遊戯王GX～鉄砲水の四方山話～

久本誠一

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊戯王ＧＸの世界に生きる少年、遊野清明。彼はアカデミア入学試験会場に向かう途中事故で死んでしまうが、『全く同じ時間』に、こちら側の世界でもデュエリストが一人死んでいて……。ああもう、難しいことは別にいい。さあ、デュエルと洒落込もう！（壊獣グレイドル出しながら）

憑依モノともトリップともいえなくもない、そんな曖昧な感じでお送りします。むしろ遊馬とアストラル的な立ち位置です、主人公たちは。基本的に原作アニメ沿い。※この作品は暁～小説投稿サイト～にも投稿してありますが、中の人は同じのマルチ投稿ですのであしからず。

追記：ためしに１・２話だけ２０１５年９月１日現在の書体で修正してみました。

目次

入学編
ターン1　生き返って、入学試験 ―― 1
ターン2　河に吹く風との出会い ―― 19
ターン3　ポロロッカ　VS　HERO ―― 43
ターン4　氷上のプリマ ―― 78
ターン5　移動砲台型戦闘機械、VWXYZ! ―― 106
ターン6　闇のゲーム、チェスデーモンの罠! ―― 144
ターン7　出動!はたらく機械たち! ―― 182
ターン8　圧倒!ダブルサイバーVS鉄砲水のHERO! ―― 209
ターン9　迅雷!無限の電極骨を撃つ! ―― 246
ターン10　激突!襲い来る門番の魔手! ―― 279
ターン11　知略!水でなくなる鉄砲水! ―― 305
ターン12　野性!SuperAnimalLearning! ―― 332
ターン13　怪奇!人造人間召喚術!

――――――

ターン２４　青い瞳は何を見る　759
ターン２５　捨てられたモノと見捨てられた者　792
ターン２６　今週のビックリドッキリ…　825
ターン２７　女戦士と宝石騎士　862
ターン２８　蘇った少年と不死を目指した男　891
ターン２９　聖戦！三幻魔～神の炎、ウリア～　932
ターン３０　激戦！三幻魔～神の雷、ハモン～　963
ターン３１　決戦！三幻魔～幻魔皇、ラビエル～　985
ターンＥＸ－２　鉄砲水ともう一つの『真紅』　1007
ターン３２　南方の大自然と暗黒の中世　1045
ターン３３　冥府の姫と『白き龍』　1072
ターン３４　鉄砲水と完全なる機械龍　1094
ターン２８（裏）　愉快なトリックスターと人工生命　1130

ターン３５　鉄砲水と菓子屋の陰謀　1156
２年生編：そして、光が溢れ出す
ターン３６　鉄砲水と伝説のＨＥＲＯ　1185
ターン３７　鉄砲水と変幻忍法　1205
ターン３８　鉄砲水と光の天使　1238
ターン３９　変幻忍者と太古の鼓動　1258
ターン４０　鉄砲水と過去の源流　1287
ターン４１　天上の氷炎と正義の誓い　1315
ターン４２　冥界の河と三連コンビ　1350
ターンＥＸ―３　鉄砲水と光、光、光　1381
ターン４３　ノース校と選ばれし戦士（前）　1407
ターン４４　ノース校と選ばれし戦士（中）　1436
ターン４５　ノース校と選ばれし戦士（後）　1468
白い光の中で

ターン46　壊れた鉄砲水　――　1490
ターン47　泥水と永久電力　―　1512
ターン48　正義の闇と運命の光　1539
ターン49　鉄砲水と負の遺産　1574
ターン50　鉄砲水と優しき闇　1603
ターン51　鉄砲水と歯車と地獄　1625
ターン52　冥府の姫と天球の司　1659
ターン53　冥府の姫と純白の龍　1685
ターン54　鉄砲水と『D』と冥界の札　――　1710
ターン55　鉄砲水と冥府の姫と　1744
ターン56　鉄砲水と愉快な奇術師　1764
ターン57　鉄砲水と手札の天使　1791
ターン58　鉄砲水と太陽神（陽）　1819
ターン59　鉄砲水と太陽神（陰）　1845

ターン60　邪魔蠍団と正義の誓い　1870
ターン61　鉄砲水と真紅の瞳　1912
ターン62　鉄砲水ともう1つの『真紅』（前）　1941
ターン63　鉄砲水ともう1つの『真紅』（後）　1965
ターン64　鉄砲水と『D』　1988
ターン65　鉄砲水と移動砲台と侵略者　2010
ターン66　未知の鉄砲水と帰ってきた『D』　2048

ハメツノヒカリ編

ターン67　光の結社とアカデミア―1F―　2074
ターン68　光の結社とアカデミア―2F―　2103
ターン69　光の結社とアカデミア―3F―　2130
ターン70　光の結社とアカデミア―4F―　2158
ターンEX―4　光の結社とアカデミア―??―　2191
ターン71　鉄砲水と破滅の光　2211

ターンEX—5　真紅の竜と『真紅の』竜　——　2260
嵐の転入生編
ターン72　鉄砲水の午後　——　2287
ターン73　変幻忍者と黄昏の隠密　2308
ターン74　鉄砲水と灼熱の傭兵　2347
ターン75　鉄砲水と七色の宝玉　2383
ターン76　鉄砲水と流離の浮雲　2422
ターン77　鉄砲水と魔性の甘味　2457
ターン78　鉄砲水と『万』の結束　2482
ターン79　鉄砲水と暗黒の中世　2515
ターン80　鉄砲水と泡沫の英雄　2536
ターン81　鉄砲水と毒蛇の神域　2561
ターン82　鉄砲水と分岐の英雄　2598
砂漠の異世界編
ターン83　鉄砲水と砂上の異形

ターン８４　鉄砲水と天部の舞姫　2626
ターン８５　鉄砲水と天王星の主　2647
ターン８６　冥府の姫と白き魂　2668
ターン８７　鉄砲水とゾンビ軍団　2711
ターン８８　鉄砲水と黒騎士の刃　2733
ターン８９　炎の幻魔と暴食の憑依　2757
ターン９０　科学水龍と神の雷　2782
ターン９１　鉄砲水と幻魔の皇者　2810
ターン９２　鉄砲水と叛乱の歯車　2835
ターン９３　鉄砲水と精霊の森　2858
ターン９４　蹂躙王と暴食の憑依　2876
ターン９５　蹂躙王と怪異の演目　2901

覇王達の戦い編

2927

ターン９６　墓場の騎士と最速の玩具　2962
ターン９７　蹂躙王と墓場の騎士　2993
ターン９８　蹂躙王と荒廃のＨＥＲＯ　3035
ターン９９　蹂躙王と鉄砲水　3067
ターン１００　鉄砲水と大蛇の深淵　3104
ターン１０１　覇王の粛清　3135
ターン１０２　覇王達の戦い（前）　3160
ターン１０３　覇王達の戦い（後）　3186
ターン１０４　封印の神と『Ｄ』　3215
ターン１０５　鉄砲水と封印の神　3257
ターン１０６　鉄砲水と優しき闇　3300
ダークネス・カウントダウン
ターン１０７　冥府の姫と変幻忍者　3342
ターン１０８　鉄砲水と死神の黒翼　3383
ターン１０９　鉄砲水と冥界の札師

ターン110　鉄砲水と英雄、空爆　3422
ターン111　鉄砲水と紅蓮の黒竜　3451
ターン112　鉄砲水と五行の竜魂　3485
ターン113　鉄砲水とシャル・ウィ・デュエル？　3519
ターン114　鉄砲水と表裏の皇帝　3547
ターン115　学園英雄と邪魔の化身　3587
ターン116　邪魔の化身とラスト・『D』（邪）　3624
ターン117　邪魔の化身とラスト・『D』（魔）　3662
ターン118　鉄砲水と決別の歯車　3694
ターン119　科学水龍と大地の龍脈　3720
ターン120　鉄砲水と変幻の銀河　3765
ターン121　百鬼の疾風と虚無の仮面　3793

ターン１２２　鉄砲水と紫毒の記憶　3863
ターン１２３　真紅の暴君と紅蓮の災厄　3920
ターン１２４　鉄砲水と、覚悟　3971
ターン１２５　鉄砲水と小さな挽歌　3993
ターン１２６　遊野清明と河風現　4015
ｙｏｕ　ｋｎｏｗ～あなたのことを知っている～　4072
ターン１２７　鉄砲水と遊戯の王　4135
番外編その１　鉄砲水と絆の英雄　42
番外編その２　鉄砲水とＧＸ　584
おまけ　鉄砲水の軌跡　195

入学編

ターン1　生き返って、入学試験

「じゃあ……頼んだぞ。俺のデッキのこと」
「わかってる。一緒に頑張らせてもらうよ」
「ああ。そんじゃ、俺はしばらくお前の中に引っ込んでるとしようかね。ま、案外もう二度と会うことがないかもしれんが」
　じゃあな。最後にそう言って、目の前の少年は霧になって消えていった。なんだかつくづく嘘みたいだけど、僕の手には確かにデッキがある。だから、これは夢でもなんでもないんだろう。多分。
　……僕の名前は、遊野清明（ゆうのあきら）。今年デュエルアカデミアの入学試験（筆記）を受けて、今日が実技試験だってのに電車が事故起こしよったせいでニュース速報見た瞬間ヤケになって自転車で飛び出して、それで――――車にリアルダイレクトアタックされて、死んだ。笑うに笑えないね、うん。でもその時に、声が聞こえた。たまたま『全く同じ日付の』、『同じ時間に』死んだ子がいたらしくて、そいつも決闘者だから、っていう雑な繋がりで僕は、生き返った。

正確には『死にかけの魂二つを足して二で割った』らしいけど、まあ難しいことはいいや。なんでも決闘者は普通の人間よりも生存能力が強いから、そういったこともできるらしい。さすがにほんとかよそれ、ってツッコミたくなったけど、まだ生きてデュエルできるんならそれでいいんじゃねーか？……って、その僕の魂の半分になった奴に言われた。まあいっか、そんなもんで。それにほら、あれだよね？『この世界（＝遊戯王）ならよくあること』ってやつだよね？いや、意味はよくわかんないけど。アイツのいた世界なら、とりあえずそう言っときゃだいじょーぶな魔法の言葉らしい。

そして、それがつい１０分前のこと。ただいま、壊れた自転車を押しながらアカデミア試験会場前にたどり着いたところです。

「って、受付さんもう片付けしてるじゃん!?わーわーわー!!待って待って待ってくださいっ！受験番号９２番、遊野清明ただいま参りましたっ！」

大声で怒鳴ると、気づいてくれた黒服の人が急いだ様子で叫び返してきた。

「今も１１０番の生徒が駆け込みで入ってきたところだ！遅刻については『時間ぎりぎりに到着した』ということにしといてやるから、早く行くといい!!」

「ありがとうございます！」

叫び返して中に入ると、その１１０番がちょうどデュエルを始めたところだった。

経過については省略。フレイム・ウイングマンはカッコいいなあ、と思ったとだけ述べておく。さて、今度は僕の番だ。

「全く、今年～の受験生に～は、危機感というものがないんです～か？二人も遅刻ギリギリにやってくるなんて、前代未聞ナノーネ！」

「す、すいません……」

返す言葉もないので、素直に謝る。こればっかりは、ねえ？

「まあいいでしょう。それでは受験番号９２番、このままクロノス・デ・メディチが相手になるノーネ！」

「はい！よろしくお願いします、先生！」

「少なくとも、礼儀はわきまえてるようなノーネ。結構なことでスーノ」

「「デュエル!!」」

遊野ＬＰ４０００　クロノスＬＰ４０００

「入学試験において、先攻は受験者のものでスーノ。さ、カードをドローするノーネ」

「じゃあ……僕のターン、ドロー！」

えっと、手札は……どうしよう、見たことあるカードが一枚しかない。なんだこのカード、今からテキスト読めとでもいうのか。

『あー、そりゃそうだわな。今の時代はまだＧＸだしな。つーか何９２番て？どーせなら後８番くらい落としとけばキリもいいしネタにもなったってのによ、半端すぎてリアクションに困るわそんな順位』

いきなり、頭の中で声が響いた。さらっと理不尽なこと言われた気もするけどスルーしとこう。

「!?……ってあれ？まさか君？」

『落ち着けみっともない、そのとーり俺だよ俺。いいか？俺はお前だし、お前は俺でもあるんだ。だから、そいつらの戦い方も体がわかってもおかしくないんだよ！それと、アドバイスするとしたらこの人相手にそのカードは……あー待てよ、これアドバイスなんかしたらズルになるか？んじゃやっぱ俺これ以上はなんも言わないわ。頑張れよー』

「え、え、えっと？」

今の声は、僕と一緒に死んだアイツの声だ。間違いない。言いたいだけ言って引っ込みやがって、まるで意味が分からんぞ！……まあいい。えっと、とりあえず今できることとしては、まずモンスターを出さないとね。世の中にはモンスター０のデッキとか

もあるらしいけど、僕のセンスで使えるデッキはいたって普通のビートぐらいです。ソリティアとかややこしくて無理。

「手札から、オイスターマイスターを召喚っ！」

そう言ってカードをディスクに置くと、ソリットビジョンになった魚の戦士が表れた。……こういっちゃ悪いかもだけど、とてもじゃないけど魚には見えない。

「そしてフィールド魔法、伝説の都アトランティスを発動！これによりオイスターマイスターの攻守は上がり、さらにお互いのフィールドおよび手札の水属性モンスターはレベルが1下がります」

これだけは見たことあるカード。周りが海に沈んだ都市に囲まれた。

オイスターマイスター　攻1600↓1800　☆3↓2

「カードを二枚伏せて、ターンエンドです」

さあ、一体どう来るかな？

「私のターン、ドローナノーネ！私ーは永続魔法、古代の機械城（アンティーク・ギアキャッスル）を2枚発動するのーネ！さらに、古代の機械騎士（アンティーク・ギアナイト）を召喚！」

古めかしいつくりの、大砲を正面に備えた城が2つもクロノス先生の前にそびえ立つ。一夜城なんてレベルじゃないな、なんてのんびりしたことを考えているとそのうち片方の城門が軋んだ音を立てて開き、そこから歯車をむき出しにした槍と盾を持つ機械

仕掛けの騎士が現れる。
「モンスターが召喚されたことにより、まず古代の機械城にカウンターがそれぞれ１つ置かれまスーノ。そして、古代の機械城の効果によ～り、私のの攻撃力は３００ポイントアップするのーネ！」
　古代の機械騎士　攻１８００→２１００→２４００
「待ったあ!!永続罠、アイスバーン発動！このカードは場に水属性モンスターが存在する限り、お互いに場に出したモンスターが水属性以外ならば守備表示にします。オイスターマイスターは水属性……効果を受けてもらいますよ」
　重々しく構えて一歩を踏み出したロボ（？）が、そのまま足元に広がった氷でずっこけそうになり、持っていた槍を地面に突き立てて強引に踏みとどまった。……なんかゴメンよ、騎士さん。
　古代の機械騎士　守５００
「むぅ……カードを三枚伏せて、ターンエンドにするノーネ」
「僕のターン、ドロー！」
　また見たことないカードだ。でも、これならいける！
「モンスターとなる罠カード、メタル・リフレクト・スライム発動。そのスライムを生けｎ……リリースして、超古深海王シーラカンスを召喚！まあ、城にカウンターは乗り

ますが。あ、アトランティスの効果でレベルが下がってますから本来レベル7のシーラカンスもレベル6としてリリース1体で場に出せますからね。説明するまでもないでしょうけど」

超古深海王シーラカンス　攻2800→3000

フィールド上にベチャリ、という音とともに上半身が筋肉ムキムキな牛っぽいスライムが現れたかと思うと、その筋肉をフルに使い手札の魚の王様を掴んでフィールド上に引っ張り出した。なお、スライムはその後溶けて消えてしまった。……何このツッコミどころ満載な演出。

「こ、攻撃力3000ですート!?（あ、危なかったのーネ……）」

「攻撃力3000だと!?」

「でかい魚だ……あれ食えるんか?」

「色合いがちょっと地味ですわね～」

よっぽどシーラカンスが珍しいらしく、出した瞬間ざわざわと観客がどよめく。個人的には2番目の奴が気になったんだけど、うちの相方の考えは違うらしい。

『怒らねえから、最後の奴ちょっと表でろ』

「（どうどう。いや、ムッチャ怒ってるじゃん）オイスターマイスターで、古代の機械騎士を攻撃!オイスターショット!!」

オイスターマイスター　攻１８００↓古代の機械騎士　守５００（破壊）
「シーラカンスでダイレクトアタック!!」
「確かに、思ったよりもやりまスーネ。ですが、私だってまだまだデスーノ！罠発動、邪神の大災害！相手モンスターの攻撃宣言時、フィールドの魔法及びトラップをすべて破壊するノーネ！」
宣言とともに黒い嵐が巻き起こり、海と城、それに海底（互いの足元）に広がるスケート場のような氷（アイスバーン）がまとめて吹き飛ばされて……ってあれ？先生のモンスターゾーンに、ちっこいのが二ついるような？
「私が破壊した自分のカードは、二つとも黄金の邪神像だったのーネ。このカードは破壊されて墓地に送られた時、モンスターとして特殊召喚されますーノ」
邪神トークン　守１０００
邪神トークン　守１０００
「んなっ……！なら、シーラカンス、こっちから見て右側の邪神像を攻撃だ！マリン・ポロロッカ！」
超古深海王シーラカンス　攻３０００↓２８００　邪神トークン　守１０００（破壊）
ちっこい金色のトークンめがけて某携帯獣ゲームの波に乗っちゃう技のごとく勢い

でぶつかっていく魚の王様。迫力あるなあ、コイツ。
「ターン、エンドです……」
マズイな、アイスバーンもアトランティスも破壊されちゃったか。でも、先生だって今はハンドレス。トークン一枚でそうそう何ができるとも思えないし……。
『なあなあ、なんで今シーラカンスの効果を使わなかったんだ？』
あ。
「……作戦、です」
『忘れてたんだな』
「……」
「私のターン、ドロー！モンスターを一体セットして、更にカードを一枚伏せて、ターンエンドナノーネ」
「僕のターン、ドロー。ここは一気に攻める！やれ、オイスターマイスター！オイスターショット、二回目!!」
『ア、アホ！んな見え見えのところで攻撃なんか……』
「セットモンスターはメタモルポット。さあ、お互いの手札をすべて捨てて５枚ドローする、リバース効果の処理を行うノーネ！」
「しまった！」

『言わんこっちゃない……つーか、それくらい予想しとけよ……』
オイスターマイスター　攻１６００　メタモルポット　守６００（破壊）
くっ……マズイ！クロノス先生はノーリスクで５枚ドロー、一方こっちは手札３枚捨てての５枚ドロー……何を引かれるかわかったもんじゃないな。
まあしょうがない、ドロー。って！あんまいい手札じゃない!?
「えーい、シーラカンスで連撃！とりあえずダイレクトアタック！」
「甘いのーネ！手札から速攻のかかしを捨てて効果発動、攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるのーネ！」
「タ、ターンエンドです」
『クロノス先生が速攻のかかしせんせーだと!?どうなってんだ一体!?』
「むむぅ～、なかなか危なかったのーネ。私のターン、ドロー！」
あの表情を見る限り、いいカードが来たらしい。正直もうチートドローは勘弁してほしいけど。
『お前なあ、本物のチートドローはあんなもんじゃねえぞ？いやマジな話』
「私は、手札からトロイホースを召喚しますーノ。更に魔法カード、二重召喚を発動！」
トロイホース　攻１６００
『トロイホースはダブルコストモンスターで、二重召喚は通常召喚の補助。となると、ヤ

ツがくるんだろうな』
　どうやら僕の中のこいつには、これから何が起こるかの予想がついたらしい。ただ、教えてくれるつもりはないみたいだけど。
「さあ、覚悟はいいですか？トロイホースを生け贄にして現れるのーネ、古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）!!」
『きた……！』
「でかい……」
　仁王立ちをして立ちはだかるのは、歯車により動く巨人。赤い目を光らせて、こちらを見下ろしている。関係ないけどこの『光る目』って、ロボットとしてはよくあることだけどやっぱり胸熱だよね。カッコいいな、うん。
　古代の機械巨人　攻３０００
『なんかずいぶん余裕だな』
「（マイスターが攻撃されてもダメージは１４００……それくらいは受けてやるさ）」
『それで済みゃあいいけどねぇ』
「さらに、速攻魔法月の書を発動、対象は超古深海王シーラカンスにするのーネ！」
「くっ……でもシーラカンスは、効果の対象になった時に魚を一匹リリースして発動を無効にできる！さらにオイスターマイスターが戦闘以外の方法でフィールドから離

れたから、オイスタートークンを一体生み出しますよ……守備表示でトークンを召喚します」

『あ、そういうことか!!サーセン先生、俺アンタのことちょっとなめてました！いやー流石実技担当最高責任者、伊達じゃなかったか』

「え？」

嫌な予感がしたけど、今更チェーンは止まらない。月の書から放たれた光からシーラカンスを守るように牡蠣の戦士が両手を広げて立ちはだかり、目も眩む光が弾けたと思ったらそこには牡蠣が一つ転がっていただけだった。

「（効果はちゃんと発動できたけど、これで何か問題でもあるの？）」

こっそり聞いてみると、衝撃の事実を言われてしまった。

『ギアゴの効果は貫通だからな』

えっと……ギアゴってのは多分古代の機械巨人のこと、だよね……？で、貫通……貫通……

「攻撃力３０００の貫通!?」

「おおっ!?そ、その通りナノーネ……デスーが、人のセリフをとってはいけませんのーネ！オイスタートークンを攻撃、アルティメット・パウンド!!」

「うわあああああっ！」

飛んできた拳が牡蠣を突き破り、そのまま僕の足元に命中する。イテテテテ……いや、ソリッドビジョンだし別に痛くはないんだけど、ただなんか変な感じだ。

遊野ＬＰ４０００→１０００

「うぅ……」

『ま、今更何言ったってどーしようもないしな、くよくよせずに頑張れや』

「そんな他人事みたいに」

『他人事だろ？』

「ひどい話だよ」

「これで、ターンを終了するのーネ」

「あ、はい。僕のターン、ドロー！」

正直、状況はかなりマズイ。ここで反撃できないと、あっさり負ける。さあ、引いたカードは？

「……よしっ！魔法カード、クロス・ソウル……発動っ！相手モンスターをリリースする場合、相手モンスターをその材料にできる！」

『ここで引いたか！テメーもドロー運は十分以上に高いじゃねーか、先生のことを言えるような立場じゃないな』

あれ？なんで逆転カード出したのにボロクソ言われてんだろ僕？

「先生のフィールド上の古代の機械巨人と、こっちのシーラカンスをリリースして……」

『来い、マイフェイバリットカード!!霧の王っ!!』

二つのモンスターが霧に変わり、フィールド上に現れた青白く神秘的に輝く騎士……にしか見えない魔法使いの全身に吸い込まれる。これこそが、ずっと昔から変わらない僕にとってのエースカード。

「霧の王の攻撃力は、生け贄にしたモンスターのもともとの攻撃力の合計……」

「つ、つまり……」

『５８００、だな』

霧の王　攻０→５８００

おぉ、と湧き上がる試験場。この感覚、悪くないね！

「僕はこれでターンエンドです」

『それで正解。クロス・ソウルの発動ターンにバトルができないデメリットもあるしな』

「まだ私は負けないノーネ！ドロー！カードをセットして、ターンエンドですーノ」

「ドロー！いけ、霧の王！ミスト・ストラングル!!」

「罠発動、ガード・ブロック！その攻撃を無効にして、カードをドローするノーネ」

霧の王が大剣を振り上げ大上段に切りかかるが、その１撃は命中する寸前に見えない

壁に阻まれた。激しい火花が散るものの、結局その壁を両断することはできない。
『くっ、落としきれなかったか……次のターンは気をつけろよ、何が起きてもおかしくない』
「え？う、うん、わかったけど……」
　本当にここから何か起きるのか。そんな思いを読み取ってか、さらに言葉をかけてきた。
『何かしらのことはある。俺はそう信じるね』
「（ねえ、一体どっちの味方してるわけ？）」
『さあな。いいデュエルが見たいだけさ』
　全く……！
「私のターン、ドローー……魔法カード死者蘇生を発動、これにより古代の機械騎士を守備表示で召喚しますーノ！」
「でも、騎士さんの守備力じゃあ攻撃は耐え切れませんよ！」
　古代の機械騎士　守５００
「甘いのーネ、このモンスターに装備魔法、古代の機械戦車（アンティーク・ギアタンク）を装備。これで攻撃力が６００上がりーノ、ターンエンド」
　ゴゴゴゴゴッ、とうなりをあげてどこからともなくやってきた戦車に、よっこらせい

といわんばかりに乗り込む騎士。ちゃんと槍も楯も手放さないところは偉いと思う。
　って、そうじゃなくて。肝心のモンスターが守備表示なのに攻撃力が上がる装備カードなんて出して、どうするつもりだろう。
　古代の機械騎士　攻１８００→２４００
『まずいな……ここで戦車か。いいか、戦車は破壊された時、相手に６００のダメージを与えることができるカードだ、うかつに攻撃しない方がいい』
「え？でも倒しきれば問題ないんじゃ」
『まあな。古代の機械砲台ってのもあるにはあるが、霧の王の前には無力だし』
「でしょ？ドロー！霧の王、今度こそミスト・ストラングル！」
　物凄い剣速で振られた剣が、戦車ごと騎士を一刀両断する。が、真っ二つにされる瞬間に戦車の砲台が火を噴き、砲弾が足元に飛んできて爆発する。
「ぐっ……」
　遊野ＬＰ１０００→４００
「カードを一枚セット。ターン、エンドです……」
「私のターン、ドローナノーネ！」
　さあ、何を引いた？
『ＢＧＭ：運命のテーマ（仮）ってとこかな』

「（へ？）」

『……気にしないでくれ、お約束みたいなもんだ』

「魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地の古代の機械騎士、古代の機械巨人、速攻のかかし、メタモルポッド、トロイホースをデッキに戻し、２枚ドローしますーノ！……そして手札を１枚捨てて魔法カード、ライトニング・ボルテックス発動！相手フィールドの表側モンスターをすべて破壊するノーネ！」

『ここで定番：困ったときの壺ときて、さらにそこからの除去!?なんちゅうドロー運だ!?』

「でも、させない！カウンター罠、神の宣告!!ライフを半分払い、ライトニング・ボルテックスを無効に!!」

遊野ＬＰ４００→２００

天から降り注ぐ雷が直撃する瞬間に白い服の神様がいきなり現れて手を前に突き出し、バリアを張って雷を弾き返した。

「そ、そんな馬鹿なナノーネ……ターンエンドですーノ……」

「それじゃあ……いくぞ、霧の王！ミスト・ストラングル!!」

クロノスＬＰ４０００→０

「楽しかったです、クロノス先生！ありがとうございました！」

「どういたしまして、ナノーネ……結果は後日配布しますかーら、待っていて欲しいのーネ……」
「はい！」

『デュエルアカデミア、か……はてさて、どーなることやらねぇ』

ターン２　河に吹く風との出会い

　クロノス先生に辛勝してからはや一週間。内心けっこう不安だったけど、めでたく届いた合格通知。……いやまあ、レッドだけど。お情けで入れてもらっただけみたいだけど。そして来ましたヘリの上、これから入学式なのだ。

「祝、合格～♪」

『いや、まあいいんだけどさ……一体いつまで浮かれてるつもりなんだ？』

　意外とノリの悪い幽霊に水を差され、口をとがらせて抗議する。

「なに、ユーノ。せっかく僕が合格したってのに、少しくらい祝ってやろうとかは思わないの？」

『そりゃ祝ってやるのは別にいいさ。た・だ・し！毎日毎日毎日毎日一時間ごとに喜んでる奴の相手なんぞなんで俺が毎回やってやらにゃいかんのだ!?……それともう１つ。受かったのはお前じゃない。俺たち、だ。そこ忘れんなよ』

「ねえ、ユーノ……」

『んー？今度はなんだ？』

「今の、言ってて恥ずかしくなかった？」

『やっかましいわ!!』

あ、やっぱ恥ずかしかったんだ。はっはっは。そんな感じでのんびりだべってたら、突然後ろから声をかけられた。

「あ、お前!確か俺の後に試験受けた奴だろ!」

振り返ると、むっちゃ元気そうな見覚えのある顔があった。

『あ、十代さんだ。ってん?翔はいないのか?』

「えっと……確か１１０番、だったっけ?」

「おう、覚えててくれたのか!俺は遊城十代っていうんだ。よろしくな!えっと……」

「名前も知らずに声かけたのね……僕は遊野清明。よろしく、遊城」

「別にいいぜそんな他人行儀なの。十代、で構わないからな」

「そう?んじゃよろしく、十代」

「ああ、こっちこそ!」

制服を見るに、どうやら僕と同じオシリスレッド所属らしい。よかった、少なくとも１人は友達ができそうだ。こっそりほっとしているとそこに、息を切らせながら小柄な丸メガネの生徒が走ってきた。いくら広いとはいえヘリの中で走るのはやめてほしいなぁ、口にはしないけど。

「ちょ、ちょっとアニキ、速すぎるッスよ〜」

「清明、紹介するぜ。こいつは翔。俺らの同輩だぜ！」
「へ？あ、君はあの時の！丸藤翔です、よろしくッス！」
「翔、ね。了解。僕は遊野清明（ゆうのあきら）だよ。これからよろしく」
「あ、そうだ清明！早速だけど、今からデュエルしようぜ！」
はい!?なにこのトンデモブットビ論理。いや僕もデュエルは大好きだけど、さすがに今はマズいんじゃないだろか。どうせもうすぐ到着だし。でも、確かにあのＨＥＲＯとはちょっと戦ってみたいんだよなあ……。
ユーノはユーノで後ろの方でニヤニヤ笑って見てるだけで、特に口をはさむつもりはないらしい。果たしてこの誘いを受けるべきか受けざるべきか困っていると、使い物にならないユーノの代わりに後ろから助け舟が来た。
「十代君に、清明君だね。ちょっといいかい？」
『今日は随分と、後ろから声をかけられる日だこった……お、三沢っちか。それにしても、デュエル脳って楽しいけど怖い』
「ああ、えっと？」
見覚えのないその学生……その学生服の色から見てラーイエロー、つまり僕らより１つ上のクラスになった人のようだ。特にこだわりがないのか本人がのんきなのか、それを見ても気軽に返事する十代の態度は見習いたいと思う。

「……十代、この人知り合い？」
「翔、お前の知り合いか？」
「なんで僕に聞くんスか!?」
「失礼。俺の名前は三沢大地。君たちの、あのクロノス先生を打ち破ったデュエルスタイルに興味があるのだが、話を聞かせてもらってもいいかな？」
「別に僕は構わないよー」
「俺のヒーローの話を聞きたいってことだろ？俺も構わないぜ」
「ありがとう、じゃあまずは……」
この時の僕たちは思わなかったよ、まさかこの後島に到着するまで延々デュエル談義で大盛り上がりすることになるとは。あー楽しかった。十代も翔も三沢もいい奴だし。
さ、校長センセのお話だ。

ゆ、油断してた……。それが第一印象だった。というよりむしろ、それ以外の感想は出てこない。立ってるだけだったのに、なんだかすごく脳が疲れた。
『退屈で精神的ライフポイントはとっくにゼロだな……バタッ』
「同感。鮫島校長、だっけ？これからは注意してないとね……」

しかし先生の話ってのは、どうしてこうも長いんだろうか。おまけに立場の偉さに比例して長くなるときたもんだし。十代なんて途中から立ったまま寝てたぞ。そんなことを考えながら、ぐったりした体を引きずるようにしてパンフレットに書いてあるレッド寮のある場所に進む。一体どんな部屋だろうか。

『あんま期待しない方がいいぞー』

「え、どんな感じの寮か知ってるの!?」

意外じゃないけど。ユーノって、常識的なところは時々抜けてるくせに妙に物知りなんだよなぁ。生前は何をやってたんだろ。

『普通の学生さんさ』

あ、聞こえてた。

「そこの君、さっきから何をブツブツ喋ってるの？って言ってるみたい」

「『!?』」

え、誰？別にそういうのは得意じゃないけど、気配を全く感じなかった。慌てて声の方を見ると、ニコニコと愛想よく笑っている女の子が１人。きれいな青髪を肩のあたりまで伸ばして、なかなかどうして可愛い。

後になってから時々考えたけど、多分僕の気持ちはこの瞬間、初めて彼女に出会ったまさにこの瞬間から決まっていたのだろう。一目惚れ、だなんて恥ずかしい話だけど

さ。
「え、えっと。どちら様、ですか？」
「私？多分あなたとおんなじだよ、だってさ。それとも名前を聞いてるの？なら、あなたから言うものでしょう、だって」
「え？ああ、えっと、僕は遊野清明。今日入ってきたばっかの一年坊だよ。そっちは？」
「遊野君、ね」
「……清明、でいいよ」
　わかり辛いし。遊野だけじゃ『どっちのだよ！』って近い将来なる気がしてならないし。音だけだとユーノと同じなところが辛い。
「私の名前は河風夢想（かわかぜむそう）、だって。夢想だけでいいよ～、だってさ。実は私も、今日入学したばっかりなんだ、って言ってるみたい」
「そ、そう……」
　それにしてもなんだろう、このちょいちょい違和感がある喋り方。声自体は柔らかくて暖かい、いい声なだけに余計気になる。そう思っていたのが顔に出ていたらしく、彼女はのんびりした笑顔のまま口を開いた。
「ちょっと気になる？ごめんね、これが癖なの。……って言ってるよ」
　なんとなく把握。まあ、世の中いろんな人がいるんだってことだけはわかったよ。で

もそれはそれとして、雑にしか聞いてなかったけど確か……
『その通りだな。女子は無条件でブルー寮入りするはずだからこんな所にいるはずないんだよな』
「(だよね。いまさらツッコむのも馬鹿らしいからなんも言わないけど)」
『それが正解だな。どうも伝統らしいし』
「それでさ、君にちょっとお願いがあるんだけど、聞いてもらっていいかな?って言ってるけど……どう? いいかな、だって?」
「構わないよ」
『即答っ!?』
　可愛い女の子の頼みを断るほどの根性は欠片もありませんから。だいたい、上目づかいで頼んでくるとかもう反則でしょ。
「ありがとう!って、お礼を言ってるみたいだよ!」
『なっさけねえの』
　るっさい。夢想も喜んでるし、それでいいじゃないか。それにしてもこうやって笑った顔なんて、ああ可愛いなあもう。もう今ならそこの崖から海に飛び込んでって言われてもできそうな気がする。
「それじゃあ、早速デュエルしよう!だって!」

「よしきた！……って、それが頼みごと？」
「うん！それじゃあ、デュエルだよっ！」
『デュエル脳全開（バカ）がまた一人……でもま、そこがこの世界の魅力ってやつか……な？』

「「デュエル!!」」
清明ＬＰ４０００　夢想ＬＰ４０００
「先攻は私からみたい。ドロー！」
カードを引いた瞬間、めちゃくちゃ嬉しそうな顔をした。よっぽどいいカードでも来たんだろうか。
「私はまず、ワイトを召喚するんだって。それからカードを二枚伏せて……う～ん、永続魔法、弱者の意地を発動するみたい。これで、ターンエンドらしいよ」
フィールドに仁王立ちする、青い衣のガイコツが一体。ワイト……ねぇ？
『このタイミングで、手札が０じゃないと意味をなさない弱者の意地？とりあえず出しただけなのか、それとも伏せに何かあるのか、あるいはそれを考えさせるためのブラフか……まだなんとも言えないな』
「（あ、今のだけでそんなに深く考えるものなの!?）」

『なんでその位考えねえんだよ!?』

びっくりしたら怒られた。なにこの扱い。

「まあ、僕が悪いんだろうけど……ドロー！ウミノタウルスを召喚、ワイトに攻撃！」

『漢（おとこ）探知かよ。まだ序盤だから別に正解だとは思うけどな』

仮にブラフだとしたら、僕にはまるで意味がない。何がどうなるとしても、とりあえず殴ってみないとね。召喚されたなんだかよくわからない見た目の青白い戦士が、二枚貝のような斧を振りかざして突っ込んでいく。

「悪いけどこの瞬間にトラップカードを2枚発動、どっちもライジング・エナジーなんだってさ。その効果によりそれぞれ1枚ずつの手札コストを払い、攻撃力を１５００ポイントアップさせるんだって」

「うわっ！やっちゃった！」

『言わんこっちゃない……なるほど、ここまで読んでの弱者の意地か。それにしても、なーんであんな怪しいとこで攻撃するかねぇウチの馬鹿は。これがあれか？原作モブキャラの限界ってやつか？』

ちょっと待てユーノさんや、あんたついさっきこれが正解とか何とかほざいてませんでしたかねえ。

そんなことを考えている最中にもフィールドでは、僕の納得のいかない思いをよそに

突っ込んでいった海の戦士の斧をひらりとかわしたガイコツが、お返しとばかりになんか物凄い気の力がこもったパンチを胴体に叩きつける。次の瞬間、ウミノタウルスが大爆発した。

ワイト　攻３００→３３００

ウミノタウルス　攻１７００（破壊）→ワイト　攻３３００

清明ＬＰ４０００→２４００

突っ込んでいった海の戦士の斧をひらりとかわしたガイコツが、お返しとばかりになんか物凄い気の力がこもったパンチを胴体に叩きつけると、ウミノタウルスが大爆発した。

『ファル○ンパーンチ!!……ってか?攻撃力３３００ってスゲーな』

さすがのユーノも若干呆れ気味の声を漏らす。というか、やっぱり『あの』パンチに見えたんだ……。

「この瞬間、弱者の意地の効果が発動するみたい。手札がない時にレベル２以下の通常モンスターが相手モンスターを破壊したから、カードを２枚ドローするんだってさ。他に何かある?」

「カードを一枚伏せて、ターンエンド……」

清明　ＬＰ：２４００　手札：４

モンスター：０
魔法・罠：１（伏せ）
夢想　ＬＰ：４０００　手札：２
モンスター：ワイト（攻）
魔法・罠：弱者の意地

「うん。それじゃあ私のターン、ドローするみたい。う～ん、よし、ワイト夫人を守備表示で召喚、ワイトも守備表示にしてターンエンドにするみたいだよ」

ゴゴゴゴゴッとボロボロの椅子が地面からせり上がり、そこに女物のドレスを着たガイコツが座っている。すると前からいたワイトが、そのゴージャス（？）なワイトに向かって慌ててひざまずく。

ワイト夫人　守２２００
ワイト　攻３００→守２００

『あーあ、ウミノタウルスが今いればなー。ワイト夫人の効果で戦闘破壊耐性もちになったワイトを貫通能力付与でボッコボコのサンドバックにしてやれたのになー』

果てしない棒読みで嫌味を言ってくる。うわぁ、これは腹立つ。なまじ本当のことだけにタチが悪い。おまけにいつの間にか、僕１人のプレミスみたいな扱いになってるし。自分だって反対しなかったくせに。

だけど、今はこっちで喧嘩してる場合じゃない。アドバンス召喚せずにワイト夫人を突破する方法は数少ないから、そっちは諦めて何か別の手を引かないと。一応手札にあるこのカードを使えばワイト夫人は突破できなくもないけど、それだとダメージが与えられないし。

「僕のターン、ドロー……よっしゃ、ドリル・バーニカルを召喚」

宣言と同時にフィールド上に出てきたどでかいフジツボもどきから、ニョキニョキッといくつものドリルが生えてくる。

ドリル・バーニカル　攻３００

「……？その子の攻撃力なら確かにワイトの守備力より上だけど、ワイト夫人が突破できないと意味がないよ？」

「慌てなさんなって。そして魔法カード、アクア・ジェットを発動！対象はもちろんバーニカル！このカードの効果でバーニカルの攻撃力は、永続的に１０００ポイントアップする！」

ドリル・バーニカル　攻３００→１３００

『出た！清明さんのマジックコンボだ!!』

外野がなんか言ってるけど、無視。無視ったら無視。

『無視すんなって……しゃーないだろ、アクア・ジェットが出たらこれ言うのがお約束な

んだから』

そんなお約束、聞いたことがない。今重要なのは、これでバーニカルの攻撃力が４倍以上にはね上がったということだけだ。

「ドリル・バーニカルはダイレクトアタックに成功するたびに攻撃力が１０００ポイントずつアップしていき、さらに自身の効果で相手モンスターがいてもダイレクトアタックができる！攻撃、ドリルアタック！」

バーニカルの無数のドリルのうち１本が夢想の方を向いて超回転しながら発射され、盛大な音と共に命中した。

ドリル・バーニカル　攻１３００→夢想（直接攻撃）

夢想ＬＰ４０００→２７００

ドリル・バーニカル　攻１３００→２３００

「いよしっ、ターンエンド」

清明　ＬＰ：２４００　手札：３

モンスター：ドリル・バーニカル（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

夢想　ＬＰ：２７００　手札：２

モンスター：ワイト（守）

ワイト夫人（守）
魔法・罠：弱者の意地
「私のターン、ドローしてワイトをリリースするんだって。来て、龍骨鬼」
ワイトがガシャガシャッと崩れたかと思うと、その骨が再び組み合わさって大きな骨でできた鬼に姿を変える。サイズ違うけど質量おかしくね？とか言ってはいけません。
龍骨鬼　攻２４００
「龍骨鬼でドリル・バーニカルを攻撃するみたいだよ？」
「……残念ながら、何にも発動できるようなカードがないんだよねー」
足元に散らばる骨の中から適当に一本取り出して投げつけた龍骨鬼に対し、ドリルを発射して迎え撃とうとするバーニカル。二つの飛び道具がぶつかり合って互いの威力を打ち消し合ったすぐ隣を二本目の骨が回転しながら飛んでいき、ドリルを発射した後の無防備な穴に突き刺さる。
龍骨鬼　攻２４００→ドリル・バーニカル　攻２３００（破壊）
清明　ＬＰ２４００→２３００
『ちょーっと押され気味だな』
「（うるさい）」
言い返したものの、劣勢は間違いない。打点上昇のアクア・ジェットも使っちゃった

し、龍骨鬼の攻撃をなんとかいなす手段を探さないとこのまま押し切られる。
「僕のターン、ドロー！……おっ」
『ふむ、使い方は任せる。どっちを選んでもプレミスっていうほどひどくないし』
「（そう？なら、お言葉に甘えて）」
「モンスターをセット、ターンエンド」
清明　ＬＰ：２４３０　手札：３
モンスター：???（セット）
魔法・罠：１（伏せ）
夢想　ＬＰ：２７００　手札：２
モンスター：龍骨鬼（攻）
ワイト夫人（守）
魔法・罠：弱者の意地
「私のターン、なんだって。ドローして……う～ん、このまま攻撃するみたい。お願い、龍骨鬼、ってさ」
再び投げつけられる骨。それを受け、セットされたモンスターの姿が明らかになる。
「この瞬間にスノーマンイーターの効果発動！リバースした時、フィールド上の表側モンスター１体を破壊する！」

さて、普通に考えたら破壊するのは龍骨鬼。でも、ワイト夫人にはなかなかどうして突破しにくい破壊耐性を味方に受けさせる効果がある。どっちにしようか……よし、決定。

「やっちゃって、スノーマンイーター。ワイト夫人を破壊する！」

雪だるまを背負ったよくわからない獣がシャカシャカと相手フィールドまで駆けていき、ワイト夫人にガブリと噛みつく。それと同時にどういう仕組みなのかホーミングして追いかけてきた骨が雪だるまに突き刺さって動きを止める。

龍骨鬼　攻２４００↓スノーマンイーター　守１９００（破壊）

「私のワイト夫人が……カードを伏せて、ターンを終わるんだってさ」

「ドロー！罠カード、リビングデッドの呼び声を発動！甦れ、ウミノタウルス！そして、ウミノタウルスは水族モンスター……この特殊召喚をトリガーにして、シャーク・サッカーを手札から特殊召喚するよっと」

地面に開いた魔法陣から勢いよく飛び出してくる、青白い肌の海の戦士。よくよく見ると、その頭ののっぺりした部分にはコバンザメがひっついていた。

ウミノタウルス　攻１７００

シャーク・サッカー　攻２００

「さらに僕はこの二体をリリースして、青氷の白夜龍をアドバンス召喚する！」

『これをアド損とみるよーな世界にいたんだよなー俺……なんだか悲しくなってきた』

氷の翼を広げた、真っ青なドラゴンがフィールドに現れる。おお、かっこいいかっこいい。

「なら私は、ここでリバースカードの発動をするんだって。手札を一枚捨てて、サンダー・ブレークッ！この効果で、その氷のドラゴンを破壊するみたい」

ビシッ！とポーズまで決めて、罠を発動する。だけど、相手だって伊達に最上級モンスターなわけじゃない。ジグザグな軌道を描きながら飛んできて絡みついた雷を、あっさりと氷のドラゴンは振り払った。

「む。ってさ」

「白夜龍には、自身を対象にする魔法・罠を無効にする効果がある！そのまま龍骨鬼に攻撃……いっけぇー！孤高の冬色輪氷弾（ウインター・ストリーム）！」

青白く光るブレスが、あっという間に龍骨鬼を飲み込んで消し去る。そして夢想のところにも、その余波が届いてダメージを与える。

「くっ……！やっぱり強いね、だってさ。さすがはあのクロノス先生を倒した人だね、って」

青氷の白夜龍　攻３０００→龍骨鬼　攻２４００（破壊）

夢想ＬＰ２７００→２１００

「見ててくれたの？ありがとう。僕はこれで、ターンエンド」

清明　ＬＰ：２４００　手札：２

モンスター：青氷の白夜龍（攻）

魔法・罠：リビングデッドの呼び声（対象無し）

夢想　ＬＰ：２１００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：弱者の意地

「私のターンだね。ここで逆転できないと、私の負け。でも、まだ私は自分のデッキを信じるんだって言ってるよ。ドロー！」

勢いよくドローして、そっとそのカードを確認する。さあ、一体何を引いたんだろう？なんだかこっちまでドキドキしてきた。

「ありがとう、私のデッキ！って凄く喜んでるみたいなの。お願い、ワイトキング!!」

ドラゴンと向かい合い、自分の主人を守るように立ちふさがる骸骨の王。その相本から大量の霊魂が噴き上がり、骸骨の王の空になった眼の跡や服の隙間などからその体内に注入されていく。

『まずいな、ワイトキングは墓地のワイトの数１体につき１０００。確か今の攻撃力は

裁定でもワイトが１枚にワイト夫人が１枚の２枚だから２０００か。さあ、あのたくさんの手札コストの中で、一体何枚がワイトかね？』

相変わらず楽しそうに解説してくれるユーノ。この様子からいって、ホントに僕が負けてもいいって思ってるんだろうなぁ。

「今のこの子の攻撃力はね、まずフィールドから墓地に行ったワイトとワイト夫人、ライジング・エナジーのコストにしたワイト２枚、さらにサンダー・ブレイクのコストにしたワイトメアが１枚の、合計５０００なんだよ！だって言ってるよ」

『って、あれ全部ワイトだったのかよ!?』

あ、ハモった。なんて言ってる場合じゃなーい。あれだけの手札コストが全部攻撃力に回るとすると……もしかして、あのサンダー・ブレイクもミスじゃなくてわざと、ここでワイトキングの火力を上げるために……？

「ワイトキング、その綺麗なドラゴンに攻撃して!!」

不気味なステップを踏みながら、ゆったりとこちらにやってくるワイトキング。そして次の瞬間、目に見えないほどのスピードで踊りだしたワイトキングが何が起こったのかわからないうちにきれいなステップの蹴りで白夜龍を撃破していた。え、なにこのメッチャ速いガイコツさん。

ワイトキング　攻５０００→青氷の白夜龍　攻３０００（破壊）

清明ＬＰ２３００→３００

「逆転だね。私はここでターンエンド、だって」

くっ、かなりマズイな……。攻撃力５０００のワイトキングか。突破できる、かな？できるよね、きっと。

『できるな。とゆーかさ、仮にもデュエリストが一瞬でも弱気になってどーするよ？正直に言うとな、俺は前世では弱い方だった。けど、少なくとも諦めたこたぁ１回もないぜ？』

おお……なんかかっこいいな。でもそうだよね、ここで勝負捨てるわけにもいかないか。

『まあ、俺のデッキの場合ピンチの時になると魔宮の賄賂ドロー率が跳ね上がるんだけどな』

聞きたくなかった。そこ凄く聞きたくなかった！

『いやいや、ちょっと考えてみろ。いいか、残りライフ８００でフィールドもカラ、手札も事故ってる状況でのラストドロー！であの賄賂のおっさんのドヤ顔がこっちを見てくる状況ってどうだと思う？正直俺は泣きたくなります』

「（そんな感想限りなくどーでもいいよ！）」

「……？どうしたの、って聞いてるんだけど」

「あ、ああゴメン……ド、ドローー！」

魔宮の賄賂じゃありませんよーに魔宮の賄賂じゃありませんよーに魔宮……。

『わーいろ！わーいろ！わーいろ！わーいろ！わーいろ！わーいろ！』

るっさいわ。えっと、何を引いたかな？

魔宮の賄賂「やあ」

そんな幻聴が聞こえた気がした。

「ターン、エンド……」

「じゃあ私のターン、ワイトキングで攻撃！だよ！」

そして空っぽのフィールドをワイトキングが爆走しながらこっちに近づいてきて、吹っ飛ばされて……。

ワイトキング　攻５０００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ３００→０

デュエルの終了と同時に、ソリットビジョンも消えていく。負けた、か。そしてちょっとわかったユートの気持ち。こりゃ泣きたくもなるわ……。

「ありがとう、清明。私も危なかったよ、だって」

「いやいや、こっちこそありがと。帰ったらデッキ調整だなー」

まず真っ先に、魔宮の賄賂は２枚積みから１枚積みにしよう。絶対に。

「あ、ちょっと待って、だって。もう1つだけ、お願いなんだけどいいかな？って頼んでるんだけど……どう？」

はて、まだ何かあるんだろうか。まあ、別にデッキは後でもいいし断る理由もないか。

「別にいいけど、何？」

「えっと……」

ちょっと目をそらしながら口ごもる夢想。

「その、えっと、恥ずかしいんだけど……私、今迷子なのっ、て言ってるみたい。だから、その……ブルー寮まで案内してくれるかな？なんて……」

結論。ただの迷子さんでした。ちなみに同じころに十代が万なんとかってブルー生徒とデュエルしてたらしいけど、それはまた別の話。

ターン３　ポロロッカ　ＶＳ　ＨＥＲＯ

「お、終わ、った……」
「あ～、今日もよく寝たぜ！」
「アニキ……」
『うん、翔以外お前ら全員おかしいね。なんで清明はあのレベルの授業で瀕死になって、十代に至ってはなに堂々とサボってんだよ』
「（多分聞こえてないと思うけどなぁ）」
『誰かが言ってやるのが優しさってもんだろが』
　そんなもんかなぁ……？う～む。というか、コイツは僕が誰のために気を使ってんのかわかんないんだろうか。
『俺の存在がばれないように、とは確かに言ったけどな。んな思い詰めてたら逆に怪しいわい』
「なあ、清明」
「え、どったの十代？」
「お前今、誰かと喋ってたか？」

『ほらみろ。でもそーいやこの辺りからもう見え始めるフラグはちょいちょい立ててたんだよなコイツ。まぁとりあえず否定しといてちょーだい』
「……いや？いきなりどーしたの一体」
「うーん、なーんかわかんねーけどそんな気がしたんだよな～。翔、お前は聞こえたか？」
「え!?僕は何も聞こえなかったッスけど……寝過ぎじゃないッスか？」
「そうかなぁ……確かになんか聞こえたような気がしたんだけどな。ってどうした!?すごい汗だぞ、清明！」
『命令、なんでもいいからごまかせ！今見えるようになるのは（原作的に）いろいろマズイような気がする!!』
「ほぇ!?え、え～と……」
『そーだ、今すぐデュエル申し込め！多分それなら効くはずだ！』
「十代、いきなりだけどデュエルしよっ！」
　ってなんでやねん。怪しすぎるでしょいくらなんでも。どうしてこうなった。十代だって急にこんなこと言われたら迷惑だろうｓ
「よし、じゃあデュエルだ！」
　……。デスヨネー。それにしても、ほんとにこれだけでユーノのことは忘れてく

れるかな……？
「それじゃあ……」
「「デュエル!!」」
清明　ＬＰ４０００　十代ＬＰ　４０００
「お、先攻は僕か。ドロー、キラー・ラブカを召喚して、フィールド魔法ウォーターワールドを発動」
黄色がかった色の尻尾が刃物で武装されたサメがフィールド上でとぐろを巻き（守備表示だからだろーか）、十代を威嚇する。……が、直後に自分の足元（？）から吹き上がった水柱に打たれてバランスを崩してしまう。それにしても、どう言えばユーノのことを誤魔化せるかなぁ？
キラー・ラブカ
効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻　７００／守１５００
自分フィールド上に表側表示で存在する
魚族・海竜族・水族モンスターが攻撃対象に選択された時、
墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
攻撃モンスター１体の攻撃を無効にし、

その攻撃力を次の自分のエンドフェイズ時まで５００ポイントダウンさせる。
「キラー・ラブカ」の効果は１ターンに１度しか使用できない。
ウォーターワールド
フィールド魔法
フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、
守備力は４００ポイントダウンする。
キラー・ラブカ　守１５００→１１００
「カードを一枚セットして、ターンエンド」
『あながちプレイングミスとも言えない……な。守備力低い方がさっさと墓地行きやすいし。まあふつーやらんだろうけど』
「俺のターン、ドロー！魔法カード、融合を発動。手札のバブルマンとフェザーマンを融合するぜ！来い、Ｅ・ＨＥＲＯセイラーマン！」
融合
通常魔法
手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた
融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体を

エクストラデッキから特殊召喚する。
Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン
通常モンスター
星３／風属性／戦士族／攻１０００／守１０００
風を操り空を舞う翼をもったＥ・ＨＥＲＯ。
天空からの一撃、フェザーブレイクで悪を裁く。
Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン
効果モンスター
星４／水属性／戦士族／攻　８００／守１２００
手札がこのカード１枚だけの場合、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に
自分のフィールド上と手札に他のカードが無い場合、
デッキからカードを２枚ドローする事ができる。
Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン
融合・効果モンスター
星５／水属性／戦士族／攻１４００／守１０００

「Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」
　このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。
　自分の魔法＆罠カードゾーンにカードがセットされている場合、
　このカードは相手プレイヤーに直接攻撃をする事ができる。
「セイラーマンは水属性だから、ウォーターワールドの効果を受けさせてもらうぜ」
　Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン　攻１４００→１９００
「カードを一枚セットして、バトル……ただしセイラーマンは自身の効果で、自分が魔法、罠カードをセットしているときにはダイレクトアタックができるぜ！アンカー・ナックル！」
　折よく地面から噴き出した水柱の上に飛び乗ったセイラーマンが、頭上から右手についた錨を打ち込んでくる。
「ぐっ……！」
　Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン　攻１９００→清明（直接攻撃）
　清明　ＬＰ４０００→２１００
「俺はこれで、ターンエンドだぜ」
　清明　手札：３　モンスター：キラー・ラブカ　魔法・罠：１（伏せ）　フィールド：ウォーターワールド

十代　手札：２　モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン　魔法・罠：１（伏せ）
場：ウォーターワールド
「やった、先手はアニキがとったッス！」
「……。くっ」
「どうした清明？ほんとに体調でも悪いのか？」
「え？あ、ああ。別に問題ないよ。ドロー。……シャクトパスを召喚、ウォーターワールドの効果で攻撃力がアップする……セイラーマンに攻撃」
シャクトパス
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１６００／守　８００
このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備できる。
この効果によってこのカードを装備したモンスターは攻撃力が０になり、表示形式を変更できない。
シャクトパス　攻１６００→２１００
「甘いぜ清明！罠発動、ヒーローバリア！」
ヒーローバリア

通常罠
自分フィールド上に「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターが
表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする。
通常の三倍の速度で（嘘です）突っ込んでいったシャクトパスの突進は、セイラーマンに届く前に光る壁で防がれた。うーん、防がれたか。それにしても、一体十代達にはなんて言えばいいんだろう。
「ターンエンド……」
大丈夫、まだあと一回のダイレクトアタックなら耐えられる。それにしても、どーしようかねぇ。
「俺のターン、ドロー！へへ……行くぜ、清明！手札から魔法カード、ヒーローハートを発動！これでセイラーマンは攻撃力が半分になる代わりに、このターン２回攻撃できる！それから魔法カード、Ｈ―ヒートハートを発動！これでセイラーマンの攻撃力はエンドフェイズまで５００ポイントアップし、貫通能力が付く！」
ヒーローハート
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ」
と名のついたモンスター１体を選択して発動する。

このターン選択したモンスターの攻撃力は半分になり、
１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。
Ｈ―ヒートハート
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。
そのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が越えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
この効果は発動ターンのエンドフェイズまで続く。
十代の宣言に合わせてまずセイラーマンの錨が両腕につき、さらに青いオーラが全身を包み込んだ。
Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン　攻１９００→９５０→１４５０
「そ、それじゃあ！」
「行けぇ、セイラーマン！アンカー・ナックル!!」
「くっ」
Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン　攻１４５０→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ２１００→６５０
「まだまだだぜ、セイラーマンでダイレクトアタック！もう一度アンカー・ナックル！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　セイラーマン　攻１４５０→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ６５０→０
「ガッチャ！……でも本当にどうしたんだ？やっぱり調子悪いのか？」
『お前なぁ、心配してくれんのにはとりあえずありがとさんとだけ伝えとくけど、そんな気の抜けたよーなデュエルしかできないようじゃ十代にも俺にも失礼なだけだぞ？まあとりあえずデッキに謝れコノヤロウ』
「（……手厳しいね）」
『上の空でなんかやるのは見てるだけで腹立つからな』
「そう、かぁ……」

ふむ、そんなキツく言ったつもりはないんだが、だいぶこたえてるみたいだな。しょうがねぇ、もとはといえば俺のせい、このユーノさんが一肌脱いでやりますか。
『清明、ちょい体借りるぜ』
「（え？ちょ、わっ!?）」

なんか言ってるけど無視だ無視。
「ん……しかしあれだ、肉のある体ってのも久しぶりだな」
感覚を思い出しがてら、軽くストレッチ。ああよしよし、ちゃんと動くな。
「なぁ十代、俺ともう一回デュエルしてくれないか？」
「え、アレ？お、おう……売られたデュエルは買うのが礼儀だし俺は構わないけど、なんか雰囲気変わってないか？」
「終わったら。……教えてやる、かもな。さ、それじゃあ始めようか」
「「デュエル!!」」
ユーノ　ＬＰ４０００　十代　ＬＰ４０００
「先攻は譲るぜ、十代」
「ありがとよ、清明！俺のターン、ドロー！クレイマンを守備表示で召喚、カードを一枚伏せてターンエンドだ」
十代の場に現れる、巨大な体の堅い壁役ヒーロー。アニメで見たときも思ったけど、やっぱヒーローのなかでもかなりでっかいなコイツ。
Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン
通常モンスター
星４／地属性／戦士族／攻　８００／守２０００

粘土でできた頑丈な体を持つＥ・ＨＥＲＯ。
体をはって、仲間のＥ・ＨＥＲＯを守り抜く。
っと、そんなこと考えてるほど暇じゃないな。清明のヤロー、抵抗すんなコラ。体が動かしづらいだろーが。
「俺のターン、ドローー……よし、近年稀に見るほどの良手札だな。まず永続魔法、ウォーターハザードを発動」
ウォーターハザード
永続魔法
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
手札からレベル４以下の水属性モンスター１体を特殊召喚できる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。
「この効果で、手札からレベル４の水属性のヒゲアンコウを攻撃表示で特殊召喚」
ヒゲアンコウ
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１５００／守１６００
水属性モンスターを生け贄召喚する場合、
このモンスター１体で２体分の生け贄とする事ができる。

「ヒゲアンコウをリリース……来てくれ、超古深海王シーラカンス」
そして現れる、魚の王様。何回見ても納得いかんのだが、深海王デビルシャークとはえらい違いだよなぁ。弱いとまでは言わんが、なんだろうあの鮫さんから漂うコレジャナイ感は。何回だって繰り返すけど、アイツは弱くない。ただ、明らかにあれは切り札って感じじゃないんだよなぁ。
超古深海王シーラカンス
効果モンスター
星７／水属性／魚族／攻２８００／守２２００
１ターンに１度、手札を１枚捨てて発動できる。
デッキからレベル４以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効化される。
また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが
カードの効果の対象になった時、
このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター１体をリリースする事で
その効果を無効にし破壊する。
「一ターン目から大型モンスターを出すなんて……」
翔よ、お前の兄貴は後攻一ターンでサイバー・ドラゴンをポンポン出してくるんだぞ。

つーか俺も、ここまでデッキが応えてくれるのは予想外だったわ。ピンチになると魔宮の賄賂しかくれないくせに。ちくせうちくせう。

「ま、今言ったってしょーがないことではあるんだがね。いくぜ、俺はシーラカンスの効果発動！手札を一枚捨て、デッキから仲間を四体特殊召喚する！俺は、シャクトパス攻撃表示、オイスターマイスター守備表示、ハリマンボウ守備表示、竜宮の白タウナギ攻撃表示で召喚！」

魚の王の咆哮に応え、デッキから飛び出してくる４体の魚たち。

シャクトパス

省略

オイスターマイスター

効果モンスター

星３／水属性／魚族／攻１６００／守　２００

このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、自分フィールド上に「オイスタートークン」（魚族・水・星１・攻／守０）１体を特殊召喚する。

ハリマンボウ

効果モンスター

星３／水属性／魚族／攻１５００／守　１００
このカードが墓地へ送られた時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。
竜宮の白タウナギ
チューナー（効果モンスター）
星４／水属性／魚族／攻１７００／守１２００
このカードをシンクロ素材とする場合、
他のシンクロ素材モンスターは全て魚族モンスターでなければならない。
さて。一応生前のノリで出しちゃった白タウナギを使えばシンクロもできるし、エクシーズもできるわけだが。まあ、エクストラの中のこいつらを使うつもりは（今のところ）無いしな。この時代誰も持ってない種類のカードだし、さすがにそれは気が咎める。とりあえず全員立たせておこう。
「残念ながらこの効果でやって来た魚達は攻撃ができないうえ、フィールド上では効果も無効になる。……行け、シーラカンス！クレイマンを攻撃！マリン・ポロロッカ!!」
水の鎧を身にまとったシーラカンスが、がっちりと防御態勢をとる石の戦士に突撃し

ていく。

超古深海王シーラカンス　攻２８００→Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン　守２０００（破壊）

「へへ……やるな、清明！でも俺だって負けないぜ！罠発動！ヒーロー・シグナル!!」

クレイマンの破壊をうけて、空に輝くＨのシグナル。

ヒーロー・シグナル

通常罠

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され

墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついた

レベル４以下のモンスター１体を特殊召喚する。

サーチカードか。さあ、何が飛び出してくる？

「俺は、デッキからスパークマンを特殊召喚するぜ」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン

通常モンスター

星４／光属性／戦士族／攻１６００／守１４００

様々な武器を使いこなす、光の戦士のＥ・ＨＥＲＯ。
聖なる輝きスパークフラッシュが悪の退路を断つ。
「スパークマン……厄介な相手だな、融合的な意味で。カードを一枚セットしてターンエンド」
ユーノ　手札：１　フィールド：超古深海王シーラカンス、シャクトパス、ハリマンボウ、オイスターマイスター、竜宮の白タウナギ　魔法・罠：１（伏せ）
十代　手札：４　フィールド：Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　魔法・罠：０
「俺のターン、ドロー！手札から魔法カード、融合を発動！」
出たな、融合召喚！さあ、一体どいつが飛び出る？
「場のスパークマンと、手札のネクロダークマンを融合！来い、Ｅ・ＨＥＲＯ　ダーク・ブライトマン!!」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロダークマン
効果モンスター
星５／闇属性／戦士族／攻１６００／守１８００
このカードが墓地に存在する限り１度だけ、
自分はレベル５以上の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついた
モンスター１体をリリースなしで召喚する事ができる。

スパークマンが闇に包まれ、体が一部黒くなりマスクの形もだいぶ変わり、全体的にダークヒーローっぽくなる。個人的に、コイツは融合ＨＥＲＯの中でもかなり格好いい方だと思うよ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ダーク・ブライトマン

融合・効果モンスター

星６／闇属性／戦士族／攻２０００／守１０００

「Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロダークマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

また、このカードは攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。

このカードが破壊された時、

相手フィールド上のモンスター１体を選択して破壊する。

「ダーク・ブライトマンでオイスターマイスターを攻撃！ダークフラッシュ!!そしてダーク・ブライトマンの効果により、貫通ダメージを受けてもらうぜ」

「くっ、守備表示は失敗だったか」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ダーク・ブライトマン　攻２０００→オイスターマイスター　守２００（破壊）
ユーノＬＰ４０００→２２００
「さらにダーク・ブライトマンは攻撃終了時、守備表示になる！へへ……どうだ！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ダーク・ブライトマン　攻２０００→守１０００
「やるな、十代！やっぱりお前は強いぜ！」
「やった、アニキがまた先制をとったッス」
しかも、ダーク・ブライトマンの効果で破壊された時に誰かが道連れになる、と。さて、どう突破する？強引に押し切ってもいいし、シーラカンスなら身代わり効果で耐えられるけど、うーん。
「まあいいか。ドロー！よし、アームズ・シーハンターを召喚！」
今日マジで引きいいな。俺近いうちに成仏しちゃうんじゃないだろうか。
アームズ・シーハンター
効果モンスター
星４／水属性／海竜族／攻１８００／守　４００
自分フィールド上にこのカード以外の水属性モンスターが存在する場合、
このカードと戦闘を行った効果モンスターの効果をダメージ計算後に無効化する。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊される場合、
代わりに自分フィールド上に表側表示で存在する
レベル３以下の水属性モンスター１体を破壊できる。
「シーハンターでダーク・ブライトマンを攻撃！」
背中にしょった矢筒から矢を一本引っ張り出して構え、放たれた矢は狙い違わずヒーローの心臓あたりに突き刺さる。
アームズ・シーハンター　攻１８００↓　Ｅ・ＨＥＲＯ　ダーク・ブライトマン　守１０００（破壊）
「でも、これでダーク・ブライトマンの効果が……ってアレ？」
いつまでたっても何も起きないフィールドに、十代が疑問の声を上げる。それじゃあ、こっちも種明かしと行こうかね。
「残念だったな、十代。アームズ・シーハンターが戦闘を行った時に自分フィールド上に他の水属性が一体でもいれば、その相手の効果を無効にできるんだぜ！」
「そんな！」
墓地効果すら止められるってのがなかなかの食わせもんだよなぁ。身代わり効果はあんまし使わないけど。
「さあ、遠慮はなしでいかせてもらうぜ！シーラカンスのダイレクトアタックだ！マリ

ン・ポロロッカ！」
「うわぁっ！」
超古深海王シーラカンス　攻２８００↓　十代（直接攻撃）
十代　ＬＰ４０００→１２００
「ターンエンドだ」
ユーノ　手札：１　フィールド：超古深海王シーラカンス、シャクトパス、ハリマンボウ、アームズ・シーハンター、竜宮の白タウナギ　魔法・罠：１（伏せ）
十代　手札：４　フィールド：なし　魔法・罠：なし
「俺のターン、ドロー！しょうがない、これを使うか……俺は、バブルマンを通常召喚！さらに手札から魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！バブルマンと墓地のクレイマンを融合させて、来い！Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン!!」
ドシィィィィン、と地響きをたてて地面に降り立ちファイティングポーズをとる、クレイマンよりも丸っこくてデカいＨＥＲＯ。それにしても、十代。ミラクル・フュージョンなんて隠し持ってたのか。……待てよ？今の状況なら墓地にスパークマンもいるし、サンダー・ジャイアントだって出せたはず。なのになんで特にメリット効果もない壁役を、しかも攻撃表示で出してきたんだ？考えろ、俺。これには何か裏があるはず……。

ミラクル・フュージョン
通常魔法
自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついた融合モンスター１体を融合デッキから特殊召喚する。
（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）
Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン
融合・効果モンスター
星６／地属性／戦士族／攻１９００／守３０００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。
Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン　攻１９００
「そしてさらに魔法カード発動！Ｏ―オーバーソウル、対象はスパークマン！」
光り輝くＯ字から飛び出す光の戦士。……って、こいつも攻撃表示？
Ｏ―オーバーソウル
通常魔法
自分の墓地から「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついた通常モンスター１体を選択し、

自分フィールド上に特殊召喚する。
Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン
省略
Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　攻１６００
「そして装備魔法、スパークガンをスパークマンに装備するぜ！」
スパークマンの右手が一瞬光ったかと思うと、いつの間にか握られていた黒い銃。
……某米国版のスパークガンを、俺は絶対にスパークガンとは認めない。カッコよさも何もあったもんじゃないしなぁ……。
スパークガン
装備魔法
「Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン」にのみ装備可能。
自分のターンのメインフェイズ時に表側表示モンスター１体の
表示形式を変更する事ができる。
この効果を３回使用した後、このカードを破壊する。
それにしても、スパークガンか。だが、それじゃあまだシーラカンスは突破できないぜ？
「そして、手札のＥ・ＨＥＲＯキャプテン・ゴールドの効果を発動！このカードを墓地に

送り、デッキからスカイスクレイパーをサーチ……そして、たった今加えたスカイスクレイパーを発動！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　キャプテン・ゴールド

効果モンスター

星４／光属性／戦士族／攻２１００／守　８００

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

デッキから「摩天楼　―スカイスクレイパー―」１枚を手札に加える。

また、フィールド上に「摩天楼　―スカイスクレイパー―」が存在しない場合、

このカードを破壊する。

ゴゴゴゴゴ、という音と共に地面からニョキニョキ生えてくるビル群。そして、いつの間にかビルの上でポーズをとるヒーロー達。マッドボールマンのシュールっぷりが半端ないな。どうやってあそこまで登ったんだろーか。

摩天楼　―スカイスクレイパー―

フィールド魔法

「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のつくモンスターが攻撃する時、

攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、

攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ１０００ポイントアップする。

……ふむ。あれ、これ結構マズくね？

「行くぜ、清明！マッドボールマンでシーラカンスを攻撃、この時スカイスクレイパーの効果で、攻撃力が１０００ポイントアップする！マッド・スタンプ！」

よいしょおっ！とばかりに飛びあがった泥団子……もといマッドボールマンが、自分の体の重さをフルに使っての飛び蹴りをシーラカンスにブチ当てた。

Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン　攻１９００→２９００

Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン　攻２９００→超古深海王シーラカンス　攻２８００（破壊）

ユーノ　ＬＰ２２００→２１００

「そのままスパークマンでアームズ・シーハンターを攻撃！スパークフラッシュ!!」

わざわざ右手の銃を左手に持ち替え、右手から雷の塊を打ち出すスパークマン。白タウナギが電気で焼かれて蒲焼きになる……というようなことは一切起きずに、ごくふつーに爆発した。

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　攻１６００→２６００

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　攻２６００→アームズ・シーハンター　攻１８００（破壊）

ユーノ　ＬＰ２１００→１３００

「ちょーっとばかりマズイな、もうライフが並びつつある」
「メインフェイズ2、スパークガンの効果を発動。スパークマンとマッドボールマンを守備表示にするぜ」
Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　攻１６００→守１４００
Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン　攻１９００→守３０００
「俺はこれで、ターンエンドだ」
「……確かにやや不利にはなった、でもまだまだこれからだ、ドロー！来てくれると信じてたぜ、相棒!!見せてやるぜ、俺の切り札……シャクトパスとハリマンボウをリリース！来い、霧の王!!」
鎧に身を包み、堂々とそびえ立つ騎士……にしか見えない魔法使い。
「コイツの攻撃力は、リリースしたモンスターの元の攻撃力の合計。つまり今のパワーは３１００だ！それと、発動する意味も特にないけどハリマンボウの効果で、マッドボールマンの攻撃力を５００ポイントダウンさせるからな」
地面に開いた魔法陣からいくつものぶっとい針が打ち出され、マッドボールマンにぶつかって爆発する。
Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン　攻１９００→１４００
霧の王

効果モンスター
星７／水属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０
このカードを召喚する場合、生け贄１体
または生け贄なしで召喚する事ができる。
このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた
モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。
霧の王　攻０→３１００
「行け、霧の王！……ここは、融合が怖いスパークマンを討つ！ミスト・ストラングル！」
霧の王　攻３１００→　Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　守１４００（破壊）
「これで俺は、ターンエンドだ」
ユーノ　手札：１　フィールド：霧の王（攻）魔法・罠：１（伏せ）
十代　手札：０　フィールド：マッドボールマン（守）魔法・罠：０
場：摩天楼　―スカイスクレイパー―
「俺のターン、ドロー！……モンスターをセットしてターンエンドだ」

「手が止まってるなら、こっちからガンガン行かせてもらうぜ！ドロー！」
残念、ここでアタッカーを引けてれば……まあ、引けなかったもんに文句言ってもしょうがないか。さて、どっちを攻撃しようか？なにしろ相手はあの十代だ。あの伏せモンスター、手札に来ないことで有名なネクガさんや、戦闘破壊で効果を発揮するフレンドッグ、一枚ドローのカードガンナーあたりだと思った方がいいだろう。そして、今の俺はそれをカウンターできるカードを持ってない。なら！
「霧の王でマッドボールマンに攻撃、ミスト・ストラングル！」
霧の王　攻３１００→Ｅ・ＨＥＲＯ　マッドボールマン　守３０００（破壊）
「ターンエンドだぜ」
ユーノ　手札：２　フィールド：霧の王（攻）魔法・罠：１（伏せ）
十代　手札：０　フィールド：モンスター（仮・守）魔法・罠：０
場：摩天楼　―スカイスクレイパー―
「俺のターン、ドロー！……よっしゃ！魔法カード、ホープ・オブ・フィフス！」
「なに!?」
「アニキー、やっぱり凄いッス～!!」
ホープ・オブ・フィフス
通常魔法

自分の墓地の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたカードを５枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。
その後、デッキからカードを２枚ドローする。
このカードの発動時に自分の手札・フィールド上に他のカードが存在しない場合はカードを３枚ドローする。
「選択するのはマッドボールマン、ダーク・ブライトマン、スパークマン、キャプテン・ゴールド、ネクロダークマン……そしてカードを２枚ドローするぜ」
ゆっくりと、祈るようにカードを引く十代。さあ、お前は一体どんな逆転の一手を引いたんだ？
「清明、お前にも俺のフェイバリットカードを見せてやるぜ！魔法カード、融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合して、Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマンを召喚っ!!」
満を持して……ってところか？ついにその姿を見せた、十代にとって永遠のフェイバリットカード。
Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン
融合・効果モンスター
星６／風属性／戦士族／攻２１００／守１２００

「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」
　このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
　このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、
　破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。
「さあ、行くぜ！フレイム・ウィングマンで霧の王を攻撃！スカイスクレイパー・シュットオッッッ!!!」
「迎え撃て、霧の王!!ミスト・ストラングル！」
　Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻２１００→３１００
　Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン（破壊）→霧の王（破壊）
　二体のモンスターがぶつかり合って、激しい爆発が起こり……そして誰もいなくなった。って、これじゃホラーじゃねえか俺のバカ。
「ターンエンドだぜ」
「俺のターン、ド……待てよ、なあ十代」
　せっかくだからここは、あの名ゼリフでも持ち出すとするか。うろ覚えだけど。
「どうした、清明？」
「もしも俺がここで攻撃力１２００以上のモンスターを召喚できたら、……面白いよな！」

そう言うと十代は一瞬あっけにとられた顔をして……にっこりと笑い、勢いよく頷いた。
「ああ！」
「よく言った、それでこそ十代だ！俺のターン、ドロー!!!」
「どうだった、清明!?」
俺の手札に即出せるモンスターはいない、けど……。
「諦めたらそこで試合終了なんだ、まだ勝負はわからないぜ！魔法カード、強欲なウツボを発動！手札の氷帝メビウスとジョーズマンをデッキに戻し、３枚ドローするぜ！」
強欲なウツボ
通常魔法
手札の水属性モンスター２体をデッキに戻してシャッフルする。
その後、デッキからカードを３枚ドローする。
「……ありがとよ、俺のデッキ。手札から、氷弾使いレイスを召喚！」
氷弾使いレイス
チューナー（効果モンスター）
星２／水属性／海竜族／攻　８００／守　８００
このカードはレベル４以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

氷弾使いレイス　攻８００

「攻撃力８００なら、アニキのライフはまだ残るッス！」

「慌てなさんなよ。レイスの召喚に合わせて、手札からシャーク・サッカーを特殊召喚！」

シャーク・サッカー

効果モンスター

星３／水属性／魚族／攻　２００／守１０００

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードはシンクロ素材とする事はできない。

シャーク・サッカー　攻２００

「だが攻撃力の合計は１０００……まだあと２００足りないぜ！」

そう言いながらも十代の目は、すごくキラキラしていた。これから俺が何をするのか、楽しみでしょうがないという目。ひたすら純粋にデュエルを楽しんでる、そんな感じの目。なら、精々その期待に応えてやりますかね。

「手札の最後の一枚……フィールド魔法、忘却の都　レミューリアを発動！」

俺たちの辺りを囲むようにそびえ立つ摩天楼がさびれて海に沈んでいき、巨大な神殿

のような建物が新しく現れる。
忘却の都　レミューリア
フィールド魔法
このカードのカード名は「海」として扱う。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００ポイントアップする。
また、１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に発動できる。
このカードがフィールド上に存在する限り、
自分フィールド上の水属性モンスターの数と同じ数だけ、
自分フィールド上の水属性モンスターのレベルをエンドフェイズ時まで上げる。
シンクロもエクシーズも使わないならアトランティスや海の方がいいのはわかってるんだけど、何となく抜く気になれないんだよなあ、このカードも。
氷弾使いレイス　攻８００↓１０００
シャーク・サッカー　攻２００↓４００
「これじゃあ攻撃力の合計は……」
「せ、１４００になるッス……」
「その通り。まずはシャーク・サッカーのダイレクトアタック！」

勢いよく十代に飛びつき、鋭い牙でガブリと噛みつくシャーク・サッカー。
シャーク・サッカー　攻４００→十代（直接攻撃）
十代　ＬＰ１２００→８００
「氷弾使いレイスでダイレクトアタック！ヘイルランチャー！」
脇に抱えた大きな銃から、連射された氷の弾が十代にぶつかっていく。
氷弾使いレイス　攻１０００→十代（直接攻撃）
十代　ＬＰ８００→０
「ふう……」
やれやれ、どうにか勝てたな。疲れた疲れた。
「ちぇー、負けちまったかぁ」
さすがに十代も悔しそうだな。ふむ、せっかくだからあのセリフも借りてくか。
「十代」
「え？」
「ガッチャ、楽しいデュエルだったぜ!!」
「……ああ！」
「さてと、とりあえず夕飯には間に合うように帰らねーとな。話はメシが終わってから

のんびりしちゃる。それじゃ、寮まで競争な！」
「あ、ずるいぜ清明！」
「ふ、二人とも待って欲しいッスよ～！」

ターン4　氷上のプリマ

「皆さん、初めまして。体育教諭の鮎川です。これから三年間、よろしくね」

あのデュエルからはや三日。十代も翔も最初はピンときてないみたいだったけど、業を煮やしたユートが説明途中に割り込み交代。ようやく納得してくれたようだ。もっとも翔は『二重人格ってヤツっスか？』なんて、微妙にわかったんだかわかってないんだか始末に困る反応だったけど。それともう一つ不思議なことが起きた。どうも十代にはユーノの姿が見えるようになったらしい。本人いわく、『ハネクリボーも見えるぜ！ところでお前の横で泳いでるソイツって、もしかしてシャーク・サッカーか？』だそうだ。いや、僕には何も見えないんだけど……。ちなみにユーノの感想は『驚いたな。ま、原作の大まかな流れに変わりはないだろ』とのこと。なんのことだかさっぱりわからない。前からちょいちょい思ってたけど、コイツら会話のキャッチボールをまともにする気があるのかなぁ……？

そんなことを考えていたら、頭の中で声がした。

『体育……なあ清明、お前ってボート漕げるか？』

「（は、はい？）」

まるで意味が分からない。体育とボートと一体何の関係があるってんだろう。まあ一応できるっちゃあできるけどさ。

『あーいや、別に授業には関係ないんだけどな。今日はボートを漕ぐスキルが必要になる可能性がひじょーに高いから、そのつもりでいろよ』

……なんで？その後も一日中問いただしてみたけど、結局ユーノが答えてくれることはなかった。ただ、ほかにも気になったことがありまして。

「えへへ……」

「なあ清明、翔の奴一体どうしちまったんだ？」

「さあ？」

ぼんやりと頬杖ついて座り、ニタニタとしまりなく笑ってる翔。

「ユーノー、お前はなんか知ってるか？」

『……さあな（スーッと明後日の方を向く）』

「ムッチャ怪しいーー!?」

もうよくわかんないので十代と相談して、ある程度注意しながらもそのままほっとくことにした。まあそのうち治るでしょ、うん。

――――――で、夜。のんびりデッキをいじくってたら、隣の部屋の十代がいきなり飛び込んできた。

「清明!!翔がどこ行ったか知らないか!?」
「え、何?何?」
「それが、さっきから翔がどこにも居ないんだ!」
「あれだよほら、忘れ物でも取りに行ったんじゃないの?」
「それでも、もう一時間もたつんだぜ!何かあったんじゃないのか?」
「そんなこと言われてもなぁ……でもいいよ、手伝おうじゃないの。ところで隼人は?」
隼人……あー、隼人さんってのは僕らの先輩。なんでも留年生らしいけど、基本的にはいい人。ただちょっと後ろ向きなところもあるんだけど。
「それが、『どうせ飯の時間には帰ってくるだろー』って」
「うん……まあ実際そうだと思うけどなぁ」
「そう……かなー?」
「とりあえず、この辺りからもう一回探し直そ。夕飯になっても帰ってこなかったら、最悪先生のところまで行った方が早いだろうし」
「そっか!じゃあ清明、悪いけどそっちの方探しててくれ!」
「オーケー!」

まず結論。見つかりませんでした、まる。

「帰ってこないね……」

「どこにも居ない……」

まったく、人に心配させて。帰ってきたらまず説教でもしてやりますかね。と、その時十代のＰＤＬ……だっけ？なんかそんな感じの名前の、入学時に一人一個もらった機械が鳴った。

「ん、なんだ？」

そう言ってポケットから引っ張り出し、覗き込む十代。と、驚いたようにメールの文面を見せてくれた。そこには簡単に一言、

『翔君のことで、話したいことがあります。ブルーの女子寮まで来なさい』
と書かれていた。お願いじゃなくて命令口調なのがイラッとくる。けどまあ、
「行くしかないよねーこれは」
「よし、じゃあ早速行ってみるか！」
『……ふむ。ちょい待ち、お二人さん』
ようやく手掛かりが見つかって盛り上がってきたところに、ずっと部屋の隅で精霊体になって寝っ転がってたユーノが声をかける。
『女子寮は基本的に男子禁制だぞ？さあ、どうやって潜り込む？』
あ。ど、どうしよ十代。
「え、えーっと、なにかいい方法あるか、清明にユーノ？」
うーんと、何か、何か、何か……。と、そこでふと一つのことを思い出した。それは、今日の昼にユーノが振ってきた、意味の分からない会話。
「ボートだ！あれで脇の池から行けばいい！」
「それだ！よし、確かこの寮にも手漕ぎボートなら一隻あるはずだぜ！」
それにしてもユーノ、まさかこうなることを知ってたのかな？いや、まさか、ね。

そして、所変わってブルー女子寮前……の池。特徴、デカい。以上。いーかげんボート漕ぐのも飽きてきたんだけどなぁ。
「おい、誰だか知らないけど来てやったぜ！翔を返せ！」
「ようやく現れたわね、遊城十代」
「アニキ～、助けて～！」
「あ、翔！……何やってんのそんなとこで」
ロープでぐるぐる巻きにされた翔が桟橋に放り出されているその姿は、まあなんというか、
「みっともないな、翔」
『前々から思ってたけど、お前って結構えぐいとこあるよな』
「ちょっと、そこのあなた!!」
はて、僕のこと……なんだろうなあ、やっぱり。十代は今あっちの金髪っ娘と何やら喋ってるし。
「はーい。何か用？」
「何か用、じゃありません！あっちは明日香さんが直々に呼びつけたのだからまだわか

るとしても、貴方は一体誰なんですか？」
「そうよそうよ！部外者の、それもレッド生は特別に見逃してあげるからさっさと帰りなさい！」
　いや、レッド関係なくね？と言いたいのはぐっと我慢して、とりあえず当たり障りのない返事を返す。
「そりゃどーも。でもまあお気遣いなく。第一、今ここで僕が帰ったら十代が帰れなくなるし」
「なによその態度！貴方、自分がオシリスレッドだという自覚はあるの？」
「そーいや隼人……先輩も言ってたなー、そんなこと。でもまあ、悪いけど特に気にするつもりはないから」
『へぇ、なかなか言うじゃないの。ちっとは見直したぜ』
「（そう言ってもらえて嬉しいよ）」
『ま、あっちのお二人さんはそう思ってはくれないみたいだけどな』
　やっぱりというかなんというか、まあブルーの傾向から考えて当たり前だけど。結構怒ってるねー、二人とも。そしてそのうちの片方（いまだにどっちの名前もわかんないから、こうとしか言いようがない）が口を開いたその時。
「二人とも、少し落ち着かなきゃだめだよ？って言ってるよ。それとやっほー、清明。久

しぶり～、だってさ」
「あれ？その声……」
『もしかしなくても、だな』
「あの時はありがとうね、だってさ。夢想ちゃんの登場だよー、なんだって」
「夢想ちゃん！」
「ちょっと貴方、夢想さんに対してなんですかその態度は！」
「え、何夢想ちゃん実はそんな偉い人だったの!?」
「いや、だから二人とも呼び捨てでいいんだけど、って言ってるのに……。それと清明、別にそういうわけじゃないよ、だってさ」
「え、じゃあなんで？」
「ちょっとね、勝ちすぎたのかな？みたいなの」
「今のブルー女子寮の二大トップと言えば、あそこのドロップアウトと話している天上院明日香さんと、ここにいる河風夢想さんの二人なんです！いやしくもオシリスレッドなんかには、話しかけることさえ許されませんわ！」
「え～と……どゆこと？」
　説明を求めてチラッと見ると、心底困った顔で答えてきた。
「正直私もやめてほしいんだけど何回言っても直らなくて、って言ってるの」

「大変そうだね……」
「うん」
なんとなく二人でしみじみしていると、そこに十代の大声が響いた。
「サンダー・ジャイアントで攻撃！ボルティック・サンダー!!」
「きゃあっ!!」
あ、十代が勝った。それじゃあ、今の今まですっかり忘れてたけど。
「ほら翔、さっさと帰って……説教な」
「何か今殺気を感じたッスよ!?」
「当たり前だって。ったく、何があってこんなトコまで来たかは知らないけど……
そういやそこのお二人さん、一体翔が何したってのさ」
「コイツが覗きをやってたのよ！」
「やっぱ僕ら帰るんでこのメガネは煮るなり焼くなり好きにしてください」
「ちょ、誤解っスよ清明君！なにホントに帰ろうとしてるんスか！」
「だって覗きでしょ？そりゃさすがに庇いきれそうにないわー」
「だから誤解だってば～！」
「とにかく、許すわけにはいきませんわ！」
「別に返してあげていいと思うんだけどな、って言ってるのに」

「いいえ、そんなことを一度でも許したらつけあがるに決まってますわ！」
「そんな～、そもそも僕は覗いてないッスよ！」
『もー収集つかなくなってきたな』
「（だね。どーしようこれ）」
「話は聞かせてもらったわ」
「!?」
「あ、明日香さん！」
　ふと後ろを見ると、さっきまで十代とデュエルしてたらしい（見てなかったもん）金髪。そうかそうか、この人がその明日香さんとやらか。
「初めまして、遊野清明君。もう知ってるとは思うけど、私は天上院明日香、明日香でいいわ。よろしくね」
　ふむ、この人は少なくとも礼儀正しいな。なら、こっちもそれなりの態度をとるべきだろう。別に皮肉を言う理由もないし。
「ああ、こっちこそ初めまして。それと、こっちも清明だけで構わないよ」
「それで、翔君の話だけど。どうかしら、その前に私ともデュエル、してくれない？」
「おい明日香、話が違うぞ！俺が勝ったから翔は返してくれるんじゃなかったのかよ！」
「わかってるわよ、十代。これは、私が純粋にデュエルがしたいから頼んでいるだけ。結

果がどうなっても今日のことはなかったことにするわ。ジュンコ、ももえ、それでいいわね？」
「は、はい！」
「明日香、気を付けたほうがいいよ、だってさ。清明はかなり強いよ、って言いたいみたいだよ」
「わかってるわよ、夢想。クロノス教諭を倒した実力、改めてこの目で見せてもらうわ」
「清明も頑張ってね、だってさ。明日香の強さもなかなかのものだよ、って忠告してるからね」
「わかったわかった……まったく、人がまだＯＫ出してないのに勝手に盛り上がっちゃって。でもまあ……」
『デュエリストなら、常識だろ？』
『「売られたデュエルは、買うのが礼儀！」……ってな』
「そう、ありがとう。それじゃあ早速だけど」
「「デュエル!!」」
「先攻はあなたからでいいわよ」
「ありがとう。それじゃあ僕のターン、ドロー！」
　さーて、どうしようか。さっきのデュエルに気づいてなかったせいで、明日香のデッ

キタイプが掴めない。じゃあ、ここは守りを固めるか。
「僕は、ヒゲアンコウを守備表示で召喚」
ずいぶんと強面のチョウチンアンコウが、明日香に向かって牙をむく。
ヒゲアンコウ
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１５００／守１６００
水属性モンスターを生け贄召喚する場合、
このモンスター１体で２体分の生け贄とする事ができる。
ヒゲアンコウ　守１６００
「そしてヒゲアンコウは魚族。その召喚に成功した時、手札からシャーク・サッカーを特殊召喚！」
シャーク・サッカー
効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻　２００／守１０００
自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードはシンクロ素材とする事はできない。

シャーク・サッカー　守１０００
「そしてフィールド魔法、忘却の都　レミューリアを発動!」
ゴゴゴゴゴっと地面から生えてくる、忘れ去られた無人の都。ヒゲアンコウもシャーク・サッカーも、それぞれその周りの海の中に飛び込んだ。
忘却の都　レミューリア
フィールド魔法
このカードのカード名は「海」として扱う。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００ポイントアップする。
また、１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に発動できる。
このカードがフィールド上に存在する限り、
自分フィールド上の水属性モンスターの数と同じ数だけ、
自分フィールド上の水属性モンスターのレベルをエンドフェイズ時まで上げる。
ヒゲアンコウ　守１６００→１８００　攻１５００→１７００
シャーク・サッカー　守１０００→１２００　攻２００→４００
「カードを二枚伏せて、ターンエンド」
「まずは様子見、といったところかしら?私のターン、ドロー!私はサイバー・チュチュ

を召喚するわ」
サイバー・チュチュ
効果モンスター
星３／地属性／戦士族／攻１０００／守　８００
相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力が
このカードの攻撃力よりも高い場合、
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
踊るようにしてフィールドに現れる、スケート靴をはいた女性モンスター。さあ、一体どんなデュエルを見せてくれるんだろう。
「そして速攻魔法、突進を発動！対象はシャーク・サッカー！」
突進
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は
エンドフェイズ時まで７００ポイントアップする。
シャーク・サッカー　攻４００→１１００
「んなっ!?」
『あーなるほど、そうきたか。ライフ４０００なら確かにそんなゴリ押しでもいけなく

はないわな』

「ユーノ、今のは一体どういうことなんだ？自分のモンスターの攻撃力をあげれば、どっちか片方は突破できるのに」

『んー？まあ見てなって十代。どうせすぐに本人が説明してくれるさ』

先に言われちゃったけど、僕の疑問も十代と同じ。いつもどうり、ユーノは全部お見通しみたいだけど。

「そしてマジックカード、ダブルアタックを発動。手札のヂェミナイ・エルフを捨てて、このターンサイバー・チュチュが二回攻撃できるようにするわ」

ダブルアタック

通常魔法

自分の手札からモンスターカード1枚を墓地に捨てる。

捨てたモンスターよりもレベルが低いモンスター1体を自分フィールド上から選択する。

選択したモンスター1体はこのターン2回攻撃をする事ができる。

ヂェミナイ・エルフ

通常モンスター

星４／地属性／魔法使い族／攻１９００／守　９００

交互に攻撃を仕掛けてくる、エルフの双子姉妹。
「そしてサイバー・チュチュで攻撃、この瞬間に効果発動！あなたのフィールド上のモンスターの攻撃力がすべてチュチュより上だった場合、チュチュは相手プレイヤーにダイレクトアタックができる！ヌーベル・ポアント！」
スケート靴は凶器じゃありません。良い子の皆さんは、間違っても人を蹴るための道具として使ったりなんてしないでください。
「ぐっ！」
サイバー・チュチュ　攻１０００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ４０００→３０００
「もう一度ヌーベル・ポアント！」
スケート靴は凶器じゃありませｎ（ｒｙ
というかそんなん喰らったらいきなりライフ半分じゃないか。く、ここはしょうがない！
「待った！二回目の攻撃時にトラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！」
スケートの要領で突っ込んでくるサイバー・チュチュを、大津波が押し戻す。
ポセイドン・ウェーブ
通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にする。
自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが表側表示で存在する場合、
その数×８００ポイントダメージを相手ライフに与える。
「このカードの効果でチュチュの攻撃は無効、さらにヒゲアンコウとシャーク・サッカーの存在でダメージは１６００だ！」
「やるわね！」
明日香　ＬＰ４０００→２４００
「やったッス！」
「頑張れー、清明！」
「あのレッド生、よくも明日香さんにダメージを！」
「貴女たち、ちょっと黙っててね……だってさ。そんなことばっかり言ってると、ブルー寮の品位が下がっちゃうよ？別に私は気にしないけど、なんだって」
「カードを一枚伏せて、ターンエンドよ」
清明　手札：１　フィールド：ヒゲアンコウ（守）、シャーク・サッカー（守）　魔法・罠：１（伏せ）
明日香　手札：１　フィールド：サイバー・チュチュ（攻）　魔法・罠：１（伏せ）

場：忘却の都　レミューリア

「僕のターン、ドロー」

さて。今のところはこっちが微妙に押してるけど、正直攻めの一手が見つからないな。これを伏せたのは間違いだったかな？ただまあ、あのサイバー・チュチュは残しておくと厄介だ。

「ヒゲアンコウを攻撃表示に変更して、サイバー・チュチュを攻撃！」

ヒゲアンコウ　守１８００→攻１７００

ヒゲアンコウ　攻１７００→サイバー・チュチュ　攻１０００（破壊？）

「なら、ここでトラップ発動！ホーリーライフバリアー！」

ヒゲアンコウが大きな口を開けてサイバー・チュチュに噛みつこうとするも、その真ん中にいきなり表れた青い服の修道女たちがバリアを張って攻撃を防ぐ。あれ、ホーリーライフバリアーの効果って確か……。

ホーリーライフバリアー

通常罠

手札を１枚捨てる。

このカードを発動したターン、相手から受ける全てのダメージを０にする。

『言いたいことはわからんでもないが、残念ながらあのカードならモンスターの戦闘破

壊もナシにできるんだよ』
え、そうなの？じゃあ一時ｋ……
『念のため言っとくけど、一時休戦あたりではふつーに戦闘破壊されるぞ』
「……なんで？」
『そんなもんだ、としか言いようがねえな。こればっかりは俺も今一つ理解できなかった』
「ふーん。あ、これでターンエンド」
「私のターン、ドロー！ヂェミナイ・エルフを召喚！」
フィールド上に降り立つ、双子のエルフ姉妹。どーでもいいけどこれって、二人がかりで攻撃力１９００なら、一人になると攻撃力９５０っていうことになるんだろうか。
『お前は何を言ってるんだ』
「（……うん、ごめん。ちょっと反省してる）」
ヂェミナイ・エルフ
省略
ヂェミナイ・エルフ　攻１９００
「ヂェミナイ・エルフでシャーク・サッカーを攻撃！」
「ごめんよ、シャーク・サッカー」

ヂェミナイ・エルフ　攻１９００↓シャーク・サッカー　守１２００（破壊）
「これであなたのモンスターは攻撃力１７００のヒゲアンコウ一体……行きなさい、サイバー・チュチュ！ヌーベル・ポアント！」
本日二回目の、スケート靴によるハイキック。く、さっきのターンで倒せなかったのは痛いな。
サイバー・チュチュ　攻１０００↓清明　ＬＰ３０００（直接攻撃）
清明　ＬＰ３０００↓２０００
「これでターンエンド」
清明　手札：２　フィールド：ヒゲアンコウ（攻）魔法・罠：１（伏せ）
明日香　手札：０　フィールド：ヂェミナイ・エルフ（攻）、サイバー・チュチュ（攻）
魔法・罠：０
場：忘却の都　レミューリア
「僕のターン、ドロー！」
今ならセットカードもない、ここは押し切る！って言いたいところなんだけどなぁ……。手札が……。
『わー、モンスターが一体もいねぇ』
どう見ても事故です、本当にありがとうございました。

「しょうがないか、まずはヒゲアンコウでサイバー・チュチュをもう一度攻撃！」
ヒゲアンコウの噛みつきは、今度こそサイバー・チュチュをしっかりと捉えた。
ヒゲアンコウ　攻１７００→サイバー・チュチュ　攻１０００（破壊）
明日香　ＬＰ２４００→１７００
「カードを一枚セット、ターンエンド」
「私のターン、ドロー。……そうね、エトワール・サイバーを召喚。そして、ヂェミナイ・エルフでヒゲアンコウを攻撃するわ」
フィールドに降り立つ二人目のプリマは、紅白デザインの衣装を着た長髪の女戦士。
エトワール・サイバー
効果モンスター
星４／地属性／戦士族／攻１２００／守１６００
このカードは相手プレイヤーを直接攻撃する場合、
ダメージステップの間攻撃力が５００ポイントアップする。
エトワール・サイバー　攻１２００
くっ、ここでこの伏せカードを使うか？いや、でもここで発動したら後でどうしようもなくなる！
『ふむ、ここで見送りか。……エトワール・サイバーの効果を把握したうえでやって

くれてんだよな？」
「へ、効果？」
『もうやだコイツ』
　ヂェミナイ・エルフ　攻１９００↓ヒゲアンコウ　攻１７００（破壊）
　清明　ＬＰ２０００↓１８００
「エトワール・サイバーでダイレクトアタック！さらにこの時エトワール・サイバーの効果で、攻撃力が５００ポイントアップするわよ」
　そんな効果だったのか！ならやっぱり、さっきヒゲアンコウがやられるときにあのカードを使っておけばよかったかな？
　エトワール・サイバー　攻１２００↓１７００
　エトワール・サイバー　攻１７００↓清明（直接攻撃）
　清明　ＬＰ１８００↓１００
「うわぁっ！」
『ふむ。鉄壁だな』
　いやちょっとユーノさん何落ち着いてんの!!残りライフ１００って相当まずいんじゃないの!?
『まずいっちゃあまずいんだけどな。すっげー楽しみに見させてもらうぜ、次のお前の

ターン。自分でやったポカなんだし。わーい鉄壁だー鉄壁だー』

えー、何その反応友達なくすよ?と言いたいのをぐっとこらえる。言ったところでぜんぜん応えないのは目に見えてるし。

「エトワール・サイバーの攻撃力が元に戻って、ターンエンド。さあ、あなたのターンよ?」

エトワール・サイバー　攻１７００→１２００

清明　手札：２　フィールド：０　魔法・罠：２（伏せ）

明日香　手札：０　フィールド：ヂェミナイ・エルフ（攻）、エトワール・サイバー（攻）

魔法・罠：０

場：忘却の都　レミューリア

「わかってますよ、だ！ドロー！」

頼む、モンスター来い！

「よし！オイスターマイスターを召喚！」

もうすっかりお馴染みになった、牡蠣に見えない牡蠣の戦士が池から飛び出してフィールドに着地する。何か今池の方で『マンマミ～ヤ！足をつったのーネ!!』とか聞こえたような気がしたけど、多分空耳だろう。

オイスターマイスター

効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻１６００／守　２００
このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、
自分フィールド上に「オイスタートークン」（魚族・水・星１・攻／守０）１体を特殊召喚する。
オイスターマイスター　攻１６００→１８００　守２００→４００
「オイスターマイスターを対象に、マジックカードアクア・ジェット！」
『出た！清明さんのマジックコンｂ「うるさい」……はい』
アクア・ジェット
通常魔法
自分フィールド上の
魚族・海竜族・水族モンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。
オイスターマイスター　攻１８００→２８００
「レベル３で攻撃力２８００!?」
「行け、オイスターマイスター！エトワール・サイバーに攻撃！オイスターショット！」
「やるわね……！でも、まだライフは１００残る！まだ戦えるわ！」

「それはどうかな！」
「なんですって!?」
「トラップ発動！メタル化・魔法反射装甲!!」
そう、これこそが前から伏せてあったとっておき。さっき発動を渋ったのは、素の攻撃力が低いヒゲアンコウじゃあ効果が今一つ薄いと思ったからなんだけど……結果的にはオイスターマイスターも１００しか違わないね。まあいっか。そんなこっちの思いをよそに、右腕にジェットを付けてサイボーグのようになったオイスターマイスターがメタルの鎧を身に着け、いよいよ生き物に見えなくなっていく。もうこれ二足歩行ってことしか原型留めてないんじゃないかってぐらいに。
メタル化・魔法反射装甲
通常罠
発動後このカードは攻撃力・守備力３００ポイントアップの装備カードとなり、モンスター１体に装備する。
装備モンスターが攻撃を行う場合、そのダメージ計算時のみ
装備モンスターの攻撃力は攻撃対象モンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。
「まず、メタル化の効果で攻守３００ポイントアップ！さらに、エトワール・サイバーの攻撃力の半分……６００ポイントの攻撃力アップ！」

オイスターマイスター　攻２８００→３１００→３７００　守４００→７００
「そんな……」
オイスターマイスター　攻３７００→エトワール・サイバー　攻１２００（破壊）
明日香　ＬＰ１７００→０
はぁ、勝った……。へたり込みそうになるのをぐっと踏ん張って、先に座り込んでしまった明日香のところに近づいていく。
「えっと、大丈夫？」
「ええ……」
「手ぇ、貸そっか？」
「それじゃ、お願いしようかしｒ「ちょっと貴方！いくらまぐれで明日香さんに勝ったからって、そんなにいい気にならないでくれる！」……ごめんなさいね、自分で立たないとまた言われそうだし」
「ちょっと、さすがにそれは言い過ぎじゃ……」
「あー、うん。気にしないから別にいいんだけどさ……」
『だな』
「それでも同じブルーとして、私からも謝っておくよ、だって。ごめんね？」
「ノープロブレム」

『……そのカタカナ英語発音やめろ、カッコ悪いぞ』
「え、そうだった!?」
『お前が英語できないことだけはよく伝わってきたな』
「そんな～……えーい、十代に翔！もう帰ろう!!」
「お、おう！」
「だからアニキ、まずこのロープをほどいてくださいってば～！」
「あ、すまん翔！すっかり忘れてたぜ！」
「ちょっと、二人とも僕の扱いが悪くないっすか？」
「だって……なあ？」
「なんでハモるんスか～!?」
　いや、だって今回ここまで来るきっかけは翔なわけだし。
「じゃあねー。まあ翔には説教しておくから、それで水に流しといて」
「それじゃあなー。ところで清明、説教っていったいどのくらいなんだ？」
「……5時間ぶっ続けコース、かな？」
「ひぃっ!?鬼がいたッス！」
「ユート、俺と隼人は今日どこで寝りゃあいいんだろう……？」
『大徳寺先生かファラオにでも頼みこんだらどうだ？俺も一緒についてくから。巻き込

まれちゃかなわん」
「……だな」
その後、本当に５時間の間翔の悲鳴が響き渡ったかどうかは別の話。ちゃんちゃん♪

『怖えなオイ』
「もう済んだこと、気にしない気にしない」

ターン5　移動砲台型戦闘機械、ＶＷＸＹＺ！

　気持ちのいい青空。吹き抜ける潮風。……なんてもの、今の俺らには関係ない。なぜなら、明日香撃破後に起こる最初のイベントがあるからだ。そう、テストである。正直めんどくさいのだが、ここで退学にでもなられちゃ馬鹿みたい、というか馬鹿そのものなので清明をしごき倒す。するとあの野郎、一人でも道連れを増やそうとしたのか死者蘇生を頭に巻きつけてお祈り中の翔と実技一本に絞ってデッキ調整中の十代を首根っこ掴んでズルズルと涙目になりながら引っ張ってきた。正直この二人はなんだかんだいって合格してたからどっちでもよかったけど、せっかくだから正史に干渉してみる……早い話が一緒にカードの知識から暗記させることにする。まあ、どうせまだテストまで一週間はあるし。プリントに書いてあった。

　以上、今回ここに至るまでの経緯でした。

『よし十代、怒らないからゆっくり答えてみろ。モンスターを墓地から一体蘇生させる魔法カード5種類！』

「えっと、まず死者蘇生だろ、O―オーバーソウルだろ、ヒーローフラッシュだろ、後ブランチ、えっと……」

『お前、ホント自分のデッキに関係あるのしか覚えてないのな。ちなみにあとパッと思いつくものとしては、禁止カードになった早すぎた埋葬なんかかな？んじゃ次、清明！自己再生能力もちのモンスター５種類！』
「なんか十代より問題難しくない!?ん～と、黄泉ガエルに、ドル・ドラ、それとタスケナイトにリバイバルスライム、あと……不死武士！どーだ！」
『ほお、少しはやるじゃねえか。他にはナチュル・パイナポーとかもいるぞー。よし、ちょっと体借りるぞ』
「え、あ、ちょ……よし、次はテメーだ翔！カードを破壊する効果持ちのカード、種類も枚数も言わないから３枚答えてみろ」
「は、はいっ！えっと、えっと……」
「がんばれ翔！落ち着いて考えれば、お前ならこんな問題できるはずだぜ！」
「じゃあヒント。確かビークロイドの中にも無効にして破壊の効果持ちがいたよな」
「そうか！ネイビィロイドッスね！」
「ん、そーだな。でも、まだ二枚答えてないぞ？」
「わかってるッスよ！ステルスロイドでしょ？」
「あと一枚だ。んじゃ、ここで最後のヒント。別に効果破壊ならモンスターでも構わんぞ？」

「もしかして、ドリルロイド……っスか？」
「よし、やりゃあできるじゃねーか」
と、そこで疑問に思ったらしい十代が声をかけた。……不満たっぷりに。
「なあユーノ、ちょっと翔だけ贔屓しすぎじゃねーか？問題も俺の方が難しかったし」
「（うん、まあそうなんだけどな。ただ、はっきり言って今の翔はちとレベルが低いうえに自分に自信がまるでないからな。まず自信つけることから始めてもらわんと）」
それに、今の受け答えだけではっきりしたことが一つある。この世界、俺の知ってるアニメＧＸよりもビミョーに原作キャラが強い。十代にはああ言ったけど、翔の最初期といったら例の『先攻スチームロイド攻撃表示』が示すほどひどかったはず。でも、ここにいる翔は少なくとも自分の使うロイドの効果はしっかり把握している。『俺』に『清明』というイレギュラーが入った影響なのか？そして、それよりなにより……
「ごちゃごちゃゆーな十代。つぎ、チューナーモンスターを三体ずつそれぞれ答えてみろ」
「チューナーか……まずこの間お前が使ってた氷弾使いレイスに竜宮の白タウナギだろ、それに……」
「アニキ～ひどいッスよ！僕がそれ言おうと思ってたのに！」
「へへっ、早い者勝ちだぜ！」

これだ。この時代にいちゃあおかしいモンスター、チューナー。やっぱり俺がデッキごとこの世界に持ちこんできたのがまずかったんだろうか？もっともこの世界にはシンクロもエクシーズもなくて、チューナーの意味は単に『トラスト・マインドで蘇生できたり、チューナーズ・バリアで守ったりできるモンスター群』というもの……乱暴に一言でまとめると、癖のないスピリットやユニオンみたいなカテゴリである。ちなみに……

『はーい！』

「ん、清明」

『氷結界の水影！でもさ、ユーノ？』

「はいせーかい。どした？今ちょっとばかし忙しいんだ。後にしろ後に」

『いや、でもさ』

「後だ後」

『まあ、いいんだけど……』

「だろ？よーし、じゃあ次の問題だすぞー」

「じゃ、もう寝よっか～」
「ああ、俺らも部屋に戻るぜ」
「おやすみなさいッス～」
『おう。明日も覚悟しとけよー』
「「明日も!?」」
『……何驚いてんだお前ら。ほれほれ、さっさと寝ろ』
「は、は～い」
全く、なにかおかしなこと言ったか俺？

『……何驚いてんだお前ら。ほれほれ、さっさと寝ろ』

思えば、この時点で何かがおかしいと気づくべき……いや、僕だってそこまで馬鹿じゃないよ、気づいてたんだよはっきりと。いや、でもさ？ぶっちゃけ、テスト勉強ってしたくないじゃん？ねえ？だから、僕は悪くない……と、思いたいなぁ。

まあ、何が言いたいかというと。

「じゃあお休み、ユーノ」

『ん』

「そういえば、さっきの話だけどさ」

『おう、そういや何か言ってたな。なんだ？』

「ユーノは普段授業中って校舎内うろついたり一緒に授業効いてたり一日中昼寝決め込んでたり忙しいけどさ」

『ハッキリ言ってくれ、ハッキリ。うっとうしいからグダグダ喋んな』

「その……ほら、ユーノはテストの日って、プリントでしか見てないよね」

『まあそうだな。特に聞かなかったし……まさか！』

「その、あの後で訂正が入ってね？ほんのちょびーっとだけ、日付がずれたんだよね」

『怒らないから言ってみろ、結局テストはいつなんだ？』

「え？えっと、えーっと、イツダッタカナー」
『……』
「明日、です」
『……』
「……」
『今すぐ十代と翔たたき起こしてこい！まだ基本すら終わってねえぞ!?せめてチェーンに乗る乗らない特殊召喚ぐらいは脳みそに詰め込んでやるからキリキリ動けこの野郎っっっ!!』
「たった今怒んないって言ったじゃん!!」
『やかましーわ！どうもさっきの反応がおかしいと思ったらそーゆーことか！テスト前日にぐーすか寝ようとするたあいい度胸じゃねーかこのすっとこどっこい！』
「やっぱ言うんじゃなかったー!!!」
　その後？二人ともたたき起こして延々知識の詰め込み作業。あ、ちゃんと睡眠時間もとらせてもらえたよ？まあ下手に徹夜させて本番で寝オチとかいまどきギャグ漫画でもやらないパターンだろうけど。ってユーノが言ってた。

『……ろ！おい、起きろっつってんだろ！』

何か聞こえる気がする。でも眠い。うるさい。寝る。

『っの野郎……よーしわかった、ちょい右手貸せ』

「むにゃ、右手？よくわかんないけど、好きにすれば……」

『言ったな？歯ぁくいしばれ馬鹿！』

「ぐぎゃんっ!?」

自分の右手に本気で殴られてたたき起こされるって、人生の中でもそうはない経験だと思う。人って自分のことを殴る際にはある程度のリミッターがかかって無意識のうちに威力が落ちてるらしいんだけど、この場合動かしてるのがユーノだから遠慮も何もないマジパンチ。むっちゃ痛いです。

『目ぇ覚めたか？さっさと起きろ！』

「なにすんのいきなり！痛いよ？ふつーに痛いよ今の？」

『時計見てからものを言えっ！』
「とけ……でええええっっっっ!!?」
『いやー、俺が昨日余計なこと言ったせいでフラグ立っちゃったんだろうな。すまない。本当にすまないと思っている』
「俺にわかるように説明しろ！……って、言ってる場合か！とりあえず今からでも行かないと！そういや十代達は？」
『多分、俺らが先に言ってると思ったんだろうな。翔はともかく十代も遅刻組だし』
「え、十代も？」
『あーいや、こっちの話。とりあえず走れ！』
「わーってますよ、っと！」
　大慌てで食パン一枚だけ口にくわえて寮から校舎への地味に長い上り坂（この間ユーノが『こういう所もレッドなんだなぁ……』って物凄いしみじみした声で言ってた）を駆け上がっていくと、ふと見慣れた赤い制服と髪型、そして一台の車が見えた。ふむ。
「おーい、十代！何やってんのー？」
「あれ、清明？なんでお前がこんなところにいるんだ？」
「……どっかの誰かさんが起こしてくんないから」
『……どっかの誰かさんが電池の切れた目覚まし時計を放っておいたから』

『……一体誰のことだろうな（ね）』

「そ、そうか」

何か言いたそうだったけど、とりあえず何も言わないことにしたらしい。でもとにかく、僕は悪くないはず。

「んで、十代こそ何こんなとこで車押してんの？」

「ああ、実はな……」

「アタシの車の調子が悪くなってねぇ。手伝ってもらってるんだよ」

十代が話そうとした瞬間、いきなり新しい声がした。車の陰に隠れて気づかなかったけど、どうもずっといたらしい。ちょっとぼっちゃりした体系の、優しそうな人だ。

「ああ、それでこの車を校舎まで押してかなきゃいけないんだ。やっぱ困ってる人はほっとけないしな」

「なるほどねえ……オーケー十代、せっかくだから僕も手伝うよ」

「え、いいのか？お前まで遅刻することはないぜ」

「まったく、今自分でも言ったばっかりじゃないの。この遊野清明、困ってる人の横をたったか走っていけるほどの薄情者に見える？」

「ありがとな、清明！」

結局、ガッツリ遅刻しましたとさ。とっぴんぱらりのぷう。わかってたけどね！……そういや、あの人結局誰だったんだろう？名前がトメさんってことだけはわかったけど。

「それで、アニキも清明君も遅れちゃったんスか？」

「ああ、もうこうなったらしょうがない、勉強の成果を見せられなかったのは残念だけど実技試験で本気出すしかないな！」

「いや、むっちゃ嬉しそうじゃん」

なんてことをダベりながらの昼食タイム。すると、そこに見慣れた顔がやって来た。

……僕のおにぎり勝手に盗られたー！

「やあ、君たち。もしよかったら、俺も混ざっていいかい？」

「ああ、別にかまわないぜ三沢」

「三人とも久しぶり、だってさ。それと、このおかか美味しいよ、とも言ってるよ」

「そりゃどうも、夢想……」

ああ、僕の一日のエネルギー源が……まあいっか。もう全部食べられたものについてあーだこーだ言ってもしょうがないし、ね。

「二人ともこんなところまで、一体どうしたんスか？」

「ああ、実は今日から新しいカードのパックが購買で販売されるんだ。遅刻した君たちに、それを教えないのも不公平だろう？」
　ふーん、新しいパックかぁ。興味はあるけど、ユーノがなんて言うかなあ。
『新しいパック……ああ、あれか。ま、行く行かないは自分で決めな』
　あれれ、意外と淡白な反応。
『んー、だってあれなぁ……』
　なんかコイツにしては珍しい、今一つはっきりしない物言い。うーん、
「な～んか気になるなあ」
「？」
「あーいや、こっちの話。それで、三沢はそのパックを買いに？」
「いや、下手に新しいカードを入れて上手く回らなくなるのも嫌だからな。俺は俺のデッキを信じるさ」
「つまり行く気はない、と。じゃあ僕もやめよっかな……あーでもやっぱちょっとは気になるし、冷やかしぐらいには見に行ってみよっと」
「私も同じ、だってさ」
「あ、僕も行くッス～」
「じゃあ俺も！」

「みんなが行くんなら、せっかくだし俺もついて行ってみるかな」
　そうと決まれば前進前進。
「ところで三沢」
「どうした、清明？」
「……購買ってどこ？」
「俺もわかんねーな」
「あれ、アニキもわかんないんスか？」
「君たち、学校のどこに何があるかぐらい覚えておいてくれよ。なあ、河風君？」
「……ごめんなさい、だってさ」
「そ、そうか……あれ、もしかして俺がおかしいのか？」
『多分そんなことはないと思う、って俺が言っても聞こえねーか精霊体だし』
　まあとにかく、三沢せんせーによる道案内でたどり着いた購買。うーん、さすがにだいぶ人が集まってるなぁ。できればその新パック、収録カードのリストとかが出てるといいんだけどなぁ。そううまくはいかな……アレ？
「ねー十代、あの人ってさ」
「あ、そうだな！おーい、トメさーん！」
「あら、十代ちゃんに清明ちゃん。ごめんねぇ、実は……」

「「買占め!?」」
「そうなのよ、みんながくるちょっと前にきてね、ウチにあるパック全部買って行っちゃったお客さんがいたから、もうカードは無いの。ごめんね、せっかく来てくれたのに」
「そうかー。まあいいか、そろそろ時間だし戻ろうぜ」
「ああ、そうだね（ユーノさーん？）」
『どした？』
「（いや、どしたじゃなくて。最初からこうなることがわかってたの？）」
『はてさて、何のことやら、だな』
「（むー、なかなか口を割らないなあ）」
「ああ、ちょいとお待ちよ二人とも！」
「え、なんですか？」
「ふふふ、ちょいとこっちへおいでよ。あ、静かにね！」
「「……？」」
「はいこれ。さっきのお礼にね、こっそり一パックだけ隠しておいたんだよ！」

「え、これ俺らがもらっていいの!?」
「ほかの生徒には内緒だよ?それじゃあ試験、頑張ってね!」
「やったな清明!それじゃあ、あっちで翔たちと一緒に開けようぜ!」
「おー!」

「レッド寮より遊野清明です、こうなったらヤケだ、よろしくお願いします!」
「ブルー寮、万丈目準だ。まあいくらレッド寮とはいえ、遊城十代とデュエルする前の前座ぐらいにはなってくれるだろうな」
実技試験で、僕の相手はブルー生徒……しかも、話を聞く限りではかなりのエリート生らしい。ソースは夢想から聞いたブルー男子についての噂話だけど。どうしてこうなった。

『やんなくていい喧嘩吹っかけたお前が悪い』
「……とか言いながらユーノさん、ムッチャ嬉しそうですよ？」
そう、あれはちょっと前、三沢と夢想がそれぞれイエローとブルー女子のテスト部屋に帰っていき、それと入れ違いに現れたこの万丈目さ……あー、呼び捨てでいいや。万丈目とその取り巻きが『あること』を伝えに来た時だった。
『以下、回想です』
「……誰と話してんの？」

「おい、遊城十代！」
「お前確か、万丈目！」
「万丈目さん、だ！いいか、今回の実技試験、お前の相手は俺になった！」
「え、本当か!?」
「感謝しろよ、レッド生相手にわざわざ万丈目さんから直々にお呼びがかかったんだ！」
「そうだそうだ！」
「でも、そんなの不公平っスよ！だいたい、決まりでは違う色の寮の生徒どうしでは原則公式なデュエルはしないんじゃないんスか!?」

「だからこそ、俺様が直々に出向いてやったんだ！さあ、どうする遊城十代！この勝負受けるのか、それとも尻尾を巻いて逃げ出すのか！」
「へっ、上等だぜ！売られたデュエルは買うのが礼儀！それに、お前との決着はまだついてないもんな！」
「ん？翔、十代ってアイツとデュエルしたことがあるの？」
「入学初日に校舎に忍び込んで……わっ！な、なんでもないッス～!!」
「だいたい把握した」
「そこ、黙っていろ！お前らレッド寮ごときはな、本来万丈目さんとは口を利くことすら許されないほど差があるんだよ！」
「ほー、口を利くことも、ね……よーし面白い、そこの……えーと、名前なんだっけ？」
「万丈目、さんだ！」
「よし万丈目！レッド寮には十代もいるけど、この僕遊野清明がいることも忘れるなってんだ！十代とデュエルする前に、僕ともデュエルしてみろ！」
「あー？何言ってんだこのレッド、万丈目さんはなあ、お前みたいなクズとデュエルなんt「何、貴様が遊野清明だったか！」えぇっ！」
「あれ、僕も結構有名人なのかな？」

「クロノス教諭を倒したもう一人のレッド生……いいだろう！そのデュエル、受けて立ってやる！」

『別にわざわざ売らなくても何も問題ないデュエルだったよな。あ、これで回想終わりね』

「だから誰に向かって言ってるの？というか、もうほっといてよ……」

反省はしてないけど。無論後悔もしてません。

『駄目じゃねえか』

「細かいことはいーの！いくぞ万丈目！」

「さんだ！」

「デュエル!!」

「先攻は俺がもらうぞ！ドロー！俺は、手札抹殺を発動！さあ、お前の手札を捨ててドローしろ！」

うわぁ、せっかく初手にきてたペンギン・ナイトメアとスノーマンイーターが……。

手札抹殺

通常魔法（制限カード）
お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから
捨てた枚数分のカードをドローする。
「さらに俺は、Ｘ―ヘッド・キャノンを召喚！」
Ｘ―ヘッド・キャノン
通常モンスター
星４／光属性／機械族／攻１８００／守１５００
強力なキャノン砲を装備した、合体能力を持つモンスター。
合体と分離を駆使して様々な攻撃を繰り出す。
Ｘ―ヘッド・キャノン　攻１８００
「カードを三枚セットして、ターンエンドだ」
『さーて、どうする？残念ながらあのセットカードがどうにかできる手札じゃない。かといって、あいつを放っておいたらユニオン合体されて手が付けられなくなるぞ』
「どっちにしても危険なら、突っ走ってみるのみさ！ドロー！永続魔法ウォーターハザードを発動、効果によりオイスターマイスターを特殊召喚！」
フィールドにいきなりどこからともなく波がかぶさり、水が引いた後に立っていたのは毎度おなじみ牡蠣の戦士。

ウォーターハザード
永続魔法
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
手札からレベル４以下の水属性モンスター１体を特殊召喚できる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。
オイスターマイスター
効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻１６００／守　２００
このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、
自分フィールド上に「オイスタートークン」（魚族・水・星１・攻／守０）１体を特殊召喚する。
オイスターマイスター　攻１６００
「さらに、オイスターマイスターをリリース！カモン、ジョーズマン！」
そして牡蠣の戦士が光に包まれて姿を消し、その後に立っているのは体中に鋭い牙の生えた口をたくさん持つ、サメの名を持つくせに魚ではなく獣戦士なお方。ほらそこの観客さん、聞こえてますからキモいだのなんだの言わないでください。カッコいいのになぁ。

ジョーズマン
効果モンスター
星６／水属性／獣戦士族／攻２６００／守１６００
このカードは特殊召喚できない。
このカードをアドバンス召喚する場合、
リリースするモンスターは水属性モンスターでなければならない。
このカードの攻撃力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する
水属性モンスター１体につき３００ポイントアップする。
ジョーズマン　攻２６００→２９００
「馬鹿な!?攻撃力が上昇しただと!?」
「そりゃそうさ。ジョーズマンを召喚するためにリリースしたカードはオイスターマイスター……こいつの効果でオイスタートークンが一体守備表示で特殊召喚されてたからね」
オイスタートークン　守０
「行け、ジョーズマン!シャーク・ストリーム!!」
「甘いぞ!メインフェイズ終了時にトラップ発動、デモンズ・チェーン!」
ヘッド・キャノンに突撃しようとしたジョーズマンだったが、その途中でどこからと

もなく飛んできた無数の鎖に全身を縛られて動きが止められてしまう。
デモンズ・チェーン
永続罠
フィールド上の効果モンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターは攻撃できず、効果は無効化される。
選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。
「さらに効果が無効となったことにより、そのモンスターの攻撃力が元に戻る！」
ジョーズマン　攻２９００→２６００
「……カードを一枚セット、ターンエンド」
万丈目　手札：１　フィールド：Ｘ―ヘッド・キャノン（攻）　魔法・罠：デモンズ・チェーン（ジ）＋２
清明　手札：３　フィールド：ジョーズマン（攻：デモチェ）、オイスタートークン（守）
魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！まずトラップ発動だ、ゲットライド！墓地のＹ―ドラゴン・ヘッドをＸ―ドラゴン・キャノンに装備！」
墓地から赤い機械龍が舞い上がり、Ｘ―ヘッド・キャノンと合体……合体？正直乗っただけのようｎ『それ以上言わないでおいてやれ。さすがにかわいそ過ぎる』

……えーと、とにかく合体する。

ゲットライド！

通常罠

自分の墓地に存在するユニオンモンスター1体を選択し、

自分フィールド上に表側表示で存在する装備可能なモンスターに装備する。

Ｙ―ドラゴン・ヘッド

ユニオンモンスター

星４／光属性／機械族／攻１５００／守１６００

１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして

自分の「Ｘ―ヘッド・キャノン」に装備、または装備を解除して

表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、

装備モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする。

（1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、

代わりにこのカードを破壊する。）

Ｘ―ヘッド・キャノン　攻１８００→２２００　守１５００→１９００

「そして、ドラゴン・ヘッドのユニオンを解除！」
「せっかく合体したのに、ここで解除!?」
Ｘ―ヘッド・キャノン　攻２２００→１８００　守１９００→１５００
Ｙ―ドラゴン・ヘッド　攻１４００
「まだまだ行くぞ、リビングデッドの呼び声を発動！蘇生させるのはＺ―メタル・キャタピラーだ！」
Ｚ―メタル・キャタピラー
ユニオンモンスター
星４／光属性／機械族／攻１５００／守１３００
１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして
自分の「Ｘ―ヘッド・　キャノン」「Ｙ―ドラゴン・ヘッド」に装備、
または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で装備カード扱いになっている時のみ、
装備モンスターの攻撃力・守備力は６００ポイントアップする。
（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。
装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、
代わりにこのカードを破壊する。）

「いくぞ、三体合体！フィールド上のX、Y、Zを全てゲームから除外することにより、
ＸＹＺ―ドラゴン・キャノンを召喚する！」
『ちっ、なんだかんだ言ってもやっぱ強いな万丈目』
ＸＹＺ―ドラゴン・キャノン
融合・効果モンスター
星８／光属性／機械族／攻２８００／守２６００
「Ｘ―ヘッド・キャノン」＋「Ｙ―ドラゴン・ヘッド」＋「Ｚ―メタル・キャタピラー」
自分フィールド上に存在する上記のカードを
ゲームから除外した場合のみ、エクストラデッキから
特殊召喚する事ができる（「融合」魔法カードは必要としない）。
このカードは墓地からの特殊召喚はできない。
自分のメインフェイズ時に手札を１枚捨てる事で、
相手フィールド上に存在するカード１枚を破壊する。
「さらにマジック・プランターを発動、リビングデッドを墓地に送ってカードを二枚ドローする」
マジック・プランター
通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する
永続罠カード１枚を墓地へ送って発動できる。
デッキからカードを２枚ドローする。
『おいおい、あんな扱い難しそうなデッキであっさりＸＹＺを出したってのに、まだぶん回すつもりかよ!?』
全くだよ……！さすがにブルーのトップ、伊達じゃないね！
「ふむ……いいだろう、遊城十代と戦うその時まで見せないつもりだったが、気が変わった。このデッキの真の切り札、貴様に見せてやる！マジックカード、アイアンコールを発動！墓地に眠るＶ―タイガー・ジェットを召喚だ！」
アイアンコール
通常魔法
自分フィールド上に機械族モンスターが存在する場合に発動できる。
自分の墓地のレベル４以下の機械族モンスター１体を選択して特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズ時に破壊される。
Ｖ―タイガー・ジェット
通常モンスター

星４／光属性／機械族／攻１６００／守１８００
空中戦を得意とする、合体能力を持つモンスター。
合体と分離を駆使して立体的な攻撃を繰り出す。
ひらりと墓地から飛んできたのは、虎がモチーフになった戦闘機。……なんで緑色のパーツが多いんだろうか。
「さらに、俺はこのターン通常召喚を行っていない。Ｗ―ウィング・カタパルトを召喚する！」
続いて現れたのはなぜかコックピットが二つある、ひじょーに飛びにくそうな青い戦闘機。
Ｗ―ウィング・カタパルト
ユニオンモンスター
星４／光属性／機械族／攻１３００／守１５００
１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして
自分の「Ｖ―タイガー・ジェット」に装備、
または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で装備カード扱いになっている時のみ、
装備モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする。

（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。
装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、
代わりにこのカードを破壊する。）
「二体合体だ！フィールド上のＶとＷを除外することで、ＶＷ―タイガー・カタパルトを特殊召喚！」
またもや行われる、今度はモンスター二体での乗っただけ融ｇ……合体。
ＶＷ―タイガー・カタパルト
融合・効果モンスター
星６／光属性／機械族／攻２０００／守２１００
「Ｖ―タイガー・ジェット」＋「Ｗ―ウィング・カタパルト」
自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、
融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としない）。
手札を１枚捨てることで、相手フィールド上モンスター１体の表示形式を変更する。
（この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。）
大型モンスターが二体か。でも落ち着け僕、きっとなにか抜け道があるはずだ！
……おや？
「確かに驚いたよ。でも、その二体の効果にはどっちも手札コストがかかるはず！今の

お前の手札じゃ、大したことはできない、違うか万丈目！」
『お前なぁ、何をドヤ顔で恥ずかしいことぬかしとるか……いやまあ、知らないっつーか教えてないから無理もないんだけど』
「フン、笑わせるな遊野清明！言っただろう、このデッキの真の切り札をみせてやると！フィールド上のＸＹＺ、ＶＷの二体を除外して、最強の合体、ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノンを特殊召喚だ！」
　二体の合体戦闘機がさらに複雑な変形をし、ついには一体の、人型の巨大なロボットになる。おお、カッコいい……！いや、言ってる場合じゃないんだけども。
　ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン
　融合・効果モンスター
　星８／光属性／機械族／攻３０００／守２８００
「ＶＷ―タイガー・カタパルト」＋「ＸＹＺ―ドラゴン・キャノン」
　自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、
　融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としない）。
　１ターンに１度、相手フィールド上のカード１枚をゲームから除外する。
　このカードが攻撃する時、攻撃対象となるモンスターの表示形式を
　変更する事ができる。（この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。）

「ドラゴン・カタパルトキャノンの効果発動！相手の場にあるカード一枚……ここは、その厄介なウォーターハザードを除外させてもらう！ＶＷＸＹＺ―アルティメット・デストラクション!!」

肩の部分の砲台がグイーンとこちらを向き、そこから発射された光線がウォーターハザードのカードを打ち抜いてしまう。

『ちっ、やっぱりそっちで来たか。こりゃちょっとキツイかな？』

「そしてオイスタートークンに攻撃、この時もう一つの効果発動！オイスタートークンを攻撃表示にする！」

オイスタートークン　守０↓攻０

「ゆけ、ドラゴン・カタパルトキャノン！ＶＷＸＹＺ―アルティメット・デストラクション！」

ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン　攻３０００↓オイスタートークン　攻０（破壊）

清明　ＬＰ４０００↓１０００

「うわあっ!!」

ととと、ソリットビジョンなのはわかってるけどやっぱりこんな大型モンスターからの攻撃は怖いな。思わず手をあげて頭を守ってしまった。

「さあ、このＶＷＸＹＺの壁、越えられるものなら超えてみろ！俺はこれで、ターンエンドだ」
「くっ……」
　越えてみろ、そう万丈目は言った。でも、こんな状況、僕に突破できるのかな？相手の場にいるのは、一ターンに一度ノーコストでこっちのカードを除外してくるうえに下手に攻守が偏ったモンスターを出してもすぐに倒してしまう攻撃力３０００の超大型モンスター。一方こっちの場にいるのは、効果が無効になって、攻撃することすらできないジョーズマン。クロノス先生の古代の機械巨人も攻撃力３０００で強い効果持ちのモンスターだったけど、あの時は手札にフェイバリットカード……霧の王がいた。でも、今の手札にはクロス・ソウルはおろか上級モンスターすらいない。じゃあ、もう……。
『ったく、めんどくせーなお前。他の奴とデュエルしてた時には、どんな状況だってわりと笑ってたじゃねえの。なんでまた今回だけ気弱になる必要がある？あれか、場の空気にでも呑まれてんのか？』
「ユーノ、でもそうは言ってもさ『おっと、何か言いたいのは俺だけじゃないみたいだぜ？ホレ、あっち見てみ』え？」
「頑張れー、清明！次は俺も控えてるんだからな、負けるんじゃないぞー！」

「十代……」
「清明君、レッド生の意地を見せてやるッスよ！」
「翔も……」
「クロノス先生を倒したその諦めない心、もう一度俺にも見せてくれ！」
「三沢……」
「どうしたのかしら？私に勝ったのだから、もう少し堂々としていて頂戴」
「そうよ、いくらまぐれとはいえ、そんな顔していては明日香さんに対して申し訳ないです！」
「明日香……」
　と、えーっと、名前なんだっけあの二人？とは言わないでおこう。また怒られそうだし。
「私もいるよ？ほら、あなたの実力はまだそんなものじゃないでしょう？……だって、さ」
「夢想も……」
『まったく、出る時代間違えてんじゃねーってのぐらいコテコテのお涙頂戴話だこった。一部変なの入ってたけど。ま、嫌いじゃないがな。んで、どーする？あんだけ言われて、まだサレンダーするとか言い出したりするワケ？』

「いやー、期待されるってキツイもんだね～。……でもま、わざわざ見に来てもらったんだ。折角だからその期待、しっかり応えてみますかね。ドロー！」

引いたカードは……よし！

『なんつーか、ホンッとお前って引きがいいんだか悪いんだかわからん奴だよな』

後攻一ターン目からいきなりシーラカンス出せるぐらい引きのいい奴は黙っといてください。

『いや、俺だってあれはちょっとびっくりしたからな？』

「ホントかなぁ？まあいいさ、手札からアトランティスの戦士の効果発動！コイツを手札から墓地に送って、伝説の都　アトランティスをデッキからサーチ！そして、そのアトランティスをそのまま発動するよ！」

見る見るうちに、辺りの風景が水中の都に変わっていく。レミューリアとはまた違う、完全に水没しきった町。

アトランティスの戦士

効果モンスター

星４／水属性／水族／攻１９００／守１２００

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

デッキから「伝説の都　アトランティス」１枚を手札に加える。

伝説の都　アトランティス
フィールド魔法
このカードのカード名は「海」として扱う。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００ポイントアップする。
また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは１つ下がる。
「ふん、今更レベルを下げたところで、俺のドラゴン・カタパルトキャノンの攻撃力を超えることができるモンスターなど」
「残念、いるんだなこれが」
「どういうことだ!?」
「僕は、アトランティスの効果でレベルが４になった深海の怒りを召喚！このモンスターの攻撃力は、自分の墓地の水・魚・海竜族の数だけ上がっていく！」
深海（レイジ・オブ・ディープシー）の怒り
効果モンスター
星５／水属性／魚族／攻　　０／守　　０
このカードの攻撃力・守備力は、自分の墓地の
魚族・海竜族・水族モンスターの数×５００ポイントアップする。

「だが、墓地にそんなモンスターなど……まさか！」
「その通りさ！万丈目、お前が発動した手札抹殺で墓地に送られた手札はペンギン・ナイトメア、シャクトパス、ウミノタウルス、スノーマンイーター、シャーク・サッカーの計五体。そして今アトランティスの戦士を墓地に送ったことで、水・魚・海竜族の数は六体になった!!」
圧倒的な威圧感を誇る海の王に、墓地から六つの青い光が降り注いでその力を上げていった。
深海の怒り　攻０→３２００　守０→３２００　ジョーズマン　攻２６００→２８００　守１６００→１８００
「ば、馬鹿な……だが、その攻撃を受けてもまだまだ俺のライフは残るぞ！」
「ふっ、それはどうかな？」
「何ぃ!?」
「見てればわかるさ！マジックカード発動、受け継がれる力！この効果で僕はジョーズマンを墓地に送って、深海の怒りの攻撃力を上げる！」
闇の鎖を振り払って青い光になったジョーズマンの魂（？）が、深海の怒りをさらに包み込む。
受け継がれる力

通常魔法
自分フィールド上のモンスター１体を墓地に送る。
自分フィールド上のモンスター１体を選択する。
選択したモンスター１体の攻撃力は、
発動ターンのエンドフェイズまで墓地に送った
モンスターカードの攻撃力分アップする。
深海の怒り　攻３２００→５８００
「深海の怒りでＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノンを攻撃！アビス・ライジング!!」
『いや、どこのパック名だよ……いや、この世界にはないみたいだけど』
深海の怒り　攻５８００→ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン　攻３０００
（破壊）
万丈目　ＬＰ４０００→１２００
「ふん、やはり俺のライフはまだ」
「ここでトラップ、リビングデッドの呼び声発動……蘇生させるのはジョーズマン、って言いたいところだけど、デメリット効果があるからね。戻って来い、シャクトパス！」

シャクトパス
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１６００／守　８００
このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備できる。
この効果によってこのカードを装備したモンスターは
攻撃力が０になり、表示形式を変更できない。
シャクトパス　攻１６００
「そ、そんな馬鹿な、この俺がレッド生なんかに……」
「レッドだからって舐めてると、痛い目に合うぜってことさ。シャクトパスで攻撃、コンバット・イート！」
シャクトパス　攻１６００→万丈目（直接攻撃）
万丈目　ＬＰ１２００→０
「勝った……」
『だな。ところで最後のリビングデッド、あれでシャクトパスを呼んだのはもしかして……』
「ん、まあね。あんまりレッドレッド言うもんだから、赤い子で決めてやろうかと思った

だけ。あ、そうだ一言だけ。万丈目！」
「……なんだ！」
　僕に負けたことがよっぽど悔しいらしい声色の万丈目に、軽く笑いかける。
「楽しかったよ、とっても。またデュエルして欲しいな」
「……フン！」
『このころはプライド高かったからな。そういやあ、もともとアイツ十代とデュエルするんじゃなかったのか？』
「あ、そういえばそんなこと言ってたような……おーい、十代は!?あ、もう行っちゃった」
「えー!?俺、実技試験だけまだ誰ともやってねえぞ!?」
「ど、どうしよう!?このままじゃアニキが赤点になっちゃうッス！」
『と、とりあえず誰か先生呼んで事情説明して来い!!』
「あ、じゃあ僕がとりあえず行ってくるよ！ほら、十代も急いでデッキもって！」
「おう！」
　とまあ、せっかく勝ったって休む暇すら貰えなかったけど。こういうのも悪くない、なんて思う今日この頃。

ターン6　闇のゲーム、チェスデーモンの罠！

「……でも、最近はついに聞こえるだけじゃなくて見えるようにもなってるんだよなー。たとえば翔、お前の後ろにはハネクリボーの精霊が！」
「えっ！……なんだーアニキ、脅かさないでくださいよー」
「ホントなの、ユーノ？」
『ああ、いるな。ちなみにシャーク・サッカーはお前の右肩のあたりを泳ぎ回ってるぞ』
　そう言われて、右肩の方をじーっと注意して見つめてみる。う～ん、やっぱり何も見えないけどなぁ。ちなみに今僕ら……僕と十代、翔に隼人に（さん付けはいらないんだそうだ）ユーノがやってるのは、怖い話大会。でたらめに積んだカードから順番に一枚ずつカードを引いていき、そのモンスターのレベルに合った怖い話をしていく、というものだ。そして今終わったのは、十代の引いたキラー・スネーク……つまりレベル1の話。ぶっちゃけ怖くない。
「さてと、それじゃあ次は僕が「何をやってるのかニャ～？」うわっ!?」
「びっくりさせんなよ、先生～」
「ほ、本気で驚いたッス……」

今どこからともなく現れたのが、我らレッド寮の寮長、大徳寺先生。担当学科は錬金術。なにかおかしいのは多分気のせい。

『気のせい気のせい、よくあることだし』

やっぱり気のせいらしい。

「それで、どうしたんですか先生?」

一番早く立ち直ったのが隼人。さすがに寮生活が長いと、こんなことも慣れっこなんだろうか。

「いやー、ふと気になってニャ。私も混ぜて欲しいのニャ」

そう言って、カードを一枚引く先生。あ、僕の話……って、F・G・D!?レベル12なんて、どんだけおいしいとこ持ってくのこの先生!?

「ふむ……」

「んで、ホントに行っちゃうんだもんねーこの人たち」

『お前だってえらいノリノリで懐中電灯とか準備してたじゃねえか』
「ユーノだってどっからか知らないけど備品のリュックサックまで持ち出してきて」
「まあまあ二人とも、ちょっと落ち着こうぜ」
「なんかもう、この二人には僕らに見えないものが見えることをなんとも思わなくなってきた自分が怖いッス……」
「慣れって恐ろしいんだな～」
　次の日。昨日の『そんな廃寮があるとなっちゃあ、もう行ってみるしかあるまい』って感じのノリを一日中維持していた僕らは、あれこれ道具を持ち出しての肝試しに向かう最中なのだ。
「お、見えてきたぞ」
　そして、今僕らの前に姿を見せたのが、噂の『闇のゲームやってたら生徒消えちゃった☆しょうがないから閉めちゃうね☆』な寮。
『……まあ、なんだ。うん、何も言わないでおいてやる』
　ちょっとふざけすぎたか。と、そんな気まずい感じを打ち破るかのように、どこかピリピリした声がした。
「あなた達、ここで何をやっているの!?」
「ひぃ、出た～!!」

そう言って騒がしく十代と僕の後ろに隠れる隼人と翔。まったく、少しは落ち着けばいいのに。だってこの声、多分……。

「よう、明日香。こんなところで何やってんだ?」

「それはこっちのセリフよ。あなた達こそ、こんなところで何をしているの?」

「肝試し。えっと、明日香こそ一人で何やってんの?」

何か静かだと思ったら、あのぺらぺらとよーしゃべる二人組がいないのね。夢想もいないっぽいけど。

「……ここは立ち入り禁止のはずよ。今なら先生には黙っておいてあげるから、早く寮に帰りなさい」

「ちょっと待てよ。そっちはまだ、俺らの質問に答えてないぜ。お前はここで何をしてたんだ?」

「……」

はて、何か言いたくないことでもやってたんだろうか。

「明日香、別に言いたくないなら言わなくてもいいけど?」

「……いえ、あなた達がここに来たってことは、ここがどういう所か知っているんでしょう?」

「えっと、俺らが聞いたのは確かアレだな。もともと特待生のための寮だったけど、闇の

デュエルのせいだか何だかのせいで生徒が行方不明になって廃寮にされたとかいう」
「そこまで知っているのに、自分が行方不明になるとは思わなかったの？」
「そんなの、迷信だろ？俺は信じないぜ」
「僕はちょっと信じるけど……でもやっぱり見て見たい、かなー」
「お、俺もなんだな～」
「僕は別にわざわざ来なくても……」
「まあいいわ。そこまで言うなら、勝手にしなさい。ただね、ここで行方不明になった生徒。その中の一人には、私の兄もいたのよ」
　そう言って、こちらに背を向けて歩いていく明日香。
「……十代、どーする？こりゃなんかマジな話っぽいけど」
『いや、このまま行ってみようぜ』
「ああ、せっかくここまで来たんだ！いっぺんぐらい覗いてみないとな」
「待って欲しいんだな～」
「ま、待ってくださいよー！」
『俺も俺も～』
　ぽつーんと一人残される。あらら、皆行っちゃったか……しょうがない。
「僕も行くから、ちょっと待って待って!!」

　入口までたどり着いたみんなの後を、慌てて追いかける。
「それにしても、ずいぶん埃がたまってるな」
「クモの巣もいっぱい張ってるんだな～」
「でも、僕らの寮よりずっと立派ッスね。いっそのこと、ここに引っ越しちゃいますか？なんて。あはは」
「お、それいいな！やってみるか？」
「えー、冗談に決まってるッスよ!?」
「なんだよ～。それにしても、なんか変な絵だな。こいつが千年アイテムってやつか？」
『ああ、千年アイテムの絵だな。もっとも、俺だって本物を見たわけじゃねーけど』
「ふーん。あれ、この写真って……１０、ＪＯＩＮ？」
『……出たなＪＯＩＮさん。十代、そいつの読み方はテン、ジョイン、フブキ、だ』
「テンジョイン……天上院……もしかして、明日香の言ってた兄さんって！」
「キャアー!!」
　その時、いきなり悲鳴がした。しかもあれは！
「明日香の声だ！」
「こっちからッス！」
「でも、なんで外で別れたはずの明日香の声が奥の方から……！」

「そんなことどうでもいいだろ！今は早く行かねえと！」
「まったくだね！」
　大急ぎで全員そろって走り出す。廊下をわたって、階段を下りて……昔は広間だったんだろう部屋に出たとき、ふと何かが落ちているのに気付いた。
「これは……エトワール・サイバー!?」
「明日香のカードか！ってことはやっぱり、明日香はこの向こうに！」

　進む道がより明らかになって、外見よりも長く感じる廊下を駆け抜けて（レッド寮じゃ味わえないような贅沢だね、あそこ狭いから……とゆーか廊下なんてもの屋外にしかないし）、そして。
「明日香！」
　そこにいたのはなんだかよくわからない棺桶みたいなものに入れられた明日香。どっから持ってきたんだろう。それとも最初っからあんなもんが備品であるような寮なんだろうか。だとしたらそんなもんばっかり買ってるバチが当たっても文句は言えないような気がする。
「来たなぁ、遊城十代。それに、遊野清明」
「誰だ!?」

「我が名は、タイタン。千年アイテムの力を持つ、闇のデュエリストだぁ」
「闇のデュエリストだと!?」
「その通り。そこの女を返して欲しくば、我にデュエルで勝利することだなぁ」
「上等じゃないの、なら僕が」
「いや、ここは俺が行くぜ！」
『……いや、ここは俺らに行かせてくれ』「ユーノ？」
「どうしてだよ！別に俺が行ったって」
「ちょっとした思い付きだけど、いっぺん試してみたいことがあるんでね。悪いな、十代』
「えー!?」
『ホレ行くぞ、清明。それと十代、今度ドローパン奢ってやるから』
「わ、わかった！ごめん十代！」
「おいおい、だからってそりゃないだろ！」
『だから悪いって』
「ほう、お前が最初に闇のゲームの餌食となるかぁ、遊野清明」
「生憎だけど、負けるつもりはまるっきりないね！勝って明日香は連れ帰る！」
『さあて、上手くいくといいんだが……！』

「「デュエル!!」」
「先攻は私だぁ。私はまず、フィールド魔法の万魔殿―悪魔の巣窟―を発動するぅ」
そう宣言した瞬間、フィールドが不気味なコロシアムに変更される。
万魔殿―悪魔の巣窟―
フィールド魔法
「デーモン」という名のついたモンスターはスタンバイフェイズにライフを払わなくてよい。
戦闘以外で「デーモン」という名のついたモンスターカードが破壊されて墓地へ送られた時、
そのカードのレベル未満の「デーモン」という名のついたモンスターカードをデッキから1枚選択して手札に加える事ができる。
「万魔殿……ということはデーモンデッキか!」
「いかにも、私のデッキは【デーモン】だぁ。そしてこのカードはお前にとってさしずめ、地獄への一丁目といったところだなぁ。フフフフ」
なかなか単体では強力だが、展開して戦線を維持するにはかなりのライフコストを覚悟しなくちゃいけないチェスデーモン。でもこのカードの効果のせいで、そのライフコストがなくなった、か。

「そして私は、インフェルノクインデーモンを攻撃表示で召喚するぅ」
そしてタイタンの前に立ちふさがる、女王の名を持つチェスデーモンの一体。こいつやっぱ女性モンスターなんだろか。
インフェルノクインデーモン
効果モンスター
星４／炎属性／悪魔族／攻　９００／守１５００
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に５００ライフポイントを払う。
このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、
その処理を行う時にサイコロを１回振る。
２・５が出た場合、その効果を無効にし破壊する。
このカードがフィールド上に存在する限り、スタンバイフェイズ毎に
「デーモン」という名のついたモンスターカード１体の攻撃力を
エンドフェイズまで１０００ポイントアップする。
インフェルノクインデーモン　攻９００
「さらに手札から永続魔法、フィールドバリアを発動するぅ。そしてカードを一枚セット。これで私は、ターンエンドだぁ」

フィールドバリア
永続魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、
お互いにフィールド魔法カードを破壊できず、
フィールド魔法カードの発動もできない。
「フィールドバリア」は、自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。
「僕のターン、ドロー！」
う～ん、フィールドバリアが痛いなあ……手札のアトランティスの戦士からアトランティス引っ張ってきて張り替えてやろうと思ったのに、それもできない。なら！
「おっと、待ってくれ。この瞬間、インフェルノクインデーモンの効果発動だぁ。エンドフェイズまで自分のデーモン一体の攻撃力を１０００ポイントアップするぅ。私はこの効果で、インフェルノクインデーモンを選択だぁ」
インフェルノクインデーモン　攻９００→１９００
「それがどうした、このまま出す！アトランティスの戦士を通常召喚！」
アトランティスの戦士
効果モンスター
星４／水属性／水族／攻１９００／守１２００

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。
デッキから「伝説の都　アトランティス」１枚を手札に加える。
アトランティスの戦士　攻１９００
「アトランティスの戦士で、インフェルノクインデーモンを攻撃！」
『……ま、居座られるよりはマシだわな。自爆特攻って俺あんま好きじゃないけど』
僕だって嫌いです。
アトランティスの戦士　攻１９００（破壊）→インフェルノクインデーモン　攻１９００（破壊）
「戦闘破壊なら万魔殿の効果も発動しないから、カードを二枚セットしてターンエンド」
ブラフにも一枚伏せておこうっと。
「ならばエンドフェイズにチェーンだぁ、トラップカード、リビングデッドの呼び声！」
せっかく倒したインフェルノクインデーモンが、再び甦ってくる。
リビングデッドの呼び声
永続罠
自分の墓地のモンスター１体を選択し、表側攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

インフェルノクインデーモン
省略
タイタン　手札：2　モンスター：インフェルノクインデーモン（攻・リ）魔法・罠：フィールドバリア、リビングデッドの呼び声（イ）場：万魔殿―悪魔の巣窟―
清明　手札：3　モンスター：なし　魔法・罠：2
場：万魔殿―悪魔の巣窟―
「まあいい、ドロー！私はぁ、まずインフェルノクインデーモンの効果で自身を選択。さらに、ジェノサイドキングデーモンを召喚するぅ」
次に現れたデーモンはいかにもといった恰好をした、キングの名を持つチェスデーモン。
ジェノサイドキングデーモン
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／攻２０００／守１５００
自分フィールド上に「デーモン」という名のついたモンスターカードが存在しなければこのカードは召喚・反転召喚できない。
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に８００ライフポイントを払う。

このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを１回振る。
２・５が出た場合、その効果を無効にし破壊する。
このカードが戦闘で破壊した効果モンスターの効果は無効化される。
インフェルノクインデーモン　攻９００→１９００
ジェノサイドキングデーモン　攻２０００
「行け、私のデーモン達よ！まずはジェノサイドキングデーモンでダイレクトアタック！炸裂！五臓六腑!!」
「くっ……！こっちもトラップカード、リビングデッドの呼び声!!」
『なんで今出しちゃうかなーこの馬鹿は』
甦ったアトランティスの戦士が、ジェノサイドキングデーモンが体から大量に発射した虫の群れに対して防御の構えをとる。
「……ゴメン、アトランティスの戦士」
そう言うとアトランティスの戦士は驚いたことにこっちをちらりと振り返り、気にしなくてもいい、と言いたげにうなづいた。あれ、ソリットビジョンのはずなのに……。
アトランティスの戦士　攻１９００
「構わん、このまま攻撃を続行だぁ。ゆけ、ジェノサイドキングデーモン！」

ジェノサイドキングデーモン　攻２０００↓アトランティスの戦士　攻１９００（破壊）

清明　ＬＰ４０００↓３９００

「うわあああああっ!!」

「な、なんだよ翔いきなり……って清明、お前!!」

「え、何!?どったの二人とも!?」

「清明ー、お前、何にも感じないのかー？」

「いや、だから何が？」

『俺からは左手に見える。肘のあたりな』

「左手の肘……なんじゃこりゃー!!?」

「ふふふ、やっと気が付いたかぁ。最初に言っただろう、これは闇のゲームだと」

僕の左手、その肘のあたり。ない、体がない！い、一体どこ行った!?やだよ肘から先が宙ぶらりんとか気持ち悪いよ！

「闇の、ゲーム？」

その通りだぁ、と言い、懐から目のマークがついた金色のペンダントを引っ張り出す。

あれ、あの形どっかで見たことあるような？

「この千年パズルの力により、闇のゲームは行われるぅ。そして闇のゲームにおいてラ

イフポイントは命と同じもの、ライフが減るたびに少しずつ体が消えてゆき、０になった時消滅するのだぁ！」
「なんだって!?」
「じゃあ、今清明君の右手が消えてるのは、その闇のゲームのせいッスか!?」
「ああ、そうなんだろうな」
「翔も隼人も、何言ってんだ？消えかかってるのは左膝のあたりだろ？」
「「え？」」
　なんか後ろが妙なことを言ってる。だって、今消えてるのはどう見ても左肘なのに。一体どういうことだろう？
「それでは、バトルを続けるぅ。ゆけ、インフェルノクインデーモン！」
「くっ……!!」
　この攻撃は、防げない!!
　インフェルノクインデーモン　攻１９００→清明（直接攻撃）
　清明　ＬＰ３９００→２０００
『おー、さすがに半分持ってかれるとだいぶ消えてんなー』
「え、嘘……気持ち悪いなコレ」
　もう、胴体のあたりがだいぶボロボロ。肘から先と膝から下、それに首から上はあら

かた残ってるからまだカードは持てるんだけどさあ。
「ほう、ずいぶんと落ち着いているなあ遊野清明ぁ。恐怖のあまり感覚がマヒしたかぁ？私はこれで、ターンエンドだぁ」
インフェルノクインデーモン　攻１９００→９００
「いや、そういうわけじゃないんだけどね」
実際、僕は別に慌てているわけじゃない。まあ痛みとかが一切ないから実感がわかないのもあるけど、何しろユーノがまだまだ余裕そうだからね。こいつがどうってことないって思ってるなら、実際それはたいしたことない。それが、ここしばらくの間こいつと一緒にいて感じたこと。こう、無条件で安心できるというか、なんかそんなオーラでも出してるんだろうか。だから……
「僕はまだまだ、やってられるさ！ドロー！」
「もちろん、このターンにもインフェルノクインデーモンの効果を発動するぅ。対象は同じくインフェルノクインデーモンだぁ」
インフェルノクインデーモン　攻９００→１９００
攻撃力１９００と２０００、か。この手札じゃあまだ越えられない……なら、守りを固めるまでさ！
「ハンマー・シャークを守備表示で通常召喚して、その効果を発動！このカードのレベル

を一つ下げ、手札のレベル３水属性、ハリマンボウを守備表示で特殊召喚！さらに、ハリマンボウの召喚にチェーン！魚族の召喚成功時にシャーク・サッカーを守備表示で特殊召喚！」

一気にフィールドに出そろった、三体の魚モンスター達。

『水差して悪いが、シャーク・サッカーは別にチェーン作る効果じゃねえぞ』

ハンマー・シャーク
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１７００／守１５００
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に発動できる。
このカードのレベルを１つ下げ、
手札から水属性・レベル３以下のモンスター１体を特殊召喚する。

ハリマンボウ
効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻１５００／守　１００
このカードが墓地へ送られた時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。

シャーク・サッカー
効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻　２００／守１０００
自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードはシンクロ素材とする事はできない。
ハンマー・シャーク　守１５００　☆４↓３
ハリマンボウ　守１００
シャーク・サッカー　守１０００
「ちい、小賢しい真似を」
「こっちだって命懸かってんの！カードを一枚セットしてターンエンド！」
インフェルノクインデーモン　攻１９００↓９００
タイタン　手札：２　モンスター：インフェルノクインデーモン（攻・リ）、ジェノサイドキングデーモン（攻）魔法・罠：フィールドバリア、リビングデッドの呼び声（イ）
場：万魔殿―悪魔の巣窟―
清明　手札：０　モンスター：ハンマー・シャーク（守）、ハリマンボウ（守）、シャーク・サッカー（守）魔法・罠：２

場：万魔殿―悪魔の巣窟―

「私のターン。インフェルノクインデーモンの効果で自身を強化して、シャドウナイトデーモンを召喚!」

そして現れる３体目の、騎士の名を持ったチェスデーモン。

シャドウナイトデーモン

効果モンスター

星４／風属性／悪魔族／攻２０００／守１６００

このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に９００ライフポイントを払う。

このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを１回振る。

３が出た場合、その効果を無効にし破壊する。

このカードが相手プレイヤーに与えるダメージは半分になる。

インフェルノクインデーモン　攻９００→１９００

シャドウナイトデーモン　攻２０００

「そして今フィールド上には攻撃力の同じモンスターが二体いるぅ。マジックカード、クロス・アタックを発動ぅ!!」

クロス・アタック
通常魔法
自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する、
同じ攻撃力を持つモンスター2体を選択して発動する。
このターン、選択したモンスター1体は相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
もう1体のモンスターは攻撃する事ができない。
「これで終わりだ、遊野清明ぁ!ジェノサイドキングデーモンでダイレクトアタックぅ!炸裂!五臓六腑!!」
「マズイ、この攻撃が通ったら清明のライフが0になるんだな!」
「清明ー!!」
『いまだ、やっちまえ!』
「当然!トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ!」
ポセイドン・ウェーブ
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にする。
自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが表側表示で存在する場合、

その数×８００ポイントダメージを相手ライフに与える。
「ならばここで、ジェノサイドキングデーモンの特殊能力だぁ!カード効果の対象になったときにサイコロを振り、２か５が出れば無効にする!」
「ええっ!?」
『だー!忘れてたーっ!!ってあれ?あのお手製ルーレットじゃないのか?』
サイコロの数値は……3!た、助かった。
『あら?イカサマが入ってない?』
「むぅ、あのシャーク・サッカーさえいなければそのトラップを計算に入れてもフィールドをがら空きにできたんだがぁ」
タイタン　ＬＰ４０００→１６００
「だが、まだインフェルノクインデーモンの攻撃はできる!ゆけ、インフェルノクインデーモン!ハンマー・シャークを攻撃だぁ!」
インフェルノクインデーモン　攻１９００→ハンマー・シャーク　守１５００（破壊）
「私はこれで、ターンエンドだぁ。なかなかしぶといな、遊野清明ぁ」
インフェルノクインデーモン　攻１９００→９００
「まったく、なーんでライフで負けてるのにそんな偉そうなのか、ね……!」
『ボードで勝ってるからだろ』

「う、反論できない……ドロー！」
「インフェルノクインデーモンをお、パワーアップさせるぅ」
　インフェルノクインデーモン　攻９００→１９００
「なら、リバースカードオープン！マジックカード、スター・ブラスト！ライフを１０００払って、レベルが2下がったこいつを通常召喚だ！来てくれ、ジョーズマン！」
　咆哮と共に仁王立ちする、むしろこっちがデーモンの一種っぽい鮫人間のモンスター。相変わらず頼もしい攻撃力だよね。
『パワー馬鹿は嫌いじゃないよな』
「ジョーズマンの効果により、攻撃力が６００ポイントアップ！」
　スター・ブラスト
　通常魔法
　５００の倍数のライフポイントを払って発動できる。
　自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選び、
　そのモンスターのレベルをエンドフェイズ時まで、
　払ったライフポイント５００ポイントにつき1つ下げる。
　ジョーズマン
　効果モンスター

星６／水属性／獣戦士族／攻２６００／守１６００
このカードは特殊召喚できない。
このカードをアドバンス召喚する場合、
リリースするモンスターは水属性モンスターでなければならない。
このカードの攻撃力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスター１体につき３００ポイントアップする。
清明　ＬＰ２０００→１０００
ジョーズマン　攻２６００→３２００
「もちろん攻撃!ジョーズマンでインフェルノクインデーモンを攻撃、シャーク・ストリーム!」
ジョーズマン　攻３２００→インフェルノクインデーモン　攻１９００（破壊）
タイタン　ＬＰ１６００→３００
「よし!」
「やった、タイタンも右手が消えていくんだな」
「え、何言ってんすか?消えてるのは左足でしょ?」
「「え?」」
……やっぱりおかしい。ちなみに僕からは、右足が消えてるようにしか見えな

い。よし、ちょーっと揺さぶってみるか。
「おーい、タイタン！お前、本当に闇のデュエリストなのかよ！」
「もちろん、私はこの千年アイテムの一つ、七つある千年パズルの持ち主だぁ」
「七つ？千年パズルが？」
「何かおかしなところでもあったかぁ？」
「そういうことか！やいタイタン、お前実は闇のデュエルなんてインチキだろ！」
　あー！今度は十代にセリフ盗られた！まだ僕がデュエルしてるの根に持ってんだろうか。まあ十代に限ってそんなこともないと思いたいけど。
「何ぃ!?」
「え、どういうことツスかアニキ？」
「千年アイテムっていうのは別に千年パズルが七つある訳じゃなくて、そのほかにも千年ロッドとか、七種類のものがあるんだな」
『あれ、隼人意外と賢い』
「でも、タイタンはそれを知らなかった。つまり」
「この闇のゲームは、インチキだ!!」
『あ、ハモった』
「くっ……う、うおおおおおおおおおお!!」

僕と十代が同時に言った瞬間。ライフポイントがごっそり削られたせいで自棄にでもなったのか、なんかいきなりタイタンが叫びだした。それと同時に床が巨大な目の形に光り、どこからともなく黒い靄が出てきてフィールド全体を包み込んでいく。

「おいタイタン、これ一体何の真似!?」

今度は何を仕掛けるつもりかと聞いてみるも、帰ってきたのはうめき声のみ。あれ、これもしかして本物?……まさかね。そ、そんな手の込んだことしたってもうタネも仕掛けもあることはわかってるんだから……ね?

『下からくるぞ気をつけろっ!』

「下?ってなにこれ!?」

全く気が付かないうちに、なんだかよくわからないもぞもぞ動く黒い生き物みたいなのに取り込まれていた。え、やだこれ怖い。わ、足に引っ付いてきた。

『よし、ここまでは最初の狙いばっちりだ……後は頼んだぞ!』

「こんな誰得プレイが狙いとかどんな趣味してんのユー……アレ?」

叫び返してからもう一度足元を見ると、へばりついていた黒いのが2〜3匹まとめて吹き飛ばされるところだった。そしてそれをやってくれたのは。

「シャーク・サッカー……」

十代もユーノも見えるといい、それでも僕には見えなかったカードの精霊。でも、な

んで今ここで見えるようになったんだろう？

『はっきりしたことはなんとも言えんけど、多分この空間は擬似的に闇のゲームを再現しようとして行方不明になったアホの先輩達が作ったものなんだろ。闇のゲームにしようとした以上、精霊が見えやすい環境になったって別にそこまでおかしくはあるまい』

「いや、そのりくつはおかしい……とも言ってらんないか、実際見えるようになったし。ありがとね、シャーク・サッカー」

お礼を言うと、嬉しそうにすり寄ってくるシャーク・サッカー。なにこれかわいい。

「うおおおおおおおおおぉっ!!」

「タイタン!?」

『あ、やべ。忘れてた』

「いやいやいや！僕も忘れてたけど」

そうこういってる間にタイタンに取り付いていた黒いモノがどんどん多くなり、そして霧のようになって体の中に入っていく。もう、今度は何が起きるってのさ！

「……か？」

「え？」

「ターン……エンド、か？」

「う、うん。ジョーズマンのレベルが元に戻って、ターンエンド」
なんだ、別にどうもなってない……よね？別に何も変なところないよね？だよねきっと気のせいだよね？
タイタン　手札：2　モンスター：ジェノサイドキングデーモン（攻）、シャドウナイトデーモン（攻）　魔法・罠：フィールドバリア　場：万魔殿―悪魔の巣窟―
清明　手札：0　モンスター：ハリマンボウ（守）、シャーク・サッカー（守）、ジョーズマン（攻）　魔法・罠：0
場：万魔殿―悪魔の巣窟―
「私のターン、ドロー……私は、装備魔法堕落を発動！その目障りなジョーズマンのコントロールを得るぅ!!」
「ジョーズマン！」
目の前でいきなり苦しみだしたジョーズマンが抵抗むなしく一度地に倒れ、ゆっくりとなにかに操られるような動きでタイタンのフィールドのほうに立ちあがる。
堕落
装備魔法
自分フィールド上に「デーモン」という名のついたカードが存在しなければ
このカードを破壊する。

このカードを装備した相手モンスターのコントロールを得る。
相手のスタンバイフェイズ毎に、自分は８００ポイントダメージを受ける。
「そんな！」
「さらぁに！私はこのジョーズマンとシャドウナイトデーモンをリリースして、アドバンス召喚を行う！」
『リリース二体⁉迅雷の魔王じゃないだと⁉』
「いでよ最強のチェスデーモン、プリズンクインデーモン!!」
二体のモンスターをリリースして召喚されたのは、両手足が鎖につながれた格好の女性型（多分ね）デーモン。
プリズンクインデーモン
効果モンスター
星８／闇属性／悪魔族／攻２６００／守１７００
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に
１０００ライフポイントを払う。
フィールド上に「万魔殿―悪魔の巣窟―」が存在し、このカードが墓地に存在する場合、
自分のスタンバイフェイズ毎にフィールド上に存在するレベル４以下の悪魔族モン

スター
　１体の攻撃力はエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップする。
　プリズンクインデーモン　攻２６００
「まずはジェノサイドキングデーモンでハリマンボウに攻撃ぃ！炸裂！五臓六腑!!」
　ジェノサイドキングデーモン　攻２０００→ハリマンボウ　守１００（破壊）
「でも、ハリマンボウの効果で……アレ?」
『いや、それは無理だ!』
「残念だったなぁ。ジェノサイドキングデーモンが戦闘で破壊したモンスターの効果は、無効となるぅ!」
「なんだって!?」
「そのまま、プリズンクインデーモンでシャーク・サッカーを攻撃ぃ!」
「シャーク・サッカー!!」
　プリズンクインデーモン　攻２６００→シャーク・サッカーシャーク・サッカー　守１０００（破壊）
「私はこれでターンエンドだぁ。さあ絶望しろ、遊野清明!」
『ちっ、思ったより苦戦してんな……』
「悪かったね、まだまだで!僕のターン、ドロー!」

くっ、確かにこの状況はキツイ。攻撃力２０００越えのモンスターが二体で、そのうち一体は破壊相手の効果を無効にできるときたもんだ。とりあえず、今引いたカードは？

『ほう、こりゃなかなかきついギャンブルだな。構わねえさ、どうせ負けるなら最後まであがいてやれ！』

「わかってらい！モンスターをセット、ターンエンドだ！」

タイタン　手札：１　モンスター：ジェノサイドキングデーモン（攻）、プリズンクインデーモン（攻）　魔法・罠：フィールドバリア　場：万魔殿―悪魔の巣窟―

清明　手札：０　モンスター：１（セット）　魔法・罠：０

場：万魔殿―悪魔の巣窟―

「もはや守りを固めることしかできないかぁ！私のターン、ドロー！」

「なんとでも言えっ！こいつが僕の最善手だよ！」

さあ、ここでどっちが攻撃してくるかですべてが決まる！もしあのモンスターから攻撃してきたりもう一体デーモンを展開してきたらこっちの負けだけど、そうでなければまだいける！

「もしそのモンスターが何かの効果持ちならジェノサイドキングデーモンで攻撃すればいいがぁ、その場合そのモンスターが守備の高い壁だった時にこちらが反射ダメージを

受ける……決めたぞぉ！プリズンクインデーモンでそのモンスターを攻撃ぃ!!」
『いよっしゃあっ！首の皮一枚で持ちこたえたぜ！』
「セットモンスターはグリズリーマザー！効果により、デッキから深海の……」
『いや、よせ！』
「な、なんでさ！ここで深海の怒りを出せば攻撃力２０００、ジェノサイドキングデーモンと並ぶことができるのに！」
『あのタイタンの、一ターン目からずっと握りっぱなしの手札……あのカードを俺は、デスルークデーモンだと思う。効果を簡単に言うと、ジェノサイドキングデーモンが破壊された時に手札から捨てると、そのジェノサイドキングデーモンを復活させられる専用蘇生カードだ。もしそうだった場合、どうなるか考えてみろ！』

デスルークデーモン
効果モンスター
星３／光属性／悪魔族／攻１１００／守１８００
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に５００ライフポイントを払う。
このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、
その処理を行う時にサイコロを１回振る。

３が出た場合、その効果を無効にし破壊する。
自分フィールド上の「ジェノサイドキングデーモン」が破壊され墓地に送られた時、
このカードを手札から墓地に送る事で、その「ジェノサイドキングデーモン」１体を特殊召喚する。
「えっと……深海の怒りを出してもジェノサイドキングデーモンが攻撃してきて相打ちになって」
『そのまま復活されてダイレクトアタック、だろうな』
「じゃ、じゃあ何を出せば！」
『……死に出し、だな』
「それしかない、か！デッキからヒゲアンコウを特殊召喚！」
ヒゲアンコウ
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１５００／守１６００
水属性モンスターを生け贄召喚する場合、
このモンスター１体で２体分の生け贄とする事ができる。
ヒゲアンコウ　攻１５００
「悪あがきをぉ！炸裂！五臓六腑！！」

ジェノサイドキングデーモン　攻２０００→ヒゲアンコウ　攻１５００（破壊）
清明　ＬＰ１０００→５００
「ごめんグリズリーマザー、それにヒゲアンコウ……」
やっぱり死に出しってのは好きじゃないな。ソリットビジョンだと特に。ユーノも同じことを考えているらしく、複雑な顔をしていた。
『いいか、死に出しまでしてこのターンを生き延びたんだ。下手なもの引いて負けたりすんじゃねえぞ』
「ああ、もちろんさ」
「ちい、やはりジェノサイドキングデーモンから攻撃していればぁ……ターンエンドだぁ」
「ドロー！」
こ、このカードは！
『困ったときのなんとやら～♪』
「マジックカード、貪欲な壺を発動！墓地のアトランティスの戦士、ハンマー・シャーク、ヒゲアンコウ、ジョーズマン、グリズリーマザーをデッキに戻して２枚ドロー！」
貪欲な壺
通常魔法（制限カード）

自分の墓地のモンスター5体を選択して発動できる。
選択したモンスター5体をデッキに加えてシャッフルする。
その後、デッキからカードを2枚ドローする。
「だが、今更何をドローしようとも!」
『……それはどうかな?』
「何い!?」
「マジックカード、サルベージを発動!墓地にいるハリマンボウ、シャーク・サッカーを手札に!そしてハリマンボウをそのまま通常召喚、そしてシャーク・サッカーを特殊召喚!」
サルベージ
通常魔法
自分の墓地の攻撃力１５００以下の水属性モンスター2体を選択して手札に加える。
ハリマンボウ　攻１５００
シャーク・サッカー　攻２００
「そんな低攻撃力のモンスターを攻撃表示でだとぉ?ついにおかしくなったのかぁ?」
「残念ながら、いたってこっちは正常だよ!マジックカード発動、ミニマム・ガッツ!!この効果でハリマンボウをリリースして、プリズンクインデーモンの攻撃力をエンドフェ

イズまで０にする！それと、ハリマンボウの効果対象をプリズンクインデーモンに！」
「何ぃ!?」
『まあ意味はないけどな』
　ハリマンボウがプリズンクインデーモンに向かって突進して、そのまま爆発を起こす。残ったのは、衝撃で体がぼろぼろになったプリズンクインデーモンのみ！……
今日は本当にごめん、ハリマンボウ。何回も墓地に送っちゃって。
　プリズンクインデーモン　攻２６００→０
「シャーク・サッカーでプリズンクインデーモンに攻撃！よろしく、シャーク・サッカー！」
　シャーク・サッカー　攻２００→プリズンクインデーモン　攻０（破壊）
　タイタン　ＬＰ３００→１００
「く、だがまだ私のライフは１００残っているぅ。次のターンでまだなにか仕掛けがあるとしても、フィールドにはジェノサイドキングデーモン、手札にはデスルークデーモンがいるぅ！つまり万一ジェノサイドキングデーモンの破壊に成功したとしても、私の勝ちは決まっているのだぁ！」
「な、ホントにデスルークデーモンだったのか！でも残念だけど、次のターンは回ってこないよ！この瞬間ミニマム・ガッツのもう一つの効果により、プリズンクインデーモン

の元々攻撃力、つまり２６００のダメージを受けてもらうっ！」
ミニマム・ガッツ
通常魔法
自分フィールド上のモンスター１体をリリースし、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで０になる。
このターン、選択したモンスターが戦闘によって破壊され相手の墓地へ送られた時、
そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。
「ば、馬鹿なあああああぁっ!!」
タイタン　ＬＰ１００→０
『はあ、今回もギリッギリだったな。先が思いやられるぜ』
「勝ったからいいじゃないの。あ、霧が晴れてきた」
『闇のゲームもどきもおしまい、ってわけだ。それじゃそろそろ「た、助けてくれえぇっ!!」……なんだ？』
「タ、タイタン！」
叫び声の方を見ると、タイタンがさっきの黒いモノに呑みこまれかかっていた。
「えーい、ほら早くつかまって！」

……ま、見捨てることなんてできないよね。必死になって引っ張り、どうにかこうにかタイタンも霧の中から引きずり出す。と、十代達が慌てて駆け寄ってきた。そうそう、忘れるところだった。

「おい、そいつタイタンじゃ」

「十代!」

「な、なんだよ?」

「僕もついに精霊が見えるようになったぞ!・どーだ!」

「おお、やったな清明!」

タイタンそっちのけで盛り上がる僕ら相手に、複雑な表情で明日香の入った棺桶に向かう翔と隼人がいた。その隙にタイタンが「世話になった、すまない」とだけ書いた紙を置いてどこかに消えていたのは……まあ、別にいいか。本来ここは立ち入り禁止の場所だから下手に先生に説明はできないし、考えようによっちゃあタイタンのおかげで精霊が見えるようになれたんだし、大目に見ることにしよう。

『お前も、ほんとに甘い奴だなぁ』

「ほっといてよ!」

別にいいじゃない、甘ちゃんだって!

ターン7　出動！はたらく機械たち！

　その日も、これまでどうりの朝がくると思ってました。ええ本当に。というかついさっきまで何事もなかったんです。フツーに寝てただけでした。
「このドアを今すぐ開けろ！おい、聞こえていないのか！今すぐここを開けるんだ！」
　……えらい威圧的な人にドア越しで怒鳴られるまでは、ね。
「な、なんだ……？」
　あ、十代が起きた。隼人はとりあえず様子見といった感じで二段ベッドの上からこっちをちらちら見てる、翔はこの大音量の中布団にくるまり頑張って寝ようとしてる。
『……来たか。変われ、俺が出る』
「なに、ユーノの知り合……ムグッ、いんや別に。ただ、用件の想像はつくな」
『なんで？というかまだＯＫ出してないのに』
「細かいこと気にすんなよ。ま、見てりゃわかるさ」
「今すぐ開けないか！速やかに行動しない場合、この扉を爆破する！」
『ば、爆破ぁ!?』
「わかったぜ、今開けるよ」

　爆破の一言で眠気が吹き飛んだのか、ジャージ姿のまま扉を開ける十代。そこに立っていたのは、まあなんというかこう簡潔にまとめると。
「偉そうなこった」
『だよねぇ』
　すっごい偉そうな女の人だった。正直苦手なタイプです。
「お前の好みなんぞ別に聞いちゃあいないんだけどな。んで、おたくら一体どちらさんで？」
『あれ、用件はわかってるって今言ってなかったっけ？』
「わかってるさ。でもま、こういうのは聞いてやるのが礼儀ってもんだろ」
「私たちは、この学校の査問委員会の者だ。わかったら遊野清明、遊城十代の二名は今すぐ服を着替えて私たちについて来い」
「ちょっと待ってくれよ!?俺たちが一体何やったってんだ！」
『うん、いくらなんでも展開についてけないよ！ちょっとユーノ、体使うなら使うで何か言ってよ！』
「とぼけるな！お前たちがこの前、立ち入り禁止区域の廃寮に入ったことはもうわかっているんだ！ちゃんと証拠も出ているから、つまらない言い逃れは聞かないぞ」
『ね、ねえってばユーノ……？何とかするあてはあるんだよね？』

でなきゃわざわざ交代なんてしないはずだし、ね？

「……あいよ。とりあえず着替えるんだから、もうこれ閉めていい？」

そう言いながら、ドアを顎で軽く示すユーノ。え、何このドライな対応。

「いいだろう。五分だけ待ってやる」

「気が利かない、っつーかノリが悪いなあ。そこは当然『三分間待ってやる』って言うとこだろ？」

そう言うと、物凄い剣幕でこっちを睨んでから大きな音を立てて扉を閉めた。正直、今のは殴られてても文句言えないと思う。まあ、そうすると後で痛い思いするのは僕なんだけど……。

「それでは我々査問委員会は、あの寮に入ったお前たち全員に退学処分を命じる！」

「ちょい待ち。確かに俺たちはあそこの寮に入ったけど、なんでまたそのせいで退学までされなきゃいかんわけだ！」

「校則違反者が何を言うか！」

「朝っぱらから怒鳴り込んできやがって、少しは他人様の迷惑ってもんも考えろっつっ

てんだよ！」
「ま、まあまあ遊野君。一度落ち着いてくれないか」
『ほらユーノ、鮫島校長もああやって言ってるよ？というかこれ以上ペラペラ喋られると後々目ぇつけられんのは全部僕なんだから勘弁しやがれくださいお願いしますユーノ様』
「（おいユーノ、そろそろ止めとかないとヤバいんじゃないか？）」
『ねえ十代もそうやって言ってるよ？だからお願いします抑えてください』
「ちっ、言いくるめるまでは頑張ってみようと思ったのによ」
『待てよオイそんなこと考えてたのかよやだよ退学』
「わめくなやかーしー。それじゃあ……お願いします、何でも（コイツが）言うこと聞きますから退学だけは勘弁してください！」
『あれ、今「コイツが」って言わなかった？てことはなに、言うこと聞くのは僕なわけ？』
「あーるっさいるっさい。……お願いします校長、クロノス先生！お慈悲を下さいっ！」
「ならば、私から一つ提案があるのーネ」
「と、言いますと？」
「それはでスーネ校長、ズバリ制裁デュエルですーノ！」

「せ、制裁デュエル？なんだそれ？」
「そう、よく聞きなさい遊城十代。アナタと丸藤翔の二人にはタッグを組んでもらい、学校の決めた相手と退学を賭けたタッグデュエルをして貰うのーネ！」
　タッグデュエルか！面白そうだな！」
『……僕は？』
「おう、十代と翔はそれでいいかもしれんが、俺はどしたらいいんだ？もしかしてアレか、俺にはおとがめなしなのか？」
「遊野君、できれば君にもタッグを組んでもらいたいところなのですが、なにぶん校則違反者がちょうど三人しかいないもので……」
『あれ、校長の言ってることなんかおかしくない？隼人はもういない扱いなわけ？』
「ああ、ちーっとばかし妙だな。ま、とりあえずクロノスせんせと鮫島校長が結論出してくれるだろ」
　その言葉どうり、あーだこーだと言い合ってやっと結論が出たらしい。その位呼び出す前に考えとけよ、と思ったのはナイショ。どうせ言っても不毛なだけだし。
「では決まりました。君には申し訳ないのですが、誰か本校の生徒の中から、ただし遊城十代君及び丸藤翔以外の人とペアを組んでもらってください。もちろん、その場合君が負けてもペアの人には影響ありません」

『……何その果てしなくわけわからんルール』

「……とまあ、こんな所かな」

ようやく先生たちから解放されて体もユーノから取り返して、購買で勝ったドローパンを食べながらどっかから今朝の話を聞きつけてきた明日香と三沢に、しょっ引かれてからどうなったのか心配で追いかけてきたらしい隼人、よくわからないなりに興味があったらしく寄ってきた夢想に対して愚痴っていたところ。ちなみにユーノは十代と翔にレッド寮でタッグの指導をするんだそうだ。

「ふーん。ちなみにそのペアの相手ってもう決まったの？だってさ」

「うんにゃ、まだ誰にも頼んですらいないよ」

「なら私が手伝ってあげようか？だって」

「いえ、私のことを助けてくれたんだから、その借りは返させて頂戴」

「ちょっと待て、そもそも俺もついていったんだから、当然俺がやるんだな」

「確かに俺は何のかかわりもない。だがな、この三沢大地がそこで見捨てるような薄情者に見えるか？」

「……ありがと、皆」

「というかそもそも、一緒に行った俺だけおとがめなしなんて目覚めが悪すぎるんだな。ちょっと校長先生のところ行って抗議してくる」
「あ、待って隼人君！私もあの寮には入ったんだし、一緒に行かせてもらうわ」
「ありがとうなんだな、明日香さん」
　そういうが早いが、止める間もなくすたすたと歩いていく二人。
「とりあえずあなたのペアは私たちに任せて、って言ってるよ」
「だな、清明。安心しろ、いかなる奴が相手でもこの俺の計算の前では無力、お前の勝ちは決まったようなものだ」
「骨の実力、もう一回魅せてあげる。……だってさ」
　持つべきものって友達だよね。つくづくそう思う。

「じゃ、じゃあお願いします」
「準備はいいか、ユーノ？」
『おお、こっちはいつでもいいぜ。お前こそしくるなよ、十代』
「ああ、わかってるぜ！翔もほら、そんなに緊張すんなよ。デュエルは楽しむもんだぜ？」

「は、はい！」
『まだまだ固いなぁ。ま、おいおい直ってけばいいさね』
　さて、一方こっちは俺ことユーノに十代、翔。やっぱり原作とは微妙にずれがあるらしく、なんと翔の方から足を引っ張りたくないから自分たちに稽古をつけて欲しいと言ってきた。んで、ならよかろうと俺が相手してやろうとして実体がないことをようやく思い出し、とりあえず指示だけ出して十代にカードを引いてもらうことにする。すまんな、十代。こんな役ばっか押し付けて。
「デュエル！」
『先攻は俺らか』
「俺のターン、ドロー！……で、俺はどうすればいい？」
『まずこいつを守備表示、それからこっち伏せといて』
「わかったぜ、俺は氷弾使いレイスを守備表示で召喚！カードを一枚セットしてターンエンドだ。落ち着いてやれよ、翔」
「は、はい……」
　自分から言い出したこととはいえ今になって気が引けてきたのか、あまり乗り気じゃなさそうな翔。ま、こればっかりはしゃーねえのかな。
　氷弾使いレイス

チューナー（効果モンスター）
星２／水属性／海竜族／攻　８００／守　８００
このカードはレベル４以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。
氷弾使いレイス　守８００
「僕のターン、ドロー！……パトロイドを攻撃表示で召喚！そしてその効果で、そのセットされたカードを確認する！」
勢いよく飛び出してくる、デフォルメされたパトカー。頭の上の非常灯がぐるぐると回転すると、伏せておいたカードが表向きになった。
パトロイド
効果モンスター
星４／地属性／機械族／攻１２００／守１２００
相手フィールド上にセットされているカードを１枚めくり、確認した後元に戻す。
この効果は１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに発動する事ができる。
パトロイド　攻１２００
「こっちの伏せカードは攻撃反応のトラップ、ポセイドン・ウェーブだぜ」
「なら、速攻魔法サイクロンを発動！ポセイドン・ウェーブを破壊するッス！」
サイクロン

速攻魔法
フィールド上の魔法・罠カード１枚を選択して破壊する。
『……ふむ』
「ん、どうしたんだユーノ？」
『いや、大したことじゃないさ』
そう、大したことじゃない。パトロイドの効果をきちんと使った、ただそれだけの事。でも、俺の記憶が正しけりゃこの時翔はパトロイドの効果を使わずに攻撃の無力化めがけて突っ込んできてたはずだ。やっぱり原作よりこっちの世界のほうが強いってことなんだろう。
「行け、パトロイド！氷弾使いレイスに攻撃、シグナル・アタック！」
車輪で殴りかかろうとしたパトロイドだったが、レイスが慌てて地面にまきびしのように氷の弾をばらまいたおかげで途中で進むのを断念し、すごすごと翔のフィールド上に引き返していく。まったく、自分のカードの効果で手一杯になって、相手モンスターの効果を確認してなかったな？
「翔、残念だったな。氷弾使いレイスは、レベル４以上のモンスターとの戦闘では破壊されないのさ」
「そんな!?」

「だめだぜ、ちゃんと効果は確認しとかないと」
おお、なんか十代がいいこと言った。お前が言うなと返したいとこだけど。
「アニキ、いいからお説教なんてしないでよ！」
「悪い、たしかに説教みたいだったな。やっぱり、デュエルは楽しもうぜ！」
「こっちこそごめん、せっかくアニキがアドバイスくれたのにあんな事言っちゃって……カードをセットして、ターンエンド」
ユーノ＆十代　手札：4　モンスター：氷弾使いレイス（守）魔法・罠：0
翔　手札：3　モンスター：パトロイド（攻）魔法・罠：1（伏せ）
「いや、気にするなって。ドロー！」
『う～ん、どうすっかなー……まあいいさ、全力でやっちゃってくれ』
「ああ、わかった。ハンマー・シャークを召喚して効果発動！レベルを一つ下げて、手札からオイスターマイスターを特殊召喚！」
ハンマー・シャーク
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１７００／守１５００
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に発動できる。
このカードのレベルを１つ下げ、

手札から水属性・レベル３以下のモンスター１体を特殊召喚する。
ハンマー・シャーク　攻１７００　☆４→３
オイスターマイスター
効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻１６００／守　２００
このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、自分フィールド上に「オイスタートークン」（魚族・水・星１・攻／守０）１体を特殊召喚する。
オイスターマイスター　攻１６００
「バトル！オイスターマイスターで、パトロイドを攻撃！オイスターショット！」
牡蠣の戦士がいいフォームで投げつけた牡蠣がフォークボールとなってパトロイドに飛んでいく。わざわざ変化球まで投げられるようになったとは、お主なかなかやりおるな。
「ト、トラップ発動！スーパーチャージ！」
牡蠣をまともに喰らってよれよれになったパトロイドが最後の力を振り絞ってサイレンを鳴らし、翔のデッキの上からカードを二枚はじき出した。
スーパーチャージ

通常罠
自分フィールド上に「ロイド」と名のついた機械族モンスターのみが存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。自分のデッキからカードを2枚ドローする。
『だが切れ味は受けてもらう……ってな』
「切れ味？」
『こっちの話』
オイスターマイスター　攻１６００↓パトロイド　攻１２００（破壊）
翔　ＬＰ４０００↓３６００
「さらに、ハンマー・シャーク でダイレクトアタックだ！」
「うわあっ！」
ハンマー・シャーク　攻１７００↓翔（直接攻撃）
翔　ＬＰ３６００↓１９００
「大丈夫か、翔!?」
「う、うん……でも」
『でも？』
「でも、どうしたんだ？」

「やっぱり、無理なんだよ……僕の弱さでアニキの足を引っ張らずにデュエルするなんて……」
「翔、お前」
「気張れ、気張るんだな翔！」
「は、隼人君!?」
「あれ隼人、お前確か校舎でメシ食ってたんじゃないのか？」
「校長に、俺と明日香さんも制裁デュエルに参加できないか聞きに行った帰りなんだな」
「僕も来たよ～」
「私も来てみたわよ」
「同じく、みたい」
「俺もいるぞ！」
『なんだ、帰ってきたんなら覗き見なんぞせずに素直に見にくりゃいいのに』
「でも隼人君、気張れって言っても僕じゃあ」
「それじゃだめだ！いいか翔、このままじゃあお前は今の留年してレッド寮にいる俺以下ってことになるんだな！それに、お前は絶対に弱くなんかない、だからもっと自分と自分のデッキに自信を持つんだな！」
『いいこと言うなぁ隼人。俺が出張るまでもなかったか？』

「いつも大声なんて出さない隼人君が僕のためにあんなに必死に……うん、わかったよ！アニキ、それに多分そこにいるユーノ君、心配かけてごめん！僕はもう大丈夫ッス！」
「よく言ったぜ、翔！それでこそ俺の弟分だ！じゃあ、次はお前のターンだ！」
「うん！僕のターン、ドロー！ジェット・ロイドを守備表示で召喚するッス！」
続いてフィールドに現れたロイドは、パトロイドと同じくデフォルメされた赤い飛行機型のロイド。それにしても、ジェットか。なんか嫌な予感がするな。
ジェット・ロイド
効果モンスター
星４／風属性／機械族／攻１２００／守１８００
このカードが相手モンスターの攻撃対象に選択された時、
このカードのコントローラーは手札から罠カードを発動する事ができる。
ジェット・ロイド　守１８００
「さらにカードを一枚セットして、ターンエンドッス」
ユーノ＆十代　手札：手札：３　モンスター：氷弾使いレイス（守）、ハンマー・シャーク（攻）、オイスターマイスター（攻）魔法・罠：０
翔　手札：４　モンスター：ジェット・ロイド（守）魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン、ドロー！さてユーノ、攻撃するか？」
『そーだな十代、ジェット・ロイドの効果は確かに怖いがんなもん気にしてたらいつまでたっても攻撃なんてできねえからな！まあ、一応危険は減らしておくか。こいつをこいつ使って召喚してくれ』
「了解っ！俺は氷弾使いレイスをリリースして、氷帝メビウスを召喚！さらにその効果で、お前の場の伏せカードを破壊するぜ！」
『フリーズ・バースト！』
　氷帝メビウス
　効果モンスター
　星６／水属性／水族／攻２４００／守１０００
　このカードがアドバンス召喚に成功した時、
　フィールド上の魔法・罠カードを２枚まで選択して破壊できる。
　氷帝メビウス　攻２４００
「ならこの瞬間、破壊されたワンダーガレージの効果を発動して手札にいるシャトルロイドを特殊召喚！」
　メビウスのつららが貫いた伏せカードが巨大な工場になり、そのシャッターが開いてスペースシャトルのロイドが飛んできた。

『あっちゃー、やっちまったか』

ワンダーガレージ

通常罠

セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

手札からレベル４以下の「ロイド」と名のついた

機械族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。

シャトルロイド

効果モンスター

星４／風属性／機械族／攻１０００／守１２００

このカードが攻撃対象に選択された時、このカードをゲームから除外する事ができる。

このカードは次の自分のスタンバイフェイズ時に自分フィールド上に特殊召喚される。

その時、相手ライフに１０００ポイントダメージを与える。

シャトルロイド　守１２００

『まあ、しょうがないか。ハンマー・シャークを守備表示にして、メビウスでジェットに攻撃な』

「わかった、ハンマー・シャークを守備表示にして氷帝メビウスでジェット・ロイドに攻撃！」

ハンマー・シャーク　攻１７００↓守１５００

氷帝メビウス　攻２４００↓ジェット・ロイド　守１８００（破壊？）

「ここで僕は、ジェット・ロイドの効果を発動！手札からの必殺トラップ、魔法の筒！」

『やっぱり、か。まあそんな予感はしてたぜ』

魔法の筒

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

攻撃モンスター１体の攻撃を無効にし、

そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

ユーノ＆十代　ＬＰ４０００↓１６００

『シャトルへの攻撃は遠慮しときたいな。これだけ伏せてターンエンドで』

「カードをセット、ターンエンド」

「僕のターン、ドロー！こ、このカードは……」

『……引いたか』

「え、ユーノ？もしかして今翔が引いたカードがわかんのか？」

『まーな、予想くらいはつく』
「一体何をドローしたんだ？なんかすげえ難しい顔してるけど」
『今はまだ、黙っていておいてやれ。今は、な』
「て、手札からスチームロイドを召喚！そのままオイスターマイスターに攻撃！」
お次に現れた機関車のロイドが、煙突から煙をまき散らしながらオイスターマイスターにタックルを仕掛ける。
スチームロイド
効果モンスター
星４／地属性／機械族／攻１８００／守１８００
このカードは相手モンスターに攻撃する場合、
ダメージステップの間攻撃力が５００ポイントアップする。
このカードは相手モンスターに攻撃された場合、
ダメージステップの間攻撃力が５００ポイントダウンする。
スチームロイド　攻１８００→２３００
スチームロイド　攻２３００→オイスターマイスター　攻１６００（破壊）
ユーノ＆十代　ＬＰ１６００→９００
「カードを一枚セットして、僕はターンエンドッス」

ユーノ＆十代　手札：３　モンスター：氷帝メビウス（攻）、ハンマー・シャーク（守）
魔法・罠：１（伏せ）
翔　手札：１　モンスター：ジェット・ロイド（守）、シャトルロイド（守）、スチームロイド（攻）　魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！このままじゃ守りを固めててもジリ貧だ！メビウスでスチームロイドを攻撃！」
「リバースカード、二枚目のスーパーチャージを発動！カードを二枚ドローするッス！」
つららに貫かれたスチームロイドがさっきのパトロイドのように最後の力を振り絞り、煙突から噴き上げた蒸気で翔のカードを二枚はじき出す。
「でも戦闘は止まらないぜ！」
スチームロイド　攻１８００→１３００
氷帝メビウス　攻２４００→スチームロイド　攻１３００（破壊）
翔　１９００→８００
「うっ、せっかくライフで勝ってたのに、一瞬で追い抜かれた……」
「まあそんなもんさ。でも、だからデュエルってのは面白いのさ！俺はこれで、ターンエンド」
「僕のターン、ドロー！このままターンエンド」

ユーノ＆十代　手札：4　モンスター：氷帝メビウス（攻）、ハンマー・シャーク（守）
魔法・罠：1（伏せ）
翔　手札：4　モンスター：ジェット・ロイド（守）、シャトルロイド（守）　魔法・罠：0
「俺のターン、ドロー……どうする、清明？」
『こっちのライフも１０００切ってるからな、あと一ターンだけ様子を見て、それでも安全策が見つからなかったら力押しで行けるかやってみようぜ』
「わかった。なら、俺らもここで、カードを一枚だけ伏せてターンエンドさ」
「僕のターン、ドロー！……ぼ、僕は……」
「いきなりどうしたんだよ、翔？お前、さっきからちょいちょいおかしいぞ？具合でも悪いのか？」
「い、いや、平気ッスよアニキ」
「そうか？無理はすんなよ、翔」
『うん、良い対応。まあとりあえずデュエルが終わるまではそっとしておいてやれ、どうせ俺らがどうこう言って何とかなるような話じゃねえし』
「わ、わかった」
「マジックカード死者蘇生を発動して、スチームロイドを特殊召喚！」

死者蘇生
通常魔法（制限カード）
自分または相手の墓地のモンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

スチームロイド　攻１８００

「さらに、僕はマジックカード……マジックカード、融合を発動！手札のジャイロイドと、場のスチームロイドを融合！マイフェイバリット、スチームジャイロイドを召喚！」

融合
通常魔法
手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

ジャイロイド
効果モンスター
星３／風属性／機械族／攻１０００／守１０００
このカードは１ターンに１度だけ、戦闘によっては破壊されない。

（ダメージ計算は適用する）
スチームジャイロイド
融合モンスター
星６／地属性／機械族／攻２２００／守１６００
「ジャイロイド」＋「スチームロイド」
「行け、スチームジャイロイド！ハンマー・シャークを攻撃、ハリケーン・スモーク!!」
スチームジャイロイド　攻２２００→ハンマー・シャーク　守１５００（破壊）
『クッ、あの攻撃力じゃあもう伏せておいたうちの一枚、好敵手の記憶はもう使えないな』
好敵手の記憶
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。
自分は攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを受け、
そのモンスターをゲームから除外する。
次の相手ターンのエンドフェイズ時、
この効果で除外したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。
「カードを一枚セットして、ターンを終了するッス」

ユーノ＆十代　手札：４　モンスター：氷帝メビウス（攻）魔法・罠：２（伏せ）
翔　手札：１　モンスター：ジェット・ロイド（守）、シャトルロイド（守）、スチームジャイロイド（攻）魔法・罠：１
「俺のターン、ドロー！いくぜユーノ！」
『ああ、もうやっちまうぞ十代!!』
「フィールド魔法、ウォーターワールドを発動！そしてバトルだ、氷帝メビウスでスチームジャイロイドを攻撃！」
ウォーターワールド
フィールド魔法
フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、
守備力は４００ポイントダウンする。
氷帝メビウス　攻２４００→２９００　守１０００→６００
「ならトラップ発動！シフトチェンジ!!」
シフトチェンジ
通常罠
自分フィールド上に存在するモンスター１体が

相手の魔法・罠カードの効果の対象になった時、
または相手モンスターの攻撃対象になった時に発動する事ができる。
その対象を自分フィールド上に存在する正しい対象となる他のモンスター1体に移し替える。
「この効果で攻撃対象をシャトルロイドに変更、さらにシャトルロイドの効果で自身をゲームから除外する！」
「攻撃対象になったとき除外する……だけ？」
「ええ、でもこれで僕の勝ちは確定したも同然ッスよ！今のメビウスの攻撃力じゃ、スチームジャイロイドを倒しても僕のライフは持ちこたえるッス！」
『ああ、これでこのターン内に決着をつけないと俺らの負けだ。つーか十代、お前も人のカードの効果見てねえじゃねえか。でもまあ、一つわかったことがあるとすれば』
「翔！」
「は、はい！なんスかアニキ!?」
「お前、意外と強かったんだな！さっき隼人も言ってたけど、もっと自信持ってデュエルしろよ」
「ありがとう、アニキ……」
『確かに思ったよりは強いけど、まだまだ詰めが甘いな、ってことか』

「でもな、翔。今ユーノも言ってるけど、まだほんのちょっぴりだけ詰めが甘いぜ！トラップ発動、メテオ・レイン！」

メテオ・レイン

通常罠

このターン自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時に

その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

「あ、あのカードは！」

『そう、このカードなら、そして今のメビウスの５００ポイント上がった攻撃力なら突破できる！』

「まだバトルは終わってないぜ！メビウスでもう一度ジェット・ロイドを攻撃！アイス・ランス!!」

氷帝メビウス　攻２９００→ジェット・ロイド　守１８００（破壊）

翔　ＬＰ８００→０

「あぁ、結局負けちゃった……」

「いや、面白いデュエルだったぜ！ところで翔、お前の残りの手札は一体なんだったんだ？見せてみろよ」

「あ、勝手に見ないで！」

「パ、パワー・ボンド!?お前、このカードがあったなら」
「これは、このカードは使えないんスよ……」
「ん?そりゃ一体どういうことだ?」
　まあ、そこからの話は正史どうりだったので省略。十代がＶＳカイザーを宣言したところでひとまずお開きになりましたとさ。
『んでさ、結局お前のパートナーは見つかったわけ?俺まだまだ忙しいから手伝えねーぞ』
「あ!!マズイ忘れてた!結局さっきは隼人と明日香が校長室から帰ってきてうやむやになっちゃったから……」
「今すぐ誰でもいいからあたって来いこの馬鹿!」
　訂正。お開きにはもうちょい時間がかかりそうです。

ターン８　圧倒！ダブルサイバーＶＳ鉄砲水のＨＥＲＯ！

「デュエル許可願い、っと……」
「翔とその兄貴の間になにがあったのかは知らないけど、デュエルしてみりゃわかるだろ。デュエル許可願い……」
「「丸藤亮、だっけか……ん？」」
「清明!?」
「十代!?」
『……お前ら仲いいな。息ぴったりじゃねえか』
「で、こんなところで清明は何やってんだ？」
「そっちこそ。何か今気になる単語が聞こえた気がするけど」
「俺か？俺は今、翔の本物の兄貴に対してデュエル許可願いを書きに来てたんだ」
「やっぱり！僕も申請しようと思ってここまで来たのに！」
「お前もか。こうなったら、どうするかはわかってるよな？」
「当ったり前よ！喜んで受けて立とうじゃないの！」

「「デュエ「二人とも、何をしているのーネ!」……え?」」
　デュエリストの常識、デュエルで決着をつけようとしていた僕らの前にいきなり現れたのは、いつものレッド嫌いで有名なあの人。
「ク、クロノス先生!」
「まったく、ドロップアウトボーイが二人もそろって一体こんなところで何を……うん?その紙をちょっと見せるのーネ!」
「あ、まだ書き終わってないのに」
「何々、デュエル許可願い?それで相手は、カイザー!?あなたがた、寝言は寝てから言うのーネ!」
　そう言うや否や、僕たちの持っていたデュエル許可願い証をビリッビリに細かく破り捨てるクロノス先生。ああ、せっかく書いたのに。すぐにショックから復活した十代が先生に食ってかかる。
「いきなり何すんだよ、先生!」
「黙るのーネ!カイザー亮は、この学校の中でも一番といわれるブルーの中のトップ、いわばエリート中のエリートですーノ!そんな相手にドロップアウトボーイがデュエルを挑むなんて、口にするだけでもおこがましいのーネ!」
「そんな無茶苦茶な!」

「ささ、わかったらさっさと自分たちの寮に戻って荷物の整理でもしているのーネ」
「そんなぁ～」

「んで、これからどーしよっか」
　結局あれからも少しは粘ったものの、最終的にはクロノス先生に追い出されてしまった。ユーノも加勢してくれりゃいいのに、なーんも言わないんだもんなぁ……。例えばさ、うるせーいいから受理しやがれ！とか俺のデッキが火を噴くぜ！とかそこのコアラが黙っちゃいないぞ！とか……コアラ？
『日頃からお前が俺に対してどんなイメージを持ってるかはよ～くわかった。わかったから一発殴らせろ』
「そ、そんなことよりあれ見て十代！」
　そこにいたのは隼人。いや、別に隼人だってここの生徒、どこにいたってそんなに不思議じゃない。でも、なんでまた木の上なんかにいるんだろうか。
「へ？あれ、コアｒ……隼人！そんなところで何やってんだ？」
　あ、今十代もコアラって言いそうになったな。
「わわっ！べ、別になんでもないんだな!!」

そういう隼人が乗っていた木の枝からぱらぱらと落ちてくる、デス・コアラやビッグ・コアラといったカードたち。それを見た十代が、なにかに納得したような顔になった。
「ははーん、まさかお前、デュエルやろうとしてたのか？」
「え、ホント！じゃあ後で一戦お願いしようかな」
「ち、違うんだな！別にそんな訳じゃない！」
「ふーん、まあいいさ。今はこんなことしてる場合じゃないしな！」
「清明、今度はお前ら何をする気なんだ？」
「いや、僕も知らないよ。というかなにか策があるってことも今初めて聞いたし」
『聞かれる前に言っとくけど、俺も相談されてないぞ』
そうこうしてる間に、たったか走っていく十代。あいっかわらず運動神経は無駄にいいんだよなー。あのペースについてくだけでこっちまで最近体力ついてきたし。
「ちょっと十代、どこ行くのさー！」
「ブルー寮に行って、直接カイザーに勝負を申し込む！」
「あ、抜け駆けっ！隼人、急ぐよ！」
「え、俺は別に行きたいなんて言ってないんだな」
「いいからいいから！レッツゴー！」
「うわあ～！」

『……んで、結局ダメでしたとさ』
　ものの見事に門前払い。まあしょうがないよね、あいつらエリート意識だけ無駄に高いし。やれやれ。まあとりあえずは、
「じゅーだーい？だいじょぶ？」
「あんまり……ヘックシ！それにしてもあいつら、俺はこんなことじゃ諦めねえぞ……ヘックシ！」
「今日はもう、あったかくして寝たほうがいいんだな」
　ブルーのエリート相手に粘りに粘った結果、頭からバケツの水を被ることになった十代に声をかけて、まだまだへこたれてないことを確認する。よかった、まだ諦めてない。
「ほれ十代、部屋だぞー」
「うう、ただいま……翔、まだ部屋に閉じこもってんのか？もうそろそろ元気出せよ」
　ただ、こっちはいまだに元に戻ってないみたいだけど。この間はせっかく自分からやる気になったのに、かなりいいところまで持ち込んで結局負けたことがよっぽどショックだったらしい。あとパワー・ボンドがどうたらとかも言ってたっけ。
「ちょっとやりすぎたんじゃないのユーノさんや」

『かもしれんな。途中からつい本気になっちまったから……』
「ほら、一緒にデッキ調整でもしようぜ、ってあれ!?翔がいねえ!?」
「え？」
「ここに、手紙が置いてあるんだな。なになに、僕は島を出ます……」
「何！あいつ、逃げやがったな！清明、ユーノ、隼人！」
「わかってるって！」
『行くぞ、お前ら！』
「え、どういうことなんだな？」
「決まってるだろ、翔を連れ戻すために探しに行くんだよ！」
「でももう食事の時間が」
「いいから行くぞ！」
「そんな～！」

「どうだ、いたか!?」
「だめだ、こっちにもいないよ！」
「翔、出てくるんだなー！」

あれからかなり探し回ったけど、いまだに翔は見つからない。まさか、もう島から出て行っちゃったとか？こうなったら、この子にも手伝ってもらうか。デッキからカードを一枚取り出して、ちょっと出てきてくれる、と呼びかける。あ、出てきた。

「じゃあシャーク・サッカー、悪いけど翔を探すの手伝ってくれる？」

「なるほど！じゃあ俺も、相棒？」

十代もハネクリボーを繰り出して協力を求める。と、二体の精霊はきょろきょろと辺りを見回して、同じ方向にすいすい進んでいく。

「ついて来い、ってことか？」

「なら、ついて行ってみようじゃないの」

「二人とも、一体何が見えてるんだ？俺には今、なにか声が聞こえたのに姿が見えない……」

まあそんなこんな言いながらも僕らが前を迷わずに歩いているからか、その後をついてくる隼人。と、そこで十代が何かに気づいた。

「翔！」

なんとそこには、いつの間にか作ってあったらしいイカダに乗っかって今まさに島を離れようとしている翔……というか、あの人まさかあのイカダ一つで海を渡ろうとしてるんだろうか。途中で落っこちたらシャレにならないよ？と、そんなこと言ってる場

合じゃないか！

　でも、結局僕の出番は来なかった。相変わらずの反応速度でイカダの上に飛び乗った十代が強引に翔を止めたからだ。あ、二人とも海に落ちた。

「大変だ、清明も早く助けに行かないと！」

「いや、大丈夫でしょ」

「ど、どうしてなんだな!?」

「だってあそこらへん確か」

　そういうが早いが、海中から十代と翔が顔を出す。顔だけじゃなくて胸のあたりまで出てきた。

「……すっごい浅いもん」

「あー、なるほど」

「逃げるのか、翔」

「「へ？」」

　いきなり見知らぬ人の声がして、その場にいた全員がそちらを向く。えっと、明日香と……あっちのブルー生は一体？

『ついに来たか』

「お、お兄さん!?」

『カイザー……』

「さあかかって来い、遊城十代」
「よし、行くぜ！見てろよ、翔!!」
「選別デュエルかぁ……僕もやりたかったなあ、カイザーと」
『じゃんけんで負けるお前が悪い。なんであそこでパー出すかなぁ』
「なんだ、君も俺とデュエルしたいのか？」
「え、ええ！もちろんですよカイザー！」
「そうか……ふむ。遊城十代、君の友人もああ言っていることだし、どうだろう。ここは一つ、タッグデュエルにしてみないか？」
「タッグか！面白そうだな、受けて立つぜ！」
「決まりだな。君と遊野清明がタッグを組むといい」
「え、僕も参加していいの!?いよっしゃあっ！」
「じゃあよろしくな、清明！」
『十代とタッグ、か。面白そうなことになってきたな』
「ああ！……あれ、そうするとカイザーのペアって？」

「明日香、手伝え」
「え、ええ!?私が!?ちょっと二人とも、何とか言って！」
「明日香とカイザーのペア……相手にとって不足はないぜ！」
「抜かるなよ、十代！」
「期待した私が間違ってたわよ……いいわよ、引き受けるわよ」
「なら、最初に確認しておこう。ライフは８０００で墓地とフィールドは共有、順番はターンごとの交代制で、全員最初のターンが終わるまでは攻撃できない。異論はないな？」
「ああ！」
「なら……」
「「「デュエル!!」」」
「先攻は俺だ！ドロー！俺は、クレイマンを守備表示で召喚！カードを二枚セットして、ターンエンドだ」
　泥で体ができている（らしい）戦士が、その太い腕で防御の構えをとる。
『なるほど、まずは様子見できたか。さすがにカイザーを警戒してんのか？』
　Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン
　通常モンスター

星４／地属性／戦士族／攻　８００／守２０００
粘土でできた頑丈な体を持つＥ・ＨＥＲＯ。
体をはって、仲間のＥ・ＨＥＲＯを守り抜く。
Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン　守２０００
「ならこちらの先攻は俺からだ。ドロー！俺は、相手のフィールドにモンスターが存在することにより、サイバー・ドラゴンを特殊召喚。さらに、サイバー・ドラゴン・ツヴァイを通常召喚する」
『出たな、本家とちょっとシャープになった方のサイバー・ドラゴンコンビ』
サイバー・ドラゴン
効果モンスター
星５／光属性／機械族／攻２１００／守１６００
相手フィールド上にモンスターが存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
このカードは手札から特殊召喚できる。
サイバー・ドラゴン　攻２１００
サイバー・ドラゴン・ツヴァイ
効果モンスター

星４／光属性／機械族／攻１５００／守１０００
このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップの間、
このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。
１ターンに１度、手札の魔法カード１枚を相手に見せる事で、
このカードのカード名はエンドフェイズ時まで「サイバー・ドラゴン」として扱う。
また、このカードが墓地に存在する場合、
このカードのカード名は「サイバー・ドラゴン」として扱う。
サイバー・ドラゴン・ツヴァイ　攻１５００
「そして、エヴォリューション・バーストを発動！サイバー・ドラゴンが存在することにより、その伏せカードを破壊する！」
エヴォリューション・バースト
通常魔法
自分フィールド上に「サイバー・ドラゴン」が表側表示で存在する場合のみ
発動する事ができる。相手フィールド上のカード１枚を破壊する。
このカードを発動するターン「サイバー・ドラゴン」は攻撃する事ができない。
サイバー・ドラゴンのオーラを纏ったツヴァイが口からレーザーを出し、正確に伏せカードを打ち抜いた。

「くっ、ヒーロー・シグナルが」
セットしていたのはＥ・ＨＥＲＯの戦闘破壊に対応してＥ・ＨＥＲＯを呼び出すことのできるトラップ。フリーチェーンじゃない、か……。
『あんまり褒められたプレイじゃなかったな。どうせまだ誰も攻撃できないんだから、伏せる意味は特になかったし』
「カードを一枚セットし、サイバー・ドラゴン・ツヴァイの効果が切れてターンエンド」
十代＆清明　ＬＰ８０００　手札：十代×３、清明×５　場：Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン（守）　魔法・罠：１（伏せ）
亮＆明日香　ＬＰ８０００　手札：亮×２、明日香×５　場：サイバー・ドラゴン（攻）、サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（攻）　魔法・罠：１（伏せ）
「よし、僕のターンだ！ドロー！」
ふむ……よし、決めた。
「フィールド魔法、ウォーターワールドを発動！そして、グリズリーマザーを攻撃表示で召喚してターンエンド」
フィールドが海に包まれて、クレイマンの隣に体が青いクマがかぎ爪を光らせて二本足で立ちあがる。
ウォーターワールド

フィールド魔法
フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、
守備力は４００ポイントダウンする。
グリズリーマザー
効果モンスター
星４／水属性／獣戦士族／攻１４００／守１０００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
デッキから攻撃力１５００以下の水属性モンスター１体を
表側攻撃表示で特殊召喚できる。
グリズリーマザー　攻１４００→１９００　守１０００→６００
「なら、私のターンね。ドロー！融合を発動、手札のエトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合して、来なさい私のエース！サイバー・ブレイダーを召喚！」
融合
通常魔法
手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた
融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体を

エクストラデッキから特殊召喚する。
サイバー・ブレイダー
融合・効果モンスター
星７／地属性／戦士族／攻２１００／守　８００
「エトワール・サイバー」＋「ブレード・スケーター」
このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
相手のコントロールするモンスターが１体のみの場合、
このカードは戦闘によっては破壊されない。
相手のコントロールするモンスターが２体のみの場合、
このカードの攻撃力は倍になる。
相手のコントロールするモンスターが３体のみの場合、
このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする。
『こっちの場にはモンスターが二体、か。よかったな、もう一体展開しないでおいて。ロックされるとこだった』
「相手モンスターが二体の時、サイバー・ブレイダー第二の効果発動！パ・ド・トロワ！」
サイバー・ブレイダー　攻２１００→４２００
「カードを三枚伏せて、私もターンエンド」

十代＆清明　ＬＰ８０００　手札：十代×３、清明×４　場：Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン（守）、グリズリーマザー（攻）　魔法・罠：１（伏せ）
亮＆明日香　ＬＰ８０００　手札：亮×２、明日香×０　場：サイバー・ドラゴン（攻）、サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（攻）、サイバー・ブレイダー（攻）　魔法・罠：４（伏せ）
場：ウォーターワールド
「俺のターン、ドロー！さすがに二人とも強いな！でも負けないぜ、こっちも融合を発動！場のクレイマンと、手札のスパークマンを融合！来い、サンダー・ジャイアント！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント
融合・効果モンスター
星６／光属性／戦士族／攻２４００／守１５００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。
自分の手札を１枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する
元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター１体を選択して破壊する。
この効果は１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。
Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント　攻２４００

「そして、手札を一枚捨てて……」
「待ちなさい！召喚時に速攻魔法発動、禁じられた聖衣！これでサイバー・ブレイダーはサンダー・ジャイアントの効果の対象にもできないわよ」
禁じられた聖衣
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動できる。
エンドフェイズ時まで、
選択したモンスターは攻撃力が６００ポイントダウンし、
カードの効果の対象にならず、カードの効果では破壊されない。
サイバー・ブレーダー　攻４２００↓１５００↓３０００
「なら、手札を一枚捨ててサイバー・ドラゴンを破壊だ！ヴェイパー・スパーク！」
「この瞬間にトラップ発動、アタック・リフレクター・ユニット！対象になったサイバー・ドラゴンをリリースして、デッキからサイバー・バリア・ドラゴンを特殊召喚する！」
「そんな、モンスターを一体も破壊できなかったなんて……」
アタック・リフレクター・ユニット
通常罠
自分フィールド上の「サイバー・ドラゴン」１体を生け贄に捧げて発動する。

自分の手札・デッキから「サイバー・バリア・ドラゴン」1体を特殊召喚する。
サイバー・バリア・ドラゴン
効果モンスター
星6／光属性／機械族／攻　800／守2800
このカードは通常召喚できない。
このカードは「アタック・リフレクター・ユニット」の
効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードが攻撃表示の場合、1ターンに1度だけ
相手モンスター1体の攻撃を無効にする。
サイバー・バリア・ドラゴン　攻800
「攻撃力800?なら、サンダー・ジャイアントでサイバー・バリア・ドラゴンを攻撃!ボルティック・サンダー!」
「なら、サイバー・バリア・ドラゴンの効果発動!その攻撃を無効にする!」
「グリズリーマザーで連撃すれば倒せるけど、今は攻撃力3000のサイバー・ブレイダーもいるしダメージを狙うのは危険か……グリズリーマザーを守備表示に変更、ターンエンドだ」
「禁じられた聖衣の効果も切れるわよ」

グリズリーマザー　攻１９００↓守６００
サイバー・ブレイダー　攻３０００↓４２００
「俺のターン、ドロー！明日香の伏せたトラップカード、強欲な瓶を発動。カードを一枚ドローする」
強欲な瓶
通常罠
自分のデッキからカードを１枚ドローする。
「よし。プロト・サイバー・ドラゴンを召喚だ」
さっきまでのサイバー・ドラゴンのコンビや今いるサイバー・バリア・ドラゴンに比べると装甲が若干黒ずんでいて、大きさも小さ目な機械竜が咆哮を上げる。正直本家と比べるとあんま怖くない。
プロト・サイバー・ドラゴン
効果モンスター
星３／光属性／機械族／攻１１００／守　６００
このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、カード名を「サイバー・ドラゴン」として扱う。
プロト・サイバー・ドラゴン　攻１１００

「そして手札のマジックカード、融合を見せてサイバー・ドラゴン・ツヴァイをサイバー・ドラゴン扱いにする。融合を発動！場のサイバー・ドラゴン二体を融合して、サイバー・ツイン・ドラゴンを召喚！」

サイバー・ツイン・ドラゴン

融合・効果モンスター

星８／光属性／機械族／攻２８００／守２１００

「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードは一度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。

サイバー・ツイン・ドラゴン　攻２８００

双頭の機械竜が、二つの首でそれぞれ僕と十代を威嚇する。

「そしてサイバー・ツイン・ドラゴンに装備カード、ブレイク・ドローを装備する」

『……なんだろう、このサイバー流のお手本を見てるような感じ。と思ったけど、この人文字どうりサイバー流のお手本だったなそういや』

ブレイク・ドロー

装備魔法

機械族モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、
自分のデッキからカードを１枚ドローする。
このカードは発動後３回目の自分のエンドフェイズ時に破壊される。
「いくぞ、まずはサイバー・ブレイダーでサンダー・ジャイアントを攻撃！」
サイバー・ブレーダーの放った回し蹴りが、受け止めようとしたサンダー・ジャイアントを弾き飛ばす。
サイバー・ブレーダー　攻４２００→　Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント　攻２４００（破壊）
十代＆清明　ＬＰ８０００→６２００
「これでサイバー・ブレーダーの効果は第一のもの、戦闘破壊耐性を得るわ。パ・ド・ドゥ！」
サイバー・ブレーダー　攻４２００→２１００
「続いてサイバー・ツイン・ドラゴンでグリズリーマザーを攻撃！エヴォリューション・ツイン・バースト！」
サイバー・ツイン・ドラゴン　攻２８００→グリズリーマザー　守６００（破壊）
「そしてブレイク・ドローの効果でカードを一枚ドローする」
「こっちも効果発動だ！……ドローは怖いけどダメージはもっとキツイな、レイス

は出せない！ハリマンボウを特殊召喚！」
ハリマンボウ
効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻１５００／守　１００
このカードが墓地へ送られた時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。
ハリマンボウ　攻１５００→２０００
「もう一度攻撃だ、エヴォリューション・ツイン・バースト！」
サイバー・ツイン・ドラゴン　攻２８００→ハリマンボウ　攻２０００（破壊）
十代＆清明　ＬＰ６２００→５４００
「でも、ハリマンボウの効果で攻撃力が下がる！対象はサイバー・ツイン・ドラゴン！」
「こちらもブレイク・ドローの効果で、カードを一枚ドローする」
サイバー・ツイン・ドラゴン　攻２８００→２３００
「さらに、サイバー・バリア・ドラゴンでダイレクトアタック！エヴォリューション・バリア・ショット！」
サイバー・バリア・ドラゴン　攻８００→十代＆清明（直接攻撃）

十代＆清明　ＬＰ５４００→４６００
「カードを一枚セットして、ターンエンドだ」
十代＆清明　ＬＰ４６００　手札：十代×１、清明×４　場：なし　魔法・罠：１（伏せ）
亮＆明日香　ＬＰ８０００　手札：亮×２、明日香×０　場：サイバー・バリア・ドラゴン（攻）、サイバー・ツイン・ドラゴン（攻・ブレイク）、サイバー・ブレイダー（攻）
魔法・罠：ブレイク・ドロー（ツイン）、２（伏せ）
場：ウォーターワールド
「なら、僕のターン！ドロー！」
うーん、だいぶ押され気味だな……なんとか巻き返さないと。
「十代、構わないね？」
横から聞いてたら何のことだか訳が分からないだろうけど、十代のカンはデュエルの事ならかなり冴えるし、これでも何をしようとしているかは気づいてもらえるはずだ。
案の定、一瞬も迷わずに返事してきた。
「おう、頼んだぜ！」
「任せて！永続魔法ウォーターハザードを発動、効果でペンギン・ナイトメアを特殊召喚！」

フィールドを波が包み込み水が引いた後には、静かにたたずむ蝶ネクタイを締めたペンギンの姿があった。正直温存しておきたかったけど、ここは打点の確保が大事！

ウォーターハザード

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

手札からレベル４以下の水属性モンスター１体を特殊召喚できる。

この効果は１ターンに１度しか使用できない。

ペンギン・ナイトメア

効果モンスター

星４／水属性／水族／攻　９００／守１８００

このカードがリバースした時、

相手フィールド上のカード１枚を選択して持ち主の手札に戻す。

また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は２００ポイントアップする。

ペンギン・ナイトメア　攻９００↓１４００↓１６００　守１８００↓１４００

「さらにマジックカード、死者蘇生！十代がサンダー・ジャイアントのコストにしたＨＥＲＯ、エッジマンを特殊召喚！」

死者蘇生
通常魔法（制限カード）
自分または相手の墓地のモンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。
Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン
効果モンスター
星７／地属性／戦士族／攻２６００／守１８００
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が越えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン　攻２６００
「そしてこの２体をリリースして……こいつが僕の切り札だっ！霧の王を召喚！」
十代の持つ墓地から特殊召喚できる最大攻撃力の、金色の鎧を全身に纏うＨＥＲＯ。
そして僕が呼び出した無駄に偉そうなポーズをとったペンギンがが霧になって、フィールド上の一点に集まっていく。そしてその霧の中から現れたのが！
『お、久しぶりの出番か』
霧の王

効果モンスター
星７／水属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０
このカードを召喚する場合、生け贄１体
または生け贄なしで召喚する事ができる。
このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた
モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。
「このカードの攻撃力はペンギン・ナイトメアとエッジマンの元の攻撃力の合計……つまり、３５００だ！」
『水差すようで悪いが、ウォーターワールドも計算に入れてくれ』
「あ、その、えっと……４０００、です」
霧の王　攻４０００
「まあ気を取り直して」
『お、立ち直った』
「気を取り直して、どうせ攻撃してもサイバー・バリア・ドラゴンに止められるか。カードを一枚セットして、ターンエンド」

「私のターン、ドロー！さすがに貴方達、並みの生徒とは違うわね。あそこまで引き離されておいて、まだ逆転しようとするなんて」
「とんでもない、ブルーが貧弱すぎるんじゃないの？」
「そうだそうだ、よく言ったぞ清明！レッド生は成績こそ悪いかもしれないけど、諦めだけは悪いんだよ！」
「そうみたいね。でも、私たちにもプライドはあるもの。そう簡単には倒させないわよ？速攻魔法、魔法効果の矢を発動！そちらのフィールドにある魔法カードを破壊して、その数だけダメージを受けてもらうわ」
魔法効果の矢
速攻魔法
相手フィールド上に表側表示で存在する魔法カードを全て破壊する。
破壊した魔法カード１枚につき、相手ライフに５００ポイントダメージを与える。
「させるか！伏せといてくれてセンキュー十代、速攻魔法非常食を発動！こっちのウォーターワールドとウォーターハザードを墓地に送って、２０００ライフ回復！」
非常食
速攻魔法
このカード以外の自分フィールド上に存在する

魔法・罠カードを任意の枚数墓地へ送って発動する。
墓地へ送ったカード1枚につき、自分は１０００ライフポイント回復する。
「でも、貴方のフィールドには非常食のカードがある！５００ダメージだけでも受けてもらうわ」
十代＆清明　ＬＰ　４６００→６６００→６１００
霧の王　攻４０００→３５００
「そうね……本当なら攻撃したいのだけど。サイバー・ツイン・ドラゴン、サイバー・バリア・ドラゴンを守備表示に変更してターンエンドよ」
サイバー・ツイン・ドラゴン　攻２３００→守２１００
サイバー・バリア・ドラゴン　攻８００→守２８００
十代＆清明　ＬＰ６１００　手札：十代×1、清明×０　場：霧の王（攻）　魔法・罠：1（伏せ）
亮＆明日香　ＬＰ８０００　手札：亮×2、明日香×０　場：サイバー・バリア・ドラゴン（守）、サイバー・ツイン・ドラゴン（守・ブレイク）、サイバー・ブレイダー（攻）
魔法・罠：ブレイク・ドロー（ツイン）、2（伏せ）
『なるほど、サイバー・ブレイダーはあえて攻撃表示のまま立たせておいてこっちの動きを牽制しに来たわけか』

「えっと、つまりどゆこと？」
『十代がもう一体自分でもモンスターを出したら攻撃力はそこで４２００になるからちょっとやそっとじゃ越えられねえし、それを恐れて展開しなかったら戦闘破壊耐性がついたままになるってことさ。もっとも十代のことだ、必ず何かしら期待に応えてくれるだろうよ』
「俺のターン、ドロー！……貪欲な壺を発動して、墓地のクレイマン、スパークマン、サンダー・ジャイアント、エッジマン、グリズリーマザーの五体を選択してデッキに戻し二枚ドロー！よし来たぜ、融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合してマイフェイバリットカード、フレイム・ウィングマンを融合召喚！これなら霧の王の効果にも邪魔されないぜ！」
『なるほど、この間相打ちになったエース同士のご登場か。なかなか絵になるじゃねえの』
貪欲な壺
通常魔法（制限カード）
自分の墓地のモンスター５体を選択して発動できる。
選択したモンスター５体をデッキに加えてシャッフルする。
その後、デッキからカードを２枚ドローする。

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン
星６／風属性／戦士族／攻２１００／守１２００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。
Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻２１００
「モンスターの数が増えたことで、サイバー・ブレイダーの攻撃力が倍になるわ」
サイバー・ブレイダー　攻２１００→４２００
「まずは霧の王で、サイバー・バリア・ドラゴンを攻撃！」
霧の王　攻３５００→サイバー・バリア・ドラゴン　守２８００（破壊）
「続けてフレイム・ウィングマンで、サイバー・ブレイダーを攻撃！」
「一体何を考えてるの!?サイバー・ブレイダー、フレイム・ウィングマンを迎撃しなさい！」
「甘いぜ、明日香！俺はこの瞬間に清明の伏せたトラップ、メタル化・魔法反射装甲を発動！」
メタル化・魔法反射装甲

通常罠
発動後このカードは攻撃力・守備力３００ポイントアップの装備カードとなり、モンスター１体に装備する。
装備モンスターが攻撃を行う場合、そのダメージ計算時のみ
装備モンスターの攻撃力は攻撃対象モンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。
Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻２１００→２４００→４５００
Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻４５００→サイバー・ブレイダー　攻４２００（破壊）
「きゃあっ！」
「さらにフレイム・ウィングマンの効果で、２１００ポイントのダメージを受けてもらうぜ」
亮＆明日香　ＬＰ８０００→７７００→５６００
「よし、これでライフの逆転だ！」
『だが、そう喜んでばかりもいられねえな』
「なんで？あっちの場にいるのは攻撃力の下がったサイバー・ツイン・ドラゴンだけなのに？」
『……自分の目で確かめたほうが分かりやすいからな、まあ見てなって』

そんな不穏な会話を知ってか知らずか、ターンエンドの宣言をする十代。だが。
「なら、俺はエンドフェイズにトラップカード、リビングデッドの呼び声を発動。墓地のサイバー・ドラゴンを特殊召喚する」
リビングデッドの呼び声
永続罠
自分の墓地のモンスター1体を選択し、表側攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。
サイバー・ドラゴン　攻２１００
「ここでサイバー・ドラゴンを!?」
「そして俺のターン、ドロー。……遊城十代、それに遊野清明。君たちの本気は見せてもらった。確かに君たちは強い」
「へへっ、そう言ってもらえて光栄だぜ!」
「呑気だなぁ十代は。く、来るなら来い!」
「その強さに敬意を表して、俺の本気をもってして相手する!まずはマジックカード、貪欲な壺を発動!墓地のサイバー・ドラゴン・ツヴァイ、プロト・サイバー・ドラゴン、サイバー・バリア・ドラゴン、サイバー・ブレイダー、エトワール・サイバーをそれぞれ

のデッキに戻し、カードを二枚ドローする……マジックカード、パワー・ボンドを発動!!」
「なっ！」
「パワー・ボンド!?」
「お兄さん……」
「手札にいる二体のサイバー・ドラゴンと、場のサイバー・ドラゴンを融合！出でよ、サイバー・エンド・ドラゴン!!」
これまでのサイバー・ドラゴン系統とは格の違う、圧倒的な威圧感を持った三つ首の機械竜がその羽を広げる。これが、恐らくはカイザーの切り札……！
パワー・ボンド
通常魔法
手札またはフィールド上から、
融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、
機械族の融合モンスター１体を融合デッキから特殊召喚する。
このカードによって特殊召喚したモンスターは、
元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。
発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは

特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。
（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）
サイバー・エンド・ドラゴン
融合・効果モンスター
星１０／光属性／機械族／攻４０００／守２８００
「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
サイバー・エンド・ドラゴン　攻４０００→８０００
「攻撃力、８０００……」
「そして明日香が伏せていた二枚目の強欲な瓶を発動。ふ、面白い。装備魔法の巨大化をサイバー・ツイン・ドラゴンに装備して、攻撃表示に変更する！」
「しまった！攻撃力が低くなったからって放っておいたのが裏目に出たか！」
『そういうこった。ライフで勝ったからって一瞬だけでも舞い上がっちまったんだな、お前ら。もちろんそんなつもりじゃないのはわかってるけど、ほんの一手だけ読みが甘

くなってたんだろ』
巨大化
装備魔法
自分のライフポイントが相手より下の場合、
装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。
自分のライフポイントが相手より上の場合、
装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。
サイバー・ツイン・ドラゴン　守２１００→攻５６００
「さあ、行くぞ！サイバー・ツイン・ドラゴンで、フレイム・ウィングマンを攻撃！エヴォリューション・ツイン・バースト!!」
サイバー・ツイン・ドラゴン　攻５６００→　Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻２４００（破壊）
十代＆清明　ＬＰ６１００→２９００
サイバー・ツイン・ドラゴン　攻５６００→１４００
「そんな、フレイム・ウィングマンが……」
「そしてサイバー・エンド・ドラゴンで霧の王を攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト!!」

サイバー・エンド・ドラゴン　攻８０００→霧の王　攻３５００（破壊）
三つの首から同時に放たれた熱線をなんとか手にした剣で受け止めて弾き返そうとするものの、その圧倒的な勢いに霧の王が押し負かされてしまう。
「うわあっっ!!」
十代＆清明　ＬＰ１４００→０
勝てなかったか……まさかあの状況を、力技でひっくり返してくるなんてなぁ。
「負け、た……でも、カイザー」
「どうした？」
「楽しいデュエルだったぜ！」
「ああ、俺もだ。もう行くぞ、明日香」
「え、ちょっと亮！」
そう言ってすたすたと歩き去っていく亮と、その後を慌てて追いかける明日香。その後ろ姿を見つめながら、翔がそっと頭を下げた。
「翔？」
「アニキも清明君も隼人君も、心配かけてごめん。今度こそ僕も迷わない、いつかきっとパワー・ボンドを使う資格を持つぐらいのデュエリストになってみせるよ！」
『ようやく吹っ切れたか。俺の知ってる歴史とはやっぱりずれてるけど、まあ大まかな

ところはあってるしいいか。とりあえず、今は制裁デュエルに集中しますかね』
「いやー、よかったよかった翔が元気になって。ってあれ？どしたの隼人、嬉しくなさそうだけど」
「もう、寮の食堂はとっくに閉まってる時間なんだな……」
「何!?今から走って帰れば間に合うかもしれねえ、早く帰るぞみんな！」
「アニキ、ちょっと待ってくださいよー！」
「十代、置いてかないで欲しいんだな～！」
「じゃあみんな、急ごう！」
「「おう！」」

ターン9　迅雷！無限の電極骨を撃つ！

「カイザー、かぁ」
　あのデュエルから、もう一週間たった。でも、いまだに心に引っ掛かるものがあるんだよねえ。
「結局あの時も唯一ダメージ与えたのは十代のフレイム・ウィングマンだったし……ハァ」
　僕はどうだったかっていうと、手も足も出なかったからなぁ。まだまだ、ってことなんだろうか。そんなことを考えながら、たった今十代＆翔の制裁デュエルの真っ最中であろうデュエルアカデミアの方をちらりと見る。ユーノも隼人も観戦しに行っちゃったし、僕は明日に控えてるから今日一日は校舎への立ち入りが禁止されてるし。夢想は今どこにいるかわかんないし。なんでも相手の情報を事前に知るのを防ぐためらしい。ユーノ行っちゃったけど。まあいっか。
「う～ん、デッキ調整でもしよっかな」
　こう呟くのも、もう8回目くらい。何回も何回も見直して、特に問題もないことはわかりきってる。正直タッグ用の調整もした方がいいと思うんだけど、ユーノも相方もや

らなくていいって言うし、第一下手にいじくって失敗するのも馬鹿らしい、というかシャレにならない。そういえば相方と言えば、昨日はなかなか驚いたっけ。そう、あれは昨夜のこと……。

「というわけで、河風君。もともとこれはデュエルの話、デュエルで決めようじゃないか」
「望むところだよ、だってさ」
『おーやってるやってる。間に合ってよかったぜ』
「三沢ー、夢想ー、どっちも頑張れよー！」
「またアニキはそんな呑気なこと言って……僕らのテストはもう明日なんっスよ!?大丈夫なんスか？」
「翔は心配性だな。俺らなら絶対勝てるって！」
「僕のせいで……申し訳ないなー」
『ああ、お前は本気で反省してろ。山よりも高く海よりも深く反省してろ』
「うう……」
『泣きたいのはこっちだ馬鹿。とっくに決めといたんだろうと思って聞かなかった俺も

一ミクロンぐらいは悪いのかもしれんが、なんでまだこの時期になって相方一人決められてねーんだよ』
「いや、その……すいません」
『俺に謝ってどーするお前は。むしろこんな時期からでも付き合ってくれる三沢と夢想に対して謝ってこい』
ちなみに明日香はブルー寮でどうしても抜けられない晩餐会とやらがあるらしい。じゃあなんで夢想は来れたんだろうと思って聞いてみたら『逃げてきちゃった、なんだってさ♪』ってすんごいいい笑顔で言い切られた。ありがたいことはありがたいんだけど、多分あの表情を見るに単に面倒だからこっちに来た、ってのも理由の一つなんだろうなぁ。
まあそうこう僕らが言ってる間に、三沢と夢想のデュエルが始まったわけで。そういえば、三沢のデッキって何なんだろう?まだ見た覚えがないんだけど。
「まずデュエルを始める前に、今回の俺のデッキについて一言言わせてもらおうか」
「今回の?どういう意味、って聞きたいんだってさ」
「俺は常に各属性一つずつ、計6種類のデッキを携帯している……そして今回使うのはこれ、光のデッキだ!」
「三沢、どうして光なんだ?」

「このデッキは最近作ったばかりでな、一度調整もしてみたかったんだ」
「あー、なるほど」
「では、行くぞ！」
「「デュエル！」」
「先攻は私、ドロー！スカル・コンダクターを手札から捨てて、効果発動！もう一体のスカル・コンダクターに、ワイト夫人を特殊召喚するんだってさ」
指揮棒を持った顔色の悪いおっさんの亡霊が現れ、指揮棒を巧みに振りまわして二つの魔法陣を作り出す。その魔法陣からは、それぞれ違ったモンスターが現れた。ひとつはボロボロのドレスに身を包むガイコツ、もう一つは服の色がちょっと違うけど、顔もシルエットもそっくりな指揮者その２。
スカル・コンダクター
効果モンスター
星４／闇属性／アンデット族／攻２０００／守　　０
このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、
バトルフェイズ終了時にこのカードを破壊する。
また、手札からこのカードを墓地へ送る事で、
攻撃力の合計が２０００になるように

手札からアンデット族モンスターを２体まで特殊召喚する。
スカル・コンダクター　攻２０００
ワイト夫人
効果モンスター
星３／闇属性／アンデット族／攻　　０／守２２００
このカードのカード名は、墓地に存在する限り「ワイト」として扱う。
また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
「ワイト夫人」以外のフィールド上のレベル３以下の
アンデット族モンスターは戦闘では破壊されず、魔法・罠カードの効果も受けない。
ワイト夫人　守２２００
「さらに、スカル・コンダクターをリリースして龍骨鬼を召喚、だってさ」
龍骨鬼
効果モンスター
星６／闇属性／アンデット族／攻２４００／守２０００
このカードと戦闘を行ったモンスターが戦士族・魔法使い族の場合、
ダメージステップ終了時にそのモンスターを破壊する。
龍骨鬼　攻２４００

「カードを一枚セットして、ターンエンドだって」
『いきなり飛ばすねえ。こりゃ三沢も大変だ』
「でも、三沢むしろ笑ってるよ？」
『そりゃそうだろ。強い相手と戦うのは面白いもんさ、だろ？』
「まあね」
「俺のターン、ドロー！手札のサンダー・ドラゴンを捨てて効果発動、デッキにいるサンダー・ドラゴンを二枚手札に加える。そして魔法カード、融合！今手札に加えたサンダー・ドラゴン二体を融合して、双頭の雷龍を召喚！」
サンダー・ドラゴン
効果モンスター
星５／光属性／雷族／攻１６００／守１５００
自分のメインフェイズ時に、このカードを手札から捨てて発動する。
自分のデッキから「サンダー・ドラゴン」を２体まで手札に加える。
融合
通常魔法
手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた
融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体を

エクストラデッキから特殊召喚する。
双頭の雷龍
融合モンスター
星７／光属性／雷族／攻２８００／守２１００
「サンダー・ドラゴン」＋「サンダー・ドラゴン」
双頭の雷龍　攻２８００
「そして手札から、電池メン―単一型を通常召喚する」
電池メン―単一型
効果モンスター
星１／光属性／雷族／攻　　０／守１９００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、
相手は自分フィールド上に存在する「電池メン―単一型」以外の
雷族モンスターを攻撃対象に選択できない。
電池メン―単一型　守１９００
『あれ、ここで単一型？……ああなるほどね、だいたい読めた。ここで龍骨鬼を何とかする気なのか』
「さらに魔法カード、魔霧雨を発動！双頭の雷龍の攻撃力以下、つまり２８００以下の守

備力を持つモンスターをすべて破壊だ！」
双頭の雷龍が空に向かって咆哮を放つとどこからともなく霧が出てきて、龍骨鬼とワイト夫人を飲み込んでいく。そして、霧の中で数回稲妻が走るのがぼんやりと見えた。
魔霧雨
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する「デーモンの召喚」
または雷族モンスター１体を選択して発動する。
相手フィールド上に表側表示で存在する、
選択したモンスターの攻撃力以下の守備力を持つモンスターを全て破壊する。
このカードを発動するターン、バトルフェイズを行う事ができない。
「私のモンスターが……ちょっと甘く見てたかな、だってさ」
「お褒めに預かり光栄だな。残念ながら魔霧雨のデメリット効果で俺はバトルフェイズを行えない、カードを一枚伏せてターンエンドだ」
夢想　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：０　魔法・罠：１（伏せ）
三沢　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：双頭の雷龍（攻）、電池メン―単一型（守）
魔法・罠：１（伏せ）
「今のところ、三沢が押してるみたいだね」

『まあそうだな。どっちが先に動くか？』
「私のターン、ドロー！……一時休戦を発動して、カードカー・Ｄを召喚！何かある？だって」
「カードカー……いや、いいだろう。ここは通す！」
「だったら効果により、リリースして二枚ドローしてターンエンド」

一時休戦
通常魔法
お互いに自分のデッキからカードを１枚ドローする。
次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは０になる。

カードカー・Ｄ
効果モンスター
星２／地属性／機械族／攻　８００／守　４００
このカードは特殊召喚できない。
このカードが召喚に成功した自分のメインフェイズ１に
このカードをリリースして発動できる。
デッキからカードを２枚ドローし、このターンのエンドフェイズになる。
この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚できない。

「カーＤか。意外だね、ガイコツ以外のカードも入ってたんだ」
　いやまあ、当たり前の事なんだけども。
「問題ないんだ、って言ってるよ。カー・ＤのＤはドクロのＤだもん！だってさ」
「え、マジなのそれ？」
『んなわけねえだろ』
「あ、やっぱり」
「待った、エンドフェイズにトラップ発動だ。サンダー・ブレイクでそのセットカードを破壊する！」
　サンダー・ブレイク
　通常罠
　手札を１枚捨て、フィールド上のカード１枚を選択して発動できる。
　選択したカードを破壊する。
「あっ、私のミラーフォースが！……改めてターンエンド、だってさ」
『やっぱミラーフォースか。相変わらず働かない奴だな』
「俺のターン、ドロー！カードを二枚セットしてターンエンドだ」
　夢想　ＬＰ４０００　手札：２　モンスター：０　魔法・罠：０
　三沢　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：双頭の雷龍（攻）、電池メン―単一型（守）

魔法・罠：2（伏せ）
「私のターン、ドロー！カップ・オブ・エースを発動……お願い、コイン！表、出てきて！」
そう言いながら天高く打ち上げられたコインはくるくると回転しながら落ちてきて、夢想の手の甲の上に。出たのは……表！
カップ・オブ・エース
通常魔法
コイントスを1回行う。
表が出た場合、自分はデッキからカードを2枚ドローする。
裏が出た場合、相手はデッキからカードを2枚ドローする。
「それじゃ遠慮なく、二枚ドローするんだって。それからモンスターを一体セットして、魔法カード発動、強制転移！私はこのセットモンスターを選択するけど、あなたは？」
「何？……いいだろう、俺は電池メン―単一型を選択する」
強制転移
通常魔法
お互いはそれぞれ自分フィールド上のモンスター1体を選び、そのモンスターのコントロールを入れ替える。

そのモンスターはこのターン表示形式を変更できない。
「なら私は、二重召喚を発動してマッド・デーモンを召喚。セットモンスターに攻撃、ボーン・スプラッシュ！」
二重召喚
通常魔法
このターン自分は通常召喚を２回まで行う事ができる。
マッド・デーモン
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／攻１８００／守　　０
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、
このカードの表示形式を守備表示にする。
声を受けたおどろおどろしい悪魔が自分の腹にある頭蓋骨をかみ砕き、それをセットモンスターめがけて吹き付けた。そしてあっさり破壊されるセットモンスター。だが、なぜか破壊された後に三つの骨が夢想のフィールドに飛び込んできて、そのままモンス

ターゾーンに居座ってしまった。
マッド・デーモン　攻１８００→???（破壊）
三沢　ＬＰ４０００→２５００
「まさか、今のカードは！」
『なるほど、そういうことかっ！』
三沢もユーノも何か気づいたみたいだけど、誰か僕にも今何が起こったのか教えてください。
『よーするにだな、あのセットモンスターはチュウボーンで……』
「なるほど、見事だ河風君。チュウボーンのデメリットとしての色合いが強い効果を逆手に取り、自分フィールドにトークンを出したか」
『さらにステータスの低いチュウボーンを貫通もちで、しかも双頭の雷龍からの反撃もノーダメージで受け流せるマッド・デーモンでの攻撃。こいつは面白くなってきたな』
チュウボーン
効果モンスター
星３／地属性／アンデット族／攻　３００／守　３００
リバース：相手フィールド上に「チュウボーンＪｒ．トークン」
（アンデット族・地・星１・攻１００／守３００）３体を守備表示で特殊召喚する。

チュウボーンＪｒ．トークン×３　守３００
「私は、これでターンエンド」
「ならば俺のターン、ドロー！」
「さっきのターンで一気に巻き返してきたよね」
『ああ、このターンは一体何が起きるかねぇ』
「マジックカード、死者蘇生を発動！俺の墓地から、さっきのサンダー・ブレイクで捨てた電池メン―単三型を特殊召喚する。更にリバースカードオープン、地獄の暴走召喚を発動！俺は単三型を選択して、デッキからもう二体を特殊召喚する」
「私は、何もできないね。チュウボーンＪｒはトークンだし、マッド・デーモンも一枚しか入ってない。単一型だって、そもそも私のデッキに入ってないもん。ほら、デュエルディスクも異常なしって言ってるよ？」
そう言って掲げた腕のデュエルディスクを見れば、確かに不正なしを示している。
死者蘇生
通常魔法（制限カード）
自分または相手の墓地のモンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。
電池メン―単三型

効果モンスター
星３／光属性／雷族／攻　　０／守　　０
自分フィールド上の「電池メン―単三型」が全て攻撃表示だった場合、
「電池メン―単三型」１体につきこのカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
自分フィールド上の「電池メン―単三型」が全て守備表示だった場合、
「電池メン―単三型」１体につきこのカードの守備力は１０００ポイントアップする。
地獄の暴走召喚
速攻魔法
相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に
攻撃力１５００以下のモンスター１体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。
その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から
全て攻撃表示で特殊召喚する。
相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、
そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。
電池メン―単三型×３　攻３０００

「バトル、俺のモンスターは返してもらうぞ！一体目の単三型で、単一型を攻撃！バッテリースパーク・３！」
電池メン―単三型　攻３０００→電池メン―単一型　守１９００（破壊）
「そしてトラップカード、奇跡の軌跡を発動！今攻撃を行った単三型を対象にする！」
「……一枚ドロー、だってさ」
奇跡の軌跡
通常罠
自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
相手はデッキからカードを１枚ドローする。
このターンのエンドフェイズ時まで、
選択したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップし、
１度のバトルフェイズ中に２回までモンスターに攻撃する事ができる。
そのモンスターが戦闘を行う場合、
相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは０になる。
電池メン―単三型　攻３０００→４０００
「もう一度攻撃だ、単三型！マッド・デーモンに、バッテリースパーク・３―２！」
「でもマッド・デーモンの効果で、デーモンは守備表示になるよ」

マッド・デーモン　攻１８００→守０
電池メン―単三型　攻４０００→マッド・デーモン　守０（破壊）
「二本目の電池メン―単三型で、チュウボーンＪｒ．トークンを攻撃！バッテリースパーク・３―３！」
電池メン―単三型　攻３０００→チュウボーンＪｒ．トークン　守３００（破壊）
「続いて三本目！バッテリースパーク・３―４！」
電池メン―単三型　攻３０００→チュウボーンＪｒ．トークン　守３００（破壊）
「双頭の雷龍も、チュウボーンＪｒ．トークンを攻撃！」
双頭の雷龍　攻２８００→　チュウボーンＪｒ．トークン　守３００（破壊）
「ダメージは無いが、まあしょうがない。ターンエンドだ」
夢想　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：０　魔法・罠：０
三沢　ＬＰ２５００　手札：０　モンスター：双頭の雷龍（攻）、電池メン―単三型（攻）、電池メン―単三型（攻）、電池メン―単三型（攻）　魔法・罠：０
「私のターン、ドローして……来た！これが私の、無敵の切り札！ワイトキングを召喚！」
「何!?」
「え、ここでワイトキング!?」

『一体何しようとしてるんだ？ま、何かしら考えてるんだろうけど』
低攻撃力とは思えないほど圧倒的なカリスマと威圧感をたたえたガイコツの王が、大地を割って地の底から現れる。でも、今墓地にいるのはワイト夫人一枚だけ……！
ワイトキング
効果モンスター
星１／闇属性／アンデット族／攻　　？／守　　０
このカードの元々の攻撃力は、自分の墓地に存在する「ワイトキング」
「ワイト」の数×１０００ポイントの数値になる。
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
自分の墓地の「ワイトキング」または「ワイト」１体を
ゲームから除外する事で、このカードを特殊召喚する。
ワイトキング　攻０→１０００
「カードを一枚セットして、ターンエンドなんだって」
「一体何を……いや、考えても仕方ないか。ドロー！カードを一枚セットする」
「それで、どうするの？私のエースに攻撃するの？だってさ」
「くっ、俺は……」
『いい心理フェイズだな。さあどうする三沢』

「……俺は、攻撃をする！行け、単三型！バッテリースパーク・３！」
「トラップ発動、針虫の巣窟！私のデッキの上から、カードを５枚墓地に！」
針虫の巣窟
通常罠
自分のデッキの上からカードを５枚墓地へ送る。
「なるほど、デッキの上に何枚ワイトがいるかにすべてを賭けたわけか」
「一枚目、ワイト！二枚目、ワイト！三枚目、守護神の鉾！四枚目、ワイトメア！５枚目、ワイトキング！このカードを全部墓地に送ることで、ワイトキングの攻撃力を上げるよっ！」
「『何いっ!!?』」
『……もう笑うしかねえな。ごしゅーしょー様、三沢。いや待てよ、むしろあと一枚ワイトが来なかっただけアイツ運いいのか？』
ワイト
通常モンスター
星１／闇属性／アンデット族／攻　３００／守　２００
どこにでも出てくるガイコツのおばけ。攻撃は弱いが集まると大変。
ワイトメア

効果モンスター
星１／闇属性／アンデット族／攻　３００／守　２００
このカードのカード名は、墓地に存在する限り「ワイト」として扱う。
また、このカードを手札から捨てて以下の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●ゲームから除外されている自分の「ワイト」または「ワイトメア」１体を選択して自分の墓地に戻す。
●ゲームから除外されている自分の「ワイト夫人」または「ワイトキング」１体を選択してフィールド上に特殊召喚する。
守護神の鉾
装備魔法
装備モンスターの攻撃力は、お互いの墓地に存在する装備モンスターと同名のカードの数×９００ポイントアップする。

ワイトキング　攻１０００↓５０００
電池メン―単三型　攻３０００（破壊）↓ワイトキング　攻５０００
三沢　ＬＰ２５００↓５００

電池メン―単三型×２　攻３０００→２０００

「すまない、単三型……だが勝負はまだまだこれからだっ！俺はあきらめたりしない、全てのモンスターを守備表示にしてターンエンド」

電池メン―単三型×２　攻２０００→守２０００

双頭の雷龍　攻２８００→守２１００

夢想　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：ワイトキング（攻）　魔法・罠：０

三沢　ＬＰ５００　手札：０　モンスター：双頭の雷龍（守）、電池メン―単三型（守）、電池メン―単三型（守）　魔法・罠：１（伏せ）

「私のターン、ドロー。ジャイアント・オークを召喚して、単三型を攻撃するんだって」

ジャイアント・オーク

効果モンスター

星４／闇属性／悪魔族／攻２２００／守　　０

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

次の自分のターン終了時までこのカードの表示形式は変更できない。

ぶっとい骨を握ったガチムチ系オークが、その骨を軽く振り回してから器用にブーメランよろしく投げつけた。見かけによらず器用なのね。そう思いながら見ていると、自分のところに帰ってきた骨を掴み損ねて転んで頭を打った。よって前言撤回。

ジャイアント・オーク　攻２２００→電池メン―単三型　守２０００（破壊）
ジャイアント・オーク　攻２２００→守０
電池メン―単三型　守２０００→１０００
「それからワイトキングも、双頭の雷龍に攻撃して！」
ワイトキング　攻５０００→双頭の雷龍　守２１００（破壊）
「これでターンエンド、だってさ」
「俺のターン、ドロー！よし、やはり俺のデッキは間違っていない！墓地の電池メン―単三型を二本除外して、手札から電池メン―業務用を特殊召喚！」
もはや冷蔵庫並みのサイズになった馬鹿でかい電池が、ちょっと放電してる赤青二本のコードを振り回しながらなぜか空から降ってくる。よっぽど重いらしく、かなりの砂埃が立ち上がった。そして砂埃越しでも目立つ、ロボットのように光る両目。
電池メン―業務用
効果モンスター
星８／光属性／雷族／攻２６００／守　　０
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の「電池メン」と名のついたモンスター２体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚できる。

１ターンに１度、自分の墓地の雷族モンスター１体をゲームから除外して発動できる。
フィールド上のモンスター１体と魔法・罠カード１枚を選択して破壊する。
電池メン―業務用　攻２６００
「そして効果発動！俺の墓地の電池メン―単一型を除外して、ワイトキング及び俺のセットカードを破壊する！」
「そんな、ワイトキング！」
『ま、ワイトキングの復活は戦闘破壊限定だからな。ただ、思い切ったな三沢。そいつはずいぶんと分の悪い賭けだぞ？』
「え、なんで？おかしなところでもあったっけ？」
『いや、あながちミスとも言い切れねえんだがな。まあ結局のところ、全部は夢想次第だな』
「そして俺の破壊したカード、呪われた棺の効果発動だ！もっとも君の手札は０枚、ジャイアント・オークを破壊することになるんだがな」
呪われた棺
通常罠
セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

相手は以下の効果から１つを選択して適用する。
●自分の手札をランダムに１枚捨てる。
●自分フィールド上に存在するモンスター１体を破壊する。
「うぅ……ジャイアント・オークを破壊、だって」
「今だ、業務用！単三型は守備表示のまま、ダイレクトアタック！バッテリースパーク・インダストリー！」
電池メン―業務用　攻２６００↓夢想　ＬＰ４０００（直接攻撃）
夢想　ＬＰ４０００↓１４００
「俺はこれでターンを終了する」
夢想　ＬＰ１４００　手札：０　モンスター：０　魔法・罠：０
三沢　ＬＰ５００　手札：０　モンスター：電池メン―業務用（攻）、電池メン―単三型（守）　魔法・罠：０
『はたして今のバトル、単三型で攻撃しなかったのが吉と出るか凶と出るかね』
「……カードを一枚セットしてターンエンド、だって」
「俺のターン、ドロー！……業務用、そのままダイレクトアタック！バッテリースパーク・インダストリー！」
「まだ私も負けないよ！トラップ発動、闇よりの罠！」

「闇よりの罠だと!?だが、君が使ったトラップは針虫の巣窟くらいしか……はっ！」
「トラップ……トラップ……あー、思い出した！」
『サンダー・ブレークで破壊されたアレ、だな。まったく、仕事しないかと思ったら最後にオイシイとこ持ってきやがって』
「１０００のライフを払って、墓地のミラーフォースの効果をコピー!!」

闇よりの罠
通常罠
自分が３０００ライフポイント以下の時、
１０００ライフポイントを払う事で発動する。
自分の墓地に存在する通常罠カード１枚を選択する。
このカードの効果は、その通常罠カードの効果と同じになる。
その後、選択した通常罠カードをゲームから除外する。

夢想　ＬＰ１４００→４００
聖なるバリア―ミラーフォース―
通常罠（準制限カード）
相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。
相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「くっ、確かに予想外だったが、まだまだ勝負はこれからだ！」
夢想　ＬＰ４００　手札：０　モンスター：０　魔法・罠：０
三沢　ＬＰ５００　手札：０　モンスター：電池メン―単三型（守）　魔法・罠：１（伏せ）
「確かにそうだね、だってさ。私がこのドローで勝利の一手を掴まないと……ドロー！」
『さあて、何を引いた？』
「貪欲な壺、発動するよ。墓地のマッド・デーモン、ジャイアント・オーク、龍骨鬼、スカル・コンダクター、カードカー・Ｄをデッキに戻して２枚ドロー……そしてランサー・デーモンを召喚するよ」
『まーた壺か』
貪欲な壺
通常魔法（制限カード）
自分の墓地のモンスター５体を選択して発動できる。
選択したモンスター５体をデッキに加えてシャッフルする。
その後、デッキからカードを２枚ドローする。
ランサー・デーモン

効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／攻１６００／守１４００
相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを
攻撃対象とした自分のモンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
そのモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。
ランサー・デーモン　攻１６００
「ならそ攻撃する前に、こちらのトラップを通してもらおう！ライフを半分払い異次元からの帰還だ、電池メン―単三型を二本、単一型を一本守備表示で特殊召喚する！ここでこのターンを耐えきって、次のドローで【エレキ】のモンスター、ダイレクトアタッカーを引くことさえできれば直接攻撃で……!!」
異次元からの帰還
通常罠（制限カード）
ライフポイントを半分払って発動できる。
ゲームから除外されている自分のモンスターを

可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時にゲームから除外される。
電池メン―単三型×３　守３０００
電池メン―単一型　守１９００
三沢　ＬＰ５００→２５０
「ならこっちはマジックカード、生者の書―禁断の呪術―を発動！あなたの業務用を除外、私のワイトキングを復活させるんだって」
「馬鹿な、俺の計算の上を行くというのか!?」
生者の書―禁断の呪術―
通常魔法
自分の墓地に存在するアンデット族モンスター１体を選択して特殊召喚し、相手の墓地に存在するモンスター１体を選択してゲームから除外する。
ワイトキング　攻５０００
「ワイトキングで単三型に攻撃、さらにランサー・デーモンの効果発動！ワイトキングに貫通能力を！後はお願い、ワイトキング！」
「俺の負け、か……」
ワイトキング　攻５０００→電池メン―単一型　守１９００（破壊）

三沢　ＬＰ２５０→０

「おめでとう、夢想！それと残念だったね、三沢」

「残念？何を言ってるんだ。勝てなかったのは確かに悔しいが、これもお前のためじゃないか」

「え？どゆこと？」

『いや、え？って何言ってんだお前は』

「よろしくね、清明。明後日は一緒に勝とうね、だってさ」

「明後日……っ!!」

『忘れてたのか。……馬鹿』

「あ、ああ、うん、こっちこそよろしくね、夢想。そ、それじゃデッキ調整でもしようか！ね、ほらほら行こっ！」

「え、ええ」

「じゃあ俺はイエロー寮に帰るぞ。このデッキもまだまだ課題がある」

「うん、三沢もありがとー！」

「あー、なんか思い出したら色々吹っ切れたし、デュエルしたくなってきたな。早く帰っ

てこないかな～」

そうぼやきながら窓の外を見ると、いつの間にか夕方になっていた。もうそろそろ、皆が帰ってくるころだろうか。

一方そのころ、レッド寮へと向かう道では。十代、翔、三沢、隼人、俺のメンバーが先勝報告を一人寂しく寮の中にいるであろう清明にするため帰り道を歩いていた。

「いやー、何とか勝てたな、翔！」

「はい、よかったッス～！」

「おいおい、何も泣くことないじゃないかよ」

「だってアニキ、僕もう嬉しくて！」

正直、ここで聞くのも無粋だとは思う。でもやっぱり気になるし、もし俺の思っている通りの理由なら間違っても清明に聞かせるわけにはいかん、とすると今しかチャンスはない。

『……水差して悪いが、ちょっといいか十代。昨日からずっと気になってることがあるんだが、俺の代わりに三沢に聞いてくれねえか？』
「ああ、いいぜ。なあ、三沢」
「ああ、どうした十代？」
『昨日のデュエルだが、最後のところで業務用の効果を使えばお前が勝ってたんじゃないのか？単三型と闇よりの罠を破壊して。お前に限って気づかないなんてことはないだろ』
「ホントだ……！三沢、どうしてお前、昨日のデュエルではわざと負けたんだ？」
「おいおい、一体何のことだ？俺がわざと負けるとでも？」
『三沢、教えてくれ』
「なあ三沢、教えてくれよ」
　一度はとぼけた三沢もさすがに誤魔化しきれないことを悟ったのか、諦めたように口を開いた。
「おいおい、それを俺の口から言えと？恥ずかしいじゃないか」
「恥ずかしい？ああなるほど、そういうことっスね」
『やっぱり、な』
「え、どういうことだよ、わかんねえ！」

そう言って頭を抱える十代に、やれやれといった感じの三沢が説明をする。
「いいか、十代」

部屋の机にデッキのカード、全５９枚を並べて特に何をするでもなくそれを見ていると、ドアがノックされる音がした。多分十代達が帰ってきたんだろう。
「おかえり、ドアは開いてるよー。どうだった？」
「じゃあお邪魔するよ、だってさ」
予想に反して返ってきた返事は、明日一緒にタッグを組むパートナーのもの。一瞬返事に詰まった間に部屋の中に上り込んできて、ナチュラルに僕のすぐ隣に座る。多分今、僕の顔はかなり赤いだろう。心臓もバクバクいってるし。え、何コレ。もしかして今あれですか、二人っきりってヤツですか!?
「じゃあ明日の作戦でもたてようか、なんだって」
「う、うん！明日もよろしく！」

「あの二人の邪魔をするなんて、無粋以外のなんでもないじゃないか。なあ？」

ターン１０　激突!襲い来る門番の魔手!

昨日寝て朝起きたら日付が一つ進んでました。

『……何を言っとるんだお前は』

「いやほらだってアレじゃん、個人的にはもう昨日の時点で今日という日が来なくても別に文句なかったんだよ?やだよ退学とか」

『もう負け試合前提かい。いーから起きた起きた、さっさと着替えてメシ食って来い』

ぶつくさ言いながら体を起こし、布団をはねのけてベッドから降りる。とはいえ、別に僕だって本気で言ってるわけじゃない。一つの冗談、軽口のようなもの。……半分はね!まあそれはそれとして今は、メザシと白米と味噌汁とたくあんでも食べに行こう。

「お、起きてきたか」

「おはようッス、清明君」

「おはようなんだな、清明」

「うん、おはよー」

もう食事中だったいつもの三人に軽く挨拶して席に着くと、後ろから声をかけられた。

「おはようなんだニャ、清明君。今日は先生も見に行くから、頑張って欲しいのニャ」

「びっくりさせないでくださいよ先生……でも、頑張りますよ。そういや先生、今日の相手って一体誰なんですか？」

「申し訳ないですが、それはまだ教えるわけにはいけないのニャ。クロノス先生から釘を刺されているのニャ」

む、またクロノス先生か……あの人ホントにレッド嫌いだなあ。まあ、どんなところにも一人くらいは合わない人っているもんだよね。

「よし、それじゃあ行こうか。大丈夫？緊張してない？だってさ」

「うん、こっちはへーき。でもさ」

「どうかしたの？だって」

所変わってデュエルちょっと前の控え室。ついさっきまで応援にいろんな知り合いが来てくれてたけど、今は僕ら以外誰もいない。もう出番まで１０分もないからのんびり駄弁ってる暇はないんだけど、どうしても先に一言だけ、彼女には言っておきたいことがあった。

「……今更だけどさ。ごめん夢想、わざわざこんなことに付きあわせて」
今更この話題を持ち出したところで意味がないのはわかってる。第一お礼だったら昨日のうちに何回も繰り返したし。でも、しつこいって思われてるかもしれないけど、こっちのけじめとしてもう一回だけ言っておきたかったんだよね。空気読んで部屋の外で待機してるユーノには感謝してます。
「ううん、大丈夫だよ。全然気にしないで、だってさ」
ちょっと笑いながらこっちを振り向き、安心させるように返事を返す夢想の姿は、なんだか僕には眩しく感じられて。
「う、うん……」
まともに目を合わすこともできずに赤くなった顔を伏せて、ちょっぴり気弱な返事を返すことしかできなかった。情けないよね、自分から話振っといて。
「あ、そろそろ時間だ。行こ?だって」
「そう、だね……ありがとう」
こんな所でも気を遣わせちゃったんだろうか。でもおかげで、いいタイミングで気持ちを切り替えることができた。今回のデュエルは人生懸かってるんだ、メンタルが弱くっちゃ話にならない。だから今は、これでいい……んだろう、多分。

「それでは、準備はよろしいのーネ？」
「僕はいつでも！」
「私もいいよ、だってさ」
「ドロップアウトボーイ、あなたには聞いてないのーネ！」
「……あ、さいですか」
「私もいいぞ」
「こちらもだ」
　最後の二つは僕らの対戦相手、迷宮兄弟のもの。あのデュエルキング武藤遊戯と、その最高の友たる凄腕ギャンブルデュエリスト城乃内克也のコンビを苦戦させたというその実力……まあ並みのものではないんだろう。でなきゃわざわざ呼び出すとは思えない。そんなことを考えながら悶々としていると、あちらの方から挨拶をしてきた。
「遊野清明、といったか。本日はよろしく頼む」
「あ、はい」
「われわれとしてもお前個人に恨みはないがこれも仕事のうち、すまないが全力で行かせてもらう」
「……ええ、こちらこそよろしくお願いします」
　なんだろう、第一印象は絶対関わり合いになりたくない感じだったのに。なんか思っ

たよりいい人だった。手加減なんてできないし、できたとしてもする気はないけど。
「それでは、ルールを確認しますーノ。フィールド及び墓地は共有、ライフポイントは共同で４０００。以上ですーノ!それでは、デュエル開始ナノーネ!」
「「「デュエル!!!」」」
　デュエルディスクのランダム機能が示した先攻は……僕だ!
「僕のターン、ドローー!」
『よし、このカードだ。何が来ても対応できるようにしとけよ』
「わかってるって!フィールド魔法、伝説の都　アトランティスを発動!さらに氷弾使いレイスを守備表示で召喚、カードを一枚伏せてターンエンド」
　氷弾使いレイス　守８００→１０００　攻８００→１０００　☆２→１
　フィールドが水属性モンスターのレベルを１下げる、海底に沈んだ都に変わる。そしてそこにレベル４以上とのモンスター相手の戦闘では破壊されない安定の壁役、レイスが陣取る。更にセットカードもあるから守りはだいぶ固まったはずだけど……さあ、一体どんな手を使ってくるかな?
「私のターン、ドロー」
　次のターンプレイヤーは、迷の字がある兄の方らしい。正直頭の文字がなかったら全然見分け付かないけど、言ったら怒られそうだからやめとこう。

「相手の場にモンスターが存在して自分の場に存在しない時、バイス・ドラゴンは攻守を半分にして特殊召喚できる！」
『今だ、モンスター効果発動！』
「うん！バイス・ドラゴンの特殊召喚により、手札のドラゴン・アイスを捨ててそのまま墓地から特殊召喚！」
バイス・ドラゴン　攻２０００→１０００　守２４００→１２００
ドラゴン・アイス
効果モンスター
星５／水属性／ドラゴン族／攻１８００／守２２００
相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、
自分の手札を１枚捨てる事で、このカードを手札または墓地から特殊召喚する。
「ドラゴン・アイス」はフィールド上に１枚しか表側表示で存在できない。
ドラゴン・アイス　守２２００→２４００　攻１８００→２０００　☆５→４
「くっ、さらに壁が増えたか……まあいい、バイス・ドラゴンをリリースしてアトランティスの効果でレベルが１下がった水魔神―スーガを召喚！」
「しまった、アトランティスのせいで！」
水の文字が書かれた青い魔神が、激流の中から顔を覗かせる。

水魔神―スーガ
効果モンスター
星７／水属性／水族／攻２５００／守２４００
このカードが相手のターンで攻撃された場合、
そのダメージ計算時に発動する事ができる。
その攻撃モンスター１体の攻撃力を０にする。
この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り１度しか使用できない。
水魔神―スーガ　攻２５００→２７００　守２４００→２６００　☆７→６
「そしてフィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動!アトランティスを上書きする!」
みるみるうちに海の水が干上がっていき、残った遺跡も地面から生えてきた巨大な陵墓に塗り替えられてしまう。毎回思うけど、フィールド魔法のソリッドビジョンって妙に気合入ってるよね。
死皇帝の陵墓
フィールド魔法
お互いのプレイヤーは、アドバンス召喚に必要な
モンスターの数×１０００ライフポイントを払う事で、

リリースなしでそのモンスターを通常召喚できる。
氷弾使いレイス　守１０００→８００　攻１０００→８００　☆１→２
ドラゴン・アイス　守２４００→２２００　攻２０００→１８００　☆４→５
水魔神―スーガ　攻２７００→２５００　守２６００→２４００　☆６→７
「そして魔法カード、二重召喚を発動……このカードで私はもう一回の通常召喚が可能となる。そして陵墓の効果により、２０００のライフを払うことで陵墓のはにわを使い、手札の風魔神―ヒューガを召喚！」
いきなりフィールドに竜巻が巻き起こり、その風の中から現れる風の字を持つ緑の魔神。これで……
『これで、二体目か』
「だ、大丈夫かな？」
『お前の相方を信じてやれ。こっちができることはこのセットカードぐらいしか特にないんだ』
風魔神―ヒューガ
効果モンスター
星７／風属性／魔法使い族／攻２４００／守２２００
このカードが相手のターンで攻撃された場合、

そのダメージ計算時に発動する事ができる。
その攻撃モンスター1体の攻撃力を0にする。
この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。
迷宮兄弟　ＬＰ４０００→２０００
風魔神―ヒューガ　攻２４００
「そして、ヒューガでドラゴン・アイスを攻撃!魔風衝撃波!」
風魔神―ヒューガ　攻２４００→ドラゴン・アイス　守２２００（破壊）
「くっ……!」
「他にすることはない。カードを一枚セットして、ターンエンドだ」
清明&夢想　ＬＰ４０００　手札：清明×2、夢想×５　モンスター：氷弾使いレイス（守）　魔法・罠：1（伏せ）
迷宮兄弟　ＬＰ２０００　手札:兄×０、弟×５　モンスター:水魔神―スーガ（攻）、風魔神―ヒューガ（攻）　魔法・罠：1（伏せ）　場：死皇帝の陵墓
「私のターン、ドローだね。氷弾使いレイスをリリースして、龍骨鬼をアドバンス召喚!」

龍骨鬼　攻２４００
「龍骨鬼で、風魔神―ヒューガを攻撃！」
「相打ち狙いだと!?だが無駄だ、ヒューガの効果発動！龍骨鬼の攻撃力を０にする、リフレクト・ストーム・バリケード！」
「……計画通り、だってさ」
「何?!」
龍骨鬼　攻２４００→０
龍骨鬼　攻０（破壊）→風魔神―ヒューガ　攻２４００
清明＆夢想　ＬＰ４０００→１６００
「教えてあげる、なんで私が死皇帝の陵墓の効果を使わずに龍骨鬼を出したのか。龍骨鬼の効果によって、戦闘を行った魔法使い族……つまりヒューガを破壊するよ！」
「なんだと!?」
「そうか、アドバンスで龍骨鬼を出せばライフの差は４００で済むけど陵墓の効果を使えば１４００、その差を嫌ったから」
『はいはい説明お疲れさん』
龍骨鬼の投げつけた骨はヒューガの息によって弾かれ龍骨鬼に突き刺さってしまうが、その直後に口から火の玉を吐き出してヒューガを火だるまにする。２体のモンス

ターが倒れるのは、ほぼ同時だった。
「カードを三枚セットして、ターンエンドだってさ」
「私のターン、ドローだ!」
　次のターンプレイヤーは宮の字が書かれた弟の方。兄の方が一ターンで三魔神のうち2体を出してくるタクティクスの持ち主だから、多分こっちも同じくらい強いんだろう。
「魔法カード、死者蘇生を発動!対象はもちろん風魔神―ヒューガだ」
『まさか、このターン中に奴を出す気か!?まあ、原作考えりゃありえん話でもないか』
　再び巻き起こる竜巻から姿を見せる緑の魔神。また帰ってきちゃったか……。
　風魔神―ヒューガ　攻２４００
「そしてメインフェイズ、手札からマツボックル一体を捨てることにより、コロボックリを特殊召喚する。さらにマツボックルがコロボックリの効果で捨てられたため、マツボックルも特殊召喚だ」
　コロボックリ　攻２００
　マツボックル　攻４００
『来るぞ!』
「そして私は、この二体をリリースすることで手札の雷魔神―サンガを召喚する!」

どこからともなく数本の稲妻が飛んできて、その落下地点にそびえ立つ雷の名を持った魔神シリーズ最後の一体。まさかこんな早くに出してくるなんて！

雷魔神―サンガ

効果モンスター

星７／光属性／雷族／攻２６００／守２２００

このカードが相手のターンで攻撃された場合、

そのダメージ計算時に発動する事ができる。

その攻撃モンスター１体の攻撃力を０にする。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り１度しか使用できない。

「……っ、ならここで私のトラップを発動！サンガの攻撃力は１５００以上、奈落の落とし穴で破壊からの除外だってさ！」

「甘い！速攻魔法、収縮を発動！サンガの攻撃力を元々の攻撃力の半分……つまり１３００にすることで、奈落の対象範囲外にする！」

「そんな、夢想のトラップがかわされた!?」

『カウンターの一つや二つでわめくな！落ち着いて深呼吸して、もう一回周りの状況を見ろ！お前の伏せたリバースは一体何のためにあるってんだ！』

「そうか、僕の伏せたカードはメタル・リフレクト・スライム……あの三体じゃ、越えられない守備力だ」
『ああ。ふつうこんな状況なら、合体せずにバトルフェイズにいくはずだ。その方が確実だしな。だからこのターンは耐え切れる……はずだ』
メタル・リフレクト・スライム
永続罠
このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星１０・攻０／守３０００）となり、
自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。
このカードは攻撃する事ができない。（このカードは罠カードとしても扱う）
「ふっ……俺は、フィールド上にいる三魔神をリリースする!出でよ、ゲート・ガーディアン!」
『何ぃ!?』
「う、うそつきー!!」
三体の魔神が上下に積み重なり、最強の門番たる巨人が誕生する。いいかそこ、乗っただけとか言うなよ!絶対に言うなよ!!
ゲート・ガーディアン

効果モンスター
星１１／闇属性／戦士族／攻３７５０／守３４００
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に存在する「雷魔神―サンガ」「風魔神―ヒューガ」
「水魔神―スーガ」をそれぞれ1体ずつリリースした場合に特殊召喚する事ができる。
ゲート・ガーディアン　攻３７５０
「う、嘘でしょ……？」
『まだだ！墓地からドラゴン・アイスの効果発動！』
「そっか！手札のハリマンボウを捨てて、墓地のドラゴン・アイスを特殊召喚！さらにハリマンボウの効果で、ゲート・ガーディアンの攻撃力を下げる!!」
ハリマンボウ
効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻１５００／守　１００
このカードが墓地へ送られた時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。
ドラゴン・アイス　守２２００

ゲート・ガーディアン　攻３７５０→３２５０
「ゆけ、ゲート・ガーディアンでドラゴン・アイスに攻撃だ!」
「夢想、僕のカードを!」
「ごめんね清明、トラップ発動!メタル・リフレクト・スライム!」
「む?守備力３０００か。だがゲート・ガーディアンの敵ではないわ!ゲート・デストラクション!!」
メタル・リフレクト・スライム　守３０００
ゲート・ガーディアン　攻３２５０→メタル・リフレクト・スライム　守３０００（破壊）
「いいだろう、私はこれでターンエンドだ」
「待って、エンドフェイズにトラップカード発動、針虫の巣窟!自分のデッキの上からカードを５枚墓地に送るんだってさ」
今落ちたカードはワイトが二枚にワイト夫人が一枚、永続魔法のつまづきにタスケルトンか。相変わらずいい落ちしてるなぁ。
清明&夢想　ＬＰ１６００　手札：清明×１、夢想×２　モンスター：ドラゴン・アイス（守）　魔法・罠：１（伏せ）
迷宮兄弟　ＬＰ２０００　手札：兄×０、弟×０　モンスター：ゲート・ガーディア

ン（攻）　魔法・罠：１（伏せ）　場：死皇帝の陵墓

場：死皇帝の陵墓

「僕のターン、ドロー！……クッ！」

『まだだ！諦めたらそこで試合終了なんだよ！だからお前は、そのカードをセットするんだ！』

「……カードを一枚セット、ターンエンド」

「私のターン！カードを一枚セットしてドラゴン・アイスに攻撃！ゲート・デストラクション！」

「夢想が墓地に送ったタスケルトンの効果発動！除外して、その攻撃を無効に！」

ゲート・ガーディアンの拳の前に一匹の子豚が立ちふさがり、体を風船のように膨らませて攻撃をなんとか弾いてくれた。

タスケルトン

効果モンスター

星２／闇属性／アンデット族／攻　７００／守　６００

モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、

墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

そのモンスターの攻撃を無効にする。

この効果は相手ターンでも発動できる。
「タスケルトン」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。
「ちっ、まあいい。私はターンエンドだ」
清明&夢想　ＬＰ１６００　手札：清明×1、夢想×２　モンスター：ドラゴン・アイス（守）　魔法・罠：２（伏せ）
迷宮兄弟　ＬＰ２０００　手札：兄×０、弟×０　モンスター：ゲート・ガーディアン（攻）　魔法・罠：２（伏せ）　場：死皇帝の陵墓
場：死皇帝の陵墓
「私のターン、ドロー!魔法カード、暗黒界の取引を発動!全員カードを一枚ドローして、そのあと手札を一枚捨てるんだって。さらに魔法カード、おろかな埋葬を発動!デッキにいるモンスター一体を墓地に……この効果で私は、ワイトを墓地に送るんだってさ」
『ぼちぼちワイトがたまってきたな……まあタイミング的にもそろそろだろうな』
「だね」
「もう準備は整ったかな?これが私の、無敵の切り札!ワイトキング、召喚!」
ワイトキング
効果モンスター

星1／闇属性／アンデット族／攻　　？／守　　0
このカードの元々の攻撃力は、自分の墓地に存在する「ワイトキング」
「ワイト」の数×１０００ポイントの数値になる。
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
自分の墓地の「ワイトキング」または「ワイト」1体を
ゲームから除外する事で、このカードを特殊召喚する。
「今の私の墓地には針虫の巣窟で送ったワイトモンスターが三体、暗黒界の取引で送ったぶんが一体、おろかな埋葬で送ったぶんが一体……攻撃力は、５０００になるんだってさ」
「レベル1で攻撃力５０００のモンスターだと!?」
『うし、やっぱ期待を裏切らねえな』
ワイトキング　攻0→５０００
「ワイトキング、お願い！トワイライトダンシング！」
「よし、これで大ダメージを！」
『……いや、まだまだっぽいな』
「え？」
「まだまだ勝負はこれからだ！我らは負けぬ、決して負けぬ！この瞬間、トラップカード

を二枚発動だ!一枚目、攻撃の無敵化!この一つ目の効果により、ゲート・ガーディアンは破壊されない!」

ゲート・ガーディアンの巨大な拳とワイトキングの拳が激突する直前、不思議なオーラがゲート・ガーディアンの全身を包み込んだ。そして次の瞬間、両方のパンチのあまりの威力に衝撃波が巻き起こる。

攻撃の無敵化

通常罠

バトルフェイズ時にのみ、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターはこのバトルフェイズ中、

戦闘及びカードの効果では破壊されない。

●このバトルフェイズ中、自分への戦闘ダメージは0になる。

「でも、そのカードならダメージは受ける!やっぱり大ダメージだ!」

「ふっ、聞いていなかったのか?私はトラップを『二枚』発動するといったんだぞ?」

「じゃあ、もう一枚!?」

「そうだ!二枚目、聖なる鎧―ミラーメール!ゲート・ガーディアンよ!ワイトキングのその力を、お前のものにするのだ!」

拳をぶつかり合わせたまま膠着状態に陥っていたゲート・ガーディアンの全身がまばゆい光に包まれ、ワイトキングをついに力技で殴り飛ばしてしまった。そんな、あのワイトキングが……。

聖なる鎧―ミラーメール

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが

攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。

攻撃対象モンスターの攻撃力は、

攻撃モンスターの攻撃力と同じになる。

ゲート・ガーディアン　攻３２５０→５０００

ワイトキング　攻５０００（破壊）→ゲート・ガーディアン　攻５０００

『……やるじゃねえか』

「ワイトキングは自身の効果で、戦闘破壊された時に墓地のワイトを除外して特殊召喚できるよ。戻ってきて、ワイトキング……」

ワイトキング　攻０→４０００

「私はこれでターンエンド、だって」

『攻撃表示、か。まあ実際どうしようもないし、ああするしかないのかね』

「私のターン、ドロー。ふむ……あの伏せカードがいい加減目障りだな。魔法カード、大嵐を発動!場の全ての魔法・罠カードを破壊する!」

「!?」

夢想の伏せていた最後のカードは……自分フィールドのモンスターが攻撃された時に、攻撃をするモンスターの攻撃力の半分の数値分攻撃対象モンスターの攻撃力をアップさせるトラップ、ハーフ・カウンター。これまでゲート・ガーディアンの攻撃が守備表示モンスターだけにしかなかったために発動されなかった、攻撃反応型のカードだ。そして、僕の伏せていたカードも破壊される。これでバックはがら空きになり、残ったのはワイトキングとなかなか狙われなかったドラゴン・アイスの二体だけ。とすれば当然、攻撃対象は。

「ゲート・ガーディアンで、ワイトキングを攻撃!ゲート・デストラクション!」

ゲート・ガーディアン　攻５０００→ワイトキング　攻４０００（破壊）

清明＆夢想　ＬＰ１６００→６００

「くっ……ごめんね清明、だってさ。……清明?」

「ふむ、もう絶望で声を出すこともできんか。だが恨んでくれるな、これでターンエンドだ」

「……だ」

「何？」
「……定。……だ」
「もう一度言え、聞こえないぞ」
聞こえない？ならもう一回言おうじゃないの！ニヤリと笑ってからもう一度、今言ったことを大声で繰り返す。
「対象を指定！ゲート・ガーディアンだ!!」
「一体何の話をしているんだ!?」
「わからないんなら見てみなよっ！」
恐る恐るといった風に、迷宮兄弟が仁王立ちするゲート・ガーディアンの方に目をやると。
パン、パン、パァン!!と、いきなり数発の銃声が響き、銃弾をまともに喰らったゲート・ガーディアンが、その攻撃力がうそみたいにあっけなく倒れてきた。
「そんな、我らのゲート・ガーディアンが」
「だが一体なぜ……む、なんだそのモンスターは!?」
そう言って迷宮兄が指差したのは、腕を組んで防御姿勢をとるドラゴン・アイスの隣でまだ煙を上げる銀色のライフルを肩に担ぎ、雪のたくさんついた防寒具を身にまとった一人の男。今回の逆転のキーになったカードだ。

「エンドフェイズ時に、さっきの大嵐で破壊された白銀のスナイパーの効果によってゲート・ガーディアンを破壊、さらにスナイパーを特殊召喚したのさ!」

『やれやれ、大嵐してくれてよかったぜ。あれがなかったら正直どうしようかと思った』

「そ、そんな馬鹿な……私のせいで負けとなってしまうのか……」

白銀のスナイパー

効果モンスター

星４／地属性／戦士族／攻１５００／守１３００

このカードは魔法カード扱いとして

手札から魔法＆罠カードゾーンにセットできる。

魔法＆罠カードゾーンにセットされたこのカードが

相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、

このカードを墓地から特殊召喚し、

相手フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

白銀のスナイパー　攻１５００

「それじゃあ僕のターン……ゲート・ガーディアンがそっちのエースなら、こっちもエースカードで行くよ!ドラゴン・アイスと白銀のスナイパーをリリースして……こいつが僕の切り札だ!霧の王を召喚!」

霧の王
効果モンスター
星７／水属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０
このカードを召喚する場合、生け贄１体
または生け贄なしで召喚する事ができる。
このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた
モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。
霧の王　攻０→３３００
「後は任せたよ、霧の王でダイレクトアタック！ミスト・ストラングル!!」
「「うおぉぉぉぉっ!!」」
霧の王　攻３３００→迷宮兄弟（直接攻撃）
迷宮兄弟　ＬＰ２０００→０

「「いいデュエルだった、礼を言おう」」
「いえ、こちらこそ。ありがとうございました、迷宮兄弟さん」

「いい経験になりました、だってさ」
　無事にデュエルも終わり、退学の話もなかったことに。いやー、よかったよかった。そして迷宮兄弟が帰っていく船をユーノに夢想と一緒に見送って……ってアレ?ユーノがいない?どこ行ったんだ一体。しょうがない、探しに……。
「ねえ、清明」
「うん、なーに?」
　探しに行くのは後でいいか。どうせ迷子になるような奴じゃないし。
「今朝、言ってたよね。私に、ありがとうって」
「うん、まあ言ったけど?」
「あの時は別に気にしないでって言ったけど、本当はすごく嬉しかったんだ。なんだって」
「嬉しかった?なんで?」
　どうもよくわからない。何かしてもらったらお礼を言うなんて、当たり前の行為じゃないんだろうか。それを言うと彼女は、ちょっぴり困ったような、でも嬉しそうな顔をして。
「まったく、もう少しデュエル以外のことに鋭くなってもいいんじゃないの?だってさ。じゃあ私はもう寮に帰るからね」

そう言って、素早い身のこなしで歩き出してしまった。なんだか話が急展開過ぎてついていけなかったので、慌てて後を追いかける。もうちょっとわかりやすい説明をお願いしたいんだけどなぁ……。

「あ、そうだ」

ピタリと歩みを止めて、くるりと振り返る夢想。その顔がちょっぴり赤く染まって見えたのは、夕日のせいだろうか。

「なに？」

「えーっと、その……またいつか、一緒にタッグ組もうね。だって」

ちょっぴりあった溜めが若干気になったけど、まあどうでもいいか。もしもまたタッグを組む機会があるんなら、僕にとってはもちろん大歓迎だ。だから、この返事は胸を張って言うことができる。

「……うん！そのときもまた、よろしく頼むよ！」

ターン11　知略！水でなくなる鉄砲水！

～遊野清明の日記より、抜粋～

○月△日

今日で、あの退学がかかった制裁デュエルから４日が経った。考えてみれば早いものだ。迷宮兄弟の二人は今どうしているんだろう？思ったより悪い人たちじゃなかったから、元気にしてるといいんだけど。そういえばあの制裁デュエルも、もとはといえば廃寮に忍び込んだことが原因なんだっけ。タイタンはまだインチキ闇のデュエルを続けてるんだろうか。なんとなーくあの人にはまた会いそうな予感がする。

と、日記なんだから今日の事も書かなきゃだめか。今日は、イエロー対レッドで野球をした。途中までは十代無双だったけど、途中までいなかった三沢が入ってきてからガラリと流れが変わってボッコボコにやられてしまった。……悔しい。１８対８とかバスケやってんじゃないんだからさ。

そのあとは三沢の部屋に行って簡単なバイト、人の部屋にペンキ塗りたくるのって楽しいね。終わったらイエロー寮のごはんをご馳走になったけど、日ごろからあんな贅沢なもん食ってんだろうか。だとしたら思う所がないわけでもない。いやメザシ美味し

いけど。

そして、万丈目と三沢の退学及び進級を賭けたデュエル。ダメージこそ結構食らってたもののあの万丈目相手に……なんかこう、全部計算づくって感じのデュエル展開だった。夢想には勝ててなかったけど、やっぱり学年トップだけのことはある。そう言ったらなぜかユーノが憐みの混じったすごく微妙な顔でこっち見てたけど。

さて、今日はもうこれぐらいで寝よう。なにしろ明日は、授業が終わったら三沢とデュエルする約束を取り付けたんだ。一体何属性のデッキを使ってくるんだろうか。ウォーター・ドラゴンは炎のメタカードだから残り5属性のどれかだろうけど、どんな手を見せてくれるのか楽しみだ。

『ふと読んでみて思った。あれ、これ最後の一文フラグなんじゃねえの？』

「いよっしゃあ、今日も授業終了っ！」

さあ、ここからはデュエルの時間。ここ最近、偽物だったとはいえ闇のゲームに学園最強と言われるカイザーとのタッグデュエル、こっちの退学が懸かった迷宮兄弟戦……純粋に楽しいだけじゃない、ある程度の緊張が混じったデュエルばっかりやってたからね。もっとも、その緊張感があったからこそ楽しい、なんて思ってる自分がいる

ことも否定できないけど。ただ今日みたいな、難しいことを考えずにできる……いや、別に普段も考えてないかな?まあとにかく、デュエルはやっぱり楽しみだ。
「おお清明、今日はお前と三沢のデュエルだったな!早く見たいぜ!!」
　全く十代は……これ、僕のデュエルなんだよ?って言ってやろうかとも思ったけど、まあデュエルならなんでもいいコイツにとってはそれこそ馬の耳になんとやらだろう。
「慌てなさんな十代、まずはイエロー寮まで行くよっ!」
「え、なんで僕らがイエローまで行くんスか?」
「なんだ翔、お前聞いてなかったのか?」
　意外そうに聞く翔と、それに説明する十代。まあ理由といっても、昨日三沢の部屋に塗ったペンキが乾いただろうからってんで荷物を中に入れなおすのを手伝うだけなんだけど。ついでにまたご飯奢ってもらえればなおよし。
『というか、十代はちゃんと聞いてたんだな。授業態度はアレなのに』
「いや、アレって……確かにほぼ毎時間寝てるけどさ」
『毎回起こそうとするお前も、こう、何というかお人よしだよなぁ』
「だって、ほっとくわけにもいかないでしょーが」
　いくらなんでも隣の席で寝てばっかいられたらこっちも困るし。ねえ?

「……ってわけだ。わかったならさっさと行こうぜ、翔！清明！ユーノ！」
　あ、終わったらしい。なら、返事はただ一つ。
「りょーかい！」
「アニキ、ちょっと待ってよ～」
『うし、行くか』

「お、来てくれたか。なら悪いけど、このタンスのそっち側を持ってくれないか？」
「よし三沢、任せろ！」
　そう言うが早いがわっせわっせと一人で荷物を部屋の中に運び入れる十代。さすがの三沢もこの働きっぷりは予想外だったのか、驚き半分呆れ半分といった感じでその様子を見ている。だから、なんで十代がこんなに熱くなってるんだろう。
『とかなんとか言いながらちゃぶ台を一人で持って平気な顔して動き回る清明であった』
「るっさい」

「さてと、三沢。準備はいい?」
「ああ、いつでもいいぞ。それじゃあ……」
「「デュエル!!」」
「先攻は……お、また僕か。なら僕は、グリズリーマザーを守備表示で召喚!」
全身真っ青な毛に包まれた熊が、片膝をついて腕を組み、防御の構えをとる。
グリズリーマザー
効果モンスター
星４／水属性／獣戦士族／攻１４００／守１０００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
デッキから攻撃力１５００以下の水属性モンスター１体を
表側攻撃表示で特殊召喚できる。
「ほう、リクルーターか」
『守備表示でマザーか……ま、慎重にやるのは悪いことじゃないしな』
「カードを一枚セットして、ターンエンド」
「ならば俺のターン、ドロー!……そういえば、まだ俺が何属性のデッキを使うかは教えてなかったな」
「え?ああ、そうだね」

「ならば今、このカードで教えよう。来い、ハイドロゲドン！」
「んなっ!?ハ、ハイドロゲドン!?」
『あ、やっぱフラグだった』
フラグ？何のことだろう。でも、ハイドロゲドンがいるってことはあのデッキは水のデッキ……ということは、エースモンスターはやっぱり昨日も見たウォーター・ドラゴンのはずだ。でもどうしてだろう、僕がいつもの【ポロロッカ】を使うことなんて誰でも予想できるだろうに……それとも、まだ何か考えがあるんだろうか。だとしたら、一体どんな？
ハイドロゲドン
効果モンスター
星４／水属性／恐竜族／攻１６００／守１０００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、
自分のデッキから「ハイドロゲドン」１体を特殊召喚する事ができる。
「……いや」
『ん、どした？』
「どうせ考えたってわかんないんだ！だったら迷うだけ馬鹿らしい、何が来ようと全力で行くまでさ！」

『はは、違いねえや。よし、俺は何も言わんようにするから全力でやって来い!』
「なら行くぞ!ハイドロゲドンでグリズリーマザーを攻撃、ハイドロ・ブレス!」
ハイドロゲドンが口から吐き出した泥水が、グリズリーマザーを吹き飛ばす。
ハイドロゲドン　攻１６００→グリズリーマザー　守１０００（破壊）
「グリズリーマザー、効果発動!僕は、二体目のグリズ……」
そこまで言いかけて、はっとハイドロゲドンの特殊効果を思い出した。危ない危ない、ここで二体目を出してたら後続のハイドロゲドンにやられるところだった。なら攻撃表示だからダメージは痛いけど、これも必要経費!
「……いや、氷弾使いレイスを特殊召喚!」
どこからともなくひらりと飛んでフィールドに立つ、相変わらず人間にしか見えないけど海竜族な僕のデッキにとって頼れる壁役のうち一人。今回も頼りにしてるよ、毎度毎度悪いけど。
氷弾使いレイス
チューナー（効果モンスター）
星２／水属性／海竜族／攻　８００／守　８００
このカードはレベル４以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。
「ふ、やはりレイスを出してきたか。清明、もし俺がこの展開を予想していたとしたらど

うする？」
「え……？そんな、僕がレイスを出すことを読んでたって？」
『いや、別におかしな話じゃねえぞ。俺らのデッキの中では、この状況ではレイスを出すのが最善手……逆に言えば、出すモンスターはほぼ１００パーセントでレイスになる。読むことだってできない話じゃない』
　な、なるほど。でも、この展開が読めていたとしても、レベル４のハイドロゲドンじゃあ突破はできないはず。少なくともこのターンは耐え切れる！
「まずハイドロゲドンの効果で、デッキから二体目のハイドロゲドンを特殊召喚する。そしてこのハイドロゲドンで、氷弾使いレイスを攻撃！ハイドロ・ブレス！」
「残念、氷弾使いレイスはレベル４以上のモンスターとの戦闘では破壊されないよ」
「そんなことはわかっているさ、速攻魔法スター・チェンジャーを発動！二つ目の効果により、このハイドロゲドンのレベルを３にする！」
「そんな……！」
　スター・チェンジャー
　速攻魔法
　フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、
　以下の効果から１つを選択して発動できる。

●そのモンスターのレベルを１つ上げる。
●そのモンスターのレベルを１つ下げる。
ハイドロゲドン　☆４→３
ハイドロゲドン　攻１６００→氷弾使いレイス　攻８００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→３２００
「く……!」
「そしてレイスを戦闘破壊したことで、このハイドロゲドンも効果発動する。三体目のハイドロゲドンでダイレクトアタックだ!ハイドロ・ブレス!」
ハイドロゲドン　攻１６００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３２００→１６００
「俺はカードを3枚伏せて、ターンエンドだ」
清明　ＬＰ１６００　手札：４　モンスター：０　魔法・罠：１（伏せ）
三沢　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：ハイドロゲドン×３　魔法・罠：３（伏せ）
「僕のターン、ドロー!」
三沢の場にいるのは、もう後続を呼ぶことのできないハイドロゲドンが三体。そして、全員攻撃力は１６００……何とかなりそうではあるんだけど、そうすると気に

なるのがあの伏せ２枚。ええい、気にしてたって仕方ない！って言いたいところなんだけど、あいにく今は守るしかないか。

「僕は、モンスターを一体セット。さらに永続魔法、強者の苦痛を発動してターンエンド」

強者の苦痛
永続魔法
相手フィールド上のモンスターの攻撃力は、
そのモンスターのレベル×１００ポイントダウンする。

ハイドロゲドン×２　攻１６００→１２００
ハイドロゲドン　攻１６００→１３００

「ふむ……ということは、多分こいつらではあのセットモンスターを突破できないな。ならば俺は、オキシゲドンを召喚！」

オキシゲドン
効果モンスター
星４／風属性／恐竜族／攻１８００／守　８００
このカードが炎族モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
お互いのライフに８００ポイントダメージを与える。

オキシゲドン　攻１８００→１４００
「そして魔法カード、ボンディング―Ｈ２Ｏを発動!自分の場にいる水素と酸素を化学反応させ、水の生成を行う!来い、ウォーター・ドラゴン!!」
「出た、三沢の水デッキの切り札……」
でも、一体何を考えているんだろう?僕のデッキに炎系のモンスターはいないから、実質バニラ同様のウォーター・ドラゴンを見上げながら、必死に考える。
ウォーター・ドラゴン
効果モンスター
星８／水属性／海竜族／攻２８００／守２６００
このカードは通常召喚できない。
「ボンディング―Ｈ２Ｏ」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
炎属性と炎族モンスターの攻撃力は０になる。
このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する
「ハイドロゲドン」２体と「オキシゲドン」１体を特殊召喚する事ができる。
ウォーター・ドラゴン　攻２８００→２０００
「ウォーター・ドラゴンで、セットモンスターを攻撃!アクア・パニッシャー!」

「へへ、油断したね三沢！リバースモンスター、ペンギン・ナイトメアの効果発動！対象はもちろんウォーター・ドラゴン!!」
ウォーター・ドラゴン　攻２０００→???（破壊）
ペンギン・ナイトメア
効果モンスター
星４／水属性／水族／攻　９００／守１８００
このカードがリバースした時、
相手フィールド上のカード１枚を選択して持ち主の手札に戻す。
また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は２００ポイントアップする。
『これが通ればだいぶ有利にはなる……が』
「やはりそのカードか、だがそれも計算のうちだ！カウンタートラップ、リ・バウンドを発動して、ペンギンの効果を無効にする！」
『まあ、通しちゃくんねえだろうな』
リ・バウンド
カウンター罠
フィールド上のカードを手札に戻す効果を相手が発動した時に発動できる。

その効果を無効にし、相手の手札・フィールド上からカードを1枚選んで墓地へ送る。
また、セットされたこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、
デッキからカードを1枚ドローする。
「さてと、それじゃあリ・バウンドの二つ目の効果だ。そのセットカードを墓地に送ってもらう」
「メタル化・魔法反射装甲まで……」
「そして、残ったレベル３のハイドロゲドンでダイレクトアタックだ。ハイドロ・ブレス!」
ハイドロゲドン　攻１３００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ１６００→３００
「俺は、これでターンエンドだ」
清明　ＬＰ３００　手札：３　モンスター：０　魔法・罠：強者の苦痛、０
三沢　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：ウォーター・ドラゴン（攻）、ハイドロゲドン（攻）魔法・罠：２（伏せ）
うわ、完全に動きが読まれてる。これはかなりマズイな、こっちのライフがなくなる前に早く勝負を決めないと。
「ドロー、ブリザード・ドラゴンを攻撃表示で召喚!そして効果発動、パーフェクトフ

リーズッ!ウォーター・ドラゴンを氷漬けにしてやれ!」
ブリザード・ドラゴン
効果モンスター
星４／水属性／ドラゴン族／攻１８００／守１０００
相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターは次の相手のエンドフェイズ時まで
攻撃宣言をする事ができず、表示形式を変更する事もできない。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。
青いドラゴンが口から猛吹雪を吐き出すと、見る見るうちにウォーター・ドラゴンが氷に包まれていく。
「それからブリザード・ドラゴンで、ハイドロゲドンを攻撃!」
ブリザード・ドラゴン　攻１８００→ハイドロゲドン　攻１３００（破壊）
三沢　ＬＰ４０００→３５００
「よし、初ダメージだ!さらにカードを２枚セットして、ターンエンド」
「俺のターン、ドロー……特にすることもないか。カードを一枚セットして、カードカー・Ｄを召喚して効果を発動する。強制エンドフェイズでターンエンドだ」
カードカー・Ｄ

効果モンスター
星２／地属性／機械族／攻　８００／守　４００
このカードは特殊召喚できない。
このカードが召喚に成功した自分のメインフェイズ１に
このカードをリリースして発動できる。
デッキからカードを２枚ドローし、このターンのエンドフェイズになる。
この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚できない。
清明　ＬＰ３００　手札：１　モンスター：ブリザード・ドラゴン（攻）　魔法・罠：強者の苦痛、２（伏せ）
三沢　ＬＰ３５００　手札：２　モンスター：ウォーター・ドラゴン（攻）　魔法・罠：３（伏せ）
そして三沢のターンが終わると同時にウォーター・ドラゴンが氷を弾き飛ばして復活する……けど。
「僕のターン、ブリザード・ドラゴンの効果をまた発動!パーフェクトフリーズ!」
結局また吹雪に包まれ、あっという間に氷漬けになるウォーター・ドラゴン。ふ、不憫だ。やってんの僕なんだけど。
「それから、ドリル・バーニカルを召喚、そしてこのモンスターは自分の効果でダイレク

トアタックができる！ドイルミサイル、発射！」
ドリル・バーニカル
効果モンスター
星３／水属性／水族／攻　３００／守　　０
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与える度に、
このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
ドリル・バーニカル　攻３００→三沢（直接攻撃）
三沢　ＬＰ３５００→３２００
ドリル・バーニカル　攻３００→１３００
「僕はこれで、ターンエンド」
「ならば俺のターン！まず俺は、黄泉ガエルを召喚。そして大嵐を発動する！」
「このタイミングで大嵐!?」
黄泉ガエル
効果モンスター
星１／水属性／水族／攻　１００／守　１００
自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、

自分フィールド上に魔法・罠カードが存在しない場合、
このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が
表側表示で存在する場合は発動できない。
大嵐……お互いの魔法・罠を問答無用で全破壊するわかりやすくてかつ強力な効果を持ったカード。でも、今は三沢だって伏せカードを三枚も伏せている。巻き込まれる自分のカードだって相当な量になるのに。ということは、あの黄泉ガエルには何か裏がある……？
『それくらい一発で気づけバカ。むしろなんで裏がないなんて思えるんだよ』
「うぅ……」
「そして俺は、この大嵐にチェーンして三枚のトラップを発動する。ＤＮＡ改造手術、暴君の威圧、そして……宮廷のしきたりだ！」
ＤＮＡ改造手術
永続罠
種族を１つ宣言して発動する。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターは宣言した種族になる。

暴君の威圧
永続罠
自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上に表側表示で存在する元々の持ち主が自分となるモンスターは、
このカード以外の罠カードの効果を受けない。
宮廷のしきたり
永続罠
このカードがフィールド上に存在する限り、
お互いのプレイヤーは「宮廷のしきたり」以外の
フィールド上に表側表示で存在する永続罠カードを破壊できない。
「宮廷のしきたり」は自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。
「まずＤＮＡ改造手術の効果で炎族を選択し、これでウォーター・ドラゴンの効果によりすべてのモンスターの攻撃力が０になる。だが黄泉ガエルをリリースして発動された暴君の威圧の効果で、俺のモンスターは炎族にならない。そして大嵐の効果で互いの魔法・罠が全破壊されるが、宮廷のしきたりの効果でこのカードが身代わりになる」
「う、うわぁ……って、ぼけっとしてる場合じゃないか！」

ブリザード・ドラゴン　攻１８００→０
ドリル・バーニカル　攻１３００→０
ウォーター・ドラゴン　攻２０００→２８００
「生憎と、攻めの一手がないな。カードを一枚セットしてターンエンド」
『首の皮一枚残して繋がった、ってか?ギリギリ助かったな』
清明　ＬＰ３００　手札：１　モンスター：ブリザード・ドラゴン（攻）、ドリル・バーニカル（攻）魔法・罠：０
三沢　ＬＰ３２００　手札：０　モンスター：ウォーター・ドラゴン（攻）　魔法・罠：ＤＮＡ改造手術、暴君の威圧、１（伏せ）
「僕のターン、ドロー!」
今のところ三沢の引きが絶妙に悪い（らしい）せいでぎりぎりライフは残ってる。残ってはいるけど、もう息も絶え絶えだ。おまけにウォーター・ドラゴンの特殊効果さえ強引に発動された。
「ブリザード・ドラゴンの効果で……」
「待った、その前にこのカードを発動しよう。速攻魔法、禁じられた聖杯!ブリザード・ドラゴンの攻撃力を４００ポイントアップさせる代わりに、効果を無効にする!」
吹雪を吐き出そうとしたブリザード・ドラゴンに、頭上にいきなり現れたコップの水

が降りかかってしまう。その水が目に入ったのか、いったん吹雪をストップして前足で目をこすり始める。マズイ、止められた！

「なら、モンスター二体を守備表示に！さらにモンスターを……セットで召喚、ターンエンド！」

「俺のターン。コアキメイル・アイスを召喚して、ドリル・バーニカルを攻撃！」

コアキメイル・アイス

効果モンスター

星４／水属性／水族／攻１９００／守１２００

このカードのコントローラーは自分のエンドフェイズ毎に、

手札から「コアキメイルの鋼核」１枚を墓地へ送るか、

手札の永続魔法カード１枚を相手に見せる。

または、どちらも行わずにこのカードを破壊する。

また、自分のメインフェイズ時に手札を１枚墓地へ送って発動できる。

フィールド上の特殊召喚されたモンスター１体を選択して破壊する。

コアキメイル・アイス　攻１９００↓ドリル・バーニカル　守０（破壊）

「追撃だ！ウォーター・ドラゴンで、ブリザード・ドラゴンを攻撃！アクア・パニッシャー！」

ウォーター・ドラゴン　攻２８００↓ブリザード・ドラゴン　守１０００（破壊）
「あと一回攻撃が通ればいいんだがな……。まあいい、ターンエンドだ。そしてこの時、コアキメイル・アイスのデメリット効果によりこのカードは自壊する」
清明　ＬＰ３００　手札：１　モンスター：???　魔法・罠：０
三沢　ＬＰ３２００　手札：０　モンスター：ウォーター・ドラゴン（攻）　魔法・罠：ＤＮＡ改造手術、暴君の威圧
「僕のターン、ドロー!!」
場の状況から見れば、多分これがラストドローだろう。そして実は、もう勝ち筋は見えてきている。ただあと一枚、あのカードさえ来てくれれば……。
「頼むから来てくれ……よし!!三沢、こっからが僕の逆転劇だ!まず、夜叉を通常召喚!!」
「なに、夜叉だと!?」
夜叉
スピリットモンスター
星４／水属性／天使族／攻１９００／守１５００
このカードは特殊召喚できない。
召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが召喚・リバースした時、相手フィールド上に存在する
魔法・罠カード1枚を選択して持ち主の手札に戻すことができる。
「その様子だと、効果は知ってるみたいだね！夜叉の効果で、ＤＮＡ改造手術をバウンスするよ！」
「くっ、やられたか」
「さらに、セットモンスターを反転召喚……このモンスターは、ニードル・ギルマンさ」
ニードル・ギルマン
効果モンスター
星３／水属性／海竜族／攻１３００／守　　０
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分フィールド上の魚族・海竜族・水族モンスターの
攻撃力は４００ポイントアップする。
ニードル・ギルマン　攻１３００→１７００
「だが、そのモンスターではウォーター・ドラゴンを突破できないぞ？」
「もちろんわかってるさ。だから僕は、魔法の呪文を唱えるのさ」
『あいつまさか、魔法の呪文ってアレの事か？アレ出そうとしてんのか？』
「魔法の呪文、ボチミズゴタイ！墓地にグリズリーマザー、氷弾使いレイス、ペンギン・

ナイトメア、ブリザード・ドラゴン、ドリル・バーニカルが存在することで、氷霊神ムーラングレイスを特殊召喚!!」

『あ、やっぱり。ボチヤミサンタイと同じノリで出てくる奴だ』

氷霊神ムーラングレイス

効果モンスター

星８／水属性／海竜族／攻２８００／守２２００

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の水属性モンスターが５体の場合のみ特殊召喚できる。

このカードが特殊召喚に成功した時、

相手の手札をランダムに２枚選んで捨てる。

「氷霊神ムーラングレイス」のこの効果は１ターンに１度しか使用できない。

このカードがフィールド上から離れた場合、

次の自分のターンのバトルフェイズをスキップする。

氷霊神ムーラングレイス　攻２８００→３２００

「なに、俺のコンボを崩しただと!?」

「知らなくっても無理はないさ、なにしろこのムーラングレイスは、まだ三沢には見せてないカードだからね」

覚えてる人はいるだろうか、僕が万丈目と戦った日、新パックの中でたった一つだけ買占めから逃れたものがあったことを。その中に入っていた進化する翼とハネクリボーＬＶ１０こそ十代が貰っていったものの、このムーラングレイスは僕のものになった。

「つまりは、そういうことさ」

「なるほど……俺もまだまだ、勉強不足だったってことか。この点には反省しないとな」

「いくよ！ムーラングレイスで、ウォーター・ドラゴンを攻撃！ムーンライトレーザー！」

ムーラングレイスの額の角から発射された青いビームが、ウォーター・ドラゴンを打ち抜く。やった、これで残りのモンスターたちで直接攻撃すれば……!!

氷霊神ムーラングレイス　攻３２００→ウォーター・ドラゴン　攻２８００（破壊）

三沢　ＬＰ３２００→２８００

「清明、確かに君は強い。だが、今はまだ俺の方が一枚上手だ！ウォーター・ドラゴンの、もう一つの特殊効果！このカードが破壊された時、墓地のハイドロゲドン２体とオキシゲドン１体を特殊召喚する！」

「えっ……？」

『えっ、じゃねえよ……いつからウォーター・ドラゴンの効果が一つだと勘違いしてたんだお前は。しかし、少しはタクティクスも上がってきたのかと思った瞬間にこんなボケかますんだもんなーお前は』

「う、うるさい!夜叉、オキシゲドンに攻撃!ニードル・ギルマン、ハイドロゲドンに攻撃!」

夜叉　攻１９００↓オキシゲドン　守８００（破壊）

ニードル・ギルマン　攻１７００↓ハイドロゲドン　守１０００（破壊）

「スピリットモンスターの夜叉は、ターンエンド時に手札に帰る……僕はこれで、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー!……貪欲な壺、この効果で墓地のハイドロゲドンとオキシゲドン、カードカー・Ｄにコアキメイル・アイス、そしてウォーター・ドラゴンをデッキに戻して２枚ドローする。これで終わりだ清明、アビス・ソルジャーを召喚!」

アビス・ソルジャー

効果モンスター

星４／水属性／水族／攻１８００／守１３００

１ターンに１度、手札から水属性モンスター１体を墓地へ捨て、フィールド上のカード１枚を選択して発動できる。

選択したカードを持ち主の手札に戻す。
「ニードル・ギルマンの攻撃力を超えるアタッカーが……」
「アビス・ソルジャーの効果で、手札のグリズリーマザーを捨ててムーラングレイスを手札に。そしてそのまま、ニードル・ギルマンを攻撃！」
アビス・ソルジャー　攻１８００→ニードル・ギルマン　攻１７００（破壊）
清明　ＬＰ３００→２００
「ハイドロゲドンでダイレクトアタック！ハイドロ・ブレス!!」
「うわあああっ!!」
ハイドロゲドン　攻１６００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ２００→０

「いやー、負けちゃったか」
「だが、いいデュエルだったと俺は思うぞ。ほら、一人で立てるか？」
そう声をかけながら、へたり込んでる僕に手を差し出す三沢。素直にその手を掴んで立ち上がる。
「センキュ、三沢」

「この程度のこと、気にするな。それじゃあ皆、今日も手伝ってくれたお礼にメシぐらい奢ってやるよ」
「おお、ホントか三沢!やったな、翔!」
「やったッスね、アニキ!」
そう言って、何とはなしにみんなで笑いあう。負けちゃったのは悔しいけど、まだまだ僕だって若いんだからこれから強くなれる、はず。とりあえず今は、ただ飯を美味しくいただくとしよう。

ターン12　野性！SuperAnimalLearning！

その知らせは、いきなりやってきました。
「大変だー、万丈目君が行方不明になっちゃったー！」
「……へ？」
どうも話を聞くと、今朝早くに荷物をまとめてデュエルアカデミアから出ていく姿が何人かに見られていたらしい。……見てたんなら止めてやれよお前ら。
「まさか、この前のデュエルに負けたのを苦にして岸壁から飛び降りたとか」
「馬鹿野郎、そんなことあるワケない……よな、清明？」
「いやなんでそこ僕に振るの。ない、よね？」
『ノーコメント』
今回のことに関しては、ユーノも答える気はないらしい。だ、大丈夫かなぁ……。
「しっかし十代、よくまあこんな所見つけたね」
今僕たちがいるのは、なんでもこの学校から安全に出られる先生も知らない抜け道、

というかただの穴の中。ホントにいつの間にこんのもの見つけたんだろう。
「ああ、これか?この道は、俺たちの部屋に置いてあった何年も前の先輩のノートに書いてあったんだ。俺も最初に見た時はビックリしたぜ、まさかこんなものを作ってあったなんてな」
「実際に使うのはこれが初めてなんスけどねー。ちゃんと外につながってててよかったッスよ」
『マジか、この道そんないわくつきのだったのかよ。つーかんなことやってる間にデュエルの腕でも磨いてりゃいいのに』
　と、そんなことを言いながら外に這い出る。ユーノ、多分そこは言っちゃいけないかと。さてと、万丈目を探し出しますかね。
「ちょっと待ちなさい、貴方達」
「げえ、あ、明日香!?」
「なによ、人を化け物か何かみたいに。それで貴方達、一体どこに行くつもりなの?」
　また出たよこの人。なんかちょいちょいこの明日香、ジュンコ、ももえのコンビには会うけど、実はかなりの暇人なんじゃないだろか。
「さすがにほっとけないし、万丈目見つけて首根っこひっつかんででもアカデミアに戻すつもりだったんだけど。そっちこそ何やってんのさ」

「私たちも同じよ。放っておくわけにもいかないでしょう？」
「なるほど、つまりそっちもサボりだと」
「うるさいわね」
　う、マズイ。一言余計だったか。と、とりあえず別の話題をっと。
「あ、あれ、そういえば今日は夢想はいないの？」
「本当は彼女もついてくるつもりだったんだけど、途中であの子だけ見つかって捕まっちゃって……」
『……あー、じゃあ今回は欠席か』
　かわいそうに……捕まえたのがクロノス先生あたりならまだブルー寮補正がかかって大したおとがめなしで済むかもしれないけど、どうなんだろうか。とりあえず今は無事に済むようにお祈りでもしておこう。

「おーい、万丈目ー!!」
『声も姿も聞こえず見えず、か』
「うーん、探す場所が悪いのかな？」
『さあな。それより十代はどこだ、十代は』
　それとなく隣でふわふわしてるユーノに鎌をかけてみるけど、引っかかってはくれな

かった。残念。というか、真剣な話十代達は今頃どこにいるんだろう。さっきまで一緒にいたんだけど、ねえ。いやあのその、ほら。

『十代、翔、明日香、ジュンコ、ももえー。迷子になりやがったこの馬鹿が探してますよー』

「るっさい！」

だって！なんか歩いてたら草むらが動いた気がしたんだもん！ちょっと見に行っただけなのに！というかユーノも別に止めなかったじゃん、それを馬鹿扱いはいくらなんでも理不尽だと思うんだけどなぁ……。

『見に行くのは別に止めねえけど、迷子になれなんて誰も言ってねえよ！』

「んな無茶な！子供か!!」

『幽霊に年は関係ねーよーだ！』

「そゆこと言ってんじゃないよ！」

「『……ハァ』」

力いっぱい怒鳴り合ってちょっと気持ちが落ち着いたところで、改めてユーノに声をかける。

「んでさ、結局どうしよっか。アカデミアどっちかなぁ」

『んー、もうそろそろだと思うんだけどな』

「もうそろそろ？何が？」
　そう尋ねた瞬間。
「キャー、助けて明日香さーん!!」
「悲鳴!?あっちの方か！」
『ほらな』
「ちょっと、いい加減に降ろしてよ～!!」
　あれ？なんかさっきより声が近くなってるような？気のせいかな、どんどんこっちに来てるような……。
「キャー！ってあれ、あなたは」
「ジュンコ……だよね？何やってんのこんなところで」
「ウキ」
「えっと、あのさ。なにがなんだかさっぱりわからないんだけど、この猿何者？」
　目の前の木の枝にいるのは、なんかサイボーグっぽい猿。そして片手で抱えられたジュンコ。何この絵面。
「ちょっとあなた！そんなところでぼうっとしてないで、早く私を助けなさい！」
「いやそんなこと言われましてもどうやって、ってねえ猿」
「ウキー？」

「その腕についているもの、もしかしなくてもデュエルディスクでしょ」
「ウキーウキー」
「……えっと。お前、デュエルできるの？」
「ウキ」
「うーん、じゃあこうしよっか。猿、今から僕とデュエルだ。僕が勝ったらその子は返してもらうよ」
『んで、お前が負けたら？』
「あーそっか、じゃあ僕が負けたら……負けたら……負けたら…もう、とりあえずデュエルだ！」
『なにその理不尽』
「ウキー！」
「なんでもいいですけど、頼んだわよー！」
「【デュエル!!】」
「……ってちょっと待って、何今の声」
『あの機械からだな。さすがに相手がウキーウキー言ってるだけじゃデュエルにならんだろ。それからな清明、アイツは猿じゃない』
「え、どこが？猿にしか見えないんだけど」

『あいつは正式名称ＳｕｐｅｒＡｎｉｍａｌＬｅａｒｎｉｎｇ……通称ＳＡＬだ』
「おお、なんかかっこいい！じゃあＳＡＬ、僕が先行をもらう！シャクトパスを攻撃表示で召喚！」
『（カッコいい……？）』
シャクトパス　攻１６００
「これでターンエンド」
【私のターン、ドロー。私は、怒れる類人猿（バーサークゴリラ）を召喚、シャクトパスに攻撃】
怒れる類人猿
効果モンスター
星４／地属性／獣族／攻２０００／守１０００
このカードが表側守備表示でフィールド上に存在する場合、このカードを破壊する。
このカードのコントローラーは、このカードが攻撃可能な状態であれば
必ず攻撃しなければならない。
怒れる類人猿　攻２０００→シャクトパス　攻１６００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→３６００
「くっ、だけどこの時、シャクトパスの特殊効果発動！このカードを怒れる類人猿に装備！」

ゴリラがその怪力をフルに使ってシャクトパスをぶん殴るも、かろうじて堪えたシャクトパスが８本のタコ足でゴリラをぐいぐいと締め付ける。そのままゴリラに引っ付いて猿のフィールドまで行ってしまった。

シャクトパス
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１６００／守　８００
このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備できる。
この効果によってこのカードを装備したモンスターは
攻撃力が０になり、表示形式を変更できない。

怒れる類人猿　攻２０００→０

「どうだ！」

【私は魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキからＡＤチェンジャーを墓地に送る。そしてＡＤチェンジャーの効果により、このカードを除外して怒れる類人猿の表示形式を守備表示に変更する。そしてこのカードのデメリット効果によって怒れる類人猿が自壊、ここで１０００ライフポイントを払って手札から森の番人グリーン・バブーンを特殊召喚する】

「シャクトパスの効果が無駄になった!?」

おろかな埋葬

通常魔法（制限カード）

自分のデッキからモンスター１体を選択して墓地へ送る。

ＡＤチェンジャー

効果モンスター

星１／光属性／戦士族／攻　１００／守　１００

墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、

フィールド上に存在するモンスター１体を選択して発動する。

選択したモンスターの表示形式を変更する。

怒れる類人猿　攻０↓守１０００（破壊）

ＳＡＬ　ＬＰ４０００↓３０００

森の番人グリーン・バブーン

効果モンスター

星７／地属性／獣族／攻２６００／守１８００

自分フィールド上に表側表示で存在する獣族モンスターが

カードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、

１０００ライフポイントを払って発動できる。
このカードを手札または墓地から特殊召喚する。
【カードを二枚セットし、ターンエンド】
清明　ＬＰ３６００　手札：５　モンスター：なし　魔法・罠：なし
ＳＡＬ　ＬＰ３０００　手札：２　モンスター：森の番人グリーン・バブーン（攻）
魔法・罠：２（伏せ）
「思ったより強いね、ＳＡＬ……でも負けないよ、僕のターン、ドロー!キラー・ラブカを通常召喚して、そのままリリース!シャークラーケンを特殊召喚!」
キラー・ラブカ　攻７００
シャークラーケン
効果モンスター
星６／水属性／魚族／攻２４００／守２１００
このカードは自分フィールド上の水属性モンスター１体をリリースし、
手札から特殊召喚できる。
「ちょっと、何をやっているの!?そのモンスターの攻撃力じゃあ、次のターンにやられるだけよ!?」
「そんなことわかってるさ、ウォーターワールド発動!」

ウォーターワールド
フィールド魔法
フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、
守備力は４００ポイントダウンする。
シャークラーケン　攻２４００→２９００　守２１００→１７００
「このままグリーン・バブーンに攻撃！」
シャークラーケン　攻２９００→森の番人グリーン・バブーン　攻２６００（破壊）
ＳＡＬ　ＬＰ３０００→２７００
「僕はこのまま、ターンエンド」
【私のターン、ドロー。そしてリバースカード、リビングデッドの呼び声を発動。墓地のグリーン・バブーンを特殊召喚、そのままリリースしてツインヘデッド・ビーストを通常召喚する。そしてもう一枚のトラップカード、血の代償を発動。ライフポイントを５００払い、手札のアクロバットモンキーを通常召喚】
リビングデッドの呼び声
永続罠
自分の墓地のモンスター１体を選択し、表側攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。
ツインヘデッド・ビースト
効果モンスター
星６／炎属性／獣族／攻１７００／守１９００
このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。
血の代償
永続罠（制限カード）
５００ライフポイントを払う事で、モンスター１体を通常召喚する。
この効果は自分のメインフェイズ時及び
相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。
ＳＡＬ　ＬＰ２７００↓２２００
アクロバットモンキー
通常モンスター
星３／地属性／機械族／攻１０００／守１８００
超最先端技術により開発されたモンキータイプの自律型ロボット。
非常にアクロバティックな動きをする。

【そして速攻魔法、野性解放を発動。対象はもちろんツインヘデッド・ビースト】
野性解放
通常魔法
フィールド上の獣族・獣戦士族モンスター1体を選択して発動できる。
選択した獣族・獣戦士族モンスターの攻撃力は、
そのモンスターの守備力分アップする。
この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。
ツインヘデッド・ビースト　攻１７００→３６００
【バトル。ツインヘデッド・ビーストで、シャークラーケンを攻撃】
「待って、ここで墓地のキラー・ラブカの効果発動！」
墓地から一瞬だけ姿を見せた半透明のキラー・ラブカが、触ったら痛そうな尻尾を振り回してツインヘデッド・ビーストの二つある頭のうち片方をはたいて怯ませる。
ツインヘデッド・ビースト　攻３６００→３１００
【だが、このカードは自身の効果で一ターンに二回の攻撃を行える。もう一度シャークラーケンに攻撃】
「……それは止められないよ」
ツインヘデッド・ビースト　攻３１００→シャークラーケン　攻２９００（破壊）

清明　ＬＰ３６００→３４００
【アクロバットモンキーでダイレクトアタック。アクロバット・ウッキー】
アクロバットモンキー　攻１０００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ　３４００→２４００
【そしてこのエンドフェイズ時、ツインヘデッド・ビーストは野性解放のデメリット効果で破壊される。ライフを１０００払い、墓地のグリーン・バブーンを特殊召喚】
『ここでバブーン出すか……やっぱまだコンピューターが不完全なのか?』
ＳＡＬ　ＬＰ２２００→１２００
森の番人グリーン・バブーン　攻２６００
清明　ＬＰ２４００　手札：２　モンスター：なし　魔法・罠：なし　場：ウォーターワールド
ＳＡＬ　ＬＰ１２００　手札：なし　モンスター：森の番人グリーン・バブーン（攻）、アクロバットモンキー（攻）魔法・罠：リビングデッドの呼び声（無）、血の代償
「僕のターン、ドロー!」
ＳＡＬの場に発動できるカードは無いし、血の代償を使おうとしても手札がない、か。よし、このデュエルはもらっｔ「ウキー、ウキー」……な、なんだ?「ウッキー」「ウキウキー」「キーッ」ねえなんかどんどん聞こえる数が増えてきてるんだけど、この鳴き

声ってもしかしてさあ。
『猿だな』
「やっぱりー！というかさ、ＳＡＬってこんなにいっぱいいるの!?」
『とりあえず後ろを見てから物を言え。今度来たのはＳＡＬじゃない、猿だ』
「発音が一緒だからわかんないんだよ！」
　そう言いながら後ろをチラッと振り返ると……あ、本当だ。確かに猿だ。ごくごく普通の、どうってことない猿。なんだもう、びっくりしたなぁ。
「でも、なんでこんなに猿がいるの？」
『そこはＳＡＬに聞いてみな』
「ねえＳＡＬ、もしかしてあっちの猿達は知り合いだったりする？」
「ウッキー」
「……野生に帰りたい、って？」
「ウキ」
「なるほどねえ。じゃあどうしよっか」
「ウキウッキ～」
「ん～、じゃあこうしよっか。いい？まずこのデュエル、僕が勝ったらその人質は放してもらう。それでＳＡＬ、お前が勝ったらお前が野生に帰るのに協力するよ」

「ウキッ!?」

「なに、疑ってんの?だいじょーぶだって、このおにーさんに任せときなさい。でもまあ、それはそれでこれはこれ。デュエルは本気で行くよ!まずそっちの場に地属性モンスターが二体いることで、手札の神禽王アレクトールを特殊召喚!それから魔法カード死者蘇生、この効果でシャークラーケンを蘇生!二体のモンスターをリリースして、来い、マイフェイバリット!霧の王(キングミスト)を召喚!!」

「というか、なんであの人はナチュラルにあの猿と会話できるのかしら。レッド生だから?」

神禽王アレクトール
効果モンスター
星６／風属性／鳥獣族／攻２４００／守２０００
相手フィールド上に同じ属性のモンスターが表側表示で２体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を選択する。
選択されたカードの効果はそのターン中無効になる。
「神禽王アレクトール」はフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。

死者蘇生

通常魔法（制限カード）
自分または相手の墓地のモンスター1体を選択して発動できる。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。
シャークラーケン　攻２４００→２９００
霧の王
効果モンスター
星７／水属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０
このカードを召喚する場合、生け贄１体
または生け贄なしで召喚する事ができる。
このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた
モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。
霧の王　攻０→４８００→５３００
「霧の王、アクロバットモンキーに攻撃！ミスト・ストラングル!!」
「ウッキー!!」
霧の王　攻５３００→アクロバットモンキー　攻１０００（破壊）

ＳＡＬ　ＬＰ１２００→０

「さてとＳＡＬ、僕が勝ったんだから、まず最初に人質を返してくれる?」
「ウッキー……」
しょんぼりと肩を落としながらも、木の上までするりと登ってジュンコを小脇に抱えて降りてくるＳＡＬ。降りてきた辺りを見計らって、もう一度声をかける。
「そういえばさ、その機械類って自力で取れるもんなの?」
この質問には、無言で首を横に振った。なるほど、無理なのか。
「だったらほら、こっちおいで。多分とれると思、う……あ、取れた。というかこれ、スイッチ一つで簡単に取れるじゃん」
誰がこんなものつけたのか知らないけど、雑な装置もあったもんだ。いやむしろ、こんな取り外し簡単な装置で猿がＳＡＬになるんだから大したものなのかもしれない。ま、そんなこと今はどうでもいいか。どうしてただの猿がＳＡＬになってるかの理由は知ったこっちゃないけど、本人（?）が戻りたいならそれが一番いいと思うし。
「ということで、バイバイＳＡＬ。ほら、僕もまだ人探しの最中でやることあるんだから、行った行った」
「ウ……ウキー?」

「助けてくれたことには一応お礼を言っておきますけど、勝手に外したりしていいのかしら？」
「いいのいいの。『勝ったら協力』とは言ったけど、『負けたら協力しない』なんて一言も言ってないんだから。僕はここで偶然ジュンコと再会した、体中に機械を付けたデュエリスト猿なんてこれっぽっちも見てない。それでいいじゃないの。ジュンコ、そっちもそれでいいね？」
『なんっつーかお前、お人よしだよなぁ……ま、その屁理屈には大いに賛成するがね』
「レッドの言うことを聞くのも癪ですが、まあそれくらいならいいでしょう。明日香さんやももえには話しておきますけど、それ以外には黙っておくわ」
「ウキー！」
　最後に一声上げ、身軽な動きで仲間の猿と一緒に森の中へひょいひょいと去っていく猿たち。
「これで一件落着、かな？」
「あ、いたいた！おーい清明！」
「ジュンコ、貴女こんなところにいたの？」
「やっほー十代、迷惑かけて悪かったね」
「明日香さん！一時はどうなるかと思いましたよー！」

無事に感動のを再会を果たし、これでアカデミアに帰れると思って安心したのもつかの間、十代達の後ろに見覚えのない黒スーツの銃を構えた人たちが走ってきた。
「ああそこの君、こっちの方に我々のＳＡＬ……いや、体中に機械を付けた猿が来なかったかね？」
なんかずいぶんと物騒なもの持ってるし、ここはすっとぼけるのが得策だろう。ということで、猿たちが走っていったのとは真逆の方向を指さしておいた。
「え、えーっと、そういえば見ましたよ。た、確か僕に気付いたらこっちの子を降ろしてすぐにあっちの方に走ってっちゃったんじゃないですかー？」
『嘘下手だコイツー!?』
うん、自分でも今のはちょっとないな、って思った。でま、そんなのでもあっさり騙されてくれたらしい。
「そうか、わかった！よしお前ら、追うぞ！」
「はっ！」
そして十代がポツリと漏らした一言、
「いったいこりゃ、何の騒ぎだったんだ？」
っていうのが今日の全てを物語ってると思う。ちなみにその後結局万丈目は見つからず、しかも帰りにはレッド寮前でわざわざ張り込みしてたクロノス先生に捕まってし

まい、かなり辛い一日を過ごすことになったとだけ言っておく。というかそれ以上思い出したくない……。

ターン１３　怪奇！人造人間召喚術！

アカデミアは今、冬真っ盛りです。冬休みになって他の寮の生徒は大半が島を出て行っちゃったけど、レッド寮住民は……というか、僕の周りの人たちはなぜかみんな島に残ってるので特に問題は無し。偶然って凄い。

そして今、僕らが何をしているかというと。

「あーらよっ、と」

夜の寒い寒い空気の中、雪がしんしんと降り積もるレッド寮屋根の上での雪下ろしという苦行のような作業をしていた。明日の朝にでもやればいいと思ってたんだけど、大徳寺先生曰く『そんなのんびりしたこと言ってたら確実に屋根が抜け落ちるんだニャ～』だそうだ。古い建物だとは前から思ってたけど、まさかそこまでひどい、じゃなかった……えーっと、味がある建物だとは思わなかった。ちなみにその大徳寺先生はというと、寮の中で隼人やファラオと一緒に餅を焼いて待っている。なにこの理不尽。というか、

「十代、ホントにちゃんとやってる?なんかさっきから僕一人で頑張ってる気がするんだけど」

「え？お、おう！……よし続きだ翔、クレイマンでサイクロイドを攻撃！」
「あれ？」
なんか今、明らかにおかしい一言が聞こえたような？まあでも、きっと気のせいだろう。さすがに屋根で作業してるのが僕だけだなんてことあるわけ……
『……バカだな十代。だから言ったろ、もう少し声抑えないとサボってんのばれるぞって』
「しっかりしてくださいよアニキ～」
「じゅ～うだ～い？しょ～う？ユーノ～？」
「しまった!!い、いや違うんだ清明！ユーノ、そうユーノが俺らがデュエルするのが見たいって言うからしかたなく……！」
『おいコラちょっと待て十代、なに人に罪かぶせようとしてんだ！』
「問答無用！今降りるから三人ともそこで待って「た、助けてくれー!!」……え、何ごと？」
助かったあ、と下に降りてデュエルしていた三人がほっと息を吐くのを目の片隅でとらえながら、森の奥からこっちに向けて走ってくる一人のブルー生のところへ近寄る。
「えーと、いったいどうしたの？」
「た、頼む!!ヤツが来るんだ、とにかくここにかくまってくれ～!!」

「高寺オカルトブラザーズ?」
「はい、僕とあと二人で結成した、デュエルモンスターズの精霊について調べる会で……」
　まあ要約すると、興味本位でサイコ・ショッカーの精霊をこっくりさんの要領で呼び出そうとしたら三体の生け贄を要求され、アドバンス召喚に必要なリリースの事だと思い軽い気持ちでＯＫしたら次の日に一人、また次の日にもう一人のメンバーが行方不明になったらしい。そして彼、高寺自身も今日の昼にサイコ・ショッカーらしき何かと遭遇したらしい。マジですかおい。ただ、いつもニコニコしてるイメージだった大徳寺先生が珍しく真面目な顔をしているところから、少なくともただ事ではなさそうだ。
「じゃあ高寺、だったか?今夜はこの寮に泊まってけよ。そのかわり、お前ブルー寮なんだろ?俺とデュエルしようぜ!!」
「ええ!?デュエル、ですか?」
「十代、ちょっと落ち着きなよ。明らかにそんな気分じゃないって様子じゃないの」
『かわいい目してんな……俺は好きなんだよな、怯えた小動物のような目をしたヤツが』
「いきなり何言ってんのこの人」

『ここで言わなきゃ男がすたる気がした。反省も後悔もしてない。でも似合わなかったろうなぁとは思ってる』
「あの、さっきから何をブツブツ言ってるんですか？」
「あ、いやいや！なんでもないよ、なんでも！」
「そう、ですか。じゃあすいません大徳寺先生、今夜だけでもここにご厄介になっても……」
　そこまで言った時にブツン、と音がして、いきなり寮中の電気が消えた。
「え、停電？」
『見事なまでに真っ暗だな』
「おい翔、隼人、そんなにくっつくなよ！」
「みなさん落ち着くのニャ、今ブレーカーを戻すのニャ！」
　そしてまた、電気がついた。こんなタイミングでいきなりブレーカーが落ちるなんて、いくらなんでも空気の読みすぎでしょ。不意打ち過ぎたわ。
「あれ？高寺どこ行った？」
「「「……え？」」」
　ふと見ると、さっきまで七輪のそばにうずくまってあったまっていた高寺の姿が見えない。何かが動く気配がしてパッと振り向くと、そこにはさっきまでいなかった黒ずく

めの格好をしたいかにも怪しい男が小脇に気絶した高寺を抱え、森の奥に走っていくのが見えた。
「あれって、もしかして……」
『はら、なにボサッとしてんだ!』
「急がないと危ない!追いかけるぞ、みんな!」
「う、うん!」

「え～っと、ここは?」
「ここは、デュエルアカデミアに電気を送る送電施設なんだニャ。危ないから普段は鍵がかかってるはずなんだけどニャー」
「あ、高寺!おーい、大丈夫!?」
　金網で囲まれたそこにはいくつもの発電機っぽい建物が建っていて、その中央にはなぜか広場……そして、その奥に見覚えのあるブルー生が一人倒れていた。さっきの怪しい奴はいないみたいだけど、いったいどうなってるんだろう?と思いながら足を踏み入れたその瞬間……。
「邪魔をしないでもらおうか」
　え?……まずありえないとはいえ翔や隼人のＴＰＯを読まないいたずらの可能性

もあるので、ギギイッと音がしそうなぐらいぎくしゃくと後ろを振り返る。
「……この声、一体どこから？」
「ききっとお化けッスよアニキ、さっさとみんなで逃げましょうよ～」
「そ、そうなんだな。とりあえず寮まで戻った方が……」
「馬鹿野郎、高寺を見捨てる気か？俺は行くぜ！」
『よし行け清明、お前もだ！』
「ん、んな他人事だと思って！いや放っておくわけにもいかないから結局は行くんだけどさ」
『どうせ俺にとっちゃあ他人事だしな。つーか膝震えてるけど大丈夫かお前』
「セリフ前半と後半の優しさの量が全然違うんだけどこれどーゆーこと!?」
　相変わらずの言い合いをしながらも、おっかなびっくり近づいてみる。と、またさっきの声がした。
「お前たち、ここに何の用がある」
「うるせー！お前、もしかして本物のサイコ・ショッカーの精霊なのか？」
「……いかにも。私の名はサイコ・ショッカー」
「やっぱりそうか……！」
　今度は僕が、その自称サイコ・ショッカーに向かって声をかける。一緒に来ておいて

十代に全部任せるってのもどうかと思うし。
「ならサイコ・ショッカー、一つ聞かせてもらうよ!一体お前は高寺と、その前にいなくなった二人をどうする気だ!!」
「知れたこと、我が復活のための生け贄となってもらう。それに、私はお前の言う三人に対してきちんと『生け贄を捧げろ』と要求し、そいつらはそれに了承した。何がおかしいのだ?」
うっ……いくら勘違いしてたとは言え、それ言われるとつらいなぁ。でも、僕が一瞬怯んでも十代は全く迷わない。それどころか、とんでもないことを言い出した。
「だったらこうしようぜ、サイコ・ショッカー!俺が、お前とデュエルする!もし俺が負けたら、その生け贄とやらに俺も追加してやるよ!」
「十代……!」
「え～アニキ、その『俺たち』ってもしかして僕も入ってるんですか!?」
「心配するなよ、翔!俺が負けるわけないだろ!」
「……なるほど。お前、それとその横にいるお前もだ。精霊を見ることができる程度の力は持っているようだし、どうせ生け贄にするなら強い力を持った人間のほうがいいだろう。その提案、乗ってやる」
「そうこなくっちゃな!いくぜ、サイコ・ショッ「待て!!」……え?」

「精霊が見えるのは、そこの二人だな。まずは、そちらの人間から相手してやろう」
「え、僕!?」
ちょ、なんでいきなり僕が入るわけ!?十代だけに危険な橋を渡らせるなんてことやったら後で自分の良心に押しつぶされそうだし断るつもりはあんまりないけど、流石に文句の一つでも言ってやろうとして口を開いた瞬間、
「ちょっと待てよ、こいつは別に関係ないだろ!サイコ・ショッカー、俺とデュエルしろ!」
どうしてこう人が何か言う暇もくれないのかねこの子は。
「弱そうな方から順に倒す、戦い方の基本だろう?」
「おいちょっとまて、その挑発乗ったぁ!十代、間違っても止めないでよ!」
「え、お、おう……」
『ふふふ、弱そうな方、か……くくっ、こりゃなかなかの名言来たな……ぷっ』
セリフのところどころに違和感を感じてなるべく首を動かさないようにそっと後ろを振り向くと、最大限に声を立てないようにしながら体を曲げて爆笑してるユーノを視界の端でちらりと捉えた。このデュエル終わったら、アイツはどうしてくれようか。
「「デュエル!!」」
宣言した瞬間に頭上の電線から雷が落ちて、そこに立っていたのはサイコ・ショッ

カーそのもの。ええい、そんなことでいちいち驚いてられるかっ！
「先攻は私が貰おう。ドロー！私は、永続魔法エクトプラズマーを発動。そして、怨念のキラードールを召喚する」
エクトプラズマー
永続魔法
各プレイヤーは自分のターンのエンドフェイズ時に1度だけ、自分フィールド上の表側表示モンスター1体を生け贄に捧げ、元々の攻撃力の半分のダメージを相手プレイヤーに与える。
怨念のキラードール　攻１６００
「そして速攻魔法、手札断殺を発動。さあ、手札を入れ替えろ」
手札断殺
速攻魔法
お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送る。
その後、それぞれ自分のデッキからカードを2枚ドローする。
「カードを三枚セットしてターンエンド……の前にエクトプラズマーの効果発動！キラードールをリリースし、８００ポイントのダメージを受けてもらう！」
清明　ＬＰ４０００→３２００

「ぐっ……僕のターン、ドロー!」
「そこでトラップカード、ギャンブルを発動!宣言するのは裏だ!」
「ギャ、ギャンブル!?」
サイコ・ショッカーが発動したのは、あのデュエルキング武藤遊戯さんの親友である城之内克也さんが使ったという、外れた時の条件があまりにもキツいドローカード。そういや城之内さんもサイコ・ショッカーの使い手だって話だけど……まあ、別に関係ないだろう。って当ててるし!コイン裏出ちゃったよしっかりと!!
ギャンブル
通常罠
相手の手札が6枚以上、自分の手札が2枚以下の場合に発動する事ができる。
コイントスを1回行い裏表を当てる。
当たった場合、自分の手札が5枚になるようにデッキからカードをドローする。
ハズレの場合、次の自分のターンをスキップする。
「これでよし……私は、手札を五枚にする」
「き、気を取り直していくぞ!オイスターマイスターを召喚!そしてバトル!オイスターマイスターでダイレクトアタックだ!」
オイスターマイスター

効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻１６００／守　２００
このカードが戦闘で破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、自分フィールド上に「オイスタートークン」（魚族・水・星１・攻／守０）１体を特殊召喚する。
オイスターマイスター　攻１６００→サイコ・ショッカー（直接攻撃）
サイコ・ショッカー　ＬＰ４０００→２４００
「エクトプラズマーがうっとうしいな。カードを一枚セットして、エクトプラズマーの効果!行け、オイスターマイスター!」
サイコ・ショッカー　ＬＰ２４００→１６００
「なんだ、あっさりダメージは通すのか……ふん、偉そうなこと言ってその程度?オイスターマイスターの特殊効果でオイスタートークンを特殊召喚、これでターンエンド」
オイスタートークン　守０
清明　ＬＰ３２００　手札：４　モンスター：オイスタートークン（守）　魔法・罠：１（伏せ）
サイコ・ショッカー　ＬＰ１６００　手札：５　モンスター：なし　魔法・罠：２（伏せ）、エクトプラズマー

「私のターン、ドロー。この時、墓地にいる怨念のキラードールの効果を発動！甦れ、キラードール!!」
怨念のキラードール
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／攻１６００／守１７００
このカードが永続魔法の効果によってフィールド上から墓地に送られた場合、
自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地から特殊召喚する。
「ここでトラップ発動、フィッシャーチャージ！オイスタートークンをリリースして、エクトプラズマーを破壊！」
「その程度か？ならば私もトラップ発動、サイコ・ショックウェーブ！手札を一枚捨ててデッキからわが分身、サイコ・ショッカーを特殊召喚する！」
フィッシャーチャージ
通常罠
自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースし、
フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。
選択したカードを破壊し、デッキからカードを1枚ドローする。
サイコ・ショックウェーブ

通常罠
相手が罠カードを発動した時、
手札から魔法・罠カード1枚を捨てて発動できる。
自分のデッキから機械族・闇属性・レベル6のモンスター1体を特殊召喚する。
人造人間―サイコ・ショッカー
効果モンスター
星6／闇属性／機械族／攻２４００／守１５００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
お互いに罠カードの効果は発動できず、
フィールド上の全ての罠カードの効果は無効化される。
「そしてサイコ・ショッカーの効果によりフィッシャーチャージは無効になるが、コストにしたオイスタートークンは帰ってこない。これでお前の場はがら空きになり、私の場のモンスターの総攻撃力は４０００。これで私の勝ちは確定したな……だが、一応他の手も打てるようにしておこう。手札のジェスター・コンフィを特殊召喚する」
ジェスター・コンフィ
効果モンスター
星1／闇属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０

このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚できる。
この方法で特殊召喚した場合、次の相手のエンドフェイズ時に
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、
そのモンスターと表側表示のこのカードを持ち主の手札に戻す。
「ジェスター・コンフィ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。
「まだまだぁ!その特殊召喚に対して手札のドラゴン・アイスの効果発動!手札を一枚捨てて特殊召喚、そして今捨てたハリマンボウの特殊効果により、サイコ・ショッカーの攻撃力を下げる!」
『馬鹿だねえ、いらんことせずにそのまま攻撃すりゃあいいのに。余裕ぶっこいてるからだな』
ドラゴン・アイス
効果モンスター
星5／水属性／ドラゴン族／攻1800／守2200
相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、
自分の手札を1枚捨てる事で、このカードを手札または墓地から特殊召喚する。
「ドラゴン・アイス」はフィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。
ドラゴン・アイス　守2200

ハリマンボウ
効果モンスター
星３／水属性／魚族／攻１５００／守　１００
このカードが墓地へ送られた時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。
人造人間―サイコ・ショッカー　攻２４００→１９００
「小賢しい真似を……まあいい、ジェスター・コンフィに装備魔法、ワンダー・ワンドを装備する。そしてワンダー・ワンドの効果でコンフィをリリースし2枚ドロー。永続魔法ウイルスメールを発動し、怨念のキラードールを選択。直接攻撃」
『ほう、この状況でウイルスメールか。ってことはあの手札の中には大方アレだろうな、リビデあたりが入ってんだな』
ワンダー・ワンド
装備魔法
魔法使い族モンスターにのみ装備可能。
装備モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。
また、自分フィールド上のこのカードを装備したモンスターと

このカードを墓地へ送る事で、デッキからカードを２枚ドローする。
ジェスター・コンフィ　攻０→５００
ウイルスメール
永続魔法
１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する
レベル４以下のモンスター１体を選択して発動する事ができる。
このターン、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
そのモンスターはバトルフェイズ終了時に墓地へ送られる。
怨念のキラードール　攻１６００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３２００→１６００
「カードをセットし、ターンエンドだ。そしてエクトプラズマーの効果でサイコ・ショッカーをリリースし、元々の攻撃力の半分である１２００ポイントのダメージを与える」
「ハリマンボウで下げた意味が……」
『いや、全くないってわけじゃねえぞ。少なくともドラゴン・アイスは生き残った』
清明　ＬＰ１６００→４００
「僕のターン、ドロー！下手に展開して激流葬とか撃たれたらやだな……ドラゴン・アイスを攻撃表示に変更して、そのままダイレクトアタック！」

ドラゴン・アイス　守２２００→攻１８００
ドラゴン・アイス　攻１８００→サイコ・ショッカー（直接攻撃）
「うおおおおおおおっっっっ!!!」
「やった!これで一件落着!」

「ふ、ふふふ」

「ははははははははっ！惜しかったな、人間！」
サイコ・ショッカー　ＬＰ１６００→７００
「ラ、ライフが９００しか減ってない……でもどうして」
「理由は単純だ。私はリバースカード、ダメージ・ダイエットを発動していた」
『お、ほんとにリビデ以外の手で耐えきったか。わざわざフラグ立てたかいがあったな』
ダメージ・ダイエット
通常罠
このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。
また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、

そのターン自分が受ける効果ダメージは半分になる。
そ、そんな……状況はかなりまずい。というか勝てない。このままターンエンドしたら、エンドフェイズにエクトプラズマーで４５０ダメージが通る。それからサイコ・ショッカーのターンでキラードール復活、それに合わせてドラゴン・アイス蘇生、それからウイルスメールの効果……いや、それすら使う必要もないのか。バトルフェイズなんてわざわざしなくてもドローゴーでエンドフェイズに移行してエクトプラズマーの効果を使う。ただそれだけで、僕のライフはゼロになる。でも、こんな状況だってのにユーノはまだまだ余裕っぽい。一体、なんでこんなに余裕なんだろう?まだ何か、僕の気づいてない勝ち筋があるの?
「くそっ、わからない……」
『……しゃーねーなあ、俺も消えたくはないし、今回は交代してやるよ。でも、こんな手ぐらい自分で気づいてほしかったぞ』
悔しくて、情けなくて、何も言い返せない。ユーノは何も言わずにポン、と僕の肩に慰めるように手を置いて、いつもとは違った優しい笑みを浮かべて見せた。
『ちょい言い過ぎたな。でも大丈夫だ、これからたっぷり強くなる時間はある。今は、そっちで俺が勝つのを見てろって』
その言葉を最後に、僕とユーノが入れ替わる。まっすぐに立ってサイコ・ショッカー

と対峙するユーノの背中を、ただ見ていることしか僕にはできなかった。
「よし、選手交代だぜ。今からお前をぶち倒してやるよ、精々覚悟しときな」
「様子が変わった……？まあいい、なにをたわごとを。私の勝利は今度こそ確定している」
「さてさて、そいつはどうかな？マイフェイバリットカード、霧の王（キングミスト）を召喚！このカードは自身の効果で、リリースなしでの召喚もできるのさ」
霧の王　攻０
「ふん、いくらレベルが高くても攻撃力ゼロのモンスターに一体何ができる」
「俺の狙いはそこじゃないんだな、これが。そして墓地のハリマンボウとオイスターマイスターを除外して、墓地から爆征竜―タイダルを特殊召喚する。カードを二枚セットし、ターンエンドだ」
「エクトプラズマーの効果を……なに、発動されないだと!?」
「おい清明、お前霧の王を単なる最高打点としてしか使ってなかっただろ……まあ無理ねえけど。使ってる方も時々忘れそうになる霧の王の第二の効果！このカードがいる限り、いかなるリリースも行えない！つまり、発動条件が『モンスターを生け贄にする』のエクトプラズマーの発動はされなくなる！」
霧の王

効果モンスター
星７／水属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０
このカードを召喚する場合、生け贄１体
または生け贄なしで召喚する事ができる。
このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた
モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。
爆征竜―タイダル
効果モンスター
星７／水属性／ドラゴン族／攻２６００／守２０００
自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族
または水属性のモンスターを合計２体除外して発動できる。
このカードを手札・墓地から特殊召喚する。
特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。
また、このカードと水属性モンスター１体を手札から墓地へ捨てる事で、
デッキからモンスター１体を墓地へ送る。

このカードが除外された場合、
デッキからドラゴン族・水属性モンスター1体を手札に加える事ができる。
「瀑征竜―タイダル」の効果は1ターンに1度しか使用できない。
そうか、確かにこの効果を使えばダメージは通らない……そして、今ユーノが伏せた二枚のカード、あのカードさえあれば！
清明　ＬＰ４００　手札：０　モンスター：霧の王（攻）、ドラゴン・アイス（攻）、爆征竜―タイダル（攻）　魔法・罠：２（伏せ）
サイコ・ショッカー　ＬＰ７００　手札：４　モンスター：なし　魔法・罠：エクトプラズマー、ウイルスメール
「まあいい、どうせ私の場にはまだウイルスメールがあるし、第一あの霧の王は攻撃表示だ。私のターン、ドロー！そして、怨念のキラードールを再び復活させる！」
「はっ、そいつを待ってたのさ！リバース発動、激流葬！」
カードから飛び出した荒れ狂う水流がフィールドを暴れ回り、合計三体のモンスターを一度に押し流していく。水が引いた時、フィールドはカラになっていた。
激流葬
通常罠（準制限カード）
モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動できる。

フィールド上のモンスターを全て破壊する。
「だが、私が今ドローした死者蘇生でサイコ・ショッカーを特殊召喚すれば」
「させねえよ……もう一枚のリバース、激流蘇生を発動!」
今度カードから溢れる水は、先ほどの水流とは真逆の力を持った水。ユーノの場に二本の水柱が立ち、その中から霧の王とドラゴン・アイス、タイダルが姿を見せる。
激流蘇生
通常罠
自分フィールド上の水属性モンスターが
戦闘またはカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時に発動できる。
その時に破壊され、フィールド上から自分の墓地へ送られたモンスターを全て特殊召喚し、
特殊召喚したモンスターの数×５００ポイントダメージを相手ライフに与える。
「激流蘇生」は1ターンに1枚しか発動できない。
「俺が今蘇生したモンスターは3体。従って１５００ポイントのダメージだ。ダメージ・ダイエットのもう一つの効果を使っても、どうしようもねえな」
「ば、馬鹿なあぁぁ!!」
サイコ・ショッカー　ＬＰ７００→０

ライフがゼロになり、すうっと消えていくサイコ・ショッカー。いつの間にか雪もやみ、空にかかっていた黒雲も消え、朝日が差し込んでまわりも明るくなっていた。もうすぐ、デュエルアカデミアに春が来るんだろう。僕は、次に春が来るまでにはもっと強くなれるんだろうか？

自分の体に戻り、思わずへたり込んで空を見上げる。風が、静かに木の葉を揺らしていた。

ターン１４　伝説！世界最強の片鱗！

「うわあああああっ!!……また、かぁ」
『また、だな。うるさくて寝れやしねーぜ』
「……ゴメン」
　ふと枕元の時計を見ると、まだ夜真っ盛りの午前２時。やれやれ、もういいかげんになんとかなんないのかな。
『なあ清明、今日もいつもの夢か？』
「まーね。僕はもう立ち直ってるつもりなんだけど」
　ここんところ一週間ぐらい、同じ夢ばかり見る。山の中でドローの練習してた人に会った日も、ゴブリン使いの二人組と十代がデュエルした日も、なんかテニス部の人と十代がデュエルするのを観戦してた日も。そしてその夢の中で、僕はデュエルしている。でも、どんなに手を尽くしてもすぐにモンスターが消え、セットカードが割られ、手札が捨てられて。最終的にはサイコ・ショッカーの攻撃を食らってライフがゼロになるところでいつも目が覚める。そしてその夢の中で、なによりも深刻な問題が。
「もう無理、むこう十年くらいサイコ・ショッカーは見たくない……やだよあのいろん

な意味で濃い顔と二人っきりで毎日会うとか」
『トラウマなのそこかよ!……お前、つくづくズレてるよな。せっかくシリアスになりかけたところをギャグで落としに来るか』
「んなこと言われても僕は負けるなんてもう慣れっこだし、確かに悔しいとは思うけど怖いなんて考えたことないからさあ」
そう、僕は昔っからデュエルが弱かった。近所の子と遊ぶ時も決まってビリだった。そのたんびに泣きそうになるのをぐっとこらえて、再戦を申し込んで。たま~に誰かから一勝でももぎ取れると、毎回すごく嬉しかったっけ。懐かしいな、あの頃が。あえて戻りたいとは思わなかったけど。まあ今思えば、そんなに負けがかさんだのもタクティクス以前のデッキ構築の問題だったんだけど。上級下級モンスターのバランスとか、ピンポイント過ぎるメタカードとか。
『僕は、か。別に俺だって、強いデュエリストだったわけじゃないんだぜ?むしろ勝ち星の方が少ないし』
「嘘」
『マジ。ま、そんなことはいいさ。自分から話振っといてなんだけど、生前のことはあんま思い出したくねーし。それより、あれ確か今日じゃないのか?お前も楽しみにしてたろ』

「あ、そうだった!しょうがない、もっかい寝なおすのは無理だしこのまま購買の前に陣取って整理券だけ貰っとくとしよう」

『警備員さん真夜中のガッコで床に寝転んでる見るからに怪しい男はコイツです』

「……やっぱ部屋にいます」

『今はああ言ってるけど、あの目には見覚えがあるな。ありゃ……負けることを本気で怖がってる奴の目だ。手遅れになる前にどっかで矯正してやらねーとな』

まあ結局あの後一睡もできずに、気が付けば朝までデッキに入れたいけど枚数的に無

理なカードとにらめっこして過ごしていた。この作業、毎回楽しいけど難しいんだよねえ。まあ今回は特に入れ替えなかったけど。なんだったんだあの四時間。
「それで清明、なんで今日は朝からお前も翔も妙にドタバタしてるんだ？ユーノは眠そうだけど」
『十代、俺は眠そうなんじゃない……眠いんだ』
「あーうん、だからごめんってばユーノ。十代は十代で、ちょっとは授業寝ないで聞いてみようよ……昨日チラシまで貰ったじゃん。」
「う。まあ、固い事言うなって！」
「どこが!?ってあれ、翔？」
わいわい言いながら昼食にドローパンを求めて購買に行くと、そこにはレッドとイエロー、それと見覚えのあるブルーの人だかりが。いやあの、廊下のど真ん中で居座られちゃ通れないんだけど。
「三沢、一体どうしたんだ？」
「夢想、おっひさー。何やってんのこれ」
一瞬だけ十代と顔を見合わせ、それぞれ別方向から情報収集にかかる。まあ、ちょっと前の方を見ればわざわざ人に聞くまでもなかったんだけど。翔が、誰かイエロー生とデュエルしていた。

「ちなみに、今デュエルしてるイエロー生の名前は神楽坂。座学に関してはとても優秀な生徒なんだが、いかんせん記憶力がよすぎてな。自分でデッキを組んでみると、どうしても他の誰かが作ったものそっくりになってしまうんだ」
「ちなみに、今使ってるデッキはクロノス先生と同じ【古代の機械】だってさ。本人に言ったら【暗黒の中世】って言いなおされるだろうけど、だって」
「なるほどねえ……あ、翔が勝った。というか、一体なんでまたこんなところでデュエルしてたのさ」
「整理券だよ、あれの」
　そう言って三沢が指差した先には、伝説のデュエルキング武藤遊戯さんがデュエルディスクを構えたポーズの写真がプリントされた一枚のチラシ。ああ、そういうことね。遊戯さんのデッキ展示の整理券か。
「でもおっかしーな、僕が整理券取りに行ったときに翔も一緒についてきたはずなんだけど」
「マジかー!なんで俺もその時起こしてくれなかったんだよ～!」
「……ごめん、これというのも全部サイコ・ショッカーのせいなんだわ」
「へっ?なんだそりゃ?」
　いや、実際あの悪夢のせいで朝は毎日精神的に余裕ないし。

「まあいいや。それで翔、結局その整理券は誰の分なんだ？」
「何言ってるんスか。アニキのに決まってるでしょう？ホントは朝の時に二枚もらってくるつもりだったけど、うっかり忘れちゃってて」
「翔――！ありがとうなー!!」
　なんかいい話っぽくまとまったところで、ちょうどチャイムが鳴る。さて、午後の授業に行きますか。
『ん、今日は昼飯は抜きなのか？』
「あ。と、トメさーん！ドローパン三つちょうだいっ！」
「そういえば私も明日香たちに頼まれたんだった、なんだって。ちょっと遅れちゃったけど……私も三つ下さいな」
　お詫びも込めて十代達の分も買って行こうっと。あんまお金ないけど。

「というわけで清明、翔、それに隼人にユーノ。せっかくだから行ってみようぜ、遊戯さんのデッキを見に」
　部屋のど真ん中で仁王立ちになり、胸を張った十代がそんなことを言い出したのは、その日の夜のことだった。というか、『大事な話があるから飯食ったら来てくれ』なんて言うから何事かと思ったら、そんなことか。方法もわかんなけりゃ、明日になれば見れ

るのにわざわざ夜の学校に忍び込んでまで見る理由もわからない。だから当然返事は……。

「行くに決まってるじゃないの十代!・というか、むしろ十代の話が終わったらこっちから誘おうと思ってたのに同じこと考えてんだもんなー」

『ですよねー。まあそんな気はしてたぜ、とりあえず俺も一枚噛むから連れてけよ』

結局満場一致で忍び込むことに決めた。ここまでの間約一分。素早いことはいいことだ。そしてひとたびすることが決まれば、あとはレッド寮特有の行動力がものを言う。こんなことばっかやってるから成績がからっきしなんだろうなあ、なんて思わないでもない今日この頃。

『わかってんならちっとは勉強せい』

「あー聞こえない聞こえなーい!!」

「おい清明、警備員に見つかったらどうすんだよ!・お、あの部屋だ。みんな、着いたぞ!」

「む、君たちも来ていたのかい?」

「あれ、三沢!?」

声の方を見ると、なるほど確かに三沢。まあわざわざこんな時間にこの部屋の前にいるんだから、用件は推して知るべし。

「声が大きいぞ、十代!・整理券は持っているんだが、今日は気になって眠れそうにないん

でな。いっそのこと人が少ない今のうちに見るだけ見てみようかと」
「なるほどな。意外だったな、俺たち以外にも同じことを考えるやつがいたなんて」
「ちなみに私も来てるよ、だってさ」
「っ!?夢想、一体いつからいたの……？」
「たった今ね、だって」
　それにしても、ひい、ふう、みい……ユーノを人数としてカウントしないとしても六人か。忍び込んで何かするにはちょっと人数が多い気もするけど、そんなもん今更気にしてたってしょうがないので突撃。しようとした瞬間、校舎中に絶叫が響いた。
「なんだなんだ！」
「今の声、クロノス先生か？」
『お、始まったか』
「一体どうしたんだな、まさかお化けでも出たのか？」
「隼人君、そんな怖い事言わないでよ！」
「……とりあえず行ってみようか、だってさ」
「そだね」
　ということで慌てて駆け付けるとなぜか鍵がかかってるはずのドアが開いていて……ふむ、せっかく持ってきた針金が無駄になった。って、そんなことはどうでもい

いんだよ。むしろ重要なのはその部屋の中。部屋のど真ん中に配置されたガラスケースは割れていて、その横で鍵を持った姿勢のまま彫像のように固まっているクロノス先生。あー、えーっと、これは……

「クロノス先生、ついにドロボウまで」

「今ならまだ謝って全部返したら許してもらえるんじゃあ?」

「とりあえず、警備員さんに言わなきゃ」

「ちょちょちょちょちょ、ちょっと待つのーネ!」

あ、復活した。とりあえず顔がえらいことになってるから涙をふきなさい。って言いたいのを我慢して、一体何があったのか事情を聴く。いくらなんでも先生は鍵持ってんだし、わざわざケース破らなくても持ち出しちゃうことはできるだろうし。そして、ついさっきまでデッキは間違いなくあったこともわかった。ここから導き出せる結論、それはつまり!

「まだｈ「まだ犯人はこの近くにいるはずだ、みんなで手分けして探そう!」

三沢……セリフとらないでよ……。せっかく夢想もいることだし、カッコよく決めようと思ったのに。はあ、海の方でも探しに行ってみようかな。

「あ、翔。どう?なんかいた?」

「清明君、こっちは全然。もしかして、もう犯人はこの島にいないんじゃあ……」
「う～ん……ん？ね、もしかしてアレ、今日の昼にもいた神楽坂とかいう人じゃあ」
「あ、本当だ！おーい、そんなところで何してるんだよー！」
『……ほんっとに一度勝った相手には強気になれるタイプなんだな、翔』
　やたらと勝ち気な翔に、そんな翔の態度にちょっと呆れた様子のユーノ。ただ、神楽坂はこちらに背を向けたまま仁王立ちで海の方を見ている。別におかしなところはない。ただなんなんだろうか、このなんとも言えない嫌な予感は。と、今までこちらを無視し続けていた神楽坂がゆっくりと振り返る。その目は、不自然なほどの喜びと自信に満ち溢れていた。
「丸藤翔か、ちょうどいい。このデッキの実験台になってもらうぜ！」
「え、デュエル？……いや、アニキだったらこの勝負も受けて立つはず！いいよ、また返り討ちにしてあげるから！」
「……えっと。置いてきぼりを食らったわけですが、どしたらよかろうでしょうかユーノさん」
『デュエルディスクの調子をチェックしとけよ。どうせすぐ出番だ』
「うわあっ！」

翔　ＬＰ０

「もう負けた!?っていうか今のモンスターってあの」

『有翼幻獣キマイラ……【遊戯デッキ】を作るときにはほぼ必須モンスターだな』

「うう、ごめん清明君……負けちゃった」

「くっ、神楽坂!そのデッキ、やっぱり遊戯さんのだろ!」

「そうだが、それがどうかしたか?」

「今度は僕が相手だ!僕が勝ったら大人しくそのデッキは返してもらうよ!……翔、今すぐみんなをここに呼んできて!」

「わ、わかった!」

そう言って、ダダダッと駆けていく翔。よし、あとは十代や三沢、夢想あたりが来れば僕が負けたとしてもなんとかなる!もっとも僕がここで勝てば、そんなこと心配する必要もないんだけどね!

「なるほど、今のデュエルを見ていながらなお向かってくるとは大した自信だと思ったが、お前はただの時間稼ぎか。だがまあ関係ない、なにしろ今の俺が持つデッキは武藤遊戯さんのデッキ、つまり今の俺の力はデュエルキングにも匹敵するからだ!」

「御託はいいからかかってきなよ、それともこっちの時間稼ぎに付き合ってくれてるの？」

「フン、精々今のうちに粋がっておけ！それでは、このデッキの恐ろしさを味あわせてやる！」
「「デュエル！」」
「先攻は俺が貰う！モンスターを一枚セット、さらに永続魔法、凡骨の意地を発動！カードを伏せてターンエンドだ」
凡骨の意地
永続魔法
ドローフェイズにドローしたカードが通常モンスターだった場合、
そのカードを相手に見せる事で、自分はカードをもう1枚ドローする事ができる。
「僕のターン、ドロー！」
『セットモンスターは壁だろうな。クリッターもう使えねえし（※1）、さすがに禁止カードは抜いてあるだろ。ってことは、だいたい三択だな』
※1　２０１３年３月２７日現在の情報です
三択？えっと、ホーリー・エルフと岩石の巨兵と……あとなんだったっけ？この２枚は破壊神の系譜のイラストにも出てるから覚えたんだよね。まあいいや、確かあの２体の守備力は２０００、つまり攻撃力２００１あれば突破できるはず！
『考え方は間違ってないけどな、なんだよ攻撃力２００１って。出せるもんなら出して

みろ』

「いいのっ!僕は、永続魔法ウォーターハザードを発動!その効果でアームズ・シーハンターを召喚するよ」

一瞬フィールドに波が覆いかぶさり、水が引いた後には上半身が人型、だけど下半身がいかにも海竜っぽい弓を片手にしたモンスターがいた。

アームズ・シーハンター

効果モンスター

星４／水属性／海竜族／攻１８００／守　４００

自分フィールド上にこのカード以外の水属性モンスターが存在する場合、

このカードと戦闘を行った効果モンスターの効果をダメージ計算後に無効化する。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊される場合、

代わりに自分フィールド上に表側表示で存在する

レベル３以下の水属性モンスター１体を破壊できる。

「そして、ウミノタウルスを通常召喚!」

ウミノタウルス

効果モンスター

星４／水属性／水族／攻１７００／守１０００

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分フィールド上の魚族・海竜族・水族モンスターが
守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
「これだけじゃ終わらないよ、フィールド魔法発動、ウォーターワールド！」
ウォーターワールド
フィールド魔法
フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、
守備力は４００ポイントダウンする。
アームズ・シーハンター　攻１８００→２３００　守４００→０
ウミノタウルス　攻１７００→２２００　守１０００→６００
「よし、準備は整った。アームズ・シーハンターでセットモンスターを攻撃！さらにウミノタウルスの効果で、貫通ダメージも受けてもらうよ！」
「ふっ、残念だったな！セットモンスターは守備力２６００、ビッグ・シールド・ガードナーだ！」

アームズ・シーハンター　攻２３００→???　守２６００
清明　ＬＰ４０００→３７００
「うわっ!で、でもビッグ・シールド・ガードナーには攻撃表示になるデメリット効果が……」
『いや、無理だ!』
「えっ!?だってあのモンスターのテキストにはちゃんと」
ビッグ・シールド・ガードナー
効果モンスター
星４／地属性／戦士族／攻　１００／守２６００
フィールド上に裏側表示で存在するこのモンスター１体を対象にする魔法カードの発動を無効にする。
その時、このカードは表側守備表示になる。
このカードは攻撃された場合、ダメージステップ終了時に攻撃表示になる。
「ほら、やっぱり」
『馬鹿野郎、アームズ・シーハンターの効果無効能力を完全に逆手に取られたんだよ。今のガードナーは守備力２６００でノーデメリットの壁モンスターだ』
「むむむ。えーい、このままターンエンド!」

清明　ＬＰ３７００　手札：２　モンスター：アームズ・シーハンター（攻）、ウミノタウルス（攻）　魔法・罠：ウォーターハザード　場：ウォーターワールド
神楽坂　ＬＰ４０００　手札：３　モンスター：ビッグ・シールド・ガードナー（守）
魔法・罠：凡骨の意地、１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！ドローカードは通常モンスターのジャックス・ナイト、よっても
う一枚ドロー！このカードも通常モンスターのクイーンズ・ナイト、さらにドローだ！
念のため手札に残しておいたが、その程度のタクティクスの奴が相手ならここで出して
も問題なさそうだな！手札の融合を発動し、手札のキング、ジャック、クイーンの三騎
士を融合！来い、アルカナ　ナイトジョーカー!!」
『いや、それ使うのかよ！とかいうツッコミも疲れてきたなぁ』
融合
通常魔法
手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた
融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体を
エクストラデッキから特殊召喚する。
アルカナ　ナイトジョーカー
融合・効果モンスター

星９／光属性／戦士族／攻３８００／守２５００
「クィーンズ・ナイト」＋「ジャックス・ナイト」＋「キングス・ナイト」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが、
魔法カードの対象になった場合は魔法カードを、
罠カードの対象になった場合は罠カードを、
効果モンスターの効果の対象になった場合はモンスターカードを、
手札から１枚捨てる事でその効果を無効にする。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。
「ジョーカーでウミノタウルスを攻撃する!切り札(ジョーカー)の力を見せてやれ!」
ジョーカーが片手で軽々と操る巨大な剣がウミノタウルスの持つ二枚貝の斧とぶつかり合い火花を散らす……が、すぐにウミノタウルスがその斧ごと真っ二つに切り裂かれてしまった。
アルカナ　ナイトジョーカー　攻３８００→ウミノタウルス　攻２２００（破壊）
清明　ＬＰ３７００→２１００
「ぐっ……でもまだだ!まだ諦めるもんか!僕のターンドロー!伝説の都　アトランティスを発動、フィールド魔法の張替えだ!」

『もともと粘り強い奴だとはいえ、今回のこの妙なやる気……もしかして、自分に自信が欲しいのか？負けることは怖いけど自分の実力に自信がなくなってきた、サイコ・ショッカーの時途中で諦めかけた自分が情けなくて悔しくて、だからここで伝説扱いされるデッキに勝って自信を取り戻したい、ってとこか。この場合俺は応援してやりゃいいのか？一回どん底まで叩き落としてやるのがアニメ的には正しい気がしないでもないが……いや、今の俺にとっちゃここが「現実」か。なら……』

伝説の都　アトランティス

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００ポイントアップする。

また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは１つ下がる。

アームズ・シーハンター　攻２３００→２０００　守０→６００　☆４→３

「わざわざフィールドを張り替えたか。そこまでして、一体何をする気だ？」

「決まってるでしょ？シーハンターをリリースして、超古深海王シーラカンスを召喚！」

超古深海王シーラカンス

効果モンスター

星７／水属性／魚族／攻２８００／守２２００
１ターンに１度、手札を１枚捨てて発動できる。
デッキからレベル４以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効化される。
また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが
カードの効果の対象になった時、
このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター１体をリリースする事で
その効果を無効にし破壊する。
超古深海王シーラカンス　攻２８００→３０００　守２２００→２４００　☆７→６
「そしてシーラカンスに装備魔法、団結の力を装備!攻守８００ポイントアップするよ」
団結の力
装備魔法
装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールド上に表側表示で存在する
モンスター１体につき８００ポイントアップする。
超古深海王シーラカンス　攻３０００→３８００　守２４００→３２００
いわばこれは、とんでもなくハイリスクな賭けだ。神楽坂が団結の力かアトランティ

スのどちらか一枚でも破壊できるカードを持っている、あるいは次にドローしたら……それだけじゃない、仮にそんなカードが無くても最悪次のドローで手札に幻獣王ガゼルみたいなアタッカーが来ればシーラカンスとジョーカーが相打ちになったところでダイレクトアタックされ、敗色がかなり濃くなってしまう。でも、もしもこのターンを膠着状態で乗り切ることができればまだ逆転のチャンスがある。可能性は低いけど。でも守備表示で出せば、確かにここではダメージを受けないけどその後がない。次につなげる一手がない。だからこそシーラカンスをあえて攻撃表示で出し、団結の力も発動コストでなく装備させた。さあ、どう出る神楽坂？

「僕はこれで、ターンエンド」

清明　ＬＰ２１００　手札：０　モンスター：超古深海王シーラカンス（攻、団）魔法・罠：ウォーターハザード、団結の力（シ）場：伝説の都　アトランティス

神楽坂　ＬＰ４０００　手札：２　モンスター：ビッグ・シールド・ガードナー（守）、アルカナ　ナイトジョーカー（攻）魔法・罠：凡骨の意地、１（伏せ）

「俺のターン、ドロー！……くそっ。攻撃はしない、ターンエンドだ」

「よし、まだいける！僕のターン、ドローしてシーラカンスの効果発動！手札を一枚コストにしてデッキからシャクトパス、ハリマンボウ、竜宮の白タウナギ、フィッシュボーグ―アーチャーを全員守備表示で特殊召喚！」

シャクトパス　守８００→１０００　攻１６００→１８００　☆４→３
オイスターマイスター　守２００→４００　攻１６００→１８００　☆３→２
竜宮の白タウナギ　守１２００→１４００　攻１７００→１９００　☆４→３
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００→５００　攻３００→５００　☆３→２
超古深海王シーラカンス　攻３８００→７０００　守３２００→６４００
「いっけえ!シーラカンスでジョーカーを攻撃!マリン・ポロロッカ!」
「かかったな!トラップ発動、聖なるバリアーミラーフォース―!!」
全身に激流を纏って突撃していったシーラカンスだったが、ジョーカーに攻撃が届く寸前その目の前に鏡のようなものが現れ、そこから出てきたシーラカンスの偽物とぶつかり合って消えてしまう。
聖なるバリアーミラーフォース―
通常罠（準制限カード）
相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。
相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊する。
「そんな、シーラカンスが……」
『ミラーフォースは対象を取らないから、な。なるほど神楽坂、さすがのプレイングだな』

清明　ＬＰ２１００　手札：０　モンスター：シャクトパス（守）、オイスターマイスター（守）、竜宮の白タウナギ（守）、フィッシュボーグ―アーチャー（守）　魔法・罠：ウォーターハザード　場：伝説の都　アトランティス
神楽坂　ＬＰ４０００　手札：３　モンスター：ビッグ・シールド・ガードナー（守）、アルカナ　ナイトジョーカー（攻）　魔法・罠：凡骨の意地
「どうした、ターンエンドか？ならば俺のターン、ドロー！俺はビッグ・シールド・ガードナーをリリースし、ブラック・マジシャン・ガールを召喚！そしてガールが場に存在することで、賢者の宝石を発動！デッキからブラック・マジシャンを呼び出すぜ！」
ブラック・マジシャン・ガール
効果モンスター
星６／闇属性／魔法使い族／攻２０００／守１７００
お互いの墓地に存在する「ブラック・マジシャン」
「マジシャン・オブ・ブラックカオス」１体につき、
このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。
賢者の宝石
通常魔法
自分フィールド上に「ブラック・マジシャン・ガール」が

表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
自分の手札またはデッキから、「ブラック・マジシャン」１体を特殊召喚する。
ブラック・マジシャン
通常モンスター
星７／闇属性／魔法使い族／攻２５００／守２１００
魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。
『出たな、マジシャンコンビ。待ってましたー』
「さあ、攻撃だ!ジョーカーで白タウナギを、ガールでアーチャーを、ブラック・マジシャンでオイスターをそれぞれ攻撃!」
アルカナ　ナイトジョーカー　攻３８００→竜宮の白タウナギ　守１４００（破壊）
ブラック・マジシャン・ガール　攻２０００→フィッシュボーグ―アーチャー　守５００（破壊）
ブラック・マジシャン　攻２５００→オイスターマイスター　守４００（破壊）
「で、でもまだシャクトパスが……」
「メインフェイズ２、千本ナイフを発動!対象はシャクトパスだ!」
千本（サウザンド）ナイフ
通常魔法

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が
表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する。
「さあ、俺はターンエンドだ。どうだ、このデッキの力！」
「ぐっ……」
『よし決めた、せっかく俺もここにいるんだし、発破くらいはかけてやりますかね』
「え、今何か言った？」
『ああ。……なあ清明、まさかこんなとこで音を上げるんじゃねえだろうな？』
「で、でも……相手はあの遊戯さんのデッキだし、実際問題さっきからダメージだって通ってないし」
『お前もあれだな、強気になったり弱気になったり忙しい奴だな。なあ、そんなにデッキが信用できねえか？』
「えっ？」
『だってそうだろ？デュエルの途中であきらめるってのは、単に自信のなさの現れだぜ？と、俺は思う。まだデッキにはカードが残ってるし、墓地は肥えてる。手札がちと心もとないけど、ま、次のドローがあるだろ。次で起死回生の一発を引く。絶対に引く。そんなことも信じられないようじゃ、デュエリストなんてやってけないぜ。だいたい、

昨夜の話を聞く限りじゃ昔のお前だってそう思ってたんだろ?その点だけ見りゃ、今のお前よりも前の方が数段マシだろうな。負けることを考えてそれを怖がってちゃ、その時点でもう負けてんだよ。何回負けたって次に食らいついてきゃいい、つまりはそーゆーこと』

ハッとした。ほんっと、コイツには背中押してもらってばっかりだよなぁ……でも、確かにそうだったかもしれない。あれだけ強気になってたのも、負けることへの恐怖の裏返しだったのかも。ちょっと目をつむって、深呼吸をする。こんなことをするのは、サイコ・ショッカーの事件以来初めてかもしれない。でも、おかげでちょっと目が覚めた。感謝の念を込めて振り返ると、ユーノといつの間にか出てきていたシャーク・サッカーと目が合った。ありがとう。

「僕のターン、ドロー!アトランティスの効果でレベル４になった深海の怒りを召喚!」

深海(レイジ・オブ・ディープシー)の怒り

効果モンスター

星５／水属性／魚族／攻　　０／守　　０

このカードの攻撃力・守備力は、自分の墓地の魚族・海竜族・水族モンスターの数×５００ポイントアップする。

『な、言った通りだろ?逆転の一手ってのは、出ると思ってりゃ出せるもんなんだよ。本

気で願うなら、デッキは何かしら応えてくれるもんさ』
「今の僕の墓地にいるのはシーハンター、ウミノタウルス、シーラカンス、シャクトパス、オイスターマイスター、アーチャー、白タウナギ、そしてシーラカンスのコストで捨てたシャーク・サッカーの計八体。さらにアトランティスの上昇値も加えて、攻撃力はジョーカーを超える４２００!」
「馬鹿な、まだそんなモンスターを出すことができたのか!?」
深海の怒り　攻０→４２００　守０→４２００
「まずはジョーカーに攻撃!・アビス・ライジング!」
深海の怒り　攻４２００→アルカナ　ナイトジョーカー　攻３８００（破壊）
神楽坂　ＬＰ４０００→３６００
清明　ＬＰ２１００　手札：０　モンスター：深海の怒り（攻）魔法・罠：ウォーターハザード　場：伝説の都　アトランティス
神楽坂　ＬＰ３６００　手札：１　モンスター：ブラック・マジシャン（攻）、ブラック・マジシャン・ガール（攻）魔法・罠：なし
「俺のターン、ドロー。……これでターンエンドだ」
「やけっぱちにしては、あの余裕たっぷりな顔……一体何をたくらんでるんだろう？どうにも怪しいけど、僕のターン！深海の怒りでブラック・マジシャンを攻撃、アビス・

ライジング!」
深海の怒り　攻４２００↓ブラック・マジシャン　攻２５００（破壊）
ブラック・マジシャン・ガール　攻２０００↓２３００
「この時、手札からクリボーの効果発動!その戦闘ダメージを０にするぜ!」
クリボー
効果モンスター
星１／闇属性／悪魔族／攻　３００／守　２００
相手ターンの戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から捨てて発動する。
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
「クリボーじゃ戦闘破壊は防げないし、ブラマジがいなくなったから千本ナイフの二本目や騎士の称号がきても大丈夫だけど、やっぱり嫌な予感が……モンスターをセット、ターンエンド」
清明　ＬＰ２１００　手札：０　モンスター:深海の怒り（攻）、???　魔法・罠:ウォーターハザード　場：伝説の都　アトランティス
神楽坂　ＬＰ３６００　手札：１　モンスター：ブラック・マジシャン・ガール（攻）
魔法・罠：凡骨の意地
「俺のターン、ドロー!:まず、天よりの宝札を発動!:この手札一枚と場のブラック・マジ

シャン・ガール、凡骨の意地を除外して二枚ドロー。さらに貪欲な壺を発動するぜ、デッキに戻すカードはブラック・マジシャン、ビッグ・シールド・ガードナー、絵札の三騎士だ。二枚ドロー！」

天よりの宝札

通常魔法

自分の手札と自分フィールド上に存在する全てのカードをゲームから除外する。

自分の手札が2枚になるようにカードをドローする。

貪欲な壺

通常魔法（制限カード）

自分の墓地のモンスター5体を選択して発動できる。

選択したモンスター5体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを2枚ドローする。

たった一枚のドローから、一気に手札を三枚まで増やされた。うーん、本当に勝てるかな……いや、そうじゃない。僕はこのデュエル、勝ってみせるんだ！

「さあ、再び俺の逆転だ！墓地の光と闇であるアルカナ　ナイトジョーカーとクリボーを除外！出でよ、カオス・ソルジャー――開闢の使者――!!」

『ほう、思ったよりメンタル強えじゃねえか。もっとも、そうこなくっちゃ面白くないぜ

!』

カオス・ソルジャー――開闢の使者―

効果モンスター（制限カード）

星８／光属性／戦士族／攻３０００／守２５００

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性のモンスターを１体ずつ

ゲームから除外した場合に特殊召喚できる。

１ターンに１度、以下の効果から１つを選択して発動できる。

●フィールド上のモンスター１体を選択してゲームから除外する。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

●このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、

もう１度だけ続けて攻撃できる。

「開闢の効果発動!このターンの攻撃を放棄し、その深海の怒りを除外する!カードを二枚セットし、ターンエンドだ」

「悪いけど、もう僕は吹っ切れてるんでね!まだまだへこたれないよ、こっちも貪欲な壺!シーラカンス、シャクトパス、オイスター、ウミノタウルス、シャーク・サッカーをデッキに戻して二枚ドロー、そしてセットモンスターを反転召喚!スノーマンイーター

の特殊効果で、開闢の使者を破壊！」
ひょっこりと地面から生えてきた雪だるまがシャカシャカと歩き、開闢の使者を押しつぶす。……棒立ちで雪だるまに押しつぶされる開闢が妙にシュールだった。
スノーマンイーター
効果モンスター
星３／水属性／水族／攻　　０／守１９００
このカードがリバースした時、
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して破壊する。
「なら、開闢の破壊に合わせてリバース発動、魂の綱！１０００のライフを払い、デッキから翻弄するエルフの剣士を守備表示で召喚する！」
魂の綱
通常罠
自分フィールド上のモンスターがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、
１０００ライフポイントを払って発動できる。
デッキからレベル４モンスター１体を特殊召喚する。
神楽坂　ＬＰ３６００→２６００
翻弄するエルフの剣士

効果モンスター
星４／地属性／戦士族／攻１４００／守１２００
このカードは攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。
「攻撃力１９００以下のモンスターはいない……スノーマンイーターをリリースして、氷帝メビウスを召喚!さらに効果で、そのセットカードを破壊する!フリーズ・バースト!」
「残念だったな、フリーチェーンだ!砂塵の大竜巻を発動、この効果でアトランティスを破壊するぜ!」
氷帝メビウス
効果モンスター
星６／水属性／水族／攻２４００／守１０００
このカードがアドバンス召喚に成功した時、
フィールド上の魔法・罠カードを２枚まで選択して破壊できる。
砂塵の大竜巻
通常罠
相手フィールド上の魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。
その後、自分の手札から魔法・罠カード1枚をセットできる。

「アトランティスまで……ターンエンド」
清明　ＬＰ２１００　手札：１　モンスター：氷帝メビウス（攻）　魔法・罠：ウォーターハザード
神楽坂　ＬＰ２６００　手札：０　モンスター：翻弄するエルフの剣士（守）　魔法・罠：なし
「俺のターン、ドロー！黒魔術のカーテンを発動！ライフポイントを半分払い、デッキからもう一度ブラック・マジシャンを特殊召喚！」
黒魔術のカーテン
通常魔法
ライフポイントを半分払って発動する。
自分のデッキから「ブラック・マジシャン」１体を特殊召喚する。
このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。
神楽坂　ＬＰ２６００→１３００
ブラック・マジシャン　攻２５００
「メビウスの攻撃力が越えられた!?」
「翻弄するエルフの剣士を攻撃表示に変更し、バトル！ブラック・マジシャンでメビウスを攻撃、黒・魔・導!!」

ブラック・マジシャン　攻２５００→氷帝メビウス　攻２４００（破壊）
清明　ＬＰ２１００→２０００
「そのまま、翻弄するエルフの剣士で追撃!精・剣・斬!」
『あれ、それ本家エルフの剣士の攻撃名だったような……まあいっか』
翻弄するエルフの剣士　攻１４００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ２１００→７００
「さあ、それで終わりか?俺はターンエンドだ」
「まだまだ、さっ!ドロー、封印の黄金櫃を発動して、選択するカードは爆征竜―タイダル!そしてタイダルの効果でブリザード・ドラゴンをサーチして召喚!」
封印の黄金櫃
通常魔法
自分のデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外する。
発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にそのカードを手札に加える。
爆征竜―タイダル
効果モンスター
星７／水属性／ドラゴン族／攻２６００／守２０００
自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族

または水属性のモンスターを合計２体除外して発動できる。
このカードを手札・墓地から特殊召喚する。
特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。
また、このカードと水属性モンスター１体を手札から墓地へ捨てる事で、
デッキからモンスター１体を墓地へ送る。
このカードが除外された場合、
デッキからドラゴン族・水属性モンスター１体を手札に加える事ができる。
「瀑征竜―タイダル」の効果は１ターンに１度しか使用できない。
ブリザード・ドラゴン
効果モンスター
星４／水属性／ドラゴン族／攻１８００／守１０００
相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターは次の相手のエンドフェイズ時まで
攻撃宣言をする事ができず、表示形式を変更する事もできない。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。
「ブリザード・ドラゴンの効果をブラック・マジシャンに発動、パーフェクトフリーズ！
さらに、翻弄するエルフの剣士に攻撃する！」

ブリザード・ドラゴン　攻１８００↓翻弄するエルフの剣士　攻１４００（破壊）
神楽坂　ＬＰ１３００↓９００
「また形勢逆転っ!これでターンエンドだよ」
清明　ＬＰ７００　手札：１　モンスター：ブリザード・ドラゴン（攻）魔法・罠：ウォーターハザード
神楽坂　ＬＰ９００　手札：０　モンスター：ブラック・マジシャン（攻）魔法・罠：なし
「すぐに巻き返してやるぜ、ドロー!ちっ、ホーリー・エルフを守備表示で召喚してターンエンドだ」
ホーリー・エルフ
通常モンスター
星４／光属性／魔法使い族／攻　８００／守２０００
かよわいエルフだが、聖なる力で身を守りとても守備が高い。
「僕のターン、ドロー!黄金櫃の一ターン目……まあそれはいいとして、もう一度ブラック・マジシャンにパーフェクトフリーズ!カードをセットして、これでターンエンド」
清明　ＬＰ７００　手札：１　モンスター：ブリザード・ドラゴン（攻）魔法・罠：

ウォーターハザード、１（伏せ）
神楽坂　ＬＰ９００　手札：０　モンスター：ブラック・マジシャン（攻）　魔法・罠：なし
「俺のターン！ホーリー・エルフをリリースして、闇紅の魔導師を召喚するぜ。そしてブリザード・ドラゴンに攻撃する！」
闇紅の魔導師（ダークレッド・エンチャンター）
効果モンスター
星６／闇属性／魔法使い族／攻１７００／守２２００
このカードが召喚に成功した時、
このカードに魔力カウンターを２つ置く。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分または相手が魔法カードを発動する度に、
このカードに魔力カウンターを１つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、
このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。
１ターンに１度、このカードに乗っている魔力カウンターを
２つ取り除く事で、相手の手札をランダムに１枚捨てる。

闇紅の魔導師　攻１７００→２３００
闇紅の魔導師　攻２３００→ブリザード・ドラゴン　攻１８００（破壊）
清明　ＬＰ７００→２００
「でも、ここでリバース発動!激流蘇生で、今破壊されたブリザード・ドラゴンを特殊召喚!」
激流蘇生
通常罠
自分フィールド上の水属性モンスターが
戦闘またはカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時に発動できる。
その時に破壊され、フィールド上から自分の墓地へ送られたモンスターを全て特殊召喚し、
特殊召喚したモンスターの数×５００ポイントダメージを相手ライフに与える。
「激流蘇生」は1ターンに1枚しか発動できない。
神楽坂　ＬＰ９００→４００
「なかなかしぶといな……俺はターンエンドだ」
「僕のターン、ドロー!そしてこの時、黄金櫃の封印が解かれてタイダルが僕の手札に。そしてタイダルのもう一つの効果によって、墓地の深海の怒りとアームズ・シーハン

ターを除外して特殊召喚！」

爆征竜―タイダル　攻２６００

「これで終わりにするよ、神楽坂っ!!タイダルとブリザード・ドラゴンをリリースして、マイフェイバリットカード、霧の王を召喚!!」

霧の王（キングミスト）

効果モンスター

星７／水属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０

このカードを召喚する場合、生け贄１体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。

霧の王　攻０→４４００

「そんな、このデッキは世界最強のデッキのはずだ、なのになぜ……」

「僕は人に説教できるほどえらい人間になったつもりなんて一回もないよ。でも一つだけ言うとしたら、僕はこのデッキに対して愛着がある。誇りがある。ちょっとの間揺ら

いでた時期もあったけど、今はこのデッキとカードを全面的に信頼してる。そこらへんにヒントがあるんじゃないかなーなんて思ったり。……ブラック・マジシャンを攻撃だ!ミスト・ストラングル!!」

霧の王　攻４４００→ブラック・マジシャン　攻２５００（破壊）

神楽坂　ＬＰ９００→０

「なん、とか……勝った……」

そう呟いたところで急に足から力が抜けてしまい、ふらふらとその場にへたり込んでしまう。どうやら知らず知らずのうちに、結構緊張してたらしい。全然力が入らない……と、そこでようやく翔の声と、たくさんの足音が聞こえた気がした。というのも、そのまま僕が意識を手放してしまったからだ。なんとなくだけど、あの夢はもう見ない気がした。

「三沢ー、そういや結局さ、神楽坂はどうなったの?」

「ん、知りたいか?」

その次の日のレッド寮、放課後。見舞いがてら遊びに来た三沢にお茶の用意をしながら、ずっと気になっていた事を聞く。恥ずかしい話ではあるけれど、あれからついさっきまでぶっ続けで寝てたから詳しい話はまだ聞いてないんだよね。

「別に大した話ではないさ。きちんとデッキを返して、なんとか穏便に済ませてもらったからそこは安心していいぞ」
「そりゃよかった。ところで、もう一つ聞きたいことがあるんだけど」
「おお、いいぞ。俺に答えられることならな」
「僕が倒れちゃってから、誰がここまで運んできてくれたの？まだお礼が言えてないから、改めて言っておこうと思って」
　そう言うと、なぜかニヤリと笑ってみせる三沢。僕、なにかおかしなことでも言っただろうか。
「河風君だ……と言ったらどうする？」
「……マジ？」
『マジだぜ』
「ああ、大マジだ。誰よりも早く駆け寄って、普段の様子からは考えられないくらい取り乱してたぞ」
「そ、そう……」
　とりあえず、赤くなった顔を見せないように明後日の方を向く。まあ、十中八九ばれてるだろう。三沢のにやにやした顔が何よりの証拠だ。
「そ、それで？今、夢想はどこにいるの？」

「彼女は今『お見舞いの品持ってくる』って言って5分くらい前に出て行ったぞ。ゆうべからつきっきりで君のそばにいたんだから、ちゃんとそこにもお礼を言っとけよ」
　聞き捨てならない言葉について聞き返そうとしたちょうどその時、狙ってたんじゃないかと聞きたくなるくらいのタイミングで扉が開く音がした。
「ただいま、だってさ。三沢、清明の調子はどう?」
「えっと、その……おはよう」
「っ!!起きたの!?よかったぁ、って言ってるよ……」
「さて、それじゃ俺はもう帰るかな、っと」
　そう言ってそっと立ち上がる三沢は、そのまま本当に部屋を出て行っちゃった。おいこらユーノ、なんでお前まで一緒に退出してんだ。二人っきりは……その、嫌じゃないし、むしろ嬉しいんだけど、やっぱり照れくさいというかなんというか。
「ええと、ゆうべはなんでもここまで引っ張ってってくれたみたいで、あ、ありがとう」
「そんなこと気にしないで、だってさ。それより、もう体は平気なの?だって」
「うん、そりゃまあね。別に病気だとか怪我だとかいうわけじゃなし、もうどってことないよ」
「そう……本当によかった、だってさ」
　そこで、会話が止まる。でも、別に気まずくはない。それどころか、ずっとこうして

いたいような気もする。そんなことを考えていると、左手に何かが触れた。ちょっと視線を落とすと、手が握られている。慌てて夢想の顔を見ると、彼女は照れくさそうに微笑んで見せた。

ターン１５　融合!英雄と騎士の意地!

「え、俺?」
「そうなのニャ、三沢君とデュエルして、勝った方がノース校とのデュエルの代表となるんだニャ」
　あいもかわらず何の役に立つのかよくわからないけど聞いてるぶんには結構面白かったりする錬金術の授業中、大徳寺先生が軽い口調でとんでもない話を振ってきた。一瞬固まった部屋の空気の中でやはりというかなんというか、最初に復活したのは彼女だった。
「大徳寺先生、一体何があったんですか?……って聞きたいみたいです」
「いい質問だニャ夢想君。実は～」
　ちなみに彼女の名誉のためにつけたしておくけど、別に今の発言に悪意はない。ただ、つい昨日わざわざ校内放送で『ノース校とのデュエルの代表はシニョール亮に決定したのーネ!!』とえらくハイテンションなクロノス先生からの発表があったことを踏まえてのことだ。

『そんで？ノース校代表が一年だからこっちも一年で対抗しましょう（ｂｙ鮫島校長）↓遊城十代だな（ｂｙカイザー）↓ならば私は三沢大地を推薦するのーネ！（ｂｙクロノス）……ま、ここはそのまんまか』

「そのまんま？何が？まあそんなことはどうでもいいんだよ、問題はさ、僕だってその代表の候補ぐらいにはなってもよかったんじゃないの？ってことなんだよ。一応万丈目には勝てたんだし」

『面白くなさそーな仏頂面で帰ってきていきなり何を言い出すかと思ったらただの愚痴か。でもお前個人だと極端に実力にムラがあるだろ？同じ格上が相手でも勝ちっぱなしの十代と違ってお前勝ったり負けたりでなんかこうパッとしないし』

「うー否定できないー」

『そーゆーこった。ま、諦めて観戦してよーぜ』

「そだね。あ、そうそう十代から呼ばれてたんだった。デッキ調整やるから手伝ってくれって」

『先行ってるぜ～』

「……壁抜けは卑怯だと思う」

『なはは、悔しかったら死んでみーろ』

「僕だって一回死んで……まあいいや、思い出したくもない。それに、どうせこの部屋

の壁抜け程度なら造作もないもんね。よっこらしょっと」

「それでーは、これよりラーイエローの三沢大地と、オシリスレッドのドロップアウ……じゃなかったノーネ、遊城十代によるデュエルを始めますーノ!」

「頑張れ十代、三沢ー!」

「アニキ～、負けるなー!」

『一晩寝てりゃさっぱりしてるあたり、こいつも単純というか素直というか』

「……頑張れ、だってさ」

いつの間にか横に来ていた夢想と一緒に声援を送る。そういや、いまだ入学以来負けなしのはずなのになんで夢想はこっち側にいるんだろうか。選ばれるだけの実力はあるはずなのに。

「私?この間清明と一緒に制裁デュエルやったでしょ。あれの後でまた出すのもなんだからってことで学校側がやめたみたいだよ、だってさ」

「スケール違うねなんか。こっちは単に実力の問題なのに」

「ありがとね、だってさ」

ちょっと得意顔になる彼女を見て、普通にアリだと思ったのはナイショ。ちなみにそ

の頃ステージの中央では、十代と三沢が話し合っていた。
「へへ、お前とこんな早くに戦うことになるとはな」
「ああ、俺も驚いている」
「ところで、七番目のデッキはできたのかよ」
「いや、あれはひとまず保留だ。俺は俺のこれまでに作ってきたデッキを信じることにしたよ」
『……ん？』
へー、じゃあ何を使うんだろ。これまで見たことがあるのは……光の【電池メン】、水の【ウォーター・ドラゴン】だったけど、またそのどっちかだろうか。それとも、まだ見たことない他の属性デッキだろうか。わくわく。
『う～ん、今更とはいえ一体どうなってんだ？もうこっからは全く先が読めねえな……』
もっとも、隣でウチの馬鹿（ユーノ）がうんうん唸ってるせいでやかましくて今一つ集中できなかったけど。
「へえ、ちなみにどんなデッキなんだ？」
「いろいろ考えたんだが十代、俺がお前のデッキにメタを張って勝ってもそれは本当に俺が勝ったことにはならないからな。なるべく同じ条件の元勝ちたい……そう思った時、ぴったりのデッキがあることを思い出したんだ。このデッキは俺の名前と同じ大

地のデッキ、地属性のものだ」
『地属性でＨＥＲＯと同じようなデッキ……ああ、あれか。つーか【磁石の戦士】でも【妖怪】でもないのな』
「え、もう何使うかわかったの!?ところで【磁石の戦士】と【妖怪】って?」
「清明、いきなり何と喋ってるの?だってさ」
「え、ああ、なんでもないよなんでも!あ、ほら始まるよっ!」
慌てて話を振って、再び十代と三沢の方に注意を向けさせる。まったく、こっちの声は人に聞こえるんだからもっと気をつけとかないと。注意注意。
「俺のヒーローと同じような?おお、なんかワクワクしてきたぜ!」
「ああ、俺もだ!」
「「デュエル!!」」
「先攻は俺からだぜ!俺は、手札のクレイマンとバーストレディを融合!来い、ランパートガンナー!」
まず十代の場に先陣切って飛び出し防御の構えをとったのは、いかにもクレイマンとバーストレディの融合形態らしい攻撃的なんだか守備的なんだかよくわからない効果を持ったメカメカしい見た目の女性兵士。
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ランパートガンナー

融合・効果モンスター
星６／地属性／戦士族／攻２０００／守２５００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードが表側守備表示の場合、
守備表示の状態で相手プレイヤーを直接攻撃する事ができる。
その場合、このカードの攻撃力はダメージ計算時のみ半分になる。
「さらに、フレンドッグを守備表示で召喚するぜ。カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」
片膝をつく女戦士の隣に、メカメカしいどころかもろに機械の犬がお座りのポーズをとる。
フレンドッグ
効果モンスター
星３／地属性／機械族／攻　８００／守１２００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
自分の墓地から「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚と
「融合」魔法カード１枚を手札に加える。

「なるほど、守備固めか……ならばあのカードは恐らく!」
「三沢、何ブツブツ言ってんだよー!もうお前のターンだぜー!」
「え、ああ、すまない。俺のターン、ドロー!見せてやるぞ十代、俺の融合戦士を!俺は手札から、ジェムナイト・フュージョンを発動!手札のサフィアとルマリンを融合し、パーズを召喚する!」
三沢の場に現れたのは、トパーズの名を持つ刺激的な黄色のナイト。なるほど、融合の地属性ってジェムナイトのことか。
ジェムナイト・フュージョン
通常魔法
自分の手札・フィールド上から、融合モンスターカードによって
決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、
「ジェムナイト」と名のついたその融合モンスター1体を
融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
また、このカードが墓地に存在する場合、
自分の墓地の「ジェムナイト」と名のついた
モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを手札に加える。
ジェムナイト・パーズ

融合・効果モンスター
星６／地属性／雷族／攻１８００／守１８００
「ジェムナイト・ルマリン」＋「ジェムナイト」と名のついたモンスター
このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ
エクストラデッキから特殊召喚できる。
このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、
破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。
「パーズでランパートガンナーを攻撃する！」
「攻撃力の低いモンスターで攻撃!?怪しいな、ヒーローバリアを発動！その攻撃は止めさせてもらうぜ」
ジェムナイト・パーズ　攻１８００↓Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー　守２５００
ヒーローバリア
通常罠
自分フィールド上に「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターが
表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする。

「お、十代が防いだ!」
『いや、まだわからんぞ。パーズの効果は2回攻撃だから、もう一度ランパートガンナーに攻撃すれば……いや、待てよ。読めたぞ三沢、そういうことか!』
「あれ、今の攻撃の狙いってもしかして、なのかな?」
　ほぼ同じタイミングで何かに気付いたらしい二人。ごめん、何が言いたいのかさっぱりなんだけど。
「かかったな十代!パーズでもう一度攻撃、対象はフレンドッグ!」
『やっぱり!!』……だって!」
　ジェムナイト・パーズ　攻１８００→フレンドッグ　守１２００（破壊）
「そしてパーズのもう一つの効果でフレンドッグの元々の攻撃力分、つまり８００ダメージだ!」
「ぐわっ!」
　十代　ＬＰ４０００→３２００
「やるな三沢……だけど、フレンドッグも効果発動だ!墓地の融合とバーストレディを手札に戻すぜ」
　序盤の攻防は、どうやら三沢の方が若干有利に終わりそうだ。それにしても二人とも、一体何がやっぱりなのさ。

『んー？簡単なことさ、ハナっから三沢の手札にパーズの攻撃力を上げるカードなんてなかったんだろうさ』
「え!?で、でもそれじゃ最初の攻撃は……？」
「あれは多分、伏せカードが攻撃反応だと仮定したうえで、そのカードを無駄打ちさせるための引っ掛けだったんじゃない？なんだって」
「そ、それじゃあ」
『ああ。確かに最初の攻撃がそのまま通ってりゃ、無駄にダメージを受けただけだったな。ただ、十代は1ターン目からランパートガンナーとフレンドッグの二体で守備固めをしてきた。なら、伏せカードがその守りをさらに強化するものでも不思議じゃないってこった。特に、十代の引きの強さならな』
　つまり三沢は、あるかどうかわからない攻撃反応罠に賭けて今の攻撃を、一瞬の迷いすらせずに繰り出したのか……つくづく凄いな、三沢。僕には真似できない戦い方だと思う。
『俺もあえて真似しようとは思わん』
　あ、はい。ですよねー。
「ふむ……あえてこの状況でバーストレディの回収を優先したか。なるほど十代、今のお前の手札はフェザーマンだな？そして返しのターンでフレイム・ウィングマンを召

喚して俺にダメージを与えるつもりだろう」
「んなっ!ど、どうしてそう思うんだよ!」
「簡単なことだ。パーズの攻撃力は１８００、ならば確かに俺がどんなカードを持っているかわからないとはいえ少なくとも単体で突破されることの少ないクレイマンを回収するのが基本というものだろう。だが十代、お前はあえてバーストレディを回収した。つまり、次の融合でパーズを突破できる組み合わせのモンスターが確実に出せるということ。バーストレディの融合体なら、一番可能性が高いのはフレイム・ウィングマンだというだけさ。カードを一枚伏せてターンエンドだ」
「ぐ、ぐぅ……」
十代　ＬＰ３２００　手札：３　モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー（守）
魔法、罠：なし
三沢　ＬＰ４０００　手札：２　モンスター：ジェムナイト・パーズ（攻）　魔法・罠：１
「俺のターン、ドロー!……三沢、確かに俺の手札にはフェザーマンがいる。でもな、俺のヒーローの融合には無限の可能性があるんだぜ!手札のフェザーマンとワイルドマンを融合!ワイルド・ウィングマンを召喚だ!そして手札のバーストレディを捨てて、そのセットカードを破壊!」

バッサバッサと翼を広げ地面に降り立つ、人の体と言い鳥脚といい微妙にハーピーと似てなくもないような気がしないでもない鳥人ヒーローが、その白い羽根から衝撃波を放ち三沢のセットカードを木端微塵にする。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルド・ウィングマン

融合・効果モンスター

星８／地属性／戦士族／攻１９００／守２３００

「Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

手札を１枚捨てる事で、フィールド上の魔法・罠カード１枚を破壊する。

「かかったな、十代！今破壊された荒野の大竜巻の効果で、ワイルド・ウィングマンを破壊する！」

衝撃波をまともにくらってバラバラになったセットカードから竜巻が巻き起こり、とても速いスピードでフィールドを駆け十代の方に近づいたそれがワイルド・ウィングマンをあっという間に飲み込んでしまう。

荒野の大竜巻

通常罠

魔法＆罠カードゾーンに表側表示で存在するカード１枚を選択して破壊する。

破壊されたカードのコントローラーは、
手札から魔法または罠カード1枚をセットする事ができる。
また、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、
フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。
『えぐいなー。これ、普通にフレイム・ウィングマン出しときゃ攻撃通ったじゃねえか』
「ワイルド・ウィングマンが……なら、背に腹は代えられないか。ランパートガンナーを攻撃表示に変更して、バトル!ジェムナイト・パーズに攻撃、ランパート・ショット!」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー　攻２０００→ジェムナイト・パーズ　攻１８００（破壊）
三沢　ＬＰ４０００→３８００
「これで俺はターンエンドだぜ」
「俺のターン、ドロー!墓地のルマリンを除外し、ジェムナイト・フュージョンを墓地から回収する……そして融合だ、ジェムナイト・フュージョン!手札のガネットとアンバーを融合し、来い!ジェムナイト・ルビーズ!」
二体目に現れたナイトの色は、赤。色合いがよく映える真っ青なマントをなびかせて、鎌を持った戦士がランパートガンナーの前に仁王立ちする。

ジェムナイト・ルビーズ
融合・効果モンスター
星６／地属性／炎族／攻２５００／守１３００
「ジェムナイト・ガネット」＋「ジェムナイト」と名のついたモンスター
このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ
エクストラデッキから特殊召喚できる。
１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する
「ジェム」と名のついたモンスター１体をリリースして発動できる。
このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで
リリースしたモンスターの攻撃力分アップする。
また、このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
「攻撃力２５００……！」
「ルビーズでランパートガンナーを攻撃する！行け、ルビーズ！」
ジェムナイト・ルビーズ　攻２５００→Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー　攻２０００（破壊）

十代　ＬＰ３２００→２７００
「このターン、俺は通常召喚をしていない。モンスターをセットしてターンエンドだ」
十代　ＬＰ２７００　手札：０　モンスター：なし　魔法、罠：なし
三沢　ＬＰ３８００　手札：０　モンスター：ジェムナイト・ルビーズ（攻）、???（守）
魔法・罠：なし
「十代、ここが正念場だね」
『そーだな。まあ十代だし、ここ一番でカードが引けないなんてありえねえだろ』
「俺のターン、ドロー!……このカードは!カードを一枚セットして、ターンエンドだぜ!」
「伏せカードが一枚、か。まあいい、ドロー!ジェムナイト・アイオーラを召喚し、アイオーラでダイレクトアタック!」
ジェムナイト・アイオーラ
デュアルモンスター
星４／地属性／水族／攻１３００／守２０００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する

事で、
このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●1ターンに1度、自分の墓地の「ジェム」と名のついたモンスター1体をゲームから除外して発動できる。
自分の墓地の「ジェムナイト」と名のついたカード1枚を選択して手札に加える。
このまま2体のナイトの攻撃を受けたら、十代のライフは0になる。が、やっぱり黙ってやられる十代じゃなかったようだ。
「リバース発動、クリボーを呼ぶ笛！デッキからハネクリボーを守備表示で特殊召喚だ！」
クリボーを呼ぶ笛
速攻魔法
自分のデッキから「クリボー」または「ハネクリボー」1体を選択し、
手札に加えるか自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
ハネクリボー
効果モンスター
星1／光属性／天使族／攻　３００／守　２００
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時に発動する。

発動後、このターンこのカードのコントローラーが
受ける戦闘ダメージは全て０になる。
「ならばアイオーラの攻撃を中止し、ルビーズでハネクリボーを攻撃!」
ジェムナイト・ルビーズ　攻２５００→ハネクリボー　守２００（破壊）
十代　ＬＰ２７００→４００
「そんな、なんで俺がダメージを受けたんだ?」
『十代……ハネクリの弱点についてはテストのときに教えといてやっただろうが。もう忘れたんか』
「確かハネクリボーの効果って、自分が戦闘するときのダメージは防げないんだっけ、って聞きたいみたい」
「うん、そのはずだよ。……（だよね、ユーノ?）」
『せーかい。ったく、困ったもんだ。こりゃ後で詰め込み直しだな』
観客席で僕がまた一つ賢くなったところで……あ、もちろん僕は知ってたよ?ホントホント、僕ちゃんとわかってたから。あ、あはははは……。コ、コホン、とにかくハネクリボーは破壊されて、十代のライフが一気に削られたわけで。
「アイオーラをこのままにするのは危険か。メイン２でルビーズの効果を使えば……いや、まあいいだろう。ここでターンエンドだ」

十代　ＬＰ４００　手札：０　モンスター：なし　魔法、罠：なし
三沢　ＬＰ３８００　手札：０　モンスター：ジェムナイト・ルビーズ（攻）、ジェムナイト・アイオーラ（攻）、???（守）　魔法・罠：なし
「頼むぜ、俺のヒーロー達……！俺のターン、ドロー！」
ここで逆転しない限り、十代にとっては最後となる一手。会場にいる全員が、息をのんで十代のドローカードを見守る。さあ、その結果は……？
「よっしゃあ！俺の手札がこのカード一枚の時、バブルマンは手札から特殊召喚できる！さらにバブルマンの効果発動、カードを２枚ドロー！」
『出たな、強欲な泡男！』
Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン
効果モンスター
星４／水属性／戦士族／攻　８００／守１２００
手札がこのカード１枚だけの場合、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に
自分のフィールド上と手札に他のカードが無い場合、
デッキからカードを２枚ドローする事ができる。

「さらに、装備魔法バブル・ショットをバブルマンに装備!これで攻撃力アップだ、アイオーラに攻撃!バブル・ショット!」

巨大な、まるで水鉄砲のような形状の銃を片膝ついて構えたバブルマンが、勢いよくその銃から泡を発射してアイオーラを押し流す。

バブル・ショット

装備魔法

「Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン」にのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力は８００ポイントアップする。

装備モンスターが戦闘で破壊される場合、

代わりにこのカードを破壊し、装備モンスターの

コントローラーへの戦闘ダメージを０にする。

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻８００→１６００→ジェムナイト・アイオーラ　攻１３００（破壊）

三沢　ＬＰ３８００→３５００

「カードを一枚セットして、ここでターンエンドだ!」

「俺のターン、ドロー!駄目だ、このカードだけではバブルマンの処理ができなくて、次のターン十代に流れを持って行かれる……しょうがない、あまり自分からは使いたく

なかったんだが背に腹は代えられないか。セットモンスターを反転召喚、メタモルポット！さあ十代、カードを５枚ドローするんだ」

メタモルポット

効果モンスター（制限カード）

星２／地属性／岩石族／攻　７００／守　６００

リバース：お互いの手札を全て捨てる。

その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを５枚ドローする。

「ただし俺はこれだけでは終わらん、今手札から捨てたジェムナイト・ラズリーの効果により墓地のガネットを回収、そして召喚する！」

ジェムナイト・ラズリー

効果モンスター

星１／地属性／岩石族／攻　６００／守　１００

このカードがカードの効果によって墓地へ送られた場合、

自分の墓地の通常モンスター１体を選択して手札に加える事ができる。

ジェムナイト・ガネット

通常モンスター

星４／地属性／炎族／攻１９００／守　　０

ガーネットの力を宿すジェムナイトの戦士。
炎の鉄拳はあらゆる敵を粉砕するぞ。
「そして墓地のラズリーを除外し、ジェムナイト・フュージョンをまた手札に。そしてまた発動！手札のクリスタと場の岩石族メタモルポットを融合して現れろ、ジェムナイト・ジルコニア！」
拳がメラメラと燃えている赤みがかったオレンジ色の闘士の隣に現れた３体目の融合ジェムナイトの色は、クリスタル。ダイヤモンドそっくりの輝きを放つヘビィ・ナックルを両腕に装着した、余分な効果を全て捨てての戦闘力に特化したパワーファイターだ。
ジェムナイト・ジルコニア
融合モンスター
星８／地属性／岩石族／攻２９００／守２５００
「ジェムナイト」と名のついたモンスター＋岩石族モンスター
「バトル！ガネットでバブルマンを攻撃！」
ジェムナイト・ガネット　攻１９００→Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻１６００（バブル・ショット破壊）
Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻１６００→８００

「続いてルビーズでもバブルマンを攻撃！」
「セットカード発動、バブル・シャッフル！ジルコニアとバブルマンを守備表示に変更、さらにバブルマンをリリースしてエッジマンを特殊召喚！」
ルビーズの鎌があと一歩でバブルマンに届く寸前、周りにバブルマンの姿が見えなくなるほど大量の泡が湧く。そしてその泡の中から姿を見せるのは、金色に輝く鎧を着た十代のメインデッキ最強の攻撃力を持つモンスター、エッジマン。
バブル・シャッフル
速攻魔法
「Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン」がフィールド上に
表側表示で存在する時のみ発動する事ができる。
自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン」１体と
相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター１体を守備表示にする。
守備表示にした「Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン」１体を生け贄に捧げ、
「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のつくモンスター１体を手札から特殊召喚する。
Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン
効果モンスター
星７／地属性／戦士族／攻２６００／守１８００

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が越えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
ジェムナイト・ジルコニア　攻２９００→守２５００
「エッジマンとは、また厄介なモンスターを……悔やんでも仕方がないか、カードを一枚伏せてターンエンド」
十代　ＬＰ４００　手札：４　モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン（攻）　魔法、罠：なし
三沢　ＬＰ３８００　手札：３　モンスター：ジェムナイト・ルビーズ（攻）、ジェムナイト・ガネット（攻）、ジェムナイト・ジルコニア（守）　魔法・罠：１
「いくぜ、三沢!俺のターン、死者蘇生でワイルドマン復活!さらに融合を発動してワイルドマンとエッジマンを融合!ワイルドジャギーマンを召喚だ!」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン
融合・効果モンスター
星８／地属性／戦士族／攻２６００／守２３００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をする事ができる。
「さらに魔法カード、Ｈ―ヒートハートを発動！ワイルドジャギーマンの攻撃力を５００ポイントアップさせるぜ」
燃え上がるＨの文字をバックに、ワイルドジャギーマンが自らに気合を入れる。
Ｈ―ヒートハート
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。
そのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が越えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
この効果は発動ターンのエンドフェイズまで続く。
Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン　攻２６００→３１００
「ワイルドジャギーマンでガネット、ルビーズ、ジルコニアに攻撃！インフィニティ・エッジ・スライサー！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン　攻３１００→ジェムナイト・ガネット　攻１９００（破壊）

三沢　ＬＰ３８００→２６００
Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン　攻３１００→ジェムナイト・ルビーズ　攻２５００（破壊）
三沢　ＬＰ２６００→２０００
Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン　攻３１００→ジェムナイト・ジルコニア　守２５００（破壊）
三沢　ＬＰ２０００→１４００
「カードをセットして、ターンエンドだ」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン　攻３１００→２６００
「すごい、ここまで巻き返した……!」
「やるね、だってさ」
『三沢も三沢で、ちょっと勝負を急ぎすぎてたかもしれねえけどな。それにしたってつくづく大したもんだ、十代』
「ふっ、だがそれでこそ面白い!俺のターン、ドロー!手札の死者蘇生を発動、墓地のジルコニアを蘇生!」
「またワイルドジャギーマン以上の攻撃力のモンスターが」
ジェムナイト・ジルコニア　攻２９００

「ああ、だがそれだけじゃないぞ。墓地のクリスタを除外し、ジェムナイト・フュージョンをもう一度手札に。そして発動し、場のジルコニアと手札のアンバー、エメラルを融合！見せてやるぞこのデッキの切り札、ジェムナイトマスター・ダイヤ!!」

満を持してフィールドに現れる、これまでのジェムナイトたち以上の威厳をもつ騎士の王にして宝石の王。ワイルドジャギーマンが思わずといった感じで一歩退いたように見えたのは、僕の気のせいだろうか。

ジェムナイトマスター・ダイヤ

融合・効果モンスター

星９／地属性／岩石族／攻２９００／守２５００

「ジェムナイト」と名のついたモンスター×３

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚できる。

このカードの攻撃力は、自分の墓地の「ジェム」と名のついたモンスターの数×１００ポイントアップする。

また、１ターンに１度、自分の墓地のレベル７以下の「ジェムナイト」と名のついた融合モンスター１体をゲームから除外して発動できる。

エンドフェイズ時まで、このカードは除外したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る。

「ダイヤは墓地にいるジェムナイトの力を自分のものにできる……まず、俺の墓地にいるジェムナイトはサフィア、パーズ、アンバー、アイオーラ、ガネット、ルビーズ、ジルコニア、アンバー、エメラルの９体だ、したがって攻撃力が９００ポイントアップする。もっとも俺はダイヤの特殊効果を発動、墓地のパーズを除外してその効果と名前を得る!」

「パーズの効果……フレイム・ウィングマンが二回攻撃するのと同じあれか!」

三沢が効果を発動すると、ダイヤの手にする大剣に埋め込まれた宝石の一つ……トパーズがひときわ強い輝きを放つ。

ジェムナイトマスター・ダイヤ　攻２９００→３７００

ジェムナイトマスター・ダイヤ→ジェムナイト・パーズ

「最後のバトルだ!パーズとなったダイヤで、ワイルドジャギーマンに攻撃!」

「なあ、三沢!」

「……?どうした、十代」

「デュエルって、やっぱり面白いよな!最後まで何が起きるかわからなくてよ!」

「ああ、そうだな。楽しかったぞ、十代!」

宝石の大剣とワイルドジャギーマンの抱える剣。二つの剣がフィールドのど真ん中でぶつかり合い、爆発を起こす。

ジェムナイト・パーズ（ジェムナイトマスター・ダイヤ）　攻３７００→Ｅ・ＨＥＲＯ
ワイルドジャギーマン　攻２６００（破壊）
十代　ＬＰ４００→０
「どうやら、今回は俺の勝ちのようだな」
「それはどうかな？これが俺の、最後のトラップだ！リバースカードオープン、英雄変化
―リフレクター・レイ!!」
英雄変化（チェンジ・オブ・ヒーロー）―リフレクター・レイ
通常罠
自分フィールド上に存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついた融合モンスターが
戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。
破壊された融合モンスターのレベル×３００ポイントダメージを相手ライフに与える。
「なに!?まだそんな隠し玉を持っていただと!?」
「だから言ったろ、デュエルは最後まで何が起こるかわからないって！」
三沢　ＬＰ１４００→０

「いやー、終わった終わったー!」
『そういや、結局ノース校の件どーすんだろーな。引き分けだから二人出します、ってのは無理だろ』
「じゃあ清明、私は寮に帰るからね?だってさ」
「うん、それじゃあまた」
「また明日会おうね、だって」
そう言って夢想が席を立っ……た瞬間、校内放送が響いた。この声、校長だな。
「三沢大地君、遊城十代君、お疲れ様でした。両者ともに、素晴らしいデュエルでしたね。さて、すみませんが二人とも、それにオシリスレッドの遊野清明君、オベリスクブルーの天上院明日香さん、河風夢想さんは、このあと校長室まで来てください」
「『えっ?』」

とりあえずさっき呼ばれた5人で集まって校長室へ歩いていく……んだけど、僕と十代はちょっと顔色が悪い。というか行きたくない。もちろん、校長室に行きたくないということはそれ相応の理由があるワケで。
「ねえ十代。……まさかとは思うんだけど、『アレ』ばれたのかな?」

「い、いや、大丈夫……だろ？ほら、大徳寺先生だって2階に上がってきたことはないし、昼は俺らと一緒に学校にいるわけだし、な……」
「貴方達、さっきから何の話かしら？」
「い、いや、こっちの話だぜ明日香！」
「一体お前ら、何をやらかしたんだ？」
「や、やだなー三沢ったら！別に何もしてないよっ！」
「ホントに？嘘ついたら駄目だよ、だってさ」
「う」
　見るなー！そんなまっすぐな目で僕を見ないでくれー！
「で、お遊びはいいとして。貴方達が一体何をしたのか、正直に言いなさい」
　十代と顔を見合わせて、アイコンタクトだけでなんとかこの場を言い逃れるすべがないか緊急会議を開く。
「（十代、なにかいい話題ある？）」
「（さっぱり思いつかないぜ。清明も、何かあるか？チクショウ、なんで校長室はこんな遠いんだよ！）」
「（いや、校長室に着いたら本末転倒だから）」
「早く言いなさい、二人とも？」

『諦めろ、お前ら。もう言い逃れは無理だぜ?それにどーせコイツらには黙っててもそのうちばれるだろ』
「ハイ……実は、誰にも言わないでほしいんだけどさ」

「まったく……」
「清明、ずいぶん大胆だね……だってさ」
「呆れて声も出ないわね」
「いや、だって、その、ね?」
「な、なあ!あれはしょうがないよな、清明」
　ああ、皆からの呆れた視線が痛い。まあぶっちゃけ何をやったかっていうと、レッド寮あるでしょ。僕らの愛すべきボロ……こほん、味のある家。この間、僕の部屋と十代の部屋の間にあった壁を寝ぼけて蹴りつけた拍子に大穴開けちゃってね?慌てて土木工事した結果、壁を埋めるはずだったのになぜか気が付いたら僕のいる部屋と十代達の部屋の間にドアが一つ増設されることになって。いや、壁ぶち抜いてそこに廃品回収で捨ててあったのを拾っておいたドアはめ込んだだけなんだけど。でも、おかげで僕らの部屋だけ出入りは随分楽になったよ。もう他のレッド生も退学だの転校だので数が

減っていって、気づいた時にはだいぶ人が少なくなってたからこそ通った無茶。あんま反省してない。後悔も特にする気はない。でも怒られるだろうな、ってのはさすがに想像つくからなぁ。

とりあえず正直に打ち明けた3人には絶対秘密にしておくようお願いして、ついにたどり着いた校長室。代表して十代がノックを……しようとしたら、自動ドアがスウッと開いた。だいぶ緊張してんな、十代。

『お前も膝、震えてんぞ』

あ、どうりで視界がカクカクすると思ったら。そんな僕らを見かねたのか、三沢が救いの手を差し伸べてくれた。

「三沢大地以下四人、ただいま参りました。それで校長、用件というのは？」

「よく来てくれましたね。実は、非常に急な話で申し訳ないのですが……」

なんだろう。さすがに『退学』ってことはないだろう。それならわざわざ関係ない夢想たちまで呼びつける意味がない。あ、じゃあ『停学』あたりかな？って、それを言うにしても僕らだけで十分だろう。じゃあ……？

「あなた達5人には、今度のノース校とのデュエルで本校の代表を努めていただきたいのです」

時が止まった。

「……は?えっとすいません校長、もっかい言ってくれませんか?」
「混乱するのも無理はありませんが、あなた達５人に本校の代表になって欲しいのです」
「それはどういった訳があるんでしょうか、校長?」
　さすがの明日香も、この発言には戸惑いを隠せないようだ。校長の机にバンッと手を置き、そのまま詰め寄る。軽くため息をつきながらえらく手慣れた感じで夢想が明日香の腕を持って後ろに引っ張って勢いを殺してたけど、もしかして女子寮の日常風景ってこんなんなんだろうか。

「実はですね、さっきのデュエルの最中、ノース校の校長から電話がかかってきまして。なんでもあちらの代表が、お互いに5人ずつ選手を決めて順番に戦い先に3勝したほうが勝つ団体戦デュエルというのを提案して、生徒全員がそれに乗り気になったようで」
「それで、断りきれなくなったノース校の校長がこちらに同意を求めてきたと?」
「はい。できればこの試合、君たちが受けてくれると有難いのですが……」
団体戦っていうと、あれか。先鋒、次峰、中堅、副将、大将にわかれてやるやつか。
『そうそう。ちなみに一つ補足しとくと、鋒の読み方は「ぽう」だからな。「ぼう」なんて読んで恥かくなよ』
まあ、ぽうだろうがぼうだろうがどっちでもいい。返事?もちろんきまってるさ。こんな面白そうな話なんだから。
「「「「もちろん引き受けます」」」」……ですって」
「そうですか……ありがとうございます。詳しいことはまた、追って連絡しますので」
そう言ってほほ笑む校長の顔を見て、もしかしたらこの返事も織り込み済みなんじゃないかと思った。いや、別にそれでもかまわないんだけど。

ノース校特別編～プリンセス・Ｔの甘い褒美～
ターン１６　先鋒、玩具箱の勇士達

　なんのかんので月日は流れ、あっという間にノース校がやってくる日になってしまった。いや、月日ったってまだ一週間しか経ってないんだけど。で、もうそろそろ時間なんだけど……。
「さて、いよいよ今日になっちゃったわけだけどさ十代。なーにやってんのこんな時間になって。もうあっちの船着いちゃうよ？ちゃんと出迎えぐらいはやっとかないとダメでしょやっぱり」
「え、もうそんな時間か？悪い悪い。じゃ、さっさと行こうぜ！」
「どっちのセリフなんだか……あ、ちょっと置いてかないでよ！わざわざ呼びに来たのになにこの扱い！」
『はらはら、早く来ないと置いてくぜー』
「ユーノまでっ!?」
　相も変わらずいつも通りの十代に置いて行かれそうになりながら、慌てて島にある港に走っていく。案の定、もう船は来ていた。船というより潜水艦だね、ありゃ。

「おー、あんたがノース校の校長か！よろしくな、俺遊城十代！それでさ、俺らの対戦相手ってどこにいるんだムグ」
「はーいちょっとおちつこーね十代。どうも、同じくアカデミア代表、遊野清明です。今日はわざわざ遠くからお越し下さり、ありがとうございます」
　じたばたともがく十代を羽交い絞めにしながら、とりあえず校長と思しき人にあいさつする。えーっと、ちゃんとしたあいさつってのはこんな感じでいいのかな？
『まあこんなもんでいいんじゃね？後ろで鮫島校長が出番とられて泣きそうになってるぐらいだし』
　……ごめん、校長。そしてそう思って一瞬腕の力が弱まったところを、十代は見逃さなかったらしい。ウナギ並みにスルスルと抜け出して、懲りずにまたタメ口。
「ぷはー、やっと出れた……。それで、校長のおっちゃん！早く紹介してくれよ、対戦相手痛あっ！」
「ちょっと落ち着けっつってんでしょ」
「痛てて……いきなり殴ることないだろ、清明ー」
「ええい、茶番はもうたくさんだ！久しぶりだな、遊城十代に遊野清明!!」
「そ、その声は！」
　聞き覚えのある声がノース校生徒の人垣の向こうからして、そっちに視線を向けると

その人垣が左右真っ二つに割れた。そしてその向こうに一人、腕を組んで堂々とふんぞり返っていたのは。
「ま、万丈目!?」
「そんなに知りたいのなら教えてやる、この俺がノース校代表の大将、万丈目準だ！」

まあその後なんの脈絡もなくいきなりやってきた万丈目の兄さん二人が今回のデュエルをテレビ中継するとか言い出したりしてなんかもういろいろ大変だったけど、機材の準備やらなんやかんやでドタバタしてて緊張する暇がなかったからそういう意味ではむしろ良かったのかもしれない。そして今、僕らは選手控え室にいる。さっきまで翔や隼人や神楽坂や高寺、それにブルーからはジュンコにももえ、そしてなんとカイザーまでもが応援しに来ていたけど、もう皆自分の席を取りに帰っていった。
「いやー、まさか万丈目がノース校まで行ってたなんてね。まあ無事でよかったよ」
「それもそうだが、今日の俺らの試合はなんでも全国に向けて万丈目グループ主催でテレビ中継されるそうだな。考えてみるとすごい話だ」
「まったくね。まあ私は別にかまわないけれど。自分のデュエルをするだけよ。それにしても彼、一体この学校を逃げ出すほどの価値のある何かを見つけられたのかしら？」

「手厳しいね、明日香……だってさ。あれ、そういえば一人足りないみたいだけど？」
「ああ、十代は一回レッド寮に戻ったよ。身だしなみがきちんとできてるか不安だからテレビに出ても大丈夫なぐらいキッチリやってくるって」
『で、帰ってくるころにトイレの中で例のシーンがあるんですねわかります』
「何例のシーンて」
『無理に知る必要はないな』
どうやらウチの相方は、今日も何か隠してるようだ。まあ、それもいつも通りっちゃあそうなんだけども。おっと、そろそろ時間だ。十代は……ま、そのうち来るでしょ。たぶん。
「あぶねー、遅れるとこだったぜ！それじゃ皆、デュエルしに行こうぜ！」
ほら、ね。

「お集まりの皆さん。それではこれより、デュエルアカデミア本校対ノース校の、対抗試合を始めますノーネ！どうもテレビの前の皆さん、ワタクシこのデュエルアカデミア本校で実技担当最高責任者を務めているクロノス・デ・メディチと申しますノーネ。それでは、まずこちら本校の生徒たち、右から順に天上院明日香、河風夢想、そして三沢大

地……とドロップアウト、じゃなかった、遊野清明に遊城十代ですーノ！」
　クロノス先生の紹介の後、観客席にサクラでも入ってるのかどうかは知らないけど歓声が起こる。と、とりあえず手でも振っとこうかな。多分僕宛てじゃあないだろうけど、そこはまあノリってやつで。ところで、僕ら5人の紹介が終わったあたりで万丈目がちょっと不思議そうな顔をしたのはなんでだろう？まさか、ね。ユーノが見えるってことはないだろう。
「そして対するは、ノース校代表……」
「要らん、俺の名は自分で言う！マイクを貸せ、おかっぱ頭」
　言うが早いがクロノス先生からマイクを奪った万丈目が、ステージの中心で客席に向かい声を張り上げる。
「お前たち、この俺を覚えているか！　この学園で俺が消えて清々したと思っている奴！俺の退学を自業自得だとほざいた奴！知らぬなら言って聞かせるぜ、その耳かっぽじって良く聞くがいい！地獄の底から不死鳥の如く復活してきた俺の名は！……一！十！」
　そう言いながら万丈目がビシッと上、というか天井を指差すと、ノース校の生徒たちが一斉に声を上げた。なぜかユーノまで混ざってた。それも結構ノリノリで。
「「「「『百！千！』」」」」

そしてカウントが千に達した時、万丈目が再び声を上げる。
「万丈目、サンダーッ!!!!」
「「「「『サンダー!サンダー!』」」」」
なにがなんだかわからず、僕も含めた本校の生徒たちがポカーンとしている間に、勝手に試合を仕切り始めてしまった。まあ、クロノス先生はさっきのマイクのコードが絡まって身動き取れないんだし別に嫌がる理由もないけど。
「さあ、行って来い飯田!大丈夫だ、お前らサンダー四天王ならきっとやれる!」
「任せてください、サンダー!本校の奴らに一泡吹かせてやりますよ!……俺の名前は飯田、ノース校先鋒にしてサンダー四天王の一だ!さあ、お前らも先鋒を出せ!」
そう言いながらデュエルステージに上がってきたのは、不良っぽい見た目のガタイのいい兄ちゃん。てかこの人、ホントに僕らと同い年なんだろうか。隼人よりも年上に見えるんだけど。
『つーかサンダー四天王ってなんなんだよ。いやまあ5人って時点でそんなオチかとは思ったけどさ』
「サンダー四天王?面白いわね、私がこちらの先鋒、天上院明日香よ」
でも、こっちの先鋒は流石というかなんというか、そんな相手にもひるむことなくまっすぐに立つ。「キャー明日香様ー!」とかあっちで叫んでるのは多分ジュンコと

ももえの二人だろう、いつも通り。
「いいか、一切の手加減を俺はせん。そのかわりお前も、全力でかかって来い！」
「あら、そんなの当たり前でしょう？」
「「デュエル！」」
「先攻は俺が貰う、俺は手札のブリキンギョを守備表示で召喚！そしてブリキンギョの効果により、手札のアイアイアンを特殊召喚！」
ブリキの名前通り木製っぽい見た目の玩具が地面をカタカタと跳ね回ると、両手のシンバルを鳴らしながらアイアイの玩具がシャンシャンと音を立てて背中のゼンマイをゆっくりと回しながら歩いてくる。
ブリキンギョ
効果モンスター
星４／水属性／機械族／攻　８００／守２０００
このカードが召喚に成功した時、
手札からレベル４モンスター１体を特殊召喚できる。
アイアイアン
効果モンスター
星４／地属性／機械族／攻１６００／守１８００

１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に
このカードの攻撃力を４００ポイントアップできる。
この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。
「あら、可愛らしいモンスターね」
「舐めてもらっちゃ困るぜ?アイアイアンの効果発動!このカードの攻撃力を４００ポイント上げる!」
一度止まりかけたゼンマイが急に高速回転し、目をカッと見開いたアイアイアンがシンバルを一度だけ力いっぱい鳴らした。うお、うるさい。
アイアイアン　攻１６００→２０００
「そしてカードを二枚セット、ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー!手札のサイバー・ジムナクティスを守備表示で召喚するわ」
サイバー・ジムナクティス
効果モンスター
星４／地属性／戦士族／攻　８００／守１８００
手札を１枚捨てる。
相手フィールド上に存在する表側攻撃表示モンスター１体を破壊する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「そして手札を捨ててジムナクティスの効果発動、破壊するのはアイアイアンしかいないわね」
「俺の大事なアタッカー、そう簡単には捨てないぜ！リバースカード、禁じられた聖杯！これでそのモンスターの効果は無効になって、手札を捨てただけで終わる！」
「なら、カードをセットしてターンエンドよ」
飯田　ＬＰ４０００　手札：２　モンスター：ブリキンギョ（守）、アイアイアン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
明日香　ＬＰ４０００　手札：３　モンスター：なし　魔法・罠：１
「俺のターン、ドロー！ここは……ゼンマイソルジャー、召喚！」
緑色を基調としたおもちゃの兵隊が、背中のゼンマイを回転させる。
ゼンマイソルジャー
効果モンスター
星４／地属性／戦士族／攻１８００／守１２００
自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。
エンドフェイズ時までこのカードのレベルを１つ上げ、
攻撃力を４００ポイントアップする。
この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り１度しか使用でき

ない。

「そして永続魔法、ゼンマイマニュファクチュアを発動するぜ。ゼンマイソルジャー、それにアイアイアン！効果発動だ！」

二体のモンスターの体についたゼンマイが動き出すとアイアイアンはまたシンバルを鳴らし、ゼンマイソルジャーは両腕をぐるぐると回転させた。

アイアイアン　攻２０００→２４００

ゼンマイソルジャー　攻１８００→２２００　☆４→５

「そしてゼンマイソルジャーが効果を使ったことでマニュファクチュアの効果、デッキのゼンマイマイを手札に加えておく」

ゼンマイマニュファクチュア

永続魔法

「ゼンマイ」と名のついたモンスターの効果が発動した場合、

自分のデッキからレベル４以下の

「ゼンマイ」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「アイアイアンは攻撃できないからな。ゼンマイソルジャーでサイバー・ジムナクティスを攻撃！」

ゼンマイソルジャー　攻２２００↓サイバー・ジムナクティス　守１８００（破壊）
「へへっ、よくやったぞソルジャー！カードを伏せて、これでターンエンドだ！」
ゼンマイソルジャー　攻２２００↓１８００　☆５↓４
「私のターン、ドロー！もう、しょうがないわね。手札の融合を発動、エトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合するわ。来なさい、サイバー・ブレイダー!!」
サイバー・ブレイダー
融合・効果モンスター
星７／地属性／戦士族／攻２１００／守　８００
「エトワール・サイバー」＋「ブレード・スケーター」
このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
相手のコントロールするモンスターが１体のみの場合、
このカードは戦闘によっては破壊されない。
相手のコントロールするモンスターが２体のみの場合、
このカードの攻撃力は倍になる。
相手のコントロールするモンスターが３体のみの場合、
このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする。
「今、あなたの場のモンスターは３体……無効効果ね、パ・ド・カトル！そしてサイ

バー・ブレイダーでアイアイアンを攻撃するわ、グリッサード・スラッシュ！」
「何ぃ!?アイアイアン、迎撃を……！」
「待ちなさい、墓地のブレイクスルー・スキルの効果を発動！このカードを墓地から除外して、アイアイアンの効果をエンドフェイズまで無効にするわ！」
アイアイアン　攻２４００→１６００
サイバー・ブレイダー　攻２１００→アイアイアン　攻１６００（破壊）
飯田　ＬＰ４０００→３５００
「お、俺の勇敢な玩具の戦士が！」
「あら、貴方が本気で来いって言ったんじゃないのかしら?そして貴方のモンスターが２体になったことで、サイバー・ブレイダーの効果もパ・ド・トロワになるわ。私はこれでターンエンドよ」
サイバー・ブレイダー　攻２１００→４２００
飯田　ＬＰ３５００　手札：１　モンスター：ブリキンギョ（守）、ゼンマイソルジャー（攻）魔法・罠：ゼンマイマニュファクチュア、２（伏せ）
明日香　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：サイバー・ブレイダー（攻）魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！ソルジャーを守備表示にしてターンエンドだよチクショウ！」

ゼンマイソルジャー　攻１８００↓守１２００
「さっきまでの威勢はどこに行ったのかしらね……ドロー！サイバー・ブレイダーにビックバン・シュートを装備するわ。残念だったわね、守備表示にしたのが裏目に出て」
ビックバン・シュート
装備魔法
装備モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。
装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。
サイバー・ブレイダー　攻４２００↓４６００↓５０００
「サイバー・ブレイダーでゼンマイソルジャーを攻撃！グリッサード・スラッシュ！」
「トラップ発動、攻撃の無力化！このカードでバトルフェイズを終わらせるぜ。今のサイバー・ブレイダーならこのカードも使えるってもんさ」
「……ターンエンドよ」
飯田　ＬＰ３５００　手札：２　モンスター：ブリキンギョ（守）、ゼンマイソルジャー（守）　魔法・罠：ゼンマイマニュファクチュア、１（伏せ）

明日香　ＬＰ４０００　手札…１　モンスター…サイバー・ブレイダー（攻・ビ）魔法・罠…ビックバン・シュート（サ）、１（伏せ）

「んー、明日香の方が押してるのは間違いないんだけど、なーんかこうスッキリしないものがあるなあ」

「あの飯田という奴の守りもわりと固いからな。彼女も突破しかねているんだろう。お前がスッキリしない気分なのは、単に最近のデュエルがどれも激しいものばかりだったからじゃないか？」

「あ、そういうことかな。さっすが三沢、頭いい！」

『その程度の推測に頭いい扱いするのはいかがなもんじゃねーか？』

「るっさい」

「俺のターンドロー、ゼンマイマイはやっぱりまだ召喚できない……なら、俺はブリキンギョとゼンマイソルジャーをリリースする！人形の王、パペット・キングを召喚！」

パペット・キング

効果モンスター

星７／地属性／戦士族／攻２８００／守２６００

相手がドロー以外の方法でデッキからモンスターカードを手札に加えた時、手札からこのカードを特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚した場合、次の自分ターンのエンドフェイズ時にこのカードを破壊する。
「攻撃力は下がるけど、サイバー・ブレイダーの効果は戦闘破壊耐性になるわ。パ・ド・ドゥ！」
サイバー・ブレイダー　攻５０００→２５００
「構わねえさ、これでダメージが通る！パペット・キングの攻撃、マジェスティックチェッカー！」
パペット・キング　攻２８００→サイバー・ブレイダー　攻２５００
明日香　ＬＰ４０００→３７００
「これでターンエンドだ！」
「私のターン、ドロー。サイバー・チュチュを召喚して、その効果で貴方にダイレクトアタックするわ！ヌーベル・ポアント！」
サイバー・チュチュ
効果モンスター
星３／地属性／戦士族／攻１０００／守　８００
相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
サイバー・チュチュ　攻１０００→飯田（直接攻撃）
飯田　ＬＰ３５００→２５００
「ターンエンドよ。さあ、どうするのかしら？」
飯田　ＬＰ２５００　手札：２　モンスター：パペット・キング（攻）　魔法・罠：ゼンマイマニュファクチュア、１（伏せ）
明日香　ＬＰ３７００　手札：１　モンスター：サイバー・ブレイダー（攻・ビ）、サイバー・チュチュ（攻）　魔法・罠：ビックバン・シュート（サ）、１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！速攻魔法、サイクロンを発動！そのビックバン・シュートを破壊するぜ！」
「だったら速攻魔法、移り気な仕立て屋を発動！このカードの効果で、装備カード一枚を別の正しい対象に移し替える……ビックバン・シュートは貴方の王様にプレゼントするわ。そしてサイクロンの効果で破壊された時、装備モンスターのパペット・キングは除外されるわよ」
「差し引きするとこっちが損かよ……。まあいいさ、ゼンマイジャグラーを召喚してサイバー・チュチュに攻撃！」
ゼンマイジャグラー

効果モンスター
星４／風属性／サイキック族／攻１７００／守１０００
このカードが相手モンスターと戦闘を行った場合、
その相手モンスターをダメージ計算後に破壊する事ができる。
この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り１度しか使用できない。

キリキリキリ、とゼンマイが回る音を立てつつ一定のリズムでポーンポーンと器用にお手玉をするジャグラーが持っていたボールを全て宙に放り投げ、さらに足のバネを使って自身も空高くジャンプする。そしてその勢いでサイバー・チュチュに体当たりを仕掛けた。その後もう一度バネを使って野田の場に戻り、ちょうど上から落ちてきた自分のボールでジャグリングを再開する。

ゼンマイジャグラー　攻１７００→サイバー・チュチュ　攻１０００（破壊）
明日香　ＬＰ３７００→３０００

「ごめんなさい、サイバー・チュチュ……」
「ターンエンドだ」
「いくわよ、私のターン！サイバー・ブレイダーでゼンマイジャグラーに攻撃！グリッサード・スラッシュ！」

「ジャグラーの効果を知らないってわけじゃなさそうだし、何か企んでるな？リバースカード、バトル・ブレイク発動！さあ、その手札はモンスターカードかい？」
バトル・ブレイク
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。
相手は手札からモンスター1体を見せてこのカードの効果を無効にできる。
見せなかった場合、その攻撃モンスターを破壊し、
バトルフェイズを終了する。
「……この手札は見せないわ、効果は通すわよ」
「いよしっ！」
「カードをセットして、ターンエンドするわ」
飯田　ＬＰ２５００　手札：１　モンスター：ゼンマイジャグラー（攻）魔法・罠：ゼンマイマニュファクチュア
明日香　ＬＰ３０００　手札：０　モンスター：なし　魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！ゼンマイマイを守備表示で召喚、効果発動！その伏せカードには退場してもらうぜ！」
ゼンマイマイ

効果モンスター
星２／水属性／水族／攻　１００／守２０００
自分のメインフェイズ時、フィールド上にセットされた
カード１枚を選択して持ち主の手札に戻す事ができる。
この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り１度しか使用できない。
「戻される前に発動、スケープ・ゴート！貴方の攻撃は、４体の身代わり羊が引き受けるわよ」
羊トークン×４　守０
「で、でもゼンマイマニュファクチュアの効果は生きてる！デッキからゼンマイナイトを手札に加えるぜ！そしてゼンマイジャグラー、黄色の羊を攻撃だ！」
ゼンマイジャグラー　攻１７００↓　羊トークン　守０（破壊）
「カードをセット、ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！装備魔法、再融合を発動！墓地のサイバー・ブレイダーを呼び出して、このカードを装備するわ。そして貴方のモンスターは２体、パ・ド・トロワ！」
再融合
装備魔法

８００ライフポイントを払う。
自分の墓地から融合モンスター１体を選択して
自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。
このカードが破壊された時、装備モンスターをゲームから除外する。
明日香　ＬＰ３０００→２２００
サイバー・ブレイダー　攻２１００→４２００
「サイバー・ブレイダーでゼンマイジャグラーを攻撃！グリッサード・スラッシュよ！」
「やべ、そんなの受けたらジャストキルされちまう！トラップ発動、螺旋式発条！この効果で手札のゼンマイナイトを特殊召喚！」
甦ったサイバー・ブレイダーのハイキックがゼンマイジャグラーの回避により空振りし、一度バランスを崩した隙に素早く駆け寄ってきたゼンマイ戦士がその行く手をふさいだ。
螺旋式発条（らせんしきぜんまい）
通常罠
自分フィールド上の攻撃力１５００以上の
「ゼンマイ」と名のついたモンスター１体をリリースして発動する。
手札から「ゼンマイ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。

その後、この効果で特殊召喚したモンスターと同じ攻撃力を持つ「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体をデッキから特殊召喚できる。

ゼンマイナイト　攻１８００

「なら、改めて攻撃よ！ゼンマイナイトに攻撃！」

「ゼンマイナイトの効果！一度だけゼンマイモンスターへの攻撃を止める！」

ゼンマイナイト

効果モンスター

星４／光属性／戦士族／攻１８００／守１２００

自分フィールド上に表側表示で存在する

「ゼンマイ」と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された時、

そのモンスターの攻撃を無効にする事ができる。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

キリキリと音を立てて玩具の騎士のゼンマイが回ると左手の盾を地面に突き立ててその後ろにしゃがみ込み、サイバー・ブレイダーの回転蹴りを受け止めた。ただしその衝撃で盾にひびが入ったため、もうあれは防御には使えないだろう。

「ゼンマイナイトが効果を使ったことでマニュファクチュアの効果も発動、次のサーチ

はゼンマイニャンコだ。こいつはギリギリまでとっておくつもりだったんだけどな、だんだんそうも言ってられなくなってきた」

「ターンエンドするわ」

飯田　ＬＰ２５００　手札：ｉ　モンスター：ゼンマイナイト（攻）、ゼンマイマイ（守）

魔法・罠：ゼンマイマニュファクチュア

明日香　ＬＰ２２００　手札：０　モンスター：サイバー・ブレイダー（攻・再）、羊トークン×３（守）　魔法・罠：再融合（サ）

「ドローー！来たぜ、ゼンマイニャンコを召喚！そしてそのゼンマイが回りだすことで、手札のゼンマイシャークを特殊召喚！」

ゼンマイ仕掛けの子猫と鮫が、ポンポンと手札から飛び出てくる。あっという間にモンスターの数が４体になった。そしてサイバー・ブレイダーの効果は、相手が４体以上モンスターを使っている場合にはただの飾りになってしまう。こ、これは明日香、ピンチかな？

「そしてゼンマイニャンコの効果発動、一度だけ相手モンスターを手札に戻すぜ！いい加減帰れ、サイバー・ブレイダーー！」

ゼンマイニャンコ

効果モンスター

星２／地属性／獣族／攻　８００／守　５００
自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択して持ち主の手札に戻す。
この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り１度しか使用できない。
「そしてマニュファクチュアの効果、デッキのゼンマイネズミを手札に入れる！」
ゼンマイシャーク
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１５００／守１３００
自分フィールド上に「ゼンマイ」と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚された時、
このカードを手札から特殊召喚できる。
また、１ターンに１度、以下の効果から１つを選択して発動できる。
●このカードのレベルをエンドフェイズ時まで１つ上げる。
●このカードのレベルをエンドフェイズ時まで１つ下げる。
「そして俺のゼンマイたちを全員攻撃表示にして攻撃！シャークは青い羊、マイマイは赤いの、ニャンコはピンク、そしてがら空きになったところをナイトでダイレクトアタック！」

ゼンマイシャーク　攻１５００→羊トークン　守０（破壊）
ゼンマイニャンコ　攻８００→羊トークン　守０（破壊）
ゼンマイマイ　攻１００→羊トークン　守０（破壊）
ゼンマイナイト　攻１８００→明日香（直接攻撃）
明日香　ＬＰ２２００→４００
「……なるほどね、面白いわ」
「それ、褒めてんだよな？目が怖いぜ。ターンエンドっと」
「ドロー、荒野の女戦士を守備表示で召喚！」
もう後がない明日香が召喚したモンスターは、他のリクルーターよりも若干低いステータスが目につく戦士族専用のリクルーター。でも、あれじゃあ後続を呼んだって表側攻撃表示限定だし攻撃力は最大でも１５００だし、次のターンを生き残ることなんてできるのかな。いや、明日香のことだ。なにかこんな時に備えての策があるんだろう。
荒野の女戦士　守１２００
「私はこれでターンを終了するわ」
飯田　ＬＰ２５００　手札：１　モンスター：ゼンマイナイト（攻）、ゼンマイニャンコ（攻）、ゼンマイシャーク（攻）、ゼンマイマイ（攻）　魔法・罠：ゼンマイマニュファクチュア

明日香　ＬＰ４００　手札：０　モンスター：荒野の女戦士（守）魔法・罠：なし
「俺のターン、ドロー！ネズミもあえて出す意味はないか。なら、バトルだ！ゼンマイシャークで荒野の女戦士に攻撃！」
ゼンマイシャーク　攻１５００→荒野の女戦士　守１２００（破壊）
「荒野の女戦士の効果によって、デッキからカードガードナーを特殊召喚！そしてカードガードナーは自身の効果で、召喚成功時に守備表示になるわ」
鎧に身を包んだゼンマイたちよりさらにちっこい戦士が、いっちょまえに盾を構えて明日香を守る最後の騎士としてゼンマイの前に立ちふさがる。
カードガードナー　攻４００→守４００
「守備力４００……だがまあ、念には念を入れるか。ゼンマイナイトで追撃！」
「甘いわね、カードガードナーの特殊効果！デッキからカードを3枚墓地に送って、守備力を１９００までアップさせるわ！」
明日香のデッキからカードが墓地に送られたことで小さな戦士の体を青いオーラが包み込み、ゼンマイナイトの一撃を回避して爪楊枝なみに細いその剣でブスリと一突きやり返した。
カードガードナー
効果モンスター

星３／地属性／戦士族／攻　４００／守　４００
このカードは召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、守備表示になる。
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、
このカードに攻撃対象を変更する事ができる。
このカードが攻撃対象になった時、
自分のデッキのカードを上から３枚まで墓地へ送る事ができる。
墓地へ送ったカード１枚につき、
このカードの守備力はエンドフェイズ時まで５００ポイントアップする。
ゼンマイナイト　攻１８００→カードガードナー　守４００→１９００
飯田　ＬＰ２５００→２４００
「ちっくしょ、シャークとマニュファクチュアの効果でウォリアーを持ってきてれば！悔やんでもしょうがねえ、ゼンマイシャークの効果発動、自分のレベルを１下げる！そして発動したマニュファクチュアでゼンマイウォリアーを手札に加えてカードを伏せてターンエンドッ！」
「ペラペラとよくしゃべる割にはずいぶん手札を増やしたわね……ドロー！貪欲な壺を発動、墓地のサイバー・チュチュ、サイバー・ジムナクティス、サイバー・プリマ、荒野の女戦士、ヂェミナイ・エルフの５体をデッキに戻して２枚のカードをドロー……

手札の戦士の生還を発動、墓地の戦士族モンスター1体であるブレード・スケーターを手札に加えるわ。そして、手札の伝説の賭博師を召喚よ」

伝説の賭博師（レジェンド・ギャンブラー）

効果モンスター

星４／闇属性／魔法使い族／攻　５００／守１４００

コイントスを3回行う。

3回とも表だった場合、相手フィールド上モンスターを全て破壊する。

2回表だった場合、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

1回表だった場合、自分フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

3回とも裏だった場合、自分の手札を全て捨てる。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。

「って、攻撃表示!?明日香、いくらなんでもそりゃ攻撃的すぎるんじゃ……」

「ううん、むしろあのほうが明日香らしいかも、だってさ」

「……いつもあんな感じなの？」

「どんなに劣勢でもあくまで攻撃的に、というわけか。その姿勢は俺たちも見習うべきなのかもしれないな」

「さあ、いくわよ?まず一回目のコイントス！」

そう言って宙にはじき出されたソリットビジョンのコインが見せる面は、表。
『まずは一回、か。さあ、あと二回表を出してもらおうじゃないか』
「2回目、コイントス！」
またもやソリットビジョンのコインがくるくると回転しながら落下する。今度の面も表。あと一回だ！
「これで、最後！」
この場にいる全員が、きらきらと光る小さなコインの行方に注目する。これまでの2枚より妙にゆっくりに感じる落下速度でコインが落ちてきて……そして……。

「表、ね。賭けは私の勝ちかしら」
　その言葉に反応して、賭博師がニヤリと笑いながらゼンマイモンスター全員にどこからともなく取り出したコインを一枚ずつぶつけていく。するとそのコインが当たった瞬間爆発を起こし、炎が収まった時に飯田の場に立っているモンスターはいなかった。
「俺の、俺のモンスターが！」
「どうやら、まだ私に運はあるようね！伝説の賭博師でダイレクトアタック！」
　なぜか今度はさっきの爆発コインを使わず、近づいていって素手で殴りつける伝説の賭博師。そんなんだから攻撃力低いんだろうか。コイン使えばいいのに。
　伝説の賭博師　攻５００→飯田（直接攻撃）
　飯田　ＬＰ２４００→１９００
「これでターンエンドするわ」
　飯田　ＬＰ１９００　手札：１　モンスター：なし　魔法・罠：ゼンマイマニュファクチュア、１（伏せ）
　明日香　ＬＰ４００　手札：１　モンスター：カードガードナー（守）、伝説の賭博師（攻）　魔法・罠：なし
「落ち着け俺、まだ俺の方が有利なんだ！ゼンマイネズミ召喚、効果発動！甦れ、ゼンマ

イジャグラー！」

機械仕掛けの小さなネズミがどたどたとフィールドを走り回ってどこからともなく機械の部品を拾い集め、それを一か所に積み上げる。するとそのガラクタの山の中からゼンマイジャグラーがスプリングを使って飛び出してきた。

ゼンマイネズミ

効果モンスター

星３／地属性／獣族／攻　６００／守　６００

自分のメインフェイズ時に発動できる。

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードを表側守備表示に変更し、自分の墓地の「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体を選択して表側守備表示で特殊召喚する。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

ゼンマイジャグラー　守１０００

「マニュファクチュアの効果、サーチするのはゼンマイソルジャー！これでターンを終了だ！」

「守備固めのつもりかしら？ドロー！マジックカード、融合回収を発動！墓地の融合と、

融合素材として墓地に送られたエトワール・サイバーを手札に戻すわよ。そして融合！もう一度踊りなさい、サイバー・ブレイダー！パ・ド・トロワ！」

サイバー・ブレイダー　攻２１００→４２００

「そして……そうね、もう一度運試しと行こうかしら？伝説の賭博師の効果、コイントスよ！」

そして再びコインが３枚宙を舞う。が、さすがに奇跡は起こらなかった。出た面はなんと裏、裏、表。手札が一枚もない明日香にとっては、下手に表がでて自分フィールドのカード一枚を破壊するデメリット効果よりも、いっそのことすべて裏の手札を全て捨てる効果の方がよかったんだろうなぁ。ちなみにこの効果で、明日香は伝説の賭博師を破壊。最後に、自分で投げた爆発コインが自分にあたって爆発というコントみたいな散り際を見せてくれた。

「気を取り直して、サイバー・ブレイダーの攻撃！ゼンマイネズミを破壊するわ！」

サイバー・ブレイダー　攻４２００→ゼンマイネズミ　守６００（破壊）

「そしてサイバー・ブレイダーの効果もまた変わるわ。ターンエンドよ」

サイバー・ブレイダー　攻４２００→２１００

飯田　ＬＰ１９００　手札：２　モンスター：ゼンマイジャグラー（守）　魔法・罠：ゼンマイマニュファクチュア、１（伏せ）

明日香　ＬＰ４００　手札…０　モンスター…カードガードナー（守）、サイバー・ブレイダー（攻）魔法・罠…なし

「俺のターン、ドロー！ゼンマイウォリアーを召喚して、効果発動！ゼンマイジャグラーのレベルを２、攻撃力を６００上げる！マニュファクチュアではゼンマイドッグをサーチしておくぜ。そして魔法カード、打ち出の小槌を発動！俺の手札のカードを……せっかくだから全部デッキに戻してその枚数と同じだけ、つまり２枚ドロー！」

ゼンマイウォリアー

効果モンスター

星４／地属性／戦士族／攻１２００／守１８００

自分フィールド上に表側表示で存在する

「ゼンマイ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する事ができる。

エンドフェイズ時まで選択したモンスター１体のレベルを１つ上げ、

攻撃力を６００ポイントアップする。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り１度しか使用できない。

ゼンマイジャグラー　攻１７００→２３００　☆４→６

「パ・ド・トロワ！」

サイバー・ブレイダー　攻２１００→４２００
打ち出の小槌
通常魔法
自分の手札を任意の枚数デッキに加えてシャッフルする。
その後、デッキに加えた枚数分のカードをドローする。
「よし、準備は万端だ！手札からモンスター１体の攻守を相手のエンドフェイズまで１０００ポイント上げる魔法カード、破天荒な風をゼンマイウォリアーに発動！」
ゼンマイウォリアー　攻１２００→２２００　守１８００→２８００
「さあ、バトル！ゼンマイウォリアーでカードガードナーを攻撃！」
「守備力は足りないけど、効果は使うわよ」
ゼンマイウォリアー　攻２２００→カードガードナー　守４００→１９００（破壊）
「そしてこれが、最後のバトルだ！ゼンマイジャグラーでサイバー・ブレイダーを攻撃！」
「効果を使って突破する気なのか、それともまだ隠し玉があるのか。どちらにせよ、その攻撃は通さないわよ！墓地のタスケルトンの効果発動！その攻撃、止めさせてもらうわ！」
「明日香、使ってくれたんだ。ちょっと嬉しいかも、なんだって」

「あれ、あのカードって夢想のなの？いや、確かに迷宮兄弟のあたりで見たことあるけど」
「一枚余ってたからね、だってさ。二枚以上入れる意味もないし」
まあ元の持ち主が誰だったにせよ、タスケルトンのやることは変わらない。一匹の子豚が体を膨らませ、スプリングでの飛び蹴りを受け止めた。
タスケルトン
効果モンスター
星２／闇属性／アンデット族／攻　７００／守　６００
モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、
墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。
そのモンスターの攻撃を無効にする。
この効果は相手ターンでも発動できる。
「タスケルトン」の効果はデュエル中に１度しか使用できない。
「ふっ、言っただろう、これを最後のバトルにすると！速攻魔法、ダブル・アップ・チャンス発動！こっちが本命の攻撃だぜ、ゼンマイジャグラー！」
ダブル・アップ・チャンス
速攻魔法

モンスターの攻撃が無効になった時、
そのモンスター1体を選択して発動できる。
このバトルフェイズ中、
選択したモンスターはもう1度だけ攻撃できる。
その場合、選択したモンスターはダメージステップの間、攻撃力が倍になる。
ゼンマイジャグラー　攻２３００↓４６００
「でも、その攻撃だけじゃ私のライフは削りきれないわよ！」
「その攻撃だけなら、な！リバースカード発動、オーバー・レンチ！ゼンマイジャグラー、真の力を開放するんだ！」
ゼンマイジャグラーのゼンマイが目にも止まらぬほどのスピードで超高速回転し、本来出せる以上の出力に体中が激しい熱とともに真っ赤な光を放った。そして投げつけられる無数のジャグリング用ボールがさながら火矢のようにまっすぐ飛び、サイバー・ブレイダーを打ち抜いた。
オーバー・レンチ
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在する
「ゼンマイ」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力・守備力は倍になり、
このターンのエンドフェイズ時に手札に戻る。
「オーバー・レンチ」は1ターンに1枚しか発動できない。
ゼンマイジャグラー　攻４６００→９２００　守１０００→２０００
ゼンマイジャグラー　攻９２００→サイバー・ブレイダー　攻４２００（破壊）
明日香　ＬＰ４００→０

「ごめんなさい、負けちゃったわ」
「気にしちゃダメだよ、明日香……だって。こんな日だってたまにはあるよ、だってさ」
「そうだぜ、明日香！あとは俺たちに任せとけって！」
「うんうん、まだ一回戦目、十分僕たちで巻き返せるって！それで、次は三沢か。じゃあ頑張ってね！」
「ああ、わかってるさ。俺に任せておけ」
そう言ってデュエルディスクを腕に付け、ゆっくりと迷いなく歩いていく三沢。次は一体、どんなデュエリストが待ってるんだろう。

ターン１７　次峰、必殺のスペシャルバーガー

「三沢ー、早くしないと始まっちゃうよー？」
「わかってる、わかってるからあと１分待ってくれ！このカードとこのカードを入れ替えて、と」
　さっきカッコつけて出て行ったはいいけど試合ごとに５分間の休憩があるとかいう理由で肩透かしを食らって帰って来た三沢が、さっきからデッキをガサゴソといじってる。いじってるのはいいんだけど、もう休憩終わっちゃうんだけど……。
『こんな土壇場で調整なんて、ずいぶんらしくない真似だな。つーかこれ生放送だってのに、休憩なんてとってどーやって万丈目グループは間を持たせる気なんだろーな』
「さあ……でも生放送なら、なおさら遅れるわけにはいかないでしょ！三沢ー三沢ー、急いで急いで！」

「俺がデュエルアカデミア本校の次峰、三沢大地だ。よろしく」
「……ああ。俺はサンダー四天王の十、天田だ」

そしてきっかり1分後、デュエル前に軽く自己紹介する三沢と……てんだ？というかなんだろ、四天王の十って。二じゃだめなんだろか。

『一の飯田の次は十の天田か。ってことはあれだな、中堅は四天王の百で名前が百田だな』

「いや、いくらなんでもそんなマンガみたいないい加減な名前ってことはないでしょ。あ、でも四天王の百ってのはあるかも」

『だろ？』

「四天王の十？……いや、まあいい。早速だが、デュエルだ！」

「……望むところ！」

「「デュエル!!」」

「先攻は俺が貰った、ドロー！手札のオキシゲドンを召喚！」

オキシゲドン　攻１８００

三沢の水デッキにおける重要な構成員、酸素のオキシゲドンが翼を広げる。そしてそれは三沢のデッキが今回、【ウォーター・ドラゴン】であることを示す。

「そして手札から水征竜―ストリームの効果発動！このカードと手札の水属性またはドラゴン族一体を捨て、デッキからタイダルを特殊召喚する！俺が捨てるのは水属性の黄泉ガエルだ！来い、タイダル！」

爆征竜―タイダル　攻２６００
「そしてカードをセット、ターンエンドだ」
「……俺のターン、ドロー。手札抹殺を発動。お互いはすべての手札を捨て、その枚数ぶんカードをドローする」
「いいだろう、少し待て」
そう言って自分の手札を捨てる三沢。その後、２枚カードをドローした。
「……手札から、儀式魔人プレサイダーを召喚。カードを3枚セットしてターンエンドだ。そしてこのタイミングでお前のタイダルは手札に戻る」
太った魔人が天田のフィールドで仁王立ちし、三沢にガンを飛ばす。ずいぶん柄悪いなこの魔人。
儀式魔人プレサイダー　攻１８００
三沢　ＬＰ４０００　手札：3　モンスター：オキシゲドン（攻）魔法・罠：1
天田　ＬＰ４０００　手札：1　モンスター：儀式魔人プレサイダー（攻）魔法・罠：3
「俺のターン、ドロー！手札の……いや、オキシゲドンで普通に攻撃！」
オキシゲドン　攻１８００→儀式魔人プレサイダー　攻１８００
「……攻撃宣言時、ピンポイント・ガードを発動。墓地の儀式魔人、リリーサーを召喚」

地中から巨大な岩石の握りこぶしが突き出され、その手がゆっくりと開くとその中にはまた太った魔人が一人。
ピンポイント・ガード
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時、
自分の墓地のレベル４以下のモンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはそのターン、
戦闘及びカードの効果では破壊されない。
儀式魔人リリーサー　守２０００
「攻撃の巻き戻しか。だがまあ、どのみち破壊できないなら同じこと！改めてプレサイダーを攻撃！」
「……それは通さん！リバースカード、グラヴィティ・バインドを発動」
三沢と天田の間に光の網が張り巡らされ、そこを突破できなかったオキシゲドンの爪が虚しく空を切った。
グラヴィティ・バインド―超重力の網―
永続罠

フィールド上のレベル４以上のモンスターは攻撃できない。
「仕方がない、ターンエンドだ」
「……ドロー！クレーンクレーンを召喚し、墓地の儀式魔人プレコグスターを特殊召喚」
クレーンクレーン
効果モンスター
星３／地属性／鳥獣族／攻　３００／守　９００
このカードが召喚に成功した時、
自分の墓地のレベル３モンスター１体を選択して特殊召喚できる。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。
「クレーンクレーン」の効果は１ターンに１度しか使用できない。
儀式魔人プレコグスター　攻４００
クレーンクレーンが地面に開いた紫色の魔法陣の中に鎖を投げ入れ、キリキリと重そうに巻き上げる。その鎖の先端には、案の定というかなんというか太った魔人がしがみついていた。それにしても、なんで魔人ってのはどいつもこいつも太ったのしかいないんだろう。
『ほう。今のセリフ、マエストロークに聞かせてやりたいぜ』
「誰それ。知り合い？」

『ちょっと前までの戦友。ド派手なことはできなかったけど、いつも堅実で一定以上の働きをしてくれるいい奴だったんだよ』

「ふーん」

知らんがな。

「そして手札から死者蘇生を発動、墓地から光帝クライスを特殊召喚。効果発動、クライス自身とこの伏せカードを破壊する。そしてそれにチェーンしてトラップカード、妖怪のいたずらを発動。あらゆるモンスターのレベルを2下げる」

全身が光り輝く戦士が、その光で天田の場にあるカードとグラヴィティ・バインドをそれぞれ射抜いて破壊した。

光帝クライス

効果モンスター

星6／光属性／戦士族／攻2400／守1000

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

フィールド上に存在するカードを2枚まで破壊する事ができる。

破壊されたカードのコントローラーは、破壊された数だけ

デッキからカードをドローする事ができる。

このカードは召喚・特殊召喚したターンには攻撃する事ができない。

妖怪のいたずら
通常罠
フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターのレベルを
エンドフェイズ時まで２つ下げる。
また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、
そのレベルをエンドフェイズ時まで１つ下げる。
この効果はこのカードが墓地へ送られたターンに発動する事はできない。
儀式魔人プレサイダー　☆４→２
儀式魔人プレコグスター　☆３→１
儀式魔人リリーサー　☆３→１
クレーンクレーン　☆３→１
オキシゲドン　☆４→２
「……クライスのもう一つの効果。破壊したのはどちらも俺のカード、よって２枚ドローする」
「レベルの変更カード、そして増えた手札……来るか、儀式召喚！」
「……手札の儀式魔法、ハンバーガーのレシピを発動！場のプレサイダー、プレコグス

ター、リリーサー、クレーンクレーン、そして墓地の儀式魔人ディザースを使い、ハングリーバーガーを降臨させる。さあ、これが俺のメインディッシュだ！」

ハングリーバーガー

儀式モンスター

星６／闇属性／戦士族／攻２０００／守１８５０

「ハンバーガーのレシピ」により降臨。

フィールドか手札から、レベル６以上になるよう

カードを生け贄に捧げなければならない。

「ハ、ハングリーバーガーだと!?……いや、儀式魔人のサポート能力を考えると侮れない、か」

「……そういうことだ。ハングリーバーガーでオキシゲドンを攻撃。……暴飲暴食メタボリック！」

ハンバーガーが空を飛び、光の網を食い破って酸素の名前を持つ翼竜に食らいつ……かなかった。途中で光の壁にぶつかったのだ。

「……何？」

「俺は今の攻撃の前に、このトラップを発動していた……！和睦の使者の効果により、お前のバトルは実質無効だ！」

和睦の使者
通常罠
このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける
全ての戦闘ダメージは０になる。
このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。
「……なるほど、確かにそのカードなら今のハングリーバーガーであっても攻撃が届かん。少しは楽しめそうだ、ターンエンド」
「って、今の一体なんだったの？いくら黄泉ガエルが墓地にいるとはいえ、なんでたかだか２００のダメージを防ぐためにこのタイミングで和睦の使者を……」
『お前なあ……儀式魔人どもの効果に決まってんだろ。詳しいことはお前の彼女にでも聞け。俺は観戦で忙しい』
「かのっ!?い、いや別に僕そんなんじゃっ！」
『あーるっさい。少しぐらい静かにしてろ』
「ど、どうしたの急に、だって？」
「いや、その、えーと……今何が起きたの？」
一瞬迷ったけど、どうせ今わからないとずっともやもやするだろうから素直に聞いておく。三沢が理解してるから天田も説明する気配が見えないし。

「つまり、儀式魔人たちにはそれぞれの効果があってね？それで……」
　要約すると、儀式魔人にはそれぞれ儀式召喚に使った時その儀式モンスターに特殊効果をつける能力があって、プレサイダーはそのモンスターが戦闘で相手を倒した時に1ドロー、プレコグスターによって戦闘ダメージを与えた時に相手は手札を1枚捨て、リリーサーの効果が生きてる限り相手はモンスターを特殊召喚できず、ディザースによっていかなるトラップの効果も受け付けなくなる。らしい。今和睦の使者が効いたのは、ハングリーバーガーに対して影響を与えるトラップじゃないから、とのこと。
「よくわかった、ありがとうね」
「どういたしまして、なんだって」
「……さあ、続けるぞ。とはいえ、ターンエンドだがな」
　三沢　ＬＰ４０００　手札：４　モンスター：オキシゲドン（攻）魔法・罠：０
　天田　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：ハングリーバーガー（攻）、光帝クライス（攻）魔法・罠：０
「俺のターン、ドロー！黄泉ガエルは自分が魔法、罠を使っていない場合、スタンバイフェイズに墓地からノーコストで特殊召喚できる……はずなんだが、リリーサーの効果でそれも無理、か。まあ仕方がないか、ハイドロゲドンを召喚！」
　酸素の翼竜の隣に水柱が立ち、水素の名を持つ恐りゅ……恐…竜…？まあ、本人が

恐竜だって言ってんだから恐竜なんだろう。とにかく立ち上がる。
ハイドロゲドン
効果モンスター
星４／水属性／恐竜族／攻１６００／守１０００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、
自分のデッキから「ハイドロゲドン」１体を特殊召喚する事ができる。
『ハイドロゲドン!?三沢、一体何企んでんだ?』
「……何をする気だ?」
「まあ見ていろ。手札を3枚伏せ、ターンを終了する」
そう自信満々に宣言した三沢に、ざわざわと会場がざわめく。あの三沢が何も考えずにハイドロゲドンを出すとは思えないけど……。
「……ドロー。リチュアル・ウェポンをハングリーバーガーに装備。レベル６儀式モンスターのハングリーバーガーは、攻守が１５００アップする」
「おっと、そこでカードを発動するぞ。リバースカード、スター・チェンジャーの効果で、ハングリーバーガーのレベルを1上げて7に変更する。これでリチュアル・ウェポンは対象不適切で破壊だな」
「……墓地から妖怪のいたずらのもう一つの効果発動。このカードを除外し、ハング

リーバーガーのレベルをエンドフェイズまで1下げて5にする。これでこのターンの間は問題ない」

ハングリーバーガー　☆6→5→6　攻2000→3500　守1850→3350

リチュアル・ウェポン

装備魔法

レベル6以下の儀式モンスターのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力と守備力は1500ポイントアップする。

今の一瞬のやり取りもすごかったけど、個人的にはそれよりソリットビジョンに反映された、大口を開けたハンバーガーが身にまとったポテトの剣と包み紙の鎧のほうが気になってしょうがなかった。確かにハンバーガーが鎧をつけるのは無理があるんだけども。あ、なんかおなか減ってきた。

『なにが腹減っただ、今生放送中だろが。全国に恥晒すな空気読めバーカ』

「相変わらず口悪いね。もー慣れたけどさ」

「……ハングリーバーガーで、ハイドロゲドンを攻撃。暴飲暴食メタボリック！」

「ああ、かかってこい」

ハングリーバーガー　攻3500→ハイドロゲドン　攻1600（破壊）

「……む？」

「永続トラップ、スピリットバリア発動。このカードが場にあって俺がモンスターをコントロールしている限り、俺への戦闘ダメージは０になる」

スピリットバリア……三沢のあのデッキはウォーター・ドラゴンが軸だけど、罠モンスターの数も割と多い。宮廷のしきたりとの相性がいいからとのことらしい。そして僕のメタル・リフレクト・スライムのように、罠モンスターというのは一回伏せておくだけでいいのでかなり出しやすい。モンスターが基本途切れることのないデッキだからこそ投入していたカードなんだろうけど、一切の特殊召喚ができない今じゃその守りもいつまで持つだろうか。ああそうか、だからこそ用心のためにハイドロゲドンを出したのか。それでもリスキーな選択だけど。

「……モンスターの戦闘破壊は完了、よって一枚ドロー。ターンを終了する。そしてこの時妖怪のいたずらの力がなくなりハングリーバーガーのレベルが７になり、リチュアル・ウェポンが対象不適当で自壊する」

ハングリーバーガー　☆６→７　攻３５００→２０００　守３３５０→１８５０

三沢　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：オキシゲドン（攻）魔法・罠：スピリットバリア、１（伏せ）

天田　ＬＰ３８００　手札：１　モンスター：ハングリーバーガー（攻）魔法・罠：

0

「俺のターン、ドロー！カードをセットしてターンを終了するっ！」

モンスターの表示形式すら変えず、ただ引いたカードをそのまま伏せただけの三沢に対し、再びざわざわと会場が揺れる。正直、僕にも三沢の狙いがさっぱりわからない。

「……手札が悪いのか？まあいい、ドロー。速攻魔法サイクロン発動、スピリットバリアを破か…」

「それも待った。この伏せカード、宮廷のしきたりを発動させてもらう」

サイクロンが巻き起こした小型の竜巻が、三沢を覆い隠す半透明のバリアに届くことなく霧散してただの風になる。

宮廷のしきたり

永続罠

このカードがフィールド上に存在する限り、

お互いのプレイヤーは「宮廷のしきたり」以外の

フィールド上に表側表示で存在する永続罠カードを破壊できない。

「宮廷のしきたり」は自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

「……ならばモンスターを潰していくまで！ハングリーバーガーでオキシゲドンに攻撃、暴飲暴食メタボリック！」

「ダメージは受けず、従って手札破壊効果も発生しない！もっとも、俺の手札は今０だがな」
ハングリーバーガー　攻２０００→オキシゲドン　攻１８００（破壊）
「……カードをドロー。１枚セットしてターンエンドだ」
三沢　ＬＰ４０００　手札…１　モンスター…なし　魔法・罠…スピリットバリア、宮廷のしきたり
天田　ＬＰ４０００　手札…１　モンスター…ハングリーバーガー（攻）　魔法・罠…１（伏せ）
「俺のターン、マジック・プランターを発動！場の宮廷のしきたりを墓地に送って、カードを２枚ドロー！」
マジック・プランター
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する
永続罠カード１枚を墓地へ送って発動できる。
デッキからカードを２枚ドローする。
「……手札増強か。好きにしろ」
「なら、このままやらせてもらうぞ。カードを１枚セットし、カードカー・Ｄを召喚して

リリースしさらにドロー、強制エンドフェイズでターンエンドだ」
カードカー・D
効果モンスター
星２／地属性／機械族／攻　８００／守　４００
このカードは特殊召喚できない。
このカードが召喚に成功した自分のメインフェイズ１に
このカードをリリースして発動できる。
デッキからカードを２枚ドローし、このターンのエンドフェイズになる。
この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚できない。
「……何を狙っているかは知らぬが、ドロー！手札のキラー・トマトを召喚する」
闇属性版グリズリーマザーであるリクルーター、顔のついた真っ赤なトマトが、ぴょんぴょん飛び跳ねながらケタケタと不気味な笑い声を上げる。そうかそうか、ハンバーガーの次はトマトかあ。
『まーた腹減ったとか言い出すんじゃねえだろーな』
ぎく。
キラー・トマト　攻１４００
「……キラー・トマトで直接攻撃を」

「レインボー・ライフ発動！手札のタイダルを捨てることで１４００回復！」
レインボー・ライフ
通常罠
手札を１枚捨てて発動できる。
このターンのエンドフェイズ時まで、
自分は戦闘及びカードの効果によって
ダメージを受ける代わりに、
その数値分だけライフポイントを回復する。
キラー・トマト　攻１４００→三沢（直接攻撃）
三沢　ＬＰ４０００→５４００
「……ターンを終了する」
「俺のターン、ドロー！カードを２枚伏せ、ハイドロゲドンを召喚する。そしてキラー・トマトに攻撃、ハイドロ・ブレス！」
ハイドロゲドン　攻１６００→キラー・トマト　攻１４００（破壊）
天田　ＬＰ４０００→３８００
「……キラー・トマトの効果発動！デッキから攻撃力１５００以下の闇属性、イナゴの佃煮……もとい、イナゴの軍勢を攻撃表示で特殊召喚する」

『こっちもあくまで食い物扱いかよ』

イナゴの軍勢

効果モンスター

星３／闇属性／昆虫族／攻１０００／守　５００

このカードは１ターンに１度だけ裏側守備表示にする事ができる。

このカードが反転召喚に成功した時、

相手フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を選択して破壊する。

「ハイドロゲドンの効果は封じられているからな。ターンエンドする」

三沢　ＬＰ５４００　手札：０　モンスター：ハイドロゲドン（攻）　魔法・罠：スピリットバリア、１（伏せ）

天田　ＬＰ３８００　手札：２　モンスター：ハングリーバーガー（攻）、イナゴの軍勢（攻）　魔法・罠：１（伏せ）

「……ドロー。まさにこの状況に合致したカードだ、まずはイナゴの軍勢を裏側守備表示に変更。そして悪魔の調理師を召喚する」

「この状況では一番来てほしくなかったモンスターだな……まあ、これまでのデッキパターンから言って入っているだろうとは思ってたが」

悪魔の調理師（デビル・コック）

効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／攻１８００／守１０００
このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、
相手はデッキからカードを２枚ドローする。
「……ここは堅実にいかせてもらうぞ、ハングリーバーガーでハイドロゲドンに攻撃」
ハングリーバーガー　攻２０００→ハイドロゲドン　攻１６００（破壊）
「スピリットバリアによって、ダメージは通らないがドローはできる、か。だがそれを待っていた！永続トラップ、グリード発動！」
「……おのれ、だがそれは諸刃の剣となる。悪魔の調理師でダイレクトアタック。さあ、２枚ドローしろ」
悪魔の調理師　攻１８００→三沢（直接攻撃）
三沢　ＬＰ５４００→３６００
「……そしてグリードの効果により、俺たちはダメージを受ける」
グリード
永続罠
カードの効果でドローを行ったプレイヤーは、そのターンのエンドフェイズ終了時にカードの効果でドローしたカードの枚数×５００ポイントダメージを受ける。

三沢　ＬＰ３６００→２６００
天田　ＬＰ３８００→３３００
「俺のターン、ドロー！３枚、か……まあ悪くない数字だ、カードを２枚伏せ、手札抹殺を発動！俺の手札はこのカードのみだから何も起きないが、お前は３枚捨て３枚ドローしてもらう」
自分と相手の手札を総とっかえする豪快な手札交換カード、手札抹殺。だがそのカードすらも、この状況では相手の手札を引っ掻き回したうえにライフの四分の一以上ものダメージまで与えられるお手軽バーンカードだ。
「……甘い。チェーンしてトラップ発動、全弾発射。俺の手札を全て弾丸にして射出する」
全弾発射（フルバースト）
通常罠
このカードの発動後、手札を全て墓地へ送る。
墓地に送ったカードの枚数×２００ポイントダメージを相手ライフに与える。
三沢　ＬＰ２６００→２０００
「手札抹殺が不発になったか。できることもない、ターンエンドだ」
三沢　ＬＰ２０００　手札…０　モンスター…なし　魔法・罠…スピリットバリア、グ

リード、３（伏せ）
天田　ＬＰ３３００　手札：２　モンスター：ハングリーバーガー（攻）、???（イナゴの軍勢、伏せ）、悪魔の調理師（攻）魔法・罠：１（伏せ）
「……ドロー。万一のためにやれることはやっておくか。イナゴのつく……ゴホン、軍勢を反転召喚し、効果によってグリードを破壊する」
茶色い体の大イナゴが群れになってグリードのカードに飛びかかり、その小さくも鋭い牙で跡形もなく食らいつくそうとする。が、彼らが飛びかかったのはなぜかその隣に伏せられたカード……よく見るとそこには『スカ』の二文字が黒々と力強い書体で書かれていた。
「偽物のわなをチェーン発動、これでグリードは破壊されない」
偽物のわな
通常罠
自分フィールド上に存在する罠カードを破壊する魔法・罠・効果モンスターの効果を相手が発動した時に発動する事ができる。
このカードを代わりに破壊し、他の自分の罠カードは破壊されない。
セットされたカードが破壊される場合、そのカードを全てめくって確認する。
「……イナゴの軍勢を裏守備表示に変更。悪魔の調理師で直接攻撃」

「ここが使いどころか！攻撃の無力化を発動、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終わりにする！」

「……トラップを受け付けないハングリーバーガーで攻撃していればよかったか。ターンエンドだ」

三沢　ＬＰ２０００　手札…０　モンスター…なし　魔法・罠…スピリットバリア、グリード、１（伏せ）

天田　ＬＰ３３００　手札…２　モンスター…ハングリーバーガー（攻）、???（イナゴの軍勢、伏せ）、悪魔の調理師（攻）　魔法・罠…１（伏せ）

「俺のターン、ドロー！魔法カード、強欲で謙虚な壺を発動！自分のデッキの上からカードを３枚めくり、１枚を手札に加える。今の状況なら特殊召喚を封じるデメリットも気にならないしな。そして手札に加える効果はグリードの対象にもならない。１枚目、ジェネクス・ウィンディーネ。２枚目、マインドクラッシュ。３枚目は……この、カードは……」

「……？どうした、公開しろ」

「ああ、わかってる。……３枚目、白魔導士ピケル、だ」

一瞬だけ、デュエル場が完全に静まり返った。へえ、三沢もやっぱりああいう女の子カードを入れるんだ、って思ったのは胸の中にしまっておく。明日香が、というか観客

席の女子全員がビミョーに引いた目で見てたのがすごく印象に残ったから、あんまり下手なことを口に出すのは控えておこう。そういや僕のデッキもレイス入ってるけど、なんなんだろうこの扱いの差は。三沢、哀れ。

『あー、うん。いいか十代、清明。何も言ってやるなよ、ただでさえ公開処刑みたいなもんだってのにここで追い打ちかけるのはあんまりすぎる』

「……三沢大地、といったな。この勝負、俺にとってはより負けられぬ理由ができた」

「なに?ま、まさか天田、お前」

今の会話で何かに気付いたらしい三沢の瞳に、これまで僕が見たこともないほどの闘志が宿る。と思ったら、向かい合う天田の気迫も段違いになっていた。

「……その通り。俺はクラン派だ」

「ふ、なるほど。そういうことならこの勝負、なにがなんでも勝つしかなさそうだ。俺は、ピケルを手札に加える。そしてそのまま召喚だ」

ここにきて突然負けられない理由が増えたらしい三沢が召喚した、白い服を着た可愛らしい女の子の魔法使い。笑顔を振りまいて登場したものの相手の強面のハンバーガーと見るからに危ないコックを見て、ちょっと泣きべそをかいた。

白魔導士ピケル
効果モンスター

星２／光属性／魔法使い族／攻１２００／守　　０
自分のスタンバイフェイズ時、自分のフィールド上に存在する
モンスターの数×４００ライフポイント回復する。
「そして、墓地のネクロ・ディフェンダーの効果発動。このカードを除外し、ピケルを守らせる」
ネクロ・ディフェンダー
効果モンスター
星２／闇属性／悪魔族／攻　　０／守　８００
自分のメインフェイズ時に、
墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、
自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。
次の相手のエンドフェイズ時まで、
選択したモンスターは戦闘で破壊されず、
選択したモンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。
「そしてピケルで裏守備のイナゴの軍勢に攻撃、ターンを終了する」
白魔導士ピケル　攻１２００→???（イナゴの軍勢）守５００（破壊）
「……ドロー、やれることもなくターンエンドだ」

三沢　ＬＰ２０００　手札…０　モンスター…白魔導士ピケル（攻）魔法・罠…スピリットバリア、グリード、１（伏せ）
天田　ＬＰ３３００　手札…３　モンスター…ハングリーバーガー（攻）、悪魔の調理師（攻）魔法・罠…１（伏せ）
「俺のターン、まずスタンバイフェイズにピケルの効果が発動し、ライフを４００回復」
三沢　ＬＰ１６００→２４００
「そして魔法カード、光の護封剣を発動。これでお前のモンスターはどちらも攻撃ができない」
光の護封剣
通常魔法
相手フィールド上のモンスターを全て表側表示にする。
このカードは発動後、相手のターンで数えて３ターンの間フィールド上に残り続ける。
このカードがフィールド上に存在する限り、
相手フィールド上のモンスターは攻撃宣言できない。
「……小賢しい真似を」
「お互い様だろう。【ウォーター・ドラゴン】にとって、特殊召喚封じは最高のメタだか

らな。ターンエンドだ」

「……ふん、ドロー。魔法カード、簡易融合を発動。エクストラのカルボナーラ戦士を特殊召喚する」

コックとハンバーガーの間にボワンと音を立てて現れた超巨大なカップ麺の蓋が開き、大量の湯気の中から紫色の鎧を着た戦士が剣を構えて飛び出してくる。カルボナーラ、か。ふむ、今度作ってみようかな。材料は明日香にでも頼み込んで分けてもらおうっと。ブルー寮なら食料も山のようにため込んでるだろうし。

簡易融合（インスタント・フュージョン）

通常魔法

１０００ライフポイントを払って発動できる。

レベル５以下の融合モンスター１体を融合召喚扱いとして

エクストラデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、

エンドフェイズ時に破壊される。

「簡易融合」は１ターンに１枚しか発動できない。

天田　ＬＰ３３００→２３００

カルボナーラ戦士　攻１５００

「……カルボナーラ戦士をリリースし、ドドドウォリアーをアドバンス召喚する」
ドドドウォリアー
効果モンスター
星６／地属性／戦士族／攻２３００／守　９００
このカードはリリースなしで召喚できる。
この方法で召喚したこのカードの元々の攻撃力は１８００になる。
また、このカードが攻撃する場合、
ダメージステップ終了時まで相手の墓地で発動する効果は無効化される。
背中に『怒』の文字を背負い、斧を持ったバイキングの格好をした戦士。でもなんでドドド？……ああそうか、バイキング（食べ放題）か。でもここまでくるとこじつけも立派なもんだよね。
「……護封剣の効果で攻撃はできない、ターンエンドだ」
三沢　ＬＰ２０００　手札：０　モンスター：白魔導士ピケル（攻）　魔法・罠：スピリットバリア、グリード、光の護封剣（残２）、１（伏せ）
天田　ＬＰ２３００　手札：２　モンスター：ハングリーバーガー（攻）、悪魔の調理師（攻）、ドドドウォリアー（攻）　魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン、ドローしてピケルの効果！再び回復を行う。そしてメイン１、カードを１

枚伏せてターンエンド」

三沢　ＬＰ２４００→２８００

「……ドロー、ターンエンド」

三沢　ＬＰ２８００　手札…０　モンスター…白魔導士ピケル（攻）　魔法・罠：スピリットバリア、グリード、光の護封剣（残１）、２（伏せ）

天田　ＬＰ２３００　手札…３　モンスター…ハングリーバーガー（攻）、悪魔の調理師（攻）、ドドドウォリアー（攻）　魔法・罠…１（伏せ）

「俺のターン、ドロー！準備は万全ではないにしろ整った、ここで攻めに行く！その前にまずはピケルの効果で、４００の回復をするがな」

三沢　ＬＰ２８００→３２００

「行け、ピケル！悪魔の調理師に攻撃！そしてこの攻撃時、リバースカード発動！奇跡の軌跡！」

懐から木の杖を取り出したピケルが、元から持っていたものと合わせ２本の杖から光を放つ。その光は正確に、ハンバーガーとコックを貫いていた。

奇跡の軌跡（ミラクルルーカス）

通常罠

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。

相手はデッキからカードを1枚ドローする。
このターンのエンドフェイズ時まで、
選択したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップし、
1度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃する事ができる。
そのモンスターが戦闘を行う場合、
相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは0になる。
「まずこの効果で、お前にはカードをドローしてもらう。そして俺のピケルの攻撃力は２２００に上がり、お前の自慢のハンバーガーを打ち砕く！」
白魔導士ピケル　攻１２００→２２００→悪魔の調理師　攻１８００（破壊）
白魔導士ピケル　攻２２００→ハングリーバーガー　攻２０００（破壊）
「カードをセットしてターンエンド……そして、お前にはさっきドローした分のダメージを受けてもらう」
天田　ＬＰ２３００→１８００
「……まさか奇跡の軌跡のデメリットを逆手に取るとはな。ドロー、儀式の準備を発動。デッキから2枚目のハングリーバーガー、墓地からハンバーガーのレシピをサーチする」
儀式の準備

通常魔法
デッキからレベル7以下の儀式モンスター1体を手札に加える。
その後、自分の墓地の儀式魔法カード1枚を選んで手札に加える事ができる。
「……そしてハンバーガーのレシピを発動。墓地のレベル3の儀式魔人、リリーサーとプレコグスターを除外してハングリーバーガーを再臨させる。せっかく苦労して倒したところ悪いが、これでまだ特殊召喚封じと手札破壊の効果は使うことができる。ドローサイダー効果は邪魔になるだけだ」
ハングリーバーガー　攻２０００
「……そしてとどめに、護封剣の効果もこれで切れる。ターンエンドだ」
エンド宣言と共にその力を失った光の護封剣が、文字通り光になって消えていく。そしてそれに伴い、照明は点いているにもかかわらずなぜかデュエル場全体が日食のような暗闇に包まれる。
「エンドフェイズ時にリバースカード、皆既日食の書だ」
皆既日食の書
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て裏側守備表示にする。
このターンのエンドフェイズ時に相手フィールド上に

裏側守備表示で存在するモンスターを全て表側守備表示にし、
相手はその枚数分だけデッキからカードをドローする。
ハングリーバーガー　攻２０００↓（セット状態）↓守１８５０
ドドドウォリアー　攻２３００↓（セット状態）↓守９００
白魔導士ピケル　攻１２００↓セット
「エンドフェイズだからすぐに表に戻るが、その時のドロー効果は受けてもらうぞ」
「……おのれ…！」
天田　ＬＰ１８００↓８００
三沢　ＬＰ３２００　手札：０　モンスター：???（白魔導士ピケル、伏せ）　魔法・罠：スピリットバリア、グリード、２（伏せ）
天田　ＬＰ８００　手札：６　モンスター：ハングリーバーガー（守）、ドドドウォリアー（守）　魔法・罠：１（伏せ）
「ねえユーノ、今の三沢の手ってちょっと危険じゃない？１０００ダメージは大きいけど、それで２枚もドローさせてたらいくらなんでも危ないんじゃ」
『ふむ、まだお前は雑魚だなってことはとてもとてもとてもよくわかった』
「ひどいっ！」
『しゃあねえなあ、簡単に解説してやる。儀式魔人がモンスターにつける効果はどれも

厄介揃いだが所詮はどの効果もその器、つまり儀式モンスターに完全に依存してんだよ。いや、この言い方じゃちょっと違うか。まあとにかく、儀式モンスターがいて初めて成立する効果なんだってこった。今の皆既日食はあのハンバーガーをセット状態にしただろ?あの時点で儀式魔人たちとハンバーガーの間にあったつながりは消えたんだ』

「えっと、つまり……」

『これでハングリーバーガーはただの守備力１８５０のバニラになったってこと。これで三沢のデッキは特殊召喚が使えるようになった。これはとんでもなくデカい、２枚ドローのリスクを受けてでもやる意味のあることだぞ?』

「な、なるほど!」

「俺のターン、ドロー!ピケルはセット状態だから効果が使えないが……２枚目のマジック・プランターを発動、グリードを墓地に送って２枚ドローする」

あれだけ大量のバーンダメージを稼いだグリードも、三沢の特殊召喚が復活したことでその役目が終了した。まさか、ここからあのカードが出てくるんだろうか。

「３枚目、最後のマジック・プランターを発動!スピリットバリアを墓地に送ってさらに２枚ドローだ。そしてさらに貪欲な壺!俺の墓地の黄泉ガエル、ストリーム、タイダル、アビス・ソルジャー、カードカー・Ｄをデッキに戻して２枚ドローを行う」

あれよあれよという間に神がかった引きの良さで手札を増やしていく三沢。アビス・ソルジャーは多分、天田の手札抹殺で墓地に送ったモンスターなんだろう。

「さて、待たせたな。まず手札のオキシゲドンを召喚する。そして死者蘇生発動、墓地のハイドロゲドンを復活させる！」

オキシゲドン　攻１８００

ハイドロゲドン　攻１６００

「そしてピケルを反転召喚し、バトル！ハイドロゲドンでドドドウォリアーを攻撃、ハイドロ・ブレス！」

???→白魔導士ピケル　攻１２００

ハイドロゲドン　攻１６００→ドドドウォリアー　守９００（破壊）

「この時ハイドロゲドンの特殊効果により、もう一体ハイドロゲドンをデッキから特殊召喚！」

ハイドロゲドン　攻１６００

「だが、いくらモンスターを並べてもハングリーバーガーの守備力は１８５０！そのモンスターではまだ力不足だ！」

「ああ、確かにそうだな。だがな天田、覚えておけ！水素と酸素は単体ではちっぽけな元素だが、二つを合わせることで全ての命を生み出した偉大な存在、水となる！メイン２

に移行し、ポンディング―Ｈ２Ｏを発動！オキシゲドン１体とハイドロゲドン２体をリリースし、化学反応！デッキのウォーター・ドラゴンを特殊召喚する！」

やっぱり、というべきなんだろか。満を持して特殊召喚される、三沢の水デッキ最大のキーカードにして切り札モンスター。３体の恐竜が混ざり合って１体の海竜になり、ハングリーバーガーを静かに見下ろす。

ポンディング―Ｈ２Ｏ

通常魔法

自分フィールド上に存在する「ハイドロゲドン」２体と

「オキシゲドン」１体を生け贄に捧げる。

自分の手札・デッキ・墓地から

「ウォーター・ドラゴン」１体を特殊召喚する。

ウォーター・ドラゴン

効果モンスター

星８／水属性／海竜族／攻２８００／守２６００

このカードは通常召喚できない。

「ポンディング―Ｈ２Ｏ」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

炎属性と炎族モンスターの攻撃力は０になる。
このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する
「ハイドロゲドン」２体と「オキシゲドン」１体を特殊召喚する事ができる。
「カードをセットして、ターン終了だ」
「……ドロー！装備魔法、巨大化をハングリーバーガーに装備！俺の方がライフは下だ、よって攻撃力が倍になる」
ぶるぶるとハンバーガーが震えだすと、なんとポンッと音を立てて具材のトマト、レタス、ミートの量が倍になり、さらにピクルスまで追加された。頭の日の丸の旗も心なしかおっきくなったし。巨大化っていうよりメガ盛りだねこりゃ。
巨大化
装備魔法
自分のライフポイントが相手より下の場合、
装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。
自分のライフポイントが相手より上の場合、
装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。
ハングリーバーガー　攻２０００→４０００
「……この攻撃が通ればいい、それだけの事！ハングリーバーガーでピケルを攻撃！暴

飲暴食メタボリック！」

「残念だったな、天田。このカードが攻撃反応じゃない可能性に賭けたんだろうが……リバースカードを2枚、援護射撃と攻撃の無敵化を発動！ウォーター・ドラゴン、ピケルの援護に回ってくれ！そしてピケルは無敵化2つ目の効果で、戦闘破壊されなくなる！」

ウォーター・ドラゴンが吐き出した水のブレスとピケルが杖から放った光の球が一つになり、ハングリーバーガーのピクルス乱れ撃ち攻撃とぶつかり合って激しい爆発を巻き起こした。なんでデュエルディスクの演出って、モンスターどうしが引き分けになった時はやたらと爆発させたがるんだろう。

『海馬コーポレーションの趣味なんじゃね？』

「なんかありそうな話だね」

援護射撃

通常罠

相手モンスターが自分フィールド上モンスターを攻撃する場合、

ダメージステップ時に発動する事ができる。

攻撃を受けた自分モンスターの攻撃力は、

自分フィールド上に表側表示で存在する他のモンスター1体の攻撃力分アップする。

攻撃の無敵化
通常罠
バトルフェイズ時にのみ、以下の効果から1つを選択して発動できる。
●フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。
選択したモンスターはこのバトルフェイズ中、
戦闘及びカードの効果では破壊されない。
●このバトルフェイズ中、自分への戦闘ダメージは０になる。
ハングリーバーガー　攻４０００（破壊）→白魔導士ピケル　攻１２００→４０００
「……カードをセット、ターンエンド（……まだ大丈夫だ、俺の場の伏せたままのカードは『闘争本能』。このカードで手札の素早いモモンガを特殊召喚し、さらに今伏せた死力のタッグ・チェンジに繋げる。これでダメージを消しつつ、手札のマッシブ・ウォリアーを特殊召喚する。これならモンスターが3体になって、少なくとも次のターンは耐え切れるはずだ）」
闘争本能
通常罠
相手が直接攻撃を宣言した時、自分フィールド上に
モンスターが存在しない場合に発動する事ができる。

手札からレベル４以下の獣族モンスター１体を
表側攻撃表示で特殊召喚する。
素早いモモンガ
効果モンスター
星２／地属性／獣族／攻１０００／守　１００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分は１０００ライフポイント回復する。
さらにデッキから「素早いモモンガ」を任意の数だけ裏側守備表示で特殊召喚できる。
死力のタッグ・チェンジ
永続罠
自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスターが
戦闘によって破壊されるダメージ計算時、
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージを０にし、
そのダメージステップ終了時に手札からレベル４以下の
戦士族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
マッシブ・ウォリアー
効果モンスター

星２／地属性／戦士族／攻　６００／守１２００
このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
このカードは１ターンに１度だけ、戦闘では破壊されない。
……なんだろう、今一瞬だけすごい負けフラグが立った気がしたのは。気のせいかな？
『いや、俺も同じこと思った。なんか盛大なフラグ立てやがったんだな』
三沢　ＬＰ３２００　手札：０　モンスター：ウォーター・ドラゴン（攻）、白魔導士ピケル（攻）魔法・罠：なし
天田　ＬＰ８００　手札：５　モンスター：なし　魔法・罠：２（伏せ）
「俺のターン、ドロー。ピケルの力でさらに回復し、ナイト・ショット発動！このカードは相手の場の魔法、罠を１枚破壊するが、相手はそのカードをチェーンして発動できない……そうだな。俺が破壊するのは、先に伏せてあった方のカードだ！」
「……くっ、俺の負けか」
「ウォーター・ドラゴンでダイレクトアタック！アクア・パニッシャー！」
三沢　ＬＰ３２００→４０００
ウォーター・ドラゴン　攻２８００→天田（直接攻撃）
天田　ＬＰ８００→０

「勝ってきたぞ、みんな。後は任せた」
「お疲れ様、三沢。それでさ、少し聞きたいことがあるんだけど」
「どうした？」
「まず一つ目だけど、試合前に入れ替えてたカードってグリードだよね。なんでバーン要素を詰め込んだの？」
「ああ、あれか。万丈目はプライドこそ高いがけっして馬鹿じゃない、俺のデッキが特殊召喚に頼り切りなことは気づいていたはずだ。だから、それに対するメタ要素を持つデュエリストを俺にぶつけてくるのは読めていた。ライオウや黒角笛３積みぐらいならまだ何とかなるが、最悪の事態が起きた時のために保険をかけておいたのさ」
「それじゃあさ、もう一ついいかな？」
「ああ、言ってみてくれ」
「ピケ…」
「さあ河風君、次の出番は頑張ってくれ!!ここでもう一勝できればだいぶこっちが有利になるからな!!」
「い、いやあの三さ…」

「頼んだぞ、本当に！油断しないようにな!!」
「……」
『だーから言ったろー？あんましいじめてやんなって』

ターン18　中堅、形を変える襲撃者

「じゃあ行ってくるよー、だってさ」
「うん、頑張ってね～」
　5分休憩も終わり、1勝1敗で迎えた中堅戦。ここで勝っておくとグッと有利になれる、結構大事な試合なんだけど……まあ、夢想はいつも通り、一切気負わずいつも通りの自然体で歩きだす。この物怖じとか緊張とかと縁がなさそーな性格も彼女の人気の一つなんだろう。んでもって、それは相手にする側からしたらたまったもんじゃないわけで。なにしろ自分のペースがうまく取れなくなるからなぁ。
『たまにいるよな、ああいうプレッシャーがかかる場所でまるっきり自然体だから精神的に始まる前から有利になれる奴。それに対抗するにはあっちも例えば……』
「よろしく、だってさ」
「おうともよ！俺は酒田（さけだ）、サンダー四天王の百だぜ！こんな晴れ舞台に立てたんだ、ガンガン行くから覚悟しとけよ！」
『……そう、こーゆータイプの奴だな。あえて言うなら十代タイプ？』
「ていうか、やっぱり百田じゃなかったね。まあそんな都合いい話あるわけ……」

『三桁→さんけた→さけだ→酒田。ってのはどうだ？』
「あったー!?」

「「デュエル!!」」
「先攻は俺からだな、ドロー！最初から飛ばすぜ、手札抹殺！」
手札抹殺
通常魔法（制限カード）
お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから
捨てた枚数分のカードをドローする。
「さらにさらに、手札のモンタージュ・ドラゴンの効果発動！手札から鉄巨人アイアンハンマー、異次元ジェット・アイアン号、異次元エスパースター・ロビンを墓地に送って、こいつを特殊召喚だぜ！聞いて驚くなよお前ら、このカードの攻撃力はたった今捨てたモンスターのレベルの３００倍だあ！」
何の前触れもなく、３つ首の龍が現れる。よく見るとその首はそれぞれ今捨てたモンスターの顔に似た形だった。
『事故率半端なさそうだな……えーっと、確かアイアンハンマーが８でアイアン号が１０でロビンが１０レベだったな。ってことは２８の３００倍で８４００とかいうサイ

バー流並みのパワー馬鹿になるわけだ』
呆然としながらユーノが呟くが、全くだと思う。なんで最上級モンスターばっかりあんなに入ってるんだろう。
モンタージュ・ドラゴン
効果モンスター
星８／地属性／ドラゴン族／攻　　？／守　　０
このカードは通常召喚できない。
手札からモンスター３体を墓地へ送った場合のみ特殊召喚できる。
このカードの攻撃力は、墓地へ送ったそのモンスターのレベルの合計×３００ポイントになる。
モンタージュ・ドラゴン　攻０→８４００
「さらにさらにさらに、強欲なカケラを発動！ターンを終わってやるぜー！」
『……だんだんイライラしてきたな』
「まあまあ、そーゆーこと言わないの」
強欲なカケラ
永続魔法
自分のドローフェイズ時に通常のドローをする度に、

このカードに強欲カウンターを1つ置く。
強欲カウンターが2つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、
自分のデッキからカードを2枚ドローする。
「私のターン、ドロー！」
さっき酒田がした墓地肥やし……モンタージュ・ドラゴンのインパクトのせいで頭から吹っ飛んでたけど、よく考えたら彼女のワイトにとっては墓地肥やしこそが勝利への道そのもの。この状況からでも十分巻き返せるんじゃないだろうか。
「モンスターをセットして、強制転移を発動するんだってさ。私のセットモンスターをあげるから、あなたのそのドラゴンを私にちょうだい？」
「なっ、ふざけんな……ああ、俺のモンタージュ・ドラゴン！」
あー、うん。ワイトも墓地肥やしもまるっきり関係なかったわ。
『まあ、あんだけ手札消費荒けりゃ妨害もできんわな』
強制転移
通常魔法
お互いはそれぞれ自分フィールド上のモンスター1体を選び、
そのモンスターのコントロールを入れ替える。
そのモンスターはこのターン表示形式を変更できない。

「モンタージュ・ドラゴンで私のセットモンスターに攻撃するんだってさ。ぱ、ぱわー・こらーじゅ？」

モンタージュ・ドラゴン　攻８４００→???　守３００（破壊）

「破壊されたチュウボーンのリバース効果で、私の場にはトークンが３体やってくるよ」

チュウボーン

効果モンスター

星３／地属性／アンデット族／攻　３００／守　３００

リバース：相手フィールド上に「チュウボーンＪｒ．トークン」

（アンデット族・地・星１・攻１００／守３００）３体を守備表示で特殊召喚する。

チュウボーンＪｒ．トークン×３　守３００

「これでターンエンド、だって」

酒田　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：なし　魔法・罠：強欲なカケラ（０）

夢想　ＬＰ４０００　手札：４　モンスター：モンタージュ・ドラゴン（攻）、チュウボーンＪｒ．トークン×３（守）　魔法・罠：なし

「ちくしょう、よくも俺のモンスターを！ドロー、これでカケラにカウンターがたまるぜ！そして俺のエース、ファントム・オブ・カオスを召喚だあ！効果発動、変☆身！異次元ジェット・アイアン号出航！」

なんだかよくわからないドロドロした黒いヘドロのようなモンスターが、いきなり動き出して異次元ジェット・アイアン号の形になる。……真っ黒だけど。
ファントム・オブ・カオス
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／攻　　０／守　　０
自分の墓地に存在する効果モンスター１体を選択し、ゲームから除外する事ができる。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、
このカードはエンドフェイズ時まで選択したモンスターと同名カードとして扱い、
選択したモンスターと同じ攻撃力とモンスター効果を得る。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。
このモンスターの戦闘によって発生する相手プレイヤーへの戦闘ダメージは０になる。
「変身したこのカードは、このターンだけ異次元ジェット・アイアン号になるんだぜ！まいったか！」
ファントム・オブ・カオス→異次元ジェット・アイアン号　攻０→４０００
「そしてアイアン号の効果、このカードをリリースして墓地のロビンファミリーを全員

集合させる！」

異次元ジェット・アイアン号

効果モンスター

星１０／光属性／機械族／攻４０００／守　　０

このカードは通常召喚できない。

自分の手札・フィールド上から、

「異次元エスパー・スター・ロビン」「野獣戦士ピューマン」

「鳳王獣ガイルーダ」「鉄巨人アイアンハンマー」を

それぞれ1体ずつ墓地へ送った場合に特殊召喚できる。

また、自分フィールド上のこのカードをリリースする事で、

自分の墓地の「異次元エスパー・スター・ロビン」「野獣戦士ピューマン」

「鳳王獣ガイルーダ」「鉄巨人アイアンハンマー」をそれぞれ1体ずつ選択して特殊召喚する。

異次元エスパー・スター・ロビン　攻３０００

野獣戦士ピューマン　守１０００

鳳王獣ガイルーダ　守１２００

鉄巨人アイアンハンマー　守３５００

「アイアンハンマーの効果発動！ロビンを選択することで、このターンロビンはダイレクトアタックができる！決めるぞロビン、ビック・リパンチ！」
鉄巨人アイアンハンマー
効果モンスター
星８／地属性／岩石族／攻　９００／守３５００
自分フィールド上に「異次元エスパー・スター・ロビン」「野獣戦士ピューマン」「鳳王獣ガイルーダ」が存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚できる。
このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、表示形式を変更できない。
また、１ターンに１度、自分フィールド上のモンスター１体を選択して発動できる。
このターン、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃できる。
異次元エスパースター・ロビン　攻３０００→夢想（直接攻撃）
夢想　ＬＰ４０００→１０００
「……さっきからポンポン出てきてるモンスターの攻撃力がとてもデュエルの序盤とは思えないんだけど」
『インフレだよなぁ。でもこういう脳筋の殴り合いって俺はわりと好きだぜ』
「ターンエンドしてやるよ。ふふふ、こりゃあ俺の勝ちは決まったようなもんかな？な

にしろロビンが場にいる限り、お前はロビン以外のモンスターを攻撃とカード効果の対象にすることができないからなわっはっは！」
「話はそれで終わり？なら、ドローするんだって。通らないとは思うけど、一応モンタージュ・ドラゴンでロビンを攻撃！パワー・コラージュ！」
「当然通さないぜ！墓地のネクロ・ガードナーを除外して、相手の攻撃一回を無効にする！」
「あー、うん、だよねー、だって」
十代のデッキにも入っている闇の戦士が半透明な姿でロビンの前に仁王立ちし、三つ首竜のブレス攻撃をはじく。まあ、わざわざロビンを攻撃表示にしたんだから当然何かしらの対策はあるよね。当然夢想もそれはわかってて攻撃したようだ。今の攻撃は単に、ネクガを使わせるためだけの一撃だったんだろう。
「メイン2に移行して、モンタージュ・ドラゴンをリリース！神秘の中華なべを発動するみたいだよ。あ、選ぶのは攻撃力ね」
『こっちもこっちでなかなかにえげつねえな』
神秘の中華なべ
速攻魔法
自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。

生け贄に捧げたモンスターの攻撃力か守備力を選択し、
その数値だけ自分のライフポイントを回復する。
夢想　ＬＰ１０００→９４００
「カードをセット、ターンエンドだってさ」
酒田　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：異次元エスパースター・ロビン（攻）、鳳王獣ガイルーダ（守）、野獣戦士ピューマン（守）、鉄巨人アイアンハンマー（守）　魔法・罠：強欲なカケラ（１）
夢想　ＬＰ９４００　手札：３　モンスター：チュウボーンＪｒ．トークン×３（守）
魔法・罠：１（伏せ）
「ええい、ライフがどんだけ増えたって、全部削ればいいだけさ！ドロー、そして二つ目のカウンターが乗ったカケラを墓地に送ってさらにドロー！これで手札は３枚だ、このままガンガン攻めてやる！アイアンハンマー以外のモンスターを攻撃表示に変更し、アイアンハンマーでロビンを選択！そしてフィールド魔法、混沌空間を発動！さらにファントム・オブ・カオスを召喚して……ここは安全に、その伏せから潰しておくか。変☆身！コアキメイル・マキシマム参上！」
混沌空間（カオス・ゾーン）
フィールド魔法

モンスターがゲームから除外される度に、
1体につき1つこのカードにカオスカウンターを置く。
1ターンに1度、自分フィールド上のカオスカウンターを4つ以上取り除く事で、
取り除いた数と同じレベルを持つ、
ゲームから除外されているモンスター1体を選択し、
自分フィールド上に特殊召喚する。
フィールド上のこのカードが相手の効果によって墓地へ送られた時、
このカードに乗っていたカオスカウンターの数以下のレベルを持つ
光属性または闇属性のモンスター1体をデッキから手札に加える事ができる。
コアキメイル・マキシマム
効果モンスター
星8／風属性／ドラゴン族／攻3000／守2500
このカードは通常召喚できない。
手札の「コアキメイルの鋼核」1枚をゲームから除外した場合に
特殊召喚する事ができる。
このカードのコントローラーは自分のエンドフェイズ毎に
手札から「コアキメイルの鋼核」1枚を墓地へ送るか、

「コアキメイル」と名のついたモンスター1枚を墓地へ送る。
または、どちらも行わずにこのカードを破壊する。
1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に
相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する事ができる。
ファントム・オブ・カオス→コアキメイル・マキシマム　攻０→３０００
「墓地のマキシマムが除外されたことでカウンターが1つ乗り、そのマキシマムの効果で伏せカードを除去させてもらうぜ！」
コアキメイル・マキシマムの形になったファントム・オブ・カオスのブレス攻撃が、夢想の伏せだった血の代償を打ち抜き焼き尽くす。多分バトルフェイズ開始時にチュウボーンＪｒ．トークンをリリースして上級モンスターを呼び出すつもりだったんだろうけど、今は酒田のメインフェイズだからその効果も使えない。
「さあ、バトルだ！ファントム、ピューマン、ガイルーダでそのネズミ野郎に攻撃！がら空きになったところをロビンで攻撃、ビック・リパンチ！」
コアキメイル・マキシマム（ファントム・オブ・カオス）　攻３０００→チュウボーンＪｒ．トークン　守３００（破壊）
野獣戦士ピューマン　守１０００→攻１６００→チュウボーンＪｒ．トークン　守３００（破壊）

鳳王獣ガイルーダ　守１２００→攻２５００→２８００→チュウボーンＪｒ．トークン　守３００（破壊）
異次元エスパースター・ロビン　攻３０００→夢想（直接攻撃）
夢想　ＬＰ９４００→６４００
「……まだまだ平気だよ、だってさ」
「ぐぐぐ、そりゃそうだろうよ！モンタージュの攻撃力８４００もあったんだぞ!?メイン２、カードをセットしてターンエンド！」
コアキメイル・マキシマム→ファントム・オブ・カオス　攻３０００→０
「私のターン、ドロー。う～ん、しょうがないかな？手札の生者の書―禁断の呪術を発動。墓地のアンデット族のゾンビキャリアを特殊召喚して、そっちの墓地のバーサーク・デッド・ドラゴンを除外するんだってさ」
「ちっ、最初にこっそり送っといたのがばれてたのかよ！まあいいさ、混沌空間に２つ目のカウンターが乗るぜ」
『うまいな。なるほど、さっきはダメージ重視でバーサークを使うか安全重視でマキシマムになるかで迷ってたのか』
ゾンビキャリア　攻２００
「へっ、俺のロビンファミリー相手にその幽霊が何をするってんだ！」

「む。私のカードをなめないでね、ゾンビキャリアをリリースして砂塵の悪霊をアドバンス召喚するよ、だってさ」

フィールドが何も見えなくなるほどに猛烈な砂嵐が吹き荒れると、その砂に触れたすべてのモンスターが破壊されていく。そして最後に残ったのは、さっきまでそこにはいなかった化け物。赤い肌に爛々と光る目、そして全身から生えた謎の針が、なんとも不気味な味を出している。

砂塵の悪霊

スピリットモンスター

星６／地属性／アンデット族／攻２２００／守１８００

このカードは特殊召喚できない。

召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

このカードが召喚・リバースした時、

このカード以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「げーっ！ロビンファミリーも、ファントム・オブ・カオスも、全員吹っ飛んじまったーっ!?」

「砂塵の悪霊でダイレクトアタック！」

砂塵の悪霊　攻２２００→酒田（直接攻撃）

「まだまだぁ！スター・ロビン第二の効果発動！相手がダイレクトアタックを宣言した時、このカードは表側守備表示で特殊召喚できる！スター・ロビンよ永遠（とわ）に！」
「なら、そのロビンを攻撃！」
砂塵の悪霊　攻２２００→異次元エスパースター・ロビン　守１５００（破壊）
「この効果を使ったロビンは除外されるから、混沌空間のカウンターはこれで３つだぜ！」
「カードを２枚伏せて、エンドフェイズ。砂塵の悪霊はスピリットモンスターだから、手札に戻って今度こそターンエンドみたいだよ」
酒田　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：なし　魔法・罠：なし　場：混沌空間（３）
夢想　ＬＰ６４００　手札：１　モンスター：なし　魔法・罠：２（伏せ）
「手札も場もすっからかんか……参ったねこりゃ、ドロー！永続魔法、炎の護封剣を発動！」
燃え盛る青い炎の剣がドスッドスッとフィールドに突き刺さり、どんなモンスターでも突破できないような防御の構えを作る。
炎の護封剣
永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
相手フィールド上のモンスターは攻撃宣言できない。
自分フィールド上にモンスターが存在する場合、
または相手の手札が５枚以上の場合、このカードは破壊される。
「この布陣、突破できるならしてみやがれ！」
『布陣も何も自壊効果ふたつも抱えたのが１枚しかねーじゃ……うんにゃ、言うだけ野暮だな』
「私のターン、ドロー！冥界の使者を召喚するよ」
冥界の使者　攻１６００
「そのモンスターだけで何ができるってんだ！」
「それさっきも聞いたよ……この冥界の使者をコストに、闇霊術―欲を発動！手札の罠を見せられたら効果が不発になっちゃうけど、今なら問題ないね。闇属性１体をリリースして、２ドローするんだって。さらに冥界の使者の効果で、お互いにレベル３以下の通常モンスターがデッキにいるならそれを手札に強制的に加えるみたいだよ。私はレベル１のワイトを手札に加えるけど、あなたは？」
「俺のデッキにレベル３以下の通常モンスターなんて……残念だったな、入ってるよ！って言えたらカッコいいんだろうけどなー」

そう言いながらデュエルディスクをガサゴソと操作し、対象となるカードがデッキにないことをこの場にいる全員に証明する酒田。……よーするに入ってないんだよね？

「残念、手札があんまり。暗黒界の取引を発動して効果の処理が終わったらターンエンド」

暗黒界の取引
通常魔法
お互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドローし、
その後手札を1枚選んで捨てる。

酒田　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：なし　魔法・罠：炎の護封剣　場：混沌空間（３）
夢想　ＬＰ６４００　手札：３　モンスター：なし　魔法・罠：１（伏せ）

「ドロー！闇の誘惑を発動、２枚ドローして闇属性一体を手札から除外する！手札の堕天使ゼラートを除外するからこれでカウンターも４つ目、だいぶ集まってきたぜ！カードを伏せてターンエンドだ」

「私のターン、ドロー。そろそろ攻めさせてもらうね、ゾンビ・マスター召喚！」

ゾンビ・マスター　攻１８００

「ゾンビ・マスターは効果で、手札のモンスターを捨てると墓地からレベル４以下のアンデット族を1体蘇生できるんだってさ。砂塵の悪霊を捨てて、ボーンクラッシャーを特殊召喚するよ。さらにボーンクラッシャーの効果で、炎の護封剣を破壊するんだってさ」

ボーンクラッシャー

効果モンスター

星４／地属性／アンデット族／攻１６００／守　２００

このカードがアンデット族モンスターの効果によって

自分の墓地から特殊召喚に成功した時、

相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を破壊する事ができる。

このカードは特殊召喚したターンのエンドフェイズ時に破壊される。

「まずゾンビ・マスターでダイレクト……」

「攻撃宣言時、墓地のタスケナイトの効果発動!このカードが墓地にいて俺の手札が０の時に相手が攻撃してきたら、このカードを特殊召喚してバトルフェイズを終了する!ここで使わないとデッキの裁きの龍が完っ全に腐りまくりまくるからな!」

タスケナイト　攻１７００

「これでターンエンド、だってさ。ボーンクラッシャーは自壊するみたいだけど」

酒田　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：タスケナイト（攻）　魔法・罠：１（伏せ）　場：混沌空間（４）
夢想　ＬＰ６４００　手札：２　モンスター：ゾンビ・マスター　魔法・罠：１（伏せ）
「ドロー、よし！伏せカード、ダーク・バーストを発動するぜ！このカードで俺は墓地の攻撃力１５００以下の闇属性モンスターを１体手札に戻す！俺が戻すのは当然俺のキーカードにして攻撃力０、ファントム・オブ・カオスだ！そしてこのファントム・オブ・カオスを通常召喚するぜ！さらに変☆身！ダーク・パーシアス推参！」
ファントム・オブ・カオス→ダーク・パーシアス　攻０→１９００→２０００
ダーク・パーシアス
効果モンスター
星５／闇属性／天使族／攻１９００／守１４００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、
自分の墓地に存在する闇属性モンスター１体をゲームから除外する事で、
自分のデッキからカードを１枚ドローする。
このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する
闇属性モンスターの数×１００ポイントアップする。

「ＧＯ!ダーク・パーシアスでゾンビ・マスターを攻撃!」
ダーク・パーシアス（ファントム・オブ・カオス）　攻２０００→ゾンビ・マスター攻１８００（破壊）
「そしてこの瞬間、墓地のファントム・オブ・カオスを除外してドロー!混沌空間に６つ目のカウンターが乗って、今だぜタスケナイト!ダイレクトアタックを決めてやれ、ヘルプッシュ!」
タスケナイト　攻１７００→夢想（直接攻撃）
夢想　ＬＰ６４００→４９００
「かかったね?トラップ発動、無抵抗の真相!手札のワイトを見せて、ワイト２体を特殊召喚!」
無抵抗の真相
通常罠
相手モンスターの直接攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けた時、
手札のレベル１モンスター１体を相手に見せて発動する。
相手に見せたモンスター１体と、自分のデッキに存在する同名モンスター１体を
自分フィールド上に特殊召喚する。
ワイト×２　攻３００

「ちっ！これでバトルフェイズは終わりにしといてやるが、まさか俺がこのまま終わるなんて思ってないよな？永続魔法、ゼロゼロック発動！どーだ、これでタスケナイトしか攻撃できまいざまーみろ！これで今度こそターンエンドっと」

ゼロゼロック

永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、

相手は表側攻撃表示で存在する攻撃力０のモンスターを攻撃対象に選択できない。

ダーク・パーシアス↓ファントム・オブ・カオス　攻１９００→０

「むー。ドローして、ワイトをリリース！龍骨鬼をアドバンス召喚するんだって」

龍骨鬼

効果モンスター

星６／闇属性／アンデット族／攻２４００／守２０００

このカードと戦闘を行ったモンスターが戦士族・魔法使い族の場合、

ダメージステップ終了時にそのモンスターを破壊する。

「龍骨鬼、やっちゃって！タスケナイトに攻撃！」

龍骨鬼　攻２４００→タスケナイト　攻１７００（破壊）

酒田　ＬＰ４０００→３３００

「メイン2、ワイトを守備表示にしてターンエンドするんだって」
ワイト　攻３００↓守２００
酒田　ＬＰ３３００　手札：１　モンスター：ファントム・オブ・カオス（攻）　魔法・罠：ゼロゼロック　場：混沌空間（６）
夢想　ＬＰ６４００　手札：１　モンスター：ワイト（守）、龍骨鬼（攻）　魔法・罠：なし
「俺のターンドロー！おろかな埋葬を発動して、デッキの天魔神ノーレライスを墓地に送るぜ。そして墓地の光と闇、野獣戦士ピューマンとノーレライスを除外して開闘の使者を特殊召喚するからな！これで混沌空間のカウンターも一気に２つ増えちゃうぜい！」
「……っ！」
開闘の使者。いつぞや僕が神楽坂とデュエルした時も、あのカードには苦労したっけ。あの時は運よくスノーマンイーターが助けてくれたけど、夢想はあのカードを切り抜けられるんだろうか。……いや、彼女は僕よりずっと強いデュエリストなんだ。大丈夫、彼女ならどんな相手にも負けないはず。
カオス・ソルジャー―開闘の使者―
効果モンスター（制限カード）

星８／光属性／戦士族／攻３０００／守２５００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の光属性と闇属性のモンスターを１体ずつ
ゲームから除外した場合に特殊召喚できる。
１ターンに１度、以下の効果から１つを選択して発動できる。
●フィールド上のモンスター１体を選択してゲームから除外する。
この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。
●このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、
もう１度だけ続けて攻撃できる。
「そしてファントム・オブ・カオス、変☆身！混沌空間のカウンターをさらに増やして、
ヴェルズ・サラマンドラ見参！」
ファントム・オブ・カオス↓ヴェルズ・サラマンドラ　攻０↓１８５０
ヴェルズ・サラマンドラ
効果モンスター
星４／闇属性／恐竜族／攻１８５０／守　９５０
自分の墓地のモンスター１体をゲームから除外して発動できる。
このカードの攻撃力は相手のエンドフェイズ時まで３００ポイントアップする。

この効果は1ターンに2度まで使用できる。
「サラマンドラの効果を2回使ってアイアンハンマーとガイルーダを除外し、混沌空間のカウンターを11個に!んで、そろそろこの効果も使い時だな!混沌空間のカオスカウンターを8つ取り除いて、異次元エスパースター・ロビンを除外ゾーンから特殊召喚しちまうからな!」
混沌空間　11→1
異次元エスパースター・ロビン　攻3000
「バトルだぜいっ!ファントム・オブ・カオスで龍骨鬼に攻撃!」
ヴェルズ・サラマンドラ（ファントム・オブ・カオス）　攻2450→龍骨鬼　攻2400（破壊）
「後はわかるな?開闢でワイトに攻撃、開闢双破斬!」
カオス・ソルジャー―開闢の使者―　攻3000→ワイト　守200（破壊）
「開闢の第一の効果ぁ!さらにさらにさらに、ロビンでもダイレクトアタックだぁ!時空突刃・開闢双破斬!アーンド、ビック・リパンチ!」
カオス・ソルジャー―開闢の使者―　攻3000→夢想（直接攻撃）
夢想　LP6400→3400
異次元エスパースター・ロビン　攻3000→夢想（直接攻撃）

夢想　ＬＰ３４００→４００
「きゃあっ！」
「悪く思うなよ、これこそが真剣勝負！ターンエンドだっ！」
鳳王獣ガイルーダ→ファントム・オブ・カオス　攻２５００→０
「……私のターン、ドローだって。私も手札抹殺を発動、このカードを捨てて１枚ドロー。私の墓地にはワイトが２体に龍骨鬼、ゾンビキャリア、ゾンビ・マスター、冥界の使者、マッド・デーモン、ワイトメア、ワイト夫人がいるみたいだよ。魔法カード、終わりの始まりを発動するんだってさ。除外するのは龍骨鬼、ゾンビ・マスター、冥界の使者、マッド・デーモン、ゾンビキャリアにするみたい」
「ワイト２に夫人１、メア１かぁ。えっと、あれ？珍しいな、今日はワイトが少ない」
『いちいち驚くようなこと……なんだよなぁ、あの女の場合』
終わりの始まり
通常魔法
自分の墓地に闇属性モンスターが７体以上存在する場合に発動する事ができる。
自分の墓地に存在する闇属性モンスター５体をゲームから除外する事で、
自分のデッキからカードを３枚ドローする。
「終わりの始まりぃ!?えーい、混沌空間にカウンター５つ乗せだ！」

「これが私の、無敵の切り札。見せてあげるよ、ワイトキング！」
ワイトキング
効果モンスター
星１／闇属性／アンデット族／攻　　？／守　　０
このカードの元々の攻撃力は、自分の墓地に存在する「ワイトキング」「ワイト」の数×１０００ポイントの数値になる。
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地の「ワイトキング」または「ワイト」１体をゲームから除外する事で、このカードを特殊召喚する。
ワイトキング　攻４０００
「手札から速攻魔法、サイクロンを発動。ゼロゼロックは破壊するね」
「ぐっ……でもな、まだロビンの効果が残ってる！ロビンがここに立っている限り、お前はロビンしか攻撃できないんだよ！そしてロビンの攻撃力は３０００で俺のライフは１５００！つまり、やっぱり俺の勝ちだ！」
「手札の禁じられた聖杯の効果発動！スター・ロビンの攻撃力を４００上げて、その効果を無効にするんだってさ」
異次元エスパースター・ロビン　攻３０００→３４００

「そ、そそそんな……」
「さっきのドローが終わりの始まりなら、この攻撃は終わりの終わり。ワイトキングでファントム・オブ・カオスを攻撃、だってさ」
「すいません、サンダー!!!」
ワイトキング　攻４０００→ファントム・オブ・カオス　攻０（破壊）
酒田　ＬＰ３３００→０

「ただいま、清明。勝ってきたよ、なんだって」
「お帰り。さてと、いよいよ……」
『おー、俺らの出番だな。全国生放送でドジ踏むんじゃねーぞ』
こんな嫌味な言い回しをしてるけど、別にユーノに悪気はない。こういう、とことん素直じゃない奴なんだ。だから僕も、ちょっぴり皮肉めいた笑みを浮かべてそっと一言返すにとどめておいた。
「そっちこそ、僕のデュエルスフィンクスにびっくらこいてひっくり返っても知らないよ？」

『……お前はどこのホープ使いだと。タクティクスもまともに言えねー奴なんか副将においといて大丈夫かこのチーム』

ターン19　副将（？）、戦いの中進化する竜

「よしっ、ようやっとデュエルができる！さあ、僕の相手は？」
『四天王もこれでラスト、か。いいか清明、目標は十代にデュエルさせないことだ！』
「うわなんかそのセリフだけ聞くとすごい悪い人みたい」
　いやまあ、ここで僕が勝てばそこで勝負が決まるのはわかってるんだけどさ。わかってるんだけど、なんかほら、もうちょっと言い方ってもんがないのかな。えーとえーと、例えばほら……。
「……まあそんなことはともかくとして、いったい僕の相手はどんな人さ」
『思いつかなかったか』
「そこ言わないのが優しさってもんでしょー!?」
　あーだこーだ言ってるうちにスッとデュエル場に上がる、一人の少年。高校生で少年ってのも正直ちょっと違和感あるけど、まあとりあえず少年。そしておもむろに口を開き、これまでの3人同様自分の名前を名乗る。
「俺こそがサンダー四天王の千と呼ばれた男にしてノース校のナンバー2、よろ…
「ちょっと待ってくれ、鎧田（よろいだ）」……なんですか、サンダー？」

少年改め鎧田の言葉を遮ったのは、意外なことに総大将の万丈目。だけど皆にとってもっと意外だったのは、その次の言葉だった。

「遊野清明の相手は、俺が出る」

「えっ!?」

そう言ったのは、十代なのかユーノなのか鎧田なのか、それともほかの誰かか。僕が言ったのかもしれない。

「もとはと言えば俺はあいつに一度負けた。この場を借りて今、お前にもう一度勝負を申し込む！そして俺がお前に勝ったら、その次は遊城十代、まだ勝負がついていないお前の番だ！」

『勝負がついてない……？あーそっか、ＶＷＸＹＺ回に俺らが出たせいで第２話でうやむやになってからやりあってないのか』

「わかりました、サンダー。ご武運を！」

「……すまないな、鎧田。だが、この２人だけは俺の手でカタを付けたいんだ！」

『じゃあなぜ呼んだし』

「おいそこのお前、見ない顔だから黙っていてやったがさっきからなんだその態度は！」

ビシッと万丈目が指差した先には……ユーノ。どっからどう見てもユーノ。後ろにだれも立ってないから、ユーノでなけりゃ壁でも指差してんだろう。

『じゃあ俺だろうな』
「いやいやいやちょっと待ってよ。そんなこと言ったら万丈目にも精霊が見えるってことになるじゃない」
『馬鹿だねえお前は。ノース校で修行する……ちょっと前に奴に精霊がついたのは常識だぜ?』
「どこの!?てかそれ初耳!え、マジで万丈目!?」
「万丈目サンダー!おいそこのふわふわ浮いてる貴様、どこでそのことを知った!」
『あ、ヤベ。んじゃ、俺は一切ノータッチだから頑張ってくれ～』
あ、逃げよった。……えーと、とりあえず全国各地の皆さんも何が何だか分かんないだろうし。
「「デュエル!」」
同じこと考えてたのね、万丈目。やるじゃないか。
「わざわざリターンマッチ仕掛けてきたとこ悪いけど、遠慮なく返り討ちにさせてもらうよ!ドロー、ドリル・バーニカル召喚!そして水属性のドリル・バーニカルをリリースして、シャークラーケンを特殊召喚!」
シャークラーケン　攻２４００
「これでターンエンド」

「俺のターン、ドロー！俺は、仮面竜を召喚してカードを1枚伏せ、ターンを終了する」

仮面竜（マスクド・ドラゴン）

効果モンスター

星３／炎属性／ドラゴン族／攻１４００／守１１００

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「確かに伏せは怪しいし危険だと思うけど……ドロー、グリズリーマザーを召喚してそのまま攻撃！」

グリズリーマザー　攻１４００

リクルーターは全員攻撃力１４００。まあ、たまにもっと低いモンスターもいるが、それでも１４００が基準ラインと言えるだろう。そして僕のグリズリーマザーも万丈目の仮面竜もその例に漏れず、その攻撃力は同じ。仮にあの伏せが攻撃反応のカードだとしても、ノーダメージでサーチできるこの攻撃は確実にいけるだろう。その後で連撃をかけるかどうかは、万丈目のモンスターを見てから決めればいいや。

グリズリーマザー　攻１４００（破壊）→仮面竜　攻１４００（破壊）

「ここでグリズリーマザーの効果！デッキのハリマンボウを特殊召喚！」

「こちらも仮面竜の効果だ！もう一体の仮面竜を召喚！」
ハリマンボウ　攻１５００
仮面竜　攻１４００
「んー、ここは攻めるべし！シャークラーケンで連撃！」
この攻撃で様子を見よう。ここで３体目の仮面竜が出てくるならよっぽどデッキから特殊召喚して生き残らせたいモンスターがいるってことだから、攻撃をストップしてやればいい。もし本命のモンスターがここで出てくるならハリマンボウで……まあ、あんまやりたくないけど相打ちにすればいいし。
「トラップ発動、ガード・ブロック！」
ガード・ブロック
通常罠
相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になり、
自分のデッキからカードを１枚ドローする。
シャークラーケン　攻２４００↓仮面竜　攻１４００（破壊）
「もう一度仮面竜の効果だ！来い、アームド・ドラゴン　ＬＶ３！」
次に出てきたのは３体目のリクルーター……ではなく、黄色い体のコミカルなデザイ

ンのドラゴン。ついに来たか、本命。
アームド・ドラゴン　ＬＶ３　攻１２００
「でも、攻撃力１２００なら相打ちに持ち込む必要すらないね！ハリマンボウで攻撃！」
ハリマンボウ　攻１５００→アームド・ドラゴン　ＬＶ３　攻１２００（破壊）
万丈目　ＬＰ４０００→３７００
「やった、倒した！ターンエンド！」
『うんわかった、わかったからちょっと落ち着け。小学生かお前は』
「フン、そこの奴の言うとおりだな」
清明　ＬＰ４０００　手札：４　モンスター：シャークラーケン（攻）、ハリマンボウ（攻）　魔法・罠：なし
万丈目　ＬＰ３７００　手札：５　モンスター：なし　魔法・罠：なし
「俺のターン、レベル調整を発動！お前にカードをドローさせる代わりに、墓地のアームド・ドラゴン　ＬＶ３を特殊召喚する！さらに通常魔法、レベルアップ！この効果でＬＶ３を墓地に送り、デッキのＬＶ５を特殊召喚！」
レベル調整
通常魔法
相手はカードを２枚ドローする。

自分の墓地に存在する「ＬＶ」を持つモンスター１体を、
召喚条件を無視して特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン攻撃できず
効果を発動及び適用する事もできない。
レベルアップ！
通常魔法
フィールド上に表側表示で存在する「ＬＶ」を持つ
モンスター１体を墓地へ送り発動する。
そのカードに記されているモンスターを、
召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する。
黄色のドラゴンが光に包まれ、サイズが倍以上になりカラーリングも黒っぽい灰色と赤に変わってちょびっとだけ厳めしい顔つきになった。
「攻撃力２４００は確かにすごいさ。でも、それだってシャークラーケンと互角！それに、モンスターの数だってこっちの方が多いんだよ」
「ああ、確かにそうだな。そこで俺は、こんな手を使う。手札から攻撃力２８００のフェルグラントドラゴンを捨てることで、シャークラーケンを破壊！デストロイド・パイル！」

「そんな、破壊効果持ち!?」
「これで貴様の場にはモンスターが1体だな。バトル!・アームド・ドラゴンでハリマンボウを攻撃!・アームド・バスター!」
アームド・ドラゴン　ＬＶ５　攻２４００→ハリマンボウ　攻１５００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→３１００
「でもこの時、ハリマンボウの特殊効果!・アームド・ドラゴンの攻撃力をダウン!」
アームド・ドラゴン　ＬＶ５　攻２４００→１９００
墓地からいくつものぶっとい針が乱射され、アームド・ドラゴンの体に突き刺さって爆発を起こす。よし、これで戦闘破壊しやすくなった。破壊効果は厄介だからね、早めに退場してもらおう。
『……とかなんとか考えてんだろーなー。ここじゃアームド・ドラゴンなんてトンデモレアカードだから効果知らんだろうし。ま、頑張ってくれや』
「ふ、それで勝ったつもりか?・メイン2に強欲なカケラを発動してエンドフェイズ、アームド・ドラゴン第2の効果発動!・こいつがバトルでモンスターを破壊したターンのエンドフェイズ、このカードはもう一度進化を遂げる!」
アームド・ドラゴンが咆哮と共に再び光に包まれ、レベル3や5の時の面影がほぼなくなりギゴバイトからゴギガ・ガガギゴ並みの謎進化を遂げた巨大なドラゴンが万丈目

のそばにそびえ立った。
強欲なカケラ
永続魔法
自分のドローフェイズ時に通常のドローをする度に、
このカードに強欲カウンターを１つ置く。
強欲カウンターが２つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、
自分のデッキからカードを２枚ドローする。
アームド・ドラゴン　ＬＶ５
効果モンスター
星５／風属性／ドラゴン族／攻２４００／守１７００
手札からモンスター１体を墓地へ送る事で、
そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して破壊する。
また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊したターンのエンドフェイズ時、
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、
手札またはデッキから「アームド・ドラゴン　ＬＶ７」１体を特殊召喚する。
アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００

「ハリマンボウの効果が、打ち消された……」
「その通り。俺はこれでターンエンドだ」
「まだまださ！ドローッ！」
　いつぞや会った大山先輩を参考にして、いつも以上に気合を込めてカードを引いてみる。む、残念。ここは、守りを固めるか……。
「僕は、フィッシュボーグ―アーチャー―を守備表示で召喚！そして魚族のアーチャーを召喚したことで、頼むよ戦友！シャーク・サッカー特殊召喚！」
　シャーク・サッカー
　効果モンスター
　星３／水属性／魚族／攻　２００／守１０００
　自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、
　このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
　このカードはシンクロ素材とする事はできない。
　フィッシュボーグ―アーチャー―　守３００
「さらにカードをセットして、これでターンエンド。これなら、なんとかこのターンはしのげるはず……」
『わけねえだろ。ったく、まさか万丈目と当たることはないだろーと思ってアームド・ド

ラゴンの効果を覚えさせとかなかったのが裏目に出たか』
清明　ＬＰ３１００　手札：３　モンスター：フィッシュボーグ―アーチャー―（守）、シャーク・サッカー（守）魔法・罠：１（伏せ）
万丈目　ＬＰ３７００　手札：２　モンスター：アームド・ドラゴン　ＬＶ７（攻）魔法・罠：強欲なカケラ（０）
「俺のターン、ドロー！強欲カウンターが一つ増えてメイン１、さらに進化したアームド・ドラゴンの力を見せてやる！手札から攻撃力４００のミンゲイドラゴンを捨てて、貴様の雑魚モンスターを全部吹き飛ばす！ジェノサイド・カッター！」
「そんな、破壊効果がパワーアップしてるなんて!?」
『知らんカードが出たら素直に効果見せてもらえよ……』
アームド・ドラゴン　ＬＶ７
効果モンスター
星７／風属性／ドラゴン族／攻２８００／守１０００
このカードは通常召喚できない。
「アームド・ドラゴン　ＬＶ５」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
手札からモンスター１体を墓地へ送る事で、
そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。
「ゆけ、アームド・ドラゴン！アームド・ヴァニッシャー！」
「ぎゃっ！一気に削られた……」
アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３１００→３００
「メイン２に入り、カードを２枚伏せてターンエンドだ」
「万丈目！僕は今の攻撃、あえて直接受けたのさ！こうするためにね、ドロー！メインフェイズに墓地のフィッシュボーグ―アーチャー――の効果発動！手札の氷帝メビウスを捨てて、このカードを特殊召喚！」
がら空きになった僕のフィールドに、さきほどアームド・ドラゴンの効果を受けて倒れた魚……魚？って、このネタは前もやったか。とりあえず魚が四本足で走ってくる。なんかおかしい気もするけど、多分気のせいだろう。
フィッシュボーグ―アーチャー―
チューナー（効果モンスター）
星３／水属性／魚族／攻　３００／守　３００
このカードが墓地に存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

手札の水属性モンスター1体を捨てて発動できる。
このカードを墓地から特殊召喚する。
さらに、この効果で特殊召喚したターンのバトルフェイズ開始時に
水属性以外の自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。
「フィッシュボーグ―アーチャー」の効果は1ターンに1度しか使用できない。
「またその雑魚モンスターか？」
「これだけじゃないよ、というかそもそも雑魚なんかじゃない！トラップ発動して、メタル・リフレクト・スライム召喚！」
毎度おなじみ銀色の筋肉スライムが、そのぶっとい腕をアームド・ドラゴンに見せつける。そんなことしたってお前、攻撃力0だろうに。
メタル・リフレクト・スライム
永続罠
このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星１０・攻０／守３０００）となり、
自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。
このカードは攻撃する事ができない。（このカードは罠カードとしても扱う）
「これでモンスターが2体、そして僕には召喚権が残ってる……来い、僕のドラゴン！

青氷の白夜龍！」

　これがやりたかったから、さっきはアームド・ドラゴンの攻撃を通したんだよね。なにしろスライムの攻撃力は０、さっき攻撃を防ぐのにお世話になってたらメイン２で一瞬で処理された可能性があった。どうだユーノ、僕だってこれくらいはできるんだぞ！

『あきら　は　ほめてほしそうな　め　で　こっちをみている！ってか？……まあ悪くはないが、今ので一体なにを褒めろってんだ。ふーん、で終わりだろ』

青氷の白夜龍（ブルーアイズ・ホワイトナイツ・ドラゴン）

効果モンスター

星８／水属性／ドラゴン族／攻３０００／守２５００

このカードを対象にする魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、

自分フィールド上に存在する魔法または罠カード１枚を墓地に送る事で、

このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

「これだけじゃ終わらないよ、サルベージを発動。墓地のドリル・バーニカルとシャーク・サッカーを手札に加えて、これで墓地のモンスターはシャークラーケン、グリズリーマザー、ハリマンボウ、氷帝メビウス、フィッシュボーグ―アーチャー――の５体！そしてこの条件が整った時、氷霊神ムーラングレイスは特殊召喚できる！」

サルベージ
通常魔法
自分の墓地の攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体を選択して手札に加える。
氷霊神ムーラングレイス
効果モンスター
星８／水属性／海竜族／攻２８００／守２２００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の水属性モンスターが５体の場合のみ特殊召喚できる。
このカードが特殊召喚に成功した時、
相手の手札をランダムに２枚選んで捨てる。
「氷霊神ムーラングレイス」のこの効果は１ターンに１度しか使用できない。
このカードがフィールド上から離れた場合、
次の自分のターンのバトルフェイズをスキップする。
「ムーラングレイスの効果……は使えないけど、バトル！ブルーアイズでアームド・ドラゴンを打ち抜け！孤高の冬色氷輪弾（ウィンターストリーム）!!」
青氷の白夜龍　攻３０００→アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００（破壊）
万丈目　ＬＰ３７００→３５００

「ムーラングレイスも攻撃！」
氷霊神ムーラングレイス　攻２８００→万丈目（直接攻撃）
万丈目　ＬＰ３５００→７００
「僕はこれで、ターンエンドだよ」
清明　ＬＰ３００　手札：２　モンスター：青氷の白夜龍（攻）、氷霊神ムーラングレイス（攻）魔法・罠：なし
万丈目　ＬＰ７００　手札：０　モンスター：なし　魔法・罠：強欲なカケラ（１）、２（伏せ）
アームド・ドラゴンの破壊効果は確かに面倒だったけど、効果の発動にはモンスターを手札から捨てる必要がある。今の万丈目の手札は０、次のドローだけでなにかしらのカードを引くなんてことはまさかないだろう。……いや、万丈目の目は本気だ。なんだろう、嫌な予感がする。
「俺は……俺は、もう負けるわけにはいかんのだ！」
「ま、万丈目？」
「いいか遊野清明、それに遊城十代！俺はお前らのように、ただ毎日ヘラヘラ笑って楽しんでデュエルしていればいいのではない！俺のこの肩には、万丈目グループとしての誇りと期待がかかっているんだ！だから俺は、とにかく勝たなくてはいけないんだ！今日

も明日も明後日も、その次の日もまた次の日も！だから頼む、俺のデッキ！俺を勝たせてくれ！」

正直なところ、何も言うことができなかった。出てく前とあんま変わってなかったからあんま心配してなかったけど、まさかここまで万丈目が思い詰めてたなんてねえ。

「……ドロー！そして、強欲カウンターが２つになったカケラを墓地に送ってさらに２枚ドロー！２枚目のレベル調整を発動、相手のドローと引き換えに俺が召喚するのは、アームド・ドラゴン　ＬＶ７！そして俺の場のＬＶ７をリリースすることで、アームド・ドラゴンは究極の進化を遂げる！出て来い最後のアームド・ドラゴン、アームド・ドラゴン　ＬＶ１０！」

万丈目の本気に、そのデッキは答えたらしい。アームド・ドラゴンの全身が全体的に黒っぽい色になり、体も一回り大きくなる。だが何よりも大きな変化は、その巨体が放つ圧倒的な威圧感だろうか。

アームド・ドラゴン　ＬＶ１０

効果モンスター

星１０／風属性／ドラゴン族／攻３０００／守２０００

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「アームド・ドラゴン　ＬＶ７」１体を

リリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。
手札を１枚墓地へ送る事で、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。
『なんだこの万丈目。すげー漫画版っぽいんですが』
「アームド・ドラゴンでムーラングレイスに攻撃、アームド・ビッグ・パニッシャー!!」
アームド・ドラゴン　ＬＶ１０　攻３０００→氷霊神ムーラングレイス　攻２８００（破壊）
清明　ＬＰ３００→１００
「くっ……!」
「俺はこれで、ターンを終了する。そうだ遊野清明、いつまでもこのぬるい環境でばかり戦ってきたお前が、一度地獄を見てきたこの俺に勝てるものか!」
『ん、ＬＶ１０の効果を使わない？確実な勝ちのチャンスを捨ててまで手札に残しておきたいほどのカード……まさかアレか？』
清明　ＬＰ１００　手札：４　モンスター：青氷の白夜龍（攻）魔法・罠：なし
万丈目　ＬＰ７００　手札：１　モンスター：アームド・ドラゴン　ＬＶ１０（攻）魔法・罠：２（伏せ）
「なんの、まだまだ……!ドロー!ねえ万丈目、一つ聞いてもいい？」

「万丈目サンダー!・まあいい、なんだ」
「万丈目はさ、デュエルしてて楽しい?」
僕がそう聞くと、万丈目はまずきょとんとした顔をした。そして一瞬だけ後ろめたそうな顔になったけど、すぐに表情を取り繕う。わっかりやすいやつ。人のことは言えないかもしれないけど。
「俺の話を聞いていたのか?俺には万丈目グループとしての責任がある、楽しんでデュエルをする暇などない!」
「ありがと、今の顔でだいたいわかったよ。……ちょっと荒療治だけど万丈目、ここで全力でぶっ飛ばすよ!この全国放送でもう一回僕が勝って、少しでもその肩の荷を降ろしてやる!デュエルはやっぱり、皆で楽しくやるものだよ!・フィールド魔法、ウォーターワールドを発動してブリザード・ファルコンを守備表示で召喚!」
ウォーターワールド
フィールド魔法
フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、
守備力は４００ポイントダウンする。
ブリザード・ファルコン

効果モンスター
星４／水属性／鳥獣族／攻１５００／守１５００
このカードの攻撃力が元々の攻撃力よりも高い場合に発動できる。
相手ライフに１５００ポイントダメージを与える。
この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り１度しか使用できず、
「ブリザード・ファルコン」の効果は1ターンに1度しか使用できない。
青氷の白夜龍　攻３０００→３５００　守２５００→２１００
ブリザード・ファルコン　守１５００→１１００　攻１５００→２０００
「ブリザード・ファルコンの効果発動!これで終わりにするよ、１５００ポイントダメージ!」
「まだだ!リバース発動、黒板消しの罠!そのダメージは受け付けん!」
黒板消しの罠
カウンター罠
ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。
自分が受けるその効果ダメージを無効にし、相手は手札を1枚選択して捨てる。
「僕の手札を1枚……ドリル・バーニカルを捨てるよ」

『これで攻撃ができれば勝ちだったんだがな。たられば論とはいえ、さっきのタイミングでムーラングレイス出さない方がよかったかもしれんな』

「ムーラングレイスのデメリット効果でこのターン僕はバトルができないから、貪欲な壺を発動。ムーラングレイス召喚の時に見せたモンスターをデッキに戻してドロー、カードを2枚伏せてターンエンド」

僕が今伏せたカードはそれぞれ、リビングデッドの呼び声とポセイドン・ウェーブ。万丈目のアームド・ドラゴンの効果はどれほどレベルアップしても、当たり前ながらバトルフェイズに発動することはできない。つまり、攻撃に合わせてリビングデッドを発動してドリル・バーニカルを蘇生させる。そのまま攻撃宣言をし直すならポセイドン・ウェーブで返り討ちにすればいいし、攻撃をやめるなら返しの僕のターンで攻撃力８００に上がってるバーニカルで直接攻撃を決めてやればいい。唯一気になるのが万丈目のさっき使わなかった手札だけど、あそこまで追い詰めた状況でも捨てないようなカードなら多分メイン2で使ったりはしないだろう。よし、完璧。

「俺のターン。……このデュエル、俺の勝ちだ」

「好きなだけ言ってなよ。僕が何にも考えずにターンを渡すわけないでしょ?」

「どんな小細工を仕掛けたのかは知らんが、それでも、だ。まず、リビングデッドの呼び声を発動。墓地のミンゲイドラゴンを特殊召喚する」

ミンゲイドラゴン
効果モンスター
星２／地属性／ドラゴン族／攻　４００／守　２００
ドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する場合、
このモンスター1体で2体分のリリースとする事ができる。
自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
このカードを自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果は自分の墓地にドラゴン族以外のモンスターが存在する場合には発動できない。
この効果で特殊召喚されたこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。
「そして今ドローしたカード、おジャマ・イエローを捨ててアームド・ドラゴン　ＬＶ１０の効果を発動。お前の場のモンスターを破壊する」
「ごめんブルーアイズ、それにファルコン……でも、僕は負けるつもりはないよ！」
「言っただろう、どんな小細工も通用しないと！ミンゲイドラゴンをリリースし、俺はこのモンスターをアドバンス召喚する！」

『万丈目の最上級ドラゴンで、手札に置いておきたいカードときたら、やっぱアレしかないよなぁ』

「来い、光と闇の竜！」

万丈目の場に、２体の最上級ドラゴンがそろう。体の半分が白、もう半分が黒。きれいにカラーリングが分けられた白黒の龍が、アームド・ドラゴンと共に雄たけびを上げた。

光と闇の竜　攻２８００

「光と闇の竜でダイレクトアタック、シャイニングブレス！」

「トラップ発動、リビングデッドの……」

でも、カード名を最後まで宣言することはできなかった。発動したはずのリビングデッドが、僕のモンスターを呼び寄せる前に粉々に砕け散ったからだ。

「なっ、僕のカードが？」

「これこそが俺の、光と闇の竜の効果だ！自らの攻守を犠牲に、いかなるカードの効果も無効にする！」

光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）

効果モンスター

星８／光属性／ドラゴン族／攻２８００／守２４００

このカードは特殊召喚できない。
このカードの属性は「闇」としても扱う。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にする。
この効果でカードの発動を無効にする度に、
このカードの攻撃力と守備力は５００ポイントダウンする。
このカードが破壊され墓地へ送られた時、
自分の墓地に存在するモンスター１体を選択して発動する。
自分フィールド上のカードを全て破壊する。
選択したモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。
光と闇の竜　攻２８００→２３００　守２４００→１９００
「改めて攻撃だ、光と闇の竜！ダークパプティズム！」
「ポ、ポセイドン・ウェーブを……！」
もちろんわかってる。通るわけがない。でも、なにかせずにはいられなかったんだと思う。無理なのは百も承知だけど、それでも半ば無意識に発動していた。
光と闇の竜　攻２３００→１８００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ１００→０

僕のライフが0になったことでデュエルが終わり、ゆっくりとソリットビジョンのドラゴンたちが消えていく。完全に姿が見えなくなる寸前にチラッと見えた2体の表情がなんとなく悲しそうに見えたのは、本当に僕の気のせいなんだろうか。ごめん、なんとかしようと思ったけど、僕じゃ万丈目は止められなかったよ。

「ねえ、ユーノ」

『んー？』

「僕、今はまだ弱いけど、もっと強くなるよ。もっと強くなって、もうこんなやってらんない気持ちを味わうことがないようにするんだ」

正直、自分でもいいかげんな宣言だと思う。小学生が作文に書く未来の夢じゃあるまいしね。きっと笑われるかと思ったけど、意外にもユーノは真面目な顔で、黙ったまま最後まで聞いてくれた。

『そっか、頑張れよ。俺も応援ぐらいは片手間にしといちゃるからな。でもま、今はとりあえず顔上げとけ。まだ十代が残ってんだろうが』

「うん、そうだね……」

僕に気を使ってくれてるんだろうか。まだ5分経たないと始まんないのに。まった

く、肝心なところで抜けてるんだから。でも、『強くなる』って言ったそばからいつまでも落ち込んでちゃいけないよね。後は任せたよ、十代。

ターン２０　大将、最後に英雄が救うもの

「なあ万丈目、お前とデュエルするのって、考えてみれば結構久しぶりだよな！」
「万丈目サンダー！……だがまあ、確かにそうだな。入学式の夜以来か」
「あの時の勝負だって、実質俺の勝ちだったんだ！ここであらためて決着つけてやるぜ！」
「なんだ、まだそんな負け惜しみを言ってるのか？まあいい、俺もあの時の俺ではない！清明はすでに倒した、次はお前に格の違いを教えてやる！」
「「デュエル！」」
「先攻は俺だ！俺は、ゴーレム・ドラゴンを守備表示で召喚する。さらにカードを２枚伏せ、ターンエンドだ」
　ゴーレム・ドラゴン　守２０００
「俺のターン、ドロー！最初から行くぜ、フィールド魔法発動、フュージョン・ゲート！そしてこの効果で、手札のスパークマンとクレイマンを融合する！サンダー・ジャイアント召喚！」
　フュージョン・ゲート

フィールド魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、
ターンプレイヤーは手札・自分フィールド上から
融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを
ゲームから除外し、その融合モンスター１体を融合召喚扱いとして
エクストラデッキから特殊召喚する事ができる。
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　サンダー・ジャイアント
融合・効果モンスター
星６／光属性／戦士族／攻２４００／守１５００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。
自分の手札を１枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する
元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター１体を選択して破壊する。
この効果は１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。
「サンダー・ジャイアントの効果で、手札を捨ててゴーレム・ドラゴンを破壊するぜ！
ヴェイパー・スパーク！さらに手札のバーストレディを召喚して、バトル！まずはサンダー・ジャイアントからだぜ、ボルティック・サンダー！」

『十代、せっかくバーストレディ出したんならそっちから攻撃しろよ……』
Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００
Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント　攻２４００→万丈目（直接攻撃）
万丈目　ＬＰ４０００→１６００
「ぐっ……だがこのダイレクトアタック時、両方のトラップを発動！1枚目、ダメージ・コンデンサー！そして2枚目、痛恨の訴え！」
『言わんこっちゃねえけど、俺が予想してたのより一段とえげつねえな』
「まず手札を捨てて、ダメージ・コンデンサーの効果だ。俺のダメージは２４００、よって攻撃力２４００のアームド・ドラゴン　ＬＶ５を特殊召喚する！そして痛恨の訴えの効果により、守備力１５００のサンダー・ジャイアントのコントロールを貰っていくぞ！」
「俺のサンダー・ジャイアントが！」
ダメージ・コンデンサー
通常罠
自分が戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨てて発動する事ができる。
その時に受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター1体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

アームド・ドラゴン　ＬＶ５　攻２４００
痛恨の訴え
通常罠
相手モンスターの直接攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けた時に発動できる。
相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター１体の
コントロールを次の自分のエンドフェイズ時まで得る。
この効果でコントロールを得たモンスターの効果は無効化され、攻撃宣言できない。
「くっ、カードをセットしてターンエンドだ」
十代　ＬＰ４０００　手札：０　フィールド：Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ（攻）
魔法、罠：１（伏せ）
万丈目　ＬＰ１６００　手札：２　フィールド：アームド・ドラゴン　ＬＶ５（攻）、
Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント（攻）魔法、罠：なし
場：フュージョン・ゲート
「俺のターン、ドロー！サンダー・ジャイアントをリリースして、創生竜をアドバンス召喚する」
創生竜（ジェネクスドラゴン）
効果モンスター

星６／光属性／ドラゴン族／攻２２００／守１８００
１ターンに１度、手札からドラゴン族モンスター１体を墓地に送る事で、
自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター１体を手札に加える。
このカードがフィールド上から墓地に送られた時、
自分の墓地に存在するドラゴン族モンスターを全てデッキに戻す事ができる。
「創生竜の効果は使わん。バトルだ！アームド・ドラゴンでバーストレディを攻撃、アームド・バスター！」
「トラップ発動、攻撃の無力化！その攻撃を無効にして、バトルフェイズを終わらせるぜ」
「相変わらず姑息な手を使う……まあいい、俺の優位に変わりはないのだからな。ターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！Ｅ―エマージェンシーコールを発動して、デッキのエッジマンを手札に加えるぜ。そして墓地からネクロダークマンの効果発動、一回だけＥ・ＨＥＲＯ召喚のリリースをなしにできる！この効果でエッジマンを通常召喚だ！」
Ｅ―エマージェンシーコール
通常魔法（準制限カード）
自分のデッキから「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を手札に加える。

「エッジマンでアームド・ドラゴンに攻撃！パワー・エッジ・アタック！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン　攻２６００→アームド・ドラゴン　ＬＶ５　攻２４００
（破壊）
万丈目　ＬＰ１６００→１４００
「バーストレディを守備表示に変更、これでターンエンドだぜ」
Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００→守８００
十代　ＬＰ４０００　手札：０　フィールド：Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ（守）、Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン（攻）魔法、罠：なし
万丈目　ＬＰ１４００　手札：２　フィールド：創生竜（攻）魔法、罠：なし
場：フュージョン・ゲート
「まだまだこの程度！俺のターン、ドロー！レベル調整、レベルアップ！のコンボでアームド・ドラゴン　ＬＶ７をデッキから特殊召喚！そして手札のランサー・ドラゴニュートを通常召喚する」
「うわ、僕もやられたコンビだ……」
アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００
ランサー・ドラゴニュート
効果モンスター

星４／闇属性／ドラゴン族／攻１５００／守１８００
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
「アームド・ドラゴンの効果は使わん。ドラゴニュートでバーストレディに、アームド・ドラゴンでエッジマンにそれぞれ攻撃！そして創生竜でダイレクトアタックだ！」
ランサー・ドラゴニュート　攻１５００→Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　守８００
（破壊）
十代　ＬＰ４０００→３３００
アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００→Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン　攻２６００
（破壊）
十代　ＬＰ３３００→３１００
創生竜　攻２２００→十代（直接攻撃）
十代　ＬＰ３１００→９００
「どうだ十代、これが俺の覚悟！ターンエンドだ！」
「やるな、万丈目！なんだかワクワクしてきたぜ！」
「ええい、お前という奴はここまで追い込んでもまだヘラヘラ笑ってられるのか！」

「当たり前だろ？ヒーローってのは、どんな時でもへこたれないもんさ！ドロー！Ｏ―オーバーソウルを発動して、墓地のバーストレディを特殊召喚！さらにフュージョン・ゲートの効果で、手札のフェザーマンとバーストレディを除外融合！来い、マイフェイバリット！フレイム・ウィングマン召喚！」

Ｏ―オーバーソウル

通常魔法

自分の墓地から「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついた通常モンスター１体を選択し、

自分フィールド上に特殊召喚する。

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマン

融合・効果モンスター

星６／風属性／戦士族／攻２１００／守１２００

「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、

破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「フレイム・ウィングマンでランサー・ドラゴニュートに攻撃！フレイム・シュート！」

「攻撃時に墓地のダメージ・ダイエットの効果発動！戦闘ダメージは無理でも、その効果

ダメージは半減する！」
『コンデンサーで捨てたコストだな』
ダメージ・ダイエット
通常罠
このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。
また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、
そのターン自分が受ける効果ダメージは半分になる。
Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻２１００→ランサー・ドラゴニュート
攻１５００（破壊）
万丈目　ＬＰ１４００→８００→５０
『しかし、５０残して倒し損ねたか！十代、これは痛いな。さあどうする』
「くっ……カードをセットして、ターンエンドだ」
十代　ＬＰ９００　手札：０　フィールド：Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン
（攻）魔法、罠：１（伏せ）
万丈目　ＬＰ５０　手札：０　フィールド：アームド・ドラゴン　ＬＶ７（攻）、創生
竜（攻）魔法、罠：なし
場：フュージョン・ゲート

「せっかく引いたカードだ、使っておくか。フィールド魔法、サベージ・コロシアムを発動！」

それまで広がっていたポリゴンの山が粉々になり、フィールド全体が古めかしい闘技場に変化する。これで、十代は融合召喚がさらにできにくくなったわけだ。もっともそれも、このターンを耐え切ってからの話だけど。負けないでよ、十代……！

サベージ・コロシアム

フィールド魔法

フィールド上に存在するモンスターが攻撃を行った場合、

そのモンスターのコントローラーはダメージステップ終了時に３００ライフポイント回復する。

このカードがフィールド上に存在する限り、

攻撃可能なモンスターは攻撃しなければならない。

エンドフェイズ時、ターンプレイヤーのフィールド上に

表側攻撃表示で存在する攻撃宣言をしていないモンスターを全て破壊する。

「だが、この効果が役に立つことはあるまい。なぜならお前はここで負けるからだ、十代！アームド・ドラゴンでフレイム・ウィングマンに攻撃、アームド・ヴァニッシャー！」

アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００→Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン

攻２１００（破壊）
十代　ＬＰ９００→２００
万丈目　ＬＰ５０→３５０
「ヒーローは決して諦めないぜ、お前にデュエルは勝ち負けだけじゃないってことを、ましてや誰かのためにやるもんじゃないってことを教えるまではな！デュエルは、自分が楽しいからするんだ！ここでトラップ発動、ヒーロー・シグナル！デッキのバブルマンを守備表示で特殊召喚して、カードを２枚ドロー！」
『出たな強欲な泡男！』
ヒーロー・シグナル
通常罠
自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され
墓地へ送られた時に発動する事ができる。
自分の手札またはデッキから「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついた
レベル４以下のモンスター１体を特殊召喚する。
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマン
効果モンスター
星４／水属性／戦士族／攻　８００／守１２００

手札がこのカード1枚だけの場合、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に
自分のフィールド上と手札に他のカードが無い場合、
デッキからカードを2枚ドローする事ができる。
「ええい、サベージ・コロシアムさえ発動してなければ！創生竜でバブルマンを攻撃、剛炎弾！」
創生竜　攻２２００→Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　守１２００（破壊）
万丈目　ＬＰ３５０→６５０
「ありがとうな、バブルマン……ドロー！魂の解放を発動、俺の墓地のバブルマンを除外する！」
「何？俺の墓地ならまだしも、自分の墓地を自分で荒らすだと？」
「ああそうさ、これでこのカードが使えるからな！マジック発動、平行世界融合！俺が除外したフェザーマン、バーストレディ、クレイマン、バブルマンをデッキに戻して究極のヒーロー、エリクシーラーを召喚！」
平行世界融合（パラレル・ワールド・フュージョン）
通常魔法

ゲームから除外されている、融合モンスターカードによって決められた
自分の融合素材モンスターをデッキに戻し、「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついた
融合モンスター１体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
このカードを発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚する事はできない。
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　エリクシーラー
融合・効果モンスター
星１０／光属性／戦士族／攻２９００／守２６００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」
＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードの属性は「風」「水」「炎」「地」としても扱う。
このカードが融合召喚に成功した時、ゲームから除外された全てのカードを
持ち主のデッキに戻し、デッキをシャッフルする。
相手フィールド上に存在するこのカードと同じ属性のモンスター１体につき、
このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。
「エリクシーラー第一の効果で、俺のスパークマンとお前のダメージ・ダイエットをデッ
キに戻すぜ。そして第二の効果によって、光属性の創生竜と風属性のアームド・ドラゴ

ンの分だけ攻撃力アップだ！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　エリクシーラー　攻２９００→３５００
「覚悟はいいな、万丈目！エリクシーラーでアームド・ドラゴンを攻撃、フュージョニスト・マジスタリー！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　エリクシーラー　攻３５００→アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００（破壊）
万丈目　ＬＰ６５０→０

「ガッチャ、万丈目！」
「やった、十代が勝った！」
これで勝負は２対３、僕らの勝ちだ！十代のところに駆け寄ろうとした……ところで、それより早く万丈目の前に２人の男が立った。あの面白味も何にもない真っ黒スーツは、万丈目の兄さんとやらか。ねぎらいの言葉でもかけてやるのかな、と思ったけど、放たれた言葉は優しいものとは程遠かった。
「準、きさま何をやっているのだ！自分のやったことが分かっているのか！」
「万丈目一族の名に、泥を塗りおって！」

あんなに頑張ってこの言いざま。そのまま黙って……というかあっけにとられて聞いてたらまあひどいのなんの。俺たちのカードを使えばもっと強いデッキができたはずだ？自分の力で組んだデッキを使うことがふざけてるだ？万丈目も何か言い返せばいいのに、「すまない、兄さんたち……」って力なくつぶやくだけしかしない。人の家の話に口出しちゃいけないのかもしれないけど、そんなもん人前で話す方が悪いんだよね！

「「「「「「やめろ、あんたたち!!」」」」」」

あれ、ハモった。僕と、十代と、あと5人はサンダー四天王の皆さん方。全員で素早くアイコンタクトして、一同代表として十代が喋りだす。いったん観客席まで戻ってたせいでやってくるのが遅れた三沢に明日香、夢想になぜかついてきた翔、隼人、カイザーも僕らのところにきた。心強いね、味方が増えると。喋るの十代だけど。その後当然のようにひと悶着あったけど、思えばこっちにこれだけの人が集まってくれた時点で結果は見えてたのかもしれないね。

そして時刻は夕方、テレビ屋の後片付けとかでまだ島でぐずぐずしてた万丈目兄弟のヘリが帰っていくのをべーっと舌を出して見送り。ついに万丈目が、ノース校の皆が帰

る時が迫っていた。
「また帰っちゃうんスね……」
「元気でな、万丈目」
そうお別れの言葉をかける中、万丈目は意を決したように意外な言葉を口にした。
「……いや、俺はノース校には帰らん」
「「「「えぇ～!?」」」」
どうやらその情報、サンダー四天王にも教えてなかったらしい。相変わらず一人で詰め込む奴め。っていうか、ノース校に帰らないってまさか……。
『喜べ清明、そのとーりだ。な、サンダーさんよ?』
「フン!そういうわけだ校長、また厄介になる」
と、その時。レッド寮生の空気を読まないことに定評のあるクロノス先生が、またもやってくれた。このタイミングでマイクを使って何やら喋りだしたのだ。まあ、聞こえない位置だからしょうがないっちゃあそうなんだけどね。なんでも、今から表彰式を始めて、プレゼントの授与をミス・デュエルアカデミアとやらが行うらしい。
ちなみに正直なところ、後ろを振り返って夢想の姿がいなくなってることを期待したのは否定できない。あっさり見つけたから、少なくとも彼女のことじゃないってのはすぐわかったけど。しかし、一体誰なんだろう?……って、トメさん!?そして唖然とし

た僕らが見ているうちに、スキップでもしそうな勢いでウチの校長が表彰台に上ってそのままトメさんのキスを受けた。

「えーっと……」

『いかん、間近で見るとわかってててもアホらしくなってくる。この手のギャグで落とすノリは嫌いじゃないんだがな』

「俺たち、こんなもんのために戦ってたのかよ～……」

なんかもう、この十代の一言にすべてが詰まってると思う。あと、後ろで地団駄踏んで悔しがってるノース校校長が印象的だった。そのままノース校校長は走って船に飛び込み、皆が男泣きに泣きながら船はゆっくりと離れていった。

『そろそろ衝撃発表その2だな。万丈目と再戦したがってるお前にゃいい知らせだろーな』

「……？」

『ま、黙って大徳寺先生の話聞いてな』

言われた通り黙って聞く。なになに、万丈目は出席日数が足りない、だから進級するためにはオシリスレッドに入らないといけない。オシリスレッド……僕らのとこ、だよね。っていうかウチの寮って3か月学校にいなくても進級できるんだ。レッド寮凄い。いろんな意味で凄い。

「なんで俺がこいつらと！」
「そんじゃ、万丈目の入寮を祝して！」
「勝手に決めるな！」
　往生際が悪いなあ、万丈目め。僕らは全力挙げて歓迎するよ？だってほら、おきまりの掛け声だって。
「一！十！百！千！」
「「「「万丈目、サンダー!!!サンダー！サンダー！」」」」
　ねえ？これからよろしく万丈目、サンダー。

ターン21　死神の羽は黒い羽根

　万丈目がこっちに帰ってきた日の夜。ちょうど空き部屋が一つあったのでとりあえずそこに入ってもらい、あーだこーだと薄い壁と部屋の中のドアを通して聞こえてくる文句に耳を塞ぐ。せめてこのドアがなければもうちょっと静かだったんだろうけど。ちなみに僕の部屋は十代や翔の部屋と今万丈目がいる部屋の間に位置してるんだけど、なぜか両方の部屋に通じる壁に一つづつドアがついている。いや、なぜかじゃない。こうなったのはだいたい十代が悪い。つい昨日まで空き部屋だったのをいいことに、どうせだから2階の部屋全部通り抜けできるようにしようぜ！とか言い出したのは十代だ。『んで、ハンマーだののこぎりだので嬉々として壁ぶち抜いたのはお前な。挙句の果てに終わってからタイタンのいた寮まで行ってそこら辺のドア引っぺがして持ってくるとかお前ら何がしたいんだ』

「いいじゃないの。どうせ誰も使わない寮なんだし、あそこでホコリかぶってるよりはこっちで部屋の行き来を楽にする役に立つ方が道具としても幸せでしょ」

　あらかじめ考えておいた言い訳を口にする。しかしこれ、いまさらとはいえやってることは泥棒だよね。すると、不意にまじめな顔になったユーノがポツリと一言言った。

『……明日香が来たらなんて言い訳すんだ？さすがにドアの形ぐらい見りゃ一発でわかるだろ。あれだけ言われて懲りずに入ったどころか備品まで持ち出してきてからに』

「あ」

一瞬だけ時間が止まった。今の話はなかったことにした。別に思考放棄とかそういうんじゃない。断じて違うよ！と、そこで部屋のドア……あ、玄関のある方ね。つまり最初からついてたやつ。それがノックされた。はて、どちらさんだろうか。十代とかなら壁のドア使って入ってくればいいはずだし、わざわざ外からお客さんなんて来るような場所でもないし。どーでもいいけどレッド寮って校舎からも遠いんだよね。だからこそ大徳寺先生以外に監視の目はまずないから大規模な土木工事もできるんだけど。

「はいはーい、今開けますよっと」

もう一度ノックされたので、とりあえずドアを開けてみる。そこに立っていたのは、いろんな意味で意外すぎる人物だった。

「すいません、サンダー。実は折り入ってご相談が……アレ？」

「えっと、鎧田……だよね？」

そこにいたのはサンダー四天王最後の男、鎧田。何してんのこの人。ノース校の皆、もう帰っちゃったよ？というかサンダー隣の部屋だし。そう言うと一言、

「マジか。あー、そりゃ悪かったな。んじゃ」

それだけ言ってドアを閉めようとした。
「待て待て待てちょっと待て」
「んー？どした？俺、サンダーに頼みがあってわざわざここに残ってんだけど……ってちょっと待て！お前、遊野清明とかいう奴だろ！」
「僕？うん、確かにそうだけど」
「ちょうどいい、今日の俺にはツキがあるんだな。とりあえずサンダーに会うのは別に後でもいいし、おい、デュエルしろよ！」
へ？……へ？とりあえず後ろで『蟹!?』とか言って跳ね起きた奴のことは無視しよう。てか、今何時だと思ってんのこの人。もう深夜だよ？よい子はもう寝る時間だよ？
『ちなみにお前は？』
「悪い子です」
２４時間３６５日、売られたデュエルはいつでもどこでもデッキがある限り受け付けます。

「よーし、ここら辺でいいかな」
そして今、僕らがいるのは寮からちょっと離れた海辺。暗い海の波の音をバックに向

かい合い、デュエルディスクを起動する。なにしろ夜も遅い時間、寮の近くでデュエルしたら近所迷惑なんてレベルじゃないからね。
「なあ、始める前に一つ言っておきたいんだが」
「うん？」
「俺は、１ターン目には本気を出さないからな。もし俺のターンを生きてやり過ごすことができたら、そん時は本気を出してやる」
　なんだか妙に真剣な顔で、挑発としか思えないセリフをのたまう鎧田。ほほう、言ってくれるじゃないの。ちょーっとカチンときたかな、うん。
『煮えたぎってきたぜ、ってか？』
　あー、まさにそんな感じ。煮えたぎってきた。ま、その自信がどこから来るのか見せてもらおうじゃん！
「デュエル！」
　先攻は……僕か。ざっと手札を見て、ドローしたカードと比べ合わせる。さっきのセリフが口だけじゃない場合のことも考えて、まずは様子を見るべきだろう。幸い、今の手札ならそれができる。
「僕は、ヒゲアンコウを守備表示で召喚。そして魚族のヒゲアンコウ召喚に合わせて、シャーク・サッカーを特殊召喚！」

巨大なチョウチンアンコウとそこにくっつくコバンザメのコンビ。シャーク・サッカーもさっきまでデッキの中にいたところをいきなりたたき起こされたせいかちょっと眠そうだ。ごめんね。

ヒゲアンコウ　守１６００

シャーク・サッカー　守１０００

「さらにカードを２枚セットして、ターンエンド」

とりあえず、先攻１ターン目としてはまずまずの布陣だろう。だいたいのデッキには対抗できるはずだ。

『ツッコミ待ちだよな？ブラホ一枚で突破できるその布陣でその自信はツッコミ待ちだよな？』

「俺のターン、ドロー！おいおい、その程度じゃ俺のワンキル圏内だぜ？手札のＢＦ、暁のシロッコを通常召喚！こいつはレベル５だが、相手の場にモンスターがいて自分の場が空の時リリースなしで通常召喚できるからな」

ＢＦ―暁のシロッコ　攻２０００

ＢＦ……話には聞いたことがある。大量展開が得意な鴉と鴉天狗の集団だとか。だけどなんだろう、この妙な感じは。一回も戦ったことがないテーマなのに、懐かしいような苦々しいような感じになる。

『シロッコか。ヤバいな、とりあえずそれ使っとけ！』

ぼんやりとユーノの声が聞こえた気がしたけど、自分の考えに閉じこもっててよく聞こえなかった。なんだろう、この感覚。間違いなく、一回もこのテーマを相手にしたことはない。なのに、なんだか……。

「なにもないならもっと行くぜ？俺の場のモンスターがＢＦ１体だけの時、白夜のグラディウスは特殊召喚できる！そして俺の場にＢＦがいることで、黒槍のブラストを手札から特殊召喚だ！」

Ｂ　Ｆ（ブラックフェザー）―白夜のグラディウス

効果モンスター

星３／闇属性／鳥獣族／攻　８００／守１５００

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが、

「ＢＦ―白夜のグラディウス」以外の

「ＢＦ」と名のついたモンスター１体のみの場合、

このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードは１ターンに１度だけ、戦闘では破壊されない。

Ｂ　Ｆ（ブラックフェザー）―黒槍のブラスト

効果モンスター

星４／闇属性／鳥獣族／攻１７００／守　８００
自分フィールド上に「ＢＦ―黒槍のブラスト」以外の
「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚できる。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
最初の鴉天狗の隣に、大きな槍を持った鴉天狗と銀色の鎧を着た鳥人間が黒い羽根を巻き上げながら姿を見せる。無茶苦茶な展開力だ！
「そして俺の場に3体のＢＦがそろった時、このトラップは手札から発動できる！デルタ・クロウ―アンチ・リバース！」
デルタ・クロウ―アンチ・リバース
通常罠
自分フィールド上に「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合に発動できる。
相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードを全て破壊する。
自分フィールド上の「ＢＦ」と名のついたモンスターが3体のみの場合、
このカードは手札から発動できる。

『おい馬鹿聞いてんのか！今更遅いが、やらんよりもはるかにマシだ！』
「え？あ、そっか！トラップ発動、フィッシャーチャージ！シャーク・サッカーをリリースして、暁のシロッコ破壊！」
あ、考え込んでて気づかなかった！もう一枚は発動できるカードじゃないけど、せめてこっちだけは通させてもらおう。青い弾丸になったシャーク・サッカーが突撃して、シロッコのどてっ腹をぶち抜くという見ようによってはなかなかエグイ映像を見た後で、ありがたくカードをドローする。
フィッシャーチャージ
通常罠
自分フィールド上の魚族モンスター１体をリリースし、
フィールド上のカード１枚を選択して発動できる。
選択したカードを破壊し、デッキからカードを１枚ドローする。
「ほう、ちょっとは楽しめそうだ！何しろ今のコンボ、ノース校じゃあワンキル率７割越えだったからな」
７割……！すさまじい数字だ。そうか、だからあんなに自信があったのか。
「だがな、まだ俺のバトルフェイズは始まってすらいないからな？ブラストでヒゲアンコウに攻撃、デス・スパイラル！」

ＢＦ―黒槍のブラスト　攻１７００↓ヒゲアンコウ　守１６００（破壊）
清明　ＬＰ４０００↓３９００
「ターンエンドだ」
「このエンドフェイズ、白銀のスナイパーの効果発動！特殊召喚して、白夜のグラディウスを破壊！頼むよ、スナイパーさん」
パン、パン、パンと三発の銃声が響き、グラディウスの鎧が銃弾に貫かれる。それをやったのはモンスターゾーンにいつのまにやら潜んでいた、一人のスナイパー。おお、渋い。
白銀のスナイパー
効果モンスター
星４／地属性／戦士族／攻１５００／守１３００
このカードは魔法カード扱いとして
手札から魔法＆罠カードゾーンにセットできる。
魔法＆罠カードゾーンにセットされたこのカードが
相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、
このカードを墓地から特殊召喚し、
相手フィールド上のカード１枚を選択して破壊する。

「グラディウス！……面白くなってきやがった、久しぶりに本気が出せるぜ！」
清明　ＬＰ３９００　手札：３　モンスター：白銀のスナイパー（守）魔法、罠：なし
鎧田　ＬＰ４０００　手札：２　モンスター：ＢＦ―黒槍のブラスト（攻）魔法、罠：なし
「僕のターン、ドロー！」
カードを引いた時点で、横のユーノがふと気になったといった感じで声をかけてきた。
『なあ清明、なーんかさっきから変だぞ。ＢＦになんか恨みでもあんのか？』
「んー、恨みっていうかね。とりあえず孤高のシルバー・ウィンド苦手」
『ああ、出しづらそうだけどわりと厄介だ……よ……な？』
なぜかフリーズしたユーノのことはとりあえず無視するとして。さあ、どうやってこの場をひっくり返そうか。まあ、そんなに変わったことができるわけじゃないけど。ちなみにさっきブラストじゃなくてグラディウスを狙ったのは、こうすることができたからなのさ。
「スナイパーを攻撃表示に。アトランティスの戦士を通常召喚して、黒槍のブラストに攻撃！スナイパーさんもダイレクトアタック！」

アトランティスの戦士　攻１９００↓ＢＦ―黒槍のブラスト　攻１７００（破壊）
鎧田　ＬＰ４０００↓３８００
白銀のスナイパー　攻１５００↓鎧田（直接攻撃）
鎧田　ＬＰ３９００↓２４００
「ターンエンド。さあ、本気とやらを見せてみてよ！」
そう言うと、鎧田は二ヤリと笑った。一体、どんな手を見せてくれる？と、そこで固まってたユーノがようやく動き出した。
『おい、ちょっと待て今言ったこともう一回繰り返してみろ』
「なに？今すんごく忙しいんだから後にして！」
『それどころじゃね……チッ、わかったわかった。んじゃ俺は寮に戻ってるぞ。どうしても今すぐ確かめたいことがある』
そう言って大急ぎですっ飛んでいくユーノ。一体何なんだろう、確かめたいことって。まあいいさ、今は集中集中。
「俺のターン、ドロー……んじゃ、約束だ。俺のデッキの本気を魅せてやらあ！フィールド魔法発動！」
フィールド魔法？ＢＦは闇属性、ダークゾーンでも張るつもりなんだろうか。でも僕のそんな予想は、もろくも崩れ去ることになる。

「アンデットワールド!!」
　空が黒い不気味な雲に覆われ、すぐ横の海がＲＰＧの毒沼みたいな粘ついた紫色になり、あたりにぼんやりと霧が立ち込めて……様変わりしたフィールドのなか、アトランティスの戦士がまるで落ち武者のようにボロボロの姿になる。
　アンデットワールド
　フィールド魔法
　このカードがフィールド上に存在する限り、
　フィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族として扱う。
　また、このカードがフィールド上に存在する限り
　アンデット族以外のモンスターのアドバンス召喚をする事はできない。
　アトランティスの戦士　水族→アンデット族
　白銀のスナイパー　戦士族→アンデット族
「あ、アンデットワールド!?」
「そう、これこそがこのデッキの真骨頂！元から展開を得意とするＢＦに展開の上手いアンデット族を混ぜ合わせることでさらに動きを速め、なおかつ相手のアドバンス召喚を封じることでアフターケアも行う最速のデッキ！ＢＦを超えた黒羽、かの有名なＵＦ（アンデットフェザー）の鎧田とはまさに！この！俺のことだぁぁぁ！」

「ごめんそれ初耳！」
「あらら、マジか」
残念ながらマジ。……なんて言ってる場合じゃないよ！
「まあいいさ。ＢＦ……いや、ＵＦ―疾風のゲイルを通常召喚だ！そしてゲイルの効果で、アトランティスの戦士の攻守を半分に！」
ＵＦ―疾風のゲイル（アンデットフェザー）
チューナー（効果モンスター）（制限カード）
星３／闇属性／アンデット族／攻１３００／守　４００
自分フィールド上に「ＵＦ―疾風のゲイル」以外の「ＵＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚できる。
１ターンに１度、相手フィールド上のモンスター１体を選択して発動できる。
選択した相手モンスターの攻撃力・守備力を半分にする。
アトランティスの戦士　攻１９００→９５０　守１２００→６００
「ゲイル、やっちまえ！ブラック・スクラッチ！」
ＵＦ―疾風のゲイル　攻１３００→アトランティスの戦士　攻９５０（破壊）
清明　ＬＰ３９００→３５５０

「さあ、俺の本気は止められないぜ！これでターンエンドだ」
清明　ＬＰ３５５０　手札…３　モンスター…白銀のスナイパー（攻）魔法、罠…なし
鎧田　ＬＰ２４００　手札…０　モンスター…ＵＦ―疾風のゲイル（攻）魔法、罠…なし
場…アンデットワールド
「僕のターン、ドロー！」
さて、とりあえずゲイルの効果がとんでもないのはよーくわかった。まずはあっちから叩かないと、どんなモンスターを出してもすぐ突破されちゃう。あのセットカードは多分ゲイルを守るためのものだろうけど、今の手札じゃどうにもできない以上、せめてさっさと使わせないと！
「僕は、オイスターマイスターを通常召喚！」
オイスターマイスター　攻１６００　魚族↓アンデット族
「スナイパーさんでゲイルに攻撃！」
「甘いぜ、そんな攻撃がゲイルに届くかよ！手札のＵＦ、極夜のダマスカスの効果発動！こいつを捨てれば、このターンのエンドフェイズまで自分のＵＦ１体……つまりゲイルの攻撃力は５００ポイントアップだ！」

白銀のスナイパー　攻１５００（破壊）→ＵＦ―疾風のゲイル　攻１３００→１８００

清明　ＬＰ３５５０→３２５０

あっちゃー、かわされた……。しかも悪いことに、伏せカードは残したままだ。まずい、攻撃力１８００をこんなに越えられない壁に感じたのは人生初かもしんない。できれば一生味わいたくない感覚だけど。

「最善の策がダメだったなら、次善の策で何とかするしかない、ってね。カードをセットしてターンエンド」

「次行くぜ次！白い羽根のＵＦ、極北のブリザードを召喚！このカードは特殊召喚できない代わりに、召喚した時レベル４以下のＵＦを守備表示で特殊召喚できるのさ。カモーン、黒槍のブラスト！」

ＵＦ―極北のブリザード　攻１２００

ＵＦ―黒槍のブラスト　守８００

白い羽根がところどころ抜け落ちて骨が見えている鳥のゾンビが鎧田のデュエルディスクをコンコンと嘴でつつくと、そこから落ち武者のようなボロボロの姿になったブラストが飛び出してくる。しかし、墓地からも特殊召喚してくるなんてこれは予想外すぎる！

「ブラストは痛い……けど、トラップ発動！イタクァの暴風！」
竜巻が鎧田の場に吹き荒れると、さすがの鳥たちも飛ぶことができなくなって地面に着地する。よし、このまま次で体勢を立て直そう。
イタクァの暴風
通常罠
相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの表示形式を変更する。
ＵＦ―疾風のゲイル　攻１３００→守４００
ＵＦ―極北のブリザード　攻１２００→守０
ＵＦ―黒槍のブラスト　守８００→攻１７００
「ちっ、どのみちこのターンじゃ倒しきれないってのに粘るねえ。ゲイルの効果でオイスターマイスターの攻守半減、そこをブラストで攻撃！」
オイスターマイスター　攻１６００→８００　守２００→１００
ＵＦ―黒槍のブラスト　攻１７００→オイスターマイスター　攻８００（破壊）
清明　ＬＰ３２５０→２３５０
「これでターンエンドだぜ」
清明　ＬＰ２３５０　手札：２　モンスター：なし　魔法、罠：なし
鎧田　ＬＰ２４００　手札：０　モンスター：ＵＦ―疾風のゲイル（守）、ＵＦ―黒槍

のブラスト（攻）、ＵＦ―極北のブリザード（守）　魔法、罠：なし
場：アンデットワールド
「僕のターン、ドロー！」
とりあえず、状況はかなりマズイ。結構追い込まれてる。ライフだけならさっきの暴風のおかげでそこまで変わらないし手札もこっちの方が多いけど、フィールドに差がありすぎる。せめてアンデットワールドさえなんとかできれば、もう少しやりようもあるんだけど……そう思いながら、今引いたカードに目を通す。お、ラッキー。最高のカードじゃあないけど、この状況ならなかなかいいカードだ。結果論だけど、さっきイタクァの暴風を使っといたのは正解だったね。
「魔法カード発動、スター・ブラスト！１０００のライフを支払って、手札のジョーズマンのレベルを４に！そのまま通常召喚！」
スター・ブラスト
通常魔法
５００の倍数のライフポイントを払って発動できる。
自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選び、
そのモンスターのレベルをエンドフェイズ時まで、
払ったライフポイント５００ポイントにつき１つ下げる。

清明　ＬＰ２３５０→１３５０
ジョーズマン　攻２６００　獣戦士族→アンデット族　☆６→４
「おっと、これだけじゃ終わんないよ。墓地の水属性２体、ヒゲアンコウとシャーク・サッカーを除外して、手札のタイダルを特殊召喚！」
爆征竜―タイダル
効果モンスター
星７／水属性／ドラゴン族／攻２６００／守２０００
自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族
または水属性のモンスターを合計２体除外して発動できる。
このカードを手札・墓地から特殊召喚する。
特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。
また、このカードと水属性モンスター１体を手札から墓地へ捨てる事で、
デッキからモンスター１体を墓地へ送る。
このカードが除外された場合、
デッキからドラゴン族・水属性モンスター１体を手札に加える事ができる。
「瀑征竜―タイダル」の効果は１ターンに１度しか使用できない。
爆征竜―タイダル　ドラゴン族→アンデット族

これで2体の上級モンスターを揃えられた、さあ一気に反撃開始！

「ジョーズマンは自分フィールドの水属性1体につき攻撃力が３００上がる……バトル！攻撃力が上がったジョーズマンでブラストを攻撃！」

ジョーズマン　攻２６００→２９００→ＵＦ―黒槍のブラスト　攻１７００（破壊）

鎧田　ＬＰ２４００→１２００

「いいぞ！次はタイダル、ゲイルを攻撃だ！」

爆征竜―タイダル　攻２６００→ＵＦ―疾風のゲイル　守４００（破壊）

「どうだ、まだまだ負けないよ！エンドフェイズにジョーズマンのレベルが6に戻って、僕はこれでターンエンド」

「俺のターン、ドロー。モンスターをセットしてターンエンドだ」

相手のエンドフェイズを迎えたことで、タイダルが光に包まれ手札に帰ってくる。お疲れ様。また働いてもらうけど。なにしろアンデットワールドのせいでアドバンス召喚が全くできないんだから。

ジョーズマン　攻２９００→２６００

清明　ＬＰ１３５０　手札：１　モンスター：ジョーズマン（攻）魔法、罠：なし

鎧田　ＬＰ１２００　手札：１　モンスター：ＵＦ―極北のブリザード（守）、１（セット）魔法、罠：なし

場：アンデットワールド
「僕のターン、ドロー……うーん、墓地のオイスターマイスターとアトランティスの戦士を除外して、もっかいタイダルを特殊召喚。ジョーズマンでブリザードに攻撃！」
あの手札がまたダマスカスみたいな手札誘発だとしても、ジョーズマンの攻撃力２６００を超えてくることはまず無理だろう。第一、向こうのモンスターは全部守備表示なんだから使うメリットもない。ここは、ややこしい事なんて考えずにサクッと攻撃しちゃうに限る。
ジョーズマン　攻２６００→２９００→ＵＦ―極北のブリザード　守０（破壊）
「タイダルでセットモンスターに連撃！」
爆征竜―タイダル　攻２６００→???　守６００（破壊）
「メタモルポットのリバース効果！お互い手札が５枚になるぜ！」
メタモルポット
効果モンスター（制限カード）
星２／地属性／岩石族／攻　７００／守　６００
リバース：お互いの手札を全て捨てる。
その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを５枚ドローする。
たった今攻撃したのは、よりにもよってメタモルポット。ノーコスト５枚ドローとか

もうふざけてんでしょ鎧田さんよう。こっちは一枚とはいえ手札捨てなくちゃいけないってのに。いやいかんいかん、落ち着け僕。まだ僕のターン、できることはある。とりあえず……

「カードをセットして、ターンエンドっと」

「きしし、反撃してやるぜ?まず永続魔法、黒い旋風を発動。手札のＵＦ―鉄鎖のフェーンを通常召喚だ!」

錆びついてボロボロになった鎖を振り回す鴉天狗の亡霊が、なぜか地面の中から這い出てくる。……そこは空飛ぼうよ。

Ｕ　Ｆ（アンデットフェザー）―鉄鎖のフェーン

効果モンスター

星２／闇属性／アンデット族／攻　５００／守　８００

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスター１体を守備表示にする。

「そしてこの時、黒い旋風の効果も発動だ!俺が攻撃力５００のＵＦを召喚したから、攻撃力０の熱風のギブリをサーチしておくぜ」

黒い旋風

永続魔法（制限カード）
自分フィールド上に「ＵＦ」と名のついたモンスターが召喚された時、
そのモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ
「ＵＦ」と名のついたモンスター１体をデッキから手札に加える事ができる。
「フェーンの効果で直接攻撃、そのままジョーズマンを守備表示に変更だ！」
ＵＦ―鉄鎖のフェーン　攻５００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ１３５０→８５０
ジョーズマン　攻２９００→守１６００
フェーンの投げつけた長い鎖がジョーズマンとタイダルの間を縫うようにして僕に直接当たり、それを引っ張り上げる際にジョーズマンの足元をすくう。あ、ジョーズマンがこけた。でも、相手ターンでの表示変更なんて別に怖くない。次のターンにはまた表示形式は変更できるんだ！
「メイン２にカードを３枚セット、さらに魔法カードの浅すぎた墓穴を発動。モンスターをお互いセット状態で蘇生させて、ターンエンドだぜ！さっさと帰れ、征竜野郎！」
タイダルがまた光に包まれ、手札に戻ってくる。もう僕の墓地の水属性はいないし手札の水属性を使ってあとあとやれることの幅が狭まるのも怖いから、当分タイダルの出番はなさそうだ。本音を言えばもうちょっと戦ってほしいところだけど。ちなみに僕

のセットモンスターは内緒。メタモルポットで墓地に行った手札のモンスターだよ。
清明　ＬＰ８５０　手札：５　モンスター：ジョーズマン（攻）１（セット）魔法、罠：１（伏せ）
鎧田　ＬＰ１２００　手札：２　モンスター：ＵＦ―鉄鎖のフェーン（攻）、１（セット）魔法、罠：黒い旋風、３（伏せ）
場：アンデットワールド
「僕のターンドロー……手札の」
「おっと、待ちな。リバース発動、リビングデッドの呼び声！墓地の暁のシロッコを特殊召喚するぜ」
ＵＦ―暁のシロッコ　攻２０００
「ここでシロッコ？そんなことしても、ジョーズマンの攻撃力には勝てないよ？」
「慌てんなって。シロッコの特殊召喚に合わせて、この伏せカードも発動！ブラック・リターン！」
シロッコがぼろぼろの両腕を振り、羽をまき散らしながらジョーズマンに風を吹き付けると、なんとジョーズマンの巨体が吹き飛んでいってしまった。ジョ、ジョーズマーン!?
ブラック・リターン

通常罠
「ＵＦ」と名のついたモンスター１体が特殊召喚に成功した時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの攻撃力分だけ自分のライフを回復し、そのモンスターを持ち主の手札に戻す。
鎧田　ＬＰ１２００→３８００
「さ、続けてくれ」
「ぐぐぐ……ハンマー・シャークを召喚して効果発動、レベル３のドリル・バーニカルを特殊召喚！」
ハンマー・シャーク
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１７００／守１５００
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に発動できる。
このカードのレベルを１つ下げ、
手札から水属性・レベル３以下のモンスター１体を特殊召喚する。
ハンマー・シャーク　魚族→アンデット族　☆４→３
ドリル・バーニカル　水族→アンデット族　攻３００

毎度おなじみトンカチ型の鮫が、これまたおなじみのでかいフジツボを呼び寄せる。もっとも、僕の狙いはそこじゃない。今回やりたかったことは、このカードの発動！

「バーニカルの召喚成功で、このトラップを発動！ディメンション・スライドの効果で、暁のシロッコ除外！」

僕が発動したカード、ディメンション・スライドとは、自分がモンスターを特殊召喚した時に相手の表側モンスター1体をノーコストで除外することができる万能除去カード。本当は今使うつもりはなかったんだけど、ジョーズマンがバウンスされるなんて予想外の事態があった後じゃあシロッコ突破のためにはやむを得ないだろう。いわゆる必要経費ってやつだ。

「甘いぜ、甘々だぜ！そんなカード、俺が通すもんかよ！カウンタートラップ、ツタン仮面！」

ツタン仮面

カウンター罠

フィールド上に表側表示で存在するアンデット族モンスター1体を対象にする

魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

「こ、これも止めちゃうの!?ならバトルフェイズ！ハンマー・シャークでフェーンに攻撃！」

ハンマー・シャーク　攻１７００↓ＵＦ―鉄鎖のフェーン　攻５００（破壊）
鎧田　ＬＰ３８００↓２６００
「ドリル・バーニカルは自分の効果で、相手に直接攻撃できる！ドリル・ハリケーン！」
「その攻撃宣言時、手札の熱風のギブリを特殊召喚！」
発射されたドリルの間を縫うようにして、素早い動きで黒と赤の羽をした鳥が羽ばたき羽を広げる。……もっとも、そんなことしたって直接攻撃はするんだけどね。
Ｕ　Ｆ（アンデットフェザー）―熱風のギブリ
効果モンスター
星３／闇属性／アンデット族／攻　　０／守１６００
相手が直接攻撃を宣言した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、このカードの元々の攻撃力・守備力を
エンドフェイズ時まで入れ替える事ができる。
ドリル・バーニカル　攻３００↓鎧田（直接攻撃）
鎧田　ＬＰ２６００↓２３００
「バーニカルは直接攻撃に成功するたびに攻撃力が１０００アップするよ。とはいえ、次のダメージが怖い……カードを２枚セットしてターンエンド」
あれ、なんか忘れてるような気がする。なんだっ…たっ……け……あー！

「せ、セットモンスター表側にするの忘れてた……」

　これはヤバい。大チョンボとかピンチとかいうレベルじゃないくらい馬鹿だ。大馬鹿だ。ドアホウだ。え、ちょっと待って？え、ホントになんで僕こんなことしちゃったんだろ。うわー、やらかした。ディメンジョン・スライドからのラッシュで勝つ気満々だったから、カウンターされるなんて予想外すぎたから……こんなことやってるからオシリスレッドなんだろうな、僕。

「ドロー、メイン1にセットモンスターを反転召喚メタモルポット！リバース効果によって、もう一回手札を補充するぜ。ギブリのもう一つの効果発動！そしてシロッコの効果で、このターンシロッコ以外の攻撃を封じる代わりに場のＵＦすべての力を結集！シロッコでドリル・バーニカルに攻撃、ダークウィングスラッシュ！」

　ＵＦ—熱風のギブリ　守１６００↓０　攻０↓１６００

　ＵＦ—暁のシロッコ　攻２０００↓３６００↓ドリル・バーニカル　攻１３００

「そんなの受けたらライフ一撃でなくなるじゃん！リバースカード発動、ポセイドン・ウェーブ！」

　大波がシロッコの突撃を防いでくれた。けど、今は全員アンデットだからダメージが入んないんだよねぇ。

「それでも、このターンはなんとか首の皮1枚で繋がった、かぁ……」

「だがな、次で仕留めてやるぜ?メイン２に魔法カード、ブラックフェザー・シュートを発動。手札のＵＦ、尖鋭のボーラを捨ててお前が墓穴で蘇生したモンスターを墓地送りに。カードを３枚セットしてターンエンドだ」

ブラックフェザー・シュート

通常魔法

手札から「ＵＦ」と名のついたモンスター１体を墓地へ送り、

相手フィールド上に守備表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。

選択したモンスターを墓地へ送る。

ＵＦ―熱風のギブリ　守０→１６００　攻１６００→０

ＵＦ―暁のシロッコ　攻３６００→２０００

清明　ＬＰ３５０　手札：５　モンスター：ハンマー・シャーク（攻）、ドリル・バーニカル（攻）魔法、罠：１（伏せ）

鎧田　ＬＰ２３００　手札：１　モンスター：ＵＦ―暁のシロッコ（攻）、ＵＦ―熱風のギブリ（守）、メタモルポット（攻）魔法、罠：黒い旋風、２（伏せ）

場：アンデットワールド

「僕のターン、ドロー！」

はっきり言って、状況はかなり厳しくなってきた。とりあえずタイダルはまた出せる

ようになったけど、このままじゃジリ貧……すぐに打つ手がなくなっちゃう。そんな中、思いを込めてドローしたカードは、と。

「……あれ、コレ詰んだ?」

手札はいっぱいあるのに、なんも思いつかない。モンスターはいることはいるけど、鎧田がまた1ターン目みたいな展開してきたらひとたまりもないだろう。絶望のまま、ヤケになってエンド宣言をしようとする瞬間。

『よ。ヒーローは遅れてやってくる、ってな。しかしあれだな、とっくの昔にやられてるかと思ったら昔一回は天下とったテーマ相手によく粘ってんじゃねーか』

どうしようもなく口が悪い、とびっきりの相方が相変わらずのマイペースっぷりで帰ってきた。

「ユーノ、どこ行ってたのさ!」

『調べもんだってーの。もっとも、まるで成果なしだったけどな。その話は後ですると して、どれ、ちょっと手札と墓地と伏せ見せてみろ。……ふーん、おめでとさん。今はお前のターンなんだろ?ちょいと運任せだが、勝利への方程式はもう5割がた揃ってんぜ』

ユーノの言う『調べ物』が一体何なのかも気になったけど、それよりもセリフの後半が衝撃的だった。勝て……る?僕が?ここから?

「ほ、ほんと!?」
『おう、つーか狙ってたわけじゃないのね。……さ、勝つぞ』
「うん！」
本当、頼りになる相方なんだよなぁ。そばにいるだけで、ぐっと心強くなる。それじゃあ、いっちょ勝ちに行こうか！
『「手札から魔法カード、死者転生を発動！手札のモンスターカード、グリズリーマザーを捨てることで墓地のモンスターカード1枚、タイダルを手札に。そしてタイダルもう一つの効果により、このカードと水属性のシャーク・サッカーを捨てることでデッキのモンスター1体を墓地に送る！この効果でデッキのシーラカンスを墓地に……ここで死者蘇生、たった今墓地に行ったシーラカンスを特殊召喚！」』
万能蘇生魔法、死者蘇生の効果によって魚の王が地中からさながら鯉の滝登りのように飛び出してくる。いっぺん見てみたいよね、鯉の滝登り。本当に竜になったりするんだろうか。今度それモチーフのモンスターとか出ないかなー。
超古深海王シーラカンス　攻２８００
「へっ、大型モンスターを出したのは褒めてやるぜ。だけどな、それだって俺にはまだ勝算があるんだよ！」
鎧田よ、そーゆーのをフラグって言うんだよ？もう遅いけど。だって今の状況ならド

リル・バーニカルのダイレクトアタックで１３００ダメージ、さらにシーラカンスでメタモルポットを破壊して２１００ダメージで計３４００ダメージ、これなら僕の勝ちだ！

『勝算、ねえ。読めたぞ、まずはシーラカンスから攻撃だ！』

「バーニカ……え、わかった！シーラカンスでメタモルポットに攻撃、マリン・ポロロッカ！」

超古深海王シーラカンス　攻３０００→メタモルポット　攻７００（破壊）

鎧田　ＬＰ２３００→２００

「もういいんだよね？バーニカルで連撃、ドリルアタック！」

ドリル・バーニカル　攻１３００→鎧田（直接攻撃）

「まだだ、こいつが俺の勝算！トラップ発動、バックフラッシュ！このカードで返り討ちだぜ！」

発射したドリルが命中すると思われた瞬間にいきなり鋭い閃光が弾けて、大量の黒い羽根が僕のモンスターたちに突き刺さって爆発する。ぜ、全滅!?

Ｕ　Ｆ（アンデットフェザー）―バックフラッシュ

通常罠

自分の墓地に「ＵＦ」と名のついたモンスターが５体以上存在する場合、

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。
『やっぱり張ってやがったな、トラップを……すまん、お前ら。だが、これで終わりじゃねえんだよ。清明、わかってるとは思うがあのモンスターだぞ』
「うん！リバース発動、リビングデットの呼び声！僕が蘇生させるのは、墓地の青氷の白夜龍！」
青白い氷の竜、僕のデッキで最大攻撃力を誇るモンスター。さっき墓穴で蘇生させたのもこのカードだったんだけど……いや、もうあの事件は忘れよう。忘れようったら忘れよう。ユーノにばれたらどんだけ馬鹿にされることかわかったもんじゃない。
青氷の白夜龍　攻３０００　ドラゴン族→アンデット族
「白夜龍でシロッコを攻撃、孤高の冬色氷輪弾（ウインターストリーム）!!」
「もう一枚のトラップ発動、フェイク・フェザー！手札からＵＦ―激震のアブロオロスを捨てて、お前の墓地のポセイドン・ウェーブの効果をもらってくぜ！」
フェイク・フェザー
通常罠
手札から「ＵＦ」と名のついたモンスター１体を墓地へ送り、
相手の墓地の通常罠カード１枚を選択して発動できる。

このカードの効果は、選択した通常罠カードの効果と同じになる。
無数の黒い羽根が風もないのにくるくると回り、浮かび上がった大津波の幻影が白夜龍の吐き出すブレスを抑え込もうとする。……でも！
「確かにこの攻撃が止められたら、僕の負けは確定するよ。でも、僕だって考えなしに白夜龍を出したわけじゃないんだ！白夜龍の効果は、そんな偽物の波なんて突き破る！」
青氷の白夜龍（ブルーアイス・ホワイトナイツ・ドラゴン）
効果モンスター
星８／水属性／ドラゴン族／攻３０００／守２５００
このカードを対象にする魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、
自分フィールド上に存在する魔法または罠カード１枚を墓地に送る事で、
このカードに攻撃対象を変更する事ができる。
青氷の白夜龍　攻３０００→ＢＦ―暁のシロッコ　攻２０００（破壊）
鎧田　ＬＰ２００→０

「ちぇー、負けちまったかー。ま、楽しかったぜ」

「僕もね」
　そう言ってよっこらせと起き上がり、右手を差し出す鎧田。僕は、無言でその手を握り返した。二人で寮の方へ戻りながら、ずっと気になってたことを聞いてみる。
「ところでさ、こんな言い方もなんだけど、なんでこっちの学校にいるの？」
「んー、それか。サンダーの部屋まで案内してくれよ。そしたらそこでまとめて話すからさ」
「はいはい。おーい、万丈目～」
　もう寝ててもおかしくない時間なので、割と強めにノックしながら名前を呼ぶ。意外にもまだ起きてたらしく、反応はすぐにあった。
「ええい、うるさいぞ！だいたい俺は万丈目サンダー……鎧田？お前、こんなところでいつまでも何やってるんだ」
「あ、すいませんサンダー、実は……」
「まあいい、とりあえず上がれ。あいにく茶の用意はないがな」
『お構いなく』
「誰がお前に出すといった！」

「それで？一体何があった」
「はい、実は……」
「「実は？」」
　わざわざこんな時間まで学校に残ってたんだ、きっと大事な用なんだろう。
「出発前にちょっともよおしてきて、トイレ行ってたら船が帰っちゃって……」
　あ、そうですか。うん、まあそんなことだろうとは思ったよ！
『さっきと言ってること違うぞ』
「るっさい！」
「……まあ、お前の事情は分かった。明日校長に言って船を出してもらうから、今日はもう泊まってけ」
「ホントですか！ありがとうございます、サンダー！」
「そのかわり、帰ったらノース校の連中をまとめ上げるんだぞ。来年の友好デュエルでつまらん連中でも連れてきたら、この万丈目サンダーが許さんからな！」
「はい！」
　さてと、用も終わったし僕も帰って寝よう。壁のドアを開けて部屋に戻ろうとすると、鎧田に呼び止められた。
「あ、待ってくれよ」

「どったの？まだなんかあった？」
　まだ何か聞きたいことでもあるのかと振り返る。すると違う違うと首を横に振って差し出したのは、１枚のカード。受け取って表にしてみると、そこにはＢＦ―疾風のゲイルの文字が。
「今日はありがとな。これ、よかったら受け取ってくれよ」
「え、でもこれって……」
「気にすんなって！どうせ制限カードだから１枚余ってるんだよ、俺が使わないのに持ってるよりもお前に使ってもらう方がゲイルだって幸せだろ？」
　ど、どうしよう。正直なところを言うと、このカードは欲しい。フィールド魔法の補助がないと若干素の打点が低めな僕のデッキでは、あの攻守半減効果はかなり使えるだろう。でも、本当にもらっちゃっていいのかな？ちらりと隣を見ると、うなずくユーノの姿。目線を前に戻すと、満面の笑みを浮かべる鎧田。……誰も反対しないみたいだし、じゃあ、もらっとこうかな。
「ありがとう、鎧田！」
「おいおい、さっきも言ったろ？気にすんなって」
　こうして、僕にとってのノース校友好デュエルは終わりとなった。次の日鎧田は帰っていったけど、なんでもノース校校長になんで万丈目君のアームド・ドラゴンを返して

もらってこなかったんだ！って怒られたらしい。自分で忘れてきといて、そりゃいくらなんでもあんまりじゃなかろうか。万丈目も万丈目だけどさ。

そう言えばあの後、ユーノに気になったことってのは何か聞いてみた。そしたらちょっとデッキ見せてみろって言うから素直に渡したらカードを1枚ずつじっくりと見た後でポツリと『やっぱり、ない……な』っていつもとは違いやたらとシリアスな顔で言ったのが心に引っ掛かった。まったく、一体何を隠してるんだろう。一人で悩んでたって何も解決しないってのに。

七つの鍵と守護者たち編
ターン２２　真紅の瞳と闇色竜

　僕がゲイルをもらったあの日から、またしばらくたった。変わったことと言えば、墓守たちの世界まで行ってきたことだろうか。いやー、あの時はビックリした。でも、そんな非日常な世界も終わってみれば思い出話の中の一つになるんだよね。そういえばあの時十代が受け取ったペンダント、その半分は一体誰が持ってるんだろう。そんなことをつらつらと考えながらの授業中。明らかに授業態度悪いけど大丈夫、隣で爆睡してる十代よりは起きてるぶんだけマシだと思う。お、チャイムだ。よし、今日も昼飯だー！

「ああ、遊城十代君。それから遊野君に、万丈目君。三沢君に明日香さん、河風さんも。ちょっとお昼は後にして、私と一緒に校長室まで来てください。もしいるんでしたらユーノ君も、別についてきてもらって構いませんよ」

　ちなみに大徳寺先生がユーノのことを知ってるのは、墓守の世界で実体化したところを見られたから。これまで半信半疑だった隼人や翔も、これでユーノがいることにはっきり気づいてくれた。というかユーノ、やっぱり扱いとしては精霊体なんだね。

「ちなみにさ、何の話か分かる？」
『こりゃあれだな、レッド寮魔改造のことがばれててド叱られるパターンだな』
「……マジ？」
　何気なく話を振ってみたら、即答された。あっちゃー、短い青春だったなぁ。いつかばれるかもとは思ってたけど。
『嘘に決まってんだろバカヤロウ。なんでそれに三沢だの明日香だのまで呼ばれなきゃいけねーんだよ。ほれ、さっさと行こーぜ』
　な、なんだ嘘か……よかったよかった。それから道中さりげなく聞いてみたけど、どうも大徳寺先生も用件は知らないらしい。うーん、一体何の話なんだろ。

「三幻魔のカード？」
「そうです、この島に封印されている、古（いにしえ）より伝わる3枚のカード……」
　いきなり呼び出されて始まったのは、校長によるまるでお伽噺のような昔話。ついこの間、入学する前にはこんな話聞かされても多分信じてなかったろうけど……今はユーノ（幽霊）とかシャーク・サッカー（精霊）だのがすぐ近くにいるんだから、この話も本当なんだろうなあ、ってのはすんなり受け入れられた。しかしそんな、解放したら世界が魔に包ま

れるような危険なカードを封印した島に平気な顔して学園を建てちゃうなんて、これが世界に羽ばたく海馬コーポレーションクオリティーなんだろうか。

「そのカードの封印を解こうと、挑戦してきた者達が現れたのです……」

七星門だかセブンスターズだか知らないけど、随分大それた真似をする人たちもいたもんだ。名前から察するに、全員デッキには七星の宝刀が3積みしてあるんだろう。というかこーゆーのって大体あれだよね、一回は解放に成功してパワーアップするけどすぐ自分が取り込まれてえらい事になっちゃうパターンだよね。

「……そして、これが七星門を守る7つの鍵です。そこで、あなたたちにはこの鍵を守って頂きたい」

そう言って校長がそっと取り出した小箱の中には、なるほど確かに7つの鍵、というかパズルのようになっている金属片。

「守ると言っても、一体どうやって」

万丈目の疑問は、すごくもっともだと思う。いくらなんでもこっちは高校生、そんなアブナイ人たちを相手にできる方法なんて……

「もちろん、デュエルによってです。だからこそ、学園内でも屈指のデュエリストであるあなた方に集まってもらったのです」

それくらいしかないよね、やっぱり。でも、なんなんだろうその『鍵を奪うにはデュ

エルで勝たねばならない』とかいう謎ルール。まあでも封印されてるのもカードなんだし、ある意味筋は通ってるのかな。しかし、僕が学園屈指のデュエリスト、か。うーん、ここまで正面から褒められると照れくさいね。

『いや、そのりくつはおかしい。……とも言い切れねーんだよなー、遊戯王だし。セブンスターズなんてまだマシな方だ』

それにしても、なにかマズイことやったのがばれたのかと思ったら全くの予想外な話だ。……ま、僕だってデュエリストの端くれ、目の前に出てきたデュエルのチャンスは掴むだけさ！ということで鍵に手を伸ばしたけど、同時に十代も手を伸ばしたために鍵を手にするのはほぼ同時だった。

「おもしれえ、やってやるぜ！」

「その話乗った！じゃあ、僕このピースね！」

そしてその後もカイザーは静かに笑いながら、三沢は真剣な顔で頷きながらそれぞれ鍵を手にし、明日香と万丈目、夢想もすぐに手を伸ばした。……あれ、大徳寺先生とクロノス先生の分は？

『七星門、だからな。当然７つしかないだろうな』

「教諭のお二人には、この７人の生徒たちのサポート役に回って頂きたい。何しろ敵の力は未知数ですからな」

「わかりましたニャ」
「校長、このクロノス・デ・メディチに任せてください。私がいる限り、学園の平和は守られますノーネ！」
「いいですか、みなさん。戦いはもう始まっています、常にデュエルの準備をしておいてください」
　最後に校長先生から締めの言葉があり、ちょうどチャイムが鳴ったこともありその場はそれで解散となった。あ、お昼まだ食べてないのに。

　その日の夜。十代が翔や隼人に自慢話してるのを壁越しに聞きながら、僕はちょっと外に行く準備をしていた。
『ん、どっか行くのか？』
「いやー、ちょっとね。なんとなく眠れなくて」
　早くデュエルがしたいような、やっぱりちょっと怖いような、でもワクワクするのが抑えられない。そんなこんなで眼が冴えてしょうがないので、軽く散歩にでも行こうと思ったのだ。
『いや、それは今が９時半だからだと思うぞ』

「いーの。どうせデッキもチェックしたし、特にすることないもん。じゃ、行ってきまーす」

『原作通りなら今日いきなり、か……よし、俺もついてくぞ』

一応デュエルディスクだけは手に付けていつでも動かせるようにして、靴を履いて外に出る。と、こっちに向かって歩いてくる人影を見つけた。

「誰!?……ってなんだ、明日香じゃん。おーい!」

「あら、どうしたの?なんとなく不安になったから様子を見にきたんだけど」

「いや、ただの散歩。どうも落ち着かなくてさ」

「あまり一人で出歩くのはお勧めしないわよ。そういえば、この間の彼は今もいるの?」

この間の彼?ああ、ユーノのことか。

そこまで言ったところで、たった今出てきたばかりの部屋から眩しい……レッド寮の電力事情じゃとてもじゃないけど出せないぐらい眩しい光が放たれた。あれだけ光が出るライトなんて買おうものなら、一瞬も持たずにブレーカーが落ちるだろう。

「え、何!?」

『始まったか!』

ここにいるのが僕一人だったらどうしたかはわからないけどまだ中には十代達がいるんだ、早く助けに行かないと!

「じゅうだーい！翔ー！隼人ー、万丈目ー！」

みんなの名前を呼びながら部屋に駆け込むと、なんと光っているのは部屋の壁に机に天井に……つまり、部屋全体が光を放っていた。驚いて動きを止めている間に、光はどんどん強くなっていく。そしてあまりの眩しさに目を開けていられなくなり、思わず目を閉じると……。

「ここどこ？」

『地球ん中』

あ、はい。ありがとうございます。別にそういうことを聞きたいんじゃなかったんだけど。まあ前向きに考えると、また異世界に来たわけじゃないってことがわかっただけよしとしよう。

「んで、ここどこ？」

『見ての通りの火山だな。先に言っとくと、この島ど真ん中に火山あるだろ。あの火口ん中』

なるほど、火山か。そう思って辺りを見回すと、確かにちょっと暑い。十代と明日香が後ろで倒れて……あ、起き上がった。よかったよかった。それと、マグマが下の方でボコボコいってるのも聞こえてくる。そのすぐ近くに翔と隼人もいるね。

「ってちょっと待って!?何やってんのあの二人!?」

「それについては私が答えよう、遊野清明」
「誰だ！」
　いつの間にか後ろに立っていた、全身黒服に身を包んで黒いマスクをかぶった怪人がこちらに向けて歩いてきた。
「私はセブンスターズの一人、ダークネス。七星門の鍵を持っているということは、細かい説明は不要だろう。さあ、互いの魂を賭けた闇のゲームを始めよう！」
「……なんかもう予想はついてきたけど、あえて聞かせてもらうよ。あの二人、翔と隼人までなんで巻き込んでるの？鍵を持ってる僕に十代、明日香が連れてこられたのはまだ分かんないでもないけど、あの二人はなんも関係ないでしょ」
　はたして仮面男改めダークネスの答えは、最悪の予想通りのものだった。
「あの二人は、お前に本気を出してもらうためにあの位置に置いた。今はあの壁によりシャットアウトされているが、時間と共に壁は崩れていき最終的にマグマの中に落ちるだろう。そうしたくないならば、私にデュエルで勝つことだな」
「時間制限つき!?上等、何が何でも勝ってやるさ！」
「では、ゆくぞ！」
「「デュエル!!」」
「先攻は私だ。私は、手札の軍隊竜を守備表示で召喚。さらに魔法カード、一時休戦を発

動。カードをセットしてターンエンドだ」
ダークネスの場に、ちょっとした鎧を着こんだ身軽そうな竜人が盾を構えた。
軍隊竜（アーミー・ドラゴン）　守８００
一時休戦
通常魔法（制限カード）
お互いに自分のデッキからカードを1枚ドローする。
次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは0になる。
「僕のターン、ドロー！」
さっきからなんだろう、どうもこの場所に来てから自分でも妙に感じるぐらい全身に力が満ち溢れていて、今ならなんだってできそうな気がする。知らず知らずのうちに、ニヤリと笑みを浮かべていたことにふと気が付いた。一体、僕はどうしちゃったんだろう。まあ、悪い気はしないからどうでもいいさ。
「グリズリーマザー、召喚！軍隊竜を攻撃！」
青い体毛の熊が、その鋭い両手の爪で容赦なく竜人をひっかいていく。一撃目で盾がバラバラに壊れ、二撃目で体を守る鎧が吹っ飛んでいき、そして三撃目がガラ空きの胴体に叩き込まれた。
グリズリーマザー　攻１４００→軍隊竜　守８００（破壊）

「軍隊竜の特殊効果。このカードが戦闘破壊された時、デッキから軍隊竜を特殊召喚できる！」

軍隊竜　攻７００

「ちっ……メイン２にカードをセット、ターンエンド」

「エンドフェイズにトラップ発動、リビングデッドの呼び声！甦れ軍隊竜！」

「おっと、蘇生カードか」

軍隊竜　攻７００

ダークネス　ＬＰ４０００　手札：４　モンスター：軍隊竜×２（攻・リ＆無）　魔法・罠：リビングデッドの呼び声（軍）

清明　ＬＰ４０００　手札：５　モンスター：グリズリーマザー（攻）　魔法・罠：１

これでダークネスは、自分のターンにレベル７以上のモンスターもアドバンス召喚できるようになったわけだ。はたして、次の一手は最上級モンスターだった。

「ドロー、私の場の軍隊竜２体をリリースし、真紅眼の黒竜を召喚する！」

いきなり足元のマグマが巨大な竜の姿になって立ち上がり、その炎の中から真っ黒いドラゴンが現れた。

真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）

通常モンスター

星７／闇属性／ドラゴン族／攻２４００／守２０００
真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを焼き尽くす。
「レッドアイズ……」
『出たなレッドアイズ。用心してけよ？』
「バトル、真紅眼でグリズリーマザーに攻撃！ダーク・メガ・フレア！」
真紅眼の黒竜　攻２４００↓グリズリーマザー　攻１４００（破壊）
清明　ＬＰ４０００↓３０００
グリズリーマザーが破壊された瞬間僕の体にも命（ライフ）の３分の１、つまり１０００ポイントダメージ分の痛みが走った。たまらず顔をしかめるけど、思ったよりひどいダメージじゃなかったおかげでなんとか倒れたりはしなかった。アドレナリンでも出てきたのか、それとも闇のゲームのダメージもこんなもんなのか。まあなんにせよ、十代だってこんな痛みを感じながら平気な顔してデュエルしてたんだ、僕がやられるわけにはいかないさ。あれ？今、僕の体の周りに紫色のオーラっぽいモノが立ち上ったような気がしたけど……気のせいかな、うん。見直してみたら何も見えなかったし。
「グリズリーマザーも特殊効果発動！ただしこっちが呼ぶのは同名モンスターじゃなくて、攻撃力１５００以下の水属性だけどね。来い、ハリマンボウ！」
ハリマンボウ　攻１５００

「ふ、お互いリクルーターを失った訳か。マジック・プランターを発動。私の場のリビングデッドを墓地に送ってカードを２枚ドロー、そしてカードをセットしてターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！ハリマンボウをリリースして氷帝メビウスをアドバンス召喚、その効果フリーズ・バーストで伏せを破壊、さらに今ハリマンボウが墓地に送られたことでその特殊効果！レッドアイズの攻撃力を５００下げる！」

これが決まれば、いくらレッドアイズと言えども攻撃力は１９００、さらに伏せカードのサポートも受けられなくなるはず。ライフはそんなに削れなくても、ボードアドバンテージはだいぶ稼げる！だけど、そんな僕の考えは十分に予想の範囲内だったようだ。

「ならば私は、この伏せを発動しよう。竜魂の城の効果で墓地の軍隊竜を除外してレッドアイズの攻撃力をエンドフェイズまで上げ、その後メビウスの効果が適用され破壊されることで今除外した軍隊竜を特殊召喚する」

竜魂の城

永続罠

１ターンに１度、自分の墓地のドラゴン族モンスター１体をゲームから除外し、自分フィールド上のモンスター１体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで７００ポイントアップする。
また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた時、
ゲームから除外されている自分のドラゴン族モンスター１体を選択して特殊召喚できる。
「竜魂の城」は自分フィールド上に１枚しか表側表示で存在できない。
真紅眼の黒竜　攻２４００→３１００→２６００
軍隊竜　守８００
「決まんない、か……だけどダークネス、ひとつ教えてあげるよ！火山の中じゃあ今のメビウスはレッドアイズに勝てないかもしれないけど、海の中なら話は別さ！フィールド魔法、アトランティス発動！」
伝説の都　アトランティス
フィールド魔法
このカードのカード名は「海」として扱う。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００ポイントアップする。
また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは１つ下がる。
氷帝メビウス　攻２４００→２６００　守１０００→１２００　☆６→５

「行け、メビウス！今ならお前はレッドアイズとも互角に戦える！」
『っ!?おい、何を』
「うるさい！メビウスでレッドアイズを攻撃、アイス・ランス！」
氷帝メビウス　攻２６００（破壊）→真紅眼の黒竜　攻２６００（破壊）
メビウスの投げつけた氷の槍がレッドアイズの吐き出した炎の球とぶつかり合い、激しい爆発の脇をすり抜けて駆け付けたメビウスがレッドアイズをがっしりと掴んで自分もろとも足元のマグマに飛び込んでいく。……ソリットビジョンの調子が悪いんだろうか、また僕の周りに一瞬だけ紫の炎が見えた気がした。他の皆が気づいてないのは単に気のせいなのか、それともフィールドに注目してたからか。まあ、そんなことはやっぱりどうだっていい。メビウスには悪いことしたけどダークネス、まだまだ僕は全然暴れ足りないんだ。もっと付き合ってもらうよ！
「カードを一枚セット、ターンエンド！」
『おい清明、一体どうしたってんだ！なんかさっきから変だぞ、ちょっと頭冷やせ！』
「いいじゃないの、るっさいなあ」
『清明……？』
「せっかくこっちは力が溢れてきてんだよ、邪魔しないでくれる？」
ダークネス　ＬＰ４０００　手札：４　モンスター：軍隊竜（守）　魔法・罠：なし

清明　ＬＰ３０００　手札：５　モンスター：なし　魔法・罠：１
場：伝説の都　アトランティス
「私のターン。魔法カード、思い出のブランコを発動。墓地のレッドアイズを特殊召喚する」
思い出のブランコ
通常魔法
自分の墓地の通常モンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターを特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時に破壊される。
真紅眼の黒竜　攻２４００
「そして攻撃……いや、黒炎弾を発動。私の場のレッドアイズの攻撃を放棄することで、２４００のダメージを与える！」
黒炎弾
通常魔法
自分フィールド上の「真紅眼の黒竜」１体を選択して発動する。
選択した「真紅眼の黒竜」の元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。
このカードを発動するターン「真紅眼の黒竜」は攻撃できない。

清明　ＬＰ３０００→６００

「ぐっ……！」

流石にさっきの倍以上のダメージだけのことはあり、結構効いた。でも、やめたいとかつらいとかは全然感じない。本当に、さっきから僕はなにか調子がおかしい。

「そして私の場のレッドアイズをリリースして、カイザー・グライダーをアドバンス召喚する！」

カイザー・グライダー　攻２４００

『まだ闇竜の出番じゃねえってか？まあ、今のこっちにとっちゃありがたい事ではあるが』

「バトル！カイザー・グライダーで直接攻撃だ！」

「させないよ！トラップ発動、メタル・リフレクト・スライム！」

「ならば攻撃は中止だ！戻って来い、カイザー・グライダー」

金色に光る体を持つ竜の突撃を、銀色に光る巨体のスライムががっしりと両腕で受け止めてダークネスの場に投げ返す。本当はレッドアイズの攻撃をこれで受けてノーダメージで済ますつもりだったけど、済んだことについてどうこう言うのは趣味じゃない。

メタル・リフレクト・スライム

永続罠
このカードは発動後モンスターカード（水族・水・星１０・攻０／守３０００）となり、
自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。
このカードは攻撃する事ができない。（このカードは罠カードとしても扱う）
メタル・リフレクト・スライム　守３０００→３２００　攻０→２００　☆１０→９
「カードを１枚セット、ターンエンドだ」
「僕のターン、ドロー！場のスライムをリリースして、レベル６になった超古深海王シーラカンスをアドバンス召喚する！」
超古深海王シーラカンス
効果モンスター
星７／水属性／魚族／攻２８００／守２２００
１ターンに１度、手札を１枚捨てて発動できる。
デッキからレベル４以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効化される。
また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが
カードの効果の対象になった時、

このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースする事で
その効果を無効にし破壊する。
超古深海王シーラカンス　攻２８００→３０００　守２２００→２４００　☆７→６
「……いいだろう、続けてくれ」
「シーラカンスの効果！手札を捨てて、魚族を展開！来い、シャクトパス、竜宮の白タウナギ、ヒゲアンコウ、ハンマー・シャーク！」
『よりによってそのカードがコストかよ。ってかハリマンボウもアーチャーもナシだと!?おい、今攻撃力だけ見て出す奴考えたろ!?』
ユーノがごちゃごちゃ言ってるけど、知ったこっちゃない。４体の色とりどりの魚が、魚の王様の前に集まってくる。
「トラップ発動、奈落の落とし穴！お前が特殊召喚したモンスターの攻撃力はすべて１５００以上、よってまとめて除外だ！」
「っ!!」
確かに、そうすることはできる。僕のモンスターの攻撃力はヒゲアンコウの１５００にシャクトパスの１６００、ハンマー・シャークと白タウナギの１７００だから、攻撃力１５００以上のモンスターの召喚、特殊召喚に対応して全除外する奈落の発動トリ

ガーとしては十分以上だ。だけど……！

『確実にくるシーラカンスの攻撃より、デッキの魚をごっそり除外したかったってわけか。くそ、下級モンスターがずいぶん減ったな。事故んなきゃいいが。おい清明、どう間違ってもグライダーにだけは攻撃すんじゃねえぞ？』

「なんでさ！軍隊竜なんて攻撃したってダメージは入らないし、３枚めに繋がるだけだからなんにも変らない！グライダーの攻撃力は２４００、ダメージを通せる！」

『だから駄目だっつってんだよ！カイザー・グライダーは破壊された時、場のモンスター１体をバウンスする効果があるんだよ。今シーラカンスまでいなくなったら、軍隊竜の攻撃一発でやられちまうだろうが！』

「そんな、早くしないといけないのに！シーラカンス、軍隊竜に突撃！マリン・ポロロッカ！」

超古深海王シーラカンス　攻３０００→軍隊竜　守８００（破壊）

「へへっ、ざまーみ……」

「軍隊竜の特殊効果！デッキからもう一体の軍隊竜を特殊召喚する！」

『アホかあああ!!リクルーター相手にわざわざ無駄な攻撃仕掛けてどーするってんだよ!?デッキ圧縮と墓地肥やしのお手伝いなんてしてんじゃねえ!!つーかたった今自分で意味ないって言ったじゃねえかなんでやるんだよ!?』

軍隊竜　守８００

「や、やっちゃった……？いいやたかだかこの程度、さっさと叩き潰せば問題ないねっ！」

まただ。かあっと頭が熱くなって、異様に力がみなぎってくるあの感覚。それと同時にちらりと見える、紫色の炎。ユーノには位置の関係で見えてなかったみたいだけど、ここまで連続して見ると本当に気のせいなのかどうかも怪しいもんだ。いやまあ、心当たりなんてまるでないんだけど。

『しゃーない、次行くぞ次。説教は後だ。とりあえずそれは伏せとけよ』

「う、うん。カードを１枚セットして、ターンエンド……」

ダークネス　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：軍隊竜（守）、カイザー・グライダー（攻）魔法・罠：１（伏せ）

清明　ＬＰ６００　手札：１　モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）魔法・罠：２

場：伝説の都　アトランティス

「ドローー！俺の場のカイザー・グライダーと軍隊竜をリリースして、２体目のレッドアイズをアドバンス召喚！」

真紅眼の黒竜　攻２４００

もし今のダークネスの手札がもう1枚黒炎弾だったら、僕にはそれを防ぐ手立てがない。だけどありがたいことに、もう1枚は違うカードだった。

「そろそろ見せてやろう、私の切り札を。場のレッドアイズをリリースすることで、このカードは手札から特殊召喚する！現れろ、真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）！」

レッドアイズの体がカードから湧き出る闇に覆われていき、その闇を自分の中に取り込んだレッドアイズが更なる進化をする。羽の一部が赤く光り、前足の形が変わり、顔つきもより鋭くなり、さらに凄みを増した声で一声吠えた。……前言撤回！よくわかんないけどなんかヤバそう！

真紅眼の闇竜　攻２４００

「ってあれ？別に攻撃力変わんないんじゃ？」

「闇（ダークネス）の力を受け生まれ変わった新たなるレッドアイズの特殊効果！このカードの攻撃力は自分の墓地のドラゴン族1体につき３００ポイントアップする！今の俺の墓地には、軍隊竜3体とレッドアイズが2体、そしてカイザー・グライダーが存在する。したがって攻撃力は４２００だ！」

真紅眼の闇竜　攻２４００→４２００

「シーラカンスを超えた!?」

しかも、僕のライフ６００じゃ受けきれない！そうだ、今伏せたカードなら……だめ

だ、このままじゃ何の意味もない！だったら？と、そこまで考えた時。またあの感覚がして、自分の中から恐怖感がいっぺんに消え去った。面白い、負けたら魂を取られるだぁ？まだそんなの体験したことねえんだ、ぜひやってもらおうじゃないの。幻魔や世界がどうなろうと、そんなの僕の知ったこっちゃない！

「これで終わりだ！レッドアイズの攻撃、ダークネス・ギガ・フレイム！」

「ああ、やってみやがれってんだ!!」

『おい馬鹿!?えーい、こうなったら……！』

真紅眼の闇竜　攻４２００→超古深海王シーラカンス　攻３０００

「ふん、たわいない。この程度が七星門の守護者とはな……む？」

先ほどとは比べ物にならないほどの爆炎の塊が起こした砂煙のせいでよく周りが見えないながらも、自分の勝ちを確信したダークネスが目にしたものは。

清明→ユーノ　ＬＰ６００

「選手交代だぜ、この野郎……。『このアホ』はどーだか知らんが、まだ『俺ら』は終わっちゃいねえんだよ」

全く減っていないライフポイントで、燃え盛る海中の街をバックにしっかりと立っている僕（ユーノ）の姿だったろう。だって、また元に戻って気分が落ち着いた僕が最初に見たのも、その後ろ姿だったんだから。

「馬鹿な！お前の場にシーラカンスはいない、なのになぜダメージを受けていない！」
「理由？んなもん簡単だぜ。戦闘なんて最初（ハナ）っからしてねえのに、俺にダメージが通るわけねーだろが」
　流石のダークネスも僕の性格が急に変わったことには驚きを隠せないようだけど、それ以上に自分の攻撃が通らなかったことに驚いてるみたいだ。僕も、今ならわかる。さっきはなんでか暴走しちゃってたから思いつかなかったけど、最初から攻撃を防ぐ一手は場にあったんだ。
「まず俺は攻撃を受ける前に、今は墓地に行ったあるトラップ……儀水鏡の反魂術を発動していた。この効果でシーラカンスはデッキに返しておいたんだよ。ちなみに手札に戻したのはハリマンボウと霧の王、シーラカンスの発動コストにしてたモンスターな」
　儀水鏡の反魂術
　通常罠
　自分フィールド上の水属性モンスター1体を選択してデッキに戻し、
　自分の墓地に存在する水属性モンスター2体を選択して手札に加える。
「だが、それならば私のレッドアイズのダイレクトアタックが命中しているはず！ダメージが増えこそすれ、０になる理由にはならない！」

「ああそうさ。だから俺はこっちのトラップ、バブル・ブリンガーも発動した。俺の場にモンスターがいなくなった以上、必然的にお前の攻撃は直接攻撃になる。その点を利用させてもらったぜ」

バブル・ブリンガー

永続罠

このカードがフィールド上に存在する限り、

レベル４以上のモンスターは直接攻撃できない。

自分のターンにフィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、

自分の墓地の水属性・レベル３以下の

同名モンスター２体を選択して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「くっ……だが所詮は悪あがきにすぎん、その防御カード１枚で何ができる！ターンエンドだ！」

「まあ見てなって、ドロー！手札の爆征竜―タイダルの効果発動、このカードと水属性のハリマンボウを墓地に送りデッキのモンスター１体、ハリマンボウを墓地に落とすぜ。ここでハリマンボウ２体分の特殊効果が発動、対象はどっちもレッドアイズ！」

真紅眼の闇竜　攻４２００→３７００→３２００

「私のレッドアイズが！」
「まだ終わんねえよ、バブル・ブリンガー第２の効果発動！このカードを墓地に送って墓地のレベル３水属性で同名モンスター、ハリマンボウ２体を特殊召喚！」
　ハリマンボウ×２　攻１５００→１７００　守１００→３００　☆３→２
「さらにフィールド魔法の張替えだ、ウォーターワールドを発動！」
　ウォーターワールド
　フィールド魔法
　フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、
　守備力は４００ポイントダウンする。
　ハリマンボウ×２　攻１７００→２０００　守３００→０　☆２→３
「さらに、ハリマンボウ２体をリリース！頼んだぜマイフェイバリット、霧の王を召喚！そしてハリマンボウがリリースという手段で墓地に送られたから、さらにレッドアイズの攻撃力を１０００ポイントダウン！」
　霧の王
　効果モンスター
　星７／水属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０

このカードを召喚する場合、生け贄１体
または生け贄なしで召喚する事ができる。
このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた
モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。
霧の王　攻０→３０００→３５００
真紅眼の闇竜　攻３２００→２７００→２２００
「霧の王でレッドアイズに攻撃、ミスト・ストラングル！」
霧の王が掲げた大剣が、黒いドラゴンを一刀両断した。やっぱりこの攻撃方法は魔法使いのやることじゃない気がする。
霧の王　攻３５００→真紅眼の闇竜　攻２２００（破壊）
ダークネス　ＬＰ４０００→２７００
清明　ＬＰ６００　手札：０　モンスター：霧の王（攻）魔法・罠：なし
ダークネス　ＬＰ２７００　手札：０　モンスター：なし　魔法・罠：なし
「おのれ、私のレッドアイズを！私は何もせずにターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！……なあ、ダークネス」

てっきり挑発でもするのかと思いきや思いがけないほど真剣な声音で、静かにユーノは語りかける。

「お前のデッキの中で一番の切り札は俺が倒した。今のお前は、心の中を切り札を倒された怒りで煮えたぎってるはずだ。お前のたった今引いたカードは確かに考えられる中でも最高の一手だろうさ。だけどな、ちょっと冷静になってみればそのカードにも弱点があることに気付けるはずだ」

「何だと?」

「教えてやるよ。俺にはそのカードの見当があらかたついてる。なにしろダークネス、あんたはこの大事な場面でいいカードが引けないなんてことはないほど強いデュエリストだからな。逆に考えれば、この状況で引くようなカードなんてほんの数枚しか考えられない。そのカード、バトルフェーダーの弱点はこれだ!俺の墓地の水属性はグリズリーマザーに氷帝メビウス、ハリマンボウ2体にタイダルの5体……氷霊神ムーラングレイス、特殊召喚!」

氷霊神ムーラングレイス

効果モンスター

星８／水属性／海竜族／攻２８００／守２２００

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の水属性モンスターが5体の場合のみ特殊召喚できる。
このカードが特殊召喚に成功した時、
相手の手札をランダムに2枚選んで捨てる。
「氷霊神ムーラングレイス」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。
このカードがフィールド上から離れた場合、
次の自分のターンのバトルフェイズをスキップする。
「バトルフェーダーは手札誘発だが、相手の攻撃宣言に合わせてしか効果が発動できないモンスター。なら、このメインフェイズで叩き落としてやるよ」
「私の……速攻のかかしが……!」
とりあえずユーノのために、聞かなかったことにしてあげよう。何も言うなという無言の圧力と共にジト目でこっちの方をにらんできたユーノから慌てて目をそらしながら、そう思った。
「霧の王、そろそろ全部終わらせようぜ!プレイヤーにダイレクトアタック、ミスト・ストラングル!」
霧の王　攻３５００→ダークネス（直接攻撃）
ダークネス　ＬＰ２７００→０
ユーノが勝った瞬間、叫び声をあげながらダークネスが炎の柱に呑みこまれていく。

あっちも気になるけど、まずは翔と隼人を……！と、そちらの方に向かおうとしたユーノががくんと崩れ落ちるように倒れた。
『ユーノっ!?』
　さらに、その場にいた僕ら全員が炎のわっかの中に閉じ込められてしまう。デュエルには勝ったのに、何でこんなことに！とパニックになりそうになった瞬間光が弾け、ふと気づいたらどういう原理なのか火山の外まで章や隼人も含めたみんなでワープしていた。よかった、二人とも無事で！
『じゃあ、ユーノに一体何が起きたってのさ!!』
　思わず叫ぶと、無茶苦茶に苦しそうな声で倒れた本人からコメントが入った。
「ギャーギャー……耳元で、わめくなうるさい……おい清明よ、お前の……体、もろすぎ、んぞ……なんで、この程度で……ぶっ倒れるんだよ……」
　しょうがないでしょ、なんでデュエリストに体力が必要になるのさ！
『だからお前は、アホだってんだ……デュエリストの……身体能力ってのは……そっちの道でも、食ってけるんじゃねーかって……思うぐらいには、しとくもん、だぞ……」
『それっておかしくないかな!?』
「知る、か……とりあえず、交代……な……」

へ、交代？そう思った瞬間、なにかを言う暇もなくユーノと僕の位置が入れ替わる。いや違う、僕の魂が元の体に戻って、ユーノがいつもの精霊体になったんだ。って、全身痛い！デュエル中はアドレナリンとかなんかそーゆーのせいで何にも感じなかったけど、今になるといろいろ痛いよこの体！あまりの痛みにあっさり意識を手放す寸前、

『あー、痛みが消えた。目ぇ覚ましたらいっぺん体力づくりと喧嘩（リアルファイト）の仕方をみっちり叩き込む時間を作ってやんなきゃな』

そんな恐ろしいことを呟く相方の声が聞こえた。僕、生きてられるんだろうか。

ターン２３　吸血美女と５０００年の負の歴史

「痛てて……」

目が覚めると、知らない天井があった。どうやら、どこかのベッドに寝かされてるらしい。そうだ、ダークネスと闇のデュエルして倒れちゃったんだっけ。きょろきょろと辺りを見回してみると、どこかで見たような気がするイケメンさんが隣のベッドで入院中だった。えーっと、確か……この顔は……と、また意識がぼやけてきた。

「アニキ、清明君が！」

「おう、ついに起きたか！」

そんな声が聞こえてきた気がするけど、これ以上はもう体が持たない。全身を支えることができなくなってもう一度ベッドに倒れこみ意識が消える寸前、隣の人が誰か、ようやく思い出した。

「（確か、明日香の兄ちゃんで……吹雪さん、とかいったような……）」

行方不明の人が何でここに、なんてことを考える余裕は、全くなかった。おやすみなさい。

「寝過ごしたぁっ!!」
『やかましいわぁ!!』
慌てて跳ね起きた瞬間、自分の右手に全力で殴られた。多分、というか間違いなくユーノの仕業だろう。いったいなあ。
「というかユーノさんや、今何時？」
『午後９時３４分７秒、いや８、９、１０……』
「もういいや、あんがと。今日のテストどーしよ、こんな成績じゃ退学になっちゃうよ！」
『オーケーわかった、入院中にしちゃずいぶん調子よさそうじゃねえか。寝ぼけて跳ね起きるぐらいならまだ余裕あるな』
へ？だって今日はテストの日……そこまで考えたところで、いろんな人が一斉に近づいてきた。
「ついに起きたのか、清明！」
「もう大丈夫ッスか!?」
「よかった……！」
えーと、これなに？なんだかみんな、すごく喜んでるんだけど。特に十代と夢想の笑

顔っぷりがハンパなく眩しいです。僕が寝過ごしたのがそんなに嬉しいですかそーですか。そんな調子で人間不信に陥りかけた時、どうしようもねえなといった感じのユーノが明らかに馬鹿にした顔で一言つぶやいた。

『ヒント、ダークネス』

「あ、思い出した。えっと……おはよ、皆。心配かけてゴメン。そーいえばさ、なんで吹雪さんがここにいるの？」

「貴方がデュエルしたあのダークネス。彼は、闇の意識に乗っ取られた兄さんだったのよ」

「明日香……」

　そうと知ってたら、と言いかけてやめた。そうと知ってたら、僕に何ができたってんだ。あのデュエルはわざと負けてたと？いや、実際僕一人じゃ負けてたけど。僕だってせっかく取り戻した命、もう一度失うなんてまだしたくない。じゃあ、どうあろうと全力で行くしかなかったじゃないか。そんな思い空気を振り払ってくれたのは、悪いニュースと共に飛び込んできた隼人だった。

「大変なんだな！今、クロノス教諭が湖で闇のデュエルを！」

「今すぐ行こう」

　大体、クロノス先生は七星門の鍵を持ってない。まさかあの人が負けるとは思わない

けど、万が一のことがあったら！頼む、間に合ってくれ！

よろめく体を支えてもらいながらなんとかたどり着いた時には、もうデュエルは終わりかかっていた。あっちの女の人が、今回の闇のデュエリストなんだろう。そして僕が見ている前で、クロノス先生の古代の機械巨人をアンデットサポートの効果で上回った攻撃力３２００の大型モンスター、ヴァンパイアジェネシスが姿を見せた。伏せカードもないうえに、墓地発動のカードもない今の先生のライフじゃ、あのモンスター三体の攻撃は耐え切れない！でも先生は意外に落ち着いた顔で自分の場と相手の場を見渡し、真剣な顔つきでこちらの方を向いた。

「諸君、よく見ておくのーネ。そして約束するのーネ。例え闇のデュエルに敗れても、闇は光を凌駕できない。そう信じて、決して心を折らぬこと。ワタクシと約束してください」

そう言うと、自らバトルフェイズを催促した。クロノス、先生……！

「ヴァンパイアジェネシスで古代の機械巨人を攻撃、ヘルビシャス・ブラッド！」

ヴァンパイアジェネシス　攻３２００→古代の機械巨人　攻３０００（破壊）

クロノス　ＬＰ１７００→１５００

「さらに私の場のモンスターたちで攻撃！」

身を守るためのカードを持ち合わせていないクロノス先生が狼男の爪に引き裂かれ、蝙蝠にまとわりつかれてさらにダメージを受けていく。闇のデュエルを体感した僕だからわかるけど、闇のデュエルのダメージは質で来るより数で来られる方がキツイ。わかりやすく例を挙げると、僕とダークネスのデュエルの際に受けた黒炎弾のダメージは２４００。この数値はグリズリーマザーがレッドアイズに戦闘破壊された時の１０００ダメージの2倍以上だけど、実感できる痛み自体にはそこまで差がなかった。つまり、闇のデュエルをするのならいっぺんに４０００以上のダメージを与えてワンキルするよりも１００ポイントずつ細かくバーンダメージを蓄積させる方がはるかに途中で相手がデュエル続行不可になる確率は高いのだ。そしてクロノス先生は、わずか1ターンの間に三回も戦闘ダメージを受けた。あまりの痛みに気を失っていても何一つおかしくない。でも、クロノス先生は違ったらしい。ライフが0になって倒れる寸前、はっきりとこちらの方を見て一言、言った。

「ボーイ！光のデュエルを……」

クロノス　ＬＰ１５００→１００→０

そして相手の人、もといヴァンパイア・カミューラはクロノス先生が鍵を持っていないことに気付くと、そのことについて嘲りながら湖に浮かんだ城と一緒に霧の中に消え

ていった。僕らはそれを、ただ見つめることしかできなかった。

クロノス先生がカミューラの手によって人形になった次の日、夢想と僕以外の皆はカミューラ探しに行っていた。本当は僕も行きたかったんだけど、まだ体が本調子じゃない今行ったって途中で力尽きて迷惑になるだけだ。それがわかってるから、おとなしく留守番。夢想は、もし今の僕のところにカミューラが来たら、という心配から自発的に残ってくれている。ユーノとシャーク・サッカーも残りたがってたけど、結局は十代達についていった。鮎川先生も他のクラスの明日の授業の用意があるとやらで隣の部屋にいる。だから僕は今、意識不明の吹雪さんを除けば彼女と二人なわけで。

「えーっと……」

「どうしたの、どこか痛いの？それともお腹すいた？飲み物持ってこようか？だってさ」

好意はありがたいです。倒れてる間寝ずに看病してくれてたみたいで、とてもとても感謝してます。だけど、だけど正直に一言だけ言わせてもらえるならば。

「大丈夫だよ、なんだって。鮎川先生もこの分ならすぐよくなるって言ってたし、今は無理しないでね、だって」

居心地、悪いです。すごく。いつもだったらちょっとお金に余裕ができてワクワクし

ながら新しいパックを買った時並みに手放しで喜んでる状況なんだろうけど、昨日の今日じゃとてもそんなドキドキするような気分にはなれません。ちくしょう、こんなイベント一生に何回あるか分かったもんじゃないってのに……。これというのも間違いなく、全部が全部カミューラのせいだ！吸血鬼、許すまじ。

そんな下心丸出しの怒りに燃えて決意を新たにし、クロノス先生を助けて心置きなくこの状況を満喫するためにも夢想にある『お願い』をした。

んで、その5分後。正直もうちょっと説得には手間取るかと思ってたのでうれしい誤算だったけど、ともかく。

「清明、本当に動ける？無理してない？だってさ」

「余裕余裕。どってことないよ、もう大丈夫」

突然だけど、脱走って素晴らしい言葉だと思う。ただし、

「ただし、自分でやる場合に限る、とか？」

「さっすが夢想、ご名算」

「まったく……なんだって」

という訳でただ今、二人で抜け出してカミューラ探してます。さっさとあんな吸血鬼ぶっ飛ばして、一回死んでからついに僕にも来た青春をエンジョイするんだ！後になって考えれば、この時の僕は明らかにおかしかったと思う。体の痛みが不自然なほど消え

て、気分も妙に高揚してきてたし。例えるなら、ちょうどダークネス戦と同じようなことになりかけていた。

「出て来い、カミューラアァァァ!!!」

「待ってー!そんなに叫んだら体に響くし皆に見つかっちゃうよ、だってー!!」

そんな会話をしながら、なんとなくクロノス先生が以前デュエルした湖までやって来た。ここにいるんなら手間が省けてよかったんだけど、さすがにそんなことはな……い……か……って、

「あったー!?」

「だから叫ばないで～、だってば～!!」

ついさっきまで何にもなかったはずななのに、今見たら霧の中にぼんやりとかすんで見える城。そして、その方角から水上を突っ切って伸びているレッドカーペット。まあここまでお膳立てしてもらったんだ、行かないってのはさすがにありえないだろう。

「よいしょ、っと」

ひょいっと飛び乗る。あら、思ったより足場しっかりしてるのね。これで、後はここをまっすぐ進んでいけばあのうすぼんやりと見える、ここにあるはずのないあの建物にたどり着けるだろう。つーか、これで罠だったら性格悪すぎんぞ。もしそんなことやられたら、この鍵その場でへし折って再現不可能にしてやる。

「おい、そこで何をしている！危険だからそこには立ち入るな……お前ら、何をしてるんだこんなところで!?」
　ギギギギギ、と音がするぐらいゆっくりぎこちなく振り返ると、そこにはこめかみに青筋立てて静かに怒ってるカイザーの姿があった。……ばれた。

「えっと、カイザーさん？まだ怒ってる？」
「……。黙っていろ」
「ハイ」
　結局、今はそれどころではないということでお説教はされなかった。帰れとは一言も言われてないので、許可が下りたと解釈して勝手に後ろをついていく。目つきがとても怖かったけど、やっぱり何も言わなかったのでこちらも余計なことは言わないようにして黙って歩く。と、カイザーが歩みを止めた。慌てて僕らも進むのをやめると、これまでのような通路ではなく大広間のようになった一つの部屋になっていた。そして、その上にいたのは。
「カミューラ！」
「あら、後ろの坊や達まで呼んだ覚えはないのだけれど……まあいいわ、今度の相手は全

員鍵を持ってるみたいだし、こっちの彼を倒した後でなら遊んであげてもいいわよ？」
「……清明に手を出さないで、この面食い年増。だってさ」
ボソッと夢想が呟いたその一言は、どうも地獄耳のデビルイヤーにははっきり聞こえていたらしい。というか夢想さん、なんでいきなり誰よりも早くケンカ売ってんですか。
「なんですってぇ……？」
あ、案の定キレた。やっぱ女性に年の話ってしちゃいけないのね。一瞬だけ二人の間に火花が散った気がしたけど、先に冷静になったのはカミューラの方だった。
「まあいいわ、今はあなたの番。さあ、私とデュエルをして下さらない？」
「あいにくだが、俺にも好みがあるのでな。だが、今は好き嫌いは言ってられん。俺が勝ったらクロノス教諭は元に戻してもらうぞ」
「いいわよ？そのかわり、私が勝てばあなたの魂をこの人形にいただくわ」
「「デュエル！」」
そして始まった二人のデュエル。今日のカイザーは相当頭にきているらしく、いつものリスペクトデュエルを放棄するような圧倒的なパワーで攻め続けていく。そしてカミューラをあと一歩のところまで追いつめたところで、そういったことに関しては素人の僕から見てもわかるぐらい闇の力がこもったあるカードを彼女がドローした。

「魔法カード、幻魔の扉を発動！相手モンスターをすべて破壊し、その後お互いの墓地の中からモンスターを１体を召喚条件を無視して特殊召喚する！」
「サンダー・ボルト効果に加えて死者蘇生の完全上位交換!?そんな無茶な、インチキカードもいい加減にしやがれ！」
　思わず突っ込んだけど、効果の説明にはまだ続きがあるらしい。
「ただし、このカードにはそれ相応のリスクがある。このカードを使い敗北したプレーヤーは、幻魔に魂を捧げなければならない！でも、ただ私の魂を使うだけじゃ芸がないと思わない？そこで私は、今日の特別ゲストの魂を代わりに賭けさせてもらうわ」
　そう言ってパチンと指を鳴らすと、カミューラの分身がなんの脈絡もなく彼女の後ろから現れる。吸血鬼すげえ。そのわきに抱えていた、今は気絶してるらしくてぐったりしてるけど見覚えのあるメガネのレッド生はまさか。
「翔!!」
　最悪の予感は見事に的中した。僕らのよき友人でありカイザーの弟でもある、翔がそこにいたのだ。
「私はこの坊やの魂を生け贄とし、あなたのサイバー・バリア・ドラゴンとサイバー・レーザー・ドラゴンを破壊！そして、サイバー・エンド・ドラゴンを召喚条件を無視して特殊召喚！」

サイバー・エンド・ドラゴン　攻４０００
「これで終わりよ、サイバー・エンド・ドラゴンでプレイヤーにダイレクトアタック！」
カイザーの場にはまだ伏せカードがあったけど、カイザーはそれをちらりと見たのみで結局何もせずに３つ首機械竜の光線に呑みこまれた。
亮　ＬＰ０
「ぐっ……！」
「さあ、いい子ね。あなたの魂をいただくわよ！」
「待て、カミューラ……！」
ライフも無くなってふらふらになりながら、最後の意地を振り絞ってカミューラを睨みつけるカイザー。その目からは、まだ闘志は消えてなかった。
「あら、どうしたのかしら？」
「その前に、俺の……俺のサイバー・エンドを、返してもらうぞ！」
サイバー・エンド・ドラゴンのカードはカミューラが復活させて彼女の場に呼んだカードだから、彼女のデュエルディスクのモンスターゾーンにセットされたままだ。多分、それのことを言ってるんだろう。よほどカイザーを倒したことがうれしいのか、カミューラはその頼みを快諾した。
「ああ、このカードかしら？いいわよ、最後にそれくらいの頼みはお姉さん聞いてあげる

わよ」

　そう言って無造作に片手で投げつけたサイバーエンド・ドラゴンのカードが宙を飛んでカイザーの目の前の床に突き刺さる。人のカードをあんな乱暴な投げ方するなんてマナー違反だと思うけど、まあカードそのものが大根すら真っ二つにできるとか上手く投げれば鉄板に突き刺さるとか言われるぐらい頑丈だから石の床程度じゃ傷がついたりはしないだろう。

「ふ……すまない、サイバー・エンド！」

　そう言い放ってカイザーが最後にとった行動は、僕らの度肝を抜いた。サイバー・エンドを床から引っこ抜き、カミューラにめがけて思いっきり投げつけたのだ。完全に油断していたカミューラはそれ、俗に言うカード手裏剣を避けきることができずにその白い手に……いや、その手に持っていたあるカードに突き刺さって、そのまま2枚のカードはどこかへ吹っ飛んで消えていった。か、カイザー？

「清明！」

「は、はい！」

　こういうのを鬼気迫る表情、というのだろうか。いきなり話の矛先がこっちに向いたので、思わず背筋が伸びる。

「幻魔の扉は俺が消し去った……お前の腕ならば、きっとあの女にも勝てるはずだ。

後は……頼んだ、ぞ……」

そう言ったところでついに限界が来たのか、ゆっくりと倒れていくカイザー。その体が床にぶつかる前に青い炎に呑みこまれ、カミューラの持っていた人形の姿がデフォルメされたカイザーのものになる。クロノス先生の時と同じだ、魂が人形に吸い込まれたんだ。そしてそれを見た瞬間、僕の中で何かが弾けた。

「ちっ、全く最後まで生意気ね！」

カミューラがそんなことを言った気がしたけど、そんなもの耳に入ってこない。とりあえず今考えることはただ一つ。

「おい、カミューラ」

「あき……ら？」

声のトーンから何かを感じ取ったのか、夢想がこっちの方を心配そうに伺ってくる。そのきれいな目が驚愕に見開かれたところを見ると、やっぱり彼女にも見えてるんだろう。今僕の体を静かに包んでる、ダークネス戦の時にも見たあの中二的な紫の炎のことが。また心配、かけちゃうな。こんなもん見たらだれだって驚くだろうし。ごめん、と心の中で一声呟いて、さっきまでカイザーが立っていたところまで歩く。あれからこの炎について考えてみたけど、どうもこれが出ると僕は感情のコントロールができなくなるらしい。おかしいぐらいにブチ切れたり、不自然なぐらい相手を憎く思ったり。ちな

みに今はその両方。でも、多分これがなくても本気で怒ってただろう。
「あら、坊や。あなた、並みの人間じゃなさそうね。七星門の鍵も持ってるみたいだし、少しぐらいなら遊んであげてもいいわよ？」
「幻魔の扉、拾ってくれれば？どうせそれがなきゃ僕には勝てないよ」
普段の僕なら絶対にしないであろう挑発。こーゆーのはむしろユーノが得意とするところなんだけどなあ。でもまあ、今回はキッチリ効果があったらしい。
「言ったわね？別にかまわないわ、あなたごときは幻魔の扉がなくても勝ってあげるもの」
「はいはいそーですか。……じゃあ、始めようか」
「「デュエル!!」」
「先攻は私だわ！私は速攻魔法、手札断殺を発動するわ。さらにヴァンパイア・レディを通常召喚！カードをセットして、ターンエンドよ」
青白い肌でドレス姿の女性が、持ち主そっくりの高圧的な態度で睨みつけてくる。別に今は怖いとは思わないけど。
手札断殺
速攻魔法
お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送る。

その後、それぞれ自分のデッキからカードを２枚ドローする。
ヴァンパイア・レディ
効果モンスター
星４／闇属性／アンデット族／攻１５５０／守１５５０
このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、
カードの種類（モンスター、魔法、罠）を宣言する。
相手はデッキからその種類のカード１枚を選択して墓地に送る。
「僕のターン、ドロー！レミューリアを発動してウミノタウルスを召喚、さらに水族のウミノタウルス召喚成功によりシャーク・サッカーを特殊召喚！」
忘却の都　レミューリア
フィールド魔法
このカードのカード名は「海」として扱う。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００ポイントアップする。
また、１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に発動できる。
このカードがフィールド上に存在する限り、
自分フィールド上の水属性モンスターの数と同じ数だけ、

自分フィールド上の水属性モンスターのレベルをエンドフェイズ時まで上げる。
ウミノタウルス　攻１７００→１９００　守１０００→１２００
シャーク・サッカー　守１０００→１２００　攻２００→４００
「バトル！ウミノタウルス、真っ二つにしてやれ！」
ウミノタウルス　攻１９００→ヴァンパイア・レディ　攻１５５０
ウミノタウルスの斧が勢いよく振り下ろされ、激しい音を立てる。攻撃力の差は３５０、まあ少ないけど先制ダメージとしてはこんなもんだろう。というかむしろ、少ないダメージでじわじわ痛みを味あわせてやりたい今にとってはそっちの方が好都合だ。
……ん？
「ウミノタウルスが、止められた？だって……」
夢想の言った通りだ。ウミノタウルスの斧の一撃は、なんとヴァンパイア・レディの細い腕一本で受け止められていた。ウミノタウルスもかなりの力を込めているのに、押しても引いてもびくともしない。呆然とする僕らの耳に、カミューラの高笑いが聞こえた。
「ホーッホッホ！残念だったわね坊や、私はあなたの攻撃宣言の時にトラップカード、ヴァンパイア・シフトを発動していたのよ！」
「ヴァンパイア・シフト？」

「……発動時にあるフィールド魔法をデッキから発動するカードだよ、なんだって。私もそのフィールド魔法は使ってみようか迷ったけど、イメージに合わないからやめたんだけど……」

「一体、そのフィールド魔法って？」

「私が教えてあげるわ。それは私たち、誇り高きヴァンパイア一族の帝国……ヴァンパイア帝国発動！」

ヴァンパイア・シフト

通常罠

自分のフィールドカードゾーンにカードが存在せず、

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが

アンデット族モンスターのみの場合に発動できる。

デッキから「ヴァンパイア帝国」1枚を選んで発動する。

その後、自分の墓地から「ヴァンパイア」と名のついた

闇属性モンスター1体を選んで表側守備表示で特殊召喚できる。

「ヴァンパイア・シフト」は1ターンに1枚しか発動できない。

ヴァンパイア帝国（エンパイア）

フィールド魔法

フィールド上のアンデット族モンスターの攻撃力は
ダメージ計算時のみ５００ポイントアップする。
また、１ターンに１度、相手のデッキからカードが墓地へ送られた時、
自分の手札・デッキから「ヴァンパイア」と名のついた
闇属性モンスター１体を墓地へ送り、
フィールド上のカード１枚を選択して破壊する。
「それじゃあ、レミューリアが……」
「そう、フィールド魔法は１枚しか存在できないのよ。あなたの建物は私の趣味に合わないわ？」
まるで彼女のセリフに合わせるように神殿のようなレミューリアの建物のほとんどが崩れ落ちていき、残ったほんの一部の上に真っ赤な満月がかかった。
ウミノタウルス　攻１９００→１７００（破壊）→ヴァンパイア・レディ　攻１５５０→２０５０
清明　ＬＰ４０００→３６５０
「ぐうっ……！」
「そして私のヴァンパイア・レディが戦闘ダメージを与えたことで、レディと帝国の効果が発動するわ。まずレディの効果であなたのデッキから魔法カード１枚を墓地に送り、

さらに帝国の効果でデッキのヴァンパイア・ドラゴンを墓地に送ってシャーク・サッカーを破壊するわ」

「……僕が選択するのは、アクア・ジェット。この魔法カードをデッキから墓地に送るよ」

デッキからアクア・ジェットを選択して墓地に送った瞬間、いきなり赤い月がさらに輝きを増して血のような光を放つ。その光に当てられたシャーク・サッカーが突然苦しみだし、そのまま破壊されてしまった。普段ならここでなすすべもなくターンエンドしたっておかしくない状況だけど、今回は特に負けられない理由がある。その執念が、最初の手札にいいカードを入れてくれたのだ。そして僕は、さっきの手札断札でそのカードを墓地に送っておいた。

「メイン2に入って墓地のフィッシュボーグ—アーチャー—の効果を発動、手札のオイスターマイスターを捨てて、このカードを特殊召喚！カードを1枚セットしてターンエンド」

まあ、まだ受けたダメージも一度だけ。この程度なら、どってことない。だから大丈夫、まだいける。闇のデュエルでの痛みを怖いと思ったら、それを乗り切れなかったら、そんなデュエルで勝つことなんてできない。

フィッシュボーグ—アーチャー

チューナー（効果モンスター）
星３／水属性／魚族／攻　３００／守　３００
このカードが墓地に存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
手札の水属性モンスター1体を捨てて発動できる。
このカードを墓地から特殊召喚する。
さらに、この効果で特殊召喚したターンのバトルフェイズ開始時に
水属性以外の自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。
「フィッシュボーグ―アーチャー」の効果は1ターンに1度しか使用できない。
カミューラ　ＬＰ：４０００　手札：3　モンスター：ヴァンパイア・レディ（攻）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ：３６５０　手札：1　モンスター：フィッシュボーグ―アーチャー（守）
魔法・罠：1（伏せ）
場：ヴァンパイア帝国
「私のターン、ドロー！坊や、粋がってたわりにはもう息切れかしら。まだまだ夜は長いわよ？墓地のヴァンパイア・ソーサラーの効果発動、このカードが墓地にいる時、このカードを除外することで一度だけヴァンパイアと名のつくモンスターのアドバンス召

喚に必要なリリースを1体減らすことができる！そして私は手札のシャドウ・ヴァンパイアを召喚し、その効果によってデッキのヴァンパイア・ベビーを特殊召喚するわ」

シャドウ・ヴァンパイア

効果モンスター

星５／闇属性／アンデット族／攻２０００／守　　０

このカードが召喚に成功した時、

手札・デッキから「シャドウ・ヴァンパイア」以外の

「ヴァンパイア」と名のついた闇属性モンスター１体を特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚に成功した場合、

このターンそのモンスター以外の自分のモンスターは攻撃できない。

また、このカードをエクシーズ召喚の素材とする場合、

闇属性モンスターのエクシーズ召喚にしか使用できない。

ヴァンパイア・ベビー　攻７００

まさにシャドウの名前どうりに影が立体になったような真っ黒いヴァンパイアがぬるりと床を突き抜けて這い上がってくる。そしてゆっくりと右手をかざすとどこからともなく蝙蝠が集まってきて、それが小さな、まだ赤ん坊と言ってもいいぐらいの子供の形をとった。

「こんなにたくさんのモンスターが……こりゃマズイかな?」
　アーチャーの守備力３００だけで防ぎきれる数じゃない。だけど、どうやらカミューラはよっぽど人のことをいたぶるのが好きらしい。
「安心しなさい、坊や?このターンはシャドウ・ヴァンパイアのデメリット効果でヴァンパイア・ベビーしか攻撃はできないわ」
　助かった、なんて表情は絶対見せてやらない。ここはあえて、もう一度挑発に回ることにする。なにせ効果の処理はもう終わってるんだ、今何を言ったってこのターンベビーしか攻撃できない事実は変わりっこない。
「ふーん。だけど、偉そうなこと言ってるけど実はただのプレミスじゃないの?」
「あら、違うわよ?あなたにはじっくりと、なるべくたくさんのダメージを与えたいもの。今の私はそういう気分なのよ。だから、精々楽しませて頂戴?バトル!ヴァンパイア・ベビーでフィッシュボーグ―アーチャーに攻撃!」
　ヴァンパイア・ベビー　攻７００→１２００→フィッシュボーグ―アーチャー　守３００（破壊）
「ぐっ!だけど、また次のターンで復活させれば……」
「残念だったわね。ヴァンパイア・ベビーの特殊効果発動!あなたのモンスターを私のフィールドによみがえらせるわ」

ヴァンパイア・ベビー
効果モンスター
星３／闇属性／アンデット族／攻　７００／守１０００
このカードが戦闘によってモンスターを破壊したバトルフェイズ終了時、
墓地に存在するそのモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
「カードをセットして、私はこれでターンエンドよ」
今のターン、シャドウの効果を使わなければ僕にもっとダメージを与えられたはずだ。でも彼女はあえてそれをしなかった。つまり、僕はそれくらい余裕をもって倒せる相手だとみられている。俗にいう舐めプというものだろう。面白い、すぐ後悔させてやるから覚悟してもらおうじゃないの。
「僕のターン、ドロー！」
とはいえ、カミューラの場には実質攻撃力１２００のベビーから２５００のシャドウまでいる。この場を突破できるモンスターなんて……いや、いるじゃないか。いいカードが。
「モンスターをセットして、ターンエンド」
カミューラ　ＬＰ：４０００　手札：２　モンスター：ヴァンパイア・レディ（攻）、

シャドウ・ヴァンパイア（攻）、ヴァンパイア・ベビー（攻）、フィッシュボーグ―アーチャー（守）魔法・罠…１（伏せ）

清明　ＬＰ：３６５０　手札：１　モンスター：１（セット）魔法・罠：１（伏せ）

場：ヴァンパイア帝国

「私のターン！やっぱりあなたみたいな無様な雑魚の相手をしても面白くないわね。このターンで終わらせてあげる！私はもう一体のヴァンパイア・ソーサラーの効果を使って、ヴァンパイア・ドラゴンをリリースなしで召喚するわ。それと……せっかくだからあなた自身のモンスターの手でも葬ってあげるわよ、フィッシュボーグ―アーチャーを攻撃表示に変更。バトル、シャドウ・ヴァンパイアで伏せモンスターに攻撃！」

ヴァンパイア・ドラゴン　攻２４００

シャドウ・ヴァンパイア　攻２０００→２５００→???　守１８００（破壊）

「フフ、これであなたの場にモンスターはいなくなったわね」

「な、何勝った気でいるのさ！セットモンスターだったペンギン・ナイトメアの特殊効果発動！このカードがリバースしたことで、ヴァンパイア・ドラゴンをバウンスする！」

ペンギン・ナイトメア

効果モンスター

星４／水属性／水族／攻　９００／守１８００

このカードがリバースした時、
相手フィールド上のカード１枚を選択して持ち主の手札に戻す。
また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は２００ポイントアップする。
「なんですって!?だけど、あなたのフィールドはがら空きなことに変わりはないわよ!ヴァンパイア・レディでダイレクトアタック!」
ヴァンパイア・レディ　攻１５５０→２０５０→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３６５０→１５００
女性ヴァンパイアの鋭い爪の一撃がまともに命中する。い、痛ったあ……でも、おかげでこのターンは何とかなりそうだ。
「ま、まだまだ……」
「ヴァンパイア・レディの特殊効果が発動するわ。私が次に宣言するのは罠カード!」
「トラップ、トラップか。じゃあ、フィッシャーチャージを墓地に」
「次はヴァンパイア帝国の番ね。デッキから最後のヴァンパイア・ソーサラーを墓地に送って、その伏せカードを破壊するわ」
やっぱり来た!考えてみれば皮肉な話だけど、この破壊効果のおかげで僕はまだ戦うだけでなく、次につなげることができるんだよね。

「それを待ってたんだ！この発動してあるトラップカード、安全地帯の効果発動！僕はこのカードを、シャドウ・ヴァンパイアに対して発動していた！」

安全地帯

永続罠

フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは相手の効果の対象にならず、

戦闘及び相手の効果では破壊されない。

また、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。

「デメリット効果によって、シャドウ・ヴァンパイア撃破！」

正直、この決断には勇気がいった。ここでベビーを破壊しておけば、このターンで受けるダメージは一回少なくなりライフもその方が多く残る。だけど、それじゃあダメなんだ。それじゃあ、返しのターンでシャドウ・ヴァンパイアをどうにもできない可能性の方が高い。とはいえ、これだとこのターンだけであと2回のダイレクトアタックを受ける計算になるわけで。このターンを立ったまま終わることができるといいんだけど。

「誇り高きヴァンパイアの一族を、よくもこんな姑息な手で葬ってくれたわね!!だけど

プレイングミスね、私の場にはまだ攻撃をしていないベビーがいる！ベビー、アーチャーでダイレクトアタック！」

ヴァンパイア・ベビー　攻７００→１２００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ１６００→４００

フィッシュボーグ―アーチャー　攻３００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４００→１００

さっき僕が考え抜いた末にあえてとったシャドウの破壊という一手を、カミューラはプレミスの一言で片付けた。そこら辺に考え方の違いってもんが如実に表れてるんだろうな、と思う。というか、そうやって何か考え続けて思考力を保ってないと今にも気絶しそうだ。痛い、痛い、痛い。一回経験済みだからわかってたけど、やっぱりハンパなく痛いです。

「もう立ってるのもやっとかしら？ターンエンドよ」

「僕の……ターンッ！ド……ロー！」

このターンで決定的な何かをしない限り、多分これが最後のドローになるだろう。お願いしますデュエルの神様、なにか逆転の一手を授けてください！

「魔法カード、サルベージを発動！攻撃力１５００以下の水属性２体を墓地から手札に……僕が加えるのは、ペンギン・ナイトメアとシャーク・サッカー！さらに魔法カード、

強欲なウツボを発動！手札の水属性２体をデッキに戻すことで、３枚のカードをドローできる！」

　これで手札は３枚、何かしらのコンボができるといいんだけど。おそるおそる引いた１枚目は、死者蘇生。強力なカードではあるんだけど、いかんせん今は墓地にそこまで攻撃力の高いモンスターがいないから壁を出すことにしか使えなさそうだ。次に引いた２枚目は、シャーク・サッカー。ありがとうシャークさん、こんな時でも僕の精霊は僕を助けてくれるらしい。だけど、そこまで考えたところで凍りついた。次のターンで壁を出しても、モンスター２体じゃ耐えきれない。もし仮に、また舐めプをする気になったとかの理由で耐え切れたとしても、その次のターンで何をする？手札だって次のドロー１枚しかないのに、逆転なんてできるのか？つまり僕に残された唯一の生き残る手段は、この最後の１ドローで巻き返すしかない。カードをドローするためにデュエルディスクに手を伸ばすけど、その手は僕の意思とは関係なくガクガクと震えていた。いつの間にか流していた汗が、つーっと頬を伝って床に落ちる。痛み関係なく緊張と恐怖で倒れそうになったその時、どこからともなく声が聞こえた。

『……力が、欲しいか』

　え、嘘。今の誰？ちらっちらっと周りを見回すけど、僕ら以外に新しい人はいない。不思議に思う暇もなく、もう一度その声が聞こえた。

『貴方は力が欲しいか？この勝負、勝ちたいか？』
　どうやらこの声、夢想にもカミューラにも聞こえてないらしい。ついに幻聴まで聞こえるようになったんだろうかってＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ、ちょっとそれシャレにならないな。
『……少しは緊張感を持ってくれ。私がシリアスやってるのに、肝心要の貴方がそんな調子では私の立つ瀬がない』
「緊張感がないんじゃなくて色々吹っ切れただけ。だいたい、ここに入学してから僕がどんだけ濃い人生送ってると思ってんのさ」
　自分でもちょっと驚きだけど、正体不明の声の主との会話はなんだか心が落ち着いた。まるで、ずっと前からの知り合いと駄弁ってる時のような。なんでだろう。
『それは後で話すとして、まずはあの吸血鬼を倒す。改めて聞こう。遊野清明、貴方は私の力を使いたいと願うか？』
「……君の力を使えば、この状況からでも勝てるってこと？」
『勝つ！』
　声の主が誰かは、まだわからない。でも、なんとなくだけど、この声は信用してもいい気がした。だから、僕もきっぱりと答えることにする。
「じゃあ、よろしく頼むよ！僕は勝つ、勝ってあの２人を元に戻す！」

あと夢想と2人でいられる時間のために、って言うのは心の中だけに留めておいた。

『ならば私の力を使うといい。デッキトップに私はいる』

どれどれとデッキを見てみると、なんかデッキトップの1枚が明らかにヤバい感じの紫色のオーラに満ち溢れていた。

「あのー。これ、使っても大丈夫なの？」

『すまない。正直その邪気は、私が消そうとして消せるものではないのだ。心の闇に囚われなければたぶん大丈夫なはずだが……私も、貴方ならなんとかしてくれると信じているから私のカードを託している。信用しているぞ、遊野清明』

うーん、そんなふうに言われたら断れないじゃないか。最初からそんなつもりもなかったけど。

「それじゃあ最後の1枚いくよっ！ドローッ!!」

引いた瞬間、とんでもない量の負の感情が流れ込んできた。それと同時に、僕の体全体がこれまでも何回か見た例の紫のオーラに包まれる。これまでは体の一部にしか見えなかったから、全身すっぽりってのは初めてだ。『な、なんとか耐えきってくれ！』という声がぼんやり聞こえた気がしたけど、これは……ちょっと、キツイ……か……も……。

「うわあああああああああっ!!!!!!」

誰かの叫び声が聞こえてくる。いったい誰だろう、と思ったらどうも無意識のうちに自分で叫んでたらしい。足にうまく力を入れられなくなり、後ろの方に倒れていく。だけど地面に体が叩きつけられる前に、誰かが優しい手つきで背中を支えてくれた。ほんの少し頭を動かすと、心配そうに僕の顔を覗き込む夢想の顔が見えた。
「ぼ……僕、は……」
「もういいの、清明。私があなたを助けてあげるから、だって」
何か言おうとするけど、上手く言葉が出てこない。必死になって喋ろうとする僕の唇に黙っていて、と言うかのように人差し指を当てて、ゆっくりと顔をあげてカミューラと目を合わせる。
「ねえそこの年増。これ以上清明に無茶させないで、だってさ」
「あくまでも年増呼ばわりかしら？確かに私も、その子はあんまり好みじゃないから別に魂をもらったって持って帰ろうとは思わないわ。でも私だって鍵は欲しいし、第一誇り高きヴァンパイアの末裔として一度狙った獲物を無条件で逃がすわけにはいかないのよ」
「なら、私の鍵ぐらい持って行って構わないから。だから今すぐ清明とのデュエルを中止して、だって」
「……っ!?む、そう」

慌てて起き上がろうとするけど、まだ体中から吹き出ている紫のオーラのせいで動くこともままならない。このっ、このっ！

「へぇ……ご立派なことね。そうね、鍵がもらえるなら確かに悪い話じゃあないわね。ただし、もう二つ注文があるわ」

「なに？なんだって」

とても邪悪な笑みを浮かべながら、カミューラは一言一言強調するように言葉を発した。

「まず一つ目に、その坊やを放す代わり鍵二つ。あなたの分だけじゃなくて、その坊やの鍵もよこしなさい」

「そんな程度なら……構わない、だってさ。はい、まず私の分」

そう言って首にかけていた七星門の鍵を、ヒュッと投げつける。それをカミューラが片手でキャッチすると、その鍵が光になって消えていった。ここまではまだいい。だけど次のセリフをきいた瞬間、心臓が止まりそうになるほどの衝撃を受けた。

「はい、よくできました。それじゃあ、ふたつ目の条件ね。坊やの鍵、それにあなたの魂も一緒に付けるって言うなら考えてあげてもよくってよ？私は坊やの魂をあきらめる。だからあなたの魂を代わりに貰っていく。合理的じゃなくって？」

「ふざ、けん、な……」

「わかった。だって」
　動かない体で何とか思いとどまらせようとするけど、彼女はそっと僕の体を地面に横たえ、僕の首から七星門の鍵を取るとそれを持ったままカミューラと向かい合う。何とか、少しでも体が動きさえすれば！
『落ち着きなさい。私の持つ負の力は、１００年も生きていない人間が力づくで押さえつけられるようなものではない。力と正面からぶつかりあうのではなく、うまくコントロールするのだ。そして貴方にはそれをする素質と能力がある』
　そうこうしている間にも夢想はゆっくりとカミューラの方に一歩一歩近づいていき、その分僕との距離も離れていく。その距離がなんだか、二度と埋められないような気がして。……そんなの絶対に嫌だ。そう思った瞬間体が急に楽になって、ほぼ無意識のうちに口が動いていた。
「待ちな、お二人さん。夢想、僕なんかのためにそこまでしてくれてありがとう。カミューラ、お前はここで終わらせてやる」
「清明!?もう無理しないでっ……て、その顔はどうしたの!?」
「あら、また動く気になったのかし……あなた、本当に人間なの!?目、目が……」
　なんだろう二人とも。僕の顔だの目だのがどうかしたんだろうか。いや、それは後でいい。今は、このデュエルにケリをつけるだけさ。

「僕のターンはこれから、だからね。僕はまず、死者蘇生を発動。そうだな、墓地からウミノタウルスを蘇生。水族のウミノタウルスが出てきたことで、シャーク・サッカーを特殊召喚」

１ターン目と全く同じ組み合わせの２体。あの時と違うのは、さらに続きがあるということだ。

「そしてこの２体をリリース。七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ！来い！地縛神Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）!」

『よく頑張った、後は私の力に任せておいてくれ。……ダークシグナー、遊野清明』

突如地面に亀裂が走り、その中から紫色のシャチのような形の『何か』が飛び出す。これが僕の新しい力、地縛神。

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００

「攻撃力２９００ですって!?でも残念ね、私はトラップカード発動、重力解除！このカードの効果で、あなたのモンスターも私のモンスターも守備表示になるわ！どんなに高い攻撃力のカードを出そうとも、攻撃ができないんじゃねえ？」

重力解除

通常罠

自分と相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの表示形式を変更

する。
地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→守２４００
ヴァンパイア・レディ　攻１５５０→守１５５０
ヴァンパイア・ベビー　攻７００→守１０００
フィッシュボーグ―アーチャー　攻３００→守３００
「それはどうかな？ってね。チャクチャルアの５つ目の特殊効果を発動、このターンの攻撃を放棄して相手にこのカードの守備力の半分、つまり今は１２００のバーンダメージを与える！ダーク・ダイブ・アタック！」
カミューラ　ＬＰ４０００→２８００
「ターンエンド。さあカミューラ、これがアンタの長い人生最後のターンだ。精々抵抗してみなよ！」
カミューラ　ＬＰ：２８００　手札：３　モンスター：ヴァンパイア・レディ（守）、ヴァンパイア・ベビー（守）、フィッシュボーグ―アーチャー（守）　魔法・罠：なし
清明　ＬＰ：１００　手札：０　モンスター：地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ（守）　魔法・罠：なし
場：ヴァンパイア帝国
「一回ダメージを与えただけで、ずいぶん言ってくれるじゃないの！ドロー、墓地のヴァ

ンパイア・ソーサラーの効果！手札のヴァンパイア・ロードを通常召喚して、このロードを除外！現れなさい、高貴なる夜の王！ヴァンパイアジェネシス、特殊召喚！」

紫色の体をした、ヴァンパイアの王様。クロノス先生の古代の機械巨人と同じ攻撃力を持つ大型モンスターだけど……もうそれも、怖くない。ヴァンパイアだか何だか知らないけど、今の僕には５０００年近い歴史がある地縛神が味方に付いてくれてるんだ。いったい何を怖がることがあろうか、いや、あるはずがない。

『反語表現だな。人間のことは封印されながら暇つぶしに観察していたがあの時にこの島国で一般的だった言葉が過去のものとは、つくづく移り変わりの速い種族だ』

ヴァンパイアジェネシス

効果モンスター

星８／闇属性／アンデット族／攻３０００／守２１００

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「ヴァンパイア・ロード」１体を

ゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。

１ターンに１度、手札からアンデット族モンスター１体を墓地に捨てる事で、

捨てたアンデット族モンスターよりレベルの低い

アンデット族モンスター１体を自分の墓地から選択して特殊召喚する。

「私のモンスターたちを攻撃表示に変更するわ。さあ攻撃しなさい、ヴァンパイアジェネシス！ヘルビシャス・ブラッド!!」

その言葉に従い、ヴァンパイアジェネシスの体が攻撃のために紫色の霧になる。だが、その体がチャクチャルアを覆い尽くすことはなかった。何もできずに元の体に戻ったヴァンパイアジェネシスを見て、カミューラが金切声をあげる。

「なぜ！どうして攻撃しないの、ヴァンパイアジェネシス！」

「地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ、第６の効果発動！このカードが守備表示でいる限り、相手はバトルフェイズを行うことができない！」

まあ、実のところを言うと第３の効果のおかげでどっちみち攻撃はされないんだけど。わざわざ言うことでもないから黙っておこうっと。

「そ、それでも私の場で一番攻撃力の低いモンスターはフィッシュボーグ―アーチャーの３００、このカードが破壊されてもまだ私のライフは残るわよ。カードを１枚伏せてターンエンド！（さあ、早く攻撃してきなさい？今伏せたカードは攻撃反応の罠、援護射撃。どのモンスターを攻撃して来ようと、ヴァンパイアジェネシスの攻撃力３０００を加算すれば私の勝ちね）」

援護射撃

通常罠

相手モンスターが自分フィールド上モンスターを攻撃する場合、
ダメージステップ時に発動する事ができる。
攻撃を受けた自分モンスターの攻撃力は、
自分フィールド上に表側表示で存在する他のモンスター1体の攻撃力分アップする。
あの、ほんの一瞬だけ見えた勝ち誇ったような表情……張ってるな、罠を。だけど、怖くなんてないね。何度だって繰り返すけど、こっちにはざっくり５０００年の歴史があるんだ。たかだが５００年も生きてないような吸血鬼ごときに、後れを取るなんてことはない。
「僕のターン、ドロー……さあカミューラ、自分の人生にお別れは言った？チャクチャルア、攻撃！」
「かかったわね、トラップを……」
「もう一回言わせてもらうけど、それはどうかな？チャクチャルア、第４の特殊効果！このカードは相手に直接攻撃ができる！」
「なんですって!?」
「これでとどめだよ、ダイレクトアタック！ミッドナイト・フラッド！」
地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→カミューラ（直接攻撃）
カミューラ　ＬＰ２８００→０

ライフの無くなったカミューラの体が、風になって消えていく。そして彼女がすっかり消えた瞬間、なにやら地響きがした。見ると、あれよあれよという間に館が崩れてきている。く、ここは湖の上、下手したら沈んでっちゃう！

「夢想、逃げるよ！」

「う、うん！」

そう言ってまだ気絶したままの翔を背中に担ぎ、さっさと来た道を戻りだす……前にカミューラがさっきまでいた場所に引き返し、なぜかまだ人形のままのカイザーを拾い上げる。そのまま脱出しようとしたその時ひときわ大きく館が揺れ、天井が僕と夢想の間に落ちてくる。全力で走り抜ければまだ間に合ったのかもしれないけど、慌てて後ろに飛びのいてしまったのがまずかった。……通れねえ。

「清明?!」

砂埃の向こうから夢想の声が聞こえてくる。というか、まだそんなところにいたのか。さっさと逃げないとそっちまで危ないってのに、全く何してるんだか。そんなことを考えてると、今度は真横の柱が倒れてきた。

「うおっと危なっ！こりゃ、まずこっちの心配しないとダメかな……？」

　自分一人ならまだなんとでもなるんだけど、人形カイザーと翔を抱えながらってとこがなんともマズイ。これだけで難易度が一気に跳ね上がってる。どうしよう、と思ったけど特に何も思いつかないので大人しく相談してみることにする。
「チャクチャルさん、どうすればいいと思う？」
『「ア」の一文字ぐらいわざわざ略さなくても……まあ、いくら今の貴方でも正面突破は難しいだろうな。そうだな、私の力を応用すればある程度精霊としての力を持ったカードなら実体化させることができるはずだ』
「なにそれすごい」
　なんというかもう、人間飛び越えちゃってるね。いやまあ、リアル死者蘇生やらかした時点で人間やめてるって言われたらそれまでだけど。
「でさ、具体的にはどのカードならできそう？」
『ふむ……霧の王だな。さすがに愛着がこもっているだけのことはある。正直、私が手を貸さなくても放っておけば実体化できるだろう』
「ホント!?」
『うむ』
　嬉しいなあ、ありがとうマイフェイバリットカード。早速デッキをデュエルディスクから取り出し、その中から霧の王のカードを掲げてみる。お願い相棒、力を貸して！そ

う心の中で呟いた瞬間、きれいな青い光がカードからほとばしる。そして光が収まった時、そこに立っていた一つの影。僕がデュエルを始めるきっかけになったカードであり、どんなデッキにも必ず入れていたカード。ユーノは自分がいた世界の話をなぜかめったにしてくれないけど、それでもこのカードと出会ってからは僕と似たようなものだったらしい。

「霧の王……」

ついにソリットビジョンじゃない実体化した霧の王が、僕に向かってコクリとうなずく。そして右手の大剣を一振りすると、一瞬で道をふさいでいた瓦礫の山が消滅した。魔法が凄いのか剣が凄いのかはよくわからないけど、とにかく霧の王はできる子だってことはよくわかった。

そう思ってわずか一分後。僕たち3人＋人形1個は、湖のほとりに立っていた。

「訂正。スペック高いとかできる子とか通り越してとんでもないチートっ子じゃないですかー」

助かった、とか嬉しい、とかよりもここまであっさりしてると正直呆れの方が先にくる。ちなみにあれよあれよという間にゆく手を阻むがれきを消し去り、僕らのことを抱え上げて文字通りのひとっとびで元の場所まで運んでくれた当の本人は、僕のすぐそばで何も言わずに立っている。

あ、そうだ。せっかくだからこれも頼んでみよっと。
「ねえ霧の王、この人形元に戻せたりとかする？」
そう言ってポケットからカイザー人形を取り出して見せる。最初のうちはカミューラも倒したんだしすぐ元に戻るだろう、なんて思ってたけどいつまでたっても人形のままで、そろそろ不安になってきたのだ。さすがに多くを求めすぎた気もするけど、彼（？）はあっさり頷くと、僕の手から人形を受け取ってそれを地面に置いた。そして手をかざすと、地面に魔法陣が浮かび上がる。そして魔法陣の中心で光が弾けると、さっきまで人形の転がっていた位置にはカイザーが座り込んでいた。うーむ、霧の王が魔法使いっぽいとこ見るのってこれが初めてな気がする。
「すまなかったな、清明。俺が不甲斐ないばかりに」
「いや、いいっていいって。もうこれで皆助かったんだし、ひとまずハッピーエンドってことでいいじゃないの。それとありがとう、霧の王。これからもよろしく！」
霧の王にお礼を言ってカードの中に戻ってもらい、相変わらず律儀なカイザーに軽く返事してから、ふと思い立ってデッキを取り出してみる。地縛神、地縛神……あった。
地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）
効果モンスター
星１０／闇属性／魚族／攻２９００／守２４００

「地縛神」と名のついたモンスターはフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。
フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。
相手はこのカードを攻撃対象に選択できない。
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。
また、1ターンに1度、このカードの守備力の半分のダメージを
相手ライフに与える事ができる。
この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。
このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、
相手はバトルフェイズを行えない。
こうやってじっくりテキスト見直してみると、なにげにひどい効果だよねチャクチャルさん。
『使うだけ使っておいてその言いぐさはあんまりではないか?』
あ、聞こえてた。ごめんごめん。さて、それじゃあユーノ達に見つかる前に病室に戻ろうかな。チャクチャルさんのことも、遅かれ早かればれるだろうし皆には話しておこう。
そう決心して帰る途中ユーノ達に見つかり、こっぴどく怒られたのはまた別の話。とほほ、せっかく勝ったのに……。

ターンＥＸ　真紅のロードを歩む龍

「でさ、僕思う訳よ。『ハチャメチャ』って言葉あるじゃん？あれって後半のメチャが滅茶苦茶のメチャなのはまあわかるんだけど最初の『ハチャ』って何者？いや、そもそもあれってハチャがメチャするからハチャメチャなの？ハチャをメチャるからハチャメチャなの？」

夜、レッド寮の一室。ここ数日セブンスターズ側の動きもなくつかの間の小休止的な日々を送っていた清明たちは、なんとはなしに清明の部屋に集まってダベっていた。いくらデュエリストとはいえ、一年三百六十五日二十四時間千四百四十分八万六千四百秒の全てをカードの話ばかりして過ごしているわけではない。たまには違う話もする。ちなみに、今絶好調で喋り続けているのは清明。意外かもしれないが、こういった死ぬほどくだらない話はだいたい彼から振り始めることが多い。

『バーカ。ハチャメチャってのはな、もとはと言えば古代アトランタル語で「混乱」を意味するハンチャンってのと「台無し」を意味するメンチャルルって言葉をくっつけたのが語源で、さらにそれが日本に伝わって訛ったから「ハチャメチャ」になったっていう逸話があるんだよ。お前ら高校生にもなってそんなことも知らんのか』

そして、その手の話題に真っ先に返事を返すのがユーノ。なんだかんだいってこの二人もいいコンビである。もっとも困ったことに、
「ええ！おいユーノ、それマジかよ！なあ万丈目、お前は知ってたか？」
「騙されるな十代！そんな話、この万丈目グループの俺ですら聞いたこともないぞ！」
『おお、嘘だぞ。んなもん一から十まで出まかせに決まってんだろ』
その答えの９割方は無駄に手の込んだ大嘘なのだが。それで誰も気にしない辺りおおらかというかのんきというか、とにかくそういう所なのだろう。
「それと十代、前々からずっと聞きたかったことがあるんだけど」
「え、俺？どうしたんだよ、急に改まって」
「うん。ワイルドマンってさ、名前から言ってター○ン的な野生児モンスターだよね。なんで大都会のスカイスクレイパーで攻撃力上がっちゃうわけ？あれビジュアル的には１０００ポイント下がったって文句言えないでしょどーみても」
「そんなこと俺に聞かれてもなぁ……」
別に酒が入っているわけではない。これでも清明本人は全くの素面である。だけどセリフ内容は酔っ払いが絡んでるのと大差ない。どれどれ俺が答えよう、とまたもや出まかせを口にすべくユーノが口を開きかけたその時、玄関がガチャリと開いた。とりあえずこれで話を切ることができる、とその場の全員が微妙にほっとした顔になる。

「みんなー、ただいまッスー」
「ちゃんと帰ってきたんだなー」
　そして入ってきたのが、翔と隼人。別に大した用事があったわけではない、じゃんけんに負けたから下の階まで行って戸棚の奥に押し込まれている大徳寺先生秘蔵のかりんとうをこっそり持ってくる役目を押し付けられただけだ。ちなみにこのかりんとうを見つけたのも清明である。変なところだけ目ざといのも彼ならではといったところか。
「あ、お帰り～」
「早速みんなで食おうぜ！」
「遅かったな」
　その後もあーだこーだと色々なことに対して文句を言い続ける清明を尻目に急須から湯呑に熱い番茶を入れて一口すすり、ほーっと一息つくユーノ。どうやって急須やら湯呑やらを掴むことができたのか、そもそもなぜお茶を飲むことができるのかなどは永遠の謎である。そして、そんな二人を呆れ半分に見つめるほかのメンバーたち。こんな感じで、レッド寮の夜は今日も更けていく。

時はさらに飛び、草木も眠る丑三つ時となる。さっきまでの皆もとっくに眠りについていて、今動くものはいなかった。……たった一人を除いては。
「うし、これでいいか。じゃ、行ってくるぜ」
そう小声で同居人に呟いて声の主、ユーノは自分の腕にデュエルディスクを装着して窓を開け、ひょいっとそこから外に飛び出した。
「よっ……と」
そして空中で減速し、ふわりと足から着地する。どうやら体がある時の癖でつい窓を使ってしまったらしいが、そもそも壁抜けができる彼にとって今の行為に意味はない。
「うし、誰も見てねーだろうな」
『私が見ていた。ところで、今夜の話だが。私もついていこうか？』
「よっ、チャクチャル。まあお前はむしろ見ててもらわないと困ったことになるからいいや。それと悪いけど、今夜は留守番頼むわ」
『だが……』
「頼むわ。俺が何とかするつもりで入るけど、万一って言葉もあるからな。地縛神が守

り神やってくれるんならこっちも安心できるってもんだ」
　一瞬の沈黙。だが、先に折れたのはチャクチャルアの方だった。
『わかった。指一本触れさせないし、何一つ見せない。それが頼みたかったんだろう？』
「ははは、さすがによくわかってらっしゃるもんだ。……んじゃ、な。結界は任せたぜ。それと、これも預かっててくれ。万一の時は、そのまま清明の奴に受け渡しとけよ」
　そう言って投げ渡したのは、デッキの魂ともいえる霧の王のカード。そのカードをわざわざデッキから抜くということはそれだけ事態を深刻にとらえているということなのだろうが、軽く伸びをし、ゆっくりとレッド寮に背を向けて森の中に入っていくユーノの背中にそんな深刻な色は見られない。その後ろで、レッド寮の建物がシャチをかたどった青い炎に包まれた。本来はダークシグナーがシグナーと戦う際に勝負がつくまで出られないようにするためのものだが、裏を返せばそれはデュエルが終了するまで何人たりとも入ることができない鉄壁の結界となるのだ。
　ユーノはひたすら歩き続ける。どこへ向かっているのかはともかく、少なくともその足取りに迷いは一切ない。そして、どれほど歩き続けただろうか。歩き続ける彼の後ろ姿に、声をかける影がいた。
「よう、転生者。こんな夜中にどこまで行く気だよ」
「あー？わざわざそっちから出向いてくれるたぁご苦労なこったな、このストーカーの

盗撮魔。さっきからじろじろじろじろ人の部屋覗いてやがって、バレバレなんだよバーカ」

お互いに嫌味たっぷりの口調でにらみ合う二人。今度先に口を開いたのは、ユーノの方だった。

「まあいいさ。お前の用件はある程度予想できるけどな、あえて様式美ってやつに従って聞いといてやる。……一体何の用だ？」

「テンプレ通りに答えてやるよ。今すぐここで消えろ、この屑転生者が！」

激昂して怒鳴る少年に対し、ユーノの態度はあくまでも冷静だった。そうかやっぱりか、いつかこうなるのはわかっていたぜといわんばかりに冷静に、皮肉たっぷりの口調で話しかけていく。

「消えろ、ねえ。一体どーゆー了見だ？俺シンクロもエクシーズも出してねえぞ？」

「はっ、シーラカンスがＧＸ時代にあるとでも？原作で明日香以外が白夜龍を出したのか？万丈目のドラゴンデッキだって漫画版混じってんだろうが。わかったか屑野郎、お前らのせいで原作はもう十分以上にメチャクチャなんだよ。だからさっさと消えちまえ」

「メチャクチャのメチャはハチャメチャのメチャ、だな」

「は？一体何の話だ」

「うんにゃ、こっちの話。それで？要するにお前は俺が許せない、と？」
それは、彼なりの最終通告。もっとも彼にとっては、ここで話し合いで済むならそれもそれで悪くない、といった程度の認識であり最初から実力行使する気満々だったのだが。そんなことを考えているとは知る由もない少年……いや、転生者狩りの返事は案の定、右腕のデュエルディスクの起動だった。
「ああそうだ、この原作破壊者め。もういい、お前とは話すつもりもない。転生者、お前はこの場でこの俺、富野が消し去って最初からこの世界にいなかったことにしてやる！」
「そもそも俺、転『生』者じゃねーんだけどな。幽霊だし。しかしこれ、傍から聞いてりゃ完全に俺が悪者だな。ふむ、なら悪者っぽくやってみるか。……さあ、よからぬことを始めようじゃないか！」
「「デュエル!!」」
「先攻は俺だ！俺は手札のハンマー・シャークを召喚！そしてその効果で、自分のレベルを下げてフィッシュボーグ―アーチャーを守備表示で特殊召喚するぜ」
ハンマー・シャーク
効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１７００／守１５００

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。
このカードのレベルを1つ下げ、
手札から水属性・レベル3以下のモンスター1体を特殊召喚する。
ハンマー・シャーク　☆4→3
フィッシュボーグ―アーチャー　守300
この時彼がふと思ったのは、とりあえず封印してあるエクストラデッキに眠る白黒のカードたちだった。実際チューナーとそうでないモンスターがそろったこの状況ならばレベル6のシンクロモンスターも、ランク3のエクシーズモンスターも出すことができる。どうせこいつはそのカードのことを知ってるから問題ないだろうし使っちまおうか、そんな気持ちが一瞬頭をよぎったのだ。だが、彼はそんな考えを頭を軽く振ることで追い出そうとする。ここはGXなんだ、エクストラの連中には悪いけど大人しくしててもらおう。そう自分に言い聞かせ、彼はターンを譲り渡す。
「俺はこれでターンエンドだ」
「けっ、その程度かよ。それじゃあこっちも潰しがいってもんがないぜ。俺のターン！相手の場のモンスターが俺の場のモンスターより2体以上いる時、このカードは特殊召喚できる！来い、魔導ギガサイバー！」
冨野の場に現れたのは、ハングリーバーガーとほぼ同じ時期とかなり昔からあるカー

ドでありながら今でもある程度単体で実戦級の力を持つ、人間大のサイズの黄色を基調とした派手な色の鎧に身を包んだ戦士。

魔導ギガサイバー　攻２２００

「さらに手札から、レベル２のフォース・リゾネーターを通常召喚だ」

フォース・リゾネーター　攻５００

フォース・リゾネーターの登場に対し、ユーノは少し嫌な予感を感じる。たった今彼がわざわざ口にした『レベル２の』という部分がどうも引っかかったのだ。そして、その嫌な予感は現実のものになる。

「レベル６の魔導ギガサイバーに、レベル２のフォース・リゾネーターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

「っ!!」

☆６＋☆２＝☆８

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００

「お前が何で今のターンで何もしなかったのか。俺にとってはどうでもいい、とにかくこの場は一刻でも早くゴミを叩きのめすのみ！行け、レッド・デーモンズ！ハンマー・シャークに攻撃、灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

禍々しい顔つきの、まさに悪魔竜と呼ぶにふさわしい見た目のドラゴンが吐き出したブレス攻撃が、一瞬にしてハンマー・シャークの姿を消し炭にしてしまう。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→ハンマー・シャーク　攻１７００（破壊）

ユーノ　ＬＰ４０００→２７００

「ぐわああああっっっ!!?」

ソリットビジョンのはずのその炎の余波をまともに受けてしまい、その痛みに思わず叫ぶユーノと何か言うこともなく破壊されるフィッシュボーグ―アーチャー。ユーノはすぐに立ち上がったが、このデュエルがリアルダメージを受ける闇のゲーム状態になることをまるで考えていなかった自分のうかつさに舌打ちする。そして今のダメージからざっくり換算し、ライフが０になるまであの威力のダメージを受け続けたら相当ヤバいことになるな、と頭の隅でぼんやり考える。

レッド・デーモンズ・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星８／闇属性／ドラゴン族／攻３０００／守２０００

チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上

このカードが相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを攻撃した場合、

そのダメージ計算後に相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを全て破壊する。
自分のエンドフェイズ時にこのカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、このカード以外のこのターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。
「メイン2でおろかな埋葬を発動、このデッキのモンスター1体を墓地に送る効果でフレア・リゾネーターを墓地に。カードを3枚伏せてターンエンド。どうした？もっともっと抵抗してみろよ。どうせお前は消えるんだからさ」
ユーノ　ＬＰ２７００　手札：４　モンスター：フィッシュボーグ―アーチャー（守）
魔法・罠：なし
冨野　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）
魔法・罠：３（伏せ）
「抵抗、ねえ。その前に一つ聞かせろや。てめえ、何のつもりでシンクロをしやがった？ここがＧＸだってわかってんのかコノヤロ」
ユーノの質問の意味は、転生者を嫌っているらしい彼が真っ先にシンクロ召喚をしたことに対する純粋な疑問。その問いに、彼は笑って答える。
「はっ、確かにそうだな。だけども、これは力だ。お前らみたいな転生者をさっさとぶち

倒すために俺に許された正義の力だ。何も考えずにシンクロやエクシーズを持ち出して原作をぶっ壊すお前らとは訳が違うんだよ訳が」
「許した、ねえ。嘘くさい話だぜ。まあ、そっちがその気なら俺だってやらせてもらうぜ。お前ら、久しぶりの出番だけど腕は鈍ってねえだろうな！」
　そう言って服の胸ポケットから、１５枚のカードを取り出す。気のせいかそのカードたちはまた戦えることを楽しんでいるようにも見えて、思わず口の端に笑みが浮かぶ。それは、彼が自分の霊体としての人生でやるべきことをはっきり自分で決めたしるしでもあった。
「なんだ、お前も出すのか？所詮お前も転生者、でかい口叩いてもエクストラ頼みなことには変わりないな」
「なんとでも言えよ。俺はもう死んじまってるから今更どうこう言わねえが、清明の奴にはまだ未来ってもんが残ってんだ。だから、俺はあいつを守り抜く。あいつだってダークシグナーになったりなんだかんだでわりとハードな人生送ってんだ、間違ってもお前らなんぞの好きにはさせんよ。あいつには、ありったけのハッピーエンドを届けてやるさ。俺のターン！ブリザード・ファルコンを召喚。そしてレベル４のブリザード・ファルコンに、レベル３のアーチャーをチューニング！七つの海を凍てつかせ、敵を貫け奇跡の槍よ。シンクロ召喚！神槍一閃、氷結界の龍　グングニール!!」

☆４＋☆３＝☆７
氷結界の龍グングニール
シンクロ・効果モンスター
星７／水属性／ドラゴン族／攻２５００／守１７００
チューナー＋チューナー以外の水属性モンスター１体以上
１ターンに１度、手札を２枚まで墓地へ捨て、
捨てた数だけ相手フィールド上のカードを選択して発動できる。
選択したカードを破壊する。

アーチャーが３つの緑に光る輪になり、その中をブリザード・ファルコンが通り抜けていく。富野には知るよしもないが、その白を基調とした落ち着いた色合いの竜は、ユーノが存命中に初めて手に入れたシンクロモンスターである。特に融合ギミックは取り入れてなかった彼のデッキにおいて、生まれて初めてエクストラデッキに入れたカード。そんな思い出深いモンスターだっただけに、ソリットビジョンにより立体化したその姿を見つめる彼の瞳はまるで普段の清明のように、実に無邪気に輝いていた。

「いくぜ、グングニールの効果発動！俺は２枚の手札を捨てて、レッド・デーモンズと伏せのうち俺から見て右側にある方を破壊する！ゼロ・スピア！」

「甘いぜバーカ、トラップ発動！強欲な瓶の効果で、カードを１枚ドロー！」

グングニールが翼をはためかせ、フィールドに吹雪を巻き起こす。その寒波はレッド・デーモンズ・ドラゴンを一瞬で身動きしない氷像にし、それが地面に落ちて粉々に砕けちった。

「くっそ、手札一枚は空撃ちになったか。もったいないけど、このまま突っ切るぜ！グングニールで直接攻撃、スピア・ザ・グングニル！」

おそらく全国のグング使いが攻撃させるときに一番多く言われているであろう攻撃名を受け、氷結の竜が巨大な槍のような形をしたエネルギー波を打ち出す。それは富野の体を貫き、彼を5～6メートルほど吹っ飛ばした。

氷結界の龍　グングニール　攻２５００→富野（直接攻撃）

富野　ＬＰ４０００→１５００

「このまま立ち上がってこなきゃ俺の勝ちなんだろーけど……あ、起きた。ま、あれだけえばっといてこんなあっさり倒れられたら拍子抜けなんだけどな。カードを1枚伏せてターンエンド」

「調子に乗るなよ転生者！正義は必ず勝つってことを教えてやる！ドローしてトラップ発動、ロスト・スター・ディセント！甦れ、レッド・デーモンズ！」

ロスト・スター・ディセント

通常罠

自分の墓地に存在するシンクロモンスター１体を選択し、
自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、
レベルは１つ下がり守備力は０になる。
また、表示形式を変更する事はできない。
レッド・デーモンズ・ドラゴン　守２０００→０　☆８→７
「なにが正義だバカヤロウ。つーかこのタイミングで蘇生ときたらまさか！」
「さすがに察しがいいな、その通りだよ！もう一枚のトラップ発動、スカーレッド・カーペット！このカードはどちらかの場にドラゴン族のシンクロがいる時に墓地のリゾネーターを２体まで特殊召喚するカードだ！そして俺が蘇生させるのは、もちろんレベル２のフォース・リゾネーターとレベル３のフレア・リゾネーター！」
フォース・リゾネーター　攻５００
フレア・リゾネーター　攻３００
赤黒い悪魔の竜の両脇に、雷と炎をまとって現れる２体のリゾネーター。単体では大した力を持たない彼らだが、今この場においてはステータスも低くレベルもそう高くない彼らの存在が脅威となっていた。
「レベル８のレッド・デーモンズ・ドラゴンに、レベル２のフォース・リゾネーターとレ

ベル３のフレア・リゾネーターをダブルチューニング！赤き王者のプライドが、神も悪魔もねじ伏せる。天地を統べる偉大な魂！シンクロ召喚、出でよ、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！」

２体のリゾネーターが口上に合わせてそれぞれのレベルの数と等しい赤く光る炎の輪になり、レッド・デーモンズ・ドラゴンを包み込む。そしてその中から、デュエルモンスターズ史上最強ドラゴンの一角と名高い赤（レッド）を超えた真紅（スカーレッド）の竜。

☆７＋☆２＋☆３＝☆１２

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻３５００→４８００

「ふふふ、スカーレッド・ノヴァの特殊効果だ。このカードの攻撃力は、俺の墓地のチューナーの数×５００ポイントアップする……さらにフレア・リゾネーターがシンクロ召喚に使われた時、そのモンスターの攻撃力は３００アップする。貴様のグングニールなんて雑魚じゃ、逆立ちしたってかなわねえよなぁ？」

攻撃力４８００のスカーレッドに対し、グングニールは２５００。この攻撃を受ければユーノのライフはたった４００にまで減ってしまううえ場にカードがなくなってしまうのだが、彼は不敵な笑みを崩さない。それがなにか策があってのことか、はたまただのハッタリかはその表情からは読み取れないのだが。

「気に入らねえなあ、その顔。お前も転生者ならそろそろ自分が主役や主人公なんか

じゃないってことに気付いて絶望してみろよ。どうせ勝てねえんだって、そろそろ認めてみろよ！」

それはとても奇妙なことなのだが、この場で冷静さを欠いているのはピンチが間近に迫っているはずのユーノよりもむしろ絶対的優位に立っているはずの富野の方だった。

彼は思う。彼にとって転生者とは、これまで星の数ほど消し去ってきた存在がそうであったように、ここまで追い詰めれば絶望的な表情を見せるはずだった。原作では存在しない展開。自分だけの特権だと、そう思い込んでいたシンクロモンスター。白黒の枠を持つそのモンスター群を『自分だけが』使いこなせるから、そう信じていて事実そうであったからこそ原作のキャラ相手に無双を続けられる。だからそれを使う自分は彼らにとって数か月、下手をすれば十数年ぶりに出会った対等な条件で戦う相手となる。彼に言わせれば転生者にとってＧＸとは、例えるならばぬるま湯のような世界なのだ。シンクロもエクシーズも転生者以外は存在すら知らないゆえに、計り知れないほどのアドバンテージを持ち続けることができる世界。そんなところにずっと浸かっていれば、どれほどデュエルを続けようと本人の腕が鈍っていくのは必然のはずだった。それに初めて気が付いた彼らの顔が絶望にゆがむのを見ながら叩き潰してやるのは、仕事というよりむしろ自分の楽しみであった。なのに、この男はどうだろう。あの笑い顔に腹が立つ。なんで絶望しないんだ。そんな理不尽な怒りが彼の体を駆け巡り、頭にかぁっと

血がのぼる。二ヤリ、とユーノが悪い笑みを浮かべたのさえ見ていなかった。
「スカーレッド・ノヴァでグングニールに攻撃、バーニング・ソウル！」
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻４８００→氷結界の龍　グングニール　攻２５００（破壊）
ユーノ　ＬＰ２７００→４００
ユーノ　ＬＰ４００　手札：１　モンスター：なし　魔法・罠：１（伏せ）
冨野　ＬＰ１５００　手札：２　モンスター：スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
結論から言えば、ユーノの狙いは富野の頭に血をのぼらせること。早い話、先ほど笑って見せたのは単なるブラフである。そういう意味では狙いどおりにいったのだが、それをするために彼が受けたダメージはさっきとは比べ物にならない。清明は闇のゲームについて『ダメージ量は痛みに比例しない』という法則を見つけた気になっているが、実際にはそれは違うことをユーノは薄々感づいていた。彼の説はこうである。いわく、
『痛みはそれをもたらすカードの質に比例する』
と。わかりやすく例を挙げると、黒炎弾の２４００ダメージとレッドアイズの攻撃による１０００ダメージで感じる痛みは黒炎弾のほうが多いもののそこまで変わるわけ

ではない。だがこれはどちらも同じレッドアイズの攻撃及び必殺技カードによるダメージだったからである。ここでいうカードの質とは、決してレアリティのことではない。使用者の愛着やそのカード自体の持つ力のことである。彼のメインデッキでいうと精霊体になれる霧の王にチャクチャルア、それとシャーク・サッカーあたりの攻撃が闇のゲームでは格別に強いだろうか。

そして、レッド・デーモンズ・ドラゴンの進化体であるスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃は当然進化前よりはるかに熱くて痛い。さっきの痛みとは5階建てビルの屋上と地下の駐車場並みに違う。衝撃に耐えきれなくなった彼の体が吹っ飛んでいき、辛うじて受け身こそとったものの体はもうボロボロの状態である。

「いよっこいせ、っと!」

それでも彼には、負けられない理由がある。言い返したいセリフがある。だから、悲鳴をあげる体のあちこちをきっぱりと無視して立ち上がった。立ち上がっただけでなく、なるべくピンピンしているように聞こえるよう声音を調整して声を張り上げる。

「お前のフィールはその程度か、ってな……あのな富野さんよ、お前は一つ間違ってるぜ。まずここがＧＸである以上、主役は十代に決まってる。ここまでオーケー?だけどな、それとは別に主人公ってのがもしいるとするなら、そいつは俺じゃねえ。死んじまったのに主人公やってられんのはどこぞの不良霊界探偵ぐらいのもんだぜ。俺の役

目はあくまでもサポーター、遊野清明って人間の人生を全力で助けてやることだけだよ。俺がダメになった以上、せめてあいつにはまともに長生きしてほしいんでな。とどのつまりはそういうことさ」

「けっ、口ではなんとでもいえるからな。つまらん屑の言い訳なんて聞いてやるほど暇じゃないぜ！」

「そりゃ残念。今、俺けっこういいこと言ったっぽかったのになー。まあいいさ、俺のターン！手札から魔法カード、サルベージを発動。この効果で、墓地の攻撃力１５００以下のモンスター２体……ペンギン・ナイトメアとブリザード・ファルコンを手札に加えるぜ。モンスターをセットして、ターンエンドだ」

「なら俺のターン！はっ、どうせそのモンスターはペンギン・ナイトメアだろぉ？忌々しいが、確かにスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンといえどもバウンスには弱い。かといって何もしなかったら結局スカーレッドはバウンスされる……なら、こうしてやればいいだけのことよ！魔法カード、クロス・ソウルを発動！」

クロス・ソウル

通常魔法

相手フィールド上のモンスター１体を選択して発動できる。

このターン自分のモンスターをリリースする場合、

自分のモンスター１体の代わりに選択した相手モンスターをリリースしなければならない。
このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。
「この効果で、お前の邪魔なセットモンスターをリリース！そして召喚、パワー・インベーダー！」
小さい頭に不釣り合いな大きさの体を持つ自称インベーダーの悪魔が、太い腕に不釣り合いなほどちっちゃい手で腕を組む。
パワー・インベーダー　攻２２００
「クロソのデメリットで、俺はこのターンバトルフェイズできねえからな。カードを１枚伏せて、ターン終了だ」
ユーノ　ＬＰ４００　手札…２　モンスター…なし　魔法・罠…１（伏せ）
冨野　ＬＰ１５００　手札…１　モンスター…スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン（攻）、パワー・インベーダー（攻）　魔法・罠…２（伏せ）
「俺のターン、ドロー！あ痛つつ……」
カードを引いた瞬間に走る痛み。意志力だけでそれを抑え込み、引いたカードを確認する。
「永続魔法、強欲なカケラを発動。モンスターをセットして、ターンエンドだぜ」

強欲なカケラ
永続魔法
自分のドローフェイズ時に通常のドローをする度に、
このカードに強欲カウンターを１つ置く。
強欲カウンターが２つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、
自分のデッキからカードを２枚ドローする。
それは、先ほどのターンとほぼ同じ動き。ひたすら守りを固めに行く彼の姿を、富田は嘲笑う。
「おいおい、デカい口叩くわりにはずーいぶん消極的なデュエルじゃないか。なら、こっちは攻撃的に生かせてもらうぜ？バトル！パワー・インベーダーで伏せモンスターを攻撃！」
パワー・インベーダー　攻２２００→???　守１８００（破壊）
ソリットビジョンのカードがダメージ計算のため表側になる瞬間、冨野は自分が完全にはめられたことを悟った。そのカードには「ペンギン・ナイトメア」の文字が描かれていたのだ。
「最初のモンスターがファルコン、だからさっきのはブラフ……！だが、まだだ！トラップカード、亜空間物質転送装置を発動！スカーレッドをエンドフェイズまで除外する

！」

亜空間物質転送装置

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、

このターンのエンドフェイズ時までゲームから除外する。

完全に頭に血が上っていた故の、痛恨のミス。だがそれに気付いても諦めず、自分にできる最善の一手を取るあたりは伊達に転生者狩りをしているわけではない、ということだろう。奇妙な形の機械が作動し、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの姿が異次元へと消えていく。

「さくっと退場してもらえりゃ万々歳だったんだが、思ったよりやるじゃねえか！ペンギン・ナイトメアの効果で俺は、パワー・インベーダー……いや、お前が最後に伏せたそのセットカードをバウンスする！」

ユーノがバウンスするカードをギリギリになって変えた理由は、全くの勘だった。彼のデュエリストとしての本能が、あのカードはヤバい、とささやいたのだ。

「ちっ、俺はもう一度このカードをセットして、エンドフェイズ。スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが帰還してターンエンドだ。もっとも、フレア・リゾネーターの効果はリセットされてなかったことになるがな」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　攻３５００→４５００
ユーノ　ＬＰ４００　手札…１　モンスター…なし　魔法・罠：強欲なカケラ、１（伏せ）
冨野　ＬＰ１５００　手札…１　モンスター：スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン（攻）、パワー・インベーダー（攻）魔法・罠…１（伏せ）
「どーでもいいけどお前さん、そのさっきからブレまくりなキャラはどうにかなんないのかね。ドロー、強欲カウンターが一つ乗ってシャクトパスを守備表示で召喚。ターンエンドだぜ」
シャクトパス　守８００
「シャクトパス？しつっこいカード出しやがるぜ。でもな、そんなもんぶっ潰してやる！パワー・インベーダーでシャクトパスに攻撃！」
「シャクトパスの特殊効果！執念深い鮫の呪いを受けてみろ！」
パワー・インベーダーがダダダッと走ってきておもむろにシャクトパスを掴むと、なんとそのタコ足部分をぶちっとまとめてちぎってしまった。痛そうだな、とちょっと顔をゆがめるユーノの前でその胴体から引き離されたタコ足がもぞもぞと動き出し、インベーダーの全身をギリギリと締め付ける。
シャクトパス

効果モンスター
星４／水属性／魚族／攻１６００／守　８００
このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備できる。
この効果によってこのカードを装備したモンスターは
攻撃力が０になり、表示形式を変更できない。
パワー・インベーダー　攻２２００→０
「だからどうしたってんだよ！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンでダイレクトアタック、バーニング・ソウル！」
「まだまだぁ！リバース発動、バブル・ブリンガー！レベル１２のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは攻撃できねえぜ！」
　無数の泡が吹き上がり、炎の塊になって突撃するスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを押しとどめる。攻撃は止めたはずなのにユーノへ炎の余波がまた襲いかかり、服の端が少し焦げてしまう。
「バブル・ブリンガー……レベル４以上のモンスターの直接攻撃を完全に封じるトラップか。しつっこいったらありゃしない……カードをセットしてターンエンドだよ
ターンエンド」

ユーノ　ＬＰ４００　手札：１　モンスター：なし　魔法・罠：強欲なカケラ（１）、バブル・ブリンガー、シャクトパス（パ）
冨野　ＬＰ１５００　手札：０　モンスター：スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン（攻）、パワー・インベーダー（攻・シャ）　魔法・罠：２（伏せ）
とりあえずこのターンを乗り切れたことに対して気づかれないようにほっと息を吐くユーノ。これから反撃だ、と気合を新たに入れなおす。
「俺のターン！強欲カウンターが２つ乗ったカケラを墓地送りにしてもう２枚ドローするぜ」
「ちょっと待て！ドローする前のスタンバイフェイズにトラップカード、闇霊術―欲を発動！パワー・インベーダーをリリースして２枚ドローするが、そのドローフェイズに引いたカードはトラップか？」
闇霊術―欲
通常罠
自分フィールド上の闇属性モンスター１体をリリースして発動できる。
相手は手札から魔法カード１枚を見せてこのカードの効果を無効にできる。
見せなかった場合、自分はデッキからカードを２枚ドローする。
「いや、どっちにしろこれは見せないぜ」

　問いには直接答えず、ちょっと迷うふりをしてから効果を通すユーノ。ここら辺の駆け引きは清明も割と得意であり、間違ってもトラップかどうかを直接言うようなまねはしない。もっとも、相手を惑わすことの演技力にかけてはユーノの方が一枚も二枚も上手なのだが。
「なら、欲の効果でドローする」
「んじゃ改めてメイン1、カケラを墓地に送って俺もドローだ。……よし、やる価値はあるか。貪欲な壺を発動、墓地のハンマー・シャーク、ブリザード・ファルコン、ペンギン・ナイトメア、シャクトパス、オイスターマイスターをデッキに戻してもう2ドローする。そして墓地のフィッシュボーグ―アーチャーの効果発動、手札から水属性の超古深海王シーラカンスを墓地に送ってレベル3のこのカードを召喚。さらに手札からもう1体レベル3モンスター、オイスターマイスターを通常召喚する。そしてレベル3のアーチャーとマイスターでオーバーレイ、2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。七つの海の水中に、回れ発条弾けろ機雷！エクシーズ召喚！稼働しろ、発条機雷ゼンマイン！」
　2体のモンスターが光になって絡み合いながら飛んでいき、宇宙のような場所に吸い込まれていく。そしてその中心から爆発が巻き起こり、外国のお菓子並みに派手な色合いの背中に巨大なゼンマイが付いたモンスターがスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの前

に立ちふさがった。その体は目の前のドラゴンよりはるかにちっぽけだったが、ユーノはこのモンスターが耐え切れることを知っている。知っているからこそ、この場を任せたのだ。

発条機雷ゼンマイン（ぜんまいきらい）

エクシーズ・効果モンスター

ランク３／炎属性／機械族／攻１５００／守２１００

レベル３モンスター×２

フィールド上のこのカードが破壊される場合、

代わりにこのカードのエクシーズ素材を１つ取り除く事ができる。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時に１度、

フィールド上のカード１枚を選択して破壊する。

「ゼンマイン？おいおい、まーた守り固めかよ。こっちはちゃっちゃと終わらせてえってのによ！」

「なんとでも言いやがれ！悪いなゼンマイン、久しぶりの出番がこんな役目で。すまん」

謝るユーノに対し、気にするな、と言いたげに首を振るゼンマイン。もしかすると、このモンスターにも意志があるのかもしれない。ただの偶然と言ってしまえばそれまでだが、なんとなくユーノにはそんな気がした。

「俺はカードを2枚伏せる。これでターンエンドだ！」
　おそらくは、次のターンが正念場。ゼンマインの破壊耐性は優秀だが、それだって時間稼ぎに過ぎない。だが、もし何らかの手段でレッド・デーモンズ・ドラゴンが再び出てくるようなことがあれば自身の攻撃力と効果を合わせてわずか1ターンで突破されてしまう。ユーノは今のターンで、あの手札でできることはすべてやっておいた。あとは、富野の引きにすべてがかかっているのだ。
「俺のターン、ドロー！来たぜ来たぜ、死者蘇生を発動！俺の墓地からレッド・デーモンズ・ドラゴンを蘇生させてやる！」
　レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００
　よりにもよってこの場で富野が引いたカードは、デュエルモンスターズの豊富なカードプールにおいてもにおいても最高峰の蘇生カードである『死者蘇生』。この効果により完全蘇生された悪魔の竜が、再び夜空に吼える。だが、ユーノはあくまでも表情を崩さない。もっとも、富野の方もそんな暇は与えなかったのだが。
「さらに手札の速攻魔法、サイクロンを発動！さっきから鬱陶しかったバブル・ブリンガーはここでお別れだ！」
　このカードにはもう少し残っていて欲しかったな、とちょっと不安になるユーノ。だが、このおかげで伏せカードには手を付けられなかったんだから結果オーライだろう、

と気持ちを切り替える。ユーノはただゼンマインを出して時間を稼ごうとしているのではない。待っているのだ。この伏せカードを使うことのできる状況を。

「レモンで攻撃して素材全部引っぺがして……スカレで破壊。ただ、それだとこのターン中にダメージ通んねーんだよなぁー。だから俺は、こういう手を使ってやるよ！最後の手札、地砕きを発動！このカードは相手の場で一番守備力の高いモンスターを破壊するカード、この効果でゼンマインの素材を一つ取り除いてやるぜ！」

空から巨大な握りこぶしが振り下ろされ、ゼンマインを殴りつける。その一撃に耐えながら、ゼンマインはユーノに対してもう一度頷いて見せる。ユーノもそれに対して覚悟を決めたように頷き返し、口を開いた。

「俺はゼンマインの効果でオーバーレイユニットを……使わねえ！ゼンマインはこれで破壊だ！」

「何!?」

富野にとって、その行動はまったくの想定外。破壊耐性を使わなかったことで、ゼンマインが握りこぶしに押しつぶされて地面にクモの巣状の亀裂が走る。防御が無駄と知り、自分の負けを認め大人しく覚悟を決めたのか。だが、そういうことではない。ユーノはまた笑って見せた。実際、このターンに起きたすべての行動は彼の想定内だったのだ。

「そしてゼンマインが破壊されたことで、このリバースカード、ヘイト・クレバスを発動！堕ちろ、スカーレッド！」
「へ、ヘイト・クレバスだとぉ!?スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは効果破壊されないが……」
「わかってんだろ？『墓地送り』にさせてもらうぜ！」
ヘイト・クレバス
通常罠
自分フィールド上に存在するモンスター１体が
相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、
相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択して墓地へ送り、
その元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。
これが彼の秘策。ゼンマインをさっさと除去してこのターンで決着をつけるためにレッド・デーモンズ・ドラゴンを呼び戻し、さらに除去カードまで使ってくることに賭けた逆転の一手だった。だが、まだデュエルは終わらない。
「まだだぁ！リバースカード、生贄の祭壇を発動！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンをリリースし、攻撃力分のライフを回復する！墓地に送れなけりゃ、クレバスは空撃ち！ダメージは発生しないぜ！」

地面がパックリと割れ、その中に落ちていくスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン。だが完全に地中に呑みこまれる寸前、その姿が光になって富野の中に吸収された。

生贄の祭壇

通常罠

自分フィールド上のモンスター1体を選択して墓地に送る。

このモンスターの元々の攻撃力分のライフポイントを回復する。

富野　ＬＰ１５００→５０００

「嘘だろ!?」

「惜しかったな、転生者！レッド・デーモンズ・ドラゴンで直接攻撃！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→清明（直接攻撃）

「くっそ、リバースカードオープン！メタル・リフレクト・スライム！」

「攻撃だ攻撃！しつこいんだよ、なんでさっさと潰されねえ！」

銀色に輝くスライムが両腕でブレス攻撃を受け流したが、代償としてあまりの高熱のためかその体がどろどろに溶けてしまった。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→メタル・リフレクト・スライム　守３０００

「守備全滅のデモン・メテオでどのみち破壊……でもなんとか耐えきった、か」
「くそ、ターンエンド」
ユーノ　ＬＰ４００　手札…１　モンスター…なし　魔法・罠…なし
冨野　ＬＰ５０００　手札…０　モンスター…レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）
魔法・罠…１（伏せ）
「俺のターン！参ったなこりゃ……まさかクレバスが防がれるとはな。でも、そうこなくっちゃ面白くないぜ！氷弾使いレイスを守備表示で召喚、ターンエンドだ。すまんな、レイス」
氷弾使いレイス　守８００
さっきのゼンマインと違い、このレイスには時間稼ぎとしての意味しかない。ヘイト・クレバスが防がれた以上、何とかして時間を稼ぐしか今の彼にできることはないのだ。もっとも、そんな態度はおくびにも出さないのだが。
「俺のターン、ドロー！くそ、なんでモンスターが来ねえんだよ！リバースカード、紅蓮魔竜の壺を発動！カードを２枚ドロー！」
紅蓮魔竜の壺
通常魔法
自分フィールド上に「レッド・デーモンズ・ドラゴン」が

表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。
このカードを発動する場合、次の相手ターン終了時まで
自分はモンスターを召喚・特殊召喚する事はできない。
ふう、と一息つくユーノ。少なくともこれで、さらにモンスターが出てくることはない。このターンでの敗北は免れたわけだ。
「そしてレッド・デーモンズ・ドラゴンでレイスに攻撃！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」
「アブソリュート・パワーフォースは使わんのか。……熱っ！」
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→氷弾使いレイス　守８００
「レイスはレベル４以上のモンスターとの戦闘では破壊されないけど」
「デモン・メテオ！」
レイスの姿が炎に包まれ、次の瞬間には破壊される。
「カードを3枚伏せてターンエンドだ。いい加減無駄な抵抗ってのはやめろよ畜生！」
ユーノ　ＬＰ４００　手札：１　モンスター：なし　魔法・罠：なし
冨野　ＬＰ５０００　手札：０　モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）
魔法・罠：３（伏せ）

「ドロー！よっしゃ、魔法カード、クロス・ソウル発動！レッド・デーモンズ・ドラゴンをリリースして、氷帝メビウスをアドバンス召喚！」

氷帝メビウス　攻２４００

「さらにメビウスがアドバンス召喚に成功したことで、その特殊効果発動！お前から見て右から2枚の伏せカードを破壊する、フリーズ・バースト！」

「なに、俺のミラフォ2段重ねが!?」

「ミラフォは仕事しねーからなー。クロソのデメリットで俺はバトルフェイズができんから、どうしようもなくターンエンドだ」

「エンドフェイズにカード発動、破滅へのクイック・ドロー！」

破滅へのクイック・ドロー

永続罠

お互いのプレイヤーはドローフェイズ開始時に手札が０枚だった場合、

通常のドローに加えてもう1枚ドローする事ができる。

このカードのコントローラーは自分のターンのエンドフェイズ毎に

７００ライフポイントを払う。

この時にライフポイントが７００未満だった場合、ライフポイントは０になる。

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードがフィールド上から離れた時、

自分は３０００ポイントダメージを受ける。
「そして俺のターンが訪れる。クイック・ドローの効果で２枚ドロー！俺の場にモンスターがいなくて貴様の場にモンスターがいる時、サイバー・ドラゴンは手札から特殊召喚できる！」
サイバー・ドラゴン
効果モンスター
星５／光属性／機械族／攻２１００／守１６００
相手フィールド上にモンスターが存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
このカードは手札から特殊召喚できる。
「そしてアステル・ドローンを通常召喚。アステル・ドローンは特殊効果により、エクシーズ召喚時のみレベル５として扱える！俺はレベル５扱いのドローンとレベル５のサイバー・ドラゴン２体でオーバーレイ！２体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！玩具の意思が一つになる時、新たな時代のネジが巻かれる。エクシーズ召喚、発条装攻ゼンマイオー！」
発条装攻（ぜんまいそうこう）ゼンマイオー
エクシーズ・効果モンスター

ランク５／風属性／機械族／攻２６００／守１９００
レベル５モンスター×２
１ターンに１度、このカードのエクシーズ素材を１つ取り除き、フィールド上にセットされたカード２枚を選択して発動できる。
選択したカードを破壊する。
「ヴォルカじゃないだけマシか……ちっくしょ、メビウスもすまん！ここは堪忍してくれ！」
「そしてアステル・ドローンもう一つの効果により、カードをドローする。ゆけ、ゼンマイオー！メビウスを破壊しろ！」
発条装攻ゼンマイオー　攻２６００→氷帝メビウス　攻２４００（破壊）
ユーノ　ＬＰ４００→２００
「そしてカードを１枚セットし、エンドフェイズにクイック・ドローの効果で７００のライフを払う……ターンエンドだ」
富野　ＬＰ５０００→４３００
ユーノ　ＬＰ２００　手札：０　モンスター：なし　魔法・罠：なし
富野　ＬＰ４３００　手札：０　モンスター：発条装攻ゼンマイオー（攻）　魔法・罠：破滅へのクイック・ドロー、１（伏せ）

「俺のターン！ありがたいことにクイック・ドローの効果は俺も受けられるからな。カードを２枚ドロー！」

ゼンマイオーは高い攻撃力に加え、セットカードならなんでも破壊する能力を持つ。つまり、中途半端な防御策では何かする前に破壊されてしまうのだ。その、かなりギリギリの状況で引いた２枚のカードを見る。ありがたいことにどうやら彼のデッキは、まだ彼を負けさせる気などみじんもないようだ。

「俺は手札の、オイスターマイスターを召喚！カードをセットして、ターンエンド」

オイスターマイスター　守２００

「いい加減にしろっての！クイック・ドローの効果で２ドロー、そしてゼンマイオーの効果！オーバーレイ・ユニットを一つ使うことで、俺の場の伏せカードとお前の伏せカードを破壊する！」

ゼンマイオーの体の周りをぐるぐる飛び回っていた２つの光の球のうち１つがゼンマイオーの胸に吸い込まれ、右腕のドリルとハサミ型のゼンマインにうりふたつの左腕がそれぞれ伏せカードめがけて飛んでいく。だが虚しいことに、その攻撃はどちらのカードにも当たらなかった。

「俺はその効果にチェーンして、ブラック・アローを発動！これでゼンマイオーは貫通能力を得るぜ！」

ブラック・アロー
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
エンドフェイズ時まで、そのモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンし、
守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
選択したモンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、
破壊したモンスターの元々の守備力分のダメージを相手ライフに与える。
「悪いが、俺もゼンマイオーの効果に合わせてカード発動！フィッシャーチャージでオイスターマイスターを弾丸にして、ゼンマイオーを破壊する！んでもって一枚ドロー！」
フィッシャーチャージの発動に合わせてオイスターマイスターがフィールドを爆走してそのままの勢いでゼンマイオーにタックルを仕掛けると、よろめいたゼンマイオーの体にちょうど戻ってきたドリルが突き刺さり、そのままオイスターマイスターを巻き込んで爆発する。そしてユーノの場には、いつも通りちょこんとたたずむ牡蠣が一つ。
フィッシャーチャージ
通常罠

自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースし、
フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。
選択したカードを破壊し、デッキからカードを1枚ドローする。
オイスタートークン　守０
「ぐぐぐ……もう抵抗すんなよ、この腐れ野郎がぁ！手札のクロック・リゾネーターを召喚して、オイスタートークン撃破！」
クロック・リゾネーター
チューナー（効果モンスター）
星３／地属性／悪魔族／攻１２００／守　６００
このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、
このカードは1ターンに1度だけ戦闘またはカードの効果では破壊されない。
クロック・リゾネーター　攻１２００↓オイスタートークン　守０（破壊）
「７００払ってターンエンド……なあ頼むぜ、いつまで俺にいらん手間かけさせるんだよ。さっさとサレンダーして消えちまえ」
富野　ＬＰ４３００↓３６００
ユーノ　ＬＰ２００　手札：１　モンスター：なし　魔法・罠：なし
富野　ＬＰ４３００　手札：１　モンスター：クロック・リゾネーター（攻）魔法・

罠：破滅へのクイック・ドロー
「消えちまえだあ?やなこったバーカ。なぜなら、そのでかい面はこのターンで吹き飛ばしてやるからだ!クイック・ドローの効果は使えないから普通にドロー、死者蘇生を発動!甦れ、シーラカンス!」
　先ほど富野が使いユーノをピンチに陥れた必殺の蘇生カードが、今度はユーノのデッキの核となるモンスターを呼び寄せる。その効果を知っている富野が、体を固くした。
　超古深海王シーラカンス
　効果モンスター
　星７／水属性／魚族／攻２８００／守２２００
　１ターンに１度、手札を１枚捨てて発動できる。
　デッキからレベル４以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。
　この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効化される。
　また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが
　カードの効果の対象になった時、
　このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター１体をリリースする事で
　その効果を無効にし破壊する。
「シーラカンスの効果はわかるよな?海王の咆哮がモンスター３体蘇生なら、こっちは

モンスター４体展開だ！あえて言うなら、さしずめ深海王の咆哮ってところか？来い、竜宮の白タウナギ、ヒゲアンコウ、ハリマンボウ、ゼンマイシャーク！」

「く……そんな……！」

竜宮の白タウナギ　攻１７００
ヒゲアンコウ　攻１５００
ハリマンボウ　攻１５００
ゼンマイシャーク　攻１５００

「いくぜ！レベル４の白タウナギ、ヒゲアンコウ、ゼンマイシャークでオーバーレイ！３体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築。七つの海を噛み砕く、最凶の牙が獲物を喰らう。エクシーズ召喚！やっちまえＮｏ．３２！海咬龍シャーク・ドレイク！」

三体のモンスターが光となって絡まり合い、先ほどのような爆発を起こす。そして魚の尾びれのような形のものが出てきたかと思うと、その姿が変形してこれまた凶悪な面構えのモンスターになった。そしてこのカードを出した瞬間、ユーノの左手の甲に『３２』と読める光が浮かび上がったのだが……当の本人はちょっと見ただけでああやっぱりか、と思うのみだった。地縛神の痣だって出てきたんだから、今更ナンバーズの刻印ごときで驚きはしないのだろう。

「シャーク・ドレイクでクロック・リゾネーターに攻撃！デプス・バイト！」
Ｎｏ．３２　海咬龍シャーク・ドレイク　攻２８００→クロック・リゾネーター　攻１２００（破壊）
富野　ＬＰ３６００→２０００
「ぐあああああっ！」
「シャーク・ドレイクの効果発動！モンスターを戦闘破壊した時、オーバーレイ・ユニットを一つ使ってそのモンスターの攻撃力を１０００下げた状態で特殊召喚！そしてこのターン、もう一度だけ攻撃ができるようになる。いいか富野サンよ、俺も清明も絶対お前らなんかに狩られたりなんてしねえからな！わかったらさっさと帰れ、デプス・バイト２連打！」
クロック・リゾネーター　攻１２００→２００
Ｎｏ．３２　海咬龍シャーク・ドレイク　攻２８００→クロック・リゾネーター　攻２００（破壊）
富野　ＬＰ２０００→０

「はー、終わった終わった……おい富野サンよ、生きてるかー？」

デプス・バイトを受けて吹っ飛ばされたっきりピクリとも動かない富野を見てちょっと心配になってきたらしく、慌てた様子で声をかけるユーノ。幸い意識はあったらしく、ポツリとつぶやくのが聞こえた。

「……んで……だよ……」

「うん？」

「なんでなんだよ……なんで、なんでお前らはそんなに普通に生きてられるんだよ……」

「ふむ、なんか奥深そうな話だな。どれどれ、おにーさんに相談してみ？」

さすがに言わないかな、たダメもとで聞いてみたのだが、富野は返り討ちにあったことがよほどショックなのか、抵抗もせずにすんなり話し出した。自分ももとは転生者だったこと、レッド・デーモンズ・ドラゴンの使い手（シグナー）としてジャックの代わりに５Ｄ☒ｓの世界に生まれたのに、なぜか原作通りに事が進まなかったこと、他のシグナーたちが戦いの中で一人また一人と倒れていくというありえない展開を経てついに世界そのものが滅んでしまったこと。

「おいちょっと待て。さらっととんでもねー爆弾発言してくれちゃったわけだけど、なんでそれが転生者狩りに繋がるんだよ」

「ああ、それは今から話すところだ。俺はその後もしばらく、一人ぼっちで守れなかった世界をうろついてた。そこで、ある男にあったんだ」

「ある男？」
「ああ、シルクハットにマントをつけた男が、いきなり俺の前に出てきたんだ。そりゃあびっくりしたさ、もう人間どころか動物すら何一ついなくて、ビルの残骸とかから缶詰を持ち出しては食うだけの生活だったんだからな。とりあえず新しい缶詰を開けて差し出したんだけど、それを無視して俺に聞いたんだよ。君はこんな結末に納得がいってるかい、ってな。その時言われたセリフは全部覚えてるぜ。君という転生者がいなければ、この世界も原作通りのハッピーエンドで終われたはずだ。ああもちろん、君を責めるつもりはない。ある意味、これは不可抗力のようなものだ。だがもし、君がこの世界に対して責任を感じているなら、君と同じ過ちを繰り返す人を止める仕事を頼まれてくれないか。ってな」
「それが、転生者狩りってわけか。転生者を潰して、原作通りに物事を進ませれば」
「ああ。そうすれば、世界が滅ぶことは絶対にないからな。だから、俺はもうあんなことになった世界を見たくないからずっと戦ってきたってのに……」
　ふー、とユーノは息をついた。どうやら自分が最初に思ってたよりも、話は大きなものらしい。シルクハットにマントの男？転生者狩り？やれやれ、と思いながら、東の空を見る。水平線の向こうから、朝日が昇ってくるのが見えたのだ。朝焼けを少し眺めてからもう一度富野の方を振り返ると、そこにはもう、誰もいなかった。

「んなっ……！おい富野、テメーどこ行きやがった!?」
慌てて叫び、周囲を見回すユーノ。後ろからいつの間にか近づいてきた足音に気が付いて警戒しながら振り返ると、黒いシルクハットに黒いマントといういかにもな格好をした怪しい男が一人。
「お前か、さっき富野が話してた変な奴って？お前らのせいでえらい迷惑だぜ」
ユーノの言葉は、質問ではなく確認。それと文句。並みの人間ならたまらず目をそらすような敵意をぶつけられてなお、怪人の歩みは止まらない。そのままユーノから5メートルほど離れた位置までまっすぐ歩いてきて、無言のまま全身をすっぽり包んでいたマントから手を出してデュエルディスクをセットする。
「……話すつもりはさらさらない、か。いいぜ、どうせ授業受けるのは清明なんだから俺は遅刻の心配もねえ。一試合も二試合も同じことってもんよ」
そう言いつつ、自分もデュエルディスクを構える。その後何が起きたかは、誰も知らない。

ターン２４　青い瞳は何を見る

「ねーってばユーノ、こっち来てお風呂入ろうよー。あったかいよー」
『……』
「どうなんだな、こっち来たのか？」
「ダメ。もう、一体どうしたんだろ」
僕らが今いるのは、校舎のはずれの方にある温泉の建物。正直こんなレジャー施設並みの風呂場を作るぐらいならレッド寮のごはんにつく沢庵をもう一切れぐらい増やしてほしい。とはいえ、楽しいことに変わりはない。朝起きた時からなんかユーノの元気がないから何かあったのかと思って気分晴らしに連れてきたんだけどやっぱりふさぎ込んだままで、お湯に入ろうともせず岩の上に座り込んでぼーっと遠くを見ている。腰にタオル巻いた格好でそんなことして、寒くないんだろうか。正直、絵面がシュールすぎて反応に困るからやめてほしい。
この場の空気を変えようとしてか、それとも単に天然なのか。十代がお湯に潜って翔のタオルをひっぺがし、それを翔がメガネに浮き輪というよくわからない装備でバシャバシャと追いかけるのをのんびり眺めていると、いつの間にか海パン姿の万丈目まで

入ってきてもっとややこしいことになった。でも、ユーノはやっぱり無反応のままだ。なんかもやっとするなあ、よしこうしよう。

「ユーノっ！ちょっとこっち見て！」

『……おう、ってぶあっ!!?』

呼びつけてこっちを向いた瞬間、狙い澄まして水鉄砲を食らわせる。ぶるぶると犬のように頭を振って水を払い、ようやくまともにこちらを向いてくれた。

『……何すんだいきなり』

「ほらほら、そんないつぞやの天田みたいな喋り方になってないでこっち来る。ほらサッカーにチャクチャルさんもなんか言ったげて」

そう言って横を見ると、さっきまで横でぱちゃぱちゃ遊んでいたシャーク・サッカーがふらふらと湯の中のある一点を目指して泳いでいく後ろ姿が見えた。

「あ、あれ？何かあったの？」

なんとなく気になったので追いかけてみる。するといきなり、底に足がつかなくなった。ちょ、ここってどこも水深1メートルぐらいだと思ったんだけど!?そしてものすごい勢いで落ちて行った先には、なんだかずいぶん広い洞窟のような空間になっていた。……どここ。なんか服着てるし。デュエルディスク持ってるし。デッキもちゃんと入ってるし。

「安心しろ、オゾンより下だ」
「なんかもういろいろアバウトだよ！……ってあれ、ユーノいつの間に実体化できるようになったの」

そんな馬鹿話をしているうちに、どさりどさりと十代、翔、隼人、万丈目、おジャマ・イエロー、隼人……じゃない、デス・コアラが落ちてきた。なぜかみんなも服を着た状態で。そして、そんな僕らに声をかけてきた人がいた。
「精霊に導かれしデュエリストとは、貴様達のことか」
最近このパターン多いな、なんで背後ばっかり取られるんだろう、と思いながら慌てて振り返ると、そこにいたのは銀色を基調としたスーツを着て、仮面をかぶって素顔を隠した怪しい男。腕にデュエルディスクのような何かをつけているところからいって、この人もデュエリストみたいだ。えっと、どっかでこの人見たことあるような……。
「カイバーマン様！」
ああそうだ正義の味方カイバーマンだ、ありがとうおジャマ・イエロー。って、そうじゃなくて。
「いったい俺らをこんな所に連れてきて、どういうつもり？待てよ、もしかしてセブンスターズの！」

「ごちゃごちゃ騒ぐな。デュエルをすればすべてわかる、貴様らは常々そうほざいているそうではないか」

……貴様らって、その極論言ってるのは十代だけなんだけどなぁ。僕はいまだにカミューラのこともサイコ・ショッカーのこともわからないしそんなもんわかりたくもないぞ。確かに、わかるようになった人も多いからあながち間違ってはいないんだけどさ。でもまあ、とりあえずデュエルを売られたのだけは理解できた。ならば、とディスクを起動させようとすると、カイバーマンはユーノの方を指差した。

「そこの貴様、何を悩んでいる。ひとつ教えてやろう、負け犬は自力で這い上がらん限り負け犬のままだ。俺は特に興味もないが、貴様らにも何が起きたのか見せてやろう。来い、ミラージュ！」

カイバーマンの声に応えて、さっきまで後ろの方からこっそり僕らの方をうかがっていたモンスターの1体、鏡を抱えたでっかい鳥が器用に飛んできた。

ミラージュ

通常モンスター

星４／光属性／鳥獣族／攻１１００／守１４００

手にする鏡から仲間を呼び出すことのできる鳥のけもの。

ミラージュの鏡の中を覗き込むと、そこには夜が写っていた。夜の森で、ユーノと

……誰だこれ。シルクハットにマントを着たなかなかの怪人がデュエルを始めていた。
とりあえずシルクハットマンと呼ぶことにする。あ、これ音声も入るのね。
『『デュエル!!』』
先攻を取ったのは、シルクハットマン。一体何が起きてるんだろう。
『私は魔法カード、闇の誘惑を発動。カードを２枚ドローし、ネクロフェイスを除外する。そしてネクロフェイスの効果で、お互いデッキトップのカードを５枚除外する』
闇の誘惑
通常魔法（制限カード）
デッキからカードを２枚ドローし、
その後手札の闇属性モンスター１体を選んでゲームから除外する。
手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。
ネクロフェイス
効果モンスター（制限カード）
星４／闇属性／アンデット族／攻１２００／守１８００
このカードが召喚に成功した時、
ゲームから除外されているカード全てをデッキに戻してシャッフルする。
このカードの攻撃力は、この効果でデッキに戻したカードの枚数×１００ポイント

アップする。
　このカードがゲームから除外された時、
　お互いはデッキの上からカードを5枚ゲームから除外する。
『カードを2枚伏せ、ターンエンドだ。さあ、何を恐れている?もっとも、これで私の勝ちは確定したがな』
『くっ……そうだな、俺の予想通りなら確かにお前の勝ちだ』
『その予想は多分正しいよ。えっと、この世界ではユーノ君、だったかな?』
『俺がドローする前に、一つ聞かせろや。なんでお前が最初っからでてこなかった?富野いらねーだろ明らかに』
『彼については少々期待はずれだったよ。と言うより、彼の行動は私にとっても予想外だった。君はまだエクストラデッキを使うつもりはなかったはずだし、それならまだ放っておいても大丈夫だったんだが。今私が出てきたのは、警告のためだ。まずないとは思うが、君のそのカード達はこれからも使わないように。今回はデュエル終了時に君が消滅するようなことはないし、意識が回復したら寮に戻ってもらって構わない。もう一度繰り返すが、これは警告だからな』
　エクストラデッキ?警告?富野って誰?等々疑問点たっぷりの映像がさっきから続いてるけど、画面全体から漂ってくる異様な雰囲気に呑まれて何も言えなかった。た

だ、苦渋の表情でカードをドローするユーノがやたらと印象的だった。
『……ドロー』
『スタンバイフェイスにトラップカードを発動。まずは異次元からの帰還だ。ライフを半分払い、封印されしエクゾディア、封印されし者の右腕、左腕、右足、左足を特殊召喚する』
異次元からの帰還
通常罠（制限カード）
ライフポイントを半分払って発動できる。
ゲームから除外されている自分のモンスターを
可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時にゲームから除外される。
シルクハットマン（仮名）　ＬＰ４０００→２０００
封印されしエクゾディア　攻１０００
封印されし者の右腕　攻２００
封印されし者の左腕　攻２００
封印されし者の右足　攻２００
封印されし者の左足　攻２００

『そして2枚目のカード、撤収命令を発動。怒りの業火、エクゾード・フレイム』

そして画面が真っ白になって、そこで再生は終わった。

撤収命令

通常罠

自分フィールド上に存在するモンスターを全て持ち主の手札に戻す。

「うわあ……」

とりあえずこれが第一感想。普通にワンキルするんじゃなくて相手にカードを一回引かせてから何もさせずに倒すってあたりがまたいやらしい。そりゃこんなもん食らったら誰だって落ち込むよ。そんなことを考えていると、カイバーマンが口を開いた。

「ふん、つまらん勝負だ。こんなつまらん負けをいつまでも引きずっているような男では、俺のこのブルーアイズもがっかりするぞ」

そう言ってデュエルディスクのてっぺんのカードを抜いてこっちに見せつけてくる。
あのカードは！
「青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）！」
「すっげえ、本物は初めてだ！」
僕らの反応を見てから、再びユーノの方にカイバーマンが向き直った。当然のごとくブルーアイズは掲げたままだけど、あんなポーズで腕は疲れないんだろうか。
「さあどうする？俺のブルーアイズをがっかりさせるなよ」
「……わかった。そのデュエル、買おうじゃないか」
そうは言いながらも、まだちょっとためらい気味の態度が心に引っ掛かった。
「デュエル!!」
「先攻は俺だ、ドロー！俺は手札からスター・ブラストを発動、１５００のライフを払って手札のシーラカンスのレベルを7から４に下げる！そしてレベル４のシーラカンスを通常召喚だ」
スター・ブラスト
通常魔法
５００の倍数のライフポイントを払って発動できる。
自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選び、

そのモンスターのレベルをエンドフェイズ時まで、
払ったライフポイント５００ポイントにつき１つ下げる。
ユーノ　ＬＰ４０００→２５００
超古深海王シーラカンス　☆７→４
超古深海王シーラカンス
効果モンスター
星７／水属性／魚族／攻２８００／守２２００
１ターンに１度、手札を１枚捨てて発動できる。
デッキからレベル４以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃宣言できず、効果は無効化される。
また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが
カードの効果の対象になった時、
このカード以外の自分フィールド上の魚族モンスター１体をリリースする事で
その効果を無効にし破壊する。
「その効果発動、魚介王の咆哮。手札一枚捨てて、デッキからヒゲアンコウ、ハリマンボウ２体、オイスターマイスターを特殊召喚！」
「今日も飛ばしてるなぁ」

「ああ、ユーノって引きがいいよな」
「……初手か最初のドローあたりに融合が来ること前提でデッキ組んでるヒーローに言われたくないと思う」
ヒゲアンコウ　守１５００
ハリマンボウ×２　守１００
オイスターマイスター　守２００
「まだ終わらねえぜ、フィールド魔法発動！ウォーターワールドの特殊効果で、俺の場のモンスターは防御を捨てて攻撃力を上げる！」
ウォーターワールド
フィールド魔法
フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、
守備力は４００ポイントダウンする。
超古深海王シーラカンス　攻２８００→３３００　守２２００→１８００
ヒゲアンコウ　守１５００→１１００　攻１５００→２０００
ハリマンボウ×２　守１００→０　攻１５００→２０００
オイスターマイスター　守２００→０　攻１６００→２１００

それにしても、今日のユーノは一体何が狙いなんだろう。確かに、今呼び出してたモンスターたちの守備力はヒゲアンコウ以外お世辞にも高くない。高くないけど、なにもウォーターワールドで０にすることはないんじゃなかろうか。

「ならば俺のターン！俺は手札の、正義の味方カイバーマンを通常召喚！」

「!?」

意気揚々と自分が印刷されたカードをデュエルディスクに置き、カイバーマンを召喚するカイバーマン。いや、カイバーマンのカードをデッキに入れること自体は何もおかしくはないんだけど……なんかこう、分身の術を見てるような感じだ。あ、でも細かいところとかちょっと違うかも。

正義の味方　カイバーマン　攻２００

「そしてカイバーマンの効果発動、このカードをリリースすることであるモンスターを特殊召喚する」

「あるモンスターってまさか」

「ああ、海馬瀬戸の忠実なるしもべ！」

「見るがいい、そして慄くがいい。降臨せよ、青眼の白龍！」

カイバーマン（カード）が光に包まれ、その光の中から巨大な一匹のドラゴンがその姿を見せる。あれがソリットビジョンで見る生のブルーアイズ……すっごい、初めて見

た！

青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）

通常モンスター

星８／光属性／ドラゴン族／攻３０００／守２５００

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。

どんな相手でも粉砕する、その破壊力は計り知れない。

ブルーアイズは守備力２５００……あ、そうか。ユーノがウォーターワールドを張ったのは展開したモンスターをどうこうするためじゃなくて、シーラカンスの攻撃力を３０００以上にしてブルーアイズを攻撃表示で出させないためだったのか。

「攻撃力３３００のシーラカンスで攻撃を防ぐつもりか？甘いな、手札から魔法カード、滅びの爆裂疾風弾を発動！このターンブルーアイズの攻撃を放棄することで、貴様の場のモンスターを全て破壊する！」

強烈な光が弾けて、思わず目を閉じてしまう。光が収まって目を開けた時には、ユーノの場に残っているのは小さな牡蠣が一つだけだった。

「オイスターマイスターの効果によって、このカードが戦闘以外で場から墓地に行ったからオイスタートークンを特殊召喚するぜ。さらに2体のハリマンボウの効果で、ブルーアイズの攻撃力は合計１０００ポイントダウンする」

オイスタートークン　守０　攻０→５００
青眼の白龍　攻３０００→２５００→２０００
「ふぅん、少しは考えているようだな。いいだろう、カードを１枚伏せてターンエンドだ」
ユーノ　ＬＰ２５００　手札：2　モンスター：オイスタートークン（守）　魔法・罠：なし
カイバーマン　ＬＰ４０００　手札：2　モンスター：青眼の白龍（守）　魔法・罠：1
「俺のターン、ドロー。オイスタートークンをリリースして、水属性のジョーズマンをアドバンス召喚だ」
「その召喚にトラップ発動、クローン複製！俺の場に貴様のジョーズマンの複製を呼び出してやる」
クローン複製
通常罠
相手がモンスターの召喚・反転召喚に成功した時に発動する事ができる。
フィールド上に表側表示で存在するそのモンスターの
元々の種族・属性・レベル・攻撃力・守備力を持つ

「クローントークン」１体を自分フィールド上に特殊召喚する。
そのモンスターが破壊され墓地へ送られた時、このトークンを破壊する。
ジョーズマン　攻２６００→３１００　守１６００→１２００
クローントークン　攻２６００→３１００　守１６００→１２００
「マジか……でも、ジョーズマンでブルーアイズに攻撃する！」
ジョーズマンが大きな右腕を叩きつけながらそこについている口でブルーアイズの体を噛みちぎった。そして相変わらずの謎爆発が起きたけど、もうツッコんだら負けな気がする。
ジョーズマン　攻３１００→青眼の白龍　守２５００（破壊）
「ほう、俺のブルーアイズを倒したか」
「……カードを２枚伏せる」
「ならば俺のターン！手札のマンジュ・ゴッドを召喚！このカードは召喚時にデッキの儀式魔法または儀式モンスター１枚をサーチできる。俺はこの効果により、白竜降臨を手札に加えるぞ。そして儀式魔法、白龍降臨を発動！場のマンジュ・ゴッドをリリースし、白竜の聖騎士を儀式召喚して効果発動！このカードをリリースし、デッキから２体目のブルーアイズを特殊召喚する！」
マンジュ・ゴッド　攻１４００

白竜の聖騎士（ナイト・オブ・ホワイトドラゴン）
儀式・効果モンスター
星４／光属性／ドラゴン族／攻１９００／守１２００
「白竜降臨」により降臨。
フィールドか手札から、レベルが４以上になるよう
カードを生け贄に捧げなければならない。
このカードが裏側守備表示のモンスターを攻撃した場合、
ダメージ計算を行わず裏側守備表示のままそのモンスターを破壊する。
また、このカードを生け贄に捧げる事で手札またはデッキから
「青眼の白龍」１体を特殊召喚する事ができる。
（そのターン「青眼の白龍」は攻撃できない。）
青眼の白龍　攻３０００
「何とか倒したってのにもう2体目か……わかってるとはいえ冗談キツイな」
「なんだその弱気な態度は！貴様もその辺に転がっていた、ポンコツデュエリストと同じなのか。ブルーアイズをがっかりさせるな！だがせめてもの情けだ、この勝負のとどめはブルーアイズの手でさしてやる。まずはクローントークンでジョーズマンに攻撃！」

このままジョーズマン同士が相打ちになったら、がら空きになったところにブルーアイズの攻撃を受けてそのままユーノが負けてしまうだろう。残る可能性はあの伏せカードしかない。しかないんだけど、ユーノの顔を見た瞬間に思った。あ、これ駄目ですわ。もしかして、いつもユーノが見るに見かねて交代してくるときの自分もこんなみじめったらしい、負けムード出しまくりでやる気も何もあったもんじゃない顔だったんだろうか。そう思ったらなんか我慢できなくなって、自然と口が動いていた。

「ユーノ！」

いきなり僕が叫んだせいで、その場にいる全員がこっちを見てきた。ちょっと気まずいけど、言い出した以上後に引くわけにはいかんのだよ。

「カイバーマンの言うとおりだよ、なんでこんなつまんない負けかたいつまでも引っ張ってうじうじしてんのさ。負けることなんてしょっちゅうだって笑ってたのはユーノじゃない、次行くぞ次っていつも言ってるじゃない！なのになんで、なんでそのユーノが一回負けただけでこんなに落ち込んでるんだよ！僕にとってユーノは、他の誰よりも大きい一番の目標なんだ……僕と同じデッキを使ってるのに、毎回僕じゃ思いつかなかった逆転の一手を言い当ててくれる、そんな僕よりはるかに上にいる、いつか僕が必ずたどり着いてみせる場所にいるデュエリストなんだ！だから、そんな弱気にならないでよ！一回や二回負けたぐらいでそんな顔されたら、僕は……僕はこれから、一

体どうすればいいのさ！」

最初は煮え切らないユーノに喝を入れるだけのつもりだったのに言いながらだんだん感傷的な気分になってきて、最後ではボロボロと涙をこぼしながら喋っていた。皆がポカンとしてるのが見えたけど、そんなことに構ってるだけの余裕がない。

「ねえユーノ、いい加減元に戻ってまたいつもみたいに楽しくデュエルしようよ。いつもの自信満々で凄く強いユーノになってさ。そしたら、僕が今度こそ勝って見せるから。昨日も一昨日も3日前もその前もまたその前も勝てなかったけど、今日こそ負けないからさ！」

「貴様の歩んできたデュエル道など、まだ入り口だ。世界には、まだ未知のデュエルがある。見えるはずだ、果てしなく続く戦いのロードが。なのに、貴様はここで立ち止まるのか！」

「そう、だな」

僕とカイバーマンの激励を受けて、ゆっくりと口を開くユーノ。これでまだくだらないこと言うようなら、一発ぶん殴ってでも目を覚まさせてやる。そう思って密かに拳を固めたのを知ってか知らずか、苦笑して頭をかいた。

「悪い、なんかずいぶん心配かけたみたいだな。……だいぶマシな気分になったぜ、清明。カイバーマン、俺はまだ立ち止まんないぜ！トラップ発動、安全地帯！この効果で

ジョーズマンは破壊されなくなる！」
安全地帯
永続罠
フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターは相手の効果の対象にならず、
戦闘及び相手の効果では破壊されない。
また、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。
クローントークン　攻３１００（破壊）↓ジョーズマン　攻３１００
そうだよ、僕が憧れて追いかけてるユーのはやっぱりこうじゃなくっちゃ。下見てるところなんてこっちが見たくない。
「ふぅん、やっとその気になったか。まあ３０点、と言ったところだな」
「よくわからんがそのテストは３０点満点なんだろ？なら満点だ、問題ないぜ」
「減らず口を、俺はターンエンドだ。さあ、恐れずにかかって来い！」
ユーノ　ＬＰ２５００　手札：０　モンスター：ジョーズマン（攻・安）魔法・罠：安全地帯（ジョ）、１（伏せ）

カイバーマン　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：青眼の白龍（攻）　魔法・罠：なし
場：ウォーターワールド
「俺のターン、ドロー！ジョーズマンでブルーアイズに攻撃！」
ジョーズマン　攻３１００→青眼の白龍　攻３０００（破壊）
カイバーマン　ＬＰ４０００→３９００
「やった、ついにカイバーマンのライフを削った！」
やっぱりやればできるじゃないかユーノ。頑張れー！
「俺はこれで、ターンエンドだ！」
「ドロー！闇・道化師のペーテンを守備表示で召喚してターンエンドだ」
闇・道化師のペーテン　守１２００
ユーノ　ＬＰ２５００　手札：１　モンスター：ジョーズマン（攻・安）　魔法・罠：安全地帯（ジョ）、１（伏せ）
カイバーマン　ＬＰ３９００　手札：１　モンスター：闇・道化師のペーテン（守）　魔法・罠：なし
場：ウォーターワールド
「俺のターン、ドロー！んー……攻撃するうまみはない、か。カードをセットしてター

ンエンドだ」
　一瞬悩む様子を見せたが、なぜか攻撃をせずにターンを終了したユーノ。へんなの、僕ならとりあえず攻撃したのに。
「だからお前はそこ止まりのデュエリストなんだ」
「万丈目、それどーゆー意味？」
「闇・道化師のペーテンは墓地に送られた時、その手段を問わず自分を除外することでデッキまたは手札から同名モンスターを特殊召喚できる効果を持っている。リミッター・ブレイクがスピード・ウォリアーを特殊召喚するのと似たようなものだ。恐らく、後続を呼ばれてデッキが圧縮されることを嫌ったんだろう」
　うーん、なるほどねえ。やみくもに突っ込んでくだけじゃダメダメだってことか。
「俺のターン、ドロー！何もせずこれでターンエンドだ」
　……怪しいなあ。まあ、僕が心配してもしょうがないんだけど。
　ユーノ　ＬＰ２５００　手札：１　モンスター：ジョーズマン（攻・安）魔法・罠：安全地帯（ジョ）、１（伏せ）
　カイバーマン　ＬＰ３９００　手札：２　モンスター：闇・道化師のペーテン（守）魔法・罠：なし
　場：ウォーターワールド

「俺のターン！そろそろサイクロンが怖くなってきたから、ジョーズマンにゃ悪いがここで選手交代だ。マジックカード、浮上を発動！このカードは、俺の墓地からレベル３以下の水・魚・海竜族モンスター１体を表側守備表示で復活させる！俺が呼ぶのはオイスターマイスター！」

オイスターマイスター　守２００→０　攻１６００→２１００

「ふぅん、そんな壁にもならん雑魚モンスターを呼んだところでどうする気だ？」

「慌てなさんなって。俺はジョーズマンとオイスターマイスターをリリースして、このカードをアドバンス召喚だ！来い、俺のブルーアイス……青氷の白夜龍！それとオイスタートークン！」

青氷の白夜龍（ブルーアイス・ホワイトナイツドラゴン）　攻３０００→３５００　守２５００→２１００

オイスタートークン　守０　攻０→５００

「ほう、ブルーアイズの偽物か。いいだろう、俺の本物のブルーアイズの力で葬り去ってくれる」

「偽物？そりゃ心外だな、大事な切り札の一つに対して。とはいえ攻撃はしたくないな、カードを伏せてターンエンドにする」

「ドロー！貪欲で無欲な壺を発動、墓地のドラゴン族、白竜の聖騎士に天使族のマンジュ・ゴッド、戦士族であるこの俺自身、正義の味方　カイバーマンをデッキに戻して

２枚ドローをする！」
貪欲で無欲な壺
通常魔法
メインフェイズ１の開始時に自分の墓地から
異なる種族のモンスター３体を選択して発動できる。
選択したモンスター３体をデッキに加えてシャッフルする。
その後、デッキからカードを２枚ドローする。
このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。
「まだ終わらんぞ！手札からマジックカード、黙する死者を発動！俺の墓地のブルーアイズを特殊召喚する！」
黙する死者
通常魔法
自分の墓地に存在する通常モンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは
フィールド上に表側表示で存在する限り攻撃する事ができない。
青眼の白龍　守２５００

「さらにもう一枚！墓地に眠るブルーアイズを特殊召喚！」

青眼の白龍　守２５００

「魔法カード、融合を発動！３体のブルーアイズを融合することで、青眼の究極竜を召喚する！」

青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）

融合モンスター

星１２／光属性／ドラゴン族／攻４５００／守３８００

「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」

「貪欲で無欲な壺のデメリットにより、俺はバトルフェイズを行うことができない……カードをセットしてターンエンドだ」

ユーノ　ＬＰ２５００　手札：１　モンスター：青氷の白夜龍（攻）、オイスタートークン（守）魔法・罠：２（伏せ）

カイバーマン　ＬＰ３９００　手札：０　モンスター：青眼の究極竜（攻）、闇・道化師のペーテン（守）魔法・罠：１（伏せ）

場：ウォーターワールド

ユーノの状況はかなりマズイ。白夜龍は僕らのデッキで最高打点のモンスターだけど、それでも攻撃力はウォーターワールド込みで３５００……４５００のブルーアイ

ズの前にはひとたまりもない。このターンで何かしないと、ジリ貧になるのは目に見えてる。
「俺のターン、ドロー！カードをセットしてターンエンドだ！」
「ならば俺のターン！」
「この瞬間、たった今伏せた俺のカードを発動！フィッシャーチャージの効果でオイスタートークンをリリースして、ブルーアイズを破壊！」
フィッシャーチャージ
通常罠
自分フィールド上の魚族モンスター１体をリリースし、
フィールド上のカード１枚を選択して発動できる。
選択したカードを破壊し、デッキからカードを１枚ドローする。
「甘いぞ！リバースカードオープン、神の宣告！ライフポイントを半分払うことで、そのカードの発動を無効にする！」
「!?融合解除じゃない、だと？」
ごろんと転がっていた牡蠣が弾丸のような勢いでブルーアイズに向かって突進していったが、その固い殻がドラゴンに命中する前にどこからともなくやって来た白髪のおじいさんのチョップを受けて爆ぜた。神様すげえ。

カイバーマン　ＬＰ３９００→１９５０
「どうした、これで終わりか？魔法カード、カップ・オブ・エースを発動！コイントスを一度行い表が出れば俺が、裏が出れば貴様がカードを２枚ドローする。……表！さらに俺は手札から装備魔法、巨大化を発動！俺のライフポイントが貴様を下回っていることで、ブルーアイズの攻撃力は倍となる！攻撃だ、アルティメット・バースト！」
青眼の究極竜　攻４５００→９０００
「融合解除は絶対手札にあると思ってたんだけどな。っーか強欲な壺の代用品２枚目か。ええい、ポセイドン・ウェーブ発動、その攻撃を無効にする！俺のブルーアイスはドラゴン族だからダメージは通らないが、それでも攻撃を防ぐことはできるぜ！」
ただでさえ大きいのにさらに体のサイズが倍になった三つ首の竜がそれぞれの口から一斉に放った三本のブレスが一つに混ざり合って青氷の白夜龍を飲み込もうとする寸前巨大な波が巻き起こり、分厚い水の壁が白夜龍を守ってくれた。なんとか首の皮一枚で繋がった、ってトコかな？なにしろ攻撃力９０００なんだ、一撃でも喰らったらオーバーキル間違いなしだ。
「なかなか粘るな。俺はターンエンドだ」
ユーノ　ＬＰ２５００　手札：ｉ　モンスター：青氷の白夜龍（攻）　魔法・罠：ｉ（伏せ）

カイバーマン　ＬＰ１９５０　手札：１　モンスター：青眼の究極竜（攻・巨）、闇・道化師のペーテン（守）魔法・罠：巨大化（青）
場：ウォーターワールド
「さあて、そろそろジリ貧が近づいてきましたかね、っと……ドロー！伏せてあったサルベージを発動、攻撃力１５００以下の水属性２体を墓地から手札に加える！さらに強欲なウツボを発動、手札の水属性２体をデッキに戻してカードを３枚ドロー！俺が戻すのは当然、さっき回収したハリマンボウとヒゲアンコウだ！」
サルベージからの強欲なウツボ……僕のデッキにある、一番カードを引ける枚数が多いドローコンボだ。サルベージで回収したモンスターを使ってウツボを発動すれば、コスト１枚で３枚のカードが引ける計算になる。いいぞ、３枚も引けばまだ何かできるかもしれない！
「カードを２枚セット。ターンエンドだ……！」
あれ？
「俺のターン、ドロー！ブルーアイズで攻撃、アルティメット・バースト！」
「待ちな、メインフェイズにトラップ発動！リビングデッドの呼び声で、墓地の超古深海王シーラカンスを特殊召喚！そして俺の場にモンスターが特殊召喚されたことで、ディメンション・スライドは発動できる！」

超古深海王シーラカンス　攻２８００
ディメンション・スライド
通常罠
自分フィールド上にモンスターが特殊召喚された時に発動できる。
相手フィールド上に表側表示で存在する
モンスター1体を選択してゲームから除外する。
その特殊召喚がエクシーズ召喚だった場合、
このカードはセットしたターンに発動できる。
一時はどうなるかと思ったけど流石はユーノだ、ちゃんとあの大型モンスターを攻略する方法を考えていたなんて。これでカイバーマンの場にはテーペン一体がいるだけ……ってあれれ？なんか増えてませんかドラゴンさん。
青眼の白龍×３　攻３０００
「手札から速攻魔法、融合解除を発動した！これにより対象を失ったディメンジョン・スライドは空振りとなり、俺の場には3体のブルーアイズが残される！」
「融合解除、たった今引いたのか……！でも、それなら俺のブルーアイスの方が攻撃力は上だぜ！」
「わめくな！魔法カードサイコロンを発動、サイコロを一回振る！……出た目は5、リ

ビングデッドとウォーターワールドを破壊だ！ブルーアイズの偽物は、本物の手で葬ってくれるわ！」

サイコロン

速攻魔法

サイコロを1回振る。

2～4の目が出た場合、フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する。

5の目が出た場合、フィールド上の魔法・罠カード2枚を破壊する。

1または6の目が出た場合、自分は１０００ポイントダメージを受ける。

多分さっきのカップ・オブ・エースの時に引き当てたのであろうサイコロンが、周りの荒波を吹き飛ばしてフィールドをがらんとさせる。リビングデッドも破壊されたことでシーラカンスも再び倒れてしまい、場に残っているのは3対1で向かい合うドラゴンとしぶとく生き残っているペーテン一人になった。ペーテンの浮きっぷりがハンパないけど、さすが道化師というべきなんだろうか。

青氷の白夜龍　攻３５００→３０００　守２１００→２５００

「許せ、ブルーアイズ。だが、本物の力を見せてやれ！ブルーアイズで攻撃、滅びのバーストストリーム！」

「攻撃時に速攻魔法、収縮を発動。対象はもちろんブルーアイズだ！迎え撃ってやれ、孤

高の冬色氷輪弾（ウィンターストリーム）!!」

収縮

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズ時まで半分になる。

青眼の白龍　攻３０００→１５００（破壊）→青氷の白夜龍　攻３０００

カイバーマン　ＬＰ１９５０→４５０

２体のドラゴンが真っ向からブレスを打ち合って、例のごとく爆発が巻き起こる。その砂煙の中から無傷で姿を見せた白夜龍に対し舌打ちをして、カイバーマンは連撃を仕掛ける。これで伏せカードも何も打ち止めなのに、ユーノはなんだか楽しそうだった。

「許せとは言わん。恨むなら俺を恨め、ブルーアイズ。もう一度攻撃だ、滅びのバーストストリーム！」

２体のドラゴンが弧を描くようにぐるぐると回りながら上昇していき、同時に放ったブレス攻撃が互いの体をとらえて両方とも灰になった。これでユーノの場はすっからかん、だけどカイバーマンの場にはまだ攻撃宣言をしていないブルーアイズ……と、ペーテン。まあペーテン守備表示だけど。

青眼の白龍　攻３０００（破壊）→青氷の白夜龍　攻３０００（破壊）

「どーやら、これまでみたいだな。なあカイバーマンさんよ、またいつか、一手指南してもらえるか？」
「ふっ、考えておいてやろう。ブルーアイズでダイレクトアタック、滅びのバーストストリーム！」
青眼の白龍　攻３０００→ユーノ（直接攻撃）
ユーノ　ＬＰ２５００→０

「じゃあカイバーマンさん、うちの馬鹿に喝を入れるのを手伝ってもらってありがとうございました」
「礼には及ばん。俺のブルーアイズを一度のデュエルであれほど破壊したデュエリストは初めてだ」
あはは。ユーノ、ジョーズマン２回白夜龍２回の計４回も破壊してたからなぁ。
「なあカイバーマン、今度は俺ともデュエルしてくれよ！」
十代がすっごいキラキラした目で頼み込んでたけど、さっきユーノが言われたのと同じく『考えてやろう』の一言で終わりになった。
「ところで、僕らはどうやって帰れば？」

「この世界はお前たちの世界とつながっている。目を閉じて強く念じてみろ」
　言われた通りに皆で目を閉じる。えーと、帰りたい帰りたい帰りたい……っと。ふわっと体が宙に浮き、上に向かって引っ張られるような感覚を感じる。最後に一言だけ、カイバーマンの声が聞こえた。
「いいか貴様ら、己がデュエルを、己がデッキを信じて進め！そこに記したロード、それがお前の未来となるのだ！」

「もごもごもご……ぷはーっ！あ、危なっ！今溺れるとこだったよ絶対！」
『気をつけろアホ。そんなしょーもない理由で死にやがったらわざわざ生き返らせてくれたチャクチャルアに申し訳がたたんだろうが』
『全く、少しは自分の身もことも心配してほしい』
「あれ、チャクチャルさんいたの？」
『……そう言われるだろうとは思っていたが、私は最初からいた。体が大きいから出てこれなかっただけだ』
　いつの間にかすり寄ってきてたシャーク・サッカーの頭をなでながらまだやいのやいのと言ってるチャクチャルさんとユーノの声を聞き流していると、訳もなく笑えてき

た。ふふ、十代達も復活したみたいだしそろそろ帰ろうか。ユーノも元気になったみたいだし、今日の目的は十分果たせた。

ターン25　捨てられたモノと見捨てられた者

「狭い、狭い、狭すぎる！この寮は何をやるにも狭ーい！」
「うるさーい！」
　のんびり昼寝していたとある日の昼下がり、いきなり隣の部屋で万丈目がわめく声が聞こえた。とりあえず安眠妨害の罰としてドア一枚開けて万丈目の部屋に入り込み、そのまま蹴りの一つでも喰らわせようとして……何か部屋そのものに違和感を感じた。おかしいな、僕や十代の部屋も狭いっちゃその通りだけど、床が見えなくなるほどひどくはなかったはず。というかなんだこれ。……ふむ。
「おお、フカフカだ」
「あ、こら！人のベッドで勝手に飛び跳ねるな！」
　そこにおいてあったのは、どう見てもダブルサイズはある馬鹿でっかいベッドと部屋の端から端までいきわたるほど大きなソファー。ふと玄関を見ると、このバカデカグッズを運び込むためか扉が取り外されていた。でもこれ、扉を外しただけで通るようなサイズとは思えないんだけど。わざわざバラしてから入れたんだろうか。言えば手伝ってあげるのに、まったく意固地というかなんというか。と、そこに騒ぎを聞きつけたの

か十代と翔がやって来た。
「おーい万丈目！お、なんか楽しそうだな！俺もやるぜ、それっ！」
「あ、僕にもスペース分けてくださいよアニキ～」
「おい十代、どうせ言ったところで止めないのはわかっているからせめて靴を脱げ！」
ベッドでポンポンと飛び跳ねる僕がそんなに楽しそうに見えたのか、すぐに二人とも真似して飛び跳ねる。うわ、ちょ、いくらでっかいベッドでも４人は狭いって！
「そんな無理に入ってきたら……うわああっ!?」
無理矢理入ってきたせいでバランスが崩れ、３人そろってベッドから転がり落ちる。なぜか僕が一番下になったせいで２人分の体重がダイレクトにきて痛い。
「十代、一体何しに来たのさ……」
「そうそう、忘れるとこだった。万丈目、校長先生が呼んでるぜ。大事な話があるんだってよ」
「はあ？」
はて、なんだろう。まさか万丈目がこんなでっかいベッド運んだせいで壁ぶち抜いたことが今度こそばれたかな？……とりあえずついてこう！下手に逃げると後でどーなるか分かったもんじゃない！

「……で、万丈目グループが来るわけかぁ」
『そーだな』
ありがたいことにって素直に喜んでいいのかどうかわからないけど、とりあえずまだ改築の件はばれてないようでよかったよかった。いやよくないけど。なんでも、この学校を『財界、政界、そしてカードゲーム界』が合言葉の万丈目グループが買収しようとしているらしい。このあいだ十代が万丈目に勝ったのがよっぽど悔しかったんだろうか。当然鮫島校長は抵抗。そこにこの学校のオーナーからの鶴の一声がかかり、万丈目グループ側が出した『お互いに代表者を選びデュエル、ただしアカデミア側は万丈目準を出してデッキのモンスターはすべて攻撃力５００以下』という言ってて情けなくなってこないのが不思議でしょうがないぐらいの条件を快諾。まあ、それだけこの学校のことを評価してるってことなんだろう。というか、そうとでも思わないとやってられん。
「でもさ、万丈目」
「なんだ」
「……正直に答えて。攻撃力５００以下のモンスター、何枚持ってる？」
「……２枚」
わお。ＶＷＸＹＺといいアームド・ドラゴンといいどうもパワーデッキばっかりだか

ら嫌な予感はしてたんだけど、まさか2枚ですか。
「ち、ちなみに何と何？」
「貴様とのデュエルで使ったミンゲイドラゴンと、何回抜いても勝手にデッキに入ってくるこの雑魚だけだな」
『もー、そんなにオイラのことを雑魚雑魚言わないでよ～。確かにオイラは攻撃力０だけど、オイラの兄弟と力を合わせればきっと強くなれるから、だからお願い万丈目のアニキ、オイラの兄弟を探してよぅ』
「おいーっす、おジャマ・イエロー」
『あらこんにちわ。ねえ清明のアニキにシャーク・サッカーの旦那も、オイラの兄弟のこと何か知らない？』
　そう言ってこっちにすり寄ってくるおジャマ・イエロー。だけど、この会話ももう８回目ぐらいなんだよなあ。万丈目がいつまでたっても探し出さないから見てらんなくなって結構いろいろと探してはいるんだけど、なにせ情報が少なすぎるんだよね。
「万丈目君、お困りかニャー？」
「大徳寺先生？」
　そこに声をかけてきたのが、我らが大徳寺先生。この人、いつも突然何の脈絡もなく出てくるんだもんなあ。

「いい話を教えてあげるのニャ。実は、この学校の裏に……」

「ねえ万丈目、その井戸ってどこにあるんだろうね」

さっきから３０分は歩いているのに、いつまでたっても森しか見えない。つくづく学校１つ立ってるだけにしちゃ広い敷地だよなあ、この学校。島一つ分あるんだから当たり前か。

「知らん！というかなぜお前たちがついてくるんだ！」

『説明しよう！俺らはついさっき、大徳寺先生からこの学校の涸れ井戸に弱小カードを捨てた馬鹿が何人もいる、という情報を手に入れた。万丈目は今、その場所を最後の可能性として歩いているのだ！そして俺らは、そこにさも当然のような顔をして面白そうなのでついていくのであった！』

「……ユーノ、誰と喋ってんのそんなハイテンションで」

「あ、私はもしワイトとかチュウボーンとかのカードが落ちてたら回収しようかと思って、だってさ」

「相変わらずこっちはこっちで全然ぶれないのね。だがそれがいい……おっと、なんでもないよ」

『お前もお前で最近変態度が入学当初に比べて増してきたな。まあ寮に男しかいないんだからそんなもんなのかもしれんが』

暇なときはひたすら途切れないように会話をつなげる。いつの間にか確立していた僕らの暇つぶしの黄金パターンです。お、なんか浮いてる。

『浮いてるな』

「飛んでますな」

そこにいたのは、白くて半透明でふわふわ飛び回ってて、といかにもと言った感じの幽霊、のような何か。でも、特に緊張はない。何かあるならとっくの昔に霧の王やチャクチャルさんが黙ってないだろうし、特に害はないんだろう。多分。あ、気づかれた。

「突っ込んできた!?うわ、や～ら～れ～た～……ってアレ?」

なんとこの幽霊、よほどしつけがなってないのかいきなり突っ込んできた。反射的にギュッと目をつぶって痛みに耐えようとしたけど、いつまでたっても痛くない。体を通り抜けた時にちょっとひんやりした感じがしたけど、ただそれだけ。

「痛みはない、な。恐らく、こいつらは攻撃力０のカードの亡霊なんだろう。目的地は近そうだ」

隣を見ると、万丈目も同じような幽霊にたかられてた。うーん、成仏させてあげたほうがいいんだろうか。まあでもやり方もわからないし、とりあえず放っておいて夏場に

暑くてたまらなくなったら体を通り抜けてもらおう。きっと涼しくなる。
「さっきから、いったい何が見えてるの？だってさ」
精霊が見えないせいでいまひとつ状況が呑み込めてないらしい夢想にたいして肩をすくめて見せ、僕たちはもう少し歩いてみることにした。
……そこから道を間違えて３０分ほど無駄に歩き回り、結局井戸が見つかったのはこの地点から徒歩１分の場所だったのは密に、密に。
「む、辛気臭い井戸だな」
「まあまあ。よし、降りるぞー！」
「おー！」
万一水がたまってたらえらい事になるので、わざわざ持ってきた懐中電灯で照らしてみる。あ、カードがあっちにもこっちにも落ちてる。やっぱり本当のネタだったんだ、カードを捨てる井戸。正直なところ、本当にカードを捨てる人がいるなんてまだ半信半疑だったんだよね。
そして三人とも降りて、とりあえず足元のカードを物色する。あ、これ攻撃力６００あるや。もったいないから回収はするけど。そうやって拾い集めていくと、なにやら隅のほうで動く気配がした。
「ん？」

あれから一日。万丈目兄と万丈目の学園を賭けたデュエルとあって、全校生徒のほとんどが早いうちから詰めかけてきていた。ちょっと万丈目に用があったせいで場所取りに遅れちゃったけど、立見席でいいから空いてる場所があるだろうか。

「お、清明。こっちだこっち！」

「ほら、こっちっスよ！三沢君が僕たちの分の席も確保しておいてくれたんだ！」

ラッキー。やっぱ、持つべきものは友達だね。感謝しながら席に着くと、十代に三沢に翔に隼人に夢想と、ブルー生特別席に座っている明日香とカイザーを除くいつものメンバーが揃っていた。昨日はあれだけ落ちてたカードの中にワイトが一枚もなくて結構へこんでた夢想も、もうすっかり元気そうだ。

「ってあれ？夢想、あっちの席じゃなくていいの？僕が言うのもなんだけど男ばっかだよここ」

『ホントにお前が言うのもなんだな。というか空気読んでさっさと爆発しろ』

「……ん。いいの、だってさ」

「そ」

やった嬉しい。普段は寮が違うからどうしてもレッドの皆より会う頻度は低くなっ

ちゃうから、こういうチャンスは無駄にしないようにしないと。……まあどうせ僕のことだから座ってるだけしかできないだろうけどな！

『ヘタレ。ムッツリスケベ』

るっさいわ。

「お、始まるみたいだぜ！」

十代の言葉通り、ゆっくりとデュエル場の両脇の入場口からそれぞれ万丈目兄弟上から二人と我らがサンダーのほうの万丈目が出てきた。やったれー、万丈目ーっ！

「兄さん、デュエルの前に一つだけ言わせてもらう。兄さんは俺にハンデとして、デッキのモンスターを全て攻撃力５００以下のものにするよう言ったな」

「ああ、言ったとも。それがどうした？今更条件を変えろとでも？」

落ち着いた雰囲気の万丈目にいらだちを感じたのか、どこかムキになったように突っかかる万丈目兄……えーと、正司のほうだったっけ。

『長作の方だぞ』

あ、ごめん万丈目兄。間違えた長作だった。

「フッ、まさか。俺が言いたいのは、俺が組んだこのデッキのモンスターの攻撃力はすべて０だということだ！」

「何!?貴様、私のことを馬鹿にしているのか！もういい、始めるぞ！」

「「デュエル！」」

「先攻は私だ、ドロー！サファイアドラゴンを通常召喚する！」

当然サファイアの青いドラゴンが出てくる……と思ったのもつかの間、なんかやたらとキラキラして虹色のオーラっぽい物が全身から立ち上ってる、サファイアというよりもプリズムサファイアドラゴンとでもいうべき何かが出てきた。とりあえず、僕の知ってるサファイアドラゴンと違う。というか長作さん、自分から攻撃力５００以下って言いだしておいて万丈目が全部０宣言した瞬間怒るとかあんまりじゃないですかね。

『パラレルレアだな』

さっすが金の力で作ったって本人も認めるだけのことはある。いくらしたんだろう、あれ。

サファイアドラゴン　攻１９００

「私はターンエンドだ。さあ準、お前の雑魚モンスターを見せてみろ！」

「ドロー！俺の場にモンスターが存在せず相手の場にモンスターがいる時、このカードは手札から特殊召喚できる！来い、アンノウン・シンクロン！」

万丈目が出したのは、丸まった銀色のダンゴ虫に触角を付けたような見た目のモンスター。でもなんで攻撃表示？アドバンス召喚するから表示形式はどっちでもよかったとか？

アンノウン・シンクロン　攻０
「さらに手札から、ガンバラナイトを通常召喚！これも攻撃表示だ！」
ガッチガチの鎧で全身を包み、さらに両腕に盾を装備した騎士が颯爽と地面に降り立つ。万丈目、いったい何を狙ってるんだろう。
ガンバラナイト　攻０
「カードを４枚セットし、ターンエンドだ」
そして攻撃力０のモンスター２体を特に何かすることなく、カードだけ伏せてターンを終える万丈目。１ターンで手札全部使い切っちゃったけど、あんなハイペースでいいんだろうか。まあ、こっちとしては万丈目を信じてるぐらいしかやることないんだけど。それに、あのデッキにはあのカードたちが入ってるんだ。きっと大丈夫。
長作　ＬＰ４０００　手札：５　モンスター：サファイアドラゴン（攻）魔法・罠：なし
万丈目　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：アンノウン・シンクロン（攻）、ガンバラナイト（攻）魔法・罠：４（伏せ）
「私のターン、ドロー！手札の融合を発動、同じく手札のロード・オブ・ドラゴン―ドラゴンの支配者―と神竜ラグナロクを融合！来い、竜魔人　キングドラグーン！」
案の定というかなんというか、パラレルレア仕様のキラキラした竜人がその巨体を見

せる。
竜魔人　キングドラグーン
融合・効果モンスター
星７／闇属性／ドラゴン族／攻２４００／守１１００
「ロード・オブ・ドラゴン―ドラゴンの支配者―」＋「神竜　ラグナロク」
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
相手はドラゴン族モンスターを魔法・罠・モンスターの効果の対象にする事はできない。
１ターンに１度だけ、手札からドラゴン族モンスター１体を
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
「さらにキングドラグーンの効果発動、ワンターンに一度手札のドラゴンを特殊召喚する！来い、ダイヤモンド・ドラゴン！」
当然パラレルレアの以下略。
ダイヤモンド・ドラゴン　攻２１００
「さらにこのターン、私は通常召喚をしていない！ドラゴン・ウィッチ―ドラゴンの守護者を召喚！」
当然パラ以下略の、竜のオーラを纏った女性魔法使いが長作のドラゴンたちの前に半

透明の壁を張る。ねえ、この人本当に初心者なわけ？

ドラゴン・ウィッチ―ドラゴンの守護者―

効果モンスター

星４／闇属性／魔法使い族／攻１５００／守１１００

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分フィールド上のドラゴン族モンスターを相手は攻撃対象に選択できない。

フィールド上のこのカードが戦闘またはカードの効果によって破壊される場合、

代わりに手札からドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る事ができる。

『キングドラグーンである程度の効果耐性、ドラゴン・ウィッチで戦闘破壊耐性……まるでお手本みたいにいいコンボだな』

「バトルだ、キングドラグーンで……」

「待った、その前に伏せカードのうち3枚を発動、すべて捨て身の宝札だ！俺の場のアンノウン・シンクロンとガンバラナイトの攻撃力合計は０で、兄さんのドラゴン・ウィッチより低い！従ってカードを6枚ドロー！」

捨て身の宝札

通常罠

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター2体以上の攻撃力の合計が、

相手フィールド上に表側表示で存在する攻撃力が一番低いモンスターよりも低い場合、
自分のデッキからカードを２枚ドローする。
このカードを発動するターン、
自分はモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚する事ができず、
表示形式を変更する事もできない。
万丈目が発動した３枚の同カード。条件が満たせるモンスターが手札にいたからよかったけど、これ一歩間違えれば手札事故って言うレベルじゃないね。
「小癪なマネを！キングドラグーンでアンノウン・シンクロンを攻撃、トワイライト・バーン！」
キングドラグーンが杖から出した光線が、アンノウン・シンクロンのボディを一瞬で焼き尽くした。
竜魔人　キングドラグーン　攻２４００→アンノウン・シンクロン　攻０（破壊）
万丈目　ＬＰ４０００→１６００
「さらに、サファイアドラゴンでガンバラナイトに攻撃！サファイア・スパーク！」
「ガンバラナイトの特殊効果！このカードが攻撃対象になった時、守備表示にすることができる！」

サファイアドラゴン　攻１９００→ガンバラナイト　攻０→守１８００（破壊）
「おのれ、無駄な抵抗を！ダイヤモンド・ドラゴンでとどめだ、ダイヤモンド・ブレス！」
「手札から速攻のかかしを捨てる！これで兄さんのバトルフェイズは終了だ！」
帽子を被ったかかしが万丈目の手札から飛び出し、ダイヤモンド・ドラゴンのブレスを黒こげになりながらもなんとか防ぎ切った。ふー、危なかった。
速攻のかかし
効果モンスター
星１／地属性／機械族／攻　　０／守　　０
相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。
その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。
「ええい、これでターンエンドだ！」
「俺のターン、ドロー！……ほう、このカードか。モンスターをセットして、カードを２枚伏せる。ターンエンドだ」
長作　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：竜魔人　キングドラグーン（攻）、サファイアドラゴン（攻）、ダイヤモンド・ドラゴン（攻）、ドラゴン・ウィッチ―ドラゴンの守護者―（攻）魔法・罠：なし
万丈目　ＬＰ１６００　手札：３　モンスター：???　魔法・罠：３（伏せ）

「ならば私のターン！ちっ、いいモンスターがいない。キングドラグーンの効果で、ラブラドライドラゴンを守備表示で特殊召喚だ」
やっぱりパ以下略。幸いにも攻撃力は０のため守備表示での登場だったけど、万丈目のピンチには変わりない。
ラブラドライドラゴン
チューナー（通常モンスター）
星６／闇属性／ドラゴン族／攻　０／守２４００
ラブラドレッセンスと呼ばれる特有の美しい輝きを放つウロコを持ったドラゴン。
そのウロコから生まれる眩い輝きは、見た者の魂を導き、
感情を開放させる力を持つ。
――その光は前世の記憶を辿り、人々を巡り合わせると伝えられる。
「バトル！キングドラグーンでセットモンスターに攻撃、トワイライト・バーン！」
竜魔人　キングドラグーン　攻２１００→???　守１９００（破壊）
「ふはは、これでお前を守るモンスターはいなくなった！」
「まだだ！今破壊されたモンスター、スノーマンイーターの効果発動！ドラゴン族モンスターはキングドラグーンの効果で対象にできないが、魔法使い族のドラゴン・ウィッチは別！ドラゴン・ウィッチを破壊する！」

スノーマンイーター
効果モンスター
星３／水属性／水族／攻　　０／守１９００
このカードがリバースした時、
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して破壊する。
「やった、僕のモンスターだ！」
思わず叫んでしまう。そう、あれこそが僕が今朝万丈目に渡したもの。ふと、今朝の会話を思いだした。
（回想）
『万丈目ー、いるー？』
『清明！お前、何をしに来た！ここは選手控え室、立ち入り禁止のはずだ！』
『ゴメンゴメン、思ったより届くのが遅れちゃって。おかげで風邪ひくかと思ったよ』
『届く？遅れる？一体何の話だ』
『はいこれ。どういうことかは言わなくてもわかるよね？』
『このカードたちは……』
『じゃ、場所取りいかなくちゃ。頑張れよー、万丈目』
『万丈目サンダーだ！……だがまあ、すまないな。礼を言うぞ』

『なーに、気にすんなって。じゃあねー』

（終了）

という訳で今の万丈目のデッキには、ある５枚のカードが追加で入っている。そのうちの１枚が僕のスノーマンイーターなのだ。なにせゲイル入れたらデッキ枚数がオーバーしちゃって、使わないのにずっと持ってるよりはいっそちゃんと使ってくれる人にあげたほうがいいのかな、と。

「まだ私の場には攻撃宣言していない２体のドラゴンがいる！サファイアドラゴンで攻撃、サファイア・スパーク！」

「相手の直接攻撃宣言時、このカードは手札から特殊召喚できる！ＢＦ―熱風のギブリ、召喚！」

そしてあれが、僕が昨夜ノース校の鎧田に頼んで届けてもらった、サンダー四天王のカードの一枚。さすが鎧田、攻撃力５００以下で使いやすいのをちょうだい、なんて無茶なお願いにもちゃんと答えてくれた。あとで『ギブリ使われたよー』って電話しとかなきゃな。

ＢＦ（ブラックフェザー）―熱風のギブリ

効果モンスター

星３／闇属性／鳥獣族／攻　０／守１６００

相手が直接攻撃を宣言した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
1ターンに1度、このカードの元々の攻撃力・守備力を
エンドフェイズ時まで入れ替える事ができる。
「かまわん、サファイアドラゴン！そのまま攻撃だ！」
サファイアドラゴン　攻１９００→ＢＦ—熱風のギブリ　守１６００（破壊）
「今度こそとどめだ！ダイヤモンド・ブレス！」
「トラップ発動、ヒーロー見参！俺の手札は2枚……さあ兄さん、右か左か選んでもらおう！」
「おお、俺のカードだ！」
そう言ってはしゃぐ十代。あれ、十代も僕と同じことしてたんだ。気づかなかった。
ヒーロー見参
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
自分の手札から相手はカードをランダムに1枚選択する。
選択したカードがモンスターカードだった場合、自分フィールド上に特殊召喚する。
違う場合は墓地へ送る。
「選ぶのは、右のカードだ！」

「右だな？ならば俺はこのカード、おもちゃ箱を特殊召喚！」
おもちゃ箱、か。あれは飯田のカードだ。飯田もきっと喜ぶだろうし、デュエルが終わったらちゃんと伝えておこう。
おもちゃ箱　守０
「守備力０のモンスターに何ができる！ダイヤモンド・ドラゴンで破壊だ！」
ダイヤモンド・ドラゴン　攻２１００→おもちゃ箱　守０（破壊）
「この瞬間、おもちゃ箱の効果発動！このカードが破壊された時、デッキから攻撃力または守備力０の通常モンスターを２体表側守備表示で特殊召喚する！もっとも、俺のエンドフェイズには破壊されてしまうがな。来い、魂虎！千眼の邪教神！」
ブレスを浴びて黒こげになったおもちゃ箱のリボンが解かれ、中から青白く燃える虎と体中に目がいっぱいついた変な奴が無傷で出てきた。
魂虎（ソウル・タイガー）　守２１００
千眼の邪教神　守０
「まだ粘るか！カードを伏せてターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！トラップ発動、闇霊術―欲！俺の場の闇属性、千眼の邪教神をリリースすることで発動し、カードを２枚ドローする。ただし、兄さんの手札からトラップカードを見せればこの効果は無効になるがな。もっとも、手札がない今の状況で止め

ることはできない！」
「くっ！」
「2枚ドロー。そして手札のジェスター・コンフィを特殊召喚する」
怪しげな小太りのピエロが、玉乗りとジャグリングを同時にこなしながらゆらゆらと不気味なリズムで万丈目の手札から飛び出してくる。なんかちょっと不気味。
ジェスター・コンフィ
効果モンスター
星1／闇属性／魔法使い族／攻　　0／守　　0
このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚できる。
この方法で特殊召喚した場合、次の相手のエンドフェイズ時に
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、
そのモンスターと表側表示のこのカードを持ち主の手札に戻す。
「ジェスター・コンフィ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。
「さらにジェスター・コンフィと魂虎をリリースし、破壊竜ガンドラを召喚！」
禍々しい黒と赤の竜が、万丈目兄のドラゴン軍団相手に一歩もひるまず咆哮をあげる。よし、これなら一発逆転だ！
破壊竜ガンドラ

効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／攻　　０／守　　０
このカードは特殊召喚できない。
自分のメインフェイズ時にライフポイントを半分払う事で、
このカード以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊しゲームから除外する。
さらに、この効果で破壊したカード１枚につき、
このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。
このカードが召喚・反転召喚したターンのエンドフェイズ時、このカードを墓地へ送る。
「ガンドラの効果発動、デストロイ・ギガ・レイズ！」
万丈目　ＬＰ１６００→８００
「残念だったな、準！トラップ発動、ブレイクスルー・スキル！これでガンドラの効果は無効、攻撃力０のでくの坊だ！」
「何!?」
ブレイクスルー・スキル
通常罠
相手フィールド上の効果モンスター１体を選択して発動できる。

選択した相手モンスターの効果をターン終了時まで無効にする。
また、墓地のこのカードをゲームから除外する事で、
相手フィールド上の効果モンスター1体を選択し、
その効果をターン終了時まで無効にする。
この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できず、
自分のターンにのみ発動できる。
それにしても、このタイミングでブレイクスルー・スキルか……状況はだいぶキツイ。頼むよ、万丈目。僕らの生活もかかってるんだ。
「くっ……強欲なカケラを発動、ターンエンドだ。そしてエンドフェイズ時、ガンドラは自身の効果で墓地に送られるはずだがそれもできないな」
強欲なカケラ
永続魔法
自分のドローフェイズ時に通常のドローをする度に、
このカードに強欲カウンターを1つ置く。
強欲カウンターが2つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、
自分のデッキからカードを2枚ドローする。
長作　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：竜魔人　キングドラグーン（攻）、サファ

イアドラゴン（攻）、ダイヤモンド・ドラゴン（攻）、ラブラドライドラゴン（守）　魔法・罠：なし
　万丈目　ＬＰ８００　手札：１　モンスター：なし　魔法・罠：強欲なカケラ（０）、１（伏せ）
「私のターン、ドロー！アレキサンドライドラゴンを通常召喚する」
　アレキサンドライドラゴン　攻２０００
　当然以下略。だから全員プリズム加工するのは止めてくださいモンスターのカラーリングが変わんないからいい加減わけわかんなくなってきたぞ。
「そして全モンスターで一斉攻撃！準のライフをゼロにしろ！」
「攻撃宣言時にトラップカード、攻撃の無敵化を発動！ふたつ目の効果を選択し、このターン俺の受けるダメージは０になる！ただしガンドラは破壊されるがな」
　攻撃の無敵化
　通常罠
　バトルフェイズ時にのみ、以下の効果から１つを選択して発動できる。
●フィールド上のモンスター１体を選択して発動できる。
　選択したモンスターはこのバトルフェイズ中、
　戦闘及びカードの効果では破壊されない。

●このバトルフェイズ中、自分への戦闘ダメージは０になる。
竜魔人　キングドラグーン　攻２４００→破壊竜ガンドラ　攻０（破壊）
「いい加減にしろ、見苦しいぞ準!ターンエンドだ!」
「なんとでも言ってくれ、兄さん!ドロー、ゼロ・ガードナーを攻撃表示で召喚、さらに永続魔法ゼロゼロックを発動!」
ゼロ・ガードナー　攻０
ゼロゼロック
永続魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、
相手は表側攻撃表示で存在する攻撃力０のモンスターを攻撃対象に選択できない。

ゼロ・ガードナーは天田のカードで、ゼロゼロックは酒田のカード。なんでも天田いわく、ゼロ・ガードナーは見てるうちに料理を乗っけるプレートに見えてきたから投入とのこと。そんなこと言い出したらもうなんでもありな気がする。受け取った時にふと気になってなんで酒田のカードがファントム・オブ・カオスじゃなくてゼロゼロックなのかと聞いてみると、ファンカスはきっかり3枚しか持ってないから送れない、すいませんサンダー決して恩義を忘れたわけじゃありません俺のことを許してくださいっ

て言っておいてくれって電話の向こうで本気で泣いてた。でも酒田、ファンカスのせめてもの代わりにって送ってくれたカードのおかげで万丈目はもうちょっと戦えそうだ。人生、何が幸いするかわかんないもんだねー。

長作　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：竜魔人　キングドラグーン（攻）、サファイアドラゴン（攻）、ダイヤモンド・ドラゴン（攻）、ラブラドライドラゴン（守）、アレキサンドライドラゴン（攻）魔法・罠：なし

万丈目　ＬＰ９５０　手札：０　モンスター：ゼロ・ガードナー（攻）魔法・罠：強欲なカケラ（１）、ゼロゼロック

「まあいい、ゼロゼロックを破壊するカードを引くまでのことだ。ドローして成金ゴブリンを発動、私がカードを引く代わりにお前のライフを１０００回復させる。ラブラドライドラゴンをリリースしてエメラルド・ドラゴンを召喚、ターンエンドだ」

万丈目　ＬＰ８００→１８００

エメラルド・ドラゴン　攻２４００

当然以下略。これまでの宝石竜にも言えるけど、こんなプリズム加工されてたらエメラルドでも何でもないと思う。

「ドロー、強欲カウンターが２つのったカケラの効果によりもう２枚ドローする。ターンエンドだ」

長作　ＬＰ４０００　手札：０　モンスター：竜魔人　キングドラグーン（攻）、サファイアドラゴン（攻）、ダイヤモンド・ドラゴン（攻）、エメラルド・ドラゴン（攻）、アレキサンドライドラゴン（攻）魔法・罠：なし

万丈目　ＬＰ１８００　手札：３　モンスター：ゼロ・ガードナー（攻）魔法・罠：ゼロゼロック

「私のターン、ドロー！ついに来たぞ、魔法カード大嵐を発動！わざわざゼロゼロック１枚のためにこれを使うのも贅沢な話だが、これで私の勝ちだ！」

ゼロ・ガードナーの前にできていた半透明のブロックが組み合わさった壁が吹き飛ばされていき、万丈目の場は実質がら空きになってしまった。……なんてね。

「ゼロ・ガードナーの効果発動！このカードをリリースし、このターンの戦闘ダメージを０にする！」

ゼロ・ガードナー

効果モンスター

星４／地属性／戦士族／攻　０／守　０

このカードをリリースして発動する。

このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されず、

相手モンスターとの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。

この効果は相手ターンでも発動する事ができる。
ふっふっふ、なんてったってあのカードを万丈目に渡したのは僕だからね、当然ゼロ・ガードナーの効果だってわかってるわけさ。
「ブレイクスルー・スキルの効果を発動！墓地のこのカードを除外し、ゼロ・ガードナーの効果を無効に……！」
「その行動は俺の読み通りだぜ兄さん。だが、自分のデュエルディスクを確認してみな！」

そう言われた万丈目兄が素直に自分のデュエルディスクに目を落とすと、そこには赤いバツ印……つまりはエラーが示されていた。
「馬鹿な、今は私のターンだから問題なく発動できるはずでは……！」
「ゼロ・ガードナーは兄さんがブレイクスルー・スキルを使ったタイミングではもうとっくにリリース済みでフィールド上にはいない、つまりゼロ・ガードナーの効果は有効になる！」
「何ぃ!?」
あ、出た。いまだに何言ってんのか今一つよくわかんない細かいとこのルール。これホントややこしいんだよなぁ……。

「さあ、ターンエンドか兄さん」
「そうだ。だが、これで今度こそお前を守るカードは無くなった。次のターンが最後だ！」
「それはどうかな？ドロー！魔の試着部屋を発動、８００のライフを払ってデッキのカードを４枚めくり、レベル３以下の通常モンスターを特殊召喚する！一枚目、おジャマ・イエロー！二枚目、おジャマ・グリーン！三枚目、おジャマ・ブラック！四枚目、キャッスル・ゲート……はレベル６の効果モンスターだからデッキに戻す。来い、雑魚ども！」
万丈目　ＬＰ１８００→１０００
魔の試着部屋のカーテンが開き、そこからイエロー、グリーン、ブラックの昨日井戸の中でついに再会を果たしたおジャマ３兄弟が飛び出してきた。
『『『どうも～』』』
おジャマ・イエロー　攻０
おジャマ・グリーン　攻０
おジャマ・ブラック　攻０
「何かと思えば、そんな雑魚モンスターか。３体のモンスターを出したのは褒めてやるが、攻撃表示の壁にもならん雑魚モンスターに私の光り輝くモンスターの攻撃を止めら

れるものか！」
「こいつらを馬鹿にすることは、俺が許さん！確かにこいつらは攻撃力０で、見てくれも性格も間違いなく最悪！だが、俺はこいつらに教えてもらった！」
　はて、なにかあの４人（？）で喋ってたっけ。ゆうべはこっちの部屋にも入ってきた、大量につれてきたカードの精霊とちょっと寝た後でサンダー四天王のカードを乗せた船が到着するまでトランプやったりして遊んでたから、万丈目の部屋で何があったかはよくわかんないけど。
『兄弟のきずなをさ！』
『力を合わせれば！』
『なんだってできるってことを！』
　おお、ずいぶんいい話。そうか、ずいぶん深いことを……
「下には下がいるということを!!こいつらに比べたら俺なんて、全然マシだ！見せてやるぞ、落ちこぼれの意地を！マジックカード発動、おジャマ・デルタハリケーン!!」
　うん、まあ、それで元気になったんならそれでいいと思うんだけどさあ……なんかなあ。それはともかくとして、一度はずっこけた3体のおジャマが気を取り直して輪になって飛び上がり、ものすごい勢いで回転しながら万丈目兄のドラゴン軍団の周りを取り囲む。するとなぜかドラゴン軍団が苦しみだし、なぜか全員爆発した。どーなって

んのこれ。ただ、最後に見せたすっごく嫌そうな顔が印象的だった。
おジャマ・デルタハリケーン!!
通常魔法
自分フィールド上に「おジャマ・グリーン」「おジャマ・イエロー」「おジャマ・ブラック」が表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。
「馬鹿な!」
「攻撃力0の役目は終わりだ!魔法カード、サンダー・クラッシュ!」
フィールドに現れたソリッドビジョンのサンダー・クラッシュのカードを見て、おジャマ三兄弟が丁寧に効果の音読を始めた。それによると、自分の場のモンスターを全破壊してその数×３００ポイントのダメージを与えるらしい。
『『『そ、そんな〜!』』』
……かわいそうな奴ら。
長作　ＬＰ４０００→３１００
「だが、まだ俺の有利に変わりはない!」
「忘れたのか兄さん、俺はこのターン、まだ通常召喚をしていないことを!カオス・ネクロマンサー召喚!このカードの攻撃力も元々は0だが、自身の効果により俺の墓地のモ

ンスター１体につき３００ポイントずつアップする！」
　確かこのデュエルで万丈目が使ったカードはアンノウン・シンクロンにガンバラナイトに速攻のかかし、スノーマンイーターに熱風のギブリにおもちゃ箱とそこから出てきた魂虎に千眼の邪教神、ジェスター・コンフィに破壊竜ガンドラとゼロ・ガードナー、そしておジャマ三兄弟の計１４体。ってことはつまり……えーと？
『遅い。４２００だな』
　カオス・ネクロマンサー　攻０→４２００
「攻撃力４２００だと!?」
「これで終わりだ、兄さん！カオス・ネクロマンサーで攻撃、ネクロ・パペットショー！」
　カオス・ネクロマンサー　攻４２００→長作（直接攻撃）
　長作　ＬＰ３１００→０
「万丈目が勝った！」
　そう言って皆で騒いでいると、万丈目がビシッ！と天を指した。
「俺の名は……一！」
　なるほど、例のアレね！いいよ、もちろん呼ぶよ！
「「十!!」」
「「百!!」」

「「「千!!!」」」

ここでぐっ、と一呼吸おいてから、大きく息を吸い込んで万丈目は声を上げた。

「万丈目……サンダー!!」

そしてサンダー!サンダー!とその場にいた全員でコールする中、どこか満足げな顔をして万丈目兄弟は静かに立ち去って行った。後日アカデミア買収計画は白紙になり、またほんの少しの間だけ日常生活が戻ってきた。めでたしめでたし。

ターン２６　今週のビックリドッキリ…

「ねー十代ー、今ヒマ？」
「いや、今日は翔と隼人と万丈目と釣り競争する約束してるぞ。どうしたんだ？」
　ある休日の午後、どうしても気になることがあったから十代の部屋につながってる扉を軽く蹴り開けて声をかけてみる。というか十代、そんな予定初耳なんだけどなんで僕も誘ってくんないのさちょっと寂しいじゃん。
「悪い、今朝聞こうと思ったんだけどよく寝てたからさ。別に構わないから一緒に行こうぜ！」
「う～ん、自分から話振っといてこんなこと言うのもなんだけど、今日はちょっとやっときたいことがあるから。暗くなる前には帰ってくるからー！」
『面白そうだな、俺も付いてくぞ。というかどうせ俺が釣りに行ったところで竿が持てん』
　よっこらせ、と立ち上がって靴をはく。さーて、うまく入れるといいけどなっと。
『ところで、どこに行くつもりなんだ？』
「特待寮」

『……は？』

大体１０分後、僕らは前にも一度入った特待生用の廃寮の前にいた。いやー懐かしいな、十代達と扉を２～３枚引っぺがしに来た時以来だ。あのときはお世話になりました。

『んで、また来たわけだが。入る算段はついてるんだろうな』

怪しむような声で疑問を投げかけるユーノだが、その疑問はもっともだと思う。一回タイタンと偽闇のデュエルをした時にあっさり入れちゃったのが問題になったせいでバリケードが強化されて、前来た時は中に押し入るのにとんでもなく苦労したからなあ。でも、今は大丈夫なんだよね。

「チャクチャルさん、よろしくっ！」

『了承した。存分にやってくれ』

腰に付けたデッキケースに声をかけて、ダークシグナーの能力を全開放する。唖然とした表情のユーノを放っておいて、自分の腕に紫色の痣が浮かび上がってくるのを眺める。たぶん、目もそろそろ白目の部分が真っ黒になって黒目の部分に紫色が出てきただろう。

「……よし、完璧」

『うむ』

　満足げに頷く僕とチャクチャルさんとは対照的に、呆れてものも言えない、といった様子で佇むユーノ。どうしたんだろう、急に。そう思いながらも、誰かに見つかったらやばいなんてもんじゃ済まないのであんまりのんびりはしてられない。ということで、ダークシグナーの身体能力を生かして高さ3メートルぐらいの柵をひょいっとジャンプして飛び越えた。おお、体が軽い。ちらっと後ろを振り返ると、幽霊だけができる特権のリアル壁抜けをしてユーノが敷地の中に入ってきた。

『んで、お前ら。これはどういうこった?』

　呆れてものも言えんわ、と言いたげな表情のユーノの第一声がこれ。まったく、もうちょっと気のきいたことは言えないもんなのかね。

「何って言われても、ダークシグナーの能力・応用編だけど。別名身体能力底上げ法」

『うむ』

『うむじゃねえよそこの自爆神。フィールド魔法たたき割るぞコラ』

「まあまあ、別にチャクチャルさんだって悪気があって僕をダークシグナーにしたわけじゃないし」

『うるせこの駄ークシグナー。もうちょいそれっぽいことに能力使えるようになって出

直してこい』

「……精霊実体化っ！出てきてブリザード・ファルコン！」

『うわちょ、やめれ！つつくなトリ！ってかなんでお前は俺に触れるんだ、やっぱ精霊だからか？……あ痛っ！』

わーわー騒いでるユーノの声が万一精霊の見える人に聞かれたりしたらいろいろめんどくさいことになりそうなので、ブリザード・ファルコンに戻っておいで、と声をかけてさっさと建物の中に入る。前に来た時と同じで、誰も使ってないにしては妙に滑らかに動く扉だった。

「えーっと、確か前に来たときはこっちにあったと思ったんだけど……」

『それよりそろそろ教えてくれよ。俺らはいったい何しにここまで来たんだ？』

「あれ、まだ言ってなかったっけ。ちょっと欲しくなったものがあってね。前ここに来たときチラッと見たのを思い出して」

そこまで言った時、コツ、コツ、と足音が聞こえた。冷や汗がタラリ、と頬を伝うのを感じたけど、それをぬぐってるほどの余裕はない。え、ちょっと待って。なんで今ここに人がいるの!?十代にも結局行先は教えてないのに、なんでこの場所に!?とりあえず逃げて隠れなきゃ、そう思ってゆっくりと後ろを振り返った瞬間、オベリスクブルーの制服を着て、丸メガネをかけたいかにも頭のいい優等生という感じの生徒と目があっ

た。……嘘、いつの間に後ろをとられたんだろう。まるで気づかなかったんだけどゆこと。

「えっと……」

先に話しかけてきたのは向こうだった。その声を聞いた瞬間、自分のすべきことを思い出す。すなわち、

「後ろを向いて全速全身っ！」

「え、ちょっと君!?」

慌てて追いかけてきたけど、無視！ダークシグナーの身体能力があれば、バイクより速く走ることだってできる！

『それ違う人だな』

「ぜー、ぜー……ここどこ？」

あれから１０分ほど脇目もふらずに走り続け、ふと気づいたら一回も通ったことのない長い廊下にいた。足元の赤いカーペットにはたっぷりと埃が積もっていて僕の足跡がはっきり見えるけど、さすがにあれだけ走ったら追いつかれるまでにはまだまだかかるだろう。

「あ、いた！おーい、待ってよ君！」

えっ。恐る恐る振り返ると、足音を立てずに走ってくる例のブルー生の姿が見えた。あれ、これ人生詰んだ？

「待ってー！せっかく久しぶりに人に会えたんだから、せめて話だけでも聞いてってー！」

『ん？なにかしら聞いたほうがよさそうじゃねーかこれ。もしかしたら吹雪みたく帰ってきたあの人コースかもしれんぞ』

そっか。確かにここは行方不明者の出た廃寮、ダークネスになってた吹雪さんの例もあることだし絶対違う、とは言い切れないか。

「じゃ、じゃあ少しだけ……」

「ホント!?よかった～！それじゃあまず、君の名前は？ほら、いつまでも君ってだけじゃ話するのにも不便でしょ？ちなみに自分は稲石（いないし）っていうんだ。よろしく！」

久しぶりに人と話をする（本人談）からか妙にハイテンションな稲石……先輩？の話をざっとまとめていると、どうもこの人は吹雪さんよりももう一つ上の学年の人らしい。吹雪さんはその年の新入生の中でもカイザー、そして藤原さんとかいう人と並んでトップクラスの強さを誇る人だったから印象に残っていたそうだ。どうでもいいけど吹雪さん、その頃は獣戦士デッキの使い手だったらしい。ちょっと意外。稲石さんのこ

とに話を戻すと、ある夜に地下が騒がしいから様子を見に行ってみたら不思議な光に包まれて、ふと気づいたら埃まるけの廊下に倒れてて僕を見つけたから近寄ったらしい。
「(……ねえユーノ、これあなたの時代から数年経ってますよって教えたほうがいいのかな)」
『うーん、まあ黙っててもすぐにばれるだろうな。遅かれ早かれならまだ今のうちに教えてやるのが優しさってもんじゃねーか?』
『(それはわかってるんだけど、でもやっぱり言いにくいなあ)』
　ぼそぼそと稲石さんに聞こえないように後ろのユーノと作戦会議してると、本人が不安げに声をかけてきた。
「ねえ遊野君、どうしたんだいさっきから?まさか、自分が嘘ついてるって思ってる?確かに自分だっていまだに信じられないけど、全部本当のことなんだ!」
「ああいや、別にそういうわけじゃ……」
「じゃあこうしよう!」
　いやあの、だから信じてないわけじゃないんですが。人の話を聞かないのはルール違反ですぜ兄さん。
「自分と今からデュエルしてもらう!自分が勝ったら自分の話は本当のことなんだって認めてもらうからな!ついてきてくれ、ここは狭い。この近くだと食堂が広いから、そ

こまで案内するよ」
『安定と信頼のデュエル脳お疲れさんです。あれ、なんか……妙だな』
流れで押し切られて稲石さんの後を歩く途中、ユーノが首をかしげた。
「何が？」
『いや、よくわからん。間違い探し見てるみたいな感覚がするのは気のせいか？』
そう言われてみれば、なんとなーくおかしな気がする。何がおかしいってわけじゃないんだけど、何となく違和感。何気なく後ろを振り返っても、そこには積もった埃にくっきりと浮かび上がる僕の足跡だけ。うーん、なんなんだろう？
「ほら、この部屋が食堂さ。さ、入った入った。自分はロウソクに火をつけてくるから、ちょっと待っててね」
そう言いながらポケットからマッチ箱を取り出し、素早くでっかいテーブルの上に置かれた燭台に火をつけていく。ろうそくの明かりに照らされた室内は思ったよりも明るく、カーペットの赤色もきれいに映えている。そうか、ロウソクってのも電気代節約にいいなあ。レッド寮みたいなところでも毎月電気代はばかにならないから、うまく誤魔化せれば毎月の電気代とロウソク代の差額でういたお金で設備をよくできるかも。これは覚えておかないと。
『この部屋、まるでシャドウ・スペクターズのＣＭに出てきたみたいな食堂だな。まあ、

偶然……なのか？』

「さあ、これで明るくなったね。いくよ！」

「「デュエル!!」」

「先行は自分だね。ドロー、手札断殺を発動！自分はこのカードを墓地に送るよ」

手札断殺

速攻魔法

お互いのプレイヤーは手札を２枚墓地へ送る。

その後、それぞれ自分のデッキからカードを２枚ドローする。

えっと、手札２枚を墓地に、か。あれ、今チラッと見せてきたカードに見覚えのあるのがいたような。気のせいかな？とりあえず僕は手札にレベル３モンスターを置いておきたいからこのカードと、それと……うん、ごめんチャクチャルさん。ぶっちゃけフィールド魔法もないのに初手に来られるとさすがに邪魔。闇だからヒゲアンコウが使えるわけでもないし。

「そして自分は、キラー・トマトを召喚！カードをセットして、ターンエンドさ」

フランス料理の盛った皿の上にかぶせるあの丸い取っ手付きの蓋、なんでもクロッシュという道具らしい。とにかくそのクロッシュが稲石さんの場に現れたかと思うと、それをはねのけてケタケタと笑う真っ赤なトマトが飛び出してきた。

キラー・トマト　攻１４００
「闇属性リクルーター……闇属性使いですか」
「ふふふ、君はどう思う？ターンエンドさ」
伏せカードもないし、今いるのはリクルーターのみ。よし、先制攻撃で一気にライフを削っておこう。
「ドロー！手札のハンマー・シャークを召喚、効果発動！自分のレベルを１下げて、手札のレベル３以下水属性を特殊召喚する！来て、オイスターマイスター！」
ハンマー・シャーク　☆４↓３　攻１７００
オイスターマイスター　☆３　攻１６００
「へえ、もうモンスターを２体も！」
「バトル、オイスターマイスターで攻撃！オイスターショット！」
投げつけられた牡蠣は勢いよく飛んでいってキラー・トマトの顔面、つまり体全体のど真ん中に命中する。よし、まずは一撃！
オイスターマイスター　攻１６００↓キラー・トマト　攻１４００（破壊）
稲石　ＬＰ４０００↓３８００
「モンスター効果発動！自分のデッキから攻撃力１５００以下の闇属性を特殊召喚する！ゴーストリックの魔女、召喚！」

またどこからともなくクロッシュが運ばれてきて、その中から魔女衣装の女の子がほうき片手に元気いっぱいの様子で飛び出てきた。あれ意外、２体目のキラー・トマトじゃないんだ。

ゴーストリックの魔女　攻１２００

「でも、攻撃は止めないよ！ハンマー・シャークでゴーストリックの魔女に攻撃！」

「いいや、攻撃は止めてもらう！自分は手札から、ゴーストリック・ランタンの効果発動！その攻撃を無効にして、このモンスターを場にセットする！」

魔女に向かって空中を泳いでいったハンマー・シャークが、いきなり天井から飛び出してきたとんがり帽子にかぼちゃ頭の幽霊に動きを邪魔されてあきらめて帰ってくる。

むー、残念。

ゴーストリック・ランタン

効果モンスター

星１／闇属性／悪魔族／攻　８００／守　　０

自分フィールド上に「ゴーストリック」と名のついたモンスターが存在する場合のみ、このカードは表側表示で召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ裏側守備表示にする事ができる。

また、相手モンスターの直接攻撃宣言時、
または自分フィールド上の「ゴーストリック」と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された時に発動できる。
その攻撃を無効にし、このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚する。
『魔女だけならまだわからんかったが、やっぱり【ゴーストリック】か。ライフ４０００なこの世界じゃあなかなか厳しいな』
「カードをセットして、ターンエンド」
稲石　ＬＰ３８００　手札：２　モンスター：ゴーストリックの魔女（攻）、１（ゴーストリック・ランタン）　魔法・罠：１（伏せ）
清明　ＬＰ４０００　手札：３　モンスター：ハンマー・シャーク（攻）、オイスターマイスター（攻）　魔法・罠：１（伏せ）
「ドロー！自分の場にゴーストリックモンスターが表側でいる場合、このカードは通常召喚できる！ゴーストリック・シュタイン召喚！」
ゴーストリックの魔女がほうきを振ると、ボワンと音を立てて案の定クロッシュ登場。その中から出てきたのは、ずいぶんコミカルなタッチのフランケンシュタインだった。
ゴーストリック・シュタイン　攻１６００

「さらにゴーストリックの魔女の効果発動！1ターンに一度、相手モンスターを裏守備にできる！自分はこの効果で、オイスターマイスターを選ぶよ」

ゴーストリックの魔女

効果モンスター

星２／闇属性／魔法使い族／攻１２００／守　２００

自分フィールド上に「ゴーストリック」と名のついたモンスターが存在する場合のみ、このカードは表側表示で召喚できる。

このカードは1ターンに1度だけ裏側守備表示にする事ができる。

また、1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを裏側守備表示にする。

「さらにランタンをリバースしてバトル、裏守備になったオイスターマイスターをゴーストリック・ランタンで攻撃！」

ランタンのかぼちゃ頭の周りにいくつもの人魂が浮かび、それが同時に突っ込んできて裏側になったオイスターマイスターを焼き尽くした。

ゴーストリック・ランタン　攻８００→???（オイスターマイスター）　守２００（破壊）

「オイスターマイスターが……」
「まだまだ！って言いたいところだけど、自分の場にハンマー・シャーク以上の攻撃力を持つモンスターはいないね。カードをセットして、ターンエンドさ」
　てっきり手札か場にコンバットトリックできるカードがあるのかと思ったら、予想に反してあっさりとターンを終わらせた稲石さん。あれ、もしかしてこの人初心者とか？さすがに特待生っていうぐらいだからそれはないんだろうけど、じゃあなんでわざわざ攻撃するわけでもないモンスターを攻撃表示で出したんだろう。
「うー、怪しいけどそれ言い出したらきりがない。もういいか、ドロー！ハンマー・シャークの効果を使ってハリマンボウを特殊召喚！」
　ハンマー・シャーク　☆３→２
　ハリマンボウ　☆３　攻１５００
「さらに、僕はまだモンスターを通常召喚していないから、それもいくよ！竜宮の白タウナギ、召喚！」
　竜宮の白タウナギ　攻１７００
「これだけモンスターがいれば、なんとかなるはず……」
「残念でした、ここで激流葬を発動！全モンスターを破壊さ！」
　激流葬

通常罠（準制限カード）
モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動できる。
フィールド上のモンスターを全て破壊する。
『なるほそ、シュタイン棒立ちを警戒して大量展開することもで全部織り込み済みってわけか。ってことは、あのもう一枚の伏せカードは……』
「さらに自分は、この激流葬にチェーンしてゴーストリック・アウトを発動！自分が見せるのは、ゴーストリック・スペクターさ」
ゴーストリック・アウト
通常罠
手札の「ゴーストリック」と名のついたモンスター1体を相手に見せて発動できる。
このターン、自分フィールド上の「ゴーストリック」と名のついたカード
及び裏側守備表示で存在するモンスターはカードの効果の対象にならず、
カードの効果では破壊されない。
さあ、まずいことになった。僕はもうこのターンにモンスターを出す手段がない。これでこっちの場は完全にがら空き、だけど稲石さんのゴーストリックたちは無傷。幸いにもゴーストリックは全員攻撃力が低いからあのモンスターの総攻撃を受けたとしてもギリギリライフは残るけど、さらに2体以上のモンスターを出されたらだいぶ危な

い。とりあえず、やれることだけでもやっておこう。
「ハリマンボウが墓地に贈られた時の効果で、ゴーストリック・シュタインの攻撃力を５００ダウン！カードを１枚伏せて、ターンエンド」
ゴーストリック・シュタイン　攻１６００→１１００
稲石　ＬＰ３８００　手札：２　モンスター：ゴーストリックの魔女（攻）、ゴーストリック・ランタン（攻）、ゴーストリック・シュタイン（攻）　魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：なし　魔法・罠：２（伏せ）
「自分のターン、ドロー！うーん残念、みんなで一斉攻撃！」
「うわあっ！」
ゴーストリック・ランタン　攻８００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ４０００→３２００
ゴーストリックの魔女　攻１２００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３２００→２０００
ゴーストリック・シュタイン　攻１１００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ２０００→９００
いてて、あっという間にライフが４分の１以下にまで減らされた。セットカードのうち一枚はバブル・ブリンガーだけど、これレベル１のランタンにレベル２の魔女、レベ

ル３のシュタイン相手じゃ何の意味もないんだよね。
「そしてゴーストリック・シュタインが相手に戦闘ダメージを与えたことで、自分はデッキからゴーストリック・ハウスをサーチしておくよ。そしてそのハウスを発動！これが自分らのお化け屋敷さ！」
ゴーストリック・シュタイン
効果モンスター
星３／闇属性／アンデット族／攻１６００／守　　０
自分フィールド上に「ゴーストリック」と名のついたモンスターが存在する場合のみ、このカードは表側表示で召喚できる。
このカードは１ターンに１度だけ裏側守備表示にする事ができる。
また、このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、デッキから「ゴーストリック」と名のついた魔法・罠カード１枚を手札に加える事ができる。
「ゴーストリック・シュタイン」のこの効果は１ターンに１度しか使用できない。
「さらにゴーストリックのみんなの効果発動！全員裏側表示に変更さ！」
稲石がそう言うと三体のゴーストリックが煙に包まれ、さっきまでモンスターがいた

場所に計３つのクロッシュが置かれていた。
「それと自分は、忘れずにこのカードも使っておくよ。永続魔法うごめく影！ライフを３００払って、自分の場の裏守備モンスターをシャッフルして並び替えるね」
稲石　ＬＰ３８００→３５００
今度は３つのクロッシュがグルングルンと動き回ってシャッフルされ、どこにどのモンスターが入っているのかわからなくなってしまった。もう、これじゃあ次の攻撃で一番危険な魔女を当てられる確率が３分の１になっちゃったじゃないか！
『いや、もっと確率は低いな。何せハウスをどうにかしないとモンスターには攻撃すらまともに届かんぞ』
「ふふっ、ターンエンドさ。さあ、もっと楽しくデュエルしようよ！」
「まだあきらめないよ、僕のターン！リバース効果が怖いなら、こっちもセットで対抗してやる！モンスターをセットしてターンエンド！」
『……あほ。ハウスの効果があるってのに』
稲石　ＬＰ３５００　手札：２　モンスター：３（ゴーストリック・シュタインｏｒゴーストリック・ランタンｏｒゴーストリックの魔女）魔法・罠：うごめく影
清明　ＬＰ９００　手札：１　モンスター：１（???）魔法・罠：２（伏せ）、うごめく影

場：ゴーストリック・ハウス
「自分のターン、場のゴーストリックを全員リバースして、さらにゴーストリックの雪女を攻撃表示で召喚！」
ゴーストリックの雪女　攻１０００
「さらにゴーストリック・ハウスの効果によって、自分のモンスター皆でまたまたダイレクトアタック！さあ、この４連打を止められるかな？」
ゴーストリック・ハウス
フィールド魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、
お互いのフィールド上のモンスターは、
裏側守備表示のモンスターに攻撃できず、
相手フィールド上のモンスターが裏側守備表示のモンスターのみの場合、
相手プレイヤーに直接攻撃できる。
また、このカードがフィールド上に存在する限り、
お互いのプレイヤーが受ける効果ダメージ及び、
「ゴーストリック」と名のついたモンスター以外のモンスターが
プレイヤーに与える戦闘ダメージは半分になる。

「そのオーバーキル狙いにイラッとくるね！トラップ発動、イタクァの暴風！」

一斉に僕の伏せモンスターをジャンプで飛び越えて踊りかかってきたゴーストリックたちが、激しい風にあおられて元の場所まで吹き飛ばされる。その後ふくれっ面でくしゃくしゃになった髪型を整える魔女やずれたとんがり帽子をかぶりなおすランタン、頭を振って起き上がるシュタインに風でめくれかかっていたスカートを押さえる雪女と、なんとも思い思いの反応を見せてくれた。

イタクァの暴風

通常罠

相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの表示形式を変更する。

ゴーストリック・ランタン　攻８００→守０

ゴーストリックの魔女　攻１２００→守２００

ゴーストリック・シュタイン　攻１６００→守０

ゴーストリックの雪女　攻１０００→守８００

「ごめんごめん、ちょっと失礼だったね。メインフェイズ２に雪女以外の皆を裏守備に変更、うごめく影の効果を使用さ」

稲石　ＬＰ３５００→３２００

またもや３体のモンスターがクロッシュの中に隠れてしまい、シャッフルされること

でどれがどれだかわからなくなる。ただ一人、ぽつんと佇む雪女を除いて。
「さ、これで自分はターンエンドさ」
「僕のターン、ドロー！」
状況はかなり悪い。バブル・ブリンガーが使い物にならない今最後の砦だったイタクァまで使っちゃったし、このドローによっては詰みもありえる。……頼むよ、僕のデッキ！
「よし！まずセットモンスターを反転召喚、ペンギン・ナイトメア！このモンスターの効果で、ゴーストリックの雪女を手札に戻す！」
ペンギン・ナイトメア
効果モンスター
星４／水属性／水族／攻　９００／守１８００
このカードがリバースした時、
相手フィールド上のカード１枚を選択して持ち主の手札に戻す。
また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃力は２００ポイントアップする。
「あ、雪女！」
「さらに実は、もう一つ手があるのさ！僕の墓地の水属性はハンマー・シャークにオイス

ターマイスター、ハリマンボウに竜宮の白タウナギとゼンマイシャークの５体！手札から氷霊神ムーラングレイスを特殊召喚！」
「へえ……！」
氷霊神ムーラングレイス
効果モンスター
星８／水属性／海竜族／攻２８００／守２２００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地の水属性モンスターが５体の場合のみ特殊召喚できる。
このカードが特殊召喚に成功した時、
相手の手札をランダムに２枚選んで捨てる。
「氷霊神ムーラングレイス」のこの効果は１ターンに１度しか使用できない。
このカードがフィールド上から離れた場合、
次の自分のターンのバトルフェイズをスキップする。
「さらにムーラングレイス召喚時の効果で、そっちから見て右から２枚のカードを捨ててもらうよ！」
「くっ、２枚は痛いなあ。キョンシーなんてまだ出してすらいないのに」
「僕はこのターン通常召喚してないから、ペンギン・ナイトメアをリリースして、氷帝メ

ビウスをアドバンス召喚！そしてフリーズ・バーストを使って、その左側の伏せとゴーストリック・ハウスを破壊！」

メビウスの投げつけた２本のつららが正確に２枚のカードの中心を射抜いた。だけど、まだまだ僕のターンは終わらないよ！

「バトル、ムーラングレイスで真ん中のモンスターを攻撃！」

氷霊神ムーラングレイス　攻２８００→???（ゴーストリック・シュタイン）　守０（破壊）

「シュタイン撃破、やっとこれで１体倒した……あれ？」

『手札半分捨てさせたのにまだ落ちてなかったのか。運が悪かったな』

確かにシュタインは倒した。なのにセットモンスターの数、つまりクロッシュの数が一つ増えて３つになっているのはなぜだろう。

「残念、自分は今の攻撃終了後に手札からあるモンスターの効果を発動させたのさ。そのモンスターの名は、ゴーストリック・スペクター！そしてそのもう一つの効果で、自分はカードをドローする」

ゴーストリック・スペクター

効果モンスター

星１／闇属性／悪魔族／攻　６００／守　０

自分フィールド上に「ゴーストリック」と名のついた
モンスターが存在する場合のみ、
このカードは表側表示で召喚できる。
このカードは1ターンに1度だけ裏側守備表示にする事ができる。
また、「ゴーストリック」と名のついたモンスターが、
相手のカードの効果または相手モンスターの攻撃によって
破壊され自分の墓地へ送られた時に発動できる。
このカードを手札から裏側守備表示で特殊召喚し、
デッキからカードを1枚ドローする。
「だったら次、メビウスの攻撃！アイス・ランスで左側のモンスターを撃破する！」
「残念だったね、こっちはゴーストリック・ランタンさ。魔女じゃないよ」
氷帝メビウス　攻２４００→???（ゴーストリック・ランタン）　守０（破壊）
「魔女が倒せなかった……ごめんメビウス、ターンエンド」
稲石　ＬＰ３５００　手札：１　モンスター：２（ゴーストリック・スペクターｏｒ
ゴーストリックの魔女）魔法・罠：うごめく影、１（伏せ）
清明　ＬＰ９００　手札：０　モンスター：１（氷帝メビウス）、氷霊神ムーラングレ
イス（攻）魔法・罠：１（伏せ）

「自分のターン、ドロー！グレイヴ・オージャを守備表示で召喚」
これまで稲石さんが使ってきたのとは全く毛色の違う岩人間が、そのごっつい腕で守備体勢をとる。
グレイヴ・オージャ
効果モンスター
星４／地属性／岩石族／攻１６００／守１５００
自分フィールド上に裏側守備表示モンスターが存在する限り、
このカードを攻撃対象に選択する事はできない。
自分フィールド上のモンスターが反転召喚する度に、
相手ライフに３００ポイントダメージを与える。
「そしてゴーストリックの魔女、ゴーストリック・スペクターをそれぞれ反転召喚！これでグレイヴ・オージャの効果が２回発動して、合計６００のダメージさ」
『あと一体伏せモンスターがいたら即死だったな』
清明　ＬＰ９００→３００
「さらに魔女の効果でメビウスを裏守備にして、そのまま攻撃！」
ゴーストリックの魔女　攻１２００→???（氷帝メビウス）　守１０００（破壊）
「メイン２、魔女とスペクターをもう一回裏守備に変更して、カードをセットする。これ

で自分はターンエンド。もう一回自分のターンが回ってきたら、自分の勝ちは確定。さあ、君はどうする?」
「どうするかって?もちろん僕はこのドローに、このデッキに賭けるよ!ドローっ!」
威勢よく啖呵を切ったはいいけど、このターン中にグレイヴ・オージャをなんとかしないと負けは確定……逆転のカードが来ますように!
「さて、何のカードを引いたかな?」
「来た来た来た!貪欲な壺発動、墓地のオイスターマイスター、ハリマンボウ、ハンマー・シャーク、竜宮の白タウナギ、氷帝メビウスをデッキに戻して2枚ドロー!そしてサルベージと強欲なウツボのコンボで、墓地のペンギン・ナイトメアとゼンマイシャークを手札からデッキに戻して3枚ドロー!伝説の都　アトランティスを発動して死者蘇生、僕が墓地から呼ぶのはこのカード!七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ!地縛神Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ、特殊召喚!……いい、チャクチャルさん。これ闇のゲームでもなんでもないから大人しくしててね。暴れちゃダメ、ゼッタイ」
『承知している。私のことはただのカードと思ってくれて構わない』
『お前、実際カードはカードだろが』
伝説の都　アトランティス
フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００ポイントアップする。
また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは１つ下がる。
氷霊神ムーラングレイス　☆８→７　攻２８００→３０００　守２２００→２４００

0

地縛神Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）
効果モンスター
星１０／闇属性／魚族／攻２９００／守２４００
「地縛神」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。
フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。
相手はこのカードを攻撃対象に選択できない。
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。
また、１ターンに１度、このカードの守備力の半分のダメージを
相手ライフに与える事ができる。
この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。
このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、

相手はバトルフェイズを行えない。
「攻撃力２９００の最上級魚族だって!?そんなカード……そうか、自分が使った手札断殺か!」
「その通り!さらに手札から、ウミノタウルスを通常召喚!」
ウミノタウルス
効果モンスター
星４／水属性／水族／攻１７００／守１０００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分フィールド上の魚族・海竜族・水族モンスターが
守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
ウミノタウルス　☆４→３　攻１７００→１９００　守１０００→１２００
「バトルフェイズ、ウミノタウルスでセットモンスターのうち右側に攻撃!そしてウミノタウルスは自身の効果によって、貫通能力を持つ!」
「ぐっ……スペクター!」
ウミノタウルス　攻１９００→???（ゴーストリック・スペクター）守０（破壊）

稲石　ＬＰ３５００→１６００
「やれやれ、次の攻撃を受けたらひとたまりもないね。君もオーバーキル狙いかい？」
「とぼけないで。手札断殺で墓地に送ったカード……１枚はネクロ・ガードナーなのはわかってるんだよ」
「なんだ、ばれてたのか。つまんないの」
むしろばれてないと思うほうがどうかしてます。さっきあれだけ見せてきたじゃん。

「チャクチャルアの効果で、プレイヤーにダイレクトアタック！」
「ネクロ・ガードナーっと！」
まあ、使ってくるとしたらここだよね。
ネクロ・ガードナー
効果モンスター
星３／闇属性／戦士族／攻　６００／守１３００
相手ターン中に、墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。
このターン、相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする。
「でも、これで僕の勝ち！貫通能力はついてるんだ、構うことはない！ムーラングレイスでそのまま攻撃だ！」

「ここで最後のトラップ発動、マジカルシルクハット！」
　これまでのようなクロッシュではなく、クエスチョンマークが描かれた青いシルクハットが2つ上から降ってくる。さらに魔女が入っていたはずのクロッシュも同じデザインのシルクハットになり、計3つのシルクハットが稲石さんの前に壁を作った。
　マジカルシルクハット
　通常罠
　相手のバトルフェイズ時に発動する事ができる。
　自分のデッキからモンスター以外のカード2枚を選択する。
　その2枚をモンスター扱い（攻／守0）として、
　自分フィールド上に存在するモンスター1体と合わせてシャッフルし裏側守備表示でセットする。
　デッキから選択して特殊召喚した2枚のカードはバトルフェイズ終了時に破壊される。
×
「な???2　守0
　なんだ？」
「さあ、攻撃してごらん。ちなみに自分がセットしたカードは、それぞれ黒いペンダント（ブラック・ペンダント）とコザッキーの自爆装置。どれを攻撃するのも君の自由さ。自分のライフがなくなる

のは変わりないけど、５割以上の確率で相打ちに持ち込める」
『黒いペンダントはフィールドから墓地に送られた時に相手へ５００のダメージ、自爆装置はセット状態のとき破壊したプレーヤーに１０００のダメージ……うまく魔女に攻撃が当てられたらこっちの勝ちだが、外したら戦闘破壊が終わってからライフ０になるこの世界なら相打ち、か』
　ど、どうしよう……戦略も何も関係ない、完全に運任せってことか。僕が勝つ確率は３分の１とやや不利だけど、いいね、燃えてきた。たまにはこういうのも面白い。
「じゃあ、僕は……」
「うん、僕は？」
「僕は、一番左のカードを攻撃！頼むよムーラングレイス！」
　ムーラングレイスが放った青白い光線がシルクハットの一つをぶち抜く。攻撃するカードを選んだ以上、できることは何もない。あのカードの正体は？
「……ふふ、自分の完敗だよ。運も実力のうち、君は強いね」
　氷霊神ムーラングレイス　攻２８００→???（ゴーストリックの魔女）守２００（破壊）
　稲石　ＬＰ１６００→０

「負けちゃったけど、久しぶりにデュエルができて楽しかったよ。ありがとう」
「いや、そっちこそ強かったです。特待生はさすがにレベル高いですね」
素直に感心したのでそう言うと、なぜか稲石さんはあははと笑った。
「うん、ありがとう。ああそうだ、これはお礼って言ったらなんだけど、よかったら君がもらってくれない？自分が持ってても使い道がよくわかんないし」
ポケットに手を突っ込んで、僕に金属片を見せる稲石さん。細長い形のそれは、一方の端にひもがついてちょうどペンダントのようになっていて……ってこれ！
「しゅ、守護者の鍵い!?まままさか稲石さん、あんたセブンスターズだったのっ!?」
確かあの鍵の形は、夢想がカミューラに投げ渡した奴だったはず。慌てて飛び退り、デュエルディスクを構えなおして警戒態勢に入る僕をぽかんと見つめる稲石さん。あれ、なんだか思ってたのと反応が違う。
「違うよ。これは、自分が数日前に地下でなんだかよくわからない変な喋り方のデーモン使いの人に会ったときデュエルを挑まれてね、とりあえず倒したらこれ落として逃げちゃったのさ」
変な喋り方のデーモン使いって、もしかしてタイタンだろうか。今度はあの人何しに来てたんだろう。まあそれはいいとして、人を疑ったんだから謝んないとね。

「どうもすいません、ここ最近いろいろ立て込んでたから」
「いや、今の反応だけでもこれがなにかすごいものだってのはわかったよ。はい」
「ど、どうも……」
　そう言って、妙に冷たいその鍵を受け取る。自分の首に引っ掛けてる鍵とも見比べてみたけど、たぶん本物だ。うーん、なんでタイタンがこんな物を。帰ったら夢想に渡しておこうっと。
「じゃあ、外に出ましょうか」
「そうだね。今日は楽しかったよ」
　それから歩くこと数分。玄関前の大広間に出たあたりで後ろにいるはずの稲石さんの足音が聞こえないことに気づき、振り返ってみる。
「……あれ？」
　誰もいない。おっかしいな、確かにいたと思ったのに。来た道を探しに戻ろうとしたところで、デュエルが終わってから黙りっぱなしだったユーノがゆっくりと口を開いた。
『……なあ、清明』
「何？今稲石さんを捜しに行くんだけど」
『その稲石のことなんだけどな？俺やっと気づいたんだよ、デュエル前に感じた違和感

がなんだったのか』
　あ、それは聞きたい。まだちょっと気になってたし。すると心なしかひきつった声で、ゆっくりと語りだした。
『……あいつ、お前と一緒に歩いてたろ？おかしいじゃねえか、なんで足跡がひとり分しかつかないんだよ。あの時、廊下に残ってたのはお前の足跡だけだったろ？』
「え」
『おかしなところはまだあるぜ、その七星門の鍵だ。どうしてたった今目が覚めてうろついてたらお前を見つけた男が数日前にタイタンとデュエルして鍵をぶんどれるんだよ』
「え」
『もう一つ。その鍵、受け取ったとき妙に冷たかったろ』
「え」
『まだある。いくらあっちのほうが道に詳しいって言っても、仮にもダグナーの身体能力だぞ。俺みたいに壁抜けでもしない限り、あんなすぐに追いつけるはずがないんだよ』
「え」
『さっきからえしか言ってないけど、とどめさしてやるよ。この地図よーく見てみろ』

いやな予感しかしないけど、見てみないわけにはいかない。ゆっくりと首を動かすと、何の変哲もないこの建物全体の案内図があるだけだった。えっとユーノさん、これが一体どうしましたか……？

『ここ。この寮の食堂ってな、俺らが今通ったのとは真反対の方向に一か所あるだけで、今俺らが来た道はどう見ても行き止まりのはずなんだよ』

「えっと、それって……」

『ああ。俺らはついさっきまで存在しない部屋で、な・ぜ・か、足跡がつかない人間とデュエルしてたんだよ』

「……」

『……』

「もう出るっ！レッド寮に帰る！」

「ってことがあったんだよ。これが証拠の鍵。どー思う皆」

「まじかよ！・く～、俺も行っときゃよかった！」

その日の晩、レッド寮の狭い食堂でいつものメンバーと食卓を囲みながら今日会ったことの報告。さすがにみんな最初は疑ってたけど、少なくとも何かあったらしいことは

わかってくれたようだ。
「それで、どんな人だったんスか？その稲石って人」
「うん、いい人そうだったよ。いやー、まさかユーノ以外の幽霊に会うなんてね、思わず気づいた時には冷や汗が出たよ」
「ふん、意気地のない。ところで清明、一体何をしにあんな場所まで行ってきたんだ？」
あ。万丈目に突っ込まれるまできれいさっぱり忘れてたけど、そういえば目的があったんだっけ。
「実は……」
「実は？」
「あの寮、やたらと高級そうな皿とか食器とかあったでしょ？ウチのちょっと欠けちゃってるお茶碗とかと交換しようかなーと」
『え、俺そんなくだんないのについてったの？お前、そりゃ幽霊が出ても文句言えませんわ』
その瞬間、玄関でコトリと音がした気がした。普段なら放っておくところだが、何となく気になったので席を立って玄関に行く。ドアを開けると誰もおらず、足元に高そうな食器が何十枚も積んであり、その横に銀製っぽいフォークやらスプーンやらの束が重ねてある。その上に手紙が一枚置いてあったので、慎重に取って文面を見る。

『なになに？［今日は楽しかったよー♪君が欲しがってたみたいだから、これは自分からのプレゼントさ。裏はないから受け取ってちょうだい。稲石より　追伸：稲石なんてあの寮にはいないし……ってね。なんなら歴代名簿でも見てごらん、稲石なんて名前の生徒は一人もいないから。じゃあ一体、僕は誰でしょう？］……よかったじゃないか、欲しいもんが手に入って』

あはは、と笑いながら食器を拾い上げる。そんな僕の笑い声がちょっとひきつっていたのは否定できない。否定できないけど、また稲石とデュエルしたいな、とも思う自分がどこかにいた。

ターン27　女戦士と宝石騎士

「ん……よし、そろそろかな」
まだ日も昇っておらず、ちょっと東の空が白んで見えるくらいの時間に僕は、レッド寮を出た。夕べ新しいことに手を出してみたのだが、その成果が知りたくなったのだ。
『ふわぁ……なんだお前、もう行くのか？』
「あ、起こしちゃった？ごめんごめん、まだ寝てていーよ」
ふわふわとユーノが飛んできて僕の半歩後ろにつく。さらにシャーク・サッカーも僕の右隣をゆったりと泳ぎだす。ふーむ、なんか悪いことしちゃったかな。
「あ、そろそろだ」
もう一回謝っとこうかな、そう思ったところで海に面した崖、とはいっても水面までの距離はせいぜい1メートル程度の場所に出て、目印にしていたひもに括り付けた浮き輪がぷかぷかと浮かんでいるのが見えた。
「いよっこいせぇ！」
掛け声とともに、その浮き輪に手を伸ばして思いっきり引っ張る。あれ、これ意外と重いのね。もうちょっと人手がいるし、またデッキの誰かに手伝ってもらおうかな？

さっそく呼び出そうとすると、すぐ近くに三沢がいるのを見つけた。まだこっちには気づいていないようで、海に向かって何やら体操をしている。
「おーい、みっさわー！暇ならこれ手伝ってくれるー？」
　手を口に当てて声を張り上げる。すぐに気付いてくれたみたいで、こっちに向けて走ってくるのが見えた。

「おいーっす、三沢。おはよ」
「ああ、おはよう。それはいいが、一体こんな時間から何をしてるんだ？」
　お前もな、と言いたいのをぐっと飲み込む。あまり無駄話をしてる暇はない。今はそれより、こっちを手伝ってもらいたいのだ。
「訳は後で話すからさ三沢、ちょっとこれ引っ張るの手伝って…くれ、る……？」
「わ、わかった！」
　割と全力で引っ張ってるのにちっとも海から引っ張り出せない浮き輪を見て、慌てて手を貸してくれる三沢。
「ありが、と……！」
「気に、する、な…！」

二人がかりで思いっきり引っ張ってると、何かバチッと嫌な音がした。そしてみるみる軽くなってくる浮き輪。あああああ、やっちゃった！

「きょ、今日のごはん～……」

涙目になってもう一人でも持ち上げられる重さの浮き輪を引っ張り上げると、案の定無残に大穴のあいたでっかい網がくっついていた。それを黙ってみていた三沢が、信じられない、といった様子で声をかけてくる。

「ま、まさか今日のごはんって……」

「ここ、十代と釣りしててもよく釣れるポイントだから、レッド寮の食卓に刺身なり焼き魚なりを出そうと思ってゆうべの夜遅く頑張って定置網張っておいたのに、せっかく金曜のエビフライと毎日のメザシ以外にも海産物を安定して全員に出せると思ったのに！」

「そんなに困ってるなら一言相談してくれ！」

『うん、俺もずっとそう思ってた。なんで定置網張ったり投網ぶん投げたりする方向に走るんだよお前は。ってツッコミができないぐらい必死だったから黙ってたけどな』

「ありがと三沢。でもいいよ、とりあえず僕は今から寮に帰ってこの網を縫い直すから。あ、大量になったらラーイエローにもおすそ分けするから楽しみにしててね」

『これ全部嫌味抜きの本音で言えるんだからお前って大した奴だよな』

何代前の先輩が何を考えて買ったのかまるで訳が分からないけどせっかくなのでありがたく使わせてもらってる軽く２０メートルはある投網をバサッと肩に担ぎながらそう言うと、三沢は心底呆れたようにため息をついた。そのまま僕の肩に手を置き、真剣な目で一言、

「わかった、わかったからとりあえず今日はお前ら全員でウチまで来てくれ。樺山先生のことだ、今日もカレーの仕込みはもう終わってるだろうしな」

って言ってくれたのがなんか泣きそうになるほど嬉しかった。樺山先生、カレー美味しかったです。あ、それと投網修理に使う針だのなんだのも貸してくれてほんとありがとうございました。この恩はいつかこの網でたくさん魚が獲れたら返します。

『お前……三沢がメシおごってくれた意味ぜんっぜん理解してねーな？』

そして、朝カレーをおなか一杯頂いてから。僕と十代、隼人に翔は三沢からラーイエローのすぐ近くの崖まで呼び出されていた。なんでも、デュエルの早朝特訓を始めるらしい。そう思ってた時期が僕にもありました。始まったのは、掛け声とともにひたすらカードを引く特訓。確かに効果があるであろうことは大山先輩が実証済みだけど、だけど……あえて言わせてもらおう、どうしてこうなった。

「アン、ドゥー、ドロー。アン、ドゥー・ドロー。アン、ドゥー、ドロー……ねえ三沢、これあと何セットやるんだっけ？」
「アン、ドゥー、ドロー。もちろん、自分のデッキがなくなるまでだ！」
「アン、ドゥー、ドロー……ってことは、俺と隼人と翔はあと１１回か！」
「アン、ドゥー……ってことは何？デッキ枚数６０の僕はこの３人より２０回多くやんなきゃいけないの!?」
「そもそも、なんで俺らまでやらなきゃいけないんだな～。お、翔、そのカード雷電娘々か？」
「あ、ばれた？えへへ、僕のアイドルカードなんだ」
残りデッキの枚数が１０枚を切ったあたりで、隼人と翔が雑談を始める。隼人のおかーさん、ディアン・ケトに似てるってどんな顔なんだろ。少なくとも隼人本人が父親似なのはこの前よくわかったけど。
ふむ、アイドルカード、か。まあ僕のデッキならレイス一択だな。三沢は間違いなくピケルだろう。まあ本人にとっては触れてほしくない点らしいので、あえて何も言わないでおく。それが自分でもわかっているのだろう、特にとがめられることはなく特訓は終わりになった。さ、授業授業。確か今日は、１時間目から大徳寺先生の錬金術だっけか。

「ガラッガラだ」
「スカスカっすね」
　おかしい。何がおかしいって、もう授業はじまってるのに空席がやたらと目立つ。青黄赤、全色合わせてもせいぜいいつもの４分の３ぐらいしかいない。いつものほほんとした大徳寺先生もさすがに不安そうな顔をして、無断欠席の理由を知っている人がいないか尋ねている。が、どうも誰もわからないらしい。そういや、今朝もレッド生が数人いなかったな。貧乏根性のしみついたオシリスレッドでただ飯に来ないなんて何かあるとは思ってたけど、まさかこんなに人がいないとは。
「大変です先生、森でこんなものが！」
　そういいながら事務の人が、何やらカバンを持って駆け込んでくる。そのかばんにはくっきりと『ＧＯＴＯＵ』の文字があった。後藤……一体どこに行っちゃったんだ？その後人がいないので授業は中止となり、いったん生徒は各自寮に戻るようアナウンスがあった。けど、
「これはもう、探してみるしかないね。ちょっと手かしてね、サッカー」
「だな。手伝ってくれ相棒！」

当然のごとく無視。ハネクリボーとシャーク・サッカーを呼び出して、僕らも素早く森の中に入るのであった。

そして、かれこれ１０分ほど歩きまわったころ。いきなり森の開けた場所に出ると、そこには謎の石造りの建物がそびえたっていた。え、なにこれ。

「ああ、みんな、あれを見るんだな～！」

隼人が指差した先には、見覚えのある制服を着たたくさんの男子高校生が四角い石を運んだり切ったりしてその建物を作り上げていくシュールな光景。それと、虎。英語にするとタイガー。

「……虎？」

なんかもう手遅れな気もしたけど、なるべく刺激しないようにしてゆっくりと後ろを向き、そのまま一歩ずつ前に進m

「こっち来た！逃げろーっ!!」

大慌てで走り出し、必死になって建設途中の柱の一本にしがみついてよじ登った。チラッと下を見たら、こっちが手を放すまで粘るつもりなのか足元でうろうろしてる虎と目があった。今気づいたけど、この虎片目がないのね。でっかい傷跡が残ってる。まあどうでもいいことだけど。

「バース！」

「ん？」

　さて、これからどうしようかと考えだしたとき、建物の中から凛とした女性の声が聞こえた。するとその虎、いやバースはさっきまでの態度が嘘のように、例えて言うなら借りてきた猫のようになって大人しく声のほうに走って行った。

「ようこそ、私の城へ。もう降りてもらっても構わないぞ」

　そのたくましい褐色の肌の女性の言葉に従って地面に降りると、当の女性はさっきまで作業していたアカデミア生に対してひとりひとり丁寧にねぎらいの言葉をかけて給料袋とおぼしきものを手渡していた。くっ、バイトがあると一声かけてくれれば僕だって行ってたのに。

「いやいやいや、だってさ」

　うん、さすがに半分は冗談。まあどう考えてもこんなところで闘技場作らせてる女なんてただ者なわけがないし、こっちから遠慮してただろう。……しかし給料ってあれいくらぐらいもらってたんだろうか。

「さて、待たせたな。私はセブンスターズの一員にしてアマゾネスの末裔、タニヤ。このコロシアムで七星門の鍵をかけた聖なる戦いを行う」

　わかっていたこととはいえ、サッと場に緊張が走る。アマゾネス、確か地球のどこかにあるっていう女性だけの一族のことだ。しかしこの人、下手すると一回で終わるデュ

エルのためだけにわざわざこんな建物作らせたのか。暇人というかなんというか。と、いきなりタニヤの声がぶりっ子っぽくなった。
「でもね、私と戦うことができるのは、男の中の男だけ」
「何よそれ！」……だって！」
語尾にハートマークでもつきそうな声で事実上あんたらとはデュエルしないという宣言をされ、女性人二人が怒りの声を上げる。もうこの迫力からいっても明日香は資格あるんじゃないかな、本人の前では死んでもこんなこと言えないけど。あ、また声戻った。
「我こそは男というもの、出て来い！」
「俺が！」
「いや、俺だろう！」
「いいや、俺だ！」
「僕が行く！」
我こそは男！ということで一斉に名乗りを上げる男性陣をじっくりと見つめたタニヤ。これ、当ててもらえなかったら地味にへこむだろうなー。
「面構えは全員悪くないけど……ユー！」
そういってタニヤが指差したのは、三沢。くっ……なんかちょっと一瞬だけドヤ顔に

なってたのが無駄に悔しい！
「いいだろう、この三沢大地が相手しよう」
「まず、デュエルの前に聞かせてもらう。ここに２つのデッキがあるが、一つは勇気のデッキでもう一つは知恵のデッキ。さあ、どちらを選ぶ？」
「当然、知恵のデッキだ！」
　なにが当然なんだろーか。
「そっちがデッキの内容を決めさせたならば、俺も同じことをしてやろう。ここに６つの属性デッキがあるが、どれを相手にするか選んでもらおうか！」
　そう言って黄色の制服をはだけ、常に身に着けている６つのデッキケースを見せつける三沢。三沢よ、仮にも女性の前でいちいちそのポーズとるのはやめたほうがいいと僕は思うよ。素肌は見せてないとはいえ、セクハラ扱いされても文句言えないし。
「キャー、三沢っちったら大胆ー！じゃあタニヤ、あなたの名前と同じ地属性のデッキをお願いするわー！」
　コロシアム全体に、何とも言えない空気が広がった。……三沢、ファイト。
「ええい、そんな見え透いたお色気作戦なんかに引っかかってたまるか！」
「三沢っちったら硬派ね、そこがまた素敵ー！……では、ゆくぞ！」
「「デュエル！」」

「先行は私がもらう！ドロー、手札からフィールド魔法、アマゾネスの里を発動！」
周りにニョキニョキと木が生えてきて、まるで南国の森のようになった。木の向こう側には、なにやら木製の家もいくつか見える。
アマゾネスの里
フィールド魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上に表側表示で存在する「アマゾネス」と名のついた
モンスターの攻撃力は２００ポイントアップする。
「アマゾネス」と名のついたモンスターが戦闘または
カードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、
その「アマゾネス」と名のついたモンスターのレベル以下の
「アマゾネス」と名のついたモンスター１体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。
「さらに、アマゾネスの聖戦士を通常召喚する。このカードの攻撃力は１７００だが、自分の場のアマゾネスモンスター１体につき１００ポイントアップする。今の私の場には聖戦士１体しかいないが、アマゾネスの里の効果でさらに２００ポイントアップする

！カードをセットして、ターン終了だ」
　アマゾネスの聖戦士　攻１７００↓２０００
「いきなり攻撃力２０００のアタッカーを通常召喚一回で召喚!?」
「イロモノかと思ったらなかなかやるね、だってさ」
「い、いやイロモノってさすがに失礼じゃ」
　別にタニヤをかばうつもりはさらさらないが、さすがにいきなりイロモノ扱いはあんまりじゃなかろうか。そう思って言っただけなのに何が気に入らなかったのか、夢想はぷぅっと頬を膨らませてそっぽ向いてしまった。え、僕何かまずいこと言った!?
「いいわよ、どうせ清明は女の人には甘いんだもん、だってさ。どうせあの人がちょっと露出高いからってデレデレしてるんでしょ、なんだって」
「え、ええ!?べ、別にそんなことないよ！」
「どうだかね、だって。ふんっ！」
　……嫌われたらどうしよう。いや、ホント誤解なんだけどなあ。ほんとほんと。ちょっと胸のあたり見たとかそういうのは決して否定しないけどいやでもそれぐらいは気づいてほしくなかったというか気づいててもノーカンにしてほしかったといいますかだって僕だって男のはしくれですし、ねえ?
「俺のターン、ドロー！手札のレスキューラビットを召喚、効果を使ってデッキのジェム

ナイト・サフィアを２体特殊召喚する」
　そんな僕の沈んだ気持など知ったこっちゃない、という顔をした首から笛を下げたウサギがぴょこぴょこ跳ねてきてフィールドの真ん中で笛を吹くと、その音につられた水で楯を作ることができるジェムナイトの戦士が寄ってきた。
　レスキューラビット
　効果モンスター（準制限カード）
　星４／地属性／獣族／攻　３００／守　１００
　このカードはデッキから特殊召喚する事はできない。
　自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
　自分のデッキからレベル４以下の同名通常モンスター２体を特殊召喚する。
　この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。
「レスキューラビット」の効果は１ターンに１度しか使用できない。
　ジェムナイト・サフィア×２　守２１００
「そしてこのジェムナイト専用の融合、ジェムナイト・フュージョンを発動！場のサフィア２体を融合してジェムナイト・アクアマリナを特殊召喚！」
　ジェムナイト・アクアマリナ
　融合・効果モンスター

星６／地属性／水族／攻１４００／守２６００
「ジェムナイト・サフィア」＋「ジェムナイト」と名のついたモンスター
このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ
エクストラデッキから特殊召喚できる。
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、
相手フィールド上のカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。
「キャー三沢っち、後攻1ターン目から融合召喚なんてかっこいいー！」
「そんな手に俺は引っかからんぞと言ったはずだ！さらに墓地のサフィアを除外することで、再び回収したジェムナイト・フュージョンを発動！手札のジェムナイト・サニクスと場のアクアマリナを融合！来い、ジェムナイト・マディラ！」
三沢の場の青いジェムナイトと手札の赤いジェムナイトが融合し、高熱のため真っ赤に光る両腕と剣を持った炎のジェムナイトが胸の核石（コア）を光らせた。でも、なんでわざわざ融合してから融合なんて手間のかかる真似を？
『アクアマリナの効果で場を開けてからマディラで確実に一撃叩き込むか……いきなり２２００ダメージとかやってらんねえな。まあ、どうせ三沢が解説するからそれ聞いとけ』

「？」

「そしてこの時、アクアマリナの効果発動！このカードが場を離れたことで、相手のカードを1枚バウンスする。俺が選ぶのは、アマゾネスの聖戦士だ！さらにジェムナイト・マディラは、戦闘時に相手のあらゆるカードの発動を封じ込めることができる。この戦闘、確実にダメージを通らせてもらうぞ！」

おお、なるほど！これならあの伏せカードも手札誘発も気にせずにバトルができるってことか。しかし、よくまあこんなコンボ思いつくなあ。

「さすがにやるようね。だけど、まだ甘いわよ！メインフェイズ最後に速攻魔法発動、死者への供物！ジェムナイト・マディラには破壊されてもらうわ！」

死者への供物

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

次の自分のドローフェイズをスキップする。

「くっ……ターンエンドだ」

タニヤ　ＬＰ４０００　手札：４　モンスター：なし　魔法・罠：なし

三沢　ＬＰ４０００　手札：３　モンスター：なし　魔法・罠：なし

場：アマゾネスの里

「私のターン、ドロー……は飛ばしてメインフェイズ、もう一度アマゾネスの聖戦士を召喚して攻撃！聖剣の舞！」

アマゾネスの聖戦士　攻１７００→２０００→三沢（直接攻撃）

三沢　ＬＰ４０００→２０００

「三沢！」

「この程度案ずるな……俺の場に何もカードがない状態でダイレクトアタックを受けた時、冥府の使者はもう一人の使者を伴ってフィールドに特殊召喚できる！ゴーズ、カイエン特殊召喚！」

聖戦士が手にした細身の剣で三沢を切り裂いた瞬間、地面に伸びた三沢の影の色が急に濃くなったかと思うとその真下に闇に包まれた地下へ続く階段が現れ、その中から二体のモンスターがゆっくりと登ってきた。

冥府の使者ゴーズ

効果モンスター（準制限カード）

星７／闇属性／悪魔族／攻２７００／守２５００

自分フィールド上にカードが存在しない場合、

相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。

●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・光・星７・攻／守?）を1体特殊召喚する。

このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

●カードの効果によるダメージの場合、

受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

冥府の使者ゴーズ　守２５００

冥府の使者カイエントークン　守２０００

やれやれ、一時はどうなるかと思ったけどこれで状況はまた五分五分か、どちらかといえば三沢がちょっと有利になったわけだ。よかったよかった、このまま押し切ってくれるといいんだけど。

「カードを2枚伏せる。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ジェムレシスを召喚して効果発動、デッキからジェムナイト・ラズリーを手札に加えるぞ」

ジェムレシス

効果モンスター

星４／地属性／岩石族／攻１７００／守　５００
このカードが召喚に成功した時、
デッキから「ジェムナイト」と名のついた
モンスター1体を手札に加える事ができる。
「さらに墓地からジェムナイト・フュージョンの効果を使い、墓地のジェムナイトモンスターであるサフィアを除外することでこのカードを手札に加える。そして発動！手札のラズリーと、場の光属性のカイエントークンを融合！ジェムナイト・セラフィ召喚！」
カイエントークンの体が光に包まれ、光り輝くレイピアを掲げる天使の羽のようなものを背中に生やしたジェムナイト唯一の女戦士へと変わった。
ジェムナイト・セラフィ
融合・効果モンスター
星５／地属性／天使族／攻２３００／守１４００
「ジェムナイト」と名のついたモンスター＋光属性モンスター
このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ
エクストラデッキから特殊召喚できる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分のメインフェイズ時に1度だけ、

自分は通常召喚に加えてモンスター1体を通常召喚できる。
「さすが三沢っち、たった1ターンでモンスターをこんなに揃えるなんて！」
「その三沢っちというのをやめろ！……墓地に行ったラズリーは、墓地の通常モンスターを代わりに手札に加えることができる。俺はこの効果により、墓地では通常モンスターとして扱うジェムナイト・サニクスを手札に加えてセラフィの効果でそのまま通常召喚！」
ジェムナイト・サニクス　攻１８００
「うわー、三沢本気だね」
『久しぶりにここまでのソリティア見た気がするな。あっという間にモンスター０から４体か』
どこか緊張感の抜けた観戦ムードの僕らを尻目に、一人真面目に攻撃準備を整えていく三沢。これだけモンスターがいれば、ちょっとぐらい余裕もってもいいと思うけどなあ。
「……念のためゴーズは守備表示のままにしておくか。バトル！セラフィでアマゾネスの聖戦士に攻撃！」
「トラップ発動、アマゾネスの弩弓隊！全員迎撃しなさい、アマゾネスの聖戦士！」
タニヤの号令によって森の奥から数人の弓を構えた部隊が統率のとれた動きで並び、

一斉に三沢のモンスターに弓を撃った。２人のジェムナイト、ジェムレシス、そしてゴーズの体に数本の矢が突き刺さってゆき、身に着けていたマントなどがすっかりボロボロになってしまう。

アマゾネスの弩弓隊

通常罠

相手の攻撃宣言時に、自分フィールド上に「アマゾネス」という名のついたモンスターが存在する場合のみ発動する事ができる。

相手フィールド上の全てのモンスターは表側攻撃表示になり（リバース効果は発動しない）、攻撃力は５００ポイントダウンする。

相手は全てのモンスターで攻撃しなければならない。

ジェムナイト・セラフィ　攻２３００→１８００

ジェムナイト・サニクス　攻１８００→１３００

ジェムレシス　攻１７００→１２００

冥府の使者ゴーズ　守２５００→攻２７００→２２００

「残念だったな、セラフィの攻撃はもう止まらないぞ！」

タニヤの言葉通り、すっかりぼろぼろになった青いマントを羽織ったセラフィが若干ふらつく動きで放ったレイピアでの突きをあっさりかわした聖戦士が素早くセラフィ

の体を切り返す。普段の状態ならまだしも、全身に矢を受けた今の状態ではかわすことすらできなかった。

ジェムナイト・セラフィ　攻１８００（破壊）→アマゾネスの聖戦士　攻２０００

三沢　ＬＰ２０００→１８００

「くっ……だが、俺の場にはそれでもお前のモンスターの攻撃力を上回るゴーズがいる！ゴーズでもう一度聖戦士に攻撃！」

「残念ね、三沢っち！トラップ発動、奇策！私が捨てるのは攻撃力１５００、アマゾネスの格闘戦士！これで２度目の返り討ちだ！」

これまたぼろぼろになった服装のゴーズが手にはめたかぎづめで聖戦士の体を切り裂こうとするも、その攻撃すらもひらりとジャンプしてよけた聖戦士がその剣で上空からゴーズの体を貫く。聖戦士、さっきから攻撃パターンが妙に多いな。

奇策

通常罠

手札からモンスター１体を捨て、

フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力は、捨てたモンスターの元々の攻撃力分ダウンする。

冥府の使者ゴーズ　攻２２００→７００（破壊）→アマゾネスの聖戦士　攻２０００

三沢　ＬＰ１８００→５００

「ごめんね三沢っち、このターンの攻撃は強制なのー。さあ、残りはその２体ね」

例によってぶりっ子な声音でさらっと鬼畜なことを言うタニヤに対し、圧倒的に不利なはずの三沢は、なんとかすかに笑っていた。ちょ、ちょっと三沢？

「ふっ、もし俺がこの最悪の事態まで想定して対策していたとすれば、どうする？」

「え？」

「まさかここまでボロボロにされるとは思っていなかったから単なる保険のつもりだったが……まさか本当に使うことになるとは、な。わからないかタニヤ、これでお前の場に伏せカードはない。俺はその瞬間を待っていたんだ！ジェムナイト・サニクスで攻撃！」

「迎え撃ちなさい、聖戦士！」

「この瞬間、手札からジェム・マーチャントの効果発動！今はまだ通常モンスター扱いのサニクスの攻撃力は、これで１０００ポイントアップする！」

赤いモーニングスターを手にしたサニクスが、うなりをつけて鎖を振り回しながら聖戦士に戦いを挑んでいく。だが、その動きにもやはり精彩が欠ける。また攻撃がかわされるんだろうと思った瞬間、いきなりサニクスの胸の核石（コア）が真っ赤に輝いてそのスピードが跳ね上がった。聖戦士の剣がむなしく空を切り、がら空きになった胴にサニクスの

モーニングスターが命中する。
ジェム・マーチャント
効果モンスター
星３／地属性／魔法使い族／攻１０００／守１０００
自分フィールド上の地属性の通常モンスターが
戦闘を行うダメージステップ時、
このカードを手札から墓地へ送って発動できる。
そのモンスターの攻撃力・守備力は
エンドフェイズ時まで１０００ポイントアップする。
ジェムナイト・サニクス　攻１３００→２３００→アマゾネスの聖戦士　攻２０００
（破壊）
タニヤ　ＬＰ４０００→３７００
「やるわね三沢っち！だが、この瞬間にアマゾネスの里の効果が発動する！出てきなさい、アマゾネスの射手！」
タニヤの声を聞きつけ、ほかのアマゾネスよりも色白で体の線も細い弓を持った女戦士が森の奥から駆けつけてきた。
アマゾネス（アマゾネスアーチャー）の射手

効果モンスター
星４／地属性／戦士族／攻１４００／守１０００
自分フィールド上に存在するモンスター２体をリリースして発動する。
相手ライフに１２００ポイントダメージを与える。

「くっ……これはどうしようもない、ジェムレシスで攻撃」
ジェムレシス　攻１２００（破壊）→アマゾネスの射手　攻１４００→１６００
三沢　ＬＰ５００→１００
「さあ、これで残るモンスターは私のターンに攻撃力１３００に戻るサニクス１体のみ。潔く負けを認め、サレンダーしたらどうだ？」
「誰が！まだ俺には最後の賭けが残されている、馬の骨の対価を発動！」
三沢が発動したのは、自分の場の通常モンスター１体をリリースすることでカードを２枚引くことができるドローカード、馬の骨の対価。そこそこ使い勝手のいいドローソースだ、という程度の知識は僕だって持ってるけど、このタイミングで使うのは危険すぎる。
もちろんこのプレイングは確率や計算を重視する三沢のスタイル通りの戦法だ。ここでターンエンドして確実に負けるよりは、２枚ドローして最後の賭けに出る方がいい

に決まってる。だけどそれはただ計算づくなんじゃなくて、一回一回のドローに全てを賭けてる十代や僕の戦い方に似たところもある。自分の引くカードを、自分のデッキを信じる戦い方には運がいる。計算と運、この二つを同時に使えることが三沢の最大の強みだと思う。僕なんかはいまだに運と勘とその場の閃きだけで頑張ってるようなものだから、そういうところが僕にとっては羨ましい。

「いくぞ、タニヤ……ドロー!!!」

素早く引いた2枚のカードをちらりと見て、三沢はあくまでも表情を崩さない。

「カードを2枚セットする。これでターンエンドだ」

タニヤ　ＬＰ３７００　手札：０　モンスター：アマゾネスの剣士（攻）魔法・罠：なし

三沢　ＬＰ２００　手札：０　モンスター：なし　魔法・罠：２（伏せ）

場：アマゾネスの里

「さっき何を引いたかは知らないが、このターンで終わりだ!アマゾネスの射手で直接攻撃!」

「トラップ発動、攻撃の無力化!このターンのバトルフェイズはこれで終了だ!」

「ならばメイン2にアマゾネスの射手をリリースし、アマゾネス王女を召喚!この壁、超

えられるものなら超えてみろ！」
アマゾネス王女（クイーン）
効果モンスター
星６／地属性／戦士族／攻２４００／守１８００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
自分フィールド上に存在する「アマゾネス」と名のついたモンスターは
戦闘では破壊されない。
「戦闘破壊されない攻撃力２４００か……甘いな、タニヤ。俺を倒しきることができず、この伏せカードを残した状態でターンを終了した時点で、お前の負けは既に決まっている！」
「なんだと!?」
「証拠を見せてやろう。永続トラップ発動、零式魔道粉砕機！」
三沢が発動した最後の伏せカードの古めかしい機械が、ガタガタと音を立てて蒸気を吹き上げながら起動する。
「このカードは、自分の魔法カードを１枚捨てることで、相手に５００のバーンダメージを与える効果を持つ」
「だが、お前の手札は１枚のはず！」

『いや、魔法カードに限って言うなら最低でも５枚、だな』
え、５枚……えっと、どゆこと？
「墓地からジェムナイト・フュージョンの効果を発動、サニクスを除外してこのカードを手札に戻す。そして零式魔道粉砕機の効果で射出、ファイヤー！」
タニヤ　ＬＰ３７００→３２００
「ぐっ……そうか、そういうことか！」
「そういうことだ。今ならサレンダーを受け付けてもいいが……」
「いや、私とて誇り高きアマゾネスの末裔！勝負から逃げはしないから存分にかかってこい、三沢大地！」
「いいだろう、墓地からジェムナイト・フュージョンの効果発動！マディラを除外して手札に戻し、ファイヤー！」
タニヤ　ＬＰ３２００→２７００
「墓地のアクアマリナを除外し、ジェムナイト・フュージョンを射出！ファイヤー！」
タニヤ　ＬＰ２７００→２２００
「墓地のラズリーを除外！ファイヤー！」
タニヤ　ＬＰ２２００→１７００
「墓地のセラフィを除外！」

タニヤ　ＬＰ１７００→１２００
「こ、これでお前の墓地のモンスターは品切れのはずだが……」
「無論、対策はある。さっきはああ言ったが、本当はこのドローフェイズでこのカードがなかったら俺の負けだったな。速攻魔法、異次元からの埋葬発動！除外されたサフィア２体とラズリーを墓地に戻し、すべてジェムナイト・フュージョンのコストにする！ファイヤー！」
異次元からの埋葬
速攻魔法（制限カード）
ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、
そのカードを墓地に戻す。
タニヤ　ＬＰ１２００→７００→２００→０

「私の負け、か」
「いや、もし零式魔道粉砕機がなかったら俺が圧倒的に不利だった。俺の計算をお前の戦法が上回ったのは事実だ」
「だが、それを引いたのもお前の実力……では、私は精霊界にでも帰るとしよう。この

コロッセオは好きに使ってくれ。さらばだ、三沢大地」

そう言うと、みるみるうちにタニヤの姿が一匹のメス虎へ変化していく。呆然としている僕らをよそに、いつの間にか近くに寄ってきていたバースとタニヤは僕らに背を向けてゆっくりと去っていった。その姿が完全に見えなくなったあたりで、思わず気になったことをぽつりとつぶやいた。

「好きに使ってくれって……こんな校舎から絶妙に距離が離れた建物どう使えっていうのさ……」

レッド寮が限界を迎えたあたりで新生オシリスレッドにでもしろと?あ、でもそれはそれでありかも。敷地広いし。とりあえず、月一ぐらいで掃除しに来ようかな。維持管理が大変そうだ。

ターン２８　蘇った少年と不死を目指した男

とある朝。のんびり朝ご飯を食べながら、なんだかこの数日間はずいぶんとイベント盛りだくさんだったなあ、なんてことをぼんやり考えていた。なにせ黒蠍団の面々に鍵を盗まれそうになったけど最終的には万丈目、もとい名探偵万丈目サンダーの活躍によってレッド寮に住みついてもらったり、アビドス三世とかいう正直聞いたことない名前の昔の王様がスピリッツ・オブ・ファラオを引き連れて十代と戦ったり、コスプレデュエル大会にブラマジガールが出てきたり。ちなみに僕はジョーズマンのコスプレで出てました。

「よう、清明」

「あ、おはよ万丈目。十代たちはまだ？」

寝てるのか、という意味を込めて軽く上を指さすと、無言でうなずいて肯定する万丈目。まったく、こっちは最近始めたレッド寮すぐそこの土地で（勝手に）始めた畑の世話とかようやく直った投網の練習とかで忙しいってのに。

「……なんか理不尽。とゆーことでこれはもらってこっと」

言いながら、盆の一つから焼き魚を一匹くすねる。いっただきまーす。

「ふむ、じゃあ俺も」
　万丈目が取ったのは、味噌汁と納豆。それぞれ別のトレイからとってある程度のバランスをとるあたり、こいつもなんだかんだ言っていいやつだと思う。
　それからしばらくの間、特にこれといった会話もせずに無言でむしゃむしゃと朝ご飯をほおばった。普段なら僕ら二人でもなにがしかの会話があるもんなんだけど、何せ今日はいつもとは勝手が違う。僕ら全員が隠してはいるけど、正直不安でいっぱいなのだ。
「ごちそうさまでした。ねえ、万丈目」
「なんだ」
「大徳寺先生、どこにいるんだろうね」
「……さあな。ほら、早く出発しないと遅刻するぞ」
「そう、だね」
　昨日から姿を見せない、大徳寺先生。夕飯も朝ごはんも食べに来てないけどもしかしたら、授業の準備をしてて朝早くから学校にいるのかもしれないし。まさかあの先生に限って、誰にも何も言わずにセブンスターズにケンカを売るなんてありえない……はず。
「よし、今日も行ってきます！」

『おー、行って来い』
　とりあえず僕に今できることなんて、ユーノの声を後ろに聞きながら、一時間目の錬金術の授業に大徳寺先生が出ることを願いつつ遅刻しないように校舎まで急ぐことだけだ。……あ、十代起こすの忘れてた。ごめんね。

「やっぱダメ、か」
「来ないね、だってさ」
「別にお前のことを疑ってるわけじゃないが、本当に昨日から大徳寺先生のことは見てないのか？」
　三沢、その質問はこれで3回目だよ。まあ、その気持ちもわからないではないので素直に同じことを言うだけにしておくけど。
「うん、昨夜からいないんだよ。昼までは間違いなくいたのに」
　昼間購買に行ったときにトメさんにもりそば頼んでるのが電話越しに聞こえたから間違いない。しかしお蕎麦も取り扱ってるって、無駄にレパートリー広いねこの学校。まあ海の中にぽつんと浮かぶ離れ島だし、それぐらいなきゃやってらんないけど。そうやって教壇に誰もいない教室で座りながらむなしくだべってると、なぜかクロノス先生

が入ってきた。行方不明の大徳寺先生の代わりに錬金術の授業をすることになった、とのこと。あのオカルト嫌いの人がねえ、ちゃんとした錬金術の授業なんてできるんだろうか。

……結果？なんだかよくわかんないぐだぐだな流れで終わったよ！錬金術のマークとかいうのは覚えたけど。あんな『丸書いてちょん』で終わるようなマークなら僕だって書けるな。そしてそのままの流れで今日の授業は終わり。土曜日だからね、午前中で授業はなくなるのだ。いつもだったら寮でゴロゴロしたりデュエルしたりするところだけど……、

「わかってるな、お前ら」

「「「もちろん！」」」

万丈目隊長（仮）の言葉に合わせて返事を返す、我らオシリスレッドのいつもの４人。何があったかは知らないけど大徳寺先生ひとりで行ける場所なんて限られてるんだ、絶対僕らで探し出してやる！

「それで隊長、質問でーす！」

「なんだ、清明隊員」

「まずどこを探すんでありますか！」

「……そうだな、まずはヒントになるものがあるかもしれんし、大徳寺先生の部屋か

らあたってみるか」

　というわけで、意外とまともだった名探偵?なサンダーの言葉に従って大徳寺先生の部屋の前まで来てみたのはいいのだが。

「で、結局これだもんなー。なんでこうこの寮はすることなすこと全部犯罪チックなのかね。あ、ご苦労様サッカー」

「うるさい!そもそも実行犯はお前らだろうが」

　なんのことはない。鍵がかかっていた部屋の扉を開けるために精霊体のシャーク・サッカーを先に中に入れ、そのまま中で実体化して鍵を解除してもらったのだ。まあ非常時だからしょうがないね。怒られたらその時は万丈目がやれって言った、とでも言っておこう。どれ、なにかあるといいなー。

　そして1時間後。ある地図を囲んでその周りに座っていた僕らは、一斉にその地図のある一点を指さした。

「森だな」

「森だね」

「森ッスね」

「森が怪しいな」

「森っぽいんだな～」

『……』

それは、このデュエルアカデミアのある島全体の地図。見慣れた校舎、火山などの地形の中に一か所だけ、ついさっきの授業で覚えた錬金術マークが手書きで書かれていたのだ。そしてその場所が、今言った森の中。正確に言うと、この位置は洞窟かなんかがあるんだっけか。

「よし、これから俺たちはこの位置に向かう！大徳寺先生をなんとしても探し出すぞ！」

「「「おー！」」」

なんか妙にしゃべらないユーノが気になるけど、今はそれより先生優先！レッツゴー！

「ねえ万丈目」

「サンダー」

「……ねえサンダー」

「なんだ」

「迷った……よね」

「ノーコメントだ」

そう言って、話は終わりだといわんばかりにそっと目をそらす万丈目。迷ってるな。これまではまだもしかしたら迷ってないんじゃないかっていう希望もあったけど間違いない。完全に迷子になってやがる。

「まったく……」

「キャーーーーー!!」

そのまま文句の一つでも言ってやろうとした時、いきなり悲鳴が響いた。あの声……明日香!?慌てて声の方向に駈け出そうとしたその瞬間、ポケットにねじ込んでおいた僕のＰＤＬが鳴り響いた。相手は……夢想だ！

「はいこちら清明、もしもしどうしたの!?今ちょっと忙し…！」

『お願い清明！今森の中にいるんだけど、明日香とはぐれちゃった、だって！それで探してたら悲鳴が聞こえてきて……細かいことは後で話すから、とにかく森まで来て、だって……さ?』

「あれ。えっと、やあ、夢想」

歩きながら話してたら案外すぐ近くにいた夢想に話を聞いてみると、なんでも明日香の部屋が誰かに荒らされて犯人が森に駆け込むのが見えたから追いかけてきたらしい。ふむ、大徳寺先生がいないのと何か関係が……まさかね。

「ちょうどいるなら話は早いね、だってさ。明日香っ！」

そう言って走っていくのを慌てて追いかける。と、いきなり前を行く夢想の足がぴたりと止まった。そのままぶつかりそうになるのをなんとかストップし、背中越しに何があるのかを見てみる。するとそこに落ちていたのは、誰かのデュエルディスクと散らばったカード。恐る恐るそのなかの何枚かをひっくり返してみると、それは案の定『エトワール・サイバー』『サイバー・チュチュ』『スケープ・ゴート』『プリマの光』『ドゥーブルバッセ』等々、明日香のカードばかりだった。

「一体、明日香に何が……」

大徳寺先生の行方不明に加え、明日香の身にデッキを放り出してどこかへ行くほどの何かが起きた。これにはさすがの十代も警戒の色を強くし、翔に隼人も不安そうにあたりを見回している。あれ？

「ねえ十代、万丈目、見なかった？」

一人足りない。ついさっきまでいたはずの万丈目までどこかに行ってしまった。万丈目は、普段の言動とは裏腹に面倒見がかなりいい。すぐ近くで悲鳴が聞こえたのを無視したり逃げ出したりするような男じゃあないはずなんだけど。

「うわあああーーーっ！」

ってまた悲鳴!?しかも今度は万丈目の声だ！

「行くよ、みんな！はぐれないでね！」

本当は一人で突っ走って様子を見に行きたいところだけど、さすがに二回目だからある程度警戒する。一人でいるのは論外。助けに行ってこっちがやられました、じゃああんまりすぎる。もうすぐそっちまで行くから、それまで何やってんのか知らないけど何とか持ちこたえてよ万丈目！

「っ！遅かった……」

駆け付けた湖のほとりに散らばっていたのは、これまたデュエルディスクに『アームド・ドラゴン　ＬＶ７』『レベルの絆』『おじゃマンダラ』『おジャマ・デルタブリーフ！』『Ｘ―ヘッド・キャノン』……ああこれ間違いない、万丈目のカードだ。アームドとＶＷＸＹＺは別のデッキに分けてたはずだから、デッキ二つが混ざって散らばってるんだろう。

「な、何か二人の手がかりは……」

『そこだ。こっからでも見えるだろ、アムナエルのマーク』

またいつの間にかそばに来ていたユーノが指差した方を見ると、確かにどういう原理なのか、空中に浮かぶ黄色い丸書いてちょんのマークがひとつ。それを僕が見た瞬間、激しい音とともに海からこの島を囲むように計３本の光の柱が立ち上がった。え、ちょ、もうどうなってんの!?

『三幻魔……ふん、若輩者が粋がった演出を』

「あれ、いたのチャクチャルさん？」
『最初からだ。それはどうでもいいが、今三幻魔の封印は７つ中３つが解放された。あの光はその目印だろう。……私がいつだって貴方にはついているが、ゆめゆめ油断しないように』
　なるほど、つまり万丈目と明日香の鍵はもう取られちゃったと。あと一本はカイザーの分だろうし。だけど今は、そんな悠長なことを考えてる場合じゃない。光の柱を見て一番早く行動を起こしたのは、いつも通り十代だった。
「清明、こうなったら俺らで行ってみようぜ！きっと大徳寺先生もあの中にいるはずだし、こうなると万丈目や明日香もあの中にいる可能性が高い！」
「う、うん！」
　僕らが決意を固めると、まるでそれに反応するかのように錬金術師アムナエルのマークが空中を明滅しながら移動していった。
「ついて来い、ってことなのかな？だってさ」
「上等さ、最後のセブンスターズも返り討ちにしてやる！」

「しっかし、まーたこの廃寮に戻ってくるとはねぇ」

「くっそー、中に入ったらマークが消えちまった。そういやお前、ついこの間ここで幽霊に会ったんだってな」
「うん。いい人だったんだけどねー」
「初耳。だってさ。あとで教えてね、清明」
「へえ、彼女さんかい？それにしても今度はずいぶん大所帯じゃないの。自分びっくりしちゃったよ」
「ちなみにその時の幽霊って、どういう奴だったんだな～……うん？」
　あれ、この声ってもしかして？
『む、出たな幽霊』
「君に言われたくないけどね。みんなの期待にお応えして、自分の率いるゴーストリック軍団ただいま参上ー♪なんちって」
「い、いいいい稲石さんっ!?」
　いつの間にかナチュラルに僕らに紛れ込んでいて、やっほーと明るく手を振るのは身元も経歴も不明だけどデュエル脳では一級品、謎の廃寮に住むゴーストリック使いの幽霊、稲石さん。びっくりすんなあもう。
「えっと、どしたんですかこんなところで」
「なーに言ってんの。ここ自分が住み着いてるんだよ？むしろいない方がおかしいっ

しょ。あ、清明以外の人には初めましてだね。廃寮住込みの幽霊、稲石です。どもよろしく」
「えーと……初めまして、なんだって」
「ど、どうもなんだな」
「初めましてッス」
ぎこちないなりに自己紹介を終える夢想たち。相手が幽霊だからある程度ぎこちなくなるのは仕方ないんだろう。僕も最初に気づいたときは本気で怖かったから人のことは言えないし。
「それで君たち、いったい何しに来たんだい？」
セブンスターズとかのことも全部ばらしちゃっていいんだろうか、と素早くアイコンタクトをかわす。いいのかなあっさり言っちゃって、まあいいんじゃない悪い人じゃないし。
「実はかくかくしかじか、ってわけ。ねえ稲石さん、何か知ってない？」
「まるまるうまうま。なるほど、そういうことか。ねえ君たち、実は自分に心当たりが一つあるんだ。つい昨日のことなんだけどいきなり地下通路の一部が何者かに爆破されて、その向こう側に隠し通路が見つかったんだよ。いかにも怪しいからスルーしてたんだけど、たぶんそこが怪しいと思う。案内するからついてきて」

そういうが早いが、ひらりと体を反転させて相変わらず足音ひとつ立てず、もっと言うと足すら動かさずにすうっと床の上を滑るように先頭に立つ稲石さん。願ったりかなったりだ、ここは迷わずついてくしかないね。と、そんな僕の服の襟をぐっとつかんだ隼人が、稲石さんに聞こえないようにそっと耳打ちしてきた。

「（いいのか、清明？なんか話ができすぎてる気がするけど、本当に信用して大丈夫なのか～？）」

なんだ、何かと思えばそんなことか。

「大丈夫、僕は稲石さんを信じてるよ。だって、僕はあの人とデュエルして友達になった……かどうかは向こうがどう思ってるかわかんないけど、あの人が信用できるってことはわかったんだ。十代のいつも言ってる『デュエルすれば分かり合える』ってのも、あながち間違いじゃないのかもね」

「ここ、さ。ここから先には自分もまだ入ったことがないんだけどね」

「なるほど、じゃあ……」

ここから先は僕らだけで、と言おうとしたのを遮るようにして、素早く言葉を続ける稲石さん。

「だから、自分もついてくよ。そもそも、ここは自分の家なんだ。勝手に荒らされていい気はしないしね」
「あー、はい。そですか。じゃあ行きましょ」
　この人の性格からいって、何言ったって勝手についてくるだろう。こっちだって急いでるんだし、無駄に言い争ってる暇はない。覚悟を決めて、僕らはゆっくりとその通路に足を踏み入れた。
「と思ったらすぐ出口だった」
「まだ3分も歩いてないね。待てよ、さっきの通路のあの位置からこの向きに直線で3分弱……駄目だ、どうしても計算が合わない。こんな位置に部屋があるはずないのに」
　いぶかしむ稲石さんだけど、前に僕が来たとき存在するはずない場所の部屋に案内してデュエルしたどっかの誰かとはどっこいどっこいの不気味っぷりだと思う。少なくともお前が言うな。
「ね、ねえ、あれ見てよ」
　部屋の中をきょろきょろと見回していると、翔が何かを見つけたようだ。そっちの方を向いてみると、そこにはいかにもな棺桶が壁に立てかけてあった。……ここって一応は学校の一部だよね。もうなんでもありだなデュエルアカデミア。いまさらといえ

ばその通りだけど。
「入ってますかー、失礼しますよ、っと」
　とりあえず開けてみる。いやだってほら、これがお約束ってもんでしょ。まーたカミューラみたいなのが入ってたら速攻で閉めるつもりだったけど、そこに横たわっていたのはスーツ姿でメガネをかけたミイラ。ミイラぁ!?
「なんじゃこりゃー!?ってあれ、この顔もしかして、大徳寺先生?」
「よく来たな、七星門の鍵の守護者よ」
　そのミイラについてはいろいろ考えたいこともあったが、どうやらその時間はないらしい。コツ、コツ、と静かに足音を立てながら近寄ってきたフードにマスクの男、こいつが最後のセブンスターズだろう。
「一応確認させてもらうよ。お前が明日香や万丈目をさらって大徳寺先生をこんな姿にしたのか!」
「最後の一つは間違っている。そのミイラは、はるか昔からここにあったものだ。だが、彼らを襲ったのは確かに私だ。返してほしければ、私と闇のデュエルだ!」
「上等っ!セブンスターズ、また返り討ちにしてやる!」
「自己紹介がまだだったな。私の名はアムナエル、そして私こそが最後のセブンスターズ!」

「「デュエル！」」
「先行は私がもらう！ドロー、錬金生物　ホムンクルスを召喚！カードを２枚伏せてターンエンドだ」
　錬金生物　ホムンクルス　攻１８００
　アムナエルがまず出したのは、黒い目隠しをつけた片腕と片足が金属のようになっているほぼ全らの人間型モンスター。攻撃力１８００はなかなか大きいけど、このまま押し切る！
「ドロー、アームズ・シーハンターを召喚！そして手札から爆征竜―タイダルの効果発動、このカードと水属性を墓地に送ることでデッキのモンスターを一体墓地に落とすことができる。この効果で僕が手札とデッキからそれぞれ落とすのは、手札がオイスターマイスターでデッキからがハリマンボウだよ。その効果を受けて、ホムンクルスの攻撃力は５００ダウンしてもらう」
　アームズ・シーハンター　攻１８００
　ハリマンボウ
　効果モンスター
　星３／水属性／魚族／攻１５００／守　１００
　このカードが墓地へ送られた時、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。
錬金生物　ホムンクルス　攻１８００→１３００
「そこにそのまま攻撃！」
狙い澄まして放たれた必殺の矢が、大量の針を受けて弱体化したホムンクルスめがけて一直線に迫っていく。が、命中する寸前にアムナエルの前に怪しく音を立てる機械のような何かが出現し、その一撃を止めてしまう。
「永続トラップ発動、エレメンタル・アブソーバー！私は手札の水属性モンスター、水の精霊　アクエリアを除外することでその攻撃を無効にする！」
「なっ!?」
エレメンタル・アブソーバー
永続罠
手札のモンスターカード1枚をゲームから除外する。
この効果によって除外したモンスターと同じ属性を持つ相手モンスターは、
このカードがフィールド上に存在する限り攻撃宣言をする事ができない。
「さあ、どうするかね？」
「だったらしょうがない。カードを2枚セット、これで僕はターンエンド」

アムナエル　ＬＰ４０００　手札：２　モンスター：錬金生物　ホムンクルス（攻）
魔法・罠：エレメンタル・アブソーバー（水）、１（伏せ）
清明　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：アームズ・シーハンター（攻）　魔法・罠：２（伏せ）
「ならば私のターン。この伏せカード、マクロコスモスを発動！そしてその効果により、デッキから原始太陽ヘリオスを特殊召喚する！見るがいい、これが私のたどり着いた錬金術の力だ！」
アムナエルがマクロコスモスを発動した瞬間、不思議なことが起こった。さっきまで洞窟の中の部屋にいたはずなのに、いきなり周りの風景が宇宙になったのだ。ソリッドビジョンでもなさそうだし、一体何が起こってるってのさ！
「今、我々のデュエルは人間の世界を飛び越え、宇宙へと転換した。大宇宙（マクロコスモス）……このカードがある限り、お互いの墓地へ行くカードはすべてゲームから除外される。そして先ほども言ったがこのカードの発動時、私は原始太陽ヘリオスを特殊召喚できるのだよ」
原始太陽ヘリオス
効果モンスター
星４／光属性／炎族／攻　　？／守　　？

このカードの攻撃力・守備力は、
ゲームから除外されているモンスターの数×１００ポイントになる。
原始太陽ヘリオス　攻０→１００
「だ、だけど攻撃力１００ならこのまま」
「まあそう慌てるな、悪い癖だぞ。手札からマジックカード、闇の誘惑を発動！カードを２枚ドローし、手札のネクロフェイスを除外！」
闇の誘惑
通常魔法（制限カード）
デッキからカードを２枚ドローし、
その後手札の闇属性モンスター１体を選んでゲームから除外する。
手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。
ネクロフェイス
効果モンスター（制限カード）
星４／闇属性／アンデット族／攻１２００／守１８００
このカードが召喚に成功した時、
ゲームから除外されているカード全てをデッキに戻してシャッフルする。
このカードの攻撃力は、この効果でデッキに戻したカードの枚数×１００ポイント

アップする。
　このカードがゲームから除外された時、
　お互いはデッキの上からカードを５枚ゲームから除外する。
「この効果で、お互いはデッキの上からカードを５枚除外する。私の除外するカードの中のモンスターカードは４枚だ」
　デッキの上から５枚……ウミノタウルス、氷霊神ムーラングレイス、ジョーズマン、竜宮の白タウナギ、グリズリーマザー。ってちょっと待てぇ!全部、よりにもよって全部モンスターって。そんなにデッキバランス悪くした覚えはないよ!
　原始太陽ヘリオス　攻１００→１０００
「そして私は、カオス・グリードを発動。カードをもう２枚ドローする」
　カオス・グリード
　通常魔法
　自分のカードが４枚以上ゲームから除外されており、
　自分の墓地にカードが存在しない場合に発動する事ができる。
　自分のデッキからカードを２枚ドローする。
「そして私はこのターン、まだ通常召喚を行っていない。錬金生物　ホムンクルスをリリースし、黄金のホムンクルスをアドバンス召喚!そして錬金生物がリリースされ除外

されたことで、ヘリオスの攻撃力もまた上がる」
　同じホムンクルスと名がついてはいるが、さっきのホムンクルスは割と人間に近かった。服着てなかったけど。だけど今度は違う、金色に光り輝くゴーレムだ。
　黄金のホムンクルス
　効果モンスター
　星６／光属性／戦士族／攻１５００／守１５００
　このカードの攻撃力・守備力は、
　ゲームから除外されている自分のカードの数×３００ポイントアップする。
　黄金のホムンクルス　攻１５００↓４５００　守１５００↓４５００
　原始太陽ヘリオス　攻１０００↓１１００
「そして速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動！私のエレメンタル・アブソーバーと君の伏せカード１枚を破壊する」
　２本の竜巻がフィールドを駆け抜け、それぞれ１枚ずつカードに襲い掛かる。だけど、それはむしろラッキーだった。なにせ、ノーコストで厄介なエレメンタル・アブソーバーがなくなってくれたのと同じだからだ。
「チェーンしてトラップ発動、八咫烏の骸！残念ながらスピリットモンスターはいないから、一つ目の効果でカードをドロー！」

ダブル・サイクロン
速攻魔法
自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚と、
相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊する。
八咫烏の骸
通常罠
次の効果から1つを選択して発動する。
●自分のデッキからカードを1枚ドローする。
●相手フィールド上にスピリットモンスターが表側表示で
存在する場合に発動する事ができる。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。
「まあいい。ダブル・サイクロンの発動により、除外ゾーンに送られた私のカードは2枚増えた。ホムンクルスの攻守がもう600ポイントアップする」
黄金のホムンクルス　攻4500↓5100　守4500↓5100
「行け、黄金のホムンクルス!ゴールデン・ハーヴェスト!」
「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ!その攻撃を止めて、800のダメージを受けて

もらう！」
ポセイドン・ウェーブ
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター１体の攻撃を無効にする。
自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが表側表示で存在する場合、
その数×８００ポイントダメージを相手ライフに与える。
アムナエル　ＬＰ４０００→３２００
「むっ……」
大津波の一撃を受けて返り討ちにあった黄金のホムンクルスの巨体がバランスを崩して倒れ、その衝撃でアムナエルがかぶっていたマスクがポロリととれる。
「ちょうどいい、その素顔を見せてもらおうか！って、そんな、まさか……」
そこから見えた顔は、まぎれもなく大徳寺先生のもの。そんな、でも、さっきのミイラが大徳寺先生ってことは。
「偽物？」
「いや、違う。そこでミイラになっている男と、今こうして君とデュエルしている私は同一人物だ。私の名はアムナエルであり、大徳寺でもある。詳しい説明は省くが、私のこ

の体はホムンクルス、の一種、平たく言えば人造人間だ。もっとも、もう長く持ちそうもないがな」
「そんな、大徳寺先生、ずっと嘘ついて裏切ってたっての!?」
「今はそう思ってくれて構わない。君の性格上、その方がデュエルに熱が入るだろうからな。さあ、これは私からの最後の試験だ！落第したくなければ、私を倒してみろ！」
「先生、いやアムナエル、僕にはもう何が何だか分かんないよ……」
　これは紛れもない本音。今日一日で、色々なことがありすぎた。そんな、いくらなんでも話が急すぎる。
「だからどうした。私は君の準備が整うのを待つつもりはないぞ！」
「……わかってる、それはわかってるよ。だから僕は、難しいことは考えない。今の僕にできることは、せめて万丈目たちを助け出すこと！そのためにアムナエル、お前はここで絶対倒す！ドロー！マジックカード、アクア・ジェット発動！シーハンターの攻撃力は、この効果で１０００ポイントアップ！」
　アクア・ジェット
　通常魔法
　自分フィールド上の
　魚族・海竜族・水族モンスター１体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。
アームズ・シーハンター　攻１８００→２８００
「そんな程度では、私のホムンクルスを倒すことなどできないぞ！」
「わかってらい！僕はここで手札のモンスター、ＢＦ―疾風のゲイルを通常召喚！」
前にサンダー四天王最強の男、鎧田からもらったＢＦの名前を持つ鳥のモンスター。
この子の力なら、ホムンクルスだって倒すことができる！
ＢＦ（ブラックフェザー）―疾風のゲイル
チューナー（効果モンスター）（制限カード）
星３／闇属性／鳥獣族／攻１３００／守　４００
自分フィールド上に「ＢＦ―疾風のゲイル」以外の
「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚できる。
１ターンに１度、相手フィールド上のモンスター１体を選択して発動できる。
選択した相手モンスターの攻撃力・守備力を半分にする。
「そしてゲイルの効果発動、黄金のホムンクルスの攻守を半分にする！これで黄金のホムンクルスの攻守は２２５０だ！」
「何!?」

ゲイルがその翼をはためかせ、名前通りの黒い疾風を巻き起こすとその風を受けたゴーレムの体の光沢が徐々に弱くなっていき、すっかりくすんだ色になっていった。

黄金のホムンクルス　攻４５００→２２５０　守４５００→２２５０

「今だ、シーハンター！」

アームズ・シーハンター　攻２８００→黄金のホムンクルス　攻２２５０（破壊）

アムナエル　ＬＰ３２００→２６５０

「黄金のホムンクルスが除外されたことで、ヘリオスの攻撃力もまた上がるが……」

「無論、そのままゲイルで攻撃！ブラック・スクラッチ！」

ＢＦ―疾風のゲイル　攻１３００→原始太陽ヘリオス　攻１１００→１２００（破壊）

アムナエル　ＬＰ２８５０→２７５０

「どうだ！これでターンエンド！」

アムナエル　ＬＰ２７５０　手札：２　モンスター：なし　魔法・罠：マクロコスモス

清明　ＬＰ４０００　手札：１　モンスター：アームズ・シーハンター（攻）、ＢＦ―疾風のゲイル（攻）魔法・罠：なし

「私のターン！手札からもう１枚のカオス・グリードを発動して２枚ドロー、そして速攻

魔法、グランドクロスを発動！場のモンスターをすべて破壊し、３００ポイントのダメージを与える！」

周りをふわふわと漂っていた星がまるで十字状に並んだかのような形になり、ぐにゃり、と空間がゆがんでシーハンターとゲイルの体が爆発した。まずい、これでモンスターは一気に全滅だ！

グランドクロス

速攻魔法

自分フィールド上に「マクロコスモス」が

存在する時に発動する事ができる。

相手ライフに３００ポイントダメージを与え、

フィールド上のモンスターを全て破壊する。

清明　ＬＰ４０００→３７００

「そして次元の歪みを発動！今私の墓地にカードはない、よって除外された原始太陽ヘリオスを特殊召喚する！」

次元の歪（ひず）み

通常魔法

自分の墓地にカードが存在しない場合に発動する事ができる。

除外された自分のモンスター１体を選択し、
自分のフィールド上に特殊召喚する。
原始太陽ヘリオス　攻０→１４００
「ヘリオス？黄金のホムンクルスじゃなくて？」
「ふ、あのカードは所詮錬金術を完成させる過程での試験体にすぎない。私がたどりついた錬金術の究極の形こそがこのカード、ヘリオスシリーズだ！自分の場の原始太陽ヘリオス１体をリリースすることで、このカードは特殊召喚できる！来い、ヘリオス・デュオ・メギストス！」
ヘリオスの体が光に包まれて頭の太陽がより大きく赤くなり、その下の胴体はむしろずんぐりむっくりした体系へと進化していった。
ヘリオス・デュオ・メギストス
効果モンスター
星６／光属性／炎族／攻　　？／守　　？
このカードは自分フィールド上の「原始太陽ヘリオス」１体を
生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。
このカードの攻撃力と守備力は、
ゲームから除外されているモンスターカードの数×２００ポイントになる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた場合、
エンドフェイズ時に攻撃力・守備力を３００ポイントアップさせて特殊召喚される。
ヘリオス・デュオ・メギストス　攻０→２８００　守０→２８００
「やっぱホムンクルスのほうが攻撃力高いんじゃ……」
「わからないか、私は君自身に興味があるんだよ」
はい？いきなり何を言ってるんだこの人は。そんな思いが顔に出ていたのだろう、やれやれと息をついて説明してくれた。
「正確に言うと、君自身の体に、だ。一度死んでおきながら遠い異国の地で伝説とされた邪神の力により再び蘇り、さらにその力の一部を秘めた人間の体というのはいったいどれほどの変化があるのか。死人を復活させることと不死の人間を作ること、この二つはとてもよく似ている。つまり遊野清明、君という存在はある意味錬金術がずっと追い求めてきたものの一つの形というわけだ」
『……私のことか。誤魔化すのは無理そうだな』
うーん、チャクチャルさんがそう言うんなら無理なんだろう。とはいえさすがに参ったな、できれば後ろの夢想たちに教えたい話じゃなかったんだけど。……怖がられたり怯えられたりするのは、寂しいから、嫌だ。
「したがって私は、私の見つけた私なりの錬金術最高の答えをもってして君とデュエル

がしたい。それが錬金術師としての私の、つまらないちっぽけな意地だ。ヘリオス・デュオ・メギストスで攻撃！ウルカヌスの炎！」

ヘリオス・デュオ・メギストス　攻２８００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ３７００→９００

「あ……熱っ！」

闇のデュエルならではの強烈な痛みと熱さに、ライフの余裕も一気になくなり立っているのもやっとの状態になる。でも、ここで僕が負けたら万丈目たちがどうなるかもわからない。まだ倒れるわけにはいかないんだよねっ！

「さあアムナエル、続きと行こうか！」

「ほう、目つきが変わったな。だが、私とて君に関してはいろいろ研究している。具体的に言うと、君はこういう状況に追い込まれるとかなり高い確率で極端に堅い守りを固めるか、一気に反撃に出るかの２択をとる。そこで私は、一時休戦を発動する。これでターンエンドだ」

一時休戦

通常魔法（制限カード）

お互いに自分のデッキからカードを１枚ドローする。

次の相手ターン終了時まで、お互いが受ける全てのダメージは０になる。

「一気に押し切られるよりは守りを固められる方がましってわけね。僕のターン！シャクトパスを守備表示で召喚、さらにこっちも一時休戦返し。カードをセットしてターンエンド！」

シャクトパス

効果モンスター

星４／水属性／魚族／攻１６００／守　８００

このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

このカードを装備カード扱いとしてその相手モンスターに装備できる。

この効果によってこのカードを装備したモンスターは

攻撃力が０になり、表示形式を変更できない。

シャクトパス　守８００

アムナエル　ＬＰ２７５０　手札：０　モンスター：ヘリオス・デュオ・メギストス（攻）　魔法・罠：マクロコスモス

清明　ＬＰ９００　手札：１　モンスター：シャクトパス（守）　魔法・罠：１（伏せ）

「私のターン！ヘリオス・デュオ・メギストスでシャクトパスに攻撃、ウルカヌスの炎！」

「そこでトラップ発動、フィッシャーチャージ!!魚族のシャクトパスをリリースして破壊するのは、マクロコスモス！」

「しまった!」
飛んできた炎を身をよじって避けたシャクトパスが、ずっと大徳寺先生の場にあったマクロコスモスのカードをそののこぎりのような形をした頭の先で串刺しにする。その瞬間、ついさっきまで広がっていた宇宙にひびが入り、そのまま崩れていった。
フィッシャーチャージ
通常罠
自分フィールド上の魚族モンスター1体をリリースし、
フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。
選択したカードを破壊し、デッキからカードを1枚ドローする。
「一時休戦の効果でダメージは通らない、か。流石にしぶといな、だがそれでこそ面白い!私はこのヘリオス・デュオ・メギストスをリリースする!これこそが私のたどり着いた錬金術の究極の答え、ヘリオス・トリス・メギストス!」
ヘリオス・デュオ・メギストスの姿がまたしても光に包まれ、その姿が3つに分かれる。一体一体の太陽と体はこれまでと比べてずっと小さくなったが、その熱量は明らかに跳ね上がっている。
ヘリオス・トリス・メギストス　攻0→4200　守0→4200
「さあ、私はこれでターンエンドだ」

「だいぶきついけど、とにかくこのターンは耐えきった……僕のターン！オイスターマイスターを守備表示で召喚、さらにカードを伏せてターンエンド」

オイスターマイスター　守２００

アムナエル　ＬＰ２７５０　手札：１　モンスター：ヘリオス・トリス・メギストス（攻）魔法・罠：なし

清明　ＬＰ９００　手札：１　モンスター：オイスターマイスター（守）魔法・罠：１（伏せ）

「私のターン、流星の弓―シールをヘリオス・トリス・メギストスに装備する！」

流星の弓―シール

装備魔法

装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントダウンする。

装備モンスターは相手プレイヤーに直接攻撃をする事ができる。

ヘリオス・トリス・メギストス　攻４２００→３２００

「ヘリオス・トリス・メギストスで直接攻撃！フェニックス・プロミネンス！」

３つの太陽から立ち上った炎の柱が上で合体し、巨大な不死鳥の姿になって襲い掛かってくる。ううむ、弓の要素がかけらもない。

「なんてこと言ってる場合じゃなくて！トラップ発動、バブル・ブリンガー！」

不死鳥の突撃は、僕に命中する寸前に無数の泡の壁によって消えさった。
バブル・ブリンガー
永続罠
このカードがフィールド上に存在する限り、
レベル４以上のモンスターは直接攻撃できない。
自分のターンにフィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、
自分の墓地の水属性・レベル３以下の
同名モンスター２体を選択して特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。
「ならば、モンスターを攻撃すればいいだけの話！改めて攻撃、フェニックス・プロミネンス！」
ヘリオス・トリス・メギストス　攻３２００↓オイスターマイスター　守２００（破壊）
「カードを伏せてターンエンドだ。この土壇場での勝負強さ、それがお前の一番の力なのかもしれないな」
「褒め言葉として受け取っとくよ、ドロー！来た来た来た！バブル・ブリンガー第２の効果を使って、このカードを墓地に送って２体のオイスターマイスターを特殊召喚！そし

てそのままリリースしてマイフェイバリットカード、霧の王をアドバンス召喚！」

霧の王（キングミスト）

効果モンスター

星７／水属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０

このカードを召喚する場合、生け贄１体

または生け贄なしで召喚する事ができる。

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げた

モンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

いかなる場合による生け贄も行う事ができなくなる。

霧の王　攻３２００

「さらにオイスターマイスターが戦闘以外の方法でフィールドから墓地に送られたことで、オイスタートークンを２体特殊召喚！」

オイスタートークン×２　守０

「攻撃力３２００か。相打ちでも狙っているのか？」

「とんでもない。装備魔法、団結の力を霧の王に装備！僕の場にモンスターは計３体、だから攻撃力２４００アップだ！」

言わずと知れた有名装備魔法、団結の力。自分の場のモンスター1体につき装備モンスターの攻守を８００上げる単純ながら強力な効果は、ヘリオス・トリス・メギストスと霧の王の互角だった攻撃力に一気に差をつけた。

霧の王　攻３２００→５６００　守０→２４００

「なるほど、団結の力……それが君の見つけた答え、というわけか」

「さらに、墓地から爆征竜―タイダルの効果発動、水属性のオイスターマイスター2体を除外して特殊しょう

「だが、私もまだ負けるわけにはいかないのだよ！トラップ発動、転生の予言！このカードは発動時、お互いの墓地から合計2枚のカードを選択して持ち主のデッキに戻す。この効果で選ぶのはマクロコスモスと爆征竜―タイダルだ！」

「そんな！」

タイダルを復活させれば霧の王の攻撃力はさらに上がってもっとダメージを増やすこともできたんだけど、見通しが甘かったか。

「だけど、霧の王の攻撃力が上なことには変わりない！ミスト・ストラングル！」

霧の王　攻５６００→ヘリオス・トリス・メギストス　攻３２００（破壊）

アムナエル　ＬＰ２７５０→３５０

霧の王がひと振りした大剣が、一気に3つの太陽を横一文字に両断した。よし、この

ターンで倒しきれなかったのは残念だけど、さすがに、これ、で……？
ヘリオス・トリス・メギストス　攻４７００　守４７００
「そ、そんな、どうして!?」
「ヘリオス・トリス・メギストスはたとえ戦闘で破壊されても、その能力を上げて蘇る不死の太陽。残念だったな、清明」
ヘリオス・トリス・メギストス
効果モンスター
星８／光属性／炎族／攻　　？／守　　？
このカードは自分フィールド上の「ヘリオス・デュオ・メギストス」１体を生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。
このカードの攻撃力と守備力は、ゲームから除外されているモンスターカードの数×３００ポイントになる。
このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた場合、エンドフェイズ時に攻撃力・守備力を５００ポイントアップさせて特殊召喚される。
相手フィールド上にモンスターが存在する場合、もう１度だけ続けて攻撃を行う事ができる。
アムナエル　ＬＰ２７５０　手札：０　モンスター：ヘリオス・トリス・メギストス

（攻）魔法・罠：なし
清明　ＬＰ９００　手札：１　モンスター：霧の王（攻・団）、オイスタートークン×２（守）魔法・罠：団結の力（霧）
「私のターン、ドロー。ヘリオス・トリス・メギストスでオイスタートークンに攻撃、フェニックス・プロミネンス！」
ヘリオス・トリス・メギストス　攻４７００→オイスタートークン　守０（破壊）
霧の王　攻５６００→４８００　守２４００→１６００
「だ、だけど僕が次のターンにまたモンスターを出しさえすればまだチャンスはあるはず」
「いいや、ヘリオス・トリス・メギストスは相手の場にモンスターがいる場合にもう一度だけ攻撃できる！もう一体のオイスタートークンにも攻撃だ、フェニックス・プロミネンス！」
ヘリオス・トリス・メギストス　攻４７００→オイスタートークン　守０（破壊）
霧の王　攻４８００→４０００　守１６００→８００
「また形勢逆転、だな。これでターンエンドだ」
僕の手札にモンスターは今、いない。というか手札そのものがもうない。うまくモンスターが引けるとは限らないし、引けたとしてもそれが下級モンスターの保証もない。

「このドローに、このデュエルの、僕らの全部がかかってるわけか……おお、責任重大」
『ったく、まじめにやるっつー選択肢はねーのかよ』
『思い起こせば初めに話しかけた時も同じことを言った気がするが……少しは緊張感を持ってくれ。私らがシリアスやってるのに、肝心要の貴方がそんな調子ではこちらの立つ瀬がない』
「えっと、確かあのときはこう答えたんだっけ？緊張感がないんじゃなくて色々吹っ切れただけ。だいたい、ここに入学してから僕がどんだけ濃い人生送ってると思ってんのさ、ってね。これが最後だ、アムナエル！このドローで全部決めてみせる！ドローっ!!!」
　気合を込めて、最後のドローをする。さあて、引いたカードは？
「っ！僕は手札の、ダブルフィン・シャークを召喚！そして召喚時の効果で、墓地からハリマンボウを特殊召喚！」
　ダブルフィン・シャーク
　効果モンスター
　星４／水属性／魚族／攻１０００／守１２００
　このカードが召喚に成功した時、
　自分の墓地からレベル３またはレベル４の
　魚族・水属性モンスター１体を選択して表側守備表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。
この効果を発動するターン、自分は水属性以外のモンスターを特殊召喚できない。
ハリマンボウ　守１００
「手札１枚から２体のモンスターの展開……」
「ある意味、これも錬金術の一種なのかな？まあなんだっていいさ、場に２体のモンスターが出たことで、霧の王の攻撃力もまた１６００ポイントアップ！」
霧の王　攻４０００→５６００　守８００→２４００
「ミスト・ストラングル！……先生、最後の試験の結果は合格ですか？」
そう言うと、アムナエルはちょっと驚いた顔をした後でふっと笑い一言、
「期待以上の満点なんだニャ」
そう言った顔は、僕らがよく知っている大徳寺先生のものだった。
霧の王　攻５６００→ヘリオス・トリス・メギストス　攻４７００（破壊）
アムナエル　ＬＰ４００→０

デュエルが終了し、ソリッドビジョンがふっと消えていく。それと同時に、アムナエルと棺桶のミイラが同時に床に崩れ落ちた。慌ててアムナエルのほうに駆け寄ると、体

が文字通りボロボロになって床に叩き付けたゆで卵の殻みたいなひび割れが全身に走っていた。そういえば、デュエル中にもこの体は長くない、みたいなことを言ってた気がする。
「アムナエル……」
「よく聞いてくれ、清明。私は確かにセブンスターズでは最後の一人だが、これで三幻魔の件がすべて片付いたわけではない」
「え…？」
「ちょっと待て、それどういうことだよ！まだ他にもいるってのかよ?!」
「その通りだ、十代。私の上にもう一人、三幻魔を復活させようとする者がいる。私はそれを止める力を持つものを見極めるために清明、君と戦った。君ならばきっと、三幻魔の復活を阻止できるはずだ！後のことは、任せた」
　本当は、まだ何か言おうとしていたのかもしれない。だけど、その声が言葉になる前に、アムナエルの体は限界を迎えて砂の山になった。
「大徳寺先生ー!!」
　本音を言うと、ちょっと泣きたい。だけどアムナエルは最期に言っていた、まだすべてが終わったわけじゃないって。だから、そういうのは全部後回し。いまはただ、その最後の敵とやらの企みを止めてやることだけを考えるんだ！

ターン２９　聖戦！三幻魔～神の炎、ウリア～

「ちょ、万丈目ー!?どこ行っちゃうのさー!!」
「万丈目サンダーー!そ、そんなこと俺に聞くな、鍵が勝手に……うおおっ!?」
七星門の鍵に引っ張られながらも律儀に返事をしようとした万丈目の体が、鍵に引っ張られるような形で宙に浮いていく。と、さすがにそこで首に引っ掛けていた鍵の紐に限界が来たらしくぶちっとちぎれて万丈目を地面に落とす。おもりのなくなった鍵はさらにスピードを上げて飛んで行った。
「どうしてこうなったのさ……」
思わずそう呟いて、地面でピクピクしてる万丈目に一発蹴りを入れながら鍵が飛んでいくのをただ茫然と眺めていた。大体これというのも、タイミング的に考えればたぶん万丈目が悪いんだ。あと悪乗りした吹雪さん……いや、１０ＪＯＩＮさんと呼ぶべきか。大体あの人だって黙って寝てりゃ普通にイケメンだったのに、なんであんな残念かつ面白愉快な人になってるんだろう。でもモテてるところが妬ましい。
『それ、お前にもある程度同じこと言えるけどな。大人しくしてりゃ背も顔もそこそこだってのに、朝早く起きて畑に水撒いて雑草抜いてから投網をぶん投げに海まで行く高

校生ってどんなんだよ』
「そう思うならなんか手伝ってくんない？」
『いや、俺が言いたいのはそういうことじゃなくてだな』
　じゃあ何が言いたいんだろう。いや、今はとりあえず万丈目だ。大体こいつが七星門の鍵を持ち出したりするからいけないんだ。明日香に惚れたってのは別にいい。それは個人の自由だし、一言でも言ってくれれば応援だってしただろう。そもそも、僕だってその点では人のことが言えた身分じゃない。問題なのは、吹雪さんとよくわかんない同盟を結んで僕を含めて人様に迷惑かけまくったことだ。
「……とりあえず万丈目、今日の夕飯は絶対作ってやんないからね」
　何か足元でもごもご言ってたけど、無視。無視ったら無視。完全に余談だけど、大徳寺先生がいなくなってから僕の忙しさは数倍に跳ね上がった。寮監としてあの人がやっていた雑用をまさかファラオに押し付けるわけにもいかず、十代も万丈目も翔も隼人も今一つこういったことを任せるには信用できなかったので僕が引き受けてたらいつの間にか予算の交渉にまで駆り出されるようになったのだ。僕、まだ生徒なんだけどなあ。
「っと、そんなことより鍵だ鍵！」
　慌ててさっき鍵の飛んで行った方を見るが、時すでに遅く何も見えない。えーと、

えーと……
「こ、こっちかな！」
さっきまでの方角からある程度の見当をつけて、その方向に走り出す。ああ、これ間違ってたらどうしよう。三幻魔の復活なんてシャレになんない。

タッタッタッ。
『……なあ、清明さんや』
タッタッタッ。
『もしもーし、清明ー？』
タッタッタッ。
『いい加減にしろこの駄ークシグナーがっ!!』
「うおあっ!?」
無視され続けたことにイラッと来たらしいユーノが走っていた僕の体のコントロールを奪い、無理やり足をもつれさせる。とっさのことで受け身もとれず、顔面から地面に叩き付けられた。
「何すんのいきなり！」

『何やってんだお前はー!』
さすがに怒って声を張ると、その1，3倍くらい大きな声で怒鳴り返された。うるさい。
「仏の顔も三度までって言うでしょ!?せめて3回は話しかける努力しようよ!」
『それは仏さんの場合だろ!俺はそんなに人間ができてないっつーの!』
「仏さんには違いないでしょうがこの幽霊!で、何、何の用?」
鼻が痛いのを無視してこんなことをした理由を聞くと、実に簡潔なお答えが返ってきた。
『三幻魔はあっちだばか』
びしっと彼が指差した方向を見ると、見るからに禍々しい黒雲がいつの間にか立っていた謎の柱の周りを取り囲んでいた。つまり、僕はこれまで見当違いの方向に走ってたと。
「先に言ってよユーノっ!」
『お前のせいだかんな!?』
わーわーと罪をなすりつけながら現場に急行する僕らの姿は、さぞかし情けなかったろうと思う。

「皆っ!!」

「どこに行ってたんだ、清明！お前の代わりに十代がもうデュエルを始めてるんだぞー」

ようやく駆けつけた時には、いったい何があったのかすでに三幻魔と思しきオーラを放つ3体のモンスターが場に出ていた。そしてぼろぼろの十代と、本気でいったい何があったのか上半身裸のマッチョな変態がデュエルを繰り広げていた。だけど、この分なら十代が勝ちそうだ。というか、ちょうど十代が最後の切り札を使った瞬間に間に合ったらしい。

「エリクシーラーで幻魔皇ラビエルに攻撃！フュージョニスト・マジスタリー!!」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エリクシーラー　攻１４５００→幻魔皇ラビエル　攻４０００（破壊）

変態　ＬＰ０

そして十代曰く『究極のＥ・ＨＥＲＯ』であるエリクシーラーの一撃がちょっとオベリスクっぽい幻魔を縦に一刀両断し、デュエルは終わりを告げた。が。

「雲が、晴れない……？」

『しつこいな。私たち地縛神もたいがいだったが、少なくとも負けた時はさっさと封印されたぞ』

若干呆れた風にチャクチャルさんがつぶやいた瞬間、十代とデュエルしていた変態の

デュエルディスクから赤、青、黄の三本の光が飛び出した。その光は一度大空高くに上っていき、すぐに折り返してきて地面に衝突して爆発を起こした。そしてできた３つのクレーターの中から、それぞれ人型をした『何か』が姿を見せる。
「って、何?!何?!」
「「さあ、第２ラウンドと洒落込もうか」」
　きれいに声を合わせ、寸分たがわず同じ姿にそれぞれ赤、青、黄のマントを羽織ったその姿は、まるで悪魔のようだった。
「あの姿……まるでさっき影丸理事長が使っていた幻魔の殉教者トークンじゃないか」
「トークン!?」
　僕がいない間に、一体何があったんだろう。幻魔って実はトークンテーマだったんだろうか。しかし殉教者ってまた物騒な名前だこと。いまだに状況が半分ぐらいしか呑み込めてない僕がそんなことを考えていると、三沢が思わずといった風に声を上げた。
「ちょっと待て!第２ラウンドだと?一体どういうことだ!」
「そもそも、この人間に我々の開放など期待してはいなかった。この人間が強い欲望を持ち、我々にとって都合がいい地位を持つ存在だったために精霊の知識を与え、この島で闇のデュエルを行うことで力を我々に送り届けさせるよう仕向けただけのことだ。もっとも、先ほどの精霊使いとのデュエルの間にだいぶ調子を取り戻すことができたの

はうれしい誤算だがな。ここまでやってくれるとは思わなかった」
　えっと……つまり、どゆこと？
「我々とデュエルモンスターズでもう一度勝負してもらう。その戦いで我らが勝利し、敗者の魂を取り込むことで今度こそ我々は完全な形で復活することができるからな」
「要するに、結局はデュエルってことだな！なら、俺がもう一回戦って……あ、あれ？」
　地面にへたり込んでいた十代が再び相手をしようとして立ち上がるも、さっきまでやっていた闇のゲームによるダメージが大きかったのか膝に力が入らなかったらしく再びへたり込む。これ以上何かやらせるのは危険、か。
「まずは私からだ。さあ、この神炎皇ウリアの贄となる者は誰だ？」
　そう言いながら、右端のクレーターから赤マントの殉教者が登ってくる。すぐ前に出ようとした僕を手で制して、三沢が前に進み出た。
「三沢！」
「安心しろ。神炎皇ウリア……あのカード単体の相手なら、この中にいる誰よりも俺が有利だ。それに、俺はまだ七星門の鍵を奪われていなかった。あれはただの道具にすぎなかったそうだが、それでも俺にはここで戦う権利があるはずだ」
　そして、こちらにいつも通りの笑顔を向けてくる三沢。大丈夫、三沢は強いんだ。ウリアってのがどんなカードかは知らないけど、あそこまで言うなら何か勝算があるんだ

ろう。
「三沢、といったな。いいだろう、いざ勝負だ!」
「デュエル!!」
「先行は我がもらう、ドロー!我はカードを５枚伏せ、カードカー・Ｄを召喚!そのまま効果を発動し、ターンエンドだ」
　いきなりカードをガン伏せした殉教者が呼び出したのは、夢想曰くＤは髑髏のＤな平べったい車。通常召喚してリリースするとカードを２枚ドローできるが、その代償としてそのターンのエンドフェイズまで飛ばされてしまう。モンスターのない今なら三沢の攻め放題だが、５枚も伏せられたらさぞかし不気味なことだろう。
「俺のターン、ドロー!よし、魔法カード、簡易融合を発動!１０００ライフポイントを払い、エクストラデッキから朱雀を特殊召喚!」
　簡易融合（インスタント・フュージョン）
　通常魔法
　１０００ライフポイントを払って発動できる。
　レベル５以下の融合モンスター１体を
　融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
　この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、

エンドフェイズ時に破壊される。

「簡易融合」は1ターンに1枚しか発動できない。

三沢　ＬＰ４０００→３０００

朱雀（朱雀）　攻１９００

「さらに俺はこのモンスターをリリースし、氷帝メビウスをアドバンス召喚！そして効果発動、フリーズ・バースト！お前の場の両端の伏せカードを破壊だ！」

赤い髪の着物を着た戦士は速攻でリリースされ、代わりに僕も愛用する氷の名を持つ帝……アドバンス召喚時に2発までサイクロンをぶちかませるメビウスが姿を見せ、素早く2本のつららを殉教者の場のカードめがけて打ち出す。

「なら、まず1枚をチェーン。永続罠、女神の加護。この効果により我は、３０００のライフを得る」

「くっ、やはり永続トラップ……だが、そのカードにはデメリットもある。結局は何も変わらないぞ！」

殉教者―ウリア―　ＬＰ４０００→７０００

三沢の言葉は正しい。女神の加護は発動するだけで３０００という破格のライフを回復できるが、そのリスクとして破壊された場合に３０００のダメージを受けてしまう。どやっ、これぐらいは僕だって知ってるのさ。

『そういや翔が言ってたけど、ちょうど3日前の授業にライフ回復に関しての講義があったらしいなー?』

く、ばれてたのか。せっかくユーノを見返してやれるかと思ったのに。でも実際、ここで女神の加護を発動するメリットは何もないはず。なのに、なんでわざわざチェーンしたんだろう?

「そして我は、こちら側のカードもチェーンする。トラップカード、幻蝶の護り」

殉教者がもう1枚のカードを発動した瞬間、色とりどりの無数の蝶が一斉にメビウスの周りを飛び回ってその視界を攪乱する。目の前を動き回る原色に目を回したのか、たまりかねたようにメビウスが片膝をついた。

幻蝶の護り
通常罠
フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。
選択したモンスターを表側守備表示にする。
このカードを発動したターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。
氷帝メビウス　攻２４００→守１０００
殉教者―ウリア―　ＬＰ７０００→５５００

「なるほど、守りも万全だったわけか。手札にサイクロンか何かがあれば神炎皇ウリア

の召喚はさせなかったんだが……カードを２枚伏せ、ターンエンド」

殉教者―ウリア―　ＬＰ５５００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：３（伏せ）

三沢　ＬＰ３０００　手札：２

モンスター：氷帝メビウス（守）

魔法・罠：２（伏せ）

「我のターン、ドロー。リバースカード三枚を同時に発動。死霊ゾーマ、棺桶売り、死の演算盤」

「やはり、か……！」

そういう趣味なのか、えらくおどろおどろしい名前のカード３枚を一度に発動させる殉教者。そしてそのうちの１枚、死霊ゾーマは攻撃力１８００のトラップモンスター。これで上級モンスターのアドバンス召喚も視野に入れることができるようになってしまったわけだ。

「そして、この３枚の永続罠を墓地に送る。出でよ我が分身、神炎皇ウリア！」

と思ったけど別にそんなことはなかった。３枚のカードが同時に燃え上がり、立ち上った３つの火柱が絡み合って一つの炎の竜の姿になる。そしてその炎の中からまる

でデュエルキング武藤遊戯さんも愛用した神のカードの一つ、オシリスの天空竜にも似た姿の赤い竜が静かな威厳を漂わせながらその巨体でメビウスと三沢を見下ろした。そうか、『永続トラップ３枚』なんてけったいな召喚条件を持つカードだから三沢もさっきエンドフェイズのときにあそこまで警戒してたんだ。

「ウリアの攻撃力は、我の墓地の永続トラップ１枚につき１０００ポイントアップする。今我の墓地にある永続トラップは女神の加護、死霊ゾーマ、棺桶売り、死の演算盤の４枚。したがって攻撃力は４０００だ!」

神炎皇ウリア　攻０→４０００

「そしてその効果、トラップディストラクション!相手の場の魔法、罠カードを１ターンに１度だけ、そのカードおよび他の魔法、罠カードの効果を発動させることなく破壊させる!」

顔に二つある口の上にある方を開き、そこから強烈な衝撃波を放つウリア。三沢がせっかく伏せたカードも、発動すらさせずに破壊してしまった。

「そして氷帝メビウスに攻撃、ハイパーブレイズ!」

今度は下の口が開き、火炎放射が一瞬でメビウスの体を灰にする。さっき幻蝶の護りで守備表示になっていたから三沢へのダメージはないのが唯一の救いだろう。

神炎皇ウリア　攻４０００→氷帝メビウス　守１０００（破壊）

「我はカードを伏せ、ターンエンドする」
「俺のターン、ドロー。ふむ、ハイドロゲドン召喚！」
三沢が召喚したのは、ウォーター・ドラゴンを形作る一角となる水素のハイドロゲドン。定番のアタッカーではあるけど、この状況でウリアの相手をするにはあまりにも攻撃力が低い。
ハイドロゲドン　攻１６００
「さらに速攻魔法、月の書発動！このカードの効果で、お前の神炎皇ウリアを裏守備表示にする！」
「何!?」
そうか、ウリアの効果で上がっていくのはあくまでも攻撃力だけ。守備表示にしさえすれば、その数値は０！それに……
「ハイドロゲドンで攻撃、ハイドロ・ブレス！」
ハイドロゲドン　攻１６００→???（神炎皇ウリア）　守０（破壊）
「おのれ、よくも我が分身を！」
「だがそれだけじゃない、モンスターを戦闘破壊したハイドロゲドンの効果発動！デッキからもう１体、ハイドロゲドンを特殊召喚する！」
ハイドロゲドン　攻１６００

そう、ハイドロゲドンにはこの特殊能力がある。確かにこの方法なら、ウリアを処理しつつもダメージを叩き込むことができる。
「今呼び出したハイドロゲドンでダイレクトアタック！ハイドロ・ブレス！」
ハイドロゲドン　攻１６００→殉教者―ウリア―（直接攻撃）
ウリア　ＬＰ５５００→３９００
壁となるモンスターがいない状態で、まともに濁流を受ける殉教者。だがその一撃で冷静さを取り戻したのか、さっきまでとはうって変わった低めのテンションになった。
「それで終わりか？」
「あ、ああ。メイン２にカードを１枚伏せて永続トラップ発動、ガリトラップ―ピクシーの輪―」
三沢の発動したピクシーの輪により、２体のハイドロゲドンが光り輝く輪に包まれる。これで……えっと、どうなるんだっけユーノせんせー。
『ウリアが攻撃できないとだけ覚えとけ』
「なるほど、つまりロックパーツなわけね。じゃあ、あっちの伏せは永続トラップを破壊から守る宮廷のしきたりってとこかな」
『さあ、な』
ガリトラップ―ピクシーの輪―

永続罠
自分フィールド上にモンスターが表側攻撃表示で２体以上存在する場合、相手は攻撃力の一番低いモンスターを攻撃対象に選択する事ができない。
殉教者―ウリア―　ＬＰ３９００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：なし
三沢　ＬＰ３０００　手札：０
モンスター：ハイドロゲドン×２（攻）
魔法・罠：ガリトラップ―ピクシーの輪―
１（伏せ）
「我のターン、カードを２枚伏せてターンエンドだ」
「もしもう一枚ウリアのカードがあったとしても、またトラップを３枚準備する前に倒させてもらう！２体のハイドロゲドンで一斉攻撃、ハイドロ・ブレス！」
ハイドロゲドン　攻１６００→殉教者―ウリア―（直接攻撃）
ウリア　ＬＰ３９００→２３００
ハイドロゲドン　攻１６００→殉教者―ウリア―（直接攻撃）
ウリア　ＬＰ２３００→７００

「これでターンエンドだ」

殉教者―ウリア―　ＬＰ７００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：２（伏せ）

三沢　ＬＰ３０００　手札：１

モンスター：ハイドロゲドン×２（攻）

魔法・罠：ガリトラップ―ピクシーの輪―

１（伏せ）

これは闇のデュエル。いくらなんでも一度に３２００のダメージを受けたんだから人間ならそのまま気を失ってもおかしくないくらいの痛みを感じているだろうに、殉教者はその名の通り神のためにその命を平然と使っているのだろうか、まるで痛みを感じていないかのように立ったままでいる。そもそも人間じゃないんだろうけど。

「ドロー。モンスターをセットして、我はターンエンドだ」

「くっ……怯んでいる暇はない！カードを伏せて手札のモンスター、オキシゲドンを召喚！そしてバトル、まずはハイドロゲドンで伏せモンスターを攻撃！ハイドロ・ブレス！」

オキシゲドン　攻１８００

見るからに怪しい伏せモンスターだが、リバース効果もちならまだここで戦闘破壊した方がましだ。僕と同じ結論を三沢も出したらしく、ちょっと嫌そうな顔をしながらもハイドロゲドンのブレスをぶつけさせる。守備力の高い壁モンスターなら反射ダメージを受けるだけで済んだんだけど、案の定そのモンスターはあっさりと破壊された。

ハイドロゲドン　攻１６００→???　守６００（破壊）

「我のモンスターはメタモルポット、そのリバース効果によりお互いカードを５枚ドローする」

「あー、やっぱり……」

『まあ定番だな。だけどやっぱりこの土壇場で引く運命力って恐ろしいわ』

「だが、こっちもハイドロゲドンの効果発動だ。モンスターを戦闘破壊したので、さらにもう一体特殊召喚！」

ハイドロゲドン　攻１６００

これで殉教者の手札は５枚に増えたけど、それは三沢も同じこと。それに三沢の場には、まだ動いてないモンスターが３体もいる。この中でどれか一つでも攻撃が通れば！

「ハイドロゲドン２体目で攻撃！ハイドロ・ブレス！」

「この瞬間我の手札からモンスターカード、護封剣の剣士を特殊召喚する。そしてその効果で、ハイドロゲドンは返り討ちだ」

光の剣を両手に持った二刀流の剣士がハイドロゲドンのブレスの前に立ちはだかりその剣を一閃すると、俗に言う波動斬りのような光の衝撃波が起こってそのブレスごとハイドロゲドンの体を両断した。

護封剣の剣士
効果モンスター
星８／光属性／戦士族／攻　　０／守２４００
相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。
このカードを手札から特殊召喚する。
さらにこのカードの守備力がその攻撃モンスターの攻撃力より高い場合、
その攻撃モンスターを破壊する。
また、フィールド上のこのカードを素材として
エクシーズ召喚したモンスターは以下の効果を得る。
●このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

「守備力２４００……ならば、もう1枚カードを伏せてターンエンドだ」

殉教者―ウリア―　ＬＰ７００　手札：５
モンスター：護封剣の剣士（守）
魔法・罠：２（伏せ）

三沢　ＬＰ３０００　手札：４
モンスター：ハイドロゲドン×２（攻）
オキシゲドン（攻）
魔法・罠：ガリトラップ―ピクシーの輪―
２（伏せ）

「我のターン、死者転生を発動。手札を1枚捨てることで墓地のモンスターカードを1枚手札に戻す。我はこの効果で、無論神炎皇ウリアを手札に。さらにカードを3枚伏せターンエンドだ」

「俺のターン！守備力２４００の護封剣の剣士を突破するためには……いや、やめておこう。オキシゲドンを守備表示に変更してターンエンドだ」

オキシゲドン　攻１８００→守８００

「我のターン、ドロー！永続トラップ3枚発動、デスカウンター、倍返し、反撃準備。そしてこの3枚をリリースし再び顕現せよ、神炎皇ウリア！」

ついに3枚のトラップの発動を許してしまい、再び召喚されるウリア。だけど、その禍々しさというかカリスマというか覇気というか、それはさっきまでいたウリアとは比べ物にならなかった。まあ攻撃力が３０００も違うんだ、無理もないことなんだろう。どうでもいいけど今ウリアの召喚コストにしたトラップ、あれ明らかに狙ってやってる

よね。
神炎皇ウリア　攻０→７０００
「ガリトラップ……いや、貴様から見て一番右の伏せカードを破壊だ!トラップ・ディストラクション!」
「残念だったな、ここでガリトラップではなくこのカードを狙うことは想定済みだ!今破壊されたカード、荒野の大竜巻の効果発動!このカードが破壊された時、場の表側カード1枚を破壊する!俺が破壊するのはもちろん、神炎皇ウリア!」
ウリアの衝撃波が破壊したカードは、三沢のブラフだったようだ。激しくうねる砂の竜巻が、赤い竜の姿を飲み込む。
荒野の大竜巻
通常罠
魔法&罠カードゾーンに表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。
破壊されたカードのコントローラーは、
手札から魔法または罠カード1枚をセットする事ができる。
また、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、
フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。
「どれほど攻撃力を上げたところで、あくまでも三幻魔はただのモンスターカード。攻

略の道は必ずある……む？」

砂嵐が収まったそこには、何事もなかったかのようにそびえる赤い幻魔がいた。そんな、確かに荒野の大竜巻が命中したはずなのに。

「三沢大地、どこまでも忌々しい男よ。だが、今度は我のほうが一枚上手だったようだな。永続トラップ、暴君の威圧……我はこのカードを、護封剣の剣士をリリースすることで発動していた」

暴君の威圧

永続罠

自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースして発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する元々の持ち主が自分となるモンスターは、このカード以外の罠カードの効果を受けない。

「オキシゲドンに攻撃！ハイパーブレイズ！」

そしてバトルフェイズに入り、放たれる火炎放射がオキシゲドンを一瞬で焼き尽くす。するとそのオキシゲドンが、完全に焼き尽くされる一瞬前に炎の中で壮絶な自爆を遂げた。

神炎皇ウリア　攻７０００→オキシゲドン　守８００（破壊）

「ぐっ！だが、水素に火をつけた場合、化学反応により爆発が起きる！具体的には、この

モンスターが炎族のモンスターとの戦闘で破壊された時お互いに８００ポイントの効果ダメージを受ける。これで終わりだ!」

三沢　ＬＰ３０００→２２００→１４００

殉教者―ウリア―　ＬＰ７００

「ぐわああっ!?俺が倍のダメージを受けて、お前がダメージを受けていない……まさか!?」

「その通り。カウンタートラップ、地獄の扉越し銃の効果により我のダメージは貴様に代わりに受けてもらった!」

地獄の扉越し銃

カウンター罠

ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。

自分が受けるその効果ダメージを相手に与える。

「我はカードを伏せる。これでターンを終了」

「俺のターン!死者蘇生を発動、オキシゲドンを蘇生する!」

オキシゲドン　攻１８００

「ふん、それがどうした。まさか絶望のあまり自爆特攻でも狙っているのか?」

馬鹿にした様子の殉教者の言葉に、三沢は笑顔で答える。まだ諦めてなんかいない、

ここからが勝負だとその眼は語っていた。
「とんでもない。むしろ俺は嬉しいんだ、いくつか予想外の点もあったとはいえ、俺の戦略が幻魔に通用することが分かってな」
「……なんだと?」
「じゃあウリアよ、一つ理科の質問をしてやろう。H、つまりハイドロゲンが2つにO、オキシゲンが1つ。この物質が化学反応を起こすことで、何ができると思う?」
「貴様、何が言いたい」
「答えは水、だ。その証拠を見せてやる!魔法発動、ポンディング—H2O!これが俺の、化学反応召喚!来い、ウォーター・ドラゴン!」
ハイドロゲドンとオキシゲドンの姿が混ざり合い、その姿が一つの水龍になっていく。青い体に赤く光る目、三沢の切り札がついに場に現れた。
ポンディング—H2O
通常魔法
自分フィールド上に存在する「ハイドロゲドン」2体と
「オキシゲドン」1体を生け贄に捧げる。
自分の手札・デッキ・墓地から
「ウォーター・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

ウォーター・ドラゴン　攻２８００

「だが、そのモンスターを出したところで攻撃力は２８００!我の前には塵も同然の攻撃力だ!」

「なら、自分の目で見てみるといい。その自慢の幻魔の攻撃力をな」

「何?……ハッ!?」

神炎皇ウリア　攻７０００→０

この時、ようやく三沢が最初に言っていた『ウリア相手なら誰よりも自分が有利』という言葉の意味が分かった。さっきまで十代がデュエルしていたから、すでに三沢はウリアの効果を完全に見切っている。あの破壊効果が1ターン1回なことを生かしてガリトラップを守りつつウリアを破壊しようと荒野の大竜巻をブラフにしたり、守備力が上がらない点をついて月の書からハイドロゲドンで畳み掛けたり。そしてさらに、あのカードが炎属性なことも三沢は知っていた。そしてウォーター・ドラゴンがいる限り、場のすべての炎族、および炎属性モンスターの攻撃力は0で固定される。だから、あんなに自身があったんだ。

「今だ、ウォーター・ドラゴン!アクア・パニッシャー!」

ウォーター・ドラゴンの巻き起こした水流がウリアの巨体を押し流す……その寸前、その体がふっとかき消えた。代わりに、ばかでっかいモグラたたきのような上部分に穴

がいくつか開いた箱がデン、と据えられる。そしてその穴の一つから、ひょっこりとモンスターの方のウリアが顔を出した。
「永続トラップ発動、モンスターＢＯＸ！」
モンスターＢＯＸ
永続罠
相手モンスターの攻撃宣言時、コイントスを１回行い裏表を当てる。
当たった場合、その攻撃モンスターの攻撃力はバトルフェイズ終了時まで０になる。
このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に５００ライフポイントを払う。
または、５００ライフポイント払わずにこのカードを破壊する。
「なるほど、二分の一に賭けたか。どうにかする手はない、通しだ」
「ゆくぞ、コイントス！我は表を選択する！」
ソリッドビジョンでできた金色のコインが宙をくるくると舞い、皆の注目を集めながらゆっくり地面に落ちていく。ここで裏さえ出れば一気にウリアのライフを減らせる、お願い裏出て裏！
「くっ」
「表だ、よってウォーター・ドラゴンの攻撃力もまた０になる。そしてお互いのモンス

ターの攻撃力が０ならば、どちらも戦闘破壊されない」
『なんかこの間から思ってんだけど、三沢ってビミョーに運悪くね?どこがどうってわけじゃねーけど、何となくそんなイメージがついたんだが』
ウォーター・ドラゴン　攻２８００→０→神炎皇ウリア　攻０
「カードを２枚伏せる。ターンエンドだ」
ウリア　ＬＰ７００　手札：０
モンスター：神炎皇ウリア（攻）
魔法・罠：暴君の威圧
モンスターＢＯＸ
三沢　ＬＰ１４００　手札：２
モンスター：ウォーター・ドラゴン（攻）
魔法・罠：ガリトラップ―ピクシーの輪―
３（伏せ）
「我のターン!スタンバイフェイズ、我はモンスターＢＯＸの維持コストである５００ライフを払わずこのカードを自壊させる」
「墓地にいくら永続トラップを増やそうと、ウォーター・ドラゴンがいる限りウリアの攻撃力は０だ!」

「そんなことはわかっている、忌々しいがな。まずは効果発動、左の伏せをトラップディストラクションで破壊する」
「……まだまだ！」
破壊されたカードは、これまたただのブラフ。偽物のわなだ。
「そしてこんなのはどうだ？装備魔法、愚鈍の斧をウォーター・ドラゴンに装備する」
愚鈍の斧
装備魔法
装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップし、効果は無効化される。
また、自分のスタンバイフェイズ毎に、
装備モンスターのコントローラーに５００ポイントダメージを与える。
ウォーター・ドラゴン　攻２８００→３８００
神炎皇ウリア　攻０→８０００
「まずい、ウリアの攻撃力が８０００まで上がっちゃった！」
『ンなもん見りゃわかるわ！』
「これで終わりだ！ハイパーブレイズ！」
「三沢っ！」

「いいや、まだだ!リバースカードオープン、ダメージ・ダイエット!」
「ダメージ・ダイエット……発動ターンのあらゆるダメージを半減するカードか。だが、それでも貴様のライフを削るには十分!」
　くやしいけど、殉教者の言うとおりだ。三沢のライフは１４００、そして今のウリアとウォーター・ドラゴンの攻撃力の差は４２００。ダメージ・ダイエットの効果で半減することを計算に入れても三沢の受けるダメージは２１００で、敗北を免れることはできない。そんな思いをよそに、ウリアの炎がウォーター・ドラゴンの放つ水流を押し返していき力尽きたウォーター・ドラゴンが炎に包まれてゆっくりと倒れていった。
　神炎皇ウリア　攻８０００→ウォーター・ドラゴン　攻３８００（破壊）
　三沢　ＬＰ１４００→２４００→３００
「三沢……!」
「クッ、さすがに闇のデュエル、だいぶこたえるな。だが、他のやつらだってこの痛みと戦ってきたんだ、俺だけが倒れるわけにはいかん!」
「馬鹿な、なぜだ!なぜまだ立っている!」
「それは簡単な話だ。俺は攻撃前、ダメージ・ダイエットと合わせてこのカードを発動していた。この永続トラップ、炎虎梁山爆をな!」
　炎虎梁山爆（えんこりょうざんばく）

永続罠
このカードの発動時に、自分は自分フィールド上の
永続魔法・永続罠カードの数×５００ライフポイント回復する。
また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが
相手の効果によって墓地へ送られた場合、
自分の墓地の永続魔法・永続罠カードの数×５００ポイントダメージを相手ライフに与える。
「お前がフィールドにガリトラップを残し続けてくれていて助かったよ。もしこのカードが途中で除去されていたら回復量は５００、俺のライフは２００の差で負けになっていたからな」
「お、おのれおのれおのれぇ!」
「さらにウォーター・ドラゴンは破壊された時、墓地のハイドロゲドン２体とオキシゲドン１体を特殊召喚する効果を持っている。帰って来い、ハイドロゲドン、オキシゲドン!」
ハイドロゲドン×２　攻１６００
オキシゲドン　攻１８００
「だが、いくらそんなモンスターを再びそろえたところで!」

「確かにそうだろう。だが、もし俺の手札にもう1枚ポンディング―Ｈ２Ｏがあったとしたら、どうなる?」
「なっ……!」
「俺の変幻自在の水デッキにおいて水素と酸素に分かれた水は、再びここで水となる!魔法カード、ポンディング―Ｈ２Ｏ発動!場のハイドロゲドン、オキシゲドンをリリースして墓地のウォーター・ドラゴンを特殊召喚する!」
　ウォーター・ドラゴン　攻２８００
　神炎皇ウリア　攻８０００→０
「馬鹿な、我が、この三幻魔の一角たる我が!」
「残念だったな、ウリア!ウォーター・ドラゴンで神炎皇ウリアを攻撃、アクア・パニッシャー!」
　ウォーター・ドラゴン　攻２８００→神炎皇ウリア　攻０（破壊）
　殉教者―ウリア―　ＬＰ７００→０

「うあああああああっっ!見事であった、三沢大地……!!」
　ライフポイントのなくなった殉教者が赤い光になって、火山の方向まで飛んで行っ

た。力を失ったからまた封印された、ってところだろうか。それを見送りながら、
「まずは1体、か……」
そうつぶやき、静かに倒れこんだ。慌てて近寄ってみると、どうも気を失っただけらしい。とりあえずホッと一安心したところで、これまでずっと黙っていた残りの黄マント青マントの殉教者のうち、黄マントの方の声が響いた。
「さあ、次は我の番だ。この隆雷皇ハモン、軟弱なウリアとは一味違うぞ」

ターン３０　激戦!三幻魔～神の雷、ハモン～

「……なら、これは僕が!」

そうだ、まだ三幻魔はその三分の一しか片付いてない。闇のゲームに一番耐性があるのはダークシグナーの力を使える僕だろうし、あと2戦ぐらいなら何とか……!

「待って、清明。まずは三沢君を安全なところに、だって」

さっそくデュエルディスクを構えようとしたところで、夢想の声を聞いて我に返った。確かにこんなところで倒れたままにしておいたら危ないしね。とりあえず肩を貸すような体勢で抱え上げ、一歩下がった翔や隼人がいるところまで引きずっていく。よし、これで大丈夫。さあ、デュエルをはじめｙ

「「デュエル!!」」

……あれ?ちょ、夢想さーん!?あんた何やってんですか一体!?

「騙してごめんね、清明。だけど、私だけ何もしないで見てるだけなんて嫌なの、だってさ」

「だ、だからって」

「それに」

「!?」

相変わらず彼女は考えてることが今一つ読めない。言ってることはわからないでもないし、そこもまた一緒にいて楽しいところの一つでもあるんだけど。とりあえず今思ったこととしては、セリフ後半のそれに、の部分で急に声のトーンが下がったマジ切れモードになっててすごくこわかったです。夢想があそこまで怒るなんて、い、一体どんな理由が。

「人に迷惑をかける骨。私が許さない」

「そこぉ!?」

よりにもよって三幻魔を骨扱いですか。ハモン、っていったっけ。どんなガイコツが出てくるんだろう……。

「茶番は終わったか?我が先行だ、ドロー!手札から永続魔法、強者の苦痛を3枚発動!そして自分の場に永続魔法が3枚以上あるとき、このモンスターは特殊召喚できる!出でよ我が忠実なる部下、バッド・エンド・クイーン・ドラゴン!」

強者の苦痛

永続魔法

相手フィールド上のモンスターの攻撃力は、

そのモンスターのレベル×１００ポイントダウンする。

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン
効果モンスター
星６／闇属性／ドラゴン族／攻１９００／守２６００
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上の永続魔法カードが３枚以上の場合に特殊召喚できる。
このカードの攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、
相手は手札を１枚選んで墓地へ送り、
自分はデッキからカードを１枚ドローする。
また、このカードがフィールド上から墓地へ送られていた場合、
自分のスタンバイフェイズ時に、自分フィールド上に表側表示で存在する
永続魔法カード１枚を墓地へ送る事で、このカードを墓地から特殊召喚する。
「３幻魔じゃないの？なんだって」
「フン、わざわざ人間相手に我が直接出向くまでもなかろう。ウリアなどと我を一緒にするな」
「……その余裕、潰してあげるんだって。ドロー、冥界の使者を守備表示で召喚」
とにかくワイトをデッキから引っ張り出したい夢想のデッキにとって中核を担うアタッカー、冥界の使者がその鎌を杖のようにして座り込む。守備表示なら、強者の苦痛

の効果もあまり意味がないしね。
冥界の使者　守６００　攻１６００→４００
「さらにカードを2枚伏せてこれでターンエンド、だってさ」
殉教者―ハモン―　ＬＰ４０００　手札：2
モンスター：バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（攻）
魔法・罠：強者の苦痛
強者の苦痛
強者の苦痛
夢想　ＬＰ４０００　手札：3
モンスター：冥界の使者（守）
魔法・罠：2（伏せ）
「我のターン、コアキメイル・アイスを召喚してそのまま攻撃！」
氷の体に氷の槍を持った巨人が、一突きで冥界の使者を破壊してしまう。なるほど、確かに幻魔のカードを使うつもりは今のところないらしい。
コアキメイル・アイス　攻１９００→冥界の使者　守６００（破壊）
「だけどこの瞬間、冥界の使者の効果が発動！このカードが墓地に送られた時、お互いにレベル3以下の通常モンスターをデッキから手札に加えるんだってさ。私はワイトを、

この効果でサーチするね」
「我がデッキに通常モンスターなど不要、加えるカードなどない!バッド・エンド・クイーン・ドラゴンで直接攻撃!トラジェディ・ストリーム!」
バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　攻１９００→夢想（直接攻撃）
夢想　ＬＰ４０００→２１００
「痛い……でも、この瞬間トラップ発動、無抵抗の真相!手札のワイト、デッキのワイトを1体ずつ特殊召喚するみたい」
無抵抗の真相
通常罠
相手モンスターの直接攻撃によって自分が戦闘ダメージを受けた時、
手札のレベル1モンスター1体を相手に見せて発動する。
相手に見せたモンスター1体と、自分のデッキに存在する同名モンスター1体を
自分フィールド上に特殊召喚する。
ワイト×２　守２００　攻３００→０
「だがバッド・エンドの効果も発動する。我がカードを1枚ドローして人間、お前が手札を1枚墓地に送れ。そしてエンドフェイズ、手札の永続魔法を見せねば自壊してしまうコアキメイル・アイスの維持コストとして騎士道精神を見せてやる。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー!」
　悔しいけど、確かにハモンは言うだけのことはある。あの夢想が今のところ防戦一方だなんて、相当の腕前のデュエリストに決まってる。とにかく、あの強者の苦痛をなんとかしないことにはモンスターでの力技で攻め込むこともできない。
「魔法カード、簡易融合を発動!・１０００ライフを払ってレベル３の融合モンスター、アンデッド・ウォーリアーを特殊召喚するんだって。さらにそのままこのカードをリリースして、竜骨鬼をアドバンス召喚!」
　夢想　ＬＰ２１００→１１００
　竜骨鬼　攻２４００→６００
「それがどうした?」
「今からこの子が、目にもの見せてくれるの。トラップ発動、帝王の凍志!」
　夢想のトラップからいかにも冷たそうな霧が竜骨鬼の体を包み、おもむろに霧が晴れるとそこには薄い氷の鎧を全身に纏う竜骨鬼の姿があった。
　竜骨鬼　攻６００→２４００
「なに、強者の苦痛の効果が切れただと!?」
「ううん、そうじゃないみたいだよ。帝王の凍志の効果を受けた竜骨鬼に、その小細工は通用しないってこと、だってさ」

帝王の凍志
通常罠
自分のエクストラデッキにカードが存在しない場合、
自分フィールド上に表側表示で存在する
アドバンス召喚したモンスター1体を選択して発動できる。
選択したモンスターの効果は無効になり、このカード以外のカードの効果を受けない。
「くっ……甘く見すぎたようだな」
「うん。竜骨鬼でバッド・エンド・クイーン・ドラゴンに攻撃!」
竜骨鬼　攻２４００→バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　攻１９００（破壊）
殉教者―ハモン―　ＬＰ４０００→３５００
「少しは目が覚めたかな?カードをセットしてターンエンド」
よかった、さすがは学年最強って言われるだけのことはある。このまま一気に押し切れば、勝てる!
『だといいけどな。竜骨鬼の素の打点は２４００……ハモンが直接出てきたらちょっと分が悪いぞ。ま、あんだけギャーギャー偉そうに言ってたんだからまだまだ出るのは先だろうけど』

殉教者―ハモン―　ＬＰ３５００　手札：３
モンスター：コアキメイル・アイス（攻）
魔法・罠：強者の苦痛
強者の苦痛

夢想　ＬＰ１１００　手札：０
モンスター：ワイト（守）
ワイト（守）
強者の苦痛
竜骨鬼（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「我のターン！バッド・エンド・クイーン・ドラゴンが墓地にいるとき、場の永続魔法一枚と引き換えに特殊召喚できる！強者の苦痛をコストに蘇れ、バッド・エンド！」
バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　攻１９００
ワイト×２　攻０→１００
「ここで永続魔法、騎士道精神を発動。そして場の永続魔法３枚をリリース！我が分身よ、愚かな現世に裁きの光を！降雷皇ハモン、特殊召喚！」
『……なんつーか、その……すまん。外した』

降雷皇ハモン　攻４０００
大地から巨大な水晶が隆起し、それが粉々に砕け散ると中から黄色いカラーリングのさっきのウリア並みにでかいモンスターが現れた。その第一印象は、確かに神のカードの一枚、ラーの骸骨といった感じ。なるほど、言われてみれば確かに骨だ。だけど永続罠の次は永続魔法ねえ。つくづく変な召喚条件だなあ。
ワイト×２　攻１００→３００
「まずはバッド・エンドでワイトのうち片方に攻撃!・トラジェディ・ストリーム!」
バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　攻１９００→ワイト　守２００（破壊）
「コアキメイル・アイスで連撃!」
コアキメイル・アイス　攻１９００→ワイト　守２００（破壊）
「さあ、これで残るはそのちっぽけな鬼のみだ。降雷皇ハモンの攻撃、失楽の霹靂(へきれき)!」
「ううん、まだ!ガード・ブロック発動!」
ガード・ブロック
通常罠
相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になり、
自分のデッキからカードを１枚ドローする。

降雷皇ハモン　攻４０００→竜骨鬼　攻２４００（破壊）
「アイスの効果を使わなかったのはお前にとって吉と出たか。だが、我が分身の攻撃は２段構え！降雷皇ハモンの効果発動、このカードが相手モンスターを破壊して墓地に送った時に１０００ポイントの追加ダメージを与える！地獄の贖罪！」
夢想　ＬＰ１１００→１００
「夢想っ！」
「だ、大丈夫、だってさ……」
口ではああいってるけど、かなり苦しそうだ。それもそうだろう、まだ数ターンしかたってないのにあっという間にライフが１００とレッドゾーン突き抜けデンジャラスゾーンに突入してるんだから。
「さっきまでの威勢はどうした、女。我は手札の永続魔法、禁止令を見せることでコアキメイル・アイスの自壊を防ぎターンを終了する」
「私の……ターンっ！魔法カード、闇の誘惑を発動！カードを２枚ドローして、手札の闇属性モンスター１体を除外するよ！私が除外するのは、ワイトキング！さらにワイトキングが除外されたことで、手札のワイトメアの効果発動！このカードを墓地に送って、今除外したワイトキングを特殊召喚！」
ワイトキング

効果モンスター
星１／闇属性／アンデット族／攻　　？／守　　０
このカードの元々の攻撃力は、自分の墓地に存在する「ワイトキング」「ワイト」の数×１０００ポイントの数値になる。
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地の「ワイトキング」または「ワイト」１体をゲームから除外する事で、このカードを特殊召喚する。
ワイトメア
効果モンスター
星１／闇属性／アンデット族／攻　３００／守　２００
このカードのカード名は、墓地に存在する限り「ワイト」として扱う。
また、このカードを手札から捨てて以下の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●ゲームから除外されている自分の「ワイト」または「ワイトメア」１体を選択して自分の墓地に戻す。
●ゲームから除外されている自分の「ワイト夫人」または「ワイトキング」１体を選択してフィールド上に特殊召

喚する。
「出た、ワイトキング！えっと、今墓地にいるワイトの数はワイト２のワイトメア１で３枚かな？」
『正解。きっちり覚えてるあたり少しは進歩してきたのかね』
ワイトキング　攻０→３０００
「ワイトキングでコアキメイル・アイスに攻撃！お願い、私の切り札！」
軽やかなフットワークでワイトキングがフィールドを走り、その骨の拳がコアキメイル・アイスの氷の体を貫通して大穴を開けた。いつものこととはいえ、相変わらず武闘派なお方だ。
ワイトキング　攻３０００→コアキメイル・アイス　攻１９００（破壊）
殉教者―ハモン―　ＬＰ３５００→２４００
「これでターンエンド。まだまだ負けないよ、だってさ」
殉教者―ハモン―　ＬＰ２４００　手札：３
モンスター：降雷皇ハモン（攻）
バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（攻）
魔法・罠：なし
夢想　ＬＰ１００　手札：１

モンスター：ワイトキング（攻）
魔法・罠：なし

「我のターン！永続魔法、禁止令を発動！宣言するのはワイトキングだ」
禁止令……あのカードが場に出ている限り、夢想はもうこのデュエルの間ワイトキングを使うことができない。それはつまり、もし今場に出てるワイトキングが倒れたらその自己再生効果を使っても何一つアクションを起こせず文字通りの死体になるということだ。だから、もう夢想にあとはない。頼むよ、夢想。お願いだから、いつもみたいに勝ってこっち側に帰ってきてね。
「ハモンでワイトキングに……」
「墓地から効果発動、タスケルトン！このカードを除外して、モンスター同士の戦闘を無効にするよ！」
ワイトキングに向けて空から落ちてきた無数の雷を、体を風船のようにふくらませた黒豚がすべてその体で受け止める。一発、二発と受けるにつれその破壊力でぼろぼろになっていきながらも、最終的にタスケルトンはワイトキングを守り切った。
タスケルトン
効果モンスター
星２／闇属性／アンデット族／攻　７００／守　６００

モンスターが戦闘を行うバトルステップ時、
墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。
そのモンスターの攻撃を無効にする。
この効果は相手ターンでも発動できる。
「タスケルトン」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。
「バッド・エンドの効果で捨てさせたカードか……役立たずめ、メイン2にバッド・エンドを守備表示に変更してターンエンドだ」
バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　攻１９００→守２６００
「私のターンだね。手札の魔法カード、至高の木の実を発動！」
暗雲立ち込める空から一羽の白い鳥が飛んできて、夢想の頭の上のあたりで木の実を一つぽとりと落として飛び去って行った。決してフンではない……と、思う。多分。
至高の木の実（スプレマシー・ベリー）
通常魔法
このカードの発動時に、自分のライフポイントが
相手より下の場合、自分は２０００ライフポイント回復する。
自分のライフポイントが相手より上の場合、
自分は１０００ポイントダメージを受ける。

夢想　ＬＰ１００→２１００
「ふー、ちょっと楽になったかな。それじゃあここで、一時休戦を発動するんだって。お互いにカードをドローして、次のそっちのエンドフェイズまで受けるダメージはゼロみたいだよ」
「つまらん延命手段だな。醜い足掻きだ」
「ベーだ。そしてカードを１枚セット、そのままワイトキングでバッド・エンド・クイーン・ドラゴンに攻撃！」
さっきの攻撃がボクシング風のワイトパンチ（仮）だったのを意識してか、今度はまるでムエタイのような動きで軽やかにハイキックで決めたワイトキング。このワイトキングの人、骨になる前は何やってたんだろう。
ワイトキング　攻３０００→バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　守２６００（破壊）
「これで残ったのはあなただけ、ターンエンド」
殉教者―ハモン―　ＬＰ２４００　手札：４
モンスター：降雷皇ハモン（攻）
魔法・罠：禁止令（ワイトキング指定）
夢想　ＬＰ２１００　手札：０

モンスター：ワイトキング（攻）
魔法・罠：1（伏せ）

「我のターン、どうせダメージが入らないなら、ここは攻撃をしないでおいてやろう。が、それと何もしないこととは全く別の話、手札から魔力の枷を発動」

「攻撃してこないんだったらせっかくだしこの伏せカード、針虫の巣窟をチェーンするね。お願いワイトたち、私の声に応えて！」

魔力の枷
永続魔法
お互いのプレイヤーは５００ライフポイントを払わなければ、
手札からカードを召喚・特殊召喚・発動・セットする事ができない。

針虫の巣窟
通常罠
自分のデッキの上からカードを５枚墓地へ送る。

「ちっ、そんなカードだったのか。大方運に任せてワイトを墓地に送るつもりなんだろうが、まあそれが成功する可能性は低いだろうな」

そんなことを言ってられるのも今のうちですよ、殉教者さん。夢想の針虫ワイト率は平均３枚なんだから。

「１枚目、ワイトメア。２枚目、ワイト夫人。３枚目、またワイト夫人。４枚目、またワイト夫人だってさ。それでラストは……あ、これはゾンビ・マスターだね」
「何!?馬鹿な、ありえん!」
「そんなこと言ったって出てきたものは出てきたんだもん、しょうがないじゃないだってさ」
　ワイトキング　攻３０００→７０００
「くっ……ならば５００ライフを払いカードをセットしてターンを終了する」
　殉教者―ハモン―　ＬＰ２４００→１９００
「私のターン!お願いワイトキング!」
「幻魔にそんな単調な攻撃が通ると思ったか!トラップ発動!強制脱出装置の効果で、ワイトキングを手札に戻す!」
　ハモンとの距離を詰めようとしたワイトキングが最初の一歩を踏み出した瞬間に地面の一部が爆ぜ、その爆発で空のかなたまで吹っ飛んでしまうワイトキング。これはまずい、普段ならそのまま通常召喚し直せばいいだけなんだけど、禁止令は依然として生きている。つまりワイトキングは完全な死に札、夢想はさっきまでの圧倒的優位から一気に大ピンチになったわけだ。
「まだ諦めないよ、だって清明も、皆もそうなんだから。５００ライフ払ってモンスター

をセットして、ターンエンド」
夢想　ＬＰ２１００→１６００
殉教者―ハモン―　ＬＰ１９００　手札：４
モンスター：降雷皇ハモン（攻）
魔法・罠：禁止令（ワイトキング指定）
魔力の枷
夢想　ＬＰ１６００　手札：１
モンスター：１（セット）
魔法・罠：なし
「我のターン、その伏せモンスターに攻撃！失楽の霹靂！」
降雷皇ハモン　攻４０００→???　守１４００（破壊）
「守備力１４００だと？だがそれがどうした、地獄の贖罪！」
夢想　ＬＰ１６００→６００
雷を浴びた伏せモンスターがそのまま破壊されると、そこには一つのピラミッドがそびえていた。そしてその入り口がゆっくりと開き、中から一人のワイトが歩いてくる。
「ピラミッド・タートルの効果発動、デッキから守備力２０００以下のアンデット族一体、つまりワイトを特殊召喚！」

ワイト　攻３００

「その程度の雑魚、守備表示で出せばよいものを。まあいい、ターンエンドだ」

……でも実際、なんでワイトなんだろう?確かにハモンの攻撃力と渡り合えるようなモンスターをピラミッド・タートルの効果で出すことはできないけど、たとえば戦闘破壊耐性もちの魂を削る死霊とかもっとほかにも候補はあるはずだ。今の夢想のライフは６００、何か手を打たない限りあとたった１枚のカードしか発動することはできない。

「夢想……」

その声が聞こえたのか、夢想は一度こちらを振り返り、僕の方へ笑いかけてきた。まるで、心配しないでね、というかのように。

「引けばいいの。私のデッキが私の気持ちに応えてくれるなら、あとたった一枚のカードで私は勝てるから、だってさ」

「貴様……!言わせておけばそのような戯言を!」

「なら、試してみる?私のターン。これがラストドロー、だってさ」

ゆっくりと落ち着いた動きでデッキトップに手をかけ、そのまま１枚のカードを引く夢想。でも、攻撃力４０００のハモンを出している今の殉教者をたった１枚のカードで倒しきるなんて、そんなことどうやって……。

「来たよ、だって。私は手札から５００ライフを払って装備魔法、守護神の矛をワイトに装備！」

『ああ、その手があったか。なるほど、そーゆーことか」

夢想　ＬＰ６００→１００

ワイトがおもむろにどこからともなく金色に輝く槍のような武器を手にし、その白い骨の腕で器用に振り回す。そのバックに、ぼんやりといくつもの骸骨の顔が重なって見えた。

守護神の矛

装備魔法

装備モンスターの攻撃力は、お互いの墓地に存在する

装備モンスターと同名のカードの数×９００ポイントアップする。

「だが、そんなカードを使ったところで墓地のワイトは2体、よって上昇地は８００止まりなはずだ。我が分身を倒すにはまだ役者が足りんな」

「ううん。ワイトメアとワイト夫人の共通効果がこの瞬間適用するよ」

「共通効果、だと？」

「『このカードのカード名は、墓地に存在する限り「ワイト」として扱う』……ここまで言えば、もうわかるよね」

笑顔で語る夢想。だけど、僕は……。

「（すいませんユーノ先生、どういうことか教えてください）」

『前々からアホだアホだとは思ってたけど、ほんっとにアホだなぁお前。今はワイト夫人もワイトメアも墓地にいるからワイト扱い、そして場にいるのはワイト。夫人とメアがワイトになった以上、その数も守護神の矛の強化に使えるってことだよ。今でいうと、ちょうど7体分だな』

ワイト　攻３００→６６００

「正面から……押してくるだと!?」

「これが私のデュエルスタイルだもん、だってさ。ワイト、攻撃！」

ハモンが5本の雷を落としてワイトに攻撃を仕掛けるも、ワイトは手にした矛でそのうち4本を薙ぎ払う。最後の1本が命中して爆音と土煙が上がった、と見えたのもつかの間、黒こげになった服を放置して飛び上がった素っ裸の骸骨がケタケタと笑い声をあげながらハモンの顔面に真正面からとどめの一撃を叩き込んだ。

ワイト　攻６６００→降雷皇ハモン　攻４０００（破壊）

殉教者―ハモン―　ＬＰ１９００→０

「馬鹿な、この我がああぁぁぁっ!!!」
最後に一声叫び、黄色い光となって火山へ飛ばされるハモンの殉教者。
「ごめん、清明……。私が、残り全員、相手するつもりだった……けど、もう、限界……」
そう言って、さっきの三沢同様ぱったりと倒れる夢想。さっき同様慌てて駆け寄って抱き起こすと、こっちもただ気絶してるだけだった。少し顔を上げると、いつの間にかこちらにきていた最後の殉教者が見えたので啖呵を切っておく。
「やい、そこの三幻魔!このダークシグナー遊野清明がいる限り、お前らの好きにはさせないからね!すぐ相手するから、そこで待ってろこのやろ!」
三幻魔も残るはあと一体、僕がこの手で始末をつけてやる!

ターン３１　決戦！三幻魔～幻魔皇、ラビエル～

「ウリアが倒れ、ハモンもまた眠りにつかされた……どうやら我々が封印されている間に、人間の力は大きく進化したようだな。いや、ただの人間が我らの封印を解いた時点でそれは察するべきだったか」

そう言って苦笑のような表情を浮かべる、青いマントを羽織った殉教者。なんだろう、セリフのそこかしこに何かを感じるような気がする。

「だがこの我、幻魔皇たるラビエルが今あやつらの仇をとろう。ウリア、そしてハモン。地獄の底か煉獄の果てかは知らぬが、せめて我がこの地上を制覇するところを見ていてくれい」

今度は上を向き、まるで涙をこらえるようなポーズをとる。……うーん、この感じ。

「さあ、すべてをこの一戦で終わらせようではないか！」

「え、あ、えっと……ハイ」

いかん、急に話を振られたせいで思わず間抜けな返事になってしまった。反省反省。

「デュエル!!」

「先行のドローは我が手の中にあり。来たれ、ジャイアントウイルス！」

デュエルディスクによる決定を待たずに勝手にターンを始めやがったラビエルが、小さな岩ほどのサイズのでっかいウイルスを呼び出した。
『む、リクルーターか。まあ定番だわな』
ジャイアントウイルス
効果モンスター
星２／闇属性／悪魔族／攻１０００／守　１００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
相手ライフに５００ポイントダメージを与える。
さらに自分のデッキから「ジャイアントウィルス」を任意の数だけ
表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
「さらにカードを伏せ、我のターンはこれで終了としよう。さあ、呪われし運命の人間よ。カードを引くがよい」
「の、呪われしてやっぱこの人……人？まあいいや、調子くるうなー。ドロー！頼むよ、オイスターマイスター！」
オイスターマイスター　攻１６００
「オイスターマイスターで攻撃！オイスターショット！」
『え、攻撃すんの!?やっちまったもんはしょうがねーけど』

オイスターマイスターの投げた牡蠣は、狙いたがわずジャイアントウイルスのど真ん中の核をぶち抜いて体に風穴を開けた。だが、そこからぶるぶるとジャイアントウイルスがその体を震わし、なんとそのまま体が二つに分裂した。サイズは半分になったものの、さっき致命傷を与えたことなんて嘘みたいにぴんぴんしている。

オイスターマイスター　攻１６００→ジャイアントウイルス　攻１０００（破壊）

殉教者―ラビエル―　ＬＰ４０００→３４００

清明　ＬＰ４０００→３５００

ジャイアントウイルス×２　攻１０００

「ジャイアントウイルスは不死身。一度その身が滅びようとも、輪廻の輪より蘇る」

「くっ」

だ、だめだ、この中二臭い雰囲気に耐えきれる自信がない！でも、ここはこらえてまずはデュエル！

「僕はこれで、ターンエンド」

殉教者―ラビエル―　ＬＰ３４００　手札：４

モンスター：ジャイアントウイルス×２（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

清明　ＬＰ３５００　手札：５

モンスター：オイスターマイスター（攻）
魔法・罠：なし

「我のターン。手札の悪魔族カード、ダーク・リゾネーターを墓地に送ることでマリスボラス・フォークを特殊召喚する。ああ憐れなるダーク・リゾネーターよ、その身の犠牲を我は決して無駄にしないからな」

マリスボラス・フォーク　攻４００

殉教者の手札にあったダーク・リゾネーターのカードを自分の体より大きなフォークで串刺しにして、いかにも小悪魔といった見た目の黒いモンスターがジャイアントウイルスと並び立った。うーん、特殊召喚なら使いどころはここかな？……いや、もう少しだ。もう少しだけ待とう。

「そして、場に存在する3体の悪魔族モンスターをリリースする」

『来るぞ！』

「出でよ、幻魔皇ラビエル!!」

まあ当然というかなんというか、予想はついてたけど案の定オベリスクの巨神兵っぽい見た目の幻魔。さっき十代のエリクシーラーに一刀両断必殺神剣ー！ってやられてたあのモンスターだ。

『清明、あの召喚は特殊召喚だからな！』

「そうだとは思ったよ、手札からドラゴン・アイスの効果発動！同じく手札のハリマンボウを捨てて、このカードを特殊召喚！さらに捨てたハリマンボウの効果で、ラビエルの攻撃力は永続的に５００ポイントダウンする！」

宙に浮かんだ墓地へとつながる魔方陣から無数の針が飛び出してきて、はるか高くにあるラビエルの顔、その左目に何本も突き刺さる。不意を突かれて一瞬よろめいたラビエルが、右目に憎々しげな光をたたえてドラゴン・アイスをにらみつけた。

幻魔皇ラビエル　攻４０００→３５００

ドラゴン・アイス　守２２００

「どうだ、参ったか！」

「ふ、なるほど。これこそがこの幻魔のあまりに強大な力を抑えるために天が与えたもうた受難！いいだろう、今はこの痛みに甘んじようぞ。だが見ていろ、このデュエルを我の勝利により終わらせたのちにこのような枷など打ち破ってくれる！」

「……あんま効いてないね、ユーノ」

『どっちかっつーと聞いてないんじゃねーか？完全一人で盛り上がってるし』

「さあ、我のメインフェイズはまだ終わらない！トラップ発動、リバイバル・ギフト！このカードは、我の墓地に眠るチューナーモンスターを1体、再び現世へと解き放つ。だが我だけがモンスターを呼び出すのは不公平というものだろう。なので、お前の場にも

トークンを2体ほどプレゼントしよう。遠慮せずに受け取るがいい」
ダーク・リゾネーター　攻１３００
ギフト・デモン・トークン×２　攻１５００
殉教者の場には音叉を手にした赤い目の悪魔が、僕の場には2体の茶色いおたまじゃくしのできそこないみたいなトークンが攻撃表示で特殊召喚される。こ、攻撃表示!?しかもこの子オイスターマイスターより攻撃力低いし!
「さらに、ここで我の効果を使う。我はモンスターを1体リリースすることで、そのモンスター分の攻撃力をエンドフェイズまで得る!ダーク・リゾネーターよ、ふたたびその命燃やし尽くせ!」
ダーク・リゾネーターが音叉を鳴らして緑色に光る3つの光の輪になり、その輪がラビエルの体を包み込んで吸い込まれていった。なんだあの演出。
『シンクロ召喚だな。そうかそうか、あの演出こんなところでも使い道あったのか』
「……?」
『あ、気にすんな』
幻魔皇ラビエル　攻３５００→４８００
「バトル、我が唸る拳は神をも砕く!トークンに攻撃、天界蹂躙拳!」
天界蹂躙拳、とはよく言ったものだ。その名のごとくあたりの空気すらも震わせなが

ら、圧倒的な質量をもって迫る拳が棒立ちのトークンを一撃で粉砕する。そして一瞬後、これまで闇のゲームで受けてきたダメージとは比べ物にならないほどの衝撃を受けてそのまま勢いで体が後ろに吹っ飛ばされた。ぐっ、なんだこれ!?痛い、なんてもんじゃない!痛すぎてむしろ気を失う心配すらない!

幻魔皇ラビエル　攻４８００→ギフト・デモン・トークン　攻１５００（破壊）

清明　ＬＰ３５００→２００

『あらー……生きてるかー、清明ー』

「くっ、もうちょい心配してくれてもいいんじゃないの?」

『いやだって今のでダメになるほどやわな奴がデュエリストなわけないだろ』

なんか納得してしまった悔しい。まあ、まだ、ね。まだいける、体だって動くし頭もはっきりしてる。……よし、頑張ろう。しかし今のは危なかった。ドラゴン・アイスの効果コストにハリマンボウを使ってなかったら一撃でデュエルが終わってたぐらいだし。

幻魔皇ラビエル　攻４８００→３５００

「我の攻撃力はエンドフェイズに元に戻る。ターン終了だ」

「そんなわけで僕のターン!さっきのはむちゃくちゃ痛かったからね、お礼はたっぷり利子つけて返してあげるよ!フィールド魔法、アトランティス発動してギフト・デモン・

トークンとオイスターマイスターをリリース、地縛神のチャクチャルさんを召喚！さらにオイスターマイスターが戦闘以外の方法で墓地に送られたから、オイスタートークンも特殊召喚ね」

召喚に合わせて僕の全身にダークシグナーの証である紫のあざが走り、それと同時に地面からいくつもの古びた柱や建物跡のようなものが生えてきて辺りがみるみるうちに水に包まれていく。そしてその建物の中でもひときわ大きい神殿跡から、シャチをモチーフにしたイメージカラー紫の地縛神が悠々と泳いでやってきた。

伝説の都　アトランティス

フィールド魔法

このカードのカード名は「海」として扱う。

このカードがフィールド上に存在する限り、

フィールド上の水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００ポイントアップする。

また、お互いの手札・フィールド上の水属性モンスターのレベルは１つ下がる。

地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）　攻２９００

オイスタートークン　守０↓２００　攻０↓２００

「そのカード、かなりの力を感じるぞ。だが、どれほどの力があろうと我の攻撃力が上である以上、我を倒すことは不可能！そしてここで我の効果を使う。相手がモンスターを

通常召喚したことで、場に幻魔トークンを特殊召喚だ。さあ深き闇より歩み寄れ、我が眷属の一員よ！」

幻魔トークン　守１０００

「甘い甘い！魔法発動、アクア・ジェット！魚族モンスターのチャクチャルさんは、このカードの効果で攻撃力が１０００ポイントアップする！さらに地縛神の特殊効果で、ラビエルを無視して直接攻撃！ミッドナイト・ジェットフラッド！」

『攻撃力３９００のダイレクト……えげつねえマジックコンボだがむしろあっちに逆転フラグ立てさせてる気がするのは俺の気のせいか』

『確かに、今回はいつもより気合が入っているな。まあ、デュエルに関しては私は貴方を全面的に信頼しているから文句は一切ないが』

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→３９００→殉教者―ラビエル―（直接攻撃）

殉教者―ラビエル―　ＬＰ３４００→１４００

この一撃で決めるはずだったんだけど。まああっちだってだてに三幻魔のトップやってるわけじゃないからね、まだ耐える手が残っててもあんまり驚きはしない。だけど、ダメージ半減じゃなくて２０００だけライフが減ってるってのはちょっと珍しいかも。何したんだろ。

「我は手札から闇に輝く黒き光、クリフォトンの効果を発動した。このカードを墓地に送り２０００ライフを払うことで、このターンに我が受けるダメージは０になる」
「一応確認したいんだけど……要するにクリフォトンだよね？」
「うむ」
一瞬の沈黙。だったら最初からそれだけ言えや。だけどそのままだとデュエルが進まないので、気を取り直してメインフェイズ２に移行する。
「とはいえ、することといえば……カードを１枚伏せてターンエンド」
殉教者―ラビエル―　ＬＰ１４００　手札：０
モンスター：幻魔皇ラビエル（攻）
幻魔トークン（守）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ２００　手札：０
モンスター：オイスタートークン（守）
ドラゴン・アイス（守）
地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「我のターン。再び時は満ちた、今こそ幻魔の動く時！その地縛神に攻撃せよ、天界蹂躙

拳!」

「させないよ!このカードは自身の効果により、相手の攻撃対象にならない!」

「ならば、ドラゴン・アイスに狙いを定めるのみ!幻魔の深き闇の力の前に、そのように貧弱な龍など壁にすらならぬ!」

巨大な拳が氷のドラゴンを一瞬で打ち砕き、その衝撃がこっちにまで伝わってくる。ダメージがないからさっきみたいに吹っ飛ぶようなことはなかったけど、それでも空気がびりびり振動するのが肌で感じられた。

幻魔皇ラビエル　攻３５００↓ドラゴン・アイス　守２４００（破壊）

「僕のターン、ここで決める!チャクチャルさんの効果を使い、直接攻撃を」

「待てい。たとえ光の力であろうと、闇はそれを飲み込みさらにその先へ向かう。エフェクト・ヴェーラーの効果発動、このカードを手札から捨て、相手モンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする」

「だったらどうしようもないから、何もしないでターン終了!……あと一撃、一撃さえ通ればこの幻魔との戦いも全部終わるってのにー」

殉教者―ラビエル―　ＬＰ１４００　手札：０

モンスター：幻魔皇ラビエル（攻）

幻魔トークン（守）

魔法・罠：なし
清明　ＬＰ２００　手札：１
モンスター：オイスタートークン（守）
地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「我のターン、見える、また一歩破滅への時が近づいているのが見える！貪欲な壺を発動、墓地のジャイアントウイルス３体、マリスボラス・フォーク、ダーク・リゾネーターをデッキに戻し、カードを２枚引く！そして今引いた中から、終末の騎士を召喚する。己が味方さえも闇の底に引きずり落とす呪われし剣士よ、今こそその力解き放て！デッキからトリック・デーモンを墓地に送る！」

終末の騎士
効果モンスター
星４／闇属性／戦士族／攻１４００／守１２００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、
デッキから闇属性モンスター１体を墓地へ送る事ができる。
全体的にまっくろな服装の戦士が腰の剣を抜き、おもむろに殉教者の方を振り返ってそのデュエルディスクに剣を突き刺す。そしてその剣を引っこ抜くと先端に刺さって

いたトリック・デーモンのカードを手で引きちぎるように取り出してそこらへんに捨ててしまった。やってることはただの墓地肥やしなのに、なんでこんなえぐい演出なんだろう。

「さらにトリック・デーモンの効果がこの時発動する。このカードが墓地に送られた時、デーモンカードをデッキから手札にサーチ……死を呼ぶ悪魔の行進に乗り、マッド・デーモンが手札に加わる」

『ここでマッドか……ちょいとめんどくさいな、油断するなよ清明』

「りょーかい。まあ、今のところ見てるだけなんだけどね」

「そして、死のマジック・ボックスを発動。地縛神とやら、この死の運命からはたとえ貴様であっても逃れきれん!Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａを破壊し、幻魔トークンを送り込む!」

　二つの細長い箱にチャクチャルさんとずっと放置されていた幻魔トークンがそれぞれ入り込むと、チャクチャルさんの入っている方の箱がどこからともなく飛んできた無数のナイフで串刺しにされた。思わず目を覆いたくなるようなむごい光景、だけど……。

『幻魔とやら、一つ聞かせてもらおう。仮にも邪神と呼ばれたこの地縛神が、このような児戯にも等しい仕掛けごときに屈するとでも本気で思っているのか?』

串刺しになった箱のふたが開き、無傷のチャクチャルさんがその巨体を再び水中に舞わせる。ふー、危なかった……。だけどチャクチャルさん、今助けたの僕ですよね。この伏せカード、安全地帯を発動してさ。もっともここでチャクチャルさんがやられたらこっちの戦線は一瞬で崩壊するんだから、守らないなんて選択肢はあり得ないわけだけどさ。多分本人もそれがわかってて言ってるんだからずるいなぁ。

安全地帯

永続罠

フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターは相手のカードの効果の対象にならず、

戦闘及び相手のカードの効果では破壊されない。

また、そのモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃できない。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。

「……マジック・ボックスの効果でモンスターが破壊できなかった場合、送りつけも行われない。攻撃表示の終末の騎士を贄とし、我の攻撃力を上げる。が、これだけでターンエンドだ」

幻魔皇ラビエル　攻３５００→４９００→３５００

「僕のターン!安全地帯のデメリット効果で、チャクチャルさんのダイレクトアタック効果はもう使えない、か」

さて、どうしようかな。このままラビエルを攻撃すれば、今の攻撃力３９００のチャクチャルさんならギリギリ力押しで倒すこともできる。だけど、ここはあえて攻撃しないで効果を使うのも一つの手だろう。そうすれば１２００のダメージをとるか、攻撃を放棄して１２００バーンをとるか。まあ、ラビエルなんてパワー馬鹿がいつまでも残ってると正直邪魔でしょうがないし、攻撃してさくっと退場願おうかな。

「チャクチャルさん、ラビエルに攻ｇ『あ・ほ・かお前はあああぁぁっ!!』えぇー!?なんでっ!?」

意気揚々と攻撃宣言をしようとした瞬間、全力でユーノがそれを止めに来た。なんでなのさ、僕だって安全地帯を自分のモンスターに使うデメリットは知ってるのに。次にサイクロンなんかを引かれたら、もうこれ以上チャクチャルさんを守る手段はない。だから今のうちにラビエルだけでも倒しておけば……。

『貴方の決断はできる限り尊重したいが、さすがに今のは擁護できないな。というか闇のゲームにおいて勝負を捨てるような所業、ダークシグナーの契約者としてむしろ私が許さない。こんな所で死なれては、生き返らせた甲斐がない』

「チャクチャルさんまで、そんな」
『よしわかった、一から説明してやるからよーく聞け。まずお前がここで攻撃するとして、そのあとどうする？』
　言われて、今の手札に目を落とす。そこにあるのは魔法カード、特にわざわざ伏せるようなカードではない。
「まあ、そのままターンエンドかな」
『そうだろうそうだろう。で、そうしたら殉教者（あいつ）は何をする？』
「安全地帯が破壊できるなら破壊して、それから……」
『ヒントをやろう。マのつくカードだ』
　マのつくカード？あれ、なんかついさっきそんなカードを見たような見なかったような。
『ハイ時間切れ。正解はさっきサーチしてたレベル４貫通持ちデーモン、マッド・デーモンを召喚する、だ』
「マッド・デーモン……ああっ！そういうこと！」
　そこまで言われてやっとわかった。僕の場にはオイスターマイスターをリリースした時に出した、アトランティスの効果込みでも攻守２００のオイスタートークンが守備表示で残り続けている。そしてマッド・デーモンの攻撃力は１８００で、僕のライフは

残り２００。となると、その攻撃が来れば僕の負けだ。完全に目先のターンでのボード・アドバンテージしか見えてなかったけど、それじゃあ元も子もない。なら、確かに攻撃は悪手か。だったら！

「チャクチャルさんを守備表示に変更、そして効果発動！このカードでの攻撃を放棄することで1ターンに1度、相手に守備力の半分のダメージを与える！ダーク・ダイブ・アタック！」

「むうっ!?直接攻撃の次は効果ダメージとは、神を名乗る割にずいぶんと小癪な手を使うものだ」

『さすが幻魔の皇、などと偉そうなことを言っておきながらすることはひたすら物理で殴るのみのパワー馬鹿、私のような神とは考えのレベルが違う』

いやだからそこ、勝手にケンカしないの。今デュエルしてるんだから。

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻３９００→守２４００

殉教者―ラビエル―　ＬＰ１４００→２００

「よしっ、やっとライフが並んだ。これでターンエンド」

殉教者―ラビエル―　ＬＰ２００　手札：１

モンスター：幻魔皇ラビエル（攻）

幻魔トークン（守）

魔法・罠：なし
清明　ＬＰ２００　手札：２
モンスター：オイスタートークン（守）
地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ（守・安地）
魔法・罠：安全地帯（地）

「我のターン。このターンで決めようぞ、手札のマッド・デーモンを召喚！」
マッド・デーモン
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／攻１８００／守　　０
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、
このカードの表示形式を守備表示にする。
「唸れ、マッド・デーモン！ボーン・スプラッシュの一撃で、オイスタートークンを粉砕せよ！」
威勢よく召喚したマッド・デーモンに、攻撃の指示を出す殉教者。だがマッド・デー

モンは、まるで何かにおびえるようなそぶりを見せていつまでたっても動こうとしない。それを訝しんだ殉教者がもう一度指示を出すが、やはりマッド・デーモンの足は前に進もうとしなかった。もっとも、それも無理はないだろう。守備表示のときのチャクチャルさんの放つ圧倒的なカリスマとか威圧感とかなんかそんな感じのは、それを味方にしてるこっちですら並大抵じゃあないプレッシャーを感じるんだ。それを真っ向から受けたりしたらまさに蛇ににらまれたカエル、動くことなんてできるわけがない。

『いや、なんかそんな感じのて。もうちょいなんかカッコいい言い回しとかあるだろーよ』

「……ほっといてちょーだい。チャクチャルさん、もう一つの効果発動！チャクチャルさんが守備表示でいる限り相手のバトルフェイズは封印状態、つまりラビエルだろうとデーモンだろうと、この効果の前で攻撃をすることは不可能だよ！」

もっとも、この布陣だってもし今殉教者の引いたカードがサイクロンとかの安全地帯を破壊することができるカードだったら、そこでおしまいなことには変わりない。バトルフェイズを行わない限りメインフェイズ2には移行しない……それはつまり、攻撃宣言こそあったもののそれが通用しない以上、いまだ殉教者のメインフェイズ1であることを意味している。

あの手札にある1枚のカード。その内容によっては、このターンで勝負がつく。

「……カードをセットし、ターンエンドだ」
　やった、そう思った。これで砂塵の大竜巻とか飛んできたら泣くしかないけど。とにかく、僕のターンだ！
「ドロー！チャクチャルさんの効果をもう一回使って……」
「なあ、人間よ。名はなんという」
　まったく、今日はよくセリフを止められる日だ。えっと、人間ってのは多分僕のことなんだろう。むしろこの流れでそうじゃなかったらびっくりだわ。
「遊野清明。覚えといてね、ラビエル」
「ああ、覚えておこう。だがな、一つだけ言わせてくれ。お前は人間のために戦ったのかもしれんが、我にもふたたび封印されていった仲間の仇討ちという大義がある」
「それで？」
　言いたいことはわからないでもないけど、だからと言って今更勝ちを譲るつもりはさらっさらない。ここまでやっといて結局負けちゃって『２０ＸＸ年、世界は幻魔の炎に包まれた――――』なんてオチは御免こうむりたいしね。
『高攻撃力で敵を外側から叩きのめすサイバー流とトラップ封じで内側からデッキコンセプトを破壊するサイコ流が一子相伝で受け継がれていきそうなオチだな。まあ冗談言ってる状況でもねえか、なーんか怪しいんだよなあ、あの伏せカード。止める手段が

ないってのがまたイラッとくるな』
　そう言われて、ちょっとだけ緊張する。やだな、変なこと言わないでよユーノ。ここでチャクチャルさんの効果を使う。１２００のバーンをもう一回与える。僕が勝ってハッピーエンド。それでいいじゃない。……ねえ？
「つまり、だ。我にも最後に残った幻魔皇としての意地がある。この勝負、たとえ差し違えようとただ負けるようなことにはしない！リバースカードオープン、破壊指輪！我はフィールド上に存在する我自身を対象にしてこのカードを発動する！」
『……っ!!』
　ラビエルが右手で天を指さすと上空の黒雲から雷がその人差し指に落ち、そのまま指にまとわりついて指輪のような形になる。そして、その指輪を中心として、フィールドのすべてを吹き飛ばすような爆発が起きた。
　破壊指輪（はかいリング）
　通常罠
　自分フィールド上の表側表示モンスター１体を破壊し、
　お互いに１０００ポイントダメージを受ける。
「そん、な……」
「言っただろう、たとえ差し違えようともただ負けるわけにはいかないと」

殉教者―ラビエル―　ＬＰ２００→０

清明　ＬＰ２００→０

負けた。いや正確には引き分けだけど、闇のゲームでライフが０になったことに変わりはない。魂を抜かれるってのはどんな感じなんだろうとぼんやり思った瞬間、猛烈な勢いで体中の力が抜けてきた。腕を上にあげることができない。足がふらつき、地面に崩れるのを止めることができない。今何か叫んだのは、ユーノだろうかチャクチャルさんだろうか、それともほかの誰かだろうか。あるいは、誰も何もしゃべってなんかいなかったのかもしれない。どちらにせよどんどん耳が遠くなってきていて、もう何も聞こえない。目もかすんできて、視界に霧がかかったように何も見えなくなった。眠い、眠くてしょうがない。世界の運命とか幻魔とか、もう全部どうでもいいや。

おやすみなさい。

ターンＥＸ―２　鉄砲水ともう一つの『真紅』

『……クソッ』

保健室の一角、窓際に位置するベッドの一つ。さっきまでは見舞い客たちでにぎわっていたそこも、今では鮎川先生に消灯時間の関係で追い出されたため誰もいない。だが、それは精霊の見えない人間が見た時のこと。見るものが見れば見えただろう、シャーク・サッカーを肩に張り付かせてベッド際にたたずむ一人の少年の姿を。

そんな彼の背に、どこからともなく言葉がかけられた。

『貴方のせいではない。私が、もっと強ければ！五千年前と何も変わらない！自分と契約した人間一人も勝たせることができなくて、何が神だ……！』

『……いやチャクチャル、気持ちはありがてえけどそうじゃない。あの手札じゃ他に発動できるカードもなかったし、あのデュエルにミスはどこにもなかった。ただ、勝てなかっただけだ』

『……ああ、そうだな。すまないな、柄にもなく取り乱してしまって』

その言葉を合図にしたかのように、再び部屋を沈黙が支配する。その空気を最初に破ったのは、今度はユーノだった。

『なあチャクチャル、こーゆーのはお前の専門だろうから聞いておくけどよ。……こいつの、清明の魂は今どうなってんだ？』

清明が今昏睡状態なのは、闇のゲームによって魂を抜かれたから。このまま植物状態の寝顔を見ていても回復の見込みがないが、それは裏を返せば魂さえ戻ってきたらすぐに目を覚ます、ということでもある。そして、そんな方法があるんだとすればそれを知るのは闇のゲームを仕掛ける側でもある地縛神をおいてこの中にはいない。そう思っての質問をしかけたが、返ってきたユーノの予想の斜め上を行く答えに驚いて聞き直している。

『それができるようなら私が自力で地獄の底からでも引きずり出している。ただ、妙な点がある。私の心当たりのある世界すべてを回ってみたが、どこにも清明の魂がいない』

『魂がいない？』

さっぱりわからない、といったユーノの顔を見かねてより詳しい説明に入っていた。

『そうだな、では最初から説明しよう。まず闇のゲームだが、これに負けて魂が抜けたからといって全てのパターンでそれがその場で消滅するわけではない。抜き取ったうえで一時保管し、その後は勝者の勝手というのが基本だ』

『何それ初耳』

『ふむ、少し性質は違うがあのアニメで未来の私が負けた時も私召喚のため生け贄になった魂が元に戻っていただろう。あれと似たようなものだ』
『なるほど納得。ってことは、まだ希望はあるってことか』
　そういうことになるな、と返すチャクチャルア。だがそのあとにただ、と暗い声で付け加えた。
『その肝心の魂がどこにいるのかがさっぱりわからない。どこを探っても痕跡すら見つからないのは初めてだ。……それが分からない限り、何もできることはない』
『難しい話は俺にはよくわからんが、とにかく何かが変なんだな？つまり、もう一人ぐらい黒幕がいると』
『その可能性は極めて高い。が、よほどうまく隠れているようだな』
『なるほど……どこからどうあたってけばいいのかもわからんが、とりあえず動いてから考えるかね。悪いチャクチャル、デュエルディスク持ってたいから俺も実体化させてくれ』
　ああ、と言って数秒後。そこには、久しぶりに肉の体を持ったユーノが立っていた。そしてベッドのわきの机に置いてあった清明のデュエルディスクとデッキを腕に装着し、精霊軍団を中にひっこめさせると最後にもう一度だけ清明の方をちらっと見て忍び足で部屋を出て行く。

と思ったら、数秒もしないうちに部屋に戻ってきた。ただし今度の人数は一人ではなく、二人である。三人目の少年と寝かされている清明の間に立ちふさがるような位置をとったユーノが、警戒しながらもふてぶてしく笑ってみせた。

「随分とひっさしぶりじゃねえか、富野さん?」

そこにいたのは富野……『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を軸とした所謂ジャックデッキの使い手であり、元転生者であり現転生者狩りの一員でもある。一度ユーノの前に敗れはしたが、ユーノ自身もあれがかなりギリギリの戦いだったことは承知している。この間は、自分の方がほんのちょっぴり運が良かっただけのこと。あと挑発、つまり心理フェイズがきれいにはまったというのも大きい。そしてそれが二度続く保証は、どこにもないのだ。もっとも、そう思っていることなどおくびにも出さないのだが。

おそらくあの時のリターンマッチに来たのだろう、とユーノは踏んでいる。だとしたら、せめて清明だけでも守りきらねばなるまい。そう決意を固めたところで、ぽつりと富野が口を開いた。

「まず一つ言っとくが、俺はお前のことが大っ嫌いだ」

「じゃあ帰れよ。素敵かどうかは知らんけど、とりあえず出口はあっちだぜ?」

お互いに敵意丸出しの、愛想なんて欠片もない会話。だが、少なくとも話をする余地はあるらしい。そう判断したユーノはベッドの端によっこらせと偉そうに腰掛け、それ

で？と言いたげに富野の顔を見て話の続きを促す。
「……今日は、お前と取引しに来た」
「そりゃまた随分な話だこって。ま、とりあえずはよ続き」
「俺とタッグを組んで、ある奴をデュエルでぶちのめしてほしい」
「はあ⁉」
　これにはユーノも意表を突かれ、ずっこけてベッドからずり落ちそうになった。さっきのチャクチャルアとの会話といい今日は意表のつかれっぱなしだ、と心の中でぼやきながら尻もちをつく寸前にかろうじて体勢を立て直し、自分の耳がおかしくなったのかと割と本気で心配しながら聞き返す。
「おいちょーっと待て。つまりあれか、哀れな仔羊であるわたくしめにどうか力を貸してくださいユーノ様よろしくお願いしますなんでもしますからと、つまりお前はそう言いたいんだな？」
「言いたくない。そもそもお前に拒否権があるはずないからなバーカ」
「……何？」
　その含みのある言い方に、何か自分にとってよからぬものを感じ取るユーノ。その後彼が口にした取引の条件は、ユーノの顔色を一発で変えさせるに十分なものだった。
「この取引を受けた場合、今からぶちのめしに行くやつが持ってるお前の相方の魂はお

前の好きにさせてやるよ」
「話は聞いてやるからさっさと全部吐け」
悔しさのあまり歯を食いしばりながら声を絞り出す。清明の魂がかかるとあらば断わるなんて選択肢はない、ユーノがこの取引で完全敗北した瞬間であった。それから場所を移すからついて来いと言われ連れ立って歩きながらおおよその話を聞く。なんでも、そのぶちのめしたいデュエリストは元々彼と同じ転生者から転生者狩りになったクチらしいのだが、どうにも暴走気味なうえに仕事が雑で富野とは徹底的に気が合わなかったらしい。
「もちろん、俺はお前の方が嫌いだがな。目くそ鼻くそ程度の違いだが」
「うるせ」
そしてあの日、富野がユーノとのデュエルに負けて帰った日に事件が起きたらしい。
「……あいつがケンカ売ってきてな。負けたんだよ、後攻ワンキルされて」
「ふんふん」
いつものノリでざまーみろ、と言いかけていた自分を慌てて抑えるユーノ。何しろまだ情報が足りなすぎる、不用意な挑発はしないが吉だろう。その思いを知ってか知らずか、彼の話は続く。
……そこまではよかった。そいつの腕が立つことは彼だってわかっていたし、自分

の方が弱いという自覚もあったからまだ割り切ることもできた。だが、その後の行動が問題なのだという。

「あの野郎、そこで調子に乗っちまって転生者狩りの仕事を辞めて逃げ出しやがったんだ。それも、かなり最悪な方向にな」

「最悪？俺にしてみりゃお前らは全員こっちが必死に毎日生きてんの邪魔してくる悪趣味野郎の集まりだけどな。あ、俺はもう死んでっけど」

「アホ。俺らは転生者を倒して世界を元に戻した後、そいつの魂はちゃんと元いた世界に返してやってるんだよ。だけどあいつの場合、何をとち狂ったのか仕留めた魂を片っ端から潰し始めてな？」

魂を潰す。つまり、存在の完全な消滅だ。正直これまでが専門的な話しすぎて今一つついていけなかったユーノも、その物騒な響きには眉をピクリと動かした。それを知ってか知らずか、富野の言葉は続く。

「お前なんぞにあんまり詳しいことまでしゃべるつもりはねーから適当にはしょるけどよ、たまたまお前らがラビエルと相打ちになったとこに居合わせたんだろうな。お前の半分のやつの魂が体から抜ける寸前にそれをやつが回収して、その時の反応を見つけた俺が場所を特定してここまで追っかけて来たわけだ。正直あいつには俺一人じゃ勝てる気がしねえが、お前程度ならギリギリ俺の足を引っ張ることもなく肉壁ぐらいには

なってくれそうだからな。せいぜい時間稼げよ、その隙に俺が止めさすから」
「おいちょっと待てコラ！」
「お、見つけた。あれだ、あの金髪」
　認めてるんだか認めてないんだかわからない散々な言いように文句を言いかけた時、富野が不意に目の前の崖を指さした。
「なるほど確かに金髪だ」
　生前から英語は苦手なので金髪を見ただけでちょっと帰りたくなっていたりする。
「落ち着け、日本人だバカ。……おいてめぇ、よくも俺のレッド・デーモンズを侮辱しやがったな！あの時の借りを返しに来たから勝負しろ！」
「あらら、富野センパイってばもう追いかけてきちゃったの？で、そっちの男の人が助っ人？ふーん。あ、申し遅れたけど僕の名前は遊。遊戯王の遊って書いて遊(あそぶ)ね。ここで死んでもらうから短い付き合いにしかならないだろうけど、とりあえずよろしく」
「……なあ富野」
「なんだ」
「……お前、ほんっとにあんなチャラそうな奴に負けたのか？」
　物騒なセリフはガン無視することにして、見た目の印象だけで聞くことにしたらしい。

「あの男は見た目で判断しない方がいいぞ。あんな人畜無害そうな顔でも中身はとんでもない化け物だし、腕だって立つ。そもそも、あいつがなんで転生者から転生者狩りになったかってーとだな。あいつ、転生した世界で闇のゲーム仕掛けまくって登場人物を原作主要キャラからモブに至るまで全滅させて世界ひとつぶち壊しちまったんだよ」
「はあ!?そんなことできるもんなのか!?だいたい……」
　いくらなんでもこれだけは嘘だろうと思って何か言おうとしたが、その声は当の本人に遮られた。
「ねえねえー、お二人さん。いいから早く始めようよー。バトルロワイヤルルールでいいからさ」
「ちっ、しょうがねえ!話は後だ、始めるぞ!」
「「デュエル!!」」
「あはは、先行は僕ねー。ドローして、神機王ウルを召喚!さらにカードをセットしてターンエンドっと」
　神機王ウル
　効果モンスター
　星４／地属性／機械族／攻１６００／守１５００
　このカードは相手フィールド上に存在する全てのモンスターに

１回ずつ攻撃をする事ができる。
このカードが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは０になる。
「ウル……何をたくらんでやがる？俺のターン、ここは様子見が無難か。手札断殺を発動、さらにオーロラ・ウィングを守備表示で召喚。これでターンエンド」
オーロラ・ウィング　守１６００　攻１２００→８００
「最後は俺のターン！最初から飛ばしていくぜ、融合を発動！手札のビッグ・ピース・ゴーレムとスモール・ピース・ゴーレムを融合して、融合召喚！来い、マルチ・ピース・ゴーレム！」
マルチ・ピース・ゴーレム　攻２６００→１９００
バトルロイヤルルール。タッグデュエルのようにチームを組んで戦うのではなく、１ＶＳ１ＶＳ１ＶＳ……の形で行われるデュエルの形式の一つである。主な特徴としてすべてのプレイヤーが最初のターン攻撃宣言を行えず、全フィールドに影響を与える大嵐などのカードはすべてのプレイヤーが効果を受ける、などがある。自分の身を守りながら相手が潰しあうのをやり過ごして満身創痍の勝者を倒す、全力で攻め込んで二人まとめて力押しで行く、事前にチームを組んで２対１の戦いに持っていく……かと思いきや同盟相手に裏切られて大ピンチになるなど、デュエリストの個性によってその戦法も様々な試合方法は、決してメジャーではないもののタッグデュエルと並び常に一定の人

気がある。
　今回は、遊とユーノが手札を温存したのとは対照的に富野がいきなり全力で動く結果になったようだ。
「さらにレベル1のチューナーモンスター、ダーク・スプロケッター召喚！レベル７のマルチ・ピース・ゴーレムに、レベル1のダーク・スプロケッターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
「おいおい、また初手でそれかよ……」
　ダーク・スプロケッターが勢いよく伸ばした歯車のチェーンが岩石の巨人をギリギリと締め上げ、２つのモンスターが溶け合うように合体して赤黒い悪魔の竜がさっそうと登場する。
　☆７＋☆１＝☆８
　レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００
「この間の礼はたっぷりしてやるぜ、遊！」
「へぇー、すごいすごい」
「カードを伏せるぜ。俺は、これでターンエンドだ」
　遊　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：神機王ウル（攻）
魔法・罠：1（伏せ）
ユーノ　ＬＰ４０００　手札：4
モンスター：オーロラ・ウィング（守）
魔法・罠：なし
富野　ＬＰ４０００　手札：1
モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）
魔法・罠：1（伏せ）

「それじゃあー、僕のターン！さあ、攻撃始めるよー。金華猫を召喚して、効果発動！このスピリットモンスターは召喚に成功した時、レベル1モンスターを墓地から特殊召喚できるんだよねー。猫さんすごい！というわけで、レベル1チューナーのバリア・リゾネーターを召喚してそのままシンクロ召喚！レベル1の金華猫に、レベル1のバリア・リゾネーターをチューニング！怪しく揺らめく紫色が、世界に静かに火を放つ。シンクロ召喚、焔紫竜ピュラリス！」

☆1＋☆1＝☆2
焔紫竜（ほむら）ピュラリス　攻８００

「そしてレベル4のウルに、レベル2シンクロチューナーのピュラリスをチューニング

！静かに輝く青色が、天の牙となり地を砕く。シンクロ召喚、天狼王　ブルー・セイリオス！」

☆４＋☆２＝☆６

天狼王　ブルー・セイリオス　攻２４００

「と、ここでピュラリスの効果発動～。このカードは墓地に送られた時、相手の場のモンスター全員の攻撃力を強制的に５００ポイント下げまーす！」

セイリオスがピュラリスと同じ紫色の火炎を吐き、その炎がフィールドのすべてを舐めつくすように広がっていく。モンスターを破壊するほどの熱さはないそれも、火傷を負わせ集中力を削ぐには十分な威力を持っていたようだ。

オーロラ・ウィング　守１６００　攻１２００→７００

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→２５００

「へっ、それでもお前のモンスターごときじゃ俺のレッド・デーモンズには勝てねえなあ！」

「そうだね、だからオーロラ・ウイングを攻撃！天狼蒼牙（ウルフズ・ファング）！」

天狼王　ブルー・セイリオス　攻２４００→オーロラ・ウイング　守１６００（破壊）

ブルー・セイリオスが青い閃光となってフィールドを走り抜け、オーロラ・ウイングの体を噛み千切る。だが、そのまま光になって消えていったかと思われたその体はまさ

に掴みどころのないオーロラのようにゆらゆらと揺れて、また元の鳥の姿に戻った。
「オーロラ・ウィングは戦闘破壊された時、1ターンに1度だけ自分を表側攻撃表示で蘇らせる……今の攻撃は無意味だぜ」
オーロラ・ウィング　攻1200
「無意味？確かにそうかもねー。カードを2枚セットしてターン終了だね」
「否定しないことが余計不気味だな……ドロー、チューナーモンスター、竜宮の白タウナギを召喚！さらに水属性モンスターのオーロラ・ウィングをリリースすることで、シャークラーケンを手札から特殊召喚！レベル6魚族のシャークラーケンに、レベル4のウナギをチューニング！山をも砕くその牙で、海を蹴散らすその爪で！地鳴りとともに駆け抜けろ、シンクロ召喚！神樹の守護獣―牙王！」
一瞬にして並んだ2体の魚族モンスター。そのうち片方が4つの緑色の輪になり大きいほうを包み、鎧を装備したライオンにも似た獣が一声吠える。牙王、攻撃力3100を誇る高レベル縛りなしシンクロの中でも抜群の安定感を誇るモンスターである。
☆6＋☆4＝☆10
神樹の守護獣―牙王　攻3100
「牙王、行くぜ！ブルー・セイリオスに攻撃！」
轟、と音がした。たったそれだけで、狼の王たるセイリオスは破壊された。あまりの

スピードでの攻撃なため、いつの間に何発の爪を、牙を叩き込んだのかすら誰にもわからなかったのだ。もしかすると、当のセイリオスにもわからなかったのかもしれない。

神樹の守護獣―牙王　攻３１００↓天狼王　ブルー・セイリオス　攻２４００（破壊）

遊　ＬＰ４０００↓３３００

「うわわっ！だけど、セイリオスはただじゃあやられないんだよ。このモンスターは破壊されて墓地に送られた時、相手モンスター１体の攻撃力を２４００下げる！僕はこの効果でねー」

「先に言っとくが、今はまだバトルフェイズ中だ。そして牙王は俺のメイン２にならない限り、あらゆる相手カードの効果の対象にならない効果もちだからな」

「わかってるよ、うっとうしい耐性だなあ。レッド・デーモンズにさらに弱ってもらおうかな、蒼天昇牙（ブルー・サプレイメイション）～」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻２５００↓１００

「ああー！テメー、俺のレッド・デーモンズに何しやがる！攻撃力もう１００しかないじゃねえか！」

「うるせバカヤロ、さっさとスカーレッドに進化させりゃいいだけの話じゃねえか！そうでなきゃこっちだってお前に押し付けたりはしねえよ！」

「それができるんなら苦労しねえわあぁぁっ！」

「事故ったんだな!?事故ってるんだな!?そんなことで威張るんじゃねえよ!」
「おもしろーい!もっとやってよ、待っててあげるからさ!あ、その前にトラップ発動ね。奇跡の残照!さあもっと働けセイリオス、ハリィ、ハリィ!」
奇跡の残照
通常罠
このターン戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られたモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。
天狼王　ブルー・セイリオス　攻２４００
ギャーギャーとみにくい罵り合いを始めた二人だが、その様子に腹を抱えてケラケラと子供のように笑いながらもちゃっかりセイリオスを復活させる遊を見ていっぺんに富野の怒りがマックスに達したらしい。もはや喋る余裕もないのか真っ赤な顔で無言のままカードをデッキから引き、乱暴に魔法・罠ゾーンに差し込んで発動する。どれどれとそのカードを見た清明が、げげぇ!と驚愕の声を上げた。
「ちょ、お前、ここでブラホとか牙王まで死んじまうだろうが!」
だがもう遅い。ブラホ……本名ブラック・ホール。効果は単純明快な、フィールド上のモンスターをすべて破壊する。確かに自分の場のモンスターも巻き込む効果を持

つこのカードならばセイリオスの効果を無駄打ちさせることはできるのだが、ユーノが召喚した牙王の効果はあくまで効果の対象にならないのみ。対象をとらない破壊にはとことん脆いのだ。フィールドの中心にぽっかりと真っ黒な穴が開き、その中心に向けてすべてのモンスターが引きずり込まれていく。セイリオスが、そして牙王が抵抗むなしく引きずられる様子を見て少し気分が落ち着いたらしく、今度は富野もきちんと伏せカードの発動を宣言した。

「これで少しはすっきりするぜ！さらにチェーンしてトラップ、バスター・モード！このカードは俺のシンクロモンスターをリリースすることで、そのカード名を含むバスターモンスターをデッキから特殊召喚する！そして対象は当然、俺のレッド・デーモンズだ！来い、レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター!!」

一度はほかのモンスターともどもブラック・ホールの中に吸い込まれたかに見えたが、その一瞬前に真紅の鎧を装着して飛翔力が上がり、圧倒的な重力を振り切って飛び出したレッド・デーモンズ・ドラゴン。だがその鎧は、ブラック・ホールが消滅するのと同時にすうっと消えさった。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００

「ようやくダメージが消えたな、レッド・デーモンズ！バスターモンスターは破壊された時、墓地から素材になったシンクロモンスターを特殊召喚する効果があるんだよ！遊、

お前はここで潰す！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」
レッド・デーモンズ・ドラゴンが大きく息を吸い込み、必殺のブレスを放つ。だがその炎は、突然地中から生えてきた巨大な岩石の腕によって遮られた。
「トラップ発動、ピンポイント・ガード～。戻っておいで、ピュラリスちゃーん」
ピンポイント・ガード
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時、
自分の墓地のレベル４以下のモンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはそのターン、
戦闘及びカードの効果では破壊されない。
焔紫竜ピュラリス　守１４００
「攻撃しても戦闘破壊できない、おまけに効果使ってもダメ。どうすりゃいいってんだよ！」
「とりあえず俺の牙王返せ馬鹿！」
遊　ＬＰ３３００　手札：２
モンスター：焔紫竜ピュラリス（守）

魔法・罠：１（伏せ）
ユーノ　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：なし
富野　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）
魔法・罠：なし
「ふふふ、ドロー！手札の灰塵王アッシュ・ガッシュを召喚、そっちのおにーさんに攻撃！」
灰塵王アッシュ・ガッシュ　攻１０００→ユーノ（直接攻撃）
ユーノ　ＬＰ４０００→３０００
ついに通ったユーノへの初ダメージ。ライフの４分の１を削る一撃に多少顔をしかめるが、まだまだ闘志は消えていない。とはいうものの、アッシュ・ガッシュには効果があるのだが。
「アッシュ・ガッシュが相手に戦闘ダメージを与えた時、このカードのレベルは１アップするよ～。メイン２、永続トラップのシェイプシスターを発動！」
シェイプシスター

永続罠
このカードは発動後モンスターカード
（悪魔族・チューナー・地・星２・攻／守０）となり、
モンスターカードゾーンに特殊召喚する。
このカードは罠カードとしても扱う。
「シェイプシスター」は１ターンに１枚しか発動できない。
「レベル４から５になったアッシュ・ガッシュにレベル２チューナーのシェイプシスターをチューニング！天頂佇む白色が、穢れた地上に裁きを下す。シンクロ召喚、天刑王　ブラック・ハイランダー！」
大鎌を手にした黒白の死神が、夜空のてっぺんで急に輝いた北斗七星から舞い降りてきた。その効果は、富野もユーノもよく知っている。ゆえに二人とも渋い顔だが、正直ユーノはエクシーズ召喚主体かメインデッキオンリーで戦う作戦に切り替えればいいだけであり富野も今いるレッド・デーモンズだけである程度やっていけるようなデッキ構築なのでダメージそのものはそこまでなかったりする。
☆５＋☆２＝☆７
天刑王　ブラック・ハイランダー
シンクロ・効果モンスター

星７／闇属性／悪魔族／攻２８００／守２３００
悪魔族チューナー＋チューナー以外の悪魔族モンスター１体以上
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
お互いにシンクロ召喚をする事ができない。
１ターンに１度、装備カードを装備した相手モンスター１体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターに装備された装備カードを全て破壊し、
破壊した数×４００ポイントダメージを相手ライフに与える。
「カードを伏せてターンエンドだよ。さあ、せいぜいあがいて見せてよ！」
「上等だな、俺のターン！ドリル・バーニカルを召喚、手札のアクア・ジェットを発動！これが俺のマジックコンボだ！」
ドリル・バーニカル　攻３００→１３００
「そしてドリル・バーニカルの攻撃！こいつは相手に直接攻撃することができ、さらにその攻撃が通るたびに攻撃力が１０００ポイントアップする効果もちだ、ドリルアタック発射！」
ドリル・バーニカル　攻１３００→遊（直接攻撃）
遊　ＬＰ３３００→２０００

ドリル・バーニカル　攻１３００→２３００
「カードを伏せて、と。これでターンエンドだ」
エクシーズ召喚も狙うことができる手札だったが、あえて直接攻撃できるドリル・バーニカルを強化してダメージ優先の戦法をとるユーノ。自分の判断が間違っていないことを祈りつつ、富野にターンを譲り渡した。さっきみたいな真似を勝手にされたらかなわないのでちょっと不安はあるが、まさか攻撃力が３０００に戻ったレッド・デーモンズがいるのに無茶はしないだろうと踏む。どの道、今伏せたカードでは彼には見ていることしかできないのだが。
「まず魔法カード、紅蓮魔竜の壺を発動！俺の場にレッド・デーモンズがいる時、次の相手ターン終了までモンスターを出すことの禁止を条件にカードを２枚ドローする！さらにもう１枚発動して２枚ドロー、そのままバトルだ！ブラック・ハイランダーを焼き尽くせ、灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」
「攻撃するんだ。じゃあトラップ発動～、ラララ火霊術、紅～。炎属性モンスターのピュラリスをリリースして、その攻撃力８００のダメージを、じゃあそっちのおにーさんに与えようかな～」
半ば歌うように発動したカード。その効果を受けたピュラリスが、紫の火の球になってユーノに突っ込んできた。

ユーノ　ＫＰ３０００→２２００
「って俺かよ！熱っ」
「それでピュラリスの効果、相手のモンスターは全員弱体化ね～」
またもや広がる紫色の炎が、ドリル・バーニカルとレッド・デーモンズを包み込んでバランスを崩させる。しまった、と力なく富野がつぶやいたが、もう遅い。今はバトルフェイズ中であり、攻撃宣言は既に済んでいる。威力の弱まったブレスをなんなく鎌で弾いたブラック・ハイランダーが、逆にレッド・デーモンズの首を跳ね飛ばした。
ドリル・バーニカル　攻２３００→１８００
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→２５００（破壊）→天刑王　ブラック・ハイランダー　攻２８００
富野　ＬＰ４０００→３７００
「お、俺のレッド・デーモンズ・ドラゴンがまた……カードだけ伏せるぜ……」
「何ぼさっとしてやがる、次が来るぞ！」
これで終わりではない。次は、遊のターンなのだ。だが、自分のエースがまたしても何もできなかったショックに呆然としている富野にその声は届かない。というところで全員の３ターン目が終了した。
遊　ＬＰ２０００　手札：１

モンスター：天刑王　ブラック・ハイランダー（攻）
魔法・罠：なし
ユーノ　ＬＰ２２００　手札：１
モンスター：ドリル・バーニカル（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
富野　ＬＰ３７００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
「さあ、行っちゃえ～！魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のバリア・リゾネーター、金華猫、神機王ウル、アッシュ・ガッシュ、セイリオスをデッキに戻して２枚引いて～、破天荒な風を発動してブラック・ハイランダーのパワーをさらにアーップ！」
破天荒な風
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動できる。
選択したモンスターの攻撃力・守備力は、
次の自分のスタンバイフェイズ時まで１０００ポイントアップする。
天刑王　ブラック・ハイランダー　攻２８００→３８００　守２３００→３３００

「直接攻撃、死兆星斬（デス・ポーラ・スレイ）～！」
「ったく、今回だけだぜ？トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃は俺が無効にして、さらにダメージを受けてもらう」
　大上段に振りかぶった大鎌を叩き付けようとした死神の攻撃は、すんでのところで横から飛んできた大波によって阻まれる。水圧に吹き飛ばされたブラック・ハイランダーが、遊の場に落下したのを見て危なかったな、とひそかにほっと息を吐くユーノ。ドリル・バーニカルがいることでダメージも与えられたし、まあ悪い結果ではないだろう。
　遊　ＬＰ２０００→１２００
「ば、馬鹿かお前！たった１枚しかない伏せカードこんなとこで使ってんじゃねーよ！」
「はぁ!?このやろ、人がたまに助けてやったんだからそこは土下座して俺の慈悲深さに感謝するとこだろーが！態度がなってねえな態度が、親の顔が見てみたいぜ。そもそも別にお前のためじゃない、１対１より２対１のほうが楽だから生かしておいてやってんだよ！」
　どちらもわかりやすいツンデレだった。
「むー、いいよ、カードを伏せてターンエンドしても」
「俺のターン！通るとは思えんがやるしかないな、ドリルアタック第二波！」
「当然通さないよー。手札から効果発動、護封剣の剣士！」

護封剣の剣士
効果モンスター
星８／光属性／戦士族／攻　　０／守２４００
相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。
このカードを手札から特殊召喚する。
さらにこのカードの守備力がその攻撃モンスターの攻撃力より高い場合、
その攻撃モンスターを破壊する。
また、フィールド上のこのカードを素材として
エクシーズ召喚したモンスターは以下の効果を得る。
●このカードは１ターンに１度だけ戦闘では破壊されない。
「バーニカルの攻撃力は１８００……すまん、バーニカル！メイン２に手札のゼンマイシャークを召喚、さらに水属性モンスターのゼンマイシャークがいることで手札のサイレント・アングラーを特殊召喚！そしてレベル４のゼンマイシャークとサイレント・アングラーでオーバーレイ！２体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築。魂揺さぶるオーケストラが、海を渡って世界に響く！エクシーズ召喚、交響魔人マエストロック！」
☆４＋☆４＝★４

交響魔人マエストローク　守２３００

小さな悪魔の角が生えたデザインの帽子をかぶる指揮者、マエストロークが指揮棒を構える。一度だけユーノがエクストラデッキへの存在を言及したことこそあるが、この世界で実際に登場するのはこれが初である。その効果は、自分が攻めるよりむしろ仲間のサポートに向いた能力である。

「マエストロークは1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで相手モンスターを裏守備にできる！ディミニエンド・マーチ！」

交響魔人マエストローク（２）↓（１）

天刑王　ブラック・ハイランダー（攻）→???（伏せ）

「俺はこれで、ターンエンドだ。次は任すぜ、富野！」

「……お、俺に命令すんな！ドロー、リビングデッドの呼び声を発動！不屈の王者よ蘇れ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！さらに、手札のダーク・リペアラーを通常召喚だ」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００

ダーク・リペアラー　攻１０００

「バトルだ、レッド・デーモンズ・ドラゴンで裏側になったブラック・ハイランダーを攻撃！今度こそ燃やし尽くせ、灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→???　守２３００（破壊）

「さらにこの瞬間、レッド・デーモンズの効果発動！守備表示のモンスターに攻撃したことで、守備表示になっている護封剣の剣士も破壊する、デモン・メテオ！」

ブレス攻撃でセット状態のブラック・ハイランダーを今度こそ破壊したレッド・デーモンズ・ドラゴンが、間髪入れずに太い腕を振るって護封剣の剣士を力技で叩き潰す。そして一瞬で2体のモンスターが消し飛んでがら空きになったフィールドに、もぞもぞと這うように動く昆虫のような悪魔が後ろ足で持つ包丁で切りかかった。ちなみにその陰でレッド・デーモンズ・ドラゴンの吐くブレスの余波を受けたマエストロークは自身のもう一つの効果により、エクシーズ素材を使うことで破壊を無効にし、ちょっと焦げた服を気にしていた。

交響魔人マエストローク（1）→（0）

「ダーク・リペアラーで、ダイレクトアタック……！」

ダーク・リペアラー　攻1000→遊（直接攻撃）

遊　LP1200→200

「よっしゃあ、どうだ！カードを伏せるぜ！ざまーみやがれってんだコノヤロー！」

遊　LP200　手札：0

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

ユーノ　ＬＰ２２００　手札：０
モンスター：交響魔人マエストローク（守・０）
魔法・罠：なし
富野　ＬＰ３７００　手札：１
モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻・リ）
ダーク・リペアラー（攻）
魔法・罠：リビングデッドの呼び声（レ）
１（伏せ）

「へえ、少しはコンビプレーするようになってきたんだ……いいねいいねいいよいいよ、そうこなくっちゃ！本気を出してあげるよ、ドロー！まずは魔法カード、貪欲で～、無欲な壺をはっつどう～。墓地から戦士族の護封剣の剣士、悪魔族のブラック・ハイランダー、爬虫類族のピュラリスをデッキに戻して、またまた２枚ドロ～」

貪欲で無欲な壺
通常魔法
メインフェイズ１の開始時に自分の墓地から
異なる種族のモンスター３体を選択して発動できる。
選択したモンスター３体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを２枚ドローする。
このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行えない。
「相手の場に同じ属性のモンスターが２体以上いるとき、このカードは特殊召喚できるからね。今の富野、お前の場には闇属性モンスターが２体。来なよ神禽王アレクトール！」
神禽王アレクトール
効果モンスター
星６／風属性／鳥獣族／攻２４００／守２０００
相手フィールド上に同じ属性のモンスターが表側表示で２体以上存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を選択する。
選択されたカードの効果はそのターン中無効になる。
「神禽王アレクトール」はフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。
「そして忘れちゃならない通常召喚、金華猫さん再び参上～、効果を使って墓地のレベル１チューナー、チェンジ・シンクロンを特殊召喚だよー。シンクロ召喚、焔紫竜ピュラリスっ！」
☆１＋☆１＝☆２

焔紫竜ピュラリス　攻８００
「レベル合計８……まずい、奴のエースモンスターが出るぞ！」
「ごめいさーん！さすがに一回やられてるからわかるかな？レベル６のアレキトールに、レベル２のピュラリスをチューニング！圧倒的な黒色が、世界の色を塗りつぶす。シンクロ召喚、琰魔竜　レッド・デーモン!!」
レッド・デーモンズによく似たシルエットのドラゴン。だがこちらは本家よりも筋肉質な体をしており、より黒の強いカラーリングも相まってさらに凶悪な印象を与える姿をしている。
☆６＋☆２＝☆８
琰魔竜　レッド・デーモン　攻３０００
「貪欲で無欲な壺のデメリット効果があるから、このターン俺らが攻撃されることはない。けど……」
「けど、このモンスターには効果がある！１ターンに１度、このカード以外の場に表側攻撃表示で存在するモンスターをすべて破壊する！真紅の地獄炎（クリムソン・ヘル・バーン）！」
大地に足をつけてしっかりと踏ん張り、地面に向かってブレスを浴びせかけるレッド・デーモン。その地獄の炎は瞬く間にフィールド全体を覆い尽くし、レッド・デーモンズ・ドラゴンとダーク・リペアラーを焼き尽くした。そしてその効果は、マエストロー

クにも及び始める。
「なんでマエストローク、お前まで……あ」
「ピュラリスの召喚に、チェンジ・シンクロン使ったでしょ～？あのカードの効果は、シンクロ素材になったとき相手モンスター1体の表示形式を変えること。守備表示じゃあレッド・デーモンの効果も届かないから、ちょーっと攻撃表示になってもらったんだ～。うん、これで全滅、さっぱりして気分がいいね」
「ダ、ダーク・リペアラーの効果発動……あのカードは墓地に送られた時自分のデッキの一番上を確認して、そのカードをデッキトップかデッキボトムに移動させられるからな、つーわけで俺はこのカードを確認するぜ、うん」
震え声でそう言ってデッキの1番上のカードを引き抜いた富野が見せたカードは、血涙のオーガ。守備表示にすれば壁にはなるので決してどうしようもないほど悪いカードではないのだが、一発逆転のカードでもない。彼はそれを、一瞬悩んだ末にデッキボトムに戻した。次のドローカードで逆転することに全てを賭けたらしい。
「だけどまあ、俺がこのターンでこのデカブツを倒せばいいだけの話だな。ドロー！手札からアトランティスの戦士を捨てることで、アトランティスをデッキから手札に加える。さらにそのまま発動し、手札のレベル4になった深海の怒りを攻撃表示で召喚！」
深海の怒り（レイジ・オブ・ディープシー）

効果モンスター
星５／水属性／魚族／攻　　０／守　　０
このカードの攻撃力・守備力は、自分の墓地の
魚族・海竜族・水族モンスターの数×５００ポイントアップする。
深海の怒り　☆５→４　攻０→３２００　守０→３２００
「これでジャストキルだ！深海の怒り、レッド・デーモンを攻撃！」
これまでの戦いで墓地に落ちて行った魚たちの魂を秘めて力を上げた深海の怒りが、右手の銛を勢いよく投げつける。まっすぐ飛んで行ったそれはきれいに命中し、レッド・デーモンはどうと倒れた。……かに見えたのだが、その銛はなんとレッド・デーモンの腹に突き刺さる寸前のところでがっしりとキャッチされていた。それをゆっくりと構えるレッド・デーモンに、遊の得意げな声が重なった。
「最後のトラップ、魂の一撃を発動ー。ライフを１００払って、レッド・デーモンの攻撃力を一時的に３９００アップ～」
魂の一撃
通常罠
自分のライフポイントが４０００以下の場合、
自分フィールド上のモンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に

ライフポイントを半分払い、自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。
選択したモンスターの攻撃力は相手のエンドフェイズ時まで、自分のライフポイントが４０００より下回っている数値分アップする。
「魂の一撃」は1ターンに1枚しか発動できない。
遊　ＬＰ２００→１００
　　
　　
　　

いきなり何の脈絡もなく地面を割って登場した……というより生えてきたジャッジ・マンが軽々と銛を掴み、一振りして火を消すと深海の怒りにそれを見せて何事か聞くそぶりを見せる。深海の怒りがこくこくと頷くと、満足げに微笑んでからそれを手渡して再び地面の中へ消えていった。

「そしてエンドフェイズ、魂の一撃の効果も消えるよなあ?」

「け、計算外だよ。まさかあの富野がこんなコンビプレーに自分から乗るようなマネをするなんてね」

　琰魔竜　レッド・デーモン　攻６９００→３０００

「勝手にほざいてやがれ、ドロー!手札の死者蘇生を発動、三度蘇れ、俺の相棒!」

　これでこのデュエル３度目の復活となるレッド・デーモンズ・ドラゴンが、これで終わりにしようといわんばかりに咆哮する。それに対してレッド・デーモンは、まるで面白いやってみろと言わんばかりの表情をしているかのように見えた。それを見たレッド・デーモンズの怒りは、富野にもきっちり伝わった。

「見せてやるぜ、俺の最後のモンスター!トップ・ランナー通常召喚!」

　カラフルな残像を引いて辺りを走り回る謎の走者。その姿はどこか珍妙なものだったが、あいにくと今の遊にそれを見て笑うほどの余裕はなかった。

「トップ・ランナー……その効果は確か」

「その通りだ。このカードが場にいる限り、俺の場にいるすべてのシンクロモンスターの攻撃力は６００ポイントアップする！燃え上がれ、レッド・デーモンズ!!灼熱のクリムゾン・ヘルフレア!!!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３６００→琰魔竜　レッド・デーモン　攻３０００（破壊）

遊　ＬＰ１００→０

「あ、あはは、そそそんな、あはははは……」

いまだに負けることが信じられない、といった様子で呆然としている遊。その様子はどこか哀れなものだったが、ユーノにとって譲れないものがかかっている以上同情するつもりはさらさらない。ソリッドビジョンが消えるのとほぼ同時に近づき、彼の胸ぐらをつかんで無言で締め上げる。と、その服の胸ポケットが不自然に膨らんでいるのが目についた。引っ張り出してみると、その中にはキャラメル箱ほどのサイズの用途不明なケース。

「富野、これ」

いくら見てもわからないらしく、あっさり富野に渡している。だが、富野はそれを一

瞥するとそのまま投げ返してきた。
「ほらよ、約束のブツだ。蓋あけるだけで中身は勝手に体に戻るぜ」
「そりゃどうも。じゃ、早速……ん？」
　蓋を開けようと手に力を込めると、富野が彼のことを見ているのに気が付いた。そのまま何か言いたそうにしているのを見て取ったユーノが、ため息を一つついて自分から適当に話を振ってみる。
「なんかまだ言いたいことでもあんのか？あ、そっちで廃人になってるのはちゃんと持って帰ってくれよ」
「そ、その……」
「なんだ違うのか。はよ言ってみろよ」
「今回は、なんだ、俺も世話になったな。だけどな、次はお前を倒す……転生者は、許さねえよ」
　そう言って遊の体を担ぎ上げるとくるりと後ろを向き、そのままどこかへ歩いて行った。おそらくシルクハットマンのいるところにでも帰るのだろう。
「ま、上等だけどな。返り討ちにしてやるぜ」
　その姿が見えなくなった辺りでぽつりと一言つぶやき、プシュッと箱の蓋を開けた。その後しばらくして植物人間状態だった清明が目を覚ましたことに鮎川先生が驚きの

あまり椅子を蹴倒したり朝一番の登校前に見舞いに来ていた夢想や十代といった面々がどかどかと入ってきて保健室がカオスな状態になったりと色々あるのだが、それはまた別のお話。

ターン３２　南方の大自然と暗黒の中世

「る～る～るるるるる～るっるるっる～♪きょーうっもごっはんが、できましたー！」
　メロディーもリズムも完全に即興の、僕自身ですら二度と再現不可能な歌を口ずさんでリズムをとりながら、手首をひねることでフライパンを振ってその中身、我ながらいい感じにぱらっぱらになったチャーハンを人数分の皿に盛りつけていく。ああ、今日も人生が無駄に楽しくてしょうがない。
「盛り付けよし、副菜よし、スープよし、デザート……は、まあ明日にはできるかな。よしサッカー、ちょっと上行って十代たち引っ張ってきてー」
　幻魔との戦いが終わってから、かれこれ二週間経ったらしい。らしいというのは単に、つい昨日まで僕が意識不明だったため今一つそんなに時間がたった実感がないというだけだ。鮎川先生はまだ今日も保健室で入院していて欲しかったみたいだし、その気持ちもわからないではない。だけどやっぱり、じっとしてたり入院したりは性に合わない。料理してる方が楽しいし。
「やり、今日は久しぶりに清明のメシだ！」
「おい十代！勝手に一番大きいのを持っていくな！……まったく、お前がいない間

ずっとこいつらのうまくもないメシを食う羽目になってたんだ。そしてお前のメシはこの万丈目サンダーが認める程度の味はある。だから、もう勝手に倒れたりするなよ」
「悪いけど万丈目君の料理もはっきり言ってあんまりおいしくなかったッスよ」
『うんうん。精霊のアタイたちもカードの中に隠れたくなるくらい焦げ臭かったのもあるしね～』
　こんなひねくれた言い方だけど、要するに万丈目も心配してくれたんだ。こんな風にワイワイ会話してるのを見ると、つくづく日常ってやつが戻ってきたんだろうなあ、と思う。ちょっとしみじみ。と、一人だけいつもと反応が違うことに気が付いた。
「あれ隼人、食べないの？風邪でもひいた？」
　いつもは率先してやってきて配膳やらなんやらもちょっとは手伝ってくれる隼人が、今日はずいぶんと元気がなさそうだ。目の下にはうっすらとくまができ、どうも顔色も心なしか悪い。もしかして病気だろうか。
「あ、そういえば清明君は知らなかったッスね。実は隼人君、明日の進級試験受けることになったんだよ」
「え、それホント!?なんで誰も教えてくんなかったのさ！」
「いや、だってててっきりもう知ってるもんだとばっかり……」
「僕この一日入院中だったよ!?」

「悪い悪い」
　あ、十代この顔は全然悪いと思ってない顔だ。しかし、隼人が進級試験か。
「ちなみに相手は？」
「……クロノス教諭、なんだな」
「ここで隼人が勝てば推薦がもらえて、あの I（インダストリアルイリュージョン）2 社に入ることができるんだぜ！ペガサスさんからの大抜擢だ！」
　なるほど、そりゃ緊張で胃も痛くなろうってものだ。特に隼人の場合、自分に対するコンプレックスが強いから余計に気が重いんだろう。
「（ということで何か力になれないかな、ユーノ）」
『無茶言いやがって。……ま、お前が心配する必要はないぜ。お前がバッタリ倒れてた間にも、世界は毎日進歩してんだ』
「（へ？）」
『あとは明日のお楽しみ、ってな。一つヒントを出すとしたら、進級試験の話は今日でてきた、ってことだ』
　それからも食事中に何度かせっついてみたが、詳しい意味については何一つ教えてくれなかった。一体何を知っているんだろう、この男は。

そして、午前3時ごろ。これまでずっと体は寝てる……というか倒れてる生活を送ってきたせいか、まったく眠れずにベッドで寝返りを打ち続けていたのだが、それもいい加減飽きてきたのでふらっと外に出る。ちょっと一人で考えたいことがあったので、ユーノもサッカーも連れて行かない完全フリー状態だ。波の音を聞きながら玄関を出ると、頭上に満天の星空が広がっていた。

「うわぁ……」

思えばこのところ、夜は幻魔に警戒してばっかりで星なんてまともに見る機会がなかったからなあ。考えたいことがあるとはいえ正直僕が考えてどうにかなる話でもなさそうだし、ユーノにも明日あたり相談するとして今夜はもう少しこっちをゆっくり見てこうかな。と、誰か来た。

「ふわぁ……清明、こんな夜中にどうしたんだな」

「いやそりゃこっちのセリフでしょ隼人。何やってたの一体」

まさか隼人が夜遊びだなんて、さすがに想定外すぎる。そう思ったのが顔に出てたのか、ちょっとムッとした表情で否定するように手を振った。

「多分、お前が想像したようなことはないんだな。それはともかく清明、お前に一つお願いがあるんだけど、いいか？」

「お願い？まあいいけど、内容によるよー？」
隼人のお願い、ね。珍しいこともあるもんだけど、まあ別に断る理由もないわけだし。
「このカードを、お前にあずかっててほしいんだな」
そう言って彼が差し出したのは、やたらときれいなイラストの魔法カード、エアーズロック・サンライズ。なになに、効果は……
エアーズロック・サンライズ（アニメオリカ）
通常魔法
相手フィールド上の表側表示モンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターの攻撃力・守備力を、エンドフェイズまで
自分の墓地の獣族・植物族・鳥獣族モンスターの数×２００ポイントダウンする。
その後、自分の墓地の獣族・植物族・鳥獣族モンスター１体を選んで
自分フィールド上に特殊召喚できる。
「へー、羨ましいなー。これの水・魚・海竜族版とかあったら欲しいかも。でもなんで僕に？こんないいカードなら、明日の試験で使えばいいじゃない」
そう聞くと、隼人は思いのほか真剣な顔できっぱりと言い切った。
「このカードは、俺がデザインしたものをインダストリアルイリュージョン社が特別にカードにしてくれたものなんだな。いうなればこのカードは、ずっとくすぶって落ちこ

ぼれて、全部を諦めてた去年の俺との決別のあかしなんだな」
「だったらなおのこと……」
「いや、俺はこのカードを使わずに明日の試験に挑むんだな。そして、自分のことを一人前のデュエリストだと胸を張って言えるようになる。そうじゃないと、このカードを使う資格がないような気がしてならないんだな。だから、明日のデュエルが終わるまで、このカードはお前が持っててくれ」
「隼人……」
　きっと何を言っても聞かないだろうな、そう思うほど隼人は決意の固い目をしていた。なら、僕にできることなんて一つしかないじゃないか。せっかく前に踏み出そうとしてるんだ、僕の方が年下なのにこんなこと言うのもおかしいけど、ここはひとつ背中を押すとしよう。
「任せてよ、隼人。そのかわり、明日はちゃんと勝ってよ?」
「わ、わかってるんだな。ありがとう、清明。もう俺は寝るからな」
「うん、お休み」
　隼人の後姿を見送ってから、もう一度エアーズロック・サンライズのカードに目を落とす。その細部まできっちり書き込んであって、すごく芸術的な仕上がりのイラストを見ているとなんとなくシリアスちっくに考え事しようと思っていたのがばからしく

なってくる。自然はこんなにでっかいんだ、それに比べりゃどうってことない、みたいな。どれ、もう一回眠れるかどうか試してみますかね。

　で、ついに試験の始まり。結論から言うと昨夜は結局ぜんっぜん眠れなかったから、今になってちょっと眠いかも。
「シニョール前田、準備はよろしいノーネ？」
「よろしくお願いします、クロノス先生」
「いいでショウ。それでは、デュエルを始めるノーネ！」
「「デュエル！」」
「シニョール前田、先行は譲るノーネ」
「それじゃあ俺のターン、ドローするんだな。そして手札から、デス・コアラを攻撃表示で召喚！さらにカードを１枚伏せて、ターンエンドなんだな」
　デス・コアラ　攻１１００
「ええ?!」
「オー、シニョール前田……」
　思わず声が出てしまった。デス・コアラはリバースした時にバーンダメージを相手に

与えるリバース効果モンスター。なのにそれを、よりにもよってお世辞にもステータスが高いとは言えない攻撃表示で出すなんて。確かこの間も同じことやって怒られてたじゃないの。……このデュエル、大丈夫かなあ？

だが、今のプレイングを見ていたユーノの感想はこっちと真逆だったようだ。

『クククッ、なるほどな。いやらしい真似しこんでくれやがるぜ』

「何？おい貴様、それはどういう意味だ。俺にはあのコアラが素人並みのプレミスをしたようにしか見えんぞ」

『まあ万丈目、黙ってみてなって。今の隼人は一味違うデュエリストだからな。あ、ちゃんと録画しといてくれよ』

「そんなことはわかっている！」

『ねえアニキ、これおいらたちも写っちゃダメかい？』

「お前ら（精霊）が写ったらただの心霊写真だろうが！」

プンすかしながらもちゃんと手に持つカメラを構えなおす万丈目。なんでも、今日のデュエルを見たい奴がいるから録画が必要らしい。でもそれが誰なのかは教えてくれないなんて、あいっかわらず情報を小出しにしか出さないやつだ。

「どうやらあなたは、この一年でもあまり成長していないようでいささか残念でスーノ。ですが、だからと言って手を抜くようなことはありえませン。私のターン、手札から

フィールド魔法、歯車街（ギア・タウン）を発動するノーネ！」
『お、出たなチートフィールド』
　のんびりとつぶやくユーノをよそに、みるみるうちに地面からいくつもの大小さまざまな歯車が組み合わさった建物や歯車型の光を放つスポットライトがせりあがってきてちょっとした未来都市の図が出来上がる。えっと、この効果は……
「……解説お願い三沢っち！」
「その呼び方はやめてくれ！歯車街（ギア・タウン）の効果は、まず永続的に【古代の機械】シリーズのアドバンス召喚にかかるリリースの数を一つ減らすことだ。それとは別に破壊された時デッキの古代の機械を特殊召喚する効果もある」
「なるほど、センキュー」
「私は歯車街の効果により、レベル６の古代の機械合成獣をリリースなしで召喚しますーノ！」
　頭が二つある獣を模した機械獣が、２つの口を開けてデス・コアラを威嚇する。本来ならば胸に開いた３つの穴のどれかに３色の歯車をはめ込むことで力を発揮するモンスターも、リリースなしで出されたらただのバニラモンスターでしかない。だけど、単純に攻撃力２３００のノーデメリットモンスターをリリース抜きで出したとなれば話は別だ。

古代の機械合成獣（アンティーク・ギアガジェルキメラ）　攻２３００

「機械合成獣で、デス・コアラにバトルを挑みますノーネ！」

「リバースカード、皆既日蝕の書を発動するんだな！このカードは発動時、すべてのモンスターを裏側守備表示に変更する！」

機械合成獣がデス・コアラに向けて一歩を踏み出そうとした瞬間、ふっとあたりが真っ暗になった。すぐに明かりは戻ってきたものの、すべてのモンスターがセット状態に変更されている。そして、あのカードの効果って確か。

「ぐぬぬ、私はせめてカードを2枚伏せて、ターンエンドなノーネ」

「この瞬間、皆既日蝕の書のさらなる効果が発動して、先生の古代の機械合成獣を表側守備表示にするんだな。それでそのあと、先生は今表になったモンスターの数だけ、つまり1枚カードをドローする」

古代の機械合成獣　守１３００

隼人　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：???（デス・コアラ）

魔法・罠：なし

クロノス　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：古代の機械合成獣（守）

魔法・罠：２（伏せ）
場：歯車街

「俺のターン、まずはこのデス・コアラを反転召喚するんだな。そしてデス・コアラはリバースした時、相手の手札１枚につき４００ポイントのダメージを与える！」
クロノス　ＬＰ４０００→２８００
「……意外だ」
隼人、本気出せばむちゃくちゃ強いじゃん。あのクロノス先生相手に一方的にデュエルを進めてる。
「さらに手札から、吸血コアラを召喚。バトル！吸血コアラで、古代の機械合成獣を攻撃するんだな！」
もこもこした見た目のオーストラリア原産の動物、コアラをモチーフにした……のだろうが、その見た目は明らかに並みのコアラではない。なにしろ悪魔の羽と牙をもち、目も真っ赤に輝いているのだ。そんなコアラがパタパタと空を飛んで機械の獣に鋭い爪で踊りかかり、連続でひっかいて回路をショートさせた。あら怖い。
吸血コアラ　攻１８００→古代の機械合成獣　守１３００（破壊）
「気張れ、デス・コアラ！クロノス先生にダイレクトアタック！さらにこの攻撃の時、手札から速攻魔法、百獣行進を発動するんだな！このカードは、自分フィールドの獣族モ

ンスター1体につき２００ポイント、獣族モンスターの攻撃力を上げる効果がある。俺の場には獣族の吸血コアラとデス・コアラがいるから、デス・コアラの攻撃力は４００ポイント上がるんだな！」

「マ、マンマミーア！」

デス・コアラ　攻１１００→１５００→クロノス（直接攻撃）

クロノス　ＬＰ２８００→１３００

「メインフェイズ２にカードをセットして、俺のターンは終了だ」

「ぐぐぐ……シニョール前田、あなたのことを見くびっていた私を許してほしいノーネ。あなたの成長は目覚ましいです。しかーし、私もこの栄光あるデュエルアカデミア実技担当最高責任者の名に賭けて、負けはしないノーネ！私のターン、モンスターをセットしてターンエンドしマス」

クロノス先生、あんだけかっこつけといてやることがそれだけですか。いやまあ別に悪いとは言わないけど！言わないけども！

隼人　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：デス・コアラ（攻）

吸血コアラ（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

クロノス　ＬＰ１３００　手札：３
モンスター：???（セット）
魔法・罠：２（伏せ）
場：歯車街

「俺のターン、吸血コアラで伏せモンスターに攻撃！」
吸血コアラ　攻１８００→???　守７００（破壊）
「セットモンスターはメタモルポット。リバース効果によってお互いは手札をすべて捨て、カードを5枚ドローするノーネ」
「だけど、俺にはまだデス・コアラの攻撃がある！行けえ、デス・コアラ！」
「残念ですが、手札から速攻のかかしの効果を使うノーネ！相手のダイレクトアタック時にこのカードを捨てることで、バトルフェイズは終了しマス」
「なら、ターン終了なんだな」
「私のターン！古代の機械砲台を召喚してセットカード、機械複製術を発動。攻撃力５００である古代の機械砲台を、デッキからもう2体特殊召喚するノーネ！」
古代の機械砲台×３　攻５００
これで、クロノス先生の場にはモンスターが3体。だが、そのうちで隼人の場のコアラ軍団を突破できる攻撃力の持ち主はいない。じゃあ、一体これから何をする気なんだ

ろう。

「そして私は最後のセットカード、魔法の歯車（マジック・ギア）を使用するノーネ！このカードは、自分の場のアンティーク・ギアと名のつくカードを3枚墓地に送ることーで、手札とデッキからそれぞれ古代の機械巨人を召喚条件を無視して特殊召喚することができるノーネ！現れなサイ、古代の機械巨人！」

３つの砲台がバラバラに分解されて組み合わさり、一つの光輝く巨大な歯車の形をとっていく。なんだなんだと見ているうちにその歯車が歯車街の建物の一角に吸い込まれ、ガタゴトと作業音が響いたらその工場の入り口から2体の巨人がモノアイをキュピーンと光らせてのっしのっしと歩いてきた。忘れもしないあのカード、クロノス先生の切り札だ。

古代の機械巨人×２　攻３０００

「さらに手札の魔法カード、大嵐を発動するノーネ！このカードの効果によって、私は自分の歯車街とあなたの伏せカードを破壊しますーノ！」

「だったらそれにチェーンして発動、威嚇する咆哮！このカードを使ったことで、このターン先生はバトルをすることができないんだな！」

歯車の町が台風に飲み込まれ、ガラガラと崩れていく。あれ、リリース軽減能力のある歯車街をここで捨ててまでしてデッキから出したい古代の機械がいるんだろうか。

クロノス先生の切り札、古代の機械巨人には特殊召喚できないジョーズマンみたいなデメリットがあるっていうのに。

「私が歯車街の効果で呼び出すのは、レベル８で攻撃力３０００の大型機械、古代の機械巨竜（アンティーク・ギアガジェルドラゴン）！」

「こ、攻撃力３０００!?」

なんてこったい、クロノス先生のデッキには攻撃力３０００の大型モンスターが２種類も入ってたのか。これは予想できなかった。

「ふむ、まあクロノス教諭のデッキが【古代の機械】である以上あの流れは当然か……」

「え」

「ここまでは予想できたな。もっとも、まさか生徒に対してここまで本気を出してくるとは思わなかったが」

「え」

……まだまだ勉強不足だったみたい。反省反省。

「さ、さすがクロノス先生なんだな……」

「このターン私は攻撃ができず、さらに魔法の歯車のデメリット効果により２ターンの間通常召喚を行うことができなくなったノーネ。さあシニョール前田、この布陣を突破できるものならしてみなサイ」

隼人　ＬＰ４０００　手札：５
モンスター：デス・コアラ（攻）
吸血コアラ（攻）
魔法・罠：なし
クロノス　ＬＰ１３００　手札：１
モンスター：古代の機械巨人（攻）
古代の機械巨人（攻）
古代の機械巨竜（攻）
魔法・罠：なし

「お、俺はもう、目の前のデュエルから逃げないんだな！この一年間、清明や十代たちはずっと命がけで戦い続けてた、だから俺ももう一回頑張ろうって決めたんだ！２体のモンスターをリリースして、ビッグ・コアラを召喚！」
ビッグ・コアラ　攻２７００
「ビッグ・コアラの攻撃力は２７００ですが、それはどうするノーネ？」
「もちろん、対策はあるんだな！永続魔法発動、一族の結束！」
「三沢～」
「わかったわかった、わかったからそんな捨てられた子犬みたいな声を出さないでくれ。

一族の結束……自分のモンスターをデメリットなしで常に攻撃力を８００アップさせる強力な効果を持つ半面、墓地にその種族以外のモンスターが１体でもいると効力を失ってしまう永続魔法だ。獣族に手札誘発のモンスターは純粋に戦闘能力の高いグリーンやイエローのバブーンくらいしかいないことを踏まえると、今の隼人のデッキにはエフェクト・ヴェーラーや増殖するＧ、といったコンボや妨害用カードはまず入っていないことがわかるな」

効果だけ教えてくれればよかったのに、期待以上に濃密な解説をくれた三沢には感謝。そうかそうか、８００のぽんぷあっぷ？って言うんだっけこういうの。

「だよね、ユーノ？」

『……まさかとは思うがもしかして、バンプアップのこと言ってんのか？』

「……ハイ」

ビッグ・コアラ　攻２７００→３５００

「バトル！古代の機械巨人の一体に攻撃、ユーカリ・ボム！」

ドスンドスンと大地を揺らしながらビッグ・コアラが駆け、勢いよくフライング・ボディアタックを仕掛ける。あのモフモフしてそうな体はやはりかなりの重さがあったらしく、真正面から受け止めにかかった古代の機械巨人の関節がショートして歯車がひん曲がり、あっという間につぶれてスクラップになってしまった。南無。

ビッグ・コアラ　攻３５００→古代の機械巨人　攻３０００（破壊）
クロノス　ＬＰ１３００→８００
「俺はこれで、ターンエンドなんだな」
「なるほど、攻撃力を上げることで正面から私の古代の機械巨人を倒しましたか。ですが、まだまだ詰めが甘いノーネ！装備魔法、重力の斧―グラールを発動。古代の機械巨竜の攻撃力は５００ポイントアップする！」
古代の機械巨竜　攻３０００→３５００
「これで攻撃力は同じ、古代の機械巨竜でビッグ・コアラを攻撃！」
古代の機械巨竜　攻３５００（破壊）→ビッグ・コアラ　攻３５００（破壊）
「場はがら空きになりましたが、私にはまだ古代の機械巨人の攻撃が残っているノーネ！アルティメット・パウンド！」
古代の機械巨人　攻３０００→隼人（直接攻撃）
隼人　ＬＰ４０００→１０００
「ターン終了しマス」
隼人　ＬＰ１０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：一族の結束

クロノス　ＬＰ８００　手札：1
モンスター：古代の機械巨人（攻）
魔法・罠：なし

「俺のターン！こ、ここはこのカードで時間を稼ぐんだな。モンスターをセットして、一時休戦を発動！お互いにカードをドローして、次の先生のエンドフェイズまで受けるダメージはすべて０になるんだな。さらに闇の護封剣を発動！ターンエンド」

隼人のセットモンスターの陰から3本の闇の剣が飛び出してきて、最後の機械巨人を串刺しにする。これで機械巨人は裏側守備表示になって、ほんの少しだけ時間が稼げる。でも、ちょっともったいないかも。護封剣、別に今発動することはなかったんじゃ？

『ふむ、下手に巨人と巨竜を倒せたから自分でも気づかないうちに油断が出たか？今のミスが響いてこなけりゃいいが』

あ、よかった。やっぱりミスだったんだ。いやよくないけど。

闇の護封剣
永続魔法
このカードの発動時に、相手フィールド上の全てのモンスターを裏側守備表示にする。

また、このカードがフィールド上に存在する限り、
相手フィールド上のモンスターは表示形式を変更できない。
このカードは発動後２回目の自分のスタンバイフェイズ時に破壊される。
「むむむ、私のターン。魔法の歯車による通常召喚の制限はもう終わりましたから、古代の機械兵士を通常召喚してそのまま攻撃させますーノ！プレシャス・ブリッド！」
さっきまでの巨人を小型にして片腕を丸ごと銃に取り換えたような機械兵が、無数の銃弾を乱射する。だが、その攻撃を受けるかに見えたモンスターはなんと勢いよく跳ね起きて華麗なフットワークでひょいひょいと銃弾をすべてかわしながら近づいていき、呆然とした様子の機械兵士に必殺のアッパーパンチをぶち当てた。
古代の機械兵士　攻１３００→???　守１７００
「私の古代の機械兵士が、破壊された!?」
「俺のセットモンスターは、デス・カンガルー……このカードの守備力以下の攻撃力のモンスターが守備表示のこのカードに攻撃してきたとき、その相手を破壊する。一時休戦の効果でダメージはなくなったけど、効果の発動だけならできるんだな」
「……いいでショウ、１枚カードを伏せて、ターンエンドしますーノ」
隼人　ＬＰ１０００　手札：２
モンスター：デス・カンガルー（守）

魔法・罠：一族の結束
闇の護封剣（０）

クロノス　ＬＰ８００　手札：１
モンスター：???（セット・古代の機械巨人）
魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン、これで次のスタンバイフェイズに闇の護封剣は破壊されるんだな。ターンエンド」
「私のターン！魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地の古代の機械砲台を３枚と古代の機械巨竜、古代の機械兵士をデッキに戻して２枚ドロー。ふうむ、どうせこのターン攻撃できないなら悪くないカードを引いたノーネ。魔法カード、クロス・ソウルを発動！このカードは、自分がモンスターをリリースするとき相手モンスター１体を身代りにできるカード！これによりシニョール前田のデス・カンガルーと私のセットされた古代の機械巨人をリリースして、手札から最後の古代の機械巨人を召喚するノーネ！もっとも、私はクロス・ソウルのデメリット効果でこのターンバトルフェイズを行えまセンが」
　古代の機械巨人　攻３０００
「さらに装備魔法、巨大化を発動。このカードを装備した古代の機械巨人の攻撃力は、倍になりますーノ！」

ただでさえ巨体の古代の機械巨人の体がさらに大きくなり、頭のてっぺんが高い天井に届くほどになる。で、でかい。というか鬼かあの先生は。

古代の機械巨人　攻３０００→６０００

「ターンを終了するノーネ」

隼人　ＬＰ１０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：一族の結束

闇の護封剣（１）

クロノス　ＬＰ８００　手札：０

モンスター：古代の機械巨人（攻・巨）

魔法・罠：巨大化（古）

１（伏せ）

「お、俺のターン……」

一目見ればわかる。隼人、完全に気合負けしてる。いやでも、攻撃力６０００の貫通もちで攻撃反応カードが使えない相手なんて出されたらそりゃ仕方ないと思う。思う、けど……

「気張れ、隼人ー！ここで勝つんでしょー!?勝ってこのカード、エアーズロック・サンラ

イズを胸張って使えるようになるんだって言ってたじゃん！だから負けるな隼人、気張れーっ！」
「そうだぜ、隼人！オシリスレッドの意地を見せてやれ！」
「頑張れー、隼人君！」
　僕が声を張り上げるのを見て、十代や翔も応援に加わる。それだけじゃない、万丈目も三沢も明日香もいつの間にかいた鮫島校長も、みんなが隼人に期待を向けている。
「清明……皆も……俺、まだまだだったんだな。ついさっき頑張るって言ったのに、また心が折れそうになって……でも、今度こそやってやるんだな！魔法カード、思い出のブランコを発動！墓地の通常モンスター１体を、エンドフェイズに破壊するかわりに特殊召喚できるんだな！俺が呼び戻すのは、もちろんビッグ・コアラ！」
　ビッグ・コアラ　攻２７００→３５００
「さらに手札の融合を発動！２枚目のデス・カンガルーと、場のビッグ・コアラを融合！来い、俺の最強カード！マスター・オブ・ＯＺ（オージー）!!」
　両手に赤いボクシンググローブをつけた、筋肉隆々の強面コアラ……隼人のデッキで最強の攻撃力を誇る、圧倒的パワーの持ち主。なにせ２体融合で攻撃力４２００なんだ、何かがおかしいってレベルじゃない。さらにＯＺは獣族、一族の結束の適用範囲でもある。

マスター・オブ・ＯＺ　攻４２００→５０００
「攻撃力５０００では、私の古代の機械巨人にはかないませんよ？」
「そんなこと、わかっているんだな。バトル！マスター・オブ・ＯＺで古代の機械巨人に攻撃、さらにこの瞬間に手札から速攻魔法、野性解放を発動！ＯＺの攻撃力はその守備力の数値と同じだけ、つまり３７００ポイントアップするんだな！エアーズ・ロッキー！」
マスター・オブ・ＯＺ　攻５０００→８７００
「よくやりましたノーネ、シニョール隼人。私もこの攻撃を受け、ライフを０にしてあげたいところです。しかーし、私はあなたがたの教師。ここで手を抜いてしまっては、他の生徒たちに合わす顔がないノーネ！速攻魔法、リミッター解除発動！古代の機械巨人の攻撃力を６０００の２倍、１２０００に引き上げるノーネ！」
マスター・オブ・ＯＺの右パンチがうなり、機械巨人の顔面に吸い込まれる。だが、その腕に自身の左腕を絡めるように合わせてパンチを放つ機械巨人。先に目標に命中したのは俗に言うクロスカウンター……古代の機械巨人の一撃だった。
マスター・オブ・ＯＺ　攻８７００（破壊）→古代の機械巨人　攻１２０００
隼人　ＬＰ１０００→０

「ま、負けたんだな」
「隼人……」
　何か言おうと思ったけど、今声をかけても月並みな言葉しか出ないだろうと思い口を閉じる。ああいった状況での気持ちは大事な局面での負けが多い僕が一番わかってると思う。少なくとも僕なら、中途半端な同情はよけい自分が惨めになるだけだ。
「シニョール前田、あなたは立派に成長したノーネ。あそこまで私が追い込まれるとは思っていませんでシタ」
「……でも、結局俺、負けちゃったんだな。だけど、俺、すごくワクワクした。あんなに楽しいデュエル、初めてだったんだな」
「その通りです、前田君」
　そこで口を開いたのは、鮫島校長だった。優しげな笑みを浮かべながら、ボロボロと悔し涙をこぼす隼人に向かってゆっくりと話しかけていく。
「前田君、君のデュエルを見て私は確信しました。デュエルを愛する心を持つ君ならば、きっといいカードデザイナーになれるでしょう。クロノス先生、よろしいですか？」
「もちろん。シニョール前田、あなたの推薦は私が許可するノーネ。だから、あちらでもしっかりやってきてくだサイ！」

「……はい、わかりました!!」

そして、その次の日。いよいよ本土に向けて旅立つ隼人をレッド寮総出で見送りに来ていたのだが、肝心の隼人が来ない。あとユーノもいない。おっかしいなあ、もうヘリ来てるんだよ?……あ、やっと走ってきた。

「ご、ごめんなさいなんだな〜!」

『悪ぃ悪ぃ、遅れちまった』

「遅いよ隼人、どこ行ってたの!?」

「俺の師匠に、最後のお礼を言ってきたんだな……」

師匠だのなんだのよくわからないことを言っている隼人に首をかしげつつ、胸ポケットから1枚のカードを差し出す。何があったのかは知らないけど、まだこれを渡してなかったからね。

「はい、これ」

「エアーズロック・サンライズ……」

一瞬嬉しそうな顔をするものの、すぐに後ろめたそうな表情がとってかわる。もしかして、まだ負けたことを気にしてるんだろうか。気持ちはわからないでもないんだけど

ね。
「少なくとも僕は、受け取っていいと思うよ。昨日のデュエル、すごくワクワクしたもん」
　そう言うと、やっと決心したように受け取った。そのカードをそっとデッキに入れ、ヘリのパイロットに頭を下げてから乗り込んでいく。
「さようなら、みんな！これまでありがとうなんだな～！」
「またね、隼人ー！」
「じゃあな、元気でなー！」
「また戻って来い、この俺様直々に相手してやる！」
「さよならッス、隼人君！」
　そして上昇していくヘリ。窓にへばりつくようにこちらを見ている隼人の横の窓には隼人の精霊、デス・コアラが笑顔でぶんぶんと手を振っているのが見えた。空は、すごく晴れ渡っていた。

ターン33　冥府の姫と『白き龍』

『もうやめてくれ。君は悪くないのはわかってる、これは俺の、大人のわがままだ。それもわかってる。だけど頼む、もうやめてくれ』
どうして、そんなに苦しそうな顔をするのって。
『君は絶対に悪くない。ただ……ただ、俺が弱いんだ。俺はこれ以上、君の視線に耐えられない』
ねえ、待ってよ。お願いだから返事をして、だって。
『なあ兄さん、俺が一体何をしたっていうんだ。俺はちっぽけな、薄汚れた大人の一人だ。どうして、どうして兄さんはこの子を遺して逝っちまったりしたんだ』
なんで、泣いてるの？なんでそんなに、助けてほしそうな顔をしてるの？ねえ、もしかして私が邪魔なの？だったらごめんなさい、おじさんに迷惑かけるなら私、この家にいたくないよ、なんだって。
『……ごめんな、ごめんな。おじさんが駄目な大人のせいで、君みたいな小さな子に心配かけて気を遣わせて。大丈夫だよ、君は何も悪くないんだ。悪いのは俺だ、君のまっすぐな目を見ることのできない俺なんだ』

いったいどうしたの、おじさん。ねえってば。

『……そ、そうだよな。ごめんな、変なこと言って。それですまないけど、お使いを頼まれてくれるかい？この手紙を三丁目のおばさんちまで届けてほしいんだ。場所はわかるよね？』

うん！私できるよ。でもおじさん、ほんとうにだいじょうぶ？

『ああ。それじゃあ、いってらっしゃい。車に気を付けてな』

はーい。じゃあ、あとでねー！

『……よし、しばらくは戻ってこないだろう。ごめんな兄さん、俺は地獄に堕ちるべきだと思うよ。俺みたいに出来の悪い弟、卑怯者の屑にあの子は眩しすぎる。こんなわがままで最後まであの子には迷惑かけたなあ……夢想』

……

……

……

ただいまおじさん！お手紙渡そうと思ったけどおばさんいなかったから、ポストの中に入れてきたよ。あれ、おじさんなんで机の上で寝てるの？だらしないなあ、風邪ひいちゃうよ？テーブルの上におくすり散らかして……おじさん？ねえおじさん、起きてよおじさん！

「……嫌な夢。だって」

そう言ってむくりとベッドから起き上がり、顔にかかった青い髪を軽く払いのけて洗面台へ向かう彼女の名は河風夢想。これは、ちょうど隼人がクロノス教諭と推薦を賭けたデュエルを行う日の裏で起きていた話。

さっきまで見ていたあの夢を見るのは、ずいぶんと久しぶりだ。二度と思い出したくない記憶の一部。もう忘れよう、そう呟いて軽くあくびをした彼女は、自分が空腹なことに気が付いた。朝食というにはいささか遅い時間だが、ブランチと洒落込むことにしよう。それから、今日は確かレッド寮の清明の友達がクロノス教諭とデュエルをする日だったはずだ。食べたらそれも見学しに行こう。そこまで考えたところで、足元に封筒が落ちているのに気が付いた。

「……？」

差出人も書いてない、真っ白な封筒。何気なく拾い上げて封を切ると、中には一枚の手紙とデュエルモンスターズのカードが入っていた。裏向きになっていたので何のカードかはわからなかったが、まず先に手紙から取り出してみる。自分の部屋に落ちているカードということはきっと拾ってもいいはずだ、思わぬ状況で手に入ったカードを

知る楽しみは後にとっておこう。

《今日の昼１２時、灯台まで来い。なおその際、同封したカードをエクストラデッキに入れることを望む――――――×（名前を消した跡がある。なんて書いてあったのかは読めない）》

×　×　×

時計を見ると、もうすでに１１時４０分。お昼も食べたいし、そもそも昼からはクロノス教諭のデュエルがあるし、今回は相手には悪いけどご遠慮しようかな。そう思いつつ、とりあえず同封のカードを見るため表にしてみる。

「このカード……」

見たことのないカードだったが、なぜかそのカードを見た瞬間に心がざわついた。その理由が知りたい、という欲求が抑えきれなくなる。よし、予定は全部変更しよう。一日くらい断食しても倒れたりはしないだろうし。まあ多少栄養バランスが崩れて太りやすくなるかもしれないが。

「……やっぱり行くのやめようかな、なんて」

割と本気でそう呟きながらも、手早く制服に着替えデュエルディスクにデッキをセットする彼女であった。

「あれ？」

灯台下にやって来た夢想。てっきり手紙を出した『誰か』がいると思ったのだが、そこには誰もおらずただ波の音がのんびりと聞こえるのみだった。あるいは、その時点ですでにおかしかったのかもしれない。いくら見るべきものがなく暇つぶしの役にも立たない灯台とはいえ、休日の昼間から近くに誰ひとりいないという状況はありえないはずなのだ。それなのに、生徒はおろか清掃員の姿さえない。しょっちゅうデュエルアカデミア近くを飛び回りこの辺りにも巣を作っているカモメの姿すらない。この場にいるのが河風夢想ただ一人という時点で、何か違和感を感じるべきだった。もっとも、普段この辺りに近づかない彼女にそれを求めるのも酷な話なのだが。

とにかく、彼女がそれに気づいた時にはもう手遅れだった。

「……来たな」

後ろからかけられる声。それを聞いて何となく、以前清明が『最近後ろをとられることが多い』とぼやいていたのを思い出した。最近ではそのパターンが多すぎて別に驚きもせずにああまたか、なんて思いながら振り向くようになったらしい。それもそれでおかしいのではないか、などと思いながら聞いていた記憶がある。

「誰かな？だってさ」

「俺だよ」

「詐欺の方なら間に合ってますので、って」

そう返しながら振り向くと、そこにいたのは予想していたアカデミアの学生服姿ではなく、ごくごく一般的な服を着た３０代中盤ごろの背の高い男。渋く笑ってこそいるものの、まるで笑っていないその眼を見て素早く距離をとる。

「おいおい、別に知らない仲じゃないだろうにつれねえなぁ……ま、いいさ。俺が聞きたいのは挨拶なんかじゃねえ。なあ、なーんでまたお前がここにいるんだ？さっさとあのガキだけ叩きのめして帰ってくりゃいいだろ、何があったかしらねーけどかれこれ１０年以上も姿くらましやがってよ、もしウチの今はもういないクソガキ２号が見つけてなけりゃマジの行方不明者だったんだぞ？」

「知らない仲でもない？１０年以上……？」

何一つ聞き覚えのない単語と、会ったこともない人間の話。そもそも今年で１７になる彼女にとって、そんなに前のことなど知ったことではない。だが、そう言い返せないような何かが彼女の中にあった。確かに私は、この男を知っている……という気がする。

幸いにも、今回は向こうが勝手に話を進めてくれた。

「ん、もしかしてお前、覚えてないのか!?ちっ、めんどくさいことになってやがる。ま、今回は俺もあんま深入りする気はねえし簡単なテストだけで終わらせますかね。ほれ、

構えろよ。先行は譲ってやるからさ」
「え、えっと……？」
「デュエルだよ、デューエール。常識だろ？」
　なるほど、それもその通りである。慌てて自分のデュエルディスクを起動させる。だからあのカードをエクストラに入れるよう指定したのか、とも理解した。そして、もう一つ大事なことがある。
「あなたが誰かは知らないけど、私も今日は予定があって、それをちょっと楽しみにしてたの。だから手加減なんてなしの、本気で行くから覚悟してね？だってさ」
「おおー、怖えぇ怖えぇ。ちっこくなっても迫力は変わんねえなあ。にしてもお前、そのヘンテコな語尾はどうしちまったんだ？前はそんな癖ついてなかったろ。ま、それもどうでもいいっちゃその通りなんだがな」
「「デュエル！」」
　本来はランダムで決まる先行も、今回は相手がわざわざ指定してきたためスムーズに決まる。先行だと正直ちょっと困るバイス・ドラゴンなどがデッキに入っているわけではないのでありがたく頂戴してカードを引いた。
「私のターン、まずはワイト夫人を守備表示で召喚。さらにカードを1枚セットして永続魔法、漆黒のトバリを発動。ターンエンドだってさ」

ワイト夫人　守２２００

「相変わらず骸骨好きだねえ。行くぜ俺のターン！まずはカードをセットして、青き眼の乙女を攻撃表示っとくらぁ」

古めかしい椅子に座る喪服を着た骸骨の女王（たぶん）と、腰まで伸びた長い銀髪に青い目の女性が対峙する。そのどちらも攻撃力０なのだが、ワイト夫人がその守備力を生かすべく守備表示で召喚されたのとは対照的に乙女は攻撃力０をさらしだしている。

「ん、ターンエンドだぜー。ほれ、逃げも隠れもしないからさっさとかかってこいよ」

夢想　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：ワイト夫人（守）

魔法・罠：漆黒のトバリ

１（伏せ）

男　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：青き眼の乙女（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

「私のターン！」

夢想は考える。あのモンスターの効果は知らないが、攻撃力０を伏せカードもなしで

立たせるということは何か裏があるに違いないと。ならばどうするか？よろしい、今この手札で出せる限りの最大火力で立ち向かい、中途半端な策なら力技で押し切れるくらいの攻撃力をぶつけてみよう。

「ドローフェイズ、漆黒のトバリの効果を発動。ドローカードが闇属性だった場合にそのカードを墓地に送ることで、さらにカードをドローできるんだって。私の引いたカードは闇属性、ワイトだから墓地に送ってもう1枚。次に引いたのはまたワイトメア、これも墓地に送ってもう1枚。次は竜骨鬼、これも墓地に送ってドロー。次はまたワイト、墓地に送ってドロー。次は……まあいいや、これでドローフェイズは終わり。メインフェイズまで移って魔法カード、死者蘇生を発動。墓地に送った竜骨鬼を蘇生するみたい」

地面から骨の腕がにょきっと生えてきて、地面を押さえつけるようにして体が出てくる。大きく裂けた口に胸の中心の赤く光るコアがトレードマークの夢想のメインアタッカーの1体、竜骨鬼である。

竜骨鬼　攻２４００

「さらにワイトキングを召喚、この子の攻撃力は墓地のワイトの数によって１０００ポイントずつアップするから、今の攻撃力は３０００ね」

ワイトキング　攻３０００

「ったく、エクストラなしでもほんっとよく回るよなぁ……いやになっちまう」

「バトル！まずは竜骨鬼で攻撃！」

攻撃の指令を受けた竜骨鬼が、口から火の玉を吹き出す。このモンスターはバトルした相手が戦士または魔法使い族だった時にその結果がどうあれ破壊することのできる能力を持っている。乙女がもし戦闘耐性のようなものを持っていても、効果破壊がそのあとに待ち構えているというわけだ。だが、そんな計算は大きく狂うことになる。迫る火の玉に対して乙女が天に祈りをささげると、上空から1体のドラゴンが急降下してきたのだ。

「へへっ、乙女の効果発動……っとくらあ。このカードが攻撃対象になったときに攻撃を無効にして表示形式を変更、さらにデッキか手札、あるいは墓地からコイツを特殊召喚だ。来な、青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）!!」

「ブ、ブルーアイズ!?」

青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）。どんなデュエリストだって知っている超有名カードであり世界にたった4枚、今は実質3枚しか存在しないはずの伝説のレアカードである。そして、その3枚を保有しているのはかの有名な海馬コーポレーションの若き社長、海馬瀬戸のはずだ。精霊世界においてカイバーマンの精霊も平気な顔してデッキに3積みしていたりもするのだが、あいにく夢想はそのことを知らない。だからとっさのことに気の利い

た返しができるわけでもなく、ただ目を白黒させるばかりであった。
「マジで驚いてんな……本っ気でなーんも覚えてないのか。まあいいさ、かかってきな」
だが、彼女もまた強さを求めるデュエリストの一員である。最強のバニラモンスターである青眼の入ったデッキを相手にする。その興奮に、彼女の中にあった相手に対する不信や警戒は吹っ飛んだ。あるのはただ、デュエリストの闘争本能からくるワクワク感のみ。かかってきな、などとは言われるまでもない。
「ワイトキング、ブルーアイズに攻撃！必殺、螺旋怪談！」
主の思いに応えるように、ジャンプしたワイトキングがブルーアイズの後ろに素早く回り込んでその首をギリギリと絞めつける。ブルーアイズが苦し紛れに放った尾の一撃がワイトキングの骨格をバラバラにするのと締め付けに限界を迎えたブルーアイズが倒れるのはほぼ同時だった。だが、地に堕ちたドラゴンの横に散らばるワイトキングの体の骨にワイト夫人がそっと手を差し伸べると、愛する妻の願いを受けたワイトキングが寄り集まってくっつき元に戻る。最初からこれを狙っていたからこそ、今後の戦線維持のため乙女ではなく青眼を狙わせたのだ。
ワイトキング　攻３０００↓青眼の白龍　攻３０００（破壊）
「ワイト夫人が場にいる限り、レベル３以下のアンデットは戦闘で破壊されないしカード効果も受けないよ。私はこれでターンエンド、だって」

「俺のターン！永続魔法、ポジションチェンジを発動！このカードは1ターンに1度、俺のモンスターを隣のモンスターゾーンに移動させることができる……んだが、ここで再び乙女の効果だ！このカードの効果で乙女を対象にしたことで、デッキから2体目のブルーアイズを特殊召喚！」

再び乙女が天に祈りをささげ、2体目のドラゴンが急降下して乙女のそばに寄り添う。

「さあ、バトルを始めようぜ！ブルーアイズでワイト夫人に攻撃、滅びのバースト・ストリーム！」

青眼の白龍　攻３０００→ワイト夫人　守２２００（破壊）

「だけど、ワイト夫人は墓地でワイト扱いになるモンスター！ワイトキングの攻撃力はこれで４０００！」

ワイトキング　攻３０００→４０００

「それがどうしたぁ！トラップ発動、破壊神の系譜！俺の場にいるレベル８モンスターが守備モンスターを戦闘破壊した時、もう一度だけ追加攻撃をさせることができる！次の相手は竜骨鬼、てめえだ！ダブル・バースト・ストリーム！」

一度攻撃したはずのブルーアイズの翼が再び広げられ、ふわりと宙に舞いあがると太陽を背にして2度目のブレスを打ち出す。竜骨鬼の効果はあくまで戦士と魔法使いに

のみ効力のある限定的なもの、ドラゴン族にとっては何の意味もない。
青眼の白龍　攻３０００→竜骨鬼　攻２４００（破壊）
夢想　ＬＰ４０００→３６００
「メイン2、乙女を攻撃表示に変更。カードを伏せて、ターン終了だ」
夢想　ＬＰ３６００　手札：３
モンスター：ワイトキング（攻）
魔法・罠：漆黒のトバリ
１（伏せ）
男　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：青き眼の乙女（攻）
青眼の白龍（攻）
魔法・罠：ポジションチェンジ
１（伏せ）
「私のターン！」
ドローしたカードをちらりと見るが、どうやらワイトモンスターではなかったらしく漆黒のトバリの効果を使うことはなかった。だが、十分に満足のいくカードを引いたらしい。

「マッド・デーモンを召喚してワイトキングで乙女に攻撃、螺旋怪談！」
紳士は淑女に手を上げない。だが、別に蹴ってはいかんという法はない。物言わぬ骸骨が回し蹴りを放つものの、その攻撃はまたもや祈りに応え上空から急降下してきた青いドラゴンに阻まれる。
「乙女の効果発動！その攻撃を無効にして乙女を守備表示に変更、デッキからブルーアイズを呼び出す！」
「関係ないよ、マッド・デーモンでもう一度乙女に攻撃！ボーン・スプラッシュ！」
ワイトキングの攻撃を止めてもらいほっと一息つく乙女の背後から、噛み砕かれた無数の骨のかけらが吹き付けられる。２体のドラゴンもワイトキングに注意をそらされていたため、乙女をかばいに行くことができなかった。
マッド・デーモン　攻１８００→青き眼の乙女　守０（破壊）
男　ＬＰ４０００→２２００
「ぐうっ！そーいやマッド・デーモン、貫通能力なんてもってやがったっけか。マイナーなカードだからすっかり忘れてたぜ」
「私にとっては頼りになるアタッカーだけどね、だって……」
そこで一度、言葉を切る。別にためを作ってから言いきろうとしたわけではない。
『だって』

その次に何を言おうとしていたのか、自分でもわからなかったからだ。確かにこのカードは、彼女のデッキを初期からずっと支え続けてくれたカードの1枚だ。物心ついて初めて組んだデッキに入っていたカード。だけど、それは一体いつのこと？普通に考えれば彼女の年齢を考慮して１０年前くらいだろう。本当にそうだろうか。わからない。

「ん？おいおい、せっかくこっちがノッてきたってのにサレンダーでもする気か？そりゃないぜ」

「……ううん、とんでもない。カードをセットして、これでターンエンドだよ」

だがその疑問は、ひとまず脇に置いておく。今自分のすべきことは、この男をデュエルで倒すこと。そう言い聞かせる。なぜか、そうした方がいいような気がしてならなかったのだ。

「そうか、ならおれのターンだな。魔法発動、実力伯仲！俺の場にいるブルーアイズ１体とお前のワイトキングを選択して発動し、お互いの効果を無効にする。そして、そのモンスターは攻撃も表示形式の変更もできなくなる代わりに戦闘で破壊されず、あらゆるカード効果も受け付けねえ！」

「……っ！ワイトキング！」

ワイトキング　攻４０００→０

「効果無効になったワイトキングなんざぁただの的だ！さらに青き眼の乙女を攻撃表示で召喚、ポジションチェンジの効果を使ってモンスターゾーンの位置を変えつつデッキから3体目のブルーアイズを召喚！」
「これで、３体……」
　青眼の白龍　攻３０００
「さあ、俺の知ってるお前ならまさかこれだけじゃあやられねえとは思うが……ブルーアイズ、攻撃！」
「トラップ発動、闇霊術―「欲」！自分の場の闇属性、ワイトキングをリリースすることでカードを2枚引くけど、相手は手札の魔法カードを見せてこのカードを無効にできる！」
「ならこの速攻魔法、おろかな転生を見せることで無効だ！」
　ワイトキングをリリースして発動された伏せカード、闇霊術。その効果こそ無効になってしまったものの、もとより手札が2枚ある相手にこのカードが通るなどとは最初からあまり期待していない。重要なのはその結果、ワイトキングをフィールドから引きはがすことに成功したという1点だ。
「これで私の場にはマッド・デーモン1体だけ。このまま攻撃するの？だって」
「ちっ、うまくかわしたか。そう来なくっちゃな、まずはマッド・デーモンに攻撃！」

「マッド・デーモンもう一つの効果発動、攻撃対象になった場合このカードを守備表示にする！」

青眼の白龍　攻３０００→マッド・デーモン　攻１８００→守０（破壊）

「まだあと２体！そのままブルーアイズで連続攻撃だ！」

「そうはさせないよ、ヒーロー見参を発動！あなたが私の手札２枚の中から１枚を選んで、それがモンスターカードなら私の場に特殊召喚するよ、って」

「なら俺はその、俺から見て右のカードを選ぶ！」

「こっち？なら……」

そう言って、そのカードをゆっくりと表向きにする。そのカードの種類は、モンスターカード。

「手札のスカル・マイスターを守備表示で特殊召喚するんだって」

「ちっ！構わねえ、やっちまえ！」

青眼の白龍　攻３０００→スカル・マイスター　守４００（破壊）

青眼の白龍　攻３０００→夢想（直接攻撃）

夢想　ＬＰ３６００→６００

「どうだ、俺のブルーアイズの味はよお？なかなか効くだろ、こいつらの一撃は」

「う、うん……まあね、だってさ。でも、まだまだ！」

「そーかいそーかい。さて、俺の読みが正しけりゃお前はそろそろ次辺りで決めてくるな。ま、俺も一応あがけるだけあがいてみるがね。っつーわけで手札を全部伏せてターンエンドだ」

夢想　ＬＰ６００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：漆黒のトバリ
１（伏せ）

男　ＬＰ２２００　手札：０
モンスター：青眼の白龍（攻）
青眼の白龍（攻）
魔法・罠：ポジションチェンジ
３（伏せ）

妙だ。夢想でなくてもそう思うだろう。フィールドは、圧倒的に男の方が有利だ。伏せカードの数も多く、手札も大した差があるわけでもない。だが、男は言い切ったのだ。彼女が次辺りで決めてくる、と。自分が勝つのを諦めているという風ではなく、まるでそれが当然であり、そうでない方がおかしいのだ、といわんばかりの自信を持って。

だが、どんなに怪しいと思っても彼女には進む以外の選択肢がないのもまた事実であ

る。そしてやはりというべきか、ずば抜けた彼女の運命力はこの場面でも確かに彼女に手を貸した。男の予言通り本当に引いたのだ、この状況を打開して男のライフを一気に0にできる可能性を持つカードを。

「今引いた魔法発動、龍の鏡(ドラゴンズ・ミラー)……!このカードは自分の場か墓地から融合素材になるモンスターを除外することで、融合モンスターを融合召喚することができる!私がゲームから除外するのは、アンデット族の竜骨鬼とワイトキング!」

「おっと待ちな。そこでリバースカード、おろかな転生を発動!この速攻魔法は相手の墓地のカード1枚を選択して持ち主のデッキに戻す……俺はこれでワイトキングをデッキに戻させるぜ!」

「その発動にチェーンしてリバースカード、マジック・ディフレクター!このカードは魔法版のトラップ・スタン、通常魔法以外のあらゆる魔法カードを無効にするんだって」

「こっちは何もねえ、龍の鏡は通すぜ。ちっくしょ、せっかく伏せた月の書までお亡くなりになりやがったか」

「なら続けるよ、だって。アンデット族モンスター2体で融合!冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温(なまぬる)い!融合召喚、冥界龍　ドラゴネクロ!」

夢想のバックに幻魔の扉並みに大きな怪しい門が浮かび上がり、その扉がゆっくりと開くと中の地獄のような闇からデーモンの召喚と神炎皇ウリアを足して2で割ったよ

うなドラゴンがヌルリ、と飛んでくる。見ているだけで子供が泣き出しそうなそんな風景を、男はクックックと笑いながら見ていた。
「いいねえいいねえ、やっぱりやってくれる女だぜ。だけど、そいつだけじゃあ効果込みでも力不足だな。最後のトラップ、ダメージ・ダイエット発動！これで俺の受けるダメージはこのターン半分になる」
　そしてそんな男を、冷めた目で見つめる夢想。もしもこの場に普段の彼女をよく知る者が居合わせたら、そのあまりの雰囲気の違いに双子の姉妹かと思うほどだろう。それほど別人めいていたのだが、男にとってはむしろそれが狙いだったのかもしれない。事実、彼はそこでなお笑って見せた。
「ああ、やっぱりな。お前は……」
「最後の手札、ワイトメアの効果発動。このカードを墓地に送って、除外されたワイトキングを特殊召喚する。この時、このワイトキングの攻撃力は５０００……バトル！ドラゴネクロ、ブルーアイズに攻撃！ソウル・クランチ！」
　ドラゴネクロがズイッと迫り、ブルーアイズの体を掴んで至近距離から喰らいつこうとするが、その時の一瞬の隙をブルーアイズは見逃さなかった。それよりも一瞬早く放たれたバースト・ストリームが、ドラゴネクロの上半身を吹き飛ばす。
　冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００（破壊）→青眼の白龍　攻３０００

「本当なら相打ちだけど、ドラゴネクロが戦う相手モンスターはその戦闘で死ぬことは許されない。ただし、その魂は私のもの」

そう言った瞬間、勝ったはずのブルーアイズがガクンと急に力が抜けたように頭を垂れた。その口から白い霧のようなものが飛び出してきて、それがみるみるうちに黒く染まりながらブルーアイズの姿をとって夢想の場に降り立つ。黒いブルーアイズが、翼を広げた。

「ブルーアイズの攻撃力は0になり、私の場にはその攻撃力とレベルをコピーした魂の成れの果て、ダークソウル・トークンが呼び出される」

青眼の白龍　攻３０００→０

ダークソウル・トークン（青眼の白龍）　攻３０００

「ワイトキングでその抜け殻を攻撃……螺旋怪談」

ワイトキング　攻５０００→青眼の白龍　攻０（破壊）

男　ＬＰ２２００→０

「かーっ、負けた負けたっと。んじゃな、あいにく俺もこの後2、3人狩っとかなきゃいかん奴らがいるからな、そろそろお暇するぜー。まあでも安心したわ、なんだかんだ

いってやっぱお前全然変わってねえし」
「え、あ、ちょっと待……って、だってのに」
　ライフが０になった瞬間言いたいことだけ言って、男の姿はすうっと消えた。まるで最初から誰もいなかったかのように。だけど、この出来事が夢ではない証拠にドラゴネクロのカードはまだ夢想が持っている。なにげなく墓地から取り出してみて、じっくりとイラストを眺める。一体なんだったんだろう、このカードを出した時の不思議な感じ、まるで自分じゃない誰かがデュエルしているのを眺めていたような感覚は。それに、今もまだこのカードを見ると胸がざわつく。何かがありそうな気もするのに、何一つ思い出せない。
「……帰ってお昼にしようかな、なんて」
　だけど、一人で悩んでいても何も始まらない。このどこか懐かしい気もするカードを使い続ければ、何かの拍子に見えてくるものもあるかもしれない。根が楽天的な彼女はそう結論付け、ひとり呟いて静かに女子寮へと戻るのであった。
　これは、ちょうど隼人がクロノス教諭と推薦を賭けたデュエルを行う日の裏で起きていた話。特に誰かに知られることなく起きた、世界の片隅でひっそりと行われた一回のデュエルの話。

ターン３４　鉄砲水と完全なる機械龍

我らがオシリスレッド寮に客がやって来たのは、あの男らしく実に突然だった。アポの一つも入れてくれないものだから、お茶菓子を用意する暇もなかったほどだ。
「清明、いるか」
そう言ってその男がドアを開けた時には、さぞかし驚いたことだろう。なにせ部屋の両端には明らかに不釣り合いな古ぼけたドアが素人丸出しの建築で強引に取り付けられ、その横には万丈目の部屋に入りきらなかった家具で野ざらしになっていたのをいくつかかっぱらってきた戦利品である一級品の椅子がポン、と置いてあったりするんだからねえ。住んでるうちに僕たちはだいぶ慣れてきたからいいんだけどね。
「……まあ、とにかく上がってよ、カイザー」
カイザー亮。デュエルアカデミアで最強ともいわれる、サイバー流の使い手である男。そんな男がわざわざブルー寮からここまで一人でやってくるとなると、その要件は……うん、さっぱりわかんない。
「で、何してるのそんなにキョロキョロして」
「いや、俺の寮とはずいぶん雰囲気が違うなと思ってな」

「……具体的には？」
「味がある部屋だ」
　い、いかん。悪気がないのはわかってるけど、それでも嫌味にしか聞こえない。大体ブルー寮の方がおかしいんだよ、見た目からしてもう城だもん！そう、あれは断じて寮なんてチャチなもんじゃない。あれはどこからどう見てもただの城だよ。
『いやー、そこ抜きにしてもこの部屋は実際世にも珍しいと思うぞ。なんてったって壁のぶち抜きだし』
　幽霊も住み着いてるし。カードの精霊もちょっとした動物園並みにいるし。あと猫。（ファラオ）
うーん、改めて並べてみると何かがおかしい気がするけど、まあいいや。
「話が脱線したな。俺がここに来たのは、お前に用があったからだ。明日、俺の卒業デュエルがあるのは知っているな？」
「まーね。確かあれでしょ、全校生徒から一人選んでそいつと皆の見てる前で学園最後のデュエルするっていうアカデミア恒例行事で年間行事予定表にも書いてあるあれ」
　別に僕が行事予定表をじっくりと見たわけではない。台所の冷蔵庫に張り付けてあるから確かに一番見る機会は多いけど、この行事はかなり大掛かりなイベントだから誰だって知っている。十代クラスのデュエル人間だともしかしたら知らないかもしれないけど、まあさすがにそれはないだろう。この間の授業でクロノス先生もチラッと言っ

てたし。
『待て。もしかしてその時、十代グッスリ寝てなかったか？』
　あ、そうだったかも。よくわかったなユーノ。っと、また話がずれた。
「それで、その卒業デュエルがどうしたの？あいにく十代と万丈目と翔は釣りに行っちゃったけど」
「いや、さっきも言っただろう。俺がここに来たのは、お前に用があるからだ。……そのデュエルで、俺はお前を指名する」
「ほえっ!?」
「それだけだ、明日は楽しみにしているぞ」
　言いたいことだけ言って、クルリと背を向けて出ていこうとするカイザー。ちょっと頭の中が混乱してるけど、とりあえず一つだけどうしても聞いておきたいことがあった。
「そう言ってくれるのはもちろん嬉しいよ、だけど、なんで僕なの？十代や万丈目や三沢、それに夢想とかの方が実力的には僕よりずっと上だよ？」
　心からの本音。カイザーは、決して自分が確実に勝てる相手だからとかいうゲスな理由で対戦相手を決めるような男じゃない。だからこそその理由が、僕は知りたかった。
「それはお前自身が考えろ。あえて今言うとしたら、お前にはカミューラから助けても

らった借りがあるからな。そういうことにしておこう」
……なるほど、あくまでその理由を言うつもりはないってわけか。なら、こっちにも考えがある。
「じゃあさ、カイザー。明日のデュエルで僕が勝ったら教えてくれる？その理由を」
下手をすると宣戦布告にも聞こえるそんなセリフを背中で受け取って、カイザー……アカデミアの皇帝がふっと薄く笑ったのが、見えた気がした。
「いいだろう。ではまた明日」
それきり振り返ることなく、今度こそカイザーは歩き去っていった。うーん。

「ってことがあったんだけど」
これ言ったらたぶん荒れるだろうなあ、ってことはわかってた。最初からわかってたけど、まさか言わないわけにもいかないし。そもそもここで隠しても、どうせ明日にはばれる。
「ずるいぞ貴様、この万丈目サンダーを差し置いて卒業デュエル代表生徒だと!?なぜ俺ではないのだ、おかわり！」
「万丈目、いくらお前だけボウズだったからってそんなやけ食いすることないんじゃな

いか？」
『そうだよアニキ、十代のダンナの言うとおり。みっともないよ～』
「ええい、貴様みたいな気持ち悪い雑魚にみっともないといわれる筋合いはない！大体お前もだ十代、なぜ貴様はそんなにヘラヘラしていられる！お前だってカイザーとはデュエルしたいんじゃなかったのか！」
　バンッと机を両手でたたき、万丈目が十代を指さす。だが、当の十代は案外冷静だった。
「まあな。そりゃ、俺だってカイザーとはまたデュエルしたいさ。だけど俺、実は今すっげえワクワクしてるんだ！なんでかわかんないけど、明日はきっとすごいデュエルになる。そんな予感がするんだよ。だから、今回は清明に譲っておくぜ。多分カイザーは卒業したらプロに行く。そして俺がいつかデュエルキングになる。俺がカイザーとデュエルするのは、その時までお楽しみにしておくぜ！」
「十代……！」
「ふん、貴様らしい考えだ。だが一つ間違いがある。その時デュエルキングとして君臨しているのはこの俺、万丈目サンダーだ！だがまあ、それ以外の点については一理ある。いいだろう清明、今回はお前に花を持たせてやる。……明日はしっかりな、清明」
「万丈目……！」

「気を付けてね清明君、お兄さんのサイバーデッキはわかってると思うけど、すごく強いから。僕には応援するぐらいしかできないけど、精いっぱい応援してるから！」
「翔……！」
　あ、なんかちょっと目に汗が。こ、こんなとこ見せられないよ！
「ごめん皆、僕もうちょっと今日は寝るから！」
　そう言い残して、顔を見せないようにして二階へと駆け上がっていく。後ろの方でおい、俺のおかわりはどうした！とか言ってる声が聞こえたけど、ごめん万丈目。今あの場所に戻って感動のあまり泣かない自信が僕にはない。

「ふう……」
『やっと落ち着いたか。んじゃ、最終デッキ調整と洒落込もうかね』
「うん、そーだね」
　さすがにあのカイザーが相手なんだ、中途半端に突っ込んでいったら速攻で返り討ちに合うのは目に見えてる。さーて、どうしようかなこのデッキ。
『まあ機械メタなら酸の嵐やシステム・ダウン、光メタならＤ・Ｄ・チェッカーとかコアデストロイあたりかねえ。ただまあ、正直言って俺はそういうのは好かん。そもそもあ

のカイザーに付け焼刃のメタデッキが効くとは思えんし、卒業デュエルでそんなの使ったらお前が大ブーイング受ける未来しか見えねえし』
「そうなんだよねえ。僕も欲を言うなら使い慣れたカードで勝ちたいし」
かと言って、僕のデッキは全体的に低い攻撃力を誤魔化しながら戦っていくビートダウンデッキ。圧倒的な攻撃力でガンガン攻め込んでくるサイバー流との相性は最悪だ。コントロール系が相手ならわりと強いんだけども。うーん。
『ふむ……ならいっそのこと、逆の発想もありかもな。具体的にはこれ入れてみよーぜ』
「コレ!?あー、でも……ありかも」
『だろ?』
そんなこんなで、ゆったりと夜は更けていった。明日、絶対勝とう。

「それでは只今よりシニョール丸藤バーサス、シニョール遊野による卒業デュエルを開始するノーネ!申し遅れましたが司会はワタクシ、クロノス・デ・メディチが担当しますーノ。ささ、それでは両選手入場ナノーネ!」
あらかじめ聞かされた話通りにクロノス先生からの超簡単な初めの言葉を聞き、僕らの入場が呼ばれたタイミングでデュエルフィールドへと登っていく。ふと見るとカイ

ザー側の観客席は赤青黄の三色の制服でぎっしりと埋め尽くされており、その人気がうかがえる。ちなみに僕の方は……あー、うん。ですよねー。もののみごとにスッカスカだ。そんな中に座ってこっちを応援してくれてる十代たちには感謝。もしこれで誰もいなかったら戦う前から気持ちの問題で負けてたかもしんない。

『ギャラリーなんざいらねぇぜ、ここで勝ったら官軍だ！』

「勝てば官軍、か」

　この続きはなんだっけか。負けたら賊軍、だったかな確か。ここはひとつ、官軍になりたいもんだ。いや、こんな覚悟じゃだめだな。狙うは官軍ただ一つ、他の道なんて選択肢に入らないね！

「それじゃあ始めようか、カイザー……1学期に十代とのタッグデュエルではぼろ負けしたけど、僕はこの1年で大きく変わった、強くなった！それを今から証明してやる！」

「ふ、いいだろう。ならばその力、見せてもらう！」

「「デュエル!!」」

　本来ならば先攻後攻はランダムで決まるシステムのデュエルディスクも、今回はちょっぴり特別仕様。なんと、指名された相手である僕が好きな方を選べるのだ。普通の相手ならば先攻をとるのが有利と一般的に言われているけど、相手はあのサイバー

流。ここはひとつ、様子見も込めて後攻にしよう。
「僕は後攻を選ぶよ、カイザー。お先にどうぞ」
「ほう？ならば俺のターン、ドロー！サイバー・ラーバァを守備表示で召喚。さらに永続魔法、強欲なカケラを３枚発動。俺はこれでターンエンドだ」
サイバー・ラーバァ　守８００
カイザーが先行で召喚したのは、まさにサイバー・ドラゴンの幼虫のようなこじんまりとしたイモムシ型機械。意外だ、たとえ先行であっても何かしらの大型モンスターを出してくることは覚悟してたのに。そしてもっと怖いのが、あの強欲なカケラ３枚同時発動。なんとかしてせめて１枚でも除去したいところだけど、今の手札じゃ無理か。でも当面の問題はあのラーバァだね。
「僕のターン、ドロー！」
ふむ、ちょうどいいカードが来た。今回は全体的に引きがいい気がする。というかこっちも引いたか、強欲なカケラ。なんだこのカケラ祭りは。まあ使わない理由はないしありがたく使っておこう。
「ツーヘッド・シャークを召喚してそのままバトル、サイバー・ラーバァを攻撃！」
あごの部分を半機械化した青い鮫が、まずは口の上半分でラーバァを一口で噛み砕く。よし、いい調子いい調子。

ツーヘッド・シャーク　攻１２００↓サイバー・ラーバァ　守８００（破壊）
「さらにツーヘッド・シャークは、１ターンに２回の攻撃ができる！もう一回攻撃！」
「だが、サイバー・ラーバァもまた効果がある。このカードが戦闘で破壊された時、デッキから別のサイバー・ラーバァを呼び出す！」
「む、しつこいモンスターだね。まあいいか、攻撃しちゃって！」
ツーヘッド・シャーク　攻１２００↓サイバー・ラーバァ　守８００（破壊）
先ほどとは逆の、口の下半分で２体目のラーバァを噛み砕くツーヘッド・シャーク。どうせ３体目が来るだろうと思っていたが、カイザーに動きはない。
「これで俺のデッキにサイバー・ラーバァはもういない、効果は使わないぞ」
「……だったら、カードを１枚セットして永続魔法、強欲なカケラを発動。ターンエンド」
今僕が伏せたカードは、ポセイドン・ウェーブ。おそらくカイザーは次のターン、今度こそサイバー・ドラゴンかその融合体を出してくるはずだ。だけど、攻撃を１度止められるポセイドン・ウェーブを張っておけば１ターンは大丈夫なはずだ。というかむしろ、さっさとダメージを与えて何か仕掛けてくる前に倒したいから攻撃してくれる方がありがたい。
カイザー　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：なし
魔法・罠：強欲なカケラ（０）
強欲なカケラ（０）

強欲なカケラ（０）

清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：ツーヘッド・シャーク（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
強欲なカケラ（０）

「俺のターン。まず通常のドローをしたことで３枚の強欲なカケラにそれぞれ強欲カウンターが１つのる。さらにサイバー・フェニックスを守備表示で召喚、ターンエンドだ」

サイバー・フェニックス　守１６００

「僕のターン！強欲カウンターがたまって、と」

ううん、もっと序盤からガンガン攻めてくると思ってただけに今の守備固めが逆に怖い……。でもここで迷ってても何もできないししょうがない、か。

『仕掛けてくるとしたらまず間違いなく次のターンだな。逆に言うと、このターンだけはこっちも動き放題だ。さーて、どうすっかねえ』

「よし、ここはいつも通り動くよ！キラー・ラブカを召喚、さらに水属性モンスターのラブカをリリースして手札のシャークラーケンを特殊召喚！」
シャークラーケン　攻２４００
「バトル、シャークラーケンでサイバー・フェニックスに攻撃！」
シャークラーケン　攻２４００→サイバー・フェニックス　守１６００（破壊）
「サイバー・フェニックスがバトルで破壊された時、俺はカードを１枚ドローすることができる」
さーて、問題はここだ。今ツーヘッドに攻撃させれば２回攻撃で２４００のダメージを与えることができる。だけど、もしカイザーの手札に速攻のかかしとかのカードがあったらどうなる？攻撃は通らず、返しのターンでまず間違いなく攻撃を受けるだろう。何せ次のターンはカイザーの手札の数が違う、今伏せてある２枚だけで対抗できるかどうかは怪しいものだ。なら、ここはメイン２に移ってツーヘッドを守備表示にすべきだろうか。
『俺は何も言わないからな。後々まで響く選択だろうし、これは自分で考えて決めとけ』
静かに、そして真剣につぶやくユーノ。まあ、さすがにここで助け舟はくれないか。たとえあったとしても無視しただろうけど。
僕は……。

「攻撃、ツーヘッド・シャーク!カイザーに2回のダイレクトアタックだ!」
その一声を待ちかねていたかのようにツーヘッドが飛び上がり、一発の魚雷になったかのようにカイザーへ突進する。そしてその牙は、確かにカイザーに届いた。
「くっ……!」
ツーヘッド・シャーク　攻１２００→カイザー（直接攻撃）
カイザー　ＬＰ４０００→２８００
ツーヘッド・シャーク　攻１２００→カイザー（直接攻撃）
カイザー　ＬＰ２８００→１６００
「よしっ!」
これでカイザーの残りライフは１６００、次のターンの攻撃をポセイドン・ウェーブで反射すれば１６００ダメージが入って僕の勝ち。このままいけば、勝てる。あの男に、カイザーに!
「これでターンエンドだよ」
カイザー　ＬＰ１６００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：強欲なカケラ（１）
強欲なカケラ（１）

カケラ（１）　　強欲な
清明　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：ツーヘッド・シャーク（攻）
シャークラーケン（攻）
魔法・罠：強欲なカケラ（１）
１（伏せ）

「俺のターン、ドロー。この瞬間、２つ目の強欲カウンターが強欲なカケラにたまる。そしてそのカケラの効果発動、２つ以上のカウンターがたまったこのカードを墓地に送ってカードを２枚ドロー……俺が引くのは合計６枚だ」

そう言って６枚のカードを引くカイザー。これであっちの手札は１０枚、か。さあ、このターンが正念場だ。

「もう勘づいているとは思うが、清明。覚悟はいいな？」

「もちろんだよ、カイザー」

「ならば、俺の本気を見せてやろう！フィールド魔法、シャインスパークを発動！このカードは光属性の攻撃力を上げる代わりに守備力を下げる、お前のウォーターワールドのようなものだな。そしてエクストラデッキからサイバー・エンド・ドラゴンを除外！」

『何!?まさか!』
「生まれ落ちろ、もう一つのサイバー・エンド!Ｓｉｎ（シン）　サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚!」
　何の下準備もなしにいきなり出てきたそのモンスターは、特徴的な三つ首と言いメタリックなボディといいまさしくサイバー・エンド・ドラゴン……いや、違う。とてもよく似ているけど、あのモンスターは僕がこれまで見てきたサイバー・エンドじゃない。例えるなら、もう１つのサイバー・エンドといったところか。
　Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴン　攻４０００
「まだだ!手札から融合を発動し、３体のサイバー・ドラゴンを融合!融合召喚、サイバー・エンド・ドラゴン!」
　Ｓｉｎの隣に、本家本元のサイバー・エンドがそびえ立つ。攻撃力４５００の貫通もちモンスターは、はっきり言ってかなりまずい展開だ。
　サイバー・エンド・ドラゴン　攻４０００→４５００　守２８００→２４００
『いや。Ｓｉｎモンスターは強力だが、他のモンスターが攻撃をできなくさせる特殊効果を持っている。このままなら今の召喚に意味はないな。まあ、そんなことまずありえん話だが』
「まだ俺はこのターン、通常召喚をしていないな。サイバー・ドラゴン・コアを召喚し、

その効果を発動。デッキから『サイバー』または『サイバネティック』と名のつく魔法、罠カード１枚をサーチ……俺はこの効果で、サイバネティック・フュージョン・サポートを手札に加える」

目も鼻もなく、こじんまりとした姿は機械の竜というより機械の蛇。なるほど、きっとあのカードが文字通りサイバー・ドラゴンたちの核になるんだろう。

サイバー・ドラゴン・コア　攻４００→９００　守１５００→１１００

「そして融合回収を発動、墓地の融合１枚と融合素材となったモンスター１体を手札に戻す。これでサイバー・ドラゴンと融合を手札に戻し、そのまま発動！場のコアと手札のサイバー・ドラゴンを使用し、サイバー・ツイン・ドラゴンを呼び出す！」

サイバー・ツイン・ドラゴン　攻２８００→３３００　守２１００→１７００

「う、うわあ……」

さっきまで何もなかったフィールドに、今は超大型モンスターが３体。

「さらに速攻魔法、禁じられた聖杯を発動。Ｓｉｎの効果をこのターン無効にし、攻撃力を４００アップさせる」

Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴン　攻４０００→４４００

これで、さっきユーノが教えてくれたＳｉｎモンスターのデメリットもなくなった。これから来るのはとんでもない攻撃力の４回連続攻撃、１発でも喰らったら即死か、そ

うでなくてもほぼ瀕死クラス。……頼むよ、ポセイドン・ウェーブ。これさえ決まればいくら向こうに攻撃力があっても僕の勝ちなんだ。

「ゆくぞ、バトルだ!・まずはＳｉｎサイバー・エンドでツーヘッド・シャークを攻撃!・エターナル・エヴォリューション・バースト!」

本家の方とは違い、三つの首からそれぞれ火炎弾を打ち出して攻撃するＳｉｎサイバー・エンド。だが、その火球はツーヘッド・シャークに届く前に分厚い水の壁に阻まれた。

「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ!その攻撃を無効にして僕の場の水、魚、海竜族１体につき８００のダメージを与えるからこれで１６００のダメージ、このデュエルはもらった!」

「甘い!手札からハネワタの効果発動、このカードを墓地に送ることで俺がこのターン受ける効果ダメージはすべて０になる!」

「だ、だけど攻撃は止めきった!まだまだ負けるもんか!」

「確かにな。だが次だ!サイバー・エンド・ドラゴンで攻撃、エターナル・エヴォリューション・バースト!」

もう何度となく目にしてきた、すべてを焼き尽くす白い熱線。初めてカイザーとデュエルした時にはなすすべがなかったけど、今の僕はもう違う。

「墓地からキラー・ラブカの効果を発動、このカードをゲームから除外してその攻撃を無効に、そして攻撃力を僕のエンドフェイズまで５００ポイントダウンさせる！」

サイバー・エンド・ドラゴン　攻４５００→４０００

「ふっ、これも受けたか。だが、続くサイバー・ツイン・ドラゴンの２回攻撃は止めきれまい！２体のモンスターを焼き尽くせ、エヴォリューション・ツイン・バースト！」

確かに、カイザーの言うとおりだ。僕の防御札はもう、全部使いきった。どうすることもできないまま、ツーヘッド・シャークとシャークラーケンが白い光に飲み込まれて消えていく。

「うわあああっ！」

サイバー・ツイン・ドラゴン　攻３３００→ツーヘッド・シャーク　攻１２００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→１９００

サイバー・ツイン・ドラゴン　攻３３００→シャークラーケン　攻２４００（破壊）

清明　ＬＰ１９００→１０００

「俺は、これでターンエンドだ。さあ、お前の本気のデュエルを見せてみろ！」

「くっ……」

僕の本気のデュエル、か。この手札は、かなりいいところまで来てる。具体的にはあ

と1枚、あのカードさえ来れば逆転できる。と、そこでユーノがあることに気が付いた。
『あーなってこーなって……待てよ？こーきてあーきて、それで……ふむ。清明、次の俺らのターンはお情けでもらったと思え』
「え、いきなりどうしたのさ？」
『今の攻撃、確かに俺らは捌ききったよな』
「うん」
　だいぶ危なかったとはいえ、なんとかライフも１０００残ってる。もっとも、１０００なんてあのモンスターたちの前じゃ大した量じゃないゴミみたいな数値だけど。
『あれ、攻撃の順番が一か所でも違ってりゃラブカ効果の発動条件から言ってどう考えても４０００以上のダメージが通る計算になるんだよ。それにカイザーが気付かないはずがねえ、いわゆる奴のリスペクトデュエル、ってやつなんだろうな……手を抜かれたのは事実だし、正直これは気に入らんが』
「な、なるほど」
　つまり、僕の腕じゃあまだまだカイザーに本気を出させるほどのレベルじゃないってことか。……悔しい。なんとかして、このドローカードで大逆転してやろう。頼むよ、僕のデッキ。あのカードさえ引けば、あるいはまだわかんないんだ。
「僕のターン、ドローッ！さらにこのドローで僕の強欲カウンターも２つになったから

墓地に送って2枚ドロー……来た来た来たあ！まず魔法カード、クロス・ソウルを発動！僕はこのターンバトルフェイズを放棄する代わりに、モンスターをリリースするとき1回だけそのリリースを相手モンスターに肩代わりさせることができる！」
「なるほど、確かにそのカードなら俺のモンスターを1体確実に墓地に送ることができるだろう。だが、まだそれだけでは足りないな」
確かに。普通はそうだろう。だけど僕の手にはこのカード、ユーノの提案で昨夜デッキに入れてみたこのカードがある！
「僕のフィールドはさっきのターンにカイザーの攻撃ですっからかんになった、つまりもうカードはない！この条件をクリアした時、爆走特急ロケット・アローは手札から特殊召喚できる！」
派手な色をした、流線形のメタリックなバカデカ電車、爆走特急ロケット・アロー。このカードは比較的緩い条件で特殊召喚できる代わりに、そのターンのバトルフェイズ不可なうえにこれがいるだけであらゆる効果を自分が発動できなくなり、さらにスタンバイフェイズが来るたびに手札をすべて捨てなきゃいけないというめんどくさいデメリットを詰め込めるだけ詰め込んだようなモンスターだ。だが、その分リターンも大きい。
爆走特急ロケット・アロー　攻５０００

「そしてここで、クロス・ソウルの効果が生きる。僕はクロス・ソウルの効果で選んだそっちのサイバー・エンド・ドラゴン……いや、Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンと、このロケット・アローをリリース！さあ、こいつが僕の切り札だ！マイフェイバリット、霧の王降臨！」

２つの大型モンスターが消え、すこしすっきりしたフィールド上に剣を手にした鎧の魔法使いがふわりと降り立つ。さあ、ここからだ。さっきはあの攻撃力の前に散々な目にあったけど、一気に反撃と洒落込もう！

『よし、最っ高に上等な条件で出せたな。まさかここまでうまいことといくとはな』

「いつも助けてくれてありがとう、霧の王。この攻撃力はリリースしたモンスターのもともとの攻撃力の合計になる……そしてＳｉｎサイバー・エンドは４０００、ロケット・アローは５０００。つまり霧の王の攻撃力は、過去最高の９０００！」

霧の王　攻９０００

「ほう、攻撃力９０００……か。大したものだな」

そう。カイザー必殺の戦術であるパワーボンド＋サイバー・エンドでも、その攻撃力は８０００止まり。日頃その数字に慣れてきたカイザーだからこそ、攻撃力９０００の重みが誰よりもわかるのだろう。口調こそ静かだったけど、そこに込められた思いは伝わってきた。ちなみに今本家じゃなくてあえてＳｉｎの方をリリース対象にしたのは、

やっぱりカイザーを象徴するモンスターのサイバー・エンドをこんな小技で退場させるのはやっぱり何か違う気がしたから。それと、さっきとどめを刺しに来なかったことに対する借りを返したかったからってのもある。無論カイザーはそんなつもりじゃなかったんだろうけど、気にするのはこっちなんだ。

「もっとも、このターン僕はバトルできないからね。カードをセットして、ターンエンド」

カイザー　ＬＰ１６００　手札：１

モンスター：サイバー・エンド・ドラゴン（攻）

サイバー・ツイン・ドラゴン（攻）

魔法・罠：なし

場：シャインスパーク

清明　ＬＰ１０００　手札：１

モンスター：霧の王（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン、ドロー。確かに攻撃力９０００の霧の王は恐ろしいが、まだわからんぞ？魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地のＳｉｎサイバー・エンドにサイバー・フェニックス、サイバー・ドラゴン・コアにサイバー・ラーバァ２体をデッキに戻して２枚ドロー。

よし、攻撃力はだいぶ下がるがいいだろう。俺は、墓地のサイバー・ドラゴン3体と場のサイバー・エンド、サイバー・ツインの合計5枚を除外。サイバー・エルタニンを特殊召喚する！」

　これまでカイザーが使ってきたたくさんのサイバー系モンスターが光り輝きながら空高く昇って混じり合い、一つの大きな光になって戻ってきた。その姿はこれまでのサイバーの集合体のようで、中央の巨大な顔にそこから伸びた長い首にも顔。そして特徴的なことに、サイバー・ドラゴン系列の頭部を模したようないくつものオプションパーツが辺りに漂っている。

「サイバー・エルタニンの攻撃力と守備力は、今除外したモンスター1体につき５００ポイントアップする。シャインスパークの分も含めると攻撃力は３０００だな」

　サイバー・エルタニン　攻２５００→３０００　守２５００→２１００

「だけど、その数字じゃあ僕の霧の王の方がはるかに上！」

「だが、エルタニンの効果はもう一つある。このカードが特殊召喚に成功した時、場の全ての表側表示モンスターを破壊する！受けてみろ、コンステレイション・シージュ！」

　エルタニンのオプションパーツの目に光がともり、その口が一斉に開いて霧の王をめがけて白い熱線を放つ。だけど、何かしらの効果で霧の王を破壊してくるのはこっちだって想定済みだよ！

「トラップ発動、デモンズ・チェーン！このカードがある限り、エルタニンの効果は無効だ！」
　霧の王がゆっくりと片手を上げると地面から無数の黒い鎖が伸びてきて、エルタニン本体とすべてのオプションパーツをがんじがらめにする。おお、非常に珍しい霧の王が魔法っぽいものを使うシーンが見れた。
　サイバー・エルタニン　攻３０００→０　守２１００→０
「なるほど、どうやらお前は実際、この１年で別次元の強さに到達したらしいな。だが、俺もアカデミアの皇帝と呼ばれた男。そう簡単に勝ちを譲るつもりはない！サイバー・ヴァリーを通常召喚し、第２の効果発動！このカードと俺の場の表側表示モンスター、サイバー・エルタニンをゲームから除外することでカードを２枚ドローする！そしてカードを２枚セットして、ターンエンドだ」
　カイザーの場は空になった。このまま攻撃すれば勝てるけど、用心のためにもう１体モンスターが引ければ申し分ない。
「僕のターン、ドロー！」
　うん。
「攻撃、霧の王！ミスト・ストラングル！」
「トラップ発動、ガード・ブロック！その戦闘ダメージは０になり、俺はカードを１枚ド

ローする」

も、もう1体モンスターさえ引けてたら……！

「メイン2。一時休戦を発動、お互いにカードを1枚ドローするよ」

『そのかわり次の相手のエンドフェイズまでお互いはダメージを受けない……あーあ、絶好のチャンスだってのに』

「う、うるさいうるさい！カードをセットしてターンエンドっ！」

カイザー　ＬＰ１６００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

場：シャインスパーク

清明　ＬＰ１０００　手札：１

モンスター：霧の王（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン。速攻魔法、サイクロンを発動！」

まずい。ここでこのカード、最後の守りの砦が破壊されたらたぶん霧の王の破壊まで

持って行かれる。この伏せカードはフリーチェーンじゃないし、これを止める手段はない！

「破壊するのはこの、俺の伏せカードだ！」

……あれ？まあいいや、素直に喜んでおこう。いや、十分不気味だけど。わざわざ自分のカードを破壊するなんて、一体何をしようとしてるんだ？

「そして破壊されたサイバー・ネットワークの効果発動。このカードが破壊された時、自分の除外された光属性機械族モンスターを可能な限り特殊召喚する……甦れ、俺のサイバー・ドラゴンたちよ！」

サイバー・ドラゴン　守１６００
サイバー・ドラゴン　守１６００
サイバー・ドラゴン　守１６００
サイバー・エンド・ドラゴン　守２８００
サイバー・ヴァリー　守０

ここか？ここでこのカードを使うべきか？……いや、まだだ。伏せカードはこの１枚しかないんだ、ここで今の僕にとって最後の守りの要になるこのカードを使ってまだカイザーに余力があったとしたら、そのあとの展開に対する抑止力がなくなる。だから、ここはこらえておこう。

「そしてこの効果を使った場合、俺の魔法、罠カードはすべて破壊されるからここでシャインスパークは破壊だな。だが、それでも十分だ！サイバー・ドラゴンのうち1体を軸として、俺の場の5体の機械族モンスターで融合！出でよ、融合素材モンスターをすべて墓地に送ることでその数1体につき１０００ポイントの攻撃力となる異端のサイバー、キメラテック・フォートレス・ドラゴン！」

それは、これまで出てきたサイバー流モンスターたちとは全然違っていた。さっきのエルタニンもたいがいにぶっとんでた見た目だったけど、少なくともパーツの一つ一つやカラーリングはいかにもなサイバー流だった。だけどこのモンスターは違う。より正確に獲物を射止めるためなのかスコープのような模様がついた目もさることながら、その紫色を軸にしたカラーリングは白を基調とする他のサイバーとはかけ離れている。そしてまずいのが、攻撃力が５０００……つまり、機械族の切り札であるリミッター解除を使った時の攻撃力が１００００、今の霧の王をさらに超えてくる数値になる。くっ、前言撤回！このカードを使ってでもあのモンスターには消えてもらう！

「何を狙ってるかは予想がついたけどまだまだ僕は負けない、負けるもんか！トラップ発動、奈落の落とし穴！キメラテック・フォートレスの攻撃力が５０００なら、破壊して除外してやるまでさ！」

「やはり、まだ罠が仕掛けてあったか。だがそれも俺の計算のうちだ！見せてやろう、俺

のパーフェクトを!・速攻魔法発動、サイバネティック・フュージョン・サポート!」
「あのカード、確かあの時の……!」
　僕の記憶に間違いがなければ、カイザーが怒涛の大量展開を始めたターンにサイバー・ドラゴン・コアの効果でデッキからサーチしてたカードのはずだ。そういえば、ここまでずっと使ってなかったっけ。
「このカードの発動時、俺は半分のライフを払うことで１度だけ、墓地の素材を使い機械族融合モンスターを出すことができる!」
「墓地のモンスターで機械族の融合モンスター!?」
　カイザー　ＬＰ１６００→８００
　カイザーのライフが、ついに僕を下回る。だけど、喜んでられる状況じゃない。まさか、まさかあの手札のカードは。
「魔法カード、パワー・ボンド発動!墓地のサイバー・ドラゴン３体を素材とし、サイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚!そしてパワー・ボンドにより融合召喚されたモンスターの元々の攻撃力は、元々の攻撃力と同じだけアップする」
　サイバー・エンド・ドラゴン　攻４０００→８０００
　やはり来た、サイバー流の頂点にしてカイザーの切り札、パワー・ボンドで呼び出したサイバー・エンド・ドラゴン。しまった、もしさっきネットワークを破壊してサイ

バー・ドラゴンを出してきたときに奈落を使っておけば！
『いや、これは悔やんでもしゃーねえ。気持ち切り替えろ、次行くぞ次！』
「まだ1枚足りんが、俺はこれでターンエンド。エンドフェイズに俺はパワー・ボンドのリスクとして４０００のダメージを受けるが、そのダメージはお前の一時休戦の効果により無効となった」
「くっ……僕のターン！」
ちら、と今引いたカードを確認する。よし！これが最後の賭けだ、ここで負けたら次はない！
「カードを2枚セットして、ターンエンドにするよ」
カイザー　ＬＰ８００　手札：1
モンスター：サイバー・エンド・ドラゴン（攻）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ１０００　手札：0
モンスター：霧の王（攻）
魔法・罠：2（伏せ）
「俺のターン！」
「そのスタンバイフェイズにトラップカード、和睦の使者を発動！このターンお互いの

モンスターは戦闘破壊されずに、戦闘ダメージも０になる！」
『な、ん、で、それを今使うんじゃお前はあああああっ！』
　あ、やっちゃった。しかしここは聞こえないふりしてスルー。この効果で次のターンまで繋げれば、きっと……！
「いいだろう。カードを１枚セットして、ターンエンドだ」
『よしっ！』
　そう叫んだのはユーノだったのか、それとも僕の心の声だったのか。そんなことはもうどうでもいい。次の僕のターン、ここでこのデュエルに決着をつける！
「僕のターン！」
　引いたカードは、ウォーターワールド。よし、使おう。別にカウンターされても痛くもなんともないフィールド魔法なのに、ここでこのデュエルも終わると思うと一手一手が慎重になる。これで霧の王の攻撃力は９５００、あと一歩で５桁には届かないものの破格の数値には変わりない。
「いくよ、霧の王……バトルフェイズ、霧の王でサイバー・エンド・ドラゴンに攻撃！」
　サイバー・エンドに真っ向から戦いを挑む霧の王が大剣を大上段に振りかぶると、その刃が魔法の光を放ちだす。だがそのまま剣を振り降ろそうとすると、サイバー・エンドもただでやられるわけにはいかんとばかりに３つの口から同時に光線を発射して抵

抗してきた。するとその瞬間サイバー・エンドの体中に機械がショートするとき特有の青いプラズマが走り、なんと光線の太さが倍になる。カイザー、やっぱりあのカードを！

「攻撃宣言時にリバースカード、リミッター解除を発動させてもらった。このターンのみ、機械族モンスターの攻撃力はさらに倍になる。これで終わりだ、清明！」

そういうカイザーは、僕がこの1年で見てきた中で1番いい顔をしてたと思う。すごく生き生きと、本気で本気のデュエルを楽しんでいるような。もしそうだとすれば、僕はカイザーの本気を引き出すことに成功したんだろうか。

サイバー・エンド・ドラゴン　攻８０００→１６０００

だけどカイザー、それじゃあ僕は倒せないよ。

「……ふっ」

「何？」

「そのリミッター解除は僕の想定内！トラップ発動、メタル化・魔法反射装甲！このカードは自分モンスター1体の装備カードになって攻守を３００アップさせるけど、それだけじゃない」

そう言っている間にもソリッドビジョンには動きがある。サイバー・エンドが自身の限界を超えて放つ光線を霧の王はその剣でがっちりと受け止め、それどころか少しずつ

だが押し返しつつあった。そして、霧の王は一歩ずつ前に進んでいく。ゆっくりではあるが、確実にあのサイバー・エンド・ドラゴンを倒すために。

「このカードを装備したモンスターが攻撃するとき、その攻撃力はさらに相手の攻撃力の半分だけアップするんだよ。今のサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力が１６０００なら、こっちは８０００ポイントの攻撃力を得ることになる……覚悟はいい、カイザー？これが僕らの全力だ、ファイナルミスト・ストラングル!!」

霧の王　攻９５００→９８００→１７８００

そしてついに霧の王の剣が光線を完全に切り裂き、そのままの勢いでサイバー・エンドの体を一刀両断する！

霧の王　攻１７８００→サイバー・エンド・ドラゴン　攻１６０００

「ついに、ついにあのカイザーに……あれ？」
　おかしい。もう勝負はついたはずなのに、ソリッドビジョンによる演出上の砂ぼこりが消えない。いつまでたってもフィールド上が、そしてその向こうにいるカイザーが見えない。
「なっ!?」
　少しおさまってきた砂ぼこりの向こう側で見えたのは、信じられないもの。あるはずのないもの。そんな、どうして。
「どうしてサイバー・エンド・ドラゴンが、霧の王が、まだフィールドにいるのさ……」
　いや、ただいるだけではない。霧の王が振り切ったその剣はサイバー・エンドの真ん中の首を切り落として再起不能にさせていたものの、そのまま右側の頭がぼろぼろになった状態で噛みついていてそれ以上振りきれなくなっている。さらにその右の首そのものがぐるぐると霧の王を絞めつけていて、なんとかそこから脱出しようとする霧の王も動くことができないことになっている。そして最後の、左側の首は既に口を開けていて、もう一度この至近距離で光線を打つためにエネルギーのチャージを行っている。
『いや、まさか、あれ……』
　そう震え声のユーノが呟いて指さすのは、サイバー・エンドの首ではない。
『おいおい、ちょっと待てよ、まさかリミッター解除だけじゃなくて、あっちまで持って

たってのか……？』

　ユーノが指差しているのは、首の向こう側に広がる胴体。普段は機械でできた羽があった部分。あった、と過去形なのには訳がある。今その位置に生えているのは機械の翼なんかじゃない。あれはもっと生物的な、一言で言い表すなら……天使。

　そしてその向こうから、カイザーの声が聞こえてくる。

「ありがとう、清明。やはり卒業デュエルの相手にお前を選んで正解だった。お前がそうやって俺の限界以上の力を使い俺を超えてくるからこそ、俺はさらにその先へゆき、もう１つ限界を突破することができる」

「すごいよ、やっぱりカイザーはものすごい。これ以上ないくらい最高に決まったのに、まだ奥の手があるんだもん」

「これ以上ないくらい、か。そうやって自分の限界を決めつけるものじゃない。それが俺からの、卒業生として贈る言葉だ。ダメージステップ。手札からオネストを墓地に送り、サイバー・エンドの攻撃力をお前の霧の王の数値、１７８００ポイントアップさせる」

『いくらメタル化が数少ないオネスト相手にも後出しで攻撃力を上げられるカードとはいえ、リミッター解除と組み合わされたら上昇値が追いつかねえぞ……ま、カイザーらしいといやカイザーらしいし、清明らしいといや清明らしいのかね』

霧の王　攻１７８００→２６７００→サイバー・エンド・ドラゴン　攻１６０００→３３８００
清明　ＬＰ１０００→０
チャージが完了した。動けない霧の王にゆっくりと最後の首が照準を合わせ、そこから霧の王に巻きついた自分の首ごと消し尽くさんと光線を撃つ。もう奥の手なんて残ってない。僕のライフは、０になった。

「負けちゃった、か」
『そだな』
ふー、と息を吐くと、こちらに近寄ってくるカイザーの姿が見えた。試しにおーい、と手を振ると向こうも振り返してくる。そんな光景が、なぜだがおかしかった。
「先ほども言ったが、改めて礼を言わせてくれ。いいデュエルだった、ありがとう」
「ありがと、カイザー。こちらこそ、楽しかったよ」
「ああ、そうだな」
そう言って、カイザーがすっと自分の右手を差し出す。その手をぐっと握り返してちょっと笑うと、カイザーも少し笑みを浮かべた。観客席にいるみんなの拍手をぼんや

り聞きながら、なにはともあれ僕は幸せなけだるさに包まれていた。
　こうしてカイザーは、デュエルアカデミアの皇帝は学校を去っていった。だけど、またいつかきっと会えるだろう。そうしたら、今度こそ僕が勝とう。その時までにもっともっと強くなって、最終的にはデュエルキングと洒落込むんだ。

ターン28（裏）愉快なトリックスターと人工生命

あらすじ：清明ご一行、廃寮に潜り込み稲石と再会する。その後地下室にて。

「一応確認させてもらうよ。お前が明日香や万丈目をさらって大徳寺先生をこんな姿にしたのか！」

「最後の一つは間違っている。そのミイラは、はるか昔からここにあったものだ。だが、彼らを襲ったのは確かに私だ。返してほしければ、私と闇のデュエルだ！」

「上等っ！セブンスターズ、また返り討ちにしてやる！」

そう目の前の不気味な敵に啖呵を切ってデュエルディスクを立ち上げようとしたその時、スッと僕とフード男の間に立ちふさがるようにして立って勝手に自分のデュエルディスクを起動させる人が1人。

「稲石……さん？」

「なんだ、お前は。これは神聖なる七星門の鍵をかけた戦い、部外者の出る幕はない！」

フードの男が怒りのにじむ声を張り上げるが、稲石さんはそんなものどこ吹く風だ。

それで？と言わんばかりに……。

「それで？」

前言撤回。言わんばかりにどころかモロにそう聞き返し、フードの男が放つ威圧感に怯むどころかむしろ堂々と胸を張る。なんで威張ってんだろこの人。

相手ばかりか味方からもそんな視線を向けられていることに気が付いたのか、やれやれと息を吐いてさらに口を開く。そのまるで緊張感のない姿が、こっちの緊張まで削いでいってるような気がする。

「あのねー、ここは自分がかれこれ１６年、いやさもう１７年くらい住んでる愛しの我が家、というか島なんだよ？……つまり何が言いたいかというとだね、隠し部屋なんて作ってないでさっさと出てけ」

「ふん、くだらんな。ここは本来私のいるべき場所、薄汚いネズミに荒らすことを許可した覚えはない」

「チューチューチュー、はいはいネズミさんですよーだ。許可しないからなんなのさ、デュエルでもやろうっての？」

あ。なるほど、これはうまい。すごく自然な挑発の流れで断りにくい空気に持ってった。やるなあ稲石さん。

「さあ七星門の鍵の守護者よ、私とデュエルだ」

『あ、スルーされた』

稲石さん……哀れな人だ。あ、ちょっと部屋の隅っこの方でいじけだした。でも、

そんな言いがかりみたいな理由で自分がデュエルしにいくような人だったっけこの人。
『少なくともお前よりゃ馬鹿じゃないし、何かしら思うとこでもあるんだろ』
「うるさい」
「さあ、どうした？ここにきて怖気づいたか、守護者よ」
　おっと、そうだった。さーて、稲石さんには悪いけどここは僕が指名されてるんだ、相手のデッキも実力も未知数だけど、あの明日香と万丈目を倒すぐらいだから少なくともかなりの実力者のはずだ。気を引き締めてかからないと、僕も一瞬でやられる……ってあれ？
「デュエルディスクが」
『反応しねーな。壊れたか？』
「いやいやいや、そうじゃないでしょ清明。よく見てよ、これ！自分！」
　ガサゴソと電源をいじってるうちに復活したらしい稲石さんが、ババーンと腕のデュエルディスクを見せびらかしてくる。見ると、そこにはすでに【４０００】のライフ表示が。
　……そーいやこの人、いの一番にデュエルディスク立ち上げてあのフード男の相手する気満々だったっけか。
　ん、待てよ？ということは必然的にあのフードの相手をするのは。

「まあ自分に任せといてよ、清明。だから、しっかり見ておくように」
「え、いやえっと、稲石さん？」
「い・い・ね？しっかり見ておくんだよ、本当に」
「……はい」
　負けた。今のなんだかよくわからない迫力に負けた。そんな僕の戦意喪失を見たフード男は小馬鹿にしたように鼻で笑うと、デュエルディスクを構えなおす。どうやら、稲石さんとのデュエルを引き受けたらしい。
「デュエル！」
「さあ、先攻は自分だね。モンスターをセットして、カードをセット。ターンエンドさ」
「私のターン。永続魔法、次元の裂け目を発動。先に言っておこう、私の錬金術の前ではデュエルモンスターズの常識は通用しないぞ！」
　いつも通りのセット戦法を使う稲石さんに対しフード男が発動したカードにより、フィールドの上空1メートルくらいの空がぱっくりと割れてどこかもわからない異世界がその中にぼんやりとうつる。次元の裂け目、確かあらゆる墓地に送られるモンスターを除外するカードだったはずだ。ということはあのフード、除外デッキの使い手なのか。
「手札から錬金生物　ホムンクルスを召喚、そのまま攻撃」

男の呼び出した人造生物が、金属光沢を放つ腕でセットモンスターを殴りつける。だが、そのモンスターも手にした数珠を振り回して鋼の拳を受け流し、なんとかパンチを受けずにすんだ。

錬金生物　ホムンクルス　攻１８００→???　守１８００

「む……？」

「セットモンスターは守備力１８００のゴーストリック・キョンシー。さらにキョンシーはリバースした時、デッキから自分の場のゴーストリックの仲間の数以下のレベルのゴーストリックを手札に呼ぶ能力を持ってるからそれも使わせてもらうよ、レベル１ゴーストリック、ランタンを手札にっと。あ、続けてどうぞ」

「ターンエンドだ」

「あれ、あんだけ偉そうなこと言っておいてやるのはただ殴ってくるだけかな？ああ別に答えなくていいよ、こっちがただ言いたいこと言ってるだけだから」

フード　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：錬金生物　ホムンクルス（攻）

魔法・罠：次元の裂け目

稲石　ＬＰ４０００　手札：５

モンスター：ゴーストリック・キョンシー（守）

魔法・罠：１（伏せ）

攻して、お互いビックリするほど動きのない最初の攻防が終わる。でも油断はできない、なんてったって今デュエルしてるのは最後のセブンスターズと本物の幽霊稲石さんなんだから。考えてみるとある意味無駄に豪華なメンツだ。

「さあて、自分も動くとしようかな？ゴーストリックの猫娘、召喚！」

ポン、と音を立てて活発そうな顔つきのゴスロリ風和服というなかなか新しいセンスの服を着た猫っ娘が人魂とともに召喚される。手で顔をこするしぐさなんか、まさに猫そのものである。

ゴーストリックの猫娘　攻４００

「で、これも使おうっと。魔法カード、テラ・フォーミングを発動。効果でデッキのフィールド魔法１枚を手札に。うーん、今回はこれでいいかな。ゴーストリック・ミュージアムを加えてそのまま発動！」

フィールド魔法の演出によりいくつもの展示品が飾られた棚やら何やらがゴゴゴッとせりあがってきて、あっという間に謎の部屋が小規模な博物館のようになる。とはいえよく見ると飾ってあるものが馬に乗った首なし騎士の像や色白のヴァンパイアの肖像画など、いささか偏ってる気もするけども。

「はい、終わり。やっぱりやめた、ここは動かないでターンエンド」

「私のターン、ドロー。もう1体ホムンクルスを召喚する」
そっくり同じ顔、同じ体をした2体目のホムンクルス。そのホムンクルスに猫娘がいきなりとびかかり、そのままの勢いで押し倒して顔中を引っ掻き回す。
「猫娘の効果発動さ。フィールドにゴーストリック・モンスターがいる場合でレベル4以上のモンスターが召喚及び特殊召喚された時に、そのモンスターは裏側守備表示になる」
「ならば、破壊するだけのこと。最初からいるホムンクルスでゴーストリックの猫娘に攻撃!」
「冗談じゃない、そんな攻撃受けないよ。手札からゴーストリック・ランタンの効果発動、その攻撃を無効にしてランタンを裏守備で特殊召喚」
「カードを伏せる。これでターンエンドだ」

フード　LP4000　手札：4
モンスター：錬金生物　ホムンクルス（攻）
???（錬金生物　ホムンクルス）
魔法・罠：次元の裂け目
1（伏せ）
稲石　LP4000　手札：3

モンスター：ゴーストリック・キョンシー（守）
ゴーストリックの猫娘（攻）
???（ゴーストリック・ランタン）
魔法・罠：1（伏せ）
場：ゴーストリック・ミュージアム

「ね、ねえ、ユーノ」
『……おう』
正直、こんなこと言うのは間違ってるとは思う。だけどこれまで見てきたセブンスターズの戦いと比較して、どうしてもひとつだけ言いたいことがあった。
「なんかこう、地味……だよね」
『……おう』
当然だけど、別に悪口ではない。ただ相手のフード男がなかなか仕掛けてこないうえに稲石さん自身も相手が動くまでまるっきり動く気がないみたいだから、全然デュエルが進まないのだ。
「そして自分のドロー。ゴーストリック・マミーを召喚、その効果を発動。1ターンに1回、自分はゴーストリック・モンスターをもう1回通常召喚できる。ゴーストリック随一の力持ち、ゴーストリック・シュタイン召喚！」

白い包帯を体中に巻きつけたミイラ男が、その太い腕でもはやおなじみになったあの料理に蓋するやつ、クロッシュのやたらと大きいのを両手で重そうに抱えてよたよたと展示物の間を縫うように歩いてやってきて、ドスンとクロッシュを床に置いて蓋を取る。と、そこにはうずくまって隠れていたフランケンシュタイン、ゴーストリック・シュタインの姿が。

ゴーストリック・マミー　攻１５００

ゴーストリック・シュタイン　攻１６００

「さらにキョンシー、ランタンを攻撃表示に変更して魔法カード、破天荒な風を発動！この効果によって、シュタインの攻守は次のそっちのエンドフェイズまで１０００ポイントアップ！」

ゴーストリック・キョンシー　守１８００→攻４００

ゴーストリック・ランタン　攻８００

ゴーストリック・シュタイン　攻１６００→２６００　守０→１０００

「まずはシュタイン、表側表示のホムンクルスに攻撃！」

『この攻撃が通れば、ミュージアムの効果で４回連続ダイレクトか……決まればの話だけどな』

まあ無理だろう、と言わんばかりの口調でユーノがポツリとつぶやく。案の定という

べきか、シュタインのパンチは床からによきっと生えてきた謎の回転する機械に止められる。

「永続トラップ、エレメンタル・アブソーバー発動！手札からネクロフェイスを除外することでそれと同じ属性……つまり闇属性の相手モンスターは攻撃宣言を行うことができない！さらにネクロフェイスはゲームから除外された時、お互いのデッキトップ５枚のカードをゲームから除外する効果を持つ」

「デッキトップ５枚も痛いけど、アブソーバーは闇属性ばっかりのゴーストリックにとってはありがたくないね……だったらゴーストリック共通効果を使って、シュタインと猫娘以外すべてのゴーストリックを裏側守備表示に変更。猫娘を表側のまま守備表示にしてターンエンドさ」

博物館の通路に仁王立ちするシュタインとその横にちょこんと座る猫娘のそばに、ボワンと音を立てて３つのクロッシュが設置される。もっとも、今回のデュエルにうごめく影は使われてないから正体は丸わかりなんだけど。

「私のターン。魔法カード、ブラック・ホールを発動！説明は不要だろうが、この効果によりすべてのモンスターは破壊される！もっとも、次元の裂け目の効果によりその魂の行きつく先は墓地ではなく除外だがな」

「しまった！」

ぽっかりと空中に浮かんだ黒い穴、ブラック・ホールに全てのモンスターが吸い込まれて消えていく。がらんどうのミュージアムと虚しく浮かぶ次元の裂け目だけが占める空間に、仮面をつけた白い影が忍び寄る。
「次元合成師（ディメンション・ケミストリー）を召喚し、効果を発動。１ターンに１度デッキトップのカードを除外し、このカードの攻撃力をエンドフェイズまで５００ポイントアップさせる。除外するカードは……モンスターカード、光の追放者か」
次元合成師　攻１３００→１８００
「次元合成師でダイレクトアタック！」
次元合成師　攻１８００→稲石（直接攻撃）
稲石　ＬＰ４０００→２２００
「くっ、これが闇のゲーム、ね。なるほどとんでもない、やっぱヤバそうな相手だ」
「あれ？稲石さんって確かタイタンともデュエルして鍵ぶんどったんじゃ」
「ああ、あのチェスデーモン？ノーダメージで勝っちゃったからね、あのときは」
マジか。稲石さん、僕はあんたの方が数段とんでもないと思いますよ。
「ふん、奴は使えん男だった。まさか鍵を１つも手に入れることができずに倒れるとはな。まあいい、エンドフェイズに次元合成師の攻撃力が元に戻る」
次元合成師　攻１８００→１３００

フード　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：次元合成師（攻）
魔法・罠：次元の裂け目
　　エレメンタル・アブソーバー（対象・闇）
稲石　ＬＰ２２００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
場：ゴーストリック・ミュージアム

「さあて、さあて。とりあえずアブソーバーをどうにかしないと話が始まらないね。魔法カード、大嵐を発動。このカードは発動時に自分と相手の場の魔法、罠カードを全部破壊するけど、このままだと自分のこのカードも破壊されるね。だからセットカード、アビスコーンの効果発動。このカードがセット状態のまま墓地に送られた時、相手モンスター１体を墓地に送るよ」

「む……いいだろう、通しだ」

博物館が、闇属性の攻撃をすべて止める謎の機械が、そして空中に浮かぶ割れ目さえもが消え、フィールドが元の洞窟に戻る。随分すっきりしたもんだ。

「で、マジック・ストライカーを召喚してダイレクトアタック」

「手札からバトルフェーダーの効果発動。その直接攻撃を無効にしてこのモンスターを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる」
バトルフェーダー　守０
「あー、惜しい！」
だけど、これであのフードの手札は残り１枚。そう悪いことばっかりじゃないはず。
『……まあ、そのかわりあっちの手札も０になったけどな』
ま、まあきっと何とかしてくれるよ、うん。
「ターンエンド」
「私のターン。なるほど、タイタンを倒した実力は本物ということか。いいだろう、その実力に敬意を表そう！バトルフェーダーをリリースし、黄金のホムンクルスをアドバンス召喚！」
同じホムンクルスと名がついてはいるが、さっきのホムンクルスは割と人間に近かった。服着てなかったけど。だけど今度は違う、金色に光り輝くゴーレムだ。
「黄金のホムンクルス……私の研究にとっては不完全な失敗作とはいえ、戦闘能力は十分にある。このカードのステータスは自分の除外されたカード１枚につき３００ポイント上がる、よって攻撃力、守備力ともに３３００アップした４８００だ！」
黄金のホムンクルス　攻１５００→４８００　守１５００→４８００

「ヒューっ、派手だねえ。それで?そのまま自分に攻撃?」
「無論。ゆけ、黄金のホムンクルス!ゴールデン・ハーヴェスト!!」
　黄金の岩のかけらが、小人の戦士を直撃する。何か仕掛けてくれるのかと思ってみていたのに、なんと稲石さんは何一つ動きを見せなかった。
　黄金のホムンクルス　攻４８００→マジック・ストライカー　攻６００（破壊）
「はい、残念」
「稲石さ……あれ?」
　おかしい。確かにマジック・ストライカーは破壊されたのに、全く稲石さんにダメージが入ってない。
『マジック・ストライカーが戦闘で受ける自分へのダメージは０になる……いい効果だなやっぱ』
「なるほど、そんな効果が」
「ほう。なかなかしぶといな、これでターンエンドだ」
　フード　ＬＰ４０００　手札：０
　モンスター：黄金のホムンクルス（攻）
　魔法・罠：１（伏せ）
　稲石　ＬＰ２２００　手札：０

モンスター：なし
魔法・罠：なし
「場も手札もカードはなし、しかも相手の場には攻撃力４８００か。いいね、面白いよ。自分のターン、ドロー！モンスターをセットして、そのままターン終了さ」
絶体絶命の状況で稲石さんがセットしたモンスターはただの苦し紛れなのか、それとも逆転の一手なのか。それは本人にしかわからない。
「私のターン、黄金のホムンクルスで攻撃！ゴールデン・ハーヴェスト！」
だが、じっとしているわけにもいかない以上相手には攻撃しか選択肢はない。無数の黄金の岩のかけらがセットされたモンスターを破壊し……そしてその直後、黄金のホムンクルスの姿がみるみるうちに氷漬けになっていく。
黄金のホムンクルス　攻４８００↓???　守８００（破壊）
黄金のホムンクルス　攻４８００↓???（セット）
「何!?」
「またまた残念。セットモンスター、ゴーストリックの雪女の効果を発動させてもらったよ。ひとつ、このカードを戦闘で破壊したモンスターを裏側守備表示にする。ふたつ、そのモンスターはこれ以降表示形式を変更できない。まあ、実質行動不能になったと思ってくれればいいよ」

「くっ……舐めた真似を！カードを１枚伏せ、ターンエンドだ」

フード　ＬＰ４０００　手札：０

モンスター：???（黄金のホムンクルス）

魔法・罠：２（伏せ）

稲石　ＬＰ２２００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：なし

「さあて、さあて。ドロー、なんだかんだ言ってもまだ守備力４８００だからね、まともに突っ込んだらまず勝てない。だから自分は、リバース・バスターを召喚！そして攻撃！」

リバース・バスター　攻１５００→???（破壊）

刃の部分が自分の上半身ほどもある大鎌を軽々と手にするマントを羽織った死神が、問答無用とばかりに守備力４８００のセットモンスター……黄金のホムンクルスを真っ二つにする。え、なんで？

「リバース・バスターは攻撃するとき、相手の魔法、罠カードの発動を封じる。さらに裏守備モンスターをダメージ計算抜きで破壊することができるのさ。もっとも、攻撃前に発動したんならあんまり意味なかったけど……うん？」

きょろきょろと辺りを見回す稲石さん。一体何が見えるんだろう、と思ったのもつかの間、すぐに僕にも何が起きているのかが分かった。ここはついさっきまで洞窟のような部屋の中だったはずだ。一瞬だけ博物館になったりもしてたけど。だけど、おかしい。上に星が見える。いや、上だけじゃない。真ん前にも、後ろにも、それどころか僕らの足元にまで星が広がっている。

「ようやく気が付いたか。だが、まさかこのカードまで使うことになるとはな。本来ならば鍵の守護者と戦うその時までこちらの手は温存しておくつもりだったが、私のホムンクルスが倒れた以上もはや手加減する余裕はない。永続トラップ、マクロコスモス発動！今、我々のデュエルは人間の世界を飛び越え、宇宙へと転換した!!」

「マクロ……コスモス？」

「そうだ。そしてこのカードの効果により、私はデッキから原始太陽ヘリオスを1体特殊召喚する。ヘリオスの能力は、除外されたお互いのモンスターの数1体につき１００ポイント。私の除外されたモンスターはエレメンタル・アブソーバーで除外したネクロフェイスにその効果で除外した4体、ブラック・ホールで破壊した2体に次元合成師の効果で1体、そしてバトルフェーダーの計9体だ。そしてお前のモンスターはネクロフェイスで除外した中のゴーストリック・フロスト、キラー・トマト、ネクロ・ガードナーの3体にブラック・ホールで破壊した5体、か」

宇宙の果てからふわふわと漂ってきた一つの太陽。その太陽の下に無数の包帯が重なり合い、組み合わされ、人間の女のようなスタイルを映し出す。な、なんだってのさあのモンスターは。黄金のホムンクルスが切り札じゃないなんてただのはったりだと思ってた、というよりそうであってほしかったのに。

原始太陽ヘリオス　攻０→１７００

「自分にできることは何もないか。ターンエンド」

「ならば私のターン！ゆけ、ヘリオス！私の錬金術、最高の成果よ！」

原始太陽ヘリオス　攻１７００→リバース・バスター　攻１５００（破壊）

稲石　ＬＰ２２００→２０００

「くっ……」

これで、ついに稲石さんのライフが半分を切った。それに対し、あのフード男のライフはまだ全然減ってない。しかも、ついさっきまであのフードは本気出してなかったって言うし。流石セブンスターズ最後の一人、強い。

「リバース・バスターはマクロコスモスの効果により除外され、ヘリオスの攻撃力はさらに上がる。メイン２、カードを１枚セットしてターンエンドだ」

原始太陽ヘリオス　攻１７００→１８００

フード　ＬＰ４０００　手札：０

モンスター：原始太陽ヘリオス（攻）
魔法・罠：マクロコスモス
２（伏せ）
稲石　ＬＰ２０００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：なし
「自分のターン、ドローー……ターン、エンドさ」
「そんな！」
ついにこの時が来てしまった。多分あのカード、唯一の手札はセットすらできない上級モンスターなんだろう。次のターン、ダイレクトアタックが素通しになっちゃう。
「私のターン。魔法カード、闇の誘惑を発動。デッキからカードを２枚ドローして手札の闇属性モンスター１体をゲームから除外する。そして闇属性モンスター、異次元の生還者が除外されたことでより攻撃力の上がったヘリオスで攻撃だ！」
原始太陽ヘリオス　攻１８００→１９００→稲石（直接攻撃）
稲石　ＬＰ２０００→１００
「稲石さん！」
吹っ飛んだ稲石さんに思わず駆け寄ろうとするも、あの人はそれを地面に、いや宇宙

に倒れた状態のまま片手をあげて制止した。ダメージを受け続けたことが幽霊の体にもだいぶこたえてきているのか、つっかえつっかえぼくに向かってしゃべりかけてくる。

「これは、まだ、自分の……仕事、だよ。まだ、まだきっとあの男は、本気で来てないから、ね。せめて、手の内だけでも、見せて、あげるからさ……」

「でも……」

『やらせてやれ』

「ユーノっ！」

　いいからサレンダーしてください、そう続けようとしたところでいきなりユーノが口を開く。開いたと思ったらいきなりなんてこと言うんだこの人は。鬼か。

『お前こそ分かんねえのか？多分、どのあたりからかは知らんが途中からずっとこのつもりだったんだろうよ。明らかに不自然な理由でわざわざお前より先にデュエルを挑んだのも、参加する義理も何もねえセブンスターズ戦にわざわざ関わってボロッボロにされながら立とうとしてんのも。全部次に戦うであろうお前らの誰かに少しでも情報アドを渡して、あわよくば闇のゲームを通して少しでも奴にダメージを与えようとしてんだろう』

「だったら、なおさら……」

『だーかーら、やらせてやれって。そこまで言うなら聞いてやるけど、もしお前があの立場ならどうするってんだ？』

そう言われると、一瞬でそんな状況のイメージが思い浮かんだ。

「……耳栓詰めて聞こえないふりしてコンマ1秒でも早く立ち上がって元気いっぱいに見えるように手を振ってる僕が見える」

『お、おう。まあそういうことだ』

そう言われると何もできない。だって、たぶん僕が同じことをしてるなら絶対に止めてほしくない、むしろなにがなんでも中途半端なところでは止めさせないだろう。なら、せめてしっかりと見ていよう。お願いします、稲石さん。

「……続ける、よ。自分は今の攻撃でダメージを受けたから、手札のゴーストリック・マリーの効果を発動……自分がダメージを受けた時にこのカードを手札から捨てて、デッキからゴーストリックモンスターを裏側守備表示で特殊召喚。おいで、ゴーストリックの魔女……！」

ボワン、と煙を立てて銀色のクロッシュが1つ、ふわふわと宇宙に浮く。ゴーストリックの魔女、でもいまさらあのカードを出してももうできることなんてないんじゃ。

「お前が捨てたゴーストリック・マリーもまたマクロコスモスの効果を受ける。したがって原始太陽ヘリオスはさらにその輝きを増していく。ターン終了だ」

原始太陽ヘリオス　攻１９００↓２０００
フード　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：原始太陽ヘリオス（攻）
魔法・罠：マクロコスモス
２（伏せ）
稲石　ＬＰ１００　手札：０
モンスター：???（ゴーストリックの魔女・セット）
魔法・罠：なし
「自分のターン、これが最後のドロー……ッ！」
「待て！この瞬間にトラップ発動、バトルマニア！このカードは相手のスタンバイフェイズにのみ発動ができ、相手のモンスターをすべて表側攻撃表示にしたうえでこのターンの攻撃を強制的に行わせる！」
クロッシュを勢いよく宇宙の果てに蹴飛ばして、強制的に叩き起こされたいかにも元気そうな顔の金髪魔法少女が幅広の魔法使い帽をくいっと頭に合わせる。若干寝癖がはねているもののその自信満々な表情は、まるでこの状況を自分の力でどうにかできる、と語っているようにも見えた。
ゴーストリックの魔女　攻１２００

「そしてモンスターカード、Ｇｈｏｓｔｒｉｃｋ　Ｇｈｏｕｌ……まあゴーストリック・グールを召喚！」

ゴーストリック・グール　攻１１００

稲石さんがラストドローで引いたカードは、デフォルメされてはいるもののゴーストリックでは珍しいおどろおどろしい系の見た目をしたゾンビモンスター。どれくらいおどろおどろしいかというと、味方のはずの魔女が若干引き気味の目を向ける程度には刺激的だ。

「どれほどのカードを引いたかと思えば、攻撃力１１００か。私のヘリオスの方が攻撃力は上だ！」

「確かに。だけど、グールには効果がある！ゴーストリック・グールの効果発動！１ターンに１度自分フィールドのゴーストリックモンスターを選ぶことでそのモンスター以外の攻撃をこのターン封じるかわりに、自分の全ゴーストリックの力を結集させる！すべての力を、魔女に転換！」

グールが両手を合わせてまじないのようなポーズをとると、魔女の全身が鈍い緑色に光り始める。これで魔女の攻撃力はグールと合わせたぶんで２３００、つまり勝てる！これならヘリオスを倒せる！もしこの後にまだ本命がいるっていう稲石さんの予想が本当だとしても、ゴーストリックの効果を使えば裏側表示にできるからまだ希望の目は

ある。なんだ、あれだけ悲壮な感じだったけどこの勝負まだわかんないね。

「ゴーストリックの魔女で原始太陽ヘリオスに攻撃！ヒス・オブ・メイジ！」

ゴーストリックの魔女　攻２３００→原始太陽ヘリオス　攻２０００

いや、たとえ魔女を裏守備にすることができなくても。せめて、この一発の攻撃さえ届けば、まだ希望が無くなるわけじゃない。そうだ、この攻撃さえあのヘリオスに届きさえすれば。

そんな僕のせめてもの願いは、ついに聞き取られることはなかった。

「攻撃宣言時にトラップ発動、血の代償。ライフポイントを５００払うことで、手札のモンスターを通常召喚する！誇り高き戦士よ、そこまでこのカードを守護者に見せたいのならば見せてやろう！我が錬金術のさらなる高みのその一部を！私は場の原始太陽ヘリオスをリリースし、ヘリオス・デュオ・メギストスを召喚！」

その瞬間、太陽が弾けた。急激に大きくなったその光に体の包帯が耐え切れなくなって燃え尽きていき、また新たな包帯が新しい太陽の下に体を構成し始める。頭を支えるためにより身長を低くし、体型を横に広げ……だが、そのスタイルが女性のそれであることは変わらずに。

フード　ＬＰ４０００→３５００

ヘリオス・デュオ・メギストス　攻４２００

「攻撃力、４２００……!?」
「そう。ヘリオス・デュオ・メギストスの攻撃力はゲームから除外されたモンスターの数につき２００ポイント、ヘリオスの倍だ。そしてアドバンス召喚を行うために原始太陽ヘリオスをリリースしたことでマクロコスモスにより除外され、もう２００ポイント攻撃力が上がる。さあ、これで終わりだ。ヘリオス・デュオ・メギストスで迎撃、ウルカヌスの炎！」
　稲石さんが、すまなそうにこっちを見てすぐに目を伏せる。本来なら攻撃の巻き戻しが発生するこの状況でも、バトルマニアの効果で強制攻撃をさせられる魔女にはそんなもの何の意味もない。
　ゴーストリックの魔女　攻２３００（破壊）→ヘリオス・デュオ・メギストス　攻４２００
　稲石　ＬＰ１００→０

　炎の衝撃をまともに受け、稲石さんがまた吹き飛ばされる。すぐに駆け寄ろうとしてフードに背を向けた瞬間、後ろから声をかけられた。
「どこへ行く気だ？さあ、私とデュエルだ」

「くっ……」

これはどうしようもない、申し訳ないけど稲石さんのことはほかの皆に任せよう。あの人が今のデュエルで教えてくれたいくつものことは、このデュエルを有利に進める役に立つ。

ありがとう、稲石さん。このフードはきっと僕が倒して、敵討ちと洒落込ませてもらいます。

「いいよ、それじゃあはじめようか。ユーノ、準備はいい？」

『当たり前だろ、誰に向かってモノ言ってんだ』

「「デュエル!!」」

ターン35　鉄砲水と菓子屋の陰謀

「まま、どうぞどうぞ遠慮なさらず吹雪さん」
「ありがとう、それじゃあいただくよ。それにしても、一体どういう風の吹き回しだい？君がブルー寮まで来るなんて珍しいじゃないか」
「ささささ、どうぞどうぞ!! いいからこれ全部あげますんでまずは食べてくださいよ！」
「あ、ああ……」
　ここは、ブルー寮の吹雪さんの部屋。向かい合って座る僕の勢いに押し切られるような形で僕の持ち込んだ自家製クッキーやら自家製マドレーヌやら自家製ブラウニーその他もろもろエトセトラを少しづつ口に運び、優雅な動きで紅茶をすすった。こういう動作の1つ1つも、この人が（無駄に）モテる理由の一つなんだろう。
「……うん、おいしいじゃないか。僕もいろいろな女の子からお菓子をもらったりしたけど、これはかなりレベル高いよ。これ、君が作ったのかい？」
「それ嫌味ですか……あ、いえなんでもないです、はい。料理と菓子には少しばかり自信がありますから」
　この言葉は本当。特に料理に関してはここ最近のレッド寮の食卓を仕切ってること

もあってかなり色々できるようになってきた。具体的には両手で包丁を使ったり右手でキャベツを千切りしながら左手で揚げものをしたり。

もっとも、ユーノからは『ロクでもねえ特技だな』の一言でバッサリ切り捨てられたけど。

そんなことを思い出している間に、口元を軽く拭いた吹雪さんがこっちを見た。

「さて、本題に入ろう。わざわざこんなところに何も言わずにたくさんのお菓子を持ってきた、そしてこれだけの種類があるにもかかわらず１つも入ってない、おそらく意図的に避けたのであろうあるお菓子がある……これが意味するところはひとつ、違うかい？」

「さすが吹雪さん、わかってらっしゃる」

そう、ぼくがわざわざこんなにたくさんの手土産まで持って来たのにはわけがある。それも、この学園中ではこの人に頼むのが一番現実的な。

「チョコだね？」

「はい!!」

そう、これが今日この場所に僕が来た意味。男子の本懐、バレンタインデーである。これまでだったら適当に冷めた目を送りつつ「リア充のバーカ」と言ってるだけの日だったのだが、今年からは事情が違う。なんとしてでももらいたい人ができたんだか

ら。
「なるほどね。バレンタインまであと5日、それまでに彼女、河風夢想の好感度を稼ぎたいと。つまりはそういうわけだね？」
「はい……」
　まさか相手までばれてるとは思わなかった。おかしいな、いつもそんなそぶりは完璧に隠してたはずなのに。なんで知ってるんだろうこの人。
「いや、そんな目で見られても……割とバレバレだよ？」
「なんですとーっ!?」
「うん。だってほら、これ見てごらんよ。ちょっとしたルートを使ってこの間もらってきたものなんだけど」
　そう言って吹雪さんが懐から取り出したのは、顔写真入りになっている1枚の名簿。よく見るとランキング形式になっているそれのタイトルはそのものズバリ、
【アカデミア女子大調査！毎年恒例、今年のチョコをささげる人は？ランキング！　※男子禁制】
「……一体、どんな裏ルートから持ってきたんですかこんな紙」
「余計な詮索をしないで、書いてあることに目を通してごらんよ」
　そう言われ、内容に目を通してみる。えーとなになに、吹雪さんがダントツ1位でっ

と。お、万丈目もいる。あ、三沢の名前も書いてあるな。カイザーはもう卒業したから全部無効票扱いとはかわいそうに。で、ちなみに僕の名前はあるのか……あった!?

「遊野清明、全校順位７９位。コメントとしてはそこそこ美形な中性的な顔立ちがいい、という見た目的なものと料理の腕がうまく、頼めばよく色々なものを作ってくれるという優しい性格にひかれたものが多いね。デュエルの腕がいいのも評価高いよー。ただどちらにも共通しているのは本当ならもっといい順位にいてもおかしくないけど、本人には意中の人がいるようなのでチョコは諦めます、という点」

「ほ、本当だ……」

うわあ、恥ずかしい。明日からどんな顔して学校行けばいいんだろうこれ。変に意識しないのが一番なんだろうけど、ううむ。ちょっと紅茶でも飲んで落ち着こう。

「さ、これでわかったかい？僕に言わせればね清明君、君は自然体を装うってことが苦手なんだろう。だから、そんな君が彼女をデートに誘おうとしても……」

「で、デートっ!?」

あまりと言えばあまりに不意打ちな爆弾に思わず噴き出した紅茶をサッと何気なくかわし、吹雪さんは絶好調な様子で熱弁をふるう。

「おっと危ない。まあとにかくだ、その様子だと厳しいようだけど。慣れないことをしようとして無駄に緊張して滑舌も悪くなって、彼女がＯＫを出したとしてもそのあと寮

に帰って恥ずかしさのあまり悶絶することになるだろうね。食事が喉を通らず大事を取って早めに寝たら寝坊する姿が目に見えるようだよ」
「……なんですかその無駄に細かいビジョンは」
　でも、実際そう言われると思い当たる節はある。というか、もうそんなふうになる未来しか見えないぞ僕。じゃ、じゃあどうすれば……
「って、だからそれを相談しに来たんですよ。生活費切り詰めてこれだけ作ってきたんですから、何かいい案があったらバシバシ言ってくださいよ～」
「うーん、そう言われてもねえ」
「万丈目に聞きましたよ？七星門の鍵を盗ってったのってあれ吹雪さんの入れ知恵なんでしょう？」
「いや、確かにそうだけどね？別に手を貸さないなんて言ってないんだけど、あの娘はちょっと難しいからね」
　あ、この人たぶん夢想にも一回手を出そうとしてたな。あの渋い顔を見る限り、よっぽどな結果だったらしいけど。うーん、それにしてもこういうことには百戦錬磨に見える吹雪さんでもダメか。
「まあお菓子ももらったしいつも明日香が世話になってるし、とりあえず簡単なことから試してみようか。清明君、メモの用意はいいかい？」

「はいっ、師匠！」
　こうして、吹雪さんからいくつかの作戦を伝授してもらった。してもらったのはいいけど、どれもなかなか恥ずかしいなこれ。ええい、夢想のためだ。明日からは頑張ろう。

　バレンタインまであと４日…①まずは会話から
「力いっぱい振りかぶって、と」
　授業のチャイムが鳴り、先生が来るまでのわずかな時間。夢想の座る席は残念なことに僕の位置からかなり離れているため、話をするきっかけを作るには少しばかり強引にいかねばならない。そのための秘策……何の変哲もない消しゴムをぎゅっと握りしめ、夢想のいる方向に向けて狙いをつける。そう、これをブン投げて偶然を装いつつ夢想に拾ってもらう作戦なのだ。
「おーい、清明。何してんだ？」
「ちぇすとおぉっ……どわあああっ!!?」
　そっと振りかぶり、今まさにぼくの夢とか希望とかを色々乗せて夢想のもとに飛ぼうとしていた消しゴムは十代が急に話しかけてくるせいで手元が狂い、あらぬ方向に飛んでいく。

そして間の悪いことに、その時ちょうどクロノス先生が入ってきた。その顔面に、僕の消しゴムがぶつかろうとしている。
「先生、危ない！」
「ムゥ？あ痛ぁ、やられたノーネ、お星さまが飛んでますーノ……」
「あっちゃー……」
こっぴどく怒られたことは言うまでもない。今日は夢想とは一言も話せませんでした。
バレンタインまであと3日：②花束を贈ってみよう
わー恥ずかしい。でも、ここで心が折れたら何のために昨日怒られたのかが分からなくなる。というか、こんないまどき漫画ですら見ないような方法が本当に効くんだろうか。いや、ここは吹雪さんを信じよう。えっと、赤いバラの花束を……大きさをケチらずになるべく大きいのにしよう!?か、家計が吹っ飛んでいく……。
「ということで万丈目」
「万丈目さんだ。まあいい、こんな昼間から何の用だ」
「実はこうこういうわけなんだけど、何かいい花屋ってある？ほら、このあたりって野生のバラとか咲いてないし本土に行かないと花屋なんてないし」
こういうことなら、きっと金持ちに聞くのが1番だろう。いつぞやも明日香のために

いろいろやってた万条目ならこの気持ちもわかってくれるはずだ。
「……まあ、お前の気持ちはよくわかる。わかるが、今から花束を用意するのはもう無理だぞ？」
「なんでっ!?」
　言いにくそうな顔になる万丈目。と、いきなり出てきたおジャマ・イエローがかわりに解説してくれた。
『それがさあ、清明のダンナ。実は万丈目のアニキも天上院君に花束送るんだーって張り切って注文してたんだけど、最近本土とアカデミアの間に季節外れの台風が生まれてるから船が出せませんって断られてたのよ～』
「バ、バカ！そのことは秘密にしておけってあれほど言っただろう！」
『で、でもダンナだって困ってるみたいだし……』
「チッ……もういい、戻ってろ！見苦しいところを見せたな、とにかくそういうわけだ」
「う、うん……」
　見苦しいったって別にいつもとやってることそんなに変わんないような気がするのは気のせいだろうか。いや、ここは黙っているのが得策だろう。それよりも重要なのは、花束の準備ができない点だ。しょうがない、今からでも他の手を考えるか。
「ありがとね。じゃ、僕はこれで」

「待て！」

礼を言って部屋を後にしようとすると、意を決したような声で万丈目に呼び止められた。

「……実はな、今の話にはまだ続きがあってな。バレンタイン前に届けるのは無理だが、当日にはぎりぎり間に合うらしい。といっても、在庫の関係で届くのは一束だけなんだが。だからもしよかったら、お前にも数本ぐらいは分けてやってもいいぞ、うん」

「万丈目……ありがとう！夕飯何食べたい？リクエストは最優先で受けつけるから遠慮しないで言ってね！」

小躍りしたいのをぐっと我慢して部屋を出る。ちょうど真上にあった太陽に、なんとなくガッツポーズして見せた。イエイッ！

バレンタインまであと2日：③恩を売っておくのも手段の一つ

「とはいえ、恩ねえ」

やっぱり定番としては困っているところを助ける、とかだろうか。そもそも彼女が僕になんとかできることを困ってるところなんて見たことないんだけど。

ちょっと前にワイトがあるカードだからという理由でエンジェルリフトを探してたのは知ってるけど、僕の小遣いとしての有り金全部ドローパンにつぎ込んでも当らなかった時点でこれもダメ。ちなみに夢想が買ったら1つ目でいきなり出てやんの。あ

あ、なんでこう狙ったカードが手に入らないんだろう。
　そんな苦い思い出を噛みしめながら校内をぶらぶらしていると、曲がり角を曲がったところで偶然夢想の後姿が見えた。特にどうするつもりはなかったけど、気が向いたのでこっそり後ろをついていく。ストーカー？言いたい奴は言えばいいさ。
「……？あ、清明だ、だってさ」
　もうバレたー!?え、ちょっとまだ１０秒と経ってないよどんだけ勘良いのこの人！
「や、やあ夢想。こんにちは、今日もいい天気だねアははー」
　ここでどんよりと曇ってればそれはそれでいいネタになったんだろうけど、あいにく今は空の半分くらいをまばらに雲があるという正直何とも言い難い天気。うわあ、一番会話にしにくい微妙な空だ。
「様子が変だけど、何かあったの？ってさ」
　これは僕が悪いんだろうか、それとも彼女が鋭いんだろうか。まさか正直に話すわけにはいかない、ということぐらいは僕にもわかる。だって自分で言うのもなんだけど、これただのストーカーだもん。
　んー、何かいいごまかしは……よし、決めた。ごまかすネタがどこにもないなら、自分で作ればいいじゃない。
「（サッカー、お願い！）」

なるべくさりげなく手を後ろに組んで、デッキを軽くたたいてシャーク・サッカーを呼び出す。あっちの方でなんでもいいから何か騒ぎを起こしてくれればそれを理由に逃げ出せる！

「あ、あれ清明、本当にどうしたの？保健室行こうか？だってさ」

「え、ああ、うん、別に平気だよ、元気元気。それより夢想こそ、最近体調とかどうなの？」

「私？別に何もないよ、だって」

ますます不思議そうな顔になって首を傾げる夢想。ああ駄目だ、何か言うほどドツボにはまってる気がする。それにしても今のポーズ、かわいいなチクショウ。

「危ないぞ、そこの君！」

と、そこでようやくサッカーが何かしてくれたらしい。切羽詰まった感じの声に振り向いて、そのままその方向に駈け出そうとしようと思っていた。あくまでも思って『いた』、大事なことなので繰り返しました。ともかくそう思ってました、手もない鮫の体で何をどうやったのかこっちに向かって勢いよく回転しながら飛んでくる植木鉢、しかも中に土がたっぷり詰まった飛び切り重そうなやつを見るまでは。

「っ!?」

だけど大丈夫、あの程度のスピードならダークシグナーにとっては全然たいしたこと

ない、本気出せば余裕でかわせる……と、そこまで考えた時点で背筋が凍った。もし僕がこれを避けたら、どうなる？当然あの植木鉢が止まるわけでもなし、位置的に言って僕の真正面にいる夢想にあたっちゃうじゃないか！ったくサッカーめ、もう少し考えてくれたってよさそうなものを！

「でーい！」

スッと腕を後ろに引いて、特攻してくる植木鉢を迎え撃つように打ち出したパンチ一発！焼き物の植木鉢程度、今の僕の体なら骨も折らずに叩き割れるはず！

だが、そんな計算すらもあざ笑うように、植木鉢の軌道がすっと変わった。野球でいうところのフォークボール、つまりは落ちる球である。全体重をかけて突き出した拳は空振りし、その腕の下を通って僕の腹にボディーブロー。

「へっ？」

悲鳴すら上げる暇はなかったのは、情けない声を聞かれなくてラッキーだったと捉えるべきなんだろうか。あまりに一瞬の出来事で腹に力を込めて耐えることすらできず、そのまま意識が遠くなっていった。

「……うー、痛てててて」

目が覚めるとそこには見知った天井、具体的には僕の部屋の天井が見えた。どうやら、誰かが運んでくれたらしい。十代かな、なんて考えながら起きあがって。
「って、夢想!?」
「おはよ、なんだって」
そう言い、安心したような笑顔を見せる夢想。
「お、おはよう。えっと、もしかして」
夢想が運んでくれたのか、と聞こうとすると、急に彼女は時計を見てあわてたように、
「もうこんな時間、私は帰るからね、だってさ」
そう言うが早いが、ぴゅーっと走り去っていった。恩を売るどころか、こっちが借りを作っちゃったみたいだ。吹雪さんも言ってたけど、慣れないことはするもんじゃない、ってことだろうか。ああ恥ずかしい。
バレンタイン前日：④やはりこれがないと始まらない
「夢想ー、デュエルしよー」
「清明、もう具合はいいの？だって。でもいいよ。デュエルしようか、だってさ」
これが吹雪さんからもらった最後の作戦。と言ってもやることは単純、デュエルで勝ってカッコいいところを見せるだけである。ただ、この作戦は諸刃の剣。僕がここで勝てば問題ないのだけど、もし負けたりしたらもう目も当てられないことになる。学園

最強との呼び声も高い彼女相手にはかなりリスキーな賭けだけど、その分当たった時に得られるものは大きい。

だからこのデュエル、絶対負けられないんだ！

「デュエル!!」

「僕の先行、ドロー！」

そういえば、この先攻ドローも近々ルール改訂が行われてなくなっちゃうそうだ。うう、僕のデッキは手札消費があんまりいいとは言えないから、かなりこれは困るんだけど。反面フィールド魔法が重複するようになったから僕と相手でお互いにフィールド魔法を使って、なおかつ相手がサイクロンとかで僕のフィールド魔法を破壊してきた場合という恐ろしく限定的な状況だけとはいえほんのちょっぴりだけチャクチャルさんが生き残る可能性も増えてきたのはよしとしよう。

まあ、今はまだ関係ない話なんだけど。

「ハンマー・シャークを召喚、そのまま効果発動。このカードのレベルを1下げて、手札から水属性でレベル４以下のモンスター1体を特殊召喚！僕がこの効果で出すのはレベル1、鰤っ子姫（プリンセス）！」

ハンマー・シャーク　攻１７００　☆４→☆３

鰤っ子姫　攻０

「そして鰤っ子姫の効果発動、召喚か特殊召喚に成功したこのカードをゲームから除外して、デッキからレベル４以下の魚族を特殊召喚する！僕が呼ぶのはレベル４、竜宮の白タウナギ！」

マイクを器用にひれで抱える黄色の鰤が左右に流し目を送りながらどこかへ泳ぎ去っていくと、そのあとを追いかけるようにどこからともなく白タウナギがふらふらと泳いできた。ううん、魚の価値観はよくわからん。あれが追っかけになるほどカワイコちゃんなんだろうか。

竜宮の白タウナギ　攻１７００

「さらにフィールド魔法、忘却の都　レミューリアを発動。このカードの効果で、水属性モンスターは攻守が２００ポイントアップするよ」

おなじみの白い神殿。よし、当面の準備は整った。

ハンマー・シャーク　攻１７００→１９００　守１５００→１７００

竜宮の白タウナギ　攻１７００→１９００　守１２００→１４００

「さらにカードを２枚伏せてっと。僕はこれで、ターンエンド」

「私のターンだって。うーん……ゾンビ・マスターを召喚。さらに手札の永続魔法、奇跡のピラミッドを発動するね」

夢想がカードを発動した瞬間、その背後に上空から光り輝く怪しいピラミッド型の何

かが三角錐のとんがった部分を下にして降りてきた。そしてほのかに青く輝くそれのとがった部分から光が走り、ゾンビ・マスターに命中する。さあ、一体何が始まるってんだ。

ゾンビ・マスター　攻１８００→２２００

「攻撃力が上がった!?」

「そう。このカードは、自分のアンデット族の攻撃力を相手モンスター1体につき２００ポイントアップさせるんだよ、だってさ。バトル!まずはハンマー・シャークに攻撃!」

「させないよ、トラップ発動!イタクァの暴風!」

ゾンビ・マスターが杖を振り上げた瞬間にものすごい突風が巻き起こり、たまらず振り上げた手を下して吹き飛ばされないよう地面に座り込んでやり過ごそうとする。だけど、それこそが僕の狙い!

「イタクァの暴風……私のモンスターの表示形式を変更させるカードだね、って」

「その通り。そしてゾンビ・マスターは防御力のなさに定評のあるアンデット族、これで守備力０がむき出しだよ!」

ゾンビ・マスター　攻２２００→守０

「むー。カードをセットして、これでターンエン……」

「エンドフェイズにリバース発動、サイクロン！今伏せたカード、そのまま破壊！」
先ほどよりもはるかに規模が小さいつむじ風が吹き、夢想の伏せていたカード……次元幽閉を破壊する。よしよし、いいカードを壊せた。
さすがにこれは予想外だったのか、ちょっと驚いた顔になる夢想。うん、普段あんな表情にはならないからなんか得した気分。
清明　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：ハンマー・シャーク（攻・☆３）
　　竜宮の白タウナギ（攻）
魔法・罠：なし
場：忘却の都　レミューリア
夢想　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：ゾンビ・マスター（守）
魔法・罠：奇跡のピラミッド
「さあ、このまま行かせてもらうよ！僕のターン、またまたハンマー・シャークの効果発動！自分のレベルを２に下げて、レベル３のハリマンボウを特殊召喚！さらに、ツーヘッド・シャークを通常召喚！」
今、夢想のフィールドにいるのは守備力０のゾンビ・マスターだけ。よし、勝算は十

分。この勝負、いける！
ハンマー・シャーク　☆３↓２
ハリマンボウ　攻１５００↓１７００　守１００↓３００
ツーヘッド・シャーク　攻１２００↓１４００　守１６００↓１８００
「バトル！まずはツーヘッド・シャークでゾンビ・マスターに攻撃！」
「奇跡のピラミッドのさらなる効果を発動！このカードを墓地に送って、アンデット族１体の破壊を無効
にするよ！」
ツーヘッド・シャーク　攻１４００↓ゾンビ・マスター　守０
ツーヘッドの牙がゾンビ・マスターに届く寸前、光るピラミッドが薄い壁になってその突撃を押し止める。む、そんな効果もあったのか。
「だけど、ツーヘッド・シャークには１ターンに２回攻撃ができるからね。そのまま連撃！」
ツーヘッド・シャーク　攻１４００↓ゾンビ・マスター　守０（破壊）
「これが決まれば！ハリマンボウ、白タウナギ、ハンマーの順で一斉攻撃、トリオ・ザ・ダイレクトアタック！」
「……本当に？」

「へ？」
　そう言われてよく見ると、先ほどツーヘッドの攻撃でモンスターを倒したはずのフィールドには、濃い紫色の竜が一匹佇んでいた。
「あ、あれ？」
「ゾンビ・マスターが破壊されて墓地に送られたことで、手札から異界の棘紫竜（きょくしりゅう）の効果を発動。このカードを特殊召喚したんだよ、だってさ」
　異界の棘紫竜　攻２２００
「くっ、ターンエンド」
　うーん、まずい。攻撃力２０００越えのモンスターに対する対抗策がない。策があるとすれば、ハリマンボウでの自爆特攻ぐらいなんだろうか。でもあんまりやりたくないなあ。ポセイドン・ウェーブがあればすごくいいカモなんだけども。
「私のターン。でも清明、一体どうしたの？いつもより気合入ってるみたいだけど」
「ちょっとしたわけありでね。今の僕は普段より当社比３割増しぐらいで強いのさ」
　まさか正直に言うわけにもいかないので適当に誤魔化しておく。彼女はふーん、とよくわかってなさそうな顔で頷いていたけど、これ以上の追及はなさそうだ。
「うーん、奇跡のピラミッドの効果を使わないほうがよかったかな？ナチュラル・ボーン・サウルスを召喚して、まずカップ・オブ・エースを発動。コイントスで表が出れば

私が、裏が出れば清明がカードを２枚ドローするね。えいっ！……ありゃ、裏だ」
よし、今日はついてる。カードを２枚ドローして確認すると、より一層その気持ちは強まった。
「バトルするってさ。棘紫竜でハンマー・シャークを攻撃！」
紫色のブレスに、なすすべもなくハンマー・シャークが丸焼きになる。ごめんよ、でもよく頑張ってくれた。
異界の棘紫竜　攻２２００↓ハンマー・シャーク　攻１９００（破壊）
清明　ＬＰ４０００↓３７００
「そのままナチュラル・ボーン・サウルスでツーヘッド・シャークに攻撃するよ、だってさ」
「それも受けるよ。ありがとう、ツーヘッド」
ナチュラル・ボーン・サウルス　攻１７００↓ツーヘッド・シャーク　攻１４００（破壊）
清明　ＬＰ３７００↓３３００
「……ふう」
さっきのターンで終わらせられなかったのは誤算だったけど、なんとかダメージは７００で済んだ。これくらいならまだまだ平気だし、僕の場にはまだ２体のモンスターが

いる。いくらでもやりようはあるね。
「カードを伏せるね。私はこれでターンエンド、だって」
清明　ＬＰ３３００　手札：３
モンスター：竜宮の白タウナギ（攻）
　　ハリマンボウ（攻）
魔法・罠：なし
場：忘却の都　レミューリア
夢想　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：異界の棘紫竜（攻）
　　ナチュラル・ボーン・サウルス（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「僕のターン、ドロー！」
引いたカードはっと。お、来た来た。なんだか、このカードを召喚するのもずいぶん久しぶりな気がするなあ。
「僕はこのモンスター２体をリリースして、超古深海王シーラカンスをアドバンス召喚！」
超古深海王シーラカンス　攻２８００→３０００　守２２００→２４００

「そしてこの手札１枚をコストに効果発動、魚介王の咆哮！デッキからレベル４以下の魚族モンスターを、可能な限りフィールドに呼び出すよっと。カモーン、シャクトパス！オイスターマイスター！ヒゲアンコウ！ハリマンボウ！」

魚の王の咆哮に、素早くおなじみのメンツが寄り集まってくる。あ、アーチャーとかもっと優先して出すの忘れてた。まあいいか、たまにはほかの子を出しても。

シャクトパス　守８００→１０００　攻１６００→１８００

オイスターマイスター　守２００→４００　攻１６００→１８００

ヒゲアンコウ　守１６００→１８００　攻１５００→１７００

ハリマンボウ　守１００→３００　攻１５００→１７００

「っと、ここで今リリースしたハリマンボウの効果も発動。自身が墓地に行ったことで相手モンスター１体……どっちでもいいけど、ここはダメージ優先でナチュラル・ボーン・ザウルスの攻撃力を５００ポイントダウンさせるよ」

ナチュラル・ボーン・サウルス　攻１７００→１２００

よし、これで準備は万全だ。なにせ手札にあるのは死者蘇生、シーラカンスのコストで捨てたのはキラー・ラブカなんだ。ここまでやっておけば、あとは力押しで押し切れるだろう。

「バトル、シーラカンスでナチュラル・ボーン・ザウルスに攻撃！マリン・ポロロッカ！」

超古深海王シーラカンス　攻３０００→ナチュラル・ボーン・サウルス　攻１２００（破壊）
夢想　ＬＰ４０００→２２００
魚の王の突撃の前に、なすすべなく骨になった恐竜が砕け散った。だが、そのバラバラになった頭蓋骨の目の部分から植物の根がにょっきりと生えてきたかと思うとそれがみるみるうちに伸びて育ち、３つの赤い花を咲かせたかと思うとその中心からいくつもの種がはじけ飛ぶ。
デモンバルサムトークン×３　守１００
「なっ!?」
「リバースカード、デモンバルサム・シードを発動したみたい。私の表側モンスターが破壊されて戦闘ダメージを受けた時、ダメージ５００ポイントにつき1体のトークンを特殊召喚するんだってさ」
「むっ、厄介な。ターンエンド」
さすが夢想、かなりきつい一発を当てたのにそれを逆に利用されてしまった。伏せカードが1枚も用意できなかったのはかなり痛いな。
「私のターン、ドロー。……ねえ、清明」
「なーに?」

「この勝負、私がもらうからね」
「え？」
その自信たっぷりの言葉に、思わず聞き返す。その様子はさぞかし間抜けに映ったことだろう、と聞き返した後で思いしまった、と心の中で毒づいた。でも、そんなことをしている間にも彼女のターンは進んでいくわけで。
「プリーステス・オームを召喚して効果を発動するんだってさ。このカードは自分フィールドの闇属性モンスター１体をリリースして８００のダメージを与える効果を持ってるの」
「１体、８００……」
えっと、僕のライフが残り３３００だから、４回まではぎりぎり耐えられるわけだ。まずデモンバルサム・トークンで３回ダメージを受けて、さらに棘紫竜で１回。で、最後に残った自分をリリースすれば合計５回。
……ダメじゃん。
「発射！なんだってさ」
清明　ＬＰ３３００→２５００→１７００→９００→１００→０

「ま、負けた……」
しかもものすごくあっさりと。ははは、こりゃチョコは絶望的かな。何か彼女が言ってた気もしたけどもう話をする気力もなかったので適当に聞き流し、とぼとぼとレッド寮に帰ることにした。
どこの道を通ったのかもよくわからないままぼんやりと寮にたどり着き、そのまま頭から布団かぶってさっさと寝ようと思ったのに僕の部屋ではなぜか万丈目が待ち構えていた。そして僕がドアを開けた瞬間、間髪入れずに土下座のポーズをとる。たいていのことなら無視しようかと思ってたけど、これにはさすがに驚いた。
「何、万丈目。どったの？」
「どったの、だと？すまない、清明。本当にすまん！」
この一言を皮切りにワーワーと喋る万丈目をなだめながら話を聞いていくと、なんでも花束を届けるための万丈目グループのヘリのパイロットが着地場所がレッド寮周辺に見つからないとの理由で上空から花束を投げ落として渡そうとしたらしく、その瞬間に吹いてきた風に吹き飛ばされて鼻は全部海中に消えていったそうな。はっはっは、ここまで踏んだり蹴ったりだともう笑うしかないね。
「それでだ。なんとか海に飛び込んで拾おうとしたんだが、ほとんどが海水でダメになっていてな。なんとか見栄えのいいものがこれしか……」

そう言って差し出す手の中には、真っ赤なバラが1本。うーん、花束が1本の花に、か。随分スケールダウンしたもんだ。

「万丈目グループの不始末は俺の責任も同じ、俺にこの花をプレゼントする資格はない。だから、せめてお前が受け取ってくれ。なに、俺のことなら心配するな。天上院君へのプレゼントは、何かもっとふさわしいものを考えるさ」

そういう万丈目の服は海に飛び込んだという言葉通りまだかすかに湿っていて、どれだけ必死になって拾い集めようとしたのかがよく伝わってきた。それに、そんな震え声だと無理してるのがバレバレだよ、万丈目。

「いいよ、もう。それ、あげるよ。万丈目が頼んだ花なんだし、僕にはもう必要じゃないしね」

「必要じゃない？待て、それはどういう……」

「はい、この話はおしまい。僕はもう今日は寝るから、夕飯はテキトーに作っといてね。お休みー」

なかなか帰ろうとしない万丈目を半ば強引に部屋から押し出し、電気を切ってさっさと布団にもぐりこむ。視界が閉ざされる寸前に見えた景色は、なんだか妙にぼやけていた。まるで、僕の目が水か何かでうるんでいるように。

そのまま眠りに落ちる寸前、壁の向こうから万丈目の声がした。

「清明。……すまん」

と、ただ一言だけ。だけど、言いたいことは僕にはよく伝わった。

そして今日も朝が来る。バレンタインデー当日である。よっぽど今日は休もうかとも思ったけど、そこまでするのもさすがにどうかと思ったので素直に学校に行くことにする。とはいえギリギリまで布団の中で粘ってたらいつの間にか僕以外の皆はもう出発していたんだけど。ああ、今日はなんだか足が重いなあ。せめて夢想には今日一日は会いたくないなあ。

「清明、おはよう。ってさ」

……と思った矢先にこれだ。世の中の流れってのは、よーっぽどまがった性格とひねくれた根性を元に動いてるらしい。

まあでも、挨拶は大事。人間関係の基本だしね。

「お、おはよう、夢想」

ああ駄目だ、会いたくないっていう気持ちが割とストレートに声に出てる。こんなんじゃあ嫌われても文句は言えないだろう。でも、正直今だけは一人にしておいてほしいです。

「あのさ、清明。これ、もしよかったらね、なんだって」
彼女にしては妙に歯切れの悪いそんな声とともに、何かが動く気配。振り返って僕の少し後ろを歩いていた夢想の方を見ると、彼女の手には何か包みが一つ握られていた。あれってまさか、いやまさか、ね。あそこまで情けない負け方したってのに、さすがにそれは虫が良さすぎるってもんだ。少しは現実見ようや、僕。
「はい、どうぞ。……チョコだよ、だってさ」
「え……？」
ドッキリ。何よりもまずその単語が思い浮かんでどこかにカメラマンが隠れてないか見まわすようになった辺り、僕もこの1年でだいぶ性格が荒んできたんだろうか。結論から言うと、そんなモノ見つからなかったんだけど。
え、じゃあちょっと待って。これがいわゆるチョコレイト？チョコもどきとかチョコだましとかそういうオチじゃなくて、いわゆる原材料カカオのあのチョコ？あーうん、今すごく混乱してます、僕。本来ならお礼を言うのが当然ってものなのに、それすらも思いつかないし。みっともないなあ、恥ずかしいなあ、僕。
「じゃあ、もう授業始まるから、ね」
僕が完全にフリーズしているうちに、そう言ってたっと駆け出す夢想。僕は何か声をかけるわけでもなく、その後ろ姿をじっと見ているだけだった。

ちなみに、これは後で知ったのだが。わざわざ朝一番に寮まで来て渡してくれたのは実は万丈目のおかげらしい。本当ならもっと後になって渡すつもりだったのを、『だいぶ落ち込んでるみたいだから、もし奴に何か渡すものがあるなら早めに行ってやれ。……いや、奴のためにも今行ってほしい。頼む、この通りだ』とわざわざ頭まで下げたんだそうだ。まったく、万丈目め余計な真似を。

もっと余談。結局明日香は今年チョコを作らず、必然的に万丈目自身は彼女からチョコをもらえなかったそうな。あと海水に漬けたのがやっぱりまずかったらしく、最後に残ったバラも朝見たらしなびて生ごみに直行したらしい。

……ホワイトデーにはどうせクッキー焼くし、少し多めに焼いておいていくつか皆にもあげようかな。

２年生編：そして、光が溢れ出す
ターン３６　鉄砲水と伝説のＨＥＲＯ

ある晴れた日のこと、レッド寮にて。
「えーっと、ようこそいらっしゃいました……かな？いやでも一応こっちが年上なのにあんまり仕立てに出るのもなんだかなー」
『さっきから何をぶつぶつ言っとるんだお前は』
２年生になった僕ら……この僕遊野清明（ゆうのあきら）に十代や万丈目、翔といったいつものメンバー。これから来るであろう新入生に対する歓迎のあいさつを考えてあーでもないこーでもないと頭を悩ませていたら、若干呆れた感じの声に邪魔された。声の主は、去年僕が入学試験直前に交通事故でポックリ逝っちゃったときからの腐れ縁な幽霊、ユーノ。デュエルの腕は僕よりずっと確かだけど、どうにもこうにも口が悪い。性格も悪い。もう慣れたけど。
「っと、それはいまさら言ってもしょうがないか。ほらあれだよ、新入生向けの挨拶。どうせレッド寮なら来るとしても数人だろうけど、コミュニケーション超大事だし」
『あー、うん。そうか、まあ頑張れよ』

「あれ、なんかノリ悪いね。そろそろ成仏しそう？」
　もちろんこれはただの冗談だけど。この図々しい存在感抜群な幽霊が成仏とか、もはやただのギャグの域だ。さ、続き続き。えーと、やあやあ遠からん者は音に聞け、近くば寄って目にも見よ、我こそはデュエルアカデミアオシリスレッドの偉大なる先輩、遊野清明である……うん、ないな。初対面でこんな挨拶されたらさすがにドン引きものだ。

「ということで十代、デュエルしよう！」
「お、デュエルか？いいぜいいぜ、売られたデュエルは買うのが礼儀！」
『つまりどういうことだよ。いや、聞くだけ野暮なんだろうけど』
　ということでも何もない。普段使わない脳みそを使ったせいでちょっと疲れてきたのかはたまた飽きてきたのか、なんとなくカードを使いたくなってきたのだ。十代なら了承してくれるだろうと思って尋ねたら、案の定二つ返事で乗って来たし。去年は三幻魔だの卒業デュエルだので精神的にくるものがあるデュエルばっかりだったから、こういう気楽なデュエルはちょっと久しぶりかも。

「「デュエル！」」
　デュエルディスクが指示したのは、僕の先行。うーん、今年度からデュエルモンスターズのルールが変わったせいで先行は最初のターンにドローできないんだよなあ。まあ、この5枚の手札で頑張ろう。沿う気持ちを切り替え、改めて手札を見る。
「僕のターン、オイスターマイスターを召喚！」
　今年もお世話になるであろう、僕のデッキの切り込み役ともいえる牡蠣の戦士を召喚する。思えば、去年入学試験の時も先陣切って飛び出してったのはこのモンスターだっけか。
　オイスターマイスター　攻１６００
「さらにカードをセットして、これでターンエンド」
「俺のターン、ドロー！Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プリズマーを召喚！」
　Ｅ・ＨＥＲＯ　プリズマー　攻１７００
　十代が召喚したのは、下級のＨＥＲＯにしては珍しく高い攻撃力を持った宝石のように光り輝く戦士。まいったな、これじゃあオイスターマイスターが戦闘で負ける。
「なんてねっ！トラップ発動、フィッシャーチャージ！魚族モンスターのオイスターマイスターをリリースしてプリズマーを破壊、さらにカードを1枚ドロー！」
　オイスターマイスターが弾丸のように素早く走り抜け、プリズマーにタックルを仕掛

ける。２体のモンスターは同時に倒れたが、僕の場は空にはならない。
　オイスタートークン　守０
「オイスターマイスターがバトル以外で墓地に送られた時、トークンを１体特殊召喚っと」
「やるな！だけど、俺だってまだ負けないぜ！魔法カード、増援を発動。デッキからレベル４以下の戦士族、マジック・ストライカーをサーチ。そして手札のマジック・ストライカーは、墓地の魔法カード１枚を除外して特殊召喚できる！増援を除外して、特殊召喚だ！」
「むむ、あてが外れたな」
　マジック・ストライカー　攻６００
　召喚権を使って出したモンスターを片付けてしめしめ、と思ったのもつかの間、慌てることなく次のモンスターを出してくる十代。確かあの小人の剣士には、直接攻撃効果があったはずだ。さあ、僕とオイスタートークン、どっちを攻撃してくる？
「行くぜ、バトル！マジック・ストライカーで、オイスタートークンに攻撃！ダイレクト・ストライク！」
　マジック・ストライカー　攻６００→オイスタートークン　守０（破壊）
「むー、やっぱりモンスターを減らしに来たか」

まあ、ここまでは十分想定内。まだまだ、勝負は全然これからだね。
「メイン2でカードをセットして、ターンエンドだ」
清明　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
十代　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：マジック・ストライカー　攻６００
魔法・罠：１（伏せ）
「僕のターン、ドロー。フィールド魔法、ウォーターワールドを発動！」
いくつもの水柱が地面から湧きあがり、みるみるうちにあたりの風景がソリッドビジョンのそれになっていく。さあ、ここからはこっちの攻撃だ！
「そしてブリザード・ファルコンを通常召喚して効果発動、このカードの攻撃力がアップしているときに1度だけ１５００ダメージを相手に与える！」
「なんだと？うわっ！」
ブリザード・ファルコン　攻１５００→２０００　守１５００→１１００
十代　ＬＰ４０００→２５００
「先制攻撃はいただきね。そのまま攻撃！」

青い鷹が素早く宙を舞い、かぎ爪で小人の戦士を摘み上げて地面にたたき落とす。なかなか痛そうなその絵面に、さすがにちょっと罪悪感がわく。

ブリザード・ファルコン　攻２０００→マジック・ストライカー　攻６００（破壊）

「だけどマジック・ストライカーは、バトルによる自分への戦闘ダメージを０にする。俺はダメージを受けないぜ」

あ。忘れてた。

『……あほ』

「わ、わかってたもんね！これでターンエンド！」

「俺のターン！来たぜ来たぜ、融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合して、来い！マイフェイバリットカード、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマン！」

緑と赤のコントラストがよく似合う、十代がずっと使い続けているＨＥＲＯ。いつかは使ってくるのは予想してたけど、このタイミングで来るか……。

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻２１００

「フレイム・ウィングマンでブリザード・ファルコンに攻撃！フレイム・シュート！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻２１００→ブリザード・ファルコン　攻２０００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→３９００

戦闘ダメージ自体は、たいしたことないかすり傷みたいなものだ。だけど、あのモンスターが怖いのはそこじゃない。その効果だ。案の定、すでに奴は龍の頭部のような形をしたその腕をこちらに向けて、炎を打ち出す準備をしている。
「フレイム・ウィングマンがバトルでモンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力ぶんのダメージを与えるからな。ブリザード・ファルコンのもとの攻撃力は１５００、よってその分のダメージだ！」
清明　ＬＰ３９００→２４００
「くっ……」
「おっと、まだ終わるには早いぜ？速攻魔法、融合解除を発動！」
「へ？」
十代が掲げた速攻魔法。そして僕の場にモンスターはいない。まずい、すごくまずい。だってあのカードの効果は！
「融合モンスター１体をエクストラに戻して、その素材を特殊召喚だ！戻って来い、フェザーマンにバーストレディ！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　攻１０００
Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００
「そしてバトルフェイズ中に特殊召喚されたモンスターは、さらなる追撃ができる

……2体のモンスターで同時攻撃だ！フェザー・ブレイク！バースト・ファイヤー！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　攻１０００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ　２４００→１４００

Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ１４００→２００

「あ、危なかった……」

あの2体の素の攻撃力が低くて助かった。一般的なアタッカークラスのパワーがあったら即死だった。とはいえ僕のライフはあっという間に残り２００、全然気が抜ける状況じゃあない。

『だけどやっぱり融合は手札消費が荒いな。あーっという間に手札０か』

「うん、悪いことばっかりでもないのかな？ただ十代のあの伏せカード、あれ気になるんだよなあ……」

気にしてたってどうしようもないのは僕もよくわかってるんだけどね。うーん、どうしたものか。ま、とりあえずドローしてから考えますか。

清明　ＬＰ２００　手札：3

モンスター：なし

魔法・罠：なし

場：ウォーターワールド
十代　ＬＰ２５００　手札：０
モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　攻１０００
Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００
魔法・罠：１（伏せ）

「僕のターン！モンスターをセット、さらにカードを伏せてターンエンド」
どうしようもない。たった２００しかライフが残ってない以上下手な真似もできないし、ここはいったん引いて様子を見ようっと。
「なら俺のターンだ！ドロー、Ｒ―ライトジャスティスを発動するぜ。このカードの発動時に自分フィールドにいるＥ・ＨＥＲＯの数だけ魔法・罠を破壊するこのカードは、俺の場にフェザーマンとバーストレディがいることでお前のウォーターワールドと伏せカードを破壊だ！」
十代の頭上に『Ｒ』の文字がでっかく輝くと僕のカード２枚が破壊されて風景も元のレッド寮前に戻ってしまい、あらら、と小さくつぶやく。
「バーストレディ、その伏せモンスターに攻撃！バーストファイヤー！」
バーストレディが掌の上に小さな火炎弾を作り出し、伏せモンスターめがけて放り投げると着弾地点で小規模な爆発が巻き起こる。だが、その炎の中からゆらり、と立ち上

がるシルクハットに燕尾服の影が一つ。
ふふふ、勝負を焦ったね十代。
Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００→???　守１８００
十代　ＬＰ２５００→１９００
「ペンギン・ナイトメアの効果を使うよっと。このカードはリバースした時に相手の場のカードを1枚、バウンスできる！手札に帰れ、バーストレディ！」
「うわっ!?なら、メイン2でフェザーマンを守備表示に変更、さらにバーストレディをもう1回通常召喚。ターンエンドだ」
Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　攻１０００→守１０００
Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００
流れがこっちに傾いてきた（たぶん）ことを悟った十代がエンド宣言した瞬間、ぱあん、ぱあんと数発の銃声が響き渡る。ペンギン・ナイトメアの後ろに潜んでいた男が、手にした銀色のライフルでフェザーマンを撃ち落としたのだ。
「さっき十代がライトジャスティスで破壊したモンスター、白銀のスナイパーの効果を発動。魔法・罠ゾーンにセットされたこのカードが相手によって破壊されたターンのエンドフェイズにこのカードを墓地から特殊召喚して、相手のカードを1枚破壊する！」
白銀のスナイパー　攻１５００

清明　ＬＰ２００　手札：２
モンスター：ペンギン・ナイトメア　守１８００
白銀のスナイパー　攻１５００
魔法・罠：なし
十代　ＬＰ１９００　手札：０
モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００
魔法・罠：１（伏せ）

「そして僕のターン。ペンギンを攻撃表示にしてフィールド魔法、忘却の都　レミューリアを発動！このカードはウォーターワールドよりも攻撃力の上がり幅こそ小さいけど、攻守まんべんなく強化できる。さらにペンギン・ナイトメアが表側表示の時、自分フィールドの表側水属性モンスターの攻撃力は２００ポイントずつアップ！ま、このスナイパーさんは地属性だからどっちも関係ないけどね」

ペンギン・ナイトメア　攻９００→１１００→１３００　守１８００→２０００

「バトル！えーとユーノ、攻撃するときは攻撃力の低い方からがセオリーだったっけ？」

『んなもん俺に相談するなっての。ただ、それはゴーズ警戒する時の対処法だぜ』

ちょっと不安になったので聞いてみる。確かそう習ったような気がするんだ。習ったといっても授業は寝てることが多いから、稲石さんのテスト前に受ける赤点回避用の

個人授業か三沢に宿題を聞きに行った時のことだろう。
「バトル、ペンギン・ナイトメアでバーストレディに攻撃!」
「んー、惜しいけどしょうがないな。トラップ発動、異次元トンネル―ミラーゲート―!」
急に目の前の空間がぐにゃり、とねじれ曲がると、なぜか僕の目の前にバーストレディが立っていて十代の側に立っているペンギン・ナイトメアが攻撃してきて……あれ?故障?
「ちょっと中断しよっか、十代。デュエルディスクなんて複雑なもの直せるかどうかわかんないけど」
「いやそうじゃないぜ!?これがミラーゲートの効果で、このターンのエンドフェイズまで攻撃を受けた俺のＨＥＲＯと攻撃してきたお前のモンスターのコントロールを入れ替えるんだよ」
「っ!?」
あっぶな!セオリー通り……では別にないみたいだけど、とにかくこっちから先に攻撃してよかった!今のでスナイパーさんの攻撃から入ってたら戦闘ダメージで敗北確定じゃん!
ペンギン・ナイトメア　攻１３００→Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００（破

壊）

清明　ＬＰ２００↓１００

さて、とりあえずライフが１００だけ残った今どうするべきか。一応スナイパーさんに攻撃させればナイトメアを倒してわずかながらのダメージが通せるけど……。

「ここで攻撃してもちょこっとしかダメージも通せないのに、僕に自分のモンスターを攻撃しろっての？冗談じゃないよ、それにミラーゲートの効果はエンドフェイズまでしか続かないんだ。スナイパーさんを守備表示に変更。カードを1枚伏せてターンエンド。戻っておいで、ナイトメア」

エンドフェイズを迎えると同時にはっと気が付いたように辺りを見回し、とてとてと慌てて僕のフィールドまでペンギン歩きで帰ってくるナイトメア。顔は凶悪そうだけど、こういうとことはちょっとかわいいと思う。

白銀のスナイパー　攻１５００↓守１２００

「俺のターンだな。ドロー！自分の手札が1枚だけの時、バブルマンは手札から特殊召喚できる！さらにこのカードを特殊召喚した時自分がほかのカードをコントロールしていなければ、デッキからカードを2枚ドローできる」

「うげ、またこのタイミングでバブルマン!?」

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バブルマン　攻８００

やっぱ、なんだ。十代の引きは化け物だ。そんな思いで、十代がカードを引くのをじっと眺める。

「通常魔法、アームズ・ホールを発動。このターンの通常召喚を封じる代わりにデッキトップを墓地に送り、デッキか墓地から装備魔法1枚を手札に加えることができる！デッキからバブル・ショットを手札に加えて、このカードをそのままバブルマンに装備！これでバブルマンの攻撃力は８００ポイントアップするぜ」

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻８００→１６００

「バトルだ！バブルマン、ペンギン・ナイトメアに攻撃！バブル・ショット！」

バブルマンが両手で抱えたでっかい銃から、泡の塊が打ち出される。あんな攻撃受けたら僕の負けじゃないか。まだ負けたくないし、もっと粘らせてもらうよ！

「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を無効にして、さらに僕の場に水族のナイトメアがいることで十代、そっちに８００の効果ダメージだよ！」

水の壁が泡の一撃をはじき、そのまま十代にぶつかる。ふー、なんとか防げた。

十代　ＬＰ１９００→１１００

「さすがにやるな。カードをセットして、ターンエンドだ」

清明　ＬＰ１００　手札：１

モンスター：ペンギン・ナイトメア　攻１３００

白銀のスナイパー　攻１５００
魔法・罠：なし
場：忘却の都　レミューリア
十代　ＬＰ１１００　手札：０
モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン（ショット）　攻１６００
魔法・罠：バブル・ショット（バブルマン）
１（伏せ）

「僕のターン！よし、いいところに来てくれたよ！ナイトメアをリリースして、ジョーズマンをアドバンス召喚！」

ペンギンの姿が消え、全身に鋭い牙のついた口を持つ勇ましい鮫の獣人が仁王立ちする。腹についたひときわ大きい口をがちがちとかみ合わせるその姿は、とても頼もしいものに見えた。

ジョーズマン　攻２６００→２８００　守１６００→１８００

「ジョーズマン、頼んだよ！バブルマンに攻撃！」

「バブル・ショットの効果を発動！装備モンスターが戦闘破壊されるときに身代わりになってこのカードを破壊し、プレイヤーへのダメージも０にする！」

ジョーズマン　攻２８００→Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻１６００

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻１６００→８００
勢いよく振られた右腕が、バブルマンの体を吹き飛ばす。だが、バブルマンはそのままくるっと空中で１回転して着地を決めるだけで、破壊はされなかった。
まあ、僕だってそこまでは計算済みだ。これでバブルマンは攻撃表示で棒立ち状態、今ならスナイパーさんで狙い撃てる！
「というわけで頼みますよ、スナイパーさん！」
「確かにその攻撃を止めるカードは、今の俺は持ってない。だけど、ＨＥＲＯはただ負けるなんてことはしないぜ！トラップ発動、エレメンタル・チャージ！俺はこのカードの効果により自分の場のＥ・ＨＥＲＯ１体につき１０００ライフを回復する！」
白銀のスナイパー　攻１５００→Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻８００（破壊）
十代　ＬＰ１１００→２１００→１４００
「くっ、むしろ回復された！ええい、カードをセット、僕はこれでターンエンドっ！」
これで、十代にはもう手札も場のカードもない。だけど、こういう時に限ってあいつはとんでもないカードを引いてくれる。それが、十代の十代たるゆえんなんだから。
「俺のターン、ドロー！魔法発動、ホープ・オブ・フィフス！このカードは墓地のＥ・ＨＥＲＯ５体をデッキに戻してカードを２枚引くことのできるカードだけど、この発動時に自分の手札にも場にもほかのカードがない場合、ドロー枚数は３枚になる！俺は墓地

のプリズマー、フェザーマン、バーストレディ、バブルマン、スパークマンをデッキに戻して3枚ドロー!」

「スパークマン?そんなカードいつの間に……」

『いや、アームズ・ホールの時に送ったデッキトップのカードだな』

「そういうことさ!」

まずいまずいまずい、あの十代に3枚もカードを引かせなんてしたら、何をやってくるかわかったもんじゃない。だけど、妨害のカードなんて僕の場にはない。結局、指をくわえてみてることしかやることはないのだ。

「さあ、行くぜ清明!融合を発動、手札のワイルドマンとエッジマンを融合!来い、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ワイルドジャギーマン!」

ワイルドジャギーマン。黄金の鎧をまとうワイルドマンの進化した姿……そういえば聞こえはいいが、その鎧が実に中途半端な部分しかカバーしていないためどっちかというとサイボーグワイルドマンとか工場長のオッサンとか散々な言われようをされるある意味イラスト的な意味でもっとも不遇なＨＥＲＯだ。

だが、その効果は攻撃力も相まってかなり強い。やれやれ、このセットカードがポセイドン・ウェーブだったら……いや、現実を見よう。このカードは、何かの役に立つかと思ってセットした速攻魔法、サイクロンだ。それ以外の何物でもない。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン　攻２６００
「ワイルドジャギーマンは、１ターンに相手モンスター全てに攻撃ができる！だから、もしその伏せカードで攻撃を無効にしても意味ないぜ！白銀のスナイパーに攻撃、インフィニティ・エッジ・スライサー！」
……これがサイクロンなのは黙っとこうかな。なんかちょっと悔しいし。
Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドジャギーマン　攻２６００→白銀のスナイパー　攻１５００
（破壊）
清明　ＬＰ１００→０

「かーっ、負けたかぁ……」
「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」
いつも通り、びしっと満面の笑みでこちらに向かってポーズをとる十代を見ながら墓地のカードを引っ張り出してデッキに戻す。あとはシャッフルして、と。よし、これでバッチリだ。
「うん、まあ、僕も楽しかったよ。結局勝てなかったけどね」
「そりゃあなんてったって、俺は未来のデュエルキングになる男だからな。そう簡単に

負けるわけにはいかないぜ」
　そんなことを全く悪びれずにまっすぐな瞳で語る十代に、なんだかしらないけども思わず笑いがこみあげてきて。本当に、去年からまるで変わっていないんだから。　そんなことを全く悪びれずにまっすぐな瞳で語る十代に、なんだかしらないけども思わず笑いがこみあげてきて。本当に、去年からまるで変わっていないんだから。
『なーに他人事みたいに黄昏てんだ。お前もまるっきり変わってねーよ』
「おお、俺もそう思うぜ。お前もなるんだろ？デュエルキングにさ」
　うーん、そうか、僕も変わってはいないのかな。これはどこかで聞いた話だけど、人は大抵、成長する中で大切なものを捨てちまうらしい。
　なら、変わってないってことは裏を返せばその大切なものを捨ててないってことなんだろう。まあ、それなら別に悪いことじゃないのかなって思う。
　と、その時、ヒューっとレッド寮に爽やかな風が吹いた。ああ、今日も気持ちのいい天気だ。それじゃあ、また原稿を考える作業に戻ろうかな。
「へ、何言ってんだ？今年のレッド寮に新入生は来ないって掲示板に張ってあったぞ？」
「えっ」
『あーあ、ばらしちまったか』
　ギギギギギ、と音が出そうになるほどゆっくりと、ユーノのいる方を振り向く。

こーっそりと忍び足でどこかに逃げようとする彼の後ろ姿が見えた。
「なんで教えてくんないのさー！」
『んなもん確認しないお前が悪いわ！』
ユーノを追いかけて、どたばたと走り回る。それを、十代が笑いながら見ていた。去年がおかしかっただけで、これが本来の日常なんだろう。それはそれで、ちょっと残念な気もする。命どころか魂まで賭けた闇のデュエルなんてもうこりごりなのは当然なのに、なんでそう思ったりするんだろうか。あるいはそれも、うちの神様のせいなのかもしれない。
『なんでもかんでも私に押し付けないように』
あ、筒抜けだったらしい。たいしたもんだ、僕の神様……地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）
Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）は。

ターン３７　鉄砲水と変幻忍法

授業が終わり、昼休みを告げるチャイムが鳴った。これから３０分ほどは、たのしいたのしいお弁当の時間だ。少なくとも、僕たち以外にとっては。

今日は僕が珍しく寝坊してしまったため、全員分の弁当はおろか朝食すら作れていない。さすがに罪悪感は感じるが、それ以上に差し迫った問題としてとりあえず腹減った。

「さーいしょはグー、ジャーンケーン……ポイ！」

チョキ、チョキ、チョキ、パー。最初から順に十代、翔、万丈目、僕である。つまり僕の一人負け。

「くっ……今ちょっと後出ししてなかった？」

苦し紛れに言いがかりをつけてみるも、そんなことされてないのは僕が一番よくわかってるわけで。

「馬鹿を言え。この万丈目サンダーが、そんなくだらん真似をすると思うか。そもそも元はと言えばお前が悪いんだ、諦めて買って来い」

「ですよねー」

逆に一喝され、さっさと席を立つ。貧乏なウチの今月分の予算を軽く確認し、なんとかドローパンを人数分買う程度の余裕はあると判断。よかったよかった、これで赤字だったら目も当てられない。

『つーかお前、最近は遊野洋菓子店で結構利益入ってきてんだろ。その金はどこに消えてんだ？』

「いや、人聞き悪いね。それじゃあまるで僕が使い込みしてるみたいじゃん……というかユーノ、今日は学校来てるんだ。めずらしーね、いつもはぐーすか寝てるのに」

ちなみにこの遊野洋菓子店、正式名称『遊野洋菓子店　ＹＯＵ　ＫＮＯＷ』とは、文字通り僕が経営するオーダーメイド洋菓子（？）専門店である。何でも先だっての ホワイトデーに女子寮の皆さんで食べてくださいって送っておいた夢想用に焼いたクッキーの余りが大好評を博したらしく、相応の金は払うからまた何か作ってくれと数人がかりでわざわざ教室まで来て頭を下げられたのだ。

その時は材料費のことを気にせずに菓子作りができ、おいしく食べてもらえるうえにバイト代まで稼げるんならまあいいかと引き受けたし今もその気持ちは変わってないが、正直アシスタントの一人も欲しいところである。色々試してはみたんだけど十代たちには危なっかしくて任せられないし、ユーノはそもそも幽霊だから物が持てない。サッカーや霧の王といった精霊たちはよく働いてくれるんだけど、普段からデュエルで

お世話になりっぱなしなのにこんなことにまで引っ張り出すのはさすがにどうかと思うので自主規制。結局今に至るまで僕が１人で注文をこなしていることになる。
『ふむ。そんで？あの金は何に使ってんだよ』
「あれねえ……注文受け付け用にって無理やり寮に電話回線繋いだときに全部消えちゃった」
『はぁ!?』
　嘘じゃない。もともとオシリスレッドは校舎から遠いうえに、デュエルアカデミア自体が海のど真ん中にある孤島なのだ。万丈目グループのコネがあったから多少は安上がりになったものの、電気はあるけど電話がない（そもそもＰＤＬで連絡が成り立つため必要がないという話も）ここに回線をつなげるのはなかなかお金がかかったのだ。
『そーかそーか、最近なんか工事やってると思ったらそんなことしてたのか。つーかそれにしてもそんなにねえ』
「連絡取るのが楽になるからって稲石さんの廃寮に繋いでもらったせいかも」
『もー何も言わん、好きにしてくれ……ん？』
　何を言っても無駄だといわんばかりに話を切り上げ、横の方に注意を向けるユーノ。つられてそっちを見ると、なにやらわーわーと騒ぐ声。はて、なにかあったんだろうか。
「俺が勝ったんだ、ちゃんとアンティルールだって言ったろ！だからそのカードをさっ

さとよこせ！」
「た、確かに言ってたけど……でも私、いやだって言ったよ……」
「がたがたうるせーな、どこ探しても宵闇の使者がお前の持ってる1枚しか見つかんなかったんだから諦めろよ！へへへ、これで俺のデッキもパワーアップだ」
「お、お願いです、返してください！」
……なんだろうこの時代劇みたいな典型的悪役。器量よしで病気のおとっつぁんと二人暮らしの貧乏娘とそれに惚れこむ長屋のドラ息子みたいな。しかし宵闇の使者とは、あやつなかなか目の付け所が渋い。
おっと、ついついテレビを見る感覚で引き込まれちゃってた。さて、どうすっかねえ……さすがに無視して購買に行くのは胸が痛むけど、そもそもあっちの女の子が本当に善玉とも限らない。
『おいチャクチャル、なんか去年に比べてこいつ性格歪んでね？心の闇増えてんだろ絶対』
『私は何もしたつもりもないのだが……とはいえ確かに1年でトラウマになるようなこともないのにここまで心の闇が増大するのは異常なペースだな。もしかしなくても、やはり私のせいだろうか』
『ま、元が気持ち悪いぐらいのガキっぷりだったからこんなもんでちょうどいいのかも

しれんけどな』

なんか外野がいろいろ言ってるのを適当に聞き流し、柱の陰からもうちょっと様子をうかがってみる。ま、様子見様子見。

「悪く思うなよ。そもそもお前が勝ってりゃこんなことにはならなかったんだ、お前のデッキが弱いのが原因だろ！」

割と暴論だな、オイ。まったく、これだからアンティルールってのは……。

「白銀のスナイパー？こんなエンドフェイズにしか特殊召喚できないような遅すぎるカード使ってんじゃねえよ。そんなんだから負けたんだよ、それはこんな弱いカードをデッキに入れようと思ったお前の自業自得だ。よって俺がこのカードは持っていく」

「あー？そこの１年、今言ったこと僕の前でもういっぺん言ってみな」

予定変更。もう少し黙ってみてるつもりだったが、気が変わった。スナイパーさんが弱いだと？なかなか面白いこと言ってくれるじゃないの。

そいつは急に話に割り込んできた僕に一瞬ビビったようだったが、僕の制服を見てすぐににやにやと笑みを浮かべた。一瞬何がそんなにおかしいのかわからなかったけど、去年前半でのオシリスレッドの扱いを思い出してやっと納得がいった。僕と十代が昇級を蹴ったり万丈目がいきなり入ってきたりで色々あったながらも実力を認められて最近それなりの対応をされるようになってたからすっかり忘れてたけど、そういえば元

は落ちこぼれ寮という触れ込みだったんだよねあそこ。おそらく去年以前の前評判だけ聞きかじってたクチなんだろう、きっと。
「けっ、先輩だか何だか知らねーけどよ、俺はちゃんとしたアンティルールでこの宵闇を手に入れたんだ。返したりなんかするもんかよ」
　ったく、自分からそんな念押しするってことは悪いことしてる自覚があるってことなんだよ。それが分からないうちはまだまだだなあ、なんてことを思いながら口を開く。
「なら、後輩さん?僕とデュエルしようか。もちろんアンティルールで、ね。あいにく僕も宵闇は持ってないんだ、ちょうどいいからもらっておこうかな」
「んなっ!?ふざけんなよ、だいたいオシリスレッドなんかがアンティに釣り合うようなカードもってるわけ……」
「(ねーえチャクチャルさん、お願いがあるんだけど?)」
『……了承。ただしこの一戦、例え貴方がもう1度死んででも勝ってくれ』
　本人の許可をもらい、地縛神のカードをサッと目の前に突き付ける。このカードは世界にこの1枚しかないはずだ。つまり、アンティの条件としてこれ以上のカードはほかにない。これなら間違いなく乗ってくる、と読んでの行動である。
「な、馬鹿な、俺の知らないカードだと!?いったいそんなカードどこで……今日の俺はついてる!」

そして案の定、一発で乗ってきた。とはいえリスクは高い。こっちもチャクチャルさんを賭けに出した以上、何が何でも勝たなくっちゃね。

「「デュエル!!」」

僕が先行なのを確認し、初期手札をざっと眺める。これは……僕の勝ちたい思いにデッキがそのまま答えてくれたんだろうか。だとしたらありがとう、皆。遠慮なくその力を使わせてもらおうか。

「スター・ブラスト発動。１５００ライフを払うことで、手札にいるシーラカンスのレベルを7から4に下げるよ。んで、レベル4のシーラカンスを通常召喚」

自分のライフを５００単位で払うことで手札か場の自分モンスターのレベルを1ずつ下げていくカード、スター・ブラストの効果で速攻召喚されたシーラカンス。なんだかいつもよりその後ろ姿に気合が入っているように見えるのは、たぶん気のせいじゃないだろう。それを肯定するかのように、アカデミアの廊下にシーラカンスの雄叫びが響き渡った。

……もうちょっと近所迷惑とかも考えてくれると、私としては大変うれしい。

清明　ＬＰ４０００→２５００

超古深海王シーラカンス　☆7→3　攻２８００

「さらにカードを2枚セット、それからシーラカンスの効果を発動。手札1枚を捨てて、

デッキからレベル４以下の魚族を出せるだけ特殊召喚する！一斉召喚、魚介王の咆哮！」

モンスターゾーンの中央に召喚したシーラカンス。そこを中心とした残り４か所の地面が割れて間欠泉よろしく一斉に水柱が噴き出て、その水流に乗って４体のモンスターが姿を見せる。

ハリマンボウ　攻１５００
ハンマー・シャーク　攻１７００
オイスターマイスター　攻１６００
シャクトパス　攻１６００

「はい、ターンエンド」

「そんな雑魚攻撃表示でいくら並べたところで、意味ないぜ先輩サンよぉ！魔法発動、ブラック・ホール！このカードの効果で、場に出ているモンスターをすべて破壊だ！」

５体のモンスターが、一瞬で光さえも捉えて離さないといわれる圧倒的な宇宙の墓場、ブラック・ホールに飲み込まれる。……なんてことはなかった。

『狙いは悪くなかったな。狙いは』

「そだね。確かに５体のモンスターが破壊できるんなら使いたいところだけど、それがかんっぜんに裏目に出たね。トラップ発動、魔宮の賄賂！その発動は無効になる代わり

に、カードを1枚ドローさせるよ」
「ク、クソッ！まだだ、阿修羅（アスラ）を召喚して魔法カード、渾身の一撃を発動！」
『ほー、案外やるじゃねえか。阿修羅の全体攻撃をフル活用して渾身の一撃の効果で全滅狙い、悪くはないがまあ相手が悪かったな。今の清明はぶちぎれてっから強いぞー？』
　渾身の一撃……確か対象モンスターによる戦闘ダメージを０にしたうえでバトル後にその相手を効果破壊するカードだったっけか。なるほど、コンボとしてはいい動きだ。
　ただ一つ問題があるとすれば、今の僕にそんなものは通用しないってことだ。
「阿修羅でまずハンマー・シャークに攻撃、地獄の千手剣！」
「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ」
　普段、このカードは魔法の筒の下位交換として見られがちである。実際、僕が使う時も相手の攻撃力がいくつであっても８００ダメージしか与えられないことが多い。だけど、このカードの効果は攻撃を無効にし、自分の場にいる水、魚、海竜族1体につき８００のダメージを与える効果だ。性質上、場をすべて魚で埋め尽くすシーラカンスとの相性は最高というわけ。何せ、この2枚のコンボがうまく決まれば……。
「８００かける5、で４０００ダメージだね」

このように、一撃で初期ライフをすべてかっさらっていくこともできるんだから。

後輩　ＬＰ４０００→０

「さ、何か言うことは？後輩クンや」

「こんなのまぐれだ、覚えてろ！」

最後の最後まで小物臭たっぷりだった後輩が投げつけた宵闇の使者を空中でキャッチし、ずっとその様子を見ていた本来の持ち主に向き直る。なにか怖い人が近づいてきたかのようにびくっとされたのはまあ、見逃しておこう。初対面だしね。だけどちょっとショックだったり。

「えーと……君の、だよね？」

「は、はい」

「いや、そんな身構えなくても何もしないよ。ホイ」

無論人のカードを投げつけるような真似はせず、なるべく丁寧に目の前に差し出す。宵闇の使者と僕の顔を何度か見てから、そっと彼女も手を伸ばした。

「ありがとうございます……」

「ん、いいってことよ。別に気にしない……で……ね……」

セリフの途中、廊下に響くチャイムの音。それを聞いて、僕の顔がさあっと青くなったのが見なくてもよくわかった。

『なあチャクチャル、最近お前毎日学校来てるんだからわかるだろ。まだ授業じゃねーし、あれ何？』
『説明しよう。あの音は、購買に置いてあるその日のドローパン及びあらゆる食料が完全に売り切れたことを示す、昼の糧を準備していなかったものに対する絶望の音なのだ』
『なるほどな。んで、なんでそんなハイテンションなわけ？』
『この時間帯は必ずアカデミアに昼を食べ損ねた者の絶望が感じられるからな。一応とはいえ邪神たる私としては大変気持ちがいい』
　急に顔色を変えた僕を心配そうに見る女の子。そしてよく見ると、その手にはドローパンが入ったレジ袋。……よし、前言撤回。今まさに放そうとしていた宵闇の使者を持つ手にぐっと力を込める。
「え？えっと、あの……」
「僕とデュエルしよう？アンティルールで、君が勝ったらこのカードは返すよ。だけど僕が勝ったら、その時はそのドローパンをそっくり頂くってことで」
『うわ、人間のクズだ』
　自分でも割とひどいこと言ってるなあ、とは思う。ただしこちらも今日の昼ごはんがかかっている死活問題、買えませんでしたーなんて言おうもんなら十代たちに申し訳が

立たない。
　その迫力に押されたのか、それともよっぽど宵闇の使者が大事なのか。ともかく彼女は、半ば押し切られるようにコクリ、と頷いた。これで後は、僕が勝つだけだ。と、その前に。
「君、名前は？僕は遊野清明、見ての通りの２年生だよ」
「私ですか？私は、葵。姓が葵で名がクラ。葵（あおい）クラと申します。いざ！」
「「デュエル！」」
　今度は僕の後攻。まあ確率は二分の一だし、筋は通ってる。それに後攻ならドローできるし、そう悪いことばっかりでもない。
「私の先行。自分の場にモンスターが存在しない時、フォトン・スラッシャーは特殊召喚されます」
　フォトン・スラッシャー　攻２１００
「そして、このスラッシャーをリリース。モンスターをアドバンスセットいたします」
　攻撃力２１００と下級モンスターにしては破格の数値を持つスラッシャーをリリースしてまでセットしたんだ。きっとあの伏せモンスター、かなり厄介な守備力か効果を持っているに違いない。さて、次のドローで何かいいカードが来ればいいんだけど。
「さらにカードを伏せ、ターンエンドです」

「僕のターン、ドロー！シャクトパスを召喚して、さらに魚族のシャクトパス召喚に合わせてシャーク・サッカー特殊召喚！そしてサッカーをリリースして手札のシャークラーケンを特殊召喚」

シャクトパス　攻１６００

シャークラーケン　攻２４００

結論から言うと、ちょうどいいかんじの除去カードは引けなかった。なら、力づくでいってみるしかない。

「シャークラーケンで伏せモンスターに攻撃！」

シャークラーケン　攻２４００→???　守２２００（破壊）

「セットモンスター、渋い（シルバー）忍者の効果を発動します。このカードがリバースしたことで、手札か墓地から忍者モンスターを裏側守備表示で特殊召喚です。お出でなさい、機甲忍者アース！アクア！」

シャークラーケンの牙が老齢の忍者を噛み砕いたと見るやその姿が煙のように消え、その隙に追加で２人の忍者が音もなくモンスターゾーンに忍び込む。でも、やってることは所詮壁を増やしただけだ。

「なら、シャクトパスで右側のモンスターに攻撃！」

『あ、いやここは黙ってエンドした方が……もう遅いな』

シャクトパス　攻１６００→???　守１６００
「ふふ、アクアの守備力は１６００。その攻撃力で戦闘破壊は無理ですよ」
「む、ターンエンｄ……」
「待ってください、ここでリバースカード！忍法・超変化の術！私の機甲忍者アクアと先輩の場のシャークラーケンを墓地へ送ることで、デッキからその合計レベル、つまりレベル１０以下のドラゴン、恐竜、海竜族モンスターを特殊召喚いたします。さあ、これこそが葵流忍術最強のしもべ！レベル８、銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）！」
裏守備になっていた青服の忍者と、僕の場のシャークラーケンが光る煙に包まれる。そして２体のモンスターがフィールドの真ん中に引き寄せられ、一つに溶け合ってまばゆいばかりに光り輝く１匹の竜の姿に変化していく。
銀河眼の光子竜　攻３０００
葵　ＫＰ４０００　手札：０
モンスター：銀河眼の光子竜（攻・超変化）
???（機甲忍者アクア）
魔法・罠：忍法・超変化の術（銀河眼）
清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：シャクトパス（攻）

魔法・罠：なし
「私のターン、アースを反転召喚します。バトル！銀河眼でシャクトパスに攻撃、破滅のフォトン・ストリームです！」
銀河眼の光子竜　攻３０００→シャクトパス　攻１６００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→２６００
「まだまだ！シャクトパスは、自分を破壊した相手をつかんで離さないモンスターだよ。銀河眼の装備カードになったこのカードの効果で攻撃力は０になり、さらに攻撃も表示形式の変更もできなくなるからね」
銀河眼の足元から無数のタコ足が伸び、とっさのことに飛び立つこともできないドラゴンをがんじがらめに縛りつける。どれほど攻撃力の高いモンスターでも、シャクトパスの効果の前ではただの的にしかならなくなるのだ。
銀河眼の光子竜　攻３０００→０
「ですが、アースの一撃は止まりませんよ？アース、ダイレクトアタック！」
機甲忍者アース　攻１６００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ２６００→１０００
「カードを伏せ、ターンを終了します」
「なら、僕のターン。ツーヘッド・シャークを召喚して、銀河眼に攻撃！」

「伏せカード、くず鉄のかかしを発動！相手の攻撃を1度だけ無効にし、このカードをセットしなおします。これぞ葵流忍術防御の型、廃棄忍法リサイクル・ロック」

一気に2体のモンスターを破壊せんとばかりに迫るツーヘッドの口の片方に、ボロボロになったかかしの片腕が強引に突っ込まれる。さすがに金属はかみ切れなかったらしく、首を振ってなんとか脱出した。

「ツーヘッドは2回攻撃ができるモンスターだからね、もう一回銀河眼に攻撃！」

「かかりましたね！この瞬間に銀河眼の効果発動、銀河忍法コズミック・ワープ！このカードと戦闘を行う相手とこのカードを、バトルフェイズ終了までゲームから除外します！」

「ちぇっ、かわされたか」

『いや、それだけじゃねえな。これであの銀河眼はシャクトパスとも超変化ともつながりが切れた状態……ノーデメリットの３０００打点の出来上がりだ』

ユーノの言葉を聞き、はっと気づく。そうか、そっちが狙いだったのか！じゃあもしかして、最初からシャクトパスの効果を知ったうえで攻撃を？目の前の少女について、どうやら僕の認識は甘かったらしい。さっきまでも手を抜いたつもりはないけど、本気で倒しにかからないと勝てる相手じゃなさそうだ。

「バトルフェイズ終了、とみてよろしいですか？では、2体のモンスターはお互いの場に

戻ります」
「なるほどね、それで次のターンに攻撃されれば僕の負け……だけど、そううまくいくかな？自分の場に水属性モンスターがいるとき、手札のサイレント・アングラーを特殊召喚。さらにカードを１枚伏せて、ターンエンド」
サイレント・アングラー　守１４００
葵　ＫＰ４０００　手札：０
モンスター：銀河眼の光子竜（攻）
　　機甲忍者アース（攻）
魔法・罠：忍法・超変化の術（対象なし）
　　１（伏せ・くず鉄）
清明　ＬＰ１０００　手札：１
モンスター：ツーヘッド・シャーク（攻）
　　サイレント・アングラー（守）
魔法・罠：１（伏せ）
「ドロー、悪シノビを通常召喚します」
悪シノビ　攻４００
黒というより灰色一色の、これまで出てきた色とりどりの忍者に比べていささか地味

目な色合いの忍者。若干オーバーキル気味な気がするけど、きっとこの伏せカードを警戒してるんだろう。まあ、悪い選択じゃあないんじゃなかろうか。
「バトル！銀河眼で効果は使わず、ツーヘッドに攻撃です！」
「当然そんなことはさせないよ、ポセイドン・ウェーブ発動！僕の場には魚族のアングラーとツーヘッドがいるから１６００のダメージ！」
「その発動にチェーンして銀河眼の効果を使います！銀河忍法コズミック・ワープ！」
　分厚い水の壁が攻撃を押し返し……てない！光のブレスは水の壁にぶつかる寸前に銀河眼ごとふっと消え、水が引いてから再び姿を見せた。とはいえ、攻撃をしのいだことに変わりはない。まだまだ勝負はここからだろう。
「メイン2、アースを守備表示にしてターンエンドです」
　機甲忍者アクア　攻１６００→守１６００
「僕のターン、この2体をリリースして……そっちがドラゴンなら、こっちもドラゴンをぶつけるまでさ。青氷（ブルーアイス）の白夜龍（ホワイトナイツ・ドラゴン）、ここに降臨！」
　青い体に冷たい翼。溶けない氷でできたドラゴンが、光の竜に対峙する。とはいえ、あちらに攻撃してもどうせまた除外されるだけなのでスルーなんだけど。
「アクアに攻撃、孤高のウィンター・ストリーム！」
　青氷の白夜龍　攻３０００→機甲忍者アース　守１６００（破壊）

「へへ、ターンエンド」
葵　ＫＰ４０００　手札：０
モンスター：銀河眼の光子竜（攻）
悪シノビ（攻）
魔法・罠：忍法・超変化の術（対象なし）
１（伏せ・くず鉄）
清明　ＬＰ１０００　手札：１
モンスター：青氷の白夜龍（攻）
魔法・罠：なし
「私のターン、機甲忍法ゴールド・コンバージョンを発動します。私の場の忍法カードをすべて破壊し、カードを２枚ドロー！そして青い忍者（ブルー）を守備表示で召喚、カードをセットしてターン終了です」
青い忍者　守３００
『清明、どっちに攻撃するかは……ま、言わんでもいいか』
「もちろん！ドローしてそのままバトル、悪シノビに攻撃！孤高のウィンター・ストリーム！」
『お、ダメージ優先できたか。まあここで青倒してもうまみは少ないし、ドローを怖がら

なきゃありっちゃありか』

そう言って明後日の方を向くユーノ。言ってることの意味は半分もわからなかったけど、とにかく馬鹿にされてるわけじゃないことだけは理解できた。

「ならば、まず攻撃表示の悪シノビが攻撃対象になったことでカードをドロー。このままでは戦闘ダメージを受けますが私の場にはこのカード、くず鉄のかかしがありますよ！廃棄忍法リサイクル・ロック！」

再び跳ね起きたかかしが、冷気のブレスを受け止めんとその鋼鉄の腕を広げる。が、その抵抗もそこまでだった。一瞬で氷漬けになったかかしはブレスを止めるどころか逆に吹き飛ばされ、その向こう側にいる灰色の忍者もまとめて打ち抜いた。

「そんな…!?」

「白夜龍は、自信を対象にする魔法及び罠の効果を無効にする力がある！くず鉄のかかしは無効、そして破壊させてもらうよ！通るダメージは２６００、これならどうだっ！」

青氷の白夜龍　攻３０００→悪シノビ　攻４００（破壊）

葵　ＬＰ４０００

これでこのデュエルの流れも変わるだろう、と思ったのもつかの間、まったく無傷の状態で葵が立っているのが見えて愕然とする。それが顔に出ていたのかちょっと満足げな様子で手札にある１枚のカード、ついさっき悪シノビの効果でドローしたカードを

こちらに見せてきた。
「ダ、ダメージステップに手札からクリボーの効果を発動しました……このカードを捨てることで1度だけ戦闘ダメージを0にできます。これぞ名づけて葵流、機雷忍法モコモコ・プロテクションです」
　いや、そんなきりっとした顔でモコモコとか言われてもどうリアクション取ればいいのさ。大人の対応でスルーしながら、次の手を考える。まさかこれでもダメだったとは。
「ま、やることなんて1個しかないんだけどねー。モンスターとカードをセットして、ターンエンド」
「ならば、そのエンドフェイズに伏せカード、忍法　変化の術を発動します。自分の場のレベル1、青い忍者をリリースすることでデッキからレベル4以下の獣、鳥獣、昆虫族モンスターを特殊召喚です。お出でなさいレベル4、聖鳥クレイン！」
　速攻の黒い忍者が印を結ぶとその姿が足元からもくもくと煙に包まれていき、2、3度ほど羽ばたきのような音が聞こえたかと思うとそこには真っ白い鳥が澄ました顔で立っていた。
『ほう、まあレベル4なら定番だわな』
　聖鳥クレイン　守４００

「聖鳥クレインが特殊召喚されたことにより、私はカードをドローしますね」
葵　ＫＰ４０００　手札：１
モンスター：銀河眼の光子竜（攻）
聖鳥クレイン（守・変化）
魔法・罠：忍法　変化の術（聖鳥）
清明　ＬＰ１０００　手札：０
モンスター：青氷の白夜龍（攻）
???（セット）
魔法・罠：１（伏せ）
「そして私のターン、さらにカードをドロー。魔法カード、マジック・プランターを発動してその効果により変化の術を墓地に送ってカードを2枚ドロー、そして変化の術が場を離れたことでクレインは破壊されます」
これで、葵の手札はあっという間に3枚。そして場には実質的な戦闘破壊耐性がある銀河眼。さあ、まずはこのターンを切り抜けねば。
「忍者マスターＳＡＳＵＫＥ（サスケ）を召喚して装備魔法、風魔手裏剣を装備です。これによりＳＡＳＵＫＥの攻撃力は７００ポイントアップします」
白装束の忍者が手に持っていた手裏剣を腰に差し、服の中から大事そうな手つきで別

の手裏剣を引っ張り出す。武器を変えるだけで攻撃力が７００も上がるんなら、普段からそれっかってればいいのに。

忍者マスターＳＡＳＵＫＥ　攻１８００→２５００

「いざ！ＳＡＳＵＫＥでセットモンスターに攻撃です。裏守備に対してはＳＡＳＵＫＥの効果も意味はありませんが、攻撃力２５００ならさすがに倒せるでしょう……！」

「確かにね。だけど、その攻撃は勝負を焦ったね！白夜龍のもう１つの効果発動、自分の場の魔法、罠を１枚墓地に送ることで攻撃対象をこのカードに変更する！」

弧を描くようにして僕の伏せモンスターに迫る手裏剣。その時白夜龍が大きく羽ばたき風を起こすと、その風圧に煽られた手裏剣はあらぬ方へと飛んで行った。そして自分の大切な武器がなくなるピンチに一瞬だけ白夜龍から注意をそらしたＳＡＳＵＫＥを、問答無用のブレスが飲み込んだ。

忍者マスターＳＡＳＵＫＥ　攻２５００（破壊）→青氷の白夜龍　攻３０００

葵　ＬＰ４０００→３５００

「きゃっ！で、ですが風魔手裏剣の効果も発動！このカードが墓地に送られた時、７００ポイントのダメージです！」

清明　ＬＰ１０００→３００

「それに、私の場にはまだ攻撃をしていない銀河眼……長くなりましたがこの勝負、私

の勝ちですね」
「ふっ……それはどうかな？」
「え？」
何も言わず、すっとフィールド上の銀河眼を指さす。すると銀河眼が突然苦しみだし、ついにはその巨体が倒れた。さて、そろそろネタバラシと洒落込もうか。
「そんな、私の銀河眼が……」
「さっきのバトルの時、だね。白夜龍の効果で攻撃対象を変更させるには、自分の場の魔法か罠を墓地に送らないといけないって。じゃあもし、その墓地に送ったカードがこれ、その前に発動していた安全地帯だったら？」
「!?」
もっと引っ張ろうと思ったけど、あの反応を見るとここまで言っただけでもう何が起こったのか察したらしい。去年の僕なら絶対何言ってるのかわからなかったろうし、ほんっとうに今年の新入生は優秀だ。それともこの子が去年の三沢ポジなんだろうか。
『安全地帯は墓地に送られた時、対象にしていたモンスターを破壊する……墓地送りの効果にチェーンして銀河眼を対象にとっておけば、一気に除去もこなせるって寸法だな。ただ、発動していたってのはマナー的にもあまりよろしくないが』
「そういうこと。何か質問ある？」

「ま、まだ諦めませんよ！魔法カード、カップ・オブ・エースを発動します。コイントスで表が出れば私、裏なら先輩がカードを２枚ドローです……博打忍法コイントス・ショット！」
「あ、裏だ」
……なんか涙目になってた。かわいそうだけどここで手を抜くのは逆に失礼だから気を取り直して、と。さあ、すべてはこのターンにかかっているといっても過言ではない。今こそまさに絶好のチャンス、ここを逃したらせっかくこちらに傾いてきた流れがまたあっちに持っていかれそうだ。
「ドロー！セットモンスターを反転召喚して、水晶の占い師のリバース効果を発動！デッキトップから２枚めくって１枚を僕の手札に、もう１枚をデッキボトムに戻す……１枚目、霧の王。２枚目、強欲なカケラ。当然霧の王を手札に加えてフィールド魔法、ウォーターワールドを発動！さらに自身の効果により、霧の王をリリースなしで通常召喚！さあ、マイフェイバリットカードのお出ましだ！」
　青氷の白夜龍　攻３０００→３５００　守２５００→２１００
　霧の王　攻０→５００　守０
　水晶の占い師　攻１００→６００　守１００→０
『なんだ、アクアの効果は知ってたのか。いつの間にそんなの覚えたんだ？』

「アクアの効果？なんのことそれ？霧の王で攻撃、ミスト・ストラングル！」
『あ、ただのオーバーキル狙いで出したのね……』
霧の王　攻５００→葵（直接攻撃）
葵　ＬＰ３５００→３０００
「つづけて白夜龍、ウィンター・ストリーム！」
「墓地から機甲忍者アクアの効果発動！このカードを除外して、相手の直接攻撃を無効にしますよっ！」
そうか、ユーノが言ってたのってそういうことか……。結果論とはいえ、出してよかったマイフェイバリット。
「それに、まだ手数は残ってるしね。水晶の占い師でもダイレクトアタック！」
水晶の占い師　攻６００→葵（直接攻撃）
葵　ＬＰ３０００→２４００
「カードを２枚セットして、ターンエンド」
葵　ＫＰ２４００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ３００　手札：０

モンスター：青氷の白夜龍（攻）
霧の王（攻）
水晶の占い師（攻）
魔法・罠：２（伏せ）

「私のターン、ドロー！・まだ、まだまだ諦めませんよ！・魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動します！・墓地の戦士族の渋い忍者と鳥獣族の聖鳥クレイン、悪魔族のクリボーをデッキに戻して２枚ドロー、そして魔法カード、ブラック・ホールを使います。この効果により、場のモンスターは全破壊です！」

さっきの名前も知らない後輩と言い、今日はブラック・ホールに縁のある日なんだろうか。あいにくあの時みたいに魔宮の賄賂が伏せてあるようなこともなく、３体のモンスターが宇宙の闇の中に吸い込まれていく。

ま、すぐ出てくるんだけどね。

「トラップ発動、激流蘇生！・水属性モンスターが破壊された時にその全てを特殊召喚し、さらにダメージを与える……甦れ、僕のモンスターたち！」

霧の王　攻５００
水晶の占い師　攻６００
青氷の白夜龍　攻３５００

葵　ＬＰ２４００→９００
「それでも、まだです！この、私の最後のカードは死者蘇生。ここに再び蘇り、見せつけなさい銀河忍法！銀河眼の光子竜、またまた推参です！」
　銀河眼の光子竜　攻３０００
「とはいえ貪欲で無欲な壺を使ったターン、私はバトルフェイズが行えません。これでターンエンドです」
「僕のターン！」
　ちらりと考える。もし、今銀河眼が守備表示で出されてたら……いや、それでも結局のところは変わらないか。
「霧の王で銀河眼に攻撃、ミスト・ストラングル！」
「なっ!?攻撃力５００の霧の王で攻撃を!?」
　そんな叫びにお構いなく、飛び上がって光り輝く魔剣を大上段に振りかぶる霧の王。それに対し、真正面から対抗しようと体を白く光らせて光のブレスを吐く準備に取り掛かる銀河眼。２体のモンスターの間にある緊張は高まり続け、最高点に達しようとしていた。
「やむをえません、このまま戦います！破滅のフォトン・ストリーム！」
「なら、トラップカードを発動！墓地墓地の恨み！」

瞬間、地面から無数の幽霊がぽこぽこと湧き出て銀河眼の周りにまとわりついていく。いったんブレスを吐くのを中断してその幽霊たちを振り払おうとするも、払っても払っても数を増やしつつ帰ってくるそれには太刀打ちできないようだ。

銀河眼の光子竜　攻３０００→０

「このカードは、相手の墓地のカードが８枚以上あるときに相手モンスターの攻撃力を０にする！」

「いくら攻撃力を変化させても、銀河忍法の前には……あ、やられましたね」

その通りだ。ここでもし銀河眼の効果を使っても、今の彼女のライフではそのあとの白夜龍の攻撃を耐えることはできない。かといって、効果を使わなくてもそれは同じこと。つまり、

「このデュエルはもう詰み、さ」

「ええ、完全にしてやられました。ですが、せめて銀河眼だけには逃げてもらいましょうか。銀河忍法コズミック・ワープ！バトルフェイズが終了するまで、銀河眼と霧の王をゲームから除外します」

「白夜龍、ダイレクトアタック！孤高のウィンター・ストリーム！」

葵　ＬＰ４００→０

「しょうがないですね、私の負けです。はい、先輩」
そう言って、デュエルの間に邪魔にならないようどけておいたビニール袋を持ってくる葵。持ってくるのは一向に構わないんだけど。
「えっと、これなんだっけ？」
「へ？先輩、忘れたんですか？アンティですよ、ア・ン・ティ。自分から言い出したんじゃないですか」
「……おお！」
「本気で忘れてたんですね。ただ、先輩の口に合えばいいんですけど」
はて、今何やらおかしなセリフが聞こえたような。ドローパンなんて元から博打みたいな食べ物だし、それに対して口に合うかどうかなんてこと言うのは無粋極まりないことだってのをこの子には一回教えておいた方がいいのかもしれない。
そう思って口を開こうと思った矢先、そういえば言い忘れてましたけど、と葵が言い出した。
「それ、中身はドローパンじゃないんですよ。私が趣味で作ってみた、ただの丸パンです。まだ修行中ですから、あまりうまくできてはいないと思いますけど」
「なるほどねえ。じゃあちょっと失礼」

少なくとも見た目はなかなかいい感じに焼きあがっているように見えるそれを１つ取り出し、ためしにちょっとかじってみる。
「あ、美味しい」
「本当ですか？お世辞ならそう言ってくださいね、その方が私のためになりますので」
そんなことを言っているが、こちとら食べ物に関してだけはお世辞なんてもの言うつもりは全くない。単純に美味しいものならそう言うし、不味いものなら遠慮なくそう言わせてもらう。だけど、その丸パンは中のもっちり具合といいパリッとした外の皮といい、かなりレベルの高い代物だったのだ。
……ふむ、これはちょうどいいかもしれない。
「ねえ、ものは相談なんだけど」
「はい、なんでしょうか」
「この宵闇は返すからさ、そのかわりに１つ頼みたいことがあるんだけど」
「はい？」

それから数日たって、ある日の放課後。遊野洋菓子店に注文されたもののリストを片手に調理室に向かうと、そこにはエプロン姿の葵がすでに立っていた。こういうこと

言ったら今の世の中怒られるかもしれないけど、エプロン姿の女の子ってのはやっぱりいいなあ、なんてことをふと思う。夢想も頼み込んでみたら案外ＯＫしてくれるかも……いややっぱ無理だ、着てくれるかもしれないけど僕みたいなヘタレにはまずそれを彼女に頼むところが無理だ。

「先輩、遅いですよ。もうこっちのシナモンクッキーは生地の仕込みを始めてるんですから」

「ごめんごめん、追試が難しくて」

「またですか？まったく、本当に座学の苦手な先輩ですね」

「実技ができれば問題ない！」

「言い切らないでくださいよ」

何があったかを簡潔に説明すると、入学したてでまだ部活にも入っていない彼女を遊野洋菓子店の店員としてスカウトしたのだ。最初は彼女ほどの腕ならいい助手になってくれるだろう、程度の考えだったのだがこれが予想以上の逸材だった。

まず彼女は勉強もしっかりできるから追試があるたびに引っかかって調理開始が遅れる僕よりもずっと菓子作りにかける時間もとれるし、手先が器用だから初めて教えることもすぐに呑み込んでくれる。僕一人でやってた時は女子からの注文がほとんどだったけど、女の子の手作り菓子があるとわかった瞬間モテない男子勢からの注文もド

カッと増えたしいいことづくめだ。別にそんなにいらないと断ったのを無理やり押し切って儲けを折半にしただけの甲斐はあったと思う。

完全予約制オーダーメイド菓子屋の遊野洋菓子店　ＹＯＵ　ＫＮＯＷ、本日も絶賛営業中です。もしよろしければ、あなたもおひとついかがでしょう？

ターン38　鉄砲水と光の天使

「はい、仕込み終わりっと。葵ちゃんどう？もう準備するものないよね？」
「そうですね。予約分でやっておくことはとっくの昔に終わってます。というかいくらなんでも作りすぎですよ先輩。注文のあてもないのにこんなに作って悪くなったらどうするんですか」
「あはは。だいじょーぶだよきっと、もうすぐやる新入生歓迎集会ですぐ捌けるはずだから」
「……すごくそれっぽいこと言ってますけど、絶対それたった今考えましたよね」
「あ、ばれた？」
　まったくもう、と息を吐く葵ちゃん。さっきまでお昼だったはずなのに、ふと気が付けば太陽も沈みかかっている程度の時刻。つい熱中して商売（菓子作り）に精を出しすぎたようだけど、なんだかんだ言って最後まで付き合ってくれた葵ちゃんには感謝。
「さてと、夕飯も作らなきゃだしそろそろ帰ろうか。もうすぐ暗くなるし、近くまで送ってくよ」
「好き好んで自分で夕飯作ってる寮なんて先輩のオシリスレッドくらいのものですけど

ね。じゃあ、せっかくですしお願いしましょうか。……でも、たぶん今来ても夢想先輩には会えないと思いますよ？」

あ、バレてた。これ以上ぼろを出すのは避けようとその言葉を最後に手早く片づけを済ませ、電気を消して外に出る。連れ立って歩くとはいえ特に何か話すわけでもないが、この距離感は割と気に入ってるので気まずくはない。いっぺん気を使って色々話しかけてみたこともあったけど、その時は彼女から別に気を遣わなくていいですよ、私もあの距離感は悪くありませんし、ってあっさり言われたのでその言葉に甘えることにしている。のんびり歩いていると、すぐにブルー寮が見えてきた。

一応は男子禁制、あまり近づくわけにもいかないのである程度近くまで来たあたりでそれじゃあ、と手を振って帰ろうとすると、白いスーツ姿の少年が歩いてくるのとすれ違った。見ない顔だし新入生かな、と思いながら軽く会釈すると、あ、という返事が返ってきた。

「あの、もしかしてオシリスレッドの遊野先輩ですか？僕、新入生のエドっていいます。ぶしつけなお願いですが、僕とデュエルしていただけないでしょうか」

「え？」

「さっきレッド寮に行ったんですけどいなかったものですから今日はもう会えないのかと思ってたら……うわあ、嬉しいです」

さわやかーな笑顔でそんなことを堂々と言ってくるエド。うん、まあ、悪い気はしない、かな。ただなんとなく、何となくだけど嫌な予感のようなものがする。よし、少し探ってみるか。

「それはいいとして、なんで僕のことが……？」

「そりゃあ、この学校で赤い制服を着ている人なんて数少ないですからね。すぐにわかりましたよ」

うーん、悪い人には見えないなあ。こういう時はしょうがない、十代方式で行くか。

いわく、デュエルすれば分かり合える。

「それじゃ……」

「あ、デュエルしてくれますか！ありがとうございます」

「うん。勝負と洒落込もうか！」

「「デュエル！」」

「先行は僕がもらいますね。僕のターン、ドロー……は、もうできないんでしたっけ」

む、予習不足かな？まったく、ルールぐらいしっかり覚えておかないとこの後色々困るよ？と言いたいのをぐっとこらえる。きっと先輩たちにとっては、去年の僕も同じようなふうに見えていたんだろう。先は長いんだ、僕らがこれからゆっくり教えていけば

いい。あんまり頭ごなしに怒られると、やる気って急になくなっちゃうしね。

「まず、光天使（ホーリー・ライトニング）ウィングスを守備表示で召喚！」

エドの場に翼、というよりも鳥の翼の彫刻のような形をしたモンスターが召喚される。光天使、一体どんな動きをするんだろう。

光天使ウィングス　守１８００

「そしてこの瞬間、ウィングスの効果発動！召喚成功時、手札からさらに光天使と名のつくモンスターを特殊召喚できる！光天使（ホーリー・ライトニング）…ブックス！」

次いで、本の形を模した彫刻のようなモンスター。だめだ、この後の動きが全く予想できない。

光天使ブックス　攻１６００

「さらにブックスの効果を発動、手札の魔法カード１枚をコストに手札の光天使を１体特殊召喚する！魔法カード、サルガッソの灯台を墓地に送って特殊召喚、現れろ光天使（ホーリー・ライトニング）ソード！」

光天使ソード　攻１４００

やっぱり剣というより剣をモチーフにした美術品といった方がしっくりくるモンスター、ソード。手札４枚を使ったとはいえ、まさか１ターン目からいきなり３体もモンスターを展開してくるとはね。

「そして魔法カード、トランスターンを発動。僕の場のブックスをリリースしてデッキから同じ属性、種族でレベルが1高いモンスターを特殊召喚する！光属性天使族レベル5、光神テテュスを特殊召喚」

ブックスの体から後光が放たれ、あまりの眩しさに一瞬目をそらすとそこにはさっきまでとは似ても似つかない白い羽のお姉さんの姿が。こんなにあっさりと上級モンスターを出してくるなんて、たいしたもんだ。だけど、今の動きでもうエドの手札は０。このモンスターたちをなんとかできれば、立て直しはかなり難しいはずだ。

光神テテュス　攻２４００

「僕はこれで、ターンエンドです。先輩、どうぞ」

「さーて、このターンでどれくらい削れるかな?ドロー！」

うーん、初手がシーラカンスにグリズリーマザー、白銀のスナイパーと安全地帯に激流蘇生。そして今引いたのがダブルフィン・シャークか。せっかくエドが手札を使い切った今のうちに攻め込んでおきたかったけど、これはどうしようもないか。むしろ一歩間違えれば手札事故なこの状況、出せるモンスターがいるだけありがたいと思おう。

「グリズリーマザー守備表示で召喚。カードを3枚セットしてターンエンド」

グリズリーマザー　守１０００

エド　ＬＰ４０００　手札：０

モンスター：光天使ウィングス（守）
光天使ソード（攻）
光神テテュス（攻）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：グリズリーマザー（守）
魔法・罠：３（伏せ）

白銀のスナイパーと安全地帯が伏せてあって相手の場には攻撃表示モンスター、今の状況なら大嵐なんてむしろ歓迎したいぐらいだ。ただ、激流蘇生が破壊されるのはちょっと困るけど。とはいえあっちだって3枚も伏せれば相当動きにくいはずだ。さあて、どう出てくるかな？

「僕のターン、ドロー……」この瞬間、テテュスの効果を発動。自分がドローしたカードが天使族ならそれを公開して、さらにドローをすることができる。まず1枚目、光天使ブックス。２枚目、もけもけ。３枚目。おや、またもけもけだ。４枚目、神聖なる球体。５枚目、大天使ゼラート。６枚目、創造の代行者　ヴィーナス。７枚目……は、さすがに無理か」

さすがに無理かじゃない。あれよあれよという間に手札０からドローフェイズだけ

で７参って、どうなってんのこれ。そんな思いをよそに、まるでこれだけドローするのはわかっていたといわんばかりに平然とターンを進めていく。
「光天使ソードの効果を発動、手札から光天使を１体墓地に送ることで、エンドフェイズまでその攻撃力を自らに加算する。ブックスを捨てて、攻撃力１６００ポイントアップ」
　光天使ソード　攻１４００→３０００
「いくらエンドフェイズまでとはいえ、レベル４でお手軽３０００打点って……」
　素の打点が低いことで有名な水属性に分けてもらいたいもんだ、まったくもう。
「そして最後にドローしたカード、手札抹殺を発動。お互い手札をすべて捨てて、その枚数ぶんだけカードをドロー」
「手札抹殺!?シ、シーラカンスがっ！」
「おや、ラッキーでしたね。でも、この程度じゃあ終わりませんよ?ウィングスをリリースして、裁きの代行者　サターンをアドバンス召喚」
　裁きの代行者　サターン　攻２４００
「くっ……！」
「なるほど、今のサターンにも反応しない、ということはその伏せカードは召喚反応系ではない、と。なら、警戒するべきカードはミラフォぐらい……いいでしょう、このま

ま攻撃。まずはテテュスでグリズリーマザーを破壊！」
光神テテュス　攻２２００→グリズリーマザー　守１０００（破壊）
「この瞬間、グリズリーマザーの効果によってデッキから攻撃力１５００以下の水属性を特殊召喚できる！来て、ニードル・ギルマン！」
ニードル・ギルマン　攻１３００→１７００
「なるほど、そのカードは確か場に存在する限り水、魚、海竜族のモンスターの攻撃力を４００アップさせる効果を持ってましたね。実質攻撃力１７００、なかなかの手だ」
その言葉を聞き、にやりと笑ってみせる。こっちだってこの１年でいろいろな相手とデュエルしてきたんだ、最近来たばっかりの１年にそう簡単にやられてたまるものですかっての。
「さらに僕はこのカード、激流蘇生をグリズリーマザー破壊時に発動するのさ！このカードの効果で、破壊された水属性は復活！さらに５００ポイントの効果ダメージも与えるおまけつきだよ」
グリズリーマザーが地面から吹き上がった水流に乗って再び現れ、ヒゲアンコウの隣で防御の構えをとる。ふう、サイクロンとか引かれなくてよかったよかった。
グリズリーマザー　守１０００
エド　ＬＰ４０００→３５００

「くっ……なら、ソードでギルマンに攻撃！」
「しょうがない、その攻撃は通しだよ」
手札にシーラカンスさえいれば安全地帯使ってでも守りきったんだけど、残念ながら２枚目はさっきの手札抹殺でドローできなかったからね。だからヒゲアンコウには悪いけど、ここは倒れてもらって安全地帯を温存する方がいい。
光天使ソード　攻３０００→ニードル・ギルマン　攻１７００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→２７００
「サターンで攻撃……はやめておこう。メイン２に永続魔法、タイムカプセルを発動。デッキからカードを１枚選んでこのカードに封印し、２ターン後に手札に加えます。カードを１枚伏せて、エンドフェイズにソードの攻撃力は元に戻る。さ、ターンエンドですよ先輩」
光天使ソード　攻３０００→１４００
「僕のターン！まずグリズリーマザーを攻撃表示に変更。ここは頼むよグリズリーマザー、ソードに攻撃、そして相打ち！」
真っ青な熊のかぎ爪と、文字通りの剣がぶつかり合う。攻撃力が同じなためどちらも戦闘破壊されるが、こっちにはグリズリーマザーの効果がある。
「そして戦闘破壊されたグリズリーマザーの効果で、デッキからキラー・ラブカを特殊召

喚する」

キラー・ラブカ　攻７００

「そんな弱いモンスターをわざわざ出して、一体どうするつもりなんですか？」

「む。まだまだ甘いね１年、確かにこのモンスターのステータスは戦闘向きじゃない。だけど、このカードはサポーターとしてはこの上なく有能なのさ。メイン２にラブカをリリースして氷帝メビウスをアドバンス召喚、そして効果発動フリーズ・バースト！このカードのアドバンス召喚成功時、場の魔法、罠カードを２枚まで破壊する！僕が選ぶのはそっちの右側に伏せてあるカードと、僕の場にあるこの伏せカード！」

「何!?」

２本のつららが、それぞれエドと僕の場の伏せカードめがけてまっすぐ飛んでいく。あっちの場の撃ちぬいたカードは……装備魔法に対策するカード、アーマーブレイクか。あんまりうまみがないもの破壊しちゃったかな。

「だとしても、僕のやることは変わらないけどね。チェーンしてトラップ発動、安全地帯！対象はその光神テテュス！ふっふっふ、このコンボを使えば……」

「なるほど。安全地帯は対象になったモンスターを破壊から守る効果を持っている反面、自身が除去されるとそのモンスターを道連れにする効果を持っている……そういうことですね」

「う、うん」
くっ、なかなか詳しいじゃないかエド。僕が去年そのコンボを思いつくのにどれだけかかったと思ってるんだ。
「ま、まあいいや。さらにフィールド魔法、忘却の都　レミューリアを発動。ターンエンドするよ」
氷帝メビウス　攻２４００→２６００　守１０００→１２００
エド　ＬＰ３５００　手札：２
モンスター：裁きの代行者　サターン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
　　タイムカプセル（０）
清明　ＬＰ２７００　手札：１
モンスター：氷帝メビウス（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：忘却の都　レミューリア
「僕のターン。フィールド魔法、天空の聖域を発動！」
僕の後ろにそびえるレミューリアの白い建物の真正面に、これまた真っ白い天使の城が地面からせりあがってくる。一見よく似た建物に見えるが最大の違いは、レミューリ

アの周りは海が取り囲んでいるのに対しあちらは雲に包まれていることだろう。
「そして伏せてあった魔法カード、盗人ゴブリンを発動。相手のライフを５００奪い、自分のライフに変換します」
　清明　ＬＰ２７００→２２００
　エド　ＬＰ３５００→４０００
「そしてこの瞬間、サターンの効果を発動！天空の聖域が場にある状態で自分のライフが相手よりも上の時、このカードをリリースすることで相手ライフにその数値ぶんのダメージを与える！」
「そのために盗人ゴブリンを……うわっ！」
　サターンの体が真っ白く光りだしたかと思うと一つのエネルギー弾になり、それがこちらに向けて突っ込んでくる。とっさに止めようとしたメビウスをひらりとかわしたそれは、僕にぶつかって爆発を起こした。
「ライフの差は１８００、さすがにこれは効いた……！」
　清明　ＬＰ２２００→４００
「この効果を使うターン、バトルフェイズが行えませんので。カードを１枚セット、これでターン終了です。やれやれ、闇の力を持ったカードの持ち主だっていうからどんなすごいデュエリストなのかと思ったらこの程度か。遊城十代といい遊野清明といい、何が

そんなに気になるんだか」
「ん？今何か言った？」
ターン終了です、からのセリフが声が小さくてよく聞こえなかったからちょっと聞き直す。はて、十代がどうとか言ってたような気がするけど。
「ああいえ、なんでもないですよ。なんでも、ね」
「ふむ。まずは僕のターン、ドロー」
そのことについては後でゆっくり聞いてみよう、と思いながらカードを引く。こっちのライフはもう危険領域、だけどエドのライフはさっきの回復のせいで実質削れてないに等しい。
割とまずい状況だ。だけど、だからこそ面白いともいえる。
「オイスターマイスターを攻撃表示で召喚。そしてメビウス、攻撃！アイス・ランス！」
オイスターマイスター　攻１６００→１８００　守２００→４００
「それにはトラップカード、ガード・ブロックを発動！戦闘ダメージを無効にして、カードをドロー」
「ならオイスターマイスターでさらにダイレクト、オイスターショット！」
オイスターマイスター　攻１８００→エド（直接攻撃）
エド　ＬＰ４０００→２２００

ようやくまともに戦闘ダメージが通った。だけどそれはそれとして、何となく気になることが１つある。さっきからどうも、自分のモンスターがやられたことへの悲しみというかなんというか、とにかくそんなものが全然感じられないのだ。そんなものいちいち感じてられない、なんてのはデュエルディスクでデュエルをしたことのない人間だけが言える事だろう。ソリッドビジョンで立体化した、自分が信じてデッキに入れたモンスターがやられるのを見るのは意外と心に来るものがあるのだ。

だけど、目の前で平然とデュエルを行うこの男からはその意思が全く感じられないのだ。例えて言うならそう、そこらへんで適当に拾ったカードをモンスターゾーンに置いてデュエルしているかのような。

それとも僕の気にしすぎ、なんだろうか。

「これでターンエンド」

エド　ＬＰ２２００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

タイムカプセル（１）

場：天空の聖域

清明　ＬＰ４００　手札：１

モンスター：氷帝メビウス（攻）
　　オイスターマイスター（攻）
魔法・罠：1（伏せ）
場：忘却の都　レミューリア
「僕のターン。そろそろ終わらせますよ、先輩。ゼラの戦士を召喚、そしてこのモンスターをリリースすることで手札から大天使ゼラートを特殊召喚！」
たくましい体つきの仮面をつけた剣士が聖域の奥に入ってゆき、神々しい光とともに白い翼をもった大天使になってゆっくりとエドのもとへ帰ってくる。エド、まだそんな切り札がいたのか……！
大天使ゼラート　攻２８００
「ゼラートは1ターンに1度、手札の光属性モンスターを捨てることで相手モンスターをすべて壊すことができます。つまりゲームエンドですよ、先輩」
「じゃ、じゃあその今ドローしたカードは……」
「ああ、これは残念ながら光属性モンスターじゃありませんでした。僕、ドロー運はそんなにいいわけじゃないんですよ。だけど運に頼る必要なんてない。お忘れですか？僕が2ターン前に発動したタイムカプセルのことを。このターンのスタンバイフェイズ、あの時除外したカードはもう手札に加わってるんですよ？手札からそのカード、神聖な

る球体を捨ててゼラートの効果発動、聖なる光芒」
　ゼラートが剣を掲げると後ろの神殿から光が走り、メビウスと牡蠣の戦士をいっぺんに焼き尽くす。だけど、こっちにだって効果があるんだ。
「オイスターマイスターがバトル以外でフィールドから墓地に送られたことで、オイスタートークンを特殊召喚するよ」
　オイスタートークン　守０→２００　攻０→２００
「ええ、知ってますよ。ですがそちらの墓地にはキラー・ラブカもいる、どのみち攻撃は通らないですから。これでターンエンドです」
　おかしい。先攻ドロー廃止すら忘れかけてたような人間が、どうして自分が使いもしないカードの効果まで完璧に把握してるんだろうか。逆ならわかる。だけど、普通そっちを忘れるものだろうか。
　このデュエル、やっぱり何か裏がありそうだ。だとしたら、狙いが何にせよさっさと決着をつけないと。
「僕のターン、ドロー。よし！魔法カード発動、クロス・ソウル！このカードは、自分モンスターの代わりに相手モンスター１体をリリースすることができるようになる。当然大天使ゼラートと、僕の場のオイスタートークンをリリース……七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ！アドバンス召喚、地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）

Ｃｈａｌｌｈｕａっ！」

２体のモンスターが消え、レミューリアの奥から悠然と巨大なシャチ型モンスターが泳いでやってくる。

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　守２４００

「これが……闇のカード！」

「正解だよ、コングラチュレーション。さあチャクチャルさん、効果発動やっちゃって。１ターンに１度このモンスターの攻撃を放棄して、守備力の半分、ダメージを与える！ダーク・ダイブ・アタック！」

「ぐう……っ!?」

エド　　ＬＰ２２００→１０００

「あいにくと、もう手はないんだ。これでターンエンドさ」

これで、エドのライフは１０００。チャクチャルさんを維持できれば次のターンでほぼ確実に１２００ダメージを与えられ、そうすれば僕の勝ちだ。そうしたら、一体何をたくらんでるのか話してもらおうかな。

エド　ＬＰ１０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

場：天空の聖域
清明　ＬＰ４００　手札：０
モンスター：地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ（守）
魔法・罠：１（伏せ）
場：忘却の都　レミューリア

「なるほど。うすうす気づいてるみたいだからこの際言っておきますけど、今日のところの僕の目的はその闇のカードをこの目で見ること。目的は果たせたし、この勝敗はどうでもいいですよ。何もせずにターンエンドです」

「目的……まんまと乗せられた、ってことか。ったく、完全にやられたよ。……ダーク・ダイブ・アタック」

エド　ＬＰ１０００→０

「ふー……今日のところは勝ちを譲りますよ。それでは、またいつか会いましょう」

「あ、こら！ちょっと待……！」

呼び止めようとしたときには、その白い姿はすっかり日が暮れていた夜の闇にまぎれてしまい。一瞬サッカー、僕のシャーク・サッカーの精霊にあとをつけてもらおうかと

も思ったけど多分それも手遅れだろう。
「むう。残念」
『少なくとも、今年も退屈はしなさそうだな』
「またそんな……でも、ポジティブに考えればそういうことになるのか。頭いいねチャクチャルさん」
『私の過ごした歳月は５０００年弱だからな。当然だ』
少しは謙遜することもいいと思うの、この強いんだけどしょっちゅう手札で腐る上に下手すると自爆する神様は。
もっとも、そんなところもひっくるめての邪神なんだろう。ひとたび暴れだせば相手を一瞬で倒す力があるけど、失敗するとそれはそれは邪魔になる。一筋縄ではいかないけど、どこか間の抜けた。本当に、困った神様だ。
『それはそうと、１ついいだろうか』
「何、チャクチャルさん？」
『貴方の住むべきところから、激しい空腹とそれに由来する負の感情がひしめき合っているのだが。早く帰らないと大変なことになるのでは？』
「……あ」
たっぷり３秒ほど思考停止して、すっかり夜になったあたりを見回して。

「だーっもう、夕飯作るの忘れてたー!?」
レッド寮の皆に心の中で土下座しながら、大慌てで走って帰るのだった。すると、そこにいたのは。
「ん、お前は誰ザウルス？おーいアニキ、探してた人っぽいのがこっちに来たドン！」
……誰？

ターン39　変幻忍者と太古の鼓動

突然だけど。混乱しているときに落ち着く方法としては、今自分に起きていることを3行でまとめてみる、という方法がある。ちなみに本当か嘘かは知らない。何せ、小学生の時に近所の兄ちゃんから教えられた程度の知識だからだ。なんでこんなことを今思い出したのかはよくわからないけど、少なくともやってみる分には悪くないだろう。えーっと、

①何かと怪しい新入生、エドに絡まれる。

②てえへんだ旦那、夕飯の支度ができてない。

③全速力で帰ったら十代たちレッド寮メンバーの他に誰かいた。

なるほど、さっぱりわからん。改めて、玄関の前に立ってこちらに手を振ってくる筋骨隆々の男をまじまじと見る。別に野郎なんて見ても面白いものは何もないことは百も承知だけれど、ノースリーブ状に加工された、元はラーイエローの制服だったとおぼしき服装やや頭に巻いた恐竜の頭のようなバンダナが目を引いたのだ。

するといつまでも距離をとったまま動こうとしない僕を不審に思ったのか、もう1度声をかけてきた。

「何してるドン？もう外は暗いんだから、そんなところで立ってないで中に入るザウルス」
「う、うん。みんなごめん、ただいまー」
　僕がドアをくぐると、その黄色い男も後から入ってきてドアを閉める。とりあえず説明がほしいなあと、こういう事態には一番話の通じそうな万丈目をこっそり手招きして呼び寄せる。
「（ねえ万丈目。あの人だれ？）」
「まずお前は飯を作れ。話は全部それからだ」
　空腹のあまり話す気力もない、と言いたげにそっぽを向く万丈目。ううん、やっぱり僕のせいなんだろうか。でも、別に誰かがかわりに作ってくれてもよかったのよ？と思う今日この頃。もっとも、それだけ僕の料理が評価されてると思えばまあ悪い気分じゃないけども。
　夕飯は手早くできるもの……よし、チャーハンでいいか。

「できたよー、チャーハン７人前ぐらい」
「相変わらずお前の作り方はアバウトだな」

そうは言うけどね万丈目さん、食べ盛りの男子高校生が相手なんだから足りない、なんてことはあっても作りすぎ、なんてことはあり得ないんだよ?これ口に出したらまた言い合いになるから言うのはぐっと我慢するけど。
「おお、待ってたぜ!」
「遅いッスよ、清明君〜」
「ふん、当然この俺を待たせただけの物にはなってるんだろうな」
『とか何とか言っちゃって〜、あのね清明のダンナ、さっきまで万丈目のアニキったらダンナが帰ってこないからってすごく心配してたんだよ〜』
「んなっ……でたらめ言うんじゃない、この雑魚め!」
『キャー、ハネクリボーのダンナ、アニキがいじめる〜』
『ク、クリ!?』
いつも通りの、(精霊が見える人にとっては)にぎやかな食卓。翔にもなんとかして精霊を見せてやりたいものだとは思うけど、去年1年考えてもなかなかいい方法が思いつかない。
ただ、今日は決定的に違う点が1つあった。今も精霊たちがじゃれあってる机の片隅にドン!とチャーハンのおかわり分を入れたフライパンが置かれ、潰されかかったおジャマ・イエローたちが慌てて避ける。

「いやあ十代のアニキから話は聞いてたけど、本当に先輩の料理はうまいドン！これならいくらでもおかわりいけるドン！」

なんとなく浮かんだもう一杯食べれるドン、という言霊を全力で無視しながら、あのままのペースで食べられると僕らのおかわりする分がなくなることに気が付いて慌てて自分の取り分を口に放り込んでいく。

そして結局追加を作る羽目になり、それもきれいに平らげたところで長かった夕食も終わりを告げる。さあ、ここからはお待ちかね質問タイムだ。

「で、改めて聞くけど。君は誰？」

「俺の名前はティラノ剣山。よろしくだドン、遊野先輩」

「ユーノ？……ああ。別に下の名前、清明（あきら）でいいよ。それと、その先輩ってのも１人の後輩とかぶるからやめて」

「そ、そうかドン。わかったドン、清明さん」

「ん。だいぶマシになったよ。こちらこそよろしく、剣山君」

遊野先輩、なんて呼ばれるのは初めてだ。ちょっとくすぐったいと同時に、ユーノがいるせいで非常にわかりづらい。

だけど、向こうも向こうで君付けには慣れてないようで呼び捨てで構わないドン、ときっぱり言ってきた。ならいいんだけど。

「それで剣山、おぬしはどーしてラーイエローじゃなくてここにいるのかね？」
「ああ、もちろん寝る時間には寮に戻るザウルス。でも、俺は天狗になっていた俺の目を覚ましてくれた十代のアニキについていくことに決めたんだドン！」
　すっごくキラキラした目できっぱりと言い切る剣山。何がなんだかよくわからないけど、その迫力に負けて何も言えなくなる。あれ、でも十代の弟分って翔もだったような。するとまるでその思いが伝わったかのように、ムスッとした口調の翔が会話に乱入してきた。
「だから、アニキの第一の弟分はこの僕、丸藤翔なんだってば！そこは勘違いしてほしくないッス」
「まだ言ってるのかドン、丸藤先輩。この俺が十代のアニキの弟分になったんだドン！」
　やいのやいのと騒ぐ2人に、それをなだめにかかる十代。どうしていいのかわからず様子を見ていると、万丈目がすっと僕の横に来た。
「あの剣山とかいうふざけた恐竜野郎についてどう思う、清明」
「いや、どうって言われてもなんて答えりゃいいのさ。まあでも、悪い人じゃないんじゃない？」
「ふむ……俺の考えすぎなのかも、な。お前、エド・フェニックスっていうプロデュエリストを知っているか？」

　エド、というとついさっきまで僕とデュエルしてた新入生を思い出す。だけど、いくらなんでもあんな若いのにプロデュエリストなんてことはない、ただの偶然の一致だろう。そもそも僕でも勝てたし。
　しかしそうすると、エドなんて名前に聞き覚えはないわけで。
「いや、ちょっと。それで?そのプロがどうかしたの?」
「今日十代にデュエルを挑んで、直前に買ったパック８つを組み合わせただけのいい加減なデッキであの十代を苦戦させたんだ。なんでも、この学校に新入生として入ったらしい」
　……ん?いやいや、まさかね。まさかあのエド、確かに胡散臭かったけどアレがプロなんてことはないだろう。
「ちなみに写真がこれだ」
「!?」
　万丈目が取りだした１冊の雑誌。その翔愛読のデュエルモンスターズ情報誌には、まぎれもなくあのエドの顔写真がプリントされていた。
　写真を見つめたままフリーズして動かなくなった僕を見て何かを察したのか、真剣な面持ちで顔を近づけてくる万丈目。
「まさか、お前の所にも奴が来たのか!?」

「う、うん……なんとか勝ったけどね、明らかに手は抜かれてたよ。天空の聖域軸の天使デッキだった」
「間違いない。それがさっきも言った、パック８個の寄せ集めデッキだ」
うわあ、としか言いようがない。あれ結構強いデッキだと思ったけど、まさかそんな寄せ集めにあれだけ苦労させられたのか。ひきつった顔を見てどれほど苦戦したのか大体の見当がついたらしく、憐みの視線を向けてくる万丈目。
「……お前の場合はあいつのプレイングがどうこうというより、デッキ枚数６０枚限界までぶち込んでるのが原因だと思うぞ」
「さ、最近頑張って１枚抜いたから今は５９枚だもん」
そこは全然違う。気分的にも、そして数学的にも素数かそうでないかという明らかな違いがある。
「それは同じだバカ」
「ぶーぶー。最近ユーノに似てきてない？口の悪さとか性格の悪さとかねじれた根性とか目つきの悪さとかその他もろもろエトセトラ」
「お、お前なあ……はあ、もういい。聞いた俺が馬鹿だったのかもしれん。それに、俺たちにはまだ理解できんプロの中での常識なのかもしれんしな」
ため息とともに会話を切り上げ、つかみ合いのけんか一歩前にまで発展していた剣山

と翔の罵り合いを止めに行く万丈目。と、そうだ。ユーノの話をして思い出したけど、１つ聞いておきたいことがあったんだ。
「そういやさ万丈目、どっかでユーノ見てない？なんか今朝からずっといないんだけど」
「ふむ、そういえば見てないな。まあ、この名探偵万丈目サンダーの力を貸してほしいというのなら別に考えてやらなくもな……」
「そっかー。おっかしいなあ、どーこ行っちゃったんだろ」
「人の話を聞け！」
　多少気にかかることこそあったものの、その日はこうして全体的には平和なまま過ぎていった。結局剣山がイエロー寮に帰ってもユーノは戻ってこず、明日の朝になればひょこっと出てくるさ、と自分に言い聞かせてベッドにもぐりこむ。

「うーむ」
　結論から言うと、その日の昼になってもユーノの姿は見かけなかった。ただ、授業が終わってふらりと調理室に入り込むと、そこでは現在進行形で他の問題が起きていたわけで。
「だ、か、ら！こっちだって予約でパンッパンなんですから後から来て急にそんな無茶言

わないでください！」
「そこをなんとか、この通りだドン！こうやって男ティラノ剣山が恥を忍んで頭を下げてるんだから、なんとか融通を聞かせてほしいザウルス！」
「無理なものは無理です！そもそも、そういう話は私じゃなくて今日も追試中であろう先輩に聞いてくださいよ」
　やいのやいのと顔を真っ赤にして叫ぶ葵ちゃんと剣山。個人的にはそーっと抜け出して見なかったことにしたいんだけど、さすがにそういうわけにもいくまい。一応僕の店だし。でも、入ったら何かめんどくさいことになりそうな気もするしなあ。
「なら、その先輩が来るまでここで待たせてもらうドン」
「いや、そういう話じゃなくてですね。そもそも、先輩の頭だとパスするのにあと2、3時間はかかりますよ？」
　よし、入ろう。ちょっとだけイラッときた。正論なのが特に。
「オーケー葵ちゃん、普段から僕のことをどんな目で見てるのかはよーくわかった」
「せ、先輩！……追試、ボイコットはいけませんよ？」
「いや受かったからね!?僕だってたまには合格点ぐらいとるよ!?」
　なんかこの後輩の中では、僕はとんでもないバカキャラとして定着してたらしい。否定はしない。否定はしないけど、さすがにあんまりな扱いだと思う。嫌味の1つや2つ

ぐらい言おうとして口を開いたところで、さっきまで黙って見ていた剣山が割り込んできた。
「おお、清明さん！ちょうどよかったドン、頼みがあるザウルス！」
　その後の剣山の話をまとめるとこうなる。なんでも朝から十代の所へ向かったらそれより先に翔と鉢合わせてしまい、昨日の口喧嘩の続きをしていたらそこでこんなセリフを言われたらしい。
『じゃあ、そこまで言うんなら１つ条件があるッス。清明君がやってる洋菓子店、実はアニキはあそこの……えっと、チーズケーキが大好物なんスよ。そこまで言うんなら、それを見事アニキのところまで持っていくッス』
　で、それを聞いて喜び勇んで駆け付けてきたらしい。しょ、翔……。
「えーっと、剣山？盛り上がってるところ悪いんだけど」
「だから頼むドン、先輩！金ならちゃんと払うから、一切れでいいんで売ってくださいドン！」
　この通り、と必死になって拝み倒してくる剣山。何と言っていいのか返事に困っていると、すっと葵ちゃんがそばに来てひそひそ話しかけてきた。
「（先輩？そもそもココ、チーズケーキなんてメニューにありましたっけ？）」
「（それがあるんだよね……なんか知らないけど焼き菓子系に人気が持ってかれてほ

ぼ注文無いから最近作ってないけど)」
「(確信犯じゃないですかそれ!)」
翔としても、自分の居場所が後輩に取られそうで必死だったんだろう。それはいい。問題は、それを無関係の僕に押し付けてきたことだ。しかも翔の性格から考えて、間違いなく本人に悪気がないのが余計にたちが悪い。
うまいことこの場を収める方法としては、どうすればいいだろうか。本当のことを言ったとしても、見た感じ素直に信じてくれそうにない。それでＹＯＵ　ＫＮＯＷの評判が下がるだけならまだしも――――いや、それも十分よくない話だけど――――怒りの矛先が翔の方に向いたとしたら、今度こそリアルファイトに発展しかねない。そうなった場合、体格の差から言って翔がえらいことになるのは避けられないだろう。そこでふとあることを思いついてちらり、と部屋の隅に置いた業務用冷蔵庫を見る。実はあの中には、もうすでに1個だけチーズケーキが冷やしてあるのだ。まだ改良途中の試作品だから美味しいかどうかもわからない代物だけど、チーズケーキには変わりない。ただ、作りかけなんだよねあれ。……今から大急ぎで作ったとしてだいたい１５分くらい。よし、やってみるか。
「ということで葵ちゃん、１つ頼みがあるんだけど」
「了解です。じゃあ剣山さん、こうなったらデュエルで決めましょう。私が勝ったらあ

なたには帰ってもらいますが、あなたが勝てばチーズケーキは渡します。それでいいですか？」

　できる後輩って素敵。僕のやってほしかったこと、そっくりそのまま悟ってくれた。

「デュエルで？もちろんだドン！ただし１つ言わせてもらうと、俺は強いザウルス。後になって文句は言いっこなしだドン」

「そのセリフ、そっくりそのままお返ししますよ。……じゃあ頼みますよ、先輩」

　僕に向かってウインクし、デュエルディスクを構える葵ちゃん。観戦していたいところだけど、ここは我慢我慢。時間稼ぎは全部彼女に任せよう。

「デュエル！」

「先行は私ですね。モンスターをセット、さらにカードを２枚伏せます。そしてターンエンドです」

「悪いけど、ここは最初から全力で押し通すドン！手札から俊足のギラザウルスの効果を発動、このカードを特殊召喚するドン！」

　ダダダダッと、たくましい足を持った小型の肉食恐竜が見た目通りの俊足で駆けてくる。

　俊足のギラザウルス　攻１４００

「ギラザウルス、ですか」

「そう、このカードは手札から特殊召喚できるドン。本当はこの時に相手は相手の墓地からモンスターを特殊召喚するデメリットがあるけれど、1ターン目ならそれも関係ないザウルス。さらにギラザウルスをリリースして、暗黒（ダーク）ドリケラトプスをアドバンス召喚するドン！」

暗黒ドリケラトプス　攻２４００

バサリと羽を広げ、恐竜と鳥の中間地点にいるような進化の途上、といった見た目のモンスター。裏守備になった葵ちゃんのモンスターを肉食獣特有の鋭い目でギラリとにらんだ。

って、ダメじゃんこっち見てちゃ。集中集中。

「さらに手札のキラーザウルスの効果を使うザウルス。このカードを墓地に送りデッキのジュラシックワールドをサーチ、そしてそのままフィールド魔法、ジュラシックワールドを発ドン。この効果を受けて、恐竜さんの攻守はともに３００ポイントアップするザウルス」

「む、それは通せないですね。リバースカード、砂塵の大竜巻を発動。この効果でまずジュラシックワールドを破壊、さらに第2の効果を使って手札のこのカードをセットします」

「お、俺の恐竜さんの楽園が！」

一瞬あたりにジュラ紀だとか白亜紀だとかを連想させる巨大植物が生えてきたかと思ったけど、別にそんなことはなかったね！一瞬呆然とした剣山だったけど、すぐに気を取り直して攻撃を仕掛ける。

「だったらバトルだドン！ドリケラトプスで伏せモンスターに攻撃、怪鳥（けちょう）！」

暗黒ドリケラトプス　攻２４００→???　守１２００（破壊）

葵　ＬＰ４０００→２８００

「ドリケラトプスは貫通能力を持つモンスター、先制ダメージはもらったドン！」

「甘いですね、忍者はただではやられません。今リバースしたモンスター、カラクリ忍者参参九（さざんく）の効果を発動です。相手モンスター１体を墓地に送りますよ」

「俺のフィールドにモンスターはドリケラトプスだけ……やられたザウルス」

機械の忍者をその巨体で押しつぶし、剣山のモンスターゾーンに帰っていったドリケラトプス。だがその足が地面についた瞬間、参参九がひっそりと仕掛けておいた無数の火薬玉が爆発した。何発もの至近距離での直撃にはさすがに耐えきれず、巨体が炎の中に崩れ落ちていく。

っと、また見てた。いかんいかん。

「だけど俺だってそう簡単にフィールドをがら空きのまま終わらせはしないドン、魔法カードの一時休戦を発動。お互いにカードをドローして、これでターンエンドザウル

ス」

一時休戦を使ったか。これで、葵ちゃんのターンが終わるまで双方ダメージは受けなくなったわけだ。派手な見た目からは予想もできないほど隙のない動きに、さすがの葵ちゃんもやや表情を硬くする。

葵　ＬＰ２８００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：２（伏せ）

剣山　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：なし

「私のターンです。ダメージが通せないのは痛いですが、まあよしとしましょう。忍者マスターＨＡＮＺＯ（ハンゾー）を召喚し、効果発動。デッキから忍法と名のつくカード１枚、機甲忍法ラスト・ミストを手札に加えます。カードを伏せて、ターンエンドです」

「俺のターンだドン！ラスト・ミストは確か特殊召喚したモンスターの攻撃力を半分にするカード……なら、通常召喚で攻め込むザウルス！セイバーザウルスを通常召喚して、そのまま攻撃！」

セイバーザウルス　攻１９００

尻尾が剣のようにするどい、怒りで体を赤くしたトリケラトプスが突進攻撃でＨＡＮＺＯへと突っ込んでゆく。しかし忍者マスターはそれを避けようともせずに、背中に背負った大きな鎖鎌をその足元に投げつけて転ばせる。

「これぞ忍具、鎖鎌……攻撃モンスターを守備表示に変更し、さらに攻撃力アップのカードとしてＨＡＮＺＯに装備します」

「鎖付きブーメラン、そのカードはラスト・ミストじゃなかったのかドン」

「はい」

なるほど。ちなみに葵ちゃんが発動したのはさっきのターンに伏せたカード。ラスト・ミストを警戒して通常召喚したモンスターが攻撃するところまで読んでいたってわけか。

……あーもう！あっちのことはひとまず無視！でないとこっちが進まない！

忍者マスターＨＡＮＺＯ　攻１８００→２３００

しかし、これだけは気になる。鎖付きブーメランはその効果発動時、必ず２つの効果を１度に使わなければいけないわけではない。つまり、わざわざセイバーザウルスを守備表示にしなくても攻撃力アップの効果だけで返り討ちにできたのだ。でもそれをしなかった。考えられるものとしては相手モンスターと自分の忍者を素材として上級モンスターを呼び出す超変化の術だけど、だとしたらわざわざブーメランをここで使う必

要がない。いったい、何を狙ってるんだか。
「俺もカードをセット。ターンエンドだドン」
葵　ＬＰ２８００　手札：２
モンスター：忍者マスターＨＡＮＺＯ（攻・鎖）
魔法・罠：鎖付きブーメラン（ＨＡＮＺＯ）
１（伏せ）
剣山　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：セイバーザウルス（守）
魔法・罠：１（伏せ）
「私のターン！カラクリ忍者　九壱九（クイック）を召喚します！」
ドリケラトプスと相打ちになって倒れていった参参九の次に現れる第二のカラクリ忍者、九壱九。両腕に持ったクナイが、電灯の光を反射してギラリと鈍い光を放つ。
カラクリ忍者　九壱九　攻１７００
「バトルです、九壱九でセイバーザウルスに攻撃！」
「ぐっ、それは通すドン」
カラクリ忍者　九壱九　攻１７００→セイバーザウルス　守４００（破壊）
「この瞬間、九壱九の効果が発動です。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した

ので墓地のカラクリモンスター、参参九を特殊召喚！お出でませ、仕掛忍法カラクリターン！」

カラクリ忍者　参参九　攻１２００

「無論、私のバトルフェイズは終わってません。参参九、やってしまってください！」

「その攻撃は通せないザウルス！トラップ発ドン、化石発掘！このカードは手札１枚をコストに、墓地から恐竜さんを効果を無効にして特殊召喚するドン！マンモスの墓場を捨てて、ドリケラトプスを復活させるドン！」

「一方こちらはカラクリモンスターの共通効果によって必ず相手に攻撃しなくてはいけないですね。……なかなかやるようですが、私の忍者はさらに先をゆきますよ？トラップ発動、機甲忍法ラスト・ミスト！自分の場に忍者がいる状態で相手が特殊召喚した時、そのモンスターの攻撃力は半分になります！」

「なっ、それは最初のターンから伏せてあったカード！ラスト・ミストはずっと、あの時サーチするより前に伏せてあったのかドン！」

「ええ。特に使いどころもなかったですしね」

偶然にも、１ターン目の再現のような形になった参参九とドリケラトプスのバトル。さっきと違うところは、参参九のほうが手にした忍者刀を振りかぶって攻撃を仕掛けていることもある。だがそれ以上の違いとして今復活したドリケラトプスの体は九壱九

とＨＡＮＺＯの忍術により半分ほど氷漬けにされており、自慢の翼も半分しかうまく開かなくなっていた。不意打ちにこそ長けているものの正面から戦いを挑む場合の戦闘力はあまり高くない参参九でも、今の体がでかいだけの的になったドリケラトプスならばなんとか互角の戦いに持ち込める。２体のモンスターが、盛大な爆発を起こした。

カラクリ忍者　参参九　攻１２００（破壊）→暗黒ドリケラトプス　攻２４００→１２００（破壊）

「覚悟はできてますね？ＨＡＮＺＯのダイレクトアタック！」

ＨＡＮＺＯが巧みに鎖鎌を振るい、その先端が剣山の体を直撃する。

忍者マスターＨＡＮＺＯ　攻２３００→剣山（直接攻撃）

剣山　ＬＰ４０００→１７００

場の状況、手札の数、残りライフ……どれも剣山が圧倒的に不利だ。しかも場にラスト・ミストが出ていることにより墓地アドバンテージも使いづらい状況になっている。ここで剣山が引くカード次第では、このターンでけりがついてしまうこともあるだろう。だけど、剣山は荒々しく笑いながらカードを引く。デュエルを楽しむその姿は、自らを弟分と主張するだけあって十代とよく似ていた。

「俺のターン！俺は今引いたモンスター、暗黒（ブラック）ブラキを召喚して効果を使うドン。このモンスターは召喚成功時に場のモンスター１体を表側守備表示に変更させるザウルス。

忍者マスターを守備表示にして、そのまま攻撃！」
　黒い体のブラキオサウルスがその長い首を伸ばし、そのままＨＡＮＺＯの体を押す。余りといえばあまりに単調な攻撃は逆に避けづらかったのか、バランスを崩して倒れるＨＡＮＺＯ。その体を、のしのしと歩くブラキの大きな足が踏みつぶした。
　暗黒ブラキ　攻１８００→忍者マスターＨＡＮＺＯ　攻２３００→守１０００（破壊）
「これで勝負はまだわからないドン。ターンエンド」
　葵　ＬＰ２８００　手札：２
　モンスター：カラクリ忍者　九壱九（攻）
　魔法・罠：機甲忍法ラスト・ミスト
　剣山　ＬＰ１７００　手札：０
　モンスター：暗黒ブラキ（攻）
　魔法・罠：なし
「確かに、わからなくなりましたね。だけど、それはこっちも同じことです。ドローカード１枚で、逆転の目はいくらでも作れる！機甲忍法ゴールド・コンバージョンを発動、場の忍法カードであるラスト・ミストを破壊して２枚ドローします。カードを２枚伏せ、九壱九を守備表示に。ターンエンドです」

「なんだ、大きなことを言った割には伏せカード２枚で終わりかドン？」
カラクリ忍者　九壱九　攻１７００↓守１５００
若干呆れ気味の剣山の声。葵ちゃんは薄く笑うのみで、それにひとことも答えない。
その静かな気迫に一瞬剣山もたじろぐが、すぐに気を持ち直す。
「まあ、どんな罠が張ってあるとしてもこのティラノ剣山、真っ向から受けて立つドン！暗黒ブラキで九壱九に攻撃！」
再びどしどしと歩き、カラクリ仕掛けの忍者を踏みつぶそうと迫るブラキオサウルス。だが、今まさに踏みつぶされる、というところで九壱九の体がピカリと光った。そして、さっきまで九壱九のいた位置にはごろんと転がる丸太が１本。
「九壱九が攻撃対象になったことで表示形式は変更されますが……トラップ発動、忍法空蝉の術！このカードが存在する限り、私の九壱九は戦闘破壊されませんよ」
暗黒ブラキ　攻１８００↓カラクリ忍者　九壱九　守１５００↓攻１７００
葵　ＬＰ２８００↓２７００
「な、なんだ、驚いたドン。なら、メイン２で恐竜族モンスターのブラキをリリース。最上級モンスター、超古代恐獣（エンシェント・ダイノ）を召喚ザウルス！」
ブラキオサウルスの姿が消え、背中から一組の翼を生やした角を持つ本当に恐竜なのかと疑いたくなるような恐竜が、口からビームを吐いて葵ちゃんを威嚇する。

ねえこれ、本当に恐竜なんだろうか。恐竜型メカとかドラゴンとかそんな感じにしか見えないんだけども。

超古代恐獣　攻２７００

「こいつは最上級モンスターだけど、恐竜族モンスターを使う場合リリース１体で召喚が可能だドン。これでターンエンドザウルス」

「いいえ。エンドフェイズにトラップ発動、忍法　分身の術！場にいる忍者をリリースすることで、レベル合計がその忍者以下になるよう選択してデッキの忍者を特殊召喚します。九壱九のレベルは４、よってレベル１の青い忍者、同じくレベル１の赤い忍者を攻撃表示で特殊召喚！」

赤い忍者　攻３００

青い忍者　攻３００

葵　ＬＰ２７００　手札：２

モンスター：赤い忍者（攻・分身）

青い忍者（攻・分身）

魔法・罠：忍法　空蝉の術（無）

忍法　分身の術（赤・青）

剣山　ＬＰ１７００　手札：０

モンスター：超古代恐獣（攻）
魔法・罠：なし
「私のターンです。ふふ、覚悟はいいですね？2体のモンスターをリリースし、来なさい、葵流忍術最強のしもべ！銀河眼の光子竜をアドバンス召喚します！」
銀河眼の光子竜　攻３０００
ついに現れた葵ちゃんのエース、白いドラゴン。羽の生えた恐竜などおそるるに足らずといわんばかりに光を全身から放つその姿は、僕がデュエルした時と同じように圧倒的な迫力を持っていた。
「バトル！銀河忍法は使わず、そのまま超古代恐獣を戦闘破壊します！破滅のフォトン・ストリーム！」
銀河眼の光子竜　攻３０００→超古代恐獣　攻２７００（破壊）
剣山　ＬＰ１７００→１４００
最上級モンスターのバトルは、わずかの差で銀河眼が勝利を収めた。少しだが確実に、剣山のライフも削られていく。
「なかなかやるドン。でも、このドローによっては……！カードをセットして、ターンエンドだドン」
ドローカードを見た剣山の目の黒目部分が一瞬スッと細まり、まるで人間じゃなくて

爬虫類か何かのように見えたのは、僕の気のせいだったろうか。ともかく剣山は何かカードを伏せ、ターンを終えた。

葵　ＬＰ２７００　手札：２
モンスター：銀河眼の光子竜（攻）
魔法・罠：忍法　空蝉の術（無）
　　忍法　分身の術（無）

剣山　ＬＰ１４００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）

「私のターン。おや、ここで引きましたか……魔法カード発動、成金ゴブリンです。相手に１０００のライフを与える代わりにカードを１枚ドローします、これぞ名付けて成金忍法マネーイズライフ」

剣山　ＬＰ１４００→２４００

「今はこれじゃなくてモンスターが欲しかったですね。まあ引けなかったものは仕方ありません、手札の装備魔法、愚鈍な斧を銀河眼に装備します。効果は無効になりますが、攻撃力が１０００あっぷしますよ。そして攻撃です、破滅のフォトン・アックスストリーム！」

いかにも重そうな大斧を両手持ちする銀河眼が、力任せにその斧を叩き付ける。明らかに銀河眼には合っていない武器ではあるが、そのサイズの刃物ならばただ振り下ろさせるだけでもかなりの破壊力を持つことになる。

「トラップ発動、生存本能！このカードは発動時に墓地の恐竜族を除外し、１体につき４００のライフを回復させる。俺はギラザウルス、ドリケラトプス、キラーザウルス、ベビケラザウルス、セイバーザウルス、暗黒ブラキ、超古代恐獣の７体を除外してライフを２８００回復するドン！」

銀河眼の光子竜　攻３０００→４０００→剣山（直接攻撃）

剣山　ＬＰ２４００→５２００→１２００

「なるほど、回復兼恐竜のエースとして名高いディノインフィニティへの布石ですか。そんなわかりやすい手、先輩じゃありませんし私にはまるっとお見通しですよ」

「ちょっと待って！なんで僕がそこで出てくるのさ！」

さらっとひどいことを言われた気がしたのできっちり抗議しておく。もっとも、ディノインフィニティとやらがどんなカードなのかわからないから葵ちゃんの言ったことは全然間違ってないんだけど。

「まあ、先輩はいいとして。ターンエンドです」

「俺の狙いは確かにディノインフィニティだドン。そしてその手札の１枚が確実にラス

ト・ミストな以上、問題はもう1枚のみ。それが万が一オネストなら俺の負け、でもうまくいけば俺の勝ち。なら男剣山、ここはでっかく勝負ザウルス。俺は今引いたカード、ディノインフィニティを通常召喚！このカードの攻撃力は、除外されている恐竜族モンスター1体につき１０００ポイントだドン！」

恐竜の王者、ティラノサウルスが光のドラゴンと向かい合い、天に向かって一声吠える。どうやら、このデュエルもいよいよ終わりを迎えるようだ。

ディノインフィニティ　攻０→７０００

「バトル！ディノインフィニティで、効果が無効になっている銀河眼に攻撃！インフィニティ・ファング！」

荒ぶる恐竜の、どこまでもまっすぐな突撃。それを重量感たっぷりのその斧で迎え撃つ銀河眼。

そして――――

「通るか!?」

「いいえ、手札からオネストの効果を使います！エンドフェイズまで銀河眼は、ディノインフィニティの攻撃力を得ますよ！」

銀河眼が斧をそこらへんに放り投げ、全身全霊の光のブレスでディノインフィニティを焼き尽くした。

ディノインフィニティ　攻７０００（破壊）→銀河眼の光子竜　攻３０００→９０００

剣山　ＬＰ８００→０

「くーっ、負けたドン！十代のアニキといいアンタといい、世界は広いザウルス！」

「どういたしまして。あなたも強かったですけどね」

負けたというのにどこか爽やかに笑ってみせる剣山。この切り替えの早さは立派な長所だと思う。うんうん、本当に今年の新入生は優秀だなあ、と一人で頷いていると、葵ちゃんがこっそり寄ってきた。

「（それで、先輩？どうせ私が勝っても負けても作るつもりはあったんでしょう？私にできるだけの時間は稼ぎましたけど……大丈夫ですか？できましたか？）」

「あ」

そこでようやくピンときた。鎖付きブーメランとかオネスト召喚しないとかいくつか疑問点もあったけど、あれは全部時間稼ぎのためにやってくれてたのか。普段の彼女なら多少の伏せがあっても押し通すことが多いからああいう慎重プレイングは珍しいと思ったら、そういうことだったのね。

「……ほんっとどうしようもない人ですね先輩はっ！」
「はい。ごめんなさい」
　さすがに半ギレ状態になった葵ちゃんを見て、すぐさま素直に頭を下げる。今回悪いのは全面的にこちらなのはよくわかってるし、もし下手に口答えして辞められたらものすごく困るので甘んじてこの説教は受けるしかないよね。
「ぼさっと立ってないで正座しなさい、先輩！」
「あ、あの、一応聞きますけど……」
「当然、床にですよ？」
「はい。わかってました」
　この様子をそばで見ていた剣山は、助けてくれるかと思ったけどすぐに巻き込まれたらかなわんと思ったらしくてこっそり部屋を出て行った。うん、良判断だと思う。多分立場が逆なら僕もそうしただろうし。
「先輩？いいですか？」
「は、はい！」
　そして思った。ああ、これ今日も帰りは遅くなりそうだ。
　ちなみに案の定というかなんというか、その日は完全下校時間ぎりぎりまで床に正座させられました。どこかで様子を聞きつけてきたらしい夢想が強制的に葵ちゃんを

引っ張って行ってくれたから助かったけど、あれがなかったらと思うとぞっとする。
ユーノは今日もいない。そろそろ不安になってきたけど、いったいどこで油売ってるんだろうか。

ターン４０　鉄砲水と過去の源流

「……よしっ！もうこれで大丈夫、どんな状況が来てもサッと応えられる！」
「ふーん。じゃあひとつ質問していい？これ答えられたらテストで困ることはないだろうから帰ってもいいよ」
「え、ホント稲石さん!?よーし、かかってこいやー！」
　いつもの廃寮にて。新学期最初の実力テストを前に、僕は亡霊稲石さんの個人授業を受けていた。なにせ実技がなければ進級すら怪しい程度の成績だったから、テストは気が抜けないのだ。
「じゃあ問題。自分のライフが１０００、相手ライフが１５００とします。相手の場にダーク・キメラが出ている状態で自分と相手がブラック・ガーデンを発動、その後召喚したカラテマンが効果を使って攻撃を仕掛けたら相手が攻撃宣言時に収縮をカラテマンに使いました。そこでチェーンして旗鼓堂々を発動、墓地の進化する人類をカラテマンに装備。さあ、この場合どっちがいくつダメージを受けるでしょう」
　長い長い長い！問題長いよ稲石さん！だ、だけどこれはあくまで戦闘ダメージに関する問題なんだ。その場合、こっちには切り札がある。

「当然０以外ありえないね。なぜならその戦闘で、両者が手札からクリボーの効果を発ど……」

「却下。それ言い出したら問題にならないでしょ？」

ですよねー。いい案だと思うんだけどなあ。まあでも休みを獲得するために、脳みそをフル活用させて考える。そもそもカラテマン自身が召喚した瞬間攻撃力……あれ？カラテマンの最初の攻撃力っていくつだっけ？いや、確か１０００だったはず。だから半分の半分で２５０になって、そこから効果を使うけど確かあの効果は元々の攻撃力を倍にする効果なはず。つまりここまでで２０００。だけど収縮で元々の攻撃力が半分になって進化する人類で攻撃力が上がって、あれそもそもダーク・キメラの素の攻撃力っていくつだっけ？

「……参りました。授業続けてください」

「ん。ちなみにダーク・キメラの攻撃力は１６１０、収縮の効果で半分になるのは進化する人類で２４００になったカラテマンのもともとの攻撃力。つまりこの場合は攻撃を仕掛けた側が４１０ダメージを受けるからね」

まあこれがしっかり言えるならわざわざこんなところまで補習なんて来ないよね、と言いながら手早く机の前に問題集を積み上げていく稲石さん。ポルターガイスト現象を駆使してふわふわと教科書をページが開いた状態で漂わせるその姿はまるでファン

タジーによくある魔法使いのようだけど、浮かんでる本はあくまでもただの教科書だからそんな大それたものじゃない。

あ、そういえばデュエルモンスターズの初期の名前、Ｍ（マジック）＆Ｗ（ウィザース）って確かプレイヤーが魔法使いという設定で行うゲームなんだっけ。そこまで考えたところで、コツリと頭を小突かれた。

「あいて。教科書の角で叩くのはやめて……」

「集中集中。はい、じゃあ次はこのページね」

なんだかんだいって、この人……じゃない、この霊の授業はわかりやすい。だからこそ、僕も最近はじわじわ成績が上がってきているのだ。入学試験時は１１０人中９２番だったけど、今の平均はなんと８８番ぐらい。これはすごい進歩だと我ながら思う。

……いかん、いくらなんでも虚しくなってきた。

「さて、と。とりあえずこれだけ詰め込んどけば赤点は回避できるかな？間違いなく言うこと聞かないのはわかってるけど、普段から勉強しておこうね」

「あーあー聞こえなーい聞こえない～」

私は何も聞いてませんよー？的なオーラを全面的に出しつつ、お小言が増える前に

とっとと退散する。まったくもう、とため息をつきながらもこれまた心霊現象の一種なのだろうか、稲石さんが片手をあげると錆びついた門がひとりでに開いたので、そこから外に出る。

そういえば、今日はあのカイザーの試合がテレビ中継される日だっけか。卒業してプロになったカイザーは当然のごとく連戦連勝で、ファンも多いと聞く。よし、夜になったら見てみようっと。

そんなことを考えつつプラプラ歩いていると、ポケットに突っ込んであったＰＤＬが音を立てた。おや珍しい、僕の番号を知ってる人がほとんどいないからこっちから使うことはたまにあってもこっちが呼び出されるなんてめったにないのに。どうせ葵ちゃんからの砂糖を切らしたとか小麦粉をぶちまけたとかいう報告だとは思うけど。

『もしもし清明？だってさ』

「む、むむむ夢想!?」

ビックリした!!なんかもう例えるならチャクチャルさんが目を覚ました次の日からしばらくの間ナスカでシャチの地上絵が一夜のうちに消えさりましたってニュース見た時と同じくらいびっくりした。

『ちょっと、大丈夫？って』

「え、え、え、なんで？えー嘘、なんでこの番号知ってるの!?」

『ああ、それ？それは、ほら。はい、かわりに喋ってくれる？だって……あ、もしもし先輩ですか？私です、葵です。なんでも夢想先輩が先輩の連絡先を教えてほしいって言ってたからこの番号伝えましたけど、もしかしてまずかったですか？』
「い、いや。盛大に驚いただけだから。みりんと醤油を間違えちゃうようなもんだよ」
『あー、それは確かにキツイですねー。じゃ、そろそろ夢想先輩に戻りますので……ってことなの、なんだって』
　うん。確かに店の関係でトラブルがあったらすぐ僕に連絡ちょうだいって葵ちゃんにはアドレス教えてあったから、確かに筋は通ってる。それにしても若干、どころかかなりカッコ悪いところを見せたような気がする。気がするんじゃなくて完全に見せた。くっ、今からでもなんとか誤魔化せるだろうか。
「ごめんごめん、いきなりだったからつい。それで？どうしたのさ一体」
　言ってから思ったけど、今のはいくらなんでもちょっと素っ気なさすぎやしなかっただろうか。これで夢想に申し訳ない気持なんか持たせたらどうしよう、いやそれならまだマシなほうだ。最悪嫌われてもおかしくない。
　画面の前でたらたらと冷や汗を流すその姿は、さぞかし不審に見えたことだろう。だけどわからない、この後どういった対応をするのがベストなのかがまったくもってわからない。よく考えろ、僕。下手なことを言おうものなら一発で泥沼にはまり込むぞ。と

いうか、もうすでに片足突っ込んでる気もするし。
あれこれ考えすぎて脳がオーバーヒートする寸前ぐらいのところで、夢想の声が聞こえた。
『とりあえず校長室まで来て、だってさ。鮫島校長……はいないから、代理のクロノス先生から話があるんだって』
「？」
今度こそ、何かやったのがばれたんだろうか。見つかったら怒られるであろうネタは身に覚えがありすぎるぐらいにあるから、もう何が見つかったのかが分からないけども。

「どうも皆さん、よく来たノーネ」
校長の椅子に満面の笑みでふんぞり返るクロノス先生。確か『臨時』で『代理』の『仮』校長になったんだっけか。鮫島校長はどこ行っちゃったんだろう。
「前置きはどうでもいい。こんなに人を集めて、一体何のつもりだ」
むすっとした声の万丈目。こんなに、というのももっともなことだ。何しろこの部屋には今、僕と同じように招集をかけられた万丈目に十代に三沢に明日香と夢想。メン

バーがカオスすぎていったい何をやらせようとしているのかまるで見当がつかない。と思ったけどこの面子、よく考えたら万丈目以外は去年のノース校対本校のタタカイに代表者として出たメンバーじゃないか。その万丈目だってあっち側のリーダーだったんだし。

「いい質問ナノーネ、シニョール万丈目。実は先日、デュエルアカデミアノース校の校長から通信が入ったノーネ」

「ノース校から？一体あいつらが何の用だ。アームド・ドラゴンなら返すつもりはないと言っておいてくれ」

そういや万丈目のアームドシリーズって、ノース校で伝説扱いされてたのを借りパクしてるカードなんだっけ。１回本人から聞いたことがあるけど、特に返せと催促されなかったから返さなかったとのことらしい。

「まあまあ、とりあえずこの映像を見るノーネ。その方が話が早いですーノ」

そう言ってリモコンをピッと操作すると、ウイイイインと天井からスクリーンが垂れ下がってきてさらに自動でカーテンが閉まった。

「へえ、この部屋こんな機能があったのか！」

「随分とハイテクザウルス。さすがデュエルアカデミア高等部だドン」

そんなどうでもいいことをしゃべっているうちに、画面にはノース校の校長……え

と、名前なんだっけ。まあとにかく、校長が写った。
『どうも、鮫島校長。お久しぶりです』
「ポチッとな。このセリフについては、彼はこのクロノス・デ・メディチが校長となったことを知らないうちに送ったメッセージだから聞き流してほしいノーネ」
わざわざそこで一時停止を入れるクロノス先生。あれ、代理だよね？とツッコミたくなったのは僕だけじゃないはずだ。
『さて、こうして連絡を入れたのはほかでもありません。去年はそちらに敗れたノース校対本校の試合ですが、ぜひ今年もやりたいとの声がうちの生徒から多数寄せられまして。もしよろしければ、昨年と同じ条件での5対5のチーム戦を開催したいと思っているのですが、いかがでしょうか。返信、お待ちしています』
「ポチっと。つまり、そういうことなノーネ」
懐かしいなあ。まさか、急にやって来たとはいえテレビ中継までされたあのノース校との戦いで鮫島校長が勝ち取ったものがトメさんのキス1回だとは思わなかった。たぶんあのノース校長もどちらかというとそっちの方が目当てなんだろう、きっと。
「それで？わざわざ呼びつけておいて、まさかそれだけということはあるまい」
「それには深いわけがありまスーノ。今日集まってもらったシニョールアーンドセニョリータにまた代表5名をしてもらいたいと思っていますが、実はこのテープ、まだ続き

があるノーネ。またまたポチッとな」
　急に真剣な顔になって、リモコンのボタンを押す先生。画面のいち……いちの……
そうだ、市ノ瀬校長だ！まあとにかく、その校長が再び口を開く。
『ところで、鮫島校長。愚痴をこぼすようで申し訳ないが、私には一つ心配事があるのだが。最近このノース校では生徒たちの間でなにか宗教のようなものが流行っていて、それに影響された子が制服を白くしたり部屋を白く塗り替えたりとやりたい放題なんだ。確か名前は……光の結社、とか言ったかな。今のところ全生徒の３分の１ほどの間に広まっていて、あのサンダー四天王の言うことにすら反発することもある一大勢力を築きあげつつあるのだよ。教職者として、私に至らない点があったのは認めよう。だからせめて、私のことを反面教師にしてアカデミア本校ではくれぐれも気をつけてほしい。それと万丈目君、アームド・ドラゴンを返してくれ』
　……なんだろう、これ。こんなものを僕らに見せて、一体クロノス先生は何がしたいんだろうか。
　だけど、万丈目はどうやら違うことを感じたらしい。
「おい、クロノス教諭。この話、もう少し細かいところはわからんのか？とりあえずアームドは返さんと連絡を……」
「申し訳ないですが、さっぱりわかりませんーノ。何回かノース校と連絡を取ろうとは

していますが、全然応答がないノーネ」
「何、応答がないだと?」
なんだか、ずいぶんと不穏な話になって来たものだ。大丈夫だろうか、ノース校。
「これは私の勘でスーが、どうもこの話には嫌な予感がするノーネ。皆さんが引き受けたくないというのなら、なんとかして断れるよう私が直接ノース校に出向いて交渉してみまスが、いかがでしょう」
「なるほどな。つまり、進むか退くかここで決めてほしいと」
「その通りデス、シニョール三沢。私個人としては、この挑戦を断ることでノース校に馬鹿にされるのは確かに悔しいでスーノ。しかーし、私はそれ以前に一人の教師。生徒に少しでも危険が及びそうなことは断じて許さない、それが教師のありかただと思ってますノーネ」
おお、いい人だ。この人がこんなこと言う先生になるなんて、僕らの入学時には思いもよらなかったのになあ。だけど、その気持ちはありがたいけど、僕らだってデュエリストなんだ。なにより去年はセブンスターズ相手に闇のゲームで大立ち回りを繰り広げてきた僕らにとって、そんな新興宗教なんぞ怖くない。だから、
「気持ちはありがたいけど、俺はそのデュエル引き受けるぜ。売られたデュエルは買うのが礼儀だしな」

……なんで先に言っちゃうかなあ、十代。
「当然、俺もだ。ノース校のやつらにはまたこの俺が直々に活を入れてやる」
「私も参加するよ、だってさ」
「右に同じく、だ」
「私も参加するわよ」
……だからなんで僕より先に言いたいこと言っちゃうかなあ、この人たちは。それとも単にこっちのタイミングが悪いんだろうか。しょうがない、せめて締めの一言ぐらいは言わせてもらおう。
「ってことですよ、先生。きっと大丈夫です、僕らは勝ちますから」

「とは言ったものの、具体的にどうしようかなあ」
あれからクロノス先生はまだ少し心配そうだったが特に何も言わず、そのまま流れ解散。正直、何かしようにも情報が少なすぎるのだ。
「ただまあ、特訓はしておかないとねえ」
きっとサンダー四天王だってこの１年を遊んですごしたわけじゃないはずだ。なら、僕はさらにその上をいかないと格好がつかない。そもそも僕、去年は副将の鎧田にこそ

勝ったけど公式の試合では万丈目に負けちゃったし。
そして、僕には1つ前々からやってみたかったことがある。いい機会なので、あの男に頼んでみよう。

「……なるほどな。確かにこの学校中探しても、そういうことなら俺が一番だろうな。いいぜ、あの時に俺を止めてくれた借りもまだ返せてなかったしよ」
「うん、ありがとう。だけど悪いね、せっかく自分なりのデッキを作ってる最中でまたこんなことさせて」
あっさりOKはもらったけど、さすがにちょっと良心が痛む。何しろ今からやってもらうことは、例えるならばアル中が治りかかってきた人を結婚式に呼んで酒盛りさせるようなものなんだから。
だけどその男は、気にすんな、と快活に笑ってみせた。
「実を言うとな、もうできてるんだ。ちょっと待ってろ、今持ってくるから」
「うん、頼むよ……神楽坂」
おう、と一言返して。ラーイエローにおいて三沢とは別のベクトルで秀才と呼ばれる男、神楽坂は席を立った。

「さて、と。考えてみれば、こういう頼みをされるのは初めてだな。じゃあ、俺……いや、僕とデュエルしようか」
「うん。じゃあ、デュエルと洒落込もうか！」
「「デュエル！」」
　先攻をとったのは、神楽坂。５枚の手札をざっと見て、一瞬で自分のとるべき最適な一手を見つけ出す。
「手札からアトランティスの戦士を捨てて効果発動、デッキからアトランティスのフィールド魔法をサーチする。そしてこのアトランティスをそのまま発動。さらに魔法カード、スター・ブラストを発動！このカードは５００単位でライフを払って、手札か場のモンスターのレベルを下げるカード……僕は１０００のライフを払って、手札にいるレベル６になったシーラカンスのレベルをさらに２つ下げる！レベル４のシーラカンスを通常召喚だ！」
　神楽坂　ＬＰ４０００→３０００
　超古深海王シーラカンス　攻２８００→３０００　守２２００→２４００　☆７→６→４
　アトランティスの効果でレベルが１下がっているシーラカンスのレベルをさらに２つ下げての、１ターン目からの最速シーラカンス召喚。普段僕の味方として暴れてくれ

るシーラカンスがこうして敵に回るのは、考えてみれば初めてだ。
だけど、これこそが僕の望んでいた展開。今神楽坂に使ってもらってるデッキは、去年の僕が使っていたものと同じものである。通称ミラーマッチと呼ばれるデュエルは、カードパワーが同じなぶんプレイングと運の差が物を言う。だが、神楽坂にはデュエルする際にコピーしたデッキの使い手のプレイングや癖をそっくりそのまま使うという特技がある。つまり、今僕の目の前にいるのは去年までの僕そのもの。この相手にどれだけ差をつけて勝つことができるかで、今の僕の力量も知れるというものだ。
「シーラカンスの効果を発動、手札を1枚捨てることでデッキからレベル4以下の魚族を出せるだけ特殊召喚する！魚介王の咆哮！」
魚の王の号令が、デッキの部下を呼び起こす。まさにテンプレの動き。
ハリマンボウ　守100→300　攻1500→1700　☆3→2
ハリマンボウ　守100→300　攻1500→1700　☆3→2
オイスターマイスター　守200→400　攻1600→1800　☆3→2
フィッシュボーグ―アーチャー　守300→500　攻300→500　☆3→2
「カードをセットして、エンドフェイズにシーラカンスのレベルは戻る。ターンエンドだ」
「僕のターン、ドロー！」

あのデッキを使ってた僕だからわかる。あの伏せカードは恐らく、破壊された水属性を完全復活させる激流蘇生か攻撃を無効にしてダメージを叩き込むポセイドン・ウェーブだ。
「速攻魔法、サイクロンを発動！その伏せカードを破壊だ！」
「しまった、激流蘇生が!?」
「よし！とはいえ、シーラカンス越えはそうそう出せないし……モンスターを裏守備でセット、さらにカードもセット。これでターンエンド」
神楽坂　ＬＰ３０００　手札：０
モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）
ハリマンボウ（守）
ハリマンボウ（守）
オイスターマイスター（守）
フィッシュボーグ―アーチャー（守）
魔法・罠：なし
場：伝説の都　アトランティス
清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：???（セット）

魔法・罠：1（伏せ）
「僕のターン！永続魔法、強欲なカケラを発動。そしてシーラカンスで裏守備に攻撃、マリン・ポロロッカ！」
超古深海王シーラカンス　攻３０００→???　守１０００→１２００（破壊）
「この瞬間、グリズリーマザーの効果発動！このカードが戦闘破壊されたことで、デッキから攻撃力１５００以下の水属性1体を特殊召喚する！僕が呼ぶのはこのカード、ヒゲアンコウ！」
ヒゲアンコウ　攻１５００→１７００　守１６００→１８００　☆4→3
この攻撃はもうわかっていた。だって僕だし、あそこでセットモンスターを警戒するなんてありえない。そして引いたカードが強欲なカケラであることを自分からばらしてくれた以上、警戒することなく安心して僕のターンでモンスターが出せる。
「そして僕のターン。ダブルコストモンスターのヒゲアンコウをリリースして、青氷の白夜龍を召喚！」
シーラカンスを超えるその攻撃力は、僕のデッキの中で最大の固定値を持つ。思えば、このカードにも随分とお世話になって来たものだ。
青氷の白夜龍　攻３０００→３２００　守２５００→２７００　☆8→7
「白夜龍でシーラカンスに攻撃、孤高のウィンター・ストリーム！」

「へへ、悪いね！墓地からキラー・ラブカのモンスター効果発動！このカードをゲームから除外することで魚族のシーラカンスに対する攻撃を無効にして、さらに白夜龍の攻撃力は僕のエンドフェイズまで５００ダウンするよ」

冷気のブレスは、半透明の魚によってあっさりと防がれる。しかも、攻撃力がシーラカンスを下回る結果になってしまった。

青氷の白夜龍　攻３２００→２７００

「くっ、これでターンエンド」

神楽坂　ＬＰ３０００　手札：０

モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）

ハリマンボウ（守）

ハリマンボウ（守）

オイスターマイスター（守）

フィッシュボーグ―アーチャー（守）

魔法・罠：強欲なカケラ（０）

場：伝説の都　アトランティス

清明　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：青氷の白夜龍（攻）

魔法・罠：１（伏せ）
「僕のターン、ここで攻め込む！まずドローしたから、カケラに強欲カウンターが一つ。ハリマンボウをリリースして、ジョーズマンをアドバンス召喚！そしてジョーズマンは当然アトランティスの効果を受けて、さらにこのカード以外の自分の水属性１体につき３００で攻撃力を上げていく」
ジョーズマン　攻２６００→４０００　守１６００→１８００　☆６→５
「さらにハリマンボウが墓地に送られたことで、相手モンスター１体の攻撃力を５００ダウンさせる」
青氷の白夜龍　攻２７００→２２００
どんどん弱体化していく白夜龍に対し、攻撃力をガンガン上げていくジョーズマン。あれ、自分で言うのもなんだけど去年の僕ってこんなに強かったっけ。絶対神楽坂のやつ、ちょっと強さ盛ってるでしょ。
「このターンでケリをつけられるかな？前進あるのみ、まずはシーラカンスで攻撃！マリン・ポロロッカ！」
超古深海王シーラカンス　攻３０００→青氷の白夜龍　攻２２００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→３２００
「ぐうっ……！だけどここでトラップ発動、リビングデッドの呼び声！墓地から白夜

龍を選んで蘇生、アトランティスの効果で攻守アップ！」
　魚の王の突撃を受けて一度は吹き飛ばされた白夜龍が、今の一撃でぼろぼろになった氷の翼を広げてジョーズマンの攻撃から僕をかばうように立ちふさがる。……ごめん、白夜龍。
　青氷の白夜龍　攻３０００→３２００　守２５００→２７００　☆８→７
「無論、ジョーズマンでそのまま連撃！」
　ジョーズマン　攻４０００→青氷の白夜龍　攻３２００（破壊）
　清明　ＬＰ３２００→２４００
「僕は、これでターンエンド」
「このターンで何かしないと……！ドロー！カードを２枚セットして、モンスターも伏せてターンエンド」
　状況はかなりこっちが押されてる。とにかく、あの布陣をなんとかしないと僕の勝ちはない。このカードがうまく通りさえすれば、一気に逆転の目もあるんだけども。ただこのカードはかなり受身なカード、あっちが警戒してそのまま攻撃したら何もできない。
　神楽坂　ＬＰ３０００　手札：０
　モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）

ジョーズマン（攻）
ハリマンボウ（守）
オイスターマイスター（守）
フィッシュボーグ―アーチャー（守）
魔法・罠：強欲なカケラ（１）
場：伝説の都　アトランティス
清明　ＬＰ２４００　手札：１
モンスター：???（セット）
魔法・罠：２（伏せ）

「よーしっ、僕のターン！カードをドローしたから強欲カウンターがもう１つのって、その状態のカケラを墓地に送って２枚ドロー！ここはアーチャーを使おうかな。水属性モンスターをリリースすることで、シャークラーケンを特殊召喚！」

シャークラーケン　攻２４００→２６００　守２１００→２３００　☆６→５

いよっしゃあああ、と叫びだしたい気分だった。馬鹿だ。昔の僕、やっぱ馬鹿だった。大体デッキの内容は大まかなところは変わってないんだ、この状況でセットなんてレベル４以上とのモンスターに対する戦闘破壊耐性もちの氷弾使いレイスか、２積みだったりピン刺しだったり時と場合で揺れ動くグリズリーマザーか苦し紛れのセット

か、せいぜい警戒するとしてもリバース時に相手のカード1枚をバウンスするペンギン・ナイトメアぐらいの物だろう。つまり、あのシャークラーケン召喚はナイトメアただ1枚のみに対策した、ほぼ完全にオーバーキル以外の何物でもないわけで。

「だったらあとは、そこにできた隙をつくまで！トラップ発動、激流葬！モンスターが特殊召喚されたことで、場のモンスター全てを洗い流す！」

「な、なんだって!?」

なんだって、とはいえ、多分神楽坂個人としてはオーバーキル狙いが隙を作りやすいなんてことはとっくにわかっていただろう。だけど、今の彼はあくまでも昔の僕のコピー。その役割に徹してくれたんだから、本当に感謝しないといけない。

「だ、だけどオイスターマイスターがフィールドから墓地に送られたことで、効果発動！オイスタートークンを特殊召喚！」

オイスタートークン　守0→200　攻0→200

慌ててトークンを召喚する。だけど、そんなことはこっちだって織り込み済みだ。

「こっちもセットしてあったオイスターマイスターの効果を発動。カモーン、オイスタートークン」

オイスタートークン　守0→200　攻0→200

「なっ……!?ぼ、僕にはまだ通常召喚が残ってる！オイスタートークンをリリースして、

２体目のシーラカンスを召喚！」
「へっ、２枚目も引いてたの!?」
いかん、これは予想外。ねえ神楽坂、僕、そんなに引きよくないよ？いや、これ言ってもどうしようもないのはわかってるんだけども。
超古深海王シーラカンス　攻２８００→３０００　守２２００→２４００　☆７→６
「ふっふっふ、一瞬肝を冷やしたけど僕の勝ちは確定かな。シーラカンスに対して魔法カード、アクア・ジェットを発動！これで攻撃力は永続的に１０００アップする」
来るか魚介王の咆哮第二陣、と身構えたのも一瞬。残り手札１枚を、貴重なシーラカンスの効果発動コストになるカードをあっさりと使う神楽坂＝去年の僕。ほんっっっとに何を考えてたんだろう、去年の僕は。ちょっとだけ、本当にちょっとだけだけど、入学当初の嫌味な性格だったクロノス先生の気持ちがわかる気がした。こりゃ嫌味の１つも言いたくなりますわ。
超古深海王シーラカンス　攻３０００→４０００
「シーラカンスでオイスタートークンに攻撃、マリン・ポロロッカ！」
超古深海王シーラカンス　攻４０００→オイスタートークン　守２００（破壊）
とはいえ、攻撃力４０００のシーラカンスをなんとかするのはかなり難しい。さすが

に次に引いたカードはすぐコストに使うだろうし、そうなったら対象をとる効果を無効にできるようになるシーラカンスはまず倒せない。この伏せカードがうまく使えるチャンスは、あと1回。この僕のドローにかかっている。

……結局、いつもこうなるんだなあ。ギリッギリの状況まで持ち込まれて、そこからデッキに助けてもらってなんとか首の皮一枚から勝負を動かす。別に不満はないけれど、たまにはもっとこう終始相手を圧倒するデュエルとかしてみたい。

「ま、さすがにそれは高望みなのかな?」

デッキトップに手をかけ、目をつぶってそのカードに神経を集中する。俺に任せろ、そうそのカードが言っているような気がした。なら、こっちができることはただ1つ。自分のデッキを信じるだけだ。

「僕のターン、ドロー!」

ほら、そうすればきっと応えてくれる。だって、この子たちは僕の大切な仲間なんだから。

「ハンマー・シャークを通常召喚して、効果発動。このカードのレベルを1下げることで、手札からレベル3以下の水属性を1体……アトランティスの効果でレベル3になってるシャクトパスを特殊召喚!」

ハンマー・シャーク　攻1700↓1900　守1500↓1700　☆4↓3↓2

シャクトパス　攻１６００→１８００　守８００→１０００　☆４→３

「ふん、そうやってモンスターを揃えてもシーラカンスの前には」

「ああそうさ、あのアクア・ジェットを手札コストに回されてたらね。僕がモンスターの特殊召喚に成功したことで、このトラップの発動条件がクリア……トラップ発動、ディメンジョン・スライド！相手モンスター１体、つまりシーラカンスをゲームから除外っ！」

次元を飛び越えてシーラカンスの後ろにワープしたシャクトパスが、その鋭い口先……でいいのかなあれ。どちらかというと鼻面？まあとにかくその部分でシーラカンスの体を一刺しする。さすがの固い鱗もこの不意を衝いての予想外な一撃は防げなかったらしく、巨体がどう、と崩れ落ちた。

「２体のモンスターでとどめ！シャクトパス、ハンマー・シャークでダイレクトアタック！」

シャクトパス　攻１８００→神楽坂（直接攻撃）

神楽坂　ＬＰ３０００→１２００

ハンマー・シャーク　攻１９００→神楽坂（直接攻撃）

神楽坂　ＬＰ１２００→０

「ふー……」

正直、まさかこんなに追い込まれるとは思ってなかった。あっちのプレイミスのおかげで助かったけど、もしかして僕自身はあんまり成長してないんじゃなかろうか。

「いや、そんなことはないさ。お前は昔のお前のプレイングの甘さを見ただけで気づけたんだろう？相変わらず、オシリスレッドにしておくのが惜しいぐらいだ」

「そうかな。そうだといいんだけど」

「それに、今ので俺も何かをつかみかけたような気もするしな。俺の、俺だけのデッキが完成するのもそう遠くはないはずだ。そうしたら、またデュエルしてくれよ？」

「うん、もちろん。いつでも相手になるよ」

こうして、朝から晩まで常にドタバタしつづけた１日は終わった。明らかに様子がおかしいノース校とか明日のテストとか不安なことはいろいろあるけど、とりあえず今日は早めに寝……いやまだ終わってないな、大急ぎでテレビ見ないと。カイザーの試合、もうちょっとで始まっちゃう。

そう思っていたこのころは、まだ思いもしなかった。

『互いに一歩も譲らなかったこのデュエル、勝者は……エド・フェニックス！』
「嘘……カイザーが……」
あのカイザーが、学園最強のサイバー流が、十代とはまた違うＨＥＲＯ、フェニックスガイ系統のモンスターを使うエドの前に一敗地にまみれるとは。
「なんだかもう、信じられな……あれ？」
圧巻のデュエルが終わり、テレビを切って何気なく外を見ると、窓の向こう側に見慣れた顔がちらりと見えた気がした。
「ユーノ？」
一瞬だったから確証は持てないけど、あれは多分ユーノだろう。ここ数日間、一度も顔を見せていない僕の隣人。どこに行ってたのか、たっぷり問い詰めてやろうっと。
「おーい、ユーノー？」
『……』
何も言わずにスッと寮から離れていくユーノを慌てて追いかけ、外に飛び出す。どんどん遠くに行っちゃうユーノをさらに追いかけるうちに、いつの間にか森の中に入り込んでいた。
「あれー？しょうがないなあ、手伝ってよサッカー」
シャーク・サッカーの精霊をカードから呼び出して、ユーノの捜索を頼む。コクリと

頷いたコバンザメが、するりと空中を泳いでいった。
　さてと、サッカーがあっちに行ったなら、僕はこっちに行こうかな。
『お前が探してるのは俺かい？』
「あ、ユーノ！なんだ、そこにい……た……の……？」
　何かがおかしい。にやにやと笑うユーノに、別に不審な点はみられない。だけど、何かがおかしい。ふと気が付くと、いつのまにかデュエルディスクを構えていたことに気が付いた。どうも、無意識のうちに警戒度が跳ね上がっていたらしい。
『おっと、やりあおうってんじゃねえんだ。これ、ちょっと見てくれよ』
　そう言って彼が懐から取り出したのは、１枚のデュエルモンスターズのカードで、あのデュエルキング武藤遊戯の親友である城之内克也も愛用する由緒正しきカード、時の魔術師。
「これがどうし……っ!?」
　たのか、と言い終わる前にクラリ、と急に目がくらんできた。みるみるうちに意識が飲まれていくのを感じながら、どうすることもできない。
「くっ、サッカー……」
　多分サッカーが何かしてくれるだろうから、それを頼りにしよう。そう心の中で思う。完全に意識が消える寸前、ユーノのつぶやきが聞こえた。

『安心しな、４、５日もすりゃ目が覚めるさ。特殊能力、タイム・マジックの発展形だとでも思ってくれ……確かにやりましたよ、斎王様』

ターン４１　天上の氷炎と正義の誓い

「……ハッ!?」
慌てて跳ね起きるとそこには、
「知らない天じょ」
「む。夢想先輩、丸藤先輩！起きてください、先輩が目を覚ましましたよ！」
「最後まで言わせてよ！」
「何馬鹿なこと言ってんですか！」
名セリフを邪魔されたのがちょっと悔しくて怒鳴ったらその倍くらいの勢いで怒鳴り返された。怖い。
「清明！」
「清明君！」
「あれ、２人とも。どったの？」
「どったの？じゃないッスよ、清明君！もう倒れてから４日も経ってるんスよ!?」
「何ィ!?」
あー、なんかだんだん思い出してきたかも。カイザーがエドに負けて、行方不明の

ユーノを追いかけたら時の魔術師を見せられて、いきなり意識が飛んで……。
「アニキが教えてくれたんスよ。あいつのサッカーが助けを呼んでるって。で、そうしたら森の中で清明君がバッタリ倒れてて」
「そのあとはもう大変でしたよ。息してないどころか心臓まで止まってましたし。よっぽどこの人はゾンビか何かかと思いましたよ」
「あ、あははー」
ゾンビ、と言われればあながち否定もしにくい気が。うーむ、何と言ったものか。
『時の魔術師だからな。油断した、完全に我々の時間を止められた』
「(あ、チャクチャルさん。それより時間を止められたって……)」
『どうやったのかはわからないが、どうやら彼も精霊の力を行使する能力、ないしはそれに類似したものが付いたらしい。なぜそうなったのかはともかく、これは厄介な相手だな』
なるほど、どれくらいヤバいのかはっきりしたことはピンとこないけどとにかくヤバそうなことだけはなんとなくわかった。しかしこれ、もしもサッカーが助けを呼びに行ってくれなかったらどうなってたんだろうか。等々とそんなことをつらつら考えていると、ついうっかり自分の世界に閉じこもってしまった。周りの心配そうな視線に気づいて慌てて咳払いし、ふと気になったことに話題をすり替える。

「と、ところでさー。なんか今回、お見舞い少なくない？去年保健室の厄介になったときはもっといろいろ来てくれたってのにさ」

適当に思い付いたことを口にしただけだったのに、一気に暗くなった３人の顔を見て地雷を踏んだことをいっぺんに悟る。

「実はね、清明。清明が倒れた次の日、学校にエド・フェニックスが来たんだよ、だってさ」

最初に重い口を開いたのは、夢想だった。普段は何を考えてるのか今一つ掴みづらい彼女だけど、今何か心配事があることだけはよくわかった。多分、それがこの話に関係するんだろう。

「それで、エドがアニキとデュエルしたんスよ。最初はアニキが優勢だったんだけど、そのあとでエドがこれまで見たことないテーマ、Ｄ―ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）に戦術を切り替えて、それで……」

「それで、何？もしかして負けちゃったの？」

つらそうに顔を伏せ、コクリ、と頷く翔。その時のことを思い出したのか、なんだかこれ以上喋らせたら泣きそうな雰囲気になってきた。その様子を見て気を使ったのか、ため息を１つついて葵ちゃんがそのあとを喋る。

「それで、その十代先輩ですが。負けた後しばらくの間ショックで自分のカードのテキ

ストやイラストを確認することができない、いくら見ても白い紙にしか見えない状態になっちゃったんです。そして、ちょうど昨日のことでしたね。先輩の隣のベッドで寝かしつけてたはずなんですけど、丸藤先輩と剣山さんが元気づけに行ったらもう行方不明になってたんですよ」

「はあ?」

なにそのトンデモ展開。でもまあ、あの十代のことだ。あのデュエル馬鹿がカードを見ることができないなんてなったとしたら、ショックの余り山にでも引きこもったってあんまり違和感ない気がする。

「そ、それで?当然探してるんだよね?」

「ううん、実は清明、話はそれだけじゃないの、だってさ。エドが来たその日の夕方ぐらいから生徒の間で急に光の結社っていうのが流行りだしたの、って。」

「光の結社……」

どこかで聞いた気がする、と思ったけどあれだ。ついさっき、じゃなかった僕が倒れた日の昼、クロノス先生が見せてくれたノース校からの連絡で市之瀬校長が愚痴ってたやつだ。あの時は変なこともあるもんだ程度に聞き流してたけど、まさかこっちにまでその熱が移るとは。気づかないうちに、事態はどんどん僕の知らない方向に向けて動いて行っている気がする。

「それで、その先導をやってるのがあの万丈目君なんスよ！なんか真っ白い服をどっかから持ってきて、万丈目ホワイトサンダーって名乗って校内で目に付いた人に片っ端からデュエルを申し込んでは完勝、するとなぜかその負けちゃった人も真っ白い服に着替えて光の結社バンザーイって言いだすようになって……今日この部屋に来るのだって見つからないようにしながらだからすごく苦労したんスよ」

「ちょ、ちょっと待って！え、万丈目ってあの？いくらなんでもそれはないでしょ」

あのいつもゴキブリみたいに黒い上下ばっかり着ておジャマ軍団共々やたら高い生命力としぶとさを全身で表現してるようにしか見えないあの万丈目が、全身真っ白？似合うとか似合わない以前にそもそもイメージできん。

でも、僕だって口ではああ言ったけど、伊達にこの１年を１つ屋根の下で暮らしてきたわけじゃない。翔がこんな嘘をつけるタイプじゃないことはよくわかってるんだ。だから、この話に嘘はない。わからないのは、何がどうなってそんなイメチェンをするまでに至ったかだ。

「で、なんで万丈目がそんなことになっちゃったの？なんかこうほら、原因とか理由とか、思い当たることは？」

「……それは……言いにくいッスけど……」

翔さん翔さん、その態度そのものが僕のせいだって言ってるのとほぼ同義なんですが

それは、とは思っても言わない。これでも翔なりに考えて気を使おうとしてくれてるのだ、ってことにはもう入学して2か月目ぐらいの時には理解できてたし。ただ、こういう時にはできれば、

「私も又聞きだけど、急に外に出た清明を探しに行った時からこうなったみたい」

そう、こんなふうにスパッと言ってくれる方がまだマシだったりするんだよね。ありがと夢想。

「いや、いったんは寮で待ってたんスよ?だけどいきなりアニキと万丈目君が清明に何かあったみたいだって言って外に出ちゃって、それで僕とアニキは清明君を探しに行ったんスけど、反対側にユーノ君を連れ戻しに行くって言ったっきり万丈目君が帰ってこなくて、それで次の日にはもう」

なるほど、少し読めてきた。僕がユーノを追いかけて外に出て、時の魔術師の効果を受けたところでサッカーが救援を求めてレッド寮に。精霊が見える十代と万丈目の二人がそれぞれ僕とユーノを探しにバラバラになったところをその光の結社とやらに狙われたってことか。

……畜生。

「つまり、だ。一から十まできれいさっぱり全部まとめて僕のせい以外の何物でもないよねーこれ。だいたいわかってきたけど、まだほかにいるでしょ?明日香とか三沢、そ

れに剣山とか神楽坂辺りは今どうしてるの？」
努めて投げやりな口調になって、煮えたぎってる腹の中を表に出さないようにする。自分のことを許せない。どうしてこう、迷惑をかけるんだろう。僕が１人で外に出なけりゃ、こんなことにはならなかったろう。せめて誰かに声をかけておくなり、この事態を回避する方法はいくらでもあったはずだ。下手に自分の感情を爆発させたらどうなるかわからない一方で、それを冷静に見てる自分も心のどこかにいる。もし今心の中にあるものを全部解き放ったら、ダークシグナーになったことで増幅されたらしい心の闇の力も相まってとんでもないことになるだろう。もう、闇堕ちルート待ったなしの一直線。
でも、それも面白いかもね。そう心の中でそっと続け、それに対してまたぞくりとする。
『安心しなさい。心の闇なら私の、地縛神の専門だ。私がいる限り万一そちらでコントロールし損なっても何とかできる』
……お人よしというかなんというか。本当に優しいなあ、この神様。効果も強いし、これで自爆さえしなけりゃ言うことなしなんだけど。っと、また話がずれた。
「まず、神楽坂君はもう光の結社ッス。剣山君はさっきまでいたんスけど、清明君が目を覚ますちょっと前に十代のアニキも心配だから山まで行ってくるドンって」

「明日香は昨日、ショック療法で万丈目君の目を覚まさせてあげるわって言ってついデュエルを挑んだの、だってさ」
「明日香らしいね。それで、どうなったの？」
もう薄々予想はつくけど、それでもはっきりと聞いておかなきゃいけない。僕が引き起こしたとまでは言わないまでも、僕のせいで被害が圧倒的に大きくなってることは否めないんだ。せめて今できることは、何が起きたかを正面から受け止めることだけだ。
「万丈目君、いつもとは全然違うデッキを使ってたんスよ。それでも明日香さんは強くて、あと一撃で勝てるところまで行ったんスけど、結局最後には負けちゃって……それから急に、まるで何かに憑りつかれたみたいに光の結社の一員になって、今はかなり上位の方で片っ端から勧誘をしてるみたいッスよ」
「そう……それで、三沢は？」
セブンスターズの時に共に戦った七星門の鍵の守護者最後の一人、三沢大地。正直、三沢まで敵に回られたらかなり難易度が上がるからやめてほしいのだが。
「あ、そろそろですよ先輩達！今日はその三沢先輩が、万丈目先輩にデュエルを挑んでるんです！目が覚めたなら見に行きましょう、もうすぐ始まっちゃいます！」
「三沢が!?」

で、保健室からそう遠くないデュエル場。去年もしばらく寝込んでた僕だからわかるけど、デュエルの際の叫び声やら爆発音やらがドアを開けると聞こえてくる程度には近い。一応防音設備は整ってるから保健室を本気で閉め切ればシャットダウンできるんだけど。なんでも、デュエルの生の音を聞かせることによりデュエリストとしての生存本能を高めて免疫系を活性化させ、強引に傷も病気も治してやろうという理由があるらしい。でもまあ、入院で退屈してる時にぱっとデュエルが見に行けるってのはありがたいよね。

閑話休題。僕たちが駆けつけると、確かにそこには真っ白な２Ｐカラー版万丈目と黄色いいつも通りの三沢が向かい合っていた。

「そこの貴様、誰が２Ｐカラーだ！俺は斎王様からの訓示を受けた白の貴公子、万丈目ホワイトサンダーだぞ！」

「げ、聞こえてたの!?」

その声を聞き、三沢もこちらを向く。もう大丈夫だ、ということを伝えるため軽く手を振ると、ほっとした様子で片手を上げて返事した。そして万丈目の方を向き、重々しく口を開く。

「万丈目……お前の目は、ここで俺が覚まさせてやる！天上院君の仇は、俺が取る！」

「ふん、1つ教えてやろう、三沢大地。俺は万丈目ホワイトサンダー、つまりは万。そしてお前の名は三沢、つまり三だ。わかったか、俺とお前の間には、戦う前からすでに９９９７もの差があるのだ！」
「どこかで聞いたような気がするセリフだな、万丈目。言いたいことはそれだけか？」
「無論。言葉なぞはもう必要ない、斎王様の正しさはこのデッキが語ってくれる」
すっかり変わったような、でも本質的にはそんなに変わってないような気がする万丈目と、上着の中からデッキを1つ取り出して素早くセットする三沢。もっと見やすい位置に移動している僕らをよそに、黄色と白の戦いが始まった。
「「デュエル！」」
先攻となったのは、三沢。
「俺が召喚するのはこのカード、豪雨の結界像だ」
カエルのような水色の置物が三沢の場に召喚されると、不思議なことに室内のはずのフィールドに雲が立ち込め、あっという間に雨が降り始める。
豪雨の結界像　守１０００
「このモンスターが存在する限り、お互いに水属性以外のモンスターは特殊召喚できない。まずはこのモンスターでお前の目論見を崩してやろう。カードをセットし、ターンエンドだ」

「ちっ、特殊召喚封じか。忌々しい、俺のターン！おっ、いいカードを引いた……いいか三沢、１つ教えてやろう。俺が今引いたカード、これこそが斎王様が今朝俺に渡してくれた運命のカード。宣言してやろう、お前はこのカードの効果の前に敗北することになると！だが今は使わない、このカードともう１枚、別のカードをセットしてライトロード・ドレイド　オルクスを召喚する」

大きな石板を小脇に抱える、白い服と髪が特徴の壮年の男性が召喚される。なるほど、ライトロードか。ロクに効果は知らないけど、そういうテーマがあるってことだけは知っている。カードごとのスペックの高さが売りの戦闘集団、だったかな。

ライトロード・ドレイド　オルクス　攻１２００

「行け、オルクス！その小さなカエルを噛み千切ってやれ」

万丈目の声にコクリと頷いたオルクスが呪文をぶつぶつと唱えるとその姿がいきなり光り輝く一匹の狼になって結界像に突撃し、その牙であっけなく噛み砕いた。

「なるほど、オルクスがいれば自分のライトロードは効果の対象にならないからな。俺の次のカードを警戒したか」

ライトロード・ドレイド　オルクス　攻１２００→豪雨の結界像　守１０００（破壊）

「ふふふ、どうやら最初のバトルは俺の勝ちのようだな。エンドフェイズにオルクス第２の効果が発動し、デッキの上からカードを２枚墓地に送る。これでターンエンドだ」

三沢　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
万丈目（白）　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：ライトロード・ドレイド　オルクス（攻）
魔法・罠：２（伏せ）
「俺のターン、ドロー」
万丈目の場にいるのは攻撃力１２００のオルクスただ一人。伏せカードもないから一見攻撃し放題に見えるけど、問題はそのオルクスが光属性だということだ。となると、最優先で警戒すべきは手札にあるかもしれないあのカード。これは、うかつに攻撃できない。
……とまあ、そんなことは僕よりも三沢が一番よくわかってるだろう。その上で、何か手を打ってくるはずだ。
「俺が召喚するのは、ハイドロゲドン。このカードならばオルクスよりも攻撃力は上、そのまま攻撃だ！ハイドロ・ブレス！」
水素の名を持つ三沢の水デッキの中核を担うモンスター、ハイドロゲドン。確かに攻撃力はオルクスよりも高い、だけどそんな単調な攻撃じゃあおそらく万丈目には通用し

ない！

「何？おいおい、ラーイエロー主席のタクティクスはそんなに単調なものなのか？ならば、ダメージステップに……」

「まあ待て。俺はこの攻撃宣言に合わせる形でこのリバースカード、マインドクラッシュを使用する！宣言するのは当然、オネストのカードだ！」

「何!?……くっ、俺は手札に存在するオネストを２枚、墓地に送る……」

なんとまあ、としか言いようがない。準制限カードであり光属性において最も警戒しなければならないカードであるオネスト、それをいきなり２枚とも手札に握っていたとは。そんな運命力を持ち合わせる万丈目もすごいけど、きっちりそれをカウンターして見せた三沢はもっとすごい。やっぱりあの男は敵に回したくないもんだ。

ハイドロゲドン　攻１６００→ライトロード・ドレイド　オルクス　攻１２００（破壊）

万丈目（白）　ＬＰ４０００→３６００

「そしてハイドロゲドンが戦闘で相手を破壊した時、デッキから別のハイドロゲドンを呼び出すことができる！」

フィールドに水柱が噴き上がる。おそらく、あそこから２体目のハイドロゲドンが特殊召喚されるのだろう。だが、万丈目もただでやられる男ではなかった。

「甘いな。カウンタートラップ発動、真剣勝負！このカードは相手がバトルフェイズにカード効果を使用した時、その発動を無効にして破壊する。これで貴様のハイドロゲドン連続召喚は無効になったばかりか、最初の1体さえフィールドからいなくなるわけだ」

一瞬三沢が圧倒するかに見えたこのデュエルも、これでまたわからなくなってきた。次のターンに万丈目がモンスターを出せば、十中八九ダイレクトアタックを食らってしまうだろう。

「カードをセットし、ターンエンドだ」

「俺のターン。いいカードを引いた、ライトロード・アサシン　ライデンを召喚だ！」

金色に輝く包丁型の短剣を逆手に握る上半身裸の細マッチョが、鋭い眼光で三沢を睨む。

ライトロード・アサシン　ライデン　攻１７００

「そしてライデンの効果を発動。メインフェイズに1度、デッキの上からカードを２枚墓地に送ってその中にライトロードのモンスターがいれば攻撃力を２００ポイントアップする。普通に使えば何が落とせるかはわからない効果だが、今の俺には斎王様のご加護がついているからな、この程度は朝飯前だ！送った２枚のカード、ライトロード・ビースト　ウォルフを自身の効果により特殊召喚！」

ライトロード・ビースト　ウォルフ　攻２１００
ライトロード・ビースト　ウォルフ　攻２１００
ライトロード・アサシン　ライデン　攻１７００→１９００
「デッキトップ２枚に連続してウォルフだと!?馬鹿な、そんなことが２回も連続して起きるわけがない！」
「そういえば、天上院君に光の結社の素晴らしさを教えたのも激流葬からのこのコンボだったな。さあ三沢、お前もこの３体の同時攻撃を受けてみろ！まずはライデンで攻撃だ」
「させるか！永続トラップ発動、モンスターＢＯＸ！相手の攻撃ごとにコイントスを行い、当たった場合その攻撃力はエンドフェイズまで０になる……まずは裏を選択だ」
ピーン、と空に向かって跳ね上げられる１枚のコイン。クルクルと宙を回りながら落ちてきたそれを、三沢が手の甲で受け止める。
その向きは……表！つまりライデンの攻撃力は１９００のままだ。
ライトロード・アサシン　ライデン　攻１９００→三沢（直接攻撃）
三沢　ＬＰ４０００→２１００
「くっ……」
「ふはは、あと２回の攻撃、どちらか一方でもコイントスを外したらジャストキルで俺の

勝ちか。このまま斎王様の予言したカードを使わずに勝つのもあるいはまた一興かもしれんな、ウォルフで攻撃！」

「俺が宣言するのは、もう1度表。ゆくぞ、コイントス！」

再び宙を舞い、三沢にキャッチされるコイン。もう後がない状況で三沢が出したのは、表。これにより攻撃力が0になったウォルフの一撃は三沢に傷をつけることすらできず、すごすごと引き返していく。だけど、まだ危機が去ったわけではない。

「最後のウォルフで攻撃！」

「確率的に言って、表が2回連続で出たということは……よし、次は裏を宣言しよう」

三度宙を舞うコイン。そういえば昔、三沢に聞いたことがある。なんでも3回コインを投げて2回表が出た場合、次に表が出る確率は2分の1よりもちょっと少ないんだとか。何回聞いてもさっぱりわからない理論だったから理解しようとするのは諦めたけど、とにかくそういうことらしい。

「そして、裏が出たな。そのウォルフの攻撃力も0だ」

「それで命拾いしたつもりか？いや、残念だがそれは違うな。やはり貴様のライフポイントは、予言通りこの伏せカードによって0になる運命なだけだ。エンドフェイズにライデンの効果によってさらに2枚のカードを墓地に送り、これでターンを終了する」

三沢　ＬＰ２１００　手札：２

モンスター：なし
魔法・罠：モンスターＢＯＸ
万丈目（白）　ＬＰ３６００　手札：１
モンスター：ライトロード・アサシン　ライデン（攻）
ライトロード・ビースト　ウォルフ（攻）
ライトロード・ビースト　ウォルフ（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン！スタンバイフェイズにモンスターＢＯＸは維持コストとして５００のライフを払わねば自壊する。維持コストを払おう……む？」

三沢　ＬＰ２１００→１６００

５００のライフコストは、決して無視できる値ではない。ないのだが、永続罠は三沢の水デッキの核。ここでモンスターＢＯＸを失うことはなんとしても避けたかったのだろう。だがなぜか、コストを払った瞬間に三沢が少し訝しげな顔をした。ちょうどこの位置からだと万丈目の背中しか見えないのだけど、なにかおかしなものでも見えたのだろうか。

「さらに魔法カード、ブラック・ホールを発動。これにより、フィールドのモンスターはすべて破壊される。その伏せカードは、俺のライフを削るためのカードなんだろう？な

ら裏を返せば、そのカードに俺のブラック・ホールを妨害する効果はないはずだ」
「く、忌々しい奴め。その通りだ」
「そのままオキシゲドンを召喚する。だが、攻撃はせずにカードをセットしてターンエンドだ」
オキシゲドン　攻１８００
せっかく召喚された酸素の翼竜も、なぜか絶好の攻撃チャンスに攻撃をしないままターンを譲り渡してしまう。何をたくらんでいるんだろう、三沢。ユーノ、こんな時お前がいれば何か意見の１つも聞けただろうに。
「ちっ、余裕を見せたつもりか？いい気になっていられるのも今のうちだ、ドロー！くそっ、俺の運命力もまだ未熟だったか。ライトロード・モンク　エイリンを守備表示で召喚。さらに魔法カード、おとり人形を発動。相手の伏せカード１枚を確認し、それが発動条件を満たしているトラップならば強制的に発動させることができる」
「もう少し後に使うつもりだったんだがな。このトラップは、炎虎梁山爆（えんこりょうざんばく）……発動時に俺の場の永続魔法か永続罠の数だけライフを回復する。今俺の場には２枚の永続罠、つまり回復量は１０００だ」
三沢　ＬＰ１６００→２６００
「おとり人形は発動後、デッキに戻るカード。エンドフェイズにエイリンの効果を発動、

デッキから３枚のカードを墓地に。よし、今落ちたライトロード・アーチャー　フェリスを自身の効果で特殊召喚し、ターンエンドだ」

ライトロード・モンク　エイリン　守１０００

ライトロード・アーチャー　フェリス　守２０００

三沢　ＬＰ２６００　手札：０

モンスター：オキシゲドン（攻）

魔法・罠：モンスターＢＯＸ

炎虎梁山爆

万丈目（白）　ＬＰ３６００　手札：０

モンスター：ライトロード・モンク　エイリン（守）

ライトロード・アーチャー　フェリス（守）

魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターンだな。随分と守りを固めたようだがどうした万丈目、お前の言う運命とやらは？スタンバイフェイズにまた５００ライフを払い、モンスターＢＯＸを維持する」

三沢　ＬＰ２６００→２１００

「魔法カード、マジック・プランターを発動。永続罠カード１枚、モンスターＢＯＸを墓地に送ることでカードを２枚ドロー。さらに魔法カード、化石調査を発動。デッキから

レベル６以下の恐竜族、ハイドロゲドンを手札に。そしてハイドロゲドンを召喚、そのままエイリンに攻撃！ハイドロ・ブレス！」

ハイドロゲドン　攻１６００→ライトロード・モンク　エイリン　守１０００（破壊）

「そして、ハイドロゲドンの効果によって別のハイドロゲドンがデッキから特殊召喚される。攻撃、と言いたいところだが、フェリスを倒すことはできないな。メイン２に魔法カード発動、ボンディング―Ｈ２Ｏ！場のＨ、つまり水素２つとＯ、酸素１つを化学反応させ、このモンスターを呼びだす！ウォーター・ドラゴンをデッキから特殊召喚！」

「出たな、それがお前の切り札か！」

ウォーター・ドラゴン　攻２８００

ついに出た、三沢の切り札の一つ。なるほど、確かにこの攻撃力ならば次のターンの攻撃でフェリスを倒すことができるだろう。これはさすがの万丈目にもきついはずだ、そう思っていると万丈目がいきなり高笑いをしだした。

「１度真剣勝負を食らったうえでなおウォーター・ドラゴンを呼び出してみせるプレイングは褒めてやろう。だがそれがどうした、三沢ぁ！俺のターン、フェリスの効果を発動！このカードをリリースして相手モンスター１体を破壊、さらにデッキトップからカードを３枚墓地に送る！ヴァルキリー・アロー！」

フェリスが猫耳をピンと立てて弓を引き絞り、勢いよく光の矢を放つ。ウォーター・

ドラゴンの水の体をあっさりと突き抜けて大穴を開けたその矢が、ドスッとその向こうの壁に突き刺ささった。

「やはりそう来たか！だがウォーター・ドラゴンは破壊された時再び水素と酸素に戻る、つまり墓地のハイドロゲドン２体とオキシゲドン２体を特殊召喚だ」

なるほど、三沢は最初からフェリスのあの効果のことを知っていたんだ。知っていたからこそ破壊されてもリカバリーが効くように、つまりウォーター・ドラゴンは最初から囮として特殊召喚したわけか。あれはまさしく自分で使わないカードの効果から特殊裁定まですべてを丸暗記してる化け物級の秀才、三沢だからこそできる真似だろう。

ハイドロゲドン　守１０００

ハイドロゲドン　守１０００

オキシゲドン　守８００

「ええい、しぶとい！ライトロード・ウォリアー　ガロスを召喚、ハイドロゲドンに攻撃だ！」

申し訳程度に刃のついた斧のような杖を振り回すたくましい戦士が、ハイドロゲドンを一撃で打ち砕く。

ライトロード・ウォリアー　ガロス　攻１８５０→ハイドロゲドン　守１０００（破壊）

「ふ、まだ俺には2体のモンスターが残ってるぞ？」
そう挑発的に笑う三沢に、いら立ちを抑えきれない様子の万丈目。だが手札のカードを使い切っている以上彼に何かができるわけでもなく、そのままターンを終えた。
三沢　ＬＰ２１００　手札：０
モンスター：オキシゲドン（守）
ハイドロゲドン（守）
魔法・罠：炎虎梁山爆
万丈目（白）　ＬＰ３６００　手札：０
モンスター：ライトロード・ウォリアー　ガロス（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン。カードを1枚セットし、ターンエンドだ」
「ふん、モンスターも引けなかったか。ならばその隙に、邪魔な壁を排除させてもらおうか。ライトロード・パラディン　ジェインを召喚し、オキシゲドンに攻撃！この瞬間ジェインの効果により、攻撃力は３００ポイントアップする」
「トラップ発動、ＤＮＡ改造手術！このカードの発動時から、場のモンスターの所属は全て俺の宣言したものになる！俺が宣言するのは、炎族！」
正統派の騎士、といった見た目のジェインが掲げる光の剣が突然燃え盛る炎の件に代

わり、若干ぎょっとしながらもそのまま翼を使って防御態勢をとる翼竜に切りかかる。だがその剣先が体に触れた瞬間、オキシゲドンの体は大爆発を起こした。

ライトロード・パラディン　ジェイン　攻１８００→２１００→オキシゲドン　守８００（破壊）

三沢　ＬＰ２１００→１３００

万丈目（白）　ＬＰ３６００→２８００

「何!?」

「ははは、酸素に火を近づけたら爆発するのは世の中の常識だぞ。オキシゲドンが炎族モンスターとの戦闘で破壊された時、お互いは８００ポイントのダメージを受けることになる！」

一瞬焦った様子だったが、三沢のライフも一緒に減っていることを確認してすぐに小馬鹿にするような声音になる万丈目。こういうところはまるで変わってない。

「だが、それでお前のライフまで減らしては本末転倒だな。ガロス、残ったハイドロゲドンに攻撃だ！」

ライトロード・ウォリアー　ガロス　攻１８５０→ハイドロゲドン　守１０００（破壊）

「これでお前の壁はもういない、エンドフェイズにジェインの効果を発動。デッキトッ

プから2枚のカードを墓地に送る。そしてガロスの効果発動、もう2枚のカードを墓地に送り、この時墓地に送ったカードの中のライトロードモンスターの枚数ぶんだけカードをドローする。俺が落としたのはダメージ・ダイエットと2枚目のガロス、よってカードを1枚ドロー。ターンエンドだ」

三沢　ＬＰ１３００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：炎虎梁山爆

ＤＮＡ改造手術（炎）

万丈目（白）　ＬＰ２８００　手札：１

モンスター：ライトロード・ウォリアー　ガロス（攻）

ライトロード・パラディン　ジェイン（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン、ドロー。カードをセットし、ターンエンドだ」

「ふん、よほどモンスターが引けないようだな。だがまあ、その伏せカードにも用心するに越したことはないか。ライトロード・マジシャン　ライラを召喚、効果を発動。このモンスターを守備表示にすることで、相手の伏せカード1枚を破壊する。ライト・ブレイク！」

ライトロード・マジシャン　ライラ　攻１７００→守２００
白い帽子をかぶったいかにもな女魔法使いが杖を三沢の伏せカードに向けると、そこからその伏せカードを撃ちぬこうと光が放たれる。永続罠だったらもうこれでアウトだったろうけど、三沢が引いていたのはうまい具合にフリーチェーンのカードだったらしい。
「トラップ発動、幻蝶の護り!このカードは発動時に相手モンスター１体を表側守備表示に変更する。これで、ガロスは守備表示になるな」
パタパタと無数のカラフルな蝶がフィールドを飛び回り、ライトロードの聖戦士を幻惑する。燃える斧のような杖を振って追い払おうとするものの、その前に目を回して座り込んでしまった。
ライトロード・ウォリアー　ガロス　攻１８５０→守１３００
「往生際が悪いな。ジェイン、ダイレクトアタックだ!」
「だがジェインの強化効果は、相手モンスターに攻撃するときのみ。この状況ならば、攻撃力が上がることはない。さらに幻蝶の護りのさらなる効果により、俺がこのターンに受けるダメージは半分になる」
ガロスにまとわりついていた蝶が、一斉にジェインの燃える剣に惹かれたかのように集まってきてパタパタと目の前を飛び回る。迷惑そうな顔をしながら振り下ろした剣

は、三沢の体をかすめただけに終わった。
ライトロード・パラディン　ジェイン　攻１８００→三沢（直接攻撃）
三沢　ＬＰ１３００→４００
「首の皮１枚か、まったくしつこいものだ。とはいえこのデュエルに勝って光の結社の素晴らしさを伝えるのも俺の仕事、文句は言ってられんな。ジェインの効果で２枚、ライラの効果で３枚、ガロスの効果で２かける２の計４枚を落としてさらにその中のライトロード、３枚のカードをドローしてターンを終了してやろう」
三沢　ＬＰ４００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：炎虎梁山爆
ＤＮＡ改造手術（炎）
万丈目（白）　ＬＰ２８００　手札：４
モンスター：ライトロード・ウォリアー　ガロス（攻）
ライトロード・パラディン　ジェイン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
状況は相変わらず、三沢が圧倒的に不利だ。だけど、僕だってこの１年ずっと三沢がデュエルするのを見てきたんだ。だからわかる。まだ、三沢は諦めてない。自分のデッ

キのことを知り尽くしている三沢が諦めてないってことは、きっとあのデッキの中にはまだ逆転のカードが眠っているはずだ。
「俺のターン、ドロー……よし、魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地のハイドロゲドン２体、オキシゲドン、豪雨の結界像、ウォーター・ドラゴンをデッキに戻すことで、カードを２枚ドロー。カードを２枚セットしてターンエンド。いいか万丈目、俺の永続トラップは、そう簡単に打ち破られるほど甘くはないぞ？」
　きっぱりと言い切ってのける三沢。わざわざそんなことを言ったということは、あの伏せカードは２枚とも永続罠なんだろう。
「俺のターン、全モンスターを攻撃表示に変更。その伏せカードで守ったつもりか？残念だったな、ライトロード・スピリット　シャイアを召喚。このカードならばたとえ貴様がグラビティ・バインドのようなカードをセットしていても、レベル３ゆえにすり抜けることが可能。そしてシャイアの攻撃力は、俺の墓地のライトロード１種類につき３００ポイントアップする」
　絶体絶命のピンチかに見えた一瞬。だが、ここでも笑ったのは三沢だったわけで。
「いいや、そうでもないさ。トラップ発動、激流葬！まんまと油断したな、万丈目。俺の知っているお前ならば、こんな見え透いた言葉には引っかからなかったぞ？」
「何!?」

万丈目の攻勢から一転し、再び空になるフィールド。わざと永続トラップ、という三沢のコンセプトである単語を口にすることで伏せカードがそうだと思い込ませ、いつでも警戒すべき激流葬を安全に通す……頭の回転が早い三沢ならではの一手だろう。実際、僕も引っかかった。ねえ、と同意を得ようとして横を見ると女性陣は、

「心理戦の基本だよね、だって。でも即興だろうから甘さが目立つかな、ってさ」

「ですねー。口先八丁は立派な忍者の武器の1つ、私ならもうちょっと捻れましたけど」

とかなんとか話してた。つくづく、女の子って怖いのね。

「まあいいさ。俺にはまだ切り札が残っているからな。墓地のライトロードが４種類以上の時、このカードはノーコストで手札から特殊召喚できる！これぞ俺の真の切り札、裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）!!」

でかい。月並みなようだけど、第一印象はそれだった。純白に輝く龍が、今まさに裁きを下さんと冷たい目で三沢を見下ろす。

「やはり、握っていたか……！」

「当然だ。もしこれが通れば斎王様の予言に反することになるが、その伏せカードを確認する意味も込めて一応使ってみるか。裁きの龍の効果を発動！ライフを１０００払うことで、このカード以外のあらゆるものを無に帰す！全てをなぎ倒す聖なる光、ジェネシス・レイ！」

万丈目（白）　ＬＰ２８００→１８００

「無論、そんなものは通さんぞ。トラップ発動、デモンズ・チェーン！この闇の鎖に縛られたモンスターは、攻撃も効果の発動もできずに沈黙するのみだ」

白い龍が全身を光らせて文字通り裁きの一撃を放とうとした瞬間、地面から無数の闇の鎖が生えてきてその羽を、口を、足を拘束する。光のエネルギーを吸い取られた裁きの龍がなんとか振りほどこうとするも、その鎖はびくともしない。

「だろうな。まあそう来るとは思っていた。だが、１つ教えてやろう。俺の手札にはまだ２体目のライラがいる、次のターンにはこいつを召喚してそんな鎖など破壊してやる。ターンエンドだ」

三沢　ＬＰ４００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：炎虎梁山爆

ＤＮＡ改造手術（炎）

デモンズ・チェーン（裁き）

万丈目（白）　ＬＰ２８００　手札：３

モンスター：裁きの龍（攻・デモチェ）

魔法・罠：１（伏せ）

ふう、とひそかに息を吐く三沢。前言撤回。さっき見た時はまだ諦めてないように見えたし実際諦めてはいないものの、これ、かなり追いつめられてる。勝利のビジョンが思い浮かんでない状態だ。ポーカーフェイスは割と得意な三沢だけど、注意して見てると完全に追い込まれてる時とカードがうまく引ければ十分逆転もあり得るときの差は案外わかりやすかったりする。たかだか２０年も生きてない人間の表情などお見通しだってチャクチャルさんが言ってた。

「三沢……」

せめて何か声をかけようとした瞬間、頭の中に声が響いた。

『……力が、欲しいか？この勝負、勝ちたいか？』

「あれチャクチャルさん何やってんの？」

『いや、今のは私じゃないぞ』

あんまりにもチャクチャルさん初登場シーンとかぶったセリフだったためなにかこの神様がよからぬことでも考えてるのかと思ったけど、どうやらそういうわけではないらしい。

『だいたい力が欲しいか、から入るのは我々のような役どころのお約束だろう。様式美というものだ』

え、あれってそんなしょうもない理由だったの？といいたいのをぐっと我慢する。ま

あ確かに、あれくらい強引な勧誘の方が手っ取り早いこともよくあるよね。じゃあそれにしても、この声はいったい誰が……？

『どうなんだ？力が欲しいというのなら、我はその声に応えよう』

どうやらこの声は僕とチャクチャルさん、それと三沢にしか聞こえてないらしい。不思議そうにあたりを見回す三沢を、何をやってるんだといわんばかりの目で万丈目が見ている。とすると、この声は三沢あてに喋っているんだろう。

『代価などはいらぬ。ただ、我を一声呼べばよい。選ぶも選ばぬもお前の自由』

「お、お前は……お前は一体」

『くだらぬ話だ。心の内ではもう気が付いているのだろう？自分の思いに、守りたいものに素直になればよいだけだ』

「俺の……」

なんだろう。そういえばこの重々しい声、どこかで聞いたことがあるような気もする。

「ねえチャクチャルさん、これって止めたほうがいいのかな」

『……いや、心配はいらないだろう。おそらくだが、あの申し出に敵意や裏はない。単純に腹に据えかねたのだろうよ、自分を倒した男があっさりと負けかかっているという事実が』

その言いっぷりからして、どうやらチャクチャルさんは声の正体に気づいているらしい。あとすこし、あとすこしで僕も思い出せそうなんだけど。

『さあ、決断しろ。力が欲しいか？』

まだ少し迷った様子の三沢だったが上の客席にいる僕をちらりと見て、目の前で苛立っている万丈目を見て、何か決心したように頷いた。

「……よし、わかった。俺の親友達を助けるため、俺の親友達を守るためだ。お前の力、貸してもらうぞ」

『それでいい。カードをドローし、我の力を存分に使うがよい』

「ああ。万丈目、いくぞ！俺のターン、ドローッ!!」

気合とともに引いたカード。その瞬間、空から天井を通り抜けて真っ赤に輝く炎がそのカードめがけて落ちてきた。あまりの迫力に怯んだ僕らをよそに、そのカードに炎がすべて吸い込まれていく。

「な、なんだ。一体何が起きているんだ！」

「さあな。実は俺にもよくわからん。だが万丈目、このデュエルは俺がもらうぞ。俺は自分フィールド上に存在する3枚のカード、炎虎梁山爆、ＤＮＡ改造手術、デモンズ・チェーンを墓地に送り！手札からこのカードを特殊召喚する！」

永続トラップ3枚の墓地送り。思い出した、あの声はまさに去年の終わりに聞いたあ

のモンスターの。

「降臨せよ、神炎皇ウリア！」

去年あれだけ苦労して封印した３幻魔の１体にして、永続罠を軸として戦う他に類のない効果を持ったモンスター、神炎皇ウリア。まさか、あの赤い体をもう一度見ることになるとは。

「３幻魔だと?!」

「ウリアの攻撃力は、墓地に存在する永続罠１枚につき１０００ポイント。俺の墓地にはすでに今送った３枚に加えモンスターＢＯＸのカードが存在する、よってその攻撃力は裁きの龍を上回る４０００だ！」

神炎皇ウリア　攻０→４０００

だが、万丈目のふてぶてしい顔は変わらない。あの伏せカードにはよっぽどの自信があったりするのだろう。でも、今の万丈目は忘れてるのかもしれないけれど。神炎皇ウリアは伊達に３幻魔やってない、そんな伏せカード１枚に揺らいだりはしないのだ。

神炎皇ウリア第２の効果は、トラップディストラクション……相手フィールドの伏せカード１枚を、チェーンすることを許さず１ターンに１度ノーコストで破壊する恐ろしい能力。三沢も言ってたけどおそらくあのカードはバーンカード、それも今まで使ってこなかったことを見ると魔法の筒のように発動条件があるカードなのだろう。だと

すれば、まさか三沢が勝負を焦って効果の使い忘れなんて初歩的なミスをするはずもないし、せっかくの予言とやらもトラップディストラクションの敵ではない。この勝負、どうにか三沢が勝ってくれそうだ。

だが、なぜか何かをウリアと相談する三沢。何やってんのさ、このまま効果を使って安全に攻撃するだけなのに。さすがに個人的な会話までは聞き取れないので何を喋っているかはわからないけど、なぜか少しだけ嫌な予感がした。

「待たせたな、万丈目。神炎皇ウリアで裁きの龍を攻撃、ハイパーブレイズ！」

そしてなぜか、最後まで効果を使わずに攻撃宣言をする三沢。ウリアの２つあるうち下の方の口が開き、そこから炎を吐きだす。

「ふ、馬鹿め。勝負を焦ったか、トラップ発動！やはり斎王様のお言葉は正しかったようだな、魔法（マジック）の筒（シリンダー）！相手の攻撃を無効にし、攻撃モンスターの攻撃力ぶんのダメージ、つまり４０００のダメージを与える！」

神の炎を吸収し、そっくりそのまま跳ね返す茶筒程度の大きさの筒。自分めがけて襲い掛かるその炎に、三沢はふっと微笑んで静かに目を閉じて。

三沢　ＬＰ４００→０

「三沢ー!?」

そのまま、なにもせずに吹き飛んで行った。

「う、うう……」
　倒れた三沢に僕らが駆け寄る前に、万丈目がすっと手を差しのべる。その手を、三沢が掴んで起き上った。
「ありがとう、万丈目。おかげで俺も目が覚めたよ」
「ふ、ようやく理解してくれたか、三沢。さあ、これがお前のホワイト学生服だ」
「おお、美しい色だな」
　そんなことを言いながら、今の今まで着ていた黄色の上着を脱いで６つのデッキケースがくっついたあの服をむき出しにした後、いそいそと白い学生服を羽織る三沢。嘘……でしょ？
「どうだろう、ちゃんと似合っているだろうか」
「ああ、安心しろ。それじゃあ、斎王様に報告に行くからついてきてくれ」
「わかった。あ、そこの君。すまないが、その黄色い服はもういらないんだ。適当に捨てておいてくれないか？」
　僕に向かって最後にそう言い、万丈目について歩いていく三沢。何と言っていいのかわからないうちに、僕らをよそに２人はデュエル場の外に出て行った。

ターン４２　冥界の河と三連コンビ

「明日ぁ!?」
　今聞いた言葉が信じられず、思わず大声を上げてしまう。ええ、と、校長の椅子にどっかりと座るクロノス先生が重々しく頷いた。
「え、ちょっと今なんて言いました先生、明日ってーとトゥデイのことですか!?」
「シニョール清明、気持ちはわかるけど落ち着くノーネ。それと高校生にもなったんだからさすがにＴｏｄａｙ（今日）の意味ぐらい覚えておいてほしかったでスーノ」
「う……め、面目ないです」
　思えば、あれは今朝のことだった。学校に来たらクロノス先生から呼び出しを食らい、はて何やったのがばれて怒られるんだろうと行ってみた。するとおもむろにカーテンを閉められ、スルスルと天井からスクリーンが垂れ下がって映像が映りこんだ。あれ、これ前もやったような。そう思いながら見ていると、案の定つい数日前見たのと同じようにノース校の一之瀬校長……が……。
　それだけだ。それから後のことは、正直思い出したくない。どう考えてもめんどくさい予感しかしないし。

「……んで先生、これどーしましょう」
「こっちが聞きたいノーネ、といいたいところですーガ。今アカデミア本校の校長はワタクシ、クロノス・デ・メディチですからネ、なんとかするしかないでショウ」
「ですよね……」
「それで申し訳ありませんが、シニョール清明。こちらも連絡がつけられないか試してみますから、そちらのことは任せますーノ」
「わかりましたよ。何かうまいこと考えときます」
「本来ならばこういったことは教師の仕事なのですが、重ね重ね申し訳ないノーネ」
「そう思うなら成績オマケしてくださいよー。じゃ、失礼します」
　どんどん空気が重くなっていったので少しでも流れを良くしようと軽口をたたき、そのまま部屋から出ていく。扉が閉まる瞬間、電話をかけようとするクロノス先生の姿が見えた。
「って、任せますーノ、って言われてもねえ。……どうしようかなあ」
「何の話だったの、だってさ」
「あ、夢想。相変わらず脈絡なく出てくるよね」
「褒め言葉かな？なんだって」
　別にそんなつもりはなかったけど、キラキラと輝く笑顔を見れたのでよしとする。う

ん、ちょっと癒されたしもうそれでいいや。
「と、そういや夢想にも関係ある話か。あんまりいい知らせじゃないんだけどさ、今年もノース校との学校対決するって話はこの前聞いたでしょ？」
「楽しかったねー、って」
「まあね。で、それはそれでいいんだけどさ。今朝になっていきなり音信不通だったノース校から連絡が入ったわけよ」
「ふむふむ」
こくこくと頷きながら話を聞く夢想。ちょっと辺りを見回して見える範囲に白い制服が1人もいないことを確認してから、改めて話の続きにかかる。
「……多分、あっちはほぼ全滅してる」
「……光の結社、ね」
軽く形のいい眉をひそめる夢想。さすがに勘がいい、一言で理解してくれるとは。
「うん、少なくとも一之瀬校長はもうやられてる。激しく似合ってなかったけど、白服」
「本当に全員なの？校長がそうやって言ってたの、だって」
「いや、そうは言ってないんだよね。あくまでも『ほとんど』だし。ただ、どっちかっていうとこっちの方が差し迫った問題なんだけど、どうもあっちは全校ほぼ一致で明日こっちに来ることが決定したらしいのよ」

それはまた、とため息を吐く夢想。だけど、それだけならまだいい。明日ノース校がこっちに来るということは、光の結社の人間が一気に増えるってことだけじゃない。

「メンバー……どうしよう……」

ノース校との対抗戦が、もう明日に迫っているということでもあるのだ。去年同様５対５の団体戦ってことは、当然５人のメンバーを用意しなくちゃいけない。いけないってのに、こっちには去年の大将だった十代がいない。先鋒だった明日香や次峰だった三沢、それにこっちの代表候補として有力だった万丈目は全員光の結社入りで連絡が取れないし、そもそもクロノス先生とも話し合ったけど光の結社の人を出す気はさらさらない。

光の結社以外の人で、あと3人のメンバーを決めてほしい――――それが、今回クロノス先生に頼まれた僕への『お願い』だ。

「ちなみに、候補は誰かいるの？だってさ」

そう言われ、とりあえずぱっと思い浮かんだ人間を指折り数えていく。

「まず稲石さん……は廃寮から外に出ることができないからダメ。あとは翔や剣山、葵ちゃんぐらいかなあ、めぼしいところは」

やたらと知り合いばっかりだけど、別に他意はない。そもそも生徒じゃない稲石さんは別として、今名前を挙げた面々は校内でもじわじわ実力を知られつつあるかなりの腕

の持ち主なのだ。ほかにも神楽坂とかが戦力として欲しかったところだけど、彼はもう光の結社の一人だからしょうがない。
「とりあえず、剣山から順番にあたってみようかな」
必要人数は3人、そして候補も3人。一発で決まればいいんだけど。もしダメだったら、あとは吹雪さんにでも頭を下げに行こうかな。

「ずいぶん楽しそうなイベントだドン、恐竜さんの力をノース校に見せてやるザウルス！」
「水臭いですよ、先輩。引き受けるに決まってるじゃないですか」
「え、僕なんかでいいんスか!?ちょ、ちょっと怖いけど、やるよ！」

「一発で決まったー!?」
「いいことじゃない、だってさ。はい、お茶飲む？」
「あ、いただきます」
いや、まさかこんなにあっさり決まるとは思ってなかった。葵ちゃんと剣山が引き受

けるのはなんとなく予想ついてたけど、正直なところ翔の説得にはもっと時間がいると思ってた。これまでは十代っていう超積極的なデュエルの天才がすぐ近くにいたせいでこれまでそんなに目立ってなかったけど、翔もちゃんと成長してるんだなあ。

「でもまあ、しみじみしてる場合じゃない、か。えーっと、今年は先鋒ティラノ剣山、次峰葵・クラディー、中堅丸藤翔、副将河風夢想に大将遊野清明ですよっと」

「クラディー？」

「うん、葵ちゃんの本名だって。縮めてクラちゃん」

クロノス先生に提出する用のメンバー表にさらさらっと名前を書き、なるべく丁寧に折りたたんで上着のポケットに入れておく。あとで出しに行かないといけないな、忘れないようにしないと。

夢想が買ってくれた小ぶりなペットボトルの緑茶を一息に飲み干し、よっこらせいと立ち上がる。去年はまだ商売を始める前だったから思いつきもしなかったけど、今年は違う。人がたくさん動くなら、そこにビジネスチャンスあり。明日からなるであろうお祭り騒ぎの雰囲気を利用して菓子類を売りまくり、なんとしてもひと儲けしなくては。たとえ光の結社でも、お金さえ払ってくれればお客さん。ケーキやらクッキーやらの生地をたっぷり作ったり、最近手を出し始めた和菓子の準備をしたりと、やることはたくさんある。

「とゆーわけで、僕はもう行くからね。じゃ、また明日ー」
「うん……ねえ清明、少しいいかな、ってさ」
「んー？」
立ち上がったままのポーズで振り返り、何かを考えている様子の夢想に向き直る。はて、なんだろう。できれば手短に済ませてほしいんだけども。
「ちょっと今日は、私にも手伝わせてくれないかな？」
「へ？珍しいね、夢想がそんなこと言うなんて」
夢想は普段、ＹＵＯ　ＫＮＯＷにとってかなりの上客ではある。しょっちゅう店に来てくれるし、買い方も気前がいい。もっとも、たいていは女子寮でのお茶会用にまとめ買いしてるだけみたいだけど。だけど、これまで厨房まで手伝いに来たことはない。そう思っての返しだったが、彼女は軽く肩をすくめるのみだった。
「別に。……なんとなく、ね。嫌な予感がしたの、だって」
ふーむ。でも、葵ちゃんのほかに手先が器用な夢想が入ってくれるんならこっちとしては断る理由はないか。ありがたく受け取っておこう。

その３分後。

「あー……これ？嫌な予感って」
「多分ね、ってさ」
「やっぱり？ですよねー」
　フラグというか、なんというか。
「何をゴチャゴチャ言ってやがる！」
「さあ、俺たちとデュエルだ！」
「かかってこいよ、光の結社の結束を見せてやる！」
　僕ら二人の前に立ちはだかる、白い制服の３人組。よし、右から順にその１、その２、その３と呼ぼう。
「へっ、どうした？ビビってんのかよ！」
　なんと言っていいのかわからなかったので何も言わずに立っているのをどう解釈したのか、ノリノリで挑発の言葉をぶつけるその２。それを受け、その１とその３が高笑いした。
「ハハハ、無理もないぜ高野！なにせ俺たちのコンボはアカデミアでもトップクラスだからな！」
「違いないぜ、中野！いくら少しは名の知れたこの二人でも、俺たちのコンビネイションの前にはかかって来いっていう方が残酷ってもんさ！」

そう言い、また3人でわっはっはと笑いあう3人組。……これ、この隙に隣を駆け抜けたら逃げられるとかそういう抜け道はないだろうか。ふとそんなことを思いつき、チラッと廊下の隅に目をやる。だがその瞬間にその1、まだ名前のわからない最後の一人がデュエルディスクを素早く構えて起動させた。

「おーっと、この野中様の目をかいくぐって逃げられると思うなよ？3対2の変則デュエルでいっぺんに二人まとめて倒してやるからな！」

右から順に野中、高野、中野ね。よし、覚えたぞ。どうやら逃げられないっぽいし、だったらここで相手する方がいいだろう。でも、タッグデュエルならやったことはあるけど3対2ってのは初めてだな。こんな時にそんなこと言ってる場合じゃないのかもしれないけど、ちょっとわくわくしたり。

「夢想、悪いね迷惑かけて」

「ううん、何となくこうなる気はしてたから、だってさ」

「「それじゃあ……」」

いつも通りの掛け声をしようとしたら、夢想と声がはもった。何が言いたいのかをすぐに理解して、アイコンタクトでタイミングを合わせる。

「「デュエルと洒落込もうか（洒落込みましょう）！」」

「先行はまず俺、野中がもらったぜ！よしよし、いい手札だな。カードを3枚セットし

て、クリバンデッドを召喚。そしてエンドフェイズ、通常召喚したクリバンデッドをリリースすることでデッキトップ５枚をめくり、その中から魔法か罠カード１枚を手札に加える。１枚目から順にタスケルトン、攻撃の無力化、速攻のかかし、ネクロ・ガードナー、だめだな。攻撃の無力化を選択して、あとは全部墓地に送ってターンエンド」

「あ、終わった?じゃあ私のターン、ドローだってさ」

ターンが変わり、自然な動きでカードをドローする夢想。これで彼女の手札は初期手札含めて９枚……って、あれ?同じことを思ったようで、中野が文句の声を上げた。

「ヘイ、ちょっと待てよ!?それ、手札多くね?」

「これかな?だって２対３なんですもの、当然初期手札８枚ぐらいのハンデはくれるんでしょ?ってさ。ほら、清明もあと３枚引かなきゃ駄目だよ」

「ほえ?え、あ、うん、じゃ、じゃあ３枚ドロー……」

あまりといえばあまりに堂々とした態度につい流され、言われたとおりにカードを２枚引く。い、いいのかなあこれって。きっとあの３人組が何か言ってくるかと思ったけど、見逃すことに決めたらしい。まあ相手が夢想だから、ここでスルーしたくなる気持ちはわからんでもない。僕なんかはもう慣れてきたから平気だけど、初対面の人にとって彼女のペースというか世界観はとっつきにくいだろう。

僕がカードを引いても何も言われなかったのを見て満足そうに頷き、再び彼女のター

ンが始まった。

「ボーンクラッシャーを攻撃表示で召喚、カードを2枚セットしてターンエンドかな、だってさ」

ボーンクラッシャー　攻１６００

今回の変則デュエルでは、未行動のプレイヤーへの直接攻撃を防ぐためにすべてのプレイヤーが1度ターンを終えるまで攻撃宣言をすることができない。夢想もそんな状況で全力で飛ばしていくのはさすがにまずいと考えたのか、当たり障りのない無難な布陣を引いたのみでターンを終了した。

「こ、この抜け目ないリアリスト女め……！俺のターンか。ドローさせてもらいますかね」

そして次は、高野のターン。一人目の野中はかなり守りに重点を置いたデッキの使い手みたいだったけど、この男はどんなデッキを使ってくるのだろうか。

「電動刃虫（チェーンソー・インセクト）、召喚！」

電動刃虫　攻２４００

ギュイイイインとうなりを上げる鋭いのこぎりを抱え持つクワガタムシが、ガチガチと威嚇の構えをとる。電動刃虫、高い攻撃力を持つかわりに戦闘を行うだけで相手にドローを許すデメリットを持ったあのカードが入っているということは、かなり高野の

デッキパターンは縛られるだろう。考えられるものとしては……えっと、なんだろ。だめだ、らしくないことしようとしても結局付け焼刃の知識じゃどうにもならん。
「電動刃虫ね。【昆虫族】か【スキルドレイン】、それとも【ガーゼット】とかかな、だってさ」
……さっすが夢想。
「カードをセットして、ターンエンドだ」
「僕のターン！」
そして、やっと回ってきた僕のターン。合計９枚もある手札をざっと見て、何をすべきか考える。
「よし、ここは。ハンマー・シャークを守備表示で召喚して、効果発動！このカードのレベルを１下げて……」
「おっと、待ちな！トラップ発動、スキルドレイン！１０００のライフを払って発動したこのカードが場にある限り、場で発動するすべてのモンスター効果は無効に……」
「甘いよ、ってさ。トラップ発動、砂塵の大竜巻！この効果を使って、スキルドレインを破壊するみたい」
「いいや、何のためにこの野中がカードを３枚も伏せたと思ってんだよ！その砂塵に対してカウントラップ、盗賊の七つ道具を発動するぜ。１０００ライフを払うこと

で、相手の発動したトラップを無効化する！」
高野　ＬＰ４０００→３０００
野中　ＬＰ４０００→３０００
うーん、さすがにこれだけ人数が増えると組まれるチェーンの数もわけわからんことになってくるな。でもまあ要するに、夢想の砂塵が不発になってスキルドレインが通り、僕のハンマー・シャークの効果が無効になったってことだ。残念。
「だけど、特殊召喚はさせてもらおうかな。自分フィールドに水属性モンスターが存在するとき、手札のサイレント・アングラーは特殊召喚できる！来い、サイレント・アングラー！」
サイレント・アングラー　守１４００
「さらにカードを2枚セットして、ターンエンド」
「よし、俺の番だな。ドロー！へへへ、さっきのスキドレやら七つ道具やらでライフが減っちまったろ、今回復させてやるからな。魔法発動、成金ゴブリン！デッキからカードを1枚引く代わりに相手……高野のライフを１０００回復させる！」
「おう、いつもすまんな中野」
「なっ!?」
高野　ＬＰ３０００→４０００

こ、これはまずい。成金ゴブリンがカードを1枚引ける通常魔法として成り立っているのは、その引き換えに『相手』のライフポイントを１０００回復させることにある。おそらく、この3人は初めから3人一組のチーム戦を前提としたデッキを組んでいるんだろう。最初の一人、野中がネクロ・ガードナーや攻撃の無力化、盗賊の七つ道具などでひたすら妨害をかける。そして中野がライフを供給する。そして最後の一人、高野がスキルドレインを生かした高攻撃力でガンガン攻め立てていく。

普通デッキを組む時は個人戦しか想定しないから、防御の手と攻撃の手をある程度バランスよく混ぜざるを得ない。だけどあの3人組は、個人戦では勝ち目なんてない攻撃特化、妨害特化、補助特化のデッキをそれぞれ組んでいるのだろう。この3人、早いとこ誰か1人でも潰さないとかなり厄介な相手になりそうだ。

「次、2枚目の成金ゴブリンだ！野中、お前も回復しとけよ」

「サンキュー、中野。今回も頼りにしてるからな」

野中　ＬＰ３０００→４０００

いかん、これはいやらしい。こういう時はＲＰＧの大原則、まずは補助役から倒すのみ。ライフ回復の中野は今のところ無視して、うまいこと攻撃役の高野をいなしながら妨害の野中を潰す。それが一番こっちに勝ち目があるだろう。

ある程度の作戦が立ったところで、隣の夢想にアイコンタクト。彼女も考えることは

同じだったらしく、すぐににっこりと頷き返す。
「カードを２枚伏せて、素早いモモンガを守備表示で召喚。ターンエンドだ」
素早いモモンガ　守１００
これでやっと全員がそれぞれの１ターン目を終えたことになる。ただ、次に動くのが真っ先に潰しておきたい妨害の野中だというのが気にかかるけど。
野中　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：２（伏せ）
夢想　ＬＰ４０００　手札：７
モンスター：ボーンクラッシャー（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
高野　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：電動刃虫（攻）
魔法・罠：スキルドレイン
清明　ＬＰ４０００　手札：５
モンスター：ハンマー・シャーク（攻）
サイレント・アングラー（守）

魔法・罠：２（伏せ）
中野　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：素早いモモンガ（守）
魔法・罠：２（伏せ）

「俺のターン、ドロー！いいぞいいぞ、２枚の手札をセット。これでターンエンドだ」

俗に言うガン伏せ。普通のデッキならまだブラフが混じっている可能性もあるが、妨害札ばっかりたんまり仕込んであるであろうあのデッキなら多分全部が本命だろう。そこを夢想がこの１ターンでどこまで切り崩せるか、それが大事なところだ。僕のデッキに自分以外をサポートするカードなんて攻撃反応のカードぐらいしか入ってないからできることは少ないけど、任せたよ、夢想。

「私のターン。うーん、……どうしようかなあ、って」

あれ、夢想らしくない弱気なセリフ。と思ったけど、よく考えたら今はスキルドレインの適用状態だった。夢想のエースモンスターであるワイトキングは効果によって攻撃力を馬鹿みたいにあげていくカードだから、その効果を無効にされたら当然戦力はがた落ちする。

とまあ、それが常識というものだろう。でもきっと夢想だから、何か突拍子もないことをしてくれるに決まってるさ。

「決ーめた、だってさ。魔法発動、大嵐。これで、すべての魔法カードも罠カードも破壊！」

出た、対伏せカードにおいて最高峰のカード。荒れ狂う風がフィールドを駆け廻り、全てのリバースカードを空に巻き上げようともする。だけどガン伏せは伊達じゃなかったらしく、まず野中が反応した。

「させるかよ！リバースカードオープン、神の宣告！ライフポイントを半分払う代わりに、その発動と効果は無効になる！」

野中　ＬＰ４０００→２０００

「ライフを半分払ってくれたんだ、使いどころはここ一択だね。その神の宣告に対してトラップ発動、魔宮の賄賂！カードを１枚ドローさせる代わりに、その発動を無効にさせてもらうよ」

野中の伏せカードの前に両手を広げて両手を広げて立ちはだかり、嵐の勢いを鎮めようとする白い服を着た老人。そこにどこからともなくいかにもな悪人顔の着物を着た商人風の男が走ってきて、老人の袖にスッと金貨を差し込む。揉み手しながら愛想笑いを浮かべる商人の前に、老人はため息をついて引き下がっていった。よ、よかった伏せといて。ここでこの大嵐が通らなかったら、今後の展開がガラッと変わってくるところだった。

「甘い甘い甘い！魔宮の賄賂に対してカウンター発動、ギャクタン！相手の罠カードの発動を無効にし、そのカードをデッキに戻させる……これで神の宣告が有効になって、大嵐は無効だ！」

一仕事やり終えた男の顔で踵を返す商人の後ろから、何人もの警官がどやどやとやってくる。収賄は犯罪だからね、お上に見つかっちゃあどうしようもない、というわけか。

「なんて、甘いこと言ってる場合じゃないか。どーする、夢想？もうこれ、僕にはどうしようもないけど」

ちょっと不安になり、思わず口を突いて出た弱音。だが、それでも夢想は笑って見せた。

「残りライフは２０００、でしょ？大丈夫、このターンで確実にとどめは刺すから、だってさ」

「……どーやってかは聞かないでおくから、全面的に任せたよ」

「うん。トラップ発動、八咫烏の躯。この効果でカードを１枚ドローして、これで仕込みは整ったよ。魔法カード、ポルターガイストを発動するね。このカードは相手の場の魔法か罠１枚を持ち主の手札に戻すけど、この発動と効果を無効にすることはできないんだって。さよなら、スキルドレイン」

手を触れていないのに勝手にモノが動く怪奇現象、ポルターガイスト。その名にふさ

わしくスキルドレインのカードがふわりと宙に持ちあがると、そのまま高野の手札に収まった。
「さらに手札からスカル・コンダクターの効果を発動、このカードを手札から墓地に送ることで、攻撃力合計がぴったり２０００になるようにアンデット族モンスターを手札から特殊召喚するよ、だって。私が呼ぶのは、攻撃力１０００のバーニング・スカルヘッド２体みたいだよ」
バーニング・スカルヘッド　守８００
バーニング・スカルヘッド　守８００
ガイコツの指揮者に誘われて、ふわふわと飛んでくる燃え盛る頭蓋骨ふたつ。一斉に口を開き、野中めがけて火の玉を吐きだした。
「ひいっ!?な、なんだぁ!?」
「バーニング・スカルヘッドの特殊効果発動。手札から特殊召喚に成功した時、相手に１０００のダメージを与えるみたい」
「なんだと!?それじゃあ、１０００かける2で俺のライフがなくなっちまうじゃねえか！中野、なんとかしてくれよ！」
「はいはーい。トラップ発動、フュージョン・ガード。相手が効果ダメージを与える効果を使った時、そのダメージを無効にしてエクストラデッキの融合モンスターをランダム

に1体墓地に送る。重装機甲　パンツァードラゴンか、まあこれしか入れてないから当然だな」

火の玉のうち1つが空中ではじけ飛ぶが、まだもう1つ残っている。そちらは妨害も受けずに、野中に命中した。

野中　ＬＰ２０００→１０００

「アチャチャッー：ふう、危なかったぜ。惜しかったな、もう少しで俺を倒すことができたのによ。確かに俺の場にモンスターはいないが、墓地にはネクロ・ガードナーがいる。それに伏せカードのうち1枚がさっきサーチした攻撃の無力化だってことはわかってるんだろ、ああん？もうバーンも球切れだろうし、さすがにこのターンで俺にとどめを刺すのはなかなか厳しいもんがあるんじゃないか～？」

確かにその通りだ。あれだけの布陣を張られたら、さすがに攻撃で突破するのは難しいだろう。だけどまあ、それもやっぱり一般論だ。相手が悪かったね、ご愁傷様でした、としか言いようがない。

「魔法カード、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動するね。この効果で場のアンデット族モンスター2体、バーニング・スカルヘッド2体を融合、だってさ」

「龍の鏡……？夢想、ドラゴン族融合モンスターなんて持ってたっけ」

ああ、そういえば、と薄く笑う夢想。何となく、その笑顔にゾッとするものを感じた。

「まだ清明には見せてなかったね、だってさ。これが私の、もう1つのエースカード。冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い。融合召喚、冥界龍　ドラゴネクロ！」
　第一印象は、鬼だった。鬼のような顔つきに上半身、そして蛇のような形になっていて足のない下半身。名状しがたい声で叫び声を上げる冥界の龍が、狂気に満ちた瞳で3人の敵を見下ろす。
　冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００
「大型モンスターを出しやがったよ、この女……おい野中、奈落かなんか伏せてないのか！」
「すまん……もう神の宣告も使っちまったし、この無力化じゃないほうの伏せカードも召喚を止めるためのじゃないんだよ。なあに、見えてるぶんだけでもこんだけ攻撃妨害のカードがあるんだ、このターンで俺を倒すなんてはったりに決まってるさ。さらに、俺にはこのまだ正体を知られてない伏せカードもあるわけだしな。余裕余裕」
「まだ私はこのターン、通常召喚してないね。フォース・リゾネーターを通常召喚するよ」
「へ？」
　フォース・リゾネーター　攻５００
「フォースさんの効果を発動。このカードを墓地に送って私のモンスター1体を選択。

そのモンスターがバトルを終えるまで、相手はあらゆるモンスターを対象にしたカードを発動できないからね、なんだって」
「ほ、ほう。や、ややややるじゃねえか。だがな、お、俺は知ってるんだぜ。ネクロ・ガードナーは対象をとらない効果、そんなもんじゃあ防ぎきれないもんな、うん」
　ああ、あの伏せカードも対象をとるような何かなんだな、きっと。さすがに僕でもしないであろう、なかなかわかりやすい反応だ。
「なら、試してみるかな?ドラゴネクロでダイレクトアタック、ソウル・クランチ!」
「わーーっ!俺は、墓地からネクロ・ガードナーの効果を発動!このカードを除外して、相手の攻撃を無効にする!」
　半透明の闇の戦士が地面から現れ、攻撃をその身に引き受けようと野中の前に両手を広げて立ちはだかる。だが、その体はドラゴネクロの牙に引き裂かれる前に再び地面の中に引きずり込まれた。
「これが私の最後の手札……スカル・マイスターの効果を発動、だってさ。このカードを手札から捨てると、１回だけ相手が墓地で発動した効果を無効にできるみたい」
「そ、そんな～!」
　冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００→野中（直接攻撃）
　野中　ＬＰ１０００→０

「ちっくしょう、マジック・ジャマーも伏せておいたってのに、全部機能しないなんて」
「ふふふ。次は、回復役のあなたかな。でもボーンクラッシャーで攻撃したいのに、リクルーターのモモンガがいるからやめた方がいいかな？いいよ、このターンは見逃してあげる。ボーンクラッシャーを守備表示に変更、ターンエンド」
「ひ、ひいっ！」
　ライフが０になってその場にへたり込んだ野中に天使のような笑顔で微笑みかけ、くるりと首を回して次のターゲットと目を合わせる。すっかり気圧されて後ずさりする中野に、高野からのヤジが飛ぶ。
「バカヤロー、ノーダメージでビビってんじゃねーよ！野中と違って、お前はしっかり俺のサポートしろよ」
「な、なめんなよ！だいたいアタッカーがお前だからって、いつもいつもそんなに威張りくさることはねーだろ！」
　あれ、もう仲間割れだろうか。しかし、こいつら。最初のターンの連携に度肝を抜かれはしたけど、もしかして。
「多分同じこと考えてるよね、清明。この３人組は、個人での実力は下の下クラス……私もあなたも、普段通りにデュエルすれば十分倒せる相手だね、だってさ。３人がかりというプレッシャーを相手に押し付けることである程度それっぽくはなれるけど、所詮

そんなものは付け焼刃でしかないよ、って。だから大丈夫、清明。ここは勝つよ、だって」

「う、うん……！」

心強い夢想の言葉。実際、一見かなりのものに見えた連携も仲間が1人倒れただけですぐにダメになったりそもそも肝心の妨害役が2人がかりとはいえほんとにあっさり突破できちゃったりと、この3人組はなんか詰めが甘い。でもなんだろう、もう一言一言がこっちの死亡フラグにしかつながってないような気がするんですが気のせいでしょうか夢想さん。

「え、ええーい！こうなりゃままよ、速攻魔法、スケープ・ゴートを発動！これにより俺の場に、４体の身代わり羊が生み出されるぜ」

羊トークン　守０
羊トークン　守０
羊トークン　守０
羊トークン　守０

「いたずらに数を増やしても、私にも清明にも勝つことはできない……それが分かっているのかな、って」

「まだだ！魔法カード、アームズ・ホールを発動するぜ。このカードはデッキトップを墓

地に送ってこのターンの通常召喚を封じる代わりに、デッキか墓地の装備魔法をサーチ！団結の力を手札に加えて、そのまま電動刃虫に装備！さらにもう1枚、さらにさらに追加でもう1枚！」

　団結の力は、装備モンスターの攻守を自分のモンスターの数1体につき８００もアップさせる効果を持っている、説明不要なぐらい有名なデーモンの斧と同じく単体強化の基準ともいえるカード。今の高野の場には羊トークン含めてモンスターが5体、つまり団結の力による強化値は。

「い、いちまんにせん……？装備魔法だけで、攻撃力１２０００の上昇？」

　電動刃虫　攻２４００→１４４００　守０→１２０００

「女から倒してもいいが、今の女に手札はない……ここは、次にターンが回ってきてまだ手札もある男を倒す！電動刃虫、やっちまえ！」

　派手に火花を散らしながら、チェーンソーのような顎が鮫の体を真っ二つにせんと迫る。だけど、僕だってただ単に何も考えずにハンマーを攻撃表示にしておいたわけじゃあない。

「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を無効にして、さらに自分の場の状況に応じて相手にダメージを与える！僕の場には魚族モンスターが2体、よって１６００の効果ダメージ！」

「何!?くそ、どうすることもできねえ……」
「効果ダメージ、ね。わかったわかった、やりゃあいいんだろやりゃあ。リバースカード、防御輪を発動。あらゆるトラップカードによる効果ダメージは、これで０になる。惜しかったな、バーンが通せなくてよお」
　む、ダメージは防いじゃったか。まあいいや、攻撃を止められたんだから十分仕事したといえるだろう。生き延びれたことに対して安堵の息をつくと、心底ブチ切れた感じの叫び声がした。見ると、高野が顔を真っ赤にしてプルプル震えている。
「て、てめえ、中野！なんてことしやがる、よくも変なカードチェーンしやがったな！」
「はぁ？お前、ダメージ止めてもらってんのになんなんだよその言いぐさ」
「俺の攻撃が防がれた、どうするピンチだ！とそこで、華麗に手札から飛び出すこの俺の最後の手札、ダブル・アップ・チャンス！そんなこともわかんねえのかよお前は、別のカード挟んだら発動できないだろが！」
「ガキかお前は！もう俺は知らん、おいそこの二人！」
「あ、僕ら？」
　よくわからない理由で再び喧嘩を始めた二人を止めてやるべきか考えながらじっと見ていると、いきなり中野がこっちに話を振ってきた。正直こっちに持ってこられても、困る。

「いきなり悪かったな、俺はもうサレンダーする。このアホは知らんから、手数かけてすまないけど思いっきり叩きのめしておいてくれ。あばよ、高野。短い間だったが、お前とのコンビなんぞもう2度とやらねえよ」

それだけ言うと1人でサレンダーし、まだまだ怒りが冷めやらないといった様子で野中を連れてどこかへ行ってしまった。あんぐりと口を開けて放心状態の高野に、わざとなのかそうでないのか夢想が追い打ちをかける。

「どうするのかな、だって。1対2なら私たちが勝つだろうし、あなたも負けないうちにサレンダーするの？」

「ち、ちくしょう、やってやらあ、やってやらあ！俺の場の電動刃虫は攻撃力１４４００、そう簡単にやられはしない！」

そして、僕のターンだ。とはいえ、もうこの手札でやることなんて1つしかないんだけどもね。

「僕のターン、ウミノタウルスを通常召喚。さらにサイレント・アングラーを攻撃表示に変更っと」

ウミノタウルス　攻１７００

サイレント・アングラー　守１４００↓攻８００

「へっ、なるほど読めたぜ。その雑魚モンスターで守備力０の羊トークンを倒して、少し

でも攻撃力を下げようってんだな？いいぜ、そんなセコイ手なら痛くもかゆくもない」
「痛くもかゆくも、ね。なーにトンチンカンなこと言ってんだか。アングラー、その赤い羊に攻撃！」
サイレント・アングラー　攻８００→羊トークン　守０（破壊）
高野　ＬＰ４０００→３２００
「え……？」
「ウミノタウルスの特殊能力は、貫通。それもただの貫通じゃない、僕の場に存在する全ての水族、魚族、海竜族にその効果は分け与えられる」
「そ、そんな、それじゃ……」
今頃気づいたらしい高野に、夢想の真似をしてにっこりと笑いかけてやる。
「とっくに仕掛けは終わってたのさ、あとは釣り竿引き上げるだけ。さあ、ウミノタウルス！ハンマー・シャーク！２体の羊に攻撃よろしくっ！」
ウミノタウルス　攻１７００→羊トークン　守０（破壊）
高野　ＬＰ３２００→１５００
ハンマー・シャーク　攻１７００→羊トークン　守０（破壊）
高野　ＬＰ１５００→０

「だ、だめだ。こんなの勝てるわけなかったんだー！」

そう言い残し、こっちが声をかける前に逃げ出す高野。ふう、よくわからない相手ではあったけど、時間はずいぶん経っちゃったなあ。

「突貫工事で作ってかないとキツイかな？じゃあ、改めて手伝い頼むよ、夢想！」

「うん。任せて、だって。ただ、なんでだろう。まだ嫌な予感が消えないんだけど、なんだって」

ふむ。それは多分、すぐ行くって話をすっぽかしてデュエルしてた僕に対して怒ってるであろう葵ちゃんに僕が説教されるということだろう。

頭の中で、もうとっくに準備を始めているであろう彼女になんと言って謝ったら一番怒られる時間が短くなるかを何パターンかシュミレーションしながら走っていく。うーん、何を言っても怒られるだろうなあ……。いや、きっと道はあるはずだ。説教されるのは確定としても、その時間が1分1秒でも短くなるすんばらしい言い訳ってもんが。

だけど、別にそこまで離れているわけではない。結局思いつかないまま、あっさりと到着してしまう。こうなったら仕方がない、正直に覚悟を決めよう。

そう思って自動扉の前に立とうとすると、中から1人の白い影が飛び出してきた。ぶ

つからないようにサッと避けると、その光の結社の誰かと思しき男は一言もしゃべらないまま廊下の向こうに消えていった。まさか、葵ちゃんのところにも!?

「葵ちゃん、大丈夫!?」

「先輩、ずいぶん遅かったですね。あれ？河風先輩まで、一体どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたも……葵ちゃん、今の誰だったの？」

「別に、としか言いようがないですね。強引にデュエル申し込まれたんですよ、まあ何とかなりましたけど」

　ということは、葵ちゃんも光の結社を撃退するのに成功したんだろう。まったく、はた迷惑な組織もあったもんだ。でもまあ、そのごたごたのおかげでまさかの説教なしで済んだんだからそこは感謝。珍しいなあ、いつもの彼女だったらそれはそれ、これはこれとして約束すっぽかしたことはキッチリ叱るタイプなのに。

「さ、始めましょうか。明日は商売のチャンス、でしょう？」

「もっちろん！さすがに僕の考えることもわかって来たね葵ちゃん。だけど試合が明日だし、それに響かない程度に自重しておかないとね。じゃあ夢想、悪いけどこの紙に書いた通りに小麦粉牛乳バニラエッセンスその他もろもろエトセトラ混ぜといてくんない？葵ちゃんはいつものクッキー生地ね。プレーンシナモン抹茶にチョコ……めんどくさいから省略。全部均等に作れるだけお願いねー。その間僕はこっちを作って

「……

ターンＥＸ―３　鉄砲水と光、光、光

一人、また一人と光の結社へ入っていく仲間に不安を覚えながらも、遊野清明は明日の戦いに向けて静かに眠っていた。その寝顔の横に、ちろりと動く影がある。いや、影という言葉ではまだ足りない。薄く月明かりが照らす部屋の中で、その部分にだけは光がない。それは、まさに闇そのもの。

すやすやと眠ったまま起きない清明のそばをしばらくうろうろしていた闇は、やがて音も立てずにするりと窓の隙間から屋根の上へと出て行った。

人とはかけ離れた姿ながらも、まるでぽっかりと浮かんだ月を見上げるような形になる闇。その体のどこかから、小さな声が響いた。

『あの日起きたことを言ったら、貴方はどう答えるのだろうな……』

声の主である闇を、人はみなこの名で呼ぶ。地に縛られた呪われし神――――地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）と。

なぜ、このような台詞を独白しているのか。それは、少し前にさかのぼる。それは、ユーノが光の結社の手に堕ちる、ほんの少し前の話。

『んー？まーた来たのか、懲りねー奴』

その日は、きれいな半月が出ていた。そのうすぼんやりとした光に照らされながら、すやすや眠っている清明を尻目にぽつりとユーノが呟いた。

『行くのか？』

その声に応え、どこからともなく地縛神の声が響く。無論、なんと答えるかなどわかっていた。なのでこれは、質問ではない。ただの確認だ。

『おう。だからその間、また結界頼むわ。万一のことがあっても、全力で何とかしてくれよ？』

『そうなる前に、勝ってきてくれると有難いがな』

「ワハハ、そりゃそうか。んじゃなー」

ポン、と実体化して地面に降り立ち、本来のこの部屋の主……遊野清明のデュエルディスクを腕に付ける。2、3度腕を振ってしっかり固定されたことを確かめ、彼はいつも通り気楽そうに外に出て行った。その姿がレッド寮からある程度離れたところで、寮の建物自体が青く光る炎にぐるりと囲まれる。その炎は地面を走り回り、やがて巨大なシャチをかたどった姿になった。もし、その様子を上から見る者がいればさぞかし驚いたろう。その姿はまさに、去年一夜のうちに跡形もなく消え去ったナスカの地上絵の

姿そのものだったのだから。
　その様子を一切振り返ることなく、ゆっくりと歩くユーノ。レッド寮が立地している崖の上から少し行った先の浜辺で、その足が止まった。すでにそこに立っていた先客に、友人に挨拶するような軽い調子で右手を上げる。
「よう。久しぶりだな富野。まさかまたお前の顔見る羽目になるとはなあ」
「ああ、そうだな。俺だってもう会いたくはなかったけどな、これも仕事だし自分のミスは自分でケリつけないとな」
　一見すると、お互いに口が悪いながらも穏やかな会話に見えなくもない。だが、それは違う。個人的に何を考えているかはともかく、この２人はお互いに譲れないものがある敵同士なのだから。
　先にデュエルディスクを構えたのは、不敵に笑うユーノだった。
「さあ、かかってこいよ。返り討ちにしてやんぜ」
「寝言は寝て言え、奇跡は２回も３回も起きないってことを教えてやるよ」
「上等上等。……っと、そうだ。１つ聞きたいんだけどよ、いつぞやお前が俺に泣きついてきたときのあのナルシスト野郎、あれどうなったんだ？」
　いざデュエルで決着をつけようとした矢先、ふと気になっていたことを思い出してユーノが声をかける。それは忘れもしない数か月前、三幻魔の戦いが終わってから数日

も経っていない頃の話だ。幻魔の皇と相打ちになる形で倒れた清明の魂を代価にすると持ちかけられ、暴走した1人の転生者狩りを2対1で倒したことがある。あの相手はかなりの実力者であり、2対1であったからこそわりとライフに余裕がある状態で倒せたものの1対1ならばほぼ確実に負けていただろう。

よっぽど嬉しくない記憶だったのか、あまり思い出したくなさそうにする富野にさっさと喋れと無言のプレッシャーをかけるユーノ。

「あれな。色々あったけど、今はもう全く新しい人生やってんじゃね？記憶も消して、本当に1から別の人間として再スタート中、ってとこだろうな」

「ふーん」

話を振りはしたが、彼としてはそのことにあまり興味はなかったりする。ただ、ふと聞いてみたくなっただけだ。そして、もう用も済んだ。ここから先は、腕ずくで自分の居場所を守るための時間だ。

「さて、と」

「今日こそは……！」

「「デュエル！」」

「先行はくれてやるぜ？俺ドローしたいし」

「けっ、そりゃどうも、だ。俺のターン、手札からパワー・ジャイアントの効果を発動！

このカードは手札のレベル４以下のモンスターを墓地に送り、そのレベル分レベルを下げて特殊召喚することができる。レベル２のゾンビキャリアを墓地に送って、特殊召喚！」

パワー・ジャイアント　攻２２００　☆６→４

「まだ俺は通常召喚をしていないな。来い、ドレッド・ドラゴン！」

ドレッド・ドラゴン　攻１１００

「レベル４のパワー・ジャイアントに、レベル２のドレッド・ドラゴンをチューニング！大いなる風に導かれ、稲妻よりもなお速く。青きシリウスよ天を焼け！シンクロ召喚、天狼王　ブルー・セイリオス！」

☆４＋☆２＝☆６

天狼王　ブルー・セイリオス　攻２４００

「くっ……また初手シンクロかよ」

思わずぼやく。いつもはエクストラデッキに融合モンスター以外のカードが入っていないデュエルばかり見ているので、久しぶりに見るこの生前と同じ高速環境に合わせた思考ペースに戻すのは若干骨が折れるのだ。もっとも定期的にこの男が来るおかげで勘が鈍らずに済んでいる、という面もあったりするので決して悪いことばかりではないのかもしれないが。

「カードをセットして、ターンエンドだ」
「俺のターン！」
心底楽しそうにデッキからカードを引くユーノ。どれほど口が悪かろうが、この男もやはりデュエルが大好きな人間の一人なのだ。もっとも、そんな人間でなければ最初からこちらの世界に招いたりなどしなかったろうが。崖の上から2人のデュエルを眺めつつ、そんなことをつらつらと考えるチャクチャルアであった。
「先制攻撃はもらってくぜ？キラー・ラブカを通常召喚、そして魚族のラブカを召喚したことで手札のシャーク・サッカーを特殊召喚だ」
キラー・ラブカ　攻７００
シャーク・サッカー　攻２００
「これで俺の場には、同じレベルのモンスターが2体。俺はレベル3のキラー・ラブカと、シャーク・サッカーでオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築。深海を裂く沈黙が、静かな夜に悪夢を魅せる。エクシーズ召喚！Ｎｏ（ナンバーズ）．４７　ナイトメア・シャーク！」
暗夜に広がる青い翼。鳥とも虫とも違う形のその翼の持ち主は、まるでどこかの悪夢から飛び出してきたかのように生物の常識を外れた姿をしていた。ただ、薄明かりに照らされた両腕の大きな刃のみが圧倒的な現実感を持って仄かに輝いている。

☆３＋☆３＝★３

Ｎｏ．４７　ナイトメア・シャーク　攻２０００

「ナイトメア……シャーク……」

その効果の恐ろしさは彼らが生前いたライフポイント８０００の世界ではなく、この初期ライフ４０００の世界でこそ生きる。そのことをよく知っている富野が、冷や汗とともにつぶやいた。

「ナイトメア・シャークの効果を発動。オーバーレイ・ユニットを１つ消費し、水属性モンスター１体を選択。他のモンスターがそのターン攻撃できなくなる代わりに、その１体は直接攻撃の能力を得る！ダイレクト・エフェクト！」

体の周りを飛び回る２つの光る球体のうち、片方がナイトメア・シャークの刃に吸い込まれていく。その直後、その姿が闇に消えた。急にいなくなった敵の姿を探し、ブルー・セイリオスが３組６つの目で辺りを慌てて見回す。

だが、それでも少し間に合わない。全くの無言のまま、完全に無音なうちに、悪夢の刃が振り下ろされる。

Ｎｏ．４７　ナイトメア・シャーク　攻２０００→富野（直接攻撃）

富野　ＬＰ４０００→２０００

「ぐはっ……！」

その威力は、彼の初期ライフのきっかり半分を一撃で奪い去った。ダメージもさることながら、心構えのできていないタイミングで大きな一撃をもらったことで富野の体がのけぞる。そのリアクションにいささかやりすぎたと思い、自分の場にそっと戻ってきたナイトメア・シャークに軽く注意する。

「よくやった。だけど、もーちょっと手加減ってもんも、な？」

ユーノ。なんだかんだ言っても、根っこの方はどこまでも善人であった。

「俺は、これでターンエンドだ」

富野　ＬＰ２０００　手札：１

モンスター：天狼王　ブルー・セイリオス（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

ユーノ　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：Ｎｏ．４７　ナイトメア・シャーク（攻・１）

魔法・罠：なし

「チッ、甘いこと言いやがってよ……俺のターン！墓地からゾンビキャリアの効果を発動、手札１枚をデッキトップに戻すことで墓地からこのカードを蘇らせる」

ゾンビキャリア　攻４００

「ダメージ優先は結構だが、まさかセイリオスを生き残らせてくれるとはな。レベル６

のブルー・セイリオスに、レベル２のゾンビキャリアをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

ゾンビキャリアが変化した２つのリングの間に狼の王が入り込み、さらに上の存在へと進化していく。赤と黒のコントラストが禍々しい悪魔名を持つ破壊のドラゴンが、地上に降り立った。

☆６＋☆２＝☆８

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００

「レッド・デーモンズで攻撃！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

「わかってるとは思うが、墓地からキラー・ラブカの効果を発動！このカードを墓地から除外することで、その攻撃を無効にして次の俺のターンまで攻撃力を５００ポイントダウンさせる！」

大きく息を吸い込み、灼熱の炎を吐くレッド・デーモンズ。だがその熱がナイトメア・シャークを丸焼きにする寸前、一匹の魚が炎の前に割り込んだ。いや、割り込んだだけではない。その身を少しずつ燃えていくのも構わず、炎そのものを弾き飛ばしたのだ。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→２５００

「ふっ、まあそう来るよな？当然そうするよな？なんてったって、この攻撃をしのげばも

う1回直接攻撃できるわけだからよ。だが、そんなの俺に言わせりゃ甘すぎるぜ！ぬるま湯生活で腕が鈍ったんじゃねーのかよ、あー？トラップ発動、バスター・モード！このカードは特定のシンクロモンスターを対象とし、そのモンスターを強化する！」

「バスター!?」

油断していたのかもしれない。考えが甘かったのかもしれない。引きが弱かった、とも言うことができる。だが、それは全て言い訳でしかない。冷や汗を流すユーノをよそに、炎を弾き返された悪魔の竜が赤い光に包まれていく。もう1つの進化系、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンのデザインに酷似した赤い甲冑に身を包み、より重くなったその体を持ち上げるために翼がもう一回り大きくなる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター（スラッシュ）　攻３５００

「受け取りな。バスターでもう一度攻撃……エクストリーム・クリムゾン・フォース！」

より勢いを増した破壊の一撃が、キラー・ラブカの守りを失いなすすべのないナイトメア・シャークを消し炭へと変えた。その時の衝撃波で浜辺の砂が派手に舞い上がり、すぐ横にいたユーノの体も爆風に吹き飛ばされていく。

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター　攻３５００

↓Ｎｏ．４７　ナイトメア・シャーク　攻２０００（破壊）

ユーノ　ＬＰ４０００→２５００
「くーっ、さすがに効くな。でもまあ、おかげで目が覚めたぜ」
「はっ、そりゃどうも、だ。ターンエンド」
実際、今の攻撃で彼はだいぶ目が覚めた。たった1ターンで最上級モンスターを出すことができるこの高速環境。これこそが彼のいた世界なのだ。このスピードに適応しなければ、待っているのは敗北のみ。
「ドロー、手札から爆征竜―タイダルの効果を発動。このカードと手札の水属性モンスターを墓地に送ることで、デッキのモンスター1体を落とすことができる。竜宮の白タウナギを使って、デッキの超古深海王シーラカンスを墓地に送るぜ」
ひとたび本気を出せば、どこまでも回り続ける。例えデッキ枚数が規定ギリギリでセオリーガン無視であろうと、彼はこのデッキを使い続けていた。だからこそ、どこでどう動かせばいいのかはすべて知っている。
「魔法カード、死者蘇生を発動。俺の墓地から、今墓地に送ったシーラカンスを蘇生させる」
超古深海王シーラカンス　攻２８００
「シーラカンス……悪いな、その特殊召喚にチェーンして手札から増殖するＧの効果を発動。相手が特殊召喚したことで、カードをドロー」

黒く光る、不気味な動きの小さな影。Ｇと一般的に呼称されるそれがシーラカンスの体から飛び立ち、富野のデュエルディスクに吸い込まれていく。その様子にユーノばかりか使い手の富野までちょっと表情を硬くしていた。なにしろ、このまま特殊召喚を行わずにターンを終えたらただのジリ貧になるので、ユーノとしては嫌でも展開を行わなければならない。だがそうする以上、２人はこの光景を何度も何度も繰り返し見せつけられるのだ。

「そ、それで俺の展開を止めたつもりか?上等。もう仕留めるルートは見つかってるんだ、俺が勝つのとお前がバトルフェーダーあたりを引くの、どっちが早いか見せてもらおうじゃねえか。手札を１枚捨ててシーラカンスの効果発動、魚介王の咆哮！デッキからレベル４以下の魚族を、フィールドに出せるだけ特殊召喚する！来い、俺のモンスター達！」

「この一斉召喚はあくまでも１度に行う特殊召喚……ドローするのは１枚だけだ」

４体のモンスターを代表し、白タウナギの体にくっついていたＧが再び飛び立って富野のデュエルディスクに入り込む。うっという顔をしながら、カードをまたドローした。

フィッシュボーグ―アーチャー　攻３００

ハンマー・シャーク　攻１７００

ハリマンボウ　攻１５００
ハリマンボウ　攻１５００
「レベル４のハンマー・シャークに、レベル３のアーチャーをチューニング。仲間を守る力を求め、妖精は闇を受け入れる。シンクロ召喚！永久なる守護者、妖精竜　エンシェント！」
シンクロ召喚の合計レベルは、７。キラキラと鱗粉のような光を放つ羽根をもった流線形のフォルムの竜がひっそりとシーラカンスの横に降り立つ。だが、まだ終わらない。そのドラゴンの体にも、Ｇはひっそりと付いているのだから。
「ド、ドロー！……なあ、もうそろそろやめてくんね？」
妖精竜　エンシェント　攻２１００
「お前がやったんだろが、お前が。っーか、俺だってやめられるんならやめときたいんだぞ。さらに、レベル３のハリマンボウ２体でオーバーレイ！２体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築。星をも喰らう海竜が、新たな時代の風を呼ぶ。エクシーズ召喚！Ｎｏ．（ナンバーズ）１７　リバイス・ドラゴン！」
翼に包まれた球体が、さながら巨大な眼球か黒真珠のように光り。そのオブジェがスルスルと展開されて青を基調としたリヴァイアサン、嫉妬の意味を持つドラゴンの姿へと変化していく。……そして、Ｇ。

Ｎｏ．１７　リバイス・ドラゴン　攻２０００
「も、もう終わりだよな！ここでダウナードとか出して来たらそろそろ本気で殴るぞ！」
「やんねーよ、持ってないし。そしてフィールド魔法、忘却の都　レミューリアを発動。この瞬間にエンシェント第１の効果が発動、自分ターンに１度、フィールド魔法発動時にカードを１枚ドロー」
落ち着いた様子でカードを１枚引くユーノ。新たなねぐらを得た２匹の竜が、レミューリアの周りを縄張りを守るかのようにふわりと飛び回る。
超古深海王シーラカンス　攻２８００↓３０００
Ｎｏ．１７　リバイス・ドラゴン　攻２０００↓２２００
「エンシェント、第２の効果を発動。フィールド魔法が存在する場合、１ターンに１度相手フィールドの表側攻撃表示モンスター１体を破壊する！森葬（スピリット・ベリアル）の霊場！」
妖精竜の目が赤く光り、呪いを受けた悪魔の竜が頭を押さえて苦しみだす。痛みが限界に達したレッド・デーモンズが膝を折りかけた瞬間、富野の声が響いた。
「しっかりしろ、レッド・デーモンズ!?俺はここで／バスターの効果を使用！このカードが破壊された時、その鎧をパージすることで墓地から元のレッド・デーモンズを特殊召喚する！」
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００

全ての鎧が炎に包まれて消えさり、再びその身一つの姿で立ち上がるレッド・デーモンズ。だが、彼だって／バスターの効果も知らずにエンシェントの効果を使ったわけではない。その証拠に、さっきのお返しと言わんばかりにユーノがにやりと笑って見せた。
「当然、そこまでは想定済みだぜ?リバイス・ドラゴンの効果発動!1ターンに1度オーバーレイ・ユニットを1つ使うことで、攻撃力を５００ポイントアップする!アクア・オービタル・ゲイン!」
「そんなことしたって……いや、そうか!」
何かに気が付いたようにうめく富野だが、時すでに遅し。リバイス・ドラゴンが己の周りをクルクルと飛び回る2つの光の球のうち1つに食らいついた。
「どうやら気づいたようだが、言わせてもらうぜ?墓地に送られたハリマンボウの効果により、相手モンスター1体の攻撃力は５００ポイントダウンだ」
Ｎｏ．１７　リバイス・ドラゴン　攻２２００→２７００
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→２５００
「クソッ、俺のレッド・デーモンズがパワー負けするだと?」
「これで終わらせてやるよ、リバイスでレッド・デーモンズに攻撃!バイス・ストリーム!」

リバイス・ドラゴンのブレスが、動きの鈍ったレッド・デーモンズを飲み込む。
Ｎｏ．１７　リバイス・ドラゴン　攻２７００
↓レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻２５００（破壊）
富野　ＬＰ２０００→１８００
「シーラカンスで連撃、マリン・ポロロッカ！」
激流を起こしながら突進するシーラカンス。そのシンプルながらも力強い一撃も、富野の体をとらえることはできなかった。富野とシーラカンスの間に割って入った一つの振り子のようなモンスターが、シーラカンスを強引に押しとめたのだ。
「まだだっ！もうとっくにドローできてたんだよ、バトルフェーダーの効果を発動！相手のダイレクトアタック時にこのカードを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる」
バトルフェーダー　守０
これで、ユーノの攻め手はなくなった。いくらまだ通常召喚を行っていないとはいえ、バーンダメージを手軽に与えられるブリザード・ファルコンなどのカードが手札にない以上このターンではとどめを刺しきることができない。
「残念。カードを伏せてターンエンド」
富野　ＬＰ１８００　手札：３
モンスター：バトルフェーダー（守）

魔法・罠：なし
ユーノ　ＬＰ２５００　手札：０
モンスター：Ｎｏ．１７　リバイス・ドラゴン（攻・１）
妖精竜　エンシェント（攻）
超古深海王シーラカンス（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：忘却の都　レミューリア
「戦況は不利だ、けどまだ勝ち目はあるな。ドロー！魔法カード、死者蘇生を俺も発動だ。蘇生させるのは当然、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
このデュエルだけでも2度目の復活を果たす悪魔の竜。いくらレッド・デーモンズが軸とはいえ、この異様なまでのしぶとさにさすがの彼も内心舌を巻く。
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００
「そして通常召喚、救世竜　セイヴァー・ドラゴン！」
「バスターとセイヴァーの混合型で、もし前とデッキが同じだとすればスカーレッドも出せる構築……もはや頭おかしいレベルだな、ったく」
「お前に言われたくねえな。デッキ枚数６０で俺と互角にぶん回すなんて十分頭おかしいだろ」

どっちもどっち、という言葉をかける者がいなかったのは、お互いにとって幸か不幸か。

救世竜　セイヴァー・ドラゴン　攻０

「レベル８のレッド・デーモンズ、レベル１のバトルフェーダーにレベル１、セイヴァー・ドラゴンをチューニング。赤き王者の永久（とわ）の魂、終末の世に光を放つ！シンクロ召喚、世界を統べろ！セイヴァー・デモン・ドラゴン！」

レッド・デーモンズが先ほどとは違った白い光の輪に包まれ、またもやその姿を変えていった。両腕が消えていき、そのかわりに尾はさらに長く。竜の翼はまるでトンボのような４枚羽へと変わり、空中戦での素早さをさらに高める形へ適応していく。救世の天使としての神々しさと、破滅の悪魔としての禍々しさ。相反する２つの力を同時にその身に秘めた、他のレッド・デーモンズ系統とはまた違ったコンセプトを持つ第３のドラゴンである。

セイヴァー・デモン・ドラゴン　攻４０００

「セイヴァー・デモン、お前の力を見せてやれ！１ターンに１度、相手のモンスターの効果を無効にしてその攻撃力を得る！パワー・ゲイン！……だがその前に、用心に用心を重ねないとな。速攻魔法、禁じられた聖槍を発動、対象はシーラカンスだ。これでその伏せカードがなんであろうが、シーラカンスはその効果に対する完全耐性を持っ

た。だが逆に言えば、その恩恵も受けられないぜ」

超古深海王シーラカンス　攻３０００→２２００

シーラカンスの体が赤い光に包まれ、苦しむ魚の王からなにかエネルギーのようなものがセイヴァー・デモンの中に流れ込んでいく。その様子を見て、富野は勝利を確信した。レミューリアの効果を受けたシーラカンスの攻撃力は２２００。それを吸収して攻撃力６２００かつカード効果で破壊されないセイヴァー・デモンの１撃ならば、それを止めることのできるカードは限られてくる。攻撃反応に絞るならば破壊ではなく除外を行う次元幽閉や攻撃力をそのまま跳ね返してくる魔法の筒あたりが警戒どころだし、その他フリーチェーンならば月の書などが危ない。が、そんなフリーチェーンで使うようなカードが伏せてあるのならばそもそもセイヴァー・ドラゴン召喚時に使用してセイヴァー・デモンの召喚を防げばいいだけの話であるのでこれは除外できる。そして破壊を行わないタイプの攻撃反応カードを使ってきたとしてもそれは十中八九トラップカードであろう。その場合は先ほどＧの効果でドローしたカード、攻撃宣言時に相手が発動したトラップを手札から捨てることで無効にできるチャウチャウちゃんの効果を使えばいい。つまり、この効果が届くと同時に彼は勝利を手にするに等しいのだ。

だが、その推測にはたった１つだけ欠点があった。それは、今の推測全てが前提条件としてセイヴァー・デモン・ドラゴンの効果が通っていないと意味がないという点。実

際その力が届く寸前、シーラカンスの力は本体もろとも一つの魔方陣に吸い込まれていった。
「何!?」
「あんまり好き勝手させるかよ!リバースカードオープン、水霊術―葵!このカードは自分の場の水属性1体をリリースし、相手の手札1枚を墓地送りにすることができる。俺はこの効果で、シーラカンスをリリースするぜ!!」
「だ、だがシーラカンスは聖槍の効果を受けた!なのになぜ……ハッ!」
痛恨の判断ミス。普段の彼ならば決してしないであろう、最悪の選択だった。この瞬間、勝負の流れは完全にユーノの方へと傾いたといえるだろう。シーラカンスが光の槍に貫かれてわななきながらも鏡の中に吸い込まれ、セイヴァ―・デモンの効果が不発になる。
「悪いが、水霊術の発動条件はコスト、さ。確かにこれが効果の一部だったらパーになってたろうが、聖槍といえどもモンスターをコストに使用するのだけは止められないぜ。それじゃ、改めて手札を……ほう、チャウチャウちゃんか。惜しかったな」
余裕めかしたセリフを吐きながらも、次に来るであろう衝撃に備える。なにしろこれでやることは全部やってしまったのだ、この次の攻撃を止める方法はない。2体のドラゴンのうち、どちらがやられるか。もっとも2体の効果を考えれば、そんなことはわか

りきっている。
「まだ俺は攻撃宣言をしていない、妖精竜に攻撃！アルティメット・パワー・フォース！」
「まあ、そう来るよな……っ！すまん、エンシェント！」
灼熱の火炎放射とはまた違う、赤い光の奔流が妖精竜の姿を一飲みにした。たとえ効果が不発に終わっていても素の攻撃力だけで４０００と圧巻の数値のそれは、またしてもその後ろにいたユーノを吹き飛ばす。
セイヴァー・デモン・ドラゴン　攻４０００→妖精竜　エンシェント　攻２１００（破壊）
ユーノ　ＬＰ２５００→６００
「ふー……」
先ほどの富野の判断ミスにこっそり感謝しながら、辛うじて残ったライフでデュエルを続けるために立ち上がる。実際、今のはかなり危なかった。もし先ほどの禁じられた聖槍を今の戦闘でエンシェントに対して使っていたら、ユーノのライフは０になっていたのだ。
だが、それもすべては過ぎた話。エンドフェイズを迎え、セイヴァー・デモン・ドラゴンから救世の力が抜けていく。
「チクショオオオォォ!!エンドフェイズにセイヴァー・デモン・ドラゴンはエクストラ

デッキに戻り、かわりに墓地のレッド・デーモンズを特殊召喚する!!」
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００
もはや、勝負はついていた。リバイス・ドラゴンの効果を使い、攻撃力を上げつつハリマンボウを墓地に送る……あとは、このドローでモンスターを引きさえすればいい。そして……。
「来い、ツーヘッド・シャーク。そしてリバイスの効果をもう1回発動、アクア・ゲイン・オービタル!」
ツーヘッド・シャーク　攻１２００→１４００
Ｎｏ．１７　リバイス・ドラゴン　攻２７００→３２００
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→２５００
「これで終わりだ、富野。バイス・ストリーム!そしてツーヘッドでのダイレクトアタック!」
Ｎｏ．１７　リバイス・ドラゴン　攻３２００
→レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻２５００（破壊）
富野　ＬＰ１８００→１１００
ツーヘッド・シャーク　攻１４００→富野（直接攻撃）
富野　ＬＰ１１００→０

「チックショ、今回は俺が馬鹿だった。……もうこんなことはしないからな、次こそは覚悟してろよ」
「おうおう、３日４日ぐらいなら覚えといてやるよ。んじゃ、あーばよ」
　しきりに悔しがる富野を余裕たっぷりに相手しながら、くるりと背を向けて寮に戻ろうとするユーノ。その背中に、最後の一言がかけられる。
「ところで。一応この辺りには最初に昔倒した転生者の技術を応用して永続魔法、フィールドバリアを張っておいたから一応今のは誰にも見られてないけどよ、なんかさっきからこっちに来ようとしてる奴がいるぜ。俺は帰るから、見つかったらテキトーに後始末やっといてくれ」
「あ、ちょっとこら待て！……んなろー、また勝手に消えやがって」
　あまりといえばあまりにぶっ飛んだ話ではあるが、それに何一つ疑問を持たない辺りはさすがにデュエリストというべきか。ぶつくさと誰もいない浜辺で文句を言いながら引き上げようとするユーノだが、それは少しばかり遅かったようだ。
「待ちなさい。そう、そこのあなたです」
　当然、夜更けの浜辺に誰かほかに人がいるはずもなく。半ば諦めてゆっくりと振り向

くと、そこにはかなり会いたくない相手の顔があった。
「斎王……琢磨……！」
「おや、私のことを知っていましたか。私も有名になったものです」
何が起きるかはわからないが、かなりよからぬことになってきた。なんとか脳をフル回転させてこの場から立ち去る方法を考えようとするが、それよりも先に斎王が懐から2枚のカードを取り出した。1枚はデュエルモンスターズのカードだが、もう1枚は違う。占い用に使われるトランプ、所謂タロットという奴である。
「聞きたそうですから先に教えておきますが、私のタロット（運命）が告げたのですよ。誰かの裏切りを暗示する月（MOON）のカードの運命を持つものがここにいる、とね。私はあなたのことを知らないが、光の結社に入るにふさわしい力を持っているようだね」
「ご高説ありがたいがね、生憎と死んだじーさんの遺言で宗教に関わっちゃいけないって言われてんだ。じゃ、あばよ」
ちなみにこのじいさんとやら、完全に口から出まかせである。
「ああ、待ちなさい。せめてこのカードを受け取ってもらいたい」
「なに？」
受け取って、という単語についつい反応してしまうあたり、彼にも清明の貧乏性がいつの間にか移ってしまったのかも知れない。そんな彼の目が、斎王のかざした1枚の

カード……時の魔術師のカードを捉えた。見てしまった。瞬間、時の魔術師が白い光を放ち、まるで意志を持つかのように斎王の手から離れてユーノの胸ポケットにすうっと入り込む。

　変化は、すぐに表れた。

「これは!?」

「さあてね。このカードはアルカナでもなんでもないが、かなり強い光の意思が宿っている。だが案ずることはない。さあ、私とともに光を目指そうではないか」

「……誰……が……」

　必死に強がるも、さっきまでの闇のゲームに疲弊していた彼の精神は光の意思を抑えられない。地縛神の力があればまた別なのかもしれないが、肝心のカードは今レッド寮に残してきている上に、そもそも彼自身はダークシグナーではないのでその恩恵を受けることができない。下手に出ていけば返り討ちにされかねないほどの光の意志の強さにユーノも、チャクチャルアもどうすることもできないうちに彼の意識が遠くなっていく。どうにもできずに意識が完全に吸い込まれる寸前、せめてもの抵抗としてデュエルディスクを腕から外して砂浜の向こう側に放り投げた。それをチャクチャルアの作り出した闇が捕まえたのを確認し、彼の意識は……。

　彼は思う。ああそうだ、俺は光の結社のためにあの世から蘇ったのだと。

「……わかった、斎王様」
「お互いに分かり合えてうれしいよ。ところで、君の名前は？」
「俺は、ユーノ。光の意思を代弁する1人、ユーノだ」

『……結局は、これも私の力不足が招いたことか。いつかのラビエルとの戦いの時もそうだ。私には、力が足りない』
場面は、再びレッド寮屋根の上に戻る。自虐気味にそう言うチャクチャルアに、言葉をかける者はいない。虚しいほどに白い月のみが、ただぽっかりと輝いていた。

ターン４３　ノース校と選ばれし戦士（前）

「うーん」

いよいよ、今日はノース校との決戦の日。いつもよりちょっぴり早起きしてデッキの最終確認中、ふと思いついたことがあった。

「シャッフルして、カットして……上から５枚引いて……」

ちなみに今引いたのはシャクトパス、ツーヘッド・シャーク、氷弾使いレイス、アクア・ジェット、リビングデッドの呼び声。まあそれはいいとして、そのままデッキをクルリと裏返す。１枚、２枚、３枚と順番に見てみると、案の定そのカードはデッキの下の方にあった。

『さっきから何をしているんだ?』

「あ、チャクチャルさん。ちょうどよかった、ちょっとこれシャッフルしてみてくれる?」

後ろから声をかけられたので、デッキを掴んでひょいっと後ろに投げ渡す。床にぶちまけた音がしないところをみると、うまいことキャッチしてくれたらしい。それにしても、今のチャクチャルさんの声の調子は何か引っかかるものを感じるような気がした。

僕の気のせいだろうか。きっと、なんだかんだで僕も緊張してるんだろう。
『……ふむ。こんなところでいいか？』
「センキュー。これをひっくり返して……うーん、チャクチャルさんでもダメか」
デッキボトムに来ていたカードを確認し、ちょっとため息を吐く。ここまで来ると、もう偶然じゃあ済まないだろう。
『このカードが何か？』
それは、Ｂ　Ｆ（ブラックフェザー）―疾風のゲイル。１ターンに１度相手モンスター１体の攻守をノーコストかつ永続的に半減させることができる大変恐ろしい効果を持ったカードであり、去年のノース校対決の時に向こう側の副将、鎧田（よろいだ）から色々あって貰うことになったものだ。なったものなのだがこのカード、性能とは全く関係ない点で１つ大きな弱点がある。
「このカード、とにかく手札に来てくれないんだよね」
なにせ、これをデッキに入れてからもう１年近くたつのだ。いくら僕のデッキ枚数が規定ギリギリなうえにピン刺しのカードとはいえ、それだけの間ずっと同じデッキを使ってきているんだからもっとドローできなければおかしいというものだろう。実際、同じくピン刺しのハンマー・シャークやらシャクトパスやらはよく手札に来てくれる。なのに、このカードのドローに成功したのはこれまででたった１度だけ……廃寮の地

下で大徳寺先生、本名アムナエルの錬金術デッキとデュエルした時の1回だけ。あれ以来デッキに入れ続けているのに、いまだにデッキ調整の最中にしか見たことがない。
「嫌われてんのかなあ」
『まあ、ありえない話ではないだろうな。それか、根本的にデッキに合わないのかもしれない』
「うーん」
　じっとゲイルのカードを見つめる。一体このカード、僕にどうしてほしいんだろう。この子はもともと僕のカードじゃなかったせいか、どんなに頑張ってみてもいまだに精霊召喚ができない。だから、直接声を聞くこともできないわけで。
「……こうしててもしょうがないし、外行ってくる」
　結局どうすることもできず、またデッキの真ん中あたりに押し込んで家を出るのだった。まだ少し時間もあるし、軽く散歩でもしようかな。そう思い立ち、デュエルディスクだけ腕にはめて靴を履く。海岸に行けば、少しは気分も晴れるだろう。
　しばらく歩くと、見覚えのある人影が見えた。こんな朝早い時間に崖に向かって……なんだろう、デュエルディスクからひたすらカードを引いている。もう少し近づいてみると、何を話しているのかも聞こえてきた。
「アン、ドゥー、ドロー。アン、ドゥー、ドロー。アン、ドゥー、ドロー。む、誰かいる

のか？」
「三沢！」
そこにいたのは僕の友達の一人で、ちょっと前までラーイエローの秀才と呼ばれていた男、三沢。今ではすっかり白い服になってしまい、そのせいでイエロー改めホワイトの秀才とか何とか呼ばれてるらしい。
「えっと……」
はて、何を話せばいいんだろうか。そもそも三沢とは、彼が光の結社に入ってから一度も話していない。常に白い制服の誰かに囲まれていて何となく近寄りがたかったのもあるが、それ以上に怖かったのだ。あの時一足先に光の結社に入っていた万丈目は、僕のことなんてまるで眼中にないようなそぶりを見せていた。あの時だって実は結構へこんだのに、また誰か、僕の友達にあんな態度をされたとしたら。立ち直るのにかなり時間がかかることが容易に想像できて、だから近づくのを避けていた。というか逃げた。いいことじゃないとは思うけど、こればっかりは勇気が出ない。
だけど、三沢はそんな僕の心境なんてお構いなしに話しかけてくる。
「同じ学校にいながらこういうことを言うのも変な話だが……久しぶりだな、清明」
「え？ああ、うん」
何一つおかしなところのない、ごく普通の挨拶。だというのに、とっさに反応できな

かった。心のどこかでは、三沢も万丈目のようになってしまったと勝手に覚悟していたのかもしれない。
「そうだ。今日の代表メンバーだが、なかなかの人選じゃないか？俺が入らなかったのが少し残念だが、まあ事情が事情だししょうがないな」
「あ、あはは」
　さわやかに言って笑う三沢。その隣で、僕の笑いはさぞぎこちないものだったろう。そのまま何かを言おうとしたようだが、彼が口を開く前に聞き覚えのある声が近づいてきた。
「む。なんだ三沢、こんなところにいたのか。斎王様がお呼びだぞ」
「ああ、わかっているさ万丈目。今行く」
　これまでよりも当社比3割増しぐらいに偉そうにふんぞり返って歩いてくる万丈目……あー、ホワイトサンダー。まったく、と肩をすくめ、三沢とともに並んで離れていく。
　その遠ざかっていく背中に、思わず声を上げる。
「ま、万丈目！」
「万丈目ホワイトサンダー、だ。一体何の用だ」
　声をかけはしたが、何か言おうと明確に思ったわけではない。結局何も言えないうち

に、変な奴だと肩をすくめて万丈目と三沢は行ってしまった。

　それから後のことは、かなり忙しかったのであまり記憶に残ってない。お菓子だけ作っといて肝心の売り手が2人ともメンバー入りしていたことをギリギリになって思い出して大急ぎで無人販売所のようなものを作ったり、ついでに朝ご飯を食べてなかったので一緒に作った観戦客用の弁当セットを1つちょろまかして味見がてら食べてみたり、そんなことしてたらいつの間にかノース校からの船が来ていてその対応に港まで繰り出したりと、とにかくいろんなことをしたことは覚えている。

「おはよう、清明。頑張ろうね、だってさ」

「もちろん。今日も頼むよ、夢想」

「おはようだドン、清明さん。こんなイベントに新参者の俺を選んでくれて、改めて感謝ザウルス」

「いや、別にそんな」

「あー！一体今までどこにいたんスか清明君！おかげで朝ご飯食べられなかったんスよ！」

「いや、自分で何か作ろうよ。じゃあウチの観戦用弁当1つ譲ったげるからそれ食べて

て」

「……ああ、おはようございます先輩」

「うん、おはよー葵ちゃん」

やっと準備を終わらせ、なんとか時間ギリギリにデュエル場へたどり着く。先に来ていた皆に声をかけられたりやったーと言いながら無人販売所に行った翔を見送ったりしているうちに、向こう側からも誰かがやって来た。はて誰だろうと見ているうちに、ずんずんこっちに迫ってくる。照明が逆光になってる関係でなかなか顔が見えなかったが、向こうから声をかけてくるころにはそれが誰だかわかった。

「おーい、遊野清明！」

「あ……あーっ！鎧田!!」

サンダー四天王と名乗るノース校最強の４人衆。その中でもトップの実力を誇り、UF……アンデッドフェザーと自称するアンデッドワールド入りのBF（ブラックフェザー）を操る男、鎧田。ちょうど今朝見ていたゲイルのカードをくれたあの鎧田だ。電話ではあれから連絡を取ったこともあったけど、直接会うのはほぼ１年ぶり。だけど、どうやらあっちはその時からそんなに変わってなさそうだ。特に白くない制服を見る限りサンダー四天王はまだ光の結社に入ってないみたいだし。一緒に来たノース校の皆さん方はもう９割がた白くなってたけど。

「よう、元気にしてたか？」
「んー、まあね。そっちはどう？」
「俺か？俺もまあ、ノース校で頑張ってるぜ。ところで、サンダーは？サンダーはどこにいるんだ？」
　おっと。この質問もいつかは聞かれると思ってある程度の覚悟はしてたけど、さっそく聞きに来ますか鎧田さん。直接言う気になれず、無言で客席を指さす。確かそこには、白服の本校生徒たちのど真ん中で観戦用の椅子を3人分ぐらい占領し、さらにその上にふかっふかのでっかい座布団を敷いて高級ソファーみたいにした上でふんぞり返る万丈目がいたはずだ。見てるうちに馬鹿らしくなってくるからなるべくそっちの方は向かないように気を付けてたけど。
　その方向を見た鎧田も、ああ、という表情になった。万丈目、あっちでも似たようなことしてたのね。
「まあ、元気そうならそれでいいさ。ところでよ、その、言いにくいんだが……」
「何？」
　何かを言おうかどうか迷っている、といった様子の鎧田。何が言いたいのかはわからないけど、これからデュエルしようって時に余計なこと考えて集中が鈍ったままにしておくのはフェアじゃないだろう。別にフェアプレイに拘るわけでもないけど、わざわざ

こっちまで来たってことは僕にできるようなことなんだろう。
「その、ゲイル、あっただろ。去年お前にやった。あれ、今も持ってるか？」
「まあね。これ？」
　デッキを取り出してひっくり返し……ああ、薄々わかっちゃいたけどまーたデッキボトムだ。ゲイルのカードを取って、鎧田に見せる。しばらく彼はそのカードを見ていたが、やがてなんでもない、と言って元の場所に戻っていった。なんだったんだ一体。よくわからないままに、クロノス先生のアナウンスが始まった。
「あー、あー、ただいまマイクのテスト中ですーノ」
「何をバカなことしてるんでアールか、クロノス臨時校長」
「臨時はよけいなノーネ、ナポレオン教頭。失礼、お見苦しいところを見せてしまったノーネ。それはさておき、今年もノース校対本校の対抗試合を行いますノーネ。昨年は本校側が３対２で勝利を収めましたが、果たして今年はどうなるのか。それでは両校、先鋒の人を出してくだサイ」
「それじゃあ先輩方、行ってくるドン！」
　僕が先鋒に選んだのは、剣山。今年入学してきた関係上相手からすれば未知の人間である剣山に対してメタを張ることは不可能なはずだし、彼の物怖じしない性格ならば緊張のあまり実力が発揮できないなんてことはないだろうと踏んでの人選だ。おそらく

相手は去年と同じサンダー四天王でIを担当する飯田だろうし、剣山の恐竜デッキのパワーなら十分押し切れる相手だろ……

「ファースト・バトルは任せたぞ、和田！」

あれ？

「ふん、わかった。この和田が、ノース校のために初戦を制してくる」

「いや誰だお前」

思わず素で突っ込んでいるうちに、両者が向かい合う。一人で考えていてもらちが明かないので、軽く手招きして鎧田をもう一回呼び寄せる。

「「デュエル!!」」

「先行は俺がもらうドン、暗黒（ブラック）ステゴを召喚！さらにフィールド魔法、ジュラシックワールドを発ドン！このカードがある限り、恐竜族モンスターの攻守は３００ポイントアップするザウルス。これでターンエンドだドン」

暗黒ステゴ　攻１２００→１５００

「ねーねー鎧田、あれ誰？」

「ああ、あいつか？あいつはノース校期待の新人の和田ってやつでな、去年で卒業した飯田先輩に代わって新しくサンダー四天王の一角を務めてもらってるんだ。つーか、お前らだってなんなんだよあのメンバー。去年と同じ奴がお前とあの女の２人しかいない

じゃねーか」
「うっ」
　そこを言われるとこっちも弱い。でも去年のメンバーなんていまだ行方不明の十代やら光の結社に入った明日香やらで呼び出そうにも呼び出せないような連中ばっかりだからこれは仕方ない。
「ノース校のために！ドロー。お前も恐竜族使いのようだが、この和田の恐竜族は他とは一味違うぞ？まずはジュラック・ヴェローを召喚。ジュラシックワールド、効果的用！」
　ジュラシックワールドに生い茂った大量の草をかき分け、体の一部が炎に包まれた不思議な恐竜が和田の場に召喚される。
　ジュラック・ヴェロー　攻１７００↓２０００
　こういってはなんだが、恐竜族というのはあまりメジャーな種族ではない。どれくらいメジャーではないかというと、僕も愛用する海竜族ぐらいメジャーではない。なので、ジュラシックワールドの効果を相手も受けるというのはこれだけでかなり珍しいことだ。これには、剣山もいささか驚いたようだ。
「おお、お前も恐竜さん使いなのかドン！恐竜さん使いに悪い人はいない、これはいいデュエルができそうな気がするザウルス」

「ふ、そうか。ヴェロー、暗黒ステゴに攻撃だ！」
爪を振り上げ、肉食恐竜が力強く大地を踏みしめて足元の草を食むステゴサウルスに突撃していく。だがその攻撃が届く前に敵の存在に気付いたステゴが力強く尾を一振りし、ヴェローを返り討ちにした。
「何っ!?」
「ふふふ、罠にかかったドン！暗黒ステゴは攻撃対象になったとき、守備表示に変更することができるザウルス！」
ジュラック・ヴェロー　攻２０００→暗黒ステゴ　守２０００→２３００
和田　ＬＰ４０００→３７００
「やるな。カードをセットして、ターンエンドだ」
剣山　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：暗黒ステゴ（守）
魔法・罠：なし
場：ジュラシックワールド
和田　ＬＰ３７００　手札：４
モンスター：ジュラック・ヴェロー（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン、ドロー！ここは一気に攻め込むドン、エレメント・ザウルス召喚！このカードは自分か相手の場に炎属性モンスターが存在するとき、攻撃力を５００ポイントアップするドン。さらに、暗黒ステゴも攻撃表示に変更」

エレメント・ザウルス　攻１５００→１８００→２３００

暗黒ステゴ　守２３００→攻１５００

「バトル！エレメント・ザウルスでジュラック・ヴェローを攻撃だドン！」

ティラノサウルスのような恐竜が火を吐き、ヴェローを焼き尽くそうとする。同じく火を扱うジュラックとしてなんとか持ちこたえそうにも見えたが、結局は攻撃力の差の前に倒れることとなった。

エレメント・ザウルス　攻２３００→ジュラック・ヴェロー　攻２０００（破壊）

和田　ＬＰ３７００→３４００

「だが、ここでジュラック・ヴェローの効果を発動。表側攻撃表示のこのカードが戦闘破壊されたことで、デッキから攻撃力１７００以下のジュラックモンスターを特殊召喚……ん？」

ジュラックの残り火が、新たな命を産むために真っ赤に燃え上がる。だが、それを見逃さなかったエレメント・ザウルスはその残り火をぐしゃりと踏みつけて消した。

「エレメント・ザウルス第２の効果を使ったドン。自分または相手の場に地属性モンス

ターがいるとき、このカードが戦闘破壊したモンスターの効果は無効となるザウルス。もっとも、これで場の炎属性モンスターがいなくなったからまた攻撃力はダウンするドン」
「そんな効果まで……！」
「敵陣はがら空きだドン、暗黒ステゴでダイレクトアタック！」
暗黒ステゴ　攻１５００→和田（直接攻撃）
和田　ＬＰ３４００→１９００
「いい調子だよー、剣山！そのまま突っ切れー！」
「無論だドン、清明さん！」
なかなかいい調子だ。ここまでノーダメージ状態のまま、一回の隙も見せずにうまいこと攻め立てている。だけど、次に何が起きるかわからないのがデュエルだ。これは僕の勘だけど、あの和田とかいう奴、何かを狙っている。キーカードを引くのをじっと待っている、そんな気がする。
「俺のターン、ドロー。ふん、やっと来たか。魔法カード、テラ・フォーミングを発動。このカードの効果により、デッキからフィールド魔法１枚を手札に加える。俺が加えるのは、ブラック・ガーデンのカードだ」
「ブラック・ガーデン……？」

知らないカードだ。まあ、わざわざサーチしたんだからすぐに使うだろう。見てればわかるかな。

「ふっ、魔法カード発動。死者蘇生の効果で、墓地のヴェローを再び呼び出す」

ジュラック・ヴェロー　攻１７００→２０００

「これでコンボの布石は整ったな。魔法カード、大進化薬を発動。恐竜族モンスター１体をリリースすることで発動するこのカードは３ターンの間フィールドに留まり、その間いかなる恐竜族モンスターもリリースなしで召喚できるようになる。ふふ、俺はこの効果を使うことでこのデッキのエースカード、ジュラック・スピノスを召喚だ」

まるで火の山を背負っているかのように派手に燃え盛るひれ、じゃないか。なんていうんだっけ恐竜のあの部分。えーと……まあとにかく燃えてる。元気よく燃えてる。それでいいじゃないか、うん。

ジュラック・スピノス　攻２６００→２９００

「ふん、バトルだ。エレメント・ザウルスに攻撃！」

ジュラック・スピノス　攻２９００→エレメント・ザウルス　攻２３００（破壊）

剣山　ＬＰ４０００→３４００

「くっ……まだまだドン！」

「ふ、そうだろうな。だが、モンスターを戦闘破壊したことでスピノスの能力発動！お前

のフィールドに、スピノストークンを攻撃表示で呼び出す」
　スピノスの炎が体を揺らした拍子に地面に燃え移り、その炎から新しい恐竜の命が生まれる。恐竜の赤ん坊が、小さな体を精いっぱい使って火を吹いてみせる。
　スピノストークン　攻３００↓６００
「なんだ、わざわざ俺にこんなに可愛いトークンをくれるのかドン？随分と気前のいいやつザウルス」
「ふ、馬鹿をぬかせ。もとはと言えば俺のスピノスの炎、俺に返してもらうぞ。永続トラップ発動、洗脳解除！」
　その時、不思議なことが起こった。今まで剣山のフィールドで小さいなりに戦いの構えをしていたスピノストークンが、何か目が覚めたような顔になって自分の親、本家ジュラック・スピノスのところに走っていったのだ。
「ふん、決まったな。洗脳解除がある限り、あらゆるモンスターのコントロールは元々の持ち主が得ることとなる。この１体も、そしてこれからも、スピノスの炎は俺のものだ」
「なるほど、どんどん数を増やすつもりなのかドン……だけど、スピノストークンの攻撃力はたった６００！そんなにかわいい恐竜さんを攻撃するのは忍びないけど、だからと言って手加減するほど大自然は甘くないザウルス！」
「ふ、そう焦るな。だからこそ、このカードを使うのだ。フィールド魔法、ブラック・ガー

デンを発動！」

シュルシュルと黒い茨があたりかまわず伸び、そこかしこに生えたシダ植物やらでっかい木やらを締め付けるように成長する。ものの１０秒もしないうちに、生命力あふれる古代の森が不気味な荒れ庭へと変化してしまった。

「ああ、フィールドが！」

「フィールド魔法はお互いが使用できるから、お前のジュラシックワールドは残り続ける。だが、そんな程度の全体強化ではこのブラック・ガーデンには追いつけない。カードをセットして、ターンエンドだ」

剣山　ＬＰ３４００　手札：３

モンスター：暗黒ステゴ（攻）

魔法・罠：なし

場：ジュラシックワールド

和田　ＬＰ１９００　手札：０

モンスター：ジュラック・スピノス（攻）

スピノストークン（攻）

魔法・罠：大進化薬（０）

洗脳解除

１（伏せ）

場：ブラック・ガーデン

「俺のターン！ブラック・ガーデンだか何だか知らないけど、恐竜さんのパワーは無限大！そんな庭なんかに負けはしないドン！暗黒ステゴ、スピノストークンに攻撃！」

「ふっ、随分と予想通りに動いてくれるものだな。本校の実力とやらはその程度か！カウンターでトラップ発動、暴走闘君！この永続トラップは、フィールド上のトークン全ての攻撃力を１０００ポイントアップさせる強化カード。迎え撃て、スピノストークン！」

暗黒ステゴ　攻１５００（破壊）→スピノストークン　攻６００→１６００

剣山　ＬＰ３４００→３３００

「うわっ！は、ハイパーハンマーヘッドを守備表示で召喚、カードを伏せてターンエンドだドン……」

「ふっ、待ちな。お前の恐竜、よく見たほうがいいんじゃないのか？」

「え？……ハイパーハンマーヘッド！お前、どうしたんだドン一体！」

流れを完全に和田に持っていかれた剣山が、時間稼ぎのために出した守備モンスター。その体が、地面から伸びる茨に巻きつかれて苦しそうに膝を折る。

ハイパーハンマーヘッド　守１２００→１５００

「あ、あれ？守備力は特に変わってない……って、なんなんだドンこの攻撃力は!?」
「ふ、やっと気づいたか。ハイパーハンマーヘッドの元々の攻撃力は１５００、つまりそこにジュラシックワールドの効果で３００を足した１８００になるはずだろう？だが、そうはならない。なぜならば、ここがブラック・ガーデンだからだ。このカードがある限り、召喚及び特殊召喚されたあらゆるモンスターの攻撃力は半減される。今のハイパーハンマーヘッドの攻撃力は９００、だな」
「攻撃力、半減」
　これは、かなりまずい。剣山のデッキは、恐竜族のパワーで押し切ることを信条としたビートダウンデッキ。シンプルで力強いが、どうしてもやることは戦闘一本と単調になりがちである。だが、どれほど元の攻撃力が高くても、それが半分になってしまっては一気に戦闘能力は下がってしまう。
　そして、そうなれば後はもうスピノスが苦し紛れに伏せられたモンスターを蹴散らし、生み出したトークンを洗脳解除で自分のものにして暴走闘君で強化。剣山の場は壊滅状態になり、和田の場はどんどん戦力が整っていく。剣山にとっては、デッキの相性がかなり悪いと言えるだろう。もしかしてミスったかな、順番。でも、デュエルはもう始まっちゃってるんだ。剣山の力を信じるしかない。
「頼むよ剣山！勝ったら夕飯おごるからさっ！」

「任せてください！このティラノ剣山、真っ向から受けて立つドン！」
「ふ、盛り上がっているところ悪いが、まだブラック・ガーデンの効果は終わってはいない。モンスターを出した側から見て相手、つまり俺のフィールド上にローズ・トークンを特殊召喚。無論、暴走闘君の効果込みでな」
ハイパーハンマーヘッドに絡みついた茨が養分を吸いとると、近くの地面から黒い風景には不釣り合いな地のように赤いバラが一輪生えてきた。なるほど、確かにそんな効果を持っているなら下手にモンスターを表側表示で出すことすらできないわけだ。実に理にかなってる。
ローズ・トークン　攻８００→１８００
って、そんなのんきにしてる場合でもない。これで剣山の場には強化されてるとはいえ守備力１５００のハンマーヘッド1体のみ、だけど和田の場には攻撃力２９００のスピノス、そして攻撃力１６００、１８００のトークンが1体ずつ。剣山の伏せカード次第では、このターンで決着がついてしまう。
「俺のターン！ゆくぞ、ジュラック・スピノス！ハイパーハンマーヘッドに攻撃だ！」
ジュラック・スピノス　攻２９００→ハイパーハンマーヘッド　守１５００（破壊）
「そして、スピノストークンをお前の場に特殊召喚。この瞬間洗脳解除が再び発動され、トークンは俺のものとなる。だが、ブラック・ガーデンの効果もその召喚に対して発動

される。この意味が分かるか？」
「それじゃあ、またお前の場にローズ・トークンが生まれるのかドン!?」
　これで2体目。燃える炎の赤ちゃん恐竜が、炎というより火の粉を吹いて自慢げな態度をとる。そしてその直後にその体を締め付けた黒い蔦が養分を吸い取り、新たなバラを和田の場に産む。
　スピノストークン　攻３００→１６００→８００
　ローズ・トークン　攻８００→１８００
「だけど、ハイパーハンマーヘッドの効果も発動するドン！このモンスターとの戦闘で破壊されなかった相手モンスター1体は、手札に戻るザウルス」
「今更スピノスを手札に戻したところで、大進化薬のあるこの状況なら痛くもかゆくもない。ローズ・トークンでダイレクトアタックだ」
　がら空きになった剣山に、2輪のバラが種子を飛ばして攻撃する。だがその状況に対し剣山は、まだ笑っていた。よし、笑う余裕があるならまだなんとでもなるね。
　ローズ・トークン　攻１８００→剣山（直接攻撃）
　剣山　ＬＰ３４００→１６００
「ふっ、これでもう1体の攻撃が通れば」
「あんた、なかなか強いドン。でも、俺だって強いザウルス！今の戦闘ダメージをトリ

ガーにトラップ発動、ダメージ・ゲート！今のダメージ以下の攻撃力を持つモンスター１体を、墓地から特殊召喚するドン。甦れ、暗黒ステゴ！」

大量の茨をものともせずに、先ほど倒されたステゴサウルスが再び立ち上がる。だけど、その体もまた無数の蔦に絡まれ養分を吸い取られていく。

暗黒ステゴ　攻１２００→１５００→７５０

ローズ・トークン　攻８００→１８００

「さあ、これを見てもまだ攻撃してくるのかドン？もっとも、俺はそれでも一向に構わないザウルス」

「……ふ、なるほどな。暗黒ステゴは攻撃対象になったとき、守備表示にできる。守備力には影響を与えない、ブラック・ガーデンの効果のわずかな隙をついたか。さらに俺の場をトークンで埋め尽くすことで、レベル７のスピノスを出すにはどれか２体をリリースせざるをえない、か。ふ、悪くない手だ。感心するよ。場のスピノストークン２体をリリースし、モンスターをアドバンスセット。これでターンエンドだ」

ブラック・ガーデンの効果は召喚または特殊召喚時にのみ発動される……つまり、アドバンスセットからの反転召喚ならば影響は受けずに済む。ただ、問題はあのモンスターがなんなのかだ。そのままスピノスを出したのか、それとも他の最上級モンスターなのか。どちらも、可能性としては十分あり得る。

剣山　ＬＰ１６００　手札：１
モンスター：暗黒ステゴ（攻）
魔法・罠：なし
場：ジュラシックワールド
和田　ＬＰ１９００　手札：１
モンスター：ローズ・トークン（攻）
ローズ・トークン（攻）
???（セット）
魔法・罠：大進化薬（１）
洗脳解除
暴走闘君
場：ブラック・ガーデン

「俺のターン！よし、このカードなら！俺も、お前の場の大進化薬の効果を使用させてもらうドン。レベル５以上の恐竜族をリリースなしで召喚……俺が呼び出すのは、竜脚獣ブラキオン！」

剣山の行動を制限しつづけたブラック・ガーデンなどまとめて踏みつぶしてやる、と言わんばかりのサイズを誇る恐竜ブラキオサウルスをモチーフにしたモンスター、ブラ

キオン。その圧倒的なデカさはデュエルフィールドからはみ出そうになるほどで、そんなモンスターの養分を吸ったローズ・トークンもまたそれなりの大きさのものが育ってしまった。ま、攻撃力は変わんないけどね。

竜脚獣ブラキオン　攻１６００→１９００→９５０

ローズ・トークン　攻８００→１８００

「ブラキオンは、攻撃力ではそのロース・トークンに勝てないドン。ま、ダメもとで一応アンタの伏せモンスターに攻撃してみるザウルス」

「ふ、馬鹿め。迎え撃ってやれ、ジュラック・スピノス！」

竜脚獣ブラキオン　攻９５０→???　守１７００→２０００

剣山　ＬＰ１６００→６５０

「そ、そりゃそうなるでしょ剣山！」

なにせ、モンスター２体を使ってアドバンスセットされたモンスターなんだ。攻撃力たかだか９５０のブラキオンの一撃で破壊できるわけがない。むしろ、今の反射ダメージで負けなかったことを感謝すべきだと思う。

「まだ大丈夫ザウルス、清明さん。それはそうと、やっぱりそのモンスターはジュラック・スピノスだったかドン。十分想定内、メイン２にブラキオンの効果発動！このカードは１ターンに１度、裏側守備表示に変更できるザウルス！」

「ほう」
「このモンスターなら、ブラック・ガーデンも怖くないドン。さらにカードをセットし、ターンエンドザウルス」
　このターンで、一気に剣山のライフが半分以下になってしまった。いくらブラキオンの守備力がジュラシックワールドこみで３３００とよほどの大型モンスターでなければ突破できないとはいえ、やっぱりあの局面でのあれは無謀すぎるんじゃないだろうか。はっきり言って、相当痛いプレイングミスだ。
「ふん、舐めた真似を。その余裕、この場で後悔させてやろう。魔法カード発動、太陽の書。このカードで、そのブラキオンを強制的に表側攻撃表示に変更させる。そして、俺のスピノスも攻撃表示に」
　竜脚獣ブラキオン　守３３００→攻１９００
　ジュラック・スピノス　守２０００→攻２９００
「な、そんなカードを持っていたのかドン!?」
「ふ、俺は俺のデッキの弱点ぐらい把握している。守備表示で逃げ切られないよう、敵の表示形式を変更するカードくらい入れておくさ」
　これは初戦はこっちの負け、かな。今のブラキオン自爆特攻さえなければまだワンチャンあったのかもしれないけど……いや、ローズ・トークンがあれだけいる時点で

もう詰みか。それに、どっちにしろこの攻撃で剣山のライフは尽きる。
「ふむ。だが、その伏せカードに対してさらに念を入れておくか。ミラーフォース対策の意味を込め、ローズ・トークン1体を守備表示に変更しておこう。」
ローズ・トークン　攻１８００→守８００
「バトルだ！スピノス、ブラキオンに攻撃を行え！」
スピノスが口から火炎弾を放ち、それがブラキオンめがけてまっすぐ突っ込んでいく。体が燃えてる時点で今更だけど、恐竜のやることじゃないよね。
「うわあああっ！」
「ふ、決まったな」
炎から身を守るように剣山が体の前で腕を組み、その直後にブラキオンの体が燃え上がる。それを見た和田が、勝利を確信して一言つぶやく。
そしてその瞬間、剣山が動いた。
「……なーんちゃって、ザウルス。この瞬間をずっと待っていたドン！攻撃宣言時にトラップ発動、魂の一撃！」
燃える炎の中でブラキオンがゆらりと立ち上がり、自信を燃やしている火を出した敵であるスピノスを見下ろす格好になる。その体の大きさからくる威圧感に、本来肉食恐竜であるはずのスピノスが草食恐竜のブラキオン相手に体を縮こまらせて恐怖する。

剣山　ＬＰ６５０→３２５
ジュラック・スピノス　攻２９００（破壊）→竜脚獣ブラキオン　攻１９００→５５７５
「何、なんだその攻撃力は！」
「魂の一撃……自分のライフを半分にする代わりに、モンスター１体の攻撃力を４０００マイナス半分にしたライフの数値ぶんアップさせる一発逆転の効果だドン。これによってブラキオンの攻撃力はスピノスをはるかに上回る５５７５となったザウルス！」
「あ、そうか。あれを狙っていたから剣山は、わざと自分のライフを減らすような攻撃を……」
　そこまで言いかけて、ふと気づいた。いや、違う。別にあんな自爆特攻を行わなくても、残りライフ１９００の和田を返り討ちにする程度の火力は出せていた。じゃあ、一体剣山は何を警戒したんだろう？夢想にも意見を聞こうとした時、和田の手札にずっと温存されていた手札、その最後の一枚が姿を見せた。
「ふ、まだだ！手札から速攻魔法発動、非常食！このカードは発動時に自分の魔法か罠を任意の枚数墓地に送ることで、ライフを１枚につき１０００回復する。俺が墓地に送るのはブラック・ガーデン以外の３枚、つまり洗脳解除、大進化薬、暴走闘君だ！」

和田　ＬＰ１９００→４９００
なるほど、非常食か。確かに、戦闘スタイルの都合上あのデッキなら場にカードがたまりやすいから相性はいいだろう。最悪ブラック・ガーデンさえあれば相手の攻めはだいぶ遅れるだろうから、その間に墓地送りにした分をゆっくり補充すればいいだけだし。ブラキオンとスピノスの攻撃力の差は２６７５、勝負はまだまだ終わりそうにない。
「いいや、それじゃあやっぱり俺の勝ちだドン」
「何?お前のカードは使い切っている、俺のライフはなくならんぞ」
そう、確かにもう剣山にはこれ以上の伏せカードも、墓地から効果を発動するカードもない。なのに、これで終わりにするとはいかに。
「あれだけの永続カードを使う時点で、非常食が1枚ぐらい入っている可能性は十分読めていたドン。ブラック・ガーデンも墓地に送っていたらまだわからなかったけど、それはないだろうと思っていたザウルス」
「何が言いたい!」
「竜脚獣ブラキオン、もう一つの効果を発動!このモンスターが相手から攻撃を受けて相手が戦闘ダメージを受ける場合、その数値は倍になるドン!」
「攻撃力の差は２６７５……倍にして、５３５０のダメージだと!?うおおおおっ!」

和田　ＬＰ１９００→０

「ふー、危なかったドン……」
「すごいじゃない、剣山！よくやった！」
やれやれと首を振ってこちらに戻ってくる剣山に手を振ると、向こうもニカッと笑って手を振り返してきた。その背中に、和田が最後に声をかける。
「ティラノ剣山、その名前は覚えたぞ。ふん、次やるときは俺が勝つさ」
「和田、俺もお前のことは覚えておくドン。実際、お前は大したデュエリストだったザウルス」
その会話を最後に、座り込んでいた和田も立ち上がってノース校陣地へと帰っていく。まずは一勝、だけど勝負はまだまだこれからだ。

ターン44　ノース校と選ばれし戦士（中）

「これより、5分間の休憩に入りますノーネ。選手の皆さんは次の試合の準備を、観客の皆さんもトイレは混まないうちに行っておくことをお勧めしますーノ」

クロノス先生のアナウンスが響く中、何気なくノース校側を見てみる。初戦は剣山が勝ってくれたけど、裏を返せば余裕のなくなったあっちはこれまで以上に本気でかかってくるということ。とはいえ次峰は葵ちゃん、あんまり心配はしていない。3番手は夢想だし、こりゃ下手すると僕の出番ないまま終わったりして。どれほどギスギスした空気になっているかと野次馬根性全開でのぞいてみると、意外にもそこには向こうの次峰、天田（てんだ）しかいなかった。そのままじっと見ていると、向こうも僕の視線に気が付いて近寄ってきた。

「……何か、用か」

「あ、いや別に。ね、他のみんなどこ行ったの？」

わざわざ聞くほどのことでもないだろうけど、せっかく会話してくれてるんだからやっぱり聞いておきたい。天田は軽く肩をすくめ、若干呆れたようなポーズをとった。

「……サンダーに会いに行くんだと。で、俺も行きたかったんだけど、別にサンダーとは

試合の後でも会えるし、どちらかというと次の試合で勝つことをまず考えないといけないしな」
「なるほどねー。でも、うちの葵ちゃんも強いからね？」
「……だろうな。なにせ、去年サンダーとあそこまでの勝負をした男の選んだメンバーだからな、こちらも警戒ぐらいはするさ」
　そう言ってもらうのは嬉しい。随分僕も偉くなったものだ。ちょっと気を良くしていると、辺りをきょろきょろと警戒するように見回した天田が、誰にも見られないように自分の体で隠しながら僕になにかケースのようなものを押し付けてきた。依然として周りを警戒しつつ、声を低くして僕に話しかける。
「……話は変わるが、何も言わずにこれを受け取ってくれ。頼む」
「え？え、あーうん」
　まったく意味が分からないが、もらえるものはもらっておこう。あーでも、億に一つどころか兆に一つでラブレターとかだったらどうしよ。僕にはもう好きな人がいるし、そもそもそういった趣味はありませんってはっきり断ったほうがいいんじゃなかろうか。
「……頼む。本当はサンダーに渡したかったんだが、サンダーが光の結社に入っていたとあっては渡しづらいんだ」

何を考えているのかはわからないけど、とても真剣な天田の目を見る。ふうむ、これは素直に受け取っておいた方が面白そうだ。何かはわからないけど、いつかこのケースの中身が役に立つ。そんな気がする。
「……誰もいない場所で、誰にも見られないように開封してくれ。使い方はお前に任せるが、できれば最終的にはサンダーに渡してほしい」
「あいよ、よくわかんないけど頼まれたよ。でも、このことって鎧田たちは」
「……あいつらは何も知らんはずだ。これはノース校に代々伝わっていたレアカード、アームド・ドラゴンの他にもう2つあるレアカードだ。教職員はおろか、あいつらにさえ気づかれないように盗ってくるのはかなり骨が折れた」
「へー、そんなものが……でも、なんで？そりゃ許可は下りないだろうけど、別にわざわざ他の皆にまで黙ってることはないんじゃない？」
「……俺の勘だが、どうも今回は嫌な予感がしてな。あいつらでさえ今一つ信用できないんだ、と言ったらお前は笑うか？」
いいや、と首を横に振る。嫌な予感、か。そういえば、夢想もつい昨日は同じことを言ってたっけ。実際、あそこで夢想がついてきてくれなかったらあの3人組相手はかなり厳しかったろう。そして、今は夢想に続き天田まで同じことを言う。気のせいだったら笑い飛ばせばいいだけだし、警戒するに越したことはないだろう。

「……俺は、別に光の結社に恨みがあるわけではない。ただ、怖い。あそこに入った人間は、全員目つきがおかしくなる。何かわからないものを信仰し、そのほかのことに目が行かなくなる。つい昨日まで隣で笑っていた友が、同じ結社の人間以外とはまともに話すらしなくなる。だから俺は、光の結社をなんとかしたい。そう思うんだ」

「そっか。なら、僕と一緒だよ。恨みなんてものは特にないけど、友達を返してほしい。言うことなんてそれだけさ」

「……ふ。同じことを考えていたか。だが、勝負は勝負。俺は、負けはせんから覚悟しておけ」

　ちょっと笑ってそう言い残し、そのまま戻っていく天田。言われたとおりにケースをポケットの奥深くに押し込み、何食わぬ顔をして夢想たちのところに戻る。さて、そろそろ時間かな。

「あーあー、それでは皆さん、お待たせしたノーネ。第２回戦、これより始めますノーネ！」

「頑張ってね、葵ちゃん！」

　そう声をかけると、彼女はそっと振り向いて、普段の様子に似つかない、どこか寒気をする笑顔をして見せた。

「……ええ、先輩」

さて、それではここで時間を少し巻き戻そう。時は、剣山のデュエルが終わる、その少し前……丸藤翔は、走っていた。彼は今の今まで遅い朝飯となった弁当、朝ご飯を作っておらず、しかもそのことをすっかり忘れていた清明からお詫びの品として急遽タダで貰うことになった観戦用のそれを食べていた。その間は観客席にいたのだが、いざ食べ終わって戻ろうとするとごみ箱はすでに弁当の空箱で満員状態。そこらへんに放置するわけにもいかず、わざわざ他のごみ箱を探してさまよっていたのだ。そのあたりに、彼の誠実ではあるが要領の悪さが目立つ点がよく表れているといえるだろう。

「ふー、すっかり遅くなっちゃったよ。急がないと、もう剣山君の試合も終わりそうだったし……と、トイレトイレ」

ちなみに、彼のこの戦いにおけるポジションは副将である。5分の休憩があることも考えれば、別にそこまで全力で走る必要はないのだが。

そしてトイレに入り軽く用を足し、手を洗っていると外から声が聞こえてきた。

「ふわ～ああ、ねーむい眠い。さっさと顔洗って戻りますかね」
　その声に聞き覚えがある気がして、なんとなく個室の中に隠れる翔。当然ここは男子トイレの中であり、わざわざ隠れる必要なんてどこにもない。だが、なんとなく顔を合わせたくない相手なような気がしたのだ。そのまま個室の中でドアに耳を立てて様子をうかがっていると、ジャバジャバと水道の水が流れる音がしばらく続いた。どうやら本当に顔を洗いに来ただけらしい、と一息ついた次の瞬間。
「しっかし、サンダーもえっぐいこと考えるよなあ……でもまあ、これが決まったらアカデミア本校も、だもんな。さすがサンダーだぜ。さ、かーえろっと」
「ま、待って！」
「あー？」
　とても不穏な台詞を聞き、思わず個室から飛び出していた。怪訝そうに振り返った、その声の主は。
「おっと。お前は確か今年の本校側代表メンバーじゃねえか」
「お前は！確か、去年ノース校で中堅だった……えーと、誰だっけ」
「なんだよもう、覚えてないのかよ！俺だよ俺、去年初手攻撃力９６００のモンタージュ・ドラゴン出したサンダー四天王の百、酒田（さけだ）だよ！」
「あ、思い出した。次のターン夢想さんに強制転移やられてた人だ」

「ええーい、そんなもん思い出すな！」

じたばたと手を振り回して怒っているポーズを取った後、なんとか落ち着いたように息を吐く酒田。身長の関係で再び翔を見下ろす形になったその眼には、先ほどまでのおどけた様子とはうってかわって真剣な光が宿っていた。

「まあいいさ。さてと、お前を向こうに帰らせていらんことを考えられると厄介だし、多少手順は変わるがしょうがねえ。お前、さっき『待て』って言ったよな？デュエリストに向かって待てなんて言う以上、当然デュエルの覚悟はできてるんだろ？」

「え、ええ!?」

翔は別に、そこまで非戦的な性格ではない。規格外なデュエル馬鹿である十代や清明と暮らしているせいで影こそは薄いが本人にそこそこの向上心があり腕も決して悪くはないため、ラーイエローへの昇格も間近である。それになにより、酒田がさっき漏らした言葉の内容も気になっていた。だから彼は少し迷ったものの、結局はデュエルディスクを構えるのだった。その様子を見た酒田が意外そうに、だが嬉しそうにニヤリと笑う。

「「デュエル！」」

「おいチビ、デュエルディスクの決定を待つまでもないな！先行はお前にくれてやるよ」

「……わかった。僕が先行だ。永続魔法、機甲部隊（マシンナーズ・フロントライン）の最前線を発動。さらに永続魔法、

マシン・デベロッパーも発動」

１枚ずつ、ゆっくりと戦線を整えていく翔。去年の今頃に比べれば、自分だって進歩している。本当ならこんな奴じゃなくて、十代（アニキ）にそれを見せたかった。そう思いながらも、デュエルの手は休めない。

「そして、ジャイロイドを守備表示で召喚。マシン・デベロッパーは機械族の攻撃力を上げる効果があるけど、守備力には影響しない。カードをセットして、これでターンエンドっス」

ジャイロイド　守１０００

様子見ということで、ある程度の守りを固める。決して天狗にならないようにと自分に言い聞かせながら、ちらりと酒田の様子をうかがった。

「俺のターン。手札から魔法カード、オノマト連携（ペア）を発動！」

「オノマト……連携？」

聞き覚えのない単語に首を傾げる翔。彼の記憶が確かならば、酒田のデッキは最上級モンスターだらけの一歩間違えれば手札事故まっしぐらな圧倒的な重さを誇るものだったはずだが。その反応が期待通りのものだったらしく、またまたにやりと酒田が笑う。

「俺は去年、あの河風とかいう女に負けた。それで１つ賢くなったのさ。最初から馬鹿

でかい攻撃力の超大型モンスターを1体出すよりも、多少総攻撃力を下げてでも戦線を分厚くした方がリスクが少ないってことをな。オノマト連携の続きだ、手札を1枚捨てることでデッキからズババ、ガガガ、ゴゴゴ、ドドドのモンスターから1種類ずつ2枚までサーチができる。俺が手札に加えるのは、ドドドバスターとゴゴゴジャイアント。そしてドドドバスターは自分の場にモンスターがいない時、手札から自分のレベルを4にして特殊召喚できる!」

ドドドバスター　攻1900　☆6↓4

「だ、だけどジャイロイドは1ターンに1回戦闘破壊されない効果がある!これでなんとか」

「ならないんだな、それが!自分フィールドの戦士族モンスター1体をリリースすることで、手札のターレット・ウォリアー特殊召喚!そしてターレット・ウォリアーをこの効果で特殊召喚した時、リリースした戦士族の攻撃力ぶん自身の攻撃力をアップさせる」

両肩に小さな砲台を備え付けたまさに動く城壁のような戦士が、ドドドバスターの構えていた大型ハンマーを受け継いでぐっと握りしめる。

ターレット・ウォリアー　攻1200↓3100

「驚くのはこれからだぜ!まだ残ってる召喚権を使ってゴゴゴジャイアントを通常召

喚、そのまま効果発動！召喚に成功したこのカードを守備表示にすることで、墓地のゴゴゴモンスター１体を守備表示で特殊召喚できる……甦れ、ゴゴゴゴラム！さらにゴゴゴゴラムが特殊召喚された時、その表示形式は変更されるぜ。ゴラム、攻撃表示に変更だ！」

ゴゴゴジャイアント　攻２０００→守０

ゴゴゴゴラム　守０→攻２３００

「最初にオノマト連携の効果で捨てたモンスター……！」

「だから言ったろ、戦線を分厚くするって。そして自分フィールドのゴゴゴをリリースすることで、このカードは手札から特殊召喚できる！ゴゴゴジャイアント、進化！ゴゴゴゴーレム―Ｇ（ゴールデンフォーム）Ｆ!!」

ゴゴゴゴーレム―ＧＦ　攻？

赤茶色の巨人、ジャイアントの姿が黄金色に光を放ち、その右腕に岩が集まってよりパワーアップ。胸の中心には赤く光るコアが出現し、はるかに増したパワーを制御することを可能にする金の巨人がターレット・ウォリアー共々その岩の体から圧迫感を放ち翔を圧倒する。

「攻撃力が、ない？」

「ああ、そうさ。ＧＦの攻撃力は決まっていない……なぜなら、攻撃力は今リリースし

た進化前のゴゴゴモンスターの倍の数値になるからだ！」
ゴゴゴゴーレム―ＧＦ　攻４０００
「さあ、ド派手にやらせてもらうぜ！ＧＦ、ジャイロイドを攻撃だ！グレートキャノン！」
「トラップ発動、スーパーチャージ！自分の場にロイドだけがいて相手が攻撃してきたとき、カードを２枚ドロー！」
岩の拳が迫り、ジャイロイドのプロペラの付け根に直撃する。辛うじて大破は避けたものの、もう空を飛ぶことはできないだろう。
ゴゴゴゴーレム―ＧＦ　攻４０００→ジャイロイド　守１０００
「一回は耐えても、もう一回は無理だろ！ゴゴゴゴラムで続けて攻撃だ！」
ずんぐりむっくりの岩石の戦士が手にした金棒を振り下ろし、すでにスクラップ寸前だったジャイロイドを完全に打ち壊す。
ゴゴゴゴラム　攻２３００→ジャイロイド　守１０００（破壊）
「だけど、この瞬間に２枚の永続魔法の効果を発動！マシン・デペロッパーはフィールドの機械族が破壊された時、このカードにジャンクカウンターを２つ乗せるっス。さらに機甲部隊の最前線があるときに機械族が戦闘破壊されたら、同じ属性でより攻撃力の低いモンスター１体をデッキから呼び出せる。僕が呼び出すのは風属性のビークロイド、

サイクロイド！」

壊れたヘリコプター（ジャイロイド）の部品を組み立て、新しく自転車（サイクロイド）が作り出される。攻守も低いバニラモンスターだが、翔のデッキでは装備魔法の補助輪を駆使して戦う立派なアタッカーである。もっともその補助輪がない以上、ただの壁にしかならないのだが。

マシン・デペロッパー（０）→（２）

サイクロイド　守１０００

「覚悟しな、おんぼろ自転車！ターレット・ウォリアーで攻撃だ！」

生ける城壁が、両肩の砲台から球を乱射しつつ巨大ハンマーを振り下ろす。当然そんなオーバーキル気味な一撃に単体では弱小モンスターであるサイクロイドが太刀打ちできるはずもなく、これまた一瞬でスクラップになる。

ターレット・ウォリアー　攻３１００→サイクロイド　守１０００（破壊）

マシン・デペロッパー（２）→（４）

「うわっ！き、機甲部隊の最前線……の効果は１ターンに１度だから使えないけど、マシン・デペロッパーにはこれでジャンクカウンターがもう２つ追加！」

「どうだ！俺はこれで、ターンエンドだ」

翔　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：機甲部隊の最前線
マシン・デペロッパー（４）
酒田　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：ターレット・ウォリアー（攻）
ゴゴゴゴーレム―ＧＦ（攻）
ゴゴゴゴラム（攻）
魔法・罠：なし
モンスターこそ失ったが、今のターンの猛攻をノーダメージで防ぎ切った。そこに、翔の成長の姿が見られるだろう。そして、それに天狗にならないように気を付けながら次の一手を考える。
「僕のターン！マシン・デペロッパーの効果発動！このカードを墓地に送ることで、その時乗っていたジャンクカウンターの数以下のレベルを持つモンスター１体を墓地から蘇生させる！」
「へっ、またジャイロイドか？いいぜ、やってみろよ」
「いいや。僕が蘇生させるのはレベル３、サイクロイドさ」
「はぁ!?ふざけてんのかテメェ！」
サイクロイド　攻８００

えらい言われようではあるが、実際このタイミングではもう1度ジャイロイドを呼ぶのが得策と言えるだろう。ただしそれは、あくまでもフィールドのみを見た場合。サイクロイドを複数採用している翔のデッキにとっては、この方が都合のいい場合もあるのだ。

「魔法カード、融合を発動。同名機械族モンスター2体……場と手札のサイクロイド2体を素材にして、融合召喚！ペアサイクロイド！」

子供用自転車のサイズが大人用のそれ程度に大きくなり、オレンジ色だったカラーも赤を基調とした攻撃的な色に変わる。椅子も通常の自転車と同じ1つから、その後ろにもう1つ備え付けられた。その姿はまさに、2人乗り用自転車。

ペアサイクロイド　攻１６００

「なんだなんだ、融合までしてやっとレベル3アタッカークラスかよ。火力がないなあ、火力がよお！」

お前の火力は高すぎる。そんな事実を言える人間がこの場にいなかったのは、翔にとっては不幸なことだったろう。

「うるさい！さらに、サブマリンロイドを召喚！」

サブマリンロイド　攻８００

「そしてバトル！ペアサイクロイドは攻撃力が低い代わりにダイレクトアタッカーの力

を持つモンスター。ペアサイクロイドでダイレクトアタック！ダブル・サイクロン」
ペアサイクロイド　攻１６００→酒田（直接攻撃）
酒田　ＬＰ４０００→２４００
「ちっ、めんどくさい真似してくれんじゃねえか」
「まだまだ！サブマリンロイドは水中や地中に潜むことができるビークロイド。このカードも自身の効果でダイレクトアタックができる！ディープ・デス・インパクト！」
地中を突き進む魚雷の一撃が、酒田の足元で爆発する。その爆風に煽られ、酒田の髪が逆立った。
サブマリンロイド　攻８００→酒田（直接攻撃）
酒田　ＬＰ２４００→１６００
「どうだ！」
「面白いことやってくれんじゃねえか。だけどな、そのおかげでお前の場にいるのは大したことない攻撃力のモンスターが２体だけ。たっぷり礼をしてやるから覚悟しとけよ」
「そんなことさせるもんか！サブマリンロイドの効果発動、このカードがダイレクトアタックをした後、このカードを守備表示にできる。これなら戦闘ダメージは」
「いいや、ダメだね。ゴゴゴゴーレム－ＧＦのモンスター効果！相手フィールドでモン

スター効果が発動した時、このカードの攻撃力を１５００ポイント下げることでその発動を無効にする！パワー・チェンジ・バリア！」

金色の巨人が胸のコアから人型の光線を放ち、申し訳程度についた両腕で守りを固めようとしたサブマリンロイドを強引に戦闘モードに引き戻した。

ゴゴゴゴーレム―ＧＦ　攻４０００→２５００

「そんな！か、カードをセットしてターンエンド……」

「なら、俺のターンだな。ドロー、野獣戦士ピューマンを召喚だ」

野獣戦士ピューマン　攻１６００

「そしてバトル、ターレット・ウォリアーでペアサイクロイドを攻撃！リボルビング・ショット！」

再び銃を乱射しながらハンマー片手にとびかかる動く要塞。２人乗り自転車はなかなか市販されておらず知名度も低いなかなかレアな代物ではあるが、だからといって戦闘目的の要塞に勝てるわけではない。ジャイロイドよりもステータスは高いものの耐性を１つも持っていないペアサイクロイドが、あっという間にくず鉄の塊に変化する。

ターレット・ウォリアー　攻３１００→ペアサイクロイド　攻１６００（破壊）

翔　ＬＰ４０００→２５００

「機甲部隊の最前線の効果！ペアサイクロイドは地属性、だから地属性のエクスプレス

ロイドを特殊召喚！」

エクスプレスロイド　守１６００

「守備力１６００、ねえ。確かにピューマンじゃ破壊できねーけど、それがなんだってんだ」

「僕の狙いはそこじゃないよ、エクスプレスロイドの効果発動。このカードが特殊召喚されたことで、墓地のロイドモンスター２体を手札に加えることができる！」

「何っ!?くそ、ＧＦの効果は強制効果だ。パワーチェンジ・バリア……攻撃力１５００を犠牲にして、相手フィールドのモンスター効果を無効にする。まんまとやりやがったな」

ゴゴゴゴーレム―ＧＦ　攻２５００→１０００

「へへへ、どうだ！恐れ入ったか！」

うまいことエクスプレスロイドの効果を使って酒田の裏をかいたのがよっぽど嬉しかったらしく、あれだけ自分に言い聞かせていたのも忘れて大威張りで胸を張る翔。だがそれは、かえって酒田の闘志に火をつけたようだ。

「ああ、恐れ入ったぜ。正直、お前みたいなチビがここまでやるとは思わなかった。だから、ここからはさらに本気だぜ！とは言ったものの他の奴らじゃ火力が足りねえし、これはしょうがねえ。ゴゴゴゴラム、エクスプレスロイドを攻撃だ！」

ゴゴゴゴラム　攻２３００→エクスプレスロイド　守１６００（破壊）
「次、ピューマン！サブマリンロイドに攻撃！ブラック・スラッシュ！」
野獣戦士ピューマン　攻１６００→サブマリンロイド　攻８００（破壊）
翔　ＬＰ２５００→１７００
「ＧＦで……ダメージはデメリット効果で半分になっちまうしな、大人しく守備にしとくか。さらに野獣戦士ピューマンのモンスター効果発動。このカードをリリースして、デッキに存在する俺のエースモンスター……異次元エスパースター・ロビンをサーチする。カードをセットして、ターン終了だ」
翔　ＬＰ１７００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：機甲部隊の最前線
酒田　ＬＰ１６００　手札：２
モンスター：ターレット・ウォリアー（攻）
ゴゴゴゴーレム―ＧＦ（守）
ゴゴゴゴラム（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場の状況も手札もライフも、全て酒田の方がリードしている。だが、翔はもう負ける

気がしなかった。先ほどの攻防で自信をつけた彼は、そのまま押し切るカードを求めてドローを行う。
「魔法カード発動、貪欲な壺！墓地のエクスプレスロイド、ペアサイクロイド、ジャイロイド、サイクロイド、サイクロイドの５体をデッキに戻してさらに２枚のカードをドロー。そして魔法カード、ブラック・ホールを発動！フィールド上の全モンスターを破壊する！」
「なに!?ここでそんなガチカード使いやがって！トラップ発動、神の宣告！ライフを半分払うことになるが、その発動は無効になるぜ」
酒田　ＬＰ１６００→８００
「防がれちゃったか……カードを伏せて、ターンエンド」
「危なかったな、ったく。俺のターン、ＥＭ（エンタメイト）ディスカバー・ヒッポ召喚だ！」
ＥＭディスカバー・ヒッポ　攻８００
シルクハットをつけたピンク色のカバ。だが、その攻撃力はこれまで彼が使ってきたモンスターのことを考えるとおかしなぐらいに低い。
「ディスカバー・ヒッポのモンスター効果だ。このカードを召喚したターン、俺はレベル７以上のモンスターをアドバンス召喚できる。ゴゴゴゴーレム―ＧＦとヒッポをリリースし、アドバンス召喚！光の意思を守るため、今日も正義の大盤振る舞い！異次元

エスパースター・ロビン、満を持して参上！」
異次元エスパースター・ロビン　攻３０００
「スター・ロビン！いや、それよりも今光の意思って……まさか！」
何かに気づき、はっと息をのむ翔。だがもう遅い。このことを清明たち本校メンバーに伝えるには、このデュエルを何としてでも制さなければならない。
「何をぼさっとしてやがる！ゴゴゴゴラムでダイレクトアタック……念のため言っとくが、ロビンが場にいる限りお前はロビン以外を攻撃できず、効果対象にもとれないぜ。その伏せカードがなんだとしても、それが対象をとる効果ならロビン以外には発動すらできないんだよお！」
ゴゴゴゴラムが金棒片手に、無防備な翔に殴りかかってくる。だが、いざ叩き付けようと金棒を振り上げた瞬間、その姿がいきなり爆発した。ゴラムだけではない。ターレット・ウォリアーが、そしてスター・ロビンまでもが同時に爆発を起こす。
「な、何をしやがった！」
「これだよ。対象を取らない攻撃反応カード、聖なるバリアーミラーフォース。これならスター・ロビンの効果に引っかかることもなく発動できて、相手の攻撃表示モンスターを全滅させられるからね」
逆転に次ぐ逆転。もっとも、ここでただで終わるほどの男ならば、彼にサンダー四天

王の座は務まらないのだが。
「ゴゴゴゴラムのモンスター効果発動、このカードが墓地に送られたことでデッキからゴゴゴモンスター1体を墓地に送る。ゴゴゴゴーレムを送ってターンエンドだ」
翔　ＬＰ１７００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：機甲部隊の最前線
酒田　ＬＰ８００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：なし
「僕のターン、来た！ドリルロイドを召喚、そのまま攻撃！」
両手と鼻がドリル状になったモグラをモチーフにしたと思われるロイドが、３つのドリルを駆使して突っ込んだが、その攻撃はまだ届かない。
「異次元エスパースター・ロビン、正義のヒーローは何度だって立ち上がる！相手のダイレクトアタック時、このカードを守備表示で特殊召喚……スター・ロビンよ永久(とわ)に！」
異次元エスパースター・ロビン　守１５００
「だけどドリルロイドの攻撃力は１６００だし、何かしてきてもこのカードには守備モンスターを一方的に効果破壊する効果がある。そのまま攻撃だ！」

「悪いな、これだけじゃねえ！ロビンの効果の発動にチェーンして、手札のバトルフェーダーを発動！直接攻撃宣言時に特殊召喚し、このバトルフェイズは終了だ」

バトルフェーダー　守０

「そ、そんな」

翔の残りライフは１７００、そしてロビンの攻撃力は３０００。もし次のターンに酒田がモンスターを引かなければギリギリ持ちこたえられるが、それでもかなりライフは厳しくなる。モンスターを引いたらその時点でまず間違いなく終了と、翔にとってはかなり勝率の悪い賭けとなってしまった。

だが、手札のない翔にはどうすることもできない。

「悪いな、俺のターンだ。ドロー！ちっ、闇がいないのに開闢かよ。ったく、運が良かったな。スター・ロビンを攻撃表示にしてドリルロイドに攻撃！ビック・リパンチ！」

異次元エスパースター・ロビン　攻３０００→ドリルロイド　攻１６００（破壊）

翔　ＬＰ１７００→３００

この瞬間、すでにすべての運命は決していたといえるだろう。バトルの神様は１回のデュエルで何度も何度も微笑んでくれるわけではない、先ほどのターンが酒田にとって最後のチャンスだったのだ。そしてそれを生かしきれなかった場合、待っているのは当然、敗北一直線であると相場が決まっているわけで。

「機甲部隊の最前線の効果で、地属性のエクスプレスロイドをまた召喚！もう一回効果を使って、墓地のサブマリンロイドと今破壊されたドリルロイドを手札に加えるよ」
エクスプレスロイド　守１６００
「チッ……ターンエンドだよ、ターンエンド」
翔　ＬＰ３００　手札：３
モンスター：エクスプレスロイド（守）
魔法・罠：機甲部隊の最前線
酒田　ＬＰ８００　手札：１
モンスター：異次元エスパースター・ロビン（攻）
バトルフェーダー（守）
魔法・罠：なし
「僕のターン、ドロー。このカードは……よし、魔法カード発動、パワー・ボンド！この究極の融合カードで、手札のスチーム、ドリル、サブマリンの３体のロイドを融合！現れろ、スーパービークロイド！」
３体ものモンスターを用いた融合召喚。地上、地中、水中で働く３体の力が１つになり、サブマリンロイドの潜水艦型をベースに巨大化していく。
「なんだ、このモンスター!?」

「僕のエースモンスター、スーパービークロイド―ジャンボドリル！」
　スーパービークロイド―ジャンボドリル　攻３０００
「味な真似しやがるぜ。だがな、ロビンが存在する限り相手はロビン以外を攻撃できず、そしてそのモンスターの攻撃力はロビンと全く同じ。それじゃあ攻撃はできねえはずだぜ！」
「ううん。それは違うよ」
「何？」
　スーパービークロイド―ジャンボドリル　攻３０００→６０００
「こ、攻撃力が……」
「これが、パワー・ボンドの力。このカードで融合された機械族は、攻撃力が元々の数値ぶんアップする！」
「く、くっ……」
「さっき、火力が足りないとか言ってたよね。だけど、今は僕の火力の方が上！行っけえ、ジャンボドリル！
　スーパービークロイド―ジャンボドリル　攻６０００
　→異次元エスパースター・ロビン　攻３０００（破壊）
酒田　ＬＰ８００→０

「ま、負けちまった……やべ、サンダーになんて言ったらいいか」
「今は、僕の質問に答えてもらうよ！」
半ば呆然と呟く酒田の目の前にずい、と立ちふさがる翔。一瞬視線が辺りをさまよったものの逃げることは無理だと判断したらしく、やむを得ないといった様子でぽつぽつと全てのことを話し始める。最初の内は黙って聞いていた翔だったが、話が進むにつれてみるみるうちに顔色が青くなっていった。そして話がすべて終わったとき、翔は全てを理解した。
「そ、それじゃあ……」
「ああ、そういうことだな。もうほとんどうまくいってるし、最悪ばれても問題ないタイミングだったってわけだ。ま、ばれないに越したことはなかったんだけどな。ハハハハハ」
「は、早くみんなに伝えないと！」
酒田のことはもう放っておき、一目散に会場めがけて走り出す翔。その後ろ姿を酒田は、くっくっくと笑いながら最後まで見送っていた。

「あー、翔！今までずっと何やってたの！今一番重要なとこなんだよ！」
どたどたといかにも全速力！といったふうに顔を真っ赤にして走りこんできた翔を見つけ、ついつい声を荒げてしまう。あんまり説教めいたことはやりたくないんだけど、これはいくらなんでも遅すぎる。一食食べて帰ってくるだけなのに、なんでこんなに時間がかかるんだろうか。
「はあ、はあ……そ、そんなことよりみんな！今、今の試合は……！」
「え？まあ、見ての通りこんな感じだけど」
葵　ＬＰ８５０　手札：１
モンスター：銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトンドラゴン）（攻）
魔法・罠：なし
天田　ＬＰ９００　手札：２
モンスター：ハングリーバーガー（攻）
魔法・罠：補給部隊

「……俺のターン、ドロー！ふん、遅いぞ。装備魔法カード、リチュアル・ウェポンを発動。このカードはレベル６以下の儀式モンスターにのみ装備でき、その攻守を１５００ポイントアップさせる」

ハングリーバーガー　攻２０００→３５００　守１８５０→３３５０

すでに儀式魔人３体の力を得てフィールドを暴れまわっていたハングリーバーガーが包み紙の鎧とポテトの剣を装着し、ますます手が付けられない強さになっていく。対する葵ちゃんも相手の特殊召喚を封じる儀式魔人リリーサーの効果に苦しみながらもなんとかエースの銀河眼召喚に成功したものの、状況はかなり苦しい。負けるな、葵ちゃん。

「ほら、翔も応援しないと」

「そうだドン、丸藤先輩。ここで俺たちが応援しないで、いつやるのかって話ザウルス！」

「これならなんとか……いや、やっぱり駄目だ！清明君、早くこの試合を止めさせて！」

「へっ？」

まったく、いきなり帰ってきて何言ってんだ翔は。確かに状況は苦しいけど、そうなったからって棄権するのはさすがに卑怯すぎる。どうせ乗りかかった船なんだ、最後

まで葵ちゃんを信じるのが筋ってものだろう。
「いいから、早く！訳は全部後で話すッス！」
「うーん、やっぱり昨日からの嫌な予感が消えないなあ、なんだって。ねえ、清明。もしかして、ちゃんと話を聞いた方がいいんじゃないの、だってさ」
「そ、そうっスよ！早くしないと！」
なんだか妙に焦って早く早くと繰り返すだけの翔に何を感じたのか、夢想まで乗り気になり始める。うーん、そうは言ってもなあ。そうこうしているうちに、試合が動き出した。
「……さらに、悪魔の調理師（デビルズ・コック）を召喚。お前の手札に伏せカードはなく、すでにオネストは墓地。これで終わりだ」
悪魔の調理師　攻１８００
さすがの葵ちゃんも、もう限界だろうか。銀河眼を打点で上回ったハングリーバーガーの攻撃を回避するには、銀河眼自身の効果を使ってお互いをゲームから除外させるしかない。だが、それをやってしまってはそのあとの悪魔の調理師の攻撃が素通しになる。頼みの綱のオネストも使い切った今、このまま攻撃を待つことしかできない。
……棄権、しよっかな。
「先輩、なに考えてんですか？黙って見ててくださいよ」

「あ、聞こえてた？」
「そりゃまあ、あれだけ大声で喋られたら。それに、もう遅いですよ」
「葵ちゃん、それってどういう」
何がもう遅いのか、と聞こうとした瞬間、こちらを向いて喋っていた葵ちゃんがくるりと前を向き天田に対して声を張る。
「さあ、来なさい！葵流忍法、真正面から迎え撃ちます！」
「……その意気やよし。ハングリーバーガーで銀河眼の光子竜を攻撃、暴飲暴食メタボリック！」
「銀河眼の効果発動、銀河忍法コズミック・ワープ！戦闘を行う相手とこのカードを、ゲームから除外します！」
２体のモンスターが銀河の隙間に消え、装備する対象のなくなった包み紙とポテトが地面に落ちる。これで葵ちゃんの場にカードはもうないが、天田にはまだ攻撃権のある悪魔の調理師が控えている。ふぅ、と一拍おいたのち、天田が口を開いた。
「……終わりだ。悪魔の調理師で――――――」
「させませんよ？」
「……む？」
まるで目が笑ってない笑顔を浮かべ、攻撃宣言を遮る葵ちゃん。でも、もうこの状況

でできることなんてたかが知れている。確か彼女のデッキにはクリボーは入ってるけどバトルフェーダーや速攻のかかしは入ってないはずだし。

「私は、いえ私たちはこの時をずっと待っていたんですよ……あなたがノース校最後の一人です。手札から、ディメンション・ワンダラーの効果発動。銀河眼の光子竜が効果を使った時にこのカードを手札から捨てることで、相手に効果ダメージを与えることができます」

「……なるほど、起死回生の一手というわけか。だが、俺にだって意地がある。ノース校四天王としての意地がな。速攻魔法、神秘の中華なべを発動。自分のモンスター1体をリリースし、その攻撃力か守備力の数値ぶんだけライフを回復する！俺が選択するのは、悪魔の調理師の攻撃力１８００だ」

悪魔の調理師が大鍋を巧みに操り、なにやらいい匂いのする炒め物を作り出す。しかし具材にも焼き色がついてあとは味を整えるだけ、となったあたりで足を滑らせたのか、そのまま本人が鍋の中に吸い込まれてしまった。怖いよ演出！

天田　ＬＰ９００→２７００

とはいえ、これで天田のライフは一気に２７００まで持ちあがった。いくらダメージが来るのかはわからないけど、まあバーンカードならせいぜい１０００ダメージぐらいがいいとこだろう。とはいえ、これで悪魔の調理師の攻撃がなくなったんだから……

と、そこまで考えた時、また葵ちゃんが微笑んだ。
「ライフ回復ですか。その程度のライフで逃げようなんて、いくらなんでも虫が良すぎですよ。ディメンション・ワンダラーの効果ダメージは、発動トリガーとなる銀河眼の攻撃力と同じ数値です」
「……馬鹿な!そんな数値のバーンカードが……!」
「３０００の効果ダメージ。防げるものなら、防いでみてください」
「は、早くこの試合を中止にしないと!」
そんなことを言われても、もう遅い。勝敗は既に決したのだ。
天田　ＬＰ２７００→０
「……むぅっ!」
その場に倒れる天田。その様子を見た翔が、絶望したように一言もらす。
「間に合わなかった……これで、ノース校は全員……」
「ねえ翔、さっきからなんなのさ一体。いい加減ちゃんと説明してよ!」
ただならぬ様子を感じ、いい加減はっきりさせたいと翔の方へ向き直る。睨みつけるように問い詰めた時、葵ちゃんの声がした。
「その必要はありませんよ、せーんぱい。……さあ天田さん、あなたも私たちと共に行きましょう?もう、みんな待ってますよ」

そう言いつつ、倒れたままの天田に手を差し伸べる。その手を、がっしりと天田が掴んで立ち上がった。

「……無論だ。多少入った時期は遅いが、光の結社のために今からでも全力を尽くさせてもらう」

「え……？」

はっはっは、ふふふと笑いあう二人。その姿は、とてもとても遠いものに感じられた。

ターン４５　ノース校と選ばれし戦士（後）

「え……？」

呆然として、声が出ない。そんな、だって、あの葵ちゃんがいつの間に。昨日会った時だってそんな感じじゃなかったし、今朝から今までの間はほぼずっと夢想と一緒にいたはずだ。じゃあ、一体いつ。

「おいおい、なんか随分面白い顔してるじゃんかよ」

「よ、鎧田！どうもこうもないよ、いま天田が……」

確か、鎧田はまだ光の結社に入ってないはずだ。ごく普通の格好をしてるところを見ると、サンダー四天王もまだ……と、そこでハッと来た。もしかして、翔がずっと試合を中止するように言ってたのはこのことを知ってたからなんじゃあ。

「翔！」

慌てて彼の方を見ると、悲しそうに目を伏せられた。何か言おうとしていたようだが、それより先に鎧田が口を開く。

「天田、そう天田な。いやー、実際こいつには苦労させられたぜ。どうも途中から自分しか残ってないのを薄々勘づいてたみたいでな、ここんところ何回誘ってもデュエルして

くれないわ、なんのかんの言ってどこかへ逃げちまうか、挙句の果てにはデッキを持ち歩かないからデュエルをしないなんて荒業までやりやがるしな。でもまあ、それも今日で終わりだ。ん？どうした？なんだよ、せっかく人が話しかけてやったのにシカトか？親の顔が見てみたいもんだな。まあいいさ、じっくりたっぷり……」

「ネタバラシ、とでも『洒落込みましょう』か、先輩？」

洒落込みましょうか、のところで器用に僕の口真似を織り込んでいきつつ会話に割り込んでくる葵ちゃん。わりと似てると思うけど、僕の口真似なんてそんなしょうもないものいつの間に覚えたんだろう。

そんなどうでもいいことを疑問に思っていると、なにか気の利いたことを言う前に口が勝手に動いていた。

「ああいいよ、耳の穴かっぽじって聞いてやるからさっさと話してちょうだい」

んー、口悪いな僕。こういう喧嘩腰な態度は友達なくすからやめようって思ってたはずなのに。でもまあ、驚いてるのは僕だけじゃない。むしろ僕以上に剣山たち外野の面々から驚きの目を向けられてる気がする。無理もないか、アカデミアに来てからは基本的には穏やかな人だったからね、僕。そしてそのイメージは葵ちゃんにとっても同じだったらしく、一瞬へえ、という表情になったもののすぐにまた不敵な笑みに戻った。

「では遠慮なく。そもそも、私が光の結社の素晴らしさを知ったのはつい昨日のことで

す。ほら、先輩のところに3人組が行ったでしょう?あの時私が一人でいた時、こちらにも光の結社の方が来てくださったんですよ」
「ああ、それは確かに見たよ。ちょうどすれ違った」
そう、それは覚えている。その後で葵ちゃんにおかしな点が時になかったからてっきり撃退したもんだとばっかり思ってたけど、どうやら違ったらしい。つまり、あの時からすでに引っかかってたわけだ。
「まあ、そうですね。正確に言えば、すれ違わせた、ですけど。下手に私一人でいるよりも先輩の到着した時間と同じタイミングで帰ってもらえばいかにもそれっぽいですし、実際先輩もそれに騙されてくれましたよね。もう本当に、気持ちいいぐらいあっさりと」
「……悪かったね、単純で」
くすくすと笑う葵ちゃんに、少しむすっとしながら返す。ちょっと前までこんな嫌味な子じゃなかったのに本当に人間変わるなあ、光の結社。なんか横の方で鎧田が酸欠の金魚みたいに口をパクパクさせてるけど、もしかしてセリフを全部葵ちゃんに横からとられたせいで話し足りないんだろうか。いつ口を出すか見守る意味も込めてもう少し放っておこう。
それにしても、この時点でもう向こうの力関係もだいたい読めたね。やっぱこの学校

の女の子はいろんな意味で男より強いのばっかりだわ。
「それでも、ですね。実を言うと、これでも計画通りじゃないんですよ?」
「へえ?」
　ちょっと不満げな様子の葵ちゃん。完全に僕は引っかかったのに、本来ならまだこの話に続きがあったらしい。
「いえですね、本来ならば先輩にも昨日の時点で私たちの仲間になってもらう予定だったんですよ。確かに私一人で先輩に勝つのはちょっと苦しいかもしれないですが、一度安心させておいてからの不意打ちという形、それに何より斎王様から力を頂いて光の波動を手に入れたこのカード、私の銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトンドラゴン）のご加護があれば十分に勝算はありました。ですけど……」
　そこで言葉を切り、一度僕の後ろで黙っている夢想の方にちらりと目を向ける。ああ、なるほどそういうことか。
「ですけど、まさか河風先輩まで連れてくるとは思いませんでしたよ。私だって1対1ならばまだしも、先輩たち2人を相手にして誰にも気づかれないように勝つことができると考えるほど間抜けではありませんよ。仕方ないので、昨日はひたすらばれないように専念してました。もっとも、河風先輩は気づいていたのかもしれませんが。昨夜は、絶対に私と先輩が二人にならないように随分気を使っていらしたみたいですし」

「あれ、そうだったっけ？」
　チラッと振り返ると、軽く肩をすくめる夢想の顔。
「言ったでしょう？嫌な予感がする、って。もし清明に何かあったら」
「ああ先輩方、もういいです。のろけはお腹いっぱいですので。さーてと、他に何か聞きたいことはありますか？なければ、試合の続きと洒落込みましょう？」
　多分のろけではないと思う。でもまあ、ここでそんなことに文句をつけるほど僕は野暮じゃない。むしろ夢想とのろけ話とか、その、正直嬉しい。今はそれどころじゃなさそうだ、ってことを除けばだけど。
「じょ、冗談じゃない！とっとと……」
「中断なんて、当然許されるはずないでしょう。それとも棄権しますか？2勝した時点での棄権なんて随分と馬鹿らしいことですが、もしやりたいならここにきているお客さんに対してちゃんと多数決で聞いてみて下さいね？説得にはか、な、り、骨が折れるでしょうけど」
「……そういうこと。そこも抜かりはないわけね」
　ざっと周りを見回してみる。ノース校が全員光の結社に入っているってことは、本校の分も合わせるとだいたい5分の4ぐらいが敵ってことか。当然、そいつらは何を言っても終わらせる気なんてないだろう。この勝負を受けた時から、すでに僕らは罠にか

かっていたようだ。
　特にいいアイデアも浮かばず、どうすればいいのかわからないので上を見る。当然青い空が見えるようなことはなく、野球ドーム並みに高い位置にある天井とそこに備え付けられたスポットライト含むいくつもの照明、それに火災用のスプリンクラーが見えるだけだった。
「それで、この後はどうしようってのさ」
「私としてもデュエルを介さずに口約束だけでこちら側（光の結社）に入る、などと言われても信用できませんし、デュエルはちゃんとやってもらいますよ。先輩の持っている闇のカードとやらでも光の力を防ぐことができないのは、三沢先輩のおかげでもうわかってますし」
　三沢の闇のカードというのは、ウリアのことだろう。なるほど、確かに三幻魔の１体であるウリアの正式な使い手になった三沢でもデュエルに負けた時は光の洗脳にやられてた。となれば、僕がやられた時にチャクチャルさんに守ってもらうっていう案も使えそうにない。闇のカードの謎パワー的なサムシングで立ち向かうのは無理ってことが、三沢という前例のせいで証明されちゃったわけか。
「さあ、諦めてデュエルを続け……」
「そ、そろそろ代わってくれ、な？」

む、葵ちゃんに真っ向から意見を言うなんて根性あるな鎧田。僕だってあんまりやりたくないのに。

しかし、言ってることは情けないもんだ。

「ああ、まだ何か喋り足りませんでしたか？いいですよ、もう私が言いたいことは全部言いましたし」

「俺が言いたかったこともほとんど全部……ああいやなんでもないです。まあとにかくだ、清明。お前らもここで諦めて俺たちとデュエルしようぜ、な？」

冗談じゃないよ馬鹿。この人数比相手で戦う気なんてさらさらない、ここは戦略的撤退だ。ということでもう一度逃げ道を探して、横やら上やらに目をやる。走って逃げるのは無理そうだし、とすれば何か別の手を考えるしかない。ここにあるもので今見える範囲のものはどれも期待できそうにないし、あと近くにあるのは内ポケットの飴ちゃんと……あ、いいこと考えた。

「さあ、準備はできたか？大将のお前の出番はまだ先だろ、さっさと中堅のやつを出せよ」

この手なら十分なんとかなるだろう。勝ち誇った顔でそう言ってくる鎧田に、思いっきり笑ってみせる。

「やだね」

「あー？聞こえねえな。早く試合の続きを始めようぜ、って言ってんだよ」
「あっそ。いいよ別に聞いてなくても、どうせここでこの勝負は終わりにするし」
「何？お前らだけでそんなことできるわけが」
　ああまったく、これ以上はないくらい最高のセリフを吐いてくれる。そのセリフ、一つ一つが悪の組織の下っ端……ヒーローの逆転に痛い目を見る中間管理職ポジの悪者みたいじゃないか。こんな最高の舞台を作ってくれたなら、こちらとしても全力で期待に応えないとね。
　もっとも僕のやることはたった一つ。悪の軍団に追い詰められた一般人よろしく、逆転の切り札を呼べばいいのだ。さっとデッキケースに手をやり、当然のごとく手の中に納まった１枚のカードを高々と掲げる。これが僕の切り札だ！
「霧の王（キングミスト）オオオオォォッ！」
　瞬間、精霊体の霧の王がふわりとカードの中から飛び出てきて、任せておけと言わんばかりに頷いて手にした大剣を一振りする。みるみるうちにあたりがどこからともなく湧いてきた霧に包まれ始めた。それもただの霧じゃない、霧の王が生み出した魔法の霧だ。ふだん焼き菓子に使ってる安物の牛乳なんぞよりもはるかに濃くてきれいな白色が、数センチ先もよく見えないほどに辺りを埋め尽くす。いやー、精霊召喚が思いっきりできるってのは気分がいい。ちょっとスカッとできたし。

当たり前だけどこれは想定外だったらしく、さすがの葵ちゃんも多少うろたえた声になった。
「こ、これは一体!?先輩、何をしたかは知りませんけどとにかく何かしましたね！ですが、こんなことをしたって何の意味も……！」
「そうだね。これだけやっても、多分こっそり逃げ出すのは無理だと思う。というか、こっちからも君たちどころか出口がどこかすら見えないし」
これは嘘でもなんでもない。非常灯の明かりすらここからでは見えないのだ。だけど、僕の狙いは煙幕たいて逃げ出すことじゃない。
「だけど、そろそろじゃない？カウントダウン行くよー、５、４、３、２、１」
「い、一体何を」
その言葉は、途中でかき消された。もっと大きな音が、頭上から響いてきたのだ。まず、不快感を感じるサイレンの警告音。そして、機械で合成されたよく通るけど無機質な声。
『火事です。火事です。デュエルルームにて、火災が検知されました。生徒及び職員の皆さんは、至急該当現場から避難してください。繰り返します。火事です。火事です……』
その後一拍おいて、頭上から大量の水が降ってくる。おかげでびしょ濡れになったけ

ど、そんな程度の犠牲かまうものか。
「この水……まさか、スプリンクラーですか!?」
「はい正解。まあ、これだけ濃い霧だからね。煙と勘違いしたスプリンクラーが消火用の水を使ったんでしょ。熱感知?そんなもの、例えば天井あたりだけ超高温の霧が出てればどうとでもできるね。それじゃ、クロノス先生!避難誘導お願いします!」
突然呼ばれて慌てて立ち上がったらナポレオン教頭の服の裾でも踏んづけたらしく、どかどかと盛大に転ぶ音が2人分連続で聞こえてきた。どうにか起き上ったらしいクロノス先生の声が、今の騒ぎでも手放さなかったとみえるマイクで大きくなって辺りに響く。
『あー、あー、全校生徒の皆さん、及びノース校の皆さん。ただいま火災報知機が鳴りましたが、こういう場合は慌てず騒がず、なノーネ。私が誘導しますから、ちゃんと固まって決して走らないように避難するノーネ!』
いやだから、その誘導が見えないんだよ。そんな一同の心の中でのツッコミは届かなかったらしく、意気揚々として誘導をしようとするクロノス先生。立派なことではあるんだけど、マイクのスイッチが入りっぱなしだから今壁にぶつかったな、とかまた転んだな、っていうのが全部筒抜けなのはご愛嬌。だけど、これで邪魔する奴は全員どかせるだろう。ちゃんと避難誘導やってくれてるあの先生には感謝してもしきれない。あ

りがとうございます、クロノス先生。……あ、また壁にぶつかったのか。ちょっとやりすぎたかな、霧。
「夢想、翔、剣山。皆もほら、早く避難して」
「うん……って、清明君はどうするのさ?」
　不安げに聞いてくる翔に、無言でふっと笑いかける。あ、見えないんだった。じゃあしょうがない、直接口で言おう。
「僕は、もうちょっとここに残ってるよ」
「ええ!なんでさ!早くこの隙に……」
「いやー、そうしたいのはやまやまなんだけどさ」
　ここで一拍間を空ける。特に深い意味はないけど。
「この霧を抑えられるのが僕(の霧の王)しかいないからね。みんなが逃げた後でゆっくり霧を消して(もらって)、後始末だけしてから逃げるよ」
　無論カッコ内は脳内のみのセリフ。葵ちゃんの前ではまだ精霊を出したことはなかったはずだから、もし聞いてたとしても僕自身がなにか怪しい力を持ってるんだと勘違いしてくれるだろう。
「ということでほら、行った行った」
「う〜……早めに帰ってくるんスよ、清明君!」

その言葉を最後に、残っていた気配が去っていった。さてと、一応もう少しの間はこの霧の中で待ちますかね。待ってる間、さっき見つけた飴ちゃんでも食べてようかな。

「まだ誰かいますかー、もう誰もいませんねー」

飴をすっかり食べ終わったぐらいのタイミングで、声を張り上げる。よしよし、どこからも返事がない。

「じゃ、やっちゃって霧の王」

みるみるうちに、電気の消えた部屋の中で霧が引いていく。とっととその場を離れようとして、目の前に人が立っているのに気が付いた。

「よう。やっと終わったのか」

「随分念入りでしたね、先輩」

「まーね。よくまあこんなところにずっといたもんだよ……葵ちゃん、ついでに鎧田も」

なんでだよ。なんでお前らがまだここにいるんだよ。さっさと避難しててほしいなあ、色々面倒くさそうだから。という本音をぐっとこらえて、にこやかに話しかける。隙を見て逃げようかな、という考えがチラッと頭をよぎったが、それより先に鎧田が動

いた。

「ついでに、か。そんな挑発には乗らないからな。無駄話は無しだ、本題に入るぜ。ああだこうだと長ったらしいのは嫌いだから、一言で言わせてもらう。ゲイルを返してくれ」

「……へ？」

ちょっと何言ってんのかわかりませんね鎧田さん。確かに鎧田からはＢＦのキーカード、疾風のゲイルを1枚譲り受けた。それで僕のデッキに入っていないならまだしも、ついさっき見せてくれって言われた時にちゃんとデッキに入れてることを示した。なのに、なんで返さなきゃいけないんだ。確かあのカードは制限になって余ったからってもらった奴のはずだし、その制限はまだ解除されてないはずだ。いやまあ、確かに使いこなせてるとは言えないんだけどね！

何も言わない僕に対してさすがに説明不足を感じたらしく、ゆっくりと鎧田が口を開く。

「まあ、その、なんだ。そもそもの話、俺が2枚目以降のゲイルを持ってるって話は嘘だったんだ。俺のこのデッキはサンダー四天王になったときにサンダーのアドバイスを元に組んだものだから、できた時にはとっくにゲイルは制限カードだったんだよな。だから、1枚しか持ってなかった。もっとも、あんなレアカード2枚も3枚も集められ

たかどうかわからないが」

　ああ、それはちょっとわかる。一度、ふと気になってゲイルの相場を調べてみたことがあるからだ。もちろん売り飛ばすつもりはなかったけど、どれくらいのカードなのか調べてみたくなって。そしたら驚いたね、１枚数十万円の真紅眼（レッドアイズ）カードほどじゃないにしろ、１枚数万円は下らないほどのレアカードだったんだから。あの時はそれを３枚も集めた鎧田すごいって思ったものだけど。

「圧倒的にビートダウン向けのその効果、そしてＢＦの中でもトップクラスに緩い特殊召喚条件、黒い旋風でサーチしやすいほどよい攻撃力……やっぱりあのカードがないと、俺のデッキは力を発揮できない。俺が光の結社、お前は残念ながらそうじゃない人間だってことは重々承知の上で、あえて頼ませてもらう。俺に、俺にゲイルを返してくれ！」

　ど、どうしよう。なんて考えるまでもない。もし彼が光の結社でなければ喜んで、とまでは言わないまでもすんなり返していただろう。だけど、そうじゃない。ここは、心を鬼にすべきだろう。

「いやだ、って言ったら？」

　きっぱりと拒否。それに対し、無言でデュエルディスクを起動する鎧田。まあ、そうなる気はしてた。

「……手荒なことはしたくなかったんだけどな。お前も光の結社に入れば、きっとすべてがうまくいくはずだ」
「喧嘩上等、ってね。ちょっと手荒になるけど、ガツンと勝って元の鎧田に戻したげるよ……辺りはこんなに暗いし、ギャラリーだって一人しかいない。だけど、中堅副将飛ばしての大将戦と洒落込もうか！」
「デュエル!!」
「先行は僕だ、本気で行くよ！」
　初期手札５枚は、３枚の最上級モンスターと２枚の魔法カードというなかなか偏ったもの。だけど、すぐに分かった。これは、このデッキが僕に応えてくれた形の１つ。今の僕が先行１ターン目に出すことのできる中では、最高級の初手だ。
「手札から爆征竜―タイダルの効果を使用、手札の水属性とこのカードを墓地に送って、デッキのモンスター１体を墓地に。この効果で手札の青氷の白夜龍とデッキの地縛神、チャクチャルさんをまとめて墓地に送るよ」
　これで仕込みは整った。あとは、一気に仕上げるだけだ。
「フィールド魔法、ウォーターワールドを発動。そして魔法カード、ソウル・チャージ！僕の墓地のモンスターを任意の数だけ蘇らせることができる代わりに、１体につき１００のライフとこのターンのバトルフェイズを犠牲にしなくちゃいけない。だけど今

は先行１ターン目、そんなもの構うもんか。来て、青氷（ブルーアイス・ホワイトナイツドラゴン）の白夜龍！七つの海の力を纏（まと）い、穢れた大地を突き抜けろ……地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルルア）！」

神秘的な青い光をほのかに放つ、澄んだ氷のドラゴン。黒と紫のコントラストが印象的な、僕にとっては基本いい人なシャチの神様。高い攻撃力と強力な効果を併せ持つ、僕のデッキの中でも１、２を争う実力者たちだ。

だけど、ただ喜んでばかりはいられない。墓地からいきなり現れた２体のモンスターの代償として、僕の体から２つの光の球がとびだしてそれぞれに吸収される。心配そうにこちらを見る２体に大丈夫だ、と手を振ってみせる。別に闇のデュエルってわけじゃないから、肉体的な痛みはない……はずだしね。

青氷の白夜龍　攻３０００→３５００　守２５００→２１００

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　守２４００

清明　ＬＰ４０００→２０００

「ほう？」

「まだまだいくよ、チャクチャルさんの効果を発動。自身のバトルを放棄することで１ターンに１度、相手に守備力の半分の数値分ダメージを与える！ダーク・ダイブ・アタック！」

「おっと、手札からエフェクト・ヴェーラーの効果発動だ。このカードを捨てて、エンド

フェイズまで相手モンスター1体の効果を無効にするぜ」

チャクチャルさんの巨体が白いベールのようなものに絡め取られた。なんとか自力で振り払ったものの、効果を使うために体に貯めていたエネルギーはすっかり0になってしまったようだ。うーん、ライフ差を考えるとここでダメージを稼いでおきたかったんだけど。できなかったものは諦めて気持ちを切り替え、次のターンに繋ぐしかない。

例えば、ＢＦにおいて警戒しなければならないカードの1つは暁のシロッコ。あのモンスターが出てこられた日には、例え攻撃力３５００の白夜龍でも過信はできない。だけどチャクチャルさんが守備表示で粘っている限り相手はバトルフェイズを行うことができないため、これは心配しなくていい。確かにコンボ攻撃は恐ろしいけど、単体火力で白夜龍に勝てるモンスターはそうはいないのだ。他にも警戒すべきカードはあるものの、基本的には戦闘ありきのＢＦ。その戦闘を封じてしまえば、完全にとは言わないまでもある程度の抑制はできるだろう。

「頼むよ、２体とも！僕はこれで、ターンエンド」

残った手札最後の1枚はマイフェイバリットカード、霧の王。確かにこの2体をリリースしてアドバンス召喚すればウォーターワールド込みで６４００もの攻撃力を出すこともできたけど、そうするよりもここはこの2体で突っ張ったほうがいいだろう、との判断だ。

「なら、俺のターンだな」
　その声を聞いた時、背筋に冷たいものが走った。間違いない。鎧田のやつ、このターンで決めに来るつもりだ！
「俺の場には当然、カードが１枚もない。よって手札のＢＦ（ブラックフェザー）―逆風のガストを特殊召喚だ」
　言い終わるや否や、鎧田の方から強烈な風が吹いてきてその風圧にたまらず目をつぶる。風が止んだ時、ブラックでもなんでもないやたらとカラフルな鳥人間がいた。
　ＢＦ―逆風のガスト　守１４００
「そして自分の場にＢＦのモンスターが１体だけいるとき、手札から白夜のグラディウスは特殊召喚できる」
　銀色に輝く鎧に、逆手に握った短剣。その身一つで空を駆け回るＢＦには珍しい、重装備な鳥人間である。もっとも同じ鳥人間と言っても全体的に人間の色が強いガストとは違ってこちらは正真正銘の鳥人間、鳥の顔を持つ人型の戦士だ。確か、効果は１ターン１度の戦闘破壊耐性だったはず。
　ＢＦ―白夜のグラディウス　守１５００
「俺の場にはＢＦのモンスター。黒槍のブラストを手札から特殊召喚」
　自分の身長ほどもある大槍を軽々とかつぐ、貫通能力を持った鴉天狗。テーマ内でも

トップクラスの特殊召喚条件の緩さから、デッキの中核となって縦横無尽に駆け回るメインアタッカーだ。

ＢＦ―黒槍のブラスト　攻１７００

「お前はどうやらその神とやらで守りを固めたつもりらしいな。実際、なかなか悪くはない手だ。だが、まだぬるいぜ！俺はこのターンでまだ使用してない召喚権を使い、漆黒のエルフェンを通常召喚！このモンスターはレベル６だが、自分の場にＢＦがいるならばリリースなしで召喚できる！」

電気の消えた薄闇の中でもなお目立つ、他の黒なんて比較にならないほどの漆黒。ブラストたちよりも一回り大きい体をした鴉天狗が、背中の翼から闇の羽を振りまきつつ闇の中から音もなく忍び寄る。

ＢＦ―漆黒のエルフェン　攻２２００

「シロッコ以外にもリリースなしで出せる上級モンスターが……だ、だけど、攻撃力は白夜龍どころかチャクチャルさんの守備力以下、シロッコがないならまだどうにでもなるし、何より今はバトルフェイズがスキップされて……」

「まあ、そうだな。だが落ち着け、エルフェンの効果発動！このカードの通常召喚に成功した時、モンスター１体の表示形式を変更できる！」

鴉天狗が背中の翼を振るい、無数の黒い羽による嵐を巻き起こす。勢いよく吹き荒れ

る漆黒の風は、例え神であっても抗うことができない。

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　守２４００↓攻２９００

「だけど、そんなことしたって残りの手札は1枚で召喚権も使い終わってる。白夜龍を倒して僕に２０００以上のダメージをぶつけるには、ちょっと力不足なんじゃない？」

「あのなあ……お前、俺のことをよっぽどアホだと思ってんだな。よーくわかったわ。最後の手札、トランスターンを発動。自分の場のモンスターをリリースすることで、同じ種族属性でレベルが1つ上がったモンスターをデッキから特殊召喚する。闇属性鳥獣族レベル4、黒槍のブラストをリリースしてレベル5、暁のシロッコを特殊召喚！」

「そ、そんな……」

ついに来てしまった、ＢＦの爆発力を象徴するカード。ただ立っているだけなのに、その周りをクルクルと風がはためく。エルフェンが表示形式の変更というテクニカルな搦め手を得意とする闇の上級ＢＦだとすれば、豪快な一点集中突破能力を持つこのカードはさながら光のＢＦといったところだろう。とにかく、これが意味するところはひとつしかない。

……僕の、負けだ。

「はっ、当然効果はわかってるよな？暁のシロッコの効果発動、1ターンに1度、エンドフェイズまで自分のＢＦ1体に全てのＢＦの力を集中させる！シロッコ自身に対して

ガスト、グラディウス、そしてエルフェンの攻撃力を集中だ！」
「くっ……」
ＢＦ―暁のシロッコ　攻２０００→５９００
「やれ」
たった一言の命令。シロッコがその爪を振りかざし、白夜龍に迫る。迎撃のブレスを難なくかわして懐に潜り込み、腹のあたりに一撃。まるで発泡スチロールか何かのようにあっけなく、氷の体は一本の腕に貫かれた。
「……無様ですね、先輩。それが、ついこの間私に勝った人間の戦いですか？」
ぽつりと呟いた葵ちゃんの一言が、なぜだかひどく心に突き刺さった。
ＢＦ―暁のシロッコ　攻５９００→青氷の白夜龍　攻３５００（破壊）
清明　ＬＰ２０００→０

「……っ!!」
一瞬ののち訪れた衝撃に吹き飛ばされ、後ろの壁に思いっきり背中をぶつけて息が止まる。つまり、ダメージが実体化している。いつの間に闇のゲームに、と思ったが、よく考えたら負けたら光の結社に洗脳されるデュエルなんてものがまともなデュエルで

あるはずがなかった。あれ、じゃあなんで僕は平気なんだろう。
「ほんと、弱くなったなお前。お前みたいな雑魚引き入れても、何の役にも立たねーよ。じゃあな」
よっぽど打ち所が悪かったらしくまだ動けない僕のところまでわざわざ来てそれだけ言い、勝手に僕のデッキを取り上げてゲイルのカードを引き抜く鎧田。その位置は、ちょうどデッキトップ。ああ、今回は力を貸してくれる気だったのか。それを生かす前に、僕がやられただけだ。
それから、１０分ほど経っただろうか。まだ多少反応の鈍い体を引きずるようにして歩き、誰もいない部屋を振り返りもせずによろよろと外に出る。無様、か。さっき葵ちゃんに言われた言葉が、いつまでも脳内でリフレインしていた。確かに、今の僕はいつも以上に無様だ。それは間違いない。まったく情けなさすぎて、
「ほんっと、笑っちゃうよねぇ……」
無理やり笑ってみようとしたが、その笑顔は自虐的なものにしかならなかった。ちょうどそれに気づいたとき、いつの間にか流していた涙が一滴、床にポツリと落ちるのが見えた。

白い光の中で
ターン４６　壊れた鉄砲水

「ごめん、ごめんね、皆」

『……？』

あれからどこをどう歩いたのかは、自分でもよく覚えてない。だけどふと気づいたら、海辺まで来ていた。何となく歩く気にならず、その場に腰を下ろす。砂が入ったら洗濯が大変になるだろうけど、そんなこと知ったことではない。誰も何も言わない。だけど、僕にはもうわかってる。僕のデッキは間違いなく、僕のために最大限に力を発揮してくれた。あの初手をきちんと使いこなしていれば、こんなことにはならなかったはずなのに。

「もうわかってるから、気を遣わなくてもいいよ。あのターンでの正解は、白夜龍１体をリリースして霧の王のアドバンス召喚……そうすればリリース封印能力でトランスターンはそもそも発動できないし、エルフェンの効果で霧の王を守備表示にしてもチャクチャルさんが守備表示のままだからバトルが成り立たない。そうすれば、少なくとも次の僕のターンを迎えることができた。……違う？」

辺りには人どころか海鳥すらおらず、ひたすら波の音のみが聞こえてくる。霧の王はレベル７の最上級モンスターだが、色々と個性的な点もある。その１つが、召喚に必要なリリースを１体、またはなしで済ますことのできる妥協召喚能力と、場のあらゆるリリースを封印する能力だ。白夜龍１体をリリースすればその攻撃力はウォーターワールド込みで３５００とまず戦闘破壊されない数値となり、しかも上級モンスターの展開すら許さない。結局のところ、あの初手５枚に無駄なカードなんてものは１枚もなかったのだ。

『だがそれは結果論だ。あの時点では、向こうの手札はわからなかった。白夜龍を残そうとする判断も、決して間違いではない』

「確かにね。だけど、僕が一番嫌なのはそこじゃないよ。僕はねチャクチャルさん、僕は別にそこまでデュエルが強いわけじゃないってのは自分が一番よくわかってるんだよ。そんな僕がここまでいろんな相手に勝ってこれたのは、皆が僕に力を貸してくれたから。それがわかってるはずなのにあの局面、僕は自分のデッキよりも自分の浅い考えを信じたんだ。いつの間にか、実力で勝って来たなんて勘違いしてた僕がどこかにいる。それが、許せないんだよ。ねえお願いチャクチャルさん、今の僕に話しかけないでよ。……ごめん。わがままなのはわかってる。でも少しだけ、一人にさせて」

まだ何か言い返そうとしていたようだが、結局何を言っても無駄だと悟ったらしい

チャクチャルさんがその場を去っていくような気配がした。
また一人に戻って深いため息をついた瞬間、入れ替わるようにして別の気配。
「……嫌味でも言いに来たの？」
棘のある僕の言葉に軽く首を振って、砂の上で体育座りをする僕のすぐ横にすとん、と腰を下ろす銀色の鎧。ついさっき話題にあげた張本人、霧の王だ。別に実体化させた覚えはないけれど、いつの間にかこやつも勝手に出てこれるようになっていたらしい。今初めて知った。
……ああ、まったく情けない。無様以外の何物でもない。自分の大事なカードのことすら把握し切れてなかっただなんて。
そうやって自己嫌悪を強めていると、黙ったままの霧の王が僕の背にポン、と慰めるように手を乗せる。反射的に払いのけた。少し悲しそうなそぶりを見せた後、すうっと霧の王の姿が消えていく。やっちゃったな、と心のどこかでぼんやり思った。
これというのも、僕が勝てないから悪いんだ。心のどこかで、ぼそりとそんな声がした。そうかもしれないな、とぼんやり思う。なら、どうすればいいんだろうか。その声に問いかけると、さっきよりもはっきりした声音で答えが返ってくる。簡単だ。勝てばいい。どんな相手にも勝てるようになれば、こんなことで迷わなくてもよくなるんだ。

……気づいたら、いつのまにか体育座りのまま寝ていたらしい。ついさっきまで頭の上にあった太陽が、今では海の向こうに沈みかかっている。そのまま特に一言もしゃべることなく、ただただ時間だけが過ぎていく。ひたすら日が沈んでいくのを眺めながら波の音を聞いていると、少しずつ荒んだ気持ちが落ち着いてくるのが分かった。気分はいまだに最悪のままだけど、少なくともう誰彼構わず当たり散らすようなことはないだろう。時間がたって落ち着いたのももちろんあるけれど、なによりもこれからは勝つことだけを考えていけばいいというはっきりした目標ができたのが大きい。完全に日が沈みきって辺りが暗くなるまででもう少し待ってから、思い切って立ち上がる。

ゆっくりと歩いていると、すぐ横の草むらで何やら音がした。位置から言って、まず人間ではない。別に珍しくもない狸か何かだろうと思って特に気に留めないでいると、もう一度何かが動くガサゴソという音。しかもちょっと近づいてきてる。この島の動物は基本的に野生のままなのでわざわざこんな人の多いところまで来る方が珍しいのだが、もしかしたら道に迷ったのかもしれない。さすがに見捨てる気分にもなれず、刺激しないようにそっと音のした方へと近づいていくと、そこから飛び出してきた茶色い影は。

「あれ、ファラオじゃないの」
僕の足元をのそのそと歩くのは、最近どこかに出歩いてばっかりでめったに帰ってこなくなったオシリスレッドの正式寮長の猫であるファラオ。ちゃんとご飯食べれてるのかちょっと不安だったけど、相変わらず丸々としてるところを見ると何不自由なく暮らしているらしい。
「じゃあ、ファラオもたまには家に帰ってくるんだよ。ってあれ、どしたの一体」
ちょっと気が抜けて、そのまま通り抜けようとするが、その瞬間にファラオが僕の目の前に回り込んできた。
「んー？よくわかんないけど、もう帰るから……って、何？」
道の端によって通ろうとするも、またしてもそれを妨害しにくるファラオ。反対側に移動すると、今度はそっちに回り込んでくる。ぐるぐるとその場を回ること数秒、ようやくどこか来てほしいところがあるのだと察しがついた。自分のことにいっぱいいっぱいで、そんな簡単なことに気づくのにすら時間がかかったのだ。
「わかったわかった。……ハア」
今日何度目かもわからないため息をつき、のそのそと歩くファラオの後ろを大人しくついていく。その後レッド寮へ続く道からは大きく外れ、森の中を歩くこと１０分。最終的にたどり着いたのは、僕もよーく知ってる場所だった。別に何かとんでもないもの

を期待したわけではないけど、ちょっと拍子抜け。

「ああ、よく来たね。さ、上がって上がって」

そんな家主の声がして、ギギギと音を立てて錆びついた門がひとりでに開く。ここは廃寮、元特待寮の現幽霊屋敷だ。そして２階の窓から手を振っているのがここの主である稲石さん。そう言えば、前にここに来たのはもうテスト前だから、だいたい２週間ぐらいかな。たったそれだけの間にいろんなことが……と、これまであったことを思い返すと嫌な記憶を思い出しそうになって慌てて頭を振って余計な思考を追い払う。すぐ後ろのファラオを見ると、さっさと入れ、と言わんばかりの態度。ふむ、そこまで言うならお邪魔してみようかな。

「なるほどねえ、今そんなことになってたんだ」

誰かいるのを悟られないようにとわざと荒れ放題な庭や埃まるけの玄関と違い、きれいに整頓されてキャンドルの明かりがともる稲石さんの自室。入れてもらった紅茶をすすりながら、聞かれるままにここ最近の出来事を話していた。なにしろ、地縛霊の稲石さんはこの敷地から外に出ることができない。誰も訪ねてこないこの場所も相まって、本校で何が起きているのかはまるでわかっていないのだ。

「それで、わざわざ自分のところまで？」
「あーいや、そういうわけじゃなくてファラオに連れてこられて」
「ファラオが？あーなるほど、自分に手を貸せと。ねえセンセ、自分で言ったらどうなのさ」
紅茶に砂糖を入れながら、じとーっとした目でファラオを見る稲石さん。すると見つめられたファラオの口から、黄色いピンポン玉サイズの光の球がポワンと吐きだされた。そのまま光の球は僕らの方へふわふわ飛んできて、そこを中心として半透明の人間の姿が浮かび上がる。もう今更幽霊ぐらいじゃ驚かないぞ、と思いながら見ていたのだが浮かび上がってきたその顔を見た時、思わずカップを取り落としそうになった。
「ちょっとファラオ、なんで出しちゃうのかニャ！……あ、えーと、お久しぶりなんだにゃ、清明君」
「だ、大徳寺先生!?」
ちょっとくたびれたスーツを着た、長身でメガネの男。忘れようもないその顔は僕らの元教師にしてセブンスターズ最後の刺客、大徳寺先生こと錬金術師アムナエルだ。
「えっと、何やってんですか先生。去年成仏してませんでしたっけ」
「うん、私もそのつもりだったんだけどニャ。まあいろいろあって、今はこうしてファラオと一緒にいるのニャ」

そう言って咳払いをし、まあそんなことより、と露骨に話題を変えてくる。……今の反応を見るに今まで出てこなかったのは多分あれなんだろう、いきなり出てきてびっくりさせるタイミングをうかがってたとかそういうしょうもない理由なんだろう。とはいえ、今は深く追求する元気もないので気が付かなかったふりをする。

「今日ここまで来てもらったのは、君のことが心配だからなのニャ」

「僕が？」

「うん。ファラオと一緒に私もあの場所にいたんだけど、はっきり言ってだいぶこっぴどくやられてたからニャー。これでも去年までは教師だった身、元生徒のことはやっぱり気になるもんだニャ」

ああ、やっぱりこの人はいい人なんだなあ、と思う。つくづく、いい先生だ。だからこそ、その心配に素直に答えられない自分が情けない。

「……カウンセリングならいりませんよ、よけい惨めになるだけなんで。用がそれだけなら、もう帰りますね」

「あ、待つのにゃー！」

もうだいぶ落ち着いたと自分では思っていたけど、今の僕はまだこの好意を素直に受け取ることができないみたいだ。本当は嬉しいはずなのに、乾ききった眼からは何も出てこないし口を開けば嫌味が飛び出す。なんとかしたいのに、まだまだガキの僕には自

分を抑えることができない。
と、そこでさっきからずっと冷めた目で紅茶をすすっていた稲石さんがカップをコトリと置いた。
「なるほどねぇ。さすが錬金術師、こうなることも予想済みでここまで引っ張ってきたのね。ねえ、1つ聞いてもいいかな？」
「え？」
「君はここを出て、その後どうするつもりなんだい？十代君の話はもう自分も聞いたけど、同じく行方不明にでもなるの？」
む、それについては特に考えてなかった。だけどあえて何か言うなら、負けっぱなしというのは悔しい。多分十代だって、今頃新しい力を手に入れているだろう。特に根拠はないけど、何となくそんな気がする。というか、そうであって欲しい。
とはいえ、今この話に十代は関係ない。これは僕についての話だ。要するに一言でまとめるなら、
「強くなりたい、かな」
月並みな答えだと思う。でも、すごく正直な僕の気持ちだ。
だけどその答えを聞いた稲石さんはフン、と馬鹿にしたように軽く鼻で笑った。再びカップを手に取り、残っていた紅茶を一気に飲みきってから再び口を開く。

「まあ自分だってあんまり厳しいことは言いたくないんだけどさ。無理だね」
「えっ……」
　とっさのことに言葉が出ない。気持ちを立て直す前に、稲石さんの冷たい声が飛ぶ。
「そもそも１つ聞きたいんだけどさ、強くなる、ってどういうことかわかってる？」
　強くなるとは何か。そりゃあもちろん、デュエルに勝てるようになることだろう。強ければ勝つ。これはもう疑いようがない。あいあんだーすたーんど。
　間違ったことを言っているつもりはないが、なぜかその答えにさらに眉をひそめる稲石さん。
「……こりゃあ、ちょっと見ないうちにずいぶん重症だねぇ。いい？強くなるなんて一口に言っても、その方法なんて星の数ほどあるからね？例えばビートダウン１つにしても一発あたりの火力を高めるか連続して細かく攻撃を仕掛けていくか。バーンデッキでも同じことが言える。矛盾した話だけど、ロマンを安定して出せるようにするとか戦線を分厚くして数の勝負を仕掛けていくかってことだね。相手のデッキ切れを狙うためにデッキを直接切り崩す方向に進化するか、ひたすら耐え忍んで何もしないうちに相手が負けるように防御力を高めるか。あんまり推奨はしないけど、なんかこう電波が出せる機械を発明して相手のデュエルディスクがカードデータを読み取れなくさせるなんて方法もある。あるいはもっとてっとり早く、相手がカードを出す前に骨を折

るとかして物理的にカードを使えなくさせるなんてのも一つの手だよ。ほかにも相手が切り札の使用をためらうように仕向けるように相手の思考を誘導する話術を磨いたりするのもグレーゾーンだけどありっちゃありだろうし」

「後半が色々物騒だニャ!?」

色々とツッコミどころもあるが、僕は一言もしゃべることができなかった。大徳寺先生、あなたは稲石さんの顔が見えない位置にいるからそんなことを言うだけの余裕があるんだ。それほどまでに稲石さんの目は冷たく、まるでその視線に物理的な拘束力でもあるかのように体がピクリとも動かない。

「言うだけなら、そりゃあまあそれはノーコストだろうさ。ただね、そんなただ強くなりたい、だなんて雑な願いはどう頑張っても叶わないよ。……構えてみな。自分が相手したげるから」

「え、稲石さん……?」

「今何かしないと本気で手遅れになりそうだしね。方向を見失って負けがかさんで完全に心が折れる前に、なんとか叩き直してあげるよ。はい、構えて。早く!」

「は、はい!」

怖かったから、というよりもむしろなにがなんだかよくわからないままにデュエルディスクを構える。デッキをセットし、机を挟んだ状態のまま稲石さんと向かい合う。

大徳寺先生もいつものニコニコ笑いではなく、アムナエルの時みたいな鋭い視線で僕らを眺める。うう、やりづらい。

「「デュエル！」」

「先行はもらうよ、自分のターン。モンスターを裏守備でセット、これでターンエンド」

「僕のターン、ドロー。ここは……」

稲石さんの場には、セットモンスターが1体。またいつものゴーストリックだろうか、それとも別のリバース系モンスターだろうか。僕の手札には水属性をリリースして手札から特殊召喚できるモンスター、シャークラーケンがいる。このカードを出したうえでさらにモンスターの攻撃力を１０００ポイント上げるこのカード、アクア・ジェットを使えばほぼ確実にあのセットモンスターは破壊できるけど。

「ここは慎重に、モンスターをセット。さらにカードを2枚セットして、ターンエンド」

今セットしたモンスターは下級魚族ではかなり高めの守備力１６００を誇るツーヘッド・シャークで、カードは守備力３０００を誇る最強クラスの罠モンスター、メタル・リフレクト・スライムと相手の攻撃を無効にできるポセイドン・ウェーブ。これで少なくとも、このターンは持ちこたえられるはずだ。

稲石　ＬＰ４０００　手札：4

モンスター：???（セット）

魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：???（セット）
魔法・罠：２（伏せ）
「自分のターン。モンスターをセット。そして最初にセットしていたモンスターを反転召喚、ゴーストリック・ワーウルフ！」
ワーウルフ、つまり直訳して人狼。ワオーンと吠える上半身裸の狼男が飛びかかってきて、４回連続で両腕の爪で僕を引き裂く。
ゴーストリック・ワーウルフ　攻１４００
清明　ＬＰ４０００→３６００
「ワーウルフはリバースした時、場のセットカード１枚につき１００ポイントのバーンダメージを与えることができる。自分の場には１枚、そっちには３枚。まずは４００ダメージからさ」
「くっ……」
結果的には、さっきのターンはシャークラーケンで攻撃する方がよかったらしい。外した。
「それから魔法カード、大嵐を発動。場にある魔法、罠カードは全部破壊さ」

荒れ狂う風が僕のスライムカードを、そしてポセイドン・ウェーブを吹き飛ばしていく。不味い、これで僕の場には守備力１６００のツーヘッドが１体だけだ。
「止めにフィールド魔法、ゴーストリック・ハウスを発動。これで相手が裏守備モンスターしかコントロールしていない時、お互いにダイレクトアタック可能。ワーウルフ、直接攻撃！」
またまたとびかかってきた人狼が、今度は僕の肩にがぶりと噛みつく。ツーヘッド、表側守備表示で出しておけばよかったのかな。
ゴーストリック・ワーウルフ　攻１４００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３６００→２２００
「メイン２にワーウルフの効果で自身を裏守備に変更、ターンエンド」
「ぼ、僕のターン……」
強い。元からかなり強い人だったけど、今日の稲石さんはいつもより強い。でも、まだ勝機はある、はずだ。
「ツーヘッド・シャークを反転召喚、そして魔法カード、アクア・ジェットを発動！これで、ツーヘッドの攻撃力は２２００だ！さらに、そのままシャクトパスを通常召喚！」
ツーヘッド・シャーク　攻１２００→２２００
シャクトパス　攻１６００

以前までだったらアクア・ジェットを使うたびにマジックコンボ呼ばわりしてたユーノも、今はもう僕の隣にはいない。ふと感じた寂しさをごまかすように首を振り、バトルに集中しようとする。

「ツーヘッドの能力は2回攻撃、これでゴーストリック・ハウスの効果を逆手にとればこっちからも直接攻撃ができる！ツーヘッド、稲石さんにダイレクトアタック！」

「はい残念、手札からゴーストリック・フロストの効果発動ね。直接攻撃してきたツーヘッド・シャークを凍りつかせて裏守備に変更、そしてこのモンスターを裏守備で特殊召喚」

２つの顎をもつ鮫の牙が稲石さんに躍り掛かるが、獲物を捕らえる前に突然吹いてきた冷風に当たってその体がみるみるうちに氷漬けになる。犯人と思われる厚着をした雪だるまが、見つかったことに気づいて慌ててクロッシュ……西洋料理を入れておく蓋をかぶって隠れこむ。

「まだまだぁ！シャクトパスでダイレクトアタック！」

「ゴーストリック・ランタン効果。手札から裏守備で特殊召喚して、その攻撃は無効さ」

「く、くぅ……」

何てことだ、まさか全部止められるとは。こうなった以上僕にできることはない。

「ターンエンド……」

稲石　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：???（ゴーストリック・ワーウルフ）
???????（ゴーストリック・フロスト）
（ゴーストリック・ランタン）
（セット）
魔法・罠：なし
場：ゴーストリック・ハウス
清明　ＬＰ２２００　手札：３
モンスター：???（ツーヘッド・シャーク）
シャクトパス（攻）
魔法・罠：なし
「ドロー。カードをセットして、メタモルポットを反転召喚。お互いに手札をすべて捨てて、カードを５枚ドローしてね」
メタモルポット　攻７００
「さらにカードを２枚セットして、モンスターをセット。そのままゴーストリック・ワーウルフ反転召喚で今度は６００ポイントダメージって言いたいところだけど、ハウスのもう１つの効果でそのダメージは半分の３００にしかならないね。だけど、減ったダ

メージは量でカバー。今セットした魔法カード、火炎地獄を発動。このカードは相手に１０００ポイントダメージを与える代わりに自分も５００のダメージを受ける……けど、ハウスの効果によってお互いが受けるダメージはこれまたその半分さ」

清明　ＬＰ２２００→１９００→１４００

稲石　ＬＰ４０００→３７５０

じわじわと削られていくライフ。気づけばその数値はゴーストリック・ワーウルフの攻撃力と同じ……僕の手札にこの状況を打破できるカードはなく、もしあのカードの中にシャクトパスを破壊できるカードがあればハウス効果のダイレクトアタックが成立するようになり、僕の負けだ。

ああ、また勝てない。だったらもう、別にこのデュエルを続けなくてもいいんじゃないかな。そんな思いが、ちらりと胸をよぎる。

「稲石さん、もう……」

やめよう。そう言おうとした瞬間、稲石さんが諦めたように肩をすくめた。

「……ふーむ。もう1ターンだけ待とうかな。ワーウルフを裏側守備表示に変更、これでターンエンド」

どうやら、このターンでシャクトパスを倒すことはできなかったようだ。なんか綱渡りばっかりで、つくづくデッキに対して申し訳ないと思う。こんなしょうもないのが使

い手でいいんだろうか、ほんとに。
「ああ、僕のターンか。ドロー」
一応手札は5枚、今のドローも合わせると6枚ある。だけど、勝てる気がしない。
「速攻魔法、サイクロンを発動。対象は、えっと」
どれを破壊しようか。ハウスを破壊すればシャクトパス達がやられても返しのダイレクトアタックは防げるけど、稲石さんもあれだけドローして手札に2枚目のハウスかミュージアムが来ていないとは考えにくい。じゃあ、セットカードだろうか。とはいえ今の稲石さんのデッキはバーン軸らしいし、何も考えずにこのサイクロンを使ってもフリーチェーンでかわされる可能性もある。いや、そんなのは度のデッキでも同じだし考えるだけ無駄か。
「その伏せカード、僕から見て右側の方を」
「ん」
風が吹き、稲石さんのカードを巻き上げる。その際に見えたイラストは、っと。
「地砕き……？」
僕でも知ってる割と有名なカード、地砕き。大地を砕く拳のイラストが印象的な、相手フィールドに存在する守備力の1番高いモンスターを破壊する対象にとらないことが厄介だったりする通常魔法カードだ。それをセットしたのは別にいい。おそらく、

ワーウルフの効果で与えるダメージを増やしたかったから先に伏せたのだろう。いや待てよ、その前のメタモルポットで捨てるのを回避するために伏せたほうだったかもしれない。だがそんなことはどうでもいい、今重要なのはそれを稲石さんが前のターンに使わなかったということだ。通常魔法は他のカードと違って1度セットしてからでもそのターン中に使うことができるという特徴があり、当然稲石さんもそのことは知っている。だというのに、それを使っていれば勝てる状況だったにもかかわらずそれをしなかった。

　というか大体、今の稲石さんのプレイングはちょいちょいおかしい。バーン軸なのにハウスを使ってダメージを減らすなんて本末転倒だし、さっきのターンだって十分にライフが残ってる状態でわざわざランタンまで出す意味は薄いだろう。メタモルポットだってわざわざこのタイミングで反転召喚するようなものでもないし。

「稲石さん、今、本気ですか」

　自然と声が固くなる。もし舐めプされてるんだとしたら、それは嫌だ。でもまさか、あの稲石さんはそんなことするキャラじゃない。だけどそんな思いを全部見透かしているような目で稲石さんは僕の顔を見て、嫌味たっぷりの口調で返す。

「ああ、気づいた？でもね、今の君に舐めプに対して怒る権利なんてたいそうなものがあると思う？悪いけど、今の君に文句を言う資格はないよ。……さっき君が何を言おう

としてたのか、自分が気付いてないとでも思った?もうやめようだなんて、随分と馬鹿にしてくれたものだね。自分が知ってる遊野清明って男は、そんなこと言うような屑じゃなかったよ、うん」

「……」

稲石さんがなんで怒ってるのか、正直まだよくわからない。だけどその沈黙を理解と受け取ったらしくそれに気をよくしたのか、さらに口を開く稲石さん。

「勝敗だけにしかこだわらなくなるとこうなるっていういい例さ。勝ちを目指すのは結構だけど、その路線変更に君のデッキが、何より君自身がまるでついていけてない。こういう説教みたいなのは苦手なんだけど要するにまとめるとだね、なんだ、そんな慣れないことはするもんじゃないよ」

「は、はい」

そうは言っても、勝つことができなければ何の意味もない。あなたの言ってることは、ただの理想論だ。ヒーローである十代がおらず、万丈目たちも次々と光の結社に飲み込まれていく中、僕が勝ち続けるしか道はないじゃないか。そう言いそうになるが、また喧嘩になりそうだったのでぐっと飲み込んだ。

だがそれすらも鋭い稲石さんにはお見通しだったようで、ため息を一つつくとつまらなそうな顔でデュエルディスクの電源を落とした。デュエルが強制終了されたことで、

お互いのソリッドビジョンが消えていく。
「え……？」
「もういいよ、どうやら自分と今の君とは、根本的なところで噛み合ってないみたいだし。これ以上やっても時間の無駄さ。さ、帰った帰った」
　ああ、僕は勝ちたいだけなのに。チャクチャルさんに続いて、稲石さんにまで見限られた。このまま取り返しのつかないことになる前に考え直せ、という声が頭の中で響く。だけどその声は、もっと大きな声にかき消された。
　いわく、この程度で見限るというならば、所詮はその程度の仲だったのだと。僕は何一つ悪くないのだ、むしろ自分のことをわかろうともしない者に全ての責任がある。だから無視してそのまま帰り、金輪際関わり合いにならなければいい。そして僕は一瞬迷った末、その声の言うことを聞くことにした。手早くデュエルディスクの上のカードをデッキに戻し、振り返りすらせずに廃寮を出ていく。あちらから非を認めて謝るなら別だけど、そうでもない限りもうここに来ることもないだろう。さあ、帰ったらどうしたら勝てるようになるか考えないと。勝とう。とにかく勝とう。勝って勝って勝ち続けないと。
　そんな僕の背に、とどめを刺すかのような稲石さんの言葉が突き刺さった。
「あ、それとね。トランスターンは対象モンスターを墓地に送って発動するカードだか

ら、君の言った通りの手札ならどっちみち詰んでたよ」

「……さて、と。どう思う？」

「かなり荒れてるのニャ」

清明がいなくなった部屋に、幽霊二人の声が響く。

「いや、そうじゃなくて。それはわかってるけど治るかな、あれ」

「正直、本人次第としか言いようがないニャ。錬金術はあくまで命を作ることが目的の技、心を作ったり癒したりは専門外だから私には何とも」

あっさりと言い切った後、ただまあ、と言葉をつなげる大徳寺。

「今回の彼はどうも、単にショックを受けたなんて理由じゃすまないと思うのニャ」

その言葉に同意を示すよう頷く稲石。大徳寺の次の発言を最後に２人の姿は幻のように消え、そしてそこには誰もいなくなった。

「なら、私にも何かできるかもしれない。ファラオ、それに君にも一緒に来てほしいのニャ。私のかわいい教え子のため、できる限りの手は尽くしてみるのニャ」

ターン４７　泥水と永久電力

「邪魔邪魔ぁ！シーラカンスでダイレクトアタック、マリン・ポロロッカ！」
「うわあああっ！す、すみません斎王様……」
魚の王の突撃をまともに受けライフが０になった誰か。名前がわからないどころか顔も見たことないってことは、多分ノース校の人なんだろう。でもまあ、そんなことはどうでもよかった。吹っ飛んだ今までの相手は放っておき、周りにまだ何人かいた白い制服をぎろりと睨みつける。
「……それで？次の相手は誰？」
まだ足りない、もっとデュエルがしたい。こんな雑魚相手じゃ物足りなさすぎる。この中で一番強そうなのは誰かな、と。
「ひえええええっ！助けてー！！」
リーダー格の男に目を付けた瞬間、それを感じ取ったらしくとっとこ逃げていく。金魚のフンのようにそいつについていた数人も、それを見て我先にと逃げ出していく。
「ふう、逃げちゃったか」
別に逃げるような相手に興味はない。もっと歯ごたえのある白制服を探して、ぶちの

めす。ただそれだけだ。
　次の獲物を探して校内をうろついていると、ちょうど三沢が階段を上っているのが下から見えた。ふむ、三沢か。さっきのとは違って、少しは楽しめそうだ。一瞬でも気を抜いたら僕がやられるかもしれない。だからこそ、潰しがいもあるだろう。
「みーさーわくーん、あーそびーましょー！」
　手を振りながら声を張り上げると、びくっとした様子でこちらを見る三沢。はて、そんなに怖かったんだろうか。あ、よしよしちゃんとこっち来たね。それじゃあ……覚悟しろ、三沢。これといって君に恨みはないけれど、あえて言うならホワイト寮に入ったお前が悪いんだ。

　その1時間ほど前。ホワイト寮と化した元オベリスクブルーの一室で、何人かの生徒と斎王が白いレースのかけられた机を囲むようにして座っていた。その輪の中には、三沢の姿もある。部屋中が白で統一され、窓からはあふれんばかりの日差しが降り注いでいる。にもかかわらずどこか重苦しい空気が漂う中、斎王の言葉が響いた。
「なるほど。つまり、ここ最近遊野清明の調子がおかしい、と」
「は、はい。まさか、あいつがあんなことになるなんて……」

普段の彼にはまるで似合わない固い調子で弁明の言葉を発しようとする鎧田を手ぶりで止めて、その横にいた万丈目が代わりに口を開く。
「すみません斎王様。本来は俺たちの手で処理すべき問題なのですが、どうも去年までの遊野清明という男とあまりにも違いすぎるので、一応報告にと」
「ふむ、構いませんよ。それで、どのようなことになっているのです?」
「3日前の、ノース校にいる我々の仲間がこちらにやって来た日に俺は奴をワンキルしてやりました。そうしたら次の日、奴は体調不良とやらで一日中学校に来ませんでした。その時は別に堂とも思いませんでしたが、問題はその次の日からです。学年も出身校も関係なく、校内を歩いている光の結社の仲間が突然現れた奴にデュエルを挑まれるようになり、再起不能とまではいかないまでもボロボロにされてるんです」
「ボロボロに?喧嘩でも売っているんですか?」
「ち、違います!」
上ずった声で何かに怯えながら叫ぶ一人の少年。斎王様の前だぞ、口のきき方に気をつけろと周りの生徒が彼を止めようとするが、それどころではない少年は制止を振り切って斎王の前に進み出る。
「俺は、その、確かにデュエルを挑まれたんです。奴と勝負した最初の一人です。あいつは間違いなく化け物ですよ!やってることはただのデュエルのはずなのに、ライフが

減ってダメージを受けるたびに俺の体にまで痛みが走ったんです！しかもサレンダーすらさせてくれないし、もうどうしていいかわからなくて……！」

「なるほど。三沢君、君は確かその現場の一番近くにいたそうだね。君は去年，

わけあって闇のデュエルをしたことがあると聞いているが、これについてどう思う？」

「おそらくは奴が一方的に仕掛けたのでしょう。俺の知っている闇のデュエルは敗者が命や魂を取られるほどのものでしたが、そんなことをする気はないのだと思います」

淡々と話す三沢だが、目を見れば彼もこの事態にかなり動転しているのがわかる。それはそうだろう。たとえ進む道が違うことになっても、彼にとって遊野清明という人間はいまだに友人なのだ。

「ふん、どうせ世間の目でも気にしているだけだろう。どうやっているのかはともかく、このまま奴を野放しにしたら、何をしだすかわかったものじゃない」

一方、万丈目をはじめ同じく彼の友人だった他の生徒の意見は違う。彼ら彼女らにとって遊野清明とはどんな技を用いたのかはわからないが、自分らの仲間を傷つけ崇高なる斎王様の目的を邪魔する愚か者でしかないのだ。

それがわかっているからこそ、三沢は斎王に先手を打って進言する。万丈目たちに任せていては、どんな過激な手を取るか分かったものではない。

「どうでしょう斎王様。ここはひとつ、この三沢大地にお任せください」
「待つんだ、三沢。ここはこの万丈目ホワイトサンダーに任せておいてくれ」
ここで万丈目は、あくまでも純粋な親切心から言っているだけだ。普段は威張った態度が目につくが、ここぞという時には自分の部下や味方を危険な目にあわせまいと自分が真っ先に動く。そんなカリスマ性があるからこそ、光の結社の中でも万丈目は斎王に次ぎナンバーツーの立ち位置を得ることとなったのだ。
だがその親切心は、清明と万丈目たちを引き離したい三沢にとっては邪魔でしかない。どう言って断ろうかと脳をフル回転させるが、その時意外なところから助け舟が飛んできた。
「いえ、ここは三沢君に任せましょう。危険な仕事ではありますが、よろしくお願いしますね」
「さ、斎王様。……わかりました。頼んだぞ、三沢。気を付けてな」

という会話ののち、被害者たちに聞いた話からどうも構成がだいぶ変わったらしい清明のデッキに対抗できそうなカードを抜かりなく何枚かデッキに忍ばせてから校内をうろつきまわること数分。できれば本格的なメタデッキを組みたかったのだが、そんな

時間もなさそうなので本当に部屋にあったカードからめぼしいものを数枚放り込んだ程度である。
「みーさーわくーん、あーそびーましょー！」
　そして、話はようやく現在に至る。そんなことがあったとはつゆ知らず、ひょいひょいと軽い身のこなしで三沢のもとにたどり着き、退路を塞ぐような位置に立つ清明。もっとも三沢も元から逃げるつもりはない、もはや言葉は不要とばかりにわざわざ白塗りした自分のデュエルディスクを構える。勝負から逃げない態度を見て一瞬嬉しそうになった清明も、そのデュエルディスクを見て露骨に嫌そうな顔になった。そのわかりやすい態度から素直なところはまるで変わってないな、と苦笑し、すぐに気を引き締め直す。
「何も言わずにすぐデュエル……どうやら、まんまと誘い込まれたかな？まあいいさ、とりあえず病院送りだけは勘弁してあげるよ」
「それはありがたいことだな。だが、俺も負けるわけにはいかん」
「あー？よくわかんないけど、無駄話はそろそろ切り上げようかね」
「「デュエル！」」
　先攻は、三沢。手札にお互いにカードをドローすることで相手のエンドフェイズまでのあらゆるダメージを０にするカード、一時休戦が来ているのを確認して少し考え込

む。まだ相手の出方がはっきりとは分からない以上、先行で1枚しか入っていないこのカードをいきなり使うことは控えたほうがいいのだろうか。だが、ここで先手を打って使っておけばおそらく清明は効果が切れるまで大量展開は控えるはず、出鼻をくじく意味も込めて使うのもありだろう。

「……俺のカードはマスマティシャン。召喚時の効果でデッキからレベル４以下のモンスター1体、電池メン―単４型を墓地に送る。カードを1枚伏せて、これでターンエンドだ」

一瞬迷ったものの、最終的に手札で温存しておくことに決めたようだ。かわりに彼が伏せたのは、攻撃モンスターを除外することができるトラップ、次元幽閉。マスマティシャンを囮にして使うつもりなのだがはたしてこの判断、吉と出るか凶と出るか。

マスマティシャン　攻１５００

「僕のターン。魔法カード、スター・ブラストを発動。ライフを５００単位で払うことで、その分だけ手札か場の自分モンスター1体のレベルをターン終了時までダウンさせる。これで１５００ライフを支払って、レベル７から４になったシーラカンスを通常召喚」

清明　ＬＰ４０００→２５００

超古深海王シーラカンス　攻２８００　☆７→４

「そしてシーラカンスの効果、魚介王の咆哮！手札１枚を捨てて、デッキからレベル４以下の魚族を出せるだけ特殊召喚する！さあみんな、今日も僕を勝たせるんだよ？」

竜宮の白タウナギ　守１２００

シャクトパス　守８００

オイスターマイスター　守２００

軍隊ピラニア　守２００

「くっ、外したか」

シーラカンスからの大量展開を止められなかったことに軽く頭を抱えそうになる三沢。それも無理はない、シーラカンスは自身が効果の対象になったときに魚族をリリースすることでその発動と効果を無効にして破壊できる効果耐性を持っているのだ。つまり、対象をとる効果である次元幽閉はシーラカンスを除外できないうえに攻撃も止められないと、使う理由がほぼなくなってしまったのだ。

「ふふ、その伏せカードはなんだったかな？光の力なんかに頼ろうとするからそういうことになるんだよ、三沢。もっとも、今更後悔しても遅いけどね。シーラカンスでマスマティシャンに攻撃、マリン・ポロロッカ！」

超古深海王シーラカンス　攻２８００→マスマティシャン　攻１５００（破壊）

三沢　ＬＰ４０００→２７００

闇のゲームということを聞いた時点からある程度の覚悟はしていたが、それでもやはり慣れることのない痛みが三沢を襲う。とはいえ、本人も病院送りにする気はないと言っていただけあって、前に三幻魔の1体、神炎皇ウリアと戦った時のような意識が吹き飛ぶほどの痛みではない。ちなみにその後三沢の手に渡ったウリアのカードは、彼が光の結社に入ったときに斎王のもとへ渡っている。今は光の結社の中心部で分厚い金庫の中に封印されているはずだ。

「マスマティシャンが戦闘破壊されたことで、俺はデッキからカードを1枚ドローする」

「はいはい、どうぞー。それじゃあ、本番行ってみようか。このデッキのキーカード、永続魔法エクトプラズマーを発動!」

「何⁉エクトプラズマーだと⁉」

これまでの犠牲者たちからは、これを使ったという話は一切聞いていない。それがキーカードということは、これまでの相手にはそれを使うまでもなかったということだろうか。

「清明、お前……本当に変わったんだな。以前のお前はどんな相手にも決して手を抜かずに全力で戦うデュエリストだったはずだ」

「あー、そんな時期もあったねえ。でも、僕は今すんごい強いのさ。雑魚にいちいち本気出すまでもないんだよ。舐めプ、最初とある人にやられた時はすんごい腹立ったんだけ

どさ。いざやってみるとすんごい楽しいもんだねえ！あはハハハ！」
　ぬけぬけと言い放つ清明。その眼は明らかにおかしな光を宿していて……と言えば少しは聞こえがいいが、要するにアレなクスリでも決めたみたいな状態になっていた。その様子に心を痛めながらも、なんとか自分の言葉を届かせようと別方向からのアプローチにかかる。
「それに、エクトプラズマーだってお前らしくないぞ。俺の知っているお前はモンスター射出どころか、死に出しや自爆特攻ですら嫌っていたじゃないか。モンスターのことを、カードのことをまるで１枚１枚人格があるかのように取り扱ってデュエルしていたじゃないか！」
　当たらずとも遠からず、である。実際に彼のカードには精霊が宿っているので人格があるというのもあながち間違いではない。そのため、ただでさえその手の戦法は取りたがらなかった彼は精霊が見えるようになって以降見向きもしていなかったのだが。
「なーに、勝つためさ。簡単だよ？シーラカンスで肉の壁を作って攻撃を防ぎつつエクトプラズマーの弾を補充する。我ながら合理的な戦法だと思うけどね、あっという間に４０００程度のライフなら消し去れるし、シーラカンスで殴ればこっちのライフが先に消える心配も基本しなくて済むし」
「お前……本当に清明なのか？」

「やだね、三沢。僕は僕さ、遊野清明さ。カードを伏せて、エンドフェイズにエクトプラズマーの効果発動。モンスター1体をリリースすることでその元々の攻撃力の半分の数値だけダメージを与える！殺れ、軍隊ピラニア！」

リアルなタッチで描かれたピラニアが苦しみ悶えながらその場に崩れ落ち、体から引きずり出された魂が三沢めがけて突っ込んでいく。

三沢　ＬＰ２７００→２４００

「くっ……」

「どう？痛い？でもね、僕がお前たちのせいで感じた痛みはこんなものじゃない。倒れるまではとことん付き合ってもらうからね」

三沢　ＬＰ２４００　手札：４

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

清明　ＬＰ２５００　手札：２

モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）

竜宮の白タウナギ（守）

シャクトパス（守）

オイスターマイスター（守）

魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン、ドローー！」

シーラカンスの効果で常に魚族が現れること、そして清明のデッキがビートダウンからバーン軸に変わったことを考えるとおそらくこの先の展開でシーラカンス以外のモンスターが攻撃してくる可能性は低い、つまり次元幽閉が通る確率はほぼないだろう。そう考え、せっかく伏せた次元幽閉のことはすっぱりと諦める。

「電池メン―単四型を召喚。このカードが召喚に成功した時、手札か墓地の単四型を特殊召喚できる。先ほど墓地に送った単四型を特殊召喚だ」

電池メン―単四型　攻０

電池メン―単四型　守０

「そして俺の場に電池メンのモンスターが２体以上存在するとき、このカードは手札から特殊召喚できる。来い、燃料電池メン！」

細長い体の中心に４と刻み込まれた緑と紫の電池メン達。その２人がさっと中心を開けるように飛び退ると、空いたスペースに四角い体を持ったピンクの大型電池が召喚される。

燃料電池メン　攻２１００

「それで？残念だけど、２１００程度の攻撃力じゃあねー」

「確かにな。だが、俺の狙いは燃料電池メンを特殊召喚することじゃない。電池メンと名のつくモンスターが俺の場に3体以上存在するとき、相手の場のカードをすべて破壊する！食らえ、漏電（ショートサーキット）！」

「……役立たずが。トラップ発動」

3体の電池がそれぞれポーズをとって、全身から電気を発生させる。激しく火花が弾け、辺りが眩しさのあまり何も見えなくなり……光が収まったときには、立派な焼き魚が3つ転がっていた。

「ちっ。まあいいさ、オイスターマイスターの効果発動。戦闘以外の方法でフィールドから墓地に送られた時、オイスタートークンを特殊召喚する」

オイスタートークン　守0

「無論知っているさ、ここで燃料電池メンの効果を使おう。1ターンに1度場の電池メンをリリースすることでその電力を自らに供給し、その際に発生したエネルギーによって相手の場のカード1枚をバウンスする。対象はオイスタートークンだが、トークンはバウンスできないから存在しなかったことになるな」

「……!!」

ころりと一つだけ転がっていた牡蠣が電気の力でみごとな焼き牡蠣となり、今度こそ清明の前のモンスターがいなくなる。これで燃料電池メンの攻撃力２１００でのダイ

レクトアタックが通れば、そこで速攻魔法、突進を使用するつもりである。攻撃力が７００ポイントアップした燃料電池メンの直接攻撃ならば、清明を一撃で倒すことも可能だ。

「燃料電池メンでダイレクトアタックだ」

「そのまま受けるさ」

「ならばダメージステップ、手札から突進を発動する。これにより燃料電池メンの攻撃力はさらに７００ポイントアップだ！少し荒療治になるが目を覚ませ、清明！」

燃料電池メン　攻２１００→２８００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ５３００→２５００

「ふう。それで？今何かしたわけ？」

「馬鹿な！いや、さっきのトラップか!?」

「物わかりが良くて助かるよ、説明の手間が省けるってもんさ。僕が使ったのは通常トラップ、デストラクト・ポーション。効果は……」

「自分フィールドのモンスター１体を破壊し、その攻撃力ぶんのライフを回復する、か。これもまた」

「お前らしくないカードだ、って？」

三沢の言葉に割り込むように、ふっと笑って後を続ける清明。その笑いは狂気的ではあったが、同時にどこかさびしそうにも見えた。あるいは、それもまた光の加減だったのかもしれないが。

「……いや、なんでもない。手札がこれしかないなら、温存するよりもドローに賭けてみるか。メイン２に魔法カード、一時休戦を発動。お互いにカードをドローして、次のお前のエンドフェイズまで俺たちが受けるダメージは０になる。そして手札のサンダー・ドラゴンの効果発動。このカードを捨てることで、デッキからサンダー・ドラゴン２体を手札にサーチできる。これでターンエンドだ」

燃料電池メン　攻２８００→２１００

「僕のターン。魔法カード発動、死者蘇生。シーラカンス、お前にはまだ使い道があるからね」

清明自身の手によって破壊された魚の王が、強制的に呼び起される。だがその鱗はところどころ痛々しく剥がれており、王冠のような形をした謎の部位もボロボロになっている。なによりも目につくのは、顔についた大きな傷のせいで片目が完全に潰れてしまっていることだ。

だが、そんな痛々しい姿に見向きもせずに淡々と手札を１枚墓地に送る清明。いや違う、と三沢はぼんやり考えた。見向きもしていないのではなく、目を背けて少しでも見

ないようにしているのだ、と。
超古深海王シーラカンス　攻２８００
「さあて、ね。手札を捨てて、魚介王の咆哮」
そして呼び出される、４体のモンスター。
ハリマンボウ　守１００
ツーヘッド・シャーク　守１６００
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
ハンマー・シャーク　守１５００
「ダメージは通らなくても、攻撃はさせてもらおうかな。シーラカンス、燃料電池に攻撃」
満身創痍と言えど、魚の王の勢いはピンク色の燃料電池をスクラップにするには十分なほどの威力を持つ。相変わらず身代わりのせいで次元幽閉が使えない三沢には、それをどうすることもできない。
超古深海王シーラカンス　攻２８００→燃料電池メン　攻２１００（破壊）
「これでターンエンド」
三沢　ＬＰ２３５０　手札：２
モンスター：電池メン―単四型（守）

魔法・罠：1（伏せ）
清明　LP2500　手札：2
モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）
ハリマンボウ（守）
ツーヘッド・シャーク（守）
ハンマー・シャーク（守）
フィッシュボーグ―アーチャー（守）

魔法・罠：なし

「俺のターン、ドローだ」

三沢の手札にあるのは、デッキ圧縮のため先ほどのターンに効果を使ったサンダー・ドラゴンが2体のみ。このドローで融合のカードが来れば双頭の雷龍が融合召喚できるのだが、と少し期待していたのだが、残念ながらそう都合よくデッキに1枚しか入っていない融合を引くことはできなかったようだ。

「モンスターを1体セット。これでターンエンド」

「ふふ、電池メンでモンスターのセット。おおかた引いたのはリバース効果のあるボタン型ってとこかな？ならまあ反転召喚なんてまずしないだろうし、攻守0の単四型も放置で大丈夫そう。となると、別に攻撃するまでもないね。だって、いいカードがまた引

けたんだ。永続魔法、エクトプラズマー発動！残った手札もセットして、エンドフェイズ。攻撃力１７００のハンマー・シャークをリリースし、霊魂攻撃！」

金槌のような頭を持つ青い鮫が、クリクリした目をバツ印にしてぐったりとする。その体から出た霊魂が、単四型とセットモンスターを突き抜けて三沢に直撃した。

三沢　ＬＰ２４００→１５５０

「ターンエンド。さあーて、ライフが０になるのと意識が飛ぶの、どっちが早いかな？」

三沢　ＬＰ１５５０　手札：２

モンスター：電池メン―単四型（守）

???（セット）

魔法・罠：１（伏せ）

清明　ＬＰ２５００　手札：１

モンスター：超古深海王シーラカンス（攻）

ハリマンボウ（守）

ツーヘッド・シャーク（守）

フィッシュボーグ―アーチャー（守）

魔法・罠：エクトプラズマー

１（伏せ）

「ふざけるなよ、清明。俺は闇のデュエルなんかに負けはしないさ！ドロー、エレキリンを召喚！」

電気をパチパチと鳴らしながら、明るい黄色を基調としたメルヘンなデザインのキリンがやや窮屈そうにしながらも召喚される。その効果も知っているらしい清明が、露骨に嫌そうな顔をした。ルール違反ではないが立派なマナー違反である。

エレキリン　攻１２００

「そんな顔をするもんじゃないぞ。エレキリンは、相手プレイヤーにダイレクトアタックができる！エレキリンで攻撃！」

エレキリンがその長い足を持ち上げ、シーラカンスたちをわずか一歩で乗り越えておもむろに踏み下ろす。本当に踏みつけるとソリッドビジョンとはいえ心臓に悪いのでわざと微妙に狙いをそらした一撃は清明を踏みつけるとまではいかなかったものの、それでも地面を踏みしめた時の衝撃がダイレクトに伝わってくる。

エレキリン　攻１２００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ２５００→１３００

「エンドフェイズでのエクトプラズマーの効果は、もったいないがエレキリンをリリースしよう。よくやったな、エレキリン」

清明　ＬＰ１３００→７００

本音を言うともう少しダメージを与えておきたかったが、それでもここまで削れば十分だろう、と三沢は考える。彼は今のターン、苦し紛れで攻撃を仕掛けたのではない。すでに罠は張ってある状態であり、あと1枚のキーカードが来るのをじっと待っているのだ。

「今の程度でいい気にならないでよ。僕のターンドロー。三沢のライフは残りあれだけ……ここは大きく賭けに出る！カードをセットだけして、あとはこのままターンを流してエンドフェイズ、エクトプラズマー発射！」

次の標的に選ばれたのは、すでに満身創痍のシーラカンス。魂を引きずり出される苦しみを隠せないようにその場で暴れだす魚の王だったが、どんなモンスターでもカード効果とプレイヤーの意思にだけは逆らえない。力尽きる寸前最期に一声吠え、魚の王の巨体は再び地面に崩れ落ちた。

三沢　ＬＰ１５５０→１５０

「ぐわあああっ!?」

「三沢！」

これまでのエクトプラズマーによるダメージの2倍近い数値。それをまともに受け止めた三沢もさすがに苦痛の呻きをこらえきれず、その場に膝をつきそうになる。なるが、そこで清明が叫んだ。彼がよく知っている、いつも通りの清明の声が。その声を聞

き、踏みとどまって立ち直る。まさか元に戻ったのか、と清明を見るが、当の本人も彼の名を呼んだのかは自覚していなかったらしく、自分の口に手を当てて忌々しそうな顔をしていた。

「ちっ、もう起きてきやがったか……」

「何？」

それは、間違いなく清明の言葉。なのだが、どこか彼とは違う何かが喋っているような印象を受けた。気のせいかと思い軽く首を振って頭をはっきりさせてから見直すと、その感覚はもう消えていたのだが。

三沢　ＬＰ１５０　手札：２

モンスター：電池メン―単四型（守）

???（セット）

魔法・罠：１（伏せ）

清明　ＬＰ７００　手札：０

モンスター：　ハリマンボウ（守）

ツーヘッド・シャーク（守）

フィッシュボーグ―アーチャー（守）

魔法・罠：エクトプラズマー

２（伏せ）

「俺のターン、ドローー！」

今一瞬だけ起きた当の本人にもよくわからない現象が収まった。そして三沢がカードを引くのを見ながら、それにしても、と清明は大事な一瞬だというのにふと考える。相変わらずこの男には、どうも勝てる気がしない。こちらが一生懸命知恵を絞って考えた戦略が、三沢にはまるで通用しない。いや、もちろん全く通用していないということはないしある程度ダメージは通るのだが、常に全部お見通しにされているような気がしてならないのだ。実際、彼は2年生になってもいまだに三沢相手には1勝すらできていない。現校生の中でこんな相手、あとは十代とノース校から帰ってきてからの万丈目くらいのものである。

だけど、なんでこんなことを今考えているんだろうか。ふと疑問が彼の胸をよぎる。別に今じゃなくても、あとでじっくり考えればいいではないか。まるでそう、例えるならば『何か』に思考を誘導されていたかのような。なにかかんがえてはいけないことがあるかのような。でもなにが。なにが。な…に……が……。

『難しいこと考えるなよ、遊野清明。それよりも、さっき十代に万丈目って言ったろ？そいつらは今どうしてるんだ？十代はいまだに行方不明、万丈目は真っ白に染まってお前のことを敵としか見てないぜ。目の前にいる三沢だって、口じゃあ立派なこと言っては

いるが所詮は光の結社さ。お前の友を次々に奪っていった、憎い憎い光の結社だよなぁ？ほら、もっと憎むんだよ』

彼の頭の中で、また声がした。残念ながら三沢にはその声が聞こえていない。もし聞こえていれば、たとえ清明を殴りつけてでも止めただろう。だが、清明はその声に耳を傾けてしまった。それを聞いて、自分が今すべきことを思い出す。さっきの疑問もどうでもいい。今考えることはただ一つ、光の結社を潰して皆を取り返す、ただそれだけだ。

「来い、三沢！」

「言われなくても、このターンで終わらせてやるとも」

「えっ」

格好つけて言ってみた台詞に予想外の自信満々な返しをされ、ちょっと慌てて素が出る。そんな様子を意に介さず、三沢が待ち続けていたカードを場に出した。

「俺のカードはこのモンスター、ＲＡＩ（ライ）―ＪＩＮ（ジン）だ！」

ＲＡＩ―ＪＩＮ……漢字で書くと雷神。どことなくアメコミヒーロー風の派手な衣装に身を包み、雷の形を模した黄色のサングラスをかけた赤髪の若い男が、派手なスパークを起こしつつ天井から飛び降りてスタイリッシュに着地する。そして全身から電気を放つと、そのパワーの一部が単四型に降り注ぐ。

「このカードは、自分フィールド全ての光属性モンスターの攻撃力を墓地の光属性モン

スターの数につき１００ポイントアップさせる能力を持つ。今の段階で俺の墓地にいるのは単四型、燃料電池メン、サンダー・ドラゴン、エレキリンの４体。よって攻撃力は４００ポイントずつアップだ」

ＲＡＩ―ＪＩＮ　攻?→４００

電池メン―単四型　攻０→４００

「た、たかがその程度で驚かさないでほしいね。それに、エクトプラズマーの効果で参照するのはモンスターの元々の攻撃力！いくらフィールドで全体強化を掛けたって無駄なのさ！さらに、ここで伏せカードのうち1枚を発動、リビングデッドの呼び声！甦れ、シーラカンス！」

超古深海王シーラカンス　攻２８００

「確かにな。だが、この俺のセットモンスター……お前がボタン型だと信じこんだこのモンスターの効果がここで生きてくる。反転召喚によるリバース効果発動、魔道雑貨商人！」

４本の腕にそれぞれ妙なアイテムを手にした商人ファッションのコガネムシが、三沢のデッキをデュエルし救から抜き出して勝手にぱらぱらとめくる。そして上から１２枚ほどのカードを無造作に墓地へ突っ込むと、無言のまま1枚のカードを持主に手渡した。

「このモンスターがリバースした時にデッキの上から魔法か罠が出るまでカードをめくり、最初に出たそのカードを手札に加える。そして残り、つまりモンスターカードはすべて墓地に送るのだが、この意味は分かるな？さらに、魔道雑貨商人自体も光属性昆虫族のモンスターカードだ」

「お、落としたモンスターは１２枚、つまり上昇値は合計１６００……」

ＲＡＩ―ＪＩＮの全身から発散される電気がさらに明るさを増す。その光は全てのモンスターに均等に降り注ぎ、みるみるうちに体が大きくなる。

「僕のモンスターは残り４体で、三沢のモンスターは３体。このターンだけなら」

「いいや、それはないな。俺が魔道雑貨商人で手札に加えたカードはこれだからだ。魔法カード、融合を発動！手札のサンダー・ドラゴン２体を素材とし、双頭の雷龍（サンダー・ドラゴン）を融合召喚！そして光属性のサンダー・ドラゴン２体が墓地に送られたことで、さらに全体強化の数値が上がることになるな」

ＲＡＩ―ＪＩＮ　攻４００→２２００

魔道雑貨商人　攻２００→２０００

電池メン―単四型　攻０→１８００

双頭の雷龍　攻２８００→４６００

「ふ、ふざけんな。僕は強いはずなんだ、もう光の結社なんかに二度と負けるはず

……」

「光の結社、か。……悪いな、清明。ＲＡＩ―ＪＩＮでツーヘッド・シャーク、攻撃表示にした単四型でフィッシュボーグ、魔道雑貨商人でハリマンボウ、そして双頭の雷龍でシーラカンスに攻撃！」

４体のモンスターが一斉に放つ電流が、シーラカンスたちを飲み込んでいく。その破壊力は先ほどの漏電に勝るとも劣らない。

だが。歪みきった清明の心が、ここで最後の粘りを見せる。

「させるかあああああっ！リバース・トラップ発動、破壊指輪！自分フィールドのモンスターを1体破壊して、お互いに１０００ポイントのダメージを受けることになる！僕もダメだけどお前も道連れだ、三沢！」

「何っ!?」

シーラカンスの体を爆弾付きの輪が締め付け、身動きの取れない状態にしたままそれが爆発する。雷撃が清明に届くよりもさらに一瞬早く、爆発の衝撃が２人を飲み込んだ。

三沢　ＬＰ１５０→０

清明　ＬＰ７００→０

「くっ……」

吹き飛ばされた衝撃で気絶していた三沢がようやく起きた時、すでに清明はいなかった。自分よりも先に目が覚めたのか、それとも最初から意識があったのか。どちらにしても丈夫な奴だ、とつぶやいて立ち上がる。闇のデュエルのせいで節々が痛む体を引きずるようにして立ち上がり、最後にもう一度だけ周囲を確認する。やはり誰もいない。あと少しだった。あと少しであの勝負に勝つことができた。

いや、勝負自体は俺の勝ちだった。そう思い直す。勝負自体は勝っていたが、最後の最後で粘り負けしたのだ。最終的には引き分けとはいえ、あの粘りがなければ確実に三沢の勝ちだったことを考えると、実質負け試合と言っても過言ではない。そしてその粘り、土壇場になってからのわけのわからない精神力こそが、実力では清明をはるかに上回る三沢が清明に一目置いている最大の理由である。

「まだ俺も修行が足りないか……だが、このままだとまずいな」

三沢が清明と引き分けになったことが斎王の、ひいては万丈目ら過激派の耳に入るまでそう時間はかからないだろう。だとすると、少し予定を改める必要がある。

全身の痛みに顔をしかめながら、三沢はホワイト寮へと戻るのであった。

ターン４８　正義の闇と運命の光

「はー……今日も結局三沢には勝てなかったか」

もはや誰もいなくなったレッド寮で、聞く人がいないことはわかっているけれどひとり呟く。もっとも、別に翔が光の結社に入ったわけではない。危険が及ぶ前にと数日前からラーイエローに避難させたのだ。なにしろ、この我ながら異様なまでの敵意がいつ何時無関係の翔の方に向くかわかったものじゃない。誰か人がいると見境なく怒りが込み上げてくるけど、こうして自分以外誰もいないところにいるうちは、ある程度落ち着いていられる。

……今の僕は明らかに何かがおかしい。誰かこういうことが相談できそうな人に相談したいけれど、稲石さんとは喧嘩したまま気まずくて連絡が取れない。というか、多分今あの人の声を聞こうものならまたあのわけがわからない敵意が湧いてくることは容易に予想できる。ユーノだって今はいない、あの裏切り者が……ああ、まただ。心の中にたまって来たどす黒い怒りを無理やり締め出し、平常心を保つ。他に頼りになりそうなのはチャクチャルさんだけど、あの神様もどうも最近どこかに行っているらしく、いくら探っても全然見つからない。思えば最後にチャクチャルさんの声を聞いたの

も、稲石さんと喧嘩したあの日だ。元気にしてるんだろうか。あるいは、まるで言うことを聞かない僕に愛想を尽かしたのかもしれない。

「いや、だとしたらまずはこっちから、かな」

誰もいない部屋に、また僕の声だけが響く。僕のデッキの精霊たち。エクトプラズマーやデストラクト・ポーションなんて恐ろしいカードはデッキに入れたくないし使いたいとも思わないので、こうして我に返る時間のたびにデッキから抜こうとはしている。しているのだけど、そのたびに心の中で何かが抵抗してどうしても抜けない。モンスターを犠牲にするようなスタイルは嫌だって僕は言ってるのに、その声は少しでも相手にダメージを与えるためならモンスターごときに一々かまうなって言ってくる。どれほど抵抗しても、僕一人しかいないこの状況だとどうしてもその声に勝つことができない。

かといって、他の人を呼ぼうものなら本末転倒なのだ。

「はー……ごめんね」

誰に向けての謝罪なのか。実は自分でもよくわからない。ただ、何かに対して謝らなければいけない気がしたから謝った。それだけのことだ。すると、まるでそれを待っていたかのようなタイミングで学生服のポケットにねじ込んでおいたＰＤＬが鳴る。取り出そうとすると、何か別のものに手が当たった。一瞬なんだろう、と思ったがすぐに

思い出した。そういえばあのノース校とのデュエルの時、天田からなにか預かってたんだっけ。あの時の彼の予感は最悪の形で的中しちゃったけど、だとするとこれは一体なんだろう。いや、まずはメールか。

えー、なになに？ふむふむ。メールの送り主は夢想からで、女子寮に今届いた情報によると明日の午前１１時にエド・フェニックスによる特別座談会『それはどうかな？と言えるデュエル教室～アカデミア特別編～』なるものが開催される、と。

「エド、かぁ」

大人しい転校生の仮面をかぶったプロデュエリスト。思えば、僕がちょうど倒れてた間にあの男のせいで十代がいなくなり、そこからどんどん事態がおかしくなっていったんだ。そう考えると、何か引っかかるものがある。エドと光の結社、思ったよりも深いところで繋がりがあるんじゃないのかな。これは、行ってみるしかないだろう。人前に出たら十中八九喧嘩を売ることにはなるだろうけど、

『それならそれで構わない。そこはもうどうしようもない。僕はおかしくなったんだもの。……だろ？』

そう、僕はもうおかしく……って、ちょっと待てや。危なかった、もう少し気を抜いてたら今の声、ここ最近毎日のように僕だけに聞こえてくるこの声のペースに乗せられるところだった。でも実際、こんなものが聞こえるってことはおかしくなったという

のもあながち間違いではないのかもしれない。
難しいことはよくわからないので、とりあえず風呂に入って布団かぶって寝ることにした。天田の渡した荷物のことは、なぜだかきれいさっぱり頭から消し飛んでいた。

その頃の話。とうに消灯時間も過ぎて寝静まったホワイト寮の廊下を、音をたてないように注意しながら歩く人影が1人。誰あろう、三沢大地である。夜更けにもなって、なぜ彼は痛む体を無理に動かしてまでこんなところをこそこそと歩いているのか。
そのわけは、彼の目的地にあった。そこは、光の結社の中でも万丈目や明日香、鎧田と三沢ぐらいにしか正確な場所を知られていない位置の部屋。ホワイト寮の最上階。そこに、斎王の普段寝泊りする部屋があるのだ。
誰にも見とがめられずにその部屋の前までたどり着いた彼は、ポケットから前もって準備していた針金をドアの鍵穴に入れ……ようとしたところで、ふと思い直してドアノブをひねってみる。案の定そのドアはあっさりと開き、中には机の上でタロットを広げる斎王の後姿が見えた。
こちらの侵入には気づいていないと判断し、一瞬ためらった後するりと部屋の中に入り込む三沢。わざわざ万丈目が買ってきた分厚い絨毯のおかげで足音は完全に殺され

ている、と思ってのことだ。
　そのまま一歩を踏み出そうとしたところで、振り返りすらもせずに斎王が口を開く。
「教皇の逆位置。これがあなたの過去の暗示」
「魔術師の逆位置。これがあなたの現在の暗示」
　とっさのことに言葉に詰まる三沢を意に介さず、そのままもう1枚のカードを確認する斎王。
「そして最後の1枚、吊された男の逆位置。これがあなたの未来の暗示ですよ、三沢大地。この意味が分かりますか？」
「何？」
　さすがの三沢も、タロットにはそこまで詳しくない。名前ぐらいは一通り覚えているが、正位置逆位置の意味など一々覚えてはいないのだ。
「まず、教皇の逆位置は嘘を示します。つまりあなたは過去、私に対して嘘をついた。そして魔術師の逆位置、これはあなたが私に対しての裏切りを行おうとしていることを示しています。ですが、そんなあなたの未来は吊された男の逆位置。つまり、その試みは徒労に終わるでしょう」
「……っ！」
「あなたが最初から光の結社（われわれ）の仲間になる気などなく、ずっとスパイ活動を続けていた

ことに気が付いていないとでも思っていましたか？むしろいつ私のところに直接来るかと思っていましたよ。しかし、麗しい友情ですねえ。友人である遊野清明を心労から救うため、無理を押して強行してくるとは」

ここまで斎王の話したことは、全て当たっている。ウリアの力のおかげで辛うじて洗脳を免れた三沢はとっさの判断で光の結社内部に入り込むことを選択したが、その日のうちに闇の波動がどうたらこうたらともっともらしいことを言われてウリアのカードは没収されてしまっていた。つまり闇の力が抜けた今、あくまで一般人である彼が次に光の結社相手に負けた場合は問答無用で洗脳されることとなる。できればそれを避けるための保険として、まずはウリアを取り返しに行く予定だった。

だが、それができない理由ができた。誰あろう、遊野清明の暴走である。今日行ったデュエルによりかなり彼の精神が追い込まれていると判断した三沢は、いつまでもゆっくりしている場合ではないとまだ準備ができていないことは百も承知で斎王のもとへ乗り込んだのだ。

「そこまでわかっているなら話は早い。俺とデュエルしろ、斎王！俺が勝ったらこの馬鹿げた話をすべてなくし、二度とこのアカデミアの土を踏まないと約束してもらう！」

「ふぅむ……いいでしょう、あなたのように優秀な手駒は、いくらいても足りることはない。ですがお忘れなきよう。あなたの運命は、このデュエルが始まる前から既に決

まっているのです」
「能書きはいい、始めるぞ」
「いいでしょう。少しばかり、遊んであげますよ」
「「デュエル!!」」
「先行は私ですね。私が召喚するのはアルカナフォースⅢ―ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ（ジ・エンプレス）。そして召喚成功時、このモンスターの効果が発動します。さあ、回転を止めるのはあなたですよ、三沢大地」
　アルカナフォースⅢ―ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ　攻１３００
　女帝を意味する大アルカナ３番目のカード、エンプレス。そのレースのようなマントを身に着けた頭上で、１枚のカードがゆっくりと回転を始める。不気味に回転するエンプレスのカードを注意深く見ながら、適当なタイミングで声をかける。
「ストップだ」
　ぴたりと止まったその位置は、ちょうど頭が上になる形。
「素晴らしい。では、この瞬間よりエンプレスは正位置の効果が適用されます。もっとも、今発動するものではありませんがね。私はこれで、ターンエンドです」
「俺のターン、ドローだ」
　どうしようか、と手札を見て思案する三沢。エンプレスの効果で正位置、つまり表が

出た以上、下手に残しておくのは危険だと結論付ける。だが、まだ心配はしていない。なぜならこのデッキは、光の結社のメンバーの目を盗んでずっとこの日のために隠し持っていた6つのデッキの1つ、闇属性のものだからだ。

「モンスターを1体セットし、さらにカードを……」

「待ちなさい。ならばここで、エンプレスの効果を発動。正位置が出たこのカードが存在する限り、相手がモンスターを通常召喚するたびに手札のアルカナフォースを呼び出すことができます。本来ならば高レベルモンスターを出したいところなのですが……多少は運があるようですね、私の手札にいるアルカナは全て下級モンスター。アルカナフォースⅣ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲを特殊召喚。無論、このカードもエンプレスと同じくあなたの手で効果を決めてもらいます」

アルカナフォースⅣ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１４００

女帝の隣に降り立つ皇帝。その頭上でまたも回転したカードをじっくりと見る。そして三沢は考える。実を言うとこの場面では、別に正位置だろうと逆位置だろうと別に困りはしない。その理由があるのだ。だが、万一この手が失敗した時でもエンペラーの逆位置、つまり仲間のアルカナフォースの弱体化さえ引けばいくらでもリカバリーは効く。

つまり、狙うはただ一つ。逆位置の効果だ。

「ストップだ」
　そんな願いもかなわず、静止した位置はまたも正位置。残念がる三沢を愉快そうに見つめ、正位置の効果を説明する斎王。
「正位置のエンペラーは、場のアルカナフォースの攻撃力を５００ポイント永続的にアップさせます」
　アルカナフォースⅢ―ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ　攻１３００→１８００
　アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１４００→１９００
「くっ……」
「さあ、今はまだあなたのターンですよ。これ以上私のすることはありません、どうぞ続けてください」
「カードをセットして、ターンエンドだ」
　斎王　ＬＰ４０００　手札：３
　モンスター：アルカナフォースⅢ―ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ（攻）
　　アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（攻）
　魔法・罠：なし
　三沢　ＬＰ４０００　手札：４
　モンスター：???（セット）

魔法・罠：1（セット）

「では、私のターンです。ドロー。ふぅむ、なるほど。1つ、このターンでのあなたの運命を教えてあげましょう。あなたはこのターン、狙っていたことが一度はうまく行ったかに見えるもののその直後に絶望を見ることになるでしょう」

「なんだと?」

「今にわかることです。エンプレスでその伏せモンスターに攻撃、ＥＭＰＲＥＳＳ　ブレッシング!」

アルカナフォースⅢ―ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ　攻１８００→???　守３００（破壊）

「むっ……ええい、破壊されたモンスター、Ａ（アーリー）・ボムの効果発動!このカードが光属性モンスターに戦闘破壊された時、フィールドのカード2枚を破壊する!俺が破壊するのは、エンプレスとエンペラーだ」

先ほどの斎王の言葉から何か嫌な予感はしたが、ここであの2体を破壊しなければエンペラーの攻撃が彼のライフを直撃することとなり、そうすることは避けておきたかった。ゆえに彼は、斎王の予想通りの行動をとらざるを得ない。

「おやおや、私のモンスターが全滅してしまいましたねぇ。ならばメイン2に移行、魔法カード、フォトン・サンクチュアリを発動します。このカードの効果により、フォトントークンを2体守備表示で特殊召喚します」

フォトントークン　守０
フォトントークン　守０
斎王の場に現れた２つの球体、そしていまだ残っている召喚権。この２つのことからこれから何が起きるのかがぴんときた三沢だが、彼の伏せカードは相手がもしアドバンス召喚をターンの初めに行った場合でも問題なくＡ・ボムの発動ができるようにとセットしただけのものなのでそれを止めるような効果はない。
「フォトントークン２体をリリースし、現れなさい……アルカナフォースＸＶＩＩＩ（エイティーン）―ＴＨＥ　ＭＯＯＮ（ザ・ムーン）！」
アルカナフォースＸＶＩＩＩ―ＴＨＥ　ＭＯＯＮ　攻２８００
これまでの人型だったアルカナフォースとはまた一味違う、まるで宇宙服を着ている宇宙人のようなデザインの化け物が、つぶらな瞳を光らせながら無数の触手をうねらせる。その頭上では、例のごとく回転するカード。
「ストップだ」
「正位置ですね、素晴らしい。カードをセットして、ターンエンドです」
「ならばエンドフェイズに速攻魔法、終焉の焔を発動。攻守０の黒焔トークンを２体、特殊召喚する」
「なるほど。終焉の焔のデメリット効果である発動ターンに召喚及び特殊召喚ができな

い制約も、私のターンの内に使ってしまえば問題はない、ということですか。さすがにアカデミアの秀才と呼ばれるだけのことはある、冷静な判断です」

黒焔トークン　守０

黒焔トークン　守０

「そして俺のターン。トークンのうち1体をリリースしてレベル5、Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブ・ジャスティス）　ルドラをアドバンス召喚！」

Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ　攻１９００

「そして装備魔法、重力砲（グラヴィティ・ブラスター）を発動してルドラに装備する。このカードは1ターンに1度、装備モンスターの攻撃力を永続的に４００ポイントアップできる。俺は、早速この効果を使用させてもらう」

ルドラの背面からにょっきりと砲台がせりあがってきて、ルドラが足を踏ん張って力を込めるとその先端に光がチャージされていった。

Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ　攻１９００→２３００

「ほう。ですが、たかだか４００程度の攻撃力アップでは……」

「これだけあれば十分だ！ルドラでムーンに攻撃、その瞬間ルドラの効果発動！このモンスターが光属性とバトルを行う時、その攻撃力は７００ポイントアップする！」

砲台から放たれた一筋のビーム。それは触手で迎え撃とうとするムーンの目の前で

急に勢いを増し、ガードをとる前にその胸のど真ん中に風穴を開けた。触手が力なく垂れ、目の光も暗くなってゆく。

Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ　攻２３００↓３０００↓

アルカナフォースＸＶＩＩＩ―ＴＨＥ　ＭＯＯＮ　攻２８００（破壊）

斎王　ＬＰ４０００↓３８００

先手を打ったのは三沢。だが、その表情は晴れない。確かにダメージは与えたが、まるで勝っている気がしないのだ。有利なのは自分のはずなのに、まるでここまでの動きがすべて読まれているような。すべてが運命であり、その通りに動いているだけのような……そこまで考えて、バカバカしい、と首を振る。デュエルモンスターズは理論と運のゲーム、運命なんてまやかしの介入する余地はない。それが彼なりのデュエル感である。

「カードを1枚セット。ターンエンドだ」

斎王　ＬＰ３８００　手札：1

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）

三沢　ＬＰ４０００　手札：2

モンスター：Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ（攻・重）

黒焔トークン（守）
魔法・罠：重力砲（ルドラ）
1（セット）

「私のターン。アルカナフォース0―THE　FOOL（ゼロ・ザ・フール）を守備表示で召喚。さあ、この愚者の回転を止めるのもまたあなたです」

アルカナフォース0―THE　FOOL　守0

「戦闘破壊耐性か、だがそんなものは無意味だな。ストップだ」

「確かに。ああ、このカードで正位置が出ましたか。私にとってはなかなか珍しいことですが、まあどうでもいいですね。ターンエンドです」

「俺のターン、まずは重力砲の効果を再び発動し、ルドラの攻撃力をさらに上げる！」

A・O・J　ルドラ　攻2300→2700

「そして魔法カード、アームズ・ホールを発動。このターンの通常召喚権を失う代わりにデッキトップを墓地に送り、その後デッキか墓地の装備魔法を1枚手札に加える。俺の墓地に装備魔法はない、よってデッキからブレイク・ドローを手札に加えてそのままルドラに装備する」

やはりビックバン・シュートかメテオ・ストライクを1枚入れておくべきだったか、とやや後悔するが、今更言ってもしょうがない話なのでさっさと気持ちを切り替える。

背中のビーム砲がもう1度光り輝きさらなる力を蓄えたルドラの全身が、青いオーラに包まれる。だが、その攻撃力に変化はない。

「ルドラでフールに攻撃、そしてこの瞬間にルドラと重力砲の効果が適用される！」

Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ　攻２７００→３４００→アルカナフォース０―ＴＨＥ　ＦＯＯＬ　守０（破壊）

「重力砲の効果……それは、装備モンスターが戦闘を行う場合、その相手モンスターの効果を無効化する。これにより、フールの戦闘破壊耐性は無効だ。そしてブレイク・ドローを装備したモンスターが戦闘でモンスターを破壊したことにより、デッキからカードをドローする。これで、俺はターンエンドだ」

斎王　ＬＰ３８００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

三沢　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ（攻・重＆ブレ）

黒焔トークン（守）

魔法・罠：重力砲（ルドラ）

ブレイク・ドロー（ルドラ）

1（セット）

「私のターン。ふふふ、ふふふふふ」

「な、何がおかしい！」

いきなり堪えきれないように笑いだす斎王を問い詰める三沢。だが、その声はどこか固い。すでにこの場の異様な空気に呑まれかかっているのだ。それが分かっているからこそ、より一層自分に気合を入れようとする。

「これは失礼。ですがね、三沢大地。あなたには見えないでしょうが、すでにあなたが私の前に倒れることになる運命のビジョンが私には見えているのですよ。そうとも知らず、あなたはその未来に向かってひたすら進み続けている。それを見ることは、私にとってはたまらない楽しみなのですよ」

「本性を現したな、斎王……！」

普段光の結社の構成員たちに見せる紳士っぷりからは予想もできないほどに歪んだ発言に、三沢もまさかここまでとは、と驚愕を隠せない。彼は気づいていない。先ほどよりもさらに、斎王のペースに乗せられつつあることに。

「それでは、この無意味なデュエルを続けましょう。改めて私のターン、ドロー。魔法カード、『攻撃』封じを発動。この効果により、あなたのルドラは守備表示に変更されます」

Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ　攻２７００↓守１２００
「そして通常召喚……アルカナフォースＶＩＩ（セブン）―ＴＨＥ（ザ）　ＣＨＡＲＩＯＴ（チャリオット）。このカードの効果もまた、」
「ス、ストップだ！」
　この局面でのチャリオットはまずい。なにがなんでも逆位置の効果を出さねば、と祈りを込めて宣言するも、またしてもカードは三沢の思いを嘲笑う。
「しまった！」
「当然、正位置。正位置を得たチャリオットで、守備表示となったルドラを攻撃！フィーラー・キャノン！」
　戦車を意味する言葉、チャリオット。だがそのフォルムは実在する戦車と呼ぶにはあまりにも異形な、触手を無数に生やして浮遊する、目玉がいくつもついた２階建てのユーフォーとでもいうべき代物である。その触手から連続して放たれた光線がルドラの装甲を貫き、その体を蝕んでいく。ルドラの能力はあくまでも戦闘特価であり、己の効果も重力砲の効果もすべて攻撃力を上げる役にしかたたない。２つの効果が同時に使われたことでレベル５モンスターとしては破格のステータスを手に入れたルドラだったが、その守備力は召喚された時と何も変わってはいない。
　アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ　攻１７００↓

Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ　守１２００（破壊）
Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ　攻１９００
チャリオットの効果が発動され、先ほど怪光線を浴びて鉄くずになったはずのルドラが操り人形のようにぎこちない動きで斎王の場に特殊召喚される。これこそが正位置を得たチャリオットの特殊能力、戦闘破壊した相手のコントロールを得る力である。
「行きなさい、ルドラ。黒焔トークンに攻撃！」
Ａ・Ｏ・Ｊ　ルドラ　攻１９００→黒焔トークン　守０（破壊）
「私は、これでターンを終了します」
「俺のターン……ドロー！よし、来たか！」
このカードが引きたい、と思ったカードがデッキトップに来ていた。ただそれだけのことだが、三沢の気持ちを奮い立たせて希望を持ち直すにはそれで十分だった。
「相手フィールド上に光属性を含むモンスターが2体以上存在するとき、このカードは特殊召喚できる！Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブ・ジャスティス）　コズミック・クローザーを特殊召喚！」
効果こそ凶悪だが素の攻撃力は下級モンスターとしてもやや低めなチャリオットに、光属性相手でないと力を発揮しないルドラ。コズミック・クローザーも別段特筆すべきほどの攻撃力は備えていないとはいえ、それでも上級モンスター程度の２４００は持ち合わせている。だが……

「リバーストラップ、神の宣告を発動。ライフを半分払い、その特殊召喚を無効」

斎王　ＬＰ３８００→１９００

あっさりと無効にされる特殊召喚。ここで三沢も、何かがおかしいと気がついた。今の特殊召喚を無効にしなかった場合、チャリオットを戦闘破壊することで与えるダメージは７００。わざわざ１９００ものライフを払って止めたということは、何か他にやりたいことがあるのだろう。デビルやハングドマンといった最上級モンスターのアドバンス召喚か、あるいはアルカナ２１番目のカード、ザ・ワールドを何らかの方法で展開しての効果の発動だろうか。

「いずれにせよ、だいぶ手は読めてきた……逆に考えれば、この場さえ凌げばどうにでもなる！２体目のＡ・ボムを召喚し、チャリオットに自爆特攻！」

小型の爆弾が空を駆け抜け、迎撃のビームをすべてかわしてチャリオットの体に密着、そして自爆。その衝撃にルドラが巻き込まれ、全てのモンスターがその爆発ののちに消えさった。

Ａ・ボム　攻４００（破壊）→アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ　攻１７００

三沢　ＬＰ４０００→２７００

Ａ・ボム　守３００

「自爆特攻によるダメージ、そしてチャリオットの効果によるA・ボムのこちら側への蘇生。2つの条件もいとわずにこちらのモンスターを減らそうとした、その状況判断力には敬意を示しますよ。ですが、少しばかり別方向への配慮が足りなかったようですね」
「ぐふっ……!!」
斎王の言葉も、三沢の耳には届かない。彼は今、突然全身を走った痛みの前に立っているのもやっとな状態である。
「デュエルでダメージが俺に?ま、まさか!」
「その通り、これは闇のゲーム……いえ、むしろ光のゲームと呼びべきでしょうか。もう少しよく考えてからデュエルを挑むべきでしたね。あなたにはまだ昼のダメージが残っているはずです」
「光の、デュエルだと?ふざ、けるな!」
何とか最初のショックからは立ち直り、多少ふらつきながらもしっかりと前を向く三沢。今の彼にとってはA・ボムの攻撃力400によるダイレクトアタックすらかなりの大ダメージになるが、それを抑えることのできるカードは既にない。
「ターン、エンドだ」
斎王　LP1900　手札：0
モンスター：A・ボム（守）

魔法・罠：なし
三沢　ＬＰ２７００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：１（セット）

「私のターン。あなたの考えていることはわかっていますよ、三沢。あなたは私が最上級モンスターの召喚、あるいはザ・ワールドの効果のためにモンスターを残すべく先ほど神の宣告を使ったものだと思っている……そして、それは正しいです。ですが、あなたはこうも考えているはずだ。私のフィールドにはさっきあなたからプレゼントされたＡ・ボム１体しか存在せず、手札も今ドローした１枚のみと。このターンに大きな動きはないと安心していませんか？魔法カード、カップ・オブ・エースを発動。このカードはアルカナフォースではありませんが、まあ似たようなものです。さあ、これもまた回転を止めてください」

「ストップ、だ」

「そして、これも当然正位置。よって、私がカードを２枚ドローします。魔法カード、フォトン・サンクチュアリを発動。効果はもう説明しなくてもいいですよね？」

フォトントークン　守０
フォトントークン　守０

「そしてフォトントークン２体をリリース。これぞ大アルカナの頂点にしてラストナンバー、２１番目のカード！アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ（ザ・）ＷＯＲＬＤ（ワールド）ッ!!」

世界を暗示するそのカードは、これまでのアルカナフォースよりもさらに大きく、より強く。その威圧感は空間を歪ませ、彼の前では時間ですらもその意のままに従うほかはないという。

アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　攻３１００

「ザ・ワールド……」

ある程度予想はしていたが、まだこのターンは無事だろうと高をくくっていた三沢。だが、まだ終わったわけではない。ザ・ワールドは当たりと外れの落差が極端に激しいアルカナ、この局面だけでも逆位置を引くことができれば勝負は一気にわからなくなる。

「ストップだ！」

その声に合わせ、ゆっくりと頭上の回転スピードが落ちていく。一度逆位置になり、しかしそのまま回転を続けて正位置になり……いや、まだ動いている！そして、そして……。

「当然、正位置。もっとも、さすがにこの効果を使うことはこのターンではできませんがね。ですが、攻撃は可能。運命に抗わないことです、オーバー・カタストロフ！」

ゆっくりと。少しずつ、世界がその体の前に光の力をためてゆく。そして、それが解き放たれた。

アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　攻３１００→三沢（直接攻撃）

その攻撃が引き起こした爆発に、斎王は薄く笑みを浮かべる。これで、自分の周りをかぎまわる目障りなネズミを始末できた。彼は有能な人材だ、これからは光の結社のためにその頭脳を生かしてもらおう――――――そして、その笑みが凍りつく。

「トラップ発動、閃光弾……相手の直接攻撃時、そのターンのエンドフェイズになる」

このターンをしのいだ三沢を見て、いささか認識を改める斎王。斎王の見ていたこのデュエルのラストターンでのビジョンは『三沢が床に倒れていて、その正面に自分が立っている』というもの。てっきり今の攻撃がそれだと思っていたのだが、まだ運命はその時ではないようだ。

斎王は運命を見通す力を持つ。だが、それはあくまでも『何がどのタイミングで起きるか』を見ることができるというものであり、今の場合でもデュエルのラストターンでのビジョンであることはわかってもそれが具体的に何ターン目なのかまではわからない。そういう時、彼はまだ自分が光の意思を使いこなせていないことを実感するのだった。

「いいでしょう、エンドフェイズです」

「俺の、ターン……ドローっ！」

ちらりとカードを見る。このターンで何とかＡ・ボムだけでも除去しない限り、かなり高い確率で斎王はザ・ワールドの効果を使うだろう、ということは三沢にも予想できた。彼は運命の存在を信じないタイプではあるが、少なくとも斎王が何らかの能力を持っていることはわかる。幸いにもＡ・ボムのステータスは低く、返しの戦闘ダメージさえどうにかできるならばモンスターをうまく引ければ救いはある。

モンスターを引ければ、だが。

「カードを3枚セット……これで、ターン終了だ」

そして、それは叶わない話だった。たった守備力３００しかないＡ・ボムですら、モンスターの存在しない彼の手札にとっては十分な脅威となる。そして、斎王はその隙を見逃さない。

斎王　ＬＰ１９００　手札：０

モンスター：アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ（攻）

Ａ・ボム（守）

魔法・罠：なし

三沢　ＬＰ２７００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：３（セット）
「私のターン。モンスターを召喚するのは得策ではないでしょう、もう一度ザ・ワールドによるダイレクトアタック！オーバー・カタストロフ！」
再び光を充填した世界が、今度こそ目の前の敵を排除せんと破壊を解き放つ。そのパワーを前に、三沢は……
「やはり激流葬やミラーフォースを警戒してきたか！俺らしくもなく縁起を担いで入れただけのカードだったんだが、まさか本当に役に立つとはな。トラップ発動、チェンジ・デステニー！このカードは相手の攻撃を無効にしてそのモンスターを守備表示に変え、さらに相手は２つの効果から１つを選択する！」
世界の攻撃は空中で力を失い、三沢と斎王の間には２枚の扉……それぞれ赤と青に塗られた、何の変哲もない簡素な造りの扉が出現する。
「私に選択を、ですか？」
「その通りだ。まず１つは、俺に今攻撃が無効になったモンスター、つまりザ・ワールドの攻撃力の半分のダメージを与える効果。そしてもう１つは、それと同じ数値だけお前のライフを回復する効果。さあ、どちらを選ぶ？」
「では、ザ・ワールドの半分で１５５０のダメージを受けてもらいますよ」
特に斎王に迷いはなかった。それはそうだろう、彼にとって自分の勝利は確実なも

の。ならば、無駄な戦いは少しでも早く切り上げるのが得策だと考えても不思議な点はどこにもない。

そして斎王の選択によりダメージを与える側、赤の扉が開いてその奥に広がる無限の宇宙のようなサムウェアからビームが飛んできて三沢を直撃する。

「うおおおおっ!!」

三沢　ＬＰ２７００→１１５０

「そしてメイン２に移行。魔法カード簡易融合（インスタントフュージョン）を発動。１０００のライフポイントを払うことでエクストラデッキから融合モンスター、魔道騎士ギルティアを特殊召喚。そしてＡ・ボム及びシャインエンジェルをリリースしてザ・ワールド正位置の効果を発動、相手ターンをスキップする！ザ・ワールド……時よ止まれ！」

斎王　ＬＰ１９００→９００

斎王のライフが減り、その命を糧に生まれた光を操る魔法戦士と光を倒すためだけに開発された小型兵器の２体がフィールドからかき消える。瞬間、ザ・ワールド以外のあらゆるものが動きを止めた。世界から色が失われ、モノクロなフィールドの中でただ１人、ザ・ワールドのみが動くことが可能となる。

そして、再び世界に色が戻った。

「そして時は動き出す……私のターン、ドロー。天輪の葬送士を召喚し、その召喚時効

果を使用。墓地のレベル1光属性モンスター、フールを蘇生させます」
天輪の葬送士　攻０
アルカナフォース０―ＴＨＥ　ＦＯＯＬ　攻０
２体のモンスターの攻撃力は、ともに０。幸いにもチェンジ・デステニーの効果を受けたモンスターは場に存在する限り戦闘に参加できなくなるため、このターンのダイレクトアタックは防げたといってよい。ただ、それもいつまで続くかはわからないが。
「この2体のモンスターをコストに、再びザ・ワールドの効果を使いましょう。ザ・ワールド、時よ止まれ……そして時は動き出す。私のターン、ドロー」
「ちっ、まさか今のターンでもザ・ワールドの効果が使えたとはな」
悔しそうに歯噛みする三沢だが、彼にザ・ワールドの効果を防ぐ手立てはない。残り2枚の伏せカードのみで、デッキからカードをドローするチャンスすら与えられずにこのターン、あるいは下手すると次のターンを凌がねばならないことになる。
「ふふふ、精々足掻いてみなさい。私の次なるカードはアルカナフォースＩ―ＴＨＥ（ザ・）ＭＡＧＩＣＩＡＮ（マジシャン）。さあ、回転を止めなさい」
「こんなにも正位置ばかり出るなど、確率的に低すぎる！今度こそ、今度こそ逆位置を引いてみせる！ストップだ！」
アルカナフォースＩ―ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ　攻１１００

このデュエルで三沢が止めたアルカナの回転は、計７回。そのうち全てで正位置が出る確率は、たったの１２８分の１である。もしここでまた正位置を出すならば、その確率はさらに半分の２５６分の１、とても現実的な数字ではない。

だが、回転をやめたカードはまたしても表を向く。それを見た時の三沢の表情には教学とともに、本人もそれと気づかない程度の納得が含まれていた。理性は確率論からそれを否定していたが、心のどこかではこうなることを予感していたのだ。

「正位置を得たマジシャンで攻撃！アルカナ・マジック！」

ゆらゆらと不気味なステップを踏む道化師の一撃。それに対し、反射的に三沢は残り２枚となった伏せカードの１つを発動させようとして、ギリギリのところで思いとどまる。なぜならそれは、正位置の効果を得たマジシャンの特殊能力である。

通常だろうと速攻だろうと装備だろうと儀式だろうと、とにかく分類が魔法カードである者が発動されたターンに自らの攻撃力を元の攻撃力、つまり１１００の倍にするというもの。効果の仕様上、収縮などで半減させることもできないすこぶる厄介なこの効果は、三沢が発動させかけた伏せカードは速攻魔法、禁じられた聖槍に対しても当然働く。ちなみにこの超有名カードは、モンスター１体の攻撃力を８００ダウンさせる代わりに、このターンあらゆる魔法及び罠カードに対する完全無効化能力を得させるものである。

アルカナフォースＩ―ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ　攻１１００↓三沢（直接攻撃）
三沢　ＬＰ１１５０↓５０
「ぐふうっ!!」
一撃でライフを５０まで持っていかれた三沢。すでにその体はボロボロだったが、それでも彼はまだ諦めていなかった。ひとえに、自らの友人たちを助けるために。絶対にここで引くわけにはいかないのだと。
「さて、ここまでやればもういいでしょう。このターンでさらにザ・ワールドの効果を使用してザ・ワールド自身とマジシャンを墓地に送ればもう１度あなたのターンはスキップされますが、私も今日は少し運命を操りすぎて疲れてしまいました。おそらく、いまカードをドローしたとしてもあなたのライフを奪うモンスターを引くことはできないでしょう。これで私はターンエンドです」
３回連続で訪れた斎王のターンをなんとかしのぎ切ったものの、その代償は大きい。３枚あった伏せカードは１枚がマジシャンの効果のため発動する意味がほぼない状態にあるため残るは１枚のみとなり、ライフも既に５０しか残っていない。おまけに手札も０でモンスターもない。このターンでモンスター、それもマジシャンを倒すかせめてその攻撃を防げるようなものを引かない限り、今までの苦労は全て水の泡である。
「お、俺に……俺にターンを渡したことを後悔するんだな、斎王……まずはトラッ

プカード、リミット・リバースを使用。これにより、俺の、墓地から、攻撃力１０００以下のモンスターを、表側攻撃表示で……特殊、召喚する」

カタパルト・タートル　攻１０００

４本の太い足で大地を踏みしめ、背中から伸びたルドラの重力砲とは比べ物にならないほど大きなカタパルトの重みを支える機械亀。

「ばかな！そんなモンスターはあなたの墓地に……いや、あの時か！」

斎王の脳裏によみがえる、デュエル序盤での１シーン。あの時確かに三沢は、こう言っていた。

『そして魔法カード、アームズ・ホールを発動。このターンの通常召喚権を失う代わりにデッキトップを墓地に送り、その後デッキか墓地の装備魔法を１枚手札に加える』

「あそこでデッキトップのそのカードを墓地に落としていたのですか。ですがそのモンスターも、射出する対象が自身しかいないのならば５００ダメージ程度。１ターンに１度しか効果が使えない以上、そのドローカードが攻撃力１８００以上のモンスターでなければなりませんね。もっとも、そのカードがそうではないことは既に分かっていますが」

「お得意の、運命……か……確かにこのカードは、ただの、魔法カードだが……魔法カード、モンスター・スロット……発動！」

　巨大な顔を模したスロットの口が開き、３つのリールが回転を始める。そのうち左端がカタパルト・タートル、真ん中がルドラのイラストが移った面で止まった。
「モンスター、スロット……このカードは発動時に、自分の場のモンスターを選択し、それと同じ……レベルのモンスターを1体、俺の、墓地から除外する……そしてその後、カードを1枚……ドローしてそのレベルが……2体の、モンスターと、同じならば……そのモンスターを、特殊……召喚する……」
　これまで受けたダメージのせいで少しずつ意識が途切れてきて、もはや立っているのもやっとといった有様の三沢の横でぐるぐるとまわり続ける、３つ目のリール。それを不敵な目で見る斎王は、むしろ三沢に対する憐みが込み上げてきた。この若者はこれだけ運命を見せられていて、まだモンスター・スロットなどというはかない希望にすがろうとしているのか、どれだけ願おうと自分の勝利はゆるぎなく、都合よくレベル５のモンスターをドローできるはずがないのに、と。
「まあいいでしょう、どうせならたっぷりと絶望しなさい。そして運命に従うのです」
「ドロー……ッ！」
　ふらつく腕。ぼやける視界。そんな状態の中で引いたカードを確かめようとしたところで、彼の足に限界が訪れる。受け身すら取ることもできなかった彼の体がどさり、と絨毯の上に崩れ落ちる。それでも最後の力でそのカードを改めて確認しようと腕を

わずかに動かし――――――

「三沢！」

「あき……ら……？」

うまく焦点の合わない目で彼が声の方へ顔を向けると、そこにはちょうど入り口のドアを蹴破って入ってきた人影が１つ。顔を見ることはできなかったが、その聞き覚えのある声は清明、遊野清明のものだ。その状態で、人影は声を張り上げる。

「もういいよ、三沢。僕のせいでそんなボロボロになって……でも、大丈夫。あとは、僕が全部始末をつけるから。今までありがとう、あとはゆっくり寝ててよ」

「俺……は……」

ポン、と背中をたたき、その人影は三沢を気遣うように声をかけていく。その言葉を聞き、三沢の中で張りつめていた糸が切れた。最後の力を振り絞るのをやめ、心地よい眠りの中に引き込まれていく。

「そう、か……よか、った……」

最後にそれだけ言い残し、完全に意識を失う三沢。斎王の見たビジョン通り、最後に倒れているのは三沢であった。

だが、あのビジョンにはその横に座るあの人物はいなかったはずだ。声を掛けようとした斎王だが、その前にその人影が斎王の方を不敵な顔で向き直った。

「ほらよ、斎王様。間に合ってよかったぜ、俺の助け」
「あなたがなぜここに来ているのです?」
その質問に肩をすくめる人影の正体は、ユーノ。ある意味では、去年から続く一連の流れの全ての始まりともいえる幽霊である。そんな彼の介入に一瞬自分の洗脳が解けたことも疑ったが、すっかり光の結社に洗脳されきった彼が自発的にそうなることはあり得ない。
「別に。ちょっとした情報が手に入ったんで、気になってきてみただけですよ。そしたら案の定、斎王様が負けかかってるときたもんだ」
「何を言っているのです。私の勝利は既に運命で……」
そう言った斎王の言葉が、床に落ちた三沢の最後の手札を見て止まる。最後の最後に三沢がモンスター・スロットの効果でドローしたカードには、こう書かれていた。
Ａ・Ｏ・Ｊ（アーリー・オブ・ジャスティス）　リーサル・ウェポン
効果モンスター
星５／闇属性／機械族／攻２２００／守　８００
このカードが戦闘によって光属性モンスターを破壊し墓地へ送った時、
デッキからカードを１枚ドローする。
さらに、この効果でドローしたカードがレベル４以下の闇属性モンスターだった場

合、

そのカードを相手に見せて特殊召喚できる。

「馬鹿な!?攻撃力２２００のレベル５モンスターだと!?そんなことあるはずが……」

「そんなことあるはずがったって、引いてるんだからどうしようもないさね。清明の声にはまんまと引っかかってくれたけどな」

斎王はしばし考える。まさか三沢は、自分の見た運命を打ち破ったとでもいうのだろうか。馬鹿な話だ、最終的に自分が立っていて三沢が倒れ伏している状態でデュエルが終わっているのは確かだったではないかと自分に言い聞かせるが、それだとビジョンにはいなかった第三の存在、ユーノのことが説明できない。もしユーノがタイミングよく割り込んでくれなければ、あるいは自分は負けていたのかもしれない。

だがそれも所詮はもしもの話であり、考えても詮無いことである。

しばし黙っている斎王をよそに、なにやら自分の懐から１枚のカードを取りだすユーノ。それを空中に向かって無造作に投げつけると、彼の影から腕のようなものが伸びてそのカードを掴みとる。すると、どこからともかく感情を押し殺したかのような声が響いた。

『……すまない、三沢大地。高潔なる戦士よ。恨むならただ一人、私のみを恨むがいい……』

「おいおいチャクチャル、それじゃあまるでこっちが悪者みたいじゃないかよ。違うだろ？俺たち光の結社に逆らう奴こそが悪で、斎王様がそいつを粛清なさったんだよ」

『黙るがいい。もっとも、今の貴様には何を言っても無駄だろうがな。では、約束の品は確かに貰い受けた。２度と協力はしない』

その気配は最後にそう言い捨てて、部屋の中から去っていった。

「今のがこの島に存在する闇のカードの１枚ですね。エドに調査させた頃が懐かしいものです」

「ええ。地縛神……厄介な奴ではありますが、我々正義は必ず勝ちますよ。もっとも、今回はちょっとした取引で協力してもらいましたがね。さっきの清明の声、あれもあいつが喋ってたんですよ。なかなか上手いもんでしょう」

取引、という単語が少し気にかかったものの、何か考えているならばあえて聞くこともあるまいと思い口をつぐむ斎王。それだけ、ユーノの能力については信頼を置いているのだ。

それをよそに、今はただ眠り続ける三沢。その眠りが覚めた時には今度こそ、彼の精神は光の結社のものとなっているだろう。そんな不吉な近い未来を暗示するかのように、先ほどまで晴れていた夜空にはいつの間にか雲がかかっていた。

ターン４９　鉄砲水と負の遺産

「うー、眠れな……い……？」

ベッドに倒れこんでからしばらくして。体はだいぶ疲れてるのに、どうも眠ることができない。なんとはなしに目を開けてみて、次の瞬間跳ね起きた。

目の前にあったのは見慣れた天井ではなく、どこかもわからない真っ黒な空間。目に見える範囲全てがひとかけらの明かりもなく、どこまで行ってもひたすら何もない。その中にただ一つ、僕が寝ているベッドがぽつんと置かれている。

「よう。お目覚めかい、旦那」

「!?」

上半身だけ起き上って辺りを見回していると、目の前にぱっと人の姿が現れた。間違いなくさっきまで誰もいなかったのに、まるでワープでもしてきたかのように。その人物が男なことは体格や声の調子から分かったけど、なぜかその顔が見えない。首から上の部分だけ影がかかったようになっていて、その輪郭しか見ることができないのだ。ただ、かすかに見えるその口がニヤニヤと笑っている。

「まあ起きなよ、旦那。俺が喋ってるのにいつまでも寝てるなんて、随分と礼儀がなっ

ちゃいないじゃないか」
　そう言い、ぱちんと指を鳴らす。すると、突然体を支える物がなくなった感覚がした。もっとはっきり言うと、今の今まで寝ていたベッドがふっと掻き消えた。すると当然、支えを失った僕の体は地面に変な体制のまま激突する。
「いてっ」
「おう、そりゃすまなかったね旦那。さてと、少し積もる話でもしようじゃないか」
「話？」
　いきなりわけのわからないところに連れてこられて、わけのわからない奴がわけのわからないことを言いだした。いろいろとわけがわからないので、それとなく探りを入れてみる。
「えっと……どちら様？」
「おう、こりゃ失礼。でもまあさっきの旦那もなかなか失礼だったし、ここはひとつあいこってことでお互いに水に流しておくれよ。それで俺のことだけど、残念ながら名乗ることはできないんだ。なにももったいぶってるわけじゃない、遠い昔、かれこれ５００年近く前に名前なんてもんは捨てちまったのさ」
　５０００年前？名前は捨てた？何を言っているのかちょっとよくわからないけどとりあえずわかることがある。この男は危険だ。穏やかな口調と身振りではあるけれど、

一皮むけばその外面の中にはどんな本性があるか分かったものではない。もっともこれは特に明確な理由があるわけじゃない、ただの勘だ。もう少し、もう少しだけ様子を見てみよう。

「いやまったく、旦那には感謝してるんだよ?ああ、訳が分からないって顔だね。じゃあもう少し具体的に話そうか。ここまでに何があったかはだいたい把握したけど、少し前にあのいつまで経っても役立たずな地縛神が受け切れなかった光の波動がほんの少し、ほんの少しだけ旦那の中に入り込んだろう?あの衝撃が俺を、永い永い眠りから解き放ってくれたのさ。礼代わりにと思って少しばかり殺意を高めてやったけど、気に入ってくれたかい?」

今の話はどう考えてもノース校対抗試合で僕がワンキルされた時のことだろう。でも、そこで起きた?今の話とはどんな因果関係が?それにあの口ぶり、おそらくチャクチャルさんのことも知っている。この男、ホントに何者なんだろうか一体。正直、すごく関わり合いにはなりたくないけども。

でも、ここ最近悩みの種だった異様な敵意の原因はわかった。

「あれお前の仕業か!正直ね、すんごい迷惑なんだけどアレ。今すぐ元に戻してよ」

「へ?おいおい、そりゃないだろ旦那。ああそうか、これがいわゆるアメリカンジョークってやつね。いや失礼、俺としたことがうまくネタに反応できなかった」

「……」

どうしよう、まるで会話がつながってる気がしない。脳ミソちゃんとついてんだろうかコイツ。

「ま、なんだっていいさ。今日呼び出したのはな、旦那。お前の生温いやり方にいい加減嫌気がさしてきたんだよ。だってそうだろ？はっきり言ってお前の心の闇は明らかにお前の温い人生からは不釣り合いなぐらいにデカい。だから結構期待してたのに、なんだかずいぶんしょうもないことばっかりやりやがって。お前みたいなのを宝の持ち腐れってんだよ、旦那」

「最終的に何が言いたいのかがさっぱり分かんないね。せっかくの長話悪いけど、僕にとっちゃあこの世に存在するあらゆる難しい話は専門外なのさ」

「そうかそうか、まだとぼけるか。別にそんならそれでいいさ。構えな、そこまで言うならお前にもう用はない、地縛神の力ごとまとめて俺が有効利用してやるよ。本来ならこんなゲームでわざわざ勝負する必要なんてないんだけどな。知ってるか？地縛神の、つまりダークシグナーの力はその時代において定められた決闘の形式に合わせない限りうまく引きはがせないんだよ」

そう言って右腕を構えると、ついさっきまで何もなかったはずの腕にはいつの間にかデュエルディスクが装着されていた。このパターンはもしやと思って僕の腕を見ると、

案の定こっちにもつけた覚えのないデュエルディスクが1つ。さすが夢の中、なんでもありだ。たとえそれが、半分も会話がつながらない言葉のデッドボールする気満々な相手でも。

「お前の温いデッキなんぞ、俺が作ったデッキで焼き切ってやるよ。いつまでも仲良しごっこじゃ勝てないってのはもう学んだんじゃなかったのかね、旦那」

「はいはい、まさか夢の中でまでデュエルとはね。でもまあ、どこでやろうと変わらない、か……それじゃあ、デュエルと洒落込もうか！」

「「デュエル！」」

「先行は僕がもらう！オイスターマイスターを召喚し、さらに水属性モンスターのマイスターをリリース。シャークラーケン、オイスタートークンをダブルで特殊召喚！」

さっきから、なんか妙に愛想がいいというか友好的な態度ばかり取ってくる男。だけど、こうして目の前にいる僕にはわかる。これは、とにかく危険だ。下手をすると三幻魔以上に。だからといってこっちだって一応はダークシグナー、態度を改める気は特にないけど。それはそれとして、このデュエルも十中八九闇のゲームと見て間違いないだろう。なら、ますます負けるわけにはいかない。命どころか魂まで取られる、あるいはもっとまずいことが起きる可能性もある。

シャークラーケン　攻２４００

オイスタートークン　守０

「……あれ？」

いつも通りに飛び出してくる僕のモンスターたち。その、何もおかしいところがないはずの風景にどこか違和感を感じた。だけど、それがなんだろうか、と思いを巡らす暇はない。

「俺のターン！ククク、永続魔法発動、波動キャノン！」

男の場に出現したのは、いかにも危険そうな大きな砲台。発動からのターン数につき１０００ものライフダメージを与える恐るべきカードだ。今はまだそこにエネルギーは溜まっていないけど、早めに終わらせないとまずいことになるのは間違いない。

……と言うとでも思ったか。実は、僕の手札にはすでに速攻魔法、サイクロンが存在しているのだ。このターンは放っておくとして、次の僕のターンになったらさっさと破壊してやろうっと。

「そして悪魔族モンスター、カードガードを召喚。このカードは召喚時に自身にガードカウンターを１つ乗せ、そのカウンターを１ターンに１回別のカードに移し替えることができる。俺は早速この移し替え効果を使い、波動キャノンにガードカウンターを装着！甘いんだよ旦那ぁ、そんな程度の浅い考え、とっくの昔にお見通しだ！」

カードガード　守５００

派手な紅白の、どこかエイのようなデザインの悪魔が波動キャノンの上にぺたりと両手両足を使ってへばりつく。わざわざ守備力５００程度のモンスターを出してくるなんて、他にいいモンスターがいなかったのか、それとも今のガードカウンターとやらがそんなに大切なんだろうか。

「カードを２枚伏せてぇ、フィールド魔法発動、ブラック・ガーデン～！これでぇぇ、ターンエンドオオ」

おどけたしぐさの一つ一つが何だか妙に癇に障る。だけど喧嘩は先に熱くなりすぎたほうの負けだ。

清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：シャークラーケン（攻）
　　オイスタートークン（守）
魔法・罠：なし
???　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：カードガード（守）
魔法・罠：２（伏せ）
場：ブラック・ガーデン

「僕のターン……ん？」

カードを引く。ここでようやく、さっきの違和感の正体に気が付いた。精霊たちの声が、さっきから全く聞こえないのだ。ここ数日は意図的にその気配や声から目をそらしてたけど、今はどれだけ意識を集中させても何一つ聞こえてこないし感じられない。

何を考えていたのか察したらしく、かすかに見える口元にいやらしい笑みを浮かべる男。

「おいおい旦那、ここは夢の中、インザドリームなんだぜ？精霊がいちいち入ってこれるわけないだろっての」

「……まあ、筋は通ってるか。改めて僕のターン、水属性のオイスタートークンをリリースして、ジョーズマンをアドバンス召喚！この子の攻撃力は、自分フィールドの水属性１体につき３００ポイントアップするよ」

「ブラック・ガーデンの効果！召喚及び特殊召喚されたモンスターの攻撃力の半分をフィールドが吸い取り、その命を養分に花が咲く。一発では殺してやらねえ、じわじわ痛めつけてやる。それが昔からの俺の流儀なんでな」

ジョーズマンの体に、牙に、背びれに絡みついてその棘で容赦なく締め付ける無数の茨。生命エネルギーを吸い取ったそれの力により、血のように赤いバラが一輪ぽっと咲く。

ジョーズマン　攻２６００→２９００→１４５０

ローズ・トークン　攻８００
「ぐっ……だけど、それ以外には何の制約もかからないはず！シャークラーケンでトークンに攻撃！」
シャークラーケン　攻２４００→ローズ・トークン　攻８００（破壊）
???　ＬＰ４０００→２４００
「そのままジョーズマンで、カードガードに攻撃！」
「まんまとかかったねえ、旦那！俺の発動するトラップカード、アルケミー・サイクルの効果により、カードガードの攻撃力は０になる！」
カードガード　攻１６００→０
ジョーズマン　攻１４５０→カードガード　守５００（破壊）
アルケミー・サイクルは発動ターンのみ自分フィールドのモンスターの攻撃力を０にする代わり、自分のモンスターが戦闘破壊されるたびにカードをドローする効果を持つ。でも、わざわざ１枚のドローのためにそこまでするだろうか。
カードガード　守５００　攻１６００→８００→１１００
カードガード　守５００　攻１６００→８００→１１００
ローズ・トークン　攻８００
「んなっ……！」

　そこにいたのは、確かに今ジョーズマンの牙によって引き裂かれたはずのカードガード。しかも、それが2体に増えている。
「はっはぁ！悪いな旦那、俺の方が1枚上手だったな！カードガードが戦闘破壊された瞬間に俺はトラップカード、ブロークン・ブロッカーを発動していたんだよ！このカードは守備力の方が攻撃力よりデカい数値のモンスターが守備表示で戦闘破壊された時、同名モンスターを2体まで守備表示で特殊召喚できるのさ。そしてブラック・ガーデンによる攻撃力半減、お前の場へのトークン生成処置が終わってからガードカウンターを乗せる効果が適用され、さらにカードガードのもう一つの効果によって自身に乗ったガードカウンター1つにつき３００の攻撃力がアップだ」
「長い長い長い！」
　長いうえにとんでもない早口だったから半分ぐらいしか聞いてなかったけど、とりあえず攻撃しない方がよかったのは理解できた。どうしよう、サイクロンをここで使うべきだろうか。さっきまでは使う気だったけど、この男思ったよりもカードの使い方がうまい。となると正直、あの波動キャノンは他のカードの囮のような気がする。こっちがサイクロンを握ってることは向こうも知らないはずだし、もう1ターンだけ様子を見よう。それでもまだ仕掛けてこないなら、さすがに波動キャノンが見過ごせない。その場合はやむを得ないということで、下手にダメージ食らう前にさっさと発動することにし

よう。
「ローズ・トークンを守備表示にして、これでターンエンド」
「俺のターン、ドロー！……これで波動キャノンはフィールドに1ターン残ったことになるな、旦那」
「くっ」
まだだ。あんな挑発には乗らない乗らない。もっとも、サイクロンは手札にあるから今は何かしたくてもできないんだけど。
「それじゃ、カードガード2体の効果発動。自身に乗ってるガードカウンターを取り除いて、波動キャノンに計2つのガードカウンターを上乗せする」
2体のカードガードがまたもや波動キャノンにシールか何かの用にぺたりと引っ付く。ただし、先ほどと違い波動キャノンはその奥の方がぼんやりと薄く光っており、少しずつパワーがたまってきているのがよくわかる。
カードガード　攻１１００→８００
カードガード　攻１１００→８００
「そしてゴゴゴゴーレムを守備表示で召喚」
ゴゴゴゴーレム　守１５００　攻１８００→９００
ローズ・トークン　攻８００

「準備は整った、ブラック・ガーデン第二の効果を発動！このカードとフィールド上の植物族、つまり旦那のフィールドにいるローズ・トークン２体を破壊することで、墓地からその攻撃力合計と同じ攻撃力のモンスターを１体特殊召喚する！来いよ、カードガード！」

カードガード　攻１６００→１９００

「よくもまあそんなにクルクルと回るもんだ……！」

というか、これは割とシャレにならない。今はまだ攻撃力２４００のシャークラーケンが抑止力になってくれているけど、それがいなくなれば男のフィールドの攻撃力合計はすでに４０００をオーバーしている。そうでなくともあの波動キャノンもあるし。

こんな時にユーノがいたらいつも通りの調子で上等上等って笑いながら突破してくれるんだろうけど、今はそのユーノもいない。……もうよそう、このことについて考えるのは。

「来い！」

「言われなくとも、ってな。行くぜ旦那、ジョーズマンに攻撃力１９００のカードガードで攻撃！」

音もなく宙を飛んで近づくカードガードの角による一撃。普段ならば楽々対処できたそんな攻撃も、茨に全身を蝕まれている今のジョーズマンにとっては致命傷だ。

カードガード　攻１９００→ジョーズマン　攻１４５０（破壊）
清明　ＬＰ４０００→３６５０
「ぐっ!?や、やっぱり……」
そして案の定襲い掛かる、闇のゲームの衝撃。もう最近はあれなんだろうか、このダメージ現実化がデフォなんだろうか。
「はっはぁ!ご想像通りの闇のゲームだぜ、気分はどうだ?カードを2枚セットして、これでターン終了だ」
清明　ＬＰ３６５０　手札：３
モンスター：シャークラーケン（攻）
魔法・罠：なし
??? ＬＰ２４００　手札：０
モンスター：カードガード（守）
カードガード（守）
カードガード（攻）
ゴゴゴゴーレム（守）
魔法・罠：２（伏せ）
「まだまだ!僕のターン、ドロー!」

守備力の低いカードガードを2体まとめて撃破できるツーヘッド・シャークあたりが欲しかったけど、残念ながらそう都合よくカードは引けない。伏せカードさえなければ迷わず初志貫徹のサイクロン一直線コースだったけど、あの意味ありげに伏せてあるカードが気になる。ただの波動キャノンを守るためのブラフなのか、それともそう思わせておいての切り札なのか、あるいは何の関係もない汎用カードなのか。んー……よし、決めた。

「サイクロンを発動、対象は波動キャノンで」

どこからともなく風が吹き、波動キャノンを空の果てまで吹き飛ばしにかかる。まさかこれだけ展開しておいて激流葬はないだろうし、ここはダメージ元をさっさとなくして安心してデュエルしていたい。というか、ソリッドビジョンだと波動キャノンの威圧感がかなり大きくて集中できないです。パワーチャージがとても怖い。

「はっはぁ！旦那、そんな程度は織り込み済みなんだよぉ？ガードカウンターの能力発動！カードに乗せられたガードカウンターは、そのカードが破壊されるときの身代わりになることができる！」

ガードカウンターなんて言うからなんとなく嫌な予感はしてたけど、本当に名前そのまんまの能力だったか……仕方ない、このままやるしかない。

「ダブルフィン・シャークを守備表示で召喚、そして効果！このカードの召喚成功時、墓

地からレベル３または４の水属性魚族を効果無効の守備表示にして特殊召喚できる！
オイスターマイスター、蘇生！」
ダブルフィン・シャーク　攻１０００
オイスターマイスター　守２００
「これで、攻撃反応でなければ……シャークラーケン、攻撃表示のカードガードに攻撃！」
「自前のガードカウンターは身代わり効果を使えないからねえ。そのまま戦闘破壊だ」
背中に水をジェット噴射する装置をくくりつけてスピードが倍になったシャークラーケンの突撃が、カードガードの平べったい体を見事に突き破る。体のど真ん中に風穴をあけられた紅白の体が、ダメージに耐えきれず爆発した。
シャークラーケン　攻２４００→カードガード　攻１９００（破壊）
???　ＬＰ２４００→１９００
「やった！」
ここでこの攻撃が通ったのは大きい。もう相手ライフも半分まで削ったし、この調子で落ち着いて対処すればどうにかなる……と思った瞬間、またもや男の口がにやりと邪悪な笑いの形に歪む。
「さすがだね、旦那ぁ……こんなにも見事に罠にかかってくれるなんてよう！いくら

ジョーズマンを破壊するためとはいえ、なんで返しのターンに破壊されることが確定してるモンスターを攻撃表示で出したのか考えもしなかったのかい？トラップ発動、自由開放！」

男の発動したトラップ……そこから２つのビームが放たれ、それを浴びたダブルフィン・シャークとシャークラーケンの姿が忽然と消えた。

「自由開放は俺のモンスターが戦闘で破壊された瞬間にのみ発動することができて、フィールド上からモンスター２体を選択してそいつらを持主のデッキに戻す！デッキバウンスを防げるようなカードは旦那のデッキには入ってないだろ？」

そもそもそんなピンポイントなもの防ぐカードなんてあったっけ。などとのんびり突っ込んでる暇はない！

「おっと、忘れるところだった。トラップ発動、時の機械―タイム・マシーン！モンスターが戦闘破壊された時、そのモンスターをコントローラーの場に復活させる……もう一度働け、カードガード！」

カードガード　攻１６００↓１９００

「だったらカードを２枚セット、これでターンエンドっ！」

「はっはぁ！随分と寂しいフィールドだな、オイ？スタンバイフェイズが来たことで、波動キャノンにさらにパワーがたまる！」

これで２ターン目、もし今発動するならばダメージは２０００。単体火力としてはだいぶまずい数値になってきた。
「カードガード２体とゴゴゴゴーレムを攻撃表示、そしてバトルだ！攻撃力８００のカードガードで、旦那のオイスターマイスターを攻撃！」
「１度目は防ぐ！トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を無効にして、効果ダメージ８００を食らえっ！」
???　ＬＰ１７００→９００
「はっはぁ！なけなしの抵抗かい、旦那？だったら次だ、もう１度カードガードによる攻撃！」
「なんの！トラップ発動、ドレインシールド！その攻撃を無効にして、攻撃力ぶんのライフを回復！」
清明　ＬＰ３６５０→４４５０
「だが、ここからは防げないだろ？ゴゴゴゴーレムによる攻撃、ゴゴゴブロー！」
ずしりと重量感のある岩の拳が、いまだ残っていた茨にまとわりつかれながらもオイスターマイスターを撃ちぬく。オイスターマイスターは攻撃力こそレベル３の中ではそこそこ高いが、守備力は低いのだ。
ゴゴゴゴーレム　攻９００→オイスターマイスター　守２００（破壊）

「そのままカードガードによるダイレクトアタック！こいつはどうやったって防げないのさ！」

カードガード　攻１９００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４４５０→２５５０

「し、しまった……っ！」

特大のダメージに吹き飛ばされて背中をしたたかに地面に打ち付けながら、今の致命的なミスに気づいて舌打ちする。ポセイドン・ウェーブを最初の攻撃に使ったのはいい。そうしなければ効果ダメージが通らなかった。だが、その次のドレインシールドは悪手でしかない。あそこは１発耐えておき、攻撃力が最も高い今の攻撃まで温存しておくべきだった。

「なんで……なんでこんな……！」

「なんだ、無意識だったのかい？もっともおおかた、オイスターマイスターがやられるところが見たくなかったとかそんな理由だろうよ！それに、どんな理由にせよ後悔は今更遅いねえ、旦那。ねえ、今どんな気持ちだい？フィールドも手札もカードは０、ライフは既に残り半分。もし次のドローでブラック・ホールなんかを引いたとしても波動キャノンが処理できない限り勝つことは不可能。神禽王アレクトール……今は入ってないんだよねえ？さてと、俺はカードをセットさせてもらうさ」

「うっ……」
なんでそんなことまで知ってんだ、昔僕のデッキにアレクトールが入ってたことなんて知ってる人はほとんどいないってのに。いや、これは夢だ。忘れがちだけどあくまで夢の中、細かいところにいちいち突っ込んでたらきりがない。
「さあ、早く最後のドローしようや旦那。それで終わればいいよ」
「ふざけるなっ！」
反射的に言い返す。だけど、確かに今の僕のデッキであの布陣をどうにかできるカードは存在しない。ここでどんなカードをドローしようとも、もう何も……。
『その勝負、待った！』
「えっ!?」
「この声……ようやくお出ましかい、この駄神！」
大地を震わすほどの大音声が鳴り響き、足元から暗い紫色の焔が一定の形を作るように吹き出す。その姿はさながら、縦横無尽に荒海を駆けるシャチのような。僕は、この形を知っている。この炎の色を知っている。そしてなにより、この声を知っている。
『すまないな、遅くなって』
「チャクチャルさん！」
地面からゆっくりと、僕に力をくれた地縛神が浮上する。その巨体は小学校のグラウ

ンドをすっぽり覆い尽くすほど大きく、そして威厳に満ちている。一度聞いてみたことがあるのだが、チャクチャルさんは本来はもっと大きいらしい。あまり大きすぎるのも不便なので、基本的に若干縮めているのだそうだ。

　そのチャクチャルさんが、キッと男を睨みつける。もっともチャクチャルさんの顔に目のようなものは見えないのでそちらの方へ向き直っただけなのだが、それでもすさまじいまでの威圧感である。

『……まさか貴様の顔をまた見ることになろうとはな、　　』

「えっ？」

　直前の文脈から考えるに、最後に言ったのは男の名前なんだろう。でも、なぜかそれが聞き取れなかった。何か言ったことだけは理解できたけど、何をどうやっていったのか、何文字の名前なのか、それすらもわからない。それに気づいたチャクチャルさんが、軽く舌打ちをする。

『ふん。名前を捨ててまで力を欲したか？昔から何一つ成長していないな、強欲にして傲慢な人間だ』

「はっはあ！なんとでも言いなよ、神さんよお。俺はお前が力をくれる、復讐させてくれるっていうからホイホイ誘いに乗ってやったんだ。なのにどうだ？シグナーとかいうふざけた奴に受けた屈辱、俺は二度と忘れねえ。俺は強くなったんじゃねえのかよ！」

「チャクチャルさん、知り合いなの？」
　男の剣幕に一瞬黙ったチャクチャルさん。今の会話からだいたい予想はついたけど、本人の口から確かめたかった。
『……あの男は、５０００年前私がダークシグナーとして契約をした、いわゆる先代だ』
「ふむ。やっぱりね」
『む、驚かないのか？いや、話を聞いていればすぐにわかることか』
「うんうん。僕が聞きたいのはその後だよ。なんでそんなのが今、現代にいるわけ？チャクチャルさんまで出てくるってことは、これはただの夢じゃないんでしょ？」
『まあ、な。詳しいことは後々話すから、まずは黙って私の言うことをよく聞いてほしい』
　何を言い出すのかはわからないけど、なんだか妙に真剣な様子のチャクチャルさんを見て何か言うのはやめておいた。この神様がここまで真剣なんだ、こちらも真剣に聞くのが筋というものだろう。
「おいおい、１人と１尾で仲良く作戦タイムかい？強い奴ならまだしもそんな甘い奴に入れ込むなんて随分と人を見る目が曇ったもんだな、地縛神サンよお」
「……チャクチャルさん、昔はどんなキャラだったの？」

僕にしてみれば、ややシリアスさが増してるものの割といつも通りのお方です。常にどこかすっとぼけてる食えない性格の、でもいつだってとても頼りになる神様。

『　　、いや、その名すら捨てた先代。今の発言は聞き捨てならないな、取り消してもらおうか』

「あー？」

『ここにいる遊野清明は、私を扱うだけの力があると私が判断した……私のマスターだ。マスターへの侮辱は私への侮辱として受け取ろう』

一瞬ぽかんとする。それは男、いや先代も同じだったようだ。だけど、なんだか今の言葉を聞いて視界がぼやけてきた。慌てて、チャクチャルさんに気づかれる前に涙をぬぐう。ああ、そうだ。ユーノたちは光の結社に入った。十代は行方不明。なぜか夢想も最近見かけなくなった。みんなみんな僕の前からいなくなっちゃったけど、それでもまだ僕は一人じゃなかったんだ。なにせ、こんなに心強い味方がすぐそば、具体的にはデッキの中にいたんだから。

『まあ、なんだ。別に私だけがそう感じているわけではない。霧の王をはじめとして、マスターのデッキの全員は1度たりとも愛想を尽かしたことなどない。マスターが耳をふさいで、私たちの声を聞かないようにしていただけだ』

その補足がまた、僕に響く。みんな、ありがとう。胸の奥でそう呟くと、なんだか力

が湧いてくる気がした。
　だが、それが先代にとっては気に食わないらしい。
「けっ、しばらく見ないうちに、随分つまんねえこと言う奴になったもんだねえ。ご立派な友情は結構だがね、旦那。アンタはもう詰んでるってことをいい加減思いだしなよ。当然、旦那が負けたら生かして返す気なんて俺にはないからね？」
「あう。ちゃ、チャクチャルさ～ん」
『そこでなぜ私を見る、マスター。よく考えてみてほしいが、ここで私をドローしたとしてもそれはどう考えても手札事故だ』
　あ、自分でそれ言っちゃうんだ。いやまあ確かにそうなんだけど。この局面では絶対引きたくないカードではあるけれど。
「じゃ、じゃあ……」
「思い出してくれ、私が初めてマスターの前に現れた日のことを。あの時のように、もう一度』
「もう一度？」
　初めてチャクチャルさんにあった日というと、あのカミューラとデュエルした日のことだろう。あの時は確か、本気で願ったんだ。デュエルの神様お願いします、何か逆転の一手を授けてくださいって。闇のゲームによる痛みで死にかかってて、とても本気

だった。そうしたら本当に神様が来て、あとでそのことに気づいて思わず笑っちゃったっけ。

『すでに……すでに、仕込みはできている。あとはマスターの思いが、奴に届くかどうかに全てがかかっている』

奴、とは一体誰なんだろう。それにしても、今のセリフの初めで一瞬チャクチャルさんがためらったような気がしたのが少し気になる。気のせいかもしれないけど、まるでなにかを悔やんでるような。

でも、それも後で覚えてたら聞くとしよう。目を閉じて神経を集中し、デッキトップに手をかける。そのままカードに触れた指先に思いを乗せていると、頭の中に声が聞こえてきた。いや、声ではない。明確な言葉ではないけど、何か意志の塊のようなもの。その気配が僕に近づいてきて、そのまま僕の様子をうかがっているのがわかる。きっと、僕の思いとやらを確かめているんだろう。

「大丈夫。僕ならきっと、君の力を使うことができる。だから、僕に力を貸してください。僕の大切な人たちを取り返すために、僕に力をください」

以前、稲石さんに言われたことを思い出す。明確な理由もないのに漠然と強くなりたいなんて言ったって、それで強くなることはできないとかなんとか。今なら、あの質問にも答えることができる。僕が強くなりたいのは、自分のためじゃない。リターンマッ

チ、特に喧嘩のは好きだけど復讐なんてドロドロしたのは苦手だし、そもそもこれといって憎い奴なんていない。勝ちにこだわったときに使ったあのデッキでは、三沢をはじめとしてたくさんの人を傷つけてしまった。それもまた、僕には似合わない。

「僕は、強くなりたい。大切な人を、今ここにいる大切な時間を守るために。僕は未来を見たい。皆が帰ってきて、また笑いあえる未来を。そんな感じの未来を手に入れるために、力を貸してください」

素直な気持ちで、心に浮かんだままのことを言う。すると、それを聞いていた意志が、何か決心したかのような感情を見せる。そして、デッキトップがしだいに光りだした。最初はピンク色に近い色だったけど、どんどん赤色になっていく。いや、赤という言葉は微妙にふさわしくない。例えるならば、炎の色……それも、神々しさのある聖なる炎の色だ。

チャクチャルさんの方を見る。コクリと、満足げに頷いた。

「いくよ、ドローッ!!」

引いたカードは、僕の見たことのないカード。なかなか長い効果だったけど、読もうとする前にその効果の内容が頭の中になだれ込んできた。なるほど、この能力なら!

「僕のフィールドにはモンスターカードが存在しない」

「ああ、それがどうした!今更新しいカードを手に入れたところで、どうにかなるわけな

いね！」
「いいや、嬉しいのさ。僕のフィールドにモンスターが存在しないなら、このモンスターの能力が使える」
「何？場にモンスターがいないなら使える能力だって？」
　ここで初めて訝しげな顔、正確には訝しげな表情の口元を見せる先代。その顔に向けてにやりと笑い、手札をばっと見せつけてやる。もっとも、これだけ距離があるとよく見えないだろうけど。
「そうさ。僕のフィールドにモンスターが存在しない時、このカードはリリースなしで通常召喚できる！これが僕の、もう１つの神！天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」
　金属の腕、金属の胴。その巨体は、チャクチャルさんに勝るとも及ばないサイズを誇る。打が何よりも印象的なのはそのサイズではなく、特徴的な顔である。全体的に鎧のような形状をしているメタイオンには首から上のパーツがなく、顔はその胴体にでっかく映し出されているような格好になっている。
　時械神メタイオン　攻０
「攻撃力０、だって？」
「その通り。だけど、このメタイオンさんはただの攻撃力０じゃない！メタイオンで

カードガードに攻撃！」

金属の腕をゆっくりと伸ばし、その指の先から計４本の炎の柱が噴き上がり、先代のフィールドにいた４体のモンスターを残さず清らかな炎に包む。

時械神メタイオン　攻０→カードガード　攻１９００

「させるかよっ！トラップ発動、ミラーフォー……」

「この瞬間にメタイオンの効果発動！このカードは破壊されず、バトルダメージも受け付けないよ！」

「はっはあ！なるほど、確かに壁としてはなかなかじゃないか。だけど忘れてないかい旦那、こっちにはまだ波動キャノンが残ってるんだよ！」

「確かに僕はバカだけど、そこまでどうしようもなくはないつもりだよ。メタイオンのさらなる効果発動、ケテルの大火（たいか）！戦闘後にこのカード以外のあらゆるモンスターをバウンスして、さらにその数１体につき３００ポイントのダメージを与える！戻したモンスターは計４体、そしてお前のライフはもう残り９００！」

「な、何!?」

そして炎がおさまったとき、そこにはもう誰もいなかった。４体のモンスターは、天の炎に焼かれたのだ。

???　ＬＰ９００→０

「勝った……ありがとうチャクチャルさん、それにメタイオン先生」
『先生？』
「うん。メタイオンさん、この効果って切り札っていうより一発逆転の奥の手って感じでしょ？ほら、時代劇とかでもよくいるじゃん。悪代官とかが『先生、お願いします』って言うと『どうれ』とか言って酒飲むのやめてゆらりと立ち上がる凄腕の人。何となくそんなイメージだから、用心棒のメタイオン先生」
『そ、そうか。まあ本人がいいならいいんじゃないか、マスター』
「うん！」
　そんなことを言っていると、さっきまで倒れていた先代がむくりと起き上った。
「おい、おま」
「ヘイヘイ、旦那。まあ今回はちょいとばかし疲れちまったし、ここはいったん退散しようかね。だがな、旦那。俺はまだ、復讐を諦めたわけじゃねえ。俺はそのためだけに力を求めたんだ。それは今でも変わってねえ、そのダークシグナーの力はまた俺に返してもらうぜ。あばよ」
　言いたいだけ言って、出てきたときと同じく忽然と消えた先代。僕がこの力を持って

いるうちは、また会うことがあるんだろうか。できれば会いたく……ない……な……あ……。

「ごめんチャクチャルさん、もう寝るから話はまた明日ね……ふわぁ」

『ああ、お休み。せめて今ぐらいはゆっくり休んでくれ、マスター』

それじゃあ、お言葉に甘えて。おやすみなさい。

ターン５０　鉄砲水と優しき闇

朝になって、目が覚める。朝といっても、まだ日が登るまでには少しかかるぐらいの時間だ。ここ最近は寝坊気味だったけど、昨夜見た夢の中でその原因だった先代を追い払うことに成功したからか寝覚めもスッキリいい気持ち。

「さて、出ておいでサッカー」

時計を見れば午前7時、まだ登校までにはもう少し時間がある。皿洗いまで終わったところで、久しぶりに会う精霊を呼び出した。じゃれついてきた鮫の頭をよしよしと撫でながら、この後のことについて考えを巡らす。サッカーには非常に申し訳ないけれど、今日の僕は遊ぶためだけにこの子を呼び出したのではないのだ。

「チャクチャルさん、ちょっと検証するから付き合ってくんない？まず、考えないといけないのは光の結社とエドとのつながりがあるのかどうか。正直黒だと思うんだけど、まだこれといった証拠もないし一応はっきりさせておきたいところ」

『シャーク・サッカー……ああ、そのために呼び出したのか。悪くない手だと思うぞ』

「ありがと。だとすると、斎王かエドか。サッカー、どっちの方がいい？」

体全体をひねるようにして首をかしげるコバンザメ。要するに、今からこの子をどち

らかの見張りにつけようというのだ。いきなり呼び出しておいてこんなこと頼むのは正直気が進まないけど、もうこれは僕一人でどうにかできるような話じゃなくなってる。だから、この信頼できる精霊たちに力を借りるしかない。ややあって、サッカーがくるりと身をひるがえして窓の外へ出て行った。

「あの方向は……エドの方か。まあ斎王のところには万丈目もいるし、近づかない方がいいか。ありがとう、サッカー」

『ふむ、いくら精霊といえども見つかった時のリスクを考えると単独行動は危険だろうな』

言われてみれば確かに、相方はいたほうがいいだろう。万が一、ということもある。本当なら、そんな危ないことには付きあわせないのが一番なんだけどね。

「でも気づけてよかった。できれば次からはそういうことはもうちょっと早く言ってねチャクチャルさん。じゃあ……キラー・ラブカ！サッカーについて行って、同じくエドの監視をお願い。何かあったらすぐに連絡してね」

黄色の体に刃物のようなひれをいくつもつけた古代魚、ラブカを呼び出して同じく外に。さて、あっちはこれで良し、と。あとはこっちでも何か動かなくちゃ。

「とは言うものの、何すればいいのかね」
『ああ、別に何も考えてなかったのか』
　呆れ声のチャクチャルさん。でもしょうがないんだ、わざわざ校舎まで出てきたのに僕の顔見るだけで光の結社どころかそれ以外の生徒まで全員逃げてっちゃうんだもん。逆に言うと、それだけのことをしでかしてきたんだからまあ仕方ないことなんだろうけど。
　それにしても、一つ気になる。前は光の結社への無理やり力づく勧誘があったから非構成員はこっそり逃げ回るようにして動き回ってたはずだけど、今はある程度警戒が解かれてる。何か路線変更でもあったんだろうか。
「あ、清明ちゃん！ちょっとおいで！」
　売店前まで来たところで、トメさんに呼び止められた。はて、なんだろう。また何かおかずのレシピでも教えてくれるんだろうか。この間教わった少ない油で店売り並みのサクッとしたコロッケを揚げるやりかたには大いに助けられたからまたああいうのだと嬉しいなあ。
　一人でワクワクしながら言われたとおりに売店の中に入る。非デュエリストである売店の人は光の結社に襲われておらず、ずっと前から通常通りに営業を続けている。むしろ光の結社に入った生徒がデッキをそれっぽくしようとする関係上、最近は光属性の

パックがとにかく売れるらしい。
「お久しぶりでーす、トメさん」
「最近顔出さないから心配してたわよ、もう。それでね清明ちゃん、昨日三沢ちゃんからこんなものを渡されてね。俺が明日になってもまだ白い制服を着ているようなら清明にこれを渡してやってくださいって。私はデュエルしないからよくわかんないけど、今日見かけた時も白い制服のままだったから渡さなきゃって思ってね。はい、受け取ってちょうだい」
「これは……」
渡されたのは、茶封筒が1つ。見た感じ、中に手紙のようなものが入っているようだ。
「あ、もちろん中は見てないから安心してちょうだい。じゃあ、またいつでもいらっしゃい」
「はーい」
売店から出て、受け取ったものをしげしげと眺める。特に変わったところのない、ごくごく普通の100円ショップで売ってるような茶封筒だ。
「どう思う、チャクチャルさん？」
『どうもなにも、中身を見てみないうちは何ともな』
まったくもってその通りなので、封筒の口に手をかける。丁寧に糊付けされたそれを

はがそうとしたところで、
「あ、清明。久しぶり、だって」
「夢想！」
　その時タイミングよく、夢想が角を曲がってきた。こちらに気づいた彼女に手を振りつつ、茶封筒をポケットの中にしまいこむ。と、そういえばノース校の天田からもらった謎の包みもまだ開けてないな。もういい加減今日中には開封しよう。
「もう具合はいいの？ってさ。なんだか最近バトルジャンキーになった、なんて話を聞いたから」
「あー……あはは。うん、あれはちょっとした黒歴史だと思って。それで、夢想はこんなところでどうしたの？」
　その質問に別に、と肩をすくめ、すぐ横の方をくいっと指差す彼女。つられてそっちの方を見るが、そこには壁しかない。
「ほら、もうすぐ講演会でしょ？プロの話なら聞いておきたいなーと思ってね、なんだって。もうそろそろ場所取りもしておかないと、いい場所なくなっちゃいそうだし」
「ふむふむ。じゃあ、よかったら僕も一緒に行っていい？」
「もちろん、だって」

「……甘く見てたかな、なんだって」
「うーん、やっちゃったかー」
ぎっしりと詰まっている人、人、人。どうやらまともにいい場所を確保しようとするなら、それこそ朝イチで来るぐらいの覚悟が必要だったらしい。まあ相手は史上最年少プロなんだ、これくらいの注目度はあって当然だったか。諦めて入り口近くで立ち見していると、クロノス先生がスポットライトを浴びながらデュエル場の真ん中に立つのが見えた。
「アー、アー、ただいまマイクのテスト中なのーネ……コホン。それでは全校生徒の皆さん、長らくお待たせしたノーネ。これより史上最年少でプロ入りし、先日は本校の卒業生たるカイザー亮を下す圧倒的な実力を見せたエド・フェニックスさんにお越しいただいてますーノ」
その後もぺらぺらと上機嫌でしゃべり続けるクロノス先生。あの人、基本いい人なんだけどあのミーハーな部分はもうちっとなんとかならないもんだろうか。機嫌がいいオーラが全身から出まくってる。
「話、長いね。だってさ」
じっと待つのにしびれを切らしたのか、こちらに顔を寄せてひそひそとささやいてく

る夢想。近づいた拍子に彼女の長い青髪が揺れて、あたりにふわっといい匂いが漂う。
『いらぬ世話かもしれないが、顔を隠した方がいいぞ、マスター。一目でわかる程度には赤い』
うるさい！と叫び返したくなるのをやっとの思いで我慢しつつ、そっと顔の向きを変える。気休めにもならないだろうけど、何もやらないよりははるかにマシだろう。
「……どうしたの？って」
「え!?あー、いやー、そのね！別に、別に何もないよー、うん。確かに長いね、あはは」
「本当、どうしたの？変な清明」
まだ何か言いたそうな夢想だったが、ちょうどその時クロノス先生の話が終わった。それとほぼ同時に、入場口の向こうからサッカーとラブカの2体がチラリと見えた。向こうも見られてることに気づいて、こちらに軽くヒレを振ってみせてくる。無事でよかった。
そしてエドが現れ、軽く笑って手を振ったりしながらクロノス先生からマイクを受け取る。一拍置いてから、いかにもプロらしい朗々とした声で話し始めた。
「アカデミアの皆さん、こんにちは。本日は私のような者のためにわざわざお集まりいただき、ありがとうございます。さて、本日の予定はこれより講演会……でしたが、その前に一つ余興を挟みたいと思います」

余興。その単語に、場内が軽くざわつく。クロノス先生やナポレオン教頭もあの反応から見ると初耳らしいし、エドが1人で考え付いたんだろうか。それにしても、エドは喋りがうまい。聞く側の心理をつかむ言葉を発するタイミングや声のトーンを完璧にマスターしていて、話術だけでも食っていけるんじゃないかってレベルだ。

「と言っても、何か難しいことをしようというのではありません。今日、この場にお集まりいただいている中の一人と私がデュエルをする。どうです、簡単でしょう？」

デュエル、ねえ。まあそれのプロとして今日はここに来てるんだし、間近でそれを実践するって意味なら別に違和感はない。相手はこのたくさんいる中から適当に決めるのかな、なんてのんびり思いほんの一瞬だけ、まさか当たるわけないだろうと気を抜いてしまった。チャクチャルさんが制止しようとしたみたいだけど、それも一瞬間に合わず。ゆっくりと観客席を見回していたエドと、目があった。

「では、そこの遊野先輩。ひとつ手合せお願いしますよ」

先手を取ってきた、か。イニシアチブを向こうが取る展開はあんまり好きじゃないからここはスルーしてそっと外に出よう……と一瞬思ったけど、周りの様子をうかがってそれはかなり難しいことだと分かった。最初からこうなることが分かっていたかのように手際よく、周りが白制服に固められている。これはもう、光の結社とエドに何らかの関係があると見てほぼ間違いないとみていいだろう。まあ最初から薄々わかって

たんですけどね。じゃあ最初から気を抜くなって話だけど。

「……サッカー！ラブカ！お疲れ様、戻っておいで！夢想、合図したら一気に走り抜けるよ！」

予定変更。こっそり退出できないなら、実力行使で突破あるのみ。だけどおかしい。かなり大声で呼んだのに、いつまでたってもサッカーとラブカが帰ってこない。

「おっと、お前の探し物はこれか？」

「あ、あらら……」

おかしいと思ったら、万丈目がドヤ顔で２匹の尻尾を掴んで持ち上げているのが見えた。そんなアンタ漁師が獲物の自慢するんじゃないんだからもう少し丁寧に扱ってほしいね。申し訳なさそうな顔つきの２匹に気にしないで、と手を振る。しかしこれ、今思ったんだけど精霊が見えない人たちからしたらドヤ顔で何かを握ってる風に片手を上げる万丈目と、そこに向かって苦笑しながら手を振る僕とか言うよくわからん構図になってるのか。

そんなことを思っているうちに、包囲の輪がじりじりと狭まってくる。よし、前言撤回。サッカーたちが捕まったままだし、ここで逃げたら夢想にまで迷惑がかかる。それに、彼女の前でとっとこ逃げ出すなんてカッコ悪いことはできないね。男は見栄張ってなんぼの生き物。

どうせやるならとことん派手にやりたいので、びしっとデュエル場の中央で仁王立ちするエドに向かって指を突きつける。せっかくなので前口上の1つでも叩き付けてやろう。
「それじゃあ、デュエルと洒落こ」
「おーーーいっ!!」
「……え?」
思わず会場全員の声がハモる。だって、僕らはこの声を知っている。大きく開け放った扉の前に立ち、逆光を背に受けるあの人影は。
「……十代!」
僕の親友の一人、遊城十代なのだから。
「久しぶりだな、みんな!帰ってきたら早速なんか面白そうなことやってるじゃないか、そのデュエル俺も混ぜてくれよ!」
「十代、今までどこ行ってたのさ!」
「清明、お前も元に戻ったのか!いやー、それが宇宙に行ってナントカ星人っていう喋るイルカと会ったりして、もうとにかく大変だったんだぜ。おかげで俺のHEROデッキに新しい仲間たちが増えたんだけどな。お前にも後で見せてやるよ。まあ積もる話は後でするとして、随分と白い制服が増えたじゃないか」

「ま、こっちも色々あったんだよ。さてと、エド。それに万丈目。こっちはこれで一人増えたけど、それでもやろうっての？」
　このままうやむやになってくれると、こちらとしても体勢を立て直せるから大変ありがたい。どうやら万丈目はやる気満々のようだが、エドがどう出るだろうか。
「ふっ、いいだろう。今度こそ、僕の本物のＨＥＲＯで……」
「ここは撤退しよう、エド」
　同じくやる気だったらしいエドと僕らの前にスッと割り込むようにして入ってきた１つの影。昨日までの黒髪から万丈目のような銀髪に代わってこそいるが、見間違えようがない。三沢だ。
「なんだと？おい三沢、一体どういうことだ」
　どこか昨日までと様子が違う。そう思えるのは、多分髪の毛の色が変わったからというだけではないはずだ。もっと何か、そんな外面的なことじゃなくて根本的なところで大きな変化があったような。考えすぎ、なのかなぁ。
「この二人を同時に相手にするのはまずい、と言ってるのさ。例えエド、君であっても勝つかどうかは五分五分、いや、それより少し不利なぐらいだと思う。この一年間でこの二人を見てきた俺にはわかる、今みたいな目をしてる時にはまず負けないんだ」
「バカバカしい、そんなこと……」

「いいえ、三沢君の言うとおりです。ここは大人しく撤退しましょう。元々今日排除する予定だったのは遊野清明ただ一人、遊城十代という不確定要素が入り込んだ時点であやがついた、ということです。これもあるいは、運命の一つなのかもしれません」
「斎王……！」
いつの間に来ていたのだろうか、三沢の言葉を遮る斎王。エドも斎王には頭が上がらないらしく、嫌そうな顔をしながらもしぶしぶ僕らに背を向けて引き返していった。肝心のエドがいなくなったことで、他の光の結社も潮が引くように遠ざかっていく。その中で万丈目と三沢、それにさっきから一言も喋らなかったものの後ろに回り込んでこちらの動きを見張っていた明日香だけは最後までこちらを見ていた。
あっという間に人がいっぱいだったデュエル場には僕と十代、それに夢想の三人しかいなくなった。何となく同時に顔を見合わせて、
「戻ろうぜ、レッド寮に。俺、あそこに戻るのも久しぶりなんだよ」
十代の言葉に、静かに頷いた。

「……なるほど、随分いろんなことがあったんだな。どうりで人数が多いと思った」
「十代がいなくなってから、もうこっちはてんやわんやだったからねー。ね、夢想」

「そうだったね、だって」
　所変わって我らがレッド寮、お茶など出しつつ情報交換タイム。さて、これでこっちにあったことはだいたい話し終わったはずだ。
「じゃ、次は十代の番ね。こんなになるまでどこほっつき歩いてたのさ」
「おう！それが話せば長くなるんだけどな……」

「……ってわけだ。どうだ、すごいだろ！なんてったってネオスは宇宙のヒーローだからな！」
　キラキラした目で興奮を隠そうともせずに話す十代。このひたむきさは、最近地縛神やらなんやらのおかげですっかりすれちゃった僕も見習いたいと思う。
　そしてこの話、他の人ならとてもじゃないけど信じられるようなものじゃない。いつの間にか宇宙にいて喋るイルカがいて人工衛星の中のカードでデッキを組んで変なロボットとデュエルをした？でも、十代の目を見ればわかる。これは、嘘をついたりからかったりしてる目じゃない。ふと横を見ると、夢想も同意見のようだ。そういう不思議なことがあるなんて、これだから世の中面白い。
「なるほどねぇ。さてと、十代。そんな面白そうな話を聞かせてくれたからには、当然や

ることは一つだよね？」

光の結社は大至急どうにかしたい問題なんだけど、デュエリストとしての本能には抗えない。えー、と言いたげな顔をしていながらも決して止めようとはしない夢想も無論、そんな一人である。言いながら外していたデュエルディスクを腕にはめ直し、ぐっと腕を突き出してみせる。それが示す意味を、すぐに彼は察してくれた。

「おう、もちろんだ！部屋の中じゃ狭いから、外で勝負しようぜ」

「もちろん！」

素早く外に出て適当に距離を取り、その位置でデュエルディスクを起動。同じく起動された十代のデュエルディスクと自動的に反応し、デュエルの準備が整った。

「「デュエル！」」

「先行は僕！ハンマー・シャークを召喚、そして効果を発動。自分のレベルを１下げて、手札からレベル３以下の水属性を特殊召喚する。キラー・ラブカを守備表示でターンエンド」

ハンマー・シャーク　攻１７００　☆４→３

キラー・ラブカ　守１５００

「後攻は俺だな、ドロー！魔法カード、融合破棄を発動！」

「ゆ、融合破棄？」

十代が取りだしたのは、いつもおなじみの融合に亀裂が入ったようなイラストのカード。

「おう、このカードは手札の融合とエクストラデッキのモンスターを1体墓地に送って、その融合素材モンスター1体を手札から特殊召喚するカードだ。エクストラから新しいＨＥＲＯ、マリン・ネオスを墓地に送ってその融合素材、ネオスを特殊召喚！来い、ネオス！」

白い光が弾けたのかと思った。全体的に流線形なニューヒーロー、ネオスが空の果てから地面に勢いよく着地する。これが、十代の新しいエースカード……！

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００

「おっと、これで驚いてもらっちゃ困るぜ。な、ネオス。まずは大地のＮ（ネオスペーシアン）、グラン・モールを召喚」

Ｎ・グラン・モール　攻９００

両肩にドリルを二つに割ったようなパーツを装着した出っ歯のモグラ。可愛らしい見た目だが、Ｎなんてテーマは聞いたことがない。どんな効果があるか分かったものじゃないから、気を引き締めないといけないだろう。

「そして見せてやるぜ、ネオスペーシアンとネオスの能力、コンタクト融合を！ネオスとグラン・モールを俺のデッキに戻すことで、このカードは融合召喚できる！Ｅ・ＨＥＲ

Ｏ　グラン・ネオス！」

光の戦士とモグラの戦士が同時に空高く飛び上がり、融合の力を使わず１つの戦士に進化する。右腕は肘の先から巨大なドリルと化し、白かった体も茶色がかった渋い色合いへと変化した。

Ｅ・ＨＥＲＯ　グラン・ネオス　攻２５００

「おお！……ってあれ？攻撃力上がらないの？」

だがその攻撃力は、素材元のネオスと同じ２５００。これなら2体のモンスターのうち、どちらかは残すことができるだろう……そんな甘い考えは、一瞬で吹き飛んだ。

「グラン・ネオスのモンスター効果は1ターンに1度相手モンスター1体を対象に、そのモンスターを手札に戻す！キラー・ラブカを手札に戻せ、ネビュラスホール！」

「ラ、ラブカーっ！ってことは……」

左手から出したなんだかよくわからないエネルギー弾に吹っ飛ばされたラブカの方へ注意がそれた一瞬の隙に、ハンマー・シャークの目の前にはもう高速回転するドリルが迫っていた。

Ｅ・ＨＥＲＯ　グラン・ネオス　攻２５００→ハンマー・シャーク　攻１７００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→３２００

「くぅ……やるね、十代！でも、今度はこっちの番さ！」
「おっと、まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ？速攻魔法、コンタクト・アウト発動！」
「コンタクト・アウト……？」
十代が取りだしたのは、またもや聞きなれないカード。ただ、何か嫌な予感がする。あのカードを通すのはまずいと、理屈じゃなくてデュエリストの本能が全力で叫ぶ。
もっとも、そんなこと言ってもどうしようもないんですけどね！
「このカードはいわば、コンタクト融合専用の融合解除。コンタクト融合は素材はデッキに戻すことで融合なしでの融合召喚を実現させたけど、このカードはその素材をデッキからもう一度引っ張ってくることができる！再び現れろ、グラン・モール！ネオス！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００
Ｎ・グラン・モール　攻９００
「あ、あらら……」
「グラン・モールとネオスでダイレクトアタック！ドリル・モール！ラス・オブ・ネオス！」
Ｎ・グラン・モール　攻９００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３２００→２３００

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ２３００→０

「……完敗した」
「まあまあ、清明。たまにはこういうことだってあるから大丈夫だよ、だってさ。ね？」
　まさかワンキルされるとは思わなかったのでさすがにちょっと落ち込む。隣で夢想が一生懸命慰めてくれてるけど、入学以来いまだに無敗とかいう文字通り無双の化け物デュエリストがそんなこと言っても説得力はないと思う。
「十代、強くなったね。僕も遊んでたつもりはないんだけど」
「へへっ、ありがとうな！ただ、一気に種類が増えたせいでこれまでの俺のデッキとの折り合いが難しいんだよなあ。どうせなら全員使いたいし」
「……デッキ枚数、６０枚でもいいのよ？」
「いや、４０枚に収まるようぎりぎりまで粘ってみるぜ」
「ですよねー」
　なかなか賛同者が現れてくれない６０枚デッキの明日はどっちだ。メリットがほとんどないっていうのはすごくよくわかるんだけど、どれも大切なカードだから結局どれ

も抜けないんだよね。こればっかりはどうしようもない。
とはいえ、やっぱりどこか寂しいもんだ。
「はぁ……」
「あれ？清明、それなに？なんだって」
「え？ああ、これか」
ため息をついた拍子にポケットから顔をのぞかせた、トメさんからもらった三沢の手紙。せっかくだし、ここで開いてみようかな。
『あ、じゃあ私はこれで引っ込んでいよう』
その声を最後に、チャクチャルさんの気配がすうっと消えていく感覚。薄く糊付けされた開け口を開くと、入っていたのは几帳面に折りたたまれた紙が１枚のみ。どれどれ。

清明へ
これをお前が読んでいるということは、おそらく俺は負けたのだろう。なので、それを前提として話を進めさせてもらう。
まず第一に、今日までの俺は光の結社に本当に入ったわけではない。お前が地縛神の

力で光の波動を防いだのと同様、俺もウリアの力で辛うじて洗脳を跳ね返すことに成功した。あれは今考えてもかなり分の悪い賭けだったが、わざと万丈目に負けるような真似をしたのもそのせいだ。

本当はそうやって光の結社の内部に入り込み内部からしかわからない情報を送るなどしてお前たちをサポートしてデュエルアカデミアを取り返すつもりだったのだが、今日の俺とのデュエルでお前の心がかなり限界だったように思えたから急遽予定を変更することにした。すまない、お前を必要以上に追い込んでしまって。そんなつもりはなかったのだが、誰よりも仲間思いなお前がそうなり、自分を追い込むことをまるで想定していなかった俺にも責任はある。

俺は今日、斎王にデュエルを申し込む。俺が勝てば皆を元に戻してもらうつもりだったんだが、負けたということは次にお前と会う時、俺はもう身も心も光の結社に染まりきっているだろう。非力な俺を許してくれ。

あまり時間がないのでゆっくり推敲することもできなかったから少々雑な文になってしまったが、俺にはもうあまり時間がない。ついさっきこんなこともあろうかと思ってイエロー寮に保管しておいた対光属性用の俺のデッキを取りに行ったんだが、どうもそれがもうばれているらしく、さっきから妙な視線を感じる。斎王のところにたどり着けるとしたら、まだ警戒が薄い今日しかない。

お前の心を追い込んだ俺がこんなことを言うのもおこがましいが、それでもこれだけは言わせてくれ。俺はお前を信じている。お前が立ち向かうならば、どんな状況だって最後の希望が消えることはない。お前にはそう思わせる何かがある。

三沢大地

「……」

ど、どうしようこれ。わざわざ日付指定の手紙ってとこでどこか嫌な予感はしてたけど、まさか三沢がここまであれこれ考えてたなんて。しかもこれ、元をただせば完全に僕のせいじゃないの。先代なんかの誘惑に乗せられ手派手にやってたせいだこれ。

「うーん、一緒に頑張ろうね、清明。だってさ」

「へ？」

「そうだぞ、何1人で難しい顔してんだよ」

「夢想、十代」

ポン、ポンと2人から両肩をそれぞれ叩かれる。左右を見るとどちらの笑顔も屈託なく、どうしようどうしようと思っていたことがバカバカしくなるぐらいで。それを見て、なんだかスッと気が楽になった。

「そう、だね」

まだ何をすればいいのかもよくわからないけど、とにかく前に進んでみよう。そうすれば、どう転ぶにせよ何かしらの道は見えてくるはずだ。少なくとも、ここでじっとしてるよりは遥かにいい。

ターン５１　鉄砲水と歯車と地獄

「うーん、こりゃひどい。あ、ちょっとサッカーそっちのノート取って……うい、センキュ」

渡された大学ノートをぺらぺらめくり、つらつらと並んだ数字を電卓に打ち込んでいく。これとこれとこれが支出で、あとこれも支出で、それからこっちの数字も支出で……。

「……寝る」

『そう来ると思った。打ち合わせ通りよろしく頼む』

ノートを閉じて全力で現実逃避しようとした矢先、いきなり背後から霧が湧きだして僕の体を包み込む。ただの霧のはずのそれは物理的な質量があるかのように僕を抑え込んで、その場を離れられないようにした。

「チャークーチャールーさーん、それに霧の王まで、何すんのさまったくもう」

『マスターの性格を考慮した結果、赤字額が６ケタを超えた瞬間に容量オーバーになるのは目に見えたからな。案の定、累計１０万と６３円になったところで考えるのをやめたか』

「だだだって１０万だよ!?９万までならどうにかなる気がするけど６ケタだよ!?これ以上赤字が増えるところなんて見たくないよ！」
『ふむ。なら、そんなマスターにいい言葉を授けてやろう』
「な、何？」
含みたっぷりにそんなことを言うチャクチャルさんになんだか嫌な予感を覚えつつも、一応聞くだけ聞いてみることにする。
『昔から言うだろう。――――男は借金背負って一人前、と』
「だったら半人前でいいよ！」
チラッとでも聞いてみようと思った僕が馬鹿だった。さて、そもそもどうしてこんなことを僕がする羽目になったのかというと、それは数時間前にさかのぼる。

「あ、そこの君。ちょっといいでアールか」
「はーい、どしたんですかナポレオン教頭」
廊下を歩いていた僕は背が低くて小太りで、クルリとカールした立派なひげが特徴的な微妙に貴族風ファッションの人に呼び止められた。そう、こんなよくわかんない恰好した人がこの学校の教頭なのだ。あのクロノスせんせ……あー、校長代理にも負けず

劣らずにキャラが立っているというなかなかとんでもない人だけど、学校での評判や印象は正直イマイチの一言に尽きる。というのもより立場が上でデュエルも強いクロノス先生と違ってあまり生徒たちと関わりあうことをせず、いまだに全校集会などの先生が全員そろう時にしかその姿を見たことのない一年生がいるほどなのだ。おまけに僕らが入学した時のクロノス先生並みにレッド寮を毛嫌いし、イエロー寮も若干見下してる節がある。ちなみに僕個人としては何度か寮長ファラオの代理として話をしたことがあるので比較的知っている人ではあるのだが、どうも何度話をしても小悪党という印象がぬぐえない。どうしようもない悪人ではないんだろうけど、多分この人は一生こんな感じの性格なんだろうなーと。

「最近オシリスレッドの会計状況の提出が無いようでアールが、もしかしてなにか見せられない事情でも?たとえばそう、赤字、のような?」

「ほえ?……あー、あー、あー!やですね先生、ちょっとドタバタしてただけですぐに出しますって、ホント」

「ま、吾輩も鬼ではないから明日までは待ってあげるのでアール。万一赤字になった、なんてことがあれば……約束、忘れたとは言わせないのでアール」

一方的にそれだけ言うと、のっしのっしとふんぞり返って歩き去っていく教頭。その背中を見送りながら、多分僕の笑顔は引きつっていたと思う。

さて、そもそもなんでここでひきつった顔になる必要があったのか？これはさらに前、まだ僕が1年だった時までさかのぼることになる。と言っても話は単純で、まだ今に比べたらはるかに純真だったころの僕がレッド寮を取り壊そうと企んでた教頭の口車に乗せられて、ある1つの約束をしたのだ。それが、

『赤字が出たらその月いっぱいでレッド寮は廃止、か』

「そゆこと」

考えてみたらとんでもなくむちゃくちゃな話ではあるが、その挑戦を受けた僕にも責任はあるので何も言えないのだ。ちなみに僕が最近開店休業状態な洋菓子屋『ＹＯＵ ＫＮＯＷ』を立ち上げたのも、主にこの約束をどうにかするためだったりする。まさか半年もしないうちに電話回線が引けるようになるほど儲かるとは思わなかったけど。

「ただ、そのおかげで去年までの利益はほぼすっからかん。新しく葵ちゃんも入ったし、そこからの売り上げで十分まかなえると思ったんだけどなあ……」

『油断大敵か。今回に関しては不可抗力だと私は思うが』

それもこれも、全部あの光の結社のせいなんだ。何日もかけて菓子作りのいろはを叩き込んできた貴重な戦力である葵ちゃんがいなくなったのも痛いが、校内のほとんどの

生徒があそこに入ったことで敵対してる僕の店に来るはずもなく、客がぱったり来なくなったのが何よりも痛い。しかも、ちょうど砂糖とかをこれまで使ってた安物からちょっとグレードアップさせたタイミングと重なってるときてる。一応さっきは計算してみたけど、正直なところそんなことするまでもなく明らかに大赤字だ。

「さーて、どうすっかねえ」

『別に金を用意するだけならいくらでもやりようはあるのだがな』

「え、どんな!?」

『催眠、恐喝、詐欺その他もろもろだ。この年頃なら警戒心も薄いからなおやりやす……』

「やっぱり聞いた僕が馬鹿だったよこの邪神！」

チャクチャルさんの発想は物騒すぎる。しかも冗談でもなんでもなく、素で言ってるあたりが恐ろしい。もうちょっとまともな感性の持ち主に相談したいところだけど、今すぐ会えるような相手は少ない。さすがに帰ってきたばかりの十代にこんな重い話をするのも酷だし、誰かほかの人で味方になってくれそうで、なおかつ人格者……よし、決めた。

「……ってことなんでクロノス先生、どうすればいいんですかね僕は」
「なんでそれを私に言いに来たノーネ。申し訳ないけれどシニョール清明、この件に関してははっきり証文まで取られてるからいくら私でもナポレオン教頭に言うことを聞かせるのは無理なんでスーノ」
校長室。校長代理の札の『代理』の部分に油性マジックでバッテンを書く暇がある程度には忙しくなさそうだったクロノス先生に相談してみる。残念ながらあまり色よい返事ではなかったけど、ここではいそうですかと帰るわけにはいかない。
「あと一か月でいいんです、それだけあればいくらでもやりようはありますから」
「そんなこと言われましても……そもそも、私は校長として」
「……代理」
「聞こえてるノーネ。とにかく、生徒を正しい方向へ導く立場にありますーノ。この場合、対外的に見れば正しいのは明らかに証文を持ってる教頭の方。もしここで私がシニョール清明に手を貸してそれが教育委員会にバレでもしたら、私の進退にもかかわってくるようなことなのーネ。さらに言わせてもらえば、今の教頭は斎王琢磨と一種の協力関係にあることは明白。遺憾ながら光の結社に学校のほとんどを制圧された今は私の地位も飾り同前、逆らうのは得策ではないでスーノ」
先生、そりゃないでしょう。文句の1つも言いたいのをぐっと我慢する。教育委員会

云々は冗談のようだが、後半部分は確かに一理ある。どうもこの調子だと、粘ってみるだけ時間の無駄っぽい。
「……もういいです。しつれーしましたー」
「はい、気を付けて帰るノーネ。……ああ、それとこれは独り言なのですが」
「はい？」
　帰ろうとして背を向けた矢先、ぼそりと呟くようにクロノス先生が口を開く。
「確か、今レッド寮の取り壊しに積極的なのは校内でもナポレオン教頭だけだったような気がするノーネ。裏を返せば、教頭さえ納得させることができればいいような気もしないような気がするんですーノ」
「歯切れ悪いですね……そんなこと言われても、あの人を言葉で説得とかちょっと難易度高すぎますって」
「まったく、できの悪い生徒を持つとこの仕事も大変なノーネ。ここがどこだか一度じっくり考えてみるノーネ」
　ほとほとあきれた様子のクロノス先生。ここがどこかって？そんなもの、デュエルアカデミアに……あ、いや、ちょっと待てよ。うん、これならいけるかもしれない。
「先生、ありがとうございました」
「はて、何のことだかさっぱりでスーノ。私は部屋に誰もいないと思って独り言を喋っ

ただけなのに、それをこっそり盗み聞きしていたとでも?」
そう言ってにっと笑い、ウインクする先生。その姿に深々と一礼して部屋を出た。ナポレオン教頭、首を洗って待ってろってんだ!

「てなわけで教頭、僕とデュエルしてください」
「ななな、藪から棒に何を言い出すでアールか!?」
「なにって、デュエルですよデュエル。僕が勝ったら、レッド寮についての約束はなかったことにしてもらいます」
喋りながら声音や表情を微調整して、さも僕が当たり前のことを言っているような態度に見せかける。割と無茶言ってるのは承知の上だけど、ここで一気に押し切るべし。
「そもそも教頭、ここはデュエルアカデミアですよ? 教頭はレッド寮をなくしたいのかもですけど、僕はそんなの嫌です。だったら、デュエルで白黒つけるしかないでしょう」
「そ、そんな横暴が教師に向かって通るはずないでアール!」
うん、僕もそう思いますよ教頭。とは思っても言わない。態度にも出さない。出さないったら出さない。さらに畳みかけようとしたところで、思わぬ方向から援護が飛んできた。

「話は聞いたぜ、ナポレオン教頭！もしかして、生徒相手にデュエルするのが怖いのかよ！」
「十代!?」
「おう、水臭いじゃないかよ。俺だってオシリスレッドの一員なんだ、変なところで遠慮してないでちゃんと教えてくれよ」
　予想外だけど、これは心強い。……結局十代の力を借りちゃったか、僕。
「「そろそろ観念してもらいますよ、先生」」
「ム、ムゥ……だったら、こちらからも条件を二つ出すでアール。ひとつ、試合は明日、お互いの代表同士の一騎打ちで決めること。もうひとつは、その試合でそちらが負けたらその場でオシリスレッドは廃止とすることでアール」
　さすがに教頭の肩書は伊達じゃないか。代表を一人選んでの一騎打ちということは、どんな人が出てきてもおかしくはない。わざわざ明日なんて指定したところから見ると、何か助っ人のあてがあるんだろう。さらに、負けたらその場でオシリスレッド廃止。かなり不利な条件を付けられてしまったけど、ここでやっぱりやめますなんて言おうものならなんのかんのと言って逃げ切られることはほぼ間違いない。
「わかりましたよ、じゃあそれで」
「ふふふ、確かにその言葉聞いたでアール。残りわずかな時間を精々楽しむのでアール

よ」
それだけ言うと、僕らに背を向けて立ち去っていく教頭。一体、何をたくらんでるのやら。

それからについては、特にこれといって何もなかった。日が西の空に沈んで、また東の空から昇る。ちなみに十代と僕のどちらが代表になるかは徹夜して話し合ったものの平行線のままどっちも譲らず、その場になってから空気を読んで決めようということで落ち着いた。そして、今は約束の場所に来ているのだが。
「教頭……ねえ十代、あの人ってさ」
「お、おう。だよなぁ」
自信満々、といった様子のナポレオン教頭の隣に立つのは、黒いコートに黒い帽子、そして黒手袋の顔の上半分を覆うマスクをつけた巨人。すごく、すごーくあの人見た覚えがある。
「ふふふ、それでは紹介するでアール。今回『偶然』この島に観光に来ていたプロデュエリスト、タイタンさんでアール」
あ、やっぱり。去年僕が倒したインチキ闇のデュエリストだ。とはいえ、だからと

いって油断はできない。今年に入ってからのタイタンはインチキからすっぱり足を洗って本格的なプロデビューを果たし、より進化したデーモンデッキを巧みに使いこなすプレイングセンスと本人の強烈なキャラ性からかなりの人気を誇る大会でも上位の常連なのだ。って、翔の読んでた雑誌あった特集の受け売りだけど。もっとも、インチキ云々は僕の創造である。ただ、プロの世界でチェスデーモンの耐性が必ず成功するなんていかさまが通用するとは思えないし、ねえ？

「久しぶりだな、お前らぁ。あの時のことについては感謝するが、今回は仕事。私情を挟むつもりはないから、覚悟しておけぇ」

「さあ、給料三か月分をつぎ込んで呼び寄せた……あ、いや、なんでもないでアール。とにかくプロデュエリストの洗礼を受けるのでアール！」

「タイタン……だったら、また僕が！」

「いや、俺にやらせてくれよ！」

一瞬睨み合って、無言でお互いに拳を突き出す。僕はパー、十代はグー。うし、相手は僕だ。

「話はまとまったかぁ？ならば、いざ……」

「「デュエル!!」」

「先行は僕からだ、フィッシュボーグーアーチャーを召喚。そして魚族モンスターを召

喚したことで、手札からシャーク・サッカーを特殊召喚！」
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
シャーク・サッカー　守１０００
「さらにカードを2枚伏せて、これでターンエンド」
僕の伏せたカードは、魚族1体をリリースしてフィールドのカードを破壊、その上ドローまでできるカード、フィッシャーチャージと相手の攻撃を無効にしてうまくいけばダメージのおなじみ防御カード、ポセイドン・ウェーブ。これだけやれば、いくらプロでもそう簡単に展開はできないはずだ。
「守りを固めたかぁ。ならば私のターン、ドロー……魔法カード、大嵐を発動ぅ。魔法及び罠カードをすべて破壊だぁ」
「うっ!?」
どうしよう。フィッシャーチャージをチェーン発動すれば一応大嵐を破壊して無理やりドローにつなげられるけど、それをやっちゃうとモンスターの数が減る。ここは……通す、か。
「そしておろかな埋葬を発動。この効果によりデッキからトリック・デーモンを墓地へ送り、その効果を発動。デッキからデーモンモンスターを1体サーチするぅ。私が加えるのは、戦慄の凶皇―ジェネシス・デーモン。このカードはレベル8だが、攻守を半分

にすることで妥協召喚が可能となる」
戦慄の凶皇―ジェネシス・デーモン　攻３０００→１５００　守２０００→１０００
黒い玉座に座った、いかにも魔王といった風格のデーモン。だがその威厳も通常の半分のサイズになってしまっては形無しである。
「やれ、ジェネシス・デーモン！フィッシュボーグを攻撃だぁ！」
形無しとはいえ、皇の名前はハッタリではない。小さいながらも闇を纏った一撃が、フィッシュボーグの体を一瞬にして包み込みひねりつぶす。
戦慄の凶皇―ジェネシス・デーモン　攻１５００→フィッシュボーグ―アーチャー守３００（破壊）
「カードを１枚伏せてターンエンドだが、この瞬間にジェネシスの効果が発動するぅ。妥協召喚したこのカードはエンドフェイズに自壊だぁ」
清明　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：シャーク・サッカー（守）
魔法・罠：なし
タイタン　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）

　さて、どうするか。伏せカードがあるとはいえ、今のタイタンの場にモンスターはない。直接攻撃を決められる可能性は十分にあるだろう。だったらあとは、自分の手札と相談か。

「ドロー……よし来た来た、魔法カード、スター・ブラストを発動！このカードはライフを５００の倍数支払って、その分だけ手札か場のモンスターのレベルを下げることができるカード。これで１５００ライフを払い、手札のシーラカンスのレベルを７から４に変更！そのままシーラカンスを通常召喚！」

　魚の王者、シーラカンス。この攻撃力２８００の一撃が通れば、この先かなり有利になるはずだ。欲を言えば効果発動のためにもう１枚手札が欲しいところだったけど、無いものねだりはみっともない。

　清明　ＬＰ４０００→２５００

　超古深海王シーラカンス　攻２８００　☆７→４

「ほう……面白い、攻撃してみろぉ」

「言われなくても！シーラカンスでダイレクトアタック、マリン・ポロロッカ！」

　超古深海王シーラカンス　攻２８００→タイタン（直接攻撃）

　タイタン　ＬＰ４０００→１２００

「よしっ！」

攻撃がしっかり決まったのを見て、ちょっとガッツポーズ。ナポレオン教頭があたふたしてるところも見えてちょっと気分がいい。

だけど、僕はプロデュエリストというものを甘く見ていたらしい。

「相変わらずなかなかやるなぁ、少年。だが、今の私には及ばん。トラップ発動、フリッグのリンゴ！このカードは直接攻撃を受けた時にのみ発動でき、その戦闘ダメージ分だけライフを回復。さらに、その数値と同じだけの攻守を持った邪精トークンを特殊召喚するぅ」

タイタン　ＬＰ１２００→４０００

邪精トークン　攻２８００

「攻撃力２８００のトークンで、さらにダメージも回復？……エンドフェイズ、スター・ブラストの効果は切れるよ……」

超古深海王シーラカンス　☆４→７

「もはや手はなかろう。私のターン、ヘルポーンデーモンを召喚。さらに魔法カード、テラ・フォーミングを発動してデッキのフィールド魔法１枚をサーチ。ここは地獄への２丁目、伏魔殿（デーモンパレス）―悪魔の迷宮―をサーチし、そのまま発動だぁ。ふはははは、私のデーモンよ、その力を今こそ高める時だぁ！」

いかにも魔王城といった出で立ちの黒い城がそびえ、その闇の力にあてられた邪精

トークンがくねくねと踊り、ヘルポーンデーモンの腕の剣が怪しい光を放ちだす。
邪精トークン　攻２８００→３３００
ヘルポーンデーモン　攻１２００→１７００
「もうわかっているだろうが、このカードは自分フィールドの悪魔族の攻撃力を５００ポイントアップさせる能力を持っている。バトルだ、邪精トークンでシーラカンスに攻撃ぃ！」
２体のモンスターの攻撃力は本来互角。だが、シーラカンスではあのトークンに勝つことはできない。そして、手札も伏せカードも何もない僕では、それをどうすることもできない。
邪精トークン　攻３３００→超古深海王シーラカンス　攻２８００（破壊）
清明　ＬＰ２５００→２０００
「くぅっ！シーラカンス！」
「まだだ、ヘルポーンでシャーク・サッカーに攻撃！」
ヘルポーンデーモン　攻１７００→シャーク・サッカー　守１０００（破壊）
辛うじて、このターンは乗り切った。だけど次のターンにモンスターを引けなければ、僕の負けは確定する。
「ぐ、ぐぐぐ……」

「さっきまでの威勢の良さはどうしたぁ?カードを伏せてターンエンドだぁ」
清明　ＬＰ２０００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：なし
タイタン　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：邪精トークン（攻）
ヘルポーンデーモン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：伏魔殿―悪魔の迷宮―
「僕のターン、ドローー!」
起死回生の切り札、ではない。正直言ってこんな局面にこそメタイオン先生に出てきてほしかったけど、来ない者に文句言っても仕方がない。きっとまだ動く時ではないのだろう。
「死に出しは嫌いなんだけどな……ごめん、皆。ダブルフィン・シャークを守備表示で召喚して、召喚時効果を使用。墓地からレベル３または４の水属性魚族を１体特殊召喚することができる。もう一回出てきて、サッカー」
ダブルフィン・シャーク　守１２００

シャーク・サッカー　守１０００
「これで、ターンエンド……」
「どうした、それで終わりかぁ？スタンバイフェイズにヘルポーンのコストとして５０ライフを支払う。メインフェイズにヘルポーンをリリースして、迅雷の魔王―スカル・デーモンをアドバンス召喚だぁ！」
タイタン　ＬＰ４０００→３５００
攻撃力２５００を誇る、デュエルキングも愛用していた通常モンスター、デーモンの召喚のリメイクカード。全身がバチバチと帯電するその姿もまた、悪魔の城から力を受ける。
迅雷の魔王―スカル・デーモン　攻２５００→３０００
「我がデーモンよ、無力なそこの魚を引き裂けぇ！」
迫りくる２体の高攻撃力モンスター相手に、なすすべもなくやられていく僕のモンスターたち。タイタン……強い。去年のあれは一体なんだったのかと聞きたくなるぐらい強い。
邪精トークン　攻３３００→ダブルフィン・シャーク　守１２００（破壊）
迅雷の魔王―スカル・デーモン　攻３０００→シャーク・サッカー　守１０００（破壊）

清明　ＬＰ２０００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：なし
タイタン　ＬＰ３５００　手札：１
モンスター：邪精トークン（攻）
迅雷の魔王―スカル・デーモン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：伏魔殿―悪魔の迷宮―

「僕のターン、ドロー……！まだ、まだ諦めるもんか！魔法カード、ブラック・ホールを発動！フィールドのモンスターを全破壊するこのカードがあれば、戦況はまだ……！」

「いいぞ清明、これならまだ勝負は……」

そう言いかけた十代のセリフが、途中で止まる。ブラック・ホールに対し、タイタンが伏せカードを発動したのが見えたのだ。

「いいや、その程度では私には勝てん！トラップ発動、魔宮の賄賂！お前に１枚カードを引かせる代わりに、その発動を無効にするぅ！」

「そ、そんな」

一縷の望みを託して最後に賄賂の効果で引いたカードはステータスもレベルも低い、この局面をひっくり返すにはあまりに力不足な縁の下の力持ちとでもいうべき効果モンスター。そんな、僕が負ける？こんな大事な勝負で？嘘……。

「フィッシュボーグ―プランターを守備表示、これでターン、エンド……」

フィッシュボーグ―プランター　守２００

「随分とあっけなかったな、私のターン。スタンバイフェイズに迅雷の魔王のため５００ライフを支払い、邪精トークンでフィッシュボーグを攻撃！」

タイタン　ＬＰ３５００→３０００

邪精トークン　攻３３００→フィッシュボーグ―プランター　守２００（破壊）

最後の僕のモンスターもあっけなく破壊され、がら空きのフィールドから自らの必殺技である怒髪天昇撃の構えを取る迅雷の魔王と目が合う。今度ばかりはお手上げだ、手札も、フィールドも、何もない。ごめん、十代。

「これで終わりだ、迅雷の魔王でダイレクト――――」

「ちょっと待つノーネ！」

「むむ、この声はまさかお前でアールか！」

突然投げかけられた、聞き覚えのある声。あの子供の時にどんな育ち方すればそんな語尾が身につくのかさっぱりわからん特徴的な話し方は、この世広しといえどもそうは

いない。というか、もしあの人以外でこんな喋り方してる人がいたらびっくりしてひっくり返る自信がある。
「クロノス・デ・メディチ、ただいま参上ナノーネ！」
「一体何をしに来たでアールか、クロノス代理校長！」
「だから、代理はやめるノーネ！」
　もはやお約束と化したやりとりを終え、改めて僕の方に向き直る先生。
「まったく……一人でプロと戦おうなんて、いくらシニョールと言えども無茶が過ぎるノーネ。ナポレオン教頭、話は全部私の耳に届いていましたが、高校生相手にプロデュエリストをぶつけるとはいくらなんでも生徒にとって不公平すぎると思われるノーネ。よってこの勝負、私がここから代わりに行わせてもらいますーノ！」
「な、なんと。それは……」
「ふっ、面白い。私はそれでも構わないぞぉ」
　文句を言おうとした教頭を止めたのは、以外にも当事者のタイタン。なんだろう、さっきからこの人の大物オーラがすごい。去年のあの人と同一人物とは思えない。
「と、いうことですシニョール清明。あとはこの実技担当最高責任者、クロノス校長に任せるノーネ」
「でも、先生……」

「ノンノン。生徒は教師の言うことを聞くものであるからして、口答えなどしてはいけませんーノ。……それに、これは私からの贖罪の意味もあるノーネ」
「贖罪？」
　不意に大真面目な顔になるクロノス先生。声もやさしく諭すような調子から、急にシリアスな感じに変わる。
「去年あなたはあのタイタンとデュエルしましたね、シニョール清明。これまで黙っていましたが実はあれは、私がこの島に招いたデュエリストだったノーネ。私が教師として未熟だったせいで入学したてのあなたたちを危険な目に合わせてしまいました。もちろんこんなことでその罪が消えるとは思いませんが、せめてこれぐらいは私にやらせてください」
　マジか。マジでか。大体おかしいとは思ってたんだよ、なんで学校の廃寮にわざわざ入り込んでたのかとか、なんで僕と十代の名前を知ってたのかとか。あの時はそれどころじゃなかったから疑問に思わなかったけど、あとから考えてみれば明らかに変だし。そうか、あのやたらめったら嫌味で小物だったころのクロノス先生が呼んでたのか。
　まあ、もっとも、
「そのことについては気にしないでくださいよ、先生」
「ホワッツ？しかし……」

「今となってはいい思い出ですし、それに」
　ここで、チラッと自分のデッキを見る。思えば、あの時のタイタンとのデュエルがきっかけで僕はこうやって精霊が見えるようになれたんだ。それに、あの体験が元になって稲石さんとも知り合えた。感謝こそすれ、恨む道理なんてただの１つもありはしない。とはいえ、さすがに精霊とか何とか言っても先生には通じないだろうから、そこは適当にぼかすことにする。
「それに、大事なものがたくさん増えましたし」
「？」
「いえ、なんでもありません」
「さあ、話は終わったかぁ？デュエルの続きを始めようではないかぁ」
　そう言われデュエルディスクを構えるものの、その前に、と一度手を止めるクロノス先生。
「ルールを確認するノーネ。あなたのターンの中断されたところからスタートで私の手札は５枚から、ライフポイントと墓地に関してはシニョール清明のものをそのまま受け継ぐ。……異論はありませんか？」
「ええっ!?」
「ほう……」

思わず驚きの声を上げる僕に対して、感心した様子のタイタン。それはそうだろう、何せさっき中断されたところって言ったら僕がやられる寸前、おまけにライフも通常の半分しかない。初期手札に手札誘発のカードがない限り、出てきたその瞬間に敗北確定という話にならないぐらい不利な条件だ。それを、あの先生は今からやってのけようというのだ。

「ふふん、そう簡単に狙ったカードが引けるはず無いでアール。タイタンさん、構わないからやっつけてやるでアールよ」

「クライアントがそう言うんなら、それでよかろう。迅雷の魔王で改めて攻撃、怒髪天昇撃！」

激しい雷がジグザグに走りながら、先生めがけて襲い掛かる。だけど先生は落ち着き払った顔で、手札から1枚のカードを墓地に送った。

「手札から、速攻のかかしの効果を発動。ダイレクトアタック時、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるノーネ。ちなみにこの効果は対象を取らない者であるからして、そのモンスターの耐性も無意味なんですーノ。……ここ、次の試験に出しますからあなたたちもよく覚えておくように」

帽子をかぶった金属製のかかしが、全ての雷を黒こげになりながらも受け止める。それを見たタイタンは悔しがるどころか、以外にもにいっと笑って見せた。

「くくく、面白い。カードを伏せて、俺はこれでターンエンドだぁ」
清明↓クロノス　ＬＰ２０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
タイタン　ＬＰ３０００　手札：１
モンスター：邪精トークン（攻）
迅雷の魔王―スカル・デーモン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：伏魔殿―悪魔の迷宮―
「では私のターン、ドローナノーネ！シニョール清明、あなたのカードを使わせてもらいますーノ。私は、墓地からフィッシュボーグ―アーチャーの効果を発動！水属性モンスター１体を墓地に送ることで、このカードを蘇生させることができますーノ」
「でも、クロノス先生のデッキは古代の機械でしょう？そこに入る水属性モンスターなんて」
「まったく、まだまだカードプールの知識が足りてないノーネ。確かに水属性機械族は数が少ないうえにそのほとんどが水属性用のカードですが、中にはこんな例外だってあるノーネ。手札からブリキンギョを墓地に送り、アーチャーを蘇生しますーノ」

フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
「さらに墓地から、フィッシュボーグ―プランターの効果を発動。１ターンに１度デッキトップを墓地に送り、そのカードが水属性モンスターならそのまま墓地のこのカードを特殊召喚できるノーネ。私のデッキトップは……同じく水属性モンスター、ブリキンギョ。よってこのカードも蘇生しますーノ」
フィッシュボーグ―プランター　守２００
あっという間に、僕のカードを巧みに使って２体のモンスターを揃えたクロノス先生。あの人のデッキで、それが意味するところは一つしかない。
「そして、この２体のモンスターをリリース。来い、古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）！」
古代の機械巨人　攻３０００
「だが、そのモンスターの攻撃力は辛うじて私の迅雷の魔王と相打ちにできる程度。次のターンに邪精トークンの攻撃で葬り去ってくれるぅ」
「ぼ、僕が下手にシーラカンスなんかでダイレクトアタックしたせいで……」
「シニョール清明、あまり思い悩むのはあなたの悪い癖でスーノ。魔法カード、巨大化を発動。このカードは私のライフが相手よりも低い時に装備モンスターの攻撃力を元々の倍の数値にするノーネ」
古代の機械巨人　攻３０００→６０００

なんと、僕が好き勝手やって減らしたライフを逆手にとって無理なく巨大化のメリット効果を発動してのけた。これで、タイタンのモンスターをどちらも破壊できる。
「カードを1枚セットして、ターンエンドするノーネ」
「ええ!?」
絶好の攻撃チャンスに攻撃しなかった先生。一瞬プレミスか、という疑念が胸をよぎった。
「シニョール清明、頼むから自分のカードの効果ぐらい把握しておくノーネ。フィッシュボーグ―アーチャーの蘇生効果を使ったターンにバトルフェイズを行う場合、その開始時に自分フィールドの水属性以外のモンスターはすべて破壊されるんですーノ。私の古代の機械巨人は地属性、破壊を免れるためにはこのターンバトルするわけにはいかないノーネ」
そ、そういえばそんな効果もあったっけ……僕のデッキだと水属性以外のモンスターがそもそも自分フィールドが空の時、というアーチャーの効果発動条件と決定的に相性悪い白銀のスナイパーと同じく相性が悪いうえに効果破壊されないメタイオン先生ぐらいしかいないから忘れてた。いや、でも、これは仕方ないと思う。普段からノーデメリットで使い慣れてたし。
「さすがに教師、といったところかぁ。私のターン、ドロー。スタンバイフェイズに迅雷

の魔王に５００ライフを払い、インターセプト・デーモンを召喚して伏魔殿第二の効果を発動。自分フィールド上のデーモンを選択し、それ以外の悪魔族を除外することでそのレベルと等しいレベルを持つデーモンを特殊召喚できるぅ。迅雷の魔王を選択してインターセプト・デーモンを除外、そしてレベル６のデーモン、デーモンの巨神をデッキから特殊召喚するぅ」

タイタン　ＬＰ３０００→２５００

まるでアメフト選手のような格好をした４本腕の悪魔に、迅雷の魔王が文字通りの雷を落とす。一瞬で灰になったインターセプト・デーモンの魂を吸い込んだ伏魔殿の扉が開き、新たな悪魔が１体戦列に加わった。

デーモンの巨神　攻２４００→２９００

「そんなにモンスターを並べたところで、私の古代の機械巨人の攻撃力の方が上なことに変わりはないノーネ」

「確かに今は、なぁ。だがこの瞬間にトラップ発動、ジェネレーション・チェンジ！自分のモンスターを１体破壊し、そのモンスターと同名カードをデッキからサーチする。デーモンの巨神を対象にとるが、この時さらに巨神の効果を発動。５００ポイントのライフを支払うことで、自身の効果破壊を１度だけ無効にできる」

タイタン　ＬＰ２５００→２０００

「むうう、そうきましたか」
「今更気づいたかぁ、これで私のライフはお前と同じ、よって巨大化の攻撃力倍加効果は消えることとなる」
　古代の機械巨人　攻６０００→３０００
「バトルだぁ、邪精トークンで攻撃！」
「……見事な戦術ではありますが、まだまだ甘いノーネ！トラップ発動、闇よりの罠！このカードは自分のライフが３０００ポイント以下の時に１０００ライフを払うことで発動し、自分の墓地のトラップ１枚の効果をコピーするノーネ。私が使用するカードは、ポセイドン・ウェーブ！」
　ポセイドン・ウェーブ……最初のターンに僕がセットしたものの、大嵐でフィッシャーチャージ共々破壊された攻撃を無効にするカードだ。分厚い水の壁が攻撃を受け止め、跳ね返す。それと同時に巨人の姿が光に包まれ、再び大きくなり始めた。
　クロノス　ＬＰ２０００→１０００
「これであなたの攻撃は無効になりましたが、それだけではないノーネ。再び私のライフがあなたを下回ったことで、巨大化はその効力を再び発揮しますーノ。また、闇よりの罠でコピーしたトラップはその後、ゲームから除外されますーノ」
　墓地からポセイドン・ウェーブのカードを抜き取り、それをポケットにおさめる。そ

うしている間にも、さっき一瞬縮んで見えた巨人の体が再び大きくなっていく。
古代の機械巨人　攻３０００→６０００
「ちぃぃ……貫通能力を持つ古代の機械巨人の前には守備表示にする意味はない、かぁ。ターンエンドだ」
クロノス　ＬＰ１０００　手札：１
モンスター：古代の機械巨人（攻・巨大化）
魔法・罠：巨大化（巨人）
タイタン　ＬＰ２０００　手札：１
モンスター：邪精トークン（攻）
迅雷の魔王―スカル・デーモン（攻）
デーモンの巨神
魔法・罠：なし
場：伏魔殿―悪魔の迷宮―
「私のターン、ドロー。墓地からフィッシュボーグ―プランターの効果を発動。デッキトップは水属性モンスターではありませんから、蘇生は失敗したノーネ。ですが、これでよし。ここまでで準備は整ったので、このターンで決めるノーネ！」
「面白いぃ……やれるものならやってみろぉ！」

「古代の機械巨人で、邪精トークンに攻撃！アルティメット・パウンド！」
ビックサイズの鋼鉄の拳（当社比十割増し）がうなりを上げ、何気にかなり長いことフィールドに留まり続けたトークンをついに破壊する。攻撃力の差は２７００、これならタイタンを一撃で仕留められる。
だけど、その攻撃はあまりにも単調すぎる。
「手札からクリボーの効果を発動！このカードを墓地に送り、一度だけ戦闘ダメージを０にするぅ！」
古代の機械巨人　攻６０００→邪精トークン　攻３３００（破壊）
「これで、お前の攻撃は……」
「やはり、その程度の対策はしていましたか……速攻魔法、旗鼓堂々を発動！このカードは墓地の装備魔法１枚を選択し、フィールドの正しい装備対象に１ターンのみ装備することができる！」
「だが、お前の墓地に装備魔法なぞ……はっ！ま、まさかぁ！」
「そのまさかなノーネ。私が先ほどプランターの効果で墓地に送ったカードは閃光の双剣―トライス、このカードを発動コストである手札１枚を踏み倒して古代の機械巨人に装備！」
右ストレートを振り切った姿勢で固まる巨人の両腕に、光る双剣が握られる。巨人の

目が赤く光を放つと、その左腕がゆっくりと持ち上がった。
「トライスを装備したモンスターは、攻撃力が５００ポイント下がりますが……」
古代の機械巨人　攻６０００→５５００
「そのかわり、２回攻撃の能力を得るノーネ！古代の機械巨人、もう１体のデーモンに攻撃！」
「むううううう……！」
古代の機械巨人　攻５５００→迅雷の魔王―スカル・デーモン　攻３０００（破壊）
タイタン　ＬＰ２０００→０

「つ、強い……」
いや別に、疑ってたわけじゃないけど。一瞬の反撃すら許さないクロノス先生の猛攻の前に、あっという間に勝負がついてしまった。もうね、さっきまでの苦労はなんだったのかって。せっかくメタイオン先生の参戦で僕も強くなったのに、周りの人たちの成長がそれ以上で埋もれまくっちゃってる気がする。
「お、覚えてるでアール！」
はあ、とため息をついたところで、ナポレオン教頭が捨て台詞を吐いてこっちに

ベー、っと舌を出しながら走り去っていくのが視界の端に見えた。短い足でそうやって後ろ見ながら走ってると……あ、やっぱ転んだ。痛そう。

「さてと、どうもこの島に来るとろくなことにならん。表の仕事もあることだし、私もそろそろ帰るとするかぁ。少年、今度機会があればまた相手してやろぅ」

そう言ってタイタンも、ぐずぐずしない辺りがいかにもプロらしいきっぱりとした動きでどこかへ帰っていく。

こうして、後には僕ら3人だけが残った。

「「ありがとうございました、先生！」

十代と声を合わせてお礼。実際、今回は先生に来てもらわなかったらかなり危なかった。僕一人で、あのデュエルに勝つことができたとは思えない。というか無理。あんなまな板の上の鯉みたいな状態まで持ってかれたら例えデュエルキングだって無理だろう。

「別に、たいしたことではないノーネ。二人とも、私がここに来たことは他の人には内緒ですからね？」

そうこともなげに言い、軽く伸びをしながら校舎に向けて帰っていくクロノス先生。僕もあんな感じの大人になりたいなあ、と思う。だって、カッコいいじゃない。

「なあ清明、俺とデュエルしようぜ！あんな凄いデュエルだったのに俺は見てるだけで

おしまいなんて、そりゃないだろ？」
　デュエル、か。いいかもしれない。もっと強くなるには格上の相手とデュエルするのがいいってのはよく聞く話だし、今の僕にはそれが足りてないような気がする。
「よし、それじゃあ……」
　デュエルディスクを構えたところで、ふと違和感に気づいた。心なしかデッキが軽いような気がする。ちょうどカード1枚分ぐらい……1枚分……1枚……
「ああーっ!!」
「ど、どうしたんだよ急に」
　ここに来てようやく、大変なことに気づいた。確かさっきのデュエルが終わって、それから……。
「ク、クロノスせんせー！僕のポセイドン・ウェーブ返して下さいよ～!!」
　大慌てで走り出す僕を一瞬ぽかんとした顔で見つめ、その後すぐに大笑いしながら追いかけてくる十代。全く、他人事だと思って。そうは思うものの、走りながら僕もこみあげてくる笑いが抑えきれない。何がそんなにおかしいのかは自分でもよくわからないけど、何となく声を出して笑いたい気分だ。
　ああもう全く、どうして僕が何かやるとほとんどいつもこんな最後が締まんない感じになっちゃうのかね。……ま、悪い気分じゃないから別にいいか。

ターン５２　冥府の姫と天球の司

「修学旅行ぅ？」
「そ。修学旅行だってさ」
「そっかー、もうそんな時期かー……」
　とある午後、一定の距離を置いて周りからちょいちょい睨んでくる白服相手にガンつけなから弁当を食べていると……どうでもいいけど、弁当って難しいよね。朝作って昼食べる関係上どうしても冷えるのは避けられないし、肉は炒め方によっては脂が固まりになって見た目が大変よろしくないことになる。保温機能付きの弁当箱お？そりゃまあ憧れの１つではあるけど、んな金がどこにあるってんですかねえ奥さん。奥さんって誰だ。だいぶ話がずれたけど、とにかく弁当を食べていたのだ。するとその隣に当然のような顔をして夢想が腰を下ろしてドローパンの袋を開いた。ちなみに中身は人参。夢想にしては珍しくそんなに引きがよくなかったほうだろうか。
「で、どこに行くんだっけ」
「えーっと、クロノス先生がイタリア。ナポレオン教頭がイギリス。樺山先生がカレーの本場インドに行きたいって言ってた気もするけどいつも通り黙殺されたから、この二

つが今のところ最有力候補かな、だってさ」

ふむ、イタリアかぁ。本場ピザ、もとい、ピッツァ（巻き舌）の作りかたとか教えてくれるいい講師はいないだろうか。スパゲッティの茹で具合に関して本場の人と意見交換してみたいし。いいなぁ、イタリア。でもインドもいいなあ。よくわからん香辛料とかすっごいいっぱい入ってる本場なんちゃらカレーとかも作れるようになったら料理のバリエーションがぐっと広がることは間違いない。日本人の舌に合うかどうかが問題だけど、少なくとも僕の舌には合うからまあ別にいいだろう。イギリス……は、うん、まあ。教頭には一人で行ってもらおうかな。

「……」

そんなことを考えていたら、それが顔に出ていたのか夢想がジト目でこっちを見てきた。

「清明、ここはデュエルアカデミアだよ？　Ｉ（インダストリアル・イリュージョン）２社のペガサスさんの故郷のアメリカならまだわかるけど、特にイベントも聖地もない外国行ってどうするの、だってさ」

あ、はい。返す言葉もございません。

「となると、そろそろ誰かが別の候補地を出してくるころかね」

「そうなんじゃない、なんだって。どこに行くにしても、楽しみだね」

楽しみ、か。どうだろうか。こういうイベントはできるだけ大勢でワイワイやる方が好きなんだけど、僕の友達はほとんど光の結社入りしてるから誘いづらい。そういう意味では、来年とかに引き伸ばしてもらう方がいいなあ。さすがにその頃には光の結社も片付いてるだろうし。

「それでさ、清明」

「うん？」

「その修学旅行なんだけど」

「うんうん」

何気なく聞きながら、卵焼きを１つ口に放り込む。む、ちょっと砂糖多かったかな。

「私と、一緒にどこか、行かない？なんて、思ったり……してるんだけど、どうかなー、なんて」

え。

「え、えっと夢想さん？」

「だから、もし暇なら私とどこか行かない？なんて」

マジですか。とは言わない。言いたいけど言わない。あんまりがっつくのはみっともないのだ、ここはクールに行こう。

「へぇ……僕とぉうふっ!!?」

舌噛んだ。すごく痛い。いかんいかん、あくまでもクールに。一度落ち着くためにお茶を飲もうとしたら、手が震えてペットボトルが倒れた。
「あっ」
僕の方に倒れたんならまだよかった。ああ濡れちゃったな、で済んだだろう。ただ問題は、それが夢想のいる方に倒れたということ。そしてもう一つは、その夢想の着ている学生服は光の結社ほどじゃないにしろ白を基調としたものであったこと。そして極めつけはそれが染みが取れないことで有名な飲み物、コーラだったことだ。

「すみませんでした」
「い、いや別に、ね。ほら、洗えば……」
あせあせしながらコーラのかかった部分を持ち上げて手でこするジェスチャーをして見せる夢想。気を使ってくれてるんだろうけど、それは無駄だ。あの手の飲み物の染みがどれほど恐ろしいものなのか、僕は嫌というほど知っている。小さいころに洗うよう言われて数時間ほど頑張ってみたものの徒労に終わり、最終的には頭に来て白い絵の具を上から塗りたくってやったら速攻でばれて盛大に怒られたのは嫌な思い出だ。
「もうちょっと持ち合わせがあれば今すぐにでも弁償できるんだけど、その……」

「う、ううん！本当に気にしなくていいから、ね!?だって！」
なまじ僕らの経済状況を知ってるだけに下手に文句を言うこともできない彼女の優しさが胸にしみる。これもみんな貧乏が悪い。
「と、とりあえず何かしらの服を用意して――――――」
「手ぬるいですわ！」
ちょっと落ち着いてきたところで、僕の背中に鋭い声が叩き付けられる。それから少し間を開けて、スパーンと小気味いい音を立てて何か柔らかいものが背中に当たる感覚。振り向いてみると、白いレースの手袋が床に落ちているのが見えた。
「そこのガサツなあなた、先ほどから無礼なことをしそうだったので監視させていただきましたが、あまりにもレディーに対する態度というものがなっていません。よってワタクシから本場イギリス風の決闘を申し込ませていただきます！」
ババーン！と音が付きそうなぐらいの勢いで現れたその女の子は、左手に白いレースの手袋をつけた純白のドレスにふわっふわのカールがついた髪型と、いかにも英国人かそのコスプレのような格好だった。わざわざこの島にいるってことは生徒で、僕が会った覚えがない女子ってことは多分今年入学してすぐ光の結社に捕まったんだろう。だからきっとこんな面白おかしい動きづらそうな恰好をしてるんだ。本人が楽しそうだからそれでいいと思うけどね。

「夢想、この子の名前わかる？」
「うーん……覚えがないかな、なんだって。こんな派手な子はいなかったと思うけど」
「ちょ、ちょっとあなたたち！決闘を申し込んだのですよ、もうちょっと反応なさい！それとワタクシは名誉あるデュエルアカデミアホワイト寮の一員、天下井（あまがい）ですわ、覚えておきなさい！」
　目をつぶって反応を待ってるドヤ顔を放置してふたりでひそひそ話しこんでいると、すぐに詰め寄ってきた。あっさり名前を教えてくれるあたり、根は素直な子なんだろう。
「決闘？決闘（デュエル）じゃなくて？ってさ」
「あ、いえ、そんなことはありませんわ。ワタクシのようにたおやかな淑女は、ガサツな殿方のように自らの拳を振り上げるような真似は致しませんもの。手袋を投げたのもあくまで形式的な行事ですのでお間違えありませんように」
「そですか」
　たとえどんななりしてもそこはデュエリスト、ということか。実際プロデュエリストにはそういう人も多い。実力ももちろんだけど、キャラや見た目のインパクトで毎回見てる人を楽しませてくれるタイプの。僕はその人がデュエルを楽しんでるならわりと見た目なんかは何でもいいです。

「あら、随分と静かになったわね。まあいいわ、だいたいあなた、その赤い恰好が気に入らなかったのよ。いつまでも廃寮寸前のオシリスレッドの制服なんか着て、カッコつけてるつもりなのかしら？こう言っちゃあなんですけど、かなり痛い子ですわよそれは」

さっき無視したのがよっぽど効いたらしく、もはやただの悪口になっている非難を大人しく聞く。これで相手が男ならブチ切れて手を出してくるまで煽り返すんだけど、うーむ。別に男女差別なんてする気はないけど、やっぱり女の子相手はやりづらい。

『マスターー……多分私の影響なんだろうがだいぶ腹黒くなったな』

そう言うチャクチャルさんはだいぶ丸くなったと思う。元からそんなに悪ってふうには思わなかったけど。ちなみに僕は元から割とこんなんだったはず。むしろアカデミアに入ってから大人しくなっただけで。

「ちょっと！聞いてらっしゃるの!?」

「うん、聞いてる聞いてる。いいよ、デュエルしようってんでしょ？なら今すぐ相手に」

「ねえ清明、ちょっと変わって。私、今日はまだ誰ともデュエルしてないから1回ぐらいデュエルしたいな、だってさ」

「ええー!?……しょ、しょうがないなあ。じゃあそこの君、悪いけど僕パスね」

いくら夢想の頼みでもデュエルできるならここは断ろうとも思ったけど、先手を打った夢想がこれ見よがしに茶色いコーラの染みの部分見せつけてきたせいで何も言い返

せなくなった。たった今起動したばかりのデュエルディスクの電源をもう一度切り、一歩下がって椅子に座りなおす。
「へ？え、ちょっと、ワタクシが決闘を申し込んだのはこちらの」
「僕もそう思うけど、ほらあれよあれ。レディーファースト的なサムシングよ」
とでも思わないとやってけない。まあ夢想のことだ、純粋に自分の欲望だけじゃなくて何かしらの訳があるんだろう。
「むうぅ……いいわよ、もう！こうなったら誰だって相手するわ、かかっていらっしゃい！」
「そう来なくっちゃ、だって」
「「デュエル!!」」
「先行はワタクシね、神秘の代行者　アースを召喚！このモンスターが召喚に成功した時、デッキの代行者モンスター1枚……創造の代行者　ヴィーナスをサーチするわ。さらに魔法カード、天空の宝札を発動。手札の光属性天使族、勝利の導き手フレイヤをゲームから除外することで、カードを2枚ドローしますわ。これでターンエンドですの」
なんで始まったのか今一つよくわからないデュエルは、よくわからないままに進んでいた。攻撃力１０００のモンスターを特にカードを伏せるわけでもなく攻撃表示で出

すとは、いかにも怪しいものがある。
でも、そんなことに頓着するような夢想ではない。
「私のターン、マッド・デーモンを召喚してバトル！ボーン・スプラッシュ！」
腹の中に頭蓋骨を持つ人型の悪魔が、勢いよく無数の骨を吹き付ける。てっきりオネストでも握っているのかと思ったが、以外にも緑の羽根を持つ天使はその攻撃にあっけなく倒れた。
マッド・デーモン　攻１８００→神秘の代行者　アース　攻１０００（破壊）
天下井　ＬＰ４０００→３２００
「きゃあっ！こ、この程度なんでもないわね！」
「そうかな？なんだって。カードを伏せて、ターンエンド」
天下井　ＬＰ３２００　手札：５
モンスター：なし
魔法・罠：なし
夢想　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：マッド・デーモン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「ワタクシのターン、先ほど加えたヴィーナスを召喚しますわ」

創造の代行者　ヴィーナス　攻１６００
続いて召喚されたのは、白と緑を基調としたアースとは違い黄色がかった色で統一されている天使。両腕を組んで黙想するその周りを、赤、青、水色の球体がぐるぐると規則正しく回っている。
「ヴィーナスは５００ライフを払うことで、デッキからこのモンスターを呼びだすことができますの。１０００ライフを払うことで、お出でなさい！神聖なる球体（ホーリーシャイン・ボール）！」
ヴィーナスの周りを飛び回っていた球体のうち赤と水色の球が軌道から外れ、モンスターゾーンにそれぞれ移動する。ステータスの低い通常モンスターとはいえ、これでモンスターの数は一気に３体に増えた。
天下井　ＬＰ３２００→２２００
神聖なる球体　攻５００
神聖なる球体　攻５００
「ふふふ、あなたのそのモンスターの効果はもうわかってますのよ！神聖なる球体でマッド・デーモンに攻撃！」
「マッド・デーモンは攻撃を受けた時、強制的に守備表示になる……」
神聖なる球体　攻５００→マッド・デーモン　攻１８００→守０（破壊）
「先ほどのお返しです、さらに２体のモンスターでダイレクトアタック！」

「きゃっ！」
神聖なる球体　攻５００↓夢想（直接攻撃）
夢想　ＬＰ４０００↓３５００
創造の代行者　ヴィーナス　攻１６００↓夢想（直接攻撃）
夢想　ＬＰ３５００↓１９００
「うう、ちょっと勘が鈍っちゃったかな？」
「あら、言い訳ですか？ですが容赦は致しませんよ、メイン２にカードを２枚セットして、ターンを終了」
「夢想ー、えらく調子悪いけど体調悪いの？」
彼女にしては珍しいイマイチな立ち上がりがだんだん心配になってきて思わず声をかける。さっきのドローパンの時も思ったけど、どうもパッとしないというかなんというか。まあ彼女だって人間だし、そんなときもあるんだろうとは思うけどね。
「私は平気……ドロー、魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動だってさ。手札１枚をコストに、デッキからレベル１モンスターのワイトを特殊召喚するね。そして今捨てたワイトプリンスは、墓地に送られた時にデッキか手札からワイトとワイト夫人を墓地に送ることができる。この２枚をデッキから墓地へ移動、なんだって」
ワイト　攻３００

きょとんとした顔でワイトを見つめる天下井。まあ無理もない、ワイト本人のステータスはヴィーナスはおろか球にすら勝てないのだから、女子にとっては特に何も感じないだろう。だけど男子にとっては違う。現にワイトの姿を見た瞬間、周りにいた光の結社の男子のうち約３割の顔色が変わった。というのもワイトは彼女のデッキの中である意味ではワイトキングやドラゴネクロ以上のトラウマ製造機であり、彼女にとっての裏のエースとでもいうべき存在なのだ。その武勇伝は男子の間に広く伝わっており、新学期が始まって一週間の時点でワイトキングばかり警戒して守護神の矛をつけたワイトに殴り殺された、彼女に『俺が勝ったら付き合って以下略』といかいうふざけた条件でデュエルを申し込んではぼっこぼこにされたオベリスクブルー生の数が最近ついに５０人を突破したというのは（男子の間では）割と有名な話である。

「装備魔法、守護神の矛をワイトに装備。このカードの効果で、ワイトの攻撃力は……」

「っ!?そんなことさせないわよ!トラップ発動、神の宣告!ワタクシのライフを半分にして、その発動は無効にしますわ!」

天下井　ＬＰ２２００→１１００

白い服のおじいちゃんが天から後光とともに降りてきて、ワイトが手にしようとしていた矛をぺしっとはたき落としてまた後光とともに天に返っていった。相変わらず、神

の警告のソリッドビジョン演出は無駄に気合が入っている。なんでも、この世に存在するあらゆる警告で無効にできるカードに対して専用モーションが用意されているらしい。青眼とかの実質検証不可能なカードを除いた全カードでの検証動画とかもあったけど、長すぎて途中で見るのやめちゃったんだよね。再生時間がものすごいことになってたのを見た衝撃は今でも覚えてるし。

だけど、そんな話も今は特に関係ない。守護神の矛が無効になった以上、ワイトに攻めるすべはないのだ。

「だったら、このワイトをリリースしてアドバンス召喚！龍骨鬼！」

しかし、そこで終わるような夢想ではない。というか、その程度の相手ならいくらなんでも学校中の全員がこの１年以上ずっと負け越すなんてことになるはずがない。続けて繰り出された次の手は、夢想の操るおなじみのモンスター、龍骨鬼だ。ワイト軍団よりも火力は下がるものの、安定感と地味だがあって困るもんじゃない効果が特徴の、骨軍団の副将ポジ。

龍骨鬼　攻２４００

「すでに上級モンスターを手札に持っていましたのね……」

「当然。ほら、私ってばカードに選ばれすぎてるからね、だってさ。バトル、竜骨鬼で神聖なる球体に攻撃！」

体の骨を一本おもむろに抜き取ってブーメランのように投げつけた龍骨鬼。ふわふわと浮かんでいるだけの球体は当然それに耐えきれるわけがない……いや、違う。攻撃の瞬間激しく輝いた球体から、皆のトラウマである忌々しい一組の天使の羽が生えた。

「ふふふ、残念ながらワタクシは先ほどのターンのドローで、このカードを手札に加えていましたのよ！あなたがカードに選ばれているというのなら、ワタクシは斎王様に、そしてその偉大なる光の力に選ばれた身。つまりは……」

「長い。早くしてね、だってさ」

「あらら、申し訳ありませんわ。手札からオネストの効果を発動！これであなたのモンスターは……あら？」

龍骨鬼　攻２４００→２７００→４１５０→神聖なる球体　攻５００→２９００

ダメージ計算の瞬間、龍骨鬼の攻撃力数値が跳ね上がる。よりリアルな動きを追及するために刻一刻と動き、のんびりしてると勝手にバトル終了まで処理してしまうという微妙に不親切な仕様のソリッドビジョンをあの一瞬の間に確認して変化に気づけるだなんて、この子なかなかできる。

「トラップカード、メタル化・魔法反射装甲を発動。このカードは発動後に攻守３００ポイントアップの装備カードになって、さらに装備モンスターが攻撃するときのダメージ

計算時に相手の攻撃力の半分だけパワーアップさせるの。ダメージ計算時の攻撃力アップはオネストによる強化のさらに後だから、これなら押し負けないよ、だってさ。なかなか強かったけど、これで私の勝ち……あれ？」

龍骨鬼の骨を叩き付ける一撃は、確かに光の球を粉砕した。だけど妙だ、まだデュエルが続いている。

「はぁ、はぁ……て、手札からクリボーの効果を使わせていただきましたの。この戦闘でワタクシが受けるダメージは０になりますわよ」

「へぇ、今年の一年生は本当に優秀な子が多いね、ってさ」

「あら、ワタクシどもの間でも伝説の先輩、無双の女王様にそう言ってもらえるなんて光栄ですわね」

「なにそれ初耳。夢想、そんな二つ名とかもらってんの？いいなー」

「いや、私も初耳なんだけど……って言ってるみたい」

「そうでしたの？もうてっきり本人公認かと思いましたのに。さあ、することがないならターンエンドして下さらない？」

「え、ちょっとその話もうちょっと詳しく聞かせてくれない？って」

何が起きても余裕たっぷり、といった様子の夢想も、まさか自分に二つ名が（勝手に）つけられていたことは予想外だったらしい。僕にもその気持ちはちょっとわかる。あ

れ、慣れるまでは結構恥ずかしいからねえ。
「申し訳ありませんが、嫌ですわよ。そんなに聞きたければ、ワタクシたちの仲間になって斎王様に占ってもらったらいかがですの？」
「……もういいよ、だってさ。１枚セットしてターンエンド、みたい」
天下井　ＬＰ１１００　手札：１
モンスター：創造の代行者　ヴィーナス（攻）
神聖なる球体（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
夢想　ＬＰ１９００　手札：０
モンスター：龍骨鬼（攻・メタル化）
魔法・罠：メタル化・魔法反射装甲（龍）
１（伏せ）
「ふふふ、ようやくワタクシのターンが巡ってきましたわね。ドローカード、マスター・ヒュペリオンの効果を発動！このカードは場か墓地の代行者１体を除外し、手札から特殊召喚できますわ。メリット効果もちの２７００打点がこんなに簡単に特殊召喚できる……まさにマスターの名にふさわしい、代行者のトップとして申し分ない能力ですわね。ちなみに除外はヴィーナスにいたします」

なぜか墓地にいるアースではなく、フィールド上のヴィーナスを除外して召喚された大天使。金色の体と太陽のように燃える翼が何とも眩しく、少しサングラスが欲しくなってくるぐらいだ。もしかして、デュエルディスクの設定から明度いじったりしてるんだろうか。

マスター・ヒュペリオン　攻２７００

「ここでワタクシ、ヒュペリオンの効果を使用しますわ。１ターンに１度墓地の光属性天使族を除外することで、場のカード１枚を破壊いたします！墓地のアースを除外して竜骨鬼を破壊……イリアコン・システィマ・ドクサ！」

ヒュペリオンが体の前で構えていた天球のうち内側から３番目、つまり地球を示す球が光りだし、そこから一筋のレーザーが放たれる。聖なる光の前になすすべなく龍骨鬼の骨が、そして胸にある核の部分が解けて消えていく。

「バトル！これで終わりにしますわ、マスター・ヒュペリオンのダイレクトアタック！」

「針虫の巣窟！」

「針虫……確か自分のデッキからカードを５枚墓地に送るカードでしたわね。構いませんわ、ヒュペリオン！そのまま攻撃なさい！」

夢想がデッキの上から５枚のカードを掴み、一斉に墓地に送る。普段はワイトを墓地に送りつけるために使うカードだけど、今この場にワイトキングはいない。

「危なかった、なんだって。自分の手札が０枚で相手が直接攻撃するとき、墓地からタスケナイトの効果を発動！１度だけこのモンスターを蘇生して、バトルフェイズは強制終了だよ」

タスケナイト　攻１７００

このターンの攻撃をしのぎ切った夢想。とはいえこれで手札も場もすっからかんだ、決して安心できるような状況ではない。

「神聖なる球体は、そうですわね。これ以上のオネストがない以上、攻撃表示にする意味がありませんわ。メイン２に移行して守備表示に変更、これでターンエンドですわよ」

神聖なる球体　攻５００→守５００

「私のターン、ドローなんだって。ふふふ、来た来た。ワイトキングを召喚するみたい」

「なんですって!?確かワイトプリンスとワイト夫人には、それぞれ墓地にいる限りワイトとして扱う効果が……！」

「そう。そしてワイトキングの攻撃力は、墓地のワイトの数を１０００倍した数値。そして今私の墓地にはさっきまでで４体、さらに針虫で３体の計７体のワイト一族がいるよ、だってさ」

ワイトキング　攻７０００

「ワイトキング、攻撃してね」

「冗談じゃありませんわ、ちょっとお待ちになりなさい！降なる気がして温存しておいたのは正解でしたわ、ワタクシはメインフェイズ終了前に手札からエフェクト・ヴェーラーの効果を使います！」

「……しつこいね、だってさ。あ、怒ってるんじゃないからね」

エフェクト・ヴェーラーは対象にするモンスターの効果をエンドフェイズまで無効にする能力を持っている。いわゆる脳筋のワイトキングも、効果を無効にされては元のワイトよりステータスの低いモンスターになってしまう。

ワイトキング　攻７０００→０

「タスケナイトを守備表示にして、ターンエンド」

タスケナイト　攻１７００→守１００

「そして、この瞬間にエフェクト・ヴェーラーの効果も切れますわね。まあ問題ありませんわ、ドロー！」

天下井　ＬＰ１１００　手札：１

モンスター：マスター・ヒュペリオン（攻）

神聖なる球体（守）

魔法・罠：１（伏せ）

夢想　ＬＰ１９００　手札：０

モンスター：ワイトキング（攻）
　　タスケナイト（守）
魔法・罠：なし
ワイトキングのステータスは元に戻った。だけど、さっきのターンに勝負を決められなかったことで夢想のピンチに変わりはない。なにしろ、まだ天下井ちゃんの墓地には神聖なる球体が、つまりヒュペリオンの効果コストが1体残っているのだから。
「墓地の神聖なる球体を除外！お受けなさい、イリアコン・システィマ・ドクサ！」
「ワイトキングを対象に墓地からスキル・プリズナーを発動！このターンの間、選んだモンスターに対するモンスター効果を無効にするよ、って」
クルクルと回る天球の中心から2番目の球体から放たれた光が、ワイトキングの正面で見えない壁に阻まれたように霧散する。なかなか思うようにいかないその様子に若干眉をひそめながらも、すぐに気持ちを切り替えたようだ。
「仕方ありませんわね。ですが、まだ終わりではありませんことよ？フィールド魔法、天空の聖域を発動！このカードが存在する限り、天使族モンスターによるワタクシへの戦闘ダメージは0になりますわ。ですが、それだけじゃあありませんの。マスター・ヒュペリオンは天空の聖域のもと、1ターンに2度破壊効果を使うことが可能となります！墓地からオネストを除外してタスケナイトを破壊、もう1度イリアコン・システィマ・ド

クサ！」
　夢想の墓地にこれ以上の仕掛けはなく、背中に大剣を背負った赤い騎士が光を浴びて破壊される。しかしこれ、完全にぐだってきてるね。いつまでたっても一進一退で全然進まない。だけど、そろそろだ。そろそろ何かしらの動きがあってもおかしくない。
「……ターンエンドですわ」
「ドロー。ねえ、天下井ちゃん」
「はい、なんですの？」
　いつになくシリアスな雰囲気で静かに目の前の相手に話しかける夢想。その様子にさっきまでとは違うものを感じ取ったのか、やや表情を硬くして対応する。
「覚悟してね、だってさ」
「へ？」
「魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地のマッド・デーモン、タスケナイト、龍骨鬼、ワイトメアにワイト夫人をデッキに戻して２枚ドロー。墓地のワイトが減っちゃったから、ワイトキングの攻撃力は５０００に下がるんだってさ」
　ワイトキング　攻７０００→５０００
「なるほど、ここで貪欲な壺を当たり前のように引きましたか。その運命力は確かに素晴らしいですわね。それだけにもったいないですわ、斎王様の光の御力があればその能

力をさらに高めることだって簡単でしょうに」
「ふーん。悪いけど、これは私の力じゃないよ、だってさ。たとえ私が望まなくても、このデッキは私に力を与え続ける。いかなる形であろうとも、私が最終的な勝者になるまで、ね。だから、貴女の言葉は的外れ。私じゃなくてこのデッキそのものを勧誘したら？って言ってるみたい」
「は、はい？どういうことですの？」
　あなたなんとか解説しなさい、と言わんばかりの視線がこっちに向けられたのを感じるが、正直僕にも今の言葉の意味はまるっきり分からない。声のトーンやらなんやらから考えるにどうもネタや冗談ではなさそうなんだけど、真剣にしゃべってるとしてもちょっとよくわからない。デッキが強制的に勝たせるだなんて、そんな真似精霊だらけの僕のデッキでも無理だろう。そもそも、夢想には精霊が見えないはずだ。
「ううん別に、だって。聞き流してもらって構わないよ、ってさ。魔法カード発動、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）。このカードは墓地のモンスターを素材にしてドラゴン族の融合モンスターを呼びだすカード……それじゃあいつものいってみようか、だってさ。冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い。墓地のワイト2体を素材にして融合召喚、冥界龍ドラゴネクロ！」
　天空の聖域に浮かぶ空中神殿の一部に亀裂が走り、そのまま神殿を突き破って冥界の

龍が長い首を突き出す。風圧によって周りの雲もちぎれて消えてゆき、粉々になった瓦礫がただワイトキングとドラゴネクロの足元に散らばっているのみだ。別に聖域破壊されてないのにね、とか思っても言ってはいけない。

「ドラゴネクロ召喚のために墓地のワイトとワイトメアを除外したから、ワイトキングの攻撃力はさらに２０００ポイント下がるみたい」

冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００

ワイトキング　攻５０００→３０００

「いいえ、まだ、まだですわ！ワタクシのこの伏せカードはトラップカード、魂の一撃。あなたの残りライフ、そしてそのモンスターの攻撃力では例えドラゴネクロの特殊能力をもってしてもライフポイントを半分支払うことで自分のモンスター１体の攻撃力を４０００マイナスその時点でのライフの数値だけアップさせる、このカードの突破は不可能ですわよ！」

「確かにね、だってさ。でも、だったら戦わないだけ。そこの眩しい天使には悪いけど、真正面からぶつかることができないなら他のところから回り込ませてもらうよ。魔法カード発動、クロス・アタック。自分フィールドに同じ攻撃力のモンスターが並んだ時、他のモンスターが攻撃できなくなる代わりにそのどちらかは直接攻撃できるようになるみたい。バトル、ワイトキングでダイレクトアタック、螺旋怪談！」

「う、嘘……」

ワイトキング　攻３０００→天下井（直接攻撃）

天下井　ＬＰ１１００→０

「おめでと、夢想。ほらほら、そんなとこで座ってたら風邪ひくよー」

「どういたしまして、なんだって……むっ」

ソリッドビジョンが消えて、辺りの風景が天空の聖域からもとの校内に戻っていった。いくら光の結社とはいえ女の子を放っておくのは趣味じゃないので、へなへなと力が抜けたようにその場にへたり込んでいる天下井ちゃんに手を伸ばす。やや夢想の視線がキツイ気がするのはたぶん気のせいだと思いたい。やっぱ怒ってるんだろうな、染みのこと。

「あら、ありがとうございますわ……って！ちょっとあなた、ワタクシに気軽に触れないでくださいます!?」

おっと、思ったより元気なのね。一瞬はぼんやりしたまま僕の手を掴んだものの、すぐにはっとしたように振り払ったかと思うとそのまま立ち上がってスカートを手で踏んづけて転ばない程度に持ち上げながらパタパタとどこかへ走り去ってしまった。

「清明、今ちょっと残念そうじゃなかった？」
「え？いや、別に」
「ふーん。まあいいけど、だってさ」
やっぱりどこかよそよそしい態度の夢想。……制服のクリーニング代っていくらぐらい出せばいいんだろうか。今月のレッド寮の赤字額をざっと暗算して、いくらぐらいまでならギリギリ出せるか考えていると、底抜けに明るい声が聞こえてきた。
「おーい、ここにいたのか清明！今光の結社のやつとデュエルしてさ、修学旅行、童実野町に決まったぜ!!」

……え？
一瞬、ほんの一瞬だけ固まってしまった。ただでさえ光の結社関係で気苦労の多い十代に余計な心配をかけたくないので、無理やり笑顔を作り出す。
「そ、そう。デュエリストの聖地じゃん、やったね」
「おう！あー、俺もう今からワクワクが止まらないぜ！」
「あは、あはは……」
童実野町、か。……童実野町、か。

だけど、その瞬間自分のことで頭がいっぱいになってた僕は気づかなかった。夢想もまた、その地名を聞いた瞬間に顔がこわばっていたことに。

ターン５３　冥府の姫と純白の龍

窓から見える港が徐々に近づいてきて、ガコン、と船体に軽く衝撃が走る。特にこれといった小競り合いや事故もなく、僕らを乗せた船が童実野埠頭に到着したのだ。
「着いちゃったかぁー……」
「童実野町、入学試験以来だぜ！」
僕が死んで生き返ることになった地でもあるけど、それだけじゃない。少なくとも卒業までは来ることはないと思ってたんだけど、人生そううまくはいかないもんだ。
『マスター、一体何があったんだ？行先が決まってからずっとそんな調子で、そろそろ私にぐらい教えてもらってもいいだろう』
「あれ、何回か言わなかったっけ？僕の記憶でもなんでも好きに漁っていいよってば」
よくわかんないけど、神様ならそれくらいのことはできるだろう。いくらチャクチャルさん相手でもあんまり歓迎はしないけど、このことについてはあまり思い出したい話じゃないから、自分で話すぐらいならむしろ勝手に探ってくれる方が個人的にはありがたい。
『マスターが言う気になるまで待つさ。例え邪神と呼ばれようと、モラルぐらいは備え

ている』
「……なんか、ホントに変わったよね。初対面の時はもっと威厳たっぷりだったのに」
『いまさらキャラ作る必要はあるまい』
冗談だか本気だか判別のつきにくいことを呟き、そのまま頭の中のチャクチャルさんが引いていく感覚がする。気を使ってくれてるんだろう、多分。
「え～、それでは皆さん、本日の予定ですが……」
「ああ、失礼。私たちはこの町に少し用事があるので、ここから先は別行動としてもよろしいでしょうか？」
「え？ま、まあ、そういうことなら仕方ないでアール。御機嫌よう」
「ありがとうございます。では」
ぼーっと見てたらそんな会話の後、ぞろぞろと白い集団がどこかへ一斉に歩き去っていった。後に残ったのは僕と十代、翔に剣山と夢想、そしてエドだ。
「あれ意外。いいの？斎王のとこ行かなくて」
「フン。僕は斎王の友人であって、光の結社に入っているわけではないからな。彼がどこに行くかは僕も知らん。とはいえ、僕も個人的な理由からこの場からは去らせてもらいますよ」
相変わらずのデカい態度でそれだけ言うと、斎王たちとは反対の方角に歩き去って

行ったエド。おかしいな、全校、どころかなぜか当然のような顔でついてきたノース校含めて学校二つ分の人数で来たはずなのになんで到着3分で１０人以下になるんだろう。

　そのあまりと言えばあまりの様子に、行先がイタリアでもイギリスでもなかったために元からやる気のなさそうだった引率の2人が完全にやる気をなくしたらしい。

「えー、それではこれ以降は自由行動でアール。帰りの船に乗り遅れたものは置いていくので、各自そのつもりで。じゃ、そゆことで」

「皆さん、くれぐれも気を付けるノーネ」

　……多分何を言っても無駄なんだろう、今のこの人たちには。どんだけ外国行きたかったんだ。

「さて、と。じゃ、僕もちょっと自由にさせてもらうわ」

「あれ、お前も俺たちと来いよ！あの武藤遊戯さんのお爺さんが住んでるんだ、もしかしたら遊戯さんがいるかもしれないし会いに行こうぜ！」

「清明君も行こうよー」

「そうだドン、先輩も来るザウルス」

　なんか色々声を掛けられたけど、そんな気分ではないので軽く手をふって皆と別れる。と思ったら、なぜか夢想だけが同じ方向に向かって歩いてきた。ちょっと見つめて

いると、気にしないで、と言わんばかりに手を振ってくる。
「私は駅に行きたいから。ここからだとこっちが一番近いよね、って」
「う、うん……」
確かに、ここからちょっと行った先のとあるケーキ屋を右に曲がってのルートなら10分も歩けば電車に乗れる。だけど、なんでそんな地元民しか知らないようなルートを知ってるんだろう。
まあ、ここまでくればなんとなく予想つくけどね。
「清明はどこまで行くの？だってさ」
一瞬迷ったけど、その道で駅まで行く気なら隠す意味もないだろうと観念する。そこまで隠し通したい話でもない。
「そこのケーキ屋」
「ふーん」
何か聞かれたらどこまで話そうかとも思ってたけど、幸いなことにそれ以上は何も言ってこなかった。
「じゃ、僕はここで」
「……うん、だってさ」
別段変わったこともなく、そのケーキ屋の前にたどり着く。夢想と別れの言葉を交わ

してから軽くチェックをしてみると、こじんまりとした店の周りにはごみ一つ落ちてなく、毎朝きちんと掃き掃除していることがよくわかる。ただ、そこで店のガラスがちょっと汚れてるのを放置する神経が僕にはわからない。情けない。

「コホン。……オイコラ生きてっか馬鹿親父ぃ！」

これが僕がここに行きたくなかった理由。わざわざ修学旅行で自分の出身地に行くとか、バカバカしいにもほどがある。もっとも、他のメンバーを呼ばなかった理由はもう一つあるんだけど。なるべく大声を張り上げながらドアを蹴破るぐらいの勢いで開け放って中に入ると案の定、すぐに反応が返ってきた。

「あー？なんだ金食い虫のドラ息子、お前こそまーだ生きてたのかよ？」

「見てのとーり、1年前から死んでるよっと。まあせっかく来たんだし、お茶の一杯でも用意しといてよ。僕は線香上げてるからさ」

「勝手にしてろ、奥の部屋な」

「はいよ。場所は変わってないね」

誰もいない店の中を突っ切って居住スペースに入り、その奥にある仏間に向かう。これが、他の皆を誘わなかった理由だ。この人の墓参りを欠かすつもりはないけど、そんなもの十代たちに見せたら変に気を使われる可能性がある。今はみんないろんなことがあるのに、こんな僕一人の個人的な理由で貴重な旅行の時間を無駄にさせたくない。

決して豪華とは言えないまでも大切に扱われてることがよくわかる仏壇の前に正座で座り込み、線香を1本取り出して半分の長さに折ってからマッチで火をつける。軽く手であおいで白い煙が薄く出るようにすると、それをすっと差し込んだ。そのまま静かに手を合わせる。

「ふー……なんで起こしてくんないのさ」

『起こせるわけないだろう』

気づかないうちに、仏壇の前で眠りこけていたらしい。気づかないうちに疲れてたのか、それとも中の人に天国から呼ばれてたのか。個人的には後者の方が好きだな、そのほうがロマンチックじゃないの。

「ほーう、今あの馬鹿たれはそんなことやってんのか。ったく、お前はまだ商売するほどの腕じゃねぇだろってのは釘刺しといたはずなんだけどな」

「で、でも清明も頑張ってるんですよ、って」

「邪魔したねー……って。なんでいるの夢想!?」

店に戻ると、なぜかうちの親父と夢想が紅茶とケーキで優雅なティータイムを送ってた。どうなってんのこれ、と思う間もなく親父のどら声が狭い店内に響き渡る。

「ちょっと店の前に戻ってきたらこの人に話しかけられて……」
「おう、こっちの嬢ちゃんから全部聞かせてもらったぜ。こんの親不孝もんが、なぁに親にも黙って勝手に支店出してやがる！『ＹＯＵ　ＫＮＯＷ』はうちの店名だろうがこのアホ！」
「うっ!?そこなんでばらしちゃうのさ、夢想」
「あー、まずかったみたいだね……ごめんね清明、だってさ」
　そう、実は僕の店の店名はうちの実家、親父のケーキ屋のものをまるっと拝借したものだったのだ。他の名前を付けたほうがいいのは重々承知だったけど、それでもこの名前以外はどうしてもつける気になれなかったのだ。
「ハー……悪かったよ、親父」
「ったく、それで？」
「え？」
「ちったぁマトモなもん作れるようにはなってんだろうな。冷蔵庫にスポンジの余りがあるから、今すぐ一品作ってみろ」
　もっと雷を落としてくるかと思ったけど、意外にも静かな親父の声。当然、受けて立つ以外の選択肢はない。
「少々お待ちを。去年の僕と一緒にしてもらっちゃ困るね」

清明が厨房の方に引っ込んでから、彼の父親……遊野堂(ゆうのどう)は自身の目の前のティーカップを取り、中身の紅茶を一息で飲み干した。先ほどとはうってかわって穏やかな調子で、やや緊張気味の夢想に話しかける。

「さて、と。見苦しいとこ見せちまってすまんね、お嬢ちゃん」

「いえいえとんでもない、だって。むしろ私こそ久しぶりに親子が会うのに邪魔しちゃって申し訳ありません、って」

恐縮しながら謝る夢想を手で押しとめる仕草はどことなく清明と似ており、確かにあの二人が親子であることがよくわかるように彼女には見えた。もっとも、本人たちは否定するだろうから心の中にとどめるだけにしておくが。

だが、それが表情に少し出ていたらしい。やや訝しげな顔をする堂に対してなんでもない、という風に笑いかけ、彼女もティーカップの液体を口に運ぶ。これまで清明の淹れる紅茶を幾度も飲んできてそれなりに舌の肥えてきた彼女ですら味わったことのない芳醇な味が口の中に広がり、思わず目を丸くした。これまで飲んできた紅茶と何も変わらない種類なのに、淹れ方が違うとここまで味に差が出るものだろうか。聞いているかもしれない清明に気を使って口にはしないが、少なくとも紅茶に関しては清明はまだ

まだ父親を抜くことはできないだろうとひそかに確信する。
「あの、この紅茶って」
「ああ、これか？ふふふ、コイツは妻に教わった秘伝の技だからな、アイツ(清明)が知らなくても無理はねえだろう」
「え？どうしてですか、だって。清明のお母さんって……」
　引っかかる言い方に疑問をぶつけてみると、堂はなんだあの息子彼女に向かってそんなことも言ってないのか、と若干顔を歪ませる。
「アイツが物心ついてすぐにいなくなっちまったよ。交通事故でな、いい女だったよ」
「あ……ごめんなさい、なんだって」
「おいおい、嬢ちゃんが謝ることはないだろ？悪いのは親の話を高校でまるっきりしなかったあの親不孝もんのほうだってーの。どうせあの馬鹿息子のことだ、黙ってりゃばれないとでも」
「でも、それは違うと思います、だって」
　彼女にしては珍しく、人が喋ってる間に割り込んでまで声を上げる。その懸命な様子に思うところがあったのか、堂はそれ以上何も言わずに夢想の次の言葉を待つ。
「多分清明は、私たちに同情してほしくなかったんだと思います、って。私が清明と初めて会ってからまだ1年しか経ってませんけど、清明がそんな正確なのは十分以上に知っ

てます。いつだって誰かに同情されないように、誰にも気を使わせないように自分が一番気を使って、苦しいことだって最後の最後まで一人で抱え込んで解決のめどがつくまで私たちには何も言わないし、それに、それに」
「わかったわかった。それぐらいにしときな、嬢ちゃん。でないとアイツにも聞こえっちまう」
「でも」
「それにな、俺だってそんなことは気づいてるさ。なにせアイツの親を一人で１０年以上やってきてんだからな。絶っっ対アイツの前では言わんけど、アイツは俺みたいなやつから生まれたとは思えないぐらいいい息子さ。どれ、そろそろ味見にでも行ってやるかね。すまないが嬢ちゃん、少しの間店番頼まれてくれ。紅茶の代金がわりってことで、な」
「……はい！」

　それからしばらくの間、誰ひとりやってこない店内で大人しくしている夢想。なんでこんなに美味しい店なのにお客がいないんだろう、と大きなお世話だと知りつつも訝しんでいると、彼女のデュエリストとしての感覚に何か訴えかけるものを感じた。それと

同時に店のドアが開き、一人の男が入ってくる。
「いらっしゃいませ、だってさ……貴方は！」
「よう、久しぶり。ドラゴネクロは使いこなしてるみたいだな」
　その声を聞きながら、そう言えば前にこの男と会った時もこんな感じだった、とぼんやり思い返していた。誰かがいてもおかしくないのに、彼が出てきたときは近くに鳥すら飛んでいない。去年の彼女に冥界龍のカードを手渡し、最後まで謎めいたことを呟きながら世界に４枚しかないはずの青眼の白龍を使いこなしていた男。自分の名前すら名乗らずにどこかから来てどこかへと去っていった、得体のしれない男。
「おいおい、そう警戒するなよ。今回はちょっと忠告に来ただけさ」
「忠告？」
　この男の話に耳を傾けるのは危険だ。そう思いながらも、彼女は自分を止めることができない。まるで、ずっと昔から知っている、信用している相手の話を聞こうとしているように。
「ああ。もうじきこの町はかなりヤバいことになる。俺らが知ってる世界よりも数段な。つっても、お前は覚えてないんだったな。えいくそ、なんて言ったもんだか……もうなんだっていい、今すぐこの町から離れるんだ！頭数増えた帝使いが揃いも揃って暴走中の上位種精霊引き連れてこの町ごと結界に入れようとしてるんだよ！」

「……え？」

一体この男は何を言っているのか。まるで漫画かアニメのような、常識からはるかにかけ離れた発言にさすがの彼女も若干引き気味になる。そんな目で見られていることに気づいた男は舌打ちし、最善の策が駄目なら次善の策だといわんばかりにデュエルディスクを構える。

「まぁ、こーなることは薄々わかってたけどな。説明してる時間が惜しい、力づくにでも引っ張り出してやるよ。下手に干渉するのはまずいってドラゴネクロの時もさんざん大目玉喰らったんだけどな、これも昔のよしみだ。ほら、さっさと構えろよ。今回はマジでヤバいんだ、改変なんて騒ぎじゃないことになる」

何を言ってるのかは1ミリも理解できなかったが、とにかく勝てばいい。ならば何も問題はない、いつも通りにカードを使えば必ず勝つ。面倒事は全て決闘（デュエル）で片が付く、それが常識というものだ。

だがその前に周りを見渡してそこが店内であったことを思い出し、無言でドアの向こうの外を指さす。当然のようにそこも、人っ子ひとり歩いていないゴーストタウン状態だ。

「いいぜ、こんな狭い店じゃ俺のかわいい青眼（ブルーアイズ）も見栄えしないしな」

そう言い、半ば飛び出るように外に出る男。なにを言ってるのかはいまださっぱりだ

が、少なくとも彼が急いでいるのは間違いなさそうだと結論付ける。巻き込まれまいと気を付けはするものの、ついついそのペースにつられて彼女も早足で外に出てデュエルディスクを構える。

「あと何分ある？早いとこ終わらせねえと俺まで巻き込まれちまう。よし、さっさと終わらせてやるよ」

「「デュエル！」」

「先行は俺、か。魔法カード、トレード・インを発動。手札に来たレベル８モンスター、青眼を捨てて２枚をドロー。カードを２枚セットして、ターンエンドだ」

「私のターン！」

モンスターはなく、場には２枚の伏せカードのみ。今なら楽に攻撃が通るとは思うものの、そんな簡単に事が運ぶわけがないと警戒する。

「魂を削る死霊を攻撃表示で召喚、バトル！」

魂を削る死霊　攻３００

警戒するが、したからといって手札が変わるわけでもない。この手札なら返しの攻撃も十分防げると考え、いちかばちかの死霊の効果……戦闘ダメージを与えた時のハンデス能力を使ってみることにする。大鎌を掲げた死神がふわりと宙を舞い、力任せに振り下ろす。

「おっと、そんなのに構ってる暇はないもんでな。速攻魔法発動、銀龍の轟咆(ごうほう)！このカードは墓地のドラゴン族通常モンスターを蘇生させる能力がある！甦れ、青眼(ブルーアイズ)！」

死霊の一撃に待ったをかけるように、青い体の巨体が地の底から現れる。その爪で鎌を払いのけようとして、

「手札からD．D．クロウの効果を発動！このカードを墓地に送って、貴方の墓地から轟咆よりも早く青眼を除外するみたいだよ」

どこからともなく飛んできた異次元のカラスがその体に特攻を仕掛け、ブルーアイズの体がぐにゃりと歪んで徐々に異次元に吸い込まれていく。轟咆が不発に終わったことで再び死霊の攻撃が繰り出される、かに思えたのだが。

「いいや、カウンタートラップ、天罰を発動！手札を1枚捨てて相手の効果の発動、つまりそのカラスを無効にして破壊する！」

「っ!!」

モンスターを出さなかったにもかかわらずの余裕っぷりから伏せを何かしらの蘇生カードと予想したところまではよかったのだが、もう1枚が天罰とはさすがに見抜けなかった夢想。再び空間を捻じ曲げて戻ってきた白い龍が、今度こそ死神の鎌を防いだ。

青眼の白龍　攻３０００

「さ、することないならさっさとエンド宣言しな。何度も言ってる通り、時間は全然ない

んだ」

「……カードを3枚セットして、ターンエンドするって」

男　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：青眼の白龍（攻）

魔法・罠：なし

夢想　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：魂を削る死霊（攻）

魔法・罠：２（伏せ）

「ほんじゃま、俺のターンですよっと。青き眼の乙女、召喚とくらぁ」

「そのカードは……」

青き眼の乙女　攻０

前回のデュエルでも彼女を苦しめた、攻撃力３０００を誇る青眼を何度でも場に出すことが可能な恐ろしい効果を持った女性モンスター。力押しが軸の彼女にとっては、こういった搦め手が得意なカードは苦手だったりする。

「嫌だから、退場してもらおうかな。トラップ発動、激流葬！だって」

召喚反応系カードの中では、奈落の落とし穴と並んで最もポピュラーな1枚。対象を取る効果からなら身を守るドラゴンを呼び出す乙女も、対象を取らない全体除去の前に

はなすすべない。死霊が一緒に流れて言った気もするが、そんなことは些細な犠牲である。

「あー、俺の主力！しょーがねえなあ、ったくもう！自分フィールドにモンスターが存在しない時、フォトン・スラッシャーは手札から特殊召喚できる！特殊召喚したコイツでそのままダイレクトだ！」

フォトン・スラッシャー　攻２１００→夢想（直接攻撃）

夢想　ＬＰ４０００→１９００

「はっ、どうだ！」

「まだまだ……ってさ！トラップ発動、無抵抗の真相！ダイレクトアタックを受けた時、手札とデッキから同名レベル１モンスターを特殊召喚できる！来て、ワイト」

ワイト　攻３００

ワイト　攻３００

「一発入れたことには変わりねえんだ、どっからでもかかってこいや」

「おっしゃる通りに、だってさ。私のターンに魔法カード発動、トライアングルパワー！このカードの効果を受けられるのはレベル１の通常モンスターだけだけど、効果はその分強いんだってさ。エンドフェイズに自壊する代わりに、攻守２０００ポイントアップするみたい」

みすぼらしい恰好の骸骨２体のかつて目があった箇所に再び一時的な炎が宿り、それぞれ個性的なポーズで有り余る力をアピールしだす。

ワイト　攻３００→２３００

ワイト　攻３００→２３００

「それから、ワイトのうち片方をリリース。アドバンス召喚、龍骨鬼、って」

龍骨鬼　攻２４００

ワイトを並べたのちに龍骨鬼のアドバンス召喚、夢想おなじみの陣形である。だが今回は、ワイト自身が戦いに出るといういつもとの大きな違いがある。

「バトル、だってさ。龍骨鬼でフォトン・スラッシャーに攻撃！」

骨の鬼が口から火の玉を吹き出し、光子の刃がそれを切り裂こうとして迎え撃つ。２つの力が拮抗……するようなことは特になく、スラッシャーの体が炎の中に崩れ落ちる。

龍骨鬼　攻２４００→フォトン・スラッシャー　攻２１００（破壊）

男　ＬＰ４０００→３７００

「そのままワイトで攻撃！」

ワイト　攻２３００→男（直接攻撃）

男　ＬＰ３７００→１４００

「どうかしら？だってさ。エンドフェイズにワイトが自壊、ターンエンドみたい」
罠の張りあいとでもいうべき最初の攻防に対し、単純な殴り合いとなった今のターン。状況はやや夢想有利だが、彼女はまだ気を抜かない。
男　ＬＰ１４００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：なし
夢想　ＬＰ１９００　手札：０
モンスター：龍骨鬼（攻）
魔法・罠：なし
「時間ないんだがなあ、俺のターン！ちっ、時間稼ぎしても意味ないってのに……青き眼の乙女、召喚。ターンエンドだターンエンド！」
青き眼の乙女　攻０
「私のターン。さーてどうしようかな、だって。ドロー、攻撃、は……しないかな」
「ま、そうなるだろうな」
「もちろん、って。カードをセットして、ターンエンド」
男　ＬＰ１４００　手札：１
モンスター：青き眼の乙女（攻）

魔法・罠：なし
夢想　ＬＰ１９００　手札：０
モンスター：龍骨鬼（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
自身の伏せカードに絶対の自信があるのか、伝説に最も近い位置にあると言えるドラゴンを前に余裕の表情で迎える夢想。一体どんな戦略を考えているのかは、その表情からはうかがい知れない。
「俺のターン。除去が来るまで待ってる暇はねえ、速攻で決めてやらぁ！装備魔法、ワンダー・ワンドを乙女に装備してっと。こいつは装備モンスターと一緒にリリースすると２枚ドローする効果があるが、俺が狙ってるのはそこだけじゃないんだな、これが。装備魔法は装備されるときに当然そのモンスターを対象にとる、つまり乙女の効果が発動する！デッキより出でよ、青眼！」
青眼の白龍　攻３０００
「２体目の……青眼！」
「さあ、バトルだ！青眼で龍骨鬼を攻撃、滅びのバースト・ストリーム！」
青眼の白龍　攻３０００→龍骨鬼　攻２４００（破壊）
夢想　ＬＰ１９００→１３００

龍骨鬼が一瞬で跡形もなく粉砕され、夢想を守る壁が存在しなくなる。だが、まだ夢想の表情から笑みは消えない。
「これで終わるか!?速攻魔法、銀龍の轟咆!墓地より蘇れ、青眼……」
「リバーストラップ、発動!横取りボーン!相手がモンスターを特殊召喚したターンのみ発動できて、相手の墓地のモンスターを守備表示で特殊召喚するんだって。こっちにおいで、青眼!」
彼女が呼び出したのは、最初に激流葬を受けた青眼。どちらも対象を取る蘇生カードであるゆえ、チェーンを組んで同じモンスターを呼びだそうとすれば後出しした方が勝ち、先に使った方は不発となる。これは夢想自身も知らないことであったが銀龍の轟咆は1ターンに1度しか使えないため、さらなるカウンターを受ける心配もない。ん
青眼の白龍　守２５００
「くそっ!カードを伏せて、ターン……終了だ」
「私のターン。あなたが何を考えてるのかは私にはわからない。だけど、ここはお帰り願おうかな、だってさ。ドロー!ワイトキングを召喚、さらに青眼を攻撃表示に変更!青眼2体で相打ちに、バースト・ストリーム!」
ワイトキング　攻２０００
青眼の白龍　攻３０００（破壊）↓青眼の白龍　攻３０００（破壊）

無論、夢想の行動は戦術としては何も間違っていない。相手の場を空にしてダイレクトアタックを叩き込む、基本中の基本の動きである。ただ単に彼女の運がなかった、それだけだ。

「そのままワイトキングで……」

「いいや、リバースカード発動！リビングデッドの呼び声で、もう一度青眼を呼び戻す！」

「そんな！」

青眼の白龍　攻３０００

「……攻撃はやめ。ターンエンド、って言ってるみたい」

男　ＬＰ１４００　手札：１

モンスター：青眼の白龍（攻・リビデ）

魔法・罠：リビングデッドの呼び声（青眼）

夢想　ＬＰ１９００　手札：０

モンスター：ワイトキング（攻）

魔法・罠：なし

「俺のターンだ。ここでワイトキングを潰す！出て来い、阿修羅（アスラ）！」

三つの顔と六本の黄金の腕を持つ戦い好きの鬼の神をモチーフとした、全体攻撃の能

力を持つモンスター。ワイトキングは例え戦闘破壊されても墓地のワイトを除外することで蘇る能力があるが、今のワイトの数ではその能力も2度までしか使うことができない。ただ彼女にとって唯一の救いは、阿修羅とワイトキングの攻撃力の都合上最初の一撃を青眼が決めざるを得ない、逆に言えば青眼のダイレクトアタックを受ける心配はないということである。

無論、そのことにはどちらのプレイヤーも気づいている。だからこそ夢想の目には戦闘ダメージによる衝撃を受ける覚悟とともに勝負を諦めない希望の色が見え、男の顔にはダメージこそ与えられるもののとどめを刺せないことに対する苛立ちの色が見える。2人の顔は皮肉なことに、盤面の優位性とはまるで逆の表情を浮かべていた。

「バトルだ、バトル！バースト・ストリーム！」

青眼の白龍　攻３０００→ワイトキング　攻２０００（破壊）

夢想　ＬＰ１９００→９００

「きゃあっ！ワイトキングは戦闘破壊された時、墓地に眠るワイトの魂を成仏させることで蘇るよ、ってさ」

ワイトキング　守１０００

「阿修羅で攻撃！」

阿修羅　攻１７００→ワイトキング　守１０００（破壊）

「まだ何かしてくるかもしれないし、最後の一回も使っちゃおうかな、だってさ。ワイトキング、蘇生するみたい」

ワイトキング　守０

「深読みするのは勝手だが、俺にこれ以上の罠は張れないぜ？だが、的が増えたなら当然そいつもだ！」

阿修羅　攻１７００→ワイトキング　守０（破壊）

六本の腕に全身の骨をへし折られ、今度こそ物言わぬ死体に成り果てた骸骨の王の体が、ちょうど吹いてきた風を受けて静かに砂となってどこかへ飛んでいく。その様子を悲しげに見送り、改めて彼女は男に向き直る。

「スピリットモンスターの阿修羅はエンドフェイズに持ち主の手札に戻る……それじゃあ、あとは私のターンでいいよね？だってさ。このターンのドローでどっちが勝つかが決まるからね、この空気は嫌いじゃないよ。ドローッ！」

手札もなく、伏せの１枚もない夢想のラストドロー。いつもそうであるように、負ける気はまるでしなかった。だが、デッキに手を乗せてカードを引こうとした、まさにその瞬間。

ピーピーピー。

場の雰囲気に不釣り合いなアラーム音が静かな町に鳴り響くと、それを聞いた男が

いっぺんに顔色を変える。
「クソッ、時間切れかよ！おい、この勝負は俺の負けだ。サレンダーだ。ぐずぐずしてると俺まで巻き込まれちまうからな、外に出られるうちにさっさと行かせてもらうぜ。ただ、こいつはマジの忠告だ。明らかにヤバいことが起こりつつあるから、なんとかこの町の外に出ろよ！じゃなっ！」
　大慌てで言いたいことだけ喋ると、くるりと背を向けてどこかへ走り去っていく。とっさに追いかけようとするも、まるで狙っていたかのようなタイミングの良さで後ろの店内から清明たちが出てきたので断念する。
「夢想、こんな所にいたの？一体何やって……あー、なんか急に曇ってきてるね。ったくもう、予報じゃ1日中晴れだったってのに。ほら、降ってきそうだしいったん中入ろ？」
　清明の声をぼんやりと聞きながら、デュエルが強制解除させられたデュエルディスクから次に引くはずだったカードを取りだしてみる。
　それはトラップカード、運命の分かれ道。お互いにコイントスをして、２０００ポイントのダメージか回復を受けるカード。つまりあのデュエルは、まだどうなるかわからなかった。どちらかが裏を出せば、お互いにライフが２０００を切っていたあの状況ではそれが引導火力になる。

「むーそうー！」
「嬢ちゃん、早いとこ入ってきな」
「……はい、だってさ」
　いつまでも引きずっていても仕方がない。そう結論付け、カードを元の位置に戻す。そのまま店に入る寸前ふと何かの気配を感じた気がして上を見るが、そこには重苦しい空が広がっているだけだった。

今のところは。

ターン54　鉄砲水と『D』と冥界の札

「……というか親父さあ、なに初対面の娘に店番やらせてるわけ？こんな親もって恥ずかしいのはこっちなんだよ、ったくもう」

文句を言いつつ、2人で厨房から出る。ケーキ？残念だけど、まだまだこの親父には勝てないことを思い知らされただけで終わってしまった。なんで菓子作りと紅茶にだけは異様にハイスペックなんだこの人は。

「何言ってんだお前は。どうせコレなんだろ？せっかくうちの店を継ぐどっかの馬鹿息子以外の候補が出てきたんだ、テストぐらいやっといてやらにゃあいかんだろ」

僕のもっともな意見を鼻で笑い、ニヤニヤ笑いながら小指を一本立ててみせる親父。ちょっと顔が火照ったのを隠すためにごく自然な動作で反対側を向き、赤くなったであろう顔を見られないようにする。とはいえあくまで気休めで、多分バレバレなんだろう。その証拠に、すぐ横から聞こえてくる忍び笑いがこれ見よがしに大きくなったし。

「いいじゃねえか素直な子で。お前にはどう見てももったいないからな、逃げられないうちに捕まえとけよ？」

「るっさい！おーい、むーそうー！」

なぜか店の外でどこか遠くを見ていた夢想に内心感謝しつつ、何をしてるのかと彼女に呼び掛ける。まだどこか心ここにあらずといった様子だったが、それでも反応はあったのでちょっとホッとする。

それにしても、こんなに空が曇っているのは変だ。まだお昼だってのに、今にも振りそうだなんてレベルじゃないぐらい黒くて分厚い雲が空を覆っている。嫌な予感がすごくするけど、ふむ。

「サッカーサッカー、なにか怪しいものが見つかったらすぐに教えてね」

突然のお願いにも嫌な顔一つせずにデッキから出てきてくれるシャーク・サッカー。いつもすまないね、との思いを込めて頭を撫でてやると、気持ちよさそうに喉の奥からゴロゴロと声を出して甘えてくる。かわいい。でもこれ鮫じゃなくて猫だよね、なんて思っていると、なんか精霊が見えない２人からの冷たい視線を感じたのでそそくさと店内に戻る。まったく、変な目で見ないでほしいもんだ。ここにちゃんと精霊はいるのに。

「じゃあ見張りよろし……く……？」

いた。さっきまで間違いなくいなかったのに、今でははっきり見える。ビルよりもでかい精霊が町全体を取り囲むようにひい、ふう、みい……なんと、４体も。

「チャクチャルさん、解説！」

『私か!?』

いやだって呼んだら一発で返事くれるし、わりと博識だから何聞いても答えてくれそうだし。これ本人（？）に直接言ったら前半部分について私はペットかタクシーかとか言って怒りそうだから口には出さないけど。

『またろくでもないこと考えて……まあいい、あれは帝だな。水、炎、風、土の四大元素そろい踏みだ』

そう言われて4体の人型をもう一度ぐるりと見回してみる。よくよく見れば確かにあの一角に立ってるの、どことなくメビウスに似てる気もする。なんか角とか生えてるけど。なんかメリケンサックみたいなの腕に付いてるけど。ちなみに僕の知ってるメビウスの武器はアイス・ランスという右腕を氷の槍にして突撃しつつ突き刺すというシンプルかつ中二病ロマンあふれるもので、個人的には大好きな攻撃です。

「やっぱなんか違うじゃん」

『まあ聞きなさい。あれはそれぞれ剛地帝グランマーグ、烈風帝ライザー、爆炎帝テスタロス、そして凍氷帝メビウスのカードだな。従来の帝シリーズが真の力を解放した姿で、それぞれ進化前の上位互換の能力を持つ』

「なるほど、解説お疲れ様」

『うむ。それはよしとして、どうも様子が変だ。あれだけの力を持つ精霊が一度に4体

というのははっきり言って異常。何かしらの意図があるのだろう』
冷静な、というより明らかに面白がってる風なチャクチャルさん。困ったものだ。
「そんでそんで?そもそもあんな町の端っこに突っ立って、何やってるのさ」
『見ればわかるだろう?この町に結界を張って外から遮断している……いや、中から出られないようにしているのか?先に言っておくとあの程度の結界なら突破できないこともないが、その際のエネルギーで近くの建物ぐらいは軽く吹き飛ぶだろうな』
「あら残念」
そんなもん僕が許可出すわけがない。絶対やっちゃだめだよ、と念を押してから改めて４つの巨体を見上げる。
「で、もうちょっと穏健な方法ってある?」
『一番単純な方法だと、そのカードの使い手を見つけ出してだな』
「……だいたいわかったよー」
デュエルでぶちのめすか物理的にどうにかするか、とにかく力づくなんだろう、まあこっちとしても、関係ないところに迷惑がかからない範囲でなら穏健に終わらす気はあんまりない。僕の町であんなでっかいもん勝手に出すんじゃないよまったく。
「とりあえず親近感あるしメビウスから行ってみ」
「いつまでも何くっちゃべっとるんだアホ息子」

「痛っ！」
　集中して喋っていた最中、いきなり後頭部に激しい痛み。見ると、うちの親父が凶器と思しきレジの帳簿を片手に呆れ顔で仁王立ちしていた。
「ほれ、早いとこ店入るぞ。曇ったせいでちょっと冷えてきたしな」
「あー、えっと……」
『始まったぞ、マスター！場所はそこのビル屋上、メビウスとザボルグが動き出した！』
「ええ!?」
　なぜかちょっとうれしそうな響きを含んだチャクチャルさんの言葉に聞き返そうとして親父の後姿から、そして店内の夢想から目を離した次の瞬間。
「だ、誰なの！一体どこから、って……！」
「おやおや、少々静かにしていただきましょうか。あなたは人質、別に悪いようにはしませんよ」
「夢想!?」
「嬢ちゃんっ！」
　その一瞬の間に、店内の様子が激変していた。後ろから謎の男にプロレス技でいうところのスリーパーをかけられ身動きできない、というかどうもさっき一発殴られでもしたのか気を失ってる状態の夢想。そのまま長身にサングラス、そしてなぜかライダー

スーツというものすごく怪しい恰好のまま、その謎の男がこちらへにじり寄ってくる。
「誰だっ！俺の店で何してやがる？」
「おや、人の名前を聞くならば自分から名乗るのが礼儀ではありませんか、遊野堂さん。そうですねぇ……まあここは、ミスターＴとでも名乗っておきましょうか。あなたの息子さんとはこれから何度も会うことになるでしょうし、以後お見知りおきを」
「ミスターＴ？」
　あまりといえばあまりの名前である。だけど、そんな名前に反応を示した神がいた。
『この男の気配、どこかで感じた気もしていたが、やっと思い出した……！マスター、こいつは人間じゃない！』
「へ？」
　改めていつまでも夢想に密着してるこれまで見た中でも最っ高の屑野郎をまじまじと見る。特に（やってることを除いて）おかしなところはないし、そもそも親父に見えてる時点で精霊が実体化したという線はないだろう。それにしてもぶん殴りたい、ちょっと近づきすぎてない？
『まずはその煩悩を抑えてくれ、マスター。それにしてもミスターＴが１枚噛んでいたのか』
「何？知り合い？」

『昔の同業者みたいなものだ。奴自体はただの駒だからどうでもいいんだが、バックがかなり厄介でな』

よくわからないけど、チャクチャルさんがここまで言うからにはよっぽど厄介な相手なんだろう。まったく、斎王とゆかいな仲間たちだけでこっちは手一杯だってのに。なんでこう、去年もそうだったけど変なのを相手してる時に限ってまた別の変なのが割り込んでくるのかね。あの時もノース校に勝ったーって喜ぶ暇もなく封印されてた三幻魔とかいきなり出てきたし。

「今となってはあれもいい思い出なんだから、人生わからんもんだね。……それで、ミスター？なんでもいいけど、その娘さっさと放してよ。見てる側としてはひじょーに不愉快なんだけどさ」

「これは失礼。ではそのかわり、一つこちらの条件を呑んでいただきたいのですが。あなたの所持しているこの時代にあってはならないカード……具体的には地縛神、及び時械神のカードを今この場で処分しなさい。そうすればこの女性には一切手出しせずにお返しします」

チャクチャルさんたちと夢想、どっちか選べということらしい。だけど、それによって向こうに何の得が生まれるのか。とりあえず本人に聞いてみよう。

「（チャクチャルさん、メタイオン先生）」

『……実際問題、私たちは本来この世界に存在しえないカードだからな。消えろというのもわからない話ではない。なにせ、ここにこうしている方がおかしいんだ』

この神様とは思えないぐらい弱気な発言に、一瞬こっちまで返事に詰まる。それを攻めどころと見たのか、ニヤリと笑みを浮かべるミスターＴ。

「さあ、どちらを選びますか？私もあまり暇ではないので、早いうちに決めていただきたいのですが。ああ、ではこうしましょう」

左腕で意識のない夢想を締め上げながら、右手をスッと親父に向けて伸ばして指を鳴らす。

「うっ……!?」

すると一体何をやったのか、数メートル離れた位置にいた親父がいきなり地面に崩れ落ちた。

「親父っ！」

「おっと、動かなくて結構です。彼はこのように私が預かりますので。民間人は邪魔になりますからね」

親父の体が地面にぶつかる寸前、ライダースーツと手袋に包まれた腕がその体をキャッチする。そこにいたのは、なんとミスターＴ。いつの間に移動したのかと夢想を捕まえていた方を見ると、そこには依然としてミスターＴ。

「な、な……」
『相も変わらずの数に頼んだ無限湧き戦法か。だが注意しろマスター、あれは見間違いでも錯覚でもない。すべて本物のミスターTだ』
「「さあ、どうしましたか?あなたの大切な大切なカードを取るか、はたまた自分のご友人、そして肉親を取るか。選んでください」」
チャクチャルさんを手放すなんて、そんなこと僕にはできない。だけど、あっちの2人についてもそれは同じだ。
「「どちらかを選べば、もう片方は助かります。こちらとしては、あなたがどちらを選んでも問題ないのですよ。あなたが立ち直るまでの間に、斎王の計画は完成する」」
「ぐっ……」
完全に板挟みの状態。こんな時、漫画やアニメならヒーローが颯爽と現れて悪を退治してくれるんだろう。だけど、今ここにヒーローは、十代はいない。なら、どうすればいいってのさ。
「ちょっといいかな?本来ならば僕が手を出す義理はないが、斎王の企みについて何か知っているというなら話は別だ。お前たちにデュエルを申し込む、2人まとめてかかってこい!」
僕の後ろの建物の角を曲がって、ちょうどこれまで死角になっていた位置から白い

スーツに銀髪の男がコツコツと革靴の音をアスファルトに響かせながら歩いてくる。僕はその顔をよく知っている。僕がユーノの時の魔術師に時間を止められているうちに学校にやって来た、史上最年少のプロデュエリスト。

「エド・フェニックス！」

「ふん、少し様子を見てみれば情けない。そんなに手放したくないものがあるなら、自力で掴み取ればいい。それができないと、それは自分のせいではないと自分に言い聞かせながら生きていくことになるんだ」

そう言いながら何か思うところがあるのか、少し遠くを見るような目つきになったのを僕は見逃さなかった。エドとはろくに話をしたこともないしなんとなく嫌な奴だとなんとなく思ってたけど、きっと彼なりにも色々なことがあったんだろう。ほんの少し、エドに対する認識を改めた。

「それで？早く返事を聞かせてもらおうか。なんなら1対2なんてケチなことは言わない、僕のハンデとしてこの清明にパートナーをやらせるタッグデュエルにしたっていいんだぞ」

前言撤回、やっぱこいつヤな奴だ。僕がタッグ組むのがハンデとか、日ごろどんな目で見られてんだ僕。８パックデッキとはいえ僕だってエドには一回勝ってるのに。

「いいだろう。もとよりエド・フェニックス、斎王はともかくとしても私はお前のこと

をよく思っていないからな。ここでどちらも潰せるというならば僥倖」」

「決まりだな。清明、僕の足を引っ張るなよ！」

「いや足引っ張るなて。……黙って聞いてりゃみんなして好き勝手！いいよ、こうなったらやってやる！ド派手にデュエルと洒落込もうか！」

「「「デュエル！」」」

始まったタッグデュエル。なんだかエドの掌の上で動かされてるような気もするけど、その江戸のおかげで助かったので深くは考えないことにする。ライフポイント、フィールド、墓地の全てを共有する、近頃では珍しいルールだ。そういやなんか三沢がこんなルールで大会してみたいとか言ってたことがあったっけ。

「先行は私だ。ダブルコストンを攻撃表示で召喚、カードをセットしてターンエンドだ」

ダブルコストン　攻１７００

「こちらの先行は君に任せよう」

「そりゃどーも。僕のターン、ドロー！」

ダブルコストンはその名の通りダブルコストになるモンスターだが、そのほかの能力は持ち合わせていない。大方もう一方のミスターＴにアドバンス召喚させるつもりなんだろうけど、そうはいかない。

「モンスターをセット。さらにフィールド魔法、レミューリアを発動！」

地面から白い神殿がせりあがってきて、だいたい僕らの膝ほどの深さにどこからともなく湧いてきた水が満ちる。水属性モンスターの攻守はこれで２００ポイントアップする、僕のフィールドの用意が整った。
「カードも１枚伏せて、ターンエンド」
「お前のエンドフェイズに速攻魔法、終焉の焔を発動！トークン２体を特殊召喚する」
黒焔トークン　攻０
黒焔トークン　攻０
すでにフィールド上にはダブルコストの能力を持つモンスターが存在するというのに、なぜかさらにリリース要因となるモンスターを並べるミスターＴ。着実に相手の場にモンスターが増えていくってのは、あんまり気分のいいものではないのだが。
ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ４０００
モンスター：ダブルコストン（攻）
黒焔トークン（攻）
黒焔トークン（攻）
魔法・罠：なし
清明＆エド　ＬＰ４０００
モンスター：???（セット）

魔法・罠：１（伏せ）
場：忘却の都　レミューリア
「私のターン。永続魔法、冥界の宝札を発動！そしてトークン２体をリリースし、アドバンス召喚！出でよ、ダーク・ホルス・ドラゴン！」
全身黒く染まった２Ｐカラーのホルスが、まるで鳥のように甲高い鳴き声を上げる。やっぱり思った通り、アドバンス召喚で来たか。
ダーク・ホルス・ドラゴン　攻３０００
「冥界の宝札がある限り、私がリリース２体以上でのアドバンス召喚に成功するたびカードを２枚ドローする。ダーク・ホルスでセットモンスターに攻撃！焼き尽くせ！」
ダーク・ホルス・ドラゴン　攻３０００→???　守８００→１０００（破壊）
「跡形もないか。……ほう？」
ミスターＴの言うとおり、確かに僕の伏せたモンスターは黒い炎に焼き尽くされた。だけど、それで終わらせたりはしない。シュルシュルとタコの足がホルスの翼に、爪に、くちばしに、胴体に巻きついて締め付け、動きを封じていく。
「ここでシャクトパスの効果発動！このカードは自身を戦闘破壊されたモンスターに呪いをかけて動きを封じ、攻撃力を０にする！」
ダーク・ホルス・ドラゴン　攻３０００→０

「ならばこれならどうかね？ダブルコストンでダイレクトアタック！」
「まだまだっ！リバース発動、ドレインシールドでその攻撃を無効にする！そして無効にした攻撃力ぶん、僕のライフは回復する」
　清明＆エド　ＬＰ４０００→５７００
「ほう……カードをセットし永続魔法、悪夢の拷問部屋を発動。ターンエンドだ」
「エド、後は頼んだよ」
「頼んだよ、じゃない！フィールドがほぼ空じゃないか！もういい、ドロー！カモン、デビルガイ！」
　Ｄ―ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）　デビルガイ　攻６００
　エドが召喚したのは、レベルもステータスも共に低い下級モンスター。確かにホルスは倒せるが、ダブルコストンには勝てない。もしかして、もっと攻撃力の高い下級モンスターを引けなかったのだろうか。
「デビルガイのエフェクト発動、このカードは攻撃表示の時に1ターンに1度相手モンスターを2ターン先の未来へ飛ばすことができる！デスティニー・ロード……消え失せろ、ダブルコストン！」
　ダブルコストンの姿がゆがみ、そのまま消えていく。
「このエフェクトを使ったターン、僕はバトルができない。だが、魔法カードを使うこと

ならできる！魔法カード、ミスフォーチュンを発動！相手モンスター1体の元々の攻撃力の半分の数値分ダメージを与えることができる」

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ４０００→２５００

「いいぞー、エドー！」

「いちいちのんきなもんだ、まったく。それはそうと、このステージは僕には合わないな。フィールド魔法、幽獄の時計塔を発動」

「え、ちょっと!?」

いくらフィールド魔法が重複するようになったとはいえ、それは自分と相手が使う場合においての話。フィールドを共有している今、レミューリアが崩れ落ちて足元の水が引いていき、替わって地面から１２時を指した時計塔がせりあがってくる。でも、いくらなんでも人のカードを勝手に上書きされるとは思わなかったぞ。

「カードを2枚セットして、これでターンエンドだ」

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ２５００

モンスター：ダーク・ホルス・ドラゴン（攻・シャクトパス）

魔法・罠：冥界の宝札

悪夢の拷問部屋

１（伏せ）

清明＆エド　ＬＰ５７００
モンスター：Ｄ－ＨＥＲＯ　デビルガイ（攻）
魔法・罠：２（伏せ）
場：幽獄の時計塔（０）
「続いては私のターンだ」
「その前に、相手ターンのスタンバイフェイズを迎えたことで時計塔の針が動く、つまり時計塔に時計カウンターを１個乗せさせてもらうがね」
ギィ、ときしむ音を立てながら、驚くほどの速さで時計の針が動く。そして指し示す時間が３時となったとき、再びその動きが止まった。だが、それ以上何も起きない。
「魔法カード、帝王の深怨を発動。手札から攻撃力２４００かつ守備力１０００のモンスター、邪帝ガイウスを見せることでデッキからこのカード以外の帝王と名のつく魔法及び罠をサーチすることができる。帝王の烈旋を加え、そのまま発動！このカードは相手モンスターをリリースしてアドバンス召喚を行うことができるカードだ。デビルガイをリリースし、邪帝ガイウスを召喚！」
邪帝。いわゆる帝シリーズの１体で、なぜか闇属性だけ２種類の帝が存在するうちの片方。えーと、効果はどっちがどっちだったっけか。
「邪帝はアドバンス召喚に成功した時、フィールドのカードを１枚除外することができ

る。私が選択するのは、ダーク・ホルス・ドラゴン！」

ガイウスがくるりと自分の横を向き、胸の前に作り上げた闇のエネルギー弾を自らの横でタコ足に縛られたホルスめがけて打ち出す。動きを一切封じられたホルスは抵抗することもできず、無言のままに次元の隙間へと消えていった。

「ガイウスがその効果で闇属性のモンスターを除外した時、相手プレイヤーに１０００のダメージを与える。受け取れ、エド・フェニックス！」

「ぐっ……いいだろう、だがこの貸しは高くつくぞ！」

清明＆エド　ＬＰ５７００→４７００

１０００の衝撃。だけどそれだけではない。悪夢の拷問部屋は効果ダメージが発生した時、さらに３００のダメージを追加で与える効果を持つ。一見地味な削り方だけど、こういうのがじわじわとこっちの首を絞めてくるのだ。

清明＆エド　ＬＰ４７００→４４００

「貸しは高くつく、か。果たしてそうかな？トラップ発動、闇次元の開放！自分の除外された闇属性モンスターを、攻撃表示で特殊召喚する！甦れ、ダーク・ホルス・ドラゴン！」

ダーク・ホルス・ドラゴン　攻３０００

一度除外を経由したことでシャクトパスの効果からは切り離され、完全な姿となって

甦った黒い竜。こんなコンボを仕掛けていたとは、さすがに人間じゃないだけあってデュエルの腕も相当なものだ。

『私が言うのもなんだが、人間じゃないのと強いのは関係あるのか？本当にそこ関係あるのか？』

「（カミューラもなんだかんだ言って強かったし、タニヤも三沢相手にあそこまで強かったし。ラビエルのことは今でも全力をぶつけあった相手として尊敬してるよ）」

『そ、そうか』

それと稲石さん。なんとなく仲直りするきっかけがつかめなかったから最近は全然会ってないけど、ここでおみやげ買っていってあげよう。線香とか。

「これで終わりだ！邪帝ガイウスでダイレクトアタック！」

「いいや。トラップ発動、Ｄ―フォーチュン！このカードは相手の直接攻撃宣言時に発動でき、墓地からＤ―ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）を１体除外することでそのターンのバトルフェイズを強制終了させる！」

半透明のデビルガイがまるで十代のネクロ・ガードナーのように自らの体を盾にしてガイウスの攻撃をはじく。とはいえ、なかなか危ないところだった。

「１度は凌いだか。カードを２枚伏せ、これでターンエンドだ」

「よっし、今度は僕のターン！」

威勢よく言ったものの、戦況はあまりよろしくない。なにせ攻撃力２４００と３０００が相手なのだ。とはいえ先ほどのダイレクトアタックの時に感じた痛みから考えても、これは数か月ぶりの闇のデュエルだ。間違っても負けるわけにはいかない。

「ちょっと強引だけど、突っ切らせてもらおうかな！手札から瀑征竜―タイダルの効果発動！手札の水属性モンスター２体を除外して、このカードを特殊召喚！」

氷弾使いレイス、そしてグリズリーマザーのカードを相手に見せてからポケットに入れ、タイダルをモンスターゾーンに置く。

瀑征竜―タイダル　攻２６００

「まずは１体、タイダルでガイウスに攻撃！ウェイブ・オブ・タイダル！」

「リバースカード、冥王の咆哮を発動。悪魔族が戦闘を行う時にライフを払うことで、相手モンスターの攻守をその数値ぶんダウンさせる。まあ、５００ポイントも払えば十分だろう」

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ２５００→２０００

瀑征竜―タイダル　攻２６００→２１００（破壊）→邪帝ガイウス　攻２４００

清明＆エド　ＬＰ４４００→４１００

「タイダル！くっ、ここでカードをセット。これでもうハンドレスか、ターンエンド」

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ２０００

モンスター：ダーク・ホルス・ドラゴン（攻・闇次元）
邪帝ガイウス（攻）
魔法・罠：冥界の宝札
闇次元の開放（ホルス）
清明＆エド　ＬＰ４１００
モンスター：なし
魔法・罠：３（伏せ）
場：幽獄の時計塔（１）

「私のターン。スタンバイフェイズを迎えたことで、そちらの時計塔の針がまた動くか」
その言葉通りに時計が時を刻み、先ほどからまた３時間分動いて６時を指す。だが、依然として何も起こらない。
「このカードは、墓地からレベル５以上のモンスターを除外することで特殊召喚できる。来い、邪帝家臣ルキウス！」
先ほど痛い目にあわされたガイウスをデフォルメしたマスコットのような小さな悪魔。右手でお手玉サイズの闇の球をクルクルともてあそびながら、挑戦的な目つきでこちらを睨みつけてくる。
邪帝家臣ルキウス　攻８００

「ガイウスとルキウスをリリースし、アドバンス召喚。出でよ、闇の侯爵ベリアル！」

闇の侯爵ベリアル　攻２８００

「冥界の宝札の効果で２枚ドロー。またルキウスがアドバンス召喚に使われたことで、相手の伏せカードをすべて確認することができる。なるほどメタル・リフレクト・スライムか、たいした問題ではないな。だがもう１枚は……いや、いいだろう。バトルの前に１つ教えておいてやるが、ベリアルがフィールドに存在する限りお前たちはベリアル以外のモンスターを魔法及び罠の対象にすることができず、攻撃対象にも選べない。これで終わりだ、ホルスでタイダルに攻撃！」

黒い炎が視界を埋め尽くすほどの勢いで吐き出され、みるみるうちに炎に邪魔されて何も見えなくなる。ここで唯一効果がありそうなのはエドの伏せたなんかよくわかんないカードで、フリーチェーンなのはわかるが今使う意味があるものかどうかもわからない。

だけど、このカードを見た時のミスターＴの反応が気になった。幽獄の時計塔はエドのデュエルディスクにセットされてるから僕には効果を見ることができないけど、もしかしてこのカードが役に立つのだろうか。どうもミスターＴは効果を知っているみたいだけど、もしかしたら今の反応を見て僕がこのカードを使うことまで想定済みの高度な罠なのかもしれない。どうする？どうすればいい？

「……ええい、どうせこのままじゃやられるんだ、こうなったらどうにでもなれ！リバーストラップ、エターナル・ドレッドを発動！時計塔に時計カウンターをさらに２つ乗せる！」

ものすごい勢いで時計の針が動き、あっという間に６時間が経過して最初の１２時の位置に戻る。それがきっかけになったのかこれまで一度もならなかった鐘がいきなり重い音を出し始め、ゆっくりと１２階の音が誰もいない町に響き渡った。

が、無論それだけで、ホルスの炎がこちらに到達した。

ダーク・ホルス・ドラゴン　攻３０００→清明＆エド（直接攻撃）

そのままこちらを襲うであろう戦闘ダメージに備え、とっさに顔の前で腕を組んでガードする。

だが、いつまでたってもこちらの体を吹き飛ばす炎の衝撃が来ない。たっぷり２０秒は経ってから恐る恐る前を見てみると、とっくに攻撃をやめてミスターＴのフィールドに舞い戻っているホルスが見えた。あ、あれ？

「まったく……幽獄の時計塔に時計カウンターが４つ以上乗っているとき、こちらが受ける戦闘ダメージは０になる。知らずにエターナル・ドレッドを使ったのか、見ている方がひやひやする」

ジトーッとした声音のエド。さぞかし冷たい目でこちらを見てるのだろう。

「コホン。まあでも感謝するよ、おかげでこのターンは生き延びれた」
「確かにな。カードを２枚伏せて、ターンエンドだ」
「僕のターン、ドロー。スタンバイフェイズにデビルガイのエフェクトが切れ、先ほど除外したダブルコストンがお前の場に戻る」
　ダブルコストン　攻１７００
「魔法カード、デステニー・ドローを発動。手札からＤ―ＨＥＲＯを捨てることで、カードを２枚引く。僕が捨てるのはこのカード、ダッシュガイだ」
「ならばこの瞬間、ダーク・ホルス・ドラゴンの効果発動！相手がメインフェイズに魔法カードを使用した時、墓地からレベル４の闇属性モンスターを特殊召喚することができる。私はルキウスを選択！」
　邪帝家臣ルキウス　守１０００
　これまでのターンでは墓地にレベル４の闇属性がいなかったため効果を発動できなかったダーク・ホルスも、ルキウスをアドバンス召喚に使用したことでようやく蘇生先を手に入れた。まあ、それもエドがなんとかするだろう。
「それがどうした！カモン、ダイヤモンドガイ！」
　全身からクリスタルを生やしたトゲトゲしている戦士。攻撃力はダーク・ホルスやベリアルには遠く及ばないのだが。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ　攻１４００

「ダイヤモンドガイのエフェクト発動！デッキトップのカードを確認し、それが通常魔法ならばそのカードを墓地に送ることで次のメインフェイズにコストを踏み倒してその効果を使用できる、ハードネス・アイ！当然通常魔法、終わりの始まり。ルキウスに攻撃したいところだが、ベリアルを倒さない限り他のモンスターを攻撃することはできないからな。カードをセットしてターンエンド。これで僕もハンドレスか」

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ２０００

モンスター：ダーク・ホルス・ドラゴン（攻・闇次元）

闇の侯爵ベリアル（攻）

ダブルコストン（攻）

邪帝家臣ルキウス（守）

魔法・罠：冥界の宝札

悪夢の拷問部屋

闇次元の開放（ホルス）

２（伏せ）

清明＆エド　ＬＰ４２００

モンスター：Ｄ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ（攻）

魔法・罠：２（伏せ）
場：幽獄の時計塔（４）
「私のターン。もう終わらせてもいいでしょう、ダブルコストンをリリースしてアドバンス召喚！我が主の名のもとに、全てを闇（ダークネス）に染め上げろ！怨邪帝ガイウス！」
一瞬先ほどと同じガイウスが召喚されたように見えたが、それを指摘しようと思った瞬間その体全体に大量の闇が吸い込まれていった。それを吸収してみるみるうちにその体が膨れ上がり、これまでの割とスマートな体つきから一転して筋骨隆々とした体形になっていく。
怨邪帝ガイウス　攻２８００
「怨邪帝ガイウスは闇属性モンスターを利用してアドバンス召喚に成功した時、フィールドのカード２枚を除外して１０００ダメージを与え、それが闇属性モンスターだった場合同名モンスターをすべて除外させる効果を持つ。ククク、幽獄の時計塔とメタル・リフレクト・スライムを除外だ！」
もはや闇の球を作り出すようなこともせず、時計塔よりも大きくなったガイウスが腕の一振りで塔を叩き潰し、僕の伏せたスライムカードを同時に踏みつぶそうと一歩を踏み出す。
「やむを得ないな。リバースカード、ダブル・サイクロンをチェーン発動！僕の場に存在

する幽獄の時計塔と、お前の闇次元の開放を破壊する！」
「むっ……ダーク・ホルス！だがスライムの除外は確定した、よって１０００ダメージは変わらず受けてもらおう」
　闇次元の開放は、いわば闇属性かつ除外されたモンスター用のリビングデッドの呼び声だ。つまり、それが破壊されれば呼び出したモンスターも倒れ、モンスターが敗れれば本体も破壊される。攻撃力３０００を誇るダーク・ホルスを倒したのはデカいけど、スライムがやられたことでダイヤモンドガイ１体だけではこれからの攻撃をしのぎ切れない。
　清明＆エド　ＬＰ４２００→３２００→２９００
「問題ないね。時計カウンターが４つ以上乗った時計塔が破壊された時、そこに囚われていた囚人が解き放たれる！出でよ、Ｄ―ＨＥＲＯ　ドレッドガイ！」
　崩壊した時計塔の瓦礫を跳ね飛ばして現れた上半身裸の男。傷だらけの両手両足には重そうな鎖をつけ、顔には鉄のマスクをはめられていて口しか見ることができない。その男は自分が自由の身になったのが信じられない、といった様子でキョロキョロと辺りを見回し、手足を自由に動かせることを確認すると喜びの余り獣のように一声吠えた。
「ドレッドガイは解き放たれた時、墓地のＤ―ＨＥＲＯを２体まで特殊召喚することが

できる。ドレッド・ウォール！甦れ、ダッシュガイ！」
Ｄ―ＨＥＲＯ　ダッシュガイ　攻２１００
「だがこれだけじゃない、ドレッドガイの攻撃力は自分フィールドのＤ―ＨＥＲＯの全攻撃力の合計になる！」
Ｄ―ＨＥＲＯ　ドレッドガイ　攻０→３５００　守０→３５００
「これで形勢逆転さ。おっと、先に言っておくがドレッドガイを特殊召喚したターン、全てのＤ―ＨＥＲＯはドレッドガイのもう一つの効果であるドレッド・バリアに守られてあらゆる手段で破壊できず、僕の受ける戦闘ダメージも０になる。どうやっても突破はできないのさ」
うわあ悪い顔。というのは置いといて、さすがにプロデュエリストだけのことはある。あっという間にあんな上級モンスターばっかりの相手に対抗できるだけの戦力をフィールドに揃えるだなんて、並みの腕でできることじゃない。だが、ミスターＴは依然として余裕の笑みを崩さなかった。
「戦闘ダメージが０になるなら、それも構わない。気が付かなかったのかね？私が君のダブル・サイクロンにさらにチェーンしてチェーン３にこの伏せカード……速攻魔法、サモンチェーンを発動していたことに」
「何っ!?」

「サモンチェーンの効果によって、このターン私が行える召喚は３回になる。ルキウスをリリースし、邪帝ガイウスをアドバンス召喚！召喚時効果で、まずはドレッドガイを除外！」

囚人が自由を勝ち得たのもつかの間、その体が闇の中に引きずり込まれて消えていく。そしてドレッドガイは闇属性、効果ダメージは発生してしまう。

清明＆エド　ＬＰ２９００→１９００→１６００

「ここで私の手札も尽きてしまいましたからね。トラップカード、強欲な瓶を発動。デッキからカードを引きます。これはこれは……アドバンス召喚されたモンスター、邪帝ガイウスをリリースして怨邪帝ガイウスを召喚！先ほどは言いませんでしたがこのカードはアドバンス召喚されたモンスターをリリースする場合、リリース１体で特殊召喚できるのですよ。そして闇属性モンスターをリリース素材としたことにより、残りのヒーローにも消えていただきましょう！」

２体目のガイウスが身をかがめてダッシュガイとダイヤモンドガイを掴みあげ、そのまま握りつぶす。エドの表情はここからはちょうど横顔しか見えないが、ダメージによる痛みとは別にどこかつらそうに見えた。

清明＆エド　ＬＰ１６００→６００→３００

「これで私の手札はなくなり、召喚権も消えた。戦闘ダメージを与えられないのなら、こ

のままターンを終えましょう」
「まだまだ、諦めてたまるか！僕のターン、ドロー！」
引いたカードは……駄目だ！このカードだけじゃ逆転どころか次の攻撃を耐えることもできない！
「まったく、どうしようもないのはその顔を見ればわかる。僕が君に手を貸すなんてあまり気に入らないことではあるが、1つアドバイスしよう。あまり細かく言うのはルール違反だが、僕が先ほどのターン何をしたのかよく思い出してみるんだ」
さっきのターン。デステニー・ドローでカードを引き、水晶男を召喚して効果を使い……なるほど、やっと理解できた。
「さっきエドが発動したダイヤモンドガイのエフェクトを発動！終わりの始まりの発動条件およびコストを全部踏み倒して、その効果でデッキからカードを3枚ドローする！」
引いた3枚と、手札のカードを見る。よし、道は見えた！ミスターTの最後の伏せカードが気がかりだけど、ここは突っ走るしかない！
「自分フィールドにモンスターが存在しない時、このカードは通常召喚できる！天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、召喚！」
この状況を変える力を持つ、大きくなったガイウスには若干及ばないものの、それで

も圧巻のサイズを誇る僕の第二の神。
　時械神メタイオン　攻０
「まだだ。魔法カード、二重召喚（デュアルサモン）を発動。これにより僕は、このターンもう１度の召喚ができる」
「ならばその発動にチェーンしてトラップ発動、２枚目の闇次元の開放！ダーク・ホルス・ドラゴンを呼び寄せ、魔法カードが発動されたことでルキウスを蘇生！」
　ダーク・ホルス・ドラゴン　攻３０００
　邪帝家臣ルキウス　守１０００
「どうやらメタイオン先生のことは知っててもその効果は知らないみたいだね。わざわざありがとう、って言いたい気分だよ。来て、霧の王（キングミスト）！」
　霧の王　攻０
「攻撃力０のモンスターを並べて、何をする気だ」
「エド、ちょっとの間黙って見てなって。墓地からタイダルの効果発動、墓地のシャクトパスと手札の氷帝メビウスを除外してこのカードを特殊召喚！」
　爆征竜―タイダル　攻２６００
「用意は全部整った、これで最後のバトルだ！メタイオンでベリアルに攻撃、ケテルの大火（たいか）！」

　メタイオン先生が両手から炎を放つと、それがまるで意思のあるように動いてお互いのフィールドをぐるりと取り囲む。僕のフィールドを包む炎は、触ってもまるで熱くない奇跡の炎、俗に言う生命の火…。だがあちらのフィールドを覆うのは、清らかではあるが何人たりとも逃げられない裁きの炎、とのことらしい。自分でも消えない炎のフィールドを作ることのできるチャクチャルさんがそう言ってたからたぶん間違いない。ガイウスが、ベリアルが、痛みを感じる暇もないほどの速さで焼き尽くされて消えていく。

「これで2丁上がり！メタイオンが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、フィールドの全てのモンスターを持ち主の手札に戻し、その合計数×３００ポイントのダメージを与える！この効果を受けるモンスターはそっちのガイウス2体にベリアル、ダーク・ホルスとルキウス。これだけならダメージは１５００止まりだけど、この効果は僕のフィールドにも範囲が及ぶ！さらにタイダルと霧の王を手札に戻すことで、累計ダメージは２１００ポイントだ！」

「何、まさかこれほどとは……！」

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ２０００→０

きれいに声をハモらせて、同時に吹き飛んでいくミスターＴ。やれやれ勝ったと一息ついていると、エドがミスターＴに詰め寄っていくのが見えた。
「さあ、斎王について知っていることを教えてもらおうか……なっ!?」
なんと、ミスターＴの姿が服やらサングラスやらも含め全身がカードの束になって、地面にバサリと崩れた。さすがに慌てたエドがそのカードを拾い上げようとすると、そのカードたちが一斉に透明になっていき、ついには全てがまるで最初から何もなかったかのように消えてしまった。どうなってんのさこれ。
「今のが何であれ、とにかく無駄足だったか。僕は斎王に用があるんだ、君自体には用はない。そこの２人の介抱でもしてやるんだな」
すぐに気を取り直したエドが、どこかに歩き去っていく。一瞬引き留めようかとも思ったけど、何を言っていいのかわからなかったし夢想と親父のことも気になるので諦めて見送るのみにする。とりあえず二人とも呼吸は安定してるし、布団ひいて寝かしときゃ夜までには起きるかな。
『マスター、ちょっとダークシグナーになってくれ。２人とも放っておくだけだと目が覚めるまでに１０日はかかるぞ』
「ごめんちょっと説明して」
いきなりわけのわからないことを言いだしたチャクチャルさん。話をまとめてみる

と、なんでもミスターTの力のせいで眠らされている2人を起こすには、自然回復を待つよりも別の力を加えてミスターT成分を追い払う方が早くて安全らしい。

「なるほどねー。あーらよっと!で?2人の額に手を置いて?……っ!?」

油断してた。というより、甘く見ていた。なんだかんだいってデュエルでは勝てたし、別に大したことないだろうとばかり思ってた。だけど、それはとんだ思い違いだ。ものすごい勢いで、ダークシグナーの力どころか僕自身の体力まで吸い込まれる。ようやく終わるころには疲労感たっぷりで、今にも倒れる寸前ぐらいだった。だけどまさか道のど真ん中で3人そろってぶっ倒れるわけにはいかないので、なんとかよろよろと立ち上がる。

『思ったよりがっつりした呪いだったな、ミスターTめ。常人なら今意識があるだけでもおかしいレベルに消耗しているはずだ、向こうが気になるのはわかるがここはいったん抑えてくれ』

布団を敷こう。家の物の配置、変に変わってなきゃいいけど。夕飯も作ろう。もう一歩も動きたくないけど、夜には何か食べないとそっちの方が体に悪い。その頃には2人とも起きるみたいだけど、なにせ親父ときたらケーキと紅茶に関しては僕よりずっと上なのに他の料理及び家事に関しては駄目の一言に尽きるからね。今日初めて来た夢想じゃあ冷蔵庫やらなんやらの場所もわからないだろうし、やっぱり僕がやるしかない。

親父を担ぎ上げ、夢想を背負う。何がとは言わないけど背中の方が大変柔らかくて一応年頃の男としては非常にうれしいです。

『顔赤いぞ、マスター』

「うるさい！」

最後に、もう一度街を取り囲む４体の帝を見る。誰が戦ってるのかはわからないけど、こんな調子だと僕は加勢に行けそうにない。そもそもデュエルが起きてる場所までたどり着けるかどうかも怪しいものだし、もし着いたとしても頭がボーっとしてて使い物になるかどうかもわかったもんじゃない。料理なら半覚醒状態でもできるから問題ないけど、デュエルは体力だけじゃなく脳みそも使う文字通りの全身運動だからね。

でも、なんとなく十代たちならどうにかなる気がした。なぜ十代たちだと思ったのかは自分でもよくわからない。だけど、あんなにでっかく精霊が出てるんだから十代が反応しないわけがない。それと前からちょいちょい思ってたけど、どうも剣山も普通じゃない何かを持ってるみたいだし。翔はどうせあの二人の最低でもどっちかと一緒にいるだろうから、これも大丈夫なはずだ。悪いけど、夜ぐらいまでは一時的にリタイアさせてもらおう。もう異様な疲れがたまってしょうがないんだ。

ターン５５　鉄砲水と冥府の姫と

「おいおいおい、どーなってんのこれ」

もう数十回目になる『おかけになった電話は、電波の届かないところか、電源が切れて……』という電子音声に、電話を放り出したくなる。昨日ミスターＴを返り討ちにしてから１日、結局宿泊先のキャンプに行く気力もなくずるずると自分の家で泥のように眠っていた。一応チャクチャルさんが根回ししておいてくれたおかげで捜索届とかは出てないはずだから、その点は安心できる。その根回しとやらは具体的にどうやったのかはすごく気になるけど。人に迷惑かけてないだろうか。若干不安だ。

ただその根回しに行ってきたチャクチャルさんが、一つ気になる情報を掴んできたのだ。それが、他にも数人が行方不明だということ……具体的にはエド、翔、剣山、そして十代である。なのでとりあえずエド以外の全員が学校から持ち込んでるはずのＰＤＡに連絡をつけてみたのだが。

『おかけになった電話は……』

「もういいよ」

聞き飽きた電子音声に受話器を放り投げ、ここに来るとき持ち込んだ荷物をまとめ

る。
「なんだ、もう行くのか？学生は忙しいな」
「さすがに儲かってない店の店主は言うことが一味違うねー。少しは商売っ気出さなきゃ本気で潰れちゃうよ？」
「おうなんだ、お前の癖に親を心配するなんて珍しいじゃねえか。こりゃ今日は雪だな」
軽口をたたきながらも、親父の顔は固い。多分僕も似たような感じだろう。今回だって、友達が行方不明だと言ったら店をさぼってまで探そうとしてくれたのをこっちが引きとめたのだ。なにせ相手はデュエルを仕掛けてくるんだから、非デュエリストが不用意に首を突っ込んだりしたらどうなるかわかったもんじゃない。なんのかんのといってもやっぱり僕の唯一の肉親が相手なんだから、なおさらのことだ。
「じゃ、行ってくるよ」
「……おう。またな」
特に長々と話したりはしない。お互いにそういうタイプじゃないし、改まって話すのはちょっと照れくさい。そのまま振り返らずに歩き出すと、ぴょこっと横に人影が現れた。
「清明、私も一緒に。ってさ」
「夢想……」

一瞬断ろうかと思ったけど、僕もいい加減夢想との付き合いも長いからよくわかる。彼女は自分がこうと決めたら何言ったって聞きゃしないから、説得しようと考えるだけ無駄だ。なので、

「そうは言ってもねー、僕もあてなんてないんだけど」

とだけにとどめておく。

「なら、駅に行ってみない？だって」

「駅？」

「うん。もし童実野町の外に出たなら、駅員の人がおぼえてるかもしれないし。清明もそうだけど、この制服ってわりと派手じゃない？ってさ」

自分の着ている真っ赤な制服を見ると、なんだか妙に納得できた。なるほど、確かに一理ある。それに、ここからなら一番近くの駅まで5分とかからない。

「さっすが夢想。十代たち、いるかなー」

「赤い洋服で腕にデュエルディスク付けた人かい？そういえば今朝見たねえ、2人組でしゃべってたんだけど、ここから隣町まで行くって言ってたっけか」

「あらま。あ、ありがとうございました」

　まさかとは思ったけど、まさか一発目でビンゴするとは。ラッキーというかなんというか、なんかちょっとできすぎてるような気もする。とはいえ他に手がかりがあるわけでもないので、とりあえず切符を買う。夢想の分も合わせて２枚。高い。
『そこで二人分買うあたり律儀というかなんというか』
「（やっぱ見栄は張りたいからね。まだ生活費にまでは手つけてないしギリギリオッケー。それより、頼んでた方はどうだった？）」
　頭の中に割り込んできたチャクチャルさんとこれまた頭の中で会話しながら、同時にそんなそぶりを見せないように夢想とも喋る。精霊が見えるってのは便利だけど不便だ。ちょっと気を抜くとすぐに何もないところと会話してる危ない人扱いされる。
「はいこれ、夢想。次の電車っていつだっけ？（このままでも問題ないよね？）」
「ありがとう、だってさ。でも清明、お金大丈夫なの？」
『問題はないが、だからこそ怪しいな。町全体を感知してみても、引っかかるものはまるでなし、だ』
「ま、なんとかね（そりゃまた……で、十代たちもいない、と）」
　ここで夢想との会話を切り上げる。最初は何とかなるかとも思ったけど、やっぱ無理だ。あのまま二つの会話を同時に続けてたらどこかで脳が限界になっていただろう。
「（少し整理させて。昨日までは確かにいた４体の帝が今朝になったらきれいさっぱり

消えていて、その上十代たちとエドも消えてると。チャクチャルさん、十代たちの方はともかくとして、帝があっさり消えたことについてはどう思う？）」

『おそらくそれぞれのカードの使い手が誰かに倒されたのだろう。と言いたいところだが、あの帝どもは明らかに精霊としての能力が暴走しかかっていた。もしカードの使い手が倒れでもしたら、それこそストッパーがなくなった精霊が暴れまわってもおかしくないほどにな。だが何の痕跡も残さずに消えていったところをみると、十中八九昨日のミスターTだろうな。おおかた元は普通の帝だったものに無理やり力を注ぎこんで強制的に進化させたのだろう』

「（それでミスターTを倒したからそのブーストが切れて、暴走しなくなったってこと？）」

そう聞くと、腑に落ちなさそうにしながらも肯定するチャクチャルさん。だったら、別に何もおかしなところはないと思うけどなあ。

『それ自体はな。私が言いたいのはそこじゃないんだ、マスター。ミスターTを倒せば帝にかけられた強化が切れるというならば、なぜ奴はわざわざデュエルを挑んできた？確かにあの場面でマスターが負けるようなことがあれば、同時に私の存在もナスカに封じることができただろう。だが、そのためにわざわざ本人が直接出てくるというリスクを冒した理由がどうも納得できない』

「そりゃそうだけど……でも、なんか昨日だってミスターＴ分裂して増えてたじゃん。あれも分身だったんじゃないの？」
『自分から仕掛ける側じゃないから今一つよくわかってないみたいだな、マスター。闇のゲームは命どころか魂まで賭けたゲーム、分身を身代りにたてられるほど甘いものではない。もっともミスターＴの場合は生まれが特殊だからしばらくすれば自動で蘇ることができるが、それでも決してノーリスクではない』
「他の人に闇のゲームなんてやらせたくなかったとか……？」
『そんな人間に優しい感性なんて持ち合わせていると思うか？』
「とりあえずチャクチャルさんが大嫌いな相手なのはよーくわかった」
　そこで駅についたので、また話がいったんストップする。ふと視線を感じたのであたりを見回すと、なんだか近くの乗客全員がじっとこちらを見ていた。よくわからないまま睨み返すと、慌ててさっと目をそらされる。奇妙な空気のまま降りると、隣の車両からこっそりと夢想が降りてきた。ついさっきまで隣にいたのに、まさかこれも光の結社が何か仕掛けたとか。どうもよくわからないことばかり起きるからすごく不気味だ。
「来たのはいいけど、どこから探そうかね」

「う、うーん。あれ、もしかしてあそこにいるの……ってさ」
駅前の広場に噴水があり、そこには大時計が備え付けられている、そこの前に立ち、時間を見ている赤い制服と黄色い制服の2人組がいた。
「十代、こんなところで……」
何してんの、とは言えなかった。僕の声に振り返った赤い制服の男は、後ろから見ると十代と同じ茶髪だったがその顔はまるで別人だった。もう一人も振り返るが、こちらは知らない人だ。
「よう、遅かったな」
「だがさすがは三沢さんだぜ、本当にこいつらここまで来やがった」
「三沢!?まさか君たち!」
「その通りだ!」
そう言い放ち、二人が来ていた制服を脱ぎ捨てる。そこから現れたのは、もはやおなじみとなった白づくめの格好。なぜか髪の色まで急に白くなったのはどういうわけだ。
「あれ、光の結社なの？ってさ」
「ふふふ、その通り」
「今、童実野町にお前らみたいな邪魔な奴がいたら斎王様の計画に支障が出るんでな」
「三沢さんに相談して、お前らを街の外におびき出すための作戦とそのためのデッキを

考えてもらったのさ」
　夢想の問いに片方が得意げに言うと、もう片方がその後を続ける。どこかで見たことあると思ったけど、そうだ。迷宮兄弟のノリとよく似てるんだ。もっとも目の前の２人は、息こそぴったり合っているものの顔や体格はまるで似ていない。でもあの二人、どこかで見たことあるようなないような。
「さあ、大人しく俺らとデュエルを……」
「あーっ!!」
「なんだいきなり！」
「思い出した！君らあれか、元万丈目の金魚のフンやってた取巻（とりまき）に慕谷（したいたに）か！」
　同年代とはいえとくに話をしたわけでもないし万丈目も特に昔の話はしたがらなかったからすっかり忘れてたけど、そうか。この二人もいつの間にか光の結社側に行ってたのか。そうかそうかと一人で納得したのだが、どうやら本人たちはそれがお気に召さなかったらしい。
「金魚のフンだと？許さんぞ！」
「よせ、取巻。三沢さんに作ってもらった俺たちのアンチデッキならいくらこの二人が相手でも太刀打ちできないんだ、今はせいぜい好きなだけ言わせてやれ」
　全部筒抜けなのは放っておこう。それにしても、三沢が作ったアンチデッキか。きっ

とガッチガチにメタってあるんだろうなあ、嫌だなあ。
「そ、そうだな。よし遊野清明、お前の相手はこの取巻様が……」
「じゃ、そこの君は私が相手するから、清明はそっちお願いね、ってさ」
「「え」」
……さらっととんでもないこと言うなあ、夢想は。可愛い顔してえげつない。まあ僕だってアンチデッキの相手なんか好き好んでしたくないし、ここは彼女に話を合わせよう。
「あー、えっと、さ、さーこい慕谷！この遊野清明が相手だ！」
「え、おま、ちょ……」
「取巻、だっけ？私に挑むんなら、それなりの覚悟はしてもらうからね、だって」
「こ、こんなはずじゃ……」
「それじゃあ、デュエルと洒落込みましょうか。なんだって」
夢想、割と本気で怒ってるな。何がそんなに気に食わないのかはわからないけど。一応僕も怒ってるっちゃ怒ってるけど、単に夢想と二人でいられるのを邪魔された恨みだからなあ。それなりの代償は払ってもらうし当然そこを譲る気はないけど、夢想はなんで怒ってるんだろうか。僕と同じ？まさかね。
「「「デュエル！」」」

「やってやる、やってやるさ……！俺のターン、月風魔を召喚！さらに装備魔法、竜殺しの剣を装備。これで攻撃力は７００ポイントアップし、さらに戦闘するドラゴン族を破壊する効果を得たぜ。これでターン終了だ。クソッ、こいつが相手じゃ傀儡虫の効果が使えやしねぇ」

月風魔　攻１７００→２４００

「（ねえチャクチャルさん、今言ってた傀儡虫ってどんなのだっけ）」

『ふむ。手札から捨てることで悪魔族かアンデット族のコントロールを１ターン奪うモンスターだな』

なるほど、夢想のワイトやら龍骨鬼やらの対策か。で、竜殺しの剣でドラゴネクロ対策もばっちりと。悪くはないけど、多分それだけじゃ夢想相手でも負けてたと思うぞ。

「もっとも、今の相手は僕だけどね。ドロー！ハリマンボウを通常召喚して、そのままリリース。水属性モンスターをリリースすればこのカードは特殊召喚できる！出てきて、シャークラーケン！」

シャークラーケン　攻２４００

「俺の月風魔と攻撃力が同じだと!?相打ち狙いか」

「慌てなさんなっての。ハリマンボウが墓地に送られたことで相手モンスター１体の攻撃力は５００ポイントダウン、さらに手札と墓地の水属性モンスター、シャーク・サッ

カーとハリマンボウを除外！唸れ、タイダル！」
タコのような触腕を持つ鮫と並び、水色のドラゴンが羽を広げる。月風魔の持つ対ドラゴンの剣を前にしても一歩も引かずに睨みつけるその姿は、まさに王者としての貫録を持っているように見えた。
月風魔　攻２４００→１９００
瀑征竜―タイダル　攻２６００
「ま、まだだ……まだ次のドローで」
「あー？やだなあ、そんなもんさせるわけないでしょ。魔法カード、アクア・ジェット発動！魚族モンスターのシャークラーケンの攻撃力は、このカードの力で１０００ポイントアップするよっと」
シャークラーケン　攻２４００→３４００
「ひ、ひぃっ」
「バトル、シャークラーケンで月風魔を攻撃！」
シャークラーケン　攻３４００→月風魔　攻１９００（破壊）
慕谷　ＬＰ４０００→２５００
「これでとどめだ、タイダルのダイレクトアタック！ウェイブ・オブ・タイダル！」
瀑征竜―タイダル　攻２６００→慕谷（直接攻撃）

慕谷　ＬＰ２５００→０
「はい、一丁上がりっと。夢想ー、そっちはどんな感じ……うわぁ」
無事にデュエルも終わり、チラッと隣の夢想のフィールドを見る。もっとすさまじいことになっていた。

清明がデュエルを始めたのと同時に、夢想の戦いも始まっていた。
「本来はアンチ水属性のデッキなんだけどな、こうなったらやってやるさ！俺のターン、魔法カード、融合を発動！手札のベビー・ドラゴンとワイバーンの戦士を融合し、ドラゴンに乗るワイバーンを呼び出すぜ！このモンスターは相手フィールドの表側モンスターが炎、地、水属性の時のみ直接攻撃ができる！さらに龍（ドラゴンズ・ミラー）の鏡を発動、墓地の通常モンスターであるさっきの２体を除外することで、融合召喚！出てこいや、始祖竜ワイアーム！」
ドラゴンに乗るワイバーン　攻１７００
始祖竜ワイアーム　攻２７００
瞬く間に並ぶ２体のモンスターを見て、やや夢想も目の前の敵に対する認識を改める。思ったより、あくまでも最初に思ったより、という程度にはこの男は強い。

「ここでカードを伏せて、ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー」
「今だ！永続トラップ発動、メサイアの蟻地獄！このカードがある限り、レベル３以下のモンスターはエンドフェイズごとに破壊されるぜ。本来なら遊野清明用のカードだったが、考えてみりゃワイトにだって十分効くなぁ」
　ドヤ顔での語りが、彼女の苛立ちに油を注ぐ。最初のうちは１ターンぐらい様子を見ようかとも思ったが、そんな情けをかける気も消え失せた。
「魔法カード、手札抹殺を発動、って。手札を捨てて、その枚数ぶんだけドロー。さらに暗黒界の取引を発動。お互いカードを１枚引いて、１枚捨てるんだって。魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動、手札のモンスターカードを１枚捨ててデッキからレベル１モンスター、ワイトキングを特殊召喚するみたい。それとこのターン通常召喚してなかったから、ワイトキングを通常召喚」
　ワイトキング　攻７０００
　ワイトキング　攻７０００
「ちょ、ちょっと待ってくれよ……なんで攻撃力７０００が２体も後攻１ターン目で並ぶんだよ……」
　無論、彼女は不正などしていない。たまたま初手に手札抹殺とワイト３枚にワイトメ

ア２枚が来て、暗黒界の取引で引いたワイト夫人をそのまま捨て、偶然引いたワン・フォー・ワンのコストにたまたま手札にあったワイトプリンスを使っただけである。どこからどう見てもオーバーキル以外の何物でもないが、その数字の大きさがそのまま彼女の怒りを物語っている。

「ワイトキング２体でドラゴンに乗るワイバーン、始祖竜ワイアームに攻撃、ってさ」

「ぎゃあああああっ!?」

取巻　ＬＰ４０００→０

「ふーんだ、だって。馬に蹴られて死んじゃいなさい、だってさ。あ、清明、こっちも終わったよ」

「うう……」

放心状態でその場に座り込む取巻を見て、とりあえず、夢想のことは絶対怒らせないようにしようと固く誓った。あんなの実戦で喰らったらさすがに僕でも心が折れそうになる。

「ったく、それにしてもこれで振り出しか。十代たち、どこ行っちゃったんだか」

正確に言えば電車賃の分だけマイナスだけど、これに関しては今更どうしようもないのですっぱり諦めることにして、とりあえず念のためにもう一度だけ連絡をつけてみる。数回のコール音が鳴り、そのまま電子音声に……

『あ、清明！一体どこ行ってんだよ、探してたんだぜ？』
「じゅ、じゅじゅ十代!?今どこにいんの!?」
『お、おう。えーっと、今は俺たちのキャンプ地にいるぜ。もっとも、俺もついさっき帰ってきたばっかだけどな。昨日からいろんなことがあったんだ、アカデミアに戻ったら色々俺の武勇伝を聞かせてやるぜ！だから早いところこっちまで来いよ。じゃあ、また後でな！』
そこで通話が切られた。でもとりあえず電車賃をせびる相手が見つかったので、そこはまあよかったとしよう。
……無事で、よかった。
「帰ろっか、夢想」
「ねえ、清明。その前に少しだけ付き合ってくれる、だって」
「？」

どこか寂しそうな顔の夢想によくわからないながら黙ってついていく。駅の裏手に回り、そのまま少し進む。
「ここは……」

「ごめんね、変なところに付きあわせて。でも、ここに来たらどうしても寄りたかったの、ってさ」

そこは、小さな墓地。ささやかなスペースにいくつかのお墓が立ち並んではいるが、周りに生えた木のおかげでうまいこと電車に乗っているときには見えないようになっている。

その中の１つ、特に目立つわけでもないごく普通の墓の前に立ち、夢想が静かに手を合わせる。年月のためかややかすれた表面にはなんとか見えるぐらいの字で河風家之一族、と彫られていた。

なんとなく空気を読んで僕も手を合わせること１０数秒、夢想がゆっくりと口を開いた。

「ねえ、清明。私の喋りかたって、清明はおかしいと思う？ってさ」

「え？」

「お願い、正直に答えて。って」

いきなりの質問に虚を突かれる。だからだろうか、それとも墓地という空間のよくわからない空気に呑まれたのか。割と正直に思うところを話していた。

「そりゃまあ、最初はそうも思ったさ。でも入学してからかれこれ１年以上たって、もうすっかりそんなのどうでもよくなったよ。どういう喋りかただろうと、何を考えていて

も、それ全部ひっくるめての夢想だからね」

ちなみに今のセリフを一言にまとめると慣れた、である。でもちょっとぐらいカッコつけた言い回しにしてもいいじゃない、どうせ他には誰も聞いてないんだし。

そんな答えを聞いた夢想はほんの少し笑って、それからまた真剣な顔にもどった。

「私のお父さんとお母さんは、今ここにいるの。私が物心ついてすぐのことだから、もう二人の声も覚えてないけどね、だって」

「えっと……」

なんて言えばいいのかわからない。物心ついた時にはもう母親がいない、という点では僕と同じだけど、それでも僕には親父がいた。口も性格も悪いけど、商売（菓子作り）を仕込んでくれたりもした。結局何も気の利いたことが言えないまま口を閉じると、それを待っていたかのようなタイミングでまた話し始める。

「交通事故だったんだけど、その時の車には私も乗ってたの、って。今でもぼんやり覚えてるんだ、その時の感覚は。それで、それから一か月ぐらい、私は喋ることができなくなったの。お医者さんは事故のショックだって言ってたけど、だって」

僕の母親が死んだときはどうだっただろうか。あの親父が泣いてるのを見たのは、後にも先にも事故の知らせを受け取ったその時だけだ。それだけしか覚えてない。

「ここから先の話は信じてもらえないかもしれないけど、最後まで聞いてね、だって。そ

の時に私は、声を聞いたの」
「声？」
「そう。その声は私に、事故のショックのせいで私が一生喋ることはできないけど、ある条件さえ受け入れてくれればその代用策を出してくれるって言ったの、だって。まだ小さかった私は、その取引を喜んで受け入れたんだ。それで、今でもその取引は続いてるの、ってさ」
「取引……」
　どうしよう。去年散々不思議なものを見てきてるから一概に嘘とは言い切れない、というか多分夢想の話は本当なんだろう。ただ口がきけないのを直すほどの力を持った奴のする取引なんて、絶対ロクなものじゃない。嫌な予感がすごくする。
『ちなみに私は死人（マスター）を蘇らせたけどな』
「（ちょっとチャクチャルさん静かにしててね）」
『命の恩神に対して雑な扱いだな、まったく……とはいえ、確かにその手の取引はだいたい裏があるだろうな』
　最後に不安をかきたてるようなセリフを残し、チャクチャルさんの気配が頭の中から引いていく。
「私が何か喋りたくなると、その内容を話すことのできない私に代わってその取引の人

が代わりに私の口を動かしてくれる。そのかわり、いつか必要になったときに私が1つ言うことを聞く。なんだか改めて口に出すと……ううん、出してもらうと信じられない話だけど、全部本当だってさ。私のこの変な語尾は私本来の物じゃなくて、私が言いたいことを代わりに喋ってもらってる、いわば伝言としてついたもの、ってさ」

なんだか複雑な話になってきた。僕にとってこの世のあらゆる難しい話は専門外なんだけど、明らかによからぬ話なのは感覚的にわかる。世の中皆チャクチャルさんみたいにほぼ無償で何かしてくれるほど甘いわけではないのだ。

でも、僕にはどうすることもできない。ダークシグナーとして生まれた僕は、いいことか悪いことかは別として普通の人にはできないたくさんのことをできるようになった。それでも、チャクチャルさんやその夢想の取引相手とやらのような『本物』には遠く及ばない。

「私の話はこれで終わり、だってさ。ごめんね、変な話を最後まで聞いてもらって。さ、帰りましょ」

重い雰囲気を振り払うように明るく、夢想が墓に背を向けて歩き出す。

「ちょ、ちょっと待ってよ!」

その後ろ姿を追いかけて少し歩き、途中で振り返って河風家の墓をもう一度見る。

「僕は、どんなことがあろうとも、夢想のそばにいたいもんだね。この先どうなるとして

も、そこは譲らないよ」

改めて自分の思いを口にすると、なんだか気が引き締まったような気がした。よし、僕もそろそろ帰ろう。

……そのあと帰りの電車賃が1人分しかないことが発覚したため夢想に切符を押し付けて歩いて童実野町まで行くことになったのはまた別のお話。

ターン56　鉄砲水と愉快な奇術師

修学旅行も無事……無事？とにかく終わり、ほんの一時だけアカデミアに平和な時間が来た。といっても光の結社が消えたわけではない。これまでやっていた腕づく力づくでの勧誘とは名ばかりの洗脳が幾分穏やかになり、目に見えて強引なことはしなくなったというだけだ。そんなある日の午後、新しく作ってみた蒸しパンが蒸しあがるのを待つ間に彼女はやって来た。

「先輩、今少し時間ありますか？」

「あれ葵ちゃん。斎王様、のところで金魚のフンやってなくて大丈夫なの？」

斎王様、の発音のポイントは一文字ずつ区切るように、なおかつたっぷりと嫌味を込めることです。光の結社ならほぼ9割がた今のでキレます。もっとも葵ちゃんはさすがにその辺の構成員とは格が違うのか、一瞬怒りに口元をゆがませながらもすぐに持ち直した。ちっ。

「……まあいいでしょう。今日は先輩に聞きたいことがあってきたんです。ついでにそこのショートケーキ買おうかとも思ったんですが、急に買う気がなくなりました」

「ごめんなさい訂正しますから許してください」

「私が言うのもなんですが、もうちょっとプライド大事にしたらどうですか？」
「そうは言ってもねー、現ナマって大事よ？」
「なんでそんなまっすぐな目なんですか。らちがあきませんね、本題に入らせてもらいますよ？今朝、行方っ不明だった鮫島校長を見つけたそうですがそこのところ詳しく教えてください」
　なんだ、という気持ちが顔に出ていたのか、怪訝な顔をする葵ちゃん。でも、僕の気持ちだって少しは考えてほしい。投網を担いで海に行ったら海岸に倒れてる校長がいたので慌てて保健室に担ぎ込んだ、その程度の話を一日中出会う人全員にする羽目になっている僕の気持ちを。
「……ってわけで、別に特別なことなんて何もないんだけど」
「どこの世界に校長が海から流れ着くのが普通な学校がありますか。なんか先輩、しばらく見ないうちに図太くなってません？」
「どの口がそんなことを。初めて会った時はあんなにしおらしかったのに」
「そういうこと平気で言っちゃうのが図太いって言ってんですよ」
「むー」
　一瞬切り返したと思ったら、間髪入れず切り返された。残念ながら口では葵ちゃんに勝てない。

「まあ話戻すけど、本当に特に言うことなんてないんだって」
「んー……みたいですね。先輩嘘つくの下手ですし、なにかおかしなところがあればあっさりばらすと思ったんですけど。じゃ、この辺で私は帰りますね。先輩もいつか斎王様の素晴らしさがわかるといいんですけど」
言いたいだけ言ってさっさと帰ってしまった。結局何一つ買ってかなかったし。
『全校生徒の皆さん、校長の鮫島です。これから大事な発表がありますので、講堂に集合してください』
噂をすれば何とやら、か。それにしても校長、見つけた時は弱ってたのにもう復活するとかさすがデュエリストだ。

「……というわけで、今日からこのデュエルアカデミアを舞台とし、若きデュエリストたちがメダルをかけて腕を競い合う大会、ジェネックスの開始を宣言して。近日中にこの企画に賛同したプロデュエリストもこの島にやってくると。で、それまでの間に少しでも腕を磨くもよし、自らのデッキを強化するもよし。ただし、メダルを持っている生徒は最低でも一日一回のデュエルが義務付けられますので、忘れないように……でオーケー？」

『……ああ、そんなところだな』

なんだかいっぺんに情報を詰め込んだのでパンク気味になった頭を冷やすこともかねて、チャクチャルさんにジェネックスの内容を確認しつつ、ついさっき配られた銀色のメダルをクルクルと回してみる。片面に『ＧＸ』と描かれた――――――なんでもＧｅｎｅｒａｔｉｏｎ（世代）　ｎｅＸｔ（次の）という意味が込められているらしい、決して高級品ではないもののどうしようもない安物ではない、ごく普通のメダルだ。全校生徒プラスアルファの分だけ用意してるはずなのにこのクオリティを保てるなんて、やっぱりバックに海馬コーポレーションがついてるだけのことはある。

『そ、それで、マスター。最初の相手は誰にするんだ？』

チャクチャルさんのもっともな疑問に、腕を組んで考える。十代は大物（プロ）狙いで船で来るにしろヘリで来るにしろ確実に通ることになる港で待ち構えてるし、翔は早々に１年に無理やり勝負を挑んで逃げ切ろうとしている。剣山は剣山で頑張ってるし、その他の僕の知り合いもほぼ全員今日はデュエルを終えている。

「出遅れちゃったからねぇ。うーん、どうしようか」

『何か、心当たりは？』

「心当たり、ねえ……」

知り合いの顔をつらつらと思い浮かべる。どうせ最初なんだから、十代みたいにプロ

を狙うのもいいかも。どうせ負けたらメダルは総取りされるんだし、どこかでプロに当たるなら最初からいってみたい。と、そこまで考えた時、もっと先に会っておくべきだった人の顔が頭に浮かんだ。気まずいからあんまり会いたくはないけど、どこかで謝らないといけないのはわかってるしね。

「よっこらせ、と」

『む？』

「まあね。ちょっと行ってくるよ。稲石さんに会いに」

稲石さん。元は豪華だったが今は見る影もない廃寮住まいの幽霊。身元も死因すべてが不明というよく考えたらとんでもなく怪しい人ではあるけれど、面倒見のいい人だ。ちょっと先代ダークシグナーのせいで荒れてた時期に喧嘩して以来会ってないけど、そろそろ仲直りしたいとはだいぶ前から思っていたことだ。思っていたことではあるのだが。

「……とはいってもねぇ」

『そんなに、躊躇、するような、ものかね。もう、門の、前まで来て、１０分は、経つぞ』

「いやー、だってさぁ……すっごい入りづらいんだよね、最後に会った時はなんかすんごい生意気なこと言っちゃったし」

ぐずぐずするのがよくないのはわかってるつもりなんだけど。そんな思いを読み

取ってチャクチャルさんがため息をついたのが聞こえてきたその時。
「ああもうまったく、黙って見てればじれったい！いつまで人の家の前で立ってるつもりなのさ、自分に用があるんでしょ？だったら通すから入っといでよ！」
　２階の窓から声がして、門がポルターガイスト的な何かでギイィ、と軋みながら開く。どうやら、ずっと見られてたらしい。夢想や葵ちゃんもそうだけど、この人にもあの２人とは別ベクトルで敵わないなあ、と思って軽く肩をすくめる。
『マスター』
「何？」
『どんなに格好つけてもだいぶ情けないことに変わりないぞ』
「いや別にそういうんじゃないからね!?」

「んで？」
「え、えっと」
　廃寮の一室。水道はとうの昔に止まってるはずなのにどこからか稲石さんが淹れてきたコーヒーが湯気を立て、僕が手土産に持ってきた蒸しパンが小皿に切り分けておいてある。お互いに全く手を付けていないのを尻目にファラオがむしゃむしゃと蒸しパ

ンを食べる音を背後に聞きながら、真剣な顔で僕と向かい合う稲石さん。この重い空気を少しでも和らげるため、蒸しパンと一緒に持ってきた小包を取り出す。
「とりあえずこれ、童実野町のお土産ね」
「へー、あそこ名産品なんて洒落たものあったっけ。で、なにこれ」
「線香」
「……」
「線香」
聞こえなかったのかと思ってもう一度繰り返すと、すんごいジトーッとした目で見られた。せっかく無理してちょっと高いやつ買ってきたのに、なにもそんな目で見ることないだろうに。
「……」
「……？」
なぜか何もしゃべらない稲石さん。あれ、もしかして選択ミスっただろうか。幽霊へのお土産なんだからもうこれしかない！っていう勢いで買ってきたんだけど、これについても謝ったほうがいいんだろうか。
「もういいよ、うん……。悪意がないのが一番性質（タチ）悪いんだけどね」
ため息をつきながら悟ったように言う稲石さん。やっぱりまずかったのか、とちょっ

と反省していると、それに、とさっきまでとはうってかわって心底安心したような顔でもう一度口を開いた。
「君も、もういつもの遊野清明に戻ったみたいだしね。それなら、それが一番いい。わざわざ自分たちの方でもプレゼント用意してたんだけど、もう必要ないみたいだしね」
「プレゼント？あれでも稲石さんってここから出られないんじゃ」
「ふふ、内緒。ね、大徳寺センセ」
『そうなんだニャ。でもよかったニャ、修学旅行で何人普通の生徒がいなくなるのかってハラハラしてたのは杞憂だったみたいで何よりですニャ』
　うわびっくりした。後ろを見ると、幽霊屋敷と化した廃寮にふさわしい半透明の人影が１つ。
『お久しぶりニャ、清明君』
「どうもです、先生。相変わらず元気そうですね」
『ぼちぼちってとこだニャ。それより、外では鮫島校長が新しいことを思いついたみたいだけど、もうちょっと詳しく教えてほしいニャ』
　なんでも、大徳寺先生が話を全部聞き終わる前にファラオが飽きてフラッとその場を離れてしまったため何が起きているのかイマイチわかってないのだという。そういうことならとジェネックスのことを一通り話すと、おお、といった感じで大徳寺先生が手

をたたいた。
『そういえば、そんな感じのメダルをこの間ファラオがその辺で拾ってたニャ。清明君、せっかくだからここで一回戦をしていかないかニャ?』
「へ?えっと」
　悪い話じゃない。多分だけど大徳寺先生とそのマクロコスモスデッキはプロにも引けを取らないほどの実力があるし、前回は辛うじて僕が勝ったけどあの時みたいにお互い色々なものを背負わないで純粋なデュエルがしてみたいとは常々思っていた。だから……。
「ぜひお願いします」
『うんうん、じゃあ二人とも頑張ってニャ。さーファラオ、この間お前が見つけたお宝のところに案内してくれにゃ』
　そう満足そうに言ってファラオの中に引っ込むと、どこかへ出かけて行ってしまった。えー……いや別に稲石さんも強いしそれはそれでいいんだけど、なんか、なんかもやもやする。次元デッキを相手にする気だったのにいきなり相手がゴーストリックに変わったってのはなんかすんごいもやもやする。
「えっと……言いたいことはわかるよ。でも待ってる間じっとしてるのもなんだし、ね」

「そですね。それじゃ、デュエルと洒落込みましょうか」
「「デュエル！」」
　なんだかよくわからないノリでデュエルが始まったが、始まった以上全力で戦うまでだ。
「その意気やよし。でも、先攻は自分のターン。モンスターをセットして、ターン終了」
　稲石さんお得意の、セットモンスター。だけど僕は知っている、あの人のデッキに守備力の高いモンスターはほとんどないのだ。
「だったら、このカードだ！ツーヘッド・シャークを召喚して、アクア・ジェットとのコンボで強化！」
　ツーヘッド・シャーク　攻１２００→２２００
「このモンスターは自身の能力で２回攻撃ができるよ。バトル、伏せモンスターに攻撃！」
　ツーヘッド・シャーク　攻２２００→???　守８００（破壊）
　２つある顎のうち片方の牙が、伏せモンスターをしっかりと噛み砕いた。だけど、一瞬見えたあのモンスターの姿は確か。そう思っている間にもフィールドに吹雪が吹き荒れ、ツーヘッドの姿がゆっくりと氷漬けになっていく。
「はい残念。ゴーストリックの雪女の効果によって、このモンスターを戦闘破壊したモ

ンスターは裏守備になって表示形式の変更もできないよ」
「くっ……ターンエンド」
稲石　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：???（ツーヘッド・シャーク・伏せ）
魔法・罠：なし
「さて、と。自分のターン、ドロー。ふんふん、このカードか」
ツーヘッドにかけたアクア・ジェットが無駄になったのは痛いけど、このモンスターは守備力も１６００ポイントある。リクルータークラスの攻撃力なら返り討ちにできるはずだ。
「グレイヴ・オージャを召喚。そして魔法カード、シールドクラッシュを発動。フィールド上の守備モンスター1体、ツーヘッド・シャークを破壊してダイレクトアタック」
ツーヘッドが守備モンスターを破壊するビームに狙い撃たれ、がら空きになったところに岩人形のごつごつした拳が襲い掛かる。身を守るカードは場にはなく、その攻撃をまともに腹に受けてしまった。

グレイヴ・オージャ　攻１６００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ４０００→２４００
「ぐっ……先手を取られたか」
「ふふ。カードを伏せて、ターン終了さ」
「まだダメージは浅いね、ドロー！オイスターマイスターを攻撃表示で出して、この魚族モンスターの召喚をトリガーに手札からシャーク・サッカーを特殊召喚。さらにフィールド魔法、ウォーターワールドを発動！」
水属性モンスターを前のめりな性能にする特別な海の力を受けて、牡蠣の戦士が力を増す。右手に握った牡蠣も、心なしか生き生きとしているように見えた。
オイスターマイスター　攻１６００→２１００　守２００→０
シャーク・サッカー　攻２００→７００　守１０００→６００
「グレイヴ・オージャに攻撃、オイスターショット！」
投げつけられた牡蠣が、岩のボディを削り取る。一瞬遅れて、岩人形の体が爆発を起こした。
オイスターマイスター　攻２１００→グレイヴ・オージャ　攻１６００（破壊）
稲石　ＬＰ４０００→３５００
「このままサッカー、ダイレクトアタック！」

「おっと、そりゃよくないね。リビングデッドの呼び声を発動、墓地に眠るゴーストリックの雪女を蘇生召喚させてもらうよ」

ゴーストリックの雪女　攻１０００

再び現れた雪女の攻撃力は、１０００。ウォーターワールドの力を受けたサッカーでもわずかの差で倒すことができず、僕の手札にリビングデッドにチェーンして発動できるサイクロンなどのカードはない。

「攻撃ストップ、サッカー。だったらカードをセットして、これでターン終了」

今伏せたカードはポセイドン・ウェーブ。次の攻撃を一回無効にできるうえに、場に２体の魚族モンスターがいるおかげで１６００ポイントのバーンダメージというおまけがついてくる計算になる。さっきの攻撃が通っていればなおよかったんだけど、まあ贅沢は言ってられないよね。

稲石　ＬＰ３５００　手札：２

モンスター：ゴーストリックの雪女（攻・リビデ）

魔法・罠：リビングデッドの呼び声（雪女）

清明　ＬＰ２４００　手札：１

モンスター：オイスターマイスター（攻）

シャーク・サッカー（攻）

魔法・罠：１（伏せ）
「うーん、だったらこれかな。ゴーストリックの魔女を召喚して、効果発動。オイスターマイスターには守備表示になってもらうよ」
金髪の少女がほうきを振り、牡蠣の戦士ががくりと片膝をつく。あ、まずい。何がまずいって、裏守備にされると場の表側表示の水・魚・海竜族の数でダメージが決まるポセイドン・ウェーブの効果が半減してしまう。
ゴーストリックの魔女　攻１２００
「それじゃあ、バトル！雪女でオイスターマイスターに攻撃」
ゴーストリックの雪女　攻１０００→　???（オイスターマイスター）　守２００→０（破壊）
「そのまま魔女で攻撃！」
「くっ……トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を無効にして、８００ポイントのダメージを受けてもらうよ」
「おっと、だったら自分もカード効果だ。手札のアチャチャチャンバラーは効果ダメージが発生するとき、手札から特殊召喚して相手に４００のダメージを与えることができる」
清明　ＬＰ２４００→２０００
稲石　ＬＰ３５００→２７００

アチャチャチャンバラー　攻１４００

水の壁が魔女の攻撃をはじいた、と思う間もなく、その横から飛んできた刀身が燃えている脇差が僕の体をかすめる。それを投げつけたのは、稲石さんの場に突然現れた歌舞伎役者のように顔に隈取をあしらった武士。稲石さんのデッキ、相変わらずビートなのかバーンなのかロックなのかよくわかんない。まあ人のことは言えないんですけどね。

「魔女の攻撃は止まったけど、これはどうかな?アチャチャチャンバラーでシャーク・サッカーにもう一度攻撃!」

アチャチャチャンバラー　攻１４００→シャーク・サッカー　攻７００（破壊）

清明　ＬＰ２０００→１３００

燃える日本刀の一撃が、シャーク・サッカーを切り裂く。ごめん、だけどこれはどうすることもできない。

「メイン2、雪女と魔女を自身の効果で裏側守備表示に変更。さらに永続魔法、うごめく影を発動。３００ライフポイントを払うことで、自分のセットモンスターをシャッフルして位置を変えることができる」

稲石　ＬＰ２７００→２４００

クロッシュに引っ込んだ雪女と魔女が、手品よろしくひとりでに宙を舞い位置をクル

クルと入れ替わる。まずい、次の攻撃でうまいこと魔女を倒せればいいけど下手に雪女に突っ込もうものならまた強制的に裏守備にされる。とことん地味だけどいつの間にかこっちのライフが減っている、それが稲石さんの恐ろしさだ。
「ターンエンド」
「くっ……ドロー！僕のフィールドにモンスターがいない時、このカードはリリースなしで通常召喚できる！第２の神、メタイオン召喚！」
　時械神メタイオン　攻０
「へぇ、新しいカード？面白い顔だね」
「いいの、男は顔じゃないからね。メタイオン先生でアチャチャチャンバラーに攻撃！」
　時械神メタイオン　攻０→アチャチャチャンバラー　攻１４００
　メタイオン先生が指先から炎を放ち、２つのクロッシュもろともフィールドを焼く。日が収まると、そこにはもう誰ひとり立っていなかった。
「ダメージが……ない？」
「その通り。メタイオン先生は戦闘でも効果でも破壊されずに自分の受けるダメージを０にして、さらにバトルが終わったときに相手モンスターを全部バウンスしてその数×３００のダメージを与えることができるのさ。もっとも、次の僕のスタンバイフェイズにデッキに戻るけどね」

稲石　ＬＰ２４００→１５００
「くうっ、やるね。だけど、そのおかげでもう一度こっちにアチャチャチャンバラーが戻ってきたからね、効果発動！効果ダメージの発生によりこのカードを特殊召喚して、４００ポイントのダメージ！」
「ぐっ！」
再び投げつけられた一閃が、メタイオン先生の横をすり抜けて僕に突き刺さる。
アチャチャチャンバラー　攻１４００
清明　ＬＰ１３００→９００
「ま、まだまだっ！カードを１枚伏せて、ターンエンド」
稲石さんの手札はゴーストリックの魔女と雪女の２枚。手札に何があるかわかってるんだから、次の動きもある程度予想がつくってもんだ。
稲石　ＬＰ１５００　手札：２
モンスター：アチャチャチャンバラー（攻）
魔法・罠：リビングデッドの呼び声（対象なし）
うごめく影
清明　ＬＰ９００　手札：０
モンスター：時械神メタイオン（攻）

魔法・罠：1（伏せ）

「自分のターン、ドロー。おっと、このカードか。モンスターをセットして、ターン終了さ」

「僕のターン、スタンバイフェイズにメタイオン先生がデッキに戻って、と」

稲石さんのふせたあのモンスターは雪女かな。だとすれば、こっちにわざと攻撃をさせようとしている。だけど、そう見せかけておいて全く別のモンスターを伏せているのかもしれない。もしかしたら魔女という可能性もなくはないし、それならここで攻撃したほうがいい。こりゃ、下手に先生出したのは間違いだったかな。

「なんにせよ、今できることをやるだけかな。白銀のスナイパーを召喚！」

召喚したところで一度動きを止め、もう一度セットモンスターを見る。本当に、ここであっちを攻撃すべきだろうか。せっかく攻撃力で勝ってるんだから、アチャチャチャンバラーをとりあえず破壊すべきではないだろうか。だけど、もしあの伏せモンスターが雪女か魔女、はたまた別のゴーストリックなら次のターン反転召喚してくるだろうし、そうしたらゴーストリック特有の『他にゴーストリックの仲間がいない限り召喚できない』制約もパーになって勝負の流れを完全に掴まれてしまう。そんな迷いを読み取ったのか、稲石さんがふっと笑う。そのドヤ顔が何だかイラッときて、そのおかげで吹っ切れた。

「ええい、もう！じっとしてるなんてらしくない、伏せモンスターに攻撃するよ！」

白銀のスナイパー　攻１５００→???　守６００（破壊）

あっさりと攻撃は通った。スナイパーさんが無事ということは、あのモンスターは雪女ではない。じゃあいったい、と思う間もなく、稲石さんがモンスターゾーンから外したそのモンスターをこちらに見せた。

「その、カードは……！」

「メタモルポットのリバース効果、発動。お互いに手札をすべて捨てて、カードを５枚ドローするよ。清明、君なら絶対この場面では攻撃してくると思った。ギリギリ魔女でも破壊できない守備力１２００のモンスターを引いたあたり、運も強い。だけど、まだ自分の方が読みは上だったね」

何も言い返せない。手札を捨てることなく５枚ドローできたけど、まったくそれが喜べない。なにしろ、次にターンの回ってくる稲石さんもまた５枚のカードを引いたのだから。

せめて、せめてこの５枚のカードで防御策を。そう思ってばっと目を通す。レベル４以上のモンスターによる直接攻撃を封じるトラップカード、バブル・ブリンガー。それに守備力３０００、だけどウォーターワールド適用下では２６００の壁になる罠モンスター、メタル・リフレクト・スライム……今はこれしかない。

「カードを２枚伏せて、ターンエンド」
稲石　ＬＰ１５００　手札：５
モンスター：アチャチャチャンバラー（攻）
魔法・罠：リビングデッドの呼び声（対象なし）
うごめく影
清明　ＬＰ９００　手札：３
モンスター：白銀のスナイパー（攻）
魔法・罠：２（伏せ）
「さあ、自分のターン！この手札なら、一気に勝負を決めさせてもらうよ！」
やれるもんならやってみろ、こっちには２枚の防御札が残ってるんだ。そう言い返したいところだけど、それができなかった。稲石さんほどの実力者相手に、この２枚だけでどこまで持ちこたえられるか。
「まず、召喚僧サモンプリーストを召喚。このモンスターは召喚した時守備表示になるよ」
召喚僧サモンプリースト　攻８００→守１６００
「サモンプリーストの効果。１ターンに１度手札の魔法カードを捨てて、デッキからレベル４以下のモンスターを特殊召喚。もっとも、この効果で呼び出したモンスターは

ターンの間攻撃できないけどね。テラ・フォーミングをコストにさあおいで、ゴーストリック・ママー」

サモンプリーストが長ったらしい呪文を不気味な口調で唱えると、天井からドスンと尻もちをついてミイラ男が落ちてきた。打ち付けたらしい腰をさすりながら、ここはどこだと言わんばかりにあたりをきょろきょろと見回す。

ゴーストリック・ママー　攻１５００

「ママーは表側表示で召喚する限り、自分は１ターンに１度召喚権とは別にゴーストリックを通常召喚できる。さあ出ておいで、猫娘！だけど無論、これだけじゃないからね？さらに魔法カード、受け継がれる力を発動。自分のモンスターを１体リリースすることで、エンドフェイズまでその攻撃力を別のモンスターに加算する。ママーの力を猫娘に！」

「これで攻撃力はスナイパーさんを……」

ゴーストリックの猫娘　攻４００→１９００

「バトル、猫娘で白銀のスナイパーに攻撃！」

猫ならではの素早さでスナイパーさんの懐に潜り込み、鋭い爪で連続して引っ掻く。遠距離専門のスナイパーさんは、あんなに間合いを詰められるとどうしようもない。

ゴーストリックの猫娘　攻１９００→白銀のスナイパー　攻１５００（破壊）

清明　ＬＰ９００→５００
「アチャチャチャンバラー、止めの一撃！」
「チャンバラーのレベルは３だからバブル・ブリンガーは効かない……だったらこっちだ、メタル・リフレクト・スライム！守備力２６００の壁でその攻撃は防ぐ！」
メタル・リフレクト・スライム　守３０００→２６００　攻０→５００
これでこのターンは凌げるから、返しのターンでこの氷帝メビウスをアドバンス召喚して。そんな計算は、あっさり崩された。
「速攻魔法、ディメンション・マジックを発動！場に魔法使い族モンスター、この場合サモンプリーストがいることで発動できて、モンスター１体をリリースすることで手札の魔法使いを特殊召喚し、さらに相手１体を破壊する！攻撃を止めたアチャチャチャンバラーをそのままリリースして、２体目の魔女を特殊召喚！」
「そんな!?」
「悪いね、清明。ディメンション・マジック第二の効果で、スライムを撃破させてもらうよ」
魔女の魔法を浴びたスライムが蒸発し、シュウシュウと音を立てて消えていく。レベル３の魔女には、これまたバブル・ブリンガーも効果がない。
「まだバトルフェイズは続いているからね。ゴーストリックの魔女でダイレクトアタッ

ク、ヒス・オブ・メイジ！」
ゴーストリックの魔女　攻１２００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ５００→０

「むー……負けた負けた、完敗だぁ」
完敗だ。読みの差で見事に負けた。何をしても予想済み、といった感じで対処されて、そのまま押し切られた。もうぐうの音も出ない。
「ふふ、お疲れ様」
「ちぇっ、もうリタイヤか。はいコレ、稲石さんの分ね」
負けた者に対していつまでも文句を言うわけにはいかないので、潔くＧＸのメダルを投げ渡す。それを稲石さんがキャッチしようとして、取り損ねて床に落とす。そこに目をやったところで、ちょうどファラオが帰ってきた。
「あ、お帰りなさーい」
『ただいまだニャ。メダルを持って……来た……ニャ？』
ふわふわと出てきた大徳寺先生の視線が床に落ちたメダルの上で止まる。そのままじーっとメダルを見ていたが、幽霊だから暑さ寒さは関係ないはずなのにその顔にたら

りと汗が出てきた。
まさかこの人、何か間違えたんじゃ。その思いを裏付けるように、タイミングよくファラオがくわえていたメダルをペッと吐き出す。
そこには、『ＤＸ』の文字が彫られていた。……どうみてもパチモンです、本当にありがとうございました。誰だこんなの作ったの。
『ま、まあ、今日の勝負はノーカンってことで、清明君もこれから大会頑張ればいいニャ！怒られる前に逃げるニャ、ファラオ！』
「あ、先生!?」
ファラオを急かして半ば無理やり部屋から出て行った大徳寺先生。稲石さんが床のＧＸメダルを拾い上げ、なぜかそれを僕に差し出す。
「ま、大徳寺センセもああ言ってたしね。今日のはノーカンってことで、しっかりやるんだよ」
「で、でも」
「そもそも自分がもらったって、よく考えたらここから出られないんじゃどうしようもないからね」
グイッとこちらに押し付けられたメダルを見る。本当に、受け取っちゃってもいいんだろうか。

「律儀だねえ。だけどその律義さはちょっと独りよがりかな。逆に聞くけど、自分と君が逆の立場だったとして。ここで返そうと思ったものをさらに突き返されて本当に嬉しいかい？」
「……うーん」
「それじゃあ、こうしよう。実は君たちが修学旅行に行ってる間にこの島で地震があってね。ただそれが妙に不自然で、どれだけ調べてもこの島だけ、それもごくごく一部分でのみしか揺れてないみたいなんだ。校舎はその部分に引っかかってないから、自分たち以外は誰も気づいていない。大徳寺センセが錬金術の力で割り出したその震源地を教えるから、そこで何が起きたのか調べてきてよ。メダルはその報酬の先払い。これなら納得いくんじゃない？」
「うん、そういうことなら、まあ」
　僕だって本音を言えば、ここで大会を終わらせたくはなかったからメダルを返してくれたのは素直に嬉しい。だけど、それでいいのかって思いが抜けきらなかった。そこまで読んだうえでああいうことを言ってくれたんだろう。僕が迷いなくメダルを受け取れるように。なんか聞いてるだけでものすごく怪しい話ではあるけれど、きっと何とかなるだろう。手を伸ばしてさっきまで僕の物だったメダルを再びつかむと、稲石さんが空いた手で1枚のカードを取りだした。

「それと、これも。君のデッキはなかなか前のめりだからね、このカードもあげよう」
「え？」
「いいから受け取っときなって。こっちは君と自分の仲直りの印さ」
　じっくりと見る。確かにこの効果、僕のデッキの守りのカードとして十分な能力を持っている。いや、十分以上の素晴らしい性能だ。
「稲石さん、ありがとう！大事にするよ！」
「何、いいってことよ。それじゃ、またね」
「はーい！」
　こうして、ジェネックス初デュエル……に、なるのかなこれ。とにかく初っ端から負け試合という散々な結果に終わってしまった。それにしても稲石さんの話、気になるな。ものすごく限定的な範囲での地震、ね。この島すら覆えないほど狭い範囲って、それってもはや地震じゃないよね。それにさっきはスルーしてたけど、どうも今日はチャクチャルさんの様子がおかしい。なんだか妙に疲れてるというか、弱ってるというか。今は稲石さんの頼みの話もあるしもう少し様子を見るけど、考えることがいっぱいだ。
　いったん頭を使うのをやめ、稲石さんにさっき書いてもらった手書きの地図を見る。バツ印がついたところが震源地とのことだけど、この位置には行ったことがある。弱小カードとレッテルを張られたものたちが捨てられていた、古井戸。万丈目や十代と一緒

に潜ってカードを拾い集めた井戸のあたりだ。

ターン５７　鉄砲水と手札の天使

「あいっかわらず寂れてんねえ」

もう４回目になる頭にかかった蜘蛛の巣を払いのける作業を終え、思わず文句が出る。去年来た時も大概だったけど、今年は輪をかけてひどい。足元は雑草だらけだし、木の間には今どけたもの以外にも直径１メートル近い蜘蛛の巣がぽつぽつかかってるし、おまけにふと上を見ればカードの亡霊がゆるゆる飛び回っている。

「えーっと、道はこっちだったっけか」

こうは言ったものの、別に迷っているわけではない。地図あるし。稲石さんの廃寮を出てから一言も喋らないチャクチャルさんから何かしらの反応を返してもらおうと水を向けたのだ。

「いやー、今日は晴れてるね」

なるほど、これも無視、か。気まずい。これ以上やってもこっちが精神的にダメージ受けるだけで終わりそうだったので、諦めて無言で歩くことにする。結局例の古井戸にたどり着くまで、誰も何もしゃべることはなかった。

「どれ、もうカードは全部回収したはずだけど……」

この地点のみにピンポイントで地震なんて、カードの仕業としか考えられない。ただ問題は、そんな強力な精霊がいたのならもっと早くに誰かしらが気づいてなきゃおかしいということだ。つまり、最近になって誰かが捨てたカードなのか、あるいはその逆で……。相変わらず返事してくんないチャクチャルさんを少し本気で心配しつつ、自分の考えを口に出す。

「ずっと前からあるカードがたまたま前に来たときは見つからないようになってたか。で、いいんだよね？」

最後のセリフはチャクチャルさんへのものではない。井戸の奥深く、どうも土砂崩れか何かのせいで埋まっていたのが半分ほど出ていたらしい、かすかに見える小さなお社（やしろ）の一部とその前でこちらに背を向けてうずくまる茶色い和服を着た銀髪の女の子に対して確認を取ったものだ。

女の子は僕が声をかけてもピクリとも動かず、ひたすらじっとうずくまっている。腰のあたりに鋭そうな鎌を指しているのが少し引っかかったが、いざとなれば霧の王たちに助けてもらえばいいさと思い切って飛び降りてみる。

「よっ……あ痛（つ）っ!?」

『……』

女の子の手前格好つけようとした罰が当たったのか、着地の瞬間泥に足を取られて変

な方向に足をひねってしまい、足首のあたりから嫌な感触が伝わってくる。これ、ちゃんと自力で上まで登れるだろうか。面倒だからってはしごやロープを持ってこなかった自分を呪いながら、湿った地面の上でどうにかあぐらをかく。

「い、痛ったぁ……！わ、悪いけど、しばらく休ませてもらうよ」

女の子の沈黙を肯定と受け取り、そのまま持ってきた荷物に手を伸ばす。稲石さんと別れたのがお昼ちょっと前。なんやかんやで今が１２時半ぐらいだから、１時ごろには動けるようになるだろう。じっとしているのも暇なので、長丁場になるかもとわざわざ寮まで一回戻って作ってきたお弁当でも食べようかと包みを開く。真っ白なおにぎりに別で持ってきた海苔を巻き、最近作ってみた浅漬けをポリポリやりながらかぶりつく。うん、ちゃんと米全体に塩の味がほんのりついて、パリッとした海苔の感触と相まってなかなかおいしい。こういうのを手前味噌っていうんだろうけど。あ、味噌もおかずとしてはいいなあ。今度こぼさずに持ち歩ける保存法を考えてみよう。いっそおにぎり自体の具にしてみようか。

『……！』

あれ。ふと気が付くと目の前の子がこちらに振り返っていて、きれいな赤い目でじーっと残りのおにぎりを物欲しそうに見つめていた。

「えっと、欲しいの？」

『……ッ！』

思わず声をかけると慌ててそっぽを向くが、視線はばっちりお米の方に注がれているのが丸わかりだ。その証拠に2個目を掴もうとして手を動かすとそっちに視線がついてくる。右に動かせば右を見て、左に動かせば左を見る、といった具合だ。ちょっと面白かったので1、2往復ほどしてから、あんまりいじめるのもかわいそうかともう一度声をかける。

「ごめんごめん。あいにく僕は動けないからね、こっちおいでよ。別に何もしやしないからさ、一緒に食べよ」

『……』

これは、地雷踏んだだろうか。バリバリの警戒心と殺意のこもった瞳でこちらを見つめる彼女の白い顔を見ながら、冷や汗がつうっと流れていることにぼんやりと気づいた。見た目が人間の女の子だから、心のどこかで油断していたんだろうか。人間とは比べ物にならないぐらいの力を持った精霊だってことぐらい、自力で壁を壊してお社ごと外に出たことから気づいてもよさそうなものだったのに。僕の喉に押し付けられた鋭い鉈がその証拠だ。目にもとまらぬスピードで後ろに回り込み、こちらの両腕を細腕からは想像もできないような怪力で抑え込みつつもう片方の手で首にこんなものを押し付けるなんて、並みの芸当じゃない。いまだに落ち着いていられるのは、もう命がけに

はこの1年ちょいで慣れっこになったからだろうか。とはいえそれは全てデュエルでの話、こんなふうに物理的に命が危ないのは初めてで逆に現実感がない。

「え、えっと」

『……？』

とにかく何か喋ろうとすると、首に押し付けた鉈を軽く動かすジェスチャーをする。いらんことしたらその場で首を斬るぞ、ってことだろう。だけど逆に考えれば、ともかくも喋るお許しが出たみたいだ。

とはいえ、特に何か言いたいことを考えていたわけではない。さて、どうしようか。僕の精霊を呼び出したとしても、多分ここまで密着された状況なら何かしらのアクションを取る前にばっさりやられるだろう。というか、だから皆こんなピンチでも助けに出てこれてないんだろうし。アクア・ジェットをはじめとした魔法、罠カードを実体化させたらどうだろうか、ともチラッと考えたが、割と自由にこっちの世界に出入りできるモンスターの精霊と違ってあの手のカードはいちいちデッキから引き出さないと実体化させることができない。チャクチャルさんが前に教えてくれたけど、この問題はカードに関する不思議な力を持つ超能力者、サイコデュエリストのカード実体化部門でもなかなか克服できない課題だったらしい。

とにかく何か喋りつつここから抜け出すためのヒントを掴もうとして、視線をずら

す。そもそもこの子は、さっきまで何もしてこなかったのになんでいきなり怒ったんだろう。解説という名の精霊通訳者、チャクチャルさんは相変わらず沈黙したままだ。どこかへ行っちゃったわけじゃないのは感じるけれど、何かアクションを起こすだけの力がないらしい。

『……』

許可したにもかかわらずいつまでたっても何も言いださないことにしびれを切らしたのか、不機嫌そうに彼女が地面を蹴る。小石を蹴り飛ばしたらしい音に気を取られ、ふとそちらに目を動かしてみると、見えた。別にやらしい意味じゃない。なんとかこの場を生き延びるための手が見えたのだ。とはいえよくよく考えてみれば、彼女がデュエルモンスターズの精霊で、しかも人型である以上この方法が一番手っ取り早く平和的なのは明らかなはずだった。単にテンパって気づかなかっただけで。

「ね、ねぇ。僕と、デュエルしようよ」

『……』

「そのデュエルディスク、君のでしょ？デュエリストならこんな物騒なものしまって、カードで言いたいこと言えばいいんだしさ」

『……』

ほんの少し、締め付ける腕の力が弱まったような気がした。ここはもうひと押しとみ

て、あえて黙ることにする。この場でペラペラしゃべることは、少なくとも彼女が相手の場合決してプラスにはならない。伝えたいことは伝えたのだから、後はそちらの判断に任せるということを態度で伝えるのだ。

『……！』

これが結果的によかったのだろう。ふわり、と音もなく飛び上がった彼女は驚異的なジャンプ力で空中一回転をかましつつ数メートル離れた位置に着地した。そして腰につけていた驚くほど古いタイプの、いつかニュースで見たことあるヨーヨーの親玉かカップ焼きそばのデカいのみたいな回転式のデュエルディスク第一号ほどではないものの、そのすぐ後に開発されたモデルと思しきデュエルディスクを腕にはめる。

「自分で言い出したこととはいえ、なーんでこんなことになってるんだか。……なんだっていいよね、別に。それじゃあ、デュエルと洒落込もうか」

結局、言ってみればいつもとやってることは何一つ変わらないのだ。ならそれでいいかと納得し、カードを引く。どれ、僕が後攻か。彼女の最初の動きをうかがうべく、フィールドに目をやる。少女の見た目からは想像もつかないがなんだか妙に様になっている動きで、クイックイッと指を動かす彼女が見えた。

……え、嘘。もう終わり？いくらカード引けない先攻だからって、ホントに何もなし？事故ったんならいいけど、ここまで何もないとかえって不気味だ。

「調子狂うなあ……」

とはいえ、僕だってもうデュエルアカデミアの２年。こんな盤面で何を警戒すればいいかはわかる。それはずばり、冥府の使者ゴーズだ。奴の特殊能力は、フィールドで何もない状態でダメージを受けた時に特殊召喚してそれが戦闘ならダメージがそのままステータスになるカイエントークンを生み、効果ダメージならそのダメージをこっちにも押し付けることだ。

その攻撃に対処する手は、もうこの手札に揃っている。動きを脳内で軽くシュミレーションしてから、もう一度手札を確認して動き出す。

「水属性モンスターのシャーク・サッカーを召喚して、そのままリリース！こうすることで手札のシャークラーケンは特殊召喚できる」

シャークラーケン　攻２４００

「バトル、シャークラーケンでダイレクトアタック！」

シャークラーケン　攻２４００→無口な少女（直接攻撃）

無口な少女　ＬＰ４０００→１６００

『……っ！』

やっぱりお出ましか。大方の予想が当たり、シャークラーケンの攻撃をトリガーとして彼女の足元にぽっかりと深い穴が開き、冥府の階段を上って二人の使者がフィールド

に乱入してくる。
冥府の使者ゴーズ　攻２７００
冥府の使者カイエントークン　攻２４００
だけど、その展開は予想済み。僕の手札にはフィールド魔法、ウォーターワールドがある。これを使えばシャークラーケンの攻撃力は２９００まで上昇し、２体の使者でも突破できないほどの火力を手に入れることができる。あえてメイン１ではなくメイン２に使うことで、戦闘ダメージと同じ攻撃力になるカイエントークンをすり抜けるのが僕の狙いだ。
『……』
そんな思いを見透かしたように軽く笑う彼女。手札からさらに１枚のカードを見せ、それをモンスターゾーンに置く。しまった、そのカードも持っていたのか。トラゴエディアは戦闘ダメージに反応して手札から出てくるモンスターで、手札の枚数によって変動するステータスを持つだけでなく墓地のモンスターを利用してレベルを変動させる効果と、手札のモンスターを利用して相手モンスターを洗脳する効果を持つ。一瞬嫌な予感もしたが、まさかだからといってウォーターワールドを発動しなければゴーズに一方的にやられてしまう。
トラゴエディア　攻?→１８００　守?→１８００

「メ、メイン2に移ってフィールド魔法、ウォーターワールドを発動。カードを2枚セットして、ターンエンド」

シャークラーケン　攻２４００→２９００　守２１００→１７００

無口な少女　ＬＰ１６００　手札：３

モンスター：冥府の使者ゴーズ（攻）

冥府の使者カイエントークン（攻）

トラゴエディア（攻）

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：シャークラーケン（攻）

魔法・罠：２（伏せ）

場：ウォーターワールド

『……』

また、1枚のモンスターを見せてくる。今度は何事かと覗き込むと、それはレベルもステータスも低い天道虫。

無口な少女　ＬＰ１６００→２１００

井戸の入り口の真下に立っているため日光が差し込んで明るい僕の位置とは違い、彼

女が立っているのはやや奥の方。ただでさえ薄暗いうえに遠いカードを見分けるために素の視力だけでは足りずダークシグナーの力までフル稼働して、ようやく彼女が何をしたのか理解する。あれは黄金の天道虫（ゴールデン・レディバグ）というカードで、スタンバイフェイズからエンドフェイズまで公開することで５００ポイントのライフを回復できるカードだ。

『……』

手札からレベル６のモンスター、カオス・ソーサラーを見せ、そのカードとトラゴエディアをそれぞれ指さしてから墓地に送る。なるほど、コントロールを奪う効果を使った、ってわけか。

『……！』

彼女のフィールドにいる４体のモンスターの攻撃力合計は、こっちのライフ４０００なんぞはるかに上回る。なるほど、デュエルの腕もなかなかのものだ。

「だけど、まだ甘いね！リバーストラップ、バブル・ブリンガー！このカードの効果で、お互いにレベル４以上のモンスターじゃあ直接攻撃できない！」

足元から泡の壁が立ち上り、僕の周りを包み込んで攻撃を防ぐ盾になる。これでこのターンをしのいで……

『……』

「サ、サイクロン……」

永続トラップはチェーンして破壊されると、その効果が一切適用されない。結局４体の攻撃は止まることなくこちらに襲い掛かった。ええい、至善の策が駄目なら次善の策だ！

「最初の一回、トラゴエディアの攻撃はそのまま受ける！」

トラゴエディア　攻１２００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４０００→２８００

「まだまだっ！次、カイエンの攻撃も受ける！」

冥府の使者カイエントークン　攻２４００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ２８００→４００

あっという間にわずか４００までライフが減る。これまでの僕ならこのままなすすべもなくやられていただろうけど、もう違う。これは、僕が進歩しているという僕自身への証明のデュエルでもあるのだ。

「だいぶ削られたけど、もうここで止まる僕じゃない！早速助けてもらうよ稲石さん、相手の直接攻撃宣言時に手札からゴーストリック・フロストの効果を発動！攻撃モンスターを裏側守備表示にして、さらにこのモンスターを裏側守備表示で特殊召喚！」

シャークラーケン→???（セット）

???（ゴーストリック・フロスト）

「最後のゴーズの攻撃に対してトラップカード、ポセイドン・ウェーブを発動。その攻撃は無効にする」

『……』

攻撃を終えても特に何か言うわけでもないが、どこか不思議そうな目でこちらを見る少女。何が言いたいのかと少し考え、フロストの効果に思い当たる。

「ああ、なんでカイエントークンの攻撃にフロストを発動しなかったのかって？」

『……』

コクリ、と頷く少女。確かに、そのタイミングでフロストを使えば裏側表示になるということがないトークンはそのまま破壊できていただろう。

「でも、そういうわけにもいかないのよねこれが。そのシャークラーケン、やっぱり僕のカードだからさ。倒すにしろアドバンス召喚の素材にされるにしろ、せめてその様子を見たくなかったしシャークラーケンにも見せたくなかったって言うか、なんていうか。んー、なんかうまく説明できないけど、こういうのって気分の問題だしね」

自分のカードを自分で倒すのも、他の誰かに利用されるのも見たくないし、そのカード自体にも見せたくない。ばかげた話かもしれないけど、あのフロストの効果を受けた瞬間のシャークラーケンのどこかほっとしたような顔。それが見えただけでも、十分あのタイミングで使う価値はあった。と、僕は思う。だいたいそんなことを言って聞かせ

ると、彼女はどこか寂しそうで羨ましそうで、でもかすかに嬉しそうな微妙な表情で頷いた。そして、またこちらを手招きする。もしかして、あのデッキは魔法も罠もほとんど使わないフルモン寄りの【ドローゴー】ってことなんだろうか。だとしたらちょっとこのカードはもったいないかも。

「僕のターン、ドロー。ゴーストリック・フロストをリリースしてアドバンス召喚！さあ出番だよ、氷帝メビウス！」

氷帝メビウス　攻２４００→２９００　守１０００→６００

「メビウスの攻撃力は２９００……ここは、トラゴエディアを攻撃！シャークラーケンの仇、アイス・ランス！」

『……！』

氷帝メビウス　攻２９００→トラゴエディア　攻１２００（破壊）

無口な少女　ＬＰ２１００→４００

トラゴエディアが倒れたことで、もうこれ以上のコントロール奪取は防ぐことができた。さすがに防御札はもう手札にない、ここからは手札が肥えるまでなんとかメビウスに持ちこたえてもらうしかない。

「任せたよ、メビウス。ターンエンド」

励ましの声をかけ、メビウスがそれに応えてこちらを見て軽く頷く。それを見てま

た、彼女がさっきフロストの発動タイミングについて話した時と同じような顔になった。

無口な少女　ＬＰ４００　手札：２
モンスター：冥府の使者ゴーズ（攻）
冥府の使者カイエントークン（攻）
???（シャークラーケン・セット）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４００　手札：２
モンスター：氷帝メビウス（攻）
魔法・罠：なし
場：ウォーターワールド

『……』

無口な少女　ＬＰ４００→９００

スタンバイフェイズにふたたび黄金の天道虫による回復。そして魔法カード、七星の宝刀。えーっと効果はなになに、手札かフィールドのレベル７モンスターを除外して２枚ドローと。なるほど、ゴーズじゃ勝てないと踏んでいちかばちかのドローに繋げてきたのか。

冥府の使者カイエントークン　攻２４００↓守２４００
さらにカイエンも守備に変更。どうやらいいカードは引けなかったと見える。
カードカー・Ｄ　攻８００
そしてモンスターの通常召喚。カードカー・Ｄは召喚時にリリースすることでターンのエンドフェイズになる代わりにカードを２枚引くことができる。さらにドローを狙ってきたのち、問答無用で僕のターンに移行する。　とはいえ、さっきから手札誘発ばっかり使ってくる彼女のデッキなら宝刀はともかくカードカーのデメリットはほぼゼロ。そしてあっちの手札は天道虫入れて５枚、か。あやかりたいものだ。
「僕のターン、ドロー。ふむ、まずはバトル。メビウスでカイエントークンに攻撃、アイス・ランス……なっ!?」
氷帝メビウス　攻２９００↓工作列車シグナル・レッド　守１３００
メビウスの氷の槍の前にいきなり割り込んできた１台の小型列車が、なんとその槍を車体で防ぎ切った。
『……』
もう何度目かもわからない手札誘発。その効果を見ると、今出てきた工作列車シグナル・レッドは相手の攻撃時に手札から特殊召喚してその攻撃を自分に誘導し、さらにその戦闘では破壊されない効果を持つらしい。

「なるほどね。だったらメイン2、モンスターをセットしてターンエンド」
無口な少女　ＬＰ９００　手札：４
モンスター：工作列車シグナル・レッド（守）
冥府の使者カイエントークン（守）
???（シャークラーケン・セット）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４００　手札：２
モンスター：氷帝メビウス（攻）
???（セット）
魔法・罠：なし
場：ウォーターワールド
……強い。
何とか今は膠着状態に持っていけているが、手札誘発だらけのデッキを相手に膠着状態なんて愚策そのものだ。考えてみれば、これまで僕が戦ったカードの精霊はみなやたらと強い奴だらけだった。サイコ・ショッカーしかり、ラビエルしかり。
『……』
無口な少女　ＬＰ９００→１４００

そして彼女はまた、カードを引いて黄金の天道虫の効果を使うだけで自分のターンを終える。これまでとは全く違う、見たことのない異質なデッキが余計に緊張をかきたて、悪い方へ悪い方へと想像が進んでしまう。

「くっ！僕のターン、ドローッ！」

気持ちで負けていてはデュエルには勝てない。それがわかっているからこそ、押し寄せる不安を振り払うために必要以上の大声を出す。

引いたカードは、サルベージ。墓地の水属性モンスターを文字通りサルベージできる効果を持つが、今の墓地にはいまだ対応カードがシャーク・サッカー1体しかいないため発動すらできない。

「メビウスでもう一度カイエントークンに攻撃、アイス・ランスッ！」

『……』

ピンク色の爬虫類な紳士が、紅茶を飲みながらステッキ片手にカイエントークンの前に立ちはだかる。また手札誘発、それも攻撃誘導系の……えーっと、名前がジェントルーパー？攻撃宣言時に特殊召喚できて、これまた攻撃を誘導する効果があるらしい。シグナル・レッドと違い戦闘破壊耐性がないのが救いだろうか。

氷帝メビウス　攻２９００→ジェントルーパー　守１０００（破壊）

それにしても、これで確信できた。彼女がなぜここまで執拗にカイエントークンを守

るのか。間違いなく、彼女は待っている。光属性にとって最強の手札誘発カード、オネストをドローするのを。だから、次だ。あのカイエントークンが次に攻撃表示になったとき、勝負は決まる。

「これで、ターンエンド」

無口な少女　ＬＰ１４００　手札：４

モンスター：工作列車シグナル・レッド（守）

冥府の使者カイエントークン（守）

???（シャークラーケン・セット）

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ４００　手札：３

モンスター：氷帝メビウス（攻）

???（セット）

魔法・罠：なし

場：ウォーターワールド

『……』

無口な少女　ＬＰ１４００→１９００

このライフ回復も地味ながら効いてきている。もたもたしているうちに、すっかりラ

イフ差が開いてしまった。

『……』

そしてまた、ターンエンド。

もう、これ以上待つのは自殺行為だ。こちらの攻撃を誘っているのはわかるけど、だからといって動かないでいることもできない。ここは、そろそろ覚悟を決めよう。

「僕のターン、ドロー……セットモンスターを反転召喚、水晶の占い師！このカードのリバース効果でデッキトップを２枚めくり、そのうち１枚を選択して手札に加えることができる。デッキトップはそれぞれシーラカンスとジョーズマン、ここはシーラカンスを選択。さらに水晶の占い師とメビウスをリリースして、超古深海王シーラカンスをアドバンス召喚！」

超古深海王シーラカンス　攻２８００→３３００　守２２００→１８００

「シーラカンスの効果発動、手札を１枚捨てて、デッキからレベル４以下の魚族を出せるだけ特殊召喚する！行くよ、魚介王の咆哮！」

『……ッ！……！』

魚の王が空気を震わせて叫ぶ。だけどどうしたことだろう、その姿が急に苦しみだし、まるで毒や呪いでも受けたかのように地面に倒れた。

「な、え？」

『……』

少女が見せてきたカードに描かれていたのは、まさに少女自身のイラスト。

「なるほど、これが君の本体ってわけね。それでデッキも手札誘発ってわけか……」

幽鬼（ゆき）うさぎ。フィールド上に存在する魔法か罠、あるいはモンスター効果が発動した時に手札かフィールドから墓地に送ることでそのカードを破壊する能力を持つカード。手札からやってきていきなり破壊するとは、いかにも彼女らしいというかなんというか。

『……』

まだ何か言いたげに、こっちのデュエルディスクを指さしてくる。何事かと視線をそちらにやると、なんとシーラカンスの効果はまだ生きていて、早く魚族を出せと効果の処理途中であることを示す赤いランプが点灯している。なるほど、あくまでもできることは『破壊』であって『無効』じゃないから、シーラカンスが倒れても一度使った効果自体はまだ生きてるのか。

「そうと決まれば！出ておいで、僕のモンスターたち！」

シャクトパス　守８００→４００　攻１６００→２１００

ハンマー・シャーク　守１５００→１１００　攻１７００→２２００

フィッシュボーグ―アーチャー　守３００→０　攻３００→８００

キラー・ラブカ　守１５００→１１００　攻７００→１２００
ハリマンボウ　守１００→０　攻１５００→２０００
ポセイドン・ウェーブを使っちゃったことが悔やまれるけど、これはどうしようもない。あそこで使っていなければもっと早くにやられていたのだから。
『……』
「おっと、ただこっちだけに召喚させる気はない、ってこと？やるじゃない」
こう言ったのは、彼女のフィールドにもまた、２体のモンスターが追加されたからだ。
カオスハンター　攻２５００
カオスハンター　攻２５００
このタイミングで出てきて、しかも彼女の手札が０になっているということはおそらくカオスハンターはドラゴン・アイスと似たような効果、つまり相手の特殊召喚に対応して手札コストを払うことで特殊召喚できるを持っているのだろう。
「やっと手札がなくなった、か。このターンはもうできることもないからね、これでターンエンド」
無口な少女　ＬＰ１９００　手札：１
モンスター：工作列車シグナル・レッド（守）
冥府の使者カイエントークン（守）

???（シャークラーケン・セット）
カオスハンター（攻）
カオスハンター（攻）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４００　手札：３
モンスター：シャクトパス（守）
ハンマー・シャーク（守）
フィッシュボーグ―アーチャー（守）
キラー・ラブカ（守）
ハリマンボウ（守）
魔法・罠：なし
場：ウォーターワールド
『……！』
冥府の使者カイエントークン　守２４００→攻２４００
工作列車シグナル・レッド　守１３００→攻１０００
シャークラーケン　攻２４００→２９００　守２１００→１７００
ここを攻め時と見たのか、それともついにオネストを引いたのか。いずれにせよカイ

エントークンが再び攻撃態勢を取り、シグナル・レッドもまた動いた。一瞬ためらうそぶりも見せたが、シャークラーケンも再び表を向く。

『……!』

カオスハンター　攻２５００→キラー・ラブカ　守１１００（破壊）

「キラー・ラブカを最初に破壊?」

一体何を、と思う間もなく、矢継ぎ早に次の攻撃が繰り出される。

カオスハンター　攻２５００→フィッシュボーグ―アーチャー　守３００（破壊）

工作列車シグナル・レッド　攻１０００→ハリマンボウ　守１００（破壊）

「ハリマンボウが破壊された時、相手1体の攻撃力を５００ダウンさせる!ここは、シグナル・レッドを選択!」

工作列車シグナル・レッド　攻１０００→５００

そしてついに最後の1体、カイエントークンの凶刃がハンマー・シャークに襲い掛かる。

「おっと、それは通さないよ!墓地からキラー・ラブカの効果発動、このカードを除外することで相手の水、魚、海竜族に対する攻撃を無効に……あれ?」

いつまでたってもラブカの半透明な体は現れず、そのまま僕のフィールドに最後まで残っていたハンマー・シャークまでもが破壊されてしまう。

冥府の使者カイエントークン　攻２４００↓ハンマー・シャーク　守１１００（破壊）
「そ、そんな、なんでラブカの効果が」
『……』
軽くため息をつき、モンスターゾーンのカオスハンターをこちらに見せてくる少女。手札を１枚捨てて特殊召喚でき、さらにこのカードがある限り相手はゲームからカードを除外できない、か。普段は怖くもなんともない効果だけど、今日に限ってはピンポイントで刺さったってわけか。
『……』
「ああ、ターンエンドってわけね。ごめんごめん、ちょっと考え事してて」
圧倒的に不利だけど、別に勝ち目がないわけじゃない。彼女の場には攻撃力５００のまま無防備なシグナル・レッドが１両。つまりこのターンで攻撃力２４００以上のモンスターを何らかの方法で場に出すことができれば、あるいは。
「まだ諦めないよ！ドロー！」
恐る恐る引いた、そのカードは。
「……来た！速攻魔法、帝王の烈旋を発動！このカードは相手モンスター１体をリリースして、モンスターをアドバンス召喚できる！もう一回力を貸して、シャークラーケン……これで終わらせるよ、霧の王（キングミスト）」

霧の王　攻０→２４００→２９００
『……』
「シグナル・レッドに攻撃……楽しかったよ、ミスト・ストラングル」
霧の王　攻２９００→工作列車シグナル・レッド　攻５００
無口な少女　ＬＰ１９００→０

「ふー……」
『……』
かなりギリギリだったけど、どうにか勝利。よかった、これで生きて帰れる。そろそろ足の調子も良くなってきたし、地震の原因も突き止められた。ぼちぼち潮時だろう。
「じゃあ、またね」
『……ッ!!』
別れに手を振ると、思わずといった風にこちらに手を伸ばす。だけどなぜ手を伸ばしたのかは自分でもよくわかっていないらしく、その姿勢のまま不思議そうに首をかしげる。これはもしかして、いけるだろうか。せっかく助かった命を無駄にするような行動かもしれないことは百も承知だったけど、それでも声を掛けずにはいられなくなり、こ

ちらからも手を伸ばす。
「ねえ、幽鬼うさぎちゃん」
『……？』
「僕は今、どうしても強くならなきゃいけない理由があるんだ。勝って、僕の友達を、皆を元に戻したい。だから、１つ頼みがあるんだけど。僕と、一緒に来てくれない？」
『……』
「ダメ、かな」
『……』
　一瞬目を伏せて迷いを見せたのちに、僕の差し出した手を握った。ほんの一瞬だけこれまで見たこともないほど柔らかい笑みを見せて、彼女はカードになった。
「これからよろしく、幽鬼うさぎちゃん。あ、そうだ、おにぎり食べる？」
『……！』
　パッとカードから出てきてこくこくと頷き、無表情ながら嬉しそうに残りのおにぎり１個を頬張る。そんな嬉しそうなら、こっちも作ったかいがあるってもんだ。デッキの中にゴーストリック・フロストに次ぐ新しい仲間を入れ、外を見上げる。普通によじ登るのは大変そうだけど、ダークシグナーになれば余裕だろう。チャクチャルさんの力を引き出そうとして、初めて異変に気が付いた。

『マスター……すま、ないが今は……くっ』
「チャ、チャクチャルさん!? 一体何があったのか、いい加減僕に教えてよ! 一人でぶっ倒れてちゃなにもわかんないよ!」
　数時間ぶりにチャクチャルさんの声が聞けてほっとしたのもつかの間、その声に込められた異様な衰弱にぞっとする。まるで、全身の力が吸い取られているような……。
「誰!? 一体誰がこんなこと!」
『奴が、奴が私の、力を……だが、よせ、マスター……!』
「奴!?」
『太陽神……ラー……』
「チャ、チャクチャルさーん!」
　この言葉を最後に、もうチャクチャルさんはうんともすんとも言わなくなった。ラー、ラーっていうとあの三幻神の中で最強の神、ラーの翼神竜のことだろうか。だけど、あのカードはデュエルキングの武藤遊戯さんしか持っていない、正真正銘世界に一枚しかないカードのはずだ。それがここにあるって？
　何が何だか、まるで分らない。だけど、僕の大事なチャクチャルさんをここまで弱らせているんだ。ラーだろうとヲーだろうと知ったことか。僕の全力で、たっぷり礼をしてやろう。

ターン５８　鉄砲水と太陽神（陽）

「どーこだー！」

少しでも犯人の気を引くべく、あえて派手に音を立てながら走り回る。チャクチャルさんは完全にしゃべる力を失う一瞬前、確かに自分の衰弱はラーの翼神竜のしわざだと言った。だけど、ここで一つ疑問が生じる。去年は何ともなかったのにここにきて急にラーのカードが世界のどこかからいつぞやの三幻魔みたいにカードの、それもチャクチャルさんほどの力を持ったモンスターの力を吸い取るようになるというのはいくらなんでもおかしな話だ、ということだ。

つまり、何か裏がある。あまりといえばあまりのタイミングの良さから一時は斎王が何か企んでいるのかとも思ったけど、三幻神をどうこうできるほどの力を斎王が持っているのならいつまでもこのアカデミアに執着する理由がまるでわからない。だから何か、もっと別の理由が絡んでいるのだろう。そう考える方が自然だ。そしてその理由というのが、このジェネックスに繋がっているとしたら？いや、別に鮫島校長を疑うわけじゃない。ただ、この大会には世界中のプロが集まってくる。伝説のカードがやってくるには、もってこいの場所といえるだろう。つまり、ラーはこの島に来ているのかも。

その考えを裏付けるように、タイミングよく校長の声が島中に仕掛けられたメガホンから放送された。

『ジェネックス全参加者に告ぐ。大会を一時中断し、全員に外出禁止を命ず。繰り返す、大会を一時中断し、全員に外出禁止を……』

タイミングからいって十中八九これだ。むしろ違ったらどうしようってレベルだ。

「ビーンゴ、っと。悪いね校長センセ、外出禁止は聞けそうにないわ。うちの大事な神様ここまで弱らせてくれてんだ、キッチリ落とし前だけはつけてもらわないとね」

『……!』

「ん？どしたのうさぎちゃん……おっと、センキュ！」

パタパタと飛び跳ねながら真剣な顔で僕の学生服の裾を引っ張る幽鬼うさぎ。彼女が指差す方向の先には、何かを話している十代と、あれって誰だろうか。ここからだと後ろ姿しか見えないけど、なんだかどこかで見たことある人な気がする。だけど、今そっちは重要じゃない。彼女が指差していたのは、その二人に近づく黒い影の方。いかにもさえない研究員、といった風体だが、なぜか見ているだけで人を不安にさせる嫌な気配を持っている。こっそり彼らから十数メートルの距離まで近寄ってみると、ちょうどその男が二人に話しかけるところだった。

「……これは、ミスター……」

む、うまく聞こえないな。さすがにこれだけ離れてれば当たり前か、もうちょっと近寄るとしよう。ついでに回り込んで、あの研究員の背後を取れる位置に移動する。うまいこと誰にも気づかれずに絶好の位置を取り、再び耳を澄ます。

「……そのカードを返すのデース」

「返してほしければ、この『ラーの翼神竜』の入ったデッキにデュエルで勝利することですね」

ここからだと裏向きで見えないけど、なにやらカードを十代たちの方に見せつけてからそれをデッキに入れる男。あの反応からいって、間違いなく今チャクチャルさんの力を吸い取ってるらーとやらはあれで間違いないんだろう。

「いいでショウ、私が相手を……」

「いいや、ここは俺が！」

おっと。ここまで追いかけてきて、今更十代に出番とられちゃ敵わない。サッと飛び出してなるべく素早く男をプロレス技でいうところのスリーパー、早い話が首を腕で締め付ける。

「悪いね、十代。僕はこの人に恨みがあるんだ」

「あ、清明!?なんでお前がここに！」

「野暮用が積み重なってね。この人が持ってるのがラーの翼神竜、なんでしょ？で、それ

を倒せば万事丸く収まるんでしょ？」
「た、確かにそうデスが。彼の名前はフランツ、私の会社のデザイナーの1人デース」
それだけ聞ければ十分だ。そろそろ酸素不足で顔色が変わりだした男を解放して、地面に倒れこむようにして必死に息を吸うのを見下ろしながらデッキを準備する。
「き、貴様、いきなり何を……！」
「その台詞、そっくりそのままリボン巻いてシール貼って叩き返したげるよ。お前のせいで、チャクチャルさんは……！」
別に死んでないけど。……ないよね？
「ハア、ハア……よし、いいだろう。まずはお前からだ、神と戦う栄誉をやろう」
「ボーイ、いくらなんでも無茶デース！彼のラーはコピーカードですが、それでも一介の生徒が相手をしていいものでは……！」
「まあまあ、会長さん。俺だって相手してみたいけど、ここは清明に任せようぜ。アイツもすごく強えデュエリストなんだ」
「しかし！」
「感謝するよ、十代。……神と戦う栄誉をやろう？上等上等、その台詞もそのまま送り返してやるよ」
「「デュエル！」」

「先攻はお譲りしますよ、お先にどうぞ」
「後悔しても知らないよ?僕のターン。ヒゲアンコウ、守備表示!」
　ヒゲアンコウ　守１６００
「さらにカードを伏せて、ターンエンド」
「私のターン、ドロー。フィールド魔法、神縛りの塚を発動!」
「な、なんだ!?」
　見たこともないフィールドカード。地面から３本の塚がせりあがり、その周りをバチバチと不穏な音を立てて雷がかすかに見える。
「このカードこそ、神をコントロールするために作り出された神を封じ、神を喚ぶデビルズ・サンクチュアリに次ぐ第二の聖域。そして魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキからモンスター１体、ラーの使徒を墓地に送ります。そしてレベル８モンスター、神獣王バルバロスを攻撃力１９００にすることで妥協召喚。バトル、バルバロスで攻撃!」
　神獣王バルバロス　攻３０００→１９００
　神獣王バルバロス　攻１９００→ヒゲアンコウ　守１６００（破壊）
「カードを２枚伏せ、ターンエンドです」
　結局神縛りの塚とやらには何の動きもなく、それがかえって不気味だ。伏せカードは

怖いけど、ここは攻めるべきだろうか。
清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
フランツ　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：神獣王バルバロス（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：神縛りの塚
「僕のターン、ドロー！」
引いたカードは……ふむ。攻めるのに向いた手札じゃないから、まずは場を固めて様子を見よう。いくら怒っている時だって、いや、怒っているからこそ一歩下がって様子を見る。力任せに踏み込んでいくとすぐに足元救われるからね。もとより、水属性はあまり力押しが得意なタイプではないのだ。
「グリズリーマザーを守備表示。これでターンエンド」
グリズリーマザー　守１０００
「私のターン。まずはトラップ発動、ギブ＆テイク！このカードの効果で私の墓地に存在するラーの使徒をお前の場に特殊召喚し、さらにそのレベルを私のバルバロスに加算

する」

ラーの使徒　守６００

神獣王バルバロス　☆８→１２

「僕の方にモンスターを送りつけてまでレベルを上げた？」

「惜しいが、それは少し違う。私の目的はレベル上げもそうだが、ラーの使徒をお前の場に送りつけることだ。ちなみにそのカードは特殊召喚に成功した時デッキ、手札から同名モンスターを２体まで特殊召喚できるが、そんなカードは入っていないだろう？」

当たり前だ。こんな金ぴかのコスプレしたおっさんのカードなんて見たこともないぞ。

「バトル、バルバロスでグリズリーマザーで攻撃！トルネード・シェイバー！」

神獣王バルバロス　攻１９００→グリズリーマザー　守１０００（破壊）

バルバロスの振り回す大槍が巨大熊を一撃で薙ぎ払う。だけど、グリズリーマザーは決してタダでは死なない。

「マザーの効果発動！戦闘破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の水属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚……ん？」

妙だ。グリズリーマザーの効果が発動できない。

「クックック、無駄だよ。ラーの使徒がフィールドにいるとき、そのコントローラーは

ラーの使徒以外の特殊召喚ができない。さらに、神縛りの塚第一の効果発動！フィールドに存在するレベル１０以上のモンスターが相手モンスターを戦闘破壊した時、相手に１０００ポイントのダメージを与える！」

バルバロスが振り回した槍をそのまま天に掲げると、３本の塚から雷が槍に落ち、そのまま僕めがけて突っ込んできた。だけど、これはピンチじゃない。むしろあの不気味なフィールドをぶち壊すチャンスだ。

「その瞬間、手札からサイクロン発動！チェーンして神縛りの塚を破壊して、バーンダメージは無効に！」

目にもとまらぬスピードで風が吹き抜け、３つの塚を風化させる。チェーンして破壊すれば、この手の効果は無効になる。これで、１０００のダメージを受けずに済んだわけだ。

だけど、それを見るフランツの顔はなぜか喜びに歪んでいた。

「神縛りの塚を破壊したな？この瞬間に第３の効果発動、このカードは破壊された時に、眠れる神を手札に加えることができる！デッキに眠りし神、ラーの翼神竜―球体形（スフィアモード）を手札に！」

「なっ!?」

読んでいた？こちらが神縛りの塚を破壊することを織り込み済みで？ただの偶然だ

と思いたいけど、そうも言いきれない迫力がフランツからは立ち上っていた。とにかく呼ばれてしまったものはどうしようもない、か。

　それに、今くわえた謎のカード。スフィアモード？神そのものではなくて、その派生の１つがなんでわざわざカードに？

「ワッツ？フランツ、なんですかそのカードは!?」

「ああ、そういえば会長には報告していませんでしたね。こんなカードを作る羽目になったのも、全てはあなたのせいなのですよ会長。あなたはラーのコピーカードを作る際、その能力を恐れるあまりバトルシティのデータから判明したオリジナルのテキストを大幅に削減して恐ろしいほどの弱体化をした、違いますか？」

「イエース、私は確かに神の力を恐れ、唯一手元に残したそのコピーも能力のほとんどを削除しました。怖かったのデース、もう一度『神』があの力を使うことが」

　よくわからないけど、このどっかで見たことある人は何か大事なことを言おうとしている。この会話は聞いておかねばならない。そんな気がした。

「その癖、研究用と言い張ってコピーカードを弱体化させたとはいえ手元においておこうとする。そんなあなたの中途半端な態度が神の怒りを招き、そして神は私を選んだ。これはいわば、私という媒体を使ってのあなたへの神罰なのですよ、会長。その一環として生まれたのが、この球体形のカード。このカードの存在により、ラーはその真の力

をほんの少しだけ解放できる」
　話しているうちに自分に寄ってきたのか、芝居がかった動きで両手を広げるフランツ。そのうっとりした顔つきから、話し合いでどうこうなる相手ではないと会長とやらも悟ったらしく、何か言おうとするも結局その口から言葉は出なかった。
「おっと、まだ私のバトルフェイズは終わっていない。手札からジュラゲドの効果発動、このカードを手札から特殊召喚して私のライフを１０００回復する。そのままフィッシュボーグに攻撃！」
　フランツ　ＬＰ４０００→５０００
　ジュラゲド　攻１７００→フィッシュボーグ―アーチャー　守３００（破壊）
「ターン終了時にバルバロスのレベルが８に戻り、これで私はターンエンド。ああ、１つ言っておきますが、ラーの使徒は三幻神以外のあらゆるカードの生け贄にすることができないですから」
「神にしか尻尾振らないって？そりゃまた随分狂信的なこって」
　神獣王バルバロス　☆１２→８
　清明　ＬＰ４０００　手札：２
　モンスター：ラーの使徒（守）
　魔法・罠：１（伏せ）

フランツ　ＬＰ５０００　手札：３
モンスター：神獣王バルバロス（攻）
ジュラゲド（攻）
魔法・罠：なし
「僕のターン、ドロー……何もせずにターンエンド」
動こうと思えば動けないことはない。だけど、まだ少し手が足りない。
「私のターン。おいおい、まさか神を見る前に敗北かい？それは勘弁してもらいたいものだね。２体目のバルバロスを妥協召喚する」
神獣王バルバロス　攻１９００
「今だ！リバーストラップ、激流葬発動！バルバロスの召喚をトリガーにして、僕のフィールドの使徒を含めた全モンスターを破壊！」
「チッ……まあいいさ。私はこれで、ターン終了だ」
清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：なし
フランツ　ＬＰ５０００　手札：３
モンスター：なし

魔法・罠：なし

「僕のターン、ドロー！攻めるなら、今しかない……！ハンマー・シャークを召喚、そのまま効果を発動！自身のレベルを1下げて、手札からレベル3以下の水属性モンスターを呼びだす！氷弾使いレイス、特殊召喚！さらに自分フィールドに海竜族のレイスを召喚したことで、シャーク・サッカーも特殊召喚する！」

ハンマー・シャーク　攻１７００　☆４→３

氷弾使いレイス　攻８００

シャーク・サッカー　守１０００

「ほう、1ターンでここまで展開するとは、な」

「さあ、バトル！ハンマー、レイス、ダブルダイレクトアタック！」

ハンマー・シャーク　攻１７００→フランツ（直接攻撃）

フランツ　ＬＰ５０００→３７００

氷弾使いレイス　攻８００→フランツ（直接攻撃）

フランツ　ＬＰ３７００→２９００

「くっ……！」

またジュラゲドでも出てきたらどうしようかとも思ったけど、別にそんなこともなく攻撃は通った。これでさっきの回復分はチャラにしたうえで大ダメージを与えられた

けど、なぜかフランツが笑っているのが不気味だ。
　でも、もう僕の手札はない。頼みの綱の激流葬もさっき使った以上、これ以上できることはない。
「ターンエンド」
「その展開力は大したものだ。ああ、まったく。だからこそ、礼を言わねばなぁ！」
「え？」
　嫌な予感、なんて生易しいものじゃない。何か得体のしれない、僕の力ではどうにもできないようなものがゆっくりと、でも確実に近づいてきているような。でも、どこか懐かしさも感じる。と、そこで気が付いた。ああ、そうか。この押しつぶされそうになる感覚に対する懐かしさの理由は、僕はもう2度も同じものを経験済みだからか。
「神……」
　知らず知らずのうちに声が出る。この感覚は間違いない。初めてチャクチャルさんと、メタイオン先生と会ったときにも感じた独特のものだ。
「正解だ。出でよ、私の神!!」
「ワッツ!?フランツ、一体何を始める気なのデスか!?今のラーは特殊召喚できず、3体のリリースを使用してのアドバンス召喚でしかフィールドに出すことはできないはずなのに……！」

「ええ、確かにその通りですよ、会長。だが、それはあくまでもラー本体の話。私の作り上げたこの球体形のカードは、そんな常識を破る力を持つ。お前のフィールドに存在するハンマー・シャーク！氷弾使いレイス！シャーク・サッカーの3体をリリースし、アドバンス召喚！くれてやろう、神の姿を！」

僕の場にいるモンスターたちが、一瞬で消えていく。ぽっかりと空いた僕のフィールドに、不気味な影がふっと降りてきた。上を見ると、そこにはバカバカしいほど巨大な、細かな意匠の施された黄金の球体がぽっかりと浮かんでいる。

ラーの翼神竜―球体形　攻？

「こ、これが、ラーの翼神竜？」

「その通りだ。もっとも今の神は球体（スフィア）、神の所有者が呼び出すまで眠り続ける状態だがな。私が言うのもなんだがこのカードは少し特殊でな、相手フィールドのモンスター3体をリリースして相手フィールド上に通常召喚することができるのだよ」

そう言われてみれば、神らしい球体は空にふわふわ浮かんでいるだけとはいえ、どちらかといえば僕に近い方にいるような気がする。

「こんなのいらないから僕のモンスターたち返してほしいもんだね」

「まあそう言うな。この神もなかなか便利な能力を持たせておいたんだぞ？戦闘対象にも効果対象にもできないから、まず1ターンでは倒されない。現に私の手札では、ラー

を倒すことはできないよ。だからこれで、ターンエンドさせてもらおう」
清明　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：ラーの翼神竜―球体形（攻）
魔法・罠：なし
フランツ　ＬＰ２９００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：なし
こっちの場を荒らすだけ荒らしておいたくせに、なぜか偉そうなことを言ってターンを回してくるフランツ。正直言って、このラーはかなり怪しい。いつまでも何の動きもせずにふわふわ浮いているだけなんて、不気味なことこの上ない。できればここで上級モンスターを引き、さっさとこんな不気味な太陽はリリースしてしまいたいのだが。
「僕のターン、ドロー……カードを1枚セットして、ターンエンド」
上級モンスターどころか、下級モンスターすら引けなかった。と、そのとき不気味な太陽に動きがあった。一切の沈黙を保っていたそれが、なんとゆっくりだが確実にフランツの方へと動き出したのだ。
「今度はなんだってのさ、もう！」
「先ほども言っただろう、ラーは神の所有者が呼び出すのを待っていると。ラーは相手

ターンの終了時に元々の持ち主つまり私の場へと帰ってくる。無論、先ほどの生贄は戻らないがな」

サッカーたちはリリースされ損ってことか。歯噛みして上を見るも、どうすることもできずに球体が移動するのを見ていた。

「そして、私のターン。球体形のさらなる効果を発動！このカードをリリースすることで、手札またはデッキからラーの翼神竜を攻守ともに４０００ポイントにして、召喚条件を無視し特殊召喚する！今こそ目覚めよ、太陽神ラー！」

言葉とともに球体が開いていき、その中に眠っていた真の姿をあらわにしていく。球体に見えていたのは、その羽で全身をすっぽり覆っていたからだ。そこから出てきた姿こそが、今度こそ嘘偽りない神。

ラーの翼神竜　攻????↓４０００　守????↓４０００

「くっ……」

十代も、どこかで見たことあるのは間違いないんだけど思い出せない会長さんも言葉を失っている。その様子がよっぽどお気に召したのか、満足そうに笑いながらフランツが僕を指さした。

「ラーの翼神竜でダイレクトアタック！ゴッド・ブレイズ・キャノン！」

「ええい、ままよ！リバース発動、バブル・ブリンガーッ！」

神の吐き出す火炎を、足元から立ち上る泡の壁が真っ向から受け止める。レベル４以上のモンスターによるダイレクトアタックを禁止するカード、バブル・ブリンガー……本当に『神』にこのカードが効力を発揮するのかはわからない。だけど、同じ神であるチャクチャルさんやメタイオン先生には効く。なら、十分試す価値はある。

はたせるかな、無限にも思える時間の激突ののちに無限に湧き出る泡の壁はついに神の炎を弾き飛ばした。

「フン、まあいい。せっかく神を喚んだんだ、一撃で終わっては張り合いがないからな。カードを１枚伏せ、これでターン終了だ」

清明　ＬＰ４０００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：バブル・ブリンガー

フランツ　ＬＰ２９００　手札：３

モンスター：ラーの翼神竜（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」

フランツのデッキは神を召喚し、そのパワーで押し切るタイプのデッキ……だとすれば、当然神の攻撃を通すためにこちらの伏せカードを破壊するカードもたくさん入って

いるだろう。だとすれば、このバブル・ブリンガーにも過信はできない。
だけど、信じればデッキは必ず応えてくれる。だからお願い、僕のデッキ！
「……よし、来た！魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のモンスターカード５枚、ハンマー、レイス、うさぎ、サッカー、アンコウをデッキに戻して、カードを２枚ドロー！」
僕のデッキ最高峰のドローソース、貪欲な壺で引いたカードを見る。来た！
「ありがとう、先生……自分フィールドにモンスターが存在しない時、このカードはリリースなしで召喚できる！天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」
時械神メタイオン　攻０
「出たな、清明のもう一つの神様！」
「ふむ、なんですかあのカードは。あんなカード、私も知りませーン……！」
十代には見せたことがあるけれど、そういえばまだメタイオン先生のことを知っている人は数少ない。チャクチャルさんにも同じことが言えるけども、むしろなんでデュエルディスクが反応してソリッドビジョンを出せているのか、使ってる側がさっぱりわからないのだ。そんなカードをいきなり出されたら、そりゃあたいていの人は驚くだろう。
「ほう、会長も知らないカード？大変興味深いが、そんなものの召喚を許すわけにはいか

ないな。カウンタートラップ、神の警告を発動！ライフを２０００支払い、モンスターの召喚及び特殊召喚を無効にする！」

フランツ　ＬＰ２９００→９００

メタイオン先生の鎧の顔に、ピシリとかすかな音を立ててひびが入る。最初はちっぽけな一本だったそれが瞬く間にメタイオン先生の全身に広がっていき、最後に一瞬だけ驚いた顔のメタイオン先生がチラリと見えたものの、その次の瞬間には顔を映し出す鏡のような部分が丸ごと粉々に砕け散った。魂の抜けた鎧が、ラーに首を垂れるかのようにどうと倒れた。

「く……ターンエンド……」

あのメタイオン先生が、何もできずに倒れるだなんて、そんな。心のどこかにあった、先生さえ引けば大丈夫だろうという安易な気持ちがあっさり打ち消されて、なんだか足元の地面までもが急に頼りなくなった気がした。

「手も足も出ないか？私のターン、ドロー……うっ!?」

また笑い、カードを引くフランツ。だがその表情が急に歪み、足から力が抜けたかのようによろめいた。

「くッ……さすがは神の力、使っているだけで負担が大きい、か。ならばフィールド魔法、神縛りの塚の２枚目を発動！このカードはテキストにある通りの効果のほかに、神

を縛り、私への負担を弱める効果(ちから)がある。さらに魔法カード、浅すぎた墓穴を発動。たがいに墓地からモンスターカード1枚を選択し、裏側守備表示で特殊召喚する。私が選択するのは、バルバロスのカードだ」

「そういうことか……わかったよ、グリズリーマザーを蘇生するよ」

これでこっちの場にはモンスターが1体。そしてラーの翼神竜のレベルは、１０。神縛りの塚の効果は……。

「ラーで伏せられたグリズリーマザーに攻撃、ゴッド・ブレイズ・キャノン!」

ラーの翼神竜　攻４０００→グリズリーマザー　守１０００（破壊）

「先ほどは邪魔されたが、今度こそ神縛りの塚の効果を発動!レベル１０以上のモンスターの攻撃で相手モンスターを破壊した時、１０００ポイントのダメージを発生させる!」

清明　ＬＰ４０００→３０００

「うわ……ッ!」

さすがに神を封じ込めると豪語するだけのことはある、すさまじいパワーのカードだ。僕みたいに大徳寺先生やラビエルといった強者との闇のデュエルを経験していなかったら、今のダメージだけで気を失いかねないほどの衝撃が体を走る。

「グリズリーマザーの効果、発動!」

それでも僕は、ここでグリズリーマザーの効果を使うことを選んだ。まともで筋の通った理由なんてものは何一つない。あえて一つ挙げるとすれば、デッキから声が聞こえたような気がしたからだ。ここで出る、と僕のモンスターが叫ぶ声が。

僕はデュエリストとしてはまだまだ弱い。そんな僕が入学してからの戦いを勝ち抜いてこれたのは、あることに関しては並大抵のやつよりも上だったからだと勝手に思っている。それが、自分のデッキを信じることだ。僕のカードがこうしたいというのなら、僕はそれをできる限り叶えてみせる。それができてこそ、デッキだって応えてくれるってもんだ。

「デッキから攻撃力１５００以下の水属性モンスター、鰤つ子姫（ブリンセス）を特殊召喚、そのまま効果発動！このモンスターをゲームから除外して、デッキから魚族のレベル４以下モンスターを呼びだす！レインボー・フィッシュ、召喚！」

レインボー・フィッシュ　攻１８００

「いいだろう、ターンエンドだ」

清明　ＬＰ４０００　手札：１

モンスター：レインボー・フィッシュ（攻）

魔法・罠：バブル・ブリンガー

フランツ　ＬＰ９００　手札：２

モンスター：ラーの翼神竜（攻）
???（神獣王バルバロス・セット）
魔法・罠：なし
僕の唯一残った手札は、相手モンスターを使いアドバンス召喚ができるようになる魔法のクロス・ソウル。つい先ほどやっていたうさぎちゃんとのデュエルを思い出す。あの時は帝王の烈旋から霧の王を出して逆転チャンスにつなげられたっけか。なら、今度も僕が取るべき道は一つ。
「ドロー！」
そろそろ来てくれると思ってたよ、マイフェイバリット。
「魔法カード、クロス・ソウルを発動！これで神をリリースして……！」
「残念だがそれは無理だな。神縛りの塚が存在する限り、レベル１０以上のモンスターはカード効果の対象にならない」
「……それならそれで構わないさ、そのさっき蘇生してたバルバロスを選択、レインボー・フィッシュと合わせてリリース。これこそ僕の切り札、霧の王（キングミスト）！その攻撃力は、アドバンス召喚時にリリースしたモンスターの元々の攻撃力合計……！」
バルバロスの攻撃力３０００を取り込み、霧の王の剣がラーの全身から放たれる神の光を浴びて光を放つ。

霧の王　攻４８００

「く、ラー以上の攻撃力のモンスターを出してきたか。だが、クロス・ソウルのデメリットは……」

「その通り。これからバトルと洒落込みたいところだけどね、クロス・ソウルの発動ターンにバトルを行うことはできない。これで今はターンエンド」

神と王が向かい合い、一歩も引かぬにらみ合いを続ける。さあ、来るならかかってこい。こっちの方が攻撃力は上なんだ、そう考えていると、切迫した声で会長が叫んだ。

「ユー、それは危険すぎる賭けデース。あのラー自身の効果は、プレイヤー自身のライフを１０００支払うことでモンスター１体を破壊するゴッド・フェニックス！もしフランツがライフポイントを回復するカードを引いたら、ユーのそのモンスターではひとたまりもありませーン！」

「えー!?そんな大事なことなんで今言うの!?まだ言わない方がマシですよンなもん！」

ラーの効果が前提のデッキとしたら、当然そのコストとして必要なライフを確保するカードもフランツのデッキには入っているだろう。今、あっちのライフは９００。もし１０１以上のライフを回復する手段を手に入れたら?あるいは、もうすでに手札に呼び込んでいたら?

「私の……」

フランツが、ゆっくりとデッキに手をかける。あのドロー次第で、今後の命運が決まる。

「ターン！」

カードを引いた瞬間、不気味な風が巻き起こった。この気迫、一体何をドローしたというんだか。

「……ふっ。カードを伏せ、ターンエンドだ。ラーは守備表示にしない、攻撃するならするがいい。お前にその覚悟があるならばな」

清明　ＬＰ３０００　手札：０

モンスター：霧の王（攻）

魔法・罠：バブル・ブリンガー

フランツ　ＬＰ９００　手札：２

モンスター：ラーの翼神竜（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

場：神縛りの塚

たった１枚の伏せカード。だけど、その１枚が怖い。一体、何を仕込んでいるんだろう。あのたった１枚だけが、攻撃をためらわせる抑止力になっている。カードを引く。引いたのはチャクチャルさん……駄目だ、これはただの事故だ。

どうしよう、このターン攻撃をすべきか。サイクロンを引くまで粘るべきだろうか。それとも、あれはただのブラフでこっちが攻撃をためらうことこそが真の狙いなのだろうか。わからない。疑心暗鬼になり考えが袋小路に突入しかかった時、聞き覚えのある声がした。

「迷うなんてお前らしくないぜ、清明！」

「十代……」

「難しい顔してないで、もっとデュエルを楽しめよ。たとえコピーカードだって、お前はあのラーの翼神竜を相手にしてるんだぜ？そんなの、見てるだけでワクワクするぜ！」

そうか、うん。どうやら僕も、ここのところ物事を難しく考える癖が染みついていたらしい。もっと肩の力を抜いて、気楽にいけばいい。闇のゲーム？負ければ危ない？上等じゃないか、それだって。デュエルは本来楽しむものなんだから、それができれば後悔はない。神のカード……世界広しといえど、これを相手にしたことがあるデュエリストは数少ない。光栄じゃないか、そんな中に僕が入るなんて。

「センキュー十代、もう迷わないよ。霧の王でラーの翼神竜に攻撃！神を切り裂け、ミスト・ストラングル！」

吹っ切れた僕の顔を見て満足そうに頷き、霧の王が飛んだ。ラーよりも高く飛び上がってからの太陽を背にしての大上段の一撃が、偽物の太陽神を両断する。

霧の王　攻４８００→ラーの翼神竜　攻４０００（破壊）
フランツ　ＬＰ９００→１００
「やった、神を倒した！」
「グレイト！さあフランツ、墓地から特殊召喚できないラーを失った今、あなたに勝ち筋は残されていないはずデース。大人しくサレンダーしなサイ」
ラーの姿が消えていき、会長が地面にうずくまったフランツのもとにつかつかと近づいていく。だがその歩みが、急に止まった。それも無理はない、フランツの全身からいきなり得体のしれない黒い影が噴き出てその体をすっぽり覆い尽くしたのだから。

ターン５９　鉄砲水と太陽神（陰）

「こ、これは!?」
『「ふざけるナ、まだ勝負はついていなイ」』
　フランツの声が二重に聞こえる。まるで、まったく別の何かが彼の口を動かして喋っているかのように。
「……あなた、一体誰なのですか？私の研究員を操り、ラーのカードを盗み出すとは」
『「これハこれハ、ペガサス・Ｊ・クロフォード氏。久しぶり、あえてこう言わせテ貰おうカ」』
「……Ｗｈａｔ（何）？」
『「こうしてお会いすルのは初だったカ、コれは失礼しタ。私の名ハ、アバター。邪神（デビルズ）アバター、とイう方ガわカりやすいかネ？」』
「ア、アバター!?」
　どうやら会長、いや、ペガサス会長。そうだ、どこかで見た顔だと思ったら、テレビや雑誌でしょっちゅう見る顔だ。デュエルモンスターズの生みの親、ペガサス・Ｊ・クロフォード氏。なるほど、そんな偉い人ならラーの翼神竜のコピーカードなんてすさま

じいものを持っていても不思議はない。何しろ、オリジナルのラーだってもとはといえばあの人が作ったカードなんだから。と、気になっていたことが一つはっきりしてスッキリしたところでペガサス会長とアバター?の話に耳を傾ける。どうやらこのデュエル、さっきラーを倒したからはい終了、なんて気楽にはいかなさそうだ。

『ソうとモ。ペガサス氏、貴方がオリジナルの、太陽神(ラー)をはじメとした三幻神を封ジるためニ構想だけしたもノの、結局デザインのミで終わったモンスター、三邪神。ココまで来るのは苦労しタよ、こノ男の邪念に干渉シて先ほど御覧に入レた球体形のカードを作らセ、さらにソのカードを通じて膨れ上がラせた邪念によッてこの私、アバターをカードとシて作るように仕向けサせた。もっとも、この男は自力で『邪神アバター』の構想を思イついた気になっテいるがね』

「バカな……アバターが、私がほんの気の迷いでデザインしたあの凶(まが)つ神が、カードになったデスって?」

『そウとも。一度デザインした時点で、何をシようとも『邪神(わ)アバター(たし)』という概念はもう消すことができない。だが、概念だけではさすがの私もできるコとには限りがある。真の力を発揮するために、私自身を形あるカードにする……そのための隠れ蓑として、偽の太陽神を利用させてもラったというわけさ。さて、スまないがそろそろどいてもらおうか。今はそこの少年とデュエルをしている最中なモのでね。箸にも棒にもカ

からぬ代物とはいえ、ラーを倒すとはなかなか見どころがあル。それにその闇の力、ただの人間でもないヨようだしな」』

フランツ……いや、アバターがこちらに向き直る。姿かたちこそフランツのままだったが、はっきりわかる。これはさっきまで相手していたのとは全くの別人、アバターだ。

「そ、その前にさ。一つだけ教えてもらおうか、アバター」

『「ほう、何かな？」』

「とぼけないで！チャクチャルさんの力を吸い取ってグロッキーにしたのもお前だろ！」

『「ああ、あの地縛神……だっタかな？私とよく似た性質の闇の力に満ちていたものデね、利用させてもラったよ。あの者もてっきり途中で抵抗ぐらいしてくると思ったのだがな、それほどの体力は残っていただろうに」』

「え？」

『「よほどこの土地に重要なもノを置いてあったらしく、ある程度吸ったあたりから残りの力でこの島全域に結界のようなものを張ったらしくてな。オかげでこの人間の体を使わねば島に入ることすらできなかったよ」』

「チャクチャルさん……」

もしかして、いや、間違いないだろう。守ってくれたんだ、チャクチャルさんが。あ

りがとう、と手札で沈黙するチャクチャルさんに心の中でお礼を言う。
『「さて、そちらの用はそれくらいかな？私もだいぶ、喋り方に慣れてきた。よければそろそろ、デュエルを続けようではないか」』
　そう言われてみれば、確かに最初のころはぎこちなかったアバターの言葉もだいぶ滑らかになっている。フランツの体になれてきた、ということだろうか。
「ああ、いいよ。それじゃあ改めて、第二ラウンドと洒落込もう！僕はもうターンエンドだ、かかっておいでよアバター」
『「いいだろう。だが、一つ訂正だ。その前、ラーが破壊された瞬間に私の伏せたリバースカード、道連れが発動！私のモンスターが墓地に送られた時、相手モンスターを破壊する。仮にも神を倒したのだ、その王にもそれなりの報いは受けてもらわないとな。……妄念のゴッド・フェニックス」』
　アバターが宣言するとすぐ近くの地面がいきなり爆ぜ、地獄の底からどす黒く燃える不死鳥が舞い上がってきた。憎しみに満ちた目付きの不死鳥が、霧の王へ覆いかぶさるようにして襲い掛かる。瞬間発生した衝撃から思わず顔を守り、恐る恐る目を開けてみるとそこにはもう霧の王の姿も不死鳥もおらず、地面にぽっかりと空いた穴のみが今起きたことが現実であると物語っていた。
「霧の王が……」

『「そして私のターン。モンスターをセットし、カードを伏せる。ターン終了だ」』

清明　ＬＰ３０００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：バブル・ブリンガー

アバター　ＬＰ１００　手札：２

モンスター：???（セット）

魔法・罠：１（伏せ）

場：神縛りの塚

「ぼ、僕のターン！ドロー……よし！ツーヘッド・シャークを召喚して、召喚時効果を発動！自分フィールドの魚族レベル４モンスターのレベルを１つ下げる！」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００　☆４→３

ツーヘッドは２回攻撃の能力を持ち、伏せモンスターを噛み砕いた後でさらに追撃のダイレクトアタックができる。だけど、ただ召喚しただけだとお互いに効力が及ぶバブル・ブリンガーのせいでレベル４のツーヘッドは直接攻撃ができない。そこで役に立つのが、普段めったに使わないもう一つの効果。レベルを３に下げることでバブル・ブリンガーの適用範囲から外れ、晴れてダイレクトアタックを決められるというわけだ。あとは、あの伏せモンスターの守備力が１２００未満なことを祈るのみ。

『「ならばトラップカード、強化蘇生を発動！私の墓地のレベル４以下のモンスターのレベルを１つ、攻守を１００ポイント上げて蘇生する。死の淵より蘇れ、ラーの使徒よ！」』

ラーの使徒　守８００→９００　攻１１００→１２００　☆４→５

「ここでラーの使徒？……あっ！」

『「ラーの使徒は特殊召喚した時、手札、デッキからラーの使徒を合計３体になるまで特殊召喚できる。私はデッキから、さらに２体の使徒を特殊召喚！」』

ラーの使徒　守８００

ラーの使徒　守８００

「だけど、いくら壁を増やしたって！ツーヘッド、まずは強化蘇生で出てきたラーの使徒に攻撃！」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→ラーの使徒　守９００（破壊）

さて、もう一度の攻撃をどのモンスターにするか。伏せモンスターを攻撃してもいいけど、リバース効果持ちだった場合どうなるかわからない。ここは一呼吸おいて、ラーの使徒に攻撃すべきか……いや、待てよ。なんでわざわざ攻撃前のタイミングにラーの使徒を蘇生したんだ？あの伏せモンスターに攻撃してほしくない理由があるのかもしれない。ラーの使徒に攻撃を誘導しようとしているとすれば、どうする？

「もう一撃は、伏せモンスターに攻撃！」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→???　守７００（破壊）

鋭い鮫の牙が伏せモンスターを一撃で粉砕する。その直前、一つ目のにんまり笑った顔が見えた。

『「カオスポッドのリバース効果を発動。全てのフィールド上モンスターをデッキに戻してシャッフルし、戻した数だけデッキからカードをめくってその中のレベル４以下のモンスターを裏側守備表示でセットする」』

「なるほど、ラーの使徒を出したのは攻撃誘導なんかじゃなくて……」

『「初めからこれが狙いだった。私が戻すモンスターはラーの使徒２枚、よって２枚のカードをめくる。速攻のかかし、そしてレベル５のジャックス・ナイトか。速攻のかかしをセットし、ジャックスを墓地に送る」』

「先を読んだつもりで、まんまと読まれてたってわけか。僕が戻すのはツーヘッド１枚、だからめくるカードも１枚。シャクトパスか」

フィールドには共に何がいるかわかっている伏せモンスターが１体ずつ。だけど、速攻のかかしがセットされているからって何ができるってんだ。あれは手札にいないと意味のないカードだからね。だから、まだこっちにも運はある。

「ターンエンド」

『「私のターン。速攻のかかしを反転召喚」』
「なっ!?」
速攻のかかし　攻０
不気味に佇む金属製のかかし。壁にするぐらいならともかく、この状況で反転召喚？
『「魔法カード、機械複製術を発動。デッキから同名モンスターをさらに２体特殊召喚する」』
速攻のかかし　攻０
速攻のかかし　攻０
さらに増えるかかしが３体。３体？……まさか！
『「さすがに気付いたか、だがもう遅い。モンスター３体をリリースし、私自身を召喚！」』
でろり、と音がしたような気がした。周りの木が、石が、草が地面にかすかにかけていた薄い影が意志を持つかのようにもぞもぞと一斉に動き出し、アバターの影のもとに集結していく。そしてその影が遂にフランツの体から離れて独立した意志を持つかのごとく空中に浮かび、ぼこぼこと気持ちの悪い膨れ上がり方をしていく。そして最終的に、それは真っ黒な……本当に真っ黒な、ただの一点の染みも色むらもないのっぺりとした球体になった。

邪神アバター　攻？

「攻撃力が、ない……？」

まるでさっき僕のモンスターをリリースして召喚されたラーの球体形から全ての色を取り去ったようなその形をじっと見ていると、わけもなく寒気がした。

『「伏せられたシャクトパスに攻撃……ダークネスコンバット・イート」』

闇の塊が、動きだす。影が凝縮されて人間サイズにまで縮み、さらにその姿を変えていく。最初は何が起きているのかまるで分らなかったけれど、次第にアバターの姿が見覚えのあるものに変わっていった。

「な、なんでアバターがシャクトパスに」

あの姿を僕が見間違えるわけがない。僕のデッキのメインアタッカーの1体、シャクトパスを。

『「これは失礼、説明がなかったか。私自身には見ての通り、攻撃力が存在しない。だが、私にとって固定値は不要。私の攻守は、いかなる場合においても私以外の一番攻撃力数値が高いモンスターの攻撃力、それに１００を足した数値となる。シャクトパスの攻撃力は１６００だったな」』

邪神アバター（シャクトパスベース）攻１７００→シャクトパス　守８００（破壊）

『「そして、神縛りの塚はいまだ生きている。ちなみに私のレベルもまた、神と同じ１０

だ」』
「ぐわっ!?」
清明　ＬＰ３０００→２０００
ライフ１０００はダメージ的にも肉体的にも痛いけれど、そんなことは気にならなかった。邪神シャクトパスの姿に、本家シャクトパスの呪いが絡みついていく。
『「……」』
「シャクトパスの効果発動！このモンスターが戦闘で破壊された時、そのモンスター１体の装備カードになって表示形式の変更と攻撃を封じて、さらに攻撃力を０にする！」
邪神アバター　攻０
アバターが再び球体に戻るが、その全身には依然としてタコ足が茨のように絡みついている。シャクトパスの効果は対象を取らないから、神縛りの塚にも妨害されないってわけだ。
『「ターン終了だ。ああ、もう１つ言い忘れていたよ。私の召喚に成功してから相手ターンで数えて２ターンの間、相手は魔法も罠も使うことができない。せいぜいモンスターが引けるように祈っておきたまえ」』
清明　ＬＰ２０００　手札：１
モンスター：なし

魔法・罠：バブル・ブリンガー
シャクトパス（アバター）
アバター　ＬＰ１００　手札：０
モンスター：邪神アバター（攻・シャクトパス）
魔法・罠：なし
場：神縛りの塚
「僕のターン、ドロー！くっ、ターンエンド」
ドローカードは魔法カード、スター・ブラスト。モンスターのレベルをライフを払うことで下げることができるいいカードではあるけれど、アバターのせいで僕の魔法カードは封じられていて意味がない。それに今の僕のライフポイントだと、レベル１０のチャクチャルさんを通常召喚できるようになるまでレベルダウンさせるのは無理だし。
『「私のターン、ドロー。永続魔法、フィールドバリアを発動。このカードがある限りフィールド魔法は破壊できず、新たに発動することもできない。ターンエンドだ」』
清明　ＬＰ２０００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：バブル・ブリンガー
シャクトパス（アバター）

アバター　ＬＰ１００　手札：０
モンスター：邪神アバター（攻・シャクトパス）
魔法・罠：フィールドバリア
場：神縛りの塚
ありがたいことに、がら空きの場にモンスターを出されて攻撃されずに済んだ。この浮いた1ターンを生かすか殺すかは、僕次第。シャクトパスの効果が聞いているうちなら、神を倒すことも夢ではないはずだ。
「ドロー！よしっ、ハリマンボウを召喚！」
ハリマンボウ　攻１５００
「アバター、今のお前の攻撃力はシャクトパスの力で０！ハリマンボウの一撃で僕の……」
勝ちだ、ということはできなかった。またしてもグニャグニャと球体アバターの姿が歪んでいき、その姿がハリマンボウのものになったのを見たからだ。
邪神アバター（ハリマンボウベース）攻０→１６００
「ちょっと待ってよ、なんで攻撃力が０になったのにまた」
『「いかなる場合においても、と言わなかったか？こんな下級モンスターごときの力で、私を縛り付けられるなどと思っていたのか？」』

いくら０にしたところで、次の瞬間にはまた攻撃力が復活する。とんでもなく理不尽な話だ、これじゃあどうやったって戦闘では勝てない。魔法も罠も封じられる。これが、邪神。

「ターン……エンド……」

『「私のターン。効果の意味も薄いとはいえこんなものをいつまでもつけておくのも目障りだ、サイクロンを発動。私にしがみついているシャクトパスを破壊する」』

シャクトパスのタコ足がちぎれ、それすらもアバターの体に取り込まれていく。

『「バトルだ、ハリマンボウに攻撃。戦闘ダメージはわずか１００だが、神縛りの塚の効果も受けてもらう」』

邪神アバター（ハリマンボウベース）　攻１６００→ハリマンボウ　攻１５００（破壊）

清明　ＬＰ２０００→１９００→９００

アバターのライフはわずか１００。なのに、そのたった１００のライフが削れない。たった…たった１００のライフが、奪えない…。

「ハリマンボウは墓地に送られた時にモンスター１体の攻撃力を５００下げる。だけど」

変身対象であるモンスターが消えたことで再びぐにょぐにょと元の球体に戻るアバ

ターを見て、ハリマンボウの効果である永続的な攻撃力低下も効かないことを悟る。いかなる場合も１００上回る、だから下げたところでどうせすぐに元に戻るんだ。

邪神アバター　攻０

「わかったよ、ドロー……ターンエンド」

『「私のターン、ドロー。マッシブ・ウォリアーを攻撃表示で召喚し、私（アバター）がその姿を映し出す」』

マッシブ・ウォリアー　攻６００

邪神アバター（マッシブ・ウォリアーベース）　攻７００

『「残念ながらバブル・ブリンガーは既に発動されているカード。私といえども従わざるを得ないため攻撃はできないが、レベル２のマッシブ・ウォリアーには関係のないことだ」』

マッシブ・ウォリアー　攻６００↓清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ９００↓３００

「くっ……この程度！」

清明　ＬＰ３００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：バブル・ブリンガー

アバター　ＬＰ１００　手札：０
モンスター：邪神アバター（攻）
　　マッシブ・ウォリアー（攻）
魔法・罠：フィールドバリア
場：神縛りの塚

バブル・ブリンガーにまた救われた、か。だけど、次のドローが正真正銘のラストチャンス。レベルを１下げるのにも５００ライフが必要なスター・ブラストはもう手札コストにしかならないし、さっきのターン引いたカードは使ったところで神縛りの塚の的を増やすだけのサルベージ。だから、チャクチャルさんを召喚できるかどうかはこのカード次第だ。唯一の救いがあるとすれば、アバターの魔法罠封印効果がさっきのターンで切れたということだ。このターンからは魔法カードが使える、これを生かすことができればあるいは。

「僕のターン、ドローッ！」

カードを引いた瞬間、体がすっと楽になった気がした。恐怖だとか畏れだとか、そういったので吹っ切れたわけじゃない。今回もまたデッキが応えてくれたのが、無意識のうちにわかったのかもしれない。

「魔法カード、おろかな埋葬を発動！デッキからモンスターカード、ハリマンボウを墓地

に送る。この瞬間ハリマンボウの効果をマッシブ・ウォリアーに発動、その攻撃力が下がったことでアバター、お前の攻撃力もその分下がる」

『「確かに。だが、そんなことをしたところで新たなモンスターを召喚すれば意味がない」』

マッシブ・ウォリアー　攻６００→１００

邪神アバター（マッシブ・ウォリアーベース）　攻７００→２００

「僕の狙いはそっちじゃないね。バブル・ブリンガーのさらなる効果を発動することさ！表側表示のこのカードを墓地に送ることで、レベル３以下の同名水属性モンスター２体を特殊召喚する！ハリマンボウ、カモーン！」

ハリマンボウ　攻１５００

ハリマンボウ　攻１５００

邪神アバター（ハリマンボウベース）　攻１６００

再びアバターの姿が変わる。だけどもう、そんなもの怖くない。

「ハリマンボウ２体をリリース！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ！アドバンス召喚、地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（ルア）！」

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００

邪神アバター（地縛神ベース）　攻０→３０００

『「一度私に敗れた神に再び頼るか。もう少し見どころのある人間だと思ったのだがな」』

「へっ、そっちこそもう少し見どころのある神様だと思ってたんだけどね、邪神さん？ねえ、チャクチャルさん。そろそろ寝たふりはやめたら？」

『……なんだマスター、いつから気づいていた？』

　案の定多少つらそうではあるものの、割合ぴんぴんした声を返してくるチャクチャルさん。まったく、こっちの神様にも困ったものだ。

「気づいたのはついさっきだよ。チャクチャルさんが残った力でこの島全体に結界を張った、ってアバターから聞いたあたり。この島に結界を張ったってのは、要するに誘い込みでしょ？自分のパワーを囮にしてアバターを誘い込んでから倒そうとした。違う？」

『いや、続けてくれ』

「力を吸い取られてある程度弱っていたのは本当、だけど動けなくなるほどじゃない。僕の前でそれ以上に弱ったふりして見せたのは、おおかた自分一人で片を付けようとしてたから。行動不能になって沈黙したように見せかけてれば、僕に怪しまれずにいくらでも動き回れる。だけど誤算として、僕がチャクチャルさんの想定以上にそれに怒って自力で犯人を捜し出して先にデュエルを始めちゃった。そんなとこ？」

『驚いたな、正解だ。アバター、１つ教えてやろう。お前は確かに強い。三幻神を押さえつけるための抑止力というのは嘘ではなさそうだ。実際、正面から力でお前に勝てるものは数少ないだろう。だが、まだ生まれ出でてから日が浅いな。私がナスカで生き続けてきた五千年、世界の動きを常に観察しつづけてきたその日々の深さに比べれば、力一辺倒のその生き方はあまりにも脆い』

『「何……？」』

『私の前にはそんな力、何の意味もないと言っているのさ。いつの日にか、もっと駆け引きを身に着けたらまた遊んでやろう。……行くぞ、マスター！』

「当り前さ！チャクチャルさんは自身の効果により、相手プレイヤーにダイレクトアタックできる！いくらアバターが強くなっても、プレイヤーへの攻撃には意味がない！流れ去れ、ミッドナイト・フラッド！」

『「そんな、私が……」』

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→アバター（直接攻撃）

アバター　ＬＰ１００→０

「ふー……でも実際問題、お前は強かったよ、アバター」

結果的には僕の勝ちだけど、もう一度戦ったらどうなっていたかはわからない。このデュエルは実質、アバターが途中でフランツから引き継いだものだからだ。もし最初からアバターの方が出てきていたら、まったく別の結末になっていたかもしれない。

まあそんなこと、おくびにも出さないけどね。それもまた駆け引きの１つ、ハッタリをかますってやつさ。

満ち足りた気分で倒れたままのフランツが落としたジェネックスのメダルを拾い、素早く懐にしまいこむ。これもまた勝者の特権。……と、そこでこちらをじっと見つめるペガサス会長の視線に気づいた。いや、その眼は正確には僕を見ていない。僕の持つデュエルディスク、それを見つめていた。

「……？」

「十代ボーイ、すみませんがフランツのことをお願いしマース。それと清明ボーイ、でしたか？ユーには少々聞きたいことがあるので、こちらに来てくだサーイ」

そう言って森の中に足を進めるペガサス会長。そのシリアスな雰囲気に、訳が分からないながらもついていく。

「（チャクチャルさんチャクチャルさん、なんなんだろいったい）」

『（そうだな。考えられる線としては、私とメタイオンのことだろうな。なにせあちらからすればいきなり見たこともないカードを使いだしたんだ、思うところも色々あるだろ

う）』

あ。自分の犯したとんでもないミスを前に、さーっと顔から血の気が引いていくのが分かった。そうだ、確かにあの2枚はどこを探しても世界に1枚しかないカード。そんなものを見せられてカードの開発会社がどう思うかなんて、考えるまでもないだろう。下手すると退学どころか、不正カード使用の罪で一生デュエルの表舞台からの追放もありうる。今すぐ逃げ出そうかなんてことを割と本気で検討し始めたあたりで、ペガサス会長が足を止めた。そのままこちらに振り向き、周囲に誰もいないことを確認する。

「あの、ペガサス会長」

「清明ボーイ、あなたはデュエルモンスターズが好きですか？」

「はい？……ええ、もちろんです」

何を言われるかと思っていたら、まったくの想定外の質問。思わず聞き返したが、ペガサス会長の真剣な顔を見てすぐに答え直す。もちろん好きだ、そんなことは決まっている。

するとその答えが気に入ったのか、彼はふっと笑みを浮かべた。

「そうですか。ならば清明ボーイ、あなたが使っていたあの2枚のカードについて、私は何も聞きませーン。代わりにこれを差し上げまショウ」

そう言って何やら高級そうな紙を取り出し、そこにすらすらと何か文字を書いてから

ハンコを押し、それを僕に差し出した。読むと、Ｉ（インダストリアル・イリュージョン）２社公認・新規カードテスター証明書、と書いてあった。

「これは……」

「もしあなたの持っているカードについてとやかく言われるようなことがあれば、その紙を見せておやりなさい。私はデュエルモンスターズの生みの親、このカードゲームについての発言力はいまだ衰えていないと自負していマース。恐らくそれで相手も黙るはずデース」

「あ、ありがとうございます」

僕ができる限りきれいに折りたたんでその紙を仕舞い込むのを待ってから、ペガサス会長がまた口を開いた。

「さて、本題はこのことではありまセーン。あなたが最後のターンに話していた相手、あれはもしやカードの精霊、と呼ばれるものではないですか？」

「え、ええ……」

「それならばあなたのその才能を見込んで、１つ頼みがあります。この２枚のカードを預かっていて欲しいのデース」

その言葉とともに、２枚のカードを差し出してくる。受け取って確かめてみるが、なんとそのカードはどちらも白紙……テキストもイラストも何もない、裏面しかないた

だのカード。ペガサス会長を見返すと、重々しく頷かれた。
「イエース、ユーの言いたいことはわかります。確かにこれは白紙のカード……ですが、このカードを持っていて欲しいのでーす。それは新しいカードを作っている最中に偶然できたエラーカードということになっていますが、見た瞬間に私はピンと来ました。このカードはエラーカードなんかではなく、真に自分を使いこなせる主以外の手に渡りたくないだけだと」
　そう言われて、改めてその白紙のカードを見る。ほんの一瞬、ほんの一瞬だけ、その真っ白な面に何かイラストが見えたような気がした。
「あっ！」
「ええ、私にも見えまシタ。精霊の見えるあなたのようなデュエリストなら、もしかしたらこのカードの心を開くことができるのかもしれない。だから私は、このカードを託したいのデース。どうです、受け取ってもらえないでしょうか？」
　白紙のカードの心を開け、か。なるほど、面白い話だ。こんな突拍子もない話もすんなり信じられるあたり、つくづく不思議なことにも慣れたもんだ。
「喜んで。むしろ、こっちからお願いしたいぐらいですよ」
「ワオ！ではお礼に、私の大好きなコミック『ファニーラビット』の全巻セットを今度デュエルアカデミアに寄贈しまショウ！」

そんなのいいから水属性の新カード作ってくれ、とは言い難い雰囲気だったのでぐっと我慢する。うう、せっかくデュエルモンスターズの生みの親がいるっていうのに。

「それと、ユーたちは学生ですからまだワインは無理デスネ。ならば最高のチーズ、ゴルゴンゾーラも寄贈します」

「本当ですか⁉いよっしゃあ、ありがとうございます!!」

その後、ペガサス会長は正気を取り戻したフランツとともにアカデミアを去っていった。島には隼人も来ていたのだが、僕はなにしろずっと井戸にいたもんだから結局帰りがけに少し挨拶するぐらいしかできなかった。知ってたらもう少し校舎内にいたんだけど、残念。ちなみに、ファニーラビットとゴルゴンゾーラは今週中には届けてくれるらしい。アメコミはともかく、チーズは楽しみだ。ゴルゴンゾーラ、一体どんな料理や菓子に使ってやろうか。

その夜。地縛神は、今日も清明が寝静まった後にレッド寮の屋根の上に来ていた。考

えるのは、今日のことだ。なぜ、アバターがあんなところにいたのか。確かにアバター自身の説明も筋が通ってはいたが、それでも一つ腑に落ちない点があった。それは、アバターのした話の最初の部分。

『一度デザインした時点で、何をシようとも『邪神アバター』という概念はもう消すことができない』

この部分が、どうにもチャクチャルアには気にかかっていた。本当に、そうなのだろうか。邪神といえど、作られていないのならば言ってしまえばたかがデザイン。大昔のエジプトで行われていた決闘（ディアハ）における魔物（カー）や自分たち地縛神のように最初から実体のあるものならともかく、数年前にデザインされただけに過ぎない存在がそこまで確固たる自我を持つものなのだろうか。

チャクチャルアは思慮深く、用心深い。昼に清明がやってのけた説明は、実は半分しか当たっていない。確かに彼はまだまだ余裕があったにもかかわらずあえて死にかかったふりをして清明の目を欺こうとした。だが、それがアバターを倒そうとしたためというのは間違っている。むしろ彼は清明を信頼し、あの相手ならば清明（マスター）一人でもなんとかできるだろうとまで思っていた。彼がやろうとしていたのは、そのさらに上。アバターの背後にさらに何らかの影があったとして、それを確かめるために動こうとしていたのだ。

だがその結果は振るわず、やむを得ないと清明の元に戻ってきたところで丁度自分が召喚され、中途半端に当たった推理が展開された。とりあえずは清明の目をごまかすためにも肯定しておいたが、それは正しいことだったのだろうか。それとも最初から自分の考えすぎで、アバターの言葉がすべてだったのだろうか。彼の疑問に答えるものは誰もいないが、その様子を隠れ見て嘲笑う影はいた。

「あはははは、さっすがに頭が切れるねー、ああいうロック系モンスターはさー。ま、せいぜい頑張って考えなよ、こっちはいろいろと準備があるんだから、さ～。圧倒的な黒色が、世界の色を塗りつぶす。シンクロ召喚～、ってね」

ターン６０　邪魔蠍団と正義の誓い

「ねーねー、そろそろこのままじゃまずいと思うんだよね」
僕が十代にそう言ったのは、ラーを倒したその日の夜だ。レッド寮の貧乏っぷりをよく知っている隼人がオーストラリア名物というカンガルー肉をわざわざ手土産に買ってきてくれたので、その僕にとっても未知の味をどう調理しようかと試行錯誤しながらのことである。
「おう、どうしたんだよ急に」
「いやさ、光の結社の話なんだけど。あ、ちょっと塩とって塩。そこの棚にこないだ詰め替えたのが放り込んであるから」
「おう、これか？それで、なんでまた光の結社が？」
「センキュ……うわ、十代これ砂糖！これじゃなくてその隣の瓶取ってくれる？ほい、ありがと。それで、さっきの話だけどね？今日の昼、久しぶりに葵ちゃんが店まで来たんだよ」
「ふーん。それで？」
「別に用事自体は大したことなくてさ、今朝僕が見つけた鮫島校長について詳しく聞か

せてくれ、ってやつ。で、それは別にいいんだけど。なんか後で思い出してみてふと気づいたんだけど、僕ったらフツーに葵ちゃん相手に喋ってたんだよね。ほら、翔から聞いてない？僕が一時期光の結社相手にやたらめったらデュエル売りまくってたバーサーカーソウル状態だったって話」

十代も覚えてるでしょ？と言いそうになったが、あの時期の十代はエドに負けたショックで海のどこかをさまよった末に木星だか土星だかでネオスペーシアン一同と出会うというなんだかよくわからない体験をしていた時期だったことを思い出す。下手に追及してまた自分の負け試合のことを思い出させるのは忍びないのであの時期のことは僕の方からはあまり聞かないでいたけれど、十代なら翔や剣山辺りから僕のことを聞いていてもおかしくはない。

案の定ある程度のことは聞いていたらしく、ああ、と頷く十代にそのまま語りかける。

「あの時はちょっといろいろあったとはいえ、あんなに憎んでたのにいつの間にかそれに慣れてきちゃってるんだなぁ、って思ってさ。僕が一番怖いのは、このままなんとなくの流れでずるずる毎日やってくうちに光の結社そのものに完全に慣れきっちゃって、あんなもんがあるのがおかしいって考えがうすーくなることなんだよね」

「ふーん。なるほどなあ、お前らしい悩み事だな」

「褒めてるの、それ？」

　どっちともつかなかったので聞いてみたが、どうも本人は特に何も考えず思ったことをそのまま口に出しただけらしい。まあ、そこも十代らしいっちゃ十代らしい。
「んー、あと5分ぐらい煮込んだらごはんね。それで、どうしたらいいかな？十代はなんかアイデアある？」
「お、ようやくメシか！……でもさ、清明。そうやって考えるより前に、俺たちは全員デュエリストなんだ。だったら、デュエルをすればきっと分かり合える。そうだろ？」
　ああ、まったく。十代は実にいつも通りだ。でも、今回ばかりはその方が正しいのかもしれない。いつまでも部屋で考え込んでたって、どうせ途中で昼寝して終わるだけなんだ。だったら、デュエルで解決するのが一番だろう。だけど、もうあんな無差別に襲いかかるような真似はしない。あれは実際、僕の中でもかなりの黒歴史だ。
　なら、どうするか。やっぱり頭の部分……斎王を直接叩けるのが理想なんだけど、あいにくあの周りには常に警護がいるから手出しがしづらい。それを無効にするには光の結社の中でもいわゆる幹部クラス、葵ちゃんや三沢、鎧田に万丈目や明日香を狙ってみよう。
「ありがと、十代。なんか色々吹っ切れたわ。じゃ、とりあえずシンプルにステーキにしてみたから、このカンガルー肉とやらを食べてみようか」
「おう！」

カンガルー、美味しかったです。隼人にはあとでお礼を言っておこう。
「ふー……」
その後洗い物も終わらせ、ふと窓から見える夜の海を見る。ここ数日慌ただしかったし、久しぶりに散歩するのもいいかもしれない。十代は今日もまだネオスペーシアンのコンタクト融合とこれまでのＨＥＲＯの共存に悩んでいるらしいし、誘うのも悪いだろう。いっぺんどこまで進んだか聞いてみたのだが、メインデッキは割と完成してきたのにエクストラの１５枚制限のせいで本気で頭がパンクしそうになっているらしい。今のところは妥協案として常に全種融合体を持ち歩き、デュエルのたびにフェイバリットカードのフレイム・ウィングマン以外をランダムに入れ替えてるとのこと。大変そうだなー、融合って。
「どれ、ちょっと外の空気吸ってくるよー」
自分の部屋にいる十代に声をかけ、靴だけはいてふらりと外に出る。特に誰とも会わずに歩いていると、いつの間にか海岸まで来ていた。静かに波の音でも聞こうかと耳を澄ませると、まったく別の騒がしい声にせっかくの音が全部かき消される。
『助けてー……アニキ～……』
「ええい、うるさい！お前らは邪魔になると何度言ったらわかるのだ！」
『そんなつれないこと言わないでよ、オイラ達とアニキの仲じゃないか～』

「貴様らみたいな不細工、俺は知らんといったはずだ！」
『そ、そんな～！』
相手によっては張り倒そうかと近づいてみると、そこには段ボール箱を抱えた万丈目……あー、ホワイトサンダーとおジャマトリオがいた。どうも万丈目が段ボールを海に捨てようとしてるのを、トリオが懸命に引き留めようとしているらしい。
『頼むよ、アニキー！』
「知らん知らん知らーん！」
「何やってんのさ、こんな夜遅くに」
ますます両者ともにヒートアップして声が大きくなってくるので、さすがに耐えかねて話に割り込む。するとおジャマトリオがよっしゃあ、と言わんばかりの顔でこちらのほうに飛んでくる。
『清明のダンナー、ちょうどいいところに来てくれたわね！』
『聞いてくれよ、万丈目のアニキが急に俺らのことを海に捨てるって言い出すんだよ！』
『それで俺たち、捨てないでくれって頼んでるのにアニキが全然取り付く島もなくて』
ここぞとばかりにまくしたてる三兄弟をいったん押しとめ、万丈目に向き直る。
「なるほどねぇ。んで？何か言いたいことは？」
「フン、くだらん。俺のカードを俺が捨てて何が悪いというのだ」

「……ねえ三兄弟、何？万丈目って白塗りしてからずっとこんな調子なの？」
「万丈目ホワイトサンダー、だ！」
怒る万丈目を尻目に、しみじみした顔でうんうん、と頷く三兄弟。なんか入学した時を思い出すなあ、この調子。
「ええい、なんだその目は！俺をバカにしているのか！」
「あーいや、こんな調子だと周りが大変だろうなあって……あら失礼」
おっとつい本音が。
「き、貴様……！もう許さん！遊野清明、お前にデュエルを申し込む！時刻は明日の日の出と同時に、場所は校舎の中央入り口前だ！」

「……で、お前たちを預かってきたのか？」
再びここはレッド寮。あの後すぐに帰っていった万丈目が置き忘れていったおジャマ三兄弟を放っておくのも忍びなかったので回収し、ちょうど水を飲みに来ていた十代と鉢合わせたのでわけを話す。ちょっと待ってろ、といって2階に上がった十代が、何やらもう一つ段ボール箱を持って帰ってきた。見ると、そこにもカードがたくさん。
「そいつらも一緒に戦うんだろ？だったら、これも使ってけよ。これが、万丈目があの時

井戸から回収してきたカードたちだ。それと、黒蠍団のカード」

「おお、懐かしい」

ちょっと去年のことをを思い出してしみじみしていると、箱の中から眼帯をした半透明の男が起き上がる。

『おお、なんだお前らか。このザルーグに何の用だ?』

「おっひさー。ちょっとね、力を貸してほしいことがあって……」

食卓机にカードを広げる。今の万丈目が四六時中あんな調子なら、友人として一発ガツンとくらわせてでも目を覚まさせてやらねばなるまい。ちょうどいい、最初のターゲットは万丈目にしよう。

ただ悲しいことに僕のデッキはすでにいっぱいいっぱいでせっかくついてきたおジャマ要素を入れるスペースがない。なら、この万丈目のもとに集まっている精霊たちの力を借りてひとつ新しいデッキを作るしかないだろう。勝負は明日の朝、テストプレイをする時間があるかどうかもわからない。そんなデッキで勝とうだなんて、虫のよすぎる話かもしれない。それでも、やる価値は十分にある。光の結社がデュエルで洗脳するというのなら、こっちだって同じことをするまで。さらにこれは本人のカード、目を覚まさせる力もきっと高いだろう。

「よし、やるか!」

『『おーっ！』』

「ふん、遅いな。この俺を待たせるとは何事だ！」
「ああ、そりゃどーも……」
　日付は飛んで翌日の夜明け前。案の定まるっきり初めてのおジャマデッキにてこずりまくり、ほぼ徹夜に近い状態で勝負を迎えることになってしまった。僕だって好きでこんな時間ギリギリに来たわけじゃない、目覚ましがちゃんとならなかったのが悪いんだ。おまけにデッキ枚数はわざわざ新しく組んだにもかかわらずなぜかまた６０枚。この重みが凄いしっくりくるってのは、我ながらもうだめかもわからんね。
「日が登るまであと１０分といったところか。どうせギャラリーはいないんだ、少しぐらい早くても構わんだろう」
「万丈目……」
「ホワイトサンダー」
　たとえ光の結社に入ってカードに対する心がなくなっても、性格までは変わってなくてちょっと安心。だいたい万丈目はいつもいつもせっかちすぎるんだよね。たとえば醤油こぼした時だって、僕が雑巾持ってくるより前に袖で拭くし。十代もその様子はよ

く見てたから、今朝も万丈目が元に戻った時のためわざわざあの黒い制服を探していた十代もいちばんきれいな奴が見つかるといいけどな、とか言ってた。多分もうすぐ来るだろうけど、十代もなかなか苦労人だ。

「わかったわかった。十代には悪いけど、それじゃあデュエルと洒落込もうか！」

「「デュエル！」」

そう言った瞬間、背中に光の当たる感覚がした。ちょうど今、日が登ったのだ。

「先攻は俺だ！俺のターン、ライトロード・アサシン　ライデンを召喚する」

銀色に光る短剣を持った、褐色の肌の偉丈夫。いつぞやの三沢戦の時にも見た暗殺者が先陣を切った。

ライトロード・アサシン　ライデン　攻１７００

「ライデンは1ターンに1度、俺のデッキトップから2枚のカードを墓地に送ることができる。そしてその中にライトロードのカードがあれば攻撃力がエンドフェイズまで２００ポイントアップするが、今はあまり関係ないな。だが効果は使わせてもらう！……チッ、光の援軍が落ちたか。もう1枚はライトロードのジェイン、よって攻撃力上昇。カードを1枚伏せ、エンドフェイズにライデンの効果でさらにカードを2枚墓地に。ターンを終了する」

「僕のターン、ドロー！あらー……」

まるで積み込みでもしたのかといいたくなるほどきれいな揃いっぷりである。オートシャッフル機能をダメにした覚えはないから、これもまた精霊の力なのだろう。カードの精霊とも1年近い付き合いになるけど、いまだにこの子たちがどこまでデュエルに干渉できるのかはさっぱり見当もつかない。こんなきれいにそろうなんて、ふつうは想像つかないし、ねえ。

「ま、せっかく全員居るんだから有効活用させてもらうよ。首領（ドン）・ザルーグを召喚！」

『おう、任せておきな！』

首領・ザルーグ　攻１４００

「ザルーグだと？確かに効果はまあまあだが、そんな攻撃力ではライデンを倒すことはできんぞ」

「まあ見てなって。黒蠍団、招集！」

『出て来い、野郎どもぉ！』

『『『おーう!!』』』

ザルーグが号令をかけると、４人の黒を基調とした服をした男女が手に手に武器を取り駆けつける。身長も体格もばらばらな全員の共通点として、蠍の入れ墨が体のどこかに施されていた。

『罠はずしのクリフ！』

最初に名乗りを上げたのは、いかにも神経質そうな眼鏡をかけた青年。片手で眼鏡のつるを押し上げながらもう一方の手で獲物の短刀をちらつかせ、同じ短刀使いのライデンを挑発して見せる。

黒蠍―罠はずしのクリフ　攻１２００

『茨のミーネ！』

次いで、メンバー内の紅一点。いかにも痛そうな茨の鞭をピシリと地面に叩き付けるその様子からも、彼女の男勝りな性格は容易に想像がつく。

黒蠍―茨のミーネ　守１８００

『強力のゴーグ！』

メンバー内でも１の巨漢。筋肉にぐっと力を込めて極悪な鉄球がついた重そうなハンマーを軽々と頭の上で回すその様子は、ただただ頼もしい。

黒蠍―強力のゴーグ　攻１８００

『逃げ足のチック！』

最後に名乗ったのは、ゴーグとはうってかわって小柄な男。どこから来るのかさっぱりわからない自信に満ち溢れた他のメンバーとは違い、若干不安そうな様子を隠しきれないでいる。それでも木製のハンマーを精一杯掲げ、他のメンバーの何かと濃い空気に圧倒されないように頑張っている。

黒蠍―逃げ足のチック　攻１０００

そしてその４人がザルーグのいるところに集まり、すっかり慣れきった動きで謎のフォーメーションを取る。

『『『『我ら、黒蠍盗掘団！』』』』

そう。彼らこそが黒蠍盗掘団。去年セブンスターズの一員として学園に潜り込むも突如名探偵サンダーとなった当時の万丈目にその正体を暴かれ、その後のデュエルにおいて敗北したものの万丈目の人柄に惚れこんでカードとして彼の部屋で居候を続けていたゆかいな５人組だ。

「く、黒蠍団だと!?貴様、いつものデッキはどうした！」

「いい？僕はこの勝負、ただ勝つためだけに来てるんじゃないんだよ。いい加減目ぇ覚ましてこっち帰ってこい万丈目！そしてそのために必要だと僕と十代が判断してデッキを組んだ、それが――――――」

『『『『それが、黒蠍盗掘団！』』』』

いよし決まった。急に振ったからどうなるかと思ったけど、そこは空気読んでちゃんとやってくれた。

「ふ、ふざけるな！」

「ふざけるなって？僕にはそっちがやられかかってるようにしか見えないけどね。行く

よ、バトルだ！強力のゴーグでライデンに攻撃！」
『むぅん、ごうりきハンマー！』
　ゴーグがハンマーを振り上げ、ライデンの頭上に叩き付ける。と、思ったのだが。
「トラップ発動、バトル・ブレイク！相手は手札のトラップを見せることでこのカードを無効にできるが、それができない場合は攻撃モンスターを破壊してバトルフェイズを終了させる！」
「ま、まずい……」
　僕の手札は黒蠍団展開のためにもう全部使いきった。見せることができるトラップなんてただの1枚もありゃしない。
「ごめん、ゴーグ！」
『むうぅぅぅ……！』
『ゴーグ！クソッ、清明の旦那は気にすんな。俺たち全員、覚悟の上でこのフィールドに立ってんだからよ』
　破壊されるというのに非難の声1つあげることなく、ゴーグの体がフィールドから消え去る。それとザルーグが慰めてくれたおかげで若干罪悪感は薄まったものの、残りの黒蠍メンバーではどうにもこうにも火力不足だ。１７００のライデンを倒すこともできない。

「ターン、エンド……」
万丈目　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：ライトロード・アサシン　ライデン（攻）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：首領・ザルーグ（攻）
黒蠍―罠はずしのクリフ（攻）
黒蠍―茨のミーネ（守）
黒蠍―逃げ足のチック（攻）
魔法・罠：なし
「ふん、それで終わりか。俺のターン！別にこの盤面なら凝った動きをするまでもないな。ライトロード・パラディン　ジェインを召喚！そしてこのターンもライデンの効果を発動。１枚目は死者蘇生、２枚目はライトロードのライニャン、よってアサシンの攻撃力が上昇する」
光り輝く剣を持った正統派の騎士といった姿の戦士が、ライデンの隣に降り立つ。
ライトロード・パラディン　ジェイン　攻１８００
ライトロード・アサシン　ライデン　攻１７００↓１９００

「バトルだ、ジェインで逃げ足のチックに攻撃！この瞬間にジェインの効果により、攻撃力が３００ポイント上昇する」

『ちくしょう、こっちかよ～!?こうなったらヤケクソだ、喰らえ元気槌っ！』

光の剣が煌めき、チックが決死の覚悟で振ったハンマーを手から叩き落とす。そして返しの太刀がうなり、がら空きになったチックの胴体を弾き飛ばした。

ライトロード・パラディン　ジェイン　攻２１００→黒蠍―逃げ足のチック　攻１０００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→２９００

「次はライデンの番だな。攻撃するのは……そうだな、罠はずしのクリフに攻撃！」

『フン。せめて一撃は入れてやる、トラップナイフ！』

二人の持つ短剣がそれぞれ複雑な軌道を描く。だがライデンの刃がクリフを切り裂いた時、彼のナイフはほんの少し屈んだライデンの、そのさっきまで首があったあたりの空気を虚しく切り裂くだけだった。

ライトロード・アサシン　ライデン　攻１９００→黒蠍―罠はずしのクリフ　攻１２００（破壊）

清明　ＬＰ２９００→２２００

『チック、クリフ！』

『よくも私の仲間にここまで手ぇ出してくれたわねっ！そこの白いの２人、覚えときな！』

いなくなった仲間を嘆くザルーグに対し、キッと般若の形相でジェインとライデンを睨みつけるミーネ。やっぱ女性って怖い、ということが再確認できた。

「エンドフェイズにライデンの効果で２枚、ジェインの効果でさらに２枚デッキトップを墓地に送りターンエンドだ。どうした？随分と張り合いがないな。なんなら、今からでもデッキの変更を認めてやってもいいんだぞ？」

「誰がやるってのさ、そんなもん。僕のターン、ドローッ！……ほう」

僕が今引いたカード。このデッキは基本万丈目が持っていたカードのみで作ってあるが、そんな中でたった２枚だけ別のところから入れたカードがある。これは、そのうちの１枚。いつか万丈目に渡してくれと頼まれ、一時的に僕が預かっていたカード。

話は変わるが、デュエルアカデミアノース校には、天田という男がいる。デュエルモンスターズ初期に登場したステータスもレベルもパッとしない儀式モンスター、ハングリーバーガーに強力な効果を持つ儀式魔人の効果を全部乗せすることで超強力なモンスターへと変貌させ、それを主軸として戦うテクニカルなデッキの使い手だ。僕は直接デュエルしたことこそないものの、三沢や葵ちゃんといった強豪相手に一歩も引かないだけのタクティクスも持ち合わせており、サンダー四天王としても知られている。

今年はノース校が全員光の結社に堕ちた状態の中たった一人で抵抗し続け、この時すでに構成員だった葵ちゃんたちの策略により自身も光の結社に入ってしまうものの、その直前に万丈目が持ってきた以外のノース校秘蔵のカードを僕にこっそり渡してくれた。そう、今引いたカードこそがまさにそのカードの内の1枚。

「うまい具合に墓地にモンスターが3体、か。天田、万丈目のためにこの力、ひとまず僕が使わせてもらうよ。僕の墓地の闇属性モンスターが3体ぴったりの時、このカードは手札から特殊召喚できる！出でよ、ダーク・アームド・ドラゴン！」

万丈目が普段主力として愛用するレベルモンスター、アームド・ドラゴンが闇の力を得た姿。全体的に元の姿よりとげとげしくなり、凶悪感が増している。

ダーク・アームド・ドラゴン　攻２８００

「な、なんだそのモンスターは！アームド・ドラゴンのダーク化だと!?」

「うん。このカードはノース校の天田が、光の結社に入る直前に僕に渡してくれたカード。天田、言ってたよ？このカードはできたらサンダーに渡したかったけど、光の結社に入っているなら今は渡せない、みたいなこと。みんなさ、心配してるんだよ」

「ええい、ハッタリに決まっている！そのカードだっておおかたお前が奪い取ったものだろう!?」

頭をぶんぶんと振り、必死に僕の言葉に抵抗しようとする万丈目。やっぱり口だけ

じゃ説得できないか。
「なら、ここで一発ぶん殴るさ。ダーク・アームド・ドラゴンは墓地の闇属性を除外することで、相手フィールドのカードを1枚破壊できる。逃げ足のチック、罠はずしのクリフを除外してそれぞれジェイン、ライデンを破壊！ダーク・ジェノサイド・カッター！」
「何!?」
『さっきのお返しだ、今度こそ受けてみろ元気槌！』
『借りは返す、トラップナイフ！』
　ダーク・アームドが地面を両手で勢いよく叩くと、その地点から半透明になった黒蠍団の２人が飛び出してきてそれぞれ先ほどの反撃を加えた。
「それじゃあバトル、ダーク・アームド・ドラゴンでダイレクトアタック！受けてみろ万丈目、ダーク・ヴァニッシャー！」
　ダーク・アームド・ドラゴン　攻２８００→万丈目（直接攻撃）
　万丈目　ＬＰ４０００→１２００
「ぐはあっ！」
「次、ザルーグ！」
『倒れるのはまだ早いぜ、万丈目の旦那！あーらよっと、ダブルリボルバー！』
　ドラゴンの重いパンチをまともに喰らった万丈目に、追撃の弾丸が２発うなりをつけ

て飛んでいく。打が持ち直した万丈目は慌てることなく、手札から1枚のカードをモンスターゾーンに叩き付けた。

「甘い！相手の直接攻撃宣言時、手札からＢＦ（ブラックフェザー）―熱風のギブリの効果発動！このカードを特殊召喚だ」

「ギ、ギブリ!?そのカードは！」

黒い中に赤のアクセントが入った独特の配色な羽根を持つカラスが必殺の弾丸の前にパッと飛び込み、なんと羽ばたいた風圧で弾丸の軌道を無理やりずらしてのけた。

ＢＦ―熱風のギブリ　守１６００

ギブリ。あのモンスターには僕も見覚えがある。通常ライトロードデッキには入らないであろうカードだが、あのカードはサンダー四天王最強にして今も光の結社の中ではそこそこの地位を手に入れている男、鎧田の持っていたカードだ。1度万丈目がアカデミアを賭け自分の兄とデュエルするために攻撃力０統一のデッキを組む際わざわざノース校から送ってもらったカード。あの後ノース校に返したはずだけど、わざわざもう1度もらったのだろうか。

「ザルーグの攻撃力じゃ勝てない……墓地のゴーグは温存するからダーク・アームドの効果は使わないでターン終了」

万丈目　ＬＰ１２００　手札…2

モンスター：ＢＦ―熱風のギブリ（守）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ２２００　手札：０
モンスター：首領・ザルーグ（攻）
　　黒蠍―茨のミーネ（守）
魔法・罠：なし

「俺のターンだ。ギブリをリリースし、アドバンス召喚！出でよ、ライトロード・ドラゴン　グラゴニス！」

純白の姿に金色の装飾を施されたドラゴンが、太陽を背にして天から駆けてくる。

「グラゴニスの攻撃力は、墓地に存在する戦い半ばで散っていったライトロードの正義に対する思いを受け取ることでその種類の３００倍アップする。そして今の俺の墓地にはお前に破壊されたジェイン、ライデンの他にもこいつらの効果で墓地に送られたライニャン、エイリンの計４種類６枚のライトロード。よってその攻撃力は１２００ポイントアップだ！」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　攻２０００→３２００

「残念ながらこのままザルーグに攻撃してもお前のライフを０にすることはできないな。ならばダーク・アームド・ドラゴン、貴様を破壊するまでだ！」

「ダーク・アームド！」

漆黒の龍が唸り、自身の全体重を乗せた渾身の右ストレートを放つ。だが光のドラゴンはその一撃を巨体からは想像もつかないような身軽さで上空へ回避し、再び太陽を背にする格好になる。その動きをしっかり目で追いかけるものの、太陽をまともに目にしたダーク・アームドがほんの１瞬だけ硬直する。グラゴニスには、その１瞬だけで十分だった。まばゆい光のブレスが、回避の遅れたダーク・アームドの体を包み込んで消し去っていく。

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　攻３２００↓ダーク・アームド・ドラゴン攻２８００（破壊）

清明　ＬＰ２２００↓１８００

「まさかお前を相手にしてこんな単純な殴り合いをするだけのデュエルになるとはな。まったくもってつまらん、まるで張りあいがない。まあ、ダーク・アームド・ドラゴンにだけはちょっぴり驚いたことは否定しないが。エンドフェイズにグラゴニスの効果でカードを３枚墓地に送り、その中にライラのカードがあった。よってさらにグラゴニスの攻撃力は上がり、カードを伏せてターンエンドだ」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　攻３２００↓３５００

「好き勝手言ってくれちゃってー。僕のターン、ドロー！」

とはいえ、実際これまで単純な殴り合いに終始していることは紛れもない事実。そして、真正面からの火力勝負ではぶっちゃけこのデッキはライトロードに勝てない。

「お、いいカード。魔法カード、一時休戦を発動。そのまま引いたモンスターをセットして、ターンエンド」

お互いにカードを引き、さらに次の相手ターン終了時までお互いに受けるダメージを０にする便利なカード、一時休戦をこの土壇場で引いた。ここでこのモンスターを引けたってことは、まだまだチャンスはある。

万丈目　ＬＰ１２００　手札：３

モンスター：ＢＦ―熱風のギブリ（守）

魔法・罠：１（伏せ）

清明　ＬＰ１８００　手札：０

モンスター：首領・ザルーグ（攻）

黒蠍―茨のミーネ（守）

???（セット）

魔法・罠：なし

「それで時間を稼ぐつもりか？ならば、このカードだ。来い、ライトロード・ドルイドオルクス！」

白い髪の、本を片手にした初老の老人。当然のごとくその恰好は白一色だ。
ライトロード・ドルイド　オルクス　守１８００
「オルクスの効果は知っているな？これで俺もお前もライトロードと名のつくモンスターをカード効果の対象にできない。そして戦闘ダメージは与えられなくとも、今のうちにそのセットモンスターは破壊する！バトルだ、グラゴニス！」
ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　攻３５００→???　守８００（破壊）
「この瞬間、メタモルポットのリバース効果発動！お互いに手札をすべて捨て、カードを５枚ドロー。もっとも、僕に捨てる手札なんてもんないんだけどね」
「フン、くだらん。戦闘を諦めデッキ破壊でもやる気か、お前は？カードを伏せ、エンドフェイズに２体のモンスターの効果で合計５枚のカードを墓地に送り、ターンエンドだ」
「それじゃあ、僕のターン！」
５枚の手札、そして今引いたカードを見て、それから場にいるザルーグとミーネにアイコンタクトを取る。何をしようとしているのか察したらしい２人がコクリ、と同時に頷いた。
「ザルーグとミーネをリリースして、アドバンス召喚！これがアームド・ドラゴン進化系、もう１つの形っ！現れ出でよ、メタファイズ・アームド・ドラゴンっ！」

ダーク・アームドのような姿こそしているものの、先ほどとはまるで違う。２Ｐカラーといっては失礼だが、まさにそんな感じだ。漆黒のダーク・アームドに対し、ライトロードと同じく純白を基調とした神秘的なカラーリングを持つ幻竜。

メタファイズ・アームド・ドラゴン　攻２８００

「また、新たなアームド・ドラゴンだと……！」

「生憎このモンスターには効果はないけどね。だけど、通常モンスターには通常モンスターなりの戦い方ってものがあるってもんさ。さらに魔法カード、魔の試着部屋を発動！８００ライフを払うことでカードを４枚めくり、その中からレベル３以下の通常モンスターを出せるだけ展開することができる。１、２、３、４……当たりは２枚か、なかなか悪くないね。出ておいで、グリーン！ブラック！」

『『ようやく出番だー!!』』

清明　ＬＰ１８００→１０００

おジャマ・グリーン　守１０００

おジャマ・ブラック　守１０００

『もー、ひどいぜ清明の旦那ー！せっかく黒蠍団と一緒に戦うんだから、張り切ってこんなものまで作ったのに！』

『俺たちが出てきたときにはもう、黒蠍団が全員退場してるじゃん！』

見ると、確かにいつもブリーフ一丁の彼らが珍しく革ジャンのようなものを上半身裸の上に羽織っている。背中側にはでっかくプリントされた手書きの蠍らしき生き物の絵と、でかでかと描かれた【邪魔蠍団、推参】の文字。多分それ無許可だろうし、本人たちに見られなくてよかったんじゃないかな。むしろ怒られずに済んだことを感謝してもらいたいぞ僕。

「……まあ、いいや。バトル、メタファイズでオルクスに攻撃！」

「かかったな、馬鹿め！トラップカード、地縛霊の誘いを発動！この効果によりその攻撃は俺のフィールドにいる別のモンスター、すなわちグラゴニスへと誘導される！さらにその移し替えとコンボで、手札からオネストの効果を発動！攻撃力６３００となったグラゴニスの１撃を受けて消えるがいい！」

グラゴニスがオルクスを守るかのごとく、メタファイズのパンチの前に割り込んで翼を開く。それを見て万丈目が一瞬勝利を確信した笑みを浮かべるも、すぐにその笑いが凍りついた。なんとグラゴニスの全身を覆う光がみるみるうちに弱くなり、やがては完全に消えていってしまったのだから無理もない。

メタファイズ・アームド・ドラゴン　攻２８００↓

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　攻３５００↓６３００↓２０００（破壊）

万丈目　ＬＰ１２００↓４００

「ダメージ計算時になって急に攻撃力が２０００に下がった……そうか、速攻魔法か！」
「ご名算。僕は今の戦闘で速攻魔法、禁じられた聖典を発動していたのさ。このカードの効果によりフィールド上のカードは全部一時的に無効になって、モンスターは元々の攻守を使って戦闘を行う。グラゴニスも強化さえ取っ払えば元の攻撃力は２０００、このアームド・ドラゴンの敵じゃないね」
『そうだそうだー！』
『これが俺たちの力だー！』
「ええい、何もしてないお前ら雑魚に言われる筋合いはなーい！」
　む。今のツッコミ、ちょっと前の万丈目っぽかった気がする。なにせ万丈目のやつホワイト化してから変なところでちょいちょいシリアスぶってることが多かったから、ああやって大声で叫ぶのを見るのは久しぶりだ。見た目は全く変化なしだけど、もしかして少しづつ僕の友人である万丈目サンダーが戻りつつあるんだろうか。だとしたら、ますますこのデュエルで負けるわけにはいかなくなった。そこで大人しくしてなよ万丈目、今すぐもとに戻したげるから。
「これで、僕はターンエンド」
　万丈目　ＬＰ４００　手札：４
　モンスター：ライトロード・ドルイド　オルクス（守）

魔法・罠：1（伏せ）
清明　LP1000　手札：3
モンスター：メタファイズ・アームド・ドラゴン（攻）
おジャマ・グリーン（守）
おジャマ・ブラック（守）
魔法・罠：なし
「俺のターン、ドロー……ふふふ、ハハハハハ！」
「今度は何!?」
急にカードを見て高笑いしだしたので、その異様な光景に黙っていられなくなり声をかける。
「確かにお前はよくやったさ、だが勝機は俺に訪れたようだ！俺の墓地のライトロードが4種類以上いるとき、このカードは特殊召喚できる！出て来い、裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）！」
グラゴニスをはるかに上回る白い巨体。ライトロードの切り札にして最も警戒していた最終兵器が、ついにその姿を見せた。
裁きの龍　攻3000
「だ、だけど……」
「おっと、皆まで言うな。お前の考えていることはわかるぞ？俺のライフは残りたった

の４００、そしてコイツの全体除去効果を使うのに必要なライフは１０００。このターンは凌げる、そう思っているんだろう?だが、その考えこそが甘い!ロイヤルナイツを通常召喚だ」

ロイヤルナイツ　攻１３００

どこか機械めいた姿の、手に剣を持つ天使が羽を広げて地面に降り立つ。だけどその攻撃力は１３００と、とてもじゃないが高いとは言えない数値だ。

「バトルだ、ロイヤルナイツでおジャマ……そうだな、どっちでも構わんがここはブラック、貴様に攻撃だ!」

『げーっ!?』

あたふたとモンスターゾーンから逃げようとするも、突き出した腹が邪魔になって結局逃げ遅れたブラックをロイヤルナイツが滑空しながら一閃する。

ロイヤルナイツ　攻１３００→おジャマ・ブラック　守１０００（破壊）

万丈目　ＬＰ４００→１４００

「そしてこの瞬間、ロイヤルナイツの効果が発動する。戦闘で破壊したモンスターの守備力分、俺のライフを回復だ!このまま裁きの龍での連撃に移りダメージを稼いでもいいが、お前の場に伏せてあるカードが目障りだな……ここはメイン2に移行し、裁きの龍の効果発動だ。ライフを１０００支払い、このカード以外の全フィールドを焼け野原

にする！」
『結局こうなるのかよーっ！』
　万丈目　ＬＰ１４００→４００
　メタファイズが、グリーンが、僕の伏せカードが、真っ白い光に飲み込まれていく。何もかもなくなってしまった戦場に、万丈目の声が聞こえた。
「オルクスが消えてしまったのもまあ、必要経費の範囲内だろう。裁きの龍の効果で４枚のカードを墓地に送り、ターンエンドだ。おっと、今のカードの中にウォルフがいたな。カード効果でデッキから墓地に送られたこいつは特殊召喚される」
　ライトロード・ビースト　ウォルフ　攻２１００
　あれ。これ、もたもたしてたら本気でデッキデス狙えるんじゃなかろうか。かれこれ落としたカードは３０枚以上、さらにメタモルポットの効果も１回受けさせているし。
「でもまあ、それで勝っても意味ないだろうなぁ。ドロー！」
　万丈目の場には攻撃力３０００の裁きの龍と、攻撃力２１００のウォルフ。対してこちらにはわずか３枚の手札のみ。
『ちょっとダンナ、何弱気なこと言ってるのよ！このデュエルには万丈目のアニキがあのダサい服を着続ける羽目になるかどうかがかかってるのよ!?』
「あ、ちょっと、喋ったら何引いたのかばれるでしょーが!?」

反射的につい叫び返してから、ミスに気づき慌てて万丈目の顔色をうかがう。あ、これダメな奴だ。何引いたか丸聞こえだ。

「もー、自分からばらしに行ったんだから責任とってよ？おジャマ・イエローを召喚して、馬の骨の対価を発動。自分フィールドの通常モンスターを墓地に送って、カードを２枚ドロー。よし、来た来た来た！魔法カード、トライワイトゾーンを発動！墓地に存在するレベル２以下の通常モンスター３体を特殊召喚する！甦れ、３兄弟っ！」

『『『おジャマ三兄弟、ふっかーつ！』』』

おジャマ・イエロー　守１０００

おジャマ・ブラック　守１０００

おジャマ・グリーン　守１０００

「そんなモンスター、３体並べたところで何の役に立つというんだ？」

「万丈目……ほんとに覚えてないの？いつも万丈目は、こうやってこのおジャマを揃えて戦ってきてたじゃない」

『そうだぜ、アニキ！』

『俺たちのこと、本当に覚えてないのかよ！』

「お、お前らみたいに不細工な奴のことなんか、この俺が覚えてなぞいるものか……」

そう返すものの、前よりもはるかに万丈目の言葉に勢いがない。畳みかけるなら少し

ずつ洗脳が解けてきている今が好機と見て、さらに言葉を重ねる。ここは、万丈目の性格を考えると理詰めより情に訴えかけるのが一番効くはずだ。

「これはあとから聞いた話なんだけど、万丈目がそうやって光の結社に入ったのは元々、あの日僕を探しにわざわざ外に来てくれたからなんだって？」

あの日、とは他でもない。僕にとって、光の結社の恐ろしさを最初に味わった日。どこでいつどうやったのか、そういうことはいまだにまるで分らないけれど、しばらく行方不明だったユーノがふらりと帰ってきたと思ったら、すでに光の結社洗脳済みだった彼の不意打ちを受けてしまった日のことだ。それから数日して目覚めたら、僕を心配して探しに来た万丈目があのホワイトサンダー状態になっていて、十代もエドに負けたショックで消息不明になっていた。あんな感覚、もう2度と味わいたくない。思い出しただけで寒気がする。僕は寂しいのが大嫌いなんだ。

「な、何のことだか俺は、俺は……」

「その話聞いてからいつか言おう言おうとは思ってたんだけど、ここで言わせてもらうよ。……万丈目、ありがとう」

「ッ……！」

さあ、どうだ。これでこっちが今現在出せる対万丈目用手段（カード）はほぼすべて使い切った。というとなんだか計算づくみたいだけど、別にそんなことはない。お礼を言いた

かった、というのは紛れもない本音だ。このタイミングで利用できるとは思ったけど。
「まだ思い出せないなら、これが最後の一手。いくよ、魔法発動！」
『『待ってましたー！イエロー！ブラック！グリーン！必殺……おジャマ・デルタハリケーン!!』』
　三兄弟が輪になり、飛び上がってからものすごい勢いで回転を始める。そのままその輪が万丈目のフィールドにあるすべてのカードを取り囲むと、先ほど裁きの龍がぶちかましたような破壊の嵐が吹き荒れる。
「う……うおおおおっ！」
　爆風に万丈目の体が1メートルほど吹き飛ばされ、どさりと地面に倒れこむ。さすがに心配になって駆け寄ろうとする僕を手で制し、よろめきながらも立ち上がる。
「こんな、ことで、俺の斎王様への忠誠心は……」
　まだ駄目か。思いのほか洗脳が強いせいでこちらの出せる手はもうほぼない。でもあと何か、もうひと押し欲しいところだ。と、その瞬間に声がする。こんなタイミングのいい男なんて、僕は一人しか知らない。こんな、まさにヒーローみたいなタイミングの良さは。
「お、居た居た。おーい、万丈目！お前の制服だぞ、受け取れ！」
「お前は、十代!?」

待ってました、十代。手にした黒い服を得意げに見せつけてから、それを万丈目めがけて投げつける。きれいな軌道を描いたそれが、万丈目に頭から覆いかぶさった。
「な、なんだこの変なにおいは!?」
「それは醤油だよ。だいたい万丈目いっつもいっつもこぼしては袖で拭き、こぼしては袖で拭くんだもん。おまけに服そのものが黒いせいで汚れも目立たないし。どうせ洗濯しないんならせめて雑巾とか使ってよ」
「そうだそうだ、今まで気づいてなかったのかよ!・今日だってその服もってくるとき、ちょっと臭かったんだぞ!」
『うんうん、万丈目のアニキったらいくら言っても聞かないもんだから……』
「お・ま・え・ら・なあ!・ええい、人の服をそんな乱暴に扱うんじゃない!」
バサリと白い上着をそこらへんに脱ぎ捨て、久しぶりに見るいつもの格好に戻った万丈目。僕らの方ににやりと笑って見せ、デュエルディスクを構えなおした。
「待たせたな、清明。なぜおまえの場にその雑魚3兄弟がいるのかについては聞かないでおいてやるが、今はデュエルの最中なのだろう?」
その懐かしい偉そうな調子に、思わずこちらも頬が緩む。そうか、ようやく帰ってきてくれたんだ。
「まーね。1枚セットして、ターンエンド!」

万丈目　ＬＰ４００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ１０００　手札：１
モンスター：おジャマ・イエロー（守）
おジャマ・グリーン（守）
おジャマ・ブラック（守）
魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン、ドローだ！……うっ!?」

カードをドローした万丈目が、急に苦しみだす。そういえば引いたカード全体が、ぼんやりと薄く光ってるような……？と、再び黒い服を脱ぎ捨て、ついさっき脱いだばかりの白服を羽織りだす。向き直ったその顔は、再びホワイトサンダーのものになっていた。

「ふん、くだらん手を使いおって。危うく斎王様への忠誠心が揺らいでしまうところだったが、そんな卑怯な手がこの万丈目ホワイトサンダーに通じるものか!!ここまで肥えさせた墓地の使い方を教えてやろう。魔法カード、暴走する魔力を発動！墓地に存在する魔法カード全て、合計９枚を除外することでその枚数の３００倍以下の守備力を持

つ相手モンスターをすべて破壊する！その雑魚は全員守備力２７００以下、これで消えされ！」

文字通り魔法が暴走して、四方八方に緑色の雷が飛び散る。冗談じゃない、ここまで来て負けるだなんてまっぴらごめんだね。

「だったらリバースの速攻魔法、瞬間融合を発動！フィールド上に存在するモンスターを使い、融合召喚を行う！僕が素材にするのはもちろん、三兄弟全員だ！」

『『『おジャマ究極合体！おいでませ、おジャマ・キング！』』』

黄、黒、緑の三兄弟が飛び上がって空中で一つになり、ライトロードのような光の白色とはまた違った白いモンスターになる。そう、例えるならばペンキでも頭からかぶったかのような、そういう感じの白色に。そしてその白いモンスターが、グリーン並みにムキムキな腕の筋肉を生かして雷をはじく。

『おジャーマ・キーング！』

おジャマ・キング　守３０００

「なるほど、守備力３０００ならばギリギリ暴走する魔力でも潰しきれないか……だが、瞬間融合のデメリットは俺も知っている！墓地からアマリリースの効果を発動。このカードを除外し、このターンアドバンス召喚に必要なモンスターを１体減らすことができる」

かすかに光るカード。なるほど、あれが万丈目を洗脳してるカード、葵ちゃんにおける銀河眼みたいなものか。裏を返せば、あれが万丈目を取り返す時に最後に立ちはだかるラスボスだと。そして、そのカードがモンスターゾーンに置かれた。
「ライトレイ　マドールを守備表示で召喚！さあこの壁、越えられるものなら越えてみろ！」
万丈目の目の前に、光り輝く氷の壁が立ちふさがる。３重にもなった分厚い壁の前に、仮面をつけた魔法使いが一人たたずむ。
ライトレイ　マドール　守３０００
「１つ断っておくが、こいつは１ターンに１度戦闘では破壊されない。そしてこのエンドフェイズには瞬間融合のデメリットによりお前にとって頼みの綱のおジャマ・キングも破壊される！このデュエル長かったが、これで俺の勝ちだ！」
「あれあれ、本気？僕がドローする前からそんなこと言っちゃって、どうなっても知らないよ？」
ホワイト相手に弱気なところを見せたら何言いだすかわかったもんじゃないのであえて自信満々に強がって見たけど、正直状況はかなり苦しい。手札のこれ１枚だけじゃあまだマドールの壁は越えられない、となると……。
「後は、この引き次第、っと！ドロー！」

「たった2枚のカードでマドールを倒すことなど、できるはずが……」
万丈目が、十代が、かたずをのんで見守る中、そっと手札を見る。来た！
「魔法カード、未来への思いを発動！このカードは自分の墓地からレベルの異なるモンスターを3体蘇生させることができる！レベル7、メタファイズ・アームド・ドラゴン！レベル6、おジャマ・キング！レベル4、首領・ザルーグ！」
『アニキ～！』
メタファイズ・アームド・ドラゴン　攻２８００→０
おジャマ・キング　攻０
首領・ザルーグ　攻１４００→０
「だがいくら3体モンスターを揃えたところで、未来への思いのデメリットでその攻撃力は０で効果も無効、とどめにこのターンのエンドフェイズ、お前は４０００ポイントのライフを失うことになる！その状態で俺に勝つことなど……」
「悪いね、わざわざ説明してもらって。確かにその通りだけど、このモンスターたちは攻撃することはできる」
「攻撃力０で攻撃するだと？手の込んだ自殺か、それは」
「いいや、このカードを使ってから攻撃するのさ！フィールド魔法、おジャマ・カントリー！このカードはフィールドにおジャマモンスターがいるとき、全モンスターの攻守

を逆転させる！」

一瞬にしてアカデミアが、周りにのどかな感じの家が立ち並ぶ地に変わる。そして、未来への思いは攻撃力こそ０にするものの、守備力は一切変化させない魔法カード。僕の３体のモンスターが新たな力を得て気合十分になる中、マドールはその力をみるみるうちに吸い取られてよろめき、自分の作り出した壁に寄り掛かる。

メタファイズ・アームド・ドラゴン　攻０→１０００　守１０００→０

おジャマ・キング　攻０→３０００　守３０００→０

首領・ザルーグ　攻０→１５００　守１５００→０

ライトレイ　マドール　守３０００→１２００　攻１２００→３０００

「バ、バカな……！」

「これで、最後のバトル。ザルーグでマドールに攻撃！」

『おうともよ。そらよ、こいつは俺からのプレゼントだ！ダブルリボルバー！』

首領・ザルーグ　攻１５００→ライトレイ　マドール　守１２００

２丁拳銃から放たれた銃弾が正確にマドールの仮面のど真ん中に命中し、もう片方が１枚目の氷の壁を撃ちぬく。だが、敵も戦闘で１度は破壊されないモンスター。並大抵のモンスターなら致命傷になる銃撃を受けてなお、立ち上がろうとしてなおも手足を動かす。だがその頭上に、不意に影がかかった。次の瞬間、２枚目の氷の壁ごといつの間

にかジャンプしていた白い巨体がマドールを押しつぶしにかかる。
「ほんとはこっちにとどめを任せたかったけど、ここは天田の意志を尊重して、ね。おジャマ・キングでマドールに攻撃！」
『フライング・ボディアターック！』
おジャマ・キング　攻３０００→ライトレイ　マドール　守１２００（破壊）
「そ、そんな、そんなことが……いや、そう、か」
「これで終わりさ、万丈目。今度こそこっちがわに戻っておいで。メタファイズ・アームド・ドラゴンで最後のダイレクトアタック！ミスティック・ヴァニッシャー！」
メタファイズの一撃が、なぜか残っていた最後の氷の壁を打ち砕き、そのまま勢いを消すことなく万丈目へと迫る。だが万丈目はそれを避けようともせず、大人しく目を閉じてそれを受け入れた。
メタファイズ・アームド・ドラゴン　攻１０００→万丈目（直接攻撃）
万丈目　ＬＰ４００→０

「気分はどう？万丈目」
自分のすぐ近くで聞き覚えのある声がして、それで目が覚めた。

「……ひどい気分だ。こんな気分になったのは、あの三兄弟と初めて会った時以来だな」
『ああん、アニキのいけず～』
「そ。減らず口叩けるんならまだ余裕あるね。一応聞くけど、どっちがいい？」
　そう言ってそいつは、俺に黒い服を投げ渡す。ついこの間まで好んできていた、俺特注の制服だ。最近は好みが変わって真っ白なものを注文していたが、やはり俺には黒が似合う。このハイセンスなファッションなら、いつか天上院君だって俺のことを振り向いてくれるはずだ。
『アニキは腹黒だからね～』
「なんだと、この！」
　なれなれしくすり寄ってきたおジャマ・イエローがなんだかずいぶんと無礼なことを言ってくるので、罰としてデコピンを食らわせる。キャー、と悲鳴を上げて吹き飛び、そのままポン、と消えた。まったく、仕方のない奴だ。そしてその様子を笑って見ていた二人組、俺のライバルである清明と十代を睨みつける。
「お帰り、万丈目」
「お前が戻ってきてよかったぜ！」
　お帰り？戻ってきた？まったく、こいつらはなにを言っているんだ。俺は俺、いつだってそれは変わらない。そうだ、久しぶりにあれをやろう。

「おいお前ら、俺の名前を言ってみろ！」
一瞬ぽかんとしたのち、さらに笑顔を深める２人。フン、やはりこいつらには俺が手本となってやらねばな。こいつらも仮にもデュエルキングを目指すというのなら、俺のようにただ実力があるだけではなくエンターテインメント性も必須だ。今一度、その手本を見せてやろう。スッと指を１本立てて上にあげると、２人も同じポーズをとる。そうだ、そう来なくてはな。
「一！」
「十！」
「百！」
「千！」
ここでぐっ、と一度ためを作る。このタイミングを計るのがなかなか難しいのだが、ノース校時代から鍛えてきた俺にそんな隙はない。
「万丈目……サンダー！」
「サンダー！」
「俺の名は！」
「サンダー！」
「ふふふ、ハハハハハ！」

なんだか妙に嬉しくなり、無性に笑いたくなる。しばらくの間、３人でただただ笑っていた。

ターン６１　鉄砲水と真紅の瞳

「やあ、少しいいかな？」
　そう言っていつも突然なフブキングこと吹雪さんが僕の店に入ってきたのは、万丈目が元に戻ったその日の昼休みだった。正直なところ徹夜なんてやり慣れないことをしたせいで眠くてしょうがなかったが、まさか追い返すわけにもいかないので店内に迎え入れる。お客ならもう少し頭もはっきりしたのだろうが、彼がケーキを買いに来たわけではないことだけは、雰囲気ですぐに分かった。
「はい、どーしたんです？」
「少し君と話がしたくてね。まず、万丈目君が元に戻ったらしいね。おめでとう」
「いえいえ」
　少し表情を柔らかくして、まずは今朝会ったデュエルについて話を振ってくる吹雪さん。にしても、あの時観客はいなかったはずなのにどんだけ耳早いんだこの人。
「それで、本題なんだけどね。……君は、最近の亮について知っているかい？」
「亮って、カイザーのことですか？いや、どうも世間には疎くて」
　一度エドに負けてからだんだん負けがかさんできて、プロとしてのランクをどんどん

落とされたところまでは僕も見ている。だけど、この様子だとまだ先の話がありそうだ。

「ふむ、君ならそう言うと思ったよ。僕の口から説明するより、この記事を読む方が早いだろう」

そう言いつつ吹雪さんがサッと差し出したのは、よく翔も読んでいるデュエル雑誌だ。何度も読み返したらしく開いて固定した跡があるそのページは、見開き１ページ使ってある特集を組んでいた。

「地獄の貴公子、ヘルカイザーに迫る……？」

どうなってるんだ、これ。悪そうな顔で腕組みするカイザーの服は、プロ入りしてからもずっと着ていた白いものから万丈目並みの全身真っ黒にチェンジしていた。イメチェンでも図ったのかとそのまま記事を読み進めていくと、そこには目を疑うような内容がつらつらと書き連ねてあった。

いわく、ヘルカイザーとは一時期表舞台から姿を消したカイザーが新たな戦術を手に入れ文字通り地獄の底から蘇ってからの名前であると。以前のポリシーであったリスペクトデュエルをかなぐり捨て、どこまでも貪欲に勝利のみをリスペクトするその姿勢には熱狂的なファンも多く、その人気はすでに昔を上回るほどになっていると。

「えっと……」

なんだこれ、といいたいのをぐっとこらえる。あのカイザーがヒールに移行なんて、もう何がなんだかさっぱり分からない。しかもこの写真見る限り、それがなかなかサマになっている。

「僕も初めて見た時は目を疑ったけど、これが現実みたいなんだ。彼は今、僕らの知る亮とは別の人間になっている」

「で、でもこれだってスポンサーとかに言われてのキャラ付けかもしれないし」

「その可能性も考えてみたさ。だけど昨夜の亮の試合を見て、確信したんだ。あれは亮が目指していたリスペクトデュエルのやりかたなんかじゃない。純粋に勝利のみを獲りに行く、容赦のないデュエルだ」

随分きっぱりという吹雪さん。よくよく見ると昨夜何度も試合を検証してあまり眠らなかったのか、目の下には隠そうとしていても隠しきれないほどの隈があった。カイザーとの付き合いは僕よりもずっと長い吹雪さんがここまではっきり言うのだから、そうなのだろう。ただ一つ、よくわからない点があった。

「でも、なんでそれを僕に?こう言っちゃなんですけど、海の向こうにいるカイザーの話なんてここでしたって」

「チッチッチ。確かに君の言うことにも一理あるけど、僕はとある確かな筋から情報を手に入れたんだ。カイザーはジェネックス参加のため、明日この島にやってくる」

「……」

とある筋ってなんだ。これまで謎に包まれてきた吹雪さんの地獄耳の秘密にほんのちょっぴりだけ近づいた気がしたが、これ以上関わりあうとろくな目に合わないような予感がしたので追及はしないでおく。さわらぬ神にたたりなしって言葉もあるし、そもそも吹雪さんの話がどこに行くのかがいまだにはっきり見えてこない。カイザー、いやヘルカイザーが来るのはわかったけど、それをわざわざ翔や明日香じゃなくて僕の店に伝えに来たのはどういうわけだろう。その疑問に気が付いたらしく、ポケットに手を入れて1枚のカードを取りだす吹雪さん。

「こ、これ!?」

「そう。僕がかつて飲み込まれていたダークネスの力を封印したカードだ。この封印を解けば、またダークネスのマスクが出てくる仕掛けになっている」

そんな物騒なもんまだ持ってたのかこの人。まあ、世間の目から見れば地縛神カードだって似たり寄ったりなのだろうが。そのダークネスのカードをじっと見つめてから視線を外し、今度は僕の目を見て一言一言絞り出すように話す。

「僕は明日、亮にデュエルを申し込むつもりなんだ。彼が表舞台から姿を消してから今までの間に何があったのかはわからない。だけど友人として、彼にはもう一度昔のデュエルにかける思いを取り戻してほしい。そのためなら、僕はこの力をもう一度使うこと

だって辞さないつもりだ」
「いや待って待って待って」
いくらなんでも話が飛躍しすぎている。カイザーがおかしくなったのはわかった。それはいいとして、なんでそれを止めるためにダークネスの力が必要になるというのかがわからない。
そして、そんな素朴な疑問に対する吹雪さんの答えがこれだ。
「君が僕をダークネスから解放してくれた時に一瞬見せた力、あれはダークネスに負けず劣らず邪悪なものだった。闇の力を使うことで闇の力を振り払うことができるのならば、僕は喜んで亮の闇を祓うためにこの力を使おう」
そういえばあのデュエルではまだチャクチャルさんが表に出てきてなくて、勝手に溢れてくる地縛神のパワーの影響をもろに受けていた。あのころはまだ制御の方法が全然わからなかったから、やたらと攻撃的で後先を一切考えない、ちょうど先代の呪いを受けてた時期みたいなことになってたっけ。
だけど、そう考えれば吹雪さんの考えにも一理あるのかもしれない。毒を以て毒を制す、というわけか。
「(実際どうなの、チャクチャルさん?)」
とはいえ確認を取らないことには不安なので、ここは脳内で専門家に問い合わせてみ

る。わりと即答が多いチャクチャルさんにしては珍しく少しの間考えていたふうだったが、ややあって答えが返ってきた。
『間違った話ではない。その男が何らかの外部的な要因で心の闇を増幅されているなら、という前提があってこその話だが。ところでマスター、この男の狙いはもう勘付いているか？』
「（そりゃまあね。ありがとー）」
　闇のプロから言質もとれたので、改めて吹雪さんに向き直る。そう、ここまできたらいくら僕でもこの人が何を言いたいかぐらいわかる。何も言わずにデュエルディスクを起動させ、デュエルするには距離が近すぎたので少し吹雪さんとの間隔を取る。
「……すまない。だけど誤解しないでくれ、僕は無理強いする気も、強制する気もないんだ。だけど、どうしても怖いんだ。ダークネスの力を使うことが」
「気にしないでください、吹雪さん。そのマスクをつけて、デュエルしましょう。もしまたダークネスに飲み込まれたら、力技でもう一回引っぺがしてあげますよ」
　要するに僕はこれから、吹雪さんがダークネスの力に慣れるための予行の相手をするわけだ。確かに明日ぶっつけ本番でダークネス化してもしもそのままダークネスに呑まれることのリスクを考えると、この特訓は不可欠といえる。今ならたとえダークネスの制御に失敗しても、去年と同じく僕が勝てばダークシグナーの力でまた封印すること

ができる。

だけど根はまじめで優しいこの人のことだ、ここに来るのだって悩んで悩んで悩みぬいてのことだったに違いない。僕にもう一度ダークネスの相手をさせていいのか、と。それでもこの人は、苦しみながらもカイザーのために僕に頭を下げることを選んだ。本当は僕だってダークネスの相手をするのは怖い。だけど、吹雪さんは僕ならたとえ自分が暴走しても止めてくれると信じてくれた。なら、万が一のことがあってもその期待に応えよう。それがデュエリストとしての、というより遊野清明としての生き様だ。

吹雪さんが震える手で手にしたカードを引きちぎると、そこにはカードの切れ端ではなく鼻から上を覆い隠すブラックマスクが握られていた。ゆっくりとした動作で、それを顔につけていく。その目が完全に覆われる直前、最後に一瞬だけ不安と恐怖と罪悪感でいっぱいの吹雪さんの目が見えたので、せめて僕への罪悪感だけでも薄まるようにと笑いかけてみせる。

『まったく、損する人間だよマスターは』

褒め言葉として受け取っておくよ。

「「デュエル！」」

「……の前に、どう？吹雪さん。ちゃんと意識ある？」

「あ、ああ、まだ大丈夫だ。僕の先攻、魔法カード、竜の霊廟を発動！デッキからドラゴ

ン族を1体墓地に送り、それが通常モンスターならばさらにもう1体墓地に送ることができる。通常モンスターの真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を送り、これによりさらに真紅眼の飛竜（レッドアイズ・ワイバーン）を墓地に。そしてカードを1枚伏せ、エンドフェイズに墓地から真紅眼の飛竜の効果を発動。通常召喚をしていないターンのエンドフェイズ、このカードを墓地から除外して墓地のレッドアイズを蘇生させる！出でよ、真紅眼の黒竜！」

　真紅眼の黒竜　攻２４００

　1ターン目からいきなり召喚された、吹雪さんの原点ともいえる可能性の竜。今のところはまだダークネスの力も抑えられてるみたいだし、とりあえずは何も気にせず目の前の敵をどう倒すかに集中しよう。

「僕のターン、ドロー。……ここは、モンスターをセット。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

　吹雪　ＬＰ４０００　手札：３

　モンスター：真紅眼の黒竜（攻）

　魔法・罠：１（伏せ）

　清明　ＬＰ４０００　手札：４

　モンスター：???（セット）

　魔法・罠：１（伏せ）

「ならば僕のターン。レベル４以下のモンスターの守備力ならば十分対応できるか……トラップ発動、メタル化・魔法反射装甲！このカードは装備カードとなり、モンスターの攻守を３００ポイントアップさせる」

真紅眼の黒竜　攻２４００→２７００　守２０００→２３００

「そして魔法カード、黒炎弾を発動。場に存在する真紅眼の黒竜の、元々の攻撃力ぶんダメージを与える。放て、レッドアイズ！」

金属のような光沢を全身に纏わせたレッドアイズが、口を開いて赤黒の炎の球を吐き出すと、僕の伏せカードの上を飛び越して、その衝撃が直接こちらを襲う。

清明　ＬＰ４０００→１６００

「だ、だけどそのカードを使うターン、レッドアイズは攻撃ができない……」

「確かにな。だが、それはあくまでも真紅眼の黒竜のみのこと。私はメタル化・魔法反射装甲を装備したレッドアイズをリリースし、デッキからこのカードを特殊召喚する！出でよ、レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン！」

レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン　攻２８００

さっきまでの金属風なコーティングがされただけのレッドアイズとは違い、本当に体中が機械に改造されたレッドアイズ進化形態の１つ。手札に来たら一発アウトという厳しい召喚条件とメタル化の効力が失われるという大きなデメリットから、ただでさえ

希少なレッドアイズの中でもさらに見ることは難しいと言われている。
だけど、今この局面においては厄介なカードだ。なにせ、黒炎弾のデメリットに縛られることがないのだから。
「っていうか吹雪さん、口調！あと一人称！」
「え？ああ、おっと済まない。では気を取り直して、バトルだ！ダーク・メガ・フレア！」
レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン　攻２８００→???　守３００（破壊）
「カードを１枚伏せ、ターンエンド。さあ、遠慮せずにかかってきてくれ」
「もっちろん！ドロー、墓地からフィッシュボーグ―アーチャーの効果発動！手札の水属性を１体捨てて、このカードを特殊召喚する。さらに魚族モンスターの召喚に成功したこの時、シャーク・サッカーを特殊召喚」
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
シャーク・サッカー　守１０００
僕の手札にはデッキ最強の攻撃力（固定値）を誇るモンスター、青氷の白夜龍（ブルーアイズ・ホワイトナイツドラゴン）が控えている。このままこの２体をリリースすれば……と思ったところで、吹雪さんの口元に笑みが浮
かぶ。
「甘い！永続トラップ、サモンリミッターを発動！このカードが存在する限り、お互いに

1ターンに2回までしかモンスターを場に出すことができない。すでに2体のモンスターを並べた君はこのターン、もうアドバンス召喚は行えないな」

「ぐ……ターンエンド」

吹雪　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン（攻）

魔法・罠：サモンリミッター

清明　ＬＰ１６００　手札：３

モンスター：フィッシュボーグ―アーチャー（守）

シャーク・サッカー（守）

魔法・罠：１（伏せ）

たいして動けないまま、的を用意するだけでターンが終わってしまった。だけど吹雪さんだって次のターン2回までしかモンスターを出すことはできないのだ、とりあえずはまだ凌げるだろう。

「僕のターン、ドロー。ブラックメタルでシャーク・サッカーに攻撃！ダーク・メガ・フレア！」

「今だ！墓地からキラー・ラブカの効果発動！このカードをゲームから除外してその攻撃を無効にし、さらに次の僕のターンの終わりまでブラックメタルの攻撃力を５００ポ

イントダウンさせる！」
　レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン　攻２８００→２３００
「ほう、先ほどアーチャー蘇生のために墓地に送ったカードでリリース用のモンスターを残したか。いいだろう、ならばこれでターンエンドだ」
「僕のターン、ドロー！お望みどおり出してあげるよ、僕のモンスターを。２体のモンスターをリリースしてアドバンス召喚、青氷の白夜龍！それから白夜龍でブラックメタルに攻撃、孤高のウィンター・ストリーム！」
「その攻撃は通しだ」
　青氷の白夜龍　攻３０００→レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン　攻２３００
（破壊）
　吹雪　ＬＰ４０００→３３００
「まずは一撃。さらにカードを伏せて、ターンエンド」
　吹雪　ＬＰ３３００　手札：２
　モンスター：レッドアイズ・ブラックメタルドラゴン（攻）
　魔法・罠：サモンリミッター
　清明　ＬＰ１６００　手札：２
　モンスター：青氷の白夜龍（攻）

魔法・罠：２（伏せ）
「わた……いや、僕のターン、ドロー」
「吹雪さん、ホント大丈夫？」
「ああ、まだ大丈夫だよ。魔法カード、融合を発動。手札のレッドアイズと、同じく手札のメテオ・ドラゴンを素材とする！」
融合。そうか、確かに融合なら一度の召喚で簡単に上級モンスターを呼び出せる。
「次はこのカードだ、メテオ・ブラック・ドラゴン！」
隕石の、そして宇宙の力を手に入れた、レッドアイズ系統の中でも最高の火力を持つモンスター。体の表面からはあまりの熱量のために陽炎が立ち、口からも灼熱の息が吹き出される。
「バトルだ、バーニング・ダーク・メテオ！」
「ブルーアイスっ！」
手を伸ばしてもどうにもならない。巨大な隕石が降り注ぎ、かわすこともままならずに氷のドラゴンがその下に沈んでいく。
メテオ・ブラック・ドラゴン　攻３５００→青氷の白夜龍　攻３０００（破壊）
清明　ＬＰ１６００→１１００
「くっ……だけどこれで残り手札は一気に０枚、あれさえ倒せればまだ押し通せる……」

「それは無理だな。リバースカードオープン、融合解除を発動！メテオ・ブラックをエクストラデッキに戻すことで、墓地からその素材となった２体を特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜　攻２４００

メテオ・ドラゴン　攻２０００

「これは２体を一度に特殊召喚しているためサモンリミッターに妨害されることもなく、そしてバトルフェイズ中に召喚されたモンスターはそのまま攻撃が可能となる！レッドアイズの攻撃、ダーク・メガ・フレア！」

「いいや、まだまだデュエルは終わらせない！トラップ発動、リビングデッドの呼び声！甦れ、青氷の白夜龍！」

青氷の白夜龍　攻３０００

攻撃力３０００のモンスターが再び蘇った今、攻撃力２５００にも満たない吹雪さんのモンスターには打つ手がない。大人しくターンエンドを宣言され、辛うじてつないだドローに賭ける。

「僕のターン、ドロー！シャクトパスを召喚して……」

少し迷う。普段ならこのままシャクトパスを残しておくのも悪い選択肢じゃないのだが、なにせ相手はレッドアイズだ。悪名高き黒炎弾の２発目を食らう前になんとか勝負をつけたいし、ここは多少前のめりでも戦うべきだろう。

「そのシャクトパスをリリースし、シャークラーケンを特殊召喚！これでこのターンはもうモンスターが出せないけど、それでもいいさ。バトル、シャークラーケンでメテオ・ドラゴンに攻撃！」

シャークラーケン　攻２４００→メテオ・ドラゴン　攻２０００（破壊）

吹雪　ＬＰ３３００→２９００

「そのまま連撃、孤高のウィンター・ストリーム！」

青氷の白夜龍　攻３０００→真紅眼の黒竜　攻２４００（破壊）

吹雪　ＬＰ２９００→２３００

先ほど灼熱の隕石を喰らったお返しとばかりに放たれた極寒のブレスが、黒い竜の全身を一瞬にして氷漬けにして白く染める。よし、これで流れはだいぶこちらに傾いた。

「ターンエンド。どう、吹雪さん？」

「ああ、さすがにお前は強いな。去年私と戦った時よりもさらに強くなっている……くっ、いや、まだ大丈夫だよ清明君」

「……どこが？」

さすがにこれで心配するなというのも無理があるので試しに聞いてみる。どう見ても乗っ取られかかってるんですが。

「確かにいつもと違ってこれまでなかった力が全身に溢れてくるのを感じるよ。だけ

ど、だんだんコツが掴めてきたんだ。昔の僕はダークネスの支配から逃げ出したい、そのことばかり考えていた。だけど今は亮のためにも、ここでダークネスを逆に支配してやるっていう意志がある。自分から戦う意志を強く持っていれば、闇の力は決して敵にばかりなるものではない」

「まあ、そう言うならそうなのかもしれないけど」

というか実際のところ、闇の力ってなんなんだろう。僕の場合はチャクチャルさんがそばにいるときは完璧に制御できてるから、今一つピンとこない。ダークネス戦や先代に憑かれてた時みたいになるのが飲まれてる、って認識でいいんだろうか。やっぱりよくわからない。それに、これ以上考え込んだらデュエルに身が入らなくなりそうだ。

「ま、こんだけ身近なところにいい例（地縛神）がいればそのうちわかる日も来るか。大丈夫っていうならこのまま続けるよ、吹雪さん」

「ああ、もちろん」

吹雪　ＬＰ２３００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：サモンリミッター

清明　ＬＰ１１００　手札：１

モンスター：青氷の白夜龍（攻・リビデ）

シャークラーケン（攻）
魔法・罠：リビングデッドの呼び声（白夜龍）
1（伏せ）

「僕のターン、ドロー。マジック・プランターを発動し、場の永続トラップであるサモンリミッターを墓地に送り2枚ドロー。ねえ清明君、特別に見せてあげるよ。僕の手に入れた、新しい力。僕の最高の切り札を」

「え？」

吹雪さんの手札はたったの2枚。そこから出てくる切り札なんて、一体何をするんだろう。だけど、さっきまでとは気迫というか威圧感というか、そういったものが段違いだ。

「これが僕の切り札！真紅眼融合（レッドアイズ・フュージョン）を発動！このターン他のあらゆる召喚及び特殊召喚を封じる代わりにデッキのモンスターを融合素材にすることができ、呼び出したモンスターの名前を真紅眼の黒竜とする！」

「デ、デッキから直接の融合!?」

「まず、3枚目の真紅眼の黒竜。そしてレベル6のデーモンと名のつく通常モンスター、デーモンの召喚を墓地に送ることで融合召喚！悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン!!」

激しく燃え盛る、蝙蝠のような翼。口からも炎が漏れ出し、筋骨隆々なその体躯はついさっき見たアームド・ドラゴンに勝るとも劣らない……いや、むしろ全身から立ち上る妖気だけならこちらの方が上か。破壊を振り撒くその姿は、まさに悪魔と竜の融合体という表現がしっくりくる。

悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン（真紅眼の黒竜）　攻３２００

「これが、吹雪さんの新しいエースモンスター……」

「そうさ。先に言っておくけれど、悪魔竜のバトルが始まればダメージステップ終了時まで相手はあらゆる効果を発動できない。これが最後のバトル、シャークラーケンに攻撃！メテオ・フレア・オリジン！」

「最後の？」

なんだか嫌な予感がした。最後、とはどういう意味だろうか。シャークラーケンと悪魔竜との攻撃力の差は８００、それを受けても僕のライフはまだ３００残る。ということは、あのモンスターにバトル中のカードの発動を禁止する以外にまだ何か効果があるということ……！

「メインフェイズ終了前にトラップ発動、イタクァの暴風！このカードの効果で、相手モンスターの表示形式を全部変更するっ！」

「何？次の攻撃につなげる気か」

突然吹いた暴風に巨大な翼が煽られ、それが影響して業火の塊がわずかに向きをそれる。直後、決して広いわけではない店の中にとてつもない破壊音が響いた。その衝撃の凄まじさから、改めてその破壊力を思い知る。

悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン（真紅眼の黒竜）　攻３２００→守２５００

「ふー……危ない危ない」

「そんなカードをずっと伏せていたとはね。いいよ、攻撃してくればいい。残りの手札を伏せて、ターン終了だ」

これで悪魔竜は２５００の守備力を晒すのみとなった。白夜龍で攻撃すれば楽に倒せるし、そのままシャークラーケンのダイレクトで終わり、のはずだ。だけど、吹雪さんのあの余裕。絶対に負けるはずがないと言わんばかりのあの態度がどうにも引っかかる。あのモンスターそのものなのか伏せカードの方なのかはわからないけど、あの人はまだ何か奥の手を抱えている。

なら、次の僕が打つべき手はなんだろう。そもそもこれ、本当に攻撃を誘ってる？それともただのブラフ？最初は絶対何かあると思ってたけど、ここまで執拗に言ってくるってことはやっぱりブラフだったりするんだろうか。そう考えると、このターン攻撃する気はなかったけどやっぱり攻め込むべき？それともやめるべき？

だけど、ここで止まるなんてそれこそ僕らしくない。

「お望み通りにバトルするさ！孤高のウィンター……」
「その攻撃を通すわけにはいかないな！トラップ発動、バーストブレス！ドラゴン族を１体リリースすることで、その攻撃力以下の守備力を持つモンスターをすべて破壊する！迎え撃て、悪魔竜！」
悪魔竜の瞳が真紅に輝き、おもむろに立ち上がって全身を赤熱させるとそのまま白夜龍に正面から突撃していく。燃え盛る竜と氷の竜が真っ向からぶつかり合い、激闘の末に２体の姿が光に包まれる。そして光が消えた時、どちらもフィールドには残っていなかった。
「さすがにやるね、吹雪さん。これでターンエンド」
吹雪　ＬＰ２３００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ１１００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：リビングデッドの呼び声（対象無）
ちょっと余裕ぶったこと言ってはみたけど、割と今シャレにならないピンチです。うーむ。

「僕のターン、ドロー。伝説の黒石（ブラック・オブ・レジェンド）を召喚し、そのまま効果発動。このカードをリリースし、デッキからレベル7以下のレッドアイズを特殊召喚する」

真っ黒な卵にひびが入り、少しづつ赤い光が中から漏れ出す。なるほど、あれが割れてレッドアイズが生まれるってことか。だけど吹雪さんの墓地にはすでに3体の真紅眼の黒竜がいる、精々出てくるのは真紅眼の飛竜ぐらいだろう。

だが、その予想は的外れだった。卵が割れて中から出てきたモンスター、あの姿は間違いなく本家真紅眼の黒竜……いや、違う。よく似てはいるけれど、形が少し違う。

「これがもう1つのレッドアイズ……生まれ出でよ、真紅眼の黒炎竜（レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン）！」

真紅眼の黒炎竜　攻2400

「これが最後のバトルだ、ブラックフレアドラゴンでダイレクトアタック！パラレル・メガ・フレア！」

「これだけギリギリの楽しいデュエルなんだ、まだまだ終わらす気はないね。その直接攻撃宣言時、手札からゴーストリック・フロストの効果発動！攻撃モンスターを裏守備表示にして、このカードを裏守備で特殊召喚する！」

目の前に降ってきた雪の塊が、黒い炎を受け止める。厚着をした雪だるまがその上からぴょんと飛び降り、こちらに向けて親指を突き立ててみせてからいそいそとクロッシュの中に引っ込んだ。この稲石さんからもらったカードのおかげで、今回も敗北から

助けてもらったわけだ。
真紅眼の黒炎竜　攻２４００→セット状態
???（ゴーストリック・フロスト）　セット状態
「ターン終了だ」
「僕のターン。あのモンスターの守備力は本家と同じ２０００、だったらこのカードで勝負。フロストをリリースして、氷帝メビウスをアドバンス召喚！効果でもう使い道のないリビングデッドの呼び声を破壊しておいてからバトルフェイズ、真紅眼の黒炎竜に攻撃！アイス・ランス！」
氷帝メビウス　攻２４００→???（真紅眼の黒炎竜）　守２０００（破壊）
「これでまた1体撃破。僕はターンエンドだよ、吹雪さん」
吹雪　ＬＰ２３００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ１１００　手札：１
モンスター：氷帝メビウス（攻）
魔法・罠：なし
「僕のターン。魔法カード、思い出のブランコを発動！甦れレッドアイズ！」

「ここでまたレッドアイズ!?どんだけ引きがいいってのさ」
「おいおい、それはお互い様だろう?さらに墓地から伝説の黒石、第二の効果を発動。墓地のレベル7以下のレッドアイズをデッキに戻し、このカードを手札に加える。ただし伝説の黒石は1ターンにどちらか一つの効果しか使えない、このターンは手札で温存しよう」
　真紅眼の黒竜　攻２４００
　このターン、レッドアイズとメビウスの攻撃力は同じ。まさか攻撃してくることはあるまい。
『いや、それは違うぞマスター。思い出のブランコにはデメリットがある。エンドフェイズに呼び出したモンスターが破壊されるデメリットがな』
「バトルだ、レッドアイズでメビウスに攻撃!ダーク・メガ・フレア!」
「なるほど、突っ込んでくるしかないってことか。しょうがない、メビウス!アイス・ランス!」
　真紅眼の黒竜　攻２４００（破壊）→氷帝メビウス　攻２４００（破壊）
「こうしてみると、去年君と初めてデュエルした時のことを思い出すね」
　一瞬何を言っているのかと思ったけど、少しして思い出した。そういえばあの火山の中でのデュエルの時も、レッドアイズとメビウスが相打ちになる局面があったんだっけ

か。
「懐かしいもんですね、何せこの1年がむちゃくちゃ濃かったからもっと昔の話みたいで」
「ああ、まったくだ。……まあ、まだお互いに感傷に浸るような年じゃないね。悪かった、デュエルを続けよう」
「ええ。僕のターン、ドロー！」
ここでアタッカーになるモンスターさえ引ければダイレクトアタックできたのだが、そうそううまくはいかないものだ。やむを得ない、このターン攻撃は諦めよう。
「モンスターをセット。これでターンエンドです」
吹雪　ＬＰ２３００　手札：1
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ１１００　手札：1
モンスター：???（セット）
魔法・罠：なし
「僕のターン、ドロー！貪欲な壺で悪魔竜、ブラックメタル、レッドアイズ2体、メテオ・ドラゴンをデッキに戻して2枚ドロー。ついにこのカードを引いちゃったか……いや、

僕だって覚悟はできている。行くよ、清明君！まず伝説の黒石を召喚してその効果で、デッキからさっき戻したレッドアイズを特殊召喚する。そしてそのレッドアイズをリリースし、このモンスターを特殊召喚！出でよ、真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）！」

レッドアイズが闇に包まれ、より戦闘的に進化を遂げていく。体つきはよりシャープになり、高速飛行には邪魔になるだけの両足は退化し、体中にあふれ出るパワーがオレンジ色のラインとなって全身を彩る。

「このモンスターの攻撃力は、墓地のドラゴンの３００倍アップする。今は１体のレッドアイズに伝説の黒石、真紅眼の黒炎竜で計９００ポイント分か」

真紅眼の闇竜　攻２４００→３３００

「バトルだ、ダークネス・メガ・フレア！」

真紅眼の闇竜　攻３３００→???　守１００（破壊）

「水晶の占い師のリバース効果。デッキトップ２枚をめくり、１枚を手札に。ダブルフィン・シャークとアクア・ジェット……ここはダブルフィン一択か」

「最後の手札を伏せ、このターンはこれで終了する。長いデュエルだったけど、そろそろ決着がつきそうだね」

「決着？確かにそうですね。でも、勝つのは僕だ！ダブルフィン・シャークを召喚、そして効果発動！自分の墓地から水属性魚族のレベル３または４のモンスターを特殊召喚

する！シャーク・サッカー復活！」
　ダブルフィン・シャーク　攻１０００
　シャーク・サッカー　守１０００
「だが、これで君はこのターンの召喚権も使った。そのモンスターだけでどうする気だい？」
「無論、勝ちに行くんですよ。魔法カード、ミニマム・ガッツを発動！僕のモンスターを１体リリースすることで相手モンスターの攻撃力を０にし、さらにこのターンそのモンスターが戦闘破壊された時にその元の攻撃力ぶんのダメージを与えることができる。このサッカーの力で、真紅眼の闇竜の攻撃力を０に変更！」
　真紅眼の闇竜　攻３３００→０
「なるほど、確かにその方法なら低レベルで攻守も低いモンスターが大ダメージを出すことができる、か」
「そういうこと。ダブルフィンで真紅眼の闇竜に攻撃！」
　ダブルフィン・シャーク　攻１０００→真紅眼の闇竜　攻０（破壊）
　吹雪　ＬＰ２３００→１３００
「あとは効果ダメージで……」
「清明君、確かに君の戦略は間違っていない。だが君がこのデュエルに勝つことはでき

ない」
「え……？」
「トラップ発動、レッドアイズ・バーン！自分フィールドのレッドアイズが破壊された時、お互いのプレイヤーはその元々の攻撃力ぶんのダメージを受ける！」
ダブルフィンに噛みつかれた真紅眼の闇竜の姿が急激に膨れ上がり、内側から爆発する。その衝撃波は一瞬でフィールドを覆い尽くし、全部を消し飛ばした。
清明　ＬＰ１１００→０
吹雪　ＬＰ１３００→０

「引き分け、かぁ……」
「いや、どちらかといえば僕の負けだろうね」
吹雪さんがダークネスマスクを取り外しながら、疲れた顔でつぶやく。
「なんで吹雪さんの負けになるんですか？」
「どうにも僕はドロー運が悪くてね。このデッキのポテンシャルを最大限に引き出せれば、もっと早くに決着はついていたはずなのに。なまじ君や十代君、亮みたいなドロー運がずば抜けた相手が周りにたくさんいるからそう思うだけなのかもしれないけど、そ

れでもそういう意味じゃ君たちが羨ましくてしょうがないんだ」
「ああ……」
　吹雪さんのデッキは確かに極悪だ。言ってしまえば、レッドアイズ出して黒炎弾２発で勝負がつくんだから。でも言われてみれば確かに、この人がそのやり方で勝利を手にしたという話はあまり聞かない。だいたいレッドアイズでビートダウンして勝つイメージだ。
「まだ僕はレッドアイズの力をフルに引き出せてない。それができない以上、僕にとってはまだまだなのさ」
　なるほど、と言いそうになったがそこでふと気づいた。じゃあ僕は、まだ不完全なレッドアイズにあれだけ苦戦した挙句引き分けに持ち込まれたってことか。なんか複雑な気分。
「ともあれ、ダークネスの制御も少しつかめた気もするよ。本当にありがとう、清明君。君にはいくら感謝してもしきれない」
「何回も言ってるじゃないですか。気にしないでって。実際、僕も楽しかったですし。……次はまた、僕が勝ちますからね？」
「ああ、楽しみにしてるよ。だけどまず僕は明日、亮とデュエルする。もしよかったら、君も見においでよ。じゃあね～」

最後にそう言って、吹雪さんは来た時と同じように突然帰っていった。全く、吹雪というより嵐のような人だ。

とはいえ明日、か。ヘルカイザーとやらにいったい何があったのかも、直接会えばわかるかもしれない。これは、行ってみるしかあるまい。

ターン６２　鉄砲水ともう１つの『真紅』（前）

ヘルカイザー、最初の対戦相手を天上院吹雪と宣言！

僕が吹雪さんとデュエルしてからものの数時間のうちに、この知らせはアカデミア中を駆け巡った。どうも吹雪さんがどうやったのか、本当にどうやったのかさっぱりわからないがカイザーがやってくる前に先手を打って確実に彼と勝負できる状況を作り出したらしい。いい加減何やっても驚かないぞと毎回思ってるのに、いつもあの人は僕らの想像を超えてくる。

「なにせ、こんなもんまで用意してんだから」

そう言いつつ、手元の紙を持ち上げる。そこには明日の日付と、とある一点に赤い丸が付けられたアカデミアの地図。そして上に挙げたアオリ文。

「さすがは師匠だな。することなすことスケールが違う」

万丈目はそう言って感心している。感心する方もされる方もどこか少し異常な気もするけど、その意見にも一理あると思うあたり僕も少しずれているのかもしれない。

「明日は絶対見に行こうぜ、多分学校中のデュエリストが集まるぜ」

十代にいたってはもうすっかり乗り気で、ピクニック気分なのか知らんがさっきは明

日の弁当は外で立ち見でも困らないやつを作ってくれなどと言ってきた。もちろん僕も見に行くつもりだし、明日の弁当はおにぎりないしサンドイッチにする気だけど。
「お兄さん……一体どうしちゃったんだろう……」
僕らが自分たちのことで手いっぱいだった間も、翔は肉親ということもあってカイザーの動向については調べていて、ヘルカイザーのこともだいぶ前から知っていたらしい。ただこちらも色々あったせいで言い出すタイミングが掴めず、結局黙ったままなんだとか。友達なんだから次からちゃんと相談するように、と釘はさしておいたけど、翔の性格からいって本当にそうしてくれるかどうかは不安だ。
「まあ、カイザーだってきっと何か考えがあるはずだぜ。明日島に来るんだ、その時兄弟で話し合えばいいだろ？」
「アニキ……」
「さあ、俺はもう寝るぞ。お前の持ってきたアームド・ドラゴンもデッキに入れたし、今日のぶんのメダルも稼いだしな」
そう言って自分の部屋に行こうとする万丈目。本来なら万丈目は今朝僕に負けた時点でジェネックスの参加資格はないのだが、どうもあのあとそこらへんでひとり適当に捕まえてメダルをさも持っているかのようにふるまいつつ半ば強引にデュエルを挑んでの勝利。何食わぬ顔してその生徒のメダルを分捕ってきてメダル数１となったらし

い。本来なら僕が止めるべきなんだろうけど、なにせ本人から聞いたところによるとその相手というのが適当な光の結社とのことなので黙認。負けた生徒には災難だけど、光の結社に対してはざまーみろとしか言いようがない。私怨？あーあー聞こえない聞こえない。

「うん、おやすみ……あれ？」

「どうした、清明？」

僕もそろそろ部屋に戻ろうとしてチラシを机の上に置いたところで、ちょっと引っかかるものを感じた。

「……いや、なんでも。また明日ー」

「おう」

「あ、おやすみッス」

そのまま違和感を無視して部屋に戻ろうとした途中、やっぱり無性に気になったので一度引き返してチラシを回収してから改めて2階の僕の部屋に戻る。

部屋に入ってから僕の机の上にもう一度チラシを広げ、改めて上から下までしげしげと見てみる。どうも気になってしょうがないのに、何がそんなに気になるのか自分でもわからない。多分この問題が解決しないうちは眠れないだろうな、とぼんやり思った。明日は朝からチラシに書いてある場所、ここからだとちょうど校舎を挟んで島の反対側

まで行かなくちゃいけないってのに。
「なんなんだろ、日付も明日って言ってたから別におかしくないし、アオリも吹雪さんにしちゃ大人しいけど別におかしくないし、地図も間違ってないし……」
一つ一つ声に出して指さし確認。小学生みたいだけど、これくらいしないとこの違和感はぬぐえそうにない。日付、アオリ、地図……。
『どれマスター、少し見せてくれ』
「チャクチャルさん！」
するりと後ろからチャクチャルさんの気配が近づき、じっとのぞきこまれる感覚。数秒後、ぽつりと一言。
『妙だな』
「あ、やっぱり？でも、何がおかしいのかさっぱり……」
『この位置だ。確かこの地点は港もなければヘリポートがあるわけでもない。おまけに海底は岩場だらけでわざわざ外から近づいてくる物好きもそうはいまい。船で来るというのなら港のそばを指定すれば済む話だし、飛行機やヘリも同じことだ。なぜわざわざ、こんなかけ離れた位置に移動する必要がある？』
「な、なるほど」
言われてみれば確かにそうだ、これでようやく謎が解けた。でも、そうなると吹雪さ

んの意図がわからない。余計にこんがらがってきた僕を見かねたのか、ここでチャクチャルさんから2隻目の助け舟が出向する。

『そういう時はな、マスター。まずは前提から疑ってみることだ。そもそもこれは、本当にあの男が作ったものなのか？』

「……どゆこと？」

『私も五千年近く人間を見てきたから考えている大抵のことはその言動を見れば予想がつくが、あれだけ友人のため真剣になっていた人間がこんな馬鹿げた広告を作る余裕があるだろうか』

……ふむふむ。さすがは長生きしてるだけのことはある。言われてみれば、今日の吹雪さんは真剣だった。いつものウクレレアロハシャツだとか１０ＪＯＩＮだとかが吹っ飛んで見えるぐらい真剣だった。こんなにエンターテインメント性の高いチラシなんて作るだろうか。それにそもそも、明日のデュエルはダークネスの力を解放する吹雪さんにとってもあまり観客に来てほしいようなものではないはずだ。僕を呼んでくれたのも、いわば練習台になったことに対するお礼といったたぐいのものだろう。

「じゃあ、この地図はブラフで本当は別の場所でやるってこと？野次馬を別の場所に引きつければ、その分落ち着いてデュエルできるし」

『いや、その線もないだろうな』

1つひらめいたことを言ってみるが、あっさり両断される。
「なんで？」
『マスターの個人的な話にあまり立ち入るのも気が引けたが、つい聞こえたから言わせてもらおう。あの吹雪という男、マスターに見に来いと言ったのだろう？正確な場所も教えていないのに偽の情報をばらまいていてはマスターがたどり着けないではないか』
な、なるほど。何から何まで筋が通っている。となると、この紙は一体誰が何のために？
「考えてわかるわけもなし、とりあえず見に行ってみようか、ここ」
『……この点は考えが分かれるかもしれないが、今はやめておいた方がいい。そもそも考えられることは2つあるが、まず1つは何らかの目的があって明日この場所に人を集めたい何者かがいる、ということだ』
「なら、今のうちに行けばその企みがわかるかもしんないんじゃ？」
『まあ聞け。もう1つの可能性は、この場所に人を集めることで、他の場所から人目をなくす。つまり目的はこの場所に人を集めることではなくて、まったく別の場所で安全に何かを行うこと。この場合たとえこの場所に行ってみたとしても、何も見つかるわけがない。マスターに見に来いと言った以上、少なくともあの男ではない何者かがな』
「どっちもあり得そうなもんだし、やっぱり今から見に行く分には問題ないんじゃ？」

『だから、ここは考えが分かれるといったんだ。恐らく後者だろうというのは、私の勘でしかない。それに夜間に独りで出歩くのは今の時期は推奨しないし、明日になって日が昇ってから何かしらの可能性を探せばいい。とりあえずマスターは少し休んでいてくれ、後は私が軽く当たってみる』

少しの間、チャクチャルさんに言われたことを噛み砕いてみる。

……ま、明日でいっか。今日はいろんなことが起きすぎていい加減疲れたし。

「明日のおべんと作ったら色々探ってみるから、みんなもそのつもりでね。おやすみー」

もぞもぞと呟いてから、布団に潜り込む。意識が消えるのはあっという間だった。

「よし、復活。おはよー、みんな」

すっきりと目覚めてデッキに声をかけ、顔を洗い、投網を打ち、畑に水をやり、ご飯を炊いたり味噌汁を作っているうちにすっかり日が昇ってしまった。まあ、これもいつものことだ。その後でまだ寝ている十代たちをたたき起こして朝ご飯を食べ、早速出発の準備に取り掛かる。

「悪いけど先に行ってるからねー。みんなのおべんとは台所に置いてあるから、あと適当にやっといて！」

「おーう。なあ万丈目、アイツなんであんなに急いでんだ？」
「万丈目さん、だ。あとそんなこと俺に聞くな、本人に聞けばいいだろう」
「……清明君、もう行っちゃったっスよ」
　そんな会話がうっすいうちの安物ドアの向こうから聞こえたけど、いちいち戻るようなことはしなかった。こっちもそれなりに忙しいのだ。そのまましばらく走ったところで、一度声をかける。
「チャクチャルさんチャクチャルさん、どっから行けばいいかな？」
『まず結論から言うが、案の定あの地図はブラフだ。そこで考えてみろ、島のこちら半分で重要そうな場所と言えば？』
　そんなこと急に言われても困る。えっと、大浴場……は向こう半分だし、港はちょうど中心あたりだし、そうだ、稲石さんの廃寮があった。そのほかに施設……あ、待てよ。廃寮といえば、確かあそこの地下にはアムナエルの錬金術の部屋があって、アムナエルといえば……
「も、もしかして三幻魔？」
『可能性は高いな』
　仮にもあの三幻魔が大人しく言うことを聞くとは思えないけど、少なくとも光の結社の手に三沢が手に入れたウリアのカードがあることは間違いない。とすれば、他の２枚

を自分のものにしようとしてもおかしくない、ってことか。冗談じゃない、あんな凄まじい力を持った奴らを、まだ1年もたってないのにまた解放するだなんて。せめてあと半年ぐらいはインターバルおいてほしいもんだ。
『どうする？あそこの封印もなかなか固いものだったはずだが』
「もちろん行くよ！少しでも早いうちに止めないと」
『了解した。場所は覚えて……ほう、これはこれは驚いた』
「え？」
　さっきとは一転、急にチャクチャルさんの声の調子が変わる。いつも聞きなれた親しみのあるものから、『地縛神』としての不思議なプレッシャー溢れる声に。
『前言撤回だ、マスター。まさか向こうから来てくれるとはな』
「え？」
「あはは～、ばれちゃったー？でもしょうがないよね、僕悪くないもーん。下手に勘付かなけりゃ今頃こっちも誰にも迷惑かけずに仕事終われたんだからさー。だったらせめて、時間つぶしぐらいはしないとねー」
　へらへらと笑いながら近づいてくるその金髪の男。年は僕と同じくらいに見えるけど、この学校では見たことない顔だし、こんな若いプロがいるのならいくらエドがいるといってもニュースにはなるだろう。

というか、チャクチャルさんのことを認識できて、しかもあの口ぶりからいって前から知っているというだけで怪しすぎるし。
「お初にお目にかかりまして……かなー、そっちの君、遊野清明だっけ？君そのものとはね。魂だけなら前に一回会ったんだけど、それもずいぶん昔の話だねー。それにしてもそっちの地縛神、つれないなー。なんでお前が生きてるんだー、とかさ、そういう感じの驚きを表現してもいいんだよー？」
「魂……？」
よくわからないワードに眉をひそめる。だが、チャクチャルさんには意味が通じたらしい。いっぺんに苛立った様子で、男に詰め寄る。
『なぜ生きている、などと聞く気はない。貴様、ここに何をしに来た？三幻魔はもっと奥地だぞ』
「だーから言ったでしょ、時間つぶしだよ時間つぶし。正直、今の僕のトップに対してはこっちも頭が上がんなくてねー、三幻魔は譲れないのよ」
危険だ。この二人が何を話しているのかは、正直よくわからない。つまりこいつは誰で、何が目的で三幻魔を集めたがっていて、チャクチャルさんとはどういう関係なのか。こういった特に知りたいところについては何ひとつわからないけど、この男の目は凄く危ない感じだ。何をしだすかわからない、近くにいては危険すぎるタイプだ。だけど、

逃げ出すこともできないだろう。そんなへまするタイプには見えないし、そもそも僕だって尻尾巻いて逃げるなんて願い下げだ。

『時間つぶし？なるほど、読めてきた。お前の他に最低もう一人、封印を解きにかかっている存在がいるわけか。そうでもなければわざわざこちらを排除しに来るよりも全力で解放に力を注ぐだろうからな』

「ありゃりゃ、参ったねーこりゃー。全く鋭いもんだよ、ボロ出したつもりはないのにどんどんこっちの秘密がばれてっちゃう。でも、それでー？だったらどうするのー？」

独特な語尾を伸ばす調子のイントネーションを何度も聞いているうちに、これまで感じていた不気味さとは別に何か思い出してきた。この喋り方、それにこの声。確かにこいつの言うとおり、どこかで一度僕はこの男に会ったことがある。そしてその時なにか、すごい理不尽を感じたような。

『決まっている、貴様にはこの場でいつぞやの借りを返す。マスター、少し下がってくれ』

「やなこった。悪いねチャクチャルさん、僕も何となく思い出してきたんだ。お前が僕に何をしたのかまではまだ思い出せないけど、それでも受けた借りは返す。やられっぱなしは性に合わないんでね」

「ご立派ご立派～。いいよ、その勇気に免じてハンデをつけよう。今回僕は、エクストラ

デッキを使わない……ってのはどうかなー？ああ、答えなくていいよ。それぐらいしないと遊びにすらならなさそうだしねー。それと、僕の名前は遊（あそぶ）。せっかくだから覚えておいてよー」

エクストラを使用する、つまり融合デッキか。だけど、それで融合を使わないとはどういうことなのか。融合素材のモンスターだけのデッキでやっと遊びとは、僕もずいぶん舐められたものだ。

『違うマスター、そういうことじゃなくて……』

「なんだっていいね！それじゃあ、デュエルと洒落込もうか！」

「デュエル！」

いつも通りにカードを引く。どんな不気味なデッキを使ってくるのか皆目見当もつかないけれど、僕はいつも通りやるだけだ。

「先攻は僕。モンスターをセットして永続魔法、水舞台装置（アクアリウム・セット）を発動！」

僕の後ろにズズズ、と鈍い音を立てて簡易的な竜宮城が組みあがり、周りの風景もカラフルな水草や水車で彩られる。チャプン、と音がして、僕たちの周りがいつの間にやら水中に変わっていた。と言っても無論これはソリッドビジョン、どれほど目の前の水を掻き分けても一点たりとも濡れはしないのだが。

「元相棒（ユーノ）に作ってもらったちっぽけな、偽りの平和に満ちた箱庭、かな？なるほど、君に

はぴったりのステージだよ。ねえー、地縛神？」

『……』

何が言いたいのかはともかく、とりあえず馬鹿にされていることだけはわかった。それだけで十分だ。

「ああ、ごめんごめーん。僕のターン、神獣王バルバロスを攻撃力１９００にして妥協召喚ー」

つい昨日もフランツが使っていたカードが、再び僕の前に現れる。２日連続で同じカードを、まったく違う相手から見るのも珍しい。

神獣王バルバロス　攻１９００

「さらに装備魔法、レインボー・ヴェールを装備するよー」

バルバロスの持つ槍が虹色に輝き始める。だが、それ以上の変化はみられず攻守ともに元のままだ。

「バトル、トルネード・シェイバー！」

虹色の槍を掲げての突進を、素早く一振りされたシルクハットが受け止める。器用に片翼でそのシルクハットを支えたまま、紳士服を着たペンギンが挑発的に笑ってみせる。

神獣王バルバロス　攻１９００→???　守１８００→２１００

遊　ＬＰ４０００→３８００
「へぇー」
「水舞台装置の効果で、僕のフィールドにいる水属性モンスターの攻守は常に３００ポイントアップした状態になる。さらにペンギン・ナイトメアがリバースしたことで、相手のカード１枚をバウンスできる！吹き飛べ、バルバロス！」
僕の手札にはすでに、２回攻撃を行うことのできるツーヘッド・シャークのカードがある。このまま何もしてこなければ、次のターンで僕の勝ちだ。
だが、さすがにそう簡単にはいかないようだ。バルバロスが虹の槍を振り回すと、バウンスすべく飛び上がったペンギンが逆に風圧に弾き飛ばされて後ろの岩に突っ込んで目を回す。
「レインボー・ヴェールの装備モンスターがバトルするとき、その相手モンスターの効果は無効になるのさ～。何もないならカードを１枚セットして、ターンエンドさせてもらうよー」
ファーストバトルはダメージを稼げただけこっちの勝ち、と言ったところか。まずはいい調子だ、早いとこバルバロスを処理してしまおう。
清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：ペンギン・ナイトメア（守）

魔法・罠：水舞台装置
遊　ＬＰ３８００　手札：３
モンスター：神獣王バルバロス（攻・レインボー）
魔法・罠：レインボー・ヴェール（バ）
１（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」
バルバロスの攻撃力は１９００。ペンギン・ナイトメアにはフィールドにいる限り水属性の攻撃力を２００ポイントアップさせる永続効果があるけれど、それを含めてもこのままツーヘッドを召喚するだけじゃあまだバルバロスを倒すには攻撃力が足りない。それにバルバロスは妥協召喚されて自身の効果で攻撃力の下がったモンスター、効果を無効にされれば攻撃力は一気に３０００に跳ね上がる。それならこちらも大型モンスター、それもあちらの王よりももっとすごい魚の王で立ち向かうまでだ。
「魔法カード、スター・ブラスト発動！ライフポイントを５００の倍数払って、その数値に応じて手札かばのモンスターのレベルを下げる！僕は１５００のライフと引き換えに、手札のシーラカンスをレベル４にして召喚するよ」
清明　ＬＰ４０００→２５００
超古深海王シーラカンス　攻２８００→３３００　守２２００→２５００　☆７→

４

「さらにシーラカンスの効果発動、魚介王の咆哮！手札を１枚捨てて、デッキからレベル４以下の魚族を出せるだけ特殊召喚……おいで、みんな！」

フィッシュボーグ―アーチャー　守３００→６００

キラー・ラブカ　守１５００→１８００

シャクトパス　守８００→１１００

「はいはい、おきまりの流れご苦労様～」

「悪かったね、代わり映えしなくて。だけどこれはどう？今手札コストとして捨てたハリマンボウの効果発動、相手モンスターの攻撃力を５００ポイントダウンさせる」

神獣王バルバロス　攻１９００→１４００

バルバロスの攻撃力がさらに下がった。ということは、もしあの伏せカードがバルバロスのお供として有名な禁じられた聖杯だとしてもその攻撃力は２９００までしか上がらないということだ。もしあれが聖杯のカードだった場合、攻撃力３３００のシーラカンスだとギリギリ１００の差で負けちゃうからね。

「まだまだ行くよ、ペンギン・ナイトメアも攻撃表示に変更！」

ペンギン・ナイトメア　守２１００→攻１４００

このターンで終わらせる、とまではいかないものの、それでも攻撃が通れば大ダメー

ジは間違いない。それだというのに、こちらがイライラするほど余裕ぶった態度を崩さない遊。完全に向こうのペースに乗せられてるな、と心では理解できているし、そもそもこういった心理合戦、つまり相手をイラつかせることに関しては僕も決してできないわけじゃないのだが、あの遊の言動の一つ一つがはやたらめったら見ているだけで癇に障る。もしあれがわざとやってるんだとすれば、とんでもない演技派だ。

「攻撃可能なモンスターの総攻撃力は４７００、かー。まあ、頑張ってるんじゃなーい？」

「くっ……バトル！シーラカンスで……」

「おっと、その前によーーくフィールドを見てみたらー？」

その言葉につられ、言われたとおりにフィールドに目を向ける。なんとバルバロスの虹の槍が今度は緑色の炎に包まれ、それを持つ本体もまた緑色に薄く光っていた。

神獣王バルバロス　攻１４００→３３００

「攻撃力、３３００？」

「イエースイエース。僕はメインフェイズ１の終了時に伏せカード、炎舞―「天権」のカードを発動したんだよねー。発動時に獣戦士族を１体選んでこのターンだけその効果を無効にし、さらにこのカード以外のカード効果を受けなくさせるのさー。それに天権はそれとは別に、フィールドにある限り獣戦士族の攻撃力を３００ポイントアップさ

せる効果もあるのさー。これで水舞台装置のぶんの攻撃力アップは実質チャラだねー」

「……メイン2に移行、そのままターンエンド……」

今の場面では、相打ちに持ち込んだ方がよかったのだろう。このままだと次にペンギンが倒されればシーラカンスの攻撃力がバルバロスを下回り、なすすべなく一方的にやられてしまうのみになる。だけど、いくら戦術的に正しいことだとしてもやっぱり相打ちだとか自爆特攻だとかの指示は出したくない。そんなことばかり言ってるから、いつまでたってもパッとしないデュエリストなのかもしれないけど。

「あははー、やっぱりそこで攻撃してこなかったかー。結構結構、僕のターン。レスキューラビットを召喚して、効果発動ー。このカードを除外して、デッキからレベル4以下の通常同名モンスター2体を特殊召喚～……暗黒の竜王(ドラゴン)！」

暗黒の竜王　攻１５００

暗黒の竜王　攻１５００

緑色の皮膚を持つオーソドックスな見た目の竜が2体。特にこれといった特徴のあるモンスターではなく、なぜこの局面でわざわざ出してきたのかがさっぱりわからない。ドラゴン族じゃ天権の効果も得られないし、第一あれじゃあ次のターンにシーラカンスの餌食にしてくださいと言ってるようなものだ。

『いや、マスター。これはかなり危険だ。レスキューラビットで呼び出されたモンス

ターはエンドフェイズに破壊されるから、シャクトパスの効果を無視して攻撃ができる……！』

「そ、そうかっ！」

「相談かなー？まったく、仲がいいようで微笑ましいよー。遠慮はしないけどね、バトル！暗黒の竜王でペンギン・ナイトメアに攻撃、炎のブレス！」

先ほど虹色の槍から身を守ったシルクハットも、竜の炎の前には役に立たなかったようだ。そしてペンギン・ナイトメアからのブーストがなくなったことで、シーラカンスの攻撃力も２００ポイントの修正を受けてしまう。

暗黒の竜王　攻１５００→ペンギン・ナイトメア　攻１４００（破壊）

清明　ＬＰ２５００→２４００

超古深海王シーラカンス　攻３３００→３１００

「シーラカンスももう怖くないねー。トルネード・シェイバー！」

神獣王バルバロス　攻３３００→超古深海王シーラカンス　攻３１００（破壊）

清明　ＬＰ２４００→２２００

「まだまだー。暗黒の竜王でシャクトパスに攻撃～、炎のブレス！」

暗黒の竜王　攻１５００→シャクトパス　守１１００（破壊）

「シャクトパスは戦闘破壊された時にそのモンスターの装備カードにできる、けどそれ

に意味はない、鮫の呪いは今回は使えない……」
「なるほどー、こっちとしても無駄は避けたいからねー、いい判断なんじゃなーい？メイン2、手札からＤＤＤ（ディーディーディー）覇龍王ペンドラゴンの効果を発動～。手札とフィールドからドラゴン族と悪魔族を1体ずつリリースして、このカードを特殊召喚するよー。手札の絶対王　バック・ジャックと、場の暗黒の竜王をリリースー」
ＤＤＤ覇龍王ペンドラゴン　攻２６００
同じ『りゅうおう』の名がついていても、暗黒の竜王とは比べ物にならない迫力の黒い龍。なるほど、こっちが遊のエースモンスター、ってわけなのかな、多分。だとすれば、まだ次のドロー次第で光も見えてくる。
「ターンエンド～」
清明　ＬＰ２２００　手札：1
モンスター：フィッシュボーグ―アーチャー（守）
キラー・ラブカ（守）
魔法・罠：水舞台装置
遊　ＬＰ３８００　手札：1
モンスター：神獣王バルバロス（攻・レインボー）
ＤＤＤ覇龍王ペンドラゴン（攻）

魔法・罠：レインボー・ヴェール（バ）
炎舞―「天権」

「僕のターン、ドロー！」

状況はかなり悪い。だけど、負けない。というより、負けられない。ここ最近闇のデュエルばーっかりやってたもんだからダメージのたびに痛みが発生するのが当然だなんて無意識のうちに考えてたけど、よくよく考えたらこれはおかしい。もはや日常になってたから今まで気づかなかったけど、このデュエルもまた命がけどころか魂まで賭けた闇のデュエルだ。

『ああ、だからあんな軽くデュエルを始めたのか……私が言うのもどうかとは思うが、マスター。命はもう少し大切に扱ってくれ』

「お互い様でしょ？チャクチャルさんだって替えはいないんだから」

もとより僕の命は、あってないようなものだ。なにせ本当なら去年、入学前のあの事故の段階で死んでるはずなんだから。僕にとってこうして今を生きている一瞬一瞬が奇跡そのもの、人生のエクストラターンだと思っている。だから、いつ終わったとしてもそれに文句を言う権利はない。

もっとも、だからといって自分から人生終わらせにかかる気はさらさらないけどね。

「だからなのかね、今だってデュエルそのものは全然怖くない。でも、それは勝負を諦め

たからじゃないんだ。僕は、このままここで勝つ。アーチャー、ラブカをリリースしてアドバンス召喚！天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」

時械神メタイオン　攻０

神の炎を巻き上げる、僕の第２の神。あの事故の後でもまだ生き続けている僕が見つけた、新しい可能性のカード。バルバロスには装備モンスターと戦闘する相手の効果を無効にする厄介な装備魔法、レインボー・ヴェールが仕掛けられている。だけど、ペンドラゴンを狙えばそんなことは気にしなくていい。この一撃で、勝負を振り出しに戻してやる。

「バトル、メタイオンでペンドラゴンに攻撃！」

「この瞬間、墓地から絶対王　バック・ジャックの効果発動ー！このカードを除外してデッキからカードを１枚確認、そのカードがトラップカードだった場合、フィールドにセットしてそのターン中に発動できるよー」

「相手ターンにデッキからトラップ!?だ、だけど、メタイオン先生は戦闘でも効果でも破壊できない！」

バックパックを背負ったロボットのような半透明のモンスターが浮かび上がると、その右手の肘から先のあたりがみるみるうちに赤熱していく。遊のデュエルディスクに

その右手を置き、そこからカードを1枚引きぬく。そのカードを、ゆっくりとこちらに向けた。
「ドローカードは……強制脱出装置を発動！」
「なっ!?」
「この効果はわかってるよねー？破壊じゃないよ、メタイオンをバウンスさせてもらおうかなー」
　さっきアドバンス召喚のリリースに使ってしまったため、僕のフィールドにはもうモンスターがいない。手札にもたった今戻されたメタイオン先生と、最初からいるツーヘッド・シャークしかない。これ以上できることは何一つないし、どうやらこんなところで年貢の納め時なようだ。
『マスター……』
「死にたくはないさ。ないけど……さすがに何にも思いつかない、かな」
「さあ、準備はいいかなー？僕のターン、一応カードを引いて～っと。バトル、ペンドラゴンでダイレクトアタックー」
　まだバトルフェイズにも入っていないのに黒い龍が口を開くと、徐々にその口の中にエネルギーがたまっていくのがよくわかる。ああ、僕の人生のエクストラターンもここで終わりなのか。走馬灯みたいなものが見えてくるかと思ったけど、特にそういったも

のは見えてこなかった。

「結局、エクストラデッキなしでも遊びにすらなんなかったかー。もう一回言わせてもらうよ、バトル。ペンドラゴンでダイレクトアタックー」

……こりゃ、本気でダメだな。ここまでシャレにならない状況に追い込まれれば少しぐらいは僕も焦りだすかと思ったけど、むしろどんどん気持ちが落ち着いてくる。吐き出されるであろう炎から目を閉じようかと思ったけど、どうせならまっすぐ前を向いてとどめを刺されようと思い直して改めて前を見る。ちょうどペンドラゴンの溜めが終了したらしく、その体色に合った漆黒の炎を吐き出すべく大きく体をそらせたところだった。

そして、勢いよく炎が迫る。大人しくそれを受けようとして――――

「その攻撃、ちょっと待った！手札からバトルフェーダーの効果発動、このターンのバトルフェイズを終わりにして、このカードを特殊召喚する！」

バトルフェーダー　守0

「へぇー。転生者……とはちょっと違うけど、この子を庇うなんてことするんだ。職務違反じゃないのかなー、富野くん？」

激しく不機嫌な顔をした別の乱入者が、突然現れた。

ターン６３　鉄砲水ともう１つの『真紅』（後）

「その攻撃、ちょっと待った！手札からバトルフェーダーの効果発動、このターンのバトルフェイズを終わりにして、このカードを特殊召喚する！」

バトルフェーダー　守０

突然現れた、第三のデュエリスト。その男の視線は僕ではなく、遊（あそぶ）の方へ注がれていた。

「へぇー。転生者……とはちょっと違うけど、この子を庇うなんてことするんだー。職務違反じゃないのかなー、富野くん？」

「けっ。勘違いすんじゃねえ、こいつを潰すのは俺の仕事だ。なにせユーノの奴には負けっぱなしだからな、ここで器の方に消えられたら勝ち逃げされちまう」

「男のツンデレは誰得だよー？」

「野郎のぶりっ子も誰得だろうが」

遊の相手に慣れているのか、敵意を隠しもせず適当に軽口に返事を返す彼……富野。突然のことにしばらく言葉を失っていたけど、そんなこと言ってる場合じゃないことを思い出した。これが誰なのか、なんでユーノのことを知っているのか。余計に謎は深

まったけど、とりあえず今この人は敵じゃない。なら、とことんまで利用するまでだ。
「(だからチャクチャルさん、喧嘩売らないでね)」
微妙に不機嫌そうな気配を感じて、先に釘を刺しておく。いつ死んでも構わないのと自殺志願者は別物なのだよ。するとその心の声が聞こえたかのようなタイミングの良さで、富野がこちらを向く。
『……わかっている。これもマスターのためだからな』
「よお、ユーノんとこの地縛神。話はあらかた知ってるぜ、何やってんだお前ら」
『それはむしろこちらの台詞だがな。なぜここまで来た?』
「何回も言わせんな恥ずかしい。気に食わねえが仕方ねえ、今回ばかりは助けてやんよ」
それだけ言ってまた遊の方に向き直る富野。デュエルディスクを構えなおし、吐き捨てるようにして言葉を放つ。
「つー訳でこのデュエル、俺も参戦させてもらうぜ」
「ふーん、それでー? 僕のメリットはなにかな?」
「せっかくだ、GX風に行こうぜ……って言いたいところだがな、俺だって暇じゃねえから多少妥協させてもらうぜ。俺はライフ2000で初期手札3枚、バトルフェーダーを使ったから実質2枚でスタートするから、そのかわりお前も2000ライフ回復と手札3枚ドロー。もしお前が勝てば、俺も闇のデュエルのルールには抗えないからここで消

え、お前がまだ生きていやがることを知る奴は誰もいなくなる。これはお前にとっても十分なメリットだと思うぜ？」

へえ、と言いたげな顔で富野を見る遊。数秒ほど思案気にしていたが、やがて口を開いた。

「本当なら不利な賭けはしない主義なんだけどねー、いいよー。君みたいな直情タイプが僕の意表をつけたんだから、それに敬意を表して乗ってあげようかなー」

軽くデュエルディスクを操作し、自身のライフ回復とバトルロイヤルルールへの移行を設定する遊。僕も設定を直し、３人目の乱入者を迎え入れる。

遊　ＬＰ３８００→５８００　手札：２→５

富野　ＬＰ２０００　手札：２

「さーて、まだ僕のターンだったね。メインフェイズ２にいってー、ターンエンドー」

「次は俺のターンだ！行くぜ、魔法発動モンスターゲート！自分のモンスターを１体リリースして、デッキから通常召喚可能なモンスターが出るまでカードをめくる。そして出たモンスターを特殊召喚して、残りのカードを墓地へ。１枚目、ハーフｏｒストップ。２枚目、コール・リゾネーター。３枚目、融合。４枚目……よし、バイス・ドラゴンを特殊召喚するぜ」

バイス・ドラゴン　攻２０００

「ふーん？でもペンドラゴンの攻撃力は２６００だよー？」
「わかってらい。バイス・ドラゴンをリリースして、ストロング・ウィンド・ドラゴンをアドバンス召喚！このカードはドラゴン族を素材にアドバンス召喚した時、その攻撃力の半分を自身に加えることができる」
　ストロング・ウィンド・ドラゴン　攻２４００→３４００
「バトルだ、ペンドラゴンに攻撃！ストロング・ハリケーン！」
　ストロング・ウィンド・ドラゴン　攻３４００→ＤＤＤ覇龍王ペンドラゴン　攻２６００（破壊）
　遊　ＬＰ５８００→５０００
「ヒュー、強い強ーい。さすがに大きなこと言ってきただけのことはあるねー」
「舐めた口ききやがって……カードを伏せてターンエンド。そこのお前、後のことなんか考えんな。俺がなんとかするから全力でダメージ稼げ！」
　全力で稼げ、か。なら、このカードが適任だろう。初期手札からずっと手札にいたこのカードの力を見せてやる。
「僕のターン、ドロー！ツーヘッド・シャークを召喚！さらに水舞台装置の効果で、ツーヘッドの攻守は３００ポイント上昇する……！」
「ハイハイ」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→１５００　守１６００→１９００
「ツーヘッドの能力は2回攻撃！バトル、ダイレクトアタック2連打！」
ツーヘッド・シャーク　攻１５００→遊（直接攻撃）
遊　ＬＰ５０００→３５００
ツーヘッド・シャーク　攻１５００→遊（直接攻撃）
遊　ＬＰ３５００→２０００
途中で妨害してくるかとも思ったけど、別にそんなこともなく一気に３０００のライフを削りきった。普段なら喜べるのに、さっきまで手も足も出ずにやられていたことを思うと逆に不気味だ。
「タ、ターンエンド」
清明　ＬＰ２２００　手札：１
モンスター：ツーヘッド・シャーク（攻）
魔法・罠：水舞台装置
遊　ＬＰ２０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：炎舞―「天権」
富野　ＬＰ２０００　手札：０

モンスター：ストロング・ウィンド・ドラゴン（攻）
魔法・罠：1（伏せ）
「僕のターン、ドロー。ふんふん、2人がかりで３８００ダメージかー。しかも攻撃力３４００の貫通持ちと攻撃力１５００だけど墓地にキラー・ラブカが落ちてる状態での２回攻撃持ち。ふーん……」
追い詰められているはずなのに、まるで緊張感の感じられない態度。そこで一度言葉を切り、心底つまらなそうな顔をした。
「ま、こんなもんかー。君たちのレベルにしちゃ、それなりに頑張ったんじゃないかなー？僕のターン、ドロー。墓地の獣戦士族、神獣王バルバロスと手札の神機王ウルをゲームから除外してー、手札からもっとも神に近いモンスター、獣神機王バルバロスＵｒを特殊召喚ー！さらに天権の効果で攻撃力アーップ」
バルバロスの体色が灰色になり、手に持つ武器が大型の槍から2本の盾のようなものに変化する。これが真のエースモンスター、ということなのだろう。
獣神機王バルバロスＵｒ　攻３８００→４１００
「たかだか1体ぐらい、俺のターンですぐに処理して……」
「そんなことできるのかなー？速攻魔法、異次元からの埋葬を発動。除外されたモンスターカードを合計３枚まで選んで持ち主の墓地に戻すこの効果でー、僕はバック・

ジャックとバルバロスとウルを墓地にー。そして今戻したバルバロスとウルの２体を繰り返し除外して、同じ手順でバルバロスＵｒを特殊しょうかーん」

「嘘!?」

攻撃力３８００もの超大型モンスターが、こんなに簡単にポンポン湧いてきていいのだろうか。そんな思いをよそに、もう1体の機械と獣の王がひとつになった姿が僕らの前に立ちふさがる。

獣神機王バルバロスＵｒ　攻３８００→４１００

「そんなもんでこの転生者狩りの富野様がビビるかよ、そのモンスターは相手に戦闘ダメージを与えられねえ!おいそこの、確かお前の手札にはまだ時械神のカードがあったよな?」

富野の言葉で我に返る。そうだ、僕の手札にはまださっき強制脱出装置で手札に戻されたメタイオン先生がいるんだ。しかもあの大型モンスターを並べるために、遊の手札はわずか1枚まで減っている。おまけに、あのモンスターは高い戦闘能力と引き換えにダメージを与える力を失っているらしい。見かけの数字に騙されず、落ち着いて対処すればどうってことはない。

「またそうやって粋がっちゃってー。僕はね富野君、その仕事やってた時からずっと君にだけは、そういう態度の相手にだけは負ける気がしなかったんだよー。装備魔法、ニ

トロユニットをストロング・ウィンド・ドラゴンに装備ー」
「なにっ!?」
緑色の筋骨隆々なドラゴンの背中あたりに、ガシリと重そうな爆弾が食い込む。苦痛の呻き声をあげてなんとか振り払おうとするも、自身の翼が邪魔になり腕が届かない。その姿に、バルバロスＵｒのうち片方が手にした武器の狙いを静かにつけた。最初僕が盾だと思ったその武器の先端がかすかな機械音とともに開き、そこから２本の砲台がのぞく。
「バルバロスＵｒでストロング・ウィンドに攻撃、閃光烈破弾（クラッグ・ショット）ー……まったく、物々しく出てきた割には早い退場だことで。しばらくそこで眠ってな、富野くん」
バルバロスＵｒの持つ砲台に少しずつ光が集まり、一定の力が溜まったところで目の眩むような光線が放たれる。その光を忌々しげに見つめてから軽くため息をつき、富野がこちらを向く。
「なあ、おい」
「僕？」
「ああ。俺は駄目だ、ここまでだ。せめて最後に一撃だけ入れてやるから、後はお前が何とかしろよ」
「え、ちょっと……」

それだけ言うと僕との話は終わりだとばかりに遊の方へ向き直り、ふてぶてしく笑って伏せカードに手をかける。遊が眉をひそめたのを見て若干満足げに、そのカードを発動させた。

「リバースカード、プライドの咆哮を発動！攻撃モンスターとの攻撃力の差のぶんだけライフを支払い、その数値プラス３００だけストロング・ウィンドの攻撃力を上昇させる！」

「またそうやって粋がってー……ほんっとうに邪魔くさいったらありゃしないよー？」

「うるせえ！迎え撃て、ストロング・ウィンド！ストロング・ハリケーン!!」

富野　ＬＰ２０００→１３００

獣神機王バルバロスＵｒ　攻４１００（破壊）

↓ストロング・ウィンド・ドラゴン　攻３４００→４４００

遊　ＬＰ２０００→１７００

「くっ……だけど、これで伏せカードも打ち止めだねー？バルバロスＵｒはまだ残ってるから、そっちで攻撃ー、閃光烈破弾（クラッグ・ショット）ー」

戦闘ダメージを与えることのできない破壊の光が、ストロング・ウィンドの岩のように固く盛り上がった皮膚を貫通して背中についたままのニトロユニットごと撃ちぬく。一瞬の沈黙ののち、本体ではなくニトロユニットの方が大爆発を起こした。

獣神機王バルバロスＵｒ　攻４１００→ストロング・ウィンド・ドラゴン　攻３４００（破壊）
「もう説明もいらないだろうけど、ニトロユニットを装備したモンスターが破壊された時、そのモンスターのもとの攻撃力ぶんのダメージがコントローラーに降りかかるんだよー」
「うおおおおっ!!」
富野　ＬＰ１３００→０

富野は転生する前の命を生きていた時、いわゆるヒーローものが好きな少年だった。小学校に入る前は、毎日のように将来の夢はヒーローになることだと話していた。そんな彼もある程度大きくなり、テレビの中のヒーローがあくまでもテレビの中だけの存在なことに気づいてしまった。それがいいことなのかどうかは、彼にはわからない。ただ、そこに気がつかないまま生きていけるほど、世界が優しくなかったというだけだ。
世界で生きていくために現実を受け入れ、それでもどこかぽっかりと空いた彼の心。そんな時に偶然出会ったのが、とある漫画雑誌に付録としてついてきた1枚の白いカードだった。

当時デュエルモンスターズ……その世界では遊戯王と呼ばれていたカードゲームについては名前程度しか知らなかった彼だが、漫画が読みづらいと雑誌からカードを切り離し、特に意識せずに袋とじを開ける。その瞬間、彼の人生は大きな転機を迎えることとなる。書いてある効果は素人以下のレベルである当時の彼にはまるで意味が分からなかったが、そのイラストにどこか心惹かれた彼はそれを保管し、そのモンスターが動くところが見られるという話を聞きつけて当時放送していた遊戯王のアニメを見るようになる。その世界観にすっかり取り込まれた彼が自らもデッキを作るようになるまで、そう時間はかからなかった。彼にとってすべてのきっかけになったそのカードの名を、レッド・デーモンズ・ドラゴンという。

彼は吹き飛ばされながら、朦朧とした意識の中でそんな走馬灯を見ていた。若いうちに死んだ後、諦めたつもりで諦めきれなかった夢、ヒーローになれると思って転生したこと。レッド・デーモンズ・ドラゴンを生で見たかったからというのもあるけれど、それぐらいの役得は許されると思っていたこと。なのに、世界は廃墟になったこと。その世界の遊星が、クロウが、アキが、龍亞が、龍可が、そして他のさまざまな仲間たちが傷つき倒れていく中で嫌というほど思い知った、自分ではジャック・アトラスの代わりに、キングの代わりになることなど不可能であったこと。そしてもう2度とあんな思いを味あわないために、誰もあんな目に合わせないために転生者狩りとしての道を選んだ

こと。

彼は思う。結局、俺はヒーローの器じゃなかったのだと。今の馬鹿みたいな様子はどうだ。強い力を持っていたにもかかわらず救えたはずの世界ひとつ救えず、今だってせっかく出てきたのに当初の目的を果たすどころか逆に軽くあしらわれ、ただただ道化として終わっただけだ。せめて最後にカッコつけられたことだけが救いといえなくもないが、それにしたってただの自己満足なんじゃないか、と。

ああ、ちくしょう。地面に頭を打ち付けて衝撃が走った時、彼はなぜ自分がこのデュエルに参戦したのかという真の理由に気づき、ひそかに心の中で皮肉に思った。自分をはじめとした世界の行く末を知る転生者たちとは違い何も知らないうちに、どうなるのかもわからずにそれに巻き込まれている清明は、言ってみればただの被害者だ。なのに誰のことも恨まず、人外の存在へ変わりながらも前向きに生きる清明の姿は、彼にとってどこか眩しいものだったのだ。転生者が自分のような悲劇を見る前に始末をつける、その思いに偽りはない。だが、彼は何も悪くない。若干の迷いを抱えた彼は、その答えをユーノとのデュエルの中に見出そうとした。だから何度返り討ちにされても、彼はユーノのもとに姿を見せるのだった。

今でも彼は迷っている。その途中なのに、ここでその清明を失うわけにはいかない。だからこそ、自分よりもはるかに格上のデュエリストである遊……ユーノと2人がか

りで挑んでさえ敗北を覚悟するほどの相手のデュエルに割って入るという自殺行為に踏み込んだのだ。

ちくしょう。彼の意識が闇に飲み込まれていく寸前、もう1度その言葉を繰り返した。今更気づいて、一体それがなんになるってんだ。せいぜい勝てよ、ヒーロー。

「富野っ！」

地面に打ち付けられたっきりぐったりした富野の体を見て、一瞬もう魂が抜かれたのかと思った。だが、かすかに胸が上下しているのが見えてひとまずはホッとする。少なくとも、呼吸はまだしてる。

「さあ、負け犬は放っておこうよー。続き、ねー？さ、さ、まだ終わってないんだからさー、早いとこ終わろうよー」

そうだ。まだ、デュエルは終わっていない。僕がここで勝つ。富野が繋いでくれたこのライフ、ただ散らせるわけにはいかない。

「ターンエンド～」

「僕のターン……ドローー！」

手札にいるのはさっき強制脱出装置で戻されたメタイオン先生のみ。フィールドに

はツーヘッド・シャーク。モンスターがいるからこのままメタイオン先生を出すことはできないし、仮にできたとしてもそれは手札から特殊召喚できるバルバロスＵｒに対してはコストになるモンスターを引くまでの一時しのぎにしかならない。

なら、どうにかなるまでドローすればいいだけだ。

「魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のアーチャー、シャクトパス、ペンギン、シーラカンス、ハリマンボウの５体をデッキに戻してシャッフル、その後２枚をドロー」

これで手札は３枚。これで効率よく遊のライフを削るには……よし、デッキが僕に応えてくれた。この手札なら、勝てる。

「来い、ドリル・バーニカル！このカードは水属性だから、水舞台装置の効力を受ける」

ドリル・バーニカル　攻３００→６００　守０→３００

「なるほどー、バルバロスＵｒを打点で越えられないから、倒すのを諦めてダイレクトアタッカーで僕を直接狙おうっていうんだねー？何を見せてくれるのかと思ったら、随分卑怯な手だねー」

「あいにくだけど、搦め手は水属性の十八番なんでね。バーニカル、そこのデカいのは無視してプレイヤーに直接攻撃、ドリルアタック！」

ドリル・バーニカル　攻６００→遊（直接攻撃）

遊　ＬＰ２０００→１４００

ドリル状になった棘を飛ばしたフジツボが、めりめりと音を立てて急激に成長していく。
「バーニカルは相手に直接攻撃で戦闘ダメージを与えた時、攻撃力が１０００ポイントアップする。これでさらにパワーアップして、次のターンに攻撃を決めれば僕の勝ちだ！」
ドリル・バーニカル　攻６００→１６００
「さらに墓地にキラー・ラブカがいるから攻撃を１度は凌げる、そう言いたいのかなー？それはちょっと、いくらなんでも甘いんじゃなーい？」
「生憎だけど、その心配をするのはこっちの役目なんでね。次のターンの攻撃で決めるさ、カードをセットして、ツーヘッド・シャーク　攻１５００→守１９００
ツーヘッド・シャーク　攻１５００→守１９００
清明　ＬＰ２２００　手札：１
モンスター：ツーヘッド・シャーク（守）
ドリル・バーニカル（攻）
魔法・罠：水舞台装置
１（伏せ）
遊　ＬＰ１４００　手札：０

モンスター：獣神機王バルバロスＵｒ（攻）
魔法・罠：炎舞―「天権」
次のターンの攻撃で決める、僕は今そう言った。その言葉自体に嘘はない。だけど僕の真の狙いは、バーニカルの直接攻撃ではない。文字通りの意味での次のターン、つまり遊の攻撃だ。僕の伏せたカードは、ポセイドン・ウェーブ。今僕のフィールドには魚族のツーヘッドと水族のバーニカルがいる。つまり、遊が攻撃を仕掛けてきた瞬間にこのカードを発動すれば１６００のバーンダメージが発生し、その時点で僕の勝ちが決定する。だからこそ、わざと次の僕の攻撃で終わらせる、といったようなことを繰り返し言ったのだ。僕が狙っているのは、次は次でも次の相手ターン。さあ、攻撃して来い！
「……僕のターン。絶対王　バック・ジャックの効果発動！」
「しまった、忘れてた……！」
さっき異次元からの埋葬で除外ゾーンから墓地に戻されたバック・ジャックの効果。デッキトップがトラップならそれをセットし、そのターンでも発動できるようになるというものだ。この効果で、一体何をめくるだろうか。再び半透明の人型ロボットのようなモンスターが現れ、その右手を赤熱させて遊のディスクからカードをドローする。
「……ちっ」
「残念だったねー。トラップカード、停戦協定をセットして発動！」

フィールドの効果モンスター1体につき５００のダメージをこちらに与えるカード、停戦協定。モンスターを並べてポセイドン・ウェーブのダメージを倍増させるつもりだったのが裏目に出てしまったが、せっかく富野に繋いでもらったこのライフが残っている限り諦めたりするもんか。僕のモンスターが消えたわけじゃない、この後バルバロスＵｒで攻撃してくるだろうから、そこをポセイドン・ウェーブで返り討ちにして勝つというプラン自体に変更はない。

「バルバロスＵｒ、ツーヘッド、バーニカルの3体でダメージは１５００ー。もうだいぶ虫の息だねー」

「ま、まだまだ……！」

清明　ＬＰ２０００→５００

大丈夫。墓地にはキラー・ラブカがいて、場にはポセイドン・ウェーブのカードがある。このターン戦闘ダメージを受ける可能性は０、といってもいい。

その瞬間、足元の地面から太い鉄格子が生えてきた。と思ったらそれは鉄格子なんかではなく、僕の体を完全に包囲する檻になった。そしてあたりに響きだしたジュウウ、と何か高温の物を水に投げ入れたかのような音に嫌な予感がして僕のモンスターの方を見ると、水舞台装置の水中にあってなおも赤く溶ける溶岩の腕にわしづかみにされたツーヘッドとバーニカルが僕の頭上にいつの間にかいた怪物の口元へと運ばれていく

ところだった。思わず手を伸ばすけど、その手は檻に邪魔されて届かない。
「悪いねー、おおかた伏せカードは魔法の筒とかそんな感じのカードかな？……もう、終わりさ。相手フィールドのモンスター2体を生贄にして、こいつは相手のしもべとして召喚される……」
「嘘、でしょ……」
「溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム！」
溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム　攻３０００
「もう、攻撃する必要もないねー。ターンエンド」
ラヴァ・ゴーレム。プレイヤー……つまり僕のスタンバイフェイズごとに灼熱の体が溶け出し、ダメージを与えるという恐ろしい効果を持つ大型モンスター。そのダメージ数は、僕のライフ５００を上回る数値の１０００。僕のデッキには手札から捨てて効果ダメージを防げるようなカードはないから、どうあがいたところで次のドローに賭けることすらできない。
「僕の、負け……」
「その通りさー。ささ、最後のカードを引いちゃってよー」
自分の死の宣告となる、デッキトップを見る。このカードを引いた時、僕のライフは０になる。もう1回死ぬこと自体には諦めもつく、というか覚悟もできているけど、僕

だけならともかく見ず知らずの富野まで巻き込んでおいてあげくの果てに負けるなんて、ただただ無念すぎる。
「ねえねえ、まだかなー？それとも遅延かなー？」
「僕の、ターン……ドローー……」
　ドローフェイズが終わり、お互いに発動できるカードがないことから自動的にスタンバイフェイズに移行する。その瞬間、ラヴァ・ゴーレムの体から溶岩が垂れてきて、檻の隙間を通して僕に降りかかる。それを避けるための隙間も、身を守るためのカードもない。今度こそ、終わりだ。
　清明　ＬＰ５００→０

　ライフが０になると同時に体中の力が抜けていき、立っていられなくなってその場に倒れこむ。その様子を満足げに見て頷いた遊が、くるりと背を向けて三幻魔の封印地に向けて歩き出す。その途中で一度立ち止まり、誰に言うともなく口を開いた。
「今回は、見逃してあげるよー。全身の力は抜かれただろうけど、しばらく大人しくしてれば夕方頃には歩けるようにはなるはずだしー。本当はさっさととどめさしておきたいんだけどねー、そういう約束だからしょうがないんだよ」

「や……く、そく?」
　ゆっくりと口を動かし、どうにか言葉を絞り出す。そう、と頷き、また歩き出しながら遊がそれに答える。
「ユーノとの約束でね、まあちょっとした取引だよー。彼は君と一蓮托生だから、君に死なれちゃ困る。僕は三幻魔の力が訳あって必要なんだけど、1人じゃあの封印は解けなかった。光の結社のために、とか言って同じく三幻魔を欲しがってた彼とは、少なくとも封印が解けるまでは利害が一致してるからねー。こっそり手を組んだのさー」
「……!」
「露払いも済んだことだし、もう失礼させてもらうよー。これから封印がどうなったか見にいって、その結果によっては彼と三幻魔について『話し合い』してこなくちゃいけないからねー」
　そして、今度こそ振り返らずに歩き去って行った遊の後姿を、ただ見つめていることしかできなかった。
『マスター、どうする? 私が追うか?』
「……いや、いいよ。それより十代たちに連絡しよ、みんな心配してるだろうし」
　そう言いながら、僕の後ろで倒れてるはずの富野の方を見て、一瞬自分の目を疑った。さっきまでそこに倒れていたはずの体は既にどこにもおらず、まるで最初から夢か幻か

のようだった。
「どうなってんの、これ」
『私も見ていなかったからな。それより、マスター。こんなことを聞くのもなんだが、なぜそんなに元気なのだ？思ったよりもずっと回復が早い』
「あれ、チャクチャルさんが何かしてくれたんじゃないの？」
　それに関しては僕も不思議だった。遊はついさっき、夕方ぐらいまでは動けないといった。にもかかわらず僕はもうぴんぴんしてる。てっきりチャクチャルさんがパワー補給してくれたのかと思ったけど、違うらしい。
『いや……ああ、そういうことか』
「え？」
『私からも礼を言わせてもらおう。マスターも彼らには感謝しておくといい』
　そう言って、僕の胸ポケットを示すチャクチャルさん。そこからかすかな光が漏れていたので慌てて中身を引っ張り出してみると、光っていたのは２枚のカードだった。表面が完全に真っ白な、ちょっと見ただけだとエラーカードにしか見えないカード。ペガサス氏からもらった、世界の誰もが中身を知らないカードだ。ちょいちょい取り出しては眺めてみたり話しかけたりしてみたときには何の反応もなかったから実はちょっと不安だったけど、やっぱりこの中にはまだ『何か』がいるらしい。今回は僕に力を貸し

てくれた、ということだろう。
「ありがとう。いつか君たちにも会いたいもんだよ」
指で軽く撫でてから、2枚ともポケットに戻す。さてと、早いところ吹雪さんの試合を見に行こう。十代よりも、ここは夢想あたりに聞いてみるか。
「あ、もしもし夢想？」
『清明？今どこにいるの、って。もうとっくに試合始まってるよ、場所は……』

夢想に教えられた場所にようやくたどり着いた時、すでにそこには何人もの観戦者が来ていた。半ば押しのけるようにして前に行くと、ずいぶん久しぶりに聞くカイザー、いやヘルカイザーの声がした。だが彼が従えていたのは、これまでおなじみだったサイバー・ドラゴンでもツインでもエンドでもない。見たこともない闇の機械龍が、まるで下にいるドラゴンに寄生しているかのような格好で合体して、というよりもむしろ取り込んでいた。
「終わりだ、吹雪！鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴンで真紅眼の闇竜を攻撃、フル・ダークネス・バースト！」
「うわあああああっ!!」

吹雪　ＬＰ０

「吹雪さんっ！」

ダークネスマスクが、吹き飛んだ衝撃で吹雪さんの顔から外れる。あの力を解放しても、まだ今のカイザーには勝てなかったっていうのか。

「や、やあ、清明君……亮は、やはり強いよ……」

「喋ってないで、とりあえず医務室行きましょ。誰か、手ぇかして！」

肩を貸してどうにか吹雪さんを立ち上がらせ、こちらに冷たい視線を送っていたヘルカイザーを見る。あの目つき、こうやって実際に見てはっきり分かった。何があったのか、細かいところまでは知らないしわからない。だけど、きっと何かものすごく大きな変化があったに違いない。

「さらばだ、吹雪。俺はもうしばらくこの島にいる、挑戦者がいるというのならば受けて立とう」

そう一言だけ呟き、たった一人で去っていくヘルカイザー。誰も、その後ろ姿を止められなかった。

ターン６４　鉄砲水と『Ｄ』

「え!?」
　あとから考えてみれば随分失礼な話ではあるが、僕の第一声はそれだった。でも、こればっかりは誰も文句は言えないと思う。翔がその日の夕食後、何となくゆったりしていた時間に漏らした一言には、これまでの彼を知る僕らにとってはそれほどの破壊力があった。
「だから清明君、僕がお兄さんに挑戦するんだってば」
「お兄さんってーと、ヘルカイザーの?」
　他に誰がいるのさ、という顔でこちらを見てくる翔。いやま、そらそうなんだけど。あの翔が自分からデュエルしたいだなんて、それもカイザー時代からあれだけ苦手意識もってたヘルカイザーに対して。
「いいじゃないか、俺は応援してやるぜ、翔」
「アニキ……ありがとう」
「それで、なんで今なんだ?お前だって見ただろう、あの師匠ですらかなり手ひどくやられていたんだぞ」

そこで十代と万丈目も会話に参加してきた。十代はまあ、なんというか十代らしい激励だ。万丈目の言う師匠は吹雪さんのことだろう。そうか、僕は結局ラストしか見てないけどそんなにひどいやられっぷりだったのか。

「うん、わかってるよ万丈目」

「万丈目さん……貴様何をする！」

「今話し中なんだからちょーっと黙ってようねー。続けて、翔」

もはや癖なのか条件反射なのか知らんけど、とっさに名前を訂正しようとした万丈目を押さえつけて話を促す。いい加減慣れりゃいいのに、万丈目も。

「うまく言えないけど、僕が……僕がやらなきゃいけないんだって、そう思ったんだ。今のお兄さんのデュエルは間違ってる。僕の知っていた、優しくて尊敬できるお兄さんに戻って欲しいんだ」

「翔……」

「それに、僕だってこの間までの僕じゃない。見てよ、これ」

そういってジャラジャラとテーブルにぶちまけたのは、全てジェネックスのメダル。僕がやれ店だそれうさぎちゃんだとか言ってる間、ずっと人知れず修行を続けてきたのだろう。

「今日も、元オベリスクブルーのホワイトを１人倒してきたんだ」

「オベリスクブルーを？じゃあ翔、逆に聞くけどさ、なんでまだ迷ってるのさ？」
「え？」
「そりゃ、それだけ嬉しくなさそうな顔してれば嫌でも気づくって」
　僕の言葉に、十代も真剣な顔で頷く。
「リスペクトデュエル、か」
「アニキ……」
「お前のデュエルも何回か見てたけどさ、どことなくやり方がカイザーに似てるんだよな。お前の中ではカイザーのリスペクトデュエルはまだ完成してないんだろ？」
「うん、実はそうなんだ。僕はまだお兄さんには遠く及ばないのに、どうすればお兄さんに近づけるのかがわからないんだ……」
　何か言おうかと思ったけど、こういったことに部外者が口を出すのは逆効果かと思い直す。僕に言わせりゃ必要以上にカイザーの背中を追いかけすぎて自分のデュエルスタイルを見失ってるようにしか見えないけど、そもそも先代からのちょっかいがあったとはいえ怒りに任せてモンスターを捨て石にするデュエルをついこの間まで繰り返してた僕がそれを言っても説得力がないだろう。
「まあ、今日明日のうちにデュエルしにいくわけじゃないんでしょ？ジェネックスは続くんだし、まだまだのんびりやろうよ」

「う、うん」
「気の長い話だな。まあいい、俺はもう部屋に戻る」
　万丈目がそう言ったのをきっかけに、その日はそれでお開きの流れになった。結局翔の悩みを解決することはできずにその表情は暗いままだったが、たぶん大丈夫だろう。翔だって案外精神力は強い方なのだ。もう翔の仲じゃ黒歴史だろうけど、なにせこのヒト偽ラブレターに引っかかってわざわざ男子禁制の女子寮まで忍び込む行動力があるんだから。

「大変だドン、カイザーがエド・フェニックスと正門前で鉢合わせて睨み合ってるザウルス！リベンジマッチが始まるんじゃないのかって学校中大騒ぎになってるから、アニキたちも早く来るドン！」
　そんな知らせを剣山が持ち込んできたのが、その次の日。ったく、僕がいくらのんびりって言ってもヘルカイザーの方から何かやらかすんなら意味ないじゃないの。とはいえ、いくらアカデミアが広いとはいえ１つの島の中に本校プラス大会の時から帰らないノース校の皆さん方、それにプラスでわんさかやってくるプロデュエリストだ。これだけ人口密度が上がってれば、そりゃむしろ出会わない方がおかしいといえばその通り

だけど。
「ぼ、僕」
「行こうぜ、翔！」
「センキュー剣山！」
僕と十代が走り出すと、若干遅れて翔も駆けだした。ま、これもいい機会といえばその通りか。あとは、これがいい方に転んでくれるのを祈るだけだ。
しばらく行くと、剣山の案内が無くてもすぐに分かった。なにせおなじみの白服軍団の他にも、今話題沸騰中のプロデュエリストかつ因縁の相手である2人のデュエルが見られるかもしれないと島の外から来たプロまで一緒になって人だかりを作っていたからだ。当然というかなんというか、クロノス先生とナポレオン教頭の姿もある。仮にも生徒と元生徒に対しその態度はどうかと思わなくもないが、それもあの先生たちらしい。
「お兄さん！」
翔もなんとかしてその人だかりの中に入っていこうとするものの、いかんせん背が低くて力も一般人並みにしかない翔ではデュエリストの中を割って入るのは難しいようだ。見ていても仕方がないので後ろから手を伸ばし、人だかりを片っ端から掴んではこじ開けていく。僕も見たいから自然と熱が入り、ついうっかりダークシグナーの力を使

わないようにこらえながらの作業なので案外骨が折れる。慰謝料的な意味で怪我させたら大変だし。それでもどうにかヘルカイザーが見えるようになってくると、その間に割って入るように翔が飛び込んでいった。

「お兄さん、やめて！リベンジのデュエルなんて、そんなの間違ってるよ！」

「いいや、違うな」

「え……？」

ヘルカイザーは無視。代わりになのかなんなのか、エドが口を開く。

「あの眼を見ろ。どうやらこの男、僕へのリベンジなんかよりもっと上を目指しているらしい。僕だってそちらにやる気がないのならわざわざデュエルするつもりもない、集まってくれた観客には悪いが一度退かせてもらうよ」

それだけ言っていつもの余裕ぶった態度で一礼し、慌てて人だかりが道を開けた中を悠々と歩き去っていく。と思ったらかすかに、本当にかすかに僕のことを手招きしているのが見えた。そっちを見てた僕だからかろうじて気づけたけど、多分他の皆はヘルカイザーと翔に気を取られて全く見ていなかっただろう。一瞬ためらった後、無言で十代の肩を軽くたたいてエドが歩いて行った方向を指さし、そのままその後を追いかける。どうもこの場所では、このまま翔とヘルカイザーのデュエルが始まるらしい。あっちも見たかったのに。

「来たよー。何の用？」

人ごみから離れた海辺。こんなに波音がする場所にわざわざ連れ込むだなんて、盗聴でも警戒してんのか。

「ここまで来れば、もしマイクが仕掛けられているとしても気休め程度にはなるからな。お前もプロになればこれぐらい嫌でも身につく」

あ、本当に盗聴警戒だった。何かプロの世界の裏事情が垣間見えた気もしたが、本題ではないのでスルー。なにせこのエドのことだ、わざわざ僕相手にプロとしての心構えをレクチャーするためだけに呼びつけるわけがない。

「……単刀直入に聞こう。斎王について、お前はどこまで知っている？」

「と、いうと？」

こちらの目を覗き込むようにしながら、僕の返答をじっくりと考えるエド。たっぷり３０秒ほどそうしてから、スッと視線を逸らした。

「どうやら何も知らなさそうだな。そうか、斎王め。僕と十代にはこんなものを渡しておいて、こいつには何もしなかったのか。まったく、新年度から妙に気にしていたからもしやと思っていたんだがな」

そうひとりで納得し、とんだ無駄足だったと１人ごちるエド。どうやら、まーた僕が蚊帳の外にいる間に何かあったらしい。もっとも、僕だって稲石さんのゴーストリッ

ク・フロストや古井戸のうさぎちゃん、それにペガサスさんからもらったカードのことは誰にも話してないからお互い様といえばその通りだけど。

だけど、それは全部僕の個人的なことだ。一方、光の結社並びに斎王は僕にとっても色々関係がある。おかしくなった三沢達だけでも元に戻してもらわないと、あの斎王様万歳なテンションと卒業するまで付き合っていけとか言われても困る。

「さて、することもないしもう一度斎王でも訪ねてみるかな。どうせ会わせてもらえないだろうが」

「いやいや、待って待って待って」

本気でその場から立ち去ろうとしたので、さすがにそりゃないだろうと慌てて呼び止める。すっごくめんどくさそうな顔で振り向いたエドに対し、ここでうやむやにしてなるものかと問い詰める。

「その話、もうちょっと僕にも教えてよ……ダメ？」

「ああ」

「あ、そ。だったら、悪いけど無理にでも聞きだすさ」

もうこの時点で、僕が何を言いたいのか分かったらしい。不敵な笑みを浮かべ、自分のデュエルディスクを起動させる。ここで断ったりしないあたり、やっぱりこの男も真正のデュエリストだ。

「いつかとは違って手加減はしない……本物のヒーローを見せてやる」
「デュエル！」
「先攻は僕、か。まあいいだろう、モンスターをセットしてカードを４枚伏せ、ターンエンドだ」
　まずはセットからはいるエド。表側守備表示で出せばいいのにわざわざセットなんて、あのモンスターは恐らくリバースモンスター……それも他の手札をすべて伏せたところから察するに、かなり高い確率でメタモルポッドとみた。
「そうと決まれば、僕のターン！」
　メタモルポッドへの対抗策はひとつ。徹底的にこちらの被害を減らし、逆に利用してやるのだ。とはいえ、残念ながらこちらの手札にはモンスターカードが３枚あるためどうしても２枚はそのまま捨てるしかない。とはいえ１枚は墓地にあってこそ力を発揮するキラー・ラブカのカードだ、そこまで痛いわけではない。
「シャクトパス、召喚！」
　シャクトパス　攻１６００
「さらにカードを２枚伏せて、バトルフェイズ。シャクトパスで……」
「トラップ発動、邪神の大災害！相手の攻撃宣言時、フィールドの魔法及びトラップをすべて破壊する！」

「へ？」

思わず間抜けな声が漏れるが、シャクトパスの攻撃はもう止まらない。モンスターゾーンの周りを不気味な風が吹き荒れ、今伏せた僕のカードとエドの場の伏せカードを消し去りにかかる。

「そうだ、そんなカード使ったらそっちだって……」

「おいおい、まさか策なしで僕が闇雲にカードを伏せたとでも思っているのか？それにチェーンして２枚の伏せカード、無謀な欲張りを発動！」

一時的な２枚のドローと引き換えにその後２回ものドローフェイズをスキップする大きなデメリットがあるカード、無謀な欲張り。だけどその効果も同名カードを２枚まとめて発動することで、４枚ドローして２回ドローフェイズを我慢するだけとなり大幅にお得なコンボになる……！

「そして今攻撃したカード、おおかたメタモルポッドあたりと読んだんだろうけど、その考えは浅すぎる」

シャクトパスが無数の触腕を伸ばして四方から伏せモンスターを締め落としにかかるが、カードの裏から２本の野太い岩石の腕が伸びて弾き返す。

シャクトパス　攻１６００→???　守２７００

清明　ＬＰ４０００→２９００

「は、反射ダメージだけで１１００持ってかれた!?」
「そう。守備力２７００、ディフェンドガイだ」
ディフェンドの名が示す通り、リリースなしで召喚できるレベル４モンスターとは思えないほどの岩の巨体が生み出す質量感。この壁を突破するのは、並大抵ではなさそうだ。
「このターン、もう僕に手はない……ターンエンド」
エド　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：Ｄ－ＨＥＲＯ　ディフェンドガイ（守）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ２９００　手札：２
モンスター：シャクトパス（攻）
魔法・罠：なし
「僕のターン、無謀な欲張りの効果でドローフェイズがスキップされるためドローはできない……だができる。魔法カード、デステニー・ドローを発動！手札からＤ－ＨＥＲＯ（ディー・ヒー・ロー）を捨てることで、カードを２枚ドローする。さらにここで、セメタリーに落ちたディアボリックガイのエフェクト発動！墓地に存在するこのカードを除外することで、デッキから同名モンスターを特殊召喚する。カモン、ディアボリックガイ！」

「うわっ……って、あれ？」
おどろおどろしい筋骨隆々な悪魔のシルエットに、思わず身を固くする。だがそれに反して、正体を現した悪魔はとんだこけおどし程度の能力だった。
Ｄ―ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ　攻８００
「まあ慌てるな。このディアボリックガイをリリースし、ダブルガイをアドバンス召喚！」
次いで現れたのは、いかにも英国紳士といったたたずまいの黒服を着てシルクハットをかぶり、ステッキを手に持つ男。その攻撃力も見た目通りというかなんというか、ディアボリックガイよりはわずかに上だがぶっちゃけそんなに変わってない。
Ｄ―ＨＥＲＯ　ダブルガイ　攻１０００
「そしてフィールド魔法、ダーク・シティを発動する」
周りから十代のスカイスクレイパーのような摩天楼とはまた少し違う、イギリス風の建物がニョキニョキと生えてくる。霧の町ロンドンということなのか、うすぼんやりと霧がかかってきたせいで細かいところはよくは見えないのだが。
「バトルだ。ダブルガイでシャクトパスに攻撃、デス・オーバーラップ！」
紳士が異様な跳躍力で近くの建物のてっぺんまで飛び上がり、帽子とマフラーの間にわずかに見える冷たい目でシャクトパスの位置を見下ろしてから手に持つステッキで

串刺しにせんとばかりにジャンプして落下速度をつけながら迫る。とっさに触碗を伸ばして迎撃しようとするも、なんとダブルガイの背中から霧にまぎれてもう１対の腕が、それも紳士の方とはまるで違う緑色に光るたくましい腕が伸びて無造作にそれを引きちぎる。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ダブルガイ　攻１０００→２０００→シャクトパス　攻１６００（破壊）

清明　ＬＰ２９００→２５００

「まさか、このフィールドって」

スカイスクレイパーとよく似た構図の夜の町型フィールド魔法。そして今のダブルガイの攻撃力倍増。

「そう言えば、このカードを使った時にお前は倒れていたんだっけな。ご想像通り、このカードはディーヒーロー版のスカイスクレイパーとでもいうべきカードさ。もっとも、僕に言わせればこちらの方が本家だがね」

やっぱりか。１０００ポイントの補正はなんだかんだいってかなり大きい。アクア・ジェット使いの僕が言うんだから間違いない。もっとも、僕のアクア・ジェットのカードはついさっき邪神の大災害に吹き飛ばされたけど。

だが、こちらだってやられてばかりはいられない。紳士の杖に貫かれたシャクトパス

の触碗がぴくぴくと動き出し、勢いよくその体をがんじがらめにする。
　Ｄ―ＨＥＲＯ　ダブルガイ　攻１０００↓０
「おや」
「シャクトパスが戦闘破壊された時、そのモンスターは鮫の呪いを受ける。攻撃力は０になって表示形式も変更不可、さらに攻撃宣言もできなくなるよ」
「なるほど、これならダブルガイの２回攻撃も使えないな。僕はこれでターンエンドだ」
「……ドロー！」
　ディフェンドガイはともかく、その横には攻撃力０のモンスターが突っ立っているだけだという状況なのに、まるで真剣さを感じさせないエドの態度。嫌でも何か裏があるのかと勘繰らざるを得ないが、いい的がそこにいるのに戦わないというのも変な話である。
「スタンバイフェイズにディフェンドガイのエフェクトが発動する。このモンスターはリリースなしで召喚可能な中でも５本の指に入るほどの高守備力を持っているが、その代償として相手スタンバイフェイズごとに１枚のドローを許すというデメリットがある。さあ、どうぞ」
「そりゃどうも、っと。１枚ドローしてメインフェイズ、オイスターマイスターを召喚。そのままダブルガイに攻撃！オイスターショット！」

オイスターマイスター　攻１６００→Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ　攻０（破壊）
エド　ＬＰ４０００→２４００
確かに攻撃は通った。ダメージも大きい。だけど、全然すかっとしないのはなぜだろう。むしろ、まんまと罠にかかったような気分になる。考えすぎ、だろうか。ダーク・シティの効果を考えるとオイスターマイスターの攻撃力じゃ不安だしブラフでもなんでも伏せカードを用意しておきたいところだけど、あいにく手札にはモンスターカードしかない。だけど、口ではそんなこと言わない。ここで隙を見せたり弱気になったりしたら、もう手はないですって自分からばらしてるようなものだ。
「これでターンエンド。さ、かかってきな」
エド　ＬＰ２４００　手札：２
モンスター：Ｄ－ＨＥＲＯ　ディフェンドガイ（守）
魔法・罠：なし
場：ダーク・シティ
清明　ＬＰ２５００　手札：３
モンスター：オイスターマイスター（攻）
魔法・罠：なし
「僕のターン。まだ無謀な欲張りの効果でドローフェイズは行えずにそのままスタンバ

イフェイズ、ダブルガイのエフェクトが発動される。このカードは破壊された次のスタンバイフェイズ、ダブルガイ・トークンを２体場に残していくのさ」

エドの言葉に反応するかのように、霧の町を縫って２体の巨人が建物の影からやってくる。粗野な野人といっても過言ではない風体の２人はなんと驚くべきことに、ついさっきダブルガイの背中から一瞬見えたあの緑色の手と明らかに同一人物だった。

ダブルガイ・トークン　攻１０００

ダブルガイ・トークン　攻１０００

「それとドローできないぶん、このターンは代わりにこのカードでドローさせてもらう。魔法カード、闇の誘惑を発動！デッキからカードを２枚引き、手札の闇属性モンスターを１体除外する。今回は特に出番もなさそうだし、このドレッドガイを除外するとしよう」

ドローフェイズが行えないことをまるで感じさせない手札交換っぷりは、さすがにプロといったところか。それにしても前回の童実野町でのタッグで使用していた大型モンスター、ドレッドガイを除外してまで手札に残しておきたかったカードとは何だろうか。

「これで良し、だ。僕のフィールドに存在するディーヒーローを含む３体のモンスターをリリースし、このカードを特殊召喚！カモン、ドグマガイ！」

「３体リリース、かぁ……」

３体リリース。なんかこう、いつぞやのラビエルといいついこの間のラーだったりアバターだったりといい、どうもこの手の超大型モンスターにはいい思い出がない。きっと今回もろくでもないのが出てくるんだろうな、と半ば諦めていたら、それは現れた。十代のフレイム・ウィングマンがよくスカイスクレイパーのビルのてっぺんで満月をバックに立っているのとちょうど同じような構図で、霧の町を舞台に悪魔の羽を生やした闇のヒーローが威圧感たっぷりに、だけどどこか気品あふれる仕草で静かに僕らを見下ろす。

Ｄ―ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）　ドグマガイ　攻３４００

「攻撃力、３４００……」

「その通り。そのエフェクトはもう少し後でのお楽しみだが、バトルは今からでもできる！オイスターマイスターを粉砕しろ、デス・クロニクル！」

ドグマガイの右腕に鎖で巻きつけられた剣が光を放ち、その体がオイスターマイスターに音すら立てず一瞬で迫る。回避も牡蠣での防御もままならないまま、上段からの斬り下ろしをまともに受けたオイスターマイスターの体が消え去った。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ドグマガイ　攻３４００→オイスターマイスター　攻１６００（破壊）

清明　ＬＰ２５００→７００

向こうの方がはるかに攻撃力は上だったためダーク・シティによるバンプアップは無かったから、今の攻撃はぎりぎり耐えきれた。オイスターマイスターにはすまないことをしたけど。それはいいとしてあのモンスター、どうやって倒せばいい？

「僕のターンはこれで終了」

「僕のターン、ドロー」

カードを引いた瞬間、エドがかすかに笑みを浮かべた。その瞬間、ドグマガイが羽を広げてそこから黒い閃光が放たれる。僕の体をその闇が覆い、全身から力が抜き取られるような感覚がした。

清明　ＬＰ７００→３５０

「僕のライフが！」

「そう、これこそがドグマガイのエフェクト、ライフ・アブソリュート。自身の特殊召喚に成功した次の相手ターンのスタンバイフェイズのみ発動される、ライフ半減効果。もっとも、元から少ないそのライフではあまり意味もないかな」

落ち着け、落ち着け。ライフ半減と聞けば確かにとんでもないことだけど、３５０バーンとして考えればぜんっぜんたいしたことない効果だ。おまけにあの効果は１回しか使えない、あとはもう目の前にいるのはただの火力馬鹿。まだ戦える！

「永続魔法、水舞（アクアリウム・ステージ）台を発動！」

霧の街のあちらこちらに熱帯の海を思わせるカラフルな岩やイソギンチャクが生え、街並みが水没してさながら水中都市、というかぶっちゃけ廃墟のような有様になる。

「さらに、キラー・ラブカを守備表示で召喚。これでターンエンド」

キラー・ラブカ　守１５００

今僕の使った水舞台は、フィールドに存在する限り僕の水属性モンスターが水属性以外には戦闘破壊されなくなるという強力な効果を持っている。とにかくこれで１ターンでも時間を稼いで、ディメンション・スライドや激流葬といったモンスター除去のカードを引けば……！

エド　ＬＰ２４００　手札：１

モンスター：Ｄ―ＨＥＲＯ　ドグマガイ（攻）

魔法・罠：なし

場：ダーク・シティ

清明　ＬＰ３５０　手札：２

モンスター：キラー・ラブカ（守）

魔法・罠：水舞台

「そんな消極的な手で時間稼ぎのつもりか？僕のターン、ここから僕もドローができる

ようになる。これで、お前はもう終わりだよ」
「なっ!?」
「確かに今、僕の手札にサイクロンなどの魔法・罠除去のカードはない。だが、もうそんなものは必要ない！カモン、ダンクガイ！」
Ｄ―ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ダンクガイ　攻１２００
どことなくバスケットボールのプレイヤーを思わせる出で立ちのディーヒーロー。彼が念を込めるとその右手に、光のボールが生まれた。それを持ったままこちらに突進してきて、ラブカの頭上高くにジャンプしてから僕に向けて叩き付ける。
「ダンクガイは手札からディーヒーローを1体捨てることで、相手プレイヤーに直接５００のダメージを与えることができる。そして僕はこのエフェクトで、手札のディパーテッドガイを捨てる！」
「これは……」
清明　ＬＰ３５０→０

「まったく、てんで話にならないね。その程度の実力で、むしろよくこのジェネックスを生き延びてこれたものだ」

何も言い返せない。僕は負けた。それも見事なまでの完敗だ。唯一与えることができたオイスターマイスターの攻撃さえも、ダブルガイ・トークンを生み出すための罠として掌の上で踊らされていただけにすぎない。

「だいたい、本来ならばひとつ前のターンで攻撃力１０００のディパーテッドガイを通常召喚していればドグマガイと合わせての攻撃でもっと早く勝負はついていたんだ。十代のようなドロー力でも見せてくれるのかと思ってわざわざ1ターン待ってやったというのに、できたことがあんなつまらない手での延命とはな」

「……」

「最後に1つだけ忠告しておこう。お前じゃ足手まといにしかならないから、斎王に正面切って刃向うのはやめておくことだな」

それだけ言って、今度こそ歩き去っていくエド。最後の一言は、彼なりの優しさのつもりなんだろう。この間タッグデュエルした時から思ってたけど、案外エドも最初のころの印象より悪い奴ではないのかもしれない。

だけど、その一言は僕にとっちゃ完全に逆効果だ。こんなところで立ち止まっていたら、何も取り戻せない。手放したくないものがあるなら、自分で掴み取ればいい。それができないと、それは自分のせいではないと自分に言い聞かせながら生きていくことになる……エドがあの時僕に向かって、そしておそらく自分に向けても言った言葉だ。

そんな人生を送るのは、少なくとも僕はまっぴらごめんだ。年下相手に人生を教わるのも癪だけど、言ってることが正しいのなら反発することもない。確かに今はまだ僕も力不足だけど、これからもっともっと強くなる。なってみせようじゃないの。エドへのリターンマッチはその後でいい。

だけどとりあえず、今できることは自分の負けに対しけじめを示すことだろう。ポケットから僕が最初にもらったのとフランツから奪ったジェネックスのメダルを引っ張り出して、エドの後姿に投げつける。あ、くそ、当たんなかった。もうちょいしっかり頭狙って投げればよかった。

「覚えてなよ、次は勝つからね！」

何も言わないエド。だけど、ほんのわずかに彼が笑ったような気がした。

ターン６５　鉄砲水と移動砲台と侵略者

「翔、大丈夫？」
「ああ、今は部屋で寝てるはずだぜ」
「そう……お休み、十代」
「ああ、また明日な」
　エド相手にこっぴどくやられてから戻ってくると、翔がヘルカイザー相手にこっぴどくやられていた。十代の話によると、最後まで一歩も引かずに戦い抜いたらしい。なんでも、受けたダメージがそのまま電流になって体を走るとかいう闇のゲームを科学の力で再現したような変態兵器を用いてデュエルしたらしい。今ヘルカイザーが立っている、そして見据えているその先とやらが僕にはさっぱりわからない。
「ま、人のことばっかり心配してられない、か」
　冷たいようだけど、そもそもヘルカイザーのデュエルをまだ見たことがない僕では何のアドバイスもできやしない。それに、僕だってそろそろ目を背け続けてきた現実に向き合うべき時が来ているのだ。
「……」

誰もいなくなった食卓机に、自分のデッキを1枚1枚確かめるようにして置く。思えばこのカードにも、このカードにも、僕は何度も助けられてきた。

だけど、それだけじゃもうだめなんだ。今のデッキのままだと、もうこの学校のペースには付いていけない。今日のエド戦は、それを僕に改めて思い知らせてくれた。組み換えよう、デッキを。水属性で戦う基本コンセプトは変えないままに、よりデッキパワーを高めよう。

もっとも、そんなにうまくいくなら苦労しない。デッキを組み替えるということは、当たり前だけどこれまで使ってきたカードをデッキから抜くということ。稲石さんのフロストやうさぎちゃんみたいに1枚単位ならともかく、デッキそのものを見直すような改革となるとこれがなかなか難しい。あーでもないこーでもないと考えていると、ふと気づけば夜中の2時を回っていた。

「……ハァ」

水道水でも飲もうかと、席を立つ。するとその時、2階の方からかすかに何かが動く気配がした。こんなところに入って得する泥棒がいるとは間違っても思えないので最初は気のせいかとも思ったが、もう1度気配がしたのでもしかして島の外から来た人がうちの貧乏っぷりも知らずに物色しに来たのかもしれないと思い直す。とりあえず台所にあった麺棒を掴み、足音を殺してそろそろとドアの前で待ち伏せる。

数秒後、食堂のドアノブがカチリ、と回転した。ギリギリまでひきつけておいてから、麺棒を振り下ろす！

「せりゃーっ！……あれ、何やってんのこんな夜中に」

「そ、それはこっちのセリフだ！殺す気かお前は!?」

見事命中する寸前に慌てて手を止める。なぜなら、そこにいたのが万丈目だったからだ。まあでもそりゃそうか、一目見ただけでブルー、イエロー寮と比べても明らかに貧相なこの寮に入る泥棒なんざ初見でもいるわけないね。

「単に水を飲みに来ただけだ。で、お前こそ何やってるんだ？もう2時だぞ」

「ちょうどいいや、万丈目。万丈目には明日相談しようと思ってたんだけど……」

かくかくしかじかと説明し、全部聞いたうえでの第一声がまず、

「なるほど、事情は分かった。で、なんで俺なんだ？」

「え？」

「え？じゃない。別に俺じゃなくとも、十代あたりに相談すればいい話じゃないか。相談に乗ってやるのはやぶさかではないが、なぜわざわざ俺をピンポイントで狙ってきた？」

本気で不思議そうな万丈目。だけど、そんなの決まってる。

「デッキ強化の方法として宇宙行って未知のカード拾ってくるような相手に何相談し

ろってのさ」
「ああ……うん、そうだな」
「わかってくれて嬉しいよ。んで、どうするのがいいかな？」
　お互いに理解しあえたところで、改めて聞いてみる。
「デッキ枚数を減らせ」
「……それ以外でお願い」
「面倒くさいなお前は」
　うん、悲しいことに自覚はしてる。いっそのこと、僕もテーマデッキに手を出してみようかな。そんなことを考えたその時、地面が大きく揺れた。
「な、なに!?」
「地震か？……いや、違うな。外だ」
『んもーアニキったら、なんなのよ一体。うるさいから起きちゃったじゃない』
　ふわふわと目をこすりながら眠そうにやってきたおジャマ・イエロー。その体をわしづかみにして、有無を言わさず言いつける。
「俺も知らん、見に行くからお前もついて来い。行くぞ、清明」
「もちろん！」

で、早速外に出てみたのだが。そこには予想よりもはるかにぶっ飛んだものが地面に突き刺さっていた。
「えーっと……」
「なんだなんだ!?」
「どうしたんだ!?」
そのとんでもないものとは、あえて表現するならすごく正統派なデザインのＵＦＯである。そんな現実の斜め上にすっ飛ばしていったようなものを前にどうしようか本気でわからなくなって固まっていると、校舎の方から白服の２人が同じく走ってきた。あれ、野郎の顔なんざ興味はないから今一つ自信はないけど、あの２人はどっかで見たことあるような。
「お前はオシリスレッドの遊野清明！」
「それに、裏切り者の万丈目準！」
「万丈目さん、だ！お前ら、確か中野に野中、とかいったな」
「あれ、知り合い？」
そう聞くと、険しい顔でああ、と頷く。気のせいか一瞬、ＵＦＯの近くで３つの影が動いたような気がした。万丈目が離し始めたころにはまた見えなくなったから、たぶん

気のせいだろう。
「お前にも見覚えがあるはずだが、こいつらは今年のノース校との対抗戦前にお前と河風夢想の邪魔をして俺が葵・クラディーとデュエルをしている間の時間稼ぎをしていた奴らのうちの２人だ」
　ああ、なんかちょっと思い出した。確かにいたなあ、そんな３人組。３人のそれぞれが攻撃、妨害、回復の３つの要素を担当して襲い掛かるコンビネーションはなかなか強烈で、夢想がいなくちゃ僕も危なかった覚えがある。ただまあ所詮は３人１組で強い若干インチキ臭いデュエルスタイル、裏を返せば１人１人はそれほどでもなかった。しかも、今はそのうちの２人しかいないわけだしね。
「光の結社を裏切ったお前に呼び捨てにされるいわれはない！そうか読めたぞ、このへんてこなものもお前らが作ったんだな？」
「前回は不覚を取ったが、今はあの化け物女はいない！今すぐここでぶちのめして俺たちも光の結社幹部コース入りだ！行くぜ、中野！」
「もちろんだ！デュエルディスク、起動！」
「フン、相変わらず人の話を聞こうともしない奴らだ。前々から鬱陶しかったが、味方でなくなるとここまでとはな。ここらでお灸をすえてやろう。おい清明、タッグデュエルで片を付けるぞ」

「そーだそーだ、だいたいレッド寮にこんな大それたもん作る金があるわけないじゃない！……まあいいや、それじゃ、タッグデュエルと洒落込もうかね」

そう言いつつ、万丈目に合わせてさっとデュエルディスクを起動する。やっぱりデッキだって実戦じゃないと見えてこないこともあるよね。

その様子を見て、起動とか言っておきながらデュエルディスクを動かさなかった2人もワンテンポ遅れて2人もデュエルディスクを起動した。だけど、その様子がおかしい。なんだか2人とも体中が小刻みに震えていて、表情もさっきまでのやかましいながらに元気そうなものから一転してぼんやりした無表情になっている。そもそも、この時期の学生にしては異様に起動の動作がぎこちない。まるで、今初めて見たものを見よう見まねで動かしているかのような。

その違和感は万丈目も覚えたらしく、いささか不気味そうに2人の方へ視線をやる。その一瞬だけで、『彼ら』には十分だったのだろう。足元が何かひんやりしたものに包まれた、と思ったらあれよあれよという間に全身が氷のような寒気に包まれていく。せめて万丈目に警告しようと思ったけど、それすらもできない。僕の体なのに、完全に僕の物ではなくなってしまったようだ。

仕方がないので最後の手段としてチャクチャルさんに心の中で通信を、としたところで、普段聞きなれたチャクチャルさんとは違う声が頭の中に響いた。

『すいませんすいませんっ、いやほんと申し訳ないです！ごめんなさいごめんなさいそこの人、すぐ済みますからここは大目に見てください～！』

あ、いい人（？）だ。声を聞けば分かる、間違いなくこれは悪人（？）じゃない。少しだけ警戒心を解くも、それでも体が動かないことに変わりはない。とりあえずコミュニケーションが取れることが分かっただけでもよしとするか。

「（えっと……どちら様で？）」

『ごめんなさい申し遅れました、わたしたちはグレ……ああっ、少しだけ待ってください！すいません、今ちょっと追われてるところなんです！あの人たちに憑りついてるのが私を追いかけてここまで来てるんですけど、あなたデュエリストですよね、少し体借りますごめんなさい！』

「おい、清明！どうしたお前までそんなにぼさっとして！ほら、はじめるぞ！」

「あ、ああ……」

何が言いたいのかさっぱり要領を得ないうえにいまだ僕は喋ることすらできない。だけど、どうやら野中と中野も今は何かに乗っ取られてるらしい。……実質まともな人間が万丈目1人しかいないじゃないの。

「デュエル！」

「「……」」

「なんだかやりづらいな、本当にお前らどうしたんだ？まあいい、まずは俺のターンだ。魔法カード、予想ＧＵＹ（ガイ）を発動！自分フィールドにモンスターが存在しない時、デッキからレベル４以下の通常モンスターを特殊召喚できる。来い、Ｖ―タイガー・ジェット！」

虎を模した戦闘機が、後ろ足型のジェット機から火を噴きつつ万丈目の前でホバリングする。

Ｖ―タイガー・ジェット　守１８００

「さらに俺は、Ｗ―ウィング・カタパルトを通常召喚！」

Ｗ―ウィング・カタパルト　攻１３００

これでＶ、そしてＷの２体がフィールドに揃った。あとはこのまま除外すれば、融合モンスターであるＶＷ―タイガー・カタパルトを特殊召喚することができる。先攻１ターン目から手札消費２枚で融合召喚とは、さすがに万丈目は実力者だ。

「ゆくぞ、ユニオン合体！Ｗは１ターンに１度、自分フィールドのＶに合体して攻守を４００ポイント上げることができる！」

タイガー・ジェットがウィング・カタパルトの上に陣取り、互いに磁気のようなものを放ちつつ２つの戦闘機が上下に合体する。

Ｖ―タイガー・ジェット　守１８００→２２００

「カードを１枚伏せ、ターン終了だ」
「ドロー……」
陰気くさい口調と死んだ目でつぶやきながら、中野がすっとカードを引く。録に見もしないまま、そのカードをモンスターゾーンに乱暴に置いた。
エーリアン・ソルジャー　攻１９００
「エーリアンだと？おいお前、そんなデッキだったか……？」
万丈目の疑問は、誰にも届かない。しょうがない、実質万丈目だけが蚊帳の外状態なんだから。
「こう、げき」
エーリアンの上級戦士が、すらりと伸びた銀色の剣を振りかざす。攻撃力の低いモンスターによる攻撃は一見無謀でしかないが、さすがにただ単に自爆しに来たわけではないようだ。
「はつ、どう」
タイガー・ジェットに向け駆けるソルジャーの足元の影が大きく膨れ上がり、ソルジャー本体を持呑み込んで一回り大きなサイズになる。そのまま勢いは殺さずに突っ込んできたその一撃は、体が大きくなったのに比例して破壊力が増している。
エーリアン・ソルジャー　攻１９００→２９００→Ｖ―タイガー・ジェット　守２２

００

Ｖ―タイガー・ジェット　守２２００→１８００

エーリアン・ソルジャー　攻２９００→１９００

「なるほど、速攻魔法の虚栄巨影を使用して攻撃力を１０００ポイントアップさせたか。だがユニオンモンスターは装備状態の時、戦闘破壊の身代わりにできる！ウィング・カタパルトをパージしてその破壊から身を護れ、タイガー・ジェット！」

万丈目の指令に従い、体の下にあったウィング・カタパルトを切り離して辛くもその太刀から身をそらすタイガー・ジェット。勢いの止まらない剣は、地面に落ちた青い戦闘機を両断したのみにとどまった。

『おおー。あなたの相棒さん、かなりのタクティクスですね！次の反撃を予想してあえて融合しないなんて、すごいです……って、すいません急に馴れ馴れしくしちゃって！怒らないでください、次は私のターンですから！』

「（いやま、それはいいんだけどさ）」

「魔法、はつ、どう。「Ａ」細胞増殖装置。エンド」

なにやら不気味な、無数のコードが伸びたガラスの筒のようなものがフィールドにでん、と置かれる。筒の中はなにやら液体が満たされているようで、無数の気泡が常に立ち上っている。細かいところまでは半透明なためよく見えないけど、何か今筒の中で何

か生き物みたいなものが動いたような……？
万丈目＆清明（？）　ＬＰ４０００
モンスター：Ｖ―タイガー・ジェット（守）
魔法・罠：１
中野（？）＆野中（？）　ＬＰ４０００
モンスター：エーリアン・ソルジャー（攻）
魔法・罠：「Ａ」細胞増殖装置
「では、ドローします」
「お、おい清明……？なんだその喋り方は」
「すいませんすいません、後でまた説明しますから！永続魔法、グレイドル・インパクトを発動！さらにモンスターカード、グレイドル・コブラを召喚します」
「おい！なんだそのカードは、お前のデッキにそんなカードは入っていないはずだ！」
おかしい。これが僕の体である以上、あるのは僕のデッキのはずなのに。グレイドルなる聞いたこともないテーマのカードに、体がほんのりと赤いコブラ。どこか非生物的な何かを思わせるその目が、月の光を浴びて妖しく光った。
「タイガー・ジェットを攻撃表示にしてここで伏せカード、ゲットライド！を発動して、墓地のＷをフィールドのＶにユニオン合体させます」

再び地中から戦闘機が砂を巻き上げながら発進し、空中のタイガー・ジェットとユニオン合体を果たす。これで再び攻守４００ポイントアップだ。

Ｖ―タイガー・ジェット　守１８００→攻１６００→２０００

「バトルします、タイガー・ジェットでエーリアン・ソルジャーに攻撃！」

Ｖ―タイガー・ジェット　攻２０００→エーリアン・ソルジャー　攻１９００（破壊）

中野（？）＆野中（？）　ＬＰ４０００→３９００

「そのままグレイドル・コブラでダイレクトアタック！」

グレイドル・コブラ　攻１０００→中野（？）（直接攻撃）

中野（？）＆野中（？）　ＬＰ３９００→２９００

攻撃を受けたというのに、まったく反応がない２人。改めて、不気味だ。

『すみません勝手に心読んじゃって、これ終わったらすぐ出ていきますから許して下さい！で、でも１つ捕捉させていただきますと、あの２人に憑りついているヒトたちはあまり憑りつきとかそういうのに慣れていないんですよ。いつもの自分の体とはだいぶ使い勝手が違うから困っているんだと思います』

「（キミはえらく得意みたいだね。全然片言じゃないし、体もスムーズに動かしてるし）」

『えへへ、それが私たちの生きる道ですから。って今ちょっと私調子乗ってましたねこんな偉そうなこと言える立場じゃないのにすいません！』

謝るだけ謝って、また体の操作に取り掛かるグレイドルさん（仮称）。なんというか、目まぐるしい。

「カードを1枚伏せて、エンドフェイズにグレイドル・インパクトの効果を発動します。エンドフェイズにデッキからグレイドルのカードを1枚サーチしますね。ドール・コール！来てください、グレイドル・アリゲーター。さあどうぞ、悪いですがあなた方の恨みはてんで的外れです。お願いですからもうわかってください」

「ふざけるな！お前だ、お前が我々の仲間を！」

いまだ片言の中野に憑りついた方とは違い、野中に憑りついた方はこれまで一言も喋らずに野中の体の動かし方をモノにすることにのみひたすら集中していたらしくその喋りはグレイドルさんに比べればぎこちないもののそれなりに聞けるものにはなっていた。

「何を言っても無駄ですね本当に、だったら少し頭冷やしてあげますからかかってきなさい」

「だまれ！スタンバイフェイズ、増殖された「A」細胞がタイガー・ジェットに乗り移る！」

増殖装置の上部のふたが開き、その隙間からぬらぬらと月光を反射する目の生えたぶよぶよした肉の塊のようなものが飛び出る。それは体に生えたかぎ爪のような触手の

ようなものを振り回しながらびちゃり、と気色悪い音を立ててタイガー・ジェットの右前脚部分にしがみつき、金属製のボディーに根を張るかのごとく触手を這わせてしがみついていく。

Ｖ―タイガー・ジェット　Ａカウンター０→１

「そして、ワーム・ゼクスを通常召喚。このカードは召喚成功時、デッキから同法の爬虫類族モンスターを墓地へ送ることができる。ワーム・ヤガンを墓地に送り、墓地からヤガンの効果発動！自分フィールドにゼクス１体しか存在しない時、墓地から裏側守備表示で特殊召喚できる」

ワーム・ゼクス　攻１８００

???（ワーム・ヤガン）

「バトルだ！ワーム・ゼクスでグレイドル・コブラに攻撃！」

緑色の地面にへばりつく十字のような形をしたモンスターが、平べったい体を伸び縮みさせるようにして猛烈なスピードで赤いコブラの近くまで移動する。一瞬のためのち、わっと飛びかかって体の中央にある口でコブラの上半身をいっぺんに食いちぎった。

ワーム・ゼクス　攻１８００→グレイドル・コブラ　攻１０００（破壊）

万丈目&清明（？）　ＬＰ４０００→３２００

　自分のモンスターが破壊されたというのに、グレイドルさんは慌てない。それどころか、僕の顔を使ってニヤリと笑ってさえいる。よく見ると食いちぎられたコブラも変だ。普通モンスターが戦闘破壊されたらさっさと光になるなり爆発するなりして消えるのに、なぜか血の一滴も出ていない銀色の切断面はまるでスライムか何かのようにツルンとしている。そしてその首なしの蛇が、ゆっくりとまるで目が見えているかのように正確な動きで残りの体も全部ゼクスの口の中に飛び込んでいく。
「(うわっ!?)」
『ごめんなさい説明遅れましたけど気持ち悪いとか思わないでくださいお願いします、私たちにとってはこれでいいんです!』
　あいかわらず落ち着きなく僕にそう弁解し、また僕の体でパッと野中に向き直るグレイドルさん。なんだろう、ちょっと見てて面白くなってきた気がする。
「グレイドル・コブラが戦闘破壊されたことで効果発動……相手モンスター１体に憑りつき、その装備カードとなってコントロールを頂きます。今のあなたの場に存在する表側表示のモンスターは１体、ゼクスはこちらで預かりましょう」
　何と緑色だったゼクスの体に銀色の模様が内側から浮かび上がり、その直後にゼクスが体の向きを変えて僕らのフィールドの前まで来た。なるほど、攻撃力１０００のモンスターをなんの伏せカードも伏せずに出したのは、最初から破壊されることを狙ってい

たからなのか。
「なるほど、厄介だな。しかしわが同胞、必ずや取り戻す。カードを伏せてエンドだ」
万丈目&清明（？）　ＬＰ３２００
モンスター：Ｖ―タイガー・ジェット（攻・Ｗ）
　　ワーム・ゼクス（攻・コブラ）
魔法・罠：グレイドル・インパクト
　　Ｗ―ウィング・カタパルト（Ｖ）
　　グレイドル・コブラ（ゼクス）
中野（？）&野中（？）　ＬＰ２９００
モンスター：???（ワーム・ヤガン・セット）
魔法・罠：「Ａ」細胞増殖装置
　　１（伏せ）
「俺のターン、ドロー。なんかお前ら本当に変だぞ、体調でも悪いのか？まあいい、ウィング・カタパルトのユニオンを解除して特殊召喚、そして自分フィールドのＶとＷをゲームから除外し、融合召喚！来い、ＶＷ―タイガー・カタパルト！」
ＶとＷが合体を解除して螺旋を描くようにぐるぐるとまわりながら上空へと駆け上り、はるか高くで１度光を放ったかと思うと再び合体して地上に降りてきた。一見する

と何一つ変わっていないように見えるが、少なくともさっきまでくっついていた「A」細胞の姿はもうそこにはなかった。
「甘い！トラップ発動！」
「なに、奈落の落とし穴だと!?」
　せっかく融合合体したマシンも、奈落に引きずり込む落とし穴の前には無力だ。さっきまでの活躍が嘘のようにあっさりと消えていく融合モンスターを一瞥して、すぐに次の手を打つ。
「ならば、モンスターを1体セットだ。そしてバトルフェイズ、ゼクスで裏側のヤガンに攻撃！」
「ヤガンの守備力は１８００のため破壊されず、さらにヤガンが表になった時相手モンスターを1体手札に戻す」
　ワーム・ゼクス　攻１８００→???　守１８００
　どことなくYの字のシルエットをした黄色いワームが、ゼクスの噛みつきを辛うじて払いのける。だが万丈目の目に慌てた感じはない。それどころか、笑ってさえ見せた。
「そんなことはわかっているさ、だがこれでヤガンの効果は使わせた。さあ、どちらのモンスターをバウンスする？」
「何？」

「俺は今、ヤガンの効果を承知したうえでこのモンスターをセットした。この意味をよく考えてから、バウンス対象は選ぶことだ」
なるほど、これはえげつない精神戦だ。万丈目の言葉が単なるハッタリなのか、それともあの伏せモンスターがリバース効果持ちのカードなのか。僕にもその本当のところはわからない。やがて迷いながらも、野中……に憑りついた何かがモンスターのうち片方を指さす。
「帰って来い、ゼクスよ」
「なるほど、俺のモンスターを残す方を選んだか。まあ構わん、カードを1枚伏せてターンエンドだ」
果たしてこれが吉と出るか、凶と出るか。ただ次のターンプレイヤーである中野に憑りついた奴にとっては、こういった複雑な読み合いはあまり好きではないらしい。
「ドロー」
スタンバイフェイズにはなったが、こちらのフィールドに表側モンスターが存在しないため増殖装置の蓋は開かない。筒の中でもぞもぞと先ほど見た細胞がうごめいているのを横目に見ながら、ソルジャーに次ぐ2体目のエーリアンがヤガンの隣に現れる。
「召喚、エーリアン・ウォリアー。ヤガンも攻撃表示に」
灰色の体をした筋骨隆々のエーリアン。剣を使うソルジャーとはまた違った、いかに

も格闘戦士という見た目である。
　エーリアン・ウォリアー　攻１８００
　ワーム・ヤガン　守１８００→攻１０００
「ウォリアー、ヤガンで攻撃」
「むっ、恐れずに突っ込んできたか。これはどうしようもないな。諦めろ」
『ひ、ひどいわよアニキー！いやー!!』
　エーリアン・ウォリアー　攻１８００→???　守１０００（破壊）
　文句の叫びとともに、完全にブラフでしかなかったおジャマ・イエローがあっさりと引き裂かれる。がら空きになった万丈目を、ヤガンの一撃がとらえた。
　ワーム・ヤガン　攻１０００→万丈目（直接攻撃）
　万丈目＆清明（？）　ＬＰ３２００→２２００
「ちっ、一撃喰らったか」
「（万丈目！）」
『ああああもとはといえば私のせいであなたのご友人さんにまでご迷惑かけてごめんなさい！』
「（い、いやそんなに謝らなくても大丈夫だから、ね？）」
「セット。ターン、エンド」

万丈目&清明（？）　ＬＰ２２００
モンスター：なし
魔法・罠：グレイドル・インパクト
　　１（伏せ）
中野（？）&野中（？）　ＬＰ２９００
モンスター：ワーム・ヤガン（攻）
　　エーリアン・ウォリアー（攻）
魔法・罠：「Ａ」細胞増殖装置
　　１（伏せ）

「私のターン、ここで先ほどの布石を使いますね。グレイドル・アリゲーター召喚！」
地面に銀色の染みが広がったかと思うとそれがみるみるうちに質量を増して銀色の水たまりとなり、ぶくぶくと泡立って緑色のワニのような姿になる。
グレイドル・アリゲーター　攻５００
「またステータスの低いモンスターか」
「そして永続魔法、グレイドル・インパクトのさらなる効果を発動します！このカード以外のグレイドル１枚と相手フィールドのカード１枚、その伏せカードを選択して破壊する、グレイ・レクイエム！」

アリゲーターが飛びかかり、伏せカードを大きな口で噛み砕く。だがその寸前伏せカードが持ち上がり、ウォリアーの体がいきなり数倍にも膨れ上がって音もなく爆発した。

「惑星汚染ウイルス、活動開始。味方以外のＡカウンターが乗った全生命体を駆逐し、その後もウイルスが相手フィールドに３ターンの間とどまりあらゆる生命体に寄生する」

野中の暗い声をバックに、こっぱみじんになったウォリアーの肉片が空中でもぞもぞと動き出す。ふわふわと空中を漂うそれにはどれも目があり触手があり、空中に漂うためか羽のような形状のおぞましい部位がついていた。

「私のグレイドルコンボが封殺されましたか……」

「落ち着け、清明。俺のセットカードだ、こんなこともあろうかと用意しておいてよかった」

「セットカード?……なるほど、ありがとうございます。リバースカードオープン、ＤＤＲ（ディファレント ディメンション リバイバル）！手札１枚をコストに、除外されたモンスターを特殊召喚してこのカードを装備です。ＶＷ―タイガー・カタパルトを再び召喚、そのままヤガンに攻撃！」

「ウイルス、感染」

「覚悟の上です！」

フィールドを不気味な細胞が支配する中、空のかなたから無数のミサイルが放たれて黄色のワームを一瞬で燃えカスに変える。遅れて、２台の戦闘機が融合を果たしたマシンが戦場に参戦した。だが、その全身にＡ細胞が侵食していく。

ＶＷ―タイガー・カタパルト　攻２０００→ワーム・ヤガン　攻１０００（破壊）

中野（？）＆野中（？）　ＬＰ２９００→１９００

ＶＷ―タイガー・カタパルト　Ａカウンター０→１

「自身の効果で特殊召喚されたヤガンは、フィールドから離れるとき除外される……」

「そうですか。破壊効果を発動したターン、インパクトはサーチ効果を使用できません。ターンエンドです」

「ゼクス、ヤガン、お前たちの仇はきっととる……！ドローだ。スタンバイフェイズにＡ細胞が増殖されるが、この手札なら意味はないな」

怒りに燃える野中が、自身の変化したデッキからカードを引く。よほどいいカードを引いたらしく、口の端が笑いに歪んだ。

ＶＷ―タイガー・カタパルト　Ａカウンター１→２

「魔法カード、ワーム・コールを発動。自分フィールドにモンスターが存在しないならば、手札のワーム１体を裏側守備表示で特殊召喚することができる。俺はこの効果でレベル７、ワーム・ヴィクトリーをセット。そして魔法カード、太陽の書を発動！」

「（自分で伏せて自分で反転？）」
『これは……ごめんなさい私のさっきのコンボが決まらなかったせいで、今割とピンチです』
　相変わらず平謝りしながらも、グレイドルさんの声にはいささか緊張の色が見える。そうか、今そんなにきついのか。……ふーむ。
「ワーム・ヴィクトリーはリバースした時、ワーム以外の表側表示モンスターをすべて破壊する！吹き飛べ、タイガー・カタパルト！」
「何？貴様、俺のウイルスコンボを阻害する気か！」
「何か勘違いしているようだが、お前とは今回たまたま利害が一致しただけでいちいちお前のデッキの都合に合わせるつもりはない。ヴィクトリー、そこの鉄くずを握りつぶせ！」
　微妙な仲間割れを尻目に、赤い体に６本腕を持つ全身粘液で光る爬虫類とは名ばかりの異星の生物の指が戦闘機の鋼鉄のボディーをまとめて掴むと、ほとんど力を入れた様子もなくそのまま驚異的な握力で握りつぶした。
「だがこれだけではない。ヴィクトリーの攻撃力は、墓地に存在する爬虫類ワームの数の５００倍となる。今のままでは攻撃力０というところだが、このカードを使えばどうなると思う？魔法発動、スネーク・レイン！手札１枚をコストに、デッキから爬虫類族

モンスターを４体墓地に送る！」
「（４体!?それじゃあ最高で……）」
『口をはさむようで申し訳ありませんが、今手札コストにしたのもワームモンスター、ディミレクスですね。どどどうしましょうあれもこれも私のせいで、本当なら先ほどのターンで私が華麗に勝利しているつもりだったんですけど失敗しちゃってすいません～！』
　つまり、一気に墓地にモンスターが５体も増えることになる。どうすることもできずに僕らが見ている前で野中は、デッキから抜き取ったイーロキン、アポカリプス、テンタクルス、ホープの４枚をこれみよがしに見せびらかしつつ墓地へ１枚ずつ送り込んでいく。
　ワーム・ヴィクトリー　攻０↓２５００
「Ｄ（ディミレクス）、Ｅ（イーロキン）、Ａ（アポカリプス）、Ｔ（テンタクルス）、Ｈ（ホープ）の５体だと?フン、随分と悪趣味な選出だな」
　憎まれ口をたたく万丈目も、目の前の圧倒的攻撃力を前にその表情は険しい。っていうか、ＤＥＡＴＨ（死）、ね。恥ずかしながら全っ然気づかなかったぞ僕。敵ながら、なかなか洒落たことやってくれるじゃないの。
　などと感心している暇はない。グレイドルさんが何をやらかした、あるいはやらかしたと思われてるのかはとにかくとしてもやられているのは僕と万丈目だ。なら、このま

まやられたら僕らにとってはまさにやられ損以外の何でもない。
「（ねえ、ちょっと！）」
『もうこれは駄目ですかね、ごめんなさいすいません私のわがままに無理やり付きあわせたりして……』
「（いいから聞いて！なんで手札もまともに見ようとしないのさ、悪いけどちょっと体返してもらうよ！）」
『へ？あ、あの……？』
　ちなみにこの会話がだいたいコンマ５秒といったところ。チャクチャルさんと話す時もそうだけど、頭の中で会話するときはなんだか妙に時間が流れるのが遅い。もっともそのおかげで、こうやって作戦を立てることもできるんだけど。
「これで終わらせる！ヴィクトリーでダイレクトアタック！」
「いいや、まだまだデュエルは続けるさ！直接攻撃宣言時、手札からゴーストリック・フロストの効果発動！攻撃モンスターをセット状態にして、このカードを裏側守備表示で特殊召喚！」
　ヴィクトリーの縦横無尽なパンチの連打が届く寸前に目の前にずどんと落ちてきた雪玉が、うまいこと一時的にとはいえヴィクトリーを押しつぶす。驚いた様子の万丈目に対し、どうにか笑いかける。むう、やっぱり急にコントロール取り戻したからか今一

つ体の反応が鈍い。
「ふぅー、危ない危ない。ごめんね万丈目、迷惑かけて」
「な、なんだいきなり。……だが、いつものお前に戻ったようだな。あとで何があったのか教えてくれ」
「前向きに考えとくね。とりあえず、次のターンはよろしく万丈目」
僕のしたことは本当にただの時間稼ぎでしかない。フロストの相手を裏側守備表示にする効果が仇となり、次に相手にターンを回したらもう1度ヴィクトリーのリバース効果を使われてしまう。だから、万丈目がいかにしてヴィクトリーを処理するかにかかっているのだ。
万丈目&清明（？）　ＬＰ２２００
モンスター???（ゴーストリック・フロスト）
魔法・罠：グレイドル・インパクト
備考：惑星汚染ウイルス感染中
中野（？）&野中（？）　ＬＰ１９００
モンスター：???（ワーム・ヴィクトリー）
魔法・罠：「Ａ」細胞増殖装置
「よろしく、か……ああ、任せておけ。だが、１つ訂正させてもらおう。俺は万丈目、サ

ンダーだ！俺のターン、ドロー！」

何か秘策があるのか、いつも通り自身に満ち溢れた様子でカードを引く万丈目。

「魔法カード、黙する死者を発動。これにより、俺の墓地に存在する通常モンスター１体を守備表示で特殊召喚することができる。甦れ、おジャマ・イエロー！」

『またまたアタイの出番なのね～？今度こそ活躍させてもらうわよ！……て何よこれ!?こんなフィールドにアタイを呼ぶなんて、アニキの人でなし～!!』

先ほど戦闘破壊されたイエローが再び復活する。だけど、その体にも対象を選ばない節操なしな汚染ウイルスは付着する。

おジャマ・イエロー　守１０００　Ａカウンター０→１

「そんな雑魚モンスターをフィールドに揃えたところで、私のヴィクトリーは守備力２５００。どうあがいたところで勝てはしない！」

「誰がこの雑魚で戦うといった？俺はフィールドのおジャマ・イエローと、ゴーストリック・フロストをリリースしてアドバンス召喚！出でよ、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）！」

『アタイの出番これでおしまいなの～!?』

２体のモンスターをリリースして召喚されたのは、ずいぶん久しぶりに見る万丈目の切り札の１枚。体のきっかり半分がしみひとつない純白、もう半分はこれまた一切の妥協がない漆黒に色分けされた白黒の竜。特殊召喚できないというデメリットを補って

余りある、圧倒的な制圧力を誇る２色のドラゴンだ。
光と闇の竜　攻２８００　Ａカウンター０→１
「なるほど、アドバンス召喚で最上級モンスターを出してきたか。だが、そんなことをしたところでヴィクトリーに攻撃すれば実質的に相打ちに持ち込める！」
「ならば貴様の言う通りになるかどうか、試してやろうじゃないか。バトルだ、光と闇の竜でワーム・ヴィクトリーに攻撃、シャイニングブレス！」
「ヴィクトリーは戦闘破壊されるが、リバース効果発動！フィールドのワーム以外のモンスターをすべて破壊だ」
真っ白い光のブレスが放たれ、ワームの強者を一瞬で薙ぎ払う。苦し紛れに伸びたヴィクトリーの腕がその首を締め落とさんと腕自体に意志があるかのような正確さでドラゴンの首を狙うが、その腕を尾の一撃でたたき落とす。
光と闇の竜　攻２８００→???（ワーム・ヴィクトリー）　守２５００（破壊）
光と闇の竜　攻２８００→２３００　守２４００→１９００
「バカな!?」
「これこそが光と闇の竜の効果だ。チェーンブロックを作るあらゆる効果の発動を、自身の攻守を５００ポイント下げることで強制的に無効化する」
「お前、あれだけ偉そうなこと言って、この結果がこれか」

「黙れ……！」
　こっちが何も言わなくても勝手に相手がパートナーを怒らせたり煽ったりしてくれる。分断工作を考えなくていいのは楽なもんだ。
　とはいえ、楽観ばかりはしていられない。光と闇の竜の効果は確かに強力だけど、それは強制効果という分類上カード効果が発動されたら嫌でも無効化しなければならないという弱点も含んでいる。つまり、もし中野の手札に無駄打ちできるカードとある程度のアタッカーがいればこの大型ドラゴンもあっさり突破されてしまうということだ。
「俺は、これでターンエンドする」
　だが、万丈目はそれを本当に分かっているのか、何もしない。ただいつものように不敵に笑い、自身のモンスターに全てを任せるのみだ。
「俺の邪魔するなら、もうパートナーなど必要ない。お前には頼らん、１人で勝つ。ドロー、スタンバイフェイズ、「Ａ」細胞増殖装置が起動！」
「くっ……光と闇の竜は、チェーンブロックを作る効果を無効にする……」
　光と闇の竜　攻２３００→１８００　守１９００→１４００
「これでは終わらん。通常魔法、侵食細胞「Ａ」発動」
「光と闇の竜……効果発動だ」
　光と闇の竜　攻１８００→１３００　守１４００→９００

「貪欲な壺」
光と闇の竜　攻１３００→８００　守９００→４００
強制効果の乱用により、あれよあれよという間に光と闇の竜の攻守はそこらのレベル３モンスターにも吹き飛ばされるような数値にまで落ち込んでしまう。守備力が５００未満になったため、これ以上下がることがないのが救いといえば救いだけど。
「エーリアン・ハンター」
体中に青い球体を持つ、ウォリアーよりもややシャープな見た目に巨大な三つ叉の槍のような武器を抱えたトカゲ戦士といった風体の宇宙人。その目には確かに知性の光が宿っていた。
エーリアン・ハンター　攻１６００
「エーリアン・ハンターはＡカウンターが乗った相手を戦闘破壊した際、連続攻撃の権利を得る」
「なんだって!?」
『ああどうしましょうどうしましょう、今度こそどうすればいいんでしょうかこれ!?』
「安心しろ、清明」
ハンターの攻撃力は、今の光と闇の竜より８００多い。そして光と闇の竜が戦闘破壊されたら、フロストもいない今度こそ攻撃を防いでくれるモンスターはいない。１６０

０のダイレクトが直撃で、僕らのライフは０だ。
だというのに、万丈目は安心しろという。どう安心すればいいんだろうか。
「……万丈目！」
「万丈目サンダー。慌てるな、みっともないぞ。この俺が安心しろと言っているんだ、少しは信じてくれ」
「むぅ」
何を言っても無駄そうなので、仕方なくこちらに槍を構えて突っ込んでくるハンターに向き合う。あの勢いからいって、おそらく光と闇の竜を串刺しにした勢いを利用してそのまま突っ込んでくる気だろう。
「やれ、エーリアン・ハンター」
エーリアン・ハンター　攻１６００↓光と闇の竜　攻８００（破壊）
万丈目＆清明　ＬＰ２２００↓１４００
無防備な腹の、ちょうど白と黒の境目に槍が突き刺さる。だが２色のドラゴンはそのまま消えたりせず、槍が刺さったまま最後の力を振り絞ってハンターを突き飛ばした。
「む？」
「かかったな、馬鹿が。光と闇の竜のもう１つの効果は、自身が破壊された時に発動される。自分フィールドのあらゆるカードを道ずれに破壊する代わりに、空になったフィー

ルドにモンスターを墓地から蘇生させる！清明、お前のモンスターをだ！」

『ええ、そんな効果もってたんですかあのドラゴン、』

そうか。万丈目は最初から光と闇の竜の能力を逆手にとって相手にアタッカーを出させ、その上でさらに攻撃力の高いモンスターを出すのが狙いだったのか。そして、僕らの墓地にはさっきグレイドルさんがＤ・Ｄ・Ｒのコストで墓地に送ったモンスターが僕のデッキ最強モンスター（固定値）が存在する！

「オーケイ万丈目。甦れ！青氷の白夜龍（ブルーアイス・ホワイトナイツ・ドラゴン）！」

最後の力も消え、静かに消えていった白黒のドラゴンに入れ替わるかのように天空から冷風を纏いつつふわりと降りてきた氷のドラゴン。手札コスト様様だ。

青氷の白夜龍　攻３０００

「バカな!?こんな方法で最上級モンスターを呼びだすだと!?」

「勝ちを急いだお前の戦術ミスだ。貪欲な壺を光と闇の竜に無効にさせるのではなくメイン２まで温存していたら、そのドローでまだ何かできたかもしれん」

ドヤ顔でそういう万丈目の言葉を、手札０でできることもない中野に代わって次にターンが回ってきた僕が引き継ぐ。

「もっとも、そうしなくちゃ戦闘破壊からの連撃を考えてもギリギリこっちのライフは削りきれてなかったわけだけどね。だからまあ、誰が悪いわけでもないさ」

『すごいなんか堂に入ってますね！セリフに渋みというか迫力が出てますよ２人とも！』

「だ、だがハンターの攻撃力は１６００で貴様のモンスターは３０００、こちらのライフを削りきるにはまだ５００ほど足りていないはずだ」

「それはどうかな、ってね。僕のターンに永続魔法、水舞台装置（アクアリウム・セット）を発動して自分フィールドのみの水属性モンスターの攻守を３００アップ。さらにペンギン・ナイトメアを場に出すことで自分フィールドの水属性はさらに攻撃力２００アップ。これでエーリアン・ハンターに攻撃、孤高のウィンター・ストリーム！」

青氷の白夜龍　攻３０００→３３００→３５００→エーリアン・ハンター　攻１６００（破壊）

中野（？）＆野中（？）　ＬＰ１９００→０

「お、おのれ……」

「この役立たずめ、お前のせいで負けたんだぞ」

「こちらのセリフだ。……だがまあ、約束は約束だ。いいだろう、俺たちは帰る」

約束？だがその意味を聞く前に、中野と野中の体が糸の切れた人形のように地面に崩

れ落ちる。かすかに寝息が聞こえるところを見ると、単に眠っているだけのようだ。
「いよしっ、お疲れ万丈目」
「ああ。そういえば、結局あのグレイドルとかいうカードはなんだったんだ?」
「おっと、そうだった!そろそろ、僕の体から出て行ってもらえないかな?」
諭すように呼びかけると、僕の足のあたりをなにかが這う感触がした後で足元に銀色の水たまりができる。先ほどアリゲーターが出てきたときのように震えつつふくらみ形を変えるそれは、今度は色は銀色のままで大きな頭に長い指の上半身とスライム状の下半身を持つ、いわゆるグレイ型宇宙人の変身途中といった風体になる。とっさに万丈目が身構えるが、僕はそれをじっと見ていた。さっきまで話していたグレイドルさんがこれだと感覚でわかったからだ。
「えーっと……一件落着、でいいのかな?」
『ええはい、もちろんです~!本当に本当に申し訳ありませんでした、おかげで私の命もこうして……』
「お、お前は何者だ!?」
『あなたはこちらの方の相方さん、あなたにもご迷惑をおかけしました、って私まだ自己紹介も済ませてませんね、本当に失礼なことをしてしまいすいません!』
本人はこう言っているが、自己紹介されなくても何となくの想像はつく。よく見ると

その体はＵＦＯともども砂浜の色と微妙にかぶっているせいでわかりにくいが半透明で、ちょうど見慣れたハネクリボーやらおジャマ三兄弟ぐらいの薄さだったからだ。

『私はデュエルモンスターズの精霊、グレイドル・スライムといいます。どうもおふた方は精霊が見える人間のようで、それに甘えるような形となってしまいほんっとうにご迷惑を掛けました』

「わかったわかった、わかったから何があったのか説明してちょうだい？」

その後何度も挟まる悪気のない謝罪に話を中断されながら聞いたところによると、どうもあの２人、何となく察していた通りエーリアンとワームの精霊に誤ってさっき墜落した宇宙船をぶつけてしまい、それでひたすら追いかけられていたらしい。……だからって精霊世界から現実世界に来たりすんのかな、とかこれそもそも悪いの全部こいつなんじゃ、とかいろいろツッコミどころはあるけれど、とにかくちょうどそのとき近くにいた人間の体を使ってデュエルモンスターズの精霊らしく決着をデュエルでつけることにしたらしい。俺が勝ったらなかったことにしてもらおう、という奴だ。まあこの部分はデュエリストなら至極当然だね。

『そういうわけでＵＦＯも自動修復装置が仕事を終えている頃でしょうし、私そろそろ自分の世界に帰りますね。お騒がせして申し訳ありませんでした』

ナメクジのように、といえば聞こえは悪いが、本当にそうやってずるずると宇宙船に

向けて進んでいくグレイドル・スライム。その背中を見送ろうとして、忘れていたことを思い出した。

「あれ、待って待って!このグレイドルカード、君のでしょ?ちゃんと持っていかないと」

『いえいえとんでもありません、今回迷惑をおかけしたせめてものお詫びの品だと思っておいてください~。って、なんか押しつけがましいですね最後まですいません、いらなければ海に捨ててもらっても全然かまいませんので!』

「でも……」

『それに、さっきまた勝手に心の中を覗いてしまって。そのことは申し訳ないですしこんなこと言うのも差し出がましいようですが、今あなたデッキに迷いがあるんですよね?レベルもステータスも低い私たちですが、せめて何かお役にたてるようでしたら喜んで力をお貸ししますので!では、さようなら!』

それ以上は声をかける暇もなく、宇宙船が宙に浮きあがる。その後カクカクと何度も左右に曲がりながら上昇し、あっという間に見えなくなった。

「さて、俺はもう寝るとするか。清明、お前も寝坊するなよ?お前の作る朝飯はホワイト寮で食うものとは比較にならんほど美味いんだからな、寝過ごしたりして朝から俺の期待を裏切ったりしたら承知しないぞ」

『んもーアニキったら、相変わらず素直じゃないんだから～』
「なっ!?ええい黙れ鬱陶しい、この雑魚モンスターめぇ!」
『キャー、アニキが照れたー!』
騒がしく帰っていく万丈目とおジャマ・イエローを見て、手元のデッキに目を落とす。グレイドル、か。これからよろしく、という意味を込めてそっとデッキを撫でてから、腰のデッキケースにまとめて戻した。

ターン６６　未知の鉄砲水と帰ってきた『Ｄ』

……もう、朝か。

ふと気がつけば窓の隙間から差し込んできている日の光に目を覚まされ、ぐっと体を持ち上げる。机に突っ伏した姿勢で寝ていたのと昨日のデュエルのせいで最初のうちは若干ぎこちなかったが、少し手足を動かすうちにどうにか調子が戻ってきた。

「……できた」

誰に聞かせるでもないが、ぽつりとつぶやく。机の上には大量のカードが広げられ、その中心にはきっかり５９枚のカードの束が置かれている。気がつけば寝落ちしていたけど、ほぼ一晩かけて組み上げたこれが僕のデッキ。純粋なパワー勝負では他の属性に一歩劣る水属性がそれに対抗すべく生み出した、全く新しいコンセプトを基にする新デッキだ。

そしてこのデッキを作り上げた今、僕がすることは決まっている。手早くデッキとカードを所定の位置にしまってからくるりと身をひるがえし、とっとと部屋から出て行った。……まずい今何時だこれ、さっさと朝ご飯作んないとみんなに迷惑かける！

「そういえばさ、皆ジェネックスってどんな感じなの？」
「このメンバーの中では、俺が一番メダルは多いだろうな。もう数十個は集めたから、持ち歩くのに不便でしょうがない」
　ふと気になったので朝食を食べながら話題を振ってみると、やはり万丈目がトップらしい。その言葉通り、ちょっと服を広げると内ポケットにはぎっしりとメダルが詰まっていた。あーあそんな乱暴に詰め込んで、ポケット破けたら誰が縫い直すと思ってるんだか。
　それは向こうから頭を下げてくるのを待つとして……待てよ、万丈目のことだから敗れたら即新品を買う可能性もあるのか。それはともかくとして、他に気になっていたことを聞いてみる。
「そもそもこのジェネックスってさ、いつまでやるんだっけ」
「さあな。ただ、こんな機会が次もあるとは限らないんだ。できるだけたくさんのプロとデュエルしないとな！……ヘルカイザーだって、いつまでこの島にいるのかわからないし。今結構仕事の予定があって、ジェネックスに参加したのも本人の希望があったかららしいぜ？」
「へー。まあ、今レッド寮で生き残ってるのは十代と万丈目だけなんだから、あんまし無

茶はしないようにね？」
　こう言いはしたけれど、この２人がことデュエルに関して僕の言うことを聞くわけがないからあまり気持ちがこもった言葉ではない。僕だって同じこと言われたら当然のごとく無視するだろう。もっとも、自分たちの好きにやらせたって実力で勝ち残るタイプだからそれ以上の追及はしないでおくけど。
　あとは他愛無い話をしながら朝食を終え、洗い物まできっちり済ませてから出発準備中の２人に声をかける。
「さてと、僕もこのデッキ試したいし、ちょっとプロに頭下げて対戦してもらってくるねー」
「ん？それなら俺が相手に……」
「そう言ってくれるのはありがたいんだけどさ、やっぱり僕もこの機会を逃したくないんだよね。全国のデュエリストがこの島に揃ってる、こんなデュエルの神様がくれたみたいなビッグチャンスをさ」
「そうか、わかった。じゃあ、お互いワクワクするデュエルをしてこような！」
「もちろん！じゃ、お先ー」
　最後にもう一度だけディスクとデッキを確認し、他のメンバーより先に外に出る。せっかくだし、所属のラーイエローで先のデュエルのダメージを癒してる翔の見舞いに

でも行こうかな。

……と思ってからたった数分。なんだか妙にこそこそしているエドの姿を見つけ、いつも堂々とした態度の彼がこそこそと動いている異質さにいっぺんに興味がそっちに移ってしまった。ごめん翔、と心の中で一度謝ってから、その後をゆっくりついていく。

「……何の用だ？今は取り込み中なんだ、あとにしてくれ」

「なんだ、ばれてたのね」

「プロになると、マスコミやパパラッチのせいで嫌でも感覚が鋭くなるからな。お前の尾行に不備があったわけじゃない、むしろ僕が会った中でもトップレベルだ」

「昔はもうちょい完璧だったんだけどねー、こっち入学してからすっかり鈍っちゃったかね。ま、それはまた考えればいいか。どうせばれたんならはっきり聞かせてもらうけど、何やってんの？」

ちょっとした崖の下の砂浜、普通に道を歩いていればまず見えない位置にわざわざ立ち寄ったかと思ったら、その場で振り返って開口一番にこれだ。遠まわしに聞こうとする余裕はなさそうなので、ずばりと本題に入る。だがエドは馬鹿にするように鼻を鳴らし、元の方向に戻ろうとした。

「なんでそれを言う必要がある？だいたい、センパイはつい昨日僕に負けたじゃないか。

力もないくせにむやみに首を突っ込みたがるのはやめておくことだ」
うぐ。まったくの正論に一瞬言葉が詰まるが、腰につけたデッキの重みにすぐに気を取り直す。そう、僕はもうこれまでとは違うのだ。エドも背を向けた状態ながらその自信を察したらしく、ほんの僅かに不敵な、それでいて嬉しそうな笑みを浮かべながらもう一度振り返る。
「どうやら、何か掴んだようだな。面白い、予定変更だ……と言いたいところだが、生憎僕にも外せない用事がある。斎王の相手が終わったら、また相手になってやろう」
「斎王の……？」
どういうことだろう。確かにちょいちょい気になる部分はあったけど、それでもエドは表だって斎王に刃向うような真似はしないと思っていたのに。本人も僕の顔を見て少し喋りすぎたと後悔したらしく、これ以上余計な情報を出すまいとさっさと退場しようとした。その前にさっと回り込み、ニコニコと笑いかける。
「……もうこれ以上話すことはない」
「まあまあ」
案の定のつれない言葉にもにこやかに返し、そのタイミングでスッと表情をまじめなものに変える。この切り替えが肝心で、うまいことやらないと相手を怒らせるだけで終わってしまうが成功すればぐっと精神的に優位に立つことができる。言い換えれば、相

手が勝手に警戒したりビビったりしてくれるのだ。今回は成功したらしく、明らかにエドの表情が変わった。

「斎王には僕も色々と恨みがあるんでね。もちろん僕だけじゃなくて、十代や万丈目たちだって立派な被害者さ。それを差し置いて自分だけで突っ込んでこうだなんて、ちょーっとムシがよすぎるんじゃない？」

「くっ……」

ここでもしエドがほんの少しでもいつもの冷静さを取り戻したら、多分僕がいくら探りを入れても無駄だったろう。というかそもそも、今僕が言っている理論にかなり無理があることにだって気づけたはずだ。もしエドが斎王を止めようとしているのなら、付き合いが一番長いエドにその権利があるだろうし。だけど、この時のエドはほんの少しだけそれが足りていなかったのだ。正確に言うと、足りなくなるように誘導したんだけど。

ただ正直なところ、僕としては近々光の結社に殴り込みをかける予定だったからエドにもそれに参加してほしかっただけなのだ。今のままだといくらなんでも人数差がありすぎるから、ここでエドほどのデュエリストが味方になるとぐっと頼もしさが増す、そんな程度の考えだった。だけどエドの一言で、また自体は僕の予想外の方向へ動き出してしまう。

「わかった。なら、今すぐここでデュエルしよう。僕が勝てば、今度こそ誰にも邪魔はさせない。それなら文句はあるまい」
「あー、いや……」
　参ったな、そう来たか。微妙に言っていることがずれていることを教えようとして、寸前で思いとどまった。心のどこかに、昨日のリターンマッチがしたいという思いがあったのも否定しきれない。どれだけあーだこーだと言ったとしても僕もエドも本質はデュエリスト、常に戦いを求めるタイプなのだ。
「……そう来なくっちゃ。それじゃ、デュエルと洒落込もう！」
「フン。どうせやるからには、また昨日のように無様な真似を見せるなよ？」
「「デュエル！」」
　昨日のエドとのデュエルではエドが先攻だった。だからというわけではないだろうが、今度は僕が先攻だ。本当はドローできる後攻の方がよかったけど、まあ贅沢は言ってられない。
「まずはこのカード。グリズリーマザー、守備表示！」
　グリズリーマザー　守１０００
「これでターンエンド」
「良くも悪くも無難な立ち上がりだな。僕のターン、ドロー！カモン、終末の騎士！この

カードは場に出た時、デッキの闇属性モンスター1体をセメタリーに送ることができる。この効果で、ダッシュガイをセメタリーへ」

　この次に繋げるための布石であろう一手を止める手段は、ない。だけど、ここでエドには選択の余地が生まれた。すなわち、グリズリーマザーに攻撃するか否かだ。属性リクルーターであるグリズリーマザーで引っ張ってこれる最高打点は１５００、そして終末の騎士の攻撃力は１４００。普通に考えれば、攻撃したら返しのターンで返り討ちになる。

「終末の騎士で、グリズリーマザーに攻撃！」

　ギラリと光る一刀が振り下ろされ、青い熊が両断される。エドは攻撃してきた。それはつまり、彼にその後の策が何かあるということに他ならない。

　だけど、こっちだって馬鹿じゃない。何か企んでいるというのなら、新しい力で相手するまでさ。

「グリズリーマザーの効果でデッキから攻撃力１０００、グレイドル・コブラを特殊召喚！」

「何、攻撃力１０００だと!?」

　地面に銀色の水たまりが染み出し、ぶくぶくと泡立ちながら赤いコブラの姿になる。

　グレイドル・コブラ　攻１０００

「グレイドル……？なるほど、それがお前が手に入れた力か。いいだろう、カードを１枚伏せてフィールド魔法、幽獄の時計塔を発動！」

修学旅行でも見た、不気味な夜の時計塔。今はまだ１２時を指しているけれどあの時計は僕のターンが来るたびに３時間ずつ時を刻み、再び１２時を指した時に恐ろしい囚人が解放される。

「これで、ターンエンドだ」

清明　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：グレイドル・コブラ（攻）

魔法・罠：なし

エド　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：終末の騎士（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

場：幽獄の時計塔（０）

「僕のターン、ドロー」

「この瞬間、時計塔の針が動く！」

「いいや、針は動かさせないね。相手フィールドのカードが発動したことで手札から幽鬼うさぎの効果発動、手札またはフィールドのこのカードをリリースしてそのカードを

破壊する！ドレッドガイのギミックはよく知ってるんだ、そう簡単に開放はさせないよ」

時計台の前に立つ銀髪の少女が、ゆっくりと動き始めた針めがけて腰に差した鎌を投げつける。見かけからは想像できないほどの力で投げられたそれは一直線に文字盤に突き刺さり、時計台はゆっくりと崩れ落ちた。それを見た少女は無表情ながらもどこか満足げに頷き、時計台の残骸には目もくれずに引き返す。

これでエドのペースはだいぶ崩せたかと思ったが、いまだその表情に変化はない。確かにエドのエースはまだもう1体、ドグマガイが控えている。

「さらにこのターンに、ハリマンボウを通常召喚」

ハリマンボウ　攻１５００

さて、どうしようか？このターングレイドル・コブラで自爆特攻して終末の騎士のコントロールを奪い、2体でダイレクトアタックすれば総ダメージはだいぶ高くなる。一応そういう戦術もあるにはある。でも、やっぱり自爆特攻はやりたくないな。

「バトル、ハリマンボウで終末の騎士に攻撃！」

「いいだろう、受けよう」

ハリマンボウ　攻１５００→終末の騎士　攻１４００（破壊）

エド　ＬＰ４０００→３９００

「コブラでダイレクトアタック！」
「それは通せないな。速攻魔法発動、スケープ・ゴート！４体の身代わり羊が現れ、プレイヤーへの攻撃を妨害する」
　グレイドル・コブラ　攻１０００↓羊トークン　守０（破壊）
「１枚セットして、ターンエンド」
　不本意ながらもターンを明け渡す。これでエドの場には３体のトークンが揃ってしまったわけだ。……でも、うさぎちゃんを使ってしまった今となっては今度こそ手札誘発はない。
「僕のターン、ドロー。カモン、ダイヤモンドガイ」
　Ｄ―ＨＥＲＯ（デスティニーヒーロー）　ダイヤモンドガイ　攻１４００
「そしてダイヤモンドガイのエフェクト発動！デッキトップのカードが通常魔法ならば、その効果のみを次のターンに発動することができる、ハードネス・アイ！」
　デッキトップは……通常魔法、火炎地獄。高いバーン性能を持つ厄介なカードだ。だけど、今はそんな先のことを心配している余裕はないわけで。
「羊トークン２体とディーヒーローであるダイヤモンドガイをリリースすることで、このカードは特殊召喚できる！カモン、ドグマガイ！」
　Ｄ―ＨＥＲＯ　ドグマガイ　攻３４００

……早い！いつか来るかとは思ってたけど、こんなに早く召喚されるとは。昨日のデュエルで嫌と言うほどその強さを見せつけた最強のＤが、今再びその悪魔の翼を開いた。

「攻撃力の低いグレイドル・コブラに攻撃したいところだが……何かあるのは間違いないだろうな。ハリマンボウに攻撃、デス・クロニクル！」

Ｄ―ＨＥＲＯ　ドグマガイ　攻３４００→ハリマンボウ　攻１５００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→２１００

「さすがに痛い……だけど、ハリマンボウが墓地に送られたことでモンスター１体の攻撃力を５００ダウンさせる。ドグマガイには攻撃の報いを受けて貰おうじゃないの」

Ｄ―ＨＥＲＯ　ドグマガイ　攻３４００→２９００

「もう１枚カードを伏せる。これでターンエンドだ」

清明　ＬＰ２１００　手札：１

モンスター：グレイドル・コブラ（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

エド　ＬＰ３９００　手札：１

モンスター：Ｄ―ＨＥＲＯ　ドグマガイ（攻）

羊トークン（守）

魔法・罠…1（伏せ）
「僕のターン、ドロー！」
「ドグマガイのエフェクト発動！ライフ・アブソリュート！」
「ぐぐっ……」
清明　ＬＰ２１００→１０５０
「半分吸われて、残りはこれだけか。だけど、ここから反撃開始！リバースカードオープン、グレイドル・スプリット！このカードは自分モンスター1体の装備カードになって、攻撃力を５００ポイントアップさせる！」
グレイドル・コブラ　攻１０００→１５００
「今更たかだか５００の攻撃力アップだと……？」
「僕が狙ってるのは、このカードのもう1つの効果さ。スプリットは自身を墓地に送ることで装備モンスターを破壊し、デッキから名前の違うグレイドルモンスターを2体特殊召喚できる。これでイーグル、そしてコブラを特殊召喚！」
コブラの体が中央から真っ二つに裂け、裂けたそれぞれが泡立つ銀色の水たまりになったかと思うと次の瞬間、そこから黄色の鳥と先ほどまでと寸分たがわぬコブラが姿を見せた。
グレイドル・イーグル　攻１５００

グレイドル・コブラ　攻１０００
「なるほど、アドバンス召喚のためのカードを揃えたか?」
「何勘違いしてんのさ、これだけで済むわけないでしょ?戦闘またはトラップの効果で破壊されたグレイドル・コブラは相手モンスター1体に憑りつき、そのコントロールは僕が得る!カモーン、ドグマガイ!」
「僕のディーヒーローのコントロールを奪うだと!?」
その通り。地面から伸びた銀色の網がドグマガイの全身を覆い尽くしてその体内に吸収され、額に銀色の紋章が浮かび上がった。
「これでバトル、まずはコブラで最後の羊トークンに攻撃!」
グレイドル・コブラ　攻１０００→羊トークン　守０（破壊）
「イーグル、ドグマガイの2体でダイレクトアタック!」
「まだだ!トラップ発動、ピンポイント・ガード!セメタリーに存在するレベル４以下のモンスター、ダイヤモンドガイを守備表示で特殊召喚し、このターン戦闘でも効果でも破壊されなくする!」
Ｄ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ　守１６００
一斉攻撃で逆転勝利、と洒落込みたかったのだが、さすがにプロ相手にそれは甘かったようだ。再び出てきたダイヤモンドガイを破壊する方法がない以上、別の手を考える

しかない。
「スプリットで出したモンスターはエンドフェイズに破壊されるから、ここは壁を増やすためにフィッシュボーグ―アーチャーを守備表示。これでターンエンド」
エンド宣言と同時に、イーグルとコブラが形を保てなくなってその場に崩れ落ちる。これは、予想以上に厳しい戦いだ。
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
「僕のターン、ドロー。メインフェイズ、ダイヤモンドガイのエフェクトで出た火炎地獄の効果発動！相手に１０００のダメージを与え、自分も５００ダメージを受ける！」
清明　ＬＰ１０５０→５０
エド　ＬＰ３９００→３４００
「そしてこのターンも、ダイヤモンドガイのエフェクトを発動。ハードネス・アイ、デッキトップは通常魔法の貪欲な壺だ。これで次のターンに２枚のドローが約束された。もっとも、それまでお前のライフが持てばの話だがな」
「まだ僕のライフは残ってるからね。油断してるといくらでも足元すくわれるよ？」
「これだけのライフ差で言っても説得力がないがね。とはいうものの、ドグマガイを倒す手段はない。だが、わざわざ倒さなくてもこんな手段もある！カモン、デビルガイ！」
Ｄ―ＨＥＲＯ　デビルガイ　攻６００

「デビルガイ……」
「デビルガイのエフェクト発動、相手フィールドのモンスター1体を2ターン後の未来に飛ばす。そこをどけ、ドグマガイ！ディスティニー・ロード！」
　ドグマガイのコントロールは、グレイドルの力で一時的に奪ったものにすぎない。つまりその枷から外されたドグマガイは帰還した時、一瞬だけ僕のフィールドに来たのちすぐに元々の持ち主であるエドのフィールドに帰ってくることになる。まさかこんなに早く、グレイドルの弱点に気づかれるとは。
「デビルガイのエフェクトを使用したターン、僕はバトルフェイズを行えない。カードを伏せ、ターンエンドだ」
　清明　ＬＰ５０　手札：1
　モンスター：フィッシュボーグ―アーチャー（守）
　魔法・罠：1（伏せ）
　エド　ＬＰ３４００　手札：0
　モンスター：Ｄ―ＨＥＲＯ　デビルガイ（攻）
　　Ｄ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ（守）
　魔法・罠：1（伏せ）
「僕のターン！」

気になるのは、攻撃表示のデビルガイとあの伏せカードだ。確かにデビルガイは攻撃表示でしか効果を使えないが、返しの戦闘ダメージを警戒してあのカードを伏せたのかもしれない。単なるブラフなのか、それとも罠が仕込んであるのか。いずれにせよ僕のライフに余裕はない、一回でも読み間違えたらその時点でアウトだ。

「だけど、アーチャーが生き残ったのは嬉しい誤算、か。僕の墓地の水属性モンスターはグリズリーマザーにコブラ2体、それにイーグルとハリマンボウの計5体。墓地の水属性モンスターが5体のみの時、このカードは特殊召喚できる！来い、氷霊神ムーラングレイス！」

氷をつかさどる霊神の1体、ムーラングレイス。本来なら特殊召喚時にハンデス効果を持つこのカードも、あいにく今はただのバニラでしかない。だけど、今はそれで十分だ。フィールドに頼もしくそびえる白と金の姿に向かってこの局面でよく来てくれたね、と感謝の念を送る。

氷霊神ムーラングレイス　攻２８００

「バトルだ、ムーラングレイス！デビルガイに攻撃しろ、ムーンライトレーザー！」

ムーラングレイスの額の角から青い光線が放たれ、デビルガイが一瞬で消し飛ぶ。

氷霊神ムーラングレイス　攻２８００→Ｄ―ＨＥＲＯ　デビルガイ　攻６００（破壊）

エド　ＬＰ３９００→１７００
「やった！」
「それはどうかな？トラップ発動、ダメージ・ゲート！自分が戦闘ダメージを受けた時、その数値以下の攻撃力を持つモンスターをセメタリーから蘇生できる。僕が蘇生させるのは攻撃力２１００、ダッシュガイだ！」
Ｄ―ＨＥＲＯ　ダッシュガイ　攻２１００
長い足にはまるでロボットかサイボーグのように車輪がついた、流線形のボディーを持つディーヒーロー。全く、いつになっても全然戦線が途切れない。そのしぶとさには舌を巻くけれど、ダッシュガイは所詮攻撃力２１００。これならムーラングレイスで押し切れるはずだ。
そう思った直後、チャクチャルさんからテレパシーが走った。
『いや、無理だなマスター』
「（あれチャクチャルさん。なにが無理なのさ）」
『ダッシュガイの効果だ。奴はフィールドのモンスターを１体リリースすることで、攻撃力を１０００ポイントアップさせる効果を持っている』
「（１０００ポイント!?そんなことをしたら攻撃力３１００になって……ありがとうチャクチャルさん、それならそれでまだ手はある！）」

そこで会話を切り、デュエルに神経を集中させる。確かに通常ならこの時点で積みかもしれない。だけど、まだこの手札には可能性が残っている。ダッシュガイの効果は聞いた感じ起動効果とかいう奴っぽいし、だったらこれで止められる。

「さあ、これでターンエンドか？ならばさっさとエンド宣言をしてもらいたいが」

「……いいや、まださ。メイン２に魔法カード、死者蘇生を発動。幽鬼うさぎを守備表示で特殊召喚するよ」

「ほう？ダッシュガイのエフェクトを知っていたのか」

「ちょっと訳あってね。これでターンエンドさ」

幽鬼うさぎ　守１８００

ダッシュガイが効果を使った瞬間、幽鬼うさぎ自信をリリースすれば攻撃を受けずに済む。これだけで止めきれるとはこっちだって思ってないけど、確実にこのターンの抑制力にはなっているはずだ。

「僕のターン、ドロー。ドグマガイが帰還するのは次の僕のスタンバイフェイズだが、その前に僕の新たなエースを見せてやろう」

「新しいエース……？」

「お前も僕にグレイドルを見せてくれたからな。これが僕なりのデュエリストとしてのせめてもの礼儀だ。メインフェイズ、ダイヤモンドガイのハードネス・アイが見通した

貪欲な壺の効果でカードを２枚ドロー。カモン、ドゥームガイ」

Ｄ―ＨＥＲＯ　ドゥームガイ　攻１０００

片腕が大型のサイコガンのような形状をした、カラーリングといい羽の形と言い全体的に戦闘機のようなイメージを抱かせるディーヒーロー。見たことないヒーローではあるけれど、だけど、こいつじゃないだろう。

「自分フィールド上の３体のモンスターをリリースし、このカードは特殊召喚できる……出でよ、究極のＤ！Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ!!」

エドの足元に酸化した血のように赤黒い空間のひずみが生まれ、その中にエドの場にいた３体のディーヒーローが吸い込まれていく。まるで本物の血の池のように波紋が立ったひずみの中心から、僕がこれまで見てきたヒーローと名のつくモンスター群からは全く異なる異質な、未知の恐怖とでもいうべき男が浮かび上がってきた。人間らしい顔とはまるでアンバランスな、まるで目のない化け物の頭部のように鋭い牙がびっしりと生えた右腕。明らかに悪魔のそれである鋭い鉤爪と、それを支えて振り回すための太い左腕。闘う前からすでにボロボロになった両の翼はその悠久の戦績を物語り、太い尾がますます悪魔的印象を強めている。

Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ　攻１９００

「な、なんだこれ……」

「驚いたか？まあそうだろうな。光栄に思え、このカードは僕も使うのは初めてだ。そしてこれこそが、僕が斎王に戦いを挑むことを決意した最大の理由。あいつには人知を超えた力があるが、このカードならそれに対抗できると僕は信じている。バトルだ、Ｂｌｏｏ―Ｄ！幽鬼うさぎに攻撃、ブラッディ・フィアーズ！」

悪魔の翼を異形のヒーローが広げると、そこから文字通り血の雨が降り注ぐ。幽鬼うさぎの綺麗な銀髪が、その中へ消えていって見えなくなった。

Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ　攻１９００↓幽鬼うさぎ　守１８００（破壊）

「これで邪魔者は消えたな。メイン２にＢｌｏｏ―Ｄのエフェクト発動、クラプティー・ブラッド！」

攻撃を終えて翼を畳んだＢｌｏｏ―Ｄの影が背中から無数の筋になって伸び、それぞれに意志があるかのごとく蠢いてムーラングレイスの巨体を縛り付ける。全力で抵抗するムーラングレイスの奮闘虚しくその体は自分よりもはるかに小さいＢｌｏｏ―Ｄの方へと恐るべき力で引きずり込まれていき、なんと明らかに質量の小さいＢｌｏｏ―Ｄに丸ごと吸収されてしまった。

「こ、これは……!?」

「Ｂｌｏｏ―Ｄは１体のみ、相手モンスターを吸収して装備カードにすることができる。そしてその攻撃力の半分を自らの攻撃力に加算する」

Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ　攻１９００→３３００

「だが、これだけでは固定値が上がった代わりにずっと出しにくくなった劣化サクリファイスにすぎない。Ｂｌｏｏ―Ｄを究極のＤたらしめているもう１つのエフェクトは永続効果、このカードが存在する限り相手フィールドのあらゆるモンスターエフェクトは無効となる」

「こっちだけに作用するモンスター効果無効効果……そんな無茶な」

「例え誰がいかなるモンスターを繰り出そうと、そのエフェクトをすべて無効にするこのカードの前では無力。これだけの攻撃力があれば、戦闘で突破するのも難しいだろう。さらにカードを１枚伏せ、ターンエンドだ」

清明　ＬＰ５０　手札：０

モンスター：フィッシュボーグ―アーチャー（守）

魔法・罠：１（伏せ）

エド　ＬＰ１７００　手札：０

モンスター：Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

もはや僕に手札はない。場に存在するモンスターはアーチャーただ１枚のみ。そしてこのセットカードは、永続トラップのバブル・ブリンガー。レベル４以上であるＢｌ

ｏｏ―Ｄの直接攻撃を完全にシャットダウンできるのみならず自身と引き換えに墓地のレベル３以下水属性同名モンスター、グレイドル・コブラを蘇生できるカードではあるが低レベルが多いディーヒーロー相手では守りの効果も微妙に心もとないうえに、蘇生効果もネタがばれている以上何らかの対策を取ってから出ない限り攻撃はしてくれないだろうから過信はできない。どちらも決め手になれない以上は最後のこのドローに、全てを賭けるしかない。

「トップ勝負、上等ってね。ドローッ！」

恐らく最後のチャンスであろう１枚のカードを引き、祈りつつそれに目を向ける。そのカードは……。

「おや、先輩？確か先輩はもうジェネックス参加資格がないはずですが……何してるんですか？」

「あ、葵ちゃん!?」

鋭い声を頭上から投げかけられ、咄嗟にエドとほぼ同タイミングでデュエルディスクの電源を落として手札を隠す。その声の主は、今では光の結社の中でもトップクラスの地位にいるほどの実力者である葵・クラディー。元・僕の弟子だった娘だ。

そして、かなり鋭い子でもある。おまけに僕のことをよく知っている。つまり、誤魔化すのは困難と言うことだ。厄介な相手にあったもんだという内心を表に出さないよ

うに気を付けながら、できる限りいつも通りに応対する。
「ど、どうしたの葵ちゃん。僕みたいに光の結社の『素晴らしさ』がわかんない相手なんぞに話しかけてさ」
「私も先輩と話してるとどんどん人間の格が下がる気がするから嫌なんですけどね、先輩はあんまり放っておくと何するかわからないタイプですから時々何してるのかだけは押さえとかないといけないんですよ」
　そしてこの相変わらずなきっつい物言い。これに関しては前からそうだったしそれが彼女の魅力でもあったんだけど、僕と一緒にケーキ作ったりクッキー焼いたりチョコ溶かしたりしてるうちは少なくとも他人のことを一方的に見下すようなことだけは言わなかったのに。
　でも、少なくとも何をしてるのかは理解できた。僕の監視とは、ずいぶんと特別扱いされる身分になったもんだよ。僕のグレイドルもエドのＢｌｏｏ—Ｄも、いわば対光の結社のために手に入れた切り札。こんなところでみすみす明かすわけにはいかない大事な手の内だ。だからとっさにソリッドビジョンを消すために電源を落としたんだけど、葵ちゃんの今の物言いから考えて僕らのデュエルは見ていないらしい。危ない危ない。
「別に、たいしたことじゃない。彼が僕に対してサインを求めてきてね、ペンも色紙もな

いからどうしようかといっていたところさ」
　ここでエドのナイスフォローが入る。いくらプロだからってエドのサインは別にいらんのだけど、ここでそんな空気の読めてないことを言ったら余計にこじれるだけなので大人しく頷くのみにしておく。まだ胡散臭そうな視線を向ける葵ちゃんを尻目に、若干芝居がかった態度でエドがスーツの内ポケットから1冊の手帳を取り出した。そこにどこからか取り出したペンでさらさらと何事か書き、そのページを破って僕に押し付ける。
「ほら、とりあえずはこれでいいだろう?」
「何となくスッキリしないですが……まあいいでしょう。エドさん、斎王様が探しておられましたよ」
「斎王が、ねえ。わかった、今から向かおう。そういうわけで、悪いが僕は先に失礼するよ」
「そうですか。では、私もこれで。さようなら、先輩」
　最後にこちらに目配せをして、エドが去っていく。ここは、エドに助けられたか。ふと渡された紙に目を向けると、そこには無駄にきれいな字で、
『勝負は預けた。伏せは秘密だ』
　と書いてあった。まったく、気障なもんだ。

「せっかく引いたってのに、ねえ？」

もう片方の手に持っていた最後のドローカード、お互いの受けるあらゆるダメージがターン1往復の間だけ問答無用で０になる通常魔法カードの一時休戦に声をかける。まあ、向こうの伏せが分からない以上今回は引き分けということにしておこう。結局エドが先に独りで斎王のところに行ったけど、彼は勝てるだろうか。わからないし僕にはどうすることもできないけど、せめてエドが勝てるように祈っておいてあげよう。

……決してここでエドが斎王を止めてくれたらこっちが何もしなくていいから楽だなー、とかそんなことを考えたわけではない。うん、そんなわけではない。実はちょっぴり思ったりもしたけど、それはメインの思いじゃないからギリギリセーフ。ただ、十代の言葉を借りれば、エドは僕とデュエルしたんだから僕の仲間だ。仲間が勝つのを祈るのは、当たり前のことだからね。

ハメツノヒカリ編

ターン６７　光の結社とアカデミア―１Ｆ―

「霧の王で攻撃、ミスト・ストラングル！」
「うおおおおっ！」
高野　ＬＰ１２００→０
ライフの全てを失い、その場に崩れ落ちる中野、野中の連れだった３人衆最後の１人、高野。はい、一丁あがりっと。そのまま先に進もうとする僕らに、後ろから質問が飛ぶ。よっぽど混乱しているのか、ほとんど叫ぶような声音だった。
「なんだよ、いったい何しに来たんだよ!?」
「……殴り込み、さ」
その問いに、たった一言で返事する。他に聞きたいこともなさそうだったので、それを最後に振り向かず、僕らはホワイト寮の門をくぐった。
ところで、なぜ今こんなことになっているのかには、少しばかり時間をさかのぼらなければならない。具体的には、グレイドルの力を得てエド相手にも水入りになるまで粘れるようになった日の夜に戻る。

「ねえ皆、今から暇？暇ならちょっと付き合ってほしいんだけど」
「ん？どっか行くのか？」
「どうせここにいてももう寝るだけだ、どうしてもと言うなら乗ってやらんこともない」
　相変わらずふさぎ込んだ翔の部屋に食事を運んでから、他のメンバーと一緒に食堂で夜ご飯を食べる。その途中、ふと思いついたというように聞いてみた。とりあえず話の掴みが良好なのを確かめ、ならばと一気に本題に入る。
「光の結社にね、殴り込みをかけようかと」
「え？えっと、殴り込みって……俺たちがか？」
「まーね」
　できる限りかるーく言ったつもりだったが、それでもやはりそのまま流すには無理のある話だったようだ。
「ど、どうする万丈目、清明の奴だいぶため込んでたみたいだぞ」
「ああ、こんなこと言いだすまで思い詰めてたとはな」
「お２人さん、聞こえてるよー。ったく失礼だね。だいたい、この夕飯の時点で何か思わなかったの？」

「何かって……このトンカツがか？」
「せっかくゲン担ぎだけのために奮発していい豚肉トメさんから買ったってのに。グラムいくらする肉だと思ってんのさ」
熱弁するも、料理に縁のないこのメンバーに食費の話をしても今一つピンとこないらしい。思ったより反応が薄いのに多少がっかりしつつも、どうにか気を取り直して説得の続きに当たる。トンカツ云々はあくまでついでにすぎない。値段的にはついでどころかメインだけど。
「まあ、それはいいとして。僕が今夜決行にしようと思ったのには他にもわけがあるのさ。エド・フェニックスだよ」
「エドが？今日、エドと会ったのか？」
「会ったどころかデュエルもしたよ。まだギリギリ負けてない。それでエドなんだけど、実は今日……」
エドの考えや、何をしているのかといったことをここで一気に話す。さすがに本人の許可もとってないのにＢｌｏｏ―Ｄについてペラペラ喋るのは失礼なんてレベルじゃないのであくまで新しいカードを手に入れた、程度の言い方にとどめておいたけど。
「……とまあ、こんな感じかね。だから今日はずっと何か起きないかと思って待ってたんだけど、この様子だとエドも駄目だったみたいだし」

「ちょ、ちょっと待てよ。そんな大事なことなら、俺たちに教えてくれたってよかったじゃないか」
　あ、そーゆーこと言っちゃうんだ。だったらこっちにも言いたいことはある。
「こう言っちゃ悪いけど、お互い様さ。何があったかあえて聞く気はないけど、十代も今日は何かやってたんでしょ？それもかなりの大事を。もう長いこと暮らしてんだから、そんなの嫌でもわかるって」
　まったく、まさかばれてないとでも思ってたんだろうか。赤の他人ならいざ知らず、毎日嫌でも会うことになる僕に隠し事なんて通用しないってのに。
「う。……実は今日お前が出発してからミズガルド王国のリンドさんって人が来てその人が教えてくれたんだけどよ」
　オージーン王子。レーザー衛星『ソーラ』。そしてその鍵を、今は十代が持っている。なんたることだ、スケールが大きすぎてなるほどね、としか言いようがない。斎王め、ただのデュエルモンスターズが強い宗教の教祖かと思ってたら、随分ととんでもない話になったものだ。
「悪い、黙ってて。でも、これで俺が知ってることは全部だ」
「いやいや、こっちこそ何も言わなくてごめん。でも、だったらなおさら急がないと。せっかく人生貰ったのに、自分勝手に世界ごと終わらせられたらいい迷惑だ」

僕がいま生きているのは、チャクチャルさんに死の淵から引っ張り上げてもらったから。このことは常々感謝してるし、だからこそ胸張っていけるような生き方をしたい。少なくともここまで聞かされてまだ動かないようじゃ、僕はこの先後悔するに決まってる。

……いや、そうじゃない。そこで思い直した、後悔ならもうしているか、と。もとはといえば今日、僕はエドが勝つって最後まで信じたくて、そのせいで今日の昼にでも突撃すればいいところをこんな時間まで引き延ばしたんだ。もっと早く行けばあるいはエドと合流することだってできただろうし、少なくとも今みたいにエドの安否すら不明なんて状況にはならなかったはずだ。たとえ本人が嫌がったって、1発ぶん殴ってでも単独行動をさせないべきだったのかもしれない。

『マスター、兵は拙速より巧遅を尊ぶ、という言葉が古代中国にはあってだな。例え一手や二手遅れたとしても、その分正しい戦法を選ぶことが勝利に繋がる、といった意味だ。今やるべきは迷うことより、本当にすべきことを見極めることだ』

思考が1人でどんどんネガティブな方向に向かっていくのを見計らったようなタイミングでかけられた、チャクチャルさんなりに気を使ってくれたのであろう言葉が、ただ有難かった。それのおかげでどうにか気持ちを取り直し、改めて目の前の2人に聞き直す。

「……それで、どうする？無理強いする気はないよ」
「俺らが断ったら、お前１人でも行くつもりなんだろ？俺はもちろん行くぜ」
「まあ、ノース校の奴らを鍛え上げたのはこの俺だからな。もう１回ぐらいは面倒を見てやるさ。それに、天井院君とおまけに三沢を光の結社に引き込んだのも俺だから、その責任も取る。最後に、斎王には俺も１度は負けてしまった身だ。その借りを返さないうちは、俺のプライドが許さん」
「十代、万丈目。ありがとう。これで６人か」
　今の校内で光の結社を問題視している数少ないこの２人も味方になってくれれば、こちらとしても心強い。ほっと一安心だ。
「ん？ちょ、ちょっと待て。６人？俺と十代、それにお前がいて……あと３人はどこから出てきたんだ？」
「ああ、それは……」
　まだそのことを言ってなかったことに気が付いて、説明しようと口を開く。だけど結果的に、その必要はなかったようだ。
「清明せんぱーい、来たザウルスー！」
「清明、もう準備できたよ、ってさ」
「もう痛みもないし、いつでも大丈夫ッス！」

そんな声とともに、1階のドアがノックされる。まるで様子をうかがっていたかのようにピッタリのタイミングできたそれを無言で指し示し、にやりと笑って見せる。
「当然、みんな知ってるいつものメンバーさ。おーい、こっちは2人とも来てくれるっていうから、ぼちぼち行こうかー！」
叫び返す僕を見て微妙に複雑そうに顔を見合わせ、それから同時に吹き出した2人の様子が印象的だった。そこから先の様子は、特に語るべき点はない。さすがに深夜になってまで見張りを置いているわけもなく、固く閉じられた門もこうなってはただの障害物でしかなかった。そこでたまたま出会った高野に逃げられる前にデュエルを挑み、とっとと倒したうえで現在に戻るというわけだ。何かと急な話ではあるけど、人数で圧倒的に劣るこちらに勝ち目があるとすれば最短ルートでの電撃作戦で一気に敵の頭、つまり斎王を叩くしかないため仕方がない。今の音は誰にも気づかれてないはずだけど急いでいこう、ハリーハリー。
「万丈目！斎王の部屋までの近道とかってないの？」
元ブルー生であり、つい先日まで光の結社の一員でもあった万丈目に、ふと思いついてダメもとで聞いてみる。走りながらしばらく思案していた万丈目だったが、やがて首を横に振った。
「斎王の部屋は複雑な場所、というか隠し部屋だからな。非常口の類もないはずだ。な

あに、このまま進めばすぐに斎王の部屋の前につく。その部屋の中に隠し通路が仕掛けてあるだけだ……む、あれは!?」

「……明日香、こんな時間まで起きてたら肌が荒れるよ、だってさ」

　万丈目がその人物に気づくとほぼ同時に、たまたま先頭にいた夢想が彼女に固い声で話しかける。にこりともせずに壁に寄りかかり、腕組みをして僕らの前に立ちはだかったのは、天上院明日香。まずいな、彼女の実力はここにいる皆がよく知っている。さっきの高野のように、素早く倒していけるような相手ではない。

「あら、こんな夜中にアポも取らずに人の寮に入り込んで、随分とご挨拶ね夢想。貴方達を斎王様のところには行かせはしないわ」

　アカデミアの女王とまで言われる彼女の、そのさすがの気迫を前に気圧されていると、その沈黙を破ってずい、と黒い影が一歩前に出た。彼の名前を呼ぶより前に、何かを決意したような声音で万丈目が静かに口を開く。

「行け、お前ら。天上院君を光の結社に入れたのは俺だ、俺がどうにかする」

「あらあら、誰かと思えば裏切り者の万丈目君じゃないの。嘆かわしいことね、斎王様も貴方のことは評価していらしたのに」

「その結果が今の俺なら、斎王の予知とやらも底が知れるな。もっとも、昔の俺は実際そうだったんだろうが」

明日香の皮肉に間髪入れずの嫌味で返してもう話すことはないとデュエルディスクを構えると、明日香もそれを見てゾッとするような冷たい笑みを浮かべ、特別製と思しき自身の純白のデュエルディスクを起動する。まだためらっている僕らを見かねたように、万丈目がもう1度僕の方へ振り返った。
「さあ行け、お前ら。この通路が一番の近道なだけで、この広い寮には他にも道はある」
「万丈目……やっぱり僕も残って」
「いいから早くしろ!天上院君がここにいるということは、おそらく俺たちの奇襲は筒抜けということだ。だったらこれ以上雑魚が集まってくる前に、なんとかして斎王とのタイマンに持ち込むんだ!」
「でも」
「でももしかしもない!それにな、清明。お前なら俺の気持ちがわかるはずだ」
いきなり何を言い出すんだろうと一瞬黙ると、万丈目はこれまで見たことがないほど真剣な面持ちになった。
「これは師匠の受け売りだがな。惚れた女のために戦うのが、漢の道というものだ。お前が俺の立場なら、俺と同じ道を選ぶはずだ」
そう言われ、今の万丈目を僕に、明日香を夢想に置き換えて想像する。そう考えると、決断は早かった。

「……わかった。皆、こっち！万丈目、勝ったら連絡してよ！」

今来た道を引き返す清明たちをゆっくり見送る暇もなく、万丈目は再び目の前の敵と向かい合った。彼女が他の皆を止めようとしないということは、最初から明日香は万丈目ただ１人を狙い撃つために配置されたのだろう。彼女ならば万丈目を倒すことができると。そこまで察していながら、それでもあえて彼はここに残った。

無論、先ほど言ったように責任を感じているというのもある。恋心も否定はしない。だがもう１つ、彼のプライドが自分以外の助太刀を許さなかった。斎王の掌の上で遊ばれたあげく手駒にされたあの苦い敗北。その記憶が彼の高いプライドに火をつけ、あえて相手の策に乗って１対１でデュエルしたうえで正面から勝利するという発想に行きついたのだ。

「デュエルだ。行くぞ、お前たち！」

『『『えい、えい、お――！』』』

緊張感のかけらも感じられないおジャマ３兄弟の腑抜けた掛け声をバックに、デュエルディスクにデッキを差し込む。自動的にオートシャッフル機能が働いてシャッフルされたデッキの上から５枚が初期手札として排出され、それを右手で引き抜いてばっと

開く。
「「デュエル！」」
先攻は、万丈目。明日香のデッキは確か、光の結社に入ってから少し改造されたはずだ。そのことは辛うじて覚えているが、具体的にどのようなデッキになったのかは皆目思い出せない。
「いくぞ、仮面竜（マスクド・ドラゴン）を召喚、攻撃表示だ」
万丈目の数あるデッキの中でもアームド・ドラゴンを軸とするパターンにおいて常に前線でさまざまな立ち回りを見せる、仮面をかぶったような風貌のドラゴン。
仮面竜　攻１４００
「さらに永続魔法、ワンダー・バルーンを発動」
万丈目の目の前に配置された、怪しげな箱。その蓋が勢いよく開くと、中から大量の風船が湧きあがった。
「このカードは俺の手札を任意の枚数捨てることでバルーンカウンターを乗せ、君のモンスターの攻撃力はそのカウンター１つにつき３００ポイント下がっていく。このターンは１枚捨てる」
ワンダー・バルーン（０）→（１）
「そして今捨てたカード、おジャマジックの効果発動。このカードが墓地に送られた時、

デッキからおジャマ・イエロー、ブラック、グリーンを1体ずつ手札に加える。カードを伏せ、これでターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！魔法カード、予想ＧＵＹ（ガイ）を発動！このカードは自分フィールドにモンスターが存在しない時、デッキからレベル４以下の通常モンスター1体を場に出せる。舞いなさい、ブレード・スケーター！」

ブレード・スケーター　攻１５００→１２００

「ブレード・スケーター……」

何の変哲もない通常モンスターの1体だが、明日香がプリマモンスターとして好んで使うモンスター。精霊が見える万丈目の目だからなのか、それとも自分の意思が見せた思い込みなのか。彼には、純白の舞台で華麗に舞うその姿も、どこか沈んだ表情に見えた。

「そして魔法カード、トレード・インを発動。手札のレベル８モンスター、氷の女王を捨てることでデッキからカードを2枚ドローするわ」

氷の女王という聞きなれない、少なくともこれまでの彼女のデッキには入っていなかったモンスターをコストにしての手札交換。妨害の札はなく、万丈目がただ見ている間にも着々と彼女の舞台は進行していく。

「永続魔法、異次元海溝を発動。このカードは発動時に手札・場・墓地いずれかの水属性

モンスターをゲームから除外し、このカードが破壊された際に除外したモンスターを特殊召喚するわ。さて、そろそろ始めようかしら。フィールドのブレード・スケーターをリリースし、アドバンス召喚！貴女のショーの始まりよ、サイバー・プリマ！」

サイバー・プリマ　攻２３００

ブレード・スケーターが一礼したのち光に包まれ、消えていったその場所に新たなプリマがエントリーする。その効果を知っている万丈目は、次に何が起きるのかを察して自分の表情が硬くなっていくのを感じた。

「サイバー・プリマがアドバンス召喚に成功した時、フィールドの魔法カードはすべて破壊される……貴方のワンダー・バルーンは破壊されたらそれきりだけど、私の異次元海溝は破壊された時に真の能力を発揮するのよ。おいでなさい、氷の女王！」

氷の女王　攻２９００

雪の結晶を模した杖を持つ、文字通り雪のように色白の最上級魔法使い。以前よりもはるかに実力を増した彼女を前に、ようやく万丈目も思い出した。彼女が光の結社に入ってから見つけた自分なりのデッキへの答えは、水属性を中心とした【魔法使い族】。同じ水属性でありながらも清明の使う【水属性】とは一味も二味も違う動きを可能とした厄介なデッキである。

「……ん？」

だがそこで、万丈目は氷の女王に漂うかすかな違和感に気が付いた。何かモンスターの全身から、イラストにはない白い靄のようなオーラのようなものが立ち上っているような。それだけでなく、明日香のデュエルディスクに置かれたカード自体も周りの壁とデュエルディスクの色に同化して見づらいがうすぼんやりと光っているように見えた。その違和感を基に、彼は自分が光の結社を抜けてすぐに清明から聞いた話を思い出す。デュエルの最中に光っているカードがあり、そのカードを通じて斎王の洗脳は届いているらしいと。要するにあのカードに気を付けていればいいのだな、と気合を入れ直したところで、氷の女王がその杖を振り上げる。

「バトルよ！氷の女王で仮面竜に攻撃、コールド・ブリザード！」

氷の女王　攻２９００→仮面竜　攻１４００（破壊）

万丈目　ＬＰ４０００→２５００

「くっ……だが、仮面竜はリクルーターだ。戦闘破壊されたことにより、デッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族を１体特殊召喚することができる。俺はこの効果で、２体目の仮面竜を攻撃表示で場に出す！」

仮面竜　攻１４００

「なら、サイバー・プリマで攻撃……すると思ったかしら？そんなことをしたら、アームド・ドラゴンのレベルアップコンボを手助けするだけになるものね。これでターンエン

ドよ」

明日香の言葉に心中で舌打ちしながらも、同時にその冷静で的確な判断力に舌を巻く万丈目。このアカデミアのレベルで並み程度のデュエリストであれば、ダメージを優先しあの局面で追撃を行っても不思議ではなかった。実際万丈目自身も、明日香が指摘したように多少のダメージは覚悟の上でアームド・ドラゴンを呼び、レベルアップを披露するつもりだったのだ。だが、彼とて1つの戦法が駄目になったからといってへこたれるようなデュエリストではない。次に繋げるための布石は、前のターンに既に打ってあるのだ。

万丈目　ＬＰ２５００　手札：５

モンスター：仮面竜（守）

魔法・罠：１（伏せ）

明日香　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：氷の女王（攻）

サイバー・プリマ（攻）

魔法・罠：なし

「俺のターン、ドロー。魔法カード、打ち出の小槌を発動！このカードは手札から任意の枚数だけカードをデッキに戻し、戻した数だけドローする。俺は当然、おジャマ３兄弟

をデッキに戻し3枚ドローを行う」
『ちょ、万丈目のアニキ!?』
『アタイらの出番ってこれだけなの!?』
『そんなのないぜ～!』
　何かゴチャゴチャとうるさいのをきっぱりと無視し、必死で抵抗しようとするのを力づくで、半ばデッキにねじ込むようにしながら戻す。オートシャッフルを待ち、３枚のカードを引いた。
「このカードは……よし、俺はモンスターをセットし、さらにカードを1枚伏せてターンエンドだ」
「防戦一方のようね？私のターン、ドロー。魔法カード、強欲なウツボを発動。手札の水属性モンスター2体、アイス・ブリザード・マスターとブリザード・プリンセスをデッキに戻して3枚ドロー。手札から……」
「おっと、その通常召喚待った。この瞬間にトラップ発動、おジャマトリオ！君のフィールドに、おジャマトークンを3体召喚させてもらう」
『『『ど～も～、こっちでふっかーつ!』』』
　氷の女王と光のプリマの脇に、なぜかバレリーナ衣装の3兄弟がノリノリで片足立ちでの回転をしながら現れる……のだが、やはり見よう見まねのバレエが特に運動神経に

優れるわけでもない彼らにできるはずもなく、ずでんずでんと全員目を回してその場に崩れ落ちた。

おジャマトークン（イエロー）　守１０００

おジャマトークン（ブラック）　守１０００

おジャマトークン（グリーン）　守１０００

「その不細工なトークンは……」

『不細工だなんてひどいわよアニキ～！』

『『そうだそうだー！』』

「ええい、うるさいから説明の間ぐらい黙っていろ！それになんだその恰好は、どこからどう見ても不細工だろう!?まあいい、そのトークンはアドバンス召喚のためリリースすることができず、破壊された時３００のダメージを与える効果がある！」

「それでも、まだ私の場には2体の戦えるモンスターがいるわ。バトルよ、サイバー・プリマでセットモンスターに攻撃！終幕のレヴェランス！」

プリマならではの平衡感覚を生かした、体の軸が全くぶれない回転蹴りが万丈目の伏せモンスターを薙ぎ倒すかに見えたが、その寸前に上空から炎を巻き上げつつ赤黒の悪魔が落下してきた。

「残念だったな、天上院君。俺はこのトラップカード、奇策を発動した。このカードは発

動時にモンスター1体を捨てることで、その攻撃力ぶんだけ相手モンスターの攻撃力をダウンさせる。俺が捨てたのは攻撃力２８００の炎獄魔人ヘル・バーナー、つまりサイバー・プリマの攻撃力は０だ！」

「なんですって!?」

サイバー・プリマ　攻２３００→０→???　守１９００

明日香　ＬＰ４０００→２１００

「だけど、まだ氷の女王の攻撃が私には残っているわ」

「いや、それも無理だな。よくフィールドを見ればわかるだろうが、俺のセットモンスターはスノーマンイーター、このカードは表になったときに表側モンスター1体を破壊することができる。俺が選ぶのは当然、氷の女王だ」

「スノーマンイーター……そのカードは」

スノーマンイーター。もしもこの場に清明がいれば、やいのやいのとうるさかっただろうな。そう思い、その様子を想像して万丈目の頬が緩む。何しろこのカードは去年、まだノース校から帰ってきたばかりの万丈目がアカデミア買収を目論む実の兄とデュエルをした時に譲り受けたものだったからだ。あの時貰ったこのカードを、実は万丈目はずっとデッキに入れ続けていた。もし正面切ってその理由を問われれば、決してセンチメントな理由はなくただ単にこのカードが悪くない効果を持っているからだ、そう答

えるだろう。では本心では?当の本人は照れから否定したり強がったりしているが、周りは誰でも知っている。彼は友情に篤いのだ。

「奇策の効果はエンドフェイズまでではなく、そのモンスターが存在する限り続く。つまり、次のターンで俺が攻撃力１９００以上のモンスターを出せば……」

「あら、偉そうなことを言う前に、貴方もフィールドのことをよく見たら?」

「フィールドを?……なに!?」

　万丈目が見たのは、雪だるまの陰に潜む怪物が氷の女王を倒している姿ではなかった。飛びかかった雪だるまが、プリマ衣装にチェンジした女王のハイキックを浴びて吹き飛ばされる姿だった。

「速攻魔法、禁じられた聖衣よ。モンスター１体の攻撃力を６００ダウンさせる代わりに、効果破壊耐性と効果の対象にならない能力を得ることができる。攻撃力２３００になっても、スノーマンイーターを破壊するには十分ね。コールド・ブリザード!」

　氷の女王　攻２９００→２３００→スノーマンイーター　守１９００（破壊）

「カードをセットして、これでターンエンドよ」

　氷の女王　攻２３００→２９００

　万丈目　ＬＰ２５００　手札：２

　モンスター：仮面竜（守）

魔法・罠：１（伏せ）
明日香　ＬＰ２１００　手札：２
モンスター：氷の女王（攻）
サイバー・プリマ（攻）
おジャマトークン（守）
おジャマトークン（守）
おジャマトークン（守）
魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！」
戦況はどちらかというと万丈目に有利。そのはずなのに、どうにも万丈目の表情は晴れない。あの伏せカード１枚と明日香の無言のプレッシャーが、万丈目を警戒させる。実際彼の手札にはすでにアームド・ドラゴン　ＬＶ（レベル）５のカードがあるため仮面竜をリリースすればアドバンス召喚も可能、そのままサイバー・プリマに攻撃するだけで勝利は決定するはずである。だが、彼女ほどのデュエリスト相手にそううまく事が運ぶとは思えなかったのだ。その警戒が無意識のうちに、彼に消極的な判断を強いる。
「……ゴーレム・ドラゴンを守備表示で召喚する」
ゴーレム・ドラゴン　守２０００

「仮面竜でサイバー・プリマに攻撃だ」
小柄なドラゴンの炎が、攻撃力のなくなった光のプリマをあっさりと焼き尽くす。あれだけ警戒した伏せカードは、ピクリとも動かなかった。
仮面竜　攻１４００→サイバー・プリマ　攻０（破壊）
明日香　ＬＰ２１００→７００
「あら、その程度かしら？」
「俺はこれで、ターンエンドだ……」
「私のターン、ドロー。来たわね？魔法カード、融合を発動！おジャマトークン２体を素材に、始祖竜ワイアームを融合召喚！」
「しまった、その手があったか！」
『『うわー、融合される～！』』
デュエルモンスターズには通常モンスター2体という緩い縛りから生み出される、驚くほどハイスペックな融合モンスターとして注目を集めた1体のドラゴンがある。効果を持たないゆえにトークンですら素材とすることができる、それがワイアームである。
始祖竜ワイアーム　攻２７００
「厄介だな……」

『ア、アタイ1人だけ残してかないで～！嫌よこんな気まずい状況！』
「あら、これだけじゃないわよ？魔法カード、思い出のブランコを発動。墓地の通常モンスター、ブレード・スケーターをこのターンだけ蘇生させるわ」
　ブレード・スケーター　攻１５００
「そしてこの最後の手札、融合呪印生物―地を召喚。このカードと融合素材となるモンスターをリリースすることで、地属性の融合モンスターを特殊召喚できる……何が言いたいかはわかるわね？今こそ幕を下ろしなさい、サイバー・ブレーダー！」
　入学時から常に共に戦い続けてきた、明日香のエースモンスター。プリマモンスターの頂点に位置する女戦士もまた、万丈目の目にはどこか悲しげな表情に見えた。
「相手モンスターが2体の時、サイバー・ブレイダーの攻撃力は倍になる！パ・ド・トロワ！」
　サイバー・ブレイダー　攻２１００↓４２００
「万丈目君、やはり斎王様を裏切った今の貴方では私に勝つことはできないようね」
「ああ、確かに君は強い。だが、俺もここで負けるわけにはいかん！ゴーレム・ドラゴンが存在する限り、相手はほかのドラゴン族を攻撃対象にすることはできない！」
「見苦しいわよ、それは敗北を引き延ばすだけの行為にすぎないのに。ならばサイバー・ブレイダーでゴーレム・ドラゴンに攻撃、グリッサード・スラッシュ！」

サイバー・ブレイダー　攻４２００→ゴーレム・ドラゴン　守２０００（破壊）
サイバー・ブレイダー　攻４２００→２１００
「パ・ド・ドゥ……相手モンスターの数が1体になったことで、サイバー・ブレイダーの効果は戦闘破壊耐性へと変化したわ。氷の女王で仮面竜に攻撃、コールド・ブリザード！」
氷の女王　攻２９００→仮面竜　攻１４００（破壊）
万丈目　ＬＰ２５００→１０００
「まだだ！仮面竜のリクルート効果により、アームド・ドラゴンＬＶ（レベル）３を特殊召喚！」
この選択は、まさに一瞬の判断だった。おそらく単純に3体目の仮面竜を出していてはまた攻撃を止めてしまい、アームド・ドラゴンに繋げることはできないだろうと踏んであえてアームド・ドラゴンをこのタイミングで呼んだのだ。
「3体目の仮面竜は入っていないのかしら？始祖竜ワイアームで攻撃、オリジン・ブレス！」
始祖竜ワイアーム　攻２７００→アームド・ドラゴン　ＬＶ３　守９００（破壊）
「これで貴方のフィールドにモンスターはいなくなったわね。このターンの3回の攻撃を耐えきったのは大したものだけど、貴方のフィールドはもうボロボロよ」
「いいや、まだだ。自分のモンスターの戦闘破壊をトリガーとして、復活の墓穴を発動！

お互いに墓地からモンスターを1体選び、守備表示で特殊召喚する！甦れ、ＬＶ３！」
「私は……サイバー・プリマを呼び出すわ。ターンエンドよ」
アームド・ドラゴン　ＬＶ３　守９００
サイバー・プリマ　守１６００
万丈目　ＬＰ１０００　手札：２
モンスター：アームド・ドラゴン　ＬＶ３（守）
魔法・罠：なし
明日香　ＬＰ２１００　手札：０
モンスター：氷の女王（攻）
サイバー・プリマ（守）
サイバー・ブレイダー（攻）
始祖竜ワイアーム（攻）
おジャマトークン（守）
魔法・罠：１（伏せ）
まだだ、などと強がってはみたが、実際万丈目に残された手は少ない。スタンバイフェイズにアームド・ドラゴンがレベルアップしたとしても、ＬＶ５だけでは明日香の場に存在する大型モンスターを全滅させることはできず、彼女のライフを削ることもで

きない。ＬＶ５が出せるのは確定として、そこからいかに試合の流れを変えるのかはこのドローにかかっている。

それを確認しながらデッキトップにかけた手が、かすかに震えているのを彼は感じた。だが、それは恐怖や怯えといった負の感情ではない。ギリギリの戦いを、彼は今全力で楽しんでいるのだ。

「俺のターン、ドロー！」

『がんばれ、万丈目のアニキ！』

「無駄よ、どんなカードを引いたとしても……」

「それはどうかな？」

「……なんですって？」

その問いにはふてぶてしく笑ったのみで答えることなく、アームド・ドラゴンを指さした。

「まずはスタンバイフェイズに、こいつの効果を発動。このカードを墓地に送ることで、デッキまたは手札のアームド・ドラゴン　ＬＶ５へと進化する。俺が呼び出すのは、手札からだ。さあ進化しろ、アームド・ドラゴン！」

まだまだ子供だったドラゴンが成長し、より筋肉もつき全身の棘も固く鋭く、戦闘向きの体へと変わっていく。これでもまだアームド・ドラゴンという種の中では若輩にす

ぎないのだが、それでも十分実戦に耐えうるだけの力を持っているあたりいかに戦闘向きの生物なのかがわかる。

アームド・ドラゴン　ＬＶ５　攻２４００

「さらに魔法カード、死者蘇生を発動！このカードで俺の墓地から、炎獄魔人ヘル・バーナーを特殊召喚する！」

足元から地獄の炎が噴き上がり、その中心から６本足のトカゲか恐竜のような姿の化け物に人型の上半身を無理やりくくりつけたような悪魔が這いあがってくる。下半身の化け物についた目も鼻もない口だけの顔がいびつに歪み、辛うじて笑っているのだと判別できるような邪悪な表情を形作る。

「ヘル・バーナーの攻撃力は相手フィールドのモンスター１体につき２００ポイントアップする代わりに、自分フィールドのモンスター１体につき５００ポイントダウンする。本来は差し引き５００ポイントしか上がらないがここで魔法カード、受け継がれる力を発動！自分フィールドのモンスター１体を墓地に送ることで、その元々の攻撃力ぶん他のモンスター１体の攻撃力をエンドフェイズまでアップさせる！アームド・ドラゴンよ、ヘル・バーナーに力を託せ！」

炎獄魔人ヘル・バーナー　攻２８００→３８００→６２００

「攻撃力６２００!?」

『その調子よ、アニキ～！』

ただ座ってるだけの癖になぜかドヤ顔で上から目線な声援を送るおジャマ・イエローのトークンに一瞬、攻撃対象をそっちにしてやろうかという衝動が湧きあがるが、それをなんとかこらえて目の前の氷の女王を見据える。

「帰ってくるんだ、天上院君。バトル、炎獄魔人ヘル・バーナーで氷の女王に攻撃！」

「く、応答しなさい、貴方達……！」

炎の渦が巻きあがり、氷の女王の全身を包み込む。爆風に巻き上げられて、明日香の場に伏せてあったカード……手札１枚をコストにすることであらゆるダメージを０に抑え込むトラップ、ホーリーライフバリアのカードが見えた。もしも先のターンでアームド・ドラゴン　ＬＶ５をアドバンス召喚していたら勝負は決め切れず、返しのターンで万丈目の敗北はほぼ確定していただろう。だが、それはもしもの話。手札を使い切った今の明日香にそのカードを発動することはできず、このデュエルは決した。

炎獄魔人ヘル・バーナー　攻６２００→氷の女王　攻２９００（破壊）

明日香　ＬＰ２１００→０

「天上院君！」

氷の女王が倒れると同時に気を失った明日香の体を慌てて駆け寄って支え、そっと壁に寄りかからせる。目を覚ますまでそばに付き添っていようかとも一瞬考えたが、まずは清明に連絡を取ろうと思い直して自分のＰＤＦを引っ張り出す。通話モードにしようとしたところで、自分の周りにいる大量の気配に気づいた。それと、最後に明日香が言った不可解な言葉を。

「なるほどな、ずっと見張っていたのか。まったく、人気者はつらいものだ」

皮肉めかして、いつの間にかあたりを取り囲んでいたたくさんの白い制服の集団に声をかける。どうせ返事は期待していなかったが、意外にも聞き覚えのある声がかえってきた。身長２メートルを超すハングリーバーガー使いの巨人、サンダー四天王のうち十の担当。

「……サンダー、光の結社へ復帰をもう一度お考えください。いくらサンダーでもこれだけの数を相手にできるわけありません」

「フン。天田、清明から聞いたぞ。お前がこのダーク・アームドとメタファイズ・アームドのカードを届けてくれたそうだな。その点に関しては礼を言ってやるが、この万丈目サンダー相手に随分と生意気な口を利くようになったじゃないか。ノース校での５０人抜き、お前に忘れたとは言わせんぞ」

強気な言葉とは裏腹に、万丈目の表情は険しい。これだけの数を相手にデュエルし

て、はたして自分1人で勝ちぬけるかどうか。いや、勝てるかどうかではない。やらねばならないのだ。清明の言葉を信じるならば、おそらく今の天上院君は洗脳が解けているはず。ならば、この万丈目サンダーが彼女を守らずして一体誰が守るというのだ。それに、もしここで俺が倒れればこいつらはそのまま清明たちのもとへ向かうだろう。いや、ほぼ間違いなくすでに何十人かが向かっているはずだ。せめてあいつらの負担を減らすためにも、この場所で引きつけられるだけの数を相手せねばなるまい。そう自身を鼓舞し、一度下ろしたデュエルディスクを再び構える。

「……さあ、まとめてかかって来い！もう一度身の程というものを教えてやる！」

「「デュエル!!」」

誰も見る者も、知るものもいない戦い。ひとりぼっちの戦場で、再びデュエルが始まった。

ターン６８　光の結社とアカデミア―２Ｆ―

「万丈目、大丈夫かな。まだ連絡が来ないんだけど」
「ああ、アイツは強いからな。きっと大丈夫さ」
階段を上がり、ホワイト寮２階。さすがに惜しみなく高級素材を使っているだけあって防音設備も完璧、階が１つ変わっただけなのに下にいるはずの万丈目のデュエルの音が全く聞こえてこない。それとも、もう万丈目が勝ってデュエルが終わっているのか。いや、だとしたら万丈目のことだ、すぐにドヤ顔で何か言ってくるだろう。なのに連絡がないということはまさか……？
そこまで考えたところで頭を振り、それ以上のことを想像するのをやめる。仮定だとしても、そんなことを考えちゃいけない。十代の言うとおり、万丈目は強い。だから勝つし、大丈夫だ。それで間違いない。
「それよりも、１階に明日香さんがいたってことは多分この階にも誰かいるんじゃ」
「や、やめるドン丸藤先輩。そんなネガティブなことばっかり言ってたら、十代のアニキたちの士気だって下がるザウルス」
「あー、また間違えたね？十代のアニキは僕のアニキなんだってば！」

「ぐ……わかったわかったドン。今はそういうことにしておくザウルス」
何の喧嘩をしてるのかはいまだによくわからないけど、とにかく十代の舎弟?は翔1人らしい。でもその話題は置いておくとしても、翔の言うことにも一理ある。むしろ明日香1人だけポンと配置しておいて、他の幹部クラスが出てこなかったらその方がびっくりだ。だからおそらく、その角を曲がったあたりで……。
「どうも先輩方、グッドナーイト」
ほら来た。そこに立っていたのは、葵・クラディー……これまた厄介な実力者だ。
「さて、私の相手をしてくださるのはどなたですか?本当は私だって眠いんですから、せめて選出位は早くしてくださいね」
これ見よがしにあくびをして見せる彼女だが、その目には最初からずっと一切の油断がない。こういうところ、ほんっとこの子は敵に回したくない。だけど、あえて誰か戦力を割くとしたら、長いことそばにいて彼女の細かい癖や思考パターンもある程度読めるようになった僕が適任だろう。
「だったら、僕が」
「ねえ葵ちゃん、私が相手してあげようか?ってさ」
またしても前に出ようとした僕を遮って、夢想がすっと前に出る。それを見て一瞬思案気に目を細めたものの、すぐに頷いて葵ちゃんも純白のデュエルディスクを掲げる。

「学校一の無双の女王が相手ですか。最大戦力が私の相手に動くだなんて、それもまた一興でしょう」

その言葉を聞いて、嫌でもわかった。葵ちゃんは今この場に、自分が捨て石になっても時間稼ぎができれば構わない、それぐらいの覚悟を持って立っている。無論、本人に負ける気はないだろう。だけど、いざという時には刺し違えることすら一切ためらうまい。

根はまじめないい子なんだよね、葵ちゃん。今回はそれがおかしな方向に向いちゃってるだけで。

「夢想」

「大丈夫だよ清明、だって。あの子は私が元に戻すし、たとえどれだけ時間がかかっても、それが終わったら私はあなたの隣に行くから、って」

「え？今……」

こんな時でも男というのは悲しい生き物、なかなか男心をくすぐる台詞についちょっと期待に胸を高鳴らせてしまう。だがさすがの夢想もあの内容は言ってて気恥ずかしくなったのか、プイと首を振って視線をそらしてしまう。綺麗な青い髪がサッと流れて、ふわりといい香りが舞った。

「ほ、ほら。早く行ってよ、ってば」

「お願い夢想、一生のお願い！今のもっかいだけ聞かせて！」
割と本気のお願いだったけど、残念ながらこっちもそれほど時間があるわけでもないのであまり粘ることもできない。葵ちゃんの目がさっきとはまた別の意味でとてもとても冷たいのには気づかないふりをしつつ、さっさとその場を離れる。
……これ全部終わったらあとで夢想拝み倒してもういっぺん言ってもらおっと。ついでに録音でもできれば万々歳だ。

多分清明のことだから、拝み倒してでもあとでもう1回同じこと言わせようとするんだろうなあ。さすがに恥ずかしいからやめて欲しいのに、などと考えてため息をつき、まずは目の前の相手に集中しようと改めて前を向き直る夢想。すぐにデュエルが始まるかと身構えるが、その動きを無視して葵の方がふと思いついたという風にすっと合掌する。
「……？」
「ドーモ、河風夢想＝サン。葵・クラディー＝デス……うーん、やっぱり反応薄いですね。先輩なら確実に乗ってきてくれたんでしょうが」
「え、清明が？どういうこと？ってさ」

「いえ、ちょっとしたネタですよ。私もニンジャ使いの端くれですから」
　まるで意味が分からなかったが、何も今聞くこともないだろうとそれ以上の追及を諦める。今度清明とお話するときの話題の１つにしてみようかな、そんなことも考えつつデュエルディスクを構えた。
「「デュエル！」」
　先攻を取ったのは、葵。相手モンスターを除去したうえで上級モンスターを繰り出す超変化の術は確かに厄介だが、主力（ワイトキング）がレベル１の夢想としては普通のデッキよりもその恐怖は小さい。とはいえ、気を付けるに越したことはないのだが。
「このカードで勝負します。出でませ、機甲忍者フレイム！このカードは場に出た時、忍者モンスターのレベルを１上げることができます。この効果で自身を選択！」
　赤い装束に金属製の片手片足を持つ忍者が、音も立てずに葵の前に片膝をつく。
　機甲忍者フレイム　攻１７００　☆４→５
「カードを１枚伏せ、ターンを終了します」
「私のターン、ドロー！精気を吸う骨の塔（ボーンタワー）を守備表示で召喚して、カードを１枚セット。ターンエンド、だってさ」
　とてもモンスターとは思えないような、まだ永続魔法と言った方がそれらしい文字通り様々な生物のあらゆる部位の骨のみで構成された塔がそびえ立つと、じわりじわりと

その周りから人魂のような何かがにじみ出ては飛び回り、フレイムに対し威嚇するような動きをしてみせる。ふと葵が気が付いた時には、いつの間にか周りの風景がお互いの足元どころか視界の続く限り果てしなく広がる無数の骨の平野に様変わりしていた。

精気を吸う骨の塔　守１５００

「ターンエンドですか?……ならばエンドフェイズに永続トラップ発動、忍法　変化の術！忍者モンスター1体をリリースすることでそのレベル＋3以下、この場合はフレイムのレベル5と足してレベル8以下の獣・鳥獣・昆虫族いずれかのモンスターを特殊召喚します。舞いなさい、日輪の不死鳥！炎王神獣　ガルドニクス！」

フレイムの全身から突如噴き出た炎が燃え上がり、全身を包み込んでもなおその勢いは衰えずに炎の翼に炎の尾の形をとる。やがて炎が落ち着いてくるとそこに忍び装束の男の姿はなく、太陽のごとく輝く赤い不死鳥が一羽翼を広げていた。

炎王神獣　ガルドニクス　攻２７００

葵　ＬＰ４０００　手札：3

モンスター：炎王神獣　ガルドニクス（攻・変化）

魔法・罠：忍法　変化の術（ガルドニクス）

夢想　ＬＰ４０００　手札：4

モンスター：精気を吸う骨の塔（守）

魔法・罠：１（伏せ）

「そしてそのまま私のターン、ドローします。では、悪シノビを召喚！」

暗い灰色の装束で全身を覆う他には特にこれといって目を引くところのない、逆に言えば極限まで隠密に特化したかのようなベーシックなスタイルの忍者がガルドニクスの尾羽に身を潜めるようにして片膝をつく。

悪シノビ　攻４００

「バトルです、ガルドニクスで攻撃！この業火羽輪、受けれるものなら受けてみなさい！」

不死鳥が翼をはためかすと、無数の真っ赤に燃える羽が何本か渦を巻くように骨の塔めがけて飛んでいく。無数の羽が突き刺さった塔は一瞬の静寂の後に燃え上がり、その場にゆっくりと崩れ落ちていった。

炎王神獣　ガルドニクス　攻２７００→精気を吸う骨の塔　守１５００（破壊）

「このまま悪シノビで攻撃を……あら？」

「残念だったね、ってさ。骨だけになってなお動く私のモンスターはまさに不死の象徴、そう簡単にフィールドは空かないよ、だって。トラップ発動、ブロークン・ブロッカー！守備力が攻撃力より高い守備表示モンスターが戦闘破壊された時、デッキから同名モンスターを２体特殊召喚できる！」

精気を吸う骨の塔　守１５００
精気を吸う骨の塔　守１５００
「これは……精気を吸う骨の塔の、他のアンデット族に攻撃をさせない効果２つぶんによる攻撃のロックですか。単純ながら厄介ですね。まあいいでしょう、カードを２枚伏せてターンエンドです」
両脇にそびえ立つ骨の塔の間で、夢想がカードを引く。ちょうど人魂の１つが飛んできて、そのカードを照らし出した。
「ゴブリンゾンビを攻撃表示で召喚するよ、ってさ」
骨と骨の隙間を縫うようにして、剣を持つ小鬼のゾンビが素早い動きで駆けてくる。
「バトル、ゴブリンゾンビで悪シノビに攻撃！」
ゴブリンゾンビ　攻１１００→悪シノビ　攻４００
「悪シノビが攻撃表示で攻撃を受けるとき、私はカードを１枚ドローできます。さらにこのバトルフェイズにリバースカード、強化蘇生を発動！私の墓地に眠る機甲忍者フレイムをレベル１、攻守を１００上げて特殊召喚します！」
足元に広がる骨の平野の一部がいきなり爆ぜ、炎を纏った赤の忍者が骨をまき散らしながら飛びあがる。
機甲忍者フレイム　攻１７００→１８００　守１０００→１１００　☆４→５

「モンスターを蘇生しても……ああ、そういうこと、ってさ」
「さすがに察しがいいですね。その通り、バトルフェイズ中に私の場にモンスターが増えたことによって攻撃の巻き戻しが発生します。それでも攻撃をしますか？河風先輩」
　また攻撃宣言をすれば、その瞬間に悪シノビの効果によりさらなるドロー加速を許してしまう。それでも攻撃するのか、との問いに、ニコリと笑って答えて見せた。
「ゴブリンゾンビで悪シノビに改めて攻撃、ってさ」
　ゴブリンゾンビが剣を振り上げたところに、悪シノビが隠し持っていた短刀を振るいその軌道をそらす。しかしその動きはフェイク、剣を手放したゴブリンゾンビが側転で距離を取ろうとした悪シノビの体を担ぎ上げるとそのまま助走をつけ、勢いよく叩き付けようとする。これぞ、プロレス技で言うところのカリフォルニアクラッシュである。
「そのあくまでも前のめりな戦闘姿勢、さすがに迷いのない判断ですね。ですが、私もここで引くわけにはいきませんので。悪シノビの効果でドローしたのちに伏せておいた速攻魔法、巨影虚栄を発動！これで悪シノビの攻撃力は１０００アップです」
　スピード、角度、共に完璧な攻撃。だがその体が骨に叩き付けられる寸前、２者の体が一瞬消えた。その次の瞬間、悪シノビがゴブリンゾンビをボディスラムの体勢に担いで走っていた。技を掛ける側と掛けられる側が反転したことに気づいて逃れようとするゴブリンゾンビのあがきもむなしく、その体が地面に叩き付けられた。

ゴブリンゾンビ　攻１１００（破壊）→悪シノビ　攻４００→１４００
夢想　ＬＰ４０００→３７００
「ねえ河風先輩、順逆自在の術……って言葉、知ってますか？」
「……？」
彼女には聞き覚えのない単語に黙って首を振ると、やれやれ、という風にため息を１つする。
「先輩ならこの話題にも嬉々として付き合ってくれたんでしょうけどね、まああの人と私の趣味がやや古いのはお互い自覚してますよ。それはともかくとしてこの術ですが、要するに今見せたように相手が技を掛けた次の瞬間、技を掛ける側と掛けられる側が入れ替わる術のことです。だいぶ効いたでしょう？」
「……ゴブリンゾンビが戦闘破壊された時、デッキから守備力１２００以下のアンデット族を手札に加えられるんだって。守備力０のゾンビ・マスターを加えてカードを１枚セット。ターンエンドだってさ」
葵　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：炎王神獣　ガルドニクス（攻・変化）
機甲忍者フレイム（攻・強化蘇生）
悪シノビ（攻）

魔法・罠：忍法　変化の術（ガルドニクス）
強化蘇生（フレイム）
夢想　ＬＰ３７００　手札：４
モンスター：精気を吸う骨の塔（守）
精気を吸う骨の塔（守）
魔法・罠：１（伏せ）

「さてと、私のターンですね。おや、面白いカードを引きました。せっかく順逆自在を見せたんですから、お次は当然これでしょう。転所自在の術……それはリングを自在に変えることのできる術。炎の海でも溶岩でも、果ては煮えたぎる火口にでもです。フィールド魔法、バーニングブラッド発動！炎属性の攻撃力は５００ポイントアップし、守備力は４００ポイントダウンします」

フレイムが自身の装束を脱いで素早く広げると、なんとその布が明らかに人間サイズのフレイムが着ていたとは思えないほど遠くまで広がり、完全にフィールドを覆い尽くす。いかなる仕掛けが施されているのか布であったはずの装束は完全に地面の質感へと変わり、フィールドの中央には今にも噴火しそうな火山の火口がぽっかりと口を開いていた。

炎王神獣　ガルドニクス　攻２７００→３２００　守１７００→１３００

機甲忍者フレイム　攻１８００→２３００　守１１００→７００
「だけど、私の場にはもう骨の塔によるロックが完成してるよ、ってさ。攻撃力ばかりいくら上げたって私に攻撃は届かない、って」
「そんなことは百も承知です、ですが私のモンスターの攻撃力は確かに上がりました。いいんですよ、このカードを除去しても？私としては確かに痛手ではありますが、他のカードではなくこのカードのために除去を使わせたと思えば悪い結果ではありませんし。そして魔法カード、機甲忍法ゴールド・コンバージョンを発動！自分フィールドの忍法をすべて破壊することで、カードを２枚ドロー！そして変化の術によりその姿を保っていたガルドニクスは、術が切れると同時に破壊され墓地へ送られます」
ガルドニクスの姿が元の炎に戻り、それすらもあるかなきかの風にちぎれて消えていく。自分の最上級モンスターが自分のカードで破壊されたにもかかわらず、葵はそれを満足げに見送っていた。
「魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキから機甲忍者アクアを墓地に送ります。さらにカードを２枚セットし、ターン終了です」
「私のターン、ドロー」
「ではこのスタンバイフェイズ、カードの効果で破壊されたガルドニクスの効果発動！不死鳥は墓地から蘇り、フィールドに存在する自分以外のモンスターをすべて破壊しま

す！」

火山の中で溶岩が盛り上がり、その中から圧倒的なまでの熱量をものともせずに不死鳥が再び舞い上がった。その動きが噴火寸前の火口を刺激し、限界を超えた溶岩の奔流が噴火となってフィールドのモンスターに敵味方関係なく一斉に襲い掛かった。先ほどの炎の羽とはわけが違う破壊力に、骨の塔の全てが呑み込まれて蒸発していく。

「きゃあっ！」

「当然私の忍者も破壊されますが……この瞬間にトラップカード、火霊術―「紅（くれない）」を発動！炎属性のフレイムをリリースすることでその元の攻撃力、１７００のダメージを与えます！」

溶岩に飲み込まれる寸前、フレイムが腰に差していた手裏剣を投げつける。回転しながら飛ぶそれは空中で火を放ち、燃えながら夢想の周りに着弾する。

夢想　ＬＰ３７００→２０００

「私のせっかくのロックが……残念。ワイト夫人やピラミッド・タートルと共有できるブロークン・ブロッカーで精気を吸う骨の塔を召喚して攻撃ロック、悪くない手だと思ったんだけどなあ、だってさ。また改良は考えるとして、今はゾンビ・マスターを守備表示で召喚するんだって。さらにそのまま効果発動！手札のモンスターをコストに、自分か相手のレベル４以下のアンデット族を蘇生させるみたい。私はワイトプリンス

を捨てて、今捨てたワイトプリンスをそのまま特殊召喚だってさ」

ゾンビ・マスター　守０

ワイトプリンス　守０

「ワイトプリンス、あのカードは……」

「気づいたとしてももう止められないよ、って。ワイトプリンスは墓地に送られた時、手札とデッキからワイト及びワイト夫人を墓地に送る効果があるからね、デッキから１枚ずつちゃんと墓地に送らせてもらうよ、だって。カードを１枚伏せて、ターンエンドだってさ」

葵　ＬＰ４０００　手札：１

モンスター：炎王神獣　ガルドニクス（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

場：バーニングブラッド

夢想　ＬＰ２０００　手札：３

モンスター：ゾンビ・マスター（守）

ワイトプリンス（守）

魔法・罠：１（伏せ）

「本当はＨＡＮＺＯあたりが欲しかったんですが、これはこれでいいでしょう。機甲忍

者エアーを守備表示で召喚します」
　フレイムとは違い全身を若葉色の装束につつむ忍者が、金属製の片腕で防御姿勢を取る。
　機甲忍者エアー　守１４００
「忍法　変化の術、２枚目を発動！レベル４忍者のエアーをリリースすることでデッキからレベル６鳥獣族、赤竜の忍者を特殊召喚します！」
　立膝をついていたエアーが華麗な空中回転をして火口に自ら飛び込み、赤い竜か鳥のような炎のオーラを纏う、忍者にしては珍しく自身の金髪碧眼を隠そうとしない忍者が飛び出してくる。そのまま空中でその外人忍者が指笛を吹くと、赤いオーラが夢想の伏せカードめがけて突っ込んでいった。
　赤竜の忍者　攻２４００→２９００　守１２００→８００
「朱雀忍法フェニックス・アイ……赤竜の忍者は場に出た時に墓地の忍者または忍法を除外し、相手の伏せカード１枚をチェーン不可の状態で確認したうえでデッキトップまたはボトムにバウンスすることができます。河風先輩の伏せカードは、なるほど次元幽閉ですか。こんな危ないカード、デッキボトムに帰っていただきましょう」
「ちぇっ、仕掛けるつもりだったのになー、だって」
「私は用心深いんですよ。では、バトルフェイズに入ります。ガルドニクスでゾンビ・マ

スターに攻撃！」

炎の羽が宙を舞い、ゾンビ・マスターを一瞬で焼き尽くす。

炎王神獣　ガルドニクス　攻３２００↓ゾンビ・マスター　守０（破壊）

「あえてワイトプリンスの墓地肥やしに協力する理由はありませんね。ターン終了です」

ライフ差は２０００、フィールドの差も歴然。だが、まだ葵は油断しない。このまま押し切れるほど、入学以来いまだ無敗記録を更新し続ける無双の女王が甘いわけがない……そんな思いを常に持っているからだ。皮肉なことに、夢想自身の普段の評判がこうして今の劣勢を生み出していることになる。

「私のターン、ドローするんだって。さすがに私もこれ以上押し切られるわけにはいかないかな、ってさ。ワイトプリンスをリリースして、龍骨鬼をアドバンス召喚！」

溶岩の下に閉じ込められた無数の骨が地中で組み合わさり、新たな力を生み出す。冷えて固まった溶岩を力任せに叩き割って地中から骨の腕が伸び、ついで鬼の体がゆっくりと引きあがってくる。

龍骨鬼　攻２４００

「ワイトプリンスは墓地に送られた時、デッキと手札からワイトとワイト夫人を墓地に送ることができる、ってさ」

「ですが龍骨鬼の攻撃力は２４００。バーニングブラッドの影響下では赤竜の忍者すら倒せませんよ？」
「慌てないでね。墓地のワイトプリンスのさらなる効果発動、墓地のワイト２体とこのカードを除外することでデッキからワイトキングのカードを場に出すことができる！」
　龍骨鬼のあけた穴から、もう１体の骸骨が身を乗り出す。紺色のぼろ布を着込んだワイトの王が、満を持して参戦した。
「ですが、ワイトキングの攻撃力は墓地のワイト及びワイトキングかける１０００。３体ものリソースを削ってしまっては、その攻撃力も微々たるものです」
「だから言ったでしょう、慌てないでね、って。速攻魔法、異次元からの埋葬を発動！除外されたモンスターを３体まで墓地に送ることができる！当然私はワイト２体とワイトプリンスを、墓地へ！」
　ワイトキング　攻？→２０００→５０００
「攻撃力、５０００!?」
「さらに装備魔法、光学迷彩アーマーをワイトキングに装備。このカードはレベル１モンスターのみに装備できて、装備モンスターは相手プレイヤーに直接攻撃できるんだってさ。これで最後のバトル、ワイトキングでダイレクトアタック！螺旋怪談！」
　骸骨の王の姿が闇に消え、次に現れた時にはすでに葵の目の前に立っていた。そのま

ま殴りつけようとぐっと拳を引き、自らの腕がもげかねないほどの勢いでストレートパンチを繰り出す。

ワイトキング　攻５０００→葵（直接攻撃）

「やはりあなたは恐ろしい人ですね、河風先輩。ですが、まだ甘いです！墓地から機甲忍者アクアの効果発動、墓地にこのカード以外の忍者が存在するならば、相手の直接攻撃１回を無効にできる！」

ワイトキングの骨の拳が、見えない壁にぶつかったかのように寸前で止まった。葵のそばに装束を迷彩代わりにして潜んでいた青の機甲忍者が隠密を解き、自ら肉壁となってその一撃に割って入ったのだ。

「残念でしたね、今の攻撃さえ当たっていれば私の逆転負けでしたのに」

「ターンエンド、だってさ」

葵　ＬＰ４０００　手札：１

モンスター：炎王神獣　ガルドニクス（攻）

赤竜の忍者（攻・変化）

魔法・罠：忍法　変化の術（赤竜）

場：バーニングブラッド

夢想　ＬＰ２０００　手札：１

モンスター：龍骨鬼（攻）
ワイトキング（攻・光学迷彩）
魔法・罠：光学迷彩アーマー（ワイトキング）
「そろそろこのデュエルも終わらせましょう、私のターン！霞の谷（ミスト・バレー）のファルコンを召喚！」
霞の谷のファルコン　攻２０００
「このモンスターの効果は関係ありません、今関係あるのはこのカードが攻撃力２０００という事実！自分フィールドの攻撃力２０００以上のモンスター2体、赤竜の忍者とファルコンをリリースすることでこのカードは手札から特殊召喚できます！出でませ、葵流忍術最強のしもべ！銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）！」
「ついに来たね、銀河眼……だって！」
銀河眼の光子竜　攻３０００
噴煙を裂いて空のかなたから地上に降り立った、銀河の力を持つドラゴン。そのカード自体が白く光を放っているのを確認し、洗脳の鍵はあのカードに間違いないと夢想は改めて確信する。彼女にとって、先ほどのワイトキングによる攻撃が届かないことは想定内であった。ただ一度ピンチに持っていけば、必ず彼女ほどのデュエリストなら自身のエースを引き当てるだろうと踏んで、あえて光学迷彩アーマーを装備させたのだ。

「そんなに銀河眼が嬉しいですか？バトル、ガルドニクスで龍骨鬼に攻撃！」
炎王神獣　ガルドニクス　攻３２００→龍骨鬼　攻２４００（破壊）
夢想　ＬＰ２０００→１２００
「そのまま銀河眼でワイトキングに攻撃、と同時に効果発動、銀河忍法コズミック・ワープ！お互いをバトルフェイズ終了時までゲームから除外します！」
銀河眼の光子竜　攻３０００→ワイトキング　攻５０００
骸骨の王と銀河のドラゴンの姿が同時に消えさり、主を失った鎧が地面に崩れ落ちる。次の瞬間、２体のモンスターはまたこの次元に戻ってきた。
「装備モンスターが消えたことにより、光学迷彩アーマーは装備対象がいなくなり破壊されました。これでもう直接攻撃はできませんね。これでターンエンドです」
「私のターン、ドローだって」
光学迷彩アーマーは破壊されたが、もとより夢想にその効果を使う気はない。普段のデュエルならばいざ知らず、今回のデュエルは銀河眼のカードを破壊して洗脳を解いたうえで勝たなければならないからだ。
「バトル、まずはガルドニクスを攻撃するんだって。螺旋怪談！」
高く高く飛び上がったワイトキングがガルドニクスの頭を掴むようにして体勢を整え、一拍のちにその頭を支点としての強烈な両足蹴りが不死鳥の顔面を捉えた。

ワイトキング　攻５０００→炎王神獣　ガルドニクス　攻３２００（破壊）
葵　ＬＰ４０００→２２００
「これで私も初ダメージ、ですか。ですが、不死鳥はただでは堕ちませんよ。ガルドニクスは戦闘破壊された時、デッキから同名モンスター以外の炎王を特殊召喚できます！舞い上がれ、炎王獣　ガルドニクス！」
力を失った不死鳥が火山の中へ吸い込まれるように消えていき、溶岩の中に落下する音が辺りに響く。だがその直後に火口から火の玉が１つ吐き出され、その炎が再び、先ほどまでよりも小さいとはいえ同じような鳥の姿に変わっていく。
炎王獣　ガルドニクス　攻７００→１２００　守１７００→１３００
「カードを１枚セットして、ターンエンドだってさ」
葵　ＬＰ２２００　手札：２
モンスター：炎王獣　ガルドニクス（攻）
銀河眼の光子竜（攻）
魔法・罠：忍法　変化の術（対象無し）
場：バーニングブラッド
夢想　ＬＰ１２００　手札：１
モンスター：ワイトキング（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

「ドロー！・いいカードを引けましたが、もはやこれが役に立つことはなさそうですね。銀河眼の光子竜で攻撃、そのまま効果発動！・銀河忍法コズミック・ワープ！」

銀河眼の光子竜　攻３０００→ワイトキング　攻５０００

再び銀河眼とワイトキングの姿がぼやけ、次元の壁を越えて消えていく。前のターンと違うのは、葵の場にはいまだ攻撃の権利を残したガルドニクスがいるということだ。

「これで終了ですよ、ガルドニクスによるダイレクトアタック！」

炎の羽が乱舞し、夢想めがけて飛んでゆく。もはや身を守るもののないかに見えた夢想が、最後に彼女の場に残されたカードを表にした。

「リバースカードオープン、強化蘇生！・効果は言わなくてもわかってると思うけど、このカードで私の墓地のゾンビ・マスターをレベル１、攻守を１００ポイント上げて特殊召喚するよ、だってさ」

炎の羽を手にした杖のようなもので蹴散らしつつ、ゾンビを操るゾンビが地中から湧き出てきた。受動的にしか効果を使えないガルドニクスはむざむざ墓地肥やしに付き合うするわけにもいかず、その攻撃を取りやめる。バトルフェイズが終了したことにより、また次元を越えた２体のモンスターが帰還した。

ゾンビ・マスター　攻１８００→１９００　守０→１００　☆４→５

「ワイトキングでガルドニクスを狙われたら私の負けですが……そううまくいくと思わないでください。カードをセットして、ターンエンドです」
「私のターン、ドロー！」
　普段の彼女ならば迷わず攻撃するのだが、あの含みのある物言いには必ず何かあると見てしばし考える。だが、その迷いも一瞬だった。
「バトル！ワイトキングでガルドニクスに」
「だから甘いって言ってるんですよ。リバースカードオープン、ゴッドバードアタック！鳥獣族モンスターのガルドニクスをリリースすることで、河風先輩のワイトキングとワイトプリンスを破壊します！」
　ガルドニクスが文字通りの火の鳥となって、夢想のフィールドに着弾する。激しい爆発が巻き起こり、これで終わりかと葵が一瞬だけ肩の力を抜く。その直後、爆発の炎と煙をものともせずに巨大な竜の腕が伸びた。いまだ黒い煙に覆われて夢想の姿は見えないが、静かなその声が辺りに響いた。
「冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い……」
「これは!?」
「チェーンして速攻魔法、瞬間融合を発動させてもらったみたい。フィールドのアンデット族モンスター２体を素材にして、融合召喚……」

徐々に煙が晴れてきて、夢想の姿があらわになってゆく。そして、その隣から葵を見下ろす巨大な竜も。
「冥界龍　ドラゴネクロ！」
冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００
「破壊対象にしたモンスターを融合素材にすることでゴッドバードアタックの回避、ですか。しかもこのまま攻撃してもしっかり銀河眼に効果を使わせたら瞬間融合の自壊デメリットも回避できるおまけつき。ですが、ドラゴネクロは戦闘する相手モンスターの魂を引きずり出すために肉体を破壊することができないモンスター。その攻撃であえてドラゴネクロを破壊して、トークンの連撃時に効果を使えば完璧です！」
葵の必死の反論に対し、もはや夢想はただ静かに微笑むのみ。それは、すでにこのデュエルの結末を悟った者の見せる安らかな笑みだった。
「改めてバトル、ドラゴネクロで銀河眼に攻撃！ソウル・クランチ！」
「無駄だと言っているでしょう！迎え撃ちなさい、銀河眼！破滅のフォトン・ストリー……」
「あなたが銀河眼を大切にする気持ちは立派。だけどごめんね、だって。今回、私は清明と約束したの。必ず元に戻すからって。私が清明の隣に行くから、って。速攻魔法、禁じられた聖杯を発動！銀河眼の攻撃力を４００ポイントアップさせる代わりに、その効

果をこのターンの間だけ無効にする！」

冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００（破壊）→銀河眼の光子竜　攻３０００→３４００

夢想　ＬＰ１２００→８００

「ごめんねドラゴネクロ、ってさ。だけどドラゴネクロが戦闘を行ったモンスターは攻撃力が０の魂の抜け殻になって、自分フィールドに引き抜かれた魂がダークソウル・トークンとして特殊召喚される！」

銀河眼ががくりとうなだれ、体から何かオーラのようなものが抜け出ると同時にその瞳から生気が失われる。そのオーラは夢想の場に移動し、銀河眼のシルエットのような姿になった。

銀河眼の光子竜　攻３４００→０

ダークソウル・トークン　攻３０００

「効果が無効になったなら、この攻撃は、回避手段が……」

「さあ、その闇の輝きで葵ちゃんを覆う光を吹き飛ばしてあげて、ってさ。ダークソウル・トークンで攻撃！破滅のダークフォトン・ストリーム！」

銀河眼の魂が口らしき部分を開き、そこから黒い光の奔流が放たれる。力を失った光のドラゴンがその中に消えていった。

ダークソウル・トークン（銀河眼の光子竜）　攻３０００→銀河眼の光子竜　攻０（破壊）
葵　ＬＰ２２００→０

「うう……」
「あ、あれ？気絶しちゃったかな、ってさ」
力が抜けたようにその場にへたり込む葵を見て、なにかおかしなことでもしてしまったかと若干慌てる夢想。その場に駆け寄ろうとするも、その足が途中でぴたりと止まった。
「私思うんだけど、ちょっとそういうのはずるいんじゃないのかな？って」
「おーっとっと、なんとでも言えーい！すべては斎王様のために、だぜ！」
全く悪びれることなくそう返したのは、わらわらとどこからともなく集まってきた白服軍団の先頭に立つ、ノース校四天王の百こと酒田（さけだ）だ。知った顔だったので試しに話しかけてみた夢想も、まるで会話をする気のないその返事に深くため息をつく。
「……もう。どうせ聞いてたんでしょう？私が清明のところに行くって話。それなのにそういうことする人たちは、１回馬に蹴られちゃえばいいと思うの、なんだって」
「人の恋路を邪魔する奴は、ってやつか？なかなか手厳しいこと言ってくれるじゃねえ

か。おいお前ら！一斉にかかるぞ、デッキを出せ！」

「「「へイ!!」」」

一糸乱れぬ動きで夢想を取り囲む十人ほどの集団がデュエルディスクを構えるのを見てどうやってもこのデュエルを制さない限りは先に進めないと悟り、彼女もまたその輪の中心でデュエルディスクを構えた。

「「「「デュエル！」」」」

１階の万丈目に続き、２階でもまた変則の多人数デュエルが始まった。圧倒的に不利な状況の中で、それでも夢想はカードを引く。

……デュエルを続けている限り、彼女のデッキは彼女に負けを許さない。あらゆる状況だろうとも、彼女は勝ち続けることになっているのだから。

ターン69　光の結社とアカデミア―3F―

1階で万丈目、2階で夢想と別れ、ついに僕らは3階に突入した。いまだ下にいる2人とは連絡が取れないけど、ここでいちいち戻って確認してたら何のためにあの場を任せてきたのかわけがわからない。それに、これまでのパターンから考えるとこの階もそろそろのはずだ。同じことを考えているらしく、隣を走る3人の表情も硬い。

「よう。久しぶりだな」

「……うわっ、お前かあ」

「ずいぶんひどい言いようじゃないの、オイ。なんならもっかいぶっとばしてやろうか？」

ひょっこりと顔を見せたのは、やはりこの男、というべきか。実力的には確かにどこかで出番が来るだろうとは思っていたから、あまり驚きはない。ノース校四天王最強の男、鎧田（よろいだ）……ノース校が対抗試合前からすでに堕ちていたことを考えると、光の結社のなかでもかなり古株の幹部だ。

「さあ、早く構えろよ遊野清明。俺とお前の戦績はこれまでで1勝1敗、もう結果の見えた勝負には違いないが、このデュエルできっちり決着つけようぜ？」

「ああ、僕がお望みなわけね……」
だからこの男には会いたくなかったのだ。葵ちゃんの時も正直危なかったけど、今のメンバーの中では僕としか接点のないこの男が出てくるとしたら、その狙いは僕以外にありえない。
「十代、翔、剣山！ここは僕が相手するから、３人とも早く先に！」
少しは悩むだろうと踏んでいたのか、すぐに決断した僕を何か珍しい物でも見るような顔で覗き込む鎧田。確かに僕だってどうせなら斎王を相手にしたかったけど、ここに突入した時点で誰が相手だろうと覚悟はできている。誰からの挑戦も正面から受け止め、斎王に当たるまで片っ端から叩き潰していくまでだ。
だけど、そこからの僕の友人たちの反応は予想と違った。
「いや、ここは俺に任せて先輩は先に行くドン」
「剣山君１人じゃ無理でしょ？僕だって、ここで戦う！」
「剣山、翔……なんで」
ずい、と前に出た剣山と翔が、ほぼ同時にデュエルディスクを構える。だけど、それはおかしい。ここで戦うのは僕の役目だから、２人は十代と一緒に斎王のとこに行くのが筋というものだろうに。その思いを言葉にしようとした矢先、先手を打つようにして２人がそれぞれ親指を立てて笑いかけてきた。

「なーに言ってるドン、もともと俺たちを焚きつけてここまで来させたのは清明先輩ザウルス。その先輩がここで勝手に離脱されたら、それこそおかしな話だドン」
「悔しいけど、それに関してはその通りだからね。さあ、早く!」
鎧田はとても強い。正直なところ、僕が1人で戦っても勝てるかどうかはわからない。確かにそんな僕がタイマン張るよりも、この2人で変則デュエルに持ち込む方が勝つ可能性は高いだろう。
だけど、それはつまり僕を斎王のところまでたどり着かせるためにこの2人が……いや、この2人だけじゃない。万丈目も夢想も、僕を斎王のところに送るために足止めを引き受けてくれたことになる。僕なんかがそんな役で、本当にいいんだろうか。あまりにも僕では力不足ではないだろうか。今更といえば、あまりにも今更な話だろう。自覚はある。だけど、本当にこれまではがむしゃらに走ってきただけで何も考えていなかったのだ。せかす剣山と翔を見ながらそれでもまだ迷っていた僕の肩が、ポンと優しくたたかれる。見ると、その相手は十代だった。
「ほら、ここはあの2人に任せようぜ。俺とお前、どっちが先に斎王のところにつけるか競争だぜ?」
どうやら、どんどん考えが暗い方に向かっていったのが顔に出ていたらしく、そんな十代なりの精いっぱいの励ましを聞いた。わざわざ気を遣わせて申し訳ないし、それに

剣山の言う通り確かに僕には、ここまでみんなを引っ張ってきた責任がある。今日突入するなんて僕のわがままに付き合ってもらった以上、せめて最後まで僕が決めるしかないだろう。

今はとにかく前に進むことが先決だと、ようやく覚悟を決め直した。

「う、うん……もし、もし負けたら、絶対承知しないからね！」

「なんだなんだ、俺の相手は雑魚２人か？考えようによっては、一石二鳥ともいえるのか」

「鳥がどうしたドン、恐竜さんの力を見せつけてやるザウルス！」

「けっ、鳥は恐竜が進化したんだぜ？時代遅れの化石は化石らしく、大人しく博物館にでも飾られときな！」

「なんだと！恐竜さんをバカにする奴は、このティラノ剣山が容赦しないドン！丸藤先輩も、早くデュエルの用意をするザウルス！……と、その前にこのカードをデッキに入れておくドン」

「わ、わかってるよ！」

年の功の違いか、あっさりとやりこめられた剣山が怒りに身を震わせつつもデッキに

1枚のカードを紛れ込ませてデュエルディスクを構える。次いで鎧田、最後に翔がデュエルの用意を済ます。

今回適用されるルールは変則デュエル……3人対戦のバトルロイヤルルールではあるが、翔と剣山が戦いあう理由がない以上実質1対2のデュエルとなる。ドローできないのは最初の1人のみだが、ターンプレイヤーは3人目からしか攻撃宣言ができない。今回は翔、剣山、そして鎧田の順にターンが回ってくるようだ。そして自分のターン以降は2人がかりの連続攻撃に耐えなければいけないという圧倒的に不利な状況にありながら、鎧田の表情に不安の色はない。それほどまでに彼にはノース校トップとしての、そして光の結社幹部としての自信と誇りがあるのだ。

「「デュエル!」」

「僕のターン!スチームロイドを守備表示で召喚、カードを1枚伏せてターンエンド」

スチームロイド　守1800　攻1800

下級ロイド随一の守備力を持つ機関車型ロイドを使い守備を固める。先攻1ターン目としては、まあまあ堅実な立ち上がりといえるだろう。

「俺のターン、ドローだドン。魔法カード、手札抹殺!全プレイヤーは手札をすべて捨てて、その枚数ぶんだけドローするザウルス。丸藤先輩、受け取ってくれドン!手札から俊足のギラザウルスを自身の効果で特殊召喚し、その効果を発ドン。このカードはノー

コストで特殊召喚できる代わりに、自身の効果で場に出した時に相手はモンスター1体を墓地から蘇生できるザウルス」

「わかったよ！僕は俊足のギラザウルスの効果で、レスキューロイドを蘇生！」

足の筋肉が発達した太古の狩人が駆けてきたのを発見し、緑の車体に白い線の入ったレスキュー車のロイドが赤ランプをつけて走ってきた。

俊足のギラザウルス　攻１４００

レスキューロイド　守１８００

「まだ俺はこのターン、通常召喚をしていないドン。ギラザウルスをリリースしてアドバンス召喚、暗黒（ダーク）ドリケラトプス！」

くちばしを持ち羽毛のようなものまで生えた恐竜とも鳥ともつかぬ巨体が、これまた何とも名状しがたい鳴き声を響かせる。今一つ恐竜には見えにくい姿だが、れっきとした剣山のエースの1体である。

暗黒ドリケラトプス　攻２４００

「これでターンエンドだドン」

「おっと、ならこのエンドフェイズに墓地に落ちた上弦のピナーカの効果を発動。デッキからＢＦモンスター、黒槍のブラストをサーチするぜ。さて、覚悟はいいんだな？俺のターン、ドロー！フィールド魔法、アンデットワールド発動！」

　ホワイト寮の白い廊下が、一瞬にして何かおぞましい、血のように赤い液体で満たされた沼地に変わる。あるいはそれは、本当に血なのかもしれないが。奇妙にねじれた枯れ木の下には無数の部位の骨がいたるところに散らばっており、明かりを浴びて不気味に白い光を反射している。
「どうだ、お前ら?俺の得意の場所はお気に召したか?」
「気味の悪いフィールドだドン……お、俺のドリケラトプスが!」
「ああ、僕のビークロイドも!」
　彼らの叫びも無理はない。ドリケラトプスはその大きなくちばしが途中から無残に折れ曲がっており、腹にも穴が開いてそこから白い肋骨が覗いて見える状態に。翔のスチームロイドも煙突が折れて車輪も右の前輪が完全になくなっており、レスキューロイドもレスキュー車というより霊柩車といった雰囲気の車になっていた。だが共通しているのはどのモンスターも先ほどより目の輝きがおかしくなっており、真っ赤に光る眼を不気味に見開いていた。
　スチームロイド　機械族→アンデット族
　レスキューロイド　機械族→アンデット族
　暗黒ドリケラトプス　恐竜族→アンデット族
「言い忘れてたな……アンデットワールドは死者たちの楽園、そこに入るものは当然死

者でなければならない。つまりだ、俺たち全員の墓地及びフィールドのモンスターは全てアンデット族になり、さらに種族がアンデット以外のモンスターはアドバンス召喚が行えない。そこの恐竜使い、下級モンスターだけでどう戦う気だ？」

「くっ……恐竜さんは決してあきらめないザウルス！」

「今はゾンビだけどな。さらにご丁寧なことに、さっきお前は手札抹殺をしてくれたよなあ？ありがとうよ、俺の墓地を肥やしてくれてよ！魔法カード、生者の書―禁断の呪術を発動！俺の墓地のアンデット族になったモンスター、暁のシロッコを特殊召喚。そしてそこのメガネ、お前の墓地からサブマリンロイドのカードを除外するぜ。ダイレクトアタッカーはどかすに越したことはないからな」

Ｂ（ブラックフェザー）Ｆ―暁のシロッコ　攻２０００　鳥獣族→アンデット族

「さあ、今こそ俺のＵＦ……アンデットフェザーの力を見せてやる！自分フィールドにＢＦモンスターが存在することで、漆黒のエルフェンはリリースなしで通常召喚できるぜ。さらにエルフェンは場に出た時、相手モンスター１体の表示形式を変更できる。まずは恐竜野郎、お前からだ！そのデカブツには守備表示になってもらう！」

エルフェンが漆黒の翼を振るうと無数のボロボロになった羽が渦を巻き、ドリケラトプスを混乱させる。

ＢＦ―漆黒のエルフェン　攻２２００　鳥獣族→アンデット族

暗黒ドリケラトプス　攻２４００→守１５００
「まだだ！自分フィールドにＢＦが存在するとき、黒槍のブラストは特殊召喚できる！さらにシロッコは俺が選ぶＢＦモンスター以外の攻撃を放棄することで、場のＢＦ１体に全ての力を集結させる！ブラストに全攻撃力を集中だ！」
ＢＦ―黒槍のブラスト　攻１７００→５９００　鳥獣族→アンデット族
「１ターン目でもうこんな攻撃力……なるほど、清明先輩が負けるはずザウルス」
「だけど、僕らのモンスターは全部守備表示。少なくともこのターンは……」
「甘いぜ！言っただろう、まずは恐竜野郎からだってよ。貫通能力を持つブラストで、ドリケラトプスに攻撃！ブラック・スパイラル！」
全身に黒いオーラを纏わせた鴉天狗のゾンビが、腐りきった肉が取れて骨の一部が見える腕で自分の身長ほどもある大槍を抱えながら空高く舞い上がり、猛烈な勢いで回転しながらドリケラトプスめがけて突っ込んでゆく。
剣山の場に伏せカードはなく、本人も自らの迂闊さを悔いたが、時すでに遅し。圧倒的な質量で迫りくる黒い竜巻のような一撃に思わず剣山が目をつむった時、自分の隣から声がした。
「リバースカードオープン、進入禁止！Ｎｏ（ノー）　Ｅｎｔｒｙ（エントリー）!!フィールド上の攻撃表示モンスターを、全て守備表示にする！」

「何!?」
「丸藤先輩!?」
　黒い竜巻がドリケラトプスに突き刺さる寸前にぴたりと止まり、華麗な宙返りをしてブラストが鎧田の場に帰ってゆく。その場で、３体の鴉天狗が片膝をついた。
　ＢＦ―暁のシロッコ　攻２０００→守９００
　ＢＦ―漆黒のエルフェン　攻２２００→守１２００
　ＢＦ―黒槍のブラスト　攻１７００→守８００
「助かったドン、丸藤先輩」
「まったく、次はないから気を付けてよね？でも、これでレスキューロイドの借りは返したよ」
「もちろん、わかってるザウルス」
　この２人は普段から喧嘩ばかりしているが、その分いざという時の結束力は強い。お互いがお互いを補うことを知っているため、本人たちが認めるかどうかはともかくとしてタッグとなればかなり強力なチームとなるのだ。
「けっ、まあいいさ。あっさり１人減ったところでつまんねーだけだからな。いいぜ、俺はカードを２枚セットして、これでターンエンドだ」
　翔　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：スチームロイド（守）
　　レスキューロイド（守）
魔法・罠：なし
剣山　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：暗黒ドリケラトプス（守）
魔法・罠：なし
鎧田　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：ＢＦ―暁のシロッコ（守）
　　ＢＦ―漆黒のエルフェン（守）
　　ＢＦ―黒槍のブラスト（守）
魔法・罠：２（伏せ）
場：アンデットワールド
「僕のターン、ドロー！」
長かった一巡目のターンが終わり、続いて翔の第２ターンが訪れる。カードを引き、フィールドと手札の限られたそれから最善手を導き出す。
「魔法カード、融合を発動！手札のキューキューロイドと場のレスキューロイドで融合召喚、レスキューキューロイド！」

　レスキュー車と救急車が混じり合い、赤い車体の消防車型ロイドが赤サイレンを光らせて走ってくる。だがその車体は全体的に錆びついており、よく見るとランプもカバーが割れていた。
　レスキューキューロイド　攻２３００　機械族→アンデット族
「そんな融合モンスター１体で何ができる！さあ来い、そこのメガネ！」
「やってやる！スチームロイドを攻撃表示にして、まずはレスキューキューロイドで漆黒のエルフェンに攻撃！」
　ところどころ破けたホースを伸ばしたレスキューキューロイドが、そこから勢いよく腐った水を放つ。だがその水流は漆黒のエルフェンを押し流す前に、突然上空に現れた竜巻に吸い込まれていった。次いで水を放つホースが、それどころかレスキューキューロイド本体と共にその横にいたスチームロイドの車体までもがその竜巻に巻き上げられていく。
「残念だったな、俺のフィールドにＢＦモンスターのみが３体以上いて相手がＢＦに攻撃してきたとき、通常トラップのブラック・ソニックは手札から発動できる。お前のフィールドの攻撃表示モンスター、全部まとめて除外してやるぜ！」
　鎧田の言葉通り、２体のロイドの姿が徐々に竜巻に引きずられていく。これを通せば翔の場が空になるというピンチに、剣山が思わず叫んだ。

「丸藤先輩！」
「大丈夫！速攻魔法、皆既日蝕の書を発動！フィールド上に存在するモンスターは、全て裏側守備表示となる！」
　ブラック・ソニックによる除外を紙一重でかわす翔。だが、皆既日蝕の書は効果の強力さと引き換えに高いリスクを負うカードである。
「エンドフェイズ、裏側守備表示の相手モンスターは全部表側表示になり、その数ぶんコントローラーはカードをドローする……」
「おお？なんだなんだ、３枚もドローさせてくれんのか？」
「俺も、ドリケラトプスの１枚をドローするドン」
　あまりにも痛い、３枚ものドロー加速。唯一救いなのは、１枚とはいえ剣山のもとにもカードが回ったことか。歯がゆさを胸に、最後にカードを１枚だけ伏せて翔がそのターンを終えた。
「俺のターン、ドローだドン！このカードは……ちゃんと引けてよかったドン。まず化石調査を発ドン、このカードはデッキからレベル６以下の恐竜族をサーチするドン。俊足のギラザウルスを手札に加え、そのまま先ほどの手順で特殊召喚するザウルス。丸藤先輩！」
「うん！もう一度ギラザウルスの効果で、今度も墓地のレスキューロイドを特殊召喚す

るよ」
　先ほどと同じ、変則バトルロイヤルだからこそ成り立つタクティクス。少し迷った末に翔は、効果が決まれば強力なキューキューロイドよりも単純にステータスの高いレスキューロイドを選択した。
　俊足のギラザウルス　攻１４００　恐竜族→アンデット族
　レスキューロイド　守１８００　機械族→アンデット族
「それがどうした?さっきも言った通り、いくら下級モンスターを並べてもこのフィールドがある限りアンデット以外はアドバンス召喚が許されないんだぜ?」
「慌てるなドン。ここで速攻魔法、禁じられた聖槍を発ドン!ギラザウルスの攻撃力が８００ポイントダウンする代わりにこのターンこのカードはアンデットワールドの効果を受け付けない、つまり1ターンだけ元の恐竜さんに戻るザウルス」
　半ば骨が露出して、目玉も片方潰れていたギラザウルスの皮膚がみるみるうちに血色が戻り、肉付きがよくなっていく。
　俊足のギラザウルス　攻１４００→６００　アンデット族→恐竜族
「ああ……?」
「アンデットワールドはフィールドと墓地のモンスターをゾンビ化させるカード、つまり手札にあるうちは恐竜さんのままというところに突破法が隠されているドン。そし

て、これが俺の切り札！魔法カード、大進化薬！自分フィールドの恐竜族モンスターをリリースすることでこのカードは相手ターンで数えて3ターンの間場に残り、そしてこのカードがある限り俺はレベル5以上の恐竜さんをリリースなしで召喚できるドン！」

「何!?」

「さあ吠えるドン、レベル8！究極恐獣（アルティメットティラノ）！」

体中に生えた棘のような鱗は、より敵の体を切り裂き深く傷つけるために。大きく鋭い鉤爪は、たとえ鉄板ほど分厚い装甲を持つ敵でさえも一瞬で引き裂きその中の肉体に致命的なダメージを与えるために。太い足は自身の大きな体を支えると同時に、自身から逃げようとする臆病者を捕らえるために。体中の全ての箇所が目の前の敵すべてを殲滅するためだけに異常な進化を遂げた、戦闘特化型の恐竜の進化の頂点ともいえる姿である。

究極恐獣　攻３０００　恐竜族→アンデット族

「バトル！究極恐獣は俺のどのモンスターよりも先に、必ず全ての相手モンスターに攻撃しなければならないドン。だけどこのデメリットも、恐竜さんのパワーの前ではメリットザウルス。アブソリュート・バイト！縁起の悪い鳥どもを一網打尽だドン！」

恐獣が一声吠え、その尾でブラストを叩き伏せながらシロッコの腐れ肉をためらいなく自らの骨がむき出しになった大顎で噛み砕き、余った両腕でエルフェンの翼を力任せ

に引き裂く。ただの一瞬で、３体の鴉天狗は腐った肉塊とボロボロの羽の塊に変化していた。

究極恐獣　攻３０００→ＢＦ―黒槍のブラスト　守８００（破壊）
究極恐獣　攻３０００→ＢＦ―暁のシロッコ　守９００（破壊）
究極恐獣　攻３０００→ＢＦ―漆黒のエルフェン　守１２００（破壊）

「俺のアンデットフェザー軍団が……だがな、恐竜野郎。このデュエルは１対２の変則デュエルじゃねえ、ルール的にはただのバトルロイヤルルールだ。つまりだ、次にお前ご自慢の恐竜は必ず味方のメガネ野郎のモンスターを攻撃しなけりゃならないのさ！」

「し、しまったドン！」

もはや持ち主の剣山ですら止められないほどの破壊衝動を腐りきってまともな思考のできなくなった脳に秘め、恐獣は次なる標的を自分の隣にある伏せモンスターに定める。その突撃を前に、呆然と立ち尽くす翔。

剣山にとっては体の一部でもあり、彼にとっては一番大切である恐竜。口の端から泡とも腐れ汁ともつかない液体をまき散らしながら暴走の歩みを続ける恐獣を見て、剣山はもう一度その向こう側にいる翔を見る。ほんの一瞬ためらった後、彼はついに覚悟を決めた。

「……恐竜さん、ごめんなさいだドン！速攻魔法、ハーフ・シャットを発ドン！究極恐獣

の攻撃力を半分にする代わりに、このターン戦闘で破壊されなくなるザウルス！」

急に全身の力が抜けた恐獣が、それでも本能のままにむなしい突撃を繰り返す。腐っても鋼鉄製であるロイドモンスターの車体はその攻撃を受けてもびくともせずに、自分の攻撃が通じないことを悟った恐獣がほとんど半狂乱になって体当たりを繰り返した。

究極恐獣　攻３０００→１５００→???（レスキューロイド）　守１８００

剣山　ＬＰ４０００→３７００

究極恐獣　攻１５００→???（スチームロイド）　守１８００

剣山　ＬＰ３７００→３４００

究極恐獣　攻１５００→???（レスキューロイド）　守１８００

剣山　ＬＰ３４００→３１００

「大丈夫!?」

「この程度、俺の恐竜さんの痛みに比べたらどうということはないザウルス……暗黒ドリケラトプス、追撃のダイレクトアタックだドン！怪鳥（けちょう）！」

折れたくちばしを大儀そうに開き、口から謎の音波を連射するドリケラトプス。それが鴉天狗たちの物言わぬ死体を粉みじんに吹き飛ばし、そのまま鎧田の体を突き抜けた。

暗黒ドリケラトプス　攻２４００→鎧田（直接攻撃）

鎧田　ＬＰ４０００→１６００
「へへっ、どんなもんザウルス！」
「思ったよりやるじゃねえか……だが、調子に乗ってられるのもここまでだ！俺が２０００ポイント以上の戦闘ダメージを受けたことで、墓地から天狗風のヒレンの効果を発動！このカードとレベル３以下のＢＦを選択し、効果を無効にして特殊召喚する！甦れヒレン！そして白夜のグラディウス！」
ＢＦ―天狗風のヒレン　守２３００　鳥獣族→アンデット族
ＢＦ―白夜のグラディウス　守１５００　鳥獣族→アンデット族
たった今全体攻撃により全モンスターを倒したはずなのに、またもや２体のモンスターがすぐさま場に揃う。おまけに既にドリケラトプスで攻撃を行ってしまっているため、究極恐獣でせめてスチームだけでも追撃して破壊することすらできない。
「俺の手札は残り１枚……このカードをセットして、ターン終了だドン」
「残念だったな、俺の手札はそこのメガネのおかげで随分と増えた、まだまだ戦えるぜ！まずはドローだ！」
その瞬間、鎧田のデッキトップが白い光を放つ。剣山も翔も、あれこそが鎧田の洗脳の鍵となっているカードであり、あれを破壊しなければならないのだと認識できた。
「そしてここで２枚のリバースカード、無謀な欲張りを発動！今すぐカードを２枚ド

ローできる代わりに、俺のドローフェイズが２回スキップされるぜ。そしてフィールド上にＢＦが存在することにより、残夜のクリスを特殊召喚！同じ手順により、疾風のゲイルと突風のオロシを特殊召喚するぜ」

ＢＦ—残夜のクリス　攻１９００

ＢＦ—疾風のゲイル　攻１３００

ＢＦ—突風のオロシ　攻４００

「これで仕掛けは整った！ＢＦチューナーのヒレン、非チューナーモンスターのグラディウスの２体をゲームから除外！さあ来い、これぞ斎王様より頂いた俺の新たなＢＦ、極光のアウロラ！」

ヒレンとエテジアの姿が煙か幻のようにふっと掻き消え、アンデットワールドの上空にかかる分厚く暗い雲を突き抜けて七色の閃光が一筋すっと走った。その光の正体は、１羽の鳥……オーロラのごとくつかみどころのない、見るたびに色が変わって見える不可思議な羽根を持つ異端のＢＦである。

ＢＦ—極光のアウロラ　守０　鳥獣族→アンデット族

「な、なんだドンあのカード……？」

「まだだ！同じくチューナーのオロシと非チューナーのクリスを除外して、２体目のアウロラを特殊召喚！」

再び重苦しい魔界の空に走る七色の光。光を放つ２羽の鳥が、空中を自由に飛び交い螺旋を描いた。

ＢＦ―極光のアウロラ　守０　鳥獣族→アンデット族

「次の手順は、と。だが、まずはコイツの効果からだ！疾風のゲイルは１ターンに１度、相手モンスターの攻守を半減できる！これでレスキューキューロイドの攻守は半減するぜ」

レスキューキューロイド　守１８００→９００　攻２３００→１１５０

「そして墓地に眠る、精鋭のゼピュロスの効果発動！俺のフィールドのゲイルを手札に戻してこのカードを蘇生し、俺は４００のダメージを受ける……だがこれで、再び手札のゲイルを特殊召喚して効果を使うことができる！次の目標は究極恐獣、お前だ！」

ＢＦ―精鋭のゼピュロス　攻１６００　鳥獣族→アンデット族

鎧田　ＬＰ１６００→１２００

ＢＦ―疾風のゲイル　攻１３００　鳥獣族→アンデット族

究極恐獣　攻３０００→１５００　守２２００→１１００

「ＢＦチューナーのゲイル、非チューナーのゼピュロスを除外！現れろ、これが最後のアウロラだ！」

３筋目の閃光が、またもや空を彩る。３羽の鳥が放つ光が、徐々に辺りの闇を晴らし

てきた。

ＢＦ―極光のアウロラ　守０

「さて、と。なあ、なんで俺がここまでして攻撃力０のモンスターを３体も並べたか、お前らにわかるか？」

２人とも何も答えない。正確には答えないのではなく、答えられないのだ。まさに２人とも、それと同じ疑問を抱いていたのだから。

「見ていてください、斎王様。今すぐこの者らに光の裁きを食らわせて見せましょう！通常召喚、レベル２！ザ・カリキュレーター！」

電卓に手足が付いたような小さなモンスターが、無数のドクロを押しのけてアンデットワールドに立つ。その表示板にノイズが走ったかと思うと、次の瞬間３２、と表示された。

「いいかよく聞けよ、このモンスターの攻撃力は、自分フィールドのモンスターのレベル合計分の３００倍になる！つまりだ、レベル１０のアウロラが３体とレベル２のカリキュレーター自身が並んだことで合計レベルは３２、９６００の大火力を得ることができる！」

「攻撃力、９６００!?そんなバカなドン！」

「あ、あわわ……」

ザ・カリキュレーター　攻９６００　機械族→アンデット族
「さて、まずは恐竜野郎、お前からだ！カリキュレーターで究極恐獣に攻撃、ノース・トップ・カノン！」
「ぐっ……最後のリバースカード、オープンだドン！」
「無駄だぁ！消え去れ！」
ザ・カリキュレーター　攻９６００→究極恐獣　攻１５００（破壊）
剣山　ＬＰ３１００→０
「はっはっは！ざまあねえなあ、そんなデカいなりしてよお！……あん？」
圧倒的な一撃でライフが０になった剣山だが、まだ彼は倒れない。最後に彼のもとに残った１枚のリバースカード、それはデュエルが始まる前にこの変則マッチ用に彼がデッキに１枚入れておいたカードだった。その効果を処理するまで、彼はまだ倒れられない。今にも意識が飛びそうな中、気力だけで辛うじてこらえて言葉を放つ。
「強欲な……贈り物、だドン。この、カードは……相手プレイヤーに、無条件でカードを、２枚ドローさせることができる……トラップ、ザウルス。丸藤、先輩……これで、あとは頼んだ、ドン……必ず、そいつを……」
翔に対して文字通り最後の贈り物を終えた剣山の体が、その場に崩れ落ちる。プレイヤーがリタイヤしたことにより、フィールドに残り続けていたドリケラトプスの姿も最

後にひとつ不服そうな鳴き声を上げつつ消えていった。
「そんな、剣山君！」
「おーっと、待ちなよ」
意識を失い倒れた相棒に慌てて駆け寄ろうとした翔を、鎧田が制止する。
「まだデュエルは終わってねえ、俺かお前のどちらかが倒れるまで続く。それぐらいわかってるよな？」
「う……」
その表情と声の調子から、せめて剣山を布団に寝かせるほどのひますら与えてくれないことを悟る。仕方なく、翔は再び鎧田に向かい合った。
昔の翔だったら、下手をするとこの時点でプレッシャーに耐えかねてサレンダーしていただろう。だが、この戦場に立っているのはアカデミア入学前の、自分に自信が持てない弱虫だった癖にすぐ調子に乗る悪癖を持ったころの彼ではない。確実にデュエリストとして成長しつつある戦士、丸藤翔なのだ。だから、彼はもう目の前の相手を必要以上に恐れない。自分のデッキを、そして何より自分自身を信じて戦い抜く強さを知っている。
「まずは、あの恐竜野郎の強欲な贈り物の処理があったな。さあ、カードを２枚引きな！それが終わったら俺はメイン２に装備魔法、レアゴールド・アーマーをカリキュレー

ターに発動。これでカリキュレーター以外のモンスターに相手は攻撃ができなくなり、カードを伏せてターンエンドするぜ」

「勝つまで通してくれないなら、このターンで終わらせるまでだ！強欲な贈り物のカードをドローして……僕のターン、ドロー！よし、これなら……リバースカード、融合準備（フュージョン・リザーブ）を発動！エクストラデッキの融合モンスター、スーパービークロイド―ジャンボドリルを見せることで、その融合素材であるドリルロイドをサーチして、さらに墓地からさっき使った融合のカードを手札に戻す！」

「ああ……？」

ここで初めて、翔が何かをしようとしていることに気づいた鎧田。だが、もう遅い。

「魔法カード、融合を発動！手札のトラックロイド、エクスプレスロイド、ドリルロイド、ステルスロイドの４体を素材として、融合召喚！これが僕の切り札、スーパービークロイド―ステルス・ユニオン！」

戦闘機型のステルスロイドとトラックロイドが胴体部分となり、そこから伸びた手足にそれぞれ２つに分かれたエクスプレスロイド、ドリルロイドが新たなパーツとして装着される。両手両足が揃った体に最後に頭がせり上がってきて、ついに数あるロイドモンスターの中でもトップクラスのサイズを誇る４体合体の巨大ロボがその全貌を露わにした。

スーパービークロイドーステルス・ユニオン　攻３６００　機械族↓アンデット族

「何をしたところで、カリキュレーターの攻撃力のほうが圧倒的！惜しかったな、レアゴールド・アーマーさえなければアウロラに攻撃で俺の負けだったかもしれないのによ」

「いいや、このターンで僕の勝ちだ！ステルス・ユニオンは1ターンに1度、フィールドの機械族以外のモンスター1体を選んで装備カードにすることができる！僕が選ぶのはアンデット族モンスター、ザ・カリキュレーターだ！」

「しまった、アンデットワールドの効果が……ふ、ふざけんな、斎王様からも認められたデュエリストのこの俺が、俺がこんな奴らに！こ、ここは3体のアウロラで凌ぐしかねえ！」

鎧田の叫びもむなしくステルス・ユニオンの胸にあるトラックの荷台部分が開き、その中にカリキュレーターが吸い込まれていく。

「バトル、ステルス・ユニオンで極光のアウロラに攻撃！この瞬間にステルス・ユニオンの強制効果により攻撃力が半減するけど、それでもアウロラを攻撃すれば貫通能力で１８００のダメージが通る！」

「なに、攻撃力半減だと？そいつはいいことを聞かせてもらったぜ、だったらまだ俺にもツキがある！リバースカードオープン、ダメージ・ダイエット！これで俺の受けるダ

メージはさらに半減、９００だ！」
スーパービークロイド―ステルス・ユニオン　攻３６００→１８００→ＢＦ―極光のアウロラ　守０（破壊）
鎧田　ＬＰ１２００→３００
「残念だったなあ、このターン中にケリをつけられなくてよ！」
「いいや、勝負はもう終わっている！ステルス・ユニオンは相手モンスター全てに攻撃することができ、さらに守備モンスターを攻撃した場合に貫通ダメージを与える！」
「何？」
蒼白から一転して満面の笑み、そしてまた自らの敗北を悟った顔に。二転三転する表情の鎧田に、巨大ロボの拳が唸りをつけて振るわれた。
「ステルス・ユニオンで、残り２体のアウロラに攻撃！」
スーパービークロイド―ステルス・ユニオン　攻１８００→ＢＦ―極光のアウロラ　守０（破壊）
スーパービークロイド―ステルス・ユニオン　攻１８００→ＢＦ―極光のアウロラ　守０（破壊）
鎧田　ＬＰ３００→０

「ぐはっ！」
「か、勝った！アニキたちも心配だけど、まずはこっちを！」
倒れたままの剣山の体をどうにか起こし、近くの壁に寄りかからせる。すぐにその閉じられていたまぶたがピクリと動き、弱々しく目が開かれた。
「う、うう……丸藤先輩、デュエルはどうなったドン……」
「大丈夫。僕の……いや、僕たちの勝ちだ！」
「どうか、それはよかったザウルス。じゃあ早く、アニキたちのところに……」
いつもなら翔も、剣山が十代をアニキ呼ばわりしたことをいつもの調子で咎めただろう。だが、そんなことをしている余裕は翔にはなかった。なぜなら、彼は見てしまったのだ。廊下の向こう側、今自分たちが来た道から何人かのホワイト生がこちらにデュエルディスクを構えて歩いてくるのを。
剣山も翔の視線の先を追い、こちらに近づいてくる彼らに気づく。そんな彼を守るように、翔が立ち上がった。
「さあ来い、お前たち！ぼ、僕が1人で相手になってやる！」
「丸藤先輩……お気遣いはありがたいけど、いくらなんでもそりゃなしだドン。俺だって、まだ戦うことはできるザウルス！」

どうにか立ち上がった剣山を翔は一瞬止めようともしたが、どうせ言ったところで聞きはしないだろうと判断してそれを諦める。返事代わりに、自分のデュエルディスクを構えた。

「「「デュエル!!」」」

ターン70　光の結社とアカデミア―４Ｆ―

「……よし、清明。確かこの部屋だよな」
「ちょっと待ってね。えっと……うん、この部屋に隠し通路が仕掛けてあるんだって」
ポケットにねじ込んでおいた、三沢からもらったホワイト寮地図を再確認する。間違いない、４階のこの部屋だ。
「なら、一気に行くぜ。せーのっ！」
「待って待って！鍵あいてたらどーすんの!?」
頑丈そうなドアをタックルでこじ開けようとした十代を慌てて止めて一応ドアノブに手を伸ばしてみると、案の定滑らかな動きで普通に開くことができた。まあ、あちらさんとしても僕らが入ってくるのは想定内みたいだし、ここで鍵締めて閉じこもるような見苦しい真似はさすがにしないだろう。
それに、鍵が閉まってないと思う理由はもう1つある。仮に閉じこもっていたとしても僕の場合は、精霊召喚の一発でドアどころか壁ごとぶち抜かせることもできるから特に意味はない。そのことを、霧の王に頼んでノース校との対抗戦のときスプリンクラーを誤作動させたことから斎王だって百も承知のはずだからだ。

「うし、それじゃあ……」
「思ったより遅い到着だな、清明に十代」
　勢いよく開けた部屋はさっぱりとしていて、意外にもシンプルな造りだった。あくまでも隠し通路のためのつなぎの部屋、ということだろうか。だけどそんな部屋の中でも僕らの目を引いたのが部屋の中心に置かれた一組の机と椅子、そしてそこに腰掛ける１人の男。
「三沢」
「よう。俺の思った通り、やっぱりここまで来たのはお前たち２人か」
　最後に会った修学旅行あたりで見たのと同じ銀髪に白服姿をした、僕の親友の１人。まあ、どこかで会うことになるのはわかってた。鎧田と同じだ。
「十代……行って。僕がここは止めるから」
「いいのか？」
「三沢が無茶してこんなことになったのも、もとはといえば僕のせいだからね。だったら、僕が責任取ってどうにかするさ」
　僕の思いが伝わったのかそれ以上何も言わず、十代が僕の横を抜けて開きっぱなしの隠し扉の方へ駈け出した。のだが、その行く手をすっと三沢が塞ぐ。
「なんだよ、三沢」

「斎王様のご命令でな。この場所まで遊城十代が来たら、他の奴はいいから俺が止めろとのことだ」
「俺を……？」
「ああ。正直理由は俺にもわからんが、俺がそんなことを知る必要はない。俺はただ斎王様の命令を遂行するだけだ」
　ここでいったん言葉を区切り、それにな、と呟く。
「個人的な理由だがな、十代。お前にはまだデュエルで勝ったことがなかったはずだ。それは俺のプライドが許さない」
　その言葉をどう受け取ったのか、いつになく難しい顔の十代からは読み取れなかった。だけどやがて、その手が右手のデュエルディスクに伸びる。
「清明。……斎王は、頼んだぜ」
「任せといてよ」
　そのたった一言だけで、僕らにとっては十分だった。もうそれ以上は振り返ることもせず、隠し扉の中に入る。どこまで続いているのかもよくわからないような薄暗い階段を、一段飛ばしで一気に駆けおりていった。

「さてと。ちなみに三沢、なんのデッキを使う気なんだ？」
「そうだな。やはりお前と戦うならば、この地のデッキ……もうわかっているだろうな、ジェムナイトだ」
「ジェムナイト……」
　それを聞いた十代の脳裏に、かれこれ一年近く前の記憶がよみがえる。ノース校対抗戦の代表を決めるデュエルにおいて、三沢のジェムナイトと彼のＨＥＲＯが真っ向からぶつかり合った日のことを。結局その時のデュエルはお互いにライフが０になる引き分けだったが、果たしてこの１年でより成長を遂げたのは一体どちらなのか。
　その答えは、お互いのデッキだけが知っている。それをわかっているがゆえに、それ以上無駄話で時間を潰すようなことはない。デュエルをすれば、わかる。
「「デュエル！」」
　先攻を取ったのは十代。ともに融合を使う２人の戦いは、手札消費が多いがゆえに後攻の方が動きやすい面があることは否定できない。だが、だからといって一歩も引くわけにはいかない。
「俺のターン、融合徴兵を発動！エクストラデッキの融合モンスターを相手に見せることでその素材の１体をサーチかサルベージできる代わりに、同名モンスターを俺は使用できない。俺はアクア・ネオスを見せて、その素材であるネオスを手札に加えるぜ」

十代の新たなヒーロー、ネオス。それを見た三沢がほう、と呟いた。
「なるほど、それがお前の新しいカードか。確かにこの目で見せてもらった」
「このターンはネオスの出番はないけどな。まずはお前だ、ワイルドマンを召喚！そして装備魔法、最強の盾を装備。このカードの効果で攻撃表示のワイルドマンの攻撃力は、その守備力の数値だけアップするぜ」
大剣を背負った筋骨隆々の野生児的ヒーローが、真新しい盾を左手に装備する。
E・HERO（エレメンタルヒーロー）　ワイルドマン　攻１５００→３１００
「なるほど、ワイルドマンの高い守備力を利用してきたか」
「へへっ、どうだ！俺はさらにカードをセットして、ターンエンドするぜ」
「確かに、１ターン目から手札消費２枚でトラップの効果を受けない攻撃力３１００は大したものだ。だが、まだ甘い！魔法カード、ジェムナイト・フュージョンを発動！手札のジェムナイト・アンバー、サニクス、ルマリンの３体を素材として、融合召喚！出でよ、ジェムナイトマスター・ダイヤ！」
３つの宝石の輝きが空中で混じり合い、中心に静かに燃える青い炎のような輝きを宿す１つの輝石となる。大剣を手にしたその宝石剣士が剣を掲げると、白い照明に反射して七色の輝きが辺りを照らす。
「マスター・ダイヤの攻撃力は、墓地のジェム１体につき１００ポイントアップする。残

念ながらモンスターのみしか加算されないが、それでも融合素材にした3体。ワイルドマンを倒すには十分だ」

ジェムナイトマスター・ダイヤ　攻２９００→３２００

「おいおい、いきなりエースモンスターなんて、なかなか気合入ってるな」

「お前は手を抜いて勝てる相手じゃないからな。バトルだ、マスター・ダイヤでワイルドマンに攻撃！」

ダイヤの剣に埋め込まれた8つの宝石がそれぞれ違う色の光を放ち、それが一筋の閃光となってワイルドマンを焼き尽くす。

ジェムナイトマスター・ダイヤ　攻３２００→Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン　攻３１００（破壊）

十代　ＬＰ４０００→３９００

「さあ、次はどうする？俺は、これでターンエンドだ」

「おっと、ならそのエンドフェイズにトラップ発動、トゥルース・リインフォース！バトルフェイズを封じる代わりにデッキからレベル2以下の戦士族モンスター、ヒーロー・キッズを特殊召喚するぜ。そして特殊召喚に成功したヒーロー・キッズは自身の効果により、デッキから同名モンスターをさらに2体特殊召喚できる」

ヒーロー・キッズ　守６００

ヒーロー・キッズ　守６００
ヒーロー・キッズ　守６００
アメコミチックな戦闘服に身を包んだ少年３人が揃う。結果的に十代のフィールドにモンスターを残したままターンを渡したことになるが、それでも三沢の顔に焦りの色はみられない。まだデュエルは始まったばかりなのだ。
十代　ＬＰ３９００　手札：２
モンスター：ヒーロー・キッズ（守）
ヒーロー・キッズ（守）
ヒーロー・キッズ（守）
魔法・罠：なし
三沢　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：ジェムナイトマスター・ダイヤ（攻）
魔法・罠：なし
「俺のターン、ドローだ！ヒーロー・キッズのうち２体をリリースして、アドバンス召喚！来い、ネオス！」
瞬間、光が爆発した。正義の闇の波動を受けた正しきヒーローが、光の結社の本拠地に満を持して立ち上がる。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００

「来たか……だが、そのモンスターでは俺のダイヤは倒せん！」

「そんなことわかってるぜ！永続魔法、魂の共有―コモンソウルを発動！フィールド上のモンスター1体を選択することで発動できるこのカードは、手札からそのモンスターのコントローラーの場に Ｎ（ネオスペーシアン）を1体特殊召喚。そして、その攻撃力を最初に選択したモンスターに加算するぜ。場のネオスを選択し、手札から風のＮ、エア・ハミングバードを特殊召喚！」

『ともに戦おう、十代！』

ハチドリをそのまま人型にしたような鳥人モンスターが、背中に生えた翼を器用に動かして地面に降り立つ。十代の方を振り向いて、一度ウインクして見せた。

Ｎ・エア・ハミングバード　攻８００

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００→３３００

「ほう……」

「まずはエア・ハミングバードの効果を発動するぜ。1ターンに1度、相手の手札1枚につき５００ポイントのライフを回復する！ハニー・サック！」

三沢の手に残った2枚の手札から大きな花が生え、颯爽と飛び立ったエア・ハミングバードがこれまた器用にその花ひとつひとつから丁寧に蜜を吸い取ってゆく。

十代　ＬＰ３９００→４９００
「これでよし、と。バトルだ！ネオスでジェムナイトマスター・ダイヤに攻撃、ラス・オブ・ネオス！」
飛び上がったネオスが上空から加速度をつけてチョップを叩き込む。それを迎撃せんとマスター・ダイヤが大剣を構えるが、一瞬の激突の後大剣がチョップを受けた中心部分からぽっきりと折れてしまった。たまらず一歩下がったマスター・ダイヤの鎧に、もう一撃のチョップが炸裂する。
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻３３００→ジェムナイトマスター・ダイヤ　攻３２００（破壊）
三沢　ＬＰ４０００→３９００
「驚いた、まさかお得意のスカイスクレイパーも融合も使わずに攻撃力だけでマスター・ダイヤを越えてくるとはな」
「これで終わりじゃないぜ！エア・ハミングバードでダイレクトアタック、ホバリング・ペック！」
Ｎ・エア・ハミングバード　攻８００→三沢（直接攻撃）
三沢　ＬＰ３９００→３１００
「さあ来い三沢、俺はこれでターンエンドだ！」

「１つ言っておこう、十代。マスター・ダイヤが倒されるのは俺の想定内……ここからが本番だ、とな」

自身のエースが倒されたというのにまるで堪えた風のない三沢の態度にどこかゾッとするものを感じながらも、それを振り払うように首を振って十代は次に三沢が何をしてくるのかの観察にかかる。

「俺のターン、ドロー！永続魔法、ブリリアント・フュージョンを発動！この効果で呼び出す融合モンスターは攻守が０になるが、代わりにデッキのモンスターを素材として融合召喚ができる！」

「何!?デッキだけで融合召喚だと!?」

長いこと融合テーマのパイオニア、ヒーローデッキを使い続けてきた十代でさえ聞いたことのない融合条件。融合の一番の弱みである手札消費の荒さも、その素材をデッキだけで賄うのであれば関係ない。

「デッキに眠るジェムナイト・ラズリー、クリスタ、ガネットの３体を素材とし、融合召喚！これぞ斎王様のもとで俺が手に入れたジェムナイトの新たなエース、ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ！」

砕け散ったダイヤモンドのかけらが再び結集し、へし折れた大剣もより細身のレイピアとして生まれ変わる。胸の巨大な核石（コア）も新たなカット法により生まれ変わり、前とは

一味もふた味も違う輝きを手に入れたブリリアント・ダイヤがネオスと対峙する。
ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ　攻３４００→０　守２０００→０
「だけど、攻守０ならネオスの攻撃で……」
「無論、そうはさせない。まずはラズリーが墓地に送られたことで墓地の通常モンスター、ルマリンを回収する。そして墓地からジェムナイト・フュージョンの効果発動、墓地からジェムナイトのモンスター１体、サニクスを除外することでこのカードを手札に戻す。そのまま手札の魔法カードであるこのカードを捨てて、ブリリアント・フュージョンのさらなる効果を発動！このカードで融合召喚したモンスターの攻守を、相手ターンの終わりまで元の攻守の数値だけアップさせる」
ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ　攻０→３４００　守０→２０００
「……バトルだ、ブリリアント・ダイヤでネオスに攻撃！切り裂け、ブリリアント・ダイヤ！」
妙な間が空いたのち、ブリリアント・レディが走る。レイピアの鋭い連撃が、ヒーローの反応速度を徐々に上回る。辛うじて両腕でガードを続けるが、それも最終的にはむなしい抵抗に終わった。
ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ　攻３４００→Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス攻３３００（破壊）

十代　ＬＰ４９００→４８００
「ネオス！」
「これで俺の攻撃は終わりだ、だがこのままエンドフェイズではないぞ。魔法カード、黙する死者を発動。墓地の通常モンスター、ジェムナイト・アンバーを蘇生させる。そしてデュアルモンスターであるアンバーを再度召喚しよう」
ジェムナイト・アンバー　守１４００
「デュアルモンスターは召喚権を消費して再度召喚されることによって通常モンスターから効果モンスターとなり、その効果を使用できる。そしてアンバーの能力は手札のジェムナイトモンスターを墓地に送ることで、除外されたモンスターを１体俺の手札に加えること。さっき加えたルマリンを墓地に送り、除外したサニクスを手札に。カードを１枚伏せて、ターンエンドだ」
「まさかネオスまでやられるなんて、さすが三沢だな。俺のターン、ドロー！」
フィールドに残ったのは下級モンスター２体、手札も０とあまり好ましい状況ではない。それでも十代は、自分でも知らず知らずのうちに笑っていた。この圧倒的なピンチを乗り越えることができるか、それを決定づける１枚のドローを心から楽しんでいるのだ。
「……いいカードを引いたぜ、カードガンナーを召喚！まずはエア・ハミングバードの効

果をもう1度発動し、またライフを回復するぜ」
三沢の2枚の手札が大輪の花を咲かせ、その蜜を再びエア・ハミングバードが吸い尽くす。
十代　ＬＰ４８００→５８００
「また回復か。……ってちょっと待て、カードガンナーを攻撃表示だと!?」
「ああ、俺は逃げずに戦うぜ!カードガンナーの効果発動、1ターンに1度自分のデッキを上から3枚まで墓地に送り、エンドフェイズまでその数1枚につき５００ポイント攻撃力をアップさせる。俺はもちろん、3枚のカードを墓地へ!」
カードガンナー　攻４００→１９００
「おっ、ラッキー。クロス・ポーターは墓地に送られた時、デッキからＮのカードを1枚サーチできる。俺はこれでグラン・モール……いや、アクア・ドルフィンを手札に加えるぜ」
運良く墓地で効果を発動できるクロス・ポーターの効果が使えた十代。最初はブリリアント・ダイヤをバウンスできるグラン・モールをサーチしようかとも思ったが、それでは駄目なことに気づいて慌てて取りやめる。三沢の洗脳の憑代となっているのは、本人の発言からいってもブリリアント・ダイヤで間違いないはずだ。だとすれば、それをあくまでもフィールド上で破壊しなければ洗脳を断ち切ることにならない。

「バトルだ、カードガンナーでジェムナイト・アンバーに攻撃！」
全体的におもちゃのような原色の小型ロボが、目からビームを放つ。
カードガンナー　攻１９００→ジェムナイト・アンバー　守１４００（破壊）
「そのままエア・ハミングバードを守備表示に変更してエンドフェイズ、カードガンナーの効果も切れてターンエンドだ」
「いいだろう。それと同時に、ブリリアント・フュージョンの効果も切れる」
Ｎ・エア・ハミングバード　攻８００→守６００
カードガンナー　攻１９００→４００
ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ　攻３４００→０　守２０００→０
十代　ＬＰ５８００　手札：１
モンスター：カードガンナー（攻）
Ｎ・エア・ハミングバード（守）
ヒーロー・キッズ（守）
魔法・罠：魂の共有―コモンソウル（ハミングバード）
三沢　ＬＰ３１００　手札：２
モンスター：ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ（ブリリアント・フュージョン）

ジェムナイト・アンバー（守）
魔法・罠：ブリリアント・フュージョン（ダイヤ）
1（伏せ）

「俺のターン、ドロー！言っておくがな十代、ブリリアント・ダイヤは打点だけではなく、まだ使っていない効果が残っている！ジェムナイト・サニクスを召喚し、ブリリアント・ダイヤの効果発動。自分フィールドのジェムナイト1体を墓地に送り、ジェムの名を持つ融合モンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚できる！グラインド・フュージョン、ジェムナイト・パーズ！」

黄金色の体を持つジェムナイトの突撃戦士が、黄色がかった緑のマントをはためかせて現れる。

ジェムナイト・パーズ　攻１８００

「エクストラデッキから融合モンスターを直接特殊召喚だと!?それに、パーズは確か……」

前にも一度パーズと戦ったことのある十代が、そのデュエルを思い出す。パーズの固有能力、それは確か。

「その通り、パーズは2回攻撃能力と戦闘破壊したモンスターの攻撃力と同じダメージを相手に与える能力を持つ。さらに墓地のアンバーを除外してジェムナイト・フュー

ジョンを手札に戻し、このターンのためのブリリアント・フュージョンのコストに使う」
　ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ　攻０→３４００　守０→２０００
「さあ、バトルだ！ブリリアント・ダイヤでカードガンナーに攻撃！」
「させるか！墓地のネクロ・ガードナーを除外して、その攻撃を無効にする！」
　半透明の戦士が、レイピアの嵐からカードガンナーを守り抜く。その様子に、さすがの三沢も苦笑いを漏らした。
「さすがに凄まじい落ちの良さだな、十代。たった３枚の墓地肥やしで、２枚も墓地で力を発揮できるカードを落とすだなんて。だが、まだパーズの２回攻撃が残っている。ヒーロー・キッズ、そしてエア・ハミングバードに連続攻撃！」
　ジェムナイト・パーズ　攻１８００→ヒーロー・キッズ　守６００（破壊）
　十代　ＬＰ５８００→５５００
　ジェムナイト・パーズ　攻１８００→Ｎ・エア・ハミングバード　守６００（破壊）
　十代　ＬＰ５５００→４７００
「まだ終わっていないぞ、十代！リバースカードオープン、融合解除！ブリリアント・ダイヤをエクストラデッキに戻すことで、その融合素材である３体を墓地からフィールドに特殊召喚する！甦れラズリー、クリスタ、ガネット！」
　ダイヤの光が辺りにはじけ、今度はそれが３体のジェムナイトに分裂した。水晶を司

るクリスタ、燃え盛る柘榴石の拳を振るうガネット、そして瑠璃の神秘を秘めたラズリーである。

ジェムナイト・クリスタ　攻２４５０

ジェムナイト・ガネット　攻１９００

ジェムナイト・ラズリー　攻６００

「融合解除!?それを伏せてたのか、三沢！」

「ああ、これは予想外だったようだな、十代！ラズリーでカードガンナーを破壊して、ガネットとクリスタでダイレクトアタック！」

ジェムナイト・ラズリー　攻６００→カードガンナー　攻４００（破壊）

十代　ＬＰ４７００→４５００

ジェムナイト・ガネット　攻１９００→十代（直接攻撃）

十代　ＬＰ４５００→２６００

ジェムナイト・クリスタ　攻２４５０→十代（直接攻撃）

十代　ＬＰ２６００→１５０

「今のはなかなか効いたぜ、三沢。カードガンナーが戦闘破壊されたことで、カードを１枚ドローする」

「これが俺の全力だ……カードを２枚伏せ、ターンエンドだ」

「なら、今度は俺の全力を見せてやらなくちゃな！俺のターン、ドロー！よし来たぜ、コンバート・コンタクトを発動！手札とデッキからＮを１体ずつ墓地へ送り、カードを２枚ドロー。俺は手札のアクア・ドルフィンと、デッキのフレア・スカラベを墓地に送るぜ」

「この局面で、さらなるドローソースだと……！」

うなる三沢とは対照的に、本当に楽しそうな様子を隠そうともせずにカードを引く十代。その思いが、またも十代に奇跡の引きをもたらした。

「魔法カード、シャッフル・リボーンを発動！俺のフィールドにモンスターが存在しないことで、俺の墓地のモンスター１体を効果を無効にして特殊召喚するぜ。戻って来い、エア・ハミングバード！」

Ｎ・エア・ハミングバード　攻８００

「ここで俺は墓地から、シャッフル・リボーン第２の効果を発動。このカードを墓地から除外して自分フィールドのカードをデッキに戻すことで、カードを１枚ドローできる。俺は永続魔法、魂の共有―コモンソウルをデッキに戻すことで、１枚ドローだ」

「だが、シャッフル・リボーンにはデメリットもある。２つの効果を使ったならばお前はこのエンドフェイズに両方のデメリットが適用され、そのモンスターと手札１枚が除外されることになるぞ」

冷静な三沢の指摘。だが、十代はそれを恐れない。
「まあ見てなって。俺はこのターン、まだ通常召喚をしていない。来い、闇のN！ブラック・パンサー！さらに死者蘇生を発動し、墓地のフレア・スカラベを蘇生！」
『任せてくれ、十代！』
『さあ、戦いだ！』
地面に黒い水たまりが湧きあがったかと思うと、その水がぐっと盛り上がってマントをつけた黒豹の姿となる。それと同時に隣で火柱が立ち、その中から甲虫のような角と羽を生やした人間が現れる。
N・ブラック・パンサー　攻１０００
N・フレア・スカラベ　攻５００→１７００
「魔法カード、スペーシア・ギフトを発動！自分フィールドのNと名のつくモンスター1種類につき1枚、カードをドローする。エア・ハミングバードとブラック・パンサー、フレア・スカラベで合わせて3枚ドローだ。よし！今引いた魔法カード、O―オーバーソウルを発動！墓地の通常モンスターのE・HERO、ネオスを特殊召喚！甦れ、ネオス！」
E・HERO　ネオス　攻２５００
「見せてやるぜ三沢、これが俺の手に入れたヒーローの力！フィールドのネオスとエア・

ハミングバードをデッキに戻し、コンタクト融合!これが融合の新たな可能性の1体、エアー・ネオスだ!」

　エア・ハミングバードとネオスの体が1つに溶け合い、ネオスの体をベースに風の戦士の意匠と鳥の要素を混ぜ合わせたような烈風のヒーローが降り立つ。

「コンタクト融合だと!?」

「そうさ、宇宙のヒーローの力はすごいんだぜ!エアー・ネオスは俺とお前のライフ差をそのまま攻撃力に加算する、そして俺のライフは１５０なのに対しお前のライフは３１００だ!」

　Ｅ・ＨＥＲＯ　エアー・ネオス　攻２５００→５４５０

「驚いたな、まさか自分のギリギリのライフまで攻撃力に変えてくるとは……!」

「すごいって言っただろ?バトルだ、フレア・ネオスでジェムナイト・ラズリーに攻撃!……ってあーっ!しまった、やっちまった!」

　ついデュエルに熱くなってしまい、肝心要のブリリアント・ダイヤの破壊をすっかり忘れていたことに今更気づく十代。慌てて攻撃を取り消そうとするが、三沢の方が反応は早かった。

「攻撃宣言時にトラップ発動、輝石融合(アクセンブル・フュージョン)!このカードはジェムナイト専用の融合カードで、トラップカードでありながら融合を行うことができる!フィールドのジェム

ナイト3体、ラズリー、パーズ、ガネットを素材にして、融合召喚！再び現れよ、輝きの淑女！ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ！」

３体の宝石戦士が再び混ざり合い、レイピアを掲げる女剣士がフィールドに再び舞い降りた。その攻守はブリリアント・フュージョンによって弱体化されたものではなく、正規の手段で融合されたことで本来の数値のままとなっている。

ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ　攻３４００

「ブリリアント・ダイヤ……だったら、こうするぜ！エアー・ネオスでクリスタに攻撃だ、スカイリップ・ウィング！」

エアー・ネオスがその翼で天空に舞い上がり、空気の衝撃波を飛ばす。それに対し水晶の戦士も、自らの核石を輝かせて真っ向から立ち向かう。激しい鉱石の拳と風の刃の応酬はやがて、風の刃がクリスタの核石をズタズタに切り裂いて決着がついた。

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアー・ネオス　攻５４５０

↓ジェムナイトレディ・クリスタ　攻２４５０（破壊）

三沢　ＬＰ３１００→１００

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアー・ネオス　攻５４５０→２５００

「この瞬間、リバースカードオープン！トラップ発動、極星宝レーヴァテイン！戦闘でモンスターを破壊した相手モンスター1体を、あらゆるカードのチェーンを許さずに破壊

する！十代、これでお前のフィールドに残っているのはＮの３体だけだ！」
　クリスタとの戦闘に打ち勝ったエアー・ネオスが地上に帰還した瞬間、その心臓をダイヤモンドのレイピアが寸分違わずに音もなく刺し貫く。苦悶にもがく暇もなくその場に崩れ落ちたエアー・ネオスの体から、ブリリアント・ダイヤがそのレイピアを引き抜いてスッと優雅な動きで振った。
　コンタクト融合ですら光の力を受けた三沢には及ばない……今度こそ勝利を確信した三沢の笑みが、そこで凍りついた。なんと、十代もまたそれを見て笑っていたのだ。
「なあ三沢、やっぱりデュエルは最高だぜ！最後の最後まで何が起きるかわからなくて、だから何よりも面白い！」
　そう少年のように純粋な瞳で語る十代に一瞬虚を突かれるも、ややあって三沢もゆっくりと何かを察したかのように微笑んだ。
「……ああ、そうだな」
「さあ、ここからが本当の本番だぜ！速攻魔法、リバース・オブ・ネオスを発動！フィールドのネオスと名のつく融合モンスターが破壊された時、デッキからネオスを攻撃力を１０００ポイントアップさせて攻撃表示で特殊召喚する！」
　エアー・ネオスが散らした羽の中から、三度フィールドに現れたネオス。その全身は、静かに燃える純白のオーラに覆われていた。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００↓３５００
「行っけぇ!ネオスでブリリアント・ダイヤに攻撃、ラス・オブ・ネオス!」
ネオスの右腕にオーラが集中し、目も眩むばかりの光を放つ必殺の一撃を放つ。迎え撃たんと放たれたダイヤモンドのレイピアを叩き折り、そのままいささかも勢いを落とさずにブリリアント・ダイヤ本人をも切り裂いた。
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻３５００↓ジェムナイトレディ・ブリリアント・ダイヤ攻３４００（破壊）
三沢　ＬＰ１００↓０

「う……」
「三沢!」
吹っ飛ばされた三沢が、ややあって倒れた時に打ったらしい頭をさすりながら上半身を起こす。駆け寄ってくる十代を見て、何があったのか思い出したらしい。
「ははは、結局お前の勝ち、か……うっ!?」
「おい、無理して起き上がるなって」
立ち上がろうとしてバランスを崩し、また床に座り込む三沢。その不安定な様子に十

代も一瞬どうするか悩んだものの、より危険な場にいるであろう友人のもとへ駆けつけるのを優先する。

「じゃあ三沢、俺は清明の様子を見てくるからな。きっと他の奴らももうじきここまで来るはずだから、お前も動けるようになったら来いよ！」

「十代、俺は……」

三沢の言葉は、十代には聞こえなかったようだ。最後にそれだけ言い残し、十代も隠し扉の階段を一気に駆けおりていく。その足音が完全に聞こえなくなるまで見送ってから、近くの机に寄りかかるようにしてどうにか三沢も起き上がる。軽く辺りを見回すと、斎王がなにか手書きで書類でも作っていたのか、紙とペンが転がっていた。

それをしばらくの間見つめたのち、おもむろに三沢は手を伸ばした。

一方その頃、１Ｆでは。

「魔法カード、クロス・アタックを発動！自分フィールドに同じ攻撃力のモンスターが存在する場合、１体の攻撃を封じることでもう１体はこのターン直接攻撃が可能となる。俺のフィールドには攻撃力２８００のダーク・アームド・ドラゴンとメタファイズ・アームド・ドラゴンが存在することで、メタファイズ・アームドのダイレクトアタック！は

あ、はあ……どうした、今年のノース校はその程度か？だとしたら、俺がいなかったこの1年の間にずいぶん学校のレベルが落ちたようだな！」

連戦に次ぐ連戦に息を切らしながらも、まだ闘志の消えていない目で万丈目が白服相手に啖呵を切る。すでにその近くにはライフ0になってデュエルからはじき出された白服が山となっており、どれだけ激しい戦いが起きていたのかが垣間見える。

そんな万丈目の様子におそらく1年だろうか、まだ幼い顔立ちの連中が怖気づいたように一歩下がる……だが、そんな中でもなお重々しい雰囲気を崩さない者がいた。

「……怯むな、お前たち。すべては斎王様のため、例え捨て石としての役目であろうとも、その一瞬一瞬が斎王様を助けることとなる」

「「ハ、ハイ！全ては斎王様のために！」」

「天田……ええい、本当に性質（タチ）の悪い宗教だな。そして何より、こんなくだらん中に俺がついこの間までいたということが最高に気に食わん！」

『そうよアニキ、やっちゃって！もしアニキがここで負けちゃったら、またアタイ達もぼろ雑巾みたいな扱いを……扱いを……あれ？確かに白い時の方がひどかったけど、やってることはあんまり変わってないような』

「お前は少し黙ってろ！」

まだおジャマ・イエローと軽口をたたき合うだけの元気は残っているが、それも空元

気に過ぎない。少しずつだが確実に、状況は悪化していた。
「「天田さん、助太刀参ります！」」
「おいおい、ここにきて援軍だと!?」
『ひ～っ！いっぱい来ちゃったわよアニキー！』
　睨む万丈目の顔に、嫌な汗が一筋流れる。それを見て、普段寡黙なノース王四天王も会心の笑みを漏らすのだった。
　そして、その頃の２階では。
「ドラゴネクロの攻撃、ソウル・クランチでそのモンスターの魂を奪い取り、攻撃力０になった抜け殻にワイトキングで追撃の螺旋怪談、なんだって。貴方のライフはこれで０、私はこれでターンエンド。あら、この程度かしら？ってさ。貴方達の顔には見覚えがあるけど、前よりだいぶ弱くなったんじゃないの、だって」
　１対多という圧倒的不利な状況ながら余裕を崩さない、この夢想の言葉には訳がある。おそらくは本人たちの希望なのだろうが、ここで片っ端からやられているのは全員かつて夢想に告白しては『デュエルで私よりも強かったらいいよ、ってさ』というニコニコ笑顔での言葉の前に散っていった負け犬軍団なのだ。
　雪辱を晴らすためにここに集まっているのであろう彼らだが、当然無双の女王とまで呼ばれる彼女のデュエルタクティクスの前にはちょっとやそっとのことでその実力差

を埋められるはずもなく、まともな時間稼ぎにもならずばったばったと倒されていく。
だがこの階を担当するノース校四天王、酒田にはそれも完全に予想の範囲内だったようだ。
「ククク……なあ、ひとつ聞いてやろう。そろそろ種明かしもしたいしな！やいやいお前、お前の相手は全部で何人だと思う？」
「え？えっと、ひい、ふう、みい……貴方も入れて１９人かな、ってさ。今はもう貴方しか残ってないけど」
そう答える彼女に、これ以上ないぐらい喜色満面の笑みを浮かべる酒田。
「残念だったなぁ！俺たちのチームは全部で２０人いるんだよぉ！」
「え？でも……」
何か言おうとする夢想を遮り、今までずっと言いたくてしょうがなかったという風にペラペラと早口で喋りだす。
「いいか、よく聞けよ。お前はこれまで俺たちを１人ずつ順番に相手してきたと思っているようだが、それは大間違いだ。お前はずっと３人でのバトルロイヤルを続けてきたんだよぉ！」
酒田が何を言っているのかわからず、面食らう夢想。その様子に舌打ちをしつつ、つまりだ、ともう少し詳細な説明に入る。

「お前がまず最初の１ターン目をやった。そうだろ？だからお前のことを仮にプレイヤーＡとする。そして次、そこでぶっ倒れてる奴の誰かがやった。これがプレイヤーＢのターンだ。お前はその直後、もう１度プレイヤーＡのターンが来たと思っていたようだが、それこそが間違いだ。その間にお前の知らない第３のプレイヤー、プレイヤー壱のターンがあったんだよ！」

「え……？」

「そしてお前がワンショットキルしてプレイヤーＢのライフは１瞬で０になり、それと入れ替わりでプレイヤーＣがＢの枠にそのまま収まった。そして何食わぬ顔してターンを終え、またプレイヤー壱のターンが回ってきた。と、まあこういうわけだ」

衝撃の告白。つまり、自分を含む１９人を丸々そのプレイヤー壱とやらのための囮にしたというのだ。そして勘の鋭い彼女には、もうこの先の展開が分かっていた。さっと彼女の顔が青ざめたのを満足そうに見て、駄目押しのさらなるネタバラシにかかる。

「もうこうなると、俺が何が言いたいのかはわかってるみたいじゃねーか？苦労したんだぜ、なにせプレイヤー壱があまり時間をかけすぎると、バトルロイヤルデュエルをデュエルディスクが認識している以上不都合が出てくるからな。運悪くキーカードがなかなか引けなかったせいで、こいつらの方が先に頭数がなくなっちまうんじゃないかと思ってハラハラしたぜ」

デュエルモンスターズでは、前のプレイヤーがターンを終えていないのに次のプレイヤーがカードをドローすることはできない。また、もしそんなことをしようとしてもデュエルディスクがその操作を受け付けない。なのでプレイヤー壱はそのキーカードが手札に来るまでサーチカードを使うだけのひまもなく、ひたすら目当てのカードが来るまでドローフェイズにカードをドローしていただけということになる。

そして、そんなデュエリストとしてのプライドを完全にかなぐり捨てるような真似をしてまでこの２０人が狙っていた、たった１つのコンボとは一体。その答えは、いつの間にか夢想の周りを取り囲んでいた１７個の人魂にあった。

「それじゃあ、これは……ってさ」

「ご名算！俺たちが狙っていたコンボは、このひとつ！お前の今のエンド宣言により、終焉のカウントダウンは１７ターン目のカウントを終えた！」

終焉のカウントダウン……２０００ポイントものライフを支払うことで発動し、お互いのエンドフェイズごとに１つずつカウントが増えてゆく通常魔法。そして２０ターンが経過した時、発動プレイヤーはデュエルに勝利する。

いわゆる特殊勝利カードの１枚だが、このカードには他の特殊勝利カードにはないある特徴がある。１度発動さえしてしまえば、その前に勝負をつけない限り絶対にカウントを止める手段がないという点だ。そして今無双の周りに浮かぶ人魂は、もうかれこれ

１７ターンも前にカウントダウンが始まっていたことを表す。
「さて、そして俺のターンだ。魔法カード、成金ゴブリンを発動！プレイヤー壱のライフを１０００回復させることで、デッキからカードを引くぜ」
「ちょっと酒田さん、ちゃんと名前で呼んでくださいよー」
　気弱そうな声が、すぐ横から聞こえる。誰かの部屋の扉が開き、特徴のない顔をした少年が顔を出した。
　プレイヤー壱　ＬＰ２０００→３０００
「はは、悪い悪い。だけどあとちょっとだ、俺たちよりも実力が上のこの化け物女を、俺たちのチームプレイで仕留めてやろうぜ！」
「は、はい！」
「チーム、プレイ……？」
　だいぶ何か言いたそうな夢想をきっぱりと無視して、酒田は今引いたものと合わせて４枚のカードをセットした。一応本人たちの名誉のために断わっておくと、決して普段の彼らはこのような真似をしない。その程度のデュエリストとしてのプライドは持ち合わせている。だが高い斎王の強い洗脳術とそれによって生み出された信仰心が、自らのプライドを踏みにじってまで斎王のために戦う道を選ばせたのだ。
「ターンエンドだぜ。ひとつ教えといてやるがな、今俺が伏せたカードは大革命返し、和

睦の使者2枚、奈落の落とし穴2枚だ。もうお前がどうあがいたとしても、絶対にこのデュエルは終わらせられねえって寸法よ！」

その言葉を裏付けるかのように、18個目の人魂がぼっと灯った。そしてそのまま、もはや存在を隠さなくなったプレイヤー壱のターンが特に何もしないまま終わり、19個目の人魂が灯る。

夢想に残されたターンは、わずか1ターン。彼女がここから逆転をするには、この1ターンを駆使して酒田とプレイヤー壱のライフを0にしなければならない。だが、坂田の言葉を信じるならば彼の場の妨害札のせいでそれができる可能性は限りなく0に近い。

夢想の表情が、スッと強張った。せめてもの抵抗として、自分の場に伏せてあったカードを表にする。

「エンドフェイズにサイクロン……私から見て真ん中のカードを破壊するんだってさ」

「ちっ、和睦が1枚おじゃんになっちまったか。だがな、それ1枚で今更何ができる！」

自分のデッキの中にある何のカードを引けば、この状況を打破できるだろうか。彼女は静かに目を閉じて、いくつものパターンをシュミレートし始める。

では、3階では何が起きているのか。翔と剣山が互いに互いの背中を守りながら、輪になって包囲する白服軍団相手に一歩も引かずに大立ち回りを繰り広げていた。

「速攻魔法、融合解除を発動！僕の場のスチームジャイロイドをエクストラデッキに戻すことで、融合素材となったスチームロイド、ジャイロイドの２体を特殊召喚する！そのまま２体で直接攻撃！」

「相手フィールドに守備表示モンスター以外のカードが存在しない時、暗黒恐獣（ブラック・ティラノ）は相手プレイヤーに直接攻撃ができるドン！さらにこのダメージステップにリバースカード、生存競争を発ドン！暗黒恐獣の攻撃力は、さらに１０００ポイントアップしてとどめザウルス！」

下２階と比べ、ここの２人はそこまで苦労していない。その理由はそもそもここにいるのが警戒されていた万丈目に夢想とは違い一般構成員からすればほぼノーマークに等しい２人だったおかげで出てきた光の結社メンバーも少ないうえ、もっとも危険である鎧田を一番先に片付けたからだ。

そして最後の１人が倒れ、改めてほっと息をつく。

「ふう……大丈夫、剣山君？」

「デュエルしてるうちに、だいぶ痛みも消えてきたドン。でも休んでる暇はないドン、早く先に進むザウルス」

その言葉に翔も頷き、十代たちの向かった方へ歩き出す。だが、数歩も歩かぬうちにその足が不意に止まった。

「どうしたドン?」
「下の2人がまだ来ないってことは、やっぱり様子を見に行った方がいいんじゃないかなって思って……でもアニキも心配だし、どうしよう?」
本気で困ったような翔の様子に、剣山も一瞬考え込む。そして一度自分自身に言い聞かせるように頷くと、翔の背中をバシッと叩いた。
「うわっ!?何するのさ!?」
「丸藤先輩、悪いけどここから先は1人で行ってもらうドン。俺が代わりに下の様子を見てくるザウルス」
「え、でも……」
十代のところに行きたい気持ちは同じであることは、翔もよくわかっている。それなのにその役を翔に譲り、自分は下を助けに行くという。それがどれだけ重い決意だろうか、それを考えると素直にその提案を受け入れることをためらってしまう。その様子を見て、もう1度剣山が翔の背中を押した。
「ここで話し込んでる暇はないドン、十代のアニキのことは一時任せたザウルス!」
それだけ言い、身をひるがえして今来た道を引き返す剣山。その後ろ姿を見て、もう一度ためらって、最後に一度深々と頭を下げてから、翔もまた剣山とは真逆の方向へと走り出した。

ターンＥＸ―４　光の結社とアカデミア―??―

入った時にはあれだけいたメンバーも１人減り、２人減りとどんどん少なくなっていって最終的に隠し扉の奥にたどり着いたのは僕１人。

「いよいよラスボスのお出ましですね、っと」

「いいや、斎王様がわざわざ動くまでもないぜ。少なくともお前相手なら、俺で十分すぎるからな」

「うわ、ユーノ……」

扉の前で待ち構えていたその男の名前は、ユーノ。僕の……なんだろう。半身？憑依？いまだに立ち位置がよくわからないけど、僕にとってある意味では最も大切な人間だ。チャクチャルさん共々僕の命を救ってくれた、異世界から来た異邦人。

だけど、これもある程度想定済みだ。少なくとも斎王にたどり着くまでのどこかで出てくるだろうとは思っていた。まさかこんなところにいたとはね。

前回、本当に一瞬だけ会った時のことを思い出す。あの時は時の魔術師のカードを持っていたから、おそらくそれが洗脳の鍵になっているのだろう。ただ、それだけじゃデッキがまるで読めないのが困る。僕のデッキを僕が持ってる以上、何か新しいデッキ

を使ってるのは間違いないはずなんだけど。
「ここで迷ってても仕方ないかね。いいよユーノ、斎王の前の前哨戦だ、一丁デュエルと洒落込もう！」
「前哨戦？違うな、これがラストバトルに決まってんだろ！」
前回は時の魔術師の能力を実体化させて僕の時間を止めるという反則すれすれのチート技をぶちかましてくれたユーノだけど、今回それをする気はないようだ。もっとも今回は僕にも油断はない、もしそんなことをしたらその瞬間ダークシグナーの力を全開にしてでも抵抗しよう。
『うむ。もう前回の轍は踏まない、私に任せてくれマスター』
チャクチャルさんもやる気十分だ。とはいえ、それはユーノだって承知のはず。前と同じ手を使うような真似はしないだろう。お互いにデュエルディスクを構えて向かい合い、いざデュエルの掛け声を……
「おっと、そいつはさせねえぜ！お前のせいでめんどくせえことになってんだ、落とし前つけてもらうぜ！」
その瞬間、どこからともなくそんな声がした。そして目の前の空間に割れ目が走り、それをこじ開けるようにして1人の青年が飛び出てくる。彼はユーノの首根っこを引っ掴むと、そのまま煙か幻のように消えさった。本当に一瞬の出来事だったのでその

少年の顔もよく見えなかったが、あの顔には見覚えがある。前も同じようにどこからともなくやってきてどこへともなく消えていった、その名は。
「富野……？」
その言葉には、もう誰も返事をする人はいなかった。

ここはホワイト寮から離れた地、三幻魔の封印されていた祭壇。その目の前の空間がいきなり歪むと、中から２人の青年が転げ落ちてくる。そのうち１人は近頃珍しくもなくなったホワイトな学生服だが、もう１人はこのデュエルアカデミアではいささか珍しい私服姿である。その２人、ユーノと富野が起き上がり、お互いに相手を睨みつける。
先に口を開いたのは、ユーノの方だった。怒りを抑えるようにして、むしろ静かなほどの声音でゆっくりと尋ねる。
「なあ富野、今はお前なんぞ相手にしてる暇はないんだが。斎王様が直接動くことになっちまうだろうが」
「アホか。俺もいろんな転生者は見てきたけどよ、完全に別次元から入ってきたパターンのくせに斎王に完っ全に洗脳されましたってのはなかなかないぜ」
気楽な言葉とは裏腹に、富野の表情は不自然なほど固い。彼だって、自分を倒すほど

の腕前を持ったデュエリストがそうあっさりと斎王の洗脳にかかるとは最初から思っていない。これには何か裏がある、そう考えるからこそはるばる次元を越えてこの世界に干渉してきたのだ。だが、いまだに何ひとつ見えてこない。直接会うことで何かしら掴めるかとの淡い希望が潰えたいま、残ったもう1つの手段に頼るべく彼はデュエルディスクを展開する。

「あー？おいおい何の真似だよ、あとで遊んでやるからとっとと失せろっつってんだろ」

「悪いがな、そういう訳にもいかねえんだわこれが。遊の奴とお前が手を組んで三幻魔で何がしたいのか、それも突き止めとかないと後々面倒なことになるのは目に見えてるからな。お前だけならまだしも、元転生者狩りもってのが気に食わねえ。これ以上なんかやられる前にここでぶちのめして、全部吐いてもらうぜ」

「……えーい、この屑野郎！時間無えってのによお！」

どうあってもここを通す気はないらしいと観念し、ならば1分でも早く片付けて斎王のところへ向かおうと気持ちを切り替えるユーノ。斎王から直接受け取ったデッキを同じく斎王から受け取った光の結社特注の白いデュエルディスクに入れ、すぐさま構えた。それを見て、富野がニヤリと笑う。

「わかってくれて嬉しいぜ」

「けっ」

「「デュエル！」」
　先攻を取ったのは、ユーノ。５枚の手札から１枚のカードを選び出し、それをフィールドに置く。
「さあ行くぜ、一撃必殺侍を召喚！」
　デフォルメされた侍装束のモンスターが、手にした薙刀を構える。
　一撃必殺侍　攻１２００
「さらにカードを１枚セットして、ターンエンドだ」
「ギャンブルカード……？俺のターン、ドロー！」
　ユーノのデッキから出てくるとは思いもよらなかったモンスターにいささか戸惑いつつも、すぐに気を取り直して自身のモンスターを出す。
「相手フィールドにのみモンスターが存在するならば、このカードはリリースなしで召喚できる！ビッグ・ピース・ゴーレム！」
　岩石に濃い顔が付いたようなモンスターが、地中からゆっくりとせり上がってくる。
　ビッグ・ピース・ゴーレム　攻２１００
「バトルだ、一撃必殺侍に攻撃！パワープレッシャー！」
「なめんなよ？永続トラップ、ラッキー・チャンス！を発動！このカードは俺がコイントスをするたびにその裏表を当て、見事ビンゴになったらカードを１枚ドローできる。そ

して一撃必殺侍はバトルする際にコイントスを行い、当たった場合はその相手モンスターを効果によって破壊するぜ。俺はこの2枚のカード、宣言するのはともに表だ！」
「何!?」
リスク分散も何もあったものではない、確かに当たった時のリターンこそ大きいものの外れた時のリカバリーが何もない選択。宙にコインが1つ、日光を照り返しながら真上に飛んで行き……そして、ユーノの手の甲にパシリと小気味いい音を立てて落ちる。
「当然表だ。よってラッキー・チャンス！の効果により1枚ドローし、このバトルも一撃必殺侍が制する。切り裂け、必殺の横薙ぎ！」
侍の目がキュピーンと光り、鎧を着こんでいるとは思えないほどの素早い動きでゴーレムのパンチをかいくぐる。そのまま走り抜けると同時に、がら空きになった足を切り払った。
ビッグ・ピース・ゴーレム　攻２１００（破壊）→一撃必殺侍　攻１２００
「さあ、どうするよ？」
「ちっ！カードを2枚セットして、ターン終了だ」
ユーノ　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：一撃必殺侍（攻）

魔法・罠：ラッキー・チャンス！
富野　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：２（伏せ）
「俺のターン。一気に行くぜ、一撃必殺侍をリリースしてアドバンス召喚、マキシマム・シックス！」
侍の次に現れたのは、６本腕の紫の巨人。胸にくっきりと描かれた「XI」のマークが、ギラリと光った。
「こいつは召喚成功時にサイコロを１つ振ることで、その出目×２００ポイント攻撃力をアップさせる。いくぜ、怒涛のサイコロ攻撃でダイレクトアタックだ！」
コイントスに次いで、今度は同じくギャンブルの代表格たるダイスロール。宙を舞うサイコロは地面にぶつかってもまだ勢いを殺しきれずにコロコロと回転し、やがて６の目を上にして静止した。
「当然６。攻撃力３１００の一撃を受けてみろ！」
マキシマム・シックス　攻１９００→３１００→富野（直接攻撃）
富野　ＬＰ４０００→９００
「くっそ、卑怯な真似しやがって……」

ここまで幸運が続けば、いくら洗脳済みでもさすがにそこまで腐ってはいないだろうと楽観的に考えていた富野も考えを改める。要するに、斎王に尻尾を振ることでこの男は絶対外れないギャンブルの力を手に入れたのだ。アルカナフォースを自在に止める斎王の力は、富野もよく知っている。それをそのまま、アルカナ以外のカードに転用したのだろう。

「卑怯？何言ってんだ。斎王様の御力の賜物だぞ」

しかしユーノは富野の言葉には耳も貸さず、狂信者そのものの目つきで次のカードを選び出す。

「カードを2枚セットして、ターンエンドだ」

「どうやら、デュエリストのプライドも完全に見えなくなっちまったみたいだな……だったらもう遠慮はねえ、俺も本気を出してやるぜ。俺のターン、ドローだ！」

怒りに燃える富野を、今のユーノは嘲笑う。

「お得意のバイスリゾネーターでもやってくれんのか？で、たかが攻撃力３０００ぽっちのドラゴンでどう対応する気なんだ？」

「俺の相棒（レッド・デーモンズ・ドラゴン）を侮辱した罪は重いぜ。だがまずはリビングデッドの呼び声を発動し、ビッグ・ピース・ゴーレムを蘇生させる」

再び地中から出てくる岩石の巨人。だが、その攻撃力は6本腕の巨人にはまだ敵わな

い。

ビッグ・ピース・ゴーレム　攻２１００

「さあ来い、レッド・リゾネーター！さらにこのカードは召喚に成功した時、手札からレベル４以下のモンスターを特殊召喚できる。出て来い、ミッド・ピース・ゴーレム！」

岩の体に濃い顔と、既に存在するゴーレムに特徴だけ見れば似ていなくもない人型の岩石の戦士が、赤い炎を後に引くリゾネーターの後ろからフィールドに特殊召喚される。

レッド・リゾネーター　攻６００

ミッド・ピース・ゴーレム　攻１６００

「ああ……？」

「ミッド・ピース・ゴーレムは場に出た時ビッグ・ピース・ゴーレムのカードが存在すれば、デッキからさらにこのゴーレムを効果を無効にして特殊召喚できる。出番だ、スモール・ピース・ゴーレム！」

前２体とはうってかわってコミカルで可愛らしいゴーレムが、短い手足を伸ばして元気よく召喚される。

スモール・ピース・ゴーレム　攻１１００

「はっ、何かと思えばピース・ゴーレムの３連コンボか？」

「まだだ！お前のフィールドに存在する永続トラップ、ラッキー・チャンス！を墓地に送ることで、このカードは特殊召喚できる！チューナーモンスター、トラップ・イーター！」

ユーノのカードの下から大口が出てきて、ラッキー・チャンス！のカードをぱくりと一口で呑み込む悪魔が現れる。ぺろりと口周りを舐め、膨らんだ腹を小さな腕でポン、と叩いて見せた。

トラップ・イーター　攻１９００

「ダブルシンクロ召喚を見せてやるぜ！レベル４のミッド・ピース・ゴーレムに、レベル４のトラップ・イーターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！そしてレベル５のビッグ・ピース・ゴーレムに、レベル２のレッド・リゾネーターをチューニング！混沌の仮面被りし王者よ、天地を惑わし威光を示せ！シンクロ召喚、誇り高き！デーモン・カオス・キング！」

トラップ・イーターが４つの輪になり、ミドル・ピース・ゴーレムの全身を取り囲む。瞬間そこに光が走り、満を持して富野の切り札が場に現れた。そしてそれと同時にレット・リゾネーターもまた２つの輪になってビッグ・ピース・ゴーレムを取り囲み、肩と腕に生やした刃から真紅の炎を噴き出す黄色い仮面をかぶった悪魔の姿になる。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００
デーモン・カオス・キング　攻２６００
「おいおい、なんだかんだ言っといて結局デーモン・カオス・キング頼りかよ」
「これをただのレッド・デーモンズ・ドラゴンと思うなよ?バトルだ、レッド・デーモンズ・ドラゴンでマキシマム・シックスに攻撃……そしてこの攻撃宣言時にトラップカード、スカーレッド・コクーンを発動!」
「そういうことか……!」
この試合初めて、ユーノの表情が歪む。赤き悪魔の竜が体を丸めたかと思うとその全身が赤く光る繭に包まれ、何度かそれが鼓動したのちに再び繭を突き破って飛び出してくる。
「やっちまえ!灼熱のクリムゾン・ヘルフレア!」
「スカーレッド・コクーンはドラゴン族のシンクロモンスターに装備することで、バトルの間相手の全モンスターの効果を無効にする、か。だったらせめてこれだ、悪魔のサイコロ!サイコロ１つ振って、相手モンスター全ての攻撃力を出た目×１００ポイント下げるぜ。そらよっ!」
デフォルメされた悪魔が真っ赤なサイコロを勢いよく放り投げると、それが地面でコロコロと転がる。最終的に、またも６の目を上にして止まった。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→２４００
→マキシマム・シックス　攻３１００→１９００（破壊）
ユーノ　ＬＰ４０００→３５００
「糞が……」
「デーモン・カオス・キング！スモール・ピース・ゴーレム！ダメージが減ってても構わねえ、２体でダイレクトアタックだ！」
デーモン・カオス・キング　攻２６００→２０００→ユーノ（直接攻撃）
ユーノ　ＬＰ３５００→１５００
スモール・ピース・ゴーレム　攻１１００→５００→ユーノ（直接攻撃）
ユーノ　ＬＰ１５００→１０００
「なんだなんだ、たいしたことないな。お前のことを認めてやるのは癪に障るけどよ、少なくとも昔の方が強かったぜ」
何かあるかとも思ったが、ただひたすらにダメージを受けるばかりのユーノに対しどこかがっかりしたような声音の富野。まあ楽勝なのはいいことだ、と気を取り直してエンド宣言を行う、その寸前にユーノの声が響いた。
「リバースカードオープン、ダメージ・コンデンサー……！俺が受けた戦闘ダメージをトリガーとして発動し、手札１枚をコストにそのダメージの数値以下のモンスターをデッ

キから特殊召喚する！今俺が受けたスモール・ピース・ゴーレムの攻撃力は５００。よって、このモンスターを特殊召喚！来い、時の魔術師！」

歪んだ時計に手足が生えたような形の、帽子をかぶった小さな小さな魔法使い。だがその全身は、不気味な光に包まれていた。

時の魔術師　攻５００

「時の魔術師……確かにそのギャンブル構築なら、入ってない方がおかしいか……最後の手札を伏せて、ターン終了だ」

すでに富野の場に攻撃可能なモンスターは残っておらず、わずか５００ポイントの攻撃力に対しても何もすることができない。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻２４００→３０００

デーモン・カオス・キング　攻２０００→２６００

スモール・ピース・ゴーレム　攻５００→１１００

ユーノ　ＬＰ５００　手札：０

モンスター：時の魔術師（攻）

魔法・罠：なし

富野　ＬＰ９００　手札：０

モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻・コクーン）

デーモン・カオス・キング（攻）
スモール・ピース・ゴーレム（攻）
魔法・罠：スカーレッド・コクーン（レッド・デーモンズ）
リビングデッドの呼び声（対象無し）
1（伏せ）

「俺のターン、ドロー。このターンで終わらせてやるよ、時の魔術師の効果！コイントスで裏表が当たればお前のフィールドのモンスターを全滅させるぜ。裏だ、やれっ！タイム・ルーレット！」

どこからともなく表れたルーレット盤の針が回転し、当然のごとく『当』の字のマス目で止まる。

『タイム・マジック！』

みるみるうちに2体の王者とゴーレムが風化して崩れ去り、風に巻き上げられて消えていく。

「さあバトルだ、さらにここで速攻魔法、天使のサイコロを発動！出た目につき１００ポイント、俺のモンスターの攻撃力をアップさせるぜ。これで6を出せば、俺の……」

しかしその台詞は、最後まで続かなかった。地面からいきなり真紅の火柱が噴き上がり、その中からゆっくりと赤い王者のドラゴンのシルエットが見え始めたのだ。

「バカな、そいつは俺が今倒したはず！」
「確かにな。だが俺は時の魔術師のタイム・マジックが成功した時点でトラップカード、シャドー・インパルスを発動していた。俺のシンクロモンスターが破壊されたのをトリガーとして、エクストラデッキから同じレベルかつ種族のシンクロモンスターを特殊召喚できる」
　心底つまらなそうな、失望したような声音の富野。静かにそういうと同時に、火柱が徐々に収まってゆく。とはいえいまだその全身は炎に包まれているためシルエットしかまだ見えてこないが、翼を広げたその姿は、まるでレッド・デーモンズ・ドラゴンが再び復活したかのようだった。
「待て！シャドー・インパルスは同名モンスターを呼ぶことはできないはずだぜ！」
「……ああ、やっぱり残念だな、これは」
「なに？」
「俺を倒したお前に勝つために、死ぬ気で手に入れた新しい切り札だったんだが。俺とレッド・デーモンズの進化を、まさかこんなつまらん相手に使うことになるなんてな」
「一体、何を呼ぶ気……」
　そう問うユーノの声が途中で止まった。火柱が完全に消えてついにその全貌を露わにしたそのドラゴンは、確かにシルエットだけならば元のレッド・デーモンズ・ドラゴ

ンによく似ていた。だが、その全身はいたるところに古傷を負ったのか、生々しい傷跡のような筋模様だらけになっていて頭の角も1本が途中から無残にもへし折れている。そして何よりも目を引く右腕は肘から先の部分が全体的に骨のようなもので覆われていて、単純に打撃の威力を高めると同時に耐久力を上げる役にも立っているようだ。

「俺の、いや、俺たちの手に入れた新たな力のシンクロモンスター……赤き王者の研磨の果てに、紅蓮の鼓動が天地を焦がす。力持ち得ぬ臆病者に、戦う価値など微塵もない！レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト　攻３０００

「な、このカードは……」

「もうお前にできることはねえよ。スカーレッド・コクーンの効果ももう使わねえ。俺のターン、ドロー……スカーライトは1ターンに1度、コイツ以下の攻撃力を持つ特殊召喚された効果モンスター全てを破壊したうえで1体につき５００のダメージを与えることができる。受け取りやがれ、アブソリュート・パワー・フレイム！」

真っ赤な炎がユーノの視界いっぱいに広がり、ダメージ・コンデンサーの効果で特殊召喚された時の魔術師がドロドロに溶け崩れていく。

ユーノ　ＬＰ５００→０

「……はーあ、つっまんねーの。んで?とっとと洗いざらい全部吐いてもらおーか」
　地面で伸びているユーノの体を、見かけ以上の怪力を発揮し片腕で首根っこ引っ掴んで無理やり起き上がらせる富野。２、３度ほど揺さぶってみると、ようやく反応があった。
「う……」
「む。おう寝てんじゃねえこの野郎、起きろ起きろ」
　さらに容赦なく揺さぶると、さすがのユーノもどうにか目が覚めたようだ。
「……なんだ、るっせーな。放しやがれ」
「おう。ほらよ」
　宙づりにした状態からいきなり手を放したのだから、必然的にユーノの体は重力の法則に従い地面に叩き付けられる。それでもなんとか最低限の受け身だけは取り、頭の代わりに打ち付けた背中をさすりながら起き上る。
「えー……ちょっと待てよ、えーっと……ああ、色々思い出した。世話かけたな、これは貸しにしておけ」
「んなもんどうだっていい、だから今すぐ答えろ!お前、それに遊は三幻魔をどうしたいんだ?あいつらの力だけじゃ世界はどうにもならんことぐらいはお前らだってわかっ

てるはずだぞ」

富野の言葉は真実である。彼は転生者狩りであり、それゆえ必然的に世界を揺るがすほどの力を持ったカード、身もふたもない言い方をすれば原作におけるボスカードもあらゆる次元で何度も見てきている。確かに三幻魔はＧＸ世界においてかなりの力を持った世界を揺るがすカードではあるが、原作を知るユーノや元転生者狩りの遊がわざわざ狙おうとするうまみは少ない。どうせ労力をかけるならば、まだ世界に隠されているより見返りの大きいカードがまだまだあるからだ。

にもかかわらず、この２人は三幻魔に何らかのこだわりを見せている。その理由を知るため、彼はわざわざこの世界に直接問い詰めに来たのだ。

その質問に対し、しばし何かを思い出そうとするかのように目を閉じて考え込むユーノ。富野がじっと見ていると、みるみるうちにその顔が真っ青になっていった。

「そうだ、こうしちゃいられねえ！急いで再封印しねえと面倒なことになる！」

「はあ？おいおい、俺にわかるように説明……」

「三幻魔の固有能力だよ。思い出せ、影丸理事長はなんで三幻魔を手に入れようとしてた？」

「はぁ？カードの生気を吸い取って……そうか、持ち主に若さと永遠の命!!」

ようやく何が言いたいのか分かったようで、富野も表情が変わる。なんでこんな簡単

なことに気づかなかったのだろう、と自分で自分を呪う。
「ご名算。遊にとって必要なのは、世界を手に入れるほどのスケールを持ったカードじゃねえ。なにしろそれが目的なら、わざわざ封印されたカードに頼らなくてもデュエリストとしての実力と転生者狩りとしての知識だけでおつりがくるレベルだからな。考えてもみろ、確かにこの世界にはヤバいカードが山のように眠ってる。だがな、その中でも『持ってるだけで確実に』不老不死を保証するような代物がいくつあると思う？確かに三幻魔それ自体はそこそこ止まりかもしれねえ。だけど、その副産物が厄介極まりないんだ」
「三幻魔はあくまで目的じゃなくて手段に過ぎない、ってことかよ……！確かに永遠の命なんてものがあれば、いくら俺たちが狩ったとしてもまたどこかの世界で生き返る」
「もっとも、その先どうするかはまだ決めてないらしいがな。俺もついさっきまでは斎王のために三幻魔を集めて持っていこうとしてたから、少なくとも封印の解放までは利害が一致してたってわけだ。胸糞悪い話だけどな。ぐだぐだしてる暇はねえ、行くぜ！」
「けっ、偉っそうに言いやがって、元はといえばてめえも一緒になって撒いた種じゃねえか！」
　ぶつくさ言いながらも、すぐに三幻魔のうち２体が封印された場所にむけて走り出す

富野。空間移動は転生者狩りといえどもおいそれとできる技ではない。ついさっき使ってしまった以上、しばらくは自分の足に頼るしかないのだ。

ユーノも走り出そうとしたが、最後に一度だけ木々の間から見えるデュエルアカデミアホワイト寮に目をやった。おそらくあの中では今清明が斎王と、光の結社との因縁にけりをつけるために戦っているのだろう。

「(俺が言えたことじゃねえのはよーくわかってる。でもよ、必ず勝てよ、清明……!)」

最後にそれだけ心の中で思い、ユーノもまたそこに背を向けて走り出した。

ターン７１　鉄砲水と破滅の光

　誰ひとりいないドアの前でしばし息をひそめる。１０秒、２０秒と数えていってついに１分が経ったが、結局ユーノも富野も消えたっきり帰ってこない。なんとなく嫌な予感もする、けど。
「……行くよ、皆。ここまで来たんだ、最終決戦まで一気に終わらせるんだ！」
『ああ。私達は全てマスターの味方だ、最後まで共に行こう』
　チャクチャルさんの声にも励まされ、一度頷いてから思い切ってドアを蹴破る。ダークシグナーの身体強化をフルに使った一撃の衝撃は重そうなドアの金具をねじ切り、蹴り開けるだけのつもりがドアがまるっときれいに吹き飛ばしてしまった。そしてそのまま勢いを減じずに向かい側の壁にぶつかるまで飛んでゆき、派手な破壊音を立てる。
「あーあ……やっちゃった」
「随分と乱暴な真似をしてくれたものだ。ここにやってくるのは最初からわかっていたが、ユーノがこんなに早く道を通すのはさすがの私も予想外だった。もう少しは粘ってくれると思ったんだがね。まあいい、最低限の時間稼ぎにはなった」
　部屋に響く一見静かな、だけど紙一重の狂気を含ませた声。ついに会えた斎王は、最

後に童実野町で見たときとはまるで別人のような態度だった。だけどその時、僕が注目していたのは本性を出した斎王じゃない。その隣、ぐったりしたように椅子に腰かける青年だった。後ろ姿しか見えないが、あの銀髪とスーツは見間違えようがない。

「エドー!」

僕の声にも、しかしエドは答えない。よくよく見ると、座り込んでいるにしては姿勢がおかしい。どうやら、気絶した状態で椅子に腰かけさせられているようだ。

「斎王!お前一体、エドに何を?」

「別に、まだ何も。今は少々眠ってもらっているだけさ。もっとも、お前に彼のことを心配するほど余裕があるのかね?」

「くっ……まあいいさ、斎王、デュエルだ!光の結社とデュエルアカデミアの因縁、ここでまとめて決着つけようじゃないの!」

ビッと指さして啖呵を切ると、斎王は返事の代わりに口の端を歪めて笑った。

「くだらん。私の力は以前とは比べ物にならないほど高まっている、デュエルを介さずとも人間1人に光の波動を送り込むことぐらい造作もないわ!」

そう叫び、右手を僕に向けてかざす。その掌が発光したかと思うとみるみるうちに僕の視界全体が白く染まり……そして、また元に戻った。再び色の蘇った世界を見て自分に何も変化がないことを確認すると、斎王も驚きを隠せない表情でこちらを見てい

た。
「馬鹿な。運命を受け付けない、だと?」
　しかしその驚きもつかの間、またすぐに狂ったような笑いを取り戻す。
「はははは!どんな小細工をしたかはわからんが清明よ、エドにすら負けたお前がこの私にデュエルを挑むか。いいだろう、我が運命は不敗!そのことを身をもって知らしめてやろう!そして我が勝利の暁には、お前の小細工も通用しないほどの光の波動を植え付けてやる」
　一体、何が今起きたんだろう。するとそのタイミングで、これまで黙りこくっていたチャクチャルさんがまたテレパシーを送ってきた。
『……ふむ』
「(ん、どったの?)」
『いやマスター、少し聞いてほしい。これまではあの光の波動とやらが邪魔ではっきりわからなかったが、ここにきてようやく確信が持てた。今我々の目の前にいるモノ、どうやら本来の斎王とは別の何かのようだ』
「(別の何か?)」
『ああ、本来の人格は完全に力負けして表に出てこれていないようだな。なかなか興味深いが、５０００年前の私の仲間にも似たような術を使う奴がいた。恐らくそれと同じ

処置で引きはがせるはずだから、マスターは全力であ奴を倒してくれ。そうすればマスターの中のダークシグナー、つまりは私の闇の力でどうにでもなる』

なるほど。難しいことは考えなくていいから、目の前のデュエルに勝てと。なんだ、結局はいつも通りじゃないの。それに、この世のあらゆる難しい話は最初っから僕には専門外だしね。改めて斎王とその中の何かを見て、デュエルディスクを構える。

「ようやくその気になった?·それじゃあ、デュエルと洒落込もうじゃない!·」

「レーザー衛星『ソーラ』はすでに動き始めている。そしてこの世界を、宇宙を光に染め上げる。たとえ道筋こそ変わろうと、この最終結果は既に確定した未来だ。なんならお前を倒し我々の仲間にした以降、そのまま遊城十代にけしかけるのもまた一興か」

さらりと物騒なことを言った後、自分のアイデアに酔ったかのような顔で斎王もまたデュエルディスクを構える。

「「デュエル!」」

命どころか魂までかかったこの勝負、先攻は僕だ。しかし、この運命運命ぎゃーぎゃー喚かれるのはいい加減飽き飽きしてきた。そんなこと言ったら、本来死んでなきゃおかしいはずの僕が今こうやって仮にも生きてるのはどう説明つけるんだろう。前にチャクチャルさんに聞いてみたことがあるけど、ダークシグナーとしての復活はこの世の理を超越した行為らしい。つまり、僕の運命は入学テストの日、あの事故で本来

とぎれているのだそうだ。
「悪いけど、運命なんてもんは1年以上前にぶち破れることが分かったんでね。鰤つ子姫（プリンセス）を召喚して、そのままゲームから除外。デッキからレベル4以下の魚族、ハンマー・シャークを特殊召喚して、その効果を発動！自分のレベルを1下げて、手札からレベル3以下の水属性モンスターを特殊召喚する。来て、フィッシュボーグ―アーチャー！」
ハンマー・シャーク　攻１７００　☆４→３
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
いつもの布陣を敷けたから、とりあえず立ち上がりは良好とみるべきだろう。次は、斎王がどう動くかだ。
「そして永続魔法、補給部隊を発動。カードをセットして、ターンエンド」
「私のターン。フィールド魔法、光の結界を発動！」
「光の……結界？」
僕ら2人の周りを、うっすらと光る透明な壁が取り囲む。なんだかわからないけど、この中にいると本能的に嫌な気分になってくる。
「出でよ、戦車のアルカナ……アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ（セブン　ザ・　チャ　リ　オット）！」
気味の悪い触手を生やした2段重ねの空飛ぶ円盤のようなモンスターが、こちらに向

けて砲塔を向ける。
「アルカナフォースは全て、召喚時にその正位置と逆位置を決めることによって能力が変わる。さあ、回転を止めるのはお前だ！……と言いたいところだが、あいにく運命を選択する自由すらお前に与えられてはいない。光の結界の効果が適用中、私のアルカナは全て任意で効果を選ぶことができる。私が選ぶのは、正位置だ！」
　そう言うと同時に、斎王の頭上でソリッドビジョンのチャリオットのカードが回転を始める。だがその回転は次第にゆっくりになっていき、やがてきちんと上を上に、下を下に下向きで止まった。
「戦車の正位置。よってこのモンスターが相手を戦闘破壊した時、そのモンスターを私のフィールドに特殊召喚することが可能となる！ゆけ、チャリオット！フィーラー・キャノン！」
　こちらを向いた砲台から一斉に白いビームが発射され、アーチャーが焼き尽くされる。
　アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ　攻１７００
　↓フィッシュボーグ―アーチャー　守３００（破壊）
「そして、お前のモンスターは私の場に現れる。雑魚モンスターだが、まあ壁ぐらいにはなるだろう。そして光の結界適用中にモンスターを戦闘破壊したことで、その攻撃力の

数値分私のライフが回復する」
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
斎王　ＬＰ４０００→４３００
「アーチャー！……だけど、この瞬間に補給部隊の効果発動！僕のフィールドでモンスターが破壊されたから、カードを１枚ドロー！」
思わず呼びかけるも、水槽の中にいるいまだになんだかよくわからない２体の生物からは何の反応もない。いつもはアーチャーの精霊が僕に懐いてくれてるから、呼んだら必ず近寄ってくれたのに。カードを引くことはできたけど、チャリオット、厄介な能力だ。早いうちに対処しなくちゃ。
「カードを伏せ、私はこれでターンエンドしよう。聞こえてくるぞ、お前の敗北への足音が」
清明　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：ハンマー・シャーク（攻）
魔法・罠：補給部隊
１（伏せ）
斎王　ＬＰ４３００　手札：４
モンスター：アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ（攻）

フィッシュボーグ―アーチャー（守）

魔法・罠：1（伏せ）

場：光の結界

「僕のターン、ドロー！」

「この瞬間に永続トラップ2枚、死神の巡遊を発動！このカードはアルカナフォースと同じく、選択によって効果が変わる。だが唯一違う点はその選択を毎ターン行うこと。まずはこのターンだ！」

「ス、ストップ！」

鎌を持った骸骨の姿をする死神のカードが、再びクルクルと回りだす。僕の宣言によってその回転はゆっくりになってゆき、最終的にチャリオットと同じく正しい向きで止まった。

「今度はいったい、何が起きるってのさ？」

「死神の巡遊の正位置。死神が降り立ったお前のフィールドに、新たな命は芽吹かない……これでお前はこのターン、通常召喚及び反転召喚が行えない！」

「なっ!?」

『落ち着け、マスター。まやかしの死神に惑わされるな、所詮あの死神が封じることができるのは伏せモンスターをマスターが出していない今は通常召喚のみだ。ならば、他の

方法でモンスターを出せばいい』
　召喚封じという恐ろしい効力に一瞬度肝を抜かれるも、チャクチャルさんの一喝を受けてすぐにそれが見た目だけのこけおどしでしかないことに気づく。
「そ、そうだ、確かに。斎王、お前はひとつミスを犯したね！僕が封じられたのは通常召喚、つまり特殊召喚はできるんだ。ハンマー・シャークの効果をもう一度発動、さらにレベルを下げることで別のモンスターを特殊召喚する！さあ来い、マジック・スライム！」
　ハンマー・シャーク　☆３→２
　マジック・スライム　守１２００
「攻撃力が同じチャリオットに攻撃したら、せっかくの貴重な展開要因もやられちゃうし、そもそも自爆特攻は好きじゃないからね。だからこのターンは、アーチャーを返してもらうよ。ハンマー・シャークでフィッシュボーグ―アーチャーに攻撃！」
　ハンマー・シャーク　攻１７００→フィッシュボーグ―アーチャー　守３００（破壊）
「それがどうした？守備表示だから私にダメージは入らんぞ」
「そう言ってられるのも今のうちさ。その死神はモンスターをセットすることも止められない、モンスターとカードを１つずつセットしてターンエンド」
「私のターン！この瞬間、光の結界を維持するかどうかを決める。このカードの回転を

止めてみろ！」

　その言葉とともに、ソリッドビジョンで斎王の頭上に光の結界のカードが浮かび上がる。なるほど、さっきみたいにこれをストップさせればいいのか。これまでのパターンから考えて正しい向き、つまり正位置の時に斎王にとってメリット効果が出てくると思って間違いないだろう。ということは、なんとか逆位置を引き当てればいいわけだ。

３、２、１……

「今だ、ストップ！」

「無駄だぁ！」

　その言葉通り、回転スピードを完璧に見極めて止めたはずのカードはなぜか正位置で停止する。

「光の結界の正位置。これにより、このターンもアルカナフォースの効果決定権とライフ回復効果はこのターンも持続する。そして速攻魔法、フォトン・リードを発動！手札からレベル４以下の光属性モンスター１体を特殊召喚する。出でよ、帝王のアルカナ……アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（フォー・ジ・エンペラー）！」

　アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１４００

　大量の機械の触手を生やした、翼の生えたなんだかよくわからない生物。どこらへんがどう帝王なのかはさっぱりわからないが、それにしてもなんでまた通常召喚もできる

モンスターを特殊召喚したんだろう。
「疑問に思っているようだな、今教えてやろう！速攻魔法、地獄の暴走召喚！」
　まるで心を読んだかのような……いや、そこまでできたらいくらなんでもチートなんてレベルじゃない。多分僕の顔に出てたんだろう。そう思いたい。だけど、地獄の暴走召喚か。攻撃力１５００以下のモンスターの特殊召喚をトリガーとして発動され、デッキから同名モンスターを２体特殊召喚するカード。その代償に僕もフィールドのモンスターと同名カードを２体特殊召喚できるけど、あいにくとハンマーもスライムもピン刺しだ。
　アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１４００
　アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１４００
「そしてエンペラー３体の効果を光の結界により決定、全て正位置だ！そしてエンペラーは正位置の時、私のフィールドのアルカナフォースの攻撃力を５００ポイントアップさせる！」
「エンペラーが３体……１５００ポイントのバンプアップ!?」
　全エンペラーの体が光の結界の中で輝きを放ち、その光が斎王の全てのモンスターを覆い尽くしていく。
　アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ　攻１７００↓３２００

アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１４００→２９００
アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１４００→２９００
アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１４００→２９００

「これが、斎王の実力ってわけか……！」

確かに強い。とてもじゃないけど、あれはレベル４モンスターの攻撃力じゃない。去年命がけで戦った幻魔皇、ラビエルのほうが火力的には上だけど、あっちはラビエルだけが火力要因で他は全てラビエル関連やそれに繋ぐためのカード、そんな印象だった。だけど斎王のデッキはこのエンペラーを大量展開することで攻撃力１５００のモンスターでも、アルカナフォースである限りあの青眼（ブルーアイズ）にも匹敵する火力を持つことになる。

「他愛もないな、バトルだ！チャリオットでハンマー・シャークに攻撃、フィーラー・キャノン！」

「させるか！リバースカード、オープン！」

チャリオットが今度は触手の先から謎の液体を発射する。だがそれはハンマー・シャークにぶつかるより先に、突如発生した大波に飲み込まれた。

「なにい、破壊されていないだと？」

「トラップカード、ポセイドン・ウェーブを発動。その攻撃を無効にして、さらに僕の水・魚・海竜族モンスター１体につき８００ダメージを与える！ハンマーとスライムの２体

で１６００ダメージ！」
斎王　ＬＰ４３００→２７００
「ふん……だが、まだエンペラー３体の攻撃が残っている！まずハンマー・シャーク、そしてマジック・スライム、最後に伏せモンスターへ攻撃だ！」
「おっと、だったらこのカードで！永続トラップ、安全地帯をハンマー・シャークに発動！これでハンマー・シャークは破壊耐性を得る！」
「エンペラー３体でハンマー・シャークに攻撃してもお前のライフは残るか……ならば光の結界の効果を優先しよう、攻撃対象はそのままだ！」
アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻２９００→ハンマー・シャーク　攻１７００
清明　ＬＰ４０００→２８００
アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻２９００→マジック・スライム　守１２００（破壊）
斎王　ＬＰ２７００→３４００
アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻２９００→???　守５００（破壊）
斎王　ＬＰ３４００→４９００

光の結界の効果による斎王のライフ回復がみるみる進んでいく。だけど、今の攻撃はこっちの思う壺。ここからは反撃開始だ。

くいっと指で合図すると、エンペラーの電撃を受けて四散、派手に飛び散った銀色の飛沫が動き出して自分を倒したエンペラーに吸い込まれてゆく。一瞬の後、その額に銀色の紋章が浮かび上がった。

「スライムの破壊をトリガーとして補給部隊のドロー。そしてこの瞬間、戦闘破壊されたグレイドル・イーグルの効果発動！相手モンスター1体の装備カードとなり、そのコントロールを得ることができる！」

「ほう？なるほど、お前も何らかの力を手に入れたわけか。だがこちらにはまだ正位置のエンペラーが2体残っている、一時しのぎの姑息な手にすぎん！」

「くっ……！そんなもん最後までわからないさ。よろしく頼むよ、エンペラー」

アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（清明）　攻２９００→１９００

アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（斎王）　攻２９００→２４００

アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（斎王）　攻２９００→２４００

アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ　攻３２００→２７００

僕の手にコントロールが移ったことで、コントローラーのフィールドにいるアルカナフォースしか強化しないエンペラーの効果は弱まった。だけど、まだハンマーとエンペ

ラーで突破できる数値じゃない。
「私はこれで、ターンエンドだ」
清明　ＬＰ２８００　手札：１
モンスター：ハンマー・シャーク（攻・安地）
アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（攻・イーグル）
魔法・罠：補給部隊
安全地帯（ハンマー）
グレイドル・イーグル（エンペラー）
斎王　ＬＰ４９００　手札：１
モンスター：アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ（攻）
アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（攻）
アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ（攻）
魔法・罠：死神の巡遊
場：光の結界
「僕のターン、ドロー！」
「この瞬間、死神の巡遊の効果がふたたび発動！」
斎王の頭上でまた回り始める死神のカード。あれもそのうち対処するとして、この

ターンはどう出るか。
「……ストップ」
「当然正位置い！よってお前はこのターンもモンスターの召喚、反転召喚が行えない。そんな攻撃力のモンスターしかいないようでは、大人しく守備表示にして時間を稼ぐ程度のことしかできまい」
「悪いけどね、本気でそんなこと考えてるんなら僕に対する調査不足さ。覚えておくといいよ、僕は逃げない！僕らはこの戦い、真正面から受けて立つ！魔法カード発動、アクア・ジェット！」
　ハンマー・シャークの両脇部分に小型の噴射装置が取り付けられる。魚族モンスターとアクア・ジェットのマジックコンボにより、ハンマー・シャークの攻撃力が１０００ポイントアップする。
　……そういえば、アクア・ジェット使うだけでマジックコンボだのなんだの最初に騒いでたのはユーノだっけか。結局なにがお約束なのかは毎回はぐらかされて教えてもらえなかったけど、また会ったら今度こそ聞いてみよう。
　ハンマー・シャーク　攻１７００→２７００
「バトル！ハンマーでエンペラー１体に攻撃！」
　ハンマー・シャーク　攻２７００→アルカナフォースＩＶ―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ

攻２４００（破壊）
斎王　ＬＰ４９００→４６００
アルカナフォースＶＩＩ－ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ　攻２７００→２２００
アルカナフォースＩＶ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻２４００→１９００
「これでエンペラーのバンプアップはさらに効果が薄くなったね。ここは畳みかける、エンペラーで最後のエンペラーに攻撃！」
「小賢しい真似を……光の結界の回復は、例えモンスターが相打ちとなっても適用される。私のライフは減るどころかさらに増える！」
アルカナフォースＩＶ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１９００（破壊）
→アルカナフォースＩＶ－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ　攻１９００（破壊）
アルカナフォースＶＩＩ－ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ　攻２２００→１７００
斎王　ＬＰ４６００→６０００
本来なら僕のポリシーとして、戦ってくれるモンスターに対して申し訳ないから自爆特攻はしたくない。だけど、デュエルモンスターズは互いに恨みっこなしの真剣勝負だ。自分のモンスターは大切だしできる限り敬意を払うけど、相手のモンスターに対してまでそれを持ち込むのはただの舐めプでしかない……と、少なくとも僕は思ってる。とはいえ、これがかなりいい加減な、都合のいい論理なのは自覚がある。自分のモンス

ターだけが可愛いのか、なんてもし聞かれたら、正直うまく答えられる自信がない。
結局、いくら精霊が見えるっていっても僕一人にできることなんて何もないということだ。
「小賢しいのはどっちだってのさ!こっちの僕のフィールドでエンペラーが破壊されたから、補給部隊の効果でまた1枚ドロー。メイン2に永続魔法、グレイドル・インパクト発動!そしてこのエンドフェイズにインパクト第1の効果により、デッキからグレイドルカードを1枚サーチする。おいでアリゲーター、ドール・コール!」
僕の後ろに現れたＵＦＯのてっぺんがぱかっと開き、そこからグレイドル・アリゲーターのカードが飛び出してくる。うまいこと目の前に落ちてきたそれをキャッチして手札に加え、あまり意味ないとは思いつつも一応軽く順番を入れ替えてどれがアリゲーターかパッと見ではわからなくする。まあ、こんなもんだろう。
「私のターン。この瞬間、光の結界の効果を発動!さあ、回転を止めろ!」
「やってやるさ、ストップだ!」
いい加減逆位置が出てもおかしくないとは思うけど、それでもやっぱり正位置で止まる光の結界。
「ふん。さらに魔法カード、カップ・オブ・エースを発動!このカードはアルカナではないゆえに光の結界の効果も適用されない。さあ、このカードの回転も止めるがいい」

　水面に置かれて逆さ富士のように自身の影を映す金色のカップのイラストが描かれたカードが、また回りだす。このカードは知っている、確か正位置で相手、逆位置で僕が２枚ドローできるのだ。
「今度こそ……ストップ！」
「無駄無駄無駄ぁ、当然正位置ぃ！よってカードを２枚ドローする。そして魔法カード、フォトン・サンクチュアリを発動！このターン光属性以外のモンスターを場に出せなくなる代わりに、フォトントークンを２体特殊召喚できる！」
　フォトントークン　守０
　フォトントークン　守０
「私はフォトントークン２体をリリースし、アドバンス召喚！出でよ、アルカナフォースのラストナンバー！かつて最強であった者よ！アルカナフォースＸＸＩ（トゥエンティーワン）―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ（ザ・ワールド）ッ！」
　３本指の機械めいた腕を伸ばす、オレンジ色の炎を体内に宿した単眼の生命体。１３で終わりのアルカナ最大のナンバー……だけど、それが『かつて最強であった』とはどういう意味だろう？
　アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　攻３１００
「光の結界の適用により、ザ・ワールドは自動的に正位置の効果を適用される。チャリ

オットを守備表示とし、ザ・ワールドでハンマー・シャークに攻撃！オーバー・カタストロフ！」

ゆっくりと伸ばしたザ・ワールドの腕の間にエネルギーが集中し、熱光線となって放たれる。

「ハンマー・シャークは安全地帯の効力で破壊されない！」

「だがダメージは受けてもらおう！」

アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　攻３１００→ハンマー・シャーク攻２７００

清明　ＬＰ２８００→２４００

「攻撃力３１００のパワーはさすがに、効く……！どう？そっちはまだいける、ハンマー？」

体中火傷だらけでボロボロになりながらも僕の言葉に頷いてみせるハンマーに少し安心しながらも、下手に安全地帯で守ったせいでここまで酷使することになったことを心の中で謝る。言いたいことはきっと、それでわかってくれただろう。

「ふふふ、ずいぶんと美しい友情だな？その精霊と意志を通わせ使役する力、やはりなんとしてでも私の物にしてくれる！カードを１枚伏せ、ターンエンドだ」

「一人でほざいてろ！」

清明　ＬＰ２４００　手札：２
モンスター：ハンマー・シャーク（攻・安地）
魔法・罠：補給部隊
安全地帯（ハンマー）
グレイドル・インパクト
斎王　ＬＰ６０００　手札：０
モンスター：アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ（守）
アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ（攻）
魔法・罠：死神の巡遊
１（伏せ）

場：光の結界

「僕のターン、ドロー！」

「何を引いたところで、私の優位に変わりはない！死神の巡遊よ、再び奴のフィールドの生の息吹を絶つがいい」

「何度も何度も……外してたまるか、ストップだ！」

どれほどの気合を込めても、結局死神はまたも正位置で止まってしまう。またこのターンも、僕は召喚及び反転召喚の自由が封じられる。

「だからって、手がないわけじゃない。ハンマー・シャークの効果発動！来い、グレイドル・アリゲーター！」

再び湧き上がった銀色の水たまりは、今度は緑色のワニの姿を取る。もっとも、その足先まではせっかくの擬態もうまくいっていないようだけど。

ハンマー・シャーク　☆2→1

グレイドル・アリゲーター　守1500

「そしてインパクト以外のグレイドルが場にいることで、グレイドル・インパクト第2の効果の発動条件は整った。自分フィールドのグレイドルカードと、相手フィールドのカード1枚を破壊する、グレイ・レクイエム！」

壊れかけのＵＦＯから今度は先が二又になったアンテナのようなものが伸びてそのうち片方からアリゲーター、もう片方から死神の巡遊めがけて七色の不気味な光線が発射される。２枚のカードは同時にバラバラになったが、唯一違うのは死神の巡遊が破壊されたらそれっきりなのに対しアリゲーターはバラバラになった銀色の水滴が先ほどのイーグルのようにザ・ワールドへと集結し始めたことだ。

「そしてこの瞬間、魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターの効果発動。このカードもまた、相手モンスターのコントロールを奪う能力を持つ！やっちゃえ、アリゲーター！」

「甘いわぁ！トラップ発動、亜空間物質転送装置！ザ・ワールドはこのターンの終了時まで、ゲームから除外される！」
「そんなっ!?」
　大量の銀色の飛沫が今まさにザ・ワールドに命中しようとした瞬間に、ザ・ワールドの巨体が夢か幻かのようにかき消える。相手を失った銀色のしぶきが空中でぶつかり合い、地面に落ちて消えていった。
「馬鹿め、私が何の対策もなしにザ・ワールドほどの大型モンスターを出すとでも思ったか？」
「いや、思っちゃいないさ。だけどこれで、少なくとも死神は墓地。もう死神の力で僕の召喚は止められないね。さらに僕のフィールドでアリゲーターが破壊されたことで、また補給部隊の条件が満たされた。このカードは……ありがとう、ここで来てくれて。バトルだ、ハンマー・シャーク！そこで寝てるチャリオットに攻撃！」
　ハンマー・シャーク　攻２７００
　↓アルカナフォースＶＩＩ―ＴＨＥ　ＣＨＡＲＩＯＴ　守１７００（破壊）
「どんなもんだ！」
「ふん、その程度か？守備表示モンスター１体が倒れたところで痛くも痒くもないわ。そしてこのエンドフェイズに、ザ・ワールドは異次元より帰還する」

アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　攻３１００

斎王の言葉通り、ザ・ワールドの巨体が消えたときと同じく何の前触れもなくいきなり現れる。エンドフェイズのインパクトによるサーチも、破壊効果を使ったターンには使用できないからこのターンは使えない。だけど、それは今はいい。次だ、次の瞬間こそが勝負の一瞬！

「私のターン、ドロー！光の結界の効果により……」

「今だ！相手フィールドで表側表示となっているカードの効果が発動されたことで、手札から幽鬼（ゆき）うさぎの効果を発動！このカードを捨てることで、その発動されたカードを破壊する！」

ふたたび不気味に光りだす半透明の結界。そこにどこからともなく飛んできた青白く発光するお札のようなものが張りつくと、その場所から何かが弾けたような音がしたのち、そこに入ったひびがみるみるうちに結界全体に広がっていく。一瞬の間があって、ガラス細工か何かのようにあっけなく光の結界は粉々になって消えていった。キラキラ輝いて辺りに降り注ぐ結界のなれの果ての向こう側に一瞬見覚えのある銀髪が揺れるのが見えた気がしたけれど、もう一度よく見直した時にはそこにはもう誰もいなかった。……なんでバレッバレなのにわざわざ隠れたんだろう、うさぎちゃん。

「馬鹿な、私の、光の結界が……！」

「どう、斎王？さすがにこれは効いたんじゃない？」
光の結界の破壊はどうやらかなり痛手だったらしく、もともと恐ろしい形相だった顔をさらに歪めて怒りを見せる斎王。だがすぐに邪悪そのものがにじみ出ているような笑いを口元に張り付けると、今引いたカードをデュエルディスクに叩き付けるようにして置いた。
「その程度のことで勝ったつもりかね？いまだライフも私の方が圧倒的に上、そしてお前のモンスターでは私のザ・ワールドを倒すことはできない！カードを１枚伏せ、ザ・ワールドの攻撃！オーバー・カタストロフ！」
「……っ!!」
アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ　攻３１００→ハンマー・シャーク　攻２７００
清明　ＬＰ２４００→２０００
再びザ・ワールドの放つエネルギーの塊が、ハンマー・シャークに激突する。本来ならばとうの昔に倒れるようなダメージをもう３ターンも連続で受けてなお、僕の鮫は倒れずに持ちこたえてくれた。
清明　ＬＰ２０００　手札：２
モンスター：ハンマー・シャーク（攻・安地）

魔法・罠：補給部隊
安全地帯（ハンマー）
グレイドル・インパクト
斎王　ＬＰ６０００　手札：０
モンスター：アルカナフォースＸＸＩ―ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「僕のターン！よし、このカードがあれば。フィールド魔法発動、忘却の都　レミューリア！そしてレミューリアの効果を発動、自分フィールドの水属性モンスターのレベルは、自分フィールドの水属性全ての数の数値だけエンドフェイズまでアップする！」

「なんだと!?」

「ハンマーの効果！今上げたレベルをまた下げて、手札のグレイドル・コブラを特殊召喚」

ハンマーはもう僕の酷使のせいで、自身の効果を３回使用してレベルを最低ラインの１まで下げてしまった。つまり、これ以上効果を使うことはできないということだ。

ただし、それはあくまでも通常ならば、の話。レミューリアの隠された効果によってふたたびレベルが２になったハンマーは、このターンも効果を使うことができる。

ハンマー・シャーク　攻２７００→２９００　守１５００→１７００　☆１→２→１

グレイドル・コブラ　攻１０００→１２００　守１０００→１２００

「また馬鹿の一つ覚えか？そんなことで……」

「ああ、わかってるさそんなこと。だから、ここから先は別の戦術を見せるからね！ハンマー、コブラの２体をリリースし、アドバンス召喚！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ！地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルルア）！」

僕の全身に、紫色の痣がスルスルと走るのがわかる。おそらく、黒目と白目の色も完全に入れ替わっているだろう。それぐらい、僕もチャクチャルさんも本気だということだ。ここでやらなけりゃ僕にあとを任せて光の結社と戦ってくれてる皆にだけでなく、今の今までボロボロになりながらも僕を信じてアルカナフォースの猛攻相手に戦線を維持し続けてくれていたハンマーにも申し訳が立たない。

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００

「チャクチャルさん、デュエルの方も頼むけど、それ以外にも１つ頼みたいことがあるんだけど。実は……」

『皆まで言わずとも大丈夫だ、マスター。マスターの考えることだ、ある程度の想像はつく。でなければ、何のために私の力をマスターに乗せたと思っているんだ。本来ならばできる限り人間の出来事に首を突っ込む気はなかったが、さすがに我がナスカの大地すらも射程内というのはあまりいい気分はしないものだしな』

「ありがとう、チャクチャルさん。バトルだ！だけど僕が狙うのは、ザ・ワールドじゃない。地縛神は、相手プレイヤーに直接攻撃ができる！」

チャクチャルさんの姿が、ふわりと飛んだ。いや違う、チャクチャルさんの体からもう1つ、半透明のチャクチャルさんが分離したのだ。そのまま半透明な方が体を垂直に立て、どこまでもどこまでも上に登っていく。すぐに天井をすり抜け、僕からも見えなくなった。

「待て、一体何をする気だ!?」

何かに勘付いた斎王が掴みかからんばかりの勢いで怒鳴りつけるけど、今更気づいてももう遅い。チャクチャルさんも言ってたけど、何のためにこのタイミングでダークシグナーの力を全開放したと思ってるんだか。

なにせ、チャクチャルさんクラスのモンスターを実体化させるのは生半可な精神力じゃこっちが持たないからね。

「全力で頼むよ？ミッドナイト・フラッド！」

上空……成層圏ギリギリの生物が生存できないほどの高みに、突如紫色の閃光が爆ぜた。いや、それは閃光ではない。超高速で地上から舞い上がったそれは、シャチの姿を

した地縛神。清明からの命を受けたチャクチャルアは、レーザー衛星『ソーラ』を破壊せんとこの高さまで上がってきたのだ。

『――――――まったく、無茶をやるものだ。いくらマスターの精神力でも、私をここまで離れた距離で実体化させるとなると並の負担では済まないのはわかっているだろうに。さすがにマスターの体が持つかどうかもわからないし、なるべく早くけりをつけねばな。とは言ったものの、これは少々厄介だな』

どこか心配げにそうひとりごちるのには訳がある。地縛神信仰が行われていた５００年前ならいざ知らず、今の世は既に科学全盛期である。すでに世界各国があらゆる場所から通信用なり気象用なりの衛星を飛ばしまくったことで、いくら世界を見続けていたとはいえ科学的なことには今一つ知識の浅いチャクチャルアにはどこにソーラがあるのか一目ではわからなくなっていたのだ。

まさか全部破壊するわけにもいくまいとあちこち見まわしていると、突然たまたま近くを回っていた衛星の１つから声がチャクチャルアの心に響いた。

『こちらです、太古より大地に縛られし神よ。これ以上、破滅の光の好きにはさせない！そのために、私の言葉を信じてください』

聞き覚えのない女性の声。信用に足る人間かとのチャクチャルアの躊躇を、はるか下から伝わってくる清明の苦しみが後押しした。

『……よかろう。ソーラはどこにある？』
『あちらに。お願いします、斎王を……兄を、救ってください！』
『兄？なるほど、兄妹の情、という訳か』
　それ以上は何も聞かず、巨体が揺らいだかと思うとすぐに向きを変えて声の示す方向に空中を泳いでゆく。その途中で、地上から近づいてくる茶色の影に気が付いた。まごうことなき肉食恐竜のシルエットに、なぜか見覚えのある黄色い恐竜柄の帽子をかぶったそれはチャクチャルアに気が付くと、その目を丸くした。
『む？』
『あれ、確かアンタは清明先輩のモンスター……そうか、アンタもソーラを破壊しに来たのかドン？』
『アンタ……まあいい、お前は』
『よく聞いてくれたザウルス。男ティラノ剣山、恐竜が鳥に進化したのと同じように俺も進化して、宇宙へ飛び立つスペースザウルスに進化したんだドン！』
　１から１０まで訳の分からない目の前の現実に、５０００年の長きに渡り世界を観察しつづけていたチャクチャルアですら一瞬言葉を失う。あるいは地縛神がかつて世界を支配できなかった理由は、人類の持つこの無限の可能性を軽視しすぎたことにあるのではないか。そんな考えまで頭をよぎるが、とりあえず昔の反省は後でいくらでもする

時間はあると気を取り直す。
『いいだろう。時間はない、私について来い！』
『わ、わかったドン！』

一方、再び地上に戻って。モンスターとしてのチャクチャルアが口から衝撃波を連続で放ち、それが斎王に迫る。
「ヒヒヒ、貴様ごときに破滅の未来は変えさせん！この瞬間に永続トラップ、ラッキーパンチを発動！１ターンに１度、相手の攻撃宣言時に３度のコイントスを行うことでそれがすべて表ならばカードを３枚ドローする！」
コイントスと明言したにもかかわらず、なぜか死神の巡遊や光の結界と同じように３枚のラッキーパンチのカードが斎王の頭上で同時に、それぞれ異なるスピードで回転を始める。要はあれだ、あの中で１回でも裏を出せばいいわけだ……と思っていたら、僕がストップ宣言をする前に斎王がすべての回転を停止させた。
「正位置、正位置、そして正位置。これにより、３枚のカードをドローさせてもらおうか！」
「そんなこったろうと思った。だけど、地縛神の攻撃はもう止まらない！」

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→斎王（直接攻撃）
斎王　ＬＰ６０００→３１００
「へへっ、どんな……うっ!?」
ここで限界。皆まで言い切ることもできず、立っていられないほどの痛みに膝を折る。一気に襲ってきた吐き気に思わず口を開くと、胃液どころか血の塊が湿った音とともに床に落ちたのがぼやける視界で辛うじて見えた。実を言うとチャクチャルさんが空に飛び立ってから、なんとなく胸が苦しい感じはしていた。だけど、まだいけるだろうとのんきに構えて気づかないふりしてるうちにどんどん苦しさが増し、あっという間にこれまで感じたことのないような痛みが全身を埋め尽くした。
「ふん、つまらんことを考えるからだ。運命に逆らうものの末路はみじめよのう」
「誰、が……がはっ！」
どうしようもない原因不明のその痛み、全身が消えてなくなりそうな感覚と戦いながら……いや、それは間違いだ。その原因はよくわかっている。あの事故で本来死んだ僕の魂をこの体に繋ぎとめて動かしているのは、ひとえにチャクチャルさんの持つ力だ。常にチャクチャルさんから生きるためのエネルギーを供給してもらっているようなものである。そして今、物理的なチャクチャルさんとの距離が極端に離れたことで、その結びつきもそれだけ小さく弱くなっている。普通に日常生活するだけなら僕の体に普

段から溜まってる地縛神の力だけでも問題ないけれど、よりにもよってチャクチャルさんの実体化までやるとなるとそのストックすらゴリゴリ削れていく。

早い話が、僕の体は今現在ダークシグナーとしても死を迎え、砂に変わろうとしているのだ。その証拠に、たった今吐いたばかりの血の塊はもう風化して消え、床には染み１つ残っていない。並大抵の痛みなら頑張る気だったけど、予想以上に実体化の僕への負担が激しい。

「チャク、チャル、さん」

声を絞り出してその名を読んでも、まだ帰ってこない。意識も薄れてきたけど、ここで気を失ったらデュエル続行不可能と判断されて自動的に負けが決まってしまう。あと少し、きっとあと少しで帰ってくるはずだ。だからそれまで、石に噛り付いてでも持ちこたえれば……！

「清明っ！」

辛うじて意識を繋いでいたけど、それすらきつくなってきた瞬間に声がした。無論、僕はその声の主をよく知っている。ああ、まったく。どうしてこうヒーローってやつは、毎度毎度ピンチになんなきゃ来てくれないのかね。

必ず来るって信じてたよ、親友（十代）。

「ええい、今度はなんだ！また余計な邪魔が入りよって！」

「私も来たよ、ってさ。絶対に信じてるからね、清明！」
「清明君、頑張れー！」
「何を無様な真似をしている！立ち上がれ、それでもこの万丈目サンダーを倒した男か！」
「夢想、翔、万丈目……」
　応援するのは結構だけど、ちょっと僕を酷使しすぎじゃないですかね皆さん。でも、皆の声を聞いているうちに不思議と体の奥底からパワーがあふれてきて、それと同時に痛みが急に消えていく。床に両手をつき、息を荒げながらもどうにか体を起こす。次にグレイドル・インパクトを発動した時に出てきたＵＦＯのふちを掴み、体重を預けてよろよろと立ち上がった。視界も元に戻ってきたし、もう大丈夫だ。少なくとも今、戦うことはできる。
「……斎王、デュエルを、続けよう、か……エンドフェイズに、インパクト、の、効果で２枚目のインパクトをサーチして、僕はこれで、ターン、エンド」
「はははは、なんだぁ、そのざまは？それで続ける？デュエルを？いいだろう、望み通りにしてやろうではないか！私のターンに魔法カード、カップ・オブ・エースを発動。これもまた正位置ぃ！よって、カードを２枚ドローする！」
　これで斎王の手札はラッキーパンチの分も合わせて計５枚。ついさっきまで手札０

だったのに、つくづく光の力というのは恐ろしい。

「愚者のアルカナ、アルカナフォース０（ゼロ）―ＴＨＥ（ザ）　ＦＯＯＬ（フール）を召喚しよう。さらに永続魔法、コート・オブ・ジャスティスを発動！これにより自分フィールドにレベル１天使族モンスターのフールが存在することで、手札から天使族モンスターを特殊召喚できる。出でよ、恋人のアルカナ！アルカナフォースＶＩ（シックス）―ＴＨＥ（ザ）　ＬＯＶＥＲＳ（ラバーズ）！」

アルカナフォース０―ＴＨＥ　ＦＯＯＬ　攻０

アルカナフォースＶＩ―ＴＨＥ　ＬＯＶＥＲＳ　攻１６００

チャクチャルさんの前には壁モンスターなど何の役にも立たないし、そもそもあの３体は全て攻撃表示だ。だというのになぜだろう、僕の全身には今鳥肌が立っている。あの斎王の手札、あそこに恐ろしいカードがいるのがわかる。なぜか、つい先日死闘を繰り広げたアバターの姿が頭をよぎった。

「斎王、一体何を……」

「教えてやろう、物質（マテリアル）、魂（スピリチュアル）、神々（ヘブンズ）……全てを統べる光の力、アルカナを越えたアルカナの力を！」

不気味な一つ目の顔、そのサイズとは不釣り合いなほど大きな体。アルカナフォースにしては珍しく触手が生えていないが、それでも全体の造形はどこかナンバー付きのアルカナに通じるものがある。

アルカナフォースＥＸ（エクストラ）―ＴＨＥ（ザ・）　ＬＩＧＨＴ（ライト・）　ＲＵＬＥＲ（ルーラー）　攻４０００

「攻撃力４０００、ザ・ライト・ルーラー……」

「そして当然、正位置だ！」

正位置で回転が止まる、アルカナを越えたアルカナ。その巨体に圧倒されていたが、ふと気づくと周りの風景が様変わりしていた。暗い空間の中で無数に煌めく星々の輝き、そして足元に広がる地球。

「ここは……？」

「見よ、あれがソーラだ。お前の神はどうやら破壊に失敗したようだなぁ？」

斎王が指差した先には、ひときわ目立つ人工衛星。チャクチャルさん、一体どうしたんだろうか。こうしている間にも、僕の体は刻一刻とボロボロになっていくのがわかる。今痛みが引いて落ち着いてデュエルできてるのも、夢想や十代たちのおかげもあるけど単に痛覚が使い物にならなくなって痛みを感じなくなった、というのも大きな要因なんじゃないだろうか。

「あの光こそが世界を、全てを浄化する！その邪魔は絶対にさせん！」

「あー？何か勘違いしてるようだがね、世界は破滅の光なんかの物じゃない。世界はこの僕ら、ダークシグナーが最初に唾付けたものだ！こちとら５０００年越しでその時を待ってるんだ、それを急に出てきた奴なんかに渡してたまるか！」

お互いに一歩も引かず、にらみ合う僕ら。その膠着を打ち破ったのは、斎王だった。
「ならば、力づくで奪い取るのみよ！バトルだ、ライト・ルーラーでその時代遅れの神に攻撃ぃ！」
「悪いけど地縛神は相手の攻撃対象にならない、よってその攻撃は成立しない！」
「ふん、馬鹿め。私は手札から速攻魔法、禁じられた聖杯を発動していた！これにより攻撃力４００と引き換えに地縛神の効果は無効となり、ライト・ルーラーの攻撃は直撃する！ジ・エンド・オブ・レイ！」
アルカナフォースEX―ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ　攻４０００
↓地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００↓３３００（破壊）
清明　ＬＰ２０００↓１３００
「補給部隊で、１枚ドロー……！」
「だがこの瞬間、ライト・ルーラー正位置の効果発動。相手モンスターを破壊し墓地に送った時、自分の墓地のカード１枚をサルベージできる！私は再びカップ・オブ・エースを手札に加え、発動！正位置を出し、さらに２枚のカードをドローする！カードをセットし、ターンエンドだ」
清明　ＬＰ１３００　手札：２
モンスター：なし

魔法・罠：補給部隊
グレイドル・インパクト
斎王　ＬＰ３１００　手札：１
モンスター：アルカナフォースＥＸ―ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「僕のターン、ドロー！」
カードを引いた瞬間、チャクチャルさんの気配がまたすぐ近くに帰ってきたのが全身でわかった。今こっちのチャクチャルさんが倒されたことで、本人も強制帰還となったのだろう。ボロボロで崩れかけだった体に文字通り生気が蘇り、視界も思考もさらにクリアになる。
「チャクチャルさん！」
『私が遅れたことは確かにすまないと思う、マスター。だが、せっかく場所まで特定できたんだ。もう少し粘ってくれればなんとかできたんだが』
「ごめんごめん。まさかチャクチャルさんが上からぶん殴られるとは思わなかったのよね」
『うむ。ああそうだ、マスターの友人もここにいるぞ』
「え？」

そう言われてソーラの方を見ると、何やら帽子をかぶった1匹の恐竜の姿が。あの帽子、何か見覚えがあるような。
「……まさか、剣山!?」
『お、清明先輩。見てくれドン、この俺の姿！俺はスペースザウルスに進化したんだドン！』
『マスター、あれはどういうことかわかるか？私にはさっぱりわからなかったが』
「奇遇だねチャクチャルさん、僕にもちょっとよくわかんないや。って剣山、危ない！」
『え？うわっ!?』
いきなりソーラが動き出し、でたらめな方向を向いてエネルギーをチャージする。たまたま長い尻尾が射程内にあった剣山が慌てて尻尾をひっこめた次の瞬間、その場所を白い光の筋が薙いだ。
「剣山、今チャクチャルさんの代わりを送るから！それまでなんとか耐えてて！」
『わ、わかったザウルス……うおっ、まただドン!?』
ソーラの光線をまたもギリギリのところでかわす剣山を見て、一刻も早く助けを送らなくてはと今引いたカードを見る。……来た！
「魔法カード、貪欲な壺を発動。墓地のモンスター5体、うさぎちゃん、スライムアリゲーターにハンマー、アーチャーをデッキに戻して2枚ドロー。そして、サルベージを

発動！墓地から攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体、グレイドル・イーグルとコブラを手札に戻す。さらに魔法カード、強欲なウツボを発動！手札の水属性モンスター２体、つまり今サルベージした２体をデッキに戻して、カードを３枚ドロー！」

貪欲な壺まで絡めて久しぶりに使ったサルベージと強欲なウツボのコンボによって、僕の手札も５枚にまで増える。ここまで引けば十分、後はこのターンでとどめをさすのみだ。

「永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。そしてインパクトの第２の効果！グレイ・レクイエムで場のグレイドルカード、今発動した方のインパクトと斎王、お前のライト・ルーラーを破壊する！」

再びＵＦＯから独特な色合いの光線が放たれ、ライト・ルーラーを抹消せんと迫る。だがその光線がライト・ルーラーに届く前にその体内に収納されていた竜の首のようなものが展開されたかと思うと、そこから目も眩むような光が放たれてインパクトの光線がかき消えてしまった。

「そんな!?」

「ひひひ、惜しかったなぁ！私はトラップカード、逆転する運命を発動していた！これによりライト・ルーラーの効果は正位置から逆位置となり、自身を対象を取る効果を攻撃力１０００ポイントと引き換えに無効にして破壊する！」

ライト・ルーラーの頭上に浮かぶ正位置のカードが手も加えないのにいきなり１８０度回転して逆位置となる。すると宇宙空間の一部がねじれ、ＵＦＯから放たれた光線がそこに吸い込まれていった。
アルカナフォースＥＸ―ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ　攻４０００→３０００
『わわっ！清明先輩、早く何とかしてくれドン！う、うわーっ！』
「剣山！」
剣山の注意が一瞬こちらを向いた隙に、ソーラの照準が剣山を捉える。いまさら避けてもとうてい間に合うような位置ではなく、もうだめか、と思った瞬間、また別の声が割り込んだ。
『ならば私が、時間を稼ぎましょう！』
するとソーラが、まるで何かに縛られているかのように動かなくなった。どうやら剣山は助かったようだけど、この声は一体誰だろう。聞き覚えのない声に誰だったかと頭をひねっていると、ピンときた顔でソーラに向かって十代が喋りかけた。
「その声、美寿知（みづち）だろ！」
『いかにも。そこのあなた、初対面の相手にこのようなことを頼むのも気が引けますが、どうかお願いいたします。地縛神の力を持つ者よ、私の兄に巣食う破滅の光を、消し去ってください！』

美寿知、その名前だけは知っている。十代から修学旅行で何があったのか聞いた時の話に出てきた、エドと十代の２人がかりでやっと倒したという斎王の妹だったっけか。彼女がソーラを抑えてくているなら、こちらとしても有難い。
「協力感謝するよ。それに、僕にはまだ手が残ってる。このターンで決着をつけよう、斎王！」
「面白い。ライト・ルーラーを倒せるわけがなかろう！」
「それができるんだな！相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、このカードはレベルを４、攻守を０にして特殊召喚できる。来い、カイザー・シースネーク！」
カイザー・シースネーク　攻２５００→０→２００　守１０００→０→２００　☆８→４
「確かにそれは上級モンスターだが、所詮壁を増やしただけにすぎんではないか？」
「慌てなさんなっての。カイザー・シースネークはこの効果で特殊召喚に成功した時、手札か墓地からレベル８の海竜族モンスターを特殊召喚できるのさ。僕はこの効果で、もう１体のカイザー・シースネークを特殊召喚する！」
カイザー・シースネーク　攻２５００→０→２００　守１０００→０→２００　☆８→４
「モンスターが２体揃い、召喚権を残している……まさか！」

「もっとしっかり警戒するべきだったんじゃない？２体のシースネークをリリースして、アドバンス召喚！これこそが僕の、不沈の切り札！光を切り裂け、霧の王（キングミスト）！」
　２体の大海蛇が辺りを包み込む霧となり、鎧に身を包む魔法剣士の大剣に吸い込まれてゆく。霧を自在に操る力を持つ魔法使い、それが僕のエースカードである霧の王だ。
「霧の王のカードの攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力の合計となる。そしてさらに、そこにレミューリアの効果が乗って攻守アップ！」
　霧の王　攻０→５０００→５２００　守０→２００
「わ、私の……光の力が……！だが、例えそのモンスターで私に攻撃しても私のライフは残る！」
「それはどうかな？ってね。魔法カード、パラレル・ツイスターを発動！僕のフィールドの補給部隊を墓地に送ることで、ライト・ルーラーを破壊する！」
「ライト・ルーラーの逆位置の効果は強制効果……そ、そんな、馬鹿な！」
　アルカナフォースＥＸ―ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ　攻３０００→２０００
「１つだけ教えてあげるよ、斎王。受け売りの言葉だけど……明けない夜はないけれど、暮れない昼もまた存在しないのさ。霧の王で最後の攻撃！ミスト・ストラングル！」
　大上段に振りかぶったその剣が、湧き上がる霧をその刀身に纏って伸びる。常人では持ち上げることすらできないであろうサイズになったそれを軽々と構えた霧の王が、勢

いよく斬り下ろす。ライト・ルーラーを両断したその一撃は、同時に背後のソーラまでもを深々と切り裂いた。

『これで、とどめだドン!うおおーっ!』

機能が停止しかかったソーラに、剣山が最後にタックルをぶちかます。それが駄目押しとなり、ソーラが勢いよく爆発した。今度こそ、全ては終わったのだ。

霧の王　攻５２００→アルカナフォースＥＸ―ＴＨＥ　ＬＩＧＨＴ　ＲＵＬＥＲ　攻２０００（破壊）

斎王　ＬＰ３１００→０

「申し訳ない。私の弱い心を、心の闇を破滅の光に利用されてしまって……」

「いやいや、いいっていいって。ただまあ、次からは気を付けてよ?」

文字通り憑き物が落ちたように腰が低くなった斎王相手に少し調子を狂わせながらも、そこにいた全員で外に出る。まるで計ったかのごとくぴったりのタイミングで、日の出の光が鋭く水平線の一番向こう側を切り裂いた。

何とはなしにしばらくの間ゆっくりと空に朝が広がっていくのを皆が無言で見つめていたが、やがて斎王がまた口を開く。

「私は今日一番に出る船に乗って、美寿知を探しに行きます。見つかるまでにどれぐらいかかるかはわかりませんが、それでもいつか会えると信じていますから」
「あれ、タロットは使わないのか？」
　こう聞く十代に悪気はないのだろう。それがわかっているからこそ、イヤミにも聞こえるようなその言葉にも斎王は静かに微笑んだ。
「ええ。もうこんなものは、私の役には立ちませんから」
　そういって、懐にしまってあった1組のタロットを空にめがけて投げつける。思えば光の結社が来てから、ずっとそれに翻弄されっぱなしの日々だった。これからは久しぶりに、いつもの日常が戻ってくるだろう。
「おーーーい、シニョール清明ー！」
「あれ、クロノス先生？」
　僕の名前を呼ぶ声に、そちらを向く。手に何か紙のようなものを持ったクロノス先生が、ちょうどこっちに来るところだった。そしてその紙を、僕に向けて押し付けてくる。
「どうしたんです、クロノス先生？」
「どうしたもこうしたもないノーネ、それはこっちのセリフですーノ。全然連絡が取れない上ーに、寮に行ってもいないものだから徹夜で探しましたノーネ」
「あー……ごめんなさい」

「よろしい。さて、本日の要件ですーガ、シニョール清明は今年度、まだ学期テストを受けていないノーネ。このままではこの時期にもう留年が確定してしまいますーガ、シニョールについては多少考慮する余地があるので救済措置として特別に明後日……いえ、もう日付が変わったから明日ですね。とにかく、ワタクシクロノス・デ・メディチ監修の特別テストを行いますーノ」

「え……えええええっ!?」

テスト!?なんで僕が!?と言いたいところだけど、残念ながら心当たりがないわけじゃない。確かあれは十代が行方不明になる直前のことだけど、ユーノの罠にはまって時の魔術師のタイム・マジックをまともに受けた日。そういえば、確かあれはテスト前日のことだったような。そのあと時間停止を喰らってようやく復帰したと思ったら光の結社が攻め込んできてて、それ以降はもうテストどころじゃなかったからきれいさっぱり忘れてた……!

「明日?全教科?」

「その通り。留年しないような点を取ることを期待してますノーネ。では、私はもう布団にくるまって眠りたいのでさよならでスーノ。ふわぁ〜」

最後に大あくびをしながら、今来た道を引き返していくクロノス先生。手書きで『テストのお知らせ』と書かれた手元の紙を見て、思わず頭を抱える。

「勉強手伝おうか、清明？ってさ」
「ありがとうございます夢想様！三沢もできればお願いしたいんだけど……ってあれ、そういえば三沢は？十代、一緒じゃないの？」
「あいつは俺もどこ行ったかわかんないんだよな。お前らはどうだ？」
　十代がその下の階にいた、翔と夢想と万丈目に話を振る。
「僕は階段で見かけたけど、白い制服のままだったからつい隠れちゃって……」
「私はちょうど詰みかかってたところに通りかかって、そこでやってたバトルロイヤルに乱入してハーピィの羽根箒とサイクロンで露払いしてもらったよ、ってさ。正直あれが無かったら私でもひっくり返すのは無理だったかも、だって」
「俺も似たようなものだな。そういえば清明、こんなものを預かったぞ。お前に渡してほしいそうだ」
　そう言って、きれいに折りたたまれた手紙を出す万丈目。とりあえず開いて中に目を通すとそこには自分一人で片を付けるつもりが余計に面倒事を引き起こしてすまなかったという謝罪の言葉とそれでも何とかしてくれた僕たちに対しての感謝、とりあえずウリアのカードはそちらで預かっておいてほしい旨、そしてこんなとんでもないことが書かれていた。
『（中略）さて、俺の今後のことなんだが。実は光の結社にいる最中でデュエル統一理論

の第一人者、ツバインシュタイン博士からうちに助手をしに来ないかとの大変名誉な誘いを受けてな。なんでも、俺の思考パターンが気に入ったらしい。そこで君たちに合わせる顔もないことだし、しばらくの間アカデミアを休学して博士のところで働いてみようかと思っている。それに、この分野には俺も以前から興味があった。去年起きた不思議な出来事から考えても、いわゆるデュエルモンスターズの精霊が現実に存在するのは明らかだろう。となれば、それを科学的に解明すること。それが、今の俺にとっての目標なんだ。こんな別れ方になるのは心苦しいが、今の俺にはお前に合わす顔がない。それにもし正式にみんなに別れを切り出したりして、自分の決心が鈍るのが俺には一番怖い。だから、こんな別れ方しかできない俺を許してくれ。いつかまたアカデミアに戻ったら、必ず会おう。しばしの間さらばだ、清明。三沢大地』

なんかの間違いではないかと1回読んだ後、もう1回丁寧に読み直してみる。まあ生真面目な三沢の性格からいって、これ全部本気の文章なんだろう。まったく、三沢らしい道というかなんというか。

ちょっとしんみりしていると、今度は上からヘリコプターの音がすぐそばまで近づいてきた。その中を見ていた斎王が、喜びの声を上げる。黒服の男たちと一緒にそこにいて斎王に手を振るその女性は、美寿知だった。

ま、おおむねハッピーエンドってことでいいのかね。

「……あとは、ユーノが帰ってくれば」

小さなつぶやきを聞いたのは、チャクチャルさんたち精霊しかいなかっただろう。一体ユーノ、どこに行っちゃったんだろう？

ターンEX―5　真紅の竜と『真紅の』竜

　これは、遊野清明が斎王とそれを操る破滅の光を打ち破り、レーザー衛星『ソーラ』が遥か上空で静かに爆発した……その、少し前の話。誰も知らない、異邦人たちの戦いの話。

「さて、と。この封印も、そろそろ焼き切れるかな？」

　三幻魔の封印された祠の近くで、適当な岩に腰を下ろしてそう満足げに1人ごちる人影……遊(あそぶ)。1度様子を見に行こうかと立ち上がったところで、ふと森の一点を注視した。野生動物とは違う、れっきとした人間の足音を聞き分けて意味深な笑みを浮かべる。

「ふーん、へー、ほ～。なーんだ、結局邪魔しにくるんだ。いいよー、こっちの方はどうせ暇だったし」

　怒り心頭といった様子でそこに立つのは、転生者狩りの富野。これまでにも散々煮え湯を飲まされた相手に対しても、その目の闘志はいささかも薄らいでいない。

「うるせえ！どうやって生き返ったかは知らねえがな、いったんやられた奴が2回も3回も出てくんじゃねえよ」

「自分だって散々やられたくせに、よく言うよ。それで、もう１人の方はどうしたのかな？」

もう１人、とはそこにいるはずなのに姿の見えない相手、つまりユーノのことだ。まだユーノの洗脳が解けたことは知らないはずだと内心踏んでいたが、どうやら遊の様子を見て一発で何が起きていたのかの察しがついたらしい。その勘の良さに内心舌を巻きながら、それでも表向きは平然とした様子で吐き捨てる。

「知るかよ。お前がわかっときゃいいのはただ１つ、今から俺に叩きのめされるってだけだ」

「ふうん？言うようになったねえ、負け犬クンが」

実際、遊の言葉はあながち妄言でもない。彼と富野の実力差は明白であり、例え新たに手に入れたスカーライトの力をもってしてもその差を覆すことができるかどうかはかなり分の悪い賭けだ。しかし、それでもやらねばならないのだ。それだけの理由も、覚悟もある。

「言ってやがれ……」

２人の間の緊張が徐々に高まり、空気が次第に張りつめていく。そのときたまたま、アカデミア上空を飛んでいたカラスがしわがれた声で鳴いた。その音がきっかけになったかのように、２人して同時にデュエルディスクを構える。

「「デュエル！」」

先攻を取ったのは、遊。

「僕のターンはー、これかな？幻影王　ハイド・ライド！」

ぼろぼろの幽鬼のような馬に乗ったこれまたぼろぼろの騎士……チューナーモンスターでありながら他のチューナーとシンクロを行えるという、まさに幻影の王にふさわしい効果を持つカードだ。

幻影王　ハイド・ライド　攻１５００

「ターンエンドー」

「俺のターン、ダーク・リゾネーターを守備表示で召喚！さらにカードをセットして、ターンエンドだ」

音叉を持った小柄な悪魔が、富野のフィールドに現れる。１ターンに１度の戦闘破壊耐性のあるモンスターで、まずは壁を作ったというところか。

ダーク・リゾネーター　守３００

遊　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：幻影王　ハイド・ライド（攻）

魔法・罠：なし

富野　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：ダーク・リゾネーター（守）
魔法・罠：１（伏せ）
「特に動きはなし、かー。まあいいや。手札を１枚捨てることで、ＴＨＥ（ザ）　トリッキーは手札から特殊召喚できるよー」
ハイド・ライドの隣に現れたのは、緑のファッションに身を包んだ謎の奇術師。クエスチョンマークをあしらったシルクハットで帽子というより兜のように首から上全体を覆っているため、その素顔を見ることはできない。
ＴＨＥ　トリッキー　攻２０００
「シンクロ召喚～、といきたいところだけどね、生憎と僕の琰魔竜は守備表示モンスターには特に有効打がないからねー。バトル、ダーク・リゾネーターに……」
「させるかよ！トラップ発動、スクリーン・オブ・レッド！このカードが存在する限り、相手は攻撃宣言できないぜ！」
大量の鏡が上空から落ちてきて、遊とそのフィールドの周りを取り囲む。トリッキーとハイド・ライドの攻撃はあちら落ちらに移る自らの姿に幻惑され、ダーク・リゾネーターに届かなかった。
「二重の守り、ってわけね。面白い面白い、ターンエンド」
攻撃が封じられても、余裕の態度は崩さない。あえてシンクロをせずに素材となるモ

ンスターを残したことを怪しみつつも、富野にこれ以上相手ターンでの動きに干渉する手立てはない。
「俺のターン！相手フィールドにモンスターが２体以上いる場合、このカードはリリースなしで召喚できる！パワー・インベーダー召喚！」
パワー・インベーダー　攻２２００
「お、そろそろ来るかなー？」
「望み通り、見せてやるぜ。レベル５のパワー・インベーダーに、レベル３のダーク・リゾネーターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」
レッド・デーモン使い同士のこのデュエル。先に現れたのは、富野の操る元祖レッド・デーモンズだった。まさに悪魔と呼ぶにふさわしい眼光で遊のフィールドのモンスターを見下ろし、口から蒸気を吐き出した。
☆５＋☆３→☆８
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００
「バトルだ、レッド・デーモンズ！ハイド・ライドに攻撃、灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→幻影王　ハイド・ライド　攻１５００（破壊）

遊　ＬＰ４０００→２５００

「くっ……」

「カードを１枚セット。エンドフェイズ時、スクリーン・オブ・レッドは俺に１０００ポイントのダメージを強いる。これでターンエンドだ」

富野　ＬＰ４０００→３０００

相手からの攻撃を完全にシャットアウトするという強烈な効果と引き換えに、エンドフェイズごとに自らのライフを削るデメリットを持つスクリーン・オブ・レッド。それでもまだ富野の方がライフ自体は優位に立っているが、それが安心できる理由にはならないのは本人が一番よくわかっていた。

遊　ＬＰ２５００　手札：３

モンスター：ＴＨＥ　トリッキー（攻）

魔法・罠：なし

富野　ＬＰ３０００　手札：３

モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）

魔法・罠：スクリーン・オブ・レッド

１（伏せ）

「それじゃあ、ハンデはもうこれぐらいにしてあげようかなー？僕のターン、僕もダーク・リゾネーターを召喚！」

遊のフィールドにも、音叉を手に持つ悪魔が現れる。よく見ると富野が使用したそれとは音叉を持つ手が逆になっていたが、だからといってテキストまで違うわけではない。

ダーク・リゾネーター　攻１３００

「おっと、手札から増殖するＧの効果を使用するぜ」

「レベル５のトリッキーに、レベル３のダーク・リゾネーターをチューニング。圧倒的な黒色が、世界の色を塗りつぶす。シンクロ召喚、琰魔竜　レッド・デーモン！」

富野のレッド・デーモンズよりもより筋肉質な体が目立つ、それとは似て非なる悪魔のドラゴン。体には何かを暗示するような漆黒のラインが走り、よりがっしりとした体を印象付けている。

☆５＋☆３→☆８

琰魔竜　レッド・デーモン　攻３０００

「出やがったな……だが俺はここで、増殖するＧの効果を適用！このターンお前が特殊召喚を行うたびに１枚、デッキからカードをドローするぜ。まずは１枚！」

あのモンスターは1ターンに1度、場の自身以外の攻撃表示モンスターをすべて破壊する効果がある……それを、彼は思い出していた。だがそこで、と思考は先ほど自らが伏せたカードにたいして向かう。俺の伏せたカードはモンスターを除外し、破壊された時に帰還させることができるディメンション・ゲートだ。これを使ってレッド・デーモンズを一時的に逃がし、スクリーン・オブ・レッドを突破してこないならばそれはそれでよし。万一何らかの手段で突破されたなら、このカードのさらなる効果によりレッド・デーモンズを帰還させる。完璧だ、そう彼は自分に言い聞かせた。

実際、彼の作戦は間違ってはいなかった。遊の持つレッド・デーモンから受ける被害を最大限に減らす手段としては、何も間違っていなかったと言えよう。

彼に落ち度があるとすればたった1つ、遊のデュエリストとしての能力が去年の時点ですでに完成していることを無意識のうちに前提としていたことだ。

「さあ、かかってきやがれ！」

その安い挑発に、余裕の笑みで返す。遊のターンは、まだ始まってすらいなかった。

「魔法カード、死者蘇生発動ー。墓地からチューナーモンスター、シンクローン・リゾネーターを蘇生させるよー」

シンクローン・リゾネーター　攻１００

「トリッキー召喚の時に落としてたカードか……だが、なんでこのタイミングで……？」

すでに増殖するGの効果は適用されている。みすみすドローさせることになるだけなのに、なぜここで死者蘇生してまで戦闘向きでないステータスの弱小チューナーを？富野の疑問は、いささか遅かった。そして高速化する実戦では、その遅れが致命的なミスとなる。

「レベル8のレッド・デーモンに、レベル1のシンクローン・リゾネーターをチューニング！」

「なっ、なんだと!?レッド・デーモンを捨てて出すレベル9のシンクロモンスターだと!?そんな馬鹿な！」

「君の反応は、想像通りのいいリアクションだからこっちも見ていて楽しいよー。塗り潰された黒き世界を、憤怒の黒が重ね塗る。シンクロ召喚、琰魔竜　レッド・デーモン・アビス！」

レッド・デーモンの体が、一回り大きくなった。元々筋肉質だったボディにはさらに筋肉が内から湧きあがり、頭に生えた3本の角はより長く、鋭く伸びてゆく。胸からは溢れ出るエネルギーが骨の形すら変化させ、それでもなお止まることを知らないほどのパワーが光となり、まるで巨大な顔のような模様を形作る。大きくなった体を支えるために必然的に翼の形状も変化し巨大化し、全身からは弱い皮膚を突き破って補填するかのように無数の棘が生えていく。そしてその両腕には、大斧を思わせる巨大な刃が装着

された。
☆８＋☆１↓☆９
　琰魔竜　レッド・デーモン・アビス　攻３２００
「レッド・デーモン・アビス……？ク、クソッ！ドローだ！」
「そう、僕にだってまだ進化する余地はあったんだよねー。まずはシンクローン・リゾネーターが墓地に送られたことで、効果発動。墓地のリゾネーター１体、ダーク・リゾネーターを手札に戻すよー。バトル、レッド・デーモン・アビスでレッド・デーモンズ・ドラゴンに攻撃！」
「さ、させるかよ！スクリーン・オブ・レッド、奴の攻撃を止めろ！」
　低空飛行で突っ込んでくる悪魔の竜の前に、再び無数の鏡が立ちはだかる。しかしアビスがそれを一睨みすると早回しでも見ているかのようにその輝きがくすんでゆき、飛来するアビスの巻き起こす風圧だけでいともたやすくその全てが割れてしまった。
「嘘だろ!?」
「アビスはお互いのターンごとに１度、表側表示で存在するカードの効果を無効にできるのさー。さあ、その伏せカードを使うのかなー？」
「くっ……」
　確かに、アビスは既にスクリーン・オブ・レッドに対して無効効果を使っている。ディ

メンション・ゲートを発動させれば、少なくともレッド・デーモンズだけは逃がすことができるだろう。だがそれは、アビスの攻撃がモンスターを失った富野のライフを直撃するということに他ならない。

普段の彼ならば、勝負の行方よりも自らの相棒を取っただろう。だが今回は、それでは駄目なのだ。悲壮な覚悟と共に主が目を伏せたのを見て、レッド・デーモンズも自らの運命を感じ取ったらしい。それでも王者として雄々しく大空に吠え、勝ち目のない迎撃に赴いた。そして放たれるレッド・デーモンズ渾身の一撃が、アビスのより重く、より速い一撃の前に散っていった。

琰魔竜　レッド・デーモン・アビス　攻３２００→レッド・デーモンズ・ドラゴン攻３０００（破壊）

富野　ＬＰ３０００→２８００

「はい、深淵の怒却拳（アビス・レイジ・バスター）。さらにアビスが戦闘ダメージを与えたことにより、もう１つの効果発動ー。墓地からチューナーモンスター１体、ハイド・ライドを守備表示で蘇生してっと」

悪魔の竜が地面を殴りつけると、そこを中心に大きく大地が陥没する。その穴の底を突き破り、再び幻影の王が一騎駆けてきた。

幻影王　ハイド・ライド　守３００

「ドローしようが問題ないね。このハイド・ライドには、それだけの価値があるのさー。カードをセットして、ターンエンドー。どう、僕の新しいレッド・デーモン?」
「クソッたれが……!俺のターン、ドロー!俺は今ドローしたカード、死者蘇生を発動!甦れ、レッド・デーモンズ!」
「しぶといねー。それは通してあげるよ。で、それからどうしてくれるのかな?」
　レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００
「勝負はまだこれからだ!チェーン・リゾネーターを召喚し、効果発動!このカード以外にシンクロモンスターがいるならば、召喚成功時に更なるリゾネーターをデッキから特殊召喚できる!」
　体から鎖を伸ばすリゾネーターが、その一端を富野のデッキめがけて投げつける。しかしそこにも、悪魔の竜が立ちふさがった。
「無駄だねー。そこにアビスの効果発動、その発動と効果を無効にするよー」
　アビスの剛腕が唸り、鎖を引きちぎらんとばかりに襲い掛かる。だがその腕がちっぽけな悪魔に届く寸前、その姿が鎖のみを残して瞬時に消えた。
「悪いな、俺はその発動にさらにチェーンしてトラップカード、ディメンション・ゲートを発動させてもらったぜ!チェーンの効果が無効になるより前に次元の隙間へ逃げ込んだ、つまりアビスの効果は無駄打ちってわけだ!さあ、改めてチェーンの効果を使わ

せてもらうぜ！デッキより出でよ、フレア・リゾネーター！」
「へえ？」
体の後ろに火を灯した、赤を基調とするリゾネーター。辺りを照らす赤い光は、果たしてどちらに向けての勝利の暗示なのか。
フレア・リゾネーター　攻３００
「さらにマジック・プランターを発動！永続トラップのディメンション・ゲートを墓地に送り２枚ドローするが、俺の狙いはそこじゃねえ。このカードが墓地に送られたことで、次元の狭間に逃げ込んだチェーン・リゾネーターは再びフィールドに特殊召喚される！」
チェーン・リゾネーター　攻１００
満を持してフィールドに揃った、レッド・デーモンズ・ドラゴンと合計レベル４のチューナー２体。合計レベル１２、ダブルチューニングを駆使して呼び出されるあのシンクロモンスターの名を高らかに宣言しようとした時、彼の視界がすべて黒に染まった。
「てめえ、一体何しやがった!?」
「別にー。あえて言うとしたら、君が馬鹿なのさー。どうしてアビスの効果で僕がシンクローン・リゾネーターではなくハイド・ライドを蘇生させたのか、そのことを１度た

りとも考えてみなかった、ねー」

　その言葉にふと思い当たることがあり、黒く染まった世界の中で遊のフィールドに目を凝らす。その名が示すように深淵（アビス）の底からこちらを眺めるレッド・デーモン・アビスと、その周りを取り囲んで封印するスクリーン・オブ・レッド……だが、他には？守備表示で存在するはずのハイド・ライドの姿が、ない。

「トラップカード、闇の閃光。攻撃力１５００以上のモンスターをリリースすることで闇の閃光がフィールドを眩まし、発動ターンに特殊召喚されたモンスターは全て破壊されるよー」

「そうか、だからわざわざ攻撃力１５００のハイド・ライドの方を……」

「２体破壊できれば上々のつもりだったけどねー。感謝感謝だよー、まさかディメンション・ゲートを自分で墓地に送ってわざわざチェーン・リゾネーターまで特殊召喚で出してくれるなんてねー」

「ぐ……」

　少しづつ、闇が晴れてきた。周りの風景もまた見えてくる。だが、そこにもうレッド・デーモンズ・ドラゴンの姿はない。２体のリゾネーターも、その姿を消してしまった。このターンに特殊召喚されたからだ。

「頼みのモンスターは全滅、召喚権も使い終わった。さ、何か言うことはー？」

「速攻魔法、非常食を発動。スクリーン・オブ・レッドを墓地に送ることで１０００ライフ回復し、ターンエンドだ……！」
「ふーん、ちゃんとスクリーン・オブ・レッドのコストは回避するんだー」
富野　ＬＰ２８００→３８００
遊　ＬＰ２５００　手札：２
モンスター：琰魔竜　レッド・デーモン・アビス（攻）
魔法・罠：なし
富野　ＬＰ３８００　手札：５
モンスター：なし
魔法・罠：なし
絞り出すように吐き捨てられたターンエンド宣言に嫌な笑顔で頷き、颯爽とカードを引く遊。そのカードを見て、ますます顔がほころんだ。
「もう九分九厘勝負は決まったって言っていいかもだけどー、どうやらさらにこの先をこのデッキは君に見せたいみたいだねー。僕のターン、グローアップ・バルブを召喚ー。レベル９のレッド・デーモン・アビスに、レベル１のバルブをチューニング！」
「レベル９のアビスを、さらにシンクロ素材にだと……お前、一体どこまで」
進化するつもりなんだ。問いの最後は言葉にならなかったが、それでも遊には通じた

ようだ。

「さーて、ねー。木を火を土を金を水を染め上げて、漆黒よ我が世の理を包め。シンクロ召喚ー、レベル１０！琰魔竜　レッド・デーモン・ベリアル！」

アビスと化したレッド・デーモンがさらなる戦いを求めた結果、その体にもう１度進化が起きた。体の表面に飛び出た骨はさながら鎧のように全身の弱い肉の部分を覆い、それでもなお溢れ出るエネルギーはまたも体に光の模様を刻みつける。角は長さこそあまり変わらないもののより鋭く固くなり、ついには金属的な光沢を放つようにすらなり始めた。両腕の刃も急激なパワーアップに伴いさらに巨大化するが、それでいて本体の機動力を損ねないよう全体的には鋭角化する。悪魔の中の悪魔、ベリアルの名を関する新たなるレッド・デーモンの爆誕した瞬間である。

☆９＋☆１↓☆１０

琰魔竜　レッド・デーモン・ベリアル　攻３５００

「アビスの効果を捨てて出したのが、攻撃力３５００……？」

富野の疑問を鼻で笑うと、地面から何やら植物のようなものが生えてきた。

「墓地のグローアップ・バルブの効果発動ー。このカードはデュエル中１度だけ、デッキトップを墓地に送ることで特殊召喚できるよー」

グローアップ・バルブ　攻１００

そのまま成長を続け、すぐに全体が地上に出てくるバルブ。それをベリアルがいきなりつまみ上げると、一瞥すらくれることなく問答無用で握り潰した。
「はあ？」
「ベリアルは1ターンに1度、場のモンスターをリリースすることで墓地からレッド・デーモンを1体蘇生できるのさー。甦れ、アビス！」
握り潰されたバルブの魂が地の底へ流れてゆき、1瞬の間の後にアビスが大地を割って再び現世へと翼を広げ飛び立ってきた。
　琰魔竜　レッド・デーモン・アビス　攻３２００
「バトル、２体のレッド・デーモンで……」
「まだだ！バトルフェーダーは直接攻撃宣言時に特殊召喚され、このターンのバトルフェイズを終了させる！」
いかに悪魔の竜といえどもバトルフェーダーを止める手段は持ち合わせておらず、いかにもしぶしぶといった様子で振り上げた拳を下ろす。
一方、その主たる遊はその妨害にも特に驚いた様子は見せなかった。
　バトルフェーダー　攻０
「やっぱり引いてたんだー、バトルフェーダー。だけど、そのカードは所詮使いきりのカード。次の1ターンで何をするのかなー。カードをセットして、ターンエンド～」

歯噛みする富野。だが事実バトルフェーダーは使い切りであり、これ以上の猛攻をしのぐカードは彼の手札にはない。しかし、ここで諦めたら世界は、数多の次元は一体どうなってしまうのか。そんな最悪の未来を防ぐため、転生者狩りは戦うのだ。

「まだだ、まだ終わっちゃいねえ！俺のターン、ドロー！」

もはや何年になるか、もう本人ですら覚えていない。延々使い続けてきて、これまでにも幾度となく彼を転生者狩りたらしめてきたそのデッキは、またしてもその期待に応えた。

「手札からパワー・ジャイアントの効果発動！手札のレベル４以下のモンスターを捨てることでこのカードを特殊召喚し、さらにその捨てたモンスターのレベルの数値だけこのカードのレベルを下げる！」

パワー・ジャイアント　攻２２００　☆６→５

「そんな壁を作ったところで、今更……」

「甘いんだよ！さらに俺は墓地から、今コストとして送ったミラー・リゾネーターの効果を発動！このカードは相手フィールドにのみエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターが存在する場合、特殊召喚できる！」

その名の通り鏡を背負ったリゾネーターが、アビスとベリアルの姿をその身に映し出してにんまりと笑う。

ミラー・リゾネーター　攻１００

「ミラー・リゾネーターはシンクロ召喚に使用するとき、そのレベルを相手モンスター1体に合わせることができる。俺はこの鏡に、お前のアビスのレベルを映させてもらうぜ」

「レベル9をチューナーにコピー?そんなことをして、出せるモンスターなんて……」

「いないと思うか?」

「……」

遊はこの一瞬で、自らの知識をフル回転させる。レベル9となるこの効果を通した場合、普通に考えればさらなるレベル変動なしでシンクロ召喚できるモンスターは星態龍、神樹の守護獣―牙王、天穹覇龍ドラゴアセンション、ブンボーグ・ジェット、そしてあと1体、さらにミラー・リゾネーターの属性を変化させ、条件を満たす素材モンスターを召喚することでようやく呼び出せるようになるとあるモンスターしかいないはずだ。そしてこの中でこのアビス・ベリアルの布陣を突破する可能性を秘めているのはその、最後の1体のみ。残りたった1枚の富野の手札の中に、その召喚を成功させるための鍵が隠されているという可能性は低い。それにあのモンスターは、転生者狩りの中でも『彼女』しか持っていなかったはずだ。だが、万に一つの可能性として富野がそれを持っているとしたら?その場合、遊はなすすべなく負けるだろう。

「くっ……アビスの効果を発動―！ミラー・リゾネーターの効果を無効にする！」
　鏡の中のアビスの目が光り、本体の動きと関係なく拳を繰り出す。表面に激突したそれは、一瞬で内部から鏡を叩き割った。
「……これで満足？望み通り、アビスの効果は使ったよ。さあ、これからどう出るのかなー？」
「ああ、俺は賭けに勝ったぜ！お前のことだ、必ず無効効果はミラーに使うって信じてたからな」
「それじゃあ、やっぱり……！」
「その通り、完全なブラフだぜ。もし今の効果が通ってたら、さすがの俺もどうしようもなかったからな。魔法カード、下降潮流を発動！このカードの効果で、俺のパワー・ジャイアントのレベルは１から３の任意の数字になる。俺が選択するのは、レベル３だ！」
　パワー・ジャイアント　☆５→３
「３体で合計レベル、５……？」
「いいや、８だ！バイス・バーサーカーを召喚！」
　バイス・バーサーカー　攻１０００
「そのモンスターは……まさか！」
「そのまさかさ。レベル４のバイス・バーサーカーとレベル３になったパワー・ジャイア

ントに、レベル1のミラー・リゾネーターをチューニング！見せてやるよ、レッド・デーモンズが手に入れた新たな力！赤き王者の研磨の果てに、紅蓮の鼓動が天地を焦がす。力持ち得ぬ臆病者に、戦う価値など微塵もない！レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト!!」

傷だらけの赤き悪魔の竜が、表裏一体の存在であるもう1つの悪魔の竜のカタチと対峙する。本来戦闘能力ではアビス、ベリアルに劣るはずのスカーライトだが、その全身から実力差を補って余りあるほどの異様なオーラを放出することで逆に2体を威圧していた。

「バイス・バーサーカーをシンクロ素材にしたモンスターは、俺に２０００ポイントのダメージを強制的に負わす代わりにエンドフェイズまで攻撃力を２０００ポイントアップさせる！」

富野　ＬＰ３８００→１８００

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト　攻３０００→５０００

「攻撃力５０００……だけど、バイス・バーサーカーの強化はエンドフェイズまでだよねー？」

「ああ、その通りだ。だがな、このターン中に全部ぶっ潰す！スカーライトは1ターンに1度、このカードより攻撃力の低い特殊召喚されたモンスターをすべて破壊した上で、

１体につき５００ポイントのダメージを与える！アブソリュート・パワー・フレイム！」
「そんな……！」
「アビスの効果を使ったのを恨むんだな！俺のバトルフェーダー共々焼き尽くせ、スカーライト！」
遊　ＬＰ２５００→１０００
つい先ほどユーノに決めたときよりも異様に出力の上がった地獄の炎に呑まれたアビスが、ベリアルが、傷つき倒れてゆく。そしてフィールドに立っているのは、スカーライトただ一体のみ。
「バトルだ、スカーライト！とどめの一撃を食らわせてやれ、灼熱のクリムゾン・ヘル・バーニング！」
再び放たれた真紅の炎が、遊の視界を埋め尽くす。そして……。
レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト　攻５０００→遊（直接攻撃）
遊　ＬＰ１０００→１０００
「馬鹿な!?スカーライトの攻撃が、効いてないだと!?」
そこにいたのは、攻撃力５０００もの直撃を受けてなおぴんぴんしている遊の姿だった。よく見ると炎は彼のもとにたどり着く前に見えない壁に阻まれ、ただの１欠片たりとも届いていない。

「ハー、ハー……ざーんねんでしたー、今の攻撃宣言時、ガード・ブロックのカードを発動していたのさー。この効果により1度だけ戦闘ダメージは0、しかもカードを1枚ドローするおまけつきね」

「ったく、今の攻撃さえ効いてりゃ……エンドフェイズに強化が消えて、ターンエンドだ」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカーライト　攻５０００→３０００

確実だったはずの勝利をあと一歩のところで逃し、富野の表情にも焦りが出てくる。遊の手札、1枚はクリエイト・リゾネーターで回収したダーク・リゾネーターなことはわかっている。だがもう1枚、今ガード・ブロックで引いたカードと次のドローで引くカードは、1体何が来る？

「僕の……」

ゆっくりとデッキに手を掛ける遊。その様子を、かたずをのんで半ば睨みつけるように見ていた。

「ターン……」

あまりの集中の結果、周りの時間の流れがひどくスローモーに感じる。それは遊も同じようで、その表情からもいつもの余裕は消えていた。

「ドロー！……おやー？」

「な、なんだ？」
　カードを引いた直後、不意に地響きが始まった。地震かと辺りを見回すが、どうもすぐ近くのアカデミア本校は揺れていないらしい。今富野たちが立っているこの近辺のみが、ピンポイントで揺れている。
「そうか。残念だけど、今回は時間切れかなー？」
「待ちやがれ！逃げようったってそうはいかねえぞ！」
「まったく、やってくれるよ。もう１人、ユーノがいないと思ったら先に封印解除を邪魔しに行ってたなんてねー」
　デュエルを強制終了させてその場を立ち去ろうとする遊に、それを引き留めようとする富野。だが遊の次の言葉を聞き、その違和感になぜか背筋が冷たくなった。
「それにしても、彼もかわいそうに、ねー。大人しくこっちに来てればよかったのに、よりによってあっちに行っちゃったかー」
「かわいそうに……？」
　聞き返した次の瞬間、かすかな声が２人の耳に届いた。ユーノの声で……あれは、悲鳴？
「い、一体何が起きてやがる！俺にわかるように説明しろ！」
「やだねー。ただあえて１つ言ってあげるなら、多分今頃彼は、ねえ。頑張れば死ぬまで

にあと1回ぐらい会うチャンスもあるんじゃなーい？まあ、こうなった以上とりあえず今回は僕も身を隠させてもらうよー。レッド・デーモンの真の戦いは次回にお預けだねー」

「ふざけんな！テメーのアビスもベリアルも、俺のスカーライトが焼き尽くしたじゃねえか！」

「確かに、そうだったね。正直驚いたよ、まさかあの2体を倒すなんてさー。でも、僕もまだ本気は出してないってことさー」

アビス、ベリアルにはまだ上がいる。衝撃の告白を前に言葉に詰まったその隙を見逃さず、瞬時に遊の姿は消えうせた。

残された富野もなんとか痕跡を探してその後を追おうという衝動に駆られるが、すぐに遊が残していった不吉な言葉を思い出す。

「ったく、手間がかかる！」

身を翻し、三幻魔の封印地へ走る富野。走りながらもその脳内には、最悪のビジョンがちらついて離れない。振り払おうとしてもなくならないそんな光景は、果たして現実のものとなった。彼がそこに着いた時、そこには誰もいなかったのだ。他の敵もいないかわりに、とっくに先回りしているはずのユーノの姿もない。ただひたすらに、最初から誰もいなかったかのようにがらんとしている。

「おーい、誰かいねえのかー！」

しかし、その声に対する返答はどこからも来ない。そして一番不思議なことに、あれだけの揺れがあったにもかかわらず封印もいまだ残ったままだった。

「一体ここに誰がいて、何が起きたってんだ？」

思わず誰も聞いていないことは百も承知で一言つぶやく。無作為に歩き回りながら、せめて何か少しでも手がかりになるものがないかと見回してもみたが、その場には本当に何ひとつ痕跡が残されていないことがはっきりするまでに、さほど時間はかからなかった。

「一体……」

最後にもう１度だけ呟くも、やはり誰も応えない。せめてこの次元を離れる前に、ユーノに何が起きたのかを何も知らない清明にできる限り説明しに行こうと振り向いたところで、いきなり目の前の空間が歪んだ。

「アンタは……どうしたんです？」

転生者狩り独特の次元移動法でその場に現れた人影に一瞬警戒するも、すぐに緊張を緩ませる。その男は、初代ライバルと名高い青眼（ブルーアイズ）を変幻自在に操るデッキを使いこなす富野の仲間であり、転生者狩りでも古株の男だ。

「よう、こんな所に居やがったのか。ようやく見つけたぜ、ちょっと手伝ってくれよ。い

やな、他の次元なんだけどな。1つの場所に思ったより大勢の転生者が飛ばされてるせいで、ちょっと俺1人じゃ手が回らねーんだわ」
「え?でも俺、まだこっちでやることが……」
「頼む、それは後に回してくれ!このままじゃ俺がどやされちまうんだ、恩に着るからよ。な?それにこの次元なら大丈夫だろ、よっぽどのことでもない限りほっといてもきっとどうにかなるさ」
「え、ちょ、うおあっ!」
そして、また静寂が戻る。もうそこには、誰1人として生者の姿はなかった。

嵐の転入生編
ターン７２　鉄砲水の午後

その１：遊野清明の場合

「お、今日のメシはエビフライか！」

「「いただきまーす！」」

なんてことのない昼下がり、オシリスレッド寮。長かった光の結社との戦いもめでたく勝利で終わり、ようやく平和が戻ってきた。ああ、戻ってきましたとも。

「そういえば清明先輩、定期テストの方はどうなったド……」

「わーわーわー！剣山君、しっ！な、なんでもないよ清明君、あはは……」

……何度でも言おう。戻ってきましたとも、ええ。我ながらよく留年しなかったものだと思うけど、終わってから軽く廃寮まで行って稲石さんに見てもらった結果赤点を下回っていたことは記憶に新しい。あんな身も心もくたくたになるような斎王とのデュエルの後でさらに詰め込みで８時間テスト勉強やった結果が緊急再試とか、もう笑うしかないなーとあの時は思ったものだ。本当に、あれで進級させてくれた先生方には感謝感謝だよ。

「先生達も、先輩のことは意地でも留年させないようにあれこれ知恵を絞っているように見えますけどね。私が座学でこんな成績ばっかりだったら、とっくの昔に親に連絡が行ってますよ」

とは、僕の2年次の成績表を見せたら店番中にまで広げて見ていた葵ちゃんの弁である。実際、僕もそんな節はあると思う。要するに、入学1年で校内に店を構えるような生徒に居座って欲しくないということだろう。その気持ちはよーくわかる。葵ちゃんの場合は一応そのあとに、

「まあでも、今回お情けが通ったのは学校側にも引け目があるからじゃないですか？光の結社を追いだした功績は無視できないでしょうし」

などとフォローになってないフォローをしてくれたのだが。

そんなことを思い出して遠い目になっていると、いきなり十代が立ち上がった。ハネクリボーに呼ばれているらしく、笑顔を浮かべて何か話しこみながら外に出て行った。それを見て、遊びに来ていた翔と剣山も一緒になってその後についていく。

「あ、待つドン十代のアニキー」

「どこ行っちゃうんスかー？」

万丈目も光の結社のごたごたとジェネックス優勝のどさくさに紛れてブルー寮に戻ろうとあちこち頭を下げて回ってるらしいし、翔にも今年はブルー寮昇格試験を受けさ

せるとか何とかいう話が持ち上がったり消えたりしている。好むか好まざるかに関わらず、そんな風に世界は今日も動き続けてるのだろう。ユーノにも意見を聞きたいけれど、あいにく彼にはあの日以来まだ1度も会えていない。

「ったく、このボロ家はこんなに広かったかね」

何となく取り残されたような気分になって、仕方なく1人になったレッド寮で洗い物を始める。だけどこの取り残された気分というのも、半分はつい最近判明したあることが原因なのだろう。

つい先日行われた、進級に合わせての健康診断。皆が皆程度の差こそあれ背も伸び雰囲気も大人びていく中、僕だけは去年から1ミリ、1グラムたりとも変わっていない。いや、この表現だと語弊がある。もっと正確に言うと、僕だけ入学した時から肉体的には何一つ変化していないのだ。

とはいえ、これに関しては全くの原因不明というわけではない。先代ダークシグナーが全員早死にしたとの理由でチャクチャルさんもイマイチ自信なさげだったけれど、どうも1度僕の命が尽きて、直後にダークシグナーとなって甦った2年前のあの瞬間。あそこを境目として僕の老化、というより成長は完全にストップしたらしいのだ。髪や爪なんかは普通に伸びるから代謝が完全にストップしたわけではないみたいだけど、少なくとも成長期にふさわしいほどの変化は来ない。だから僕はもう皆と一緒に年を取っ

ていくことはできないし、それは黙っていたって遅かれ早かればれることだろう。

『マスター』

その声に込められたすまなさそうな様子を察知して、謝罪の言葉が飛んでくる前に先手を打つ。

「いいよ、チャクチャルさんが謝らなくても。この話は何回かしなかったっけ？僕は生き返ったことを後悔なんてしてないし、あそこで終わるはずだった僕の人生にもう1回チャンスをくれたチャクチャルさんには本当に感謝してるんだから。それにほら、本当に目立ってどうしようもなくなったら山にでもこもって仙人の真似事でもやってみるさ」

できる限り元気に明るく言ったつもりだったが、チャクチャルさんのことは誤魔化せなかったらしい。いや、どうやらチャクチャルさんだけではなかったようだ。ふと見渡せば食堂の中は僕のデッキからいつの間にか出てきていた精霊でいっぱいになっていて、その不安げにこっちを見てくる様子に思わず笑いがこぼれる。

「ふふっ、ありがとう。皆、これからもよろしく頼むよ」

代表として、とりあえず一番手近なところにいたサッカーの頭をよしよしと撫でる。先延ばしといえばそれまでだけど、今心配することでもない。少なくとも今は、こうやって精霊や友人と一緒に日々を過ごせることを喜ぼう。

ちょうどその時、チャイムの鳴る音がした。そして、このボロ屋には似つかない少女の声。

「すみませーん。ボク、じゃなくて私、今日からここにお世話になるんですけど。十代様はいらっしゃいます？」

「……ああ、ハイハーイ。今出ますよー」

聞きなれない言葉に一瞬思考がフリーズするも、すぐに気を取り直してインターホンなんて洒落たものはついてないドアに向かう。その前に立っていたのは、見た感じ翔とどっこいどっこいか下手するとそれより一回り下ぐらいの妙に小さい、とても高１には見えないような女の子。

「えっと、どちら様ですか？それと遊城十代ならついさっき、洗い物もせずにどっか行きましたよ」

何者かわからないので、とりあえず敬語。すると、どこか慌てたように彼女も頭を下げた。

「あ、こんにちは！ボクは早乙女レイ。本当はまだ無理なんだけど、この間のジェネックスで準優勝したのが認められて飛び級でこのアカデミア高等部に入学したんだ。それで、今の話本当!?そんな～、せっかく大急ぎで走ってきたのに、十代様いらっしゃらないのー!?」

「えっと……まあなに、とりあえず入ってよ。立ち話もなんだし、僕も今一つ話が見えてこないし」
「それじゃ遠慮なく。えっと……」
「ああ、僕はオシリスレッド3年の遊野清明。よろしく」
しかし驚いた、もうオシリスレッドの新入生は僕らの代で終わりだとばっかり思ってたのに。それにこの子やけに十代に心酔してるみたいだけど、このレイちゃんと十代の間には一体何があったんだろう。昼ご飯も終わったばかりだけど、せっかくだから少し早めのティータイムとでも洒落込みながら聞かせてもらうとしようかな。洗い物の前に緑茶でも飲もうかと思って火にかけてあったやかんを横目で見ながら、急遽お茶の葉を紅茶に取り換える。
退屈でのんびりした時間になると思ったけど、楽しい話ができそうな午後になりそうだ。

その2：河風夢想の場合

その日彼女は、特にすることもなく暇だったので散歩に出ることにした。すっきりと晴れた気持ちのいい昼下がりの空の下、特に意味もなく彼女の思考は修学旅行の日のこ

とに向かう。

「貴方は今、何を考えてるのかな、ってさ。清明……」

あの日、自由行動の時間でわざわざ付き合わせた隣町での墓参り。そこで教えた、彼だけには知って欲しいと思った昔の話。いまだに、彼女のこの語尾は取れない。それはつまり、いまだに彼女自身は１０年以上前の事故のショックを引きずっていて喋ることができないということだ。ふと思い立って口を開き、深く息を吸い込んで自分１人の力で言葉を話そうとしてみる。だが、

「あ……あぁ……ああ……はぁ、だって」

いくら神経を集中させても、喉に何かがつかえているかのように声とは呼べない程度の音しか出てこない。まだ今日も、彼女のショックは癒えていないようだ。そして今の自分に変わってこの口を動かしている「何か」も、その正体も目的もいまだ一切が不明のままだ。このままずるずると今の生活を続けていてはいけない。いつまでも怪しい力に頼るのではなく、自分の声を取り戻す必要がある。それはわかっているのだが、かといってそのあてはない。むしろ下手なことをすると、この力すら彼女から抜けてしまうかもしれない。その恐怖感が、１日また１日と問題を先延ばしにしている。

「無双の女王、なんて私には過ぎた名前なんだけどなぁ、なんだって」

自嘲気味に漏らしたところで、いつの間にか見知った場所に来ていたことに気が付い

た。そこはオベリスクブルー男子寮……ついこの間までホワイト寮と呼称され、わざわざ白塗りにされていた建物をまた青く塗り直す作業の真っ最中である。同級生にして友人の明日香も今日はここを見に来ると言っていたのを朝食の席で聞いたのを思い出し、きょろきょろと辺りを見回して彼女の姿を探す。

「ん、明日香。やっほー、ってさ」

一瞬自分の名を呼ばれたことに当惑気味の表情で振り返る明日香だったが、すぐに声の主を認めて笑顔を見せる。

「あら、夢想。貴女もこれを見に来たのかしら?」

「まあね、って。こっちはどんな調子なの?だってさ」

漠然と青いペンキを塗りたくっている最中のブルー寮を指さす。といっても、作業の状況からいってまだまだ終わりそうもないことは目に見えているのだが。それでも律儀に何か答えようとした明日香だったがその言葉は結局、横から聞こえてきたより大きな声にかき消された。

「おお、天上院君!どうしたんだい、こんなところまで?」

どこか嬉しそうな態度をにじませた声の主は、どこからか持ってきたらしい工事現場用の警棒を振り回して周りの連中に指図する万丈目だ。ただ夢想が見ている限り、少なくとも今は自分も色塗りを手伝おうというつもりはないらしい。そしてこういう場合、

よりあけすけに尋ねることができるのが明日香である。
「万丈目君、貴方はペンキ塗りを手伝わないのかしら？私もそうだけど、貴方にもこの白塗りの責任の一部はあるんじゃないかしら」
「う……いや、俺はジェネックス優勝者だからな。これが勝者の特権というものだ」
「別に疑うつもりはないけれど、一体いつの間に優勝できるだけ集めていたのかしらね。あ、そこは危ないわよ！」
「何？ぶあっ!?」
　目の前に広がっているであろう悲惨な光景をさすがに直視していられなくなり、そこまで聞いたあたりで視線をつっとそらす夢想。計ったように落ちてきたバケツ一杯もの青ペンキを頭からかぶった万丈目がぷりぷりと怒りながらレッド寮の方へ歩き出したときも、最後までそちらの方は見ないでおいてあげた。それがプライドの高い彼に対する優しさだと判断したのだ。
「まったく、自分からオベリスクブルーに戻りたいって言い出したのに……大丈夫かしら？」
「うーん、よっぽど大丈夫だと思うけどね、ってさ。あ、でもせっかくだし私もレッド寮には行こうかな、なんだって。今の時間なら、清明ならお茶菓子も出してくれると思うし。明日香もどう、一緒に来る？って」

せっかくなら自分1人よりも、人数が多い方がいいだろう。とはいえ何かと忙しい彼女のことだからあまり期待はしていなかったが、意外にもあっさり頷いた。
「そうね。迷惑じゃなければ、たまには私も行ってみようかしら。十代のN（ネオスペーシアン）も清明君のグレイドルも、まだ話にしか聞いたことがないからデュエリストとして興味あるし」
「そう。それじゃあ出発しようか、ってさ」
「アポは取らなくていいの？」
「今日みたいな日は清明も退屈してるか、何か面白いことしてるかのどっちかだからね。退屈してるならいきなり行って驚かせる方がいいし、面白いことしてるなら清明だって連絡どころじゃないだろうからそのまま私達も混ざらないと、だってさ」
その冷静に考えればだいぶ無茶苦茶な理論の台詞の裏から『清明のところへ行けば何かがある』という全面的な彼への信頼を読み取り、思わず苦笑する明日香。そんなこととはつゆ知らず、さっきまでよりも機嫌良さそうに小さな声で聞いたことのないような歌をハミングしながら彼女は歩き出すのだった。

その３：葵・クラディーの場合

その日、彼女は深刻に悩んでいた。端正な顔にしわを寄せ、迷惑さと真剣さが入り混じったような表情のままかれこれ5時間はその原因……机に広げられた、1枚の手紙とにらめっこしていたのだ。

やがて何かを決心したかのようにペンを取り出し、筆筒からハガキを1枚取り出しておもむろに何かをさらさらと書きだす。しかしその手は途中で止まり、結局途中まで書いたハガキはビリビリに破かれてゴミ箱に放りこまれてしまった。

再び椅子に腰かけて背もたれにたっぷりともたれかかり、ペンを耳にはさんで苦悩する姿は絵になると言えなくもなかったが、当の本人は大真面目である。

「仕方がないですかね。1人でずっと唸っていても」

独り言というよりむしろ自分自身に言い聞かせるように喋りながら、その手紙を制服のポケットになるべく折り目が真っ直ぐになるよう畳んで入れる。

「そうですよね、きっと。日頃から私も先輩には迷惑かけられてますし、たまには相談の1つぐらい乗ってもらったって……罰は……当たりません、よね……？」

光の結社に入って以降ついこの間までその清明に迷惑をかけっぱなしだったことを思い出し、せっかくの独り言もどんどん尻すぼみになっていく。決して小心者というわけではないのだが、根はかなり真面目な彼女にとって清明の店でのバイトをすっぽかして光の結社にかかりっきりになっていたことや、単純にあの一連の事件で清明の手助け

が一切できなかったことはかなりの負い目になっているのだ。
だからつい先日も罪滅ぼしの一環として、彼の受けた臨時試験の問題とその回答からある程度弱いパターンを後輩なりに割り出して軽くレクチャーするぐらいのことはしようと思ったのだが、結局それも真剣に彼の成績表を見た結果諦めてしまった。なにせ苦手分野どころか、得意分野らしき箇所がロクにあったものじゃないのだ。国数理社英プラスデュエル学のいわゆる6角形グラフも形自体はバランスが取れているのだが、あからさまにその面積が小さすぎる。オールラウンダーなどというものではなく、ただ単に全方位が弱点になっているだけだ。そのあまりのバカバカしさにさすがの彼女も、先輩は実物のカード触るデュエルじゃないと頭の回転が極端に悪くなりますね、としみじみ言うのがやっとだったほどである。
そんな出来事を思い出し、また洗脳が解けた自分を何ひとつ咎めることなくいつもの調子で『ＹＯＵ　ＫＮＯＷ』に迎え入れた彼の顔を思い出しては罪悪感が湧いてくる。その上さらに借りを重ねるような真似は図々しいだけか。そう思うも、かといって他にこの手紙の内容を相談できるような相手もいない。なにせ内容もさることながら送りつけた相手も相手なので、下手な相手に相談するとその人にまで迷惑がかかりかねないのだ。そこまで考えたところで、ふとあることに気が付いた。
「結局私も、先輩なら何とかなるって思ってるんですかね。河風先輩の癖が移っちゃい

ましたか」

そう考えるとなんとなく可笑しくなり、ついつい口元がほころぶ。思えば日本最大級のデュエルモンスターズ専門校、さらに全寮制というところに魅力を感じて入学する前は、まさかあんな良くも悪くも常識人の皮を被った変人が日本の高校にいるとは思ってもみなかった。

「先輩からすればいい迷惑でしょうけど、今回も頼らせてもらいますよ」

結局自分1人で考えるのは諦めて、ひょいと立ちあがった。今日は朝から頭を使いすぎたので、少々疲れました。おそらく今日も作っているであろう先輩の作ったお菓子でもかじりながら、どうせ今日もティータイムとか何とか言って淹れているであろう紅茶なり緑茶なりを飲んで休憩させてもらいますか。それが終わったらこの手紙を先輩に見せて、どうしたらいいのか考えましょう。

……甘えさせてもらってばっかりですね、私。この貸しも含めていずれどこかで返しますよ、先輩。

その４：稲石さんの場合

一方その頃、廃寮では。地縛霊の仮名稲石が、ファラオ相手に庭からむしってきた猫

じゃらしをふよふよと振り回しで遊んでいた。
「ほーれほーれ、こっちこっちー」
クルクルと動く猫じゃらしを追って右へ左へ走り回るファラオだったが、突然その動きが止まった。何かを嗅ぎ付けたかのように、床に開いた穴や壁にかかる蜘蛛の巣を器用に避けながらとてとてと走ってゆく。
「おーいファラオ、そっちは危ないよー?」
『置いてかないでほしいのニャ〜』
たまたま外に出ていた大徳寺先生の魂も取り残されたかたちになってしまい、慌てて2人でその後を追う。ようやく追いついた時にはファラオは1枚の扉の前にいて、中に入りたがっているかのようにほこりまみれのそれを爪で何度も引っ掻いていた。
『稲石君、この扉はどこに繋がっているんですニャ?』
「えーっと、確か来客用の部屋だったかな? 懐かしいなー、最近来てなかったけど自分が霊になって最初に目が覚めたのがここなんだよね」
『ふーん。ファラオ、何を見つけたんですかニャ?』
「さて、あの部屋には特に何もしまってなかったはずなんだけどね、っと」
そう言いながらぱちんと指を鳴らすと、ポルターガイスト現象が発生してひとりでに古ぼけた扉が開く。霊体ならではの特技をフルに生かした技である。

「御開帳～……あれ？」
開いた扉の中にファラオが飛び込んでいくのと、幽霊２人の目が部屋の中心に落ちた１枚のカードを見つけたのはほぼ同時だった。
「おっかしいなあ、こんなところにカードがあったんならすぐ気づけそうなものだけど」
『一体何のカードなんですかニャ』
そのカードは裏返しになっているためここからではイラストが見えないが、積もった埃の量からいっても数年間誰からも触れられていない、恐らくは数年前の事故の際この寮に住んでいた生徒辺りが落としていったのだろう。
「落とされっぱなしじゃカードが泣くね。どれどれ？」
そういって拾い上げ、ひっくり返して表向きにする。
『もしかしたら、このカードがファラオをこの場所に呼んだのかもしれないですニャ』
大徳寺先生も近寄ってきて、そのカードを覗き込む。
「ドラゴン族・封印の壺……？」
かのペガサス・Ｊ・クロフォード氏が一時期愛用して、かの青眼（ブルーアイズ）の白龍（ホワイト・ドラゴン）をもその壺の中に完全に封印してその後の勝利への布石となった恐るべきカード、だったのも今は昔。その後のデュエルモンスターズのパワーインフレに完全に取り残され、正直なところ今となっては所有するプレイヤーは多くてもなかなかデッキに入ることはなく

なってしまったカードである。
『これはまた、珍しいものが落ちてますのニャ』
「うん……」
確かにそれ自体、何の変哲もないただの永続トラップに過ぎない。だけどなぜか、稲石さんにはそれがひどく気にかかったようだ。すっかり部屋の中に興味を無くしたファラオが大徳寺先生の魂を飲み込んでふらりと出て行っても、まだしばらくの間身動き一つせずに壺のカードをじっと眺めていた。一体なぜ、このカードがこんなにも気になるのだろう。自問するが、どこからも答えは帰ってこなかった。

その５：遊野清明の場合（その２）
「……それで、ボクはもうピーンときたの！間違いない、十代様こそが運命の人なんだって！」
「ふんふん」
レッド寮にて。あれからレイちゃんを中に入れて紅茶とクッキーを出したところ、大喜びでパクパクと食べてくれた。やっぱり自分の作ったもので喜んでくれるのは嬉しいもんだ。その後で少し水を向けてみたところ、本人も誰かに話したかったらしくあっ

さりと2年前に何があったのかを喋りだしてくれた。こういういかにも元気溌剌、なタイプの女の子はアカデミアではなかなか貴重な存在だから、話をしててもけっこう面白い。感情表現も豊かだし。夢想といい葵ちゃんといい、ここまで自分の感情をあけすけにしてくれることはめったにないからねえ。もっともそれはそれで、いざ感情的な面を見せてくれた時のギャップがグッとくるのは間違いないんだけど……っと、話がずれた。

「なるほど。それで、ジェネックスに準優勝して飛び級入学だっけ？なんていうか、凄いね」

「ふふん。当然よ、恋する乙女は強いんだから！」

自信満々に胸を張る彼女のカップに紅茶のおかわりを注ぎ、改めて十代の顔を思い浮かべる。あの朴念仁の十代が、この子の想いに気づいてるなんてことがあるだろうか。レイちゃんには悪いけど、まず無いだろうな。良くも悪くもデュエル馬鹿だし。

でも、この子のそこまでやる一途さは割と気に入った。

「なるほどね、なかなか洒落た答えじゃない？道のりは厳しいだろうけど、僕は応援してるよ。多分十代もそろそろおやつ食べに帰ってくると思うから、とりあえずそれまでのんびりしててよ」

「本当？！」

十代の名前を出しただけで一気に食いついてくるレイちゃんを落ち着かせていると、いきなりドアが開いた。ちょうど僕の位置からはその人物が見えるけど、背を向けて僕と向かい合うレイちゃんからは振り返らないと見えない位置だ。
「まさか、十代様？」
「んー、いや……」
満面の笑みを浮かべて振り返る前に慌てて髪を撫でつけるレイちゃんに、ああこれはちょっと荒れそうだなあ、と内心ため息をつく。案の定その真っ黒な、なぜかペンキまみれの服に身を包んだ彼がずかずかと上り込んでくる。
「よう、清明。今日からこの万丈目サンダーがまたこの寮で世話になることにしたぞ。俺の部屋はいじってないだろうな？」
「ああ、そりゃまあ……」
「えー!?ちょっと、十代様じゃないのー!?」
「む、なんだこの女は。この万丈目サンダー様より十代なんかの方がいいだと？……ってよく見たらお前、ジェネックス決勝の時の女じゃないか」
「ああ、あの時の？そんなのどうでもいいわよ、恋する乙女の気持ちを踏みにじった罪は重いんだからね、このペンキ男！」
案の定ギャーギャーと口喧嘩を始める気の強い２人を、一体どうなだめるべきか考え

る。唯一救いなのは、そのペンキがあらかた乾いているせいで床や机が汚れずに済むということだろう。というか、万一そんな状態で入ってきたりなんかしたら間違いなくその場で僕が崖下の海に蹴り落としている。
「とりあえず万丈目、風呂入ってきたら？どうせ洗濯するの僕なんだからさ」
「む、それもそうだな。今日のところはこれぐらいにしておいてやるが、清明の奴に感謝することだな」
「べーっだ。ペンキまみれの癖にー」
　どうにか嵐が去った、と思ったらまたドアの向こうに人の気配。ただ今回はいきなり開くのではなく、ちゃんとその前にノックがあった。
「やっほー、清明。今いる？ってさ」
「こんにちは。あら、貴方とレイちゃんだけ？十代はいないのかしら？」
「いらっしゃい、夢想に明日香。たいした家じゃないけど、まあ上がってよ」
　どうやら、今日はよっぽど来客が多いようだ。２人を招き入れて扉を閉めるか閉めないかのうちに、またもや見知った顔がひょっこり姿を見せたのだ。
「葵ちゃん、こっちに来るなんて珍しいね」
「ええ、先輩。この葵・クラディー、本日はこれ以上先輩にご迷惑をかけるという恥を忍んでやってきました」

「……？」
「お願いします、先輩。話を聞くだけでいいですから、ご相談に乗っていただけないでしょうか」
　いつになく申し訳なさそうな調子の葵ちゃんに、これはただ事ではない臭いを嗅ぎ付ける。せっかく僕を頼ってきてくれたんだ、葵ちゃんのことだから勉強の話でもないだろうしじっくり相談に乗ってあげよう。
「えっと、今はちょっとお客さん多いけど……」
「そうですか？まあ、別に他人様にどうしても知られたくないよう話ではないですから。というよりも、完全に私事に先輩のお時間を割いてもらうだけですのでなんでも構いません」
「そう？よくわかんないけど、僕で良ければいくらでも力になるよ。じゃあ上がって」
　葵ちゃんを中に入れ、今から何の話が始まるのかはわからないけど本人の様子を見て気合を入れ直す。するとそこに、今度はこのレッド寮でも聞き覚えのある声が近づいてきた。
「悪い悪い、急に飛び出しちまってよ。たっだいまー！」
「もう、いっつもアニキはそうなんだから」
「丸藤先輩の言う通りだドン。いきなり独り言喋りながらどこか行っちゃうから、一体

何事かと思ったザウルス」
「お帰り、３人とも」
　本当に、今日は人の多い日だ。人が多くて賑やかなのは嫌いじゃないけどね。するとそこに異議を唱えるような風ににゃーと鳴きながら、山の方から１匹の猫が降りてきた。
「ファラオも入れて３人と１匹、って？いや、大徳寺先生も入れると４人と１匹か。まあとにかく、お帰り」
　ここまでこのレッド寮に人が集まったんだ、きっと今日はこの後もまだ何か一波乱起きる……そんな気がした。こうやって平和だけど退屈な日にだって、突然何かが起こることがある。だからこそ、この世界はこんなにも面白いんだ。だからこれまでがそうだったように、これからもこの第２の人生を思いっきり楽しもう。例えこの先、何が待ち受けているとしても。
　とりあえず、まずは葵ちゃんの悩み解決と洒落込もうかね。お茶っ葉とクッキーの残量をざっと思い出して、この人数でのティータイムにはどれぐらいの量を出せばいいのかを計算しながら、そっとドアを閉めた。

ターン73　変幻忍者と黄昏の隠密

「さて、と。じゃあ聞かせてよ、何やらかしたのさ一体」
「やらかした、って……先輩じゃないんですから。まず、これを見てください」
　レッド寮食堂、食卓机にて。なぜかどんどん人が集まってきたこのボロ家で、葵ちゃんが丁寧に折りたたまれた1枚の紙を広げた。もっとよく見ようと、部屋の中にいる全員の視線が一斉にその紙に集中する。まったく、元はといえば相談されてるのは僕なのに。皆デリカシーがないというか、野次馬根性旺盛というか。
『でも立場が違うならマスターも同じことするんだろう？』
「(うん。だから何も言わないの)」
　まあそれはどうでもいい。いま大事なのは、アカデミアの民度の問題ではない。その手紙はなかなかの達筆だった。字が若干丸みを帯びているところを見ると、差出人は女性らしい。少なくともレッド寮だけ見ている限り、男にこんな字は書けんよ。
「んーと？『お久しぶりです、マイシスター。あなた入学してから年に一回は実家に顔出すって言いましたよね？いつまで経っても手紙の一枚も送ってくれないので、お姉ちゃんもう辛抱たまらなくなってしまいました。いつの間にか可愛い男の子とも仲良く

なっているみたいだし、そこの話も含めてまた今度、なんてのんびりしたことは言わずに今日会いましょう。この学校の灯台あたりが目印には良さそうなので、場所はそこ。時間は黄昏時、風邪ひかないように格好には気を付けて来てね。お姉ちゃん待ってまーす』」

「私の身内の恥、何も音読することはないじゃないですか先輩……」

「うん、今のはちょっとデリカシーなかったかな、ってさ」

「え、僕が悪いの？」

　穴があったら入りたい、といった顔の葵ちゃんと呆れ顔の夢想にたしなめられ、なんだかこっちが悪いことをやらかしたような気になってくる。助け舟を出してくれたのは、葵ちゃんとは同学年なこともあって割と話す機会もある剣山だった。

「それにしても、お姉さんなんかいたんだドン？」

「ええ。認めたくはないですが」

　そのあたりで室内の視線が僕の方へ向いたのを感じ、何か聞かれる前に先手を打って答える。

「僕も初耳だね。別に隠すようなことでもないだろうに」

「なんでこの身内の恥をわざわざこんなところに来てまで拡散しなくちゃいけないんですか。あの人のノリは私が生まれて１６年間というもの１度たりとも馴染めなかった

んですよ……」
「あー、確かにこんな感じの軽いタイプ苦手そうだもんね、葵ちゃん」
「どちらかというと、この人がトラウマになってるんですがね。とんでもない天才タイプで、何やらせても私を軽く上回るところがまた」
　これは面白い話だ。僕のレシピを片っ端から吸収する手際といい成績の高さといいデュエリストとしてもかなり上位な、まさにくの一と呼ぶべき身体能力といい、ぶっちゃけ葵ちゃんはとんでもなくスペックが高い。その葵ちゃんを軽く越すレベルが姉にいるとなると、確かにそれはトラウマにもなるだろう。
　するとそこで、手紙をじっくり見ていた明日香があることに気づいた。
「あら？でもこの手紙、今日来なさいって書いてあるけど。書いてから届くまで、何日か間があったはずよね。そこは大丈夫なのかしら？」
　そういえばそうだ。デュエルアカデミアは孤島にあるから、基本的に本土の方で出した手紙なんかは半月に一度ぐらいのペースでしか回ってこない。リアルタイムで連絡がしたければ、それこそ電話の1つでもかければいいだけだし。
「逆に聞きますが天上院先輩、この手紙はどこから受け取ったものだと思いますか？」
「え？そういえば、まだ手紙が届く日には3日ぐらい……」
「今朝私が起きた時、扉の内側に矢文が突き刺さってたんですよ。間違いなくあの人、も

うこの島に来てます。まさかこの私が完全に寝首をかかれるとは思いもよりませんでしたが、あの人ならそれぐらいのことやりかねません」

「矢文って、そらまた古典的な」

「そういう家系ですから。それで先輩、どうしたらいいでしょう？私、本当あの人苦手なんですよ……」

誰が相手でも常に同じような態度で接して個人的な好悪はあまり表に出さない葵ちゃんが、身内というのも多少はあるだろうとはいえここまで苦手意識をむき出しにするような人がいるとはねえ。

でも、これまでの話を聞いて本人の態度を見ているうちに、なんとなく見えてきたことが１つある。要するに彼女は、今誰かに背中を押してもらいたがっているのだ。多分放っておいても葵ちゃんなら、最終的にはその姉とやらのところに時間通りに向かうだろう。それでもやっぱり気は進まないところを、せめてその踏ん切りだけでもつけてもらいたい。本人も恐らく気づいてないだろうけど、心の奥底にある理由をまとめると大体そんなところだろう。

相手がそこらの野郎だったら知らんの一言で叩きだしてもおかしくないことではあるけれど、相手は僕の弟子で、後輩で、そんでもって大切な友人だ。普段から葵ちゃんには世話になりっぱなしだし、できる限り力になってあげたいところというのもある。

ここはその役目、引き受けるとしよう。
「なるほどねえ。でも、昔はどうあれ今の葵ちゃんなら大丈夫だと思うよ」
「……そうですかね」
「そりゃそうさ。それに、相手にここまで好き放題やらせておいて逃げ出すなんて葵ちゃんらしくないね。どうやったか知らないけどこの島に上り込んでおいて、うちの店に買い物1つ来ないってところも気に食わないし」
「……」
　途中から冗談めかして言ってみるも、彼女から期待したような反応はない。ふーむ、いつもなら毒舌の1つでも飛んでくるタイミングなんだけど。
「なんだったら、僕が途中までついてこっか？ここまで葵ちゃんが苦手な人なんて、個人的にもちょっと見てみたい気もするし」
「ぜひお願いします」
「嘘っ!?」
　絶対断ると踏んでたら、まさかの即答だった。しかもかなり真剣な目だし、いまさらやっぱ無しとは言えんぞこれ。でも他人の家の家庭の事情にはなるべく首突っ込みたくないなあ、この世のあらゆる難しいことは、僕にとっては専門外だし。誰か救いの手でも差し伸べてくれないかと皆を見渡すが、皆すっかり送り出しムードになっている。

「行ってらっしゃい清明、ってさ。風邪ひかないでね？」
「あ、はい」
　天使のような笑顔を見せる夢想だけが癒しだった。
「夕飯には間に合うようにな。まさかこの万丈目サンダーに炊事をやれなんて馬鹿げたことは、お前なら言わんよな？」
『万丈目のアニキ、この間目玉焼き作ろうとしてフライパン１つ駄目にしたばっかじゃないの～』
「イエロー、その話後で詳しく。万丈目、帰ってきたらお話しよっか」
「こ、この馬鹿！あれだけ清明の前では黙っておけと念を押しただろう！」
『痛い痛い痛い、ごめんなさいアニキー!!』
　いや、別に正直に言いさえすれば怒るつもりはなかったんだけども。ただ隠し通そうっていうその根性が気に食わんだけで。誰がやったのかわからないのと自首してくるかもしれなかったからしばらく見ないふりしてあげてたけど、なるほど万丈目だったのか。

「どう？ちょっとは落ち着いてきた？」

「……ええ」

日も沈みかかった黄昏時、隣を歩く葵ちゃんに話しかける。相変わらず険しい顔に沈んだ声だけど、ついさっきレッド寮に来た時よりは幾分マシな顔つきになってきている。ここまで来れば、後は本当に本人の覚悟の問題だろう。

「さてと……あれ、まだ来てないのか。わざわざ時間と場所まで指定しておいて……」

そうこうしているうちに、灯台前についた。時計を見ると5時15分前、まあ及第点ということだろう。絶対気圧されるわけにはいかない相手に会うときに、可能な限り相手より先に待ち合わせ場所に行くのは僕の経験上かなり有用な手だ。地の利を得ることができるだけで、不思議なほど安心感がある。相手もあの葵ちゃんが全力で嫌がるほどの人だからそれぐらい抑えているかと思ったけど、さすがに考えすぎだったかもしれない。

「先輩、後ろです！」

『マスター、前方1メートル向けジャンプ！』

ほとんど同時に聞こえてきた葵ちゃんとチャクチャルさんの声に従い、考えるよりも先に勢いよく体を前に飛ばす。着地して体勢を整え、慌てて何が起きたのかと今いた場所を振り返った。

「もー、せっかくびっくりさせようと思ったのにー。初めまして、葵ちゃんから話は聞い

ているかしら？いつも妹がお世話になってまーす、明菜・クラディーですっ！」

そこにいたのは、黒髪の葵ちゃんとは対照的にまじりっけなしの銀髪美人なお姉さん。でもやっぱり姉妹だからか、その顔立ちはどこか葵ちゃんに似通ったところがある。それにしてもこの人、この見晴らしのいい灯台でどうやって僕や葵ちゃんだけでなくチャクチャルさんの感覚まで誤魔化してこの距離まで近づいてきたんだ……？なるほど、確かに並の人じゃあなさそうだ。

「は、初めまして。デュエルアカデミアオシリスレッド３年兼洋菓子店『ＹＯＵ　ＫＮＯＷ』代表、遊野清明です。こちらこそ、いつも妹さんには迷惑かけて」

「いいのいいの、そんなにかしこまらなくって。清明君っていうのね、私のことは明菜って呼べばいいからねっ！」

親しげに話しかけてきた明菜さんが、次いで葵ちゃんに向き直る。と思ったら、目にも止まらぬ動きでそのまま彼女に抱き着いていた。一瞬の間の後、ドン引きする葵ちゃんをよそに怒涛の勢いで一気にまくしたてる。

「もーっ！葵ちゃん、どーーして入学してからお姉ちゃんに手紙の１枚も電話の１本もくれないのよ！お姉ちゃんこの１年というもの毎日毎日１日６回４時間ごとにポストを確認して、それから電話会社にも葵ちゃんから電話が来てないか問い合わせてずーっと待ってたんだからっ！なのに葵ちゃんったらいつまで経っても何ひとつしてきてく

れないし、ずっとずっと寂しかったのに――！うわああーん！」
「あー、ハイハイ」
おいおいと葵ちゃんの胸に顔をうずめて泣き出す明菜さんの頭を仏頂面で雑にポンポンと叩きながら、だから言ったでしょう、先輩？とでも言いたげな目でこちらを見てくる葵ちゃん。なるほど、僕は一人っ子だから兄弟姉妹のいる生活は想像するしかないけど、こんだけシスコンな姉が毎日そばにいるとそりゃあトラウマにもなるだろう。実はちょっとだけ羨ましい気もするけど。
「それで、姉上。わざわざこんなところにまで何しに来たんですか？いくら暇人で社会不適合者な姉上でも、用もないのに来るわけないと思うんですが」
「うー……清明くーん、葵ちゃんがお姉ちゃんの記憶の中の可愛い天使なあの時のあの子より毒舌がパワーアップしてるよー！」
「え!?えーと、その……葵ちゃん、一応身内ならもうちょい大事に扱ってあげても……」
「いやです」
「うわーん！」
ここまでばっさり切り捨てるあたり、本当に普段からこの姉妹はこうだったのだろう。事実明菜さんもある程度騒いで満足したのかすぐに気を取り直し、身軽な動きで葵ちゃんから体を離した。と思ったら、次の瞬間とんでもない爆弾を落としてくれた。

「くすん。そんな冷たい葵ちゃんも可愛いけど、残念ながらただただ愛でに来たわけじゃないの。率直に聞くけど葵ちゃん、家に帰ってくる気はない？」
「……は？」
　たっぷり5秒ほど空いただろうか。さすがに説明不足を感じたらしく、ため息とともに明菜さんがより詳しく語りだす。
「もちろん退学して、なんて頼むつもりはないわよー。でも葵ちゃんがいつまで経っても連絡1つしてこないから、お父さんもお母さんも私の次ぐらいに心配してるんだからっ。だから1回でいいから、皆にその元気な可愛い顔を見せてあげてほしいなーってお姉ちゃんは思います」
　もう入学して1年が経つというのに、いまだに葵ちゃんは自身の家庭のことを僕相手にすら録に話してくれない。お互い様といえばそれまでだし、だからこそ僕も深く立ち入ろうとは思わなかったわけだけど。だけどこの話を聞く限り、葵ちゃんは僕と違って両親と一緒に過ごして育ってきたみたいだ。
「そう、ですか……でも私は、約束しましたから。卒業して、プロになるまで、2度とこの家の敷居はまたぎません、と。だから、いくらそう言われましても」
「もー、葵ちゃんのいけず。でもそう言うだろうと思った。葵ちゃん、真面目なところは昔っから全然変わってないのね。どうせこのまま私が何言っても聞くわけないだろう

から、実力行使させてもらうからね」
　そう言ってどこからともなく明菜さんが取り出したのは、なんとデュエルディスク。あれ結構かさばるのに、一体どこにしまってあったんだろう。
「もしデュエルモンスターズに関してはあなたより経験が浅い私が勝つようなことがあれば、葵ちゃんにプロは向いていないってこと。本当に不退転の覚悟で家を出たのなら、この1年で私1人ぐらい軽く倒せるぐらいには成長してないとね。その覚悟を私に見せてごらん？」
「やるしかない、ですかね。姉上、後悔しても知りませんよ……！」
　灯台下の空気が、異様な緊張をはらむ。ちょうど太陽の最後のひとかけらが水平線の向こうへ消えた瞬間、最高潮まで高まった緊張が解き放たれた。
「「デュエル！」」
　先攻を取ったのは葵ちゃん。だけど、その様子が明らかにおかしい。いつもの冷静な態度は鳴りを潜めて妙に落ち着きがないというかなんというか、まるでこの場から逃げ出したくてたまらないかのような焦りすら感じる。
「私のターン、ドロー！私のフィールドにモンスターが存在しないことでフォトン・スラッシャーを特殊召喚します！さらに忍者マスター　ＨＡＮＺＯ（ハンゾー）を召喚し、召喚時効果を発動！デッキから忍法カード1枚、超変化の術をサーチしてさらに装備魔法、風魔手

裏剣をＨＡＮＺＯに装備！攻撃力を７００ポイントアップ……攻撃力２０００以上のモンスター２体をリリースし、手札のこのカードは特殊召喚できます！出でませ、葵流忍法最大のしもべ！銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）！」

フォトン・スラッシャー　攻２１００

忍者マスター　ＨＡＮＺＯ　攻１８００→２７００

銀河眼の光子竜　攻３０００

「さらに風魔手裏剣が墓地に送られたことにより、効果発動！相手プレイヤーに７００ポイントのダメージを与えます！」

明菜　ＬＰ４０００→３３００

「カードを１枚セット。私はこれで、ターンエンドです」

今の葵ちゃんはやっぱりおかしい。超変化の術は自身の忍者と相手モンスターを素材としてそのレベル合計以下のモンスターをデッキから呼び出すカードであり、どう考えても今の局面はＨＡＮＺＯを残しておいて相手の動きを牽制すべき場面のはずだ。それにそもそも攻撃力２７００と２１００のモンスターを出すことに成功したのならば、倒せない敵がいるわけでもないのだからその２体をそのまま残しておく方がよほど安全だろう。

「葵ちゃん、いったん落ち着いて！」

「うるさいから黙っててください、先輩！なんとしても、なんとしてでも私は姉上に勝ちます！」

めったに見せない葵ちゃんらしからぬ剣幕に一瞬たじろぐ。そんな様子を見て、明菜さんも困ったかのように眉をひそめた。

「もー、葵ちゃんったら。せっかく心配してくれてるのに、そんなこと言うもんじゃないわよ？私のターンはまず永続魔法発動、星邪の神喰！それから魔法カード、トレード・インを発動。手札からレベル８モンスター、黄昏の忍者将軍―ゲツガを捨てて２枚のカードをドローッ！」

「初手からいきなり手札交換？」

「どう思うかな、清明君？私はカードを２枚伏せて、さらにカードカー・Ｄを召喚。このカードをリリースしてデッキからカードを２枚ドローして、強制的にエンドフェイズに移行してターンエンド」

意外にもそのまま何もしかけてこず、ターンを終える明菜さん。だけどあの笑い方は、かれこれ１年も葵ちゃんをそばで見てきた僕にはわかる。何か仕掛けてる時の葵ちゃんそっくりなんだもん。

葵　ＬＰ４０００　手札：１

モンスター：銀河眼の光子竜（攻）

魔法・罠：１（伏せ）
明菜　ＬＰ３３００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：星邪の神喰
２（伏せ）

「私のターン、ドロー！レスキューラビットを召喚し、効果を発動。エンドフェイズに破壊される代わりに、デッキからレベル４以下の同名通常モンスターを特殊召喚します。お出ませ、忍術学びし魔性の猛犬！忍犬ワンダードッグ！」

忍者服を着た人間の体に首から上は犬、一昔前の犬人面とでもいうべき不思議なモンスターが、葵ちゃんの場に2体同時に召喚される。あれを忍者の一員として認めてデッキに入れるなんて、葵ちゃんの基準も結構アバウトだ。

忍犬ワンダードッグ　攻１８００
忍犬ワンダードッグ　攻１８００

「だったらここで……トラップ発動、リビングデッドの呼び声！墓地からさっき捨てたモンスター、黄昏の忍者将軍―ゲツガを蘇生！」

背中には月と雲がモチーフであろうシンプルなデザインの旗をさし、緑色のマントをたなびかせて光の竜と向かい合う忍者一族の長、ゲツガ。三日月を二重にあしらったデ

ザインの兜が、灯台の落とす光と辺りに残るかすかな黄昏の気配を反射して、まるで本物の月のような輝きを放った。

黄昏の忍者将軍―ゲツガ　攻２０００

「攻撃力２０００のゲツガを攻撃表示で、リビングデッドの呼び声まで使って特殊召喚？まあいいでしょう、いざバトルします！銀河眼よ、あの忍者の総大将を、光の力で消し去って！破滅のフォトン・ストリーム！」

「葵ちゃん!?」

明菜さんが恐らく張っているであろう罠に対して、あまりにも無謀で軽率な攻撃。だが意外にもゲツガはその光の奔流を、真正面から受け止めてその中へ消えていった。

銀河眼の光子竜　攻３０００→黄昏の忍者将軍―ゲツガ　攻２０００（破壊）

明菜　ＬＰ３３００→２３００

「まだですよ、姉上！忍犬ワンダードッグでダイレクト……」

葵ちゃんの張りつめた声は、途中で尻すぼみになって消えていった。たった今塵１つ残らず焼き尽くされたはずのゲツガが、何事もなかったかのように明菜さんのフィールドで仁王立ちしていたのだ。

黄昏の忍者将軍―ゲツガ　攻２８００

「ふふん、びっくりした？お姉ちゃんはゲツガが破壊された時にトラップカード、命の綱

を発動してたんでした。このカードはモンスターが戦闘破壊された時、手札をすべて捨てることでその攻撃力を８００ポイントアップして特殊召喚できる！」
「くっ……ワンダードッグでの攻撃は中止し、ターンエンドです。そしてこの瞬間、レスキューラビットのデメリットによりワンダードッグ２体は自壊します」
「だから葵ちゃん、少し落ち着いてって……」
　途中まで言いかけて、結局辞めた。別に見捨てるつもりはないけど、少なくとも今の葵ちゃんには何を言っても無駄だ。僕もチャクチャルさんのパワーが暴走してたダークネスの吹雪さんとの戦いや光の結社の力が暴走してた三沢との戦いの時にはそうだったからよくわかる。こうなった以上、外野からいくら叫んだとしても何も変わらない。残念だけど自分でそれに気づくか、相手から気づかされない限り葵ちゃんに勝ちはないだろう。
「姉上、見ての通り私のフィールドにはまだ攻撃力３０００の銀河眼がいます。攻撃力２８００のゲツガ１体で、どう耐え抜くつもりですか？」
「もー、葵ちゃんったらあわてんぼうさんなんだから。ゲツガのモンスター効果発動！１ターンに１度自身を守備表示に変更することで、墓地から忍者を２体まで蘇生させるよっ！黄昏の忍者―シンゲツを２体特殊召喚！」
　攻撃を終えたゲツガが槍を地面に突き立て、いつの間にか配置してあった椅子にどっ

しりと腰かける。するとその両脇で木の葉が渦を巻き、その中心から２体の新たな戦士……４本の腕を持ち２本の忍者刀を背負った、片目を隠す装束に青いマントの異形の忍者が音もなく現れた。

黄昏の忍者将軍―ゲツガ　攻２８００→守３０００

黄昏の忍者―シンゲツ　攻１５００

黄昏の忍者―シンゲツ　攻１５００

「そうか、命の綱は攻撃力を上げるだけじゃなくて手札の忍者を墓地に送り、ゲツガの効果をサポートするために……まるで戦略に隙がない、確かに葵ちゃんが天才っていうだけのことはある」

「うんうん、さっすがは清明君！もっと褒めてもいいよ、あとでよしよししてあげるね！どう、お姉ちゃんのコンボ？葵ちゃんも清明君ぐらい素直に褒めてくれたっていいんだよ？」

「光の結社を相手にしてる間に腑抜けたんですか、先輩？そのデッキでどうやって星邪の神喰を使うっていうんですか、姉上は」

ますます態度を硬化させる葵ちゃんだけど、これはまずい兆候だ。なんとか手遅れになる前に、悪い考えの悪循環から脱出できるといいんだけど。

そんな妹の様子を知ってか知らずか、明菜さんは相変わらずの明るさだ。

「それと、さっきどうやって耐え抜くのかって聞いてたよね？その前に、まずは攻撃させてもらおうかな。魔法カード、クロス・アタックを発動！自分フィールドに同じ攻撃力のモンスターが２体以上いるとき、他のモンスターが攻撃できなくなる代わりにその１体は直接攻撃ができる！攻撃力１５００のシンゲツでダイレクトアタック、月輪の太刀！」

黄昏の忍者―シンゲツ　攻１５００→葵（直接攻撃）

葵　ＬＰ４０００→２５００

「たかがこの程度のダメージ……！」

「もー、そうやって意固地になっちゃうところも可愛いんだからー。それと、せっかくあるんだから今のうちに使っておこうかな。墓地からアマリリースの効果発動、このカードを除外することでこのターン１度だけアドバンス召喚に必要なリリースを１体減らすことができる。だけど私が狙っているのはそっちじゃなくて、今の除外をトリガーにして星邪の神喰の効果を適用！デッキからアマリリースの属性だった地属性以外のモンスター１体、闇属性の黄昏の中忍―ニチリンを墓地へ。私はこれでターンエンドね」

葵　ＬＰ２５００　手札：１

モンスター：銀河眼の光子竜（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

明菜　ＬＰ２３００　手札：なし
モンスター：黄昏の忍者―シンゲツ（攻）
　　黄昏の忍者将軍―ゲツガ（守）
　　黄昏の忍者―シンゲツ（攻）
魔法・罠：星邪の神喰

「確かにゲツガの守備力３０００は銀河眼の力をもってしても突破できない数値……ですが、所詮それは数字のみに頼った強さ！忍者マスター　ＳＡＳＵＫＥ（サスケ）を召喚します！」

ＨＡＮＺＯに並ぶ力を持ち、忍者マスターの称号を最も早く手に入れた上忍、ＳＡＳＵＫＥ。その能力は表側守備表示モンスターに攻撃した時問答無用で破壊と、まさに今のゲツガを倒すのにはうってつけの力だ。

忍者マスター　ＳＡＳＵＫＥ　攻１８００

「バトル、ＳＡＳＵＫＥで……」

「黄昏忍法、闇月隠れ風（あんげつ）！」

ＳＡＳＵＫＥが両の手にクナイを構え、敵将軍めがけ一直線に走りだす。しかしその脇に控える２体のシンゲツがその４本の手を使って複雑な印を組むと、その名の示す通り新月の闇夜のように辺りが闇に包まれていった。

「これは……？」
「シンゲツはそのモンスター効果によって、自身以外の忍者に対する攻撃を封じ……」
「そこまで聞けば結構です、要は簡易ロックというわけですね？それならば永続トラップ、忍法　超変化の術を発動！私の場の忍者であるＳＡＳＵＫＥとシンゲツの１体を素材とし、デッキから上級モンスターを呼びだせば……」
皆まで言うなとばかりに葵ちゃんが発動させようとした、最初のターンにサーチしていた超変化の術。だがそのカードが表になる寸前、闇にまぎれて飛んできた１枚の手裏剣が伏せカードそのものを地面に再び縫い付けた。
「超変化の術が封じられた!?」
あまりといえばあまりに目の前しか見ていない葵ちゃんのプレイングにむしろ悲しげな色すらにじませながら、闇の中から明菜さんの声が響く。
「ちゃんと最後まで聞こうね、葵ちゃん？シンゲツが誘導するのは攻撃だけじゃなくて、カード効果の対象も誘導するの。私のフィールドには忍者モンスターしか存在しないから、攻撃も効果もあらゆる対象にできないの」
「そんな……」
葵ちゃんの声から、さっきまでの空元気すら失われていく。さすがに見ていられなくなってきて、どうせ彼女の耳には届かないことを承知の上でそれでも叫ぼうとしたとこ

ろで、明菜さんが一足先に口を開いた。
「ねえ、葵ちゃん？」
「なんですか、姉上……私の無様さでも笑いますか？」
「ううん、そんなことしないわよ。だけど今の葵ちゃんいっぱいいっぱいみたいだし、ちょっと深呼吸してごらん？」
「どうしてそんなこと……」
「いいから。お姉ちゃんからの命令ですっ」
　不承不承といった様子ながら、言われたとおりゆっくりと息を吸い込んで深々と吐き出す葵ちゃん。それを何度か繰り返すうち、次第に目の光が戻り、その表情からも自棄的な様子が抜けていった。それが分かったのか、明菜さんも満足げな様子で微笑する。
「うんうん、いい顔になったわよー。今カメラがあれば1枚撮って私の宝物にしたいぐらい」
「それは、勘弁してほしいですね」
　葵ちゃんも、ついつい苦笑する。でもたとえ苦笑とはいえ、葵ちゃんが笑うところなんて今日初めて見た気がする。
「むー、残念。でもどうなの、葵ちゃん？お姉ちゃんのこと、そんなに怖いかな？」
「え？」

「どうしても知りたくなったの。聞かせて葵ちゃん、そんなにお姉ちゃんのこと苦手だった？嘘は言わなくていいから、ちゃんと自分の心に聞いてごらん？」

「……」

言葉に詰まる葵ちゃん。僕らの前では苦手だ嫌だと言っていても、いざ面と向かってストレートに聞かれると答えにくいらしい。

何度か喋りかけては口を閉じることを繰り返し、それでも最後にはゆっくりと、考えながら言葉を選んで話し出す。

「確かに、姉上が苦手なことは間違いないです。ですが……ですが、こうして今宵、姉上と向き合ってようやく気付くことができました。１人で姉上から逃げてここに入学しても、結局は何の解決にもならないのだと。むしろ残った恐怖が恐怖を呼び、より一層姉上と私の距離を広げていたのだと。目を逸らしていた自分の弱さを気づかせてくれた、そんな姉上には感謝します。わざわざ会いたくはありませんでしたが」

「なんかえらい言いようだよね、お姉ちゃんのことをそんな化け物みたいに。お姉ちゃんただ、たった１人の愛する妹にはるばる会いに来ただけなのにー。でも、これで葵ちゃんの本気のデュエルが見れそうだねっ！きっかけはどうあれ、あなたがこの１年でやったことの全ては決して無駄なことじゃない。ここでしか見つけられないことを身に着ける機会だってたっくさんあったはず。お姉ちゃん、私の妹はそれができる子だっ

て信じてるから」
「ええ。姉上に見せてあげますよ。葵流忍法の妙技、その全てを！そして姉上に私は勝ちます！」
なんのかんの言っても、姉妹ってのはこういう独特の絆で繋がってるものなんだろうか。１人っ子の僕にはよくわからない世界だけど、ついさっきまでとは別人のように生き生きした葵ちゃんを見てとりあえずホッとした。
「魔法カード、一時休戦を発動！お互いにデッキからカードを１枚引き、次の姉上のターン終了時まであらゆるダメージを０にします！そして今引いたカードをセットし、ターンエンドです」
「私のターン、ドロー。墓地からＡＤチェンジャーの効果を発動、墓地のこのカードを除外して、フィールドのモンスター１体の表示形式を変更。ゲツガを攻撃表示にして、この瞬間に星邪の神喰の効果をもう１回適用。私が送るのは、またまた闇属性の黄昏の中忍―ニチリン」
黄昏の忍者将軍―ゲツガ　守３０００→攻２８００
これで、再び墓地の忍者が２体になった。それはつまり、明菜さんのゲツガの効果を使うことでまたもや２体の忍者を１度に蘇生できるというわけだ。
「ゲツガの効果を発動、黄昏の中忍―ニチリンを２体特殊召喚！これぞ明菜流・天魔覆滅

の陣！」
　上りゆく黄昏の月をモチーフとするゲツガやシンゲツとは違い、沈みゆく黄昏の太陽をイメージしたのであろう茜色の忍者が２人、ゲツガを中心とした明菜さん曰く天魔覆滅の陣を形作る。
　黄昏の忍者将軍―ゲツガ　攻２８００→守３０００
　黄昏の中忍―ニチリン　攻２３００
　黄昏の中忍―ニチリン　攻２３００
「だけど葵ちゃんの銀河眼は、攻撃力３０００。まだそう簡単には突破されないはず……」
「本当にそうかな、清明君？ニチリンの効果発動、黄昏忍法起爆朧ガマ！手札の忍者を１体捨てることで、エンドフェイズまで場の忍者１体の攻撃力を１０００ポイントアップさせる！私は機甲忍者アクアを捨てて、ルール上忍者として扱うニチリン１体の攻撃力をアップ！」
　黄昏の中忍―ニチリン　攻２３００→３３００
「一時休戦の効果が続く限りダメージは与えられないけど、攻撃はしかけておこうかな。バトル、ニチリンで銀河眼の光子竜に攻撃！」
　ニチリンが太陽のように光り輝く短刀をかざし、飛び上がって銀河眼を上から切り裂

かんと迫る。
「あれ？だけど銀河眼の効果を使えば、ニチリンと自分を除外して戦闘を回避できるんじゃ……」
「それは無理ですね、先輩。銀河眼の効果は対象を取る効果ですが、シンゲツがいる限り姉上の忍者を私はカード効果の対象にとれません。つまり、私の銀河眼は今その効果を殺された状態なんです」
「よくそこまで気づけたね、葵ちゃん。私の自慢の妹だけのことはあるよー」
「そして、その対策もすでに私の手にあります！トラップ発動、バーストブレス！」
動かなかった銀河眼がいきなり飛翔し、ニチリンの攻撃を紙一重のところで回避する。そのまま空中で全身を発光させ、光のブレスを忍者軍団にまとめて放った。
「バーストブレスは自分フィールドのドラゴン族1体をリリースすることで発動され、その攻撃力以下の守備力を持つフィールドのモンスターをすべて破壊するカードです。私の銀河眼の攻撃力３０００に対し、姉上のモンスターは最も守備力が高いゲツガでも３０００止まり。つまり、姉上の天魔覆滅の陣とやらはこれで崩壊します！」
「やった！」
光が弾け、全てのモンスターがその中に消えていく。そしてブレスを放った銀河眼自体も、ゆっくりと光の粒子となって夜空に消滅していった。これで葵ちゃんのターンが

来れば、もうあとは彼女の独壇場だろう。
　そのあたりで、ふと違和感を感じた。気のせいだろうか……いや、やっぱりおかしい。確かに銀河眼は光のブレスを放ち、それにフィールドは包み込まれた。だがその銀河眼が消えた今、なぜかまだその光が収まっていない。それどころか、まるで雲１つ無い空で輝く太陽のようにますますその眩さを増していく。
「あ、あれは！」
　あまりの眩しさに目を細めて手で顔を覆いながらも、どうにか明菜さんのフィールドに目をやった葵ちゃんが呟く。そこに立っていたのは、黄昏の中忍―ニチリン。その両腕で印を結んでいるところを見ると、またもや忍法を使って何かしたらしい。
「黄昏忍法、陽炎迷い昼。ニチリンはもう１つの効果として、手札の忍者１体をコストにこのターン終了時まで自分の忍者にたいして戦闘及び効果破壊耐性を与えることができるのよ。女忍者ヤエを捨てることで、バーストブレスから私の忍者は身を守ったのね」
「そんな!?」
「惜しかったわねー、葵ちゃん。このターンはまだダメージを与えられないから、私はこれでターンエンドするね」
　起死回生のバーストブレスすら通用せず、明菜さんの忍者を攻撃も効果の対象にとる

こともできない必殺の構え、天魔覆滅の陣はいまだ健在。さらに墓地には他の忍者が墓地にいるときに自身を除外して攻撃を無効にできる機甲忍者アクア。対するに、葵ちゃんの手元には伏せられっぱなしの超変化の術1枚のみ。ＳＡＳＵＫＥもバーストブレスに巻き込まれたので、モンスターすら今はいない。

でも、葵ちゃんはまだ諦めてない。まだ何か、逆転のルートがあるのだろう。

葵　ＬＰ３０００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

明菜　ＬＰ２３００　手札：０

モンスター：黄昏の忍者―シンゲツ（攻）

黄昏の忍者―シンゲツ（攻）

黄昏の忍者将軍―ゲツガ（守）

黄昏の中忍―ニチリン（攻）

黄昏の中忍―ニチリン（攻）

魔法・罠：星邪の神喰

「私のターン、ドロー！魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のＳＡＳＵＫＥ、フォトン・スラッシャー、銀河眼、ワンダードッグ２体の計５枚をデッキに戻すことで、２枚ドロー

！」
「へえ……！」
　個人的な考えだけど、やっぱり葵ちゃんは何か持ってると思う。僕みたいに精霊と、デッキそのものと直接心を通わせることができるわけでもないのにこの局面で最高のドローソースを引くことができる運があるんだから、これは単純にデュエリストとしての運をつかみ取る力だろう。
「魔法カード、炎王の急襲を発動！姉上のフィールドにしかモンスターが存在しないことで、デッキから炎属性の獣・獣戦士・鳥獣族モンスター１体を効果を無効にして特殊召喚します！現れなさい、七色の羽根持つ紅蓮の不死鳥……炎王神獣　ガルドニクス！」
　遥か上空から天をも焦がす鳥の形をした炎の塊が、まさに急襲と呼ぶにふさわしい勢いで落ちてくる。その体を包んでいた炎が消えると、見事に真っ赤な羽根を持つ巨大な鳥が羽ばたいていた。
　炎王神獣　ガルドニクス　攻２７００
「この不死鳥の力で今こそ決着をつけましょう、姉上！」
「望むところよ、葵ちゃん。だけど、いまだシンゲツの闇月隠れ風は有効のまま。どうやって対処するの？」

「さあて、姉上はどう思います？このターンはカードをセットし、エンドしますよ。そして炎王の急襲のデメリットにより、ガルドニクスはエンドフェイズに破壊されます」
　自らの炎に包まれ、身を焼かれた不死鳥が堕ちていく。その燃えカスすら残らず、最後の残り火も折よく海から吹いた風に流れて消えていった。
「せっかく呼び出せた最上級モンスターも、攻撃すらできずに破壊されちゃうなんてね。これからどうするの、葵ちゃん？」
「いいえ、すでに私の仕込みは終わっています。さあ姉上、カードを引いてください」
　明菜さんのもっともな疑問に、不敵な笑みで答える葵ちゃん。そのデュエル序盤とはまるで違う態度がよほどおかしかったのか、明菜さんも朗らかに笑ってカードを引いた。
「それじゃあ葵ちゃんがどんなことをしてくれるのか、お姉ちゃんに見せてもらおうかな。私のターン、ドロー！」
「この瞬間、墓地からガルドニクスの効果を発動！ガルドニクスがカード効果で破壊されたならば、その次のスタンバイフェイズにフィールドに蘇り、さらに自分以外の全てのモンスターを破壊します！これが私にできる唯一にして最後の一手、ガルドニクスの焦熱地獄！」
　炎王神獣　ガルドニクス　攻２７００

地面がパックリと割れて大きな火柱が噴き上がり、その中心からまるで何事もなかったかのように赤い不死鳥が再誕する。すると残った炎が意志を持つようにうねり、忍者軍団めがけて飛びかかっていく。

確かにこの効果が通りさえすれば、ガルドニクスを残したうえで忍者軍団を一掃できるだろう。だけど、ニチリンには先ほども使った忍者をコストに忍者を破壊から守る術がある。今の明菜さんの手札はドローしたてのあれ1枚のみ、あれが忍者モンスターだとしたら……今度こそ、葵ちゃんに勝ち目はないとみていいだろう。僕が気付いたぐらいだ、それぐらいのことは葵ちゃんも重々承知の上だろう。

「さあ、姉上。今引いたカード、そのまま使えるものですか？」

葵ちゃんの質問に、ゆっくりと首を横に振ってこたえる明菜さん。天魔覆滅の陣が、荒れる炎の奔流に飲み込まれた。

「葵ちゃん、よく私の天魔覆滅の陣を……だけど、まだ終わらないんだよっ。シンゲツは相手によって破壊された時、デッキから忍者を1体サーチできる。2体のシンゲツのそれぞれの効果で、デッキから機甲忍者アースと黄昏の忍者将軍―ゲツガをサーチ！そして相手フィールドにのみモンスターがいるとき、アースは手札から特殊召喚できる！」

葵ちゃんも愛用する機甲忍者の1体にして、あのカイザーが使うサイバー・ドラゴンと同じ効果を持つ大地の忍者が地中から湧き上がる。

機甲忍者アース　攻１６００
「さっきは死者蘇生で出したけど、実はこのカードは忍者をリリースする場合リリース１体だけでアドバンス召喚できるんだよ！再び出でよ、ゲツガ！」
黄昏の忍者将軍―ゲツガ　攻２０００
「まずい、これじゃあ葵ちゃんがせっかく崩した天魔覆滅の陣が……！」
ゲツガがさっきのシンゲツ２体を蘇生させれば、また先ほどのロックが決まってしまう。いや、それだけでは済まない。ゲツガで破壊されたゲツガを呼び戻し、そのゲツガがさらに効果を使えば？ニチリンが１体ゲツガに変わるだけで、天魔覆滅の陣が完全に復活してしまう。
だが、葵ちゃんはここで絶望の表情ではなく、会心の笑みを漏らした。
「そう来ると思いましたよ。トラップ発動、リビングデッドの呼び声！この効果により墓地のＨＡＮＺＯを蘇生召喚し、さらに特殊召喚に成功したＨＡＮＺＯの効果によりデッキから速攻の黒い忍者（ブラック）をサーチします」
忍者マスター　ＨＡＮＺＯ　攻１８００
「ここでＨＡＮＺＯ？……あっ！」
「今更気づいても遅いですよ、姉上！確かにシンゲツ２体での闇月隠れ風は恐ろしいロックでしたが、それはあくまでもシンゲツ２体が場に存在しない限り意味はない。つ

まり、ゲツガ１体しか存在しない今ならばこのカードを発動することができる！永続トラップ、忍法　超変化の術！私の忍者と姉上のモンスターをそれぞれ１体墓地に送ることで、そのレベル合計以下のレベルを持つドラゴン・恐竜・海竜族モンスター１体をデッキから特殊召喚します！」

ゲツガとＨＡＮＺＯの姿が煙となって消え、その煙が頭上に集まって見覚えのあるドラゴンの姿を形作る。あのドラゴンのシルエットを、どうして見間違えることがあるだろうか。なにせ葵ちゃんがデュエルするたびに見てるからねえ。

「再び出ませ、葵流忍法最強のしもべ！銀河眼の光子竜、ここにあり！」

銀河眼の光子竜　攻３０００

「私のゲツガ～。もう召喚権も使っちゃったし、私はこれでターンエンドかな」

葵　ＬＰ３０００　手札：１

モンスター：炎王神獣　ガルドニクス（攻）

銀河眼の光子竜（攻・超変化）

魔法・罠：忍法　超変化の術（銀河眼）

リビングデッドの呼び声（対象なし）

明菜　ＬＰ２３００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：星邪の神喰

「私のターン。姉上、これでラストターンです！速攻の黒い忍者を召喚し、２枚目の風魔手裏剣を装備します！」

「あっちゃー……」

速攻の黒い忍者　攻１７００→２４００

「バトルです、黒い忍者で攻撃！走りなさい、ブラック・ニンジャ！」

「墓地から水属性モンスター、機甲忍者アクアの効果を発動！このカードを除外してその攻撃を無効にして……さらにその効果をトリガーに星邪の神喰！デッキから光属性の超電磁……じゃなくて、闇属性のネクロ・ガードナーを墓地へ」

「姉上……？ガルドニクス、次の攻撃を！」

「ネクロ・ガードナーを除外して効果発動、その攻撃も無効に。残念だけど星邪の神喰は１ターンに１回しか使えないのよね、くすん」

ここまで追い込まれていながらも、さらに２回の攻撃を止めて見せた明菜さん。なるほど、葵ちゃんが速攻の黒い忍者を召喚して、さらに今のドローで風魔手裏剣を引いていなかったらまだライフは残っていたのか。まさにギリギリの戦い、そう呼ぶにふさわしい。

だけど、このデュエルもこれで終わる。最後に残った銀河眼が、もはやその攻撃を防

ぐものが何もなくなったフィールドで全身を発光させて力を溜める。
「銀河眼の光子竜でダイレクトアタック！破滅のフォトン・ストリーム！」
銀河眼の光子竜　攻３０００→明菜（直接攻撃）
明菜　ＬＰ２３００→０

「あーあ、葵ちゃんったら本当に強くなったのね。お姉ちゃんとしてはそうやってたくましくなった葵ちゃんもすてきだけど、やっぱ少しは寂しいわー」
敗れてもなお飄々とした態度の明菜さんに、葵ちゃんが詰め寄る。
「姉上、最後の局面でのあれは一体どういうことですか！機甲忍者アクアを除外した際墓地に送るモンスター、あそこで超電磁タートルを送っていれば私の攻撃を受けることなくまた姉上のターンが来たはず。まさか、手を抜いたのでは……」
「目が怖いわよ葵ちゃん、それに私は本気だったわよ。ねー、清明君？」
またもそこで僕に振ってきますか明菜さん。でも正直、僕もここは葵ちゃんの言うことに一理ある気がする。確か超電磁タートルは墓地から除外することで、デュエル中１度だけそのターンのバトルフェイズを終了させる効果を持つモンスターだったはず。最初その名前を呼び掛けていたところを見ると明菜さんのデッキに入っていないわけ

でもなさそうだし、あの局面でわざわざ1度の攻撃を止めるだけのネクロ・ガードナーを優先する意味はないだろう。

そんなわけで言い淀んでいると、明菜さんも何が言いたいのか分かったらしい。ふくれっ面になりながら、まだ手に持っていた最後の手札を僕らに見せる。

「これは……」

「超電磁タートル？」

「うんうん。この効果って、デュエル中1度しか使用できないって書いてあるでしょ？だからデッキに入れるのも1枚でいいかなーって思ってたら、まさかあの場面でドローしちゃうなんて思わなかったよっ」

「ああー……」

何か深いわけでもあったのか、実はわざと負けたとかそういう展開かと思ったら、思いのほか現実的な理由だった。明菜さん、本当に勝つ気満々ではあったのね。まさにこの妹にしてこの姉あり、ということか。

「さてと、久しぶりに葵ちゃん成分も補給できたし、私もいったん帰ろうかな」

「あ、あの！できれば父上と母上には、私が謝っていたと伝えて……」

「ああ、あの話？ごめんね葵ちゃん、もしかして信じてた？あれ、お姉ちゃんの嘘なの」

「……はい？」

「だって葵ちゃん、ああでも言わないとなかなかその気になってくれなかったでしょ？葵ちゃんがプロにどこまで近づけたのか、お姉ちゃんもいっぺん見てみたいなーと思って」

あっけらかんと言い放つ明菜さんに、一瞬虚を突かれたといった様子の葵ちゃん。次第にその顔が、怒りのあまり赤くなってきた。

「それで姉上、最期にまだ何か言い残したことはありますか……？」

「はい、お姉ちゃん怒ってる葵ちゃんもかわいいなーって思いました！」

「姉上ーっ！やっぱり私、姉上のことは嫌いです！」

「うわーん、また葵ちゃんがいじめるー！それじゃあ、まったねー！清明君も、今度ゆっくりお茶でもしながらお話ししましょうねっ！」

そう言うが早いが懐から何やら白い球を取り出して地面に叩き付けると、辺りが煙幕に包まれる。その煙玉の煙が晴れた時にはすでに明菜さんの姿は影も形もなく、そのかわりに明菜さんが立っていたところには何枚かのカードが置かれていた。

「１つ言い忘れてたけど、葵ちゃん。それ、私からのプレゼントだよっ！去年の誕生日はお祝いできなかったから、ちょっと時期が違うけど進級祝いも一緒にってことで、よかったら使ってねー！」

最後に、どこからともなく明菜さんの声が響く。どうやらこの明菜さんの置き土産、

黄昏の忍者シリーズは最初からそのつもりで持ってきたもののようだ。
「……まったく、姉上はこれだから」
どうやら怒りを飲み込んだらしい葵ちゃんが、まんざらでもなさそうな表情でカードを拾い集める。あれだけの効果を持った黄昏の忍者が葵ちゃんのデッキに入るとなると……うん、これはグレイドルの力を手に入れた僕もうかうかしていられない。
「さあ、帰りましょうか先輩。もうすっかり夜ですし」
「そだね」
来た時と同じように、2人で並んでゆっくりと歩きだす。と、ここであることを思い出した。ずっと聞いてみたいと思ったけど、行きの時は葵ちゃんの様子がアレだったからなかなか切り出せなかったのだ。
「そういえばさ葵ちゃん、いつの間に彼氏なんてできたの？」
「すみません先輩、私にもわかるような言語で説明してください」
「いや日本語だけど。だってほら、明菜さんからの手紙にも書いてあったじゃん。可愛い男の子と仲良くなってー、ってやつ。あれって誰のこと？一言ぐらい僕にも紹介してくれたっていいだろうに」
あの手紙を見たときから、その部分については多少気になっていた。葵ちゃんのことは入学してすぐ従業員さんになってもらってからずっと仕事仕事で自由時間を押さえ

つけてきちゃったような気もするから、そんな相手ができたんなら全力でお祝いしてあげるぐらいのことはしてあげたい。

そう言うと、何か小さい子にものを教えるときどこから話せばいいだろうか、と迷う感じで今日一番のため息をつかれた。

「……先輩、先輩はもうちょっと自分が女顔寄りだってことに気づくといいと思います」

「え、嘘!?これ僕のことなの!?」

「どう考えても。でも正直昔から私も思ってたんですよね、元々顔のパーツが女顔寄りなうえに表面の絵面だけは優男ですから、多分この人女装したら案外似合うんじゃないかなって」

「日頃そんなこと考えてたの!?」

「女子力だって高いと思いますよ？私はあまりそういうの詳しくないですけど」

「……明菜さんの気持ちがちょっとだけわかるよ。葵ちゃんがいじめるー……」

「でも大丈夫ですよ、なんだかんだ言って」

「？」

「先輩の場合、見た目は問題なくて女子力も高そうですが、それ以前に性格の問題がありますから。そこさえわかっていれば、絶対女の子には見えないです」

「……うん、もうそれは褒められてるんだと思うことにするよ」

これ以上聞いていても慰めになる気がしなかったので、そこで話を切り上げる。僕自身はご飯を作ったりお茶を入れたりしたぐらいでほとんど何もしてないはずなのに、なんだか今日はいろんなことがある日だった。そういえばデュエルアカデミアに他の分校から転入生が来るとかいう噂もあるし、もしその話が本当だとしたら明日はその人たちのところにも手土産持って挨拶に行かないとね。

ターン７４　鉄砲水と灼熱の傭兵

アカデミアに、ついに始業式の日がやってきた。その間に翔も結局ブルー寮への昇格が決まったことで、アカデミア初の３年でレッド、イエロー、ブルーの全寮制覇という偉業を成し遂げた。

……正直なところこれについて僕としては、万丈目が１度ブルーに戻るとか言っておいてドタキャンしたからオベリスクブルーの枠が１人分空いたのもそれなりに大きな理由なんじゃないかと邪推したりもしてるんだけど。実際僕が最後に聞いた話では、翔に昇格試験を受けさせるかどうかすら怪しかったって話だし。とはいえ、別にそれを悪く言うつもりはない。それを掴みとった運も実力の内だし、なにより試験をクリアしたのは紛う事なき翔自身の実力だ。だけどこうやっていらん推察するようになったのも、うちの地縛神のせいだろう。すっかり僕も性格が歪んだものだ。

『私か!?そこも私のせいなのか!?』

するとまさにドンピシャのタイミングで、その翔がレッド寮にやって来た。

「アニキー、始業式始まっちゃうけど出ないんスかー?……あれ、剣山君。それに清明君も」

「おはようだドン、丸藤先輩」
「やっほー、翔。その制服、なかなか似合ってんじゃない？」
「もう、そんなのんきなこと言ってる場合じゃないっスよ？もう始業式が始まっちゃうのに全然来ないから、心配して呼びに来たのに。それで、アニキはどこにいるんスか？もしかしてまだ寝て……」
　病気だとかなんだとかよりもまずまっさきにまだ寝てるんじゃないかと疑うあたりは、さすがに十代との付き合いが長いだけのことはある。もっとも、今回に限ってはそうではないのだが。
「最近出歩くのが多くなったからねえ。まあそうそうぶらつく場所のパターンがある訳でもないし、今日は天気もいいからどうせアカデミアの屋上あたりにいるんじゃない？僕は荷物の準備してすぐ行くから、悪いけど２人で先に行っててよ」
「そう？じゃあ、遅刻しないようにね」
「十代にアニキを探しに行くザウルス、丸藤先輩！」
　２人が出発したのを見送る暇もなく、すぐに寮に取って返す。常連の鮎川先生からの情報によると、来るんだか来ないんだか話が揺れまくっていた留学生は結局今年、それも今日来るらしい。船が到着するまで残りわずか、なんとかそれまでにこの手土産だけは作り終えたいのに……！

「ったく、確定してたんならせめてもうちょっと早く教えてくれればいいのに！昨日の段階でいきなり言われても無理だって！」

もっとも、これについては鮎川先生のせいではない。春休みの間は僕が再試を受けてたりしたのもあって週に2～3日程度しか店を開かなかったから情報がこっちに来るのが遅れたのが原因だし、なんで店を開かなかったのかといえば僕がサボってたからだ。

ただ人間、追い詰められるとろくなことを考え付かないものだ。寮にある年代物のオーブンの火力で悠長にこのマドレーヌを焼いてたら完璧に遅刻すると踏んだ瞬間、ある罰当たりなアイデアが閃いた。素早くデッキを取り出し、その中から1枚のカードを引っ張り出す。念を込めてそのカードをかざし、神経の全てを精霊の呼び出しに集中させる。

「メタイオン先生、お願いします！これ焼くのに火貸してください！」

『……』

何も反応がないのでさすがに呆れられたかと思ったら、壁の向こうから半透明の金属製の腕がスッと1本伸び、その指先から炎が吹き出されてオーブンごと包み込む。その腕の根本を見ると、窓の外にどアップで大笑いする顔が1つ。僕に力を貸してくれる2体目の神様こと、時械神メタイオンは意外とノリがいいことが分かった瞬間だった。そ

れにさすがは神様の火だ、ボロオーブンなんぞとは比べ物にならないほど熱く、かつ一瞬で消し炭にならないほどには力をセーブしてくれている。

……電気代もかかんないし、これから火の関係は全部この神様の火に任せようかな。っと、そんなこと言ってる場合じゃないんだった。さっさとこれ４つに分けて、遅刻する前に講堂に潜り込まないと。かなり分の悪い賭けだけど、それでもやらなきゃ無断欠席だ。

どうにか見とがめられることなく行動に潜り込み、気を利かせた万丈目が取っておいてくれた席に座れたのがそれから１０分後。

「あ、危なかった……」

「清明先輩、俺たちでもかなりギリギリだったのによく間に合ったドン」

「えへへ、それほどでも。ところで剣山、なんで当たり前みたいな顔してレッド寮の席にいるの？」

「俺は寮なんかにはこだわらないんだドン」

「……あっそ」

さすがにこんな時ぐらいイエロー寮の位置に行かなきゃまずい気もするのは気のせいだろうか。でも先生達も何も言ってないなら、きっとそれでいいんだろう。こういうところはやけにアバウトな学校だ。在校中の学生が堂々と商売しても怒られないどこ

ろか先生まで買いにくる時点で今更といえば今更だけど。
　とにかく始業式はつつがなく進み、軽い校長の演説の後に新入生を代表してのレイちゃんからの挨拶、と順調にスケジュールをこなしていった。そして最後に、もう１度校長から話が入る。きっとここで、転入生について詳しい説明が入るんだろう。一応生徒たちに正式な発表はまだない話だし。
「さて、ここで皆さんに重大な発表があります。今年は生徒たちのさらなる発展を願い、新しい生徒たちを受け入れることにした」
　ここで言葉を切り、後ろのスクリーンに電源が点くと、なにやらそこに世界地図が表示された。
「デュエルの発展を願うアカデミアには、世界各地にその分校が存在する。今年はその主席の生徒たちを、我が学園に迎え入れることにしたのだ」
　おっと、これは僕も知らなかった。でも分校の首席ってことは当然ノース校も入るんだろうし、１人は鎧田でほぼ確定か。だとするとあいつの分は別に用意しなくてもよかったかな、クッキー。なんとなく後ろを振り返ると、自分の舎弟ともいえる鎧田が転入してくることに万丈目が何となく嬉しそうな顔になっていた。
「主席か、きっと強い奴ばっかりなんだろうな！くーっ、早くデュエルしてみたいぜ！」
「まあね。鎧田とは今まで１勝１敗なんだ、今年こそはケリつけてやるさ」

僕と十代だけがこんな調子なんじゃない。ざっと周りに目をやると、ほぼ全員が主席の転入という言葉にデュエリストとしての闘志を燃やしている様子が一目でわかる。特に葵ちゃんなんかがいい例で、もはや近寄りがたいほどの闘志を噴き出している。あ、今隣の奴が少し距離を取った。

「ではまず、デュエルアカデミアイースト校のアモン・ガラム君」

拍手の中を颯爽と歩いてくる、眼鏡をかけた爽やかそうな青年。だけどなぜだろうか、その爽やかさの中にどことなく胡散臭さが見えたような気がした。照明の加減でたまたまそう見えただけだろうか。

「デュエルアカデミアウェスト校代表、オースチン・オブライエン君」

次いで現れたのはデュエリストというよりもはや格闘家の域に達したかのような筋肉の、黒い肌の青年。なかなか油断ならない、鋭い目をしているのが印象に残った。ってかあの腰につけてるのって、もしかして銃なんだろうか。……まさか、ね。

「デュエルアカデミアサウス校代表、ジム・クロコダイル・クック君」

「イエーイ!」

室内でカーボーイハット、なぜか片目に包帯とツッコミどころはいろいろある。あるのは間違いないけれど、正直そんなもの全部吹っ飛んだ。意気揚々と入ってきたジムが両腕で掲げたのは、なぜかワニ。どこからどう見ても、緑色のワニなのだ。しかも

ちょっと目をつぶったところを見ると、どうも生きた本物らしい。サウス校ってのはワニが生徒と一緒に住んでる学校なんだろうか。

でも、正直あのノリは嫌いじゃない。ワニって肉以外の、洋菓子は食べたりしないんだろうか。今度本人に許可とって試してみよう。

「最後にデュエルアカデミアアークティック校より、ヨハン・アンデルセン君」

「最後にだと?ノース校からは誰も来ないのか?」

ちょっと拍子抜けしたような万丈目。それについては僕も同感だけど、これから来るヨハンとやらに罪はない。拍手して入場を待つも、いつまで経ってもその本人がやってこない。

「おや、ヨハン君はどこに行ったんですか?」

「まさにゴースト、か。実は我々も、船の上では1度も姿を見ていないんですよ」

校長とアモンの話を聞く限り、誰も本人を確認していないようだ。だが不穏な空気に会場が次第にざわつき始めて、収集使なるかに思えた次の瞬間、突然転機は訪れた。誰かが、講堂のドアを勢いよく開いたのだ。

「悪い悪い、すっかり迷っちまって!」

突然やって来た青髪の青年を見て、座っていた十代がいきなりあっと叫んで立ち上がる。

「おーい、何やってるんだよー！」
「あれ、十代の知り合い？」
「ついさっき会ったんだ。早く座れよ、今ヨハンってやつを探して……」
「あー、十代君。彼がヨハン・アンデルセンですよ？」
鮫島校長が大声で叫ぶ十代の言葉を遮ると、信じられないといった風に目を瞬かせる十代。一体どんな出会い方をしたんだろう、この２人は。とりあえず親友がこれ以上悪目立ちするのも忍びないので、服の裾を引っ張って強引に着席させておいた。
「お前、新入生じゃなかったのか？」
「いやー、騙すつもりはなかったけどつい言いそびれちまって。今校長が言ってくれた通り俺がヨハン・アンデルセンだ、改めてよろしくな、十代」
「あ、ああ……」
「どうして俺たちと同じクルーザーで来なかったんだ？せっかくの素晴らしいボヤージュだったのに。まあいいさ、これからよろしくなマイフレンド」
まだ驚き冷めやらぬといった調子の十代の代わりにということなのか、壇上からジムが手を伸ばす。その手を掴んでよじ登ったヨハンが、そのままがっちりとジムと握手した。
ちょっとごたごたもあったけど、とにかくこれで４人の留学生が全員そろった……と

思ったら、その後ろからさらに見たことのない大男が登場した。険しく濃い顔に大きなリーゼント、そして服を着ても全然隠しきれていない明らかに堅気の人間とは思えないほどの筋肉というとにかく怪しいおっさんである。そのおっさんがつかつかと前に出て鮫島校長に一礼すると、校長も頷き返して話し出す。

「さて、ここでもう1人紹介したい人がいます。彼はこのデュエルアカデミアに臨時講師として招き入れた、プロフェッサー・コブラです」

「ペペロンチーノ!?」

「なんでアール!?」

鮎川先生からの情報にもなかったこのプロフェッサー・コブラ臨時講師なる怪しい人。鮎川先生に黙っておく理由もないはずだし、今のクロノス先生とナポレオン教頭の反応と併せて考えても、どうやらこの人の存在は本当に校長1人の中だけで決められていたことらしい。

マイクを受け取った。そして今度は僕ら生徒側に向き直り、低く威圧感たっぷりの声で話し出す。

「デュエルアカデミア諸君、私がプロフェッサー・コブラだ。本来ならば長々とした挨拶をするところだろうが、私はそういったものを好まないし、君たちもそれから得るものはないだろう。実戦あるのみ、それが私の信念だ。そこで早速だが、我々転入組と君た

ち在校生側から1人ずつ代表者を出しての模擬試合を行うことを提案する。いかがですかな、鮫島校長？」

ふむ。確かに僕も長話は好きだけど長い演説や挨拶は退屈なだけだからね、そこらへんよくわかってる人だ。鮫島校長がコブラ講師の言葉に静かに頷くと、唇を歪ませてにやりと笑う。

「では、お互いの代表だが……こちらからはヨハン・アンデルセン。そちらからは遊城十代の2名というのはどうだろう。どうやらすでに知った仲のようだし、親交を深める意味でもちょうどいいだろう」

「いいでしょう。十代君、やれますね？」

「もちろんだ！こんなに早くお前とデュエルできるなんて嬉しいぜ、ヨハン！頑張ろうな、相棒！」

「ああ、俺も嬉しいぜ。互いにベストを尽くそう！なあ、ルビー！」

その声に反応して、十代の方からはいつものハネクリボーの精霊が姿を見せる。だけど驚いたことに、ヨハンの方からも青っぽいグレーの毛皮を持つ猫に似たモンスターの精霊が飛び出してきた。普通に会話してるってことは、どうやらあのヨハンも僕や十代、万丈目と同じく精霊が見えるタイプの人間らしい。1つの場所にこんなに精霊が見える人が集まるなんて、つくづく世の中面白いものだ。類は友を呼ぶ、ってやつなのか

ね。

さて、試合開始まであと1時間ある。僕が選ばれなかったのは残念だけど、逆に考えればこの1時間を自由に使えるということでもある。コブラ講師のぶんはないけど、せめてあっちの４人には早速お菓子渡してこよう。控え室にでも行くのだろうか、入ってきたドアからまた出ていく5人をこっそり追いかける準備に入った。

「んー……サッカー、どう？」

講堂を出てから、かれこれ１０分は経っただろうか。みんなどこで待機してるのか、それらしき部屋を探し回ってもなかなか見つからない。途中から精霊達まで駆り出して探し回っているのだが、この学校は無駄に部屋が多いせいか難航してるようだ。

「駄目かー、気にしなくていいよ。ラブカは？うさぎちゃんは？イーグルも見つけられなかったって？……え、あっち？了解、ありがと！」

一応プライバシーの問題もあるから個室は覗かないようにって厳命してたけど、それでここまでしないと見つからないってことはもしかしてもすでにそれぞれの個室ないし寮が用意されてるのだろうか。その線は十分あり得る……というかそれが普通なんだけど、ただあの４人の話だって昨日の段階でようやく校内に知らされたことな上に、

プロフェッサー・コブラについては校内でただ1人校長しか知らなかった点が引っ掛かる。そんなかっつかつのスケジュールで都合よく空き部屋なんて見つかるもんかね？

どうもよくわからなくなってきたので一度精霊たちにお礼を言ってカードに戻ってもらい、とにかく教えてもらった場所、玄関ホールへと歩き出す。するとすぐにその隅で、なにやらオブライエンとプロフェッサー・コブラが話し込んでいるのが見えた。

この時、なぜ咄嗟に身を隠したのかは自分でもわからない。別に僕も悪いことを企んでいるわけではないし、やましいこともそんなにない。あえて理由をひねり出すとしたら、高校の教師と生徒の会話にしては妙に異質で重苦しいその2人の周りの空気に嫌な予感を感じた、といったところだろうか。周りには他に誰もいないことも相まってその会話が聞こえてきたが、断片的にしか聞こえなかったことも相まって今一つ要領を得なかった。ただどうも、遺跡がどうとか研究所がああだとか、しばらく監視がどうだとかそんな物騒な単語ばかり聞こえてくる。これは、少しあの2人は警戒した方がいいかもわからんね。少なくとも、何かしら裏の顔があるのだろう。そうこうしているうちにプロフェッサー・コブラが外に出ていき、しばらくそれを見送っていたオブライエンも踵を返す。そして僕が隠れている方を真っ直ぐ見て、有無を言わさぬ調子で話し出した。

「そろそろ出てきたらどうだ？その柱の陰にいるのはわかっている」

「う。や、やっほー」

隠れても無駄だろうし、下手に逃げたりして警戒されるよりはいっそ気軽に出ていく方がいい。そう判断して、できる限り友好的に姿を現す。次の瞬間には鋭い視線に射抜かれて、すぐに出てきたことを後悔した。

「この学校の生徒か……ここで何をしていた？正直に言え。それにその荷物、一体何を持っている？見せてみろ」

そう言って指差したのは、ずっと僕が右手に下げていたそこら辺の紙袋に詰めたマドレーヌ。集音マイクでも警戒しているのか、妙にピリピリした様子で奪い取ろうとする。そしてその動きを、多分僕に対する攻撃だと勘違いしたのだろう。

あっと思った時にはもう遅かった。いきなり出てきたシャーク・サッカーが一瞬だけ実体化して、軽くとはいえオブライエンの手に噛みついたのだ。そこまで痛くはないだろうけど、不意打ちとしては申し分のない威力だろう。

「……ッ!!」

急な苦痛に顔をしかめるも悲鳴を上げることなく、目にも止まらぬほどのスピードで手を引っ込めるオブライエン。気持ちは嬉しいけどサッカー、それは今やっちゃまずい。

「お前、今のは一体何を……！」

「ご、ごめんなさいごめんなさい！」

これ以上怒られる前に全力で謝る。だってこれ、どこからどう見ても悪いの完全に僕らだし。僕の精霊のミスなんだから、僕がその責任を負うべきだ。幸いにも根は悪い奴じゃないのか、その様子を見て若干毒気を抜かれたような表情になるオブライエン。元の落ち着いた態度に戻り、噛まれた手を一振りして話を戻した。

「ま、まあいい。今のは俺も強引だったかもしれないからな。だがいったい、本当にここで何をしていたんだ？」

「ああ、はいこれ。もう噛まないから大丈夫」

そこでようやく僕も本来の目的を思い出し、さっき強奪されそうだった紙袋を渡す。さすがに警戒した表情のオブライエンに半ば強引に押し付けると、しぶしぶといった様子で包みを開けた。中身を一目見て、その表情がいよいよ困惑したものに変わる。

「なんだ、これは？」

「マドレーヌ。美味しいよ」

「これを俺に渡して、一体どうしろと」

「ふむ、それもそうか。じゃあ最初っから説明しようか、まず僕はオシリスレッド所属生徒兼洋菓子屋『ＹＯＵ　ＫＮＯＷ』デュエルアカデミア支店取締役代表の遊野清明。それはうちの店で出してる商品の１つのマドレーヌ。ここまではオーケー？」

話の先が読めない、といった様子で無言で頷くオブライエン。その反応にちょっと満

足して勢いづき、さらに言葉を紡ぐ。
「これは悪いんだけど、転入生全員に渡しておいてくれない？今回はタダでいいからさ、美味しかったらまたぜひ買いに来てねって伝えておいて」
　もし今後１人でもリピーターが増えるのであれば、ここで無料で配ったとしてもこの１年で元は十分に取れるとの計算あってのプレゼント。だから新入生歓迎会にも何か差し入れを持っていきたいところだけど、まあ今はいいだろう。とにかく損して得取れ、が商売人としての遊野家のモットーです。親父の場合損したうえで損ばっか取ってるからいつまで経っても儲からないんだ、せっかく腕はいいのに。
「あ、ああ……そうか、悪かったな、変に勘ぐって。何か詫びをしたいところだが、あいにく持ち合わせが……」
　その言葉を聞いて、１つアイデアを思い付いた。元々今日は十代だけにスポットが当たるってんで、ちょっと羨ましかったんだ。
「じゃあさ、オブライエン。僕とデュエルしてよ」
「何？」
「デュエルアカデミアウェスト校主席の実力……一丁手合せと洒落込ませてもらいたいってことさ」
「ふっ、いいだろう。ただし、後悔するなよ？」

目にも止まらぬ速さで腰に差した銃のようなものを引き抜くと、なんとその中にデッキを収める。ここでようやく、あれがデュエルディスクだったことに気が付いた。普通に考えてわかるかそんなもん。

「「デュエル！」」

先攻はオブライエン。ちょうどいい、一体どんなデッキを使うのか、せめてその1部だけでも見せてもらおう。

「俺は、ヴォルカニック・ロケットを召喚する。そしてこのカードは場に出た時、デッキからブレイズ・キャノンと名のついたカードを1枚手札に加える効果を持つ」

先攻1ターン目のサーチは、どうしようもない。止める手立てもないので、大人しく見ているしかなかった。

「俺はこれで、ターンエンドだ」

「まずは様子見、って？僕のターン、ドロー！僕は、シャクトパスを召喚！」

シャクトパス　攻１６００

「ほう？だが俺のヴォルカニック・ロケットの方が、攻撃力は上だぞ？」

疑問に思うというよりも、むしろからかっているようなオブライエンの言葉、さすがは主席、これをただのプレイングミスだとは思わないか。まあ、思ってもらっちゃこっちとしても歯ごたえないんだけどね。まだまだデュエルは始まったばかり、これから

じっくり楽しもう。
「さらにカードを2枚セットして、ターンエンド」
オブライエン　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：ヴォルカニック・ロケット（攻）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：シャクトパス（攻）
魔法・罠：２（伏せ）
「俺のターン、ドロー」
今引いたカードを見て、少しの間何かを考えるオブライエン。僕が伏せたカードに何かあるのか、それとも単純にシャクトパスの効果である自身を戦闘破壊した相手に憑りついて攻撃力を０にする効果を狙っているのかを検証しているのだろう。さあて、どっちだろうね。僕としては、攻撃してくれればそれでいいんだけど……だが、そんなことを考えたのがまずかったようだ。
「先ほどサーチしたカード、ブレイズ・キャノンを発動。ブレイズ・キャノンは手札から攻撃力５００以下の炎族モンスター１体を墓地に送ることで相手モンスター１体を破壊し、さらに相手に５００ポイントのダメージを与える。攻撃力１００のヴォルカニッ

ク・バレットを墓地に送り、お前のシャクトパスを破壊する！」
「しまった、効果破壊か！」
砲台の銃身がこちらを向いたかと思うと、勢いよく先ほど入り込んだトカゲが撃ち出される。戦闘についてはいくらでも手が打てたけど、こういうバーン戦法を使ってくる相手だと僕の伏せカードもシャクトパスの効果も今はまるで機能しない。
清明　ＬＰ４０００→３５００
「これで次はダイレクトアタック、って？」
「いや、ブレイズ・キャノンを使うターンに俺はバトルフェイズを行えない。だが、モンスターを出すことはできる。ヴォルカニック・エッジを召喚し、効果発動！１ターンに１度、相手に５００ポイントのダメージを与える！」
「くっ……！」
２足歩行するトカゲのような生き物が、口から燃える溶岩の塊を吐き出して攻撃してくる。この伏せカードは使えず手札にも幽鬼うさぎのカードがない今それに反応してアクションを起こす手立てはなく、その直撃を受けてしまった。
清明　ＬＰ３５００→３０００
お互いにまだ１度も攻撃をしていないのに、僕のライフはすでに半分近く削られてしまった。今の時点では勝負の流れは完全にオブライエンに来ている、このままだとまず

い。どうにか次のドローでヴォルカニック・エッジかブレイズ・キャノン、せめてどちらかだけでも無力化しないと。

いや、待て待て。ブレイズ・キャノンには手札コスト、それも攻撃力５００以下の炎族というかなり条件の限られたコストが必要なことを思い出した。確かにデッキのモンスターの比率はある程度そのために調整してあるだろうけど、少なくとも次のターンで早急に対策を考える必要もないか。

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

「僕にはまだこの手があるね。ドロー、グレイドル・コブラを召喚！そしてトラップカード、グレイドル・スプリットを発動！これは発動後装備カードになって、攻撃力を５００ポイントアップさせる」

銀色の水たまりから赤いコブラの姿が湧きあがり、長い体でどっしりととぐろを巻く。普段ならここで戦闘破壊を待つところだけど、向こうにその気がないのならばこっちも無理にやるつもりはない。代わりに自分から動くまでだ。

グレイドル・コブラ　攻１０００→１５００

「そしてグレイドル・スプリットのさらなる効果を発動！装備されたこのカードを墓地に送ることで装備モンスターを破壊し、デッキから名前の異なるグレイドルモンスターを2体まで特殊召喚する。イーグル、そして2体目のコブラを特殊召喚！」

コブラの体がいきなり頭から3つに裂け、そのパーツがそれぞれ独立、再生して1つは2匹目のコブラに、そしてもう1つは黄色い鳥の姿に変わる。そして残りの1つは銀色の水たまりとなって地を這い、ヴォルカニック・ロケットの足元に潜り込んだ。

グレイドル・コブラ　攻１０００

グレイドル・イーグル　攻１５００

「なるほど、モンスターの数を増やしたか。だがそんなことをしたところで、俺のヴォルカニック・バーンには無意味だ」

「だろうね。だけど僕の狙いはそこじゃない、トラップカードの効果で破壊された1匹目のコブラの効果発動、相手モンスター1体に寄生してそのコントロールを永続的に得る！そしてその対象とするのはヴォルカニック・ロケット！」

潜り込んでいた銀色の液体が文字通りロケットのように流線形をしたモンスターの表面を這い、その内部へと入ってゆく。

「寄生完了、ヴォルカニック・ロケットでヴォルカニック・エッジに攻撃！」

ヴォルカニック・ロケット　攻１９００→ヴォルカニック・エッジ　攻１８００（破壊）

オブライエン　ＬＰ４０００→３９００

「そのままバトル、コブラとイーグルでダブルダイレクトアタック！」

「永続トラップ発動、フレイム・ウォール！このカードは墓地の炎族モンスターをゲームから除外し、相手の直接攻撃１回をストップさせる。俺は墓地のエッジとバレットをゲームから除外し、その攻撃を無効にする！」

２体のグレイドルの猛攻が、噴き上がる炎の壁に阻まれる。惜しい、この攻撃が両方通れば大ダメージだったのに。だけど気を落としてはいられない、まだやることがあるのだ。

「だったらメイン２にリバースカード、海竜神の加護を発動！このターンレベル３以下の水属性モンスターは、戦闘でもカード効果でも破壊されない。グレイドル・スプリットには呼び出したモンスターをエンドフェイズに破壊するデメリットがあるけど、この効果が切れるより先にその処理を済ませておけばデメリットなしでイーグルとコブラを場に出したままにできるって寸法さ。僕はこれで、ターンエンド」

オブライエン　ＬＰ３９００　手札：４

モンスター：なし

魔法・罠：フレイム・ウォール

清明　ＬＰ３０００　手札：３

モンスター：グレイドル・イーグル（攻）

グレイドル・コブラ（攻）

ヴォルカニック・ロケット（攻・コブラ）
魔法・罠：グレイドル・コブラ（ロケット）
「俺のターン、ドロー。最初に1つ謝っておこう、正直言ってこのデュエルが始まる前、俺はお前のことを舐めてかかっていた。お前の評判はある程度聞いてはいたが、それでも俺のライフに傷を負わすことができるとは思わなかった」
「僕の名前もついに海を渡って知れ渡ったのかね。別にいいよ、舐めてくれた方がこっちとしてはやりやすいさね」
ちょっとムッとしたのでそう返すと、ほんの少し唇を歪ませて苦笑するオブライエン。まったく、ダメージ1つ通らないとかどれだけ雑魚扱いしてたんだか。だからこそひっくり返しがいがあるんだけどね。
「スタンバイフェイズ、俺はフレイム・ウォールの維持コストとして５００ライフを支払う。そしてメインフェイズ、俺は場のブレイズ・キャノンを墓地に送り、その改良型……ブレイズ・キャノン―トライデントを発動する！」
トライデントの名の通り、主砲が３つに分かれた第２のブレイズ・キャノンがオブライエンの場にそびえ立つ。改良型、というからには、何か先ほどとは違う部分があるのだろう。ブレイズ・キャノンの欠点を補うような何かが。
オブライエン　ＬＰ３９００→３４００

「トライデントは初期のブレイズ・キャノンとは違い、手札から炎族モンスターを墓地に送ることでモンスターを破壊し、相手に５００ポイントのダメージを与える」
「攻撃力制限がなくなった、ってことか……！」
　まあ、強化するとしたらその１点だろう。だがオブライエンが手札から見せたモンスターは、僕の想像を上回っていた。
「俺は攻撃力５００、ヴォルカニック・バックショットを墓地に送る！まずトライデントの効果でグレイドル・イーグルを破壊し、さらにバックショットの効果を発動！このカードがブレイズ・キャノンの弾となった時手札及びデッキから２体のバックショットを追加で墓地に送り、相手モンスターをすべて破壊する！」
「なっ……」
「殲滅せよ、バックショット！」
　トライデントの３つの砲台からそれぞれ１体ずつの三つ首のトカゲが打ち出されてロケットを、イーグルを、そしてコブラをそれぞれ焼き尽くす。１瞬にして、僕のフィールドの３体ものモンスターが完全殲滅された。
「まさか３体がいっぺんにやられるなんて……」
「まだだ！バックショットは墓地に送られた時、相手ライフに５００のダメージを与える。それが３体分と、さらにトライデントの効果ダメージ５００を受けてみろ！」

「うわっ!?」

清明　ＬＰ３０００→１０００

地面から炎が噴き上がり、僕の全身を覆う。一瞬にして初期ライフの半分を奪うその熱の前になすすべもなく、まさしく僕のフィールドは焼け野原になった。

「この効果を使うターン、俺は攻撃宣言を行えない。ヴォルカニック・カウンターを守備表示で召喚し、さらにカードをセットしてターンエンドだ」

ヴォルカニック・カウンター　守１３００

炎を噴き出す獣のようなモンスターが、オブライエンのフィールドで威嚇の体勢をとる。見かけに反して守備力は低いけど、さっきからバーン効果を持つモンスターが多いヴォルカニックのことだ。恐らくただの壁では済まないだろう。そしてそれより問題なのが、炎族を墓地に送るだけでモンスターを破壊して５００のバーンを行うトライデント。仮に守りを固めたとしてもトライデントの1撃が飛んでくるし、かと言ってモンスターを出さなければ確かにトライデントからは身を守れるけどモンスターを出せば直接攻撃されるから結局はその場でお陀仏はほぼ確定みたいなものだ。面白い、燃えてきた!

「僕のターン!これがラストチャンス……引いてみせる、ドロー!」

ドローカードを確認する。来た、このカードだ!

「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、このカードはリリースなしで召喚できる。天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」

魂のこもった鎧が、天空かなたから降臨する。目には目を、歯には歯を……炎を使うヴォルカニックには、こっちも炎で対抗してやろう。

時械神メタイオン　攻０

「メタイオン先生でカウンターに攻撃、ケテルの大火！そしてこの神の炎はモンスターを傷つけることなく浄化し、さらに相手のライフを直接焼き払う！」

「何？」

メタイオン先生の放った炎が、燃え盛るオブライエンのモンスターを包み込む。さすがに神の炎は並のものじゃない、フィールドは一瞬でメタイオン先生のみの場所となった。

時械神メタイオン　攻０→ヴォルカニック・カウンター　守１３００

オブライエン　ＬＰ３４００→３１００

「時械神メタイオンがバトルした時そのダメージは０となり、さらにバトルフェイズ終了時にお互いのフィールドに存在する自身以外の全モンスターをバウンスしてその数１体につき３００ダメージを与える！カードをセットして、ターンエンド。先に言っておくけど、メタイオン先生は次の僕のスタンバイフェイズにデッキに戻る効果がある

よ」
「そうか。エンドフェイズに永続トラップ、ブレイズ・キャノン・マガジンを発動！1ターンに1度手札のヴォルカニックを墓地に送ることで、カードを1枚ドローする。バウンスされたカウンターを墓地に送り、1枚ドローだ」
オブライエン　ＬＰ３１００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：フレイム・ウォール
ブレイズ・キャノン―トライデント
ブレイズ・キャノン・マガジン
清明　ＬＰ１０００　手札：２
モンスター：時械神メタイオン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
さて。おそらく今、オブライエンは迷っているはずだ。結局このターン、トライデントが場に存在したままのことに変わりはない。トライデントの効果を知っているにもかかわらずモンスターを並べてきた僕の行動を見たうえで、あえて仕掛けてくるのか。それとも警戒し、動かないままターンを消費するのか。
「俺のターン、ドロー。スタンバイフェイズにフレイム・ウォールの維持コスト５００ポ

イントを支払う。そして速攻魔法、異次元からの埋葬を発動。ゲームから除外されたヴォルカニック・エッジ、バレットを墓地に戻す。さらに炎帝近衛兵を召喚し、効果を発動。自分の墓地から炎族モンスターを４体選択し、デッキに戻すことでカードを２枚ドローする……俺が選ぶのはバックショット２体にロケット、そしてエッジ。ドロー！」

オブライエン　ＬＰ３１００→２６００

炎帝近衛兵　攻１７００

「魔法カード、死者転生を発動。手札１枚をコストに、墓地からバックショットを手札に加える」

これで、オブライエンのデッキには２体、手札に１体のバックショットがある。つまり、これでいつでもさっきの強烈な一斉射撃をまた飛ばすことができるというわけだ。なるほど、これを狙うためにわざわざ炎帝近衛兵の効果に繋げたのか。

「このデュエルもこれで終わりだ、ブレイズ・キャノン・マガジンの効果をもう１度発動！手札のバックショットをコストにしてカードを１枚ドローし、そしてブレイズ・キャノンの効果で墓地に送られたバックショットの効果！３体を墓地に送ることで殲滅効果を発動し、１５００ポイントのダメージを受けてみろ！」

メタイオン先生は戦闘でも効果でも倒れないから、全滅効果ごときで破壊されたりは

しない……だけど、問題は僕だ。確かに僕のライフが尽きさえすれば、モンスターがどうなろうと問題はないだろう。
「だけど、こんなところで！トラップ発動、レインボー・ライフ！手札１枚をコストに、このターン僕が受けるダメージをすべて回復に変換する！」
清明　ＬＰ１０００→２５００
「かわしたか……」
「まあね。次は何を見せてくれるのさ？」
「ならば見せてやろう、俺のエースを！まずブレイズ・キャノン・マガジンはフィールド上で、ブレイズ・キャノン―トライデントとして扱う。そして場に存在するブレイズ・キャノン―トライデント、つまりマガジンを墓地に送ることで、このカードは特殊召喚できる！出でよ、ヴォルカニック・デビル！」
トライデントが地中から溢れ出る熱にぐずぐずに溶け、その残骸を吹き飛ばすようにこれまでで一番大きな火柱が噴き上がる。溶岩が形を成したかのようなその体は常に周りの空気が揺らぐほどの熱を放ち、頭の上にはまるでたてがみのようになびくオレンジ色の炎が一筋燃え盛っている。その姿はまさに、地獄の底から熱と共に地表に現れた悪魔そのものだ。
ヴォルカニック・デビル　攻３０００

「破壊ができない上に次のターンでデッキに戻るのならば、今攻撃する意味はないな。カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！まずスタンバイフェイズ、メタイオン先生はデッキへと戻る。そして魔法カード、サルベージを発動。墓地から攻撃力１５００以下の水属性2体、グレイドル・コブラ2体を手札に。そしてこの2体をデッキに戻し、強欲なウツボを発動。この効果で、デッキからカードを3枚ドロー！」

バーン戦術からうってかわって、急に表れた高打点モンスター。なるほど、ビートとバーンの使い分けができるデッキという訳か。さすがはウェスト校主席、ノース校トップの鎧田に負けず劣らずの厄介な敵だ。

いや、だったというべきか。僕の手札には今のドローで、勝つために必要な要素は完璧に揃った……！

「魔法カード、浮上を発動。墓地からレベル3の水族モンスター、グレイドル・イーグルを蘇生！」

「む……？」

再び銀色の水たまりが湧きあがり、黄色の鳥がその翼を構成する。

グレイドル・イーグル　守５００

「さらに手札から、グレイドル・アリゲーターを召喚する」

グレイドル・アリゲーター　攻５００
「一体何をする気だ？」
「黙って見てな、手札からグレイドル・スライムの効果発動！このカードはフィールドのグレイドルカード２枚を破壊することで手札から特殊召喚できる！」
グレイドル・スライム　守２０００
イーグルとアリゲーターが溶け崩れ、寄り集まってグレイ型宇宙人を模したような姿の銀色のスライムになる。その長い指で地面をさすと、その場所から銀色の水たまりがまた湧きあがった。
「この瞬間自身の効果で特殊召喚に成功したスライムと、モンスター効果によって破壊されたイーグルの効果発動！イーグルでヴォルカニック・デビルに寄生し、さらにスライムの効果で墓地のアリゲーターを蘇生！これで一発逆転だ！」
グレイドル・アリゲーター　守１５００
「……まさか俺のヴォルカニック・デビルまでコントロールを奪うとは、たいしたものだ」
「褒め言葉として受け取っておくよ。バトル、デビルで炎帝近衛兵に攻撃！」
銀色の紋章が頭に輝くデビルが、火山弾を勢いよく打ち出して真っすぐ赤い鱗に覆われた竜人のようなモンスターを狙う。だがその灼熱の攻撃から一切目を逸らすことな

く、オブライエンが更なる伏せカードを発動させた。
「だが、すでに一度かかった手にそう簡単にかかりはしない。その寄生が俺の計算のうちだとしたら、どうする?速攻魔法、突進を発動!」
「モンスターの攻撃力を７００ポイントアップさせるカード?そんなことしたところで、ダメージを減らす役にしか……」
「俺はこの効果を、ヴォルカニック・デビルに対して発動させる!」
　唖然として見守る中、デビルの筋肉が突然盛り上がる。より強大な熱量を受け一回りも二回りも体が大きくなり、その分だけ火山弾のサイズと威力も跳ね上がった。
　ヴォルカニック・デビル　攻３０００→３７００→炎帝近衛兵　攻１７００（破壊）
　オブライエン　ＬＰ２６００→６００
「なんでわざわざ、自分のダメージを跳ね上げるような真似を……」
「教えてやろう、墓地からヴォルカニック・カウンターの効果を発動!このカードと他の炎属性モンスターが墓地に存在して俺が戦闘ダメージを受けた時、このカードを除外することで俺の受けた戦闘ダメージと同じ数値のダメージを相手に与える!」
「嘘でしょ!?ぐわっ!?」
　突如半透明になって現れた炎の獣が飛びついてきて、その牙でしたたかに僕に噛みつく。まさに肉を切らせて骨を断つ、なんてとんでもない戦法なんだ。これだけのデュエ

ルの腕があれば、そりゃあ主席にでもなんでもなれるだろう。

清明　ＬＰ２５００→５００

「だけど、まだまだ……！僕は、これでターンエンド！」

オブライエン　ＬＰ６００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：フレイム・ウォール

ブレイズ・キャノン―トライデント

清明　ＬＰ５００　手札：０

モンスター：ヴォルカニック・デビル（攻・イーグル）

グレイドル・スライム（守）

グレイドル・アリゲーター（守）

魔法・罠：グレイドル・イーグル（デビル）

オブライエンの場にはまだブレイズ・キャノン・トライデントがあり、僕の場には３体のモンスターがいる。お互いにハンドレス状態の今、次のオブライエンのターンで炎族モンスターを引かれない限り僕の負けはない。これは単純な運、リアルラックの勝負だ。

だがオブライエンは表情１つ変えることなく、無造作にも見える動きでカードを引い

た。
「残念だが、このデュエルはもう終わっている。確かに運の勝負にもつれ込んだとしたら、俺の今引いたカードは２枚目のマガジンでお前の勝ちだ」
「どういう意味？」
どうも言い方が引っ掛かる。すると突然オブライエンの足元の床が爆ぜ、炎に身を包んだ小さなトカゲが跳ね上がった。見ているうちに見覚えのあるそのトカゲが、いまだこちらを向く三つ又の砲台の、真ん中の１つにするりと入り込んでいった。
「墓地に存在するヴォルカニック・バレットの効果を発動。このカードが墓地に存在するとき１ターンに１度だけ、５００ライフを払うことでデッキから同名カードを１枚サーチすることができる」
「なっ……!?」
オブライエン　ＬＰ６００→１００
「ブレイズ・キャノン―トライデントの効果発動！今加えたバレットをコストに、グレイドル・スライムを破壊し５００ダメージを与える！」
勢いよく放たれた炎の弾丸が、銀色の宇宙人型スライムの頭部に命中して爆散させる。首から上がまとめて吹っ飛ばされて統制を無くした体が銀色の水たまりになって消えていく横で、爆ぜた火の粉が僕にも降りかかった。

清明　ＬＰ５００→０

「あー、負けたー……」

悔いがないと言えば嘘になる。どれだけ追いつめたって、結局負けちゃううちは僕もまだまだだ。いや、ただ負けただけならここまで悔しくはないだろう。ただ問題なのは、途中から完全に僕の行動が読まれて誘導されていたことだ。今になって思い返せば確かに、グレイドルがコントロールを奪うテーマだということを知ったあのタイミングで攻撃力３０００ものヴォルカニック・デビルをのこのこ特殊召喚したのは不自然だった。

要するにあの時にはすでに、オブライエンにはこの結果が予想できていたのだろう。そして僕はまんまと読み通りにコントロール奪取した、というよりさせられたデビルで攻撃を行い、カウンターの一撃で大ダメージを受け、墓地に温存してあったバレットの効果で弾を補充したトライデントの一撃を喰らったわけだ。

ライフポイントだけ見ればパッと見ギリギリの勝負でも、デュエルの流れ自体はほぼオブライエンに持ってかれていた。これが、デュエルアカデミアウェスト校トップの実力か。

「ありがとう、わざわざ付き合ってくれて」
「いや、礼を言いたいのは俺の方だ。対人戦は久しぶりだったからな。１人で訓練していては絶対に味わえない、勝負の感覚を思い出すことができた」
「そりゃどうも。……でも、次は負けないよ」
まだ心は折れてないことを示すために言い返し、右手を差し出す。一瞬その手を困ったように見ていたオブライエンだったが、すぐにその意味を理解して苦笑しつつも右腕を差し出すと、ぐっと握り返してきた。
そんなことをしている間に、すっかり時間がたってしまったようだ。ふと何気なく玄関ホール備え付けの大時計に目をやると、もはや十代とヨハンのデュエルまでほぼ間がない。
「あっちゃー、まだいい席取れるかな？じゃーねー、また今度会おう！あ、それとその中身、ちゃんと他の人たちにも渡しておいてよー！」
「わかった。仕方ないな、気は進まないがそれぐらいなら問題もないだろう。引き受けた」
デュエルが始まるまで、あと１０分強。まずは場所を取ることが最優先として……だけどそれ以外にも考えることが、今日のデュエルからは見えてきた。
グレイドルの寄生は恐ろしい力を持つが、その強さは攻め手が単調になる弱点と裏返

しの関係にある。それでも並みの相手なら、ポテンシャルの高さを生かして押し切ることもできるだろう。だが、すでにタネがばれている者や今のように応用力の高い強者が相手だったら?目の前の敵にやみくもに寄生するだけだと、今回のように寄生相手を誘導されてこっちが掌の上で踊らされることになってしまう。かといって寄生しないという選択は、グレイドル単体での戦闘能力の低さを考えると現実的でない。元から僕のデッキに入っているモンスターたちも頑張ってくれてはいるのだが、どうしたって改造前と比べてデッキそのものの戦闘力が低くなっていることは否めないわけで。

これはこのデッキの致命的な弱点だ。ここを補完しない限り、僕はグレイドルのポテンシャルを最大限に引き出せていない。何か改善案を考えなければならないだろう。

ターン７５　鉄砲水と七色の宝玉

「まさかこんな形で、十代の親友とデュエルすることになるとはな。俺から言い出しておいてなんだが、せっかく精霊が見える者同士、君とはもっと別の形でデュエルしたかったよ」

そう言うヨハン相手に、僕は軽く肩をすくめて見せる。

「ま、これも頼まれごとなんでね。僕にとっては友達の１人からの。それじゃあ、デュエルと洒落込もうか」

もはや何を言っても無駄と判断したのか、デュエルディスクを構えるヨハン。そしてその腕には、不気味に輝く腕輪のようなデスベルト。僕も同じく腕にはめたデスベルトを一瞥し、デュエルディスクを起動させた。

「「デュエル！」」

……さて、なぜ僕とヨハンがデュエルすることになったのか。その訳は、今日の昼にまでさかのぼる。

十代とヨハン、ネオスペーシアンと宝玉獣の戦いから丸一日が経った。それにしても、今日のデュエルは面白かった。たった7枚しかモンスターが入っていないデッキであそこまで戦線を維持できるだなんて、手札事故を絶対に起こさない十代と同じくヨハンもかなり精霊から愛されていることがよくわかった。

というのもこれはチャクチャルさんからの受け売りだけど、いわゆるデッキの事故率というのはひとえに自分のデッキとの相性、というかどれだけデッキが頑張ってくれるかによって決まるからだ……らしい。例えば十代のデッキなんかは、ただでさえコンボ性が高い融合軸のＨＥＲＯに加えて今はうまくコンタクト融合につなげないと厳しいネオスペーシアンまで入っているから、仮に僕が渡されたとしても絶対に十代みたいなぶん回しはできない。事故が激しくて融合召喚どころか、モンスターを出すのがやっとだろう。また僕のデッキも、枚数の多さから考えるとあり得ないぐらいに事故率は低い。精霊の皆が、陰ながら僕のデッキに力を貸してくれているからだ。ただ肝心の僕が、その力を使いこなせていないだけで。

「心機一転、これから頑張ろうねー」

精霊たちに、そして自分自身に言い聞かせて大きく背伸びをすると、腕に付けた腕輪のようなものが電球の光を反射して鈍く光った。これこそがプロフェッサー・コブラの導入した装置……えーっと、なんだっけ。デスクなんちゃらデュエル用のデスベルト

だ。いやでも、デスクって机だよね。いくらなんでも、ちょっとこれじゃあ意味が通じないんじゃなかろうか。
「チャクチャルさん、さっきの話聞いてた？」
『まあな。ディスクロージャーデュエル、だな。マスターの横文字の割にはかなりいい線行っていたぞ』
「……前々からちょいちょい思ってたけど、結構ナチュラルに馬鹿にしてくるよねチャクチャルさん」
『それほどでも』
　それ以上の追及は諦め、改めてデスベルトを見る。なんでもこの凄いマシンは、これをつけた人間がデュエルをするたびにその熱い思いや情熱といったものをエネルギーとして抽出し、数値化することができるという代物らしい。何度聞いてもさすがは海馬コーポレーションの学校、とんでもないテクノロジーだ。
『そこが気にかかるんだ、マスター』
「え？」
　そこで再び、チャクチャルさんから声がかかる。本気で訝しんでいるようなその声音に、なぜか嫌な予感がしてきた。
『確証があるわけでもないし、そもそも機械は私も詳しくないから先ほどは何も言わな

かったが……この技術はどちらかというと我々寄りなのがどうも気にかかる。何かするたびにエネルギーが吸われるなんて、私も昔に頼まれて作ったことがあるが、呪いのマジックアイテムといった方が近いのがな』

「え、ちょ、それって……」

待て待て待て。とりあえず取り外そうとあれこれいじってみるが、どうやら1度付けたら簡単には取り外せない仕様のようだ。留め金ごと捻り潰すぐらいのつもりでやれば外せなくもないだろうけど、これ壊したら弁償代いくらするんだろう、と思うとついつい手から力が抜ける。

それにこれがないと、今後の生活にも困ってしまう。なにしろ少なくともプロフェッサー・コブラが臨時講師をしているうちはここから出たデータを基にして成績が決定するせいで、もし下手にはずして一切僕の分だけデータが送られないとかになるとそのまま退学もあり得るとのことだ。なんとなくだけど、あのおっさんなら脅しじゃなくて本気でやりかねないのが怖い。

『……すまない、脅すつもりはなかったのだが。無論、技術の進歩という可能性もある。とにかくマスター、酷なようだが1度使ってみてくれ。効果の程を直接見てみないと、説明だけでは何とも言えない』

「う、うーん……」

呪いのアイテムなんて言われると、なんだか本当にそんな風にも見えてきた。電球の光を反射するデスベルトが、妙に冷たく光っている気がするのは目の錯覚か気の迷いだろうか。

『万一厄介な代物なら、私のエネルギーを代わりに流すなり力技で解除するなり、私が責任を取ってどうにでもしてみせる。だから案じないでくれ、マスターは私が守ろう』

「ありがと。でもチャクチャルさんの言うとおり、まずはとにかく実戦で確かめてみないとね」

もしアレな代物だった場合、その相手にも迷惑をかけることになるわけだけど。まあなんだかんだ言ってもここは学校で、デスベルトはその支給品だ。まさか1年の三幻魔、2年の光の結社と続いてこれ以上何かが起きるわけもないだろう。そんなことになったら、さすがに波乱万丈の学園生活なんてもんじゃない。

なんでもデスデュエルは、今日の放課後のどこかで正式に開始のアナウンスが入るらしい。どうせなら人柱的な意味でも1番乗りがいいし、誰かいい相手を探しに行かなくちゃ。デッキの確認を最後に行い、デュエルディスクとデスベルトだけ持って外に出た。

特に行きたい場所もなかったので風任せに森の方へ歩いていくと、やがて海沿いの崖に出る。この辺りは特に高くて急な場所で、ロープの1本も張ってないのは危ないん

じゃないだろうかといつ来ても思うけど事故が起きたなんて話を聞いたことがないあたり大丈夫なんだろう。潮風に当たりながらそんな場所をふらついていると、何か異様な光景が見えた。

……いや、異様なんてもんじゃない。なんだあれは、変な奴がいるぞ。その人影はなぜか崖際の木の海に向かって突き出た枝にロープを固定し、そこに自分の足をくくりつけていた。もしロープが切れたら１０メートルはあろうかというこの崖を真っ逆さまなのでこれだけでも十分訳が分からないのだが、それだけではなかった。なんとその人影はそんな天地逆転した姿勢のままで体がぶれないようにバランスを取りつつ、腕のデュエルディスクからカードを引いていたのだ。シュールすぎて笑いも湧いてこない光景だったが、さらに近づいてよく見るとその人影は僕の見知った顔だった。

「……オブライエン!?」

今までその逆さ吊りに神経を集中させていたのか、声をかけて初めて僕が来ていることに気が付いたらしい。何か装置を操作するとロープの巻き上げ機構が働き、シュルシュルと地上に帰ってきた。

「またお前か。今度は何の用だ」

「いやそれこっちが聞きたいね。何やってたの一体」

わかるまで絶対帰らない、という態度が顔に出ていたのだろうか。一度は無視しよう

としたらしいオブライエンも、僕の顔を一目見るとため息をついてあっさり口を割った。
「俺が昔から行っている訓練の一環だ。自らの身を追い込むことで神経が研ぎ澄まされ、次のドローカードさえもある程度読み取れるようになる」
わかったらあっち行けとばかりの鋭い目線には、肩をすくめて気づかないふりをしておいた。なんで神経が研ぎ澄まされるとドローカードが見えてくるのかはこれっぽっちもわからないけど、人の趣味にケチをつける気はない。とりあえず何をしていたのかは分かったので、どうせここで会ったのだからと言いたかったことを言うことにした。
「なるほど。それで修業はいいんだけどさ、昨日はありがとうね」
昨日、つまりオブライエンに頼んで持って行ってもらった手土産だ。昨日十代と意気投合してレッド寮に遊びに来たヨハンから、ちゃんと渡してもらったことに関する裏は取ってある。いや、信用してなかったわけじゃないけどね。一応職人の端くれとして、感想ぐらいは聞いておきたかったのよ。
「気にするな。一度引き受けたことだ」
「いやいや。あ、気に入ったらオブライエンも買いに来てねー、お安くしとくよー」
「……」
営業トークにはスルーですか、そうですか。さすがに昨日の今日でオブライエンとま

たデュエルするのもなんなので、そろそろ別の場所に行ってデスデュエルの相手を探しに行こうとした矢先。水平線を見つめて何かをじっと考えていたオブライエンが、ややためらいながらも口を開いた。
「なあ、少しいいか？どうしても俺には、今日やらねばならないことがあるんだが……」
「うん？」
　何か一言一言、ゆっくりと吟味するような調子で喋り続けるオブライエン。妙な歯切れの悪さに引っかかるものを感じながらも、あえてその点には何も言わずにいておいた。
「確か、遊城十代とお前は親友だったな」
「まーね。入学した時からだから、割合長い付き合いだよ」
「俺は今日、あいつとデュエルするつもりだ」
「ふんふん。きっと十代も喜ぶよ、たいがいなデュエル馬鹿だから」
　何を心配しているのかと気楽に返すと、そうじゃないと首を横に振った。
「それじゃあ駄目なんだ。なあ、教えてくれ。あいつに本気でデュエルさせるためには、どうするのが一番有効なんだ？」
「本気で？いつだってデュエルには本気に見えるけど……そういうことが言いたいんじゃないんだよね、多分」

　へんに気迫のこもったオブライエンの態度に、少し真面目に僕がこれまで見てきた十代の姿をざっと振り返ってみた。だけど少なくとも僕の覚えている限りだと、十代のデュエルに対するスタンスはずっと変わっていない。
　……いや、待てよ。そういえばただ一度、翔からこんな話を聞いたことがある。あれは確か、最初に廃寮に忍び込んだのがばれて迷宮兄弟と退学をかけたデュエルをした時……それからしばらく経って、僕らより先にそのタッグデュエルを終わらせた十代と翔のコンビにその時の様子を聞いてみた時のことだ。

「そういえばさー翔、あの時のタッグデュエルってそっちはどうだったの？十代と翔だとデッキも全然違うんだし、両方ゲート・ガーディアン特化のあの２人相手には結構辛い相手じゃなかった？」
「自分だってワイト使いの夢想さんと組んだくせにー。……でもあの時は、十代のアニキが見たことないぐらい本気だったから」
「あれ、三沢に聞いた時はいつも通り気負わずにデュエルしてたのが一番の強みだったって言ってたけど」
　そう問いなおすと、少し言葉をまとめた後で翔はこう言ったのだ。

「一緒にデュエルしてた僕にはわかるんだよ。確かにそう見えたかもしれないけど、あのデュエルの時アニキはこれまでにないぐらいの実力が出てたッス」

その時は深く考えずに聞いてたけど、この会話自体はなぜだか心に残っていた。その、これまでにないぐらいの実力を出した十代が見てみたいとでも心のどこかで思ってたのかもしれない。とにかくその話が本当だとすると、十代の性格から考えて多分こういうことだろう。

「あえてなにか言うとしたなら……割とベタだけど友達、かな。友達のためなら、『これまでにないぐらい本気になる』かも」

そう言うと、また考え込むオブライエン。だけど、今度の沈黙は短かった。そしてあたりに人がいないことを確認し、僕にあることを頼みはじめた。そして最初は乗り気じゃなかったけど、最終的には僕もその話に頷くことにした。今一つ細かいところを教えてくれてないのはちょっと気に食わなかったけど、オブライエンの作戦というのはこうだ。

まず、何らかの方法で十代の友達……たとえば翔や剣山、万丈目あたりをこちらに呼び寄せておく。そして探しに来た十代をオブライエンがこいつを返してほしくば俺と

デュエルだ、とか何とか言って1対1でデュエルするという、単純だけど効果的だろう作戦だ。ちなみに人質役が僕じゃないのは、僕に別の役割が与えられたからだ。というのも恐らく来るであろう十代以外のメンツがデュエルに手出ししないよう、足止めをする必要があるらしい。

……わかりづらいけど、要するにデュエルしてればいいんだろう。難しくない話なら、僕にとっては専門分野だ。

「決行は今日の夜、場所はこの木の下だ。いいな」

「了解。じゃあ、僕はいったん寮に戻るよ。夕飯の支度もしなくちゃだし、あんまり長いと僕を探しに出てきかねないし。口は割らないから安心して」

一応協力にオーケーを出す条件として、誰にも危害は加えない、その約束だけはきっちりと取り付けておいた。ちょっと警戒しすぎな気もしたけど、どうもこの2年間のことを思うといくら警戒してもし足りない気がしてならないのだ。いや、もちろん僕にだってわかっている。僕もオブライエンもただの学生だ、これまでのセブンスターズや光の結社と同じノリで世の中が動くわけがない。実は、それはそれで寂しいのも否定できないけど。それでもやっぱり、心配なものは心配なのだ。

さ、約束も取り付けたし、これから少しの間は気を張ってなくちゃね。隠し事なんてちょっとワクワクするけど、それが態度に出て怪しまれたりしたらオブライエンに顔向

けできない。そんなのんきなことを考えていた。

……そしてその後は、特に変わったことはない。計画通り、日が暮れても姿を見せない翔を心配した十代が、なぜかまだいたヨハンと剣山を連れて外へと探しに行く。僕はというと声をかけられる寸前に2階の窓から飛び出て猛ダッシュで森の中に駆け込み、そこからオブライエンのいる場所とレッド寮との中間地点あたりに先回り。しばらく待っていると、無事に3人がやって来たわけで。

「やっほー」

「清明!ちょうどいい、翔がいなくなっちまったから、一緒に探して……」

「翔だったら、この向こうの崖のあたりにいるよ」

「え?お前、何言って……」

さすがにこのあたりで、何かがおかしいと気づいたらしい。一斉に警戒する十代たちに、慌てて止めるジェスチャーをする。このメンバーで3対1とか、もう絶対に勝てる気がしない。

「十代は通っていいよ、そうさせてくれって言われてるし」

「え?清明、一体この向こうに誰がいるんだ?」

んー、なんて言おうか。まあでもあっち行けばすぐわかることだし、別に隠す理由もないか。

「オブライエン。これ以上は僕もよく知らないけど、ご指名は十代だよ」
「一体……ええい、清明！お前にも後で話を聞かせてもらうからな！無事でいろよ、翔ー！」
一瞬迷った後、十代が森の中を走っていく。その後ろ姿を見送った後で視線を元に戻すと、こっそり回り込んでいこうとしていたヨハンと剣山が見えた。おっと危ない、まったく油断も隙もあったもんじゃない。
「非常に悪いんだけどね、こっから先は僕の時間稼ぎに付き合ってもらうよ」
「くっ……だったら俺が相手するドン！」
真っ先に反応する剣山。そのままデュエルディスクを構えようとするが、その前にヨハンが割り込んだ。
「いや、ここは俺が相手だ」

そして、時間は冒頭の時点に戻る。グレイドル加入前の僕が手も足も出なかった、ネオスペーシアンの力を手に入れた十代。その十代と互角に戦う実力者が相手となると、これは厳しいデュエルになりそうだ。そして、だからこそ楽しいデュエルになりそうだ。

「僕のターン！グリズリーマザー、攻撃表示！」
　いわゆる属性リクルーターの1体である、水色の体毛で覆われた大熊がその2本の足で大地を踏みしめる。
　グリズリーマザー　攻１４００
「まずはこんな所かな。僕はこれで、ターンエンド」
「俺のターン、ドロー！何をリクルートするのか見せてもらうぜ。来い、トパーズ・タイガー！」
『ああ、任せておけ！』
　頭に角の代わりに剣を生やした、黄色がかった白い虎。トパーズをつかさどるヨハンのデッキの切り込み役だ。
　宝玉獣　トパーズ・タイガー　攻１６００
「これが、宝玉獣……さすがに客席から見るのとこうやって正面から見るのじゃあ、だいぶ違うね」
『ありがとうよ。まったく、デュエルアカデミア本校ってのはこんなに精霊が見える奴ばっかり集まってきてんのか？向こうとはえらい違いだぜ』
「ははは、そうかもな。バトルだ、トパーズ・タイガーでグリズリーマザーを攻撃、トパーズ・バイト！そしてこの瞬間トパーズ・タイガーの効果により、モンスターに攻撃を行

う時のみ攻撃力を４００アップさせる！」
宝玉獣　トパーズ・タイガー　攻１６００→２０００→グリズリーマザー　攻１４００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→３４００
「この瞬間、戦闘破壊されたグリズリーマザーの効果を発動！デッキから攻撃力１５００以下の水属性モンスター……ツーヘッド・シャークを特殊召喚！」
上下に分かれた２つの口を持つシャークモンスターの１体、ツーヘッド・シャーク。僕のデッキを割と初期のころからその攻撃的な効果でアタッカーとして支え続けてきてくれたモンスターだ。
ツーヘッド・シャーク　攻１２００
「トパーズ・タイガーがいるのにあえて攻撃力１２００のモンスターを？メイン２にカードを２枚セットし、ターンエンドだ」
まずはお互い、様子見といったところだろうか。勝負が動くのはこれからだ。
清明　ＬＰ：３４００　手札：４
モンスター：ツーヘッド・シャーク（攻）
魔法・罠：なし
ヨハン　ＬＰ：４０００　手札：３

モンスター：宝玉獣　トパーズ・タイガー（攻）
魔法・罠：2（伏せ）
「僕のターン、ドロー。魔法カード発動、アクア・ジェット！このカードの効果により、魚族モンスターであるツーヘッドは攻撃力が１０００アップ！さらに、ハリマンボウを召喚！」
ツーヘッド・シャーク　攻１２００→２２００
ハリマンボウ　攻１５００
ツーヘッド・シャークは2回攻撃の能力を持つため、このターンで与えられる総ダメージは攻撃力の倍の４４００。さらにハリマンボウの一撃が乗れば、このターンで一気にけりをつけることもできるという寸法だ。もちろんそううまくいくとは思っていないけど、その伏せてある防御札を引っぺがしてやることはできる。
「バトル、ツーヘッド・シャークでトパーズ・タイガーに攻撃！」
『ちいっ……！』
やぶれかぶれで爪を振り上げ突進してきたトパーズ・タイガーの攻撃を、アクア・ジェットにより強化されたスピードでひらりとかわしたツーヘッド・シャークがそのまま横に回り込んで脇腹を噛み砕く。まずは一撃、これは通った！
ツーヘッド・シャーク　攻２２００→宝玉獣　トパーズ・タイガー　攻１６００（破

壊）

ヨハン　ＬＰ４０００→３４００

「よくも俺の宝玉獣を！だが、昨日のデュエルを見ていたなら知ってるよな？宝玉獣は破壊されても永続魔法の扱いとなり、宝玉状態でフィールドに留まり続ける！」

その言葉通り、ヨハンの伏せた２枚のカードの横に大きなトパーズの塊が浮き上がる。だがそれだけではなく、その動きに反応して伏せカードのうち１枚が表になった。

「さらに今の破壊をトリガーとして永続トラップ発動、宝玉の集結！このカードは俺のフィールドで宝玉獣が破壊された時、デッキから別の宝玉獣を特殊召喚できる！来てくれ、サファイア・ペガサス！」

トパーズが放つオレンジ色の光に導かれ、青色の宝石……サファイアを額に持つ天馬が翼を折りたたんだ防御姿勢で特殊召喚される。

宝玉獣　サファイア・ペガサス　守１２００

『どうやら私の出番のようだな、ヨハン』

「ああ、ここはお前にどうしても頼みたくてな。サファイア・ペガサスはフィールドに出た時、手札・デッキ・墓地から宝玉獣を１体宝玉状態で場に出すことができる能力がある。俺はデッキに眠る宝玉獣、アメジスト・キャットを宝玉にするぜ。サファイア・コーリング！」

サファイア色の輝きが、新たなる宝石……妖しく紫に輝くアメジストを展開する。昨日も思ったけど、このデッキはどの宝石も凄くキラキラしているから見てて飽きない。だって悪く言うつもりはないけど、グレイドルなんてモロに気色悪い系統だし。ビジュアル要素を全部かなぐり捨ててポテンシャルにステータス全振りしたみたいな子ばっかりだし。個人的にはあの子たちもあのつぶらな瞳なんてかわいいと思うけどね、絶っ対万人受けしないだけで。

「守備力１２００なら、ハリマンボウでも突破できる！ツーヘッドの２回目の攻撃は次に回すとして、今はハリマンボウで追加攻撃！」

ハリマンボウが体を開き、無数の針をミサイルのように打ち出す。だがペガサスはその翼を一振りし、なんとその全弾を撃ち返して見せた。自らの針を受けてしまい、ハリマンボウが痛みにその小さな顔をしかめる。

ハリマンボウ　攻１５００↓宝玉獣　サファイア・ペガサス　守１２００↓２４００

清明　ＬＰ３４００↓２５００

「守備力が……倍に!?」

「その通り。俺は今の攻撃時にこのトラップカード、Ｄ２シールドを発動していたのさ。この効果によって、俺のモンスター１体の守備力は元々の倍の数値になる。残念だったな、ツーヘッド・シャークから攻撃してれば少なくともダメージは受けずに済んだのに」

「ちぇっ、ちょっとうかつだったかね。メイン２に移行してカードをセット、僕はこれでターンエンド」

宝玉を出して終わりかと思ったら、ちゃんと生き残る算段も立てていたってわけか。そう来なくっちゃ、面白くないね。

「俺のターン！まずは宝玉獣　コバルト・イーグルを召喚。そしてサファイア・ペガサスを攻撃表示に変更し、さらに装備魔法、宝玉の解放を装備。この効果により、サファイア・ペガサスの攻撃力はさらに８００ポイントアップするぜ」

『いよっしゃあー！行くぜ、ヨハン！』

サファイアの透き通るような青とはまた違う、水色に近い宝石を胸に持つ大きな鷹が、意気揚々と舞い上がる。その傍らで、ペガサスの額に輝くサファイアがその輝きをより一層増した。

宝玉獣　コバルト・イーグル　攻１４００

宝玉獣　サファイア・ペガサス　攻１８００→２６００

なるほど、打点で上回るツーヘッド・シャークに対して、単純に向こうも打点を上げての正面突破を仕掛けに来たわけか。でも除去カードを一切詰まないことを明言するヨハンのデッキなら、確かに攻撃力が上のモンスターに競り勝つにはそれが一番有用か。ポセイドン・ウェーブあたりがセットしてあればよかったけど、あいにくそんなも

のここにはない。
「まだまだ終わらないぜ?魔法カード、宝玉の契約!このカードの効果で、宝玉となっている俺のトパーズ・タイガーを再びモンスターとして特殊召喚する!」
「さっき倒したってのに、もう帰ってくるの?」
宝玉獣　トパーズ・タイガー　攻１６００
「さあ、バトルだ!まずはサファイア・ペガサスで、ツーヘッド・シャークに攻撃!サファイア・トルネード!」
宝玉獣　サファイア・ペガサス　攻２６００→ツーヘッド・シャーク　攻２２００（破壊）
清明　ＬＰ２５００→２１００
「次にトパーズ・タイガーでハリマンボウに攻撃、トパーズ・バイト!この瞬間トパーズ・タイガーの効果により、また攻撃力アップだ」
宝玉獣　トパーズ・タイガー　攻１６００→２０００→ハリマンボウ　攻１５００（破壊）
清明　ＬＰ２１００→１６００
これは、さすがに参った。ヨハンのデッキに上級モンスターは1体も入っておらず、それどころかモンスターそのものがたった7体しかいない。なのに、僕のライフはいつ

の間にか半分以下になっている。上級モンスターも最上級モンスターもなしの下級ビートダウンなのにこれほどのスピードでライフが削られるとは、さすがに主席の肩書は伊達じゃない。宝石という見た目に反して戦術に派手さは一切見られないけれど、堅実にそして確実に、アドバンテージとデュエルの流れを両方持っていかれている。

もっとも、こっちとしてもやられっぱなしじゃいられない。

「だけどこの瞬間、墓地に送られたハリマンボウの効果発動！相手モンスター１体、トパーズ・タイガーの攻撃力を５００ポイント下げる！」

『この程度、かすり傷だ……！』

宝玉獣　トパーズ・タイガー　攻１６００→１１００

「大丈夫か？コバルト・イーグルでダイレクトアタック！」

「おっと、それは通せないね！相手の直接攻撃宣言時、手札からゴーストリック・フロストの効果を発動！その攻撃モンスターを裏側守備表示にして、さらにこのカードをセット状態で特殊召喚する！」

『うおっ!?寒っ！』

稲石さん譲りの、防寒着に身を包んだ雪だるまが雪玉を投げつけてコバルト・イーグルの突撃を牽制する。危ない危ない、さすがにこのライフであのダイレクトアタックは洒落にならないからね。

それにここでモンスターを場に残せたことで、次に繋げる布石ができた。
「これも防がれたか。仕方がない、俺はこれでターンエンドだ」
清明　ＬＰ：２１００　手札：１
モンスター：???（ゴーストリック・フロスト）
魔法・罠：１（伏せ）
ヨハン　ＬＰ：３４００　手札：１
モンスター：宝玉獣　サファイア・ペガサス（攻・解放）
宝玉獣　トパーズ・タイガー（攻）
???（宝玉獣　コバルト・イーグル）
魔法・罠：宝玉の集結
宝玉の解放（ペガサス）
宝玉獣　アメジスト・キャット
「僕のターン！セット状態のフロストをリリースして、アドバンス召喚！出て来い、氷帝メビウス！」
氷帝メビウス　攻２４００
「氷帝メビウス、そのカードは！」
「その通り、メビウスはアドバンス召喚時にフィールドの魔法・罠カードを２枚まで破壊

できる！フリーズ・バースト！僕がこの効果で狙うのは宝玉の集結、そして僕のフィールドに存在するこの伏せカード！」

「自分のカードを？」

ヨハンの疑問はもっともだ。何しろ、このデッキにこういったギミック……なんて大げさなものじゃないけど、とにかくこの組み合わせが仕込んであることを知らないんだから。僕が破壊宣言した伏せカードが、勢いよく表になった。

「メビウスの効果にチェーンして永続トラップ、安全地帯を発動！このカードは発動時に攻撃表示モンスター１体を対象にとって、そのモンスターをあらゆる破壊から守ったうえで効果対象にもならなくさせる。だけどそのデメリットとして、このカードが破壊された時にそのモンスターも破壊される……もうわかったよね？これでサファイア・ペガサスを撃破！」

安全地帯は単体除去カードです、オーケー？まあとにかくその指示に従い、メビウスがこちら側と向こう側に無数のつららを生やす。地中から生えたたくさんのそれが、２枚のカードを同時に貫いたように見えた。

そう、見えただけだった。確かに僕の安全地帯はその中心をぐっさりと貫かれていたのだが、宝玉の集結の姿がない。

「宝玉の集結のさらなる効果をチェーン発動させてもらったぜ。このカードを墓地に送

ることでフィールド上の宝玉獣1体と相手フィールドのカード1枚を選択し、その2枚を持主の手札にバウンスする効果だ。俺が選んだのは氷帝メビウスと、俺のフィールドで宝玉となっているアメジスト・キャットの2体！」

「メビウス!?」

メビウスの巨体が風となって消えさり、後にはただ融けかけのつららのみが残った。

「くっ……だけど安全地帯の破壊には成功したから、サファイア・ペガサスだけでも破壊はできたはず！」

「ああ、確かにその通りだ。だがな、俺の発動していた装備魔法、宝玉の解放にはもう1つ効果があるのさ。あのカードは墓地に送られた時、デッキから宝玉獣1体を宝玉化することができる。俺が選ぶのは、アンバー・マンモスだ」

アメジストの塊がヨハンの手札に戻り、すぐその位置には文字通りの琥珀色に輝くアンバーと力を失ったペガサスが変化したサファイアが輝きを放つ。こっちがどれだけ手を尽くしても、決してステータスが特筆して高いわけでも効果が目に見えてチートなわけでもない下級モンスター達の牙城を崩すことができない。頼みの綱の氷帝メビウスすら空振りに終わり、さすがにくじけそうになる心をなんとか奮い立たせた。もし使い手の僕が勝手に諦めたりしたら、その僕を信じてここまで頑張ってくれたこのデッキに対して申し訳が立たないからね。

それに、まだ手がなくなったわけじゃない。このカードがあれば、まだ僕は戦うことができる。
「カードを1枚セットして、ターンエンド」
「俺のターン！コバルト・イーグルを反転召喚して、さらに宝玉獣　アメジスト・キャットを召喚！」
『あら、ようやく私の出番なのかしら？』
「ハハハ、悪い悪い。待たせちまったな」
『冗談よ』
宝玉獣　コバルト・イーグル　攻１４００
宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００
全身薄いピンク色の大型猫が、さすがに猫らしく足音ひとつ立てずにしゃなりしゃなりとヨハンを飛び越えフィールドに着地する。ここまで矢継ぎ早に召喚を決めるなんて全く、つくづくモンスターに愛されてるもんだ。
「さあ、たっぷり暴れてもらうぜ？バトルだ、３体のモンスターで……」
「わざわざ3体目のモンスターを出してきたってことは、それが通るとは思ってないんでしょ？永続トラップ発動、バブル・ブリンガー！このカードがある限り、お互いにレベル４以上のモンスターは直接攻撃できない！」

「やっぱりな。だが、レベル３のアメジスト・キャットにそのトラップは効かないぜ。ダイレクトアタックだ、アメジスト・ネイル！」

立ち上る泡の壁が、天空から襲い来るイーグルと地上から駆けてきたタイガーの攻撃をそれぞれ押しとどめる。しかしアメジスト・キャットだけは正確に泡と泡の間をするりと抜けて近寄ってきて、いささかも勢いを落とすことなくその長い爪を伸ばして手ひどく引っ掻いていった。

宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ２１００→９００

「痛てて……まだまだこれぐらい、生きてりゃ十分安いね」

「そうか。メイン２に魔法カード、鳥合の行進を発動！このカードは自分フィールドに獣・獣戦士・鳥獣族いずれかが存在するときに発動でき、その種類１つにつきカードを１枚ドローする。俺のフィールドには獣族と鳥獣族が存在するから、２枚ドローだ。カードを１枚伏せ、俺はこれでターンエンド」

清明　ＬＰ：９００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：バブル・ブリンガー

ヨハン　ＬＰ：３４００　手札：３

モンスター：宝玉獣　アメジスト・キャット（攻）
宝玉獣　トパーズ・タイガー（攻）
宝玉獣　コバルト・イーグル（攻）
魔法・罠：宝玉獣　アンバー・マンモス
宝玉獣　サファイア・ペガサス

さあ、どうしよう。さっきは強がってみせはしたけど、割と今余裕がない。手札の唯一残ったカードの氷帝メビウスも、リリース要因がいない現状事故要因にしかなっていない。せめてアメジスト・キャットだけでもこのターンで対処しないと、もう一度今の攻撃を喰らうだけの余裕はない。

「僕のターン、ドローー！」

……もっとも、なんだかんだ言って心配はしてないけどね。僕のデッキは、そして僕のカードはありがたいことに、まだ僕を見捨てる気はないらしい。なら、このチャンスを最大限に生かすよう努力するまでだ。

「今引いたモンスター、グレイドル・イーグルを召喚！そしてバトル、イーグルでアメジスト・キャットに攻撃！」

地面から湧き出る銀色の水たまりが黄色の鳥となり、アメジスト・キャットに向かってどこか最後のあがきめいた勢いで突撃を仕掛ける。

グレイドル・イーグル　攻１５００→宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００（破壊）
ヨハン　ＬＰ３４００→３１００
「アメジスト・キャットを宝玉に変更……もうこれで、ターンエンドみたいだな」
ヨハンの言葉に、無言で頷く。今のターン、できる事はすべてやった。実際問題、あれ以上のことは望めないだろう。ただ残念ながらヨハンの今の表情とよく似たものを、僕は知っている。ちょうど、十代が相手の猛攻を耐えきって逆転のターンを始める……お決まりの流れに入る、その寸前みたいな顔だ。
「俺のターン、ドロー！魔法カード、宝玉の導きを発動！このカードは自分フィールドに宝玉化した宝玉獣が２体以上いるとき、デッキから宝玉獣を特殊召喚することができる。さあ来い、ルビー……ルビー・カーバンクル！」
これまでの宝玉獣が全員それなりのサイズだったのに対し、うってかわって小さな猫のような生き物が手札を飛び出てヨハンの肩に飛び乗る。ちょうど、十代のハネクリボーと同じぐらいのサイズだろうか。そんなカーバンクルが尻尾の先についた赤い宝石から光を放ち、休眠状態にあった宝玉たちを照らし出す。
宝玉獣　ルビー・カーバンクル　攻３００
「ルビーは特殊召喚に成功した時、宝玉化した宝玉獣を可能な限りモンスターとして特

殊召喚できる！照らし出せ、ルビー・ハピネス！」
宝玉獣　アンバー・マンモス　攻１７００
宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００
モンスターゾーンがいっぱいなためにサファイア・ペガサスは呼び出されず宝玉のまま。しかし、それでもすでに十分すぎるほどのモンスターの差だ。
「先に言っておくけど、グレイドル・イーグルは破壊された時に相手1体に寄生する能力を持っているからね。生半可な攻撃じゃあ僕のライフは削りきれないよ？」
『あら、そんなに怖い相手なら戦わないでおきましょうか。ねえ、ヨハン？私を呼んだ意味は分かってるわよ？』
精一杯の脅しを軽く受け流し、ヨハンに意味ありげな流し目を寄せるアメジスト・キャット。それにたいして軽く頷くと、ヨハンが最後の伏せカードを表にした。
「アメジスト・キャットは与えるダメージが半分になる代わりに、相手プレイヤーに直接攻撃ができる。そしてこのバトルフェイズにトラップ発動、アサルト・スピリッツ！このカードは発動後装備カードとなり、装備モンスターが攻撃するダメージステップ開始時に手札の攻撃力１０００以下のモンスター1体を墓地に送ることで、その攻撃力分だけエンドフェイズまで装備モンスターの攻撃力をアップさせることができる。攻撃力６００のエメラルド・タートルを墓地へ！」

エメラルド色のオーラがアメジスト・キャットの全身を包み、音もなく駆けだした雌豹がそのしなやかな動きを駆使してグレイドル・イーグルとバブル・ブリンガーによる２重の防御をいともたやすく乗り越え、またしても一瞬にして僕の懐へと飛び込んできた。

『残念だったわね、坊や』

宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００→１８００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ９００→０

……あー、また負けたー。さすがにちょっとへこんでいる横で、ずっと観戦していた剣山が興奮冷めやらぬ様子でヨハンに話しかけていた。

「あの清明先輩が、ほとんど手も足も出ずに……！凄いドン、さすがにデュエルアカデミアアークティック校主席だけのことはあるザウルス！」

「おいおい、褒めても何も出ないぜ？それに……」

「それに？」

そこで一度後ろの会話が途切れたのと視線を感じたので、ヨハンと剣山の方を振り返る。向こうもこちらのことを、真剣そのものの目つきで見つめていた。

「そのデッキについて、何か悩んでいるんだろう？そのせいで本来出せるはずの力の半分も出せていない。それぐらいのこと、デュエルすればわかるさ」
「一体、どういうことだドン？」
　剣山の反応をよそに、僕はただただ驚いていた。というのも、ヨハンの言ったことはまんま図星だからだ。つい昨日オブライエンに完敗したことが、いまだに僕の心に暗い影を落としているのが自分でもよくわかる。
　……僕自身がグレイドルの、そしてそれ以前に使ってきたモンスターたちの力を生かし切れていないんじゃないか。その思いは今もなお、僕を悩ませ続けている。だけど、どうすればいいのかが全く分からない。もっと直接的に言えば、今の僕は行き詰っている。
　だけど、十代にもまだ相談していないそれを、まさかたった１回デュエルしただけで見抜かれるとは。敵わないなあ、本当に。
「なあ、清明。１つ約束してくれよ、またいつかお前が、本当に納得できる自分なりの答えを見つけたら、その時は再戦しようって」
　屈託なく笑い、座り込んだ僕に手を差し伸べてくるヨハン。その言葉に力を込めて頷き、その手を掴んで立ち上がろうとしたところで――――
　ドクン。

デスベルトが突然光を放ち、そこを中心に猛烈な勢いでエネルギーが吸い取られていった。これ、は……授業用の教材の一種だとは信じられないぐらいの思ったより厳しい、下手すると意識を失いかねないほどの喪失感にどうにか耐えていると、同じように苦しそうに息をつくヨハンが見えた。
「こ、今度はどうしたんだドン!?」
「おかしい、昨日十代とデュエルした時はここまでひどくは……なかった、はずなのに……」
その瞬間、なぜか昼間見たオブライエンの顔が脳裏に浮かんだ。人質を取ってでも十代の本気以上の力が見たいとの、あの時僕に彼がした不自然で無茶のある要求。当然、十代は熱くなるだろう。そしてその腕にはまっているのはデュエリストの熱い思いや情熱……すなわち、本気の力を吸い取るデスベルト。
『マスター、今私が……』
「いや、この程度なら平気、ちょっとびっくりしただけだし。それより、今は十代が!」
実際少しの間じっとしていたら、どうにか体調も持ち直してきた。すぐさま立ち上がって、いま思いついてしまったある考えに思いを巡らす。おそらく十代とオブライエンは、あの場所で今もデュエルしているだろう。そしてあんなロープも張ってない危険極まりない崖っぷちでデュエルした後で、何も知らないであろう十代達に今のデスベル

トのショックが突然襲ってきたりしたら?そして、そこで思わずよろめいたりでもしたら?そのまま何かのはずみで足を滑らせたりでもしたら、本気で２人の命に関わる！

「あ、清明せんぱーい!?」

「剣山、悪いけどヨハンお願い！」

それだけ言い残し、座り込んでいた姿勢から急に立ち上がったせいで一瞬ふらついた自分の体に活を入れて走り出す。困惑する剣山の声を後ろに聞きながらもスピードを落とさないよう木と木の間を走り抜けていくと、今まさにそのデュエルが終わろうとしていた。

「これで終わりだ、ネオスで攻撃!ラス・オブ・ネオス！」

「十代、オブライエン、危ない……翔!?」

「清明!?」

ほんの一瞬だけ当初の目的も忘れ、翔の名前を叫んだのにはわけがある。昼間に見た、オブライエンの修行用ワイヤー装置。なんと翔は体中をぐるぐる巻きに縛られた状態で、一本だけ生えた崖際の木からちょうど昼間のオブライエンのように吊り下げられていたのだ。

「落ち着け。デュエルが終わった以上、約束は守る」

慌てて翔が吊るされている木に登り、がっちりと固定されたワイヤーを掴む。誰も止

めに入らないということは、僕が引き上げていいんだろう。
「翔!ちょーっと大人しくしててよ、今引きあげるから、ねっ!」
「う、うん……アニキー!」
最後のねっで腕に力を込めて翔の小柄な体を崖の上に引っ張り上げて縄をほどいてやると、すぐに十代に向かって駆け出して行った。
さて、十代と翔はともかくとして、どうしても僕にはやっておかなきゃいけないことがある。それも、デスベルトの影響が出る前に。ソリッドビジョンの衝撃に吹っ飛ばされてから立ち上がろうとするオブライエンのもとに行き、無言でその胸ぐらをつかんで起き上らせた。いたって落ち着いて息をつくその顔を見つつ、できる限り冷静に声を出す。もっともあまり成功したとは言えず、口から出たのは怒りを押し殺しているのがよくわかるような声だった。
「ねえオブライエン、あれはどういうこと?」
「どういう意味だ?」
「とぼけないでよ。僕は、『誰にも危害は加えない』って約束したから協力したんだよ?縛ってそこらへんに転がしておくだけならまだしも、なんであんなことする必要があったのさ」
怒りに震える僕とは対照的に一切感情を動かすことなく、なんだそんなことかと言い

たげに息をつくオブライエン。それを見て、考えるより先に手が動いていた。次に気づいた時には、すでにその横っ面を張り倒していたのだ。意外にも無言でそれを受けたオブライエンが何か言おうとして口を開いたその瞬間に、その腕に付いたデスベルトが光を放った。

「ぐっ!?」

「大丈夫だったか、翔……うわっ!?」

それと同時に十代のデスベルトもまた光を放ち、持ち主のエネルギーを吸い取りにかかる。どうやらこの２人に対するエネルギー吸収は僕とヨハンが受けたそれよりもう１段とキツいものだったらしく、ふらつくどころかその場に２人して倒れこんでしまった。

よほど苦しいのか激しく息をつくオブライエンを見ているうちに、僕の怒りも干潮の海のように引いていくのが自覚できた。あーもう、だからデスベルトが仕事する前に怒っときたかったのに。こんな苦しそうなところ見せられたら、これ以上怒るに怒れないじゃない。

ただ、最後にこれだけは聞いておきたい。

「オブライエン。今のぐらいなら、避けようと思えば避けれたんじゃない？なんで喰らったのさ」

横っ面を張る寸前、オブライエンの目はしっかりと僕の腕の動きを捉えていた。そして軌道が読めたということは、避けようと思えば避けられたということだ。

そんな僕の質問に、苦しそうに息をつきながらゆっくりと答える。

「……お前には、俺を殴るだけの、正当な権利がある。そう思った、だけだ」

「そう」

それ以上何も言わなかったけど、その答えにとりあえずは満足した。次にこれまたぐったりして動けない十代のところに行き、その介抱をしていた翔の隣に座りこむ。こちらを見てくる2人に対し、頭を下げる。

「清明……」

「十代、翔、ごめん！」

「えっ？なんで清明君が謝るんスか？」

厳しい目でその謝罪を聞く十代に対し、本気で訳が分からないという様子の翔。どうやらオブライエンからは何も聞いていないようだったので、僕が彼と協力していたこと、翔を人質にとることまでは僕も一枚噛んでいたこと、ヨハンたちの足止めを今の今までしていたことなど、全てを洗いざらいぶちまけた。2人とも、最後まで何も言わずに黙って聞いてくれた。そのことが、ただひたすらにありがたかった。

「こんな危険な目に合わせて、謝って済むような話じゃないのはわかってる。だけど、ど

うしても言わせて。……ごめん」
　最後に深々と頭を下げたまま、顔を上げるのをしばらくの間ためらう。時間にしてみればせいぜい数十秒ぐらいだろうけど、僕にとっては何時間もそうしていた気がした。すると、そんな僕の視界に2本の手が伸びてくるのが映る。恐る恐る顔を上げると、十代と翔の笑顔が見えた。もっとも十代の方は、デスベルトのショックでだいぶやつれた笑顔になっていたが。
「気にすんなよ、清明。もう済んだことだし、それにお前だって知らなかったんだろ？な、翔」
「そうッスよ。確かに怖かったけど、こうやってアニキも助けに来てくれたし、第一清明君が謝ることじゃないよ」
「十代、翔……ありがとう」
　２人の優しさが身に沁み、改めて頭を下げる。その様子が何かおかしかったのか、声を揃えて十代と翔が笑う……だけど、それもすぐに止まった。だいぶ無理して意識を保っていたらしい十代がついに限界になったらしく、そのままふらりと意識を失って崩れ落ちたのだ。
「ア、アニキ！」
　翔がその体を担ごうとするも、だいぶ体格差があるうえに別段力が強いわけでもない

翔にはさすがに無理だったようだ。折よくやって来た剣山におぶってもらうことにして、とにかくレッド寮に運んでいく。少し迷ったけど、意識こそ失っていないもののかなり苦しそうなオブライエンも僕が肩を貸して連れていくことにした。
「デュエルをすればわかりあえるし友達になれる、か」
「何？」
帰りの道中にふとこのフレーズを思い出して呟くと、オブライエンが聞き返す。ふっと笑って、どう説明しようかと少し首をひねった。
「いやね、僕も変わったなあって。ここに入学した時は、デュエルするだけで人と人がわかりあうってのはさすがに無理があると思ってたけど、いつの間にか僕もその考え方に染まってたみたいだし」
「……何が言いたい？」
「さっきはああ言ったけど、僕はオブライエンは悪い奴じゃないって信じてるよ。きっと今日のことも何かわけがあるんだろうし、気が向いたらでいいからまた教えてよ」
「なぜそう思ったんだ？」
「わかるさ。だって、オブライエンは僕にとってはもう友達だもん。友達を信じないんなら、一体何を信じればいいってのさ」
オブライエンは、一言も答えなかった。だけど、僕の言葉を否定もしなかった。僕に

とっては、それで十分だった。

ターン76　鉄砲水と流離の浮雲

次の日。朝になると既にオブライエンの姿はなく、寝かしておいた枕元には完璧な日本語で礼を言う手紙が置いてあった。すごいなあ、外人なのに読み書き喋りの全部ぺらっぺらなんて。僕なんて日本語で手いっぱいで英語すらまともにできないのに……っと、今は僕の学力は関係ない。ないったらない。

そして他の2人、ヨハンと十代も一晩寝たらだいぶマシな気分になったらしく、酒飲んだ次の朝の親父みたいに疲れ切った顔で次の日にはどうにか復活していた。

……朝食は1人で6人前ぐらい馬鹿食いされたけど、それで元気になったならまあ安いものだ。そう思わないとやっていけない。僕?ダークシグナーって、生前と比べてエネルギーの最大値が跳ね上がるのよ。だからちょっとやそっと吸われても……まあ多少面食らったのは間違いないけど、でもまだまだ平気だ。

「でもチャクチャルさん、これではっきりしたね。これ絶対ロクなもんじゃないわ」

『そうだな。いくらデュエリストでも、あのレベルを多用すれば命に関わる』

「ご飯食べて元気になれるなら問題ないけど、そのたびにあんなに食べるんじゃうちの食費が跳ね上がる」

『えっ』
「なに？」
『……あ、いや、そっちなのか。まあ私にとってはなんでもいいが』
妙に歯切れの悪いチャクチャルさんを一瞥し、今日の授業を受けに行った。
そして放課後。明らかにおかしい、というかどうも周りと話が合わないことがわかる。昨日のうちに生徒の大半はデスデュエルを一度終わらせたらしいのだが、どうも僕の知ってるデスデュエルと話が合わない。皆確かにエネルギーを吸われる感じこそしたものの、精々ちょっとふらつく程度で十代のように気絶してぶっ倒れたなんてことはないらしいのだ。まさか十代とオブライエンが普通よりはるかに虚弱体質だったなんて馬鹿な話があり得るはずがないし、この話を鵜呑みにするなら昨日のあの時間だけデスベルトの吸収率が格段に上がっていたことになる。
「誰が何のために、かね。僕にはさっぱり分かんないよ」
『どうだろうな。ただ我々地縛神は、本来ならばあの地上絵から解き放たれるためには大量の……あー、人間のエネルギーを必要とする。いつぞやの三幻魔の時も、復活の際に世界中のカードからエネルギーが吸い取られていた。似たようなことが起きていなければいいが』
「うーん。下手に考えるより、片っ端から動いてみたほうがいいのかもね」

なんとはなしの不安を感じながらも、それをどうすることもできずにただ突っ立っていることしかできない。なんて、センチな気分は僕好みじゃないけれど。もっと楽しいことを考えよう、そう、例えばあそこで剣山の尻に噛みつこうとしているワニの観察のような。

……えっ？

「うわあああっ!?なんだドン、何するんだドン!?」

「け、剣山ー!?」

違和感が生まれるより先に噛みついていたワニ……この学校にワニなんて1匹しかいない、ジム・クロコダイル・クックのワニだ。

「ソーリー、ソーリー！やめるんだ、カレン！」

「痛いドン！放すザウルス！」

わーわーと騒ぐ剣山からなかなか放れようとしないカレンをどうにか引き離し、ジムが定位置らしい自分の背中に括り付ける。

「うう……自分のワニなんだから、ちゃんと自分で管理するザウルス！」

「ソーリー、実はイエスタデイから彼女の落ち着きがなくってね。だが、その理由はもうわかってる」

「ま、まさか昨日あげたマドレーヌ……」

「ああ、君が遊野清明か。センキューベリーマッチ、あれはとてもグッドテイストだったよ。カレンも喜んでいたし、今度買いに行かせてもらう。だが、それは原因じゃないんだ。これを見てくれ」

そう言ってジムが取り出したのは、何やら四角い機械。その何かを計測するらしいメーターの針はレッドゾーン、限界ぎりぎりまで触れていた。

「これは、電波を察知することができる機械なんだ。それがこんなに反応しているということは、つまり今この学園のどこかで強い電波が発生している。カレンのような爬虫類は、電波の影響を受けると狂暴性が増すからまさかとは思ったんだが、現にこの装置が反応しているということはそうなんだろう」

「へー……それって、最近になってからなのかね。それとも、実はこの島はずっと電波を出してる島だとか？」

「いや、それはないな。俺たちがこのアカデミアに来たときはまだ、カレンも落ち着いていた。つまり、イエスタデイの夜から急にこの電波がどこかから発生しているんだ」

「な、なるほど……？」

あ、これ十代何言われてるのか半分以上わかってないな。

「だから、今からこの電波の発生源を特定しに行こうと思っているんだが、一緒に来るかい？」

「俺は行くぜ、面白そうだしな。ヨハンも来るよな？」
「ああ、もちろん」
「じゃあ僕たちも……」
「出発ザウルス！」
「んー、じゃあ気を付けてねー」
　手を振って見送ろうとすると、なぜかジムとヨハン以外の全員の顔が固まった。
「あ、あれ？どったの皆」
「いやいや清明、お前も一緒に行こうぜ？」
「清明先輩なら絶対我先に駈け出すと思ったドン」
「どんなイメージなの……まあ行きたいのはやまやまだけど、僕店番してなきゃだし」
「えー、いいじゃんかよ。お前も気になるだろ？デスデュエルの被害者なんだから」
「だから、さ」
　ヨハンの言葉に、ついぼそっと呟く。小さな声のつもりだったが、ジムにはどうやら聞こえてしまったらしい。
「え？なるほど、じゃあ俺たちでこの電波の謎を突き止めにゴーだ」
「行ってらっしゃい、土産話は楽しみにしてるよ」
　適当に誤魔化して、皆に背を向けて歩きだす。呼び止められたらどうしようかと思っ

たけど、幸いにも誰も止めには来なかった。多分ジムが何か察してくれたから、そのおかげもあるだろう。
　さて、ここからは僕も一人で動かさせてもらおう。葵ちゃん、今日は店行けないから怒るだろうなあ。

「……それで、また俺のところに来たのか」
　現在僕がいるのは、オブライエンの部屋。机の上に積まれたいくつかの大皿からは、オブライエンがさっきまで昨日大量に吸われたカロリーを食事から補給しようとしていたことがわかる。今朝はいつの間にかいなくなってたけど、さすがに影響なしとはいかなかったわけか。
「何度言われようと、お前に教えるようなことは何もない」
「別に、突っ込んだ話が聞けるだなんて期待してないよ。ただ１つ、前提条件として確認したいことがあるだけで」
「……何？」
　ここで追い出すんじゃなくて聞き返してきたあたり、どうやら話を聞いてくれる気はあるらしい。少しは気を許してくれたのかね。

「デスデュエルって、元々はオブライエンのいたウエスト校でプロフェッサー・コブラが始めたことなんだってね」
「ああ、そうだ」
「それって、やっぱりおかしくない？だったらなんで経験者のオブライエンが1回でぶっ倒れたりするのさ。それとも何、ウエスト校ってのは生徒が毎日デュエルするたびに保健室と外を行ったり来たりするような場所なわけ？」
　やや嫌味を混ぜつつ言い切り、オブライエンの目をできるだけまっすぐに見つめる。たっぷり３０秒は沈黙が続いたが、やがて言葉を選びつつオブライエンが口を開いた。
「俺の口から言えることは、1つだけだ。確かに昨日のデスデュエルは、この俺も経験したことがないようなものだった」
「ふんふん」
「悪いがこれ以上は何も喋らん、用がないなら出て行ってくれ」
　ここで一度作戦タイム。僕はこの手の駆け引きは僕はあまり好きじゃないので、心理戦の専門家にテレパシーを飛ばして意見を仰ぐ。
「(どうしようチャクチャルさん、もうひと押しすべきかな)」
『いや。これ以上押しても頑なになるだけで何も出てこないだろうから、ここは一度退けばいい。それに、今追いかければまだ間に合う』

「え？……まあいいや、じゃあね」

部屋を出る前に一度振り返ったが、オブライエンは既にこっちを見ていなかった。しかしよくわからない、オブライエンの話ぶりからするとやっぱり昨夜は何かがおかしかったことになる。今このデュエルアカデミアで、何が起きようとしているんだろうか。ユーノがいれば相談ができたんだろうけど、あいにく斎王戦の直前に会って以降彼の姿は一度も見ていない。まさか勝手に成仏したなんてことはないと思いたいけど、ともあれユーノの助けはないものとして考えたほうがいいだろう。

そんなことを考えながら扉を開けると、たまたま歩いていた留学生……アモン・ガラムの後姿が見えた。せっかくなので挨拶程度はと声をかけようとしたら、チャクチャルさんが割り込んできた。

『ストップマスター、この男だ。先ほどから部屋の前をうろうろして、マスターの話を盗み聞いていた』

「（気づいてたんなら教えてよ……）」

『余計なことに気を遣わせることもないと思ってな。あの時は情報収集に集中してほしかった』

そうやって話しているうちに、こちらの様子に気づくことなくアモンがどこかへ歩いていった。チャクチャルさんからそうと教えてもらってなかったら、ついさっきまで盗

み聞きをしていたなんてわからないほど堂々とした態度だ。
それにしても、盗み聞きか。こうなるとアモンもアモンでなんか怪しいから、今日はこっちを追いかけてみようかな。
「鬼が出るか蛇が出るか、尾行と洒落込ませてもらいますかね、っと」
できる限り足音と気配を殺しながらそっと後ろにつき、見失わないようこっそりとアモンの背中を見ながら追いかける。しばらくそうしているうちになぜか学校を離れて森の中に入っていったが、どうやら適当に散歩しているわけでもないらしいことはすぐにわかった。明らかにアモンには何か目的地があって、迷いなくそこに向かっている。
さらに歩き続けるうちに、遠くからかすかに十代たちの声が聞こえてきた。ふむ、怪電波の探知をしてるジムと同じような場所に迷いなく向かっているアモン……いよいよもって怪しい。するとその声が向こうにも聞こえたのか、いきなり前を歩くアモンが全力で走り出した。
「しまっ……!もう、なんだってのさ!」
声を殺して毒づき、木の枝などを踏んで音を立てないよう気を付けながら僕もその方向に走る。木の間を通り、足元の小石を乗り越えて。
「あらー……や、やっほー」
「やあ。こんなところで奇遇だね」

こちらを真っ直ぐ見据えて仁王立ちするアモンと目が合った。いつからかは知らないが、完全に尾行がばれていたらしい。一見にこやかに見えるアモンだが、その目は全く笑っていない。

「少々時間がないから単刀直入に聞かせてもらうが、一体なぜ追いかけてきたのか、教えてもらおうか」

「えっと……」

どうするのが一番いいだろう。まず1つ目の選択肢としては、包み隠さず正直に話すこと。これはアモンがこの電波の件を何らかの理由から追いかけているのであれば、単純にお互いの味方が増えることになるというメリットがある。ただしこの選択は、もしもアモンがこの電波の原因である場合は彼と敵対するきっかけを自分から作り出すことになってしまい、僕の身に……いや、下手をすると十代たちにまで危険が及ぶ可能性がある。もう1つはまあ、しらばっくれるなり逃げるなり。だけどそんなもんが通用するとは思えないし、ここはひとつさりげない会話から情報を拾えるかどうかやってみよう。

「今日はいい天気だね」

外した、アモンったらくすりともしてくれないんだもん。大体いい天気ってなんなのさ今日はがっつり曇り空だよコンチクショウ。そういやその昔小学生のころ理科の授

業で晴れと曇りの違いは空を見上げて見える範囲の6割だったか7割だったかが雲に覆われているかどうかって習ったけどさ、たまたま僕の年のその授業の日はなんか6割5分ぐらいが雲に覆われたものすごい微妙な日だったのね。それで教室内でこれは晴れなんじゃないか派と曇りの日扱いでいいだろう派が長々と争いをしてたんだけどさ、普通先生ってそこは中立で貫いてくれるんじゃないのかな？僕らのその時の先生は気が利かなかったのかなんなのか、空見て一言『今日は晴れですね』ときたもんだ。そのせいでもう大変だった、僕をはじめとした曇りの日派はその日1日中晴れ派から激しい弾圧を受けて人間扱いすらされなかったわ給食のカレーもなんか少なめに盛られるわ散々だったよ。そういうところあるからあの先生もう30代も後半だってのにいまだに独身だったんだね、間違いないざまーみろ。

っと、なんだか話がずれにずれまくった。アモンの目はますます鋭く冷たくなり、これもう僕無事で帰れるのかなとかそういうレベルにまで周りの空気はなっている。

「それで？」

「はい、白状します……」

結局、諦めて正直に喋ることにした。昨日経験したオブライエンと十代の、そしてヨハンと僕のデュエルのこと。たった今ジムを中心に十代たちが怪電波を探して森の中をうろつきまくっていること。あとは特にないや。

話をじっと聞いた後、しばらく何か考え込むアモン。このまま逃げ切れないかとも一瞬思ったけれど、そんなことしたら余計ややこしくなりそうだったので即やめた。
「ふーん……これは案外、利用できるかもな」
「え？」
「とりあえず僕とデュエルを行おう」
「は、え!?ちょ、話ちゃんと聞いてた!?吸われちゃうよ、下手するとその場で気絶するよ!?」
「これでも鍛えてあるんでね。それにこのデスベルトの、そしてデスデュエルの仕組みを理解するにはとにかく自分で体験してみるのが一番良さそうだ」
いきなりわけのわからないことを真顔で言い出すアモン。慌てて止めようとするも、軽く流されてしまった。それでもさらに粘ろうとするが、ちょっと悪そうな笑顔を浮かべてさらに先手を打ってきやがった。
「おや、デュエルアカデミア本校の生徒は売られたデュエルもまともに買わないのかい？」
「ぐ。……わーったよ、やればいいんでしょうやれば」
安い挑発なのはわかってるけど、僕だけでなくこのアカデミア全体を馬鹿にされたとあっちゃあやっぱり黙ってられない。わかりやすいなあ、僕も。

「そのかわり、やるからには勝たせてもらうからね。それじゃあ、デュエルと洒落込もうか！」
「「デュエル！」」
　先攻は僕。いまだこのデッキの進むべき道は見えてこないけれど……それでも、僕にできるのはこの子たちを信じて戦い抜くことだけだ。ちなみにこれは恰好つけた言い方で、もっとざっくり言うとただ単になんも思いつかないから現実逃避してるだけだったりする。
「出て来い、ハンマー・シャーク　攻１７００
　ハンマー・シャークッ！」
　頭部がハンマーの形をした鮫が、僕の呼びかけに応えてその姿を現す。いつもならばその効果を使ってさらに展開をするところだけど……珍しいことに、僕の手札には現在レベル３以下の水属性モンスターがいない。
「さらにカードを２枚セット。これでターンエンド」
　攻撃力がそこそこ高いアタッカー１体に、伏せカードが２枚。とはいえ実はそのうち１枚は今使えないカードをブラフにしただけだけど。でもそんなこと黙ってればわからない、ここでどう出てくるかを、まずはじっくり見させてもらおう。
「１つ忠告しておこう。熱くなるだけでは、僕にデュエルには勝てない。僕のターン、ド

ロー。いいカードを引いた、永続魔法発動！雲魔物のスコール（クラウディアン・スコール）！」
もくもくと雨雲が上空に広がると突然鼻先に冷たいものが当たった気がして、思わず手でぬぐってしまった。もちろんその手が軽く濡れていた……なんてことはなく、ただのソリッドビジョンの投影に過ぎない。
「この効果は今にわかる。雲魔物（クラウディアン）―アシッド・クラウドを召喚！」
緑色の雲がどこからともなく湧きあがり、少しずつ寄り集まって人のような形になる。やがてその顔、それも目に当たる部分に意志の光が宿り、どうやらこれがモンスターらしいと気づいた。
「攻撃力、５００……？」
「アシッド・クラウドの効果発動。このカードの召喚に成功した時、フィールドの雲魔物の数だけ自身にフォッグカウンターを置くことができる。僕のフィールドには雲魔物が１体、よってカウンターが１つ乗る」
雲魔物―アシッド・クラウド　攻５００（０）→（１）
「カードを１枚セット。これで、ターンエンドだ」
「え？」
攻撃力５００のモンスターを囮にして強力な伏せカードをセットする戦術、なんだろうか。ここまであからさまに罠だと、攻撃していいものかどうかわからなくなってくる

な。

「どうした?これでターンエンド、と言ったんだ。アシッド・クラウドのことは煮るなり焼くなり、好きにするがいい」

清明　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：ハンマー・シャーク（攻）

魔法・罠：２（伏せ）

アモン　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：雲魔物―アシッド・クラウド（攻）

魔法・罠：雲魔物のスコール

１（伏せ）

「うー……えーい、お望み通りぶん殴る!僕のターン、ドローー!」

今引いたカードは、これか。まあいいや、できれば初手に来てほしかったけど。

「グレイドル・コブラを召喚!さらに自分フィールドに水属性モンスターが存在することで、手札のサイレント・アングラーを自身の効果により特殊召喚!」

ピンク色の毒蛇と、チョウチンアンコウ型の魚モンスターがハンマー・シャークの隣に並び立つ。攻撃力５００のアシッド・クラウドをうまく倒してダイレクトアタックすることができれば、こんな小さな攻撃力でも累計ダメージはかなりのものになる。

グレイドル・コブラ　攻１０００
サイレント・アングラー　攻８００
「これで良し！サイレント・アングラーでアシッド・クラウドに攻撃！」
サイレント・アングラー　攻８００→雲魔物―アシッド・クラウド　攻５００
提灯を光らせての体当たりを受け、緑色の雲があっけなく四散する。やった、と言おうとしたのもつかの間、ちぎれたはずの雲が再び流れて寄り集まり、何事もなかったかのように元の形に戻ってのけた。
「言い忘れたが、僕の雲魔物はそのほとんどがある共通効果を持っている。雲魔物は守備表示の時自壊するデメリットを持つかわりに、戦闘によって破壊されない」
「だけど、攻撃力はこっちの方が上。せめてダメージだけでも……」
「いや、それは無理だね。僕は今の攻撃宣言時に永続トラップ、スピリットバリアを発動していた。このカードの効果により、僕はモンスターが存在する限り戦闘ダメージを受け付けない」
「ぐ……」
今の１ターンだけでも、アモンのデッキのコンセプトの基礎がわかってきた。戦闘破壊耐性を持つ雲魔物を攻撃表示で場に並べることで戦線を維持し、当然発生するダメージはスピリットバリアでカット。シンプルながらに厄介な戦術だけど、問題は次だ。先

ほどから全く使われていないフォッグカウンター、あれは一体何の意味があるんだろう？

「これ以上することはないから、これでターンエンド」

「ならば僕のターン、ドロー。このスタンバイフェイズに雲魔物のスコールの効果が発動、フィールドに存在するモンスター全てにフォッグカウンターを1つ乗せる！」

雲魔物―アシッド・クラウド　（1）→（2）

ハンマー・シャーク　（0）→（1）

グレイドル・コブラ　（0）→（1）

サイレント・アングラー　（0）→（1）

天から降り注ぐソリッドビジョンの水の粒が、モンスターたちの体を濡らしていく。今のスタンバイフェイズでフォッグカウンターの数だけなら一気に増えたけど、これが一体どうなるというんだろうか。

「さらに雲魔物―キロスタスを召喚する。キロスタスもアシッド・クラウドと同じく、召喚時に自身にカウンターを乗せる能力を持つ。今は雲魔物が2体いるため、乗るカウンター数も2つになるがな」

緑色で薄気味悪いアシッド・クラウドとは違い、なんだかモコモコした白い雲の体にぱっちりした目を持つ、新たなる雲魔物が召喚された。

雲魔物―キロスタス　攻９００　（０）→（２）

「どちらから使ってもいいが……まずはアシッド・クラウドのモンスター効果を発動。このカードに乗ったフォッグカウンターを２つ取り除くことで、魔法または罠を１枚破壊することができる。こちらから見て右の伏せカードを破壊する！」

雲魔物―アシッド・クラウド　（２）→（０）

アシッド・クラウドが両腕を振り上げると、僕の伏せカードだけをめがけて局地的に雨が降る。アシッドの名のごとく降りしきる酸性雨が、僕の本命の伏せカード……ポセイドン・ウェーブをグズグズに溶かしてしまった。できればブラフを狙ってほしかったけど、それを顔に出すわけにはいかない。

「次はキロスタスの効果発動、このカードはアシッド・クラウドと対になる効果を持ち、自身のフォッグカウンター２つをコストにモンスター１体を破壊する。攻撃力のあるハンマー・シャークも厄介だが……それ以上に、グレイドルの恐ろしさについては僕も聞いている。グレイドル・コブラを破壊しよう」

雲魔物―キロスタス　（２）→（０）

キロスタスが謎の踊りを踊ると、その周りにもっと小さなキロスタスが２体現れる。そのチビキロスタスがコブラに体当たりを仕掛け、ぶつかった瞬間にいきなり爆発した。そしてコブラは戦闘またはトラップの効果破壊に対応して寄生を行えるモンス

ター、モンスター効果には手も足も出ない。
「バトルだ。キロスタスでサイレント・アングラーを攻撃！」
キロスタスの攻撃力はわずか９００……だが、アングラーの攻撃力はそれよりも低い８００しかない。こんな時のためのポセイドン・ウェーブもピンポイントで撃ちぬかれてしまっては、その攻撃を止める手段はない。
雲魔物―キロスタス　攻９００→サイレント・アングラー　攻８００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→３９００
「まだまだ、この程度！」
「カードをセット。僕はこれで、このターンを終えよう」
清明　ＬＰ３９００　手札：１
モンスター：ハンマー・シャーク（攻・１）
魔法・罠：１（伏せ）
アモン　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：雲魔物―アシッド・クラウド（攻）
雲魔物―キロスタス（攻）
魔法・罠：雲魔物のスコール
スピリットバリア

１（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」

とにかく、厄介なのは雲魔物のスコールとスピリットバリアだ。せめてそのどちらかさえなければ相手の除去より速く攻撃力の低い雲魔物をサンドバッグにできるし、あるいは効果発動のためのフォッグカウンターを乗せられなくすることができる。

「そのためには、お前の力を借りるしかないね！ハンマー・シャークをリリースして、氷帝メビウスをアドバンス召喚！メビウスはアドバンス召喚された時に、魔法・罠カードを２枚まで破壊できる！スコールとスピリットバリアの両方を凍らせて壊しちゃえ、フリーズ・バースト！」

「くっ……！」

終始ペースを握られっぱなしだったこのデュエルにおいて、今のメビウス召喚が反撃の狼煙となったと言っても言い過ぎではないだろう。戦術の要と防御の要をいっぺんに潰されたのはさすがに痛手だったらしく、今日見る限り初めてアモンの表情が歪む。

「反撃開始、ってね。戦闘破壊はできなくても、この冷たさは受けてもらう！アシッド・クラウドを貫け、アイス・ランス！」

横に伸ばしたメビウスの右腕が、肘のあたりから凍り付いていく。やがて肘から先が完全に氷に覆われ、その先端は鋭くとがりまさに腕そのものが巨大な氷の槍のようにな

る。青いマントをなびかせてメビウスが走り、その右腕で緑色の雲を突き刺しにいった。だがその寸前アシッド・クラウドの姿がいきなり霧散し、その全てがキロスタスの体に吸い込まれていく。

「攻撃前に消えた?」

「その通り。速攻魔法、フォッグ・コントロールを発動したのさ。このカードは自分フィールドの雲魔物1体をリリースすることで、モンスター1体にフォッグカウンターを3つ乗せる。アシッド・クラウドは今、キロスタスの1部となった」

雲魔物―キロスタス　（0）→（3）

前言撤回。まさか除去を喰らっても最低限の立て直しができるような準備ができていたなんて、オブライエンといいヨハンといい、なんでこんなにデュエリストレベル高いのさ。どうも3年になってから、常に対戦相手に一歩先を行かれてばかりな気がする。

いや、ここで弱気になってたら勝てる勝負も勝てなくなる!

「次のターンの破壊効果は止められない……だったらせめて、一撃だけでも!改めてキロスタスに攻撃、アイス・ランス!」

氷帝メビウス　攻２４００→雲魔物―キロスタス　攻９００

アモン　ＬＰ４０００→２５００

「僕の手にトラップカードはない……ごめんメビウス、これでターンエンド」
「ふむ。多少驚いたことは認めるが、この程度は誤差の範囲内だ。ドロー、キロスタスの効果を発動。氷帝メビウスを破壊する」
　雲魔物―キロスタス（３）→（１）
　またもやミニサイズのキロスタス２体がメビウスに特攻を仕掛け、氷を操る帝と言えどもなすすべなく破壊されてしまう。
「そして雲魔物―タービュランスを召喚する。このカードもまた、召喚時に自身にフォッグカウンターを乗せる」
　雲魔物―タービュランス　攻８００　（０）→（２）
「タービュランスはフォッグカウンターを１つ使い、デッキまたは墓地からこのカードを特殊召喚できる。デッキに眠る雲魔物―スモークボールを特殊召喚！」
　渦を巻く雲の巨人がぐっと力を入れて気張り、その頭のてっぺんの穴から暴風を吐き出しはじめる。するとその上昇気流に乗って、小さな小さな雲の子供がパタパタと短い手足で懸命にバランスを取りながら吐き出された。
　雲魔物―タービュランス（２）→（１）→（０）
　雲魔物―スモークボール　攻２００
　雲魔物―スモークボール　攻２００

「バトルだ、全てのモンスターでダイレクトアタック！」
雲魔物―スモークボール　攻２００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３９００→３７００
雲魔物―スモークボール　攻２００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３７００→３５００
雲魔物―タービュランス　攻８００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３５００→２７００
雲魔物―キロスタス　攻９００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ２７００→１８００
「ちまちまちまちまと……！」
実際４体もダイレクトアタックを喰らったのにまだライフがこれだけ残っているというのは、かなり異様な事態ではある。とはいえこんな憎まれ口を叩きつつも、今の僕がピンチなのは僕自身が一番よくわかっている。アモンのデッキは決定打こそ欠けるものの、プレイングで堅実に場を固めつつフォッグカウンターから生まれるアドバンテージで押し切るデッキなんだろう。そしてそのプレイングが、火力のない雲魔物を主席にまで引き上げた最大の武器だ。さっきメビウスでスコールだけでも割っておいて助かった、あれ以上やられたら本気で立て直せなくなるところだった。

だけど、まだ手がないわけじゃない。スモークボールはこれまで出てきた雲魔物の中でも特に攻撃力が低い、次のターンでそこをつけばダメージを稼げる。こうなったら多少のアドバンテージは度外視して、僕のデッキよりさらに低いあの攻撃力と言う弱点を生かしてダメージレースに持ち込む。やられる前にやる、それしかない。

「魔法カード、馬の骨の対価を発動。自分フィールドの通常モンスター1体をリリースし、デッキから2枚ドローする。スモークボール1体を墓地へ。さらに魔法カード、宝札雲（ラッキークラウド）を発動。カードをセットしてターンエンド……だがこの瞬間に宝札雲の効果が適用され、僕がこのターン同名雲魔物を2体特殊召喚したためにカードを2枚ドローすることができる」

清明　ＬＰ１８００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

アモン　ＬＰ２５００　手札：３

モンスター：雲魔物―キロスタス（攻・１）

雲魔物―タービュランス（攻）

雲魔物―スモークボール（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

「僕のターン、ドロー！……このカードで繋いでみせる！2体目のグレイドル・コブラを召喚、そしてスモークボールに攻撃！」

グレイドル・コブラ　攻１０００

空から降りてくる雲にたいして立ちはだかるのは、地面から湧き上がる銀色の水たまりから生まれる大蛇。その毒牙が唸り、最も小さくて弱く、またなんの耐性も持ちえない通常モンスターのスモークボールを一噛みで噛み千切らんと迫る。

だがその牙も届く寸前、決して小さくはないコブラの体ごとふっと僕の目の前から消えてしまった。スモークボールの前にぽっかりと開いた次元の裂け目に飲み込まれ、この世界から消えてしまったのだ。

「そんな単調な攻撃は通さない。トラップ発動、次元幽閉！このカードにより、攻撃モンスターはゲームから除外される」

「コブラが……だとしても、僕のすることに変わりはないね。カードをセットして、ターンエンド！」

「ふっ、随分と熱くなっているようだが……熱くなるだけでは、デュエルには勝てない。僕のターン、ドロー！」

今アモンは、悩んでいるはずだ。確かにアモンの場に存在するモンスターの攻撃力合計は１９００と僕の残りライフを上回ってはいるが、その数値はたかだか１００に過ぎ

ない。つまり、僕の伏せカードがもし何らかの形で攻撃を妨害する、あるいはダメージを軽減するものだった場合このまま攻撃しても僕のライフは当然、残る。かといってさらに攻撃のできるモンスターを展開しようとしても、やはりこの伏せカードが枷となる。

当然僕が伏せたのはそのどちらかだ。さあ、危険を冒してモンスターを増やすか、危険を冒して攻撃するか。ふたつにひとつ、どちらを選ぶか見せてもらおうじゃないの。

「ここは攻撃だ。３体のモンスターでダイレクトアタック！」

「惜しい、命拾いしたね？トラップ発動、波紋のバリアーウェーブ・フォース！」

僕の全身をぐるりと取り囲むように水の壁が包み込み、そのまま攻撃してきた雲魔物たちの連撃を受けた部分に波紋が走る。次の瞬間、３体の雲魔物はすべて吹き飛ばされた。

「ウェーブ・フォースは直接攻撃宣言時にのみ発動できて、その効果は相手モンスター全てをデッキバウンスするのさ！」

通常召喚でさらにデッキバウンス対象のアタッカーを増やしてくれたらありがたかったけどね、そうそううまくはいかないか。プレイングセンスだけじゃなく、デュエリストとしての勘まで優れていると見える。どんなルートを使ったのかは知らないけど怪電波とデスデュエルについてもすでに当たりをつけていたみたいだし、こういう

勘のいい知性派は本当に厄介だ。
そして今も、自分のモンスターをいっぺんに失ったというのにまるで慌てた様子がない。どこまで想定内なのかまるで読み切れない、そんな底知れなさがある。
「やはり、攻撃宣言をトリガーとするカードだったか。僕はこのターン、まだモンスターを召喚していない。雲魔物―ゴースト・フォッグを守備表示で場に出し、さらに２枚目の雲魔物のスコールを発動。これでターンエンドだ」
雲魔物―ゴースト・フォッグ　守０
清明　ＬＰ１８００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
アモン　ＬＰ２５００　手札：１
モンスター：雲魔物―ゴースト・フォッグ（守）
魔法・罠：雲魔物のスコール
「僕のターン！」
今引いたカードは……このカードか、悪くない。こうなってみるとさっきのアシッド・クラウドでこのブラフがスルーされたのも悪いことばかりじゃない。
「リバースカードオープン、サルベージ！この効果により墓地から攻撃力１５００以下

の水属性モンスター２体、グレイドル・コブラとサイレント・アングラーを手札に回収する！そしてサイレント・アングラーを召喚！」

サイレント・アングラー　攻８００

「攻撃力の低い方をわざわざ出すのか？」

「繋ぎだからね。水属性モンスターのアングラーをリリースして、このカードを手札から特殊召喚！出てきて、シャークラーケン！」

シャークラーケン　攻２４００

半上級モンスターのスペックを持ちながらも召喚権を使わずに場に出せるモンスター、シャークラーケン。タイダルのいない今の僕のデッキにとっては凄く貴重な、パッと出せる自前のアタッカーだ。守備力０のゴースト・フォッグを倒すだけなら別にアングラーのままでもよかっただろうが、これまでの流れで考えるときっと何かあのカードにも効果があるだろう。ならば突破力の高いシャークラーケンで押し切る方がいいと考えたのだ。

「シャークラーケンでゴースト・フォッグに攻撃！」

シャークラーケン　攻２４００→雲魔物―ゴースト・フォッグ　守０（破壊）

シャークラーケン　（０）→（６）

「な、なんだってのさ!?」

なよなよした雲を一撃で粉砕した、と思ったら、なにやらシャークラーケンの様子がおかしい。その全身に薄い雲のかけらがまとわりつき、いつまで経っても消えようとしない。

「ゴースト・フォッグの効果発動。このカードが戦闘破壊された時、そのモンスターのレベルの数だけフォッグカウンターを好きなモンスターに乗せることができる。もっとも、今フィールドに存在するのはシャークラーケンだけだがね」

またまた前言撤回。しまった。これ完っ全に裏目だ。大人しくアングラーで攻撃してからメイン2でシャークラーケンにチェンジさせておけば、あるいはシャークラーケンに拘らずにコブラで攻め込んでいれば……いや、もうこうなった以上、反省は後ですればいい。落ち着け落ち着け、これまでの雲魔物のパターンを見るに、フォッグカウンターを使って何かするモンスターは常に自身に乗ったカウンターをコストにしていた。そうだ、僕の場に存在するシャークラーケンにカウンターが乗ったからって、何も恐れることはない。これはただのはったり、こけおどしに過ぎない。

「ターンエンド！」

「ふふふ。先ほども言ったことだが、熱くなるだけではデュエルに勝つことはできない。それを証明してみせようか。スタンバイフェイズに雲魔物のスコールの効果により、フォッグカウンターが1つ追加される」

シャークラーケン　（６）→（７）

「それがどうしたって？」

「永続魔法、召喚雲（サモンクラウド）を発動。このカードは１ターンに１度、自分フィールドにモンスターが存在しない時手札か墓地からレベル４以下の雲魔物を特殊召喚できる。ただし、墓地から特殊召喚した場合このカードが自壊するデメリットがあるが。だがもはやそのデメリットも関係ない、墓地からアシッド・クラウドを蘇生する！」

雲魔物―アシッド・クラウド　攻５００

またもや現れた、緑色の雲。僕のフィールドに伏せカードのない今、あのカードを出す意味はなさそうなものだけど。その疑問は、すぐにふり払われた。

「アシッド・クラウドをリリースし、アドバンス召喚！出でよ、雲魔物―ニンバスマン！」

これまでよりもひときわ大きい雲が寄せ集まり、頭と腕と足がなんとか識別できる程度の人型に変化していく。だが何よりも恐ろしいのは、その巨大さだ。これまでの雲魔物が精々人間サイズだったというのに、このモンスターは身の丈５メートルは軽く超している。しかもその状態から、さらに体が一回り二回りと巨大化しつつあるのだ。

「ニンバスマンは通常時、攻撃力を１０００しか持たないモンスターだ。だがこのカードはアドバンス召喚時、リリースした水属性モンスター１体につき１つのフォッグカウンターを自身に乗せる」

雲魔物―ニンバスマン　（０）→（１）

アモンの説明が続く中よく見ると、シャークラーケンにまとわりつく雲の切れ端が徐々にニンバスマンに吸い取られていくのが見えた。そしてその雲を取り込み、ニンバスマンが更なる巨大化を遂げる。

「そしてニンバスマンの攻撃力は、フィールドに存在するフォッグカウンター１つにつき５００ポイント上昇する。自身に１つ、そしてシャークラーケンに７つ。そのカウンター全てが、ニンバスマンの攻撃力を上昇させる」

雲魔物―ニンバスマン　攻１０００→５０００

「く……！」

してやられた。これまでのパターンから正直、例えシャークラーケンのミスが響くとしてもまさか次のターンで終わるようなことはないだろうなんて甘い期待がどこかにあったことは否めない。攻撃力１０００以下のモンスターばかり出してきていたのに、ここぞという局面にこんな火力の切り札を隠し持っていたなんて。

超高速でライフを削りつつこちらの手の内を読み切り一手先の行動を仕掛けてきたオブライエンや、精霊との絆と自らのデッキを限界まで信じ抜くことでシンプルではあるが攻略しがたい強さを見せつけたヨハンとはまた違う、常にこちらの行動を上から見下ろしてくるくせにこちらからはその動きを捉えきれず、こちらの油断をついてその表

情を一変させる……まさにそのデッキと同じく雲のようなアモンの強さは、認めざるを得なかった。

「バトルだ、ニンバスマンでシャークラーケンに攻撃！ダウンパワーシャワー！」

雲魔物―ニンバスマン　攻５０００→シャークラーケン　攻２４００（破壊）

清明　ＬＰ１８００→０

「さて、デュエルが終わったわけだが……来たか！」

「またか！」

ソリッドビジョンによるたくさんの雲が消え、それと連動するようにデスベルトが光を放つ。ちょっと立ちくらみがしたので大人しく座り込んで調子を整えていると、アモンが苦しそうに息を吐きながら地面にうずくまった。

しかし十代ですらデスデュエル終了後はしばらく意識がなかったことを考えると、その場で気絶してないあたりアモンも相当体を鍛えてあるのだろう。オブライエンといいアモンといい、服の上からでも筋肉がよくわかるプロフェッサー・コブラといい、そんなに鍛えてアスリートにでもなるつもりなんだろうか。それともどこかの兵隊とか……いや、そこまでいくのは考えすぎかな。

「なる、ほど……貴重なデータが取れた、な」
「よくわかんないけど、おめでとさん。あー、だるい……」
お互いに座り込んでいる間に、何か服の後ろをちょいちょいと引っ張られるような感覚がしたので振り返る。そこにいたのはうさぎちゃんこと幽鬼うさぎの精霊。だけどその手に持つ鎌にはカードイラストと違い、先端部分に串刺しになった機械が付いていた。相変わらず押し黙ったまま、それを見せつけるように突き出してくる。
「えっと、くれるの？」
『……』
どうやら正解だったらしく、ほんの少しだけ表情を明るくしてこくこくと頷いてからその機械を鎌の一振りで足元に落とすうさぎちゃん。このレンズからいって、恐らくこれは監視カメラだろう。わざわざ色まで塗って目立たなくしてあるところを見るに、相当慎重に仕掛けてあったに違いない。実際、僕もこんなのがすぐ近くにあるなんて全く気付かなかった。１人だけそれに気づいたこの子が、こっそり抜け出して刈り取ってきてくれたのだろう。
しかし監視カメラねえ。オベリスクブルー女子寮に仕掛けるんならいい悪いはともかくとしてわからんでもないけど、こんな森の中に仕込んで何を撮る気だったんだろう。ただ雨に濡れたような跡もなければ目立った汚れもついていないことを見ると、か

なり最近のもの……具体的には、まだ設置から1か月と経ってないだろう。つまり、あのプロフェッサー・コブラが来てデスデュエルが始まる直前のあたりだ。健康に関わるようなデスデュエルの時点で薄々感づいてはいたけど、ここまで条件が重なるといよいよもって怪しい。

　そんなことを考えながら完全に壊れて使い物にならないそれを見つめていると、アモンにも気づかれてしまった。

「……それは？」

「ぼくもわかんないけど、監視カメラだとさ。この森の中に仕込んであったらしいけど……少なくともこれは、もう使い物にはならないね」

「そうか。すまないが、それを貸してくれないか？何が撮影されているか、誰が仕掛けたものなのか、ガラム財閥の技術ならばデータの復元や情報の送信先が割り出せるかもしれない」

「はいよ。僕が持っててもしょうがないし」

　ぽいっと投げ渡したのを座り込んだままキャッチし、いやに大事そうに抱えるアモン。渡しておいてなんだけど、何か変なこと企んでなければいいけど。

　いや、どうもこれまでの様子を見る限りでは、アモンもこのデスデュエルの被害者だ。どうせ僕が持っていても役には立たないこのカメラ、あげちゃっても問題ないだろう。

「じゃ、僕は帰るよ。立てる？」
「なんとかな……と言いたいところだが。ここでしばらくの間、雲でも眺めてから戻ることにしよう」
「そう？」
聞き返すが、すでに返事はなかった。寝転がって目をつぶっているところを見ると、体力減少による疲れが効いて眠ってしまったのかもしれない。まあ昼寝のひとつやふたつでそうそう風邪ひくこともないだろうし、放っておけばいいだろう。

ターン７７　鉄砲水と魔性の甘味

「……確かにワタクシにも悪い点があったことは認めてやらなくもないですわ、ですけど彼女ったら」

「うーん。いまさら言い出しにくいのもわかるけどさ、どこかで一回は折れないと仲直りは難しいんじゃない？」

僕の言葉に黙ってうつむき、紅茶を優雅な仕草で飲むふわふわカールの髪形になぜか純白のドレス、そして長い白手袋といった完全にどこかのお嬢様そのものといった恰好の女の子。彼女は天下井ちゃん、以前光の結社騒ぎの際に夢想とデュエルを繰り広げたアカデミア生徒だ。

あの時は初対面の僕に問答無用で手袋を投げつけて決闘を申し込んできたり、それ以外にも利便性の概念をガン無視しているこのドレスが普段着だったりと色々アグレッシブ……というかぶっ飛んだ子ではあるけれど、実はその中身はそんなに悪い子でも常識のじの字もない子でもなく、案外素直ないい子である。もっとも、中身を知る以前に皆から距離を置かれがちなため友達ができづらかったりと苦労していたことは間違いないのだが。

ともかくそんな彼女もうちの味がお気に召したらしくこの春休みあたりから何回か僕の店に通っているうちにすっかり常連さんの1人になり、僕自身にもだんだん心を許してきたらしく最近は店が暇な時を見計らって悩み相談などもしてくるようになってきたのだ。その効果があったのかはわからないが最近はその人当たりも以前に比べればはるかにマシになってきて、それに伴い次第に友人も増えてきたらしい。よかったよかった……と思っていたのだが、今日はその友達と喧嘩して本気で悩んでいる模様。

「そう簡単に言いますが、このワタクシがいくら友人とはいえ庶民に頭を下げるなどとは」

あくまで強気な発言だが、その表情は重く沈んでいてカールした髪もいつもよりへなっとして見える。頭ではわかっているけれど、といったところか。でも、何をすればいいのか本当はわかっているのならば話が早い。いつぞやの葵ちゃんと同じく、ここに来たのも最後のふんぎりをつけるため、背中を押してもらいたがっているのだろう。だとすれば僕がここで何かを言わずとも、ただ話を聞いてあげればいい。ちゃんと話を聞く人がいれば、それだけでだいぶ楽になれるんだから。……なんでそれが僕の役なのかはさっぱりわからないけど。というか僕自身デッキに行き詰ってるのに、他人様のお悩み相談なんてなんで引き受けてるんだろう。

『情けは人のためならず、か。マスターらしくていいじゃないか』

そう励ましてるのか微妙に馬鹿にしてるのか判断しかねる台詞を一言だけ残して去っていくチャクチャルさん。別に、見返り目的じゃないんだけどね。

とまあそんなこんなで結局、話が終わるころにはすでに日が暮れてしまっていた。相談自体はともかく、思ったより世間話に花が咲いてしまったわけだ。ほとんど商売にならなかったけど、たまにはこんな日もいいだろう。

「本日は、手間をかけさせて申し訳ないですわ」

「いやいや。ちゃんと仲直りできるといいね」

ティーセットを片付けながら、ひらひらと手を振って送り出す。最後に一度だけ頭を下げてそのまま出て行った天下井ちゃんだったが、すぐに引き返してきた。

「忘れ物？」

そう尋ねると、ぶんぶんと首を横に振る。そのままドレスのポケットに手を突っ込み、可愛らしい小さな包みを引っ張り出した。

「そういえば、もうひとつ要件があったのを忘れていましたの。さあ、受け取ってくださいまし」

「えっと……？」

突き出してきたのでとりあえず受け取りはしたものの、これがなんなのかよくわからない。そんな思いが顔に出ていたらしく、心底情けないという表情で補足が入った。

「まったく、察しの悪い殿方というのは困りますわ。チョコレートですわよ、チョコレート。別に私1人からの物ではなくてですね、アカデミア女子寮一同からの日頃の感謝の形ですけども。中にメッセージカードも入れてありますのよ、大体10人分くらい」
「い、いいの？」
「そんな無粋なことを仰るとは、野暮な殿方もあったものですわね。こういうことを女性から2度も言わさないことこそが、本当の紳士の振る舞いというものではなくて？」
「あ、ありがとう……」
確かに、今年は去年よりもチョコ関連のものがよく売れた。年々いわゆる友チョコや自分チョコの概念が浸透してきているおかげで『チョコをもらう人』のハードルが低くなり、そのぶん1人当たりの買う量が増えてきているからだ。とはいえ、まさか僕自身がその恩恵を受けることになるとは思わなかった。儲けさせてもらっただけでもバレンタイン様々なのに、こんな役得までもらえるとは。
「それでは、ワタクシは帰らせていただきますわ。ホワイトデーにはちゃんと女子寮までお返しを持ってきてくださいまし」
「オッケーオッケー、任せといてよ！本当ありがとうね！」
今度こそ出て行った天下井ちゃんをしばらく見送ってから、改めて片づけに取り掛かる。いやー、まさか僕もチョコがもらえるなんて、幸せ幸せ。これで今年も夢想からも

らえたりしたら、もう今年中の運全部使い果たしてもいいぐらいなんだけど。
「先輩、いますか？」
ちょっと妄想にふけっていると、ひょっこりとドアが開いて葵ちゃんが顔を出した。
「あれ、今日は休めって言ってなかったっけ？」
つい先日に僕が勝手に店をほったらかしてアモンとデュエルしていた間、彼女は１人でこの店を切り盛りしていてくれた。そのお詫びとして、今日は有給休暇ということにしておいたのだ。その彼女が、こんな閉店の時間になったというのに何をしに来たのだろう。
「私も色々ありましてね。はい先輩、遅くなりましたがこれとこれ」
肩をすくめてそう言いつつ、２つの包みを取り出して僕に差し出す葵ちゃん。む、なんかデジャヴを感じる気がする。
「葵ちゃん、もしかしてこれって」
「義理チョコですが？いらないなら返して下さい、持って帰って私が食べます」
「有難くいただきます、恐悦至極感謝の極みです」
「……テンション高いですね。引きますよ？」
割と本気で引き気味の葵ちゃんを見て少しだけ我に返り、咳払いをしてどうにか誤魔化す。と同時に、そこでようやく目の前の彼女の何とも言えない表情に気が付いた。

「そういう葵ちゃんはテンション低いね。嫌なことでもあったの？」
「嫌なこと、と言うほどでもないんですけどね。先輩、これは私からのですが、こっちの箱は誰からのものだと思いますか？」
そう言って、２つ目の包みを指さす葵ちゃん。彼女がここまで複雑な顔になる相手……あ、なんかもう先が読めた気がする。
「今朝起きたら、私の部屋の机の上に手紙と一緒にこれが置いてありまして。明菜お姉ちゃんからのプレゼントだから、清明……あー、その、清明きゅんに渡してね、だそうです。末尾にハートマークもついてました」
思いっきり言いたくなさそうにしながら『清明きゅん』とか言ってる葵ちゃんをじっと見てるとなんだか新しい何かに目覚めそうな気もしてくるけど、それはそうとして貰えるものは素直に嬉しい。でもあの人、ついこの間この島に来たばかりなのにまた来てたんだ。しかもまた葵ちゃんの勘と女子寮の防犯装置に引っかからずの不法侵入までやってのけて、あの人には到底かなう気がしない。
「では、私はもう帰りますね。なんかもう……今日は姉上のせいで精神的にどっと疲れました……」
「はーい。お返しは期待していいよ」
冗談めかしてそう伝えると、今まさに出て行こうとした葵ちゃんが振り返る。

「ええ。わたしは甘味に関しては、先輩のことを全面的に信頼していますから」
いたずらっぽくそう返す葵ちゃんは、今日初めての笑顔を浮かべていた。それでは、と最後に一礼して去っていくその後ろ姿を眺めつつ、改めて片付けの続きに取り掛かる。いやー、嬉しいな。まさか1日に3つもチョコが貰えるだなんて、ここに入学する前にはそんなバラ色人生想像もしていなかった。
『ずいぶん浮かれてるな、マスター』
「そりゃ、ナスカ出身のチャクチャルさんにはよくわかんないだろうねー。バレンタインにチョコ貰って喜ぶのは、日本男児の特徴さ。フンフ～ン」
ただ、1つだけ疑念がないわけじゃあない。いや、こんなこと考えるのは贅沢の極みだって自分でもわかっちゃあいるんだけどね？ただ、誰とは言わないけど去年のこの日に僕にチョコをくれた人から、今年は何かしらないのかなーって、ね？やっぱりそこが正直1番気になるというか、なんというか、ね？
『面倒くさい……』
「なんとでも言ってよ。でもしょうがないでしょ？自分からチョコ下さいなんて、豆腐メンタルの僕に直接言う勇気はないよ」
『はい？ああ、うん、もう……いいや、マスターがやりたいようにやってくれ』
なんだか最後が投げやりだった気もするけど、チャクチャルさんの気配が去ってい

く。さて、僕もそろそろレッド寮に帰ろう。ここで待ってれば夢想も来るかな？なんて甘い期待があったことも否めないけれど、これ以上粘ると十代たちのごはんがなくなってしまう。

最後に戸締りをして店を出ると、もはや誰もいなくなった廊下に僕の靴音だけが響いた。３つのチョコレートがきちんと鞄の中に入っていることを軽く上から叩いて確認し、もう1度だけ周りに夢想がいたりしないかを見回し確認してみたりして……あ、はい、誰もいませんね。わかってますよ、ええ。別に寂しくなんてないもーん。

「さあ、帰ろう！」

未練を断ち切るためにあえて声に出してみるが、それががらんとした廊下に虚しく反響して余計にセンチな気分が増してしまう。まあこれ以上うじうじうじうじしてるのもいい加減みっともないし、今度こそきっぱり切り替えよう。それに、今年貰えないからってそれは夢想のせいじゃない。今年度は商売が忙しくて、吹雪さんから必勝作戦を聞くなどの対策とアピールをさぼっていた僕に責任がある。

そうだ、去年と違い何ひとつ夢想本人に対してやってこなかった僕の自業自得なんだ。さあ、切り替え切り替え。ほら、決して悪いことばかりじゃない。義理チョコならこんなにあるし、今日は夕日がきれいだ。すでに水平線にくっつきつつあるあの夕日と、その向こうからこちらに近づいてくる人影。忘れもしない、あのきれいな青髪の持

ち主は……あれ。
「夢想！」
「こんにちわ、だって」
　そこで一度、会話が途切れる。何か話しかけようかとも思ったけど、テンパりまくってる僕が今この場面で口を開いてもロクなことが言えなくて自己嫌悪になるのは目に見えている。夢想も夢想で夕日の加減のせいか顔を赤くして何かを言いかけようとするも、なぜかまた口をつぐんでしまう。
　……どうしよう、なぜか気まずい。会えなかったときはあんなに辛かったのに、いざ会ったら会ったでまともに会話もできないなんて。でもこうやってすぐ隣で見てると、本当綺麗だなあ。茜色の風景によく映えるこの青髪もすっごいサラサラしてそうで、いっぺんでいいから撫でてみたい。まあ、そこまでいくとただのセクハラだからやらないけど。
「あ、清明？って」
「何？」
「あ、あのね。そんなに見られると恥ずかしいよ、だってさ」
「え!?あ、ご、ごめん！」
　上目遣いでそんなことを言われ、そのあまりの破壊力にこっちまでくらくらしながら

も視線を逸らす。そして、そんな小さな仕草もいちいち可愛いなあもう。
そしてふと視界の端に捉えた太陽は、いつの間にかその5分の1ほどが水平線の向こう側に沈んでいる。日が完全に暮れるまでこうしているのも褒められたことじゃない、とにかく何か話しかけよう。
「え、ええと、その……」
「あ、あのね、って……」
「夢想、先に言っていいよ!?」
「ううん、とんでもないんだって！清明、お先にどうぞってさ！」
まずい、なんであと数秒でいいから待てなかったんだ僕の馬鹿。元々場を繋ぐためだけに話しかけただけだから、お先になんて言われても特に言いたいことなんてないぞ。
なにか会話のネタになりそうなものがないかとあちこちを見回しているとその時、偶然彼女の腕に付いたままのデュエルディスクが目に留まった。これ以上無言でいるのも不自然でしかないし、ここはもうこれしかない。
「ねえ、夢想。久しぶりにさ、デュエルやろうよ」
「デュエル？って」
首をかしげて聞き返してくる夢想に、デュエルディスクの支度をしながら頷き返す。やっぱり僕らはデュエリストなんだ、困ったときはカードの力を借りるのが一番。夢想

も夢想で一瞬目をぱちくりさせるも、すぐにノリノリでデュエルディスクを構えた。ここで躊躇いもせずに受け入れるあたり、僕も僕だけどこの子もたいがいバーサーカーというかバトルジャンキー的な面があると思う。自分から言い出しておいてなんだけどさ。

「それじゃあ、デュエルと洒落込もうか？」

「もちろんいつでも大歓迎だよ、なんだって」

「「デュエル！」」

言い出しっぺの僕が先行。ふむ、悪くない手札だ。

「フィッシュボーグ―アーチャーを守備表示。さらにカードを２枚セットして、ターンエンド」

フィッシュボーグ―アーチャー　守３００

「守りを固めるだけ？ってさ。私のターンに魔法カード、闇の誘惑を発動。デッキからカードを２枚ドローして、その後で手札の闇属性モンスター１体を除外。私はワイト夫人をゲームから除外して……さらに手札からワイトメアの効果を発動。このカードを捨てることで、ゲームから除外されたワイト夫人を特殊召喚だってさ」

ワイト夫人　守２２００

大地が震え、地の底から古ぼけたドレスを着る女性の骸骨がせり上がってくる。さす

が夢想、何ひとつ無駄のない流れるような展開だ。
「さらに、冥界騎士トリスタンを通常召喚だってさ。このカードは自分フィールドに他のアンデット族が存在するとき、攻撃力が３００ポイント上がるんだって」
冥界騎士トリスタン　攻１８００↓２１００
次いで現れた、赤い目の亡霊馬に騎乗する骸骨姿に青い鎧の騎士。自身の効果により攻撃力は２０００オーバーと、守備力３００のアーチャーを踏みつぶすぐらいならば７回は余裕で可能となるほどの数値……だけど、そんな単調な攻め手を通すわけにはいかない。
「リバースカードオープン、フィッシャーチャージ！このカードは魚族モンスター１体をリリースして相手のカード１枚、トリスタンを破壊してカードを１枚ドローする！」
アーチャーが両腕から矢を乱射しつつ亡霊騎士に単身立ち向かっていき、盛大な自爆をして見事その体を大地に崩れ落ちさせた。召喚権を使って出したアタッカーをうまいこと倒せたのは、今回は初っ端から調子がいい証拠だ。このままいけばあの無双の女王、河風夢想の牙城を崩すことだってできるかもしれない。
だがそんな見通しは、あまりにも甘かったことを思い知ることになる。
「残念だったね、清明。魔法カード発動、生者の書―禁断の呪術、って。このカードは私の墓地のアンデット族を１体蘇生して」

「僕の墓地からモンスター1体を、除外する……！」
生者の書による禁断の呪法の結果、たった今地に堕ちたはずの騎馬武者が再びその両足で立ち上がる。と同時に、僕の墓地に存在することができなくなったアーチャーのカードがデュエルディスクからはじき出されてしまった。アーチャーは何度でも墓地から蘇りアドバンス召喚の素材に壁にと柔軟な働きを可能にする僕のデッキの潤滑油、除外されたカードを再利用できない僕のデッキにとってこのピンポイント除外はこの先の展開を考えるとかなり痛い。
「バトルだよ、だって。トリスタンのダイレクトアタック！」
冥界騎士トリスタン　攻２１００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ４０００→１９００
「くっ……」
「ふふふ、今のは私が一枚上手だったね、だって。私はこれでターンエンド」
清明　ＬＰ１９００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
夢想　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：冥界騎士トリスタン（攻）

ワイト夫人（守）
魔法・罠：なし
「だったら、次は僕がその上を行くさ！ドロー！」
先ほどのフィッシャーチャージのドローのおかげで、僕の手にはすでに次の一手が握られている。今度はこっちの番だ、これで目にもの見せてやる！
「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、カイザー・シースネークはレベルを４として手札から特殊召喚でき、さらに特殊召喚されたことでその攻守は０になる！」
カイザー・シースネーク　攻２５００→０　守１０００→０　☆８→４
「アドバンス召喚でもするの？って」
「まあね。だけど、ただのアドバンス召喚じゃあ終われないね。リバースカードオープン、グレイドル・スプリット！このカードは自分モンスター１体の装備カードとなって、その攻撃力を５００ポイント上昇させる……だけど、僕がやりたいのはそこじゃない。スプリットはさらなる効果として、このカードを墓地に送り装備モンスターを破壊することで僕のデッキから２種類のグレイドルモンスターを特殊召喚することができる！行くよスライム、アリゲーター！」
大海蛇の姿が溶け崩れ、かすかに揺れ動く銀色の大きな水たまりへと変化する。やがてその水たまりが２つに分かれ、それぞれが銀色のグレイ型宇宙人と緑色のワニを模し

た超生物へと変化していった。
　グレイドル・スライム　守２０００
　グレイドル・アリゲーター　守１５００
「なるほど、ってさ。それで2体を使って、最上級モンスターのアドバンス召喚を……」
「言ったでしょ、その上を行くってさ。永続魔法、グレイドル・インパクトを発動！このカードに秘められた2つの効果のうち第2の力を発動、場のグレイドルカード1枚と相手のカード1枚を破壊する！僕のアリゲーターとそっちのワイト夫人を破壊、グレイ・レクイエム！」
　インパクトの発動により場に現れたＵＦＯから2本の未知の光線が発射され、それぞれがアリゲーターとワイト夫人を飲み込む。ワイト夫人は一瞬で焼き尽くされたが、アリゲーターはその光線を浴びても再び銀色の水たまりに戻っただけだった。そして、その水たまりが音もなく亡霊馬の足元へと迫る。
　冥界騎士トリスタン　攻２１００→１８００
「まさか……」
「そのまさかさ。魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターは、相手モンスター1体に寄生してその動きを操ることができる。トリスタンのコントロールは頂いてくよ！」
　音もなく近づいた元アリゲーターが、がばっと液状のまま飛び上がってその馬に、そ

して騎士の鎧に染み込んでその奥深くまで浸透していく。数秒もしないうちに騎士と馬の両方の額に銀色の紋章が浮かび、のしのしとこちらに向けて歩いてきた。

「さあ、お待ちかね。２体のモンスターをリリースして、アドバンス召喚！

青氷（ブルーアイス）の白夜（ホワイトナイツ）龍（ドラゴン）！」

青氷の白夜龍　攻３０００

「バトル！夢想にダイレクトアタック、孤高のウィンター・ストリーム！」

一瞬で大空に舞いあがった氷のドラゴンが、茜色の夕日に照らされながら力を溜める。そして狙い澄ました凍結のブレスが、守るもののいないがら空きになった夢想を撃ちぬいた。

青氷の白夜龍　攻３０００→夢想（直接攻撃）

夢想　ＬＰ４０００→１０００

「きゃっ！」

「っしゃあ！」

さっきは確かにいいようにやられたけど、今のターンは我ながら完璧な流れだ。これは、入学以来の２年間というものただの１度も負け試合のない夢想の戦歴に初の黒星をつけられるんじゃあないだろうか……いや、つけてみせる。この勝負、僕が勝つ！

「清明、最近調子悪いって聞いてたけど？だって」

「スランプはいい加減飽きたからね、そろそろ止めることにしたんだよ。だから夢想、この勝負は勝たせてもらうよ？」

ちょっと調子に乗ってそんな大口を叩く僕をクスクスと楽しそうに笑って、夢想がそのまま流れるような動作でデッキに手をかけた。すると次の瞬間、これまでとはまるでレベルもランクも違う圧倒的なプレッシャー、物理的な質量でこちらを押しつぶしてきそうなほどの威圧感が辺りに満ちた。これまで僕も大概色々な相手とデュエルしてきたけれど、今彼女の発するオーラは下手をするとその誰をも上回っている。

これが、無双の女王の本気の片鱗。次のターン、彼女は全力で来る。知らず知らずのうちに頬を伝っていた冷や汗をぬぐい、せめてもの空元気で笑いかけてから最後の手札をフィールドにおいた。

「……カードをセットして、ターンエンド」

「ねえ清明。今ね、私は本気で楽しいの、だってさ」

そのまま次のターンにすぐ移るのかと思いきや、意外にもデッキトップに指をかけたままこちらに話しかけてきた夢想。一体どんな話になっていくのかわからない僕には、ただ黙って聞いていることしかできなかった。夢想も僕の反応は特に気にした風もなく、楽しそうに言葉を紡ぐ。

「このアカデミアに来てから、色々なデュエリストとデュエルしてきたけど。私はやっ

ぱり、清明とデュエルするのが一番楽しいかな、なんだって」
「夢想……」
「貴方の隣でデュエルするときも、貴方とこうしてデュエルするときも。いつだって清明がいるときが一番、私は楽しくとのびのびデュエルができるんだよ、ってさ」
「ありがとう。でも、どうしたのさそんな急に」
「理由なんてないよ。なんだか今まで改めて言ったことがないなーって思うと、急にどうしても伝えたくなっちゃって、ってさ」
やっぱり明菜さんもぶっ飛んでるけど、それ以上に夢想の言動が僕には読めない。不意打ちでそんなまっすぐに言われたら、いくらなんでも照れるじゃない。あまりにも咄嗟過ぎたため気の利いた返しを考えることもできず、結局こんなことぐらいしか言えない自分が憎い。それでも、せめて僕の気持ちぐらいは伝わってくれただろうか。
「……ありがとう、夢想」
そんな僕の何の面白味もない返答を受けて、またクスリと笑う夢想。だけどその笑みには嫌味な部分はなく、見ているこちらも気分が晴れるような明るく爽やかなものだった。だから余計に、全身から立ち上るプレッシャーとのギャップが怖い。
「おかしな話しちゃったね、ってさ。それじゃあ、行くよ?私のターン!」
そうしたところで何がかあるわけでもないが、思わず身構える。さあ来い、夢想!

「魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！手札のモンスターカード、龍骨鬼を墓地に送ることでデッキからレベル１のモンスターを特殊召喚するんだって。来なさい、ワイトキング！」

「ようやく出てきたね、真打！」

大地に深々と亀裂が走り、地の底からゆっくりと骸骨の王が這いだしてくる。とうに肉など一片たりとも残っていないその瞳に、爛々とした光が宿った。ワイトキングの攻撃力は、墓地に眠るワイト及びワイトキングの１０００倍……そしてワイトメアとワイト夫人はそれぞれ墓地でワイトとして扱われるため、今の攻撃力は２０００といったところか。

ワイトキング　攻０→２０００

「魔法カード、ワンチャン!?を発動ってさ。私のフィールドにレベル１モンスターが存在するから、デッキからレベル１モンスターをサーチ。２体目のワイトキングを手札に加えて、そのまま２枚目の闇の誘惑を発動。デッキからまた２枚ドローして、サーチしたワイトキングを除外……さらに２枚目のワイトメアの効果で、自身を墓地に送りつつ除外されたワイトキングを特殊召喚するみたい」

先ほどの亀裂から古ぼけた棺桶が浮かび上がり、その蓋を突き破って更なる骸骨の王がその姿を見せる。それと同時に墓地に更なるワイトが追加されたことで、２体の王者

の骨の体により一層の力が漲る。
ワイトキング　攻２０００→３０００
ワイトキング　攻０→３０００
「バトル、ワイトキングで青氷の白夜龍に攻撃、って。螺旋怪談！」
骸骨の王のうち１人が飛び上がり、骨の拳を氷のドラゴンに叩き付ける。しかし白夜龍も負けじとその方向を見やり、特大のブレスで迎撃にかかった。その拳が白夜龍を捉えたのが先か、そのブレスが骨の体を塵一つ残さず吹き飛ばしたのが先か。ともかく２体のモンスターは同時に破壊された。
ワイトキング　攻３０００（破壊）→青氷の白夜龍　攻３０００（破壊）
「……よし、ここは。ワイトキングの効果発動！戦闘破壊されたワイトキングは、墓地に眠るワイト１体を除外することで特殊召喚される、だって」
ワイトキング　攻０→２０００
ワイトキング　攻３０００→２０００
再び地の底から這い上がるワイトキング。だけどその代償として、同じ能力を持つあの２体の攻撃力は復活に使用された分だけダウンした……そして、それこそが僕の真の狙い。白夜龍がわずか１ターンで倒されたのは、正直夢想ならばやりかねないとは思っていた。もしここで任意効果であるワイトキングの蘇生を使わない選択を取られたら、

攻撃力のさらに上昇したもう1体のワイトキングの攻撃をこの先ずっと防ぎきるのは困難だっただろう。

だけど、ワイトキングの特大火力が耐性も何もない不安定なものであることを使い手だけによく知っている夢想は、その一撃を相手に叩き込むために可能な限り慎重な手を取りたがる。ならば確実に僕のリバースカードを最後まで警戒して、突破力を自ら殺してでも攻撃の手数を増やしにくると踏んでいたのだ。

「リバースカードオープン、激流蘇生！僕のフィールドの水属性モンスターが破壊された時にそのモンスターを蘇生し、さらに蘇生させた数1体につき５００のダメージを与える！」

「っ!!」

青氷の白夜龍　攻３０００

夢想　ＬＰ１０００→５００

噴き上がる水柱とともに、氷の竜が再び宙に舞う。さらに青氷の白夜龍は自身を対象に取る魔法及び罠を無効にし破壊する効果も備えているため、夢想の手札に残ったカードがもし今から使える単体除去カードだったとしてもそれを無効化することができる。耐性としては正直不完全だけど、すでにバトルフェイズに入っている今この瞬間に限ればその耐性がとても頼もしい。

唯一の不安点は、あの最後1枚のカードがワイトキングの方を強化するカードだった場合だが……だからこそ、あえて白夜龍は攻撃表示で場に出したのだ。今現在、ワイトキングと白夜龍の攻撃力の差はきっかり１０００。守備力２５００の白夜龍を守備表示で出したとしたら、たかだか５００程度の数値差を乗り越えるカードは山のように存在する。だが１０００もの差を1枚でひっくり返せるカードは少なく、そもそもその特大火力が売りの【ワイト】でそのようなカードを採用するメリットは乏しい。

この状況はどう考えても覆らない、完璧だ。そう思った。だけど、僕はまだまだ河風夢想というデュエリストを甘く見ていたらしい。どんな状況からでも必ず勝つ、読んで字のごとく無双の女王。それが、彼女なのだ。

「速攻魔法、即神仏を発動！このカードの効果で、自分フィールドのモンスター1体を墓地へ送る。私が選択するのはたった今蘇生させたワイトキング、だって」

いつの間にかいつもの布きれではなく法衣を身にまとっていたワイトキングが、突如生気が抜け落ちたかのようにその場に崩れ落ちる。物言わぬ死体に戻ったその体が、ゴロゴロと転がって地中に吸い込まれていった。

「ワイトキングが墓地に送られた……じゃあ、まさか……」

「もう1体のワイトキングの攻撃力は、また３０００になるってさ。改めてバトル、もう1度ワイトキングで青氷の白夜龍に攻撃！螺旋怪談！」

ワイトキング　攻３０００（破壊）→青氷の白夜龍　攻３０００（破壊）
「この瞬間に戦闘で破壊されたワイトキングは、墓地のワイトを除外して特殊召喚される。だけど貴方のドラゴンは、もうこれ以上甦ることはないね、だってさ」
「……ちぇっ」
つまり、僕が考えすぎていたわけだ。良かれと思って攻撃表示で出してしまったせいで、下手に相打ちからの蘇生に持ち込まれた。つまり、このターンでの攻撃権がリセットされてしまった。ごちゃごちゃと考えずに守備表示で出していれば、次のターンに繋げることもできた……いや、こんなものは結果論でしかない。
「楽しいデュエルだったよ、って。ワイトキングで最後のダイレクトアタック、螺旋怪談！」
ワイトキング　攻２０００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ１９００→０

「今日は勝てると思ったんだけどなー。やっぱ夢想は強いや」
できる限り明るく、空元気を全開にする。いや、実際問題３ターン目の手札を見た時点でこれは間違いなく勝てると踏んだだけに逆転を喰らったショックも悔しさもひと

しおだ。
だが当の本人はいつも通り、自分の勝利を誇ることもなくこちらに近づいてくる。
「清明とデュエルしたのも、ずいぶん久しぶりだね。でも、その時よりずっと強くなってたよ、ってさ」
「そりゃどうも。最近は負け星ばっかりだけどね」
「私が保証してあげる。清明はこの1年で、去年よりずっと強いデュエリストになったよ、って」
夢想は、少なくともこういった類の嘘やおべんちゃらが言えるタイプじゃない……はず。少なくとも僕の知る限り、その手のことを口にしたためしはない。そんな彼女の言葉は素直に嬉しかったが、だからといってすぐに気が晴れるわけでもない。並のデュエルならまだしも、さっきのは絶対に勝てるとまで思ったからなあ。
まだ浮かない僕の顔を見て、夢想がなぜか手を伸ばせば届きそうなぐらいまで近寄ってきた。そのままびしっと僕に指を突きつけ、少しすねたような調子で続ける。
「もう。私が清明の強さならいくらでも保証してあげる、って言ってるでしょう？最近ずっと行き詰って悩んでたみたいだけど、清明ならきっとさらに上の段階までたどり着けるから、って。自分だけで考え込んでないで、もっと周りを見渡してね、だってさ」
「夢想……」

　そこで急に彼女の顔が赤らんだように見えたのは、単に沈みつつある夕日のいたずらだったのだろうか。ともかく自身の制服から、小さな小箱を取り出して僕に差し出した。え、これってまさか、いわゆるカカオとか砂糖とかを足したそういう感じのアレだったり。

「はい、これ。遅れてごめんね、なんだって。ハッピーバレンタイン、清明」

ターン78　鉄砲水と『万』の結束

『あら～？万丈目のアニキ、珍しくお勉強？』
『『まっさか～！』』
「ええい、うるさいぞお前ら！」
　剣山が倒れ、ジムもまたデスデュエルによって倒れた。バレンタインを挟んであれから2晩が経ったが2人ともいまだ意識が戻らず、何度か見舞いに行ったけども目覚めるそぶりすら見せないままだ。デスデュエルを見ていた十代たちの話によると、ジムは倒れる前にデスベルトを通じてエナジーが吸い取られる感覚を味わったという。僕とヨハン、十代とオブライエン、そして今回の剣山とジム。これまでに起きた終了後に人が倒れるほどの事件はこの合計3回だが、その中にもさらに程度の差がある。そしてそのほかの生徒が行うデスデュエルでは、精々終わった後でちょっとめまいがする程度でしかない、らしい。僕はそんな平和なデスデュエル経験したことないけど。プロフェッサー・コブラの持ち込んだデスデュエルに、それに対して何かしらのアクションを起こしつつあるアモン。島を飛び回る謎の怪電波と、それを追いかけるジム。そして何かを知っていそうな、だけど何ひとつ口にしない態度のオブライエン。まるでわからない、

一体これがどう繋がればスッキリするんだろう。

……などなど、せっかく柄にもなく真面目に人が物を考えていたというのに。レッド寮の安普請な壁を通じてすぐ近くから聞こえてくる万丈目と愉快な仲間たちのせいで、そんな思考も一時脇に追いやってしまった。

「入るよ万丈目ー、さっきから何やってんのいったい」

「む、清明か。ちょうどいい、お前、これには出るつもりなのか？」

部屋に入ると、調べものでもしていたらしくパソコンを目の前にした万丈目がそう言って、机の上に置いてあった封筒を投げつけてきた。キャッチして見てみるが、こんなもの特に見覚えがない。

「……なにこれ」

「何？お前は受け取っていないのか？なら説明してやろう、これは昨日からオベリスクブルー及びラーイエロー、そしてこの俺万丈目サンダーに向けて配られているアモン・ガラムからのパーティーの招待状だ。なんでもあいつのバックに存在するガラム財閥……平たく言えば万丈目グループ以上の金持ちだ、そこが身内の留学祝いでパーティーを行うんだと」

ガラム財閥、そのワードはつい先日も聞いた覚えがある。確か森に仕掛けられた謎の監視カメラをアモンに渡した時に、ガラム財閥の力で映像の再生をどうこう言っていた

ような。財閥なんて名前の響きからいってもただ者じゃないとは思ってたけど、あの万丈目グループ以上の金持ち企業だったのか。
「ふーん。まあ今時レッド生なんて数少ないからねえ。呼ばれてないのに行きようもないし、僕は家でご飯食べてるよ。んじゃさ万丈目、タッパー貸したげるからもし会場でキャビアとかフォアグラとか出たらちょっと持って帰ってきてよ。いっぺんでいいから高級食材っての、食べてみたかったんだ」
「そんな貧乏臭い真似、誰がするか！」
「あら残念。冗談だよ冗談」
半分は、という言葉はさすがに呑み込んでおいた。もちろん半分は本気だったんだけど、この様子だと絶対引き受けてはくれないだろうし。
呆れ顔のまま万丈目がやれやれと首を振り、いましがた見ていたパソコンの画面を指さす。つられて僕も見ると、そこにはガラム財閥の検索結果がずらりと並んでいた。
「別に、昔の俺ならいざ知らず今の俺は万丈目グループとは何の関わりもない身。あの男の家柄がどうだろうと、俺の知ったことではない」
『とか言っちゃって～、ホントはすっごい気にしてるんじゃないの～？』
『『プライド高いからなー』』
「やかましい、引っ込んでいろ！というか俺に話させろ！……ぜい、ぜい、すまん、見苦

しいところを見せたな」
　怒鳴り散らしておジャマ３兄弟を追いやる万丈目に、いつも通りだから気にしないよー、なんて言葉をかけるなんて真似は僕にはできなかった。でも万丈目の場合、本人がどう思うかはともかく僕らからしてみればこれが平常運転なんだけど。
「話を戻すが、俺が気に食わんのはただ１つ。万丈目グループの後ろ盾を捨ててからというもの、俺は苦労に苦労を重ね今ここにいる。だがこのアモンはどうだ！何の気苦労もなくのうのうと暮らしてきたお坊ちゃまが、この万丈目サンダーよりも今こうして目立とうとしている！」
「ちょっとでもいい話に繋がるのかと思った僕の感動を返せ」
　口には出していないが、いつの間にかまた出てきたおジャマ３兄弟もなーんだ、といった顔で万丈目の背後にふわふわ浮かんでいる。そんな僕らの視線にも気づいていないのだろう、当の本人は大真面目な顔でさらにまくしたてる。この隙に部屋帰ろっと。
「そこで、俺は一計を考えた。この万丈目サンダーが目立つことができ、なおかつアモンの鼻っ柱をへし折ることができる作戦をな。お前も来るというならばその際に手伝いのひとつでも頼もうかと思ったが……招待すらされていないのなら聞くだけ無駄だったな。ふふふ、今夜が楽しみだ。アモン・ガラムめ、今夜はこの俺の生まれ変わったデッ

キでぎゃふんと言わせてやる！」
「え？」
部屋の脱出もあと少しで成功するところまで行っていたが、それでも最後の一言につい反応してしまうのはデュエリストとしての悲しき性……でいいのかな。
「ふふん、お前が知らなくても無理はない。何しろこの忌々しい招待状が届いてから、睡眠時間を削って作り上げた俺の持ちうるギミックを詰め込んだ一品だからな」
『アタイ達兄弟にも出番があるのよ！』
「へー……ちょっと見せてよ」
万丈目のデッキ構築力は、このデュエルアカデミアの中でもかなり高い。ちょっと前まで圧倒的トップに三沢がいて、次点に元プロでここの教員の……えっと、名前なんだっけ。伊藤だか加藤だか武藤だか……ああ思い出した、佐藤先生もかなりできる男らしいという話を聞いたことがあるけど、三沢はどっか行っちゃったし佐藤先生も僕らが2年に入ったあたりから影も形も見ていない。病欠でも取ってるんだろうか、考えたこともなかった。
まあとにかくそこら辺の人がいない今、若干繰り上がり気味とはいえ今は万丈目がトップクラスの構築力なのだ。そんなデッキを見ることで、何か僕も参考にできる点が見つかるといいんだけど。僕がデッキに行き詰まりを感じていることは同じオシリス

レッド所属なだけあってよく知っている万丈目は、それを聞いて一時は快くその新たなデッキを投げ渡そうとしてくれたが、ふと何かを思いついた風にその手をひっこめた。
「ここまで来たのも何かの縁だ。悪いが清明、どうせ見るならこのデッキのテストプレイに付き合ってもらえないか？」
「僕はいいけど……」
そう言って腕のデスベルトをチラリと見る。相変わらず不気味に沈黙したままのそれは今のところ何の反応も示していないけど、ここでデュエルをすればまたこれが仕事しておかしなことになる可能性もある。
だが万丈目はバカバカしいと軽く鼻で笑い、まるで気にした風もなくデュエルディスクを構えてのけた。
「デスデュエルについて悪い噂があるのは俺も知っている。だがな、この万丈目サンダーはいずれカードゲーム界の頂点に立つ男だ。デュエルの1度や2度で倒れてなどいられるか。さあ、早くお前のデュエルディスクを持って来い！」
「あ、ちょっと!?ったく、どうなっても知らないよー!?」
なかば押し切られるような形で外に出ると、ちょうど同じパーティーの話をしていたらしい十代達にあった。十代にも招待はないのに、ホントになんで万丈目だけ貰ってるんだろう。同じレッド生のはずなのに。

「……今度本人に聞いてやろうかね。でも今は、ひとまずデュエルと洒落込もうか！」
「デュエル！」
　先攻は万丈目。さて、そのおニューのデッキの動きを見せてもらおうか。
「俺はモンスターを1体セット。さらに1枚カードを伏せて永続魔法、強欲なカケラを発動。これでターンエンドだ」
「あれ、いきなりセットだけ？てっきりもっとガンガン突っ走ってくるかと思ったのに」
「まあ待て、そう慌てるな。さあ、お前のターンだ」
「僕のターン、ドロー！」
　表側守備表示で出さないセットモンスターということは、なんらかのリバース効果を持っていると考えるのが自然。幸いこのカードが来ているのなら多少の無茶はカバーできる、序盤から攻め込もう。
「ウミノタウルスを召喚！そして水族モンスターを召喚したことで、手札のシャーク・サッカーを特殊召喚！」
　ウミノタウルス　攻１７００
　シャーク・サッカー　守１０００
「相変わらずの布陣だな」
「うるさい。バトル、ウミノタウルスで攻撃！」

頭部がウミウシのような形をした海の戦士が貝のような形状の斧を振り上げ、その全身で振りかぶって叩き付ける。だがその一撃はセットモンスターに届く前に、不意を衝いて伸びてきた1本の鞭に絡め取られた。
「嘘、止められた!?」
『なめるんじゃないわよ!』
そして辺りに響く、その鞭の持ち主の声。この声はつい先日も聞いたことがある、だけどこんなところでまた聞くことになるとは思わなかった。
ウミノタウルス　攻１７００↓黒蠍―茨のミーネ　守１８００
清明　ＬＰ４０００↓３９００
「茨のミーネ……これまで黒蠍はデュエルで使ってなかったのに、どういう気の移り変わりさ」
「お前が使っているのを見て、少し気が向いただけだ。茨のミーネの効果発動!このカードが相手に戦闘ダメージを与えたことで、デッキから黒蠍を1体サーチできる。俺は黒蠍―罠はずしのクリフを手札に加える」
「僕はこれ以上することもないし、カードをセットして……」
「おっと。バトルフェイズ終了前にリバースカードオープン、マジカルシルクハットだ。このカードは発動時にデッキの魔法、罠2枚と自分モンスター1体をセット状態で

シャッフルし、このバトルフェイズの間だけ攻守０の通常モンスターとして特殊召喚する。そしてバトルフェイズが終わったことで、２枚のカードは破壊される」
「へっ？」
攻撃が終わりさっさとメイン２に行こうとした矢先、なぜか万丈目が攻撃攪乱用のカードなはずのマジカルシルクハットを発動させた。何がしたいのかわからずただ見ているうちに、万丈目の場に現れた３つのシルクハットのうち２つが消滅し、残る１つから茨のミーネが再び姿を現す。
「そしてこの瞬間、フィールドから墓地に送られたおじゃマジックの効果発動！デッキからおジャマ・イエロー、グリーン、ブラックのカードを１枚ずつサーチする！」
「そういうこと……ターンエンド」
万丈目　ＬＰ４０００　手札：６
モンスター：???（黒蠍―茨のミーネ）
魔法・罠：強欲なカケラ（０）
清明　ＬＰ３９００　手札：４
モンスター：ウミノタウルス（攻）
　　シャーク・サッカー（守）
魔法・罠：１（伏せ）

「俺のターン、ドローだ。ドローフェイズにドローを行ったことで、強欲なカケラに強欲カウンターが１つ乗せられる。魔法カード、トランスターンを発動！この効果により茨のミーネを墓地へ送り、デッキから同じ種族属性でかつレベルが１高い強力のゴーグを特殊召喚する！」

『むぅん！』

強欲なカケラ（０）→（１）

黒蠍―強力のゴーグ　攻１８００

「まだまだぁ！出ろ、Ｖ―タイガー・ジェット！」

虎を模した戦闘機が、巨大ハンマーをその太い腕で軽々と持ち上げる盗賊の隣に召喚される。あのモンスターは、ずいぶん久しぶりに見るけど万丈目のエースの１体……移動砲台型戦闘機械、ＶＷＸＹＺの布石。

Ｖ―タイガー・ジェット　攻１６００

「行くぞ、バトルだ！強力のゴーグでウミノタウルスを攻撃！ごうりきハンマー！」

まさに斧対ハンマーの対決……なんて馬鹿なことを言っている暇はない。攻撃力はゴーグの方が上で、僕の手にステータス変動を起こすためのカードはないのだ。純粋に戦闘に持ち込まれた場合、ウミノタウルスに勝ち目はない。

黒蠍―強力のゴーグ　攻１８００→ウミノタウルス　攻１７００（破壊）

清明　ＬＰ３９００→３８００

「ゴーグがバトルで相手にダメージを与えたこの瞬間、効果発動！強力のゴーグ第一の効果により、貴様のシャーク・サッカーにはデッキトップへバウンスされてもらおう！」

ウミノタウルスを叩き伏せたゴーグの返しの一撃が、その隣にいたコバンザメにも襲い掛かる。幸い直撃こそしなかったものの、巻き起こる風圧は体の軽い魚をいともあっさりと吹き飛ばした。

「今だ、タイガー・ジェットでダイレクト……」

「リバース発動、グレイドル・パラサイト！このカードは相手の直接攻撃時に僕のフィールドにモンスターが存在しない時、デッキからグレイドルを１体攻撃表示で特殊召喚できる！出番だよ、イーグル！」

グレイドル・イーグル　攻１５００

タイガー・ジェットが自身のボディを分離させ、そのパーツひとつひとつから砲台が飛び出て僕に照準を合わせる。パワーチャージが開始されたその瞬間に足元の地面から猛烈な勢いで銀色の水が吹き出し、空中でその姿を黄色の鳥に変えていく。

その様子を見て、慌てて万丈目が攻撃命令を取り消した。

「まずい！砲撃ストップ、カードをセットしてターンエンドだ！」

さすがにそうそうコントロールはくれないか……だけど、今回は思わぬところでラッ

キーだった。
先ほど喰らった強力のゴーグによるバウンスのせいで僕のデッキトップはシャーク・サッカーに固定されてしまっていた。だけど、たった今パラサイトの効果でデッキからイーグルを特殊召喚したことで、ルール以前にマナーの問題として当然ながらシャッフルの処理が入る。つまり万丈目からしてみればダイレクトアタックできなかったばかりか、せっかくのドロー固定までもが無駄になったわけだ。
「このまま一気に波に乗る！僕のターン、ドロー……んー、フィッシュボーグ―アーチャーを守備表示で召喚、さらに永続魔法、補給部隊を発動。これでターンエンド」
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
万丈目　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：黒蠍―強力のゴーグ（攻）
Ｖ―タイガー・ジェット（攻）
魔法・罠：強欲なカケラ（１）
１（伏せ）
清明　ＬＰ３９００　手札：３
モンスター：グレイドル・イーグル（攻）
フィッシュボーグ―アーチャー（守）

魔法・罠：グレイドル・パラサイト
補給部隊

「特に波はお前のところに来なかったようだな。だがそれもそのはずだ、お前の言う波は今まさに、俺の所へ来ている！俺のターン、ドロー！」

意気揚々とカードを引く万丈目。その自信はどこから来るのかとよっぽど聞きたくなったが、それは勘弁しておいてあげよう。僕に波が来ていないのも否定できないところではあるし。

「ドローを行ったことで、さらにカケラにカウンターが乗る。そして２つ以上のカウンターが溜まった強欲なカケラを墓地に送ることで、カードを２枚ドローだ。Ｗ―ウィング・カタパルトを通常召喚し、そのままＶとＷの２体をゲームから除外し合体融合！変形だ、ＶＷ―タイガー・カタパルト！」

青い飛行機型メカの上に虎型ジェットマシンが装着され、といえば聞こえはいいが要するに上に乗っただけで２体合体を名乗る変形ロボが新たに生み出される。

ＶＷ―タイガー・カタパルト　攻２０００

融合召喚は通すしかない。だけど、ＶＷの固有能力は手札１枚をコストにしたモンスター１体の表示形式変更のみ。アーチャーを狙われるとそれなりに痛いし、そこからゴーグの効果でもう１度デッキバウンス狙い？いや、それだけならまたパラサイトの効

果でイーグルを呼び出せばいいし、補給部隊の効果で1枚のドローもできる。万丈目として、この状況でうかつに攻撃はできないはず。

そんな考えは、目の前で不敵に笑うその顔を見た瞬間に吹き飛んだ。万丈目、これはこのターンで仕掛けてくるつもりだ！

「魔法カード発動、モンスターゲート！このカードは発動時、モンスター1体をリリースする。そして俺のデッキを通常召喚可能なモンスターが出るまでめくり、最初に出たそのモンスターを特殊召喚する！強力のゴーグをリリースし、発動……1枚目、魔法カード、おジャマッスル！2枚目、特殊召喚モンスター、アームド・ドラゴン　ＬＶ７！」

「やっぱり、か」

墓地に送られた2枚のカードを見て、やはり万丈目のデッキにはあの2種類の要素が含まれていることを改めて認識する。このままうまいこと適当なモンスターでお茶を濁してくれればいいんだけど。

「3枚目！魔法カード、おじゃマジック！」

おジャマをサーチするカード、おじゃマジックが再び墓地に送られる……だがあのカードがサーチを可能とするのは、あくまでフィールドか手札から墓地に送られた時。デッキからめくられそのまま墓地に送られる形となった今、そのサーチ効果は不発とな
る。

「４枚目！魔法カード、融合！まだまだ行くぞ、５枚目！……ほう、ここで引いたか。レベル３モンスター、スノーマンイーターを特殊召喚！」

高らかに宣言するとともに、万丈目のフィールドに見覚えのある雪だるまが鎮座する。全く皮肉なものだ、１年の時に僕が万丈目のために渡したあのカードが、こうして僕に牙をむくとは。

……でも万丈目、あのカードをまだデッキに入れてくれてたんだ。そこはちょこっと嬉しかったり。

スノーマンイーター　守１９００

「そして魔法発動、融合識別（フュージョン・タグ）！この効果により俺はスノーマンイーターを選択し、さらにエクストラデッキに眠るＸＹＺ―ドラゴン・キャノンを見せる」

「……？」

そんなもん見せてもらわなくったって、エクストラにそいつがいることはわかっている。だが次の瞬間に雪だるまの形がみるみる変わっていき、まるで雪まつりの展示物並みに立派なドラゴン・キャノンの雪像へと変化した。

「このカードの効果によりスノーマンイーターは、融合召喚に使用する場合のみその名をＸＹＺ―ドラゴン・キャノンとすることができる！行くぞ、除外融合！Ｖ・Ｗ・Ｘ・Ｙ・Ｚ、５体合体！」

雪像と本物の機械が宙に舞い、分離合体を繰り返す。そして空の向こうから人型の移動砲台、アルファベットを冠するロボットの究極体が地響きとともに現れる。

ＶＷＸＹＺ（ヴィトゥズィ）―ドラゴン・カタパルトキャノン　攻３０００

「出たな、ＶＷＸＹＺ！」

予想外の方法により最低限の消費で現れた巨大ロボ……だけど、まだこれだけならば対処の方法もきっとあるはずだ。そんな考えを見透かしたのか、万丈目がさらに笑みを浮かべる。

「まだ終わってはいないぞ、清明。トラップ発動、融合準備（フュージョン・リザーブ）！このカードはエクストラデッキの融合モンスターを相手に見せることでその素材１体をサーチし、さらに墓地から融合のカードをサルベージすることができる。俺は再びＸＹＺ―ドラゴン・キャノンを見せ、Ｘ―ヘッド・キャノンをサーチ。そして墓地から、先ほど名推理で墓地に落とした融合を手札に戻す」

『いよいよおいら達の出番なのね？』

『よっしゃーー！』

『やってやるぜーー！』

素材となる３兄弟、そして融合のカードが揃ったことで気合十分なおジャマ達。だが、意外にも万丈目の返事は冷めたものだった。

「何を馬鹿なことを抜かしている。こんなところで融合したところで、それこそ壁にしかならんではないか。ＶＷＸＹＺの効果発動！１ターンに１度、場のカード１枚を除外する！消え去れ、グレイドル・イーグル！ＶＷＸＹＺ―アルティメット・デストラクション！」

「ぐっ……！」

目も眩むような光線とともに、グレイドル・イーグルの姿が跡形もなくフィールドから消え去る。イーグルの能力はあくまで破壊が前提、除外には完全に無力だ。

「このままＶＷＸＹＺでフィッシュボーグ―アーチャーに攻撃、そして効果発動！このカードとバトルするモンスターの表示形式を変更できる！消え失せろ、ＶＷＸＹＺ―アルティメット・デストラクション！」

謎の光線を受けて強制的に戦闘姿勢を取らされたアーチャーの矢が唸りをつけて飛ぶ……だけどそんなものは、圧倒的なまでの火力によるフルバーストに対しては道端に落ちている石ころほどの妨げにすらなりはしない。全身の砲台を駆使して放たれる無数の光線に雷撃が、ちっぽけな魚を跡形もなく消し去った。

ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン　攻３０００

↓フィッシュボーグ―アーチャー　守３００→攻３００（破壊）

清明　ＬＰ３８００→１１００

「ほ、補給部隊の効果発動！自分フィールドでモンスターが破壊された時、カードを１枚ドローする！」
「やむを得ないな。俺はこれでターンエンドだ」
「危なかった……」
　なんとかこのターンも凌ぐことができた。だけどもう僕のライフにも余裕はない、一刻も早くこの状況をなんとかしなくては。
「そのためにも、まずはドロー！」
　下手な壁モンスターはあの巨大ロボの前には何の意味もない。セットカードで対処しようとしても、万一そちらに除外を向けられたらアウト。つまりこの１ターンで、あのロボは突破して見せる！
「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、このカードはレベル４かつ攻守０として特殊召喚できる。カイザー・シースネーク、特殊召喚！そして水属性モンスターが自分フィールドに存在することで、手札のサイレント・アングラーを特殊召喚！」
　カイザー・シースネーク　攻２５００→０　守１０００→０　☆８→４
　サイレント・アングラー　攻８００
「モンスターを２体並べた？」
「さて、やっぱり僕の切り札はこれでなくっちゃ。２体のモンスターをリリースして、ア

ドバンス召喚！こっからが本番だ、霧の王（キングミスト）！」
リリース素材の攻撃力合計は、３３００。そしてその数値が、そのまま振るわれる霧の宝剣の破壊力に直結する。
霧の王　攻３３００
「がら空きの状態で……やるじゃないか、清明」
「そりゃどうも。バトル！ＶＷＸＹＺを切り裂け、ミスト・ストラングル！」
今の万丈目の手札は６枚……とはいえその内訳はサーチされたまま使われていない罠はずしのクリフにＸ―ヘッド・キャノン、そしておジャマ３兄弟と融合であることがわかっている。オネストがないことは確認済みだから、反撃も考える必要がない。
霧の王　攻３３００→ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン　攻３０００（破壊）
万丈目　ＬＰ４０００→３７００
「チッ……だがこの程度、かすり傷だ！」
「だろうね。カードをセットして、ターンエンド」
万丈目　ＬＰ３７００　手札：６
モンスター：なし
魔法・罠：なし

清明　ＬＰ１１００　手札：１
モンスター：霧の王（攻）
魔法・罠：グレイドル・パラサイト
補給部隊
１（伏せ）

「俺のターン、ドロー！魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動！このカードは発動時にデッキの上から１０枚を裏側で除外し、カードを２枚引く。そして魔法カード、おろかな埋葬を発動」

さあ、次は何を見せてくる？

「……清明。俺が今墓地に送ったカードは、黒蠍―罠はずしのクリフ。お前ならば、この意味が分かるはずだ」

「意味？」

何を言っているのか正直わからなかったが、とりあえず考えてはみる。ＶＷＸＹＺは除外融合を行うため素材が墓地へは行かず、今の万丈目の墓地にいるのは魔法と罠を除けば黒蠍のメンバーが３体のみ……３体……闇属性戦士族が３体……。

「まさか!?」

「そのまさかだ！俺の墓地に闇属性モンスターが３体のみ存在することで、このカード

は手札から特殊召喚できる！出でよ、ダーク・アームド・ドラゴン！」

ノース校に封印されていた伝説のレアカード、アームド・ドラゴン……のダークバージョン。僕はいまだにノース校に行ったことはないからあんまり知った風なことは言えないけど、なんでわざわざ本体とダークバージョン、それとメタファイズバージョンを別の場所に保管していたんだろう。一緒の場所でいいんじゃないのかな。万丈目の話によるとノース校は氷山の上とかにもカードがある場所とかいう色々訳の分からない場所だし、そこも関係しているんだろうか。

なんて、よその事情に首突っ込んでる暇はないんだけどね。ダーク・アームド、その効果のえげつなさは一時使用者だったこの僕が一番よく知っている。

ダーク・アームド・ドラゴン　攻２８００

「ダーク・アームド・ドラゴンは、墓地の闇属性モンスターを除外することでカードを１枚破壊する。茨のミーネを除外し、グレイドル・パラサイトを破壊！ダーク・ジェノサイド・カッター！」

「チッ……」

これまで抑止力として頑張ってくれていたパラサイトが破壊される。最初に霧の王を狙ってこなかったのは、恐らく僕のこのリバースカードを警戒してのことだろう。うっかり破壊して安全地帯でも踏み抜くのを嫌ったのか、とりあえずパラサイトから破

壊して一呼吸おこうという狙いでもあるのだろう。
　だけど、それは完全な悪手でしかない。どうせ狙うなら、霧の王を真っ先に潰しにかかるべきだったのだ。
「パラサイトの破壊は通す……だけど、これ以上はさせない！相手モンスターがフィールドで効果を発動したこの瞬間、手札から幽鬼うさぎの効果発動！ダーク・アームドには破壊されてもらうよ！」
「何!?」
　漆黒のカッターが飛来してパラサイトのカードを撃ちぬいた瞬間、お返しと言わんばかりに１本の鎌が回転しながらものすごいスピードでダーク・アームドめがけて飛んでいく。柔らかい腹の部分に突き立ったそれはいささかもスピードを緩めることなく、漆黒のドラゴンの体を貫通した。
「しくじったか……ならば、Ｘ―ヘッド・キャノンを守備表示で召喚。ターンエンドだ」
　Ｘ―ヘッド・キャノン　守１６００
「運が悪かったねえ。僕のターン！」
　とはいえ、こちらも余裕があるわけではない。少しでも流れが向いている今のうちに、なんとかこれまでの遅れを取り戻さねば。だからここでアタッカーが引けなかったのは、僕にとってかなりの痛手と言える。

「バトル、霧の王でヘッド・キャノンに攻撃！ミスト・ストラングル！」
天高く飛び上がった魔法剣士が、太陽を背にして大上段からの打ち込みを狙う。いくら変形合体して闘うマシーンといえども、その合体相手がいないうちはただのモンスターでしかない。豆腐でも切るようにすっぱりと真っ二つにされ、そのまま破片が爆発した。
霧の王　攻３３００→Ｘ―ヘッド・キャノン　守１６００（破壊）
「僕はこれでターンエンド」
万丈目　ＬＰ３７００　手札：５
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ１１００　手札：１
モンスター：霧の王（攻）
魔法・罠：補給部隊
１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！フン、ようやく来たな？魔法カード、融合を発動！手札のおジャマ・イエロー、グリーン、ブラックで３体融合！」
『『待ってました！！おジャマ究極合体！』』

３つの色が高速回転しながら混じり合い、白い巨体に花柄パンツ、風呂敷柄のマントをつけた最大のおジャマがその筋肉をアピールする。
『おジャマ・キーング！』
おジャマ・キング　攻０
「攻撃表示……まさか！」
「そのまさかだ！フィールド魔法発動、おジャマ・カントリー！このカードが存在し場におジャマモンスターが出ている限り、フィールドの全モンスターの攻守は逆転する！」
あたりの風景がのどかな田舎町に変わる……そしてその風景のあまりと言えばあまりのゆるさに脱力したのか霧の王が自身の剣に寄りかかり、なぜかキングの筋肉がモリモリと膨れ上がる。
霧の王　攻３３００→０　守０→３３００
おジャマ・キング　攻０→３０００　守３０００→０
「これで終わりだ！おジャマ・キングで霧の王に攻撃！行けっ！」
『おジャマ・フライングボディアターック！』
巨体がふわりと宙に浮き、次の瞬間体ごと霧の王にのしかかる。通常ならばさっとかわして終わりな単調な攻撃も、今の脱力しきった霧の王にかわす気力はない。
だがその巨体に押しつぶされる寸前、霧の王の体が文字通り霧となった。追突の寸前

に相手がいなくなったことで、おジャマ・キングが勢い余って顔から地面に激突する。
「まだ何か仕掛けてきたか!?」
「リバーストラップ、儀水鏡の反魂術を発動!このカードは自分フィールドの水属性モンスター1体をデッキに戻すことで、墓地の水属性モンスター2体を手札に加える!霧の王をデッキに戻したことでその攻撃は巻き戻されたわけさ。そして墓地から、カイザー・シースネークとサイレント・アングラーを回収」
「モンスターを減らしたところで、攻撃が無効になるわけではない!もう一度行って来い、おジャマ・キング!」
『お……おジャマ・フライングボディ……』
　再び技名を叫びつつ、キングの巨体が舞い上がる。だけど、僕だってただ策もなしに霧の王を逃がしたわけじゃない。
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札からゴーストリック・フロストの効果発動!このカードはその攻撃モンスターを裏側守備表示にし、さらに自身を裏側守備表示で特殊召喚する!」
　防寒具を着込んだ雪だるまが飛び出し、今まさにプレス攻撃を使用としていたおジャマ・キングに雪玉をぶつけて狙いをそれさせる。運よくそのいくつかが目に当たったらしく、たまらずにキングが再び着地した。

???（ゴーストリック・フロスト）
「おジャマ・キングをセット状態にしたことで、一時的にカントリーの効果は失われる……だがそれにより、今のキングの守備力は３０００。越えられるものならば越えてみろ、カードをセットしてターンエンドだ！」
「僕のターン！」
　超えられるものなら？もちろんだ、そしてそのために必要なカードはたった今僕がドローした！
「魔法カード、強欲なウツボを発動！手札の水属性モンスター２体、サイレント・アングラーとカイザー・シースネークをデッキに戻し、カードを３枚ドローする。そしてゴーストリック・フロストをリリースして、アドバンス召喚！来い、氷帝メビウス！」
「この局面で、氷帝メビウスだと!?」
　青いマントを靡かせる氷の力を持つ帝、メビウス。周りの風景を一睨みすると、あれよあれよという間に街の風景が氷漬けに変化していった。
「氷帝メビウスはアドバンス召喚時に魔法・罠カードを２枚まで破壊できる。フリーズ・バーストで、おジャマ・カントリーを破壊！」
「……だがメビウスの攻撃力では、おジャマ・キングの守備力は突破できないはずだ」
「それは間違いないね。だから僕は、正面突破させるのさ！魔法カード、アクア・ジェッ

トを発動！これにより水族のメビウスは、攻撃力が１０００ポイントアップする！」
メビウスの空にかざした右腕に光が走り、おなじみのジェットが装着される。
氷帝メビウス　攻２４００→３４００
「バトル！おジャマ・キングに攻撃、アイス・ランス！」
アクア・ジェットを直接腕に付けたことでいつもよりも遥かに速く、右腕に氷を纏わせたメビウス自前の槍が唸る。圧巻の守備力を持つおジャマ・キングといえど、その強化された一撃に抗うすべはなかった。
氷帝メビウス　攻３４００→???（おジャマ・キング）　守３０００（破壊）
「カードをセット、ターンエンドッ！」
今は一見、メビウスを従えている分だけこちらが有利に見える。だけどそれはかなり不安定な優位でしかなく、裏を返せばメビウス意外に僕の攻め手はないことを示している。ライフも残り少ない今、もしもう一度万丈目にこの盤面をひっくり返されたら……どうだろう、これ以上さらなる逆転なんてできるだろうか。
万丈目　ＬＰ３７００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
清明　ＬＰ１１００　手札：０

モンスター：氷帝メビウス（攻）
魔法・罠：補給部隊
１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！魔法カード発動、貪欲な壺！俺の墓地からおジャマ・グリーン、おジャマ・ブラック、黒蠍―罠はずしのクリフ、そしてダーク・アームド・ドラゴンをデッキに戻し、カードを２枚ドローする！」
ＶＷＸＹＺとおジャマ・キングを戻さなかったのは、恐らくこのドローで死者蘇生などの蘇生カードを引いた時のことを考えてだろう。正規の方法で融合されたあの２体は、条件さえ揃えば普通に蘇生させることができる。
「……クソッ、死者蘇生さえ引ければ勝てたというのに！魔法カード発動、ソウル・チャージ！俺の墓地からＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン及びおジャマ・キングの２体を蘇生させ、１体につき１０００ライフを失いさらにこのターンのバトルフェイズが封印される！」
ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン　攻３０００
おジャマ・キング　守３０００
万丈目　ＬＰ３７００→１７００
「万丈目……」

あれだけ苦労してようやくここまでこぎつけたというのに、いともあっさりと復活するモンスター。やっぱりこの男は、大したデュエリストだ。
「バトルフェイズは行えずとも、モンスター効果は生きている。おジャマ・キングが存在することで貴様のモンスターゾーンは3か所まで使用不能となる。俺はこの効果で、モンスターゾーンのうち2か所を封殺させてもらう」
「2か所？3つじゃなくて？」
「今にわかる。続いてVWXYZ―アルティメット・デストラクション！氷帝メビウスを除外する！」
「また……！」
再び無数の光線が乱舞し、メビウスを光の中へ消し去っていく。
「カードをセット。さあ、ターン終了だ！」
「僕のターン、ドロー……」
「この瞬間にトラップ発動、おジャマトリオ！相手フィールドに3体、アドバンス召喚のためのリリース不可のおジャマトークンを守備表示で特殊召喚する！これでモンスターゾーンは全封殺、よって蘇生は無効だ！」
『『『ど～も～』』』
「嘘でしょ!?」

おジャマトークン（イエロー）　守１０００
おジャマトークン（グリーン）　守１０００
おジャマトークン（ブラック）　守１０００
モンスターゾーンが完全封殺されたことで、モンスターを出して逆転することすらできなくなってしまった。仮にトークンだけで凌ごうにも、ＶＷＸＹＺの表示形式変更効果を使われれば次の万丈目のターンで瞬殺されてしまう、ということだろう。
「まだだ！さらにもう１枚のリバースカード、バトルマニアを発動！この効果により相手モンスターは全て攻撃表示となり、このターン攻撃をしなければならない！」
『オイラ達に攻撃させるの？アニキの鬼ー！』
『悪魔ー！』
『暴力はんたーい！』
「ええい、やかましいぞお前ら！」
おジャマトークン（イエロー）　守１０００→攻０
おジャマトークン（グリーン）　守１０００→攻０
おジャマトークン（ブラック）　守１０００→攻０
どうやら自分のターンを待たず、このまま攻撃させて終わらせるつもりらしい。勝負は勝負として自分たちが特攻するのは嫌なのか僕以上の勢いで抗議するおジャマトリ

オだったが、万丈目がそれをバッサリと切って捨てる。
　だけど、残念。僕が今引いたカードなら、あるいは……！
「魔法カード、ブラック・ホールを発動！フィールドに存在する全モンスターは、破壊される！」
「驚いた、まだそんな切り札を隠し持っていたとはな。だがおジャマトークンは破壊された時、相手に３００のダメージを与える！」
　清明　ＬＰ１１００→２００
「あぐっ！だけどこの瞬間、おジャマトークンが僕のフィールドで破壊されたことで補給部隊の効果が発動！カードを１枚ドローする！」
「なるほど、俺のライフは残り１７００。そのドローで最後にモンスターを引き当て、その一撃に全てを賭けようという訳か。フン、基本攻撃力の低い貴様のデッキではその確率も低いが……引けたならば、面白いだろうな。いいだろう、かかってこい！」
「万丈目……やってやるとも！ドロー！」
　引けたら面白い、だなんてまるでユーノや十代のようなことを言う万丈目にかすかに驚きつつも、言われるまでもなくデッキに手をかける。今掴んだこのカード、これが何を見せてくれる？
「……僕は今引いたカード、ハンマー・シャークを召喚！」

ハンマー・シャーク　攻１７００

「フン、結局引き当てたか。この万丈目サンダーが、よもや破られるとはな」

口ではそんなことを言ってはいるが、万丈目の表情は明るい。その笑顔に軽く手を振って応えてから、最期となる攻撃宣言を行う。

「バトル！ハンマー・シャークでダイレクトアタック！」

ハンマー・シャーク　攻１７００→万丈目（直接攻撃）

万丈目　ＬＰ１７００→０

「まったく。お前に負けたということは、俺もまだまだ詰めが甘かったということだな」

「相変わらず口が減らないねえ」

そんなことを言っているとデスベルトが光り始める……が、これまでに比べて明らかにたいしたことない。むしろせっかく身構えていたのに拍子抜けするぐらいで、この程度なら誰だって１度や２度で倒れたりはしないだろう。となると、何らかの方法でエネルギー吸収量が調整されてるとか？でもそんなの、なんのために？もしかしてこのデスベルト、狙いは僕らに自分は手を出さずに危害を加える事よりも吸い取るエネルギーそのものが目当てだったりするんだろうか。

わからない、まるで見当もつかない。なによりも情報が少なすぎる。
「さて、俺は今から夜までかけてこのデッキを一から調整し直すとしよう。ご苦労だったな、清明」
『オイラ達も手伝うわよ～ん』
「……一度、お前ら全員クビにしてみるか。新しく使いたいカードもあるしな」
『そんなっ!?』
「冗談だから耳元で怒鳴るな、やかましい。とはいえパワー不足なのは明らか、この欠点をどう解消すべきか……」
ぶつぶつと呟きながら部屋へと戻っていく万丈目の後姿を見送りながら、その最後の一言が頭の中に残っていた。パワー不足、ね。そういえば三幻魔も決戦の時には世界中のカードからエネルギーを吸い取っていたらしいし、まさか今回もそんな化け物じみたカード絡みだったりするんだろうか。
まさか、ねえ。……ね？

ターン７９　鉄砲水と暗黒の中世

「万丈目が倒れたぁ!?」

その知らせがレッド寮でゴロゴロふて寝していた僕のところに飛び込んできたのは、僕とのデュエル後にさらに新しく組み直したデッキを片手に意気揚々と出て行った万丈目を見送った、その夜のことだった。

「……オーケーオーケー、ＰＤＦじゃあ話しづらい、今すぐそっち行くから！」

『それが、ですね、先輩……くっ！』

「葵ちゃん？」

その知らせをわざわざ僕に伝えてくれた葵ちゃんだが、なんだか彼女の様子もおかしい。ＰＤＦ越しですらわかるぐらい呼吸が乱れてるし、声にもいつもの張りがない。今にも倒れそうなところを気力で踏ん張ってるような彼女の様子に考えるまでもなくピンときて、通話口に向かって半ば怒鳴りつけるように声を荒げる。

「もしもし、葵ちゃん!?もしかして、そっちでデスデュエルやったの？」

『ええ……不覚、ですが……』

「なんでパーティー会場行ってまでデュエルすんのこのデュエル馬鹿！今すぐ鮎川先生

連れてそっち行くから、そのまま大人しくしてなさい！それで？倒れたのは何人？」
『この場のほぼ全員、です……』
「はぁ!?」
　確かパーティーに招待されたのはラーイエローとオベリスクブルー男女全員＋アルファだったはずだ。１人や２人ならまだしも、そんな人数が一度にデスデュエルをした、それはつまりどういうことだろう。自身の説明不足に気づいたらしく、通話口の向こうで苦しそうに葵ちゃんが唸る声が聞こえてきた。
『元々、アモン先輩の、発案で……会場でですね、デスデュエルの、大会が、始まったんです……』
「……とにかく僕もそっち行くから、いったん切るよ」
　少なくともアモンは、デスデュエルの危険性をよく理解していたはずだ。そのアモンがわざわざ、被害を拡大するようなデスデュエルの大会を開く？ただでさえ今この学校で起きていることはわけがわからないのに、これ以上引っ掻き回さないでほしいものだ。
　もっとも、今はそんなこと言ってる場合じゃない。あの葵ちゃんがぶっ倒れる半歩手前ということは、並の生徒なら昏睡状態一直線のパターンだろう。起きるまで寝かしておくぐらいしかできる事はないだろうけど、人手があるに越したことはない。

風呂上りで寝間着だったので学生服を羽織り寮を出る寸前に、机の上に放り出してあった僕のデュエルディスクがなぜか目についた。デュエルするつもりもないのになぜそれが気になったのかはわからない。あるいは虫の知らせ、といってもいいかもしれない。その時は特に何をするつもりもなかったが、とにかくそれを引っ掴んでから改めて寮を飛び出した。

『軽い地獄絵図だな。だが私好みの地獄ではない』

「何言ってんのチャクチャルさん。馬鹿なことしてないでちょっとは手伝ってもらえませんか、ね！」

そこらへんにばったばったと倒れてるイエローやらブルーやらの生徒を手当たり次第におぶさり、本校の保健室へと運んでいく。ただこのぶんだと保健室のベッドが足りないから、途中からはそれこそ体育館にでも寝かしておくしかないだろう。

ちなみに女子ばっか最優先で運んだことは偶然です。まあレディーファーストっていうしね、ボランティアでやってんだから別に順番ぐらい僕が決めてもいいよね？保健室まで運んだところで一瞬だけ目を覚ました葵ちゃんが、他に寝かされてるのが女子ばっかりだった事に気づいた時点でまるで僕を見る目がまるでゴミを見るようものに

なっていたのもまあ気にしないでおこう。セクハラ云々言われそうだけど、否定しない範囲でうまいこととぼけておけば十分誤魔化せる……はずだ、きっと。

そんなことを考えながら最後の1人を体育館に敷かれた簡易布団に放りこみ、鮎川先生に別れを告げてから外に出た。医療知識なんて持ち合わせていない僕がいつまでもうろちょろしていたところで、単に邪魔にしかならないからだ。それに万丈目も呼吸器までつけて寝込んでいる状態だし、こちらとしても友人のそんな姿を見るのは辛いものがある。

「……ねえチャクチャルさん、やっぱり昼間、万丈目は一発殴ってでも止めるべきだったのかな」

こうなることが予想できていなかったといえば、嘘になる。デスベルトがエナジーを吸い取る率の高い時に万丈目がデュエルをしてしまう危険は、十分考えられるものだった。なまじ昼にデュエルした時は大した量じゃなかったから出発には何も言わないでおいたけど、今となってはそんな自分の判断が恨めしい。

『私がマスターに危ないからデュエルはするな、と言ったとして、それをマスターが聞き入れるのか?』

「う。その返しはずるいよ、チャクチャルさん」

『殴って止めようだなんてエネルギーを浪費するだけだ、ということさ』

いつになく諭すようなこの言葉も、チャクチャルさんなりに慰めてくれているのだろう。それにもう1つ、今の僕に対し釘を刺そうともしている。早い話僕がデュエルをするのは私としては勧めないぞ、という意思表示だ。

なんでわざわざそんなことを言いだしたのかというと、実はこれにもわけがある。先ほどまで出入りしていた保健室で、たまたま手伝いをしていたジムに出会ったのだ。そしてその時、あるものを手渡された。

「電波探知装置……ちゃんと効くかな、これ」

『私は機械はよくわからんぞ？』

デスデュエルが行われるたびにこの島を飛び交う怪電波を察知できる装置。今回のパーティーのおかげ、というかパーティーのせいでだいぶ電波の向かう先も特定できてきたらしいのだが、ジムが言うことにはなんでもあと1回でいいからその方向を絞り込める情報が欲しいとのことらしい。要するに、この学校でまだデュエルをやるような根性のある奴がいたらそいつの戦いを見届けろ、ということだ。ジムもジムで学校中を探し回っているが、なにせこの島は広い。だからここ数日の間に本土から取り寄せたこのスペアの電波探知装置を使って、土地勘のある僕にヘルプをプリーズする、だそうだ。

「あんなことの後じゃあ、そりゃあデュエルしようなんてのもいないよねえ」

『まあ、そうなるだろうな……おや、誰か来たぞ』

学校の中はがらんと静まっていて、ファラオ一匹歩いていない。すでにパーティーに出て倒れた人達のことは学校中に知れ渡っていて、偶然助かった生徒もそのほとんどが今日は寮で大人しくしているだろう。無論、デュエルだなんてもってのほかだ。だから一応見回りはするものの正直ほぼ期待していなかったが、チャクチャルさんの言葉に後ろを振り返る。

「シニョール清明、話は聞かせてもらったノーネ!」

「クロノス先生!?」

自信に満ちた足取りでこちらにやってくるその姿に、思わず驚きの声を上げる。今年になっていきなりやって来た臨時講師、コブラのせいで面目丸潰れになってしばらく落ち込みムードだったはずなのに、今日は随分と元気になったものだ。

「要するに、誰かデスベルトをつけた人がデュエルをすれば問題ないのでショウ。ここで私がデスデュエルと一連の事態の関連性を証明できれば、あの忌々しいプロフェッサー・コブラは失脚間違いなし、逆に私はその功績により次期校長の座にぐっと近づくことができるノーネ」

「ああ……」

最近すっかり忘れてたけど、そういやこの人はこういう人だった。いつぞやのジェネックスでタイタンが来た時も庇ってくれたし、根はいい人なんだけどねえ。今回だっ

て下心はあるだろうけど、だとしてもこれまで表だってコブラに逆らわなかったこの人が立ち上がったのは、生徒がこれだけ倒れたのが大きな理由だろう。

教育者としてすごくいい人なんだよ、その分自分の欲にもわりかし忠実なだけで。

「で、クロノス先生。誰がデュエルするんですか？」

「フフン、少なくとも１人はナポレオン教頭にやってもらうノーネ。あと１人は……まあ、それを今から探せばいいでショウ」

なんかもうオチが見えた気がする。そう思ったわずか５分後。

「嫌でアール、吾輩だってそんな危険なことやりたくないでアール！」

「甘いことを言ってはいけませんーノ、それでも教頭は教育者ナノーネ!?」

「そこまで言うなら、クロノス校長『代理』がやればいいのでアール！」

案の定、わーわー言い合いながら追いかけまわす２人の先生。でもこんな非常時には、むしろこの平常運転なこの人たちの方が頼もしく感じる気がしないでもない。

「では、私はちょっと急用を思い出したのでこれで失礼するでアール！」

「あ、ちょ、ちょっと待つノーネ！」

あ、逃げた。

その後クロノス先生が追いかけにかかったものの、結局教頭には逃げ切られたらしい。その後もしばらく渋い顔でぶつぶつ言っていたクロノス先生だったが、ややあって

何かを決心したような顔で立ち上がった。
「こうなったらこれも生徒のためそして私のため、デスデュエルだろうとペペロンチーノ一気食いだろうと私自らやってやるノーネ!さあシニョール清明、これで探す相手はあと1人なノーネ!」
「先生……んじゃ僕が相手を」
「ノー。私も教師の端くれ、これ以上生徒に危険を押し付けるようなことはできませんーノ。誰か先生方から手の空いた人を探すノーネ」
ついさっきまでナポレオン教頭を追いかけまわしてた人と同一人物だとは思えないほどまともな先生っぽいことを言いだすクロノス先生。だけど、僕だってここで引くわけにはいかない。例え先生が断ろうと、いくらチャクチャルさんが渋ろうと、いい加減我慢の限界だ。
そもそも、だなんて結果論でしかないけれど、そもそも留学生たちがやってきたあの日、僕がオブライエンとコブラが話していたことをすっぱ抜いて学校中にリークしていれば。あるいはその次の日、翔が人質となった時にそれを校長か、いっそ本土の新聞あたりにあることないこと話を膨らませて匿名投稿していたら。あの時はオブライエンを信じるのが最善手だと思ったし、今でもその気持ちに変わりはない。だけど、ここまで被害が出ることがあの時もしもわかっていたのなら……どうだろう、それでも僕に同

じ選択ができただろうか。
　ただ確実なことは、あの時点でコブラの危険さを知らしめることができていたならばその時点でコブラの追放は確定、このたくさんの被害者も出てくることがなかった、ということだ。
　だから僕にはせめて、一刻も早くこの事態を終わらせる責任がある。クロノス先生が僕とはデュエルしないというのなら、多少荒っぽい手を使ってでも。
　そうだそうだ、と声がした。僕が止められたはずのこの事態のせいで、たくさんの犠牲者が生まれた。僕のせいだ。僕が悪い。遊野清明が一番悪い。
「……えい」
「ムムム？た、大変なノーネシニョール清明、火事なノーネ！早く消火器を……」
「無駄ですよ、先生。この地縛の炎は物を燃やす力こそありませんが、一度張られたらデュエルが終わるまで中からも外からも干渉することはできません。さあ、デュエルと洒落込みましょう」
『待てマスター、なぜ「それ」を知っている!?私はその結界の張り方も、そもそも結界自体見せた覚えは一度もないぞ!?』
　どこか遠くから、チャクチャルさんの声が聞こえる。ぼんやりとそれを聞きながら、自分のことなのにどこか他人事のように感じていた。そういえば、なんで当たり前のよ

うに僕はこんなことができているのだろう。チャクチャルさんと同じ紫色の炎なんて、一体どこで出し方を覚えたんだろう。ダークシグナーにこんなことができるだなんて、僕は今の今までまったく知らなかったのに。

頭の中、どこか片隅で警鐘が鳴った……気がした。次の瞬間にはもうそれも塗り潰され、雑念は全てどこかへ追いやられた。とにかくデュエルだ、もうそれでいいじゃない。そんな僕の目を覗き込み、クロノス先生も何かに気づいたように渋々ながらデュエルディスクを構える。

「……シニョール清明、どうやら何かよくないものの影響を受けているようなノーネ。セニョール・カミューラとのデュエルであれほど光のデュエルを心がけるよう教えたというのに……まったく、できの悪い生徒を持つと大変ナノーネ。しかし私の生徒が道を踏み外したというのなら、それを更生させるのは教師の使命。いいでショウ、この栄光あるデュエルアカデミア実技担当最高責任者クロノス・デ・メディチ、今一度私の生徒に光のデュエルの力を見せてあげますーノ！」

「ええ、手合せ願います」

言い切った瞬間、自分の中で何かが手遅れになった気がした。どうでもいい、どうでもいい。

「「デュエル！」」

「先攻は頂くノーネ、私のターン！古代の機械砲台（アンティーク・ギアキャノン）を守備表示で召喚。さらに魔法カード、機械複製術を発動。これにより、私のデッキからさらに２体の同名モンスターを特殊召喚できるノーネ」

その言葉通り、武骨な歯車で作られた謎の砲台がガタガタと音を立てながら合計３台フィールドに現れる。

古代の機械砲台　守５００

古代の機械砲台　守５００

古代の機械砲台　守５００

「そして古代の機械砲台の効果を発動。このカードをリリースすることで相手プレイヤーに５００ポイントのダメージを与えるノーネ。さらにこのターンのバトルフェイズに相手はトラップが発動できなくなる効果も持っていますが、先攻１ターン目なら関係ないでショウ。私は２体の古代の機械砲台をリリースして、１０００ダメージを与えるノーネ！」

清明　ＬＰ４０００→３０００

「くっ……」

「まずは小手調べ。カードをセットして、ターンを終了するノーネ」

先攻１ターン目からいきなりのバーン戦術は想定外だった。ここからは僕のターン

だけど、クロノス先生が操る古代の機械はバトルする際に相手の魔法と罠を封殺する効果を持つ……僕の手札には攻撃反応のポセイドン・ウェーブのカードがあるが、これが役に立つことはなさそうだ。

「僕のターン！グリズリーマザーを召喚して、バトル！古代の機械砲台に攻撃！」

グリズリーマザー　攻１４００→古代の機械砲台　守５００（破壊）

「メイン２、カードを１枚セット。僕はこれで、ターンエンド」

攻撃が通ったのはいいが、正直意外だった。あの伏せカードで攻撃を防ぎ、次に繋げてくることを覚悟の上でその防御札だけでも見極めてやろうと攻撃したのだが。クロノス先生はかなりの実力者、本当に何も手をうたずにただ壁モンスターを出すだけで終わるとは考えにくい。とはいえとくに出すようなカードもなく、あの場面で攻撃しないというのも論外だろう。それに最悪、グリズリーマザーならばやられても後続のモンスターを呼びだせるし。

クロノス　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

清明　ＬＰ３０００　手札：５

モンスター：グリズリーマザー（攻）

魔法・罠：なし
「私のターン！速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動。私の伏せカードと、シニョール清明の伏せカード１枚を破壊するノーネ」
「グレイドル・スプリットが……」
僕が伏せていたのは装備カードとなるトラップ、グレイドル・スプリット。どうせ破壊されるのならポセイドン・ウェーブも伏せておけばよかったかな。
「そして私は今破壊されたカード、黄金の邪神像の効果を発動。このカードが破壊されたことで、自分フィールドに邪神トークンを１体特殊召喚！」
邪神トークン　攻１０００
「さらに邪神トークンをリリースし、アドバンス召喚！出でよ、古代の機械獣（アンティーク・ギアビースト）！」
無駄のない動きで次にアドバンス召喚されたのは、これまた全身機械製の犬の姿を模した兵器。攻撃力は上級モンスターであることを考えると驚くほど低いけれど、それを補うだけの高い攻撃性能を持ったモンスターだ。
古代の機械獣　攻２０００
「バトル！古代の機械獣でグリズリーマザーに攻撃、プレシャス・ファング！」
歯車を高速回転させてその体をまるで本物の獣のように動かしながら、機械犬の鋼鉄の牙と青色熊の文字通り熊の爪が激突する。一瞬の均衡の後、牙が爪をへし折った。

古代の機械獣　攻２０００→グリズリーマザー　攻１４００（破壊）
清明　ＬＰ３０００→２４００
「古代の機械獣がモンスターを戦闘破壊した時、そのモンスターの効果は無効となるノーネ。ゆえにグリズリーマザーのリクルート効果は不発、カードをセットしてターンエンドしますーノ」
当然、リクルート効果は潰してくるか。さらにあのモンスターはその効果の都合上グレイドルをただのステータスが低い下級モンスター群にしてしまうため、グレイドルが中核となっているこのデッキにはまさに天敵ともいえる。
「となると、なんとかここで潰すしかないか。僕のターン、ドロー！グレイドル・アリゲーターを召喚！」
グレイドル・アリゲーター　攻５００
僕の手札には自分フィールドの水属性モンスターを破壊しつつ手札の水属性を破壊した数だけ展開できる魔法カード、大波小波が存在する。これでアリゲーターを破壊すれば『魔法カードにより破壊された』という条件を満たしたアリゲーターの寄生効果が適用され、機械獣のコントロールを得て直接攻撃が可能……なおかつ手札に存在する攻撃力２８００のモンスター、超古深海王シーラカンスを展開しつつこれまた攻撃で合計攻撃力４８００を叩きつけられるという寸法だ。最低限の汎用性があるため単体でも

邪魔にならず、なおかつ下級グレイドルの中でもその攻撃力の低さから特に場に出しやすいアリゲーターならば狙い撃ちも容易というこのコンボは、僕がこの間徹夜で考えたグレイドルを生かすためのカードだ。

本当は僕も、ヨハンほどではないけれどこういう戦法は好きじゃなかったはずなんだけど。最近デッキを見るたびに頭の中で声がするのだ、こんな温いデッキで勝てるわけがない、どんな手を使ってでも勝ちに行け、と。最初の内は無視できていたその声も、時が経つにつれ次第に自分の中で大きくなっていった。そして今年度に突入してからの怒涛の４連敗で、ついにその声を受け入れてポリシーを曲げることにしたのだ。

「さらに魔法カード……」

「ちょっと待つノーネ。トラップ発動、激流葬！アリゲーターの特殊召喚に反応し、フィールドのモンスターをすべて破壊しますーノ！」

「嘘っ!?」

アリゲーターが、機械獣が、共に流され破壊される。がらがらになったフィールドは次のターン、クロノス先生の攻撃を僕にストレートに叩き込むことが容易になってしまった。僕のライフは残り２４００、上級モンスタークラスの攻撃力さえ来なければまだ耐えられる。

「ターン、エンド……」

クロノス　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ２４００　手札：５
モンスター：なし
魔法・罠：なし

「私のターン、ドロー！魔法カード、トレード・インを発動。手札かーらレベル８モンスター、古代の機械巨竜（アンティーク・ギアガジェルドラゴン）を捨てることで、カードを２枚ドロー。シニョール清明、このデュエルはこのターンで終わらせますカーラ、いい加減に目を覚ますノーネ！魔法カード、古代の機械工場（アンティーク・ギアファクトリー）を発動！」

工場、の名が示す通り、巨大な溶鉱炉のようなものがフィールドに設置される。その下部についたベルトコンベアが動き出すと、どこからともなく大量の歯車や装甲板といった部品がそこを流れて溶鉱炉に吸い込まれていく。よく見るとその部品は古代の機械砲台の砲塔や古代の機械獣の牙といった、これまでのデュエルで見覚えのあるものばかりだった。

「古代の機械工場は発動時に手札のアンティーク・ギアモンスターを１枚見せて墓地からそのレベルの倍になるよう墓地のアンティーク・ギアを除外することーで、そのモン

スター召喚のためのリリースが必要なくなるノーネ。私はこの効果で墓地からレベル８の古代の機械巨竜、レベル６の古代の機械獣、レベル２の古代の機械砲台を除外し、レベル８のこのカードを通常召喚！出でよ、古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）！」

「嘘……でしょ……」

手札交換カードを使い新たに引かれた、たった２枚のカード。その２枚と墓地リソースをフルに使いこなしたクロノス先生が、満を持して切り札であるモノアイの巨人を繰り出した。

古代の機械巨人　攻３０００

「バトルフェイズ、攻撃ナノーネ！古代の機械巨人のダイレクトアタック、アルティメット・パウンド！」

古代の機械巨人　攻３０００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ２４００→０

「うう……」

強い。まるでつけ入るすきがない、実技担当最高責任者の実力をまざまざと見せつけられた。ともあれデュエルが終わったので、この地縛の炎もこれ以上維持する必要がな

い。さっと片手を上げると、みるみるうちにあたりを取り囲んでいた紫の火がしぼんで消えていく。

そしてそれと入れ替わるようにして、デスベルトの方が光を放ちだす。これまで以上の強烈さに思わず体勢が崩れ、壁に手をついてどうにか耐える。これは、あの葵ちゃんが倒れただけのことはある。

「ムムッ！シニョール清明、頑張るノーネ……ギャウッ！」

そんな僕の様子を見て慌てて走りよって来ようとしたクロノス先生だけど、当然デスベルトを着けてしまった以上、その脅威は先生にも襲い掛かる。というよりこれまで何度か実感してきたように、ダークシグナーとしてある程度体力に補正がかかっている僕よりも、そういった要素のない先生のほうがきついはずだ。

「先生！」

「私のことはいいですかーら、早くその装置を……！」

苦しがりながらの言葉に、慌てて電波探知装置を引っ張り出す。その針はすでに電波の流れをキャッチしており、アカデミアの外……森の中のある一点を向いていた。あとは気を失ったクロノス先生を運んで、それからジムにこの方角を伝えて……やることはまだまだある。

『マスター。マスター！』

「なんなのさ、チャクチャルさん」
　長身のクロノス先生は、わりと持ち上げるのにバランスが悪くて手間がかかる。少し集中したかったので急に話しかけてくるのはやめて欲しかったのだが、そうも言っていられない気迫に渋々返事する。
『なんなのさ、ではない！まさか、まーた何か変な物でも拾ったのか!?』
「はい？」
　ちょっと話が読めない。大体またって何さ、またって。まるでいつも変な物ばっかり拾ってるみたいじゃん。僕がこれまでに拾ったり手に入れたりした物なんて、チャクチャルさんとメタイオン先生とゴーストリック・フロストとうさぎちゃんとグレイドル全般と……うん、まあ、そこは否定できないかも。
「でもでも、今回はなんもないんだってば」
『……本当か？なら１つ聞かせてもらうが、あの炎はどうやって出した？やり方を教えたつもりはないが』
「あれ、前にも同じことしなかったっけ？もうずいぶん前にさ」
『は？』
「え？」
　一瞬の沈黙。なんだろう、どうもチャクチャルさんと僕の間に記憶の食い違いがある

ようだ。さすがの地縛神といえども、５０００年も長生きしてる間にだいぶ記憶力が落ちてきてるのかな?でも僕は今でもはっきりと覚えている。初めてこの炎を出してデュエルを行ったのは、そう、あれは……。

あれ?なぜだろう、その時のことが全く思い出せない。ダークシグナーのこの力の使い方はばっちり覚えてるのに、肝心のその時の思い出がまるでない。かなり前の話なのは分かるけど、具体的な日付が出てこない。

「えっと……」

『……まあ具体的な被害もないし、しばらく様子見せざるを得ないか。だが覚えておいてくれマスター、これでも私はマスターのことを心配しているつもりなんだ』

深く追求される前に自分から話を打ち切り、それきり黙るチャクチャルさん。本当に何も拾った覚えはないのに、もはやチャクチャルさんの中では何か僕の近くに新たなカードやら精霊やらが増えたとの見方で確定してしまったらしい。いつかそのうちきっちり話し合ってその誤解を解いておきたいとは思うけど、まずはクロノス先生を運んでしまおう。それからゆっくり、話し合う時間を取ればいいか。

そんなことを考えて、改めて一歩を踏み出した……でも実を言うと、無意識のうちに僕も感じ取っていたのかもしれない。まだほんの小さな小さな、普段なら無視できるような。でも間違いなくそこにある、僕とチャクチャルさんの間にできた溝の存在を。

チャクチャルさんは僕が何かを隠していると思い、僕は僕でなぜチャクチャルさんが信じてくれないのかがわからない。お互いの間に生まれたちっぽけな不信感の存在を心の奥底で感じ取ったからこそ、一度チャクチャルさんと距離を置こうとしたのかもしれなかった。

ターン８０　鉄砲水と泡沫の英雄

「ジム！ほい、これ。確かにデータは取ってきたよ」
「ワオ、グレート！ありがとう、後はこのデータを突き合わせれば……よし、少し待っていてくれ」
　ここはジムの私室。先ほどのクロノス先生と僕とのデスデュエルにより得ることができた怪電波のデータを、ジムに届けに来たのだ。何やらこの島の地図を広げてジムがああでもないこうでもないと試行錯誤しているうちに、この部屋に集まったメンバーを一通り眺めてみる。僕とジムの他にも十代、剣山、翔、ヨハン、明日香、夢想。言ってみればほぼいつものメンバーだ。あと万丈目やら三沢やらがいれば完璧なんだけど、それを望むのも無理な話だろう。
　そんなことを考えていると、ジムがようやく顔を上げた。
「……オーケイ皆、この地図を見てくれ。今回清明が取ってくれたデータのおかげで、ようやくはっきりと場所が特定できた。それはこのビルディング、なぜか名前の載っていないこの建物だ！」
「どれどれ？あれアニキ、この場所って確かＳＡＬ研究所じゃないッスか？」

「ああ、あのＳＡＬか。そういやあの時清明がデュエルしたのも、割とこの近くだったな。なあ？」
「懐かしいもんだねえ」
　僕ら3年組は昔のことを思い出してほっこりしていたが、それをぽかんとした顔で見つめるヨハンたちには説明が足りていないことに気づく。まあ僕だって、あれは実際この目で見ていなければわけがわからなかっただろう。
「Ｓ（スーパー）Ａ（アニマル）Ｌ（ラーニング）……なにをとち狂ったのかその辺の動物に専用の機械をつけてデュエリストにしようっていう実験をしてた変な博士が昔居てね。そこから逃げ出したのが猿のＳＡＬだったんだよ」
「モンキーがデュエルを？」
「猿のＳＡＬ……そのまんまだドン」
「あの研究所かぁ……でもあそこ、ＳＡＬが逃げてから研究中止になったんじゃなかったっけ？」
　今や廃墟同然になっていて、わざわざあそこに入るような物好きもいない、だとか。電気やら水道やらが生きているかどうかすら怪しい場所だけど、それだけにこれまで思いつきもしなかった。というかここでこうして名前を聞くまでＳＡＬとデュエルした僕もその存在自体すっかり忘れてたし。

「ともかく、この場所に行けば何かがあるはずだ。トゥモローのモーニング……そうだな、９時ごろに改めてここに集合しよう。今日のところはしっかりスリーピングし、英気を養ってから出かけるべきだ」

「おう！」

ジムのかけた言葉に従い、そこで一度僕らも別れて各自の寮に戻ることになった。一刻も早くＳＡＬ研究所に突入したいという気持ちもあるにはあったけど、それ以上に先ほどのデスデュエルによる疲労が体にたまっているのが自分でもよくわかっていたため、あの提案は正直かなりありがたかった。今日一晩寝ておけば、ダークシグナーの身体能力の高さも相まって明日の朝には復活しているだろう。クロノス先生には悪いことをしたけど、ここでデスデュエルの秘密を解き明かしさえすればきっと無駄にはならないはずだ。

「……んじゃ、お休みー」

チャクチャルさんからの返事はない。まあお互いになんとなく気まずいままだし、それならそれでいいだろう。さ、寝よう寝よう。

「……おい！おいったら！」

「んー……」
耳元で誰かの叫び声が聞こえ、そのうるささに目を覚ます。
「何さ……十代？」
目の前にあった顔は、まさしく十代のそれだ。ただしその表情は険しく、何やらただならぬ様子。よくよく周りを見ると、ここは僕が倒れこんだはずのレッド寮のベッドではない。どこかはよくわからないけれど、上に夜空が見えるあたり少なくとも屋外ではあるようだ。
「えっと、ここは？」
頭を振りながら起きあがり、なんで自分がこんな場所にいるのか考える。……駄目だ、何も思い出せない。
「何言ってるんだ、お前？」
「え？」
思わず聞き返すが、向こうも本気で困惑しているようだ。十代は時々驚くほど単純なところがあるから、自分の感情がすぐ顔に出る。今回がまさにそのパターンといえるだろう。
「そうか、お前は気絶してて見てなかったもんな。たった今俺がコブラとデュエルして、俺が勝ったと思ったら突然光る人間みたいなのが現れてよ。それを追っかけたコブラ

がいなくなっちまったんだ。ヨハンたちが探しに行ってるけどな」
「気絶？僕が？え、ていうかちょっと待って、コブラ？」
「お、おう。だから今ちょうどそれを聞こうと思ってたんだよ。なあ清明、なんでお前、俺たちより先にここに来てたんだ？」
……駄目だ、まるで会話がつながらない。
「待ってよ十代、何がどうなってるのさ」
この時点で十代も僕と同じことを考えたらしく、少し考えてからまた口を開いた。
「俺たちは今朝、行方不明になったお前を探しにＳＡＬ研究所に行ったんだ。そこで佐藤先生やオブライエンに会ったりして色々あったけど、とにかくコブラのところにたどり着いた。そしたらその足元に清明、お前が気絶して倒れてたんだよ」
「え？……ええ？」
全っ然駄目だ、話せば話すほど訳が分からなくなってくる。どうすりゃいいんだこんなもん……そうだ、チャクチャルさんに聞けばいいや。今は喧嘩してる場合じゃない、とにかく何があったのかだけでも教えてもらわないことにはまるで話にならない。
「チャ、チャクチャルさーん？」
少し待つが、いつもすぐ近くにいるはずの邪神からの返事がない。いくらお互い気まずいからって、いつもはこんな時に無視だなんて子供じみた真似はしないキャラなの

に。とりあえずカードから直接呼び出そうとデッキを取り出して……そこで初めて、信じられないことに気が付いた。
「精霊が、いない……」
　サッカーをはじめとする小型モンスターから青氷の白夜龍といった大型モンスターに至るまで、ただの1体分も精霊の力を感じない。こんなこと、精霊が見えるようになってからは初めてのことだ。
「お、おい清明？どうしたんだよいきなり」
「どうしたもこうしたも、皆がいなくなって……」
「何言ってるんだ？お前のデッキの精霊なら、すぐそこにたくさんいるじゃないか。なあ清明、俺達は友達だろ？頼むから教えてくれよ、一体なんでお前が俺らより先にここに来てたんだ？」
「そ、そんなこと言われても」
　それはむしろこっちが聞きたいぐらいだ。それより、僕のカードの精霊がここにいる？そんな馬鹿な、僕には何も見えないし感じることもできないのに。十代、お前は一体何を言ってるってのさ？何も言えない僕を前にしばらく十代も黙ったままでいたけど、ややあってため息をついて立ち上がった。
「……もういいぜ、清明。お前がどうしても言いたくないなら、きっと何か理由があるん

だろ？ならもう言葉は必要ない、その代わり、俺とデュエルだ！」
「十代？」
「何驚いてるんだよ。デュエルをすれば、きっとわかりあえる。俺はそれを信じてるし、これからも信じたいんだ。だから、せめてお前の魂を俺に見せてくれ。それができるのがデュエル、そうだよな？」
　そう問いかけてくる十代の顔は、なんだか妙に深刻で。僕が気を失ってる間に何があったのかはわからないけど、きっと十代にとって辛いことがあったんだろう。ここまで持論を強調してくるところからいって、誰かとデュエルをしたのに分かり合うことができなかった、とかだろうか。なんにせよ、あの十代がここまで参ってるだなんてただ事ではない。
　だとしたら、僕にできる事をするのが親友としてのせめてもの務めだろう。精霊の加護は結局見つからないけれど、それでもやれる限りのことをやるしかない。
「……わかった、十代。デュエルと洒落込もう」
　腕のデスベルトが、月の光をかすかに反射して鈍く輝く。そういえば、デスデュエルは結局どうなったんだろう。でもこのデュエルを提案してきたのも十代だし、その十代はさっきコブラに勝ったって言ってたんだ。勝ったならそう心配することもないだろう。

「……デュエル！」

先攻は十代、か。十代のデッキは手札消費が恐ろしく荒い融合デッキ、後攻より１枚手札が少ない先攻は大変だろう。

「最初から飛ばしていくぜ！魔法カード、コンバート・コンタクト発動！このカードは俺のフィールドにモンスターが存在しない時、手札とデッキからそれぞれＮを１体ずつ墓地へ送ることでカードを２枚ドローする。手札のフレア・スカラベと、デッキのアクア・ドルフィンを墓地へ送るぜ。そしてクレーンクレーンを召喚して、そのまま効果を使うぜ。このカードは召喚に成功した時、墓地に存在するレベル３モンスター１体を効果を無効にして特殊召喚できる！甦れ、アクア・ドルフィン！」

鳥の形を模したクレーンがするするとロープを垂らすと、それに捕まってイルカの半魚人、とでもいうべきだろうか。まさにイルカそのものの頭部に人間のような体のついた、水を操るＮが墓地から上がってくる。

クレーンクレーン　攻３００

Ｎ・アクア・ドルフィン　守８００

「魔法カード、ヒーロー・マスクを発動！このカードは発動時にデッキのＨＥＲＯを墓地へ送ることで、場のモンスター１体をその同名カードとして扱うことができる。これで俺は、クレーンクレーンをネオスに変更するぜ」

「これでネオスとNが揃った……コンタクト融合?」
十代がなんだかよくわからない経緯で手に入れた全く新しい召喚方法、コンタクト融合。あれをまた見せてくれるのだろうか……と思ったら、そこで十代が笑みを見せた。
「今回は特別だ、もう1段上のコンタクト融合を見せてやるぜ! 魔法カード、ネオスペーシアンエクステンドNEXを発動!このカードは俺のNを進化させ、同名カードとしても扱うレベル4モンスターをエクストラデッキから特殊召喚する!さあ来い、マリン・ドルフィン!」
アクア・ドルフィンの水色がより濃い藍色になり、体つきも丸みを帯びたものから精悍な戦士へと変化していく。
N・マリン・ドルフィン　攻900
「さらに魔法カード、スペーシア・ギフトを発動!このカードは俺のフィールドに表側表示で存在するNの一種類につき1枚のカードをドローするぜ」
「あれ?十代のフィールドにはマリン・ドルフィンが1体だから、精々手札交換にしかならないんじゃ?」
「甘いぜ、清明。マリン・ドルフィンは元になったアクア・ドルフィンとしても扱うモンスター、つまり2種類の名前を持ってわけさ。よってカードを2枚ドロー!」
「好き勝手やってくれちゃって、もう」

残念ながら僕の手に手札誘発の妨害札はない。大人しく十代が何をしかけてくるか、見守らせてもらうとしよう。

「効果……は、捨てたい手札もないからやめておくか。さあ行くぜ、お待ちかねのコンタクト融合だ！フィールドのネオス（エレメンタルヒーロー）とマリン・ドルフィン（クレーンクレーン）をデッキに戻し、コンタクト融合！さあ来い、Ｅ・ＨＥＲＯ　マリン・ネオス！」

融合のカードを必要とせず、場に存在する素材モンスターをデッキに戻すことで全く新しいモンスターを生み出すコンタクト融合。マリン・ドルフィンとネオスの形のオーラを纏ったクレーンクレーンが宙に飛び上がり、ネオスの体をベースに水の力がその身に吸収されていく。

Ｅ・ＨＥＲＯ　マリン・ネオス　攻２８００

「マリン・ネオスの効果発動！１ターンに１度、相手プレイヤーの手札１枚をノーコストで破壊する！」

「くっ!?」

マリン・ネオスの胸から水の竜巻が吹き荒れ、その水流に僕の手札１枚が吹き飛ばされる。あのカードは、グレイドル・パラサイト……あればあるに越したことはないが、まだ致命傷ではない。それにしても、手札を『破壊する』、ね。モンスターゾーンの指定さえなければグレイドル・イーグルで待ち構えることもできたけど、それができないのは

惜しい。なんか損した気分だ。
「カードを2枚セット。これでターンエンドだ」
「僕のターン！」
　マリン・ネオスは攻撃力２８００の大型モンスター。しかも壁モンスターで耐えようにも、場に残れば残るだけこちらの手札が荒らされていく素敵仕様のきわめて厄介な敵だ。そんな敵に対抗する手段としては……これしかない。
「モンスターをセット。さらにカードを3枚セットして、ターンエンド」
「ずいぶん消極的じゃないか」
「どっかの誰かさんが最序盤からかっ飛ばしてくれるからねー」
　十代　ＬＰ４０００　手札：1
　モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　マリン・ネオス（攻）
　魔法・罠：2（伏せ）
　清明　ＬＰ４０００　手札：1
　モンスター：???（セット）
　魔法・罠：3（伏せ）
「へへ、俺のターンだ。まずはマリン・ネオスの効果だ、その最後の手札を破壊しろ！」
　再び荒れる水の竜巻が、唯一僕の手札に残ったカードを墓地へと叩き込む。これで3

ターン目にして早くもハンドレス、この先はドローカードに全てを賭けていくしかない。

「さらに攻め込むぜ。カードガンナーを召喚、効果発動！俺のデッキからカードを３枚まで墓地に送り、エンドフェイズまで攻撃力を１枚につき５００ポイントアップさせるぜ」

カラフルに彩られたロボットがおそらく目であろうライトを光らせ、自らの体にパワーを充電していく。何が落ちたのかをここから知る手段はないけれど、十代のことだ。ネクロ・ガードナー辺りは警戒しておこう。

カードガンナー　攻４００→１９００

「バトルだ！マリン・ネオスでセットモンスターに攻撃、ハイパーラピッドストーム！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　マリン・ネオス　攻２８００→???　守８００（破壊）

Ｅ・ＨＥＲＯ　マリン・ネオス　攻２８００→０

またもや荒れ狂う水の竜巻に、今度は手札ではなく僕のセットモンスターが消し飛ばされる。だがその次の瞬間、竜巻を収めたマリン・ネオスの足元から地面を突き破り無数のタコ足が鎖のようにその全身を縛り付けた。

「何!?」

「今破壊されたモンスターは、シャクトパス！このカードは戦闘破壊された時にそのモ

ンスターの装備カードになってその攻撃力を0にし、さらに表示形式の変更を禁止する！さあ、執念深い鮫の呪いを受けてみろ！」
　自らの首に巻きついたタコ足を掴み、必死に振り払おうとするマリン・ネオス。だけどもう遅い、シャクトパスの力は破壊されてからが本番だ。
「くっ……だけど今、お前のモンスターはいない！カードガンナーでダイレクトアタック！」
　カードガンナーが自らのキャタピラを高速回転させ、こちらへ向けて走ってくる。だけど甘い、十代！
「リバースカード発動、リビングデッドの呼び声！」
「リビングデッド？だけどお前の墓地にモンスターなんて……そうか、まさか!?」
　僕の発動した汎用蘇生カードに疑問を示すものの、すぐに何かに気づいた十代。流石に気づくのが早い、なにせ僕がこのデュエルで唯一場に出したモンスターであるシャクトパスは今こうして装備カード状態でフィールドにいるのだから、他にモンスターが墓地にいるとすればそれは1種類しかあり得ない。
「その通り！礼を言うよ十代、たった今やったこのターンでの手札破壊、あれは僕の手札を破壊したんじゃない。僕が落としてほしかったカードを墓地に送ってくれたんだ！蘇生召喚、青氷の白夜龍（ブルーアイス・ホワイトナイツ・ドラゴン）！」

青氷の白夜龍　攻３０００

ここからは反撃開始。僕のデッキの中でも最高攻撃力（固定値）を誇るこの氷の竜ならば、並大抵のＨＥＲＯにも力で負けることはない。そのことは十代もよくわかっているはずだが、それでもなお不敵に笑っている。

もっとも、そうでなくっちゃ十代らしくない。

カードガンナー　攻１９００↓４００

「エンドフェイズにカードガンナーの攻撃力は元の４００に戻る。カードを１枚セットして、これでターンエンドだ」

「なら僕のターン！よし来た、グレイドル・イーグルを召喚！」

銀色の水たまりから素早く形を変え生まれる、黄色の鳥めいた生命体。グレイドルの中でも屈指の攻撃力を持つイーグルがここでピンポイントで引けたのはラッキーだったとしか言いようがない。

グレイドル・イーグル　攻１５００

「バトル、まずは青氷の白夜龍でカードガンナーを攻撃！ぶち抜け、孤高のウィンター・ストリーム！」

「おっと、タダではやられないぜ。トラップ発動、捨て身の宝札！俺の攻撃表示モンスター２体の攻撃力合計がお前の１番攻撃力が低いモンスターの攻撃力より低い時、この

ターンでモンスターを表側表示で出すことが禁止される代わりにカードを２枚ドローするぜ」

思わぬドローこそ許してしまったものの、逆に言えばこのターン後続が出てくることはない、ということでもある。氷のブレスとロボットの目から放たれたビームが真っ向からぶつかり合う……が、それも数秒のこと。倍以上の攻撃力の差を前に、すぐにビームがかき消されて消えていった。

青氷の白夜龍　攻３０００→カードガンナー　攻４００（破壊）

十代　ＬＰ４０００→１４００

「カードガンナーが破壊されたことで、俺はデッキから1枚カードをドローできる」

「だとしても、まだこっちにはイーグルがいる！イーグル、マリン・ネオスに攻撃！」

両手両足に胴体に首……自由意思で動かせるほぼすべての箇所ががんじがらめに縛りつけられたマリン・ネオスに、黄色く光る猛禽が迫る。万全の状態ならば軽くあしらわれたであろうその突撃が、この状況に限っては文字通り必殺の一撃となった。

……ただ一点、その一撃が僕のライフを直撃したことを除けばそれは完璧だったのだが。

グレイドル・イーグル　攻１５００→Ｅ・ＨＥＲＯ　マリン・ネオス　攻０（破壊）

清明　ＬＰ４０００→２５００

「攻撃宣言時にトラップカード、異次元トンネル―ミラーゲートを発動したぜ。俺のＥ・ＨＥＲＯが攻撃対象に選ばれた時、そのバトルの間だけ互いのモンスターのコントロールは入れ替わるのさ」
「痛てて……そんな隠し玉仕込んでたなんてね」
「マリン・ネオスはコンタクト融合の中でもかなり強いけど、お前がただやられるわけがないからな。俺だって警戒させてもらったのさ。さあ、グレイドル・イーグルのコントロールは返すぜ」
「お褒めにあずかりまして。これ以上僕にカードはない、ターンエンドするよ」
十代　ＬＰ１４００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ２５００　手札：０
モンスター：青氷の白夜龍（攻・リビデ）
グレイドル・イーグル（攻）
魔法・罠：リビングデッドの呼び声（白夜龍）
２（伏せ）
「俺のターン！魔法カード、Ｏ―オーバーソウルを発動！俺の墓地の通常ヒーロー、ネオ

スを特殊召喚する！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００

「そうか、さっきコンタクト融合でデッキに戻ったのはあくまでクレーンクレーン……」

「その通りだ。そして魔法カード、融合を発動！手札のエッジマンと、場のネオスを融合！コンタクト融合だけがネオスの力じゃないぜ、ネオス・ナイトを融合召喚！このモンスターの攻撃力は、融合素材としたネオス以外の戦士族の攻撃力の半分だけアップするぜ」

場に現れたネオスが金色の鎧に全身を包むヒーロー、エッジマンの力を得てさらなる高みに進化した。素手で戦い抜いていたこれまでのファイトスタイルから一転してその右手には上下に刃のついた不思議な形状の巨大な剣を、そして左手には自らの上半身ほどのサイズがある盾を持ち、肩当てやひざ当てなどの鎧パーツもその身に着けている。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト　攻２５００→３８００

「なるほど、そのモンスターで僕のグレイドル・イーグルを攻撃すれば、僕のライフはきっかり０にできるってわけね」

「さあ、どうだろうな？バトル、ネオス・ナイトで青氷の白夜龍に攻撃、ラス・オブ・ネオススラッシュ！」

「え？」

十代の指示を受けたネオス・ナイトが飛び上がり、２つの刃のうち下の刀身を白夜龍の首に突き立てる。全身を振るわせて振り落とそうとするも、ネオス・ナイトがその手を緩めることはついになかった。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト　攻３８００→青氷の白夜龍　攻３０００（破壊）

「くっ……あれ？」

モンスターが戦闘破壊されたのに、なぜか僕にダメージが来ない。不思議に思ってフィールドを見ると、すでにネオス・ナイトは十代のフィールドに戻っていた。

「ネオス・ナイトがバトルするとき、相手は戦闘ダメージを受けないデメリットがあるのさ。だけどその代わり、こいつにはＨＥＲＯの中でもトップクラスの対モンスター戦闘能力がある！ネオス・ナイトは攻撃力上昇だけでなく１ターンに２度攻撃ができる、グレイドル・イーグルに攻撃！ラス・オブ・ネオススラッシュ！」

再び走るネオス・ナイトが、今度は大上段から上の刀身を振り下ろす。グレイドルに攻撃を仕掛けるだなんて何を企んでいるのかは知らないが、イーグルは一切その攻撃をかわそうとせず、むしろ鳥の顔で精一杯にやりと笑ってその一撃を受け止めた。そして真っ二つに裂けた黄色の鳥は銀色の水たまりに溶け崩れ、地面を這ってそのままネオス・ナイトの足元へ近づいていく。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト　攻３８００→グレイドル・イーグル　攻１５００（破壊）
「この瞬間、グレイドル・イーグルの効果発動！戦闘破壊されたイーグルは相手モンスターに寄生し、そのコントロールを得る！ネオス・ナイトに憑りつけ、イーグル！」
足元に忍び寄った銀色の水たまりがわっと持ち上がり、ネオス・ナイトの全身を包み込む。完全に寄生完了かと思ったその時、水たまりが突然はじけ飛んだ。
「甘いぜ！速攻魔法発動、融合解除！これによりネオスとエッジマンの融合は解除され、グレイドル・イーグルの効果は回避される！」
「しまった……！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００
Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン　攻２６００
「そしてバトルフェイズ中に特殊召喚されたモンスターは、そのまま追撃ができる！エッジマンでダイレクトアタック、パワー・エッジ・アタック！」
「永続トラップ発動、バブル・ブリンガー！このカードが存在する限り、レベル４以上のモンスターは直接攻撃できない！」
エッジマンの突撃を、湧き上がる泡の壁が押しとめる。イーグルの寄生がかわされたのは痛い、手札もない今ではこのバブル・ブリンガーが効いているうちに早く立て直さ

ないと。だけど下手な下級モンスターじゃ駄目だ、エッジマンノ能力である貫通効果で叩き潰されてしまう。

「一筋縄じゃあ行かないか。ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！……永続魔法発動、グレイドル・インパクト。そのままエンドフェイズにインパクトの効果発動、デッキからグレイドル・アリゲーターをサーチしてターンエンド」

地面にＵＦＯがバンッと出てきて、そのてっぺんから放たれた不思議な光線が僕のデッキに眠るアリゲーターのカードを呼び起こす。だけどサーチ効果がエンドフェイズ、次のターンでブリンガーが割られたらそこでおしまいだ。これに関してはもう、祈るしか方法がない。

十代　ＬＰ１４００　手札：０
モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン（攻）
　　Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス（攻）
魔法・罠：なし

清明　ＬＰ２５００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：バブル・ブリンガー

グレイドル・インパクト
1（伏せ）

「俺のターン！よっしゃ、ワイルドマンを召喚！」
「しまった！」
E・HERO　ワイルドマン　攻1500
野生児、と呼ぶにふさわしい筋骨隆々のヒーロー、ワイルドマン。バブル・ブリンガーによるロックはあくまでトラップカード1枚によるもの、つまりトラップの効果を受け付けないワイルドマンにとってはただの置物にしかならない。
「ワイルドマンでダイレクトアタックだ！ワイルド・スラッシュ！」
E・HERO　ワイルドマン　攻1500→清明（直接攻撃）
清明　LP2500→1000
「どうだ！」
「だけどこれ以上、そのダイレクトアタックは通さない！僕のターン！グレイドル・アリゲーターを召喚して、いそのままインパクトの効果を発動！自分フィールドのグレイドルカード1枚と、相手のカード1枚を破壊する！グレイ・レクイエム……エッジマン、撃破！」
UFOからまたもや光線が放たれ、アリゲーターとエッジマンがそれぞれ撃ちぬかれ

る。そして光線を浴びて融けたアリゲーターが水たまりとなり、またもや音もなくネオスに忍び寄る。
「これは流石に回避できないよね？魔法カードにより破壊されたアリゲーターは、相手モンスター1体に寄生する。ネオスのコントロールはもらった！」
「ネオス！そんな、お前まで……！」
今回攻撃力が上のエッジマンを狙わず、あえてネオスの方を狙ったのには理由がある。ネオスは先ほどのようにオーバーソウル等で倒しても倒しても蘇る可能性が十分にあるし、そこでコンタクト融合にでも繋げられたら目も当てられない。だったらいっそ、こちらのフィールドで待機してもらうほうがまだいいだろうと踏んだのだ。
にしても、なんだろうこの十代の反応は。僕を相手にする時点で、ある程度はこの展開も予想ができてておかしくないはずだけど。そこは少し気になったけど、だからといって手を抜くわけにはいかない。
「バトル、ネオスでワイルドマンに攻撃！僕が言うのは初めてだねこれ……ラス・オブ・ネオス！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００→Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン　攻１５００（破壊）
十代　ＬＰ１４００→４００

「ぐああっ！」
「うっしゃあ！さあ十代、かかってこい！」
　ネオスを奪われたことがよほどショックだったのか、衝撃に吹き飛ばされて膝をついた姿勢のままうつむいていつまでも顔を上げない十代。１０秒、２０秒と経ってもまだそのままでいるその姿に、さすがに不穏なものを感じた。
「十代……？」
「……」
　何も答えないままではあったが僕の声は聞こえたらしく、十代がゆっくりと顔を上げる。その目を覗き込んだ時、心臓を冷たい手でわしづかみにされたような衝撃が走った。前に一度死んだときも、ここまで驚きはしなかっただろう。
　その目は普段の十代の目とはまるで違い、黒目どころか白目の部分まで全体的に黄色く染まり……そして何より、これまでに十代からは感じたこともないほどの怒り、憎しみ、悲しみといった負の感情がごちゃ混ぜになっていた。その視線に射られ、意識するより先に危険を察知した体が勝手に身構える。
「許さない……絶対に許さないぞ！俺の、タアァァーンッ!!」
「うわあああああっ!?」

「んー、むにゃ……どうしたんだよ清明、まだ日も昇ってないじゃないか……ふわぁ」
　自分の悲鳴に、がばっと跳ね起きた。十代の半分眠ったような声が隣の部屋から聞こえ、周りを見渡すと僕の部屋のベッドの上。ふと気になって時計を見ると、まだ午前３時を少し過ぎたところだった。
「ゆ……め……？」
『随分うなされていたな、マスター』
「チャクチャルさん、だよね？それに、皆もデッキにいるし」
『む？』
「よかった……」
『はい？まあいい、私はまた寝るからな』
　何も事情を知らないチャクチャルさんにとっては、僕が何を言っているのか訳が分からないだろう。まあこっちとしては精霊の皆がいなくて泣きそうだった、なんて恥ずかしい話をするつもりは一切ない。
　それにしても、なんだったんだろう今の夢は。ただの夢にしては、妙にリアルだった気もする。マリン・ネオスだとかネオス・ナイトだとかの見たことがないモンスターが出てきたのはまあ、夢だからの一言で済ませられるとしても、あの景色の全てが、触っ

たカードの感触が、そして最後に見た十代のあの目が、いまだにくっきりと思い出せる。

「うー……さむっ」

あの時の恐ろしさをごまかすかのように声を出してみるが、体の芯から凍り付きそうなあの感覚は消えない。とりあえず、あの悪夢を見ている間に汗だくになってしまった寝間着を取り替えよう。そうすれば気分がさっぱりして、少しはましな気分になるはずだ。だがそんな思いとは裏腹に、服を脱いでいる間も、あの十代の目がずっと頭から離れなかった。

ターン８１　鉄砲水と毒蛇の神域

『……どこへ行く気だ、マスター？』

チャクチャルさんの声が、僕の頭に響く。随分と剣呑な調子だけど、それも無理はない。つい先ほど謎の悪夢を見て飛び起きたせいで、時刻はいまだ午前３時を半分回ったところ……当然、太陽なんぞ欠片すら昇っていない。そんな時間にこっそりと、音をたてないようにいつもの学生服に着替えている僕を見咎めたうえでの発言だ。

「（ちょっとね……わかったわかった、外出たら話すよ。ここで声出したら十代が起きちゃう）」

適当にはぐらかそうとしたら口にこそ出さないもののものすごい不快感が伝わってきたので、慌てて一言追加する。到底納得したようではなかったけれど、少なくともこの場で隣の部屋の十代をたたき起こすような真似はしないだろう。ここで待ってくれるあたり、邪神と呼ばれる割には律儀な神様だ。

「じゃ、行ってきまーす」

部屋を出る前に一度振り返り、誰もいない室内に向かって声をかける。無意味と言われればその通りだけど、こういうのは気分の問題だ。寮を出てしばらく歩いたところ

で、再び頭の中にチャクチャルさんの声が聞こえてくる。
『それで？』
「それで、って何が？」
『予想はついているが、一応聞かせてもらおう。どこに行き、何をする気だ？』
いつもよりやや低めの声のトーンからは、中途半端なはぐらかしやごまかしは一切聞く耳を持たないぞ、という無言の気迫を感じる。さらにテレパシーで話しかけてくるばかりで一切僕の前にその姿を現さないことで、余計にその迫力が増して聞こえる。無論、そうなることを計算づくの上での行動だろう。こういうちょっとしたテクニックだけで自分の威圧感を増幅させ、話を自分の優位に持っていく……本当に、駆け引きのうまい神様だこった。
とはいえ僕としてもここですっとぼける気はない、それに隠したところですぐにわかることだし。さて、どこからどう話そうか。ゆっくりと歩きながら、慎重に言葉を選ぶ。
「僕ね、さっき、夢を見たんだ」
『夢？』
「そ。心底つまんない夢だったけど、どうしても気になるんだ」
先ほど僕が飛び起きた夢……いつの間にかコブラがデュエルにより十代に倒されたとかいう昨日からの過程を全部すっ飛ばした時間軸で、わけがわからないまま十代と僕

がデュエルをする夢。Ｎ（ネオスペーシアン）の進化体だとかコンタクト融合じゃないネオスの融合体だとか、なんだか色々とよくわからないモンスターばかり出てきた……そして、恐ろしい夢だった。無理に明るく表現するならば、まるで打ち切り漫画の投げっぱなしバッドエンドな最終回のような。それぐらいひどい内容の、だけど妙なリアリティーのある夢だった。

　このあたりで何かリアクションしてくるかと思ったけど、チャクチャルさんからの反応はない。最後まで口を挟むつもりはない、ということだろうか。それはそれで気まずいんだけど。

「内容はまあ、事細かに説明する気はないからね。見たければ勝手に見ていいよ」

　ダークシグナーとして契約を結んだ僕だからなのか、それとも地縛神としての多々あるチャクチャルさんの能力の１つなのか。詳しくはわからないけど、チャクチャルさんは僕の記憶を覗くことができる。見られて困るような部分は覗いていない……のではなく、単に見て見ぬふりをしてくれてるだけだろう。

　だが、少しの間の後チャクチャルさんはそれを断った。

『いや。まずは話を聞かせてくれ、それからだ』

「あらそう。まあとにかく、その夢の内容、っていうかシチュエーションがどうも、ね。こんなこと言ったら笑うかもしれないけど、ちょうど明日……あ、日付変わってんだか

ら今日か。今日の未来予知みたいな夢だったんだよ」
『別におかしくはないさ、マスター。神も精霊もこの世界には実在する、夢が何か意味を持ったところで驚くようなことではない、そうではないか？』
「ふむ。なるほど、たしかにそれもそうか。それで話を戻すけど、その夢によると僕は今日何らかの形でコブラのところに皆より先にいて、その場で気絶してるらしいんだよね」
『それで、マスターはそれを正夢だと思っているのか？』
「……うん。だからあの夢みたいなことにならないために、今からコブラに奇襲をかける」
　呆れてものも言えないのか、それとも何か別のことを考えていたのか。僕の告白を聞いてしばらく沈黙を保っていたチャクチャルさんの気配が、ややあってまた戻ってきた。
『なるほど、マスターの見た夢では遊城十代がコブラを倒していた。その結末を歪めるため、自分が先に乗り込むことでコブラを倒そうと思った……それでいいか？』
「さっすがチャクチャルさん、説明が楽で嬉しいよ。で、どう思う？」
『馬鹿馬鹿しい話だ、不確定要素が多すぎる。私なら決してそんな方法は選ばない』
　これでも一応足りてない脳みそであれこれ考えた末の結論だというのに、聞き終わっ

てからコンマ１秒すら開けずに硬い声でばっさり切って捨てるチャクチャルさん。うう、当然とはいえちょっとショック。

『……と、言いたいところだが』

「え？」

ここで急にチャクチャルさんの声の調子が変わる。なぜか、いたずらっぽく笑ってみせるあのシャチの顔が容易に連想できた。

『いい加減に私もこのくだらん小細工には腹が立っていたからな。このような鉄の塊（デスベルト）ごときでマスターを縛り付ける？私の時代が過去の栄光なことは私としても重々承知しているが、それを含めてもよくもまあここまで地縛神とダークシグナーを虚仮にできるものだ。マスター、力が欲しければいくらでも協力しよう。どうせやるなら徹底的に、派手に行くぞ！』

「お、おーっ……？」

どうしよう、まさかこっちが乗り気になるとは思わなかった。猛反発される覚悟は寮を出た時点でもうできてたけど、この反応は想定外。よっぽど鬱憤溜まってたのかな、チャクチャルさん。そうこうしているうちに問題の場所、旧ＳＡＬ研究所にたどり着いた。だけど油断はできない、この近くに監視カメラが仕込んであることはアモンとのデュエルで確認済みだ。

「カメラは任せたよ、うさぎちゃん」

気づかれないようそこら辺の茂みの陰に隠れてデッキから幽鬼うさぎのカードを引っ張り出して声をかけると、イラスト部分を通して銀髪少女の精霊が姿を見せる。彼女のスピードと観察眼、かつカメラに写らない精霊の特性をフルに生かせば5分とかからずこのあたり一帯の監視カメラは使い物にならなくなるだろう……ということで早速出撃してもらおうとしたら、そこで心底楽しそうにチャクチャルさんが口を挟んできた。

『その必要はない。足元を見てくれ、マスター』

「へ?……うわっ!?」

言われたとおりに足元を見ると、いつの間にかあたり一帯に紫色の……チャクチャルさんと同じ色をした炎の筋が走っていた。複雑なルートを通りつつ研究所をもすっぽりと覆い尽くすほどの大きさなそれは静かに燃えているものの、至近距離だというのにまるで熱を感じない。

『言っただろう、派手に行くと。そういえば、マスターにはまだ教えていなかったか?細かい使い方は後で教えるが、これは地縛神の力による結界の一種だ。本来は一度張ったが最後、内部でデュエルが終了するまで何人たりとも邪魔をすることができないという代物だが、少し応用すれば違う使い方もできる。これでこの結界がある限り、機械の視

線なぞ無いも同然だ。さあ、日が昇る前に決着をつけに行こう』

相変わらず妙なやる気を全開にしているチャクチャルさんに若干調子を狂わせながらも、日が昇る前に終わらせたいのは間違いないので反論せずに進むことにする。

「自動ドアならウィーンって開いてくれるんだけど、まあ」

『霧の王（キングミスト）、任せたぞ』

前に立ってもうんともすんとも言わないドアを前に「そううまいこと行くわけないよねー」と続けようとした僕の言葉を遮り、チャクチャルさんからの指令が飛ぶ。耳元で数回ほど空気が唸り、次の瞬間には帯刀した霧の王の背後で分厚い壁が人１人通れるほどのサイズにくりぬかれて内側に倒れた。チラリと見た断面はまるでバターのようになめらかで、手にした剣の切れ味と持ち主の技量が垣間見える仕上がりとなっている。

『さて、道はできた。このまま進むぞマスター』

「あ、はい……」

『何を驚くことがある？私たちはマスターに従う覚悟があるからこそ精霊としてここにいる身、今日はこれまでマスターの意向もあってしぶしぶ大人しくしていた連中が溜まりに溜まった鬱憤を晴らしたくてうずうずしているのだからな、無論私も含めて』

霧の王、お前もか。いくらなんでもこれはやりすぎだと思うんだけど、まったくもう。とはいえもう切っちゃった壁が元に戻るはずもない、悪い気はしないけど、ね。

「まあ、どうせ半分廃墟だし構わない……のかな。んじゃあチャクチャルさん、ここからどうすればいいと思う？」

そう尋ねたのには理由がある、なにせこの建物は無駄に広いのだ。外から見れる部分だけでも地上３階ほどはあるから覚悟はしていたけれど、エレベーターの表示や下りの階段を見る限り地下にもそこそこの規模で広がっているらしい。別に上からしらみつぶしに当たっていってもいいけれど、それは流石に時間がかかりすぎてしまう。

『ふむ……』

『君たち、一体何の用だい？困るなあ、邪魔してもらっちゃ』

「っ!?」

チャクチャルさんが何か言おうとした矢先、第３者の声が辺りに響いた。咄嗟に左右を見回すけれど、声の主の姿は見えない。だけど、どこからか視線を感じる。こちらをじっと見つめている、冷たい目つきが頭の中に浮かんだ。

「誰だ!?」

『ボクかい？名乗るほどの者じゃないさ。ただ、ここから出て行ってもらえないかな？もうすぐ、本当にもうすぐ愛しの人に会えるんだ。普段ならこの場で消えてもらうところだけど、ボクは今彼に会える喜びで機嫌がいいからね。今すぐここから立ち去るなら、特別に見逃してあげるよ』

物腰こそ柔らかいけれど、その声の調子にはぞっとするほど人間味がない。いや、人間味がないというのは少し違うかもしれない。何かこの声には、病的なまでの執念のようなものを感じる。それだけに選択を間違えたときが怖い、下手なことを言うとその時点で詰みかねない。

『……もう散々愛しの彼を待ったからね、あまり辛抱強く待つ気はないんだ。早く答えてくれないかな、今すぐここから出ていくのかどうか』

「え、えっと……」

「その必要はありませんよ。これはこれは、飛んで火にいる夏の虫、だな」

突然目の前にあったエレベーターのドアが開き、またもや廊下に響く声。だけど今度はこの謎の声とは違い、これまでの数日間で何度も聞いた覚えがある声だ。

「プロフェッサー・コブラ……！」

『探す手間が省けたな』

巨体のコブラが放つ威圧感を前に、むしろ楽しそうにすら見えるチャクチャルさん。確かに本気を出せばナスカの地上絵サイズ、そこらのビルより大きなチャクチャルさんにとっては人間基準で巨体のコブラなんぞどうということないのかもしれないけど、精々１７０センチ強の僕にとっては最初からガタイの差で負けている。そりゃあ喧嘩は馬鹿力だけが要素じゃない、デカけりゃいいってもんじゃないけどさ。

「遊野清明。お前がここへの一番乗りになるとは意外だったが、お前も少しデスデュエルに深入りしすぎたようだな。ついてくるといい、私とデュエルがしたいのだろう？ここだとくだらん邪魔が入る可能性があるからな。それに、近づけば近づくほどより良質なデュエルエナジーを回収することもできる」

『ふうん……？まあいいさ、コブラ。ボクは彼にさえ会うことができれば他に興味はない、好きにするといいよ』

「……」

『見え透いた罠だな』

全く持って同感だ。だけどそれは裏を返すと話が早い、ということでもある。とんとん拍子に話が進みすぎてどんどん後戻りができなくなってきている現状への不安がちらりと頭の片隅をよぎったけれど、すぐにそんなものは別の感情に塗り潰された。それはやる気……ここまで来た以上どうやったって引くわけにはいかないという思いが、僕にクソ度胸をつけさせたのだ。それに僕が今ここにいること自体がもとはと言えば自分でまいた種、キッチリけりをつけるのが筋というものだろう。

深く息を吸い、チラリと自分が入ってきた壁の穴の方を見る。たった今通ってきたばかりの夜の森の風景が、なんだか妙に遠くに見えた。

　コブラの後をついて歩き、しばらく……といっても、せいぜい数分といったところだろう。突然、コブラがある部屋の前で足を止めた。入り口の電子ロックに何事か打ち込むと、ややあってゆっくりとその扉が開く。
「これは……？」
　思いのほか広かったその部屋は、中心に何の変哲もないデュエルリングが設置されていた。そしてその周りを囲むように設置された、この手の施設にはお決まりの隣の部屋からデュエルリングの様子を見るための防弾ガラス。　ＳＡＬも、昔はこのデュエルリングでデュエルをしていたんだろうか。一体どんな気分であの機械を身に着け、デュエルモンキーと化していたんだろう。
「昔ここでやっていた研究の名残だ。まったく、くだらん金の無駄遣いだな？だが、まだこのデュエルリングは生きている。さあ、まだ勇気があるならばかかってこい。私は逃げも隠れもしないぞ？」
　デュエルリングの片側に立って分厚い唇をゆがめ、あからさまに挑発してくるコブラ。その態度は非常に気に食わないけど、これ以上デュエリストに言葉は必要ない。もう片方のスペースに上がり、デュエルディスクを構える。これまで倒れた皆のため、そ

んでもってこのふざけたデスベルトのせいでいい迷惑を受けたこの学校全員のため。さあて、デュエルと洒落込もうか……！

「デュエル！」

　この後で襲い来る例の喪失感の準備なのか、腕のデスベルトがギラリとオレンジの光を放つ。不穏なその色に照らされながら、先攻となったコブラがカードを引いた。

「私のターン。魔法カード、強欲で謙虚な壺を発動。デッキトップ３枚をめくり、その中で好きなカード１枚を手札に加える。ダメージ・コンデンサー、テラ・フォーミング、リミット・リバース……テラ・フォーミングを手札に加え、そのまま発動。デッキからフィールド魔法、ヴェノム・スワンプを手札に加える。そしてフィールド魔法発動、ヴェノム・スワンプ！」

　流れるような動きでデッキを圧縮したかと思うと、得体のしれないフィールド魔法が発動される。殺風景な研究所がみるみるうちに毒沼に覆い尽くされ、半分枯れたようなねじれ曲がった木がニョキニョキと生えてくる。同時にかすかな霧が辺りを覆い、足元がぼやけてしか見えなくなる。

「ヴェノム・コブラを守備表示で召喚。カードを１枚伏せ、これでターンエンドだ」

　ヴェノム・コブラ　守２０００

「守備力２０００か……僕のターン！」

現状の僕の手札では、このターンだけであの壁を突破することはできそうにない。ならここは大人しく守りを固めて、じっくりと腰を据えて戦おう。

「フィッシュボーグ―アーチャーを守備表示で召喚」

フィッシュボーグ―アーチャー　守３００

攻守ともに３００と低数値ながらも、緩い条件での自己再生能力を持つアーチャー。文字通り縁の下の力持ちともいえるこのモンスターを前に、なぜかコブラがにやりと笑ったのが気にかかった。とはいえ、今更モンスターを変えることはできない。

「これでターンエン……」

「ならばこのエンドフェイズ時、ヴェノム・スワンプの効果発動！互いのターンのエンドフェイズごとに、場のヴェノムモンスター以外の全てのモンスターに毒を植え付け、ヴェノムカウンターを１つ置く」

「!?」

足元から霧にまぎれて小さな蛇が忍び寄る。あっと思った時にはすでにその蛇がアーチャーに飛びかかり、矢を放つひますらなくその動力部に噛みついた。牙から分泌される猛毒が負荷を与え、バチバチと回路がショートを起こす。数秒の沈黙ののち、動かなくなったアーチャーが静かに足元の沼地に沈み込んでいった。

フィッシュボーグ―アーチャー（０）→（１）　攻３００→０

「ヴェノムカウンターは１つにつき５００ポイントモンスターの攻撃力をダウンさせ、この効果により攻撃力が０となったモンスターはその瞬間に破壊される」
「そんな、アーチャーが……」
コブラ　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：ヴェノム・コブラ（守）
魔法・罠：１（伏せ）
場：ヴェノム・スワンプ
清明　ＬＰ４０００　手札：５
モンスター：なし
魔法・罠：なし
「私のターン。ヴェノム・スネークを召喚し、ダイレクトアタック！」
黒地にオレンジの縞が何本か入った大蛇が鎌首をもたげてこちらを威嚇した後、独の沼を保護色にして僕の足元まで忍び寄る。次の瞬間、その鋭い牙が骨まで噛み砕かんとばかりの力で足に食い込んだ。
ヴェノム・スネーク　攻１２００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ４０００→２８００
「くっ……まだまだ！」

「そう簡単にとどめは刺さんよ。どうせ時間はたっぷりある、極限までお前のデュエルエナジーを引き出してやろう。さらにカードを伏せ、ターンエンドだ」
「僕のターン、ドロー！墓地に眠るアーチャーの効果発動、僕の場にモンスターがいない時、手札の水属性１体を捨てることでこのカードは墓地から特殊召喚できる！ドリル・バーニカルを捨てて甦れ、アーチャー！」
　フィッシュボーグ―アーチャー　攻３００
「さらに自分フィールドの水属性モンスター１体をリリースして、このカードは手札から特殊召喚できる！行くよ、シャークラーケン！」
　シャークラーケン　攻２４００
　今のターンで大体、コブラの使うヴェノムデッキのコンセプトはわかった。要するにステータスの低いヴェノムモンスターをヴェノム・スワンプの効果で相手モンスターから牽制しつつ、弱り切った相手を隙を見て襲う事でこちらのライフをじわじわと削っていく、そんなところだろう。だけどその戦法には弱点がある。ヴェノムカウンターが乗せられるのは互いのターンのエンドフェイズ……つまり、このターン出すモンスターにはなんら制約がかけられない。モンスターは出したターンで例え１ポイントでも戦闘ダメージを与えることに集中すれば、十分スピードでこちらが勝てる！
「バトル、シャークラーケンでヴェノム・スネークに攻撃！」

シャークラーケン　攻２４００→ヴェノム・スネーク　攻１２００（破壊）
コブラ　ＬＰ４０００→２８００
「ふん……この瞬間にリバースカードを２枚発動！永続トラップ、ダメージ＝レプトル！」
シャークラーケンの突撃を受け、毒蛇が押しつぶされて爆発する。その残骸が毒沼に降り注ぐと、深さの見当もつかないほど奥深くからゆっくりと気泡が上がってきた。
「ダメージ＝レプトルは爬虫類族モンスターによる戦闘ダメージが発動した時に効果を発動し、デッキからその戦闘ダメージ以下の攻撃力を持つモンスター１体を特殊召喚することができる。出でよ、ヴェノム・サーペント！」
やがて水面が揺らぎ、その気泡の主がぽっかりと鋭い捕食者の顔を覗かせる。２つの首を持つ緑色の大蛇、しかもそれが２体だ。
ヴェノム・サーペント　攻１０００
ヴェノム・サーペント　攻１０００
「まだ僕はこのターンに通常召喚をしていない……モンスターをセットして、ターンエンド」
「忘れたか？その前に、毒がこのターンもお前のモンスターを蝕む」
シャークラーケン（０）→（１）　攻２４００→１９００

毒蛇にまとわりつかれ、シャークラーケンの顔が苦痛に歪む。だけどシャークラーケンの攻撃力は例え弱体化したとしても１９００、まだもう１ターンは戦う力が残っているはずだ。

コブラ　ＬＰ２８００　手札：２
モンスター：ヴェノム・コブラ（守）
ヴェノム・サーペント（攻）
ヴェノム・サーペント（攻）
魔法・罠：ダメージ＝レプトル
ダメージ＝レプトル
場：ヴェノム・スワンプ
清明　ＬＰ２８００　手札：３
モンスター：シャークラーケン（１・攻）
???（セット）
魔法・罠：なし

「私のターン。まずはこのターン、ヴェノム・サーペントの効果を発動！このカードは１ターンに１度、相手モンスター１体にヴェノムカウンターを置くことができる。私はこの効果を２度使うことで、シャークラーケンに２つのヴェノムカウンターを乗せる！」

「そんな!?」

呆然と見ているうちに、２匹の毒蛇が吐き出した毒の塊がシャークラーケンの体を急激なペースで蝕む。毒を受けた箇所がみるみるうちに変色し、タコ足の何本かが腐って崩れ落ちていった。

シャークラーケン（１）→（３）攻１９００→９００

「大方そのモンスターでこのターンだけでも凌ごうと思ったのだろうが、目論見が外れたようだな。バトルだ、ヴェノム・サーペントでシャークラーケンへ攻撃！」

ヴェノム・サーペント　攻１０００→シャークラーケン　攻９００（破壊）

清明　ＬＰ２８００→２７００

それは、普段ならなんてことないような単調な一撃。だけど全身を駆け巡る毒にやられてまともに立っていることすらおぼつかない様子のシャークラーケンに、喉元を狙うその攻撃をかわすだけの体力は残っていなかった。

「まだだ。セットモンスターにもう1体のサーペントで攻撃！」

ヴェノム・サーペント　攻１０００→???　守１００（破壊）

もう1体の蛇がするりとセットモンスターに忍びより、長い体で締め付けて爆散させる。だけど、こちらとてただやられたわけではない。毒沼の表面に、輝く水晶玉が1つ残った。

「水晶の占い師のリバース効果を発動！このカードがリバースした時にデッキトップ２枚をめくってその中の１枚を選んで手札に。もう１枚をデッキの１番下に戻す！１枚目は超古深海王シーラカンス、２枚目は……よし来た、幽鬼うさぎ！僕は幽鬼うさぎを手札に加えて、シーラカンスをデッキボトムに戻す」

うさぎちゃんこと幽鬼うさぎは、カード効果の発動に反応してそれを破壊する能力を持つ。ヴェノム・スワンプは毎ターンのエンドフェイズにモンスターにヴェノムカウンターを乗せる能力があるから、これ以降その効果を使った瞬間手札から来てこのじめっとした毒沼もボン、だ。もっとも今のフィールドにはコブラのヴェノムモンスターしかいないから、このターンで破壊することはできないわけだけど。

「小賢しい真似を。まあいい、魔法カード発動、マジック・プランター！このカードで場の永続トラップ１枚、ダメージ＝レプトルを墓地へ送り、カードを２枚ドローする。ふふふ……魔法カード発動、マジック・ガードナー！このカードは発動時にフィールドの魔法カード１枚を選択してカウンターを１つ置き、そのカードへの破壊を１度だけカウンターを消費することで防ぐ。私はこれでターンエンドだ」

「チッ……僕のターン、ドロー！」

忘れがちだけど、コブラもまたこのデュエルアカデミアに臨時講師として呼ばれるだけの実力を持つデュエリスト。相手に筒抜けの破壊カードなんて安易な手に引っか

かってくれるほど、一筋縄では行かないってことか。

「なら作戦変更、正面突破だ。ツーヘッド・シャークを召喚！そしてフィールド魔法はあんただけの特権じゃない、ウォーターワールドを発動！この効果により水属性モンスターは守備力４００ポイントと引き換えに、攻撃力を５００ポイントアップする！」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→１７００　守１６００→１２００

「バトルだ！２回攻撃モンスターのツーヘッド・シャークで、ヴェノム・サーペント２体に攻撃！」

「いいだろう、ダメージ＝レプトルは１回目の攻撃では使用しない」

つまり２回目の攻撃の時点では発動する、ということか。含みのある言い方が気になりはしたものの、ここで攻撃を仕掛けなければサーペントの効果で返しのターンでこっちが返り討ちに会ってしまう。嫌でもここは攻め込むしか手がない。双頭の蛇と双頭の鮫がぶつかり合い、やがてその捕食者対決は鮫が制した。

ツーヘッド・シャーク　攻１７００→ヴェノム・サーペント　攻１０００（破壊）

コブラ　ＬＰ２８００→２１００

ツーヘッド・シャーク　攻１７００→ヴェノム・サーペント　攻１０００（破壊）

コブラ　ＬＰ２１００→１４００

「２回目の戦闘ダメージをトリガーに、ダメージ＝レプトルの効果を発動。２体目の

ヴェノム・コブラを守備表示で特殊召喚！」
ヴェノム・コブラ　守２０００
「……ターンエンド」
ツーヘッド・シャーク（０）→（１）攻１７００→１２００
わかっていたこととはいえ、結局コブラのフィールドにはいまだ2体のモンスターが残っている。駄目だ、どうも今一つ引きがよくない。モンスターだけじゃなくて、魔法か罠をもっと引いておきたいんだけど。こういう技も何もないただ殴り合いだけの展開になると、僕のデッキは苦しい。1度や2度の攻防ではよくても、それが続くにつれ素の攻撃力の低さが響いてくるのだ。
コブラ　ＬＰ１４００　手札：３
モンスター：ヴェノム・コブラ（守）
　　ヴェノム・コブラ（守）
魔法・罠：ダメージ＝レプトル
場：ヴェノム・スワンプ
清明　ＬＰ２７００　手札：３
モンスター：ツーヘッド・シャーク（１・攻）
魔法・罠：なし

場：ウォーターワールド
「私のターン。ヴェノム・コブラをリリースし、ヴェノム・ボアをアドバンス召喚！」
これまで出てきたヴェノムの名を持つ蛇よりも数段大きな体を持つ蛇が、チロチロと舌を出してこちらを睨む。さすが上級モンスターの貫録、といったところだろうか。
ヴェノム・ボア　攻１６００
「ヴェノム・ボアはこのターン自身の攻撃を封じる代わりに、相手モンスターに２つのヴェノムカウンターを乗せることができる」
「くっ……！」
ここで幽鬼うさぎのカードを使うべきだろうか？少しの間迷ったが、結局は見送ることにした。ここでボアを破壊したとしてもうさぎちゃんに発動した効果を無効にする能力まではないから結局カウンターは乗せられるし、だったらもっと有効的なカードが出てくることもあるだろう。
ツーヘッド・シャーク（１）→（３）　攻１２００→２００
「ヴェノム・コブラを攻撃表示に変更し、バトルだ！ヴェノム・コブラでツーヘッド・シャークに攻撃！」
「え？む、迎え撃って！」
満身創痍の状態になりながらも、最後の力を振り絞ってツーヘッド・シャークが飛び

かかってきた大蛇を迎え撃つ。普段からあまり攻撃することがないのか、若干その巨体を持て余し気味な動きのヴェノム・コブラの牙をギリギリのところでかわし、逆にその喉笛を噛みちぎってみせた。

ヴェノム・コブラ　攻１００（破壊）→ツーヘッド・シャーク　攻２００

コブラ　ＬＰ１４００→１３００

「そして爬虫類族の戦闘でダメージを受けたことで、ダメージ＝レプトルの効果を発動。デッキより出でよ、毒蛇王ヴェノミノン！」

ぼこぼこ、と辺りの毒沼が一斉に沸き立つ。いや違う、これは全て気泡だ。この沼に潜む無数の蛇どもが、一斉に目覚めて一カ所に集まろうと動いているしるしだ。そしてその進む先には、ひときわ大きな波紋が広がっている。この底なし沼の奥深くから半人半蛇の蛇の王、ヴェノミノンが同朋の死を受けて立ち上がろうとしているのだ。

「ヴェノミノンの攻撃力は、私の墓地の爬虫類族の数の５００倍となる。今墓地に存在するのはヴェノム・コブラ２体、ヴェノム・サーペント２体、ヴェノム・スネークの計５体、よって攻撃力は２５００！バトルフェイズ中に特殊召喚されたモンスターはバトルを行うことができる、このままヴェノミノンでツーヘッド・シャークに攻撃、ヴェノム・ブロー！」

毒蛇王ヴェノミノン　攻０→２５００→ツーヘッド・シャーク　攻１００（破壊）

清明　ＬＰ２７００→３００

これは……まずい。ボアの効果をフル活用してコブラの自爆特攻による戦闘ダメージが発生するギリギリのラインまでこちらのモンスターの攻撃力を減らし、最小の犠牲で最上級モンスターをリクルートしたうえで追撃を行う。ボアが効果使用ターンに攻撃できないカードだからよかったようなものの、そうでなかったらこのターンでやられていた。本人の見た目に反してコンセプトこそとことん地味ながらも、その分堅実にいやらしく、そして着実に僕のモンスターとライフは減らされていく。方向性こそまるで違うものの、この戦い方はどこかゴーストリック使いの稲石さんにも似たものを感じる……気がしないでもない。そして、僕の稲石さんに対する戦績はかなり悪い。最初の１回以外に勝ち星がないレベルだ。

「カードをセットし、ターンエンドだ。どうした、もう終わりか？」

「ま、まだまだ……僕のターン！」

今引いたカードを見て、手札にあるカードを見る。さあ考えろ、このカードだけでこのターンを耐え抜き反撃に繋ぐには、一体何が必要になる？下手なモンスターを出したところで、このエンドフェイズに乗るヴェノム・スワンプと次ターンのヴェノム・ボアの効果の重ねがけでまた破壊されてしまう。そしてヴェノミノンの攻撃力は、墓地の爬虫類族１体につき５００ポイント。

いや、待てよ。今のフィールドの状況を活用すれば、あるいは……？

「グレイドル・アリゲーターを守備表示！これでターンエンド！」

毒沼の上を蹴りたてて、緑色のワニが立ちふさがる。攻撃力５００のアリゲーターでも、ウォーターワールドがあるこの状況なら１ターンだけ耐えることができる。これで、次のコブラのターンが勝負の時だ。

グレイドル・アリゲーター　守１５００→１１００　攻５００→１０００

「ヴェノム・スワンプの効果発動！ヴェノミノンはヴェノムの名こそ持たないが、自身の効果によりヴェノム・スワンプの毒を受け付けない」

まだだ。僕のデッキで魔法と罠を破壊するカードは、今は幽鬼うさぎとサイクロン、グレイドル・インパクトと氷帝メビウスしか存在しない。１度までの破壊耐性を得たヴェノム・スワンプに貴重な幽鬼うさぎを無駄打ちするのは、せめてほかの除去手段が確保できるまで避けておきたいところだ。

グレイドル・アリゲーター（０）→（１）　攻１０００→５００

コブラ　ＬＰ１４００　手札：２

モンスター：毒蛇王ヴェノミノン（攻）

ヴェノム・ボア（攻）

魔法・罠：ダメージ＝レプトル

１（伏せ）
場：ヴェノム・スワンプ
清明　ＬＰ３００　手札：３
モンスター：グレイドル・アリゲーター（１・守）
魔法・罠：なし
場：ウォーターワールド
「私のターン。速攻魔法、手札断札を発動！互いのプレイヤーは手札を２枚墓地へ送り、カードを２枚ドローする。この時手札から２体目の毒蛇王ヴェノミノンを墓地へ送ったことで、さらにヴェノミノンの攻撃力が上昇する」
毒蛇王ヴェノミノン　攻２５００→３０００
ヴェノミノンの攻撃力がさらに上昇し、ついに僕の白夜龍と並ぶほどの数値になった。早く対処しないと、こっちもどんどん手が付けられなくなってしまう。だけど、今はこのターンをしのぐことだけ考えたほうがよさそうだ。このまま今の２枚ドローでいいカードが引けていなければ、あるいは。こんなふうに考える相手依存の時点ですでに相当ピンチではあるけど、そういった部分でのプライドはもう諦めた。終わりよければすべてよし、石に食らいついてでも勝ちに行こう。
「……ヴェノム・ボアの効果発動。グレイドル・アリゲーターにヴェノムカウンターを２

つ植え付け、攻撃力が０を下回ったことでスワンプの効果により破壊する」

グレイドル・アリゲーター（１）→（３）　攻５００→０

吐き出された毒液が緑の体をみるみるうちに紫色に染め上げ、形を保っていられなくなったアリゲーターの体が崩れる。だがただ崩れて終わりではない、むしろ本番はこれからだ。

「この瞬間、魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターの効果発動！相手モンスター１体に寄生し、そのコントロールを得る！さあこっちに来い、ヴェノミノン！」

毒沼の上を、まるで水面に油を引いたかのごとくグレイドルの銀色が流れる。一定のスピードを保つそれがスルスルと大蛇の体にしがみつくと、多少の抵抗の後その蛇がこちらへゆっくりと這いずってきた。その頭だけではなく、両腕の指部分を構成する蛇全ての額にも銀色の紋章が薄く光を放つ。

毒蛇王ヴェノミノン　攻３０００→０

「攻撃力が……」

わかってはいた。僕だってそこまで馬鹿じゃない、こうなることはわかっていた。ヴェノミノンの攻撃力はあくまで『自分の』墓地の爬虫類族に依存する。僕の墓地に爬虫類族なんて１体もいないから、当然コントロールが変わればその攻撃力は０になる。だけどそれでも、ここはヴェノミノンのコントロールを奪うしかなかった。ここでボア

のコントロールを奪おうものなら、攻撃力３０００のヴェノミノンの一撃を受けて確実に負ける羽目になった。少なくともこのターンで効果を使ったボアは攻撃ができないから、このままモンスターさえ出てこなければこのターンは凌ぐことができる。

……それでもその後どうする、という問題はまだ続くけど。ただ今この瞬間の状況では、不本意ではあるけれどこれが最善手だ。そして幸いにも、コブラの手にこれ以上召喚するようなモンスターはいなかったようだ。

「まあよかろう、だがそのヴェノミノンで何ができる？私はこれでターンエンドだ」

『幸いというより、マスターのそれは悪運だな。あまりツキのみに頼り切っていると、後で痛い目にあうぞ？』

「うっさいやい。僕のターン、ドロー！」

チャクチャルさんにはああ言ったけど、実際僕もそう思う。もっと実力で勝てないと、どんどん強くなっていく皆のレベルに追いつくことすらできやしない。もっともっと強くならないと、僕１人だけ置いて行かれちゃう。

そこまで考えたあたりで、突然気づいたことがある。どうして僕が、いくらあの不吉な夢を見たからと言ってそれを誰かに相談するよりもこうして夢で見た未来を変えるためにここに来る道を選んだのか。寮を出た時は僕自身が気づいていなかったけど、もしかしたらこの場でコブラを倒すことで他の皆に、そしてなにより自分自身に証明した

かったのかもしれない。僕はまだ皆と一緒に戦える、こうして最前線に立つ実力があるって。

『心の闇がまた広がる……程々にな、マスター。止めろだなんてことは地縛神の私が言えた立場ではないが、その力の乱用は今マスターが手にしているはずの物すらこぼれ落とす危険がある。私もこの５０００年で随分と丸くなったものだ、今の私にとってマスターの幸福こそが最大の望みなんだ。そのことだけは、心の隅にでも止めておいてほしい』

諭すような口調のチャクチャルさんの声に、どうにか感情の昂ぶりも収まって落ち着きを取り戻すことができた。そうか、これが僕にとっての心の闇、か。ここ最近の負け戦が、気づかないうちに僕を変化させていたらしい。

「すぅーっ……はぁーっ……よし、もう大丈夫。ありがとうチャクチャルさん、ヴェノミノンを守備表示に変更。さらにカードを1枚セット、モンスターをセットしてターンエンド」

毒蛇王ヴェノミノン　攻０↓守０

コブラ　ＬＰ１４００　手札：２

モンスター：ヴェノム・ボア（攻）

魔法・罠：ダメージ＝レプトル

１（伏せ）
場：ヴェノム・スワンプ
清明　ＬＰ３００　手札：２
モンスター：毒蛇王ヴェノミノン（アリゲーター・守）
???（セット）
魔法・罠：グレイドル・アリゲーター（ヴェノミノン）
１（伏せ）
場：ウォーターワールド
「私のターン！ほう……面白いものを見せてやろう。速攻魔法発動、エネミーコントローラー！このカードは２つの効果から１つを選んで発動するが、私が選ぶのは２つ目の効果。ヴェノム・ボアをリリースし、このターンヴェノミノンのコントロールは再び私が得る！」
空中に巨大なゲームコントローラーが出現し、２本のコードがそれぞれヴェノム・ボアとヴェノミノンを繋ぐ。複雑なコマンドが打ち込まれると、まるで子供のおもちゃのようにぎくしゃくとした動きでヴェノミノンがコブラのフィールドに戻っていった。そしてコブラの墓地にはすでに無数の爬虫類族モンスターが存在することで、またヴェノミノンの攻撃力が上昇する。

毒蛇王ヴェノミノン　攻０→３５００

「さらに魔法カード、ハーピィの羽根帚を発動！これによりお前のフィールドに存在するすべての魔法及び罠カードは破壊される！」

「え!?……何考えてんのか知らないけど、リバースカードオープン！和睦の使者の効果により、このターン僕は戦闘でモンスターを失わず、さらに戦闘ダメージも０になる！」

ウォーターワールドが、チェーン発動した和睦の使者が、破壊され墓地に送られる。そして、グレイドル・アリゲーターのカードもまたその例外ではない。

「グレイドル・アリゲーターの効果発動。相手に寄生していたこのカードがフィールドを離れた時、その寄生モンスターは破壊される……せっかく取り戻したところ悪いけど、ヴェノミノンはこれで破壊だ！」

ヴェノミノンの体が、毒沼に倒れこむ。そのままピクリとも動かずに、その紫色の水面にゆっくりと呑み込まれて……再び、水面が沸き立ったかのごとく気泡が立ち上った。それも先ほどヴェノミノンが現れたときとは比べ物にならない、まるでヴェノム・スワンプそのものがこれから現れようとしている何者かを全身で歓迎し、歓喜に身を震わせているような異様な蠢きようだ。

そしてその様子を見て、コブラが１人佇んで狂気めいた笑みを浮かべる。

「これでいい……自分フィールド上でヴェノミノンが戦闘以外の方法により破壊された

時にこのトラップカード……蛇神降臨を発動することができる。蛇神降臨の効果により私は、デッキからこのカードを特殊召喚！出でよ、毒蛇神ヴェノミナーガ！」

毒の沼地が、そこに巣食う蛇が、共に歓喜の叫びを上げる。いや、違う。これはあの蛇の神が、その体を持ち上げて深い沼の奥底、ヴェノミノンよりはるかに深淵から地上へと降臨した際の音だ。

毒蛇神ヴェノミナーガ　攻０→４０００

「ヴェノミナーガの攻撃力は、ヴェノミノンと同じく私の墓地の爬虫類族の５００倍。例え戦闘で破壊できずとも、何が隠れているのかは見ておくか。バトルだ、ヴェノミナーガでセットモンスターに攻撃！アブソリュート・ヴェノム！」

毒蛇神ヴェノミナーガ　攻４０００→???　守２００

猛毒の奔流を受けて、セットしていたモンスターが表になる。毒の前にふらつくそのモンスターの名は、ハンマー・シャーク……展開に長けた鮫の戦士だ。

「リバースモンスターでも見せてくれるかと思ったのだがな。エンドフェイズにハンマー・シャークにヴェノムカウンターが乗り、これでターンエンドだ。おっと、ヴェノミナーガにカウンターが乗ることを期待しても無駄だぞ？先に１つだけ忠告しておいてやるが、ヴェノミナーガはカード効果の対象にならず、あらゆる効果を受け付けない。精々戦闘破壊できるように祈ることだな」

ハンマー・シャーク（０）→（１）　攻１７００→１２００

「僕のターン、ドロー……」

現時点で４０００もの打点に加え、完全効果耐性だって？そんな化け物、どう倒せっていうんだ。いや、ここで僕が諦めムードになっていては話にならない。戦闘でしか倒せないのなら、その戦闘で越えてやるまでだ。このデッキが火力で４０００を超える方法は数少ない。だけどそれを可能にするカードを、僕は確かに知っている！

「魔法カード、死者蘇生を発動！僕の墓地に眠るモンスター、シャークラーケンを蘇生する！そしてハンマー・シャーク、シャークラーケンの２体をリリースし……アドバンス召喚、これが僕の切り札だ！霧の王（キングミスト）！」

毒の沼とそれを覆い尽くす黒い雲に、一筋の光が差し込む。分厚い雲を、不浄の沼地を、全て断ち切って霧の魔法剣士がフィールドに立ち上がった。

霧の王　攻０→４１００

「霧の王の攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力の合計！受け取れ、ミスト・ストラングル！」

蛇の女神がその赤い目を憎しみに燃え上がらせて両腕代わりの大蛇を、髪の代わりに頭から生える山のような量の蛇を振り回す。無限にも思える蛇どもの猛攻をすべて剣で捌き、あるいは受け止め、時には断ち切り、さらには自身の周りに霧を一瞬だけ纏う

ことで攻撃目標を狂わせたりと、その全てをただの一撃も受けることなく、ついにその本体にたどり着いた霧の太刀が神を切り裂いた。

霧の王　攻４１００→毒蛇神ヴェノミナーガ　攻４０００（破壊）

コブラ　ＬＰ１４００→１３００

「やった！」

「ふふふ……やった、か。果たしてそれはどうかな？」

「え……」

ヴェノミナーガは確かに両断した。そのはずなのに、再び空に雲が戻りつつある。沼地から、いまだ不穏な気配が漂い続けている。霧の王が何かに警戒しているかのように、振りぬいた剣を再び構えなおす。その視線が見据える先の沼が、再び膨れ上がった。まるで、何かが中から出てこようとしているかのように。やがて水面が割れ、そこから出たのは巨大な蛇だ。半神半蛇の究極の蛇の神の赤い瞳が、再びこちらを見据える。

毒蛇神ヴェノミナーガ　攻０→３５００

「嘘、い、今確かにヴェノミナーガは……」

「確かにヴェノミナーガは破壊された。だがそれがどうした？ヴェノミナーガは戦闘破壊された時、墓地の爬虫類族１体をゲームから除外することで再び墓地から蘇る。せっかくの攻撃も、徒労に終わったようだな。さあ、次は何をするのかね？」

「ぐっ……ターン、エンド……」

こう言うしかなかった。他に、何もできる事はなかった。全身全霊をかけた今の攻撃に、もうすべてのリソースを使い切った。これ以上何かを仕掛けるほどの余裕は、もうない。今はまだ霧の王の攻撃力が自己再生に力を使ったヴェノミナーガを上回ってはいるけれど、それだって持って次のターンまでだ。

……いや、心折れるにはまだ早い。僕には確かに手札もないけれど、まだ次のターンまで生き残れる可能性がある。そんな可能性があるのなら、次のドローカードを僕が引くまでは決して諦めるものか。このデッキの一番上に眠るカード、これが僕の手に残った正真正銘最後の希望だ。

霧の王（０）→（１）　攻４１００→３６００

「私のターン。このデュエルも、もう終わりにしよう。出でよ、ヴェノム・スネーク！」

このデュエルの最初の方でも見た、黒地にオレンジの縞模様を持つ蛇。

ヴェノム・スネーク　攻１２００

「ヴェノム・スネークは１ターンに１度、自身の攻撃を封じる代わりにモンスター１体にヴェノムカウンターを１つ植え付ける。これで霧の王のヴェノムカウンターは『２つ』だ」

「……ッ！」

鎧を突き破るほどの毒蛇の牙が霧の王の腕を捉え、その腕が変色していく。苦しみながらもその剣は話さなかったが、すでにヴェノミナーガをもう1度切り裂くだけの体力はその体に残っていなかった。

霧の王（1）→（2）　攻３６００→３１００

「バトルだ。ヴェノミナーガで攻撃、アブソリュート・ヴェノム！」

再び毒蛇の、猛毒の奔流が霧の王を飲み込む。精彩を欠く動きながら懸命に抵抗するも、その数の暴力が1匹、また1匹と抵抗を潜り抜けその体に食らいついていく。その数に比例してその全身が次第に変色していき、それと同時にますます動きも鈍くなり、そして……その動きが、ついに完全に止まる時が来た。

毒蛇神ヴェノミナーガ　攻３５００→霧の王　攻３１００（破壊）

清明　ＬＰ３００→０

「ぐ……僕が、負けた……」

「さあて、それではお楽しみの時間だ。命の保証はしないがな」

『マスター！今私が』

『誰だか知らないけどさ、せっかくのデュエルエナジーなんだ。思ったよりボクの復活

にはパワーが必要そうだし、邪魔をしないでくれるかい？』
『邪魔を……！するな……！』
『へぇ……！凄い力の精霊だけど……ここは、止めさせない、よ！愛しの彼に……十代に！ボクはまた会うんだ！』
ソリッドビジョンが消える。それと同時に、視界がどんどん狭くなっていく。チャクチャルさんから一瞬だけすごい勢いで供給されていた地縛神のパワーもあの謎の声がまた聞こえた瞬間に何らかの方法で断ち切られ、これまで見たこともないほどの光を放つデスベルトが僕の体力を直接、根こそぎ剥ぎ取りにかかる。
意識が途切れる最後の瞬間まで、あの謎の声が言った最後の言葉……十代の名前が、僕の頭の中でずっとリフレインしていた。

ターン８２　鉄砲水と分岐の英雄

「あ、痛てててて……」
　目が覚めたときに真っ先に感じたのは、後頭部に感じる冷たい硬さだった。痛む体に顔をしかめながらもどうにか身を起こすと、最期に見た景色とは随分様子が違う。入口どころか窓もない、床といい壁といい一面レンガ張りの……まるで、井戸か何かの底にでも閉じ込められたような格好だ。そして暗いその部屋の中には、もう１つ仏頂面が見えた。
「オブライエン？何してんのこんなとこで」
「それはこっちのセリフだ。なぜおまえがここにいるんだ？」
「なぜ、って……えっと、話せば長くなるよ？」
「構わないさ。どうせもうしばらくは、俺たちを監視しているコブラを油断させるために大人しくしているつもりだったからな。それに、俺がここに閉じ込められてからの間に何があったのかも知っておきたい」
「コブラの監視？それに、ここに閉じ込められてたって……」
「なるべく顔を動かさず、目だけで確認してみろ。監視カメラはあの位置だ」

言われたとおりに目だけを動かしてちらりとオブライエンの言う方向を見ると、確かに監視カメラが1台、広いわけでもないこの竪穴の中にいる僕たちの方を向いていた。まじまじと見つめるわけにはいかないから確証は持てないけど、多分あれも外に仕掛けてあったものと同じ品だろう。

「えっと、どっから話そうかな。実は……」

少し迷ったけど、最終的に洗いざらい全部話すことにした。どうせ見た感じ出口も何もあったもんじゃないこの狭い部屋で隠し事をしたところでオブライエン相手にはすぐばれるだろうし。アモンの開催したデスデュエル大会と、その結果出てきてしまった大量の衰弱者。島を飛び回る怪電波と、その発生源がこの研究所にあること。僕が見た夢についてはさすがに言ったところで通じるわけがないので伏せておいたけど、それ以外のことはだいたい明かしておいた。

そんなこんなで、結構時間がかかったものの僕が知る限りのほぼ全てを聞き終えたオブライエンが、ふう、と息をつく。

「……なるほどな。先に言っておくが、俺もコブラの狙いがどこにあるのかは知らん。だから俺を問いただしても、何も吐くような情報はない。所詮は使い捨ての傭兵、というわけだ」

そう言って自嘲気味に口の端を歪めて笑い、すぐに真剣な表情に戻る。

「だが、いずれにせよコブラと敵対するという点では俺たちの狙いは同じ。ここから脱出するために、お前にも協力してもらうぞ。まずは……そら！」

いきなり立ち上がったオブライエンがズボンから何か金具のようなものを取り出し、先ほど自分が示した監視カメラめがけて投げつける。正確なコントロールで飛んで行ったそれが、カメラのレンズを一発で叩き割った。

「これで、向こうからこちらは見えなくなった。恐らくあの男のことだ、どうせ何をしても無駄だと高をくくってしばらくは確認もしに来ないだろう。もうすぐ十代達もこちらに乗り込んでくるならば、なおさらだ。とりあえず、この床から手を付けてみるか。このレンガを剥がして脱出できないかやってみるぞ」

「ちょ、ちょっと待ってよ。まだこっちには聞きたいことが残ってる！」

今度は足についたベルトからお好み焼きに使うヘラのような物を取り出すと、その先をレンガの隙間にねじ込む作業に入ったオブライエン。いかにもしぶしぶといった様子で頭を上げ、なんだ？という様子でこちらを見上げてくる。

「結局のところ、オブライエンは何者なの？コブラと敵対してるってのは本当？だとしたら、一体何があったっての？それから……」

「お前の疑問はもっともだ。だが、その疑問に全て答えることはできない。それに、仮に俺がお前の敵だとしても、少なくともここから出るという目的だけは一致している。こ

の場で全てを聞き出そうというのは、かかる時間を考慮しても得策ではないはずだ」
　ケチのつけようもない正論を前に、何も言い返せない。確かに、オブライエンがここからの脱出を図っているのは明白。僕も当然、ここからさっさと抜け出したい。オブライエンの真意がどこにあろうと、少なくともここから脱出するところまでは協力する利点が十分にある。
　……確かにその通りなんだけどさあ。全くもっておっしゃる通りなんだけど、なんかもやもやする。大体、もしオブライエンが実はコブラ側で、ここにいるのも僕を騙すためだったりしたら？仮にここから出て十代達と合流できたとしても、むしろ皆のところにこの実力者オブライエンを、厄介な敵を案内するだけになりかねない。
「う……じゃあせめて、これだけ教えて。今の時間って、わかる？」
「そうだな……俺の感覚が確かなら、そろそろ朝の８時ごろになるはずだ」
「８時い!?じゃあ何、僕はここで４時間近くぐっすり寝てたっての!?」
「何度か起こそうとはしたんだがな、完全に気を失っていたからな」
　今が８時となると、ここでいつまでも悩んでいるのは何よりも最悪な選択だ。ＰＤＦは気絶している間にコブラに取られたようで気づいた時には無くなっていたが、予定通りに事が進んでいるならばいつ十代達がここに現れても不思議ではない。オブライエンを信じるか、それとも信じないか。色々難しいことを考えたところで、結局はその２

択でしかないわけで。
なら、僕の返事は決まってる。
「よっ、と……！」
その場にうずくまり、足元のレンガに指をかける。こちらを見てくるオブライエンにウインクして指に力を込め、手をかけたレンガを床から引きはがした。目を丸くするオブライエンの視線を感じながら、ぽっかりと空いたその穴をさらに広げにかかる。ダークシグナーとして生まれ変わった、というか生き返った際に得た身体能力の底上げによる馬鹿力をフルに使えば、この程度なら十分に力技でどうにかできる。
「でりゃあ！……あれ？」
と、思ったのもつかの間。３０センチも掘らないうちに明らかに指先から伝わってくる感触が変わり、いくら手を伸ばしてもつるつるした表面を撫でるばかりでその先が掴めなくなる。
「オブライエン、ちょっとこれ見てよ」
「今度はなんだ……鉄板か？」
「だよね」
どうも一切の継ぎ目がない、かなり巨大な鉄板がこのレンガの下には広がっているらしい。それを見たオブライエンがしばらく考えたのち、またもやポケットから何か金具

をとり出した。流石にこれを素手で引きちぎるほど僕の体も凄まじいことにはなっていないので、これはこの用途不明な道具を持っているオブライエンに任せるしかないだろう。すぐにしゃがみこみ、僕の開けた穴に両手を突っ込んでの作業が始まる。

「……えっと、手伝いとか」

「いらん」

よっぽど体力がいる作業なのか、歯を食いしばるようなぶっきらぼうな返事しか返ってこない。下手に会話するのも邪魔になりそうなので、しばらくは大人しくしていることにする。手持ちぶたさなのですぐそばの壁にもたれて座っていると、今朝の寝不足とデスデュエルの疲れが今頃になって出てきたせいか、はたまた普段めったに使わないダークシグナーの力を出したせいなのか次第にまぶたが重くなってきた。すぐ隣で作業中なのに寝るなんて失礼にもほどがある、そう思ってなんとか起きていようとしてもまたすぐ睡魔が襲う。

「あうぅ……」

ごめんオブライエン。最後にその後ろ姿に手を合わせ、そのまま目を閉じる。また嫌な夢でも見るかとも思ったけど、別にそんなこともなく結局オブライエンに起こされるまで本気で爆睡していた。まあおかげで、だいぶ敗北の感触も悪夢の不安も紛らわせることができたわけだけど……逆に言うと、何か僕を眠らせようとした存在がいたわけで

もなく、本気で眠くなって寝ただけだったらしい。それはそれで情けない。
「んで、どう？出られそう？」
「だから起こしたんだ。もう少しかかるがな」
「あいよー。見ーせてっと」
そうは言いつつも、場の状況を一目見てなんとなく想像はついた。先ほどの鉄板の一部が切られ、かすかに亀裂が走り向こう側から光が覗いている。そこを起点にこのまま押し広げ、どうにか穴をあけようということだろう。
あれ、だけどこれ光が見えるぐらい開いてるんならこのまま体重かけて踏み抜けばいいんじゃないだろうか。オブライエンもずいぶん長いことここに閉じ込められてたみたいだし、こんな簡単なことも思いつかないぐらい精神的に参ってきてるのかな。よしよし、最後の一押しは僕がやってあげよう。
「どりゃあああーっ！」
「あ、馬鹿……！」
オブライエンが焦った調子で制止しようとしたけれど、もう遅い。勢い良く飛び上がり、全体重に加えその落下速度も合わせて鉄板の上に着地。みしみしといやな音が足元から聞こえ、次の瞬間立っているはずの地面に急に喪失感が広がった。あ、これは……と思ったところで、首根っこを強烈な握力で引っ掴まれる。制服のせいで首が締まる格

好になり息が止まりながらも、どうにかそのまま真下に落下することだけは防がれた。
「床から光が漏れてるんだ、下にある程度空間があるに決まってるだろう！そんなところで確認もせずに踏み抜いたら、下手すると命に係わるぞ!?」
「むーー！むーっ！」
片腕で僕を釣り上げながらお説教が始まったので、首を指さしてさしあたりの危機をどうにか伝える。どうにか降ろしてもらったところで、今開いたばかりの大穴を改めて覗き込んだ。
「うっわぁ……何これ」
レンガの下に敷かれていた鉄板……その下には通路があり、当然その底には床があった。どこに繋がっているかはわからないけれど、少なくともここから出ることはできるだろう。そしてそんな景色を見た瞬間、なぜコブラが監視カメラを封じられてから結構経ったにもかかわらず未だ顔すら見せに来ず余裕ぶっこいてるのかがよくわかった。いやまあ、こっちに来ないことについては十代達が今何かしててそっちの対応に追われてるのかもしれないけど。
結論から言うとこの通路、高さが見た感じ軽く２０メートルはある。大きな通路、なんてレベルではない。この高さから飛び降りたってダークシグナーの体を支えるために無駄に頑丈になった骨が折れるなんてことはないだろうけど、それでも着地をミスっ

て捻挫のひとつくらいはしかねない。
「なんかいいもんないの？さっきみたいなさ」
「そうだな……待て、誰か来た」
小声で注意し、通路の片側を指さすオブライエン。数秒後、そちらの方向からなんと十代達が走ってきた。ヨハンが剣山に肩を貸してもらってるところを見ると、恐らくデスデュエルがどこかであったのだろう。それだけでなくよく見ると、十代の足元も若干ふらついているように見える。全員の顔にはなぜか焦りの色が見え、少しでも早く通路のもう一方の端にたどり着こうとしているかのようだ。
ガコン。
突然研究所全体が揺れ、何か巨大なものが動く音がする。十代達が走り抜けようとするその先の通路が、上から降りてきた防火扉によってゆっくりと狭まりつつある。あれだけ分厚いと、一度閉まりきったらどうにかするのは極めて難しいだろう。なるほど、だからあれだけ焦ってるのか。おそらくはあの向こうにコブラが……そして、あの十代を呼ぶ謎の声の主がいるのだろう。
「なんて言ってる……！」
「場合じゃない、な！」
状況はまだよくわからないけど、とにかくこの通路を通り抜ける必要があるのだろ

う。だけど、彼らの位置と防火扉のスピードではちょっと間に合いそうにない。特に示し合わせたわけでもないのだが、僕もオブライエンも同じことを考えていたらしい。悠長に降りる方法を考えるわけでもなく、ほぼ同時に天井から飛び降りた。

「十代、そこどいて！」

「清明!?それにお前、オブライエン！」

オブライエンが落下しながら上着の内ポケットに手を突っ込み、今度は小型の拳銃のようなものを引っ張り出す。それを防火扉めがけて引き金を引くと、銃口からワイヤーが勢いよく打ち出された。その巻き上げの力を利用して、オブライエンがターザンのように最短コースで扉にたどり着いた。そして両腕を上に伸ばし、筋肉に力を込めて降りてくる扉をがっしりと受け止める。

「くっ……！早く行け、十代！そしてコブラを止めるんだ！」

「２人とも、なんでここにいるんだ!?」

「んなもん後で話したげるから！手伝うよ、オブライエン！」

やはり１人の力で支えるには無理があったらしく、オブライエンがどれだけ腕に力を入れても少しづつ、だが確実に床と扉の差は縮まっていく。その間に体を滑り込ませ、こちらに向け走ってくる十代達のために重たい鉄の扉を押し上げる。両腕にずしっとくる重みは流石に並の物ではなく、２人がかりでもじわじわとこちらが押されてるのが

わかる。
「早く!」
「よ、よくわからないけどわかったドン!皆、行くザウルス!」
最初に我に返った剣山の号令のもと、1人また1人と扉の向こう側に抜けていく。そして最後に、十代だけが残った。まだどこか呆然とした様子で、ゆっくりと扉をくぐる。完全にくぐりきってもなお、十代はその場に残っていた。
「オブライエン、お前はコブラの味方じゃなかったのか?」
「……俺とお前は、出会い方が悪かった。それだけのことだ。さあ、早くしろ。そしてコブラを止めてくれ。それと……コイツのことも頼む」
言いざまにオブライエンが両手を離し、急に姿勢を低くしてローキックを繰り出した。普段の状態ならなんとか見切れたかもしれないが、なにせ今は頭上に全神経を集中させている。そんな状態ではどうすることもできず、一撃を喰らった僕の全身のバランスが一気に崩れた。
「オブライエン、何を……!」
「ここでこうすることが俺の犯した罪への罰なら、俺は潔くそれを受け入れる。だが、お前までそこに着きあわせることはない。達者でな、清明」
何か言おうとしたけれど、もう声が出なかった。十代が倒れた僕の足を引きずり、扉

の向こう側へと引き上げる。その直後、分厚い鋼鉄の扉が床にがっしりと落ちきった。
「オ、オブライエン……」
「早くしろ十代！こっちの扉も閉まるぞ！」
感傷に浸っている暇もなく、ヨハンの声が響く。見ると、確かにこの通路にも上から鉄の扉が降りてきている。
「クッ……走るぜ、清明！」
「う、うん！」
２人で肩を並べて走り、かなりギリギリのところで扉の向こうに転がり込む。そこでこちらを……正確には僕の方をじっと見つめる皆の視線に気づいた。まあ、そりゃそうだよね。誰にも何も言わずに1人で乗り込んで、そのあげくがこんな何食わぬ顔してひょっこり出てきたんだ。心配、安心、そして疑念……色んな感情が渦巻いた、皆からの視線がただただ痛い。
皆の顔を見る気に慣れなくて目線を下に下げたあたりで、ふとあることに気が付いた。ここに乗り込むはずだったのは僕を含めて全部で８人、だけどここにいるのは７人だ。まるで僕の考えを呼んだかのようなタイミングで、真っ先に明日香が口を開く。
「あまり言いたくはないけれど、清明。あなたが今朝から行方不明だったから、それを探すって言って夢想はアカデミアに残ったのよ。私達もどうするか悩んだけど、もしかし

たらコブラに捕まってるのかもしれないって思って予定通りここに来たの。参ったわね、彼女に連絡が取りたいのに、ここは圏外だわ」
「そんな……!」
例えば、今朝起きたら急に夢想がいなくなっていたとしたら、僕はここに乗り込むよりそれを探す方を優先するだろう。だけど、それと同じことが自分にも言えるだなんて思いもしなかった。
何も言えずにただうつむいていると、空気を変えようという風にジムが1つ咳ばらいをした。
「ウホン。オーケー皆、俺たちがここに来たのはまず第一にコブラのデスデュエルをストップさせるためだ。確かに言いたいことはいろいろあるだろうが、ここは奴のホームグラウンド。いつまでもここで立ち止まっているのは大変バッドな選択だ。だからすべてを終わらせて、それからにすればいい。そうだろう、十代?」
そう言ってジムが、皆からは見えないように十代にアイコンタクトを送る。その意味をすぐ理解した十代が、大きく頷いた。
「ああ、そうだな。行くぜ、みんな!コブラはもう、すぐそこだ!」
「……ありがと」
思いのほか小さな声でしか言えなかったお礼の言葉は、しかしちゃんと2人の耳には

届いたらしい。無言でこちらを向いて親指を立て、すぐ前に向き直って歩きだした。その後ろを翔たちが追いかけ、さらにその後ろに僕が続く。……必ず説明するから、帰ったら絶対説明するから、だから、無事にここから出よう。

しばらく通路を歩くと、その行き止まりにはエレベーターがあった。エレベーターと言ってもよくある箱型のものではなく、ちょうどデュエルリングほどのサイズがある円形のステージのようだった。そしてその奥に立っているあの姿は、忘れもしないプロフェッサー・コブラ。十代達の顔を見てもニヤついていただけのコブラだったが、さすがに僕の顔を見ると表情が変わった。それはそうだろう、先ほどあんな地下室に放りこんだはずの人間がこうしてぴんぴんしているのだから。

「ほう？監視カメラが壊れたのは知っていたが、まさかもう脱出に成功していたとはな。オブライエンから荷物を取り上げなかったのは失敗だったか。まあいい、どの道デュエルエナジーの枯渇したお前では立っているのもやっとだろう。そんな程度では足りない、私の興味があるのは遊城十代、お前ただ１人だ。私をデュエルで止めるのだろう？デスデュエルで、なぁ？」

「ああ、やってやるぜ！」

「……！」

駄目だ、十代。ここで勝っても負けても、どのみちコブラの思う壺になってしまう。

コブラの狙いはただ1つ、デスベルトを通じて得られるデュエルエナジー。僕とコブラのデュエルのせいで溜まったデュエルエナジーがどれほどの物かは知らないが、あの謎の声は確かに『もう少し』だと言っていた。今でさえ不意打ちに近い形だったとはいえチャクチャルさんをも退けるほどの力を持ったそいつが、十分なデュエルエナジーを得たらいったいどうなってしまうのか。

それを警告しないといけない。どうにかデュエル以外の方法で、コブラを止めなくてはいけない。それを言おうとするのに、なぜか口が開かない。異変を横にいる皆に伝えようとしても、体全体がピクリとも動かない。1人でこの金縛りから抜け出そうともがいていると、再び頭の中で例の声がした。

『いい加減しつこいねえ……今はそれどころじゃないから命は取らないけど、このデュエルが終わるまでは眠っていてもらうよ』

その言葉を最後に、ゆっくりと視界が暗転していく。すでにステージでは、十代とコブラがデュエルディスクを構えていた。

「……おい！おいったら！」

「んー……」

耳元で誰かの叫び声が聞こえ、そのうるささに目を覚ます。
「何さ……十代？」
いった後ではっとした。この頭上に広がる空、そしてこのシチュエーション……ひどく似ている、あの夢と。
「コブラは、一体？」
ふと思いついたことを聞いてみる。もしあの夢の通りだとすれば、この後に続く返事は恐らく……。
「そうか、お前は気絶してて見てなかったもんな。たった今俺がコブラとデュエルして、俺が勝ったと思ったら突然光る人間みたいなのが現れてよ。それを追っかけたコブラがいなくなっちまったんだ。ヨハンたちが探しに行ってるけどな」
「っ！」
一言一句違わない、十代の言葉。まさか、本当にあの夢の内容を今現実でなぞりつつあるのだろうか。
そしてその予感は、すぐに確信に変わった。佐藤先生の名前、そしていくら呼びかけても聞こえない精霊たちの声。恐らくは、あの謎の声の主が何か仕掛けたのだろう。
……そして、話は核心部分へと移行する。
「頼むから教えてくれよ、一体なんでお前が俺らより先にここに来てたんだ？」

「そ、それは……」
「……もういいぜ、清明。お前がどうしても言いたくないなら、きっと何か理由があるんだろ？ならもう言葉は必要ない、その代わり、俺とデュエルだ！デュエルをすれば、きっとわかりあえる。俺はそれを信じてるし、これからも信じたいんだ。だから、せめてお前の魂を俺に見せてくれ。それができるのがデュエル、そうだよな？」
あの夢のラスト、あのシーンを現実にしたくないならば、このデュエルを受けなければいい。そうすれば今までほとんどあの夢通りに動いてきた十代との会話も、まったく違った方向に行けるはずだ。
だけど、僕にはそれができなかった。まず第一に、僕自身のことがある。ここでこの誘いを断るというのは、夢のことを知らない立場から見れば僕に何かやましいことがあると思われても文句は言えない。僕がコブラと通じていたのではないということを納得させるためには、十代の言うとおりデュエルを通じて魂をぶつけ合うしか方法はないだろう。それに、やっぱり十代の顔を見ていたら、断ることなんてできなかった。佐藤先生との間にいったい何があったのかは見当もつかないが、夢で見たよりも数倍ひどい顔だ。こんな状態で突き放すなんて真似、友人として僕にはできそうにない。
「……わかった。いいよ十代、一丁デュエルと洒落込もう」
目標はひとつ、あのラストターンの盤面から外れた結果を作ること。こんなこと意識

しながらデュエルしたことはこれまでないけれど、ぶっつけ本番でやってみるしかないだろう。デュエルディスクを構え、示し合わせたようにステージの両端に分かれて立つ。

「「デュエル！」」

夢で見たとおり、先攻は十代だった。相変わらず、僕の手札に妨害札はない。さあ、もうどんな手で来るかはわかってるんだ。

「最初から飛ばしていくぜ！魔法カード、コンバート・コンタクト発動！このカードは俺のフィールドにモンスターが存在しない時、手札とデッキからそれぞれＮを１体ずつ墓地へ送ることでカードを２枚ドローする。手札のフレア・スカラベと、デッキのアクア・ドルフィンを墓地へ送るぜ。そしてクレーンクレーンを召喚して、そのまま効果を使うぜ。このカードは召喚に成功した時、墓地に存在するレベル３モンスター１体を効果を無効にして特殊召喚できる！甦れ、アクア・ドルフィン！」

クレーンクレーン　攻３００

Ｎ・アクア・ドルフィン　守８００

あの時と同じ手順で、２体のモンスターが場に揃う。とくれば、次の手は手札のあのカード、そして進化からのコンタクト融合だろう。はたせるかな、その予感はすぐに現実となった。

「魔法カード、ヒーロー・マスクを発動！このカードは発動時にデッキのＨＥＲＯを墓地へ送ることで、場のモンスター１体をその同名カードとして扱うことができる。これで俺は、クレーンクレーンをネオスに変更するぜ。さあ、今回はもう１段上のコンタクト融合を見せてやる！魔法カード、Ｎ　Ｅ　Ｘ（ネオスペーシアンエクステント）を発動！このカードは俺のＮを進化させ、同名カードとしても扱うレベル４モンスターをエクストラデッキから特殊召喚する！さあ来い、マリン・ドルフィン！」

やはり、と言うべきか。アクア・ドルフィンの体つきが引き締まり、より精悍な体へと進化していく。

Ｎ・マリン・ドルフィン　攻９００

「さらに魔法カード、スペーシア・ギフトを発動！このカードは俺のフィールドに表側表示で存在するＮの一種類につき１枚のカードをドローするぜ……あれ、意外だな。俺が今２枚ドローしたことに何も言ってこないなんてよ」

「ああ、わかってるさ。マリン・ドルフィンはルール上アクア・ドルフィンとしての名前も持つカード、だから今十代の場にいるＮは１体でも、その名前だけなら２種類が場に存在する計算になるって寸法でしょ？」

「なんだよ、気づいてたのか。ちぇーっ、せっかく自慢できると思ったのによ。じゃあマリン・ドルフィンの効果……は、捨てたい手札もないからやめておくか。行くぜ、お待

ちかねのコンタクト融合だ！フィールドのネオス（クレーンクレーン）とマリン・ドルフィンをデッキに戻し、コンタクト融合！さあ来い、Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　マリン・ネオス！」

コンタクト融合のさらなる進化の形、マリン・ネオス。コンタクト融合体なのにエンドフェイズにデッキへ戻るデメリットが発生せず、Ｅ・ＨＥＲＯの名を掲げる融合ヒーローであるにもかかわらず正規の方法で特殊召喚さえしてしまえば蘇生も帰還も可能という異色の戦士も、やはり夢ではなかったわけだ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　マリン・ネオス　攻２８００

「マリン・ネオスの効果発動！１ターンに１度、相手プレイヤーの手札１枚をノーコストで破壊する！」

荒れ狂う水流がランダムに選びだしたカードはやはりあの時と同じ永続トラップ、グレイドル・パラサイト。ここまではまさに、何一つ変わることなくターンが進んでしまった。ここからは僕のターン、なるべく怪しまれない範囲でいかにあの時との違いを出すかが問題だ。

確かに極端な話、ここでドローゴーすれば夢とは全く違った盤面に持っていくことも可能だろう。だけど、それだと意味がない。精神が不安定になりつつある十代のため、それにここで下手をうつと本格的に周りから疑われかねない僕のためにも、ここは全力で戦い、その上でわかりあうことが必要なんだ。

「カードを2枚セット。これでターンエンドだ」
「僕のターン、ドロー!……シャクトパスを守備表示で召喚、さらにカードを3枚セットしてターンエンド!」
シャクトパス　守８００
あの時は、僕はシャクトパスをセット状態で出した。それを表側にしたぐらいで何が変わるとも思えないけれど、まずは軽いジャブのようなもの。こんな程度のことで結果が変わってくれるのなら、それに越したことはない。
「ずいぶん消極的じゃないか」
「シャクトパスの能力は信用してるから、ね」
戦闘破壊したらそのモンスターに憑りつくシャクトパスが見えているのに、まさかマリン・ネオスで攻撃はしないだろうというわけだ。だが結論から言うと、この手は完全な失敗で終わった。少し思い出せばわかることだったのだが、この時十代が伏せていたカードは捨て身の宝札に異次元トンネル―ミラーゲートのカード、要するにこの2枚のカードを使うためにはマリン・ネオスの攻撃力が低くなるに越したことはなかったのだ。
こんなふうにして、互いにターンを重ねていく。もちろんこれ以外にも隙を見てはいくらかの違いを混ぜていったものの、そのどれもが不発に終わったまま時間とターンだ

けがずるずると過ぎていく。そしてついに、あの瞬間が来てしまった。

十代　ＬＰ１４００　手札：０

モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン（攻）

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス（攻）

Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン（攻）

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ１０００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：バブル・ブリンガー

グレイドル・インパクト

１（伏せ）

「クッ……」

この盤面で、ターンプレイヤーである僕の手札には今引いたドローカードの他にも先ほどサーチしたグレイドル・アリゲーターのカードがある。あの時は確か、グレイドル・インパクトのグレイ・レクイエムこと破壊効果を利用してエッジマンを始末しつつネオスのコントロールを奪ったわけだ。だとすれば、ここでやるべき手は１つしかない。それに、ネオスのコントロールを奪ってこの先の融合を妨害するよりもそれよりもう１段

高い攻撃力を持つエッジマンの、今この場で確実に与えられる１００ポイントのダメージと固有能力である貫通を選ぶのも間違った選択ではないだろう。
　このターンを境に、今度こそあの夢をただの悪夢で終わらせてやる！
「グレイドル・アリゲーターを召喚して永続魔法、グレイドル・インパクトの効果を発動！１ターンに１度このカード以外のグレイドル１枚と相手の表側カード１枚を選択して、その２枚を破壊する！受け取りな、グレイ・レクイエム！」
　墜落したＵＦＯから放たれた怪光線が、宇宙のヒーローであるはずのネオスの体を貫く。そして同じ光線を浴びて溶け崩れたアリゲーターが、全身金色の鎧に身を包んだ大型戦士に足元から寄生していった。
「魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターは、相手モンスター１体に寄生して操ることができる！悪いけど、エッジマンのコントロールはこっちで貰っとくよ！そしてエッジマンでワイルドマンに攻撃、パワー・エッジ・アタック！」
　Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン　攻２６００→Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン　攻１５００（破壊）
　十代　ＬＰ１４００→３００
「ぐわあああっ！」
「どうだ……!?」

あの時十代は、ネオスを奪われたことに対して『許せない』と言った。だとすればその逆、エッジマンの方を奪えば、あるいは。祈るような気持ちで、吹っ飛ばされた十代が起き上がるのをじっと待つ。1秒が1分にも感じるほど長い時間の中で十代がゆっくりと立ち上がり、その顔を上げ、そして……。

「ふぅ～……」

「ん、どうしたんだ?」

安堵の息を吐く僕に対し、十代が怪訝な顔をする。どうやら、僕はこの賭けに無事勝ったらしい。しかし安心してばかりはいられない、この先のデュエルは全く先が読めないのだ。

「いや、なんでもないよ。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「?まあいいさ、俺のターン!よっしゃあ、来たぜ!俺の手札がこのカード1枚の時、バブルマンは手札から特殊召喚できる!そしてこのカードがフィールドに出た時自分の手札、フィールドに他のカードがないならば、さらにデッキからカードを2枚ドローする!」

「ここでバブルマンを引いたっての!?ったく、やっぱり十代は大したもんだわ」

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻８００

この局面で丁度輝くカードを引きこむだなんて、本当に十代は凄い。圧倒的な運と実

力と土壇場の勝負強さを持った、文字通りヒーローのようなデュエリストだ。……羨ましい、なあ。

「信じればデッキは答えてくれるのさ。さらに俺は魔法カード、ミラクル・コンタクトを発動！このカードは俺の墓地に眠るモンスターを素材としてデッキに戻し、コンタクト融合体を特殊召喚する！俺は墓地のネオスとフレア・スカラベをデッキに戻し、コンタクト融合！来い、フレア・ネオス！」

燃え盛る炎の昆虫の力と、ネオスの持つ闇の力が混じり合う。甲虫を思わせる形状の羽根が背中から生え、全身の色もまさに昆虫のような黒とオレンジを基調としたカラーリングへと変化。頭部からは角のようにすらりと伸びた２本の触角が生え、そのせいかどことなくクワガタめいた雰囲気も纏っている。

「フレア・ネオスの攻撃力は、互いの魔法、罠１枚につき４００ポイントアップするぜ。俺の場には０枚だが、お前の場にはグレイドル・アリゲーターも合わせて５枚のカードがあるな」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレア・ネオス　攻２５００→４５００

「グレイドルは装備カードになる時、魔法・罠ゾーンに置かれる……そんなところまで逆手に取ってくるとはね」

「これがネオスの力だ！バトル、エッジマンにフレア・ネオスで攻撃！バン・ツー・アッ

シュ！」

全身を炎に包んだフレア・ネオスの突進が、エッジマンを狙い撃つ。両腕でその猛撃を受け止めようとするエッジマンだが、その熱量の前にはとても歯が立たない。だけど、僕だってそう簡単にやられるわけがないね。

「攻撃宣言時にトラップ発動、聖なる鎧―ミラーメール！このカードの効果でエッジマンの攻撃力は、攻撃してきたモンスターの攻撃力と同じになる！迎え撃て、パワー・エッジ・アタック！」

エッジマンの両腕の刃が黄金色に輝きを放ち、炎の前に生気の薄れつつあった瞳に再び輝きが蘇る。なおも燃え盛るフレア・ネオスの突撃を受けながらも両腕を高く上げ、その刃をがら空きのフレア・ネオスの背中に叩き込んだ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレア・ネオス　攻４５００（破壊）

↓Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン　攻２６００↓４５００（破壊）

「よし、ここで相打ちにできたから……！」

これで、十代のフィールドに残るはバブルマンのみ。だがバブルマンの攻撃力は８００で、残り１０００の僕のライフを削りきるにはほんの少し足りない。これで次のターン、僕がモンスターをドローすることができれば……。

「いいや、このターンで決めるぜ！バブルマンの攻撃、バブル・シュート！そしてこの瞬

間、墓地からスキル・サクセサーの効果発動！このカードを除外することで、モンスター１体の攻撃力を８００ポイントアップさせる！」
「だ、だけどバブル・ブリンガーの効果でレベル４のバブルマンはダイレクトアタックが……！」
「もちろんそれも対策済みだぜ！速攻魔法、サイクロン！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻８００→１６００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ１０００→０

「……ははは、また負けちゃったか。さっきも言ったけどさ、やっぱたいしたもんだよ十代は」
十代が何を言おうとしたのかはわからない。だけど何かを言おうとして口を開いた、その瞬間。
世界は、光に包まれた。
「な、何だ!?」
「まだなんかあるっての!?」
どれほど長い間、その光は周りを包んでいたんだろうか。とにかく、いつの間にか気

を失っていた僕が目を覚ました時……アカデミアは、どこまで続くとも知れない砂漠に囲まれていた。

砂漠の異世界編

ターン８３　鉄砲水と砂上の異形

「う……」

目が覚めた時、真っ先に感じたのは口の中いっぱいに広がる砂の味だった。

「うえ……ぺっ、ぺっ」

何度か唾を吐き、どうにかマシな気分になったところでおかしな点に気が付いた。僕が十代とデュエルしたのはステージ、というかヘリポートの屋上だったはずだ。当然かなりの高度があり、足元一面に砂が広がっているわけがない。地面に寝そべっていた姿勢から起き上がってみると、そこには目を疑うような光景が広がっていた。

『砂漠。それに３つの太陽、そして周りの地形ごとえぐって持ってきて配置したようなデュエルアカデミア……マスター、どうやらこれは、なかなか面倒事になってきたな』

「チャクチャルさん……」

チャクチャルさんにも同じものが見えているということは、どうやら僕の目がおかしくなったわけではないようだ。視界の果てまで広がる砂漠と、目の前にぽつんと置かれたアカデミアの校舎。微妙に薄暗く感じる空には、３つの太陽が若干歪んだ三角形に並

んでいる。
　……なんかもう、ね。この学校に来てからやれセブンスターだそれ光の結社だと奇人変人びっくりショーみたいな相手ばっかり連続で出会ってきてそろそろどんな奴が来たところで驚かない耐性も出来てきたかな、なんて思ってた矢先にこれだ。まさかの環境変動とは、いくらなんでも予想外すぎる。
「一応聞くけど、ここどこかって」
『わかるわけなかろう。ただ、この感覚は人間界よりむしろ……』
　チャクチャルさんの考察は、残念ながら最後まで聞くことができなかった。何気なくアカデミアに向けて一歩を踏み出したその瞬間、足元の砂が突然崩れたのだ。とっさに地面を掴もうとするも砂地では体を支えることなどできず、そのまま深い穴に真っ逆さまに落ちていく。
「……っとぉ！」
　着地。チラリと上を見てみると、別にそこまで深い所に落ちたわけではなさそうだ。次に辺りを見回すと、意外にも砂ではなくごつごつした岩壁に囲まれている。どうやら、ちょっとした洞窟のようになっているところに落ちてきたらしい。
『マスター、生きてるなー』
「２年前から死んでるよん。見てるだけじゃなくて助けてくれてもよかったのに」

『この程度で怪我するほどやわなわけがないからな。それよりほら、お客さんだ』
「え？」
　チャクチャルさんが足元の一点を指し示すと、まるでそれを待っていたかのようにその部分の砂が盛り上がる。地中から文字通り生えてきたのは、１体のモンスターだった。胴体部分は背中の棘や異様に長く大きな腕といった細かい部分を除けばまだ人型に見えるが、決定的に人外なのはその頭部だ。ホースのような円柱形の首の先端には頭がなく、首の端からはいきなり歯が生えている。どうやって周りを見ているのか僕のいる位置を正確に睨みつけ、ゆっくりとした足取りで音もなく近づいてくる。
「こ、これ……」
『サンドモス。岩石族の下級モンスターだが……やはり、ここはモンスターが実体化できる世界のようだな』
「どどどどうしよう、どうやって逃げればいい!?」
『逃げたところで地の利はあちらにある、ならばこの場で迎撃だ。幸い、この個体の他に仲間はいないらしいしな。デュエルディスクを構えろ、マスター！』
「え、えぇ……？」
　とりあえずチャクチャルさんに言われたとおりにデュエルディスクを構えはしたけれど、本当にデュエルが通用するのだろうか。だってこのモンスター、デュエルディス

クとかデッキとか持ってる風には全然見えないし。そう思いながらこちらに近寄ってくるそれを見守っていると、僕との間に3メートルほど距離を開けてぎこちなく片腕を伸ばす。足元の砂が巻き上がりその腕に絡みつき、ある部分は広がりある部分は固まり、やがて砂製のデュエルディスクらしきものがその腕に装着された。

「できるの!?」

『アドバイスは1つだけ。……心配はしていないが絶対に負けるなよ、マスター』

「え？」

自分から焚きつけておいたくせに、急にシリアスになるチャクチャルさん。だがどういう意味か、と聞き返す暇はなかった。デュエリストが2人そろってしまった以上、もはや残された道はデュエルしかないのだ。

「そうは言っても、本当にデュエルできるのかな……？ま、精霊相手ってのもずいぶん久しぶりだし、それじゃあデュエルと洒落込もうか、サンドモス？」

フシューフシューと不気味な呼吸音がかすかに聞こえてくる程度で、返事を返そうとするそぶりすら見られない。だけどデュエルディスクを構えたっきり襲い掛かってこないところを見ると、まるっきりこちらの話を理解してないというわけではなさそうだ。

「調子狂うなあ……デュエル！」

あの砂製デュエルディスクがどういう仕組みなのかはわからないが、デュエルする上で問題はなさそうだ。僕が先攻であることが示され、手札をざっと見渡す。

ま、初ターンだしここは様子見かな。

「ツーヘッド・シャークを守備表示！」

ツーヘッド・シャーク　守１６００

いつもお世話になりっぱなしの２つの口を持つ青い鮫モンスター……だけど実体化しているからか、こころなしかいつもより色合いもくっきりして立体感も増して見える気がする。

「さらにカードをセットしてターンエンド」

「あ……う……」

やはり人語を喋るだけの知能はないのか、意味の分からない音を口から出しながらカードをそのデュエルディスクに置くサンドモス。すると足元の砂が盛り上がり、デュエルディスクを持つサンドモスの前に２体目のサンドモスが召喚された。

サンドモス　攻１０００

「あ……」

「シールドクラッシュ……ちっ」

フィールドの守備表示モンスター１体を破壊する魔法カード、シールドクラッシュ。

そこから放たれた光はツーヘッド・シャークを一撃で粉砕し、がら空きになった僕めがけサンドモスの拳が無造作に振り下ろされる。

サンドモス　攻１０００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４０００→３０００

「ぐわっ……!?」

うっかりいつものソリッドビジョンの調子でろくに受け身も取らず受け止めてしまい、頭が割れそうな衝撃を受ける。攻撃を終えプレイヤーのところに戻っていくサンドモスと、その後ろでリバースカードをセットするプレイヤーのサンドモスを尻目によろめきかかるもどうにか踏ん張り、殴られた箇所をそっと撫でる。まだずきずきと痛むとはいえ、骨や脳に異常はない、はずだ。

とりあえずほっと胸をなでおろした次の瞬間、今更ながらあることに気づいて背中に冷水をかけられた気分になった。……今僕は、モンスターの攻撃で物理的にダメージを受けた。今はたかだか１０００程度のダメージで僕のライフにも余裕があるからよかったものの、もしこのままライフが０になりでもしたら?要するにこれは、闇のゲームそのものだ。負けたところで魂がどうこうなることはないだろうけど、命の保証は何一つない。再び脳内をよぎる、チャクチャルさんが最後にアドバイスと称して掛けていった不穏な言葉。

「チャクチャルさん、もしかして最初からわかってたでしょ？……後で話聞かせてもらうよ」

『マスターならどうせ勝つだろう。だから交戦を勧めたんだ』

「ったく、そういうことじゃなくってさあ」

仮にも命がかかってるんなら、それはもう信用とかそういうレベルじゃなくて一言断りを入れて欲しい。確かにこの命は2年前のあの日にチャクチャルさんから貰ったようなものだし、それについては今でも感謝してる。けどだからって、こんな人の命を粗末に扱うような真似はやめて欲しい。そう思うのは、僕の贅沢なんだろうか。やはり人間じゃないチャクチャルさんと僕の間には、何かどうやったって相容れない価値観の違いがあるんだろうか。

……お互い口には出さない。だけど、感じていることは同じだろう。この間も感じた僕たちの間の、表面的には見えないような溝。個人の性格だとかいうレベルでは済まない、もっと根本的な種族としての壁。それがまた少し、広がった感じがした。

清明　ＬＰ３０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

サンドモス　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：サンドモス（攻）
魔法・罠：２（伏せ）
「……僕のターン。だったらこのカードで勝負、グレイドル・イーグル！」
砂地に広がる銀色の水たまりが一点に寄り集まり、砂の色よりなお黄色い鳥の姿を模す。
グレイドル・イーグル　攻１５００
「ここは攻め込む！グレイドル・イーグル、やっちゃって！」
『気を抜くな、マスター。こちらが命がけということは、向こうもまた命がかかっていることを忘れるな！そんな単調な攻め手では……』
「あ……」
チャクチャルさんの遅すぎた警告をあざ笑うかのように、サンドモスが伏せカードを表にする。速攻魔法、月の書……モンスター１体を裏側守備表示にするそのカードの効果を受けてセットされたサンドモスに、イーグルは無謀な突撃を仕掛けることしかできない。
だがその爪がサンドモスの体に弾かれるより前に、地中から伸びた鎖がサンドモスの腹を突き破ってイーグルを、そして僕の伏せたカードを貫いた。
「さらに爆導索のダブルコンボまで……」

爆導索。セットされた縦列全てにカードが存在する、つまり僕のモンスターと伏せカード、そして相手のモンスターと爆導索自身が一列になっているときのみ発動可能で、その列のカード全てを破壊するというトラップの中でも特に異端の効果を持つカードだ。僕はイーグルを召喚した時、特に何も考えずに伏せカードと並べるように出して、その点をうまいこと突かれた形になったわけだ。やがて貫かれたイーグルの瞳から光が消え、力なく溶け崩れて地面に落ちて染みとなる。サンドモスも砂となって地中に消えていった、かと思ったらなんと次の瞬間、何事もなかったかのように平然と起き上がる。

『サンドモスは裏側表示で効果破壊された際、攻守を反転して特殊召喚する効果がある』

サンドモス　攻２０００

「クッ……それじゃこっちだけやられ損ってこと!?悪かったね、イーグル。カードをセットして、ターンエンド」

どうもおかしい。闇のゲームなら、これまで僕も何度か経験がある。その時は今目の前にいるサンドモスよりもはるかに格上の相手とも戦ってこれたのに、なんで今になってこんなに苦戦しているんだろうか。小さな疑問が湧き上がるが、それをじっくり考える余裕をくれるつもりは残念ながらなさそうだ。

「う……あ……」

僕のフィールドが空いたここを好機とみたのか、勢いよく次なるカードが置かれる。地属性専用リクルーター、巨大ネズミだ。

巨大ネズミ　攻１４００

「あ……！」

「そう簡単に通しはしない！トラップ発動、波紋のバリアーウェーブ・フォース！この効果によりダイレクトアタック宣言時に相手フィールドで攻撃表示のモンスターは、全てデッキにバウンスされる！」

突っ込んできた巨大ネズミが、サンドモスが、半球状に僕を守る水の壁に阻まれ弾かれる。これでとにかく、このターンの攻撃だけは防げた……だけど虎の子のウェーブ・フォースを使ってしまった以上、これ以上の防御札はまだデッキの中に眠ったままだ。

清明　ＬＰ３０００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：なし

サンドモス　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：なし

「僕のターン！シャクトパスを召喚して、ダイレクトアタック！さっきの借りは返して

おくよ！」

無数のタコ足を伸ばし、動きの遅いサンドモスに容赦のない連打を加えていくシャクトパス。

シャクトパス　攻１６００→サンドモス（直接攻撃）

サンドモス　ＬＰ４０００→２４００

「これで少しは……」

それ以上の言葉を続けることはできなかった。サンドモスの目のない顔を見た瞬間、その気迫に呑まれてしまったのだ。

その時になってようやく先ほどの疑問の答え、なぜはるかに実力で劣るはずのサンドモスを相手にこれまで戦ってきた相手と同じくらい苦戦しているのかを悟った。僕が今まで経験した闇のゲームは、その相手もダークネス吹雪さんにヴァンパイヤ・カミューラ、幻魔皇ラビエルや邪神アバターといった文字通り化け物級の力を持つ大物相手がほとんどだった。だけどそういう相手は当人が自分の実力に絶対の自信とプライドを持っていたことから、最後の最後までこっちはそれにがむしゃらに食らいついていくだけでよかった。

……だけど、この相手はそれとは全くパターンが違う。自らの限界を知り、それを誰よりも理解したうえでなお命を張ってデュエルを挑んできている。所詮彼らにとって

闇のデュエルとは、いつ終わるともしれない悠久の命の中の暇つぶしのひとつでしかない。だがこの世界で生きるだけの何の変哲もないモンスターであるサンドモスにとっては、デュエルに使う一瞬一瞬が自らのいつ終わってもおかしくないちっぽけな命を全力で燃やす行為なのだ。

要するに、これまでの『格上』とは意気込みのベクトルがまるで違う。勝ち抜いて生きのびたいというこの純粋で本能的な欲望がこの気迫を、『格下』にしか出せないこの強さを生み出しているのだろう。

これ以上はないぐらいに噛み砕くと、戦う前から覚悟で負けていたのだ。それは苦戦もする、というかこのままいったら本気で負ける。こちらも相手を潰す気でかからないと、同じ土俵に立つことすらできやしない。

「う……うう……」

モンスターを伏せ、さらにカードを2枚と、手札に残ったカード全てを場に出すサンドモス。その様子を眺めながら、心のどこかでどうしようもないやりきれなさを感じていた。

……本当に、それでいいんだろうか。デュエルモンスターズを命を奪い合う手段なんかとして割り切って戦うことは、正しい考えなんだろうか。デュエルって、楽しい物じゃなかったのかな。少なくとも僕にとって、命の奪い合いが楽しいものだとは思えな

い。
清明　ＬＰ３０００　手札：２
モンスター：シャクトパス（攻）
魔法・罠：なし
サンドモス　ＬＰ２４００　手札：０
モンスター：???（セット）
魔法・罠：２（伏せ）
「……僕のターン、ドロー」
わからない。この世界では、確かにそれが常識なのかもしれない。僕らの世界の常識を持ち出すことの方が、むしろ間違ったことなのかもしれない。だけど中途半端に迷ったままデュエルを続けていては、勝てるものも勝てなくなる。
それはわかってる、んだけど。
「シャクトパスをリリースして、アドバンス召喚！出ろ、ジョーズマン！」
ジョーズマン　攻２６００
「バトル、ジョーズマンでセットモンスターに攻撃！」
体中に飢えた口を開く鮫の戦士が、その右腕を振りぬく。伏せてあったモンスター、２体目のサンドモスがその体の４割ほどを一撃で食いちぎられ、元の砂になって崩れて

いった。
　ジョーズマン　攻２６００→???　守２０００（破壊）
「あ……！」
「ブロークン・ブロッカー……！」
　攻撃力よりも守備力の高い守備表示モンスターが戦闘破壊された時、その同名モンスターをデッキから２体まで特殊召喚するカード、ブロークン・ブロッカー。今破壊されたサンドモスは２体目、だけどウェーブ・フォースのデッキバウンス能力がかえって仇になって、今の奴のデッキにはサンドモスのカードが２枚入っているためにその能力を最大限に発揮させてしまう。そして今日だけでもう何度も見たサンドモスが、またしても大地を盛り上げて砂の中から現れた。
　サンドモス　守２０００
　サンドモス　守２０００
「しつっこい……！カードをセットしてターンエンド！」
「あああ……」
　引いたカードをろくに見ることもなく、すぐさまセットするサンドモス。特に攻め込んでこないところを見ると、今は向こうもジリ貧なのだろう。だけど、いまだに迷いが抜け切れない僕と違ってサンドモスには決死の覚悟がある。この膠着状態も、長くは続

かない。
清明　ＬＰ３０００　手札：１
モンスター：ジョーズマン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
サンドモス　ＬＰ２４００　手札：０
モンスター：サンドモス（守）
サンドモス（守）
魔法・罠：２（伏せ）
「僕のターン！オイスターマイスターを召喚！」
オイスターマイスター　攻１６００
颯爽と飛び上がって着地する牡蠣の戦士。だがその両足が地面につくかつかないかというところで、いきなりサンドモスが動いた。ああそうだ、あのカードには僕も何度もお世話になってきたからよく知っている。
「激流葬！」
『いや、まだだ！』
チャクチャルさんの声に反応するかのように、もう１枚伏せてあったカードがチェーンして発動される。あのカードは速攻魔法、皆既日蝕の書？ふっとあたりの風景に影が

差したように暗くなり、その闇に呑まれサンドモスが、ジョーズマンが、そしてオイスターマイスターが、徐々に消えていく。これでフィールドに存在するすべてのモンスターは、このターンの終わりまで裏側守備表示になったわけだ。

「う……あ……！」

……そして、裏側守備表示になった全てのモンスターが激流葬によって無に変える。いや、違う。皆既日蝕の書により裏側守備表示となって効果破壊されたサンドモス２体は、またしても攻守を反転した状態で蘇生される。

サンドモス　攻２０００

サンドモス　攻２０００

「まだだ！オイスターマイスターは戦闘以外の方法で場を離れた時、フィールドにオイスタートークン１体を特殊召喚できるっ！」

オイスタートークン　守０

「あ……」

構うものかと言わんばかりに腕を振り上げ、２体のサンドモスが攻撃を仕掛ける。そのうち１体が守備力０のオイスタートークンをいともたやすく踏み潰し、もう１体の剛腕がデュエル序盤とは比べ物にならないほどの速さと重さを込めて唸る。

サンドモス　攻２０００→オイスタートークン　守０（破壊）

サンドモス　攻２０００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３０００→１０００
「……ッ!!」
先ほどの経験からガードだけは取ったものの、それでもなお強烈な一撃に声も出ない。その場でこらえきれず後ろに吹っ飛ばされるわずかな間にふと頭をよぎる、僕がダークシグナーになった直接の原因である暴走車にはねられた時の衝撃。下手をすると、あれよりも強かったかもしれない。この無駄に強靭な肉体がなければ、骨やら内蔵やらがまずいことになっていてもおかしくなかっただろう。
「い、痛たた……」
一気に勝負のバランスを向こうに傾けた、辛うじてライフを残すので精いっぱいの会心の一撃。だがその成功に驕ることなく、かといってまんまとしてやられた僕を嘲笑うでもなく、油断せずにモンスターを挟んでじっとこちらをうかがうサンドモス。
「く……」
その目のない顔と見つめ合う形になり、僕の心の中で１つの決心がようやくついた。少なくともこの世界では、デュエルは命をかけて行うものだ。そしてそれが分かったうえで、目の前のサンドモスは一歩も引くことなく戦っている。他の誰が何と言おうと、今の攻防で僕の腹は決まった。いいだろう、そこまで真剣勝負を挑んでくるのなら、も

うこれ以上ぐだぐだ迷ったりしない。殺らなければこっちが殺られるというのであればサンドモス、僕はお前のライフを、そしてその先にある命そのものを一切躊躇わずに全力で狩りつくす。それがデュエリストとしての、せめてもの僕の礼儀だ！

清明　ＬＰ１０００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

サンドモス　ＬＰ２４００　手札：０

モンスター：サンドモス（守）

サンドモス（守）

魔法・罠：なし

「僕のターン！ドローっ！」

今引いたカード、そして手札のカード、最後に伏せてあるカード。この３枚のコンビネーションが頭の中でスパークし、たった１つだけ僕に残された逆転の一手を導き出す。

「魔法カード、死者蘇生を発動！甦れ、ツーヘッド・シャーク！」

１ターン目に召喚したものの破壊された双頭の鮫が、再びフィールドに浮上する。

ツーヘッド・シャーク　攻１２００

「そして、お次はマジックコンボ！アクア・ジェットを発動して、ツーヘッドの攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

両脇部分に小型のジェット装置が取り付けられてツーヘッド・シャークはより強く、そしてより速く強化される。これで、サンドモスの攻撃力を上回った。

「バトルだ！ツーヘッド・シャークの２回攻撃能力で、２体のサンドモスに攻撃！」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→２２００→サンドモス　攻２０００（破壊）

サンドモス　ＬＰ２４００→２２００

ツーヘッド・シャーク　攻２２００→サンドモス　攻２０００（破壊）

サンドモス　ＬＰ２２００→２０００

「あ……！」

露払いはできた。だがすでに２回攻撃の権利を使い切ったツーヘッド・シャークにこれ以上の攻撃はできず、これ以上ライフを減らされることもない……サンドモスは、今そんな風に考えているだろうか。だとしたら、その考えはあまりにも甘い。このターンで仕留める、と言ったら絶対に仕留めるのだ。

「リバースカードオープン、メタモル・クレイ・フォートレス！このカードは発動後にモンスターとして特殊召喚され、さらに自分フィールドのレベル４以上のモンスター１体をこの一夜城の主とすることでその攻撃力を加算する！僕が選ぶのは当然、ツーヘッ

ド・シャーク！」

大地が揺れ動き、砂地を突き破って巨大な岩の手が伸びる。そしてそれに続いてその巨人の首のない上半身が映えてくる。いや、首がない巨人といっては誤解がある。正確には肩から上が城壁のようになっていて、そこに乗れば下を見下ろすことができるゴーレムだ。地下からゆっくりとせり上がるその上に飛び乗ると、上半身が完全に地中から出るころにはちょうど今までいた穴から地表に出るぐらいの高さになっていた。岩の巨人の上から久しぶりの地上に飛び降り、最後にちらりとはるか下にいるサンドモスを見下ろす。無論表情なんてまるで分らないが、デュエリストとしての魂だけは通じ合えた気がした。

メタモル・クレイ・フォートレス　攻１０００→２２００　守１０００→２２００

「……これでラストだ！メタモル・クレイ・フォートレスでダイレクトアタック！」

メタモル・クレイ・フォートレス　攻２２００→サンドモス（直接攻撃）

サンドモス　ＬＰ２０００→０

「ハア……」

『だから言っただろう、どうせ勝つと。それに、いい目になったぞマスター。戦士の目

だ』

あまりと言えばあまりの言い草についカッとなり、何か言い返そうと思って口を開く。だけど言葉を発するより先に、腕のデスベルトがまたしても光り始めた。

「しまった、これまだ生きて……！」

体重が数倍に跳ね上がったかに思えるほどの倦怠感が全身を包み込み、どこかへ飛んで行こうとする意識を辛うじて繋ぎとめる。どうにか持ちこたえて重い体を引きずり、最初に思っていたより遠くにあったデュエルアカデミアに到着したころにはすでに3つある太陽はどれも地平線の彼方に沈み切っていた。

……精霊を召喚すれば、確かにもっと早くアカデミアに着くことだってできただろう。だけど僕にはひとつだけ、どうしても気にかかることがあった。今日のデュエルの最後のターン、サンドモスにとどめを刺したあの瞬間。後悔するでもなく胸が痛むでもなく、何か嫌な、暗い愉悦の感情が心のどこかにあったことを、歩いている最中ずっと思い返していたのだ。

もしかしたら、それが僕の本性だったりするんだろうか。敵の命を奪うようなデュエルを、口では綺麗事を言いながら心の奥底では楽しんでいる。そんな化け物を、僕は自分の中に飼っているのだろうか。違う、と言い切るだけの自信は、ずっと歩いている間も最後まで出てこなかった。

ターン８４　鉄砲水と天部の舞姫

「……えっと」

「……」

「あ、はい、なんでもないです……」

時は……えっと、いつなんだろう今。ともかく3つの太陽がすべて地平線の向こうに沈んだから、ざっくり夜だということぐらいしかわからない。場所はある教室、登場人物は僕と十代、翔、剣山、明日香にジムとヨハン……ざっくり言えば、夢想を除いた旧ＳＡＬ研究所突入メンバーだ。十代が不安そうに成り行きを見ている中、他の面々は多かれ少なかれ非難を含んだ目つきでこちらをじっと見ている。とりわけ、明日香からの視線が強い。どうにかアカデミア校舎にたどり着いた僕をいきなりこの教室に引っ張ってきたのも彼女で、それからもほぼ一言も喋っていない辺りに凄まじい怒りが見て取れる。

どんどん重くなってくる空気の重さに耐えかねたかのように、口火を切ったのは十代だった。

「な、なあ清明。俺はさっきお前とデュエルして、お前には何かお前なりに事情があった

んだって信じてるぜ。だけど、1人で悩んでるなんて水臭いじゃないか。一体何があったのか、俺たちにも説明してくれよ」

ここまで来た以上もうごまかしたり逃げたりすることは逆効果にしかならないだろうし、何よりそんなことではここにいる皆も許してくれないだろう。それに、さっきも皆には後で説明するって言っちゃったし。

「どこから話せばいいのかな。えっと……」

全てのきっかけになったよくわからない予知夢のことから話し始める間、誰も口を挟むことはなかった。夢を見たのがきっかけだった、なんて我ながらメルヘンな話だとは思うけれど、僕らもこの2年間で世界にはいろいろ不思議なことがあることをいやというほど思い知らされたからだろうか。

「そうか、だからあのデュエルの時、少し様子が変だったのか」

「うん……。一言一句違わずに同じ盤面に持ってかれたからね、こっちも気が気じゃなかったよ」

そして、その後コブラとデュエルをしている最中にふと気が付いてしまった僕の心の闇……ここ最近、光の結社との戦いがひと段落してからの負け続きで少し、また少しと僕本人ですら気づかないうちにひっそりと広がっていった恐怖。

「でも結局、僕は怖かったんだ」

負けることそのものにではなく、その結果どんどん強くなっていく他の皆に置いて行かれるのではないかという不安。
「だってそうでしょ？皆はこの2年間で、入学した時とは比べ物にならないぐらい強くなった。だってのに僕はどうだっての？新しい力を手に入れたって、結局満足に使いこなすこともできない。一瞬スランプも抜けられた気もしてたんだけど、でもやっぱり現実を見せつけられてさ」
我ながら、うじうじうじうじと女々しいなあとは思う。だけどそれは一度口に出し始めると、もう止まらなかった。喉の奥につかえていたような恐怖を吐き出すごとにそれがまた新たな言葉を生み、何とも情けないことに全身を震えさせながらも言葉を繋ぐ。
「本当に……もう、駄目だね……ごめん、皆」
もはや立っていられなくなり、ずるずるとその場にへたり込んでいく。完全に膝が折れる寸前、僕の両肩をすらりと伸びた腕が強引に支えた。
「っ……！いい加減にしなさい！」
「明日香……」
これまで一言も僕とは口を利かなかった明日香が、ついに感情を爆発させた。半ば引っ張り上げるようにして僕を再び立ち上がらせると、カツカツと足音を立てて教壇の方へ歩いていく。ぽかーんとそれを見ていると、キッと振り返って刺すような視線で睨

みつけてきた。
「来なさい、清明。そこまで言うなら私にも考えがあるわ、デュエルでその根性叩き直してあげる」
「え!?」
「お、おい明日香、少し落ち着けって……」
「十代は黙って!……さあ清明、こっちに来なさい?」
　まっすぐな性格の明日香にとって、今の僕はそれほど見てられないのだろう。それはよくわかる。仮に今の僕を去年の今頃の僕が見たとしても、ここまで怒るかどうかはともかくイライラしてしょうがないだろうし。
「駄目だよ明日香、この世界でもデスベルトの仕組みはまだ生きてる。ここでデュエルなんて始めたら、後でどんなことになるか……!」
「もちろん知っているわよ。でも、関係ないわ。貴方がいつまでもそんな調子だから……いえ、今は言わないでおくわ。ただ、本当に申し訳ないと思う気持ちがあるなら、ここで勝負から逃げるような真似はできないはずよ」
　なんとはなしに含みのある言い方が多少引っかかり、ふと思い立ってさっと後ろを向く。綺麗に全員目を逸らしたところを見ると、どうやらここの皆も知っていることらしい。その話も気になるけど、その次のセリフの方が気にかかった。

「勝負から、逃げる……」
「ええ。それでもまだくだらない言い訳をして後ろを向くなら、私もこれ以上それを止めはしないわ。その代わり、ここにいる誰も2度とあなたに手を差し出すような真似はしないと思いなさい」
　数秒ほど下を向き、明日香からの最後通牒をじっくりと噛みしめる。言い方には棘があるけれど、これもつまりは明日香なりの優しさなんだろう……多分。やがて決心がつき、顔を上げて教壇からこちらを見据える彼女の顔を見上げる。
「明日香はきっついなあ……でも、ありがと。それじゃあひとつ、デュエルと洒落込もうか……！」
　同じく教壇に立ち、その端と端にたがいに陣取る。デュエルディスクにデッキをセットし、オートシャッフル機能を作動させる。ライフポイントの表示がカシャカシャと増えていき、やがて４０００で止まる。その様子を見つめながらも、頭の中は既にこれから始まるデュエルのことが大部分を占めていた。僕はこのデュエルを経て、何かを掴むことができるだろうか。いや、できるかではない。明日香がデスデュエルの危険を押して僕と真剣に向かい合ってくれる以上、何も得るものなく終わらせるなんてことはそれこそ許されることではない。
「「デュエル！」」

掛け声をかけ、初期手札に目をやる。先攻は明日香、さあ、どう出てくる？これまで僕が見てきた明日香のデッキは融合モンスター、サイバー・ブレイダー主体の物だった。そして光の結社時代の明日香は、万丈目の話によると効果モンスターの白夜の女王を軸としたものだったらしい。今の明日香は、どちらの戦術を取ってくるだろうか。

「私のターン！カードを２枚セットして、さらにサイバー・プチ・エンジェルを召喚」

「へっ？」

思わず間抜けな声が出てしまったが、対する明日香はいたって真剣だ。フィールドに現れたのは、これまで明日香が好んで使っていた人型モンスターには似ても似つかぬ可愛らしいピンク色の球体に小さな手足と翼、そして天使の輪が付いたようなモンスター。ただ目を引くのは、その全てが金属製のロボットである点だ。

サイバー・プチ・エンジェル　攻３００

「サイバー・プチ・エンジェルは場に現れた時、デッキからサイバー・エンジェル１体か機械天使の儀式をサーチすることができる。私は機械天使の儀式を手札に加え、ターンエンドするわ」

デッキから取り出して見せた機械天使の儀式とやらには、さすがにこの距離だとテキストまでは見えないもののその名の通り儀式魔法のアイコンが。無難にサーチだけして終わったようだけど、そんな悠長なことしてる暇はあるのかね。

「僕のターン！ハンマー・シャークを召喚して、効果発動！自身のレベルを1下げて、手札からレベル３以下の水属性モンスターを特殊召喚する！来い、イーグル！」

ハンマー・シャーク　攻１７００　☆４→３

グレイドル・イーグル　攻１５００

「お決まりのパターンかしら？」

「まだまだ！水族モンスターのイーグルの特殊召喚に成功したことで、さらに手札からシャーク・サッカーの効果を発動！このカードを追加で特殊召喚する！」

シャーク・サッカー　攻２００

「攻撃表示……？」

明日香の疑問も無理はない。この３体で攻撃しても総攻撃力は３４００止まり、返しのターンでサッカーを狙われれば大ダメージは必須だ。だけどそれは、あくまでこのカードが手札になかった時の場合。

「永続魔法、水舞台装置（アクアリウム・セット）を発動！これで水属性モンスターの攻守は３００ポイントアップする」

色とりどりの木々に囲まれた御殿がそびえ立ち、水に包まれた風景の中で僕の魚たちがパワーアップを果たす。これで総攻撃力は４３００、そしてサイバー・プチ・エンジェルの攻撃力は３００。つまり明日香が何もしかけてこなければ、一気にワンターンキル

が成立する！

ハンマー・シャーク　攻１７００→２０００　守１５００→１８００

グレイドル・イーグル　攻１５００→１８００　守５００→８００

シャーク・サッカー　攻２００→５００　守１０００→１３００

「バトルだ！サッカー、サイバー・プチ・エンジェルに攻撃！」

青いコバンザメが空中を泳ぎ、身をしならせて尾の一撃を叩き付ける。だがそれよりも先に機械仕掛けの天使の翼が急に巨大化し、生物的な質感を放つ。

シャーク・サッカー　攻５００（破壊）→サイバー・プチ・エンジェル　攻３００→８００

清明　ＬＰ４０００→３７００

「サッカーっ！」

「攻撃力の低いモンスターから順に攻撃を仕掛ける、セオリー通りの動きね。だけど私はその攻撃に対して手札からオネストの効果発動、このカードを捨てることでこのターンの終わりまで対象の光属性モンスターの攻撃力をアップさせるわ」

「くっ……」

今のオネストを、どう見るべきだろう。僕の仕掛けたワンキルを防ぐためには攻撃力５００のサッカーに対してオネストをこのタイミングで切らざるを得なかったからや

むを得ず使った、と考えるのが一番自然ではあるけれど、本当にそうなのだろうか。明日香の腕前は僕も知っているだけに、攻撃力３００ぽっちのモンスターをオネスト１枚だけの防御に頼って攻撃表示で放置するとは考えにくいのだけど。いや、それとも僕がそう考える事すら読んだうえでの心理戦？

明日香の様子をそっとうかがうも、薄く微笑んだその気の強そうな表情からは何も読み取ることはできない。追撃を仕掛けるべきか、ここは一度退くべきか……いや、迷ってて勝てる相手じゃない。攻撃はできるうちにやっておかないと。

「イーグルでサイバー・プチ・エンジェルに追撃！」

「やっぱり攻撃してきたわね！トラップ発動、モンスターレリーフ！このカードは相手の攻撃宣言時に私のモンスター１体を手札に戻し、その後手札からレベル４のモンスターを特殊召喚できるカード。サイバー・プチ・エンジェルを手札に戻し、サイバー・ジムナクティスを壁として特殊召喚！」

その名の示す通り体操運動をするかのように華麗な動きで、サイバー・ガールの１体がフィールドに入場する。そのモンスター効果もさることながら、今厄介なのはその壁モンスターとして十分な守備力にある。しかもまたサイバー・プチ・エンジェルが手札に戻ったことで、次のターンにはまた召喚からのサーチを喰らってしまう事がほぼ確定してしまった。

サイバー・ジムナクティス　守１８００
「だったら攻撃を中止して、ハンマー・シャークで改めてサイバー・ジムナクティスを攻撃。せめて壁モンスターだけでも取り除く！」
ハンマー・シャーク　攻２０００↓サイバー・ジムナクティス　守１８００（破壊）
さすがにこれ以上の罠はなかったらしく、何も発動させずにハンマー・シャークの攻撃を通す明日香。だけど今更攻撃が通ったところでこちらとしては手札を４枚使いモンスターを並べたあげくワンキルどころか壁モンスター１体を倒すのが精一杯というありさまだから、それを手放しに喜ぶことはできない。
「メイン２にカードを１枚セットして、ターンエンド」
明日香　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
清明　ＬＰ３７００　手札：１
モンスター：ハンマー・シャーク（攻）
グレイドル・イーグル（攻）
魔法・罠：水舞台装置
１（伏せ）

「私のターン！サイバー・プチ・エンジェルを召喚して効果発動、デッキからサイバー・エンジェル―韋駄天を手札に加えるわ」

サイバー・プチ・エンジェル　攻３００

この小さな天使による連続サーチにより、明日香の手元にはあっという間に儀式魔法とそれに対応した儀式モンスターの１組が揃ってしまった。それ以外の手札に別のモンスターがあれば、あの儀式モンスターが出てくる……と、そこまで考えたところで明日香が驚きの行動に出た。たった今サーチしたばかりの韋駄天のカードを召喚することなく、そのまま魔法カードを使ったのだ。

「儀式魔法、機械天使の儀式を発動！私はレベル６の韋駄天を手札からリリースし、レベル６……サイバー・エンジェル―弁天の儀式召喚を執り行うわ！」

明日香の宣言と同時に鋼鉄の祭壇がその背後に浮かび上がり、その中心からオレンジ色の炎が噴き上がる。妖しくそして美しく舞う炎の中から、赤い扇子を片手に持った全く新しいサイバー・ガールが降臨した。

サイバー・エンジェル―弁天　攻１８００→２８００　守１５００→２５００

「攻撃力が上がった!?」

「ええ、そうよ。私が儀式召喚のためにリリースしたのは韋駄天のカード。サイバー・エンジェル―韋駄天はリリースされた時、私の全ての儀式モンスターの攻守を永続的に１

０００ポイントアップさせる！」
「そうか、そんな使い方が……！」
直接儀式召喚するためでなく、そのリリースを行うためにサーチを行う。儀式モンスターにはそんな使い方もあるのか、と学んだところでバトルフェイズに入る。……もっとも、攻撃するならしてくればいい。僕の伏せカードはポセイドン・ウェーブ、攻撃を無効にして返り討ちだ。
「バトルよ！ハンマー・シャークに弁天で攻撃、エンジェリック・ターン！」
「トラップ発動、ポセイドン・ウェー……」
「リバースカードオープン、魔宮の賄賂！その発動を無効にする代わり、相手はカードを１枚ドローできるわ」
「しまった！」
弁天がふわりと宙に舞って僕のモンスターたちをひとっ跳びにスピンを決めつつ飛び越え、今まさにその上に覆いかぶさらんとしていたポセイドン・ウェーブの上にサーファーのように音もなく着地する。妨害手段を一切喰らうことなく、その扇子がハンマー・シャークの頭上に落ちた。
サイバー・エンジェル―弁天　攻２８００→ハンマー・シャーク　攻２０００（破壊）
清明　ＬＰ３７００→２９００

「痛たた……」
「あら、こんな程度じゃ終わらないわよ？弁天の効果発動、弁天が相手モンスターを戦闘で破壊し墓地に送った時、その守備力分のダメージを与える！」
「ぐわっ！」
　弁天の扇子が、今度はこちらに突きつけられる。ハンマー・シャークの守備力は下級モンスターにしては高めの１５００、その数値がもろにこちらを直撃する。
　清明　ＬＰ２９００→１４００
「防戦すらままならないようね？私はこれでターンエンド」
「……僕のターン、ドロー」
　イーグルの守備力はわずか５００だから、ここで壁にすれば弁天の被害も最小限で済む……だけど、そんなことをしている間に第２、第３の儀式召喚が行われることは明白。
　また、このまま負けていくんだろうか。これまで通り、反撃すらろくにできずにモンスターとライフばかりがただ減っていって……脳内に３年になってからの負け星の数々が走馬灯のように駆け巡り、またしても膝を折りたくなる。そこでとにかく引いたカードだけでも確認しようと目を向けて、はっとした。
「霧の王（キングミスト）……」
　ずっと僕と戦い続けてくれた、唯一無二の切り札。とどめを刺すフィニッシャーとな

り時には反撃の狼煙となり、どんな時でも僕を支え続けてきてくれたカード。そうだ、何度も自分に言い聞かせてきたじゃないか。気持ちで相手に負けてるようじゃ、絶対に勝つことなんてできはしないって。全く、何回やってもちょっと不利になるたびにすぐそのことを忘れちゃうんだから。

ぶるぶると首を振って悪いイメージを頭からすっかり追い出し、新鮮な気分で明日香と改めて向かい合う。気持ちの変化が伝わったのか、明日香もあら、という表情になった。

「さあて、こっからは反撃開始と洒落込むよ！速攻魔法、帝王の烈旋を発動！この効果により僕は、このターン相手モンスター１体を素材としてアドバンス召喚ができる！僕のイーグルと明日香の弁天をリリースして、アドバンス召喚！霧の王！」

２体のモンスターが霧に包まれ、空高く上がっていく。混じり合った２つの霧が人型に変化し、鎧に身を包んだ誇り高き魔法剣士の姿を取った。

霧の王　攻０→３３００→３６００　守０→３００

「霧の王の攻撃力はリリースしたモンスターの元々の攻撃力合計、さらに水属性の霧の王は水舞台装置の効果でパワーアップ！バトルだ、サイバー・プチ・エンジェルを撃破！ぶった切れ、ミスト・ストラングル！」

言い切ってからまたオネストが出てきたら、という疑念が頭をかすめたが、どうやら

今度の攻撃表示はまさにそれを匂わせるためのブラフだったらしい。結果的には何もなかったから、まさに結果オーライというべきだろう。

霧の王　攻３６００↓サイバー・プチ・エンジェル　攻３００（破壊）

明日香　ＬＰ４０００↓７００

「きゃあっ！だけど私は、さっきリリースされたサイバー・エンジェル―弁天の効果を発動していたわ。このカードはリリースされた時、デッキから天使族で光属性のモンスター１体を手札に加えるわ。この効果で２体目のサイバー・プチ・エンジェルをサーチ」

「……カードをセットしてターンエンド」

今は一時的に盛り返したとはいえ、僕と明日香の手札の差を考えるといまだ危機を脱したとは言えない状況だ。霧の王の固有能力である、一切のリリース行為を封じるという儀式召喚に対する強烈なメタ能力を加味してもまだ不思議なぐらい気持ちが晴々している。なのになぜだろう、不思議と危機感はない。気負わずに剣を構える霧の王が隣に立っていると、不思議と心が安らぐ。いつぶりだろう、こんな気持ちになれたのは。明日香との裏表のない真っ直ぐなデュエルが、何か忘れていたものを取り戻させてくれる気がする。

明日香　ＬＰ７００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：なし
清明　ＬＰ１４００　手札：０
モンスター：霧の王（攻）
魔法・罠：水舞台装置
１（伏せ）

「さあ来い、明日香！」
「当然よ。私のターン！サイバー・プチ・エンジェルを守備表示で召喚し、デッキから２枚目の機械天使の儀式をサーチ。さらに魔法カード、儀式の準備を発動。デッキからレベル６以下の儀式モンスター、２体目の弁天をサーチして墓地の機械天使の儀式をサルベージするわ」
サイバー・プチ・エンジェル　守２００
これで明日香の手札は一気に増えたことは間違いない。だけど、今更どんなに手札を増やしたところで霧の王がいる限り儀式召喚はもうできないはず。それとも霧の王を無力化する手がすでにあるのかといぶかっていると、彼女がクスリと笑うのが見えた。
「十代や貴方じゃあるまいし、そう簡単に逆転の手は引けないわよ。だけど私も、このデッキを信じることはできる。速攻魔法、リロードを発動！全ての手札をデッキに戻し、戻した枚数だけドローするわ」

リロード……なるほど、だから手札交換の弾を少しでも増やすためにサーチを連打していたのか。明日香の手札３枚がデッキに戻り、新たなカード３枚がドローされる。

「魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のサイバー・プチ・エンジェル、サイバー・エンジェル―弁天、サイバー・エンジェル―韋駄天、オネスト、サイバー・ジムナクティスの５体をデッキに戻しカードを２枚ドロー。来てくれたわね、魔法カード、融合を発動！手札のブレード・スケーターと、エトワール・サイバーを融合！融合召喚、サイバー・ブレイダー！」

明日香の初代切り札である融合モンスター、サイバー・ブレイダー。リリースを封じられたとしても、さすがにちゃんと対策はできていたってことか。

サイバー・ブレイダー　攻２１００

「サイバー・ブレイダーは相手モンスターが１体のみの時、戦闘破壊耐性を得るわ。パ・ド・ドゥ！」

「だけど耐性を持ったところで、霧の王の攻撃力の前には！」

「そこも当然対策済みよ。装備魔法、団結の力を発動！私のフィールドにモンスターが２体存在することで、サイバー・ブレイダーの攻守は１６００ポイントアップするわ」

サイバー・ブレイダー　攻２１００→３７００　守８００→２４００

「ここに来ての力押し……いかにも明日香らしいね」

「褒め言葉として受け取っておくわよ？バトル、サイバー・ブレイダーで霧の王に攻撃！グリッサード・スラッシュ！」
「だけどあいにく、力押しなら僕も負けちゃいないんでね。リバースカードオープン、グレイドル・スプリット！このカードは攻撃力５００ポイントアップの装備カードとなり、僕のモンスター１体に装備される！パワーアップだ、霧の王！」
　霧の王の片目がいきなり銀色の光を放つ。青と銀のオッドアイズとなり更なる力を解放した霧の王による剣の一撃が、サイバー・ブレイダーのスケートシューズでの回転蹴りと空中で交差する。どちらもの攻撃も致命傷には届かなく、それぞれが地面に着地した。
　サイバー・ブレイダー　攻３７００→霧の王　攻３６００→４１００
　明日香　ＬＰ７００→３００
「やるわね。私は……これで、ターンエンドよ」
「明日香……」
　バトル自体は互いに破壊されなかったが、この一撃でもはや勝負は決した。もはや手札も尽きて墓地リソースもない明日香のライフでは、次のターンで霧の王とサイバー・ブレイダーがもう１度今と同じバトルを行うダメージにはどうあがいても耐えきれない。そんなことに気づかない彼女ではないだろうが、それでもサレンダーすることなく

前を向いたままターンを終えた。

……僕に、同じことができるだろうか。負けたといっては下を向き、また負けたといっては卑屈になり、さらに負けたといっては自分から下に下に沈んでいく、そんな僕に明日香のように誇り高く、デュエリストとして最後まで前を向いて正々堂々と絶望しかない戦いであっても続けることができるだろうか。

「僕のターン……」

僕には何もわからない。『相手のドロー次第では持ちこたえられる程度の負け』ばかりを味わってきた僕には、こんな『相手のドローすら関係なくすでに負け確定』なんて状況に置かれた時にどう動けるかなんてこと、まったく想像もつかない。もちろん理想としては、今の明日香のように最後まで誇り高くありたいと思う。だけどこんな極限の状態に置かれた時、僕からどんな本性が出るのか……僕自身にすら、まるで想像がつかない。

「さあ、攻撃してきなさい！」

「き……霧の王で、サイバー・ブレイダーに攻撃！ミスト……ストラングル！」

霧の王　攻４１００→サイバー・ブレイダー　攻３７００

明日香　ＬＰ３００→０

本当に。このデュエルではたまたま僕が勝ったけど、明日香にはかなわないなあ。

「ありがとう、明日香。僕とデュエルしてくれて」
「気にしないで。少しはいい顔になったんじゃないかしら？私もよかっ……」
最後までその台詞を言うことはできなかった。待っていたといわんばかりに光り出すデスベルトにデュエルエナジーを吸い取られ、その場に半ば倒れるように座り込んだのだ。
「明日香！剣山、早く保健室へ！」
「わ、わかったドン！」
「大げさね、十代。少し休めば、すぐによくなるわ……」
無論僕も吸い取られるエナジーは一緒、当然無事ではすまない。しかしダークシグナーと人間の体力の差か、チャクチャルさんが負担の一部を肩代わりしてくれているからか、僕の場合は手近な壁に身をもたれさせてどうにか一息つく程度で済んだ。とはいえさすがに疲れがたまってきたので、何か別の話題をして気を紛らわすためずっと気にかかっていたことを聞いてみる。
「そうだ。そういえばさ、夢想はどこにいるの？全然見つかんないんだけど」
そう言った瞬間、明らかに場の空気が変わった。皆がすっと目を逸らす中、剣山と十

代に肩を貸してもらって起き上った明日香が弱々しく話し出す。
「それよ、清明……だから私は、貴方のためだけじゃなく彼女のために怒ったの……」
「無理すんなよ、明日香。少し休んでろって」
「いえ、これは私に言わせて……あのね、清明。貴方が行方不明になった時、一番心配してたのは彼女だったの。だから彼女は研究所に向かうのを諦めて、１人で貴方を探すんだって……」
「そ、それで……？」
　ここまで聞いたところでもう予想がついたが、それでも聞かなければいけない。抑えようとしても抑えきれない声の震えを感じながらの問いに、明日香もまた返事を返す。
「さっき貴方が来る前、この世界に来たアカデミアの人たちを全員集めてみたんだけど……多分彼女は、この世界には来ていないわ」

ターン85　鉄砲水と天王星の主

「やっほー十代。こちら清明、異常ないよ」
　目の前に広がるのは、ただひたすらに砂、砂、砂。今僕がいるのはアカデミアのてっぺん、ここに登って周りを見回し、目の前に無限に広がるこの砂漠でモンスターのおかしな動きがあればすぐさま十代達に連絡を飛ばすのが今回の僕の役目だ。今はまだ昼だから野生のサンドモスやらダンジョン・ワームやらはよほどの変わり者でもない限り地中に潜んでいるはずだけど、用心するに越したことはない。
　こつ、こつ、と誰かの足音がしたので振り返ると、そこには久方ぶりに見る顔がパンと牛乳、それに紙皿に乗ったゼリー状の料理を持って歩いてきた。
「よう。さっきトメさんに怒られたんだ、そんなに計算ばっかりやってたら倒れちゃうから、少し外の空気でも吸って休憩してきなさい、ついでに清明ちゃんに今日の昼食を届けてやってくれってな」
「や、三沢。まあ座ってきなよ」
「ああ、俺もまだ飯を食ってないからな。隣、失礼するぞ」
　そう言って腰を下ろし、自分の分らしい僕と同じメニューをぱくつく三沢。考えてみ

れば不思議なものだ、ひっそりと休学して研究の道に進み始めた三沢と、よりにもよってこんな地球ですらないような場所で再会するだなんて。僕は直接見たわけではないけれど、事故に巻き込まれてこの世界に飛ばされてからというものたった1人でひたすらさまよい続けて半ば行き倒れ状態になったところを偶然こっちに来てしまったアカデミアで確保したらしい。三沢にも三沢なりに色々とドラマがあったんだろうけど、悲しいことに今の僕らにそれを気にしている余裕はなく、そのあたりの詳しい話はいまだ宙ぶらりんのままだ。

「……レイちゃん、どんな感じかな」

「ここに来る前に一応見舞いだけはしてみたが……まだ目覚めそうにはないな。十代達、ちゃんとやってくれるといいが……」

そう、これこそが三沢の話を気にしている余裕がない理由。昨夜の校舎内、廊下で何者かに襲われて怪我を負ったレイちゃんが、いまだ衰弱状態が続いているのだ。日本にいるならいざ知らず、食料すらまともに確保できるか怪しいこの世界でちゃんとした医療設備が整っているはずもなく、頼みの綱は三沢が歩き続けている最中に見たという潜水艦の残骸のみ。正直それにしたってどう考えても怪しい代物だけど、じっとしていても貴重な物資が日々減っていくだけだ。籠城が役に立つのは、援軍が期待できるときだけである。

「十代、そっちはどう？変わったものでもある？」
『いや、まだ何も見えないな』
　手にしたトランシーバーに声をかけると、向こうから十代のくぐもった声が聞こえてくる。電波塔なんて気の利いたものがあるわけないこの土地で、唯一通信が期待できるのがこの、倉庫に備品として置いてあったトランシーバーだ。本当なら僕もあちら側の探索組に入りたかったけれど、誰かこっちにステイして上からウォッチする役が必要だ、なんてジムに言われるとただでさえＳＡＬ研究所の件で負い目のある僕がそれを断れるわけもなく。
　……今ここに残っているのは１００人弱の生徒と僕の他に、トメさんや鮎川先生、クロノス先生といった教員勢。それにようやく目を覚ましたもののまだ大事を取って残ってもらうことにした万丈目とここから出るための方法を考えるため体育館の壁一面に計算式を書きなぐっている三沢。普通なら人数の少ない十代達を心配すべきなんだけど、なんだか嫌な予感がする。そもそも、何にレイちゃんは襲われたんだ？外で野生のモンスターにやられたというなら、まだわからなくもない。現に、僕もここに来た直後サンドモスに襲われたし。だけど学校の中で、ということは既に敷地内にその『何か』は入り込んでいて、しかもその『何か』には証拠を一切残さないでその場から立ち去るだけの知能がある。もしかして上から十代達を見張ってるより、校舎内の見回りで

もしてた方がよかったかな。いや、でもこれ以上独断専行するのは堪えよう。ここの生き物はハーピィを除くと基本夜行性だし、昼間はきっと大丈夫だろう。
「なあ、清明。少しいいか？」
「え？」
　突然、三沢が目の前の砂漠を見つめながら口を開いた。僕の返事を肯定と受け取ったのか、ぽつぽつと恐るべき内容を語りだす。
「今からする話は、まだ誰にも言っていない。単なる俺の推論だし、それでみんなの不安を煽ることもないからな。だが俺自身も整理がついていない話だから、整理するためにも誰かに聞いてほしいんだ」
「……難しい話は専門外だよ？」
　シリアスな空気にそう問い返すと、少し緊張がほぐれたように微笑んだ。
「ふふっ、お前らしいな。別に、そこまで専門的な話でもないさ」
「んじゃまあ、僕で良ければ。カモンカモーン」
「ああ。まずお前は、俺がこの世界にはみんなよりも先に来ていたことは聞いてるか？」
「ツ……あー、なんとか博士の実験で事故があったんだって？一応大体は聞いたけど」
「ツバイン・シュタイン博士、な。まあそれはいいとして、この世界を歩き続けていたある日の夜、ふと空を見てみたんだ。今は昼だからわかりにくいが、ここは空気が澄んで

いるから星がよく見えるんだぞ」
　メルヘンだねぇ、などと茶化す言葉が喉元まで出かかったが、何とかこらえてそれを飲み込む。割とシャレにならないこの環境をたった1人で歩き続けたんだ、間違っても茶化したりなんてできるわけがない。……今夜は星でも見ようかな。
「ここは異世界だ……皆はそう思っているようだし、その考えは間違っていないはずだ。実際に太陽は3つあるし、モンスターは常に実体化してうろついているわけだしな」
「うんうん」
「だからこそ、どうしても理解しがたいことがある。俺も、最初に見たときには目を疑った」
「ふんふん」
　いよいよ話の核心に達したことを察して、大人しく相槌を打つだけにとどめる。視界の端に、もはやだいぶ小さくなってしまった十代達がなんとか識別できた。
「……ここから見える星の配置が、地球から見えるそれと酷似している。といったら、どう思う？」
「……え？」
　たっぷり10秒ほど何も言えない時間が経った後、どうにか口から出てきたのは我ながら間抜けな一言だった。ここの星座が地球とそっくりだってことは、つまりここは—

「地球？」
「いや、それはない。俺も最初は驚いたが、ほんの少し角度にずれがある。なあ清明、お前はどう思う？ここから見える星の位置は、太陽系第７惑星……天王星から見る景色と計算上完全に一致するんだ」
　天王星。話にだけは聞いたことがあるけれど、わざわざ目で確認した人間は少ないだろう。僕も見たことない。あまりの話に一瞬言葉を失うが、すぐに三沢の説にはいくつかおかしな点があることに気がついた。
「ちょっと待ってよ、天王星に空気が無いことぐらい僕だって知ってるよ。それに第一、あの３つの太陽はなんなのさ。ココが太陽系なら、ちょっと２つぐらい多いんじゃないの？」
「お前の言いたいことはよくわかる……だが、それに対しても一応の反論はある。俺が光の結社にいたころの話だからうろ覚えと又聞きでしか知らないが、十代はあの新ＨＥＲＯのネオスとＮ（ネオスベーシアン）を宇宙、それも木星の衛星イオで見つけたらしいじゃないか。実はその話を聞いた時から、俺は１つの仮説を立てていてな」
「仮説？」
「ああ。精霊世界が実在すること自体は、俺がここに飛ばされる前からツバイン博士も

ほぼ確信していた。そしてこれまでにも何度かあった人間と精霊との邂逅記録……そういったものを分析した結果、精霊の世界と俺たちが普段住んでいる世界は表裏一体、とまではいかないまでもかなり近い存在である、という結論に達したのさ。木星の衛星の中に、空気があって知的生命体が確認できる星はない。だが、もしその中の星の1つに、そこから精霊世界に入り込めば十代のたどり着いた『精霊世界のイオ』にたどり着ける場所があるとしたら？星の配置などはそのままに、精霊が暮らしているかそうでないかという1点のみに違いがある精霊世界の宇宙が広がっているとしたら？いや、それだけじゃない。俺たちの説によれば次元……そう俺たちは呼称しているが、それは全部で10以上あるはずだ」

「またスケールの大きな……」

そう言いながら僕の脳裏にもあの十代の不思議なカードたちと、それともう1つ思い浮かぶことがあった。僕の手元にあるグレイドルカードも、元はといえば宇宙のどこからふらりと地球に不時着したカードだったはずだ。あの時スライム達がやって来たのも、精霊界の地球に不時着するはずが何かの拍子で僕らの次元に来てしまったからあんなに驚いたり恐縮したりしていたんだろうか。

いや、待て待て。仮に三沢の話が正しいとしたら、ここは精霊世界の天王星ということになる。地球との距離がどれほどあるかは知らないが、次元を越えて元の宇宙に戻っ

たうえでさらに地球までの距離をどうにかしないと生きてあの島には帰れない。慌てて三沢の顔を見ると、それだけで何を言いたいのか伝わったらしく重々しい顔で頷かれた。

「ああ、俺が心配しているのもまさにその反応なんだ。今この学校でパニックによる暴動が起きるような事態になっていないのは、あまりにもこの現状に現実味が無さすぎる、という点が少なからず影響を与えていると思う。精霊世界なんてお前らみたいな例外を除いてほとんどの人間には縁のない世界だから、それも無理はないだろうがな。だが、地球と天王星の間に果てしない距離があることはみんなの常識の範囲内でもわかるはずだ。この事を知った時、ここの全員がお前のように冷静でいられるか……だから、これまでこのことは誰にも話さなかったんだ」

お互いに何も言えないまま、時間だけが過ぎていく。その沈黙を最初に破ったのは、トランシーバーから聞こえる十代の声だった。

『ザザ……おーい、清明……うやく見つけ……ザザ……から今、この丘の向こ……行って中に入……ザザ……』

「も、もしもし十代！こちら清明、繰り返す、こちら清明！電波が急に遠くなったから、多分そっちに何かいる！」

言いざまにさっきまで十代達が歩いていた方を見ると、ちょうど砂の丘のようになっ

ているところで固まっている姿がなんとか見えた。今はギリギリ見えるけど、あの丘を降りだしたらこっちから視認することはもうできないだろう。そのことを追加で伝えると、とぎれとぎれながらもなんとか返事が聞こえてきた。ここで引くわけにもいかないし、なるべく慎重に行ってみるとのことらしい。

「十代……」

「なあに、あいつらなら心配はいらないさ。さて、俺もそろそろ計算に戻るかな。何か手伝えることがあったら遠慮なく言ってくれ」

そう言って、三沢も校舎内へ帰っていく。確かにこれだけ距離が離れていたら、いくら心配してもどうしようもない。ここはあのメンバーを信じて、僕は僕なりにこの場所でどっしり待ち構えてるとしよう。動くものが視界からすべて消え、少し視線を外して辺りをぐるっと見回してみる。校舎の裏手、裏口のすぐ近くにそれはいた。最初は何かモンスターが近づいてきたのかとも思ったが、それがこちらの視線に気づいて上を向いた瞬間理解した。

「あいつ……！」

『マスター……！』

あのオレンジ色に発光する、男とも女ともつかないが人型であることだけはわかる何か。間違いない、あいつがＳＡＬ研究所で僕とチャクチャルさんの前に何度か現れては

こちらの邪魔をしてきたり、頭の中に直接話しかけてきたあの存在だ。
「どうやったかは知らないけど、あいつまでこっちについてきたっての……!?」
すぐに下に降りて応戦を……と立ち上がったところで、頭の中に独断専行の４文字がちらつく。そうだ、つい昨日だって良かれと思って暴走した結果、十代達に迷惑ばかりかけてきたじゃないか。ここで僕が駆けつけたら、またあの時の二の舞にならないだろうか。だけど、あいつをあのままにするわけにはいかない。あの十代ラブ（仮名）、放っておいたら何をするのか見当もつかない恐ろしさがある。
「……十代っ！」
せめて連絡だけでも、と叫んだ声に、しかし肝心の返事は帰ってこない。僕からの声は、向こうに届いているのだろうか？向こうでも僕と連絡が取れなくなって、なんとか連絡を取ろうと叫んでいるのだろうか？ザーザーと不調を訴えるトランシーバーを握る手にもついつい力がこもり、みしみしといやな音がする。
「くそっ！」
何をしだすかもわからないあいつを野放しにするわけにはいかない。だけど、今の僕の立ち位置であるこの場所を勝手に離れては、もし十代達に何かあったとしても誰も対応できなくなる。歯噛みしながらも、結局どちらに動くとも決めかねてしまう。
そんな僕の優柔不断さが、どうやら奴にはお気に召さなかったらしい。小首を傾げる

ような仕草をしてなかなか降りてこないこちらを見つめたのち、すっとその右腕を上げた。

次の瞬間、奴の真後ろの大地が割れた。巨大な亀裂の中からゆっくりと浮かび上がってきたのは、巨大な球体の岩。複雑な黄色の模様が彫りこまれた青い球体と、その中央に刻まれた顔。その瞳が鈍い光を放ち、アカデミアを睥睨する。

「な、何?!」

『これはこれは……大物のお出ましか。来るぞ、マスター』

チャクチャルさんの言葉通り、その意志を持つ球体は一定の高さまで浮かび上がると、そのままこちらに向けて進路を変えた。音もなく空中を滑るように動き、じわじわと校舎に近づいてくる。このままだと激突するだろうし、そうなったら相手はあれだけ大きな岩石の塊だ。被害がどれだけ出るかもわかったものじゃないけど、どう考えてもただでは済まないだろう。オレンジ色のそいつには顔はあっても口がないが、それでも何を言いたいかは理解できた。どうする?と、僕に問いかけているのだ。このままでは確実に被害が出るが、それでもなおまだそこに残り続けるのか、と。

「くっ……やってやる!せめて十代が戻ってくるまで、アカデミアは僕が守る!出てきて、グレイドル・イーグル!」

黄色い鳥の形をしたグレイドルの精霊を呼び出し、そのまま実体化させる。ここが精

霊世界だからなのか、ありがたいことにいつもより僕にかかるカード実体化の負担が少ない。質量を持って舞い上がるその足を片手で握りしめ、空いた手で無造作に地面の方を指さす。

「イーグル、お願い！今すぐ僕を下まで運んで！」

悠長に階段やエレベーターを使っている暇はない。僕の意図を察したイーグルの翼にぐっと力がこもり、ふわりと体が宙に浮く感覚に包まれる。次の瞬間にはすでに、猛スピードでの滑空が始まっていた。みるみる近くなってくる地面に半ば身を投げ出すように着地し、一定のスピードで動き続ける球体とアカデミアの中間地点に陣取って仁王立ちしつつ声を張り上げる。

「ちょっと待ったあ！これ以上アカデミアに近づくなら、僕が相手だ！」

これ見よがしに腕を掲げ、デュエルディスクを見せつける。この球体にもデュエルができるのだろうか。それはわからないが、なにせここはサンドモスですらデッキを持つ世界だ。そんな世界にいるんだから、きっとこいつも僕の見たことないカードの精霊兼デュエリストに違いない。それにしたってこんな手も足もないただの球体にまでそんな理論が通じるのかは１つの賭けだったが、どうやら僕の声は無事に届いたようだ。球体の前進がぴたりと止まり、その視線がすっと下にいる僕の方へ向く。ゾッとする冷たい目だ……だけど、こんな視線ごときにビビってなんかいられない。第一、幻魔皇ラビ

エルや邪神アバターが乗っ取ったフランツのように、もっと恐ろしい目だって見てきた経験が僕にはある。

「デュエルだよ、デュエル。僕が勝ったら、大人しく退いてもらうよ」

僕が負けたら?その疑問は、あえて口にはしない。最初から負けるつもりなんてさらさらないことを相手に見せつけ、少しでも精神的優位に立つ……交渉の基本だ。参考資料はチャクチャルさんの受け売りだけど。それにしてもこれ、どうやってデュエルするんだろう。デュエルディスクをつける腕も、カードを持つ指もないこの体では、とうていデュエルモンスターズなんてできそうにないけれど。

その疑問は、すぐに晴らされた。僕の目の前で砂がうねり、それ自体が生き物のように寄り集まって砂の巨人……不格好な、だけどサンドモスと同じ砂製のデュエルディスクをその左腕に装着した巨人の形になった。多分、このモンスターの膨大な力を砂に込めることで自在に砂を操っているのだろう。なら、こいつに勝てばそれでいい。単純な話だ。

「それじゃ、デュエルと洒落込もうかね」

目の前の名称不明な巨人も、のろのろとその腕を動かして自家製デュエルディスクを構える。その前にあのオレンジ色の奴は、と辺りを見回すと、僕らのデュエルを観賞しようとでもいうつもりなのか、特に動きもないまま離れた位置から対峙する僕らの方へ

視線を向けているのが見えた。あの様子なら、とりあえずはデュエルに集中していても問題なさそうだ。
「デュエル！」
　サンドモス戦の時もそうだったけど、僕1人だけの掛け声はやっぱりちょっと寂しいものがある。そんなことをかんがえながらも、後攻ということでまずは相手の出方をうかがうことにする。
「むん……」
　喋ってるんだか砂が動いた拍子に擦れて音を立ててるんだかわからないような音を発し、デュエルディスクに1枚のフィールド魔法が置かれる。すると辺りの砂の中から、無数の投石器がせり上がってきた。
『フィールド魔法、岩投げエリア。1ターンに1度、モンスターの戦闘破壊の代わりにデッキの岩石族モンスターを墓地へ送るカードだな』
「相手だけモンスターの場持ちがよくなるわけね。厄介な」
　まだ先攻1ターン目ということもあってか、その後はモンスターをセットしただけで終わった巨人。おそらくあのモンスターも岩石族……となると、やはりそれなりのモンスターで攻撃しなければ硬い守備力に弾かれて終わりだろう。
「僕のターン、ドロー！砂漠はどうも味気なくっていけないね。フィールド魔法、ウォー

ターワールドを発動！」

あくまでソリッドビジョンとはいえ、乾ききっていた砂漠に潤いが蘇る。一瞬で水没したあたりの風景を尻目に、この大量の水によって力を増した僕のモンスターを召喚する。

「どうせ戦闘破壊が防がれるなら、無理にそっちを狙わなくても……ドリル・バーニカル！」

ドリル・バーニカル　攻３００→８００　守０

「ウォーターワールドは、水属性モンスターの攻撃力を５００ポイントアップさせる代わりに守備力を４００ポイント下げる効果を持つカード……だけど、守備力０のこのカードにはそんなデメリット関係ないね。さらにドリル・バーニカルは、相手プレイヤーにモンスターがいてもダイレクトアタックできる！撃ちぬけ、ドリルアタック！」

巨大なフジツボとでもいうべきモンスターの体中に生えた大量のドリルのうち１本が本体を離れ、砂の巨人に向け放たれる。かわすことも防御することもなくその攻撃を受け止めた巨人の腹に大穴があくが、本人は痛がるそぶりすら見せずに飛び散った砂がまた集まってその傷口を塞いでいく。

ドリル・バーニカル　攻８００→砂の巨人（直接攻撃）

砂の巨人　ＬＰ４０００→３２００

ドリル・バーニカル　攻８００↓１８００

「ドリル・バーニカルはダイレクトアタックに成功するたびに、攻撃力を１０００ずつアップさせる特殊効果がある。早く処理しないと、次のターンには１８００のダイレクトアタックを飛ばすからね？僕はこれで、ターンエンド」

いい調子だ。裏側守備表示で出したということは、巨人のフィールドにいるあれは恐らくリバースモンスター。攻撃を受けつつ墓地肥やしをし、なおかつリバース効果を僕のターンで使おうという相手の思惑を、どれも読みやすいとはいえ全て外してやった。今回はいつになく調子がいい、これも明日香の激が効いたんだろうか。

砂の巨人　ＬＰ３２００　手札：３

モンスター：???（セット）

魔法・罠：なし

場：岩投げエリア

清明　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：ドリル・バーニカル（攻）

魔法・罠：なし

場：ウォーターワールド

「むん……！」

そして訪れる巨人のターン。さっきあれだけかき回してやったにもかかわらず、まるで何事もなかったかのようにさっき伏せたモンスターを表にする。全身に包帯を巻いたような姿の岩石の小人が、見かけによらない俊敏さでにやにやと笑いながら颯爽と飛び上がった。

???→ダミー・ゴーレム　攻８００

『あれは、ダミー・ゴーレム！』

チャクチャルさんの叫びも時すでに遅く、反転召喚されたダミー・ゴーレムがその効果を発動する。あの一見レベルもステータスも低いモンスターは、リバース効果として渡す対象を自身に限定した強制転移を内蔵している。つまり、リバースしたあのカードと僕のモンスター１体のコントロールを入れ替えてしまうのだ。そして僕のフィールドには、攻撃力の上がったドリル・バーニカルしか存在しない。にやついたままダミー・ゴーレムが僕のフィールドに着地し、バーニカルが巨人のフィールドに送りつけられる。

「むん……」

巨大ネズミ　攻１４００

「通常召喚まで……ちょっと、してやられたかな」

僕の呟きをきっかけにしたかのように、２体のモンスターの攻撃が降りかかる。手札

にもそれを回避する手段はなく、その２連撃が僕のライフを容赦なく奪っていく。
巨大ネズミ　攻１４００↓ダミー・ゴーレム　攻８００（破壊）
清明　ＬＰ４０００↓３２００
ドリル・バーニカル　攻１８００↓清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３２００↓１４００
ドリル・バーニカル　攻１８００↓２８００
「まだ、まだ……！」
このターンの猛攻に、一気に半分以下にまでライフが削られる。さあ考えろ、一体どうすればいいだろうか。岩投げエリアは１ターンに１度とはいえ墓地に『岩石族を』送ることで『モンスターの』戦闘破壊を防ぐカード……つまり、向こうのフィールドにいる限り僕のドリル・バーニカルもその効果の適用圏内ということになる。実質１度の戦闘破壊耐性を得たに等しい、攻撃力２８００にまで膨れ上がったあのカードを次の僕のターンのうちに倒さない限り、僕の負けは確実と言っていい。その困難さがわかっているのか、明らかに砂の巨人も余裕ぶった態度でターンを終える。
「僕の、ターン！」
だけど、ここまでやられてただやられっぱなしなんてのは性に合わない。この借りはきっちり、利子までつけて返さないとね。

「相手フィールドにのみモンスターがいることで、カイザー・シースネークはレベル４、攻撃力０となって特殊召喚できる！そのままカイザー・シースネークをリリースして、アドバンス召喚！こっからは反撃だ、氷帝メビウス！」

氷帝メビウス　攻２４００→２９００　守１０００→６００

一瞬だけフィールドに現れた海蛇の姿はすぐに消え、全てを凍てつかせる氷の帝が召喚される。ウォーターワールドの援護を受けて攻撃性能を尖らせながら、冷気の波が投石機を次々と凍らせ破壊していく。

「メビウスはアドバンス召喚に成功した時、フィールドの魔法・罠を２枚まで破壊できる。岩根げエリアを破壊だ、フリーズ・バースト！」

「むん……」

「ごめんね、バーニカル……バトルだ、ドリル・バーニカルに攻撃！アイス・ランス！」

右腕を巨大な氷の槍で覆ったメビウスが、マントをはためかせて走る。その巨体によるスピードの乗った一撃は、無数のドリルをものともせずにその奥にある本体を刺し貫いた。

氷帝メビウス　攻２９００→ドリル・バーニカル　攻２８００（破壊）

砂の巨人　ＬＰ３２００→３１００

どうにか最大の危機は脱した。とはいえまだライフ的には倍以上の差がつけられて

いる現状に変わりはなく、利子どころか借りすらロクに返せていない。どうしようもない現状に歯噛みしながらも、ともかくできるだけのことをしていかないと話にすらならないと思い直す。

「カードをセットして、ターンエンド」

砂の巨人　ＬＰ３１００　手札：３

モンスター：巨大ネズミ（攻）

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ１４００　手札：２

モンスター：氷帝メビウス（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

場：ウォーターワールド

「むん……」

こちらとしては到底満足できる結果ではないとはいえ、先ほどの僕の反撃に何か思うところがあったのだろう。あるいはこのターンで勝負を決めるつもりが、それをまんまと阻まれたことに対する苛立ちか。心なしか上から見下ろす球体の視線も先ほどよりとげとげしさが増した気もするし、その真下でカードを操る巨人の動きもやや乱雑になってきたように見える。

「あれは、一時休戦!?」
『墓地肥やしに専念するつもりか!』
魔法カード、一時休戦。たがいにカードを1枚ドローすることで、次の僕のターンが終わるまでお互いに一歳のダメージを受けなくなる魔法カード。メジャーな使い方として防御のほか、リクルーターがいる状態でノーダメージのまま連続自爆特攻を行うことで急速な墓地肥やしを行うというものがある。そう、まさにこの盤面のように。
「むん……」
『来た!』
「んなこと言われたって、妨害なんてできないよ!」
巨大ネズミが走り、メビウスに返り討ちにされる。そして属性リクルーターである巨大ネズミが同名モンスターをデッキから呼び出し、呼び出された巨大ネズミがまた走る。一切プレイヤーへの反射ダメージがない状況の下その作業が3回行われるが、それを止める手段は僕の手元にない。
巨大ネズミ　攻１４００（破壊）→氷帝メビウス　攻２９００
巨大ネズミ　攻１４００（破壊）→氷帝メビウス　攻２９００
巨大ネズミ　攻１４００（破壊）→氷帝メビウス　攻２９００
「むん……」

「巨大ネズミはこれで弾切れ、じゃあ本命のモンスターを見せてもらおうか」

同名モンスターがデッキに入れられるのは3枚まで、なのでこれ以上ネズミの突撃が行われることはない。まだ最後のリクルート対象が残っているとはいえ、制約により攻撃力１５００以下のモンスターしか呼び出せないからせいぜい攻撃表示の壁を呼ぶのがいいところだろう……そう思っていたら、地面が突然膨れ上がった。地下から何かが凄い勢いで地上に出てきたのだ。そのサイズはただ者ではなく、到底攻撃力１５００以下とは思えないほどの威圧を放っている。

激昂のムカムカ　攻１２００→２８００

『激昂のムカムカ、か。その攻撃力は素の数値１２００に加え、手札の枚数1枚につき４００ポイントの上昇がされる……だが、妙だな。今のメビウス相手にはそれでも力不足なはずだが』

チャクチャルさんの指摘通り、手札が４枚の今の巨人ではウォーターワールドの補正が乗ったメビウスにはあと1歩攻撃力が届かない。やっぱり攻撃表示の壁なんだろうか、と思ったところで上空の顔と目が合った。……ここで攻めてくる、あれはそういう目だ。

はたせるかな、ムカムカが全身から怒りの余り蒸気を吹き上げつつ砂漠の砂を巻き上げて突っ込んでくる。それに対して氷の槍を右腕に作り出し、迎え撃たんとメビウスが

構える。２者が戦場で交差する直前、一陣の風が吹き抜けた。これは、ただの風邪なんかじゃない。その証拠に、さっきまで辺りに満ちていたはずの水がみるみるうちに吹き飛ばされていく。

「サイクロン……！」

気づいた時にはもう遅い。速攻魔法サイクロンを発動したことにより手札が減った激昂のムカムカは攻撃力が下がる……だが、ウォーターワールドを失ったメビウスの攻撃力はそれ以上に下がっていき、その攻撃力の差は０となった。

激昂のムカムカ　攻２８００→２４００（破壊）→氷帝メビウス　攻２９００→２４００（破壊）

「まさか相打ちしてくるなんて……だけど、メビウスはそう簡単には倒れない！リバースカードオープン、激流蘇生！このカードは水属性モンスターが破壊された時そのモンスターをすべて蘇生し、その蘇生した数１体につき５００ポイントのダメージを与える！蘇れ、メビウス！」

一度は大地に倒れそうになったメビウスの瞳に再び生気が宿り、氷の槍を地面について再び立ち上がる。激昂のムカムカに蘇生手段は用意していなかったようで、これ以上巨人のフィールドにモンスターが出てくることはなかった。

氷帝メビウス　攻２４００

「むん……」

これでターンエンド、次のターンはメビウスでダイレクトアタックだ……なんて、そこまで都合よくは流石にならないらしい。まあ当然だろう。墓地から巨大ネズミ３体のカードを取りだした巨人が、それをまとめて除外ゾーンと思しき場所に放りこむ。あ、いいなーあの機能。海馬コーポレーションのデュエルディスク、バトルシティ当たりの時代とは違って除外系カードの種類が増えたこの時代になってもいまだに除外されたカードを入れておく場所がついてないんだよね。なんか技術的な兼ね合いで難しいらしいけど、だからといってポケットに突っ込むことを推奨するのはどうかと思うのよ。

と、今はそれどころじゃない。わざわざ墓地のモンスターを除外したということは、当然それをコストにするカードが何か発動されたというわけで。メビウスとともに警戒態勢に入った僕の目の前に、案の定次なるモンスターが現れる。さあて、今度はどんなごつい奴が出てくるんだろう。そんな思いは、そのモンスターの全身を見た瞬間に砕かれた。

「……え？」

それは、これまでの岩石カードとはまるで毛色の違うモンスター。カラフルな全身はまさに子供の遊ぶブロックを組み合わせてドラゴンを作ったように角ばっていて、これ

までとは別の意味で非日常的なその姿はもはやファンシーと言ってもいいレベルに達している。だがついつい気が抜けた僕とは対照的に、チャクチャルさんが息を呑む。

『あれは、ブロックドラゴン！』

なんでこんなに警戒するのか、という疑問はすぐに解けた。割とふざけた見た目なのに、なんだこの守備力!?

ブロックドラゴン　守３０００

『それだけじゃない。ブロックドラゴンが存在する限り、相手の岩石族モンスターは戦闘以外での破壊が不可能になる。単純にステータスでごり押しするしかないな』

「なるほど、効果破壊ができない、か……ありがとうメビウス、まだ岩投げエリアが残ってたら本格的に突破が面倒になってるところだった」

ウォーターワールドで打点の底上げもできない現状、メビウスのした仕事は大きい。もちろん２枚目、３枚目の岩投げエリアが出てくる可能性も否定はできないが、それより前にあのドラゴンもどきを倒せばいい。ターンを終えた巨人に変わり、僕もデッキからカードを引いた。

「ドロー！」

効果破壊のできない守備力３０００の壁、か。効果破壊できない……いや、待てよ。さっき一時休戦のドローで引いたこのカードと、もう１つ今引いたこのカードを使えば

……そうか、いいこと思いついた。

「グレイドル・アリゲーターを召喚。さらに永続魔法、グレイドル・インパクトを発動！」

グレイドル・アリゲーター　攻５００

「グレイドル・インパクトは1ターンに1度、僕のグレイドルカードと相手フィールドのカードを1枚ずつ破壊できる！僕が選択するのはアリゲーターとブロックドラゴンの2体、グレイ・レクイエム！」

派手に落下したＵＦＯ……グレイドル・インパクトから2筋の怪光線が放たれ、それぞれブロックドラゴンとアリゲーターに照射される。アリゲーターはみるみる溶けて銀色の水たまりに変化していったが、ブロックドラゴンは見た目からは想像もつかない強靭さを発揮してその光線に耐える。いや、耐えてしまう、というべきか。その足元に、液体状になったアリゲーターが迫る。

「ブロックドラゴンは効果破壊できないけど、魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターの効果発動！相手モンスター1体に寄生して、その動きはこっちで操る。ブロックドラゴン、有難くいただくよ！」

「むん……」

ブロックドラゴンの額に銀色の紋章が浮かび上がり、こちらのフィールドに移動する。とはいえ、まだ見かけほど戦況がよくなったわけではない。このターンは一時休戦

の効果が残っているため一斉攻撃で大逆転ができず、相手ターンにはブロックドラゴンのこの強力な耐性がむしろ仇となってしまう。通常グレイドルの効果でコントロールを得たモンスターはそのグレイドルが場を離れた時自壊するが、ブロックドラゴンはその自壊にすら耐えぬいてしまう。つまり、もし次に装備カード状態のアリゲーターが除去されたらこのカードは破壊どころか向こうのフィールドにまた帰って行ってしまうのだ。……そうなったら、今度こそ止める手段はない。

「これで、ターンエンド」

砂の巨人　ＬＰ３１００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ１４００　手札：２

モンスター：氷帝メビウス（攻）

ブロックドラゴン（攻・アリゲーター）

魔法・罠：グレイドル・アリゲーター（ブロック）

グレイドル・インパクト

「むん……」

今はこちらが上回っているものの、その優位も決して盤石なものではない。いずれに

せよ、このターンに巨人がどう動くかでこちらの動きも決まってくる。
何をしかけてくるか、と緊張に包まれるが……もう手がないのかそれともまだ何かを狙っているのか、単にカードを1枚伏せただけで終わった。あの1枚、苦し紛れに伏せた程度なら別にいいけれど、もし何かを狙っているとしたら？僕のライフは残り少ない、それこそ魔法（マジック）・シリンダーの筒1枚でどちらを攻撃させても逆転敗北だ。だけど逆に、あのカードがミラーフォースのようなカードだとしたらブロックドラゴンの耐性で押し通せる。
「僕のターン、ドロー……」
残念、グレイドルカードは引けなかった。こうなるとアリゲーターとあの伏せカードに対してインパクトの効果を使うしかあのカードを除去する方法はないけれど、そんなことをしたらせっかく手に入れたブロックドラゴンが……僕の取れる手は2つに1つ。このまま攻撃させるか、手札のこのカードを出すか。前者ならば通りさえすればゲームエンドに持ち込めるけれど、後者の方がどちらかといえば安定性は高い。チャクチャルさんはこういう時とことん放任主義だから、アドバイスは一切期待できない。あの伏せカードをどう警戒するべきか……よし、腹は決まった。
「ここは、この手でいく！僕は2体のモンスターをリリースして、アドバンス召喚！出でよ、青氷（ブルーアイス）の白夜（ホワイトナイツ）龍（ドラゴン）！」
青氷の白夜龍　攻３０００

いちかばちかの賭けだけれど、賭ける価値は十分にあると見た。らしくないな、とは思わなくもない。あの2体で攻撃してこのターンで終わらせることに賭ける道を、昔の僕なら選んでいただろう。少し慎重になったのか、それとも単に臆病になったのか。少し考えてみるけれど、その答えは出なかった。

「むん……」

「え？このタイミングで何か……？」

『ブロックドラゴンはフィールドから墓地に送られた時、デッキからレベル合計が8になるよう岩石族モンスターを最大3体まで手札に加える効果を持つ。アドバンス召喚のためにリリースしたことで、その条件を満たしてしまったか』

限界の3体を加えて手札の補強を図るか……とも思われたけど、意外にも加えた数は1体。レベル8の岩石族の時点でだいぶ絞り込めそうだけど、何がいたっけな……こんな時三沢がいてくれたら即座にわかるんだろうけど、そこまで贅沢は言ってられない。

「とにかく今はバトルだ！ダイレクトアタック、孤高のウィンター・ストリーム！」

「むん……！」

やはりあのカードは攻撃反応だったらしく、白夜龍のブレス攻撃に反応して表になる。その正体は……。

「攻撃の、無力化？」

モンスターの攻撃を無効にしたうえでバトルフェイズを終了させるカード、攻撃の無力化。これは、アドバンス召喚の道を選んだのは大正解だったか。なぜなら、このモンスターにはその重さにふさわしい特殊効果がある。一度は時空の渦に飲み込まれた冷気のブレスが、数秒の拮抗の後その渦を吹き飛ばして巨人の体を直撃した。

「白夜龍は、自身を対象にする魔法・罠の効果を無効にして破壊する！そんなカードじゃ止められないよ、思いっきり叩き込め！」

青氷の白夜龍　攻３０００→砂の巨人（直接攻撃）

砂の巨人　ＬＰ３１００→１００

「これで、どうだ……！そしてこのターンのエンドフェイズにグレイドル・インパクトのもう１つの効果を使って、デッキからグレイドル・イーグルをサーチする！ドール・コール！」

３０００もの戦闘ダメージを直接叩きこまれて、無事で済むわけがない。上空に浮かぶ球体の表情からは何も読み取れないが、確実にあのデカブツにもダメージは通っているはずだ。

砂の巨人　ＬＰ１００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ１４００　手札：３
モンスター：青氷の白夜龍（攻）
魔法・罠：グレイドル・インパクト
「むん……」
圧倒的に追い詰めた状況にもかかわらず、妙に落ち着いた様子でカードを引く巨人。1枚の魔法カードを、その手札から発動した。
『あれは、フォトン……』
「サンクチュアリ……」
チャクチャルさんのセリフの後半を奪う。フォトン・サンクチュアリは、２体のモンスタートークンを呼び出すことのできるカード。確かにあのカードがあれば、フィールドが空のこの状況からでも一瞬で最上級モンスターを場に出すことができる。だけどあのカードには、確か発動ターンの光属性以外の展開を禁じる制約があったはず。地属性がほとんどの岩石族で、巨大ネズミまで3積みしているのに光属性モンスター？その疑問に答えるかのように、上空で動きがある。その瞬間、ようやくぴんときた。
「まあ、いつか来るとは思ってたよ？うん」
『随分と遅いお出ましだな』
上空の球体が、ゆっくりと前進する。今まさにぼくとデュエルしているこのカードの

精霊が、ついに戦線に直接参加したのだ。
Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ（ディスペア）　ＵＲＡＮＵＳ（ウラヌス）　攻２９００
『ウラヌス……？』
「知ってるの、チャクチャルさん？」
『先ほどの話は私も聞いていたが、ウラヌスとは天王星の意。もしあのモンスターがこの世界の主だとしたら、あの仮説もあながち間違ってはいないのかもな』
「へー……ま、なんにしたってあれがこの世界のラスボスってわけだ。だったら勝負だ、ぶっ倒す！」
　気合を入れ直したところで、球体改めウラヌスの両目がそれぞれ赤と緑に光を放った。どうやらこの２色の中から１つを選べ、と言いたいらしい。赤と、緑？どちらを選んでもろくなことにならなさそうではあるが、選ばなければいけないというのなら……まあ、適当でいいか。
「せっかくだから、赤で」
　そう言った瞬間、巨人のデュエルディスクから１枚のカードが飛び出す。そのカード……安全地帯をこちらに見せてから、フィールドにセットする。なるほど、赤……つまりトラップをアドバンス召喚の時にデッキから直接場に引っ張ってこれる能力があるわけか。緑って言ってたら魔法カードを引っ張ってきたんだろう。これはなかなか厄

介だ。破壊からモンスターを守る安全地帯というのがとくに。
「むん……」
だが、このターンはこれ以上動かない。当たり前だ、せっかく出したところ悪いけど攻撃力はこっちの方がまだ上回っているんだから。さらにカードを1枚伏せたのみで、あっさりとターンを渡してきた。
「僕のターン、ドロー」
「むん……」
「このタイミングでマインドクラッシュ……？」
宣言したカードとその同名カードを相手の手札からすべて叩き落とすトラップ、マインドクラッシュ。使うにしても、なぜこのタイミングなのか。一体何をしたいのかがわからない。ただこの宣言が必要なカードをどうやって口の無いコイツが扱うのかと見ていると、頭の中にカードのイメージが伝わってきた。この黄色い姿は……グレイドル・イーグルか。確かにさっきサーチしたのはウラヌスも見ていたわけだし、狙いどころとしては無難だろう。そしてまずいことに、僕が今引いたカードはよりにもよって2枚目のイーグル……あちらさんとしては思わぬ幸運だろうが、まんまと1：2交換をさせてしまった。
『それもあるが、これでグレイドル・インパクトの効果はまた使えなくなったな』

「あっ！」
確かに、僕の手札のグレイドルカードがなくなってしまったことでこのターンもグレイ・レクイエムは使えない。そこまでして自身と安全地帯を守ったところで、残りライフたかだか１００のウラヌスでは次の攻撃を耐えきることができないだろうに。
わざわざ無意味なことにここまでこだわるわけもないし何かがあるのだろうが、その何かが分からない。仕方がない、とにかくこの攻撃が通れば僕の勝ちだ。
「迷ってたってどうにもならないね。バトルだ、もう１度白夜龍で攻撃！孤高のウィンター・ストリーム！」
「むん……」
安全地帯がウラヌスを対象に発動され、破壊耐性を手に入れる。だけどそんなことしたところで戦闘ダメージは通る、このブレス攻撃で終わりだ……だが次の瞬間、信じられない出来事が起きた。攻撃を仕掛けたはずの白夜龍が、渾身のブレスを耐えきられた上に反撃の怪光線を受けて力なく地面に落下したのだ。
「なっ……！ブルーアイスっ！」
青氷の白夜龍　攻３０００（破壊）→Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻２９００→３２００
清明　ＬＰ１４００→１２００

「なんで攻撃力が……安全地帯に打点アップなんて能力はないはずなのに……！」
『ウラヌスのさらなる効果か。魔法罠が発動されるたびに攻撃力が上がるのだとしたらマインドクラッシュがトリガーになっていないのはおかしい、となると恐らくは表側で存在する魔法罠の数だけ攻撃力が上がる能力、といったところか』
　チャクチャルさんの冷静な分析のおかげで、僕にもウラヌスの能力が次第に見えてきた。まず召喚成功時にデッキから魔法か罠を相手に選ばせてその種類のカードを直接セットする能力、そして表側表示の魔法・罠に対応して３００ポイント単位で攻撃力を上げていく能力。一筋縄じゃいかない相手なのはよくわかったけど、とにかくこのターンは守りを固めないとダイレクトアタックを喰らってしまう。
「ツーヘッド・シャークを守備表示、エンドフェイズにインパクトの効果でグレイドル・インパクトの２枚目をサーチ、ドール・コール……」
　ツーヘッド・シャーク　守１６００
　ウラヌス　ＬＰ１００　手札：１
　モンスター：Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ（攻・安全地帯）
　魔法・罠：安全地帯（ウラヌス）
　清明　ＬＰ１４００　手札：２
　モンスター：ツーヘッド・シャーク（守）

魔法・罠：グレイドル・インパクト

いや、まだだ。お互いにギリギリの戦いになっては来たが、まだ終わったわけじゃない。

「むん……」

幸いにも、ウラヌスもこのターンでモンスターは引けなかったらしい。代わりに、引いたカードをそのまま発動した。

「装備魔法、ジャンク・アタック……！」

装備モンスターが戦闘でモンスターを破壊するたびに、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える装備魔法、ジャンク・アタック。一見すると地味ではあるが、モンスター同士の殴り合いではこのバーンは意外と効いてくる。そしてウラヌスの攻撃力は、チャクチャルさんの推理通り永続カードが増えたことでさらに上がる。

Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻３２００→３５００

「むん……」

Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻３５００→ツーヘッド・シャーク　守１６００（破壊）

清明　ＬＰ１４００→８００

ツーヘッド・シャークの攻撃力は１２００、その半分で６００ダメージ。僕のライフ

では、この程度のダメージすらかなり痛い。だけど、なんとかこのターンをしのぐことができた。さあ覚悟しろよ、安全地帯に守られているウラヌスは無理でも、それを守る安全地帯を直接吹き飛ばしてやる。

「僕のターン、2枚目のグレイドル・インパクトを発動。そして1枚目のインパクトの効果で、今発動したインパクトと安全地帯を破壊！グレイ・レクイエム！」

再び怪光線が乱舞し、ウラヌスを守る安全地帯という壁の排除にかかる。安全地帯は強力だがその反面自身が除去された時に守っていたモンスターも一緒に破壊されてしまう諸刃の剣、これでウラヌスもまとめて撃破だ。

「あれ……？」

だがそんな希望も、脆くも崩れ去る。ウラヌスの体が盾となり、安全地帯までこちらの光線が届かずに霧散したのだ。

『存在するだけで魔法・罠に破壊耐性を与える効果……？』

「そんな効果まで……どうすりゃいいってのさこれ！」

ウラヌス以外のモンスターが出てこないというのなら、このままこちらがモンスターを出さなければ安全地帯のもう1つのデメリットによりダイレクトアタックされることはない。だけど、現実にそんな可能性はあり得ないだろうから現実的じゃない。かと言って半端にモンスターを出したところで、ジャンク・アタックの餌食になるだけだ。

八方ふさがりか、と思ったところで、まだドローしてから見ていなかったカードの存在を思い出す。……そうだ、まだ僕にも希望は残っている。このカードが、正真正銘最後の賭けだ。

「魔法カード、手札抹殺を発動。たがいに手札を全部捨てて、その枚数ぶんだけカードを新しくドローする！」

僕の手札は、手札抹殺を除くとたった１枚。つまり、ドローできるのもたったの１枚。この１枚が最後の記望、これに全てがかかってる。このピリピリする緊張感、実はあんがい嫌いじゃない。一度深呼吸して気持ちを整え、スッとデッキトップに手を乗せる。

「はあああああっ！」

気合一閃、たった１枚のカードを引きぬく。感じる、僕のデッキから伝わってくる鼓動を。そうだ、これだ。このカードなら……！

「僕はこのターン、このカードを召喚する！天をも焦がす神秘の炎よ、七つの海に栄光を！時械神メタイオン、降臨！」

瞬間、炎が踊る。時械神の名を冠する、僕のチャクチャルさんと並ぶもう１つの神。メタイオン先生が降臨したのだ。

時械神メタイオン　攻０

「ウラヌスに攻撃、ケテルの大火！」

時械神メタイオン　攻０↓Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻３５００

「メタイオン先生によるバトルではダメージが発生せず、このカードは戦闘で破壊されない……だけどその効果発動、時械神がバトルを行ったことにより世界のモンスターは全て創生される！自分以外の全モンスターをバウンスし、その数１体につき３００ポイントのダメージ発生！」

安全地帯と言えども、対象を取らないバウンス効果までは防ぎきれない。そしてその炎はモンスターをリセットするのみならず、相手プレイヤーを焼く力がある。

ウラヌス　ＬＰ１００↓０

「っしゃあっ！」

ウラヌス、さすがに御大層な名前してるだけあってかなりの強敵だった。そして、腕のデスベルトがまた光を放つ。デュエルで足止めをした時点でこうなることはわかってたけど、だからといってこれはどうしようもない。ぜいぜいと荒い息を吐いて地面に座り込んでいると、上空のウラヌス本体もまた支えを失ったかのようにゆっくりと落ちていくのが見えた。ズン、という腹に響く低い音がして、その巨体が落下の勢いで半分ほど柔らかい砂に埋まる。あの様子を見る限り、やはりデュエルで負ける＝死に繋がる

というのは天王星の名を冠するあのモンスターであっても例外ではないようだ。
『もう害を及ぼすことはない。せめて最期を看取ってやったらどうだ、マスター』
チャクチャルさんの厳かな口調に後押しされ、疲労の余り痛む全身をどうにか動かしてウラヌスの落下地点まで歩く。１分と歩かないうちに、その体に触れる事さえできるような位置まで近づいた。
「せめて静かに眠ってもらいたいね……あれ？」
その位置まで来て、初めて気が付いた。ウラヌスの前面は特に傷もないのだが、ちょうどデュエル中には見えなかった背面にかなり大きな、しかも深い傷がついている。精霊の体がどれほど頑丈な物かは知らないが、僕らの世界の生き物を基準に考えればこれはどう見ても致命傷だ。しかもこの傷、古いものじゃない。かなり新しい、まだやられてから１日と経っていないような新しい傷だ。
「一体……」
誰が、と言おうとした言葉は続かなかった。ウラヌスの傷から見覚えのあるオレンジの光、デュエルエナジーが猛烈な勢いで外に出て行っている。何かに導かれるように流れ出ていくそのエネルギーの行きつく先は、僕らのデュエルをずっと観戦していたオレンジ色の人型。ウラヌスの持つ膨大なエネルギーをすっかり吸い取ったそいつは、スキップでもせんばかりの勢いで校舎へ向けて音もなく進んでいく。

「ま、待てっ！」

この傷の形に見覚えがある事に、その時ようやく思い至った。いまだ倒れたままのレイちゃんの腕にも、まさにこのウラヌスの傷を縮小したような跡が付いていたんだ。ウラヌスとレイちゃんが同じ奴にやられたとしたら、その相手は恐らくあの得体のしれないあいつだろう。もしかしたらウラヌスはアカデミアを襲おうとしたのではなく、自身に傷を負わせた奴を追ってここまで来たのかもしれない。となると僕は戦う必要もない怪我人を相手に勝負を挑み、それで勝って1人で悦に入っていたことになる。

「クソッ！」

とにかく奴を追いかけなくちゃ……慌てて走り出そうとするも、無視できないレベルで溜まり続けたデスデュエルによる疲労のせいで足がもつれ、無様に顔から転んでしまう。それでもどうにか立ち上がろうとしたところ、背後から誰かが僕を呼ぶ声が聞こえた気がした。

振り返ると、ウラヌスの瞳が動いてこちらをはっきりと見つめている。あの怪我に加え今のデュエルエナジー流出で、先ほどとは比べ物にならないほど弱っているのが一目でわかる。ほとんど生気の抜けたその目が、僕に何かを訴えようとしていた。

『マスター……』

「うん、大丈夫。僕にもわかるよ、チャクチャルさん」

何かを喋ってきたわけではないが、何が言いたいのかはなんとなく理解できた。半ば無意識のうちに立ち上がって手を伸ばすと、ウラヌスの目が最後にひときわ強い光を放つ。砂に戻って地面と同化しかかっていたウラヌスのデュエルディスクから1枚のカードが解き放たれると、その強大な念動力に支えられて僕の手のひらにふわりと乗った。そのカードに記された名前を、そっと読み上げる。

「Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ……」

一体ウラヌスは、いかなる思いで僕に文字通り自身の分身であるこのカードを託したのだろう。自分の命を奪う一因となった『奴』に無念の復讐を託したのか、何か自分の命のあかしを世界に残したかったのか、自分を倒した相手である僕に対しての敬意の表れのつもりだろうか。いずれにせよ、それがどんな思いであれ。

「僕も地縛神の使い手、地縛神官の端くれさ。その思いは確かに受け取った、Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳは決して消えさったわけじゃない。僕とこのカードの中で、生き続ける」

その言葉を聞くと、満足そうにそっと目を閉じる。吹き抜けた一陣の風が足元の砂を巻き上げ、目に入った砂をぬぐった時にはもうウラヌスの巨体は跡形もなくなっていた。だけど今のデュエルが夢じゃない証拠に、僕の手元にはウラヌスのカードが残されている。

『そのカード、本人の魂の一部が宿っているな。厳密にマスターの目の前にいるのと同じ個体ではないだろうが、何かの拍子に精霊として覚醒することも十分ありうる』

「そうなの？」

いつか、このカードからも精霊が出てきてくれるのかもしれないのか。だとしたら、それはちょっと嬉しいな。

だけど、今はそのことをいつまでも考えている暇はない。一刻も早く十代達と連絡を取らないと、どう考えたってこのままで終わるはずがない。まだ少しだるい体にムチ打って、校舎に向かって歩き出した。

ターン８６　冥府の姫と白き魂

遊野清明が別の次元における天王星でウラヌスと、ひとりぼっちの死闘を繰り広げていた――――その少し後。かつてデュエルアカデミアが存在していたその場所を前に、静かに立ちすくむ人影があった。

「清明……」

白を基調としたアカデミア女子特有の制服に、肩までかかる青い髪。校舎という障害物が消えたことで島の向こう側からダイレクトに吹き付ける海風にその髪を揺らされながらも、特に気にした様子もなく立ち続ける。彼女の名は河風夢想……ＳＡＬ研究所攻略の際には暴走したあげく行方不明となった清明を探すため、単身島中を探し回っていたことでたまたま大規模な校舎の神隠しの難から逃れる格好となった幸運な生徒の１人である。

「……」

ふと彼女が上を向くと、雲１つ無い青空には何機もの飛行機やヘリコプターが旋回している。それを見ながら、おそらくあれは今回の事態を受けて派遣されたデュエルアカデミア親会社、海馬コーポレーションの物だろう、とぼんやりとあたりを付ける。

そして、そんな彼女の推測はただの勘ではない。事実、驚異的な情報統制能力によりこの事件からすでに1日が経過している今でさえあらゆる新聞、テレビニュースにおいてこの事実は揉み消され、ひた隠しにされている……1人や2人ならまだしもこれだけの規模を誇る建物と人数に対してそんなことができる権力があるとすれば、それは海馬コーポレーションぐらいのものだ。恐らく裏では、そうして稼いだこの時間のうちになんとかアカデミアと生徒たちを元に戻す方法はないかと会社お抱えの学者たちが頭を捻っていることだろう。

「よう」

「また貴方?だってさ」

そんな彼女の背後から、気安く気楽な調子で声がかかる。だが彼女はその声の主を一瞥すらせず、まるで最初から彼がここに来るのがわかっていたかのように返答した。先ほどまで誰もいなかったのに、などという当然の疑問すら、その声の調子には含まれていない。

そのまま、たっぷり数秒が経過した。最初に声をかけた男がわざとらしく咳払いをすると、ようやく彼女もそちらへと振り返る。

「……!」

どこか心ここにあらず、といった様子だった彼女も、さすがに目を丸くする。その男

は、確かに彼女の記憶の中、つまりは1年前の進級前後の時期であり、また修学旅行での童実野町の出来事にあるそれと同一人物だ。だが、彼女の記憶と比べてなんと変わり果ててしまったことだろうか。着ている服がいたるところに焼け焦げがつき穴が開いているならば、それを着ている男自身はさらに消耗している。痩せこけた頬や服に開いた穴から見え隠れする全身には無数の傷や火傷の跡が痛々しく刻まれ、ただ目のみが以前と変わらぬ光を放っている。気力は衰えていないのだろうが、遠目に見ても今にも限界を迎えそうなその体が、ぐらりと揺れた。そのまま倒れそうになるところを、どうにかといった様子で持ちこたえる。

「へへ、ちょっとしくじっちまってな。お前相手に誤魔化したって仕方ねえからはっきり言うが、俺はもう長くないみたいだ」

「長くない、って……どういうこと？早く……医者、に……って……」

　そういう夢想の声が、次第に弱くなっていく。頭上を飛び回っているヘリに助けを求めようとして、あることにようやく気が付いたのだ。つい先ほどまで島全体を包んでいたヘリの飛行音が、いつの間にかぴたりと止んでいる。ヘリだけではなく、そこら辺を飛んでいたはずの海鳥の声さえも聞こえない。咄嗟に上を見ると、確かにそこにヘリはあった……空中に静止して、ピクリとも動かない状態で。

「……これも貴方が？だってさ」

思いのほか冷静な声が出た、と彼女は思った。そして、そんな冷静な思考をする余裕がある自分にもおや、と思う。明らかに異常な事態に巻き込まれているにもかかわらず、なぜ心の中には驚愕の感情が芽生えないのだろう。

まるで、この名前も知らない男がこんな状況を作り出すのを前にも見たことがあるかのように。

「いまさらとぼけんなっての、もうこっちだって時間は……無駄口叩く余裕は、さすがに俺にも無えな」

それはつまり、肯定ということだろう。神出鬼没なところといい、改めて目の前の男の人知を超えた力を思い知る。それでは、それほどの男がこれほどまでに追い込まれるとは、一体何が起きたのだろう。そんな目線に気づいたのか、ひらひらとおどけて手を振ってみせる。

「お前に関係あるこっちゃねえよ。こっちの話だ、仕事のな。それに、もう終わった話だ。転生者の集団は全滅、俺たちの被害は俺1人。結果としちゃあ、悪くねえさ」

目の前の男が何を言っているのか、夢想にはまるで理解できない。だが彼はそんな夢想の困惑にまるで気づくことない。というよりも、もはやそこまで注意を払うだけの余裕がないのだろう。よろよろと体勢を立て直そうとした結果ギリギリのところで保っていたバランスをかえって崩し、背後の倉庫の壁にもたれかかる形でずるずると座り込

む。彼が背をついた箇所には、本人も気づいていないようだがべっとりと血の跡が付いていた。

「悪いな、今日ここに来たのは他でもねえ。さっきも言った通り、俺はもう長くないわけだが……思えば俺も、長いことデュエルばっかりやって来たわけだからなぁ。どうせ死ぬなら最後に1回、全力で悔いのない勝負ってもんがしたくなったのさ。それが、これまで俺と戦ってきたこのデッキに対する最高の供養にもなるだろうしな。となると、俺にとってその相手は1人しかいないって寸法よ。なあ、う……いや、『今は』河風夢想、だったか？せっかく次元を越えて会いに来たんだ、最期の頼みぐらい聞いてくれよ」

何を馬鹿な、と言うこともできた。それだけ喋る元気があるのなら、それこそ医者に見せればよさそうなものだ。今ならまだ、助かるかもしれない。もちろん他の誰かが同じことを言いだしたのなら、彼女も問答無用で医者に担ぎ込んだだろう。だが、彼女にはそれができなかった。する気にならなかった、と言い換えてもいい。目の前の男は何か医学では計り知れないような部分で終わりを迎えようとしていて、そんな自分の運命を受け止め、今更それに抗うつもりもない。そんな常識で考えてはあり得ないような話が、理屈を超えて納得できたのだ。

「……構えて、ってさ。デュエルと洒落込みましょう、だって」

だからこそ、彼女はゆっくりとデュエルディスクを構える。消えた校舎と清明たちの

ことも、目の前の男のひどい怪我も、もはや彼女の眼には入らない。時間の止まったような特殊な世界で、そこにいるのはただ2人のデュエリスト、それだけだった。

「……デュエル」

「俺のターン。魔法カード、ドラゴン・目覚めの旋律を発動。手札1枚を捨てて、デッキから攻撃力３０００以上かつ守備力２５００以下のドラゴン族モンスターを2体までサーチする。俺が引き込むのはブルーアイズ・カオス・ＭＡＸ・ドラゴン、そして青眼（ブルーアイズ・）の光龍（シャイニングドラゴン）のカードだ」

「ブルーアイズ……」

世界にもたった4枚しか存在しない伝説級のレアカード、青眼の白龍。それをためらいもなく使いこなすこの男の正体も、あのカードが本物なのかそれともカラーコピーのような代物なのかも、最後まで彼女には判別できない。ただわかっているのは今引きこんだその亜種ともいえる2枚が、得体のしれない力を持つカードだろうということだけだ。

「今捨てたモンスター、伝説の白石（ホワイト・オブ・レジェンド）の効果発動。青眼の卵たるこのカードが墓地に送られたことで、デッキから青眼（ブルーアイズ・）の白龍（ホワイト・ドラゴン）を1体サーチする」

流れるように無駄のない動きでのサーチ連打。3枚もの最上級モンスターを手札に抱え込みながらも、まだ先攻1ターン目ということもあってその全てを展開する気はな

いらしい。

「青き眼の乙女を攻撃表示で召喚。カードをセットして、ターンエンドだ」

青き眼の乙女　攻０

一見すると攻撃力０のか弱い女性型モンスター、青き眼の乙女。しかしその恐るべき効果……いささか受動的な面が目立つとはいえ、緩い条件で除外ゾーン以外のどこからでも青眼の白龍を呼び出す特殊能力をこれまでの対戦で知る夢想の表情は硬い。

「私のターン、だってさ。終末の騎士を召喚して、モンスター効果発動……その発動にチェーンして速攻魔法、手札断札を発動。そしてチェーン３以降にのみ発動できる速攻魔法、サモンチェーンを発動するってさ。これにより私はチェーン３のサモンチェーンの効果でこのターン通常召喚を３回行うことができて、チェーン２の手札断殺でお互いに手札を２枚捨てて２枚ドロー。そしてチェーン１、終末の騎士の効果でデッキから闇属性モンスター１体を墓地へ」

終末の騎士　攻１４００

サーチの連打に対抗するかのように、チェーンの乱舞を使いこなす夢想。だが、彼女の狙いはむしろここからが本番といえる。

「私が墓地に送ったカードはワイトプリンス、このカードは墓地に送られた時デッキからワイトとワイト夫人を１体ずつ墓地へ送る、ってさ。そしてその効果が、さらに１回

……手札断殺で墓地に送った2枚のカードのうち、1枚は龍骨鬼。だけどもう1枚は、2体目のワイトプリンスなんだって」

「そしてワイトプリンスとワイト夫人は墓地でのカード名をワイトとして扱う……おいおい、もうワイトが6枚かよ。前の時よりさらに殺意が上がってんな」

「まずはこの子で……ワイトを召喚、だって」

ワイト　攻３００

颯爽と地面から骨の腕を突き上げ、墓の下から出てくるかのように召喚されたのは、骸骨たちを束ねる骨の王……ではなく、墓地に送られずにまだ1枚だけ残っていた通常モンスターの方のワイト。守護者の矛が手札にあれば彼女もそれを使いワイト本体をアタッカーにするところだが、あいにくとそのカードはいまだ引き込めていない。

「魔法カード、馬の骨の対価を発動。自分フィールドの通常モンスターを墓地に送って、カードを2枚ドローするってさ」

カードを2枚引きながら、心の中で7体目、とカウントする。手札断殺と馬の骨の対価……彼女にしては珍しく、2度にわたる手札交換を行った末に満を持して、狙っていたカードが手札に加わった。

「これできっかり3回目の通常召喚。おいで、ワイトキング。だってさ」

またもや地面を突き破り、地中から骨の腕が虚空に突き出される。先ほど現れてすぐ

消えたワイトと動きそのものは同じ……だが、その肉のこそげ落ちた腕に込められた力は、一目見ただけでもそうとわかるほどの違いがある。
「ワイトキングの攻撃力は、墓地のワイトと自分の同名モンスター１体につき１０００、だって」
　ワイトキング　攻０→８０００
「ははっ、やるじゃねえか。だけど、その打点一本槍のモンスターでどうやって乙女の効果を潜り抜けるんだ？」
　口ではそう言いながらも、その口調に相手を舐めた部分はない。何か手を打ってくるであろうことに気づいたうえで、あえて聞いているのだ。だから彼女も、素直に笑って残りの手札をデュエルディスクに置く。
「このターンで決めるから、って。魔法カード、強制転移を発動！私の終末の騎士と、貴方の選んだモンスター１体のコントロールを入れ替えるんだって」
　そのための切り札こそが、まさにこのカード。どんなモンスターが相手の場に居ようとも、こちらから攻撃目標を送り出してしまえばその守りは一瞬で瓦解する。彼女にとって大切なのは乙女を処理することではなく、終末の騎士を送りつけること。攻撃力１４００の終末の騎士では、７０００もの一撃には耐えきれない。
「なるほど、そう来たか」

「……？」

だが、男の表情にいまだ絶望や焦りといった色は浮かんでこない。恐らく、あの1枚だけ存在する伏せカードにその秘密があるのだろう……が、さすがの彼女も伏せカードが怪しいからといって即座にそれを破壊できるカードが引けるわけではない。いつまでも残しておくよりは、いっそ今使わせる方がいいだろう。彼女の決断は早かった。

「バトル、だって。ワイトキングで、終末の騎士に……」

「リバース発動、ホーリージャベリン！相手モンスターの攻撃時、その攻撃力はそのまま俺のライフに加算される！」

ワイトキング　攻８０００→終末の騎士　攻１４００（破壊）

男　ＬＰ４０００→１１０００→５４００

ワイトキングの拳は半透明な光の壁によって遮られ威力を減衰し、そこから伝わるエネルギーが生命力となって辺りに満ちていく。一撃でゲームエンドまで持ち込むことも可能な大火力が、むしろ足を引っ張る結果となったかたちである。

そしてこのターンで決め切れなかった以上、夢想の場には彼女にとってはなんの役に立たない乙女と、一応戦闘破壊時に蘇生できる効果こそあるもののここまで成長した今となってはそんな耐性もないよりはマシ程度の役にしか立たない打点一本のワイトキングしかいない。少しためらった末、ここは安全策を取ることにした。

「魔法カード、一時休戦を発動。デッキからお互いにカードをドローして、次の貴方のエンドフェイズまであらゆるダメージは０だってさ。私はこれでターンエンド、だって」
「おっと、ならエンドフェイズに墓地から太古の白石（ホワイト・オブ・エンシェント）の効果発動だな。もうひとつの青眼の卵たるこのカードは墓地に送られたターンのエンドフェイズに孵化し、デッキからブルーアイズと名のつくモンスター１体を特殊召喚する効果を持つ。俺が呼び出すのは本家本元、青眼の白龍！」
　瞬間、止まった時の中で無音のうちに光が爆発する。その一瞬後、轟く羽音とともに伝説とまで呼ばれる龍……その姿が、アカデミアの空を彩った。
　青眼の白龍　攻３０００
　男　ＬＰ６４００　手札：５
　モンスター：青眼の白龍（攻）
　魔法・罠：なし
　夢想　ＬＰ４０００　手札：１
　モンスター：ワイトキング（攻）
　　青き眼の乙女（攻）
　魔法・罠：なし
「さて、俺のターンだな。魔法カード、トレード・インを発動。手札にいるさっきサーチ

した青眼をコストに、カードを2枚ドローだ。よしよし、デビル・フランケンを召喚するぜ」

物々しい武装に身を包んだ、でもどこか古風な印象のする重火器満載の人造人間。だがそれも道理、このカードはデュエルモンスターズ黎明期から融合モンスターを時に禁止カードとして、時に制限カードとして眺め続けてきた歴戦の勇者ともいえるモンスターである。

デビル・フランケン　守５００

「そのカードは、まさか……」

「そのまさかだぜ。デビル・フランケンの効果発動、俺のライフポイント５０００をコストとしてエクストラから融合モンスター１体を攻撃表示で特殊召喚できる！青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）！」

１つの体に３つの頭を持つ、デュエルモンスターズ全てのカードというくくりの中で見てもいまだに効果のないモンスターの中では最大にして最強の固定攻撃力を持つ、世界中にも海馬瀬人の持つただ１枚しか存在しないはずのレアカード……これまでの彼のデュエルにおいては表に出てくることのなかった、進化した青眼の姿がここにあった。

男　ＬＰ６４００→１４００

青眼の究極竜　攻４５００

「まだだ！魔法カード、滅びの爆裂疾風弾（バーストストリーム）を発動！このターン青眼の白龍の攻撃が封じられる代わりに、相手モンスターをすべて破壊する！」

「きゃあっ！」

フィールドの青眼がその口を開き、全てを消し去る光のブレスが視界を埋め尽くす。ワイトキングが、青き眼の乙女が、まるで最初から存在しなかったかのように消えさった。

「露払いはばっちりだな。儀式魔法、カオス・フォームを発動！俺はフィールドからレベル８の青眼の白龍をリリースし……太古の混沌に湧き上がる力秘めし蒼の瞳よ、根源の雄叫びと共にその翼翻し、深淵の淵より降臨せよ！ブルーアイズ・カオス・ＭＡＸ・ドラゴン！」

青眼の姿が、リリースされたことで一度消える。次の瞬間、大地がその奥深くから砕け吹き飛んだ。地面に開いたその穴から現れたのは、儀式により地中奥深くに眠る混沌の力を取り込み、より攻撃的に爆発的な進化を繰り返した青い眼の龍。瞳の青はさらに深く鋭くなり、触れただけですべての敵を引き裂きそうなその皮膚からはいたるところから湧き上がる混沌の力が発光体となって表面に具現化する。体そのもののサイズも先ほどからは一回りも二回りも巨大化し、並び立つ究極の名を冠した竜に勝るとも劣ら

ないほど巨大なドラゴンへと変貌していた。
ブルーアイズ・カオス・ＭＡＸ・ドラゴン　攻４０００
「これだけじゃまだ終われねえ、終わらせられるわけがねえ。究極竜よ、お前の魂は貰ってくぜ。俺は青眼の究極竜をリリースすることで、手札のこのカードを特殊召喚する……さあ、現れるがいい。全てを消し去る光の龍、青眼の光龍！」
究極の竜が、３つの首で天を見据えてその翼を広げ大空へ飛び立つ。雄大に宙を進む竜は輝きながら天高く昇って行き、天頂に達したところでその動きを止め……そして、またもや光が弾けた。やがて空の色が元に戻った時にはもはや究極竜の姿はどこにもなく、そこにいたのはより高次元の存在となった龍。シルバーメタリックの体は動かない太陽の光を反射して神々しく輝き、胸の部分に新たに加えられた澄んだ青い水晶体はそれ自体が呼吸しているかのようにその蒼の深みが刻一刻と変わっていく。
「このモンスターの攻撃力は、俺の墓地のドラゴン族1体につき３００ポイント上昇する」
青眼の光龍　攻３０００→４５００
今この男の墓地に存在するドラゴン族でその存在が確認できているのは伝説の白石と太古の白石、青眼の白龍と青眼の究極竜の４体。恐らく、手札断殺の際手札から太古の白石と同時にもう1体別のドラゴンを墓地に送っていたのだろう、と頭の中で見当を

つける夢想。あの新たなるドラゴンには、手札1枚を消費してさらに究極竜を墓地に送るだけの隠された効果があるのだろう……と、そこまで予想する。

「手札から、青眼の亜白龍（ブルーアイズ・オルタナティブ・ホワイト・ドラゴン）の効果発動！このカードは通常召喚できず、手札の青眼の白龍を相手に公開することで特殊召喚できる！」

海を割りその中から水柱と共に舞い上がる、第3の龍。一時休戦の生きているターンだからかろうじてその攻撃は抑えられるが、この先それが続く保証は……ない。

青眼の亜白龍　攻３０００

「ダメージが通らないんじゃな。ターンエンドだ」

攻撃力４５００の光龍に４０００のカオス・ＭＡＸ、そして３０００の亜白龍。それぞれいまだその効果を明らかにしてはいないが、そのどれもが一騎当千の圧倒的な力を持つ、いずれ劣らぬ化け物ぞろいであることはこのソリッドビジョンであってもなお衰えない全身から立ち上るプレッシャーからも見て取れる。

そしてそんな威圧感を前にして、彼女は畏れるのではなく、ただの少しも気負わずに。果たして本人も気づいているのかいないのか、その口元をうっすらと、強者と出会えた喜びに綻ばせすらしながらに。

「私の、ターン。……ドロー！だって」

何の躊躇いも起こさずに、ただ自らの前に広がる勝利のみへと手を伸ばす。

「魔法カード、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を使うよ、ってさ。墓地のモンスターを素材として、ドラゴン族の融合モンスターを呼びだすカード……私はワイトキングと龍骨鬼、この2体のモンスターをゲームから除外。冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い……融合召喚、冥界龍　ドラゴネクロ」

空が割れて、青眼の光龍が舞い降りた。大地が割れ、カオス・ＭＡＸがその姿を見せた。海が割れ、亜白龍が現世に現れた。ならば、冥府の龍はどこから現れる？知れたことだ、その名の示す場所はただ1つ。何もない空間にひびが入り、粉々に砕けた世界の向こう側には1つの門。その扉がゆっくりと開くと、向こう側の世界に溢れていた大量の瘴気が現世へと溢れ出る。そして、その向こうに巣食っていた冥府の龍もまた目を覚まし、新たな獲物を求めて冥府の門を超える。

冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００

ドラゴネクロは戦闘で相手モンスターを破壊せず、代わりにその魂を抜き取って自らの戦力とする特殊能力を備えている。カオス・ＭＡＸ・ドラゴンにでも自爆特攻を行い、攻撃力４０００ものダークソウル・トークンを呼び出せば勝利は確定する……そこまで考えたところで、もう1枚残った手札に目が行った。このまま攻撃すれば勝利は確定している以上、わざわざこのカードを使う意義はどこにもない。ない、はずなのに。

「はあ、はあ……」

「うん？なんだってんだ……？」

息が荒くなる。頭が、締め付けられるように痛む。自分の中の何かが、このカードを使えと言っている。その衝動は収まるどころかどんどん強くなっていき、それに伴い次第に意識が遠くなっていく。そしてついに、その時が来た。

「お、おい……」

突然の異常に何かを言おうとした男の目が、驚愕に染まった。一瞬の沈黙ののち、ゆっくりと歓喜の色がその顔に広がっていく。彼が見たものは現実なのか、それとも大量出血による衰弱が見せた死の淵の幻影なのか。

「私は魔法カード、アドバンスドローを発動。レベル８以上のモンスター、ドラゴネクロをリリースすることでカードを２枚ドローする！」

喋っているのもそこにいるのも、間違いなく河風夢想だ。だが、低レベルが身上のワイト使いである彼女のデッキにレベル８以上のモンスターを要求するアドバンスドローの入る余地などあるのだろうか？少なくとも彼女自身に、そんなカードを採用した覚えはない……では、今デュエルしているのはいったい誰なのか。今使われている手札は、そしてその腕に装着されたデッキは一体誰のものなのか？

「フィールド魔法、ダークゾーンを発動！この効果により闇属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、守備力は４００ポイントダウンする」

いまだ開き続けている冥界の門から流れてきた瘴気は世界を埋め尽くし、先ほどまで晴れていた空も凪いでいた海も地獄と見まごうほどに荒れている。そんな中３体の青眼のみが、まるでそれに反抗するかのようにいまだ変わらぬ光を放っていた。

デビル・フランケン　守５００↓１００　攻７００↓１２００

ブルーアイズ・カオス・ＭＡＸ・ドラゴン　攻４０００↓４５００　守０

「チューナーモンスター、劫火の舟守　ゴースト・カロンを召喚！」

木製の船に乗った、現世と地獄を隔てる川を繋ぐことのできる力を持った異形の船守。ランタン代わりに鬼火を灯し、冥界の門を抜けてその船が現世へと流れ着く。無論、このカードも夢想自身がデッキに入れた覚えはない。

そもそも、今デュエルを続けている彼女は何者なのだろうか。かつての事故を機に自分の意思で言葉を発することができなくなったはずの夢想が今や普通に言葉を発していることを、彼女自身は自覚できているのだろうか。

劫火の舟守　ゴースト・カロン　攻５００↓１０００　守０

「ゴースト・カロンは自分フィールドにこのモンスターしか存在しない時、自身と墓地の融合モンスターを素材としてエクストラデッキからシンクロモンスターを特殊召喚できる。冥府の大河の流れを紡ぐ、永久の嘆きが此岸に響く。ステュクスシンクロ……冥界濁龍　ドラゴキュートス」

冥府の門を叩き割って現れた荒ぶる白き龍は、その名をドラゴキュートスという。ドラゴネクロが冥界の中でも特に現世に近い場所である河であるステュクス、そしてその最下層を流れる河コキュートスの環境に順応して亡者の嘆きをその身に浴びつつその魂を取り込み、自己強化の果てにたどり着いた嘆きの龍。

冥界濁龍　ドラゴキュートス　攻４０００→４５００　守２０００→１６００

「は……ははっ、こいつは、こいつは凄げぇ！」

心底おかしそうに、そしてどこか嬉しそうに大笑いする男。その笑い声が響く中、ドラゴキュートスの胸に着いた幽鬼の口がゆっくりと開いた。

「バトル。デビル・フランケンに攻撃、冥界の幽鬼奔流（ゴースト・ストリーム）！」

最初のターゲットは、ちっぽけな人造人間。そちらに目を向けることすらなく幽鬼の奔流が放たれると、その小さな命は一瞬で握りつぶされた。

冥界濁龍　ドラゴキュートス　攻４５００→デビル・フランケン　守４００（破壊）

攻撃は終了した。しかしドラゴキュートスは、次なる獲物の嘆きを求めてもう１度その首をもたげる。

「この瞬間、ドラゴキュートスの効果発動。戦闘で相手モンスターを破壊し墓地に送ったならば、もう１度の連続攻撃が可能となる。次の獲物はあれ……青眼の光龍に攻撃、冥界の幽鬼奔流（ゴースト・ストリーム）」

「ははは っ……いいぜ、迎え撃て青眼の光龍！シャイニング・バースト！」
今度の獲物は、デビル・フランケンほど簡単にやられる気はないらしい。冥界の力を得た幽鬼のブレスと、光り輝く退魔のブレスが正面からぶつかり合った。双方のブレスはどちらもその勢いが衰えないばかりか、次第にその力が増していく。そしてその力の拮抗が限界を迎えた時、中心で爆発が起きた。
冥界濁龍　ドラゴキュートス　攻４５００→青眼の光龍　攻４５００（破壊）
「うおおっ！」
ドラゴキュートス、いまだ健在。では、もう1体のドラゴンは？全身全霊を注ぎ込んだそのブレスは、青眼の光龍からその命すら奪っていた。もはや体を浮かべることすらできず、力なく白き龍が落下する。その全身は次第に黒ずんでゆき、地面に落下する前に灰となって風に消えた。
「ドラゴキュートスは戦闘で破壊されない。ブルーアイズ・カオス・ＭＡＸ・ドラゴンに攻撃、冥界の幽鬼奔流（ゴースト・ストリーム）」
「けっ……混沌のマキシマム・バースト！」
通常ならば相打ちとなるほどの戦いを経ても、幽鬼の追撃はいまだ止まらない。混沌の龍が全身から破壊の光を拡散させて迎え撃とうとするも、その一撃はもはや遅い。
冥界濁龍　ドラゴキュートス　攻４５００→ブルーアイズ・カオス・ＭＡＸ・ドラゴ

ン　攻４５００（破壊）
あれだけたくさんいた青眼も、残るは亜白龍ただ1体のみ。ドラゴキュートスの破壊の嵐は、フィールド全てを殲滅するまでは終わらない。
「……いいぜ、来いよ」
「青眼の亜白龍に最後の攻撃。冥界の幽鬼奔流（ゴースト・ストリーム）」
冥界濁龍　ドラゴキュートス　攻４５００→青眼の亜白龍　攻３０００（破壊）
男　ＬＰ４００→０

「……ああ、わざわざ手間掛けさせて悪かったな。もうこれで、悔いはねえよ」
全てのソリッドビジョンが消え、止まった時の中で再び青空が戻ってきた。そんな空を眺めながら、男が体勢を直す。夢想……いや、その彼女もまた、返答代わりに軽く頷いた。もしかしたら何か言おうとしたのかもしれないが、男が先にそれを押しとめた。
「まったくよ、最後の最後まで勝てないんだもんなあ。でもま、最後の最後に最高の思い出ができたぜ。……悪い、消えるトコ見せたくねえんだ。時間が動くまで、あっち向いててくれねえか」
最後に一度だけ、片手を上げて。彼女が言われたとおりにした瞬間、頭上で再びヘリ

のプロペラ音が鳴りだした。すぐさま振り返ると、もうそこには誰もいない。それを確認したことでほんの少しだけ表情を沈め……彼女もまた糸が切れた操り人形のように、その場に気を失って倒れた。

のちに頭上を行き交うヘリのうち1機に救助された時にはすでに、夢想の中からその記憶は抜け落ちていた。彼女が覚えていたのは、ドラゴネクロを融合召喚したら頭痛がしたところまで。まさか青眼を使う男とデュエルしていました、なんて話を正直にするわけにもいかないので適当に誤魔化しはしたが、その間も彼女の心は晴れなかった。救助してくれた人たちの、彼女は学校が消えているのを改めて見たショックで気絶したのだろう、と勝手に解釈したのがいい方に出てあまり深く追求されなかったのは幸いだったろう。

そんな彼女の一日の裏で、砂の異世界では次なる異変が密かに進行していた。

ターン８７　鉄砲水とゾンビ軍団

十代ラブを唱えて止まないオレンジの人影を追って、校舎に入り込む。違和感は、自動ドアをくぐった最初の一歩の時点ですでに立ち込めていた。

「あれ……？」

野生のモンスターを警戒するために、この辺りには余裕のある生徒を中心に臨時の警備隊が配置されていたはずだ。なのに、今のロビーには人影どころかファラオ１匹いない。そういえば、ついさっきまでの僕とウラヌスのデュエルにも、あれだけ派手にデカいのとやりあっていたんだから出てきてしかるべきのギャラリーが１人も出てこなかった。

様子がおかしい。ウラヌスとのデュエルにかかった時間は、せいぜい３０分と経っていない……そのタイムラグの間に、ここの警備隊が全員退避せざるを得ないような何かが起きたんだ。まだ手に持っていたトランシーバーに、周囲に気を配りながら声を張り上げる。

「十代！十代！聞こえてんなら返事してくれる!?」

建物の中に入ったせいもあってか、どうも電波の調子が悪い。一度外に出て、連絡だ

け取ってから出直すか……なんて考えたところで、ふらふらとこちらに歩いてくるラーイエロー生徒に気が付いた。
「なんだ、皆いるんじゃん。駄目だよ勝手に持ち場離れちゃー」
『清々しいまでに自分のことは棚に上げたな、マスター』
「(ああしなきゃ校舎は今頃瓦礫の山だったろうしねえ。今回の僕は流石にノーカンでしょ)」
　言い合っている間にもその彼は前かがみな姿勢のまま、特に何か喋るでもなくふらふらと近寄ってくる。一言も喋らないままついに3メートルほどの距離にまで近寄ってきたところでようやく顔を上げるとその目の周りにはこれでもかといわんばかりに隈がかかっており、貼り付けたような不気味な笑顔とのギャップのせいで余計に薄気味悪い表情に見える。
「どったの、何か落ち込むことでもあった?……なーんて、そーいう感じじゃなさそう……だね」
「……エル……」
「あー? エル?」
「デュ……エル……デュエル……!」
　聞き取れないほどの声で喋るので思わず聞き返すと、腕に装着したデュエルディスク

を起動させながらもう少し大きな声で言い直された。デュエル？僕と？見たところこの彼にもデスベルトは装着されているし、はっきり言って見た目も言動も正気の沙汰とは思えない。
「売られた喧嘩はなんとやら、だけど悪いけど今回はパスで、ね」
「デュエル……！」
　しかし、なおもしつこく食い下がってくる。まるで話が通じない、というか全然会話にならない。どうやらこれは、腹くくって１戦やるまで放してくれなさそうだ。
「うー……ったく、後悔しても知んないよ？」
　一歩下がってデュエルディスクを起動させると、ニヤニヤと笑いながら向こうも電源付けっ放しのデュエルディスクをそのまま構える。なんだかさっぱりわからないけど、とにかく早く終わらせて皆を探そう。というか、ウラヌスとのデュエルでこっちも割とへとへとだからあまり長引かせることはできない。
「「デュエル！」」
「えへ、えへ……」
　何が嬉しいのか、ニタニタと笑いながら自分のことを指さす。ああ、もしかして先攻が取れたことに対するリアクションなんだろうか。
「俺は、こいつを……召喚」

異次元への案内人　攻１４００
フードをかぶって顔のよく見えない人型モンスターが召喚され、フィールドに現れた……それはいい。当然のことだ。ただ１点、なぜかそのモンスターが僕のフィールドに現れたということを除けば。
『異次元への案内人は、召喚された時その強制効果によりコントロールを相手に移す……他にも効果はあるが、そもそもこんな序盤に出すのに向いたカードではないはずだが』
「相手フィールドにのみモンスター……俺は、こいつを、特殊召喚」
チャクチャルさんの疑問の答えは、すぐ明らかになった。僕のカイザー・シースネークやカイザーのサイバー・ドラゴンのような特殊召喚条件を持つモンスターの１体、ギラギランサーだ。
ギラギランサー　攻２２００
「カードを伏せて、たーーーんエンドォォ」
無駄に伸ばした、妙に腹の立つ発音でエンド宣言を行った瞬間、ギラギランサーの槍が光を放つ。
イエロー生徒　ＬＰ４０００→３５００
「な、何!?」

『ギラギランサーのプレイヤーは、エンドフェイズごとに５００ライフを失う。ただのデメリットだ、無視して構わないぞ』

「あ、そう……んじゃ僕のターン、ドロー！」

「永続トラップはあつどおおう、群雄割拠だぁ」

伸ばした発音というよりもはや1周回ってタイタンみたいになってきたイエロー生徒の発動したカードは、群雄割拠……互いのフィールドに出せるモンスターの種族を1種類のみに固定するロックカードの1種だ。普段ならそんなものたいした痛手ではないが、今僕のフィールドにはよりによって戦士族の異次元の案内人がいる。正直なところ、邪魔でしょうがない。

「えーっと、えーっと……」

もう一度状況を整理する。僕のフィールドにはギラギランサーより攻撃力の低い異次元の案内人1体のみで、これか群雄割拠のどちらかを処理しない限り自前のモンスターを場に出すことはできない。

……いや、待てよ。確か群雄割拠のロックには、一見完璧に見えても穴があったはずだ。三沢だか稲石さんだったかは覚えてないけど、とにかくどっちかに教えてもらった裏技的豆知識だ。

「僕は、モンスターをセットする！」

よしよし、やっぱりだ。僕のセットしたモンスターはエラーを起こしてデュエルディスクに弾かれることもなく、無事にフィールドに現れる。群雄割拠はあくまで表側のモンスターのみを単一にするカードで、セットすること自体に制約は一切かからない。となると僕のデッキにとって、とにかくモンスターをフィールドに出すことさえできれば群雄割拠のロックなんていいカモにしかならないわけで。

「魔法カード、シールドクラッシュを発動。このカードの効果で、今セットしたグレイドル・アリゲーターを破壊！」

怪光線に照らされてアリゲーターのカードが一瞬だけ表を向いた、かと思うとすぐさまどろどろに溶けて銀色の水たまりになってゆく。ここまで来れば流石に次の展開もわかったのだろう、相手の表情が謎のにやつきからほんのわずかに変化した。

「魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターは、相手モンスター1体に寄生してそのコントロールを操る。バトル、ギラギランサーと異次元の案内人でダイレクトアタック！」

「うわあああああ……」

ギラギランサー　攻２２００→イエロー生徒（直接攻撃）

イエロー生徒　ＬＰ３５００→１３００

異次元の案内人　攻１４００→イエロー生徒（直接攻撃）

イエロー生徒　ＬＰ１３００→０
「いっちょ上がり、っと。ちっ……」
わかりきっていたこととはいえデスベルトが起動し、倦怠感がさらに増す。チャクチャルさんが減るデュエルエナジーをある程度肩代わりしてくれているから持ちこたえられてはいるが、逆に言えばその分が無かったらもっと早くに倒れててもおかしくはないほど、ここ最近は馬鹿みたいな頻度でデスデュエルをやりすぎた。これ以上無茶をするのは、ちょっと本気で控えたほうがよさそうだ。さすがにここらで一度休憩を挟まないと、いい加減辛いものがある。
改めて皆を探そうと背を向けたところで、背後からまたしても声がした。
「デュエル……デュエル……」
「なっ!?」
たった今倒したはずのイエロー生徒がゆらりとした動きで起き上がり、デュエルディスクを構えたままの姿勢で迫ってくる。
「冗談じゃない、もうやらな……」
い、と最後まで言い切ることはできなかった。イエローの彼の背後から、いつの間にかほかにも１０人以上の生徒がのろのろした動きで起動済みのデュエルディスクを構えたまま僕めがけて歩いてくるのが見えたのだ。

『これ以上続けていると、走って逃げるだけの体力も残らないかもしれんな……』

「僕もそう思うよ。ここはとっとと逃げるに限る！」

さっと反転し、ふらふらと歩いて追いかけてくるだけの集団から距離を取る。なぜか1人も走ってくる相手はいなかったので、小走り程度のスピードでも楽に引き離すことができた。そのまま階段で2階まで駆け上がり、足音を抑えて手近な教室に逃げ込んだ。ドアをきっちりと閉めて僕が入った痕跡を消し、いざというときすぐ出られるように廊下に近い方の机に適当に腰を下ろす。

「と、とりあえずこれで……」

「デュエル……デュエル……」

「んなわけないかぁ……」

振り返ると、今まで机の陰に隠れていたのか1人のブルー生徒がのろのろとこちらに向けて歩きだしていた。こいつの顔にも案の定、ひどい隈と貼り付けたような笑い顔がある。出来ればスルーして逃げたいところだけど、あのブルーの顔には見覚えがある。といっても別に直接の知り合いというわけではないが、確かこの学校の陸上部で短距離のエースを張っている奴だ。1階の奴らみたいに歩いてのろのろ来るだけならなんてことはないけど、もし全力ダッシュされたら爆発力じゃ勝てる気がしない。

となると、やはりこれしかないか。デュエルディスクを構え、せめて早く終わらせて

その隙にここを脱出しようと心に決める。
「「デュエル！」」
　今度の先攻は僕。もっともだからといって、特に目立った動きができるわけでもない。
「ハリマンボウを召喚。これでターンエンド」
　ハリマンボウ　攻１５００
「うわあ、ははは……」
　喜びの声らしきものを上げながらブルーの彼が発動したのは魔法カード、ソウルテイカー。相手のライフを１０００回復させる代わりにモンスター１体を破壊する、割と癖の少ない通常魔法の除去カードだ。当然そのカードから出た光はハリマンボウを直撃し、そのまま後ろにいた僕にも命中する。
　清明　ＬＰ４０００→５０００
「ハリマンボウ！これでがら空きか、クソッ」
「うおお……さらに、これ……」
　空いたフィールドに召喚されたのは、３人１組で申し訳程度の鎧を着て見るからに痛そうな棍棒を担いだ、緑色の戦士。まさしくあれは、ゴブリン突撃部隊だ。そしてその姿が、みるみるうちに教室の天井に届きそうなほど大きくなっていく。あんなエフェク

トがカード効果で起きるとしたら、間違いない。装備魔法、巨大化……相手よりライフが下の状態で装備された時、装備モンスターの攻撃力を元々の数値の倍にするという単純明快だがその分強力なカードである。

ゴブリン突撃部隊　攻２３００→４６００

「行けぇ！」

大きくなったゴブリンによる３連撃が、守ってくれるモンスターのいない僕の体を滅多打ちにする。４０００以上のダメージを１度に受けて、ライフカウンターの数字もみるみるうちに減っていく。

ゴブリン突撃部隊　攻４６００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ５０００→４００

「あ痛つつ……案外やるじゃないの……！」

さすがはブルー、さっきのイエローとは格が違うという訳か。だけど今のダイレクトアタックのおかげで、巨大化のデメリット効果が発動する。というのも、あのカードはあくまでライフポイントで下回るプレイヤーが馬鹿火力で１発逆転を狙うのがコンセプトのカード。ライフポイントが逆転した瞬間、その強化は弱体化……それも、元々の攻撃力を半分にするという強烈なものへと変貌する。

ゴブリン突撃部隊　攻４６００→１１５０

「ひひひ……」

攻撃力がダウンしたためか、どっと疲れた様子でその場に寝転がりすやすやと寝息を立て始めるゴブリンたち。ゴブリン突撃部隊は、そういえば攻撃を終えたバトルフェイズ終了時に守備表示になるデメリット効果がある……なるほど、デメリットとデメリットをうまいことかみ合わせて被害を最小限に抑えたわけか。

ゴブリン突撃部隊　攻１１５０→守０

「僕のターン！」

幸いにも相手フィールドに伏せカードはなく、このまま一気にけりをつけたいところだ。というより、そうしないとこのデュエルの音を聞きつけていつまたこんな奴らが襲ってくるかわかったもんじゃない。戦闘はなるべく回避するに限る。とはいえゴブリン突撃部隊を倒すのにモンスターが１体いるとして、その後さらにあの４０００のライフを奪えるほどのモンスターを展開するには……いや、そうか。このカードを使えばいい。

「ウミノタウルスを召喚して、さらに手札からシャーク・サッカーの効果発動。水族モンスターの召喚に成功したことで、このカードは特殊召喚できる！」

ウミノタウルス　攻１７００

シャーク・サッカー　攻２００

「さらに水属性モンスターのシャーク・サッカーをリリースして、手札からシャークラーケンを特殊召喚！」

シャークラーケン　攻２４００

「バトル、ウミノタウルスでゴブリン突撃部隊に攻撃……そしてこの瞬間、ウミノタウルスの効果適用。自分フィールドの水・魚・海竜族すべてに貫通能力を与える！そのままシャークラーケンでダイレクトアタック！」

ウミノタウルス　攻１７００→ゴブリン突撃部隊　守０（破壊）

ブルー生徒　ＬＰ４０００→２３００

シャークラーケン　攻２４００→ブルー生徒（直接攻撃）

ブルー生徒　ＬＰ２３００→０

「はあ、はあ……悪いね、リターンマッチは受け付けないよっ！」

負けたブルー生徒がその場に倒れこむのを確認し、とっとと背を向けて退散する。背後でまた彼が起き上がる気配がしたが、もうこれ以上は構っていられない。

「一体この学校、どうなっちゃったってのさ……！もしもし、もしもし！こちら遊野清明、こちら遊野清明！誰か聞いてたら返事して！」

トランシーバーは依然として雑音を流すのみで、まともに人の声が聞こえてこない。期待を込めてシャカシャカと振ってみるも、当然そんなことで電波状況がよくなるなら

苦労は……あ、何か聞こえてきた。
『……ザザ……先輩!?清明先輩なのかドン!?』
「剣山！イエスイエス、僕だよ僕！今これ何がどうなってんの、ってか皆どこ行っちゃったの!?」
『まさか先輩、今校舎の中にいるザウルス？そこから体育館までどれくらいかかるドン』
　体育館？よくわからないが、ざっと頭の中に学校の地図を思い浮かべてみる。今いる場所がここで、体育館の位置がこの位置だから？今いる場所を大まかに伝え、だいたい５分とかからないはずだと付け加える。数秒の間の後、すまなさそうな声がトランシーバーから聞こえてきた。
『なら、申し訳ないけど俺たちは迎えに行けそうにないザウルス。十代のアニキたちはともかく、丸藤先輩も行方が分からないし……先輩、その近くにゾンビ生徒はいるかドン？』
「ゾンビ生徒？」
　聞き覚えのない単語ではあるけど、何のことを言いたいのかはよく分かった。ゾンビ、確かに言い得て妙だ。
「あれね。散々相手してへとへとだけど、あれなんなの一体？デスデュエルしかけてくる割に妙に手ごたえ無いし、そのくせ倒してもなんかぴんぴんしてるし」

『詳しいことはわからないけど、安全な場所に着いたらわかってることだけでもまた説明するドン。とにかく先輩、もう体育館に無事な人たちはほとんど避難しているから、先に行って待っててほしいザウルス』

「りょーかーい。どうにかやってみるわ、んじゃまた後で」

そこで通話をやめ、周りにゾンビ生徒がいないことを確認する。音が小さいせいで結構大きめの声になってたから、見つからなかったのは本当に運がよかった。あとは、この運が続くことを祈るだけだ。用心しいしい歩いていくと、前の方をふらふら歩くゾンビ生徒がいるのが見えた。幸いまだ気づかれてはいないけど、近くに身を隠せそうな遮蔽物はない。かと言ってこのまま後ろをついて歩くのもリスクが高い。ちょうど男子トイレがあったので、少しの間やり過ごすつもりで中に滑り込んだ。一応個室ひとつひとつも見回って、中にゾンビ生徒が潜んでいないかだけ確かめる。一番最後の個室の奥、掃除用具の入ったドアも念のため開けてみる。

「……!!」

とっさに声が出そうになるのを全力で抑え込むため、口を両手で覆う。個室ならまだしもまさかこんな狭いところには誰もいないだろうと思っていたのに、うずくまって丸まっている人がいたのだ。最初の動転がひとまず落ち着くと、その後ろ姿にはよく見覚えがある。

「翔……？」
「怖かったっス、ずっと隠れてたんスよ～……」
　体育座りのまま、今にも泣きだしそうな声を上げる翔。そういえば剣山も翔は行方不明だって言ってたけど、そらこんなところに隠れてたら見つかるわけもない。でもそのおかげで、外のゾンビたちに捕まることもなかったんだろう。実際捕まったところでどうなるのかは知らないけど。
「まあ、とりあえず無事でよかったよ。さ、体育館まで行こう」
「体育館……？」
「ああ、聞いてないから知らないか。そりゃそうだね、さっき剣山に聞いたんだけど、とりあえず体育館に避難してるんだってさ。ほれ立って、ここだっていつまで無事かは分かんないんだし」
「うん……そうだね」
　なんというか、うかつだったとしか言いようがない。よく知った相手だって先入観があったせいで、うっかり気が緩んでいた。ゆっくりと持ち上がった翔の顔に濃い隈と薄ら笑いが確認できたときには、すでに走って逃げだすには遅すぎた。
「でもその前に、デュエルしようよぉ～……」
「翔、とっくにやられて……！」

「ねえねえ清明君、僕とデュエル～」
じりじりとにじり寄る翔から、一歩ずつ下がっていく。背中が壁に着いたところで、少なくともここに留まり続けるのは最悪の選択だということに今更ながらに気が付いた。このトイレの入り口は僕の入ってきた1か所しかなく、位置の関係上窓もない。誰も潜んでいないならある程度安全な場所ではあるのだが、反面ここでぐずぐずしてそれを外のゾンビ生徒に聞きつけられると完全に逃げ道がなくなる。
『そりゃあまあ、そうだなあ』
「チャクチャルさん、気づいてたなら一言注意してよ！」
『あんまり堂々と入ってくものだから、てっきり何か策でもあるのかと』
「僕にそんな深いこと考える知能があるように見える!?」
『……ふむ』
そこは当然否定するか、せめて即答して茶化してほしかった。そんなたっぷり時間かけて真剣に考え込まれると、その、自分で言い出しといてなんだけどちょっとへこむ。
「おっと、逃がさないよぉ。デュエル、しようよぉ」
「ぐ……」
これ以上ここに留まっていると、このまま翔が大声でもあげたら終わりだ。元気な時ならいざ知らず、わっと集まってくるであろう１０人単位のゾンビ生徒全員を起き上が

らなくなるまでデスデュエルで叩きのめすだけの余裕はない。
　これまで戦った２人の例から考えると、ゾンビ生徒たちはデスデュエルに敗れたら確かにその時だけは倒れるものの、またすぐ何事もなかったかのように蘇る。だけど逆に言えば、そのわずかな時間には隙が生まれる。とすればやむを得ない、デュエルして勝って隙を作り、そこでとっとと逃げ出そう。デュエルディスクを構えると、翔もまたにやにや笑いながらデッキをセットする。
「「デュエル！」」
　先攻は……また僕か。まあでも、このカードがあるなら先攻でよかったというべきか。
「ハンマー・シャークを召喚！さらにカードをセットして、ターンエンド」
　ハンマー・シャーク　攻１７００
　いつもならここでさらに展開するところだけど、今日は珍しいことにハンマー・シャークの効果で場に出せるレベル３以下の水属性が手札にいない。ま、そんな日もあるさ。
「僕のタ～ン、ドロ～。魔法カード、苦渋の決断を発動。デッキからレベル４以下の通常モンスターを墓地に送って、その同名モンスターをサーチ。サイクロイドを墓地と手札に」

翔が愛用するのはその全てが機械族で構成された、デフォルメされたイラストが特徴のピークロイドデッキ。癖のなく使いやすい効果を多く持つ下級モンスターで戦線を維持しつつ、整えた手札からパワー・ボンドで高攻撃力の融合ロイドを召喚して勝負を決めるのが基本戦術だ。おまけに機械族の特権、リミッター解除まで当然搭載している。なので下手に動くと、こちらがワンキルされることさえありうるのだ。だから用心を……。

「ダークジェロイドを召喚、効果発動……。このカードが場に出た時、相手モンスター1体の攻撃力を８００ポイントダウンさせる」

「へ？」

そこに出てきたのは、ピークロイドとは似ても似つかぬ８本の手だか足だかわからん部位を持つケンタウロスめいた悪魔。下半身に着いた口から闇の瘴気を吐き出し、ハンマー・シャークを絡め取る。

ダークジェロイド　攻１２００

ハンマー・シャーク　攻１７００→９００

「翔？タイムタイム、何それ!?」

「えー、何がだい？」

「ロイドは!?ロイドどこ行ったの!?」

「あはははは、変なこと言うなあ。ロイドなら、ここにいるじゃないか……」
そう言って指差したのは、ダークジェ『ロイド』。いやまあ、いるけど。確かにロイドだけど。名前さえついてりゃなんでもいいんだろうかコイツは。そしてまた、地味にいくつかのロイドカードに対応してるところがなんかむかつく。
「バトル、ダークジェロイドでハンマー・シャークに攻撃……」
ダークジェロイド　攻１２００↓ハンマー・シャーク　攻９００（破壊）
清明　ＬＰ４０００↓３７００
「へへへへへ、やったやった～」
「舐めんな！トラップ発動、激流蘇生！このカードは水属性モンスターが破壊された時にそのモンスターを蘇生し、その数１体につき５００ダメージを与える！甦れ、ハンマー・シャーク！」
ハンマー・シャーク　攻１７００
翔　ＬＰ４０００↓３５００
「このまま攻撃されると困るなぁ……メイン２、悪夢の鉄檻を発動。互いのプレイヤーは２ターン、このカードが場に残る限り攻撃宣言ができない～。さらにカードをセットして、ターンエンド」
足元から刺つきの檻が生えてきて、僕の周りを半球のドーム状に囲い込む。なるほ

ど、これでハンマー・シャークからの反撃を止めるつもりか……でもやっぱり、これはビークロイドに入れるカードじゃないと思う。翔め、ゾンビになった時にデッキ改造でもしたのかな。

「僕のターン、ドロー」

まあ、なんだっていいさ。それよりも、この程度のロックで僕の攻撃を本当に防いだとでも思ってるんだろうか。だとしたらそれは舐められすぎだ、このカードの力を見せてやる。

「ハンマー・シャークの効果発動。自分のレベルを1下げて、手札からレベル3以下の水属性モンスター1体を特殊召喚する！来い、氷弾使いレイス！」

ハンマー・シャーク　☆4→3

氷弾使いレイス　攻800

「そんなにモンスターを並べたって……」

「こっからが本番さ！手札から、真竜皇バハルストス（フューラー）Fの効果を発動！このカードは自分の水属性を含むモンスター2体を破壊して手札から特殊召喚でき、さらに破壊した2体がどちらも水属性だったなら、追加効果としてフィールドか墓地の魔法・罠を2枚まで除外する権利を得る。悪夢の鉄檻とその伏せカードを除外しろ、ハイドロ・ハウリング！」

強大な水の力を操る真竜の皇、バハルストスが虚空に吠える。その叫びは大気を震わし、エネルギーの暴走により歪んだ時空へと、鉄檻と伏せカードを吹き飛ばしにかかる。除外したカードは……魔法の筒（マジック・シリンダー）か、危ない危ない。

真竜皇バハルストスＦ　攻１８００

「除外されちゃったよー。でもまだ、その攻撃力じゃライフを削りきれない……」

「いいや、このターンで決めてやるね。魔法カード、埋葬されし生け贄！このカードはアドバンス召喚のリリースを、フィールドじゃなくて互いの墓地からまかなえる。ハンマー・シャークとサイクロイドをリリースして、アドバンス召喚！これが僕の新たな力、絶望の妖星！Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ！」

僕がついさっき手に入れたばかりの、新たな仲間。よろしく頼むよ、ウラヌス。

Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻２９００

「ウラヌスは自分フィールドに魔法・罠カードが存在しない状態でのアドバンス召喚に成功した時のみ発動する効果がある……まず最初に、相手プレイヤーは永続魔法か永続罠、好きな種類を選ぶ」

「選ぶ～？じゃあ、永続魔法でいいや」

宣言を受けたウラヌスの両目が魔法カードの色、緑色に光を放つ。

「なら僕は、永続魔法を１枚デッキから選んでフィールドにセットすることができる。

強者の苦痛をセットして、そのまま発動！この効果で相手モンスターはそのレベル１につき１００ポイント攻撃力がダウンして、ウラヌスは自分フィールドで表側の魔法・罠１枚につき攻撃力を３００アップさせる！」

ダークジェロイド　攻１２００→８００

Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻２９００→３２００

「ひぃぃぃぃ……」

「悪く思わないでよ、バトル！ハハルストス、ウラヌスでそれぞれ攻撃！」

真竜皇ハハルストスＦ　攻１８００→ダークジェロイド　攻８００（破壊）

翔　ＬＰ３５００→２５００

Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻３２００→翔（直接攻撃）

翔　ＬＰ２５００→０

「じゃ、また！」

走って逃げようとするも、足がうまく動かない。疲労の余り膝が震えてまともに歩くことすらできず、どうにかトイレの外に出たところで派手に転んでしまう。その派手な音が、このあたり一帯のゾンビを全員呼び寄せてしまったらしい。

「う、うわぁ……」

さっきの翔で確信したけど、このゾンビ生徒１人１人ははっきり言って弱い。複雑な

思考に向いていないのか、どいつもこいつも僕にワンキルされるレベルなんだから全っ然たいしたことない。翔だって本当はもっと強いはずなのに、あそこまで実力が落ちてるんだからお里が知れるというもので、ただあの無尽蔵の体力で自分の被害も構わずデスデュエルを仕掛けてくる人海戦術が厄介なだけだ。それだけに、まんまとその戦略に引っかかっている自分が恨めしい。多分まともに戦えば、僕ですらこの連中に負けることはまずないだろう。だというのに、それをやるだけの体力は僕にはもうない。じわじわと包囲網を狭めてくるゾンビ達の中心で、デッキから1枚のカードを抜き取った。

「こうなったらもう、最後の……ごめんね、毎度毎度こんな仕事押し付けて、さ……」

「デュエル～」

「俺と勝負だ～」

「デュエルしようぜぇ～」

がやがやとうるさい外野を尻目に、そのカードをデュエルディスクにそっと置く。

「霧の王（キングミスト）……！よろしくお願い、体育館まで、連れてっ、て……」

文字通り最後の力で、霧の王の精霊を実体化させる。その召喚に今度こそ体力を使い果たして意識が完全に消える寸前、そっと体を抱きかかえられる感触を感じた……気がした。やっぱり僕は駄目だなあ、こうやって助けを借りないとまともに体育館まで行くことすらできないだなんて。そんなことを思いながらも、不思議と安心感に包まれてい

て。何日ぶりだろうか、何にも気兼ねなく安らかに意識がフェードアウトしていった。

ターン８８　鉄砲水と黒騎士の刃

ようやく目が覚めたときには、簡易ベッドの上に寝かされていた。
「うっ……」
最初に感じたのは、やたらと全身が砂っぽいことだった。口の中はじゃりじゃりするし、服や靴の中も細かい砂粒のせいでこそぐったいというか、気持ち悪い。ウラヌス戦の後も雑魚無双とはいえ連続で戦ってきたからだろうか、全然気づかなかったけどこんな砂まみれだったのか。
「清明先輩、起きたのかドン」
「清明……」
「剣山、それに明日香……おはよ。目覚めは最悪だけどね」
それから話を聞く限り、どうも剣山たちが体育館の入り口前でやたらとノックする音がするのでゾンビでないことを確認してから開けてみたところ、その場に倒れてる僕を発見して慌てて運び込んだらしい。ありがとう霧の王、とデュエルディスクに差したままのデッキを軽く撫でて感謝を伝える。
「でも、無事に会えてよかったザウルス」

「まったく。それで、今無事なのってここにいる分で全員なの？いくらなんでも少なくない？」

だだっ広い体育館には、トメさんたち生徒以外の人員を含めてもせいぜい３０人ほどしかいない。ここに来た時の人数が１００人近かったことを考えると、僕が見てきたよりも事態は深刻なようだ。

「このゾンビ化現象は、本当に突然起こったの。ゾンビになった生徒にもある程度の知能はあるから、校内放送で体育館が拠点です、なんて呼びかけるわけにもいかないし……だから私と剣山君で、まだ学内に取り残された生徒たちの回収を何回かに分けてやってる最中なのよ。ごめんなさい、本当は貴方も迎えに行きたかったのだけど」

「いや、気にしないで。多少無茶はしたけど、僕ならどうにかなったわけだし……それより、十代達は？それにレイちゃんもいないっぽいけど」

悪気があったわけではないが、そこはあまり聞いてほしくない部分だったらしい。目を逸らしながらも、まず剣山が口火を切る。

「十代のアニキたちは、まだ帰ってきていないドン。あと数分もしたらまた学校中を他の隠れた生徒を探しがてら探ってみるザウルス、けど……」

そこまで言って、急に言い淀む剣山。その言葉の後を、目を逸らしたまま明日香が引き継いだ。

「レイちゃんは鮎川先生と一緒に保健室にいるはずなんだけど、あの辺りは特にゾンビの数が多いのよ。何回か近寄ろうとはしたんだけど、そのたびに１０人以上に見つかったからそれを振り切って逃げるのに精一杯で」

「そんな……」

　レイちゃんのように昏睡状態でも、あのデュエルゾンビにはなるのだろうか。ならないならならないで傷の手当てを早くしないといけないけど、もしなるとしたらあの怪我のまま校内を彷徨ってデュエルを仕掛けるようになってしまう。ただでさえあんなひどい怪我なのに、そんな無茶をする体力が彼女に残っているとは思えない剣山たちもそのことはよくわかっているが、それでもどうにもできない自分たちを悔やんでいるようだ。なら、僕がするような下手な慰めはかえって迷惑になるだろう。

「……明日香先輩、そろそろ時間だドン」

「そうね。それじゃあ清明、私たちはもう1回見回りに行ってくるから。先に言っておくけど、ついてくるなんて言わないでよ？貴方の体だってもうボロボロなんだから、少しは休みなさい」

　まさに僕も行こうか、と言おうとしたタイミングで出鼻をくじかれる。さすがになんのかんのでもう2年の付き合いになる明日香、よくわかっていらっしゃる。もっともあの連戦がだいぶ堪えているのも確かなので、今回ばかりは無理を通すよりその言葉に甘

えさせてもらうことにしよう。
「じゃあせめて、何かあったら連絡してよ。トランシーバー、持ってるでしょう？」
僕が最初にこの校舎に入った時も使ったトランシーバーを軽く振って見せると、剣山も頷いて自身の着ている改造学生服の胸ポケットを指し示す。
「んじゃ、月並みだけど……2人とも、気を付けて」
「わかってるドン」
「ええ」
慎重に少しだけ扉を開き、開閉の瞬間を見ているゾンビがいないかどうか確かめる。幸い誰もいなかったらしく、同時に頷くと用意してあった台車を押して出て行った。多分、いざとなったらあれのパワーで多少強引に蹴散らしてでも逃げるつもりなんだろう。何回かやっていた、というだけあって手慣れた様子だったけど、だからといって彼らの危険度が減ったわけではない。なにせ敵は何度倒してもすぐ起き上がってくるうえにデュエルの音を聞きつけてぞろぞろ集まってくる、1度でも捕まったらほぼアウトと見て間違いないであろう相手だ。
「よっ、と……」
最初は寝直そうかとも思ったが、いくらなんでもすぐそばで友人が頑張ってるのに自分だけぐーすか寝てるのは性に合わない。かといってまたいらんことをしたりしたら

今度こそ取り返しがつかないレベルの大惨事を招きかねないので、あまり大がかりに動くこともできない。幸い、ずっと寝てたのがよかったのか体力にもとりあえずデスデュエル1～2回分ぐらいはできるほどの余裕がある。せめて、戸締りの確認ぐらいはしておこう。なにせここは体育館、非常口や観客席まで考えると意外と出入り口になるような場所は多い。1か所でも鍵を付け忘れている場所があったら、それこそ大惨事だ。あの2人がそんな単純なミスを起こすとは思えないけど、こういうのはいくら確認したって減るものじゃないし、なにより何か動いてないとこっちが落ち着かない。

2階に上がり観客席から下を見下ろすと、なまじ場所が広いこともあって余計にそのスカスカ感が目立った。こっちは力尽きればゾンビになるのに、向こうを正気に戻す方法がわからないっていうのは、だいぶ厄介な話だ。僕が気を失っても向こう側に入らなかったのは、チャクチャルさんかメタイオン先生辺りの力が作用したんだろうか？今思えば、あの時点でゾンビ化していても不思議じゃなかった。まあ、わからないことをいつまでも考えていたってらちが明かないわけだけど。

「戸締り、よーし……ん？」

軽く引っ張ったり押したりして、ドアが簡単に開かないことを確かめる。次の場所に行こうと背を向けたところで、扉の向こう側からかすかに声が聞こえてくることに気が付いた。万一逃げ遅れた生徒が自力でここまで来たんだとしたら大変なので、ドアに

ぴったりと耳をつけて何を言っているのか少しでも聞き取ろうとする。つい力を入れすぎたのだろう、ダークシグナーの力を解放することを示す痣がシュルシュルと這うように体を走っていくのが見えた。それと同時に、まるで直接目の前で聞いているかのように外の音がクリアに聞こえるようになる。またこうやって無駄遣いして……デメリットとかあるのかは知らないけど。

『……万丈目く～ん、そっちはどうだーい？』

『いや、駄目だな。みんなどこへ行っちまったんだろうなぁ、せっかくデュエルしようぜってこの万丈目サンダー様がわざわざ言いに来てやってるってのに』

この声、どうやら話し相手はすでにゾンビ化した翔と万丈目のようだ。よかった開けなくて。そんなことを考えているうちも、２人の会話は続いていく。

『そういえば万丈目君、この体育館って誰か調べたのかい？』

『いや、俺はまだだぞ～？』

まずい。このままここに立てこもってることがばれたら、ますます外に出られなくなる。確かにこれだけの人数で生活している以上遅かれ早かれどこかで悟られることではあるけれど、いくらなんでも即日はまずい。でも、また僕の判断だけで勝手なことしたら本気で愛想尽かされかねない。

『じゃあさ、少し調べてみようか』

『ああ、そうだな……む、鍵がかかってるな』
『この入口小さい方だし、しょうがないッスよ。もっと大きな入口が、下の階にあったはずッスよ』
『ようし、じゃあそこまで行くか。十代、清明、天上院くーん、一体どこにいるんだー、デュエルしようぜー』
『アニキ～、デュエルしましょうよ～』
　ゆっくりと遠ざかっていく足音。あのスピードで１つ階を降りて正面の入り口から入ってくるとすると、残った時間はせいぜい５分というところか。僕のする勝手な行動は周りの迷惑になる、でもこんなもの聞いちゃった以上、まさかなかったことにするわけにもいかない。どうする？どうすればいい？
「……」
　ちらりと下を見る。急にこんな異世界に飛ばされて、しかもよくわからないうちに外にはゾンビがうろつきまわっているのだ。無理もないことだけど、ほとんどの人影はもう動く気力すらないかのようにぐったりと座り込んでいる。もしここにゾンビが入ってきたら、一瞬で大惨事になることは間違いないだろう。
「あーもう……行くよ、チャクチャルさん」
『推奨はしないぞ？マスターの体が本調子でないことは明らかだし、私としてはむしろ

あの下の人間を囮にマスターに逃げてもらいたい』
「……チャクチャルさんってさ、たまにびっくりすることさらっと言うよね」
『私は人間ではないからな。マスター以外は割とどうでもいい。それに、有象無象が10人いるよりマスター1人いるほうがよほどマシだからな』
「さいですか、愛が重いよまったく」
ここもまた、僕とチャクチャルさんの間にある相容れないことのひとつなんだろう。今のところは静観するようだけど、表だって協力してくれるわけではないらしい。まあ、それでも構わない。
そっと体育館を抜け出し、後ろ手にドアを閉める。サッカーを精霊体のまま壁抜けさせて鍵を中から掛け直してもらい、もしみんなが先に帰ってきたときに最低限の説明だけはしてもらえるようにそのまま残しておいた。改めて周りに他のゾンビがいないことを確認し、翔と万丈目が向かっていった方へ足音を忍ばせながら移動する。ふらふらと歩いているだけの2人の背中はすぐに見つかり……その瞬間、後ろから肩を叩かれた。この学校に今いる中で、こういうことをしてきそうな心当たりは1人しかいない。
「や、葵ちゃん。もう体調はいいの？」
「先輩にばかり任せて私が寝ているだなんて、クラディー家の名が泣きますから。ですがまあ、無駄話はまたの機会にしましょう。私がどちらか片方を引きつけますから、先

輩は残った方をお願いします」
　言うが早いが、僕の肩越しに何か白いものを投げる葵ちゃん。弧を描いて地面に激突したそれは、中から色い煙をまき散らし……煙玉とは、また忍者らしいチョイスをしたものだ。
「おいでなさい。デュエルがしたいのでしたら、私が相手になりましょう！」
　わざと足音を大きく立てつつ、葵ちゃんが遠ざかっていく音がする。若干何が起きたのかわかっていなかった前の２人も今の声で我に返ったらしく、ゆっくりとした足取りで葵ちゃんの走っていった方へルートを変える。
　よし、今だ。考えるより先に体が動いていた。大きく足を上げ、ドスンと足音を立てる……ただそれだけの動きで、２人のゾンビがゆっくりとこちらを向き直る。
「へい、お２人さん？」
「よーう、清明。俺とデュエル、しようぜぇ～」
「いやいや万丈目君、ここは僕が昨日のリベンジするのが先ッスよ」
「万丈目サンダー。なあ清明、お前も俺とデュエルしたいよなあ？」
　正直言って、どっちでも知ったこっちゃない。僕がしたいのは、こいつらをこの場から引き離すことだけだ。
「じゃんけんでもすれば？」

「ならそうするかー……じゃん、けん」
「ぽん！」
高校生２人が目の下に隈を作りながら不気味な笑顔でじゃんけんするという無駄に気持ちの悪い、今夜の夢に出てきそうな光景を見せつけられはしたが、今回の挑戦権は万丈目が先に勝ち取ったらしい。
「さあ、行くぜ～？」
「じゃあ、僕は向こうの子とデュエルしてくるッスよ」
「葵ちゃん……いや、こっちはこっちでデュエルと洒落込もうか、ね！」
「デュエル！」
先攻は僕……あのモンスターに来てほしかったけど、ないなら仕方がない。
「僕のターン、キラー・ラブカを守備表示で召喚！これでターンエンド！」
キラー・ラブカ　守１５００
ラブカの陰に隠れて、じわじわとさりげなく後ろに下がっていく。１歩、２歩、３歩……よし、ここで止まっておこう。
「俺のターン、レスキューラビットを召喚。そのまま効果でこのカードを除外してデッキからレベル４以下の同名通常モンスター、闇魔界の剣士　ダークソードを２体特殊召喚する」

闇魔界の剣士　ダークソード　攻１８００
闇魔界の剣士　ダークソード　攻１８００
漆黒の鎧で身を包んだ闇の剣士……あんなカード、ただでさえごちゃ混ぜ状態でパンパンな万丈目のデッキには入っていなかったはずだ。翔のダークジェロイドといい、ゾンビ化した生徒はデッキをいじりたくなる傾向でもあるのだろうか。
「まだだ。魔法カード、融合を発動。俺は手札の漆黒の闘龍（ドラゴン）と、場のダークソードを融合。来い、闇魔界の竜騎士　ダークソード！」
廊下の向こう側から矢のような勢いで飛んできた小型の龍に、ダークソードがその鎧の重さをものともしない動きで素早く飛び乗る。その手綱を素早く操って闘龍を制止させ、竜騎士となったダークソードがその剣をこちらに向けた。
闇魔界の竜騎士　ダークソード　攻２２００
「バトルだ！闇魔界の剣士で、キラー・ラブカに攻撃！」
闇魔界の剣士　ダークソード　攻１８００→キラー・ラブカ　守１５００（破壊）
龍を持たない剣士の一撃が、とぐろを巻いていたラブカをバッサリと切り裂く。その風圧にたまらず目をつぶり、再び開いた時には、すでに音もなく竜騎士が目の前まで迫っていた。
「竜騎士でダイレクトアタックだ！」

闇魔界の竜騎士　ダークソード　攻２２００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ４０００→１８００
「ぐっ……！」
「この瞬間、竜騎士の効果が発動する。戦闘ダメージを与えたことで、相手の墓地のモンスターを3体まで除外！キラー・ラブカには、効果を使う前に退場してもらおうかあ」
キラー・ラブカは万丈目の言うとおり、墓地にあってこそ真の力を発揮するモンスター。効果を使う前に除外されては、実際どうしようもない。
「フィールド魔法、遠心分離フィールドを発動。カードをセットして、魔法カード馬の骨の対価を発動。通常モンスターのダークソードを墓地に送ることで、カードを２枚ドローしてターンエンドだ」
１ターン目からきっちりライフを削られたうえ、墓地リソースを奪われ手札増強までされてしまった。流石万丈目、例えゾンビになってはいても、厄介な相手であることに変わりはないか。
清明　ＬＰ１８００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
万丈目　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：闇魔界の竜騎士　ダークソード（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：遠心分離フィールド
「僕のターン、ドロー！……よし来た！出番だよ、シャクトパス！」
シャクトパス　攻１６００
タコと鮫が合体したような見た目の、僕にとっては古い付き合いのアタッカー。今回はこの子の効果やステータスというよりも、身体特徴を頼りにさせてもらおう。
「しっかりお願いね！万丈目、こっちだ！」
シャクトパスのタコ足を腕に巻きつかせ、さらにその状態から別の足をグイッと伸ばして適当な壁に吸盤で張り付かせる。あとは伸ばした足が戻る力に身を任せれば、僕が走るよりもはるかに速いスピードで移動ができる寸法だ。こうやって逃げ回るふりをしつつ、少しでも体育館から遠くにやっちゃわないと。
「待て、逃げる気か？」
『あら～、見事に逃げちゃったわねん』
『きっと俺たちがいい男過ぎるからだな』
『俺たち３兄弟には敵わないってことさ』
なんか後ろの方で万丈目と一緒にゾンビ化したらしいおジャマトリオからものすっ

ごい失礼な勘違いをされてる気がするけど、無視だ無視。と思ったけど、それはそれで腹が立つのでやっぱり少しだけ懲りてもらうとしよう。

「魔法カード、アクア・ジェット！このカードと魚族モンスターのシャクトパスによるマジックコンボで、攻撃力１０００ポイントアップ！そのままダークソードに攻撃だ！」

シャクトパス　攻１６００→２６００→闇魔界の竜騎士　ダークソード

「させるか。速攻魔法、融合解除を発動。これで闇魔界の竜騎士は、闇魔界の戦士と漆黒の闘龍に分離するぜぇ」

闇魔界の剣士　ダークソード　守１５００

漆黒の闘龍　守６００

シャクトパスの突進を、素早くドラゴンから飛び降りてかわすダークソード。着地と同時に、主従がともに防御の姿勢を取って追撃に身構える。さて、ここで攻撃の巻き戻しが発生したから僕には改めて攻撃する権利が与えられたわけだけど、ここはどちらを攻撃すべきだろう。このドラゴンがいなければダークソードはただの通常モンスターのアタッカーにすぎないが、このモンスターの１８００という打点はなんらかの強化を使うか上級モンスターを出さない限り僕のデッキに突破手段は少ない。ならばダークソードを攻撃すればいいのかもしれないが、通常モンスターは何の効果も持っていない代わりに先ほどのレスキューラビットのようなサポートカードを数多く持つ。特に蘇

生手段はひときわ多く、ここで倒したとしてもまたすぐ蘇る恐れは十分にある。
「ええい、ままよ！シャクトパス、ダークソードにこのまま攻撃！」
アクア・ジェットを背負ってスピードを増した一撃が、ダークソードの剣よりも速くうねる。守備体制をとるダークソードにも、その全てを防ぐことは叶わなかった。
シャクトパス　攻２６００→闇魔界の剣士　ダークソード　守１５００（破壊）
「さらに、カードを伏せてターンエンド」
さっきのターンはこのカードも、ラブカを手早く墓地に送るためにあえて伏せなかったけど、そのせいで痛い目にあった。今度は出し惜しみなしで行こう。
「俺のターン……カードを1枚セットして、おジャマ・イエローを守備表示で召喚。ターンエンドだ」
『うっふ～ん』
おジャマ・イエロー　守１０００
清明　ＬＰ１８００　手札：３
モンスター：シャクトパス（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
万丈目　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：漆黒の闘龍（守）

おジャマ・イエロー（守）
魔法・罠：１（伏せ）
場：遠心分離フィールド
「僕のターン！」
おジャマ・イエローを融合もせずに出すだなんて、よっぽど追いつめられているんだろう。このまま押し切れば、勝利は近い。
「ハリマンボウを召喚して……」
「その瞬間にトラップカード、死のデッキ破壊ウイルスを発動。攻撃力１０００以下の闇属性、漆黒の闘龍をリリースすることで相手の手札、場の攻撃力１５００以上のモンスターをすべて破壊するぜ」
「シャクトパス！ハリマンボウ！」
シャクトパスの動きが止まったことで、タコ足を利用して距離を取る戦法がもう使えなくなる。そして静かに倒れこむその２体だけではなく、僕が手札に抱えていた超古深海王シーラカンスのカードもウイルスに侵されて消えていく。やってくれたもんだ、万丈目。
「さらにこのウイルスの副作用として、相手はデッキから攻撃力１５００以上のモンスターを３体まで選んで破壊することができる。さあ、どうする？」

なるほど、本来あのデッキのコンセプトとしては何も知らない相手がウイルスの効果で墓地に強力モンスターを送り込み、場が壊滅したところでダークソードが一撃を仕掛けてその主力となるであろうモンスターをそっくり墓地から除外し、相手のモンスターを場に出すことなく処理する、というところか。単純ながら理にかなった戦法だが、先に融合をしてデッキを自分からばらすところがゾンビの限界なんだろうか。そう考えれば、翔と同じくこの万丈目だって普段よりもはるかに弱くなっている。なら、僕にも勝機はある。

だけど、とりあえず今はウイルスの効果処理だ。バブル・ブリンガーを引いた時のためと、カイザー・シースネークを引いた時のために今から下準備だけでもしておこう。

「僕は攻撃力１５００、グレイドル・イーグル２体と攻撃力２５００、カイザー・シースネークを破壊して墓地に」

「このカードのデメリットとして、俺は次のターン終了時までダメージを相手に与えることができない……さあ、ターンを続けろよお」

万丈目め、わかってて言ってんな？もう通常召喚をしたこのターン、これ以上の展開は許されない。というかそもそも、僕の手札にはもうモンスターがいない。

「……ターンエンド」

「俺のターン、ドロー。馬の骨の対価をもう１枚発動、おジャマ・イエローを墓地に送っ

てまた２枚ドローする」
『そんな～、あ～れ～』
まさか壁にすら使わないとは、ゾンビ化してもおジャマの扱いは変わらないらしい。だがその見返りにいいカードを引いたらしく、にやりと笑ってカードを場に出す万丈目。
「魔法カード、戦士の生還を発動。墓地の戦士族モンスター、ダークソードを手札に戻してそのまま通常召喚。さらにカードをセットしてターンエンドだ」
闇魔界の剣士　ダークソード　攻１８００
清明　ＬＰ１８００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
万丈目　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：闇魔界の剣士　ダークソード（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：遠心分離フィールド
「僕のターン！」
『何か企んでいる……のか？』

カードを引いたところで、いきなりチャクチャルさんが声をかけてきた。突然すぎてつんのめりそうになるけれど、何とか踏みとどまって聞き返す。
「どうしたのさ、いきなり？」
『マスターの攻め手が遅いのはいつものことだから別にいいが、妙にあの人間の攻撃ペースが遅い』
「でも、さっきのターンはウイルスのデメリットで……」
『そこじゃない、私が言いたいのは最初のターンの話だ。融合解除を伏せるのではなく、バトルフェイズに使って追撃されていればマスターはとっくに負けていたぞ？』
その指摘を受け、今更ながらに冷や汗が出る。本当だ、あの時は気づかなかったけど、本来ならこのデュエルはとっくに負けていても不思議じゃなかった。となると、次の疑問が出る。なぜ万丈目は、わざわざ勝ちを逃すような真似をしたのか。
「ゾンビだから、馬鹿になってて気づけなかったとか……なんて、ないよね、うん」
『私なら、そう楽観はしないがな。いずれにせよ短期決戦に持ち込めるならそれに越したことはない、そのことだけ覚えておいてくれ』
なるほど。とはいえ、短期決戦ねえ。この手札でそれは、どう頑張っても無理そうだ。そしてそれを狙っているんだとしたら、かなりまずい方向に事態は動きつつある。
「……ターンエンド……」

「俺のターン。装備魔法、聖剣アロンダイトをダークソードに装備。ダークソードの攻撃力を５００下げ、相手の伏せカード1枚を破壊する！」

ダークソードの持つ剣が姿を変え、シンプルな長剣になる。それを一振りすると、生じた風圧が僕の伏せカードを切り裂いた。伏せカードはポセイドン・ウェーブ……まずい。

闇魔界の剣士　ダークソード　攻１８００→１３００

「バトルだ、ダークソードでダイレクトアタック！」

「まだまだっ！手札からゴーストリック・フロストの効果発動！相手のダイレクトアタック時にそのモンスターを裏側守備表示にし、このカードを裏側守備表示で特殊召喚する！」

「ちっ……ならばトラップ発動、リミット・リバース！漆黒の闘龍を蘇生し、セットされたゴーストリック・フロストに攻撃！」

漆黒の闘龍　攻９００→???（ゴーストリック・フロスト）守１００（破壊）

フロストによってかろうじて張られた壁も、追撃であっさり突破される。時間稼ぎだろうとなんだろうと、短期決戦にしたあげく僕が負けては意味がない。ただ万丈目も攻撃力９００のモンスターをわざわざ追撃に出したということは、手札に2枚目のあのカードが来ているのだろう。

「メイン２、手札から融合を発動！フィールドの２体のモンスターを素材とし、再び闇魔界の竜騎士　ダークソードを融合召喚する！」
闇魔界の竜騎士　ダークソード　攻２２００
「さらにカードを伏せ、ターンエンドだ」
清明　ＬＰ１８００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
万丈目　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：闇魔界の竜騎士　ダークソード（攻）
魔法・罠：リミット・リバース（対象無し）
１（伏せ）
場；遠心分離フィールド
もし万丈目が何か企んでいる、とすると、このターンでけりをつけておきたい。とはいえ僕の手札には今ウイルスカードの影響でモンスターすらない、このドローでどうにかするしかないだろう。
「ドロー！……よし来た。魔法カード、トレード・インを発動！手札からレベル８の青氷の白夜龍を捨てて、デッキからカードを２枚ドローして……よしよしよし、フィールド

魔法発動、半魔導帯域。さらに埋葬されし生け贄を発動！墓地のシャクトパスと漆黒の闘龍をリリースして、アドバンス召喚！行くよ、チャクチャルさん……地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ！」

チャクチャルさんはフィールド魔法がないと維持できない。万丈目が張るだけ張って一切使ってない遠心分離フィールドと合わせて２枚体制なら、たとえあの万丈目の伏せカードがサイクロンなどであってもどうにかなるだろう。

「半魔導帯域？くそっ、激流葬が……」

「あ、危なかった……」

半魔導帯域はその効果により、互いのメインフェイズ１の間フィールドのモンスターは相手のカード効果の対象にならず、カード効果でも破壊されない。もしこれを使わず激流葬を喰らったとしても、万丈目のダークソードは破壊された時遠心分離フィールドでその素材モンスターを特殊召喚できる。用心のために使ったカードだけど、結果的には大正解だったらしい。

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００

「まあいいさ。俺のライフはまだ４０００、そのダイレクトアタックをしたとしても……」

「最近ワンショットキルばっかりだねぇ……ゾンビ相手だと出しやすいのかな？装備魔

法、巨大化を装備！僕のライフが万丈目よりも下だから、チャクチャルさんの攻撃力は２倍！そして地縛神はその効果により、相手プレイヤーにダイレクトアタックができる！これで終わらせる、ミッドナイト・フラッド！」

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→５８００→万丈目（直接攻撃）

万丈目　ＬＰ４０００→０

「ぜい、ぜい……はぁ、んじゃね万丈目」

「万丈目サンダ～……おいおい清明、勝ち逃げなんてずるいじゃないかー……なあ、みんな？」

「みんな？」

聞き返した直後、たまたま背後にあったドアが開く。そこから出てきたのは、総勢１０人以上のゾンビ軍団。なるほど、こっちが逃げてるつもりでも、まんまと誘導されてたってわけか。

「最後にひとついいことを教えてやるよ、清明。お前たちが体育館に立てこもってることは、俺たちもとっくに知ってるんだぞ？ただ急に行ったって逃げられるだろうから、

しばらくは様子を見るけどなあ。なにせ食料は全部おれたちが抑えてるんだ、いつまでも中にはいられないだろう？だからお前が体育館から俺を引き離そうとしてる様子、見てて笑っちまいそうになったぜ。さあ、わかったら俺とデュエルしようぜ～」

「そういうことか……！」

ゾンビたちは馬鹿だから隠れ場所に気づかなかったんじゃなくて、その狙いは最初から兵糧攻めにあった……なんとしてもこの情報、持って帰って伝えなくちゃいけない。

「おっと、逃がさないぜ～」

じりじりと迫るゾンビ軍団。またさっきみたいにカードの実体化で切り抜けるか……と思った刹那、僕とゾンビ軍団の間に見覚えのあるボール状のものが投げ込まれた。と、そのボールが小規模な爆発を起こして辺り一面に濃密な煙が満ちていく。視界が奪われたところでいきなり手首のあたりを何者かに掴まれ、思わず振りほどこうとしたところで耳元で抑えた声がした。

「手のかかる先輩ですね。早く逃げますよ」

「葵ちゃん……センキュ！」

掴まれた手を引っ張られるのに合わせ、煙にまぎれて走り出す。そこから体育館に戻る途中で1人のゾンビにも出会わなかったのはあの場所に僕が見た以上の数が詰めかけていたのか、それとも別の場所……剣山たちのところに集合しているのか。いずれに

せよ、ゾンビ軍団には予想以上に知恵があるらしいことがわかっただけでも大収穫だ。収穫といったら収穫だ。そういうことにしておかないと、無断外出が明日香にばれたら今度こそどんな目に会うかわかったもんじゃないし。

「葵ちゃん、一応聞くけど責任被ってくれる気は……」

「嫌です。天上院先輩には、先輩１人で説明してください。私は布団かぶって病人のふりしてますから」

「あ、ずるい！」

ターン８９　炎の幻魔と暴食の憑依

「……で、どうするかねほんとに」

夜が来た。結論から言うと、僕も葵ちゃんも無断外出にはおとがめなし。というより、ちょうど十代達が帰ってきたりそのまま鮎川先生とレイちゃんを助けに行ったりと、それどころではなかったようだ。結果鮎川先生こそゾンビにされてしまったものの、なんとか助かったレイちゃんは薬がうまいこと効いたのか、意識こそ戻らないものの呼吸も安定して小康状態になっている。なのでそれについてはとりあえず心配しなくていいが、他にも差し迫った問題がある。

「食糧庫は奴らの手のなか。兵糧攻めは、俺達に援軍が期待できないこの状況では最も効果的な方法だ」

オブライエンの言葉に、僕らは押し黙る。そう、食糧問題だ。辛うじて災害用の水と食料はあるものの、それだってこの人数がいつまでも食べていける量があるわけではない。今日のところはトメさんの頑張りもあってまだ持ちこたえているが、既に不満は爆発寸前だし、事実このままだと空腹と栄養失調でますますこちらが弱ってしまう。辛うじて発電エリアだけはこちらが押さえてはいるが、砂まみれになって精密機械は全部

パーだからもはやただの鉄くずと見たほうがいいだろう。せめて僕の店があれば砂糖ぐらいは手に入ったのだが、それも奴らの側にある。

「トゥデイはもうミッドナイトだ。夜に動くと夜行性のモンスターがいるかもしれない、今日のところはスリープして体力を節約しよう」

結局いくら考えても結論は出ず、ジムの一言によりこの日は大人しく寝ることにした。願わくばこの悪夢のような生活も、明日になれば3つの朝日と一緒に無かったことにならないか、なんて子供じみたことを考えながら目を閉じると、なんだかんだいっても体には疲労が残っていたらしく、あっけないほど早く眠りにつくことができた。

次の日。当然ゾンビがいなくなるようなことはなく、僕らは守りを固めることにした。どうせ場所がばれているならといらない机やパイプ椅子などを積み上げて派手に通路を遮断する者、ありあわせの木材と釘でバリケードを作る者、オブライエンなどは銃のメンテナンス……ではなく、デュエルディスクの手入れに余念がない。クロノス先生はここに来てようやく先生らしいことをやり始め、ゾンビ化した生徒のリストを作り出している。その結果、実に厄介な案件が持ち上がった。

「やぁまだ――！てぇらおか――！やまなかぁ――！どこ行ったこのやろ、とりあえず殴るからさっさと出て来い！」

３人の生徒が行方不明になったのだ。といっても、ゾンビがバリケード内部に忍び込

んだわけではないらしい。トイレの窓にあったバリケードが強引に中から引っぺがされ、そこから外に抜け出したようだ。そこが一番食糧庫に近い場所なことを考えると、つまりはそういうことなんだろう。

「特に腹を空かせていたからな、あの3人は」

「すまないドン、俺があの3人に気づいてさえいれば……!」

「それは言いっこなしでしょ?僕だって寝てたし、皆だって寝てたよ」

出て行ったのが昨夜ならまだ無事でいる可能性もあるし、少人数の探索部隊を編成するか……そんな話が持ち上がったところで、いきなり校内放送が響いた。放送室も奴らの手の中にあるため、一斉に緊張が走る。もし大音量で黒板を爪でひっかく音がエンドレスに流れてきたりしたら、それは何よりも恐ろしい攻撃になるだろう……いや、割と真面目に。

『おはよう、生徒諸君。僕はこの世界の支配者、加納マルタンさ』

「マルタン……」

レイちゃんと同時期に入学した、やたらと大人しいラーイエローの男子だ。友達を作ろうとしない様子を見かねたのか何度かレイちゃんが世話を焼くのを見たことがあるし、そんな彼女が僕の店に連れ込んでは甘いものを半ば無理やり一緒に食べたりしているから僕も面識がある。この世界に来たことは知っていたけど、それ以降ずっと行方不

明だったからもうゾンビになったものかと思っていたけど……いずれにせよ、この放送に答えが隠されているのだろう。
「マルタン！お前、無事だったのか!?」
『その声、十代だね。やあ』
十代の叫びに、ノータイムで返事を返すマルタン。校内放送で会話を成立させるだなんて、どんな仕掛けがあるんだってんだ。
「マルっち！マルっちなの!?」
「レイちゃん……」
友達が行方不明ということで、色々と思うところもあったのだろう。今朝になって意識が戻ったレイちゃんが、まだふらつきながらも起き上がってスピーカーに呼び掛ける。
『その呼び方、やめてくれないかな？僕はゾンビたちの王、マルタン帝国の支配者なんだ。まあそんなことより、今日は君たちに取引の話があるんだ』
「取引？」
マルタンが僕らに突き付けた条件は、こうだ。まずマルタン側は、食糧庫にある食料をこちらにいくらか分け与える。そのかわりこちらは、あの砂に埋もれた発電施設を渡す……確かに食料は欲しいが、まだ発電所も完全に死んだと決まったではない。三沢辺

りが見れば、案外なんとかなる可能性もある。とはいえ発電所が動いたとしても、電気を食べて生きていくわけにはいかないのも事実。好条件なだけにどう考えても怪しいこの提案に対し、十代はデュエルでの賭けを提案した。勝ったものが全部取るその案は意外にも受け入れられ、ジム、オブライエン、ヨハンとこちらの出すメンバーも決まった。いざマルタンの呼びかけに従い外に出……ようとしたところで、オブライエンが僕の肩を叩いた。

「この話にはどう考えても裏がある。食料と聞けば、ここにいる生徒たちの目は全てデュエルに注がれるだろう。その間、奴は誰にも邪魔されずに動き放題になる……頼む、俺もなるべく早く終わらせるから、先に発電所に行って守りを固めておいてくれ」

「オーケイ。でも、なんで僕を選んだの?もっと強い、例えば十代とかでも……」

「いや。お前の精霊を呼び出す力は、俺の見たところヨハン、十代と並んでお前がトップだ。ヨハンは今からデュエルに行くし、十代はこの集団の中でリーダー役を担ってもらわねばならない。今この瞬間に腹を空かせた生徒による暴動が起きていないのは、あいつのリーダーシップによるところが大きいからな。ここで自由に動けるのは、お前しかいないんだ」

「ん。じゃ、早いとこ援軍に来てね。ワンキルしてよワンキル」

「ははは、お前らしいな。もちろん善処する」

　これなら正式な頼みがあってのことだし、僕の独断専行にはならないだろう。いざとなったら明日香にはオブライエンがやれって言った、で押し通せばいいし。何事もなかったかのように出ていくオブライエンの背中に軽く手を振り、こっそりと外に向かう集団から離脱する。誰にも見られないよう気を配ったつもりだが、この男相手にはそうもいかなかったようだ。

「……や、三沢」

「話は聞いていたぞ、清明。どの道発電所は俺も一度は見ておきたかったんだ、付き合うぜ」

　つくづく三沢相手には妙な縁があると思う。ま、僕に単独行動とか正気の沙汰とは思えないから見張りがいるってのはちょうどいいけどさ。もしゾンビに見つかっても最悪２人がかりなら正面突破もやり易くなるし、何よりデスベルトを装着していない三沢はものすごく心強い……とも思ったが、あちらはあちらでどこかに集まっているのかなぜか１人も見つけられずに発電所までたどり着いた。到着するや否やあちこちの機器をいじって復旧作業を急ぐ三沢の横で、地平線の向こうまでアカデミア以外ひたすら砂だけが広がる地形を見渡し警戒する。これだけ周りに何もないと、どこから何が来てもすぐわかるから気が楽でいい。

　そんな場合ではないのはよくわかっているが、昨日からずっとバリケードだらけの校

舎内にいたせいで久しぶりに見るどこまでも広がる空を見上げてちょっとのどかな気分に浸っていると、突然離れた場所から光が弾けるのが見えた。それとほぼ同時に地面が揺れ、その光の根元から何本もの柱が付き出してくる。

「うおっ!?」

三沢が叫ぶ後ろで、なにかパチパチと火花が飛ぶような音がかすかにした。もしかしたら今のショックで、発電システムが多少なりとも生き返ったのかもしれない。

だが、それは同時にこの砂漠にいた何かを叩き起こす役目も果たしたようだ。僕の目の前でゆっくりと砂が持ち上がり、その奥からぎらぎらと怒りに燃える瞳が覗く。それはゆっくりと周りの状況を確認するように動き、やがて火花を立てるコード相手に悪戦苦闘している三沢の方を向いて止まった。

ずる、ずると砂を纏ったままにその何かが動き出して、ようやく我に返る。僕も三沢もここで逃げようと思えば逃げられるかもしれない……だけど、もしここで逃げだしたらマルタンが食料と交換してまで欲しがったこの発電所は恐らく徹底的に壊されるだろう。あの目はそういう目だ。

「なら、ここはデュエルで!」

当然肌身離さず持ち歩いていたデュエルディスクを構えようとしたが、それよりも先に三沢が前に出た。

「まあ待て、清明。お前にはその、デスベルトとやらが付いているんだろう？今年度の授業が始まる前に休学した俺に、その装置はない。つまり、ここは俺の出番というわけだ」

そう言って、アカデミアにあった予備の旧式デュエルディスクをガシャンと起動させる三沢。これで案外頑固なところもあるこの男のことだ、何言っても聞きはしないだろう。

「清明、お前はそこのコードを繋げておいてくれ。何本かショックで外れたところがあるから、それをくっつけるだけでいい。感電には気をつけろよ！」

「了解！」

言われたとおりに駆け寄ると、素人目に見てもコードを繋ぎ直した程度でどうこうなるものではないことは明らかだった。僕てもできる作業ということで最大限妥協した指示だったんだろう。すまない三沢、うちの神様共々機械オンチで。とにかく何十本もあるコードを適当に手に取り、どれがどこと繋がるのかを確認にかかり始めたところで、後ろからデュエルの声が聞こえてきた。

「デュエル！」

「先攻は俺が貰う。来い、きつね火！」

きつね火　守２００

「まずは、これでターンエンドだ」

きつね火……あのカードを三沢が使うのは、僕も見たことがない。おそらくあのデッキは、三沢の使う６つの属性デッキの中でもこれまで使われることがなかった１つ、炎属性の物ということだろう。

「俺のターン、ドロー」

あ、喋れんのかコイツ。サンドモスなんかは一切人語ができなかったのに、ここら辺の区分はつくづくよくわからない。とはいえそのアクセントや発音にはやはりどこか違和感があり、目の前の存在がやはり人外であることが感覚的に伝わってくる。

「ボタニティ・ガールを召喚し、きつね火ニ攻撃スル」

椿の名を持つ人型の花が、にやにやと笑いながらその花弁を飛ばしてきつね火を襲う。

ボタニティ・ガール　攻１３００↓きつね火　守２００（破壊）

「カードを１枚セットして、ターンエンドショウ」

攻撃力１３００のボタニティ・ガールをまるで三沢を挑発するかのように立たせておいたまま、ターンを終える謎の精霊。しかしその宣言と同時に、三沢の目の前に小さな炎が灯る。

「きつね火は表側表示で戦闘破壊されたターンのエンドフェイズ、俺のフィールドに蘇るモンスターだ。残念だったな、攻撃が無駄になって」

きつね火　守２００
三沢　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：きつね火（守）
魔法・罠：なし
???　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：ボタニティ・ガール（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
……これで三沢には、何１つ損をしないままにまたターンが回ってくる。抜け目ない三沢のことだ、このターンで一気に仕掛ける算段が付いているのだろう。
そして案の定というべきか、手札から一気に３枚ものカードを引きぬく三沢。次の瞬間には、きつね火がふわふわと揺れていただけのフィールド全てを埋め尽くす勢いの炎が乱舞していた。
ＵＦＯタートル　攻１４００
炎の精霊　イフリート　攻１７００
怨念の魂　業火　攻２２００
「３体のモンスターだと!?馬鹿ナ!?」
「別に驚くほどのことをしたわけじゃないさ。それじゃあ、種明かしと行こうか。まず

俺は手札からこのカード、怨念の魂　業火を特殊召喚した。このカードは俺のフィールドに炎属性モンスターが存在するときに手札から特殊召喚でき、その後場の炎属性モンスターを破壊する効果を持つ。よってきつね火の存在をトリガーに特殊召喚し、そのままきつね火を破壊した、という訳さ。そして次にこのモンスター、炎の精霊　イフリートだ。このカードは、俺の墓地から炎属性モンスター1体を除外することで特殊召喚できる。ここでもきつね火には仕事を果たしてもらったわけだ。そして最後にＵＦＯタートルだが、これはただ単に通常召喚しただけだな」

　長い説明を後ろに聞きながら、ここしばらくデュエルから離れて研究ばかりやっていたにもかかわらずまるで鈍っていない三沢の腕に内心舌を巻く。ひとつひとつ言われればわからなくもないが、あの展開ルートをデュエルが始まってからの短い時間だけで思いついたのだろうか。

「そうそう、もう1つ注意しておこう。俺は業火を特殊召喚する前に永続魔法、補給部隊を発動していた。このカードにより、1ターンに1度俺のモンスターが破壊されるたびに俺はカードを1枚ドローする。きつね火の破壊によりカードを引かせてもらったから、このターンはもう使えないがな。さあ、バトルだ！まずはＵＦＯタートルで攻撃！」

　ＵＦＯタートル　攻１４００→ボタニティ・ガール　攻１３００（破壊）

???　ＬＰ４０００→３９００

「ふん……だがこの瞬間、ボタニティ・ガールの効果が発動スル。このカードが墓地に送られたことでデッキから守備力１０００以下の植物族モンスター、捕食植物（プレデター・プランツ）スキッド・ドロセーラをサーチダ。さらにトラップカード、リグレット・リボーンを発動。今破壊されたボタニティ・ガールを守備表示で蘇生するガ、蘇生したモンスターは次の俺のエンドフェイズに破壊サレル」

「だがボタニティ・ガールはフィールドから墓地に送れさえすればサーチ効果が発動できるため、俺が攻撃しようがしまいが結果は同じ、か……」

ボタニティ・ガール　守１１００

サンドモスの時もそうだったけど、カードの精霊だからこそ、カードのことを知り尽くしているというべきか。どちらに転んでも確定でサーチが行われるといういやらしい状況に持ち込まれてしまった三沢だが、その迷いはほんの一瞬だった。

「だとしても、ここで攻撃してダメージを通す！バトルだ、イフリート！そしてイフリートの攻撃力は、自分バトルフェイズの間３００ポイントアップする！」

炎の精霊　イフリート　攻１７００→２０００→ボタニティ・ガール　守１１００（破壊）

「ボタニティ・ガールの効果。捕食植物フライ・ヘルをサーチショウ」

「だが、これでお前の場はがら空きだ。やれ、業火！」

怨念を燃料として無限に燃え盛る壺の家紋部分が光り、そこから勢いよく炎が噴き出る。その衝撃は僕の場所から見ているだけでもとんでもなく熱そうだったが、当の精霊はというと自分の全身が燃えているにもかかわらず、まるで無頓着のままで火を消そうともしない。どうやら、炎の熱がまるで効いていないようだ。

だが、その全身を隠す砂にとってはそうでもなかったらしい。業火の一撃がなにかを狂わせたのか、謎の精霊の全身から、ずっと身にまとっていた砂が次第に剥がれていく。

怨念の魂　業火　攻２２００→???（直接攻撃）

???　ＬＰ３９００→１７００

「さあ、お前の正体を見せてもら……何!?」

やがて業火の炎も収まってきて、ついに三沢の相手の正体が明らかになる。あ、なんかあのモンスターには見覚えがある。確かそれなりに歴史のあるモンスターだ……けど、名前も効果も出てこない。

「チャークチャールさーん」

『わかったわかった。奴は、固有の名を持たない闇属性かつ悪魔族のモンスター。カードとしての名はブラッド・ソウル……憑依するブラッド・ソウルだ』

ブラッド・ソウルね、了解。当然博識の三沢もその名前に思い当たったようだが、どうも様子がおかしい。尋常ではないぐらいに険しい顔をしていて、話しかけられる雰囲

気ではない。チャクチャルさんにもう1度ヘルプを求めようとした時、ようやく三沢が口を開いた。

「憑依するブラッド・ソウル……そうか、そういうことか。悪魔族のお前がこんな砂漠のど真ん中に生息しているはずもない、マルタンに呼ばれたか？」

「マルタン？ああ、今はそんな名前の人間に憑いてるんだってナ。マルタン様と言いな、様ト」

「マルタンが!?」

あのモンスター、マルタンが召喚した精霊だって言うのか。確かにマルタンがデュエルするところは見たことがなかったけど、だからといって精霊が見える僕や十代に気づかれることなく精霊と共に過ごしていたなんて考えにくい。となると、この世界に来てからブラッド・ソウルには出会ったのだろうか？だけど、三沢の言う通りこの砂漠世界に悪魔族がすんでいるとは考えにくい。となると、一体あのモンスターはどこからやって来たんだ。

僕には何も理解できないが、どっちみちその答えを出すのは僕の役目じゃない。今その本人とデュエルしているのは、三沢だ。

「……まあいい、デュエルを続行するぞ。俺はカードを1枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン、闇の誘惑を発動！カードを２枚ドローシテ、手札から闇属性モンスターであるフライ・ヘルを除外スル。そして、スキッド・ドロセーラを召喚！」

砂地から静かに生えてきたその草は、一見ただの薄気味悪い木にも見える。だが不気味な暗い配色の幹の先から伸びる枝は自らの意思でうねうねと動き、その先端の葉……いや、歯は自らの届く範囲にいる獲物全てを喰らい尽くさんとばかりに硬質な噛みあわせる音をカチカチと響かせている。何よりも凄まじいのは、その幹だ。木のこぶなどでは決してない、見間違えようもない目がいくつも不規則に辺りを見回している。

捕食植物スキッド・ドロセーラ　攻８００

「永続魔法、超栄養太陽を発動。場のレベル２以下の植物族をリリースして、デッキからそのレベルプラス３以下の植物族モンスターのリクルートを行ウ。出でよ、フライ・ヘル！」

捕食植物フライ・ヘル　攻４００

スキッド・ドロセーラとはうってかわって、貧弱ともいえるほど細く弱々しい胴体を持つ植物。だがその胴体は決してディスアドバンテージなどではなく、むしろ進化の過程で獲得した強みであることがわかる。禍々しく開くその葉の『口』は不釣り合いなほどに大きくそして力強く、細い……つまり軽い胴体を引きずって空中の獲物をも捉えることができる仕組みになっているのがわかる。

「この瞬間、スキッド・ドロセーラのモンスター効果発動。このカードがフィールドから離れた時、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター全てに捕食カウンターを１つ乗セ、捕食カウンターのついたモンスターのレベルは１にナル」

地面から飛び出してきた小さな頭。それは昔、植物の１部だったのだろう。獲物に食らいついて放さないその性質からいって、もしかしたら種子の性質が異常な進化を遂げた結果なのかもしれない。ただ僕に言えるのは、少なくともそれが意志を持ち、自らの力で動きだすに至った過程を想像なんてしたくないということだ。

炎の精霊　イフリート（０）↓（１）☆４→１

怨念の魂　業火（０）↓（１）☆６→１

「さらにフライ・ヘルの効果を使用。１ターンに１度、相手モンスター１体に捕食カウンターを１つ乗セル」

ＵＦＯタートル（０）↓（１）☆４→１

これで、三沢のモンスター全てに捕食カウンターが乗った。カウンター、ということは、やはりそれを利用する専用のカードを使うのだろうか。

「魔法カード、二重召喚（デュアルサモン）を発動。増えた召喚権を利用シ、俺自身……憑依するブラッド・ソウルを召喚スル！」

実体を持たない、悪魔の形をした精神体。目の前のデュエリストとうり二つのそのモ

ンスターが、口が耳まで裂けるほどの笑みを浮かべた。
憑依するブラッド・ソウル　攻１２００
「ちっ、やはり持っていたか……！」
そのモンスターを見て、なぜかますます顔が険しくなる三沢。その理由は、僕にもすぐわかることとなった。それと同時に、なぜ三沢がこのモンスターを見ただけであそこまで反応していたのかも。
「ブラッド・ソウルのモンスター効果！このモンスターをリリースすることデ、相手フィールドのレベル３以下のモンスター全てのコントロールを永続的に得ル！」
捕食カウンターから得体のしれないオーラが三沢のモンスターたちを覆い、そのオーラにあてられたモンスターが一斉に持ち主であるはずの三沢に牙をむく。大量展開により圧倒的優位に立っていたはずのデュエルが、わずか１ターンでそっくりそのままひっくり返った。
そして、１枚で大量にコントロールを奪取するこの能力。もしゾンビ生徒たちのゾンビ化がなにか得体のしれないオカルトパワーではなく、カードの精霊の力による洗脳だとしたら？たった１枚で何体ものモンスターのコントロールを永続的に奪うこの能力がもし人間相手に使われたとしたら、あのゾンビ化にもすべて説明がつく。つまり、この精霊こそがこの事件の元凶……！

「クッ……！」
「モンスターがいなければ補給部隊もただの紙くずだなア？終わりダ！お前のモンスター３体による一斉攻撃で片を付けてやるゼ！」
「三沢っ！」
　炎がフィールドを埋め尽くし、今度は三沢を覆わんとする。このモンスターが犯人であることがほぼ明らかな以上、三沢にはなんとしてでもここで勝ってもらわないといけない。だが、すでに攻撃は行われている。ここまでか……と思ったその時、目も眩むほどの光と共に天空から大量の剣が三沢を守るように降ってきた。
「安心しろ、清明。俺は永続トラップ、光の護封霊剣を発動した。このカードはプレイヤーのライフを１０００ポイント払うことで、攻撃を１度無効にできる。俺は３０００のライフにより、３体の攻撃をすべて無効にしたのさ」
　三沢　ＬＰ４０００→３０００→２０００→１０００
「つまらない真似ヲ……だが、そのライフではすでにその効力も打ち止めダナ。フライ・ヘル！奴にダイレクトアタックをシロ！」
　捕食植物フライ・ヘル　攻４００→三沢（直接攻撃）
　三沢　ＬＰ１０００→６００
「ぐわっ！」

「三沢！」

確かに三沢はデスベルトを着けていないから、デスデュエルの影響そのものは受け付けない。だけどそれは、カードが実体化するこの世界でのデュエルによるダメージをも受け付けないという意味ではない。ダメージを受ければ痛い、それは当たり前のことだ。

それは頭ではわかっているけれど……やはり友人が目の前で苦しむ姿というのは、何度見たって慣れるようなもんじゃない。

「苦しメ、苦しメ。おっと、ＵＦＯタートルはリクルーターだったカ？そんなものを残すわけにはいかないナ、メイン２に業火のモンスター効果を使用スル。炎属性モンスターのＵＦＯタートルをリリースし、エンドフェイズまで攻撃力を５００ポイントアップさせようカ。カードをセットシテ、ターンエンドダ」

怨念の魂　業火　攻２２００→２７００→２２００

三沢　ＬＰ６００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：補給部隊

光の護封霊剣

ブラッド・ソウル　ＬＰ１７００　手札：２

モンスター：炎の精霊　イフリート（攻・1）
怨念の魂　業火（攻・1）
捕食植物フライ・ヘル（攻）
魔法・罠：1（伏せ）

「俺のターン、ドローだ！」

ブラッド・ソウルが指摘した通り、すでにライフが3ケタしかない無い三沢にはこれ以上護封霊剣の効果は使えない。つまり、あの手札2枚だけでこのターンをしのがなければならないのだ。そんな絶体絶命の状況で三沢が引いたカードは……。

「マスマティシャンを守備表示で召喚し、効果発動。このカードの召喚成功時、デッキからレベル4以下のモンスター1体を墓地に送る。そして俺は、たった今墓地に送ったモンスター……カーボネドンの効果発動！このカードを墓地から除外し、デッキからレベル7以下のドラゴン族通常モンスターを特殊召喚する！出でよ、ダイヤモンド・ドラゴン！」

マスマティシャン　守500
ダイヤモンド・ドラゴン　守2800

わずか1枚の手札からどうにかモンスターを2体並べ、ひとまず守りを固める三沢。だが、ブラッド・ソウルはそれを嘲笑う。

「守備力２８００……それで壁のつもりカ？１つ教えてやるガ、フライ・ヘルは自身よりレベルの低いモンスターとバトルするときその相手を効果破壊する能力がアル。そして捕食カウンターの乗ったモンスターはレベルが１にナル、この意味が分かるカ？」
「そんな!?」
　先ほどＵＦＯタートルにやって見せたように、フライ・ヘルには自力で相手モンスターに捕食カウンターを乗せる効果がある。つまり、タイマンかつ自分から攻め込む場合、あのモンスターに敵はいないことになってしまう。そんなのが相手となると、いくら守備力２８００を誇るダイヤモンド・ドラゴンであってもその数字に意味はない。
「わかっているさそんなこと。魔法カード、七星の宝刀を発動！手札またはフィールドのレベル７モンスターを除外し、デッキからカードを２枚ドローする！」
「チイッ……！」
　ダイヤモンド・ドラゴンをも踏み台にし、カードをドローする三沢。なるほど、最初からあのカードを壁モンスターにして使うつもりはなかったのか。
「……カードを２枚セットし、ターンエンドだ」
「どうやら、逆転のカードは引けなかったようだナ？ドロー、スタンバイフェイズに業火のモンスター効果、自分フィールドに火の玉トークンを特殊召喚スル」
「わかっているさ、そんなこと！リバースカードオープン、デモンズ・チェーン！この効

果によりその効果は無効になり、攻撃もできなくなる！」
　業火が収められた壺に鎖が巻きつきがんじがらめに縛りつけ、中の怨霊が出てこれないような封印が施される。これで業火からの攻撃は防げる、だけどまだ場には２体もの攻撃可能なモンスターが存在していることに変わりはない。
「まあいいサ、フライ・ヘルの効果でマスマティシャンに捕食カウンターを乗せてオコウ」
　マスマティシャン（０）→（１）　☆３→１
「バトルだ、フライ・ヘルでマスマティシャンに攻撃！」
「……いいだろう、それは通しだ」
「ならこの瞬間、フライ・ヘルの効果発動！マスマティシャンを効果で破壊シ、その元々のレベルをフライ・ヘルは喰らウ！」
　マスマティシャンは、戦闘で破壊された時に１枚ドローさせる効果を持つ。フライ・ヘルのモンスター効果で破壊することで、その貴重なドローすらも奪おうという訳か。
　捕食植物フライ・ヘル　☆２→５
「補給部隊の効果は効果破壊にも対応する、そちらの効果でカードを引かせてもらうぞ」
「行きナ、イフリート！効果により攻撃力を３００アップさせ、ダイレクトアタックダ！」

「させるか！永続トラップ、六芒星の呪縛！六芒星の罠が相手モンスター1体を縛り付け、その行動を封じる！」
「そんな古いカードで命を繋ぐカ、忌々シイ……」
「なにせこの世界に来た時、俺のデッキは持っていなかったからな。ごく少数のカード以外は、ほとんどがアカデミアにあったありあわせの物さ」
言われてみれば、さっき使ってたＵＦＯタートルやダイヤモンド・ドラゴンのテキストもやたら古かった気がする。ＡＴＫとかじゃなくて攻、守ってステータスが書いてあったし、リリースじゃなくて生け贄表記だったし。
「フン。これでターンエンドダ」
三沢　ＬＰ６００　手札：1
モンスター：なし
魔法・罠：補給部隊
光の護封霊剣
デモンズ・チェーン（業火）
六芒星の呪縛（イフリート）
ブラッド・ソウル　ＬＰ１７００　手札：3
モンスター：炎の精霊　イフリート（攻・1・六芒星）

怨念の魂　業火（攻・１・チェーン）
捕食植物フライ・ヘル（攻）
魔法・罠…１（伏せ）

「俺のターン！」

いくらさっきのターンを耐えきったとはいえ、あのカードはどれも一時しのぎにしか過ぎない。ここで逆転しなければ、今度こそ道はない。だけど、不思議と心配には思わなかった。三沢はよく十代や僕のここ一番での引きをずば抜けていると言って羨んでいたが、僕に言わせれば三沢だって大概だ。三沢に任せておけば、必ず勝ってきてくれる。そんな安心感は、昔も今もまるで変わっていない。

そして、そんな三沢が引いたカードは。

「来たな……！俺は、俺のフィールドに表側表示で存在するトラップカード３枚をコストとして墓地に送る！」

「何ダト!?」

「まさか！」

聞き覚えのある召喚条件とともに、異世界の空にその咆哮が響き渡る。あの赤い体は、３幻神のうち１枚、オシリスの天空竜にも類似するあの禍々しい巨体は、間違いない。

「出でよ、神炎皇ウリア！そしてこのカードの攻撃力は、俺の墓地の永続トラップ１枚につき１０００ポイントとなる！」

神炎皇ウリア　攻０→３０００

「ふざけた真似ヲ！」

「俺がこの異世界で、なぜデッキも無しに生き延びることができたと思う？このカードを持っていたから、並みの精霊はよほどのことがない限り近寄ろうとしなかったのさ。まずはその伏せカードを破壊する、ハイパー・ディストラクション！」

ウリアの特殊能力の１つ、チェーンを許さずに伏せカードを破壊する能力。しかし、その口から衝撃波が放たれることはなかった。

「ククク……マルタン様から、そのカードについては一応聞いていたサ。三幻魔の１体でありながら人間の側に着いたつまらん精霊として、そしてその弱点もナ。お前は攻撃力こそ墓地に応じて上がっていくが、守備力は変化シナイ。さらに売りの伏せカード除去能力も、召喚成功時に発動させちまえば畏れるに足りないッテナ。俺はお前の召喚時にトラップカード、手のひら返しを発動させてイタ。このカードは元々のレベルと違うレベルを持つモンスターが存在するとき、フィールドのモンスターを全て裏側守備表示に変更スル……ウリアはともかく、俺の場のモンスターは全てレベルが変動している、よって条件を満たすのもたやすいという訳サ」

神炎皇ウリア→???
炎の精霊　イフリート→???
怨念の魂　業火→???
捕食植物フライ・ヘル→???

「そう、か。俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ」
「残念だったナア、せっかくの切り札も不発に終わってヨウ！俺のターン、ドロー！」
「……」
悪魔的な笑いと共にカードを引くブラッド・ソウル。だがもはやそのカードを見ることすらせず、今さっき裏側になったモンスターたちをまた攻撃表示に変更していく。それに対して三沢はエンド宣言以降一言も喋らず、じっと静かな目でフィールドを見つめている。
「バトルダー・フライ・ヘル、裏側になったウリアに攻撃シロ！」
フライ・ヘルが、その名の通り空中を植物とは思えないほど機敏な動きで飛来するそしてその牙が、裏側のカードに収められたウリアにかぶりついて……次の瞬間、灰になって燃え尽きた。
「エ？」
捕食植物フライ・ヘル　攻４００（破壊）→神炎皇ウリア　攻３０００

ブラッド・ソウル　ＬＰ１７００→０

「エ？」

デュエルの敗者として、静かに全身が消えていく様子を何が何だかわからない、という様子で呆然と見つめるブラッド・ソウル。やがてその視線が、三沢の場に１枚表になったカードの上で止まった。

「最終……突撃……」

「……命令」

セリフの後半を、僕が受け継ぐ。三沢が最後に発動したカードは、最終突撃命令。発動したが最後全てのモンスターを表側攻撃表示で固定する、強力だが諸刃の剣ともなる永続トラップの１枚だ。

「ウリアの弱点といったか？そんなもの、使い手の俺が一番よく理解しているさ。そこが狙われやすいウィークポイントなら、当然対策も取ってある。それがこのカード、最終突撃命令だ」

「そん……ナ……」

その言葉を最後に、消えていくブラッド・ソウル。その姿が完全に風にかき消されたのを確認し、三沢がこちらを向いた。ちょうどその時、僕の作業も終わりを告げた。たまたま繋いだコードがよほど大事な物だったらしく、いきなりどこかの画像が電線と電

線の間に投影されたのだ。その画面の向こう側の人物の顔を見た瞬間、三沢の顔色が変わる。僕に対する礼もそこそこに、かぶりつかんばかりの勢いでその画像の前に陣取った。

『誰か、聞こえるか！誰か、この通信を聞いている者はいないのか!?』

「博士！俺です、三沢です！」

博士、との呼称を聞いて、僕もそれが誰なのかをようやく理解できた。あのおじさんこそツバインシュタイン博士……おそらくは人間の中で誰よりも、このモンスターが存在する異世界について詳しいであろう人物だ。

ターン９０　科学水龍と神の雷

『いいかね三沢君、我々は～……』
「はい、博士！」
　ついに僕らの元いた世界とのコンタクトに成功した……のはいいけれど、ツバインシュタイン博士と三沢の会話は専門的すぎて門外漢の僕には何がなんだかさっぱりわからない。まあ、三沢本人が理解できているのだからそれでいいだろう。
　それよりも、僕には気がかりなことがあった。先ほど突然地面からそびえ立ったあの何本もの柱、どうも嫌な予感がする。
「おい、清明！」
「オブライエン！」
　そのタイミングで丁度来てくれたのはオブライエンとそのゆかいな仲間たち。ブルーベレーとか何とかいうチーム名で呼ばれる、オブライエン本人がこの世界に来てから突貫工事で鍛え上げた選りすぐりの猛者たちだ。そのブルーベレーがサッと発電所の周囲を囲むように散らばり、一瞬の隙も見せずに警戒態勢に当たる。その様子を見て頷いたオブライエンが、見張りの仕事を取られて一気に暇になった僕に語りかける。

「すまなかったな、清明。まず結論を言うと、やはりあのデュエルは囮だった。マルタンの狙いは発電所でも食料でもなく、あの柱の根元にあるらしい。すでに十代が彼を追っている」
「十代が？１人で？」
　多分、十代なら１人でも勝つだろう。彼はそういう男だ。僕が今から追いかけたとしてもできる事なんてせいぜい露払いがいいところだろうし、それ以前に足を引っ張る可能性すらあるだろう。その話題はそれまでにして、１つ気になることについて聞いてみた。
「そういえばオブライエン、ゾンビ生徒ってどうなってるの？ちょっと減ったりとかしてない？」
　ついさっき三沢は、明らかにマルタンの息のかかったコントロール奪取能力持ちの悪魔族カード、憑依するブラッド・ソウルを撃破した。もしこれで生徒たちのゾンビ化が解けているなら、それに越したことはない。
　だが、オブライエンはそんな希望的観測に対してあっさりと首を横に振った。
「駄目だな。あの３人は正気に戻ったようだが、むしろその後で不意を突かれて襲われ、ゾンビ化した生徒が何人かいる。ちゃんとした数はまだ把握できていないが、楽観はできないだろう」

「そう……」

となると、他にもまだ洗脳担当のモンスターが潜んでいるのだろうか。だとすると、それをいちいち探すよりも頭、つまりマルタン自身を直接叩く方がよさそうだ。十代には、いつも負担ばかりかけてるけど。

すると後ろの通信で聞き覚えのある声がした。ぼやけた映像を見ると、そこには見覚えのある顔２つが。

『清明！』

「夢想！それにエド！」

『僕をおまけ扱いとは、相変わらずいい根性だなお前は。まあいい、今の話は聞いていたか？すぐテニスコートに向かってくれ』

相変わらず年下とは思えないほどデカい態度のエドがなんか言ってるけど、んなもん無視だ無視。たかだか数日顔を見てないだけなのに、なんだかもうずいぶんと顔を見ていないような気がする。

「夢想……」

何か言おうと思っていたはずなのに、何もセリフが出てこない。顔を見たら言いたいことはいくらでもあったはずなのに、その全てが吹き飛んだ。天上天下古今東西、男は美少女の涙にゃ弱いって相場が決まってるもんよ。

『よかった……本当によかった……って、私……！』

「……ごめん」

　申し訳なさや嬉しさなどがこみあげてきていっぱいになり、博士やエドの目も気にせず泣きじゃくる夢想の顔を直視できず、目を逸らしてそれだけ返すのが精一杯だった。多分放っておくといつまでもそうしていただろうから、そのあたりで一度映像の前から引き離してくれた皆にはむしろ感謝すべきだろう。

「……ゴホン。では博士、もう一度確認します。見つかったレインボー・ドラゴンの石板からカードが完成しだいこちらの世界に転送装置を使って送り込み、その精霊の力を利用してアカデミアを元の場所にワープさせる。ただしレインボー・ドラゴンのカードを送るためには膨大なデュエルエナジーが必要となるため、こちらとそちらの世界でそれぞれデュエリストを用意してそのエナジーを賄うためにデュエルさせる……これでよろしいですね？」

『ワシにもこんな青春があったもんじゃのう……いや、失礼した三沢君。その通り、これで理論上は完璧じゃ。これで君たちを、この世界に帰還させられる。ただ次元の裂け目はとても不安定なものであり、失敗の可能性を少しでも抑えるためになるべく迅速に行動してもらいたい』

「はい、博士。よし、テニスコートに行くぞ！」

「ブルーベレー、お前たちもついて来い。俺たちも行くぞ！」
　テニスコートに向けて全員が出発する。僕もついていこうとして、もう1度だけ振り返った。またこちらを覗き込んでいた夢想と再び目が合い、どうしていいかわからず咄嗟に親指を立てていた。それを見て一瞬あっけにとられた顔をするも、優しく微笑んで同じくサムズアップで応える夢想。そこで発電システムの調子が一時的に悪くなったらしく、画像が急に乱れて何も見えなくなった。砂嵐状態のテレビのようにザーザーと無意味な音が流れたままの映像に背を向けて、すでにいくらか先行しているメンバーと合流しに向かった。……本当駄目だなあ、僕。ヘタレとか臆病とか言われても言い返せそうにないや。
『ヘタレ。臆病。これでいいか、マスター？』
「……そういうのはいらないです」
　なんでこの神様からナチュラルに悪口言われなきゃいかんのだ。流石に空気読めてなかったと反省してくれたのか、それ以降向こうからコンタクトは取ってこなかった。

「そんな……あいつらは……！」
「嘘、でしょう……？マルタン、本当にあの封印を……」

僕や明日香が言葉を失ったのも、無理はないと思う。あれからブルーベレーの皆さん、そしてクロノス教諭という多大な犠牲を払いながらもなんとかゾンビ生徒たちを潜り抜けテニスコートにたどり着いた僕たち。そこでツバインシュタイン博士の指示に従いデュエルエナジーを発生させるためのデュエル……向こうの世界からはヘルカイザー、こちらからはヨハンが出ることを決め、たまたまナポレオン教頭がアカデミアに借り受けていたデュエルシステムの機械を使っての史上初の試み、次元を隔ててのデュエルが行われようとしていた。お互いにデュエルの準備もしっかり完了し、広いスペースが必要だから、とかそんな程度の理由でドーム状の屋根を開いて……その結果、すでに解放された3幻魔のうち三沢のところに居るウリアを除く2体、ラビエルとハモンの実体化した姿をばっちり見上げることになっていた。

「こっちはもうデュエルするだけだってのに……！」

ヨハンの声には早く元いた世界に帰りたい、という焦りや初めて見る3幻魔への畏怖の他にも、ずっと待ち望んでいたレインボー・ドラゴンをまだこの手にできないのかという苛立ちが見え隠れしている気がする。まったく、こんな時でもデュエル馬鹿ってのはこうだから困ったものだ。

よく見ると3幻魔の足元には、左腕が怪物のような奇妙な形になっているマルタンがいる。そのマルタンと僕らの目が合うと、何事か頭上のラビエルとハモンに向かって話

しかけた。すると2体の幻魔がそれに頷いてそれぞれ青と黄色のエネルギーの塊を放出し、それがかわす間もなく僕らの目の前まで来て光と同じ色のマントをつけた人型の悪魔……幻魔の殉教者、と呼ばれる姿になる。そのうちの1体、ラビエルの放った青マントの殉教者が口を開いた。

「久しぶり、だな。遊野清明」

「ああ、まったくだね。もう2度と会うことはないと思ってたんだけど?」

忘れもしない1年の最後、セブンスターズとの戦いに始まった闇のデュエルの日々、そしてその締めくくりとなったラビエルとの死闘の記憶が甦る。思えばあの時も、こうして殉教者の姿を取ったラビエルとデュエルしたんだっけか。

「私がその名を覚えた人間は、お前ただ1人だけだ。光栄に思うがいい」

「そりゃどうも、だ」

あっちはそう言うが、僕にとってもラビエルの名前は忘れられない。なにせあのデュエルは僕にとって初めての、最終的に勝利できなかった闇のデュエルだ。チャクチャルさんの力をもってしてさえ、あの時の僕には引き分けるだけで精一杯だった。その結果魂を抜かれたはずの僕が、なぜこうして今を生きているのか……ユーノもチャクチャルさんも何も教えてくれないけど、なんとなくあの2人が何かしてくれたような記憶がおぼろげながらある。

「我々がこうして解放されたのは、お前たちのやろうとしていることを止めるためだ」
「つまりマルタン様が、お前らを倒せとさ。もっとも我の狙いはただ１つ、裏切り者のウリア！お前を倒す、ただそれだけだ！そのご自慢の機械を粉々にされたくなければ、我の挑戦を受けろ！」
　そう言って黄マントの殉教者が三沢を……より正確に言えば、三沢のデュエルディスクとその中に眠るウリアをすごい剣幕で指差す。どうやらそれを受けて、三沢とウリアが何かテレパシーでの会話をしたらしい。覚悟を決めた表情でデュエルディスクを構え、ハモンの方へと歩きだす。それを止めたのは、意外にも向こう側で見ていたツバインシュタイン博士だった。
『待ちたまえ、三沢君！』
「申し訳ありません、博士。しかし奴の狙いは俺です、幸いここから先の操作に専門知識は必要ありませんし、俺が席を外しても……」
『違う、そういうことを言っているのではない。この転送システムはデュエルアカデミアほど巨大な質量を持つ物体を運ぶにはデュエルエナジーが足りていないが、これぐらい小さなものならば今の状態でも飛ばすことができる！戦う前にこれを受け取ってくれ、三沢君！』
　そう言って何かケースのようなものを投げる博士。弧を描いて転送装置の真上に飛

んで行ったそれが装置から放たれた光を浴びると、次の瞬間にはテニスコートの真上に突然現れた。重力に従い落ちてきたそれをキャッチし、中身を確認した三沢の顔がパッと輝く。

「これは、俺のデッキじゃないですか！」

『うむ。やはり使い慣れたものが一番良いじゃろうからな。健闘を祈っておるぞ、三沢君』

「ありがとうございます、博士！」

これまで使っていた借り組みで寄せ集め状態だった炎属性のデッキを引き抜く三沢。そこからウリアのカードを取りだして送られてきた新たなデッキに入れ、それをデュエルディスクに差し込んだ。

「さあ、待たせたな」

「まずはウリアとそのおまけを倒す。それが終われば、我に屈辱を味あわせたあの女を……」

あの女、というのは夢想のことだろう。綺麗な逆転勝利だったからねえ。しかし三沢をおまけ扱いとは、大胆というか傲慢というか。

ともかく2人のデュエリストが、特に示し合わせる風もなくテニスコートの両端に分かれる。そこから互いに構えを取るのも、ほぼ同時だった。

「「デュエル！」」
「先攻は俺からだ！カードを３枚セットし、カードカー・Ｄを召喚！召喚したこのカードをリリースすることでデッキからカードを２枚ドローし、このターンのエンドフェイズになる。俺はこれで、ターンエンドだ」
　先手を打った三沢は、まずドローから仕掛けた。フィールドに現れすぐ消えた平べったい車の効力により手札を増やし、３枚の伏せカードでハモンのターンを迎え撃つ準備を固める。
「我のターン！永続魔法、天変地異！さらに永続魔法、デーモンの宣告を発動！」
　殉教者の背後に、僕らには読めない悪魔文字がびっしりと書かれた巨大な石板がせり上がる。だけどそれより問題なのは、あの天変地異のカードだ。天変地異とデーモンの宣告が揃った時、そのプレイヤーは１ターンに１枚のカードをドローできるのと等しい……なにせ超有名なコンボだ、僕だって知っている。
「天変地異の効果により、互いのプレイヤーはデッキを表側表示にする。そしてデーモンの宣告は１ターンに１度我のライフ５００を支払うことでカード名を宣言し、デッキトップがそのカードならばそのまま手札に加えることができる。このターンは……ほう、強者の苦痛か」
　天変地異の効力でデッキが表側になっているこの状況では、どんな馬鹿だってデッキ

トップの中身なんて外すわけがない。当たり前のようにデッキの一番上にあったカード、強者の苦痛を手札に入れた。

ハモン　ＬＰ４０００→３５００

「さらに我は番犬―ウォッチドッグを召喚。バトルフェイズに入るが、このカードは攻撃力０なため攻撃はせずメイン２に移る」

番犬―ウォッチドッグ　攻０

「ウォッチドッグは召喚したターンのメイン２にのみ効果を使うことができる。手札の魔法カード１枚を捨て、デッキから永続魔法１枚を場にセット。この効果で我は２枚目のデーモンの宣告をセットしそのまま発動、５００ライフを払いバッド・エンド・クイーン・ドラゴンを宣言。当然これも手札に加える。カードをセットしてターンエンドだ」

ハモン　ＬＰ３５００→３０００

「止められない、か……」

３枚も伏せてあるのだからなにか１枚ぐらい妨害系のカードがあるかとも思ったが、現実はそううまくはいかないようだ。全ての効果を素通しした結果、ハモンのデッキは大きく回転し始めてしまった。

三沢　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：３（伏せ）
ハモン　ＬＰ３０００　手札：５
モンスター：番犬―ウォッチドッグ（攻）
魔法・罠：デーモンの宣告
　　デーモンの宣告
　　天変地異
　　１（伏せ）

「俺のターン、ドロー！来い、ハイドロゲドン！」

久々に見るその姿は、水素をモチーフとした４つ足の恐竜。となるとあれは間違いない、６つの属性デッキの中でも三沢が最も愛用する、ウォーター・ドラゴン軸の水属性デッキだ。

ハイドロゲドン　攻１６００

「……あれ？」

攻撃力ではハイドロゲドンが上なうえ、あのカードはモンスターを戦闘破壊するたびに同名カードをリクルートする能力がある。つまりこのままハイドロゲドン２連撃を加えれば三沢の勝利……なのだが、なぜかその本人が動こうとしない。あの伏せカードがいかにもな罠なのは僕だって見ればわかる。だけど、案外ブラフの可能性だってある

しとりあえず攻撃してみないと始まらない、なんて僕なんかは思うけど。
そして躊躇いつつも、最終的には三沢も同じ結論に達したらしい。
「バトルだ、ハイドロゲドン！ハイドロ・ブレス！」
「リバースカードオープン、レインボー・ライフ！手札１枚をコストとし、このターン我の受けるあらゆるダメージを回復に変換する！」
ハイドロゲドン　攻１６００→番犬―ウォッチドッグ（破壊）
ハモン　ＬＰ３０００→４６００
「しくじったか……？だが、ハイドロゲドンのモンスター効果発動！相手モンスターを戦闘破壊し墓地に送ったことで、デッキからハイドロゲドンを特殊召喚する！」
ハイドロゲドン　攻１６００
本来ならば追撃をするはずのハイドロゲドン。だがレインボー・ライフの効力はターンの間ずっと続くため、ここで攻撃したらみすみす敵のライフを増やすだけになってしまう。
「それで終わりか？ならば我のターン、ドロー！……ほう、どうやらお遊びは終わりのようだな。我はデーモンの宣告の効果を２回使い、降雷皇ハモンとツインツイスターをそれぞれ手札に加える！」
「降雷皇……ハモン！」

ハモン　ＬＰ４６００→４１００→３６００

ついに手札に加えられた３幻魔の一角、ハモン。そしてその特殊な召喚条件は、すでにフィールドに揃ってしまっている。

「まずは手札より、バッド・エンド・クイーン・ドラゴンのモンスター効果！自分フィールドに永続魔法が３枚以上存在するとき、このカードは手札から特殊召喚できる！さらに自分フィールドから永続魔法３枚を墓地に送ることで、我はフィールドに降臨する！出でよ、降雷皇ハモン！」

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　攻１９００

降雷皇ハモン　攻４０００

「早い……！」

思わずそんな声が出る。【天変地異コントロール】のギミックをフルに生かして必要なカードを高速で手札に揃え、バッド・エンド・クイーン・ドラゴンと降雷皇ハモンの永続魔法３枚というサーチの利きにくい召喚条件をこれだけのターンで満たしてくるだなんて。三沢ですらようやくハイドロゲドン２体を並べただけで、まだエースモンスターのウォーター・ドラゴン召喚の条件すら満たしていないというのに。

改めて実感する。あの時は相手が夢想だったから印象がぼかされていただけで、このハモンもやはり３幻魔……凄まじいまでの実力者だ。どうして僕の周りには、人格に一

癖もふた癖もあるくせにやたら強い奴ばっかり集まるんだか。
「行け、バッド・エンド！ハイドロゲドンを破壊しろ、トラジェディ・ストリーム！」
「くっ……リバース発動、デモンズ・チェーン！これにより降雷皇ハモンは効果が無効となり、攻撃が不可能になる！」
「愚かな、先ほど手札に加えたカードを忘れたか！速攻魔法、ツインツイスターを発動！手札から強者の苦痛を捨て、フィールドの魔法か罠を２枚まで破壊する！デモンズ・チェーン及び真ん中の伏せカードには、そのまま墓地へ送られてもらおうか！」
「ぐっ！」
　２本の竜巻が巻き起こり、三沢の発動した２枚のカードがそれに飛ばされて消えていく。だが攻撃封じのコンボが破られてなお、三沢の目から闘志が消えることはなかった。
「もちろん忘れるわけがない。俺はツインツインスターにさらにチェーンして破壊されるカード、強欲な瓶を発動していた。これによりデッキからカードを１枚ドローできる。そして今俺が発動したデモンズ・チェーンは、このカードを通すための囮だ！リバースカードオープン、銀幕の障壁（ミラーウォール）！このカードが存在する限り、相手攻撃モンスターは銀幕に写る己自身を攻撃し、攻撃力が半分となる！」
　バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　攻１９００→９５０（破壊）→ハイドロゲド

ン　攻１６００
ハモン　ＬＰ３６００→２９５０
「くだらん真似を……！だが、少なくとも貴様の場の永続罠の数はまだ1枚のみだな」
「確かにな、だがこのくらいは必要経費だ。さらに相手モンスターを破壊し墓地へ送ったハイドロゲドンの効果で、デッキから3体目のハイドロゲドンをさらに呼び出させてもらおうか」
ハイドロゲドン　守１０００
「だが、たとえ攻撃力が半減しようと我が一撃ならば！喰らいて滅びよ、失楽の霹靂！」
大量の雷が銀幕の壁を叩き割り、今度こそハイドロゲドンに届く。確かに数値的なダメージこそだいぶ抑えられたものの、それでもこの世界で3幻魔の一撃だ、三沢の体にかかる負担は想像するだけで恐ろしい。
降雷皇ハモン　攻４０００→２０００→ハイドロゲドン　攻１６００（破壊）
三沢　ＬＰ４０００→３６００
「さらに我が特殊能力発動。相手モンスターを葬った時、追加で１０００ポイントのダメージを与える！受けて見よ、地獄の贖罪！」
「ぐわあああっ！」
三沢　ＬＰ３６００→２６００

「どうした、これで終わりか？ならばカードを１枚伏せ、永続魔法、強欲なカケラを発動。ターンエンドだ」
三沢　ＬＰ２６００　手札：３
モンスター：ハイドロゲドン（攻）
　　ハイドロゲドン（守）
魔法・罠：銀幕の障壁
ハモン　ＬＰ２９５０　手札：３
モンスター：降雷皇ハモン（攻・銀幕）
魔法・罠：強欲なカケラ
　　１（伏せ）
「ぐ……俺のターン！このカードは……よし、銀幕の障壁は維持コストとして毎ターン２０００のライフを要求するが俺はそのライフを払わず、このカードを自壊させる」
三沢を守るために張られていた鏡の幕にひびが入り、粉々に砕け散る。と同時に、障壁によって減らされていたハモンの攻撃力がまたしても元に戻ってしまう。
降雷皇ハモン　攻２０００→４０００
「なんだ、まだライフは残っているのに自壊させるのか？」
「黙って見ていろ！俺はオキシゲドンを召喚し、魔法カード……ボンディング―Ｈ２Ｏ

を発動！フィールド上に存在する２つの水素（ハイドロゲドン）と１つの酸素（オキシゲドン）を結合させ、デッキから水の化身を呼び起こす！出でよ、ウォーター・ドラゴン！」

ウォーター・ドラゴン　攻２８００

満を持して現れた、三沢のエースたる水の化身。だが銀幕の障壁が消えて攻撃力４０００になったハモンの前では、その攻撃力も届かない。これなら障壁を維持していれば……そう思った直後、彼が別のカードを手札から出した。

「装備魔法、幻惑の巻物を発動。このカードを降雷皇ハモンに装備することで、その属性を俺が自由に決めることができる。そして炎属性を宣言することで、ウォーター・ドラゴンの効果を適用。このカードが存在する限り、あらゆる炎属性モンスターと炎族モンスターの攻撃力は０となる！」

降雷皇ハモン　光→炎　攻４０００→０

「バトルだ！ウォーター・ドラゴンで降雷皇ハモンに攻撃、アクア・パニッシャー！」

「小癪な真似を……だがまだ甘い。カウンター罠、攻撃の無力化を発動！攻撃は無効となり、バトルフェイズは終了する！」

「そんな、三沢の攻撃がかわされた!?」

大きく広げられたハモンの黄金の翼が盾代わりとなり、ウォーター・ドラゴンの吐き出した水のブレスを弾いて逸らす。明後日の方向へと飛んで行った水流が、砂漠のはる

か遠くに着弾して重い音が響いた。
「これで、ターンエンドだ……」
　ウォーター・ドラゴンの効果が生きている以上まだ絶体絶命というほどでもないが、今のターンでとどめを刺し損ねたことを悔やみつつターンを終える三沢。一方ハモンは今のカウンターに気をよくしたのか、余裕の面持ちでカードを引き……僕らにとっては運のいいことに、引いたカードはそのまま召喚できるモンスターではなかったらしい。少しだけイラッとしたままに、自らの分身を再び立ち上がらせる。
「スタンバイフェイズ、我のフィールドから永続魔法１枚を墓地へ送ることでバッド・エンド・クイーン・ドラゴンは蘇生が可能となる」
　バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　攻１９００
　先ほど返り討ちに会い葬られたドラゴンが、強欲なカケラを墓地に送ることでまたもやフィールドに現れる。最初からドロー目的じゃなくて、この蘇生効果を使うためだけに使ったということか。
「速攻魔法、サイクロンを発動。我はこのカードで幻惑の巻物を破壊する」
　幻惑の巻物が破壊され、ハモンの属性が炎から光に戻ってしまう、これでせっかくの属性変更も台無し、ウォーター・ドラゴンの効果から逃れてしまった。
　降雷皇ハモン　炎→光　攻０→４０００

「バトルだ、我自身でウォーター・ドラゴンに攻撃！失楽の霹靂！」
降雷皇ハモン　攻４０００↓ウォーター・ドラゴン　攻２８００（破壊）
三沢　ＬＰ２６００↓１４００
「追撃の地獄の贖罪！」
「うおおおっ！」
三沢　ＬＰ１４００↓４００
テニスコート中に、三沢の絶叫が響く。無理もない、あの場で三沢が受けているのは、実体化した精霊による本物の雷撃なのだから。
「まだだ……！ウォーター・ドラゴンには、もう１つの効果がある！」
そう。ウォーター・ドラゴンは破壊されても、墓地からハイドロゲドン２体とオキシゲドン１体を蘇生する特殊能力を備えている。その３体のモンスターを壁にすれば、ハモンの攻撃は防げずともバッド・エンド・クイーン・ドラゴンのダイレクトアタックは受けずに済む。
ハイドロゲドン　守１０００
ハイドロゲドン　守１０００
オキシゲドン　守８００
「くだらんな。速攻魔法、エネミーコントローラーを発動！この効果によりハイドロゲ

ドンを攻撃表示に変更する！バトルだ、バッド・エンド！」
バッド・エンド・クイーン・ドラゴン　攻１９００→ハイドロゲドン　守１０００→攻１６００（破壊）
三沢　ＬＰ４００→１００
「バッド・エンドがバトルによりダメージを与えた時、相手は手札を１枚選んで墓地へ送り、我はカードを１枚ドローする。残った最後の手札１枚、墓地へと送ってもらおうか」
「……ああ、いいだろう」
確かにハモンの言うとおり、残り１枚しかない手札では選んでも何もあったものではない。デュエル序盤から使われることなくずっと手札にあったカードが、ゆっくりと墓地へ送られた。
これで三沢はハンドレス、対するハモンは今のドローも含めてまだ３枚も手札を残している。状況は不利……だけど、まだ負けたわけじゃない。きっと何かできる事があるはずだから、まだ三沢の目は死んでない。
三沢　ＬＰ１００　手札：０
モンスター：オキシゲドン（守）
ハイドロゲドン（守）
魔法・罠：なし

ハモン　ＬＰ２９５０　手札：３
モンスター：降雷皇ハモン（攻）
バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（攻）
魔法・罠：なし
「俺のターン、ドロー！」
最後の最後に三沢が引いた１枚のカード……それを、静かにフィールドに伏せる。あのカードがなんにせよ、次のハモンのターンで決着がつくだろう。
「このカードをセットして、ターンエンドだ」
「我のターン。我が一撃で残ったモンスターのうちどちらかを攻撃すれば、地獄の贖罪により貴様の敗北は確定する……結局ウリアの奴は出てこなかったが、まあいい。もはや考えることもあるまい、ハイドロゲドンに攻撃する！失楽の――――――」
「この瞬間、リバースカードオープン！」
ハモンが全身から走らせる稲妻が、三沢の目の前に出現した巨大な鏡に全て吸収される。その鏡は目の前の風景を模写するのではなく、かすかに覗いて見えるその中にはハイドロゲドンとオキシゲドンが１体ずつ写りこんでいた。
「馬鹿な!?」
「俺はフィールド上の２体のモンスター、ハイドロゲドンとオキシゲドンをゲームから

除外することで永続罠、ディメンション・リフレクターを発動した。このカードは発動後に闇属性レベル４の魔法使い族としてフィールドに特殊召喚され、その攻守は相手モンスター１体と同じになる」

ディメンション・ミラージュ　攻４０００　守４０００

鏡が吸収した稲妻のエネルギーを内部に溜め込み、自らの力へと変換していく。最初はうっすらと、だが次第に力強く、鏡そのものの表面が内部から光を放ち始めた。

「そしてディメンジョン・ミラージュは特殊召喚に成功した時、自らの攻撃力の数値分だけ相手プレイヤーにダメージを与える！これで終わりだ、降雷皇ハモン！」

臨界点を超えたエネルギーは破壊光線として真っ直ぐに解き放たれ、防御姿勢を取ったハモンの黄金色の翼をあっさりと突き破ってプレイヤーとしてのハモンを直撃する。

「ぐ、ぐおおお……!!」

ハモン　ＬＰ２９５０→０

「なぜだ、なぜ我が２度も人間ごときに……！」

『その理由を知りたいか？』

ソリッドビジョンが消えてゆく中、その場に倒れこむハモン。うわごとのようになぜ

だ、なぜだと呟き続けるその姿に、どこからともなく声が降り注いだ。
「……その声、ウリアか……フン、我の無様な姿を嗤いにでも来たか？」
『まさか。いいか、お前が敗北した原因はただ１つ。人間を侮っていたことだ』
「何？」
　ゆっくりとハモンを諭すウリアの声。僕らも、ラビエルも、誰も何も言わなかった。
『以前の私もそうだった、だからこそ敗れた。今回お前は私との戦いを求めるあまり、真の相手である目の前のこの人間のことを見ていなかった。だからこそ私はこのデュエルの前、この人間に密かに頼んだのだ。万一私のカードをドローしたとしても、このデュエルに限り私を召喚しないでくれと。案の定お前は常に心のどこかで私が場に現れることを意識してのデュエルしかできず、その結果実力を十分に発揮することができていなかった』
「それでは、まさか貴様は……！」
『ああ、そうだとも。バッド・エンド・クイーン・ドラゴンにより墓地に送られたカード、あれが私だ。お前はいつまでも手札で召喚条件を満たしていない私、そして墓地に送られ蘇生もできない私の幻影を無意味に意識し続けていたのだ』
「まったく……このハモンともあろうものが見事に裏をかかれた、ということか……」
　その台詞を最後に、黄マントの殉教者が最初にこちらへ飛んできたのと同じような黄

色い光となって砂漠の向こう、マルタンの方へと飛び去っていく。これで残る妨害役はラビエルただ1人、ここまで来たら僕も引くわけにもいかないだろう。
「ハモンめ。まあいい、遊野清明。いざ、あの時の決着をつけようではないか」
「……オーケイ。僕も1年前とは違うってことを見せたげるよ、っと！」
　あの時は引き分けに終わった相手。あれから丸1年と少しの間に、どちらがより成長できたのか。その答えを、今からカードに聞いてみよう。

ターン９１　鉄砲水と幻魔の皇者

「ラビエル……勝負の前に、ひとつ聞かせてもらおーか」
「ほう？」
「マルタンに憑いてるのが誰かは知らないけど、わざわざ荒事担当に三幻魔を復活させるなんて、なんでそんなに手のかかることをする必要があったのさ？いや、それだけじゃないか。プロフェッサー・コブラといいゾンビ軍団といい校舎にけしかけたウラヌスといい、マルタン自身はお膳立てばっかりで全然動こうとしてこない。強大な力を持つ精霊なのはわかるのに、だったらなんでそのご主人様は自分から動かないのさ」
　これは、実はずっと気にかかってきた疑問でもある。大量の精霊を使役するその力に加えてアカデミアごと次元移動指せるだけの実力を持っていながら、なぜかマルタンは……いや、あのオレンジ色の人影は決して僕らに直接攻撃してこない。十代に会いたい会いたいというのなら、それこそピンポイントで神隠しにでも合わせる方がよっぽど簡単なはずだ。なのに、それをしてこない。一から十まですることなすこと全てが回りくどいのだ。
　過去１度だけとはいえ、ラビエルと直接対峙した僕にはわかる。奴は嘘をつくような

タイプじゃない……少なくとも、この疑問に対する答えを持っているならば、それを誤魔化したりするような真似はしないはずだ。
「ククク……そうか、お前らは何も知らぬのか」
「だから聞いてるんだっての」
「まあよかろう。他ならぬ遊野清明、お前の頼みだ。我々の勝負の最中そんなくだらぬことに思考を裂いて興が冷めることがないよう、憂いは先に断っておいてやろう。とはいえ私も認めたくはないが、奴の力により封印を解かれた身……全てを口にすることはできないが、ヒントぐらいは与えておこう。奴は確かに強い、だが同時に、奴は誰よりも弱い。奴の最大の強みはその弱さにこそあり、それゆえもし私が奴と会いまみえることがあれば、奴に対し私は特に敗北するだろう」
「……そんなポエム聞きたくて聞いてんじゃないんだけどね。さっぱりわかんないんだけど」
　もっとこれこれこんな訳で～、とか説明してくれないと、僕の脳味噌じゃついていけない。ただ、『私は奴に特に敗北する』という部分が妙に引っかかった。日本語としてはむちゃくちゃだけど、言いたいことはわからんでもない。要するに、極端に相性が悪いってこと？確かラビエルの効果は、元からの高打点に加えさらに自軍モンスターの魂を文字通り生贄としてさらにその火力を増大させる力押しスタイルだったはずだ。そ

れがとくに相性が悪い……どういうことだろう。
「もうよかろう。これ以上私は口を割らぬ、もはや言葉は蛇足でしかない」
「そうね、僕もあの時の引き分けには納得いってないし、リターンマッチと洒落込ませてもらおうか……」
「「デュエル！」」
　しかし、まさかこうしてラビエルと再びデュエルするだけでも驚きだなんてもんじゃないのに、その舞台がこんな異世界だなんて、ねえ。人生何が起きるかわからないとはよく言ったものだけど、それにしたって限度ってもんがあるんじゃないかと思う。
「先攻は僕だ！永続魔法、補給部隊を発動！さらにフィッシュボーグ―アーチャーを守備表示で召喚して、この魚族モンスターの召喚をトリガーに手札のシャーク・サッカーの効果発動。出ておいで、サッカー！」
　フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
　シャーク・サッカー　守１０００
「まずはこれでターンエンド……かかってきな、ラビエル！」
　最低限の壁モンスターと、それが破壊されたとしてもその行動をトリガーとしてのドローを行う補給部隊。次の１ターンを耐えきることさえできれば、さらなる展開に繋げるルートもすでに考え付いている。我ながら、これは悪くない立ち上がりだ。

「私のターン。何だそれは、壁でも出したつもりなのか？だとすれば……遅いな」
「え？」
ラビエルが心底冷たい声で告げたその言葉が、まるで死刑宣告のように胸に突き刺さった。嫌な予感が全身を包み、ふと気がつけば気づかぬうちに出ていた冷や汗が首を伝っていくのを感じた。
「魔界発現世行きデスガイドを召喚し、その効果を発動する。これによりデッキからレベル３の悪魔族、メタボ・サッカーを特殊召喚」
ラビエルの姿からは想像もつかない、赤いショートヘアの女性型モンスター。営業スマイルと共に手を振ると、その背後からのっそりと不気味な姿の悪魔が這いずるように現れる。
魔界発現世行きデスガイド　攻１０００
メタボ・サッカー　攻８００
「魔法カード、二重召喚（デュアルサモン）を発動。このターンに限り召喚権を１つ増やし、それを利用し２体のモンスターをリリース。怨邪帝ガイウスを召喚し、アドバンス召喚時の効果を発動。闇属性モンスターをリリースしたことで全フィールドから合計２枚までのカードを選択しゲームから除外し、相手プレイヤーに１０００ポイントのダメージを与える。消え去れ、雑魚どもよ」

「サッカー!・アーチャー!・」
ガイウスがその両腕にそれぞれ１つずつ闇の塊を発生させ、それを無造作に投げつける。光さえも歪んで消える得体の知れない暗黒は正確に僕の２体のモンスターを捉え、あっという間もなくその存在ごと消え去った。
怨邪帝ガイウス　攻２８００
清明　ＬＰ４０００→３０００
「さらに、闇属性モンスターのアドバンス召喚に利用されたメタボ・サッカーの効果を墓地から発動。アドバンス召喚のためのリリース不可なメタボトークン３体を、全て守備表示で特殊召喚する」
ガイウスの足元の地面が膨れ上がり、植物が成長するのを早回しで見ているかのようにそこから先ほどリリースされたメタボ・サッカーそっくりのモンスターが３体伸び上がる。
メタボトークン　守０
メタボトークン　守０
メタボトークン　守０
「これで３体のモンスターが揃った……」
ああもう、ここまで見せられれば嫌でも察しが付く。さっきまで雲一つなかったはず

の空にはいつの間にやら暗雲立ち込め、不穏な雷鳴が遠くの方でバックサウンドのごとく低く響きわたる。

「悪魔族モンスター3体をリリースすることで、私自身は特殊召喚できる！全てを潰す破壊の御子、幻魔皇ラビエル！」

メタボトークン3体が消え、その代わりに巨大な人型の魔神が大地を割って地の底からその姿を明らかにする。

……なるほど、言うだけのことはある。確かにこれはあまりにも早い。しかもご丁寧にその隣にまで最上級モンスターを立たせる徹底ぶりだ、あの時よりもはるかに腕が上がっている。

幻魔皇ラビエル　攻４０００

「これで終わりとは、私の復讐の日々も報われぬ気がするが……もはや語ることはないな、消え去れ人間よ！奥義、天界蹂躙拳！」

「清明っ！」

後ろから誰かの声が聞こえたが、振り返らずに大丈夫だと軽く手を振りかえす。実際そのラビエルの拳は風圧だけでテニスコート中の窓という窓をすべて叩き割りながらも、がら空きになった僕の体を捉えることはなかった。瞬間的に目の前に組み上がった氷の壁が、その一撃に対する盾となったのだ。

「……ほう？」
「手札から、ゴーストリック・フロストの効果発動。相手のダイレクトアタック時にこのカードを裏側守備表示で特殊召喚し、さらにその攻撃モンスターをセット状態に変更する……悪いけど、僕だってあの日からはずっとずっと進化してるのさ」
???（ゴーストリック・フロスト）守１００
「なるほどな……いいだろう、先ほどの非礼は詫びておこう。だがこの戦い、勝利を得るのは私だ。ガイウスで攻撃」
怨邪帝の太い腕に薙ぎ払われ、防寒具を着た雪だるまが一瞬で吹き飛ぶ。これは防げない攻撃で、どうしようもない……ワンキルを防いでくれたフロストと、このカードを僕にくれた稲石さんに心の中で礼を言う。
怨邪帝ガイウス　攻２８００→???　守１００（破壊）
「僕のモンスターが破壊されたことで、補給部隊の効果発動。これにより、カードを１枚ドロー！」
「私はこの手札を伏せ、ターンエンドだ」
強がっては見せたけど、状況はすこぶるつきで悪い。僕の計画だと本来は、２体のモンスターのうちどちらかでも生き残ればそれを起点に２体のモンスターを並べ、さらにそれをリリースして超古深海王シーラカンスをアドバンス召喚、その効果である魚介王

の宣告でデッキの魚族を大量リクルートするつもりだった……まさか2体とも、しかも除外されるとは。これだとアーチャーの蘇生能力も使うことができない。

清明　ＬＰ：３０００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：補給部隊

ラビエル　ＬＰ：４０００　手札：１

モンスター：幻魔皇ラビエル（攻）

怨邪帝ガイウス（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

「僕のターン、ドロー」

計画は変更だ、どう動くにしても要となるアーチャーがいなくなった以上、このラビエル相手に悠長に2体のモンスターを召喚権を残したままで並べることはまず無理だろう。幸い、仕切り直しにはもってこいのカードが手札に来てくれた。

「魔法カード、強欲なウツボを発動。手札から超古深海王シーラカンスとオイスターマイスター、この2体の水属性モンスターをデッキに戻してシャッフルしてカードを3枚ドロー！」

最初期のころから共に戦ってきてくれたモンスター2体をデッキに戻し、改めてカー

ドを引き直す。僕の思いは、どうやらデッキに伝わったらしい。
「モンスターをセット、カードを１枚伏せてターンエンド」
「ドロー。１ターンの猶予も、結局期待はずれか？ガイウス、露払いは任せるぞ」
　ガイウスの腕がまたもや振りぬかれる。ガイウスから攻撃してこのモンスターを撃破、ラビエル自身の一撃でとどめを狙っているのだろう。もちろん戦術としては極めて真っ当だし、立場が逆なら僕だってそうするだろう。
　ただこの場合、普通に殴ってきてもらうことそのものが僕の手のひらの上なだけで。
　怨邪帝ガイウス　攻２８００→???　守１０００（破壊）
「補給部隊の効果で、また１枚ドロー」
「再び手札誘発でも引けたのか？もう終わりにしよう、この天界蹂躙……」
　そこまで言ったところで、我慢できなくなってにやりと笑う。
「させるかぁ！引っかかったね、ラビエル！僕が今伏せたモンスターは、グレイドル・コブラ！このカードは戦闘破壊された時に相手モンスター１体を選び、そのモンスターに寄生してコントロールを得る！」
　ガイウスの拳に押しつぶされ、銀色のしぶきとなったコブラがガイウスを飛び越え、その向こう側の総大将……ラビエルめがけて飛んでゆく。幻魔を幻魔で倒すとしたら、これほど皮肉の利いた最後もないだろう。

そして無事に付着し、グレイドルとしての能力をいかんなく発揮しにかかるコブラ。だが喜びもつかの間、何か様子がおかしいことに気が付いた。普通の相手ならばとうに体内に潜り込んでいるはずの銀の液体が、表面を覆うのみで進まない。ラビエルの方も寄生完了を示す銀の紋章が浮かび上がらないし、片目が銀色のオッドアイになるはずの瞳は依然として両方とも赤い光を放つままだ。

やがてラビエルがゆっくりと腕を上げ、自らの体に着いたコブラをひと払いする。すると驚いたことに、コブラだった銀の液体が一斉に薙ぎ払われて地面に落ちて消えていった。

「コブラ!?」

「カウンタートラップ、闇の幻影。闇属性を対象としたカードの効果を無効にし、破壊する!」

「ラビエル……は、そういや闇属性だったね。やってくれるじゃん……だけど、僕もそれなりにしぶといんでね!リバースカードオープン、強化蘇生!この効果により墓地のコブラをレベル1、攻守１００ポイントアップした状態で特殊召喚する!」

グレイドル・コブラ　☆３↓４　守１０００↓１１００　攻１０００↓１１００

ラビエルの巨体に比べると、あまりにちっぽけなコブラの威嚇。だがそれは、今まさに動こうとしていた幻魔の皇を停止させるには十分な効力を発していた。

「いいだろう、カードを伏せてターン終了だ」
さて。グレイドルの何よりの強みは、この初見殺しの才能だ。それが回避された以上、ラビエルもこれからはでたらめに攻撃を仕掛けるような真似はしてこないだろう。ただセットするだけで相手の攻撃待ちなんて雑な戦法は、もう２度と通用しない。そういう意味ではこのターンは何とかしのいだのではなく、むしろ仕留めきれなかった致命のターンともいえる。
次のターンからが、本当の勝負だ。
清明　ＬＰ：３０００　手札：２
モンスター：グレイドル・コブラ（守・強化蘇生）
魔法・罠：補給部隊
　　強化蘇生（コブラ）
ラビエル　ＬＰ：４０００　手札：１
モンスター：幻魔皇ラビエル（攻）
　　怨邪帝ガイウス（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「僕のターン！」
引いたのは……このカードか。せめてインパクト、グレイドル・インパクトのカード

さえ来れば、コブラと相打ちであのラビエルを倒すことも夢ではないのだが、引けない物はどうしようもない。それに、このカードだって悪い物じゃない。今は使うべきじゃないというだけで。

「このまま、ターンエンド……」

「私のターン。まずはクリッターを召喚し、私の効果を発動。その魂を贄とし、攻撃力をこのターンの間吸収する」

クリッター　攻１０００

幻魔皇ラビエル　攻４０００→５０００

「いくら攻撃力を上げたところで、コブラは突破できないよ！」

言うだけ言ってはみたけれど、無論僕だってそこまで馬鹿じゃない。ラビエルの狙いは攻撃力を上げることではなく、その副産物……クリッターの特殊効果の能動的な発動だ。

「クリッターはフィールドから墓地に送られた時、デッキから攻撃力１５００以下のモンスター１体をこのターンの使用不可という制約付きでサーチすることができる。私はこれで、Ｄ．Ｄ．クロウをサーチする」

デッキ圧縮を果たすラビエル。なるほど、確かに墓地から効果を発揮するグレイドルにとっては、フリーチェーンでこっちの墓地を除外してくるあのカラスは天敵ともいえ

る。なかなかいやらしい準備をしてくれたが、だがそれだけでは済まない、済まさないとその瞳が物語っていた。まさか、もう仕掛けてくるっての!?

「私はこのターン、バトルを行う!行け、ガイウスよ!そしてこの伏せてあった速攻魔法、禁じられた聖衣を発動する。この効果を受けた私の分身はこのターン攻撃力６００ポイントと引き換えにカード効果により破壊されず、さらにカードの対象とならない!」

「なっ……コブラ!」

幻魔皇ラビエル　攻５０００→４４００

怨邪帝ガイウス　攻２８００→グレイドル・コブラ　守１１００（破壊）

対象を取るグレイドルの効果が、先ほどからピンポイントでカウンターされている。実際この寄生の際にいちいち対象を取ってしまう点はグレイドルたちの数少ない弱点だけど、まさかその点をこんなに早く見抜かれるとは。それにガイウスの攻撃でコブラが破壊されたことで、強化蘇生までついでに破壊されてしまった。

だけど、まだ僕にはドローが残されている。

「ラビエルが奪えなくても、グレイドル・コブラの効果をガイウスに発動!さらにチェーンして補給部隊の……」

「速攻魔法、サイクロン!いい加減そのドロー加速に付き合うのも飽きたわ!」

このラビエルの詰めの判断が、僕の命を繋いだといっていい。もしもドローを放っておいて装備カード状態のコブラを破壊されていたら、僕にはもう攻撃力５０００のラビエルによるダイレクトアタックを止める手段はない。どうやら最初のゴーストリック・フロストがよほど気に食わなかったらしく、確実に手札誘発を引く可能性を潰しに来たようだ。もう僕のデッキに眠るカードの中で、相手の攻撃に手札から干渉できるカードは存在しないというのに。

そしてそのおかげで、コブラはガイウスの体を乗っ取りにかかる。ラビエルの側にもこれ以上の防御札はないらしく、ようやく寄生が完了した。

「立て、ガイウス！」

「承知の上よ！天界蹂躙拳、塵芥へと還るがよい！」

幻魔皇ラビエル　攻４４００→怨邪帝ガイウス　攻２８００（破壊）

清明　ＬＰ３０００→１４００

「ぐっ……！」

いくら攻撃力２８００を誇るガイウスとはいえ、ラビエルの前ではただの的にしかならない。寄生したコブラもろともその拳の前に塵一つ残さず消失し、今度こそ僕のフィールドは空になった。

「ターンを終了する。そしてこの時、私の効果と禁じられた聖衣の効果は同時に消える」

幻魔皇ラビエル　攻４４００↓４０００
清明　ＬＰ：１４００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：なし
ラビエル　ＬＰ：４０００　手札：１
モンスター：幻魔皇ラビエル（攻）
魔法・罠：なし

奴の手札には実質グレイドルの効果を無効化できるカードであるＤ．Ｄ．クロウがいる。状況は最悪の一歩手前、だけどここで折れるわけにはいかない。ここで僕が勝利を諦めたら、後ろにいる皆は、このアカデミアはどうなる。それに何より、そんな結末は僕自身が認めない。この２年近くに渡る僕の歴史が、グレイドルやフロスト、幽鬼うさぎとの出会いが、デュエルの日々が、全て無駄だったことになってしまう。

「僕のターン、ドロー！」

確かにラビエルは強い。だけど、決して無敵の存在じゃない。モンスターの枠にいる以上、どこかに攻めどころはあるはずだ。

「魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動。デッキトップ１０枚を裏側表示で除外したのち、デッキからカードを２枚ドロー。よし、埋葬されし生け贄を発動！このターン２体のリ

リースを行いモンスターをアドバンス召喚する場合、フィールドではなく互いの墓地からモンスターをリリースできる！僕の墓地からはグレイドル・コブラを、お前の墓地からはメタボ・サッカーをそれぞれ除外し、アドバンス召喚！来い、絶望の妖星！Ｔｈｅ ｄｅｓｐａｉｒ（ディスペア） ＵＲＡＮＵＳ（ウラヌス）！」

真ん中に顔のついた、岩石の巨大な球体がせり上がる。このモンスターはこの砂漠で出会ったカード、このカードならば、ラビエルに対抗するだけの力を持っている！

「ウラヌスは僕のフィールドに魔法も罠も存在しない状態でのアドバンス召喚に成功した時、その特殊効果を発動できる。ラビエル、お前が永続魔法か永続罠、好きな方を選びな！そして僕は宣言された種類のカード１枚を、僕のフィールドにセットできる」

「魔法か、罠か……いいだろう、好きな永続魔法を選ぶがいい」

「永続魔法……グレイドル・インパクトをデッキからセットして、そのまま発動。そしてウラヌスは僕のフィールドで表側表示の魔法か罠１枚につき３００ポイント攻撃力がアップする」

Ｔｈｅ ｄｅｓｐａｉｒ ＵＲＡＮＵＳ 攻２８００→３１００

「だけどこれだけじゃないはずだよね、ラビエル？」

「……ああ。相手がモンスターを通常召喚するたびに、幻魔トークンを１体特殊召喚する」

幻魔トークン　守１０００

「邪魔邪魔、そのトークンには退場願おうか。装備魔法、ビッグバン・シュートを発動！装備モンスターの攻撃力を４００アップして貫通分ダメージを与える効果を付与、さらに表側の魔法カードが増えたことでウラヌスの攻撃力アップ！」

Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻３１００→３５００→３８００

「バトル、ウラヌスでトークンに攻撃！」

Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻３８００→幻魔トークン　守１０００（破壊）

ラビエル　ＬＰ４０００→１２００

このデュエルではまだ初ダメージだからラビエルのライフは残っているが、それでも一気にその半分以上を削ることができた。手札の状況や残りライフを考えると、恐らくこのウラヌスが最後の希望になるだろう。流石にこれ以上、このデュエルで大型モンスターを引っ張り出す余裕があるとは思えない。

チャンスは１回、勝負は１瞬。このターンでの攻撃はこれまでだけど、なんとしてでも、ここでこのデュエルを終わらせる。

「カードを２枚伏せてエンドフェイズ、グレイドル・インパクトの効果でデッキからグレイドル・パラサイトを手札に加える。ドール・コール！さあかかって来い、ラビエル！」

「いいだろう、ドロー！闇の誘惑を発動、カードを２枚ドローし手札の闇属性モンスター、Ｄ．Ｄ．クロウをゲームから除外する」

ラビエルも考えることは同じだったようだ。グレイドルへの最大のメタになりうるカラスを捨ててまで新たなカード2枚を手札に残す道を選んだ……おそらくあの２枚とフィールドのラビエルのみで、これ以上デュエルを続けることなく決着をつける気なのだろう。

「まず魔法カード、火炎地獄を発動！私が５００ポイントのダメージを受ける代わりに、相手に１０００ポイントのダメージを与える！」

「熱っ……！」

清明　ＬＰ１４００→４００

ラビエル　ＬＰ１２００→７００

一瞬だけこちらが優位に立ったライフも、捨て身の火炎地獄によりまた僅差とはいえひっくり返される。確かに熱い、だけど今更バーンダメージぐらい、死ななきゃ十分安い安い。

「さらに魔法カード、ナイト・ショットを発動。相手のセットカード1枚を、チェーンを許さずに破壊する。私が選択するのは……右の伏せカードだ」

「僕のスキル・サクセサーが……」

本来スキル・サクセサーはフリーチェーンでモンスターの攻撃力を４００ポイントアップさせるカードなのだが、ラビエルの言った通りナイト・ショットのせいでそのチェーンが許されずになすすべなく破壊される。本当なら攻撃してきたところを返り討ちにする気だっただけに、少し表情が歪むのが自覚できた。

「堕ちるがいい、絶望の妖星とやら！受けて見よ、天界蹂躙拳！」

幻魔皇ラビエル　攻４０００→Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ　ＵＲＡＮＵＳ　攻３８００（破壊）

清明　ＬＰ４００→２００

「残り２００……そのライフ、必ず我が拳で削りきってくれようぞ。私はこれでターン……」

「待ちな！」

「……何？」

ラビエルが驚くのも無理はない。ウラヌスが沈んだ今、フィールドを支配しているのはラビエルのみ。その目の前にほのかに赤く光る剣を手にして立っているのが、モンスターではなくプレイヤーの僕自身なのだから。

「何のつもりだ、遊野清明」

「別に？ただ、これを受けてもらいたくってね」

そう言って、手に持っている剣をこれ見よがしにかざしてみせる。少し訝しげな顔でそれを見た後、ややあってラビエルが息をのむのが聞こえた。
「その形状……まさか！」
「そのまさかさ。トラップ発動、極星宝レーヴァテイン！このカードは戦闘でモンスターを破壊したモンスターに対してのみ発動でき、一切のチェーンを許さずに対象となったモンスターを破壊する！そう……れっ、と！」
まっすぐに投げつけた剣は何の抵抗もなくラビエルの心臓を貫き、やがて陽炎のようにラビエルの巨体が砂漠の空に消えていく。
「く……！」
「そして、これをラストターンにしてみせる！僕のターン、ドロー！」
もはやお互いのフィールドにカードはなく、僕の手札にもさっきサーチした永続トラップ、グレイドル・パラサイトしかない。このドローカードで通常召喚可能なモンスターが引ければ僕の勝ち、もし引けなければ残りのライフから考えてもまず間違いなくラビエルの勝ち。
ここまで来た以上、小難しい戦略は必要ない。原点に立ち返っての1発ドロー勝負、いいじゃない。皆が、ラビエルが、そして僕自身がじっと見つめる中、ゆっくりと今引いたカードを表側にしていく。

「ありがとう。いつも僕を、助けてくれて。僕は今引いたカード、霧の王（キングミスト）を自身の効果によりリリースなしで妥協召喚！」

フィールドの中心に空の果てから落ちてきた青い光が走り、その光の中からゆっくりと僕がどんなカードよりも信頼する最強の魔法剣士がその一歩を踏み出す。

霧の王　攻０

「モンスターを……引いたか……」

「ああ。墓地からスキル・サクセサーの効果発動、このカードをゲームから除外して霧の王の攻撃力を８００ポイントアップさせるよ」

霧の王　攻０→８００

そう、これこそがとにかく通常召喚できるモンスターさえ引ければよかった理由。ラビエルのライフが８００を下回った時点で、たとえ僕がどんな攻撃力のモンスターを引いたとしてもこの結果は変わらなかった。

もしも、ラビエルが自身のライフを気にして火炎地獄を温存していたら？もしも、ウラヌスの召喚時にラビエルが永続トラップを宣言していたら？もしも、クリッターでＤ．Ｄ．クロウ以外のカードをサーチしていたら？どれか１つでもここまでの流れに狂いが生じていたら、あるいはこのデュエル、もっとほかの結末を迎えていたのかもしれない。もっとも、それこそ考えたって詮無いことではあるが。

「そう、か……私が負ける、か」
そう言って両腕を広げ、霧の王の一撃を黙って受け入れるようなポーズをとるラビエル。このデュエルが終わることに一抹の寂しさを覚え、そんなことを感じる自分自身にやや驚きながらも、霧の王に最後の宣告をかける。
「バトル。霧の王でダイレクトアタック……ミスト・ストラングル」
最後の一撃は高揚するでも感慨に浸るでもなく、ただただ静かだった。そんなもの、なんだろうか。
霧の王　攻８００→ラビエル（直接攻撃）
ラビエル　ＬＰ７００→０

「……」
「……」
僕もラビエルも、今度こそ今生の別れとなるであろうこの時も、特に何を話すこともなかった。お互い、言いたいことは全てデュエルで伝えあった。いまさら言葉なんて、蛇足にしかならない。
最後にラビエルの目を見ると、向こうもまっすぐに僕の目を見返してくる。ほんの少

し、その口元が笑った気がして……ラビエルが自身のカラーリングと同じ濃い青い光となり、マルタンのもとへ飛んで行った。

「ぐっ……！」

余韻もへったくれもなく、問答無用で襲い来るデスベルトの力に膝をつきそうになるも、最後まで光の行く末を見続ける。僕にとっての三幻魔との戦いは、今この時を持ってようやく完結した。

ターン９２　鉄砲水と叛乱の歯車

ハモンを、そしてラビエルを、辛うじて退けることに成功した僕ら。だけど、これで一息つくにはまだ早い。そもそもこのテニスコートに来た理由は、ヨハンとカイザーに次元を挟んでのデュエルをさせるためなんだから。

先ほどのデスデュエルの疲れが体を重くしているものの、こんな面白そうなデュエルを見逃す手はない。重い体を引きずるようにしてそこらの壁に寄りかかり、観戦の姿勢に入る。

「あとは任せたよー、ヨハン」

「ああ、任せてくれ！レインボー・ドラゴンのカード、必ず受け取ってやるさ！」

元気よく返すその姿は本当に嬉しそうで、心から自分の宝玉獣を愛しているのがよく伝わってくる。そして２人がそれぞれの場所でデュエルディスクを構え、ついにデュエルが始まった。

「「デュエル！」」

さあ、どんな勝負になるのか……今まさに最初のカードが場に置かれようとしたその時、全身に悪寒が走った。何か、物凄く悪意に満ちた視線がこの場に送られている。他

の皆はデュエルに集中していたり周りを警戒していたりで気づいていないみたいだけど、皆からは少し離れたこの位置もよかったのかすぐに気付いた。

体のだるさも全部吹っ飛んで、その視線の来た方向……ちょうどラビエルたちが入ってきたのとは真逆、テニスコートの奥を睨みつける。そこにちらりと人影が見えた瞬間、半ば無意識のうちに体が動いていた。ふらふらと歩く自分をどこか他人事のように捉えながら、一歩また一歩とヨハンたちから遠ざかっていく。

もしもこの時誰か１人でも僕の動きに気づいていてくれたら、そしてたとえ一言でも僕に声をかけてくれたら、あるいはまったく別の結果になったのかもしれない。しかし幸か不幸か最後まで誰にも気づかれず、テニスコートからは死角となっている物陰にふらふらと入り込んだ。そこで気楽そうにくつろぐ青年の顔を見て、先ほどの視線の正体はこの男だと確信する。

「お前は……！」

「はーい、また会ったねー。遊（あそぶ）さんのご登場だよー」

以前このヘラヘラした奴と会ったのは、確かカイザーがヘルカイザーになって最初にこのアカデミアに戻ってきたときのことだったろうか。あの時も、結局意味深な言動ばかり繰り返して何がなんやら僕にはわからなかった。

ただ明らかなのは、この男はとても危険な存在だということ。これはもう理屈じゃな

くて、デュエリストとしての本能だ。

身構える僕を鼻で笑い、ヘラヘラとした笑みを口元に張り付けたまま遊が口を開く。そこから出てきた言葉は、僕にとっては全くの予想外なものだった。

「ユーノ。……ねえ、彼に会いたくないかい？」

『なに……!?』

僕より先に反応するチャクチャルさん。そういえば、チャクチャルさんも遊のことは僕より前から知っていたんだっけ……だが、それは後でいい。それよりも、今は遊の話に集中すべきだ。光の結社との決着を待たずに、僕には見当もつかない理由から何処へかと去っていったユーノ。今どこにいるのか、何をしているのか……なんでもいい、知りたかった。

「どういうこと？ユーノがどこにいるのか、知ってるの？」

「ああ、知ってるよー。で、どうなの？知りたい？知りたくないー？」

見え透いた罠だ。この異世界にまで突然現れて、唐突にユーノのことを持ち出すなんて裏があるとしか思えない。だけど、ユーノがいなくなったその理由にこの男が何らかの関わりを持っているであろうことは、ほぼ間違いないとみていいだろう。なにせ遊と敵対しているらしい男、富野に連れ去られるような形で最後にユーノは消えたのだ。いまだにユーノを取り巻く話は全体像が見えてこないためうさんくさいことこの上なく、

信用するかどうかは置いておくとしても、今のところ唯一の情報源として話を聞く価値ぐらいはあるはずだ。
「……知り、たい」
「そうそう、そうやって素直なのが人間一番だねー。だけど、ただでは教えられないかな」
「何が言いたいのさ……！」
会話のペースを完全に握られ、どんどん泥沼にはまり込んでいく感覚がする。だけど、僕にはもうどうしようもない。主導権はあちらにあるのだ。
そして遊は、そんなこちらの心中も見透かしたように……というか多分、見透かされてるんだろう。その上でおちょくってきてるのだろう。
「あっはは、警戒してるねー。別に何もないよ、ただの気まぐれ暇つぶし。まーせっかくだし、デュエルでもしてもらおっかな？僕が相手すると瞬殺だし、この人とさ」
そう言って背を返し、返事も聞かないうちに背後にあった扉を開く。そこから出てきた、ずっと待ち構えていたらしい人影を見て、顔が引きつるのが分かった。つい先ほど、僕らをこのテニスコートに入れるためたった１人でゾンビ軍団の足止めを買って出てくれた、僕らにとって最高の教師。
「クロノス先生！」

「デュエルゾンビ、だっけ？なんも考えてないから気楽でいいねえ。面白いデュエルしてくれればそれでいいからさー、ちょっと相手してあげてよー。そしたら教えたげるよ」

「さあ、授業を始めるノーネ……」

元から不健康そうな顔なうえにデュエルゾンビ特有の隈などのせいでさらに不健康そうになった顔でにじり寄ってくるクロノス先生から、じりじりと下がって距離を取る。当然向こうはその分だけ近寄ってくるのでまた下がると、すぐ後ろの壁にぶつかってそれ以上下がれなくなった。やっぱり洗脳をかけてるモンスターがどこにどれだけいるかわかったもんじゃないのと、レインボー・ドラゴンのカードが来さえすれば帰る目途が立つからってゾンビたちを放っておいたのはまずかったか。少し前に三沢が倒した憑依するブラッド・ソウルだけで終わりなら、こんな難しいことにはならなかったのに。

いくらゾンビ化で多少いつもより実力が落ちているだろうとはいえ、この人を相手どるのは厳しい戦いになるだろう。でも、ここで逃げだしたらヨハンたちのデュエルまで妨害されるかもしれない。それだけならまだしも、あの次元を隔ててのデュエルを実現させているなんとか装置が壊されでもしたら、今度こそ積みだ。

「わかったよ。僕がやってやるとも！僕が勝ったら、ユーノの情報は吐いてもらうから

ね！さあ先生、実技の時間と洒落込みましょうか！」

まだ十代達は、ヨハンとカイザーのデュエルに集中していて僕らの動きには気づいていない。ちょうどレインボー・ルインやら宝玉の樹やらのソリッドビジョンが邪魔になって余計にこちらが見えにくい、というのもあるかもしれないが。

「「デュエル！」」

クロノス先生の古代の機械は、攻撃時に魔法と罠を封じる共通効果を持つ。とはいえ、このデッキは基本戦術が受け身のグレイドル。モンスター効果の発動が通れば特に問題はないので、警戒すべきは戦闘破壊したモンスターの効果を無効にしてしまう古代の機械獣（アンティーク・ギアビースト）ぐらいだろう。

「ツーヘッド・シャークを召喚。これでターンエンド」

ツーヘッド・シャーク　守１６００

「私のターン、ドローするノーネ。まずカードを1枚セットして、古代の機械兵士（アンティーク・ギアソルジャー）を召喚。さらに魔法カード、同胞の絆を発動。２０００ライフを払うことで、デッキから場のレベル４以下のモンスター1体と同じレベル、属性、種族のモンスター2体を特殊召喚するノーネ。古代の機械兵士は地属性機械族、よって私はこの2体をデッキから呼び出すノーネ」

銃になっている右腕を兵士が掲げると、それを目印にしたかのようにそこから錆びつ

いた機械のモンスターと真新しい小型の車が出てくる。古代の機械は……そういえばあれも、地属性機械族のテーマだったか。

だがそこから出てきたモンスターは、僕がこれまでに見たことのないタイプの古代の機械だった。

クロノス　ＬＰ４０００→２０００

古代の機械兵士　攻１３００

古代の機械飛竜（アンティーク・ギアワイバーン）　攻１７００

惑星探査車（プラネット・パスファインダー）　攻１０００

「小型のドラゴン……？」

「ああ。言い忘れてたけど、そのデッキはちょこっと改良させてもらったよ。ほら、もう手の内は割れてるってのにただ戦うんじゃつまんないでしょー？」

「外道な……！」

クロノス先生本人の許可も取らずにデッキを改造、そのくせ言うことが『改良』だって？人間としてもうさんくさいし信用できないけど、デュエリストとしてもただの屑じゃないか、遊。

「古代の機械飛竜の効果発動。このカードが場に出た時、デッキから古代の機械と名のつくカード１枚をサーチできる。私はこの効果で、古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）を手札に加えるノー

ネ」

　サーチ効果により即座に手札に加えられた、クロノス先生の切り札にして象徴のカード。どうやらゾンビになっても、クロノス先生のデッキは万丈目ほど変わったわけではないらしい。むしろ万丈目が【ダークソード】なんてどっから持ち出したのかって話ではあるけれど。

「そして惑星探査車は、フィールドの自身をリリースすることでデッキからフィールド魔法を1枚サーチしますーノ。私が選ぶのは当然このカード、歯車街（ギア・タウン）。そしてこのカードを、このまま発動するノーネ」

　フィールドに一斉に広がる、大小さまざまな大きさや色の歯車で構成された機械都市。となるとやはりこれは、次のターンに今サーチした古代の機械巨人をアドバンス召喚するための下準備なのだろう。

　だが、そう思ったのも1瞬だった。

「魔法カード、トレード・インを発動。レベル8の古代の機械巨人を捨てまシーテ、カードを2枚ドローしますーノ」

「自分から古代の機械巨人を手放した……？」

「あとは、次のターンのお楽しみナノーネ。同胞の絆を発動したターンはバトルができないので、これでターンエンドしますーノ」

清明　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：ツーヘッド・シャーク（守）
魔法・罠：なし
クロノス　ＬＰ２０００　手札：４
モンスター：古代の機械兵士（攻）
　　古代の機械飛竜（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：歯車街

「僕のターン、ドロー！」
ツーヘッド・シャークの攻撃力は、１２００と低い。だけどクロノス先生の場の機械の戦士たちもまた、下級モンスターとしてはそうたいした攻撃力ではない。このカード１枚あれば、一気に攻め込むこともできる。
「ツーヘッドを攻撃表示にして魔法カード、アクア・ジェットを発動！さらにダブルマジックコンボ、忘却の都　レミューリアを発動！この２枚の強化カードによる相乗効果で、ツーヘッド・シャークのステータスは大幅にアップ！」
ツーヘッド・シャーク　攻１２００→２２００→２４００　守１６００→１８００
２枚のカードの重ねがけにより、一気にツーヘッドの攻撃力が元の倍にまで跳ね上が

る。だけど、まだ足りない。そこからさらにダメ押しを加えるため、手札のカードを引っ張り出す。

「グレイドル・イーグルを召喚。もちろんこのカードも水属性、レミューリアの効果でステータスが上昇するよ」

グレイドル・イーグル　攻１５００→１７００　守５００→７００

「バトル、グレイドル・イーグルで古代の機械兵士に攻撃！」

グレイドル・イーグル　攻１７００→古代の機械兵士　攻１３００（破壊）

クロノス　ＬＰ２０００→１６００

「さらにツーヘッド・シャークで古代の機械飛竜に攻撃！」

ツーヘッド・シャーク　攻２４００→古代の機械飛竜　攻１７００（破壊）

クロノス　ＬＰ１６００→９００

「……」

あの伏せカード、てっきり何か仕掛けてくるかと思ったが……僕の考えすぎだったのだろうか。なんにせよ、ツーヘッドの２回攻撃能力でもう１度攻撃すればこのデュエルは終わる。

……ちょっと拍子抜けした感じはあるが、デュエルゾンビが基本的に雑魚になることを思えばまあこんなものだろう。むしろやたら強かった万丈目がいろいろおかしいだ

けで。
「これでとどめ！ツーヘッド・シャーク、もう一回……」
「トラップ発動……リビングデッドの呼び声、ナノーネ。古代の機械飛竜を攻撃表示で墓地から蘇生し、その効果でデッキから古代の機械射出機（アンティーク・ギアガタパルト）をサーチしますーノ……」
バラバラに砕け散った歯車がもう一度集結し、再び蘇った空飛ぶ機械の龍。なるほど、あのサーチ効果は特殊召喚でも使えるわけか。
古代の機械飛竜　攻１７００
「仕留め損ねたか……だけど残しとく理由もないね、構わないからそのまま攻撃！」
ツーヘッド・シャーク　攻２４００→古代の機械飛竜　攻１７００（破壊）
クロノス　ＬＰ９００→２００
「伏せるようなカードもないし、このままターンエンド」
古代の機械の共通効果の前では、せっかく握ったグレイドル・パラサイトも魔法・罠ゾーンを圧迫するカードにしかならない。相手モンスターの直接攻撃に反応してデッキからグレイドル１体をリクルートする効果、便利といえば便利なんだけど。
「ニョホホホホ……シニョール清明、なかなかの攻撃でしたが、伏せカード１枚出せないようならここからは私のターンナノーネ。永続魔法、古代の機械要塞（アンティーク・ギアフォートレス）を発動。さらに先ほどサーチしたこのカード、古代の機械射出機を発動し、その効果で古代の機械要塞

を破壊するノーネ」
「わざわざ破壊するために発動……？」
　そう言うが早いが、歯車街の全歯車が急速稼働を始める。重い稼働音の響く中、急ピッチで製造された2体の機械戦士が地上に降り立った。
　古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）　攻３０００
　古代の歯車機械（アンティーク・ギアガジェット）　攻５００
「古代の機械巨人!?そのカードは特殊召喚できないはずじゃ！」
「ノンノンノン、これは古代の機械射出機の効果ナノーネ。自分フィールドにモンスターがいない時、手札から発動したこのカードは自分フィールドの表側カード1枚を破壊することでデッキから古代の機械を召喚条件を無視して特殊召喚することができマス。さらに古代の機械要塞は破壊された時、手札か墓地から古代の機械を1体特殊召喚することができる、私はこの効果で古代の歯車機械を特殊召喚したノーネ」
「そんな無茶苦茶な……」
「さらに私にはこのターン、まだ召喚権が残っていますーノ。わたしは歯車街の効果により古代の機械を召喚する際のリリースを1体軽減し、古代の歯車機械をリリースしてレベル9、古代の機械熱核竜をアドバンス召喚するノーネ！」
　それは、僕にとって全くの未知な機械龍。おそらくあのカードも射出機や飛竜同様、

遊がどこからか持ってきたカードなのだろう。他の古代の機械と同じく錆びついた金属の鎧に包まれたその体はサイズこそおなじみの巨人や以前見たことのある巨竜とほぼ変わらないが、異質な点として体の中央にはその名の示す通りリアクター……その部分だけ他のクロノス先生従来の古代の機械カードとは異質な感じを放つ真新しい見た目のコアが内蔵されており、そこから不気味な赤いエネルギーの流れが全身に伝わってどくどくと脈打っている。

古代の機械熱核竜　攻３０００

「これでジ・エンド、授業終了ナノーネ。まずは古代の機械巨人でツーヘッド・シャークに攻撃、アルティメット・パウーンド！」

巨人の右こぶしが振るわれ、いくら攻撃力が倍にまで強化されたとはいえそれでも２４００止まりのツーヘッドの牙が打ち砕かれる。

だけど、僕のもう１体のモンスターは戦闘またはモンスター効果による破壊を自分の力として操るグレイドル・イーグル。魔法か罠で除去をかけてこなかったということは、このターン攻撃を仕掛けてくるような真似はしてこないだろう。それとも、ゾンビ化で馬鹿になったから突っ込んでくるとかだろうか。だとしたらさすがに笑ってやろう。

古代の機械巨人　攻３０００→ツーヘッド・シャーク　攻２４００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→２４００
「さらに、古代の機械熱核竜でグレイドル・イーグルに攻撃!と同時に効果発動、このカードが攻撃する場合、相手プレイヤーはダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスター効果を使用することができませんーノ」
「モンスター効果が……!」
胸のコアがひときわ赤く輝き、熱核竜がその口から熱線を吐き出す。それをまともに浴びたイーグルの全身がどろどろに溶けていき、銀色の液体を通り越してそのまま蒸発していった。
古代の機械熱核竜　攻３０００→グレイドル・イーグル　攻１７００（破壊）
清明　ＬＰ２４００→１１００
「さらに古代の機械熱核竜の効果発動。このカードが攻撃を行ったダメージステップ終了時に、フィールドの魔法か罠カードを1枚破壊するノーネ。レミューリア、破壊!」
「ぐううっ……!ま、まだ、次のターンになれば!」
僕に残った手札のうち、1枚はグレイドル・パラサイト。だがもう1枚は攻撃力こそ３００と低いが、その効果により相手プレイヤーに直接攻撃ができるドリル・バーニカルのカード。クロノス先生の残りライフはこれまでの過程ですでに２００、これなら。
だがそんな思考を読んだかのごとく、不気味な笑顔を作るクロノス先生。その笑みに

応えるかのごとく、機械の龍の尾が動いた。まるで槍のように突き出されたそれが、僕の体を直撃する。

古代の機械熱核竜　攻３０００↓清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ９００↓０

「な、なん、で……」

「ガジェットモンスターを素材とした古代の機械核熱竜は、１ターンに２度の攻撃が可能となるノーネ」

「く……」

負けた。完敗だ。たった１ターンで、初期値そのままだったはずのライフポイント全てが奪われた。膝をつく僕の目の前でゆっくりとソリッドビジョンが消えていくと、入れ替わりにその向こう側からパチパチとやる気ない拍手をしながら遊が歩いてくるのが見えた。

「いやー、負けちゃったねぇー？残念残念、だけど負けちゃったんだし、何か罰を受けてもらおうかなー？じゃ、お仕置きっと。あ、もうそっちはどうでもいいよー」

明らかに楽しそうに指を鳴らすと、クロノス先生がまるでおもちゃのスイッチでも

切ったかのように唐突にその場に崩れ落ちる。かすかに胸のあたりが上下しているところを見ると、単に気を失っただけのようだ。

そしてクロノス先生についてはそれでいいが、気になるのはその次の不穏な言葉だ。

「お仕置き？」

「そ、お仕置き。だって負けちゃったんだもんねー、まさかそれでペナルティー無しなんて甘い話があるなんて思ってないよねー？」

足元の床に突然穴が開き、遊が喋る間にもみるみるそれは広がっていく。穴、といっても明らかにただの穴ではない。中が闇に塗り潰された、得体の知れない異空間に繋がっているような代物だ。どうにかそこから逃げ出そうとして、よりによってこの最悪のタイミングでデスベルトが光り出す。ほんの一瞬だけ動きが鈍った隙に人間が余裕で入れるぐらいのサイズになると、ゆっくりとその中に僕の体が沈み始めた。

「うわ……！これは！」

「ユーノは今、異世界にいるんだよ」

「え？」

「せっかくだし、同じところに送ってあげよう。別に今はそこで野垂れ死んでも生き残っても、どっちでもいいや。ほら、この間会った時に君の味方してた富野っていたでしょー？君が『ストーリー上明らかにおかしな場所と時で』死んだりしたら僕の居場所

を彼にばらすことになっちゃうからそういう意味では生き残ってくれる方が楽でいいけど、別に来たら来たで今度こそ返り討ちにすればいいだけだしねー」

相変わらず、何を言ってるのかの半分も理解できない。むしろ脳がどこかで、理解することを拒否しているような感覚さえ感じる。だけどこの穴が異世界に繋がるトンネルのようなもので、この向こう側の世界にユーノがいるのはわかった。もうすでに体の半分以上が暗闇に沈んでいて、どうあがいても抜け出すことはできそうにない。精霊の力を借りようにも、デュエルディスクもカードを引く腕もすでに足元に沈んでいる。

なら、せめてできることをするしかない。

「……十代っ！」

「どうした、清明!?……うわっ、本当にどうしたんだよ!?」

大声で、親友の名前を呼ぶ。幸いにも僕の声は届いたらしく、すぐに駆けつけてきてくれた。絶句する十代の後ろからも、どかどかと他のメンバーが口々に叫びながら走ってくる。

「……十代、訳を説明してる暇はないんだ。ちょっとドジ踏んじゃってね、今から別の世界に飛ばされるのさ」

「あ、清明」

たったこれだけ話している間にも、僕の体は既に肩まで沈んでしまった。視点が低い

ので見上げるような形になりながらも、これだけの取り返しのつかないことをしてしまった人間としてせめて最後の責任を果たすために声を上げる。
「僕のことは気にしないでいいから、皆は早くレインボー・ドラゴンのカードを……必ず、絶対、アカデミアを元の世界に戻して！せめてみんなだけでも、正しい世界に帰って！」
「なんなんだよ、一体何が起きてるんだよ……！」
「いつかまたどこかで会えたら、その時はきっと話すから、さ。皆のことは頼んだよ、十代（ヒーロー）」
　最後に半ばやけくそで目一杯カッコつけたところで、全身がすっぽり呑み込まれる。それとほぼ同時に、僕の意識も闇に飲み込まれた。

覇王達の戦い編

ターン９３　鉄砲水と精霊の森

「う……痛っ」

目が覚めたのは、固い地面の上……なんかつい最近も同じようなことがあった気がするけど、あの時は下が砂漠の砂だからまだマシだった。今回はただの地面の上なため、そこでずっと寝ていた体のあちこちが痛い。

ぼんやりした頭でそこまで考えたあたりで、だんだん思考がはっきりしてきた。十代達は、あの砂漠の異世界から脱出できたんだろうか。レインボー・ドラゴン、見てみたかったな。

「だけどまあ、まずは自分の心配しなきゃ、ねえ？」

独り言ではない。チャクチャルさんに同意を求めるつもりで声に出したのだが……なぜか、いつまで経っても返事が返ってこない。さっきはあれだけ馬鹿馬鹿しい負け方したわけだし、そうでなくても最近すれ違いぎみだったからついに愛想尽かされたのかな。気にはかかるけども、チャクチャルさんがコンタクトを取らないと決めたのなら今は僕から無理に話しかけることもないだろう。そもそも向こうの方が圧倒的に年上な

んだし、下手なことはしないに限る。
　気持ちを切り替えて周りを改めて見まわすと、どこかの暗い森の中にいるようだ。頭上にはこんもりと葉が生い茂っていて空が見えないし、いかにも樹齢長そうな木々や僕の寝ていた地面にはうっすらとした苔が覆いかぶさって余計に鬱蒼としている。
「すいませーん、誰かいませんかー!?」
　とりあえず大声で怒鳴ってみるが、自分の声がむなしく響くだけで終わる。仕方がない、こういう時はとりあえず川を探せばいいという話は聞いたことがある。なんといっても水があればとりあえず命は繋げられるし、川の流れに沿ってひたすら下流に行けばどんな森や山からも抜け出せるからだそうだ。こんな話を最初に聞いた時にはあくびしながら聞き流してたものだけど、そのおかげでやることができてパニックにならずに済んでいるのだから人生何が幸いするかわからない。
　とにかく水の流れる音でも聞こえないかと耳を澄ますと、ほんのかすかに音が聞こえた。といってもそれは期待していた川の流れる音なんかじゃない、何か、かなり大きい犬のような動物が、かすかに唸っているような……。
　チッ、と舌打ちし、それに反応するように唸り声がさっきよりも近くで聞こえたことに自分を呪いたくなる。何やってんだ僕、下手に大声を出しただけでなく舌打ちまでして２回も場所を教えるなんて。よく考えればこの世界にだって精霊がいることぐらい

予想がつきそうなものなのに、なんでその程度のことを最初に考えなかったのだろう。幸い苔のおかげで足音はほとんど吸収されるはずだし、とにかく距離を取って……いや、それをしたって匂いなりなんなりで追いかけられる可能性の方が高い。ここはひとつ、待ち構えて返り討ちにしよう。

「ハンマー・シャーク、ツーヘッド・シャーク、召か……え？」

腕につけっぱなしのデュエルディスクに手を伸ばし、デッキからカードを取りだそうとして、謎の唸り声とか水場の位置とか、そういうのはもう全部頭から吹っ飛んだ。

確かにデュエルディスクはある。だけどそこにはまっているはずの、僕のデッキが1枚もない。デッキ入れのスペースはぽっかりと空いていて、僕のカードがどこにもない。

「嘘、どこに……」

チャクチャルさんにテレパシーを飛ばすが、よほど遠くにいるのかうんともすんとも帰ってこない。周りを見回しても、当然落ちているはずもない。そして、逃げ出すわけでもなくいつまでもそんなふうに悠長にしている隙を見逃してもらえるはずもなかった。ふと気が付いた時には唸り声の主は既に木を2、3本ほど離したところに移動していて、声どころかその息遣いすら感じられるようになっていた。それと同時に、なぜか肉が腐ったような嫌な臭いが空気に上乗せされる。

「くっ……」

今からでも背を向けて走り出す？いや駄目だ、土地勘は向こうにある。この状態だと、獣型モンスターどころか人間相手でも振りきれないだろう。木の上に登る……のもその間無防備になるし、そもそもあのモンスターに木登りができないなんて保証はどこにもない。地面に落ちていた苔むした石を手に取り、唸り声の方向に向き合ってそれを構える。どうせ何やっても詰むんなら、いっそ真正面から相手してやろう。腐ってもダークシグナー、体力勝負なら僕は並の人間を遥かに上回る。タイマンなら案外追い払えるかもしれない。

石を握りしめながら、そろそろと唸り声が聞こえる木に向かって歩き出す。向こうも、まさか獲物が自分から喧嘩を売りに来るとは思うまい。つまりは先手必しょ……。

「っ!!……こん、のおっ！」

左肩に強烈な痛みと熱い息の感触、そしてかすかに漂う腐臭がのしかかる。どうにか頭を後ろに向けると、黒色の獣の顔とその中に輝く鈍く濁った瞳が見えた。そしてその牙が突き刺さっている僕の肩が、噴き出す血の色でただでさえ赤い制服が真っ赤に染まってきているのを見て、ようやく何が起こっているのか理解した。

つまり、目の前で唸っているのは囮だったわけだ。よく考えればそりゃそうだ、こんな自分の位置がバレバレなのにわざわざ隠れてるんだもん。その隙にもう１匹が後ろ

に忍びより、目の前の敵に警戒した獲物を安全に襲う。まったくもって合理的だ。

だけど、僕もこんなところで2回目の死を迎えるわけにはいかない。理由はともかくとして、チャクチャルさんはここにいない。いたとしても、1度生き返った人間がもう1度蘇らせてもらえるのかはわからない。だから、ここは自力で生き延びるしかない。右手にまだ握っていた石を手放し、その獣の首根っこを無理やり掴む。牙がさらに深く食い込んできた痛みに泣きそうになるも、背負い投げの要領で身を捻りながら背中の獣を地面に嫌というほど叩き付ける。噛みつきが緩んだすきに強引に傷口を引き離し、駄目押しにその下顎を骨も折れよとばかりの勢いで全力で蹴りつけた。

「ハア、ハア……ざまあみろってんだ！」

起き上がろうともがいている獣から目を離さないまま、じりじりと後退していく。傷口から出る血がぽた、ぽた、とその軌跡をたどってくるのを見て、逃げ出すことは絶対に無理だと改めて悟る。これだけ血が出てると、その後を追いかける事なんて子供でもできるだろう。

このまま向こうが逃げ出してくれれば問題なかったのだが、残念なことにそれは無理だったらしい。顎の骨が砕けたらしく口を歪に開いたままだらんと舌を垂らしながらも、いまだ戦意衰えぬといった様子で立ち上がる黒い獣。そして、相方の苦戦を見かねたらしいこれまで様子をうかがっていただけのもう1匹の獣がその隣に並んだ。

「う、うわぁ……」
　結構本気出して蹴ったはずなのに、まさかまだ向かってくるとは思わなかった。しかも増えたし。じりじりと距離を詰められ、今まさに２体の獣が飛びかからんとした、その時。
「トラップ発動、閃光弾！」
「え!?」
　瞬間的に辺りに光が弾け、視界がすべて強烈な目の痛みと共に白く塗り替えられる。近くにあったはずの木の幹に寄りかかろうと思わず伸ばした右手の手首が、皺だらけの人間の手に掴まれた。何が何だかわからないままに、その手の主が押さえた声で話しかける。
「早く、私についてきなさい。疫病狼は執念深い狩人だ、閃光弾も長くは持たん」
　その声に含まれる不思議な迫力に呑まれ、抵抗する気にもならず引っ張られるままに歩いていく。どこをどう歩いたのか、目が見えないなりに感覚で覚えようとしたもののすぐに諦める。何度やり直しても、さっきから同じところをぐるぐる回っているように感じられてしょうがないのだ。しかし案内人が終始確固たる足取りで歩いていくため文句をつけることもできず、かれこれ３０分ほど進んだだろうか。
「さあ、上がるといい。ここに椅子があるのがわかるかね？座って傷を見せてみなさい、

今治癒をかけよう」
導かれるまま椅子に座り、言われたとおり血染めの制服を脱いで傷口を出す。何か聞き取れない言語でしばらく呟いたかと思うと、傷の痛みが次第に和らいでいくのを感じた。
「これは……」
「すまないが動かないでくれ。出血は止めたが、疫病狼の牙はその名の通り病気を運ぶ。もう少し様子が見たいから少々ここで待っていなさい、お茶でも持って来よう」
「は、はい」
よくわからないがたしなめられたので、代わりにようやく見えるようになってきた視界で、腕を動かさないようにそっと辺りを確認する。ここは、書斎だろうか。ぎっしりと古めかしい本が詰め込まれた見上げるほど高い本棚が果てしなく並び、ランプの明かりが点々と優しい光でその中を照らしている。今座っている椅子も年代物の木製で、よく手入れされているのが一目でわかる。
傷口に改めて目をやるとさっきまで肉がえぐれて血が溢れていたはずの肩にはすでに新しい皮膚ができていて、傷跡こそくっきり残っているものの動かす分にはちょっとくすぐったく感じる程度で何の支障もない。
この短期間でここまでの治療を成し遂げた謎の技に感嘆していると、書斎のドアがか

すかに軋む音を立てて開いた。
「ほれ、飲みなさい。毒などは入れておらんよ」
先ほどから声だけ聞こえていた主の姿をようやく直接見て、思わず目が丸くなった。冗談めかして言ってくれた言葉も聞き流し、その人の姿を穴が開くほどまじまじと見る。
その人は……いや、人、という呼び方も性格ではないのだろうか。ともかく、僕は彼を知っている。白い縁取りがされた緑色のローブと、その左胸に着いた勲章。深い髭と頭髪には白いものが混じり、全体的に濃い灰色となっている。右目に当たる部分には眼球がなく、代わりに開いたまぶたの間からは謎の光がかすかに発せられ、頭にすっぽりとかぶった王冠のような帽子をほのかに照らしている。
「辺境の大賢者……」
あれはもう、1年は前のことだろうか。ある歴史の授業中、雑談の一環として突如話し出されたフリード軍の歴史。ならず者傭兵部隊やら切り込み隊長やらのカードと共に、フリード軍をバックアップする賢者という設定があったと紹介された話をたまたま覚えていたのだ。
そもそも授業中にカードのバックストーリーが雑談とはいえ浮かび上がってくるあたりがさすがのデュエルアカデミアという感じもするが……まあ、その話は今はいい。

実際、それを聞いていたおかげで目の前の精霊の正体がわかったのだから。
「その名で呼ばれるのも、随分と久しいな。今の私は賢者なんてものじゃない、ただの隠居の老人さ。さあ、冷める前に飲むといい」
そう言われ、慌てて差し出されたカップを受け取る。ほんのり湯気の立つ中の液体は一見紅茶のような色だが、菓子屋としての僕の人生でも嗅いだことのないような不思議な香りと味がした。
「えっと……ありがとう、ございました。このお茶も、それから、先ほども助けていただいて」
「そう畏まることもない。ただ、君に一体何があったのか教えてもらえないかね？そのデュエルディスクも、私の知っている物とは少し型が違うようだが……」
不思議と断りにくいその声の調子に誘われてか、あるいは砂漠の異世界では飲む余裕のなかった淹れたての熱いお茶にほだされてか、自然と口が開く。気が付くと、あの砂漠の世界であったこと全てを打ち明けていた。当の本人ですらいまだに信じられないような内容にも大賢者は口を挟まず、優しげなまなざしで時折頷きながら最後まで聞いてくれた。
「僕の話はこんなところです。あの、こんな話でも信じてくれるんですか？せめてデッキさえあれば、僕のカードの精霊たちに証明してもらえるのに……」

「ああ、君の目は嘘をついているようには見えない。それに、もし嘘ならもっとそれらしい話を作るだろう。それと君のデッキだが、少なくとも君のいた近くには落ちていなかった。恐らく、次元の壁を超える際に何かの拍子でデュエルディスクから外れてしまったのだろう」

「そう、ですか。せめてチャクチャルさんと連絡が取れるぐらい近くに行ければ……」

もう一度テレパシーを試みるも、やはりあちらからは遠すぎるためか何も伝わってこない。そこで、老人の眉に初めて皺が寄った。

「それなんだがね。君の話を信じないというわけではないが、どうもそこの部分だけ腑に落ちないんだ。君の言うチャクチャルさん、とは、本当にあの『地縛神』なのかね？」

「あ、それなら証拠も出せますよ。ほら」

チャクチャルさんが近くにいないのにエネルギーの乱用をするのはどんなリスクがあるかわからないので、ほんの1瞬だけダークシグナーの力を表面に出す。パッと体中に紫の痣が走るも次の瞬間にはその全てが消え失せたが、地縛神のことを知っているのなら証明はこれで十分だろう。

そんな軽い気持ちで見せた痣だったが、その結果は僕の思った以上のものだった。老人の顔がサッと青ざめ、自分の手にしていたカップが床に落ちるのも構わずよろよろと数歩下がる。その後どうにか落ち着きを取り戻したが、いまだ顔色は悪いままだ。

「あ、あの、大丈夫ですか……？」
「……君は、本当にその神の力をその体に宿しているというのかね？本当にそれでいいのかね？」
「はい？」
本気で訳が分からない、というのが顔に出ていたらしい。軽く息を吸って気を落ち着かせると、質問を少し変えてきた。
「どうやら、君は自分の持つ力の性質も知らずに使っていたようだな。無知は悪ではないが、この場合はいささか危険すぎる。君は、これまでにも自分の中の黒い衝動に突き動かされたことがないかい？」
「えっ、と……」
どうしよう、心当たりしかない。思い返せばカミューラ戦、いやその前のダークネス吹雪さん戦に始まって光の結社洗脳中、近いところだとコブラ戦やゾンビ化したクロノス先生戦などなど、僕がダークシグナーになってから怒りに身を任せたことは数多い。ただその場合、勝率はお察しだけど。
「そもそも、地縛神というものがそもそも何者なのか。これも知らないというのかね？」
「地縛神が……？」
そういえば、そんなこと考えたこともなかった。最近はちょっとすれ違いぎみだった

とはいえ僕が生き返ったあの時からずっとそばに居てくれて、辛い時には力を貸してくれたし、何度も何度もその圧倒的な力で絶望的な盤面をひっくり返してくれた、何物にも代えられない大切な仲間にして神様。

そんなチャクチャルさんの過去を本人は特に言いだそうとしなかったし、だから僕もずっと聞かなかった。いや、むしろ聞かないようにしていた。だから昔のチャクチャルさんについて僕が知っていることは五千年前からカミューラ戦の時までずっとナスカの地で地上絵として封印されていたことと、その封印前には先代のダークシグナーとしてある男を僕と同じく死の淵から引っ張り上げていたことぐらいだ。

……この老人が知っている話を聞いてしまったらもう後には戻れない、そんな予感がする。今ならまだ、全ての話を聞かなかったことにしてここから出ていくことだってできる。そうすればチャクチャルさんと再会してもこれまで通りに、過去のことなんて何ひとつ詮索せずにそれなりの関係を保ったままでいられるはずだ。だけど、本当にそれでいいのだろうか。僕の知らないチャクチャルさんの話を知る格好の機会から逃げるのは、正しいことなんだろうか。それに僕が時折暴走するときもチャクチャルさんの過去、というかその力が絡んでいるのだとしたら、もしかするとあの怒りを制御できるヒントが隠れているかもしれない。

しばらく迷った後、僕も覚悟を決めることにした。

「……教えてください、お願いします」

それを聞いて老人が重々しく頷き手を伸ばすと近くの本棚から1冊の本が音もなく抜け出して滑空し、その手にすっぽりと収まった。

「私のしていることは、もしかしたら間違っているのかもしれない。君が何も知らないというのなら、それは知らない方が幸せなのは間違いないだろう。だが、やはり君は知っておいた方がいいと私は思う。自分の力のルーツを知ることでそれを制御する、それは魔法も人生も変わりないことだからな。何も知らずに行使するには、その力はあまりに強大すぎる。君の言う、五千年前に地縛神が封印された際の出来事……それは我々の世界にも、文献として伝わっているのだよ」

そう言いながら慣れた手つきで飛んできた本のページをめくり、やがて目当ての箇所にたどり着いたのかその手が止まる。そのページを開いたままこちらに持ってきて、僕にそっと渡して中を読むように促した。

「こ、これって……」

まず最初に目についたのは、その挿絵だ。古めかしい紙の上に生き生きとした筆遣いで描かれているのは、紫の模様が入った黒いシャチの姿を模したモンスター……まぎれもなくチャクチャルさんが、どこかの石造りの都市を蹂躙しているイラストだった。その隣には見たことのないモンスター、チャクチャルさんと同じような黒い体にそれぞれ

違った色の模様がついた、動物をモチーフとしている存在が同じように暴れまわっている。この二足歩行するトカゲのようなモンスターが掴んで口に運ぼうとしているのは、もしかしなくても人間だろうか。握られた拳の隙間から、いくつもの人の手足が覗いている。

「かつて人間界で行われたシグナーとダークシグナー。彼らが操った６体のドラゴンと、地縛神の戦いに関する文献だ。私が直接見たわけではないが、この本の著者は信用できる人物だ」

挿絵からひとまず目を離し、本文に目を通す。そこに綴られていたのは、古代ナスカの地に起きた破壊の記録……字面を追っているだけで目を覆いたくなるような、地獄絵図と呼ぶにふさわしいものだった。たくさんの人の命が地縛神の糧となり、その被害がナスカを飛び出し世界に広がらんとしていた。そんな時に突如現れた、腕に赤き龍の痣を持つ人間たち……シグナーの活躍により全ての地縛神は封印されダークシグナーは灰となり、生き残りのナスカの人々はその跡地である地上絵を祀り、２度と封印が解けないよう祈り続けた、らしい。

読み終えたのを確認し、何も考えることができずにぼうっとしている僕の肩に手を置く大賢者。優しげな声からは、心の底から心配してくれているのが伝わってきた。

「今日はもう遅い。ここに泊まるといい」

大賢者の館の1室、僕にあてがわれた客間。あの後夕食までごちそうになり、勧められるままにベッドに潜り込んだものの、混乱した頭でずっとあの本のことを考えていたせいでお礼すら言えなかったし、何を食べたのかも思い出せなかった。

申し訳ないとは心の中でチラリと思うものの、そんな思考もまたすぐあの本の内容にかき消される。チャクチャルさんが、あのチャクチャルさんが、あんな風に世界を、街を、何の罪もないナスカの人を……何かの間違いだ、と思う一方で不思議とあの内容は本当のことだ、と信じる気持ちもあった。

「寝よう。寝よう寝よう、もう今日は寝る！」

誰もいない部屋の中で自分に言い聞かせるように叫び、無理やり目をつぶる。眠気は全然感じなかったのでしばらくかかるかと覚悟していたが、意外なほどあっさりと意識が薄れていった。

『よお、旦那』

誰かが呼んでる声がする。うるさいなあもう、人がせっかく寝たってのに。また起きたら現実と向き合わなきゃなんだから、せめて寝てる時ぐらい邪魔しないでほしいものだ。

『おいおい、俺のこと忘れっちまったのかい？寂しいねぇ旦那』

いや待て、この声には聴き覚えがある。そうだ、確かあの時もこんな……そこまで考えた時点でいっぺんに前の記憶を思い出し、ベッドから瞬間的に跳ね起きた。にやにやと笑い、だがその目は全く笑っていない目の前の男をあらん限りの敵意を持って睨みつけ身構える。

「生きてやがったのか……！」

『まあな。いやー苦労したぜ、あのクソ神に気づかれないようひたすらじっと存在隠して、お前が奴と離れるこの瞬間をずっと待ってたんだからよぉ。なにせ、前回は奴が勘付いたせいでとんだ邪魔が入ったからな』

あの時と同じく夢に出てきた……夢といっても、嘘の存在というわけではない。体を失った後も精神体となって害虫以上のしぶとさで生きながらえてきた、先代ダークシグナー。

あの時はチャクチャルさんが助けに来てくれたし、メタイオン先生が覚醒することで存在ごと消し去った、はずだったのだが。目の前で気楽そうにしているこの男はいかなる方法を使ってか、神々の攻撃をも耐え抜いてしつこく僕の頭の中にいたらしい。

「それで、何しに来たのさ」

悔しいけど、チャクチャルさんも他の仲間もいない今の僕ではこの男にはどうやって

も勝てっこない。僕は大賢者にも指摘されたように自分の持つ力がどんなものかすらロクに把握できていないのに対し、相手はその力を５０００年間研磨しつづけてきた化け物だ。こうして夢の中に入り込んで話をする技ひとつとってみても、僕には一体どうやっているのか見当もつかない。力づくで追い出せない以上、黙って相手のペースに乗るしか方法はない。

『いやいや、そう警戒しなさんなよ旦那。あの老いぼれの話はなかなか面白かったが、どうやらお前は半信半疑だったみたいだからな。せっかくだから、面白いものを見せてやろうと思ってよぉ』

「面白い……？」

その言葉に含まれた不穏な調子に、咄嗟に目を閉じようとして……できない。目を閉じるどころか、指１本ピクリとも動かせない。強引に力づくで動こうともがいている僕を嘲るように笑い、ぱちりと指を鳴らす先代。突然周りの景色が真夜中の、妙に古めかしい街に切り替わった。

「こ、ここは……」

『我が麗しの今は亡き故郷、今でいうところのナスカの地さぁ。ククク、ほれ、あっちで火事が起きてるだろ？』

指さした方を反射的に見ると、石造りの建物から盛大に火が上がっていた。月明かり

が霞むほどの光を放つその火事のせいで、電灯のひとつもないのに周りの景色はくっきりとよく見える。その2階部分には逃げ遅れたらしい人がいて懸命に外に助けを求めているが、周りはみなパニックになっていて誰も上の叫び声に耳を傾ける者はいない。

幻覚か何かだ。そう頭ではわかっているのだが、その光景の余りのリアルさについ助けを求めている人のもとへ1歩を踏み出しそうになる。すると突然、雲もないのに上空に影がかかった。

『ほれ、俺のお出ましだ』

その言葉に上を見ると上空に浮かんでいたのは、巨大なシャチのシルエット。その上には、僕と同じフードつきのローブをすっぽりとかぶった男が座り込んで愉快そうに笑っている。

「チャクチャルさん！」

僕の声が聞こえないかのように……いや、実際聞こえないのだろう。これはあくまで映像、今起きていることじゃない。悠然と紫色の軌跡を引きながら星の海を泳ぐその姿は、まぎれもなく見慣れた地縛神のものだ。そして上に乗った男が下を指さして何事か叫ぶと、チャクチャルさんも動きを止めて燃え続ける家を見下ろして口をゆっくりと開く。

次の瞬間、目の前の家が吹き飛んだ。呆然としてチャクチャルさんを、たった今中に

人が残っていた家に向かって攻撃をぶちかました地縛神を見る……上の男は今の光景がたいそうお気に召したようで、体を震わせて大笑いしていた。周りでパニックになっていた人々も全員上を見て、その場にどっしりと浮かぶ神の姿を捉えていた。

それに気づいた男が、眼下の人々をざっと手で指し示してチャクチャルさんに何事か呟く。再びその巨体を震わせ、まるで水中を泳ぐかのように流麗な動きで神が動こうとする。その次に起きることが予想できていながらも、僕の体は動かない。僕の声も、今ここにいる人たちには届かない。目の前の人たちの表情ひとつひとつまではっきり見えていながら、どうすることもできない。

「や、やめ……」

そしてまた、破壊の嵐が吹き荒れる。人が、家が、木が、岩が、全てがなすすべなく吹き飛ばされ、打ち付けられ、その後には廃墟すらも残らない。もはや動くものが何もなくなったことを確認した男が、暇そうにしながらまた別の方角を指す。その先には、また別の街が。

そこで急に視界が暗転し、気が付くとまた最初の部屋の中に戻っていた。

『おっと、終わったと思ったか？残念だったな旦那、まだ終わりじゃねえときたもんだ。そーらよっと』

また指を鳴らすと再び視界が暗転し、今度は別の街……山のふもとの小さな街が燃え

ているど真ん中に切り替わる。あちらこちらで火の手が上がる上空には巨大な２羽の鳥の地縛神がその翼で月を覆い隠し、山の向こうからは人型の地縛神がその上半身を突き出してあのラビエルに勝るとも劣らない太さの剛腕をゆっくりと逃げ惑う人々めがけて伸ばしている。トカゲの地縛神はその細い腕と伸びる舌で人間を目につくままにその口へ運んでいるし、蜘蛛の足元では目がうつろな人々が操られているかのようなぎこちない動きで逃げる人に襲い掛かっている。猿の地縛神も、長い尾をクルクルと巻いたまま器用にバランスを取って跳ね回っては足元を無邪気そうに破壊し続けている。

　このままだとこの小さな街に住む人が全滅するまでにはそう時間もかからないだろう。そう思った矢先、僕のすぐ横をすり抜けて何人かの地縛神の宴から逃れた人が街の出口に向かって走っていくのが見えた。お互いを励まし合い、物陰に隠れながらなんとかここまで来たのだろう。外に出たからといって助かる保証などまるでないが、それでもここにいるよりは未来があると踏んだらしい。あと少し、あと少しで壊れていく街から外に出られる……そこまでたどり着き、彼らの顔にもようやく希望の色が見えてきたところで突然集団の先頭が足を止めた。その見上げる先には、いつの間にか出口に回り込んで外から覗き込む巨大なシャチの姿。

　ああ、そうだ。こんなわざわざ持ち上げてから叩き落とすようなやり方で心を徹底的に折っていくなんて、いかにもうちの神様ならやりそうなことだ。絶望の色を張り付け

て膝から崩れ落ちる生き残りの人たちに、そっとチャクチャルさんが上空から近寄ってゆく。彼らの姿が闇に飲まれたところで、こちらの視界も再び暗くなった。

『はっはぁ！どうだい気分は、最高だろう？お前ご自慢の地縛神は、ずっとお前の前じゃ猫被ってて何も言わなかったからなぁ？いやあ、なかなかあの様子は傑作だったってーもんよ』

「うるさい……」

もうこんな話、これ以上は聞きたくない。だけど、拒否する声にも力が入らない。

裏切られた、というのは少し違う。僕はチャクチャルさんから過去を問いたださなかったしあちらも言わなかった、それだけのことだ。それはわかってはいるけれど、やっぱりなぜ言ってくれなかったのかという悲しみが大きい。僕はチャクチャルさんのことをずっと信用して……いや、そもそもそれは僕だけの勝手な思い込みじゃなかっただろうか。

最初からずっとチャクチャルさんの目的は５０００年前の復讐を果たし、再びあの文献や今の映像のような世界を作り出すこと……そのために、こうしてその機会をうかがっているのだとしたら？だとすれば僕を生き返らせたわけにも説明がつく。自身のカードを突破口としてナスカの封印を破るために利用されたのだとしたら？三幻魔を共に撃退したのも、邪神アバターを闇に葬り還したのも、光の結社と敵対したのも、単

に地縛神とダークシグナーの世界には不要な存在だったから、というだけの理由なのだとしたら？

仲間を、それも命の恩神を疑うなんて最低だ、そんな声が自分の中から聞こえてくる。僕自身も、やっぱりチャクチャルさんのことを信じたい。だけど、そんな思いを丁寧に打ち砕くように、先代の言葉ひとつひとつが胸に突き刺さる。

『いやまったく、ひでえ話だなぁ、オイ？あいつはずっとお前を騙してたんだ。流石の俺も同情するぜー、なぁ？お前がこれまで必死こいて守ってきた世界は、最後には誰よりも信じてた、あの味方面したクソ神の手でおじゃんになるって寸法なんだからよお。だがこいつは効果的だ、それは俺も認めるぜ。何しろ持ち上げて落とすこの方法なら確実にお前にのしかかる絶望はそれだけデカイ、それまでの間にお前が勝手になまっちょろい信頼関係を築いた気になってたんならなおさらだ。見事な計画ってもんだぜ』

「し、信じないよ、そんな話……」

『そうか？じゃあ聞かせてもらうがね旦那、そもそも俺が最初にダンナの夢に出てきたとき、あいつはなーんであんなに怒ってたんだい？簡単だよ旦那、俺とあいつが会えば、遅かれ早かれ俺はあいつが何を企んでるかに気づく、それがよーくわかってたのさぁ。おまけにお前は馬鹿だから、あいつがお前のことを心配してくれたんだと思い込んでますます信用するようになる。あいつにとっちゃあ願ったり叶ったり、一石二鳥狙いの寸

法だったのさ』

何か言い返さないと。そう思うのに頭が麻痺したようになって、何も口に出すことができない。振り切りたいのに振りきれない、闇がずぶずぶと底なし沼のように僕の足元から包み込んでいくような錯覚を感じながら、どうすることもできずにただ黙っていた。

……もしかしたら、そうなのかもしれない。先代は僕よりもはるかにチャクチャルさんとの付き合いが長い、僕よりもずっとあの神様の気持ちを汲み取ることができるのかもしれない。一度そんな思いが湧き上がるともう止められず、次から次に悪いことばかりが頭に浮かんできた。チャクチャルさん、答えてよ。どこにいるのかわからないけど、今すぐここに来て全部否定して。僕の命を助けてもらったのに、そんな相手を恨んだり憎んだりなんて、僕はしたくないよ。お願いだから早く来て、僕が手遅れになる前に。

『……んぁ?おいおい無粋な真似してくれんじゃねえか、一体なんだってんだ?』

突然先代がベッドの横から立ち上がり、ドアの向こうをじっと見つめる。そんな様子を僕は気にも留めなかったが、そのドアの向こうから叫び声が聞こえてきたときは流石にそうも言ってられなかった。

「……何っ!?」

　自分の声の大きさにようやく目が覚め、当然のごとく誰もいない部屋の中でがばっと起き上がる。全く気が付かないうちに凄い汗をかいて呼吸も荒くなっていたが、部屋の外から何度も物のぶつかるような音とくぐもった悲鳴が断続的に聞こえてくるためそれをぬぐうことすら考えつかなかった。
「大丈夫ですか!?今そっちに……」
「いや、来てはいかん！」
　ドアノブに手をかけた時点で向こう側から聞こえてきたのは、苦痛を帯びながらもきっぱりとした静止の言葉。その迫力に、思わず手を離して1歩退く。また魔法を使ったらしく、内側からしか閉められないはずの鍵がゆっくりと回ってロックされるのが薄暗い部屋の中でも見えた。
「いいかね、よく聞きなさい。この森を抜けたら、南西の方角に向けてまっすぐ進むのだ。私の記憶通りの場所に今も拠点を構えているのなら、徒歩で1日の位置にフリード軍の非戦闘員たちの街があるはずだ。そこに行き、匿ってもらいなさい。そしてこう伝えるのだ、辺境の大賢者はすでに死んだと」
「死んだ？一体何を……！」
「説明している暇はない、早く逃げるのだ！君のためだけではない、私自身のためにも！私は敗れた、すでに時間はなイ……！」

その言葉を最後に、急に老人の口調が変わる。声そのものは本人の物で間違いないが、そこに宿った意思だけが別の存在に入れ替わったような……まるで悪魔のようなけたたましい笑い声が聞こえてきて、ドアノブがものすごい力でガチャガチャと回される。見た目以上に頑丈な代物らしく今はまだ侵入を食い止めているが、このままでは数分と持たずに破壊されるだろう。

どうやら本当に、悠長に話すことはできないようだ。ドアの正面にある窓のそばに走り、鍵がかかっていないことを確認して全力で引き開ける。涼しい夜の空気が流れ込んでくるのと入れ替わりに、２階から外に身を躍らせた。

飛び出す寸前後ろのドアが破壊された音がしたが、もう振り返る暇はない。デッキのないデュエルディスクだけを腕に、来た時の格好のままで森に飛び出した。

ターン９４　蹂躙王と暴食の憑依

一体、どれほどの時間を走っただろう。常に暗く葉が生い茂り、上からの光を遮るこの森の中では、時間感覚などあってないようなものだ。もう疲れた……ような気もする。眠りたい……ような気もする。辺境の大賢者の館を抜け出してからというもの、ずっとこんな調子だ。まるで夢の中で動いているかのように、何もかもが他人事に感じられる。

ただ、これが現実な証拠もある。僕が何かの理由で足を止めたりスピードを緩めたりするたびに、後ろから悪魔の笑い声が聞こえてくるのだ。そもそも、いくらダークシグナーの僕でも本物の悪魔が本気で捕まえに来たら逃げ切れるわけがない。なのに僕がまだ生きているのは、ひとえにあの悪魔が僕をギリギリまでいたぶって追い詰めるつもりだからだろう。今はまだ体も動く……だけど、それすらも限界に達してピクリとも動けなくなるその時をあの悪魔は待っている。

逆に言えば、こうして走っている限り身の安全は保障されるということだ。何とも皮肉な話ではあるけれど、この森に潜む疫病狼の群れも自分たちより格上の悪魔が狙っている獲物の僕に手を出そうとはしてこない。今もまたちょっとした群れのすぐ近くを

通り抜けたが、どいつもこいつも耳を伏せて尾を垂らし我関せずを貫いているため唸り声一つ出すこともしない。

そうして走り続けてから、結局どれほど経ったのだろうか。その時は、本当に突然訪れた。無限に続くかに見えた暗い森の前方から突然光が射し、ふらふらと誘われるようにそのまま行くと突然森が終わっていたのだ。

夕日が、今にも地平線と触れ合いそうな様子が見える。あと数十分もしないうちに、電気なんて気の利いたものがないこのあたりも真っ暗になるだろう。

「ぬ、抜けた……!」

「なんだ、もう終わりか?ならばこれ以上追い回す意味もないな」

喜びもつかの間、手を後ろに伸ばせば届くほどの距離でゾッとするほど冷たい声がする。後ろを振り返ると、そこにはまるで疲れた様子で立つ悪魔の姿があった。頭には紫色の、巨大なカールした角が一対生え、背中からは蝙蝠のそれを思わせる形の翼がやや控えめなサイズではあるが付いている。全身は鎧を着ているかのように硬質化し無数の棘が生えていて、なおさらその猟奇的なシルエットを目立たせている……が、僕が見ていたのはそんなところじゃない。その悪魔が身にまとっていた緑色のローブには、見覚えがある。森の中を走り抜けてきた割には汚れが少ない上質そうなそれは、間違いなく辺境の大賢者が着ていたものだ。

そんなことじゃないかとは思っていたが、それでもどこかで信じたくなかった……そんな希望も、もはや完全に打ち砕かれた。最後に聞いた老人のあの不穏な台詞、入れ違いに僕を追いかけてきた目の前の悪魔。やはり大賢者は、この悪魔に体を乗っ取られたのだろう。言葉を失う僕を見て、悪魔がふと意表を突かれたような顔になる。１瞬の沈黙ののち、その身を震わせ口を耳まで裂いて笑い出した。

「ククククク、ワハハハハッ！これは面白い、ああ全く面白い！人間、私のことがわかるかね？」

「え？」

耳をふさぎたくなるような笑いのなかで放たれた謎の質問に虚を突かれ、まじまじとその悪魔を見る。その姿には何一つ見覚えがなかったが、燃えるような目にはどこか見覚えがあった。どこだったか、そう遠くない過去に一度、確かに見たことがあるような。だけど、悪魔の知り合いなんてそれこそ腐れ縁のラビエルぐらいしか僕にはいない。

だが、そこでふと引っかかるものを感じた。ラビエル……アカデミアで戦い、その後砂漠の異世界でも戦った。砂漠の異世界……そうだ、あの世界でもこんな目の持ち主を僕はみた。

「憑依するブラッド・ソウル！」

「おやおや、思い出してくれて嬉しいよ。もっとも、今の私は憑依しか能のない下級悪魔

ではなく魔人……そう、魔人　ダーク・バルターとなったがね。この体の持ち主だったご老体には気の毒なことをしたが、この体は魔力に満ちていて実に私にはよく馴染む」

気の毒、と口では言いながらもその嘲り口調からはとてもそんな思いは感じられない。前は人外の存在が無理に人の言葉を喋っているような調子だったが、今はベースとなった辺境の大賢者が人型モンスターだからかその台詞や言い回しにも違和感がなく、それどころか砂漠で三沢と戦っていた時には見られなかった冷たい知性すら感じられる。また黒いドロドロした負の感情が体の底から湧き上がってくるのをなんとか押しとどめ、睨みつけるだけにとどめておいた。……ここでいくら怒ったところで、デッキが無くデュエルができない僕がこの悪魔に勝てる可能性は0だ。

「そら。受け取りたまえ」

ブラッド・ソウル改めダーク・バルターが賢者の物だったローブの中からカードの束を取り出し、こちらに向けて放り投げる。反射的に受け取ったそれは、やはりというかなんというかデュエルモンスターズのカード。その意図がわからず警戒したままの僕に、ため息をついて幼児にものをひとつひとつ教えるかのごとき口調でダーク・バルターが話し始めた。

「これはこの可哀そうなご老体が生前使っていたデッキだ。ご老体の記憶によれば、君には今デッキがないのだろう?」

「何がしたいわけ？」
「そう喧嘩腰にならないでくれたまえ。これは私からの最大限の温情なのだから」
「温情？」
「そうだとも。一つ賭けをしてみないかね？今から君と私がデュエルをする。君が勝てば、私は今度君に一切手を出さないと約束しよう。だがもし君がこの賭けを断るか、あるいは敗北すれば私は君を喰う。人間の肉は、我々悪魔には大変な珍味でね。特に、絶望や恐怖している物ほどいい味が出る」
　要するに、わざとひとかけらの希望を与えたうえで敗北というどん底に突き落とそうということだろう。勝てば見逃すだなんてこれ以上はない餌を目の前にちらつかせておいて希望を膨らませ、その上で叩き潰す。単純ながら効果的で、それでいて本人の負担もさほどではない。
　本来ならこんな勝負、受けるべきではない。せめて使い慣れた僕のデッキがあるならまだしも、たった今渡されたばかりの内訳もわからないようなデッキであの三沢相手に善戦したこの悪魔とやり合おうだなんて、普通に考えたらまともな神経持った奴のやることじゃない。
　……だけど、賢者さんは僕を助けてくれた恩人なんだ。憑依される最期の瞬間まで僕のことを案じてくれた、そんな人に対してこんな仕打ちをした外道。

『絶対に生かしておくものか……」だろう?ああそうだ、その調子だ。全部解放して全力で行きな、旦那』

自分の声が二重に聞こえる。いや違う、僕の内側のもうひとつの声……先代ダークシグナーの世界全てに対するどす黒い怒り、闇雲な破壊衝動、もはや起源すらわからなくなったまま膨れ上がった憎しみ、そういったものが僕と同調しつつある。普段だったら何とか抑えようとしたであろうこの感情にも、今回ばかりは身をゆだねたい。

無言でデッキをデュエルディスクにセットし、機械を起動させる。今日は怒りに囚われてはいるが、頭は自分でも驚くほど冴えている。あるいは最初から、チャクチャルさんより先代を信用していた方がよかったのかもしれない。

「では、賭けは成立ということでよろしいかな?」

「御託はどうだっていいさ。どうせ僕が勝つ!」

「なるほどなるほど、大変いい気迫だ。では……」

「「デュエル!」」

「先攻は差し上げよう。最後のね」

「僕のターン!」

何が差し上げようだ、後攻ドローしたいだけじゃないか。まあいい、この手札なら……なるほど、このデッキのコンセプトが読めてきた。

「まずは、王立魔法図書館を守備表示で召喚する」
ズズズ、と地響きが起こり、地中から巨大な本棚が生えてくる。一見古ぼけたつくりのそれからは、魔力が内側から溢れてぼんやりと緑色の光が放たれている。
王立魔法図書館　守２０００
「そして魔法カード、二重召喚（デュアルサモン）を発動。このターン２回の通常召喚が行えるようになるのと同時に、魔法カードが発動されたことで図書館に魔力カウンターが１つ乗せられる」
王立魔法図書館（０）→（１）
本棚から緑色の光がより一層強く溢れ、１つの球体となって元の明るさに戻った本棚の周りをふわふわと浮遊する。まずは、ひとつっと。
「それで……魔法カード、魔力掌握を発動。このカードの効果で図書館に２つ目の魔力カウンターを乗せて、さらに魔力掌握をデッキからサーチ。そして魔法カードが発動されたことで、さらに１つ追加」
再び、そして三度本棚から光が放たれ、合計３つの光球がその周りを浮遊する。
王立魔法図書館（１）→（２）→（３）
「王立魔法図書館に貯まった魔力カウンターを３つ消費することで、効果発動。デッキからカードを１枚ドローする」

引いたカードは、これか。大丈夫、【魔力カウンター】はテーマ（？）デッキの中でもかなり癖が少なくて扱いやすい部類、いくら僕でもゆっくりなら間違えようがない。

「魔法カード、トゥーンのもくじを発動。デッキから同名カードを加え、魔力カウンター１つ追加。さらに２枚目をそのまま使って３枚目をサーチ、魔力カウンター追加して最後の１枚を発動。これ以上トゥーンのもくじはデッキにないから、今度は別のトゥーンカード……トゥーン・デーモンをサーチ。ここまでで図書館に３つのカウンターが貯まったから、これを消費してまた１枚ドロー」

王立魔法図書館（０）→（１）→（２）→（３）→（０）

「……魔法カード、闇の誘惑を発動。カードを２枚ドローして手札の闇属性モンスター、トゥーン・デーモンをゲームから除外。さらに魔力カウンターを１つ乗せて通常魔法、増援を発動。デッキからレベル４以下の戦士族モンスター、終末の騎士をサーチしてさっき増やした召喚権を使ってそのまま召喚。その効果でデッキから闇属性モンスター、熟練の赤魔術師を墓地に送って墓地から赤魔術師の効果発動。墓地のこのカードを除外して、王立魔法図書館に魔力カウンターを追加。これで増援と合わせて魔力カウンターは３つ、もう１枚ドローする」

終末の騎士　攻１４００

王立魔法図書館（０）→（１）→（２）→（３）→（０）

魔力掌握は1ターンに1度しか発動できないから、これ以上デッキを回すことはできそうにない。もっともこれだけ引けば、1ターン目としては十分すぎるぐらいだろうけど。防御札がロクに引けなかったのがちょっと気がかりだけど、確かブラッド・ソウルだった時の奴のデッキは打点低めの【捕食植物】だったはずだ。とすれば、出てくるモンスターも精々攻撃力２０００に届くか届かないかぐらいのはず。

「……よし、カードを1枚セットしてターンエンド」

「では。私のターン、ドローしよう。さあ出でよ、イービル・ソーン！」

地面が盛り上がり、刺つきのパンパンに膨らんだ実が1つ付いた植物の芽が伸びる。

イービル・ソーン　攻１００

「このカードは自身をリリースすることで相手プレイヤーに３００ダメージを与え、さらにデッキから同名カードを2体まで特殊召喚することができる。イービル・バースト！」

膨らんだ実がいきなり弾け、無数の刺が降り注ぐ。ダメージは大したことない、それよりもモンスターが増える方が厄介だ。

清明　ＬＰ４０００→３７００

イービル・ソーン　守３００

イービル・ソーン　守３００

「この効果で特殊召喚したこのカードは効果を使用することができない……だが、その他の用法に制限はない。魔法カード、トランスターンを発動。私のフィールドからレベル1闇属性植物族のイービル・ソーンを墓地に送ることで、デッキから同じ種族属性でレベルが1つ上のモンスターを特殊召喚できる。レベル2、捕食植物サンデウ・キンジーを呼ばせてもらおう。トランスターンを使ったことで、君のその図書館にカウンターを乗せておきたまえ」

突然ピンク色の蔦が伸び、イービル・ソーンを絡め取る。そのまま蔦は飛んできた位置に戻り、自らの主が開いた口の中に収納された。そう、口だ。今伸びてきたのは紛れもなく蔦、だがそれが放たれたのは間違いなく口。

ではそれは、動物なのか植物なのか？僕が以前見た捕食植物は、もっと植物要素が強かったはずだ。だが今回ダーク・バルターが繰り出した捕食植物は、むしろ動物としての要素を前面に押し出した根本的に異なる種。緑色のエリマキトカゲにも似たその生物が、葉の部分から生えた毛の先の粘液を滴らせつつのしのしと自らの足で歩きだした。

捕食植物サンデウ・キンジー　攻６００

王立魔法図書館（０）→（１）

「サンデウ・キンジーは自身を素材とし、融合カード無しでの融合召喚が可能となる。私

は、場のイービル・ソーンとサンデウ・キンジーを――――――」
融合召喚？以前見た戦術とは何もかもが違う新たな捕食植物の戦術……だがそれを止めるとしたら、ここしかない。幸い、たくさんのドローのおかげでそれを妨害できるカードも手札にはある。
「チェーンして手札からエフェクト・ヴェーラーの効果発動。このカードを捨てて、サンデウ・キンジーのモンスター効果をこのターンの終わりまで無効にする！」
再び舌……いや、蔦を伸ばして残ったイービル・ソーンを絡め取ろうとしていたサンデウ・キンジーの動きが止まった。僕の予想外の妨害に対しても、ダーク・バルターの口元が笑いの形に歪む。そんな程度の抵抗がどうした、とその目が語っている。
「おやおや、これは大変だ。私のモンスターの効果が無効になってしまったよ」
「そういうのはいいから、早くターンエンドすれば？」
「まあそう言ってくれるな、私のターンはまだ終わっていないのだから。さて、ではここでひとつ残念なお知らせだ。君は今のエフェクト・ヴェーラーで多少なりとも私の攻めを遅らせたつもりだろうが、正直なところ私としては痛くも痒くもないのだよ。魔法カード、融合を発動。再び捕食植物モンスター、サンデウ・キンジーと闇属性モンスター、イービル・ソーンを融合する」
「最初っから持ってたのか……！」

２体のモンスターが宙に舞い、不思議な渦の中で１つに融けあう。だけど僕にはそれを止められない悔しさに歯噛みしつつ、ただ見ていることしかできない。

「融合召喚。現れよ、捕食植物――――――キメラフレシア！」

大地が割れ、新たな捕食植物が先端がパックリ割れて牙のついた蔦を腕代わりにその裂け目から這い出してくる。体色こそ他の捕食植物と同様に一見地味なようだが、これまでのパターンと大きく違うのはその先端に咲いた一輪の花だ。せっかく体が保護色を纏ってもこのどぎついピンク色と白のまだら模様、そして何より花弁から漂う悪臭のせいでその姿を見過ごすことは難しいだろう。その花は頭のような役割も果たしているらしく、蜜だか涎だかわからない液体をべっとりと垂らしながら巨大花が真っ直ぐにこちらを向いた。

捕食植物キメラフレシア　攻２５００

王立魔法図書館（１）→（２）

「驚いたかね？キメラフレシアこそ、私がこのご老体に憑依して得た魔力を浴びて進化した捕食植物の集大成。光栄に思うがいい、君がこのカードを実戦で見た最初の人間だ。では、前説はこの程度でいいだろう。キメラフレシアの第一の効果を発動。このカードは１ターンに１度、自分以下のレベルを持つモンスターを除外することができる！貪欲な狩人よ、そこの図書館を捕食するがいい！」

キメラフレシアがそれ自体人間の胴よりもはるかに太いサイズの蔦を伸ばし、本棚をいっぺんに丸呑みする。バリバリと強靭な歯が木製の棚を噛み砕く音が辺りに響き、それが数回続いたのちに蔦の先端が何かを飲み込むように動く。再び先端が開いた時、そこには木のかけらしか残っていなかった。

「くっ……」

「次にバトルだ。キメラフレシアで終末の騎士に攻撃……と、この時、キメラフレシアのさらなる効果発動。このカードはバトルを行う際、地中に根を張り一時的に養分を摂取し攻撃力を１０００ポイントアップさせると同時に毒性を持つ花粉を花弁から放出し、鋼鉄すら腐食させるそれが相手モンスターの攻撃力を１０００ポイントダウンさせる。受けてみるがいい、紫炎の棘（サポート・ソーン）」

その言葉通りに、キメラフレシアが地中に蔦の一部を伸ばして大地の養分を吸い取る。みるみるうちにパンプアップされ強靭になった蔦がしなり、その花の中心から吹きつけられた花粉を受け膝をついた終末の騎士を頭から一飲みにする。

捕食植物キメラフレシア　攻２５００→３５００→終末の騎士　攻１４００→４００（破壊）

清明　ＬＰ３７００→６００

「う……あっ……！」

３０００ポイントオーバーのダメージが直撃し、脳まで揺さぶられるような衝撃をまともに受ける。吹っ飛んだはずみで倒れるも、よろめきながらなんとか起き上がる。
「それでいい、その最後のターンまで続けるといい、その抵抗を。君が最後のカードを引いた時、私の前に屈するときの絶望の顔が今から楽しみだよ。カードを２枚セットし、ターンエンドだ。ここでキメラフレシアの一時的なドーピング効果が切れる」
捕食植物キメラフレシア　攻３５００→２５００
清明　ＬＰ６００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
ダーク・バルター　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：捕食植物キメラフレシア（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「僕の、ターン……ドローっ！」
「スタンバイフェイズに永続トラップ、聖なる輝きを発動させてもらおう。これでこのカードが存在する限り場の全てのモンスターは表側表示となり、互いにモンスターをセット状態で場に出すことができなった。どうしてもモンスターを守備表示にしたければ表側守備表示で出せばいいが……キメラフレシアの効果からモンスターをセット

して逃れようなどという甘い考えは捨てることだな」

ある程度手の内もわかっている相手だという勝算があったから、このデュエルを受けた時にはそこまで悲観的ではなかったけど……強い。予想外に強い。なんとか立ち上がりこそしたものの、モンスターのセットまで封じられより一層絶望的な状況に追い詰められただけだった。

その時だった。突然一陣の風が吹き、ダーク・バルターのローブと僕の学生服が揺れた。それ自体は、本当にただの風だったのかもしれない。だがその風圧に揺れた学生服の胸ポケットからたまたま何かが飛び出してきて、深く考えないまま反射的に僕はそれを掴んだ。

「これは……」

そうだ、デッキがこの世界に来る際に行方不明になったショックですっかり忘れてたけど、このカードは胸ポケットに入れてあったから無事だったんだ。

これは、かつて邪神アバターと戦った際にデュエルモンスターズの創始者、ペガサスさんから受け取った白紙のエラーカード。ペガサスさんはあの時、この2枚のカードには自分でもわからない力が秘められていると言っていた。もしこのカードの力が使えれば、あるいはこのキメラフレシアの牙城を打ち砕くことができるのだろうか。

……いや、今更すべては遅すぎる。もうデュエルは始まっているのに、新しいカード

をデッキ外から付け足すなんてできるわけがない。しかもそのカードにしても、ひたすら白紙でただのエラーカードにしか見えない代物なのだ。後悔してもどうにもならないこのカードよりも、今引いたばかりのカードは……。

「速攻魔法、リロードを発動……自分の手札全てをデッキに戻して……」

最後の最後の小さな希望、リロード。今の手札だけではキメラフレシアを倒すことはできないので、これはありがたい。全てをデッキに戻し、改めて仕切り直そうとデッキトップに手をかけた時、その手の上からもう1本別人の腕が重なるのが見えた。

「!?」

『まあ待ちなよ大将、こいつはいい。まったく、面白いもんばっか引っ張り出してくれるぜ大将はよぉ』

「先代！」

『おう、俺だ。まあそんなことより、そのドロー待ちな。そんで今大将が引っ張り出したカード、もーいっぺん見てみなよ』

なぜその声に従おうと思ったのかはわからない。ただ吸い寄せられるようにデッキから一度手を放し、言われたとおり胸ポケットに入れ直した2枚のカードの内の1枚をすっと出して白紙の面を覗き込んだ。

思わずあっと声が漏れる。さっきまで白紙だったはずのそのカードの表面は真っ黒

に染まり……と言っても、単に黒塗りされていたというのではない。空間にぽっかり空いた穴を手で持っているかのごとく、カードの向こう側に無限の空間が広がっているように見えたのだ。

「こ、これは……？まさかお前！」

『いんや、こいつは俺じゃねえ。見てみな、あの空を。見えるか、あの隕石がよ？』

スッと天を指差す先代の指した先には確かに赤く輝く、空に尾を引いた状態にもかかわらずそれ以上動くことなくその場所に留まり続ける不思議な隕石らしきものが。なぜだろう、あれを見ているとどうにも不安な気持ちになってくる。

『ややこしい理論はどうせわからねえだろう大将にもわかるように言うとだな、このカードはどうやら扉の役割を果たす力を持っているらしいな。大将の中にいい感じに育ってきた心の闇と、あの隕石の持つ力がうまいこと共鳴し合ってこのカードを媒体にして力が飛び込もうとしてもがいてるってとこか。だがまだ足りねえな、大将が心の闇を解放しない限り、うまくこの扉は開かねえ』

こんな奴の話なんて、聞いちゃいけないのはわかってる。わかってるのに、この話にはどこか引き込まれる所がある。僕がずっと持っていてもカードとして覚醒させることができなかったこの白紙のカードの１枚が、今まさに目覚めようとしている。そのヒントがこの先代の話に隠されている。そう思うと、耳を塞ぐことがどうしてもできな

かった。
『だがまあ大将のことだ、自力で扉が開くところまで待ってたらその前にあの低級悪魔に喰われちまうだろうな。だがせっかくできた2代目がこのまま無駄死にするのは俺としても惜しい、そこで俺はひとつ考えた、だったらこの俺が一肌脱げばいいってな』
「な、一体何を……！」
『決まってるだろう、大将。俺がこの世から消えるのさ』
「え……？」
　突然の宣言についていけない僕に対し、底意地の悪い笑顔を向ける先代。
『わかってねえなあ。俺の存在が消えさっても、俺がこれまでため込んできた怒りや憎しみはそのまま残る。それを大将にまるっと叩き込めば、いくらヘタレの大将でも出力全開ってなもんだ』
「騙されるもんか、何を企んで……！」
『べっつにい？そもそも、俺は別に生きてようが生きてまいがどっちでもいいからなぁ。ただあの糞神に落とし前つけさせて、この世に地獄を持ってこれさえすれば手段は問わんよ』
「そんな、無茶苦茶な！」
『はあ？おい、少しこっち向け』

ここでいきなり髪を掴まれ、無理やり顔を近づけて僕の目を覗き込む先代。まぎれもなく人間の顔、だけどその目は深くて、暗くて、根本的に人間とは異なる種族であることが一目見ただけで本能的に察せられる。

『見たか?これが、俺だ。ダークシグナーだ。こうなった以上、俺らに無茶なんてことあり得ない。そう望むならなんだってできる力を手に入れる代わりに人間であることをやめる、それが俺らが強制的に受けた呪いだ……じゃ、時間切れだ。ああまったく、大将がどうなるのか楽しみだぜ』

その言葉のみを置き土産に、先代の姿が消える。５０００年前からいた化け物の最期にしては、意外なほどあっけなかった。と同時に、心の底から先代の言った通りに負の感情が湧きあがる。

「え……あぐ、あ、あああ……!!」

怖い、いやだ、こんなものに飲み込まれたくない。湧き上がる衝動に必死に抵抗しようとするも、それよりも速いスピードでどす黒い怒りが心の中を占めていく。無限にも思える、だけど実際にはほんの１秒もかかっていない戦いはやがて決着を見せた。

……憎い。僕の恩人をあんな悪魔の姿にしたダーク・バルターが憎い。手始めに奴を倒し、その全てを奪ってやろう。モンスターも、ライフも、勝利も、何一つ貴様にくれてやるものはない。

「おいおい、どうしたのかね？サレンダーでもする気かな？」
デッキにカードを戻したままいつまでも動こうとしない僕にしびれを切らしたダーク・バルターの声に、軽く片腕を上げて応える。
ああ、待たせたな。これで終わらせよう、全部。不思議と、どうすればいいのかはわかっていた。あるいは、このカード自体が何らかの形で僕に語りかけていたのかもしれない。まるでそうするのがさも自然なように、白紙だったカードをデッキにかざす。黒みを帯びた濃い紫色の光がカードから放たれ、その光を浴びたデッキもやがて同じ色に光り始める。今や僕の物となった先代の負の感情と宙に浮かぶ隕石の力が共鳴し、その全てがこのカードを通じてデッキに宿される。
やがてすべての力を移し終えた白紙のカードがまず光を失い、その役目を果たしきって灰になって風に消えていく。デッキの光もやがて落ち着き、全てが表面上は元に戻った。
「……リロードの効果で、デッキに戻したのと同じ枚数、つまり3枚のカードを新たに引く」
ああ、やっぱり。そこにあった3枚のカードのうち2枚は、僕のこれまで見たことのないカード。白紙のカードの力により、その全てが書き換えられた新たなデッキ。カードたちが呼んでいるのがわかる、今すぐ俺たちを暴れさせろと。この力と僕の力が組み

合わされば、全てを破壊しつくすことだって夢物語ではないと。
だが手始めに、ダーク・バルターだ。憎い、憎い、憎い。
「フィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵ（キョウトウ）ウォーターフロントを発動！そして魔法カード、ハーピィの羽根箒！このカードでお前の魔法、罠カードを全て破壊する！」
「今更そんなカードで……まあいいさ、私の聖なる輝きも、茨の壁も破壊される」
「まだだ！そして今フィールドから2枚のカードが墓地へ送られ、さらに羽根箒のカードも発動したことで墓地へ送られた。これにより、フィールドから墓地へ送られたカード1枚につき1つの壊獣カウンターがウォーターフロントに乗ることとなる」
ウォーターフロントに突如、３色のライトが灯る。眠っていた灯台に光が宿り、遥か遠く間からでも識別できる強力な光がぐるぐると辺りを照らし出した。
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（３）
「そしてカウンターが３つ以上乗ったウォーターフロントの効果発動！1ターンに1度、デッキから壊獣モンスター1体をサーチすることができる。来い、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！」
全く知らないモンスターの名前が、自然と口をついて出る。だがそれは何もおかしなことではない。今となっては、このデッキの意思が僕の意思だ。デッキ自身が自分の回し方を何よりも心得ているのだから、それを僕が知っていてもそれは当然のことだ。

ともあれ、これですべての準備が整った。あとは、決定された勝利を手順通りに掴むだけだ。
「レベル１０のモンスター?あいにくだが、私にはいくらそんなものをサーチしても召喚するためのリリースがいないように見えるのだがね」
「ご高説ありがとう。言いたいことはそれだけ?なら僕は捕食植物キメラフレシアをリリースし、お前のフィールド上に、多次元壊獣ラディアンを特殊召喚する!来ぉい、ラディアーン!」
「私のモンスターをリリースだと!?ラヴァ・ゴーレムタイプのモンスターか!」
灯台の光のうち1本に照らされたキメラフレシアの姿が消え、その場所には空間を割って黒い人型モンスターが特殊召喚される。奴こそがラディアン……僕の新しいデッキの、新しいメンバーの1体だ。
多次元壊獣ラディアン　攻２８００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）↓（４）
「……まあいいさ。私はこのターンのエンドフェイズ、墓地に送られたキメラフレシア最後の効果によりデッキから融合またはフュージョンと名のつくカードを1枚サーチすることができる。墓地の融合モンスターを蘇生させるカード、再融合をサーチすればいいだけのことだからな」

「エンドフェイズ、ねえ……そんなもの、本当に来ると思う？」
「どういう意味だ？」
「このターンで終わらせる、それだけの意味さ。ラストターンと洒落込もうよ、ねえ？手札に眠りし壊獣のカードは、相手フィールド上に壊獣モンスターが存在するとき手札からノーコストで特殊召喚できる！出ろ、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！」
　上空に黒い雷雲がかかり、その隙間から３つの首を持つ白き龍の姿をした壊獣が光と共に降りてくる。これこそがサンダー・ザ・キング……このデュエルを一撃で終わらせる力を秘めた、今回の切り札だ。
　雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００
「ノーコストで攻撃力３３００のモンスターだと!?だが例えそのカードで攻撃をしてこようが、私の受けるダメージは精々５００。キメラフレシアはその効果により、一方的に攻撃力４５００までのモンスターを葬り去れることを忘れたか！」
「お前こそ忘れたか、ダーク・バルター！このターンはラストターン、すでに勝負は終わってるんだ！サンダー・ザ・キングの固有効果、帯電を発動！」
　サンダー・ザ・キングの周りにプラズマが発生し、溢れ出る電気のエネルギーにより体が薄く光を放ち始める。そして３つの頭にそれぞれ生えた角がさらにその電力を増幅させ、強化する。ややあって、全身に雷を纏った白き龍の姿がそこにはあった。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）→（１）
「サンダー・ザ・キングはフィールドに存在する壊獣カウンターを３つ取り除くことで、このターン相手はあらゆるカード効果を発動できなくなる。伏せカードは既に除去したけど、墓地や手札から抵抗することも許さない」
「チッ……」
やはりあの１枚、何らかの手札誘発を隠し持っていたのだろう。だがそんなもの、通すわけがない。一切の希望という希望を根こそぎ奪い、完膚無きまでに叩きのめしてやる。
「バトルだ！サンダー・ザ・キングでラディアンに攻撃！」
３つの首のうち１つが口を開け、稲妻型の雷撃光線を放つ。ジグザグと宙を裂いたそれはラディアンの体を直撃し、ラディアンも無駄な抵抗はせずさっさとフィールドから立ち去った。
雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００→多次元壊獣ラディアン　攻２８００（破壊）
ダーク・バルター　ＬＰ４０００→３５００
「ぐおおっ……この力……！」
「トラップ発動、リバイバル・ギフト！このカードは僕の墓地からチューナー１体を蘇生

させ、相手フィールドに攻守１５００のギフト・デモン・トークンを２体特殊召喚する！甦れ、エフェクト・ヴェーラー！」

エフェクト・ヴェーラー　守０

ギフト・デモン・トークン　攻１５００

ギフト・デモン・トークン　攻１５００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）↓（２）

「このタイミングでリバイバル・ギフトだと……？はっ、まさか！」

訝しむダーク・バルターが、ある可能性に気が付いてサンダー・ザ・キングを見上げる。宙を舞う白き龍の姿を見たときの絶望の表情は、なかなかの見ものだった。サンダー・ザ・キングの３つの頭のうち１つはすでに攻撃を終えていたが、まだ残り２つが帯電したまま僕の命令を待っていたのだ。

「その通りさ、ダーク・バルター。サンダー・ザ・キングは帯電の能力を使ったターン、１ターンに３回までモンスターに対しての攻撃が可能になる。もっとも、ダイレクトアタックはできないからお膳立ては必要だけどね」

「２体のトークンを生みだすリバイバル・ギフト……そうか、そのために……」

「ご名算。サンダー・ザ・キング、残り２回の攻撃権を使用してギフト・デモン・トークン２体に攻撃しろ！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００↓ギフト・デモン・トークン　攻１５００（破壊）
ダーク・バルター　ＬＰ３５００↓１７００
雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００↓ギフト・デモン・トークン　攻１５００（破壊）
ダーク・バルター　ＬＰ１７００↓０
ライフポイントを失ったダーク・バルターが雷撃を受けて吹き飛び、ゴロゴロと地面を転がる。その姿を見て、背後に鳴る稲妻の音を聞きながら僕は……ただひたすらに、笑っていた。ずっとずっと、笑っていた。

ターン９５　蹂躙王と怪異の演目

「……はぁ」

ため息をつき、鉄格子のはまった小さな窓の隙間から空を見上げる。どんよりと厚い雲が立ち込めた夜空は、僕の気分にもぴったりだった……なんて、詞的なことを言う気分にもなれない。そもそもそんな相手もいない。僕は今ここに、１人きりだ。

だが、自分の境遇に文句をつける気はない。そんな図々しいこと、ちらりと考える気にすらならない。石造りで殺風景な部屋のせいで無性に冷たく感じるベッドに寝そべっていると、自然とあの時のことが頭をよぎってきた。そう、あれは、僕がサンダー・ザ・キングの特殊能力を使ってダーク・バルターにとどめを刺したあのデュエルが終わってからのこと。といっても、大した話ではない。こんな何もない部屋にいると、それぐらいしかすることがないのだ。

「あ……ぐ……」

地面に無様に転がったダーク・バルターの方から、かすかなうめき声が聞こえてくる。

しつこい奴だ、サンダー・ザ・キングの3回攻撃を受けてまだ息があったか。
「もっとも、生きてて可哀そうにとは思うけどね。ねえ?」
同意を求めて頭上を仰ぐと、ゴロゴロと途方もなく巨大な生物が喉を鳴らすような音が帰ってきた。そこにいたのは、まさしくたった今死闘を制したばかりのサンダー・ザ・キングの白い巨体。なぜデュエルが終わったのにソリッドビジョンが消えていないのかはいまいち謎だが、これはむしろ都合がいい。
「まあ、生かしておくのも禍根が残るしね。どーせ今更許す気もないし、構わないから遠慮なくとどめ刺しちゃってよ」
僕の命令を待っていた、といわんばかりに、サンダー・ザ・キングの全身に再びプラズマが走り出す。別に普通に攻撃するだけでもよかったのにわざわざ帯電能力まで使っているところを見ると、オーバーキルは承知のうえで最大火力で終わらせる気のようだ。それだけ、僕のダーク・バルターに対しての怒りやら憎しみやらが深いことをこの龍は読み取ってくれたのだろう。そしてそんな知能があるところをみると、どうやらこの壊獣たちも精霊の力を宿しているらしい。それとも前提が逆で、精霊として自我があるからこそこうして僕の呼びかけに応えてくれたのだろうか。どちらにせよ、そんな鶏が先か卵が先かなんて話は僕には関係ないことだ。
ともあれ見かけによらないその細やかな気遣いに心の中で感謝しつつ白い巨体に走

るプラズマの量が徐々に増えていくのを見守っていると、やがてその量も最大に達したのが感覚で理解できた。じっとこちらを見るサンダー・ザ・キングの３つの頭に、そっと頷いて口を開く。

「これで終わらせる！行け、サンダー・ザ・キ……ん？」

今まさに最終命令を出そうとしたその時、うめき声と共に苦しみ続けるダーク・バルターの体がふとしたはずみにごろりとひっくり返って仰向けになった。あらわになったその顔……それはすでに悪魔のそれではなく、その体の元となった辺境の大賢者のもの。

「……っ！ストップストップ、攻撃中止して！」

頭上の三つ首龍に精一杯の大声で攻撃を強制中断させようとしたが、すでにそれをするには遅すぎた。それでも辛うじて２つの首を明後日の方向に伸ばして雷撃のブレスを飛ばすサンダー・ザ・キングだが、残りの首からは既にブレスが老人に向かって放たれている。

気が付けば、半ば無意識に体を動かしていた。僕の体では小さすぎて盾にすらならないことは承知の上だが、それでも動かずにはいられない。いまだ体を動かすこともできない老人の前に行き、今にも到達しそうな雷撃との間に立ちふさがる。大賢者の体を持ち上げてブレスの直撃範囲外に持っていければそれが最善なのだが、それをするにはあ

まりに距離が離れすぎていて先にブレスが届いてしまう。

「くっ……！」

目の前が真っ白くなるほどの迫力と眩しさに目を閉じ、歯を食いしばって両手を広げ仁王立ちする。

その直後、想像をはるかに超える衝撃と全身の筋肉が痙攣するほどの電撃が僕の体に降りかかった。悲鳴を上げようにも口が動かず、全身の細胞ひとつひとつが電気の力に屈して痛みを訴える。これまでの闇のデュエルで受けた痛みは、よくも悪くもそのほとんどが物理的な衝撃ばかりだった。直接体を襲う電撃という全く未知なタイプの痛みの前には僕のちっぽけな覚悟など何の役にも立たず、意識が途切れる際にはこれでこの瞬間だけでも痛みから解放されるという喜びが真っ先に来たほどだった。

そして、今。一体何があったのか、僕には何もわからない。サンダー・ザ・キングの一撃をまともに浴びて意識が飛んだ僕が目覚めたのが、だいたい数時間前。一体あれからどれぐらいの時が経っているのか、そもそもここはどこなのか、まだ誰にも会っていないため話を聞くことができておらず、大事なことは何一つわからない。

「痛っ……」

ぼそりと声が漏れる。まだ電気の後遺症が体に残っているらしく、下手に動くと重い痛みと共に筋肉が突っ張るような感覚になる。少し動くだけでもこのざまだ、走ったり

するなど問題外だろう。
　それでもどうにか上半身を起こしたところで、部屋のドアノブがゆっくりと回るのが見えた。じっと見つめていると、音をたてないよう慎重な動きでドアが開きその隙間から人の顔がのぞく。まさか起きているとは思わなかったのであろう僕と目が合うことたっぷり５秒、ドアも開けっ放しでその人が元来た方向へ駆けていった。騒々しい声がこっちまで聞こえてくるけど、いいんだろうか。
「隊長、隊長！あの子供、目が覚めました！」
「何？わかった、私が行こ……待て、この馬鹿者！ドアも閉じずに報告に来るやつがどこの世界にいるか！」
「ひえっ、も、申し訳ありません！」
「まあいい……戦闘経験のない者にそこまで期待するのも筋違いだからな。ただ、次は無いと思え」
　……なんか、この隊長とやらはずいぶん苦労しているらしい。心の中で同情していると、全身緑色の軍服のようなものに身を包んだ男がきびきびした動きで入ってきた。ヘルメットとゴーグルで顔を隠しているため素顔はよくわからないが、恐らくこの男が隊長とやらだろう。
「目が覚めたようだな。私は……そうだな、デュエルモンスターズでいうところのバッ

クアップ・ウォリアーという者だ。私自身はただの戦士族だが、今はここでフリード軍後方支援部隊を率いている」
「バックアップ・ウォリアーさん……」
復唱すると満足げにうむ、と頷き、その後一言ぼそりと付け足す。
「済まないね。私も本名を名乗りたいのだが、まだ君が敵になるか味方になるかもわからないからな。なにせこのご時世だ、ほいほいと本名を教えるわけにはいかないのだよ、遊野清明君」
このご時世、という言い方も引っかかったが、それ以上に気になることがあった。バックアップ・ウォリアーとは初対面のはずだが、僕の名前をなぜ知っているのだろう。そんな訝しげな視線に気づいたらしい軍人が、ばつが悪そうに肩をすくめる。
「あまりプライバシーに干渉したくはなかったが、これも仕事なのでね。君が眠っているここ数日の間に、少々荷物をチェックさせてもらったよ。といっても、身に着けていた学生証や財布以外はデュエルディスクとデッキ、それと白紙のカードが1枚程度しかなかったようだが」
言われて服の中を探ってみると、確かにいつも入れてある位置に学生証がない。バックアップ・ウォリアーが差し出したそれを受け取り、間違いなく僕の物であることを確認してまた仕舞い込む。白紙のカードは、これで残り1枚。

「あの、僕のデュエルディスクは……」
「その前に、聞かせてもらいたい。一体、君に何があったのかを。私があの恐ろしい雷撃と、それを放つ白い龍の姿を見て駆け付けた時にはすでにデュエルは終わっていて、その場所には君と辺境の大賢者が倒れていた」
「そ、そうだ！あの人は、あの人は無事なんですか!?くっ……！」
　急に動いたせいでまた痛み出した体に怯んでいるうちに、バックアップ・ウォリアーのゴーグル越しに見える顔がどこか遠くを見るような目になる。ややあってぽつりと告げた言葉は、体中の痛みを忘れさせるには十分だった。
「……彼とは私も懇意にしていてね、あの人の最期を看取れたのは運がよかったと思っているよ」
「そう、ですか……」
　最期を看取れた、か。するとやはり、僕がしたことは無駄だったのだろうか。もとはといえば僕があの森に出てきさえしなければ、あるいは砂漠の世界でクロノス先生に負けさえしなければ、いっそラビエルに負けていれば……どこかでほんの少し違った結果が起きていれば、大賢者は今もあの森の奥で静かに暮らしていられただろう。
　どんどん気持ちが沈んでいく僕の方をちらりと見たバックアップ・ウォリアーが、明後日の方向を見つめたまま口を開く。

「あの人からの遺言がある。あの人は最後まで君のことを心配していたが、『たとえ君の目の前に道があろうとも、その道を進むか否かは君の決めることだ』だそうだ。それと私のことで気に病むな、これは私が決めた上で進んだ道だ、とも言っていたな」

「……」

辺境の大賢者からの遺言を、心の中でじっくりと噛みしめる。やがてぽつぽつと、僕がこの世界に来てからのことを話し始めた。いざ口に出してみるといかにも嘘くさい話だとは我ながら思ったが、少なくともバックアップ・ウォリアーは一切口を挟まずにずっと僕の話を真剣な表情で聞き続けてくれた。

途中で休憩を取って数日ぶりの食事にありついたりしていたら、話が終わるころにはすっかり夕暮れ時になっていた。小さな窓から見える外の様子をぼんやり眺めていると、突然外の様子が騒がしくなってきた。軽く舌打ちし、バックアップ・ウォリアーが腰から無線機を引っ張り出す。

「おい、応答しろ!この騒ぎは一体なんだ!」

『ほ、報告します、隊長!南南西より敵襲、今のところ敵は1人ですが、恐ろしい奴です!』

「南南西だと?その方角には串刺しの落とし穴が仕掛けてあったはずだ、投石部隊にはそこに誘導するよう命じて……」

『だ、駄目です隊長！とんでもない速さです、もう本陣まで……うわぁーっ！』
「おい、応答しろ！誰か！誰かいないのか！……チッ、私が出よう。君はここで待っていてくれ」
「いえ」
　思いのほか冷静な、というよりむしろ冷たい声が出た。驚いて振り返る軍人の目には、さぞかし奇異に映ったことだろう。なぜとは説明できないけれど、強いていえば感覚でわかる。今この場所に近づきつつある敵襲……その殺意は、真っ直ぐ僕に向けられている。それに体が勝手に反応し、ダークシグナーとしての力が強制的に開放されつつあるのだろう。今僕の目は紫色を帯び始め、制服の下では紫の痣が体の表面を這い続けていることだろう。
「僕が、行きます。すいませんが、デッキを返して下さい」
「……わかった。ついてきなさい」
　これ以上の説得は時間の無駄だと諦めたのか、それとも僕の調子に押し切られたのか。なんにせよ、話が早いのはいいことだ。ベッドから起き上がったのを確認し、無言で部屋を後にするバックアップ・ウォリアーの後ろに続く。いくらか歩くことになるかとも思ったが、何のことはなくすぐ隣の部屋に入っていった。その部屋の壁に立てかけてあるのは、確かにアカデミア仕様のデュエルディスク。

「あれが君のデュエルディスクだ。デッキには一切触れていない、これは同じデュエリストとしての私の名誉に誓おう」
「ありがとうございます」
「少し、待っていただきましょうか」
　デュエルディスクを手に取ったちょうどその時、どこからともなく低い声が石造りの部屋に響いた。咄嗟に周りを見回すも、僕とバックアップ・ウォリアーの他には動くものは何もない。あえて挙げるとすれば、部屋の奥の暖炉で炎が赤々と燃えているぐらいだろうか。
　だが、僕よりも歴戦の戦士であるバックアップ・ウォリアーにはその気配が感じられたらしい。まさにその暖炉に向けて、手にした巨大な銃を腰だめに構える。ワンテンポ遅れて、僕にもはっきりと分かった。あの炎、ただ単に火が燃えているんじゃない。
「誰だ!」
「おやおや、もう見つかってしまいましたか。さすがはフリード軍後方支援部隊隊長、バックアップ・ウォリアーさんといったところでしょうか?ですが、今回私(わたくし)が用があるのはあなたではないのですよ」
　暖炉の炎が揺らめき、みるみるうちに膨れ上がって形を変えていく。筋肉質な上半身からは4本もの腕だけでなく蝙蝠状の翼までもが生え、毛深い下半身は足先の蹄と合わ

せて羊など動物のそれを連想させる。もっとも、そんな当たり前の動物は2足歩行などしやしないであろうという1点を除けば、の話ではあるが。

だが、それまでのパーツはどうにか人型の体裁を成していたのだが、首から上だけはどうにもしようがない。もろに山羊といった風体のそれには、あのダーク・バルターのそれとよく似た角もついている。もっとも、向こうのそれよりもサイズは小さい代わりによりカールしているというささやかな違いはあるが。

「その山羊面、聞いたことがあるぞ。貴様がレッサー・デーモンか」

「おや、私の名もずいぶん広まったようで光栄ですね。いかにも、私の名はレッサー・デーモン。お初にお目にかかります」

その物腰こそ丁寧だが、レッサー・デーモンのその目はまるで笑っていない。常に周りの存在全てを小馬鹿にした感じを隠そうともしていない悪魔、そんな点までダーク・バルターとどことなく似通っている。

「さて、私も今回こうして足を運んだのは、なにもあなた方と遊びに来たわけではないのですよ。早速本題に入らせていただきますが、あなた、私達と共に戦いませんか？」

レッサー・デーモンが僕の方を向き、蹄でコツコツと床を叩きながら問いかける。真意をはかりかねて無言のままでいる僕に自らの説明不足を感じたらしく、咳払いひとつとともに改めて悪魔が語りだす。

「つまりですね、私はあなたの実力をそれなりに評価しているのですよ。ブラッド・ソウルはただの小物のつまらない悪魔でしたが、辺境の大賢者の体に憑依するという大金星を挙げて名実ともに魔人となった彼の戦闘力、ひいてはデュエルの腕前は決して侮れないものがありました。それをあなたは、あっさりと圧倒的なまでの力を持って退けた。その力をお貸しいただけるならば、我々暗黒界による侵攻計画もより一層楽になるというものです」

「暗黒界？侵攻？」

「……少し前のことだ。元々この世界は暗黒界により統治されていたのだが、穏健派の龍神グラファを筆頭とする彼らによるあくまでも名ばかりの支配のもとで我々も平和な日々を過ごしていた。だがある日、あの空に留まり続ける不気味な彗星が現れてからすべてが狂いだした！」

バックアップ・ウォリアーが、レッサー・デーモンを睨みつけ銃口を向けたままその話をさらに補足する。

そしてどうやら今から語られる話は、この世界の根幹となる重要なストーリーのようだ。何ひとつ聞き漏らすまいと神経を集中させ、この世界の歴史に耳を傾ける。

「……取り乱してすまなかったね。といっても、あとは単純この上ない話さ。グラファはその日を境に謎の失踪、その代理として急遽暗黒界のトップに立った魔神レインは突

如、暗黒界の全兵力を傾けこの世界の全てを圧倒的な力で侵略することを宣言した。あの彗星が出るまではグラファほどの穏健派ではないにせよ、少なくとも無益な戦争を仕掛けるような男ではなかったのだがな。そしてこれまで紳士的だった騎士ズール、武神ゴルド、軍神シルバといった面々までまるで熱に浮かされたようにレインの宣言に逆らうどころか嬉々として従う始末だった。私たちはその無差別な悪魔どもに抵抗するために勇者フリードの名の下に志を同じくして集まった抵抗軍、というわけさ」

この世界は、サンドモスとかの原生モンスターがやりたいように生きていた砂漠の異世界とはまるで違う。高い知能を持ち、組織立った行動をとる悪魔とそれに対抗する人々という構図は、現代日本に生きてきた僕にとってはなんだか現実味がない話に思える。

だけど、これがこの世界の現実だ。そしてこんな殺伐とした日々を過ごしている原因らしき天頂の彗星、思えば僕がこの世界を生き抜くための武器、僕の力そのものとして手に入れた壊獣デッキもあの彗星の力が白紙のカードを通じて流れてきた結果生み出されたものだった。

何かある。なんだか見当もつかないけど、怪しい力がこの世界には今まさに干渉しつつある。なら、僕が今するべきことは……。

「1つだけ確認させろ、レッサー・デーモン」

「おや、どうしましたか?」
「ブラッド・ソウル……ダーク・バルターも、お前たちの言う暗黒界の仲間だったんだね?」
「ふぅむ。私個人としては、あんな粗野で下級な者と同類扱いしていただきたくないのですが……そうですね。彼もまた、私と同じく魔神レイン様の元で働いていたことに変わりはありません。さ、これで満足でしょうか?ならば、そろそろご返事を聞かせていただきましょう。私達と共に来るか、それともここでその兵隊さんともども命を捨てるか。ふたつにひとつでお願いします」
「そんなもん決まってるさ、レッサー・デーモン!砂漠の異世界では僕の親友も世話になったし、こっちでは辺境の大賢者をも襲い乗っ取った。そんなお前らと、僕が?土下座して僕の下に就くってんなら考えてやらんこともないけどね、身の程ぐらいわきまえてきなってんだ!」
　まっすぐ山羊頭の目を見て啖呵を切る。また少しづつ、黒い負の感情が心の底から湧き上がってきているのを感じる……影響を受けた結果随分と傲慢な言い草になってしまったけど、この場合かえってその傲慢っぷりがよかったらしい。悪魔の顔がみるみるうちに怒りで赤く染まり、口が耳まで裂けた笑みを浮かべだした。
「……いいでしょう。では、後々の憂いになりそうな要素はここで断っておきます。始

末して差し上げますから、私とデュエルしなさい」
「もちろんさ。表に出よう、ここじゃ狭すぎる」
「よろしい。お待ちしておりますよ」
言うが早いがレッサー・デーモンの姿がまた炎に戻り、勢いよく暖炉の中に引っ込んでいく。
一応暖炉の中で燃えているのがただの火であることを確認してからデュエルディスクを腕に装着し、こちらも電源を入れた。数秒としないうちに眠っていた機能が息を吹き返して準備万全の状態になった……と言いたいところだけど、なんだか内部から妙な音がするのとデュエル機能が復活するまでにワンテンポ遅いのが気にかかった。まあ、あれだけの雷撃を僕と一緒に受けたんだ、内部の機械がおかしくなったとしても全然不思議はない。幸い今はまだ動くし、なんとかなるだろう。
「君……」
何か言おうとしていたバックアップ・ウォリアーを手で制し、一言だけ言い残して外に出る。
「大丈夫です、勝ちますから」

「「デュエル！」

もはや何も互いにいうことはせず、外に出るなりカードを引く。瞬間、今引いたばかりの手札から強い力が流れ込んでくるのが分かった。それに反応して、心の中のどす黒い感情が膨れ上がっていく。なるほど、つまりこのカードを使えば使うほど僕はこうやって先代の怒りや憎しみに蝕まれていくわけか。どうりで、デュエルディスクを外していた時は何も感じなかったわけだ。

「これは、短期決戦じゃないとまずいかな……」

「私が先攻を取りましょう。私は、ＥＭ（エンタメイト）ジンライノを守備表示で召喚します。さらにカードを１枚セットし、ターンエンドです」

ＥＭジンライノ　守１８００

４本の腕のうち１本にデュエルディスクをつけてそれと対になる手で手札を持ち、さらに空いた腕を動かして巧みにカードを動かすレッサー・デーモンがまず呼び出したのは、太鼓を背負ったサイの姿をしたモンスター。

まずは守備固め、ということだろうか。別に、それ自体は何も悪くない。ただ、僕のデッキにそんなものまるで効かないというだけだ。

「僕のターン、ドロー！よし、永続魔法、壊獣の出現記録を発動。さらにお前のフィールドからジンライノをリリースし、海亀壊獣ガメシエルを特殊召喚する！」

「私のモンスターを……」
海亀壊獣ガメシエル　攻２２００
ジンライノの姿が消え、その場所に青い甲羅を背負った巨大な亀のようなモンスターが鎮座する。守備力１８００の下級モンスター相手にリリース能力を使うのは少しもったいない気もするが、だからといって出し惜しみしていてはこのデッキだとろくに動けないことにもなりかねない。要するに４０００ライフを削ればこっちの勝ちなんだから、最初から飛ばしていく方が効率的だ。
「さらにこの瞬間、出現記録の効果発動。手札から壊獣が特殊召喚されたことで、このカードに壊獣カウンターを１つ置く。そして手札の粘糸壊獣クモグスは、相手フィールドに壊獣が存在することにより手札から特殊召喚できる！来い、クモグス！」
空中から落下してきた巨大なクモが、６本の足を巧みに使い着地の衝撃を分散させる。口をガチガチと噛み鳴らし、僕の敵であるレッサー・デーモンに対して敵意もあらわに威嚇の構えに入った。そしてそれだけでなく、また壊獣が手札から特殊召喚されたことで出現記録に２つ目のカウンターが乗せられる。
粘糸壊獣クモグス　攻２４００
壊獣の出現記録（０）→（１）→（２）
「バトル、クモグスでガメシエルに攻撃！」

命令を受け、クモグスが巨体に似合わぬ俊敏な動きでガメシエルに躍り掛かる。ガメシエルもその甲羅にこもるようなことはせず、むしろ自分から進んで鎌のようになっているその爪先を受け止めた。

粘糸壊獣クモグス　攻２４００→海亀壊獣ガメシエル　攻２２００（破壊）

レッサー・デーモン　ＬＰ４０００→３８００

「ふん……私のフィールドでモンスターが戦闘破壊されたことにより発動条件を満たした速攻魔法、イリュージョン・バルーンを発動します」

そう言うと同時に、辺りをどこからともなく飛んできた無数の風船が取り囲む。電気も通っていないシンプルな石造りの建物や土がむき出しになった地面などが辺りに広がる異世界の風景にその色とりどりな風船はどう見てもミスマッチで、それがこのあたりの空間に異様な雰囲気を醸し出していた。

「このカードの効果により、私はデッキの上からカードを５枚めくって確認。その中にＥＭと名のつくモンスターが存在すれば、そのうち１体を選んで特殊召喚が可能となります。まず１枚目はトラップカード、エンタメ・フラッシュ。２枚目は速攻魔法、超カバーカーニバル。おやおや、では３枚目。出ましたね、ＥＭセカンドンキー。ですが、このモンスターではまだ少し力不足ですね。４枚目。いいカードを引きました、ＥＭソード・フィッシュ。そしてラスト５枚目は魔法カード、ＥＭキャスト・チェンジですか。私

はこの中からＥＭソード・フィッシュを選択し、特殊召喚しましょう」
ＥＭソード・フィッシュ　攻６００
風船のうち１つが割れ、中からリーゼントと蝶ネクタイが特徴的な魚が飛び跳ねる。なんでわざわざレベルもステータスも低いこのモンスターをチョイスしたんだ、そんな疑問はすぐに解消された。
「ソード・フィッシュのモンスター効果を発動します。このカードが場に出たことにより、相手モンスター全ての攻守は６００ポイントダウンします」
「なっ!?」
クモグスの固有効果は一応使えるし、それを使えばソード・フィッシュの効果を回避することはできる。ただそれをやると次のレッサー・デーモンのターンを、僕は壊獣カウンターのない、バニラ同然のクモグスのみで凌ぎ切らなければならない。だけどここで攻守６００ポイントも下がってしまうと、クモグスのステータスでは下級モンスターにすら戦闘破壊されかねない。
ほんの少しだけ迷った末、クモグスの効果は温存することにする。１度きりしか使えない効果、まだ使うには早すぎる。
「何もしてこない、ですか。なるほど?」
意味深な呟きを残すレッサー・デーモンだが、悪魔のささやきなんかに耳を貸したら

向こうの思う壺だ。
粘糸壊獣クモグス　攻２４００→１８００　守２５００→１９００
「これで僕は、ターンエンド」
清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：粘糸壊獣クモグス（攻）
魔法・罠：壊獣の出現記録（２）
レッサー・デーモン　ＬＰ３８００　手札：３
モンスター：ＥＭソード・フィッシュ（攻）
魔法・罠：なし
「私のターンですね。ドロー、ＥＭハンサムライガーを召喚します」
これまでの動物型モンスターからがらりと趣を変えた、目元涼やかな剣士のモンスター。
ＥＭハンサムライガー　攻１８００
「攻撃力１８００……！」
このままでは攻撃力の下がったクモグスが相打ちに持っていかれる……だが、レッサー・デーモンの狙いはそんな甘いものではなかった。
「この瞬間、ソード・フィッシュのもう１つの効果が発動いたしますよ。自分フィールド

にモンスターが出たことで、さらに相手モンスターの攻守を６００ポイントダウンさせます」

「これでクモグスの攻撃力は１２００……だとしても、このターンだけでも凌ぎ切る！クモグスの特殊能力、縛鎖……壊獣カウンター２つを消費して糸を吐き、召喚または特殊召喚に成功したモンスターに対しこのターンの間だけその攻撃と効果を封じ込める！」

クモグスが口から吐き出した糸がハンサムライガーの全身を絡め取り、がんじがらめにしてその動きを封じる。何が悲しゅうて野郎の拘束なんぞのお膳立てをしなければいけないのかはともかく、これでクモグスがこのターン攻撃されるリスクはなくなった。

その一方でソード・フィッシュの効果は素通しにするしかないのは少し気に喰わないが、この効果を受けてもまだ攻撃力はこちらの方が上だ。

粘糸壊獣クモグス　攻１８００→１２００　守１９００→１３００

壊獣の出現記録（２）→（０）

「これでハンサムライガーは攻撃できないし、ソード・フィッシュは攻撃力不足。残念だったね、クモグスが突破できなくてさ」

「いえいえ。むしろ、私としてはお礼を申し上げたいぐらいですよ。まったく、気持ち良

いほど私の思い通りに動いてくださって」
「え？」
　アタッカーが縛りつけられ身動き取れなくなっているというのに、なぜか嘲りの笑みを浮かべるレッサー・デーモン。手札からゆっくりと、見せつけるように1枚のカードを表にした。
「手札からＥＭスライハンド・マジシャンの効果発動。このカードは自分フィールドのＥＭをリリースすることで、手札からの特殊召喚が行えます。ハンサムライガーをリリースしてさあお出でなさい、千の技持つ熟練の奇術師よ！」
　突如フィールドに人ひとり入れるほどのサイズの大砲が現れたかと思うと、上空を向いたその先から赤と青の２色に塗られた玉のようなものが発射された。そして発射された何かは空中で素早く体勢を整え、上半身をすっぽりと覆い隠すような赤いスーツを着込んだ奇術師の姿となって着地しこちらに向けて一礼して見せる。よく見ると青色に見えていたのは奇術師の下半身で、上半身と同じ赤のスーツどころか足すらないその腰から下には真っ青な鉱物のような柱がむき出しになっている。
　ＥＭスライハンド・マジシャン　攻２５００
「そして私のフィールドにモンスターが特殊召喚されたことで、再びソード・フィッシュの効果が発動されます」

「クモグス……！」
　粘糸壊獣クモグス　攻１２００→６００　守１３００→７００
「では、そろそろバトルいたしましょうか。まずはスライハンド・マジシャンでクモグスに攻撃いたします」
　スライハンド・マジシャンが手にした杖を一振りすると、その軌跡に沿って純白の鳩が翼を広げて飛び出し矢のようにクモグスめがけ突っ込んでいく。無数の鳩はクモグスにぶつかった途端爆発を起こし、その炎の中にボロボロになった巨体が崩れ落ちていった。
　ＥＭスライハンド・マジシャン　攻２５００→粘糸壊獣クモグス　攻６００（破壊）
　清明　ＬＰ４０００→２１００
「ぐううっ……！」
「まだ終わりではございませんよ？さらにソード・フィッシュでダイレクトアタックいたしましょう」
　ＥＭソード・フィッシュ　攻６００→清明（直接攻撃）
　清明　ＬＰ２１００→１５００
「ふむ、こんな所ですかね。メイン2、スライハンド・マジシャンもう1つの効果を使っておきましょう。1ターンに1度手札を1枚捨て、フィールドで表側になっているカー

ド1枚を破壊します。私が破壊するのは当然そのカード、壊獣の出現記録です」
「うわっ！」
スライハンド・マジシャンが今度は杖からビームを放ち、僕の場に最後に残っていたカードまでもが破壊される。今の手札コストでレッサー・デーモン側も残り手札は1枚になったが、それを差し引いても圧倒的にあちらが有利なことに変わりはない。
当然向こうもそれはよく承知しているらしく、余裕の態度を隠そうとさえしないままターンを終えた。
「僕のターン、ドロー！」
このカードは……よし。今度はこっちが、さっきのおかえしと洒落込んでみようじゃないか。だけどその前に、この手札ならうまくいけばあの山羊頭の悪魔に1発キツイのを喰らわせてやることができるはずだ。
「魔法カード、死者転生を発動。手札を1枚捨てて、墓地からモンスター1体を回収する。そしてスライハンド・マジシャンをリリースして、今回収したガメシエルを再び特殊召喚！そして相手フィールドの壊獣の存在を起点に、次にこっちが出す壊獣はこれだ！戦え、壊星壊獣ジズキエル！」
全身を未知なる金属と神秘の武装で包んだ、たった1体で星をも滅ぼす力を持った戦闘機械ジズキエル。その蛇のような下半身は金属製とは思えないほど滑らかに動き巨

体による高速移動を支え、両腕に当たる部分にはどちらも先端に必殺のパルスを発生させる装置が、その他にも全身にそのひとつひとつが１国の軍隊にも匹敵するほどの武装が無数に備え付けられている、まさに戦うために生まれてきた壊獣だ。

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

壊星壊獣ジズキエル　攻３３００

「バトルだ、ジズキエルでソード・フィッシュに攻撃！」

この攻撃が通れば、一気に大ダメージを与えることもできる。だが必殺の衝撃波がソード・フィッシュの体を捉える寸前、２体のモンスターが割り込んでその壁となったのがかすかに見えた。その直後衝撃波が大地を砕き、立ち込める砂煙で視界が塞がれる。

それが晴れた時僕が見たものは、何事もなかったかのように佇むソード・フィッシュとレッサー・デーモンの姿だった。

壊星壊獣ジズキエル　攻３３００→ＥＭソード・フィッシュ　攻６００

「ダメージが０……それに、ソード・フィッシュがまだフィールドに？」

「惜しかったですね。並みの相手ならば確かに今の攻撃で戦意喪失級のダメージを負っていたのでしょうが……この私を相手にしたのが運の尽きでしたね。私は今の攻撃に対して、手札のＥＭバリアバルーンバクと墓地のジンライノのモンスター効果を使用さ

せていただきました。この２体はそれぞれ手札から捨てることで戦闘ダメージを０にし、また墓地から除外することでＥＭの破壊を１度だけ無効にします。この２枚を同時に使ったことで、貴方の攻撃は何も成し得ることなく終わったというわけです」

ここまで来ると笑うしかない。いくらなんでも、あの攻撃でノーダメージはないだろう。こんなことならガメシエルを狙っておけば少なくともジンライノの効果は使えなかったのに、などと後悔してもすでに後の祭りだ。あとはこの１枚のカードが、どこまで働いてくれるかにかかっている。

「……カードを１枚セットして、ターンエンド」

清明　ＬＰ１５００　手札：０

モンスター：壊星壊獣ジズキエル（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

レッサー・デーモン　ＬＰ３８００　手札：０

モンスター：海亀壊獣ガメシエル（攻）

ＥＭソード・フィッシュ（攻）

魔法・罠：なし

「私のターンですね。ああ、これはこれは素晴らしいカードを引きました。ですがまず、スタンバイフェイズに先ほど手札コストとして墓地へ送ったキラー・スネークの効果を

発動しましょう。墓地に存在するこのカードは、スタンバイフェイズに自分の手札に戻すことが可能となるのです。そしてメインフェイズに魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動。デッキトップから１０枚を裏側で除外し、その後カードを２枚引かせて頂きます」

ここに来てのドローソースと墓地発動の効果により、枯渇した手札を３枚まで回復させるレッサー・デーモン。また厄介なカードを引いてくれたものだ。

「ＥＭガンバッターを召喚し、まずはソード・フィッシュの効果を使いましょう。私のモンスターの召喚により、ジズキエルの攻守を６００ポイント下げていただきます」

「……ふん」

ＥＭガンバッター　攻１５００

壊星壊獣ジズキエル　攻３３００→２７００　守２６００→２０００

さっきから、この効果が本気で鬱陶しい。数字が結構大きいうえに回数制限がないものだから、いくらこっちで大型モンスターを出してもみるみるうちに弱体化してしまう。

「そして次に、ガンバッターの効果を発動。１ターンに１度このカード以外のＥＭをリリースすることで、墓地からそのモンスターとは別の名を持つＥＭをサルベージいたします。この効果でソード・フィッシュをリリースです」

「ＥＭのサルベージ……まさか！」

「もうお分かりになられたようですね。私が回収するのは、ＥＭスライハンド・マジシャン……そしてこのカードを、場のＥＭことガンバッターをリリースすることで再び手札から特殊召喚します！」

ガンバッターが自身の背中にソード・フィッシュを乗せ、それを待ち構えていたちっこいのがロープを引いて弓のように発射する。元々が流線型のボディなだけあってすごい勢いで飛んで行ったソード・フィッシュが、いかなる記述を用いたのかスライハンド・マジシャンの姿になって地面に降り立った。

ＥＭスライハンド・マジシャン　攻２５００

「スライハンド・マジシャンの……」

「させるか！召喚成功時に永続トラップ発動、壊獣捕獲大作戦！このカードは１ターンに１度壊獣を裏側守備表示にして、さらにこのカード自身に壊獣カウンターを１つ乗せる。僕はこの効果を、ジズキエルに対して発動！」

壊獣捕獲大作戦（０）→（１）

ジズキエルが裏側守備表示となり、先手を打って守りを固める。そしてソード・フィッシュとの効果の因果が切れたことでジズキエルの守備力は再び２６００に戻り、ガメシエルはもちろんスライハンド・マジシャンですら突破できない数字となった。

これが僕の作戦の第一段階。さて、次にどうしてくるかな？上手いこと引っかかって

くれるかな？こっちのそんな思いにも気付かず、このターンで仕留める算段がパーになったことで露骨にイライラしだすレッサー・デーモンの姿はなかなか見ていて楽しかった。

「スライハンド・マジシャンの効果は表側表示のカードにしか使えない……ならば、その邪魔なカードをこのターンでは破壊しておきましょうかね。スライハンド・マジシャンの効果発動！手札を捨てて、壊獣捕獲大作戦を破壊しますとも！」

　再びキラー・スネークが捨てられ、壊獣捕獲大作戦のカードが破壊される。壊獣カウンターを置けるカードがなくなったことはそれなりに痛い……だけど、思わず笑ってしまった。

「プッ……あっはっは！」

「なんですか、その不愉快な笑いは。気にいりませんね」

「そりゃどーも。だけどこっちとしては『お礼を申し上げたいぐらいですよ。まったく、気持ち良いほど私の思い通りに動いてくださって』ってね！」

　なるべく似せて声真似まで披露してやると、レッサー・デーモンの額に深々と不愉快そうな皺が刻まれる。いいねえその顔、写真に撮っておきたいぐらいだ。

「こういうことさ、壊獣捕獲大作戦のさらなる効果発動！このカードが相手によって破壊された時、僕はデッキからカードを2枚ドローする！」

「なんですって!?」
「わざわざありがとうね、破壊してくれてさ。しかも、キラー・スネークを回収したターンに墓地に送ったってことは……」
「くっ……カードをセットしてガメシエルを守備表示に変更。エンドフェイズ、墓地に存在するすべてのキラー・スネークはゲームから除外されます……」
　海亀壊獣ガメシエル　攻２２００→守３０００
　これで手札コストのあてもなくなり、僕のターンがまた回ってくる。
「このデュエル、そろそろ終わりにさせてもらうよ！僕のターン、ドロー！」
　先ほど大作戦の効果で引いた２枚と、今ドローしたばかりの１枚。この３枚があれば、十分いける。
「ジズキエルを反転召喚して装備魔法、巨大化を発動！こっちのライフが相手より下回ってることで、ジズキエルの攻守は倍加する」
　壊星壊獣ジズキエル　攻３３００→６６００　守２６００→５２００
「攻撃力、６６００ですって!?」
「まだだぁ！魔法カード、シャイニング・アブソーブ！相手フィールドに光属性モンスターが存在するとき、その攻撃力を全ての自分のモンスターに加算する！本当なら光属性の壊獣とセットで使いたかったけど、この際贅沢は言えないね。光属性のスライハン

ド・マジシャンの攻撃力は、ジズキエルが頂くよ」
　壊星壊獣ジズキエル　攻６６００↓９１００
「攻撃力……９１００……！」
「バトルだ！ジズキエルでスライハンド・マジシャンに攻撃！」
　ジズキエルが両腕にエネルギーチャージを行い、その先端を真っ直ぐスライハンド・マジシャンに向ける。限界突破したエネルギーが今まさに放たれようとした時、レッサー・デーモンが最後の悪あがきに出た。
「トラップ発動、ドタキャン！相手モンスターの攻撃宣言時に自分フィールドのモンスターを全て守備表示にし、さらにこのターンに破壊されたＥＭは全て持ち主である私の手札に戻ります！これで次のターンに再びスライハンド・マジシャンを召喚し、今度こそとどめを刺してあげますよ！」
　再び芽生えた逆転勝利の可能性に、レッサー・デーモンの勝ち誇った表情に一瞬だが安堵の色が走ったのを僕の鋭くなった目は見逃さなかった。
　そして、今の僕はそれをすぐさま絶望に塗り替えることに対して暗い高揚と満足感を感じるのだ。
「速攻魔法、禁じられた聖槍を発動！このカードの効果でスライハンド・マジシャンは攻撃力が８００ポイントダウンし、このターン魔法と罠の効果を受け付けない！これでド

タキャンの効果で守備表示になれないスライハンド・マジシャンは、攻撃表示のままバトルを行ってもらうよ」
「そ、そんなこと……ひっ！」
「もう観念しろ、レッサー・デーモン！ジズキエル、お前の力を見せてやれ！」
壊星壊獣ジズキエル　攻９１００→ＥＭスライハンド・マジシャン　攻２５００→１７００
レッサー・デーモン　ＬＰ３８００→０

「ぐわあああああっ！」
デュエルの敗者となったレッサー・デーモンの姿が、悲鳴と共に消えてゆく。だけどまだだ、まだ破壊したりない。そうだ、何を遠慮することがある。このあたり一帯をジズキエルの武装で焼け野原に変えて、それから他のことは考えればいいじゃないか。
「叩け、ジズキエ……うっ！」
振り返ったところでこちらを遠巻きに見守っている後方支援部隊の人たちと目が合い、すんでのところで我に返る。デュエルディスクを殴りつけるほどの勢いで電源を落とすと、辛うじてジズキエルの姿も消えていった。

……今のは危なかった。たまたま正気に戻れたからよかったものの、あと少しこのデュエルが長引いていればそれだけ心の闇も膨れ上がっていただろうし、そうなっていたら自分を止められたかどうかはわからない。はあはあと荒い息をつきながら、ふらふらと村に背を向けて歩きだす。

そういえば、とふとおかしな点に気づいた。デュエルはとっくに終わったのに、まだデスデュエルの衝撃が襲ってこない。気になって腕を見ると、そこにあったはずのデスベルトの姿は影も形もなかった。

「あれ……？」

「ま、待ってくれ！」

訝しんでいるうちに後ろから声をかけられ振り返ると、バックアップ・ウォリアーがこちらへ走ってくるのが見えた。さすがの軍人の脚力ですぐ僕に追いつき、切羽詰まった様子で話しかけてくる。

「まず、君には礼を言わせてほしい。君のおかげで、我々後方支援部隊のみならずここにいるたくさんの民間人達も助かったよ」

「……たまたまですよ。ええ、たまたまです」

そうだ。僕がこのデュエルを受けた時には、悪魔への復讐のことしか頭になかった。バックアップ・ウォリアーをはじめとしたここにいるカードの精霊や、それ以外の人々

を守るために戦うなんて正義の味方チックなことはまるで考えていなかった。
今回はたまたまそれが結果としてこの村を守ることに繋がったが、次もそううまくいくとは限らない。それどころか、僕自身がここを壊滅させる可能性すらある。だから、僕はここには長居しない方がいい。そしてそれを見抜いたからこそ、バックアップ・ウォリアーも無理に引き留めることができないのだろう。
「そうだ。僕が腕に付けてた機械って、どこ行ったか知りません？」
「ああ、あの腕輪のことか……ひどく強い電圧をかけられたせいで中身がぐちゃぐちゃになっていたから、とりあえず外しておいた。なにやらロックがかかっていたようだが、それも完全に壊れていたからね。まずかったのなら、今すぐ誰かに取ってこさせるが……」
「いえ、ならいいんです。そこら辺に捨てといてください」
強い電圧というのは、あのサンダー・ザ・キングの一撃のことだろう。普段なら喜ぶべきことなんだろうけど、このタイミングでデスベルトが壊れたというのは、果たしていいことなんだろうか。少なくともあれが生きていれば、僕が心の闇に飲まれて暴走したとしてもデュエルのたびに体力が吸収され、どこかのタイミングでストッパーになっていたかもしれないのだが。皮肉なもんだ、よりにもよって楽しくデュエルすることを何よりも妨害していたデスベルトが取れたことを素直に喜べなくなるだなんて。

「では、お世話になりました。ご飯、美味しかったです」

「……すまない」

苦痛に満ちた声音で、バックアップ・ウォリアーが敬礼する。この少年は我々の恩人なのに、なぜそれがたった1人で出ていこうとするのを引き留めるどころか、何もすることができないのか。そんな悔しさがあふれる声音だった。

最後にその姿に手を振り、再び前を向く。さて、どこに行く？何も決めてはいないが、遊の言葉を信じるならばこの世界のどこかにユーノがいるはずだからそれを探すのもいいだろう。それに、あの赤く宙で光る隕石のことをなんとかして調べてもみたい。壊獣の出現にあの隕石の力が関係していることを考えると、暗黒界の暴走とやらにも無関係ではないはずだ。

いずれにせよ、まずはその暴走したという暗黒界の様子を見に行ってみよう。とにかくこの目で確認しないことには何とも言いようがないし、軍を作るほど組織だって動いているのならばそこに情報も集まるはずだ。うまくすれば、ユーノの消息も手に入るかもしれない。

方針、だなんて大げさなものでもないが。とりあえずの目標を決め、レッサー・デーモンが最初に飛んできた方向に見当をつけて歩き出した。

ターン９６　墓場の騎士と最速の玩具

バックアップ・ウォリアーたちフリード軍後方支援部隊と別れてから、何日が経過しただろうか。その間、僕はひたすら歩き続けていた。寝る間も惜しみ、食事すらろくな調理をせずにひたすら動き続けたのには２つのわけがある。

そのひとつが、最近この世界で新たな動きがあったという情報が入ったこと。ぽつぽつとこの地で暮らしている人々から食料を分けてもらったりする交渉の際に聞いたところによると、なんでもつい最近暗黒界におかしな動きがあったらしい。狂王ブロンがデュエルに敗北のち消滅し、異世界からやって来た赤い服の男がその後釜に着いた……とか何とか。

もっともこういった話は伝わっていくうちにどこかで尾ひれがつくものだし、どこまで真実が含まれているかなんてわかったものではない。というかそもそも、狂王ブロンのくだりはともかくとしてもダーク・バルター、レッサー・デーモンとそれなりに上級な悪魔を叩き潰してきた僕の話も少し混じってるんじゃないかと睨んでいる。赤い服の男ってのがいかにもそれっぽいし。とはいえ、ここまで大規模に広まっている噂が全くの事実無根とは考えにくいし、やはり会ったこともないけどブロンとやらにも何か

あったのはほぼ確定だろうから、自分の目で確認しておきたい。それに、会う人会う人全員から僕のオシリスレッドの学生服をおかしな目で見られるのは流石にもう勘弁してほしくなってきたし。

　そして、もう１つの理由。噂話レベルの赤い服の男よりもむしろ、こちらの方が僕にとっては緊迫した理由だ。

「いたぞ、奴だ！」

「奴を仕留めれば、俺たちもこんな下っ端からはおさらばだぜぇ！」

「ようしお前ら、左右に散れ！挟み込んで逃げ道を塞ぎ、３人がかりで倒してやる！どんな化け物だかは知らないが、俺たちがチームを組めば勝てるわけない！」

「「おーう！」」

　２体の悪魔を倒した時点で、どうも僕は暗黒界からマークされる存在になってしまったらしい。何体も襲い掛かってくる下級悪魔を返り討ちにして吐かせてみたところ、どうも少額ながら僕には懸賞金がかけられているようだ。あれから何日も立っているので、その額もさらに上がっているかもしれない。そのため、今もチラリと見える賞金稼ぎ気取りの輩がしょっちゅうやってくるのだ。そのため、おちおち寝ている暇もない。それでも不思議と動き続けていられるのは、認めたくはないが先代の力のおかげだろう。僕の体が人間離れしつつあるのはダークシグナーになった時から気づいてはいた

が、この壊獣デッキを手に入れてからはそのスピードが加速度的に跳ね上がっている。まるで疲れは感じないし、夜目も耳も効くようになっていち早く接近を感じ取れる。
「奴め、森に入って隠れる気か！」
「そうはいくか！俺たちの方が早いぜ、逃げ切れるわけがねえ！」
「俺たちも突っ込んでいって包囲しなおすぞ！」
今も、馬に乗って追いかけてくる3体の悪魔から身を隠すため近くの森に入り込んだところだ。返り討ちにすれば楽なのは重々承知だし、相手も下級なだけあってデュエルの腕も低いことはわかっているのだが、そういう訳にもいかない。僕の壊獣デッキは呪われたデッキ、使えば使うだけ心の闇を押し広げていってしまう。ここ数日はデュエルを控えて逃げ回ることに専念しているため精神状態も割と落ち着いているが、もしこれ以上デュエルをし続ければ僕はダークシグナーとして、辺境の大賢者の家で見せられたあの悪夢をこの世界に広げてしまう可能性すらある。あの時感じた破壊への高揚、敵といわず味方といわず全てを見境なく潰しまわる快感、あんなものに呑まれるわけにはいかない。この世界のためだなんて格好つけるつもりはない、ただ単純に僕のためだ。僕が悪魔に堕ちないためにも、このデッキを使うわけにはいかない。
「ちっくしょう、どこ行きやがったあの人間！」
「俺たちが撒かれたってのかよぉ!?いやでも、まだ近くにいるはずだぜ！」

「ん、今そっちの方で草が動いたぞ！俺が正面から行くから、お前らは左右に散らばるんだ！」
「「おう！」」
　どたばたと走り回った挙句、新しい目標へ向けて走り去っていく3体の悪魔。それをしばらく見送ってから、もう帰ってこないことを確信して今の居場所……木の上の葉が生い茂った中から滑り降りた。どうやら、今回もデュエルは回避できたようだ。もっと長いことこの場所で息を潜めることも覚悟していたけど、ちょうど向こうに動物でもいたのか茂みがガサガサ動いてくれたおかげで思ったより早く助かった。
　だが元の道に戻ろうと森の奥に背を向けた瞬間、背後で木の枝が折れる音がかすかに聞こえた。慌てて木の幹に体をくっつけるようにして身を隠し、恐る恐る覗き込む。先ほどの3人組が見ていた場所にある茂みのさらに奥から、落ち葉やら枝やらを踏みつける音が一定のリズムで聞こえてくる。
　……前言撤回。動物なんかじゃなくて、本当にここには誰か潜んでいるようだ。それも、自分がいることを全く隠す気のない何かが。
「……」
　できる限り気配を消して、何が来るのかを待ち構える。足音が聞こえるぐらい近くにいるのなら、今更下手に隠れたり逃げたりして動くとかえって見つかりやすくなってし

まう。あの３人組を撒けて気が緩んでいたのだろう、なんにせよ最初に近づいてくるのに気づけなかったこちらのミスだ。となると、なんとかここで隠れてやり過ごすしかない。

じっと足音の方を見ていると、やがてその主の姿が見えてきた。額に生えた鬼のような２本角、筋肉質な体と銀色の金属めいたパーツ、鋭い鉤爪に翼に尻尾……ああくそ、また悪魔か。それもあの迫力、かなりの実力者だ。これまで適当に撒いてきた雑魚とは一味違う、久々にかなり危ない感じの相手だ。

「……」

息を限界まで潜めて、指一本動かさないように神経を集中させ周りの空気に溶け込む。大丈夫だ、落ち着け、ほらあの悪魔がすぐ横を通り抜けていく、もう少しだ、これでこのまま行き過ぎれば逃げ切れる……だがそこで、すぐ目の前まで来た悪魔が足を止めた。何かを探すかのように、左右に目を走らせ始めた。

「……！」

１秒１秒が何時間にも感じられるほどの沈黙の時間が過ぎ、何も見つけられなかったらしい悪魔が再び歩き出す。その姿を見送ってからさらに１０分ほどその場所で留まり続け、物音ひとつ聞こえなくなったころを見計らって慎重に体を動かし始める。力の入れすぎで強張った手足をほぐし、ゆっくり息を吐き出す。

「よう」
「な、なななな……！」
突然の声に飛び上がらんまでに驚き、ぎこちなく首を後ろに向ける。腕を組んだ状態で、僕が動き出すのをじっと待っていたらしい鬼のような例の悪魔がそこにいた。
逃げる？駄目だ、身体能力で本物に敵うわけがないのはダーク・バルターを振りきれなかったときに実証済みだ。迎え撃つ？そっちの方がまだ可能性がありそうだが、デュエルとなるとこのデッキを使うしかない。でもだからといって、このままここで捕まえられるなんて冗談じゃないし、でも、でも……と色々な思考が頭の中をぐるぐるした状態で固まっていると、悪魔の方が両腕を上に挙げて手のひらを広げて見せた。
「……あー、なんだ。ビビらせたんなら謝るが、俺はこの通り手を出すつもりはないからな。ほら、見ての通り丸腰だ」
困ったような声で言い、１歩下がって僕から距離を取る。
……あれ？よくわからないが、この悪魔は他とは違うのだろうか。仮に僕を騙そうとしているのだとしても、後ろを取られた時点で不意打ちし放題だったろうにそんなことする意味がない。命がけだから絶対選択ミスはできないのに、どうすればいいのかまるで見当もつかない。あれこれ考えていると突然あたりに小さな、しかしはっきりと聞こえる音が響き渡った。音源は僕の腹……まあ、ここ数日ろくに料理もできてなかったか

らね、しゃーないよね。
なんとなく気まずい空気が流れてしばらくしたところで、鬼がやれやれとため息をついてどっかりとその場に胡坐をかいて座り込んだ。懐に手を突っ込み、小包のようなものを取り出して開ける。中に入っていた子供の頭ほどもあるおにぎりを1つ掴みとり、グイッとこちらに突き出してきた。
「ほれ、食えよ。ツナ入ってんぞツナ」
「……いただきます」
だいぶ躊躇いはしたが、食欲には勝てなかった。一応割ってみると、なるほど確かに具は僕も知っているツナだ。どうせ食べるんならもう自棄だ、後は野となれ山となれ。僕もその場に座り込み、手近な木にもたれかかって手の中のおにぎりに噛り付いた。

それから、目の前の悪魔とは色々なことを話した。一度吹っ切れると案外話しやすく、これまで悪魔と見るだけで逃げ回ってきたのがバカバカしく思えてくるほどあっさりとしたものだった。
……彼の名はケルト。昔はその高い実力から、暗黒界の鬼神とまで呼ばれた武人らしい。どうりでプレッシャーが半端ないわけだ。しかし数百年前に自身を上回る実力の

持ち主であった龍神グラファや魔神レインに暗黒界の統治を託し、自らの武を鍛えるために武者修行の旅に出る。そのため、今となってはその名を知るものも数少ないとのことらしい。事実、僕がこれまでこの世界を歩いていた中でもケルトなんて名は聞いたことがない。

　そんな彼がこうしてこの地に戻ってきたのは、まさにこの世界がいま陥っている混乱が原因だ。暗黒界による突然かつ無差別な侵攻の話を耳にして、その真偽を確かめ問い詰めるべくやって来たのだ。そして様々な情報を寄せ集めた結果、空に輝くあの隕石が怪しいということに気づいた彼は自分までその波長に呑まれる前にとこの森の中へ入り、空から降り注ぐ隕石の光を遮断することで今まで正気を保ち続けてきていたらしい。しかし昼夜を問わず降り注ぐこの赤い光の前では下手に動くこともできず、思案に暮れていたところ僕をたまたま見つけた、とのことだ。

　もちろん、このケルトが嘘をついている可能性だってある。だけど、僕はその言葉を信じた。というよりも、信じようとした。常に狙われ、寝ても覚めても命の危険が付きまとうこの世界の殺伐とした空気に芯から疲れ切った今、なんでもいいから人の話を信じたかった。いくら過去の負の歴史を見せつけられたとはいえ、僕も根っこのところではまだまだ現代っ子なんだということを痛感する。

「とま、俺の話はこんなとこだな。んで、お前さんはどうしたんだ？見た感じ随分余裕な

さそうだけどよ」

問われるままに、ぽつぽつと話し出す。さすがに異世界から来ました、なんて話をする気にはなれなかったので砂漠の異世界までのことは適当に誤魔化しつつ、この世界に来てからのことを整理しつつまとめてみる。たとえ相手が人間じゃないとしても久しぶりにするまともな会話ということもあってか、気が付けばバックアップ・ウォリアーにさえ言わなかったダークシグナーと先代のことまで喋っていることに自分でも驚きながらも、最終的には洗いざらい喋っていた。どんだけ会話に飢えてたんだろうかと苦笑しつつ最後まできっちり喋り終えると、黙って聞いていたケルトがぼりぼりと鋭い爪のついた腕で自分の頭を掻いた。

「なんっつーかこう……ガキのくせに随分ませた奴だとは思ってたが、お前も色々あんだな」

ダークシグナーの呪いにも等しい闇の力にいつ心をやられるかもしれない僕に対して警戒も躊躇いも見せず、それだけ言ってその場に寝転がる。僕にとっては人生の全てがひっくり返ったように感じるこの衝撃……チャクチャルさんの過去やダークシグナーの負の歴史も、これくらい人生経験を積めばこんな風に流せるようになるのだろうか。

……少なくとも、今の僕には絶対にたどり着けない境地だ。自分の丸太のように太い

腕を枕にしたケルトが、目を閉じてまた口を開く。
「なかなかの話だったが、とりあえず今日はもう寝とけ。ここ数日まともに寝れてねえんだろ？誰か来たら俺が教えてやるから、ガキは睡眠が足りねえと大きくなれんぞ」
「で、でも」
「でももだってもねえよ。第一、お前俺らの本拠地の場所わかってんのか？どうせ俺も明日には出るんだ、案内してやるから今日は休んどけ」
　言われてみれば確かに、僕が知ってるのはあくまでは暗黒界の軍がこっちの方にいるという程度の大まかな方向だけだ。黙っていても向こうの方から賞金稼ぎが来てくれるのでこれまでは道に迷わずやってこれたが、これから先もそれが続く保証はないわけだし。
　これで捕まってたりしたらお笑いだなあ、などと考えながら横になる。なんかここ数日、必要最低限だけとはいえそのたびに心を蝕んできたデュエルでだいぶ荒んできたせいで、すっごい自暴自棄になってる気がする。普通なら絶対警戒するであろうこんなシチュエーションを普通に受け入れてる時点で、もうどうなったとしても文句の言いようがない。
　ただ幸か不幸か、そのまま寝付くことはなかった。目を閉じるか閉じないかのうちに、ケルトがいきなり立ち上がって周りの闇に視線を向け始めたからだ。

「何の用だ、ああ？」
　ケルトのドスの利いた低い声に答えるかのように、森の奥でなにか巨大な者が動く音がする。このサイズ感、恐らくは身の丈2メートルはあるケルトとほぼ同サイズ。やがてのっそりとこの場に姿を現したのは、ケルトよりもさらに一回り大きな黒い翼を持つ、顎のあたりから一組のねじれた角が生えた悪魔だった。
「随分と久しい顔だな、ケルト」
「んだよ、お前かよ……ラチナ、なんでお前の顔なんか帰ってきて最初に見なきゃいけねえんだ」
「悪かったな、お前好みの美女じゃなくて。お前がここを出て行ってからのことで積もる話も色々とあるんだが、生憎今日は忙しくてな。その楽しみはまたの機会にするとして、ひとまずそこをどいてくれ」
　ケルトと今ラチナと呼ばれた悪魔の2人は知り合いらしい……のだが、どうも空気が不穏だ。一瞬迷ったが、ひとまずここは狸寝入りで様子をうかがうことに専念する。第一、今更逃げたところで逃げ切れるほどの距離はない。
「おいおい、一体何があったってんだ？随分とまあ怖い顔してんじゃねえか」
「お前には関係ないことさ。そうだ、なんならお前も一緒に来るか？覇王様は、そこの人間に用があるらしいからな。暗黒界の闘神と呼ばれた俺の他に鬼神ケルト、お前が加

わってくれるならこの侵略も安泰だ」
　やはり、狙いは僕か。それにしても、覇王？新しく出てきたワードの持つ禍々しい響きに、目を閉じながら緊張が高まっていくのを感じる。だがそれは意外にも、同じ暗黒界であるケルトにとっても初耳の単語だったようだ。
「おい、ちょっと待てや。覇王って誰だ？そんな肩書の奴は俺がいたときにはいなかったはずなんだがな」
「そうだったな、お前はまだ知らないのか。覇王様は素晴らしいお方だよ。数日前に突如現れ、ブロン亡き後に彗星のごとく我々を纏め上げた。あのお方のおかげで、我々の侵攻は大幅に効率化された。あのお方こそ、まさしくこの世界を統べるにふさわしい人物だ」
　わずか数日前に現れ、ブロンが消えた後釜に着いた覇王、ね。これまで何度か聞いてきたあの噂話は、どうやら思った以上に正確だったらしい。となると、その覇王とやらが赤い服を着ていたというのもおそらく本当のことだろう。
　まあ常識的に考えれば、十代がここにいるなんてことあるわけないんだけどね。ここ最近皆に会ってないから、少しおセンチな気分になっているだけだろう。よくない兆候だ、もっと気張っていかないと。
「おい、ちょっと待てよ」

思わぬところで手に入れた情報からふらふらと連鎖式にどこかへ行こうとしていた思考が、ケルトの不機嫌そうな声で現実に引き戻された。
「ん、どうした?」
「そりゃこっちのセリフだ馬鹿、どうしちまったんだお前ら?黙って聞いてりゃ侵攻だの侵略だの、俺の知ってる暗黒界はどこに行っちまったんだよ?ここに戻ってきてから色々と見たけどよ、こんな無差別な攻撃がお前らの言う侵略なのか?なあ、答えろよ。俺が納得するような答えが出せないっつーなら、このガキは渡せねえな。成り行きとはいえ同じ飯食った相手だ、欲しいからってハイそうですかなんて差し出しゃしねえよ」
「……変わってないな、お前は。昔から自由で身勝手で、実力はあるくせに帰属意識がまるでない。そのせいでお前がここを出て行ってからは、お前の存在自体つい最近までなかったことにされていたからな」
「当たり前だ、俺は変わっちゃいねえよ。何があろうと、どこに行こうと、俺そのものは変わりようがねえ。勝手に変わってんのはお前らだ、昔はもっとまともな奴らだったってのに」
何があろうと、どこに行こうと、俺は俺……か。黙って聞きながら、その発言には少しばかり思うところもあった。僕はこんな風に、自分のことを胸張って言えるだろうか。ダークシグナーとして少しづつ破滅の道に近づきつつある僕と、元人間の遊野清明

としてその運命を避けようとしている今の僕。わからない。
「昔の話はいい。そうか、どうあってもその人間を渡さないというのなら、仕方がない。鬼神ケルトは異国の地で風来坊のまま死んだ、昔の縁で墓ぐらいは立ててやろう」
「物騒な話だな、オイ。なんで昔の仲間と潰しあわなきゃいけねえんだ」
「嫌なら覇王軍に来い。覇王様も、お前の帰還とあらばお喜びになられるだろう」
「交渉決裂だな。なんだかわからねえが、そんなポッと出の野郎なんぞの下にいられるかよ」
２人の二の腕に闇が纏いつき、それが晴れた時その箇所にはデュエルディスクらしい装置が装着されていた。じりじりとスペースを確保するため横に移動しながら、ケルトが密かに僕に向かってアイコンタクトを送る。感謝の気持ちを込めて小さく頷き、ラチナの目に留まらないようにゆっくりと起き上る。いざという時には逃げろ、そう言いたいのだろう。
「準備はいいな?」
「お前こそな」
「デュエル!」
「先攻は俺だ。カードを3枚セットして、闇の誘惑を発動。デッキからカードを2枚引く」

闇の誘惑、本当に便利なカードだ。２枚引いた後で闇属性を除外すればいいから、まずデメリット効果が適用されることなんて……。

「手札に闇属性モンスターがあればそれを除外するんだがな。あいにく俺の手札はトラップだけだ、これをすべて捨てとくぜ」

なんと、デメリット効果が発動されてしまった。手札に除外できる闇属性が存在しない場合、全てのカードは墓地へ捨てられる。不敵に笑いながら手札３枚をまとめて墓地へ送り込むケルトにまさか手札事故か、とこっちが生きた心地がしなかったが、ケルトの調子にはまるで焦りや緊張がみられない。

「手札も使い切ったな。ターンエンドだ」

「ならばこちらから行くぞ、ドロー。手札のＳＲ（スピードロイド）ベイゴマックスは、自分フィールドにモンスターが存在しない時に特殊召喚できる」

いくつものコマが連なりあったようなモンスターが、それぞれ高速回転しながらそれ自体１つの生き物のように現れる。

ＳＲベイゴマックス　攻１２００

「さらにベイゴマックスが場に出た時、デッキから別のＳＲを１枚手札に加えることができる。ＳＲバンブー・ホースをサーチし通常召喚、効果により手札から別のＳＲを特殊召喚できる。出でよ、タケトンボーグ」

ＳＲバンブー・ホース　攻１１００
ＳＲタケトンボーグ　攻６００
ベイゴマの隣に竹とんぼと竹馬が並ぶ。なんだこの展開力。
「タケトンボーグの効果発動。このカードをリリースし、デッキからＳＲのチューナー１体を特殊召喚する。ただしこの効果を使用するならば、このターン風属性以外のモンスターが出せなくなる制約を受けるがな。電々大公を特殊召喚する」
竹とんぼ型モンスターが空中で展開し人型のロボットになったかと思うと、その姿が消えて雷マークの電々太鼓を手にした人型モンスターが特殊召喚される。
ＳＲ電々大公　攻１０００
「ちんまいモンスターばっかり並べやがって、それからどうする気だ？」
「ワンターンキル、だ。永続魔法、一族の結束を発動。俺の墓地に存在するモンスターの種族が単一の時、その種族を持つモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする。タケトンボーグは機械族、よって俺の場の機械族は攻撃力が上昇する」
ＳＲベイゴマックス　攻１２００→２０００
ＳＲバンブー・ホース　攻１１００→１９００
ＳＲ電々大公　攻１０００→１８００
「そんな……！」

　思わず小さく声が出る。１体ごとのステータスは大したことないＳＲだが、その分展開力は高い。その展開力に全体強化が加わることで、総攻撃力はあっという間に４０００を軽く上回る。
「バトルだ、電々大公で攻撃！」
「悪いが、そんなもん通せねえな！俺は今のダイレクトアタック宣言時、墓地に存在する３枚のトラップの効果をまとめて発動する！」
「墓地からトラップ……やはり仕込みは整っていたか」
「ほざけ！幻影騎士団シャドーベイル（ファントム・ナイツ）３枚は攻撃力０かつ守備力３００の通常モンスターとなり、守備表示で俺のフィールドに特殊召喚される！さらに最終突撃命令をチェーンして発動、これでフィールドの全モンスター、つまり俺のシャドーベイルは全員が攻撃表示になるぜ」
　木々の地面に落とす影が揺らめき、その中から影の騎士が騎乗する漆黒の馬が３体同時に飛び出す。青白く燃えるたてがみは風もないのに揺らめき、この世ならざるものであることを物語っている。そうか、この効果をまとめて使うためにあえて闇の誘惑を手札にモンスターがない状態で発動したわけか。だけどせっかく壁となるシャドーベイルも、最終突撃命令の効果で低いどころか皆無の攻撃力を晒してしまう。一体、何を考えているんだろう。

幻影騎士団シャドーベイル　守３００→攻０
幻影騎士団シャドーベイル　守３００→攻０
幻影騎士団シャドーベイル　守３００→攻０
「ここは攻めるのみか？電々大公で攻撃継続」
「だったら次のトラップだ、ジャスティブレイクを発動！俺の通常モンスターが攻撃対象となった時に発動し、攻撃表示の通常モンスター以外のモンスター全てを破壊する！」
幻影の騎士が突如鳴り響いた雷鳴をバックにＳＲの軍団へ一斉に攻めかかる。周りの地形まで効率的に生かした騎士たちの連携攻撃に、個々の実力では遥かに上回っているはずの玩具のモンスターたちがなすすべなく倒されていった。
「……カードをセットし、ターンエンドだ」
ケルト　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：幻影騎士団シャドーベイル（攻）
幻影騎士団シャドーベイル（攻）
幻影騎士団シャドーベイル（攻）
魔法・罠：最終突撃命令
１（伏せ）

ラチナ　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：一族の結束
１（伏せ）
「俺のターン、ドローだ。まず伏せておいた魔法カード、マジック・プランターを発動。俺の場の永続トラップ、最終突撃命令を墓地に送って２枚ドローする。フィールド魔法、ダークゾーンを発動！闇属性モンスターの攻撃力が５００ポイントアップする代わりに、守備力が４００ポイントダウンするぜ」
幻影騎士団シャドーベイル　攻０→５００　守３００→０
幻影騎士団シャドーベイル　攻０→５００　守３００→０
幻影騎士団シャドーベイル　攻０→５００　守３００→０
これで、シャドーベイル達にほんのわずかながら攻撃力が生まれた。それはつまり、戦闘ダメージを与えられるということだ。
「さらに魔法カード、アームズ・ホールを発動。デッキトップを墓地に送って、装備魔法１枚をサーチ。俺がサーチするのはこのカード、折れ竹光だ。そしてこのカードをそのままシャドーベイル１体に装備する」
中央のシャドーベイルの持っていた武器が光り、真ん中あたりでぽっきりと折れた竹

光に変化する。あれでは武器にならないし、現にシャドーベイルのステータスは何一つアップしていない。
「攻撃力が０ポイント上がる無意味な効果しか持たない壊れた武器か。小汚い騎士にはお似合いだな」
「これを見てまだ同じことがほざけんのか？魔法カード、黄金色の竹光を発動！装備カードの竹光が俺のフィールドに存在することで、カードをさらに２枚ドローする」
「ドローソースか……！」
「魂を吸う竹光がありゃあなお良かったんだが、贅沢は言えねえな。やれ、シャドーベイル！一斉攻撃でダイレクトアタックだ！」
　シャドーベイルが掲げる折れ竹光に怪しい影がかかり、無数の霊魂がその刀身に纏わりつく。人馬一体となり森を駆けるシャドーベイルが、今まさにそのへし折れた竹光でラチナの体をしたたかに打ち付けようとしたその時、モーター音を立てて四角く平べったいマシーンが飛び出してきた。
「なに？」
「相手モンスターの直接攻撃宣言時、手札からＳＲメンコートの効果を発動できる。このカードを攻撃表示で特殊召喚し、相手モンスターは全て守備表示となる……相変わらず複雑なようでいてその実単純な攻め手だな、ケルト」

幻影騎士団シャドーベイル　攻５００→守０
幻影騎士団シャドーベイル　攻５００→守０
幻影騎士団シャドーベイル　攻５００→守０
ＳＲメンコート　攻１００→９００
減っていく手札のリカバリーが難しいデッキを使っていた僕にはよくわかるけど、あれだけのリソースをつぎ込んでの攻撃が防がれたのはケルトにとってもさすがにかなり痛いはずだ。かといって、あの残り１枚の手札はこの攻撃を通すために使うようなものではないらしい。
「クソが！カードを２枚セットして、ターンエンドだ！」
「どうやら、ここで種切れのようだな。墓地に存在するバンブー・ホースの効果を発動。このカードを除外することで、デッキから風属性モンスターを墓地に送る。ＳＲシェイブー・メランを墓地へ送り魔法カード、スピードリバースを発動。墓地からＳＲを特殊召喚する。甦れ、シェイブー・メラン」
ＳＲシェイブー・メラン　攻２０００→２８００
「レベル４で攻撃力２８００か、案外やるじゃねえか……！」
「無理に強がる必要はないぞ？さらにＳＲダブルヨーヨーを召喚し、その効果を使う。墓地からレベル３以下のＳＲ、ベイゴマックスを蘇生する」

文字通り２つのヨーヨーを模したモンスターが勢いよく回転し、先ほど動きを止めてスクラップになったベイゴマックスに再び命を吹き込む。そして、ベイゴマックスが特殊召喚に成功したことでまたあのサーチ効果が使用可能となってしまう。

ＳＲダブルヨーヨー　攻１４００→２２００

ＳＲベイゴマックス　攻１２００→２０００

「ベイゴマックスの効果でＳＲパチンゴーカートを手札に加える。これ以上の展開は無理か、ならばメンコート、ベイゴマックス、ダブルヨーヨーでシャドーベイル３体に攻撃！」

ＳＲメンコート　攻９００→幻影騎士団シャドーベイル　守０（破壊）

ＳＲベイゴマックス　攻２０００→幻影騎士団シャドーベイル　守０（破壊）

ＳＲダブルヨーヨー　攻２２００→幻影騎士団シャドーベイル　守０（破壊）

「俺のシャドーベイルはモンスターとしてフィールドを離れた時に除外される……といいたいところだがな、俺は最初の攻撃宣言時に永続トラップ、王宮の鉄壁を発動していたんだよ。これで除外されるカードはすべて墓地へ行く、つまりシャドーベイルは再び墓地でお前に一太刀浴びせる隙を窺ってるってわけだ」

そうだ。いくらフィールドを空にされようとも、王宮の鉄壁により守られている限り幻影騎士団は倒れない。傷ついても倒されても、相手の直接攻撃に合わせて何度でも蘇

る。

「なるほど、解説感謝しよう。だが構わない、シェイブー・メランで攻撃だ」

「話聞いてたのか？墓地に存在するシャドーベイルは、ダイレクトアタックの宣言にたいして何度でも蘇る！帰って来い、シャドーベイル共！」

再び木々の影の隙間から駆け抜けてくる幻影の戦士たちが、鋭角的なボディを持つ戦闘機械の円弧を描く一撃から自らの主を守る壁となって立ち上がる。だがその騎士の１人に、突如ラチナの方から伸びてきたコードが突き刺さる。

「速攻魔法、エネミーコントローラーを発動。この効果のうち１つ目のものを使い、シャドーベイル１体を攻撃表示に変更する。そして攻撃表示のシャドーベイルにシェイブー・メランで改めて攻撃だ」

幻影騎士団シャドーベイル　守３００→０　攻０→５００

幻影騎士団シャドーベイル　守３００→０　攻０→５００

ＳＲシェイブー・メラン　攻２８００→幻影騎士団シャドーベイル　攻５００（破壊）

ケルト　ＬＰ４０００→１７００

「ぬおおおおっ！」

「２体残した貴様らにも消えてもらおうか。メイン２にトラップカード、爆導索を発動。このカードの存在する縦一列にあるカード全て……シェイブー・メランとシャドーベイ

ル、そして王宮の鉄壁を破壊する」
「何っ!?」
　シャドーベイルの無限蘇生のカギを握っていた王宮の鉄壁が同時に破壊されたことで、今破壊された方のシャドーベイルはゲームから除外されてしまう。これで残りのシャドーベイルは、墓地に存在しているのとフィールドに残るものの計2体のみだ。
「ターンエンドだ。もはや大勢は決した、サレンダーしろ……かつての戦友に対する最後の情けだ、このままその人間を引き渡すというのなら、これ以上こちらも深追いはしない」
　確かに、場の状態だけ見ればもっともな話だ。それは、当事者たる僕も認めざるを得ない。そもそもケルトが今戦っているのは、ついさっき会ったばかりの僕のためだ。そんな行きずりの相手に、ここまで命を懸けてくれただけでもすでに十分すぎておつりがくるレベルだ。
　だがケルトは、あくまでもにやりと笑ってみせる。最初のターンに見せたのと同じように不敵に、胸を張って立ち上がる。
「寝言は寝て言え、馬鹿。やっぱりお前は俺の知ってる闘神ラチナじゃねえな、昔のお前ならそんなくだらねえ質問なんて考えすらしなかったろうぜ」
「そうか。その世迷い事はともかく残念だよ、どうやらお前のことを買い被っていたよ

うだ。鬼神ケルトにも、自分にとってどちらが得な道かを選ぶ頭ぐらいはあると思っていたんだがな」

「損得じゃねえよ、こういうのはハートの問題だ。てめえらはおかしくなってる、だから俺は戦う。それが昔のよしみで俺がしてやれる唯一のことだからな」

「我々が変わったというのなら、それは紛れもなく進歩したんだよ。いつまでも懐古趣味に拘っている鬼神殿とは違って、ね」

ケルトはこのデュエルが始まる前から何回も、ラチナが昔から変わってしまったと言い続けている。当の本人は取りつく島もないけれど、今のケルトの心中は一体どうなっているんだろうか。変わってしまったがゆえに、そして自分だけが変わっていないがために感じる悲しみ……もしかして、先代ならケルトの気持ちが理解できたんだろうか。かつての仲間もすでに死に絶え、唯一残った地縛神は５０００年の間に僕が知るチャクチャルさんになっていて。そう考えると、あの男も憐れむべき奴だったのかもしれない。

……いやいや、僕は何を考えているんだ。先代が悲しもうが嘆こうが、それは全て自業自得でしかないじゃないか。ざまあみやがれと言って笑いこそすれ、くれてやる同情なんて欠片すらない。先代の力は僕のデッキを通じて、今もなお僕を蝕み続けている。こんな思考をするようになったのも、その結果のひとつだろう。先代の力が勝手に身に

着きつつあることで、僕の思考パターンまでもが影響されつつある。
ケルト　ＬＰ１７００　手札：０
モンスター：幻影騎士団シャドーベイル（守）
魔法・罠：１（伏せ）
場：ダークゾーン
ラチナ　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：ＳＲベイゴマックス（攻）
ＳＲダブルヨーヨー（攻）
ＳＲメンコート（攻）
魔法・罠：一族の結束
「デュエルを続けるぜ。俺のターン、ドローだ！」
この状況を覆すカードを求めてカードを引くケルト。手に入れたものは決して望みのものではなかったが、それでもまだ次に繋ぐ希望がほんの少しだけ見えた。
「永続魔法、暗黒の扉を発動！このカードが存在する限り、互いにモンスター１体でしかバトルが行えないぜ。まだまだ終わらせやしねえよ、ターンエンドだ」
「それで大量展開からの一斉攻撃というこちらの持ち味を潰した、か。だが、その程度の抵抗は私としても当然織り込み済みだ。まずは墓地に存在するスピードリバースの更

なる効果を発動、このカードを除外することで墓地からＳＲをサルベージする。なんでもいいが、そうだな。電々大公を手札に戻し……これで準備は整った。見せてやろう、このデッキの真の切り札を！魔法カード、融合を発動！」

「融合だと!?こんなバラバラのモンスターしかいないのにか!?」

「それがいるのだよ、まさに今召喚するのにおあつらえ向きのモンスターがな。ベイゴマックス、ダブルヨーヨー、メンコート、パチンゴーカート、電々大公のロイドと名のつく機械族モンスター５体を素材とし、融合召喚！出でよ、極戦機王ヴァルバロイド！」

周りの木々をなぎ倒して現れた紅色の巨大戦闘用マシーン。その鋼のモノアイに光が宿り、煙突から一斉に蒸気が噴き上がった。流石は５体ものモンスターをいっぺんに素材としての融合モンスター、そのサイズも威圧感もこれまでのＳＲとはわけが違う。ここまでずっと展開力で攻めてきたラチナが使う、まるでファイトスタイルを変えての一点突破用決戦兵器。そして、こうして全ての戦力をヴァルバロイドに集中させることで、暗黒の扉はほぼ使い物にならなくなった。

だがそれは逆に言えば、これ以上のものは出てこないということを意味する。現にラチナは今の融合召喚ですべての手札を使い切った、このヴァルバロイドを倒すことができればまだ逆転の目もある。

極戦機王ヴァルバロイド　攻４０００→４８００

「バトルだ、ヴァルバロイドでシャドーベイルに攻撃！」
「墓地に存在する永続魔法、幻影死槍（ファントム・デスピア）の効果を発動！自分フィールドの闇属性モンスターが破壊されるとき、代わりにこのカードを除外することができる！」
ヴァルバロイドの極太光線の照射に対し、幻影の騎士が自らが地に落とす影に手を突っ込んで取り出した漆黒の槍を構えて身を守る。槍はボロボロになって消し飛んだものの、シャドーベイルとその馬は辛うじて持ちこたえた。
極戦機王ヴァルバロイド　攻４８００→幻影騎士団シャドーベイル　守０
「ハッ！どうだ……！」
「まだだ。ヴァルバロイドはその効果により、１度のバトルフェイズに２度の攻撃ができる。どうやらアームズ・ホールのコストで抜け目なくそんなものを落としていたようだが、もう次はあるまい。そしてヴァルバロイドは戦闘で相手モンスターを破壊した時に１０００ポイントのダメージを与える、戦闘ダメージは通らずともそのダメージは受けてもらうぞ」
ヴァルバロイドが再び始動する。ビームの第２射は、今度こそ幻影の騎士からその力を奪い去った……かに見えた。だが近くの地面ごと抉り取ったヴァルバロイドのビームによる砂煙が晴れた時、そこにいたのは亡霊の馬に跨り自らの武器を持つ不屈の戦士、シャドーベイルの姿だった。よく見るとその周囲には、まるでシャドーベイルに自

らの思いを託し、その力を分け与えたかのように無数の霊魂が飛び回っている。
　極戦機王ヴァルバロイド　攻４８００→０→幻影騎士団シャドーベイル　守０
「何!?ヴァルバロイドの攻撃力が……!」
「トラップ発動、墓地墓地の恨み。相手の墓地にカードが８枚以上存在するとき、相手のモンスター全ての攻撃力を０にする。シャドーベイルは、幻影騎士団は決して倒れない不屈の闘志が持ち味でな。その程度の連撃じゃあ、挫けてやるわけにはいかねえんだ。だが今のは危なかった、礼を言うぜ。わざわざ融合で墓地のカード枚数を増やしてくれてよ」
「あの状況から、攻撃力４８００のヴァルバロイドが……プレイングミスだったというのか……!だが、まだライフポイントは４０００全て残っている。暗黒の扉はお前にも影響をもたらすカードだ、そんな状況の中たかだか攻撃力５００のシャドーベイル１体で、どうダメージを出すつもりだ?」
「ダメージも何もねえ、このターンで俺は勝つぜ。今の一撃をカウンターできなかったその瞬間にお前の負けは決まったんだよ、ラチナ。俺のターン、ドロー!」
　自らの使うデッキと同じく、不屈の闘志でカードを引くケルト。その鬼の表情が、ニヤリと笑顔の形に歪んだ。
「このスタンバイフェイズ、魂を吸う竹光のカードは自壊する。だがもう必要ねえな、

シャドーベイルを攻撃表示にして装備魔法、下克上の首飾りを装備！このカードは通常モンスターにのみ装備でき、そのモンスターが自身よりレベルが上のモンスターとバトルする際にその攻撃力は、レベル差１につき５００ポイントアップする！」
「シャドーベイルのレベルは４、だが……！」
「ヴァルバロイドのレベルは１２、よって攻撃力は４０００ポイントアップだ！」
　幻影騎士団シャドーベイル　攻５００→４５００
「く……こんなカード相手に……！」
「だから言ったろう、このターンで俺が勝つって。行きな、シャドーベイル」
　騎士の一閃が、機能停止したヴァルバロイドのコアを最短距離で刺し貫く。そのまま駆け抜けていった後ろで、ヴァルバロイドが爆発した。
　幻影騎士団シャドーベイル　攻４５００→極戦機王ヴァルバロイド　攻０（破壊）
　ラチナ　ＬＰ４０００→０

「こんな、なぜ、なぜだ……！」
「……あばよ、ラチナ。いつか俺もそっちに行くから、そん時はまともになってろよ」
「御許しください、覇王様ぁ……！」

　その台詞を最後に、ラチナの姿が消えていく。その様子を黙った見送った後、ケルトが僕の方を向かないまま話しかけてくる。
「今のを見てお前、どう思った?」
「え?えっと……」
「いやすまん、言葉が足りてなかったな。俺はともかく、覇王とやらに一度会ってみたくなったぜ。ラチナはいけすかねえ野郎だったが、どっか俺と似たところもあってな。それが最後の最後まで覇王とやらに惚れ込んで、こんなふうになっちまうとはな」
　その時、ようやく気付いた。ケルトの肩が、小さく震えている。どんな表情をしているのかはここからでは見えないけれど、今その背中は泣いている。自分の仲間が隕石のせいで狂い、謎の覇王の僕となって働く姿を見なければいけないというのは、一体どれほど辛い気持ちになるだろう。
「だからともかく、いっぺんそのアホ面拝んでやってな。この礼はたっぷりしてやらんと、な。日が昇ったら俺は出るが、お前も来るんだろ?何かの縁だ、一緒に行こうぜ」
「……もちろん」
　振り返ったケルトの顔には、先ほど背中に見えた悲哀などまるで感じさせないいつも通りの不敵な笑みが浮かんでいる。だから僕も野暮な事は言わずただ頷いて、長い夜が明けるのを元通り静かになった森の中で待ち続けた。

ターン９７　蹂躙王と墓場の騎士

ケルトと出会ってからの森を抜ける旅は、それまでの強行軍とはまるで違うものだった。細かな点はいろいろとあったが、何よりも会話相手がいたという点が大きい。たった１人で暗黒界の拠点のはっきりした場所もわからずに何となくの方向だけを頼りに彷徨い続けていたあのころと比べると、今はまるでＶＩＰ待遇でも受けているかのようなぬるさだ。それに人数が倍になったことで、交代で眠る余裕さえ出てきたのも素晴らしい。実際この数日間に、荒んでいた僕の心にもだいぶ余裕が出てきた。木の実を採って食べたり、近くの川から魚を獲って焼いて食べたり、ケルトが見つけた薬草から僕らの世界には存在しない薬、ゴブリンの秘薬と呼ばれる苦い粒を収穫したりもした。

だが、どんな旅にも目的がある以上必ずゴールが存在する。僕らにとってもそれは例外ではなく、ついにその時は訪れた。

「ようやく出たな。俺がいた時と何も変わっちゃいねえ……あれが暗黒界の中枢だ」

森が唐突に途切れ、急に視界が開ける。目の前、といってもまだ数キロは向こうに広がっていたのは、恐ろしく巨大な城だった。分厚く重苦しい城壁で囲まれたその周りには、まるでそれ取り囲むように小規模な城下町が広がっている。流石に悪魔の城、その

上空には馬鹿みたいに分厚い雷雲も常備されているのがなんだか妙におかしかった。
「あれが……」
「おう。さてと、お前もなにか上着かなんか着たほうがいいな。その赤い服じゃいくらなんでも目立ちすぎだ」
　言いながらケルトがマントを引っ張り出し、全身に巻きつけるようにして体を隠す。巨体なうえに翼や角まで生えているケルトが正体を隠すにはとてもじゃないが十分とは言い難い代物だが、そもそもケルトの場合元々この場所の出身だからこの程度でいいのだろう。それより問題は僕で、言われて初めて気が付いたが確かにこのオシリスレッドの制服は遠くからでもよく目立つ。１人だった時には自分の服が赤いのはわかっていたけど、だから目立つだろうというところまで考えが回っていなかった。
　だからあれだけ付け狙ってくる連中に見つかっていたのか、と自分から強行軍をハードモードに引き上げていたうかつさに舌打ちし、パッと思いついた上着を引っ張り出す。何もない空間からいきなり構成される灰色に紫の模様が入ったフードつきローブ……要するにダークシグナーとしての神官服だ。この服が５０００年前にあれだけの大虐殺と共にあったことを思うと吐き気を催しそうにはなるが、この際背に腹は代えられない。全身を包むデザインなうえにフードで顔まで隠せるから、実際個人的な感情に目をつぶれば悪い選択ではないだろう。

「よし。まずは酒場でも行くか？景気づけに一杯やろうぜ、おごってやるからよ」
「僕まだ未成年！」
「あー？しゃーねえなあ、だったらミルクでも飲んでろよ」
やいのやいのと言いながら、森を離れて街に近づいていく。この近くは常にかかっている分厚い雲のおかげで頭上の赤い彗星は隠されている、その光を浴びる危険がないためこうしてケルトも普通に出歩けるのだ。
……後になって思えば、なぜそんな結論に達したのかが本当にわからない。そもそもそんな浅はかな考えが仮に正しいのだとしたら、なぜ他の暗黒界はみなおかしくなってしまったのか。なんだかんだ言っても数百年ぶりの故郷に浮かれぎみだったらしいケルトはともかく、本来一番警戒しなければいけない立場にもかかわらずそんなことすら考えつかなかった僕の馬鹿さ加減は、すぐ後でたっぷりと呪うことになる。
しかしその時はそんなこと考えすらせず、フードをなるべく目深に被ってうつむきがちにしながらケルトの後をついていくだけだった。
そんな僕が最初に異変を感じたのは、街に１歩入ったその瞬間だった。それなりに広い道の両端には民家らしき家が建ち並び、それなりに生活感もある……のだが、なぜか誰もいない。人や悪魔どころか、鳥の１羽や犬猫の１匹すら通りを歩いていない。ケルトもかすかに眉をひそめているところを見るとこれが日常風景というわけでもないら

しく、なにかただならぬことが起きているらしい。なんとはなしに顔を見合わせて呆然としていると、少し進んだ先にある十字路の部分に人影が現れた。
「おい、ちょっとそこの……」
ケルトが声をかけるかかけないかのうちに、向こうもこちらの存在に気が付いたらしい。ビクッとした様子で立ち上がると、脇目もふらず今来た道をそのまま逃げ始めた。
「お、おい!?なんだってんだこん畜生、追っかけるぞ!」
「合点!」
とにかく誰かに話を聞かないことには、この町のただならぬ様子のわけは掴めない。僕らが同時に1歩を踏み出した次の瞬間、足元を軸にいきなりの飛翔感が全身を包みこんだ。なぜか天地が逆転し、頭の上に地面がある……と、そこでようやく自分が宙吊りになっていることが理解できた。と同時に、暗黒界の軍勢に完全に一杯喰わされたことを悟る。まさかこんな単純な手に引っかかるとは、なんて考えてももう遅い。
「ななな……!」
「クソッたれがあっ!」
すぐ隣では、僕と同じようにケルトが宙吊りになって暴れている。だけどケルトには僕と違って強靭な翼がある、それを開けば……ということを指摘しようとした時、地面から2本の黒い鎖が伸びてきた。ぐんぐん伸びるそれの片方がケルトの体を、次いでも

う1本が僕の体をがんじがらめに縛りつける。一見ただの鉄製に見えるそれが肌に触れた瞬間、みるみるうちに全身から力が抜けていった。
「こ、これは……」
「デモンズ・チェーン。無駄さ、その鎖はあらゆる相手を縛り付けて特殊能力すら無効とする力を持つ魔の鎖。いくら暴れても切れるわけないだろう！」
周囲の家々から、僕らがこのシンプルな罠にかかるのを待っていたらしい悪魔どもがぞろぞろと湧いてくる。その先頭に立つリーダー格らしき長槍を手にした悪魔が、手にする1枚のカードをこちらに見せながら近寄ってきた。
「みてーだな。お前も下手な抵抗はやめとけ、引っかかって怪我するぞ」
吊るされながらも先に落ち着きを取り戻したケルトの言葉に、しぶしぶ僕も動こうとするのをやめる。精々できるのは、僕らを下ろしに来ようとする下級悪魔を思いっきり睨みつけてやることぐらいだった。

それから。宙吊りの状態から地面に降ろされ……というより叩き落とされた僕らは、デモンズ・チェーンに上半身を縛り付けられたままその指揮官、なんでも尖兵ベージというらしい悪魔に連れられて街の中心部に向かわされていた。賞金首になっているら

しい僕はともかく、なぜケルトまで？そんな疑問は、次第に城の一角に近づいていくにつれだんだん険しくなるケルトの表情を見てひとまず脇に追いやった。
「この方向、一体何が……？」
「……ああ、こっちには確かな」
「うるさいぞ、静かに歩け！」
先頭を行くベージがデモンズ・チェーンの先端を力任せに引っ張ったため、バランスを崩して転びそうになるところを何とか踏みとどまる。しかしケルトはそれを最後に押し黙ってしまい、僕も何も言うことができなかった。
そのまま少し歩くと、やがて小さな円形の建物が見えてきた。僕はあんな感じの建造物を知っている、あの形は忘れようったってそうはいかない。ニヤニヤと笑いながらその中に僕らを引いていくベージの顔を見ても、僕の予想が間違っていないことはよくわかった。
「闘技場……」
そう。円柱の底に当たる位置にはむき出しの地面が広がり、その周りを取り囲むように設置された高い壁と観客席。これはいつぞやのセブンスターズ事件の際、アマゾネスのタニヤが作らせていたものとそっくりだ。もっともタニヤの闘技場がシンプルなできだったのに対し、この闘技場は石造りの悪魔像やらなんやらでごてごてと不気味に飾

り立てられているという違いはあるが。まあ、いかにも悪魔らしいといえばらしくもある。

「へへへ……ほらよ、入りな！」

ドン、と背中を突き飛ばされ、よろめいた拍子に押し出される。背後で分厚い鉄の門がおり、完全に進退窮まってしまった。そのすぐ横では、同じようにケルトも立っている。

下から見上げると観客席には様々な悪魔族モンスターが座り、嫌な笑いを浮かべながら立ち尽くす僕ら2人を見下ろしている。ここまでくればこいつらがどんな悪趣味なことを考えているのかは嫌でもわかる……が、誰がそんなことしてやるか。手当たり次第に睨みつけていると、いつの間にか上に登っていたベージがメガホンのようなものを手にして声を上げた。

「静粛に、静粛に！ここに捕らえたるはここ数日、我らが同胞を虐殺して回っていた恐るべき賞金首の人間1人！」

「なーにが虐殺って？自分から喧嘩売ってきたくせに」

誰も聞こえなかったのかあるいは無視したのか、いずれにせよ僕の声は観客の沸き立つ叫びにかき消された。

「そしてかたや、ここに捕らえたるはかつて我らが同胞でありながらも我らから離反、忌

むべき歴史として暗黒界の書物からもその名を抹消された裏切り者のケルト！」
「ケッ、若造がデカい口叩きやがって」
　意外にも、こちらの方が歓声が大きかった。当然のごとくケルトの呟きは届かず、代わりに返ってきたのは殺せ、殺せ、殺せ……そんなコールだった。ベージはその反応に満足したように手で制し、再び静まり返った闘技場に声を張り上げる。
「本来ならば両名すぐさま処刑と致すところですが、どうでしょう皆様。本日はお日柄もいい、ここにおわせられる我らが覇王様の許可を得て、僭越ながらこのベージがひとつ趣向を凝らしました」
　その発言に、咄嗟にベージが叫んでいる方に目をやる。ベージのすぐそばにどっしりと座る、トゲトゲした黒い鎧を身につけた男……あれが、覇王なのか。でも、あの眼はどこかで見たことあるような。どうにか思い出そうとするも、再び始まったベージの講釈にその試みは中断を余儀なくされた。
「ここまで言えば、聡明なる皆様方にはもうお分かりでしょう。本日はこの２人の大罪人に、互いの命を賭けてデュエルをしていただきます！」
「ふっざけんな！」
「おやおや、そんなことを言っていいのですか？とはいえ、もちろんただではあなた方もやる気が出ないでしょう。そこでこのデュエル、勝ち残った方にはこの覇王様への挑戦

権が与えられます！」
「なに？」
　そこで、ケルトが反応する。覇王と僕を見比べ、やがて場内の熱気に負けじと声を張り上げた。
「おい、俺はこの勝負乗ったぞ！だから早くこの鎖を外しやがれ！」
「なっ……！」
「もちろんですとも！速攻魔法、ツインツイスターを発動！この効果により、あなた方を縛るデモンズ・チェーン２枚を破壊します！」
　つむじ風が吹き、みるみるうちにボロボロに錆びていったデモンズ・チェーンが勝手に切れて地面に落ちる。言葉を失う僕と対照的に、笑顔さえ浮かべながらケルトがデュエルディスクを取り出す。
「け、ケルト……」
「い・い・か・ら・合・わ・せ・ろ！」
　二の句が継げない僕に、ケルトが目の前にいるからギリギリ聞き取れる程度の小声で指示を飛ばす。反応する暇すら与えず僕につかつかと近寄り、観客席に向かって大声で宣誓する。
「よおーし、いいかぁ！お前らの言う通りにするのは気に喰わねえが、背に腹は代えられ

ねえ。今からこの俺、鬼神ケルトがこの人間をぶち殺してやるぜええっっ!!」
うおおおお、と割れんばかりの歓声が闘技場全体に響いた。その興奮のどさくさにまぎれ、急にたった今の叫びが嘘のように冷静さが戻ってきたケルトが僕にあることを耳打ちする。
……なるほど、そういうことね。ややあってピンと来た僕も、気乗りしない風を装いながらデュエルディスクを起動させる。数日ぶりに使うディスクはまだ調子が悪いままでなんとなく異音が聞こえてくるけど、まあよほどのことがない限り大丈夫だろう。
「それでは皆さん、ご覧下さい！彼らは我らが敵ですが、その実力はともに確か。どちらが勝利を手にするか、賭けをなさる方はお早めにお願いいたします！」
ベージの声を背後に聞き、仮にも命のやりとりであるこの世界でのデュエルモンスターズを賭けの対象にして笑いだすその神経に顔をしかめる。
まあいいさ、今はデュエルだ。そして、周りの様子に神経を使わなくては。ケルトもまた僕の方を見据えるふりをして、さりげなく周囲の警戒の薄い部分を探っている。
「「デュエル！」」
「先攻は僕が貰った！僕のターン……これでターンエンド！」
「こりゃあ傑作だ、あの人間はドローゴーだってよ！」
「まともなデッキも組めないガキは、おうちに帰ってママのミルクでも飲んでなぁ！」

何もせずのターンエンド宣言に、客席から嘲りの声と嘲笑が聞こえてくる。努めて気にしないようにするけれど、それでも顔が怒りで赤くなるのを感じる。治安度の悪い童実野町でたっぷり鍛えられたおかげで母親関係のことを言われるのは慣れたつもりだったけど、久しぶりに聞くとやっぱりまだ駄目らしい。

怒りを力づくで抑え込み、ケルトから見えるように壁のある一点を視線で示す。ややあって、向こうがゆっくりと首を横に振るのが見えた。そして即座にそれを誤魔化すかのように、必要以上の大声でカードを引く。

「俺のターン、ドローだ！カードを１枚セットしトラップカード、幻影騎士団シェード・ブリガンダインを発動するぜ。このカードはトラップだが、俺の墓地にトラップが存在しない場合のみセットしたターンでも発動が可能となる。そして闇属性レベル４、攻撃力０守備力３００の通常モンスターとして特殊召喚されるぜ」

日陰者の鎧。自身が表に出てきて亡霊の姿をむき出しにしていたシャドーベイルとは違い、その名が示すごとく鎧の中にその身を潜める幻影となった騎士の目の光が灯る。

幻影騎士団シェード・ブリガンダイン　守３００

「さらにカードをセットし、ターンエンドだ」

「おいおい、鬼神がビビってんのかぁ～？」

「レベル低いデュエルだなあ、もっと面白いことやれよ！」
僕とは違い、またまた飛んできた嘲笑も涼しい顔で聞き流すケルト。早くやれ、とその目が物語っていた。
清明　ＬＰ４０００　手札：５
モンスター：なし
魔法・罠：なし
ケルト　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：幻影騎士団シェード・ブリガンダイン（守）
魔法・罠：１（伏せ）
「僕のターン、ドロー！」
よし、来た！僕の手札にあるカードは魔法カード、妨げられた壊獣の眠り。ブラック・ホールと同等のモンスター全破壊効果に加え、互いのフィールドに１体ずつの壊獣を攻撃表示で特殊召喚するという恐ろしい効果を持つ壊獣サポートの中でもトップクラスのパワーカードだ。この旅の間、請われるがままにケルトにも見せた僕のデッキ……その中に入っていたこのカードを引くこと、それが僕に課されたケルトからの指令だった。
『俺は適当にターンを流しておくから、とにかくお前はあの眠りのカードを引け。そし

たら展開した2体の大型モンスターを一度に呼んで、一斉攻撃でこの闘技場の防御の薄い部分をぶち壊させる。そのままここはケツまくって逃げるぜ、今のままじゃどうにもならねえ』

この世界でのモンスターは全てソリッドビジョンではなく、質量を持つ。だからこの闘技場でも、デスマッチをすると見せかけてモンスターを出し、その攻撃等を利用して逃げ出そうとする者が後を絶たなかったらしい。もちろん暗黒界も馬鹿ではない、そんな場合での対策も取ってある……のだが、その準備には少し時間がかかるらしい。

つまりこの眠りのカードのように、1枚をポンと発動するだけで最上級モンスターを2体も呼び出せるカードは彼らにとっても想定の範囲外なのだ。しかも、僕が呼び出すのはただのモンスターじゃない。その攻撃力はあの伝説を作り上げたモンスター、青眼の白龍をも上回る３３００。そう、サンダー・ザ・キングとジズキエルだ。この2体を呼び出してすぐさま大暴れさせれば、ここの連中の対策が間に合う前にこの闘技場ごと叩き壊すこともできるはずだ。

とにかくここは逃げて体勢を立て直す、それさえできれば後はどうにでもなる。

「僕は手札の魔法カー……え？」

だが必殺の切り札、妨げられた壊獣の眠りの名を宣言することはできなかった。突然目の前でケルトが自らの手札をバラバラと取り落とし、両腕で頭を押さえて苦しみだし

たのだ。それもただの苦しみ方ではなく、こうやって押さえていないと目の前で頭がぱっくり割れるのではないかと思うほどの尋常ではない様子だ。
「ぐわあああっ！うおお、ぐっ、ぐわあああっっ!!」
「け、ケルト!?」
「おやおや、始まったようですね。皆様方、どうぞ今しばらくの間デュエルを中断して悲劇に包まれた、このお2人の様子をお楽しみください」
「どういう意味さ！」
苦しみ悶えるケルトとは対照的に、心底愉快そうなベージの声。突然起きたこの異常にもなんら驚いた様子の無いその声の調子に嫌な予感が膨れ上がってくるのを感じながら、遥か上のベージを問い詰める。
そしてそんな僕に答えるのも楽しくてしょうがない、といった様子を隠そうともせず、ゆっくりと気取った様子で話し出した。
「では逆に聞きますがね。そもそもあなた、本当に何も起こらないとでも思っていたんですか？」
「え？」
「この分厚い雲が光を遮っているから、降り注ぐあの赤い光の影響も受けずにすむ……もしそんな浅はかな考えでノコノコとこの場所に出てきたのでしたら、それはお笑いで

すねぇ。考えてもごらんなさい、ここは我々悪魔の居城。そんな場所なのですから、当然この雲は数百年以上晴れたためしがありませんよ。にも関わらず、この雲が常に空を覆っているにも関わらず、私達はこうしてあの光の力で悪魔としての本分、つまりこの破壊と侵略の喜びに目覚め、ここにいらっしゃる偉大なる覇王様という素晴らしい指導者も得た。ここまで言えば、もうお分かりでしょう？」

「それじゃ……まさか、あの隕石は……」

「その通り。光が地上に届こうが届くまいが、あの美しい血のように赤い光の力にはなんの関係もありませんねぇ。今はちょうどあなたのご友人、我らが鬼神も自らのくだらない理性と悪魔としての荒々しい衝動との間に揺れ動いているようですが、すぐにその戦いも終わるでしょう」

油断していた。ケルトが森の中に隠れてあの隕石の影響を受けなかったのは光を浴びなかったからではない、単にまだ光を浴びた量が少なかったからか。これは光を浴びていないから正気でいられるという本人の言葉をなんとなく信用し、ろくに確かめもしなかった僕にも責任はある。それにしても、このベージの物言いには少し引っかかる。光の力というこのワード、それにこの光への心酔っぷり。斎王……いや、さすがにないだろう。破滅の光はあの時、斎王を倒して確かに消滅させたはずだ。

「ううう……おい、よく聞け！」

苦しげな、低いケルトの声。僕に向けて何かを伝えようとしているその様子に、慌てて背後の彼に向き直る。どうにか痛みと苦しみのピークは過ぎたらしく、もう先ほどまでのようにのたうち回ってはいない。
「俺は、もう駄目だ。これ以上は耐えきれそうにない」
「な、何を……」
「黙って聞け馬鹿野郎！」
切羽詰まったケルトの気迫に押され、口をつぐむ。代わりに再び話し出したケルトの言葉を聞き洩らさないよう、集中して耳を傾ける。
「悪いな、ドジ踏んじまってよ。だが最後に、お前にひとつ頼みがある。俺にこの場で、なんとかしてとどめを刺せ……ああ、何も言うんじゃねえ。文句言いたいのは山々だろうがな、もう俺には俺自身が止められそうにない。俺は多分、今からお前を殺しにかかるだろう。だからお前は、それをなんとかして止めろ。そしてお前だけでも生き延びて、なんとか元の世界に変えるんだ。いいな！」
「そ、そんな急に……」
「ああクソ、時間切れだ。いいな、手加減なんてしたら負けるのはお前だからな。俺の分まで絶対に生き延びろ……ぐっ！」
その言葉を最後に、再びケルトの体がその場に崩れる。再び起き上った時、その目か

らはもはやさっきまでの理性的な光は消えさっていた。そしてその目を見て、もう何を言っても無駄なんだと悟る。もうあれは、僕が見てきた気のいい悪魔ではない。破壊の嵐を巻き起こす恐るべき悪魔、暗黒界の鬼神と呼ばれるにふさわしい恐怖と畏怖の対象でしかないのだ。

僕の心を蝕むダークシグナーの魂が、僕に戦え、目の前の敵を潰せと囁く。うじうじと悩まなくてもいいというのは、この場合ではむしろ喜ぶべきことなのかもしれない。この世界は弱肉強食、いつまでも迷いがあるようではここで死ぬのは確実に僕だからだ。

「ケルト……」

「ああ、いい気分だ。すがすがしいぜ、まったくよ。さあ、デュエルの続きを始めようぜ！」

「こうなった以上、もはや彼の戦いを止めることはできません。あなたが生き残るための道はただ１つ、鬼神ケルトを自らの手で下すことのみ！さあ御集りの皆様方、いよいよ本気のデュエルスタートでございます！どうぞ戦士たちの邪魔をしないよう口を閉じ、拍手をもって見守って差し上げましょう！」

観客の悪魔どもも、最初からこうなることはわかっていたらしい。僕らだけが真剣になって、どうやって逃げだすかを考えていたということか。

……いや、まだだ。まだ眠りのカードは僕の手の中にある。
「魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！フィールドのモンスターをすべて破壊し、デッキから壊獣を互いの場に1体ずつ特殊召喚する！これでシェード・ブリガンダインを破壊して……」
「通すかよ、そんなもん！トラップ発動、死のデッキ破壊ウイルス！攻撃力１０００以下の闇属性モンスターをリリースして相手フィールドと手札に存在する全ての攻撃力１５００以上のモンスターを破壊！さあ、そのたくさんある手札を見せてもらうぜ？」
「くっ！僕の手札にある七星の宝刀以外は全部モンスターカードだ……」
手札に存在する攻撃力１５００以上のモンスター……それはつまり、今の僕にとってこの手札ほぼ全てを意味する。最上級モンスターばかりの壊獣が片っ端からウイルスに感染していき、ガメシエルにラディアン、ジズキエル、サンダー・ザ・キングの４枚をまとめて墓地に送りこんだ。
「おいおい、その眠りのカード以外はモンスターばっかりかよ？だがこれで終わりじゃねえ、さらにウイルスは相手のデッキにも感染し、相手は攻撃力１５００以上のモンスターを3体まで選んで破壊することができるぜ」
「……遠慮しておくね。これ以上墓地にモンスターを送ることもないさ」
「そうかよ？なら待たせて悪かったな、次は妨げられた壊獣の眠りの効果を処理するぜ。

と、言いたいところだがなあ」
　ここで意味ありげに言われて、初めて僕も気が付いた。先ほどフィールドに存在した唯一のモンスター、シェード・ブリガンダインがウイルスのコストとしてリリースされたことで、妨げられた壊獣の眠りで破壊できたモンスターは０体だった。そしてモンスターを破壊できない限り、このカードのリクルート効果は不発となってしまう。つまり僕は今、残り少ない手札のうち1枚の効果すら何もすることができないまま不発に終わってしまったのだ。当然、これ以上できる事などあるはずがない。
「くっ、ターンエンド！」
「俺のターンだ。このターンのエンドフェイズまで、俺はウイルスカードのデメリットでお前にダメージを与えられない。だがな、だからといってこのターンを無駄に過ごすほど俺は甘くないんでな。カードを２枚セットし、カードカー・Ｄを召喚！このカードをリリースすることでカードを２枚引き、このターンのエンドフェイズになるぜ」
　紙のように薄い車が現れてすぐ消え、ケルトがカードを２枚引く。先ほどのウイルスもそうだけど、ライフこそ変動がないとはいえじわじわとこちらがアドバンテージを取られつつある。それでもいまだ目立った動きがないのは、僕の壊獣もケルトの幻影騎士団も基本が受け身なデッキだからだろうか。
　清明　ＬＰ４０００　手札：1

モンスター：なし
魔法・罠：なし
ケルト　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：２（伏せ）
「僕のターン！このメインフェイズ１の開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動！僕の墓地から種族が違う３体を選んでデッキに戻し、その後でカードを２枚ドローする。悪魔族のラディアン、水族のガメシエル、機械族のジズキエルを戻してドロー……さらに、墓地に存在する妨げられた壊獣の眠りのさらなる効果を発動！」
まだだ。たとえウイルスで壊滅しようとも、まだ僕らは戦うことができる。
……本当にこれでいいのかは、僕にはわからない。もしかしたら、ケルトを倒さず正気に戻すような方法があるのかもしれない。だけど、それを探すことに気を散らした瞬間に僕は敗北する。ケルトは、それほどまでに強い。少なくとも、よそ事を考えながらの片手間でどうにかできる相手じゃない。
結局、僕だって死にたくないんだろう。１度生き返った時点でもう自分の命に執着はないと思っていたのに、我ながらこの浅ましさが嫌になる。皆が笑って終わるハッピーエンド、その道を探すことすらせずにこうして本気で戦う事を、少しでも自分が助かる

可能性の高い道を優先している自分がいる。ケルト本人だって最後には僕に倒されることを望んでいた……そんなもの、ただの詭弁でしかない。昔に比べて変わってしまったのは先代のせいなのか、それとも僕そのものが変化しつつあるのか。それ以上考えることを放棄して、ただ勝利に向けて感覚を集中させる。そして、僕は次のカードを繰り出した。

「妨げられた壊獣の眠りは墓地から除外することで、デッキから壊獣を1体サーチすることができる。粘糸壊獣クモグスをサーチして、七星の宝刀を発動！手札からレベル７のクモグスを除外して、カードを2枚ドロー！」

手札1枚の状態から、どうにか4枚まで増やすことができた。だが、ここに来てこのデッキの弱点が露呈した形になってしまった。相手フィールドにリリースするモンスターがいない限り、このデッキはうまく動けないのだ。そして、そんな場合に備えてのカードはいまだ手札に来ていない。最もそのカードがあったとしても、貪欲で無欲な壺のデメリットによりこのターンバトルを行うことができないからあまり意味もないのだが。

「フィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントを発動！カードを1枚セットして、ターンエンド」

結局、またがら空きのままターンを流すしかない。歯がゆいけれど、どうすることも

できない。

「俺のターン。幻影騎士団クラックヘルム、召喚だ！そしてリバースカードオープン、幻影騎士団シャドーベイル！このカードは場のモンスター1体の攻守を永続的に３００アップさせる、だがそれだけじゃねえ。ファントムのカードが墓地に送られたターンの間、クラックヘルムの攻撃力はさらに５００ポイントアップする」

ひび割れた兜に霊魂が入り込み、さながら兜をかぶった人魂のような幻影の騎士の姿になる。首元に巻かれた赤いボロボロのマフラーは、生者だったころの名残だろうか。

幻影騎士団クラックヘルム　攻１５００→１８００→２３００　守５００→８００

「バトルだ！クラックヘルムでダイレクトアタック！」

「この程度のダメージ、まだ……！それに場から墓地にシャドーベイルのカードが送られたことで、ウォーターフロントには壊獣カウンターが１つ乗った！」

幻影騎士団クラックヘルム　攻２３００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４０００→１７００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（１）

「これでターンエンド。クラックヘルム自身の効果はここで切れるが、シャドーベイルによる強化はさっき言った通り残り続けるぜ」

幻影騎士団クラックヘルム　攻２３００→１８００

清明　ＬＰ１７００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）
ケルト　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：幻影騎士団クラックヘルム（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「僕のターン！クラックヘルムをリリースして、そっちのフィールドに雷撃壊獣サンダー・ザ・キングを特殊召喚！そしてクラックヘルムが墓地に送られたことで、ウォーターフロントの壊獣カウンターがまた増える」

３つの首を持つ白き雷の龍。以前は僕のフィールドでワンキルの立役者になってもらったが、今回は敵役をお願いしよう。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）→（２）

「そしてサンダー・ザ・キングの存在に反応し、僕の手札から別の壊獣がフィールドに目覚める！出ろ、多次元壊獣ラディアン！」

突然空間にひびが入り、そこから１本の腕が突き出す。その腕がひびを内側から押し

広げ、ある程度開いたところで漆黒の人型壊獣がそこを通ってするりと抜け出てきた。ラディアンとサンダー・ザ・キング、奇しくもこれは僕が最初に壊獣を使った時の組み合わせだ。

多次元壊獣ラディアン　攻２８００

「ラディアンの特殊能力、分身を発動！壊獣カウンターを２つ消費して、攻撃力２８００のラディアントークンを場に特殊召喚する！」

突然ラディアンの姿がぶれ、その輪郭が２重に見える。ずれはみるみるうちに大きくなっていき、やがて完全に独立した瓜二つのラディアンがもう１体現れた。これこそが、場にモンスターがあまり並ばない怪獣の弱点を補うことができる数少ない特殊能力、分身だ。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）↓（０）

ラディアントークン　攻２８００

「ほう？だが、んなことしたところで俺にテメエが寄越したこのデカブツの方が強いみてーだがな？」

「もちろんそれも対策済みさ！魔法カード、シャイニング・アブソーブを発動！相手フィールドの光属性モンスター１体を対象に、その攻撃力を僕の全てのモンスターに加算する！」

多次元壊獣ラディアン　攻２８００→６１００
ラディアントークン　攻２８００→６１００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（１）
サンダー・ザ・キングの攻撃力は３３００。これがラディアンとラディアントークンに上乗せされることで、総攻撃力は１２２００……確かケルトの墓地にはシャドーベイルのカードがあるからワンキルとはならないだろうが、それでも先ほど受けたダメージのお返しには十分だ。
「バトル！ラディアントークン、そしてラディアンで攻撃！」
２体の異星人が飛びかかり、その剛腕で宙に浮く龍を引きずり落とす一撃を叩き込む。だがその攻撃はともにサンダー・ザ・キングの体をすり抜け、有効打どころかまるでダメージにならなかった。
「攻撃が外れた……？」
「永続トラップ、幻影霧剣（ファントム・フォッグ・ブレード）を発動。このカードの対象となったモンスターは幻影となる」
「幻影に？」
確かに言い得て妙だ。こちらの攻撃がまるで最初からモンスターなど存在しないかのようにすり抜ける様は、確かに幻影と呼ぶにふさわしい。

「そうさ。効果は無効となり攻撃宣言もできないが、代わりに相手からの攻撃対象になることもなくなる。だがモンスターが存在することに変わりはないから、直接攻撃を仕掛けることもできない」
「あと一歩だってのに！カードをセットしてこのターンのエンドフェイズ、シャイニング・アブソーブの効果は切れる……」
多次元壊獣ラディアン　攻６１００→２８００
ラディアントークン　攻６１００→２８００
「俺のターンだ。速攻魔法、非常食を発動！幻影霧剣を墓地に送ることで１０００ライフ回復し、さらに幻影霧剣が消えたことでこのデカブツは幻影から再び実体になる。さらにフィールドからこの２枚のカードが墓地に送られたことで、その灯台にカウンターが２つ乗るんだよな？」
「壊獣カウンターが３つ……しまった！」
ケルト　ＬＰ４０００→５０００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）→（３）
「まだだ。墓地の幻影霧剣は自身を除外することで、墓地に眠る俺の騎士を今再びフィールドに呼び起こす！幻影騎士団は倒れない、今こそ目覚めろクラックヘルム！」
先ほどリリースされたクラックヘルムが、再びひび割れた兜と共に蘇る。これでモン

スターは2体、だけどサンダー・ザ・キングには特殊能力がある……！
「さあ、お前のモンスターの効果を使わせてもらうぜ！サンダー・ザ・キングはフィールド上の壊獣カウンターを合計３つ取り除くことでこのターンモンスターへの３回攻撃が可能となり、さらにターン終了時まで相手はあらゆるカードの効果を発動できない！」
「だけど、その効果に対してのチェーンはできる！トラップ発動、ハーフ・アンブレイク！このターン僕のモンスター1体、多次元壊獣ラディアンは戦闘で破壊されず、さらにラディアンの戦闘による僕へのダメージは半分になる！」
　サンダー・ザ・キングの帯電が始まり、空気中に電気の余波が満ちていく。あらゆる効果の発動を封じ込めるよりも前に、ラディアンのうち1体が防御姿勢を取る。サンダー・ザ・キングだけが相手ならこれも使わない方がダメージを抑えられたけど、クラックヘルムまで出てきたとあれば話は別だ。さすがにそこまでの攻撃を受け切る余裕は、僕のライフにはすでにない。
　ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）↓（０）↓（１）
「仕留め損ねたか？だが、ともかくダメージは受けてもらうぜ！バトルだ、サンダー・ザ・キングでラディアンに2回、ラディアントークンに1回の攻撃！」
　３つの首が一斉に雷撃のブレスを放ち、視界の全てが白く染まる。だが空を裂き大地

を砕くその衝撃にも、ラディアンはどうにか踏みとどまって堪えてくれた。
雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００→多次元壊獣ラディアン　攻２８００
清明　ＬＰ１７００→１４５０
雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００→多次元壊獣ラディアン　攻２８００
清明　ＬＰ１４５０→１２００
雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００→ラディアントークン　攻２８００（破壊）
清明　ＬＰ１２００→７００
「クラックヘルムでの攻撃はできねえなあ……カードをセットしてターンエンドだ」
辛うじてこのターンは耐えきれた……だけど、サンダー・ザ・キングをどうにかする方法はいまだにない。いや、あることはあるのだが、あのカードを引けるかどうか。
清明　ＬＰ７００　手札：０
モンスター：多次元壊獣ラディアン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）
ケルト　ＬＰ５０００　手札：４
モンスター：雷撃壊獣サンダー・ザ・キング

幻影騎士団クラックヘルム（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「いや、引いてやる！絶対に引いてみせる！僕のターン、ドロー！」

今のターンの攻防を経て、また少し考えが変わった。弱気を振り払い、迷いを捨て、目の前の敵（ゲルト）を越えることだけをただ望みカードを引く。僕の心の闇を媒体にして顕現したこのデッキは、僕がそうありたいと望めばいくらでも強くなる。僕が怒りに囚われた時、悲しみに呑まれた時、憎しみに満ちた時。きっかけは何でもいいが、とにかく勝利を求める感情の爆発をトリガーとして、限界を超えた更なる力を僕にもたらしてくれる。だがこの時僕を動かしていたのはそういった負の感情ではなく、もっと純粋に強者と戦うことのできる昂揚感、そして自分自身への義務感。ただそれだけだった。

僕がこの世界に来て初めて会った精霊、辺境の大賢者は道があったとしても、それを進むかどうかは僕が決めることだと言った。僕が進むと決めた道は、きっと一番いい道ではないのだろう。だけど、僕にはみんなが助かるような道を探すことはできない。ならば、せめて最高の選択でないなりに精一杯に足掻いてみせよう。

もっといい道があるのではないか、そんな風に考えることは確かに大事だ。でもそれは、もし失敗してもその原因を、そもそも自分が正解を選べなかったからだという部分に押し付けて言い訳を作るもとにもなってしまう。自分から逃げ道を作りそこにこも

るのではなく、不完全な道なりに1度選んだ以上は最後まで歩ききってみせる。そしてそのために、誰にも負けない力が欲しい。この場を制する力が欲しい。

そして、その願いは……届いた。

「さあ、何を引きやがった……？」

「僕が引いたカードは、魔法カード。２枚目の、妨げられた壊獣の眠り！このカードで、今度こそフィールドのモンスターをすべて破壊する！」

「甘いぜ！トラップ発動、幻影剣（ファントム・ソード）！このカードはモンスター1体の攻撃力を８００ポイント上昇させる装備カードになるが、ここで使うのはもう1つの効果だ。装備モンスターが破壊される場合、その破壊の身代わりとできる！そして幻影霧剣の効果で蘇生されたクラックヘルムは、墓地へ行かずゲームから除外されるぜ。おおかたモンスターを大量破壊して壊獣カウンターを一気に溜めたうえでリクルートした怪獣の効果を使うつもりだったんだろうが、アテが外れたな。俺の場にはいまだサンダー・ザ・キングがいる、そして壊獣はその特性により、互いのフィールドに1体ずつしか存在できない。つまりそのリクルート効果はまた不発だ！」

サンダー・ザ・キングが再び幻影の存在となり、闘技場に巻き起こる嵐から回避する……かに見えた。雷撃の龍は幻影となりフィールドに留まるどころかその色がどんどん薄くなり、半透明から輪郭のみがかすかに見える状態へ、そしてついには存在ごと完

全にフィールドから消え去った。
「馬鹿な!?」
「悪いけど幻影剣にチェーンしてカウンタートラップ、ギャクタンを発動させてもらったよ。相手のトラップが発動した時にその発動を無効にし、さらにそのカードを持主のデッキに戻す。幻影剣は最初からなかったことになって、サンダー・ザ・キングは今度こそ破壊されたのさ。そしてラディアンとサンダー・ザ・キングの2体に加え、僕の発動した2枚のカードが墓地に送られたことでウォーターフロントの壊獣カウンターはその上限の5つまで追加された。怪獣がどちらの場にもいないことで、眠りのリクルート効果も問題なく発動できる！行くぞガダーラ、敵はガメシエルだ！」
　昆虫にしてはあまりに恐ろしいほどのサイズを誇る巨大な戦闘蛾の壊獣、ガダーラ。対照的に全身が海のように青い亀の壊獣と対峙するその姿は、圧倒的でありながらも僕の心情を反映するかのようにどこか悲哀のようなものも感じられた。そして闘技場の中心で、その2体が激しくぶつかり合う。小手先の技など何もない力と力のぶつかり合いを制したのは、当然ながらガダーラの方だった。
　ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）↓（５）
　怪粉怪獣ガダーラ　攻２７００
　海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

怒炎壊獣ドゴラン　攻２７００→海亀壊獣ガメシエル　攻２２００（破壊）
ケルト　ＬＰ５０００→４５００
「メイン２にウォーターフロントの効果を発動。壊獣カウンターが３つ以上乗っていることで、デッキから壊獣を１体サーチできる。２体目のガメシエルを手札に加えて、ターンエンド」
ただ単にデュエルをする、のではなく僕自身がはっきりと強さを求めたことで、さらに力を引き出してくれた僕のデッキ。初ダメージはたかが５００ポイントに過ぎないが、ここからが反撃のターンだ。
「チイッ……俺のターン！幻影騎士団ダスティローブを召喚し、さらに手札から幻影騎士団サイレントブーツを特殊召喚！このカードは俺の場に幻影騎士団が存在するとき、特殊召喚することができる！」
幻影騎士団ダスティローブ　攻８００
幻影騎士団サイレントブーツ　攻２００
２体の幻影の騎士が、ケルトを守る壁として立ちはだかる。彼らが憑代としているのはそれぞれズダボロのローブに杖、そして柔らかそうなブーツとズボンだろうか。と見る間に、ダスティローブが体のそばを浮遊する杖を振り回してなにやら呪文を唱えだす。

「ダスティローブは自身を守備表示にすることで、場の闇属性モンスター1体の攻守を次の相手のターン終了時まで８００ポイントアップさせる。対象はもちろん、このサイレントブーツだ」

幻影騎士団ダスティローブ　攻８００→守１０００

幻影騎士団サイレントブーツ　攻２００→１０００　守１２００→２０００

サイレントブーツの攻守が申し訳程度に上昇する……だが、そこに何の意味があるのだろう。たとえ攻撃力が上がったとしても、素の攻撃力の低さが災いしてその数値はようやく4ケタに届いたといったところ。

だが、僕は忘れていた。このケルトが操るデッキには、もう1つ別のギミックが隠されていることを。

「装備魔法、折れ竹光をダスティローブに装備！さらに装備魔法、妖刀竹光をサイレントブーツに装備！この2枚はどちらも装備したところで攻撃力が上がるわけでもねえが、妖刀竹光には特殊能力が存在する！俺の場の他の竹光を手札に戻し、このターン装備モンスターの直接攻撃を可能とする！」

「ダイレクトアタッカー……！」

サイレントブーツの攻撃力は、ダスティローブの支援込みでもわずか１０００。だが、僕のライフはそれよりもさらに低い７００しかない。僕の方に傾きつつあった流れ

を強引に引き戻しにかかるケルトの反撃……それも今の動きで手札をすべて使い切ったことを考えると、正真正銘最後の賭けだろう。
「バトルだ、サイレントブーツでダイレクトアタック……！」
「ガダーラの特殊能力、風葬を発動！壊獣カウンター３つをコストにガダーラは自身の鱗粉をたっぷりと含む特殊な風を巻き起こし、自分以外の全てのモンスターの攻守を半減させる！」
「だが、サイレントブーツの攻撃が止まるわけではない！」
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）↓（２）
幻影騎士団ダスティローブ　守１０００→５００　攻８００→４００
幻影騎士団サイレントブーツ　攻１０００→５００　守２０００→１０００
ガダーラの羽ばたきが暴風を起こし、その風に乗ってガダーラ自身のカラフルな鱗粉がフィールドを包み込んでいく。いかに幻影の騎士といえども超自然の力には敵わないらしく、周囲を霧のように包む鱗粉に苦しみその場で力を失っていく。それでもなお挫けないサイレントブーツの一撃が、僕のどてっ腹を踏み抜いた。
幻影騎士団サイレントブーツ　攻５００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ７００→２００
それにしても、今のはかなりギリギリだった。返しの反撃を警戒して僕のフィールド

に出す怪獣にガダーラをチョイスしたのは、どうやら大正解だったようだ。ここでもしダメージを最優先にジズキエル辺りを出していたら、今のターンを乗り切ることはできなかったろう。やはり、少しずつ流れはこちらに傾いてきている。今の攻防はそれを崩すどころか、ますますその思いを強くさせた。

「ターンエンドだ……」

清明　ＬＰ２００　手札：１

モンスター：怪粉怪獣ガダーラ（攻）

魔法・罠：なし

場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）

ケルト　ＬＰ４５００　手札：１

モンスター：幻影騎士団ダスティローブ（守）

　　幻影騎士団サイレントブーツ（攻・妖刀）

魔法・罠：妖刀竹光（サイレントブーツ）

「僕のターン、ドロー！魔法カード、トレード・インを発動。手札からレベル８のガメシエルを墓地に送り、カードを２枚ドローする！」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）→（３）

この状況では特殊召喚するうまみも少ないガメシエルをコストに、再び次の可能性を

求めて手札交換を行う。トレード・インのカードが送られたことでウォーターフロントのカウンターもまた追加され、もう1回ならガダーラの効果も使えるようになった。
この状況でドローした2枚のカードは……よし。見えた！
「永続魔法、怪獣の出現記録を発動！このカードは1ターンに1度場の壊獣を破壊し、別の壊獣に入れ替えることができる！僕はこのガダーラを入れ替え、この怪獣を僕の場に呼び出す！今こそ目覚めろ、ドゴラン！」
ガダーラの体が風に消え、入れ替わりに全身を紅蓮の炎に染め上げた巨竜が雄叫びを上げる。その姿はまさに壊獣の王と呼ぶにふさわしいほどの威厳に溢れていて、まるでこのデュエルがここで終わることを暗示しているようでもあった。
怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）↓（４）
「攻撃力３０００か。だがたとえサイレントブーツに攻撃したところで、まだ俺のライフは余裕で残るな！」
「こんなもんじゃ終わらせない！ドゴランの効果、覆滅を発動！壊獣カウンター３つをコストに、相手フィールドのモンスターをすべて破壊する！」
「その効果を使ってくる、だと!?」
ケルトの驚きをよそに、ドゴランの全身が自らの熱で真紅に輝く。ほんのわずかな溜

めの後で大きく身を逸らし、あらゆるものを焼き尽くすまで決して消えない終焉の焔をその口から吐き出した。破壊の熱量に飲み込まれ、サイレントブーツとダスティローブが燃えカスひとつ残らず完全にこの世から消滅する。やがて炎を吐き終え、大きく肩で息をするドゴランの姿のみがフィールドにはただ残っていた。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）→（１）→（４）

「俺のモンスター2体と妖刀竹光が墓地に送られたことで、実質ノーコストでの発動ってわけか。だがな、俺はここで墓地に送られた妖刀竹光のさらなる効果を発動！このカードがフィールドから墓地に送られたことで、デッキから竹光を1枚サーチする。俺が手札に加えるのは通常魔法、黄金色の竹光だ！」

黄金色の竹光……たしか竹光が存在するときにのみ発動できる、カードを2枚ノーコストでドローする強力なドローソースだったはずだ。なるほど、このターンを耐えきればケルトの手札にはさっきバウンスした折れ竹光のカードがある、次のターンでそれをドゴランに装備すればそのコンボでさらにドローができるという訳か。

確かにこの状況では最善のサーチだろう。それに、ドゴランには強力な効果の代償として自らの効果を使ったターンに攻撃ができないというデメリットがある。それを踏まえれば、次のターンまで生き残る目は十分にあると踏んでのことだろう。

「だけどもまだ、まだだ！魔法カード、アドバンスドローを発動！自分フィールドのレベ

ル８以上のモンスターを墓地に送り、２枚ドローする！」

もし次のターンを回すようなことがあれば、確実にケルトは僕にとどめを刺すだろう。ケルトに続く道を見事に焼け野原にしてくれたドゴランに心の中で礼を言いつつさらに次のカードを、このターンでなんとしても勝利を掴むためのカードを引く。

「墓地に存在する、妨げられた壊獣の眠りの効果を発動。このカードをゲームから除外して、デッキから最後のサンダー・ザ・キングをサーチする。そして魔法カード、埋葬されし生け贄を発動！僕の墓地のドゴランとケルトの墓地のダスティローブをゲームから除外して、手札から最上級モンスターをリリースなしで通常召喚する！今こそフィールドを支配しろ、サンダー・ザ・キング！」

いつかのダーク・バルター戦の時のように、フィールドを睥睨する蛇のような体をした機械の壊獣。今回もフィニッシャーになるのは、このカードこそがふさわしいだろう。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００

「魔法カード、一騎加勢を発動。このカードの効果を受けてサンダー・ザ・キングの攻撃力は、ターンの間１５００ポイントアップする」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００→４８００

「だが俺の墓地には……ああいや、クソが！」

「そう、僕のダイレクトアタックに反応してモンスターとして蘇るトラップカード、シャドーベイルがいる。そんなことは百も承知さ、だから僕はサンダー・ザ・キングの固有能力、帯電を発動！」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）→（１）

相手フィールドにモンスターがいないから帯電の３回攻撃は意味がない。だけどこの力をメインフェイズのうちに発動しておけば、バトルフェイズにしか発動できないシャドーベイルの蘇生効果はもう使えなくなる。

「このデュエル、僕の勝ちだ！サンダー・ザ・キング、ダイレクトアタック！」

３つの首が雷撃のブレスを放ち、空気がその衝撃に震える。ドゴランの起こす炎の嵐とはまた違った雷の爆発が、その身を守るべきカードを封じられたケルトの体を吹き飛ばした。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻４８００→ケルト（直接攻撃）

ケルト　ＬＰ４５００→０

「うう……」

「ケルト！」

デュエルが終了し、最後の攻撃で吹き飛んで後ろの壁に激突したきりピクリとも動かないケルトのもとへ走る。息も絶え絶えといった様子で僕の呼びかけに顔を上げるケルトの目にもはや生気はほとんど残っていなかったが、さっきまでの狂気もまたきれいに消えていた。

苦しそうにしながらもどうにかにやりと笑って見せ、自力で起き上がろうとしてその場に膝をつく。慌てて肩を支えると、かすかな声で言葉を発した。

「……よう。よくやったな、やるじゃねえか……」

「そんな、無理にしゃべらなくていいから！」

「いや。どうせもう長生きはしたしな、今更後悔はねえよ。お前のおかげで正気にも戻れたし、何ひとつ悔いはねえさ」

「そんな……！」

ケルトの体が、うすぼんやりと発光し始める。ゆっくりと、その全身が光の粒子になって消えていきつつあるのだ。その様子をちらりと見降ろし、ケルトが最後の言葉を残す。

「いいな、なんでもいいから生き延びろ。気にすんなっつってんのにそんなにお前が気に病むんならもう俺は知ったこっちゃねえが、だったら俺の最後の頼みぐらい聞け。いいな、絶対生き残れ。俺の分までしっかり生きろよ。おら、返事しろ返事」

「う、うん……約束する、必ず僕は生きて帰る。元の世界に戻るって」
「よし。あばよ……」
「ケルト……」
　その言葉を最後に、ケルトの姿が消えていく。一緒にいたのはほんの短い間だけだったけれど、心にはぽっかりと穴が開いてしまったようで、どれだけここ数日彼に依存していたのかが痛感できる。
　そのままどうするでもなく立ち尽くしていると、やがてパチ、パチ、パチ、とゆっくりと手を叩く音が聞こえてきた。その方向へ視線をやると、その主は覇王……やがて覇王が手を叩くのをやめて立ち上がり、ここに来て初めて言葉を発した。
「いい余興だった。これから褒美として、この覇王が直々に相手してやろう」
　それを聞いて、思わず自分の耳を疑った。
　言葉の内容にではない。それは最初から聞かされていたし、それを忘れていたわけではないからだ。でも今の声、あの声には聴き覚えがある。それは、僕がこの２年間毎日のように顔を突き合わせていた相手の声。この世界にいるはずのない、でも疑いようのないあの声。
「十代……？」
　その言葉に返答をしてくれるものはなく、かわりにむなしく風だけが吹く。やがて闘

技場の入り口が開き、そこから覇王が入ってきた。

ターン９８　蹂躙王と荒廃のＨＥＲＯ

　覇王が１歩、また１歩と歩を進める。やがて僕の正面で立ち止まり、これまで影に覆われていたその顔が明らかになる。目の色は黄色と、僕の知る彼のそれとは違う。それに彼は、あんな冷たい全てを見下すような目をしたことはなかった……いや違う、僕はあんな顔をした彼を見たことがある。正確には夢で、だが。だから断言できる、それに親友の顔なんて見間違えようがない。

「やっぱり……十代！」

　なぜ十代がこの世界に来ているのか。その恰好はなんなのか。色々と聞きたいことが頭の中でごちゃ混ぜになり、その名前を呼ぶだけで精一杯だった。だが覇王、いや十代は僕の叫びに耳を貸さず、それどころか表情ひとつ変えることなくその鎧に付いた回転式デュエルディスクとでもいうべき禍々しい機械を起動させる。そして口を開くと、これまた十代の声から冷酷な声音が発せられる。

「貴様ら。それを片付けておけ」

　それ、と言いながら覇王が指差したのは、主を失いその場に転がったままのケルトのデュエルディスクとローブだ。すると慌てて走ってきた何匹かの悪魔がそれを抱え上

げ、後ろの門を通って運び出していった。
「片付けるって……どこにやる気なのさ!?」
「どうやらこの人間は、ここに来るとき周りもよく見ていなかったようだな」
僕の質問に、真上からベージの声が覇王の代わりに答える。そちらを睨みつけるとわざとらしくおお怖い、と震えて見せた後、教えるのが楽しくてしょうがないといった様子でケルトの形見が運ばれていった方を手で示した。
「それじゃあイチから話すとだな、この闘技場のあっち側は崖になっているんだよ。それも下まで５０メートルはある断崖絶壁、おまけに底には馬鹿みたいに深い急流が流れているせいで俺たち悪魔でも無策で突っ込んだらただじゃあ済まないほどのな！」
先ほどの、闘技場の司会者としてのわざとらしい敬語はすっかり鳴りを潜め、恐らくこちらが素の性格なのであろう口調で意気揚々と喋るベージ。それは別にどうでもいいのだが、その内容は聞き流すわけにはいかなかった。そこまで聞けば、最後まで聞かずともその先は予想できる。
「それじゃあ、ケルトの道具は……」
「今頃は魚の餌だろうなあ！それとも、海竜にでも食われたか？」
「この……！」
「茶番はもういいだろう。貴様も構えろ、この覇王が直々に相手してやる」

ついカッとなってベージに突っかかっていこうとした僕の背に、覇王の言葉が冷たい氷の刃のように突き刺さる。そうだ、今はあの雑魚を相手にしている場合じゃない。

ドクン、と胸の奥で何かが身じろぎするのを感じた。その正体はわかっている。この覇王の持つ、こうして向かい合っているだけでもわかる恐るべき力に僕の心の闇が反応しているのだ。戦え、倒せ、そう何度も繰り返し求め続ける声が聞こえてくる。

そしてそれと同時に目の前で消えていったケルトに対するやりきれない思いや悲しみが次第に退いていき、その代わりに僕の心を戦闘への高揚感が満たしていく。後ろ向きな感情は、戦うためにはふさわしくないからだ。効率よく敵を圧倒するためには、僕の感情すら塗り潰され書き換えられていく。

「くっ……！」

みるみる高まる衝動を感じながら、ケルトの最後の願いを思い出す。あの時ケルトは消える直前、僕に生き残れと言った。それはつまり、あの瞬間にケルトは正気に戻れたということだ。まるで、斎王を倒したらその体に取りついていた破滅の光が消えていったあの時のように。つまり、今回のあの隕石による赤い光が破滅の光と関係している……？いや、そう考えるにはいくらなんでもまだ少し早いだろう。だがあの時のように、洗脳された相手を倒せば正気に戻せるのはまず間違いないと見ていいはずだ。

……この思考も、本当は誰のものなのかわかったものじゃない。この僕『遊野清明』が

考え付いた希望の光なのか、それとも何でもいいからただデュエルすることだけを求める破壊魔の『僕』が、僕から躊躇いを消すためにでっち上げた出まかせの方便なのか。

だけどどちらにせよ、僕はこの誘いに乗ることを決めた。斎王をはじめとする光の結社のことを思えば実際分の悪い賭けでもないし、そもそもここでこのデュエルを受けなければこの闘技場から出ることは不可能だろう。自力で逃げ出すことも精霊の力を借りることもできないのなら、目の前の覇王を元の遊城十代に戻して扉を開かせるほかにできる事はなさそうだ。

「勝負だ、十代！こんなところで会うとは思わなかったけどね、それじゃあデュエルと洒落込もう！」

「十代？我が名は覇王。それがこの世界を統べる者の名、そして今から貴様を永劫の闇に突き落とす者の名だ」

「……あ、そう。ふざけたことばっか言ってないで、アカデミアに帰るよ！」

「「デュエル！」」

先攻はまたも僕。このデッキに先攻はとことん向いていないが、こうなった以上やるしかない。

ただ心配なのは、僕のデュエルディスクだ。先ほどのケルト戦が始まった時からすでに怪しかったが、あのデュエルでの衝撃のせいでますます不調がひどくなってしまった

らしい。ディスクの中心に位置する青い球体は不規則に点滅を繰り返し、耳を澄ませば先ほどよりひどくなった異音が断続的に聞こえてくる。

そういえば、先ほどのデュエルではちょいちょいヤジを飛ばしてきた観客も今は大人しい。それだけ、覇王に期待しているのだろう。愚かにも覇王軍に敵対した僕と言う贄を、自らのトップである覇王が完膚無きまでに蹂躙する様を一瞬たりとも見過ごすまいとしているのだろう。

「アウェー上等、やれることをやるだけ、か。カードを２枚セットしてターンエンド」

「ドロー。永続魔法、守護神の宝札を発動。手札５枚を捨てることでカードを２枚ドローする。Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　クレイマンを召喚」

Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン　攻８００

やはり、と言うべきか。何度も十代が……この『覇王』ではない、僕の知る『遊城十代』が壁として融合素材としてそして時にはアタッカーとして愛用してきた、大地の力を持つＨＥＲＯ。本当に、このモンスターをまさかこの世界で見ることになるとは思わなかった。

「バトルだ。クレイマンでダイレクトアタック、クレイ・ナックル！」

巨体が闘技場の大地を踏みしめて動き、重い拳が無防備な僕に叩き込まれる。

Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン　攻８００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４０００→３２００

「この程度のダメージで……！」

「だろうな。この程度で倒れるようでは、とてもこの俺の相手は務まらんぞ」

余裕ぶっこいてはいるが、今の覇王の攻撃はどう見てもミスだ。確かに効いたことは効いたけど、致命傷には程遠い８００ダメージのためにわざわざこちらのリリース先を呼び出してくれたんだから、これはむしろ感謝してもいいレベルだろう。

だが、そんなことを考えていられるのもそこまでだった。攻撃を終えて覇王のフィールドに帰還したクレイマンの姿が光に包まれ、足元から消えていったのだ。

「え!?」

「メイン２に魔法発動、馬の骨の対価を発動した。これにより俺のフィールドから通常モンスター１体を墓地に送り、カードを２枚ドローする。カードを伏せ、ターンエンドだ」

「墓地に送り……またフィールドが空に……！」

最初から、全て計算づくだったってわけか。たとえクレイマンの攻撃力であっても僕の場ががら空きな以上ダイレクトアタックは可能だし、攻撃が終われば用済みどころかむしろこちらの起点になるからさっさと墓地に放りこむ。確かにこちらの手の内が割れている以上最も効率のいい、リスクを最小限に抑えつつ最大限のダメージを出せる動

きだ。しかも守護神の宝札によるたった２枚のドローだけでピンポイントにクレイマンと馬の骨の対価を引くあたり、引きの強さは十代のころからまるで変わっていない。

こりゃあ、ひどい相手にぶつかったものだ。とてもじゃないが一筋縄では行きそうにない。

清明　ＬＰ３２００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：２（伏せ）
覇王　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：守護神の宝札
１（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」

覇王はリリースを警戒してモンスターを残さない戦術をしている……逆に言えば、先ほどの埋葬されし生け贄のように手札の壊獣を自身の効果に頼らず場に出すためのカードを引けば、モンスターのいない覇王にはダイレクトアタックが直撃する。

の、だが。駄目だ、この手札だとまだ動けない、今欲しいのは防御のカードじゃなくて反撃のカードなのに。

「……さらにカードを1枚セットして、ターンエンド」
「俺のターン。この瞬間守護神の宝札のさらなる効果が適用され、このカードが存在する限り俺が通常のドローで引く枚数は2枚となる」
先ほどのドローと合わせ、覇王の手札は既に3枚。つい先ほど5枚もの手札を捨てたことを考えると、信じられないほどの枚数だ。
「来い、バーストレディ。そのまま攻撃しろ、バースト・ファイヤー!」
「このカードはまだ……ぐわっ!」
バーストレディの攻撃力は１２００。クレイマンよりは上だが、いくらなんでもこの攻撃に対しこのカードを使うのはもったいなさすぎる。
Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ３２００→２０００
「ぐっ……」
自分で通すと決めた攻撃とはいえ、やはり食らうと結構痛い。服の端に火が燃え移ったのをもみ消す僕を見て、覇王が心の底から馬鹿にするようにため息を漏らした。
「随分期待外れな相手だな。ジム・クロコダイル・クックとかいったか。奴の方が貴様より遥かに楽しめた」
「ジム?!どういうこと、なんでジムの名前が……!」

さすがに今のは聞き過ごせず、慌てて問い詰める。僕の知る限り十代とジムの間に直接の対決はなかったはずだから、もし今の言葉が事実だとすればそれはつまり、どういう経緯かは知らないがジムがこの覇王を相手にしたということになる。そして、今この場にいるのが覇王ということはつまり、ジムは……。

「よ、よくも！」

「だったらどうした？カードを１枚伏せてターンエンドだ。さあ、貴様なりの抵抗を少しは見せてみろ」

清明　ＬＰ２０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：３（伏せ）
覇王　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：守護神の宝札
２（伏せ）

「僕のターン、ドロー！」

今の告白を受け、僕の内部でまた少し闇が増える。衝撃も悲しみもすべて燃料とし、怒りと闘志だけがただ高まっていく。もはや僕のライフは残り半分……だがそれすら

も、いいハンデだと思えるように思考が書き換えられていく。デュエル前にも同じことが起きたが、重要なのは怯まずに相手に食らいつくこと。ここで弱気な思考は、ただ勝負の邪魔でしかない。

「スタンバイフェイズにトラップ発動、デストラクト・ポーション。俺のフィールドのバーストレディを破壊し、その攻撃力分ライフを回復する」

バーストレディが苦悶の表情を浮かべ、次の瞬間その体が粉々に砕けて消える。これでまたリリース要因が消えた……けど、このカードさえあれば。

霸王　ＬＰ４０００→５２００

「やっと来たの？遅い遅い、何やってんのさ。魔法カード、七星の宝刀を発動！手札からレベル７モンスターの粘糸壊獣クモグスを除外し、カードを２枚ドローする。そして装備魔法、Ｄ・Ｄ（ディファレント・ディメンション）・Ｒ（リバイバル）を発動。手札を１枚捨てることでゲームから除外されているモンスターを特殊召喚し、さらにこのカードを装備する。クモグスを特殊召喚！」

空中高くから風切り音とともに大蜘蛛の壊獣が落下し、８本の足を使い着地の衝撃を分散させる。さあ、ここからは僕のターンだ。あのつんと澄ました嫌味な顔に、ジムの分まで一撃叩き込んでやる。

粘糸壊獣クモグス　攻２４００

「いくら回復したところで、クモグスの攻撃力はその数値より上！バトル、クモグスでダイレクトアタック！」

粘糸壊獣クモグス　攻２４００→覇王（直接攻撃）

覇王　ＬＰ５２００→２８００

「どうだ！」

「温いな。所詮この程度か」

クモグスの一撃をまともに受けても、顔色一つ変えない覇王。張りあいはないが、こちらが有利なことに変わりはないので気にしない。さすがに、今の攻撃だけで正気に戻るだなんて都合のいい展開は最初から期待してなかったし。

「今のうちに言ってな。ターンエンド」

「俺のターン、守護神の宝札により２枚ドロー。魔法カード、闇の量産工場を発動。このカードは墓地の通常モンスターを２体選択し、そのカードを手札に加える。クレイマンとバーストレディを回収し、ダーク・フュージョンを発動する」

「ダーク……フュージョン……？」

「そうだ。手札及びフィールド上のモンスターを素材とし、悪魔族の融合モンスターを融合召喚する」

クレイマンとバーストレディの２体が宙に浮き、上空に生まれた怪しげな黒い渦の中

に飲み込まれて混じり合う。通常の融合ならば、あの２体の組み合わせを指定しているのはランパートガンナーだ。だけど覇王は今、悪魔族の融合モンスターと言った。一体、どんなモンスターが目を覚ますというんだか。

「来い、Ｅ―ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）　ヘル・スナイパー！」

そして僕がその黒い渦を仰ぎ見た瞬間に上空の暗雲を貫いて、紅色の邪悪なＨＥＲＯが地上に降り立った。素材が同じだけあって女性型モンスター、右腕が巨大な銃になっているなどランパートガンナーに似た部分も存在するが、それでもあれは十代のモンスターではなく、覇王のモンスターだ。なまじ類似点があるだけに、余計にその思いが強くなる。

Ｅ―ＨＥＲＯ　ヘル・スナイパー　守２５００

「イービルヒーロー……？だけど、ようやく特殊召喚してくれたね。この瞬間を待ってたんだ、リバースカードオープン！速攻魔法、終焉の地！相手がモンスターを特殊召喚した時に、デッキからフィールド魔法を発動する……ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント、発動だ！そして終焉の地のカードが発動後フィールドから墓地に送られたことで、このカードには壊獣カウンターが乗せられる」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）↓（１）

ウォーターフロントが発動され、このデッキもようやくエンジンが回り始めてきた。

このカードの力は覇王も知っているはずだが、その表情は依然としてピクリとも動かない。

「ターンエンドだ」

清明　ＬＰ２０００　手札：２

モンスター：粘糸壊獣クモグス（攻・ＤＤＲ）

魔法・罠：Ｄ・Ｄ・Ｒ（クモグス）

２（伏せ）

場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）

覇王　ＬＰ２８００　手札：２

モンスター：Ｅ－ＨＥＲＯ　ヘル・スナイパー（守）

魔法・罠：守護神の宝札

２（伏せ）

「僕のターン！さて……」

状況を整理しよう。まず、クモグスの攻撃力ではヘル・スナイパーの守備力を越えられない。僕の手札には怒炎壊獣ドゴランのカードがあるからこれでリリースすることはできるけれど、それをやったところでクモグスの攻撃力２４００ではドゴランの３０００に勝てないからやる意味がない。この伏せカードを使えば話は変わってくるけれ

ど、それはやめておこう。もっと面白い手を思いついた。
「そうさ、このカードがあれば問題ないね。魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！フィールド全てのモンスターを破壊し、互いのフィールドに壊獣を攻撃表示で特殊召喚する！」
クモグスの姿が消えていき、それと同時に装備されていたＤ・Ｄ・Ｒもまた墓地に送られる。だが、ヘル・スナイパーの姿は消えない。フィールドに留まり続け、冷たい銃口をこちらに真っ直ぐ向けている。
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）↓（４）
「眠りのカードが効かない？」
「無駄だ。ヘル・スナイパーは、魔法の効果によっては破壊されない効果を持つ」
「そんなピンポイント耐性を……！だけどクモグスが破壊されたことで、リクルート効果の条件は満たした。さあ出番だジズキエル、敵は眼前ラディアンだ！」
僕のフィールドにジズキエル、覇王のフィールドにラディアンの姿が同時に現れる。ヘル・スナイパーを今ので破壊できなかったのは計算外だけど、まだ手はある。流れは僕の方にあるはずだ。
壊星壊獣ジズキエル　攻３３００
多次元壊獣ラディアン　攻２８００

「さらにリバースカードオープン、スキル・サクセサー！このカードはモンスターの攻撃力をこのターンの間４００ポイントアップさせる。僕はこの効果をジズキエルに対して発動……そしてこの瞬間にジズキエルの特殊能力、神鏡を発動！壊獣カウンター３つをコストとしてカード１枚に対象を取る効果を無効にし、さらにカード１枚を破壊する！僕が破壊するのは覇王、お前のヘル・スナイパーだ！魔法カードに耐性があるなら、モンスター効果で破壊するまでさ！」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）↓（１）↓（２）

ジズキエルの表面に一瞬鏡のような光沢が走り、表になったスキル・サクセサーから放たれた光線が反射され別の方向に飛んでいく。その先にいたヘル・スナイパーが、回避動作すら取れずその光に巻き込まれた。

「どうだ！」

「墓地からトラップ発動、スキル・プリズナー。このカードは墓地から除外することで自分フィールドのカード１枚を選択し、このターンその選んだカードを対象としたモンスター効果を無効とする。これによりヘル・スナイパーを対象としたジズキエルの効果は無効となった」

「壊獣カウンターは……だめだ、２つじゃもう１回神鏡の能力は使えないか……」

壊星壊獣ジズキエル　攻３３００↓３７００

ジズキエルの効果そのものを止められたことで、スキル・サクセサーの効果がジズキエルをわずかながら強化する。あのスキル・プリズナーのカードは、最初に守護神の宝札で捨てた5枚のうちの1枚だったのだろう。結局この効果でも倒すことのできなかったヘル・スナイパーが、相変わらず片膝をついた姿勢で僕に対して狙いを定め続ける。まさか融合までしておいてできることが魔法破壊への耐性だけなんてことがあるはずもないし、恐らくあのカードにはさらなる効果があるのだろう。だけど、ここでラディアンを残しておいたら返しの覇王のターンで特殊能力である分身を使用、貴重な壊獣カウンターを消費させられるうえに攻撃力２８００ものトークンを出されてしまう。ならば、どちらに攻撃するべきか？

迷いはほんの数秒だった。そして一度道を選んだ以上、もう後悔なんてしていられない。

「頼むよ、ジズキエル！ラディアンに攻撃！」

金属製の壊獣が雄叫びを上げ、腕の砲から極太の光線を叩き込む。その衝撃は覇王にも届いたはずだが、やはりその表情は揺るがない。

壊星壊獣ジズキエル　攻３７００→多次元壊獣ラディアン　攻２８００（破壊）

覇王　ＬＰ２８００→１９００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）→（３）

「メイン2にウォーターフロントの効果を発動、壊獣カウンターが3つ以上存在することでデッキから2枚目のラディアンをサーチする。これでターンエンド」
「この程度か？ならばスタンバイフェイズ、ヘル・スナイパーのモンスター効果発動！ヘルショット！」
　これまで片膝をついたまま沈黙を守ってきたヘル・スナイパーが、ついに動き出す。構えた右腕に闇のエネルギーが集まり、光弾となって放たれたそれがジズキエルの横をすり抜け僕に直接襲い掛かる。
　清明　ＬＰ２０００→１０００
「ヘル・スナイパーは表側守備表示で存在するとき、自身のスタンバイフェイズごとに１０００ポイントのダメージを相手プレイヤーに与える」
「ま、まだまだ……」
「まだ俺のターンは続いているぞ。魔法カード、戦士の生還を発動。俺の墓地から戦士族モンスター、バーストレディを回収する」
　戦士の生還、あれは墓地の戦士族1体のみを対象とするカードのはず。壊獣カウンターは3つあるし、ここでジズキエルの効果を使うべきだろうか。だけどすでに効果を使った以上、ヘル・スナイパーが次にあの凶弾を放つのは次の覇王のスタンバイフェイズ。そんな相手を今更、このタイミングで破壊する価値があるだろうか。

いや、効果の出し惜しみはよくないか。それに、ヘル・スナイパーも融合ヒーロー。ならば墓地に送ってしまえば、融合ヒーローの性としてごく一部の例外を除けばもう蘇生も帰還もできないはずだ。

「ジズキエルの特殊能力、神鏡！戦士の生還を無効にし、ヘル・スナイパーを破壊する！」

覇王が発動した戦士の生還のカードに先ほどジズキエルが身にまとったような光沢が走り、そこから放たれた光が今度こそヘル・スナイパーを撃ちぬき消滅させる。まったく、随分てこずらせたもんだ。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）↓（０）↓（２）

場ががら空きになり、サルベージも失敗した覇王。だがその口元には薄い、嘲りを隠そうともしない笑みが浮かんでいた。

「礼を言うぞ、このタイミングでその効果を使ってくれて」

「え……？」

囮。その言葉が脳裏をよぎる……が、もう手遅れだ。

「速攻魔法、コズミック・サイクロンを発動。１０００ライフを払うことで、フィールドの魔法または罠を１枚除外する。俺が除外するのは当然、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントだ」

「しまった！」

ウォーターフロントは自身の壊獣カウンターを使用しての破壊耐性があり、さらに対象を取る効果に対しては牽制のできたジズキエルがいる。そのおかげで油断していたけど、覇王の狙いは最初からウォーターフロント一択。

こうして壊獣カウンターを乗せるカードがなくなってしまった以上、もはやジズキエルもただ攻撃力が高いだけのバニラモンスターに過ぎない。そして攻撃力だけで安心できるほど、この男は甘くない。

覇王　ＬＰ１９００→９００

「やってくれるじゃん……！」

「さらにトラップ発動、ヒーロー・ブラスト。俺の墓地から通常モンスターのＥ・ＨＥＲＯを１体回収する。俺が手札に戻すのはクレイマンだ。この後でさらに別の効果があるが、今はその条件を満たしていないので使えないな」

この状況でクレイマンを手札に戻すだなんて、まさか壁にするつもりでもあるまい。また手札にあるのだろう、融合召喚を行うためのカードが。その思考を裏付けるように、先ほども見たあのカードを再び覇王が発動させる。

「魔法発動、ダーク・フュージョン。手札のスパークマンと、クレイマンの２体を融合させる！」

再び空に暗雲よりもさらに暗い渦が生じ、その中に２体のモンスターが吸い込まれて

いく。あの組み合わせを指定するのは通常ならサンダー・ジャイアント、それが今度はどう生まれ変わるというのか。

その疑問に答えるかのごとく、そのサンダー・ジャイアントと瓜二つと言ってもいいほどよく似たシルエットの巨体が渦の中から大地に降り立った。そう、カラーリングは似ても似つかないとはいえシルエットだけならこの２体は意外なほど……ランパートガンナーとヘル・スナイパーの時よりも基となったヒーローによく似ている。これはもしかして、少しずつ十代としての人格が目を覚ましつつある影響……とかだったりするのだろうか。

「来い、Ｅ―ＨＥＲＯ　ライトニング・ゴーレム！」

Ｅ―ＨＥＲＯ　ライトニング・ゴーレム　攻２４００

攻撃力だけで言えば、ジズキエルの方がはるかに上。だけど、覇王がそんなミスするはずがない。

「ライトニング・ゴーレムは１ターンに１度、相手モンスターを破壊する。ボルテック・ボム！」

「ジズキエル！」

ライトニング・ゴーレムが合わせた両掌の間に灰色の球体を作り上げ、それをジズキエルに飛ばす。ジズキエルの全長からすればはるかに小さいそれには、一体どれほどの

エネルギーが込められていたのか。食らった箇所を中心に火花やプラズマが走り、ダメージコントロールすら間に合わずに巨体が悶えてその場に崩れ落ちた。
「やれ、ライトニング・ゴーレム。ヘル・ライトニング！」
「まだだ！トラップ発動、イタクァの暴風！フィールドを暴風が掻き回し、全てのモンスターの表示形式は変更される……！」
Ｅ―ＨＥＲＯ　ライトニング・ゴーレム　攻２４００→守１５００
ここでダイレクトアタックを喰らえば終わりだ、これ以上このカードを出し惜しみする理由もない。ライトニング・ゴーレムの巨体でも風の力には抗えず、手をついて防御姿勢を取る。
「ほう？ならばこのターンは待ってやろう。ターンエンドだ」
清明　ＬＰ１０００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：なし
覇王　ＬＰ９００　手札：０
モンスター：Ｅ―ＨＥＲＯ　ライトニング・ゴーレム（守）
魔法・罠：守護神の宝札
１（伏せ）

「僕のターン、ドロー！よし、これならギリギリ行ける！永続魔法、怪獣の出現記録を発動。そしてライトニング・ゴーレムをリリースして覇王、お前のフィールドに怒炎壊獣ドゴランを特殊召喚する。さらにその壊獣の存在に反応して、手札に眠る多次元壊獣ラディアンを僕のフィールドに攻撃表示で特殊召喚！」

ライトニング・ゴーレムの姿をかき消し、再びフィールドに君臨する２体の壊獣。これ以上は流石に余裕がない、なんとかこのターンで終わらせてやる……！

怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００

多次元壊獣ラディアン　攻２８００

「怪獣の出現記録は、手札か墓地から壊獣が特殊召喚されるたびに壊獣カウンターが乗せられる。この２つのカウンターを消費してラディアンの特殊能力、分身を発動！攻撃力２８００、ラディアントークンを僕のフィールドに特殊召喚する！」

怪獣の出現記録（０）→（２）→（０）

ラディアントークン　攻２８００

空間を突き破って腕を出し、そこからにゅるりとフィールドに現れるラディアンのそっくりさん。ここでさらに念を入れて壊獣の出現記録の効果を使い、あのガダーラをもっと攻撃力の低いガメシエルあたりに入れ替える手もある。だけど、気になるのは覇王のあの伏せカード……あれは確か、かなり最初のうちから伏せられていたカードのは

ずだ。何かはわからないが下手に動いて発動条件を満たしたりでもしたらまずいし、いらないことをわざわざする必要はまあ、ないだろう。
「バトル、ラディアントークンでドゴランに攻撃……と同時にこのダメージステップ、墓地からスキル・サクセサーの更なる効果を発動。このカードを除外し、モンスター1体の攻撃力を８００ポイントアップさせる！行け、ラディアントークン！」
ラディアントークン　攻２８００→３６００→怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００（破壊）
覇王　ＬＰ９００→３００
「ラディアンで追撃、これで終わりだ！」
ラディアンがその拳を振り上げ、眼下の覇王に叩き付ける。派手な激突音とともに砂煙が発生し、視界が完全に塞がれてしまったが、でもこれで全てにけりがつく。
そしてその砂煙の向こうから、覇王の声が闘技場全体に響き渡った。
「墓地からネクロ・ガードナーの効果発動。このカードを除外し、攻撃を無効とする」
「なっ!?」
次第に視界が晴れてくる。そこで僕が見た光景は、半透明の戦士がその身を盾にしてラディアンの拳から覇王を庇っているところだった。
「どうした？まだ何かすることがあるならば、気が済むまですればいい。その全てを打

ち砕いてくれる」

「ターン……エンド……」

ネクロ・ガードナー。あれもまた、最初に守護神の宝札で墓地に送ったカードの1枚なのだろう。あと一撃、あと一撃で終わるはずなのに、残ったリソースすべてを使い切ってもなお、その一撃が届かない。

「俺のターン。トラップ発動、無謀な欲張り。カードを2枚引く代わり、その後2ターンの間俺のドローフェイズはスキップされる。そして墓地からグローアップ・バルブの効果を発動。デッキトップを墓地に送り、このカードをデュエル中1度だけ蘇生させる」

「無謀な欲張り……！」

そりゃ守護神の宝札で毎ターン2枚ドローできるなら、わざわざデメリットのキツイ無謀な欲張りなんて発動を控えるわけだ。だけど、そんな考察はどうでもいい。

それより何より問題なのは前の僕のターン、覇王のフィールドにも墓地にも防御札はネクロ・ガードナー1枚しか存在していなかった、その点だ。あの時に躊躇わず壊獣の出現記録で覇王のドゴランをガダーラなりガメシエルなりクモグスなりに入れ替えておきさえすれば、スキル・サクセサー込みの攻撃で覇王のライフを0にすることができていたはずだ。僕のミスのせいで、最後の最後に詰めの一手を読み間違えたせいで、このデュエルを終わらせることができなかった。何が一撃が届かない、だ。デッキは僕に

十分応えてくれていた、その力を持て余したあげく自分から勝利を遠ざけたのは、僕以外の誰でもない……！

　グローアップ・バルブ　守１００

「グローアップ・バルブをリリースし、Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジをアドバンス召喚。このカードはレベル７だが、相手フィールドにモンスターが存在するならばリリース１体でアドバンス召喚できる」

　エッジの名を持つものの、全身を黄金の鎧に包んだヒーローである本家エッジマンとは真逆のスマートな体に長い鉤爪を持つ悪のヒーローが覇王の場に召喚される。僕の目にはそのエッジマンとは似ても似つかぬ姿がヘル・スナイパー、ライトニング・ゴーレムと闇堕ちとはいえ順調に本家に近づきつつあった流れの中で、また十代が遠ざかってしまった象徴であるかのようにように映った。

　Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジ　攻２６００

「この俺との勝負から逃げ出さなかった褒美として、貴様にはジムとかいう男と同じやり方でとどめを刺してやろう」

「え？」

　そう言う覇王の手札にある、ここから見るだけでもわかるひときわ濃い闇のオーラを放つ１枚のカード。そのカードをかざし、デュエルディスクに叩き付けるようにして発

動した。瞬間、そのカードめがけ全てのものが吸い込まれるような力が発生し、その場に全力で踏ん張っていないとまともに立っていられないほどの吸引力に体が持っていかれそうになる。
「な、何なのさもう!」
「見せてやろう!心の闇が作り出した、最強の力の象徴!絶対無敵!究極の力を解き放て!発動せよ!超融合!」
「超……融合……?」
超融合。その名を宣言すると同時に、カードの力がさらに膨れ上がる。この力、この壊獣たちが束になったのと同等、下手すればそれ以上のものを感じる。
そしてその吸い込む力が限界を超えた時、これまで防御姿勢を取って耐えていたラディアントークンが飛ばされて吸われていった。同時にマリシャス・エッジも飛び上がり、自分からその流れに飲み込まれていく。
「超融合は、俺の手札を1枚捨てて発動する。そして互いのフィールドから融合素材を墓地に送り、その融合モンスターを融合召喚する!」
「僕のフィールドから融合!?そんな無茶苦茶、通るもんか!」
「人のモンスターをリリースして戦う貴様がそれを言うか?所詮俺も貴様も同じ穴のムジナ、その間に違いがあるとすればそれはひとつ。俺はこの世界を統べる者、覇王とな

ることを選択したということだ！俺は俺自身のマリシャス・エッジと、貴様のレベル６以上の悪魔族モンスター、ラディアントークンを素材として融合召喚！出でよ、Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・デビル！」

マリシャス・エッジの姿をベースにラディアントークンの力が取り込まれ、その背には漆黒の翼が生える。両腕の鉤爪はさらに深く鋭く長くなり、無駄なパーツは取れてむしろその全体像はよりシャープに変化していく。闇の炎が最後にその全身をひと撫ですると、後に残ったのは覇王と同じ冷たい目をした悪魔そのものだった。

Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・デビル　攻３５００

「魔法カード、破天荒な風を発動。マリシャス・デビルの攻守を、さらに１０００ポイントアップさせる」

たった１人で戦場に立つＨＥＲＯを、旋風が包み込む。その風に乗って、マリシャス・デビルが翼をゆっくりと広げ飛び立った。

Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・デビル　攻３５００→４５００　守２１００→３１００

「これで終わりだ。マリシャス・デビルでラディアンに攻撃、エッジ・ストリーム！」

「う、うわあああっ！」

上空から爪を一閃し、闇の刃を飛ばすマリシャス・デビル。迫りくる敗北の二文字への恐怖からか、ふと気が付けば無意識に自分の左腕を顔の前にかざして少しでも衝撃を

和らげようとしていて……その腕の隙間から最後に見えた、覇王の瞳。あの眼を見た時、それまでの予想が確信に変わった。

あの眼に宿る不気味な力、あれは間違いない、破滅の光がこの覇王に何らかの形で関わっている。でも、それが今更わかったところで僕はもう……。

Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・デビル　攻４５００→多次元壊獣ラディアン　攻２８００（破壊）

清明　ＬＰ１０００→???

「……え？」

「何？」

僕と覇王の声が同時に発せられる。闇の刃はラディアンの体を貫通しそのままの勢いで僕が構えた右腕に、より正確に言えばそこに取り付けられた僕のデュエルディスクに深々と突き刺さっていた。色々と限界が近かった僕のデュエルディスクだが、この攻撃が決定打になったらしい。フィールドゾーンはバチバチと激しい点滅を繰り返し、ライフカウンターは数字にすらなっていないでたらめな文字を示したまま動こうとしない。

実質的にはこのデュエルが僕の敗北で終わったのは間違いないのだが、デュエルディスクのライフ表示が０にならない以上内部処理的にはまだ終わっていない扱いになるらしく、ラディアンとマリシャス・デビルの実体化したソリッドビジョンもまた消えていかない。

「覇王様、ご無事で！」

「おい、早く門を開けろ！」

僕の背後でがやがやと声がする。異常事態を感じ取った観客が、自らの主の無事を確認するためにこちらに押し寄せてこようとしているらしい。だが、その声を聞いて我に返った。僕はまだ生きている、体が消えたりしていない。

そして頭の中で再び蘇る、ケルトの遺言。なんでもいいから、生き延びろ――――！

「もしかして……ラディアーン!!」

咄嗟にあることを思いつき、この敵だらけの場において唯一の僕の味方であるラディアンの名を叫ぶ。ラディアンは辛うじて立ってはいるものの、既に虫の息だ。無理もない、普通のデュエルならばとっくの昔に破壊されているほどの攻撃を喰らったのだから。それでも多次元壊獣は僕の意思に応えるため最後の力を振り絞り、ちょうど開いた闘技場の門めがけてその剛腕を叩きつけた。すると鉄の門が跡形もなく吹っ飛び、近く

にいた悪魔どももまとめて吹き飛ばされる。派手に地面がえぐれ、またもや土煙が周辺の視界を遮った。
「ぐわーっ！」
「は、覇王様！」
やはり、今のタイミングならケルトの言っていた、モンスターをわざと暴れさせて脱走を図るものを止めるためのシステムも作動していないらしい。少し考えれば当たり前だ、もしそのシステムが生きたままならばあの悪魔どもだってここに入れるとは思い難いのだから。恐らく誰かがここに入るために、そのスイッチを切ったのだろう。
「そうと決まれば……ありがとう、ラディアン！」
何でもいいから生き延びる。そのためにはどんな恥だろうとも、まっすぐ胸張って受け止めてやる。たとえそれが、デュエルディスクの故障にかこつけて負け確定な勝負を放り出して逃げ出すような手であってもだ。この屈辱は必ず利子をつけて返してやるとして、早くしないとこの土煙もすぐに晴れてしまう。今はそれまでになるべく遠くに逃げるんだ。
幸い妨害も受けずどうにか外に出ると、目の前にはほんの数メートルのところに一面崖が広がっていた。下を覗き込むと気が遠くなるような距離を隔ててごうごうと轟く水の音がして、最初にベージが言っていた崖の話を思い出す。でたらめに走ってどうに

か外に出たと思ったら、一番最悪なルートを選んでしまったらしい。
「も、もう……！」
だけど、今更引き返す時間はない。すでに背後からは、追手の足音やら羽音やらが聞こえ始めている。恐らくこのまま闘技場の縁を周っていけばこの崖以外の場所に出れるのだろうが、そんなことをしていてもあっという間に捕まってしまうだろう。
と、なるともう、残された道はここしかない。まだアドレナリンが体に満ちているせいか、不思議とここで死ぬとは思わなかった。にもかかわらず足を踏み出す勇気が出ないのは、僕に残った人間性の表れだろうか。
「いたぞ！」
「馬鹿な奴だ、よりによってここに出るとはな」
やはり地の利はあちらにあるようで、早くも外に出た追手が早速僕を見つけたらしくそんな会話が聞こえてくる。
……タイムアップだ。深呼吸して意を決し、助走をつけて崖の端から宙に躍り出る。ほんの一瞬の浮遊感の後、重力に従い猛烈な勢いで体が下に引っ張られた。加速の最中に両手両足を体に引き付けるよう縮め、頭を守るように空中で姿勢をできるだけ整える。ちらりと下を見るとぐんぐんと水面が近づいてきていて、最後の瞬間に大きく息を吸い目を閉じた。

次の瞬間、脳を揺さぶるような衝撃をまともに受けて視界が真っ白になった。

ターン９９　蹂躙王と鉄砲水

ふと気が付くと、固い地面の上に寝かされていた。体の上には毛布が掛けられ、すぐ横からは暖かな熱気と共に焚火のパチパチという音が聞こえてくる。

少し体を動かそうとするも、まだうまく手足が動かない。川に飛び込んだせいでずぶぬれの全身はまだ乾ききっておらず、湿った制服が余計に動きを邪魔する。それでもどうにかしようと唸っていると、枕元から聞き覚えのある声がした。

「よ。起きたか、久しぶりだな」

「その……声……」

「ああ、動くな動くな。火が近いぞ馬鹿」

静止の声も耳に入らず、軋む体を無理やり持ち上げる。どうにか上体だけ起こし、その辺で拾ったらしい木の枝で焚火をかき回す彼と目が合った。

「……ユーノ」

「おう。ほんっと久しぶりだな」

何か言おうと思ったけど、疲労が溜まっている体にとって焚火の誘惑はあまりにも強すぎた。次第に重くなる体を支えきれず、地面にずるずるとへたり込む。重いまぶたを

支えきれなくなった時、再び意識が闇に沈んだ。

「ふー……」

清明が再び眠り込んだのを確認し、深くゆっくりとため息をつくユーノ。今の短い会話だけで無意識のうちにかいていた冷たい汗をぬぐい、近くの岩にもたれかかる。

「なんなんだよ今の……こいつ、こんなプレッシャー強い奴だったか？」

遊野清明。最後にユーノが見た時には、ダークシグナーとなったことにより常人を越える力こそ持っていたものの、そんなものを感じさせない良くも悪くもただの少年（ガキ）でしかなかったはずだ。

だが、今の彼はあの時と外見こそ同じではあるが、その中身はまるで違う。全身を包む悲哀や狂気寸前の危うさの作り出す雰囲気はその年にはまるで似合わない独特の威圧感をもたらし、目の光にもどこか影が入りじっと見ているとその中に吸い込まれて消えてしまいそうな錯覚を催す。もはやそれは、少し見ただけでまともな人間ならば本能的に危険を察知するほどの存在になっていた。

そしてポツリと吐き出した、一見、誰に言うでもない独り言にしか聞こえないその言葉。しかしそれに反応するかの如く、地面に落ちた彼の影が揺らめき形を変える。人の

形から伸びる、人ならざる影。そのシルエットはまるで、１匹のシャチが丸まっているようにも見える。そしてどこからともなく響く、第三者の声。
『ああ。私達のいないうちに、また面倒事に巻き込まれたようだな。それも、特別厄介なものに』
「待てやコラ、何他人事みたいなこと言ってんだ。だいたい、なんでお前らがコイツと離れてたんだよ」
　突然の声にも驚く様子を見せず、むしろムッとした様子で言葉を返すユーノ。どうやらあまり聞かれたくないところを疲れたらしく、答える声の調子がやや弱くなる。
『それは説明しただろう……ここに飛ばされるときに引き離されてな、まさかマスターより先にこっちと合流するとまでは思わなかったが』
「なーにが合流だ、デッキごと地面に埋まってたとこ俺が引っこ抜いただけじゃねえか。にしても、いつの間にか覇王軍まで話進んでたのな。俺が最後に見た時は光の結社編クライマックスだったのに、時の流れは速いねえ」
『マスター、本当になにをやってたんだかな。せっかく寝入ったことだし、少し探ってみるか。少し手伝ってくれ、まず……』
　しばらく話が続いたのち、ユーノの影が元の人型に戻る。その本体があらかじめ横に積んであった土を焚火にかぶせて強引に火を消して周りが闇に包まれたところで、呼吸

こそ妙に浅いものの清明がぐっすり眠りこんでいることを確認して足音を殺しつつ立ち上がる。
　そのまま忍び足を維持しながら清明の枕元に立ち、その額に指を当てた。
「これでいいのか？」
『ああ……あ、いや、これは面倒だな。やめよう』
「あん？」
　わざわざそれなりに真面目に立ち上がってまで付き合ってんのになんだそのオチは、といういら立ちを隠そうともしないドスのきいた声に、慌ててすまなさそうに声が付け加える。
『いや、方法はこれでいいんだがな。思ったよりマスターの精神が抵抗してきて、うまく中が覗けないんだ。たかだか数日でどうやってこんなこと覚えたのかはわからないが、少し荒療治で行くしかないな』
「荒療治？ いいねえ、いい響きだ。よくわからんが俺もやるぜ」
　すぐに機嫌を直しノリノリになるユーノに対し、声が少しの間沈黙する。数秒後、いつになく真面目な調子で返事が返ってきた。
『単純で助かる、と言いたいところだがな。昔のよしみで１つ忠告しておくが、それはやめた方がいい。生きて帰れる保証はないぞ』

「あん？待て待て、そもそも何やるつもりなんだよそれ」
『んー……ものすごく雑に説明するとだな、今からマスターの心の中に魂を潜り込ませて記憶を読み取り、それからこうなった原因を直接、場合によっては力づくでどうにかする。前の世界のように霊体だった時ならまだしも、この世界に来て精霊と同じく実体化しているだろう？下手に肉体から魂を引きはがすとだな、その手の素質がないとうまく帰ってこれなくなることもあるからな』
「ええ、なんだそれ……」
　直球な死の宣告に、さすがのユーノもやや困惑する。一時はそれで引き下がるかに見えたが、すぐにまたあることを思いついてぱちんと手を叩く。
「ん、待てよ？そもそも俺自身、コイツに取りつく形で向こうの世界では生きてたんだよな。ってことは、もし失敗して精神がぶっ壊れたりしたら、俺はどうなるんだ？」
『正直予想もつかない……が、２人分の魂から残ったエネルギーをかき集めてマスターを生き返らせたわけだからな。少なくとも、あまりいい影響は出ないだろうな』
　それを聞いて恐れるどころか、だったら、と笑って見せるユーノ。
「やっぱり俺も行くぜ。どうせ駄目ならとりあえず足掻いて死にたいしな」
『……もう勝手にしてくれ。それなら私がサポートするから、メインの動きは任せるからな。その方がむしろやり易い。まずマスターの額に手を当てて、今度は目をつぶって

くれ。私がいいというまでな』
「よしきた」
降ろした手を再び額に当てると、清明が軽く身じろぎする。また寝息が安定したころを見計らって、すっと目を閉じた。
『よし、着いたぞ』
「早っ！」
彼が目を開けると、そこはもう別世界。右も左も真っ暗な中、足元にただ1本の光る道が通っていた。
「……これか？」
『そのまま奥に進んでくれ。その先にマスターの……なんと説明したものか、心の核と言うか、自我そのものと言うか、まあとにかく視認できる形でマスターそのものがいるはずだ』
左右と同じく黒く塗りつぶされた空を仰ぎ問いかけると、頭の中に直接声が聞こえる。その声に素直に従い、歩きながらも気になるらしく改めて周りを見渡す。しかしそこには道しるべともなる足元の光以外、本当に何ひとつ見える物がない。確か覇王十代の心の中には大量の鏡、あるいは窓のようなものがびっしりと取り囲んでいる風景があったはずだが、ここで何も見えないのは清明本人が侵入を拒んでいるからだろうか。

そんなとりとめもないことを思い出しながら進んでいくと、やがてうずくまって背を向ける人影が見えてきた。
「おい！」
聞こえない距離ではないはずだが、赤い服に黒髪の少年……清明はピクリとも反応しない。仕方なしにユーノがさらに近寄ると、小さな声で何事か呟き続けているのが聞こえてきた。
「約束だから、生き残らなきゃ。絶対元の世界に帰るって僕が言ったんだ。でもその前に、奴を倒す絶対倒す必ず行ってやるから早く立ち上がらなきゃ」
そこまで聞いたところで訳もなく背筋が寒くなり、ばっと離れて声の聞こえない距離まで後退するユーノ。さすがに引いた、と言った調子で、もう一度漆黒の空に問いかける。
「お、おい……なんかむっちゃ病んでるけどこれどうなってんだ？こんなキャラだったっけコイツ」
『礼を言うぞ、そこまで近づいてくれたおかげでこっちもだいぶマスターの心が読みやすくなった。で、肝心の心の中だが……これは、なんというかひどいな』
「ひどい？なんだそりゃ」
『元々、マスターの心は外部要因に影響されやすいタイプだった。それはわかるな？』

「あ、ああ。なんとなくわからんでもないぞ」
　ユーノの脳裏をよぎったのは、ダークネス吹雪戦や光の結社戦で我を忘れ地縛神の力や破滅の光にあっさり呑み込まれては暴走したりしかけていた清明の姿。後者に関しては彼も人のことを言えた立場ではないのだが、清明の流されやすさ、影響されやすさについては共に過ごした短い日々だけでも嫌と言うほど思い知っていた。
『まあ、これは私が元々1人分しかなかったエネルギーを蘇生のために2つの魂で分けたわけだから、不安定になるのは仕方ないんだがな』
「……ふむ」
『多分、ここ数日の間に心の闇を無理やり押し広げさせるため色々吹き込まれた結果また揺らいだんだろう。とりあえず、なんとかそのマスターと意志疎通できないか？』
「お、おう。おーい、清明ー。元気してっかー……って、無視かよ」
　努めて明るく声をかけるも、まったく反応することなく体育座りでうずくまったままの清明。やれやれとため息をつき、近寄ってその二の腕を掴んだ。それでも抵抗しなかったので、思い切り腕を引き上げて強引に立ち上がらせる。そこまでやってようやく、ぼんやりした目で目の前のユーノを認識したらしい。どこか焦点の定まらないぼんやりとした目のまま、のろのろと口を開く。
「あれ、僕……」

「人が呼んだらさっさと返事しろコノヤロ。ほれ、立てるか？」
　手を放すと少し体が揺らいだが、そのまま再び座り込むようなことにはならなかった。まだどこかふらふらしている様子を危なっかしそうに眺めながら、もう少し意識をはっきりさせるためさらに話しかける。
「なんか色々あったんだろうけどな、まあとりあえず無事でよかったなあ」
「無事……無事？僕が？」
「なんだ、普通に返事できるじゃねえか。俺もそうだけど、こいつらも懐かしいんじゃねえか？」
　そう言い、自身が着ている服のポケットにこれ見よがしに手を突っ込んでみせる。わざと大げさに手を動かし、その様子をぼんやり眼で追っていることを確認してからゆっくりとあるものを掴んで持ち上げてみせた。まだピンと来ていないらしい清明に、その手に握ったものを広げて突きつける。
「お前のデッキだ。なんで無くなったのかは聞いたから文句は言わねえが、もうこんな大事な物手放すんじゃねえぞ」
「聞いた……誰に？」
　ユーノの何気ない言葉に、ほんの少しだけこれまでより強い反応を見せる清明。だがその目を一瞬よぎった怪しい光に気づかぬまま、問われるがままにあっさりと答えてし

まう。
「え？そりゃお前、チャクチャルアに決まってんだろ。お前の神さんだぞ、ちゃんと拝んどけよ」
『あっ……』
　不穏な気配を感じ取った声が慌てて止めようとするも、時すでに遅かった。その名を聞いた瞬間、それまでの夢うつつの状態から一転して目を見開き、憑りつかれたような表情でユーノに詰め寄る。
「今すぐそれをこっちに寄越して！早く！」
「はあ？どうしたんだよ急に」
「早く！」
　謎の剣幕に押し切られ、よくわからないまま言われるままにデッキを渡しそうになるユーノ。それに待ったをかけたのは、他ならぬ清明本人の言葉だった。
「こんなもの、今すぐ……！」
「やっぱやめた。おいおい、穏やかじゃねえなあ。とりあえず少し落ち着けや」
「ふざけないで！ユーノは知らないんだ、この地縛神は昔、古代ナスカで……」
　古代ナスカ。その言葉を聞いただけで、何となく何があったのかを察しとる２人。
『あー……そういうことか。大体察したぞ』

「俺も。でもなあ、もう昔の話だし、第一この神さんのおかげで俺らは今生きてるんだぜ？そこんとこもよく考えてだな」

「ふざけないでって言ってるでしょ！もういい、まさかユーノまで５０００年前に何が起きたのか知ってて僕に黙ってたなんてね。有難いことにここは僕の心の中らしいけど、わざわざ踏み込んでくるなんていい根性してるじゃない。今の僕はお前らの知ってた僕じゃない、２度と生きて帰れると思うな！」

雑な反応が、さらに怒りを増幅させたらしい。お互いに内心お前のせいだと毒づくユーノと地縛神をよそに激昂して啖呵を切り、デュエルディスクを構える清明。現実世界では壊れて使い物にならなくなっていたはずのデュエルディスクだが、精神世界であるこの場所にその事実は通用しない。

その全身からは本人は気づいているのかいないのか紫色のオーラが揺らめきだし、爆発寸前の感情が辺りに満ちる。それを見てチャクチャルアが、無駄と知りつつ説得を試みる。

『……確かに、私は私の過去についてマスターに何も伝えなかった。ダークシグナーがなんたるか、その根本すら教えなかった。それに関して弁解するつもりはない。だが、私は……』

「もういいぜ。どーせ何言ったって聞きやしねえんだ、だったら１発ぶん殴ってこっち

の言うこと聞かせる方が楽でいいってもんよ。せっかくだ、このお前のデッキで相手してやるよ」
「好きにしな。忌々しい悪魔どもが」
「やさぐれてんねえ。そんじゃ、手加減は抜きでやらせてもらうぜ」
「「デュエル！」」
精神世界でのデュエル。真っ暗な世界で、清明が暗い笑みを浮かべて挑発するように手招きする。
「先攻はくれてやるよ。かかってきな、ユーノ」
「なんだ、そんなにドローしたいのか？なら遠慮なくいかせてもらうぜ、俺のターン！……ん？」
初期手札である5枚のカードを見て、思わず眉をひそめるユーノ。彼の知る清明のデッキは、彼自身が生前愛用していたシーラカンス軸の【魚族】を中心にメビウス等で脇を固めた水属性ビートであったはず……だが、今の手札には見慣れぬカードが混じっている。
その戸惑いを読み取ったチャクチャルアが、軽く解説する。といっても、すでにデュエルが始まってしまっている以上その説明は極めて簡素なものにとどまったが。
『マスターにも色々あったんだ』

「らしいな。こんなカード、どこで見つけてきたのやら。もうすっかり、このデッキもあいつの色に染まってきてるんだな……まあでもこれも何かの縁だ、あのアホぶっ飛ばすためにお前らの力も貸してもらうぜ。グレイドル・イーグルを召喚！」

清明がこの世界にたどり着くまで愛用していた、彼の見つけた新しい戦い方を象徴するモンスターでもある黄色い鳥。漆黒の空間に舞い上がり、大きな目を悲しげに見開いて元の自らの主をじっと見つめた。

グレイドル・イーグル　攻１５００

「グレイドル・イーグル……」

「ああ。お前のカードだ。俺は、これでターンエンドするぜ」

頭上を飛ぶイーグルを見上げ、ほんの少し辛そうに目を伏せる清明。だが、その迷いもほんの僅かだった。すぐに顔を上げ、明らかに危険な光を宿したままの目でカードを引く。

「僕のターン！グレイドルの特殊効果は敵に回すと確かに厄介だけど……それが、どうした！グレイドル・イーグルをリリースしてユーノ、お前のフィールドに怪粉壊獣ガダーラを特殊召喚！そして相手フィールドに壊獣が存在することで、手札から怒炎壊獣ドゴランを僕のフィールドに特殊召喚する！」

「何?!俺のモンスターをトリガーに、最上級モンスターをコストも無しで特殊召喚だあ

!?」

怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００

怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００

まったくの意表をついた展開に、ユーノが驚きの声を漏らす。それが期待通りの反応だったらしく、暗い歪んだ笑みが彼の顔に浮かんだ。

そしてその反応にわけもなく苛立ち、嫌味の１つでもかえしてやろうと口を開く。

「グレイドルといいこの壊獣、だっけか？俺がいなくなった途端こんなカードばっかり引き寄せやがって、お前のそれはそれは素晴らしい性格がよーくにじみ出てる素晴らしいデッキだなあ、オイ！」

「なんとでも言うがいいさ。初見だもんね、辛いよね？だけどこのデッキに慣れて対策練られる前に、できるだけ削らせてもらうよ。速攻魔法、突進を発動。これでドゴランの攻撃力を７００アップさせて、攻撃だ！やれ、ドゴラン！」

「クソッ……！」

怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００→３７００→怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００（破壊）

ユーノ　ＬＰ４０００→３０００

「カードをセットしてターンエンド、これでドゴランの攻撃力は元に戻る……ほら、今のうちに念仏でも唱えたら？」

「言ってくれるぜ。あいにく俺は地縛神教徒でな……あ、やべ。地雷踏んだ」
『アホかあーっ！』
　売り言葉に買い言葉とばかりに何も考えずに投げつけたあまりといえばあまりの言葉に、いつもの落ち着いた口調もかなぐり捨てたチャクチャルアの叫びが響く。清明の目はその名を聞いた瞬間ますます険しくなり、全身のオーラもさらにその闇を濃くした。
　その原因となった当の本人であるユーノもその様子をポリポリと顎を掻きながら顔をひきつらせ眺めていたが、不意に一転して真面目な表情になる。
「……なあ、清明よ。お前もそんな抱え込んでないで、こうやってもっと気楽になろうぜ。もっと気負わずに馬鹿やってたって、どうせ勝手に日は沈んで登ってくんだからよ」
『……』
　自分が掛ける言葉は逆効果にしかならないだろうと、あえて黙ったままユーノの説得に任せるチャクチャルア。しばらくの沈黙ののち、清明がポツリとつぶやいた。
「もう無理だよ。今の僕は、いろんなものを背負ってる。僕のために犠牲になって、僕のために消えていった人たちがいる。だからもう、全部終わらせるまで止まるわけにはいかないんだ。人の魂を、命を犠牲にして死人を蘇らせる地縛神の力……そんな命を持っ

た僕にできる事なんて、せめてそれぐらいしかないんだ。さあ、デュエルを続けようよ」
「頑固だねえ。ったく、しょうがねえ。お前がなんて思おうが知ったこっちゃねえからな、意地でも連れ帰しちゃる」
怒炎壊獣ドゴラン　攻３７００→３０００
ユーノ　ＬＰ３０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：怒炎壊獣ドゴラン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン、ドロー！」
確かに話はできる。だが、まだ言葉は届かない。清明の閉じた心は、まだ戻ってきそうにない。なら、もっとカードで語るしかない。ここはそういう世界なのだ。それを信じ、次のカードをユーノは手に取る。
「魔法カード、強欲なウツボを発動。手札から水属性の氷弾使いレイスとハリマンボウをデッキに戻し、カードを３枚ドローする。そして２体目のグレイドル・イーグルを召喚するぜ。さらにフィールド魔法、ウォーターワールドを発動。これで水属性モンス

ターの攻撃力は５００ポイントアップし、守備力が４００ポイントダウンする」

グレイドル・イーグル　攻１５００→２０００　守５００→１００

「元のご主人様がどんな使い方してたかは想像できるがな。俺は遠慮なく勝ちに行かせてもらうぜ、悪いな。永続魔法、補給部隊を２枚同時に発動してバトルだ、グレイドル・イーグルでドゴランに攻撃！」

「自分から来たわけね……！」

グレイドルによる特攻からのコントロール奪取コンボ。清明ならばやらなかったであろう戦法だが、ユーノにとってはそんなこと関係ない。イーグルも躊躇なく、むしろそれこそが俺の戦いだと言わんばかりに翼を大きく広げドゴランにまっすぐ突っ込んでいった。

そしてドゴランがその腕を振るい、イーグルの体を四散させる。

グレイドル・イーグル　攻２０００（破壊）→怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００

ユーノ　ＬＰ３０００→２０００

「ぐうっ……！だが、これで戦闘で破壊されたイーグルのモンスター効果と、補給部隊の効果が発動！まず俺のモンスターの破壊をトリガーに、補給部隊の効果２枚分により２枚ドロー。次にイーグルの効果を墓地から発動。ドゴランの装備カードとなり、そのコントロールを……」

「そのデッキはもともと僕のもの。グレイドルの弱点なんて、使い手の僕には手に取るようにわかる！リバースカードオープン、壊獣捕獲大作戦！このカードは1ターンに1度場の壊獣1体を裏守備に変更して、壊獣カウンターを1つ乗せることができる。イーグルの効果にチェーンしてドゴランを裏守備に変更、これで装備カードをドゴランに付けることはできなくなった！」

清明の場のカードが表になり、そこから光のネットが放たれドゴランを頭から包み込む。そのネットに阻まれ、銀色の雨となり頭上から降り注いでいたグレイドルが弾かれ地面に消えていった。

壊獣捕獲大作戦（0）→（1）

「なるほどな……すっかりそのデッキを使いこなしてるってわけか。だが俺だって負けちゃいられねーな、カードを3枚伏せてターンエンドだ」

「僕のターン、まずドゴランを反転召喚する」

怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００

生存競争こそ自壊したもののいまだ健在の３０００打点を持ち再び立ち上がるドゴランを前に、いささかもひるむ様子の無いユーノ。期待通りの反応がないことに舌打ちしながらも、例え魔法の筒やミラーフォースのような逆転のカードを使われたとしてもいざとなれば壊獣捕獲大作戦でまた逃げられるのだからと気を取り直しドゴランに指

示を飛ばす。
「バトルだ、ドゴランでダイレクトアタック！」
「相手の直接攻撃宣言時に永続トラップ、グレイドル・パラサイトを発動！俺のフィールドにモンスターが存在しないことで、デッキから攻撃表示でグレイドルを特殊召喚するぜ。グレイドル・アリゲーターを召喚！」
足元から湧き上がる銀色の水が急激に盛り上がり、緑色のワニ型生物に変化する。イーグル同様やる気に満ちた態度で四肢を突っ張り、太い尾を振り回す。
グレイドル・アリゲーター　攻５００→１０００　守１５００→１１００
「何を企んで……いや、だとしても踏み越えてやる。構わず攻撃だ、ドゴラン！」
主の指示を受け、ドゴランがその口から灼熱の火炎を迷いなく吐き出す。鋭く伸びたそれが足元のアリゲーターの体を飲み込もうとした瞬間、大量の水がその炎を阻む壁となる。
「そのカードは……ずいぶん久しぶりに見たね」
「だろう？トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！相手の攻撃を無効にし、俺の場の水・魚・海竜族１体につき８００ポイントのダメージを与えるぜ。これはグレイドル・アリゲーターの分だ！」
「ふん、そんなこったろうと思った！チェーンして壊獣捕獲大作戦の効果を使い、ドゴラ

ンを裏守備にすることでそのダメージを回避する！」

壊獣捕獲大作戦（1）→（2）

「おいおい、８００ダメージを回避するために攻撃力３０００を裏にしたのか？甘いところは変わってねえな」

「冗談でしょ？僕には他にやりたいことがあったのさ。メイン２に魔法カード、太陽の書を発動。裏守備になったドゴランを表側攻撃表示に戻して永続魔法、壊獣の出現記録を発動。１ターンに１度場の壊獣１体を、デッキに眠る別の壊獣と入れ替える！チェンジ、ガメシエル！」

にやりと笑いからかうように問いかけるユーノに笑みを返し、２枚のカードを連続発動させる清明。するとドゴランの姿が光の粒子となって消え、新たに呼び出されたのは巨大な亀のような形をしたモンスター。本来ならば守備的なステータスをもつガメシエルだが、ウォーターワールドの影響を加味して攻撃表示で呼び出されファイティングポーズをとる。

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００→２７００　守３０００→２６００

「ほらほら、わざわざドゴランより攻撃力が低いモンスターを出してあげたんだよ？来るなら来るでさっさと突っ込んできなって」

「言うじゃねえか……！」

「誰に似たんだかね！」

今度はこっちの言い返す番だと言わんばかりにそう言ってのける清明の顔は、まるで憑き物が落ちたかのように晴れ晴れとしていた。つい先ほどまでの淀んだオーラからはまるでかけ離れたその表情に戸惑うユーノに、チャクチャルアがこっそり耳打ちする。

『やはりマスターは根っからのデュエリスト、ということだな。こうして戦い続けたことで、ほんのわずかにだが自我が強くなってきている。光の結社、デスベルト、そしてこの精霊世界とこのところ敗北は死か、そこまでは言わずとも何らかのデメリットのあるデュエルばかりだったから、今の精神世界でのデュエルは色々たまっていたものを解放するにはもってこいのいい機会なのだろう』

「なるほどな。要するに、徹底的にデュエルしてやりゃ機嫌がよくなるってことだな？わかりやすい奴」

『そう言ってやるな。つい数年前まで一般人だったマスターに、モチベーションも動機もないままに闇のデュエルを延々やり続けろというのは確かに酷な話だったしな。本人が気づいていなくても、ただでさえ蘇生してから色々と騙し騙しでどうにかやってこれた精神にかかる負担は相当な物だったろう。だからおそらく、その部分を取っ掛かりにして心の闇を無理やり広げられたんだろう。まったく、つまらん真似をしてくれる』

「……ふむ」

何事か考えているのか、ユーノが生返事を返す。その瞳に、何かを決意したような色が見えた。

ユーノ　ＬＰ２０００　手札：０

モンスター：グレイドル・アリゲーター（攻）

魔法・罠：グレイドル・パラサイト

補給部隊

補給部隊

１（伏せ）

場：ウォーターワールド

清明　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：海亀壊獣ガメシエル（攻）

魔法・罠：壊獣捕獲大作戦（２）

壊獣の出現記録

「とはいえ、それぐらいわかりやすい方が話が早くていいってもんよ。行くぜ、俺のターン！永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。このカードの……」

引いたカードのテキストを素早く確認し、パラサイトでアリゲーターをリクルートし

た自分の判断が正しかったことを確信するユーノ。まだ俺の勘も鈍っちゃいないな、そう心中で呟いてから引いたばかりのカードをフィールドに出す。

だがその瞬間、清明とガメシエルがともに動いた。ガメシエルの巨体が体の前にその両手を持ってきて手のひらで何かを包み込むような姿勢を取ると、その両腕の間に超自然の水の渦が生まれる。次第に大きくなっていったそれが解き放たれると、渦はまっすぐユーノのフィールドに飛んで行き発動されたばかりのグレイドル・インパクトのカードを巻き込んで呑み込んだ。

「グレイドル・インパクトの効果、グレイ・レクイエム……アリゲーターとのコンボで僕のカードを破壊しつつ、魔法カードの効果で破壊されたアリゲーターの寄生効果も使おうってわけね。でも悪いけど、その戦術もお見通しさ！インパクトの発動時に場の壊獣カウンター２つをコストとしてガメシエルの特殊能力、渦潮を発動！あらゆるカードの発動を無効とし、それをゲームから除外する！」

「何っ!?」

壊獣捕獲大作戦（２）→（０）

清明は自分でもそう言うだけあって、グレイドルの動きを熟知している。手札の関係もあって単純な手しか使えていないとはいえ、自分の繰り出すコンボが片っ端から防がれることに内心顔をしかめつつも、すぐにユーノも気を取り直す。

「ええい、だったら次だ次！すまん、アリゲーター！グレイドル・アリゲーターでガメシエルに攻撃！」
「攻撃？そうか、補給部隊……仕方ない、迎撃だガメシエル！」
自らの効果がかわされることを知りつつ、それでも最後に残された可能性に繋げるために怯まずガメシエルに襲い掛かるアリゲーター。当然のように太い尾の一振りに打ち払われて弾けた体が銀色の水となり寄生を図るも、またもや放たれた光の網がガメシエルを守る盾となる。
グレイドル・アリゲーター　攻１０００（破壊）→海亀壊獣ガメシエル　攻２７００
ユーノ　ＬＰ２０００→３００
壊獣捕獲大作戦（０）→（１）
「戦闘破壊されたアリゲーターの効果にはまた壊獣捕獲大作戦をチェーン発動して回避する、けど……」
「そう、この補給部隊２枚の効果発動は止められないな。アリゲーターの破壊をトリガーに、またカードをドローする……おっ、お前も来てくれたのか」
「？」
多大なライフと貴重なモンスターをかなぐり捨ててまでユーノが掴んだ、たった２枚の可能性のカード。それを見ていきなり妙なことを口走るユーノに怪訝な顔を見せる

清明に対しもう何度目かもわからない不敵な笑みとともに、最後の伏せカードが表になる。

「慌てなさんなよ、こういうのは下準備が大事なんだ。永続トラップ、バブル・ブリンガーを発動……して即効果発動するぜ。このカードを自分ターンに墓地に送ることで、墓地からレベル３以下の水属性同名モンスター２体を特殊召喚することができる。甦りな、グレイドル・イーグル共！」

泡の壁がほんの少しだけ湧き上がってすぐに消え、最後に残った２つの泡が弾けてその中からそれぞれ瓜二つの鳥型グレイドルが翼を広げて飛び立った。

グレイドル・イーグル　攻１５００→２０００　守５００→１００

グレイドル・イーグル　攻１５００→２０００　守５００→１００

「ここまで来たら、もうわかるよな？グレイドル・イーグル２体をリリースして、アドバンス召喚！」

２体のイーグルが光を放ち、足元から消えていく。入れ替わりにフィールドに現れたモンスターを見て、清明の目が驚きに見開かれた。

「さあ行くぜ、霧の王（キングミスト）！」

「霧の、王……！」

常に第一線でエースモンスター兼フェイバリットカードとして清明と共に戦い続け

てきた最大の切り札、霧の王。漆黒の世界の中でも全身をほのかに発光させて清明の心を照らし、その剣を正眼に構えてあらゆる魔を断たんと静かにその瞬間を狙い続ける。

「今更効果の解説は必要ねえな？もしこのカードでもお前が戻ってこないなら、もう俺たちにできる事は何もねえ。だがこの霧の王、今のお前には随分ぶっ刺さるみたいだがな」

霧の王には２つの効果がある。ひとつはそのアドバンス召喚の際、リリースしたモンスターの攻撃力の合計が自らの攻撃力となること。グレイドル・イーグルはフィールドによる強化込みで攻撃力２０００となっていたため、その本来の攻撃力の合計である３０００にウォーターワールドの補正がかかり攻撃力は３５００となる。

だが、ここで重要となるのはふたつめの効果だ。霧の王がフィールドに存在する限り、互いのプレイヤーはいかなるリリースも行うことが不可能となる。ユーノ側もアドバンス召喚が封じられた形になるが、それ以上に基本的なデザインとして相手モンスターをリリースすることが大前提の壊獣使いである清明はそのコンセプトを根本から崩壊させられた形となるのだ。

霧の王　攻０→３０００→３５００

「やってくれるね、まったく」

「カードをセットしてターンエンド。頼むぞ、霧の王。もうリソースほとんど使い切っ

ちまった、お前がやられたらどうしようもなくなっちまう」
　事実ユーノは霧の王召喚により一気に優位に立ったように見えるが、その過程で消費したカード枚数もライフも多い。またこれは当人しか知らぬことではあるが、残るカードも決してこの状況をさらにひっくり返された時に輝く逆転のカードではない。また残り少ないライフではグレイドル・パラサイトも実質役に立たず、もし霧の王が倒れたらそれ以上のデュエル続行は難しいだろう。それに対して清明の手札はいまだユーノよりは潤沢だが、肝心のモンスターの攻撃力はその壊獣も３５００を上回らないため、盤面としては五分と五分。次の清明のターンが、その後の展開を決める。
「僕のターン、ドロー！」
　そう叫ぶ清明の顔からは、もうすっかり当初の暗い色は抜け落ちていた。その様子を見て、ユーノの脳裏にふと自分と清明が二心一体であるという事実がよぎる。流されやすく影響をすぐ受ける清明の精神状態が現在進行形でこうして良好になってきているのは、もしかしたら彼の片割れである自分がデュエルを楽しむ心を前面に押し出しているからなのかもしれない。いずれにせよ関係ないことだ、結果さえどうにかなればそれでいいとそこで考えるのをやめ、目の前の清明の動作のひとつひとつに神経を集中させる。
「引きが悪いけど、なんとか手はあるか。ガメシエルを反転召喚して、壊獣捕獲大作戦で

また裏守備に変更。これで壊獣カウンターをまた増やしてから、ターンエンド」

壊獣捕獲大作戦（１）→（２）

ユーノ　ＬＰ３００　手札：１

モンスター：霧の王（攻）

魔法・罠：グレイドル・パラサイト

補給部隊

補給部隊

場：ウォーターワールド

清明　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：???（海亀壊獣ガメシエル・セット）

魔法・罠：壊獣捕獲大作戦（２）

壊獣の出現記録

「俺のターン、ドローだ。次はグレイドル以外の奴も見せてやるぜ！出てきな、ツーヘッド・シャーク！」

「よりによって、このタイミングでそのカードか……！」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→１７００　守１６００→１２００

２つの頭を持つ恐るべき青き鮫が、久しぶりに主と出会えた喜びとその主の状況に対

する悲しみにその牙を打ち鳴らす。例えモンスターを出されてもアドバンス召喚ができないのなら出てくるのは下級モンスター、それ1体の攻撃ぐらいどうにでもなるだろう。そう甘い予測を立てていた清明にとっては、今最も出てきてほしくないタイプのモンスターだ。

「さあぶった切れ、霧の王!そしてツーヘッド・シャーク、お前の2回攻撃で連続ダイレクトアタックだ!」

「うわっ!」

霧の王　攻３５００→???　守２６００（破壊）

ツーヘッド・シャーク　攻１７００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４０００→２３００

ツーヘッド・シャーク　攻１７００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ２３００→６００

「ようやくまともに反撃できたな。どうだ、少しは効いたか?」

「まさかここで2回攻撃のツーヘッドを引いてくるなんて、やっぱりユーノは大したもんだよ……でも、まだ負けてられないね。僕のターン、ドロー……魔法カード、名推理を発動!相手がレベルを1つ宣言し、僕はデッキを上から通常召喚可能なモンスターが出るまでめくる。そしてそのモンスターのレベルが宣言通りだったらそこまでに出た

カード全部を墓地に送るけど、もし違っていたらそのカードを特殊召喚できる！さあ、どのレベルにするの？」

「ここでそんなカード引くかね普通、お前もお前でたいがいな引きだな。まあいいさ、俺が宣言するのは８だ」

ユーノにとってはまだ未知のテーマである壊獣。彼の知る３体、ドゴラン、ガダーラ、ガメシエルのレベルがいずれも８だったことから推測した数字である。その推測自体は何も間違っておらず、むしろ与えられている情報を最大限に生かしたグッドアンサーといえるだろう。

ただ、それが決してベストアンサーとイコールの存在ではなかったというだけのことだ。

「１枚目……レベル１０、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング。この怪獣は当然、通常召喚もできる。残念だったねユーノ、サンダー・ザ・キング召喚！」

爆発的に光が弾け、三つ首の白き龍が光の中から現れる。清明の方に構えていた霧の王も、先に対処すべき存在の登場に反応して剣先をそちらに向けて構え直した。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００

「ツーヘッド・シャークには確かに参ったけど、そこで僕のライフを削りきれなかった詰めの甘さが敗因だったね。バトル、サンダー・ザ・キングでツーヘッドに攻撃！」

３つの首に雷の力が集中し、同時に３本のブレスが放たれる。螺旋を描き絡み合いながら進む破壊の波動がツーヘッド・シャークの体を飲み込む寸前、そのブレスの間に霧の王が割って入った。

重い踏みこみとともに大上段から叩き落とさんばかりに振り下ろされた剣閃が、全てのブレスを両断して左右に散らした。さらにそのままの勢いで飛び上がった魔法剣士が、今度は振り下ろした剣を逆袈裟に切り上げつつサンダー・ザ・キングと交差する。

１瞬のうちに、勝負は決まった。霧の王が音もなく着地したその背後で、必殺の一撃を受けた雷龍が力なく地に堕ちる。

「そ、そんな……なんで霧の王が……？」

「詰めが甘いだあ？笑わせんなよ、鏡見てから物言ってみろっての。俺はこのダメージステップにトラップカード、援護射撃を発動した。この効果によりツーヘッドの攻撃力は一時的に俺のフィールドの別のモンスター、つまりきりの王の攻撃力だけアップしたのさ」

「く……！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００（破壊）→ツーヘッド・シャーク　攻１７００→５２００

清明　ＬＰ６００→０

「……んで、調子はどうだ？」
「あー、うん、なんかだいぶすっきりした、かな？チャクチャルさんにも、また後でちゃんと謝らないと。何も教えてくれなかったのはやっぱりちょっと不満だけど、ね」
　戦いも終わり、静かな時間が戻ってきた。もはや最初に見た時とは別人のように元の穏やかさを取り戻した清明が、ちょっぴり照れくさそうに小さく笑う。それを見て、ユーノもまたふっと口の端を歪めて笑った。
「そうかい、そりゃよかった。もう俺も一々助けてやれないからな、こっからは自分(テメエ)でなんとかするんだぞ」
「……え？」
　言葉に込められた不穏な意味を感じ取り不吉な予感に包まれる清明をよそに、何ひとつ気負うものがないといった様子のまま両腕を広げてユーノが呟く。
「さあ、やっちゃってくれて構わねえぜ。こればっかりは俺が自分でやるわけにもいかないからな。第一やり方もわかんねえしよ」
『……承知した』
　言うが早いが、ユーノの体が手足の先から次第に薄くなっていく。その様子と穏やか

な覚悟を決めた表情に、闘技場で消えていったケルトの様子が頭の中で重なり合い、清明の顔色がサッと変わる。
「ちょっと待ってよ、どうする気なのさユーノ！」
「ああ、俺らもいろいろ考えたんだけどな。やっぱり、こうするしかないんだわ。悪く思うなよ」
「だから、何を……！」
『魂の統一、とでも呼ぶべきか』
「チャクチャルさん！」
　清明の悲痛な叫びに対し、あくまで冷静に、重々しく声が響く。下手に感情を表に出すのは逆効果にしかならない、との計算づくでの行為である。
『彼がこうすることを最初に思い付いた時には、私も止めはしたのだがな。だが、これしかマスターの精神を安定させる方法がないことは私が一番よく理解している。だから、彼の提案を受け入れた』
「能書きはどうでもいいから、何をやろうとしてるのさ！」
『マスターの精神の不安定さ、外的要因への影響されやすさは確かにマスター自身の性格によるところもある。だがそれ以上に、私がダークシグナーとして蘇生させる際に本来1人分であるべき復活の力を2人の魂に分けてしまったことが何よりも大きな原因

なんだ。そのせいでマスターの魂には根本的な歪みが生まれ、それが最初に私の力を認知したあの女ヴァンパイヤ戦や昨年の破滅の光に呑まれた時、そしてつい先ほどまでの状態を引き起こしている』

「……それで？」

彼自身にも自覚はあった。なぜ僕は自分を抑えきれず、新たな力に呑まれて溺れ、その結果人に迷惑をかけることになるのだろう。その悩みはずっと彼の中にあったが、思いもよらぬ形で今その理由が明かされていた。

反論したいのは山々だが、当の本人に思い当たる点がある以上それもできない。それで、と聞き返すのがやっとの清明に、目の前でさらにその存在が消えつつあるユーノが笑いながら口を開く。

「おいおい、まだわからねえのか？簡単なことさ。その力が2人で足りないなら、1人にまとめりゃいい。俺の魂をお前に丸ごとくれてやりゃあ、残ったお前はようやくまともになって万々歳って寸法よ」

「そんな……！」

「だいたい、俺みたいなのがいつまでも引っ付いてる方がおかしいんだぜ、世間常識では。なーに、そう捨てたもんじゃねえさ。俺は確かに消えるが、何もかもなくなるわけじゃねえからな。お前が俺のことを覚えている限り俺がお前の一部として生き続ける、

その腐れ縁は終わらんよ。なにせ好き嫌いはともかくとして、俺たちは二身一体なんだからな」
「でも、でも！」
「ただまあ、せっかくなら最終回（卒業式）までは見たかったってのと、最後にもういっぺんぐらい富野のアホ面拝んでおきたかったってのはあるかもな……そうだ、ほれ。俺がお前にできる、正真正銘最後のプレゼントだ」
　そう言いつつ半透明の手で自らのデュエルディスクを開き、エクストラデッキから１５枚のカードを取りだして差し出す。泣きそうになりながらもぐっとこらえてそれを受け取った清明に、もう一度おなじみのニヤリとしたふてぶてしい笑顔をしてみせる。
「いいか、俺がお前にやったデッキは、このエクストラがあって初めて１００パーセントの力を発揮する。ただ諸事情あってお前に使わす気はなかったが、俺がこうなった以上このカードの行く末はお前が決めろ。今はまだ力を封印してあるから白紙のままだが、どうせお前融合モンスターなんて使わねえんだからとりあえずエクストラデッキの中にぶち込んどけ。本当に本当にどうしようもなくなった時、そいつらはお前を必ず助けてくれるはずだ」
「うん、うん……！」
　ユーノの透明化が、ついに顔にまで及び始めた。それに気づきいよいよ時間切れが

迫ってきていることを悟り、最後に何か気の利いた名言っぽいことでも言ってやろうともはやほとんど見えなくなった手を振ってみせる。
「んじゃー……あれだ。少なくとも俺は、ここまでやってきて楽しかったぜ。あとはお前が、ありったけのハッピーエンドを掴みとるだけだ。しっかりやれよ、デュエリスト遊野清明」
その言葉を最後に、ユーノという男の存在は世界から完全に消えた。

『起きたか、マスター』
目を覚ますと、すでに朝になっていた。といっても、厚い雲のせいで太陽なぞはまるで見えないのだが。
「……おはよう」
今の今までずっと見ていた夢の内容を思い出す。そして、それが夢でなくて現実であることも。もっと悲しむかと思っていたけど、自分でも意外なぐらい晴れやかな気分だった。あるいはこれも、魂の歪みとやらが治った影響のひとつなのだろうか……だがその考えが間違っていること、そしてその疑問への答えはすぐに分かった。
僕がユーノのことを覚えている限り、奴は僕の中で生き続ける。例え話したり見たり

できなくなっても、あの男がいなくなってしまったわけではない。だから、悲しんだり寂しがったりすること自体がお門違いなのだ。

「さて、と！」

やるべきことはたくさんある。ケルトとの約束、親友である十代へのリターンマッチ。それに十代やジムがこの世界にいるということは、他のメンバーも来ている可能性が高いはずだ。一体、何から手を付けようか。

……まずは、ご飯でも食べようかな。

ターン１００　鉄砲水と大蛇の深淵

『マスター、何をやっているんだ?さっきから穴など掘って』
「色々あって僕のデュエルディスクは壊れちゃったから、ね。ユーノは持ってたみたいだけど、体ごと消えちゃうしさー。でもこの子もこれまで頑張ってくれたんだから、これぐらいはね」
　ただの物と言ってしまえばそれまでだ。だけどこのデュエルディスクは入学以来ずっと使ってきた、三幻魔とも光の結社とも共に戦い抜いてきた物なので、なくなってしまうと寂しい。あの覇王とのデュエルで僕がとどめを刺される寸前にデュエルディスクが壊れたのは、ディスクそのものが最後の最後に身を挺して僕を守ってくれた……なんて考えるのは、あまりにもメルヘンだろうか。
　でもそのおかげで、僕は今ここにいられる。機械には疎い僕でもあの実体化していたマリシャス・デビルの攻撃をまともに喰らったデュエルディスクがもう二度と動かないことはわかったので、ユーノの分と一緒にせめてものお礼として墓を作って埋めているのだ。
『……そうか』

笑われるかと思ったけど、それ以上何も問われることはなかった。あるいは、何か察してくれたのかもしれない。そんな気遣いもできる、それがこの邪神だ。まったく、ありがたい仲間に囲まれたものだと思う。

やがて全ての作業が終わり、最後に手を合わせて立ち上がる。もう、ここに来ることはないだろう。土まみれになったその手を洗うため、僕が覇王から逃げる際飛び込んだ川に向かう。飛び込んだ位置から比べるとだいぶ下流まで流されてきたらしく随分緩やかな流れになっていたが、逆に言うとそれだけの間ずっと水中にいてよく生きていられたものだと思う。

『……それなんだがな、マスター。実は、これは本当は教えるつもりはなかったのだが』

「なに、また隠し事？」

手を洗い、ハンカチなんぞ持っていないのでふるふると振って水を飛ばしていると、いきなり話しかけられた。ダークシグナーの呪われた命のこと。チャクチャルさんの過去のこと。一切合財黙っていたことは、もう割り切ったし蒸し返すつもりもない。チャクチャルさんにしたって、別に悪意があったわけじゃないことは長い付き合いだからなんとなくわかる。ないが、まーだ何かあるとなれば話は別だ。意識せずともだいぶ剣呑な言い方になる僕にただでさえ歯切れの悪かった口調をますます言いにくそうなものにしながら、ぼそぼそと声が頭の中で聞こえる。

『まず、地縛神Ｕｒｕ（ウル）……蜘蛛の地上絵については知っているな？奴の能力が一番わかりやすいのだが、奴の手で蘇ったダークシグナーは小蜘蛛を人間に仕込むことでその行動、思考をコントロールできる』

「ああ、それで……」

脳裏に蘇る、先代が夢で見せた古代ナスカの記憶。他の地縛神が直接人を襲っていたのに対し、蜘蛛の地縛神の足元では本体が見下ろす足元で人間が人間を襲う異常な光景が広がっていた。妙だとは思ったけど、あの場面にはそんな仕掛けがあったのか。

『あれと同じで、我々はそれぞれ固有の特色をダークシグナーに付与することができる。というよりも、蘇生の際に魂を引き上げる作業などで自然と魂がこちら寄りになりそうなってしまう、というべきか。私の与える能力は正直このご時世で役に立つようなものでもないから黙っていたのだが、まさかこんな形で役に立つとは思わなかった』

「ふむふむ。で、僕は何ができるの？」

『説明するより体感する方が早いな。ちょっと歩いてみてくれ』

「こう？」

言われたとおりに川に沿って数歩進んでみるが、別に変わったことは感じない。すぐに訂正が入った。

『いやそうじゃなくて、川の上にだ。大丈夫だ、いける』

「え、ちょ、水上……」
『ええい、まどろっこしい』
そんなやりとりだけで後ろから突き飛ばされ、咄嗟に体勢を立て直すこともできず前に出る。そのまま足が水中に突っ込み……
――――――パチン。
突っ込まなかった。恐る恐る足元を見ると、靴の裏が水面に付いた状態でそれ以上体が沈まない。
『私はシャチの地縛神……それゆえ海の、ひいては水の力を強く持つ。難しく考える必要はない、要するにあらゆる水が私に、そしてその系譜を継ぐマスターに味方するということだ。最初からそれが当然であるかのように、水上を自由に歩くことができる。それのみでなく、もはや水中すらマスターにとって枷とならない。抵抗を受けることなく自在に潜り、呼吸や会話すら可能となるだろう』
「水上歩行に水中呼吸……河童や半魚人の域だね、こりゃ」
カードの精霊世界、命を賭けたデュエル、ちょっと見ない間にわけわかんないことになっていた親友、面便り思いダークシグナーの話。ここ数日のうちに色々なことがありすぎて、なんだかもうこの程度では驚かなくなってしまった。あまりに現実感がないせいで、まだ少しピンと来ていないのかもしれない。ゆっくりと片足を持ち上げ、また降

ろす。着水の衝撃により水面に波紋が走りその感覚がかすかに伝わってくるが、足場としては依然として安定したままだ。
「じゃあ、この川を下ってくる間にも」
『無意識のうちに呼吸をしていたんだろうな。でなければ酸欠だ』
　水上歩行に水中呼吸。びっくり人間的能力には間違いないのだが、ついさっき例として挙げられた洗脳能力を持つ小蜘蛛とかいうオカルトと比べると、なんというか、こう。
「……確かに使い道少なそうだね、今時」
『私もそう思う。むしろよく役に立ったものだ』
　しかしそう考えると、あの時川に飛び込んだのはどうも僕にできる最善手だったらしい。破れかぶれで突っ込んだだけのつもりだったのに、これは運が向いてきたと言っていいのだろうか。
「そこのあなた、そろそろ話す気になりましたか？もう１度聞きましょう、ここで何をしているのですか？」
　水上の感覚に慣れるためパチャパチャ歩いていると、唐突に誰かの声がする。一瞬見つかったかと焦るものの、よく聞くとその声は川向うから聞こえていた。音をたてないように耳を澄ませていると、その声がさらに続く。
「ふーむ……だんまりですか。あまり感心できませんねえ。このワタクシが誰だか、わ

かっていらっしゃらないので？」
　それに対し、小馬鹿にしたような返事が聞こえる。意外にも女性、それも明日香みたいにいかにも気が強そうなことが声だけでわかるタイプの声だった。
「ふん。知っているとも、暗黒界の術師。頭脳労働担当がこんな僻地に何の用だ」
「質問しているのはワタクシですよ？ですが、まあいいでしょう。フリード軍かその他有象無象の残党か、そんなことはどうでもよろしい。覇王様に害をなす愚か者、その罪は万死に当たります。デュエルを続けましょう、もはや万にひとつもあなたには勝ち目のないこのデュエルを、ねえ」
「くっ……！」
　どうやら、川向うでデュエルが行われているらしい。深い森のせいでまるで見渡すことはできないが、その奥で小規模な爆発音や火花が何度も上がる。だがそれよりも、僕の心に残ったのは顔も見えないあの女性の言葉だった。
「暗黒界の術師……？」
　暗黒界。そして覇王。そしてこの戦略的に重要とも思えない川の近くとなると、これはもう十中八九狙いは僕だ。確かに闘技場を逃げ出してからそれなりに時間が経っているとはいえ、もう覇王の手がここまで伸びていたことに背筋が凍る思いになる。僕がまだ見つかっていないのは、ほんの少しだけ運がよかったからにすぎない。

『どうやらそのようだな。どうする、マスター？私はいつでもその判断に従おう』

「どうする、って？」

聞き返しながらも、何が言いたいのかはわかっていた。敵が目と鼻の先にいるこの状況、僕に示された道はふたつにひとつ。戦うか、逃げるかだ。僕のほんのわずかな理性は、逃げたほうが賢明だとささやいていた。まさかこの近辺の悪魔があの声の主だけだなんてことあるはずない、ここはやり過ごして安全を確保する方がいい。それに、デュエルディスクを失った今の僕が出て行ってもおめおめと捕まるだけだ。あの悪魔が僕をいまだ捕まえていないのは、裏を返せばいまだ僕が見つかっていないという何よりの証明。ならば……というわけだ。

まったくもって合理的、かつわかりやすい。なにがなんでも覇王……十代のことを救い出すためなら、余分なリスクはわずかにでも少ない方がいいに決まってる。せっかく拾った命、ここで余分に危険にさらす選択はあり得ない。

とはいえ、僕の答えは決まっている。ここで今絡まれてる人を放っておいたら後々後悔するに決まってるし、そもそもこれ以上覇王軍から逃げるのはいい加減腹が立つ。それに覇王の部下ということは実力は確実に覇王以下、そんな相手とのタイマンを避けるようでは覇王に勝つなんて夢のまた夢だ。おまけに本来ならまず越えられないこの川の流れも、もはやただの道でしかない。

「行くよチャクチャルさん、こっちから喧嘩吹っかけてやる」
『よしきた。そう言うと思った』
　水面をひょいひょいと走り、まともに泳いだらどれだけかかるかわかったものじゃない反対側の岸にもすぐに到着する。だがその間に、走る間ずっと聞こえてきていた激しい金属音や爆発音もぱったりと聞こえなくなってしまった。
　嫌な予感に襲われながらも先ほどから目星をつけておいた場所の様子をうかがおうとすると、ちょうどその寸前に先ほどの声がまた聞こえてきた。
「どうやらここまでのようですねえ。ではワタクシ自身、暗黒界の術師　スノウのダイレクトアタックでとどめといたしましょう」
　その宣告の直後、ひときわ激しい爆発が起きる。草を掻き分けどうにかその場所にたどり着いた時には、すでに何もかもが終わっていた。
　女戦士　ＬＰ３００→０
「そんな……！」
　大賢者、ケルト、そしてこの女性。僕は力を手に入れてるはずなのに、どうしてこうも結果を出せないのだろう。
　いや、まだだ。まだやることは残っている。目の前の悪魔……スノウは筋肉質だったケルトとは対照的に細身な体で、全身を包む白いマントの他に片手には魔法使いのよう

な杖を手にしているのが目立つ。そのスノウが突然の乱入者に怪訝そうに眉をひそめるが、すぐにその目が喜色に輝いた。大げさに両手を広げ、こちらにじりじりとにじり寄ってくる。

「おお、これはこれは。恐らくこのあたりに流れ着いているだろうとは思いましたが、死体ではなく生きていらしたとは。ですがどちらでもよろしい、あなたの身柄を覇王様に献上すれば、ワタクシの地位はますます安泰。いやあ、こんな僻地までわざわざ来たかいがあるというものです」

「ふざけんな！」

「下品な言葉ですねえ。ですがその言葉は本来、私が言いたいのですよ？あの覇王様にいやしくもイチ人間の分際で、どいつもこいつも刃向いたがる。寛大なるあの御方は少し前のジム、とかいうワニ男もあなたも分け隔てなく自らの手をお汚しになられていますが、ワタクシにはそれが我慢ならないのですよ」

　さらに近寄ってくるスノウの不気味さに負け、思わず後ずさる。その反応にさらに喜んだらしいスノウが腕に付いたデュエルディスクらしき装置を構え、既に起動済みのそれを構える。

「あなたが覇王様に敗北を喫したのちみじめにもここまで逃げてきた際、ご自身のデュエルディスクを壊したという情報は既に入ってきています。あのケルトを破った実力

は勝算に値しますが、大人しく投降なさい。ワタクシとて自分の手を汚さずに終わるのならその方が楽ですからねえ」
「それは……」
「それはどうかな？」
　いきなり、地面に倒れていた女戦士が割り込んできた。先ほどのデュエルに敗北したためその体は既にケルトの時と同じように光となって消えかかっているが、それでも無理に上体を起こして鋭い目でスノウを睨みつける。その瞳から、まだ闘志は消えていなかった。
「……おやあなた、まだ生きてらしたんですか？嫌ですねえ、往生際の悪いのは。ですがあなたのライフは既に０、もはや消滅も時間の問題でしょう？」
「そんなことはわかっている！少年、受け取れぇぇっ！」
　そう言って自分が腕に付けていたデュエルディスクを外し、腕の力だけで数メートル離れた僕に向かって投げつける。どうにかキャッチできたものの、その衝撃で手にジンと痺れが走った。
「それを使ってくれていい、だが１つだけ頼みがある、少年。いつか私の仲間と出会うことがあれば、エルナは最後まで戦いの中で堂々と散っていった、そう伝えて欲しい」
　エルナ、それがこの女性の名だろう。仲間とは誰なのか、なぜこの場所に来ていたの

か、聞きたいことはたくさんあるけれど、その時間がないことはますます勢いを増した光の粒子からも見てわかる。だから僕は何も言わず、ただまっすぐエルナの顔を見て頷くだけにしておいた。それを見て、彼女の顔がふっと綻ぶ。

「ありがとう……」

その言葉を最後に、彼女の姿が完全に消える。残ったのはただ1つ、僕の手に残るデュエルディスクのみ。だけどこの既製品とは微妙に細部の違うどこかシックな感じのデュエルディスク、どっかで前にも見たことがあるような気がする。記憶を辿ってこのデジャヴを解消したい誘惑に駆られるが、今はそれは後回しだろう。差し込みっぱなしだったエルナのデッキを引き抜いて形が崩れないようデッキホルダーに入れ、その代わりに僕のデッキをセットし直す。オートシャッフル機能、ライフ表示機能……よし、動作に問題はない。

「待たせたね、スノウ。第二ラウンドと洒落込もうか……！」

「まったく、今日は面倒な日ですねえ。しかしあなたのデッキは水中に飛び込んだことで使い物にならなくなっているはず、とすれば恐らくは間に合わせの紙束。ワタクシは暗黒界の術師、そんな戦略が通用するなどと勘違いなさらぬよう」

それを聞いて、ようやくこのスノウが妙に強気な理由が分かった。もう壊獣はない、だから僕にも勝てる、つまりはそういうことか。

「「デュエル！」」
「僕のターン！」
　なら、今に吠え面かかせてやる。最初に５枚の手札を引く、ただそれだけで感じる。僕のデッキの鼓動を、このカードたちと共に戦う感覚を。
「グレイドル・アリゲーターを守備表示で召喚、さらにカードをセット。これでターンエンド」
　グレイドル・アリゲーター　守１５００
「ではワタクシのターン。魔法カード、スネーク・レインを発動。手札を１枚捨てることで、デッキから墓地へ爬虫類族モンスター４体を送り込みましょう。お逝きなさい、レプティレス・ナージャ。そして邪神官チラム・サバクを３体」
　いきなり墓地肥やしにより、４体ものモンスターを墓地に送りこむスノウ。爬虫類族、か。
「魔法カード、悪夢再びを発動しましょうかねえ。ワタクシの墓地に存在する守備力０の闇属性モンスターを２体回収し、手札に。これで準備は整いました。手札の邪神官チラム・サバクは手札が５枚以上存在するとき、リリースなしでの召喚を可能とします」
　邪神官チラム・サバク　攻２５００
　手札の枚数でリリースを減らせる、という聞いたこともないような召喚効果を持つ、

下半身の代わりに無数の蛇がうごめく邪神官。確かにスネーク・レインの手札コストを考慮しても最初のドローを合わせて手札は５枚、条件は問題なく満たしている。
「バトル。チラム・サバクで攻撃!」
無数の蛇の頭が一斉にこちらを向き、牙の生えた口を開きビームを放つ。その光にアリゲーターが呑みこまれ、体が削られ千切れていく。
だが、その状況を楽しむかのようにアリゲーターの巨大な口がにやりと笑いの形に歪んだ。最後にはこちらに向けて器用に尻尾を振ってみせる余裕まで感じさせながら、その姿が消滅する。
邪神官チラム・サバク　攻２５００→グレイドル・アリゲーター　守１５００（破壊）
「この瞬間、戦闘破壊されたアリゲーターの効果発動!グレイドルは破壊されてなお相手モンスターに寄生し、その体を掌握する!こっちに来い、チラム・サバク!」
たまたま開いていた蛇の口のひとつから、銀色の液体が飛び込む。その後人型の上半身が数秒間空気を掻きむしり苦しむようなジェスチャーをするも、すぐにその顔から表情が消え額に銀色の紋章が浮かぶ。これで、攻撃力２５００は僕のものだ。
「ふむ……ターンエンドしましょう。なんですかあなた、人のモンスターをリリースする下品なテーマの次は人のモンスターを奪う下品なテーマですか?人格がそのままデッキに現れていますよ」

「わかる？いやー人格者って辛いね、どれだけ隠そうとしても、このにじみ出る品格は隠しきれなくてさー」

我ながら子供っぽいとは思うけど、ついつい言い返さないと気が済まない。もうちょい気の利いた返しができれば満点だけれども、思ったよりスノウの煽り耐性は低かったらしい。ちょっと見ているだけでもはっきりと、その苛立ちが手に取るようにわかる。

清明　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：邪神官チラム・サバク（攻・アリゲーター）

魔法・罠：グレイドル・アリゲーター（邪神官）

１（伏せ）

スノウ　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：なし

魔法・罠：なし

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードは……青氷の白夜龍、か。このカードはレベル８だから、このターンでアドバンス召喚をすることは不可能だ。なんとかしてもう１体モンスターを並べられればこのターンでけりをつけることも十分狙えたけれど、この手札とこの伏せカードではそれも厳しい。

「だったら、攻撃するしかないか。チラム・サバクでダイレクトアタック！」
　再び蛇の口が開き、幾筋ものビームが撃ち込まれる。先ほどと違うのは、そのビームがすべてスノウの体を直撃したという点だ。
　邪神官チラム・サバク　攻２５００→スノウ（直接攻撃）
　スノウ　ＬＰ４０００→１５００
「ま、こんなところかね。ターンエンド」
　先ほどのスノウのターン、悪夢再びで回収していたチラム・サバクは2体。それから1体を出したきり何のカードも使用していないため、次にスノウがカードを引けばその瞬間に手札は5枚となり2体目のチラム・サバクの召喚条件が整うこととなる。
　そこまではいい、問題はそこからだ。相打ち覚悟で突っ込んで来るようならこの伏せカード、グレイドル・スプリットを装備して返り討ちにできるのだが。
「ワタクシのターン。今の一撃はなかなか痛かったですよ……覇王様に差し出す前に、このワタクシ自身の手であなたを八つ裂きにしてやりたいと思うほどにはねえ！ドロー、手札が5枚存在することで邪神官チラム・サバクを召喚！」
「来たか……！」
　邪神官チラム・サバク　攻２５００
「そして魔法カード、暗黒界の取引を発動。互いに1枚のカードを引き、その後手札を1

枚捨てます。ワタクシが捨てたカードはこのワタクシ自身、暗黒界の術師　スノウ。そしてこの瞬間その効果が発動し、デッキから暗黒界カードを1枚サーチします。暗黒界の門をサーチ。さらに装備魔法、レプティレス・アンガーをワタクシの場のチルム・サバクに装備。これにより、攻撃力が８００ポイントアップします」

「８００……!?」

チラム・サバクの顔に、まるで民族衣装の一部のようにカラフルな仮面が装着される。仮面というアイテムの持つ特有の不気味さにチラム・サバク自身の紫色の肌が相まって、形容しがたいミスマッチさを醸し出していた。だがそんなことより聞き捨てならないのは、その８００という強化値だ。発動後装備カードとなるグレイドル・スプリットを使ってもその上昇値は５００と、向こうのチラム・サバクにはわずかに及ばない。

邪神官チラム・サバク　攻２５００→３３００

「攻撃の前に、もう少しデッキを回しておきましょう。先ほどサーチした暗黒界の門を発動し、その効果を発動。ワタクシの墓地に悪魔族モンスターが存在するとき、それを除外することで手札の悪魔族を1体捨て、さらにカードをドローできます。最初に墓地に送った暗黒界の斥候　スカーを除外してワタクシが捨てたカードは暗黒界の狩人　ブラウ、その効果により自身が手札から捨てられたことでさらにもう1枚ドロー。おや、これを引きましたか。２枚目のスネーク・レインを発動、今度はレプティレス・ナー

ジャ2枚にレプティレス・バイパー、さらにレプティレス・ヴァースキを墓地へ」
「……？」
どうも読めない。暗黒界なのかレプティレス軸の爬虫類族なのか、デッキパターンが今一つ絞り込めないのだ。そもそもこれまでの相手にテーマデッキの比率が高かったせいもあって、余計に翻弄される。
ただ見た感じサーチのスノウにドローのブラウに門、そして取引と、暗黒界関連のカードはあくまでデッキの潤滑油としての採用に留まっているような印象を受ける。スネーク・レインを2枚使えるだけ爬虫類族がデッキに入っていることを考えると、本命は爬虫類側にある……はずなのだが、どうにも読み切れない。墓地を肥やし、デッキを回し、最終的に何がしたいのだろう？ただ1つ言えることとして、これだけでは終わりそうにない。
「お待たせいたしました。そろそろ苦痛が欲しいころでしょうから、たっぷりと味あわせてご覧にいれましょう。では、バトル」
2体の神官がぶつかり合い、共に蛇のビームを打ち合う。しかしその力が拮抗していたのもほんのわずかな間のみで、僕のフィールドにいる方の邪神官がやがて押し負けて敗れ去る。
邪神官チラム・サバク　攻３３００→邪神官チラム・サバク　攻２５００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→３２００

「そしてこの瞬間、戦闘破壊されたチラム・サバクの効果発動。１ターンに１度戦闘破壊された時、このカードは守備表示で特殊召喚されます。この時このカードはチューナーとして扱うようになりますが、まあだからといってどうということはありませんがねえ」

「しまった！」

邪神官チラム・サバク　守０

せっかくアリゲーターでコントロールを奪ったモンスターが破壊されたのみならず、相手フィールドに戻ってしまった。守備表示固定ならば攻撃されることはないためそこは唯一の救いだが、それにしたってこのターンを凌いだだけに過ぎない。

それにしても、あの蘇生能力はなかなかに厄介だ。１ターンに１度とはいえ戦闘破壊してもデメリットなしで蘇るのだから、最低でも２回連続で攻撃を仕掛けないとまともにフィールドから引きはがすことができない。ただ１回でも倒しさえすれば２体目もそのターンは効果を使えなくなるから、どうにかして攻撃の手数を増やすことができれば見た目よりは楽なはずだ。

「ターンエンド」

清明　ＬＰ３２００　手札：４

モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
スノウ　ＬＰ１５００　手札：１
モンスター：邪神官チラム・サバク（攻・アンガー）
　　邪神官チラム・サバク（守）
魔法・罠：レプティレス・アンガー（チルム）
場：暗黒界の門
「僕のターン！」
すでに、次にとるべき手はわかっていた。あとは、このドローでモンスターが引けさえすれば……よし！
「サイレント・アングラーを召喚してトラップ発動、グレイドル・スプリット！」
自分の場に他の水属性が存在すれば手札から特殊召喚できる魚族、サイレント・アングラー。だけど今回重要なのはその効果じゃなくて、このカードが通常召喚できるレベル４のモンスターだということだ。
サイレント・アングラー　攻８００→１３００
スプリットが発動五足装備されたことで、アングラーの攻撃力は５００ポイントアップする。でも問題はそこではない。どの道このカードでは、チラム・サバクを倒すこと

は不可能だ。
「そしてスプリットの効果を発動。このカードを墓地に送り装備モンスターを破壊し、デッキから2種類までのグレイドルを1体ずつリクルートする！来い、イーグル！コブラ！」
　グレイドル・イーグル　攻１５００
　グレイドル・コブラ　攻１０００
「そのまま2体で守備表示のチラム・サバクに攻撃、再生能力も関係ない！」
「フン……」
　グレイドル・イーグル　攻１５００→邪神官チラム・サバク　守０（破壊）
　イーグルの突撃を受けて倒されたチラム・サバクが、再びその傷を治して立ち上がる。その頭を、コブラの牙が再び薙いだ。
　グレイドル・コブラ　攻１０００→邪神官チラム・サバク　守０（破壊）
「メイン2。僕のフィールドの水属性、イーグルをリリースすることでシャークラーケンは特殊召喚できる。そしてこのターンのエンドフェイズ、スプリットの効果で呼び出したコブラは自壊。だけどトラップの効果で破壊されたコブラはアリゲーターと同じく相手モンスターに寄生し、その動きを操る！」
　シャークラーケン　攻２４００

２体のグレイドルの姿がでろでろに溶けていく。後に残った銀色の水たまりがスルスルと動き、仮面をかぶったほうのチラム・サバクの体に足元の蛇から浸透していく。
「ターンエンド。さあどんなもんだ、ってね」
強がってはみせたが、どうも久々すぎてデッキの回りが心なしかぎこちない気がする。早く勝負勘を取り戻さないと、この世界では文字通りの命取りだ。デッキのカードはそれぞれ頑張ってくれているのだから、これは僕の問題だろう。それとも、ついさっきやっておいた「仕掛け」がまだうまくいっていないのだろうか。
「また、コントロール奪取ですか。本当に下品この上ない……！ワタクシのターン！魔法カード、悪夢再びを発動！墓地のワタクシこと暗黒界の術師　スノウ、レプティレス・ヴァースキの２体を回収。そして暗黒界の門の効果を発動、墓地の狩人　ブラウを除外してスノウを捨て、カードをドローしスノウの効果で暗黒界の取引をサーチ。そしてそのまま発動、たがいにドローして手札を１枚捨てますねえ」
またしても手札交換に精を出すスノウ。妨害手段がない以上指をくわえて見ているしかないが、どうにも気に喰わない。そして取引の効果で引いたカードを見て、あからさまにスノウが笑う。
「やっと引けましたか。では、そろそろそのやりたい放題も終わりにさせてもらいますよ。まず下準備として、ダーク・グレファーを通常召喚。このカードは１ターンに１度

手札の闇属性を捨てることで、デッキから闇属性を墓地に送ることができます。先ほど回収したレプティレス・ヴァースキを捨て、デッキからレプティレス・メデューサを墓地へ」

ダーク・グレファー　攻１７００

漆黒の剣士が掲げた剣を無造作に振るうと、その剣風がスノウのデュエルディスクからカードを1枚巻き上げて闇に送り込む。今の手札コストも含めるとこれでスノウの手札は1枚のみ、どうするつもりだろうか。

「ではお待ちかね、本日のメインと行きましょうかねえ。手札から邪龍アナンタを特殊召喚！このカードはワタクシの墓地と場に存在する爬虫類族をすべて除外することで特殊召喚し、攻守はその際に除外したカード1枚につき６００ポイントアップします。ワタクシの墓地には現在８体の蛇が存在するため、そのステータスは攻守ともに４８００！」

邪龍アナンタ　攻０→４８００　守０→４８００

「攻撃力４８００……！」

過剰なまでの墓地肥やしは、この切り札に繋げるための布石だったのか。いや、墓地の爬虫類族に応じて攻撃力が上がるカードを使っていたプロフェッサー・コブラとの対戦経験があるにもかかわらず、似たようなカードの存在を見抜けなかった僕にも責任は

ある、か。
だけど、僕もただやられっぱなしでは済まさない。
「相手がモンスターを特殊召喚した時、手札ドラゴン・アイスの効果を発動する！手札からこのカードを捨てて、そのまま墓地から自身を特殊召喚！」
ドラゴン・アイス　守２２００
「壁モンスターですか。まあ、無駄なんですがね。バトル、アナンタでチルム・サバクに攻撃！」
アナンタの無数の首が伸び、自分よりもはるかに大きい蛇を前にして動けないチラム・サバクの体をそれぞれ噛み千切り呑み込んでゆく。いくらレプティレス・アンガーの効果を受けていても、この攻撃には耐えきれない。
邪龍アナンタ　攻４８００→邪神官チラム・サバク　攻３３００（破壊）
清明　ＬＰ３２００→１７００
「そしてチルム・サバクは、チューナーとなって復活する。さらにこの瞬間、装備対象が存在しなくなり破壊されたワタクシの装備カード、レプティレス・アンガーの効果発動。相手モンスター１体の攻撃力は８００ポイントダウンします」
「なっ!?」
地面に落ちて割れた仮面から不気味な瘴気が立ち上り、隣にいたシャークラーケンの

体を包む。これで攻撃力は１６００、ダーク・グレファーでも戦闘破壊ができる数値になってしまった……！

　邪神官チルム・サバク　守０

　シャークラーケン　攻２４００→１６００

「続けてバトル。ダーク・グレファーで攻撃！」

　ダーク・グレファー　攻１７００→シャークラーケン　攻１６００（破壊）

　清明　ＬＰ１７００→１６００

「くっ……！だけどまだ、僕にはドラゴン・アイスが……！」

「いないようだがねえ。エンドフェイズにアナンタのさらなる効果発動！ワタクシのエンドフェイズが来るたびに、フィールドのカード１枚を破壊する」

　一度動きを止めたはずの邪龍が、再びその鎌首をもたげる。ドラゴン・アイスの氷の体を容赦なく噛み砕き、被っていた鉄の仮面を残して全てを呑み込んだ。

　清明　ＬＰ１６００　手札：２

　モンスター：なし

　魔法・罠：なし

　スノウ　ＬＰ１５００　手札：０

　モンスター：邪龍アナンタ（攻）

邪神官チラム・サバク（守）
ダーク・グレファー（攻）
魔法・罠：なし
場：暗黒界の門
「僕のターン、ドロー」
モンスターは根こそぎ倒された。伏せカードもない。さすがに暗黒界の術師を自称するだけのことはあり、この悪魔もまたかなり強い。普通なら、この場を1ターンでひっくり返すことは不可能だろう。これまでの僕だったら、あるいはここで心が折れていたかもしれない。だけど、今の僕はもう違う。僕を助けに来てくれた、僕を支え続けてくれた、この力は負けたりしない。
「もうおしまいだ。ここで終わりにする、スノウ！」
「なんですって？あなた法螺を吹くのも結構ですが、もう少し現実を見てから物を言ったらどうなのです？」
怪訝な顔になるスノウ。だけどそもそも、このデュエルを始めた時から奴の敗北は決まっていた、といっても過言ではない。僕の戦力を見誤ったその時点で、もはや勝ち目は0になっていたのだ。
「僕はお前の邪龍アナンタをリリースし、手札から怒炎壊獣ドゴランを特殊召喚！そし

て相手フィールドの壊獣に反応して、手札から壊星壊獣ジズキエルが僕のフィールドに目覚める……！」

「馬鹿な！壊獣？そのデッキは既に失ったはずでは……」

炎を吐き空をも駆ける恐竜型の壊獣と、１体で星をも破壊し尽くす侵略兵器の壊獣がフィールドに現れる。

怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００

壊星壊獣ジズキエル　攻３３００

「失った？馬鹿言わないでよ。この子たちは僕のために来てくれて、僕もこの子たちと共に戦うって決めたんだ。どんな方法で断ち切ろうとしても、僕は必ず仲間と戦う！」

「く……こんなところで、このワタクシが……！」

そう、これこそが僕の「仕掛け」。まだ試行錯誤の段階とはいえ、これまで使っていたデッキに壊獣の力を取り入れた、僕自身が新たなステージへ上り詰めるための新しいデッキだ。そしてこのジズキエルの攻撃力と、スノウのダーク・グレファーの攻撃力の差は１６００。そして、スノウのライフは１５００。どうしようもない敗北を前にスノウの顔が絶望に歪み、その場に尻もちをついて少しでも後ろに下がろうと無駄な努力を繰り返す。

奴のあの表情に嘘はない。どうやら、墓地のカードの中にも奴を助ける力を持った

カードはなさそうだ。そう判断し、今にも破壊の光線を撃ちだそうとするジズキエルを手で制する。
「さあどうする、スノウ?2つ、2つだけ選ぶ道を残しておいてあげるよ」
「2つ……?」
自らの命が失われようとするこの状況で掴める可能性があるのなら、例えそれが藁であってもスノウには手を伸ばすしか方法はない。案の定乗ってきたことに軽い可笑しさを感じながらも、指を2本出してこちらの条件を伝えた。
「まず1つは、潔くこのまま戦士として僕のジズキエルの攻撃を受けて散ること。もう1つはこの場でサレンダーして。そうすれば命だけは助けてやるからとっとと覇王のところに行って、僕からの伝言を伝えてもらおうか」
「な、なんですって、そんなこと」
「いーんだよ別に?そんな大した話でもないし、ここで普通にデュエルを終わらせてもぜーんぜん困んないし。ジズキエル、ダーク・グレファーに……」
「わ、わかった、わかりました!サレンダーしますとも、ワタクシの負けです!」
「そりゃよかった。悪いね、ジズキエル」
少し不満げに唸りながら、ジズキエル達の姿が消えてゆく。まだ尻もちをついたままのスノウを見下ろし、改めて話しかける。

「さて、それじゃあ伝言を頼もうか。文面は、そうだね……『この遊野清明様が地獄の底から帰ってきたから、首洗って待ってなバーカ』。こんだけでいいや」

「へっ？い、いえ、わかりましたあぁっ！」

あまりといえばあまりの文面に1瞬あっけにとられたらしいスノウだったが、すぐに気を取り直すと手にした杖が黒い光を放つ。その光に包まれ、スノウの姿がその場から消えた。とりあえずその結果に満足していると、チャクチャルさんの心底面白がっている声が頭に響く。

『なるほど、考えたなマスター。いやはや、これからは忙しそうだ』

「あはは。やっぱりこの手の心理戦は、僕が何考えてもチャクチャルさんにはお見通しか」

『当然。だが、いかにもマスターらしい手の打ち方だな』

そう、これは僕にとって1種の賭け……十分勝機があると踏んだからこそできる、覇王に対しての軽い牽制だ。

そもそも覇王は十代の別人格、どれほど変わろうとも根っこにあるのはまさしく遊城十代そのものであるはず。入学してオシリスレッド所属になって以来ずっとひとつ釜の飯を食ってきた僕だからその思考パターンはある程度予想がつくが、少なくとも十代ならあんなふざけた内容の伝言を伝えるためだけにわざわざ部下を見逃してやった時

点で、こちらが喧嘩売ってることにはまず気が付くはずだ。

そしてこれは十代ではなく覇王に会って何となく感じたことなのだが、少なくとも奴はそれを笑ってスルーできるタイプではない。というよりも、癖の強い悪魔を完璧に纏め上げるためには舐められたらおしまいだとわかっているのだろう。例え侵略の最中だろうと、自分のことをコケにした僕のことを最優先で排除しようと動き出すはずだ。僕の捜索に戦力を注げばこの侵攻はストップするか、それが無理でも多少遅らせることぐらいはできるだろう。その間に、フリード軍に頑張ってもらう。

……脳裏にここで出会った人々、覇王軍の侵攻を受けて戦ったり逃げ出したり、いずれにせよその影響を受けて平和な暮らしを捨ててきた人たちの顔が蘇る。この世界に来て何があったのかは知らないが、十代は元々僕らの世界の人間だ。なら、これ以上無関係の人を巻き込んでいい道理なんてあるはずがない。このケリは僕らでつける、それがせめてもの責任だ。

「だけどその分、皆にはまた働いてもらうからね。そこだけは、本当にごめん」

『気にすることはない。半端な状態で止まるぐらいなら、これぐらい突き抜けたほうがずっと面白くなる。これは私だけの意見ではない、精霊一同の総意だ』

「……うん。ありがと」

反対されたらどうしようかと心配していたが、どうやらそれも杞憂だったらしい。や

れやれと肩の力を抜いたところで、突然背後から刺すような視線とピリピリ来るほどの殺気を感じた。何かをかすかに吹くような音も聞こえばっと振り返ったその足元、つま先すれすれの位置に小ぶりな矢が突き刺さる。さらに木々の向こうから、落ち着いた調子の声が聞こえてくる。

「これ以上警告はしない、妙な真似をすれば次は当てる。両手を上に挙げ、デュエルディスクを外して地面に置け」

『言われたとおりにしておいた方がいいな。相手の油断を誘う方が後々楽でいい』

「（……だね）」

　言われたとおりにホールドアップし、デュエルディスクを外してから足元に置く。それを見て、明らかに動揺した気配が森の中から伝わってきた。

「そのデュエルディスクは、我々の……!?貴様、それをどこで手に入れた！」

「えっと……」

「待て。あの男の顔、どこかで見た気がする。それにあの服装、あれは……」

　どこから説明したものかと言い淀んでいると、さらに第三者の声が聞こえてきた。あれ、この声、どっかで聞いたことあるような。やがて草むらを掻き分ける音とともに、長い赤髪を後ろで結んだ女性が姿を見せる。その腕に装着されたデュエルディスクを見た時、ようやくすべてを思い出した。なぜこのタイプのデュエルディスクに見覚えが

あったのか。あって当然だ、2年ほど前に見た彼女のそれと同じだったからだ。そう、彼女の名は。

「アマゾネスのタニヤ!」

かつてのセブンスターズとの戦いで、わざわざコロッセオまで造って舞台を整え三沢と激闘を繰り広げた女戦士のタニヤ。あまりにも予想外の再開に、しばらくの間二の句を注ぐことができなかった。

ターン１０１　覇王の粛清

あれから。接点こそ薄いものの三沢の友人ということで口添えしてくれたタニヤのおかげもあり、なんとかあの場で射抜かれるようなこともなく、彼女たちアマゾネスに案内されてとある場所に来ていた。簡易式の家やテントが立ち並び村というより難民キャンプのようなその場所をよく見ると、女だけの村というアマゾネスの伝統とは程遠く男や老人、カードの精霊の姿もちらほらと見ることができた。

「ここは……」

「それは私より、彼から聞いてくれ」

「彼？」

タニヤの言葉に聞き返すと、ちょうどキャンプ地の中央に位置するテントから１人の男が出てきた。タニヤに向かって手を振り、次いで僕に視線を送るその目が驚愕に見開かれる。多分、僕も同じような顔をしているだろう。忘れもしないその顔、十代やタニヤ同様まさかこの世界に来てみるとは思いもしなかった顔だ。

「三沢!?」

「清明！」

……あれ、なんかデジャヴ。反応がワンパターンな気がするけどこれしか言いようがないのだからしょうがない。

「それで、三沢達は何やってんの？」

さらに３０分後。ひとまず客分として迎えられた僕は三沢の仮住まいとなったテントの中で胡坐をかきながら、そもそもあの砂漠の異世界で別れてから皆に一体何があったのかを聞き出していた。

それにしても、まさかヨハンが行方不明になっていたとは。しかも、次元のゆらぎを通って異世界に着いたと思ったら最初は全く無関係の世界って、何やってんだか。その世界で三沢は１人、ヨハンはいなくても僕がこの世界にいるかもという希望を元に残って捜索を続けていてくれたらしい。

「何やってんのとはご挨拶だな。わざわざお前のために残ってやったというのに」

「ふーん……タニヤのため、じゃなくて？」

「ゲホッ、ゲホッ……！うるさい！」

ちょうど目の前のコップから水を口に含んだ瞬間を見計らって、三沢にとって一番突っ込んでほしくないであろう点を指摘する。予想通りの反応ににやにやと笑みがこ

ぼれ、それを見て一杯喰わされたことを悟った三沢が呆れ顔になる。
「まったく。お前、そんなキャラだったか？」
「僕にも色々あってね。少し性格が悪くなったのさ。そんで真面目な話、ここはなんなの？」
「ここは、簡単に言えばまさに難民キャンプそのものだな。覇王軍による戦火からかろうじて逃れたものの行き倒れ寸前になっている人たちを見つけてしまってな、まさか放っておくわけにもいかずタニヤと俺でこの拠点を作り上げたんだ」
「でも……」
さすがに直接口に出すのははばかられるが、ここでまともな戦力になりそうなデュエリストは三沢とタニヤを除くとほんの数人のアマゾネスぐらいしかいない。あとは老人や子供、あるいは怪我人ばかりだ。いくら三沢達が強くても、覇王軍から隠れきれるとは到底思えない。それをどう言おうか迷っていると、三沢が先手を打って周りを見回して見せた。
「言いたいことはわかるさ。俺だって、こんな場所がいつまでも持ちこたえるとは思っちゃいない。だが話によるとここから南に行った先に、覇王と戦おうという人たちが立てこもる最後の要塞都市が存在するらしい。そこにここの人たちを入れることができないか、お前も会ったアマゾネスのエルナが聞きに行ってくれたんだが……」

そこで言葉を濁す三沢。そうだ、その後のことは僕がよく知っている。アマゾネスのエルナ。誇り高く戦士として戦い散っていき、僕にデュエルディスクを渡してくれた女戦士だ。今はアマゾネスの人たちに彼女のデュエルディスクは返しておいたので、彼女にも墓を作るようなら手を合わせに行こうと心の中で誓う。彼女がいなければ、スノウともまともに戦えやしなかった。

「ごめん。せめて僕が、あと少し早く会っていれば……」

「お前が謝ることはない。タニヤもその仲間も、誰もお前のことを責めたりはしないさ。ともあれ、エルナのデュエルディスクを確認したところ手紙が入っていてな。要塞都市では俺たちのことを歓迎してくれるとのことだから、近々ここは引き払うつもりだ。お前も来い、清明」

なぜこんな僻地に暗黒界の手の者がわざわざ来ていたのか。そしてそれと時を同じくして、この場所にやってきた僕。頭のいい三沢のことだ、その2つを結び付けてあいつらの目当てが僕であることにはもう察しがついているだろう。それでもなおこうやって言ってくれる、その優しさに対しほんの少しだけ心が揺らぎかける。

でも、駄目だ。覇王に対してあからさまに喧嘩を売った以上、少なくともしばらくの間は僕の周りがこの世界で一番危険な場所になるはずだ。既に今だって、スノウの報告を受けた悪魔どもがここにめがけて進軍を始めていても不思議はない。もしも僕がこ

この人たちのことを、三沢達のことを本当に考えてその友情に応えようというのなら、むしろ今すぐこの場所を離れてなるべく目立つようにしながらでたらめな方向に覇王軍を誘導すべきだ。無言で首を横に振る僕を見て、それ以上の説得は諦めてくれたようだ。食い下がることはせずひとつため息をついて、ふと思いついたという風に話を変える。

「そういえば清明、デュエルディスクのあてはあるのか？ディスクを持たずにうろつきまわるなんて、正気の沙汰じゃないぞ」

「うーん……まあ、最悪覇王軍に襲われたどっかの村で家探しでもするよ。ひとつぐらいは動くのも残ってるだろうし」

「乱暴な話だな。少しここで待っていてくれ」

そう言い残し、ふらりとテントを出ていく三沢。やがて戻ってきたとき、その手には青い金属製の輪っかのようなものと数枚の紙が握られていた。その全身から立ち上る、さあ聞いてくれ！と言わんばかりのオーラについつい流されて、最も彼が欲しがっているであろうセリフをぶつけてみる。

「なにそれ」

「よくぞ聞いてくれた。これは俺が覇王軍に対抗するためこの世界で完成させた新型デュエルディスク……の試作品だ」

「デュエルディスク?それが?」
三沢の持つそれはどこからどう見てもデュエルディスク要素はなく、ただのブレスレットか腕輪にしか見えない。第一、カードを置くスペースどころかデッキを置く場所すらついていない。ただよく見るとただの金属の輪っかではなくその内側に無数の点が模様のようにあしらわれていて、見ようによってはその色も相まってまるで星海を切り取ってそのまま持ってきたかのようにも見えた。
だがそれだけで、やはり見慣れたデュエルディスクを連想させるパーツは何一つついていない。三沢は僕の訝しげな視線も当然の反応だと頷き、ブレスレットの方を脇に置くと代わりに手にしていた紙を地面に広げる。そこには三沢らしく、例によって例のごとく大量の数式と共に丁寧なデッサンが描かれていた。
「そもそも覇王軍は当たり前だが、基本的にデュエルディスクの有無で相手がデュエリストかどうかを判断する。デュエルディスクが無ければカードだけ持っていても何の意味もないし、あれはカードを置くスペースを確保しなければいけないせいで遠くからでもよく目立つからな。だから俺は、その部分さえクリアすれば奴らの目を誤魔化したうえで戦力を確保できるのではないかという結論に至った」
「ふんふん」
そう言ってデッサンの1つ、従来のデュエルディスクの絵を指さす三沢。言いたいこ

とはよくわかるし、確かにもっともなことだ。確かにデュエリストだとわかれば奴らは人海戦術もお構いなしで向かってくるから、非武装の一般人のふりをすれば捕虜になるぐらいはあるだろうがそれでも道中のリスクを大きく減らすことができる。少しだけ興味が湧いてきたので、そのまま先を促す。

「だが当然、これまでの俺たちの常識だとそんなことは不可能だ。カードを置くスペースがなくなればデュエルは不可能だし、そこを削る技術は海馬コーポレーションの最先端科学でも難しいだろう。そこで俺が目につけたのが、科学とは全く別の未知なる力……カードの精霊による超自然の力や魔法だ。俺らしくもない話だがな」

「ふんふんふん」

　確かに、理論的で科学的な三沢にとっては苦渋の決断だろう。異世界に渡り次元を越えることすらツバインシュタイン博士と共に科学の力でやってのけたのだから、今更それとは全く違う異質なものを利用する事を決めるまでにはどれほどの試行錯誤があったのかは、想像に難くない。

「そこでまず考えたのが、このパターンだ。この図を見てくれ」

　そう言って次に指差したデッサンは、何やら人間が手首から肘のあたりにかけて金属製の小手のようなものを装着している図だった。そこから矢印が伸びた次の画には、その小手から光の線が伸びてそこにカードが置かれている。

「カードを置く場所を実体ではなく、いっそ光……電気でも魔法でもなんでもいい、とにかくスイッチ一つでそれを展開してデュエルができるようになればいいんじゃないかと思ってな。だがこれは、俺の知識不足と機材不足のせいで計画だけに留まった。そこで次に考えたのが、これだ」

次に、その隣のデッサンを指さす。先ほどの案と同じような機械をつけた人間の図だが、隣の図と比べても明らかにその機械は一回り大きくなっている。そこから伸びた矢印では、スイッチを押すことで折りたたまれていたカードを置くスペースがその機械から展開される図が描かれていた。さらにその隣に、メカメカしい片眼鏡のようなものも描かれている。

「この案よりもう少し現実的に、ソリッドビジョン展開システムをこの片眼鏡……仮称としてD・ゲイザーと俺は呼んでいるんだが、こちらに分けてデュエルディスクの機能を2つのパーツに分けるアイデアだ。これならソリッドビジョンシステムを付ける必要がないため、だいぶサイズを小さくすることができる。これは割といい案だと思ったんだがな……科学技術を前面に出しすぎたせいで、この世界ではかえって作れない代物になってしまった。今あるデュエルディスクを解体する機材どころか、原料となる金属の確保も期待できないからな」

「三沢らしいミスだね」

「……どういう意味だそれ」
「ごめん、許して。それで、その次はどうしたの？」
「あくまで否定はしてくれないのか……まあいい、話を戻すぞ。この２つが代表案で、あとはＶＲ空間を利用してのデュエルだとか、デュエルディスクは腕に装着するという前提を覆していっそ機動性も高めるために乗り物、例えば自転車やバイクに組み込んでみたらサイズを気にしなくてもいいんじゃないかとか、我ながらここで実現させるには厳しいようなアイデアばかり浮かんできてな」
　なんでそんなこと思いつくんだろう、とは思っても言わない。頭に浮かんだことをいちいち口に出してたんじゃいつまでたっても話が進まないのだ。それに、わざわざこんな失敗談を話しているということは、その先に言いたい何かがあるのだろう。持ってきたきり触れられていないあのブレスレット型デュエルディスクも気になるし、ここは素直に頷いておく。
「それで、色々と試した結果どうにか１つだけ完成したのがこれだ。論より証拠、これを左腕に嵌めてみてくれ」
　言われたとおりにブレスレットを受け取る。金属製にも見えるそれは見た目に反して意外と軽く、僕の腕の太さにぴったりのサイズはまるであつらえたかのようにしっくりと来た。

「次に、この水をかける。動くなよ?」
目の前のコップを持ち上げ、こちらが反応する間もなく中身をそのブレスレットにぶちまける。1瞬ひやりとする感覚が腕に来たが、抗議するより前に目の前で起きた光景に言葉を失った。ブレスレットが淡い青の光を放ち、かかった水をすべて吸い取っていく。ほんの1秒ほどで光は収まり、後には水滴1つ残っていなかった。
「え?ちょっと待って何これ」
「これでいい。次はそのブレスレットをデュエルディスクのつもりで構えてくれ。ボタンがあるのが見えるか?それを押すんだ」
ここまでくればもうどうにでもなれ、だ。言われたとおり構えてみると、確かにボタン、というよりもむしろブレスレットのデザインの一部のような盛り上がりが見えた。左手ではどう曲げても届かないので、恐る恐る右手でそれを押してみる。
そこから先は一瞬だった。腕輪から半透明の膜のようなものが飛び出て、それが見慣れた形……デュエルディスクのそれへと変化する。よくよく目を近づけて見るとその膜は水でできており、腕輪のある箇所から出て別の場所へ吸い込まれる流動を延々続けていた。
「これが俺が今できる最高の技術、名付けて水妖式デュエルディスクだ。従来の物から金属パーツのほとんどを取り外し、足りない部分は外部から加える水を使い精霊……特

に水属性の力を借りてこのように展開する。あくまで試作品段階だからまだ欠点もあるがな」

「水妖式デュエルディスク……」

好奇心に耐えかねて展開中のそれにそっと触ってみるが、間違いなく動き続けている水なのにいくらつついても指はまるで濡れない。デッキから適当にカードを引っ張り出してモンスターゾーンに置いてみると、普通のデュエルディスクを使った時と同じく虹色に光る回路が水面に走り目の前にソリッドビジョンが現れた。カードを離すとソリッドビジョンも当然消え、後には全く濡れていないカードが残る。

「凄い……」

僕にはこの仕組みはまるで理解できないし、多分聞くだけ時間の無駄だろう。この世のあらゆる難しい話は、僕にとっては専門外だ。だけど、目の前の三沢が完成させたこの技術がこれまでの科学の枠を超越した代物だということはわかる。……元の世界に帰ったら、サインとか貰っておこうかな。この技術を発表すれば三沢大地の名前は世界に語り継がれそうだし、そうしたら気軽にもらいに行けなさそうだし。

だが、意外にも三沢の顔は晴れない。これまでの口ぶりや長い前フリから考えるとてっきりもっとドヤ顔してくるのかと思ったのだが、さっきからちょいちょい挟んでくる欠点とやらがよほど気に喰わないのだろう。

と、こちらが何もしていないのにいきなり水の流れが途切れた。新たな水の供給がなくなったデュエルディスクはあっという間に縮んで消えていき、後には元のブレスレットのみが残った。その様子を見た三沢が驚くわけでもなく目を閉じてため息をついたところを見ると、どうもこうなることはわかっていたらしい。

「その欠点がこれ、燃費の悪さだ。ある程度は貯水も効くようにしたんだが、どうしても回路に無駄が多くてな。コップ1杯程度だとあの程度しか持たずにデュエルが不可能になる。もし実戦中にそうなったら最悪だ」

「……うーん」

「すまない、本当は俺の普通のデュエルディスクを渡してやりたいんだが。見ての通りここは非戦闘員が多いから、今だってここを維持するのにもかなりカツカツの状態なんだ。エルナのデュエルディスクも本当は彼女の物ではなく、他のアマゾネスが使っていたものを借りていただけだったからな」

エネルギーが切れたらただのブレスレットにしかならないわけか。コップ1杯であの程度しか持たないってことは、かなり時間配分には気を付けないと肝心な時に使えなくなりそうだ。

「とまあ、こんなところだ。正直こんな危なっかしい物を使わせるのは気が進まないが、家探しして使えるかどうかわからないデュエルディスクを探すよりはまだマシだろう。

なあ、今からでも考え直して俺たちと要塞都市まで行かないか？」
　これを渡すのはよほど気が引けるのか、もう一度説得にかかる三沢。だけど、僕の答えはやっぱり決まってる。心配そうな三沢に少し笑いかけて、ブレスレットを改めて腕に付け直した。
　そうだ、ここまできておいて。散々周りに迷惑かけて、何人もの犠牲を出して。それなのに今更、当の本人が引くわけにはいかない。すぐ行ってやるから待っていろ覇王、ここからは僕の逆襲と洒落込もう。

　所変わり、覇王城。かつては暗黒界の主たる龍神グラファの居城であったが、主無き今では覇王による侵略の拠点となっていた。近日覇王の命により行われるという要塞都市への総攻撃のため続々と悪魔や一部の魔法使い、あるいはそのしもべの精霊が集結しつつある中、１体の悪魔が何かに追われるかのようにボロボロになったマントにも構うことなく最上階、覇王の居室へ向けて走っていた。その名はスノウ……旧暗黒界のもとで術師として名を上げ、赤き隕石の力を浴びてからも覇王の元でその頭脳を振るってきた実力派である。
　誰も止める者がないままに最上階にたどり着いた彼が、扉の前に片膝をついて叫ぶよ

うに声を絞り出す。
「覇王様、ご報告したいことが！」
「なんだ」
　扉の向こうから聞こえてくる冷たい声に今更ながら冷や汗が吹き出してくるのを感じたが、すでに時遅し。ただ頭を垂れ、震え声で報告を続けるしかない。
「い、以前覇王様の前から無様にも逃げ出した壊獣とかいカードを使う人間ですが、奴はまだ生きておりました！ワタクシがこの目で確認しましたので間違いございません！」
「ほう？」
「報告は以上でございます！」
　対して興味を引いた風もない返事にむしろ安堵し、早めに切り上げてその場から離れようとするスノウ。だが、それは許されなかった。立ち上がろうとした彼の背後から、分厚い石の扉を通して氷のように冷たい言葉の刃が放たれる。
「それで？」
「は、はい？」
「それで、貴様はどうしてきた？そいつの死体でも持ち帰ってきたか」
「い、いえ、それが……で、伝言を預かってまいりました。そ、その、『この遊野清明様が地獄の底から帰ってきたから、首洗って待ってなバーカ』とのことでございます」

姿を見てもいないのに伝わってくる覇王の威圧感に破れかぶれになり、清明からの伝言を伝えるスノウ。言い終えた瞬間、ますます強まってきたプレッシャーにその場にへたり込みそうになる。もはや悪魔のプライドも何もなく、願うことはただ１つ。この場から逃げ出したいという、ただ１点のみだった。

しかし、その望みは決して叶わない。覇王の次なる言葉、そのひとつひとつが死刑執行の宣告のごとくスノウに突き刺さる。

「なるほど。つまり貴様は人間相手に無様にも負けたうえに、そのくだらない言葉を俺に伝えるためだけにわざわざ生かされておめおめ逃げ帰ってきたというわけか」

「そ、それは……」

「それだけで万死に値する罪。そうですね、覇王様。意見具申させて頂きますが、こやつの処刑方法はこのカオス・ソーサラーにお任せを」

「カオス・ソーサラー様！」

一体どこから聞いていたのか、カツカツと靴音を響かせて自然と会話に入ってくる覇王の側近の１人、カオス・ソーサラー。その言葉の内容に、ゆっくりと絶望が全身にしみわたってくる……だが以外にも、それを止めたのは覇王本人だった。

「まあ待て。今の俺は機嫌がいい、貴様にも１度だけチャンスをやろう」

「ほう。どのようなチャンスをくれてやるおつもりですか？」

「そこの貴様、俺とデュエルしろ。俺は融合モンスターを使わずに戦ってやるから、戦闘でも効果でもどちらでもいい。俺のライフに1ポイントでも傷をつけられたら、その時点で貴様の罪は帳消しとしてやろう」
「そ、そんな……」
「拒否するならすればいい。ただその場合、貴様の処分はカオス・ソーサラーに一任しよう」
「か、畏まりましたっ！」
　ほんのわずかな保身の可能性だが、今のスノウにとってはそれにすがる他に方法はない。どの道上級魔法使いであるカオス・ソーサラーの手にかかれば、下級モンスターでしかない彼は抗うすべはないのだ。覇王からは見えていないと知りつつも土下座するスノウの頭をカオス・ソーサラーが掴み、無造作に立ち上がらせる。
「覇王様もお人が悪い。了解しました、闘技場に観客を集めてまいりましょう。さあ、お前はこっちに来い！」
　そこから先の行動は早かった。皆が見たがっているのだ、無力な獲物が圧倒的な力の前にねじ伏せられ、抵抗虚しく希望潰えて倒される様を。断末魔の瞬間、絶望に歪む犠牲者の顔を。その視線を痛いほど感じながら、つい昨日まで優雅に上から見る側だったはずの闘技場にスノウが引き出される。

逃げ出さないよう鎖につないで引きずってきたベージの姿が消えると同時に反対側の入り口から、ゆっくりと覇王が死神のごとく歩いてやって来た。その足音が近づくにつれ、またもや恐怖がぶり返す。だがすでに、闘技場には彼と覇王の他に誰の姿もない。

「く……く……」

「さあ、始めよう。精々バーンカードでも引けるように祈ることだな」

互いのデュエルディスクが示したのは、スノウの先攻という結果。そこでスノウは思考する。確かに1ポイントでもダメージを与えれば敵前逃亡の罪が消えるルールがある関係上、たとえ火の粉や雷鳴レベルのカードであっても先攻でバーンを行うことさえできればそれが最善手だ。

さらに追加ルールとして、覇王は今回融合モンスターを使わないという縛りがある。仮に初手でバーンカードを引くことができずとも、メインデッキのモンスターだけで戦うのならば所詮は融合素材、少しは時間的猶予があるはずだ。

十分勝機はある。覇王の名の大きさに惑わされるな。

そう萎みそうになる心を必死で奮い立たせ、カードを引きぬく。もっと単純なことに気づけなかったのは、そちらに意識が行き過ぎたからだろうか。上から観戦する悪魔も魔法使いも、もはや彼を同士ではなくまな板の上に乗る解体前の魚を見るような目でしか見つめていなかったことにもし気が付くことができていれば……。

「「デュエル！」」

恐る恐る手札を見て、声にならない叫びが漏れる。手札にあるカードはどれもバーン能力を持たないカード……もちろんバーンメタのカードを覇王が握っている可能性も０ではないとはいえ、最も可能性が高い先行逃げ切りの夢は潰えてしまった。

となれば彼に残されたのは次善の策、攻撃の機会が訪れるまでただ守りを固める事のみ。

「ワタクシは魔法カード、スネーク・レインを発動！手札１枚をコストにデッキから４体の爬虫類族、レプティレス・ナージャ３体に邪神官　チラム・サバクを墓地に。そして装備魔法、継承の印を発動！ワタクシの墓地に同名モンスターが３体存在する場合、そのうち１体を蘇生しこのカードを装備します。蘇りなさい、レプティレス・ナージャ！」

蛇の下半身に、人間の女の子のような上半身。先だって清明とのデュエルで使用したカードであるチラム・サバクや邪龍アナンタとは真逆の蛇人間が、継承の印をネックレスのように首からかける。いかにも蛇らしい赤い舌をチロチロと出し、その場にとぐろを巻いて座り込んだ。

レプティレス・ナージャ　守０

「レプティレス・ナージャは戦闘で破壊されず、さらにナージャとバトルを行ったモンスターの攻撃力は０となります。さらにワタクシはこのターン、まだ通常召喚を行ってお

りません。暗黒界の斥候　スカーを守備表示！」

スカーレットの名が示すごとく、スノウ自身も含め暗めの配色が多い暗黒界の中では珍しい全身合を赤に染められた下級モンスター。戦闘能力こそ低いものの、バトルで破壊された際にレベル４以下の暗黒界を手札に加えるというまさに序盤でこそ輝く斥候の名にふさわしい特殊能力を持つ。

暗黒界の斥候　スカー　守５００↓８００　攻５００↓８００

「さ、さらにカードをセットします。ターンエンド、です……」

彼の伏せたカードは、モンスターの守備力を２倍にするトラップ、仁王立ち。悪夢再びで回収可能な守備力０のモンスターを多く採用する彼のデッキとの相性は一見最悪だが、実はそれこそが彼の狙いである。その隠された手札に存在する手札誘発モンスター、牙城のガーディアン。攻撃されたモンスターの守備力を１５００ポイント上昇させるこのカードと組み合わせることで、その守備力は例え元の数値が０のナージャであっても不意打ちで３０００、守備力５００のスカーならばさらに上の４０００にまで膨れ上がる。事実彼はこのコンボを使い、これまでにも何人ものデュエリストが見た目の数値に騙され安易に繰り出した低攻撃力の貫通能力持ちモンスターを返り討ちにしてきたものだ。

……だが、覇王はその努力を嘲笑う。心底馬鹿にしていることを隠そうともせずに鼻

で笑い、緩慢なまでの動きでカードを、この戯れを終わらせる最後のピースを引いた。
「俺のターン。魔法カード、ヒーローアライブを発動。俺が表側表示のモンスターをコントロールしていない時、ライフ半分をコストにデッキからレベル４以下のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）を特殊召喚する。来い、バブルマン！」
　この場に清明やジムといった、覇王十代を倒すため戦っていった戦士たちがいればなんと言っただろうか。かつて十代と共に戦った水のＥ・ＨＥＲＯが、今は他のヒーロー同様覇王に使役されている。
　覇王　ＬＰ４０００→２０００
　Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　攻８００
「場にバブルマンが存在するとき、このカードは発動できる。速攻魔法、バブルイリュージョンを発動！」
　バブルマンが腕の発射口から無数の泡を噴き出し、それがシャボン玉のようにふわふわと闘技場を漂う。思わずスノウが周りを見回し、自分の周りを取り囲むシャボン玉を払おうと腕を振る……だが、それだけだ。シャボン玉はいつまでも割れることなくふわふわと浮かんでいるだけで、何も仕掛けてくる様子がない。
「このカードはもう少し後でのお楽しみだ。相手フィールドにモンスターが存在するとき、Ｅ―ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）　マリシャス・エッジはリリース１体で召喚できる。出でよ、マリシャ

ス・エッジ！」

Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジ　攻２６００

覇王の愛用する悪のヒーローの1体にして貫通能力を持つ最上級モンスター、マリシャス・エッジ。そしてその登場に、スノウが内心ガッツポーズをする。どちらでもいい、そのまま攻撃さえしてくれれば返り討ちで反射ダメージ、そうすればこのデュエルも終わり晴れて自由の身となれる。さあ覇王、何を止まっていらっしゃる。

「装備魔法、サイコ・ブレイドを発動。このカードは発動時に１００単位でライフを支払い、その数値だけ装備モンスターの攻撃力を上げる」

覇王　ＬＰ２０００→４００

Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジ　攻２６００→４２００

マリシャス・エッジが刀身が緑色に光る剣を掲げると、覇王の体を通してその生命エネルギーが剣に流れ込んでゆく。その数値は１６００ポイント……準アタッカーの一撃に相当する数値をライフから削られ、1ターン目にしてわずか3ケタにまでライフを減らしながらも、まるで意に介した様子はない。その鬼気迫る光景に、むしろ上から処刑（しあい）を覗く観客の方が圧倒されて闘技場が静寂に包まれる。針一本落ちただけでも音が響き渡りそうな沈黙の中、そんなことにすら気づく余裕もなくスノウは自身の頭脳をフル回転させていた。牙城のガーディアンと仁王立ちのコンボで対応できる数値を早

くも越えてきたことに内心焦りながらも、それを気取られないようにと平静を装う。
幸い、今のマリシャス・エッジの貫通をレプティレス・ナージャに受けたとしてもまだこのターンは凌ぐことができる。そうすればレプティレス・ナージャの効果により、マリシャス・エッジの攻撃力は０となる。あとは返しのターンでスカーを攻撃表示にし、ただ攻撃すればいい。ただそれだけで済むはずなのに、彼の脳裏をよぎるのはマリシャス・エッジの一撃で自分のライフが尽きる最後の瞬間の光景ばかり。
なぜだ。なぜこんな不吉な予感ばかりが出てくるのだ。全てを見下すような覇王の目に見つめられると、自分が処刑の瞬間を待つ死刑囚にでもなった気がしてならない。
「く……！」
「バトルだ。マリシャス・エッジで、暗黒界の斥候　スカーに攻撃。ニードル・バースト！」
「スカーに!?で、ですがこのダメージステップにトラップカード、仁王立ち……さらにその発動にチェーンして、手札の牙城のガーディアンの効果を発動！守備力を４０００にすることでダメージを抑え、戦闘破壊されたスカーの効果でデッキからワタクシ自身、暗黒界の術師　スノウのサーチを……！」
マリシャス・エッジの持つ剣が振り切られ、胴から離れたスカーの頭が宙を舞う。反射ダメージこそ狙えなくなったものの、ここで３８００もの大ダメージを受けたら例え

ライフが残っていても体が限界を迎える可能性もありうる。もしそうなれば、デュエル続行不可能となったプレイヤーは即敗北の掟に従い返しのターンに繋ぐことさえ不可能になる。特大ダメージを受けてなお平然としていられる精神力は、それこそ覇王のように特別な存在でなければ持ち得ないのだ。即座にそれだけ考え、咄嗟に２枚の防御札を使い切る。

スノウ　ＬＰ４０００→０

「え？」

斬り飛ばされたスカーの首が、ボトリと地面に落ちる。何が起きたのか把握することもできずただ０になった自身のライフカウンターを呆然と見つめるスノウの前に、バトルを行った２体のモンスターのステータスが表示される。

覇王　ＬＰ４００→２００

Ｅ―ＨＥＲＯ　マリシャス・エッジ　攻４２００→８０００→

暗黒界の斥候　スカー　守５００→２０００→４０００（破壊）

「攻撃力、８０００……？」

いくら守備力が４０００あろうとも、きっかり一撃で初期ライフの全てを削り取るマリシャス・エッジの一撃。敗北の結果を受けて、スノウの体から光の粒子がふわりと飛び出す。その勢いは増し続け、その体が次第に透け始めるのを感情の無い目で見降ろし

ながら、覇王が手にした1枚のカードを見せた。
「トラップカード、魂の一撃。モンスターの攻撃宣言時に俺のライフを半分にすることで、４０００から俺のライフを引いた数値だけモンスター1体の攻撃力をアップさせる。通常トラップカードはセットしなければ発動できないが、俺が最初に発動した速攻魔法……バブルイリュージョンの効果により、このターン1枚だけ手札からトラップをプレイすることが許された」
「そん……な……」
　薄れゆく意識の中で、あることに気づいたスノウが戦慄する。何枚ものカードにより互いのステータスが変化していった結果、受けた貫通ダメージはライフポイントと同じ４０００。まさか覇王は、この結果すら想定したうえで、サイコ・ブレイドのライフコストを『１６００』としたというのか。始めからワンターンキルのみを想定していたのなら、もっと少ないライフコストでも十分だったはずだ。またオーバーキルする気ならば、上限ギリギリの１９００ポイントでもよかったはずだ。だが覇王はきっかり１６００ライフを支払い、ジャストキルを達成させた。
「まさ、か……覇王様、貴方は……」
　こうなることすら、全てが計算の内だったというのか。最後まで言い切ることのできなかったその言葉を最後に、デュエルディスクだけを遺して敗者が消える。勝者ただ1

人のみが立つ闘技場の中心で、デュエルディスクを収納形態に移行させた覇王が声を上げた。
「いいか、これが敗者の末路だ。貴様らもこうなりたくなければ、出撃の準備を済ませておけ。恐らく逃げ出したネズミは俺の注意を引きつけたいつもりだろうが、人間１人ごときに構ってやるほど俺は暇ではない。今ここに宣言しよう、覇王軍は明日、要塞都市に総攻撃をかける！」
　闘技場を中心に、悪魔たちの歓声が低く轟く。その中心で覇王は部下の興奮をも意に介さず、頭上に光る赤い彗星をただじっと見つめていた。

ターン１０２　覇王達の戦い（前）

三沢達と離れてから、２日目の朝。ようやく見えてきた覇王城を、僕は複雑な思いで見上げていた。普通に歩けばもう少し早くたどり着けたはずだが、囮役としてわざと目立つように歩いたり、そうかと思えばふらっと身を隠したり、と色々気を遣って歩いてきたため余分な時間がかかってしまった。

……そう、かかってしまった、だ。どうやら覇王は僕の安い挑発には乗ってくれなかったらしく、スノウを追い返してから僕に対する追手はまるで来ていない。その部分を僕が読み間違えたせいで、陽動に賭けた時間は完全に無駄になってしまったわけだ。この遅れが、命取りにならなければいいけれど。

しかしこうして見ると、覇王城は大きい。前回放りこまれた闘技場も大きかったけど、あれが目じゃないぐらいのサイズだ。しかも城の周りには前来た時にはいなかった巨大なドラゴン族モンスターや鳥獣族モンスターの精霊が飛び回っており、実物以上に大きく見えてくる。これだけのモンスターが来ているということは、つまりそれだけ覇王軍の招集が進んでいるということだろう。

『騎乗型のモンスターがあの数か……食料も与えないわけにはいかないだろうし、いく

らあの大きさの城でもあまり悠長にしている余裕はないだろうな。下手すると今日の内には進軍が開始されるとみて間違いないだろう、マスター』

「りょーかい。だったら急ごうか、今日中に覇王を倒せば何も問題ないわけだし。改めて第2ラウンド、リターンマッチと洒落込もうかね……！」

口癖ともなった呟きで気合を入れ直し、覇王城までの道をただ歩き出す。幸い徴兵が進んでいるせいか、城を正面に見ながらの一本道でも誰ともすれ違うことはなかった。城壁の前まで来たところでダークシグナーのマントを体に巻きつけて顔を隠し、極力目立たないようにそっと上空の様子を窺う。見回りの兵士が何度か近くを通ったが、デュエルディスクが腕に付いていないことを確認したら話しかける事すらせずに遠ざかっていった。難民か何かだと思われたんだろう。

「んー、やっぱ空路かなあ。チャクチャルさんはどう思う？」

空路、というのは上空を飛び回るドラゴンたちのことだ。あれだけいればこっそり僕がモンスターを出して混ざっても気づかれる可能性は低いだろうし、一度入り込んでしまえばあとは適当な窓から何食わぬ顔で入り込めばいい。悪くないアイデアだと思ったが、うちのブレインはやや否定的だった。

『やめた方がいいな。確かに侵入まではさしたる困難もないだろうが、そこからどうする？入り込んでしまえば地の利は敵方にある。徴兵のせいで見回りの密度も増してい

るだろうしな』

「なるほど……ん？あれ？」

チャクチャルさんの言葉ももっともなので、空路は諦めて改めて空を見上げる。そこでふと目に付いたのが、1匹の鈍く光る生体金属の龍だった。覇王城の回りをぐるぐると周回するほかのモンスターと違い、明確な目的を持って城内に着地しようとするコースを辿っていたため下から見ると目立っていたのだ。さらによく見ると、上には3人の騎士が乗り込んでいる様子が辛うじて見えた。

それはいいのだが、あのモンスターはどこかで見た気がする。もちろんここは精霊世界なのだから見たことがあるモンスターがいても何も不思議ではないのだけれど、でもなぜか気になる。

「ねえチャクチャルさん、あれ……あ、もういいや」

一縷の望みをかけてうちの邪神の記憶に頼ろうとするも、指さした時にはすでにその機械龍は覇王城の中に入ってしまっていた。仕方ない、多少気にはなるけれどあれは後回しにしよう。どうせ僕もあの中に入るわけだし、何かの機会でまた見ることもあるだろう。

「どっかに抜け穴でもないもんかね。お城って言ったら隠し通路のひとつやふたつ抱えてナンボじゃないの？」

『あるとしても、外から見つかりやすければ意味がないからな？それこそ内通者でも抱えていない限り探す手間で逆に時間がかかるだろうな。なるべくリスクを抑えて侵入するとなると、ふむ』

「もし、そこの人。すみませんが、水を一杯もらえませんか」

「え、僕ですか？」

どこからなら入れそうか覇王城を見上げていると、戦争の気配から逃げてきたのだろうか、ぼろきれのような服を着た１人の老人が話しかけてきた。片目は怪我でもしたのか包帯が巻かれており、痩せこけたその体は一目見ただけでも相当ひどい状態にあることがわかる。

一応水妖式デュエルディスクには川の水を限界まで補充しておいたからある程度は余裕もあるし、三沢のところからもらってきた水筒の中身もまだほとんど手を付けていない。何より下手に断わるとその場で倒れそうな老人の様子を見たらとてもじゃないが断りきれず、首にかけていた水筒を外して差し出した。

「おお、ありがとうございます……！」

「あんまり飲みすぎないでくださいね？」

残った片目を輝かせてかすかに震える手を伸ばした老人が、水筒を受けとろうとしてバランスを崩す。そのままこちらの体にもたれかかるような格好になると、細い体から

は想像もつかないほどずっしりと体重がかかってきた。どこにそんな肉がついているのかと驚きつつも、どうにかその体を支えて起き上がらせようとした……その時、こちらの耳元に顔を近づけた老人が先ほどの弱々しい声とはまるで違う低い声でそっと囁いた。

「……覇王と戦いたいなら、後ろに付いて来なさい」

「え？」

「おお、すみません。では、一口だけ頂きます」

またもや弱々しい声に戻り、一口だけ中身を飲んで水筒を返す老人。そのまま今にも倒れそうな足取りで背を向け、ふらふらと覇王城から離れていく。その後ろ姿はやはりただの老人そのもので、さっき聞いた声は気のせいだったのかと首をひねりそうになる。もしここにいたのが僕1人だったら、そのまま見送っておしまいだったかもしれない。

『ハリーハリー、マスター。あの老人の言うことは、聞いておいて損はない。我々の疑問に対する最適解があるはずだからな』

「え、ええ……？」

わけがわからなかったが、チャクチャルさんがわかっているならそれでいい。どうせこの世のあらゆる難しい話は、僕にとっての専門外だ。素直に老人の後をついていく

と、今にも倒れそうな足取りの癖に意外なほど早く歩いてゆく。
やがてそのまま数分ほど経つと、老人は突然向きを変えてもはや住む人もいなくなったのであろう見捨てられた家、屋根にも穴が開き壁も崩れかかっている廃墟の中にふらりと入っていった。もうどうにでもなれと、僕もその後に続き腐りかけた扉を押しのけて中に入る。待ち構えていた老人が、家の中に誰もいないことを確認するかのように辺りを見回してから口を開いた。
「……来たか。覇王を倒しに行くんだな？」
その声は先ほど僕に囁きかけたときと同様に力強く、どうやらこちらがこの老人の本性らしい。いよいよもって正体が掴めないが、ただ者ではなさそうな様子に無意識に全身に力が入る。
「あなたは一体、誰なんですか？」
老人の質問を無視してそう聞き返すと、包帯に覆われていない方の目が品定めするように僕を見て細まる。ややあって再び口を開くと、思ってもみなかった名前が飛び出てきた。
「私の名は、グラファ。かつて暗黒界の龍神とまで呼ばれた悪魔だ」
「グラファ……！」
名乗られて真っ先に思い出したのは、バックアップ・ウォリアーから聞いたこの世界

の話だった。龍神グラファはつい先日まで暗黒界を統治していたが、例の彗星が空に現れると同時に突如姿を消したというあれだ。この老人が、本当にそのグラファだというのだろうか。

老人の真意を測りかねていると、地面に落ちた老人の影が急に伸びる。目の前の体は指一本動いていないのに、その影だけがより巨大に筋肉質に、そして禍々しい人型の龍の姿へと変化していった。それと同時に室内を小型の嵐のような風が吹き荒れ、かすかに残っていた家具が宙を舞う。こちらの表情が引きつったのを満足げに見て、再び影が元のサイズに戻っていった。

「……えっと」

『あ、そいつ本物だからなマスター』

「先に言ってよ！」

「わかってもらえたようで嬉しいよ。本題に戻るが、君の目的は覇王、そうだろう？」

「……なんでそれを？」

なるほど、この老人がグラファだというのは間違いないんだろう。それはいいが、なぜこのタイミングでよりによって僕相手に接触してきたのだろう。というか、初対面なのになんで僕の狙いが覇王にあることを知っているのか。

「こう見えても、かつては龍神とまで呼ばれた身だからな。それに君は今、この近辺では

それなりに顔が知られているのだよ。なにせ理由はどうあれ覇王に真っ向から刃向って生き延びた、ただ1人の戦士だからな。そのフードで顔を隠していたのと目撃情報にあった全身の痣がないから今までは気づかれなかったんだろうが、その目を見ればわかる。この世界では誰も見たことのない未知のテーマ、壊獣を使い鬼神ケルトを下した人間というのは、間違いなく君のことだろう」

　ケルト。こんなところで聞くとは思わなかったその名前に、少し言葉を詰まらせる。その無言を肯定と受け取り、グラファがこちらの目を真っ直ぐ見据える。

「勘違いしないでくれ。ケルトはいい部下だったが、君を相手にその仇討ちなどする気はない。むしろ鬼神の名に相応しい、誇り高い最期を遂げさせてくれたことに礼を言いたい。辛い仕事だったろうが、彼の魂がせめて安らかにあることを祈ってやってくれ」

「その……」

「時間がない、今は覇王だ。君も見ての通り、覇王城は難攻不落の要塞だ。ましてや今は徴兵により集められた悪魔により普段より監視の目が増している。だが奴らを束ねているものの根底にあるものは、あくまで覇王への恐怖でしかない。覇王さえトップから消えれば烏合の衆となり、情けない話ではあるが少し突いただけでその残党も崩壊するだろう。そこで覇王城に乗り込むため、君に私が力を貸そう」

「わかりました。でも、どうしてなんです?.どうしてグラファ、あなたは……」

「なぜ私がまともでいるのか、かね？それともなぜ私が直接出向かないのか、かい？どちらにせよ答えは単純だ。残念ながら、今の私はここにこうしていることだけでも精一杯なのだよ」

そう言い、腕に巻いた包帯を外して中身を見せる。老人に擬態したその腕には、人間ではありえないほどの力で無理やり引き裂かれたような傷跡がいくつも生々しく残っていた。傷口からにじむ濃厚な血の匂いが室内に満ちるのにも構わず天井越しに空の一点、あの隕石が浮かぶ場所のあたりを指し示す。

「もう何度も、あの光で自我を失いそうになってきた。辛うじて正気を失う寸前に私の力のほとんどを使い逃げ出すことには成功したものの、それも完全ではない。意識が呑まれそうになるたびに私は、こうして自らの体を引き裂いてきた。痛みだけが、私の意識を明瞭にさせてくれた。かつての魔力も、そして再生能力すらも失い、そうまでしてわずかな闇に逃れ正気を保っても、あの光のせいでまともに外を出歩くことは不可能なまま。日に日に落ちていく体力を実感しながら幾度となく心折れそうになってきた私にとって、覇王と戦おうという君の存在は最後の希望といってもいい」

「そりゃまた、随分都合のいい時に僕が来たわけね」

「少しは手を貸してくれる気になったかね？甘言は悪魔の得意分野だから、まだ欲しければいくらでも囁こう」

あ、これ最初はただのいい人かと思ったけど、さすがに悪魔の大将やってただけのことはある。今までの発言だってどこまで本気かわからない、とことん食えないタイプだ。こんな相手を信用すると痛い目に合いそうではあるけれど、ここで僕を騙す理由はグラファにはない。もし覇王の内通者ならば、わざわざこんなところまで誘い込まずとも覇王城前でかかってくれば兵士たちが勝手に気付いて加勢しに来ていただろうし。

「もういいよ。それで？何してくれるの？」

うっすらとはいえ本性が見えた以上、敬語を使ってやる義理もない。ため口に切り替える僕には何も言わず、部屋の片隅を指さした。すると何の変哲もないただの床がうっすらと光を放ち、魔方陣らしきものが浮かび上がる。

「そこに立つといい。この廃屋は万一のために私が作っておいた覇王城からの脱出経路のひとつでな。転移用のトラップ、ディメンション・ゲートが仕込んである。本来はあちらからこちらへ来るためのルートだが、最上階にある王室の真正面に出ることができる」

「……本当？」

「とっくに察しているだろうが、嘘をつく理由は私にはない。もっとも君にとってはこんな都合のいい話、疑念を抱くのもわからなくもないがな。なので、私ももう少し本音を言おう。正直なところ君がうまくやってくれれば、私は自分の手を汚さずに邪魔者が

消えてくれるのをただ見ているだけで済むので大変楽なのだよ。仮に君が失敗したとしても、私への被害はこのルートが使えなくなる程度だからな」

大変腹黒いけど、これぐらいはっきり言われるとむしろ好感が持てる。こういうのを清濁併せ持つ、とか言うんだろうか。なるほど、これは間違いなく大物だ。暗黒界を統治してきたという肩書にも納得できる。

ともあれ、ここまで来たらグラファの話に乗るしかなさそうだ。思い切って魔方陣の中に飛び込むと、視界がぐにゃりと歪み始めた。時間が経つにつれますますひどくなる歪みの中で、最後にグラファの声が聞こえた。

「私はこれでも、ケルトのことは武人として信用していた。そのケルトが君を信じたのならば、それに足る何かを君は持っているのだろう」

何か言い返そうかと思ったけど、結局声にならなかった。口を開くか開かないかのうちに、周りの風景が一変したからだ。ごつごつした石造りの巨大な建物、間違いない。ここが覇王城だ。

だけどそれよりも、目の前の人物に話をつけねばなるまい。まさに今王室に入ろうとしていたのであろう、見覚えのある褐色の男。目を丸くしてこちらを見つめる友人に、とりあえずフレンドリーに手を振って笑いかけてみた。

「……えっと。やっほー、オブライエン」

「な、何？清明、なのか？だがなぜここにいる、そんなはずがない、え？」
　冷静沈着なイメージが強かったが、さすがに刺激が強すぎたらしく混乱するオブライエン。まあそりゃそうだ、僕の方は三沢から聞いた話や覇王戦で聞いたジムの名前やらでオブライエンがこの世界に来ていることは知っていたけれど、オブライエンからしてみれば砂漠の異世界で勝手に行方不明になったはずの僕が、こんなわけのわからない場所でいきなり空中から生えてきたわけだから、ねえ。立場が逆なら僕だって自分の頭がおかしくなったのかと思うはずだ。
　だからじっくり説明してあげたいところだけど、あいにくそんな暇はない。ここは覇王城、いつ何時悪魔どもに気づかれるかわかったものではないからだ。それにわざわざこんなところに居るところを見ると、どうせオブライエンも目的は僕と同じだろう。
「色々言いたいことはあるだろうけど、全部後で説明するよ。それよりオブライエン、僕と手を組まない？」
「どういう意味だ？」
「そのままの意味さ。正直タイマンだと厳しいけど、２人がかりなら覇王だって……！」
「……いいだろう。お前を信用しよう。そのかわり、後でちゃんと説明はしてくれよ」
「わかってるって、飲み込みが早くて助かるよ。んじゃこれ、軽くでいいから目を通しといて。ちょっとわけありで、だいぶデッキパターン変わったからさ」

オブライエンが知っている僕のデッキには、まだ壊獣のカードが入っていないはずだ。流石に初見のデッキでタッグをさせるのは厳しいだろうと、デッキを取り出して放り投げる。オブライエンが空中でキャッチしたそれに素早く目を通し、何か聞きたそうなのを堪えて僕に返す。そして自身のデッキをおもむろに取り出し、何枚かカードを入れ替え始めた。何を思いついたのかは知らないが、まあいいだろう。改めて受け取った僕のデッキを握り、目の前の扉を開け放つ。

「さて……改めて、覚悟しな覇王。地獄の底から帰ってきてやったんだ、とっとと出てきて相手しな！」

窓から外を見下ろしていた、忘れもしない鎧姿のあの男。奴が僕の声に反応し、ゆっくりと振り返る。

「侵入者と聞いて何かと思えば、貴様らか。臆病者と負け犬が示し合わせて寄り添って、その程度の浅知恵でこの覇王に敵うとでも思ったのか？」

負け犬というのはまあ、認めたくはないけど僕のことだろう。オブライエンが臆病者扱いされるあたり、僕が見ていないうちに何があったのか知りたいところだけど、それこそ後でいくらでも聞けばいい。オブライエンが銃型のデュエルディスクを目にも止まらぬスピードの慣れた手つきで早抜きし、僕も腕輪のスイッチを起動して水の膜を放出させる。限界まで水が溜まったこの状態でどれだけ持つのかはよくわからないが、こ

こで出し惜しみはあり得ない。僕らの目を見て何を読み取ったのか、それ以上挑発してくることもなく覇王も円盤状デュエルディスクを回転、そして展開させた。
「いいだろう、２人まとめて相手してやる。ルールはバトルロイヤル方式、貴様らの次に俺のターンが来る。ただし俺にはハンデとして、１つだけ条件を加えさせてもらう」
「条件だと？」
「貴様らはどうせ２人がかりで来るのだろう？それに条件といっても、大したものではない。通常のバトルロイヤルルールでは全てのプレイヤーにターンが１巡するまで誰も攻撃が不可能だが、今回のみ３人目のプレイヤー、俺から攻撃の権利を得る。どうだ？」
　覇王の提案を受け、こちらにちらりと目をやったオブライエンと視線が合う。正直、実質２対１のデュエルに対してこの条件は破格の提案だ。最悪覇王のみ手札１０枚からスタート、とか言われても文句は言えないのに、攻撃権を１ターン早く覇王に回すだけで済むとは。
　無論、これが覇王の自信の表れなのも、そしてその自信に相応しい実力が奴にあることもわかっている。悔しいが、奴は強い……僕が命のかぎり全力を尽くしてさらに奇跡を味方に引き入れ、そこまでやってもうまくいけば引き分けに持ち込めるかもしれない、という程度だろう。その奇跡をこの１戦で引き当てるという根拠のない確信がある

からこそ、僕の方もここにこうしているわけだが。
「いいよ。後悔しても恨まないでよ？」
「後悔？それが必要なのは貴様らの方だろう。せっかく拾ったその命を、わざわざ自分から無駄にしにきたことにな」
「「デュエル！」」
「先攻は俺からだ！魔法カード、トレード・インを発動！手札からレベル８のヴォルカニック・デビルを墓地に送り、カードを２枚ドローする」
　戦いの火蓋を切ったのは、オブライエン。エースモンスターであるヴォルカニック・デビルを素早い状況判断で切り捨て、手札の質を高めにかかる。あの迷いのない判断は、さすがオブライエンとしか言いようがない。
「そしてヴォルカニック・エッジを召喚。このカードは１ターンに１度、攻撃宣言を放棄することで５００ポイントのダメージを相手に与える。受け取れ、覇王！」
　二足歩行する炎のトカゲ型モンスターが口から火炎弾を吐き、覇王の足元に着弾したそれが勢いよく燃え上がった。通常では攻撃できないデメリットの方が大きいこの効果も、どうせ攻撃ができない先攻１ターン目ならばノーリスクで発動できる。
　ヴォルカニック・エッジ　攻１８００
覇王　ＬＰ４０００→３５００

「やるね、オブライエン。どう、覇王？少しは効いたかな？」
「……温いな」
炎の勢いが次第に弱まってくると、残り火の中心から傷一つない覇王が姿を現す。さすがに、５００程度のダメージじゃ痛みの内にも入らないってわけか。
だが、その反応はオブライエンの予測の範囲内だったらしい。
「わかっているさ、この程度の炎じゃお前の鎧を剥がすことはできない。だが、次だ！魔法カード、トランスターンを発動！俺の場のヴォルカニック・エッジを墓地に送り、同じ炎属性炎族でレベルが１つ上のモンスターをデッキから特殊召喚する。来い、ヴォルカニック・ハンマー！」
ヴォルカニック・エッジが炎に覆われ、その中で進化を遂げる。より強靭な表皮とそれを動かす力強い筋肉、そしてさらに激しい炎を操る能力を身に着けた上級ヴォルカニックだ。
ヴォルカニック・ハンマー　攻２４００
「ヴォルカニック・ハンマーはエッジと同じく、攻撃を放棄することで俺の墓地に存在するヴォルカニック１体につき２００ポイントのダメージを与える。４００ポイントのダメージを受けてみろ！」
再び放たれる火炎弾。先ほどの物より威力こそ劣るものの、２連打すれば多少は効い

てもおかしくない。だが炎に包まれた覇王が無造作に腕を振ると、まるで服に付いた糸くずをはらうかのように炎が四散して消えていった。

覇王　ＬＰ３５００→３１００

「これでも効きやしないか……ならば魔法カード、闇の指名者を発動。モンスターカード名を１つ宣言し、そのカードが相手のデッキにあるならばそれを手札に加えさせる」

「オブライエン……？」

「俺が宣言するのは清明、お前のデッキのカードだ。その名は、怒炎壊獣ドゴラン」

闇の指名者自体、オブライエンのデッキとのシナジーは皆無だ。まさか先ほどカードを入れ替えていたのは、あのカードをデッキに入れるためだったというのか。このバトルロイヤルで、自分の火力が多少落ちることになっても僕のことをサポートするために。

申し訳なさに襲われながら、デッキに眠っていたドゴランを公開して手札に加える。恥ずかしい話だが僕は自分が戦うことで頭がいっぱいで、オブライエンのサポートなんてまるで考えていなかった。ここら辺が人間性の差なのだろう。

「確かにドゴランは僕のデッキにある。ありがとう、オブライエン」

「気にするな。それに、これは俺のためでもある。カードを２枚セットしてターンエンド……うまくやれよ、清明」

そう言い、意味ありげな視線を僕に向けるオブライエン。俺のためでもある……普通に考えれば、覇王を倒すために僕の戦力を増加させることで結果的に勝利が近くなるとか、そんな意味だろう。だけどあの視線に込められていたもの、そしてあの言葉に含まれていたものがそれだけとは思えない。

「……僕のターン、ドロー」

考えろ。そもそも、なぜオブライエンはドゴランを指定した？覇王のフィールドに出すためなら、攻撃力が最も低いガメシエルの名を出せばいい。僕のフィールドにアタッカーを出したいのなら、ジズキエルがサンダー・ザ・キングの方がわずかとはいえドゴランより打点が高い。何かドゴランにしかできないこと、ドゴランでなくてはならない理由があるはずだ。怒炎壊獣ドゴラン……レベル８炎属性恐竜族、攻撃力の３０００とは裏腹に守備力は低めの１２００。固有効果は壊獣カウンター３つを消費しての相手モンスター全破壊。レベル８の、恐竜族、炎属性……まさか。ある１つの可能性が頭をよぎった。ヴォルカニックと同じ炎属性、オブライエンのフィールドにはモンスターが１体、ドゴランの攻撃力は３０００……考えれば考えるほど、その可能性が正しいように思えてくる。なるほど、そういうことか。

「僕はオブライエンのヴォルカニック・ハンマーをリリースして、怒炎壊獣ドゴランをオブライエンのフィールドに攻撃表示で特殊召喚する。さらに相手フィールドの壊獣の

存在に反応して、怪粉壊獣ガダーラが手札から僕のフィールドに目覚めるよ。さあオブライエン、やっちゃって！」

怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００

怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００

２体の壊獣が並び立ち、共通の敵である覇王と戦う構えを見せる。オブライエンがにやりと笑い親指を立て、伏せたばかりのカードを表にした。

「任せておけ！トラップ発動、火霊術―紅！俺の場の炎属性モンスター１体をリリースし、その元々の攻撃力のダメージを相手に与える！受けてみろ、覇王！」

ドゴランの全身が燃え盛り、巨大な火の塊となって覇王に襲い掛かる。その全身を覆う漆黒の鎧を、紅蓮の業火が引きはがさんとばかりに覆い尽くした。

覇王　ＬＰ３１００→１００

「ぐっ……！」

燃え盛る炎の向こうから、これまで眉一つ動かさなかった覇王のかすかな苦悶の声が聞こえた。流石にこれだけの炎の力は、覇王といえども無視しきれなかったらしい。

「やった！」

「よくやった、清明」

「貴様ら……！」

わずかな喜びに浮かれる僕らの前に、炎を制した覇王の憎しみに満ちた声がかかる。背筋の凍りそうな冷たい視線と恐ろしい声音にもめげず、オブライエンが語りかけた。

「今のは俺の、清明の、そしてジムの分の一撃だ。その様子を見ると、少しは効いたようだな……十代」

覇王の心の闇を示すような鎧はところどころ焼け焦げ、あるいは熱量に屈し溶けている。オブライエンが奴のことを覇王ではなく十代、と呼んだのは、その鎧の様子を見てほんの一瞬だけでも十代の人格が表に出たりしないだろうか、という効果を期待してのことだろう。

だが十代は……覇王は、以前として覇王のままだった。

「なんとでもほざくがいい。さあそこのお前、貴様のターンはまだ終わっていないぞ」

「わかってるよ。永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。そしてこのエンドフェイズにインパクトの効果により、デッキからグレイドル・イーグルを手札に加える。ドール・コール！」

覇王のライフは、ターンが回ってくる前にオブライエンの奮戦によりすでに１００ポイントまで減った。いい調子だ、これならいける。何とかこのターンさえしのぎ切れば、僕らの勝利だ。

「俺のターン、ドロー。魔法カード、魔玩具補綴（デストーイ・パッチワーク）を発動。デッキから融合１枚及びエッ

ジインプモンスター1体を手札に加える。俺が加えるのは、エッジインプ・シザーだ」
「融合を?」
覇王が使うテーマであるE―HERO(イービルヒーロー)は、確かダーク・フュージョンによる融合召喚を得意とするカードだったはずだ。なのにあえてノーマルの融合を手札に加えたのか。
「そんなにこのカードが気になるか?だが生憎、これはただの手札コストだ。永続魔法、守護神の宝札を発動。手札を5枚捨てて発動し、カードを2枚ドローする」
「また、あのカードを……!」
以前の僕との戦いでも使用し、融合召喚の連打による覇王の荒い手札消費を補ってきた厄介なカード。なるほど、発動できれば確実に手札が1枚増える魔玩具補綴は、守護神の宝札自身が手札事故要員になる可能性を少しでも軽減するためのカードだったということか。これで覇王の手札は3枚、引いたカードによっては融合召喚も十分にありえる枚数だ。
だが、そこから先の覇王の行動は僕の予想をはるかに超えていた。
「魔法カード、ダーク・コーリングを発動。このカードは手札または墓地のモンスターを素材に、ダーク・フュージョンでのみ融合召喚できるモンスターを融合召喚する。俺は墓地の悪魔族モンスター、エッジインプ・シザーと岩石族の地球巨人 ガイア・プレートを素材とし、融合召喚!来たれ、E―HERO ダーク・ガイア!」

「Ｅ―ＨＥＲＯ版のミラクル・フュージョン……ほんと、何から何まで元とよく似たものが揃ってるってわけね」

墓地融合。確かにその方法ならば、手札消費を大幅に抑えたうえで強力なモンスターを場に出すことができる。だがまさか、それを可能にするカードがＥ―ＨＥＲＯにもあったなんて。

だがオブライエンはそんなことより、覇王の場に現れたモンスターそのものに気を引かれたらしい。はっきりと息をのむ音が、僕のところまで聞こえてきた。

「ガイア・プレートだと!?それに、ダーク・ガイア……そのモンスターは……!」

「どうしたの、オブライエン?」

「奴が今融合素材にしたガイア・プレートは、ジムのエースモンスターだった。そしてあのダーク・ガイアは、そのジムにとどめを刺したモンスターだ」

「そんな……」

ジムを倒したモンスターの素材を、よりにもよってジムのモンスターにするとは。オブライエンの心を全力でおりにくるあたり、やることがえげつない。

あるいは、とぼんやり考える。覇王の言葉通りならば、ダーク・ガイアを召喚するためには岩石族のモンスターが必要となる。もしかしたら僕のラディアントークンを奪った時のように、あの恐ろしい覇王の象徴ともいえるカード……超融合で素材にした

のかもしれない。
「ダーク・ガイアの攻撃力は、素材としたモンスターの攻撃力の合計となる。エッジインプ・シザーの攻撃力は１２００、ガイア・プレートの攻撃力は２８００。よってその数値は４０００だ」
　Ｅ―ＨＥＲＯ　ダーク・ガイア　攻４０００
「攻撃力４０００を、手札1枚でポンと出してくるとはね……」
　無理に笑って見せようとするも、さすがに顔が引きつる。あれだけの大ダメージを与えてライフ的には既に瀕死のはずなのに、勝負の流れが覇王に傾きつつある嫌な感じがする。
「まずは目障りな貴様からだ。ダーク・ガイアでダイレクトアタック！」
「オブライエン！」
　ダイレクトアタック、ということは、その相手は1人しかいない。ドゴランを射出したことでその身を守るモンスターが存在しなくなったオブライエンの方を向いたダーク・ガイアが、頭上に炎に包まれた巨大な隕石を出現させる。
「トラップ発動、竜魂の幻泉！このカードは俺の墓地のモンスター1体を守備表示で蘇生させ、その種族を幻竜族として扱う。甦れ、ヴォルカニック・ハンマー！」
「構わん、ダーク・ガイアでそのまま攻撃する」

再び蘇るヴォルカニック・ハンマーに、ダーク・ガイアが狙いをつけ直す。守備表示ならば戦闘破壊されたところで、オブライエンにダメージは通らない……だがその時、不思議なことが起こった。浮かんでいるダーク・ガイアを中心に辺りの風景が引き寄せられるかのようにぐにゃりと曲がり、防御態勢を取っていたはずのハンマーが強制的に立ち上がらされたのだ。

ヴォルカニック・ハンマー　攻１５００→攻２４００

「何!?」

「ダーク・ガイアの攻撃宣言時、相手モンスターを攻撃表示とすることができる。さらに融合モンスターがバトルを行う攻撃宣言時に速攻魔法、決闘融合―バトル・フュージョンを発動。その攻撃力がバトルの間、相手モンスターの攻撃力分アップする」

「それじゃあ、オブライエンにダーク・ガイアの攻撃力４０００がそのまま……!」

「消え失せろ!ダーク・カタストロフ!」

止める暇も、そんな手段も、僕にはありやしなかった。隕石が雨あられと降り注ぎ、その衝撃がオブライエンを吹き飛ばす。わずか1撃、たった1ターン。オブライエンの命（ライフ）は、ほんの1瞬で燃え尽きた。

Ｅ―ＨＥＲＯ　ダーク・ガイア　攻４０００→６４００→ヴォルカニック・ハンマー　攻２４００（破壊）

オブライエン　ＬＰ４０００→０
「ぐわあああああっ！」
「オブライエン！」
ダメージが体に響いたのか、吹き飛ばされたまま起き上がることすらできないオブライエンの体から光の粒がふわり、と放たれる。ライフが尽きたことで、消滅が始まっているのだ。どうすることもできないのはわかっているが、それでもじっとしていられずそのそばに駆け寄る。
「清明、こ、これを……」
苦しそうに息を吐きながら、オブライエンが自身の胸ポケットから何か球状のものを取り出して差し出す。何の金属でできているのか、これまで見たこともない光沢だ。
『オリハルコンか？随分珍しいものを』
「オリハルコン？」
チャクチャルさんの呟いたその名前だけは、僕でも聞いたことがある。伝説の金属の１つで、とにかく凄い代物らしい。そんなものをなぜ、オブライエンが持っているのだろう。
「知っているのか？これはジムの瞳にはめ込まれていた、オリハルコンの眼……不思議な力が宿っているらしい。ジムの形見だったが、俺は見ての通りこのざまだ。だからこ

れは、お前に託す……！俺の、そしてジムの思いを奴に、十代に伝えてやってくれ……！」

「わかった、約束する。絶対に僕が、十代をあの鎧から引きずり出して元に戻す！」

「頼んだ、ぞ……これで俺のミッションは、完了だ……」

その言葉を最後に、オブライエンの姿が完全に消滅する。残ったのは主を失ったデュエルディスクと、最後に手渡されたオリハルコンの眼のみ。そのデュエルディスクをガンマンよろしく腰に差し、オリハルコンの眼の方はそっとポケットに入れる。

しばらく見てて、オブライエンにジム。２人が繋いでくれたこのミッション、残りの手順は僕が引き継いだ。

「待たせたね、覇王。さあ、第3ラウンドと洒落込もうか！」

ターン１０３　覇王達の戦い（後）

　オブライエンが倒れ、覇王城の王室にいるのは僕と覇王の２人のみ。さっきまでは隣にオブライエンがいる心強さからあまり感じなかったが、いざこうして１対１で向かい合うと覇王のプレッシャーをひしひしと肌で感じる。
　だけど、ここで弱気になるなんてありえない。オブライエン、ジム、ケルト……たくさんの人たちの想いを受け継いで、僕はここにいるんだ。
「さあ覇王、お前のターンはまだ終わってないよ」
「なんだ、茶番は終わったのか？カードをセットし、ターンエンドだ」
　カードをセットしたことで、覇王の手札は０枚になった。だが次にターンを回してしまえば覇王は永続魔法、守護神の宝札の効果によりドローフェイズのドローで２枚ものカードを引いてしまう。
　……オブライエンの奮闘もあり、覇王の残りライフはたった１００。この僕のターンで、なんとしてでも奴を潰す。それが僕が受け継いだ、彼のミッションだ。
「僕のターン、ドロー！」
　覇王の従えている恐るべきモンスター、攻撃力４０００のダーク・ガイアを倒す方法

は……ない。だけど僕の手には先ほどサーチしておいた1枚のカードが、僕にとってはこれまで禁じ手に等しかった、ある方法がある。

今からすることは、以前の僕なら絶対やろうとしなかっただろう。だけど今の僕は、これまでの遊野清明ではない。僕の中に生き続けるユーノの思考パターンや戦術の癖が、僕の人格にも多少なりとも影響を与えているのがわかる。

「行くよ、グレイドル・イーグル！」

硬い石の床からにじみ出る銀の水たまりがぶくぶくと泡立ち、黄色い鳥の姿を模した侵略者がその翼を広げた。

グレイドル・イーグル　攻１５００

「バトルだ、イーグル！ダーク・ガイアに攻撃！」

やっとわかってくれたのか、とでも言いたげに一声鳴き、その羽を震わせてイーグルが自分よりはるかに強い相手に向かって矢のように突っ込んでいく。これまで自爆特攻はモンスターを捨て駒にするみたいで、人の戦法にケチをつける気はないが自分がする分には嫌だった。だけど、もしかしてそんな僕を見て。ずっとそんなことを言ってグレイドルの力を十分に発揮させてやらず、勝てたかもしれない勝負で負け続けてきた僕を見て。彼らはずっと、その悔しさに歯噛みしていたのだろうか。

グレイドル・イーグル　攻１５００（破壊）

→Ｅ―ＨＥＲＯ（イービルヒーロー）　ダーク・ガイア　攻４０００
清明　ＬＰ４０００→１５００
先ほどのように隕石を繰り出すこともせず、岩石の腕を無造作に振るうダーク・ガイア。ただそれだけでイーグルの全身がバラバラに砕け、プレイヤーの僕にまでその衝撃の余波が襲う。だけど、僕はその瞬間だけダーク・ガイアに生じた隙を見逃さなかった。水滴となって飛び散ったイーグルの欠片は壁に床に跳ね返り、銀の雨となってダーク・ガイアへと再び襲いかかっていく。
「この瞬間、戦闘で破壊されたイーグルは相手モンスター１体に寄生してその動きを操る！今僕が受けたダメージは倍近くにしてそっくり叩き返してやる、さあやれ、ダーク・ガイア！ダーク・カタストロフ！」
「甘い。トラップ発動、デストラクト・ポーション！俺の場のダーク・ガイアを破壊し、その攻撃力分だけライフを回復する。ダーク・ガイアよ、俺の糧となれ！」
かりそめの姿を脱ぎ捨てて真の姿となったグレイドルの猛攻を前に、ダーク・ガイアが四散する。その中心から抜き出された魂が覇王の鎧に吸収されると、オブライエンの火霊術によってボロボロになったはずの鎧が逆再生でも見ているかのように修復されていく。
覇王　ＬＰ１００→４１００

「まだ、まだだ!ガダーラ、行けっ!覇王にダイレクトアタック!」
極彩色の羽根をはためかせ、ガダーラが暴風を巻き起こす。モンスターを自分から捨てた覇王にそれを止めるすべはなく、直撃を受ける……だが、覇王のライフはまだ残っている。
怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００→覇王（直接攻撃）
覇王　ＬＰ４１００→１４００
「耐えきられた……カードを1枚セットして、エンドフェイズにグレイドル・インパクトの効果を発動。デッキからグレイドル・アリゲーターをサーチしてターンエンド」
清明　ＬＰ１５００　手札：５
モンスター：怪粉壊獣ガダーラ（攻）
魔法・罠：グレイドル・インパクト
　　１（伏せ）
覇王　ＬＰ１４００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：守護神の宝札
「俺のターン、守護神の宝札により2枚ドロー。ほう、このカードを引いたか。なら貴様にも少しは役に立ってもらうとしよう。モンスターとカードを伏せ、ターンエンドだ」

意味深な台詞とともに、不気味なほど静かにターンを終える覇王。今の一撃で仕留めきれなかった時点である程度の反撃は覚悟していたが、ここまで何もしてこないとなるとそれが逆に不気味だ。

「だからって、ここで退いたら勝ち目はない、か。ドロー！」

ドローカードは……守備表示モンスター1体をそのプレイヤー問わず破壊することができる魔法カード、シールドクラッシュか。あの伏せモンスターを対象にすれば、リバースモンスターだったとしてもその効果を使わせることなく破壊できる。そうではないただの壁モンスターだったとしても、先ほど魔法破壊に反応して憑依能力を使うグレイドル・アリゲーターをサーチするところを見ていた覇王がそれに対抗するためセット状態で場に出したと考えればつじつまは合う。

となると、危険なのはもう1枚の伏せカードの方か。何が出てくるかわからないから、こちらも万全の状態で臨むとしよう。

「フィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントを発動。さらに永続魔法、補給部隊も発動。そしてグレイドル・アリゲーターを召喚」

グレイドル・アリゲーター　攻５００

先ほどと同じような銀の水たまりが、今度は緑色のワニを模して起き上がる。ここでアリゲーターを使うのも少々勿体ないが、勝負をつけるのに出し惜しみはしていられな

い。もしあのカードがモンスターの破壊をトリガーに発動するタイプなら厄介だ、先にあちらから破壊しておこう。

「これで準備は整った！グレイドル・インパクト第２の効果、グレイ・レクイエムを発動！僕のグレイドル・アリゲーターと、その伏せカードを破壊する！」

ＵＦＯの残骸から放たれた２筋の謎光線が、僕の指定した２枚のカードめがけてまっすぐ飛んでゆく。まず伏せカードを破壊し、その後モンスターを引きはがして直接攻撃。これが今の僕にできる、最大限の攻撃かつ最良の一手だ。だが怪光線が届く前に、伏せカードの方が表になる。

「トラップ発動、裁きの天秤。相手フィールドに存在するカード枚数の合計が俺の手札、フィールドのカードよりも多い場合、その差だけカードをドローする。俺の手札は０、場にもこのモンスターと守護神の宝札、そして発動中の裁きの天秤の３枚のみしかカードが存在しない」

「僕のフィールドには……ちっ、カードが６枚ある、か」

「そうだ。よってカードを３枚ドローさせてもらう」

伏せカードを警戒しすぎたあまり、万全の状態で覇王を攻略しようとしての準備が裏目に出てしまった。しかも、せっかくサーチしたアリゲーターまでその力を発揮することができなかったし。

やや弱気になる心を、懸命に奮い立たせる。破壊効果をかわされたからといってどうということはない、今はまだ僕のターンなんだ。まだ僕の優位は揺らいでいない。

「ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントはフィールドから墓地にカードが送られた時、１枚につき１つの壊獣カウンターを乗せる。アリゲーターと裁きの天秤は、方法はどうあれ墓地に送られたことには変わりないね。さらに僕のフィールドでアリゲーターが破壊されたことで、補給部隊により１枚ドローする」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）↓（２）

「魔法カード、シールドクラッシュを発動！何を伏せてたのかは知らないけど、そのモンスターには退場願おうか！」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）↓（４）

シールドクラッシュのカードからも光線が放たれ、伏せモンスターが焼き払われる。当然だ、どんな耐性持ちのカードだってセットされた状態で直接除去されてはたまったものではない。

相変わらず沈黙を保ったままなのが少し気にはなるけれど、とにかくこれで覇王の場は今度こそがら空きだ。

「これで今度こそ、終わらせる……！やれ、ガダーラ！」

怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００↓覇王（直接攻撃）

再び舞い上がったガダーラの羽ばたきが、覇王城の内部に嵐を巻き起こす。今度こそこの一撃で、この戦いも終わる……そのはずだった。

だが、しかし。辺りの柱をなぎ倒し、調度品を窓から外に吹き飛ばす風の奔流の中で、覇王の周りだけ何かに守られているかのようにそよ風ひとつ届いていない。ダメージが、まるで入っていない。

「まさか、またネクロ・ガードナー……！」

「いや、それは違うな。よく見てみることだ」

「え？あれはまさか……そんな!?」

『クリクリ～……』

覇王の言葉と、その聞き覚えのある苦しげなうめき声を受け、ようやく気が付いた。覇王のフィールドで、半透明の小さなモンスターが半透明の壁を貼っている。

「ハネクリボー!?」

『ク……クリ……』

覇王の出したあのモンスターは、入学時から十代を支え続けてきていた精霊のカード、ハネクリボー。そしてその特殊能力は、フィールド上で破壊されたターンの間プレイヤーの受ける戦闘ダメージを０にするというもの。僕のシールドクラッシュをトリガーに、このターン覇王は守られている。

だが、純白の翼で空をパタパタと飛び回るいつもの自由そうな姿はそこにはない。全身をまるで拘束具のように闇のオーラが包み、それにより動きを封じられて空を飛ぶどころかまともに動くことすらおぼつかない、憔悴しきった様子の精霊がそこにいた。

十代の中の覇王に封じられたのか、それともハネクリボーが十代の闇を肩代わりして少しでも主人への負担を和らげようとしているのか。僕にそれを判別する手段はないが、いずれにせよハネクリボーはもう限界に近い。早く覇王を倒してあの呪縛を断ち切らないと、力を使い果たして消滅しかねない。

「だったら、ここは……メイン2に魔法カード、一時休戦を発動。互いにカードをドローして、次にそっちのターンが終わるまであらゆるダメージを受けなくなる。さらにウォーターフロントに壊獣カウンターが3つ以上存在するとき、1ターンに1枚新たな壊獣をデッキからサーチすることができる。海亀壊獣ガメシエルを加えて、ターンエンド」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）→（５）

ここで覇王にもカードをドローさせるリスクは大きい。だがそれ以上に、何の準備もないまま覇王にターンを回すことは避けたかった。次の覇王のターン、僕が一時休戦を使わなかったとしても通常のドローだけで奴の手札は5枚になる。Ｅ―ＨＥＲＯの全体的な殺意の高さを見ると、その枚数を持たせることは危険だ。下手をすると、次の

ターンだけで僕のライフが削りきられる危険まである。だったらたとえ1枚のドローを許しても、次のターンに殺られる危険を排除するべきだ。
耐えきれるかどうかわからない一か八かの賭けなんて、覇王の前には通用しない。そんなものが許されるのは、リスクを承知で勝ちにいくときだけだ。
清明　ＬＰ１５００　手札：４
モンスター：怪粉壊獣ガダーラ（攻）
魔法・罠：グレイドル・インパクト
補給部隊
１（伏せ）
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）
覇王　ＬＰ１４００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：守護神の宝札
「俺のターン、ドロー。まずは墓地に存在するトラップ、ブレイクスルー・スキルの効果を発動。このカードを除外し、貴様のモンスターの効果を無効にする」
「ガダーラ！」
ガダーラには壊獣カウンターをコストに３つ消費して自分以外の全モンスターの攻

守を半減させる特殊能力、風葬がある。それをわざわざ封じてきたということは、ダメージを与えられないのは承知のうえでガダーラを倒しに来たか。

でも来るなら来い、一応こちらにもセットカードはある。

「魔法カード、ダーク・フュージョンを発動！手札のＥ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フェザーマンと、バーストレディを融合させる！」

フェザーマンとバーストレディ、いつもならばフレイム・ウィングマンを召喚する流れだ。だがあのカードはただの融合ではなくダーク・フュージョン、恐らくはあのカードも闇に囚われているだろう。

「融合召喚！Ｅ―ＨＥＲＯ　インフェルノ・ウィング！」

天使の片翼と竜の頭を模した腕を持ち、フェザーマンとしての特性が表に出たフレイム・ウィングマンとは対照的な一対の悪魔の翼と竜の腕を持つ、バーストレディの要素を強く持つ闇の女性型ヒーロー。やっぱりあのカードも、か。しかも、少しの間見ないうちに随分元となったヒーローからかけ離れた姿になっている。マリシャス・エッジも大概だったけど、もはやあのモンスターには元の面影すら残っていない。類似した特徴を持つヒーローが存在しないダーク・ガイアもそうだったけれど、心の闇はいまだ十代をがっちり掴んでいるという訳か。

Ｅ―ＨＥＲＯ　インフェルノ・ウィング　攻２１００

「さらに魔法カード、破天荒な風を発動。インフェルノ・ウィングの攻守は、次の貴様のターンが終わるまで１０００ポイントアップする」

Ｅ―ＨＥＲＯ　インフェルノ・ウィング　攻２１００→３１００　守１２００→２２００

「バトルだ。怪粉壊獣ガダーラに攻撃、インフェルノ・ブラスト！」

悪魔のヒーローが腕を広げると、闇の炎が放たれる。ガダーラの体に絡みつくように伸びたそれが、じわじわとその体を焼き尽くしにかかり始めた。

「させるか！トラップ発動、グレイドル・スプリット！このカードを装備カードにすることで、ガダーラの攻撃力を５００ポイントアップさせる！」

「墓地に存在するトラップ、幻影騎士団（ファントム・ナイツ）トゥーム・シールドは、自分のターンに除外することで相手の場に存在するトラップ１枚の効果を無効とする。従ってグレイドル・スプリットは墓地へ送られる！」

「しまった……！」

Ｅ―ＨＥＲＯ　インフェルノ・ウィング　攻３１００→怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００（破壊）

頼みの綱だったスプリットを無効化され、攻撃力で劣るガダーラが炎に沈む。一時休戦により戦闘ダメージは入らないものの、その熱波は見ている僕にも届き火傷しそうな

ほど全身が熱くなる。
　でも、今の僕はそんなことに構っている余裕はなかった。今、覇王は確かに幻影騎士団と言った。ジムのエースカードだったというガイア・プレートのみならず、ケルトの幻影騎士団まで奪い取ったというのか。怒りのあまり歯を食いしばる僕をさげすむような目で見て、覇王がいかにも馬鹿にするようにパチパチと手を叩く。
「くそっ、補給部隊でドロー！」
「貴様の洞察力……いや、その臆病は褒めてやろう。結果的とはいえ、それで命を繋いだのだからな」
「……どういうこと？」
「インフェルノ・ウィングがモンスターを破壊した時、本来ならばそのモンスターの攻守どちらか高い方のダメージを相手ライフに与えることができる。偶然とはいえそれを回避したのだから、まったく大したものだ。だが、もう一時休戦の効果も切れる。次はないと思え、カードを2枚伏せてターンエンドだ」
「この……！」
　人を馬鹿にしたその物言いと冷たい声色に、さらに頭に血が上りかける。すんでのところでそれを沈めてくれたのは、僕の頭に響くチャクチャルさんの声だった。
『落ち着け、マスター。いいか、なぜ奴は言わずともいいようなインフェルノ・ウィング

の効果を自分から話したのだと思う?あれはただの挑発だ、乗って理性を失えばそのまま敗北する。いいか、逆に考えてみるんだ。確かにマスターは今のターンかなり危なかった。だがそれはつまり相手にしてみれば、今のターンで仕留めきれなかったということに他ならない。マスターがイラついているのと同様、奴もまた勝負を思うように終わらせられない苛立ちを感じているはずだ。それ故にこちらのミスを誘うため、あえて心理戦に出た。敵を自分の中で必要以上に強大にすることはない。相手を見て、その力を混じり気なく見極めることだ』

説得を受けて、少し落ち着いた頭で覇王を見る。その黄色い目には全てを呑み込む怒りや悲しみといった負の感情と傲慢な王者の態度、そしてその裏にはかすかだがちらちらと苛立ちを感じる。それはそうだろう、侵攻の準備も色々とあるはずのこの時期に僕らに捕まって、しかも1度倒したはずの相手にも関わらず粘られているのだから。

そうだ、確かに覇王は強敵だが、そこに人格がある以上つけ入るすきはある。悔しいが実力差は圧倒的、だけど必要以上に奴を恐れることはない。むしろ恐れれば恐れるほどに、その感情を糧に覇王の闇はさらに増大してしまう。平常心を保ち、今のカードでできる事を考えるんだ。

……待てよ?そもそもなんで、覇王はこの僕のターンが始まるタイミングで心理戦を仕掛けてきたのだろう。例えばあの挑発に僕が引っ掛かったままだったとすると、どう

しただろう。当然ウォーターフロントで壊獣をサーチ、さっきのターンでサーチしたガメシエルと合わせて展開、バトルさせただろう。でも、僕の手元にガメシエルがあることは覇王もよく知っている。

もし、もしもだ。最も手軽かつ単純にダメージを与えられる方法であるそれ以外のルートを僕に考えさせないがために、この瞬間を狙い澄まして僕を怒らせようとしたんだとしたら？怒りは思考を単純にする、それを計算していたのだとしたら？

「……そりゃどうも、お褒めに預かりまして。僕のターン、ドロー。まずＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントの効果を再び発動し、デッキから雷撃壊獣サンダー・ザ・キングをサーチする。そしてインフェルノ・ウィングをリリースし、そっちのフィールドに海亀壊獣ガメシエルを特殊召喚！」

「……ふん」

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

インフェルノ・ウィングの姿が消え、その場所には代わりに僕が送り付けたガメシエルが居座る。後は、サンダー・ザ・キングを特殊召喚して攻撃すればいい。だけど、僕の考えが正しければ、恐らくはこのタイミングで仕掛けてくるはずだ。

「トラップ発動、マインドクラッシュ！雷撃壊獣サンダー・ザ・キングのカード名を宣言し、そのカードが相手の手札にあればそれを捨てさせる。もっとも貴様が今サーチした

ばかりのカードだ、ないはずがないがな」

サンダー・ザ・キングを墓地に送る。だが僕は、内心では会心の笑みを浮かべていた。チャクチャルさんからのヒントがあったとはいえ、ついに覇王がこちらの予想通りに動いてくれた。ほんのわずかだが確実に、これまで常に覇王と共にあった勝負の流れがこちらに傾いてきた。これであの覇王に一泡吹かせられるかもしれない、ここからが正真正銘の反撃ターンだ。

「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、カイザー・シースネークはレベル４、攻守０として特殊召喚できる。さらに相手の壊獣に反応して、手札からもう１体のガメシエルを僕の場に特殊召喚！」

カイザー・シースネーク　攻２５００→０　守１０００→０　☆８→４

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

これで、下準備は整った。グレイドル、そして壊獣。どれだけ新たな力をデッキに組み込んでも、いかなるギミックを仕込んでも、結局最後はその努力の全てがこのカードに帰結する。僕のデュエリストとしての原点にして頂点、最強無敵のマイフェイバリット。

「さあ、これこそが僕の切り札だ！２体のモンスターをリリースし、アドバンス召喚！霧の王（キングミスト）！」

　その瞬間、暗い部屋の中を青い光が満ちた。霧の宝剣を軽々と持ち上げた魔法剣士が、その切っ先をぴたりと覇王に合わせる。
「霧の王……。さあ覇王、覚悟してもらおうか。霧の王の攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力の合計になる。バトルだ、ガメシエルに攻撃！ミスト・ストラングル！」
　力強く石の床を踏み締め、鎧の重さを感じさせない動きで魔法剣士が宙に舞った。空中で剣を２度、３度と振り回すたびに、持ち主の意思を受けて魔力を帯びた剣自体が自らも力を解放して光を放ち始める。そしてその輝きが頂点に達した時、大上段からの一刀が大気を、闇を、覇王城を切り裂いて振り下ろされた。
　霧の王　攻０→４７００→海亀壊獣ガメシエル　攻２２００（破壊）
「おのれ、おのれええ！トラップ発動、ダメージ・ダイエット！このターン俺の受けるあらゆるダメージは、半分になる！」
「なっ!?」
　剣風をまともに受け、鎧が再び崩れていく。だが覇王の瞳の憎しみは、いまだ衰えを知らないかのように燃え盛っていた。ギリギリの局面で発動されたダメージ・ダイエットにより、本来２５００受けるはずのダメージは半分の１２５０止まりとなってしまう。ライフ減少のストップと同時に鎧の崩壊も止まり、満身創痍ながらも覇王はまだ

立っていた。
覇王　ＬＰ１４００→１５０
「貴様の攻撃はそれで終わりか？ならばエンドを宣言しろ」
「……ターンエンド」
清明　ＬＰ１５００　手札：２
モンスター：霧の王（攻）
魔法・罠：グレイドル・インパクト
補給部隊
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）
覇王　ＬＰ１５０　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：守護神の宝札
「俺のターン、ドロー」
あのターンは、まぎれもなく僕の全力だった。それでもなお覇王を仕留めきれなかったことで、僕の心の中で何かが折れてしまった。頭が真っ白になり、何も考えられない。目の前にいるはずの覇王の声も、なんだかやたらと遠く感じる。
やるだけのことはやった。勝つために全力を出した。それでも駄目だったんだ、これ

以上何をしたって敵うわけない。だから、もういいじゃないか。そんな情けない幻聴まで聞こえてきた。だが何よりも恐ろしいのは、その声に耳を傾けようとしている自分がいることだ。それほどまでに、今のターンで燃え尽きてしまったとでもいうのだろうか。

「速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動。俺の場の守護神の宝札、そして貴様のグレイドル・インパクトを破壊する」

覇王の言葉が耳に届くが、話している内容がほとんど頭の中に入ってこない。インパクト？ああ、そういえばさっきのターンでサーチしてなかったような気がする。でもそれも今更いいや、もうどうせ殺るのなら、まだるっこしいことしてないでさっさと殺っちゃってくれ。そんな自暴自棄な考えまでもが頭を駆け巡る。

「俺の手札がこのカード1枚のみの時、手札のバブルマンは特殊召喚できる。さらにこの時俺の手札とフィールドに他のカードが存在しないことにより、カードを2枚ドローする」

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　守１２００

「俺の墓地から魔法カード、ダーク・コーリングを除外することで、手札のマジック・ストライカーを特殊召喚。装備魔法、レインボー・ヴェールを装備する」

マジック・ストライカー　攻６００

あのカードも、十代が昔から使っているモンスターの1体。こんな時にＥ―ＨＥＲＯじゃなくてそのカードを持ってくるなんて、まったく皮肉が効いたことだ。ただでさえ心折れた僕に、さらに駄目押しの精神ダメージを与えようとでもいうのだろう。

「バトル。マジック・ストライカーで霧の王に攻撃。この瞬間レインボー・ヴェールの効果により、相手モンスターの効果は無効となる」

力を失いその場に膝をつく霧の王の無防備な背をめがけ、小人の一撃が叩き付けられる。僕のフェイバリットカードが、反撃の象徴が、その場に崩れ落ちた。

マジック・ストライカー　攻６００→霧の王　攻４７００→０（破壊）

清明　ＬＰ１５００→９００

「くっ……」

「ターンエンドだ。もう諦めろ、貴様はこの俺に勝てん。サレンダーするというのなら、俺は命までは取ろうとは言わん」

『俺は、か。惑わされるなマスター、あんなものはただの狂言回しに過ぎない。いいか、ここは敵陣だぞ?もしここで敗北を認めれば、仮に覇王が手を出さずともマスターにとどめを刺しにくる輩はこの城内に腐るほどいる事を思い出すことだ』

「でもチャクチャルさん、さすがにちょっと、もう一回逆転するだけの気力が湧いてこない、かな……?」

『惑わされるな！それにもう一度よく状況を見てみるといい。マスターが疲弊しているのと同じく、覇王もまた平静こそ装っているものの限界も近いはずだ。その証拠がこの盤面だ、偉そうなことを言ってはいるがもはや融合モンスターを出すことすらできていない。搦め手といえば聞こえはいいが、これ以上戦うためのリソースが底を尽きてきているだけだ。それだけ奴も……』

チャクチャルさんが何か言っているが、半分も頭に入ってこない。代わりにははは、と力のない笑いが漏れる。多分今の僕は、さぞかしひどい顔をしているだろう。これまでどれだけ霧の王1枚に依存していたのかが、今更ながらによくわかる。霧の王を出したうえでの反撃は、これまで僕にとっての常勝パターンだった。確かにそれでも負けた経験がないわけではないが、そんな時でも大体その攻撃1回で決着がつく、霧の王と同時に負けるパターンばかりだった。

でも今回みたいに、霧の王だけが先に負けてしまうなんてのはこれまでなかった。ずっと一緒にやって来た相棒が先に力尽きて、僕だけがいまだ戦闘可能な状態にあるなんて初めての経験だ。

情けないと思う。なにをうじうじしてるんだと馬鹿にされても仕方ないし、実際これが他人事だったらそう思っていたことだろう。でも、なぜだろう。折れてしまった僕の心は、立ち直ろうとする気配すらないままだ。

もうこの手をデッキに載せて、サレンダーすれば楽になれるのかな。何を馬鹿なと叫ぶ自分がいるが、そんな心の声とは無関係に腕がゆっくりと動く。サレンダーしようとする自分の体を、まるで別人の動きを見ているかのような感覚で見降ろしていた。

『清明！』

手が今まさにデッキにかかろうとしたその瞬間、誰かの声が聞こえた。その声はオブライエンのもののような気もするし、ジムのものにも聞こえた。あるいはケルトや、辺境の大賢者といった人々だったような気もする。もしかしたら、その全員だったのかもしれない。

だが確実に言えるのは、覇王ともチャクチャルさんとも違うその声を聞いた瞬間、まるでバケツ一杯の冷たい水でも被ったかのように意識がはっきりしたことだった。すっきりした頭に諦めや絶望とは違う、不思議な気力が少しずつ湧いてくる。

「これは……」

ポケットの上からでもわかるほど、オリハルコンの眼が赤く輝いている。そっと取り出してみると、その光は直視したら目が潰れそうなほどの強さになっていた。手の上のそれをぐっと握りしめると、不思議と力が湧いてくる。あれだけ心を占めていた絶望が、消えていく。

そうだ、このデュエルは僕一人の物じゃない。どうして、そんな大事なことを忘れか

かってしまったんだろう。覇王を倒すため、そして十代を救い出すために僕らはたくさんの犠牲を払ってきた。ここに来た時点で僕らの後ろに道はない、最後の最後まで突き進むのみだ。

「だから、僕はサレンダーなんてしない。この手はそんなことをするために付いてるんじゃない、カードを引いて戦うためにある！」

勝負を捨てるためではなく、続けるために改めてデッキに手をかける。目の錯覚だろうか、一瞬その手に何人もの手が重なって見えた気がした。

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードは……死者蘇生、か。確かに文句なしに強力なカードではあるけれど、この局面で有効活用はできるのだろうか。さあ考えろ、これまで僕らが使ってきたカードは何がある？

ただ打点の高いモンスターならば僕の墓地の壊獣達……ドゴラン、ガダーラ、ガメシエル2体、サンダー・ザ・キングがいるが、それらを蘇生させてもダメだ。バブルマンは守備表示だし、マジック・ストライカーは自身のバトルで発生するプレイヤーへのダメージを0にする特殊能力を持っている。壊獣カウンターは溜まっているから固有能力も使おうと思えば使えるが、それ込みで考えても覇王のライフには届かない。でも諦めるものか、何のためにオブライエンが倒れていったと思ってるんだ。

……そこまで考えて、はっとした。そうだ、そうだった。
「覇王。まったく大したもんだよ、僕だけじゃ絶対にこの勝負、勝てなかった」
「うん？」
「僕1人だったら、勝てなかった。魔法発動、死者蘇生！」
「死者蘇生だと？今更そんなカード1枚に何ができる」
「確かにね。これがタイマンだったら、このカードでもどうにもできなかったさ。だけど覇王、敗者には敗北した時点で目もくれなくなるお前にはわからないだろうけど、僕には仲間がいる。たとえ傷つき倒れても、その戦う魂は今もこの場に残っている！僕が蘇生召喚するのは、このカードだ！」
　表になった死者蘇生のカードが光り、その輝きに照らされた地面から炎の柱が噴き上がる。そしてその中心から、1体のモンスターがフィールドに蘇った。硬い鎧のような、それでいてしなやかな外骨格に身を包み、口の端からチロチロと舌の代わりに火を噴き出すその姿は。
「オブライエンの墓地から蘇れ、ヴォルカニック・エッジ！」
　ヴォルカニック・エッジ　攻１８００
「馬鹿な、そのカードは！」
「ああ、そうさ！オブライエンがこのデュエルに参加していたから、僕はこのカードを呼

び出すことができた。このオリハルコンの眼を通じて僕に力をくれたから、ここで死者蘇生を引くこともできた。この世界で何があったのかなんて僕は知らないし、言いたくないならそれでもいいさ。でも」

ここで一度言葉を切り、目の前の存在……より正確に言うなら、その奥に幽閉された親友に届かせるつもりで言葉を放つ。

「いいからとっとと帰って来い、十代!ヴォルカニック・エッジは1ターンに1度、自身の戦闘を放棄することで相手ライフに５００ポイントのダメージを与える!」

覇王の墓地のダメージ・ダイエットには自身を除外することでプレイヤーへの効果ダメージを半減させる能力があるが、それを使ったとしても覇王のライフはそのダメージに耐えきれない。僕の命令と共に火炎弾が飛び、闇の鎧の中心を直撃したそれが大爆発を引き起こした。

「うおおおおお!」

覇王　ＬＰ１５０→０

「まだだ、まだ足りない……!こんなところで、この俺が……!」

爆炎が収まった時、そこには信じられない光景が広がっていた。ライフが０になって

なお、収まることを知らない闇の力。十代の中の覇王の執念。恐るべきことに、覇王の人格はデュエルによる敗北イコール消滅というこの世界のルールすらも捻じ曲げ、強引に現世に留まろうとしている。覇王の鎧が炎の中に消えていくそばから復活し、再び十代の体を覆い尽くそうとしつつあった。

『マスター、それを使え』

「うん、わかってる」

不思議と、何をすればいいのかはわかっていた。もはや三沢特製の水妖式デュエルディスクに溜めておいた水も空になり、例え覇王が向かってきてもう一度デュエルを行うことは不可能という切迫した状況にも関わらず、むしろ落ち着いた気持ちで孤独に戦い続けるそのそばへと歩み寄る。

いまだまばゆいほどに光り続けるオリハルコンの眼をぐっと握りしめ、そのままその拳で復活しつつある鎧の中心を殴りつけた。

その瞬間、世界が真っ白になるほどの光が放たれた。何も見えなくなるほどの光が収まった時、覇王の鎧は消えていた。そこに倒れて気を失っているのは、久しぶりに見る親友の姿。

「十だ……」

「君は、清明!?なぜ君がこんなところに?」

「こんなところでお前の顔を見るとはな……その様子だとうまくいったようだが、オブライエンはどうした？」

ちょうど後ろから入ってきたのは、なんとエドにヘルカイザー。ああそうか、なんか覇王城を下から見た時に目に止まった機械龍に見覚えがあると思ったら、あれだ。カイザーがヘルカイザーになって新しく手に入れたとか言うエース、サイバー・ダークとかいうモンスターだ。吹雪さんとデュエルしてるのを最後に少し見ただけだったから、今の今までどうしても思い出せなかった。

って、そんなこと今はどうでもいい。

「話は後で。いつまでもこんな辛気臭いところに居ないで、とっとと外に出よ……うおわっ!?」

まったくの不意打ちだった。ズシン、ズシンという何か重いものがぶつかるような音とともに、覇王城が大きく揺れる。岩肌に穴がくりぬいてあるだけの窓から外を覗くと、覇王城めがけて何体ものモンスターが攻撃を仕掛けていた。その攻撃に対抗している覇王軍は数では勝るとはいえリーダーを欠く状態での士気はお世辞にも高いとは言えず、結果としてかなりいい勝負になっている。混乱に包まれ怒号の飛び交うその戦場の最前線から、僕にとって聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「さあ、我々を苦しめてきた覇王は既に亡き者となった！敵は幾万有りとても、全て烏合

の衆でしかない！今こそ我らの、本物の悪魔の誇りを取り戻す時が来た！怯むな、かかれ！」

「グラファ……まさかっ！」

まるでタイミングを計ったかのような、グラファ達による覇王軍への強襲。偶然とは思えないほどのタイミングの良さに何かピンと来るものを感じ、ばっと水筒を……一番最初にグラファにあった際、老人の姿に粉していた彼に水を所望され差し出したそれを持ち上げてまじまじと見る。案の定、底の一点にほんの数ミリほどのサイズではあるが盗聴器らしき機械が付いていた。完全にしてやられたことに呻きつつ、もう遅いとはいえそれを引きはがして踏み潰す。ただ僕を手駒として覇王退治に行かせるだけでなく、その様子をこんなものまで仕掛けて窺ってたなんて、本っ当に油断も隙もない。

「これ以上ここにいるのは、たしかに危険そうだな。退散してから君の話は聞かせてもらう」

「十代は気絶したままか。まあいい、出でよ、鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン！」

その様子を遠巻きに見ていた２人が、用が済んだなら出ていくぞとばかりに脱出の準備に取り掛かる。サイバー・ダーク・ドラゴンの背に十代を背負って飛び乗る２人の例に倣い、僕もその後ろに座らせてもらうことにした。デュエルディスクに水が残っていないせいで、僕のデッキの精霊に頼むこともできそうにないからだ。

漆黒の金属製の羽根を広げ、鎧黒竜が空を駆ける。何度か眼下の戦闘の流れ弾が飛んできたが、その全てを危なげなく躱したのちに僕らは外の闇の中に消えていった。

ターン１０４　封印の神と『Ｄ』

　サイバー・ダーク・ドラゴンの上で、いつの間にか僕は眠っていたらしい。ふと気が付けば、夜の闇が頭上に広がっていた。焚火を中心に囲んで座るエド、ヘルカイザー、そのほかにも見慣れた、でもここで見るとは思わなかった顔がいくつかあった。
「おはよ、エド。ヘルカイザーも……それに翔にクロノス先生、おジャマ・イエローもいるの？あと、そっちの人は？」
　再会を懐かしむ気持ちより見知らぬ人への警戒が表に出るあたり、僕もだいぶこの世界に染まってきたと思う。翔の顔を見た時は記憶にあった彼とはなんだかだいぶ違う様子になんとなく違和感があったけれど、少なくとも偽物とかそういう話ではなさそうだ。それに、そのことをいつまでも考える暇もない。そんな僕の声に反応して、この中で唯一の新顔が僕の方を見て会釈する。随分と意志の強そうな、でもどこか思いつめたような目をした女性だ。
「この人はエコー。アモン・ガラムの……まあ、知り合いとだけ言っておこう。この２人と一緒にいたところをたまたま見つけたんだ。それにしても、ようやく起きたのか？まったく、よくこんな状況で眠れたな。大胆というか無神経というか」

「剛毅と呼んでくれてもいいのよ？で、ここどこ？」
「さあな、俺らもこの世界の地理にはそこまで明るくない。ただ少なくとも、覇王城からはだいぶ離れたことは確かだな」
「まさか君も、この世界にいたなんてね」
「驚き桃の木ナノーネ」
「会えて嬉しいわよ、清明のダンナ～」
　僕がぐっすり眠っているうちに、サイバー・ダーク・ドラゴンはどこかに降り立っていたらしい。その指示を出していたはずの主のヘルカイザーでさえどこだかわからないというのもひどい話だけど、さしあたり追手などの問題はなさそうだ。
　それにどれほど飛んでいたのかはわからないけれど、きちんとした固い地面に座るのは久しぶりな気がするからそれだけでありがたい。背伸びをして凝った筋肉をほぐし、近くの木陰に寝かされている十代の方を見る。
「さて、目が覚めたのなら君にもそろそろ話してもらおうか。聞いた話では、君は砂漠の異世界で行方不明になったはずだ。その君が、なぜ覇王と戦っていた？」
「ああ、そういえばそんな話だったっけね。えーっと、まず……」
　この世界で目覚めてから出会った人や、起きたことの話。辺境の大賢者、バックアップ・ウォリアーのいた村、そして鬼神ケルトと狸爺のグラファ。色々なことがあったが、

少し前にも三沢に話した内容だったおかげで思いのほかスムーズに話すことができた。それをすんなり信じてもらえたのも、三沢の時と同じだ。現に目の前で精霊が動き回っているのだから、今更信じるも信じないもない。

「なるほどな。待てよ、清明。その話が本当なら、今そのデュエルディスクは使い物にならないのか？」

「え？……あっ！エド、この近くに川や池とかない!?」

「いや、ここに来るまでに水場なんて見ていないな」

「だ、だとしても今からでも探しに……」

「やめるノーネ、シニョール清明。夜は危険が危ないノーネ」

僕の水妖式デュエルディスクは、水を入れなければただの腕輪でしかない。覇王戦で貯水しておいた全てを使い切ったせいで、今の僕はデュエルをすることすらままならない。クロノス先生の心配もよくわかるけれど、この世界での唯一の武器が使えない方がよっぽどリスクが高いし危険だ。

だが立ち上がったその時には、もうすでに手遅れだった。さっきまで雲一つなかった夜空がぼやけたかと思うと、動く間もなく濃い霧が流れ込んできたのだ。これまで霧の王に何度か霧を出す魔法を頼んでいた僕にはわかるが、この異様なスピードは明らかに人為的なものだ。何が目的かはわからないけれど、視界が塞がれた以上下手には動けな

い。

沈黙のうちに時間が過ぎ、やがて霧が晴れてきた。一体どんな術を使ったのか、先ほどまで屋外にいたはずの僕らはなぜかどこかの洞窟の中にいる。でもそんなことより、目の前の人間の存在が問題だった。不気味で冷酷な笑みを浮かべる、眼鏡をかけたその男。どう考えても、この霧はこの男が引き起こしたのだろう。

「……アモン！」

案の定、再会を喜び合うなんてことはできなかった。アモンの語った自らの話は、それを聞く僕らを驚愕させるには十分すぎる破壊力を持っていた。久々に見る異形の腕……それを見て呟いた十代の言葉を借りるならば、ユベルの腕。その力のみに飽き足らず、この地に眠るという神の力をも求めてエコーを贄にせんと迫るアモン・ガラム。そしてそれを阻止すべく立ちはだかったダークヒーロー、エド・フェニックス。

正直何が起きているのか、僕にはアモンの話をすべて聞いてもよくわからない。むしろわかりたくない、というのが正しいか。あれだけの力と物量でこの世界を実際に統一しかかった覇王の裏で、こんな物騒なことが進んでいたなんて。それじゃあオブライエンが、ジムが、そしてケルトや大賢者が命を捨ててまで僕に託してきたものは、一体なんだったんだ。覇王の人格を倒し十代に戻せば、この世界にも平穏が戻るはずじゃなかったのか。それなのに目の前で、覇王と同等の力を持った存在が野心に燃えて動き出

そうとしている。狙いの神とやらがなんなのかはわからないが、その力で覇王に対抗しようとしていたということは恐らく覇王の象徴、超融合と同等以上に危険な力を秘めているのだろう。アモン、なんなんだお前は。ようやく戦乱が止まり小休止を迎えたこの世界に、何の権利があってこんなことをするってんだ。

しかも、覇王とアモンには決定的な違いが１つある。覇王軍の生み出した犠牲は、無差別な侵略により生まれたいわばランダムなものだ。だがそれとは違い、アモンは確固たる意志を持ちピンポイントでエコー１人の命を犠牲にしようと動いている。それが意味することも、エコーのアモンへの想いも、すべて理解したうえで平然と乗り越えてその先に進もうとしている。

どちらがいいなんてことは、もちろんない。あるわけない。ないけれど、どちらが恐ろしいかと言われればそれはアモンの方だ。他の物には目もくれないかわり、絶対に目的を果たそうとする……そんな狂信的な勢いは、今は亡き先代ダークシグナーにすらなかったものだ。

「「デュエル！」」

そしてその２人のデュエルを前に、デュエルをすることすら満足に果たせない僕はただ無力だった。できる事はただ言葉を掛けることと、あとは精々このデュエルの行く末を見守っていることぐらいだった。

「エド！」
「うん？」
「……勝ってね」
「任せておけ。僕が先攻だ、アモン！父さんの残したラフスケッチを元に完成させた僕のニューフェイス、使うならプロの舞台でと思っていたが、まさかこんな所が初陣とはな。カモン、ドリルガイ！」
　ニューフェイスの言葉通り、見たことない新たなＤ―ＨＥＲＯを召喚するエド。その名が示すようにその片腕はまさにドリルそのもの、もう片腕も一見普通に見えるがよく見ると指が５本のすべてドリル、さらに全身からもドリルが突き出ているとダイヤモンドガイの水晶並に自己主張の激しいモンスターだ。
　Ｄ―ＨＥＲＯ（ディーヒーロー）　ドリルガイ　攻１６００
「ドリルガイの召喚、特殊召喚に成功した時、エフェクト発動。手札からこのカードの攻撃力以下の攻撃力を持つディーヒーローを特殊召喚できる。カモン、ダイヤモンドガイ！」
　Ｄ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ　攻１４００
「さらに僕はダイヤモンドガイのエフェクト、ハードネス・アイを発動。１ターンに１度デッキトップをめくり、そのカードが通常魔法ならばそのカードをセメタリーに送る。

そしてそのエフェクトのみを1ターン後の未来に送り、発動することができる。デッキトップは通常魔法、置換融合だ。よってこの効果を僕は次のメインフェイズに発動させることを宣言しよう。カードを2枚セットして、ターンエンドだ」

初手ダイヤモンドガイからのハードネス・アイという、定番の布陣を組んできたエド。それにしても、置換融合？ＤはＥと違って、融合召喚に頼らない戦術が特徴だったはずだが。おそらくあれも、ドリルガイ以外のニューフェイスへの布石なのだろう。

「それで終わりか？ならば僕のターン、ドローだ」

対するアモンは、雲魔物の使い手だったはずだ。戦闘破壊されないメリットと引き換えに、守備表示になっただけで自壊するという1歩間違えればサンドバックにされかねないデメリットを背負う不思議なモンスター群。

だがアモンの出したモンスターは、雲魔物とは似ても似つかぬ潜水服を来た人型のモンスターだった。

「ディープ・ダイバーを攻撃表示で召喚」

ディープ・ダイバー　攻１０００

「雲魔物じゃない……？」

「ああ、そういえばまだ誰にも見せていなかったね。これまで使っていたデッキは、こっちさ」

その言葉を受け、アモンが腰につけた別のデッキケースを取り出す。そして次の瞬間、そのデッキをいきなり投げ捨てた。地面に落ちたはずみで留め金が外れ、４０枚のカードが僕らの足元に散らばる。
「な、何を……!?」
「もう、このデッキは必要ないのさ。この神の封印さえ解ければ、それを従える僕こそが最強の存在となるからな。さあエド、改めてデュエルを続けようか。僕は永続魔法、強者の苦痛を発動。これにより君の全てのモンスターは、そのレベル１つにつき１００ポイントの攻撃力を失う」
「くっ……」
ドリルガイとダイヤモンドガイは、そのどちらもレベル４。ただでさえステータスが低いエドのモンスターには、わずか４００ポイントの弱体化でさえ大きく響いてしまう。
Ｄ―ＨＥＲＯ　ドリルガイ　攻１６００→１２００
Ｄ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ　攻１４００→１０００
「もう１枚永続魔法、補給部隊を発動。バトルだ。ダイヤモンドガイに攻撃！」
「相打ち狙いか……迎え撃て、ダイヤモンドガイ！」
ディープ・ダイバー　攻１０００（破壊）→Ｄ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ　攻１

０００（破壊）

２体のモンスターの攻撃力が同じだったため、戦闘ダメージは発生しない。だが補給部隊は互いのターンに１度ずつコントローラーの場でモンスターが破壊されるたびにカードをドローできる敵に回すと厄介なカード、これではダイヤモンドガイを失っただけエドの方がやや損か。だが両者のモンスターが戦闘破壊された時、洞窟の壁にＤのシグナルがくっきりと浮かび上がったのはエドのフィールドからだった。

「僕は今の戦闘破壊をトリガーにトラップカード、デステニー・シグナルを発動！これにより手札、またはデッキからレベル４以下のディーヒーローを特殊召喚できる。カモン、ディバインガイ！」

Ｄ－ＨＥＲＯ　ディバインガイ　攻１６００↓１２００

十代の多用するトラップ、ヒーロー・シグナルのディーヒーロー版により特殊召喚されたのは、背中に巨大な輪を背負った新たなヒーロー。

これでダイヤモンドガイが破壊されたにもかかわらず、エドのモンスターの数自体はいまだ変わらず2体のままとなった……だがその状況を見ても、アモンは不気味なほどに反応を示さない。

「もういいかな、エド？ならばこちらも場のディープ・ダイバーが破壊されたことで補給部隊の効果によりカードを１枚引き……さらにこのバトルフェイズ終了時、ディープ・

ダイバーの効果を墓地から発動。自身が戦闘破壊されたバトルフェイズ終了時、デッキからモンスター1体を選びデッキトップに置く。僕が選ぶモンスターはこのカード、封印されしエクゾディアだ」

「エクゾディアだと!?」

エクゾディア。頭と四肢を手札に全て揃えることで問答無用の勝利が確定する、恐るべき可能性を秘めたカード。相手がそれを利用しての勝利を狙っているとなると、通常想定される対ビートダウンでの戦術は通用しない。むしろ対策すべきはその手札、そこに何体のパーツが存在するかだ。

だが、エド・フェニックスもまた、ただのデュエリストではない。世界のトップを走るプロとして、当然そのようなデッキと対戦した経験もあるはずだ。

「さて、僕のターンがまだ終わっていなかったな。永続魔法、デーモンの宣告を発動。1ターンに1度５００ライフを支払カード名を1つ宣言し、デッキトップがそのカードならば手札に加えることができる。当然このターンに宣言するのは、封印されしエクゾディアだ」

アモン　ＬＰ４０００→３５００

宣言も何もあったものじゃない。あのカードは、たった今ディープ・ダイバーの効果で置いたばかりのカードじゃないか。これで、最低1枚のパーツがアモンの手の中にあ

ることになる。
「さらに魔法カード、浮上を発動。墓地からレベル３の水族モンスター、ディープ・ダイバーを守備表示で蘇生させる。カードを伏せ、これでターンエンドだ」
ディープ・ダイバー　守１１００
エド　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：Ｄ―ＨＥＲＯ　ドリルガイ（攻）
Ｄ―ＨＥＲＯ　ディバインガイ（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
アモン　ＬＰ３５００　手札：２
モンスター：ディープ・ダイバー（守）
魔法・罠：強者の苦痛
補給部隊
デーモンの宣告
１（伏せ）
「僕のターン、ドロー。このメインフェイズ、ダイヤモンドガイのエフェクトにより墓地の置換融合を発動！これにより僕のフィールドのモンスターのみを素材とし、融合召喚を行う。運命の岩盤を穿つ英雄よ、天与の使命背負いし英雄よ、暗黒の未来を統一し、理

想郷へと歩むがいい！カモン！ディーヒーロー、ディストピアガイ！」

ドリルガイとディバインガイが飛び上がり、空中で混じり合い新たな姿となる。額にＤの文字を意匠として刻み込み、全身を青いボディスーツのようなもので完全に覆った青いヒーロー。だがその姿はディーヒーロー特有の英国風というよりはむしろアメコミ的で、まるでヒーローの存在しない世界（ディストピア）でダークヒーローが無理に正義のヒーローであることを強要されているような歪さが感じられる。その歪さこそがまさに、決してユートピアではないディストピアとしての象徴なのだろうか。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ディストピアガイ　攻２８００↓２０００

「おいおいエド、融合召喚をしたのはいいが、むしろドリルガイ２体の方が僕に与えられるダメージは高かったんじゃないか？」

そう、アモンの言う通りだ。確かにせっかく当てたダイヤモンドガイの効果を使いたいという気持ちはわからなくもないが、強者の苦痛が存在する以上高レベルモンスターをわざわざ呼び出すのはむしろ悪手のはず。ディープ・ダイバーの守備力を突破できないというのならわからなくもないが、ドリルガイのままでもギリギリ戦闘破壊からのダイレクトアタックという動きは可能だったはずだ。

だが、それこそがエドにとっては最高の展開だった。

「いや、むしろ礼を言うよアモン、君が強者の苦痛を使ってくれて。これで、ディストピ

アガイのエフェクトのために僕が下準備をする必要がなくなったわけだからね」
「なんだと?」
「今にわかるさ。だがまずはディストピアガイのファーストエフェクト発動、スクイズ・パーム!このカードが場に出された時、墓地のレベル４以下のディーヒーロー１体の攻撃力分のダメージを与える。僕が選ぶカードは当然、ドリルガイによる１６００ダメージだ!」
　アモン　ＬＰ３５００→１９００
　ディストピアガイの効果により、アモンのライフが一気に半分近く削られる。だが本命はむしろ、その次の効果だった。ディストピアガイが掌をかざすとそこに穴が開き、凄まじい勢いで周りの空気が、そしてアモンのディープ・ダイバーが吸い込まれていく。
「ディストピアガイのセカンドエフェクト発動、ノーブルジャスティス!このカードの攻撃力が変化しているときに１ターンに１度、カード１枚を破壊しその数値を元に戻す!」
「効果破壊か……!」
　ディープ・ダイバーは、アモンの言葉通り戦闘破壊でなくては効果を使えない。しかもアモン唯一のモンスターが破壊されたことで、もはやその身を守るものは何もない。補給部隊によるドローのリスクはあるものの、確実にエクゾディアのパーツをデッキ

トップに置くディープ・ダイバーの破壊を優先したのだろう。
「バトルだ、ディストピアガイ!ディストピアブロー!」
ディストピアガイが飛び上がると、その拳に光が集まる。落下速度を加えての渾身の一撃が、アモンめがけてまっすぐに突っ込んでいった。
そう、確かにこの攻撃が通りさえすればエドの勝ちが決まる。だけど、1度だけとはいえアモンとデュエルをした僕にはわかる。あのアモンが、こんな簡単に勝負を譲るわけがない。その予感は、すぐに正しいことが明らかになった。
「単調な攻撃だな。トラップ発動、次元幽閉。攻撃モンスター1体を除外する!」
もはや守るものはないと思われたアモンの目の前の空間に亀裂が走り、その向こう側に亜空間が覗く。ディストピアガイの抵抗虚しく、その体が徐々に亀裂へと吸い込まれていく。
「エド!」
エドの攻撃を見越したうえで発動された、アモンの次元幽閉。だが、これでまた逆転されてしまうのか、なんてことをちらりとでも思った僕は、まだまだエド・フェニックスという男を甘く見ていたらしい。
「やはりトラップを張っていたか。こちらもリバースカードオープン、ディメンション・ゲート!僕のフィールドからディストピアガイを表側で除外する!」

その体が完全に亀裂に吸い込まれ閉じ込められる寸前、ディストピアガイが再び飛び上がる。額のＤの紋章が赤く輝くと、その姿が蜃気楼のように消えていった。
「ディメンション・ゲート……なるほどな」
「どうやら気が付いたようだな。ディメンション・ゲートは相手の直接攻撃宣言時に自ら墓地へ送ることができ、またこのカードが墓地に送られた時に今除外したディストピアガイを帰還させることができる」
「そういうことか」
２人の会話を聞き、ヘルカイザーも真剣な目で呟く。何の話をしているのかさっぱりわからない、という僕の視線に気づいたのか、誰に言うともなくエドの狙いをもう少し詳しく話してくれた。
「ディストピアガイは特殊召喚に成功するたび、先ほどのバーン効果を発動させる。アモンがエクゾディアでの勝利を狙っているのならば直接攻撃を狙うことはまずないだろうが、それでもエドがディメンション・ゲートを何らかの方法で墓地に送ることができればほぼ確実に１６００のバーンダメージが発生すると見ていいだろう。だがアモンのライフは既に１９００、つまり……」
「そうか、発動に５００ライフが必要になるデーモンの宣告は、アモンにはもう使えないんだ！」

「アモンの手札のエクゾディアパーツは先ほど引いた1枚か、仮にあの手札全てがパーツだとしても3枚のみ。自らの引きの強さに頼りあるかどうかも分からないパーツ名を宣言しようにも、まだ最低2枚のパーツが必要ならばこれはさすがに分が悪いな」

ディメンション・ゲート1枚で次元幽閉を不発に終わらせたばかりか、間接的にデーモンの宣告すら無力化させることに成功したエド。たった1枚でここまで相手を翻弄させるあたり、恐るべき使い手だ。

「闇の誘惑を発動。カードを2枚引き、手札から闇属性モンスターのディアボリックガイを除外。これでターンエンドだ、さあ、僕の場にモンスターはいない。攻撃するならご自由に」

「くだらない真似を……!」

「くだらない？僕に言わせれば、君の方がよほどくだらないと思うがね。どれほど甘い言葉を並べたところで、君のやろうとしていることはおかしい。エコー、彼女がどれだけ君のことを……!」

「君がどう思おうと、それこそ君の感情に過ぎない。これは僕とエコーの話なんだ、そこに首を突っ込まないで貰おうか。ねえ、エコー。どうなんだい？」

「私……私は……」

「僕がこの世界を支配する王となるためには、この神の力が必要なんだ。そしてその力

を解放するための生贄は、僕が最も愛するヒトでなければならない。僕が唯一愛した女性……エコー、君でなければならないんだ」
「私が、アモンの……」
「頼むよ、エコー。僕が王になるためには、どうしても必要なことなんだ」
「ノー、シニョーラ、エコー！行っては駄目なノーネ！」
デュエルが一筋縄ではいかないと見るや、作戦を変えてエコーに甘く語りかけるアモン。誰の制止の言葉も耳に入っていないのだろう、1歩、また1歩と震える足取りでアモンの指差した閉ざされた扉へと向かってしまう。
「まさか、このデュエルの最中に彼女を贄にするつもりなのか……？」
ヘルカイザーの呟きは、質問よりも確認としての意味合いが強かったろう。そして言葉を返すことなく、愚問だなと言いたげに口の端を歪めて笑ったのみにとどめるアモン。
この神がどんなものかはわからない。だがこの状況でその封印を解こうということは、もしその力が解放されたならばエドが優勢の今の状況をもひっくり返すことができるだけのポテンシャルを秘めているのだろう。
「させる……」
か、と言い切ることはできなかった。自分から贄となろうとしにいくエコーを力づく

にでも止めるため踏み出した瞬間、どれだけ力を込めてもピクリとも足が動かなくなったのだ。見ると、僕らに向けてアモンが例の異形の腕を向けて力を込めている。あの腕が不思議な力を使い、動きを封じているのだろう。ならばとチャクチャルさんにテレパシーを飛ばしてみるものの、なぜかうんともすんとも返事が返ってこない。

「おいおい、無粋な真似はよしてもらおうか。エコー、僕の愛しい人よ。あと少し、ほんの少しで僕はこの世界の王になれる。エコー、そのためには君が、君だけが必要なんだ」

「くっ……！おい、アモン！今はデュエルの最中だ、早くターンを進めろ！」

ゆっくりだが確実に、封印に近づくエコー。その様子に焦りの色を浮かべたエドが、エコーが生け贄になるより早くこのデュエルを終わらせるべくアモンに催促する。その様子に気をよくしたのか、満足げにアモンがカードを引く。

「ああ、そうだったな。エコー、何も今すぐ決める必要はない。君の決心が早ければ早いだけ、僕が王となる時も早くなるが……信じているよ、エコー。ドロー、防覇龍ヘリオスフィアを守備表示で召喚。さらにカードを伏せ、これでターンエンドだ」

防覇龍ヘリオスフィア　守１９００

エド　ＬＰ４０００　手札：１

モンスター：なし

魔法・罠：ディメンション・ゲート（ディストピアガイ）

アモン　ＬＰ１９００　手札：２
モンスター：防覇龍ヘリオスフィア（守）
魔法・罠：強者の苦痛
補給部隊
デーモンの宣告
１（伏せ）

ヘリオスフィアは一見ただの壁モンスターでしかないが、相手の手札が４枚以下かつプレイヤーが自身以外のモンスターをコントロールしていない場合に限り相手は攻撃宣言を一切行えなくなる守りの効果を持つ。手札が1枚のみのエドにとっては、厳しい相手と言える。

「ここでヘリオスフィアを引いてくるか……僕のターン、ドロー!カモン、ドレッドサーヴァント!」

時計の針のような武器を手にした、ドレッドヘアのディーヒーロー。ステータスの低いそれを、エドはあえて攻撃表示で場に出した。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント　攻４００→１００

「ドレッドサーヴァントは幽獄の時計塔の針を進める効果を持つが、今このフィールドに時計塔は存在しない。だがこのカードは戦闘破壊されセメタリーに送られた時、僕の

マジック、トラップを1枚破壊するセカンドエフェクトを持っている」
「なるほど、その効果でディストピアガイを復活されたくなければうかつに攻撃表示にはできない、というわけか。だがいいのか、そんな悠長なものを狙っていて？僕がモンスターを攻撃表示で出したうえでヘリオスフィアの守りを潜り抜けなければ自爆特攻すら不可能だし、そもそもエクゾディアの入ったこのデッキにアタッカーなど本当に入っていると思っているのか？」
「そう思うなら思っておけ。僕はこれでターンエンドだ」
　意味深な一言と共に、ドレッドサーヴァントの召喚のみでターンを終えるエド。いくらプロとはいえ、流石にこのターンの引きだけでヘリオスフィアを除去することはできなかったようだ。
「では、ドロー。ターンエンドだ」
　引いたカードをちらりと見ただけで、何も言わずターンを回すアモン。ヘリオスフィアの効果を生かすためにモンスターを引いたものの出せなかったのか、あるいはエクゾディアパーツを素引きしたのか……だ。驚くほど動きのないターンの往復だったが、それでもエドのディストピアガイ、アモンのエクゾディアというフィールド外から互いが相手にかけるプレッシャーに息の詰まるような空気の重さを感じる。
　エド　ＬＰ４０００　手札：１

モンスター：Ｄ―ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント（攻）
魔法・罠：ディメンション・ゲート（ディストピアガイ）
アモン　ＬＰ１９００　手札：３
モンスター：防覇龍ヘリオスフィア（守）
魔法・罠：強者の苦痛
補給部隊
デーモンの宣告
１（伏せ）

「僕のターン……ターンエンドだ」
どうやら完全に動けなかったらしく、まったく何もせずターンを終えるエド。こうしてターンを費やしているうちに、アモンがエクゾディアのパーツを引ききるかもしれない。その焦りが、手に取るようにこちらにも伝わってくる。
「ドロー。カードを１枚セットし、ターンエンド」
攻めあぐねて落ち着きを失っていくエドとは対照的に、どんどん余裕を取り戻していくアモン。次のターン辺りで何とか流れを取り戻さないと、このままずるずると引き延ばされパーツを揃えられてしまいかねない。勝負の流れというものは、誰が何と言おうとも実在するものなのだ。

エド　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：Ｄ―ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント（攻）
魔法・罠：ディメンション・ゲート（ディストピアガイ）
アモン　ＬＰ１９００　手札：３
モンスター：防覇龍ヘリオスフィア（守）
魔法・罠：強者の苦痛

補給部隊
デーモンの宣告
２（伏せ）

「もう少し、もう少しだけ待ってくれ、エコー！僕のターン、ドロー！」
悲痛な叫びとともに、デッキに願いを託してカードを引くエド。そして、その思いは……通じた。ドローしたカードを見たエドが、はっとした表情になる。
「アモン。どうやら、エクゾディアの完成を見ることはなさそうだな」
「なに？」
エドの言葉に眉をひそめ、不愉快そうな表情を露わにするアモン。そんなアモンに、エドがたった今引いたばかりのカードを表にした。
「そのカードは！」

「そう。通常魔法、手札抹殺を発動する。先ほどのディープ・ダイバーやそのデーモンの宣告を見る限り、恐らくそのデッキはエクゾディアをデッキからサーチ、及びドローして揃えるタイプと見た。となると、一度パーツを落としてしまえばその回収は難しい、違うか？」
「……」
「沈黙は肯定と受け取ろう。これがセメタリーを経由してサルベージするタイプのデッキだったら少々厄介だったが、そんなこともなさそうで安心したよ。さあ、全ての手札を捨ててもらおうか！」
　たがいに全ての手札を捨て、その枚数だけドローする手札抹殺。無言でエクゾディアパーツを含む３枚のカードを墓地に送るアモンに対し、エドも２枚の手札を捨てて新たなカードを引く。
「さらに魔法カード、マジック・プランターを発動。僕の場のディメンション・ゲートをセメタリーに送り、カードを２枚ドローする。そしてディメンション・ゲートがセメタリーへと送られたことにより、異次元の彼方から僕のディーヒーローが帰還する！暗黒の未来を再び統べろ、ディストピアガイ！」
　Ｄ―ＨＥＲＯ　ディストピアガイ　攻２８００→２０００
　ここに来て帰還したエドの新たなエース、ディストピアガイ。特殊召喚の成功、そし

て強者の苦痛を受けたことにより、再びその２つの効果を使用する用意は整った。額のＤの紋章からの光線と、掌を向けての吸引攻撃の２つが流れるような動きで行われ、アモン本人とそのフィールドに襲い掛かる。

「もう説明は不要だな?ディストピアガイのダブルエフェクト発動!まずセメタリーのドリルガイを選択、スクイズ・パーム!」

アモン　ＬＰ１９００→３００

「次いでその、僕から見て右側の伏せカードを破壊しディストピアガイの攻撃力を元に戻す、ノーブル・ジャスティス!」

「ふん、残念だったな。破壊されたトラップ、運命の発掘の効果を墓地から発動!このカードが相手により破壊された時、墓地の同名カードの数だけドローを行う。僕の墓地には今破壊されたこのカードの他に、手札抹殺により墓地に送られた1枚が存在する。よって2枚をドロー!」

Ｄ―ＨＥＲＯ　ディストピアガイ　攻２０００→２８００

せっかくの破壊効果も、よりによって破壊された時に効果を発動するカードに使ってしまったせいでまともに生かせなかったエド。しかもヘリオスフィアよりも伏せカードを優先したせいで、このターンはまだ攻撃することもできない。

だが、エドはまだ諦めていなかった。アモンが手札抹殺で運命の発掘を墓地に送りド

ロー数の増加に繋げたように、この男もまた勝利への布石をあの時ちゃっかり打っていたのだ。

「まだだ、セメタリーに存在するディアボリックガイのエフェクトを発動。このカードを除外することで、デッキより同名モンスターを特殊召喚する。カモン、アナザーワン！さらにデビルガイを召喚！」

Ｄ―ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ　攻８００→２００

Ｄ―ＨＥＲＯ　デビルガイ　攻６００→３００

ドレッドサーヴァント、デビル、そしてディアボリックにディストピア。計４体ものディーヒーローがフィールドに揃った時点で、やっとエドの狙いが僕にもわかった。

もしかして、最初からこうなることを予測してあえてドレッドサーヴァントの効果を事前に宣言していたのだろうか。攻守が低く耐性があるわけでもないドレッドサーヴァントは、ただ出すだけでは壁にすらならない。だがいかにも攻撃されたがっているような状況をあえて作ることで、逆に相手の攻撃を封じて結果的に場に生き残らせる、そんな高度な駆け引き。考えすぎかもしれないが、エドならやりかねない。なぜなら、奴はそういう抜け目のないデュエリストだからだ。

「僕はこのうちディストピアガイ以外の３体のディーヒーローをリリースし、手札からこのカードを特殊召喚する！出でよ、究極のＤ！ディーヒーロー、Ｂｌｏｏ（ブルー）―Ｄ（ディー）！」

僕との戦いでも、その圧倒的な力によりわずか1枚で場を制圧しかけた究極のディーヒーロー。エドの足元に突如湧き出した血の池から、その英雄というよりもむしろ悪魔めいた存在がゆっくりと浮かび上がってきた。

Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ　攻１９００→１１００

「Ｂｌｏｏ―Ｄ……だと？」

「そう、これこそが究極のＤの姿。バトルだ、ディストピアガイ！ディストピアブロー！」

「馬鹿な、ヘリオスフィアの効果で攻撃は……！」

「それはどうかな？Ｂｌｏｏ―Ｄが場に存在する限り、相手の場に存在するすべてのモンスター効果は無効となる。よってヘリオスフィアも、ただ守備力が高いだけの下級モンスターに過ぎなくなった」

その言葉通り、ヘリオスフィアの呪縛から解き放たれたディストピアガイが飛び上がりざまの拳を叩き込む。本来攻撃力では最初から勝っていたその一撃は、長いことフィールドに鎮座していたヘリオスフィアをついに粉砕した。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ディストピアガイ　攻２８００→防覇龍ヘリオスフィア　守１９００（破壊）

「ヘリオスフィアの破壊により、カードをドローする」

「もう遅い、これで全て終わらせる……！Ｂｌｏｏ―Ｄでダイレクトアタック、ブラッディー・フィアーズ！」

Ｄ―ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ―Ｄ　攻１１００↓アモン（直接攻撃）

伏せカードもヘリオスフィアも取り除かれて焼け野原となったアモンのフィールドに、鎮魂歌のごとくＢｌｏｏ―Ｄの血の雨が降る。レベルの割に素の攻撃力が低いＢｌｏｏ―Ｄには強者の苦痛の影響も大きいが、アモンのライフはそれ以上に少ない。文字通りの血煙が視界を遮り、その中にアモンの体が消えていった。

「これで……」

精根使い果たしたと言わんばかりのエドが、エコーに声を掛けようとする。だが、その言葉が最後まで続くことはなかった。突如血煙を突き破って伸びた１対の太い腕、鎖に繋がれた黄色い２本の腕が、Ｂｌｏｏ―Ｄの血を無造作に振り払ったのだ。そのまま掌を合わせるようなポーズをとった腕の間に、次第に炎が集まっていく。

「何!?これは……」

アモン　ＬＰ３００

それを見た瞬間、思わず自分の目を疑った。アモンのライフが、まだ減っていない。そしてますます強くなる炎の向こうから、アモンの声が洞窟に反響して聞こえてくる。

「エド。君の犯したミスはたった１つ、僕の２枚の伏せカードのうち運命の発掘の方を

破壊してしまったこと。たったそれだけのこと、だがその致命的なミスがこの結果を生んだんだ。Ｂｌｏｏ―Ｄの存在が、魔神の怒りを呼び起こした。永続トラップ、魔神火炎砲（エグゾード・フレイム）……１ターンに１度手札、またはデッキからエクゾディアパーツまたはその派生形のエクゾディアカードを墓地に送ることで、相手の場のモンスター１体をバウンスする。千の軍勢を一夜にして焼き滅ぼす、魔神の怒りを受けてみろ！」

その言葉をきっかけに、エクゾディアの物であろうその両腕が限界まで溜めていた炎の力を解き放つ。究極のＤの名を関するＢｌｏｏ―Ｄが、僕をあれほど苦しめ行動を縛ってきたエドの切り札が、塵一つ残さず焼き滅ぼされた。

「魔神火炎砲……Ｂｌｏｏ―Ｄの効果の範囲外からの攻撃だと……！」

エースモンスターの喪失に、歯噛みするエド。だが、Ｂｌｏｏ―Ｄの敗北はそれ以外にも思わぬところに影響を及ぼしていた。それまでは血の雨に阻まれて前に進めずその場に立ち尽くしていたエコーが、またふらふらと封印の扉へ近づき始めたのだ。どれほど力を込めても動けない僕ら、そして目の前のデュエルに精一杯で声を張り上げることしかできないエドには一瞥もくれず、エコーがついに扉の前に立つ。

そこからは、突然だった。自らを解放する贄の接近に反応した神が、力づくで封印の向こう側から手を伸ばす。逃げようともせず突っ立っていたエコーの体を無造作に握りしめた巨大な腕が、彼女を掴んだままゆっくりと持ち上がる。

「エコー！・エコー！」

エドの必死の呼びかけにも、もはやエコーは何も応えない……かと思われたけれど、それは違ったようだ。眠るようにぐったりとしていたエコーの目がかすかに開き、か細く途切れそうな声が聞こえてくる。

「エド……貴方を巻き込んでしまい、ごめんなさい。でも私は、愛する人に思いのまま生きて欲しかった……」

「もういい、喋るなエコー！その思いのために君が犠牲になるなんて僕には理解できない！あんなものはその場しのぎに過ぎない、次のターンでは必ず僕が勝つ！だから今ならまだ間に合うはずだ、こちらに戻ってきてくれ！」

「理解できないなら、それでいいの……ただ私と、アモンがわかってさえいれば……私はアモンを愛しているし、アモンも私を愛する人と呼んでくれた、ただそれだけで……だから……」

「エコーッ！」

エクゾディアによく似たその腕の中で、エコーの体が光に包まれ始める。この世界に来てから何回も見てきた光景、敗者が消滅する瞬間と同じものだ。ああなってしまった以上、止める方法を僕は知らない。そんなものを知っていたら、ケルトやオブライエンだって……いや、今はあの２人のことはいい。消えていくエコーの姿を直視していられ

なかったのか、エドがうつむいて目を逸らすのがわずかに見えた。
　そしてそれとは対照的に、アモンの顔が暗い歓喜に歪む。その表情をエコーは最後まで見ることがなかったのが、彼女にとってはせめてもの救いだろう。とでも思わないとやってられない。多分本人は気づいていないだろうが、それほどまでにアモンの笑みは壊れていた。
「ありがとう、エコー。僕の最愛の人。これでたった今から、僕は王となった」
「ふざけるな……」
「うん？」
　その場に膝から崩れ落ちかけたエドが再び立ち上がり、憎しみを込めてアモンを睨みつける。多分今のエドの心の中は、かなり不安定な状態になっているはずだ。何度も同じようなことになってきた僕には、その気持ちがよくわかる。そしてこんな時、何を言っても無駄だということも。
　だけど怒りのパワーは爆発力こそ確かにあるが、反面恐ろしく脆い代物だ。ねじ伏せられる前に勝負を決めないと、厄介なことになりかねない。
「お前が王だと？エコーの命を踏みにじって得たその力でか？そんなこと、この僕が認めるものか！」
「なら、試してみるかい？一応、まだ君のターンは続いているが」

「いいだろう……！僕は魔法カード、デステニー・ドローを発動！手札のディーヒーロー1体を墓地に送ることで、カードを2枚ドローする。バウンスされたＢｌｏｏ―Ｄを墓地に送り、ドロー！」

エクゾディアのパーツのほとんどは、手札抹殺と魔神火炎砲によって墓地にある。おかしい、エドの言った通りアモンのデッキはサルベージ型ではなくサーチ型の【エクゾディア】のはずだ。勝ち筋がまだ残っているとは思えないのに、なぜあんなに余裕があるのだろう。

だがその異常さも、激情に囚われたエドは見過ごしてしまう。尤もそれも無理はない、そもそも僕がそのことに気づけたのだって、こうして身動きひとつとれない状況で第三者として見ているという特異な状況にあったからこそだ。

何も起きないでくれ、アモンのはったりであってくれ。心からそう願うが、同時に嫌な予感が徐々に大きくなっていくのも感じる。

「速攻魔法、サイクロン！魔神火炎砲を破壊する！」

「いい判断だ。このカードは1ターンに1度しか効果を使えないからな」

強力なバウンス能力を秘めたカードが破壊されてなお、平然とした様子のアモン。その様子を見て、嫌な予感が確信に変わった。間違いない、まだアモンは何かを隠している。

「カードを1枚セットし、セメタリーに眠るディバインガイのエフェクト発動！僕の手札が0枚の時にセメタリーの自身と他のディーヒーロー1体を除外することで、デッキからカードを2枚ドローする。デビルガイとディバインガイを除外し、ドロー……そして今伏せた魔法カード、死者蘇生を発動！ダイヤモンドガイを守備表示で召喚し、エフェクト発動！デッキトップの通常魔法、デス・メテオをセメタリーに送る！」

「やった！」

土壇場でのエドの引き、そしてその落ちの良さに思わず声が出る。デス・メテオは発動さえすれば、問答無用で相手に１０００のダメージを与える通常魔法。本来ならばその火力と引き換えに相手ライフが３０００以下の時に使えないというデメリットがあるものの、ダイヤモンドガイの効果ならば発動コストも条件も、その全てを踏み倒して結果だけを利用することができる。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ　守１６００

「さらに僕は、この2枚のカードをセットする。これで次の僕のターンのメインフェイズ時、僕の勝利が確定した。例えお前が本物の王だとしても、この結果を覆すことは不可能だ！」

「なるほどな。確かに通常ならば、この状況はいかんともしがたいだろう……普通なら、な。今の僕はもうこれまでのアモン・ガラムではない、この世界の新たなる王だ。王の

前に、そんな小細工が通用すると思うな！このターンで終わらせてみせよう、光栄に思うがいい。この王の最初の相手を務める栄誉を、お前にくれてやるのだからな。ドロー！」

連続してのドローにより、アモンの手札は既に７枚。だが肝心のエクゾディアパーツは、そのうち３枚が墓地にある。残りの２枚はデッキに眠っているのか、それともすでに手札にあるのか。仮に手札にあったとして、パーツの揃っていないエクゾディアでいったい何をしようというのか。だが、アモンはそんな疑問などお構いなしに更なる行動に出た。

「魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキに眠るエクゾディアパーツ、封印されし者の右足を墓地へ。さらに手札の封印されし者の右腕……僕はこのカードを召喚する」

封印の扉が内側からひしゃげ、右腕がそこから飛び出してくる……だが、その手首はまだ内側の空間から鎖に繋がれており、体の他の部分は出られないようだ。

封印されし者の右腕　攻３００

「何を企んでいるのかは知らないが、ここでその腕を潰せば問題ない！速攻魔法、エネミーコントローラー！僕が選択するのは２つ目の効果だ。ダイヤモンドガイをコストとして、その右腕のコントロールをこのターンのエンドフェイズまで得る！」

巨大なゲームコントローラーがエドの頭上に現れ、２本のコードが伸びてそのうち１

本がダイヤモンドガイに繋がれる。そしてもう1本がフィールドをうねり、蛇のような動きで右腕に迫る。だがそのコードを突然扉から出てきたもう1本の腕、手首の鎖を強引に引きちぎって自由になった巨大な魔神の左腕が空中で握りつぶした。

しかもそれだけにはとどまらず、自分が引きちぎった鎖を振り回すことでもう片方の端にいたディストピアガイの体を束縛し、そのまま軽々と宙に舞わす。縛られたまま周りの壁に何度も何度も叩きつけられたディストピアガイの体から次第に生気が抜けていき、力を失い地面に落ちるまでにそう時間はかからなかった。

「速攻魔法、ディメンション・マジック。僕の場に魔法使い族モンスターの封印されし者の右腕が存在することにより発動条件を満たしたこのカードの効果により、右腕をリリースして手札の魔法使い族、封印されし者の左腕を特殊召喚。さらに追加効果により、ディストピアガイには退場してもらった」

封印されし者の左腕　攻３００

「ディストピアガイが……！だが、僕のライフはまだ４０００ある。いくらモンスターを除去していようと、エクゾディアを狙うデッキで1ターンに４０００ダメージなんて出せるはずがない！」

エクゾディアは他に例を見ないその独特な勝利条件から、他のデッキとは全く違う構築をすることをプレイヤーに半ば強いている。相手ライフがたとえ1だろうと1万だ

ろうとパーツさえ揃えれば勝ちなのだから、相手ライフを削るようなカードを入れる必要がないというのもその1つだ。なのでエドの言葉は確かに真理、何ひとつ間違ったことは言っていない。だが、そう自らに言い聞かせるよう叫ぶたびに、アモンの顔に無知な相手を馬鹿にするような愉悦の色が広がっていく。そしてそれが、ますますこちらの不安感をあおっていく。

「これ以上何もするな、早くターンエンドしろ！」

エドも同じことを感じているらしく、口調こそ強気だが半ば懇願するように叫ぶ。このターン、このターンさえ凌げれば、ダイヤモンドガイとデス・メテオのコンボが成立する。なんとか、エドのライフが残った状態でアモンのターンを終えさせることができれば。

「僕は」

やめろ、これ以上何もしなくていい。今すぐそのカードから手を放すんだ。

「封印されし者の左腕を」

やめてくれ、なぜそんなに笑っているのさ。このままじゃエドが、エドが。

「リリースし、このモンスターを特殊召喚する」

だけど、僕らの願いは叶わない。アモンが手札から1枚のカードをデュエルディスクに置くと、ほんの1瞬の静寂が洞窟を包んだ。そして、何の前触れもなく封印の扉が、そ

の内側から強い力を加えられ弾け飛ぶ。
　そこからゆっくりと、ついにその姿を見せた魔神の名を僕らは知っている。いや、仮にもデュエルモンスターズに触れたことのある人間ならば、誰もがその名を呼ぶことができるだろう。
「エクゾディア……」
「確かに似ている。だが正確には、少し違うな。これこそが僕にもたらされた王の力……出でよ、召喚神エクゾディア！」
　エコーの犠牲により、ついに完全に封印から解き放たれてしまった魔神、召喚神エクゾディア。その腕が、足が、そして頭が、黄金の炎に包まれ秘められた力を解放する。
「召喚神エクゾディアの攻撃力は、僕の墓地に存在するエクゾディアパーツ1枚につき１０００ポイントとなる。そして、僕の墓地には今、5枚すべてのパーツが揃っている」
　召喚神エクゾディア　攻５０００
「バトルだ。先ほどの魔神火炎砲とはわけが違う、エクゾディアの本気を見せてやろう。やれ、魔神火焔砲（エクゾードブレイス）！」
　魔神が両腕を合わせ、再び火炎を放つ。その輝き、勢い、そして火力の全てが桁違いに膨れ上がった一撃を前に、エドが最後のカードを発動させる。
「トラップ発動、聖なるバリア……」

「ミラーフォースか。だが無駄だ、召喚神エクゾディアは、あらゆるカード効果を受け付けない！」

　その言葉通り、ミラーフォースの発動によりエドの前に展開された半透明の壁は、魔神の炎とぶつかった瞬間に粉々に砕け散った。全ての手を使い尽くしたエドの姿が、炎の中に呑まれて見えなくなる。

「うわあああっ！」

　召喚神エクゾディア　攻５０００→エド（直接攻撃）

　エド　ＬＰ４０００→０

「ふう。さてと、本来なら君たちも始末する方がいいんだろうが、残った君たちの中で最も強いのは、十代か。それともヘルカイザー、君の方かな？でもどちらにせよ十代は覇王の力の抜け殻に過ぎず、ヘルカイザーもエドに負ける程度の腕だったか。なら、どちらにもいまさら用はない。なら今日はせっかく僕が王となった記念となる日だ、特別に見逃してあげよう。元の世界に戻るというのなら、温かく見送ってやろうじゃないか。さあ召喚神よ、こんなところに長居する必要はない。やることは山積みなんだからな」

　あのエドが。僕のことを軽く手玉に取ったこともあるほどの実力者のエドが、魔神の

暴力的な力を前にわずか1ターンで敗北するのを、僕らはただ見ていることしかできなかった。もっともプライドの高いエドのことだ、仮に僕が参戦できる状態であったとしても乱入での加勢なんて絶対に許さなかっただろうが。

あとわずか1ターンで勝利がもたらされるというところまで、アモンのことを追い詰めていた。もはや九分九厘、エドの勝利は確定していたはずだった。

だが、それでも、最後に立っていたのはアモンだった。自己犠牲なんかじゃない、できるだけの手段を尽くしただけだ、だから前に走って朋友を救え――――消滅する寸前、エドが残した最期の言葉に従い洞窟から逃げ出す途中でふと振り返ると、少し気になるものが見えた。エドとデュエルしている最中、アモンの左腕はずっと異形のそれだったはずだ。だが逃げ出す僕らを冷たく見るアモンの左腕は、いつの間にか普通の人間の物になっていた。

「何してるノーネ、早く逃げるーノ！」

「は、はい！」

アモンの高笑いをバックに、十代をおぶったまま凄い勢いで走るクロノス先生の言葉に背中を押されるようにしてとにかく走る。幸いにも一本道だった洞窟を抜けて外に出ると、朝焼けの空が頭上に広がっていた。

「朝、か……」

　エドのデュエルを見ているうちに、いつの間にか夜が明けていたらしい。空を見て感傷に浸る間もなく、背後で洞窟が崩れる音がする。洞窟の壁を突き崩し、巨大魔神がゆっくりと立ち上がった。その肩を玉座代わりとして座るアモンが、もう足元の僕らには目もくれずエクゾディアに指示を出す。魔神がゆっくりと歩きだすのを見てようやく我に返り、ばっと振り向くとヘルカイザーと目が合った。クロノス先生たちは恐らく十代をまた寝かしに行ったのだろう、この場からは離れている。
「僕は、アモンを止めてくる。この世界には、これ以上覇王の系譜はいらない」
　言葉の端々にまで覚悟を込め、ヘルカイザーの目を見たまま宣言する。脳裏をよぎるのは、覇王のせいで傷つき倒れ、そして消えていったたくさんの人や精霊たち。
　何か止めてくるかと思ったけど、意外にもそんなことは一言も言わなかった。どれだけの気持ちでこんなことを言ってるのか、察してくれたのかもしれない。
「悪いな。本当は、俺もついていきたいところだが……」
「十代の方も、なにかしらケアが必要だろうしね。それに翔も、あれなんか憑いてるみたいだし……こっちこそ悪いね、厄介ごと全部押し付けてるみたいで」
　そう言うと、ヘルカイザーが微苦笑を漏らす。その表情は、久しぶりに見るヘル化する前のカイザーに近いものだった。
「そんなことを気にしていたのか。あいつらには、俺の方から上手く伝えておく。十代

の奴も、もう少し様子を見てから俺の命に代えても叩き直してやろう。翔には……どうだろうな。もうゆっくり話し合うだけの時間が俺にはない、せいぜい俺の最後の生き様を見せつけてやれるぐらいだ」
「最後の……？それに今、命に代えてもって……」
「清明。俺がアカデミアを卒業する際、なぜお前を卒業デュエルの相手に指名したか、まだ話したことはなかったな」
「ああ、そうだね。確か、僕が勝ったら教えてくれるんだっけ？」
露骨に話を逸らしに来たことには気づいたが、ここで話を逸らすということがどういう意味かを分からないほど僕は馬鹿じゃない。だからあえて、ヘルカイザーの話に付き合うことにした。
忘れない、忘れられるわけがない、目の前の男と僕の卒業デュエル。突然レッド寮にやってきて僕のことを指名し、僕が勝てばその理由を教えてやると言うだけ言って去っていったアカデミアの皇帝。その後の結果は僕の負けだったから、結局そのちゃんとした理由は聞かずじまいだったのだ。
「お前には自覚はないだろうが、不思議な力がある。十代が皆を照らし良くも悪くも影響を与える太陽のような男だとすれば、お前はさながら天の川だ。太陽のように自分から何かしているわけではないのに、不思議と他の存在を引き付ける。流れ星のごとく燃

え盛り空を翔けるわけでもなく、月のごとく1歩退いた位置から皆を照らすわけでもなく。ただそこに自由にいるだけでなぜか周りを巻き込んでいく、宇宙（そら）の鉄砲水だ。一度お前のことを見つけた者の記憶には必ずお前の印象が残り、もう一度見ることができれば不思議な温かさが皆を包む。かくいう俺も、その十代とはまた違った魅力に惹かれてな。それが、あえて十代ではなくお前を……遊野清明を、あの時選んだ理由だ」

僕にはよくわからない。だけど、ヘルカイザーが言うならきっとそうなのだろう。

「少し買いかぶりすぎな気もするけどね」

「自覚はないだろうな。その方がお前らしい。さあ行け、清明。お前は自分の選ぶ通りに、常に自由な存在であることが一番性に合っている。そのお前が決めたのなら、こちらのことはこの俺に任せて存分にやってこい」

そこまで聞いたところで、我慢できずにふふっと笑う。何がおかしい、と問いたげなヘルカイザーに、思ったことを率直に言う。

「ごめん、なんだかちょっと安心してさ。どんなに外面が変わっても、信じる理念が変わっても、やっぱり中身は僕の知ってるアカデミアの皇帝、カイザーそのままだったからさ」

「そう見えるか？」

「うん。もちろんあの時のカイザーと今のヘルカイザーは全然違うさ。だけど本当に奥

の奥、一番奥の芯の部分は何一つ変わってないね。帰ったら吹雪さんにでも聞いてみればいいよ、多分僕と同じことを言うだろうから。それじゃ、ヘルカイザー。またいつか、手合せをお願いしてもいいかな?サイバー・ダークの相手、一度でいいからやってみたいんだ」

「……わかった。ただし、生半可な覚悟で俺の相手が務まるとは思うなよ?」

「お手柔らかにお願いします。じゃあ覇王に続きもう1回、王様倒しての下克上と洒落込んでくるよ」

その言葉を最後にヘルカイザーに背を向け、エクゾディアの背中を目印に歩き出す。

もちろん、一筋縄でいく相手ではないだろう。それでも、ここでアモンを止める必要がある。出来なかろうがなんだろうが、それでもやらなくてはいけないのだ。

ターン１０５　鉄砲水と封印の神

「……アモン！アモン・ガラム！」

一日中エクゾディアを追いかけまわし、アモンに声をかけることができたのはなんと日が西の空に沈もうとする黄昏時だった。カイザーたちと別れたのが早朝だったことを考えるとひどいタイムロスだが、仕方がない。下手にエクゾディアが実体化しているときに勝負を挑んでも踏みつぶされるのが落ちだろうから、アモンがエクゾディアをカードに戻すわずかな隙ができるまで付かず離れずの距離を気づかれないように進むしかなかったのだ。

でも不思議と、その時間を辛いとは思わなかった。アモンだって人間だから必ずどこかで下に降りる時が来るのはわかっていたし、こんな耐久レースごときで音を上げていたらそれこそケルト達に天国だか地獄だかで笑われてしまう。それにそのおかげで、道中見つけた湧き水から水妖式デュエルディスクに水を入れ直すこともできた。

一度眠りにつくつもりだったのか、適当な木にもたれかかって座るアモン。僕の声に反応して閉じていた眼を開き、ゆっくりと立ち上がった。

「……驚いたな。まだ何か用か？エドの仇でも討ちに来たか？」

「覇王は僕の手で倒した。この世界にもう王はいらない、だから今度はアモン、お前の番だよ」

オブライエンの存在はあえて伏せておく。どうせ黙っとけばばれることはないだろうし、それだけのことで必要以上にこっちを警戒してくれるならこちらとしてもその方がやりやすい。

そのことを知っているのは僕らを除くとグラファぐらいだろうが、あの老獪な悪魔のことだ。おおかた自分の息がかかった人間が覇王の支配に終止符を打った程度の大まかなことしか表には出さず、なんとなく美談っぽく纏め上げて流布していることだろう。グラファ側にもオブライエンの存在を表に出すメリットがない以上、わざわざ登場人物を増やす必要はないはずだ。

「なるほどな。それで、わざわざ止めに来たという事か?まったくご苦労なことだ。エクゾディアの力を手に入れるため、僕がどれだけの犠牲を払ったのかは君も見ていただろう?それでもなお、今更僕を止められるとでも思ったのか?僕はこの世界の王となる。それが、彼女にできる最大限の手向けだよ」

「……へぇ。だったらこっちも言わせてもらうけど、僕はこの場で絶対にその覇道を止めてみせる。それが、覇王を倒せばきっと平和が戻ると信じて!こんな僕のために!命を賭けて道を開いてくれた、ケルト達への手向けなんだ!」

できるだけ感情を抑えようと努力はしていた。けれど、いざアモンを目の前にしているとだんだん心の底からこみあげてくるものを抑えられなくなってきて、最終的には声を荒げてしまった。

でもそれは、それだけ僕も本気で怒っていることの裏返しだ。怒っているというより、半ば呆れていると言った方が近いかもしれない。エドと対峙していたときにも感じたが、本当に何の脈絡もなく突然この世界に現れて、ようやく戻ってきたはずのあるべき世界を自分の欲望のためだけに再び消し去ってしまおうとするこの男のことは理解できない。そして、そんなもの最初から理解したいとも思わない。

「君の手向け、ねえ。生憎だが、君の実力はもう知っている。アカデミアではあれだけ何かありそうな様子を見せておいて随分と歯ごたえの無い相手だったから、逆に拍子抜けしたものさ。エクゾディアの肩慣らしとしての役目もエドがやってくれたわけだし、君の挑戦を受けるメリットがないね。それに覇王を片付けたと言っても、オブライエンあっての手柄だろう？君１人の力じゃないはずだが」

「なんでそれを……!?」

挑発の方は聞き流すこともできるが、問題はその後の言葉だ。なんでオブライエンのことを、アモンが知っているんだろう。まさか、あのデュエルをアモンもどこからか見ていたのか。だとすると、アモンの手は思ったより広い範囲に届くことになる。嫌な汗

が流れるのを感じる中そんな流れを変えたのは、僕にとって、そしてそれ以上にアモンにとって予想外な声だった。
「いいじゃないか、受けてあげれば」
「なんだと!?」
「その声……!」
どこからともなく響く声。この声には、聴き覚えがある。プロフェッサー・コブラのもとに忍び込んだ時、姿を見せずに僕の頭の中に直接話しかけてきた謎の声。十代を病的に愛していて、それ以外の全てをどうでもいいと一言で切り捨てた、あの不気味な存在。デュエルエナジーを手に入れた後は砂漠の異世界でも暗躍し、ウラヌスを囮に校舎に忍び込んでゾンビ生徒軍団を生み出したりとやりたい放題やってくれたオレンジ色の人型。
今度はどこに潜んでいるのか、と左右を見回す僕に対し、アモンの反応ははっきりしていた。自分の左腕を何かを見つけようとするかのように憎々しげに見降ろし、鋭い目つきで舌打ちする。
「君、確か前にも何回か会ったよね?フフフ、アモン。この人間はしつこいから、たとえここで撒いてもどうせまた思いもよらない場所から何回でも出てくるさ。なら、ここで彼の気が済むまで相手してやればいい」

「待て、何を勝手なことを！」
「おやおや、王になる人間が1度は勝てた相手からの挑戦を拒むのかい？ボクは少し別件で用があるからね、席を外させてもらうよ。どちらが勝つにせよ、戻ってくるまでには決着をつけておいておくれ」
「この……！」
　煽り言葉を置き土産に、得体の知れない気配が遠ざかっていく。かれこれ3回目の遭遇だというのにまたもや喋りたいだけ喋ってどこかへ行ってしまった「何か」に対してもはや呆然とするしかない僕とは対照的に、いら立ちを隠せないアモンが自身の左腕から僕の方へ視線を移す。
「ふん、まあいいさ。あの化物も、いずれは僕の糧となる。それに、奴の言うことも一理あるからな。遊野清明、思えばお前は確かにしつこかった。アカデミアにいた時からな」
「みんなして人をゴキブリみたいに……んで？デュエル、受けてくれるの？」
「ああ、いいだろう。せいぜい、寝る前の暇つぶしぐらいにはなってもらおうじゃないか」
「オーケイ、子守唄とでも洒落込もうか。永眠前の暇つぶしにね！」
　売り言葉に買い言葉を吐き捨て、ほぼ同時にデュエルディスクを展開する。結果的に

こうしてデュエルを受けさせることに成功したわけだから、今回ばかりはあの人型に感謝しておこう。

「デュエル！」

「先攻は僕か。ディープ・ダイバーを守備表示で召喚！カードを伏せて、ターンエンドだ」

アモンが最初に繰り出したのは、エド戦でも使っていた潜水服に身を包むモンスター。戦闘破壊されたターンのバトルフェイズ終了時にデッキのモンスター1体をデッキトップに置くことができる、明確に手札に加えたいカードのあるエクゾディアにとっては心強いサポートカードだ。

ディープ・ダイバー　守１１００

「僕のターン、ドロー！」

アモンのデッキには今、最低でも2種類の勝ちパターンが存在する。まず最初に、通常通りエクゾディアを手札に揃えての特殊勝利。そしてもう1つ、そのパーツをリリースすることで特殊召喚できる超大型モンスターである召喚神エクゾディアによるビートダウン。あの時のアモンは通常の特殊勝利をエドの機転で妨害された瞬間に召喚神の戦術にシフトしていたが、今目の前のアモンが取ろうとしているのは、どちらの方法による勝利なのか。

いや、もちろん隙あらばどちらも仕掛けようとはしているのだろうが、その2パターンのうちでより優先的に行おうとしているのはどちらだろう。手札にパーツを揃えなくてはならない本家に対し墓地のパーツの種類で攻撃力が変動する召喚神はそのコンセプトから言って真逆の存在であり、どちらかを本命の勝利手段としてもう片方をサブにとどめるような使い方をしない限り中途半端に手札と墓地にパーツが分散するという最悪の状況に陥りかねない。そしてそんなミス、アモンは絶対にしないだろう。

となると、それを知るためにもここはあえてあの誘いに乗ってやるべきか。もちろんリスクは高いけれど、それがわからなくてはこちらも壊獣の使い時が掴めない。完全耐性を持つ召喚神をもローリスクで始末できる壊獣カードも、その枚数には限りがある。召喚神が出てくるまで温存すべきなのか、出てくるモンスターに対して片っ端から使って強引にでも短期決戦を狙いに行った方がいいのか。それがある程度見られると思えば、あえての攻撃も悪くない。

「ハンマー・シャークを召喚、攻撃表示。そしてバトル、ディープ・ダイバーに攻撃！」

ハンマー・シャーク　攻１７００↓ディープ・ダイバー　守１１００（破壊）

伏せカードと共にアモンは沈黙したまま、自らのモンスターが破壊されるのを無表情に見ている。もっとも戦闘破壊されることが仕事のディープ・ダイバーを守ることなどありえないから、あの伏せカードがミラーフォースや次元幽閉のような攻撃反応でない

保証はない。
　あれこれ考えていると、アモンが口の端を歪めて軽く笑った。
「そんなにエクゾディアが恐ろしいか？無い知恵を絞って懸命にこちらの手を読もうとするのは結構だが、せっかく相手してやってるんだ。もっと本気で来てもらわないと、僕も……それにエコーも興冷めだろう」
「この……」
『まあ待てマスター。今の言葉、一理あると私は思う』
「あれ、チャクチャルさんまでそんなこと言うの？ていうか、今まで一体どこにいたのさ」
『その話は後でする、それよりも今だ。だいたい、私だってこういうことはあまり言いたくないぞ。私が口でどうこう言うより、マスター自身が一度痛い目にあった方がよっぽど身につくだろうからな。だが、流石にこれは目に余るぞ』
「……何が？」
　アモンの言葉だけなら、腹は立つけれどまあ挑発のたぐいだと聞き流すことができただろう。だがチャクチャルさんの話は別だ。信用するブレインが不穏なことを言いだしたのだから、その言葉には聞いておく価値がある。
『どうもマスター、あの壊獣を純で使っている間に変な癖がついたようだな。それとも、

これもユーノの魂の影響か？だがおおかた怒りに任せて流されるような、自分本位なデュエルが多かったのだろう？』

「う。それはまあ、その……」

『だろうと思った。もちろん、相手の次の行動を先読みすることが悪いと言いたいのではない。それは使いこなせれば、マスターの立派な武器のひとつとなるだろう。だが問題は、相手を見ずに自分の中だけで思考を完結させていたことだ』

「相手を？」

『そうだ。長々と自分の殻に閉じこもって考えたあげく、やったことはただ殴るだけ。これでは何も考えずに突っ込むのと、結果だけ見れば変わりない。長考が悪いのではなく、その時に相手を、盤面全体を見る視野を失ったのが悪い。しかもそのあげく、出した結論すら空回りする羽目になる。私なら、恐らくエクゾディアパーツをサーチするぞ』

「バトルフェイズ終了時、ディープ・ダイバーの効果発動。僕はデッキから、封印されしエクゾディアをデッキトップに置く」

　チャクチャルさんの宣言と重なるように、アモンがエクゾディアの頭をこちらに見せてからデッキの上に置く。その時になってようやく、僕は自分の作戦の致命的な欠陥に気が付いた。

『そうだ。あのように召喚神やドローソースとなりうるモンスターではなくパーツを選ばれては、特殊勝利を狙うのか召喚神のリリース要因にするのかはわからないままだ。まだ見えないエクゾディアの影に怯むあまりにこのターンはみすみす敵に塩を送ったな、マスター』

なんてことだ。自分の考えにかまけていたばかりに、パーツを持ってくるというごくごく当たり前の選択肢があったことにまるで気が付かなかった。確かにアモンの立場になってみれば、たとえ彼がどちらの勝利方法を軸として考えているにしてもパーツを手札に置く作業は必要不可欠。それなのにこんなことをやらかした僕を見たら、アモンどころかケルトやオブライエン、それにエドにまで笑われてしまう。

もっとよく見るんだ。場を、相手を、この世界全てを。怒りの、そして無意識な恐怖のあまり視野が狭くなっていたのは、あの時のエドじゃなくて今の僕だ。

「ありがとう、チャクチャルさん。もう大丈夫」

『自分を客観的に見られるようになれば、ひとまずは大丈夫だろうな。マスター、確かにあの魔神は恐るべき力を秘めている。だが、そんな一朝一夕の力を手に入れただけでただの人間が王になれるのなら、マスターはあの人間より遥かに年季が上の地縛神官だ。1つの世界などと小さい獲物に拘る程度の王など組み伏せ、その先に進め』

その言葉を最後に、また静観モードに入るチャクチャルさん。天然なのかわざとなの

か、いちいち言い回しが妙に悪役寄りなのが引っ掛かるけど、背中を押してくれたのはよく理解できた。

「僕はこれで、ターンエンド」

アモン　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

清明　ＬＰ４０００　手札：５

モンスター：ハンマー・シャーク（攻）

魔法・罠：なし

「僕のターン、ドロー」

これでアモンの手札には、エクゾディアの頭が加わった。でもまだ最序盤、デュエルはここからだ。

「ふむ。エア・サーキュレーターを召喚する。このカードが召喚に成功した時、手札２枚をデッキに戻すことでカードを２枚引くことができる。だが、それだけではない」

次いでアモンが繰り出したモンスターは、まるで換気扇に手足のついたようなモンスター。その中央を貫いて、１本の鎖が伸びてきた。

エア・サーキュレーター　守０

「攻撃力２０００以下のモンスターが召喚されたことでトラップカード、連鎖破壊（チェーン・デストラクション）を発動。これにより、僕のデッキからさらに2枚のエア・サーキュレーターを破壊し墓地に送る。そしてエア・サーキュレーターは破壊されたとき、1体につき1枚のカードをドローできる」

「デッキ圧縮して2枚ドロー……やってくれるね」

「こんなものではないぞ?どれ、君にもひと仕事してもらおうか。僕は自分の墓地に存在するすべてのモンスターをデッキに戻し、手札から究極封印神エクゾディオスを特殊召喚する!」

アモンを中心に風が渦巻き、彼の着ているマントが大きくはためく。その背後に音もなく、第3のエクゾディアとでも呼ぶべき魔神が現れた。西の空に沈んでいく夕日の最期の残滓に照らされたその姿は、実際エクゾディアとよく似ている……だがよく見ると、その細部はまるで異なっている。違う、このモンスターはエクゾディアじゃない。

究極封印神エクゾディオス　攻0

「な、なんなのさこれ……!」

「彼はエクゾディオス。僕がエコーを招き入れたあの封印の洞窟で、エクゾディアを縛っていた封印の扉を守る番人とでもいうべき存在だ……いや、だったと言うべきか。突然襲い掛かられた時はいささか驚いたが、今ではエクゾディアの封印を解いた僕を主

人と認めたようでね。今では実に忠実なしもべだよ」
　アモンの言葉を肯定するかのように、エクゾディオスが唸る。見上げるほど高い巨神の息吹が、その足元で対峙する僕にまで届き空気が震えた。
「エクゾディオスに装備魔法、ワンショット・ワンドを装備。このカードは魔法使い族の攻撃力を８００アップさせる……バトルだ、エクゾディオス！天上の雷火　エクゾード・ブラスト！」
「攻撃!?」
　攻撃力０なところを見るに効果でエクゾディアをサポートする系のカードなのかと思ったが、普通に殴りかかってくるタイプのモンスターだったらしい。両腕を振り上げてから勢いよく振り下ろすと、それだけで夕焼け空を切り裂いて稲妻が走った。
　究極封印神エクゾディオス　攻０→８００→１８００→ハンマー・シャーク　攻１７００（破壊）
　清明　ＬＰ４０００→３９００
「攻撃力が上がった……!?」
　攻撃が命中する寸前まで、エクゾディオスの攻撃力は強化を含めてもハンマー・シャークより９００ポイントも下回っていた。それを覆す突然の強化に驚愕する僕を満足げに見つめ、アモンがデッキから１枚のカードを引き出して墓地に送りこむ。

「エクゾディオスは攻撃宣言時、デッキからモンスター1体を墓地に送る。そしてこのカードの攻撃力は、僕の墓地に存在する通常モンスター1体につき１０００ポイント上昇する。僕はこの効果で通常モンスター、封印されし者の右足を送ったのさ」
「召喚神……！」
　墓地にエクゾディアパーツを送ることができる能力。それはつまり、アモンのデッキに潜む召喚神の攻撃力を上げる作業に他ならない。だが僕の呟きを聞いて、アモンの笑みはより深くなった。
「確かにそれもある。だがその答えでは５０点、といったところだな。エクゾディオスはエクゾディアに劣るが、だからといって並のカードと一緒にされては困る。エクゾディオスもまた究極封印神の名に相応な力を持つカード……このカードが自身の効果だけで5枚のパーツを墓地に送ることに成功した時、プレイヤーの勝利が確定する」
「5回攻撃すれば特殊勝利……いいね、面白くなってきた。やってやろうじゃん」
「今度は空元気かい？それもいつまで持つことやら。まあいいさ、ワンショット・ワンドの効果発動。装備モンスターがバトルを行った後にこのカードを破壊することで、カードを1枚ドローする。さらにカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」
　究極封印神エクゾディオス　攻１８００→１０００
「僕のターン！」

エクゾディオス……今はまだ攻撃力１０００だが、次のアモンのターンまで残しておけば攻撃宣言と同時にまず間違いなく２０００となり、さらにエクゾディアパーツを墓地に送られる。その特殊勝利能力もさることながら、あまりもたもたしているとたとえこいつを倒すことができてもその後に控えている召喚神の攻撃力も上がっていく。

だとすると、今は最優先でエクゾディウスをどうにかするしかない。リソースの温存なんてダメだ、そんなこと考えている余裕はない。

「僕はエクゾディオスを……」

「させるものか！永続トラップ、虚無空間（ヴァニティー・スペース）を発動！このカードが場に存在する限り、互いのプレイヤーはモンスターを特殊召喚できない！」

「うっ!?」

「あいにく、君の手はわかっている。おおかた壊獣カードを使うつもりだったんだろうが、そう簡単には通さないよ」

手札に存在する壊獣、粘糸壊獣クモグスに指を掛けた瞬間、フィールドが薄闇に包まれた。あらゆる特殊召喚が封じられてしまうこのフィールドでは、特殊召喚による展開がコンセプトの壊獣は機能不全に陥ってしまう。グレイドルによるコントロール奪取も、この手札では不可能だ。

アモンの場に伏せカードはまだ1枚ある。無理に攻撃したところで、何らかの反撃を

受ける可能性の方が高いだろう。なら、もう1ターンの間エクゾディオスを生き残らせることもやむなし、か。

クモグスから手を離してその隣にあったカードを取り、デュエルディスクに置く。地面に湧いたおなじみの銀の水たまりから、いつもより小ぶりなグレイ型宇宙人の幼体のようなモンスターが大きな目をぱちくりさせつつ現れる。

「グレイドル・スライムＪｒ．（ジュニア）を召喚、守備表示」

グレイドル・スライムＪｒ．　守２０００

「さらにカードをセットして、ターンエンド」

アモン　ＬＰ４０００　手札：2

モンスター：究極封印神エクゾディオス（攻）

エア・サーキュレーター（守）

魔法・罠：虚無空間

1（伏せ）

清明　ＬＰ３９００　手札：4

モンスター：グレイドル・スライムＪｒ．（守）

魔法・罠：1（伏せ）

「壁モンスターで守備か。果たして、そんな悠長なことを言っていられる暇を僕が与え

ると思うかな？エクゾディオスでそのモンスターに攻撃……そしてこの瞬間エクゾディオスの効果によりデッキから通常モンスター、封印されし者の左足を送る。僕の墓地にカードが送られたことで虚無空間は自壊するが、これによりエクゾディオスの攻撃力はさらに１０００ポイント上昇する！」

どうやら、初めから虚無空間は1ターン凌げれば十分と使い捨てるつもりだったらしい。躊躇のない攻撃宣言を受けてエクゾディオスが再び雷を放ち、天からの裁きのごとく叩き下ろされたそれがＪｒの不定形の体を焼く。だが、エクゾディオスの攻撃力は倍になったとはいえいまだ２０００止まり。体中から煙を出しながらも、銀のスライムはその衝撃に耐えきった。

そう思った次の瞬間、雷撃の勢いがさらに跳ね上がる。流石にこの衝撃と熱量には耐えきれず、小さなスライムの体が溶け崩れる。

究極封印神エクゾディオス　攻１０００→２０００→３０００

↓グレイドル・スライムＪｒ．　守２０００（破壊）

「Ｊｒの守りが破られた!?」

「言っただろう、暇は与えないと。トラップ発動、奇跡の軌跡（ミラクルルーカス）！このターン対象としたモンスターが与える戦闘ダメージが０になる代わりに、攻撃表示のエクゾディオスはこのターンの間攻撃力を１０００ポイントアップし、さらにモンスターへの2回攻撃が可能

になる！」

「２回攻撃……！」

　先ほどのワンショット・ワンドを装備した時も思ったけれど、どうもエクゾディオス自体には召喚神にあったようなカード効果への耐性が付いていないらしい。その辺も含めてアモンはエクゾディオスのことをエクゾディアに劣る、と表現したんだろうが、耐性がないということはつまり自分のカードを使ってのコンボも可能ということだ。

　こんちくしょう、もっともらしい顔して何が『劣る』だ。確かに単体でのカードパワーでは下回るかもしれないが、見方を変えれば１ターンに１度、通常攻撃しかできない上に完全耐性が邪魔になって貫通能力を付与することも難しい召喚神よりも、この究極封印神はよほど相手にするのが厄介だ。

「ただし奇跡の軌跡のデメリットとして、相手はカードを１枚ドローできる。さあ、引くといい」

「……ドロー！」

　言われたとおりにカードを引く。確かに今の攻撃には耐えきれなかったけれど、Ｊｒの死は無駄にはならない。崩れて溶けた銀の水たまりは消えずにその場に残り、やがて震えたかと思うと再び別の形に盛り上がってゆく。

「Ｊｒは戦闘で破壊された時、デッキからグレイドルを１体特殊召喚できる。僕がこの

効果で呼び出すのは、グレイドル・イーグル！」

グレイドル・イーグル　攻１５００

「後続を残す効果か。しかもそのカードは……だが、むしろ好都合だ。こちらからエクゾディオスの２撃目の的を用意する必要がなくなったからな。エクゾディオスで追撃、そしてこの瞬間、封印されし者の左腕を墓地に！」

「ここで突っ込んでくるの!?……悪いね、イーグル。また頼むよ」

任せておけと一声高く鳴き、黄色の鷹が上空高くに舞い上がる。狙うはただ一点、目の前にそびえ立つ巨神の顔面だ。翼を体にぴっちりと付け、１本の黄色い槍のようにイーグルが迫る。当然その突撃は巨神の腕によりあっさりと払いのけられ、一撃を受けたイーグルの体が空中で銀の水滴となって弾け飛ぶ。

究極封印神エクゾディオス　攻３０００→４０００→グレイドル・イーグル　攻１５００（破壊）

「ぐううっ……！イーグルが戦闘破壊されたことで、効果発動！エクゾディオス、こっちに来い！」

奇跡の軌跡のデメリットにより戦闘ダメージこそ通らないものの、大地を揺るがすほどの雷がこう近くで乱れ飛んでいてはこちらの体にも全く影響がないとは言えない。体の芯からジンジンくる痺れを感じながら、弾け飛んだイーグルの体が銀の雨となって

エクゾディオスに降り注ぐ様を見守る。いかに究極の封印神とはいえそこは耐性を持たないモンスターの悲しさ、銀の液体が浸透していったその額に銀色の紋章が輝いた。

ゆっくりと向きを変え、僕の元へと来る巨神……だが、1歩を踏み出すごとにその全身から神の力が抜けていく。僕の墓地に、エクゾディオスの攻撃力を決定づける通常モンスターはいないからだ。

究極封印神エクゾディオス　攻４０００→１０００

「ターンエンド。これで、奇跡の軌跡による強化も終わる」

究極封印神エクゾディオス　攻１０００→０

「これで構わないさ。エア・サーキュレーターに攻撃、そしてこの瞬間エクゾディオスの効果発動！僕のデッキから通常モンスターのレインボー・フィッシュを墓地に送り、エクゾディオスの攻撃力アップ！天上の雷火　エクゾード・フレイム！」

究極封印神エクゾディオス　攻０→１０００→エア・サーキュレーター　守０（破壊）

先ほどまで僕のフィールドに降り注いでいた裁きの雷が、うってかわってアモンの場にいた換気扇のお化けに叩き込まれる。下級モンスターの攻撃にも劣る程度の威力とはいえ多少はアモンにも衝撃が伝わっているはずだが、当の本人は眉一つ動かさない。

「先ほども説明したが、エア・サーキュレーターが破壊された時にプレイヤーは1枚ドローできる。神の名を持ちながら無様にコントロールを奪われたあげく、唯一の取り柄

の効果すら逆利用されるとはな。所詮はまがい物、この程度が限界ということか」
「はっ、偉そうに……今のセリフだけでアモン、お前の底が知れるってもんさ。本物の王様は、部下に対してそんな口の利き方なんてしないもんだよ」
「だが現に、エクゾディウスは君のフィールドでその無様な姿を晒している。エドといい君といい、どうしてそうこちらの事情に首を突っ込みたがるんだい？あの洞窟で君らが見た光景こそが僕とエコーの愛の形、そしてこれがエクゾディオスと僕の主従関係の形だ。どうこう言われる筋合いはない、それより終わったなら早くターンを終えてくれ」
「何言っても効かないし、聞きやしないわけね。そういうどうでもいいところだけは覇王とそっくりだよ、ターンエンド」
アモン　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ３９００　手札：６
モンスター：究極封印神エクゾディオス（攻・イーグル）
魔法・罠：グレイドル・イーグル（エクゾディウス）
１（伏せ）

「僕のターン。さて、そろそろ遊びも終わりにしようか。封印されしエクゾディアを召喚する」
モンスターを失ったアモンの場に通常召喚されたのは、最初にサーチしておいたエクゾディアの頭部。となると、次の手は読めている。
封印されしエクゾディア　攻１０００
「そしてこのパーツをリリースし、手札からこのカードを特殊召喚。エコー、僕に力を！」
エクゾディアの頭部が揺らめいて消え、その場所に現れたのはエクゾディウスよりもさらに一回り大きな魔神。いまだデッキか手札に眠ったままの右腕のみを残し、両足と左腕、そして頭部が黄金の炎に包まれてその力を解放している。
「その攻撃力は、墓地のパーツの１０００倍……出でよ、究極の魔人！召喚神エクゾディア！」
召喚神エクゾディア　攻４０００
「攻撃力４０００……！」
こちらのエクゾディウスとの攻撃力差は、きっかり３０００。確かに大ダメージは必至だが、幸いこれまでの応酬で僕はまだほとんどダメージを受けていない。自身の効果以外での強化を受け付けない召喚神相手なら、何もしなくてもぎりぎり耐えきれる数値

だ。

だがそれを聞きつけ、アモンが鼻で笑う。

「４０００だと？言っただろう、遊びも終わりにすると。魔法発動、おろかな埋葬！残る右腕のパーツを墓地に送り、エクゾディアは今完全なる姿となる！」

唯一黄金の炎が覆っていなかった召喚神の右腕が、体の他の部分のように光に包まれる。まさにエドを葬ったときそのままの姿が、今度は僕に牙をむいた。

召喚神エクゾディア　攻４０００→５０００

「エクゾディオス、それに遊野清明。君たちの役割はもう終わった。後は、僕の邪魔にならないように仲良く退場していてくれ。エクゾディアで攻撃、魔神火焔砲（エクゾード・ブレイズ）！」

２体の魔神がそれぞれ両手に力を込め、聖なる火炎と天上の雷をぶつけ合う。だが、２つの力が拮抗していたのはほんのわずか、１秒にすら満たない時間だけだった。ジグザグに走る雷撃がみるみるうちに炎に呑みこまれ、そのまま押し切られていく。エクゾディオスの体を火焔の砲撃が貫いたのは、その直後だった。

「……ツー・トラップ発動！」

辛うじて場のカードを表にするのが精一杯だった。逃げる暇もなく襲いかかってきた炎の余波に身を焼かれ、苦痛のうめき声が喉の奥から漏れる。それでも叫び声を上げなかったのは、勝負の最中そんなみっともないことはできないなどという意地ではな

い。口を開いたらその中まで焼かれるという、もっと本能的な恐怖からだった。
召喚神エクゾディア　攻５０００→究極封印神エクゾディオス　攻１０００→１５００（破壊）
清明　ＬＰ３９００→４００
「ほう、これを耐えたか」
「グレイドル・スプリットは……発動後、装備カードに……なって、エクゾディウスの、攻撃力を……５００ポイント、アップさせた……！」
「なるほどな。エクゾディウスは墓地に送られる場合、ゲームから除外される。これでターンエンド……と言いたいところだが、エクゾディアの強大な力にはリスクも伴う。その真の力を発揮できる期間に限りがあるエクゾディアは、毎ターン終了時に墓地からパーツ１枚を強制的にサルベージしてしまう」
その言葉とともに、アモンの背後に立つ召喚神の左腕を包んでいた黄金の炎が消える。これで、今もなお力を解放しているのは下半身と右腕、そして頭部の４か所だ。
召喚神エクゾディア　攻５０００→４０００
「まったく、困ったものだよ。ターンエンドだ」
まだ少しふらつく足でどうにか踏ん張っていると、ふいに体が軽くなった。腕を見ると、みるみるうちに全身をまだら模様に変えていた火傷の後が引いて肌が元通りになっ

ていく。
　こんなことができるのは、僕の知る中には1人……というか1柱しかいない。タイミングよく、その声が頭の中に聞こえてきた。
『これで大丈夫か、マスター？』
「ありがとね、チャクチャルさん。助かったよ」
『あの神聖な炎は、私をはじめとした闇の神の力とは対極の存在。いつまでも放っておくと、マスターの命を保っている闇の力を全て食いつぶしかねない代物だからな。それはそうと……まさかとは思うが、ちゃんと気づいているよな、マスター？』
「もちろん。何がサルベージしてしまう、なんだかね」
　召喚神の攻撃力が下がっても、チャクチャルさんの声から警戒の色はいまだ消えていない。そしてそれは、僕も同じだ。これで召喚神の攻撃力が下がっても、嬉しくもなんともない。
　アモンはこのサルベージ効果をいかにもデメリットだと言わんばかりの口調で説明していたけれど、そんなこと心にも思っていないだろう。もしこれが本当にデメリットなら、強欲な壺だって使うだけで2枚分デッキデスに近づくデメリットカードだ。手札にパーツを5種類そろえれば特殊勝利する本家エクゾディアと墓地のパーツに依存する召喚神は、先ほども考えた通り致命的に噛み合っていないように見える。それでもこ

の2つのギミックを同時に仕込む以上、一度でも墓地にパーツを落とした時点で本家を使っての特殊勝利は考えなくていいものだとばかり思っていた。

でもアモンは、そしてこの召喚神は、そんな単純な考えで読めるほど甘くなかった。エドはアモンのデッキに墓地のパーツをサルベージする方法はないと思っていたが、今の効果を見る限り恐らくはサルベージを使っての特殊勝利も長期戦になった場合の選択肢として視野に入れているはずだ。

短期決戦では召喚神に分があり、かといって長期戦に持ち込めばエクゾディアの封印が解ける。どちらに転んでも隙がないアモンのデッキが、王の名に恥じない代物であることは認めざるを得ない。

「でも僕は負けないね。アモン、確かにお前の道の後ろにはエコーがいるのかもしれないけど、僕の後ろにはもっともっとたくさんの人たちがいる。僕がこの場で戦うために、全てを投げ打った戦士たちの魂がある。だから絶対、後には引けないのさ。ドロー！」

僕の手札には、先ほどは妨害されて出せなかった粘糸壊獣クモグスのカードがある。けれどその対となる、こちらのフィールドに呼び出せる壊獣をまだ引けていない。

それに、今引いたこのカード。これを使えば、単にクモグスを出すよりもなかなか面白いことができそうだ。少なくともアモンの度肝を抜くことはできるだろうし、このタ

イミングで引いたということは、このカード自身も多少なりともそれを望んでいるのだろう。

「よし、わかった。魔法カード、埋葬されし生け贄を発動！僕の墓地からハンマー・シャークを、そしてアモン、お前の墓地から封印されし者の右腕を除外することで２体分のリリースとし、アドバンス召喚を行う！」

「除外か……くだらない真似を！」

そう、除外だ。召喚神の右腕の炎が消え、その攻撃力はさらに下がる。明らかに苛立った様子のアモンを見る限り、どうやらさすがのエクゾディアも除外には弱いらしい。だがそれも無理はない、召喚神も本家も使えるということは、たった４０枚のデッキの中に墓地肥やしとサーチとサルベージの要素がすべて入っているということだ。そのうえさらに除外にまでメタを張っていては、それこそデッキがパンクしてしまう。

僕の６０枚デッキは、ドローカードでどれを引いても十分戦えるという良く言えば精鋭ぞろい、悪く言えば戦略性やコンボ性が低い集団だからこそ成り立っているようなものだ。

召喚神エクゾディア　攻４０００→３０００

「おっと、ここからが本番なんだから驚くのは後にしてもらいたいね。僕が２体のリリースで呼び出すのは、このモンスター……出でよ、レベル８！」

そのカードをデュエルディスクの水の膜に置くと、宵闇の空に輝く満天の星の光が急に薄らいだ。見渡す限りの空を塗り潰すように、巨大な入道雲が湧き上がる。やがて巨大な人型の上半身のような形に落ち着いたその雲の中央がプルプルと震えたかと思うと、巨大な体に相応しい巨大な一つ目がゆっくりと開いた。

そのモンスターを見てアモンの目が驚愕に見開かれたけれど、気づいた時にはもう遅い。

「ここは任せるから、しっかり働いてもらうよ？雲魔物（クラウディアン）―アイ・オブ・ザ・タイフーン！」

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン　攻３０００

「なぜ、お前がそのカードを……！」

無言の入道雲の巨大な目玉に見降ろされながら、アモンが驚きの声を出す。その反応に少し満足したからというわけではないが、お望み通りにネタバラシと洒落込むことにした。と言っても、別にそうたいした話があるわけではない。

「そんなタイミング、ひとつしかないじゃない。エドと戦う前、もういらないとかなんとか言って、自分のデッキを捨てたでしょ？逃げるときには手一杯だったから他のカードは無理だったけど、あのときたまたまこのカードだけが吹き飛ばされて僕の足元まで飛んできたのさ。その時にちょろっとね」

「人の捨てたカードを拾うとは、何とも手癖の悪いことだ」
「僕は貧乏性だからね。それに、この子の声が聞こえた気がしたんだ。もう1度でいいから、アモンのところに連れて行ってほしいって。たとえ捨てられるにしても、それでも最後にもう1回会いたいって」
　これは本当のことだ。エドが倒れ、洞窟から逃げ出そうとしていたあの時、たまたま目の前に飛んできた1枚のカード。それはまるでアモンのデッキそのものが最後の力を振り絞り、このたった1枚を代表として僕に託したように感じたのだ。
　いくらアモンが許せないといっても、そのカードに罪はない。それにこの世界に来た当初はデッキと離ればなれになっていた僕にとっては主人から一方的に別れを告げられ、そればかりか無造作に捨てられたこのカードたちの境遇が他人事とは思えなかった。
　そして今、アイ・オブ・ザ・タイフーンとアモンがこうして対峙している。アモンがどんな対応をするのか、と黙って見ていると、ややあってアモンの肩が遠目に見てもわかるほどはっきりと震えだした。
「ククク。ククククッ、ハハハハハ！」
　どうやら笑いをこらえていたらしいが、抵抗虚しく突然笑い出すアモン。心底愉快そうにひとしきり笑い終えると、僕らの方へあらためて向き直った。しかしその顔には、

いまだ先ほどの笑いの残滓が残っている。

「何を言い出すのかと思ったら、そんなことか。別に僕の捨てたカードを君がどうしようと勝手だが、そんな勝手なことを思われるのは滑稽で、そして心外だな。僕にはカードの精霊の声を聞くような力はなかったが、これだけはわかる。彼らもエコーも同じで、僕のためなら全てを捧げる覚悟はできていたはずだ。ならば僕も遠慮するつもりはない、全てを踏み台としてでも僕の目標、世界を統べる王となる。エコーも、そのデッキも、最終的な存在意義は全てそのための犠牲としての役割に収束するのさ」

何の迷いもなく言い切るアモンを見て、次いでそんな彼をどこか悲しげな丸い瞳で見つめるアイ・オブ・サ・タイフーンを仰ぎ見る。

……ああ、うん。エコーといい雲魔物といい、これだけ好かれているところを見ると、アモンも決してどうしようもない奴ではなかったんだろう。恐らく、昔はそれなりの理想に燃える正しい青年だったはずだ。でなければ、ここまで人望を集められるはずがない。

なのに一体、どこで何が狂ったのか。何がいつからおかしくなったのか。僕にとっては知ったことではないが、頭上でまたたく悲しげな瞳を見ているとこちらまでやりきれない気持ちになってくる。

もう、アモンに対する怒りは消えていた。こんな姿を見ていると、もはやそんなもの

通り越して憐れみしか感じない。頭上の入道雲に合図すると、こちらの意図を察してくれたかのように静かに頷いた。もう、終わりにしよう。

「……デュエルを続けよう、アモン。魔法カード、アクア・ジェットを発動。マジックコンボで水族モンスター、アイ・オブ・ザ・タイフーンの攻撃力は１０００ポイントアップする。これで召喚神エクゾディアに攻撃、パーフェクト・ストーム」

風が吹き、周りの木々がバサバサとせわしない音を立てる。アイ・オブ・ザ・タイフーンには自身の攻撃宣言時、場の雲魔物以外全てのモンスターの表示形式を変更させる効果がある。だが今この場にいるのは、カード効果を受けないためその影響がない召喚神のみ。迎え撃たんとばかりに大地を踏みしめ放たれた炎が風雨を貫いて雲の中心に大穴を開けたのと同時に、暴風が召喚神を薙ぎ倒す……だが召喚神の姿が消えていったのに対し、ちぎれ飛んだ雲は再び空中で何事もなかったかのように寄り集まって元の姿に戻った。

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン　攻３０００→４０００

↓召喚神エクゾディア　攻３０００（破壊）

アモン　ＬＰ４０００→３０００

「エクゾディアは戦闘破壊された時、手札のパーツの数だけドローできる。僕の手札には先ほど回収した左腕が１枚、よって１枚ドローだ」

死してなお、自らの主人のためにドローという希望を繋げようとする召喚神。思えば、召喚神も哀れなものだ。エコーを、雲魔物たちを、そしてエクゾディウスを自分から切り捨てていったアモンに今も唯一従っている、どこまでも封印を解いた者に対して忠実な僕。そう考えるとあの召喚神にも先ほどまでの恐れではなく、ひたむきに付き従う姿へのもの悲しさすら感じる。

「ターンエンド」

アモン　ＬＰ３０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ４００　手札：４

モンスター：雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン（攻）

魔法・罠：なし

「ドロー！」

引いたカードを見たアモンが、明らかに苛立った表情になる。前から持っていた手札を発動し、引いたカードの方は即座に墓地に送りこんだ。

「魔法カード、死者転生を発動！手札を１枚捨て、墓地から召喚神エクゾディアを回収する。そして左腕を召喚し、そのままリリース！復活しろ、エクゾディア！」

召喚神エクゾディア　攻４０００

再び降臨し、アイ・オブ・ザ・タイフーンと睨み合う召喚神。右腕を除く全身を黄金の炎に包みそびえ立つその表情には、エド戦の時には見られなかった確かな感情の色が……あくまでもアモンのために戦おうとする、はっきりとした強い意志が感じられる。なんだろうこの既視感、まさか封印を解く際に、このカードの中にエコーの最期の想いが入り込んだのではないだろうか。馬鹿げた話だけれど、アモンを守るかのように両腕を広げる召喚神の姿が……ある種盲目的ともいえるその献身が、あの時のエコーとだぶって見えた気がした。

そんな考えを、頭を振って追い払う。あながち妄想とも言い難い話ではあるが、どうせ知る由もないことだ。そうしている間に、フィールドではまた動きがあった。無限に続くかと思われた互角の睨み合いも、エクゾディアの左腕から再び力が失われていったのをきっかけに終わりを迎えた。

「エンドフェイズ、エクゾディアの効果により墓地の左腕を回収する……」

召喚神エクゾディア　攻４０００→３０００

悔しげな言葉とともに、デュエルディスクの墓地から吐き出されたカードを手札に加えるアモン。だけど、これは誰にもどうしようもない。召喚神の守備力は０なため、仮に召喚神を守備表示で出せば、もし僕の手札に他の通常召喚可能なモンスターがあれば

それを出して攻撃するだけでアイ・オブ・ザ・タイフーンの直接攻撃が通ってしまう。ゆえに、アモンは召喚神を攻撃表示で出さざるを得ないのだ。エンドフェイズごとに攻撃力が下がる召喚神は一方的に倒されダメージを受けると知りながら、それでも他に方法はない。

「僕のターン。召喚神エクゾディアに攻撃、もう1度パーフェクト・ストーム」

再び嵐と炎がぶつかり合い、先ほどと同じく魔神が地に堕ちる。そしてアモンが、またその死に際に発動した効果でドローを行う。何もかも、ついさっきのターンと同じだ。違うのはアモンの手札の総数と、そのライフの数値。そのどちらも確実に、０へと近づいている。

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン　攻４０００→召喚神エクゾディア　攻３０００（破壊）

アモン　ＬＰ３０００→２０００

アモン　ＬＰ２０００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ４００　手札：５

モンスター：雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン（攻）

魔法・罠：なし

「僕のターン！くっ、またか……！死者転生を発動、手札を1枚捨てることで召喚神エクゾディアを回収。さらに左腕を召喚して、そのままリリースする！」

三度現れる召喚神。だがそれ以上アモンにできる事は何もなく、またも自らの前で場に出たばかりの召喚神が力を失っていく。

召喚神エクゾディア　攻４０００→３０００

「ドロー。アイ・オブ・ザ・タイフーンで攻撃する」

ドローカードは、バブル・ブリンガー。こちらもモンスターがなかなか引けないが、これはデッキの方が空気を読んでアモンのカードであったアイ・オブ・ザ・タイフーンに決着をつけさせようとしているのだろう。だがアモンの方は、純粋に状況打開のカードが引けないようだ。これは無限ループなどではない。アモンのドローによっては、いくらでも違った内容に持って行けたはずだ。だがまるで図ったかのように2体の大型モンスターが激突し、三度魔神が力尽きる。その絵面はまるでただ1体、どこまでも忠実な召喚神のみを除いて自分のデッキにまで愛想を尽かされたように僕の目には映った。

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン　攻４０００→召喚神エクゾディア　攻３０００（破壊）

アモン　ＬＰ２０００→１０００

「ぐううっ……！エクゾディアの効果により手札の左腕を公開し、１枚ドローする！」
ドローしたカードを見て、アモンの顔が歪む。だがそれは歓喜にではなく、格下であるはずの僕に押されているというのにいつまでたってもデュエルの流れを思い通りに修正できない苛立ちの……そしてその奥に潜む、次第に現実味を帯びてきた消滅の可能性に対するかすかな恐怖の表れだ。
「ターンエンド」
アモン　ＬＰ１０００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４００　手札：６
モンスター：雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン（攻）
魔法・罠：なし
「馬鹿な、そんな馬鹿なことがあるはずがない！そうだろうエコー、僕はこの世界の王となってみせる！そのために君のことまで犠牲にして、ようやくここまでやって来たんだ！それを今更妨げる権利など、どこの誰にもない！ドローッ！」
アモンにとって最後のチャンス、ここで退かなければ敗北が確定する状況でのドロー。いつもの冷静さはどこえやら、髪を振り乱して必死の形相でカードを引くアモ

ン。その顔が示したのは、絶望の色だった。
無言で、その場に膝から崩れ落ちるアモン。その腕がまるで見えない誰かに支えられているかのように不自然な動作で動きだし、その引いたカードをデュエルディスクにそっと置く。
「死者転生……」
思わず僕が呟いたそのカードは、このデュエルで3度目の発動となる。再び手札1枚をコストに召喚神が墓地から手札に舞い戻り、やはり不自然な動きで召喚された左腕のパーツを憑代としてフィールドに顕現する。
アモンのそばに寄り添うように、そして庇うように僕の前に立ちふさがった召喚神。アモンが完全に戦意喪失しているところを見るに、あの召喚神自身が意志を持って最後の抵抗に乗り出したのだろう。アモンを守りぬくことも、勝利に導くことも、もう不可能とわかっているはずだが、それでも黙って見ていることはできなかった。そんなところだろうか。
となると、やはりエコー。意識があるかどうかは知らないが、アモンを守りたい、その手助けをしたいという彼女の強い思いだけは、体が消滅した今もあの召喚神の中で生き続けているのだろう。
だが、そんな彼女の最後の意地も、エンドフェイズと共に終わりを迎える。

召喚神エクゾディア　攻４０００→３０００

「……ねえ、アモン。これだけ愛される素質はあったのに、どうしてこんなことになっちゃったんだろうね。説教なんて柄じゃないから長々とは言わないけどさ、１つだけ。そのことに気づけなかったのか、気づいていたのにその大切さに気づけなかったのか。どっちにしろその時点で、人間アモン・ガラムの中にあった王者の素質は、消えてなくなっちゃったんじゃないかな」

僕の声が、彼に届いているのかは知らない。僕はただ、言いたいことを言っただけだ。

「もう終わりにしよう、アモン。アイ・オブ・ザ・タイフーンで攻撃、パーフェクト・ストーム」

雲魔物―アイ・オブ・ザ・タイフーン　攻４０００→召喚神エクゾディウス　攻３０００（破壊）

アモン　ＬＰ１０００→０

「エコー……」

最後に彼が呟いたのは、自分のために最後まですべてを犠牲にした恋人の名前だった。そしてその体が、光となって消えていく。その光の最後の一粒を見送って、僕も

デュエルディスクを片付けた。
「何があったのかなんて興味ないけどさ。本当に、何がいけなかったんだろうね」
「おやおや、君が勝ったのか。意外だね、てっきりアモンがもう少し頑張るかと思っていたけど」
　ぽつりと呟いた言葉に、返事を返すものは誰もいない……なんてことはなかった。一体このデュエルをどこから見ていたのか、どうやら戻ってきていたらしい例のオレンジの人型の声に振り返る。
「ヨハン……？」
　だがそこにいたのはいつものオレンジの人型ではなく、砂漠の異世界で僕が消えた少し後に行方不明になっていたらしいヨハン……のはずだ。きっぱりと断言できなかったは、目の前の存在が本当にヨハンなのか自信が持てなかったからだ。なるほど、確かに背格好もその顔も、ひとつひとつ見ていけばそれはヨハンそのものだ。服装が様変わりしているのも、まあこの世界に来てから着替えたんだろうということで理解できる。
　だけど、まずあの眼だ。僕が知っているヨハンの目は、あんな不敵な光を湛えたオッドアイではなかったはずだ。しかもその全身から立ち上る危険な雰囲気も、とうていあのヨハンと同一人物だとは思えない。
「お前は一体誰なのさ？」

「いやだなあ、気づいているんだろう？いや、君に名乗るのは初めてだったかな？ともあれ、ボクがユベルさ。もっとも、この体は確かにヨハン・アンデルセンの物だけどね。それよりも、あのエクゾディアを倒すとはね。勝者にはボクからのご褒美だ、ボクの城に招待してあげるよ」

そう言うや否やヨハン……いや、ユベルの背後の地面が盛り上がり、石造りの巨大な扉が生えてくる。自分の背丈よりはるかに大きくて重そうなそれを片腕だけで無造作に開きながら、もう片方の手で僕を手招きする。

「さあ、ついておいで」

その言葉を最後に、先に自分が扉に入ろうと背を向ける……その瞬間、突然僕のデッキから1枚のカードが飛び出した。空中で勝手に実体化し、先ほどの召喚神並みに巨大な球体が出現する。さらに問答無用で正面部分のギミックが動き、巨大な砲台が伸びる。

「待って、ウラヌス！あの体はヨハンの……！」

Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉｒ（ディスペア）　ＵＲＡＮＵＳ（ウラヌス）。砂漠の異世界では囮として使われるためだけにユベルに致命傷を負わされ、その後はカードとして僕のデッキに入り込んでいた天王星の主。その経緯を考えればユベルに対してのこの反応も無理はないけれど、奴の言葉を信じるならばあの体はヨハン本人、ならここで消し飛ばさせるわけにはいかな

い。何をしようとしているのかわかったところで止めようとするが、もう遅かった。チャージを終えた砲台から、白い光線がユベルの無防備な背中めがけて放たれる。
「ぐっ……！」
　至近距離で見た光の眩しさに、たまらず腕で顔を覆う。ようやく光が収まって恐る恐る前を向いた時、そこには信じられない光景が広がっていた。
　確かに、攻撃を仕掛けたのはウラヌスの側だったはずだ。それなのに不意打ちを食らったはずのユベル本人は傷一つなくぴんぴんしていて、逆にウラヌスの体を貫通して大穴があいている。まるで、たった今放った自分の攻撃を、そのまま自分で受けたかのように。
「ん、今何かしたかい？さあ、早く入っておいで」
　にやにやと笑いながらこちらを見て、ユベルが扉の中に消えていく。あちらも気になるけど、今はウラヌスが先だ。駆け寄ったウラヌスの巨体からは既に光の粒が出てきていて、何をしたとしても先が長くないことが一目で判別できた。
「ウラヌス……！」
　痛々しいその光景に絞り出すように出した声に、すでに力を失いつつある球体がかすかに反応する。傷口から岩石の欠片をまき散らしながら、転がるようにしてこちらを向いた。だがその目に助けを求めるような色はなく、黙って自分の運命を受け入れようと

している。

『承知した。マスターには私から伝えておこう』

突然チャクチャルさんが一言喋ると、ウラヌスが安心したように眼を閉じる。どうやら、僕にはわからない会話がこの2体の間であったらしい。そのまま唸り声一つあげることもなく、ウラヌスの姿が消えていった。同時に、僕が持っていたウラヌスのカードからも色が抜けて白紙になっていく。

短い間とはいえ、ウラヌスは僕の仲間だ。とはいえあまりにも突然のこと過ぎて、まだ実感が湧いてこない。半ば呆然と突っ立っている僕の頭に、チャクチャルさんの声が聞こえる。

『マスター、伝言だ。自分が今何をされたのか、そこにユベルの持つ力のヒントがあるはずだ。私の二の舞にならないよう、私の死を無駄にせず戦ってくれ。そして、生き延びて自分の世界に帰ることを成功させて欲しい……だそうだ』

生き延びろ。つい先日もどこかで聞いたことのある言葉だと思ったら、あれだ。覇王城近くの闘技場で、最後の瞬間に正気に戻ったケルトが僕に向かって言った言葉だ。

あー。ちょっと、これは、辛いかもしんない。

「……ねえ。僕って、そんなに早死にしそうなことばっかりやってるように見えるかな」

泣き出しそうになるのを堪えるためとはいえ、我ながら随分つまらないことを言った

と思う。見えるも何も、現に何回も何回も死にかかってるというのに。傍から見てるぶんには、危なっかしくて仕方がないのだろう。だけど今更どうしようもない、それが僕の性分だ。

涙の波のピークが過ぎ去り、どうにか気持ちを落ち着かせて歩き出す。行先はもちろん、開きっぱなしのままのユベルがくぐっていったドアだ。どんな仕組みかは見当もつかないが、その向こう側には全く別の空間が広がっている。これが、ユベルの城とやらがある場所か。

ユベルに次元を移動する力があることは、これまでの経緯から想像がつく。となると、僕が元の世界に帰るためには、この先は避けては通れない道だ。デュエルアカデミアからの腐れ縁、そろそろきっちり清算する時がきたのだろう。

意を決して、扉の中の空間に1歩を踏み出した。

ターン１０６　鉄砲水と優しき闇

扉をくぐると、そこには異世界が広がっていた。
まあ、そんな気はしてた。というか見えてたし。そこは先ほどまでの山の中とはまるで違う、かすかに霧のかかった薄暗い世界。周りを見回してみると、どうやら随分と高台にいるらしい。そして目の前には巨大な城らしき建物と、覇王城前の闘技場を彷彿とさせる円形の舞台。これがユベル城、か。
円形の端にはヨハンの体を乗っ取ったユベルが立っていて、何を考えているのかイマイチわからない笑みを浮かべながらきょろきょろと周りを見回す僕を見ていた。
「この場所に人間を招いたのは、君が初めてだよ。もうすぐ十代も来るだろうけどね」
特に返事を求めるという風もなく、ユベルが独り言のように喋り出した。この、僕がここにいるすべての元凶に対して言いたいことは山のようにあるが、いざ対面すると何から話せばいいのかよくわからない。黙ったままの僕にお構いなく、一方的に話し続ける。
「十代が来るまで、もう1時間とかからないはずだ。もし時間がある時なら、暇つぶしに君と遊んであげてもよかったと思っているんだよ？だけど、ボクは彼を歓迎する準備を

しなくてはならないんだ。君はなかなか興味深い存在だけれど、あくまで十代と比べなければの話だからね」

ユベルの話の雲行きが怪しくなってきたあたりから、用心して動きを悟られないようにデッキに手を伸ばしておいた。なるべくさりげなく、ゆっくりと手を後ろ手に組む。自分の演説に夢中なユベルが僕の動きに気づかないでいるうちに、そっとカード1枚を手の中に滑り込ませた。

少し用心しすぎな気もしたけれど、相手はこれまで散々なことをやってくれた大迷惑者だ。そして案の定、その豹変は一瞬だった。

「だから……もう消えな！」

ヨハンを乗っ取ったユベルのオッドアイが突然光ると、足元の床をぶち抜いて巨大な茨が蛇のように僕に襲い掛かる。不意打ちならどうしようもなかったけれど、あらかじめ心の準備をしておいた分だけ僕にもリアクションを起こす余裕があった。

「霧（キングミスト）の王！」

手の中のカードを掲げると、相棒とも呼べる霧の魔法剣士が傍らに実体化する。銀色の剣閃が煌めき、寸断された茨のかけらが足元にバラバラと崩れ落ちた。

だけど、そこまでだ。僕には、ここからさらに霧の王をけしかけて反撃するなんて道は選べない。目の前にいるのはユベルだが、その体はヨハンの物であることを忘れては

いけない。それに、あのウラヌスの不可解なやられ様はまだ記憶に新しい。一体何をどうすれば、あんなことになるのか。その謎を解かない限り、下手に動けない。

「フン……」

ヨハンの体を乗っ取った影響か、それともこのユベル城の世界にそういう作用があるのか。ありがたいことに、ユベルにも今の茨攻撃以外には打つ手がないようだ。問答無用で次元の狭間に飛ばされでもしたら、さすがにどうしようもなかったろう。互いに下手に動くこともできず、舞台を挟んで睨み合う……そんな状態を先に解いたのは、意外にもユベルからだった。

「ボクとしては、このままこうして千日手の睨み合いを続けていてもよかったんだけどね。少なくとも退屈していたうちは、それだけでもそれなりに楽しめたはずさ。でも今言った通り、ボクはこれから忙しいんだ。力づくで消えてもらえないなら、別の手を使うまでさ」

言いながら、ヨハンの体でデュエルディスクを構える。今回はアモンに憑いていた時のように、あの化け物の腕を出すつもりはないらしい。

僕もデュエルディスクを展開させ、首から下げておいた水筒の中身を全部その上に振り掛ける。ついさっきのアモン戦だけでだいぶ水を使ってしまったから、この水筒の分だけでもないよりはマシだろう。これで、あと1戦するぐらいはできるはずだ。

　考えてみるとこれだけ振り回されてきたのに、その張本人のユベルと直接戦うのはこれが初めてだ。もう何も、言うことはない。この長かったユベルとの戦い、その最終決戦と洒落込もう。
「「デュエル！」」
「先攻は僕が貰った。グレイドル・イーグル、守備表示！」
　いつも通りの銀色の水たまりが、素早い動きで空中へはばたく黄色の猛禽に姿を変える。アモンがグレイドルのことを知っていたことを考えると、ユベル相手にも初見殺しは通用しそうにない。ならばわざわざセットするだけ無駄なこと、それよりもユベルがどんな手を打ってくるかを見るとしよう。
　グレイドル・イーグル　守５００
「ターンエンド」
「ボクのターン、ドロー。フィールド魔法発動、アドバンスド・ダーク！」
　まるで分厚い雲でも空にかかったかのように、足元がすっと暗くなる。だがもちろん、そんなものは空のどこにもない。それどころか、見渡す限り太陽なんて始めからこの空間には出ていない。
「アドバンスド・ダークがあるかぎり、ボクの使う宝玉獣は全てＡ（アドバンスド）宝玉獣へと変化する。実際に見せたほうが分かりやすいかな？出ろ、Ａ宝玉獣　アメジスト・キャット！」

ヨハンの体を使う時点でなんとなく予想はできていたが、やはり出てきたのは宝玉獣。場に紫色の宝石……アメジストが現れ、それが弾けてピンク色の雌豹になった。だけど、あのアメジスト・キャットは、僕が知っている彼女とは違う。赤く光る眼に敵意むき出しの牙、そして何よりヨハンの宝玉獣は、宝玉からモンスターになる際に闇の力を放ったりはしなかった。

宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００　地↓闇

「属性が変わった……？」

「そうとも。Ａ宝玉獣は宝玉獣とは違い、全ての属性が闇に統一されている。これも悪くない輝きだろう？ヨハンの記憶によれば、君は以前にも彼に敗北したそうじゃないか。言っておくが、今の僕はそれよりも強い。確実にね。バトルだ、アメジスト・キャット！アメジスト・ネイル！」

しなやかな動きで、音もなく雌豹が迫る。イーグルの効果を知らないのか、とも思ったが、すぐにそんなわけないと思い直した。そうだ、アメジスト・キャットには与えるダメージが半分になる代わりに、直接攻撃が可能となる効果がある。案の定その効果を使っていたらしく、イーグルの上をさらに飛び越えた雌豹の爪が直接僕に躍りかかった。

「くっ……！」

宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ４０００→３４００
「まずは一撃さ。どうだい、あの時よりも痛いだろう?カードを3枚伏せて、ターンエンドだ」
「はっ、冗談。痛いって言うなら、それこそあのエクゾディアやダーク・ガイアの方がよっぽどだったね」
「そうかそうか。なら楽しみに待っているといい、君にも特別にあの痛みを味あわせてあげよう」
言い返すもののユベルはくすくすと笑うだけで、怒った様子もなくさらりと返す。
『あの』痛み、という表現が少し引っかかるものの、どうせこれ以上突っついても何も情報を漏らしてはくれないだろう。
清明　ＬＰ３４００　手札：4
モンスター：グレイドル・イーグル（守）
魔法・罠：なし
ユベル　ＬＰ４０００　手札：1
モンスター：宝玉獣　アメジスト・キャット（攻）
魔法・罠：3（伏せ）

場：アドバンスド・ダーク
伏せカードが３枚。既にフィールド魔法枠には十代戦でも使っていたレインボー・ルインという専用カードがあるにもかかわらず、その上さらにアドバンスド・ダークなんてカードをヨハンが使うとは思えないから、おそらくあれはユベルの手で追加されたカードなんだろう。他にどれだけデッキが組み換えられているのかはわからないが、ヨハンのデッキには確かカウンターカード以外のあらゆる除去カードが入っていないはずだ。となると、あの伏せカードもこちらの妨害目的の可能性は薄いだろう。
「僕のターン！水属性のグレイドル・イーグルをリリースして、手札のシャークラーケンは特殊召喚できる。さらにグレイドル・スライムＪｒ．を召喚し、効果発動。このカードの召喚時、墓地のグレイドル１体を蘇生召喚できる！」
シャークラーケン　攻２４００
グレイドル・スライムＪｒ．　守２０００
グレイドル・イーグル　攻１５００
「モンスターが３体か。エドみたいにＢｌｏｏ—Ｄでも出すのかい？」
無視だ無視、よりにもよってお前がエドの名前を出すなんて、そんなわかりやすい挑発に乗ってやるほど暇じゃない。もっともユベルも今のに乗ってくるとは思っておらず、単におちょくってきただけのようだ。今更言動のひとつひとつに腹を立てていて

は、また視野が狭くなりかねない。気を付けよう。
ただしこの苛立ちの報いは、痛みできっちり受けてもらうとしよう。
「……バトルだ！シャークラーケン、アメジスト・キャットに攻撃！」
無数のタコ足が地面を割りながら進むほどの勢いで伸び、雌豹を締め上げて破壊する。勢い余った足の何本かがそのままユベルに叩き付けられ、砕かれた床から砂煙が起きて一時的にその姿が見えなくなった。
シャークラーケン　攻２４００→宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００（破壊）
「うん？……チッ」
思わず舌打ちしてしまう。煙が晴れて見えてきたのは、まるでぴんぴんした姿でにやにやと笑うユベルの姿だった。どうやら、ダメージは入らなかったらしい。
「アドバンスド・ダークの効果発動。ボクの宝玉獣がバトルして戦闘ダメージを受けるとき、デッキから別の宝玉１体を墓地に送ることでそのダメージを０にする。つまりこのコバルト・イーグルを送ることで、１２００の戦闘ダメージを帳消しにしたのさ。そして、墓地でコバルト・イーグルもまたＡ宝玉獣に変化する」
その言葉通り、コバルト・イーグルのカードをこちらに見せてから墓地に送るユベル。アドバンスド・ダークの効果は墓地にまで及ぶ、ということか。でも、それが一体何の役に立つというのだろう。そこまで急速に墓地を肥やして、ヨハンは何がしたいのだろ

う。

そこまで考えて、1つだけピンとくる名前があった。レインボー・ドラゴンだ。結局砂漠の異世界では僕はあのカードを見ることがないままこの世界に飛ばされたから、それが一体どんなドラゴンなのかは知る由もない。でもあの墓地肥やしの速さから考えると、恐らくはそれがレインボー・ドラゴン召喚の鍵なのだろう。そう考えればあの召喚神エクゾディアと同じようなものだ……だが、今の僕の手札には、あの時墓地のパーツを除外して活路を切り開いてくれた埋葬されし生け贄のカードはない。

僕の疑問をよそに、ユベルの目の前に紫色の宝玉が浮かび上がる。ただしその全体は黒いもやのような闇の力に包まれ、輝きはすっかりくすんでしまっている。

「宝玉獣はフィールドでモンスターとして破壊されても、永続魔法として場に残る。これは君も知っているだろう」

「ああ。でも、アドバンス・ダークの効果はダイレクトアタックには反応しないんだね？行け、イーグル！」

「惜しいねえ、もう少しで今の攻撃も届いたのに。相手モンスターの直接攻撃宣言時にトラップカード、カウンター・ゲートを発動。今の攻撃を無効として1枚ドローし、そのカードがモンスターカードならば表側攻撃表示で召喚することができる。来い、A宝玉獣　エメラルド・タートル！」

緑色のエメラルドが闇の輝きを受けてひびが入り、弾けて亀のモンスターになる。当然といえば当然だけど、エメラルド・タートルもやはり闇の力に飲み込まれているか。

宝玉獣　エメラルド・タートル　攻８００　水→闇

「もう攻撃はできない。これでターンエンド」

宝玉と化してもなお、宝玉獣はプレイヤーをサポートする。それがわかっているからこそ、ここはせめて戦闘ダメージだけでも与えておきたかったのだが。ヨハンの実力にユベルの抜け目なさというか性格の悪さが加わって、なかなか一筋縄ではいきそうにない。

「ボクのターン。出でよ、Ａ宝玉獣　ルビー・カーバンクル！」

さらに真紅の宝玉から、子猫のような小動物の精霊がその姿を見せる。でもルビーは攻守ともに低く、とてもシャークラーケンやＪｒを突破できるほどではない。装備カードで強化でもするつもりなのだろうか。

宝玉獣　アンバー・マンモス　攻３００　光→闇

「ルビーは場に出た時、宝玉状態の宝玉獣を可能な限り特殊召喚できる。ルビー・ハピネス！甦れ、アメジスト・キャット！」

ルビーの尾から放たれた赤い光に導かれ、紫の宝玉が砕けて再び雌豹が現れる。また直接攻撃狙い、だろうか。

宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００　地↓闇

『……いや、違うな。突っ込んでくるぞ!』

「えっ?」

チャクチャルさんの警告も、時すでに遅かった。緑の亀が、真紅の幻想動物が、紫の雌豹が、同時に攻撃を仕掛けてくる。

「バトルだ!エメラルド・タートル、ルビー・カーバンクル、アメジスト・キャットの３体でシャークラーケンに攻撃!そしてその反射ダメージはアドバンスド・ダークの効果によりデッキのＡ宝玉獣、トパーズ・タイガー、サファイア・ペガサス、アンバー・マンモスに肩代わりさせ、破壊された３体を宝玉化させる」

「なっ!?」

しまった。まだ心のどこかに、目の前の相手がヨハンであるという意識があったのかもしれない。少し前の僕以上にモンスターとの絆を大切にし、７体の宝玉獣を家族とまで呼んだ彼が自爆特攻なんて手は使わないだろうと、無意識のうちに思い込んでいたのかもしれない。

後悔してもしきれない中、３体のモンスターが無謀な突撃をしては力尽きて宝玉へ姿を変えていく。だが、その無謀は無駄ではない。宝玉の数が増えていくごとにユベルの笑みは深くなり、デッキからは別の色の宝玉が墓地へ送られる。

そして、ついに場と墓地に７種類の宝玉が出揃った。
宝玉獣　エメラルド・タートル　攻８００（破壊）→シャークラーケン　攻２４００
宝玉獣　ルビー・カーバンクル　攻３００（破壊）→シャークラーケン　攻２４００
宝玉獣　アメジスト・キャット　攻１２００（破壊）→シャークラーケン　攻２４００
「墓地肥やしか……！でも、ユベル！これでお前のモンスターはもういない！次のターンで……」
「期待通りの反応をありがとう、と言っておこうか。でも残念だったね、まだ終わらないのさ。トラップ発動、虹の引力！」
アドバンスド・ダークにより闇に包まれたフィールドから、突然闇の柱が噴き上がる。柱？いや、違う。よく見るとその闇はそれぞれ濃さも色合いも違う７色になっている。赤、オレンジ、黄色……これは、虹の７色だ。闇の虹が天高く噴き上がり、その中央で何かが……恐ろしく巨大な何かが胎動した。
「虹の引力を発動するためには、場と墓地に合計７種類の宝玉獣が存在することが必要となる」
「やっぱり、それでアドバンス・ダークを……！」
「そういうことさ。虹の引力に導かれ、デッキより出でよ！究極宝玉神　レインボー・

ダーク・ドラゴン！」

虹が砕け散り、巨大な竜が宵闇の空に舞う。黒みがかった灰色の体にはそのラインに沿うように７つの宝玉が埋め込まれ、そこから放たれるそれぞれ違った色の光がくすんだ全身と漆黒の翼をほのかに照らしている。これが究極宝玉神、か。まさか本物より先に闇堕ち状態の姿を見ることになるとは思わなかったけれど、そんな姿でさえ本来この竜が持っていたのであろう高貴な美しさ、神々しさは少しも損なわれていない。

究極宝玉神　レインボー・ダーク・ドラゴン　攻４０００

「攻撃力４０００……」

「まだ今はバトルフェイズ、よってこのレインボー・ダークはさらなる追撃が可能！グレイドル・イーグルに攻撃、レインボー・リフレクション！」

「……何を企んでるかは知らないけど、イーグルっ！頼むよ！」

黒き虹の竜の宝玉がひときわ光を放ち、一度後ろにのけぞったレインボー・ダークが口から破壊の閃光を撃ちだす。黄色の猛禽は自分の力を遥かに勝るその一撃から逃げもせず真っ向から立ち向かい、闇の中に呑まれてその偽りの姿が溶けていった。

「うっ……ぐっ……！」

究極宝玉神レインボー・ダーク・ドラゴン　攻４０００→グレイドル・イーグル　攻１５００（破壊）

清明　ＬＰ３４００→９００

エクゾディアの炎に勝るとも劣らないほどのダメージをもろに食らい、一瞬意識が飛びかけるのを辛うじて繋ぎとめる。確かに痛いが、でもこれでイーグルの特殊能力を発動できる。戦闘で破壊されたことでグレイドルの原型である銀色の水たまりになったイーグルが、レインボー・ダーク・ドラゴンに憑依を……。

「いじましい努力だが、やはり死人に口なしさ。アドバンスド・ダークのさらなる効果発動！究極宝玉神がバトルする際、相手モンスターの効果はバトルフェイズ中無効となる！」

「効果無効……？」

その言葉通りに銀色の水たまりを維持していた生命力が失われ、みるみるうちにぐずぐずに崩れて地面の染みとなって消えていってしまう。死人に口なしとは、随分と言ってくれるものだ。

「魔法カード、レア・ヴァリューを発動。君がボクの場の宝玉から1つを選んで墓地に送る代わりに、カードを2枚ドローする。さあ、どれがいいか選んでもらって構わないよ」

「どれにしたって大して変わらないだろうに……エメラルド・タートルを選ばせてもらうよ」

「いいだろう、２枚ドローだ。これでターンエンド」

清明　ＬＰ９００　手札：３
モンスター：グレイドル・スライムＪｒ．（守）
　　シャークラーケン（攻）
魔法・罠：なし
ユベル　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：究極宝玉神　レインボー・ダーク・ドラゴン（攻）
魔法・罠：宝玉獣　ルビー・カーバンクル
　　宝玉獣　アメジスト・キャット
　　１（伏せ）
場：アドバンスド・ダーク

思わぬ追撃により、ほぼ初期値だったはずのライフが１ターンでわずか３ケタにまで削られてしまった。だけど……そんな思考は、突然聞こえてきた声に中断せざるを得なくなった。

「清明！ユベル！」

「十代！」

ユベル城に突然現れたのは、十代とクロノス先生、それに翔。ヘルカイザーの姿が見えないことに対する不安が胸をよぎったが、今はよりにもよってユベルと台詞がハモっ

たことの方が気に喰わない。でも、向こうも向こうで同じことを思ったのかすっごい不愉快そうな顔になるのが見えたから良しとしよう。十代に会えた嬉しさからか、先に苛立ちを抑え込んだユベルがにっこりと笑う。

「ああ、やっと来てくれたんだね、十代……！」

「ユベル！これ以上俺の仲間に手を出すな！」

その声の調子を聞いて、なんだか肩の荷が一気に下りたような気がした。ヘルカイザーが十代にどんな荒療治をしたのかはわからないが、どうやらよほどうまくやってくれたらしい。ここまで力のこもった十代の声は、随分久しぶりに聞く気がする。これならもう、僕が気を揉む必要はなさそうだ。

「もういい、清明。ユベルの相手はこの俺が……」

「まあ待ちなよ、十代。悪いけど今は僕とユベルのデュエル中なんだ、順番待ちなら後ろで並んでなって」

……ただし、心配をやめるのとデュエルの中断は全く別の話だ。意外な答えに言葉を失うギャラリーに、ちょっと振り返って笑いかける。呆然とした顔でこちらを見ている十代と目が合うと、なんだか無性におかしくなった。

だがあいにく、肝心の対戦相手の方はそんなこと欠片も思ってくれていなかったらしい。

「……何のつもりだい？十代が来たのなら、もう君なんかに用はない。特別に今ならとどめは刺さないで置いてあげるから、早くサレンダーするといい」
　この闇のデュエルが日常の世界であのユベルにここまで言わせるとは、一体どれだけ十代との勝負を心待ちにしてきたのだろう。僕から見ても破格の条件での譲歩ではあるが、それでもここは譲れない。キッパリと首を横に振ってみせた。
「そうしたいのは山々だけど、そうも言ってられない理由が２つばかりあってね。まず最初に、僕がここにいるのは僕の意思だけじゃないってこと。ここまで僕を生かし続けて、背中を押してくれた人や精霊たち。辺境の大賢者、ケルト、オブライエン、ジム、三沢とタニヤ、エドにヘルカイザー、グラファ……それに、ウラヌス。どう？パッと思いつくだけでもこれだけいるんだ。名前も知らない、でも僕のために祈ってくれてる人達も合わせると、それはそれはすごい数になるだろうね。そして、その皆が平和を望んでいたし願っている」
「それがどうしたのさ。このボクにお説教かい？」
「まさか。アモンにも言ったけど、説教なんて柄じゃないもんね。でも言ったでしょう、理由は２つって」
　ここでユベルの方を正面切って向き、なるべくふてぶてしく見えるように笑ってやる。これまで散々僕らの生活を引っ掻き回してくれた礼だ、これぐらいの嫌がらせは僕

にも許されるだろう。
「……もう1つってのはね、ユベル。お前が嫌がることをしたりその望みとは真反対に動いてやることが、割と楽しくてしょうがないのさ。だからそう願えば願うほど、絶対十代には替わってやらないって気持ちが湧いてくるね。さあユベル、今の相手はこの僕さ。まだまだ勝負は始まったばっかりなんだ、楽しいデュエルと洒落込もう！」
　ユベル、煽るのは割と得意でも煽り耐性は低めらしい。苛立ち、怒り、不愉快……そういった負の感情を隠そうとすらせず、それがまたこちらの気分を良くさせる。うーむ、歪んでるなあ。きっとユーノの魂のせいだ。全部そういうことにしておこう。
　十代達から見てもしばらくまともに会わないうちに僕はだいぶ変わっていたらしく、止める事すらせず呆然と見守るのみ。
「僕のターン、ドロー！さあ、ここからは反撃と洒落込ませてもらおうか！」
　ギャラリーのおかげで少し調子が出てきたのか、何をするのが最も効果的なのかが見えてきた。せっかく大掛かりな準備に専用サポートまで使って出てきてもらったところ悪いけど、あのドラゴンにはさくっと退場してもらおう。だって攻撃力４０００だもん、馬鹿正直に上から殴りつけられるのなんて霧の王位しか僕のデッキにはいない。
　素直に立ち向かって勝てないなら……他の方法でどかせるしかないじゃない？
「レインボー・ダーク・ドラゴンをリリースしてユベル、お前のフィールドに海亀壊獣ガ

メシエルを攻撃表示で特殊召喚。さらに相手フィールドの壊獣に反応して、僕は手札から壊星壊獣ジズキエルを同じく攻撃表示で特殊召喚！」

「レインボー・ダークを……随分無粋な真似をしてくれるじゃないか……！」

「相手モンスターをリリース!?」

本気でこめかみをぴくぴくさせて怒るユベルに対し、壊獣モンスターに唖然とする十代達。ああ、そういえば十代には見せたことなかったっけか。僕が2回戦ったのは、あくまで覇王であって十代じゃない。全くその時の記憶がないわけではないんだろうけど、じゃあ全部覚えているかといえばまたそれも違うのだろう。侵攻中の記憶や返り討ちにした戦士たちの断末魔とかの、強く印象に残ったことなら思い出せるとかそんな感じなんだろうか。

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

壊星壊獣ジズキエル　攻３３００

「おっと、まだ終わらないよ。さらに僕は、シャークラーケンとＪｒ．の２体をリリースする！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ……アドバンス召喚！出でよ、僕の神！地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）！」

ユベル城を背後に対峙する２体の壊獣。その戦場に、その２体に勝るとも劣らない巨大な体躯を持つ漆黒と紫のシャチがさらに参戦した。地縛神を維持するためには

フィールド魔法が必要となるが、ありがたいことにまさにそのフィールド魔法をユベルが張ってくれている。アドバンスド・ダークにより闇に覆われた大地を憑代に、地縛神はこの世界でその力を解放できる。

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００

「……なるほどね。追い込まれた割に随分自信たっぷりだと思っていたけど、そんな奥の手を残していたのか」

今更気づいても、もう遅い。そう、これこそが僕の、一発逆転を可能とする必殺の布陣。ジズキエルでガメシエルを攻撃すれば１１００ポイントの戦闘ダメージがユベルに入り、さらに攻撃力２９００のチャクチャルさんがダイレクトアタックを仕掛ける。その合計戦闘ダメージは、きっかり４０００……わずか1ターン、手札3枚で完成する逆転のワンターンキルだ。

あとは、この2回の攻撃さえ通ってくれればいい。何もしてくるな、これで全て終わらせろ。ありったけの祈りを込めて下した号令に、まずは機械の獣が咆哮を上げる。

「バトルだ、ジズキエル！ガメシエルに攻撃！」

「ぐっ……！」

壊星壊獣ジズキエル　攻３３００→海亀壊獣ガメシエル　攻２２００（破壊）

ユベル　ＬＰ４０００→２９００

「これで終わりだ！行っちゃって、チャクチャルさん！ミッドナイト・フラッド！」
大気を震わせ、巨大なシャチが口から放つパルスがユベルへと迫る。それが激突する寸前、ユベルがおもむろに自分のデッキに手を掛けたかと思うと上から数枚をわしづかみにし、それを何のためらいもなく目の前に投げ捨てるようにしてばらまいた。
「何を⁉」
地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→ユベル（直接攻撃）
空中に飛び散ったカードが半球状の力場を作り、半透明の壁が地縛神の一撃を阻む。その様子にはっと息を呑んだのは、意外にもこれまでじっと勝負を見ていた翔だった。
「あの動き……まさか、お兄さんの！」
「知っているノーネ、シニョール翔⁉」
「あのユベルの伏せていたカード、あれは、まさか……」
その驚きようを見て、今初めて翔の存在に気が付いたと言わんばかりにユベルが笑う。先ほどの悔しがりもどこへやら、今の防御がすっかり元の余裕と皮肉めいた態度を取り戻させてしまったらしい。
「おや、ヘルカイザーの弟君じゃないか。そうとも、君の予想通りだよ。ヘルカイザーのカード、さっきの記念に１枚貰っておいたのさ。トラップ発動、パワー・ウォール……ダイレクトアタックにより受けるダメージを、デッキのカード１枚につき５００ポイン

ト軽減させる。６枚のカードを捨てさえすれば、今の攻撃もダメージは０だ」
「ヘルカイザーが……!?」
　それで、ようやく分かった。いや、これまでなるべく考えないようにしていた事実を突き付けられた、というべきか。なぜ、ヘルカイザーがここに来ていないのか。ユベルはあの時、アモンから離れてどこに行っていたのか。ヘルカイザーを相手に戦っていたのだとすれば、ちょうど僕とアモンのデュエルが終わったぐらいのタイミングで奴が戻ってきたことにもつじつまは合う。
　そうか、ヘルカイザーが倒されたのか。後で相手してくれるって、約束したのにな。
　……嘘つき。
　いや、悲しむのは後でもできるし、少なくとも今はその時ではない。感傷を一時的に切り捨て、代わりに皮肉を叩きつける。
「……覇王も覇王で手癖悪かったけど、あれもお前譲りだったわけね。悪いね、チャクチャルさん。伏せカードが読めなくて」
『いやいや、気にすることはない。あれで十分仕込みはできた』
「仕込み？」
　なんか、またよからぬことでも企んでたんだろうかこの神様は。返事代わりにくすくすと上機嫌そうに低く笑い、ユベルに注意を向けるように促す。

『ほらマスター、今から面白い物が見えそうだぞ』
「え？」
つられるままにユベルに視線を戻すが、特にさっきまでと変わったところは見られない。何が起きたのか、と改めて問いただそうとしたところで、異変が起きた。
「うっ……？」
ユベルが突然胸を抑え、苦しそうによたよたと数歩前に出る。少しの間何かを堪えるように立っていたが、やがてその体がゆっくりと地面に倒れた。
「え、ちょ、何したのほんとに!?」
『まあ見ていてくれ。すぐに化けの皮が剥がれるはずだ』
いくら意識がユベルの物でも本来あの体は僕らの友人、ヨハンのものだ。それがここまでおかしな様子を見せられるとさすがに心配になってくるが、有無を言わさぬ調子に押し止められてただ見ていることしかできない。僕、十代、クロノス先生、翔。４人が遠巻きに見守る中で、気絶しているヨハンの体からオレンジ色の人型が幽体離脱さながらにふわりと浮き出た。何度も見てきたあの姿、僕が見間違えるはずがない。
「ユベル！」
『よしよし、うまくいったようだな。さあマスター、もう遠慮することはない。次からは勝ちに行くぞ』

「ありがとう、チャクチャルさん。さあユベル、僕はカードをセットする。これでターンエンドだ！」

「やって……くれたね……！」

満足げなチャクチャルさんとは対照的に、これまでで一番憎々しげな怨嗟の声が人型の口から聞こえてくる。思わず身震いしたくなるのを堪えてまっすぐ見返してやると、これまでデュエルエナジーの塊だった人型がさらに変化する。めきめきと音を立てて一対の翼が生え、左腕の肉と骨が飛び出てぎこちなく変形し、腕に直接デュエルディスクを生やしたような形になる。頭が、手が、足が、そして全身が新たに実体化した悪魔の姿を構築し、やがて完成した肉体がその二色に輝く眼をゆっくりと見開いた。

「これが、ユベル……」

そこにいた存在を、なんと形容すればいいのだろうか。まさに悪魔、と呼ぶには少し人間に近く、かといって絶対に人間であるとは言いようがない異形の存在。どちらの特徴も持つがゆえに、そのどちらにもなりきることのできない人型。

そうか、こいつが。これが、ユベルか。

「ボクに１つ、たった１つだけ誤算があったとすれば、それは君のことだと今になって思うよ。コブラが拠点にしていたあの廃寮で。最初に君たちを送った砂漠の世界で。始末する機会はいくらでもあったはずなのに、毎回君は生き延びてきた。その結果がこれ

さ……まさかボクの真の姿を、十代以外に晒さなければならなくなるとはね。とんだ屈辱だよ」

苛立ちや怒りが極限を通り越して1周したのか、ユベルの声は思いのほか淡々としていた。だからこそ、これまで以上に油断できない。真の姿まで引きずりだした以上、もう遊びや不要な挑発を入れるつもりは全くないだろう。本気で、この僕を殺しにくる。でも、僕にだって負けられない理由がある。

「ボクのターン。メインフェイズ開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動。このターンのバトルフェイズを放棄し、さらに墓地から種族の異なるモンスター3体をデッキに戻すことでカードを2枚ドローする。ボクが選ぶのは獣族のトパーズ・タイガー、水族のエメラルド・タートル、ドラゴン族のレインボー・ダーク・ドラゴンだ」

制約こそ多いものの強力なドローソース、貪欲で無欲な壺。バトルフェイズを放棄してきたということは、このターンはまだ仕掛けてこないのだろうか。ただ今引いたあの2枚のカード、なんとなく嫌な予感がする。

その予感は、案の定すぐ現実のものとなった。

「魔法カード、宝玉の恵みを発動。墓地のA宝玉獣2体、アンバー・マンモスとサファイア・ペガサスを宝玉化させて魔法・罠ゾーンに置く」

先ほどの自爆特攻のせいで、すでにユベルの場には宝玉が2つ。さらに2つを追加す

ることで、場には４つの宝玉が闇に包まれている。その４つがそれぞれの色の光を放つと、フィールドの全てが４色の光に包まれた。
「魔法カード、宝玉の氾濫を発動！ボクの場に存在する４種類の宝玉を墓地に送り、フィールドのカード全てを墓地に送る！」
『これは……しくじったな。すまない、マスター。少し離脱する』
「チャクチャルさんは悪くないよ。それより、そんな効果のカードが宝玉獣に……！」
いくらヨハンが除去カードを使わないからと言って、それは宝玉獣のサポートに除去カードが１枚も存在しない理由にはならない。そんなことも考えつけなかった自分の馬鹿さ加減に自己嫌悪を抱きながらとっさに上を見上げると、ジズキエルとチャクチャルさんと目が合った。無理だ、いくらレベル１０を誇る大型モンスター２体でも、フィールド全てのカードを墓地に送る、なんて除去に耐えきれるわけがない。アドバンス・ダークの闇もろともフィールドが光に塗り潰されて上書きされ、再び周りが見えるようになった時には僕の場は空っぽに、そしてユベルの場には３体の宝玉獣がうずくまっていた。
「この効果で墓地に送った相手のカードの枚数まで、ボクは墓地から宝玉獣を蘇生させることができる。君の場に存在したカードは３枚、よってこの３体を蘇生する」
宝玉獣　アメジスト・キャット　守４００

宝玉獣　アンバー・マンモス　守１６００
宝玉獣　コバルト・イーグル　守８００
アドバンスド・ダークが存在しなくなったことで、３体の宝玉獣もまた解き放たれたはずだ……だが貪欲で無欲な壺のデメリットを意識してか守備表示での展開であり、彼らも闇の力から急に解放された影響か、自らの使い手であるヨハン同様気を失ったままで動き出す気配すら見られない。
「さらに魔法カード、浅すぎた墓穴を発動。互いに墓地からモンスターを１体ずつ選択し、裏側守備表示で特殊召喚する」
僕が蘇生召喚させるのは、グレイドル・イーグル。チャクチャルさんを呼び戻したいのは山々だけど、アドバンスド・ダークまで消えてしまった以上この地に地縛神は留まれない。ならステータスが単純に高いジズキエルや守備力３０００のガメシエルもいいけれど、ここで選ぶべきカードはやはりコブラだろう。ユベルは何を蘇生させたのか……宝玉獣のどれかだろうと言いたいところだが、気になるのはあのパワー・ウォール……捨てられた６枚のカードの内容を、僕は知らない。
「ターンエンド。十代、しばらくそこで待っていてくれ。どうやら彼は、どうしてもここで死にたいらしいからね」
「やめろ、ユベル！清明も……！」

何か言いかけたのを手で制し、それよりもヨハンの体を、と合図する。我に返ったクロノス先生が慌てて走り出し、いまだ倒れたままのヨハンを抱え上げて十代のところに戻っていった。

よくわかってるじゃん、ユベル。ただし消えるのは、僕じゃない。

清明　ＬＰ９００　手札：０

モンスター：???（セット）

魔法・罠：なし

ユベル　ＬＰ２９００　手札：１

モンスター：宝玉獣　アメジスト・キャット（守）

宝玉獣　アンバー・マンモス（守）

宝玉獣　コバルト・イーグル（守）

???（セット）

魔法・罠：なし

「お前だ、ユベル。僕のターン、ドロー！」

僕のライフはわずか９００……これは、アメジスト・キャットが効果を使ってダイレクトアタックすればたったの２回、何らかの方法で強化されれば一撃で吹き飛ぶ事も十分ありうる程度の数字でしかない。じゃあ真っ先にそれを……と言いたいところだが、

そうなると厄介なのがあのアンバー・マンモス。あのカードがいる限り、僕からの攻撃は他の宝玉獣に届かない。

とでも、思っているんだろうか。だとすれば、随分と僕も舐められたものだ。

「墓地からトラップ、ブレイクスルー・スキルの効果発動。このカードを除外することで、このターンアンバー・マンモスの効果を無効にする。これで、他の宝玉獣にも攻撃が通る！行くよ、ツーヘッド・シャーク！」

ここで引いたのは、昔から僕が切り込み役として信頼している2つの口を持つ青い鮫。相手フィールドに守備力の低いモンスターが大勢いるなら、まさにこのカードの出番として相応しい。

ツーヘッド・シャーク　攻１２００

「悪く思わないでよ……バトルだ、ツーヘッドでアメジスト・キャットに攻撃！」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→宝玉獣　アメジスト・キャット　守６００（破壊）

「宝玉化能力は使わない。アメジスト・キャットを墓地に送る」

「そして……」

ここで少し言いよどむ。２回攻撃が可能なツーヘッド・シャークは、まだもう１度だけ攻撃が許されている。この２回目の攻撃、どこを狙うべきだろうか。アンバー・マン

モスはあの守備力を抜けないから論外として、コバルト・イーグルなら確実に戦闘破壊できる。でも、あの伏せモンスター……どうにも怪しい。返しのユベルのターンでツーヘッドがアンバー・マンモスに倒されて５００ダメージを受けるのはほぼ確定している。だからライフを少しでも温存しておこうとイーグルは守備表示のままにしておいたけど、これは少し判断ミスだったかもしれない。

「ええい、ままよ！そのセットモンスターに攻撃！」

猛然と突っ込んでいった鮫の牙が、セットモンスターに深々と食い込み噛み千切る。岩石のかけらが大量に飛び散り、何に攻撃をしたのかようやく分かった。

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→???　守６００（破壊）

「あのカード……そういうことか」

「メタモルポットのリバース効果発動。たがいに手札をすべて捨て、カードを５枚ドローする。せっかく姿が変わったんだ、仕切り直しと行こうじゃないか」

ユベルに５枚ドローさせるのは危険だけど、あながち悪いことばかりでもない。というより、むしろ伏せモンスターに攻撃したのは結果的に大正解だったと言えるだろう。なにせ今はこちらのターン、ここで５枚も手札を増やせるのは純粋にありがたい。今の盤面だと正直ジリ貧だったので、ここで何らかの防御札を引ければ後々楽になる。

「カードを伏せて、ターンエンド」

さあ、攻撃して来い。僕が今伏せたカードはグレイドル・スプリット。アンバー・マンモスがツーヘッドに攻撃してきたら、そのままこれで相打ちの返り討ちだ。

だがまるで、そんな考えを読んでいると言わんばかりにユベルが冷笑する。読んでいる？いや、まさか。偶然だ、偶然。きっとユベルも何か、それなりのカードを引いただけだろう。

「ボクのターン。ふふ、ボクを本気で怒らせたお礼に見せてあげるよ。アンバー・マンモスとコバルト・イーグルの2体をリリースして、アドバンス召喚！これこそがボク自身……ユベル！」

そこに現れたのは、もう1体のユベル。悪魔の翼に黒と灰色の体、女性的な顔立ちに不気味なオッドアイ、そして額に開いた第3の目。間違いない、目の前のユベルそのものだ。

だけど目を疑ったのは、そこに示されたある数値だ。

ユベル　攻0

「攻撃力0……？攻撃すれば、ダメージが通る状況だったのに……」

「おいおい、君がモンスターの攻撃力だけしか見ていないのはどうなんだい？あれだけ厭らしいカードを喜んで使う人間の言葉とも思えないな。魔法発動、ジェノサイド・ウォー！」

ジェノサイド・ウォー。効果はまさに単純明快、このターンにバトルを行うモンスターを敵味方問わずすべて破壊するカードだ。でも、それをわざわざアドバンス召喚、それも自分自身を出してから発動した？確かにジェノサイド・ウォーにはメインフェイズ１にしか使用できない制約があるが、それにしたってこのターン使う意味がどこにある？

「何を……」

「愚問だね、もちろんこうするのさ。ボク自身でそのセットモンスターに攻撃、ナイトメア・ペイン！そしてボクは、自身の戦闘により発生するダメージを０にできる」

セットされたままのグレイドル・イーグルにユベルが手を伸ばすと、その目が赤く光る。するとまるで操られているような動きでイーグルが自分から表側になり、ユベルめがけて突っ込んでいった。

「イーグル!?」

ユベル　攻０→???（グレイドル・イーグル）守５００

無理やり突撃を強制されたイーグルが、意識をはっきりさせるためか首を振りつつこちらのフィールドに戻ってくる。なるほど、少しわかってきた。魔法カードによる破壊なら、イーグルは寄生効果を発動できない。それが狙い……いやでも、まだわからない。戦闘を行ったことでユベルの破壊も確定したというのに、なぜ笑っていられるのだろ

う。
「エンドステップ、ジェノサイド・ウォーの効果が発動する。君のグレイドル・イーグルと、ボク自身にこの痛みが降りかかるのさ」
もしかしたら、とも思ったが、特に効果破壊耐性を持つわけでもないらしい。溶け崩れて消えていくイーグルと共に、ユベルがあっさりと自壊していった。
だがその時、フィールドをアドバンスド・ダークよりもさらに濃い闇が包んだ。ますます暗くなっていく闇から、何かおぞましい存在がこちらを見下ろした。
「これは……!」
『それ』を一言で表すならば、2足歩行する双頭の竜といったところだろうか。ユベルと同じ濃い紫色の被膜の翼に、肉食恐竜のそれを思わせる強靭な脚。全身は毛皮と筋肉に覆われ、太い尾が背後にちらちらと見える。
だが、僕がそれを見て寒気がしたのは、そんなよくある身体的特徴からではない。『それ』には眼がある……当然竜の頭部にもそれぞれ2つずつ付いてはいるが、あれが本当に見えているのかは疑わしい。なぜならば、体の中央少し上、首の付け根。そこに、赤く光る巨大な一つ目が鎮座している。自身の巨大な手の中にすら納まるか疑わしいほど巨大なその目が生きている証拠にピクリと下に動き、そこにいた僕を見下ろした。その時そこを通じて見えたのは、冷たく暗い知性の光……そしてそれこそが、僕の寒気の

原因。あれは、間違いない。あれは……ユベルだ。

「この痛みにより、ボクはこの醜くも美しい姿に進化する。デッキより出でよ、ユベル―Ｄａｓ　Ａｂｓｃｈｅｕｌｉｃｈ　Ｒｉｔｔｅｒ！」

ユベル―Ｄａｓ　Ａｂｓｃｈｅｕｌｉｃｈ　Ｒｉｔｔｅｒ　攻０

一体何をどうすれば、まだ辛うじて人型だったあの存在がこんなモンスターに変異するのだろう。それがわからないからこそ背筋が凍り、同時になにか恐ろしい闇の世界が垣間見えた気がした。チャクチャルさんに聞けば、何か教えてくれるかもしれない……いや、やめておこう。いくら僕でも、首を突っ込むべきでない世界があることぐらいはわきまえている。

「カードを2枚伏せる。見せてあげよう、進化したボクの力、この忌まわしき騎士の力を！ユベル―Ｄａｓ　Ａｂｓｃｈｅｕｌｉｃｈ　Ｒｉｔｔｅｒの効果発動、自分のエンドフェイズごとにフィールドに存在する自分以外すべてのモンスターを破壊する！フェロー・サクリファイス！」

「ツーヘッド！……クソッ、仲間？そんなもんがどこにいるって？」

全てを破壊する暴君の力に巻き込まれ、フィールドに残っていたツーヘッド・シャークまでもが破壊される。再びリセットされて誰もいなくなったフィールドを、ユベルがその一つ目で睥睨する様が見えた。

清明　ＬＰ９００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
ユベル　ＬＰ２９００　手札：２
モンスター：ユベル―Ｄａｓ　Ａｂｓｃｈｅｕｌｉｃｈ　Ｒｉｔｔｅｒ（攻）
魔法・罠：２（伏せ）

「僕のターン！」

結局、あのユベルが持つ効果の全貌はまだ不明のままだ。あれだけ大掛かりに攻撃力０のモンスターを出しておいて、まさか肝心の効果が全体破壊のみなんてことはないだろう。最低限、戦闘ダメージを０にする効果ぐらいは受け継いでいるはずだ。

なら、次は戦闘破壊ができるかどうか試してみようじゃないか。

「シャクトパスを召喚！そのまま攻げ……！」

き、と言い切る寸前、これまで感じたこともないほど嫌な予感がして言葉が詰まった。攻撃しようとしていたシャクトパスも、突然固まった僕を気遣うように伸ばそうとしていたタコ足をひっこめる。

その瞬間僕の脳裏をかすめたのは、あのウラヌスの死。自分の攻撃を自分で受けたような不自然な傷痕。そして次に、砂漠の異世界でラビエルから聞いた言葉がリフレイン

する。
『奴は確かに強い、だが同時に、奴は誰よりも弱い。奴の最大の強みはその弱さにこそあり、それゆえもし私が奴と会いまみえることがあれば、奴に対し私は特に敗北するだろう』
　あの時のラビエル渾身のポエム、そしてウラヌスの傷。攻撃力０であるにもかかわらず戦闘ダメージを０にする、噛み合ってはいるがまるで戦闘することを前提としているかのようなユベルの効果。そうか、そういうことだったのか。どうしてあんなに時間はあったのに、今までわからなかったんだろう。
「……やっとわかったよ、ユベル。お前がなんなのか」
「へえ？じゃあ、その推理を聞かせてもらおうか」
「ユベル、お前の能力は反射。戦闘ダメージだけを跳ね返すのか、攻撃そのものを跳ね返すのかまではわからないけど、とにかく攻撃を仕掛けた瞬間僕にその痛みが降りかかる。それも自分から攻撃した場合には発動しないけど、相手に攻撃された時なら使うことのできる、ね。違う？」
「……いつ気づいた？」
　にやにや笑いをひっこめ、スッと真面目な表情になって問いかけるユベル。あの反応から言って、やっぱりそういうことなんだろう。

「むしろ今まで気が付かなかった僕が馬鹿だったんだけどね。でも不用意にウラヌスの攻撃を、よりにもよって僕の目の前で反射して見せたのはまずかったね。あの時ウラヌスは命を賭して、僕に最大限のヒントを与えてくれたんだ」

「あの時か。君が絡むとどうも判断ミスが多くなるな。だが、今更それに気づいたところでなんになる？」

忌々しげに吐き捨てるが、確かにその言葉は間違っていない。だけど、このカードを使えば話は別だ。謝罪の意味を込めてシャクトパスをちらりと見ると、覚悟を込めた目でコクリと頷き返してくれた。ごめん、シャクトパス。

「バトルが無理なら、こうするまでさ！魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！フィールドのモンスター全てを破壊し、互いの場に壊獣を1体ずつリクルートする！」

「破壊効果か……ならばトラップ発動、安全地帯！この効果によりボクは相手の効果の対象にならず、さらに相手の効果と戦闘によっては破壊されない！」

「くっ……でも、シャクトパスが破壊されたことでリクルート効果はこのまま発動する！出て来い、粘糸壊獣クモグス！雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！」

まさか、こんなところで完全にミスだと思っていたシャクトパスの召喚が生きてくるとは思わなかった。なにも破壊できなければそれで終わりだが、1体でもモンスターの破壊ができさえすれば、妨げられた壊獣の眠りでデッキの壊獣を呼び起こすことができ

る。

粘糸壊獣クモグス　攻２４００

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００

「生き残るのは勝手だけど、それなら無視しておけばいいもんね。バトルだ、サンダー・ザ・キング！クモグスに攻撃しろ！」

サンダー・ザ・キングの３つの頭にそれぞれ光が集まり、３本のブレスが螺旋状に絡み合いながら打ち込まれる。だがその瞬間、フィールドに風が吹くのを感じた。それだけなら別になんてこともないが、風の勢いはあれよあれよという間に強くなっていき、立っているのもやっとというぐらいの暴風となってフィールドを駆け廻る。

「これは!?」

「トラップ発動、邪神の大災害。相手モンスターの攻撃宣言時、場の魔法、罠をすべて破壊する。君のその伏せカードも、ボクの安全地帯もね」

「安全地帯も!?そんなことをしたら……！」

安全地帯は強固な体制をモンスターに与えるが、その反面自身が場を離れた時に対象モンスターも道連れにする欠点を持つ。それをわかってて僕の伏せカード１枚を除去しにくるとは考えにくい……だがいずれにせよ、こちらの攻撃を止める理由はどこにもない。大蜘蛛は雷撃を浴びて爆発四散、その余波がユベルを襲う。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００→粘糸壊獣クモグス　攻２４００（破壊）
ユベル　ＬＰ２９００→２０００
「……」
ダメージは通った。ユベルも、半ば自滅に近い形で破壊された。さあ、次はなんだ、何が来る。
「本当に、大したものだよ。ボクを本気で怒らせただけでなく、ここまでボクに本気を出させるとはね」
闇の向こうから聞こえてくるユベルの声は、やはり余裕たっぷりで。やがて見えてきたその『ユベル』は、さらに禍々しさを増していた。
基本的な姿形は第二段階がベースだが、そこに込められた力は先ほどの比ではない。翼の数はさらに増え、首の付け根からは竜の頭に加えもう１つ、山羊のような角を持った悪魔の首が生えた。両膝には無作為に辺りをねめ回す捕食者の瞳が開き、次なる犠牲者を探すかのように光っている。
だがそれより何より目を引くのは、胸の位置にできた顔……そう、顔だ。馬鹿馬鹿しいほど巨大な３つの目に、その下の鼻。口からはご丁寧に牙まで覗いているとパーツひとつひとつは人間離れしているものの、でもあれは最初のユベルと同じ。正真正銘、人間の顔だ。

「いいだろう、もうボクも出し惜しみはなしだ。これがボクの、終焉にして究極の姿。第二段階の僕がフィールドを離れることでのみ特殊召喚できる、もうひとつのユベル……ユベル―Ｄａｓ　Ｅｘｔｒｅｍｅｒ（ダス　エクストレーム）　Ｔｒａｕｒｉｇ（トラウリヒ）　Ｄｒａｃｈｅｎ（ドラッヘン）！」

ユベル―Ｄａｓ　Ｅｘｔｒｅｍｅｒ　Ｔｒａｕｒｉｇ　Ｄｒａｃｈｅｎ　攻０

「ターン……エンド」

手札、場、墓地。駄目だ、これ以上はどこを見ても、何も打っておける手がない。このユベルもこれまでと同じく、攻撃された時にしか反射できないモンスターなら……そんな淡い考えが浮かぶも、すぐに頭を振ってそれを打ち消した。きっと無理だろう、このユベルはこれまでとは格が違う。

それを裏付けるように、全ての力を解放しきったユベルが体中の目見開いて睨みつける。すると先ほどのイーグルよろしく、サンダー・ザ・キングの体が操られるように動きだした。全身に力を込めてもがきながらのの抵抗もむなしく、振り上げられた３つの首に雷の力が溜まってゆく。

「深き悲哀の竜よ、サンダー・ザ・キングに攻撃しろ。この瞬間モンスター効果によりボクへの戦闘ダメージは０となり、さらにバトルによってボクは破壊されない」

わずかな沈黙の後、３本のブレスが強制的に放たれた。しかしそのどれもが敵を捕らえることができずにユベルの前で霧散し、代わりにユベルの双頭の竜が同時に火を放

つ。そのうち1本がサンダー・ザ・キングの体を焼き尽くし、もう1本は僕めがけてまっすぐに飛んできた。逃げ……られ、ない、か。

「そしてこのダメージステップ終了時、ボクの効果が発動する。戦闘を行ったモンスターの攻撃力分のダメージを君に与え、そのモンスターを破壊する効果がね」

ユベル―Ｄａｓ　Ｅｘｔｒｅｍｅｒ　Ｔｒａｕｒｉｇ　Ｄｒａｃｈｅｎ　攻０

↓雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００

清明　ＬＰ９００↓０

膝の力が抜けて立っていられなくなり、その場に倒れる。不思議と、怖いとは思わなかった。この世界であれだけの相手を消滅させてきたのに、今更自分が消えるからといってそれを拒否するのはいくらなんでも虫がよすぎるというものだ。そもそも僕は本当なら、もう3年も前に死んでいるはずの身。それがあれだけ全力で戦って、その上で負けたんだ。負けたという結果自体に不満はあれどデュエルそのものに悔いはないし、そのリスクも受け入れたうえで戦っていた。

それにここで僕が倒れても、まだ大本命の十代が残っている。きっと十代なら何とかしてくれるだろう、そんな甘えもあったかもしれない。遠くでその十代が何か叫んだ気

がするけど、何を言ったのかはよく聞こえない。それでも消滅の影響で早くもぼやけかかってきた視界に、彼が走り寄ってくるのは見えた。
「清明！」
「よっ。悪いね十代、まーたヘマこいたよ」
「何言ってるんだ、馬鹿野郎！」
　あらら。あまり深刻になってまた面倒なことになられても困るからできるだけ軽く退場しようと思ったのに、どうやら逆効果だったらしい。重くなっていく体をどうにか動かして、肩をすくめて笑ってみせた。十代の肩に手を置き、その目を正面からまっすぐに見る。
「やっぱりヒーローの真似事は、僕には少し荷が重かったのさ。駄目だねー、やっぱり……でもまあ、できるだけのことはやっておいたさ。後は本職に任せるから、絶対生き残ってよ。親友」
　まだ何か、最後にユベルに捨て台詞のひとつでも言ってやろうかとも思ったけど、残念ながらそれ以上は口が動かなかった。
　あれだけやりたい放題に暴れまわった割には、意外なほどあっけなく。こうして僕の存在は、この精霊世界から消え去った。

ダークネス・カウントダウン
ターン１０７　冥府の姫と変幻忍者

河風夢想の朝は早い。もとより眠りの浅い彼女にとって早起きはいつものことだったが、ここ数日はそれがより顕著になっていた。その日も、まだ太陽が昇るか昇らないかというほどの時間にアカデミア女子寮特有の豪奢なベッドの中でぱっちりと目を覚ましていた。

そのまま上半身を起こすとまるで何かを探しているかのように周囲を見回し、ややあって時計を見つめて時間を確認してからため息をついた。

「……はあ」

昨日もまた、彼は帰ってこなかった。今日は、今日こそは、帰ってくるだろうか。それはか細い、何の根拠もないただの希望でしかない。それでも、それだけを頼りにするしかなかった。でもその希望も、ここ数日は維持し続けるのに限界が来ようとしている。それがわかっているからこそ、彼女はもう一度ため息をついた。

２時間後。すっかり出てきた太陽の光を浴びつつ、制服に着替えた彼女は寮を出た。朝食はまだだが、どうせこの時間ならば『彼女』があの場所にいるはずだ。まさか拒否

はされないだろうから、そこでご相伴に預かればいい。誰ともすれ違うこともなく――

――当然だ、今はアカデミアも臨時休校で、しかもまだ朝早い時間なのだから――

――がらんとした本校舎に入ると、勝手知ったるある教室への道を辿って行った。案の定、他の教室がすべて電気が切られているのに対し、その場所だけはドア越しに光が漏れている。

ひとつ。ふたつ。軽いノックをすると、どうぞ、と声が聞こえたので扉を開け中に入る。明るい電気の下でエプロン姿の少女がこちらを見て呆れ顔半分、笑顔半分といった表情で軽く手を振るのが見えた。

「いらっしゃいませ、河風先輩。洋菓子店『ＹＯＵ　ＫＮＯＷ』、デュエルアカデミア支店にようこそ。とはいっても今日も開店休業ですから、そう大したものは出せませんよ？」

「おはよう葵ちゃん、ってさ。今日もおじゃまするからね、だって」

洋菓子店、ＹＯＵ　ＫＮＯＷ。かつては遊野清明が学校内でトメさんからもらった材料を使い、実家がケーキ屋であるというスキルをフルに生かし勝手に始めた小遣い稼ぎだったものを、何をどうアカデミア側にねじ込んだのか2年の初めに使わない教室を丸々借りることに成功し、万丈目グループとのコネまで使い冷蔵庫付きの調理場と食事スペースまで完備させて堂々と始まった商売である。裏を返せば、この元教室はレッド

寮の彼の部屋以外で最も遊野清明という存在を感じることのできる場所だ。
それもあって彼女は毎日ここに通い、そのたびに葵はそんな彼女をこうして出迎える。おそらく葵も、彼がいつまでも帰ってこないことでダメージを受けているのだろう、そう彼女は分析している。ただいつまでもその傷跡を引きずり、半ば機械的にここにやってくる河風夢想とは違い、葵・クラディーはその現実と自分の心に折り合いをつけ、その上で彼が大切にしていたこの店の一員として掃除をし、空気を入れ替え、こうして毎日店番をしに来ているのだろう。その芯の強さこそが、彼の良き相棒としてこの店を回してきた葵の強さなのだから。
そして、そんな強い彼女のそばにいることで自分を誤魔化し、自分も強くなったかのような錯覚の中に身を置こうとしている自分の弱さに今日も自分が嫌になる。仮に彼女がここにいてくれなければ、明日行こう明日行こうとずるずる引っ張った挙句いつまでも足を運ぶことはなかっただろう。まだ彼のいない日常に割り切れていない自分にとって、この場所に居続けることはあまりにも辛すぎる。
「……？どうかしましたか？」
「あ、ううん。なんでもないよ、って」
「そうは見えませんけどね。少し待っててください、どうせ今日も朝食まだですよね？」
ぼうっと葵の横顔を見たまま立っていたことに気づき、心配そうに覗きこむ彼女に笑

いかけてから手近な椅子に座る。肩をすくめて調理場に引っ込んだ彼女が、ややあって３つのお盆を器用に持って戻ってきた。今日のメニューは白米に味噌汁、焼き鮭に浅漬け。日本人の朝食と聞いて何となく誰もがイメージするような、けれど実際にこのメニューを毎日作るのは結構骨が折れるあれだ。

１つを夢想の前に置くと、もう１つの同じメニューが載ったそれを正面の机に置く。最後の１つはなぜか少し離れた机に置き、戻ってきて夢想の正面の席に座る。どちらが先に言いだすでもなくほぼ同時に両手を合わせて「いただきます」と呟いてから箸を取った。葵はこういう時には最初に味噌汁を一口飲んでから他に手を付けるタイプだが、夢想はまず浅漬けから口に運ぶ。今日もその法則に従い一口齧るが、すぐにその目を丸くした。

「美味しい……！だって。葵ちゃん、これもあなたが作ったの？ってさ」

混じりけ無しの本気の発言だったが、どうやら葵にとってはあまり嬉しい発言ではなかったらしい。苦虫を噛み潰したような顔になり、いやいやと言った様子で自分も浅漬けを口に入れる。

「……ええ、確かに、味は、間違いないですね」

その引っかかる物言いに少し首を傾げた後、ふと彼女はあることを思い出した。そういえば前にも、このいつだってハキハキと毒を吐く少女が妙に歯切れの悪くなった時が

ある。その時も、彼は笑って彼女に付いていったっけ……そこまで思い出したところでまた明後日の方向に飛びそうになった思考をどうにか引き戻し、頭に浮かんだある可能性を確かめる。

「お姉さんかな、だって?」

「……わかりますか」

「前の時と同じ顔してるから、ってさ」

明菜・クラディー。夢想自身はまだ会ったことがないが、葵の姉だという。良くも悪くも規格外な人だという話は目の前の葵にも、そして彼にも聞いていたので彼女も名前だけは知っている。そして、その読みは当たったらしい。

育ちがいい彼女には珍しく、うんざりした顔で浅漬けを箸で指しながら語りだした。

「今朝起きたらタッパーに入ったこれが、姉上直筆の便箋たっぷり6枚分の私宛てラブレターと一緒に私の部屋の冷蔵庫に入ってました。私寝る前鍵かけたはずなんですけどね、どこから入ってきたんでしょうね。だからたぶん、今もこの辺のどこかにいますよ姉上。わざわざこの島まで来て、手紙だけ置いて帰るなんてあの人がするはずありませんから」

諦め顔で淡々と語る葵に、まさかそんなことはあるはずないだろうと言おうとする夢想。

なにしろ今は生徒が異世界に行ったっきりという異常事態の真っただ中、海馬コーポレーションの全技術を尽くしてこの島は完全に外の世界から隔離されている。食料はこれまでの業者との取引を一時的にストップして海馬コーポレーションが自社ヘリですべてを取り仕切り、手紙を送る連絡船は完全に停止させられた……そんな甘いものではない。インターネットからも完全に遮断され一切の情報の送信が不可能になり、妨害電波のせいで島の外には電話１本繋がらない。こんな状況で、いかに生徒の家族といえど第三者がこの島にやってこれるはずがない。だが、そんな彼女の口から言葉が出ることはついになかった。いきなり天井の一角、排気口が内側から取り外されたかと思うとそこから人間の頭が飛び出したのだ。

「おー、葵ちゃんがお姉ちゃんのことそこまでわかってくれてたなんて！ゆうべは可愛い寝顔も見れたし、もうお姉ちゃんこれだけで葵ちゃん成分補給できて１０年は戦えるよ！」

「……ほら、わかりますか河風先輩。今この人天井裏から出てきましたよね。こういう人なんですよ」

「え、えっと……初めまして、ですって、さ……？」

「はーい、はじめまーしてっ！私の葵ちゃんがいつもお世話になってるね、明菜・クラディーですっ！」

入学以来初めて見せるほどひきつった笑顔で、突然天井裏から物音ひとつ立てずに降りてきた金髪の女性……明菜の方を見ようともしない葵に、さすがの夢想もただ挨拶をする程度しかできなかった。だが明菜の方はそんなことにもお構いなしに夢想の方を向いて明るい笑顔を見せ、その手を握ってぶんぶんと上下に振る。その表情や髪の色、全体の雰囲気こそ全く違うものの、こうして並んでいると明菜と葵は顔のパーツひとつひとつはどれもよく似ており、さすが姉妹という印象を抱かせる。

「……姉上、その辺でやめてあげてください。河風先輩が困っちゃってるじゃないですか」

「えー？」

そう言いながらもしぶしぶ手を放し、一歩下がったところでようやく放置されたままの3つ目のお盆の存在に気が付いたらしい。またもやパッと表情を明るくすると、反射的に1歩下がった妹に喜色満面でずいっと詰め寄る。

「葵ちゃん葵ちゃん、あれって葵ちゃんの手料理!?あれ私食べていいの!?」

「……いらないなら下げますよ」

「いやったあ！ありがとうマイラブマイシスター！いっただっきまーす！」

意外にも、と言うべきか、さすが葵の姉、と言うべきか。あれだけ大騒ぎしていた人間と同一人物とは思えないほどきちんと椅子に座り、手を合わせてから箸を取った明菜

が真っ先に手を伸ばしたのは、いまだ湯気を立てている味噌汁の器。そんなところも姉妹なんだなあ、と見ていると、再び自分の朝食に手を付けながら葵が姉に話を向けた。
「それで、姉上。一体今度は何しに来たんです？というか、今かなりがっちり遮断されてるのによく入って来れましたね」
「ああ、そのことね。そうなんだよ葵ちゃん、お姉ちゃんもうすっごい苦労したんだから。ここ最近急に電話しても繋がらなくなっちゃったから、もしかしてまた反抗期にでもなったったのかなって思ってさ。なら今会いに行ったらまた葵ちゃんが反抗期の時の可愛い可愛いすね顔が拝めるかもって思うと、もうお姉ちゃんいてもたってもいられなくって」
　その発言に、何も言わずに形のいい眉をひそめる葵。話以上に凄いお姉さんだね、という夢想の視線をどうとらえたのか、補足するようにポツリと呟いた。
「姉上は中身こそこんなのですが、あらゆることに対してとんでもなく有能な化け物なんですよ。その姉上がここまで言うのなら、常人には突破は不可能ですね。海馬コーポレーションが何を考えているかはわかりませんが、本気でこの島と外を隔絶したがっているのは確かなようです。でも人間が消えた以上いつまでも隠し切れるものでもないでしょうし、この先どうするつもりなんでしょうね」
「待ってるんじゃないかな、だってさ。きっと……きっと、またいつもみたいに厄介ごと

を全部片づけて帰ってくるから。それまで時間稼ぎしてるんだよ、って」
　きっと帰ってくる。むしろ自分に言い聞かせるようにそう言うと、思ったよりもずっと大きな声が出た。その突然の感情の高ぶりには正面の葵が目を丸くし、少し離れた席の明菜も箸を止めて夢想に目を向けたが、一番驚いていたのは当の本人だった。
　そんな様子を見て何事か思案したのち、明菜がふと箸を置いた。ごちそうさまでした葵ちゃん、と手を合わせ、いつになく真剣そうに青い……ではなく正面の夢想ににじり寄る。
「ねえねえ河風ちゃん、なんでそんなに元気ないの？お姉ちゃんが可愛い妹の友達のよしみで相談乗ってあげようか？」
「え？いえ、私は大丈夫です、って」
「そうかな？なんだか今にも心が折れちゃいそうに見えるけど……もしかしてお腹痛い？」
　一応そこまでは真面目な顔で聞き耳を立てていた葵も、最後の一言にはガクッとつんのめった。曲がりなりにも自分からシリアスに持ち込んでおいてからの、そのあまりといえばあまりの言葉に入学以来どこぞの先輩のせいで無駄に鍛えられたツッコミとしての本能がつい彼女に口を滑らせてしまう。
「何先輩みたいなこと言って……あ」

「先輩？ああそうそう、清明君。そういえばあの子どこ行ったの？また来たらお茶しようねって約束してたからずっと探してたんだけど……あれ？」

地雷を踏んだ。そのことに気づいたのは、ほぼ姉妹同時だった。清明の名が出た瞬間、さっきまで辛うじて普通に受け答えしていた夢想の目から生気が消えたのだ。うかつだった、一見元気そうでもかなりまいってるのはわかっていたはずなのに、と自責する葵となんだかわからないが清明の話題はまずかったらしい、と察した明菜が、咄嗟のアイコンタクトを交わして慌てて話題を変える。

「あ、えーっと、そういえば葵ちゃん、最近お勉強は頑張ってるの？お姉ちゃん気になるなー！」

「ええ、そうですね！もっとも、ここ最近は休みですが！」

「へぇー、お休みなんだ！いいなぁー、お姉ちゃんもお休み貰って一日中葵ちゃんの顔眺めてたいのになー！」

「いえ、そんなにいいものでもないですけど……いえ姉上、この話はやめましょう」

すんでのところでこのままこの話題を続けていては話を変えた意味がなくなることに気づいた葵が、寸前でストップをかける。少なくとも、これ以上夢想の目のハイライトが消えていくのはかろうじて食い止められた。

そこで困ったのが明菜である。昨日島に来たばかりの部外者である彼女にはまだ事

態の全貌が掴めておらず、そのため一体どんな話題なら問題ないのかがよくわかっていない。そこで何か話題の種になるものでもないかと左右に素早く目を走らせ、たまたま目に付いたものは葵……ではなく、その腕に付いたデュエルディスクだった。
「そうだ、河風ちゃん。お姉ちゃん、河風ちゃんがデュエルするところ見てみたいな」
「デュエル、ですか？」
たとえどん底の気分でも、その一言には反応するのがデュエリストの性。わずかにハイライトを取り戻した夢想に、満面の笑みで頷いてみせる。
「うんうん。ほら葵ちゃんも、準備して」
「あ、私がやるんですか？姉上、前回はデッキにデュエルディスクまで用意して、ルール覚えてから来てたじゃないですか」
「言ったでしょう、ここに来るのに苦労したって？私1人で警戒網抜けてくるだけでもすっごい苦労したんだから、あんな大きな機械持ってくる余裕なかったんだもん」
頬を膨らませて拗ねる姿はとてもこの中で最年長の女性がやっていい仕草と呼べるようなものではなかったが、少なくとも似合ってはいたことは間違いない。もし、私がこんなことをしたら？姉の様子を見た葵の脳裏にそんな考えがチラリと頭をかすめたが、そんな考えはすぐに追いやられた。いや、よそう。葵・クラディーは気がふれたと思われるのがオチだ。

「なんで浅漬け持ってくる余裕はあったんですか……まあいいですけど。河風先輩、どうですか?その気分でないなら、無理に始めなくても」
「ううん、いいよ。始めようか、ってさ」
意外にもしっかりした声でそう微笑むと、若干生気を取り戻した顔でデュエルディスクを起動させる夢想。その回復の早さに驚くと同時に、葵の心にも強敵を前にした高揚感が隠しようもなく湧きあがってくるのを感じた。
結局、この学校に……デュエルアカデミアに通うことを選んだ時点で、私も河風先輩も、そういう人種なのだろう。なにをさしおいてもデュエルが大好きで、カードに触っていることが何よりも気晴らしになる、そしてそれはいつだって変わらない。
「では河風先輩、手合せ願います」
「うん。それじゃあ、デュエルと洒落込みましょう?だってさ」
いつの間にか清明から移ったいつもの口癖に少しだけ反応するも、また地雷を踏むのはさすがの葵もごめんなので特に何も言わないことにした。恐らく今のは、本人も完全に無意識で発した言葉なのだろう。
「「デュエル!」」
「先攻は私が頂きます。黄昏の忍者―シンゲツを召喚です」
どこからともなく吹き込んだ風に数枚の木の葉が渦を描くように舞い、その中心に右

腕が２本あるかわり左腕の無い異形の忍者がその２本の右腕で印を結んだ体勢で現れる。

黄昏の忍者―シンゲツ　攻１５００

「あっ！それ、それ私のあげたカード！葵ちゃんずっと使っててくれたんだねお姉ちゃん嬉しいよー！」

「姉上、申し訳ないですが少々静かにしていただけると」

「ちぇー、黙って見学してまーす。えへへ、でも嬉しいな。私のプレゼント、ずっと持っててくれたんだ。えへへー」

「あーねーうーえー？」

「はーい。そんな怖い顔しなくてもわかったわよー」

どうにか姉を黙らせ、改めてカードに向き直る葵。あの姉の前で当の本人から貰ったカードに先陣を切らせては当然こんな反応になるであろうことに考えが至らなかった数十秒前の自分に心の中で舌打ちするが、気づいていたからといってやることが変わったわけではない。目の前の相手はあの学園最強との呼び声も高い、公式記録全戦全勝を誇る『無双の女王』河風夢想だ。

それも、あの目を見ればわかる。あれはさっきまでの腑抜けた様子を微塵も感じさせない、相手を倒すことだけを考えた戦士の目だ。いちいち私情を挟んでいては、食らい

つくことさえ難しい。
「さらにカードを2枚セットで、ターンエンドです」
「シンゲツだけ出してエンドなんてずいぶん静かだね、ってさ」
「お気遣いなく。河風先輩の強さがどれほどのものかは、私も身に染みてよくわかっていますから」
「じゃあ、私のターンだね、ってさ。私は、ワイトプリンセスを召喚。このカードが召喚した時、デッキからワイトプリンス1体を墓地に送るってさ。さらにこの瞬間、墓地に送られたワイトプリンスはデッキに眠るワイト、ワイト夫人を1体ずつ墓地に呼ぶよ」
　ワイトプリンセス　攻１６００
　お姫様ファッション、お坊ちゃん風、そしてクモの巣の張った喪服に紫色のローブ。様々な服を着ているものの、どれも中身は肉片1つ残っていない動く骸骨だ。その骨が入り乱れ入り混じり、ゆっくりと積み上がっては消えていく。
「魔法カード、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動するってさ。墓地に存在するアンデット族、ワイトとワイト夫人の2体を素材に、融合召喚！冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い……冥界龍　ドラゴネクロ！」
「早い……！」
　突如として無双の背後に現れる、固く閉ざされた冥界の門。だが、それを縛り付ける

鎖が突如弾け飛んだ。内側から開いた扉から数多の霊魂と共に、冥界に潜む龍にして夢想の忠実なるしもべ……ドラゴネクロがその身を現世に滑り込ませる。

「バトル。ドラゴネクロ、攻撃だって。ソウル・クランチ!」

「ですがそれは、通しません!シンゲツ!」

葵の号令に従い、黄昏の忍者がその2本の片腕で新たな形の印を組む。すると周りの空気が瞬時に凍り付き、シンゲツの体を中心に氷の網が張り巡らされてドラゴネクロを、そしてワイトプリンセスを縛り上げる。

「トラップ発動、機甲忍法フリーズ・ロック……このカードは私の場に忍者が存在し、相手が攻撃を宣言した瞬間をトリガーとして発動します。これにより河風先輩の攻撃は無効となり、さらにバトルフェイズも強制終了。またこのカードと私の忍者がフィールドに残っている限り、フリーズ・ロックにより相手モンスターは表示形式の変更ができません」

早速仕掛けられた後攻ワンターンキルを辛うじて防いだ、そう思ったのもつかの間、安堵の吐息すら吐かせる暇もなく夢想が追撃に動く。氷の網に全身を縛られ封じ込められたかに見えたドラゴネクロの瞳がいきなり輝き、大きく開いたその口から闇の炎がフィールド中を焼き尽くしにかかる。

その炎に炙られ、フリーズ・ロックの氷の網にわずかな緩みが生まれる。ドラゴネク

ロの巨体は動けずとも、それよりずっと小さなワイトプリンセスがドレスをばたつかせながらもその網から抜け出た。
「葵ちゃん、トラップ１枚じゃあ私は止められないよ、ってさ。速攻魔法、月の書を発動。フリーズ・ロックにチェーンしてドラゴネクロを裏側守備表示にすることで、フリーズ・ロックのトリガーとなった『ドラゴネクロの』攻撃は『フリーズ・ロックの効果で』無効にならず、したがって攻撃を無効にした後で発生するバトルフェイズ終了効果は適用されないからね、だってさ」
「効果の抜け道をついてきましたか……さすがに一筋縄ではいきませんね」
「ありがとう、って。でも、ワンターンキルは躱されちゃったけどね。続けてバトル、ワイトプリンセスでシンゲツに攻撃」
　ワイトプリンセス　攻１６００→黄昏の忍者―シンゲツ　攻１５００（破壊）
　青い　ＬＰ４０００→３９００
「シンゲツは破壊された時、デッキから別の忍者をサーチする力を持ちます。私がこの効果で加えるのは、機甲忍者アースのカードです」
　シンゲツをここで失ったのは痛手だが、このターンはこの程度の戦闘ダメージで済んだだけ良しとしよう。そう自分に言い聞かせ、新たな光の忍者を手札に加え入れる。
「なら私はこれで、ターン……」

「ではエンドフェイズに永続トラップ、明と宵の逆転を発動します。このカードは1ターンに1度手札から光または闇の属性を持つ戦士族を捨てることで、デッキから同じレベルでその対となる属性を持つ戦士族を1体手札に加えます。このターンでは光属性でレベル8の銀河騎士（ギャラクシー・ナイト）を捨て、デッキから闇属性レベル8の黄昏の忍者将軍―ゲツガを選びましょう」

「機甲忍者アース、それにゲツガ……なるほどね、やるじゃない、ってさ。いいよ、私はこれでターンエンドだって」

手札に加わった2枚のカードから、早くも次のターンに何が起こるのかを察する夢想。とはいえサーチしたカードを隠すことは不可能、ここで動きが読まれるのは仕方がないと本人も割り切っている。

葵　ＬＰ３９００　手札：3
モンスター：なし
魔法・罠：機甲忍法フリーズ・ロック
　　明と宵の逆転
夢想　ＬＰ４０００　手札：3
モンスター：???（冥界龍　ドラゴネクロ）
　　ワイトプリンセス

魔法・罠：なし

「私のターン！」

「頑張れ葵ちゃー……はーい、わかったってばー」

またしても集中を削ぎに来た姉を睨みつけて黙らせると、もう1度このターンにやることを頭の中でおさらいする。まずは、下準備からだ。

「このターンも明と宵の逆転を使います。今度捨てるのは闇属性レベル４の忍者マスター　ＨＡＮＺＯ（ハンゾー）、サーチするのは光属性の……じゃあ、成金（ゴールド）忍者にしておきましょうか。そしてサーチも終わったところで魔法カード、貪欲で強欲な壺を発動です。デッキトップ１０枚を裏側で除外し、カードを２枚ドローします……ふむ、これですか。まあいいでしょう、悪くないです。相手フィールドにのみモンスターが存在する時、手札の機甲忍者アースを特殊召喚することができます」

機甲忍者アース　攻１６００

「さて、これでこちらの準備は整いました。場の忍者を素材としてアドバンス召喚する際、このカードはリリース１体で出すことが可能です。お出でませ葵流忍術、その扇の要！黄昏の忍者将軍―ゲツガ！」

三日月をあしらった兜をかぶる、鎧姿の忍者の頭領。その攻撃力はわずか２０００と、自身のリリース軽減能力を計算に入れてもなお低い……だがこのゲツガ、その真の

力は単純な数値などではない。

「ゲツガの効果を発動！攻撃表示のこのカードは１ターンに１度、墓地に眠りし忍者２体を場に呼び戻すことで守備表示にすることができます！甦れ、葵流の忍者軍団よ！」

ゲツガが自らの手にしていた槍を頭上で回転させた後地面に突き刺すと、大地が裂けてその割れ目から２体の忍者が音もなく飛び上がる。それを見たゲツガは重々しく頷き、最前線より１歩退いた位置から戦局を見定めんとばかりにその場にどっしりと座り込んだ。

黄昏の忍者将軍―ゲツガ　攻２０００→守３０００

黄昏の忍者―シンゲツ　攻１５００

忍者マスター　ＨＡＮＺＯ　攻１８００

「河風先輩相手にいまさら言う必要もないでしょうが、私の場に忍者が戻ったことでフリーズ・ロックの表示形式変更不可の能力が復活していることをお忘れなきよう。さらにＨＡＮＺＯは特殊召喚に成功した時、デッキから新たなる忍者を加えることができます。２体目のシンゲツをサーチし……では、バトルです。シンゲツで裏側守備表示のドラゴネクロに攻撃！」

２本の片腕にそれぞれ忍者刀を握りしめた黄昏の忍者が駆け、振るわれたその刃が見事に竜の首を落とす。だが冥界の龍の生命力は、やはりこの世ならざる力を持ってい

た。切り落とされた首は落下する前にシンゲツの体を捉え、その牙が忍者の体ではなく、その魂を食いちぎった。

黄昏の忍者―シンゲツ　攻１５００→???（冥界龍　ドラゴネクロ）守０（破壊）

「ドラゴネクロの効果発動。ドラゴネクロと戦ったモンスターはその魂を抜き取られ、肉体は死ぬこともできずただ現世に留まり続ける、ってさ。シンゲツと等しいレベル、攻撃力を持つダークソウル・トークンを私の場に特殊召喚する見返りに、貴女のシンゲツの体にはもう防御を行う魂は宿っていない、ゆえにその攻撃力は０になる、だってさ」

ダークソウル・トークン（黄昏の忍者―シンゲツ）　攻１５００　☆４

黄昏の忍者―シンゲツ　攻１５００→０

「ええ、わかっています……ですが、まだ私のバトルフェイズは続いています。ＨＡＮＺＯでワイトプリンセスに攻撃！」

「なら、ワイトプリンセスのさらなる効果を……うーん、やっぱりいいかな、ってさ。その攻撃は通すんだって」

「……？」

含みのある言い方に何かあると思いつつも、攻撃が通るのならば何も問題ないと気持ちを切り替える。ＨＡＮＺＯの投げつけた手裏剣は見事に骨のお姫様を撃ちぬき、骨の体を土に還した。

忍者マスター　ＨＡＮＺＯ　攻１８００→ワイトプリンセス　攻１６００（破壊）
夢想　ＬＰ４０００→３８００
「葵ちゃんがダメージいったー！……もう、いいじゃないそんな怖い顔しなくっても！お姉ちゃんに可愛い可愛い妹の応援ぐらいさせてってば！」
「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドですっ！」
普段では絶対見ることのできないであろうムキになって怒る葵というレアな絵面に、夢想の口元にも自然と笑みが浮かぶ。だが幸か不幸か、姉の方を向いていた彼女には気づかれなかったようだ。
「ふふっ、私のターン、ドロー。私はダークソウル・トークンをリリースして、アドバンス召喚するって。出でよ、龍骨鬼！」
龍骨鬼　攻２４００
無数の人骨を組み合わせてできた骨の鬼。その巨体が一歩を踏み出すと、体を構成する骨がべき履きと割れる不気味な音が鳴り響いた。だがそんなことにもおかまいなしに鬼が上半身を大きくのけぞらせ、次の瞬間その口から火炎弾を吐き出した。
「バトル。龍骨鬼でシンゲツに攻撃、ってさ」
当然、その狙いはシンゲツ。というよりも、シンゲツ自身の効果により他の忍者への攻撃が不可能となっているこの状況では、シンゲツを狙うしかない。もっとも、彼女に

とっても他のモンスターを狙うつもりはなかったのだが。
　ともあれ、この攻撃が通れば大ダメージが入る。だがそんな攻撃を通すつもりは葵にはないし、正直なところ攻撃を仕掛けた夢想の方もここでダメージが通るとはまるで期待していなかった。彼女がそこまで甘い相手なら、先ほどのターンを凌ぐこともできずこのデュエルにも早々にけりがついていたはずだ。
　となれば、恐らくはあの伏せカード。おそらく、あのカードの正体は……。そしてその読みに反応したかのように、にやりと笑った葵が１枚のカードを表にする。
「そんな単調な攻撃、通しませんよ?.トラップ発動、忍法　変化の術！」
　もはやその目に光もなく、生きることも死ぬこともできずただその場に立っているだけの木偶と化したに思われたシンゲツの体から、いきなり白い煙が立ち上がる。全身がその煙に包まれてもまだかすかに見えるそのシルエットがうごめき、変形し、新たな忍者装束を織り上げてゆく。
「変化の術は忍者１体をコストに、そのレベルプラス３以下のレベルを持つ昆虫、鳥獣、獣族モンスターを特殊召喚します。私はレベル４のシンゲツをコストとし、お出ませ、レベル７……黒竜の忍者！」
　煙が晴れた。そこに立っていたのは、漆黒の装束に身を包んだ１人の忍者。だが見よ、その足元を。電灯に照らされ地に伸びたその漆黒の影……その形は、本当に人間の

物だろうか？４つ足の獣が、眼前の獲物に飛びかからんと筋肉に静かな力を込めている、そんな形をしていないだろうか？

黒竜の忍者　攻２８００

「これからは形勢逆転ですよ、河風先輩。せっかく始めたこのデュエル、どうせならその無双の女王の名前も返上していただきましょうか」

「その恥ずかしい名前、別に私が言い出したわけじゃないんだけどなあ、ってさ。でも、ここは攻撃を続けさせてもらうよ。龍骨鬼で改めてゲツガに攻撃、だってさ」

龍骨鬼の攻撃力では、ゲツガの守りを打ち崩すことはできない。それは互いによくわかっている。だが、龍骨鬼には効果がある。自身と戦闘を行った戦士族または魔法使い族を、その結果に関わらず破壊する効果が。シンゲツの退場は確かに大ダメージこそ防いだものの、同時に攻撃から身を呈して忍者を守るシンゲツの盾を失ったことに他ならない。何の制限もかかっていない今、再び吐き出された火球がゲツガに迫る。

「それが単調だと言っているんです。黒竜の忍者の効果発動、百獣忍法ハイド・プレデター！私の場から忍者モンスターのＨＡＮＺＯと忍法カードのフリーズ・ロックをコストとして墓地に送り、その龍骨鬼をゲームから除外します！」

黒竜の忍者の足元の影が突然本体とは無関係に動き出し、文字通りに地を這う４つ足の獣が龍骨鬼に飛びかかる。その姿がすっぽりと影の中に入り込むと、骨の鬼が底なし

沼のようなその影の中へ沈み落ちていった。
「また腕を上げたね、葵ちゃん。だったら私は、カードを1枚セットしてターンエンド」
「お褒めに預かりまして。このエンドフェイズに、このターンも明と宵の逆転を使わせていただきます。先ほど加えた光属性の成金忍者を捨て、デッキから2体目のＨＡＮＺＯを手札に」
夢想がいつになく攻めあぐねる中で、着々とデッキを回していく葵。切り札たるドラゴネクロもすでに堕ち、墓地のワイトもいまだ肥えているとは言い難いこの状況だけ見れば葵の圧倒的優位だが、まだまだここで気を抜くわけにはいかない。
葵　ＬＰ３９００　手札：3
モンスター：黒竜の忍者（攻・変化）
　　黄昏の忍者将軍―ゲツガ（守）
魔法・罠：忍法　変化の術（黒竜）
　　明と宵の逆転
夢想　ＬＰ３８００　手札：2
モンスター：なし
魔法・罠：1（伏せ）
「私のターン！ゲツガを攻撃表示にし、再び効果発動！甦りなさいＨＡＮＺＯ、そして成

金忍者！」

再び将軍が立ち上がり、その槍で大地を割って光と闇の忍者をフィールドに呼び戻す。

黄昏の忍者将軍―ゲツガ　守３０００↓攻２０００↓守３０００

忍者マスター　ＨＡＮＺＯ　攻１８００

成金忍者　守１８００

「特殊召喚されたＨＡＮＺＯの効果により、デッキから機甲忍者エアーを手札に加えます。そして闇の誘惑を発動、２枚ドローの後先ほどサーチした２体目のＨＡＮＺＯを除外します。よし、うまく引けましたね……成金忍者の効果発動！手札からトラップカード１枚を捨て、デッキからレベル４以下の忍者をさらに特殊召喚します！忍法　影縫いの術をコストにお出でなさい、女忍者ヤエ！」

女忍者ヤエ　攻１１００

成金忍者が小判を１枚頭上に放り投げると、その小判が爆発して中から緑色の髪をしたくの一が現れる。マフラーをなびかせ印を組むと、フィールドに小型の竜巻が起きた。その風に流され、夢想の場に唯一残っていた伏せカードが空高く巻き上げられる。

「女忍者ヤエは手札の風属性モンスターをコストに、相手フィールドの魔法・罠を全て手札に戻します。言うまでもありませんが、捨てたのはこれもたった今サーチした機甲忍

者エアーです。では河風先輩、覚悟！まずは女忍者ヤエの攻撃です！」
葵の場の忍者軍団が臨戦態勢に入り、その先陣を切ってヤエが飛び出していく。風のように走り抜け、身を守るカードが何もない夢想に一撃を加えた。
女忍者ヤエ　攻１１００→２００→夢想（直接攻撃）
夢想　ＬＰ３８００→３６００
「あれっ？ダメージ少なくない？」
再三の妹の言葉をまたもや無視した明菜が疑問を発する。だが、今回ばかりは葵にもそれを咎める余裕はなかった。攻撃力が急激に下がったのは、ヤエだけではない。場の全ての忍者が、急激な力の喪失に苦しんでいる。
忍者マスター　ＨＡＮＺＯ　攻１８００→６００　守１０００→０
成金忍者　守１８００→６００　攻５００→０
黄昏の忍者将軍―ゲツガ　守３０００→６００　攻２０００→０
黒竜の忍者　攻２８００→７００　守１６００→０
「こ、これは……！」
「惜しかったね葵ちゃん、だって。私は手札から、ワイトプリンセスのもう１つの効果を発動したんだってさ。このカードを捨てることで、場に存在するすべてのモンスターの攻守はこのターンの間そのレベルの３００倍だけ減少するよ、って」

「レベル４でも攻守１２００ダウン……とんでもない倍率ですね。だから特にゲツガと黒竜の被害がひどいわけですか。さすがは河風先輩です、ヤエのバウンスが通った時点で勝てたと思ったんですけどね……ですが、まだ私の忍者たちには戦う力が残っています。ＨＡＮＺＯ、黒竜の２体で続けてダイレクトアタック！」

２体の忍者が辛うじて立ち上がり、追撃に移る。本来の実力の半分も発揮できない状況とはいえ、それでもその連携攻撃は確実に夢想のライフを削り取った。だがその数値は、これまでの攻撃をすべて合わせてもまだ初期ライフの半分にすら届かない。今のターンを勝負どころと見て出し惜しみせずカードを使った葵にとっては、まるで褒められた結果ではない。

忍者マスター　ＨＡＮＺＯ　攻６００→夢想（直接攻撃）
夢想　ＬＰ３６００→３０００
黒竜の忍者　攻７００→夢想（直接攻撃）
夢想　ＬＰ３０００→２３００

「耐えきられたのは痛手ですが、まだ負けたわけではありません。ターンエンドです」

「これでこのエンドフェイズ、ワイトプリンセスの効果は切れて葵ちゃんの忍者も復活する……」

明菜の言葉通り、全ての忍者が一時的な弱体化から復帰し元の攻撃力を取り戻す。だ

がそこに、夢想が一気に攻め込んだ。
「私のターン！墓地のワイトプリンスは、自身とワイト2体を除外することでデッキからワイトキングを呼ぶことができるって。墓地ではワイト扱いになるワイトプリンセス2体を除外して、おいで、ワイトキング！」
　床を割り、1本の骨の腕が飛び出す。その穴をこじ開け、ゆっくりと1体の骸骨が這い上がってきた。顎が外れるほどに大口を開けて笑いながら、満を持して骸骨の王が忍者軍団と対峙する。
　ワイトキング　攻０
「出ましたね、ワイトキング……！ですが、今の墓地コストですでに河風先輩の墓地にワイトは０枚。墓地のワイトの数が攻撃力に直結するワイトキングをそこまでして出したところで……！」
　葵の言葉は正しい。初手の龍の鏡、そして今のワイトプリンスと墓地除外を連打してきた夢想の墓地のワイトは既に根こそぎ除外されつくしており、結果とし今のワイトキングは素のワイトにすら劣る程度の攻撃力しか持ち合わせていない。だが、彼女は忘れていた。つい先ほど自分の手でバウンス下ばかりのカードの存在を。
「速攻魔法、異次元からの埋葬だってさ。除外されたワイトプリンセス2体とワイト夫人の3体を墓地に戻して、それぞれの効果で墓地に送られた瞬間自身のカード名をワイ

トとして扱うよ、だって。これで墓地のワイトは3体、ワイトキングの攻撃力も上がるからね、って」

ワイトキング　攻0→3000

「さらに続き、行くよ。手札からワイトメアの効果を発動!このカードを捨てて、除外された私のワイトを墓地に戻すんだって。そしてワイトメアも、墓地にあるかぎりワイトとして扱うよ」

ワイトキング　攻3000→5000

「このままヤエが攻撃を受ければ3900ダメージ、ですか。それは流石に見過ごせない……やむを得ませんね。ならばこちらも黒竜の忍者の効果をもう1度発動、百獣忍法ハイド・プレデター!私の場から黒竜の忍者と変化の術を墓地に送り、女忍者ヤエを除外します!」

再び影の獣が唸り、自群のヤエをその中に引きずり込む。だが、それは諸刃の判断でもある。変化の解けた黒竜の忍者の姿が次第に薄れ、風と共に消えていく……すると夢想の龍骨鬼が、そして葵のヤエが再びフィールドに帰還した。

「変化の術が場を離れた時、この効果で呼び出したモンスターもまた破壊されます。もっとも今回は、その黒竜の忍者も自身のコストに使用したのであまり関係ありませんが。そして黒竜の忍者は自身が場を離れた時、それまでに彼が自身の術で除外したモン

スター全てを場に戻してしまう効果を持ちます」
女忍者ヤエ　守２００
龍骨鬼　攻２４００
「なるほど、それで私のモンスターも？確かにこのターンでの敗北は免れたみたいだけど、ってさ。それならせめて、ダメージは通しておこうかな。バトル、ワイトキングでＨＡＮＺＯに攻撃！」
ワイトキング　攻５０００→忍者マスター　ＨＡＮＺＯ　攻１８００（破壊）
葵　ＬＰ３９００→７００
「くうっ……！」
「続いて龍骨鬼。ゲツガを攻撃して反射ダメージを受けるけど、モンスター効果でゲツガには破壊されてもらうからね、ってさ」
骨の拳が忍者の１人を吹き飛ばした横で、放たれた火球をゲツガが槍で切り払う。しかし戦士を殺すあやかしの炎はそれだけでは消えず、むしろ槍を伝ってその体を包み込み、内と外から忍者将軍を焼き尽くした。
龍骨鬼　攻２４００→黄昏の忍者将軍―ゲツガ　守３０００
夢想　ＬＰ２３００→１７００
「またまた形勢逆転だね、だって。カードをセットして、私はこれでターンエンド」

葵　ＬＰ７００　手札：２
モンスター：女忍者ヤエ（守）
　　成金忍者（守）
魔法・罠：明と宵の逆転
夢想　ＬＰ１７００　手札：０
モンスター：ワイトキング（攻）
　　龍骨鬼（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「やってくれますね、本当に……私のターン！魔法カード、マジック・プランターを発動です。私の場から明と宵の逆転を墓地に送り、カードを２枚ドローします」

いくらここでドローソースを引いたとはいえ、逆転のチャンスは恐らくあと１回あるかどうかというところだろう。またもや逆転された盤面を見ながら、葵はそう結論付けた。墓地にあれだけのワイトが溜まってしまった以上、圧倒的攻撃力を持つワイトキングを出す方法はいくらでもある。だが不思議と、諦める気持ちは微塵も湧いてこなかった。

いや、違う……すぐにそんな疑問を打ち消した。諦めないのは、不思議でもなんでもない。この私は、葵・クラディーは、デュエリストなのだから。そしてデュエリストは、

どんな時も自分の信じるモンスターと固い絆で結ばれている。たった今引いたカードを見て、かすかな笑みが彼女の唇に浮かんだ。そしてそのカードを、そのまま場に出す。私はどんな相手にも、このカードと共に最後まで戦い続ける。

「女忍者ヤエと成金忍者の２体をリリースし、アドバンス召喚！さあご覧あれ、これこそが葵流忍術最強のしもべ！銀河眼（ギャラクシーアイズ）の光子竜（フォトン・ドラゴン）！」

銀河眼の光子竜　攻３０００

全身から光子を放つ白き光の竜。葵のエースモンスターが、ついに召喚された。すぐさまその全身の光を強め、放たれた光のブレスが龍骨鬼の胸のコアを消し飛ばした。

「ワイトキングには今は敵いません……が、まずそちらの骨には消えていただきましょう。行きます。銀河眼で龍骨鬼に攻撃、破滅のフォトン・ストリーム！」

銀河眼の光子竜　攻３０００→龍骨鬼　攻２４００（破壊）

夢想　ＬＰ１７００→１１００

「カードを２枚伏せ、ターンエンドです」

伏せカード、そして場の銀河眼。これで今できる事はすべてやった、後はこのデッキをただ信じ、次のターンを全力で迎え撃つまでだと静かに闘志を燃やす葵。明菜も今だけは妹の集中を守ってあげようと、何も言わずに気配さえ殺してただじっと２人の勝負を見つめている。そしてそんな姉妹とは対照的に、こんな詰めの局面になってもなお自

然体のまま夢想がカードを引いた。
「私のターン、ドロー……そろそろ終わらせるよ、葵ちゃん。ワイトキングの２体目を召喚、だってさ」
骸骨の王が、さらに増える。いくらこうなることも想定済みとはいえ、６０００打点が２体も並ぶそのプレッシャーは無視できるものではなく、葵が小さく息をのむ音が明菜の耳にも届いた。
ワイトキング　攻６０００
「トラップ発動、貪欲な瓶！このカードは私の墓地のカード５枚をデッキに戻すことで、カードを１枚引きます。私が選ぶカードはＨＡＮＺＯ、貪欲で強欲な壺、フリーズ・ロック、影縫いの術、変化の術です」
「へえ……？」
夢想の意味ありげな視線の意味は分かっている。このカードは、先ほどのターンで銀河眼を引く前から手札にずっとあったもの。なぜ使わなかったのか、そしてまたなぜこのタイミングで使うことにしたのか。それを知りたいというのだろう。
だけど、そこに疑問を持ってくれたことはむしろ葵にとっては思わぬ僥倖だった。答えようとする動作のひとつひとつがたった今引いたカードを見た時の表情の動き、そして咄嗟に隠しきれなかった驚きの色……そういったものをすべて誤魔化してしまえる

いい隠れ蓑になったからだ。このカードを引いた以上、絶対にその存在を悟られるわけにはいかない。

「発動コストの関係上、どうしてもデッキのカードを増やさなければ使えませんでしたからね。なるべくならまだ使いたくはなかったのですが、ゲツガさえも倒れた今となっては今更墓地のカードを後生大事に抱えているわけにはいきませんから。セットしておいた方がよかったのは間違いないんでしょうけど、破壊対象に選ばれたりでもしてせっかく減らしたデッキをまた増やすのはつまりませんでしたので」

夢想は何も言わないが、とりあえず今の答えで納得してもらえたらしい。それ以上追及することもなく、ワイトキングに攻撃指令を下した。

「バトル、ワイトキングで銀河眼の光子竜に攻撃、だってさ」

「やらせはしません！トラップ発動、忍具・鎖付きブーメラン！このカードは発動後銀河眼の攻撃力を上げる装備カードになると同時に、攻撃モンスターを守備表示に変更します！」

銀河眼がその腕で器用に刃を構え、そこから伸びた鎖がワイトキングの体を縛り上げる。その独特な攻撃力の算出方法から圧倒的な爆発力を誇るワイトキングも守備力は０、一度表示形式を変えられてはどうにもならない。

銀河眼の光子竜　攻３０００→３５００

ワイトキング　攻６０００↓守０

「むっ……」

わずかにむくれる夢想。その表情を見た時、葵は９割がた勝利を確信した。

実を言うとやらせはしない、などともっともらしいことを言ってはみたが、今の鎖付きブーメランは彼女にとってはあくまでただの囮でしかない。夢想の場に唯一伏せられた謎のリバースカード、もしあれが仮にこちらのカードを無効にする何らかのカウンターカードであるならば、何かよほどの理由がない限り鎖付きブーメランを無効にするため発動してきたはずだ。だが、それをしなかった……と、いうことはつまり、あのカードがカウンター系統である可能性は大きく下がった。それどころか、なんならただのブラフである可能性まで出てきたことになる。だとすれば、貪欲な瓶で手札に引き込んだ彼女にとって最後の切り札、ディメンション・ワンダラーの発動を止めることは不可能になる。

そう、ディメンション・ワンダラー……いわゆる手札誘発の１体であり、その効果は場の銀河眼の光子竜が効果によりモンスターを除外した際、手札から捨てることで相手に３０００ものダメージを与えるというもの。葵は思う。まさかいくら夢想といえど、あんなギリギリになってから１枚だけ引いたカードがよりにもよってこのモンスターだなんてことは思いもよらないだろう。おそらく彼女は、このまま２体目のワイトキン

グで追撃をしてくるはずだ。バトルフェイズ開始時に唯一の伏せカードだった鎖付きブーメランは使わせたのだから、あとは銀河眼に効果を使わせてその装備を引きはがさせるために。だがその瞬間、３０００の効果ダメージが彼女に降りかかることとなる。わずか５００の攻撃力を下げさせるために、敗北という代償を払ってもらおう。万一彼女が何かを警戒して攻撃をしてこなかったとしても、それならそれでこちらから攻撃し除外効果を使えばいい。

「……なら、バトル。もう1体のワイトキングで改めて銀河眼に攻撃、ってさ」

だが、夢想は引かない。ワイトキングが、彼女の予想通り動きだした。とはいえ……さらに彼女は思考を引き絞る。もうひとつだけ、可能性がないわけではない。それは、夢想の伏せカードがカウンターカードではあるが、ピンポイントでモンスター効果だけを無効にする類のものであることだ。それならば鎖付きブーメランに無反応だった理由にもなるし、なおかつ銀河眼か、ディメンション・ワンダラーか……どちらにせよその発動が無効になってしまえば、この最後のチャンスも徒労に終わってしまう。そうなってはもうお手上げだ。

これればかりは、そうでないことをただ祈るしかない。

「銀河眼の効果発動、銀河忍法コズミック・ワープ！このカードと相手モンスターがバトルするとき、互いのモンスターを一時的にゲームから除外します！」

「でもこれで鎖付きブーメランは装備対象の消滅による自壊が起きるよ、ってさ」
「承知です！」
ワイトキングの骨の拳が命中した瞬間に銀河眼の全身がこれまで以上に激しい光を放ち、目も眩むような閃光とともに2体のモンスターが次元の狭間に消えていく。そう、ここまではいい。わかっている、予想通りの流れだ。あとはこのカードさえ、通れば……！
だが次の瞬間、そんな彼女の想いは打ち砕かれた。ディメンション・ワンダラーの効果を発動しようとした寸前、場に再び閃光が走ったかと思うと、銀河眼だけが再び場に現れたのだ。しかもその手には失われたはずの鎖付きブーメランが握られており、これはつまり除外自体が行われていないことを意味している。
「トラップ発動、闇霊術―欲。私は闇属性モンスター、つまり銀河眼の効果対象になったワイトキングをリリースして、デッキからカードを2枚ドローできるってさ。だけど相手はこのカードの発動を、手札の魔法カード1枚を見せるだけで無効にできる。どう、葵ちゃん？」
「……いいえ、通します」
彼女の手札は、ディメンション・ワンダラーを含む2枚。だがその2枚はどちらもモンスターであり、闇霊術を無効にすることはできない。それにどちらにせよ、銀河眼の

効果は除外するモンスター2体が効果解決時に場に残っていない限り不発となってしまうため、コストとしてリリースされた時点でどうしようもない。

だが、結果としてまだ銀河眼とディメンション・ワンダラーの2枚は彼女の手元に残っている。夢想の行為は確かに予想外だったが、結局のところ敗北を先延ばしにしただけに過ぎない……そう自分に言い聞かせた。そうだ、この2枚が揃っている限り、私に負けはない。無双の女王に、今日こそは土をつけてみせる。

だがそんな彼女の決意を打ち砕くように、夢想は引いたカードを見て笑う。その笑みは葵にとっては勝利を掴んだものの笑みであったが、同時に明菜の目にはそれは、どこか寂しそうにも見えた。ああ、またか。また私は、勝ち続けるのか、と。

「……ありがとう、葵ちゃん。楽しかったよ、ってさ。速攻魔法、エネミーコントローラーを発動。葵ちゃんがさっき守備表示にしたワイトキングをリリースして2つ目の効果を発動、銀河眼の光子竜のコントロールをこのターンに限り私が得るよ、だって」

「そんな、これでは……」

銀河眼が奪われ、葵の場のモンスターがいなくなる。ディメンション・ワンダラーは相手の場の銀河眼が効果を発動した場合でも効果を使えるものの、そもそも銀河眼は相手モンスターとの戦闘でしか効果を使えない。

敗北の二文字が重くのしかかる中、銀河眼のブレスが部屋を白く染めた。

「バトル。銀河眼の光子竜でダイレクトアタック、破滅のフォトン・ストリーム……ってさ」

銀河眼の光子竜　攻３５００→葵（直接攻撃）

葵　ＬＰ７００→０

「また負けましたか……本当、なんなんですか河風先輩……」

「でも葵ちゃんカッコ良かったよ！お姉ちゃんもう感動しちゃった！」

「あーはいはい。絶対いけたと思ったんですけどね」

悔しそうに笑う葵に、夢想も屈託のない笑顔を返す。

「葵ちゃん、また腕が上がってたね、ってさ。前よりもさらに強くなってたよ、だって」

「それで勝てなかったら世話ないんですけどね」

和やかに語り合う２人の横で、明菜がうーんと背伸びした。自然と強調される胸のふくらみに対しなぜ姉妹なのにスペックだけではなくこんなところにまで格差がつけられなくてはならないのかとじっとりとした視線を送る葵のことを知ってか知らずか、明菜が明るく話しかける。

「じゃあ、お姉ちゃんはそろそろ帰るからね。楽しかったよ、葵ちゃん」

「あ、そうなんですか。わかりました姉上、では」
「少しは引きとめてよ！大事な大事なお姉ちゃんなんだよ!?」
　ぶーぶー言いながらも手早く荷物をまとめ、入ってきたのと同じ天井裏から出ていこうとする明菜。だがその瞬間、突然アカデミアが揺れた。それは文字通り、ほんの一揺れ……何かがこの島に降り立ったような、ごく小さく短いものだった。
「地震？あれ、止まりましたね」
「んー……多分だけど、外が怪しいかな。お姉ちゃんは誰かに見つかるわけにはいかないからこの隙に島を出るけど、葵ちゃんと河風ちゃん、見に行ってみたら？じゃあね、また来るねっ！」
　その言葉を最後に今度こそ天井に身を滑らせ、忍者らしく一切の痕跡も残さずに消えていった明菜。残された２人は思わず顔を見合わせ、ややあって同時に外に出た。なぜだか知らないが、ある予感がしたのだ。こんな非常識なことをやっても不思議がない人間など、彼女たちの知る限りあの明菜と……それと、もう１人しかいない。
　外に出て走ると、すでに人だかりができていた。さらに近づくと、その興奮したざわめきが聞こえてくる。その何かを取り囲んでいる生徒たちを強引に押しのけて円の内側にたどり着いた瞬間、夢想の目に数週間ぶりの明るい光が宿った。何かを言おうとして言葉に詰まり、あふれる涙のせいで視界がにじんで何もかもがぼやけて見える。それ

でもどうにか息を吸い、やっとの思いでただ一言だけ絞り出した。

「……お帰り、清明！」

ターン１０８　鉄砲水と死神の黒翼

『聞いているか、遊野清明！ここで会ったが百年目、俺たち二人の因縁も、そろそろけりつけようじゃねえか！』

校長室に入って開口一番、巨大なモニターから聞こえてきたのは聞き覚えのある大声だった。

僕ら……そう、自分から向こうに残った三沢、そして完全に行方不明となったアモン以外の死んだと思っていた僕ら全員は、デュエルアカデミアで蘇った。少し遅れて帰ってきた十代は何も教えてはくれなかったけど、それでも皆、なんとなくわかった。きっと、彼に救ってもらったんだろう。僕があれだけ手を尽くして、新たな力を手に入れてまで戦い抜いてもできなかったことをやってのけたんだから、まったく大したヒーローだ。

そしてそれから、もう数週間が過ぎた。最初は情報統制の解除や事後処理に追われて忙しかったアカデミアにも平和な日々が戻り、随分久しぶりにまともな学生生活が始まろうとしていた。

その矢先である。僕と……それと万丈目が、校長室に呼び出されたのは。レッド寮の

改造、学生の身でありながら大っぴらな商売と、やましいことと後ろ暗いことしかない僕だけならまだしも、万丈目とは珍しい。なんだろうと首をひねりつつ2人して繰り出し、そして冒頭に戻る。

それにしても、相変わらずこの男はやかましい。モニターの中で無意味に胸を張る、忘れもしない顔……ノース校の現トップにして元サンダー四天王の頭、鎧田の顔を見ながら思ったことは、多分僕も万丈目も同じだったろう。

「今朝、ノース校からこんな映像が届きました。どう思いますか、2人とも?」

そこで一度映像を止め、鮫島校長が呆れと諦め、そして面白がっている雰囲気がないまぜになった表情で入ってきた僕らを見る。

「いや、どうと言われても……」

「それで、校長。鎧田の奴、一体なんでこんなものを送ってきたんです」

反応に困る僕に変わり、万丈目がもっともな疑問を口にする。それもそうだろう、と頷いて校長が再生ボタンを押すと、よほど全力で叫んだらしく少しスッとした顔になった画面の中の鎧田も再び喋りだす。なんだ、まだ続きがあるのか。

『あースッキリした……で、だ。今年もやろうぜ、毎年恒例の俺らノース校と、お前らアカデミア本校の対抗合戦をよ。はっきり言っておくがな、清明。どうせこれ見てんだろ?俺とお前の戦績は1勝1敗、こりゃあどうあっても俺たちの卒業前に決着をつける必

要がある。ここまで来て引き下がるようなら、それは男じゃねえからな』
「1勝1敗て……洗脳状態の時までカウントすんの？」
「言ってやるな。あいつは2年前からそういう男だった」
　そんな会話をする僕らのことなど、当然画面の中の彼は知る由もない。
『……ただまあ俺らだって何かと忙しいんだ、あんまり派手にお前ら本校の相手してやれるほど暇じゃない。そこで、だ。今年は無駄なバトルロイヤルも勝ち抜き戦も抜きだ。俺とお前、代表2人のタイマン1発で決着つけようじゃねえか。日付はきっかり3日後の正午、首を洗って待ってやがれ！』
　そこで再生が終わった。なんとなく、ノース校校長のあの気弱そうなんだか気が強いんだかよくわからない顔が頭をよぎった。きっと今年も、鎧田に押し切られたんだろうなあ。ノース校から本校に来るなんて、あの人数を連れてくるとなると船の燃料代だってえらいことになるだろうに。
「……ねえ万丈目、万丈目が最初にこのイベント始めた時からずっと思ってたんだけど、なんで毎回ノース校側が条件出してくんの？たまにはこっちが決める自由とかないの？」
「なぜ俺を見る。俺だってもう本校の人間だぞ」
「いや、いろいろ考えるとどうも元凶が隣にいる気がして」

まあ、本気で追い詰めるつもりはない。ちょっと答えづらい質問で追い込んで遊んでみただけだ。話が終わる気まで静観する気だったらしい鮫島校長の視線に気づき、ため息1つついて答えを返す。色々言いはしたけれど、そんなの答えは決まってる。

「上等。そんなに負け越して卒業したいなら、一丁デュエルと洒落込もうじゃないの。こう伝えといてください、僕の方はいつでもいいですから」

「よろしいんですね？」

「そりゃあもう。あそこまで言われてすっこんでるようじゃあ、それこそ男がすたりますから」

そこまで言ったところで、いきなり背中に衝撃が走る。何事かと振り返ると平手でバン、と叩いた張本人の万丈目が、にやりと笑っているのが見えた。

「よく言った、清明。一応あれでも俺の元手下だ、あいつらの手前お前のことをおおっぴらに応援してやるわけにはいかんが、3日後は楽しみにしているからな」

「そりゃどうも。じゃあ、これで失礼しまーす」

奴に会うのもかれこれ1年……いや、光の結社関係のごたごたが全部終わるまであいつら島に居たからせいぜい半年ぶりか。それでも意外と楽しみにしている僕がいることに、自分でも少し驚いた。

その日の夕食の席では十代にもそのことを報告しておいたが、残念ながら期待してい

たような反応は貰えなかった。特に口を挟むことなく最後まで聞いた後、たった一言だけ。

「ふーん。頑張れよ」

そう言って席を立とうとしたのは、いくらなんでもひどいと思う。いいから当日は見に来い、と厳命はしておいたけれど、あの様子だと来るかどうかは半々といったところだろうか。

まったく、どうもあの世界から帰ってきてからというもの、十代の様子がおかしい。大人びたといえば聞こえはいいけれど、なんか全体的に冷めた様子が目立つ。前みたいに力いっぱい笑うようなこともすっかりなくなったし、そのうち何か考えないといけないだろうか。十代がいつまでもこんな調子だと、毎日1つ屋根の下で顔付きあわせてる僕の調子が狂う。

そんなことを考えていたりしているうちに、気づけば3日などあっという間に過ぎていた。ああ、こんなに何事もなく日々が過ぎるなんて、一体どれだけぶりだろうか。

そんな感じでしんみりしていたら、ついにその時が来た。付いてきた万丈目や学校トップの立場として出迎えないわけにはいかない鮫島校長らと一緒に港に出てじっと水平線を眺めていると、小さな点のようなものがその先に見えてきた。やがてその点はぐんぐん大きくなり、やがて何隻もの船団となって近づいてくる。やはりというべき

か、その先頭を走る船の先頭には鎧田が立っていて、こちらを認めて大きく手を振る様子が見えた。
「なんだなんだ、出迎えかー!?久しぶりだなコノヤローー!あ、サンダーー!お久しぶりです、元気してましたかー!?」
「相変わらずうるさい奴だな、お前はー!そんな遠くからわざわざ挨拶しなくていいから、早く上がってこい!」
負けず劣らずの大声で返す万丈目の顔は、言葉とは裏腹に実に生き生きとしていた。面倒見のいい万丈目のことだ、去年別れてからもサンダー四天王たちのことはずっと気にかけていたんだろう。留学生が来るときも、ノース校の名前には1人だけ反応してたし。

葵ちゃんには試合中の売り子としてなるべく愛想よく振る舞うことと、万丈目のコネを使い万丈目グループ経由で仕入れておいた大量の缶ジュースやらこの3日で作りためておいた菓子類やらをどんな手を使ってでも全品売りさばくことをお願いしておいた。

　最初にこのお願いをした時の『何考えてんですか先輩は？』とでも言いたげなゴミを見るような目は忘れられないけど、今日がビジネスチャンスなのは動かしようのない事実。それに彼女なら、なんのかんの言っても後者はきっちりやってくれるだろう。前者については、とりあえず言ってはみたけどぶっちゃけそんな期待してない。普段の僕に対するみたいにあまり手厳しく毒を吐かずに、そつなく対応してもらえれば十分だ。ここで重要なのは実質男子校状態になっているノース校からくる健全な男子高校生に、葵ちゃんという客観的に見てもかなりの美人を売り子としてぶつけることだ。去年は光の結社絡みのごたごたでそれどころじゃなかったけど、これは絶対うまくいくはずだとはあの頃からずっと思っていた。まさか実現するころには僕が3年になってるとまでは思わなかっただけで。

　というわけで本業の方は心置きなく葵ちゃんに押し付け、僕はこちらに集中すればいい。一番大きなデュエル場の中心で鎧田と向かい合い、水妖式デュエルディスクを展開する。

「おおっ、なんだそれ!?どこで売ってんだそんなの!?」

「あ、わかるー？でも悪いけど一点物でね、予備もなければ売る気もないよ」

　この三沢謹製デュエルディスクは、どう見てもオーバーテクノロジーの域をはるかに通り越した代物だ。どう考えても目立ってしょうがないからこっちの世界では使わず

にいようかとも一時は思ったが、それは覇王軍に対抗するためこの試作品を一生懸命作り上げた三沢に対して失礼というものだろう。いつか彼が帰ってきたらアップグレードとかしてもらえるかもしれないし、それまではテスター役の意味も込めて使い続けるつもりだ。

……ただ、やっぱこれ目立つよね。僕にとって幸いだったのは、こんな雑な説明でも納得するほど鎧田が大雑把、というか無頓着だったことだ。

「そっか、なら仕方ねえな。まあお前らが本校だしな、アイテムも回ってきやすいんだろ。だがな、デュエルはディスクでやるわけじゃねえ」

いやデュエルディスクでやるんですが。これ以上ぐだぐだ漫才するのもどうかと思うので、喉まで出かかったその言葉はぐっと飲み込んだ。

もう、本校とノース校の観客の期待値は最大まで高まっている。いいねえこの感じ、最近は野外でやたら暗い中ひとりぼっちの戦場ばっかりだったんだ、ギャラリーたくさんってのは悪くない。いよいよもって元の世界に戻ってきたんだなあ、なんてしみじみできる。

「俺たちの実力でやるもんだ！行くぜ、清明！」

「上等上等！わざわざ来てもらったところ悪いけど、返り討ちと洒落込んであげようか！」

「「デュエル!!」」
　先攻を取ったのは……僕。鎧田相手に後攻を譲るのはあまり嬉しくない……というより、僕のデッキは相手の出方で強さが変わる後攻特化型だ。もう少し先攻向きのカードも入れたほうがいいかもしれない、なんてことを思いつつ、まずは様子見から入ることにする。
「グレイドル・アリゲーターを守備表示で召喚!さらにカードをセットしてターンエンド、どっからでもかかってきな!」
　床に広がる銀色の水たまりと、そこから湧き出す緑色のワニ。普段はインパクトとのコンボ攻撃ばかりしているから、こうやって壁として配置するのは久しぶりだ。
　グレイドル・アリゲーター　守１５００
「なんだなんだ、それで終わりか?そんな程度で俺に勝とうってんなら……遥かに遅いぜ!俺のターン、ドロー!永続魔法、黒い旋風を発動だ。そして来い、ＢＦ（ブラックフェザー）―蒼炎のシュラ!」
　ＢＦ―蒼炎のシュラ　攻１８００
　巨大な腕を持つ、二足歩行する鳥人間。黒というより藍色に近い翼をはためかせると、フィールドに置かれた黒い旋風のカードからその名の通り風が吹いた。
「黒い旋風は俺がＢＦの召喚に成功した時、その攻撃力以下の攻撃力を持つ同胞をサー

チできる。俺はこの効果で月影のカルートを加えるぜ。バトルだ、シュラ！」
鋭い爪の二連撃が唸り、アリゲーターの体が深々と切り裂かれる。だがその傷口から血が飛び出すようなことはなく、かわりに滲み出た銀色の液体がシュラの爪が触れた場所から翼に、腕に、そして上半身全てに浸透していく。
「なんだこれ、気色悪っ。とにかく、シュラがモンスターを戦闘破壊したことで――――――」
「わざわざ攻撃お疲れ様。グレイドル・アリゲーターが戦闘破壊されたこの瞬間――――――」
「効果発動！」
互いに声がハモったその瞬間、２体のモンスターの効果が同時に発動された。僕のアリゲーターはその寄生効果を使い、額に銀色の紋章が浮かんだシュラのコントロールをこちらに移す。一方鎧田のフィールドもそれで空にはならず、シュラ最後の抵抗により呼び出されたターバンを被り器用に翼を丸めて弓を持つ漆黒の鳥がすでに狙いをつけていた。
ＢＦ―上弦のピナーカ　攻１２００
「へえ……」
「俺のモンスターが盗られるとはな。だがシュラの効果により攻撃力１５００以下のＢ

Ｆ、上弦のピナーカを効果を無効にして特殊召喚させてもらったぜ。そしてお前も見ただろ？さっきサーチしたこのカードをよ！ピナーカでシュラに攻撃、このダメージ計算時に手札から月影のカルートの効果を発動！手札からこいつを捨てて、ピナーカの攻撃力はこのターンの間１４００ポイントアップする！」

ギリギリと引き絞られた弦から１本の矢が放たれ、正確無比なその一撃がシュラの心臓をストレートに射抜く。

『少し痛いが、まあ悪くない。あのカードを下手に温存されるよりはずっとマシだ』

「うん、わかってる。まだまだこの程度……！」

ＢＦ―上弦のピナーカ　攻１２００→２６００→ＢＦ―蒼炎のシュラ　攻１８００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→３２００

「どうだ？さらにカードを１枚セットして、ターンエンドだ」

まさかこの序盤で躊躇なくカルートをぶっこんでくるとは思わなかったが、今のターンの攻防は間違いなくこちらの負け。さすがはノース校四天王のボス、アリゲーター１体でノーダメージに抑えられるほど甘い相手じゃない。

とはいえこちらもストレートに負けるつもりはない、すでに次への仕込みは済んでいる。

清明　ＬＰ３２００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
鎧田　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：ＢＦ―上弦のピナーカ（攻）
魔法・罠：黒い旋風
１（伏せ）

「僕のターン！相手フィールドにのみモンスターが存在することで、手札からカイザー・シースネークを特殊召喚。ただしこの方法を使う場合その攻守は０になり、レベルも半分の４に下がる。そしてトラップ発動、グレイドル・スプリット！このカードを装備カードとしてシースネークに装備して、攻撃力５００ポイントアップ！」
カイザー・シースネーク　攻２５００→０→５００　守１０００→０　☆８→４
「攻撃力たかだか５００……？いいぜ、何するつもりか見せてもらおうじゃねえか」
「もちろん。グレイドル・スプリットはこのカードを墓地に送ることで装備モンスターを破壊し、さらにデッキからグレイドルを２種類リクルートすることができるのさ。出て来い、グレイドル・スライム！さらにもう１体は……ここは用心しますかね、グレイドル・コブラを特殊召喚！」

大海蛇の巨体が消え、後に残ったのはグレイ型宇宙人を模したスライムに、赤いコブラを模したグレイドル2体。よしよし、これでこっちも問題なく行けそうだ。
グレイドル・スライム　守２０００
グレイドル・コブラ　攻１０００
「モンスターが2体……」
「そっちの得意なフィールドはわかってるんだ、それまでにやりたいだけやらせてもらうさ。このグレイドル・スライムをリリースしてアドバンス召喚、氷帝メビウス！」
６つの属性のうち、最も僕が得意とする属性……水を司る氷帝が、周りの空気を凍てつかせつつ場に現れる。急激な温度変化のせいであたりに白い靄が立ち込め、その中を縫うように氷の槍が飛んだ。
「メビウスの効果発動、フリーズ・バースト！アドバンス召喚に成功したことで、その伏せカードと黒い旋風を破壊させてもらうよ」
「まあ当然、そう来るよなあ……黒い旋風はくれてやるがな、もう片方は譲らないぜ！速攻魔法、スワローズ・ネストを発動！俺の鳥獣族モンスター、つまりピナーカをリリースすることで、それと同じレベルの鳥獣族を1体デッキから特殊召喚する！ピナーカのレベルは3、よって同じくレベル3の白夜のグラディウスを特殊召喚する！」
ＢＦ―白夜のグラディウス　守１５００

ピナーカの姿が空高く飛び去って行き、銀色に輝く鎧をガチガチに着込んだ鳥人間のモンスターが代わりに着地する。それはまあいい、ただ破壊されるのを指をくわえて見ているようなキャラではない。ただ問題は、それがスワローズ・ネストだったことだ。

「嘘、なんでそんなカード入ってんの!?」

スワローズ・ネストは鳥獣族専用の優秀なサポートカードだ。鳥獣族で統一された【ＢＦ】に入っていても本来なら何もおかしくはない。だがあの鎧田、あの男のデッキはいわゆる変態構築……通常とはまるで違ったコンセプトを前提として組まれたものだったはずだ。それを考えればはっきり言って、鳥獣族サポートなんて事故要因にしかならないはずなのだが。

「なんだ、負け惜しみか?そりゃ確かにさっきのターンで使ってればさらに１０００ぐらいのダメージは稼げたろうけど、防御カード抜きでターン回すのはちょっとなあ」

「いやそっちじゃなくて、そのデッキ確か……」

「ああ、そういうことか。これぐらいなら教えてやるが、少し枚数を減らして純構築に寄せてみたんだよ。子供(ガキ)が見たらトラウマになりかねないって言われちまったからな」

「言われたって……誰に?」

「その話は後だぜ!グラディウスは１ターンに１度戦闘破壊されないモンスター、メビウスの攻撃は寄せ付けないぜ!」

確かに、一見するとこの状況は僕にとって圧倒的不利だ。ただもしもの時のために保険を打っておいたのが、まさか本当に役立つとは。

僕が合図を送るとメビウスの横にいたコブラの体がでろり、と効果音の付きそうな勢いで溶け崩れ、銀色の液体となったグレイドルが足元からグラディウスに迫ってゆく。

「カードを1枚伏せてターンエンド。この瞬間、グレイドル・スプリットの効果により呼び出したコブラは自壊するよ。ただしただの自壊じゃない、トラップの効果で破壊されたグレイドル・コブラは相手モンスターに寄生して、そのコントロールを操る！シュラに続いて白夜のグラディウス、そのモンスターもこっちにもらおうか！」

「はぁ!?またかよ、クソッ！」

足元から鎧の隙間を縫って浸透したグレイドルの力で、グラディウスの額にも銀色の紋章が浮かび上がる。ダメージこそ与えられなかったけど、これで鎧田の場は今度こそがら空きだ。

「だがな、俺だってただやられるわけじゃねえ。上弦のピナーカは墓地に送られたターンのエンドフェイズに、デッキから別のＢＦを1体サーチすることができる。さあ、お前の次の相手はこのカードだぜ。そして俺のターン、手札から朧影のゴウフウを特殊召喚！このカードは俺の場にモンスターが存在しない時に特殊召喚でき、さらにリリースできない朧影トークン2体を特殊召喚する。そして俺の場にＢＦが存在するとき、さっ

きピナーカの効果で加えた漆黒のエルフェンはリリースなしで召喚できる！」
不気味な３本の竜巻が吹き、真ん中の１本から全身を鎖で縛られた鳥型モンスターが鋭い目つきでこちらを睨む。さらにその竜巻に乗り、その二つ名の示す通り全身を漆黒の羽根で包む鳥人間が重い音とともに着地した。
たった２枚のカードから、そのうち３体の攻守が０とはいえ４体もの頭数を揃えられるとは。もちろん、ＢＦの展開力を舐めていたわけではない。いくら場を空にしてもある程度リカバリーを効かせてくるだろうとは思っていたけれど、まさかここまでやられるとは。
ＢＦ―朧影のゴウフウ　守０
朧影トークン　守０
朧影トークン　守０
ＢＦ―漆黒のエルフェン　攻２２００
「おいおい、何もう終わりました、みたいな顔してんだよ。まだまだこっからが楽しいんじゃねえか、なあ？俺がこの通常召喚に成功したことで、漆黒のエルフェンの効果発動！お前の場にいるグラディウスの表示形式を変更させるぜ。おっと、俺の場にＢＦが存在することで手札から残夜のクリスも特殊召喚だ」
「ぐ……！」

ＢＦ―白夜のグラディウス　守１５００→攻８００
ＢＦ―残夜のクリス　攻１９００
「バトルだ！クリス、エルフェンの２体でグラディウスに連続攻撃！」
本来メリットのはずのグラディウスの戦闘破壊耐性が、とんでもないデメリットとなってこちらに牙をむく。強制的に立ち上がらされたグラディウスの体が空中で２体の鳥人間の連携の前に翻弄され、鎧の守りもむなしく一方的に突き崩される……寸前、地面から吹き上がった水柱がとどめの一撃を済んでのところで中断させた。
ＢＦ―残夜のクリス　攻１９００→ＢＦ―白夜のグラディウス　攻８００
清明　ＬＰ３２００→２１００
鎧田　ＬＰ４０００→３２００
「エルフェンの攻撃が止められた、だと？」
「１回は通すけど、そこまでさ。トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ。攻撃を１度だけ無効にして、さらに僕の場に水族のメビウスがいることで８００ポイントのダメージを与える！」
「なるほどな、さすがにまったくの無策じゃなかったわけか。俺は全然構わないけどよ、それくらいの歯応えはないとわざわざここまで来た意味がないからな。カードをセットしてターンエンドだ」

「言いたい放題言ってくれちゃって……まだまだっ！」

強がってはみたものの、戦況は思ったよりも厳しい。しかも先ほどエルフェンの効果をメビウスではなくグラディウスに回したところからも考えて、あの伏せカードは何かの防御札のはずだ。だが、僕だってまだこれですべての手を見せたわけではない。

そう、ライフの差はまだわずか８００、まだまだ負けたわけじゃない。

清明　ＬＰ２１００　手札：１

モンスター：氷帝メビウス（攻）

ＢＦ—白夜のグラディウス（攻・コブラ）

魔法・罠：グレイドル・コブラ（グラディウス）

鎧田　ＬＰ３２００　手札：２

モンスター：ＢＦ—漆黒のエルフェン（攻）

ＢＦ—残夜のクリス（攻）

ＢＦ—朧影のゴウフウ（守）

朧影トークン（守）

朧影トークン（守）

魔法・罠：１（伏せ）

「さあ次行くよ、僕のターン。魔法カード、サルベージを発動！墓地から攻撃力１５００

以下の水属性、グレイドル・アリゲーターとグレイドル・コブラを回収する」
「なんだ、また寄生戦法か？」
「いいや違うね、デッキ任せの博打戦法さ！魔法カード、強欲なウツボを発動！手札から今回収した2体の水属性をデッキに戻し、改めてカードを3枚ドローする！」
サルベージと強欲なウツボ、最近滅多に決まらなかった強力な手札交換コンボで全てのカードをデッキに戻し、改めて3枚を引き直す。そろそろ息切れしてきたから、ここで継続的に手札を増やせるようなカードに来てほしい……そんな願いを、ありがたいことに僕の信頼するデッキは聞き入れてくれた。
「さあ、第2ラウンドと洒落込もうか！フィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントを発動！」
地面から巨大な、天にも届くサイズの灯台がせり上がり、周りの風景が海沿いの都市に変化する。そしてこのカード……ちょっともったいない気もするけど、他に手はないから仕方ない。
「そして僕はこの、メビウスとグラディウスの2体をリリース。アドバンス召喚、怒炎壊獣ドゴラン！」
怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００
灯台に負けず劣らずの巨体を誇る、怒りの炎を操る恐竜型壊獣。せいぜい人間大のサ

イズしかないＢＦ軍団を前に、たった1匹で向かい合い……おもむろにその体が赤熱したかと思うと、口から炎のブレスが放たれた。
「フィールドから墓地にメビウス、グラディウス、装備カードのコブラ。この3枚のカードが送られたことでウォーターフロントに壊獣カウンターが3つ乗り、その3つをすべて消費してドゴランの効果発動、覆滅！相手モンスター全てを焼き尽くし、破壊する！」
装備カードというグレイドルの特性があったからこそできた、アドバンス召喚による強引なカウンター生成からの効果発動。まあ正直、ここで引けたのがそれだけの見返りがあるドゴランでなければ絶対やらなかったと思う。
ともあれ辺り一面に炎が走り、逃げ遅れた鳥たちが火の中に沈んでいく。そしてトークン以外のモンスターは破壊され墓地に送られたことでまたそれが壊獣カウンターの足しになり、灯台のてっぺんから鋭く空を裂く3本の光の筋が通った。
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（0）↓（3）↓（0）↓（3）
「くっ……流石に一筋縄じゃいかねえな、やってくれるじゃねえか」
「そりゃどうも、っと。この効果を使ったターン、ドゴランは攻撃できない。でも、まだまだ動くことはできる！ウォーターフロントは壊獣カウンターが3つ以上貯まっているとき、1ターンに1度壊獣を1体サーチすることができる。この効果で怪粉壊獣ガダーラを手札に加え、さらに魔法カード、トレード・インを発動！レベル8のガダーラ

を墓地に送り、カードを２枚ドロー！」
　ウォーターフロントの効果にとにかく無駄がないおかげで、ようやく僕のデッキも息を吹き返す。よし、このカードを引くことができたか。
「永続魔法、壊獣の出現記録を発動。このカードの効果で僕の場のドゴランを破壊して、デッキから別の壊獣を特殊召喚できる」
　これで多次元壊獣ラディアンを呼び出せば、ウォーターフロントの壊獣カウンター２つをコストに分身能力を発動。攻撃力２８００のラディアントークンとの連続攻撃で大逆転勝利も狙える……だけど、それは果たして本当に正しい選択だろうか。悩む僕の背中を押すように、チャクチャルさんの声がする。
『そもそも、先に警戒を始めたのはマスターだからな？確かにラディアンならば決まれば勝利もできるだろう……だが、このターンが始まる前に何を考えていたかを思い出すことだ』
　僕が何を考えていたか、か。そうだ、メビウスにエルフェンの効果を使わなかった理由を訝しんでいたんだった。ここまでの動きに対し沈黙を貫いてきたことから考えて、あの伏せカードは召喚反応や効果反応の類ではない。となると、残る選択肢は攻撃反応？魔法の筒のような対象を取るカードが相手ならジズキエル無双の始まりだ、で済むけれど、相手は鎧田。１回のミスが致命傷になりかねない相手だ、ここはさらに用心して

おこう。

「……こい、海亀壊獣ガメシエル！」

迷った末に呼び出したのは、巨大な海亀。壊獣の中でもワーストクラスに低い攻撃力を持つこのモンスターだが、内に秘めた効果はトップクラスに強力だ。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）↓（４）

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

「このガメシエルには一切の制限がかかってない、よってバトルもできる。ダイレクトアタックだ、ガメシエル！」

「２２００はいくらなんでもデカいからな。トラップカード、魔法（マジック・シリンダー）の筒を発動！その攻撃力、そっくりそのまま跳ね返してやるぜ！」

「やっぱり攻撃反応か……なら、貰った！ガメシエルの特殊効果、渦潮を発動！壊獣カウンター２つをコストにその発動を無効にして、さらにゲームから除外する！」

「何？」

「悪いねえ、今回は僕の読み勝ちさ！」

灯台から伸びる光のうち２本がふっと消え、ガメシエルの巻き起こした水の大渦が表になったトラップを巻き込んで押し流していく。今度こそ邪魔立てされることなく、太い尾の一撃がクリーンヒットした。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）→（２）
海亀壊獣ガメシエル　攻２２００→鎧田（直接攻撃）
鎧田　ＬＰ３２００→１０００
「ちっくしょう……！」
「ほらほら、さっきまでの威勢はどうしたのさ？」
『なあマスター、急に出てくるその小物っぽさはどうにかならないのか？』
失礼な。小物じゃないもん、空気読んでヒールやっただけだもん。グレイドルと壊獣の２大嫌がらせテーマを両立させようとしてる時点で、今の僕はどう見てもただの悪役。それは自覚してるし、なら盛り上げるためにはそれ相応のムーブっちゅうもんが必要不可欠だ。
『……私の好みは同じ悪役でも、せめてもう少し大物なのだが』
「大物ってことは偉いんでしょ？やだよ偉いのなんて、肩こっちゃうもん。僕は下っ端のプロだよ」
『随分弱そうなプロもあったものだな』
脳内でわあわあ言い合っているうちに、鎧田もすっかり気を取り直したらしい。ガメシエルの力を知りながらいまだ衰えない闘志を燃やし、次の一手を求めてデッキに手を掛けるのが見えた。

「まだまだ巻き返してやるぜ、俺のターン！相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、このモンスターはリリースなしで召喚できる！来い、暁のシロッコ！」

シロッコのリリース軽減能力は、発動するタイプの効果ではない。つまりそれは、ガメシエルの鉄壁の守りをすり抜けて使用することができるということだ。鎧田め、もうそのことに気づくとは。

ＢＦ―暁のシロッコ　攻２０００

「俺はこれで、ターンエンドだ」

残り２枚の手札で何かしてくるかと思いきや、意外なことに召喚だけでターンを終える鎧田。楽観的に考えるなら、たんに手札事故を起こして少しでもダメージを軽減させるためやむを得ずシロッコを出したというところだ……けど、どう考えてもそんなにうまくいくとは思えない。

おそらく、次に僕がどう動くかがかなり重要になってくるはずだ。

清明　ＬＰ２１００　手札：１

モンスター：海亀壊獣ガメシエル（攻）

魔法・罠：壊獣の出現記録（０）

場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）

鎧田　ＬＰ１０００　手札：２

モンスター：ＢＦ―暁のシロッコ（攻）
魔法・罠：なし
「僕のターン、ドロー」
落ち着いて、初めからよく考えてみよう。ウォーターフロントに載った壊獣カウンターは２つ、つまりガメシエルはまだ最低でも１回効果を使うことができる。そして、それは鎧田も十分承知しているはずだ。
ちらりと視線を上に向け、頭上でライトを放つウォーターフロントを見上げる。カウンターが２つということは、逆に言えばこのカードの持つサーチ効果も使えないということ。もっとも仮に使えたとしても、ガメシエルの攻撃力は壊獣の中でもワーストクラスなのにシロッコをリリースしてもっと強いモンスターを出してどうするというさらに根本的な問題があるのだが。
僕の手札は、今引いたカードを合わせて２枚。グレイドルがあれば迷わず寄生に繋げたのだが、それもこのターンでは無理だ。いかにも罠でございと言わんばかりのあのシロッコに、カウンターが１度しか使えないこの状況で本当に攻撃するべきだろうか？もう少し待つべきではないだろうか？
それともそう思わせる事こそが攻撃表示シロッコ棒立ちエンドの真の狙いで、場面外から掛けるプレッシャーだけで鎧田が逆転のチャンスをうかがっているのだろうか。

鎧田は敵に回すと油断ならないタイプだから、そのどちらも可能性は同じだけある。

ややあって、ついに覚悟を決めた。ただしこの判断、後になってから何回も後悔することになる。もしここでもう一度盤面をよく見ていたら、普段から痛い目にあって覚えさせるスパルタ式の教育方法を好むチャクチャルさんが僕の判断にいいとも悪いとも言わず無言で見ていたわけをもう少しでも考えていたら、結果はまた変わっていたのだが。

「……ここで退くなんて僕じゃない！ガメシエル、バトルだ！暁のシロッコに攻撃！」

「手札からＢＦ―極夜のダマスカスの効果発動！このカードを捨ててシロッコの攻撃力をこのターンの間５００ポイントアップ、これで返り討ちだ！」

どこからともなく飛来した短剣を掴み取って新たな得物を手にしたシロッコが、その巨体からは想像もできないほど軽やかな動きで踊りかかったガメシエルを迎え撃たんと構えを取る。これを通したらシロッコの攻撃力は２５００、これは止めるしかない。

「ガメシエルの特殊能力、渦潮を発動！ダマスカスの効果を無効にして、除外する！」

ＫＹＯＩＴＯＵウォーターフロント（２）↓（０）

攻撃の前に放たれた渦潮が、シロッコの手に一時は握られた短剣を弾き飛ばす。これで捉えた、そう思った瞬間、突然に空気を切り裂いて２本目の短剣が飛んできた。まるでそうなるのがわかっていたかのように自然な動きで伸びたもう片方の手がその短剣

を逆手に握り、翼を広げガメシエルの頭上まで飛び上がったシロッコがその甲羅に覆われていない部分、脳天に必殺の一撃を当てた。
「こ、これは……!?」
「悪いなあ、今度の読み合いはまた俺の勝ちだな？どうあがいたところで、無理に突っ込んできた時点でお前の負けは決まってたんだよ！」
事実その通りなので何も言い返すことができず、ただ歯を食いしばって睨みつける。そんな視線にわざとらしく震えてみせ、ようやく種明かしに入った。
「念のため、これまでずっと温存しておいてよかったぜ。そのデカ亀の効果にチェーンしてもう1枚、手札から2枚目のダマスカスの効果を発動したのさ。止めようが止めまいがシロッコの攻撃力は結局５００ポイントアップするんだよ、正真正銘の返り討ちだぜ！」
海亀壊獣ガメシエル　攻２２００（破壊）→ＢＦ―暁のシロッコ　攻２０００→２５００
清明　ＬＰ２１００→１８００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（１）
「手札から捨てられたダマスカスはカウントしないけど、ガメシエルがフィールドから墓地に送られたことでウォーターフロントに壊獣カウンターが追加で1つ乗る……」

灯台に明かりが再び1つだけ灯ったそのタイミングで、チャクチャルさんの冷静な声が聞こえてきた。最初からこうなることがわかっていたからこそ、これまで不自然に黙って何も言ってこなかったのだ。

『惜しかったな、マスター。私なら今のターン、それを使っていた』

「それ？」

『壊獣の出現記録、だ。確かにガメシエルのカウンター能力は強力だが、それに頼りすぎると今のような手痛いしっぺ返しを受けることになる。素直にガメシエルを破壊して別の壊獣をリクルートすればその過程でＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントの壊獣カウンターは3つになり、コストにカウンター3つを要求する壊獣でも効果を使うことができた。ジズキエル、サンダー・ザ・キング、ガダーラを呼べば今のような最悪の事態だけは避けられたはずだし、上から殴ることに長けたあの3体ならうまくすればこのターンで終わらせることも可能だったはずだ』

「出現記録、か……」

そこまで丁寧に解説されて、やっと今のターンで自分が何をしでかしたのか理解できた。壊獣カウンターが2つあり、なおかつガメシエルが僕の場にいるという事実だけで完全に満足して、そこで思考停止していたことに今更ながら気づく。ガメシエルの強力なカウンターは確かにこちらで使えればこの上なく強力な武器になるが、それは目的で

もゴールでもない。
　あくまでも最終目標はこのデュエルの勝利を掴むことで、そのための手段の1つだ。それを忘れていては本末転倒、今みたいに痛い目にあって終わる。壊獣の独特な動きを使い慣れてないというより、単に僕自身のセンスの問題だろう、これは。
　……またひとつ賢くなれたのは全然問題ないんだけど、今までよくこんな程度のセンスで命がけのデュエルなんてやってたものだ。もう入学してから2年以上経つんだから、いくら毎年デッキがバージョンアップしているとはいえ、もう少しぐらい成長があってもよさそうなものだけど。
『センスの問題とか言い出されたら私にもどうしようもないが……とにかく場数を踏んで慣れることが一番の近道なんじゃないか?』
「おいおい、何固まってんだよ。お前のターンだぞ、さっさとしろよ」
　鎧田の声に我に返る。さっさとしろよ、と言われても、今の僕にできる事は1つしかない。幸いまだ召喚権は残っている、ここはじっと我慢の時だ。
「グレイドル・スライムＪｒ．を守備表示で召喚。これでターンエンド」
　最近やたら出番の多い、先ほど現れたスライムの幼体といった見かけのグレイ型宇宙人が今回も壁としてシロッコの前に立ちはだかる。その守備力はシロッコではギリギリ突破できない２０００、そしてこの布陣で最も警戒すべき仮想敵2体のうち片方であ

る漆黒のエルフェンはすでに破壊済みだ。まさか上級モンスターのエルフェンが２枚以上入っているとも考えにくいし、警戒すべきはもう1体の方だけだ。

もっともこればかりはこちらにできる事はなく、あのカードを引かないことを祈る程度しかないのだが。でもきっと、鎧田なら引くだろう。なぜって、この男は真のデュエリストなのだから。

グレイドル・スライムＪｒ．　守２０００

「行くぜ、俺のターン！魔法カード、貪欲な壺を発動！カルート、エルフェン、クリス、ピナーカ、ダマスカスの５体のモンスターをデッキに戻し、カードを２枚ドロー……そろそろこの風景にも飽きたよなあ、俺がアレンジしてやるぜ！フィールド魔法発動、アンデットワールド！」

アンデットワールド。互いの場、そして墓地のモンスター全てがアンデット族に書き換えられ、さらにアンデット族以外のアドバンス召喚が禁止される悪夢のような空間。アドバンス召喚をほとんど利用しないくせに爆発力と展開力を併せ持つＢＦと組み合わせることで、相手にのみこの空間のデメリットを押し付ける……それが鎧田の、僕も僕で大概だけどこいつもこいつで結構いやらしい基本戦術だ。読んで字のごとく文字通りのゴーストタウンと化したＫＹＯＵＴＯＵで、僕らのモンスターが気味の悪い動く死体へと変化していく。

グレイドル・スライムＪｒ．　水族→アンデット族
ＢＦ―暁のシロッコ　鳥獣族→アンデット族
「これで俺のＢＦは、全てＵ（アンデットフェザー）　Ｆへと進化した。さらにもう１枚行くぜ、黒槍のブラスト！」
「あー、やっぱり引いちゃったか」
僕がここで引かれることを恐れていたカードの１枚、黒槍のブラスト。自らの背丈ほどもある漆黒の槍を手にした鴉天狗の姿もまた、召喚された瞬間にはすでに腐肉へと変化していたが、その身に秘めた特殊能力は生前のままいささかの衰えもない。そしてそれは、その横のシロッコも同じことだ。
「もうどうなるかは、言わなくてもわかるよな？暁のシロッコの効果を発動！１ターンに１度俺の場のＢＦ１体に、他の全てのＢＦの攻撃力を集中させる！」
ＢＦ―黒槍のブラスト　攻１７００→３７００　鳥獣族→アンデット族
「そして、黒槍のブラストは……」
「ブラストは、貫通能力を持つ。バトルだ、ブラストでその小っさいスライムを攻撃！ブラック・スパイラル！」
僕の言葉の後半を引き取るかのように高らかに宣言し、ブラストが支持を受けて高く飛び上がる。空中から槍を構えて一文字に突っ込んでくる姿はまさに、獲物を正確に貫

く死神の翼が生えた死の弾丸だった。その衝撃は銀色のスライムを貫通しただけに留まらず、なおも収まりきらない衝撃波が僕に直接届く。

ＢＦ―黒槍のブラスト　攻３７００↓グレイドル・スライムＪｒ．　守２０００（破壊）

清明　ＬＰ１８００↓１００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）↓（２）

「ジュ、Ｊｒの効果発動！戦闘破壊された時、デッキから別のグレイドルを特殊召喚できる……来て、イーグル！」

ゴーストタウンに四散した銀の水滴が再び集まったかと思うと先ほどまでのグレイ型宇宙人スタイルから一転した黄色い鳥の姿となって蘇り、低空にホバリングする。こんな首の皮１枚で繋がったようなライフで貫通能力を持つブラストを立たされた以上、イーグルに繋げるのはかなり分の悪い賭けだ。アドバンス召喚が封じられた現状、そのリリースに当てることすらできない。鎧田にもう１ターン回したら、どうあがいても確実に僕が負ける。

でも、次のドローであのカードさえ引くことができれば、話は全く変わる。この反撃のため残されたたった１ターンをうまく使えるかどうかは、すべてこの１枚の引きにかかっている。

ねえ、そんな賭けって素敵じゃない？

グレイドル・イーグル　攻１５００

「１００足りないか……運がよかったな、ターンエンドだ。ここでシロッコの効果も切れる」

ＢＦ―黒槍のブラスト　攻３７００→１７００

清明　ＬＰ１００　手札：１

モンスター：グレイドル・イーグル（攻）

魔法・罠：壊獣の出現記録（０）

場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）

鎧田　ＬＰ１０００　手札：０

モンスター：ＢＦ―暁のシロッコ（攻）

ＢＦ―黒槍のブラスト（攻）

魔法・罠：なし

場：アンデットワールド

「僕のターン……ドロー！」

ゆっくりとデッキに手をかけ、この勝負の明暗を分けることになるたった１枚のカードを引きぬく。見るのが怖いような、でも早く見たいような、そんな矛盾する感情で板

挟みになりながらも、そっと手の中のカードをこちらに向けた。この一挙手一投足に、鎧田の、そして会場中の注目が集まっているのを肌で感じる。本当に久々に味わう、表舞台特有のこの緊張感。

ここでひと波乱起こさなければ観客が、そして僕が面白くないし、何よりこのまま負けるなんて、それは真のデュエリストのやることじゃない。このシチュエーションに僕のデッキは、ばっちりと応えてくれた。

「さあ、何を引いたんだ?」

不敵に笑う鎧田だが、すでに奴も余力の全てをさっきの攻撃に費やしたために、これ以上罠が仕掛けられてないことはわかっている。だとすればこの勝負、これで決まる。

にやりと笑い返し、そのカードを場に出してみせた。

「グレイドル・イーグルの2体目を召喚!」

ゴーストタウンに浮かび上がる、銀色の液体が変態した1羽の黄色い鳥の姿。これだ、まさに僕は、このカードを引きたかったんだ。

グレイドル・イーグル　攻１５００　水族→アンデット族

「また寄生効果か?だが、お前のライフはもう残り……」

「忘れたの?グレイドルの真価は、戦闘だけじゃないってことを!僕の墓地に存在する、グレイドル・スライムのモンスター効果を発動!場のグレイドルカード2枚を破壊し、

墓地のこのカードは特殊召喚できる！」

グレイドル・スライム　守２０００　水族→アンデット族

２体のイーグルの体がどろりと溶けて足元で混じり合い、倍のサイズになった水たまりが中央から盛り上がって再びグレイ型宇宙人の上半身へと変化する。ゴーストタウンのメインストリート、その中央に陣取ったスライムの上半身がおもむろに両腕を差し出してその長く細い指を真っ直ぐ前に向けると、指の先から不可思議な光線が放たれてシロッコとブラストに命中した。

「な、なんだ……まさか！」

「そのまさかさ！モンスター効果で破壊されたイーグル２体は、それぞれ寄生効果を発動！僕の元に来い、アンデットフェザー達！」

「２体同時にだと……？そんなの、そんなのありかよ……！」

ありなんだな、これが。マナーはともかく、ルールはちゃんと守った戦術なんだから。寄生、というよりも洗脳の一撃を受け、額に銀の紋章をつけられたシロッコとブラストがスライムの両脇に並び立つ。もはや壁となるモンスターのいなくなった鎧田を、今やこちらの側に付いた２体のアンデットが死神の羽根をまき散らしながら疾風のようなスピードで切り裂き、貫いた。

「バトルだ、シロッコでダイレクトアタック！」

「ち、ちくしょおおお！」
ＢＦ―暁のシロッコ　攻２０００→鎧田（直接攻撃）
鎧田　ＬＰ１０００→０

こうしてデュエルアカデミアノース校と本校との、ずるずると毎年続いた結果なぜか３年間にわたることとなった戦いには一応のピリオドが打たれた。リーダー格のサンダー四天王も、そのライバルだった僕も、来年にはもう卒業してしまう。多分だけど、そうなれば彼らがわざわざ対抗合戦しにくることはないだろう。結局この葵ちゃん売り子作戦は、今年の１回が最初で最後のチャンスだったということだ。まあ、それでもここ最近の開店休業をある程度補える程度には黒字になったから良しとしよう。
そして時がたち、オレンジ色の夕日が水平線の向こうに沈もうとする時間。慌ただしく帰っていこうとするノース校の面々を見送りに来た僕らは、殿を務めるためギリギリまで港に残っていた鎧田と最後の会話をしていた。
「鎧田！」
「……なんだ、お前かよ。いいか遊野清明、今回は俺の負けだ。それは認めてやる。だがこの屈辱、次は世界中の人が見てる前で晴らさせてもらうからな」

そう言ってビシッと指を突きつける鎧田。リベンジは歓迎するけど、世界中？だがその言葉には、僕より先に万丈目が反応して会話に入り込んできた。
「鎧田、それはどういうことだ？そういえばお前、さっきも子供が見たら怖がるって言われたから純構築に寄せてみたとか言ってたよな。ノース校で何かあったのか？」
その疑問に誇らしげな顔を見せる鎧田。その口から放たれた言葉は、僕ら２人を驚愕させるには十分な破壊力を持っていた。
「実はですねサンダー、この間ノース校にプロリーグの視察って人が来て。俺のデュエルスタイルがえらく気にいったみたいで、卒業したらぜひうちに来いって連絡先まで貰ったんですよ」
「なにぃ!?」
「嘘っ!?」
「ところが本当なんだよ、清明。今日だってノース校に帰ったらまたその準備があるから長居できないわけだしな。なんなら、名刺も見せてやろうか？一応その後で調べてみたけど、身元は確かな老舗の団体からのお誘いだぜ。お前もどうせ、卒業したらプロの道に進むんだろ？今日の借りはそこで利子つけて返してやるから、その時までに覚悟決めておけよ」
「……出港だ。ではサンダー、お元気で」

「おっと。悪いな天田、今行くぜ。じゃあな清明、また会いましょうサンダー！」
それだけ言って船に飛び乗ると、ゆっくりとノース校の船団が動き始める。次第に加速して離れていく船の上で、大きく鎧田がこちらに手を振っているのが最後まで見えた。
「ふぅー……」
慌ただしかった1日に一区切りついた時特有の奇妙にけだるい独特な感覚や、爆弾発言を唐突にぶち込まれた時にありがちな思考が追いつかないあの感じ。そういったものがごちゃ混ぜになり、ため息を吐くことしかできずに振り返る。すると、同じような表情の万丈目と目が合った。
「な、なあ、清明」
「あー、うん、言いたいことはわかるよ……」
「俺たちの進路、か……」
卒業。その言葉の意味するところは、頭ではわかっているつもりだった。だけど僕には、そしておそらく万丈目にも、その先の進路のことなんてまるで頭になかった。卒業したら、進学するなりプロ入りするなり、あるいは別の道に進むなり……とにかく、なんかしなくちゃならない。
言葉にするとそれは当然のことだけど、不思議なことにこれまではそこに考えが至ら

なかった。それだけに今の発表、校舎こそ違えど同じ系列の高校に通う同級生がもう進路を明確に決めたというこの事実は、僕らの心にずっしりと重くのしかかることとなった。

ターン１０９　鉄砲水と冥界の札師

嵐のように現れて、その日のうちに去っていったノース校の鎧田たちの来襲からさらに数週間経った、ある晴れた午後。店番しながら売り物の紅茶を自分で淹れて柄でもなく優雅なティータイムと洒落込んでいた時、その知らせはやって来た。
「先輩、いますか？あ、またそれ飲んでたんですか……」
「そうは言うけど葵ちゃん、作ったのは僕とはいえこんだけ甘い香りのお菓子に囲まれてさ、なんで水道水で我慢しなきゃいけないのさ。それに大丈夫大丈夫、これお客さんに出した後の出涸らしだし」
「まだ新品の茶葉使われた方がマシです」
「えー……」
　このやりとりは、もう何度も何度も僕らの間で議論されてきたものだ。互いに相手の頑固さから説得が不可能なことはよくわかっているため、今ではすっかり形骸化してちょっとした挨拶がわりでしかない。そんなことより、と気を取り直した葵ちゃんが、用心深さと好奇心が半々に入り混じった目で廊下の方をちらっと見る。
「先輩、知ってますか？今、またちょっと面白そうなことになってますよ」

「へーい万丈目ー。何やってんの？」
なぜかカードの詰まった段ボール箱を抱えて廊下を歩く見慣れた黒い後ろ姿に声をかけると、見た目より重いのか振り返りすらせずに返事が返ってくる。
「む、清明か。なんでも、カードをデュエルディスクがうまく読み込まない不具合が見つかったらしくてな。この名探偵万丈目サンダーの名に賭けて、不良品のカードを探し出してやろうと、まあそういう訳だ」
「不良品、ねえ。ちょっと見せて？」
段ボールの中のカードを1枚適当に拾い上げ、サクッと展開したデュエルディスクの上に置いてみる。だが、それまでだ。三沢謹製の水妖式デュエルディスクはうんともすんとも言わず、ソリッドビジョンは浮かび上がらない。確かにこれは、不具合としか言いようがないだろう。
「なるほどね……あれ？」
納得してカードをダンボールに戻したとき、その中に全体的に、なにか黒い靄のようなものがかかって見えた気がした。もっとよく見ようと目を細めたけれど、気のせいだったのかたまたま影がかかっただけだったのか、それきり何もおかしなものが見える

ことはなかった。
「どうしたんですか？」
　その様子を見咎めたのか、万丈目の隣を歩いていた見覚えのない生徒が不審そうに聞いてくる。あまり心配させるのもなんなのでたぶん気のせいだろうと結論付け、安心させるように手をひらひらと振ってみせた。
「ああいや、気のせいかな……？えっと……」
「いやだなあ、忘れたんですか？藤原ですよ、藤原優介」
　ほんの一瞬だけ思考に影がかかったような感覚がしたが、それもほんのわずかな間だけだった。ああそうだ、『思い出した』。特に話した覚えはないけれど、確かにれっきとしたうちの生徒だ。
　でも、仮にも3年間なんのかんので顔を合わせてた相手なんだから、名前を思い出せなかったことは素直に謝っておかないと。
「ごめんごめん、咄嗟に出てこなくて」
「あはは。気にしないでいいですよ、影が薄いのは本当ですから。では万丈目君、次はコンピューター室に行ってシステムをチェックしよう」
「なんか手伝おっか？」
「なに、この程度この万丈目サンダーが1人がいれば十分だ。天上院君たちにも手伝っ

てもらってるし、そこまでの人数はいらないだろう。じゃあな」
「んじゃねー」
　再びえっちらおっちらと、段ボール箱を抱えたまま歩き出す万丈目に藤原。確かに葵ちゃんの言ってた通り面白そうな話ではあったけど、カードの不具合なんて僕にどうにかできる範囲じゃない。回収作業ぐらいなら手伝えそうだけど、無理に手伝うのも万丈目に悪いだろう。また店に帰ろうと後ろを向いたその時、ぽつりと頭の中で声がした。
『……なあ、マスター。今の人間だが』
「え、藤原？どうかしたの、チャクチャルさん？」
『ふむ、なら先に謝っておこう。すまないマスター、せいっ』
　その何ともやる気のない掛け声とともにチャクチャルさんが何をやったのかはわからないが、その瞬間全くの不意打ちで後頭部をガツンと殴られたような衝撃が脳の内側から走った。衝撃そのものはそこまで痛いというほどでもなかったが、全く警戒していなかったところに1発喰らったせいで前につんのめってしまった。なんとか転ぶようなこともなく体勢を立て直しはしたが、やはりあまりいい気はしない。
「何すんのさ、もう」
『もう1度聞こう。今の人間は？』
「だから、藤……あれ？」

藤原？誰だそれ？ついさっきまではわかっていたはずなのに、その内容が何ひとつ思い出せない。入学試験？いや、違う。七星門の鍵を校長から預かった時？いや、あの時も藤原なんて奴いなかった。光の結社の時、砂漠の異世界、そして覇王の世界……記憶のどこをひっくり返しても、あんな男見た覚えがない。

「え、あれ？でも確かにさっきまでは……あれ？」

『かかったふりかとも思ったが、やっぱりか。マスター、今度洗脳耐性の訓練しような。ギリギリまで正気を保たせたままで人心を操り、記憶を操作する。大したテクニックでもないが、いざかかると案外厄介だからな』

「洗脳？」

「ああ。恐らく、あの大量の闇の力を受けたカードが原因だろうな。マスターは外部からの影響を受けやすい体質だから、あの程度触れただけでも記憶改修にかかってしまったのだろう。あの藤原という人間、少なくともただの人間と思わない方がいい。何かはわからないが、あのカードも合わせてかなり面倒な力の残滓を感じる。あれだけの数のカードが媒体になっていたとすると、恐らくはこの島全土にあの人間の記憶が植えつけられているとみていいだろう」

割といつも余裕のあるチャクチャルさんが面倒と称するということは、それだけ恐ろしい力を持っているのだろう。話し込んでいるうちにもどんどん思考のもやが消え頭

がはっきりして、それと同時に藤原なんて聞いたこともないという確信が強まっていく。だが、当の本人は既に万丈目を連れて行ってしまったためここにはいない……そこまで考えたところで、ようやくはっと気が付いた。

「そうだ、万丈目が！」

まだ『藤原』を名乗るあれが何者なのか、何の目的があってアカデミアに潜り込んでいるのかはわからない。だけどチャクチャルさんが相手でなければ違和感すら抱かせないほどの大規模かつ精巧な精神操作の手際からいって、かなり強大な力を何か目的があって使おうとしているのは確かだろう。確かに万丈目は強いし、精霊を見る力もある。だけどそれだけでなんとかなるほど、甘い相手ではないだろう。

『マスター。その自分がやられたからってむやみに相手を持ち上げる悪い癖はやめような』

あ、ばれてた……じゃなくて、今はとにかく万丈目だ。あの怪しいカード回収を一緒に手伝ってるらしい明日香たちも心配ではあるけれど、今ぶっちぎりで危険なのは藤原と共に行動している万丈目のはず。

だが、結局コンピューター室に向かうことは叶わなかった。突然何の前触れもなく廊下中の電灯が消え、辺りが闇に包まれる。いやちょっと待った、いくら停電したからって今はまだ昼間。こんなに暗くなるなんてありえない……そう思った矢先、頭の中で

チャクチャルさんの警告する声が短く聞こえた。
『来るぞ!』
何が、なんて聞き返す余裕はない。デュエルディスクを構えて背を壁に付け、どこからとも知れない強襲に出来る限り備えておくのが精一杯だった。そして再び何事もなかったかのように電気がついて、また周りに明るさが戻ってくる。ただし先ほどまでとは違い、そこにいたのは僕だけではなくなっていた。全くの突然に、まるでスイッチを押したら電気が付いたかのように唐突に、あの男が僕の前に立っていた。
「ミスターT……!」
「童実野町以来だな。君は真実にあまりにも近づきすぎた……いや、違うな。君の意思に関係なく、君の存在そのものがこの世界の真実そのものを破壊しにかかっている」
「は?何が言いたいのさ?」
僕の質問にも答える様子はなく、首を横に振ってまた話し始めるミスターT。なるほど、会話のキャッチボールをする気はまるきりないらしい。
「遊城十代。確かに、彼も脅威となる存在ではある。だが彼はあくまで、真実に近づきすぎたが故に危険な存在となったにすぎない。だが君は違う。存在するだけで刻一刻と真実は歪み、君の存在を受け入れるように世界は改変される。我々だけの話ではない、君の存在は世界にとって危険すぎるのだよ」

それだけ言って、腕のデュエルディスクを広げるミスターＴ。表情がピクリとも動かない上に黒いサングラスをかけているためその顔からは何も読み取れなかったが、とにかく言葉で解決する気がまるでないことだけはよーくわかった。

『油断するな、マスター。この気配、闇のデュエルだ』

「……うん、わかってる」

そうだ、この空気が張り詰めているような、それでいて重苦しいような不思議な感覚。覇王の異世界から帰ってこれた時は今度こそこの手の危険からは足を洗ったと思ったのに、まさかこんなに早くこの感覚を再び味わうことになろうとは。

正直、怖い。でも、恐ろしいのは闇のデュエルそのものじゃない。負けたら死ぬ。そのことはよくわかってるはずなのに、僕はこの状況を本心では歓迎している。またこの緊張感の中に身を置く感覚を、心の底では楽しんでいる。そんな僕自身が、僕は一番怖い。いつから僕は、こんなふうになってしまったんだろう。命を賭けるデュエルなんて間違っている……そう言い切ることが、今の僕にはできそうにない。

「準備は整ったかね？では、始めよう」

僕には、そのことを悩む暇は与えられなかった。とりあえず今を生き延びるためにその疑問を、そして人としての葛藤を脇に追いやり、目の前の敵を消し去るために戦って。それが終わったらまた次の相手が現れ、またとりあえずその場を切り抜けるために戦っ

て。そんなことを繰り返しているうちに、今では疑問に思う心さえ風化して消えてしまっていた。それは、いいことだったのだろうか。戦士としては、それでいいのかもしれない。ダークシグナーとして考えれば、それはむしろ望ましい進化のはずだ。だけどつい3年ほど前までは確かに生きていた人間、遊野清明という個人としてみれば、果たしてそれは手放しに喜べる変化なのだろうか。

『マスター?』

黙りこくったままの僕の様子に何かを感じたのか、チャクチャルさんがかすかに心配そうな声で呼びかける。

そうだ、元をただせばこの神様が僕の人生に入り込んだ時から、全てが変わったんだ。あの場で終わったはずの僕の人生は地縛神の力で再び動き出し、その時から少しずつ僕の体は、そして精神はその影響を受けて変化していった……。

「なんて、ね。無駄さ、ミスターT」

「ほう?」

そこまでだ。その意思を込めて口の端だけでかすかに笑い、目の前のグラサン男のその目の奥を真っ直ぐ見返してやる。表情こそ全く変わらないものの、わずかに不快そうな色がその顔に走ったのが見えた気がした。

「確かに、僕はもう3年前の遊野清明じゃない。良くも悪くも、ね。だけど、もういい加

減にあの覇王の世界で腹を決めたのさ。もう純粋に人間だった頃は戻らない、それだってかまわない。この3年間の思い出に、僕は自身を持って言い切ることができる。チャクチャルさんがくれたこの第2の人生、これにはそれだけの価値がある。そこを起点に僕の心の闇を増幅させようだなんて生温い考え、もう僕には通用しない！僕はデュエリストにしてダークシグナー、遊野清明！この名のもとにミスター……いや、トゥルーマン！お前はここで倒される、それが僕の突きつけてやる真実だ！」

「なるほど。ならば、力づくで排除する必要があるようだ」

よほど切り替えが早いのだろう。おおかた僕の心の闇を増幅させ戦わずして勝つつもりだったのだろうが、それが失敗しても淡々と呟いたのみで改めてデュエルディスクを構えなおす。今度はふりではなく、本当にデュエルに持ち込む気のようだ。

「望むところさ。行くよ、チャクチャルさん！皆！」

『マスター、その前にひとついいか？』

「ん？なに？」

『大したことではないのだがな。その……ありがとう、そう言ってくれて。私も……いや、時間を取らせてすまなかったなマスター。この戦いも、そしてこれからも、私達で共に勝とう』

普段絶対に聞くことのできないであろう、この地縛神の素直にもほどがある言葉につ

い目を丸くする。だけど、ここで茶化したりするほど僕は無粋じゃない。ここでいらんこと言わなきゃ、どこかでまたデレてくれるかもしんないし。

だからにっこりと笑い、こう言うにとどめておいた。これもまぎれもない、僕の本心だ。

「当然でしょ?・さあ、それじゃあデュエルと洒落込もうか!」

廊下には依然として人の気配すらなく、どうやらミスターがT何らかの方法で人払いをかけたらしい。それなら、こちらも気兼ねなく戦えるってもんだ。

「「デュエル!」」

先攻を取ったのは、ミスターT。まあ、何も問題はない。

「私が先攻か。ならば、ダーク・クルセイダーを召喚」

何が来るかと身構える僕に対しまずミスターTが出したのは、漆黒の鎧にボロボロの赤いマント。そして自らの体ほどに太い大剣を掲げた、仮面の戦士だった。

「ダーク・クルセイダーは手札の闇属性モンスターを墓地に送ることで、1体につき400ポイント攻撃力をアップさせる。とりあえずこの1枚、ダーク・ネフティスを送っておこう」

ダーク・クルセイダー　攻1600↓2000

「さらに、魔法カード、闇の誘惑を発動。カードを2枚ドローし、手札からこの闇属性

カード、異次元の偵察機を除外する。カードを1枚伏せ、異次元の偵察機の効果を発動。このカードは除外されたターンの終わりに帰還する」

突然空間に穴が開き、球体形をした小型の宇宙船のような機械がその中から現れる。

異次元の偵察機　攻８００

これで攻撃力２０００越えのアタッカー1体とおまけのように呼び出されたモンスター、そして伏せカードが1枚。先攻1ターン目の布陣としては、普通ならば何もおかしくはない、のだが。軽く眉をひそめると、チャクチャルさんの同調するような声がした。

『怪しいな。わざわざマスターを名指しで狙いに来た以上、デッキの下調べも済んでいるはずだ。とてもその対策ができているとは思えない……となると、鍵はあの伏せカードか』

「だよね」

サイクロンでも引けていればよかったのだが、あいにくとそんなカードは手札にない。仕方がないから次善の策として、何を企んでいるにせよここはあえてその罠に足を踏み入れてやろう。

「グレイドル・コブラを召喚し、さらに水族モンスターの召喚に成功したことで、手札のシャーク・サッカーを特殊召喚！」

グレイドル・コブラ　攻１０００
シャーク・サッカー　守１０００
攻め込むだけならコブラで十分だったが、用心のためサッカーにも壁として出てきてもらう。守りとしては不安定だけど、久々の出番に本人の気力は十分だ。
「バトル！コブラでダーク・クルセイダーに攻撃！」
「いいだろう、迎え撃て」
グレイドル・コブラ　攻１０００（破壊）→ダーク・クルセイダー　攻２０００
清明　ＬＰ４０００→３０００
ピンク色の大蛇が飛びかかったところを、重そうな大剣を一振りして空中で返り討ちにする漆黒の戦士。だが、その攻撃はただの囮。切断面から血の代わりに噴き出た銀色の液体が、かわすこともできないほどの至近距離で騎士の体をまだらに染める。その液体がびくびく、とかすかに蠢きながら、一斉に騎士の鎧や仮面の隙間からその体内へと潜り込んでいった。
「く……さあ、これでコブラのモンスター効果を発動！ダーク・クルセイダーに寄生し、そのコントロールを得る！」
額に銀の紋章が浮かび上がった戦士が、剣を片手にこちらのフィールドへやってくる。本当ならわざわざ攻撃力の高いダーク・クルセイダーに攻撃してやる義理はないの

だが、残念なことに異次元の偵察機の攻撃力はギリギリコブラを下回る。ここで何か仕掛けてくるかと思ったが、ミスターＴは沈黙を保ったままだ。コブラの効果を無効にするカードじゃないとなると、あの伏せカードのトリガーは戦闘ダメージ？それとも攻撃宣言？

いや、考えていても仕方ない。僕のライフは今の攻撃で１０００減ってしまった、それを少しでも取り戻すためにはここで攻撃するしかない。罠なら罠で結構、早いうちに引っぺがしておこう。

「やれ、クルセイダー！異次元の偵察機に攻撃！」

「トラップ発動、ギブ＆テイク。私の墓地からモンスターを君の場に守備表示で蘇生し、そのレベルを私のモンスターに与える」

ダーク・ネフティス　守１６００

異次元の偵察機　☆２→１０

闇の炎が地面から噴き上がり、その流れに乗って漆黒の不死鳥が舞い上がる。無理やり呼び出された不死鳥が不満げに翼を広げた拍子に体中の炎が飛び火し、新たな獲物を見つけたとばかりにダーク・クルセイダーの体に広がり、焼き尽くし始めた。

「こ、これは？」

『ダーク・ネフティスの強制効果か。特殊召喚された際に場の魔法・罠を１枚破壊する、

本来ならその対象を選べるのはコントローラーのマスターだが……』
「今この場にある魔法カードは装備状態のコブラのみ。だから強制的にコブラが破壊されて、連鎖的にダーク・クルセイダーも破壊された……ってわけね」
「理解が早くて助かるよ。さて、どうする？」
どうするも何もない。僕のフィールドに攻撃可能なモンスターはなく、これ以上バトルフェイズを続ける意味はない。それにしても気になるのが、なぜギブ＆テイクとダーク・ネフティスのコンボなどという回りくどい手を使う必要があったのかだ。事実引っかかっている以上あまり偉そうなことが言えないのも確かだが、何もこんな手を使わずともグレイドルを妨害する方法はいくらでもあったはずだ。
何か別の狙い、あるいは他のコンボが用意してあるのだろうか。だとすればそれが発揮される前に潰すに限るけれど、そううまくいくかどうか。
「カードをセットして、ターンエンド」
「この瞬間、ギブ＆テイクによるレベル変動効果は消える」
異次元の偵察機　☆１０→２
ミスターＴ　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：異次元の偵察機（攻）
魔法・罠：なし

清明　ＬＰ３０００　手札：３
モンスター：シャーク・サッカー（守）
ダーク・ネフティス（守）
魔法・罠：１（伏せ）
「私のターン。シャーク・サッカーをリリースし、手札から君のフィールドにこのカード、サタンクロースを守備表示で特殊召喚する」
サタンクロース　守２５００
「サッカー!?」
シャーク・サッカーの姿が、突然白い袋を背負った赤い悪魔の姿に成り替わる。でも、サッカーの守備力はわずか１０００。それをリリースしてまでわざわざ僕のフィールドに守備力２５００ものモンスターを出してきたのは何のため……ああいや、そういうことか。
『用心が完全に裏目に出たな』
チャクチャルさんの簡潔な評を聞き、無言で頷く。僕だって壊獣、グレイドルの両テーマの使い手だ。コントロール関係はある意味専門分野なんだから、ミスターＴの次の行動など容易に予想がつく。ましてやこの男……いや、人間ではないのだからこの呼び方が正しいかどうかも分からないがこの存在は今回、僕のことをピンポイントで消し

に来ている。となれば、この程度のメタカードは予定調和だろう。
「魔法カード、所有者の刻印を発動。フィールド全てのモンスターのコントロールは、その元々の持ち主の元に戻る。ダーク・ネフティス、サタンクロースの2体は返してもらおうか。そして、ダーク・ネフティスを攻撃表示に変更する」
「やっぱり……！」
ダーク・ネフティス　守１６００→攻２４００
グレイドルによる寄生の努力を1枚で無に帰す恐るべきメタカード、所有者の刻印。今の僕のデッキは相手フィールドにモンスターを展開する壊獣のおかげであのカードにもある程度の耐性があると言える状態だが、今はないカードのことを話していても仕方ない。
ミスターTが今回使っているデッキはグレイドルにメタを張りつつ、自分は送り付けたモンスターを奪い返して戦うことをコンセプトとした……まあ、そんなところだろう。そして、その狙いは今のところ気持ちいいくらい綺麗にはまっている。
「バトルだ。行け、異次元の偵察機」
「だからって、舐めんなぁ！トラップ発動、波紋のバリアーウェーブフォース！相手がダイレクトアタックを宣言した時、相手フィールドの攻撃表示モンスター全てを持ち主のデッキに戻す！」

球体が側面に付いたアームで殴り掛かってきたのをトリガーに、僕の体の前面に半球状の水のドームが展開される。攻撃を受け止めてはその勢いを受け流す水の守りが、その名のごとく波紋を立てて２体のモンスターを吹き飛ばした。

これで２体のモンスターがデッキへとバウンスされ、ミスターＴの場に残ったのはサタンクロース１体のみ。かなり応えていてもおかしくないはずなのだが、以前としてその表情は変わらないままだ。

「ならばエンドフェイズ、サタンクロースの効果を発動。このカードが自身の効果で特殊召喚されたターンのエンドフェイズ、コントローラーはカードを１枚ドローする」

「そんな効果まで……」

まさに一方的に送り付けて帰還というあのデッキのためにあるようなドロー効果により、こちらからの被害を最小限に抑えるミスターＴ。余裕の表情はそういう訳か、と納得はしたが、やはりミスターＴは強い。ずっと前に童実野町で戦った時も思ったけど、とにかく動きに無駄がないのだ。

『だが、それは奴の一番の弱みでもある』

「どういうこと？」

奇妙なことを口走るチャクチャルさんに聞き返すと、僕を元気づけるためかすぐに答えが返ってきた。

『奴らに人間のような心はなく、従って常に冷静かつ無駄のない戦いが可能となる。それは確かに強みでもあるが、魔術の札……デュエルモンスターズはそれだけで勝負が決まるほど単純なものではない。それは、マスター自身がよく知っているはずだ』
「ふむふむ」
『確かに奴のデッキにはそつがなく、常に安定している。だがそれがなんだ？マスターの組んだデッキには1枚1枚に思いを込めて選び取ったマスターの魂が宿り、精霊の力が宿っている。奴にとってカードは手段でしかなく、引き出せる力はカードに記された情報によるそれを決して上回ることはない。いくらスペック上は優秀でも、所詮それ止まり……実戦にそんなものは、気休め程度の役にしか立たないからな』
「ありがと、チャクチャルさん。だいぶ気が楽になったよ」
　どうやら、もう少しこの神様のデレ期は続くらしい。絶対にいらんこと言って自分から終わらせないようにしようと固く心の中で誓い、目の前の勝負に気持ちを戻した。
「僕のターン、ドロー。さあ、今度はこっちの番だ！フィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントを発動！そしてサタンクロースをリリースして多次元壊獣ラディアンをお前のフィールドに攻撃表示で特殊召喚、フィールドからカードが墓地に送られたことで壊獣カウンターを1つウォーターフロントに乗せさせてもらうよ」
　ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（１）

多次元壊獣ラディアン　攻２８００

「さらにグレイドル・アリゲーターを攻撃表示で召喚。さあ、バトル！アリゲーター、ラディアンに攻撃！」

ありがたいことに手札誘発の類はなかったらしく、なんの妨害も入らないままのしのしと這って行ったアリゲーターが大口を開けてラディアンの足にかぶりつこうとして踏みつぶされる。闇のデュエルで受けた２０００ポイント以上の大ダメージがもろに体に響いたため額からは嫌な汗が流れ、呼吸も少し荒くなる……でも、これでいい。これはあくまでもコンビプレーの一環、これこそが僕の狙いだ。文字通り、さっきのお返しをしてやろう。

グレイドル・アリゲーター　攻５００（破壊）→多次元壊獣ラディアン　攻２８００

清明　ＬＰ３０００→７００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）→（２）

「アリゲーターの効果でラディアンに寄生して、このコントロールは返してもらうよ。帰ってきたラディアンでそのままダイレクトアタック！」

僕の元に戻ってきたラディアンが、その腕を地面に叩き付けて衝撃波を起こす。するとミスターＴの体がそれに吹き飛ばされて天井に嫌な音を立てて激突、受け身すら取らずに人形か何かのように落下した。並の人間なら良くて全身骨折、悪くすれば命に係わ

りかねないほどの衝撃のはずだったが、ややあって相も変らぬ不気味な笑みを口の端に張り付けつつ平然と起き上がってみせた。やっぱり、ライフを０にする以外の物理的なダメージはまるで受けないってわけか。

多次元壊獣ラディアン　攻２８００↓ミスターＴ（直接攻撃）

ミスターＴ　ＬＰ４０００→１２００

「次行くよ次、メイン２にラディアンの効果、分身を発動！壊獣カウンター２つをコストにラディアンは次元の壁を砕き、別の次元からラディアントークン１体を呼び寄せる！」

ラディアンが無造作に腕を振り回すと、空の一角に突然ひびが入る。ひびは広がって裂け目になり、その向こう側の世界からラディアンそっくりの異星人がするりと空間の隙間を通ってやって来た。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）↓（０）

ラディアントークン　攻２８００

「倒しきれなかったのは惜しいけど……ターンエンド」

今のターンは確かにミスターＴの場をがら空きにしたうえでダイレクトアタックも決められたけど、そのためにこちらが支払うことになった代償もかなり大きい。ライフは一気に３ケタにまで減り、手札にもう壊獣のカードはない。

　でも、そのことに後悔はしていない。認めたくはないがさっきまでのターンまで、流れは確実に僕ではなくミスターＴの側に来ていた。それをこちらに引き寄せるためには、それ相応の代償を支払わなければならない。
『それに不完全とはいえ相手がメタを張り始めた以上、長丁場の戦いはリスクが大きい。短期決戦を狙うこと自体はそう悪い話ではないな』
「不完全……やっぱそう思う？」
　それについては僕も気になっていたところだが、チャクチャルさんも同感だったらしい。頭の中で、重々しく頷く気配がした。
『ああ。どうせ対策するなら壊獣にも何らかの手を打てばいいのに、先ほどから見ている限りあれではまるで対グレイドルだけを想定したデッキだ。奴が異世界での出来事を知るすべがないはずはない、まるでわざと不完全なデッキを組んで挑んできたかのようにすら見える……だが、今はとにかくこのミスターＴを倒しておこう。どうせ一時しのぎにしかならないだろうが、放っておくわけにもいかないからな』
　チャクチャルさんの言葉にも一理ある。何がしたいのか今一つはっきりしない不完全なメタ、意味深な発言、どうにもイライラすることばかりだけど、とにかくこの場を……と、そこまで考えたところでふとあることに気づき苦笑した。とりあえずこの場を、なんて、これじゃあついさっきこのデュエル前にミスターＴが僕の心をへし折りに

来たとき誘導した思考そのものじゃないか。
とにかく、気をしっかり持つことだ。あまり疑心暗鬼になりすぎるとかえって周りの物が見えなくなることは、これまでの３年間で嫌というほど痛い思いをして学んできた。

ミスターＴ　ＬＰ１２００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ７００　手札：１
モンスター：多次元壊獣ラディアン（アリゲーター・攻）
　　ラディアントークン（攻）
魔法・罠：グレイドル・アリゲーター（ラディアン）
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）

「私のターン、ドロー……」
「？」
気のせいか、今ミスターＴがカードを引いた瞬間、それを見もせずに何か別の場所に気を取られたような気がした。サングラスの奥の視線は僕の方を向いているが、恐らく僕のことを見ているわけではない。

となると、その後ろだろうか。罠の可能性も考えながらもついついつられてチラリと背後に目をやるが、当然静まり返った廊下には虫一匹飛んでいない。よくわからない不気味な沈黙が数秒間続いたが、何か考えがまとまったらしいミスターTがまた動き出した。

「ああ、私のターンだったな。私の墓地の闇属性と光属性の数が等しい時、そのどちらかの属性をすべて除外することで手札のこのカードは特殊召喚できる。出でよ、カオス・ソルジャー　―宵闇の使者―」

体の半身を純白、もう半身を漆黒の鎧に包んだ、開闢と対を成す宵闇のカオス・ソルジャー。これが奴の今度のエースモンスター、ということでいいのだろうか。

カオス・ソルジャー　―宵闇の使者―　攻３０００

「さらにこの瞬間、光属性を素材とした宵闇の使者の効果を発動。バトルフェイズを放棄することで、フィールドのモンスター1体を除外する。私が選択するのは、ラディアントークン……」

「だったらここで、手札からモンスター効果発動！相手フィールドでモンスター効果が発動した時、手札のこのカードを捨てることで破壊する……お願いね、幽鬼うさぎ！」

宵闇の使者が剣を振りぬき、次元を切り裂く斬撃を放つ。だがそれと交差するように僕の背後から目にも止まらぬスピードで飛んでいった1本の鎌が、正確にその白黒に分

かれた境目に突き立った。後ろを振り向いて親指を立ててみせると、無い胸を張ってちょっと得意げに微笑む銀髪の女の子がすうっと消えていくのがチラッと見えた。

これで、宵闇の使者は倒した。とはいえ、これで終わるはずもない。この程度で手詰まりになるような相手なら、もっとすんなり勝負は……。

「ターンエンドだ」

「え……？」

『ん？』

あっさりと終えられたターンに、僕だけでなくチャクチャルさんまで意表を突かれる。でもラッキー、よりも怪しい、という感想が真っ先に出てきたのも無理はないと思う。まだミスターTには召喚権だって残っているし、手札だって2枚もある。にも関わらずターンを終えるとは、よほど手が悪いのだろうか。

いや、相手は人外の存在だ。手札事故なんて可能性、まずありえないだろう。何を企んでいるのか、僕には見当もつかない。

『……だが、殴るしかないだろうな。不本意だが、何かあればその時はその時だ』

チャクチャルさんですら、何が奴の狙いなのか絞り切れていないようだ。となるとこの神様の言うとおり、とにかく殴って確かめるしかない。

「僕のターン。ラディアン、そのままダイレクトアタック！」

多次元壊獣が再び動く。恐らくこの攻撃は何らかの方法で無効になるか、ミスターＴには届かないだろう。だがラディアンの体がぐんぐん迫り、その腕が振りかぶられても、ミスターＴは微動だにしなかった。そして、そのまま腕が振り下ろされてもなお、ミスターＴは何もアクションを起こさなかった。

多次元壊獣ラディアン　攻２８００→ミスターＴ（直接攻撃）

ミスターＴ　ＬＰ１２００→０

勝った。でも、まるで勝った気がしない。何を考えているにせよ、闇のデュエルで倒れたのだからそのまま消えるはずだ。だがそんな常識すら通用しないのか、何事もなかったかのようにミスターＴは立ち上がった。あの覇王ですら全力で抗うのがやっとだった闇のデュエルの決まりをいとも簡単に無視してのけるあたり、その底しれない力の一端を感じさせる。

「おめでとう、今回は君の勝ちだ。今日のところはここまでといいが、また会いにくるよ。その時まで、せいぜい楽しんでおくといい」

そしてその言葉だけを残し、出てきたときと同じように唐突に消え去った。

『待……いや、逃げられたか』

一体、何を考えていたのだろう。あの最後のターン、もう少し何かやろうと思えば十中八九できたはずだ。にもかかわらず何もしなかった……まるで、勝負を途中で投げ出したかのように。だとすれば、そんなことをする理由とは何だろう。

情報が少なすぎて、何も思いつかない。こんがらがってきた頭をふるふると振ったところに、聞きなれた声が飛び込んできた。

「あ、清明だ。どうしたの？って」

「夢想！……い、いや、大したことじゃないよ。うん、ちょっとね。それよりそっちこそ、どうしたのさこんなとこで」

こちらの質問には答えず、代わりに向けられた探るような視線に気づかないふりをして耐える。

覇王の世界に行ってる間に彼女がどんなことになっていたのかはあれから葵ちゃんにたっぷり聞かされたし、そうでなくとも僕が帰ってきてすぐの憔悴しきった彼女の顔を見れば、どうなっていたのかは容易に想像がつく。もう彼女には一生分の心配をかけたんだ、さらにミスターTの話なんてできるわけがない。

まだ納得はしていないようだったが、結局この場での追及は諦めてくれたらしい。最後にもう一度じっとりとした視線を向け、話を切り替えた。

「清明も、変なカードを集めてた話は聞いてたんだよね？だって。それで集めたカード

を置いておいたんだけど、目を離したすきに誰かが全部燃やしちゃったみたいで……今万丈目君たちが犯人捜ししてるんだ、ってさ」

「燃やした!?カードを!?と、とにかくそこまで案内して！」

既に燃えカスになってしまったのなら行ったところで何ができるわけでもないが、それでもじっとしていられなかった。それにしても、万丈目が犯人探しをしているということは、少なくとも今は何事もなかったわけか。元来た道を先に立って走り出す夢想の後姿に、結果は見えているとはいえふと気になって先ほどの疑問をぶつけてみた。

「そういえばさ、夢想。藤原優介……って名前、知ってる？」

突然の変な質問にも素直に少し考え込み、走りながらゆっくりと首を横に振る夢想。何を言ってるのかと言わんばかりの口調で、不審そうに逆に聞き返す。

「どうかしたの、清明？そんな名前の人は聞いたことがないよ、だって」

「え!?」

『む？これは……予想外の反応だな』

突然大声を出して驚く僕に、いよいよ不審そうな目を向ける夢想。でも、こちらも今の言葉のせいでそれどころではなかった。夢想は、藤原優介の存在を知らない？

え、ちょっと待って、これはいったいどういうことだろう。チャクチャルさんの推察が正しければ、藤原の存在に関する偽りの記憶は既にアカデミア中に広まっていなけれ

ばおかしいはずだ。にもかかわらず、夢想はその影響を受けていない。そういえばさっきのミスターTも、途中で何かに気が付いてから妙にあっさりと勝負を切り上げていた。そしてそのすぐ後で、夢想がこの場にやって来た……いや、さすがにそこまでは考えすぎか。夢想を疑うなんて、そんなことする意味はない。彼女と過ごしてきた、この3年間の記憶に嘘はない。彼女は僕の仲間で、それと……かけがえのない、大切な人だ。

「ごめんごめん、夢想。じゃあ、その場所に案内してよ」

「うん。こっちだよ清明、ってさ」

再び彼女の後をついて歩きながら、今浮かんだばかりの疑心の炎を頭の中で打ち消そうとする。だけどいくら努力してもその小さな小さな種火は消えず、いつまでも頭の中でくすぶり続けていた。

ターン１１０　鉄砲水と英雄、空爆

夢想の後をついて、アカデミアの外に出る。校舎の裏手のちょっとした死角になっている一点から、かすかな煙と焦げ臭いにおいが漂ってくるのを感じた。万丈目や明日香、翔に剣山といったいつものメンバーがやってくる僕らを認めてあいさつ代わりに手を上げる。

「……これがその、燃やされちゃったカード？」

「そうよ。誰がこんなことを……」

焼け跡から半分以上灰になってしまい、もはやデュエルディスクも認識してくれないであろうカードの残骸を何気なく拾い上げる。まだ使えそうならこっそりちょろまかしていこうかとも思ったけど、これは流石に無理だろう。辛うじて残っていた文字やイラストから察するにこれは大木炭１８、昼夜の大火事、終焉の地、か。何とも皮肉なラインナップだこった。

燃えカスをまた元の場所に戻すと、呆然としたままの皆の顔が見えた。なんとはなしに眺めまわしたところでようやく、あることに気づいた。

「あれ、藤原は？」

藤原。まだ敵か味方かすらわからないが、少なくともただの人間ではない謎の存在。なぜかここの生徒に成りすまし、なぜかカード回収に手を貸していた。あれ、やってることだけ取り上げると稲石さんみたくただのお人よしな気がする不思議。

だが、そこで返ってきた反応はおおいに訳の分からないものだった。

「藤……原？えっと、誰だったかしら……？」

「確かに聞き覚えがあるような気はする……んだがな」

「え……？」

これはおかしい、明らかにおかしい。百歩譲って明日香辺りがわからないのはまだいいとして、ついさっきまで一緒に行動していたはずの万丈目までこんなにはっきりしないのは、どう考えても普通じゃない。手伝うだけ手伝って記憶消してどっか行くとか、ホントに何がしたかったんだあの男。ますます困惑する僕をよそに、話は別の方向にまとまり始めていた。

「こうしていても仕方ない、まずはこの犯人を捜すとしよう」

「でも万丈目君、そんなのどうするんスか？」

「決まっているだろう、捜査の基本は足だ。辺りに怪しい奴がいなかったか聞き込みに行くぞ！」

「そんなのカードが詰まった段ボール抱えて校舎中歩き回ってた万丈目先輩の名前が挙

がるだけだと思うドン……」
「なんだと!?」
「アニキなら、こんな時どうしたかなぁ」
　ワーワーと言い争う万丈目と剣山の隣で、翔がポツリと呟く。不思議なことだが、その名前が出た瞬間ぴたりと場が静まり返った。
「そうだな。この名探偵サンダー1人でも十分だが、ここはまた奴にも華を持たせてやるとするか」
「最近はずっと寮にこもってばっかだけど……」
「じゃあ、ちょっとアニキのことも呼んでくるッス」
「あ、ちょい待ち翔。僕もいったん部屋に戻るよ、カバンが店に置きっぱだから戻しておきたいし」
「清明が行くなら私も行こうかな、ってさ」
「なら、私たちは聞き込みね。行くわよ、万丈目君、剣山君」
　今はこの場にいない十代の存在が中心となってようやく動き出すあたり、彼の影響力の強さがよくわかる……なんて、しみじみしてる場合じゃない。最近の世捨て人っぷりは目に余ってたし、これもちょうどいい機会だろう。
　だが結論から言って、この考えは不発に終わった。レッド寮にたどり着いた時十代は

そこにはおらず、ファラオもどっか行ってしまったため大徳寺先生に話を聞くこともできなかったのだ。
「散歩でもしてんのかね、ったくもう。じゃあ僕は海の方を探しに行くから、翔は火山の方、夢想は海の方をお願い。見つけたらちゃんと連絡すること、いい？」
「了解、って」
「わかったよ」
　レッド寮の前でさらに三手に分かれ、それぞれ割り当てた場所に十代を探しに行く。ただし、僕の狙いはそこではない。適当に海の方へふらふらと歩き、周りに誰もいないことを確かめてからデュエルディスクを展開する。
「……チャクチャルさん、どう？」
『少し待っててくれ、今探してる』
　散歩、ねえ。一応口ではああ言っておいたけど、僕だってそんなものを本気で信じてはいない。このタイミングで行方不明ということは、まず間違いなくミスターＴ絡み。恐らく、僕のところに現れたのと同様に十代にも何らかの形で接触したのだろう。あの十代のことだからただでやられるなんてことはないだろうが、だからといって放置なんてありえない。これでも親友のつもりだ、そこまで冷たくはない。
『お、いたいた。校舎……を出て、島の端の方向か？追いかけるか、マスター？』

「当然。今も動いてるの？」
『そのようだな。真っ最中ではなさそうだ』
　なるほど、少なくとも今は安全ということか。とにかく合流しようと、チャクチャルさんの示した方向へと早足で崖沿いの森の中を歩き出した。ありがたいことに、常に正確な相手の位置をナビしてくれるチャクチャルさんがいるので見失う恐れはない。なので周りの様子に気を配りながら歩く余裕すらあったが、僕が見る限りいたって普通の海沿いの光景だけが広がっていて、この場所に新たな危機が迫りつつある……かもしれない風にはとてもじゃないが見えない。海は穏やかで空はそこそこ晴れ、海風が心地よく吹いている。
　見た感じの世界は凄く平和で、のどかで、きれいなものだ。本物のヒーローならこの景色を見て、この世界を救おう、守ってみせるという決意を新たにしたりするのかもしれない。だけど僕は、そんな大それたことは思わなかった。というかいい加減、ヒーローの真似事をするのは懲りた。この世のあらゆる難しい話は僕にとっては専門外、もっと世の中単純に行こう。敵が喧嘩を売ってきた、だから残さずぶちのめす……ほら、だいぶわかりやすくなった。それでいいし、それだけでいい。下手に気負ったって空回りするだけなのは、この数年で身に染みた。本当に生きてんだか死んでんだかもよくわかんないような化物には、そんな程度で十分だ。

そんなことを考えていると、突然道が開けた。長かった森を抜けたらしく、その先に十代の後ろ姿が見えた。声を掛けようとするも、その向こうにさらに2つの人影がいるのに気づいた。1人は老人で、なんか見た覚えはあるんだけど誰だったか思い出せない。でも、もう1人はよく知った顔だった。

「斎王……？」

この時点でさっと身を隠し、耳を澄まして木陰にまぎれてじりじりとにじり寄る。なぜ斎王がこの島にまた来たのか、なぜ十代がそこにいるのか。なんだかわからないけれど、なんだか面白そうなことやってんじゃないの。やがて少しずつ、会話の内容が耳に入ってきた。どうやら斎王たちが十代に何かを伝えに来たものの、肝心の十代がどうもつれない態度らしい。

「……我々に啓示が下ったということは、君も気づいているのだろう。だからこそ、君はその原因が自分にあると感じ、1人でこの島を出ようとした。違うかね？」

「さあな」

「鮫島校長から聞いたが、ついさっき退学届けを出してきたそうじゃないか。だが十代、もはや話はそんな単純な次元ではないのだよ。調査チームの調べによれば、この島に何らかのエネルギーが噴出しようとしていることを突き止めた。あくまで仮説だが、こちら影丸会長の三幻魔、私の光の波動、そして君のユベル……これらの事件が複合的にこ

の次元へと負担をかけ、その結果その中心であったこの島に新たな事態を引き起こそうとしているのだろう」

ふむふむ。多分、僕もその片棒はかついでいるのだろう。この地縛神の存在がどれだけ次元を揺さぶったのかはわからないが、この際その割合は問題じゃない。それに斎王の言葉のおかげで、もう1つ思い出したことがある。あの斎王が車椅子を押すよぼよぼの老人、あれは影丸会長だ。確かに言われてみれば、アカデミアのパンフか何かで写真を見たことがある。三幻魔の時は色々ニアミスして会えなかったから、こうして直接顔を見るのは初めてだ。

それにしても、いないと思ったら退学届なんて書いてたのか十代。まーたそうやって勝手なことやって。

「それで、なんでそれを俺に知らせに来たんだ?」

「これは、我々がデュエルモンスターズを悪用した報いかもしれん。身勝手なのは承知の上だが、我々はいまだ入院患者。十代君、君にこの事態を収拾してほしい」

そう言って、頭を下げる斎王と影丸会長。多分この結論にたどり着くまでに、何度も何度も考えたのだろう。十代に、またしてもすべてを押し付けてしまっていいのか。あれだけ世界を救ってきた本物のヒーローを、またしても新たな戦いの最前線に押し付けるなんてことが許されるのだろうか。だけど、他に道はなかった。だからこそその苦し

みを堪え、断腸の思いで頭を下げている。
今の２人の気持ちを想像すると盗み聞きする僕には図々しい、という思いより先に同情すら湧いてきたが、十代の出した結論はどうやら違ったらしい。
「俺達は同じ穴の狢だから、俺にその尻拭いをしろってか？」
珍しい、というか僕もほぼ聞いた覚えのない十代の皮肉と、その内容の正しさに押し黙る大の大人が２人。ああもう、見てらんない。
「同じ穴の狢、ねえ？確かにそうも言えるだろうけど、僕の見立ては少し違うかな」
「清明!?どうしてここに!?」
「君は……そうか、君もここに来ていたのか」
あ、しまった。情報収集だけやるつもりだったのに、見てられなくなってついつい口出しちゃった。こうなった以上仕方ないので、身を隠すのは諦めて藪の中から立ち上がる。せめて最初からここで出てくる予定だった風に見えるようなるべくさりげない動きで制服中に付いた木の葉や小枝を払い落とし、極力澄ました顔で十代の目を真っ直ぐ見据えてやる。
「お久しぶり、斎王。さて、十代。この状況だけど、僕はこう読んだね。踊るアホウに見るアホウ……なら、同じアホなら踊らにゃそんそん、さ。ここまで来た以上、僕は今になって見るアホウにはなりたくないね。１人でどっか行こうだなんて、そりゃちょっと

水臭いんじゃないの？」
　この時十代が何を言おうとしていたのかは、わからない。まっすぐに見返してくる彼の目は深く、そこから何らかの感情を読み取ることは難しかった。それに、もし彼が何か言い返そうとしていたのだとしても、それはすでに遅かった。突然島全体を揺るがすような地響きが起き、空間がぱっくり割れてその裂け目から奴が現れたのだ。
「これはこれは御揃いで。また会ったね遊城十代、それに遊野清明」
「お前は！」
「ミスターＴ、また来たの？懲りないね」
　あの反応から見ても、やはり十代のところに来ていたのは間違いなかったらしい。あっちに行ったりこっちに来たり、何ともせわしない奴だ。
「清明、お前もこいつに会ったのか？」
「ちょっとした仲でね、互いに互いが大っ嫌いなのさ。斎王、それに影丸さんも。ここは逃げたほうがいいと思うよ」
「本来ならば私も戦うのが筋なのだろうが……そうさせてもらおう。本当にすまない」
　それだけ言って車椅子を押し、近くに止められたヘリに乗り込む２人。パイロットは別にいたらしく、ドアが閉まるや否やプロペラが回転を始めた。そしてほんの一瞬目を離したすきに、ミスターＴはその底知れない力を新たな方法で開放していた。

「「逃げるなら別に追いはしない。私が用があるのは君らの方だ」」
「増えた……？」
「相変わらず何でもありだねえ」
なぜか二重に聞こえる声に振り返ると、そこにいたのは背格好から服装、ちょっとした仕草までそっくりそのまま、まるで同じな2人のミスターT。童実野町でも見せられた技だから僕にとってはそう驚くことでもないが、初見の十代は意表を突かれたらしい。
「「我々はこれで2人、そして君たちも2人。1対1ではいささか厳しい相手だからね、タッグデュエルで勝負と行こうじゃないか」」
言うが早いが、僕と十代の立っている部分を残していきなり周りの地面が崩れ落ちる。さっきまでここにあった大地の落ちていく先は、海は海でも火山の下を流れる溶岩の海。一体どれほどの力を使えばこんなことが可能なのか、ぽつんと残った2本の円柱状の岩の上に、僕らだけが辛うじて立っている格好だ。
「嘘でしょ、こんなこともできるの!?」
『……ふむ。しっかりな、マスター』
「そんな他人事みたいに言っちゃって……でもいいね、悪くない。こんなのを相手にできるんだ、逆に燃えてきたね」

「断ることはできないってわけかよ……仕方ない、清明！」
「当然。話が早いのは嫌いじゃないよ、タッグデュエルと洒落込もう！」
「「「デュエル！」」」
　タッグデュエル。覇王の世界でもオブライエンとタッグを組んだけど、あの時は相手が覇王１人という変則デュエルだった。こうして本来の意味でのタッグデュエルをするのは久しぶりだが、腕が鈍っていなければいいのだが。
　そして最初のターンはミスターＴ側。僕らから見て右にいる方が、おもむろに手札の１枚をデュエルディスクに置いた。
「私のターン、ジェネクス・ニュートロンを召喚する」
　まず先陣切って場に召喚されたのは、黒を基調にオレンジ色のパーツをところどころに持つ人型の機械。あのカードは確か……駄目だな、止められない。
　ジェネクス・ニュートロン　攻１８００
「カードを２枚伏せてエンドフェイズ、このカードのモンスター効果を発動。召喚に成功したターンのエンドフェイズ、デッキから機械族のチューナー１体を手札に加える。私が選ぶのはこのカード、音響戦士（サウンドウォリアー）ピアーノだ」
「次は俺のターンだな。最初から飛ばしていくぜ、融合を発動！手札のエッジマンとスパークマンで融合召喚！来い、プラズマヴァイスマン！」

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　プラズマヴァイスマン　攻２６００

こちらのフィールドで先陣を切ったのは、金色の鎧に雷を纏った巨体の融合ヒーロー。帯電したその体がひときわ強く発光したかと思うと、その両腕から雷がジェネクス・ニュートロンめがけて空気を割いて飛んで行く。見事に命中したその激しい雷に身を撃たれ、体の機能が完全に停止したジェネクスの戦士が力なく眼下の溶岩へと落ちていく。

だが、それだけでは終わらなかった。やはり今の十代は一味違う。最初から飛ばしていくとの言葉は伊達ではなかった。

「プラズマヴァイスマンの効果発動、手札１枚を捨てることで相手フィールドの攻撃表示モンスター１体を破壊する！そして墓地に送ったネクロダークマンは、墓地に存在する限りデュエル中１度だけヒーローをリリースなしで召喚できる。来い、ネオス！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００

あっという間に場に並ぶ、最上級モンスター２体。これで総攻撃力は５１００と、攻撃がすべて通ればワンターンキルも狙えるほどの数値だ。だけど気になるのは、ミスターＴのあの２枚もの伏せカード……しかし、それを忘れるような十代ではなかった。最後に残った手札１枚を、惜しげもなく発動して見せる。

「魔法カード、Ｒ―ライトジャスティスを発動。俺の場のヒーロー１体につき１枚、場の

魔法・罠カードを破壊するぜ。俺の場にはネオスとプラズマヴァイスマンの２枚、よってその２枚の伏せカードを破壊する！」
「いいだろう、ならばこのカードを発動する。トラップ発動、ダメージ・ダイエット。この効果により、このターンの間私が受けるダメージは全て半分となる」
「惜しい……！」
「だとしても、バトルだ！プラズマヴァイスマンで攻撃！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　プラズマヴァイスマン　攻２６００→ミスターＴ＆ミスターＴ（直接攻撃）
ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ４０００→２７００
再び放たれた電撃が、２人のミスターＴの体を真っ向から貫く。この攻撃は確かに命中したし、ダメージ半減とはいえライフも減らせた。闇のデュエルのルールに従い実体化したダメージのせいで、その全身からはかすかに煙が立ち上っている。
だが、それだけだ。２人のミスターＴは自分の体が出す煙に気づいてすらいないような様子で平然と立っており、実際まるで効いていないのだろう。そこに、今度はネオス渾身の手刀が上空から襲いかかった。
「行け、ネオス！ラス・オブ・ネオス！」
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００→ミスターＴ＆ミスターＴ（直接攻撃）

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ２７００→１４５０
大ダメージを与えた割に、十代の表情は冴えない。それどころか、若干の焦りさえ見れる。だが、それも無理はない。もはや手札を使い切った十代に、これ以上取れる手はないからだ。こちらの優位に変わりはないといえば確かにそうなのだが、多分十代はこのターンだけでけりをつけるつもりであれだけ展開したのだろう。
……早い話が、わずか2ターン目にして早くも息切れを起こしている。今のターンはいいとして、次のターンを戦い抜くことができるのだろうか。さらに次のターンはどうなる?その思いでいっぱいになっているのだろう。
ま、そこをどうにかするのがパートナーの仕事なんだけどね。僕のデッキは持久戦に強い、勝負は始まったばっかりだ。
十代＆清明　ＬＰ４０００　手札：十代０清明５
モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　プラズマヴァイスマン（攻）
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス（攻）
魔法・罠：なし
ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ１４５０　手札：ミスターＴ３ミスターＴ５
モンスター：なし
魔法・罠：なし

「私のターン。魔法カード、融合を発動。手札の機械族モンスター、ジェネクス・ニュートロンと炎族の灼熱ゾンビを融合する。出でよ、起爆獣ヴァルカノン！」

起爆獣ヴァルカノン　攻２３００

足元の溶岩が突然膨れ上がり、爆炎と共に機械の体を持つ獣が宙に舞う。だが攻撃力は十代のモンスターの方が上回っている……そんな考えをあざ笑うかのように、巨体に似合わない驚くほど俊敏な動きでヴァルカノンがプラズマヴァイスマンにしがみついた。振り払おうともがくも、鋼鉄の腕は捉えた得物を決して放そうとしない。その尻尾の先に火がともったかと思うと、猛烈な勢いでその小さな炎が本体に走っていくのが見えた。

それが火薬のたっぷり詰まっているであろう本体に点火するまでには、瞬きするほどにもかからなかった。視界が真っ赤に染まるほどの炎の塊が目の前で急成長し、解き放たれたエネルギーが零距離でプラズマヴァイスマンの巨体を跡形もなく吹き飛ばす。そしてその余波は、ダメージという形で僕らにも等しく襲いかかった。

「ヴァルカノンの融合召喚に成功した時、その効果である融爆を発動する。自身と相手フィールドのモンスター1体を破壊し、その相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「プラズマヴァイスマン！……ぐわっ！」

「十代……熱っ！」

十代＆清明　ＬＰ４０００→１４００

「ＵＦＯタートルを守備表示で召喚する。最後にカードを伏せ、これでターンエンドだ」

ＵＦＯタートル　守１２００

まだ使っていなかった召喚権により呼び出されたのは、炎の属性リクルーター。もっとも戦闘破壊で後続を呼ぶのなら、それ以外の方法でどかしてやればいい。幸いここからは僕のターンだ、僕にはそれができる。

「ドローして、と。じゃあ、僕も最初っから行かせてもらうよ。ＵＦＯタートルをリリースして、粘糸壊獣クモグスをそっちのフィールドに特殊召喚！」

粘糸壊獣クモグス　攻２４００

クモグスを出して、次はどうするか。普通のデュエルならこの手札のモンスター、グレイドル・コブラで攻撃し、多少のダメージ覚悟で奪い取ってネオスと2体で攻撃を仕掛けるのもありだろう。だが、これはタッグデュエル。僕の失敗は僕だけでなく十代の迷惑にもなる以上、あまり身勝手な行動は控えたほうがいい。特に今こちらのライフは半分以上削られている、いくら全ての攻撃が通れば勝てるとはいえ追加で１４００ものダメージを受けるのはリスクの方が大きいか。

「……グレイドル・コブラを召喚。バトル、ネオスでクモグスに攻撃！ラス・オブ・ネオ

ス！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　攻２５００→粘糸壊獣クモグス　攻２４００（破壊）

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ１４５０→１３５０

「次、コブラでダイレクトアタック！」

グレイドル・コブラ　攻１０００→ミスターＴ＆ミスターＴ（直接攻撃）

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ１３５０→３５０

迷いに迷った末、僕が取ったのは安全策だった。あの奴らの場の１枚の伏せカード、あれがどうにも気になって仕方なかったのだ。少なくとも攻撃反応ではなかったようだが、すでに攻撃を終えた以上後戻りはできない。あとできる事は、今の判断を後悔する時が来ないように祈るだけだ。

「メイン２にカードを２枚セットして、ターンエンド」

十代＆清明　ＬＰ１４００　手札：十代０清明２

モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス（攻）

グレイドル・コブラ（攻）

魔法・罠：２（伏せ）

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ３５０　手札：ミスターＴ３ミスターＴ０

モンスター：なし

魔法・罠：1（伏せ）
「私のターン。まずトラップ発動、戦線復帰。このカードにより、私は墓地から灼熱ゾンビを守備表示で特殊召喚する。そしてこのカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、私はカードを1枚ドローできる」
灼熱ゾンビ　守４００
片割れの伏せておいた蘇生カードを使ってモンスターを場に出しつつ、実質ノーコストでのドローまで行うターンプレイヤー側のミスターT。こうして何のためらいもなく相方のリソースを使うことができるのも、同一人物によるタッグならではの奴らなりの強みだろう。
「魔法カード、融合回収（フュージョン・リカバリー）を発動。墓地から融合カード1枚と、融合に使用されたモンスターであるジェネクス・ニュートロンを手札に加える。そしてこの融合を発動、手札の機械族モンスター、音響戦士ピアーノと場の炎族モンスター、灼熱ゾンビを素材とする」
「機械族と炎族……まさか！」
「そう驚くことでもないだろう？再び現れよ、起爆獣ヴァルカノン。そしてネオスを破壊せよ！」
起爆獣ヴァルカノン　攻２３００

　ついさっき木っ端微塵に吹き飛んだはずの起爆獣が、またしても尾の導火線に火をつけた状態で溶岩の海から浮上する。そのまま伸ばした鋼鉄の腕でネオスを鷲掴みにしようとしたが、伸ばしたはずのその両腕はネオスの体に触れることもなく胴体から切り離されて溶岩の中へと落ちて行った。何が起きたのかわからないと呆然と切り落とされた切断面を眺めるヴァルガノンに、追い打ちをかけるような鎌の一撃が深々と突き刺さる。その投擲主である銀髪の少女の姿がほんの一瞬だけ、熱で揺らめく蜃気楼の向こう側に見えた。そちらの方向に感謝の意をこめて片手を上げ、ミスターＴへと向き直る。

「悪いね、２回も3回も同じ手が効くと思った?手札から幽鬼うさぎの効果を発動。このカードを捨てて、場で効果を発動したヴァルカノンには破壊されてもらったよ」

　これなら少しは意表をつけたかとも思ったが、やはりサングラスに隠された顔からは何の感情も読み取れない。あるいはこの人格も見せかけで、そもそもこの存在には感情そのものがないのかもしれない。そんな考えすら浮かんでくる。

「だが、目的の半分は果たされた」

　その言葉通り、今の一撃はネオスの至近距離での自爆そのものが止められたわけではない。特大ダメージがこちらに入ることこそ辛うじて避けられたものの、ネオスの姿もまた爆風の中に消えていった。

「ごめん、十代」
「気にするな。それより、来るぞ！」
「私はジェネクス・ニュートロンを召喚する」
ジェネクス・ニュートロン　攻１８００
その言葉通り、ミスターＴが次なるカードを場に出す。１ターン目にも見た人型のロボが、かすかなモーター音とともに動き出した。でもミスターＴはグレイドルの能力を知っている、わずかなダメージを稼ぐためだけに仕掛けてくるような真似はしないだろう。となると１ターン目にも使っていた、エンドフェイズに発動するサーチ能力が狙いか。
だが次の瞬間、改めてミスターＴの思考回路が常人の域ではないことを思い知らされた。放っておけばサーチが問題なく使えるはずのこの状況で、目先のダメージを優先してきたのだ。
「ジェネクス・ニュートロンで攻撃する」
ジェネクス・ニュートロン　攻１８００→グレイドル・コブラ　攻１０００（破壊）
十代＆清明　ＬＰ１４００→６００
「正気?ならコブラの効果を発動、対象は当然そいつだ！」
重たい金属の拳を喰らって弾け飛んだコブラの体が、ジェネクス・ニュートロンの全

身にへばりつくように再集結する。わずかな関節の隙間から内部に入り込み、精密機械のコントロールを狂わせる。

それにしても、こうなることがわかっていてあえて攻撃してくるとは。何らかの罠を張るのは間違いないだろうが、それにしたってあそこは1ターンぐらい大人しくしていたっておかしくない状況だったはずだ。これは闇のデュエル、命がかかっているとなれば普通ならまず間違いなくそうするし、せめて多少なりとも躊躇してから行動に移すはずだ。

だが、ミスターTにはそれがない。次の十代のターンで罠が無効化されるかもしれないといったリスクを一切考慮しないその姿勢は、そもそも生物の概念に当てはまるかどうかも怪しいあの存在だからこそ取れる戦術なのだろう。そんな生き急ぐような戦術、少なくとも僕はやる気もないしやりたくもない。

「カードを1枚伏せる。永続魔法、未来融合―フューチャー・フュージョンを発動。ターンエンドだ」

未来融合……発動時こそ何も起きないものの、それから1回目のスタンバイフェイズに融合素材をデッキから墓地に送る。そこからさらに次のスタンバイフェイズで融合召喚を行いモンスターを出すと、まさに時間差で融合を仕掛けてくる未来融合の名に相応しいカードだ。

そしてこれまでのパターンから考えると、恐らく狙いはまたヴァルカノン。うさぎちゃんも墓地にいる以上、もう1度あれが融合召喚されたら今度こそ止めるすべはないだろう。かといって2ターン後にこちらがモンスターを出さないでいたら、自爆こそ防げるもののそのまま直接攻撃を喰らってしまいそれでは本末転倒だ。猶予は後2ターン、それまでの間にあれを破壊するなりなんなりで無力化しないと、終わる。

とはいえ僕にできる事はない、ここは奇跡を呼ぶ十代の引きに命を預けよう。

「俺のターン、ドロー！」

さあて何を引いたか、だがなんといってもあの十代だ。この局面で無意味なカードなんかは絶対引かないだろう。しかし意外にも引いたカードを一瞥しただけで、それを使うことなくすぐに攻撃に移った。

「バトルだ、ジェネクス・ニュートロンでダイレクトアタック！」

「トラップ発動、ドレインシールド！攻撃を無効にし、その攻撃力分我々のライフを回復する」

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ３５０→２１５０

せっかく減らしたライフが、また大幅に回復されてしまう。とはいえまだ１８００ポイントでよかった、と言えるかもしれない。僕も十代も融合召喚や壊獣を駆使しての大型モンスターを出すことは割と得意だから、それらの攻撃に対して使われていたらこん

なものじゃすまなかった。
……ま、これぐらいポジティブに考えてないとね。僕がここで気落ちなんてしてられない。今一番焦りを感じているのは当の十代のはずだから、これ以上下手にプレッシャーを与える必要はない。
「……魔法カード、命削りの宝札を発動。手札が3枚になるようカードをドローする代わりにこのターンの特殊召喚が封じられ、このターン相手の受けるダメージも0になる」
制約こそ多い物の強烈なドローソース、命削りの宝札。なるほど、十代の引きはこのターンで勝負を決めるよりも、さらなるドローソースを選んだわけか。確かに手札がなかった今の十代にとっては、その効果を最大限発揮できるカードではある。3枚のカードを引き、それを素早く確認した十代が軽く頷く。
「まず魔法カード、E―エマージェンシーコールを発動。デッキからE・HERO1体、ワイルドマンを手札に加えて守備表示で召喚するぜ」
ジェネクス・ニュートロンの隣に、その大剣を体の前で構えて身を守りつつ片膝をつくヒーローが召喚される。確かに現在、守りを固めるには下級ヒーローの中でも割と高めの守備力を誇るこのカードが適任だろう。十代のデッキにはより守備力のあるクレイマンも入っているが、ワイルドマンには一切のトラップを受け付けない耐性がある。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン　守１６００

「さらにカードを１枚伏せて、エンドフェイズに命削りの宝札のデメリットでこの最後の手札も捨てる。だがこのダンディライオンは墓地に送られた時、綿毛トークン２体を守備表示で特殊召喚できる！」

綿毛トークン　守０

綿毛トークン　守０

その名の通りたんぽぽの綿毛に顔が付いたような何ともファンシーなトークン２体がさらに召喚されたことで、こちらのフィールドもだいぶ守りが盤石となる。わずか１ターンでの成果としては上々だろう。

十代＆清明　ＬＰ６００　手札：十代０清明２

モンスター：ジェネクス・ニュートロン（攻・コブラ）

Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン（守）

綿毛トークン（守）

綿毛トークン（守）

魔法・罠：３（伏せ）

ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ２１５０　手札：ミスターＴ０ミスターＴ０

モンスター：なし

魔法・罠：未来融合―フューチャー・フュージョン

「私のターン。このスタンバイフェイズに未来融合の効果により、私のエクストラデッキから重爆撃禽　ボム・フェネクスを見せる。そしてその融合素材である炎族モンスターと機械族モンスター、灼熱ゾンビと音響戦士サイザスを墓地に送る」

意外にも見せてきたモンスターはこれまでのヴァルガノンではなく、新たなる融合モンスター……確かあれも、計算方法こそ違えどバーン効果を持つモンスターだったはずだ。となると、依然として次のミスターTたちのターンがピンチなことに変わりはない。

「魔法カード、ソウル・チャージを発動。このターンのバトルフェイズが行えなくなる代わりに、私の墓地から1体につき１０００ライフを支払うことでモンスターを蘇生する。灼熱ゾンビ2体を蘇生し、それぞれの効果によりカードを2枚ドローしよう」

ミスターT＆ミスターT　ＬＰ２１５０→１５０

灼熱ゾンビ　守４００

灼熱ゾンビ　守４００

ついさっき回復したばかりのライフをそれ以上に投げ捨て、強引な2枚ドローに繋いでいくミスターT。凄まじく強引な手ではあるが、これでミスターTは2体のモンスターと2枚の手札を同時に手に入れてしまった。これから起こることへの嫌な予感に、

口の中が乾いていくのを感じる。それは十代も同じなのか、若干表情が硬くなっている様子が見えた。

「私も魔法カード、融合回収を発動。融合カード1枚と、素材となった音響戦士ピアーノを回収する」

「また……」

いや、またも何もない。元々が同一人物なのだから、同じようなカードばかり使って当然だ。つい先ほど片割れがやったことと同じような流れにより、三度現れた融合の渦に2体のモンスターが混ざり合う。そう、三度だ。いくらタッグである程度のカード消費を補えるとはいえ、本来かなり消費が激しいはずの融合召喚を全て正規の方法でこれだけ連続でやってのけるとは。

「融合を発動。手札の機械族、ピアーノと場の炎族、灼熱ゾンビの2体を融合する。重爆撃禽　ボム・フェネクス！」

ひときわ派手に溶岩を跳ね飛ばし、灼熱の翼に身を包んだ鋼鉄の不死鳥が炎の羽根をまき散らしつつ舞い上がった。察するに、これこそが今回のミスターTの切り札なのだろう。

重爆撃禽　ボム・フェネクス　守２３００

「カードを1枚伏せて……」

「あのカードは……まずい！」

ボム・フェネクスの効果は1ターンに1度、場のカード1枚につき３００ポイントのダメージを相手に与える。ミスターTたちの場にカードは４枚、そして僕らの場にはトークンも含めて計7枚。せっかく出てきた2体の綿毛トークンがむしろ仇となり、こちらのフィールドを見下ろした不死鳥が甲高い声とともに炎の翼を一振りする。体を離れた大量の燃え盛る羽根が11本こちらに飛んでくる。いや、よく見たらあれば羽根なんかじゃない。1体1体が全て小型の不死鳥、その身を爆弾として突っ込み、点や線ではなく面で相手を制圧するための、まさしく絨毯爆撃としか言いようのない決戦兵器だ。

「十代！」

「わかってる！効果を発動する前に、先にこっちのカードを使わせてもらうぜ！速攻魔法、神秘の中華なべを発動！俺の場のジェネクス・ニュートロンをリリースして、その攻撃力か守備力の数値だけライフを回復できる！俺が選ぶのは当然、攻撃力の１８００だ！」

ジェネクス・ニュートロンとその体に寄生していたグレイドル・コブラ、さらに発動された神秘の中華なべのカードが墓地に送られ、こちらへ突っ込んできていた小型の不死鳥のうち3羽が空中で暴発する。これでダメージは９００ポイント減って２４００、

そして回復分を合わせた僕らのライフも２４００。
「まだ足りないか……！十代、構わないから僕のカードも使っちゃって！」
「だけど、清明……」
　目に見えた敗北を回避するためには、もう1枚なんでもいいから場のカードを減らすしかない。小学生でもできる計算を目の前にしてなお十代が迷うのにも、それなりの理由がある。普通に使っても使いづらいこの伏せカードはタッグデュエルで、それも相手ターンに使うにはあまりにもデメリットが大きすぎるからだ。だから僕も一応伏せはしておいたけど、よほど確実に勝負を決めたいときにしか使うつもりはなかった。でも背に腹は代えられない、躊躇いながらも十代は2枚目のカードを表にした。
「すまない、清明！トラップ発動、無謀な欲張り！カードを2枚ドローする代わりに、2ターンの間ドローフェイズをスキップする！」
「なるほどな。だが私にもこれ以上場のカードを増やすことはできない、ボム・フェネクスの効果発動だ」
　場のカードがまた減ったことで、さらに1体の不死鳥が空中で爆散する。しかし、いまだ残った7体が僕らの至近距離、射程圏内にたどり着いてで自爆を繰り返し始めた。1体1体の衝撃はヴァルガノンの自爆の方がはるかに上ではあったが、身を守るためには爆発の起きる1か所のみに集中していればよかったあちらとは違い周りの空間全て

を攻撃範囲とするボム・フェネクスは、総合的な威力ではむしろあちらを上回る。
息が詰まるほどの熱と目を閉じていても眩しく感じる閃光、無限に続くかと思われた轟音がようやく止んだ時、僕らは共に肩で息をしてどうにか立っている状態だった。でも、どうにか……まだ、２人とも生きている。
十代＆清明　ＬＰ６００→２４００→３００
「まだ耐えきったか。だがそこまでして繋いだ命、本当にそのドローカードが使えるようになるまで持つかね？」
ミスターＴの言葉が、冷たく刺さる。無謀な欲張りは、ドローフェイズが２回スキップされるカード。そしてこのミスターＴのターンでは、まだ僕らの側のターンプレイヤーは十代だった。その状態で無謀な欲張りを使った、その意味は１つ。２枚ドローする代わりにドローフェイズが１度封じられる十代とは違い、僕は一方的にドローだけを封じられたのだ。
今のはそうしなければいけなかった状況とはいえ、状況はかなり悪くなった。首の皮１枚で繋がったのはいいが、その先のドローで希望を掴むこともできなくなった。僕に残されたのはこの手札１枚と、最後の伏せカード１枚のみ。だけどドローができないとなると、このカードも僕には役には立ちそうにない。
「ターンエンドだ。せいぜい頑張りたまえ」

「いいや、まだだぜ！トラップ発動、極限への衝動！このカードは俺の手札２枚をコストに、アドバンス召喚以外ではリリースできないソウルトークン２体を特殊召喚する！」
「十代!?」
「お前のドローを奪っちまった以上、俺にできるのはこれぐらいだ。このカードを使ってくれ、とどめは任せたぜ清明！」
ソウルトークン　守０
ソウルトークン　守０
せっかく引いたカードを全てを捨て、残りのモンスターゾーンを生めるようにトークンが特殊召喚される。これでは僕も下級モンスターの召喚ができないんだけど……と何気なく墓地を見て、思わずこの状況も忘れて笑い出しそうになった。
ああもう、十代。お前はやっぱりすごいよ、本物のヒーローだ。これならあるいは……このターンで、勝てるかもしれない。
「僕のターン！ドローフェイズをスキップして、墓地に存在する置換融合の効果を発動！このカードを除外して墓地の融合モンスター、プラズマヴァイスマンをエクストラデッキに送ることでカードを１枚ドローする！」
十代が土壇場で墓地に送ったカードのうち１枚、置換融合。このドローにより無謀な欲張りのデメリットが帳消しになったわけだが、十代の奇跡を呼ぶ引きの強さはそれだ

けでは収まっていなかった。さらに、もう1枚！
「墓地から魔法カード、シャッフル・リボーンの効果を発動！場のワイルドマンをデッキに戻し、さらにカードを1枚ドローする！」
　肝心なのはここからだ。いくらカードを引いたとしても、それが使えなければ無駄に引いただけになりかねない。
　だが、幸いにもその心配をする必要はなかった。僕のデッキは、僕が信じる限りいくらでも僕に応えてくれる。どちらから使ってもいいけれど……まずは、このカードからだ。
「魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！場のモンスター全てを破壊し、デッキから壊獣2体を互いの場にリクルートする！これで終わりだ、ミスターT！」
「果たしてそうかな？トラップ発動、神の宣告。ライフ半分をコストに、その発動は無効となり破壊される」
　ミスターT＆ミスターT　ＬＰ１５０→７５
　万能カウンターの神の宣告も、元が少ないミスターTにとっては驚くほど軽いコストで効果を無効にできる強烈なカードとなる。これで眠りのカードは不発に終わったがもはやミスターTに伏せカードはなく、逆に言えばこれ以上の妨害がさらに出てくることはない。なるほど、神の宣告、か。これは、こちらを先に使っておいてよかった。

「僕らの勝ちさ、ミスターＴ。十代、お言葉に甘えて決めさせてもらうよ」
「ああ、存分に頼むぜ」
　ちらりと顔を見合わせて頷き合い、お許しが出たところで手札に残った２枚のカードを表にする。
「フィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントを発動！さらに綿毛トークンとソウルトークンを１体ずつリリースして……さあ行くよ、チャクチャルさん。七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ！地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルルア）！」
　溶岩の海が、一瞬にして灯台の照らす闇の大海原に染まる。ボム・フェネクスの炎の輝きを打ち消すような深い紫色の光が走り、闇のシャチがその眼前へ浮上した。
　地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００
『ここまでのようだな。この場はこれで退いてもらおう』
「おのれ……やはりその力、この世界の理を根底から覆すほどの力」
「やはり君は危険な存在だ。もはや猶予は残り少ない、早急に排除の必要がある」
　前に戦ったミスターＴ同様、こいつらも回避不可能な自らの消滅に付いて思うところは特にないらしい。なら負け犬の遠吠えは放っておいて、こちらも気兼ねなく最後の一撃を加えよう。
「バトルだ、地縛神は相手に直接攻撃ができる！ミッドナイト・フラッド！」

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→ミスターＴ＆ミスターＴ（直接攻撃）
ミスターＴ＆ミスターＴ　ＬＰ７５→０

「どうだ！……あれ、また逃げられた？」
『そのようだな』
戦いが終わるとそこにミスターＴの姿はなく、なぜか周りの様子も元に戻っていた。おそるおそるさっきまで空中だった部分に足を乗せてみるが、もう１度崩れ出したりするようなそぶりは全然ない硬い地面だ。
「もしかしてあれも、ただの幻覚だったの？」
『そうだな』
即答するチャクチャルさん。ん、待てよ。ここまで即答できるってことは、もしかして……。
「もしかしてチャクチャルさん、最初っから気づいてたの？」
『そうだが？』
「そんなら教えてくれたってよかったじゃん！落ちたら絶対まずいと思って神経使って

たのに！」

『いや、幻にかかってマスターのやる気が出るなら放っておいても害はないかと思ってな』

もっともらしいけど、これは嘘だ。絶対この邪神、内心ニヤニヤしながら見てたに違いない。どうりで今日に限って、デュエル中にも全然口出ししてこないと思った。

なんだか納得いかない思いにとらわれていると、ふと横から着信音が聞こえてきた。どうやら、十代に電話らしい。差出人の相手を見てすっと真剣な表情になった十代が、無言でその電話に出る。デビルイヤーは地獄耳、これぐらいの距離なら何とかいけるはずだと、僕も耳をそばだててその会話内容を聞き取ろうと集中する。

しっかり耳に入ってきたその会話内容は、またも僕を驚かせるに十分な物だった。

ターン１１１　鉄砲水と紅蓮の黒竜

　その日の夜、医務室。どうやら十代、僕らには一切内緒でオブライエンと連絡を取り合い、藤原優介という男について僕らが出会う前から調査していたらしい。下手に隠したりして、もし僕らが何か嗅ぎ付けたらそのまま首を突っ込むことぐらいわかんなかったのかねこの男は……なんて、今日の昼まで夢想にミスターＴの存在を隠そうとしていた僕に言えたことではないけれど。

　だから僕に、十代を責める資格はない。その気持ちは、痛いほどよくわかるからだ。でもだからといって、このわだかまりがすんなり溶けるわけではない。なんとなく目を合わすのも気まずいような空気の中でオブライエンが廃寮から連れ帰ってきて、現在気を失っている吹雪さんの看病をしながら、なぜこんなことになったのかを思い返していた。元々はこのアカデミアで見つかったのと同じ、デュエルディスクに反応しない妙なカードの謎を追っていたらしいオブライエンがその途中で名前を見つけ出し、調査したという藤原についての内容……それをまとめると、だいたいこんな風になる。

　一、藤原優介は実在する人間。

　二、ただし彼は、もう何年も行方不明のはず。

三、彼が行方不明になったのは、例の特待生用だった廃寮。

そしてアカデミアに上陸したオブライエンが廃寮に向かったところ、撮られたのは数年前のはずの彼の写真と瓜二つな『藤原』に襲われていた吹雪さんを発見。調査を諦めて吹雪さんの安全を優先させ、なんとかここまで逃げ切ってきたらしい。稲石さん何してたんだろ。

なぜか廃寮にいた吹雪さん、藤原の行方不明と同時期にダークネスの力に取り込まれ、セブンスターズとの戦いまで同じく消息不明だった吹雪さん、そして藤原と吹雪さんは同級生、さらに言えばその寮まで同じ……ここまで材料が揃ったんだ、僕も十代も、考えていることは同じのはずだ。吹雪さんは多かれ少なかれ、必ず何かを知っている。それだけに、こうして彼が眠り続けている間のタイムロスが惜しい。

「兄さん！」

そんな時医務室の扉が開き、予想していた顔が飛び込んできた。明日香への連絡はした覚えがないけれど、ここの担当は鮎川先生だし、まああの人なら明日香に連絡を入れるだろう。となると、それ聞いたらそりゃこっち来るよね。眠っているとはいえ規則正しく呼吸する兄の顔を見てようやく周りを見る余裕ができたのか、僕らを一通り見回すその視線が目を閉じて壁にもたれかかっていたオブライエンのところで止まる。当然の反応だろう、僕だってこんな状況じゃなければもっと彼を質問攻めにしていたところ

だ。だが彼女が何か口を開く前に、気配だけで察したらしいオブライエンが先回りして話し出す。
「俺も君たち同様、あの謎のカードの調査をしていた。この島に来たのはその過程で藤原優介の名が挙がったため、君の兄さんを見つけたのは偶然だ」
「久しぶりね、オブライエン。でも兄さんが……どうして？」
「それも調べはついている。この件に関しては君たちの方が詳しいだろうが、かつて影丸会長の行っていた三幻魔の力を利用して不老不死の肉体を手に入れるための実験、２年前に起きたというセブンスターズ事件の後、その被験者となっていた特待生たちは行方不明となっていた１人を除いて全員解放された」
「それは僕も初耳だけど、それが藤原なの？」
　思わず口を挟んだ僕にも無言で頷き、すぐ話を続ける。
「そうだ。そもそも藤原優介は丸藤亮、天上院吹雪と共に天才と呼ばれるほどの生徒だった。十代の話と俺の調べた結果を総合した仮説だが、どうも藤原はその時から君たちのよく知る力、ダークネスの力を研究していたらしい」
　なるほど、そう繋がるのか。確かに三幻魔の研究にあたり藤原がダークネスの力を研究することに影丸会長が賛成、少なくとも黙認していたとすれば、巡り巡ってその力がセブンスターズの一員として僕らに牙をむいたことにも何となく説明がつく。

ただわからないのはなんで藤原の研究していたはずの力の象徴、ダークネスのマスクを吹雪さんが付けていたのかだ。やっぱりこれ以上は、吹雪さんに直接話を聞かないとダメということだろう。だがそんな視線の動きだけでも、僕の考えは明日香に伝わったらしい。口を開くより先に僕らと吹雪さんのベッドの間に割り込み、1歩も通さないとばかりにその前に立ちはだかる。

「駄目よ、兄さんはこんな状態なんだもの。鮎川先生にも聞いたけれど、まだしばらくは絶対安静よ」

「だが、明日香だって今の話は聞いただろ！真実は吹雪さんしか知らないんだ、頼む吹雪さん起きてくれ！」

今にも詰め寄って吹雪さんを強引に叩き起こさんばかりの十代と、それを険悪な目で睨みつける明日香。僕も個人的には十代寄りの考えだけど、そこまで必死じゃないぶんもう少しだけ周りが見える。はっきり言ってあれは悪手中の悪手、あんな態度じゃあ明日香だって意固地になるだけだ。このままではらちが明かないのでオブライエンにアイコンタクトし、何が言いたいか察してくれた彼と2人がかりで十代を押さえつける。そのまま扉まで引っ張っていき、そこで改めて明日香に話しかける。

「はーい、そこまで。明日香、とりあえず僕らはいったん帰るけど、どうするの？」

「私は……もう少し兄さんに付き添っているわ」

「あ、そ。んじゃねー」
　大人しくはなったもののまだ不服そうな十代を外に出し、もう少し別の角度から調査を続けるらしいオブライエンのことを手を振って見送る。さて、次はこっちを説得する番だ。
「清明、お前ならわかるだろ!?今すぐにでも吹雪さんに話を聞かないと、次に何が起きるか……！」
「わかってるって。だけど、あのままだと明日香は絶対あの場所から動かなかったよ？鮎川先生が明日香に伝えちゃったなら、それを前提に動かないと。花瓶の水替えでも見舞いの品の用意でもなんでもいいけど、次に明日香があの部屋を出るときがチャンスだからね。最悪窓から入ることになったって吹雪さんには起きてもらうさ」
「……いや、それには及ばないよ」
　一体どうやって、あの部屋を出たというのか。ひどく苦しそうに息をつき壁にもたれかかりながらも、吹雪さんがそこにいた。腕には起動済みのデュエルディスクを付け、その手には1枚のカード……ここから見てもわかるほどに闇の力が感じられる、前にも見た覚えのあるカードが握られていた。通常のカードとは違い名前も効果もなく、ただ鎖に縛られた漆黒のマスクが1つ浮かんでいるだけのイラストのカード。
「ダークネス……」

「ああ、明日香には本当に申し訳ないと思うけど、この力で少しの間眠ってもらったよ。それより2人とも、僕を、もう1度あの場所に……」

そう言いながらも、今にもその場に倒れこみそうな吹雪さん。慌てて駆け寄って肩を貸し、十代を先頭に歩き出した。いくら本人たっての願いとはいえ、本当にこんなボロボロの人を連れ出していいんだろうか。そう思いはしたが、それを口にはできなかった。僕も真実を知りたい、という好奇心も否定できないが、それだけではない。肩を貸した時に見えた、吹雪さんの目。なによりも大事にしている妹のことまでこの人らしからぬ力技で振り切って、それでも自分のすべきことを成そうとしている目。あんな目をした人を前に、体に無理が来てるんだから今は休みましょう、なんて言えるわけがない。

結局、最後の方は肩を貸すというよりなかば背負うようになりながらも、いつもの廃寮にたどり着いてしまう。元ここの生徒だけあって迷うことなく奥に入っていくのを支える途中で、物陰から半身だけ出してこっそりこちらを窺う廃寮の幽霊、稲石さんの姿も目に入った。僕と目が合ったことに気づくとすぐに人差し指を唇にあてて黙っていて、とジェスチャーし、幽霊らしく足元からすうっと消えていった。そういえばあの人、一体誰なんだろう。この廃寮は行方不明こそ出しているものの、死人が出たという話はない。ここがお化け屋敷扱いだった頃は特に疑問にも思わなかったけど、こうして廃寮そのものの秘密が少しずつ明らかになってくると、その中心でいまだ謎に包まれた

ままのあの人の正体が今更になって気になってきた。一体どこから来て、なぜ死んで、なぜここにいるのか。それに関しても、今度問い詰めに来た方がよさそうだ。

　そう心に決めたところで、吹雪さんの足が止まった。そこはちょうど広間のようになっている部屋で、今では見る影もないものの当時は豪勢な場所だったのだろう。当時を懐かしむように目を細めて見回してから、ダークネスの仮面が封印されたカードを取りだす。

「ここまで来れば、もういいだろう。十代君か清明君、君たちのどちらでもいい。無論無理強いはしないが、今から僕はこのダークネスの力を再び開放する。それが、これまで僕が目を背けてきた真実を取り戻すための唯一の方法だ」

「吹雪さん……」

「こんなことを君たちに頼むのは、間違っているかもしれない。だがお願いだ、僕とここで、デュエルしてくれ。ダークネスの力に飲み込まれるか、それとも真実を再び手に入れられるかは、その結果にかかっている」

「わかったぜ。なら俺がその相手……」

「いや、ここは僕が出るよ」

「でも清明、これはただのデュエルじゃ済まないんだぞ！」

　止めようとする十代を鼻で笑い、その顔の前に指を2本立てる。ゆっくりと1本ずつ

折り曲げ、諭すように言い聞かせた。
「あのねえ十代、ダークネスの力を解放した吹雪さんの相手なら、僕はこれまで2回もしたことがあるんだよ？ぶっつけ本番の十代よりはきっと、安定すると思うよ。それともーひとつ、さっきも言ったと思うけど、僕だってもう見るアホウでいるのは嫌なんだから。同じアホなら踊らにゃ損損、ぜひとも踊りに加わりたいね」
『その例え、そんなに気に入ったのか？』
　うん、実はお気に入りだったり。まあ、僕の好みはこの際どうだっていい。きっぱり目を見て言い切ると、しぶしぶながら十代も引いてくれた。……なんか最近相手の目を見て言い切るとそれだけで僕の意見が通ることが多いんだけど、チャクチャルさんの力で無意識に催眠でもかけてたりするんだろうか。
『私をなんだと思ってるんだ……ほらマスター、あちらがお待ちかねだぞ』
「オーケイ。んじゃ十代、観客頼むよ。さあ悪かったね吹雪さん、それじゃあデュエルと洒落込もうか！」
　その言葉と同時に、吹雪さんがダークネスの仮面をつける。たちまち噴き上がる闇のオーラにその全身が包まれ、仮面の下から見えるその表情も闇が広がるにつれ苦痛に歪んでいく。今吹雪さんの中では、ダークネスの記憶だけを引っ張り出してなおかつその力に自身が呑みこまれないようにするための苦しい戦いが始まっているはずだ。

　つまり、僕がこのデュエルですることは２つ。ダークネスの力を少しでも外敵である僕に向けさせることで吹雪さんの自我にかかる負担を軽減させ、同時にダメージを与えることでその封印された記憶に対してのショック療法を行う。荒療治にもほどがあるけれど、ダークネス絡みとならこれぐらいしないと記憶を取り戻すなんて不可能だろう。やがて吹雪さんの内部での孤独な戦いも小康状態になったらしく、どうにか自分を抑えてゆっくりとそのデュエルディスクを構えた。

「ああ、甦るぞ、ダークネスの力が！行くぞ、遊野清明！」

「デュエル！」

　先攻を取ったのは僕。吹雪さんの使う真紅眼デッキは、高打点と馬鹿火力バーンを両立させながらも決して力押し一辺倒にはならないテクニカルな面も見せる、なんとも掴みどころのないデッキだ。以前戦った時にはダークネスの力からその新たなる可能性、悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴンなる切り札も披露してもらったっけか。

　そんなデュエリストを相手に先攻を取るにしては、やや不安の残る手札か……いや、このカードなら何とかできるか。

「ツーヘッド・シャークを守備表示で召喚。さらにカードをセットして、ターンエンド」

　ツーヘッド・シャーク　守１６００

「俺のターン、ドロー」

そういえばいつの間にか、吹雪さんの一人称が俺になっていた。これもダークネスの力の影響だろうから、なるべく早く揺さぶりを掛けないと……いや、落ち着いていこう。自分のペースを崩した状態で押し切れるほど、あの人は甘くない。

「魔法カード、カード・フリッパーを発動。手札１枚を捨て、相手の場に存在するモンスター全ての表示形式を変更する」

無数の糸が伸びて鮫の体を絡め取り、無理やりその姿勢を変えて攻撃態勢を取らせる。ツーヘッドの攻撃力はレベル４モンスターにしては低いため、攻め込む際や雑魚散らしにこそ向いているもののこうなると弱い。

ツーヘッド・シャーク　攻１２００

「さらに、真紅眼の幼竜（レッドアイズ・ベビードラゴン）を召喚する。バトルだ、ツーヘッド・シャークに攻撃！」

「相打ち狙い……？迎え撃て、ツーヘッド！」

真紅眼の幼竜……あれも、初めて見るモンスターだ。生まれたての状態だった黒竜の雛よりは大きいものの、本家真紅眼と比べれば確かに顔立ちも幼くサイズも小さいその竜が、口から小さな火炎弾を吐き出した。

真紅眼の幼竜　攻１２００（破壊）→ツーヘッド・シャーク　攻１２００（破壊）

特に攻撃力が変化するギミックもなく、同時に破壊される互いのモンスター。だが、吹雪さんはその過程で３枚もの手札と召喚権を使った。

おかしい、絶対割に合わない。そう思った矢先、案の定廃寮内の淀んだ空気を切り裂いて漆黒の竜の翼が吹雪さんを守るように広がった。

「真紅眼の幼竜は戦闘で破壊された時、デッキからレベル７以下のレッドアイズを特殊召喚し、その装備カードとなって攻撃力を３００アップさせる。出でよ、真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）！そして攻撃しろ、ダーク・メガ・フレア！」

真紅眼の黒竜　攻２４００→２７００

天上院吹雪というデュエリストの代名詞でもある絶対不変のエースモンスター、真紅眼の黒竜。なるほど、攻撃力１２００の幼竜にとって、ツーヘッドはなんとしても攻撃表示に変えたい絶好のカモだったってわけか。さらにその攻撃力は３００上がって２７００と、このまま続く直接攻撃を許せば僕のライフは一気にその４分の３近くが削られる。

正直、他の相手ならそれもそれでアリだろう。ある程度相手に展開を許したうえで返しの一撃を叩き込む、それがこのデッキの理想の動きだ。でも相手はダークネスの力をも使う吹雪さん、そんなにライフを削らせたら僕のターンがどうこう言う前に即死する可能性すらある。

「勿体ないけど……トラップ発動、波紋のバリアーウェーブフォース！相手のダイレクトアタック宣言時、攻撃表示モンスターは全てデッキに戻る！」

「さすがに一筋縄ではいかないか。いいだろう、カードをセットしてターンエンドだ」

必殺の黒炎弾を辛うじて僕の前に張られた水の壁が防ぎ、真紅眼にその威力を跳ね返す。これでこのターンはノーダメージでしのげた、けれどその代償として貴重な防御札をこんな序盤で、それもたった1体のモンスターに対して使ってしまった。やむを得ないことだったとはいえ、この判断が凶と出なければいいけれど。

清明　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：なし

魔法・罠：なし

吹雪　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：１（伏せ）

「僕のターン！来い、グレイドル・アリゲーター！」

グレイドル・アリゲーター　守１５００

ほこりまみれの床から湧き上がる、銀色の水たまりがひとつ。そしてそれがプルプルと震えて盛り上がり、緑色のワニの姿となる。これで攻撃を待ち構えるのも一つの手だ、だけど……。

「ここはあえて、前に出る！水属性モンスターをリリースして、手札のシャークラーケン

を特殊召喚！」
シャークラーケン　攻２４００
「ほう……」
仮面の下で、面白そうにかすかに笑う吹雪さん。出してしまった以上、今更後悔しても始まらない。伏せカードも気になるけれど、ここは絶好の攻め時と見た。
「バトル、シャークラーケン！吹雪さんにダイレクトアタック！」
シャークラーケン　攻２４００→吹雪（直接攻撃）
吹雪　ＬＰ４０００→１６００
何かしらの抵抗をしてくるかと思ったけど、特にそんなこともなく攻撃を直に受ける吹雪さん。さっきまで何もしなくても倒れかかってた人と同一人物とは思えない動きでその衝撃に持ちこたえ、平然とした様子を見せる。普段なら喜ばしいことだけど、あれも全部ダークネスの力のおかげだと思うと素直には喜べない。体力そのものにまで影響が出ているということは、かなり侵食が進んでいるはずだ。
「ありがとう清明君、少し意識がはっきりしたよ。だが、まだ記憶を取り戻すには足りていない。遠慮することはない、このままデュエルを続けよう」
だが、そんな不安を読み取ったのだろう。今ここで辛いのは、苦しいのは吹雪さんのはずなのに、また口調が元に戻った吹雪さんが、相手である僕のことを安心させるよう

な言葉をかけてくる。全く、そこで僕が気を遣われてどうするんだ。
「……ターンエンドです」
「ぐっ、また……いいだろう、ならばそのエンドフェイズにトラップ発動、レッドアイズ・スピリッツ！このカードの効果により、俺の墓地に存在するレッドアイズ1体を蘇生する！蘇れ、真紅眼の黒竜！」
真紅眼の黒竜　攻２４００
再びその声音から優しげな色が消え、身にまとうオーラが膨れ上がる。それにしても、墓地から真紅眼か。たった今1体をデッキバウンスしたばかりなのにこうして出てきたところを見ると、どうやらあのカード・フリッパーは展開の起点としてツーヘッドを攻撃表示に変更しただけでなく、手札のあのカードを墓地に送る役目も果たしていたらしい。どうりで、手札コストを躊躇せずに使ってきたわけだ。
いや、待て待て待て。何か変だ。
『だな。真紅眼の幼竜を攻撃に合わせて蘇生させていれば攻撃が抑制でき、仮に攻撃されてもリクルートに繋ぐことができた。わざわざ戦闘ダメージを受けてまでこのタイミングでの、それも真紅眼の黒竜の蘇生を優先させた、ということは……』
「真紅眼の幼竜じゃなくて、本家じゃないとできないこと。メイン2でこっちの手札に壊獣があってもどうにもできない、確実にあのレッドアイズを場に残した状態でターン

が回ってくることが重要になるカード……」

チャクチャルさんの言葉を引き継ぎ、場の状況から推察できることを口に出すことで考えを整理する。その言葉を、再びチャクチャルさんが引き継いだ。

『だが、黒炎弾ではないだろうな。あのカードなら２４００のバーンダメージが与えられるとはいえ、それで自分も２４００の戦闘ダメージを受けるのはやはり割に合わないだろう。これで彼の場に伏せカードはないから、メタル化・魔法反射装甲の線もない。となると、答えはおのずと見えてくるか』

場に真紅眼の黒竜が存在することを条件とする、黒炎弾以外のもう１つのカード。ダークネスの力を得た吹雪さんの操る、ある意味もっともシンプルな進化の形ともいえる黒を越えた漆黒のドラゴンのあの姿が、僕の脳裏に浮かんだ。

「場の真紅眼の黒竜をリリースすることでのみ、このカードは特殊召喚できる。出でよ、真紅眼の闇竜（レッドアイズ・ダークネスドラゴン）！」

闇の力を纏う真紅眼が、その闇の中で急速な勢いでの自己進化を遂げる。高速で高高度を飛行するためにはむしろ邪魔となる両腕は退化し、全身のフォルムをより鋭角的にすることで空気抵抗を少なく。体表には溢れ出るそのエネルギーが従来無かったオレンジ色の模様という形で浮き出て、かすかに脈動しながら薄く光を放っている。やはり来たか、吹雪さん第一の切り札。

真紅眼の闇竜　攻２４００→３０００

「このカードの攻撃力は、俺の墓地に存在するドラゴン族１体につき３００ポイントアップする。今は真紅眼の幼竜、そして真紅眼の黒竜の２体だから６００ポイントだ。さらに手札から、黒鋼竜（ブラックメタルドラゴン）の効果を発動する。このカードは装備された闇竜族の爪となり、その攻撃力をさらに６００ポイントアップさせる。焼き尽くせ、ダークネス・ギガ・フレイム！」

「ぐっ……！」

真紅眼の闇竜　攻３０００→３６００→シャークラーケン　攻２４００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→２８００

先ほどとは比べ物にならないほどの熱量を誇る暗黒の火炎弾が、シャークラーケンを呑み込んで跡形もなくその身を消し去る。まだまだ序盤ゆえに強化値が少なかったことも幸いして僕へのダメージは１２００止まり、それでも体の奥からガツンと来るこの衝撃はさすがダークネスの力、覇王やユベルと対峙した時のそれにも勝るとも劣らない。

邪魔にならないようにとの配慮かこれまで黙ってデュエルを見守っていた十代が叫びかけたのを察して手で押し止め、吹雪さんの次の動向に神経を集中させる。まだ何か伏せカードを仕込んでくるようなら本気でどうしようかとも思ったが、幸い今の動きだ

けでこのターンにできる事はやりきっていたらしく、そのままターンが僕に移った。
清明　ＬＰ２８００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：なし
吹雪　ＬＰ１６００　手札：１
モンスター：真紅眼の闇竜（攻・黒鋼竜）
魔法・罠：黒鋼竜（闇竜）
「僕のターン、ドロー……よし、遠慮はしないよ吹雪さん。真紅眼の闇竜をリリース！そして吹雪さんの場に、怒炎壊獣ドゴランを特殊召喚する！」
「俺の真紅眼を……！」
怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００
切り札の一角があっさりとリリースされ、さすがに苛立ちを隠せない様子の吹雪さん。だが、ただリリースするのを黙って見てくれるわけではないようだ。闇竜の姿が消え去るその直前、その失われた腕となっていた黒鋼竜がその体から飛び出し、吹雪さんのデュエルディスクに潜り込むのが見えた。
「黒鋼竜はフィールドから墓地に送られた時、レッドアイズカードを１枚サーチする能力を持つ。俺が手札に加えるのはこのカード、レッドアイズ・インサイトだ」

大きく真紅眼の黒竜が描かれた魔法カードをこちらに見せてから、手札に加える吹雪さん。気になるカードだが、魔法カードならば少なくともこのターンは何もしてこないだろう。それよりも今は、僕のやるべきことをやるまでだ。

「相手フィールドに壊獣が存在するとき、手札から別の壊獣を特殊召喚することができる。さあ行くよ、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！」

黒色で炎を操る真紅眼シリーズとは対照的な、白い鱗に雷の力を誇る3つ首の巨大龍。あの悪魔竜ブラック・デーモンズすらも単純な打点では上回る、ジズキエルと共に壊獣の最高打点を誇る大型モンスターだ。

「バトル！ドゴランにサンダー・ザ・キングで攻撃！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００→怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００（破壊）

吹雪　ＬＰ１６００→１３００

先ほどこちらのフィールドを漆黒の炎が薙ぎ払ったお返しと言わんばかりに、純白の雷撃が吹雪さんの場をその眩い光で白く染める。通常召喚できるモンスターがいればさらに追撃と洒落込めたところだが、強欲なウツボで引いた3枚のうち残り2枚のこの手札はどちらもモンスターではない。

それにしても、妙に今回吹雪さんが大人しいのが気にかかる。もっと早い段階から大型モンスターがガンガン出てきてバーンの炎が乱れ飛ぶ展開になっていてもおかしく

ないはずなんだけど、さっきから1体ずつモンスターを出しては殴ってくるだけだ。あのカイザーの親友な吹雪さんが相手を舐めてデュエルするわけがないし、もしかして僕が不用意に隙を見せるのを狙っている？自分のライフが尽きるギリギリを見定め、その直前まで僕が優位な状態でデュエルを進めることで慢心を誘おうというのだろうか。仮面の奥の吹雪さんの目はここからでは見えないけれど、なにせ相手はダークネスだ。一応、その可能性があるということだけは頭に入れておこう。

「カードを2枚セットして、ターンエンド」

「俺のターン。魔法カード、レッドアイズ・インサイトを発動。このカードは発動コストとしてデッキからレッドアイズ1体を墓地に送り、さらにレッドアイズ魔法または罠を1枚手札に加える。俺が墓地に送るのは真紅眼の凶雷皇（レッドアイズ・ライトニング・ロード）―エビル・デーモン、手札に加えるのはこのカード、真紅眼融合（レッドアイズ・フュージョン）だ」

「来た……！」

　思わず息を呑む。忘れもしない、あれこそが吹雪さんの切り札。どんな劣勢からでもわずか1枚でダークネスの力を受けた恐るべき融合モンスターを呼びだすことのできる、紅き竜のもたらす可能性を開くための扉。

　そして今、その扉が開かれた。

「魔法カード、真紅眼融合を発動！このカードを発動するターン他の方法によるあらゆ

る召喚、特殊召喚が封じられるものの、俺の手札、フィールド、そしてデッキから融合素材を墓地に送り、レッドアイズの力を受け継ぐ融合モンスター1体を融合召喚する」

「でも、悪魔竜じゃサンダー・ザ・キングには勝てない！メテオ・ブラック・ドラゴンは効果を持たないモンスター、それならまだ……」

「良い読みだが、まだ甘いな。俺が融合するのは、メテオ・ブラックではない！デッキに眠る真紅眼の黒竜、そして同じくデッキのレベル6ドラゴン族、真紅眼（レッドアイズ）の凶星竜―メテオ・ドラゴンを融合！」

新たな真紅眼の名を持つモンスター2体が素材として墓地に送られ、廃寮を真紅の閃光が満たす。その全身を極寒の宇宙にあってなお燃え盛る妖星の業火に包み、岩石よりもなお堅い隕石の鱗を鎧として持つ、深淵の宇宙からその力を得た真紅眼の新たな可能性、新たな闇の光。

「出でよ！流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン！」

流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン　攻３５００

「攻撃力３５００!?」

これでは、サンダー・ザ・キングでも太刀打ちできない。この2枚の伏せカードのうち片方でも装備カードとなり攻撃力を５００ポイントアップさせるグレイドル・スプリットがあれば返り討ちも狙えたが、あいにくそういうことができるカードではない。

「メテオ・ブラックの真価はその攻撃力だけではない。行くぞ、清明！このカードが融合召喚に成功した時、手札またはデッキからレッドアイズ1体を墓地に送ることでその攻撃力の半分の数値だけダメージを与える！俺が選択するのはこのカード、デッキに眠る真紅眼の飛龍（レッドアイズ・ワイバーン）、その攻撃力は１８００。よって９００のダメージを受けてもらおう」

「熱っ……！」

清明　ＬＰ２８００→１９００

デッキから落としたのは3体目の真紅眼……ではなく、それが小型化したような亜種ともいえるモンスター。あのモンスターは確か、通常召喚を放棄したターンのエンドフェイズに墓地から除外することで墓地のレッドアイズを特殊召喚する効果を持ってたはず。このターンは真紅眼融合の効果でどの道発動できないけれど、目先のダメージより墓地にあのカードを送り込んで次への布石を打つことを優先したという訳か。

そして、あの流星竜にはまだ攻撃の権利が残っている。全身を覆う業火がより一層その激しさを増し、その名の示す通り空の彼方から飛来して襲い来る1つの流星そのものになった流星竜がおもむろに燃え盛る火炎弾、隕石の塊をその口から放った。サンダー・ザ・キングのさらに上空から飛来してきたそれに対して僕ができる事と言えば、せめてダメージを少しでも抑えるだけだった。

「バトルだ、メテオ・ブラックでサンダー・ザ・キングに攻撃。ダークネス・メテオ・ダ

イブ！」

「トラップ発動、壊獣捕獲大作戦！1ターンに1度場の壊獣を裏側守備表示に変更して、このカードに壊獣カウンターを1つ乗せる。当然このターンは、サンダー・ザ・キングを対象に！」

流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン　攻３５００→雷撃壊獣サンダー・ザ・キング守２１００（破壊）

壊獣捕獲大作戦（０）→（１）

これでなんとかダメージを抑えた……と言いたいところだが、減らしたダメージはわずか２００。他の人ならまだしも、黒炎弾やらなんやらで４ケタダメージをポンポン出してくるこの人にとっては２００なんて誤差にしかならないだろう。壊獣カウンターもまだ1つでは何の意味もなく、仮に次のターンで壊獣を出すことに成功してもその種類によっては固有効果が使えない。

「いつまでその防御が持つか、見せてもらおう。これでターンエンドだ」

「また……？」

確かにこのターン、他のモンスターを出すことは許されない。下級モンスターのセットならできたはずだけど、そもそも下級モンスター自体が少ない吹雪さんのデッキではこのターンそれができなくても不思議はない。

でもやっぱり、さっきから伏せカードすらほとんど出してこないのは何か変だ。強力なモンスターこそ繰り出してくるものの、妙に攻め手が単調というか……今の吹雪さんは、さっきも感じたようにギリギリのタイミングを探っているように見える。となると、じっと溜めている力が解放される前に勝負を決めないとまずいだろう。そのためには、まずは目先の流星竜をどうにかしなければ。吹雪さんは何一つ特別なことをしていないのに、疑心暗鬼に陥った僕の心の中で焦りだけが勝手に増大していく。

清明　ＬＰ１９００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：壊獣捕獲大作戦（１）

１（伏せ）

吹雪　ＬＰ１３００　手札：２

モンスター：流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン（攻）

魔法・罠：なし

「ぼ、僕のターン！」

このカード……悪くない、悪くないけれど、今ここで欲しいようなカードじゃない。この僕の場の最後の伏せカード、これがうまく機能して次の１ターンだけでも持ちこたえられればなんとか、というところか。

『いや、悪くないどころかむしろこれはチャンスかもしれないな。確かに分の悪い賭けを凌ぐ必要もあるが、うまくいけばその分のリターンはかなり大きい。違うか、マスター?』

確かに、チャクチャルさんの励ましにも一理ある。それにどうせ、僕の手札はこれ1枚。できることはこれだけしかないのだから、迷うまでもないか。

「永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。そしてこのターンのエンドフェイズ、インパクトの効果を発動する。デッキからグレイドルカード1枚を手札に加える、ドール・コール!来い、グレイドル・アリゲーター!」

インパクトのサーチはエンドフェイズと遅く、このターン中に持ってきたカードを使うことはできない。この次の吹雪さんのターンを、この伏せカード1枚で防げるか。そこが勝負の分かれ目だ。

「俺のターン。魔法カード、龍の鏡(ドラゴンズ・ミラー)を発動!墓地に眠るレッドアイズの名を持つ通常モンスター、真紅眼の黒竜とレベル6かつデーモンの名を持つ通常モンスター、真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモンを除外し、融合召喚!」

「あの素材……てことは……」

宇宙の力を浴びることで空中戦にその活路を開いた流星竜とは違い筋骨隆々な体躯に悪魔の翼を持つ、接近戦に重きを置いた真紅眼の可能性のひとつ。前回のデュエルで

も見せてもらった、ダークネスの力を受け継ぐモンスター。
「悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン！」
　悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン　攻３２００
　２体ものレッドアイズ融合体が並び立ち、鋭い眼光が足元の僕を射抜く。１瞬で相手ライフを吹き飛ばす破壊力を秘めたモンスター２体、そのプレッシャーはまだ攻撃すら行われていない今でも凄まじいものがある。
「まだだ。魔法カード、闇の量産工場を発動！墓地の通常モンスター、真紅眼の黒竜と真紅眼の凶星竜の２体を手札に加え、闇の誘惑を発動。カードを２枚ドローし、手札から闇属性モンスターである真紅眼の凶星竜を除外する。さらに、紅玉の宝札を発動。手札からレベル７のレッドアイズを墓地に送ることでカードを２枚ドローし、デッキからレベル７のレッドアイズ、真紅眼の黒炎竜（レッドアイズ・ブラックフレアドラゴン）を墓地に送る」
　やっぱり、吹雪さんは待っていたんだ。僕が手札を使い切り、息切れを起こすこの瞬間を。そうとしか思えないほどの勢いで、これまでのターンが嘘のようにデッキを回していく吹雪さんの動きを、背筋に冷たいものを感じながらただただ圧倒され、ひたすら眺めているしかない。
「魔法カード、死者蘇生を発動。墓地から黒鋼竜を蘇生し、フィールドからドラゴン族であるこのカードを除外する！手札より出でよ、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴ

ン！」

それはダークネスの力のみを純粋に受け継いだ真紅眼の真か、真紅眼の闇竜……その、さらなる進化の形だった。全身を黒光りする黒鋼の鎧で覆い、機動力を若干落としたかわりにより純粋に強化された戦闘能力を手に入れた姿。

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン　攻２８００

「このカードは特殊能力として、１ターンに１度手札か墓地からドラゴン族モンスター１体を特殊召喚することができる。蘇れ、真紅眼の幼竜！」

真紅眼の幼竜　攻１２００

ここでも目先の打点より、次に繋げるリクルート効果持ちモンスターを優先するということか。もっとも今の吹雪さんの場は明らかなオーバーキル状態、さらなる打点を求める理由は確かにない。それだけ、この伏せカードを警戒しているのだろうか？

『だとするならば逆に考えれば、あの１枚残った手札もマスターのカードを除去する類のものではないようだな。もしできるのならばさっさと使い、そのまま１度攻撃して終わらせていただろう』

「相変わらず微妙に引き弱いところがあるからね、吹雪さん」

吹雪さんの弱点というか傾向は、毎回やりたい放題にぶん回す癖に肝心なところでこれだけ引ければ勝ち、という手札が揃わないことだ。極端な話先攻で真紅眼の黒竜を特

殊召喚し黒炎弾を２枚揃えればよほどバーンメタに特化しない限りまず防げないような先攻ワンキルが成立するのに、僕はあの人がそれをやってのけたことをこの３年間近くの学生生活でこれまで１度も見たことがない。

ただしそれは、だからといってあの人が弱いということには結びつかない。至善の策が取れないぶん次善の策に関しては徹底的に手を抜かず、一切のミスを出さずに行う。だから厄介なんだ、この人は。

「バトルだ、悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴンで攻撃。この瞬間より悪魔竜の効果により、相手は一切のカード効果を発動できない！」

「なら、それより前にこのカードを使う！トラップ発動、バブル・ブリンガー！このカードがあるかぎり、互いのレベル４以上のモンスターは直接攻撃できない！」

「なるほどな。だが、そのカードも万能ではない。レベル４以上が直接攻撃できないのなら、レベル３のモンスターで攻撃すればいいのだろう？真紅眼の幼竜でダイレクトアタック！」

泡の壁が張り巡らされ、最上級ドラゴン３体の攻撃をシャットアウトする。だがそのわずかな隙間を縫って、ごくごく小さな火炎弾が僕の元に届いた。

真紅眼の幼竜　攻１２００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ１９００→７００

「カードを1枚伏せる。そしてこのターンのエンドフェイズ、墓地から真紅眼の飛龍の効果を発動。通常召喚を行っていないターンのエンドフェイズに墓地のこのカードを除外することで、墓地のレッドアイズを蘇生する！出でよ、真紅眼の黒炎竜！」

吹雪さんの場をさらに埋めるべく呼び出されたのは、本家によく似ているものの細部が微妙に違うまた別の黒き竜……いわば４体目の真紅眼の黒竜とも呼べる存在だ。次のドローで……さて、どうなるか。

真紅眼の黒炎竜　攻２４００
清明　ＬＰ７００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：壊獣捕獲大作戦（１）
バブル・ブリンガー
グレイドル・インパクト
吹雪　ＬＰ１３００　手札：０
モンスター：流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン（攻）
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（攻）
悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン（攻）
真紅眼の黒炎竜（攻）

真紅眼の幼竜（攻）
魔法・罠…１（伏せ）
「僕のターン、ドロー！魔法カード、貪欲な壺！」
「ほう」
グレイドル・インパクトとグレイドル・アリゲーターのコンボを使えば、流星竜にアリゲーターを寄生させつつ幼竜を攻撃して吹雪さんのライフを０にできる。だが、吹雪さんだってそんなこと百も承知で幼竜を特殊召喚したのだろう。となると、あの伏せカードが怪しい。あるいはこれも疑心暗鬼なのかもしれないが、ここは１つでも対応を間違えると倒れるのはこちら、慎重に行こう。
そんな状況を打破すべく土壇場で引いた貪欲な壺によりギリギリ僕の墓地にいた５体のモンスター、ツーヘッド・シャーク、ドゴラン、サンダー・ザ・キング、グレイドル・アリゲーター、シャークラーケンの全てをデッキに戻してカードを２枚引く。このカードか……なるほど。よくわからないけれど、アリゲーターのコンボではなくこちらに召喚権を使え、そうデッキが言っているのだろうか。いつになっても、どんな時も。やっぱりこのカードこそが僕の切り札、絶対不変のマイフェイバリットか。それがまだ僕に力を貸してくれるというのなら、今日も一緒に戦おう。
「相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、カイザー・シースネークはレベルを

４、攻守０にすることで手札から特殊召喚できる。そしてこのカードはレベル７の最上級モンスターだけど、自身の効果により召喚に必要なリリースの数を任意の数だけ減らすことができる！シースネークをリリースして、アドバンス召喚！こいつが僕の切り札だ、霧の王（キングミスト）！」

突如ピンポイントで発生した濃霧の彼方から銀の鎧を煌めかせる魔法剣士が単身現れ、真紅の瞳を持つ竜の軍団にその剣を向けて対峙した。圧倒的な竜たちを前にいささかもひるむことなく構えるその背中が、僕にとってはただただ頼もしい。

「霧の王の攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の数値。つまりカイザー・シースネーク本来の高げくりょく、２５００を霧の王は得る。さあ、バトル！ここは……真紅眼の幼竜に攻撃！ミスト・ストラングル！」

このデュエルを通じて、改めて実感できた。ダークネスは、つくづくとんでもないほどの力を秘めている。ダークシグナーとなった僕はもはや驕りでもなんでもなく、本来人間の手にしていい力以上の能力を手に入れた。だがその力をもってしても無から新しいカードを生み出すようなことはできず、カードを創造するにはあくまで存在するがまだカードとしての生を受けていない精霊からの自発的なコンタクトを必要とする。そうやって手に入れたのがこのグレイドルや壊獣、チャクチャルさんなんかもそのくくりに入れていいだろう。そのうちグレイドルに関しては完全に成り行きだったが、チャ

クチャルさんは僕の負けたくないという恐怖。壊獣は僕の負けたくないという怒り。そういったものが限界を超えた時にはじめて彼らはその勝敗を逆転させるため、僕の元に来てくれた。

でも、ダークネスは違う。吹雪さんが新たな可能性として生み出した悪魔竜に流星竜、ダークネスメタルドラゴンは、いずれも全く何もないところから吹雪さんの精神力とダークネスの力が合わさっただけで突然、さながら全くの無から宇宙を創りだした超新星爆発のように現れたモンスターだ。

あんな仮面に封印されて力の一部分しか発揮されないような状態で、にもかかわらずダークシグナーにすら不可能なことを当たり前のようにやってみせる。あの力をこれ以上暴走させたりしたら、次のターンではまたどんな化け物が生み出されるかわかったものじゃない。

ここで決める。なんとしても。僕の思いを載せた一刀はダークネスメタルの火球を潜り抜け、悪魔竜の獄炎を切り払い、黒炎弾を纏う妖星の一撃をも真っ向から叩き伏せ、たった一つ残された僕に向いた勝利の可能性、真紅眼の幼竜を深々と切り裂いた。

霧の王　攻２５００→真紅眼の幼竜　攻１２００（破壊）

吹雪　ＬＰ１３００→０

「ぐおおおおっ！」

吹き飛んだ衝撃で、吹雪さんの場に置かれていた最後の伏せカードが表になる。トラップカード、バーストブレス……ドラゴン族モンスター1体をリリースすることで、その攻撃力以下の守備力を持つモンスター全てを破壊するカード。フリーチェーンで打てるあのカードなら、もしアリゲーターとインパクトのコンボを狙っていたら通常召喚の時点で場が壊滅させられていた。カイザー・シースネークの特殊召喚に対して使わなかったのは、僕が召喚権を使うのを待っていたから。しかし吹雪さんの想定に反して僕が召喚した霧の王はその特殊能力として、場に出た瞬間から互いのプレイヤーによるあらゆるリリースを禁止する。もし最後に強欲なウツボを使ってこの3枚を引き当てていなければ、このターンでは決着はつかなかっただろう。となると、吹雪さんとダークネスの力はまた……いや、もうよそう。ダークネスはまた封印できた、それで良しとしよう。

何かの拍子にそのダークネスの仮面がひび割れて吹雪さんの顔から外れ、床に落ちて無機質な音を立てる。もう今度こそ、この世の表舞台に出てくるんじゃないよ。

「吹雪さ……」

「兄さん！」

　床に倒れこんだまま起き上がろうとしない吹雪さんの元に駆け寄ろうとした時、後ろから鋭い声が聞こえた。振り返らなくても誰がどんな顔をしているか想像はついたが、無視するわけにもいかないのでゆっくりと顔を声のした方向に向ける。そこには、予想より十倍は険しい顔と冷たい目をした明日香が走ってきて、吹雪さんの半身を起こして背中を支えてやりながら僕のことを視線だけで殺さんとばかりに睨みつけていた。
　そりゃあ、明日香からしたらそうだろう。彼女にしてみれば僕らは、絶対安静の自分の兄と一緒に医務室を抜け出したあげく体に負担のかかる無茶な闇のデュエルをさせ、あげくの果てにぶっ飛ばした張本人なのだから。しかし、誰にも言わずに来たはずなのにどうしてここがわかったんだろう。その疑問に答えるように、広間の入り口から声がする。
「今日は随分不用心でしたね、先輩。歩いた後に沿って小枝が折れてたり、石を蹴り飛ばした跡があったり、きちんと見れば綺麗に通った後の道ができていましたよ。しかもこの廃寮、正門が開けっ放しになっていましたし」
「葵ちゃん……」
　なるほど、彼女も追ってきてたのか。確かに追跡されることなんて考えてなかったから、通った後の痕跡は一切消していない。そんなわかりやすいものを辿ることなんて、彼女にとっては朝飯前だろう。正門が開いていたというのは、恐らく稲石さんが手を回

したに違いない。そこまでわかったところで何か口を開こうとするものの、今の戦いのダメージや疲れがどっと襲ってきたせいで上手く思考がまとまらない。

僕が無言のままなのを見て、明日香と僕の周りの空気がどんどん険悪になる。それに待ったをかけたのは、その原因となった張本人である吹雪さん自身だった。

「いいんだ明日香、彼らを責めないでくれ。彼らは僕のわがままに付き合ってもらっただけだから……それより、ようやく思い出せたよ。あの時何があったのか。なぜ僕がこの、ダークネスの力を持つにいたったのか。その全てをね」

今から吹雪さんの語る話には、何か重要な意味がある。しんと静まり返った廃寮内でゆっくりと語りだされたその話を、一言たりとも聞き逃すまいと僕らは耳を傾けた。

ターン１１２　鉄砲水と五行の竜魂

「元々僕と亮、そして藤原優介の３人は友人だった。いや、このことはもう君達も知っているか。そして彼は、間違いなく才能があった。僕や亮も今ではキングやカイザーだなんて大げさな名前で呼ばれているが、彼の才能は僕らをはるかに上回っていたんだ」

ゆっくりと、吹雪さんの声が廃寮に響く。やはりどこか、昔を懐かしむような調子で。記録を調べるだけでは決して知ることのできない、僕らの知らない当時の記憶が当事者により語られていく。

「ただいつからか、彼の情熱はその方向を少しずつ変えていった。それがダークネスの研究だ。僕がようやく彼の研究に気づいた時、そしてそれがどこまで進んでいたのかを知った時には、もう手遅れだった」

そこで一度言葉を区切り、足元に落ちていたままのダークネスの仮面を拾い上げる。その仮面を、険しい目でじっと見つめた。

「彼はやがて、この仮面を作り出してしまった。闇の世界のさらに先、ダークネスの力を直接引き出すための道具を。だが彼はその代償として、自分の魂を捧げてしまったんだ。僕はそれを止めることができず、最後に彼からもう不要になったというこの仮面を

渡された。それから僕はテストデュエルの最中に別の次元に飛ばされ行方不明になり、そこで生き残るためにこの仮面をつけた。その後のことは、君達の知る通りさ。ダークネスに気を許したつもりはなかったが、仮面をかぶり続けるうちにダークネスに意識を飲み込まれ、記憶も自我も録にないままセブンスターズとして立ちはだかってしまった」

「じゃあ吹雪さん、代償に魂を捧げたってことは、藤原は……」

つい口を挟んだ僕の言葉に、悲痛な面持ちで小さく頷く吹雪さん。もし吹雪さんの話通りなら、藤原はダークネスに自ら進んで心を開け放ったことになる。となると、その結末は碌な物じゃないだろう。だが、今の説明には決定的にかけているものがある。なるほど、確かにダークネスの仮面が現にこうしてある以上、まったくのでたらめというわけではないだろう。何より、吹雪さんにはここで嘘をつく理由がない。

なら、だ。万丈目たちと共に不良品のカードを回収していたあの藤原は、誰なんだ。

「ああ。恐らく……藤原は、ダークネスに取り込まれ、死んだ……」

「嘘だ！」

懸命に無い頭をフル回転させていると突然、力強い声が響いた。その声に含まれた強い怒気に、反射的に全員の視線がその場所に集中する。その顔を見た時、吹雪さんが小さく息を呑んだのが分かった。それはそうだろう、むしろその程度の反応で済んだこと

が不思議なぐらいだ。僕らはついさっきも彼に会っているのだからまだしも、吹雪さんにとって彼はもうすでに故人のはずなのだから。

「藤原……！」

その『藤原』が、怒りの表情もあらわに吹雪さんへと詰め寄る。そのままその襟元を掴みあげ、信じられないという呆然とした表情のまま抵抗もせずにいる吹雪さんを片腕で持ち上げる。

「ぐ……」

「よくも、マスターを見殺しに……！」

「やめろ！」

誰よりも早く我に返り、というよりも、まるでこうなることが最初からわかっていたかのように十代がその間に割り込む。無理やり『藤原』の手を放させたところで、チャクチャルさんがポツリと呟いた。

『マスター？……なるほど、精霊か。変化だけならまだしもこの世界で実体化までしてくるとは、大した根性だ』

「精霊？あの藤原が？」

「ああ、そうだ。こいつの真の姿はデュエルモンスターズの精霊、オネスト。藤原が行方不明になる前に持っていたカードのな」

「なんで十代がそんなこと……あーいや、ごめん。聞くだけ野暮だったわ」
　そもそも、藤原について最初に調べていたのは十代とオブライエンだ。たまたま僕の周りにやたら集まってくるから時々忘れそうになるが、精霊のカードは本来とんでもなく珍しい。そんな貴重な代物を藤原が持っていたのなら、それが捜査の過程で浮かび上がってきてもおかしくはない。
　それより今は、オネストだ。さすがに正体を明かされるとは思っていなかったのか、虚を突かれたように抵抗を緩める。その姿が光り輝いたかと思うと、数多のデュエリストの逆転の切り札に、そしてとどめの一撃に貢献してきた羽の生えた天使型モンスターへと変化した。
「ぼくのこともお見通しという訳か。確かにこれが、ぼくの本当の姿さ」
「オネスト、お前がいくら吹雪さんを責めたって、それで藤原は戻ってくるわけじゃない。自棄になるのはやめるんだ」
「黙れ！マスターさえいれば、今デュエルモンスターズ界に起きている異変だって止めてくれたはずだ。だが、お前たち人間はそのマスターを見殺しにした！」
　そう言って再び暴れ出すオネストの肩に、十代が真剣な顔で手を掛ける。瞬間、見ているこっちが叫びそうになった。十代の瞳の色が、普段の黒から緑とオレンジのオッドアイに……そしてあの全身から立ち上る黒いオーラ、あれには嫌というほどの見覚え

と、同じくらい大きな苦い思い出がある。
「ユベル……！」
「そうだ、清明。お前にはいつか教えるつもりだったんだけどな、隠していたのは悪かった。とにかく、オネスト。見ての通り、俺の魂は今ユベルと一体化している。俺の中のユベルの魂が、俺に力を与えている。影丸や斎王は、お前の言うその異変の原因が俺にあると言っていた。なら、俺がその異変に片を付ける！だから俺を信じてくれ、オネスト！」
「……いいだろう」
　これもまたユベルの力の賜物か、決意を秘めた顔でゆっくりと頷くオネスト。にしても十代め、今さらっと言ってた言葉、『俺が』片を付ける、ね。あくまで自分１人で終わらせるつもり、ということだろう。本っ当に頑固な親友だ、あと何回説得すれば気が済むんだか。そこは『俺』じゃなくて『俺ら』でしょうが。
『あ、そっちなのか』
「（何があったかは知らないけどね。まあユベルもあれだけラブコール送ってたんだから願ったり叶ったりだろうし、十代がいいならそれでいいんじゃない？）」
『それで済ませるとは、何ともマスターらしい割り切り方だな』
　褒めてる……んだよね？ともあれ落ち着いた、というよりむしろ観念したらしいオネ

ストが、彼の知るかぎりの異変について話しはじめた。それによると、今僕らの世界で起きている不良品のカード事件は、進行しつつある異変のほんの一角でしかないらしい。

そもそもデュエルモンスターズのカードは、精霊界と僕らの世界を繋ぐ扉の役割をしている。これに関しては、少なくとも僕はすんなり理解できた。覇王の世界で壊獣が来てくれた時に、ペガサス会長から貰った白紙のカードがまさに扉となってその魂を呼び寄せたのを思い出す。カードの書き換えまでやってのけたあれはさすがに極端な例としても、大まかな原理はあれと同じだろう。だがそれとは別に、精霊界とは別の場所に繋がってしまうカードもまた存在する。それが闇の力に汚染されたカード、僕らが不良品だと思っていたあれのことだ。あのカードたちをそのままにしておくと、やがて闇の住人がこちらの世界に侵食してきてしまう。それを止めるために、オネストは自らのマスターである藤原へと実体化してまで危機を伝えに来たわけだ。

伝えたかったことを伝えた安心感からか、ほんのわずかにオネストの表情が緩む。そのごくごく小さな隙を、奴らは見逃さなかった。何もない空間から突然暗黒の球体が浮かび上がり音もなく飛来してオネストの体に直撃、そのまま吹き飛ばした。

「何!?」

「情報共有は終わったかね?オネスト、君が遊城十代か、できることなら遊野清明の始末

をして欲しかったのだが……どうやらそれも期待できなさそうだ。やはり、我々が手を下すしかないのだろう」
「ミスターT！まーたお前か！」
「ミスターT……トゥルーマンか！油断するな、そいつこそがダークネスの使者……うっ！」
　全身から煙を出しながら辛うじて攻撃の飛んできた方を向いたオネストが、相変わらず神出鬼没に表れたミスターTの顔を見て声を絞り出す。しかしボロボロの体で無理に叫んだのがよくなかったのか、そこで力尽きてその場に倒れこんでしまった。
「十代はオネストを、明日香達は吹雪さんをお願い！こいつは僕が相手する！」
「でも、清明……！」
「なにぐだぐだ言ってんの！このオネストのことを一番よく知ってるのは十代なんだから、そこに十代が行かないでどうすんのさ！」
「う……気をつけろよ、清明！」
　みんながそれぞれの怪我人を抱えて部屋の隅に散る中、僕1人が中央に陣取ってミスターTと睨み合う格好になる。これで最悪、稲石さんがいざとなれば皆をこの廃寮から逃がしてくれるだろう。
「いいだろう、今回の相手は君1人か」

「そーいうことになるんじゃない？またまた返り討ちにしてあげるから、楽しいデュエルと洒落込もうよ」

相変わらずのグラサンのせいで表情が読めないその顔に向けてニヤリと笑いかけ、クイックイッと指を曲げて挑発する。だいぶダメージを受けたらしいオネストのことも心配だけど、だったらなおさらここで負けるわけにはいかない。これまでのミスターTは連敗続き、そろそろ敵も本腰を入れてくる頃だろう。

「「デュエル！」」

「私の先攻だ。魔法カード、ドラゴン・目覚めの旋律を発動。手札を1枚捨て、デッキから攻撃力３０００以上かつ守備力２５００以下のドラゴン族を２体まで手札に加える。私が加えるのはこのカード、混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）―終焉の使者―２体。そして魔法カード、調和の宝札を発動。手札から攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー、亡龍の戦慄―デストルドーを捨て、カードを２枚ドローする」

あの開闢の使者と対となる、フィールドのみならず互いの手札までもを全て墓地送りにする壮大なリセット能力を持つ超大型ドラゴン、終焉の使者。その特殊召喚には開闢の使者と同様、墓地に光属性と闇属性の２体存在しなければいけないけれど……すでに墓地には闇属性のデストルドー、そして目覚めの旋律で捨てられた手札コストが１枚。

正直とても嫌な、予感がする。

「墓地の光属性モンスター、星間竜パーセクと闇属性モンスター、デストルドーをゲームから除外することで、このカードは特殊召喚できる。出でよ、混沌帝龍―終焉の使者よ」
「やっぱり……！」
混沌帝龍―終焉の使者―　攻３０００
案の定、１ターン目から出てくる最上級モンスター。ただ幸いなのは、このターンがまだ先攻１ターン目だということだ。こちらのターンに何かする効果を持っていないのなら、なんとでも処理できる。
「魔法カード、黄金の封印櫃を発動。デッキからカード１枚を除外し、２ターン後のスタンバイフェイズに手札に加える……だがあいにく、そこまで待つつもりはなくてね。魔法カード、原初の種を発動。私の場に開闢の使者か終焉の使者が存在するとき、除外されたカード２枚を選択して手札に加える。先ほど除外したパーセクと、今除外した未来融合―フューチャー・フュージョンを回収し、そのまま発動。次のターンのスタンバイフェイズにこのカードが残っていれば融合素材をデッキから墓地に送り、さらに次のターンでも残っているならばその融合モンスターを融合召喚する」
黄金の封印櫃と原初の種のコンボにより、パーセクを手札に戻しつつデッキに眠っていた未来融合を即座に加えるミスターＴ。なんとも嫌らしい一手だ、なんとしてでもあの未来融合は次の僕のターンのうちに破壊しなければ。今回のミスターＴのデッキは

ドラゴン族メイン、となると恐らくあれが来る。
「最後にカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」
　これでミスターTの手札は残り2枚、しかしその中身はさっきサーチしたもう1体の終焉の使者にパーセクだとわかっている。少なくとも、手札誘発に関しては警戒しなくてもよさそうだ。
「僕のターン！」
　ドローカードは……よし、氷帝メビウス！そして手札には特殊召喚可能なカイザー・シースネークもある、とにかくこれで未来融合だけでも破壊するしかない。破壊しなくちゃいけないから破壊する、あまりにも単調な一手ではあるけれど、これしか僕に打つ手はない。これが通れば儲けものだ。
「相手フィールドにのみモンスターが存在するときこのカードは攻守を0、レベルを4にして特殊召喚できる。来い、カイザー・シースネーク！」
　巨大な海蛇型のモンスターが、長い体をくねらせてフィールドに特殊召喚される……と、突然その姿が爆発した。
「カウンタートラップ、昇天の剛角笛（グレイトホーン）を発動。相手の特殊召喚を無効にして破壊し、そのメインフェイズを強制的に終了させる。ただし、相手はその見返りにカードを1枚ドローできるがね」

「メインフェイズが……!?クソッ、ドロー!」
やられた。壊獣、グレイドル……僕のデッキのメインギミックは一見型破りな特性を持つテーマだが、基本的には他の大抵のデッキと同じくメインフェイズ１を経由しなければ下準備してもその後の攻撃が次のターンまでできずにワンテンポ遅れてしまう。まんまとしてやられた……なら、次だ。このターンのうちに終焉の使者も未来融合も除去できなかったのはかなり痛いが、今のドローでこちらにもまだ可能性は繋がれた。
「バトルフェイズを何もせずにメイン２に移行、これなら文句はないんだよね？僕もカードをセットして、ハリマンボウを攻撃表示で召喚。ターンエンド」
ハリマンボウ　攻１５００
「ほう……」
そう、ハリマンボウはあえて攻撃表示で出させてもらった。このターンであやがついた以上、無理に氷帝の召喚を狙うのはやめた方がいいだろう。さあ、攻撃するならしてくればいいさ。
ミスターＴ　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：混沌帝龍―終焉の使者―（攻）
魔法・罠：未来融合―フューチャー・フュージョン（０）
清明　ＬＰ４０００　手札：４

モンスター：ハリマンボウ（攻）
魔法・罠：1（伏せ）
「私のターン。このスタンバイフェイズ、未来融合の効果の半分が発動する。エクストラデッキのF・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）を選択することで、その素材となるドラゴン族モンスター5体をデッキから墓地に送る。私が素材とするのはエクリプス・ワイバーン3枚と霊廟の守護者、トライホーン・ドラゴンだ」
「やっぱりそのカードか……」
ドラゴン族で未来融合といえばデュエリスト誰もが真っ先に名前を挙げるであろうカード、F・G・D。ドラゴン族5体という驚異の素材の緩さは、未来融合と組み合わせることでデッキから任意のドラゴン族5体を墓地に送ったうえであわよくば融合までできるというおろかな埋葬5枚分プラスアルファという豪快なコンボを可能とする。
どうも今回のデュエルは先ほどの剛角笛といいミスターTの理想的な初手といい、今一つ流れがよろしくない。ここらでなんでもいい、何か勝負の流れを引き寄せに行かないと。
『いや。今奴が選んだカード……残念だがそれだけでは済まないぞ、マスター』
「さらに私は、墓地に送られたエクリプス・ワイバーン3枚の効果を同時に発動。このカードが墓地に送られた時、デッキから光または闇属性でレベル7以上のドラゴン族モ

ンスター1体を除外することができる。これによりそれぞれ古聖戦サウラヴィス2体、そしてオッドアイズ・セイバー・ドラゴンを除外する」

「また除外……？」

『当然、ただで済むわけがないな』

　チャクチャルさんの不吉な言葉に応えるかのごとく、ミスターTが次の手を示す。

「魔法カード、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動。私の墓地から今落とした5体のモンスターを除外することで、ドラゴン族限定の融合召喚を行う」

「なっ……！そのモンスターが出てくるのは、次のターンじゃ……！」

「言っただろう？あいにくそこまで待つ気はない、と。融合召喚、出でよF・G・D！」

　予想よりもさらに1ターン早く、地が弾けた。水が爆ぜた。炎が舞った。風が荒んだ。そして闇が、その力全てを統合した。デュエルモンスターズに存在する、神を除いた6つの属性……そのうち光以外の5つの力を掌握する、それぞれの属性ごとに分かれた5つの首を持つ恐るべきドラゴン。僕も何度か見たことはあるが、こうして実物を相手にするのは初めてだ。その力は小難しい効果など一切ないシンプルなものだが、それゆえにその身に秘められた破壊力はまさしく超大型モンスターの名に相応しい。

　F・G・D　攻５０００

　もしあの攻撃力からの一撃をまともに受けたりしたら、一体どれほどの苦痛を浴びる

ことになるだろう。これまでの闇のデュエルでは、受けるダメージは２０００台、多くて３０００台までだった。それだというのにあの火力馬鹿なモンスターは、１回の攻撃だけでその倍近い５０００ダメージを叩きだす。命はおろか魂まで懸かった闇のデュエルにアドレナリンが駆け巡る僕の脳内を、それでも隠しきれない死の気配と冷たい予感がほんの少しだけ掠めていく。

そしてそんな浮き足立っていた僕を諌めてくれたのは、やはりチャクチャルさんだった。

『惑わされるな、マスター。確かにＦ・Ｇ・Ｄの正面突破力はかなりのものだ……だが、マスターもそれは未来融合を発動された時点で覚悟の上だったはずだ。実物を目の前にして臆するのは勝手だが、まず次に打つべき手を考える。違うか？そもそもマスター、ついさっき自分でも言ったばかりだろう。最上級モンスターだろうと、マスターのターンに何かする効果を持っていなければいくらでもどうにかできる。もっと我々のフィールドコントロール能力を信じてくれ』

「うん……」

そうだ。確かに高い攻撃力はそれだけダメージも出すが、ただそれだけだ。それはつまり寄生のいいカモ、リリースにもってこいの弾ということと同義になる。そうするためにも、まずはこのターンを耐えきることだ。

『あ、いや、１つだけ言っておくとすれば、今回グレイドルは少々分が悪いかもしれないな。対抗するなら壊獣を軸に据えるといいだろう。あと私もいるぞ』

「……？」

「除外されたエクリプス・ワイバーン３体の効果を発動。このカードが除外された時、自身の効果で除外したドラゴン族モンスターを再び手札に加える。そして星間竜パーセクはレベル８だが、自身の効果により私の場にレベル８の混沌帝龍が存在することでリリースなしで召喚できる」

　星間竜パーセク　攻８００

「攻撃力８００……？」

『本命はそっちじゃないな。来るぞ！』

「私の場の光属性モンスター１体をリリースし、さらにデッキからオッドアイズ・ドラゴン１体を墓地に送る。これにより、手札のオッドアイズ・セイバー・ドラゴンは特殊召喚できる」

　オッドアイズ・セイバー・ドラゴン　攻２８００

　パーセクの細い体が即座に消え、全身に光輝く白銀の鎧をまとった２色の眼を持つ龍がかわりに現れる。だがそれだけじゃない、今の動きで墓地には光属性のパーセクと闇属性のオッドアイズ・ドラゴンが送られた、ということは……。

「手札の混沌帝龍の効果……を使うと思ったかね？それもいいが、ここは伏せカードを用心させてもらおう。バトルだ、混沌帝龍で攻撃！」
　オーバーキルになるほどの展開を避け、あえて混沌帝龍の１体を手札で温存したままバトルに入るミスターＴ。ここでＦ・Ｇ・Ｄから攻撃されたら目も当てられないことになっていたが、ありがたいことに攻撃力がそれより低い終焉の使者から攻撃してきてくれた。なら、このカードで迎え撃てる！
「攻撃宣言時に手札から、水精鱗（マーメイル）―ネレイアビスの効果を発動！このカードを捨てて手札の水属性モンスター、氷帝メビウスを破壊することで、場の水属性モンスターであるハリマンボウのステータスは破壊されたメビウスの分だけアップする！」
　メビウスは攻撃力２４００、守備力１０００の上級モンスター。その力が丸々ハリマンボウに加算されたことで、終焉の使者をも返り討ちにするだけのパワーを得た。
　ハリマンボウ　攻１５００→３９００　守１００→１１００
　混沌帝龍―終焉の使者―　攻３０００（破壊）→ハリマンボウ　攻３９００
　ミスターＴ　ＬＰ４０００→３１００
「最初のダメージは貰ってくよ、ミスターＴ」
「この程度、ほんのわずかな延命に過ぎない。Ｆ・Ｇ・Ｄでもう１度攻撃！」
　５本の首からそれぞれ属性の異なるブレスが飛び、それが空中で混じり合って１本の

破壊光線となる。いくらメビウスの力を得たハリマンボウでも素のスペックが違いすぎる、正面からぶつかり合っては勝てるわけがない。

Ｆ・Ｇ・Ｄ　攻５０００→ハリマンボウ　攻３９００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→２９００

「ぐうっ……！でもこの瞬間、墓地に送られたハリマンボウの効果発動！相手モンスター１体を選んで、その攻撃力を５００ポイントダウンさせる！当然この対象は、オッドアイズ！」

「ここまで攻撃しても伏せカードは使わずか。ならば手札のサウラヴィスの効果を発動、このカードを手札から捨てることで、私のモンスターに対象を取る相手の効果を無効とする。オッドアイズ・セイバー・ドラゴンでダイレクトアタックだ」

無数の針が飛んでいくも、空中で不可視の壁に遮られてオッドアイズに届かない。サウラディスにそんな効果があるなら、チャクチャルさんが対象を取るカードばかりのグレイドルで攻め立てることに渋い顔だったのも納得だ。しかも、そのサウラディスがもう１枚手札にある状態……でも、ハリマンボウを躱された以上ここでこのカードを使うしかない。

『少々勿体ないが、やむを得ないか。マスター、今だ』

「わかってる！永続トラップ発動、グレイドル・パラサイト！このカードは相手のダイレ

クトアタック宣言時に僕のフィールドにモンスターがいない場合、デッキから攻撃表示でグレイドル1体を特殊召喚することができる。グレイドル・イーグル！」

オッドアイズ・セイバー・ドラゴン　攻２８００→グレイドル・イーグル　攻１５００（破壊）

清明　ＬＰ２９００→１６００

「戦闘破壊されたイーグルの効果で、Ｆ・Ｇ・Ｄを対象に寄生能力を発動する……けど……」

「当然手札から、２枚目のサウラディスの効果を発動。再びその発動を無効にする」

「この……！」

黄色い鷹がその羽を目いっぱいに広げ、終焉の使者の放つ炎から僕を守る盾となってくれる。ドロドロに溶けたイーグルは銀色の液状となってミスターＴのドラゴンに近づこうとするも、再び張られた不可視の壁にその動きが遮られてしまう。

危なかった、もしミスターＴがもう1体の混沌帝龍を特殊召喚することを選んでいたら防ぎきれなかった。しかもあの場面ではグレイドル・パラサイトがあるなんて相手にわかるわけなかったのだから、一概に温存もミスターＴのプレミとは言い切れない。

今生きているのは本当に、たまたま僕の運が良かっただけだ。あるいはミスターＴの運が悪かった、ともいえる。

「いいだろう、私はこれでターンエンドだ」
「僕のターン！」
　ぼやぼやしていると次のターンには未来融合の効果が完遂してあのＦ・Ｇ・Ｄがもう１体追加される、とはいえ僕のライフは既に残りわずかで、グレイドルの効果を能動的に使うための最も簡単な手段である自爆特攻はもうできそうにない。
　とにかく、カードを引いてから考えよう。これで手札が３枚になり……この手札なら、行けるか？もうサウラヴィスは使い切られ、奴の場には伏せカードもない。攻め込める隙があるとしたら、それは間違いなく今だ。
「グレイドル・スライムＪｒ・（ジュニア）を守備表示で召喚。そしてＪｒは召喚成功時、墓地のグレイドルを特殊召喚することができる。このカードでイーグルを蘇生！」
　グレイドル・スライムＪｒ．　守２０００
　グレイドル・イーグル　攻１５００
「さらにグレイドル・スライムの効果を発動！場のグレイドルを２枚破壊することでこのカードを特殊召喚、そして墓地のグレイドルを守備表示で蘇生できる。僕が選ぶのはＪｒとイーグル、蘇生させるのはＪｒ！」
　グレイドル・スライム　守２０００
　グレイドル・スライムＪｒ．　守２０００

「モンスターを交換したところで……いや、そういうことか」
ここまで来てようやくミスターＴも気が付いたようだが、今更気が付いても遅い。破壊されたイーグルが再び銀色の水たまりとなり、今度こそ遮られることなくＦ・Ｇ・Ｄの足元から浸透してその５つの頭へと同時に乗っ取りを仕掛ける。
「モンスター効果で破壊されたグレイドル・イーグルは、相手モンスターに寄生できる！さあ、今度こそそのデカブツは貰ってくよ」
ドラゴンの中での孤独な戦いは、いつも通りイーグルの勝利で収まった。５つの首が一斉に雄叫びを上げ、さっきまでの主人にその牙をむく。
「ついでにこいつも持ってきな、混沌帝龍をリリース！多次元壊獣ラディアンを、お前の場に攻撃表示で特殊召喚！」
多次元壊獣ラディアン　攻２８００
ここまでやっても、まだミスターＴのライフを削りきるにはあとわずかに足りない。それは気にいらないが、ここでライフをここまで減らしておけば発動にライフコスト１０００が必要となる終焉の使者の効果はギリギリ使えない。ミスターＴが戦力を温存して正気を逃す様を見ていたのだから、僕の方は出し惜しみせずに総力戦で挑むとしよう。
「バトルだ、Ｆ・Ｇ・Ｄ！ラディアンに攻撃！」

Ｆ・Ｇ・Ｄ　攻５０００→多次元壊獣ラディアン　攻２８００（破壊）
ミスターＴ　ＬＰ３１００→９００
「どうだ……ったって、どうせ効いてやしないんだよね。ターンエンド」
埃っぽい室内で爆発が起きたせいで、もうもうと煙が立ち上り一時的に視界が効かなくなる。ややあって少し空気が落ち着いてきたとき、案の定ぴんぴんした状態のミスターＴが煙の向こうに立っているのが見えた。
ミスターＴ　ＬＰ９００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：未来融合―フューチャー・フュージョン（１）
清明　ＬＰ１４００　手札：０
モンスター：Ｆ・Ｇ・Ｄ（攻・イーグル）
グレイドル・スライム（守）
グレイドル・スライムＪｒ．（守）
魔法・罠：グレイドル・パラサイト
グレイドル・イーグル（Ｆ・Ｇ・Ｄ）
「私のターン。このスタンバイフェイズに、未来融合の効果が再び発動する。出でよ、Ｆ・Ｇ・Ｄ！」

結局２ターンの間に止められなかったことで再び融合効果が発動され、２体目のＦ・Ｇ・Ｄが融合召喚される。まあ、どうにかあれが２体並び立つことだけは防げたということでよしとしよう。

Ｆ・Ｇ・Ｄ　攻５０００

「あえて２００のダメージを上乗せすることで、私のライフを１０００未満に下げる……悪くない戦略だが、少々浅かったな。バトル、私のＦ・Ｇ・Ｄでそちらのの効果を発動。このカードを特殊召喚し、私のライフを１０００回復する」

「回復……でもＦ・Ｇ・Ｄは、地水炎風闇属性モンスターとの戦闘では破壊されない！」

「もちろん知っているとも、だからこそ狙わせてもらったのだ。そして私のＦ・Ｇ・Ｄもまた、同様の耐性により破壊されない」

「え……？」

「ターンエンドだ。最後のな」

ジュラゲド　攻１７００

ミスターＴ　ＬＰ９００→１９００

Ｆ・Ｇ・Ｄ　攻５０００→Ｆ・Ｇ・Ｄ　攻５０００

２本の破壊光線がぶつかり合い、またもや爆発が巻き起こる。爆風から身を守りなが

ら、今のミスターＴの言葉の意味を考えていた。ジュラゲドが出したいだけならグレイドル・スライムを狙ってそのまま戦闘破壊することもできたのに、なぜミスターＴはそれをしなかったばかりか、よりにもよって戦闘破壊できずダメージも通らないＦ・Ｇ・Ｄを攻撃対象としたのか。何か、僕のモンスターを減らしたくないわけがあった？

そこまで考えたところで、ミスターＴが片手に持つ最後の手札１枚が目に飛び込んできた。そうか、そういうことか。終焉の使者はプレイヤーのライフ１０００をコストに互いのフィールドと手札全てを墓地に送り、さらに相手の墓地にその効果で送り込んだカード１枚につき３００のダメージを与える効果を持つ。僕のフィールドには今スライム、Ｊｒ、パラサイト、そして装備状態のイーグルの計４枚のカードがあり、次のドローによってはそれがさらに増えて５枚になる。そして僕のライフは現在、１４００。終焉の使者の効果１発で僕を仕留める圏内に持っていくためには、ここでイーグルが装備カードとなっていることが必要不可欠だったのだ。ジュラゲドのもう１つの効果を使って無理にダメージを通す方法もあったが、次の僕のターンを確実に凌ぐためモンスターの頭数を残しておく手を選んだのだろう。

こうなると、この勝負は僕のドロー次第。上級モンスターや最上級モンスターを引ければ、アドバンス召喚でこちらのカードの合計数を減らすことができるだろう。だが下級モンスターや永続魔法、罠なんかを引いてしまった場合、消費することができずにダ

メージが増やされて終わる。
「く……！」
どちらを引けるか、可能性は五分五分といったところ……いや、違うか。腹の底から笑いがこみあげてきて、堪えきれずに口の端が歪む。
「失敗したね、ミスターT」
「ほう？それはどういう意味かね？」
「よりにもよってこの僕に向かって、そんなデッキトップ次第の勝負を仕掛けるなんてさ。それを引いたら勝てるってんなら、この場で今すぐ引いて見せるさ！僕のターン、ドロー！」
そうだ、僕のデッキはいつだって、僕が願えば応えてくれる。だからこそ僕はこれまでも、自分よりはるかに強いような相手とも戦ってこれたんだ。それはこれまでも変わらないし、これからだってずっと一緒だ。デッキトップにそっと指を掛けると、不思議と心が落ち着くのを感じた。
もう大丈夫だ。このドローで、全部終わらせよう。決意を込めてそのカードを引き、そっと表に向けて確認する。ほら、引けた。
「これで終わりだ、ミスターT！ジュラゲドをリリースして、粘糸壊獣クモグスを攻撃表示でそっちのフィールドに特殊召喚！」

「このタイミングで……2枚目の壊獣カードを……！」
粘糸壊獣クモグス　攻２４００
「これでジュラゲドの効果はもう使えない、バトルだ！Ｆ・Ｇ・Ｄで、クモグスに攻撃する！」
５つの首がまたしても動き、螺旋状に絡み合い１本の極太光線と化したブレスが闇を切り裂いて飛んでいく。
Ｆ・Ｇ・Ｄ　攻５０００→粘糸壊獣クモグス　攻２４００（破壊）
ミスターＴ　ＬＰ１９００→０

「さあミスターＴ、どうせまた生きてるんでしょ？今度こそ洗いざらい、知ってること全部吐いてもらおうか！」
「ふっ、今君の目の前にいる我々も、そして君が知っていることも。全てはまだ、真実の断片に過ぎない。いずれまた会おう」
「あ、コラ待て！」
今回も捕まえようとはしたものの、またしても時すでに遅く。捨て台詞と共に煙のように消えていくミスターＴを睨みつけるも、結局そのまま見送ることしかできなかっ

た。
『放っておけ。どうせまた向こうから来るだろう』
「専守防衛はあんま好きじゃないんだけどね。まあいいや、逃がしちゃったもんは。十代、そっちはどう?」
　言いながら振り返るとそこにオネストの姿はなく、十代が1人で1枚のカードを手にしたままうつむいていた。僕の質問に、ゆっくりと首を振る。
　……そうか、助からなかったのか。
『そもそも精霊がこちら側の世界で実体化すること自体、たまにいる私のように特殊な例を除くと莫大な体力を消費するからな。むしろあれだけ動き回っていた上で致命傷を受けたのだから、ここまで持っただけでも大したものだ』
「オネストの魂は、俺が受け継いだ。せめて俺にできる事は、それぐらいだったからな。見てくれ、清明」
　そう言いつつ、十代が握っていたカードをこちらに向ける。そこには見慣れた通常のイラストとは違い、天使の羽根を生やして飛翔するネオスの姿がくっきりと描かれていた。
「E・HERO（エレメンタルヒーロー）　オネスティ・ネオス……オネストの魂を受け継いで生まれた、ネオスの新たな姿だ。この力を使って必ず、俺があいつの願いを叶えてやる」

「十代……違うでしょ？」
「え？」
「さっきも思ったけど、そこは『俺が』じゃない、『俺たちが』さ。オネストの魂を十代が受け継いだってんなら、一緒にいた僕たちだってその思いは受け継いださ。この世界も精霊界も、ダークネスなんかに売り渡したりできるもんか。それにほら、きっとみんなだって思うところは同じはずだよ」
　広間の入り口の方を指さすと、ちょうどオブライエンを先頭に夢想、万丈目、翔、剣山のおなじみのメンツが走ってはいってくるところだった。僕らのことを認識したオブライエンが、仏頂面で不平を漏らす。
「……まったく。何かやるなら、せめて行先ぐらいは伝えて欲しいものだな。お前たちの足跡を見つけるまで、随分手間取ったぞ」
「そうだぞ清明、それに十代も。この名探偵サンダーを差し置いて、謎が解けるわけが無かろう」
「アニキ達、今度は何してたんスか？急にいなくなったってオブライエンから聞いて、心配してたんスよ」
「ようやく見つけたドン。こんな気味悪い廃寮、早く出るザウルス」
「みんな……！」

「んじゃ、もう帰ろっか。もういい加減眠いし」
　気が付けば、窓の向こうからに見える空は既にほのかに白くなってきていた。いつの間にか夜が明けて、今日もアカデミアに朝が来たんだ。
　と、ここでお開きにできればよかったのだが。それはそれは重い、じっとりとした視線を背中に感じて恐る恐る振り向くと、満面の天使のような笑顔と目が合った。あ、まずい。顔は笑ってるのに、目が全然笑ってない。
「清明、汗と埃でだいぶ汚れてるよ、ってさ。一晩中何をしたらそうなっちゃうのか、いっぺん教えて欲しいなあ、ってさ」
「う。ですからですねえーと、その点につきましてはですね、えーと……」
「あーきーら？」
「……はい」
「また清明がいなくなったって聞いて……すっごく、すっごく心配したんだよ？って」
　そんな風に言われると、僕も弱い。その時になって初めて気づいたが、よく見ると彼女の澄んだ瞳には涙が溜まって今にも零れ落ちそうになっている。
　ああもう、どうやら僕も覚悟を決めて全部打ち明けるしかなさそうだ。一体、どこから話せばいいだろう？いずれにせよ、長い夜……いや、長い朝になりそうだ。

ターン113　鉄砲水とシャル・ウィ・デュエル?

「あのー、すいません」
「……」
「しょ、少々お時間の方頂いてもよろしいでしょうか……?」
「……」
「え、ええと……」
　胃が痛くなる緊張感に包まれ、爽やかさのかけらもないただただ不快なだけの嫌な汗が全身から流れるのを感じる。ともすれば零れ落ちそうになる決意と勇気をどうにか寄せ集め、カラカラになった口を必死に動かして言葉を紡ぐ。
「む、夢想さん……」
「私忙しいから。じゃあね、ってさ」
「あ、えっと……はい」
　駄目。もう限界。その場にへたり込みそうなほどの疲労感と敗北感がずっしりとのしかかってくるのを尻目に、その当の本人である彼女……河風夢想は僕のことを一瞥すらせずに背を向けて女子寮の中へ回れ右していった。いかにも高級そうな扉が重々し

く閉ざされ、それがまた彼女の拒絶の意思を嫌というほど強調する。
「天下井(あまがい)さん、これで何回目でしたっけ」
「日数なら今朝で４日目。あの方がおヘタレになった回数なら３日前からざっと６３回目ですわ」
　随分と失礼な会話と共に手元のメモ帳に今回の結果を書きこみながら校舎の影からこちらを見ていた２人の女子生徒は、代行使いのお嬢こと天下井ちゃんにいつもの葵ちゃん。天下井ちゃんはまだ覗き見に罪悪感があるからか目を合わせるとさっと視線を逸らすぐらいの可愛げがあるのだが、問題はもう１人の方だ。彼女が今更変に遠慮するようなタマじゃないことは、僕が一番よく知っている。
「……おはよ、２人とも」
「おおおおはようございますですわ、ワタクシたまたま、そう、たーまーたーま！たった今！ここを通りかかったのですが、本日もいい天気ですわね！」
「いやめっちゃ曇ってますし、そもそも先輩最初っから気づいてましたよ。おはようございます、今日も元気にヘタレてますね」
「今日ばっかりは何も言い返せない……」
「当たり前です。そこで先輩が下手に言い訳を重ねる程度の男だったら、私もとっくに見限ってます」

「で、ですわね！」

相変わらずド直球な物言いではあるが、そのストレートさが今の僕にはむしろありがたい。下手な同情や気遣いは、余計に気まずくなるだけだ。

「今回ばかりは先輩が悪いですからね。ミスターＴでしたっけ?隠すなら最後まで隠し通す、打ち明けるなら報告連絡相談は即座に。半端に隠して結局ばれるだなんて、それは河風先輩も怒りますよ」

「うぐっ」

「そもそも、ついこの間まで河風先輩がどれだけ先輩のことで心を痛めてたかはわかっていたんでしょう?私達が砂漠の世界から帰還してからは先輩がいないって知っただけでどんどん衰弱していって、見ていられなかった……のは、私がいちいち口にしなくてもよく知ってますよね?ならなんで、まだそういうことするんですか。少しは懲りたらどうです?」

グサグサと容赦のない言葉が胸に突き刺さる。廃寮でミスターＴを退けたあの日、僕は夢想に奴との戦いについて包み隠さず打ち明けさせられた。隠し通せるとは最初から思っていなかったけれど、せめてこの戦いに終止符を打つまで夢想には蚊帳の外にいて欲しかったのだ。これ以上彼女をおかしなことに巻き込むまいと思ってのことだったが、その結果がこのざまである。

最悪のタイミングで彼女もこの戦いに首を突っ込むこととなり、立場が逆なら僕もそうしたであろうように、それを隠そうとした僕に対して激怒した。全てを聞き終えた彼女が僕の元から去っていく直前に言われた言葉は、今もはっきりと耳に残っている。

『ねえ、清明。貴方は私のことを、私が思っていた半分も信じてくれてなかったんだね、ってさ』

あれを聞いた時の絶望感を完璧に表すことのできる日本語を、僕はちょっと思いつけそうにない。そしてこの数日間は、向こうが攻めてこないのをいいことになんとか彼女と仲直りしようと暇さえあれば女子寮まで通いつめてはいるのだが……結果はいつもああだ。初日こそ不審者を見る目が向けられていたが、昨日あたりからはそれを通り越したのか周りからの視線が見てられない、という同情めいた含みをもって刺さるようになった。マシになったと言えばそうなのだが、それはそれでまた別の意味で辛い。

「葵ちゃん、天下井ちゃん。お願い、助けてなんて言わないから、せめて何か手を貸して！」

「……ぼちぼち泣きついてくるんじゃないかと思ってましたよ。これ以上先輩に腑抜けられても迷惑なので、1つ貸しでよろしければ」

「仕方ありませんわね。ワタクシのとっておきを見せて差し上げましょう、少々お待ちなさい」

自信満々な顔で踵を返し、私服のドレスを揺らしながら女子寮へ消えていく天下井ちゃん。なんのこと?という視線を送るも葵ちゃんもわからないらしく、軽く肩をすくめるだけの返事しか返ってこなかった。

しかし、僕が正面から何度通い詰めても何も進展がなかったことも事実、ここは彼女のとっておきに賭けてみるしかない。祈るような気持ちでしばらく待っていると、何かポスターのようなものを片手にとてとてと帰ってきた。

「いいこと?貴方が何をなさったのかは知りませんが、本当に反省しているとおっしゃるのならば!その答えは、これしかありえませんわ!」

ばばん!と効果音が付きそうなほどの勢いで、僕の目の前にそのポスターが広げられる。

「何これ。パーティー?ペアデュエル大会?」

「ええ。今から1週間後にワタクシたち卒業アルバム製作委員会が主催となって開く貴方達への卒業祝いのようなものなのですが、その一環として男女ペアを作ってのペアデュエル大会というものを予定していますの。貴方にもパティシエとして腕を振るって頂こうかと2、3日中には打診する予定でしたから、考えてみればちょうどいいタイミングですわ」

「……ここの男女比でペアデュエル?正気?」

「もちろん、殿方の比率の多さはワタクシも重々存じておりますわ。ですのでパートナーをご所望ならば、少しでも早いうちにアプローチを掛けたほうがよろしくてよ？」

そう言っていたずらっぽく笑い、小さくウインクして見せる天下井ちゃん。

……なるほど、そういうことか。確かにデュエルが絡む話ならあるいは今の夢想も耳を傾けてくれるかもしれないし、これならいかにもデュエルアカデミアらしい口実だ。期限がまだ1週間あるというのも素晴らしい。

「本日の授業後に改めて全校に向けて発表を行う予定でしたが……少しぐらいフライングしても問題はないでしょう。とはいえ、一応は他言無用でお願いいたしますわ」

「任せといて。あ、なるべく早いうちに予算だけ教えてね。ある程度はＹＯＵ　ＫＮＯＵの売り上げとレッド寮運営費から持ってこれるけど、こっちもそれだけじゃ動けないからさ」

「かしこまりましたわ。では、ご武運を」

「では河風先輩は私が……」

「ストップストップストップ葵ちゃん！今はいいから！まだ呼んでこなくていいから！」

「ヘタレですねえ。私は構いませんが。では、授業がありますのでこれで」

「失礼しますわ」

軽く会釈し、２人が背を向けて去っていく。手の中にある押し付けられたペアデュエル大会のチラシを眺めながら、彼女を何と誘おうかと思考をフル回転させた。

……で、それから３日後。

「助けて葵ちゃん!」

ＹＯＵ　ＫＮＯＷにて。臨時休業の紙を扉に張り付けたため、店内はいたって静かだった。そこにいたのはせっせと昨晩作ったクッキー生地の型抜きとデコレーションに精を出す葵ちゃん……と、その目の前で頭を床につけて土下座する僕の２人だけだ。

「えぇ……わかりましたからとりあえず後輩に土下座はやめましょうよ、プライドないんですか?」

「逆に聞くけどさ、あると思う?」

「……軽率な質問でした。でも先輩、気づいてなかったんですか?正直、そこまで深刻に考えることもないと思いますけど」

「えっこらしょっと。というと?」

若干本気で驚いた風の葵ちゃんの言葉に、姿勢を正して起き上がる。僕は基本的に女子寮には入れないから、その中での話は同じ女子か、あるいは何でも知ってる吹雪さんに頼るしかない。そして、その吹雪さんは残念ながら目下それどころじゃない。

「最近の河風先輩、後ろめたそうな顔で無意味に玄関前をうろうろしては外に出ようと

して思いとどまったり、寝不足なのか朝は元気がなくていつも以上に不思議っぷりが増してたりと散々なんですよ。先輩との痴話喧嘩をどこで折れるかのタイミングを計りかねてるんだろうって、今女子寮ではもっぱらの噂です」

「……本当？」

「そこで嘘ついてどうするんですか。それに河風先輩、ここ数日受けた他の男子からのアプローチは全部断ってるんですよ？下手な事は言えませんが、それでもまだ脈自体はあると思いますよ」

それについては、何度か居合わせたことがあるので僕も知っている。いっそすがすがしいぐらいの勢いで特攻しては玉砕していく男子の姿を、安心と不安の入り混じった複雑な気持ちで物陰から見ていたものだ。

……ちなみに、これはストーカー行為では断じてない。ないったらない。多分。最近の夢想、今回ばかりは本気で僕に愛想を尽かしてしまったらしくて話しかけようとしてもそもそも目すら合わせてくれず、近づこうとすれば露骨に席を立たれる始末。呆然と立ち尽くしたところにとどめとばかりに本気で嫌がっているような冷たい視線が向けられて、最終的には僕が近寄ろうとするだけでどっか行っちゃうぐらいになっちゃったから、ね？

「傍から見るとただのこじらせたストーカーでしかないですが？やりすぎて内地から警

察呼ばれないようにしてくださいね、私としても犯罪者の後輩なんて御免ですから。それで話を戻しますが、あの人も割と頑固なところありますからね……ここ数日間先輩が押しても押しても効果がないのでしたら、少しアプローチを変えてみましょうか」

「推して駄目なら引いてみな、ってやつ?」

「いえ、もっとガンガン押しましょう。先輩がそれやると多分このままうやむやになって終わります。それはもう明確にそうなる未来が見えますね」

いくらなんでもそんなことは……と言いたいところだけど、ここまできっぱりと言い切られると、なんだかそうなる気がしてくるから強く出れない。

いや、違うか。そもそも僕1人でこのチャンスを生かすことができなかったから、今こうして葵ちゃんに泣きついているわけで。間違っても、彼女に強く出られるような立場ではない。

「……それで、どうすれば……」

「あ、言い返す気力もないですか。相当重症ですね……とりあえず先輩はここで待っててください。河風先輩は私がうまいこと連れてきますから、もう手っ取り早くそれで決着(ケリ)つけたらいかがです?」

そう言って彼女が指差したのは、僕の左腕にはまった青い腕輪。僕の大事な、デュエルディスク。

「あ、結局こうなるのね」
「それはまあ、場所も場所ですし。だってここ、デュエルアカデミアなんですよ？困った時こそカードに頼りましょうよ」
真っ当なのかずれてるのか、そもそも本気なのか渾身の冗談なのかすら判断に困るようなことを平然と真顔で口にするあたり、葵ちゃんもしっかりデュエル脳が染みついた人種なんだということをひしひしと痛感する。
もっとも、僕もそのお仲間であることに変わりはない。
「いや、それはもちろん僕も考えたんだけどさあ……」
「はて、何か問題でも？」
煮え切らない態度の僕に、ちょっと不満げに小首を傾げる葵ちゃん。そう、この作戦にはひとつだけ、致命的な欠陥がある。いつになく渋い顔の僕から何かあると察したのか、じっとこちらを見つめてくる彼女の視線からすっと目を逸らす。
「実は……」
「実は？」
表面上はいつも通りクールぶっているけれど、付き合いの長い僕にはわかる。このキラッキラした目、内心では好奇心に満ち溢れているはずだ。
というか、少し考えればこんなこと、彼女ならすぐわかりそうなものなのだが。

「だってあの夢想だよ?なんべん考えてみても、チャンスがその1回だけなら全然勝てる気がしないんだもん!」
「……じゃ、河風先輩呼んできますね」
「待って!」
聞いてやって損した、とばかりにひょいっと立ち上がり、静止の声も聞かずにすたすたと出ていく葵ちゃん。と、目の前で閉められた扉が開き再び彼女の顔が見える。
「わざわざ言う必要もないとは思いますが、もし逃げ出したらどうなるかはわかってますね?今ならまだ痴話喧嘩で済んでますが、今度こそ破局待ったなしですよ?」
それだけ言い捨てて、無情にも再び目の前で扉が閉められた。うう。
それから、きっかり１０分後。もう１５０回目ぐらいになる人の字を手のひらに書いては飲み込む作業を続けていた僕の耳に、控えめなノックの音が聞こえてきた。こんな大人しいノック音、葵ちゃんが出すはずがない。というかそもそも、葵ちゃんがこの部屋に入るのにノックなんてするわけがない。そろそろ、覚悟を決める時が来たのだろう。一体どうやって夢想をここに来させたのかは知らないけれど、それをやってのけてくれた葵ちゃんに心の中で礼を言う。
「お邪魔するね、って。葵ちゃん、私に話って……」
聞きなれた声が聞こえてきて、すぐにおずおずと扉が開く。その向こうに立っていた

のは、当然のごとく彼女。

「あれ、清明？なんでここに……って、葵ちゃんはどこ？ってさ」

ああ、そういうことね。ついさっき言ったばかりの礼の言葉を、心の中で即座に取り消す。僕がいることは明かさず、夢想をこの場に呼びつけて……ったく、なんてややこしい丸投げをしてくれたんだ。どうせ今頃葵ちゃん、『良いことをすると気持ちがいいですね』とかドヤ顔で呟きつつその辺でドローパンでも食べてるんだろう。その光景がパッと目に浮かぶ。

彼女をどうしてくれるかは後で考えるとして、問題は今を僕がどう切り抜けるかだ。あれだけ会いたかった相手なのに、こうして話をすることをずっと待っていたはずなのに、なぜだろう。はっきり言って今、めっちゃ気まずい。

「む、夢想！」

「……何？ってさ」

「あ、あのさ。ペアデュエル大会ってあるじゃない？まだペアが決まってないなら、僕と一緒に出ない？」

言った。ついにこの話を切り出してしまった。人間不思議なもので、いざここまで来てしまうと逆に精神が落ち着いてくる。単に引き返せないところまで来てやけくそになっているだけだという意見もある。僕はどちらかというと、後者の説を支持する派

だ。
「……で?話は終わったかな?ってさ」
「いや、あの、えーと」
数日ぶりに夢想の綺麗な瞳に真っ直ぐ見据えられ、付け焼刃のやけっぱちがまたしても心の中で崩れ落ちていく。
……いや、駄目だ。ここで心折れるだなんて、そんなこと僕自身が許さない。僕のために知恵を絞ってくれた天下井ちゃんや、とんでもなく強引な手段とは言えそれでもここまで夢想を引き連れてきてくれた葵ちゃんも許さないだろう。咳払いして息を吸い、腹に力を込めて全身に気力を漲らせる。なけなしの決意と勇気をかき集めて体内で活性化させ、ここを勝負どころと畳み掛けた。
「夢想、僕とデュエルしてもらうよ!僕が勝ったら、大会では僕とタッグ組んでもらうからね!」
「私が勝てば、どうなるのかな?だって」
「僕が何か1つ、なんでも言うことを聞く……とか?」
「私に聞いてどうするの、って。でもそうだね、２つ」
「……?」
「お願いの数は2つ。それならいいよ、そのデュエル受けてあげる、だって」

スッと指を2本立て、それをこちらに向けて彼女は笑う。数日ぶりに見るその笑顔は、眩しいほどに魅力的で。それと同時にどこか、背筋が寒くなるような妖艶さを含んでいるように見えた。あんな顔されたら、何を言われたとしても断れそうにない。その言葉の意味を脳が理解するより先に、気が付けば僕は頷いていた。

「……わかった」

「こーしょうせーりーつ、ってさ。じゃあ、早速始めようか?」

またしても微笑み、彼女がデュエルディスクを起動する。なんだかいいようにあしらわれている気がしてどこか釈然としないが、話すらまともにできなかった昨日までに比べればこれでも御の字だ。後は僕が結果を出すだけ……だ。うん。大丈夫、きっと行ける。男遊野清明、一世一代の大勝負と洒落込もう。

「「デュエル!」」

「先攻は私みたい。堕ち武者(デス・サムライ)を召喚して、効果発動するよ」

堕ち武者　攻1700

「このカードは召喚成功時に、デッキからアンデット族1体を墓地に送るよ、だって。私が墓地に送るのは……」

「そう好き放題はさせないね!その効果発動に対して手札から、幽鬼(ゆき)うさぎの効果を発動!このカードを捨てて、今効果を発動した堕ち武者を破壊する!」

兜を被った首だけの侍らしき亡霊が、異様に長い舌を垂らして宙に浮かぶ。だがその上空から銀光一閃、切れ味鋭い鎌の一撃が頑丈な兜ごとその生首を唐竹割りにする。その真下にチラリと見えた銀髪の少女がこちらを見て軽く頷き、自分の仕事に満足げに消えていった。

これで、墓地肥やしこそ止められなかったとはいえ召喚権を使って出したモンスターは撃破できた。夢想の場はがら空き、次のターンで一気に攻め込めば……そう思った時、異変が起きた。真っ二つにかち割られて地面に転がる堕ち武者の兜から人魂のようなものがゆらりと浮かび、みるみるうちに大きくなって実体を……朽ちた喪服に身を包む貴婦人の骸骨の姿を取り始めたのだ。

ワイト夫人　守２２００

「ワイト夫人……?」

「好き放題させてくれてありがとう、だってさ。まず堕ち武者の効果で私は、デッキからワイトプリンスを墓地に。さらに墓地に送られたワイトプリンスはその効果で、デッキからワイトとワイト夫人を1体ずつ選んで墓地に送ることができるよ、ってさ」

「それは僕だって知ってるさ。でも、それは今ワイト夫人が場にいることの説明には……」

「言ったでしょう、好き放題させてくれてありがとうって?落ち武者はもう1つの効果

として、表側の状態で相手の効果で破壊された場合に、デッキからレベル４以下のアンデット族を特殊召喚することができるんだよ、ってさ」
「……！幽鬼うさぎは、むしろ悪手だったってこと」
「私にとってはありがとう、だけどね。これでターンエンドだよ、ってさ」
ここで幽鬼うさぎを失ったのは、自業自得とはいえかなり痛いか。他の相手ならいざ知らず、よりにもよってあの夢想……いや、ここで退いてはいられない。
「僕のターン！フィッシュボーグ―アーチャーを守備表示で召喚して、そのままリリース！場の水属性モンスター１体をリリースすることで、手札のシャークラーケンを特殊召喚できる！」
フィッシュボーグ―アーチャー　守３００
シャークラーケン　攻２４００
まだ夢想は、エースモンスターを出していない。壊獣もグレイドルも、今はまだ出すべき時ではない。本来ならあのワイト夫人も放っておきたいぐらいだが、あのカードには自軍のアンデット族の一部に破壊耐性を与える効果を持っていたはずだ。となると、せっかく倒せるのに放置するのもあとあと困る時が来るだろう。
「そのままバトル。シャークラーケン、攻撃！」
シャークラーケン　攻２４００→ワイト夫人　守２２００（破壊）

「さらにカードを1枚セットして、ターンエンド」
今はまだ、これでいい。夢想のターンを確実にいなし、一撃を叩き込む時を狙い定めよう。
夢想　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：シャークラーケン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「私のターン。魔法カード、シャッフル・リボーンを発動、って。私のフィールドにモンスターが存在しない時に私の墓地からモンスターを蘇生できるけどその効果は無効になって、さらにフィールドに残しておくとエンドフェイズに除外されるよ。ワイトプリンスを蘇生して、そのままリリース。龍骨鬼をアドバンス召喚、だって。これでワイトプリンスがまた墓地に送られたから、デッキから2枚目のワイトと3枚目のワイト夫人を墓地に送るね」
それなりの効果とステータスを武器に戦う骨の鬼、夢想の準エース的存在の龍骨鬼。だけど狙いはそこじゃなくて、むしろリリース要因としてワイトプリンスを墓地に送る

ことだろう。そんな目で見ているとはつゆ知らずに少し首をかしげて手札を見つめた後、何かを決意したらしい夢想がさらに動く。
「永続魔法、補給部隊を発動。そのままバトル、龍骨鬼でシャークラーケンに攻撃、だって」
「うっ!?迎え撃て、シャークラーケン!」
召喚したまま居座ってくれればこっちのターンで起点にできたのだが……ま、僕が夢想のデッキをよく知ってるのと同じように、夢想だって僕のデッキはよく知っている。みすみす攻めの起点を放置するような真似、するわけないか。
龍骨鬼　攻２４００（破壊）→シャークラーケン（破壊）
「補給部隊の効果発動、私のフィールドで龍骨鬼が破壊されたからカードを１枚引くよ、ってさ。むー……メイン２に墓地からシャッフル・リボーンのもう１つの効果を発動するってさ。このカードを除外して私のフィールドからカード１枚、補給部隊をデッキに戻してもう１枚ドローするって」
「え、ここで……?」
補給部隊で思うようなカードを引けなかったのか、形の良い眉を小さくひそめてからなんの躊躇いもなく補給部隊をデッキに戻してさらなるドローを狙う夢想。補給部隊は場に維持すれば維持するだけアドバンテージを稼げるカード、いくらこのターンでの

仕事は終えたとはいえデッキに戻すというのは少々違和感がある。それとも、そのリスクを冒してまで引きたいカードがあるのだろうか?とにかく夢想はカードを引き、今度は悪くないドロー内容だったらしい。少し満足げな表情になって次のカードを繰り出した。

「魔法カード、生者の書―禁断の呪術―を発動。このカードの効果で墓地のアンデット族モンスター、ワイト夫人を蘇生して清明の墓地からフィッシュボーグ―アーチャーのカードを除外するね、ってさ」

ワイト夫人　守２２００

再び蘇るワイト夫人とは対照的に、僕の墓地からはじき出されるアーチャーのカード。当然、このカードの自己再生能力も読まれていたか。あまり除外ゾーンを使わないこのデッキでは、除外されることはそのまま出番が終了することに繋がってしまう。えげつない手だ、だからこそ燃えてくる。

「このターンのエンドフェイズに、シャッフル・リボーンのデメリット効果で私は手札を１枚除外するよ、だってさ。これでターンエンド」

「僕のターン!」

いまだ僕も夢想も、直接ダメージこそ受けていない。だけど認めたくはないが、状況は握実に悪くなってきている。勝負の流れは少しまた少しと、夢想の方へたぐり寄せら

れている。

でも、夢想の方もここまでの流れをノーリスクでこなしてきたとはあながち言い切れない。このターンでのダイレクトアタックを封じつつアーチャーを除外するために発動した生者の書なんだろうけど、皮肉にもそれはせっかく自分から消した壊獣の起点を再び場に残してしまうという欠点にもなっている。モンスターを残すことが欠点だなんて、つくづく妙なテーマもあったものだ。攻撃力０のワイト夫人を守備表示で出すあたりグレイドルの寄生攻撃への対策はばっちりできているようだけど、今の僕をそれだけで止めることは不可能だ。

「ワイト夫人をリリースして夢想、そっちのフィールドに怒炎壊獣ドゴランを特殊召喚。さらに相手フィールドに壊獣がいるとき、手札の海亀壊獣ガメシエルは攻撃表示で特殊召喚できる！」

突如夢想の足元から突然炎が噴き上がり、火炎の軌道に乗って２足歩行する巨大な恐竜型の壊獣がフィールドを揺るがして着地した。そして、その直後それに呼応するかのように僕の足元からも水柱が噴き上がり、中心から巨大な甲羅を背負う青い亀のような壊獣がドゴランに真っ向から向かい合う。

怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

「来たね、壊獣。でも清明、貴方のモンスターの方が攻撃力が低いんじゃない?ってさ」
「これでいいのさ。リバース発動、壊獣捕獲大作戦!このカードの効果でドゴランを裏守備に変更して、さらに壊獣カウンターを１つ乗せる!」
壊獣捕獲大作戦（０）→（１）
怒炎怪獣ドゴラン　攻３０００→???（セット）
表になったカードから光の網が発射され、ドゴランの頭上で大きく広がったそれがその全身を包むように覆いかぶさる。ドゴランは攻撃力こそ高いものの守備力はわずか１２００、壊獣限定の使い減りしない月の書ともいえるこの壊獣捕獲大作戦は、色々な意味で相性抜群だ。
「……」
ここで、手札をちらりと見る。僕の手札には一応グレイドル・イーグルのカードもあるにはある。ここでこいつも召喚すれば、一応の追撃のダイレクトアタックはできるけれど……すでに夢想の墓地に存在するワイト、ワイト夫人、ワイトプリンスの合計枚数は6体。１５００ポイントのダメージは魅力的だが、返しのターンでワイトキングが出てきたら、３ターン目にしてその攻撃力は６０００。ワンショットキルを決められて終わりだ。この子は攻めに回すより、地雷としてセットしておこう。
「バトル、ガメシエルでドゴランに攻撃!」

安全策に逃げた、ということもできるだろう。だけど、ここで次のターンに夢想がワイトキングを出してこないことに賭けるというのはいくらなんでも分が悪い。勇気と無謀を一緒にするな、とはよくいったものだ。

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００↓???（怒炎怪獣ドゴラン）　守１２００（破壊）

「さらにモンスターを1体セットして、これでターンエンド」

夢想　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ４０００　手札：０

モンスター：海亀壊獣ガメシエル（攻）

???（セット）

魔法・罠：壊獣捕獲大作戦（１）

「私のターン、ってさ。手札からワイトメアの効果を発動。このカードを捨てて、除外されたワイトキング1体を特殊召喚することができるってさ」

「ワイトキング……！」

その瞬間になって、ようやく理解した。なぜ夢想は先ほどのターン、まだ使いみちのある補給部隊を捨ててまでシャッフル・リボーンの効果を使ったのか。最初から、彼女

の目当てはドロー効果なんかじゃなかった。彼女の目的はむしろその後半のデメリット効果、そのターンのエンドフェイズに手札を1枚除外すること。恐らくワイトメア、シャッフル・リボーン、ワイトキングの3枚は、かなり初期からその手札に来ていたのだろう。ワイトプリンスの効果を使い高速で墓地を肥やし、ある程度の枚数が溜まったところでデッキを回転させながらワイトキングの特殊召喚を決めるコンボを決める。このデュエルの始めからずっと、僕は彼女の手の上で踊っていたにすぎなかったんだ。

そして今、その必殺のコンボが決まろうとしている。ガメシエルの攻撃力は最上級モンスターにしてはやや低めではあるがそれでも２２００、だけど今特殊召喚されたワイトキングは墓地の仲間の数だけ攻撃力を上げ、その総数はこれまでに6体。そしてワイトメアが捨てられたことで、その数は7体。

ギリギリ僕のライフを1撃で0にする、うんざりするほどに美しい計算されつくした流れ。

「ワンショット、キル……!」

ワイトキング　攻７０００

「さあ、どうするのかな?ってさ」

「決まってる!もう1度トラップ発動、壊獣捕獲大作戦!このカードの効果でガメシエルを裏守備に変更して、さらに2つ目の壊獣カウンターを乗せる!」

再び光の網が発射され、今度はガメシエルの頭上で大きく広がる。これで、このターンは凌げる……！

「甘いよ清明、ってさ。速攻魔法、ツインツイスター……手札1枚をコストに場の魔法、罠カードを2枚まで破壊できる。1枚しか破壊するカードがないから勿体ないけど、壊獣捕獲大作戦の発動にチェーンして破壊させてもらうからね、だってさ」

光の網が、突風に吹き流されて砕け散る。これでガメシエルは攻撃表示のまま棒立ち、次の攻撃には耐えられない……けど！

「壊獣捕獲大作戦の、さらなる効果を発動！相手によって破壊された時、カードを2枚ドローする！」

やっぱり夢想は強い。こっちの取る戦略1つ1つの、さらに上から攻められているような感覚になる。こんな早い段階なのに、もうこれが生き残るための最後のチャンスだ。だが僕がそうやって2枚のカードを引く一方、目の前に立ちふさがるワイトキングの威圧感がさらに高まる。そうか夢想、あのツインツイスターの手札コストでさらに別のワイトを捨てたのか。だけど見方を変えれば、これで夢想の手札は0。このワイトキングの攻撃を耐えきりさえできれば、あるいはまだ勝機もある。

ワイトキング　攻7000→8000

「くっ……！」

「バトル。ワイトキングでガメシエルに攻撃するね、ってさ」
ワイトキングが1歩、また1歩と死神さながらに歩み寄る。いや、あながち比喩でもないかもしれない。その細身の体に秘められた力は、初期ライフの2倍……その攻撃はすでに、かすっただけで即死しかねないレベルにまで達している。
でもまだ、僕には戦う術が残されている。この土壇場で、生き残る力がある。
「手札から水精鱗(マーメイル)―ネレイアビスの効果を発動!僕のフィールドに存在する水属性モンスター、ガメシエルを対象にこのカードを捨てて、さらに手札から青氷の白夜龍を破壊!これによりフィールドのガメシエルの攻守は、破壊したもう1体の分だけアップする!」
ガメシエルの全身に青いオーラが走り、通常の2倍の以上の力を手に入れた大亀がワイトキングの無造作に振るわれた拳をその甲羅で受け止めようと手足をひっこめる。
だが、その抵抗も今の化け物じみた力の骸骨の王には敵わない。防御などお構いなしに放たれる一撃は衝撃波が発生するほどの勢いをもって爆発音と共に叩き付けられ、数秒の間の後ひび割れた甲羅と共に壊獣は地に倒れた。
ワイトキング　攻８０００→海亀壊獣ガメシエル　攻２２００→５２００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→１２００
「ぐ……!」

「へぇ、耐えきったんだ。偉いね、だって」
夢想の口調や表情からは、その言葉が賞賛なのか皮肉なのかを判別することはできなった。どちらでも構わない、手札も墓地リソースも使い切った彼女が何と言おうとも、デュエルを終えることができなかった以上このままターンを終えることしかできやしないのだから。
「僕のターン……ドローっ！」
ここでこのカードか……悪くはない、だけどさほど良くもない。とはいえ攻め手が枯渇している僕にとって、このカードを使う以外に方法はない。
「メインフェイズ1の開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動。僕の墓地から種族の異なるモンスター3体をデッキに戻して、カードを2枚ドローする。水族のガメシエル、恐竜族のドゴラン、魚族のシャークラーケンを戻して……」
貪欲で無欲な壺。ドローソースとして考えればそこそこ有用だが、反面その使用には発動ターンのバトルフェイズ封印という致命的なデメリットがある。このテンポの遅れが後々どこまで響いてくるか、そしてこの2枚のドローでどこまで体勢を立て直せるかだ。
「魔法カード、テラ・フォーミングを発動。デッキからフィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントをサーチしてそのまま発動、さらにツーヘッド・シャークを守備表

示で召喚。これでターンエンド」

強力なフィールドリセットカード、妨げられた壊獣の眠りぐらいは引きたかったが……それはただの無い物ねだりでしかない。このツーヘッド・シャークと伏せモンスター、地雷として出しておいたはいいがさすがに読みやすかったのか全然殴られないグレイドル・イーグルの力だけで、次のターンを乗り切るしかない。

ツーヘッド・シャーク　守１６００

夢想　ＬＰ４０００　手札：０

モンスター：ワイトキング（攻）

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ１２００　手札：０

モンスター：ツーヘッド・シャーク（守）

???（セット）

魔法・罠：なし

場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）

「私のターン。魔法カード、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動、だって」

なけなしのカードをつぎ込んでの防御に手いっぱいな僕を嘲笑うかのように。まるで図ったかのようなタイミングで夢想がドローしたのは、ドラゴン族専用の融合カー

ド。となると、次に出てくるモンスターはもう決まっている。
「私の墓地からアンデット族の龍骨鬼と堕ち武者の２体を除外することで素材にして、融合召喚。冥府の扉を湯葉りし者よ、其には死すらも生温い……冥界龍　ドラゴネクロ！」
「フィールドから墓地にカードが送られたことで、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントにその枚数ぶん壊獣カウンターが乗せられる……！」
燦然と輝く灯台の光に誘われたかのように、数多の霊魂を引き連れた冥界の龍が現世へと召喚される。夢想にとってはワイトキングに並ぶもうひとつのエースモンスター、ドラゴネクロだ。
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（１）
冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００
「あのモンスターは……うん、まずドラゴネクロでセットモンスターに攻撃、だってさ」
ドラゴネクロがその首を伸ばし、伏せられたイーグルに攻撃する。これで戦闘破壊されたイーグルの効果を発動して、とそこまで考えてようやく気付いた。ドラゴネクロの特殊能力は……まずい！
だが今頃気づいても遅いとばかり、黄色の鳥は無残にもすでにその牙に囚われていた。翼や嘴を使っての抵抗が無駄と知るや体を溶かしてスライム状にすることでの脱

出を図ろうとするも、それよりも早く冥界の牙がその体の奥へと食い込んでいく。やがて２、３度その体が痙攣し、動かなくなったところで地面に吐き出された。そしてドラゴネクロの周りを浮遊する霊魂の１つが軌道を変え巨大化し、漆黒の鳥の姿となってその場にホバリングする。

冥界龍ドラゴネクロ　攻３０００→???（グレイドル・イーグル）守５００

ダークソウルトークン　攻１５００　☆３

「ドラゴネクロは自らに相対する相手モンスターを戦闘破壊せず、その魂だけを闇へと送るモンスター。戦闘相手の攻撃力は０になり、そのレベルと攻撃力をコピーしたダークソウル・トークンが私のフィールドに特殊召喚される……って、今更説明しなくても知ってるよね?なんだって」

「……最初から、このモンスターがグレイドルだって知ってて放置してたわけね。自爆特攻ができないぐらい僕のライフが削られるのを待って、そのうえでドラゴネクロを呼び出すなんて、丁寧過ぎて涙が出るよ」

「貴方は私のことを信用してないのかもしれないけど、私は清明の強さを知ってるからね、って。最後まで手は抜かないよ、ってさ」

「……!」

違う、信用してないだなんて、そんなことあるはずがない。反射的に声を上げようと

したものの、口を開くより前に夢想が首を横に振って止める。
「言葉じゃないよ。貴方もデュエリストなら、私に伝えたいことは１００万の言葉より１枚のカードで語って、だって。続けるよ、清明。ダークソウル・トークンでグレイドル・イーグルに攻撃！」
ダークソウル・トークン　攻１５００↓グレイドル・イーグル　守５００（破壊）
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）↓（２）
抜け殻と化したイーグルの体に、闇に落ちたその魂が上空から襲い掛かる。当然なすすべもなく破壊されるが、グレイドルの仕事は破壊されること。ドラゴネクロにより魂を奪われても、その寄生効果を使うことは自由なままだ。
……とはいうものの、僕に寄生効果の選択肢はないに等しい。なにせ夢想の場には、まだ攻撃宣言をしていないワイトキングが残っている。もしドラゴネクロかダークソウル・トークンをここで選んだ場合、あの攻撃力の前に攻撃表示でモンスターを立たせるという手の込んだ自殺行為にしかならない。言い換えるとこのターンを僕が生き抜くためには、イーグルの効果対象をワイトキングを選ぶか初めから発動しないでツーヘッドを壁にするかの２択しかない。
「グレイドル・イーグルが戦闘で破壊されたことで、ワイトキングの装備カードとなってそのコントロールを得る、けど……」

「ワイトキングの攻撃力はプレイヤーの墓地依存、きちんと特化したわけでもないデッキが持って行っても怖くもなんともないよ、ってさ。ターンエンドするよ」

そう、それだ。ワイトキングの攻撃力は、その時のプレイヤーの墓地の状況により常に変動する。ワイトを墓地に送りこむことに特化された夢想のデッキとは違い、このデッキにそんなギミックはない、というよりそもそも僕のデッキにワイトは1枚たりとも入ってない。さっきまであれだけ猛威を振るったワイトキングも、こうなるとただの骨でしかなくなってしまう。使い手としてそれがわかっているからこそ、夢想もワイトキングが最後までフリーでいられるように攻撃順を調整していたのだろう。

ああ全く、本当につくづく大したものだ。僕がどれだけ力を振り絞っても、まるで勝負になる気がしない。辛うじて食らいつくので精一杯だ。でもだからって、ここで負けるわけにはいかない。食らいついていけるということは、言い換えればまだ負けてないということだ。

ワイトキング　攻８０００→０

「僕のターン、ドロー！」

そして負けてないということは、まだ反撃の機会を掴むチャンスがあるということに等しい。そしてそういった一発逆転のドロー勝負は、僕とこのデッキの得意とするところだ。

「ワイトキングとツーヘッド・シャークをリリースして、アドバンス召喚！いくよ、雷撃壊獣サンダー・ザ・キング！さらに装備状態のグレイドル・イーグル含むカード３枚が墓地に送られたから、ウォーターフロントのカウンターも一気に最大値まで乗っけさせてもらうよ」

ワイトキングは攻撃力０になってしまったが、モンスターの頭数が必要なアドバンス召喚にはそんなこと関係ない。２体のモンスターが僕のフィールドから消え、代わりに全身から電気を放つ３つ首の巨大竜が現れた。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）↓（５）

「壊獣をアドバンス召喚することで自分フィールドにだけ最上級モンスターを召喚して、なおかつ壊獣カウンターも限界まで溜める……そんな戦法もそういえばあったね。だけど、私に１度見た戦法が通用するかな？ってさ」

「……」

夢想の言葉は正しい。この戦法はまさについ先日行われたノース校の将、鎧田戦で僕が一発逆転の奇策として行ったものと同じだ。だが奇策が奇策として通用するのは最初の１度のみ、２度目以降はただの戦術の１つでしかない。ましてや夢想は、あの試合を全て見ている。

でも、不利な賭けなのは承知の上だ。この程度のリスクでぐちぐち言ってたら、それこそ何もできなくなる。

「ウォーターフロントは1ターンに1度、壊獣カウンターが３つ以上乗っているときにデッキの壊獣1体をサーチすることができる。２体目のガメシエルを手札に加えて、さらにサンダー・ザ・キングの固有効果発動、帯電!」

巨大竜の全身にプラズマが走り、激しい火花がその全身を光に染める。体から漏れ出す電撃はフィールド全体を覆い尽くし、その影響は夢想の場のカードにも及び始めた。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）→（２）

「サンダー・ザ・キングが壊獣カウンターを３つ消費するとき、その真の力が解き放たれる。相手プレイヤーは今からエンドフェイズまであらゆるカード効果を発動することができず、さらにサンダー・ザ・キングの攻撃は３体の敵モンスターを1度に葬り去る!さらにおまけだ、これも持って行ってもらおうか。ドラゴネクロをリリースして、ガメシエルをそっちに特殊召喚!」

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）→（３）

「へえ……!」

「バトル!２回連続攻撃だ、サンダー・ザ・キング!」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００↓海亀壊獣ガメシエル　攻２２００（破壊）
夢想　ＬＰ４０００↓２９００
雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００↓ダークソウル・トークン　攻１５００（破壊）
夢想　ＬＰ２９００↓１１００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）↓（４）
「ど、どうだ……！ターンエンド！」
ギリギリとはいえこのターンだけでライフを逆転し、フィールドの状況も一気にひっくり返すことができた。だがなぜだろう、まるで優位に立ったという気がしない。いつも捌いてる、まな板の上の名前もよくわかんないその辺で釣ってきた魚の光景がちらちらと脳裏に浮かぶ。あと１撃、１撃だけこちらの攻撃を当てれば僕の勝ちなんだ。今の連続攻撃で壊獣カウンターもまた余裕ができたんだ、次のターンさえ乗り切ることができれば……！
夢想　ＬＰ１１００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：なし

清明　ＬＰ１２００　手札：０
モンスター：雷撃壊獣サンダー・ザ・キング（攻）
魔法・罠：なし
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）
「私のターン。清明、楽しいデュエルだね、ってさ。正直、もっと早く終わるデュエルかと思ってたけど、だって」
「ふふん。負けるわけにはいかないもんね」
「でも、楽しい時間はそろそろおしまい。惜しかったね清明、ワイトキングを召喚、ってさ」
言葉も出ない僕の前で床が割れ、ぱっくり開いた裂け目からゆっくりと骨の腕が突き出される。緩慢な動きで這い上がってきたのは、ついさっき墓地に送ってやったはずの骨の王。
ワイトキング　攻９０００
「くっ……そう……！」
「バトル。ワイトキングで攻撃、なんだって」
ワイトキング　攻９０００→雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００（破壊）
清明　ＬＰ１２００→０

「また、負けた……！」

その場に座り込み、床に拳を叩きつける。八つ当たりなんてしても何も変わらないのはわかっているけれど、この悔しさと虚しさをどこかにぶつけずにはいられなかった。またしても、僕の実力は夢想に届かなかった。

「じゃあ清明、約束ね、ってさ」

「約束ねでしょ？ああうん、わかってるよ。この話はこれでおしまい、きっぱり諦めます。これでいい……よね？」

「……馬鹿。そっちじゃないよ、だって。言うこと、聞いてくれるんでしょ？」

「ああ……」

素で忘れてたけど、そういえばそんな約束もした気がする。それも2つも。完全に忘れていたことがお気に召さなかったのか、ちょっとむくれながらも夢想が指を1本立てる。まあ約束したうえで負けたのはこっちなんだ、何を言われても潔く受け止めよう。あ、でもこれ以上私に関わらないで、とか言われたらどうしよう。登校拒否にでもなろうかな。

「じゃあ、まず1つ目。これからは私に隠し事はなしでね、ってさ」

「はい……」

当然の要求だろう。大人しく頷く僕に、2本目の指を伸ばす。

「それと、２つ目は……」

「それでは本日お集まりいただいた3年生のみなさん、これより本日のメインプログラム！3年生と下級生対抗による、ペアデュエル対決を行うザウルス！」

時は流れ、ペアデュエル大会当日。司会の剣山が絶好調でマイクを握るのを遠くに聞きながら、僕はといえば厨房で、本業に精を出していた。

「葵ちゃん、これ１０人前サイズの酢豚とグラタン持ってって！それが終わったらこのおでんも仕込み終わるからそっちもよろしく」

「かしこまりました。お任せください、先輩。しかしひっどいメニューですね、せめて地方ぐらい統一したらいかがです？」

「んなこと言ったって、どうせバイキングだしねえ。嫌なら食べなくていいんだよ？」

「めっそうもない。では、配膳行ってきます」

……そう、パーティーの真っ最中にもかかわらずなぜか厨房に立っているのだ。当初のパティシエという話はどこへやら、いつの間にか総料理長にまで格上げされていた。幸いトメさんたちがその半分を担当してくれているが、それでも残りに関しては僕がリーダーだ。おかげで仕事量は飛躍的に増えてしまい、その結果として一応僕も卒業生

であるにもかかわらずなぜか祝われる側でなく祝う側に回るという珍事態が起きてしまっている。本当に、どうしてこうなった。せめてもの抵抗かつ先日の償いとして、助っ人という名の生贄に葵ちゃんを引きこめたのが唯一の救いだろうか。

ま、そうは言っても別に本気で嫌だというわけではない。デュエルできないのはちょっと残念だけど、こうして厨房に立って予算のことを気にせず思いっきり作りたいものを作れるというのはなかなか得難い経験だ。それに、この仕事にはもう1つ役得なことがある。両手に大皿を載せているにもかかわらずまったくバランスを崩さず出て行った葵ちゃんの背中を見送って、隣で卵焼きを器用に丸めるエプロン姿の彼女にも声をかけた。

「そっちはどう、夢想？」

「上手くできたかな、だってさ。清明、ちょっと味見してくれる？」

そう、夢想だ。彼女の持ち出した条件の2つ目は、自分にもこのパーティーを手伝わせること。意図は読めなかったけれど、厨房に立っている間ずっと彼女のそばにいられて、しかも怒っていたのも全部チャラにしてくれるというならば安いものだ。大人数の料理は普段やり慣れていないと料理慣れした人でも調子が狂うことが多いため、なるべく調理が簡単なものを割り振っておく必要があるのがちょっとばかし頭を使うところではあるが。ちなみに葵ちゃんは今回、そのくの一ならではの体力とバランス感覚を生

かしての下準備と給仕に集中してもらっているため厨房はお休みだ。
「どれどれ、じゃあ……」
「ううん、ほら。あーん、だって」
「え!?」
菜箸で卵焼きをつまみ、僕の口元までそっと持ち上げて笑う夢想。え、ちょっとまって、今なんて言ったの、え!?
混乱している間に卵焼きはずんずん進み、もはや僕の唇にぶつかりそうなほど近くまで寄ってきていた。混乱してわけのわからないまま、言われるがままに口を開く。
「ほらほらどうぞ、ってさ。あーん」
「い、いただきます……」
今この場に鏡があれば、さぞかし耳まで真っ赤になった姿が見えたことだろう。当然、そんな状況で味なんてわかるわけもない。夢想は夢想で最初から自分が何をやったのかは無自覚なのか、そんなこととはつゆ知らずに感想を求めて期待たっぷりの目で見つめてくる。
そんな膠着状態を打ち壊したのは、折よく帰ってきた葵ちゃんの冷めた一言だった。
「あの、先輩方には大変申し訳ありませんが、いちゃつくのはこれ終わってからにしていただけます?」

「え、あ、そうだよね、うん！じゃあ葵ちゃん、そろそろ終盤だろうし冷蔵庫の中からホールケーキ持ってきて！ほら夢想も、それだけ出しちゃったら葵ちゃんのこと手伝ったげて！」
「むー。せっかくいい雰囲気だったのに……って」
「いや否定してくださいよ。砂糖吐きますよ？では、私もしばらくペアデュエル観戦してきますので」
「そこで置いてかないで!?」
　ああもう、とてもじゃないけど今は夢想と目が合わせられない。しかも観戦してきますってなんだ、んな余裕があるならわざわざ声かけるんじゃない。
　外の騒ぎに耳を傾けると、どうやら十代と明日香のペアが注目を集めているらしい。よっぽどのヘマでもしない限り、優勝はあの２人だろう。どうせ振られたんだろうし、後で万丈目慰めに行ってやろうかな。若干の現実逃避も兼ねてそんなことをぼんやりと考えながら、胸の奥である１つの思いを感じていた。
　……こんな日が、ずっと続けばいいのにな。

ターン１１４　鉄砲水と表裏の皇帝

「はー……葵ちゃーん」
「どうかしましたか、先輩？」
　のどかな昼下がり、いつもの放課後。珍しく誰も来ない店の中で、退屈を持て余し隣の葵ちゃんに話しかける。
「いや、暇だねって話」
「……どうかしてたのは頭でしたか」
「あら辛辣。つれないねえ、コミュニケーションは大事だよ？」
「今度はパワハラですか。始末に負えませんね」
　なんだかんだ言いつつ会話自体には付き合ってくれるあたり、葵ちゃんも暇してるのだろう。彼女の性格から考えて、本気で相手したくない時は返事すらしてこないはずだ。
　とその時、廊下から何やら人の動く気配がした。葵ちゃんも同時に気づいたらしく、すぐに全身をシャキッとさせて１瞬で仕事モードに移行する。
「すいません、ちょっといいっスか？」

「あれ、翔?·はいどうぞ、いらっしゃいませー」
ノックと共に聞きなれた声がして、すぐに扉が開く。そこにいた彼の……いや、彼らの様子を見て、なぜこんなに時間がかかったのかが理解できた。そこにいたのは、翔だけではなかった。彼の押す車椅子は空っぽで、その前には彼の兄にして漆黒のコートに身を包む僕らの大先輩。かつてカイザーの名で知られ今ではヘルカイザーの通り名を持つ男、丸藤亮が立っていた。
「カイザー……」
「おじゃましてすいません。でもどうしても兄さんが、清明君に会うって聞かなくて。リハビリもかねてってことで鮎川先生の許可も貰ったから、僕も付いてきたんだよ」
リハビリ、という言葉が重くのしかかる。覇王の異世界で僕と別れた後、彼はユベルと戦っていたのは僕も知っている。大激戦の末に力尽きたものの、十代がユベルと一体化したのちどうにか僕らと共に帰還した、とも聞いていた。ただこれまでの無茶なデュエルがたたり絶対安静の面会不可という話だったから、あの時に別れて以来僕らが顔を会わすのはこれが初となる。
久しぶりに見るカイザーは少々やつれてはいたが、体の状態と反比例するかの如くその目の狂気的ともいえるギラギラとした輝きは相変わらず、どころかあの時よりさらに深みが増しているようにも見えた。全てを射るようなその眼差しを真っ向から受けて

立ちすくんでしまった僕に、落ち着いたいつもの口調で話しかけてきた。
「久しぶりだな、清明」
「ああうん、そっちこそ。元気？……っていうのもおかしいけど」
　そんな間抜けな返事をしながら、頭の中では彼が体調を顧みずこんなところまでわざわざやって来たわけを考えていた。なんて、そんなもの思い当たる節は１つしかないのだが。
　吹雪さんも以前チラリと似たようなことを言っていたが、それより付き合いがはるかに短い僕でもよくわかる。この男の本質はどれだけの時が経っても、僕が彼と初めて出会った３年前からまるで変わらない。目の前のことに真っ直ぐで、ストイックで。それこそが皇帝（カイザー）の皇帝たる証、自分の身体よりもその精神に重きを置く、誇り高く生真面目な彼の生き様。
「約束」
　そう呟くと、カイザーの表情にかすかな変化があった。やっぱり、思った通りだ。
「約束……守りに来てくれたんだ」
「当たり前だ。それに、仮に俺にその気がなかったとしても、このデッキがそんなことは許さないだろう。俺にもっと戦えと、もっと戦わせろと、そう囁いてくるこのカードがな」

そう言って、こんな時でも腕に付けているデュエルディスクに視線を落とすカイザー。カードが囁く、ねえ。正直なところカイザーのデッキから精霊の気配は感じられない、けど……サイバー・ダークはなにせあのヘルカイザーとこれまでを戦い抜いてきた曰くつきのカードだ、精霊とは別に何かの力が宿っていてもおかしくはない。それがロクなものかどうかはともかくとして。

「約束？お兄さん、何の話？」

完全に置いてけぼりになっていた翔が、そこで口を挟む。あの時翔はいなかったから、この話を知らなくても仕方がないだろう。聞かないでいてくれるとこちらとしても何かと楽だったが、そういう訳にもいくまい。

「あの覇王の異世界で、約束したんだ。またいつか、サイバー・ダークと手合せ願いたいって」

「そんな……！無茶だ、お兄さんはデュエルなんかできる体調じゃないのに！」

「まず、これだけ遅くなった非礼を詫びさせてもらおう。すまなかった」

翔のいたって当然の非難もどこ吹く風、平然としたまま軽く頭を下げるカイザー。一見健康体そのものに見える、だけどよく注意して見ればすぐわかる。本来彼の体は、今こうしてここに立っていられることさえ奇跡みたいなものだ。当人は精一杯隠そうとはしているが、いくらカイザーの精神力が並はずれていてもそのボロボロになった体は

嘘をつけない。ちょっと小突いてしまえばすぐ倒れそうな危うさが、ギリギリのバランスで成り立っている。こんな状態でデュエルすれば、たとえダメージの実体化がない普通のデュエルであっても凄まじい負担がかかってしまうことは想像に難くない。

「お兄さん、もうやめよう！約束でもなんでも、今は駄目だよ！」

「心配性だな、翔。だが、このデュエルを退くつもりはない。約束はもちろんだが、俺にはこのデッキに借りがある。ならば……！」

口調こそ静かだが、その言葉には強い意志の力が隅々まで込められているのがわかる。普通に考えれば翔の言ってることの方が正しいんだろうけど……だけどなぜかはわからないが、目の前のカイザーはもうそんな次元を越えたところに居るような、そんな印象を受けた。もう肉体がどうこうといったくくりに捕らわれず、もっと高次の存在となっているような。だからこそこんな、自分の身体を顧みないような行動もできるのだろうか。

それに、これはあまり大きな声では言えないけれど。この静かな闘志にあてられたのか、僕自身も心の底からかすかに高揚感が漲ってくるのを感じている。単純に、この強者と戦いたい。その闘争心がただのエゴでしかないことは否定できないけれど、それが僕の正直な気持ちだ。だから僕は、そっちからも何か言ってやってくれ、という翔の視線に気づかないふりをした。悪く思わないでほしい、なんて、言えた義理ではないけど

も。彼のためだけではなく僕自身のためにも、カイザーの願いを叶えたい。あの時の約束を果たしてもう1度、真っ向からカイザーと戦いたい。
「ならば翔、お前も来い」
「え……？」
「ヨハンに憑依したユベルとの戦いで、俺はお前に何を教えてやれた？お前にはまだ、これから変わる余地が残されているだろう。俺のデュエルをもう1度見ることで、お前も何かを掴むことができるかもしれない」
「そんな、僕は……」
「お前はこれまで、傍観者だったのだろう。今度は、お前が変わっていく番だ」
傍観者、という単語に何か思うところがあったのか、急にさっきまでの勢いを失い暗い表情でうつむく翔。
ま、なんか色々あったんだろう。愉快な話でもなさそうだし、別に深くは聞かないさ。それより大事なことは、なんだか場の空気が今の一言でガラリと変わったことだ。
「……あんまり無茶するようなら、絶対に途中でも止めてもらうからね？」
「ああ、好きにすればいい」
あ、決まった。そして、カイザーが再び僕に向き直る。
「今すぐ、などと言うつもりはない。今日の深夜0時、灯台の下。それでいいか？」

「もちろん。正真正銘、今の僕にできる全力で挑みます。だからよろしくお願いします、カイザー」

そして、翔に付き添われたままカイザーは帰っていった。早速デッキ調整をしようか、とボタンを押して腕輪型デュエルディスクを展開させたところで再び扉が開き、いつの間にかいなくなっていた葵ちゃんの顔がひょっこりと覗いた。

「お話し終わりましたか、先輩？」

「葵ちゃん、悪いけど今日はもう店じまいね。もう暇なんて言ってられないね、これからすっごく面白くなりそうなんだ！」

言いながら、堪えきれない笑みがこぼれる。そんな僕の様子を怪訝そうに見つめ返したのち、彼女は肩をすくめて帰り支度を始めた。ほんと察しのいい後輩で助かるよ、葵ちゃん。

それからのことは、ほとんど覚えていない。ただレッド寮に戻り、新しく入れたいカードとこれまでのデッキの中身を1枚1枚並べて何度も確認して擦り合わせた作業だけは覚えている。というより、そればかりやっていたらいつの間にか夜になっていた、というのが正しい。だがその甲斐もあって、今の僕に用意できる最高のデッキが組み上がった……はずだ。

「よし。行くよ、皆」

自らを鼓舞するようにそう声をかけ、デッキをそっと撫でて外に飛び出る。だいぶ余裕を持って寮を出たつもりだったが、灯台に着いた時には既に2人とも先に来ていた。だがカイザーは当然として、翔も何も言わない。ただ無言で、互いがそこにいることを認め合うのみだ。お互い覚悟はとうに決まっているのだから、これ以上の言葉は蛇足でしかない、ということだろう。そういうことなら、話は早い。互いに向かい合い、それぞれのデュエルディスクを構えたのは同時だった。

「「デュエル！」」

「じゃあカイザー、僕が先攻と洒落込ませてもらうよ！フィールド魔法ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント、永続魔法グレイドル・インパクトを発動！」

本物の灯台にかぶさるようにソリッドビジョンの灯台が構築され、そこから放たれる光に照らされながらＵＦＯが煙を吐きつつ落下する。なんともカオスな風景ではあるが、この2枚がこの最序盤から同時に手札に揃った意義は大きい。維持すれば維持するだけアドバンテージを獲得できるこの2枚は、僕の通常より枚数の多いこのデッキを回すうえで重要なエンジンとなってくれる。

「モンスターをセット。このエンドフェイズにインパクトの効果を発動、ドール・コール！デッキからグレイドルカード1枚、グレイドル・コブラをサーチしてターンエンド」

「俺のターン。サイバー・ドラゴン・コアを守備表示で召喚し、効果を発動。デッキから

サイバー、またはサイバネティックと名のつく魔法・罠カード1枚を手札に加える。俺がサーチするのはフィールド魔法、サイバーダーク・インフェルノだ。そして、このインフェルノをそのまま発動！」

サイバー・ドラゴン・コア　守１５００

……地獄（インフェルノ）。その物騒な名に相応しく、灯台の街がみるみるうちに暗い炎に包まれる。なるほど、ここがヘルカイザーの地獄（ヘル）ってわけか。

「そして魔法カード、融合を発動。手札のサイバー・ドラゴン、そして場のサイバー・ドラゴン・コアを素材に、融合召喚」

そして発動されたのはサイバー・ダークの関連カード……ではなく、ノーマルの融合。まずは表サイバーで牽制、ということだろう。だがその牽制は、それ1枚でも既に十分フィニッシャーになりうるほどのポテンシャルを秘めたカードだ。コアはサイバー・ドラゴンとしても扱うカード、となるとあの素材指定で召喚されるのは恐らく、２８００の攻撃力を持ちながら2回攻撃の権利を持つあのカードだろう。

だがその予想は、即座に打ち砕かれた。サイバー・ドラゴン2体が空中で混じり合い生まれた機械龍……それは断じて僕が心に思い描いたあのカードではない。黒いキューブ状の物体がいくつも組み合わさってできたいびつな胴体から、てんでバラバラにそれぞれ細部が異なる機械龍たちの3つの首と1本の尾が生えている。そのどれも

が不規則に動き、うねり、身をくねらせる様は、まるで歪んだ胴体からそれぞれの龍が自らの体を切り離し、逃げ出そうとして暴れているようにも見えた。
「出でよ、キメラテック・ランページ・ドラゴン！」
「サイバー・ツインじゃない……？」
キメラテック・ランページ・ドラゴン　攻２１００
こんなモンスター、卒業デュエルの時も見た覚えがない。その見た目もさることながら、サイバー・ドラゴンを素材としているにもかかわらずその攻撃力が素の状態から変わっていない点もまた余計にその不気味さを引き立てている。
「キメラテック・ランページ・ドラゴンは融合召喚に成功した時、その素材の数だけ場の魔法・罠を破壊できる。俺が選択するのは清明、お前の場の２枚だ！」
黒いキューブが鈍く発光すると、３つの首のうち２つがまるで電流でも走ったかのように自らの身体への抵抗を止めた。そのまま操られているようなぎこちない動きでこちらを向き、口を開いてそれぞれが２枚のカードめがけて熱線を吐く。そのうち１本はすぐにＵＦＯを炎の中に消し去ったが、もう１つの目標物……この地獄においてなおもその中心で屹立する灯台は、しぶとかった。炎に舐められ、焦げ付き、その一部を溶かしながらも、機械龍の攻撃を耐え抜き、前と変わらぬ光を閃かせて見せたのだ。
「グレイドル・インパクトはともかく……カイザー、さっき使った融合の魔法カードは、

１度フィールドで発動されてから墓地に送られた。つまり、フィールドから墓地にカードが行った段階で僕のウォーターフロントには怪獣カウンターがコアの分も合わせて２つ乗っていたわけさ。そしてこのカードは、自身の壊獣カウンター１つをコストに破壊から身を守ることができる。さらに破壊されたインパクトも墓地に行ったから、カウンターをもう１回追加させてもらうよ」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（２）→（１）→（２）

「破壊には失敗したか……ならば、キメラテック・ランページのさらなる効果を発動！デッキから光属性の機械族モンスターを２体まで墓地に送ることで、その枚数だけこのモンスターは攻撃回数を増やす。サイバー・ドラゴン・ツヴァイ、そして超電磁タートルの２枚を墓地に送り、バトル！まずは第一打！」

再び、黒いキューブが不気味に発光した。と、今度は先ほど攻撃をしてこなかった最後の首が同じく抵抗を止め、こちらに向けられる。伏せモンスターを破壊し、さらに２回の直接攻撃が成功すればワンターンキルが成立する……だけど、そんな虫のいい話を通すわけにはいかない。僕だって、それ相応の覚悟を持ってこの場に臨んでいるんだ。

キメラテック・ランページ・ドラゴン　攻２１００→???　守１５００（破壊）

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）→（３）

「この瞬間、戦闘で破壊されたグレイドル・アリゲーターの効果発動！相手モンスター１

体に寄生し、機械だろうがなんだろうがそのコントロールを掌握する！当然対象は、キメラテック・ランページ！」

熱線を受けて弾け飛んだ銀色の飛沫が、空中で向きを変えその攻撃の発生源へと一斉に飛びかかる。当然、何か回避策は持っているだろうとあまり期待はしていなかったが、意外なことに見ているこちらが拍子抜けするほどあっさりと結合魔龍はこちらの支配下に置かれた。見ていた翔にとってもその展開は予想外だったらしく、小さな悲鳴が漏れる。

「お兄さん！」

「あ、あれ？」

『……いや、まだ仕掛けてくるぞ』

チャクチャルさんの警戒を促す低い声が、脳内に響く。その言葉を待っていたかのように、目の前のカイザーも次なる一手に向けて動き出した。

「相手フィールド上にのみモンスターが存在するとき、墓地のサイバー・ドラゴン・コアのさらなる効果が発動できる。このカードを除外し、デッキからサイバー・ドラゴンを特殊召喚する」

サイバー・ドラゴン　攻２１００

「なるほど、リカバリーは万全、ってわけね」

軽口を叩きながらも、内心では言いようのない不安感に包まれていた。サイバー・ドラゴンとランページの攻撃力は同じ、相打ち狙いを棒立ちでエンド……なんて、カイザーらしくもない。まだ何か、僕の見落としている戦術があるのだろうか。

その時、ふとある情景が脳裏に浮かんだ。あれは、卒業デュエルの時。どうして忘れていたんだろう、サイバー流にはまだ、あのカードがあることを。しかし思い出せたときにはすでに遅く、カイザーのサイバー・ドラゴンと僕の場のランページが空中で混ざり合いさらなる機械龍へと変化を遂げていくところだった。

「あのカードは……！」

「場に存在するサイバー・ドラゴン1体及び、それ以外の機械族モンスター全てを墓地に送る。融合召喚！キメラテック・フォートレス・ドラゴン！」

メタリックな輝きを放つ、龍というよりむしろ蛇に近い挙動をする異端のサイバー流。その攻撃力は、素材とした機械族モンスター1体につき１０００。

キメラテック・フォートレス・ドラゴン　攻２０００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）↓（５）

やられた。攻撃力こそ下がったものの、これでアドバンテージは一気にカイザー側に傾いた。唯一の救いは、一気に3枚のカードが墓地に送られたことでウォーターフロントのカウンターが上限の５つまで溜まったことだけど……それも、この手札だとあまり

慰めにはならない。

清明　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：なし

場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）

カイザー　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：キメラテック・フォートレス・ドラゴン（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

場：サイバーダーク・インフェルノ

「僕のターン、ドロー。ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントに壊獣カウンターが３つ以上存在するとき、その光は１ターンごとに１体の壊獣を呼び寄せる！来い、怪粉壊獣ガダーラ！」

これで手札に壊獣が１体、そして僕の手札にはグレイドル・コブラのカード。フォートレスをリリースしてこのガダーラを呼び、そのままコブラで自爆特攻。流れで寄生すれば大ダメージを通せるが、それは僕のライフも一気に削られる諸刃の剣だ。サイバー流相手には１度の気の緩みが死に直結するから、確実に倒しきれる状況でもない限り極力ライフは温存しておきたい。

「ここは、グレイドル・コブラ召喚！そのままフォートレスに攻撃！」
グレイドル・コブラ　攻１０００（破壊）→キメラテック・フォートレス・ドラゴン
攻２０００
清明　ＬＰ４０００→３０００
「戦闘破壊されたコブラの効果でフォートレスに寄生、そのまま追撃のダイレクトアタック！」
その召喚条件を考えれば最低クラスの攻撃力しかないとはいえ、それでもダイレクトアタックならば初期ライフのきっかり半分を削り取るだけのパワーはある。両目のあるべき場所に付いたスコープが静かに獲物を求めて動き、その中心に捉えたカイザーめがけて熱線が撃ち込まれる。
「甘い。トラップ発動、パワー・ウォール！相手の攻撃により発生するダメージ５００ポイントにつき1枚のカードをデッキから墓地に送ることで、戦闘ダメージを打ち消す！」
「これも防がれた……！」
キメラテック・フォートレス・ドラゴン　攻２０００→カイザー（直接攻撃）
カイザーがデッキから４枚のカードを抜き取り、自分の前に無造作に投げる。そのカードたちが空中で半透明の力場を作り、機械龍の攻撃を完全に受け止めた。だが考え

てみれば、こうなることぐらいフォートレスを攻撃表示で融合召喚した時点で気づけたはずだ。わざわざ起点になるよう出してきたのだから、当然その理由があることぐらい攻撃前に読めてしかるべきだった。

これで僕はこのターン、攻撃力２０００のモンスター１体と引き換えに１０００ものライフと手札のコブラを失った。エンドフェイズまでに、このターンにできる事は……。

「永続魔法、強欲なカケラを発動。ターンエンド」

「俺のターン。肩慣らしはそろそろ切り上げて、ここからは本気で行くぞ。出でよ、サイバー・ダーク・キール！サイバー・ダーク・クローを装備しろ！」

ついに僕の前に現れた、サイバー・ダークの１体。細長い蛇のような漆黒のボディが、月光を反射して鈍く光を放つ。その体から無数のコードが地下へと伸び、無数の鉤爪をわきわきと不気味に動かす小型の機械龍に接続される。

「……？」

「サイバー・ダーク・キールは召喚に成功した時、墓地からレベル３以下のドラゴン族モンスター１体を自身に装備できる。そして、その攻撃力がこのカードに加算される」

サイバー・ダーク・キール　攻８００↓２４００

下級モンスターとしても明らかに低いわずか８００の攻撃力が、一気に同レベル帯で

も最高クラスの２４００にまで膨れ上がる。これがサイバー・ダークの戦術、なるほど確かに自らを高めることで圧倒的な攻撃力を生み出す表サイバーとは根本的に異なる存在だ。

「サイバー・ダーク・クロー……？あんなカード、見たことない……！」

初見の僕にとってはそういうものか、で済む話だったが、過去に1度裏サイバーと戦ったことのある翔にとっては見過ごせない違和感があったらしい。これまでのデュエルでカイザーが使ったことのないカード、というわけか。普通ならそんなこともあるよね、で済むような話だが、サイバー流のカードを引きこむ力を知っている僕みたいな立場からすると若干引っかかる話だ。説明を求めてカイザーに視線を送ると、その意味を汲み取ったのかキールに装備された状態のカノンを見上げた。つられて僕もクローの方へ眼をやったところで、カイザーの静かな声が聞こえる。

「確かに、翔の言う通りだ。このカードはユベルとの戦いまでは、俺のデッキには入っていなかった。いや、そもそもサイバー・ダーク・クローなんてカードはどこにも存在すらしていなかった」

「どういうことなの、お兄さん？」

「俺はあの戦いで、自分の輝きを最高に出し尽くしたつもりだった。あれ以上は望むべくもない、限界以上を引き出せたデュエルだと思っていた。だが、それは俺の考えが甘

かったらしい。俺自身はともかく、このデッキには……サイバー流にはまだ、進化の余地が存在する」
「進化の、余地……」
風は、凪いでいた。ほんのかすかに押し寄せては灯台にぶつかり、また引いていく波の音だけがかすかに聞こえる。
「その境地にたどり着くのが未来の俺なのか、それともそうでないのかはわからん。だが俺はあの戦いから再びこの世界に流れ着くまでに、裏サイバー流……サイバー・ダークの新たなる地平を確かに見た。このクローこそがその証、その進化への布石となる1枚だ。だが俺はいまだその地平を、その進化を完全にはものにはできていない。ならばどれほど時がかかろうと、なんとしてもその新たなる進化を形にしてみせる。それが俺の使命であり、戦いを求め続けるこのデッキに対してのせめてもの礼だ」
「カイザー……」
「つまらない話を聞かせたな、清明。バトルだ!サイバー・ダーク・キールで攻撃、ダーク・ウィップ!」
キールの細長い体が鞭のようにしなり、その尾の一撃が自身より巨大な機械龍の装甲を打ち砕く。その勢いでキールの体がもう一捻りされ、返しの尾の一撃が今度は僕を直接襲った。

サイバー・ダーク・キール　攻２４００→キメラテック・フォートレス・ドラゴン攻２０００（破壊）

清明　ＬＰ３０００→２６００→２３００

「なんで、ダメージが……!?」

「サイバー・ダーク・キールがモンスターを戦闘破壊した時、相手ライフに３００の追加ダメージを与える。さらに今の戦闘のダメージ計算時、サイバー・ダーク・クローの効果が発動した。装備モンスターが戦闘を行うダメージ計算時、俺のエクストラデッキからモンスター１体を墓地に送る。俺はこの効果で、サイバー・エンド・ドラゴンを選択する」

装備状態であることを前提とした効果により、さらにカイザーの墓地にカードが送り込まれる。表サイバー流の切り札中の切り札、サイバー・エンドを墓地に送るほどの戦略だ、何を狙っているかはまだわからないが、着実にその準備を整えつつある事は間違いない。

清明　ＬＰ２３００　手札：２

モンスター：なし

魔法・罠：強欲なカケラ（０）

場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）

カイザー　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：サイバー・ダーク・キール（攻・クロー）
魔法・罠：サイバー・ダーク・クロー（キール）
場：サイバーダーク・インフェルノ
「僕のターン！まずはこのドローフェイズ、通常のドローをしたことで強欲なカケラに強欲カウンターを１つ乗せる。メインフェイズにはウォーターフロントの効果で、多次元壊獣ラディアンをサーチさせてもらうよ」
強欲なカケラ（０）↓（１）
最初のターンに張られて以降、いまだ沈黙したままのサイバーダーク・インフェルノ。名前からしても間違いなくサイバー・ダークのサポートカードなのだろうが、どんな効果を持っているにせよこの僕の力、全カードの中でも最強クラスのモンスター除去である壊獣の力までは防げまい。
それにしても、こういう展開になってくると最初にサーチしたのがガダーラというチョイスはちょっと失敗だったと思う。このデッキでは貴重な、どんな相手の攻撃も真っ向から戦闘で突破できる要員だったから持ってきておこうと選んだけれど、この状況なら他の壊獣の方がなにかとよかっただろう。
「サイバー・ダーク・キールをリリースして多次元壊獣ラディアンを、ラディアンの存在

に反応して手札のガダーラを、それぞれのフィールドに特殊召喚！さらにガダーラはその特殊能力、風葬によって壊獣カウンター３つをコストに鱗粉の風をフィールドに撒き散らし、自身以外の攻守を半分にする！」

次元の壁を越える宇宙人が、風起こす大怪虫が、一度にフィールドをその巨体で埋める。機械龍が我が物顔に蹂躙していた場の空気が、１瞬にして書き変わった。

多次元壊獣ラディアン　攻２８００→１４００　守２５００→１２５０

怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）→（２）

「ほう、これがお前の手に入れた力か。サイバーダーク・インフェルノがある限り装備カードをもつサイバー・ダークは相手の効果対象にならず、効果破壊もされなかったのだが……まさか、耐性の上から攻めて来るとはな」

『油断するな、マスター。わかってるな？』

賞賛の声に応える余裕もなく、チャクチャルさんの警告が聞こえる。無論、何が言いたいのかはわかっている。手札にはアタッカーになるハンマー・シャークのカード、けれどもし僕が今のカイザーの立場だとしたら、ここで追加ダメージの誘惑に駆られての通常召喚は愚の骨頂だ。勿体ないけれど、このターンは下準備と割り切ろう。

「……バトル！ガダーラでラディアンに……」

「墓地の超電磁タートルを除外することで、効果発動。デュエル中1度だけ、バトルフェイズが強制的に終了される」

先ほどランページの効果で落としていた超電磁タートルにより、ガダーラの攻撃が強制的に止められる。

でも、これでいい。カイザーなら間違いなく壊獣のデメリット、壊獣はそれぞれのフィールドに1体ずつしか存在できない点を逆手にとって、ラディアンをこのターン生かすことで次に僕が新たな壊獣を手札に加えたとしてもカイザーのモンスターをリリースして除去、の流れを不可能にしてくるはずだと思った。だからこのターンはバトルを捨てて超電磁タートルの守りを引っぺがす、それができれば十分だ。そんな悠長なこと言ってられる相手じゃないのは百も承知だけど、だからといって墓地のカードに干渉できるカードなんてそもそもこのデッキには入っていない。

「ハンマー・シャークを守備表示で召喚。ターンエンド」

『それでいい。なかなか成長したな、マスター』

お褒めに預かりまして、だ。上から目線なのは気にくわないけど。

ハンマー・シャーク　守１５００

「俺のターン。まずお前のカード、多次元壊獣ラディアンの効果を使わせてもらおう。壊獣カウンター2つをコストに、ラディアントークンを特殊召喚する」

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）→（０）
ラディアントークン　攻２８００
何度も僕のフィールドで発動してきたラディアンの効果が、今回ばかりは僕に対して牙をむく。しかもこれで、ウォーターフロントを破壊から守るカウンターがすべてなくなってしまった。
「さらにサイバー・ダーク・エッジを召喚。このカードもまた、召喚時にレベル３以下のドラゴン族１体を墓地から装備できる。サイバー・ダーク・カノンを装備！」
小柄な胴体とは明らかに不釣り合いな巨大な金属の翼を持つ、２体目のサイバー・ダーク。その全身からはキールの時と同じように無数のコードが伸び、またしても先ほどと同じように、だが先ほどのクローとはまた違い、丸い頭部がどこか芋虫のような印象を抱かせるサイバー・ダーク・カノンと結合する。
サイバー・ダーク・エッジ　攻８００→２４００
「これでいい。速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動！俺のフィールドに存在する魔法・罠カードと、お前のフィールドの魔法・罠カードを１枚ずつ破壊する。俺のフィールドからは装備カードとなったサイバー・ダーク・カノン、そしてお前のフィールドからはＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントが破壊される」
さっきまで凪いでいた空に、突然不吉な風が吹く。荒れる波が押し寄せる中でカウン

ターの尽きた灯台が、光を失ってゆっくりと倒壊していった。
「ウォーターフロントが……！」
「まだだ、サイバー・ダーク・カノンの更なる効果を発動！装備状態のこのカードが墓地に送られた時、デッキからカードを1枚ドローする」
カイザーがカードを引く。まずい、そう思ったのは予感なんかではない。まぎれもない確信だ。そして案の定その確信は現実に変わり、カイザーはそのカードを即座に発動する。
「魔法カード、サイバーダーク・インパクト！を発動！俺のフィールド、手札、墓地のいずれかに存在するホーン、エッジ、キール3体のサイバー・ダークをデッキに戻し、融合召喚を行う！出でよ、鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン！」
「ついに出た、お兄さんの裏サイバー流エースモンスター……！」
ホーンの頭部、エッジの翼、キールの尾。フィールドと墓地から飛び立った3体の下級サイバー・ダークのパーツ同士が組み合わさり、1体の巨大な機械龍となって空中で僕のガダーラと対峙する。あの姿は僕も異世界で見た、どころかその背に乗ったこともあるが、こうして戦う姿を見るのは初めてだ。
「サイバー・ダーク・ドラゴンが特殊召喚に成功した時、墓地に存在するドラゴン族1体を装備することができる。この効果にはレベル制限がないが、今回はサイバー・ダーク・

カノンを選択する。だがこのカードにはさらにそれとは別に、攻撃力を俺の墓地に存在するモンスター1体につき１００ポイントアップする効果もある」

装備対象にレベル制限がないうえに、さらに率こそ悪いとはいえ自己強化まで備えているとは。今のカイザーの墓地にモンスターは何体いる？サイバー・ドラゴン・コアと超電磁タートルは確かゲームから除外されたはずだからその2枚は含めなくてよく、カノンも装備対象として墓地から剥がされたからそれも計算に入れる必要はない。それでも、融合素材やらなんやらでカイザーの墓地にモンスターは最低6体。パワー・ウォールで落としたカードのうち、何かわかっていない物があと2枚。もしそれがすべてモンスターだとしたら……ということは、素の攻撃力はたかだか１０００でしかない鎧黒竜の今の攻撃力は……。

「攻撃力、３４００……！」

そうだ、と言わんばかりに金属の龍が咆哮し、ホーンの物であったその頭部に漆黒のエネルギー弾が生成される。当然その狙いはただ1つ、自らの前に立ちふさがるガダーラだ。そしてその真の力を発揮するための壊獣カウンターが枯渇した今の状況では、どうあがいてもガダーラに勝ち目はない。

鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン　攻１０００→２６００→３４００

「行くぞ、バトルだ。サイバー・ダーク・ドラゴンで、怪粉壊獣ガダーラに攻撃！フル・

ダークネス・バースト!」
「ガダーラっ!」
鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン　攻３４００→怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００
（破壊）
清明　ＬＰ２３００→１６００
「ぐっ……!」
「カノンを装備したモンスターがバトルを行ったことで、デッキからサイバー・ダーク・キールを墓地に送る。次いでラディアントークンで、ハンマー・シャークに攻撃!」
これも、異世界でずっと実体化していた影響だろうか。サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃の余波は明らかにソリッドビジョンの範疇に収まらず、その衝撃により発生したとしか考えられない本物の風圧が僕の全身にぶつかり学生服をはためかせる。だが、そんなことを気にしている暇はなかった。プレイヤーの攻撃命令には逆らえず、ラディアントークンの体が闇に溶ける。次元を飛び越えて背後から振り下ろされた一撃が、ハンマー・シャークの後頭部を狙い打った。
ここまではまだモンスターたちが壁となってダメージを抑えてくれたけれど、もはや僕の場に味方はいない。体中にまだ鱗粉が付いたままのラディアンと目が合ったが、お互いどうすることもできない。

ラディアントークン　攻２８００→ハンマー・シャーク　守１５００（破壊）
「さらに多次元壊獣ラディアンでダイレクトアタック！」
多次元壊獣ラディアン　攻１４００→清明（直接攻撃）
清明　ＬＰ１６００→２００
「ぐぐ……ぐっ……！」
「メイン２に魔法カード、七星の宝刀を発動。俺のフィールドからレベル７のラディアントークンを除外することで、カードを２枚ドローする」
攻撃を終えたラディアントークンを除外することで、実質ノーコストでの２枚ドローを行うカイザー。自分のモンスターをコストにしていないのだから、やってることは強欲な壺と変わりない。
「魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキからサイバー・ダーク・エッジを墓地に送る。カードを１枚伏せ、ターンエンドだ」
もはやライフは風前の灯とはいえ、なんとかこのターンも凌ぎ切れた。ならば、まだ希望はある。このデュエル、次のターンが正念場だ。その覚悟を読み取ったのか、かすかにカイザーが微笑したように見えた。
清明　ＬＰ２００　手札：１
モンスター：なし

魔法・罠：強欲なカケラ（1）
カイザー　ＬＰ４０００　手札：1
モンスター：鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン（攻・カノン）
多次元壊獣ラディアン（攻）
魔法・罠：サイバー・ダーク・カノン（鎧黒竜）
場：サイバーダーク・インフェルノ
「僕のターン、ドロー！」
引いたカードを見て、笑みがこぼれる。こんなギリギリの局面で駆けつけるだなんて、なかなか来るべき時ってものをわかってるじゃない。ここで来てくれるってことは、当然お膳立てもできてるんだよね？
「ドローを行ったことで強欲なカケラに2つ目のカウンターを乗せて、2つのカウンターが貯まったカケラの効果発動。このカードを墓地に送ることで、さらにカードを2枚引く！」
最後に引いたカード2枚を合わせ、僕の手札は計4枚。これだけあれば、まだ戦える！
「魔法カード、ハーピィの羽根箒を発動！相手フィールドの全ての魔法、そして罠カードを破壊する！これでサイバー・ダーク・カノンも破壊されて、サイバー・ダーク・ドラ

ゴンの攻撃力はダウンする！」
「お兄さんの切り札が……」
鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン　攻３４００→１８００→１９００
装備していた分の攻撃力が下がった反面自己強化の数値が上がるため、結果として攻撃力の低下は１５００ポイント止まりで終わる。カノンの効果による1枚ドローも許してしまうが、それはもう必要経費として諦めるしかない。だがそこで、あることに気が付いた。ドロー効果を合わせても、今のカイザーの手札は2枚のはずだ。だが彼の手札は今、見間違えでなければ3枚存在する。
「サイバーダーク・インフェルノが相手により破壊された時、デッキから融合、またはフュージョンと名のつくカード1枚をサーチできる。サイバネティック・フュージョン・サポートを加えさせてもらった」
サイバネティック・フュージョン・サポート……忘れたくても忘れられない、機械族専用の融合召喚を墓地リソースで行えるようになる速攻魔法だ。首を振って不穏な予感を振り払い、目の前のサイバー・ダーク・ドラゴンに意識を集中する。
「相手フィールドの壊獣の存在に反応して、手札から粘糸壊獣クモグスを攻撃表示で特殊召喚して……さらに速攻魔法、帝王の烈旋！このターンのアドバンス召喚は、相手モンスター1体をリリースして行うことができる」

粘糸壊獣クモグス　攻２４００

これで、準備はすべて整った。呼び出すは絶対不変、未来永劫の僕の切り札。

「クモグス、そしてラディアン！2体のモンスターをリリースして、アドバンス召喚！」

このデュエルが始まってからずっと押されっぱなしだった僕に残された、最後の反撃の狼煙。２体の壊獣の姿が霧に包まれて消えてゆき、その中央から一筋の太刀が走る。

「さあ、あの時のリターンマッチと洒落込もう！行くよ、霧の王（キングミスト）！」

霧の王は、リリースしたモンスターの攻撃力の合計がそのまま攻撃力となる。思えば卒業デュエルの時も、最後はこの霧の王とサイバー・エンド・ドラゴンの一騎打ちだった。あの時からカイザーは変わったけれど、僕だってもうあの時とは違う。恐らくこれが、このデュエルで僕が出す最後のモンスターになるだろう。

霧の王　攻０→５２００

「フッ、あの時の、か。いいだろう、来い！」

「もちろん！霧の王でサイバー・ダーク・ドラゴンに攻撃、ミスト・ストラングル！」

大きく飛び上がった霧の戦士が、その宝剣で全体重を乗せた大上段からの一撃を浴びせかけると、サイバー・ダーク・ドラゴンもわずかに顔を上に向け、再び顔の前で発生させたエネルギー弾でそれを迎え撃たんとする。互いの攻撃のエネルギーが激突し、激しい爆発が起きた……だがその衝撃波が僕らの元に届くより先に、どこからともなく発

生した深い霧が全てを包み込んでいく。
勝負は、１瞬で決まった。発生した時と同じような唐突さで霧が晴れていき、みるみるうちに視界がクリアになっていく。その向こうに立っていたのは力尽きたサイバー・ダーク・ドラゴンの頭部に剣を突き立て、静かにその亡骸を見下ろす霧の王だった。
霧の王　攻５２００↓鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン　攻１９００（破壊）
カイザー　ＬＰ４０００↓７００
「どうだ……カイザーっ！」
あの時、表サイバーの龍に倒された霧の王が、今度は裏サイバーの龍を切り伏せた。だがやはり気になるのは、あの時カイザーのサーチしたサイバネティック・フュージョン・サポート……だがサイバー・エンド・ドラゴンが先ほど墓地に送られた以上、あのカードが目当てではないだろう。となるとまさかさっき言っていた、裏サイバーの新たなる地平とやらだろうか。
いや、でも、あれはカイザーでさえもまだものにできていない存在だと明言されたはずだ。まさか、このデュエルを通じて次のターンで『それ』を覚醒させるつもりだろうか。あまりにも危険で、分の悪い賭け……第一その新たな境地のモンスターが目覚めなかった場合、何も召喚することができずに終わる可能性すらある。
そんな物思いは、カイザーの目を見て吹き飛んだ。あれは……本気だ。本気で僕との

デュエルを通して、その境地に登り詰めつつある目だ。知らず知らずのうちに鳥肌が立っていたのを精神力で抑え込み、にやりと笑ってみせる。いいだろうカイザー、僕が生き証人だ。その姿はっきりと、その命の輝きを、最後まで僕がこの目で見据えてやるさ。

「ターンエンド。今のが僕の全力だ、さあ来いカイザー！ただしここまで引っ張ったんだ、その結果が生半可な力程度なら、僕らがこの手でぶった切ってやる！」

「感謝するぞ、清明……。お前のおかげで、俺は今新たな境地に最も近いところに居る！俺は生きている、その命の輝きを、さらに激しく燃え上がらせてみせる！……俺のターン、ドローッ！」

静寂が場を包んだ。僕も翔も、そしてカイザー本人も、物音ひとつしないその瞬間が、僕には永遠のものとも感じられた。

そしてその均衡が、カイザー自身の手によって破られる。

「速攻魔法、サイバネティック・フュージョン・サポート……そして魔法カード、パワー・ボンドを発動！俺のライフを半分払い、墓地のサイバー・ダーク・カノン、サイバー・ダーク・キール、サイバー・ダーク・エッジ、サイバー・ダーク・クロー、そして鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴンの５体をゲームから除外する！」

「５体のサイバー・ダークでの融合召喚!?そんなモンスターが……！」

カイザーが最後に引いたのは、彼の信じる究極の融合カードにしてサイバー流の象徴、パワー・ボンド。融合召喚した機械族の攻撃力を元々の数値分引き上げる凄まじいメリットと引き換えに、その力の代償としてエンドフェイズに挙げた攻撃力がそのままダメージとしてプレイヤーに降りかかるデメリットを併せ持つハイリスクハイリターンのカードだ。カイザーのライフはもはや残りわずか、どう考えてもエンドフェイズのデメリットには耐えきれない。このターンで決め切るつもりなら、真正面から迎え撃つまでだ。霧の王も考えることは同じなのか、正眼の構えで自身の剣を強く握りしめる。

そうして僕らが見守るその目の前で、ついに裏サイバーの究極の境地がその目を覚ました。

「出でよ！鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン！」

「これが……！」

その機械龍は、まさに限界を超えて更なる進化にたどり着いた鎧黒竜だった。ホーン、エッジ、キールの3体の特徴を併せ持ちながら、装甲の薄かった胸部からはクローの特徴である鉤爪が出現して補強され、その背にはカノンが自らの体をそっくりそのまま巨大な砲台として据えつけられる。だが何よりも恐ろしいのはそんな外見だけの特徴ではなく、一目見るだけで伝わってくる全身から立ち上る圧倒的なパワー。それは合体の相乗作用なのか1体1体の時どころか鎧黒竜とさえも比べ物にならない、完全に制

御された洗練されつくした暗黒の力。
「パワー・ボンドの効果により攻撃力は倍になり……さらにサイバー・ダークネス・ドラゴンが特殊召喚に成功した時、墓地のドラゴン族または機械族モンスター1体を自身に装備できる。サイバー・エンド・ドラゴンを装備する!」
「サイバー・エンド・ドラゴンがサイバー・ダークネス・ドラゴンに……」
翔が震え声で復唱する中、シルバーメタリックな輝きを放つ三つ首の機械龍が漆黒の機械龍に装着される。これが、表裏一体サイバー流の究極の形なのか。偶然なのか必然なのか、その攻撃力が2重の強化を受けて倍々式にはね上がる。
カイザー　LP700→350
鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン　攻2000→4000→8000
「攻撃力、8000……でも!」
僕の声に霧の王がコクリと頷き、圧倒的な力の差を前に怯むことなく剣を構え直す。その眼前で、サイバー・ダークネス・ドラゴンが前段発射に向けて力を溜めはじめる。背中の砲(カノン)　頭部からのエネルギー弾、そして吊り下げられたサイバー・エンドの3つの頭に、それぞれ別のエネルギーが充填されていく。
「行け、サイバー・ダークネス・ドラゴン!エヴォリューション・ダークネス・バースト!」

「迎え撃て、霧の王！ミスト・ストラングル！」
鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン　攻８０００→霧の王　攻５２００（破壊）
清明　ＬＰ２００→０
霧の王の一閃と機械龍の砲撃が激突し、世界が白い光に包まれる。目を閉じてもなお届く強烈な光の中で、何か動くものがかすかに見えた。強烈な逆光のためぼんやりとしたシルエットしか確認できなかったが、こちらに向けて咆哮するその姿はまるで機械の翼を生やしたサイバー・ドラゴンのような……だがその姿をもっとよく見ようとしたところで、光が収まってしまった。デュエルが終わったことでサイバー・ダークネス・ドラゴンの姿も消え、後に残ったのは僕とカイザー、そして翔の３人のみ。
「今のは……」
今見えた光景は、ただの幻覚だったのだろうか。でもあの映像が僕に与えたあまりにも鮮明な印象は、到底そうは思えなかった。立ちすくむ僕の目の前で同じく立っていたカイザーががっくりと膝をつき、次いでその場に崩れ落ちる。
「お兄さんっ！」
「カイザー！」
翔と２人で駆け寄ると、カイザーはよほど痛むのか心臓の位置に手を当てて苦しそうに息をつきながらも、それでも満足げに笑っていた。

「……清明、お前もあれを見たのか？」
「お兄さん、喋っちゃだめだ！今すぐ鮎川先生のところに……！」
「そうだろう、お前も確かに見たはずだ……」
翔の言葉も耳に入っていないかのように、熱に浮かされたような調子で喋りつづけるカイザー。じゃあやっぱりカイザーもあの光景を、僕と同じあの未知なるサイバー・ドラゴンを見ていたんだ。小さく頷くとそれに満足したのか、胸にやっていた手を何かを掴み取ろうとするかのように星空へ伸ばす。震えながらもその手を握りしめ、さらに声を絞り出す。
「俺は見た、まだ見ぬサイバー流の進化、その更に果てを！サイバー・ダークネス・ドラゴンは、確かに裏サイバー流の境地かもしれない。だが、表サイバー流にも進化の道は残されている！あの一瞬の光の中で俺は見た、瞬間が永遠（ノヴァ インフィニティ）となる様を！」
握りしめた手を緩慢な動きで自身の腕に持っていき、今にも気を失いそうな中で自らのデッキを取り外す。どうにか掴んだそれを、自分を抱き起す翔に向けて差し出した。
「お兄さん、これは……？」
「翔、俺のデッキはお前に託す。次世代のサイバー流を見つけるのは俺ではない、ここからはお前の仕事だ。頼ん……だ、ぞ……」
それだけ言ったところでついに力尽きたのか、翔の手の中で気を失うカイザー。手の

空いた僕が鮎川先生を呼びに行かなくちゃいけないんだろうけど……駄目だ。さすがに、今のデュエルで精神力を使い果たしたせいでこれ以上はちょっと動けそうにない。地面に大の字に倒れると、頭上には満天の星空が見える。

カイザーの掴もうとした新たな可能性の光も、この中のどこかにあるのだろうか。そんなことを考えながら、静かに意識を手放した。

ターン115　学園英雄と邪魔の化身

「あ、ちょいとそこ行く兄さん姉さん、観戦のお供にポップコーンいかがですかー？ＹＯＵ　ＫＮＯＷ謹製サンドイッチ、今ならお安くしときますよー」
「あ、サンドイッチを頂くノーネ」
「クロノス先生、お買い上げありがとうございまーす」
　デュエルアカデミアはこの日、いつになく熱気に包まれていた。デュエル場には全校生徒や先生どころかテレビカメラまでもが詰めかけ、その中央で対峙する赤と黄の２人がデュエルを開始するその瞬間を今か今かと待ちわびている。ポップコーンのようなおやつ類やサンドイッチなど軽食を山積みにしたトレイを持ち歩いて売りまわりつつ、チラリと時計に目をやった。
　……あと５分で、このデュエルが始まる。それまでにこの中身を全部売り切れれば……じゃなくて。そもそも、なぜこんなことになったのか。デュエル場にいるいつも通りの十代とその真向いの黄色い人影、それはラーイエローの生徒ではない。なぜか無駄によくできたおジャマ・イエローの着ぐるみという無駄にシュールな格好に身を包んで憮然とした顔になっているのは、情けないことに僕もよく知ってる顔だった。

「……なーにやってんだか、万丈目ったら」
僕が最後に彼に会ったときは、まだいつも通りの万丈目だったのだが。ラストスパートでの売り抜けを目指して体は積極的に動きつつ、頭の中ではあの日のことを振り返っていた。

「ええい、なぜこの万丈目サンダーともあろう男が！」
「るっさい万丈目！」
ぼろいレッド寮の壁を通じてガンガン伝わってくる大声に僕がキレたのは、太陽もすでに天頂を通り過ぎて西の空へと次第に落ちかかってくるような、だけどまだ夕方と呼ぶにはあまりに早すぎる、そんなけだるい時間だった。レッド寮は数年前に僕が仕組んだ大改造により、２階の部屋の壁をいくつかぶち抜いて部屋数を減らす代わりに１部屋当たりの広さを倍にしてある。何をやってるのかは知らないが最初はあまり邪魔するのも悪かろうと部屋の隅に移動してやり過ごそうとしてみたのだが、十代は朝から釣りばっかりだし翔はブルーに移籍したしで誰も止めないのをいいことに苛立ちの声はいつまでたっても収まりそうになかったので、ついに僕が重い腰を上げたのだ。
「む、清明。何の用だ、今の俺は機嫌が悪いぞ」

「はいイエロー、今の通訳して」
『ん～っとねぇ、万丈目のアニキったらここ最近ずっといろんな会社にプロデュエリスト契約の申し込みしてるんだけど、もう不採用通知だけでババ抜きできるぐらい集まっちゃったのよん。それでイライラしちゃってるわけ』
「ご苦労さん。で、何？申し込み？」
「ああ。聞けば天上院君や翔は、もう進路先を決定したそうではないか。ならばこの俺も兄者達との約束を果たしてカードゲーム界を制するため、プロデュエリストになる道をそろそろ確立させておこうと思ってな」
『そうなのよ！万丈目のアニキったら見た目通り結構頑固だから、実家の力なんか借りんって万丈目グループに頼らないでプロ入り目指してるのよ、偉いと思わない？』
「見た目通りは余計だ……ん、どうした？」
「いや……偉いね、万丈目」
　その時思わず口にした言葉は、僕の紛れもない本音だった。恐らくいつぞやのノース校四天王の将、鎧田の存在にも刺激されていたのだろうが、万丈目はこうして自分の将来を見据え、前に踏み出すべく胸を張って足掻いている。
　いや、万丈目だけではない。今の話にも出てきた、明日香や翔だってそうだ。それぞれ目指す場所は全く違えども、このアカデミアからさらに先の道へ飛び出していこうと

している。じゃあ僕は、どうなんだろう。覇王の世界で辺境の大賢者さんは僕に、目の前の道を進むかどうかは僕の自由だ、そんな言葉を残していった。僕の目の前に、道は何本あるんだろう。僕が選ぶことのできる道の中で、未来に繋がっているのはどれだろう。そう自問しているうちにすっかり毒気が抜けてしまった僕の顔を、心配そうに万丈目が覗きこんでいた。

「おいおい、なんだその腑抜けた顔は。お前もどうせ、狙いはプロ入りなんだろう？お前もこの俺のライバルの１人としての自覚を持って、もっとしゃっきりしろ」

「うん……」

　万丈目なりに心配して、励ましてくれているのだろう。それはわかっているしその心遣いが身に染みるけれど、そんな程度の軽口にも反応する気分にはなれずに万丈目の顔がますます険しくなる。だからその時クロノス先生がレッド寮を訪れ、有無を言わさず万丈目を引きずって行ったことに一番ほっとしていたのは、もしかしたら僕の方だったのかもしれない。

　それからたっぷり１週間、万丈目は島から姿を消した。

「んでクロノス先生、本当になんでこんなことになったんですか？」

どうやら、あの恰好は見かけ以上に動きやすいらしい。両腕をぐるぐると回して着ぐるみの感覚を確かめる万丈目の様子を見下ろしながら、全ての原因らしいこの人に話を聞くことにする。
「私にもさっぱりナノーネ。私はただ、プロ志望の夢に燃えるシニョール万丈目にプロの世界を間近で見てもらおうという親心で、エド・フェニックスに土下座ーニャして付き人としてもらっただけナノーネ」
「付き人!?よく万丈目にそんなの務まり……あーいや、すいません先生。なんでもないです」
あのプライドの高い万丈目に……と言おうとしたところで、改めてデュエル場を見た。３６０度どこからどう見ても色物デュエリストにしか見えない彼のよく言えば吹っ切れた、悪く言えば手段を選ばなくなった姿を見れば、この１週間のうちに彼に何かがあったことだけはわかる。僕の口からはそれがいいとも悪いともいえないけれど、あえて外野として思ったことを率直に言わせてもらえば、せっかく万丈目みたいに実力があるデュエリストがネタ要員みたいなことをするのはなんだか複雑な気分だ。
「まあ、シニョール万丈目もプロの世界を見て色々思うところがあったようですーシ、今は彼のデュエルを見守ってやるのが一番ナノーネ。それよりも私としてはシニョール清明、あなたが彼とのデュエルに立候補していないことが不思議なノーネ。鮫島校長に

はシニョール十代と一緒に、あなたの名前も推薦しておいたのですが」
「あ、あはは……」
　言えない。いい小遣い稼ぎになりそうだったから辞退したなんて、この人の前では絶対に言えない。
　まあさすがに、理由がそれだけなんてことはないけれど。いくらペガサスさんから邪神アバター事件の時に新規カードテスターとしての証明書を貰ったとはいえ、壊獣といいグレイドルといい一般流通されていないカードだらけで構築されたこのデッキを全国放送で振りかざすのは流石にはばかられたのだ。特に今回は貴重な万丈目のプロ（？）初試合、僕が出ようものなら彼に申し訳が立たない。十代にもネオスやネオスペーシアンがあるとはいえ、僕が出るよりは遥かにマシだ。
「あ、お買い上げありがとうございます」
　トレイに載せた最後のサンドイッチが売れたちょうどそのとき放送開始を知らせるブザー代わりのチャイムが鳴り、僕もクロノス先生の横の空席に腰を下ろした。空のトレイを抱えてうろついたって邪魔なだけだし、僕もこのデュエルは見たい。ふとデュエル場を挟んで反対側の客席を見ると、たまたま座ってこちらを見ていた葵ちゃんと目が合った。僕が目で問いかけると、当然ですと言わんばかりに空になったトレイを持ち上げてこちらに見せつける。よしよし、彼女の方も売り子はきっちりやってくれたよう

だ。

今回のデュエルはテレビ放送、しかも生中継ということでアカデミア側も演出に気合が入っているのか、客席の電気が消えると同時にその中央で向かい合う2人にスポットライトが当たる。マイクを持った女性レポーターがその姿をバックに、カメラに向かって営業スマイルを投げかけた。

「全国のデュエリストの皆さん、こんにちはー!今回のデュエルチャンネルはここ、海馬コーポレーションのお膝元ともいえるデュエリストの聖地、デュエルアカデミア本校におジャマしています!」

ここでわざとらしくマイクを持ったまま耳に手を当てる。あざとい。少なくとも葵ちゃんは、僕がどう頼んでもあんなポーズとってくれないだろう。

「んん?おジャマ?そうです、今回のスペシャルマッチ。デュエルアカデミアにお邪魔したのは、私だけではありません!デュエルアカデミア代表として立ち上がった彼、遊城十代君の相手を務めるのはデュエリスト界に突如現れた期待の新星にしてあのエド・フェニックスの一番弟子!その名も……おじゃ万丈目!」

その名を呼ばれると同時に、万丈目に一斉にスポットが当たる。さっきはボロカスに言っちゃったけど、そこで気後れせずに咄嗟にポーズが取れるあたりは流石万丈目、大したもんだと思う。ある程度そうやってポーズをとらせた後に再び照明が落ち着いた

のを確認して、カメラが再びレポーターに向き直る。
「共にその実力は未知数の２人、一体どんなデュエルを見せてくれるのか!それでは……」
「「デュエル!」」
「行くぞ十代。姿を現せ、アサルトワイバーン!」
先攻を取ったのは万丈目……ではなく、おじゃ万丈目。滑空するドラゴンを最初に繰り出したところを見ると、デッキ内容はこれまでと変わっていないらしい。
アサルトワイバーン　攻１８００
「さらにカードを３枚セットして、ターンエンドだ」
「あーっと、先攻はおじゃ万丈目!その使用デッキはドラゴン族でしょうか!」
「遠慮なくやらせてもらうぜ。まずはヒーローに相応しい、戦う舞台に場所を移さないとな!フィールド魔法、スカイスクレイパー!そしてバーストレディを召喚!」
地面から無数のビルが伸び、周りの景色が眠らない町の満月の夜に様変わりする。ビルの間をやりにくそうに飛び回るアサルトワイバーンの前に立ちはだかるのは、炎の塊を片手でもてあそぶヒーロー。
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　バーストレディ　攻１２００
「一方の遊城十代君のデッキはヒーローデッキ!バーストレディの攻撃力ではアサルト

ワイバーンには敵いませんが……！」
「このままバトルだ。バーストレディで攻撃、バーストファイヤー！この瞬間スカイスクレイパーの効果により、自分より攻撃力が上の相手モンスターに攻撃するバーストレディの攻撃力はこのバトルの間１０００アップするぜ」
　デュエル番組のレポーターをやってるだけのことはあり、あの人はスカイスクレイパーの効果を知っているらしい。バーストレディが十代の声に合わせて炎の塊を投げつけるとその火球が空中で巨大化し、アサルトワイバーンの体を捉えた。
　Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００→２２００→アサルトワイバーン　攻１８００（破壊）
　おじゃ万丈目　ＬＰ４０００→３６００
「……フン。この程度は必要経費だ」
「なら……カードを３枚伏せるぜ。さらに永続魔法、補充部隊を発動してターンエンドだ」
「エンドフェイズに速攻魔法、魔力の泉を発動！相手の場で表側表示の魔法・罠の数だけカードを引き、その後自分の場で表側の魔法・罠の枚数だけ手札を捨てる。補充部隊とスカイスクレイパーで２枚ドローし、魔力の泉自身で１枚を捨てさせてもらうぞ」
「十代君、果敢に攻め込むもおじゃ万丈目にはまるで効いていない！次は再びおじゃ万

丈目のターン、一体どんなデュエルを魅せてくれるのでしょうかっ！」
まだ序盤の小競り合いにもかかわらず、仕事ゆえかノリノリで実況を続けるレポーターのお姉さん。そのハイテンションぶりにつられてか、気づけば僕まで拳を固く握りしめていた。
おじゃ万丈目　ＬＰ３６００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：２（伏せ）
十代　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ（攻）
魔法・罠：補充部隊
３（伏せ）
場：摩天楼―スカイスクレイパー―
「俺のターン、ドロー！よし、来たか……まずは魔法カード、死者蘇生でアサルトワイバーンを蘇生する。そのままバーストレディに攻撃！」
アサルトワイバーン　攻１８００↓Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００（破壊）
十代　ＬＰ４０００↓３４００

先ほどやられた仕返しとばかりに、上空から再び飛来したアサルトワイバーンが滑空からの突撃でバーストレディを仕留める。十代はそれに対し1瞬伏せカードの方に目をやるも、結局何もせずにその攻撃を受けた。あえて攻撃を受けたとなると、あの伏せカードは恐らくあれ、だろう。その予想を裏付けるように、ビルの谷間を縫うようにして空にHの文字が照らし出される。

「トラップ発動、ヒーロー・シグナル!バーストレディがバトルで破壊されたことで、デッキからフェザーマンを特殊召喚するぜ」

戦闘破壊をトリガーとしてレベル4以下の新たなヒーローを場に出すことができるカード、ヒーロー・シグナル。おジャマの姿に身を包んでも万丈目は万丈目、そのデュエルの腕前を警戒してか守備表示でフェザーマンが呼び出される。

E・HERO　フェザーマン　守1000

「ふっ……クックック、あーっはっはっは!」

「な、なんだ?」

場にフェザーマンが出た瞬間いきなり笑い出した万丈目に、さすがの十代も困惑した表情を見せる。十代だけではなく会場中がざわめき百戦錬磨のお姉さんがつかの間言葉を失う中、ようやく笑いの発作が治まったらしい万丈目が着ぐるみから突き出た目の部分をびょんびょん揺らしながら十代を真っ直ぐ指差す。

「いいか、十代。今の万じ……おじゃ万丈目を、これまでの俺と同じだと思うな！貴様のここまでの行動は、何から何まで俺の想定の範囲内でしかない！」
「なんだって……？」
　またいつもの大言壮語か、とも思ったが、本人の様子はその恰好以外いたって大真面目なままだ。指さしたままの手をデュエルディスクに置き、ようやくいつもの見慣れたふてぶてしい笑みを浮かべる。
「その証拠を見せてやろう。まずはアサルトワイバーンの効果により、モンスターの戦闘破壊に成功したこのカードをリリースすることで手札から別のドラゴン族１体を特殊召喚できる。出でよ、アームド・ドラゴン　ＬＶ５！」
「あ、あーっと、おじゃ万丈目、バトルフェイズ中にモンスターを特殊召喚したーっ！これならばあのアームド・ドラゴンはこのターンの間に、さらなる追加攻撃が可能となります！」
　デュエルが進んだことでようやく先ほどの奇行のショックから立ち直ったのか、再び声を張り上げるお姉さん。その解説に合わせるかのように、アームド・ドラゴンが摩天楼の夜空に咆哮した。
　アームド・ドラゴン　ＬＶ５　攻２４００
「そんなことしたって、フェザーマンは守備表示。俺にダメージは通らないぜ」

そう、十代は今、フェザーマンを守備表示で特殊召喚した。ただ万丈目のあの自信たっぷりの目つきは、ただ単に追撃で壁モンスターをどかせるというだけでは説明がつかない気がする。まだ何か、ある。

「永続トラップ、最終突撃命令を発動！このカードが存在する限り、全てのモンスターは攻撃表示を強制されることになる」

「うっ!?」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　守１０００↓攻１０００

「まだまだぁ！追撃のダブルトラップ、おジャマデュオを発動！このカードの効果により十代、お前のフィールドにおジャマトークンを２体プレゼントしてやろう。無論、最終突撃命令の効果で攻撃表示となるがな。さあ行け、雑魚ども！」

『『ど～も～』』

気の抜ける声とともに、これまで見たことのない赤と青の、でもどこからどう見てもおジャマ３兄弟の仲間であろう２体のモンスターが十代の場に飛び出してフェザーマンの両脇に座り込む。

おジャマトークン（赤）　守１０００↓攻０

おジャマトークン（青）　守１０００↓攻０

「うわっ、なんだお前ら？」

『レッドでーす』
『ブルーです』
『『２人合わせて……おジャマしまーす』』
　座ったまま十代の方に向き直り、申し訳程度に頭を下げる２体のおジャマ。そんな２体を尻目に、万丈目が残った最後の手札を叩きつけるようにして発動したのが見えた。
「そしてこれが、正真正銘最後の１枚だ。速攻魔法、竜の闘志！」
「あーっと、あのカードは！おじゃ万丈目、強烈なコンボを仕掛けてきました！たとえ立場はおジャマした側でも、デュエルには一切手を抜かない！それがプロデュエリスト、エド・フェニックスの教えなのか!?」
「竜の、闘志？」
『ワンターンキル……ではないが、なかなかのオーバーキル狙いだな』
　やや興味を引かれたらしいチャクチャルさんの呟き。それに疑問符を投げかけるより前に、万丈目自身が今発動したカードの効果を意気揚々と説明し始めた。
「このカードは俺の場に存在するこのターンの間に特殊召喚されたドラゴン族モンスター１体を対象とし、そのモンスターの攻撃回数を発動ターン中に特殊召喚された相手モンスターの数だけ増やすことができる。十代、この意味が分かるか？」
「フェザーマン、それにお前の出したおジャマトークンが２体……！」

「そういうことだ。合計４回の連続攻撃を受けて、このおじゃ万丈目の前に沈むがいい！アームド・ドラゴン　ＬＶ５でまずそっち側のおジャマトークンに攻撃、アームド・バスター！」
『せっかくの出番なのにーっ!?』
　まずアームド・ドラゴンが攻撃の対象に選んだのは、赤い方のおジャマ。飛び上がらんばかりに驚き悲惨な叫びをあげるレッドの前に、その拳を防ぐように半透明の壁が張られた。
『あ、あれ？』
「トラップ発動、ドレインシールド！その最初の攻撃を無効にして、その攻撃力分だけ俺のライフを回復するぜ」
『た、助かったぁ～』
　十代　ＬＰ３４００→５８００
「見苦しいぞ、十代！アームド・ドラゴン、追撃のアームド・バスターだ！」
「ぐっ……！」
『結局こうなるのねーっ!?』
　今度こそアームド・ドラゴンの突撃を止めるものはなく、振り上げられた拳がレッドの脳天に叩き付けられる。これで残る攻撃は、あと３回。

アームド・ドラゴン　ＬＶ５　攻２４００→おジャマトークン（赤）攻０（破壊）
十代　ＬＰ５８００→３４００
「この瞬間に補充部隊の効果で、俺が受けたダメージ１０００ポイントにつき1枚カードをドローするぜ。今受けたダメージは２４００、だから2枚だ」
「２４００?それだけでは済まさんぞ、十代」
「なに?」
含みのある言い方に十代が眉をひそめた瞬間、その足元で小規模な爆発が起こる。
十代　ＬＰ３４００→３１００
「な、なんだ?」
「言い忘れていたが、そのトークンは破壊された時に相手に３００のダメージを与える。いくらカードを引いたところで、このターンのうちにライフを０にしてしまえば問題はない！もう1体のおジャマトークンに攻撃しろ、アームド・ドラゴン！」
その声を聞いたアームド・ドラゴンが間髪入れずに今度は反対側の腕を振り上げ、そのまま無造作に反対側にいる青い方のトークンに振り下ろす。
『いやーんっ!!』
そんな断末魔が聞こえてきたが、お互いそれに構っている余裕はないらしい。十代も万丈目も互いの顔から目を逸らさず、次の行動への緊張感が否が応にも高まっていく。

アームド・ドラゴン　ＬＶ５　攻２４００↓おジャマトークン（青）攻０（破壊）
十代　ＬＰ３１００↓７００↓４００
「補充部隊の効果を再び発動！カードを２枚ドローする！」
「だからどうした！さあ十代、泣こうがわめこうがこの一撃で全て終わりだ！アームド・ドラゴンでフェザーマンに最後の攻撃、アームド・バス……何!?」
最後に残ったフェザーマンにも攻撃を食らわせるべく、アームド・ドラゴンが頭上で両腕を組む。おもむろにそれを振り下ろそうとしたところで、突然その動きが止まった。最後に残ったフェザーマンが、巨大な楯を両手で構えている。
「惜しかったな、万丈目。お前、すっげえ強くなったんだな。でも俺だって、そう簡単にはやられないぜ」
「どうした、アームド・ドラゴン！なぜ攻撃しない！」
「トラップ発動、ヒーロー・ヘイロー。このカードは攻撃力１５００以下の戦士族モンスターに対する装備カードとなり、装備モンスターに対して攻撃力１９００以上の相手モンスターは攻撃できないぜ」
「十代君、この１ターンで勝負がつくかというところを見事に耐えきったーっ！勝負は依然おじゃ万丈目が優勢とはいえ、これは目の離せない展開になってまいりました！」
「ふん、さすがは十代、と言っておこう。この俺のライバルの１人として、それぐらいの

ことはしてもらわないとな。アームド・ドラゴンがバトルで相手モンスターを破壊したことにより、このターンのエンドフェイズに更なる進化を遂げる！デッキより出でよ、ＬＶ７！」

アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００

このターン好き放題に暴れまわったＬＶ５の姿が光に包まれ、さらなる戦闘力を得た姿……ＬＶ７へと成長を遂げた。さっきまであれだけとどめを刺そうとしていたのが防がれたにもかかわらず、おじゃ万丈目の表情はどこか嬉しそうだ。悔しいという思いよりも、十代とのデュエルを楽しむ気持ちの方が大きいのだろう。そしてその気持ちは戦っている彼らだけではなく、この会場にいる観客にも伝染してその熱気を上げていく。

「頑張れーっ、おじゃ万丈目ー！」

「負けるな、十代！」

そんな声援がちらほらと飛びかう中、反撃を誘うように万丈目がターンを終える。十代の手札はドローも合わせると５枚、まさにピンチの後にはチャンスあり、だ。

「俺のターン、融合を発動！手札のバブルマンとスパークマン、そして場のフェザーマンで３体融合するぜ。来い、Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター！」

３体融合という重い素材を可能としたのも、先ほどライフをギリギリまで減らした見

返りに得たドローの賜物。フェザーマンの翼にスパークマンの戦闘スーツ、そしてバブルマンの銃と素材となった戦士たちの要素全てを併せ持つその姿は、まさに嵐（テンペスター）の名が示すごとくこのデュエルにおける万丈目優位の流れに風穴を開けるべく現れた大型ヒーローだ。

Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター　攻２８００

「攻撃力は互角、だがあのカードは……」

「バトルだ！テンペスターでアームド・ドラゴンに攻撃、カオス・テンペスト！」

翼を広げてビルの間を縦横無尽に飛び回るテンペスターが、右腕の銃を狙い定めて嵐のエネルギー弾を打ち放つ。その素早い動きに翻弄されつつもアームド・ドラゴンの放つ反撃の剛腕がテンペスターの胴体に着弾したのと、テンペスターの一撃が正確にその巨体の中心を捉えたのはほぼ同時だった。

Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター　攻２８００→アームド・ドラゴンＬＶ７　攻２８００（破壊）

「あーっと、これはどうしたことかーっ！２体のモンスターの攻撃力は互角、そしてスカイスクレイパーの効果は相打ちでは発動しない、にもかかわらず倒れたのはアームド・ドラゴンただ１体のみです！」

「……だそうだぞ。種明かしをしてやったらどうだ、十代。何をしたかはわかっている

んだ」
「じゃあ、そうさせてもらうぜ。俺は今のターン、テンペスターの効果を発動していたのさ。俺のフィールドにある補充部隊のカードを墓地に送り、テンペスター自身をその対象とする。これでテンペスターはもう戦闘破壊されなくなったのさ。これでターンエンドするぜ」
　すでにライフが１０００を切ったことにより実質置物と化していた補充部隊のカードを自分から墓地に送ることで、アームド・ドラゴンを一方的に撃破する。さすがに残りライフ４００の状態で、それも最終突撃命令の効果で攻撃表示が強要されるこの局面で追撃用のモンスターを場に出すことは控えたらしくそのままターンを終えはしたが、今日も十代の天性のデュエルセンスはこんな表舞台のプレッシャーの下にさらされようと全く影響されていない。
　だが万丈目もまた、これまでのサンダーとは一味違う。先ほどまでの優勢を一瞬で覆されてなお、その自信はいささかも揺らいでいない。それだけなら割といつも通りだが、今日の万丈目はあの逆転劇を味わってなお、いささかも自身の敗北する可能性を感じずに戦っている。エドのところに行ったのがなんで着ぐるみを着て帰ってくる羽目になったのかは知らないが、少なくともメンタルに関してはぐっと強化されているようだ。

おじゃ万丈目　ＬＰ３６００　手札：０
モンスター：なし
魔法・罠：最終突撃命令
十代　ＬＰ４００　手札：２
モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター（攻）
魔法・罠：なし
場：摩天楼―スカイスクレイパー―
「俺のターン、ドロー！魔法カード、マジック・プランター。俺のフィールドから永続トラップの最終突撃命令を墓地に送り、カードをさらに２枚ドローする。さあ、おじゃ万丈目の底力を見せてやろう！墓地に存在するトラップ、おジャマデュオのさらなる効果を発動！このカードを除外し、デッキからカード名の異なるおジャマ２体を特殊召喚することができる。来い、雑魚兄弟！」
『『どーもどーもー』』
おジャマ・ブラック　守１０００
おジャマ・グリーン　守１０００
デッキから現れたのは見慣れたおジャマ３兄弟のうちの２人、突き出た腹のブラックに無駄にマッシブな一つ目のグリーン。この２体が来たということは、まさかあの手札

は。お姉さんもそれに気が付いたらしく、あえて何も言わずにマイク片手に次の動きを見守っている。
「おジャマ・イエローを守備表示で召喚し……さあお前ら、出番だ！」
『『『りょ～か～い！』』』
　万丈目の掛け声におジャマ3兄弟が宙に舞い、互いの尻をくっつけるようにして輪っかを作るとそこから高速回転を始める。もはやあまりの回転の速さに3体それぞれの顔すら識別できなくなったところで、輪っか自体が1つの生物のように動きだした。テンペスターを囲むように移動すると、その中のテンペスターどころか周りの摩天楼まで崩壊を始めていく。
『ついに全国デビューだー！』
『俺達兄弟の絆の力！』
『たっぷり見せてあげるわよ～ん！』
「魔法カード、おジャマ・デルタハリケーン!!おジャマ・イエロー、ブラック、グリーンの3体が場に存在するとき、相手フィールドのカード全てを破壊する！」
「おじゃ万丈目、これは凄い！逆転に次ぐ逆転、これにより十代君の場は一気にがら空きだーっ！」
　戦闘破壊耐性を得たテンペスターといえど、効果破壊に対しては全くの無力。3体

揃ったおジャマ達の不思議な力に、十代の場のカードがすべて吹き飛ばされていった。やがて自分たちの仕事の結果に満足げなおジャマ達がようやく回転をやめて着地し、万丈目の元に戻っていく……だがその途中で、ふとイエローがあることに気がついた。
『ねえ万丈目のアニキ、ちょっといい？』
「なんだいきなり、やかましい。今は本番中だぞ」
『もう～、それはわかってるわよ～。でもアニキ、もう手札が1枚もないじゃない？おいら達は次のターン、どうすればいいのさ』
その質問に万丈目はちょっと眉をひそめ、なんだか随分と久しぶりに見る悪人面をしてみせる。
「俺が知るか、そんなこと。せいぜい狙われるのが自分じゃないことを祈ってるんだな」
『『『……』』』
実にあっさりと、なんてことないように言い放たれた内容に、最初3兄弟がそれぞれ顔を見合わせる。それから数秒後、少しでも自分が他の2人の後ろに隠れることで次のターンをやり過ごせる確率を上げようとする醜い争いが盤上で始まった。……兄弟の絆の力、ねえ。
とはいえ、それはあくまで精霊の視認できる僕らだから見える世界での話。アカデミアのほとんどの観客も、レポーターのお姉さんも、自分たちが全国放送に兄弟喧嘩を流

していることなど気づいてすらいないだろう。ちょっとソリッドビジョンが荒ぶってるな、程度の認識止まりのはずだ。

まあそれはさておき、イエローの指摘通り手札の無い万丈目にはこのターンできる事は既にない。ターンプレイヤーは再び十代に移り、本人公認の奇跡を呼ぶドローが行われる。

「俺のターンだな。魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！」

「十代君、ここに来てまたもや怒涛の引きの良さを見せる！ミラクル・フュージョンは通常の融合とは違い、ヒーロー限定となった代わりにその素材を墓地からも選ぶことができるようになります！」

さっきから、あのお姉さんの知識量が凄い。ただのレポーターかと思ったら、このデュエルで使われたほとんどのカード効果を把握している。逆に言うと、そのお姉さんでも咄嗟に効果の出てこなかったテンペスターって一体……いや、もはや何も言うまい。僕は好きだよ、あのデザイン。

そんなことを考えている一方、フィールドでは既に融合が始まっていた。墓地から融合素材として除外されるのは、フェザーマンとバーストレディ。使い手が十代となると、ここで登場するヒーローは「奴」しかありえない。僕にとっての霧の王と同じように、十代にとっての永久のマイフェイバリット。

「融合召喚、フレイム・ウィングマン！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻２１００

「ついに現れたか……」

「いいや、まだだ！さらに魔法カード、融合回収（フュージョン・リカバリー）を発動。融合召喚に使われたスパークマンと融合を墓地から回収し、そのままこの融合を発動……手札のスパークマンと、場のフレイム・ウィングマンで融合召喚！全力で行くぜ、シャイニング・フレア・ウィングマン！」

十代のフェイバリットカード、フレイム・ウィングマンがスパークマンの光の力を受けてさらなる高みに登る。全身のほとんどを包みこむ丸みを帯びた純白の鎧はそれ自体がほのかに暖かい光を放ち、聖なる光を纏いフィールドに立つその姿はまさに聖戦士という形容がふさわしい。２度にわたる融合を経て呼び出されたこの白い戦士こそが、融合軸ヒーローの頂点とも呼べる存在だろう。

そしてその効果は素材となったフレイム・ウィングマンの力を受け継ぎつつ、より攻撃的なものへと進化を遂げている。

「シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力は、墓地に存在するＥ・ＨＥＲＯ１枚につき３００ポイントアップする。俺の墓地に残るヒーローはバブルマン、テンペスター、フレイム・ウィングマン、スパークマンの４体、よって１２００ポイントアップ

だ」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　攻２５００→３７００

「だが、俺の場のおジャマ３体はどいつも守備表示で、しかもその攻撃力は０。いくらシャイニング・フレア・ウィングマンを呼び出そうと、俺にダメージは通らないはずだ」

そう、確かに万丈目の言葉は正しい。でもその正しさは、あくまで常人を基準とした場合の言葉でしかない。十代の引きの強さの前では、常識すらも脇にどいていく。

「魔法カード、ＨＥＲＯの遺産を発動。俺の墓地から素材モンスターが指定された融合ヒーローのテンペスターとフレイム・ウィングマンをエクストラデッキに戻し、カードを３枚ドローするぜ。そして魔法カード、Ｈ―ヒートハートを発動！このターンの間シャイニング・フレア・ウィングマンその攻撃力を５００ポイントアップし、さらに貫通能力を得る！」

「十代君、一切攻撃の手を緩めない果敢な攻めっぷりだ！貫通能力を得ての攻撃で、おじゃ万丈目のモンスターとライフを一気に削る作戦、これが、デュエルアカデミア代表の実力なのでしょうか！」

ＨＥＲＯの遺産により墓地のヒーローが減り、シャイニング・フレア・ウィングマンの輝きがやや落ちる。しかしその光を補うかのように、燃え盛るＨの文字がそのバックに堂々と現れた。

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　攻３７００→３１００→３６００

「バトルだ！じゃあ、えっと……おジャマ・ブラックに攻撃！シャイニング・シュート！」

『嫌だぁーっ！』

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　攻３６００→おジャマ・ブラック　守１０００（破壊）

おじゃ万丈目　ＬＰ３６００→１０００

なんだかものすごく切実な断末魔とともに、ブラックの体が爆散する。さすがの十代も、あそこまで明確に拒否されると若干やりにくそうだ……かと思ったが、全然そんなことはないらしい。やっぱ十代、ちょっとドライになっちゃってるな。

それがいいことか悪いことかは、僕にはよくわからない。もしかしたらそれが成長する、っていうことなのかもしれないけれど。

「またこれで逆転だな。カードをセットして、ターンエンドするぜ」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　攻３６００→３１００

おじゃ万丈目　ＬＰ１０００　手札：０

モンスター：おジャマ・イエロー（守）

おジャマ・グリーン（守）

魔法・罠：なし
十代　ＬＰ４００　手札：１
モンスター：Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「互いにライフは残りわずか、いよいよこのデュエルも終盤に差し掛かってまいりました！フィールドの状況だけで見るならば大型モンスターのいる十代君の方が有利ですが、おじゃ万丈目、このドローで奇跡を起こせるのか!?」

「俺のターン、ドロー！魔法カード、馬の骨の対価を発動！フィールドから効果モンスター以外のモンスターであるおジャマ・グリーンを墓地に送ることで、カードを２枚ドローさせてもらうぞ」

『せっかく助かったのによー……』

あまりといえばあまりのこの扱いには本人も思うところあったらしく。ぶつくさ言いながらグリーンが墓地に送られる。これで万丈目の手元には２枚の手札と、フィールドのおジャマ・イエローのみ。自分が最後まで生き残ったことにこっそりと安堵の息を吐くイエローだったが、次の瞬間その表情が凍りついた。そのまま万丈目のセリフを遮り、イエローにしては珍しく万丈目相手に食い下がっていく。

「お、もう１枚引いたか。２枚目の馬の骨の対価を発動、おジャマ・イエローを……」

『ちょちょちょちょっと待って万丈目のアニキ、そこはもっとこう、最後に残ったおいらが知恵と勇気を振り絞って兄弟の敵を取るとか、そういうカッコいいストーリーがあるもんじゃないの!?』
「……なんだと?」
『だからもっとほら〜、いい加減コストにするとかじゃなくってさぁ、たまにはおいらだってアームド・ドラゴンのダンナやＶＷＸＹＺのダンナみたいにバリバリーっと活躍したいのよ』
「お前は自分の底が知れた知恵や勇気より先に、俺のデッキを絞るのを手伝え！おジャマ・イエローを墓地に送り、カードを２枚ドローする！」
『アニキのいけず、ケチンボ、鬼、悪魔、万丈目！』
「やかましい！それにこの手札なら、お前にはどうせまたすぐに働いてもらうことになる」
『へ?……アニキ、このカードって！』
　カードとしては墓地に送られたものの、イエローの精霊がふわふわと浮き上がって万丈目の手札を覗き込む。その表情がぱあっと明るくなったところで、万丈目が満足げに笑った。
「そういうことだ。さあ待たせたな、十代。魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地のおジャ

マ・イエロー、ブラック、グリーン、そしてアサルトワイバーンとアームド・ドラゴンＬＶ５の５体をデッキに戻し、カードを２枚ドローする」

「おじゃ万丈目も怒涛のドローを見せ、なんと手札をわずか１枚の状態から４枚にまで回復させた！この勝負、まだまだどちらに勝利の女神が微笑むのか予想がつきません！」

まるで十代のような引きを見せつけ、手札を１ターンで爆発的に増やす万丈目。お姉さんも言っていたけどこのデュエル、もしかしたらもしかするかもしれない。そう考えているのは僕だけでは無いようで、会場中の空気までもが次第に変化してきた。

「フィールド魔法、おジャマ・カントリーを発動！カントリーは１ターンに１度、手札のおジャマカード１枚を捨てることで墓地のおジャマ１体を蘇生することができる」

「墓地のおジャマ？でも万丈目、もう３兄弟はデッキに……」

「甘いぞ、十代。甦れ、おジャマ・ブルー！」

『はいなー』

万丈目の呼びかけに応えておジャマの里に立ち並ぶ家の１軒の扉が開き、その中から青いおジャマが口紅を塗りながら登場する。

おジャマ・ブルー　守１０００

「どうだ十代。これが俺の手に入れた、新たなるおジャマの力だ！」

「そんなカードいつの間に……いや、あの時か！」
「おじゃ万丈目、なんと４色目のおじゃまを特殊召喚したーっ！あのカードは一体いつの間に墓地に送られたのか、後にＶＴＲで解説を行いたいと思います！」
『魔力の泉だな。手札を捨てる余裕があったのはそこしかない』
　チャクチャルさんの解説に、ようやく僕も得心する。確かにあの時、万丈目は魔力の泉のデメリットでドローしたのち手札を１枚捨てていた。そんな手札コストが、こんな詰めのタイミングになって生きてくるとは。
「この瞬間おジャマ・カントリーのさらなる効果と、捨てられたおじゃマジックの効果が発動する。おじゃマジックは手札かフィールドから墓地に送られた時イエロー、ブラック、グリーンの３体をデッキから手札に加え、カントリーは場におジャマモンスターいる限り全てのモンスターの攻守を逆転させる！」
「シャイニング・フレア・ウィングマン……！」
　シャイニング・フレア・ウィングマンの素の守備力は２１００あるうえ、攻撃力上昇効果は攻守が入れ替わろうと引き継がれる。とはいえ、ここで攻撃力がダウンするのは十代にとっても嬉しい話ではないだろう。しかも万丈目の手札に再びあの３体が集結した、ということは、この後の展開も容易に想像がつく。
　おジャマ・ブルー　守１０００→０　攻０→１０００

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　攻３１００→２７００　守２１００→２５００

「魔法カード、融合を発動！手札のおジャマ・イエロー、ブラック、グリーンで融合召喚だ！もう1度行って来い、お前たち！」

『ついにこの時が来たのね！おいらたちに任せて、万丈目のアニキ！』

『『『おジャマ究極合体！』』』

白い体の大部分を占める巨大な顔に対してあまりにも貧弱な申し訳程度の体、そして胴体というよりもはや顔から直接伸びる手足。風呂敷のマントが風もないの着地の衝撃にたなびき、下半身と頭にかぶった赤い花柄パンツがきりりとカラーアクセントとして映える。

「出でよ、おジャマ・キング！」

『むんっ！』

おジャマ・キング　攻０→３０００　守３０００→０

「でました、おジャマ・キング！あの異様な風体のモンスターこそが、おじゃ万丈目の操る最後の切り札なのでしょうか！」

「おジャマ・キングもまた、カントリーの下で攻守が入れ替わる。バトルだ、十代！ゆけっ、おジャマ・キング！」

勢いよく膝を曲げて飛び上がり、キングの巨体が宙に舞う。手足をばたつかせて必死に飛距離を稼ぎ、どうにかシャイニング・フレア・ウィングマンの頭上にたどり着いた。巨大な口が重々しく開き、低い声が会場全体に響き渡る。

『フライング・ボディアターック！』

叫び終わると同時に体を前傾姿勢にし、重力に従ってそのまま頭のパンツから落下を始める。呆然としてその様子を見上げたまま動けないシャイニング・フレア・ウィングマンに変わり、十代が伏せカードを発動させる様子が見えた。

「トラップ発動、攻撃の無敵化！このカードの効果でシャイニング・フレア・ウィングマンは、このターン戦闘でも効果でも破壊されない！」

「やはり防いだか、おジャマ・ブルーを守備表示で出しておいたのは正解だったな。だがそれも予想の範囲内だ、ダメージだけは受けてもらうぞ」

おジャマ・キング　攻３０００→Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　攻２７００

十代　ＬＰ４００→１００

「十代君、健闘していますがもはやそのライフは風前の灯！果たしてもう１度奇跡は起きるのか、それともこのままおじゃ万丈目が勝利の栄光を手に入れるのでしょうか！」

攻撃の無敵化は使い切りのトラップ、これで十代にこれ以上身を守るすべはない。で

も、これまでも十代はそんな状況から何度も奇跡の大逆転を成し遂げてきた。次のターンにまた逆転が成り立つのか、それとも万丈目がそれを耐えきるのか。いずれにせよ、次の十代のターンで全てが決まる。

「さあかかって来い、十代。カードをセットしてターンエンドだ」

万丈目からの誘いに一度目を閉じてからデッキに手をかけ、深呼吸する十代。沈黙の一瞬の後カッと目を見開き、勢いよくカードを引いた。

「俺のターン、ドロー！……魔法カード、Ｒ―ライトジャスティスを発動！このカードは発動時に俺のフィールドに存在するＥ・ＨＥＲＯの数だけ、場の魔法・罠を選んで破壊する。選べるカードは１枚……おジャマ・カントリーを破壊し、これによりすべてのモンスターの攻守は元の数値に戻る！」

「ここでそんなカードを引いたか……！」

十代のラストドローは、おジャマ・キングの攻撃力がシャイニング・フレア・ウィングマンのそれを上回っているという前提そのものを覆す魔法・罠破壊カード。頼みの綱だったカントリー消滅により、全てのモンスターの攻守が元々の数値へと入れ替わっていく。

おジャマ・キング　攻３０００→０　守０→３０００

おジャマ・ブルー　守０→１０００　攻１０００→０

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　攻２７００→３１００　守２５００→２１００
「これが最後のバトルだな。シャイニング・フレア・ウィングマンでおジャマ・キングに攻撃、シャイニング・シュート！」
「確かにこれが最後のバトルだ十代、ただしお前にとってのな。リバースカーｄ……何!?おい、どういうことだ……？」
攻撃に合わせ、最後の伏せカードを使おうとする万丈目。だが突然、その動きが止まった。着ぐるみの耳の部分を押さえつけ、慌てた様子で何かを空に問いかける。恐らく、この距離だと観客やお姉さんにはあの声は聞こえていないだろう。現に隣のクロノス先生も、万丈目のおかしな様子には気が付いた風もない。ダークシグナーゆえの向上した身体能力の持ち主である僕だからこそ、辛うじて耳に入ってきたようなものだ。
結局、そのまま光り輝くヒーローの攻撃はおジャマ・キングに命中した。どこかスッキリしない物を残しながらも、勝負はついたのだ。
Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　攻３１００→おジャマ・キング　攻０（破壊）
おじゃ万丈目　ＬＰ１０００→０

「あーっと、ついに決着！長きにわたる激闘を制したのはデュエルアカデミア本校代表、遊城十代君でした！会場では現在、このどちらが勝ってもおかしくなかった素晴らしいデュエルを魅せてくれた遊城十代君、そしてあと1歩届かなかったおじゃ万丈目の両者に盛大な拍手が響いています！注目の新人、おじゃ万丈目のこれからの成長に我々デュエルチャンネルとしても大いに期待しつつ、今回の中継フェイズはここでおしまいです！名残惜しいですが、来週もまたデュエルチャンネルでお会いいたしましょう！」

レポーターの人が、カメラに向かって締めの一言を述べる。その後ろで、十代が倒れた万丈目の方へ近寄っていくのが見える。万雷の拍手のせいでかき消され、恐らくマイクも拾えていないほどの小さな声ではあったが、なんとか十代が最後にかけた言葉を僕だけは聞き取ることができた。

「万丈目、今日のお前は強かったぜ。だけどメディアに注目されるために最後にわざと負けるなんて、お前がエドから学んだことがそれだったら、正直がっかりだ」

やはり十代も、最後の万丈目の様子が引っ掛かったのだろう。それだけ言うと何も返さず、ただ悔しそうにうつむくだけの万丈目の方を振り返りもせずに会場から出て行ってしまった。

だがその時の万丈目の表情が何となく気にかかった僕は、クロノス先生にあることを

頼むことにした。訝しまれながらも了承を貰い、熱気冷めやらぬ会場を2人で後にする。すぐに目的の場所、コンピューター室にたどり着き、手近な1台を起動させて教員専用のページを開いてもらう。こればっかりは僕1人ではどうしようもないので、クロノス先生の手が必要だったのだ。

「それにしてもシニョール清明、さっきのデュエルのデータが見たいだなんて、一体どういう風の吹き回しナノーネ。確かに教員用のホームには生徒たちの成績をつけるために、常にデュエルデータは送信されてきますーが……」

「あ、最初の方じゃなくて、ラストターンのあたりをお願いします。万丈目が最後に伏せていたカードのあたりを。どうしても、気になることがあったんですよ」

最後に万丈目が伏せていた、だけど使われなかったカード。十代はそれを、わざと負けるために発動しなかったのだと読んでいた。正直僕も同じ気持ちではあるけれど、それでも違うと心のどこかでは思っていた。それを裏付けてくれる、確たる証拠が見たかったのだ。昔はいざ知らず今の万丈目はそんなインチキするような奴じゃない、そう信じたかった。だが祈るような気持ちのなかで出てきたカードデータは、そんな思いを一瞬で吹き飛ばす現実を押し付けてきた。

「ややややのや、これは一体どういうことナノーネ」

「このカードは……」

僕もクロノス先生も、その結果に言葉を失う。画面に映っていたカードの名は、メタバース。発動時にデッキからフィールド魔法1枚を手札に加えるか直接発動することができる、フリーチェーンのトラップカード。

もし万丈目が最後のシャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃宣言時にこのカードを使ってもう1度おジャマ・カントリーを発動させていれば、再び攻撃力の逆転が起きておジャマ・キングによる返り討ち、どころかそのダメージで万丈目の最後の逆転が成立していた可能性が高い。

カントリーが1枚しか入っていない可能性も一応あるとはいえそんなことはまずないだろうし、第一あの最後の言葉を聞く限りでは途中まで発動させる気が満々だったはずだ。

にもかかわらず、万丈目は最後の最後で勝負を捨てた。

「万丈目……どうして……」

思わずつぶやくが、どこからも返事はない。それも当然だ。クロノス先生も、その疑問への答えは持ち合わせていないのだから。

ターン１１６　邪魔の化身とラスト・『Ｄ』（邪）

「……なにこれ」

僕の目の前には、大量の雑誌がある。どれも表紙にドヤ顔の万丈目……いや、着ぐるみ着用のおじゃ万丈目がどどーんと様々なポーズを決めた状態で写り、大文字で特集タイトルが綴られている。『君の心におジャマします――大型新人、おじゃ万丈目の素顔に迫る』『デュエリスト対談「おじゃ万丈目」』『おジャマショック到来!?ＬＶモンスター品薄相次ぐ』『ファン必読!おじゃ万丈目、今月おジャマするスケジュール一覧』『怒涛の新連載!「３匹のおジャマ」』『万丈目グループ、株価爆上げ!?超上流へと「おジャマします」』『下着販売メーカーも嬉しい悲鳴!?花柄赤パンツ売上前年度３００％増』などなどなど……なんかもう凄いね、うん。

雑誌の束をいったん脇にどけ、テレビをつけるとちょうどニュース番組がやっていた。

『視聴者の皆さんおはようございます、ＫＣデュエリストニュースの時間がやってまいりました。本日のゲストは今話題の彼、おじゃ万丈目さんです!』

……知ってた。この万丈目バブルとでもいうべき現象はあの十代とのデュエルから

かれこれ1週間経った今でも衰える兆しすら見えず、それどころか日が経つにつれますます加熱しているような節さえある。もちろん友人として、僕も素直に喜びたいところではあるのだが……どうにも、そんな気分にはなれないでいた。

もちろん、その原因はわかっている。あの十代とのデュエル、ラストターンの攻防。土壇場で勝負を捨てた万丈目のことを十代は見限ってしまったらしくあれ以来世間の流行にもどこ吹く風、万丈目のまの字も口にしたことはないが、僕はまだそこまで割り切れそうにはない。

とにかく、もういっぺんでいいから彼に直接会いたい。万丈目は本当に、勝負を投げ出してウケを狙うほどの色物としてやっていくつもりなのだろうか。それならそれで、そんな生き方も彼の人生なんだろう。その覚悟を決めたうえでその道に飛び込んだのなら、僕個人として何か言う権利はない。ただ、それでも最後に本人と会って話をしてみたかった。この話、どうもまだ何か裏がある気がする。

それとも僕がそう思いたいだけで、単に現実を見れていない事の表れなのか。だとしたら、やっぱりそれは悲しいものだ。

「遊野さーん、宅配が届いてますよー」

「はい？」

レッド寮のうっすい壁を通じて聞こえてきた声に思考を中断され、ドアを開けて声の

主を確かめる。名前は覚えていないけれど、顔なじみのアカデミアの事務員さんだ。その手の中には、ごくシンプルな小包が1つ。

「……僕に？」

「今日の便で朝一に届きましたよ。じゃあ、この紙にサインお願いします」

「はあ、どうも……？」

僕に荷物なんて、誰だろう。親父……なわけないし、童実野町に友人なんて呼べる生易しい関係の奴はいない。

今でこそ海馬コーポレーションが睨みをきかせているおかげで少しはマシになったらしいが、僕が子供時代のあの町の治安と民度はそりゃあもうひどかった。そんなところに母親を事故で亡くしたケーキ屋の息子だなんて差別点の塊みたいなガキが放りこまれたもんだから、常にターゲットを探していた連中からしてみればさぞかし鴨がネギ背負ってきたように見えただろう。親無しだの片親だのケーキ屋だのと散々にいじめられ馬鹿にされ、それでも生きるためにもがいているうちにめきめき鍛えられて、喧嘩ばかり強くなっていったものだ。あの時は特に意識していなかったけれど、毎日のように喧嘩騒ぎを起こしては素手だったりその辺の石ころや木の枝だったり、あげくの果てには工事現場の鉄パイプまでちょろまかしては数人単位で返り討ちにしていた僕も客観的にみるとかなりの不良だったのだろう。

ま、今となってはもはや昔のことだ。それに、あの経験もそう悪いことばかりではない。ダークシグナーになってから著しく底上げされた身体能力は、あの時期に少しでも体力消費を抑えて効率的に逃げ回ったり隠れては不意打ちしたりといった体の動かし方を頭に叩き込んでおかなければ絶対に使いこなせなかったろう。

とと、つい昔のことを思い出してしまった。そう愉快な記憶でもないし、なるべく頭の片隅で放置しておきたかったのに。それはともかく、今はこの小包だ。

「箱の中身はなんじゃろな、っと。カード？」

『うわ～ん、清明のダンナ～ッ！』

「!?」

『へ？……きゃんっ！』

包みを解いた瞬間、見えてきたのはデュエルモンスターズのカードの裏面。何気なく拾い上げて表にすると、その中から黄色の顔が奇声とともに迫ってきた。咄嗟のことに受け止めてやる余裕もなくさっと身をかわすと、そのまま僕の顔の横をすり抜けて後ろの壁に頭から突っ込んでいく。ベシリ、という嫌な音がして、気を失ったらしいその見慣れた精霊……おジャマ・イエローが床に倒れた。

「イエロー!?なんでここに……」

手の中に残ったカードも、当然おジャマ・イエロー。精霊憑きということは、どう考

えてもこれはもう万丈目のカードだろう。完全にのびてしまったイエローを持ち上げ、とりあえず机の上に寝かせておいた。今のうちに、十代も呼びに行こう。どうせ興味は持たないだろうけど、そのせいで隠し事をしたみたいになるぐらいなら最低限彼の耳にも入れておいた方がいいだろう。

「なあ清明、今聞き覚えのある声が……」

「あ、お帰りー」

と思ったけど、わざわざ僕が出向くまでもなかった。釣り竿片手にちょうど帰ってきたらしい十代が、ドアを開けてひょっこり顔を出す。

「おジャマ・イエローじゃないか。何してるんだ、こんなところで?」

「そんなもんこっちが聞きたいんだけどね。ほーれ、起きろー」

『う〜ん……はっ!』

もう少し寝かせてやるつもりだったけれど、十代のほうから来たなら話は別だ。カタツムリで遊ぶ時の要領でちょいちょいと触角のような目を突っついてやると、すぐに跳ね起きて辺りを見回す。僕らの顔を認識すると、突然その両目からぶわっと涙が溢れ出した。

『よかった、会えてよかったわ〜!お願い、万丈目のアニキを助けてあげて!』

「助けて?万丈目を?」

「どういうことだ？」

『実は……』

　涙ながらにおジャマ・イエローが語りだした話は、なかなかに嫌な話だった。エドのために開発されたという最後のＤカードとその紛失、十代と万丈目のデュエルに賭けられていたエドの進退、そしてその全てが現おじゃ万丈目のプロデューサー、マイクの手のひらの上で起きていたこと。

　そういえばエドも、光の結社事件の時にはかなり手慣れた様子で盗聴対策を考えて動いていた。プロの世界ってのは、どうしてこう生々しく嫌な話ばかりついて回るのだろう。それを呑み込んでこそのプロの表舞台、だなんて口で言うのは簡単だけど、なんともスッキリしない話だ。

『……っていうことなのよ。でもマイクってあの嫌な男、用心深くて全然隙がないものだから、アニキもそのカードがどこにあるか探すチャンスもないって……だからオイラがこうやって、小包に隠れてアカデミアまで来たってわけ。お願い、このおジャマ・イエローの顔に免じて、アニキをあのプロデューサーから解放してあげて！』

「事情は分かったけど、そんなこと言われてもな……大体、万丈目はもうこの島に居ないんだろ？俺らのところに来てどうしろってんだよ」

『それについては、え～っと……あったあった、これよぉこれ！』

十代のもっともな指摘に1瞬言葉に詰まるも、部屋の中を見回してあるものを見つけたイエローがすぐに気を取り直す。そのままふよふよと飛んで行った先には、さっき僕がのけておいた大量の雑誌の束。その中の1冊を指さして、もう片方の手でこっちこっちと手招きする。その本の表紙にはおじゃ万丈目のアップ写真と、その特集記事のタイトル。

「『ファン必読！おじゃ万丈目、今月おジャマするスケジュール一覧』……これ？」

『そう、これなのよん』

言われるがままにぱらぱらとページをめくると、イエローお目当てのページはすぐに見つかった。横から十代が覗きこんでくる気配を感じながら、予定表とやらの該当箇所を読み上げる。

「えっと……2日後にアカデミアで、我らがデュエルの一番星、おじゃ万丈目対地獄帰りのダークヒーロー、エド・フェニックスによる師弟対決？」

『アニキの話だと、この時にもそのプロデューサーはくっついてくるはずだから、この島についてから試合が終わるまでに何とかしてほしいって。だからお願い、ねっ？』

「そんなこと言われてもなあ……要は、試合中にこっそりその最後のDカードとやらを盗んで来いってことだろ？」

これだけ言われても、十代はあまり気が乗らないらしい。僕だってタイマンや闇討ち

ならともかく、盗みになんて手を染めたことはない。
ないが、そういうことがいかにも得意そうな人は知っている。ただあの人に頼むとなると、別の場所から物凄いしかめっ面が僕に向けられるのは目に見えている。かといって他にあてもなく、気は進まないがため息を１つついてＰＤＦを取り出す。番号を打ち込みながら、イエローに釘を刺しておいた。
「イエロー。今から代引きで送り返したげるから、帰ったら万丈目に伝えといて。これ、いっこ貸しだからね」
……なんてことを言ってから、時は流れて２日後。再びやって来たテレビカメラや取材スタッフといった部外者でアカデミアが賑わう中、僕もまた本業に精を出してい……られたら、どれほど儲けが出ただろう。確かにおじゃ万丈目デビュー戦の時にも大々的な売り出しをやったばかりなので今回はスルーしてもよかったといえばよかったのだが、だからといって何もせずに見過ごすのはあまりにもったいない。
残念ながら、今日は少し勝手が違うのだ。「当日需要はいいんですか？」という葵ちゃんの疑問を振り切ってまで、本日休業の宣言をしたのには理由がある。
おジャマ・イエローから助けを求められて、はや２日。マイクなる悪徳プロデューサーについてはその道のプロに代わりに頼んでおき承諾も得たのだが、その時からなぜか全く彼女と連絡がつかない。最初の反応が結構乗り気だったからこの件は早いとこ、

それも万丈目たちが島に来るより先に片付くだろうと踏んでいただけに、正直この展開は想定外だ。とにかく万丈目とは本番前に話し合っておく必要があると思ったので、本業はすっぱり諦めたのだ。

「万丈目、万丈目ー」

「万丈目サンダー、だ。それよりその声、清明か？」

普段は更衣室の扉におじゃ万丈目様、と書かれた張り紙を張っただけの控え室の前に立ち、軽くノックして返事も聞かずに即ドアを開ける。放送開始までは、まだ少しある。まだ着ぐるみは着なくていいのか、いつもの黒服姿の万丈目がそこにいた。

僕の顔を認めて何か言おうとしたのか口を開きかけたのを手で制し、まず謝ろうと頭を下げる。

「万丈目、実は……」

「準、入るぞ」

まだ話し始めるかどうかのうちに扉が開き、どこかで見た覚えのある２人組の男が入ってくる。その顔を見て、万丈目が息を呑んだ。

「兄さん達、どうしてここに？」

「どうしたもこうしたもない。お前がついに政界、財界の我々に続きカードゲーム界にプロデビューしたと聞いてな、祝いの言葉を言いに来たんだ」

その言葉を聞いて、僕もようやく思い出した。この２人は万丈目長作と、同じく万丈目長次。僕らの知る万丈目の実の兄だ。財界、政界、カードゲーム界の頂点にこの３兄弟で君臨する事が目標のエリートコンビで、２年前にはアカデミアの買収をかけて万丈目と兄弟対決をしたこともある。その時に顔を見ていたのだから、それは見覚えがあって当然だ。

それにしてもわざわざ2人そろってアカデミアまでそれを言いにくるあたり、元々の兄弟仲は悪くないのだろう。買収事件のせいか何となく嫌味なエリートのイメージが先行していたけど、この万丈目の兄だけあって案外根は悪人でもないのかもしれない。現に万丈目も、突然の登場の驚きが覚めてからはどこか嬉しそうだ。

「すまない、わざわざこんなところまで来てもらって」

「なに、気にするな。それよりも、お前に渡したいものがあってな。俺たちはデュエルモンスターズについては素人同然だが、万丈目グループの財力を結集してお前にぴったりだと思われるカードを製造したんだ。もっと早くに渡してやるつもりだったんだが、思いのほか開発に時間がかかってしまってな。これならばそのデッキの形を崩さずに入れられるはずだ、ぜひ使ってくれ」

「兄さん……」

「じゃあな、準。俺たちはこの後も他の仕事があるからお前の雄姿を特等席で見ること

はできないが、お前のことは応援しているぞ」
「……ああ、ありがとう」
それだけ言うとやって来たときと同じように、嵐のように2人の万丈目兄は去っていった。万丈目の手元に残された3枚のカードを大切そうに撫で、1枚ずつ丁寧にデッキとエクストラデッキに入れていく。その作業が終わってから、改めて僕の方に向き直った。
「清明、お前がこうして俺のところに来た理由はわかっている。俺もこの数日ずっと観察していたが、最後のDカードはマイク本人が常に肌身離さず持っているらしい。まったく、用心深いことだ」
そう吐き捨てる万丈目の表情には、兄の前では隠していた焦り、苛立ち、そういったものが色濃く表れていた。だが、それも無理はないだろう。イエローから聞いた話によれば、マイク本人が直接現場に出向いて指揮を執るのは今回がラストチャンス。これ以降彼は仕事を持ってきては裏方から指示を出すことに徹するそうだから、カメラの前で直接罪を叩きつけられるのは今日が最後なのだ。
万丈目が深く息を吸い、僕の顔を真っ直ぐに見つめる。その目には、すでに硬い意志の力……誰が何と言おうとも聞こうとしないであろう、この男らしい負けん気の強さが宿っていた。

「よく聞いてくれ、清明。今日の試合で奴は俺とエドに途中まで本気で戦わせた後、適当なタイミングで八百長の指示を出すらしい。その時になったら合図を出すから、奴を取り押さえるのを手伝ってくれ」

「そりゃ構わないけどさ。万丈目、でもそれって……」

今日の一戦は、全国放送の生中継だ。たとえ悪徳プロデューサーの持ってきた仕事でも、エドのネームバリューも相まって全国から注目の集まる大チャンスには違いない。そんな大事な時に、プロとしてはまだ駆け出しの万丈目がアクシデントを自分から起こしにいくというのか。僕はまだプロでもなんでもないからともかくとして、仮にもプロがこれだけ大きな機会を棒に振るなんて……成功しても失敗しても、失うものが大きすぎる。

「皆まで言うな。カードを盗んだのが奴だとしても、元はといえばそれを止められなかったのはエドの付き人だった俺の不始末。本当ならば俺１人で片を付けたいところだが……いつも世話になってすまないな、清明」

それでもう話は終わりとばかりに立ち上がり、ロッカーから例の着ぐるみを引っ張り出す。もう着替えるから出ていけ、ということだろう。ま、チャクチャルさん並みに貴重な万丈目のデレシーンが見れただけでもよしとしますか。できれば万丈目なんかより女の子、特に夢想やレア度高そうな葵ちゃん辺りの方がよかったんだけどなあ。

……なんて考えているとは、まさか万丈目も思うまい。それにしても、こうやって聞くだけですでに穴だらけのプランではあるが、事前の仕掛けがだめになった以上この策に乗るしかない。1度だけ頷いて、控え室を出て行った。

「お待たせしました全国各地のデュエリストの皆さん、デュエルチャンネルのお時間です！今回私たちはなんと、つい先日も訪れた海馬コーポレーションのお膝元、デュエルアカデミア本校へとまたまたおジャマしています！」

ついこの間も来たレポーターのお姉さんが、またしてもマイク片手にカメラに向かって元気にしゃべる。あの人も、まさかこんなすぐにまたここに来ることになるとは思わなかったろう。と、ここであの時と同じように、あざとく耳に手を当てて体を傾ける。

「……おやおや？おジャマ？そうなんです！なんと今回デュエルを行うのは、つい先日この番組でデビュー戦を捉えたあの大型新人、おじゃ万丈目！対するは最近まさかの電撃引退を果たしたプロデュエリストにしておじゃ万丈目の師、貴公子エド・フェニックス！なんと彼はこの1戦に自らの復活を賭けているとのことですが、これは自らを追い込むことで師弟の情を切り捨て、本気のデュエルをするという決意の表れなのでしょうか！そうだとすれば、おじゃ万丈目にとっては何と凄まじい試練となるのでしょう！」

なるほど、エドの引退をそう絡めてきたか。感心しながら見守っていると、デュエル場の両端から今日の主役２人がゆっくりと歩いてきた。たった１人でやってくるエドに対し、後ろにいかにも小物そうなスーツ姿の男を控えさせる万丈目。恐らく、あれがプロデューサーのマイクとやらなんだろう。

「両者ともに気合は十分、一触即発の雰囲気が漂っております！もはや２人に言葉は無用、ということでしょうか！それでは私も、もはや語ることはありません！視聴者の皆さんとともに、このデュエルを最後まで見守っていきましょう！」

カメラの死角になる位置で、やや体より大きめな上着を羽織って帽子をかぶりマスクをつけた上に眼鏡までしているせいで表情どころか性別すら読めないのスタッフらしき人が自分の手首をこれ見よがしに叩くジェスチャーをする。そのまま片手を大きく上に挙げ、開いた指を１本ずつ折りたたんでいく。あれが、本番のカウントダウンがわりなのだろう。５……４……３……。

「そこまで堕ちたか、万丈目……！」

神経を集中させていた僕だからかろうじて聞き取れた程度の小声で、エドが苛立ちを見せる。多分、八百長の存在がエドにも伝えられたのだろう。間違っても試合を断られないように、こんなギリギリになるまで伝えない。効果的かもしれないが、やり口がいちいち汚い。２……１……。

「「デュエル！」」
　カウントダウンを終えたスタッフが、相変わらずカメラの死角を縫って足音を殺し後ろに引いていく。撮影の手伝いでもするのかと思ったら、万丈目陣営のすぐそばまで歩いていきそのまま観戦モードに入ってしまった。随分くつろいでいるけれど、撮影とかいいんだろうか。
　そんな動きには誰も気づかず、ついに2人のデュエルが始まった。万丈目の言葉通りなら、少なくとも今はまだ2人とも本気で戦うはずだ。
「僕の先攻だ！魔法カード、デステニー・ドローを発動。手札のドレッドガイをセメタリーに送ることで、カードを2枚ドローする。モンスターをセット、さらにカードを2枚セットしてターンエンドだ」
　エドにしては大人しい立ち上がりで、守りを固めるだけでターンが交代する。だが万丈目の着ぐるみに包まれた表情には、ひとかけらの油断もない。
「俺のターン、ドロー！魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！手札のモンスター1体をコストに、デッキからレベル1モンスターを特殊召喚する。来い、カオス・ネクロマンサー！」
「あーっと、おじゃ万丈目、またしてもデッキを変更したのか？カオス・ネクロマンサー、あれは墓地のモンスターの数により攻守を変動させるモンスターです！ですが今のお

じゃ万丈目の墓地には、たった今コストとして墓地に送った1体しかモンスターが存在しないぞ!?」

カオス・ネクロマンサー　攻０→３００

「カオス・ネクロマンサー……」

確かに、レポーターのお姉さんに見覚えはないだろう。あの時万丈目はただのいち生徒だったのだから、あるわけがない。だけど、この学園にいる僕らは知っている。あれは万丈目がかつて1度だけ使用した縛りデッキ、【攻撃力０】において逆転の切り札となったカードだ。

あれ以来使ってこなかったあのカードをここでデッキに入れてきたということは、その意味するところは1つ。万丈目はこの1戦、自分の持ちうるすべての戦術を使って実力でエドに勝とうとしている。

……負けるな、万丈目。エドにだけじゃない、この決してきれいごとだけじゃないプロデュエリストの世界に、それを象徴するあのマイクなんかに、負けるな、万丈目。

「カオス・ネクロマンサーをリリースして、アドバンス召喚だ。来い、アームド・ドラゴン　ＬＶ５！」

「出ました、おじゃ万丈目の切り込み隊長！アームド・ドラゴンの咆哮が、再びこのアカデミアに轟いたあっ！」

レポーターお姉さんの言葉通り、アームド・ドラゴンが吠える。だがその体が着地するかしないかのうちに、いきなり光に包まれた。
アームド・ドラゴン　ＬＶ５　攻２４００
「これだけではないぞ、エド。魔法カード、レベルアップ！このカードの効果により、本来の条件を無視してＬＶモンスターのアームド・ドラゴンは進化する！」
アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００
「おじゃ万丈目、いきなり最上級モンスターを特殊召喚しました！レベルアップ！を用いての奇襲戦法、まさしくＬＶモンスターの強みを最大限に生かしての上級戦術です！」
「攻撃力２８００、か」
「バトルだ、アームド・ドラゴン。セットモンスターを粉砕しろ、アームド・バニッシャー！」
わずか１ターンで現れたＬＶ７が、剛腕をエドの眼前に叩き付ける。１瞬だけレイピアらしき武器を手にした仮面の人型モンスターが見えた気がしたが、すぐにその姿もかき消えた。
アームド・ドラゴン　ＬＶ７　攻２８００→???　守７００（破壊）
「この瞬間、バトルで破壊されセメタリーに送られた幻影の魔術士のエフェクト発動！

デッキから攻撃力１０００以下のヒーロー１体を、守備表示で特殊召喚する！カモン、ディフェンドガイ！」

アームド・ドラゴンに張り合うかのように、煉瓦の体を持つ巨漢のディーヒーローがあまりの重さに砂埃を巻き上げて着地する。片膝立ちになるその姿はまさに鉄壁の盾で、いかなる攻撃も通さないとの気概が強く伝わってくる。そして実際その守備力は、レベル４の下級モンスターとしては高いを通り越してもはや異常の域だ。

Ｄ―ＨＥＲＯ（デステニーヒーロー）　ディフェンドガイ　守２７００

「そのモンスターを起点に守りを固めるつもりだろうが、甘いぞエド。メイン２に移行してアームド・ドラゴンの効果を発動！手札のモンスター１体を捨てることで、そのカードの攻撃力以下の攻撃力を持つ相手モンスター全てを破壊する、ジェノサイド・カッター！」

「おじゃ万丈目の捨てたあのカードは……攻撃力１０００、黒蠍―茨のミーネ！一方エドの繰り出したディフェンドガイは守備力こそ２７００を誇りますが、攻撃力はわずかに１００！これはおじゃ万丈目、先の先を見越しての容赦ない追撃だーっ！」

アームド・ドラゴンが腕を振り、三日月形をした光のカッターを連射する。顔色一つ変えないエドをよそにディフェンドガイめがけてまっすぐ飛んで行ったそれは、しかしその巨体に到達する寸前で見えない壁に阻まれたかのように明後日の方向へ向きを曲

げる。
　万丈目の舌打ちが聞こえた。エドの場で、1枚のカードが表になっている。
「だがアームド・ドラゴンのエフェクトには、致命的な弱点がある。それは裏側守備表示のモンスターに対し、その効果は何の意味もないということだ。速攻魔法、皆既日触の書を発動！全フィールドのモンスターを裏側守備表示とするこの効果なら、アームド・ドラゴンも空振りだな」
「なんとエド・フェニックス、アームド・ドラゴンの効果の裏を付いた！おじゃ万丈目、これでは完全にコストの払い損だ！これこそが新人のおじゃ万丈目と、プロとしての経歴も長いエド・フェニックスとの実戦経験の差だというのでしょうか!?」
　いや、一概にそうとも言い切れない。確かにディフェンドガイの破壊こそ失敗はしたが、見方を飼えれば伏せカードを使わせたともいえるし、アームド・ドラゴンが低い守備力を晒してしまうのはともかく手札コストの損失に関してはそこまで痛手でもない。ただ手札を無駄に捨てただけならともかく、皆既日蝕の書には強力な性能と引き換えにそれなりのデメリットもあるからだ。
「逃がしたか。ならばカードを1枚伏せ、これでターンエンドだ。そしてこのターンのエンドフェイズを迎えたことで……」
「……皆既日食の書のもう1つの能力により、お前のアームド・ドラゴンはリバースされ

る。そしてその数1体につき1枚、お前はデッキからドローすることが許される。だが、ただでというわけにはいかないな。永続トラップ、便乗を発動！このカードは、相手プレイヤーがカード効果によるドローを行った時にのみ発動できる」

　万丈目の言葉の後を継ぐように、説明の後半をエドが行う。だけど、便乗か。あのカードは確か、これ以降万丈目がカード効果によるドローを行うたびにエドもまたカードを2枚引くようになるカードだったはずだ。恐らく、本来は表側守備表示だと相手にドローさせるデメリットの発生するディフェンドガイとのコンボで使う予定だったのだろう。万丈目の予想外の猛攻に、このターン中に便乗を発動するためには皆既日蝕の書を切らざるを得なかったというところか。

　万丈目も同じ結論に至ったらしく、少し嫌そうな顔こそしたもののすぐに気を取り直す。

　???→アームド・ドラゴン　ＬＶ７　守１０００

「便乗……まあいいだろう、この1枚は引かせてもらうぞ」

「このわずか往復1ターンの間に、目まぐるしく戦況は変化しております！しかしアームド・ドラゴン、その守備力はわずか１０００！これはおじゃ万丈目にとって、かなりの痛手と言えるでしょう！」

　おじゃ万丈目　ＬＰ４０００　手札：1

モンスター：アームド・ドラゴン　ＬＶ７（守）
魔法・罠：１（伏せ）
エド　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：???（セット・ディフェンドガイ）
魔法・罠：便乗
「僕のターンだ。魔法カード、カップ・オブ・エースを発動。このカードは発動時に正位置か逆位置かをランダムに決定し、正位置なら僕が、逆位置ならお前が２枚ドローする。さあ万丈目、この回転を止めてみろ！」
「……ストップだ」
かつて斎王も愛用していたドローソース、カップ・オブ・エース。あの時は斎王自身の能力も合わせることで実質３枚積める強欲な壺となっていたが、今回はその恩恵もなく、真の意味でのギャンブルカードになっている。エドの頭上で回転するカードが、万丈目の声によりゆっくりと停止した。
「……あーっと、おじゃ万丈目、逆位置を引き当てた！さすがの運の強さ、やはりこれが持っている男、おじゃ万丈目の実力なのでしょうか！」
「当然だ。エド、２枚のカードを引かせてもらうぞ」
「構わないさ。ただしこの瞬間便乗の効果により、僕もカードを２枚ドローする。さら

にもう1枚、2枚目のカップ・オブ・エースだ」

「……ストップだ」

再びエドの頭上で回転するカードに、万丈目がストップをかける。だが万丈目の強運も2度は続かなかったらしく、今度は先ほどと真逆の位置で停止した。

「残念だったな、これにより今度は僕だけがカードを2枚引く。デステニー・ドローを発動。手札からドリルガイをセメタリーに送り、さらにカードを2枚ドロー。ディフェンドガイを反転召喚し、Ｖ・ＨＥＲＯ（ヴィジョンヒーロー）　ヴァイオンを召喚！そしてヴァイオンは召喚に成功した時、デッキからヒーロー1体をセメタリーに送ることができる。行け、ダイハードガイ！」

???↓Ｄ―ＨＥＲＯ　ディフェンドガイ　攻１００

Ｖ・ＨＥＲＯ　ヴァイオン　攻１０００

便乗とカップ・オブ・エースのコンボにより、回転がどちら向きに止まろうと必ず2枚のドローをするという結果を導き出したエド。その潤沢になった手札から召喚されたのは、なんとＥでもＤでもない新たなる種別のヒーロー、ヴァイオン。まさかヒーローつながりということ以外にシナジーの無いカードが入るわけもないし、恐ろしいことにディーヒーローは今なおエドと共に進化を続けているらしい。となると、次に何が出てくるのかはもはや本人以外の誰にも予想がつかない。

そして今回エドのとった戦術は、新たに手に入れた力の解放だった。
「万丈目、まさかお前がこのカードの初陣を飾る相手になるとはな。ヴァイオンのセカンドエフェクトによりセメタリーのダイハードガイを除外することでデッキから融合を手札に加え、そのまま発動する。場のディーヒーロー、ディフェンドガイと闇属性モンスター、ヴァイオンの1体を素材として融合召喚！鉄壁の意思もつ英雄よ、運命すらも幻惑する英雄よ。地獄の底にて結集し、仇なす者に致命を与えよ！カモン、ディーヒーロー、デッドリーガイ！」
「エド・フェニックス、なんとここで融合を使用！これまでのＥ・ＨＥＲＯから現在のＤ―ＨＥＲＯにデッキを変更して以降、初となる融合召喚ですっ！一体いかなるモンスターが現れるというのでしょうか！」
ディフェンドガイとヴァイオンが飛び上がって空中で混ざり合い、以前見たディストピアガイともまた一味違う第2の融合ディーヒーローとなる。スマートではあるが無駄なく筋肉のついたしなやかな身体が青く見えるのは、そんな色のスーツを着ているからではない。人型こそとってはいるが、明らかに人外であることを示す濃い藍色の肌には骨とも金属ともつかない材質の無数の棘が静かに光り、その両腕の先にある5本の指の先からは、血のように紅い捕食者の爪が伸びている。肌の色と同じ、暗い藍色のマントに全身を包んだ中でひときわ目立つ、どこか泣いているようにも見える醜悪な顔の眼

の奥で、静かな知性を湛えた眼光が瞬いた。
　Ｄ―ＨＥＲＯ　デッドリーガイ　攻２０００
「デッドリーガイ……？」
「まあそう慌てるな、すぐにこいつのエフェクトも見せてやるさ。だがその前に魔法カード、死者蘇生を発動。セメタリーに眠るドリルガイを攻撃表示で復活させる」
　デッドリーガイの横に、以前アモン戦でも見せた全身からドリルをこれでもかと生やす新ヒーロー。確かあのカードには場に出た時に手札から下級ディーヒーローを特殊召喚する効果もあったはずだが、今回はその効果を使わないようだ。
　Ｄ―ＨＥＲＯ　ドリルガイ　攻１６００
「さて、待たせたな。デッドリーガイのエフェクトを使わせてもらう。互いのターンに１度ずつ手札を１枚捨てることで、デッキからディーヒーローをセメタリーに送る。その後僕の場のディーヒーローは、このターンの終了時までセメタリーに眠るディーヒーロー１体につき２００ポイントの攻撃力を得る！」
　デッドリーガイが片腕を宙に掲げると、その掌を中心に紫色の人魂が１つ、また１つと浮かび上がる。その数は合計４つ……仮にあの人魂１つが墓地のディーヒーロー１体を表しているのだとすれば、先ほど捨てた手札コストも何らかのディーヒーローなのだろう。

D―HERO　ドリルガイ　攻１６００↓２４００
D―HERO　デッドリーガイ　攻２０００↓２８００
「覚悟しろ万丈目、ドリルガイでアームド・ドラゴンを攻撃だ。そしてドリルガイは守備表示モンスターを攻撃するとき、貫通ダメージを与える」
「おのれ……！」
D―HERO　ドリルガイ　攻２４００↓アームド・ドラゴン　LV７　守１０００
（破壊）
おじゃ万丈目　LP４０００↓２６００
「おじゃ万丈目、これは手痛いダメージですっ！このままエド・フェニックス、わずか１ターンで押し切ってこのデュエルを制するのか!?」
「ふざけるな、そう簡単にやらせはせん。リバーストラップ発動、ダメージ・コンデンサー！手札１枚を捨てることで、今俺の受けた戦闘ダメージ以下の攻撃力を持つモンスター１体をデッキから特殊召喚する。来い、破面竜（ネイキッド・ドラゴン）！」
墓地から万丈目を守るように立ちふさがったのは、万丈目の愛用するドラゴン族専用リクルーターの仮面竜……ではなく、よく似てはいるが別物の竜。まるで仮面竜の仮面が破れたようなその顔の口元からは、呼吸するたびにひゅうひゅうと小さな炎が吐き出されている。

破面竜　攻１４００

「攻撃表示……？」

「そうだ。そして今捨てられたカード、おじゃマジックの効果によりデッキからおジャマ・イエロー、ブラック、グリーンを1枚ずつ手札に加える」

訝しむエドに対し口の端を釣り上げて笑い、手札コストの損失をチャラにする3枚サーチを行う万丈目。その様子に最初にピンと来たのは、意外にもレポーターのお姉さんだった。

「おじゃ万丈目、デッドリーガイに攻撃力では遥かに劣る破面竜を、なんと攻撃表示で繰り出した！これは戦闘破壊された場合に発動できるリクルート効果を発動するため、ダメージ覚悟でエドの攻撃を誘っているというのでしょうか!?もしそうだとすれば、なんという捨て身の戦法なのでしょう！さあどうするエド・フェニックス、ここであえてこの誘いに乗って戦闘を続けるのか、それともここは引くのでしょうか!?」

多分あのお姉さんに悪気はないんだろうけど、あんな言い方されたらあのエドが引くわけがない。案の定、罠と知りつつ万丈目の望みどおりに、デッドリーガイが爪を振りかざして飛びかかる。

「いいだろう、万丈目。何を企んでいるかは知らないが、その下手な誘いにあえて乗ってやろう。デッドリーガイ、破面竜に攻撃しろ！」

Ｄ―ＨＥＲＯ　デッドリーガイ　攻２６００↓破面竜　攻１４００（破壊）
おじゃ万丈目　ＬＰ２６００↓１４００
「ぐっ……この瞬間、破面竜のモンスター効果発動！このカードが戦闘破壊され墓地に送られたことで、デッキから守備力１５００以下の幻竜族モンスター１体を特殊召喚する。俺が呼び出すのは守備力１０００、メタファイズ・アームド・ドラゴン！」
デッドリーガイが素手で破面竜の体を深々と切り裂いた刹那、白色の輝きが弾け飛ぶ。その光の中心で先ほどドリルガイの攻撃により傷つき倒れたアームド・ドラゴンが、ドラゴン族という枷から解放されて更なる高みへと幻界突破を成し遂げる。
メタファイズ・アームド・ドラゴン　攻２８００
「おじゃ万丈目、大逆転の最上級モンスターです！これはエド・フェニックス、手札に融合１枚しかカードの無い現状ではやや厳しい相手か⁉しかしデッドリーガイは先ほどのエドの言葉通りならば相手ターンにも効果を使えるモンスター、まだ結果はわかりません！」
デッドリーガイとメタファイズ・アームド・ドラゴンを間に挟み、エドと万丈目が睨みあう。つかの間の拮抗状態を打ち破り、再びエドが動く。
「僕の手札はこれで２枚。これをそのまま伏せ、ターンエンドだ」
「エド・フェニックス、なんと自分から手札をすべて伏せた⁉デッドリーガイの効果は手

札コストがないと使えませんが、このままではおじゃ万丈目のメタファイズ・アームド・ドラゴンに攻撃力で敵いませんが……？」

お姉さんの疑問は、僕ら全員の頭に浮かんだことでもあった。デッドリーガイは、墓地の仲間の数に応じてフィールドにいる仲間の攻撃力の底上げを行う。なのにここでその効果を使うための手札を消してしまえば、素の攻撃力だけではメタファイズの攻撃力に追いつけない。いくら伏せカードが2枚あるとはいえ、発動前に除去されるリスクも考えればその両方を伏せることが良手とは思えない。

だがターンを譲ったエドの表情を見て、すぐにその狙いが分かった。エド・フェニックスという男には、第一印象だけならクールに見えるもののなかなかどうして熱くなりやすい一面がある。恐らくあれは、先ほどの万丈目に対する意趣返しのようなものだろう。さあ攻撃力を下げてやったぞ、攻撃できるものならやってみろ。そう挑発し返しているのだ。

そして万丈目も、それがわからないほど鈍くはない。ないが、そこで攻撃しないという選択肢もまた、万丈目にはないだろう。ターンが移り、新たなカードを引く。それを見て少し意外そうな顔になるも、すぐさま表情を引き締めそれを発動する。

「ありがとう、兄さん……速攻魔法、おジャマッチングを発動！」

「おジャマッチングだと……？」

「一体なんでしょう、あのカードは……？私もこのレポーターの仕事を始めてから数年経ちますが、あれは見たことのないカードです！これは、ますます目が離せない展開になってまいりました！」

　おジャマッチング、僕も見たことのないカードだ。プロのエドやレポーターさんですらその存在を知らないということは、あれがさっき万丈目兄から貰っていた３枚のカードの１つということだろう。

「おジャマッチングは手札かフィールドのおジャマカード１枚を墓地に送り、デッキから同名カード以外のおジャマ１体とアームド・ドラゴン１体をデッキか墓地から手札に加え、その後そのうち１体を通常召喚することが可能となる。俺が捨てるカードとして選ぶのは、おジャマッスルだ。出てこい、おジャマ・ブルー！」

『はいな～』

　おジャマ・ブルー　守１０００

「さらに、俺の墓地に存在する闇属性モンスターは地獄戦士（ヘル・ソルジャー）、カオス・ネクロマンサー、黒蠍―茨のミーネの３体のみ。最高のマッチメイクを見せてやろう、エド。この条件が整ったことにより、手札に加えたダーク・アームド・ドラゴンは無条件で特殊召喚できる！」

　ダーク・アームド・ドラゴン　攻２８００

メタファイズ化し純白になった片割れとは真逆の進化を遂げた、闇に染まる漆黒のアームド・ドラゴン。これで万丈目のフィールドにはおジャマ・ブルーを中心に、白黒２体のアームド・ドラゴンが並び立つ。そして、ダーク・アームドの効果の恐ろしさは、僕もよーく知っている。

「なんということでしょう！おじゃ万丈目、先ほどの敗北寸前だった状況をひっくり返し、２体もの最上級モンスターを召喚権すら使わずに並べてみせました！恐らく地獄戦士は最初のターン、ワン・フォー・ワンのコストで墓地に送ったものと思われます！」

「ダーク・アームドの効果を発動。墓地の闇属性モンスター１体を除外するごとに場のカード１枚を破壊する、ダーク・ジェノサイド・カッター！地獄戦士を除外し左の、そしてカオス・ネクロマンサーを除外して右の伏せカードをそれぞれ破壊し、最後に茨のミーネを除外してデッドリーガイを破壊する！」

「ならば２枚のトラップ発動、そのどちらも強欲な瓶。そして自身への破壊効果にチェーンして、デッドリーガイのエフェクトを発動！強欲な瓶２枚分によりカードを２枚ドローし、この増えた手札のうち１枚を捨ててデッキのディーヒーローをセメタリーに。さあ、この２枚の効果は通させてもらおうか」

Ｄ―ＨＥＲＯ　ドリルガイ　攻１６００→２６００

モンスターを重点的に狙っていれば理論的にはこのターンで勝負を決め切る事も十

分狙えた盤面だったが、さすがに伏せカードを放置するリスクの方が大きいと判断したようだ。３発の闇のカッターが空を裂き、ほぼ同時に着弾して３枚のカードを破壊する。しかし結論から言えば伏せは２枚とも完全なブラフ、結果論とはいえこれは痛い。

「バトルだ、エド。メタファイズ・アームド・ドラゴン、ドリルガイに攻撃しろ！」

純白の剛腕が光の軌跡を描きながら振り下ろされ、デッドリーガイの死に際のあがきで大幅に強化されているとはいえ元々のステータスが下級モンスター止まりのドリルガイを上から叩き潰す。まずは、１撃！

メタファイズ・アームド・ドラゴン　攻２８００→Ｄ―ＨＥＲＯ　ドリルガイ　攻２６００

エド　ＬＰ４０００→３８００

「通ったーっ！エド・フェニックス、この師弟デュエルにおいて初めてそのライフに傷がつきました！しかもまだおじゃ万丈目のフィールドには、その攻撃命令を待つダーク・アームド・ドラゴンが控えております！」

「続けて攻撃だ、ダーク・アームド！」

待ってましたとばかりに漆黒の剛腕が天を指し、唸りをつけて叩き下ろされる。これで、２撃……！

ダーク・アームド・ドラゴン　攻２８００→エド（直接攻撃）

エド　ＬＰ３８００→１０００

「おじゃ万丈目、ダブル・アームド・ドラゴンによる怒りの反撃です！エド・フェニックス、いまだその闘志は衰えてはいませんが、２人のライフポイントはこれで逆転いたしました！」

「カードを1枚伏せる。さあ、どう……うん？」

ここで何か言おうとした万丈目が急に訝しげな顔になり、言葉を途中で切る。それと同時にエドも表情が一変し、露骨に不愉快そうなそぶりを見せる。まさか、そう思ったところでほんのわずかに客席の方を向いた万丈目と目が合い、そこで予感が確信に変わる。

ターン１１７　邪魔の化身とラスト・『Ｄ』（魔）

……なるほど、このタイミングでか。確かに今ここで八百長の指示を出せば、今の逆転で勝負の流れに乗った万丈目がそのまま押し切れた風に見えなくもないだろう。だけど、その指示が出たのなら打ち合わせ通り僕の出番だ。観客席の高さは一番低い場所で精々１０メートルもないぐらい、余裕で飛び降りられる。

『マスター、その前にあれを見てみるといい』

「へ？」

手すりに手をかけて身を乗り出そうとしたところで、チャクチャルさんが何かを見つけたようだ。あれ、とやらの指す方に目を向けると、ついさっき放送前のカウントダウンをしていたスタッフがじわじわと万丈目陣営に近づいていくところだった。

それにしてもあの人、確かにそこにいるのになぜか視線が滑るというか、眼には見えているのに存在感が極端に感じられないというか、とにかくなにかがおかしい。僕だって、チャクチャルさんが教えてくれなければあの人がそこにいることに気づきもしなかっただろう。

『ただの人間に、少なくともテレビ屋にできる動きではないな。足音どころか気配まで

完璧に断っている、相当の修練を積まなければ無理な芸当だ』
「まさか……」
『まあ、そういうことだろうな。何を考えているんだか』
　話し込んでいるうちにスタッフ……いや、「彼女」はマイクの真後ろまで回り込み、ここで初めて僕の視線に気が付いたかのように小さく手を振ってきた。だから僕も小さく頷いて息を吸い、きっぱりと叫ぶ。
「明菜さん、今です！やっちゃってください！」
「はーい清明ちゃーん、まっかせといてー」
　そこからの行動は、とにかく素早いの一言だった。それまで着ていた撮影スタッフの衣装を脱ぎ捨てて私服姿に戻った明菜さんの両手にはずっと隠し持っていたらしい丈夫そうなロープが握られており、それを使って恐らく自分に何が起きたのか理解する暇もなかったであろうマイクをすぐさま後ろ手に縛りあげる。「姉上えええ!?」とかいう叫び声が客席のどこかで小さく聞こえた気もするが、たぶん気のせいだ。きっと気のせいだ。絶対、何があっても、それは気のせいだ。
　……いいじゃない、今ぐらい夢見たって。あ、駄目だ。葵ちゃんこっち来た。
「い、一体何の騒ぎだこれは!?」
「ごめんねおじさん、これもお仕事だからね。清明ちゃん、あったよー！」

ものすごい剣幕で僕の場所に詰めかけてくる葵ちゃんを尻目に、完全にマイクの動きを封じた明菜さんがサッと手を振る。ただそれだけで、もうその中には手品師のように1枚のデュエルモンスターズのカードが握られていた。
「ありがとうございます、それじゃあ……よっと、失礼」
捕まる前にさっさと逃げようと手すりを乗り越えて、ちょうどその真下を走っていた警備員の上に飛び降りる。多分何が起きたかもわからなかったであろう彼にクッション代わりになってもらい、そのまま気を失ったのを確認して立ち上がる。そのあたりでただ茫然としていたレポーターのお姉さんがようやく我に返り、カメラマンに合図を送って実況を再開する。
「こ、これは前代未聞の事態です！デュエルを中断して突然現れた2人の乱入者、彼らはいったい何者だというのでしょうか⁉そしてその目的は⁉どうやら、何か1枚のカードを持っているようですが……？」
「明菜さん、それを……えっと万丈目、これどうすりゃいいの？」
「……最後まで締まらん奴だな、お前は。そこのＶＩＰ席に千里眼グループの会長がいるから、まずはその人に確認してもらえ」
「だって、明菜さん」
「はいはーい。会長さん、このカードでいいのかしら？」

明菜さんが表向きにかざしたカードは、エドのＤ―ＨＥＲＯ特有のカード名部分が青い文字で印刷された特別仕様で……なんだろうあれ、融合モンスター？少なくとも、かなりレベルが高いのは見て取れる。
「それは間違いなく、紛失していた最後のＤカードだ。マイク、なぜ君がそのカードを持っているのかね？」
「そ、それは……」
「言いたくないなら僕が言おうか。アンタがカードを盗み出すなんて卑怯な手を使ったせいで、エドは引退に追い込まれたんだ。違う？」
無言で唇をかみしめ、下を向くマイク。その沈黙が、十分に肯定の意思を表していた。
「なるほど……エド、理由が何であれこうしてカードが見つかった以上、君の引退する理由はもはやない。そのカードを使いこれからもプロデュエリストとして、よりいっそうの活躍を期待しよう。そこの君、すまないがそのカードはエドに渡してやってくれ」
「はーい、どうぞ」
「会長……」
明菜さんが手渡したカードをエドが受け取り、それをエクストラデッキに入れる。これで一件落着、といけば文句なかったのだが、まだ何かひと悶着あるらしい。絶望した様子で縛られていたマイクが暗い目になって突如立ち上がり、止める間もなく大声でわ

めき散らす。
「き、聞けぇ！確かに俺があのカードを盗んだ、だがそれなら、そこの万丈目はどうだ!?奴は俺と組んでイカサマ試合をした、そうだろう？つまりと奴は同罪、なあ万丈目ぇ！」
「な……なんと、これは衝撃の告白です！エド・フェニックス引退の真相は１枚のカードの盗難であり、その犯人が見つかったかと思えば、当人の口から明かされたおじゃ万丈目のイカサマ疑惑！おじゃ万丈目さん、今の言葉は真実なのでしょうか!?」
「……ああ、本当だ」
吐き捨てるようにして呟いた言葉に、レポーターもまさか肯定されるとは思わなかったのか言葉を失ってしまう。
次から次に訪れる展開による混乱が会場を埋め尽くし、誰もがシンと押し黙った。そんな針一本落とした音ですら響き渡りそうな静寂を切り裂いて突如素っ頓狂な、この雰囲気には場違いなほどの大声が上がる。
「なにい、万丈目！お前、俺とのデュエルでずるしてたって言うのかよ！」
「十代……」
いつの間に下に降りてきていたのか、入場口のところから十代が走ってきた。当の万丈目はというとあのデュエルから一体どれだけ苦しんでいたのか、非難する十代と目を合わすことすらせず辛そうに顔を伏せる。

確かに当事者として思うところはあるだろうし、十代の言い分の方が正しいのもわかる。だけど、さすがにここで万丈目を責めるのはやりすぎじゃないか。お前本当におジャマ・イエローの話聞いてたのか……僕の送った非難の視線もどこ吹く風、デュエル場に上がって着ぐるみの襟をぐっとつかむ。

これ以上無茶するようなら、僕が止めに行こう。だがそう決意した矢先に十代の続けた言葉は、なんとも意外なものだった。

「それじゃあお前あのデュエル、わざと弱いふりをして……あれ？それってイカサマなのか？なあ？」

はいはいはい、そういうことね。十代からのパスを受け、すっとぼけたふりして僕も声を上げる。

「あのね十代、そんなのイカサマなんていう訳ないじゃん。ただまあ、まだ万丈目の本気ってやつをを僕らに見せてないのは間違いないけどさ。まさか、こんなところでこのデュエル中断するなんて言わないよね？」

言いながらさりげなく手を後ろに回し、後ろから睨みつけているであろう葵ちゃんにハンドサインを送る。やっぱり彼女の察しの良さはどんな時でも頼もしく、すぐに反応してくれた。

「それは困ります、もっとデュエルを魅せてくださいよ！」

　その葵ちゃんの一声がトリガーとなって、会場のあちこちからデュエル続行を望む声が上がり始める。始めはまばらだったそれが次第に一体化し、やがて割れんばかりの万丈目、そしてエドに対してのコールへと変化していった。その中心で、万丈目の顔が次第に明るくなっていく。ぱっと着ぐるみを投げ捨てると、いつもの黒服で統一された万丈目の姿がそこにはいた。
「いいだろう、もうこんなくだらん小細工は俺には必要ない」
『ああん、オイラの着ぐるみが～！せっかく男前になってたのに、アニキったら！』
「待たせたな、エド！ここからが本番だ、デュエルを再開するぞ！」
「望むところだ、本物のプロとの格の違いを教えてやろう！」
「デュ、デュエル再開！視聴者の皆さん、デュエル再開です！おじゃ万丈目の姿を捨て、真の姿となった万丈目！果たしてどのようなデュエルが繰り広げられるというのでしょう、なんだか私まで興奮してまいりました！」
　ついにおじゃ万丈目であることをやめた万丈目。再開したこのデュエルは、ちょうどエドのターンが始まる寸前だった。吹っ切れたような顔で笑う万丈目に笑みを返し、エドがカードを引く。
「僕のターン、ドロー！ダブル・アームド・ドラゴンか……確かに厄介だが、所詮僕のディーヒーローの敵ではない。魔法カード、手札抹殺を発動。互いに手札全てを捨て、

捨てた枚数だけドローする。もっとも僕は本来捨てるこの1枚の他に、便乗によりさらに2枚のドローを行うがな。そしてマジック・プランターを発動、便乗をセメタリーに送りもう2枚ドロー。さあ、これで準備は整った。融合を発動し、手札のディフェンドガイとディアボリックガイを素材として融合召喚！鉄壁の意思もつ英雄よ、輪廻の運命を放浪する英雄よ。暗黒の未来を統一し、理想郷へと歩むがいい！カモン、ディストピアガイ！」

Ｄ―ＨＥＲＯ　ディストピアガイ　攻２８００

アモン戦でもエドが使用した、破壊にバーンという2種類の強力な効果を状況に応じて使うことができるディーヒーローのニューフェイス。両手でアルファベットのＤをかたどったポーズをとると、そこから赤い光が放たれた。

「ディストピアガイのファーストエフェクト発動、スクイズ・パーム。このカードが特殊召喚に成功した時、セメタリーのレベル4以下のディーヒーロー1体の攻撃力分のダメージを相手に与える……そして僕のセメタリーには、先ほどデッドリーガイが送り込んだ攻撃力１６００のディバインガイが存在する！これで終わりだ、万丈目！」

「なんとおじゃ万丈目改め万丈目、真の力を我々に見ることなくこのダメージだけで決着がついてしまうのか!?エド・フェニックスによるプロの洗礼は、これほどまでに厳しいものなのでしょうか！」

「万丈目！」
　万丈目の残りライフは１４００、確かにこのダメージには耐えきれない。でも、あそこまで啖呵切っておいてこんなあっさり負けるなんて、それこそ万丈目が許すはずがない。放たれた怪光線が万丈目に届く寸前、その周囲に光の膜が張り巡らされて威力が半減した。
「トラップ発動、ダメージ・ダイエット。発動ターンに俺が受ける、あらゆるダメージは半分になる」
　万丈目　ＬＰ１４００→６００
「万丈目、エドのディストピアガイの登場を読んでいたかのように華麗に敗北を回避しました！しかも２体のアームド・ドラゴンとディストピアガイの攻撃力は同じ、これではエドもうかつに攻撃はできません！」
「攻撃ができない？甘いな、何を言っている。デッドリーガイの送り込んだディーヒーローは、２体いることを忘れたか！セメタリーに眠るディーヒーロー、ダイナマイトガイのエフェクト発動！自身を除外することで次のお前のターン終了時まで、ディストピアガイの攻撃力を１０００ポイントアップさせる。バトルだ、ダーク・アームド・ドラゴンに攻撃！ディストピア……ブローッ！」
　ディストピアガイに被さるように、体中に爆発のエネルギーを漲らせた巨漢のヒー

ローの半透明の姿が1瞬だけ見える。ディストピアガイの全身がそのオレンジ色のエネルギーに包まれ、筋肉が戦闘服の下で盛り上がる。エネルギーを抑えきれないと言わんばかりに飛び上がると、そのままの勢いで帯電した拳の一撃が闇のアームド・ドラゴンの懐深くに突き刺さった。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ディストピアガイ　攻２８００→３８００→ダーク・アームド・ドラゴン　攻２８００（破壊）

万丈目　ＬＰ６００→１００

「ぐっ……！ダメージ・ダイエットの効果は、戦闘ダメージにも有効となる！」

「首の皮1枚で繋がったようだが、まだ僕のターンは続いている。ディストピアガイのセカンドエフェクト発動、このカードの変化した攻撃力を元々の数値に戻すことで、場のカード1枚を破壊する！消え去れメタファイズ・アームド・ドラゴン、ノーブルジャスティス！」

ダーク・アームドを殴り倒したディストピアガイが間髪入れず、その隣にいた光のアームド・ドラゴンに片手をかざす。するとそこから零距離で解き放たれた破壊の衝撃波が、幻竜の体をも吹き飛ばした。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ディストピアガイ　攻３８００→２８００

「なんということでしょう！光と闇のアームド・ドラゴン、わずか1ターンで駆逐されて

しまいました！辛うじて敗北こそ回避したものの、ディストピアガイとはなんと恐ろしい効果を持っているモンスターなのでしょうか！」

「まだ終わりではない、セメタリーに眠るディアボリックガイのエフェクトも発動だ。自身を除外することで、デッキから同名モンスターを特殊召喚する。カモン、アナザーワン！」

Ｄ―ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ　攻８００

「攻撃表示だと……？エドめ、また何か企んでいるのか？」

「さあね、どうだろうか。カードを１枚伏せ、セメタリーからディバインガイのエフェクト発動。僕の手札が０枚になったことで、このカードと同じくセメタリーのディフェンドガイを除外してカードを２枚ドローする。ターンエンドだ」

確かディストピアガイの２つ目の効果は、相手ターンでも発動できたはずだ。つまり、今ここでわざわざあのモンスターの攻撃力を下げる意味は何一つない。強いて言うならば今のうちにモンスターを減らすことで次のターン万丈目に最上級モンスターをアドバンス召喚するためのリリース要因を残さなかったということぐらいだが、それにしたってやはり今やるようなことではない。しかもあのディアボリックガイの不自然な攻撃表示、そして１枚の伏せカード。

……どう見たってあからさまに怪しいが、ついさっき万丈目は同じく怪しい伏せカー

ドにまんまと釣られて強欲な瓶２枚にダーク・アームドの効果を使ってしまうという致命的な失敗をやらかしてしまっている。どうしてもあの時の記憶が蘇り、冷静な思考力を削いでいるのだろう。

「俺のターン……兄さんたち、もう１度力を貸してくれ！魔法発動、おジャマ改造！」

「なんと万丈目、未知の力を誇るディーヒーローに対抗し、２枚目の未知なるおジャマカードを発動しました！ですが彼の手札にいた３体のおジャマはすでに手札抹殺により墓地に送られ、残るは場にいたままのおジャマ・ブルーのみ。これで万丈目、一体何を成し遂げようというのでしょう！」

「このカードは発動時に俺のエクストラデッキから光属性で機械族の融合モンスター１体を見せ、さらにデッキ以外の場所から任意の枚数だけおジャマモンスターを除外する。そして除外した数まで、その機械族融合モンスターの素材を１種類ずつどこからでも呼び出すことができる！ＸＹＺ―ドラゴン・キャノンを見せることで俺の墓地のおジャマ・イエロー、グリーン、ブラックを除外し、代わりにデッキからＸ、Ｙ、Ｚを特殊召喚だ！」

『結局俺たちゃ最後まで』

『コスト要因なのかよーっ！』

『アニキのいけず～！』

そんな切ない叫びが聞こえた気もしたが、万丈目もその声に構ってやるほどの余裕がないらしい。それとも、集中しすぎていてその声も耳に入っていないのかもしれない。まあ3兄弟もついこの間、割とやりたい放題に暴れたからか本気で自分たちの待遇を嫌がっているわけではないようだ。あくまであれも、いつものちょっとしたじゃれ合い程度の意味合いなのだろう。

ともかく3枚のカードが除外されるのと同時に、アルファベットの名を冠する3体のマグネットモンスターが合体前のまだ分離した状態でディストピアガイの眼前に着陸する。

Ｘ―ヘッド・キャノン　攻１８００

Ｙ―ドラゴン・ヘッド　攻１５００

Ｚ―メタル・キャタピラー　攻１５００

「まずはお前らの合体だ！ゆけっ、Ｘ、Ｙ、Ｚ！この3体のマグネットモンスターを除外することで、ＸＹＺ―ドラゴン・キャノンを特殊召喚する！」

Ｙの胴体の中央にＸの下半身である球体が接続され、その横を補強するかのように2つに分離したＺが左右にそれぞれ接続される。あの海馬瀬人がバトルシティにおいて神のカード召喚のための足掛かりとして採用しておきながら、それ単体で並のモンスターならば蹴散らすことのできる力を持つ大型融合モンスターだ。

だが、万丈目のマグネットモンスター戦術にはさらにその先があることを、僕らは知っている。

ＸＹＺ―ドラゴン・キャノン　攻２８００

「魔法カード発動、融合識別（フュージョン・タグ）。エクストラデッキのモンスター１体を見せることで、このターン指定したモンスターを融合素材にする際そのモンスターとして扱うことができる。これによりおジャマ・ブルーは、ＶＷ―タイガー・カタパルトの名を得る」

「これで万丈目、フィールドにその１体ごとの召喚すら難しいとされる２種類のマグネット融合体を、１体は同名カード扱いになっただけとはいえわずか１ターンで並べました！となるとまさか、狙いはあのロマンカードでしょうか!?」

「ＸＹＺ、そしてＶＷ……この２種類が全て場に揃った時、それらを除外することでさらにその先のマグネットモンスターの特殊召喚が可能となる。さあ受けてみろエド、この５体合体を！出でよ、ＶＷＸＹＺ（ヴィートゥ・ズィ）―ドラゴン・カタパルトキャノン！」

せっかく完成した２種類の合体がいきなり解除され、新たに命じられた５体合体に応じた組み合わせにそれぞれのパーツが重なり合っていく。ＸＹＺの手札を捨てて場のカードを破壊する効果を使わなかったということは、よっぽど使いたくないカードしか手札に残っていないのだろうか。

ともかくまず総司令塔となる頭をＶが、重い体全体を支える両足をＷが引き受け、さ

らに背面にはＹの機械の翼が目一杯広がることで両足だけではバランスを崩しそうになる体全体の調整器官としての役目を果たす。胴体を支えるＸの両腕が相変わらず分離したままのＺのパーツをがっちりと握りしめることで両腕代わりにすることで、人型をした１体の超火力移動砲台の姿がついに現れた。

ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン　攻３０００

「ドラゴン・カタパルトキャノンは１ターンに１度、無条件で場のカード１枚を除外する。これでその、目障りこの上ない伏せカードには退場してもらおうか、ＶＷＸＹＺ―アルティメット・デストラクション！」

「やはり、このカードを除去しに来たか。だが残念だったな、万丈目。トラップ発動、Ｄ―フュージョン……このカードは僕のフィールドに存在する、ディーヒーローのみを素材としての融合召喚を行う。暗黒の世界の英雄よ、輪廻の運命を放浪する英雄よ。悠久の時の果てに得た、理想郷にて安息の時を！カモン、ダスクユートピアガイ！」

「フリーチェーン……また逃げたか！」

「なんと、ディストピアガイにはまだもう１段階の進化が残されていました！専用の融合カードにより呼び出された、その姿は……キャッ、眩しいです！」

眩しい。僕も、それが第一印象だった。全身を黄金色に輝く鎧に包む、頭部そのものがＤの一文字をあしらったデザインのラスト・ヒーロー。モチーフがモチーフだからか

暗い色合いばかりだった既存のディーヒーローの中にあって一際目立つその光は、まさに黄昏の太陽のような存在感を放っていた。

Ｄ―ＨＥＲＯ　ダスクユートピアガイ　攻３０００

「ダスクユートピアガイがその融合召喚に成功した場合、僕はもう１度だけ融合を行うことが許される。手札のディーヒーロー、ドグマガイとＢｌｏｏ―Ｄを素材とし、この最後のＤを呼び出そう！カモン、Ｄｒａｇｏｏｎ（ドラグーン）　Ｄ―ＥＮＤ！」

太陽のようなダスクユートピアガイと並ぶかのように、ついにエドの手に渡った最後のＤカードがその謎に包まれたベールを脱ぐ。

それはＢｌｏｏ―Ｄの持っていた悪魔的荒々しさと、ドグマガイの洗練されきった力。全く毛色の違う、だけどどちらも比類なき圧倒的な２つの力の集大成だった。左腕と胸部にはどちらも龍の頭部を模した鎧と武器が装着され、龍を使役するドラグーンの名を相応しいものに見せている。そのほかにもドグマガイの蝙蝠のような翼とＢｌｏｏ―Ｄの持っていた悪魔そのものの鮮血の翼を足して２で割ったような赤い翼からは龍の爪が生え、背面では新たに生えた太い龍の尾が血を求めてでもいるのか、かすかに動いていたのも見えた。

Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ―ＥＮＤ　攻３０００

「これが……最後のＤ……」

いつもの実況も忘れて見入っていたお姉さんが呟いた言葉が、いまだ手放さなかったマイクに拾われて反響する。それだけ、誰も何も言えなかったのだ。
いや、それは違った。この中でたった1人だけ、いまだ闘争心を燃やし続けている男がいた。
「エド・フェニックス！」
万丈目だ。ただ1人万丈目だけが真正面から2体のディーヒーローの究極融合体を見据え、一歩踏み出しながら声を張り上げた。
「この俺は、万丈目サンダーは、こんなところで止まりはしない！ＶＷＸＹＺ、奴に……最後のＤとやらに攻撃するんだ！ＶＷＸＹＺ―アルティメット・デストラクション……そしてこのダメージ計算時に速攻魔法、リミッター解除を発動！倍となった攻撃力で、全てまとめて吹き飛ばしてやれ！」
２体の攻撃力は、互角。相打ち狙いで体中の全砲門の照準を最後のＤに合わせるドラゴン・カタパルトキャノンに対し、Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ―ＥＮＤもまた右腕に装着された剣を一振りしてそれに立真っ向から立ち向かう。その反撃をレーダーが捉えた瞬間ＶＷＸＹＺの全砲門から迸る光の奔流が一気に倍となり、あまりの衝撃に自らの体をも破壊しながら眼前の敵に向かって突き進んでいく。目も眩むような閃光と轟音が走り、２体の大型モンスターの生み出した破壊のエネルギー乱舞が場を荒らしまわった。

ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン　攻３０００→６０００→Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ―ＥＮＤ　攻３０００

どこまでも続くかに思われたその衝撃がようやく静まった時、ＶＷＸＹＺの姿はすでに辛うじて原形こそとどめているものの全身の砲台は破裂してボロボロ、エネルギーも枯渇寸前の見るも無残なスクラップ寸前になっており……対してエドのフィールドには、いまだ無傷の状態で2体のディーヒーローが立っていた。

「馬鹿な!?攻撃力はこちらが圧倒的に……!」

「確かにな。だが僕はダスクユートピアガイのセカンドエフェクト、アナスタシム・グリームを発動していた。互いのターンに1度ずつ場のモンスター1体を選ぶことでそのターンそのモンスターは戦闘でも効果でも破壊されず、バトルダメージも0となる。この効果でＤｒａｇｏｏｎ　Ｄ―ＥＮＤは守られていたから万丈目、このターン破壊されるのはリミッター解除のデメリットを受けることになるお前のモンスターだけだったということだ」

「ダスクユートピアガイ、その真の力は自らの仲間を呼び、仲間を守ることにありました！破壊とバーン効果を持つディストピアガイを進化させることで、仲間のためにその力を解放するダスクユートピアガイとなる……なんという奥が深いカードなのでしょう！対する万丈目、このターンで勝負を決めるべく呼び出した頼みの綱のＶＷＸＹＺの攻

撃すらエドには通らず、それどころかリミッター解除のデメリットまで背負う形になってしまいました！ここまでの健闘むなしく、ついに力尽きてしまうのかあーっ!?」

ここまで戦ってきた万丈目に対しこんなこと言いたくはないが、確かにその言葉は正しいと僕も思う。おジャマ達からのサポートを受けながら戦ってきたアームド・ドラゴンが倒れ、ＶＷＸＹＺも今まさに機能停止しようとしている。こんな状況で、さらにこの場をひっくり返すような手が万丈目に残されているとでもいうのだろうか。

いや、答えはノー、だ。万丈目とは３年間も腐れ縁が続いてきた僕だからこそ、その限界もよく知っている。これ以上の番狂わせなんて、それこそ奇跡でも起きなければ無理だろう。万丈目本人もそのことは承知しているからか、厳かな顔になって壊れかけのＶＷＸＹＺを無言で見上げる。

と、その時、その右腕が高々と宙に掲げられた。皆の視線が自然とそこに集まる中でおもむろに１度指を鳴らすと、まるでそれがきっかけとなったかのようにＶＷＸＹＺの目に再び光が宿る。破損した砲台や装甲、使い物にならなくなった部品が次々にパージされ、まだ辛うじて動く部分だけが残された。

パチン。もう１度指を鳴らすと、次に現れたのは半透明のアームド・ドラゴン。それも１番最初にドリルガイによって倒されたはずの、ＬＶ７の亡霊だ。

「なんだ一体!?何が起きている!?」

「やはりエド・フェニックス、貴様は確かに凄腕のプロデュエリストだ。だが俺もこの試合、絶対に負ける訳にはいかない。これが兄さんたちにより俺に贈られた、最強にして最後の力。アームド・ドラゴンとＶＷＸＹＺの２体による、禁断の変形合体モンスター。あの２体をこのデュエル中どちらも特殊召喚に成功したことで、すでにその召喚条件は整っている」

　実に真っ当なエドの言葉に、そこでようやく万丈目が答えた。静かな、しかしよく通る声音で、はっきりと語りだす。そうこうしている途中にも、亡霊のはずのアームド・ドラゴンの体のあちこちを補強するかのようにＶＷＸＹＺの残ったパーツが鎧となり盾となりそして武器となって組み合わさり、枯渇した自らのエネルギーの代わりにドラゴンの持つ原初的な生命エネルギーを注入され息を吹き返していく。生身の体に機械の力が組み合わさり、まさに本人が言った通りの禁断の変形合体モンスターが次第にその全容を現していく。

「俺の墓地のアームド・ドラゴン　ＬＶ７と、場のＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノンをゲームから除外する！さあその姿を見せろ、アームド・ドラゴン・カタパルトキャノン！」

　新たな力を得たアームド・ドラゴン……いや、生まれ変わったＶＷＸＹＺ……いや、違う。アームド・ドラゴン・カタパルトキャノンが、龍の咆哮と機械の咆哮の入り混じっ

た産声を上げる。よく見ると背後から黒煙が噴き上がっている辺りやはり相当に無理のかかる合体なのだろうが、当の本人はまるでそんなこと気にした様子もなく目の前の強敵に対し好戦的に両腕を打ち合わせる。

アームド・ドラゴン・カタパルトキャノン　攻３５００

「なんだこの合体は、ふざけた真似を……！」

「そのふざけた真似の力を思い知るがいい、エド！墓地の魔法カード、おジャマッチングのさらなる効果を発動。たった今除外したおジャマ３兄弟をデッキに戻すことで、カードを１枚ドローする。フン、ここでお前を引くことになるとはな。まあいい、カードを２枚伏せてターンエンドだ」

「な、な、なんなのでしょうこのモンスターは！まさに異形！奇怪！悪魔的発想による融合失敗の産物としか思えない代物ですが、その身に秘めたパワーは間違いなく本物です！一体我々の前に、どのような戦い方を見せてくれるというのでしょうか!?」

本当に、何を考えてこんなカード作ったんだあの兄弟。いくらカードについては素人同然とはいえ、もうちょっとなんかなかったのだろうか。いや、むしろこのぶっ飛んだ発想力こそが、さすが万丈目の一族と言うべきなんだろうか。

ともあれ、これで満を持してエドと万丈目それぞれの最終決戦兵器がフィールドに並んだ。こうなると後はもう、どちらが先に倒れるかの戦いだ。

万丈目　ＬＰ１００　手札：１
モンスター：アームド・ドラゴン・カタパルトキャノン（攻）
魔法・罠：２（伏せ）
エド　ＬＰ１０００　手札：０
モンスター：Ｄ―ＨＥＲＯ　ダスクユートピアガイ（攻）
Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ―ＥＮＤ（攻）
魔法・罠：なし

「僕のターン！Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ―ＥＮＤのエフェクト発動、インビンシブル・Ｄ！このターンのバトルフェイズを放棄することで相手モンスター１体を破壊し、その後そのモンスターが表側表示だったならば、その攻撃力分のダメージを与える！お前の墓地には除外することで効果ダメージを半減できるトラップ、ダメージ・ダイエットがあったようだが、それを使ってもこの効果は防ぎきれまい！」

最後のＤが龍の顎を開き、その目に映るもの全てを火の海にする火炎弾を吐き出す。だがその質量を前に万丈目は避けようともせず、アームド・ドラゴン・カタパルトキャノンがその前に立ちはだかった。

「ならばこのタイミングで、こいつの効果を発動だ。相手ターンに１度デッキからカードを１枚除外し、全弾発射！エド、貴様の場も、墓地も、全てのカードを根こそぎ除外

する！この効果ならば、貴様のダスクユートピアガイからの干渉も受けることはない！やれ、アームド・ドラゴン・カタパルトキャノン！」
「全てを除外だと？速攻魔法、禁じられた聖杯！指定したモンスターの攻撃力を４００ポイントアップさせる代わりに、そのモンスター効果をこのターンの間無効にする！」
「させるか！速攻魔法、禁じられた聖槍！対象モンスターの攻撃力を８００ポイント下げることで、このターン魔法、罠に対する完全耐性を与える！」
「……だが、Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤのエフェクトは既に発動している。たとえこちらが除外されようが、どのみち効果ダメージでお前の負けだ万丈目！」
「それはどうかな、その心配は俺には無用だ。トラップ発動、魂のリレー！手札のモンスター１体を特殊召喚し、そのモンスターがフィールドに存在する限り、俺はあらゆるダメージを受けない！」
　カウンター合戦を万丈目が制したことにより、遺憾なくその実力を発揮したアームド・ドラゴン・カタパルトキャノンが火炎弾に対抗するかのように全力掃射を行う。３体のモンスターが火球と閃光に飲み込まれ、全てが消えてなくなっていき……ぽっかりと空いたフィールドに唯一残っていたのは、誰もが見慣れたあのモンスター。万丈目が魂のリレーで呼び出した、ただ１体だけだった。
「なんと万丈目、この効果さえも凌いだーっ！しかし魂のリレーはそのデメリットとし

て特殊召喚したモンスターがフィールドを離れた時に自身の敗北が確定する、モンスターとプレイヤーが文字通り一蓮托生となる効果を持っています！果たして万丈目が最後に選んだのは、一体どのモンスターなので……あ、あれは!?」

「俺が特殊召喚したのは、こいつだ。これが最後の戦いだ、おジャマ・イエロー！」

おジャマ・イエロー　攻０

『よーし、いってらっしゃ……え？あれ、もしかしてオイラのこと？』

「お前の他に、どんなおジャマ・イエローがいるというんだ。いいからシャキッとしろ、それでも俺のエースモンスターか！」

『エース？オイラが……？』

感動のあまりぶわっと泣きはじめるおジャマ・イエローからは照れ隠しからか顔を逸らし、すぐにエドの方へと向き直る。

「……ターンエンドだ」

「俺のターン。貴様の負けだ、エド！おジャマ・イエローでダイレクトアタック！」

『ええ!?でも、オイラの攻撃力は……』

「何をゴチャゴチャ言っている、いいからさっさと攻撃して来い！」

『わ、わかったわよん、もう……でやあ～っ！』

おジャマ・イエローが、その足でフィールドをてちてちと真っ直ぐに走る。前だけを

見て懸命に走っている彼の眼には入らなかっただろうが、彼1歩を踏み出すごとに周りの風景が次第に変化していった。地面から家が、策が生え、足元が床から土がむき出しの地面へと変わっていく。
「フィールド魔法、おジャマ・カントリーを発動。このカードが存在してなおかつおジャマモンスターが存在する限り、フィールドのモンスターの攻守は逆転する」
『でやあ～っ……おジャマ・パ～ンチッ！』
イエローが跳んだ。その小さな腕を懸命に伸ばし、エドの頬を平手で力いっぱいに打ち据える。
おジャマ・イエロー　攻0→1000→エド（直接攻撃）
エド　LP1000→0

「や……やりました、ついに決着です！勝者は万丈目、なんとあのエド・フェニックスを打ち破る快挙を成し遂げました！」
「万丈目、この借りは必ずプロの世界で返す。だが今は、それより先にやるべきことがあるだろう？」
「俺のやるべきこと……違ーうっ！」

「え？」
　レポーターお姉さんの言葉に、突如一声叫んでデュエル場の中央までずかずかと歩く万条目。おもむろに立ち止まると会場全体を見渡し、指を１本天に掲げた。
「いいかお前ら、準備はいいな！この俺の名は……一！」
　当然、僕らのやるべきことも決まっている。会場全員が腕を振って声を張り上げ、一体となってコールを飛ばす。
「十！」
「「百！」」
「「「千！」」」
　ここで一度言葉を止め、ワンクッション置くことで会場の期待がさらに高まる。その熱気が最高潮に達したところで、それを解き放つ万丈目の声が響き渡った。
「……万丈目、サンダー！」
「「「サンダー！サンダー！サンダー！」」」

ターン118　鉄砲水と決別の歯車

その日、僕が授業を受けるために校舎に足を踏み入れると、なにやら教室前に人だかりができていた。その中に夢想の青髪が見えたので、近寄って話しかける。
「やっほー。なに、また今日もなの？」
「そうみたい、だって」
また、というのは、教室前に張り出された張り紙のことだ。そこにはただ簡潔に、今日の授業は臨時でお休みするノーネ、とだけ書かれている。
別にそれだけなら、ああ今日は休みなんだなよっしゃラッキー、だけで済む。実際、僕もこの張り紙が出てくるようになった初めのころはそう思っていた。
ただ問題は、それがあまりにも長すぎることだ。
「これで……3日連続？」
「うん。そろそろ危険かな、って」
それは、去年までなら考えもしなかったであろう問題。クロノス先生が授業をボイコットすることによる、シンプルにしてきわめて厄介な問題。有り体に言うと、出席日数不足だ。本来なら先生がちょっとやそっと授業をしなかったぐらいではどうという

こともないのだが、これまでのセブンスターズ戦や光の結社騒ぎ、とどめの異世界騒動のしわ寄せでこれまでにもさんざん授業が潰れまくった結果、僕らの世代は毎日毎時間休まず出席してもかなりギリギリでしか卒業できない。そんな状態で先生側がこの調子だと全員留年、の文字が本格的に笑い話ではなくなってしまう。

「クロノス先生だって、それはよくわかってるはずなんだけどね」

「でも先輩方、覚えていますか?最近のクロノス教諭、いつにもまして……その……ご乱心なようでしたが」

実技担当最高責任者による全体講義が休講となれば、本来僕らの1コ下である彼女たちにも無関係な話ではない。ひょっこり会話に入ってきた葵ちゃんが、何か波風立たない表現を模索した末に結局諦めたのかいつも通りさらりと毒を吐く。ただ言葉のチョイスこそあれだけど、僕もそこに関しては同感だ。

「ライフ計算のためナノーネ、とか言って数学どころか小学校の算数レベルの計算やらされたり……」

「先日は座学なのに腕立てやらされたりもしたね。ハードなデュエルには体力が必要だのなんだの言って」

「体調でも悪いのかな、って」

「だとしても、早く良くなってもらわないと困るんだけどね」

進路も心配ではあるけれど、卒業できないだなんてそれ以前の問題だ。いや、全然僕にとっても他人事ではないんだけど。
「こうしちゃいられない、もう限界だ！皆、クロノス先生を探しに行くぞ！」
お、背後でなんか始まった。がやがやと騒ぐ声に振り返ると、度重なる授業中止にしびれを切らしたらしいオベリスクブルー男子、正直顔はわかるけど名前わかんない奴が周りのイエロー生やブルー生を集めて演説を始めていた。
「お前たちだって、もうそろそろ進路は決まってるんだろう？この間だって、万丈目がプロに入ったばっかりだ。なのにクロノス先生がこの調子だと、俺たちもう1年この学校にいなくちゃいけなくなるぞ!?」
そうだそうだ、もう俺内定貰っちゃってるんだ、早くクロノス先生を見つけ出せ……そんな賛同の声が、ぽつりぽつりとあちこちで上がる。
「いいか、クロノス先生は多分、この校舎のどこかにいるはずだ。まず上から順に探すぞ、ただし全員で行くんじゃない。1階に何人か待機して、逃げ出さないように玄関を押さえておくんだ」
「おう！」
「じゃあ俺、十代のアニキを探してくるドン！どうせ今日もどこかで釣りしてるはずザウルス」

「あ、待って！十代様のところならボクも行く！」
　言い出しっぺの彼の指示に従い１００人弱の集団がどやどやと上への階段を駆け上がり、それとは別に１０人程度がホールへと走り出す。さらに剣山とレイちゃんが校舎外に向かうと、大教室前には僕と夢想、それに葵ちゃんの３人だけが残された。夢想に関してはいまだに何考えてるのかわからない節があるからここに残ってもそう不思議ではないが、葵ちゃんまでこっちにいるとは意外だ。
「あれ、葵ちゃんどっちか行かなくていいの？」
「あまりほいほいと人の指示を聞くのは好みではありませんので」
「あ、そ……ん？」
　何気なく流したけど、よくよく考えたらそれはただのボッチ思考では？葵ちゃんいっつも看板娘やってくれる割に一向に彼女の友達を名乗る人が出てこないとは思ってたけど、彼女との付き合いも2年近くなったここに来て今更そんな切ない理由知りたくなかったぞ。
「……なんですかその目。１人の方が性に合ってるんですから、ほっといてくださいよ」
「あー、貴女はそういうタイプだもんね、だってさ」
　夢想は優しいからそこでとりなすけど、ボッチは皆そう言うんだぞ。まあ彼女の場合、意地でも認めようとはしないだろうけど。

「大体、そんなこと言うなら先輩方こそこんなところで油売ってていいんですか？」
「んー……ぶっちゃけ1人の追い込みにあの人数動かすのって、むしろ悪手にしか見えないんだよね。しかも上からしらみつぶしにー、なんて思いっきり作戦ばらしちゃってるし。多分クロノス先生も、本気で逃げる気ならそろそろこの辺を1回通ると思うよ」
「ああ、確かにそれも一理ありますね」
「そうそう。だからあっち行った皆にはいい感じに陽動やってもらおうかなって」
「むむむ、ちょっとそこをどくノーネ！」
　まるであらかじめ待ち構えていたかのようなタイミングでどたどたと足音を立て、クロノス先生の長身が廊下の向こうからこちらに走ってくる姿が見えた。
「ほら」
「おー。それで先輩、どうしますか？」
「どうしますかって言われても……やっぱ授業はやってもらわないと、ねえ」
「ですね」
　葵ちゃんにそう返し、3人揃って廊下を塞ぐようにサッと広がる。通れないことに気づいたクロノス先生がぶつかる直前急ブレーキをかけようとするも勢い余ってその場にこけて、受け身も取れずに顔面を強打する。鼻を押さえて少し涙目になりながらも、よろよろと起き上がる。

「アルデンーテ、どうしてどいてくれないノーネ……」
「申し訳ありませんが、私に言われましても先輩の指示ですので」
「あーおーいーちゃーんー?」
　しれっとこちらに罪をなすりつけてくる後輩を睨みつけると、その倍ぐらいにきつい視線で睨み返された。さてはこの女、まーだこの間明菜さんアカデミアに呼んだこと根に持ってたな。あれは事故、というかあの人の独断だって散々説明したってのに、もう。
「シニョール清明、それは本当ですーカ?」
「いえ違……」
「重ね重ね申し訳ありません、クロノス先生。私だって何度も止めたのですが、先輩は言いだしたら引かない人ですから」
　否定のセリフにかぶせるよう、1歩前に出た葵ちゃんがこれでもかとばかりにまくしたてる。駄目だこりゃ、完全に人のことを売りにかかってる。もしかして今日は最初から、こうなることを全部予期して僕のそばにいたんだろうか。そういえばさっき最初に夢想との話に入ってきたときも、妙に彼女らしからぬ積極的な登場だった気がする。げに恐ろしきは女の執念、そう言ったのは誰だったろう。その言葉の意味を痛いほど理解していると、クロノス先生の矛先はこれまで事態を静観していた夢想に向いた。
「セニョーラ夢想、実際のところはどうナノーネ」

　さっすがクロノス先生、授業ボイコットはともかく人間はできてる。ちゃんと聞いた話を鵜呑みにせず第三者に確認を取るあたり、伊達に教師生活やってない。夢想ならきっと、僕の無実を訴えてくれるはずだ。
「うーん……でも清明、たった今言ってたよね。『やっぱ授業はやってもらわないと』って、なんだって」
「うっ!?」
『八方ふさがりだな、マスター』
　チェックメイトを告げるチャクチャルさんの声がなんだかひどく楽しそうに聞こえたのは、絶対に気のせいではないだろう。完全にどうせ他人事だからって静観モードに入ってんな、あの邪神。
　そして夢想からのお墨付きを得たクロノス先生が、改めてこちらに視線を向ける。当然先生の方が背が高いので、自然と僕がその顔を見上げる格好になった。
「シニョール清明、教師に向かって随分な態度ナノーネ」
「そんなこと言うならクロノス先生だって……」
「言い訳無用！私は教師として、そんなデュエリストにあなたを育てた覚えはないノーネ！そのゴルゴンゾーラのようにカビの生えた根性を叩き直してあげますかーら、こっちに来るノーネ！」

「……ど、どこにですか?」
「情けない、それでもデュエリストですーカ?ここはちょうどデュエルリング近く、いい機会ですので久しぶりに……そう、あなたの言葉を借りるならば、実技授業と洒落込んでやりますーノ!」
「え、ちょ、夢想に葵ちゃん、助け……あぐっ」
なんだかおかしな話になってきたのでとりあえず逃げようとした首根っこをさっと掴まれ、あの細い腕のどこにそんな筋肉が付いているのかと聞きたくなるような怪力でずるずると引きずられていく。見かねた夢想が1度手を伸ばして制止しようとしたものの、葵ちゃんが何かを耳元で囁くとその手をひっこめ、こちらに申し訳なさそうに一瞥して彼女に引っ張られるまま廊下の反対側に消えていった。
ああ、もう!葵ちゃんには後でたっぷり反省と後悔してもらうとして、今は自分の心配だ。引きずられながらどうにか首を動かし、クロノス先生の方を向く。
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ!本気ですか先生!?」
「さあ入るノーネ、シニョール清明。先攻は差し上げますからさっさと準備しますーノ!」
「ええ……」
何が何だか、というのが本音だけど、こうなった以上口でどうこう言っても何も変わ

らなさそうだ。なら僕もさっさと気持ちを切り替えて、目の前のデュエルに全力で向き合う覚悟を決めるとしよう。

そう思い直すと、一気に自分の中でスイッチが切り替わるのを感じた。さっきまでの困惑はどこかに捨てさって、今僕の全身を占めているのは単純な闘志。そういえば、クロノス先生とデュエルするのなんていつぶりだろう。確か砂漠の異世界で、ゾンビ化した先生と戦わされた時が最後だったはずだ。思えば入学試験でこそ勝てたものの、それから3年間僕はこの人に1度も白星を挙げていない。卒業までにあと何回実技の授業があるかは忘れたけれど、ここを逃すと下手したらもうチャンスはないだろう。

……絶対に、負けない。

「ほう? 少しはいい面構えになったノーネ」

「おかげさまですよ、先生。思えばあの時、先生に勝ったからこそ僕はこの学校に入ってこれたんだ。だったらもういっぺんあなたに勝って、凱旋と洒落込んでやりますよ。3年間で僕が、それとこのデッキがどれだけ成長したか、嫌というほど味あわせてあげます」

「私の暗黒の中世デッキの恐ろしさ、どうやら少しデュエルしないうちにすっかり忘れてしまったようなノーネ。よろしい、ならば教師として、もう一度たっぷり刻み付けてあげますーノ!」

「「デュエル！」」

先ほどのクロノス先生の言葉通り、僕の先攻が既に設定されている。あの人の使う古代の機械は、自分が攻めこむときにきわめて厄介な効果を持つモンスター群……さて、どうしようかね。どうしようったって、攻するしかないか。

「僕のターン。グレイドル・イーグルを召喚、これでターンエンドです」

グレイドル・イーグル　攻１５００

すっかり切り込み役として定着した黄色い鷹状のイーグルが、本物の鷹よろしく僕の差し出した腕を止まり木がわりに着地する。守備表示でセットしてもよかったけれど、クロノス先生の切り札である古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）は貫通能力持ちだ。どうせダメージを受けるなら、高い攻撃力の方で迎え撃とう。

「それで終わりとは、ずいぶん舐められたものナノーネ。私のターン、まずカードを１枚セットしましーテ、古代の機械飛竜（アンティーク・ギアワイバーン）を召喚。このカードが召喚、または特殊召喚に成功した時、１ターンに１度だけデッキから別の古代の機械１枚をサーチすることができるノーネ。この効果で古代の機械箱（アンティーク・ギアボックス）を選び、さらにドロー以外で手札に加わった古代の機械箱はそのモンスター効果で、デッキからもう１枚攻守どちらかが５００ポイントの地属性機械族モンスター……古代の機械素体（アンティーク・ギアフレーム）をサーチできますーノ」

わずか１体のモンスター召喚から芋づる式にサーチを行い、結果的に２枚のカードを

新たに手札に加えるクロノス先生。古代の機械飛竜の方は前のデュエルでも使っていたのをそのままデッキに入れただけなんだろうけど、古代の機械素体？あれは初めて見るカードだ。

そんな用心を知ってか知らずか、おもむろに機械仕掛けのワイバーンが動く。

「バトル、古代の機械飛竜でグレイドル・イーグルに攻撃するノーネ！」

「やっぱり……！」

グレイドルモンスターには、戦闘破壊に対応して相手モンスターに寄生する効果がある。それを承知なはずのクロノス先生があのモンスターを攻撃表示で召喚してきた時点で何かあるとは思ったが、案の定仕掛けてきたか。となるとあの未知のカード、古代の機械素体の効果は手札誘発か何かだろうか。ともあれ古代の機械飛竜がその口をぱかりと開くと、喉の部分に内蔵されていた噴射口からまるで本物の竜が吐いているかのように火炎弾が打ち出される。咄嗟にイーグルが僕の腕から飛び立ち、その炎を大きく広げた翼で受け止めた。

古代の機械飛竜　攻１７００↓グレイドル・イーグル　攻１５００（破壊）

清明　ＬＰ４０００↓３８００

「まずは一撃。ファーストダメージは頂いていくノーネ」

「この程度！この瞬間、戦闘で破壊されたイーグルの……あれ？」

本来ならば、炎を浴びて溶け崩れたイーグルはスライム状になって地表を移動、不意をついてワイバーンに寄生してコントロールを奪うはずだ。だが、いつまでたってもその気配がない。

「古代の機械の能力がすべて同じだとは、思わない方が身のためナノーネ。古代の機械飛竜は自身が攻撃する間、相手の魔法、罠の発動を防げないかわりに、モンスター効果の発動を許しません。さあ、これでターンエンドしますーノ」

清明　ＬＰ３８００　手札：４

モンスター：なし

魔法・罠：なし

クロノス　ＬＰ４０００　手札：６

モンスター：古代の機械飛竜（攻）

魔法・罠：１（伏せ）

「突破してくる覚悟はしてたけど、まさか手札すら減らせないとはね……まだまだ、ドローー！」

今引いたカードは……地獄の暴走召喚、ねえ。自身の特殊召喚を許さない古代の機械巨人を高速召喚をしての制圧を軸にするクロノス先生相手なら悪いカードじゃないんだけど、よりによって今ここで引くのはまずい。となると、なんとか元から手札にある

カードで……ん？なんだろう、何か引っかかる。待てよ……？

『ふむ。マスターが自力で考えるのならば、私は余計な口出しはすまい。下手な手を打って後悔する前に、よく考えてカードを選ぶことだ』

何かを感じながらもその何かがわからず苦しむ僕にアドバイスでもくれるのかと思いきや、相変わらずの放任主義でまた静観モードに入るチャクチャルさん。ただあの口ぶりからして、チャクチャルさんもこの手札から何かに気が付いたようだ。そして恐らくそれは、僕が引っかかっているのと同じことだという予感がする。先生の場には召喚、特殊召喚時にサーチを行う古代の機械飛竜、僕の墓地にはグレイドル・イーグルがいて、今手札には地獄の暴走召喚とそのトリガーにできる魔法カード、浮上がある……。

駄目だ、わからない。ここで地獄の暴走召喚を使うことがベターな手だとは、どうも思えない。じゃあいったい、何がこんなに引っかかっているんだろう。

懸命に手札を睨んで考えていると、突然その思考をぶった切るようにして頭上のスピーカーから聞き覚えのある声が突然降ってきた。

『コホン。全校生徒の皆さん、２年の葵・クラディーです。皆さんお探しのクロノス先生の行方ですが、つい先ほど遊野先輩と遭遇、今現在デュエル場にてデュエルをしています。恐らくこのデュエルで先輩が勝てば、クロノス先生は授業を再開していただけるのでしょう。全校生徒の皆さん、先輩の応援のため至急お集まりいただくよう願います。

以上、緊急連絡でした』
「むむむ、しまったノーネ！まさか最初からこれを狙って、こうなったらこの勝負は一度預け……」
「いたぞー！」
「確かにクロノス先生だ！」
「こんなところにいたのか！」
「ギャビーン！囲まれてしまったノーネ!?」
……なーるほど。あの時見捨てられたのは僕への復讐がてら、自分が放送室にたどり着くまでの間クロノス先生を足止めしておくことまで兼ねていたとはね。葵ちゃんったら、ほんっと抜け目ないんだから。ここまでいいように使われると、なんかもう怒る気も湧いてこない。しかも、ちゃっかり僕が勝てば授業再開だなんておかしな条件付けてるし。あんな全校放送で明言されれば、いくらそれが根も葉もないデタラメでも面と向かっては否定しづらいだろう。特に今回の場合クロノス先生だって、本当は授業をしないなんてありえないことだという負い目があるはずだからなおさらだ。
でもだからって、こんなえげつない情報操作するかね、普通。仮に今年の卒業失敗しても、絶っ対に葵ちゃんのことは面と向かって敵に回さないようにしよう。
まあ内容はともかく、その効果が抜群だったことは間違いない。今の放送を聞いてす

ぐにわらわらと集まってきた全校生徒が、アリの子1匹逃げ出せないほどにデュエル場を取り囲む。こんなに一度に詰めかけて、すっ転んだらどうする気なんだか。

……いやいやいや、待てよ?今なんて言った、一度に?そうか、そういうことか。これは結果的には、葵ちゃんのおかげといえるのだろうか。ともかくこの状況のおかげで、ようやくさっき自分が何に気が付こうとしていたのかがわかった。だとしたらここでの正解は、こうだ。

「まんまとしてやられましたね、僕も先生も。やられたものはどうしようもないから、デュエルは続けますよ」

「まあいいでショウ。あなたやシニョール十代のようなラーイエローに昇格しようという意志すら見られないドロップアウトボーイズごときに、早々敗北する私ではないノーネ。よろしい、もし私がここで負けたーラ、授業でもなんでもやってやりますーノ」

「今の聞いた、皆!?言質は確かに取ったからね!そうと決まれば魔法カード、浮上を発動!僕の墓地からレベル3以下の水族モンスター、グレイドル・イーグルを表側守備表示で蘇生!」

グレイドル・イーグル　守500

「そして相手フィールドにモンスターが存在し、僕の場に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚された時。速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動!僕のデッキからさら

に2体、グレイドル・イーグルを攻撃表示で特殊召喚！」

再び蘇ったイーグルの全身がぶるぶると小刻みに震えたかと思うと、その全身が突然2つ、そして3つにアメーバよろしく分裂増殖していく。結果的に僕の場には、元の姿と寸分違わない3体のイーグルが残ることとなった。

グレイドル・イーグル　攻１５００

グレイドル・イーグル　攻１５００

「ですが地獄の暴走召喚はその強力な展開能力の代償として、相手プレイヤーにも場のモンスターと同名モンスターを可能な限り並べさせてしまいますーノ。私もデッキから、さらなる古代の機械飛竜を……なるほどシニョール清明、確かに悪知恵に関してはだいぶ成長したようなノーネ」

古代の機械飛竜　攻１７００

古代の機械飛竜　攻１７００

案の定3枚入っていた古代の機械飛竜の残り2体がフィールドに呼び出され、その効果を発動しようとしたところでクロノス先生も気づいたらしい。口角を釣り上げ、感心したように薄く笑う。

「ええ。古代の機械飛竜のサーチ効果は、同名ターン1でしか使えない。複数体を一度に引っ張り出しておけば、効果を使われるのは1体分で済みますからね」

　これこそが、僕の気づいた効果の抜け道。特殊召喚時サーチ相手に地獄の暴走召喚を発動するなんてありえないという固定概念に捕らわれなければ、案外これも悪い手でもない。確か古代の機械にはデッキリクルートを行う古代の機械射出機（アンティーク・ギアカタパルト）なるカードもあったはずだから、デッキ内の古代の機械飛竜を全部他の場所に移すことにはそれを防ぐ意味もある。

「ですが、やはり1枚はサーチをさせてもらいますーノ。私が手札に加えるのは2枚目の古代の機械箱、このカードにするノーネ。そして再びその効果により、デッキから今度は攻撃力５００の古代の機械砲台（アンティーク・ギアキャノン）をサーチ」

「結局手札を2枚増やされた事に変わりなしか……だとしても、今更やることに変わりはない！バトル、グレイドル・イーグルで攻撃表示の古代の機械飛竜に攻撃、ダメージを受けてそのまま寄生！」

　グレイドル・イーグル　攻１５００（破壊）→古代の機械飛竜　攻１７００

　清明　ＬＰ３８００→３６００

　再び黄色の鷹と機械の小竜の攻撃が激突し、あっけなく四散したイーグルが今度こそその銀色の体を精密機構の内部へと滑り込ませる。

「これでよし、次に2番目のイーグルで……」

「1体は通しますが、カウンタートラップ発動、攻撃の無力化！残念ですーガその攻撃は

時空の渦に飲み込まれ、バトルフェイズも強制終了と相成るノーネ」
「しまった!」
　イーグル３体の攻撃でクロノス先生の場を一掃しつつ奪い取ったイーグルでダイレクトを決めてやろうとするも、それはあっさりと未然に防がれる。となると当然、返しにあのゴーレムを召喚してくるだろう。イーグルの効果が飛竜に通用しないのはわかったけれど、当然巨人に対しても何らかのグレイドル対策カードが手元にあるはずだ。
　となると、多少の危険は承知のうえでこのカードを使うべきだろう。ともかく、無防備な状態でターンを明け渡すのは絶対にまずい。
「メイン2に魔法カード、一時休戦。互いにカードをドローして、次の先生のターンが終わるまでの間あらゆるダメージを0にする」
「早速逃げの一手ナノーネ?ではありがたく、ドロー」
　僕のデッキにとって大事なドローエンジンとなるグレイドル・インパクトや補給部隊、ウォーターフロントはまだ引けていない。とりあえず次のターンの安全こそ確保できたものの、そこから先は完全に未知の戦いになる。
「……ターンエンド」
『ま、あの攻撃が通った場合に得られたリターンの大きさを考えれば多少のリスクはや

むを得ないだろう。この程度で済むなら安いものだ、私でもあの場面なら暴走召喚を使っていた。だからそう気に病むな』

「そうは言うけどさあ……」

『ああ、そうなると気になるのは発動タイミングだな。なぜ最初の攻撃だけはわざわざ通したんだ?』

現実問題としてクロノス先生の場には3体ものモンスターが揃い、手札も先ほどのサーチのおかげでまだまだ潤沢にある。鬼が出るか蛇が出るか、どちらにせよより一層気を引き締めていこう。

「私のターン。速攻魔法、リロードを発動。手札全てをデッキに戻し、その枚数だけドローできるノーネ。そして2体のモンスターをリリースして、アドバンス召喚!出でよ、古代の機械巨人―アルティメット・パウンド!」

1瞬召喚して即攻撃宣言でもしたのかと思ったが、どうもそういう訳ではないようだ。何気にあの人が最初から自分1人で始めたデュエルでは初めてかもしれない、リリース軽減やトークン召喚などの小細工なしに見るアドバンス召喚により呼び出されたその姿は、特徴的な左腕の爪といいそのモノアイといいまさに先生のエース、古代の機械巨人。

だが……ほんの少し。本当に少しだけ違う。表面の光沢、内側から覗く歯車の色やわ

ずかなサイズ。そういった細かな違いが、その巨人をこれまで見てきた同型の巨人とは別物だと無言で物語っていた。

古代の機械巨人―アルティメット・パウンド　攻３０００

「永続魔法、古代の機械要塞を発動。そしてバトル、まずは古代の機械飛竜を奪い返すノーネ！」

地響きとともにそのもう1人の巨人が足を踏み出すごとに、その周辺に床をかち割って歯車仕掛けの巨大要塞が浮上する。もちろんソリッドビジョンなことは百も承知なのだがその巨大さはフィールド魔法並みで、巨人がその歩みを止めた時には既にデュエル場全体が要塞の内部に取り込まれていた。

そして、そんな要塞の内部で僕らを見下ろす巨人のモノアイが1瞬光を増す。おもむろに振りかぶられた拳が、要塞の破壊もお構いなしに叩き落された。

古代の機械巨人―アルティメット・パウンド　攻３０００→古代の機械飛竜　攻１７００

「一時休戦の効果で、ダメージは……」

「確かにダメージ『は』、通りませんーノ。ですが相手モンスターを戦闘破壊したことで、アルティメット・パウンドの効果発動！手札の機械族モンスター、古代の機械箱を捨てることでその横のグレイドル・イーグルに連続攻撃！」

「連撃効果!?ならイーグル、あのデカブツに……」
「もちろん、そんな失策を犯すほどこのデュエル担当最高責任者の称号は軽いものではないーノ。古代の機械要塞の効果により、このターン場に出された古代の機械は相手の効果対象にならず、相手の効果で破壊されないノーネ!」
次いでもう片腕を振っての爪の一撃が、イーグルの体を大きくえぐる。いつものように衝撃に逆らわず液状に溶けて寄生に取り掛かろうとしたイーグルだったが、その突撃はしかし大量の機械部品や歯車、そして瓦礫に阻まれて肝心の巨人まで届かない。今の一撃が勢い余って要塞内部を破壊し、大量の部品が盾となる格好で跳ね上がったのだ。
古代の機械巨人―アルティメット・パウンド　攻３０００→グレイドル・イーグル攻１５００（破壊）
「さらにこの効果は、１ターンに2回までの使用ができる。アルティメット・パウンドよ、その目障りな黄色い鷹に、最後の攻撃をくれてやるノーネ!」
古代の機械巨人―アルティメット・パウンド　攻３０００→グレイドル・イーグル守５００（破壊）
再び押しつぶされたイーグルが液状になっての特攻を仕掛けようとするも、またもや破壊された要塞の内部機械にその突撃が阻まれる。
それにしても、あんな隠し玉を手札に抱えていたなんて。もしさっきのターン、次の

ターンぐらいならいくらなんでも大丈夫だろう、と一時休戦を出し渋っていたら？かなりギリギリの選択だったことに気が付いて、どっと冷や汗が噴き出る。用心はし過ぎぐらいでちょうどいい、か。あ、今の５７５だ。清明心の俳句。

『……それだけ余裕があるならまだ私が出る必要はないな。豪胆、というよりはむしろ紙一重の方だが』

ちょっと考えるぐらい別にいいじゃない、もう。ＴＰＯをわきまえて口には出さなかったのに、心読むことはないでしょうに。

そんな冷たいチャクチャルさんは放っておいて、今はクロノス先生だ。古代の機械要塞によって得られる耐性はあくまでこのターンのエンドフェイズまで、次の僕のターンになれば耐性は消えるしダメージも通る。なんとかグレイドルを呼び込むことができれば……だがそんな考えすらも見透かしているかのように、クロノス先生が白い歯を見せて笑う。

「まさかシニョール清明、私がこのアルティメット・パウンドを無防備に立たせたままでターンを譲る、そんな馬鹿なことは思っていませんよネ？アルデンーテ、まだ私の実技授業はこれからが本番ナノーネ！魔法カード、アイアンコールを発動！私の場に機械族モンスターが存在するとき、私の墓地からレベル４以下の機械族モンスターを効果を無効にして特殊召喚できるーノ。甦れ、古代の機械砲台！」

どうやらついさっき、アルティメット・パウンドが連続攻撃を行う際に捨てたモンスターだったらしい。要塞の床の一部が開いてひっそりと小型の砲台が地面からせり上がってくるものの、効果が無効なためかその歯車は完全に沈黙している。

古代の機械砲台　攻５００

「そして魔法カード、機械複製術。この効果で、攻撃力５００以下の機械族をデッキから増やすことができる」

古代の機械砲台　攻５００

古代の機械砲台　攻５００

「……」

攻撃力５００の機械砲台が、さらに２門追加でせり上がってくる。でもいまさらモンスターを増やしたところで通常召喚は行えないはずだし、あのカードの自身をリリースして相手にダメージを与える効果だって一時休戦中の今は何の意味も持たない。と、なるとクロノス先生の狙いは当然……。

『コスト、だろうな』

「これで準備は整ったノーネ。魔法カード、魔法の歯車（マジック・ギア）を発動。私のフィールドからアンティーク・ギアと名のつくカード３枚を墓地に送ることで、手札、そしてデッキから古代の機械巨人を１体ずつ召喚条件を無視して特殊召喚できますーノ！さあ覚悟する

ノーネ、シニョール清明！」

せっかく出てきた機械砲台３門だったが、再び床が開いて要塞内に収納されていく。その直後、要塞全体が揺れた。要塞の壁が崩れ、その向こう側の暗闇で輝く赤い光が２つ。自らの開けた大穴をくぐり、２体の巨人がアルティメット・パウンドの横に並び立った。

古代の機械巨人　守３０００

古代の機械巨人　守３０００

「嘘でしょ……？あんなデカいのが３体？」

「ノンノン、残念ながらそううまくはいかないノーネ。魔法の歯車のデメリットにより、私のフィールドに存在する古代の機械巨人以外のモンスターはすべて破壊されますーノ」

その言葉通り、２体の巨人がやってくると同時にアルティメット・パウンドの体の表面にプラズマが走る。関節部分からは嫌な感じのする黒煙が噴き出し、モノアイの光も頼りなく点滅する。先ほどの３連撃が嘘のようにあっけなく限界を迎えたもう１つの巨人は、仲間たちと並び立つのを待たずしてその場に崩れ落ちた。

「ですがアルティメット・パウンド、あなたの犠牲は無駄にはなりませン。このカードがフィールドで破壊された時に私は墓地から古代の機械１枚を、そしてデッキから融合の

魔法カード1枚をそれぞれ加えることができますーノ。さらに今サルベージしたカードは古代の機械箱、またまた効果を発動して守備力５００の古代の機械騎士をサーチするノーネ」
「またサーチ……それに、融合？」
「ニョホホホホ。これが年の功、あなた達みたいな小童とは年季が違うノーネ」
悔しいけど何も言い返せない。このデュエルが始まってからというもの、全てのターンでドロー以外にもサーチを行っている無駄のない動きは本物だ。おまけに古代の機械巨人は攻撃表示、あれじゃあグレイドルを引けても自爆戦法が使えないときた。
だがそれ以上に気になるのが、デッキからサーチされた融合のカード。融合？そんなものクロノス先生、これまで使ったことあったっけ？
「なにやってんだ、清明ーっ！」
「俺もう就職決まってるんだぞ、負けたら承知しないからなー！」
外野が言いたい放題言ってくれちゃって、まあ。なら今すぐこっち来て場所替わってみろ、ってんだ。
清明　ＬＰ３６００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：なし

クロノス　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：古代の機械巨人（守）
　　古代の機械巨人（守）
魔法・罠：古代の機械要塞
「ドロー」
……仮に融合召喚をするにしても妨害手段があるわけでもなし、考えていたところでどうもならない。守備表示に困るなら、無理やりにでも攻撃表示の奴を出してやればいい。そのためにも、このカードが役に立つはずだ。
「魔法カード、強欲なウツボを発動。手札の水属性モンスター、サイレント・アングラーと氷帝メビウスの2体をデッキに戻してカードを3枚ドローする」
これでこのデュエルも5ターン目。確率とかあんま計算したことはないけど、これまでこのデッキを使ってきた体感的にはそろそろ1枚ぐらい手札に来てもおかしくないはずだ。勢いよく引き抜いた3枚のカードに目をやって計算通り、どころかそれ以上の結果によしよしと頷く。
「古代の機械巨人1体をリリースしてクロノス先生、そっちの場に海亀壊獣ガメシエルを特殊召喚！」
要塞の内部を縫って四方八方から飛んできた水流が、片膝で防御姿勢を取る巨人の片

方を押し流す。みるみるうちに水没していく姿が見えなくなっていき、やがて完全に包まれたところでその真上から落下してきた巨大亀がその水の塊ごと押しつぶした。

よしよし、これでまずは1体。でも、まだ終わりじゃない！

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

「そしてグレイドル・コブラを召喚。ガメシエルにコブラで攻撃！」

床から先ほど四散したグレイドルのかけらがうぞうぞと寄り集まり、先ほどのイーグルとは違い赤いコブラを形作る。一度体を縮めて足の無い体で器用に踏ん張り、勢いよく大亀に飛びかかっていった。ガメシエルがその太い尾の一振りで突撃を阻むと、その衝撃を利用してコブラの体がまたも四散する。

グレイドル・コブラ　攻１０００（破壊）→海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

清明　ＬＰ３６００→２４００

「ぐっ……！でもこれで、コブラは効果が発動できる。もう1体の古代の機械巨人、こっちで預からせてもらいますよっと」

「ぐぬぬぬぬ、私の古代の機械巨人2体が……思い返せばあなたはそれこそあの入学試験の時から、人のモンスターをリリースするわ奪い取るわと、やりたい放題この上なかったノーネ」

「勝てば官軍ですよ、勝てば」

「ならば教育的指導の一環として、ドロップアウトに相応しい負けた賊軍にしてやるから覚悟するノーネ!」

古代の機械巨人を奪い取った……のはいいが、あいにくと守備表示なため追撃には移れない。一応守備力３０００はあるため壁としても申し分ないけれど……手札にこのカードがあるのだから、その兼ね合いも考えてここは動かしておこう。

「メイン2に奪い取った古代の機械巨人を攻撃表示に変更。さらにカードを2枚伏せて、ターンエンドです」

古代の機械巨人　守３０００↓攻３０００

「私のターン。魔法の歯車のデメリットによりこのターン、そして次のターン私は通常召喚ができないノーネ。ですがその程度のこと、何の障害にもなりませんーノ！手札から魔法カード、アドバンスドローを発動！私の場のレベル８モンスター、あなたの寄越してきたガメシエルをリリースして、カードを2枚引くノーネ」

「でもこれで、先生の場は空になった……」

「ノンノン、全然問題ないノーネ。私の狙いはむしろ、あなたの送りつけてきた邪魔なモンスターをなくすこと……私のフィールドにモンスターが存在しないことで、このカードの発動条件が満たせたノーネ！魔法カード、古代の機械射出機（アンティーク・ギアカタパルト）を発動！私の場の古代の機械要塞を破壊して、デッキからこのカードを特殊召喚するノーネ！出でよ、古代の

機械素体！」

「しまった、狙いは最初っから……！」

気づいた時にはすでに遅い。条件を満たしたことによりデッキリクルートが行われ、先ほどサーチされたもののすぐにデッキに戻された人型の古代の機械が特殊召喚される。

古代の機械素体　攻１６００

「さらにさらに、破壊された古代の機械要塞の最後の効果を発動。表側のこのカードがフィールドで破壊された時、手札か墓地のアンティーク・ギア１体を特殊召喚できますーノ。古代の機械巨人やアルティメット・パウンドには特殊召喚制限があるので呼び出すことができませんが、このカードにはそんな制限はついていないノーネ。甦りなサイ、古代の機械飛竜！そしてその効果で、デッキから古代の整備場（アンティーク・ギアガレージ）をサーチするノーネ」

古代の機械飛竜　攻１７００

「すげえ……」

要塞が破壊されたことで再び周りの風景が元の校内に戻っていく中、そんな呟きがギャラリーの誰かからポツリと漏れる。ああ、まったくだ。まるで召喚に制限がかかったターンの動きだとは思えないこの展開っぷり、やっぱりこの人は凄い。何度立ち向

かっても圧倒的な強さを見せつけてくれる、ずば抜けたデュエリストだ。
　だけど僕はその人に、ここで勝たなくっちゃいけない。それがこの人から3年間ずっと授業を受けてきた生徒として、絶対にこなさなくちゃいけない最低限の礼儀だ。そんな思いを知ってか知らずか、クロノス先生のターンはまだ続く。
「今サーチした魔法カード、古代の整備場を発動。私の墓地から古代の機械巨人をサルベージするノーネ。そして、古代の機械素体の効果を発動。私の手札1枚を捨てて、デッキから最後の古代の機械巨人をサーチしますーノ」
　これでクロノス先生の手札には、古代の機械巨人が2枚。特殊召喚のできないモンスターをそんなに抱えていったい何を……いや、そうか。クロノス先生の手札には、さっきアルティメット・パウンドが死に際にサーチしたあのカードがある。
「どうやら気づいたようなノーネ？魔法カード、融合を発動。手札の古代の機械巨人2体と、場の古代の機械素体の3体を素材として、融合召喚！今こそ進化するノーネ、古代の機械超巨人（アンティーク・ギア・メガトン・ゴーレム）！」
　メガトン、の名が示すように相当な重量級らしく、これまでの古代の機械巨人をも上回るほどの地響きを起こして大量の砂埃と共に空から降ってきた融合体が着地する。やがてそれも収まり、僕らの前にその姿を現した古代の機械の融合体、その巨人の姿は。
『なかなか壮観だな』

その胴体から飛び出ているのは融合素材数を反映したのか、なんと合計６本もの巨大な鋼鉄の腕。そんな思い体を支える下半身はといえば、もはや人型というよりも移動要塞のような６本の鋼鉄の足。僕らを、そして僕の側に立つ巨人を無感情に見下ろすモノアイが、獲物を発見して光を強めた。

古代の機械超巨人　攻３３００

「これだけで終わらせる気はないノーネ。あなたのしぶとさは私もよく知っているから、手加減は抜きで。装備魔法、重力砲（グラヴィティ・ブラスター）を装備し、１ターンに１度攻撃力を４００ポイントアップさせますーノ」

古代の機械超巨人　攻３３００→３７００

「さあ覚悟するノーネ、古代の機械超巨人で古代の機械巨人に攻撃！」

「バトルフェイズに入る前に永続トラップ発動、ディメンション・ガーディアン！このカードの対象になっている限り古代の機械巨人は、あらゆる方法で破壊されない！」

「だとしても、ダメージはそのまま通るノーネ！」

古代の機械超巨人　攻３７００→古代の機械巨人　攻３０００

清明　ＬＰ２４００→１７００

超巨人がその６本の足で体重からは予想もつかないようなスピードで走り、こちらの巨人の眼前に迫る。２体の巨人の右こぶしがほぼ同時に唸り、次の瞬間には轟音と共に

互いのパンチがぶつかり合っていた。とはいうもののその体重も出力も圧倒的に超巨人の方が上、腕力の差で巨人がじりじりと押しこまれていく。

それでもなんとか、巨人は踏ん張った。辛うじて破壊されることなくしのぎ切ったところで、超巨人の左腕のうち１本がゆっくりと持ち上がっていくのが見えた。まさか、と思う間もなく、その鋼鉄の爪が無防備な巨人の背中に振り下ろされる。

「古代の機械超巨人は古代の機械巨人を素材としたことーデ、その枚数ぶんだけ１度のバトルフェイズに攻撃が可能なノーネ。私が素材とした古代の機械巨人は２体、よってもう１度攻撃させていただきますーノ」

古代の機械超巨人　攻３７００→古代の機械巨人　攻３０００

清明　ＬＰ１７００→１０００

「なかなかのしぶとさですが、その粘りもこのターンまでナノーネ。ターンエンド」

辛うじてこのターンはどうにか生き延びれたが、ここからどうする？古代の機械巨人の進化体ということは、十中八九あの超巨人も貫通能力は受け継いでいるだろう。となると、巨人を破壊されない壁として置いておくわけにもいかない。

そして更に輪をかけて状況を厄介にしているのがあの装備魔法、重力砲だ。通常の装備魔法とは違い１ターンに１度攻撃力をアップさせていくためその上昇値に際限がなく、たとえ重力砲そのものを破壊したとしても上がった攻撃力はそのままモンスターに

残される。おまけに追加効果として装備モンスターが戦闘を行う相手の効果を無効にしてくるため、攻撃を仕掛けるなら純粋にその数値で上回るしかない。

まったく、ここに来て随分きついモンスターを出してくれたものだ。

清明　ＬＰ１０００　手札：１

モンスター：古代の機械巨人（攻・コブラ・ガーディアン）

魔法・罠：ディメンション・ガーディアン（巨人）

１（伏せ）

クロノス　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：古代の機械超巨人（攻・重力砲）

魔法・罠：重力砲（超巨人）

「僕のターン！」

仮にここで壊獣を引くことができたとしても、僕の手札に他の壊獣がいない以上巨人の攻撃力で対処できることが大前提となる。超巨人を残しておくよりははるかにマシだが、それにしたって一時しのぎでしかない。ただ唯一光明が見えるとすれば、この僕に残った手札。デュエル開始時からずっと手元にあった、僕の大切な１枚。もし、もしも、ここであのカードを引くことができれば、あるいは……。

『違うな、マスター。もしも引ければ、ではない』

「え？」

『もっと自信を持つんだ。もしも、はない。引くと言ったら引く、確実に次で引き当てる。それぐらいの気概を見せてみろ』

「言ってくれるねぇ……でもま、そりゃその通りだね。わかったよ、これまでそうして来たみたいに、今日だって必ず引いて見せるさ。ここからが反撃開始、ドロー！」

　このデッキの中にたった1枚眠る、この状況を打破して逆転に繋げられるカード。それが今、僕の元に……届いた。

「魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！全てのモンスターを破壊して、デッキから互いの場に1体ずつの壊獣をリクルートする……でも僕の場の古代の機械巨人は、ディメンション・ガーディアンの効果で破壊から守られる！消え去れ、超巨人！」

　壊獣を呼ぶ破壊の嵐がフィールドに渦巻き、超巨人が、そしてその横の飛竜が飲みこまれて粉々になる。だが宣言通り怪獣を呼び出そうとデッキに手を掛けたところで、ふと僕の頭上に影がかかった。実内なのにどういうことだろうと何気なく見上げると、そこには信じられない存在がいた。

「な、こ、これは……」

「やはり計算通り、効果で除去しに来ましたネ。光栄に思いなサイ、私の教師人生の中で、生徒相手にこれを見せるのは初めてナノーネ。融合召喚された古代の機械超巨人

は、相手の効果で場を離れた時に後続となるさらなる融合体……古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）究極巨人（アルティメット・ゴーレム）を特殊召喚するノーネ！」

古代の機械究極巨人　攻４４００

超、を越えた究極の巨人、これがクロノス先生の真の切り札だというのだろうか。手の本数は２本、それを支える足は４本と伝説の魔獣ケンタウロス、そんな言葉を想起させるその姿はパーツの数だけ見れば超巨人の方が上だが、そんなもの微塵も感じさせない規格外さを誇るのはまさにその腕だ。ベースとなる古代の機械巨人と同じものをそのまま流用していた超巨人とは違い、あらゆる面で戦闘に特化されたカスタムの加えられたその両腕はおそらくひと打ちで山をも砕き、海をも叩き割るだけの出力を秘めているだろう。重心を整えるためか背面から飛び出る尾のようなコードが、地面を重く打ち据える。

『マスター？・マスター！・』

そんな最終兵器を前にして完全に固まっていた僕だったが、頭に直接響くチャクチャルさんの声でどうにか現実に引き戻された。そうだ、落ち着け。確かに古代の究極巨人は恐ろしいモンスターだし、超巨人が倒れても即座に現れるその様はクロノス先生のよくわからないこの勝負にかける執念の象徴そのものにも見える。

でもそれも、今の僕の敵ではない。あのデカブツをたたっ切る算段は、すでに僕の手

の中にある。
「妨げられた壊獣の眠りの効果でクロノス先生のフィールドに多次元壊獣ラディアンを、そして僕のフィールドにはこのカードを！来い、壊星壊獣ジズキエル！」
　単純な攻撃力だけで考えるなら、クロノス先生の場に出すのはわずか４００ポイントの差とはいえより攻撃力の低い粘糸壊獣クモグスの方が適役だったろう。ただクモグスは古代の機械と同じ地属性……ないとは思うが、万一地属性サポートを使われた場合のことも計算に入れて闇属性悪魔族かつレベル７なためアドバンスドローのコスト役にもならないラディアンを選んだ。
　多次元壊獣ラディアン　攻２８００
　壊星壊獣ジズキエル　攻３３００
「今更攻撃力３３００のモンスターを出した程度で……」
「確かにこのジズキエルですら信じられないことに、今の盤面だったら力不足。だけど僕の手札には今、僕と一緒に戦い抜いてきた原点にして頂点の切り札がある！攻撃力３０００の古代の機械巨人、そして同じく３３００のジズキエル。この２体をリリースしてアドバンス召喚、霧の王（キングミスト）！」
「その攻撃力はアドバンス召喚の際にリリースしたモンスターの合計値……まったく、そういえばあの時も、あなたは私の古代の機械巨人をリリースしてその攻撃力を断りも

なく一方的に奪っていったノーネ」
　どこか遠い目をして、クロノス先生が昔を懐かしむ。あの時、というのは無論、全ての始まりとなったあの入学試験デュエルのことだろう。そしてその目の前で、霧の王がその剣を正眼に構えて究極巨人と対峙した。
　霧の王　攻０→６３００
「クロス・ソウルを使ってたあの時とは手順が違いますよ、手順が」
「でも本質はそのまま、そういうのを馬鹿の一つ覚えと呼ぶノーネ」
「うっ」
『これは見事に一本取られたな』
「ち、違うもん。こーいうのはね、苔の一念岩をも通すってのさ。今からそれを証明してやる、さあ頼むよ霧の王！古代の機械究極巨人に攻撃、ミスト・ストラングル！」
　ここでラディアンを狙えば、クロノス先生のライフは残り５００まで減らせる。それはそれで魅力的な案ではあるし１瞬そうすることも考えたが、すぐ思い直して先に危険度が高い方を排除しておくことにした。それに、妨げられた壊獣の眠りで呼び出したモンスターには攻撃できる限り必ず攻撃宣言をしなければならないデメリットが附属する。もし上手いことといけば、ここで究極巨人を倒すだけでなく返しにラディアンの攻撃を暴発させることもできるかもしれない。

そして僕の指示を受けた霧の王が飛び上がり、振りぬかれた剛腕を紙一重の動きで回避して究極の巨人の脳天に自らの剣を振り下ろす。分厚い金属の体に深々と食い込んだ刀身を伝って、黒いオイルがまるで血のように垂れて地面に落ちた。ややあってその両腕も力を失いだらりと垂れさがり、モノアイの光もみるみるうちに薄くなる。究極の巨人もまた、超巨人の後を追うようにその機能を停止した。

霧の王　攻６３００→古代の機械究極巨人　攻４４００（破壊）

クロノス　ＬＰ４０００→２１００

……こ、これで今度こそ、今度こそ倒したはずだ。だがそんな僕の淡い希望を打ち砕くかのように、一度は光を失ったはずのモノアイが再び点灯する。崩れ落ちた体が身震いし、自らの体の残骸を押しのけて三度巨人が起き上がる。だが度重なるダメージにもはやその姿は融合体としての力を完全に失っており、シンプルかつ力強い、そして見慣れた巨人がそこにいた。あの入学試験の時からずっと、１度もあいまみえることのなかった僕らのエースモンスターが、卒業間際のこのデュエルになってようやくフィールドで対峙したのだ。

古代の機械巨人　攻３０００

「ま、まーだ次が出てくるの……？」

いつの間にか、息の上がってきた自分に気づく。始末しても始末してもこれでもう大

丈夫だろうと思うたびにまた形を変え姿を変えて切れ目なくフィールドを支配し続ける巨人ども、一撃でも食らったら即そこでデュエル終了になるような大型モンスターのラッシュに、いい加減単純な体力ではなく精神が疲弊してきたのだ。

「古代の機械究極巨人は破壊された時、自分の墓地の古代の機械巨人1体を召喚条件を無視して特殊召喚できますーノ。それからシニョール清明、それは当たり前なノーネ……このデュエルは、私は絶対に負けたくないノーネ……」

それは、デュエリストとしてみれば何もおかしなところのない言葉だ。負けたくない、そんなもの誰だってそうだ。だけど、今の言い方には少し引っかかるものを感じる。

「……クロノス先生。そもそも、なんで授業を突然止めちゃったりなんてしたんですか？」

こうして今デュエルしている理由も、結局のところ元をたどればそこに起因する。「このデュエルに」負けたくないということは裏を返せば、負けて授業を再開したくないという思いが根底にあるはずだ。これだけ長い間デュエルを続けてきたのに、まだその理由を誰も聞いていない。

全生徒が、そしていつの間にかその中に混ざっていた鮫島校長やトメさんの視線が集中する中でわずかに沈黙の時が流れ、次の瞬間クロノス先生が誰も予想しなかった行動に出た。なんとその両目にいきなり大粒の涙が溢れ、恥も外聞もなく男泣きに泣き崩れ

たのだ。
「マンママミーヤ！」
「えっ？」
「あなた達が卒業なんてしたら、皆とはそれでお別れになってしまいますーノ！そんな寂しいことをこれ以上我慢して、授業なんてとてもじゃないけど私にはできないノーネ！こんなこと私の教師生活の中でも初めての経験だから、もうどうしていいのかわからないノーネ！」
「えぇ……」
　呆れ半分ではあるが、もう半分は……実は、クロノス先生の言うことも少しわかる。
　この3年間は、僕の人生の中でも特に濃い年月だった。開幕死んじゃったし、僕。それからも学校で商売始めたり、命どころか魂まで賭けて闇のデュエルを繰り返したり……あの時は無我夢中だったけど、ふと振り返った今なら自信を持ってこう言える。確かに、辛いこともあったけれど。それでもこの3年間はかけがえのない大切な、そして楽しい時間だった。そんな時間が終わるのは、僕だって嫌だ。そしてその思いは、多かれ少なかれここにいる皆が抱えているはずだ。
　もしかしたら、授業をボイコットして今クロノス先生の位置に立っていたのは、僕自身や他の生徒の誰かだったかもしれない。でも先生がその役を引き受けてくれている

からこそ、僕らはこうしてそれを止める側に踏みとどまっていられる。考えようによってはあの人は今、僕ら全員の持つ弱さをたった1人で全て抱え込み、越えるべき最後の壁として立ちはだかってくれているのかもしれない。

そう考えればあの人は、やっぱり最高の教師だ。なんて、少し美化しすぎたろうか。ま、そんなのもたまにはいいだろう。ロマンチックは嫌いじゃない。

「ムムム……さあ、わかったら、早くターンを譲るノーネ!」

ようやく少し落ち着いたクロノス先生が涙を袖でぬぐい、若干赤い目のまま立ち直る。

「……ターンエンド!」

次のターンだ。次のターンで、全ての運命が決まる。なら僕も、覚悟を決めてどっしりと迎え撃つのみだ。

「私のターン!」

このドローで、クロノス先生の手札は計3枚。ただそのうち1枚は、先ほどサーチした古代の機械騎士かサルベージした古代の機械箱のどちらかと見てほぼ間違いないだろう。少なくともどちらかは古代の機械素体の効果を発動するために手札コストとして使われたはずだから、両方が手札にある可能性はまずない。どちらも今更この状況に影響を与えるカードではないだろうし、何よりクロノス先生はこのターンもまだ魔法の

歯車のデメリットである通常召喚不可の制約を受けているからこれは無視しても問題ないはずだ。となると、警戒すべき残りは2枚。

「魔法カード、受け継がれる力を発動。私のフィールドから多次元壊獣ラディアンを墓地に送り、その元々の攻撃力を古代の機械巨人にこのターンの間加算するノーネ」

「墓地に送り、か……」

霧の王はフィールドに存在する間互いのプレイヤーにあらゆるカードのリリースを許さない永続効果を持っているが、墓地に送り発動するカードまでは防げない。ただそれでも古代の機械巨人の攻撃力は、霧の王にあと1歩のところで届かない。

古代の機械巨人　攻３０００→５８００

「墓地のトラップカード、スキル・サクセサーを発動！このカードを除外し、古代の機械巨人の攻撃力をこのターン８００ポイントアップさせるノーネ！」

「……っ！」

違う。手札コストは、古代の機械箱でも古代の機械騎士でもない。第三の手札は、とっくにこのターンへの布石として墓地に送られていたんだ。更なる強化を受けた古代の機械巨人の攻撃力が、なんとこのターンだけで霧の王に追いつき、そして追い越した。

でも……でも、それでも僕は。

古代の機械巨人　攻５８００→６６００
「これが私の本気、私の持てるすべてナノーネ。長かったこのデュエルにもここで決着をつけてやりますーノ、アルティメット・パウ……」
攻撃宣言をしようとしたクロノス先生の言葉が、途中で止まる。その視線の先には、霧の王……片目を銀色に染めたオッドアイとなり、さらに上の力を得た僕の、そして僕たちの姿があった。
霧の王　攻６３００→６８００
「……すいません、先生。トラップ発動、グレイドル・スプリット。このカードを霧の王の装備カードと、して……こうげ、き、力を、５００ポイント……」
そこまで言うので限界だった。必死にこみあげてくる涙を隠すために下を向き、両目に力を入れて溢れ出るそれをなんとかせきとめようとする。すいません、そんな謝罪の言葉を、震え声でもう１度吐き出す。クロノス先生が負けたくないという気持ちの源を知ってしまった以上、このカードを発動することに対しての躊躇いは大きかった。もしここで僕がこのまま負ければ、誰も卒業しなくて済む。
だけど、それでも、僕はここで勝つことを選んだ。墓地にスキル・サクセサーがあったということは、残る手札は先ほど見た２枚だということ。つまりクロノス先生にはもう、これ以上打つ手はない。

後悔がないといえば、大嘘になる。自分の手でこの生活との訣別の一手を打ったのだから、それが悲しくないわけがない。

自分に言い聞かせる意味も込めて、何度でも言おう。それでも僕は、ここで勝つ道を選んだのだ。

「私の墓地から古代の機械射出機の効果を使って……いえ、グレイドル・スプリットには確か、モンスター2体をリクルートする効果もあったノーネ。私はこれで、ターンエンドしますーノ」

不思議と、クロノス先生の口調は穏やかだった。憑き物が落ちたように微笑むクロノス先生の横で、強化カード2枚の効果が切れた古代の機械巨人の出力が通常の状態に戻っていく。

古代の機械巨人　攻６６００→５８００→３０００

「さあシニョール清明、何をぐずぐずしているノーネ。私が教師として全力で受け止めてあげますから、あなたも生徒として全力でぶつかってくるノーネ！」

きっぱりと言い切るクロノス先生の声に後押しされるように、涙を振り払って顔を上げる。

「霧の王っ！古代の機械巨人に攻撃……ミスト・ストラングルウッッー！」

それは、ほとんど絶叫に近かった。もう一度だけ繰り返そう。それでも、これがぼく

の選んだ道だ。迷いも後悔もあるけれど、それでも僕は前を向こう。

霧の王　攻６８００→古代の機械巨人　攻３０００（破壊）

クロノス　ＬＰ２１００→０

こうしてクロノス先生の授業ボイコット事件は終わりをつげ、その翌日からは無事に授業も再開された。時々ふとしたきっかけでしんみりした空気になったりすることもあったけど、それぐらいの変化は仕方ないだろう。また、何事もない日常が戻ってきたのだ。

……約1名を除いて。

「チクショウ、こんなことになるなら、ちゃんと授業受けとけばよかった～っ！」

ああ、今日も大量にサボりまくった授業のツケとしてこれでもかとばかりに補習を受ける十代の悲鳴が校舎に響く。申し訳ないけど、これに関しては僕も散々口を酸っぱくして注意はしてたしねえ。僕知ーらないっと。

ダークネス・クライマックス
ターン１１９　科学水龍と大地の龍脈

「俺はこのメイン2にハードアームドラゴンとメタルデビル・トークンをリリースして、絶対服従魔人を召喚!これでこいつは効果破壊もされずにカード効果の対象にもできず、さらに破壊したモンスター効果は無効になる!さあ遊野先輩、これなら……」

「わーったわーった。んじゃそれリリースしといて、代わりにドゴランあげるからさ」

僕の目の前にそびえ立っていた、後輩クンの呼び出した巨大な赤い魔人の姿が風に消え、代わりに炎を操る強大な壊獣が現れる。さよーならー、と手を振り見送ってから、次のカードをすぐに出す。

「……え?」

「で、イーグル召喚。ドゴランに攻撃して、戦闘破壊されたイーグルの効果でドゴランに寄生。３０００ダイレクトで終わりね」

「う……嘘だぁーっ!」

メタルデビル・トークンは強力な効果と引き換えに、その維持に毎ターン１０００ものライフコストがかかる。その上で攻撃力３０００のドゴランの攻撃をまともに喰ら

えば、まあこんなものだろう。
「はい2点もーらい。おらおら、次は誰？誰でもいいからかかっておいでー」
これ見よがしに手招きするも、今のワンショットキルを見てすっかり気勢が削がれたらしい。周りを囲む人垣が一斉に下がり、ざわつくのが見て取れた。まったく情けない、自分から来ておいてその態度はないだろうに。
さて。そもそもなんで僕がデュエルしている……もとい、デュエルしていたのかというと、それは今日の昼にまで遡る。

「全校生徒の諸君、本日集まってもらったのは他でもない。いよいよ今年も、卒業デュエルの時がやって来た。泣いても笑っても、3年生諸君はこれが最後の学生生活となる。悔いのないように、全力を出し切り、デュエルに挑んでもらいたい！」
全校集会を開き、こんな演説をする鮫島校長。卒業デュエル、かあ。思い返せばこの3年間、なんだかあっという間だった気しかしない。思い返すともなくぼんやりと過去の記憶に浸っていると、壇上では校長からクロノス先生にバトンタッチした。つい先日授業ボイコットをやっていた人間と同一人物とは思えないほど本人なりにキリリとした表情で、僕らに向かって一礼したクロノス先生が声を張り上げる。

「それでは皆さん、今年の卒業デュエルのルールを発表しますノーネ。卒業生の目的は、デュエルをすることで蓄積する得点を重ねて１００点にすること、ただ１つナノーネ。デュエルするたびに勝敗にかかわらず各１点をベースとして、１年生に勝つことができればさらに１点。２年生に勝てば２点、同じ３年生に勝てば３点がさらに加算されますーノ。同じ相手との連戦や敗北による減点はナッシング、累計点数が１００点に達すればその生徒は晴れて卒業デュエルをクリアしたとみなしまスーノ」

勝敗に関わらず１点は入ってくるなら、これで落第することはまずないか。要するに、本当に最後のお祭りイベント的な意味合いなのだろう。

「そしてこの卒業デュエル期間中に皆さんの溜めた点数は、そのままデュエルアカデミアの最終成績になりますーノ！」

「主席となった生徒にはかのキング・オブ・デュエリスト、武藤遊戯のレプリカデッキをインダストリアル・イリュージョン社から贈呈されるという。繰り返すが、君達には悔いの残らないよう、全力でデュエルに取り組んでほしい」

話を再び引き取った鮫島校長の言葉を最後に、ついに卒業デュエルが始まった。レプリカデッキ……昔、神楽坂が持ち出してちょっとした騒ぎになったアレのことだろう。あの事件ももう２年前か、早いもんだと思いながらチラリと振り返る。案の定あの時のことを思い出していたらしく若干きまり悪そうな神楽坂と目が合って、その様子が何と

もおかしくてついつい笑ってしまった。
その横では翔や万丈目、明日香に最近ようやく復活した吹雪さんがそれぞれ楽しそうに言葉を交わし、それぞれバラバラの方向へと歩きだす。お互いに長い付き合いでその手の内も強さも知り尽くしているからこそ、直接の対決は後に回そうということだろう。それについては、僕も同感だ。ぐっと背伸びをして、レッド寮に向けてふらりと足を向ける。新入生も入ってこなくなり来年からは事実上の廃寮となる僕らの家に、せめて最後にもう1回だけでも人を集めたい……なんて、ちょっとメルヘン過ぎるだろうか。

そして、今だ。どうやら、僕の思考パターンというのは僕が思っている以上に読みやすかったらしい。
『え、それ今更言うのかマスター』
「素でツッコむのやめてチャクチャルさん」
レッド寮にたどり着いた僕を待っていたのは、わらわらと集まっていた後輩たちだった。僕と、それから十代は確実にここにいるはずだと、卒業デュエルのルールが発表されるや否やわざわざ真っ直ぐここまで来たらしい。そこまでしてくれたんなら、僕も少

しは先輩らしいところを見せるとしよう……と思ってつい張り切っちゃったけど、さすがに初っ端からのワンショットキルはやり過ぎだったろうか。いや、でもなあ、せっかくキルできるのに見逃すのもちょっと……。

あーだこーだと悩みながらさっきのデュエルで墓地に行ったカードを引き出そうとして、ふと気が付いた。デュエルディスクのエネルギー残量が、もうほぼ０に近い。このデュエルディスクとも覇王の世界からの付き合いだけど、つくづく実感したことが１つある。

……三沢本人も釘を刺してたけどこの水妖式デュエルディスク、本当に燃費が悪い。腕輪状態からの展開、さらにデュエル中の処理までを水のエネルギーだけで賄おうというんだから当然といえば当然なんだろうけど。

「ごめん皆、いったん部屋に戻っていい？すぐ戻るから」

誰も止めてこなかったので、ありがたく寮内に入らせてもらう。勝ち逃げみたいで申し訳ないけど、そんなこともあるさ。ふと人波の向こうに、十代がデュエルしている姿も見えた。相手は……ホルスの黒炎竜と王宮のお触れ、いわゆるお触れホルスの布陣だ。強力な相手に苦戦しているようではあるけれど、最終的に十代ならなんのかんの勝つだろう。

部屋に入ってすぐのところにある洗面台の蛇口をひねり、水の冷たさに顔をしかめな

がらも腕輪にどばどばと水をかけ始める。だがものの数秒もしないうちに突然、全身に悪寒が走った。この感覚、覚えがある。
「ミスターT……!」
『最近大人しかったからな。ようやく尻尾を出してきたか』
やむを得ない、この緊急事態に悠長に補給してる暇はない。表口にはまださっきの後輩たちがいるだろうから、窓側に回り込んで飛び降りよう……としたところで洗面台まで取って返し、慌てて蛇口を逆方向にひねり水を止める。出しっぱなしは水道代へのダイレクトアタックだ。
今度こそ窓を開けて飛び出すと足音を立てないように着地、島の奥に向けて走り出した。ミスターT独特の闇の気配というか嫌な感覚が、みるみる近くなってくる。
『そこだ!』
チャクチャルさんの叫びに応じて足を止め、サッと周囲を警戒する。
……いた!たった今まで誰かとデュエルしていたらしく、腕に付けたデュエルディスクの光が消える瞬間がちょうど見えた。相手は、誰かはわからないが後輩のイエロー生だ。あの怯えた様子からいって、恐らく瞬殺されたのだろう。
「さて。では約束通り、君には消えてもらおう」
「ひ、ひぇ……く、来るな!近づくな!」

「さらばだ」
　ミスターTがすっと片手を伸ばし、腰が抜けて座り込んだまま必死に後退しようとするイエロー生に近づいていく。状況からいって、ぎりぎり間に合ったってところか。
「待て、ミスターT！」
　伸ばした手が、ぴたりと止まった。ゆっくりと振り返るその顔のサングラスの奥は相変わらずうかがい知れないが、その表情を見れば明らかに僕の乱入に苛立っているのがわかる。
「もう私に気が付くとは、まったく暇なことだ」
「もう僕に気づかれるとは、まったく無能なことで」
　できるだけ口調をまねて言い返してやると、さらに苛立ちが増したのが伝わってくる。突然のことに思考が追いつかないのか呆然としたまま成り行きを見ていたイエロー生を見下ろし、無言で顎で指し示す。それでも動こうとしないので、ちょっぴり声を荒げて活を入れた。
「早く行きな！」
「う、うわあ～っ！」
　さすがのイエロー君もそこでようやく我に返ったのか金縛りが解けたかのように跳ね起き、這う這うの体でレッド寮の方に向かって走り出す。その背中が木々の向こうに

完全に隠れたのを確認してから、ミスターTへと向き直る。
「ここまで邪魔するつもりならば仕方がない、お前から消えてもらうとしよう」
「よく言うよ3戦3敗。その連敗記録、もういっぺん伸ばしてあげようか？」
売り言葉に買い言葉を返しながらも、そう笑う口の端が引きつってはいないだろうかと不安になる。なにせこのデュエルディスク、あんな1瞬水をかけた程度の今の状態だとせいぜい1ターンやそこらしか動きそうにない。電源が切れたから仕切り直し……なんて甘い話の通じる相手じゃないだろうし、そうなった以上強制敗北とみなされるのがオチだろう。
となると、僕に残された道はただ1つ。このミスターT相手に、ついさっき後輩にやったようなワンキルをぶちかますしかない。なんのかんの言ってもミスターTは僕が3連勝できたことが不思議なぐらいの強敵だ、口にするほど簡単にいく話でもないのは僕が一番よくわかっている。でも、ここでやるしか道はない。ここに駆けつけた時点で、こうなることはわかっていたんだ。
あれ？……てかこれ、今気づいたんだけど。最初にミスターTの気配を感じた時点で、すぐそこでデュエルしてた十代を引っ張ってくれば割となんとかなったのではないだろうか。
……もうやめよう、この話は。仮定はどこまでいっても、あくまで仮定でしかない。

「さ、さあ来い！」
「では望み通り。デュエ……」
「おっと。そのデュエル、俺が代わりに引き受けよう！」
　完全に自業自得な決死隊の覚悟でデュエルディスクを構えたところで、どこからともなく鋭い一喝が飛ぶ。１瞬十代が来たのか、とも思ったが、すぐに打ち消した。いや違う、どうしてこの声を忘れられるだろう。僕とミスターＴが向かい合うすぐ横の空間が突然ぐにゃりと曲がり、陽炎でも起きているかのように不安定に揺れ始める。そこからぬっと人の足が出てきたかと思うと、すぐにその上半身が１歩１歩踏み締めるようにしてゆっくりと近寄ってきた。
　ああやっぱり、間違いない。ずいぶん遅い登場だけど、待ってたよ同士。
「三沢！」
「ああ、久しぶりだな。遅くなってすまない、こちらの世界に戻るための仕掛けがなかなか整わなくてな。そちらの世界に今何が起きているかは、俺もだいたい知っている。お前がミスターＴ、だな？」
　相変わらず、この男は話が早い。ミスターＴも僕より三沢を最優先で倒すべき対象と判断したらしく、僕のことなどすでに眼中にないと言わんばかりに三沢の方を向く。デュエルディスクを構えるのは、ほぼ同時だった。

「いかにも。多少なりとも私の知識はあるようだが、その上で私の前に姿を現すとはな」
「俺の友人が無茶したからな。もっとも、その原因は未完成品を渡した俺にもあるわけだが」
「面目ないね。ここは任せるけど……気を付けて」
「ああ。せっかくカッコつけて帰ってきたんだ、どうにかしてみるさ」
「デュエル！」
「先攻は俺が貰った。マスマティシャンを召喚し、その効果でデッキからレベル４以下のモンスター、オキシゲドンを墓地に送る。まずは基盤固め、カードを伏せてターンエンドだ」
マスマティシャン　攻１５００
オキシゲドン……ということはあのデッキは、三沢が６つの属性デッキの中でも特に愛用している水のデッキ、ウォーター・ドラゴンを軸としたあれだろう。相変わらず堅実な進め方だ。
「私のターン。キラー・トマトを召喚し、バトル。マスマティシャンに攻撃する」
キラー・トマト　攻１４００
キラー・トマトは攻撃力こそマスマティシャンに劣るものの、その真価はまさに戦闘破壊されることそのものにある。いわゆる属性リクルーターにとって、攻撃力１５００

というのはほどよい起点づくりにしかならない。
「おっと、ただで通すわけにはいかないな。トラップ発動、鎖付き爆弾（ダイナマイト）！このカードは俺のモンスター1体を選択し、その装備カードとなって攻撃力を５００ポイントアップさせる。迎え撃て、マスマティシャン！」
　マスマティシャンの握る杖が長い鎖の先にダイナマイトのくくりつけられた物騒な武器になり、その鎖を振り回してキラー・トマトに反撃する。いくら化け物トマトとはいえ元々攻撃力では劣っていたのだ、当然パワーアップした1撃を受け切れるわけがない。
　キラー・トマト　攻１４００（破壊）→マスマティシャン　攻１５００→２０００
　ミスターＴ　ＬＰ４０００→３４００
「小々計算外のダメージだったかい？だが、今のはほんの挨拶代わりだ。こんな物じゃ済まさないぞ」
「キラー・トマトの効果により、戦闘破壊され墓地に送られたことで攻撃力１５００以下の闇属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する。２体目のキラー・トマトを召喚し、もう1度マスマティシャンに攻撃。そして3体目を呼び出し、もう1度攻撃だ」
「何？……ふん、噂通りの戦い方だな」
　通常なら、無駄に増えるダメージを嫌って大人しく攻撃をやめる場面だろう。だが、

ミスターＴにその手の常識は通用しない。痛みを受けないのをいいことに自分へのダメージを顧みずに初志貫徹するあのファイトスタイルには、僕も十代も苦しめられてきた。

キラー・トマト　攻１４００（破壊）→マスマティシャン　攻２０００

ミスターＴ　ＬＰ３４００→２８００

キラー・トマト　攻１４００（破壊）→マスマティシャン　攻２０００

ミスターＴ　ＬＰ２８００→２２００

「そして３体目の効果を発動。儀式魔人デモリッシャーを特殊召喚する。カードを１枚伏せ、ターンエンドだ」

「リリーサーではない？……まあいい、儀式魔人ということは儀式デッキか」

３体目のキラー・トマトが倒れ、最後に呼び出されたのは自分の身長よりも巨大な斧を担いだ太った小人。どうやら今回のミスターＴは、儀式召喚を操るらしい。

三沢　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：マスマティシャン（攻・爆弾）

魔法・罠：鎖付き爆弾（マスマティシャン）

ミスターＴ　ＬＰ２２００　手札：４

モンスター：儀式魔人デモリッシャー（攻）

魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン。ここは臆さず攻める、ハイドロゲドンを召喚。さらに装備魔法、やりすぎた埋葬を発動！手札からレベル８のウォーター・ドラゴンを捨てることでそれ以下のレベルを持つオキシゲドンを蘇生、このカードを装備する！」
「出た！」
ハイドロゲドン　攻１６００
オキシゲドン　攻１８００
ハイドロゲドン、そしてオキシゲドン。三沢得意の化学式戦法は、すでに完成間近にまで到達していた。もっとも、今回はそこまでたどり着く前に勝負がつきそうだ。
「バトルだ、ハイドロゲドン！儀式魔人デモリッシャーに攻撃、ハイドロ・ブレス！」
「トラップ発動、メタバース。このカードの発動時、デッキからフィールド魔法１枚をサーチするか、そのまま場に発動する。私は、チキンレースを発動しよう」
「なるほど、だから最初にキラー・トマトをぶつけてきていたのか。万一にも俺のライフがお前を下回らないように……！」
チキンレースは近頃のフィールド魔法にしては珍しく、互いのプレイヤーに影響の及ぶカード。ライフポイントが低い方のプレイヤーが、あらゆるダメージを受けなくなる。恐らく三沢の言った通り、あの３連自爆特攻は、単なるデッキ圧縮だけではなくラ

イフ調整の意味も兼ねていたということだろう。悔しそうに唸る三沢だが、ハイドロゲドンの攻撃は止まらない。

ハイドロゲドン　攻１６００→儀式魔人デモリッシャー　攻１５００（破壊）

「だがこれで、ハイドロゲドンの効果を発動だ。このカードが相手モンスターを戦闘破壊したことで、デッキから更なるハイドロゲドン１体を特殊召喚できる」

ハイドロゲドン　攻１６００

これで三沢の場にはマスマティシャンの他に水素（ハイドロゲドン）、水素（ハイドロゲドン）、そして酸素（オキシゲドン）の３分子が揃った。となると、結局導き出されることになった化学式は１つ。

「このメイン２に魔法カード、ボンディング―Ｈ２Ｏを発動。ハイドロゲドン２体とオキシゲドン１体を素材として結合召喚、俺の墓地に眠るこのモンスターを呼び戻す！出でよ、ウォーター・ドラゴン！」

ウォーター・ドラゴン　攻２８００

そして現れた、炎属性と炎族の天敵ともいえる三沢のエースモンスター。あのややこしい召喚条件を今回もまるで苦戦した様子もなく満たすあたり、どうやら異世界暮らしの生活でもその腕は鈍っていないようだ。だがミスターＴは、そんなウォーター・ドラゴンのプレッシャーを目の当たりにしても涼しい顔のままだ。

「さらにターンを終える前に、お前の発動したチキンレースの効果を使わせてもらう。

ターンプレイヤーは1ターンに1度１０００ライフを払うことで、３つの効果から1つを選択して発動できる。俺が選ぶのは、１枚ドローする効果だ」

三沢　ＬＰ４０００→３０００

抜け目なくミスターＴのカードを逆利用し、無くなった手札を補充する三沢。そのカードを一瞥してそのまま場に伏せ、ミスターＴにターンを回した。

予想外の粘りを見せられたとはいえ、ここまではおおむね三沢のペースといっていいだろう。

「私のターン。まず、私もチキンレースの効果を発動する。１０００ライフを払い、1枚ドローだ」

ミスターＴ　ＬＰ２２００→１２００

たった今三沢が使ったものと同じ効果により、ミスターＴもまたカードを引く。これで奴の手札は6枚、さあ何をしてくるか。

「アーマード・ビーを通常召喚し、その効果を発動する。ウォーター・ドラゴンの攻撃力は、このターンの間半減される」

巨大な蜂のモンスターが鋭い尾を向け、毒針を水龍に打ち込む。いかに体が水とはいえ毒までもを無効にすることはできなかったらしく、苦痛の声が森に響いた。

アーマード・ビー　攻１６００

ウォーター・ドラゴン　攻２８００→１４００
「ウォーター・ドラゴン！」
これで、アーマード・ビーの攻撃力がウォーター・ドラゴンを上回った。だけどウォーター・ドラゴンには、破壊された時に墓地の素材となったモンスターを蘇生する強力な効果がある。たとえここでわずかにダメージを受けたとしてもオキシゲドンの攻撃力は１８００、十分対応可能な範囲だ。
「チキンレースを張り替えてフィールド魔法、天空の虹彩を発動。このカードは1ターンに1度私の場で表側のカードを破壊することで、デッキからオッドアイズと名のつくカード1枚を手札に加えることができる。私はアーマード・ビーを破壊し、オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンをサーチする」
「オッドアイズ……」
オッドアイズ使いのミスターT、といえば、あの廃寮で戦った奴を思い出す。でもあの時の奴の戦術はF（ファイブ）・G（ゴッド）・D（ドラゴン）を融合しての力押しで、オッドアイズはあくまでアクセント的な扱いだったはずだ。となるとあれからデッキを変えたのか、それとも別のミスターTなのか……いや、そもそも奴に別固体、なんて概念が存在するのだろうか。
まあ、存在しようがしまいがそんなもの別に知りたくもない。出てくる端から全員潰していけば、それで済む話だ。

「儀式魔法、大地讃頌を発動。手札の地属性儀式モンスターと同レベルになるようにモンスターをリリースすることで、そのモンスターを儀式召喚する。私は手札のレベル４モンスター、エレメント・デビルと墓地のレベル３、儀式魔人デモリッシャーを自身の効果によりリリースの代わりに除外することで、儀式召喚！降臨せよ、オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン！」

その圧倒的な質量と重量により、着地しただけで大地を揺るがす巨漢のドラゴン。オレンジ色の身体にはまるで鎧のように岩と化した鱗が生え、桁外れの体重を支えるためかその両足はこれまでに僕が見てきたどのオッドアイズよりも太く力強い。

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン　攻２８００

「オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンの効果発動。このカードが特殊召喚された際、相手フィールドに存在する魔法及び罠カードは全て持ち主の手札に戻る」

「やむを得ない、か」

どうやら三沢の場のカードは、フリーチェーンの物ではなかったらしい。重力の龍がおもむろにその片足を上げてドシン、と踏み鳴らすと、それだけで着地点を中心としたクレーターとともに衝撃波が走り三沢のカードを巻き上げる。

『それは違うなマスター。どうせあの効果にはあらゆる効果がチェーンできない、儀式召喚を通した時点で手遅れだ』

チャクチャルさんの補足が聞こえるが、残念ながら今の余波にこっちまで巻き込まれて倒れないようにするので精いっぱいで返事をする余裕がない。弱体化したウォーター・ドラゴンと、それを守るべき伏せカードを失った三沢の場を一瞥し、重力の龍が灰色と暗いオレンジの２色が螺旋状に絡まったブレスを放った。

「バトルだ。オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンで、ウォーター・ドラゴンを攻撃する」

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン　攻２８００→ウォーター・ドラゴン　攻１４００（破壊）

三沢　ＬＰ３０００→１６００

「ぐっ！だがウォーター・ドラゴンが破壊されたことで、効果発動……!?」

発動宣言した瞬間、三沢の顔が苦痛に歪む。闇のデュエルの痛み……にしてはタイミングがずれていた気がするし、今度は何が起きているというんだろう。目に見えない何かに耐えているのか、背を丸めて足元がふらつきながらも辛うじて膝をつくようなことはなかった。

三沢　ＬＰ１６００→１１００

「オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンが存在する限り、相手プレイヤーはカード効果を発動するには５００のライフコストを払わねばならない」

「カード１枚で５００……?」

かの極悪な永続魔法、魔力の枷を思わせるプレイヤーに直接干渉するタイプのロック効果。しかも、自分には何のデメリットもなく相手だけを一方的に縛る効果ときた。早いとこあのドラゴンを除去しない限り、何かするごとに三沢のライフが削られてしまう。

ただこれで、なぜ最初のターンにキラー・トマトで儀式魔人リリーサーを特殊召喚しなかったのかの理由が分かった。儀式モンスターが存在する限り特殊召喚封じの効果を発揮するリリーサーでは拘束力が強すぎて、あのオッドアイズの効果を生かせる場面がかえって少なくなってしまう。あえて特殊召喚は通すという隙を見せることで、場の展開のためにカード効果を使わせようという腹なのだろう。効果的かつ卑劣な手だが、それは同時に慢心でもある。ガッチガチに場を固めに来ない以上、必ず逆転のチャンスはあるはずだ。

「ウォーター・ドラゴンの効果で、墓地のハイドロゲドン２体とオキシゲドンを特殊召喚する！」

どうにか持ち直したらしく、再び背筋を伸ばした三沢が墓地から3枚のカードを引っ張り出す。その言葉通り、再び分離した水素と酸素のモンスターが場に解き放たれた。

ハイドロゲドン　守１０００

ハイドロゲドン　守１０００

オキシゲドン　守８００

「私のオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンが存在する限り、君が発動できるカードは後２枚。せいぜい考えて選ぶことだな。さらに装備魔法、リボーンリボンをオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンに装備してターンエンド」

オッドアイズに装備された装備魔法……あれは確か、装備モンスターが戦闘破壊された時にそのモンスターを１度だけ復活させるカードだったはずだ。これで戦闘破壊に対する備えも十分、というわけだ。

三沢　ＬＰ１１００　手札：１

モンスター：ハイドロゲドン（守）

ハイドロゲドン（守）

オキシゲドン（守）

マスマティシャン（攻・爆弾）

魔法・罠：鎖付き爆弾（マスマティシャン）

ミスターＴ　ＬＰ１２００　手札：１

モンスター：オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン（攻・デモリッシャー・リボン）

魔法・罠：リボーンリボン（オッドアイズ）

場：天空の虹彩

「忠告には感謝するが、まだ負けたわけではない。俺のターン、ドロー！」
　これで三沢の手札は2枚。その中身を一目見て、まるで最初から計算づくだったといわんばかりの躊躇いの無い動きで次の行動に取り掛かる。
「俺はマスマティシャンをリリースして、デューテリオンを守備表示でアドバンス召喚する。さらにカードを伏せて、ターンエンドだ」
「デューテリオン……？」
　1ターン目からずっと破壊されることなく留まっていたマスマティシャンが消え、代わりにハイドロゲドンとよく似た姿の2種類目の水の恐竜が召喚される。アドバンス召喚が必要な上級モンスターとは思えないほど低いそのステータスに関しては僕も人のことは言えないのでいいとしても、僕の記憶が正しければ、あんなモンスター三沢は持っていなかったはずだ。
　デューテリオン　守１４００
　不審げな僕の声は、どうやら聞こえていたらしい。まださっきのダメージが体に残っていて苦しいだろうに、そんな様子を微塵も感じさせない笑顔で三沢が振り返る。
「おいおい清明、俺だって研究者以前にデュエリストなんだぞ。向こうの世界にいる間に、この化学式デッキも強化しておいたのさ。もっとも、まだ少しコマが足りないがね」
　コマが足りない……つまり、デューテリオンだけではまだ不足ということか。でもあ

の余裕は、決して空元気ではない。それだけ、その先にあるカードのことを信用しているのだろう。だがどれだけ信用していようとも、まずはこの次のターンを乗り切らないことには話にならない。

「私のターン。ユニオンモンスター、バスター・ショットマンを召喚。このカードをオッドアイズに装備することで、その攻守を５００ダウンさせる」

バスター・ショットマン　攻０

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン　攻２８００→２３００　守２５００→２０００

青いカラーリングの人型ロボットが召喚されたかと思うと、すぐさまその全身を変形させて巨大な砲になる。オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンが重力波を放ちそれを引き寄せ、体の前面に装着する。合体と同時に結合部分から火花とスパークが走り、オッドアイズの体が不気味なプラズマに染め上げられた。

「バトルだ。オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンで、オキシゲドンに攻撃する」

オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン　攻２３００→オキシゲドン　守８００（破壊）

三沢の場で守りを固めていた４体のモンスターのうち、酸素を司る恐竜が破壊される。残るモンスターはこれで３体……と思うや否や、合体するだけして沈黙を保っていたバスター・ショットマンの砲に突然エネルギーが溜まり始める。その両手足を変化さ

せてできた計３門の砲口から、一斉にエネルギー弾が放たれた。着弾と同時に目も眩むような閃光が発生し、やっとそれが収まった時にはすでに三沢のフィールドを埋め尽くしていたはずのモンスターは1体も残っていなかった。
「バスター・ショットマンの装備モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、フィールド上に存在するその破壊されたモンスターと同じ種族のモンスター全てを破壊する。従ってオキシゲドンと同じ恐竜族のハイドロゲドン、そしてデューテリオンはすべて破壊だ」
「随分派手にやってくれたな……」
「そして、このターンも天空の虹彩の効果を発動する。バスター・ショットマンを破壊し、デッキから2枚目のオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンを手札に。これにより、場のオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンの攻守は元に戻る」
「なるほどな。アフターケアも織り込み済み、か」
　オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン　攻２３００→２８００　守２０００→２５００
　バスター・ショットマンの装備が無理やりとはいえ外されたことで、ダウンしていた攻守が元の数値に戻る。三沢はこんな時でも冷静に分析しているからあまり悲壮感はないけれど、このターン生き残れたのは本当に辛うじてなレベルのはずだ。今回は何と

か三沢のターンに繋がるけれど、場のモンスターが全滅してしまった以上次はないと見ていいだろう。となると三沢の言うコマとやらが揃うかどうかは、次のドローただ1枚にかかっている。

「俺のターン、ドロー！」

かたずをのんで見守る中、三沢がその運命のカードを引き抜く。真剣な表情のままそのカードに目をやり……そして、その口元が勝利の確信に綻んだ。

「このデュエルはここで終わりだ、ミスターT！トラップ発動、ボンディング―ＤＨＯ！このカードは発動時に俺の手札または墓地のＤ（デューテリオン）、Ｈ（ハイドロゲドン）、Ｏ（オキシゲドン）を1体ずつデッキに戻し、手札または墓地からこのモンスターを結合召喚する！」

三沢　ＬＰ１１００→６００

従来のボンディングとは異なる原子配列により、新たなる化学式が構築される。結合により生み出されたそれは、古龍らしく水の髭が生えていたり目つきがより鋭くなっていたりするなどの細かい点を除けば、一見普通のウォーター・ドラゴンとほとんど変わりがないように見えた……だが、違う。その迸る水龍の体の隣に、さらにもう1本同じ水龍の首が持ち上がる。双頭のウォーター・ドラゴンが、２つの口で同時に吠えた。

「水を超えし重水の龍！ウォーター・ドラゴン……クラスター！」

ウォーター・ドラゴン―クラスター　攻２８００

「だがその攻撃力は、私のオッドアイズと同じ。引き分けといいたいところだろうが、あいにくオッドアイズにはリボーンリボンが装備されていることを忘れたのか？」
「忘れちゃいないさ。そしてこの瞬間、俺の理論が完成する。オッドアイズ・グラビティ・ドラゴンの効果でさらに５００ライフポイントを支払い、この新たなるウォーター・ドラゴンの効果を発動！特殊召喚成功時、相手フィールドに存在する効果モンスター全ての効果をターン終了時まで無効にし、その間その攻撃力も０にする！」
「何!?」
　クラスターの全身から溢れ出る藍色のオーラが、二色の眼を持つ重力の龍を包み込む。抵抗虚しくその全身から力が抜けていき、小山のような存在感の龍がその場に力なく横たわった。
　三沢　ＬＰ６００→１００
　オッドアイズ・グラビティ・ドラゴン　攻２８００→０
「いくらリボーンリボンにより蘇生ができようと、先にプレイヤーのライフが尽きてしまえばその効果には何の意味もない。バトルだ！ウォーター・ドラゴン―クラスターでオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンに攻撃、オキシダン・パニッシャー！」
「ぬ……ぬおぉーっ！」
　ウォーター・ドラゴン―クラスター　攻２８００→オッドアイズ・グラビティ・ドラ

ゴン　攻０（破壊）
ミスターＴ　ＬＰ１２００→０

「お前たちが何をしようが、世界はもうじき真の闇に包みこまれる。それがダークネスの力……」
『まずいマスター、また逃げるぞ！』
チャクチャルさんの警告も時すでに遅く、ミスターＴの姿が闇に包まれたカードの束となり、それもすぐに消えていく。結局、また取り逃がしたのか。追いかけたところでどうせ捕まらないのはわかっているのでため息１つつき、代わりに三沢の方に目を向ける。デュエルを終えてデッキにカードを戻している最中だったが、僕の視線に気が付くと作業の手を止めた。何か言おうとしたところで、新たな人影が息を切らしてやって来た。
「どこだ、ミスターＴ……って、清明？それに三沢も!?清明はともかく、なんでお前がここにいるんだ？」
「おいおい、久しぶりの再会なのに随分なご挨拶だな十代。まあいい、話せば長くなるから要点だけまとめるぞ。向こうで次元世界について研究している最中に、ふと気になる

データを見つけてな。2、3日前から、この次元でだけ妙に空間の歪みの発生が多いんだ。色々と資料をあさってみた結果、ダークネスが闇の世界から干渉する際に副作用として空間にわずかな歪みが生じることがわかったんだ。それでダークネスがこの世界に侵攻しようとしていることを知って、慌てて駆け付けてきたというわけさ。だがこの様子を見ると、お前たちもそれには気づいていたようだな」

「ま、色々あってね。十代がいけずだったせいで、ちょっとばかし情報共有には時間かかっちゃったけど」

なんとなく投げつけた軽い嫌味にも、肩をすくめただけで答えない十代。反省してねーなこいつ。

「待てよ?それじゃあ三沢、その歪みがどこにできるのかがわかれば、次にミスターTがどこに出てくるのかがわかるってことか?」

「それだけじゃない。ダークネス本体がやってくるときも、ある程度はその位置を察知できるはずだ」

十代の疑問に、あっさりと肯定する三沢。これは、もしかしなくてもかなり有力な情報だ。逃げ足が恐ろしく速いうえに神出鬼没なせいで見つけられなかったミスターTがどこから来るのかを事前に察知できるのならば、これまでよりもその対応がぐっと楽になる。

「それで、次は奴はどこに現れる？頼む三沢、教えてくれ！」
「ああ、それは……」
詰め寄る十代に三沢が答えようとしたところで、場違いな電子音が鳴り響く。音の発生源は、十代のＰＤＦだ。一度追及の手を止めて通話に出ると、向こうからオブライエンの声がかすかに聞こえてきた。
『十代、至急童実野町まで来てくれ。明らかに様子がおかしい』
「童実野町だな？わかった、すぐに行く！」
それだけ返し通話を終了する十代に、三沢が真剣な面持ちで語りかける。
「どうせ俺が止めたところで聞きはしないだろうが、せめて十分気をつけろよ、十代。俺の計算が正しければ、次に奴が現れるのはまさにその童実野町……そしてその次は、このアカデミアだ」
冷たい風がひゅう、と僕らの間を吹き抜ける。ふと気が付けば、さっきまで晴れていたはずの空はどんよりと曇っていた。それが僕らの未来の何かを暗示しているのかは、わからない。
……嫌な、天気だ。

ターン１２０　鉄砲水と変幻の銀河

「……どう、三沢？」

眩しいほどに明かりの灯る部屋の中、ひたすら机に向かう三沢に声をかける。少し待ってみたが反応がないあたり、こちらの声も届かないほど集中しているのだろう。

三沢がこの世界に突然帰ってきて、そうかと思えば入れ替わるようにオブライエンからの連絡を受けて童実野町へと駈けつけていった十代からは、いまだに何の連絡もない。返り討ち……なんてことは、十代に限ってあり得ないだろう。あれだけ大口叩いておいてあっさり負けた僕や、まだ異世界でのトラウマがぬぐい切れていない皆に配慮してか本人は隠しているつもりらしいけど、今の十代にはあのユベルが付いている。最初に彼……彼女？の姿をこっちの世界でまた見た時にはさすがにびっくりしたけれど、十代がそれでいいならきっとあの後で何かがあったんだろう。それに、下手に野生のＳＡＬでも拾ってこられるより食費も世話の手間もかからないから楽なもんだ。

「よし。清明、できたぞ。ちょっと動かしてみてくれ」

いきなり椅子に座ったまま振り返った三沢が、僕に向かって青い輪っかを投げてよこしてきた。三沢の解説をＢＧＭ代わりに聞きながら、ようやく返してもらえたそれを元

通り腕にはめ直す。
「これまでは覇王に対抗するために突貫工事で作った間に合わせの品だったからかなり無駄も多かったが……これで、エネルギー効率はだいぶマシになったはずだ。給水機能もそっくり取り替えたから、半永久的とまではいかないがそうそうエネルギー不足になることはないだろう」
ミスターTを撃退したのち、三沢がまず取り組んだのは意外にもアカデミア生徒たちに危機を伝えることではなく、以前僕が貰った三沢謹製水妖式デュエルディスクの手直しだった。確かにやってくれるならそれに越したことはないけれど、それはちょっと悠長すぎやしませんかね。
そう聞いた僕に、なんてことはないといった風に軽く笑いながらこう返したのだ。
「そうは言うが、今この話を下手に広めてどうする？確かになまじ俺たちの代にはこれまでの不思議な経験があるから、この話も今更信じない奴はいないだろう。そしてそこから生まれる恐怖はパニックを生み、それはダークネスにとって格好の餌になる。なに、大丈夫だ。俺の計算によれば、奴らが次にこの世界に現れるまでまだ少しは時間がある。勝負に出るのはもう少し情報を絞り、戦う準備ができてからでいい」
確かに、その光景は容易に目に浮かぶ。何から何まで正論尽くしの三沢の言葉に渋々黙る僕の顔を見て、何がおかしいのかより一層笑みを大きくする。

「計算は俺がやっておくから、お前はもう少し今の時間を楽しんで来い。卒業デュエルのシーズンなんだろう?せっかくのイベントを邪魔する権利なんて、ダークネスだろうとありはしないさ。十代だって、何かあったらその時点で連絡してくるだろうしな」

口調こそ柔らかいが、要するに邪魔だから出てけということだろう。確かに、この世のあらゆる難しい話は専門外だと公言して憚らないような僕にこれから始まる三沢の膨大な計算の手伝いなんてできそうにない。

「それに、そのデュエルディスクもせっかく改造までしたんだ。戦闘データをいくらか確保しておきたいから、そのテストも頼む」

『適材適所、だな。マスター、駄々こねてないで大人しくした方がいいだろう』

追い打ちをかけるような頭脳派２人の言葉に畳みかけられ、半ば押し出されるように部屋の外に出る。よほど集中したいのか、扉をくぐった瞬間内側から鍵のかかる音がした。

「……じゃ、行こっか」

体よく締め出された感は否めないけど、ここにずっといてもどうにもならない。諦めて左の手首で輝く腕輪をひと撫でし、ふらりと曇り空の下に足を向けた。

「よし、勝った勝った。えっと、３点貰い……で、いいんだよね？」
「うう……」
「じゃーねー」
半ば憂さ晴らしのように倒された後輩君には申し訳ないが、もともとデュエルを挑んできたのは向こうの方だ。当たり前といえば当たり前なのだが、いまだこのアカデミアの誰もがすぐそこまで迫っている脅威には気づいていない。だからといって、それを責めることなどできるはずもない。そんなもの、普通は気づくはずもない。
むしろ、三沢から釘を刺されたとはいえこんなにのんびり卒業デュエルなんてやっていて、目の前の危機から目をそむけているのは僕の方なのかもしれない……なんて、柄でもない方に思考が飛んでしまった。
「やめだやめ。これで累計……えっと、９３点か」
卒業までに必要な点数は、最低１００点。最低２人、最高でもあと７人とデュエルすれば、晴れて僕にも卒業資格が手に入る。１度デュエルした相手とは点数に入らない以上、他に戦ってない相手は……なんて、そんなのもう決まってるじゃないか。２年生の彼女と、３年生の彼女。最低でもこの２人に勝ってこそ、僕も胸を張って卒業できるってものだ。考えながら歩いていたら無意識のうちに見慣れた場所、普段僕がいる１教室の前に着いていた。電気がついているということは、案の定彼女はこの中にいるのだろ

う。軽くノックしてから返事を待たずにドアを開けると、かすかにシナモンとバニラエッセンスの混じった甘い匂いが漂ってきた。
「やっほー、精が出るねえ」
「いらっしゃいま……自分の店放り出してどこで油売ってたんですか、先輩」
暖かく迎え入れられたかに思ったのもつかの間、冷たい視線と言葉が突き刺さる。別にそういう趣味があるわけじゃないけれど、そんな態度にどこかほっとしている自分もいた。ま、彼女の場合はこうでなくっちゃね。変にしおらしくなられると、そっちの方がよっぽど気持ち悪い。
「何かまた失礼なこと考えてません？」
「滅相もない」
「そうですか」
聞き分けのいい言葉とは裏腹に1ミリも信じていない視線に射抜かれ、適当に肩をすくめる。2年間も付き合ってきたのだからさすがにもう慣れたものだが、日頃からあの眼光に慣れていない気の弱い人ならあの眼で睨みつけられるだけでビビってあることないこと自分から白状してしまうだろう。
「まあいいです。それよりも、先輩には少し聞きたいことがあったんでした……今、時間空いてます？」

聞きようによってはなかなか過激な台詞を無自覚に吐きながら、エプロンの前ポケットに突っ込んであったらしいデュエルディスクをそっと取り出す葵ちゃん。こういう時だけ以心伝心なんだから、本当にいい後輩を持ったものだ。それとも彼女も僕もただの戦闘中毒者（バトルジャンキー）か、だ。

「先輩とこうしてデュエルするのは、私が入学した時以来ですね」

向かい合ったところでぽつりと言われて、ふと思い出す。確かに、彼女との出会いもこうしてデュエルが絡んでいた。僕が勝ったらこの店、ＹＯＵ　ＫＮＯＷの看板娘兼助手になってもらう……とか、そんな感じだったっけか。それがまさかこの2年でここまではまり役になるとは、スカウトした僕にとっても予想外だったけど。

「あそこで負けたおかげで今の葵ちゃんがあるんだから、少しは感謝してもらいたいね」

「いいですよ」

「へっ？」

どうせまた憎まれ口でも叩かれるかと思っていたから、思わぬ素直な返事に完全に虚をつかれてしまった。思わず間抜けな声を上げて彼女の顔をまじまじと見返すと、してやったりといわんばかりの笑顔で迎えられる。

「先輩が勝ったら、ですが」

「……なるほど。じゃ、なおさら負けられないね。オーケイ、デュエルと洒落込もうか」

これは、発破をかけてくれたのだろうか。この大事な時に平常心を保てないだけならまだしも、それを悟られたあげく後輩に心配かけるとは、僕もまだまだだ。

でも実際、今の軽口のおかげで少しだけ気が晴れたのも事実だ。今必要なのは切り替え、後で必ず来る戦いの時に備えて心と体を静めておくことだ。

「「デュエル！」」

葵ちゃんが相手となれば、僕の手の内は割れていると考える方が自然だろう。となれば下手な小細工を狙うより、正攻法でストレートにこのデッキの持ち味を生かすのみだ。

「僕のターン。モンスターをセットして、ターンエンド」

「セットですか。リバースモンスターですか、あるいは……」

「さーてね。どう思う？」

「どちらにせよ、すぐにわかることですね。私もモンスターをセットし、カードを２枚伏せてターンエンドです」

近頃のデュエルにしては珍しく、互いにセットしたのみでターンが再び回ってくる。誘われているのか、単に様子見だけなのか……どちらも可能性としては十分あり得るだけに、余計に読みづらい。この緊張感のある読み合いは、他の後輩たちとの卒業デュエルとは一味違う。

清明　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：１（セット）
魔法・罠：なし
葵　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：１（セット）
魔法・罠：２（伏せ）
「僕のターン。来い、ツーヘッド・シャーク！」
ツーヘッド・シャーク　攻１２００
ただまあ、彼女の意図がどちらにせよ結局最後には突撃するのだから読みもへったくれもないのだが。切り込み役としてこれまでもずっとお世話になってきた双頭のこの鮫は攻撃力こそ若干低いものの、葵ちゃんが得意とする忍者は守備力がそこまで高いわけでもない。１撃目の攻撃で破壊し、続く連続攻撃の効果でもう１撃当てる。うまくいけば儲けものだし、それだけの価値はある。
「バトル！」
「伏せモンスターは裏守備のまま、ですか。ならば、このカードでお相手しましょう。トラップ発動、鎖付きブーメラン！この忍具・鎖鎌は不用意に踏み込んできた敵の動きを封じ込め、表示形式を変更します」

「む……」

床から伸びてきた1本の鎖が、先端に付いた刃物をおもり代わりにぐるぐると回転しツーヘッドの体を絡め取る。ま、当然伏せカードが2枚もあれば止めてくるか。だけど表示形式の変更ということは、少なくとも戦闘破壊に失敗したツーヘッドが攻撃表示のまま突っ立った状態でターンを終える最悪の事態にはならずに済んだ。今はそれで良しとしよう。

ツーヘッド・シャーク　攻１２００↓守１６００

「ターンエンド」

「いいんですか、先輩?そんなにのんびりしていて」

エンド宣言をした瞬間、背筋がぞくっと来た。あの眼は本気だ、獲物を見る目だ。間違いない、来る!

「私のターン、ドロー!セットモンスターを反転召喚、白い忍者(ホワイト)!このモンスターのリバース効果により、先輩のセットモンスターを破壊します!白砂忍法ホワイト・ディフォーム!」

白装束に身を包む忍者が印を組むと、その足元から純白の砂が舞い上がる。風もないのに飛んできたそれがセットモンスターの上に雪のように降り注いだかと思うとみるみるうちに僕のカードが砂の中に埋まっていき、ほんの数秒のうちに完全にその姿が消

えてしまった。僕のあのモンスターはグレイドル・アリゲーター、戦闘破壊や魔法破壊にこそ強いもののモンスター効果は何のトリガーにもできない。
「やってくれるね、葵ちゃん」
「やる？お言葉ですが、この程度でやってくれる、なんて評さないでいただきたいですね。やってくれる、というのは、こういうことを言うんですよ！永続トラップ発動、忍法　超変化の術！私の忍者と先輩の表側表示のモンスターを1体ずつ墓地に送り、そのレベル合計以下のレベルを持つドラゴン、恐竜、海竜族モンスター1体をデッキから特殊召喚します！ツーヘッド・シャークと白い忍者のレベルは共に4、よって私が呼び出すのはレベル8！」
「レベル8のドラゴン族、ってことは……！」
「ようやくお察しいただきましたか。お出ませ、葵流忍術最強のしもべ！銀河眼の光子竜（ギャラクシーアイズ・フォトンドラゴン）！」
　白い忍者を中心にストロボでも焚いたかのような光が走り、ほんの1瞬だけ部屋の中のあらゆるものから色が抜けて白黒の静止画となる。その中でひときわ輝いていたのが、巨大な1体のドラゴン。葵ちゃんの切り札、銀河眼の光子竜だ。
　銀河眼の光子竜　攻３０００
「まだ少し、打点が足りませんね？忍者義賊ゴエゴエを召喚します」

忍者義賊ゴエゴエ　攻１５００

巨大なキセルを振り回し、大量の小判を覗かせる赤装束の忍者がさらに召喚される。これで僕のフィールドにはモンスターがいないにもかかわらず、葵ちゃんの場の総攻撃力は４５００とこちらのライフを上回った。

「手札が４枚しかないのは少し不満ですが、まあいいでしょう。どうせオマケの効果ですし。まずはゴエゴエ、ダイレクトアタック！」

「くっ……！」

忍者義賊ゴエゴエ　攻１５００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４０００→２５００

飛んできた小判が突き刺さり、確実にライフを削っていく。

「忍者義賊ゴエゴエが戦闘ダメージを与えた時に相手の手札が５枚以上であれば２枚のハンデスが行えましたが、そこだけは命拾いしましたね。ですがいくら手札を溜めこんでいても、それを使う機会がなければ完全に無意味！行きますよ銀河眼、破滅のフォトン・ストリーム！」

「ホント、いくらランダムとはいえハンデス持ちはなかなか危なかったよ。相手モンスターのダイレクトアタック宣言時に手札から、ゴーストリック・フロストの効果発動！攻撃モンスターを裏守備にして、さらに自身を裏守備で特殊召喚する！」

「む……一筋縄ではいきませんか」
全身に光をチャージし、今まさに放出しようとしていた銀河眼の前に、雪の壁が立ちはだかる。防寒具を着込んだ雪だるまにして稲石さん譲りのゴーストリックの一員が、今回も僕を守ってくれた。
銀河眼の光子竜　攻３０００→???
「ダメージが通らなかったのは無念ですが、考えようによってはこれも感謝ですね。銀河眼が裏守備になったことで超変化の術との因果が途切れ、私もこのカードを自由に使えるようになりましたから。メイン２に魔法カード、機甲忍法ゴールド・コンバージョンを発動！私の場の忍法をすべて破壊し、デッキからカードを２枚ドローします」
内心では攻撃を防がれるのも織り込み済みだったのか、口では無念といいつつも大して痛手を受けた風もなくすぐさま次の手に移る葵ちゃん。引いたカード２枚がお気に召したらしく、わずかにその口角が上がる。
「永続魔法、隠密忍法帳を発動。このカードは１ターンに１度手札の忍者を捨てることで、デッキに眠る忍法１枚をフィールドにセットすることが可能となります。私はこのターン手札の機甲忍者エアーを捨て、デッキの忍法　分身の術を選択。これにてターンエンドです」
葵ちゃんの場に今度は巨大な巻物が現れ、結んであった紐が自動でしゅるしゅると解

かれる。中には達筆でただ一言『分身の術』と書かれており、その４文字が巻物の表面から手品か何か……いや、本物の忍術のように浮き上がってフィールドに降り、１枚のカードとなってセットされる。仕事を終えた忍法帳はまたしても自動で紐が巻かれ、元の巨大な巻物に戻っていった。今はまだいいけれど、あれを長く放置しておくといろいろと面倒なことになりそうだ。

清明　ＬＰ２５００　手札：４
モンスター：???（フロスト）
魔法・罠：なし
葵　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：???（銀河眼）
忍者義賊ゴエゴエ（攻）
魔法・罠：隠密忍法帳
１（分身の術）

「僕のターン！」

氷帝メビウスでも引くことができれば完璧だったのだが、これはこれで悪くない。まずはあのセットされた銀河眼、奴から退場してもらおう。

「覚悟はいいね葵ちゃん？その裏守備の銀河眼をリリースして、僕の手札からそっちの

フィールドに粘糸壊獣クモグスを特殊召喚させてもらうよ」
「私の銀河眼が……先輩、性格悪いってよく言われません？言われてないなら私が言ってあげますよ？」
「褒めてんでしょそれ？さらにグレイドル・イーグルを召喚してフィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントを発動！」
粘糸壊獣クモグス　攻２４００
グレイドル・イーグル　攻１５００
「そのモンスターを出してからウォーターフロント、ですか」
「何が伏せてあるかはわかってるからね、一応の保険みたいなものさ。さて、反撃開始！イーグルで忍者義賊ゴエゴエに……」
「止められませんし百も承知でしょうが、せめて嫌がらせぐらいはしておきましょうかね。永続トラップ発動、忍法　分身の術！私の場の忍者をリリースすることでそのレベル以下のレベルになるよう、デッキの忍者を任意の数だけ表側攻撃表示および裏側守備表示で特殊召喚します。私が呼び出すのは守備力１８００、成金（ゴールド）忍者！」
ゴエゴエがひらりと飛び上がり、足元に煙玉を叩きつけて煙幕を張る。煙の中で一体いかなる入れ替わりが行われたのか、富士山をかたどった派手な装束に黄金の小手を装着した小太りの新たな忍者が着地してすぐにかき消えた。

その成金忍者は、守備力１８００。となるとイーグルで戦闘破壊できず、かといって守備表示なため自爆特攻することすらできない。僕にとって1番嫌なステータスのモンスターをピンポイントで呼び出すあたり、さすが葵ちゃんというべきか。攻撃せずに放置しておくのも1つの手ではあるが、すでにゴエゴエがリリースされ場から墓地に送られたことで自動的に壊獣カウンターがウォーターフロントに1つ乗せられている。
「だったらダメージは痛いけどリターンの方が大きい、か。イーグル、そのままクモグスに攻撃！」
グレイドル・イーグル　攻１５００（破壊）→粘糸壊獣クモグス　攻２４００
清明　ＬＰ２５００→１６００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（１）→（２）
墓地に２枚目のカードが送られたことで、灯台に２つ目のライトがともされる。そして破壊されたイーグルが、銀色の液体となって大蜘蛛の足元へと忍び寄る。
「戦闘破壊されたイーグルの効果で、クモグスに自身を寄生。これによりクモグスのコントロールはこっちに写って、そのまま成金忍者に攻撃！」
「まあ、攻撃するならそこまでしますよね。成金忍者は守備表示、私へのダメージは０です。分身の術はこれで、無意味にフィールドに残り続けます」
粘糸壊獣クモグス　攻２４００→???　守１８００（破壊）

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）→（３）
これで、やれることは全部やっておいた。そして、多少のダメージ覚悟のうえでイーグルに突っ込ませたおかげで、この効果をこのターン中に発動できる。
「メイン２にウォーターフロントのさらなる効果を発動。壊獣カウンターが３つ以上貯まっていることで、デッキから壊獣を１体サーチできる。来い、ドゴラン！」
３本に増えた灯台の光に導かれ、新たな壊獣がデッキから手札に加わる。これでよし、と。
「これでターンエンド」
「では、私のターン。先輩が私のモンスターを利用してくるのであれば、私も同じことをしてやりましょう。このターンの隠密忍法帳の効果により、ルール上忍者として扱う黄昏の中忍―ニチリンを捨て、２枚目の超変化の術をセットします」
「また超変化……」
「お互い様です」
再び巻物が自動で開かれると、その中には先ほどと同じように達筆で『超変化の術』という５文字が黒々と書かれていた。そして再びその文字が巻物から離れ、１枚のカードとなってフィールドに置かれる。
「さて。これで次のターンはいいとして、このターンは何をしておきましょうかね。魔

法カード、増援を発動。レベル４の戦士族、忍者マスターＨＡＮＺＯをサーチしてそのまま召喚。召喚に成功したＨＡＮＺＯは、デッキから忍法１枚を手札に加えることができますが……」

「これ以上サーチは通せないね。クモグスの特殊効果、縛鎖！壊獣カウンター２つをコストにして召喚または特殊召喚されたモンスターの効果をそのターンの間だけ無効、さらに攻撃も封じる！」

忍者マスターＨＡＮＺＯ　攻１８００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）→（１）

縦横無尽に白い糸が走り、灰色の装束を着た忍者の全身を締め上げる。印も結べず武器も振るえず、打つ手のなくなったＨＡＮＺＯが全身に力を入れて強引に引きちぎろうとするも、その瞬間に隙ができたことには変わりない。

「まあ、そうしますよねえ。カードをセットして、ターンエンドです」

エンド宣言と共に、ＨＡＮＺＯが縛鎖から脱出する。これで再びあのモンスターは自由に動けるようになったが、すでにその効果を発動するタイミングは逃している。

清明　ＬＰ１６００　手札：３

モンスター：???（フロスト）

粘糸壊獣クモグス（攻・イーグル）

魔法・罠：グレイドル・イーグル（クモグス）
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）
葵　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：忍者マスターＨＡＮＺＯ（攻）
魔法・罠：隠密忍法帳
忍法　分身の術
２（伏せ）

「僕のターン……」
「メインまで待つとＨＡＮＺＯが飛ばされますからね。このスタンバイフェズに永続トラップ発動、忍法　超変化の術！私の場のＨＡＮＺＯはレベル４、そして先輩のクモグスはレベル７。この２体を墓地に送ることでレベル７のドラゴン族、白竜の忍者を特殊召喚します！」
　灰色の忍者が腰に差していた忍者刀を抜き、クモグスの足元めがけ投げつける。一文字に飛来したそれが大蜘蛛の本体ではなくその影に突き刺さった瞬間、クモグスの巨体が金縛りにでもあったかのように触角１本動かなくなる。先ほど縛られた礼だとばかりに動けなくなったクモグスにＨＡＮＺＯが悠々と近づいていき、その体に触れた瞬間夢か幻のように２体のモンスターの姿が揺らめき煙となって薄れて消えていった。ど

こへともなく流れていくその煙はやがて渦を巻き、渦の中心から明るい茶髪をなびかせて純白の装束に身を包むくの一が足音ひとつ立てず葵ちゃんの前に片膝をついて着地した。

白竜の忍者　攻２７００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）→（３）

「最上級モンスターは立派だけど、僕の手札にドゴランがいるってことを忘れてない？せっかく満を持して出てきてもらったところ悪いけど、そのモンスターもリリースさせてもらうよ」

「お待ちを、先輩。まだスタンバイフェイズは終了していませんよ？白竜の忍者を特殊召喚したところでもう１枚の永続トラップ、２枚目の分身の術を発動！」

「しまった！」

「先ほどお見せした、ゴエゴエを成金忍者に入れ替えるような小技ではありません。正真正銘文字通り、真の分身をお目にかけてみせましょう！リリースするのは白竜の忍者レベル７、よって呼び出せる忍者のレベル合計もまた７！」

白竜の忍者が立ち上がって印を組むと、その体から竜の形をしたオーラが立ち上る。上空へと駆け上がっていった竜が頭上で４つに分裂し、フィールド上の４カ所にその頭から猛然と落下する。激しい光の爆発が４つ立て続けに起き、光が収まった後その場所

にはそれぞれ別の忍者が立っていた。
「忍者マスターＨＡＮＺＯ……」
「その通り、２体目です。そしてレベル１の青い忍者（ブルー）２体と赤い忍者（レッド）１体、これはセット状態で特殊召喚させていただきましょう。また特殊召喚に成功したＨＡＮＺＯの効果により、デッキから……では、機甲忍者アースを手札に加えます」
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）↓（４）
『渋（シルバー）い忍者を呼ばない辺り、さすがにマスターの戦い方を熟知しているな。遊び半分挑発半分の、なにかと中途半端なミスターＴのメタ張りとは大違いだ』
「……どゆこと？」
葵ちゃんの展開を見て、チャクチャルさんが一言感心したように唸る。なぜここで渋い忍者の名前が出てくるのかわからず困惑する僕に、これ見よがしに大きなため息とともに補足が入る。
『まだわからないのか、マスター。分身の術でレベル６の渋い忍者を裏守備で呼び出せば、そのリバース効果でさらに墓地の忍者を蘇生することもできた。だがそうしなかったのは、マスターが壊獣使いだからだ。リリースされるなどの要因でそのリバース効果を使えずともさほど痛手ではないレベル１と、特殊召喚された時点ですでに仕事を終えているＨＡＮＺＯ。見事にリリースするほどのうまみの無いモンスターのみを選んで

呼び出している』
「なるほど……」
『この程度なら自分で気が付いて欲しいものだがな』
　ついさっきは僕のことを性格悪いだなんだ言ってくれたけど、彼女も彼女で大概だと思う。とはいえ、まだ手がないわけではない。ダブル忍法を駆使しての大量展開はなかなか見事だったけれど、今の作戦にはひとつ大きな欠点があったからだ。
「ありがとう、って言わせてもらうよ葵ちゃん。おかげでＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントには、またこれだけたくさんのカウンターが貯まった！このターンのウォーターフロントの効果ではデッキから壊星壊獣ジズキエルをサーチして、このジズキエルをＨＡＮＺＯをリリースして葵ちゃんの場に特殊召喚。さらに相手フィールドの壊獣に反応して、手札のドゴランを特殊召喚する」
「これは……」
　壊星壊獣ジズキエル　攻３３００
　怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００
　足の無い体に両腕の付いた全身兵器の金属の大蛇と、体の奥から無限に溢れ出るエネルギーを炎として纏う壊獣王。２体が対峙したのち、おもむろにドゴランの炎の勢いが跳ね上がった。１瞬顔をのけぞらせて息を吸い、地面に踏ん張って火炎放射をぶちかま

す。

「ドゴランの効果発動、覆滅！壊獣カウンター３つをコストにして、ドゴランの放つ怒りの炎が相手フィールドのモンスター全てを薙ぎ払う！」

ジズキエルが、そしてセットされた３体の忍者が、まとめて消し飛んでいく。やがてその炎の勢いも弱まっていき、火炎放射に全力を使い果たしたドゴランが肩で息をつきながらその場に崩れこんだ。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）→（１）→（５）

「ドゴランは効果を使ったターン、自分から攻撃することはできない……だけど、他のモンスターなら攻撃ができる！魔法カード、サルベージを発動！墓地の攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体、ツーヘッド・シャークとグレイドル・イーグルを回収して、ツーヘッドをそのまま通常召喚。そしてツーヘッドは召喚時、フィールドのレベル４魚族のレベルを１つ下げることができる。さっきはこの効果を使わなかったせいで痛い目にあったからね、今度は忘れずに使わせてもらうよ」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００　☆４→３

「ここでそのカードですか……これは、思ったより痛いですね」

「さらにさらに、こっちも忘れないで貰いたいね。ゴーストリック・フロストを反転召喚して、この子も攻撃に参加してもらうよ」

このデュエルの最序盤に銀河眼の攻撃を防いでもらって以降、ずっとセット状態のままで放置していたフロストを反転召喚する。これまで散々ダメージを受けてきたんだ、今こそ反撃の時。

???→ゴーストリック・フロスト　攻８００

「バトル、ゴーストリック・フロストとツーヘッド・シャークでのダイレクトアタック。さらにツーヘッドは自身の効果により、１ターンに２回攻撃ができる！」

「致し方ありませんね……全部受けましょう」

ゴーストリック・フロスト　攻８００→葵（直接攻撃）

葵　ＬＰ４０００→３２００

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→葵（直接攻撃）

葵　ＬＰ３２００→２０００

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→葵（直接攻撃）

葵　ＬＰ２０００→８００

あと１体何かアタッカーが居さえすれば……なんて、仮定の話をしても仕方ない。ドゴランは、先頭前の露払いという大事な仕事をよくやってくれた。

「メイン２にゴーストリック・フロストの効果を発動。自身を裏守備にして、カードを伏せてターンエンド」

ゴーストリック・フロスト　攻８００→???

「先輩、今の攻撃はなかなかでした」

「なんでそんな上からなの？」

葵ちゃんと話してると、どうも向こうのペースに飲み込まれる。ちなみに以前聞いたところによると、彼女も彼女で僕と話すときは同じことを感じながら喋っているらしい。

「ですがまだ、私も負けたわけではありません！私のターン、ドロー！」

これで葵ちゃんの手札は、さっきサーチしてたアースも合わせて２枚。

「……仕方ありませんね、隠密忍法帳の効果！手札のアースを捨ててデッキから機甲忍法ゴールド・コンバージョンをセットし、そのまま発動します。隠密忍法帳、分身の術、超変化の術をすべて破壊することで２枚ドローです」

三度巻物が開くと、案の定そこに書いてあったなぜか平仮名表記の『ごぉるど・こんばぁじょん』の文字が躍る。役目を終えた３枚の忍法がまとめて破壊され、葵ちゃんの手札として生まれ変わった。

「ふむ、少しはマシになりましたね。魔法カード、ワン・フォー・ワンです。手札からモンスターカード１枚を墓地に送り、デッキからレベル１モンスターの銀河眼の雲篭（ギャラクシーアイズ・クラウドラゴン）を特殊召喚します」

銀河眼の雲篭　攻３００
「このモンスターは自身をリリースすることで、墓地のこのモンスターを蘇生できます。再び蘇りなさい、葵流忍術最強のしもべ！銀河眼の光子竜、ここに在り！」
やはり、と言うべきか。心のどこかで、彼女なら絶対再び自らのエースを出してくると思っていた。１度や２度リリースしたぐらいでは、その闘志は折れやしない。それほど葵・クラディーと銀河眼の光子竜は、強い絆と信頼で結ばれている。
そしてそう来なくっちゃ、こっちとしても面白くないね。
銀河眼の光子竜　攻３０００
「随分余裕そうですね、先輩？何か仕掛けがあるんでしょうが、だとしても正面から突破させていただきます！ツーヘッド・シャークに攻撃、破滅のフォトン・ストリーム！」
「トラップ発動、ポセイドン・ウェーブ！その攻撃を無効にして、さらに僕の場に魚族モンスターが1体いることで８００のダメージを……」
「銀河眼の光子竜の効果発動、銀河忍法コズミック・ワープ！銀河眼と戦闘モンスターをバトルフェイズ終了時まで除外することで、対象を失ったそのトラップは不発になりますよ」
光のブレスを大波が水の壁となって弾こうとした瞬間、ブレスごと銀河眼の姿がサッと消える。水が引き、こちらの反撃を完全に透かしたところで再びその巨体が光と共に

やってきた。
「惜しかったですね、もし私が選んだカードがこの銀河眼でなければ……まあ、言っても詮無いことですが」
「タラレバは言うだけみっともないしねー。それに僕としては、攻撃そのものを止められただけで割と満足だよ」
「ドゴラン、ですか。果たしてそううまくいきますかね？カードを1枚セットして、ターンエンドです」
僕にとってポセイドン・ウェーブが最後の守りだったのと同じように、葵ちゃんにとってもあの伏せカードが最後の頼みなんだろう。ならここはひとつ、先輩としてバシッと決めてあげないとね。
清明　ＬＰ１６００　手札：1
モンスター：???（フロスト）
怒炎壊獣ドゴラン（攻）
ツーヘッド・シャーク（攻）
魔法・罠：なし
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（5）
葵　ＬＰ８００　手札：0

モンスター：銀河眼の光子竜（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「僕のターン。ウォーターフロントで多次元壊獣ラディアンを持ってきて、銀河眼の光子竜をリリースして特殊召喚。このまま攻撃してもいいけど……まずドゴランの効果発動、覆滅！消し飛べ！」
多次元壊獣ラディアン　攻２８００
息を整えたドゴランが再び炎を活性化させ、破壊の爆炎がフィールドをひと舐めする。
「あれ？意外とあっさり？」
「無論トラップ発動、リビングデッドの呼び声！たとえ刀折れ矢尽きようと、私に戦う意志ある限り！銀河眼の光子竜は、何度でも蘇ります！」
なるほど。破壊を防ぐのではなく、破壊即蘇生か。ドゴランはこのターン攻撃できない、だから攻撃できないだろうと言いたいのだろう。
銀河眼の光子竜　攻３０００
だけど葵ちゃんには、１つ見落としていることがある。一体葵ちゃんと銀河眼の光子竜の間に過去に何があったのか、どんな歴史がその信頼の間に刻まれているのか、それは僕にはわからない。だけど、それを言うなら僕だって同じだ。ずっとずっと、最高の

相棒が。葵ちゃんの象徴が銀河眼であるのと同じように、僕にもずっと戦ってきた切り札が、この手の中にはすでにいる。

「ドゴラン1体をリリースして、アドバンス召喚！さあ行くよ、霧の王（キングミスト）！」

再び全力の1発を放ち動けなくなったドゴランを霧の渦が足元から包み込み、その全身を濃密な白の中に隠していく。必然的に巨大になった渦はそのまま中のドゴランの質量を無視したかのようにみるみる圧縮されて人型サイズにまで縮み、その流れを断ち切るようにして1人の全身鎧を着こんだ魔法剣士が中央からドゴランと入れ替わりに登場する。

「それ、引きましたか……」

さすがの葵ちゃんもこれ以上の回避手段はなく、若干その表情がこわばる。刀折れ矢尽きようと、何度でも蘇る……なるほど、その言葉に嘘はないだろう。だがそれも、葵ちゃん本人に戦う力が残されている限りのことだ。

「霧の王の攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の数値の合計。今回は1体だけだから、ドゴランの攻撃力が丸々コピーされて３０００！」

霧の王　攻３０００

「じゃあ葵ちゃん、これで終わらせるよ！バトル、霧の王で攻撃！」

「先輩、ゴーストリック・フロストもツーヘッド・シャークもいるのにあえてリリースを

１体にして銀河眼と攻撃力を並べてきたのが最高に厭らしいですね。そんなの、銀河忍法で逃げの一手なんて私のプライドが許しません。その挑戦、正面切って受け止めるしかないじゃないですか！銀河眼の光子竜、破滅のフォトン・ストリームです！」

霧の魔法剣と、目も眩むような光子のブレス。１瞬の交差の後、その剣が深々とドラゴンの胸を切り裂き、光が霧の王の鎧を貫通して腹の部分に風穴を開けた。

霧の王　攻３０００（破壊）→銀河眼の光子竜　攻３０００（破壊）

「くっ……！」

「今だ、ツーヘッド・シャーク！」

双頭の鮫の牙が空を裂き、とどめの一撃を与える。これで、終わりだ。

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→葵（直接攻撃）

葵　ＬＰ８００→０

「……結局、先輩には最後まで勝てませんでしたか」

ソリッドビジョンが消えていく中、葵ちゃんがぽつりとつぶやく声が耳に入った。その声がかすかに震えているように思えたのは、僕の気のせいではないだろう。こういう時に何か気の利いた言葉のひとつでもかけてやれるのが、いい先輩ってもんなんだろう

けど……あいにく、僕はそんな柄じゃない。でも、こんな状態の葵ちゃんは僕も初めて見る。せめてできるのは、それなりに美味しいであろう紅茶の1杯でも淹れることぐらいだ。親父には敵わずとも、商売人として一通りのコツは僕も抑えている。

黙って立ったまま悔しさと泣きたいであろう気持ちをかみ殺す葵ちゃんを椅子に座らせ、沸騰させない程度にお湯を沸かす。時械神の炎を出せるようになったおかげで、この辺の手順はだいぶ楽になった。本来は茶葉から淹れるのが正しいスタイルなんだろうけど、個人的には最近のＫＣ印のティーパックがかなり性能が良いのでそれで十分。こっちの方が楽だし、デュエルアカデミアは海馬コーポレーションのお膝元だから若干余所より安く買える。葵ちゃんは砂糖とかは入れないストレート派だったっけか、と思いながら3日前に焼いたばっかりのシナモン入りクッキー（売り物）の封を適当に開ける。あとでこれ一袋分は給料から天引き……は、可哀そうだから勘弁してあげよう。餞別代りの僕からの奢りだ。

「ほい、どうぞ」

「いただきます」

小声とともに、一礼してカップに口をつける。ちゃんと返事ができるあたり、こちらで作業している間に多少は気分も晴れてきたようだ。向かいの席に座り、葵ちゃんの整った顔立ちを見ながらクッキーをつまみ、僕の分もついでに用意した紅茶を飲みつつ

のんびりと飲み終わるのを待つ。
「ごちそうさまでした。先輩、これは1つ貸しにしておいてください……それと」
1杯ひっかけてだいぶ復活したようで再び声にも張りが出て、目にも光が戻ってきた。テーブルにバンと手を付いて勢いよく立ち上がり、強気な笑みを浮かべる。
「来年、私が卒業するまで首を洗って待っていてください。葵流に不可能の文字はありません、次こそはリベンジしてみせます」
「ふーん……いいねいいね、その意気やよし。なんべんだって返り討ちって洒落込んだげるから、いつでもかかっておいで」
「約束ですよ?」
「二言はないよ」
葵ちゃんの笑みに応えるようにこちらもニヤリと笑い、手元のカップを持ち上げる。葵ちゃんも何がしたいのか気がつくとすぐに自分のカップを持ち上げ、2人でそれをテーブルの中央で軽く合わせる。中身のないカップ特有のカチンと硬質な音がして、その音が奇妙に大きく店内に響いた。
約束、か。ならそれを守るためにも、ダークネスには負けてられないね。

ターン１２１　百鬼の疾風と虚無の仮面

『アカデミアの皆さん、校長の鮫島です。生徒の皆さん、そして教師の皆さんも卒業デュエル及びその関連作業に忙しいとは思いますが、一時デュエルを中断してください』

葵ちゃんとのティータイムを終えたところで、突然室内のスピーカーからかすかな環境音が鳴る。普段は授業も何もあったもんじゃないこの元教室のスピーカーが動いたということは、恐らく全校に向けてあらゆる場所のスピーカーを一斉にオンにしたのだろう。

ややあって鮫島校長の声が部屋中に、いやこの様子だと恐らくこの島中に響いた。このタイミングでの緊急放送、それもデュエルアカデミアでは大抵の事よりも優先されるはずのデュエルを中断させてまで話すこととなれば、それはもう目下一番の問題事であるダークネス関連しかありえない。

「デュエルの中断……？」

デュエルを中断、という言葉の異常性に、葵ちゃんがいぶかしげに呟く。それにしても三沢も、鮫島校長を利用しての全校放送とはうまい手を考えたものだ。確かにこの方法なら、校長自らがデュエルを中断させるという最初の掴みの強さも手伝ってこの島の

どこにいようと話を聞き逃す心配は一切ない。少なくとも、僕なら絶対そんなことまで気が回らなかっただろう。スピーカーの方に視線を向けたままさっき出したクッキーをもう1枚つまもうとしたが、袋のあるはずの場所まで手を伸ばしても指先には何も触れない。どうなっているのかとテーブルの上に視線を戻すと、クッキーの袋を自分の手元に抱えて今日一番のジト目で探るような視線を向けてくる葵ちゃんと目が合った。

「……何？あとおやつ返して」

「私まだ2枚しか食べてないんですけど。それはそれとして先輩、何か知ってますね？」

「ほう。その根拠は？」

「いくつかありますが、一番わかりやすかったのは今の返しですね。もし本当に何も知らないのなら、先輩はもう少しわかりやすいリアクションをするはずですから」

「鎌かけたっての？」

　わかりやすい誘導に引っかかったことに今更気づき、顔をしかめる。今のは僕の不注意も大きかったけど、本当に油断も隙もない。

「……まあ、いいや。それなりに真剣な話だから、葵ちゃんもしっかり聞いときなよ」

「どうやらそのようですね。そうさせていただきます」

　珍しく言い返さない僕の態度から何かを感じ取ったのか、いつもの毒吐きや軽口も叩かず神妙に耳を澄ませる葵ちゃん。かたずをのんで見守る中、再びスピーカー越しに若

干くぐもった鮫島校長の声が聞こえてきた。
『全校の皆さん、これよりアカデミアでは避難訓練を開始します。校舎で大規模な火災が発生した前提で、かつて本校で三幻魔事件が発生した際に建設されたコロッセオに生徒及び教師の皆さんには集合してもらいます。防火扉はすべて閉鎖しますので、各階の非常口より外に出てコロッセオにて集合してください。またこの避難訓練が終了し学内の全生徒の安全が確認されるまではいかなる理由に置いても単独行動は禁止しますので、最低でも2人以上のグループを組んで行動するようお願いします。それでは、質問等は現地で改めてお受けしますので』
　なんだか無茶苦茶な内容を話すだけ話して、始まった時と同じように唐突に放送が切れる。え、避難訓練？どゆこと？訳が分からず完全にフリーズしているところに、すかさず葵ちゃんの言葉が突き刺さる。
「先輩。なーにがカッコつけて『それなりに真剣な話』なんですか？」
「ちょちょちょ、ちょっと待って！え、ええ？あれ？」
　いったい僕の知らないところで、何が起きているんだ。混乱するあまりいっぱいいっぱいになって言葉に詰まる僕に追い打ちをかけるかのように、ポケットに突っ込んであったＰＤＦが着信音をけたたましくわめきたて始めた。
「え、ええ!?なんなのさ、もう……！」

「いや先輩、今のは冗談ですよ。何かしらあるのは察しがつきましたから、テンパってないで出てあげればいいじゃないですか」

冷静な葵ちゃんにたしなめられて落としそうになりながらも着信を知らせるそれをどうにか引っ張り出し、着信相手も見ずに通話ボタンを押す。なんでこの間の悪い時に電話してきやがるんだとの怒りを込め、画面に何か映るより先にヤケクソ気味に怒鳴りつけた。

「はいもしもし遊野です！」

『俺だ、三沢だ。今の放送は聞いたな？よく聞いてくれ、少し頼みたいことがある。細かいことは後で説明するから、今すぐ廃寮に向かってくれ。到着したら連絡を頼む』

じゃあな、との言葉を最後に、それだけ言って通話が切れてしまう。

……まるで意味が分からない。でも三沢があそこまで説明不足な状態で人に指図せざるを得ないということは、なにかそうせざるを得ない理由があるんだろう。それにこのわけのわからない状況の中、問題を先延ばしにしただけとはいえ当面の目標がはっきりしたのはありがたい。少し落ち着きを取り戻してＰＤＦをポケットに再び突っ込んだタイミングを見計らい、葵ちゃんが席を立った。

「私には、何がどうなっているのかまるでわかりません。わかりませんが、先輩と他に何名かが何か大掛かりなことを始めようとしていることだけはわかりました」

言いながらカウンターの後ろに素早く回り込み、さっとかがんで持ってきていたらしい彼女のカバンを持ち上げる。そのまま部屋を出て行こうとしてドアまですたすたと歩き、途中でぴたりと足を止めた。振り返って僕と目を合わせ穏やかに、でも力強く語りかけてくる。

「何を企んでいるのかは知りませんが、先輩がやろうとしているのならば私はその判断を信じますよ。だから、私からは何も言いませんし聞きません。先輩のことですから、失敗するとも思いません。ですが、せめて一声ぐらいは掛けさせてもらいます……ご武運を、先輩」

「葵ちゃん……」

「では、私はコロッセオの方に向かいますので。それと……これは、最初に約束しましたからね。先輩、ありがとうございました」

すっと一礼し、部屋の外に出ていく葵ちゃん。最後のありがとうございました、というのは、元々デュエル前に言っていた僕が勝ったら3年分のお礼を言う、というあれだろう。言い出しっぺの僕ですら適当な軽口として忘れていたのに、そこをないがしろにしない辺り彼女の律義さがよくわかる。でもその背中を見送りながら、僕が噛みしめていたのはその前の発言だった。あの用心深い葵ちゃんがあえて今起きようとしていることに踏み込まず、それどころかあそこまで言い切ってくれるとは。普段の葵ちゃんが

どんな性格なのかよく知っている僕だからこそ、今の発言の重みもわかる。今更ながらに、彼女が僕に寄せてくれていた信頼の強さを思い知らされた。
「姉上、どうせ近くにいるんでしょう？単独行動は厳禁ですからね、姉上でもいないよりはマシなのでついてきてください」
「わーい！葵ちゃんがお姉ちゃんのこと呼んでくれた～っ！」
「うわ本当にいたんですか。いい加減私も言い飽きたんですがストーカーですよそれ、やっぱついてこないでください」
「んもー葵ちゃんったら、いつでも反抗期可愛いんだからー。あ、それと清明ちゃんも！お姉ちゃんこの間清明ちゃんが依頼してくれたあれなかなか楽しかったから、また助けが必要な時はいつでも呼んでくれちゃっていいからねー！」
……明菜さん、まーたこっち来てたのか。あの人は自由だなあ。さて、僕も急がないと。

ラーイエロー。推薦や繰上りが入るオベリスクブルーを別格として、一般の入学生の中でもオシリスレッド相当以上の成績を持つものが割り当てられる寮……と、かつて触れ込まれていた場所だ。３年前に入学した遊城十代、遊野清明といった規格外の筆記は

からきしだが実技だけはできる勢、そして2年前に筆記実技共に高水準だが本人の強い希望により例外として入寮を認められた早乙女レイなどの存在によりもはやその組み分けは完全に形骸化してしまい、オシリスレッドとの明確な差別点が建物そのものぐらいしかないことから、今となっては寮監の樺山教諭ともども「一番地味な場所」呼ばわりされるようになって久しい。

そんなラーイエローの一室に、三沢大地の部屋はあった。かつて彼がツバインシュタイン教授に師事しアカデミアを離れた後も、樺山教諭の計らいにより卒業するまではという期限付きで新しい入居者を迎えることなく残されていたのだ。

しかしかつては綺麗な物であったその部屋も、今となってはその面影もない。壁といわず床といわず窓といわず、ありとあらゆるスペース全てに耳なし芳一のごとくびっしりと手書きの数式が敷き詰められているからだ。その数式の中心で、黄色い学生服を着たこの部屋の主がさらに目の前の紙に向かって図やグラフ、数式を書き込んでいく。

「後は清明に頼むとして……それにしてもおかしい、どういうことだ……?」

「何が、だい?」

彼以外には誰もいないはずの部屋に、空虚な声が響く。顔をこわばらせて弾かれたように振り返る三沢が、侵入者の顔を見てふっと力を抜いて苦笑した。

「なんだ、清明か。脅かさないでくれよ」

「ははは。それで、どうしたんだい？」
今三沢は確かに目の前の存在を「清明」と呼称した。だが、そんなことがあり得るだろうか？廃寮に向かったはずの男が、なぜここにいる？遊野清明という男はこうして向かい合っているだけで、背筋が寒くなってくるようなゾッとする気配を放っていただろうか？彼は元々三沢本人の頼みによりこの部屋を出て行ったのだから、その三沢が呼び出さない限りそうそう勝手に戻ってくるような真似はしないはずだ。
考えるまでもない。ダークネスの力を使った常識の操作だ。もっとも普段の三沢であれば、かすかに感じたその違和感をより突き詰めて考え、その洗脳を打ち破ることも可能だっただろう。だが不幸なことに、今の彼にその余裕はなかった。つい先ほど童実野町に向かった十代から届いた、たった1通のメール。そこに記されていた内容が彼の思考の大部分を占め、かすかな違和感を突破口ではなく気のせいとして封殺してしまったのだ。
だから、三沢は口にしてしまう。自分が遊野清明だと思ったその存在に、手持ちの情報を自分から開示してしまう。
「さっき、十代から連絡があってな。童実野町の人間は……どうやらすでに、ダークネスに飲み込まれてしまったらしい」
「ほう、それはそれは」

悲痛な表情の三沢とは対照的に特に驚いた風もなく返す、目の前の「遊野清明」。だが、彼の出身はまさにその童実野町だったはずだ。ほんの少し考えれば、子供でもわかる違和感。だが、目の前の問題に気を取られた三沢はやはりそれに気づくことができない。

「だがおかしいんだ。俺の計算が正しければ、そんなことが起きるはずがない。そもそもダークネスがこちらの世界に侵攻するためには、まずミスターTを差し向けて人間を心の闇に取り込み、ダークネスそのものの力を増す必要がある。こんな早くからこれほどのスピードで攻めてこれるわけがないんだ」

「なるほど。例えるならば、ダムのようなものだな。貯水湖の水を増せばそこから放出される水の勢いも増していくが、それでも限界が来たらやがてダムは決壊し、一度に押し止められていた水が溢れ出る」

「ああ、そうだ。その例えに従えば、ダークネスはまだダムを壊す……つまり次元を越えて自身がこの世界にやってくるために、貯水を続けている状態のはずだ。だが、童実野町が丸々飲み込まれるところまで来ているとなると、すでに貯水どころか決壊寸前まで事態は切迫している」

「なぜだと思う?」

どこか嘲るような響きを含んだその言葉に、躊躇いつつも三沢が口を開く。

「可能性は２つ。まず１つが、俺の計算が最初からすべて間違っていた場合だ」
「それから？」
　かすかに面白がるように、「遊野清明」がその先を促す。
「もう１つは……ダークネスに、何らかの協力者が存在するパターンだ。あちらの世界からダムを押すだけでなく、こちら側からそのダムに穴をあければその分だけ水の放出は早くなるからな。ダムの決壊を待たずとも、その穴が大きければダークネスはこちらの世界に出てこられる」
「なるほど、なかなか面白い見解だ。そして、君はやはり優秀な人間だよ。想像以上の速さで、私の語る真実（トゥルー）に近づきつつある」
「なんだと……？」
　そこまで言われてようやく、三沢の警戒心が働き始める。ダークネスが彼に自分の犯した失策を思い知らせて心の闇のつけ入る隙を作るべくわざと仕掛けていた洗脳を緩め、これまで彼が見過ごしていたいくつもの違和感が１度に浮かび上がりその脳内を駆け巡る。次の瞬間には全てを察した三沢が、すぐ横の机に飛びついていた。
　卓上に置いてあったデュエルディスクを拾い臨戦態勢を整える彼の前で、もはやその必要もなくなった「遊野清明」としての化けの皮を剥いだ闇がかりそめの人型を露わにする。デュエルディスクを取った拍子に放り投げられたＰＤＦが床に激突し、硬質な音

が立った。
「ミスターT！」
「そう。真実を語るもの、トゥルーマンだ。君との先ほどのデュエルは、なかなか面白い出し物だったよ。だが、もはや君は舞台から降りた人間だ。どれほどアンコールを望まれようと、おいそれと登場すべきではないと思うがね」
「何を訳の分からないことを……！」
たらり、と彼の首筋を一筋の汗が伝う。
ミスターTを名乗るこのダークネスの手先が神出鬼没なのは今に始まったことでもないし、その情報を事前に得ていた彼も当然その心構えはしてきたつもりだった。つい先ほど実際に対峙した時も、今のように不吉な気配は感じなかった。だが初めてこの闇の具現化した存在とたった1人で向かい合ったとき、所詮人間にすぎない彼のちっぽけな覚悟などすぐに打ち砕かれそうになってしまう。
ようやく彼は理解した。先ほどの対峙の際には、この闇そのものの化身はその実力を隠していたのだ。どこまでもちっぽけな石ころのような存在でしかない自分が何かのはずみで、辺り全域に広がる深く広い闇の底へ加速をつけて転がり落ちていく……ふと脳裏をよぎったそんな不吉なビジョンを振り払おうとするも、否定しようとしてもしきれない恐怖心がいたずらに想像力を刺激する。緊張のあまりか気が付けば唇がカラカ

ラに乾いていたが、それに構う余裕もない。
「訳が分からない、か。そうだろうな。ならば、もう少しわかりやすい話をしよう。君の出した仮定をあまり周りに触れ回られては、こちらとしても少々困るのだよ。知りすぎた、と言ってもいい」
「だから実力行使、というわけか？」
「そう思ってもらって構わない」
「……いいだろう。だがこの俺が、一筋縄で済むと思うなよ！」
　意識的に放った威勢のいい言葉に、久しぶりの帰還とは言え見慣れた部屋の中。だが彼の耳には気合を込めたはずの自分の言葉も虚しく響いて聞こえ、彼の眼には妙に寒々しく弱い光の照明が辛うじて部屋の中を照らしているように映った。
「ええい、始めるぞ！」
　冷たい空気に抵抗するかのように一際大声を出し、自らを鼓舞して向かい合う。ひとりぼっちの戦場で、世界の命運を握るための戦いが始まった。
「デュエル！」
「先攻は私が貰おう、このモンスターをセットする。さらにカードを伏せ、ターンエンドだ」
　カードをセットしたのみでターンを渡すミスターＴ。まるで正体の掴めないその

セットモンスターが、三沢の心を占める絶対にミスや敗北は許されないという焦りによって何倍も大きな脅威に見えさせているのを彼本人も自覚していた。それ故に、彼はその恐怖を乗り越えるためにあえて正面から戦うことを選ぶ。
「なら、俺のターンだ。来い、牛頭鬼！」
牛頭鬼　攻１７００
三沢の呼びかけに応えフィールドに現れたのは、巨大な木槌を得物とした２足歩行する黒牛の化け物。相方の馬頭と共に地獄の門を守るとされる、由緒正しきジャパニーズ・アンデッドの一角だ。
「牛頭鬼は１ターンに１度デッキから妖怪、つまりアンデット族１体を墓地に送ることができる。このターン俺は、馬頭鬼を選んで墓地に送らせてもらう」
「牛頭と対を成す馬頭か。君の地属性相当のデッキは、ジェムナイトだと記憶していたが」
「その通り、これは地属性のデッキではなく、疾きこと風の如くを貫く風の属性デッキだ。ただしひとこと言っておくが、今から吹き荒れるのはただの風じゃない。百鬼を率いるあやかしの風だ！永続魔法、竜操術を発動！」
締め切られたはずの部屋に、一陣の風が吹き始める。牛頭鬼の周りを包むように渦巻くその風に乗って飛来した１匹の小型の龍が、自らの体を鍛え上げられた業物、ほのか

なピンク色の柄を持つ剛槍として妖怪の手の中に委ねた。
「竜操術は1ターンに1度手札のドラゴン族ドラグニティを1体俺の場のモンスターに装備し、さらにドラグニティが装備されている限りそのモンスターの攻撃力を５００ポイントアップさせる効果を持つ。これによりこのターン、このドラグニティ―コルセスカを牛頭鬼へと装備させてもらおう」
　牛頭鬼　攻１７００→２２００
「バトルだ。牛頭鬼でそのセットモンスターへと攻撃！」
　牛頭鬼　攻２２００→???　守８００（破壊）
　新たなる得物を手に入れた牛頭鬼が、全て砕けろと言わんばかりの勢いでコルセスカをセットされたモンスターへ叩き込む。吸い込まれるようにその中心を貫いた穂先に１瞬だけ毛の１本も生えていない黒い体に何本もの赤い筋模様が走る４つ足の悪魔が見えたが、すぐに破壊されて消えていく。だがその存在を見て攻撃をわずかに後悔すると同時に、三沢はミスターＴのデッキが前回とはまるで異なるものであることを確信した。
「墓地に送られたモンスターは、魔犬オクトロス。このカードの効果により、デッキからレベル８の悪魔族モンスター1体を手札に加える。私が選ぶのはこのカード、仮面魔獣マスクド・ヘルレイザーだ」

ミスターTが取り出して見せたのは、かつてのバトルシティにおいて武藤遊戯と海馬瀬人のタッグチームを苦しめた通称仮面コンビの切り札の一角である青い枠のモンスター。

「また儀式モンスターか？よほどお気に入りのようだな。だが俺も、装備状態のコルセスカの効果を使わせてもらうぞ。このカードを装備したモンスターがバトルで相手モンスターを破壊した時、デッキから装備モンスターと種族、属性が等しいレベル４以下かつ同名以外のモンスター１体を手札に加えることができる。酒呑童子をサーチし、カードを２枚伏せてターンエンドだ」

サーチを許してしまったのは痛いが、こちらも荒い手札消費をサーチ効果でカバーできたのだから、そう悪い立ち上がりではないはずだ……三沢の脳は、そう初ターンでの激突の状況を分析する。ただ同時に、儀式主体の相手は勘弁してほしかった、ともぼんやり思った。

とはいえ彼自身も様々なタイプのデッキを操るデュエリストとして他人よりも幅広い戦術をカバーしていると自負しているし、事実儀式モンスターに関してもリトマス死の剣士を主軸としたデッキを１つ組んでみた経験がある。それでもなお前述の感想に繋がるのは、単純に経験の問題だ。そもそも儀式デッキは、メインモンスターのみで戦うデッキや融合デッキに比べその絶対数が少ない傾向にある。カード１枚１枚の効果

やそこから考えられるコンボなどは全て残さず彼の頭には入っているものの、実戦を通じて得られる間合いや呼吸をまだ獲得しきれていない。清明の話によれば、それまでのミスターＴは融合やダークモンスターのデッキを主に使っており儀式に手を出したのは先ほどの三沢戦が初だったという。こちらの実戦経験の少なさを承知したうえであのデッキを持ってきたとしても驚かないぞ、と自らに釘を刺した。

ミスターＴ　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
三沢　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：牛頭鬼（攻・コルセスカ）
魔法・罠：竜操術
ドラグニティ―コルセスカ（牛頭鬼）
２（伏せ）

「私のターン、マンジュ・ゴッドを召喚。召喚時の効果によりデッキから、高等儀式術を手札に加える」

マンジュ・ゴッド　攻１４００

オクトロスのいた場所に召喚されたのは、儀式召喚のお供とも呼ぶべき儀式に関して

の万能サーチャーだった。その効果によって新たに手札に加わった儀式魔法と、先ほどサーチされたばかりの儀式モンスター。すぐさま部屋の中心に魔方陣が浮かび上がり、その中心からおどろおどろしい異形の影が蒸気の漏れるような呼吸音と共に這い上がってくる。

それは辛うじて人型の上半身と、その首の上にあるはずの頭部を覆い隠すまるで拷問でもされているかのようにむごたらしく素肌に直接縫い付けられた仮面。だが、そんな特徴もこのモンスターを語る上ではまだマシな方だ。その下半身に至ってはもはやこれは何だ、と形容するのもおぞましい肥大した尾、としか呼びようのない不気味な肉塊と、それらすべてを支え這い回るのに適した昆虫のような太い脚。体内から直接生えてきているらしい無数の絶望、悲哀、怨嗟の感情をあらわにする面の瞳の奥に一斉に鈍い光が灯り、いくつもの視線が三沢の全身を舐めまわすようになぞる。

「儀式魔法、高等儀式術を発動。デッキからレベル合計が８になるよう通常モンスターを墓地に送ることで手札の儀式モンスター、レベル８の仮面魔獣マスクド・ヘルレイザーを儀式召喚する」

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー　攻３２００

そう言いながら自らのデッキに手をかけて２枚のレベル４通常モンスター、メルキド四面獣と仮面呪術師カースド・ギュラを墓地へと送り込むミスターＴ。その仮面モンス

ター2体を見て真っ先に三沢の脳裏に閃いたのは、眼前のマスクド・ヘルレイザーと対を成すもう1体の仮面魔獣の存在。目下のところ早急な対策が必要なのはこちらの仮面魔獣だが、片割れの存在を意識してのプレイングも必要になってくると頭の片隅に止めておく。

だがまるでそんな浅い考えは筒抜けだと言わんばかりに、もう1枚のカードが発動された。

「さらに魔法カード、黙する死者を発動。墓地の通常モンスターであるメルキド四面獣を守備表示で特殊召喚し、このカードとマンジュ・ゴッドの2体をリリースする」

「なに、すでに手札にあったのか！」

「そういうことだ。出でよ、仮面魔獣デス・ガーディウス！」

何もない空中にいきなりぼ、ぼ、ぼ、と3つの青い面がぐるぐると回りながら浮かび上がる。やがてそのうち1つを頂点としてその少し下の位置に横並びで2つが並ぶ三角形を作ったところで回転が止まり、その面の後ろから隠れていた首が、そしてその3つの首を併せ持つ本体が闇の衣を取り去って今にも消えそうなほどに弱まった照明のもとへとその全身を晒す。

異様に長い3つの首と、その半ばほどから繋がる1つの胴。4つの鉤爪に3本指の足こそ持つものの、少なくともすぐ横のあからさまに異形とわかるマスクド・ヘルレイ

ザーに比べればおおむね人型に近寄っているようにも見える。だがなんといっても異様なのは、その胴の中央だろう。よく見ればその腹のあたりには、人間の上半身らしき形をした人形が埋め込まれている。それも一目見ただけで嫌悪感と異様な物への恐れを覚えるであろう、全身を拘束具に縛られた状態でだ。繰り返すが、それはただの人形でしかないはずだ。誰が何のためにこの悪魔の体にそんなものを埋め込んだのか、なぜそれを強靭な悪魔の肉体のみならず拘束具まで使って縛り付けなければならなかったのか、なぜ悪魔はその爪で人形を引きはがそうとしないのか、そしてそもそもあの人形は何を意味しているのか。全てを知るものはもはや存在しないだろうし、これからも現れることはないだろう。

仮面魔獣デス・ガーディウス　攻３３００

「く……！」

「まずはこちらからだ。マスクド・ヘルレイザーで牛頭鬼を攻撃する」

「トラップ発動、針虫の巣窟！俺のデッキの上からカードを５枚墓地へ！」

ヘルレイザーが手にした杖を振り回し、その先端から破壊の閃光を放つ。それがコルセスカを構える牛頭鬼に命中する前に、三沢が動いた。

「ランダムな墓地肥やしか。アカデミアの秀才を名乗る割には、ずいぶんと運頼みな戦術のようだが」

「そう呼ばれていたのも昔の話だがな。それに、これは運頼みなんかじゃない。ただの確率の問題だ。俺はこのデッキを組む際、手札や場を経由せず直接墓地に置かれても問題なく仕事のできるカードを中心にカードを選んだ。従ってこの針虫の巣窟は、たとえどんなカードが落ちようと9割以上の確率で何らかのアドバンテージを俺にもたらす！」

「ならば私も、そのアドバンテージのご相伴に預かるとしよう。速攻魔法、魔力の泉を発動。相手フィールドで表側の魔法、罠カードの数だけデッキからカードを引き、その後自分フィールドで表側の魔法、罠の数まで手札を捨てる。竜操術、ドラグニティ―コルセスカ、そしてその針虫の巣窟の存在により3枚を引き、魔力の泉自身の存在により1枚を捨てる」

ともにカードを引くため、自らのデッキに手を掛ける。かたや引き抜いた3枚のカードから1枚を選びゆっくりと墓地に送ったのに対し、もう片方は引き抜いたデッキトップ5枚に目を走らせてすぐさま墓地に送る。その直後、閃光をまともに受けた牛頭鬼の姿が1瞬で消し飛んだ。

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー　攻３２００→牛頭鬼　攻２２００（破壊）

三沢　ＬＰ４０００→３０００

「ぐっ……！痛い出費だが、この程度はまだ必要経費だ。墓地に送られた牛頭鬼はその

効果により自身以外の墓地のアンデットを除外し、手札のアンデットを呼び出すことができる。達人キョンシーをコストとし、酒呑童子を守備表示で特殊召喚！」

酒呑童子　守８００

「戦闘ダメージを最小限に抑える算段か。だが、それも時間稼ぎに過ぎないな。デス・ガーディウスで攻撃、ダーク・デストラクション」

３面の怪物が両腕を体の前に構え、手のひらから闇のエネルギー波を放出する。瓢箪を手にした小柄な鬼が、その波に飲み込まれ砂へと還っていく。

仮面魔獣デス・ガーディウス　攻３３００↓酒呑童子　守８００（破壊）

「やってくれる……だが、この程度ならまだリカバリーはいくらでも効く。永続トラップ発動、リビングデッドの呼び声！俺の墓地のモンスター１体を、墓地から攻撃表示で特殊召喚する。甦れ、土地鋸（つちのこ）！」

牛頭鬼が倒れ、酒呑童子もまた敗れた。しかし、彼の操る妖怪デッキはその圧倒的なしぶとさが何よりの強み。何度傷ついても必ず誰かがすぐさま立ち上がる、モンスターを途切れさせない継戦能力に関しては並のデッキとは一線を画している、そう本人も自負している。

そして次に繰り出されたのは、蛇。しかしそれはただの蛇と呼ぶには異様に全長が短く、それと反比例するかのように胴体が明らかに通常より太い大蛇だ。その蛇が体を丸

めて自らの尾を口に咥え、１つの輪となって転がったかと思うとみるみるうちに加速して猛スピードで２体の仮面魔獣の周囲を回り始めた。

土地鋸　攻１６００

「土地鋸のモンスター効果発動！このカードが特殊召喚に成功した時、自身以外の特殊召喚されたモンスター全てを裏守備表示にする！」

「なるほど、それも針虫の巣窟で墓地に送ったカードか。ならばカードを伏せ、ターン終了だ」

大蛇の回転が風の流れを生み、その流れがやがて小型の竜巻にまで成長する。その渦に閉じ込められた２体の仮面魔獣が、脱出することもかなわず強制的に裏側守備表示へと状態を上書きされた。

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー　攻３２００↓???

仮面魔獣デス・ガーディウス　攻３３００↓???

「ここからは俺のターンだ！まずは墓地の馬頭鬼をゲームから除外することで、墓地のアンデット族１体を蘇生させることができる。この効果で再び牛頭鬼をフィールドに呼び戻し、自身の効果で２体目の馬頭鬼……いや、怨念の魂　業火を墓地に送る。さらに通常召喚だ、出て来い九蛇孔雀（くじゃくじゃく）！」

再び地の底より蘇る牛頭鬼。その横にさらに召喚されたのは、一見緑色を基調とした

羽根を持つごく普通の美しい孔雀だった。しかしその羽をパッと広げると、そこには当たり前の目玉模様はただの1つも存在せずその代わりに自由気ままにうねり舌を出し牙を見せる9匹もの蛇の影がまるで絵画のごとくくっきりと存在しており、やはりこの存在もただの鳥などではないことを物語る。

九蛇孔雀　攻１２００

「そして俺の墓地に存在する妖怪、九尾の狐の効果を発動。このカードは俺の場のモンスター2体をリリースすることで、手札または墓地から自身を特殊召喚することができる。黄泉より帰れ、九尾の狐！」

土地鋸と九蛇孔雀、２体の妖怪が全く熱を発しない妖かしの炎……狐火に包まれる。そのまま音もなく燃える2つの人魂に挟まれるような格好で、黄泉帰りを行った９本もの長い尾を持つ白面金毛の狐がゆらりと飛んで着地した。

九尾の狐　攻２２００

「さらに、今リリースされた九蛇孔雀の効果を発動。このカードがリリースされたことにより、デッキまたは墓地からレベル４以下の風属性モンスター1体を手札に加えることができる。そしてこのターンの竜操術により、サーチしたドラグニティ―ブランディストックを九尾の狐に装備する！」

人間ほどもある巨大な妖怪狐の、その尾と対比してあまりにも細くたおやかな胴体に

巻きつくようにして緑色の幼竜が武器として鎧として装備される。竜操術により竜の力をも我がものにした傾国の大妖怪がそれを見て勝ち誇るように小さく鳴くと、それに呼応するようにしてブランディストックも満足げにクリクリした丸い眼をしばたかせた。

九尾の狐　攻２２００→２７００

「バトルだ。九尾の狐でマスクド・ヘルレイザーに攻撃、九尾槍！そして自身の効果により黄泉帰りを果たした九尾の狐は、貫通能力を得る。先ほど貫ったダメージ、耳を揃えて返させてもらおうか！」

九尾の狐　攻２７００→???　守１８００（破壊）

ミスターＴ　ＬＰ４０００→３１００

九尾の狐の持つ尾のうち１本が鋭く伸び、鋼の槍と化してセットカードを貫く。いともあっさりと仮面魔獣の片割れを下した直後、さらに別の尾がもう片方のカードめがけて伸びた。

「ブランディストックを装備したモンスターは、１ターンに２度の攻撃ができる。もう１度攻撃しろ、九尾槍！」

九尾の狐　攻２７００→???　守２５００（破壊）

ミスターＴ　ＬＰ３１００→２９００

モンスター越しとはいえ闇のデュエルでの２連撃をまともに受け、ミスターＴの体を構成する闇がわずかに揺らぐ。だがそんなことはまるで意に介した様子もなく、デッキから１枚のカードを取り出した。

「見事な攻撃だった、と言いたいところだが、これからその代償を支払ってもらおう。デス・ガーディウスが破壊されたことで、場に１枚の仮面を残すことができる。その仮面は相手モンスター１体に装着され、そのコントロールを私が得る。デッキより魔法カード、遺言の仮面を発動！対象は無論、九尾の狐だ」

「そんなものは知っていたさ。だがあいにくだがミスターＴ、いくらダークネスの力があろうともこの俺に見えているカードの効果で不意を突こうなどとは百年早い。速攻魔法、炎王円環を発動！場の炎属性モンスター１体を破壊し、墓地から別の炎属性モンスター１体を特殊召喚する。九尾の狐を破壊することで、怨念の魂よ甦れ！」

２度にわたる攻撃を終えた九尾の狐に、仮面魔獣の亡骸から放たれた最後の仮面が迫る。しかしその顔が復讐の仮面に包まれる直前、誇り高き大妖怪は自らの体に火を放つことで遺言の仮面、そしてブランディストックごとその命を炎の中へと還していった。

しかし、それで終わりではない。音もなく燃え盛るその火柱に誘われたかのように、炎の中心がぶわっと膨らんだかと思うとそこに人の顔らしきものが浮かび上がる。

怨念の魂　業火　攻２２００

「おっと、これだけじゃないぞ。九尾の狐が破壊された時、場に2体の狐トークンを特殊召喚する」

狐トークン　守５００

狐トークン　守５００

巨大な怨念の集結により生み出されたあやかしの炎と、その横で輝く2つの小さな狐火。3つの炎が部屋を赤く照らし、揺らめく蜃気楼の中で三沢が最後の指示を出す。

「続けて、業火でダイレクトアタック！」

業火が一際大きく燃え上がり、その口から火炎弾を吐き出す。眼前のミスターTめがけ一直線に飛んで行ったそれが目標に狙いたがわず命中し、炎がすべてを終わらせる……はずだった。

「馬鹿な！」

三沢がそう叫んだのも無理はない。業火の吐き出したはずの炎は命中して爆発するどころかその寸前でみるみるうちに勢いを無くし、凶悪な爪と杖……ついさっき大妖怪の手を持って直々に闇へと還されたはずの悪魔の、その一撃をもって霧散させられたのだ。

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー　攻３２００

仮面魔獣デス・ガーディウス　攻３３００

「なぜ、そのモンスターが2体とも復活して……」

疑問の声が、途中で絶句に変わる。違ったのだ。モンスターは、「2体」ではない。2体の仮面魔獣の全身から伸びてその動きを操る闇の糸が、その背後に隠れて見えなかった3体目のモンスターの手元へと続いている。

死霊操りしパペットマスター　守0

ミスターT　LP2900→900

「パペットマスターだと……？だが、そのカードの召喚に成功し、なおかつ効果を発動したということは……まさかっ！」

死霊操りしパペットマスター。攻守ともに0でレベル6と単体でのステータスだけを見るならば扱いにくいことこの上ない闇属性悪魔族のモンスターだが、その真価はパペットマスターの名が示す通りの特殊能力にあった。

すなわち、アドバンス召喚に成功した際にプレイヤーの墓地から悪魔族を2体蘇生させることのできる力。プレイヤーに2000という莫大なライフコストこそ強いるものの、自らの傷つき倒れた仲間の亡骸をレベル制限や効果無効といった後々に響く枷も無く蘇生ターンの攻撃不能というだけの傀儡として再び現世に呼び戻す恐ろしい特殊能力に比肩するカードはいまだ数少ない。

だが、待ってほしい。前述したように、パペットマスターはアドバンス召喚に成功し

なければただの攻守０のバニラに過ぎないはずだ。そして九尾の狐の猛攻により、あの１瞬の間ミスターＴの場にモンスターは存在しなかったはずだ。では、アドバンス召喚に必要なリリース要因をどこから調達したのか？そして何より、なぜ三沢のターンのバトルフェイズにもかかわらずアドバンス召喚が成立しているのか？何かに気が付いた三沢に答えを提示するかの如く、そのカギとなる２枚の伏せカードがミスターＴの場で表側になっていた。

「量子猫、それにライバル・アライバル……！」

発動した瞬間にモンスターとなる永続トラップ、量子猫。そして互いのターンのバトルフェイズにモンスターを召喚することが可能となる速攻魔法、ライバル・アライバル。この２枚のコンボにより、相手ターンでの不意打ち気味のアドバンス召喚……そして、２体の仮面魔獣の蘇生をやってのけたのだ。

「さあ、どうするかね？モンスターの数が増えたことで攻撃が巻き戻ったが、業火も牛頭鬼もいまだ攻撃の権利を残している」

「そんなことはわかっている！牛頭鬼でパペットマスターに攻撃する……！」

牛頭鬼　攻１７００→死霊操りしパペットマスター　守０（破壊）

木槌の一撃が人形遣いを頭から叩き潰し、その衝撃で闇の糸が切れて仮面魔獣が自由になる。だが三沢にすでに手札はなく、九尾の狐の黄泉帰りも１ターンに１度しか使え

ない関係上これ以上はどうあがいてもターンを譲るほかはない。
「ターン……エンドだ……」
ミスターＴ　ＬＰ９００　手札：０
モンスター：仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー（攻）
仮面魔獣デス・ガーディウス（攻）
魔法・罠：なし
三沢　ＬＰ３０００　手札：０
モンスター：牛頭鬼（攻）
怨念の魂　業火（攻）
狐トークン（守）
狐トークン（守）
魔法・罠：竜操術
リビングデッドの呼び声（対象無し）
「私のターンだ。牛頭鬼を、そして業火をそれぞれ攻撃する」
２体ずつのの妖怪と魔獣がぶつかり合い、互いの獲物が火花を散らす……だが、勝負は最初から見えていた。すぐに牛頭鬼の木槌はマスクド・ヘルレイザーの杖の一撃で持ち主の首ごとへし折られ、その後を追うように業火の巣食う鐘もすぐにデス・ガーディ

ウスの鉤爪によって玩具のようにあっさりと引き裂かれてしまう。

そして闇のデュエルの厳格なルールは、今度は三沢に対して牙をむく。モンスターたちの激突の衝撃で壁まで吹き飛ばされた三沢がどうにか立ち上がろうとしたところで、今の戦闘中にモンスターが押さえきれなかったダメージがプレイヤーである三沢の脳へと伝わり、その刺激により彼自身が作り出した痛みが全身へと襲い掛かる。

「ぐわあああっ！」

仮面魔獣マスクド・ヘルレイザー　攻３２００→牛頭鬼　攻１７００（破壊）

三沢　ＬＰ３０００→１５００

仮面魔獣デス・ガーディウス　攻３３００→怨念の魂　業火　攻２２００（破壊）

三沢　ＬＰ１５００→４００

「ぐ……はあっ……！」

先の戦いでオッドアイズ・グラビティ・ドラゴンの効果により大量にライフコストを支払った時の締め付けるような苦痛とはまるで違う、もっとシンプルで原初的な痛み。このまま痛みに全身をゆだね、意識を手放し全てを諦めてしまえば楽になれるのかもしれない。

だが、それを許せない責任感が彼にはあった。今回のダークネス戦の作戦の全ては、彼の頭の中にある。鮫島校長には多少話を通しておいたが、それでも細かいところを知

るのは自分しかいない。まだやるべきことがある限り、俺が倒れるわけにはいかない。荒い息を吐きながら、全身の痛みから目を逸らして立ち上がる。
「さあ、ミスターT……!デュエルを続けるぞ……!」
「ほう、立ち上がるか。だがそれに何の意味がある?お前ももうじき、ダークネスに包まれることになる……ターンエンドだ」
「そんなこと、まだわからない!」
　会話から心の闇をこじ開け、そこから侵食を始める。ミスターTの作戦だと頭では理解しつつも、ついカッとなってその言葉に応えてしまう。閉まったと思ったころには、すでに遅かった。淡々としたミスターTの言葉が、獲物を締め付ける毒蛇のごとく三沢に絡みつく。
「こうしてお前1人が戦っていても、その戦いを誰が知る?誰も知りはしない、永劫に孤独な戦いだ。誰からも感謝されることもなく、そのあげくすべては失敗してあらゆるものがダークネスに取り込まれる。ならその努力に、一体何の意味があるのかね?」
「だ……黙れ!俺のターン、ドロー!」
　自分の心の中に入り込み、わずかなスキマをこじ開けようとするその言葉から必死で耳を逸らし、目の前のデュエルと自らのデッキに全神経を集中させてカードを引く。そんな状態の中、恐らくこれが最後のターンになるであろうこの局面で引いた1枚。それ

を見た瞬間、三沢の脳はフルスピードで回転を始めた。
　そしてその先に掴んだのは、勝機。いや、それはそう呼ぶにはあまりにもか細く不安定な物だった。しかし他のどのカードでもなく、このカードでなくては引き当てられなかった勝利への可能性が、ほんのわずかにだが生まれたのだ。
「俺のフィールドには今、アンデット族の狐トークン２体が存在する。この２体の存在を道標とし、冥界の入口より罪人への迎えが現れる！出でよ……火車！」
　確率的にはとても低いと言わざるを得ないその可能性に、三沢は賭ける。信じれば、デッキは答えてくれる。
　そして火車が、現世に招来した。それは、炎に包まれた車輪と共に彼岸より来たる自我を持つ冥界の車。罪人の死体を冥界の底へと持ち去り、その魂を未来永劫成仏することさえ許さない場所へ連れ去っていくと言われる伝説の妖怪である。獲物を見つけたその目が光り、車の前面にかかっていたすだれがおもむろに開く。その奥に広がっていたのは車の内部ではなく、無限に広がり中には何ひとつ存在しない完全な闇。そしてすだれが完全に上がりきると同時に、闇が見る者すべてを引き寄せる強烈な吸引力を放ち出した。明らかにサイズが違う２体の仮面魔獣の姿がねじれ、歪み、手足を振り回しての抵抗虚しくその車内へと……それどころか無差別悩みは本来味方であるはずの狐トークンですらも吸い込んでしまう。

全ては、ほんの1瞬だった。火車の通った跡には、あれほどたくさんいたはずのモンスターはもはや1体すらも残っていない。ただ1つ、火車のみを残して。

「火車の特殊召喚に成功した時、火車以外の全てのモンスターは持ち主のデッキへと戻される。デス・ガーディウスが遺言の仮面を遺す条件はフィールドから墓地に送られること、よってこの方法ならばその効果も封殺される」

「だが、火車は本来自らのアンデット族とコンボで使うべきカード。もともと攻撃力が不定の火車は自身の効果でデッキに戻したアンデット族の数によってその数値が変動するが、お前が召喚条件として用意したのはデッキに戻ることのできないトークン2体。それでは攻撃力は0としかならないはずだ」

火車　攻?→0

そう、ミスターTの言葉は正しい。トークンはあくまでカードとして存在しない以上、デッキに戻るという現象が起こりうるはずもない。つまり火車が自らの効果でデッキバウンスに成功したのは、実質的には悪魔族である仮面魔獣2体だけでしかないのだ。

だが、三沢の見つけた勝機はそんな浅い言葉では揺らがない。そんなもの、このカードを引いた時にはすでに理解していたのだから。

「わかっているさ。だが俺にはまだ、この墓地のカードがある。墓地の魔法カード、

シャッフル・リボーンの効果を発動！俺の場の表側表示のカード1枚をデッキに戻すことで、デッキからカードを1枚ドローする。俺が選ぶのは、このリビングデッドの呼び声だ」

土地鋸を蘇生して以降、ずっと何の効果も持たないカードとして場に留まっていたリビングデッドの呼び声。それをたった1枚のカードのみを求めて新たな手札に変換し……道が、開けた。

「魔法カード、ガルドスの羽根ペンを発動！」

「何？」

ここで初めて、ミスターTの表情が変わる。それは、疑い。目の前の人間が、何を考えているのかわからないという疑念。このデュエルが始まってから初めて、三沢の思考がミスターTの論理を上回った瞬間だった。

「その様子だと解説の必要もなさそうだが、一応宣言させてもらうぞ。ガルドスの羽根ペンは俺の墓地の風属性モンスター2体をデッキに戻し、場のカード1枚を持ち主の手札に戻す。2体のドラグニティを戻し、俺が選ぶのは火車、お前だ！」

翠緑の風が吹き、轟々と燃える火炎の車がまるで燃え尽きたかのように消えていく。地獄の熱気がふっと和らぎ、ついにフィールドには何もなくなった。

「火車は、自分フィールドにアンデット族が存在しない限り何の役にも立たないカード。

そんなものを手札に抱え、何をするつもりだ？」
「いいや、違うさ。俺がやりたかったのは火車を手札に戻すことじゃない、これで俺のフィールドにモンスターはいなくなった！墓地のトラップ、もののけの巣くう祠の効果を発動！このカードをゲームから除外することで、墓地のアンデット族１体を効果を無効にして特殊召喚する……もう１度黄泉より帰れ、九尾の狐！」
九尾の狐　攻２２００
「今度こそ最後のバトルだな、ミスターＴ。九尾の狐でダイレクトアタック、九尾槍！」
再び現世に復活した白面金毛の大妖怪が、尾の一撃を飛ばす。ミスターＴの宗元に吸い込まれるように打ち込まれたそれが、その闇の体を串刺しにした。
九尾の狐　攻２２００→ミスターＴ（直接攻撃）
ミスターＴ　ＬＰ９００→０

「よく考えてみるがいい。こうして私を倒したところで、その活躍を誰が知る？勝とうが負けようが誰も知りようがない、誰も見ていない。それでもその戦いを続ける意味があるのかね？」
ライフをすべて失ったミスターＴの体が、捨て台詞と共に薄れて消えていく。どうに

か撃退に成功した安心感も相まって、考えてはいけないと思いつつもつい思考がミスターＴの発言の方へと延びる。誰からも知られない、ならばそこに何の意味があるのか、か。

「もうこんな時間か……」

これ以上考えると本格的に危険な方に傾きそうな思考を誤魔化すために壁にかかっていた時計の方を見て、わざわざ小さく口に出してつぶやく。気が付けば、ミスターＴとのデュエル開始から３０分が経過していた。そろそろ鮫島校長は皆にこの危機を、そしてこれから始まる作戦を伝えることができただろうか。そう思う彼の注意を、床に転がったままのＰＤＦの着信音が引いた。拾い上げて通信相手の名を確認し、通話ボタンを押す。

「天上院君、どうし……」

『残念だったね、吹雪だ。今明日香からＰＤＦを借りてね、いつの間に妹のアドレスなんて手に入れていたんだい？もっとお堅いタイプだと思っていたが、なかなか隅に置けないところもあるじゃないか』

「いや、これはセブンスターズの時に……それよりどうしたんですか、俺相手に」

通話相手……天上院吹雪の非常事態とは思えない第一声に、返す言葉も思わず呆れ声になっているのを自覚する。とはいえ当の本人も本気ではなかったらしく、すぐに真面

目な表情と声色に切り替えた。
『鮫島校長から、今コロッセオで発表があったよ。ダークネスの話は知っていたが、まさかこの学園にここまで深く入り込んでいたとはね。正直、今の段階でもここに全校生徒がいるとは思えない。すでに何十人単位で向こうの世界に引き込まれている、そう考えるのが妥当だろう』
「……すみません、俺の判断が遅れたせいで」
何十人単位、という言葉が、三沢の胸に重くのしかかった。計算に間違いがあったのかダークネスに力を貸す第3者が存在するのかは依然わからないままだが、一足早く手を打つためにこうしてアカデミアに戻ってきたのにもかかわらず後手後手に回らざるを得ず、完全に被害を防ぎきることができなかった後悔に包まれる。
『いや、責めているわけじゃない。君がこうして警告してくれたから、まだ無事な生徒もたくさんいるんだ。それよりも君の立てたという作戦だが、その……』
珍しく言いよどむ吹雪に、思わず笑いかける。もっともな反応だ、と思った。俺だってツバインシュタイン博士の下で学んだ次元世界に関する理論や、覇王の異世界で得たこの次元での常識など通用しない様々な知識がなければこんな話、到底信じられるものではなかっただろう。
『確かに、光がある限りその裏側には必ず闇もある。それ故にダークネスは不滅で、消し

去ることは不可能だ。そのことは、他ならぬダークネスの力に取り込まれていた僕がよくわかっている。となれば、君の言う作戦は確かに奴に対して数少ない有効な対抗手段となり得るだろう。だが、本当にそんなことが可能なのか？』

本当に、そんなことが可能なのか。それは彼自身、この段階に至るまでの間に何度も自分に問いてきたことだった。だが、いや、だからこそ、彼はその返事をすることに迷わない。そう問われて迷いや躊躇いを生じるような段階は、とうの昔に自分の手で通り過ぎたのだから。

『……いや、すまないね。君のことを信用していないわけじゃないんだが、そうとられてもおかしくない発言だった。必ずこの作戦、成功させよう。僕たちも陰ながら、できる事がないか探ってみるよ』

「はい、お願いします。では」

通話を切り、再び机に向かう。想定外のスピードのせいで多少計算が狂ってしまっているため、その修正を行わなければならない。気が付けば、心の中のもやもやした気分は消えていた。そうだ、俺のやることにはちゃんとした意味がある。これが、この戦いでの俺の役目だ。

このタイミングで電話をしてきたということはもしかしたら、あの人は自分の心が揺らぎそうになっていたことを察知していたのかもしれない。ふと、そんな考えが頭をよ

ぎる。一時的にとはいえダークネスの力を手に入れていたあの人ならば、ダークネスがまず自分に手を出そうとしてきたことに気が付けてもおかしくないだろう。だとしてもそれはそれでいいじゃないか、今の会話のおかげで俺は自分の気持ちを新たにすることができたのだから。

再び猛烈な勢いで、紙の上をペンが走り始めた。

ターン１２２　鉄砲水と紫毒の記憶

「何の用だい？こんな辺鄙な場所に」

どこかの部屋。電気すらついていない部屋の中で、その主が荒れ果てた部屋の中を手で指し示しながら愉快そうに来客に尋ねる。尋ねられたその人影はしかしそれには答えず、返答代わりに無言で主へ向けて右手をかざす。

部屋の主がその行動に不信を抱き何かアクションを起こそうとしたのだとしても、それはあまりにも遅すぎた。その右手と連動しているかのように頭に内部から割れるような痛みが走り、立つことも喋ることもままならずその場にうずくまって頭を抱える。辛うじて開いた視界に、手をかざした側の足が見えた。突然の行動にもまるで反応することなく、１歩ずつゆっくりと向かってくる。

「う……！」

それでも距離を取ろうとしてどうにか体を反転させ、そのまま腕を前に出して這ってでもこの場を離れようとする。だがその両腕を頭から離した瞬間、より一層の痛みが彼の脳内で弾けた。またしてもその手を自らの頭部に戻し、赤ん坊のように丸まった状態でその場に転がり続ける事しかできない部屋の主の元にたどり着いた人影は、次にその

手を腰につけられたデュエリストの証、デッキケースに伸ばす。倒れたままの部屋の主には目もくれずその中から1枚のカードを探り当てた人影は、何も言わずにその1枚を再びデッキへと戻す。それはかろうじて理解できたものの、どうすることもできない部屋の主に侵入者が一声囁く。

「これでいい。だが今起きたこと、そしてお前の正体はもう少し後、その時が来るまで忘れるがいい。全てはダークネスのために……」

その言葉を最後に、侵入者が踵を返す。あまりの痛みに耐えかねた部屋の主が意識を失う寸前まで見ていたものは、その侵入者の黒いブーツだった。それが名をトゥルーマン、通称ミスターTと呼ばれる存在であったことは、知る由もない。

森の中にひっそりとたたずむ、かつて特待生のためという触れ込みで作られた廃寮。この場所から三幻魔の研究の結果として吹雪さんが次元を飛ばされ、いまだ行方知らずの本物の藤原優介もダークネスの世界へと旅立っていった、デュエルアカデミアの暗部。この場所には、何の因果か入学当初から僕も深く関わってきた。そんなこの場所に、この緊急事態に訪れることになろうとは。三沢の考えることはさっぱりわからないけれど、ここに入るのならあの人に一言声をかけておく方がいいだろう。

「稲石さーん、ちょっとちょっとー」

大声で呼びかけるも、廃寮の地縛霊から返事はない。いつもならたとえ返事がなくとも、こちらの声が聞こえた証拠に門がポルターガイストでひとりでに開いて道を開けてくれるはずだ。けれど、今日は閉ざされて錆びついたうえに蔦まで絡みついたこの門はそれが当然と言わんばかりに閉ざされたままでピクリとも動こうとしない。仕方がないので構わず門を乗り越えていつも通り伸び放題に伸びた庭の雑草を掻き分けて、その先の巨大な扉をぐいぐいと開ける。相変わらずのほこりまみれの室内の空気はしんと静まり返っていて、ついこの間ダークネス吹雪さんと戦ったあの時の熱気が嘘のようだ。

「稲石さんってば、ちょっと出てきてよー」

返事はない。視界に入る中で動くものといえば、辛うじて見える窓の外の曇り空に飛ぶ１羽の鳥の影だけだ。何かがおかしい。あの人はここの地縛霊だから、この寮の外に出ることはできないはず……と、そこまで考えて、あることを思い出した。そもそも、あの人は誰なんだろう。稲石という名前も本名かどうかは怪しいものだし、地縛霊だという情報ひとつにしてもあの人がそう自称しているだけだ。これまで何度も浮かんでは来たが、そのたびに後で本人に聞こうこれが終わったらあの人に直接聞きに行こうとひたすら後回しにして塗りつぶしてきた疑問。

だがそれが形になる前に、思考が強引に中断された。一体どこから出てきたのか、背後から肩を突然人間の手で叩かれたのだ。その感触よりも、制服越しでも体に伝わるその冷たさにぞっとしながら振り返る。
「やあ、どうしたんだい？」
「うわっ!?な、なんだ稲石さん……」
「なんだとはご挨拶だね、まったく。それで？」
多少ムッとした様子の稲石さんに、ぎこちなく笑いかける。その手は離されたというのに、いまだにその感触が肩に残っている。
「……それが、僕にもよくわからないのよ。とにかくここに行ってろって言われただけで。だからまあ、とにかく聞いてみようと思ってさ」
何が何だか、という顔でこちらを見つめてくる稲石さん。その感想ももっともで、自分の言葉ではあるものの我ながら下手な説明だ、と笑いたくなる。聞かされる方はいい迷惑だろうが、僕だってわからない物はわからない。そもそも、稲石さんをこの話に巻き込めとは三沢には言われていない。ただこの彼がこの廃寮を指定してきた以上現地の住人である稲石さんの助けがあったほうが何かとスムーズに行くだろうし、世界どころか次元規模で起きているダークネスの侵攻は稲石さんにとっても他人事ではないはずだ。

とにかくとＰＤＦを引っ張り出し、稲石さんの視線を感じながら三沢に通話を繋ぐ。ありがたいことに、この島の内部は例え火山にいようが森の奥地にいようが、この廃寮内でさえ決して圏外にはならない。海馬コーポレーションの開発した、世界中どこにいてもデュエルが楽しめるデュエルディスクの中央コンピューター接続技術を転用した強力通信技術のおかげだ。三沢もこちらからの連絡を待っていたらしく、ワンコールすら待たされることなくすぐに通話が繋がった。

「あ、三沢？こっちは今寮に入ったとこだけど」

『そうか。そっちは無事だったみたいだな』

「そっちは……？」

含みのある言葉に目を凝らしてよく見ると、三沢の方には画面越しでさえはっきりと疲労の色が見える。ついさっき僕の店で連絡をもらった時には、いくらなんでもここまでの消耗はしていなかったはずだ。

「……何かあったの？」

『少しばかり野暮用がな。だが今は俺のことはどうでもいい、そこに行ってもらった理由を説明するぞ』

適当に言葉を濁しつつ、真剣な顔になる三沢。ここからがいよいよ本題だと、稲石さんが画面を背後から覗き込む気配がした。

『まず結論から言おう。今回の目当ては、その廃寮の地下……セブンスターズのアムナエルがかつて遺した、錬金術の遺産だ』

アムナエル。セブンスターズ最後の1人にして、元オシリスレッド寮長の大徳寺先生。現在ではファラオの体内に魂を取り込まれて魂だけでも元気で……？やっているけれど、精霊の見えない三沢はそれを知る由もない。マクロコスモスとか原始太陽ヘリオスとか、今となってはすっかり懐かしい話だ。

いや、そうじゃなくて。昔の記憶に浸ることなんて、後でいくらでもできる。その後、とやらがこの先の未来にあればの話だけど。そのために戦うんだ。

「アムナエルの錬金術……なんで？」

『一言で乱暴に説明するならば、それがエネルギー源として必要だからだ。そもそも、今回の事件で俺の立てた作戦はツバインシュタイン博士が昔発表した多次元理論が基になっていてな。なあ清明、四次元世界についての話をお前は聞いたことがあるか？』

「……チャクチャルさん、説明！」

『はいはい。んー、マスターでもわかるようにか……かなり面倒な仕事だが、まあやってみよう』

なんだかすごく失礼な前置きだった気もするが、ここで言い返すと本格的に話が進まない。ぐっと堪えて下唇を噛み、黙って頭の中に響く声に意識を傾ける。

『我々の今存在する世界の物質には、全て幅、奥行き、そして高さの３つの要素がある。これはわかるな？だからこの世界は三次元、そう言いかえることができる。紙に描いた絵には長さと幅があっても奥行きが存在しない、二次元という言葉にはそういう意味があるわけだ』
「ふんふん。幅、奥行き、高さ……ん？じゃあ４つ目って何？あと何があるの？」
『時間だ。三次元世界の概念からすればありえない話だが、我々が物の高さや幅、奥行きを決められるように四次元世界では時間を４つ目の枠として自由に操作できる、まあそんなところだ』
「なるほどなるほど」
　そして画面越しに、今聞いた話をそっくりそのまま繰り返す。よく知ってたな、というあからさまに訝しげな視線とチャクチャルさんからのじっとりとした何か言いたげな気配の両方に対しきっぱり気づかないふりをしていると、三沢もあまり時間がないことを思い出して話題を次に移した。
『だいぶざっくりした説明だが、確かに大まかなところはそんな認識で構わない。そもそも博士の理論によれば時間と空間は紙一重の物であり、両者の差はない。それは人間もデュエルモンスターズも関係なく最も原初的な本能の奥底に刻み込まれている情報であり、時計も次元の数も１２となっているのは偶然ではなくその本能が無意識にそう

あることを求めていたからだ。もっとも、学界ではとても認められなかったらしいがな』

「だろうね」

デュエルモンスターズの精霊に独自の世界があることだって、この目で直に精霊を見なければ僕も到底信じられないことだったろう。学会とか論文とかはさっぱりだけど、そこに他の次元の話なんてぶっ飛んだ理論を持ち込んだらどんな目で見られるのかぐらいは僕だって想像がつく。

即座に同意した僕にかすかに悲しげに小さく頷き、いよいよ三沢の話も一番重要なところに入り始めた。

『そして、ここからがこの作戦の一番重要なところだ。これまでにも俺たちは何回か、ある程度のエネルギーと空間の不安定さという2つの条件が揃った時に別の次元へと人間、それどころかアカデミアの建物のような巨大な質量をも飛ばすことができるという実例を見てきただろう?この四次元理論に従えば、俺たちに認識できないだけで三次元間の移動と残る4つ目、時間の移動にはそう大差がない。ゆえに次元を飛ばすほどのエネルギーを準備し、ほんの少し別ベクトルに傾ければ対象をはるか未来や過去へ飛ばすことも可能となるはずだ。ここまで言えば、わかるな?』

「まさか……それでダークネスを?」

『そうだ。ダークネスは俺たちのいるこの世界と表裏一体の存在、一時的に追い払うことはできるかもしれないが決して消し去ることは不可能だ。だが可能な限り遠くの未来へと送ることができれば、その時が訪れるまでにまた準備ができる。倒すことができないが、先送りにすることはできる』

「おおー」

『もっとも、あのデスベルトだったか?さすがにあれに匹敵するほどのエネルギーをこの短期間で生み出すのは難しく、アカデミアの電力を集中させる程度ではとてもじゃないがパワーが足りない。そこで俺が目を付けた最後の可能性が清明、今お前のいる廃寮にあるはずの錬金術の力なんだ。それでも範囲を絞ることで必要となるエネルギーを最小限に抑えるため、ダークネスの出現位置の特定にもこんなギリギリまで時間をかけた。理論は既に完成している、後はエネルギーの問題だけだ』

「……なるほどね」

　ただの使いっぱしりだと思ってたけど、これはなかなかどうして重要な仕事だ。今更か。とはいえどうにか笑顔で返したものの、そんな僕の顔はひきつっていなかっただろうか。いくらなんでも僕だけプレッシャー重すぎませんかね、三沢っちさんや。

「それで、具体的には何を探せば?」

『賢者の石、だな。錬金術の最高成果とも言われる、不可能を可能に変える石。そこに秘

められた力は、生命すら生み出すという。錬金術は俺も基礎知識程度しかないが、大徳寺先生の授業内容は全て頭に入っている。力を引き出す程度のことはできるはずだ』

「な、なるほど……？」

賢者の石、どんな形をしてるんだろう。色は？サイズは？そもそも石というけれど、要するに宝石みたいなものをイメージしておけばいいんだろうか。わからないことだらけだけど、見切り発車は今に始まったことではない。

覚悟を決めた僕をよそに、ふとほこりまみれの廊下に動く影が見えた。あの茶色いシルエット、見間違えようがない。

「ファラオ！ちょっとこっちおいで！」

最近食事時だけフラッと帰ってきて普段どこにいるのかと思ったら、ここで暮らしてたのかあの猫。僕の声に反応してピクリと耳が動き、ゴロゴロと喉を鳴らしながら近寄ってきたファラオの頭を撫でてやる。気持ちいいのか大きな口を開けてあくびしたその喉の奥から、優しい光を放つ球体がふわりと飛び出た。最近久しぶりに会う、アムナエルこと大徳寺先生だ。

「早速ですけど今の話聞いてましたか、大徳寺先生？」

『もちろんだニャ。それにしてもさすがは三沢君、賢者の石とはいいところに目を付けるニャ。私がかつて作成した賢者の石は私の病ひとつ治せなかった不完全な代物に過

ぎないけれど、それでもホムンクルス作成用に数だけはそれなりに残してあるニャ。次元を超える理論は私にはわからないけれど、全てかき集めればかなりのエネルギー量にはなるはずだニャ』

「それじゃあ……！」

『付いて来るニャ。どうせあれはもう、アムナエルには不要なものだ』

最後の一瞬で語尾が消えたのは、大徳寺先生としてではなく錬金術師アムナエルとしての言葉だったのだろう。再び引っ込んでいく魂を再び呑み込むと、それを待っていたかのようにファラオが歩き出す。この方向は間違いない、かつてのアムナエルの研究室だ。

「こっちはなんとかめどが付いたかな。じゃあ三沢、終わったらそっちに届けるから。いったん切るよ！」

『ああ、頼んだ。だが油断するなよ、どうもダークネスの侵攻スピードがおかしい。ダークネスだけではなく、そこに協力する第三者が存在する可能性もある。あまり時間はないと思った方がいい』

不吉な言葉を最後に、通話が切られる。ダークネスの協力者なんて、そんな人生に絶望した人がどこかにいるのだろうか……なんて、間違ってもダークシグナーに言われたくはないだろう。ともかく、今はファラオだ。研究室までの道はまだ覚えていたが、賢

者の石の在り処は大徳寺先生にしかわからない。黙ってその後に稲石さんと共についていくかと思ったが、数歩進んだところで振り返った。てっきり稲石さんも付いて来るかと思ったのに、なぜかその場に立ち止まっている。

「あれ、稲石さん？」

「……ごめんね。全部、思い出した」

聞き取れないほどに小さな声でそう呟いた次の瞬間、手に持ったままのＰＤＦに全くの不意打ちで強烈な力が加わった。咄嗟のことで抵抗することすらできないうちに、ポルターガイストで奪い取った僕のＰＤＦを稲石さんが自分の手の中でクルクルともてあそぶ。

「いない……」

しさん、と続けることはできなかった。突然力を込めて僕のＰＤＦを床に叩き付けた稲石さんが、全力でそれを踏み抜いたのだ。いくら海馬コーポレーション製とはいえ、所詮は通信機械。たった１踏みで液晶も内部の機械も全部まとめて破壊され、素人目に見ただけでも修復不可能なぐらいスクラップにされてしまった。

「え？」

突然の奇行に言葉を失う僕の横を通り過ぎ、ファラオの歩いて行った方への道に立ちふさがるかのように仁王立ちした稲石さんがその右腕を持ち上げる。気が付けば、そこ

にはデュエルディスクが装着されていた。
「ここは通せない。絶対に」
「何を……」
『マスター、よく見ろ！』
　チャクチャルさんの言葉に、息を呑む。これまでどうやって隠していたのか、今やはっきりと見える。稲石さんの全身からは、さっきまで影も形もなかった抑えきれていないどす黒い闇の瘴気が漂っていた。
「稲石さん、それ……」
『やめておけ、マスター。説得は考えるだけ時間の無駄だ、恐らくはミスターTだな。先回りして……洗脳か？表層意識だけは普段通りに取り繕い、何かあらかじめ設定しておいたきっかけにより効果を生じる。一目見た限りでは本人そのものであるがゆえに怪しまれずに送り込むことができ、なおかつ内部ではこちらの手足として動かせる。私も昔、好んで使った手だ。先ほどの会話の中にトリガーが、例えば賢者の石、やダークネス、という単語に反応して解放されるよう仕込んであったのだろう』
「稲石さんまで、そんな……!?」
『割とマスターは、向こうからは敵視されてたからな。外堀を埋めに来ても驚きはしないが。ただ、以前オネスト事件の際にここに来たときにはおかしなところはなかったか

らな。洗脳されたのはかなり最近、まだ浅い段階だと見ていいだろう』
「ってことは？」
『カードだ。デュエリストに対しての最も手軽な洗脳はカードを媒体としてのものだから、そのカードを正面から攻略すれば流れを断ち切ることも可能なはずだ』
　きっぱりと言い切るチャクチャルさん、そして目の前で闇のオーラに包まれる稲石さん。ふうっと息を吐き、水妖式デュエルディスクを腕輪状態からデュエルモードへと変形させる。なんだか無性におかしくなって、ついつい笑ってしまう。
「なんだ……ふふっ」
『どうした、マスター？』
「いやね、チャクチャルさん。どれだけややこしい話になっても、結局腕ずく力づくなんだなあって思ったら、ね。最高じゃない、そういうわかりやすい話なら大いに僕の専門だよ。稲石さん、ちょっとばかり荒療治と洒落込むから勘弁してね！」
「「デュエル！」」
「先攻は僕が貰った！グレイドル・スライムＪｒ．を守備表示で召喚、これでターンエンド」
　普段よりも小さめの銀色の水たまりが床から湧き、それが形を変えておしゃぶりを咥えたようなビジュアルの子供スライムへと姿を変える。なりこそ小さいがこれでも守

備力２０００、並みのアタッカーの攻撃ならば余裕で受け止めることができる凄い奴だ。最も稲石さんのデッキを考える場合、守備固めが役に立つとはあまり思えないのが難点だが。

グレイドル・スライムＪｒ・　守２０００

「まずは様子見、かい？自分のターン、モンスターをセット。そしてフィールド魔法、ゴーストリック・パレードを発動！」

僕らの立っている廊下に、色とりどりの電飾が一列に走る。カラフルな風船がふわふわと浮かび、こんな状況でもなければなかなかに楽しい眺めだっただろう。

稲石さんの使うテーマ【ゴーストリック】は、他のゴーストリックが存在しない限り表側での通常召喚ができないという共通デメリットを抱えているうえにレベル５以上の上級モンスターが僕の知る限り1体も存在せず、下級モンスターにしてもステータスがお世辞にも高いわけではないというかなり変則的なテーマだ。反面相手ターンでもお構いなしに効果を使う高い奇襲性能と裏側守備表示を自在に操るトリッキーな戦闘スタイルを持ち、ひらひらと相手を翻弄しては軽くても確実にダメージとアドバンテージを積み重ねていく、これまでのデュエルでは僕が勝てはしたものの正直かなりやりづらい相手だ。まして今の僕は壊獣とグレイドルの力を得た結果、相手が力押しであればあるほどいいカモにできるというデッキの方向性が完全に定まってしまった。デッキ

の傾向だけでみれば、あまり相性はよろしくないと言わざるを得ないだろう。
そして、稲石さんはそこでターンを終えた。だがこの1ターンは隙を見せたんじゃない、すでに次への布石が張られていると見たほうがいい。
清明　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：グレイドル・スライムＪｒ．（守）
魔法・罠：なし
稲石　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：???（セット）
魔法・罠：なし
場：ゴーストリック・パレード
「……僕のターン」
今引いたカードで、どうにかゴーストリック・パレードかあのセットモンスターを除去できれば……駄目か。一見すればただの手札事故で苦し紛れにモンスターを出しただけのように見えるような場だが、あの稲石さんのデッキに限りそんな間抜けなことになるはずがない。普段の感覚でうかつに突っ込んでいっても致命打を与えるどころか、向こうのデッキの回転を速めるだけにしかならないだろう。
となると、今はまだ動けない。そんなの僕好みのやり方ではないけれど、このターン

はまだ攻め込めない。とっとターンを回そうとしたところで、注意深くこちらを観察していた稲石さんがふと思いついたように口を開く。

「何もしないでターンエ……」

「へえ、随分のんびりだね。自分としては別にどっちでも構わないけど、いいのかいそんな調子で？時間、そんなにないんじゃない？」

「この……！」

『落ち着けマスター、惑わされるんじゃない』

頭に血が上りかけたところを見計らって、タイミングよくチャクチャルさんが釘を刺す。おかげで、売り言葉に買い言葉を叩き返す前に少し辺りを見回す余裕ができた。

そうだ、いくら急いでるからって無策で突っ込むのは試合放棄も同然。確かに決着そのものは早く済むだろうけど、内容が負け試合では元も子もない。だからこの言葉、ほんの１瞬でも強引に攻め込みそうになった自分への戒めもこめて改めてはっきりと言わせてもらおう。

「ターンエンド！」

「ふーん。自分のターンは……そうだね、カードをセット。さらにモンスターをもう１体、裏側守備表示でセットしておこうかな」

「また……！」

「ほらほら、そんな調子で大丈夫？」

稲石さんの煽りは、ある意味当たっている。どうも今回はデュエルに身が入らないというか、今一つ調子が乗ってこないのだ。理由はわかってる、焦っているんだ。さっきの三沢の様子から言って、まず間違いなく何らかの形で向こうも襲撃を受けたんだろう。いまだっていつ第二陣がやってくるかわからない中、僕の帰りを待っているはずだ。

僕がこの仕事を成し遂げさえすれば、このダークネスとの戦いにもひとまずけりがつけられる。だというのに肝心の僕は、目的まであと1歩というこんなところで足止めされている。おまけにＰＤＦが壊されてしまった以上、誰かにこの緊急事態を伝える事すらできない。精霊の誰かをこっそり送り出す手もなくはないけれど、送り出したところで精霊が見えるメンツのうち十代は童実野町だし万丈目はこの島のどこにいるかわからない。鮫島校長の放送に従ってコロッセオに集まってるとは思うけど、そこまで単独行動させるリスクを考えるとかなり分の悪い賭けだろう。

となるとやはり、ここは僕がどうにかするしかない。デュエル開始直後はやる気満々で啖呵を切ったけれど、こういう時に稲石さんの戦闘スタイルは本当に厄介だ。

清明　ＬＰ４０００　手札：５

モンスター：グレイドル・スライムＪｒ．（守）

魔法・罠：なし
稲石　ＬＰ４０００　手札：３
モンスター：???（セット）
???（セット）
魔法・罠：１（伏せ）
場：ゴーストリック・パレード

「僕のターン……よし。永続魔法、グレイドル・インパクトを発動！続けてその第１の効果、グレイ・レクイエムを発動。僕の場のグレイドルカード、Ｊｒと稲石さんの伏せカードを選択して、その２枚を破壊する！」

目下のところ貼られたはいいが何の作用も及ぼすことなく沈黙を続けるゴーストリック・パレードやセットされっぱなしのモンスターも不気味ではあるが、どれか１枚を破壊するとしたらあの伏せカードからだろうか。大量の誇りを巻き上げつつ廊下に不時着したＵＦＯから２本の光線が発射され、僕の指定した２枚のカードを同時に撃ちぬいた。

いや、様子がおかしい。破壊されたはずの伏せカードのソリッドビジョンが消えず、それどころか伏せられたままかすかに振動している。チェーンして発動されたのかとも勘ぐったが、そういうわけでもないらしい。

「やっぱりそう来たかい？でもはずれ。破壊されたトラップ、コザッキーの自爆装置の効果を発動。セットされたこのカードが破壊されたなら、それを行ったプレイヤーに１０００ダメージを与える」

稲石さんの言葉を待っていたかのように、その伏せカードが爆発する。熱と爆風をまともに浴びて咄嗟に顔を両腕で守りながら、今の言葉が脳内でリフレインする。

「やっぱり？読まれてた……？」

『手の内はお見通し、という訳か。面倒だが……』

何かを訝しむ様子のチャクチャルさん。すぐに、その歯切れの悪さの原因が分かった。確かに爆風を受けたはずなのに、そよ風ひとつ感じない。

清明　ＬＰ４０００

「残念。ゴーストリック・パレードが発動されている限り、相手プレイヤーはあらゆるダメージを受け付けないんだった」

おどけた様子の稲石さんだが、さすがにそれを信じられるほど純粋じゃない。だって相手はあの稲石さん、自分のカード効果を忘れるなんて凡ミスを犯すようなレベルの人じゃないはずだ。

警戒を強める僕の顔を見て、稲石さんがくすくすと笑う。

「ねえ。それよりこのカード、懐かしいとは思わないかい」

言いながら役目を終えたコザッキーの自爆装置をデュエルディスクから引き抜いて、墓地に送る前に一度こちらに見せてくる。向こうのペースに乗せられるだけだと頭では分かりつつも、ついその言葉にまじまじとその1枚のカードを眺めてしまう。その反応に満足したのか、滑らかな調子で話し続けた。

「今ならカードプールも増えて、地雷目的ならもっとダメージ効率のいいカードもあるけどね。でもせっかくだから、このカードで引っ掛けてやりたかったのさ」

薄く笑いながら、ゆっくりと見せつけるように墓地に送る。コザッキーの自爆装置、あのカードは……ああ、思い出した。もう2年も前の記憶、稲石さんと初めて会ってデュエルした時のことだ。確かあの時のラストターン、マジカルシルクハットを使い最後のギャンブルとして選んだ2枚のカードのうち1枚があれだったっけか。あの時は僕もまだまだガキで、これからの学生生活に何が待っているかなんて考えもしなかった。

……もっともたとえ考えていたところで、こんな強烈に濃い2年間の出来事を予想できたはずもないんだけれど。

「なるほど。だからそのカードを……何？あの時のギャンブルの借りは返したってわけ？」

「深読みしすぎさ。昔を振り返るちょっとしたお遊びだよ、お遊び。それで？モンス

ターがいなくなったみたいだけど、またターンエンドかな？」
「まさか。グレイドル・コブラを通常召喚！」
ＵＦＯの中からスルスルと這い出てきた、ピンク色をした１匹の大蛇を模したグレイドルがとぐろを巻いてチロチロと舌を出す。
グレイドル・コブラ　攻１０００
「コブラでその、右側のセットモンスターに……」
「いいや、それは無理さ。なぜならこの瞬間に、ゴーストリック・パレードの効果を適用。お互いに裏側守備表示モンスターへの攻撃は禁止され、その場合の攻撃は全て相手プレイヤーへのダイレクトアタックに。そして相手モンスターの直接攻撃宣言時、パレードの陽気に誘われたデッキのゴーストリックカード１枚を自分は手札に加えることができる……ぐっ」
勢いをつけて飛びかかった大蛇の攻撃を、セットカードがすっと躱す。勢い余って飛び込んだ先は、そのプレイヤーである稲石さんだった。鋭い牙がその左腕に深々と食い込み、顔をしかめながらも右手でデッキから今井のカードを引き抜いた。
グレイドル・コブラ　攻１０００→稲石（直接攻撃）
稲石　ＬＰ４０００→３０００
「痛たた……でも自分が戦闘ダメージを受けたことで、今サーチしたゴーストリック・マ

リーの効果を発動。このカードを手札から捨てて、デッキから別のゴーストリックを裏側守備表示で特殊召喚する。ゴーストリック・グール！」

確かにダメージは通った。だけどその代償として、稲石さんの場のモンスターはこれで３体。この人とのデュエルはいつもこうだ。なんだか知らないうちに、勝手にアド差をつけられる。

「ターンエンド……」

「もうちょっと引き延ばすか、それとも……ドロー。おやおや、これは攻め込めってことなのかな？フィールド魔法、ゴーストリック・ハウスを発動！」

廊下を走る電飾がパッと消えて、代わりに現れた古めかしい燭台に火が灯る。ゴーストリックの基本となるフィールド、互いのダメージを半減させるお化け屋敷だ。

「そしてグール、イエティ、キョンシーの順で３体のモンスターを反転召喚。キョンシーがリバースしたことで、場のゴーストリックの数以下のレベルを持つゴーストリックを手札に加える。場のゴーストリックは自身含めて３体、だからレベル３のゴーストリック・マミーをサーチする」

???????→ゴーストリック・グール　攻１２００
　　→ゴーストリック・イエティ　攻３００
　　→ゴーストリック・キョンシー　攻４００

「まだまだ行くよ。場にゴーストリックが存在することで、ゴーストリック・マミーは表側表示で問題なく召喚できるようになった。さらにマミーが場に存在するとき、自分はもう1度ゴーストリックを通常召喚できる。おいで、人形」

ゴーストリック・マミー　攻１５００

ゴーストリックの人形（ひとがた）　攻３００

展開を補助するマミー、そして追加で召喚される球体関節のゴーストリック。相変わらず目立ったパワーカードを使うわけでもないのに、いつのまにか盤面が埋め尽くされている。

「グレイドルの効果は知っているからね、このまま攻撃するような勿体ない真似はしないでおくよ。その前にゴーストリック・グールは1ターンに1度、自分の場の全てのゴーストリックの攻撃力を1体に集約することができる。自分が今選ぶのは、マミーにしておこうかな」

類似、というかほぼ同じ効果を持つＢＦのシロッコと比べ、ゴーストリックの戦闘能力は低い。それでも稲石さんのプレイヤースキルがあれば、ノース校の鎧田が使うシロッコと同じぐらいの脅威になる。

ゴーストリック・マミー　攻１５００→３７００

「３７００……」

グレイドル・コブラの攻撃力は１０００で、当然次に来るのは大ダメージだ。ゴーストリック・ハウスはほとんどのダメージを無差別にプレイヤー問わず半減するけれど、唯一ゴーストリックの与える戦闘ダメージだけはその限りでない。流れは今、確実に稲石さんの方へ傾いている。だけど、決して僕に付け入る隙がないわけじゃない。使っても使わなくてもデメリットの関係で場の合計攻撃力自体は変わらないグールの効果を使うということは、裏を返せば１度攻撃した後で戦闘破壊されたコブラの効果が通るということ。つまり、このターンでこちらのライフを０にする術をあの人は持っていない。運はまだ、僕にもついているはずだ。

「バトル。グールでグレイドル・コブラに攻撃！」

ミイラ男がが棍棒のような太い腕を振り上げ、他のゴーストリックたちが後ろで見守る中で単身攻撃を仕掛ける。迎え撃とうとした蛇の体は１瞬で銀色の液状に叩きつぶされ、その衝撃がこちらの体を震わせた。

ゴーストリック・マミー　攻３７００→グレイドル・コブラ　攻１０００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→１３００

「まだまだ……！戦闘破壊されたコブラの効果で、ゴーストリック・マミーへ寄生しそのコントロールを得る！」

文字通り床の染みになったかと思われたコブラが、本来の液状の姿に素早く形を変え

てマミーの包帯の隙間を縫うようにその全身へ浸透していく。抵抗する暇もなく、その額に複雑な紋章が浮かび出た。

「グールの効果を使ったターン、他のモンスターは攻撃できない。だけどこのメイン2に、自分は全てのゴーストリックたちの効果を一斉発動。1ターンに1度、自身を裏守備にすることができる。このカードも伏せて、ターンエンド」

こちらでコントロールを奪ったマミー以外のモンスターが、全てどこからともなく取り出したクロッシュの中にその姿をすっぽりと収める。

さっきまで貼られていたパレードも含め、ゴーストリックの僕が知る3種のフィールド魔法は、すべて裏守備モンスターへの攻撃を禁じる共通効果を持っている。つまり今稲石さんに攻撃したければ、いやでもダイレクトアタックせざるを得ないのだ。それで攻撃を通したとしても、ハウスの効果でそのダメージはたった半分。おまけにその後棒立ちになる僕のモンスターに、またグールの集約した攻撃力での一撃が叩き込まれる。よほど高い数値をキープできるモンスターを出さなければ、モンスターを出すことすらとうてい割に合わない……ああもう、今はこんなことしてる暇ないってのに。

清明　LP1300　手札：4

モンスター：ゴーストリック・マミー（攻・コブラ）

魔法・罠：グレイドル・インパクト

グレイドル・コブラ（マミー）
稲石　ＬＰ３０００　手札：２
モンスター：???（グール）
???????（キョンシー）
???????（イエティ）
（人形）
魔法・罠：１（伏せ）
場：ゴーストリック・ハウス

「僕のターン！よし、これなら……！」

デッキは今回も、僕のために全力で応えてくれた。今引いたカード、そしてこの手札。脳が一気に活性化し、鈍化した時間の中でカードだけがぐるぐると回る。大丈夫、今日の僕には運がある。先ほどのようなピンチでも、ギリギリで生き残ることができる運が。だからこの作戦も、きっと通るはずだ。まずこの効果を使って、それからこっちを出して、それからこのカードを。よし、これならこのターンで終わらせられる！まずはその一環として、このカードから……。

『待て！』

このターンで終わらせるための、最初の１枚。それに手をかけた時、柄にもなく珍し

い若干慌てた様子なチャクチャルさんの制止がかかった。
「何！」
『黙って見ていれば様子がおかしいぞ、マスター。ここの空気に飲まれたか？一度体をほぐして、深呼吸の１つでもしてみることだ』
　そう言われて初めて、気づかぬうちにひどく全身が緊張で強張っていたことに気が付いた。ガチガチに張りつめた筋肉が、いまにも限界を迎えそうになっている。言うことを聞かない体から無理やり力を抜き、体中の毒素を全て吐き捨てるイメージで大きく呼吸する。
「……ぐっ！はーっ、はーっ、はーっ……」
『時間がないから早く終わらせたい、その論理は単純だが真理でもある。裏を返せばそれは、相手にとってそこを抑えた行動さえ心がけていれば必ずマスターの冷静さを削ぐことができる明確な弱点にもなる。そもそもそんな致命的な弱点を用意した状態で戦わざるを得ない状態に持っていくこと自体私はどうかと思うが、この際それはいいだろう。私もマスターにそこまでの裏読みは期待していないし、その前提で話を進めよう』
「それちょっとひどくない？」
『悪運に頼らず読み合いができるようになってから物を言ってくれ。あれだけ自分自身で釘を刺しておいて、舌の根も乾かぬうちに相手のペースに乗せられるようではただの

ピエロでしかないからな？とはいえ、そんなピエロの面倒を見るために私はマスターのそばにいるんだ。いいかマスター、焦ることが悪いとは言わん。マスターの場合特に、追い詰められた方が力が出る節もあるからな。だが自分から焦るのと他人の手のひらで焦らされるのには天と地ほどの差があり、今回は典型的な後者の例だ』

「……」

『わかったな？ま、その様子なら少しは頭も冷えただろう。それに散々言いはしたが、今回ばかりはマスターが悪いともあながち言い切れないしな。よくあたりを見てみればいい』

チャクチャルさんの指摘通りだった。あれほどカッカしていた頭は潮が引いたかのように熱が消え、知らず知らずのうちに目の前の狭い範囲しか見えていなかった視界もまた広がって冷静な視点から周り全体の動きを掴むことができる。

そして再びはっきり見える、稲石さんの全身を絡め取るダークネスの力の片鱗。恐らくあれが負の力を放ち、それに僕のダークシグナーとしての負の力が呼応して半ば暴走状態になり、その結果として必要以上に闘争心を高めていたのだろう。その証拠に自分の腕に視線を落とすと、今はまだ薄いものの目を凝らさなくても見える程度には紫色の線のような痣が浮かび上がりかけていた。この様子だと、眼もいくらか紫色になりつつあるはずだ。何度か目を瞬かせてもう１度息を吸いこむと、その痣がすうっと消えてい

く。あれがダークネスの計算内なのかそれとも予想外の副産物なのか、そんなことはどっちでもいい。タネさえ割れてしまえば、どんな手品も小手先の技に過ぎない。

「待ってて稲石さん……！まずは永続魔法、補給部隊を発動。それからこのターンもグレイドル・インパクトの破壊効果、グレイ・レクイエムを発動。装備カード状態のコブラと、そのセットカードを破壊する！」

今の手札から考えて、ここでハウスの方を狙い打ちすればこのターンで勝負を決めることも不可能ではない。現に今、僕はそれをやろうとしていた。もちろん並の相手、ごくシンプルなビートダウンが相手ならばその選択肢も十分ありだろう。だが相手は稲石さんで、使用デッキは手札誘発満載の何が飛び出てくるかわからないゴーストリックだ。２枚も手札が残っているのに全ての攻撃が通るだなんて、冷静に考えればよほどのことでもなければありえない。

「ダストフォース……！」

砂塵のバリアーダストフォース。攻撃宣言に反応して相手の攻撃表示モンスター全てを反転召喚不可の裏守備に変更させる、つまりゴーストリックフィールド魔法の元で稲石さんのモンスター全てをダイレクトアタッカーにしかねないトラップ。もし何も考えずに突っ込んでいたら、次のターン何が起きたか……考えたくもない。

ここで僕が負けでもしたら、外部との連絡手段を壊された以上その情報を伝えること

もできず三沢の作戦には致命的な遅れが生まれるだろう。改めてその事実を自分に言い聞かせ、冷や汗をぬぐって次のカードを使う。

「装備状態のコブラが破壊されたことで、その対象だったゴーストリック・マミーも破壊。僕のフィールドでモンスターが破壊されたから、カードを1枚ドローさせてもらうよ。そして魔法カード、妨げられし壊獣の眠り！場のモンスターをすべて破壊して、デッキから壊獣2体を選んで互いのフィールドに1体ずつ特殊召喚する！」

ある意味では僕の切り札とも言える、強烈なフィールドリセットカード。ただフィールドのモンスターを全破壊するだけならばブラック・ホールと変わりないが、このカードの真価はその次の効果にある。４体ものゴーストリックがクロッシュごとまとめて吹き飛ばされ、屋敷も砕けよとばかりに2体の超大型モンスターがその力を解放した。この効果で呼び出したモンスターは、攻撃可能な限り必ず攻撃を行わなくてはならない。ダストフォースが破壊されていなければ、つくづくどうなっていたことやら。

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００

海亀壊獣ガメシエル　攻２２００

「これだけじゃないさ。さらに通常召喚、ツーヘッド・シャーク！」

「へぇ……」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００

「このターンで終わらせられる可能性よりも、伏せカードの除去を優先してくるとはね。正直びっくりだよ、これは絶対引っかかると思ったのに」
「あいにく、僕は1人じゃないからね。悪いね稲石さん、うちのブレインは超優秀なのさ」
「みたいだね。でも、それってただのイカサマじゃないかい？勝負は1体1が原則、そうだろう？」
　これも精神的な揺さぶりだろうか。とはいえ、その言い分にも一理ある。だからただ肩をすくめ、こう返すのみにとどめておいた。
「僕が卑怯じゃないなんて、いつどこの誰が決めたのさ。正々堂々やろうだなんて、一言も言った覚えはないね。バトル、サンダー・ザ・キングでガメシエルに攻撃！」
「ゴーストリック・ハウスで、ダメージは半分になるよ」
　サンダー・ザ・キング　攻３３００→海亀壊獣ガメシエル　攻２２００（破壊）
　稲石　ＬＰ３０００→２４５０
「ツーヘッド・シャークは、１ターンに２回の攻撃ができる。そのままダイレクト２連撃！」
「１回目の攻撃に対し手札からゴーストリック・ランタンの効果を発動して相手モンスターの直接攻撃を無効、その後自身を裏守備で特殊召喚する。２回目もゴーストリッ

ク・ハウスの効果で直接攻撃になるけど、それはまあ仕方ないかな」

ツーヘッド・シャークの持つ２つの口のうち片方の牙が稲石さんの片腕、先ほどコブラの噛んだ反対側にがっしりと食い込……まなかった。稲石さんの腕の代わりにツーヘッドが噛みついたのは、その間に割って入った１個のランタン。攻撃が不発に終わったのを確認し、そのランタンの主……かぼちゃ頭に魔法使い帽をかぶった新手のゴーストリックがクロッシュの中に身を潜める。その隙をついてツーヘッドのもう片方の口が開き、キッチリと噛みついてから満足げに空中を泳いで帰ってきた。１回目の攻撃が止められた、か。

ツーヘッド・シャーク　攻１２００→稲石（直接攻撃）

稲石　ＬＰ２４５０→１８５０

???（ゴーストリック・ランタン）

「ふー……やっと少しはダメージを返せたかな。カードを伏せてターンエンド」

これで稲石さんと僕、両者のライフ差は５５０まで縮まった。そしてあの眠りのカードをきっかけに、どうにか流れはこちらに傾きつつある。いくら稲石さんでも、１度展開したもの全てを破壊されてからもう１度あれだけの数のゴーストリックを並べることは至難の業であるはずだからだ。そしてゴーストリックは、数を並べない限り１体１体はそこまで脅威になりえない。今のランタンのように厄介なカードは多々あるが、そ

れにしたって厄介止まり。もう1度揃えられるより先に1体ずつ潰していけば、勝機は残っている。しかも稲石さんの手札は、既に残り1枚まで減っているのだ。

「自分のターン。魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動する」

デッキトップ10枚もの裏側除外の代償として、禁止カードである強欲な壺と同じ問答無用の下準備なしでの2枚ドローを可能とする強力なドローソース、強欲で貪欲な壺。これで、あの人の手札は残り3枚。

「永続魔法、魔力倹約術を発動。このカードの効果で発動コストの2000ライフを無効にして通常魔法、天声の服従を発動。自分がこれから宣言するカード目が相手デッキにある場合、相手はそのカードを渡すか、攻撃表示でこちらのフィールドに特殊召喚するかを選ぶことができる」

「天声の服従?」

強力カードではあるけれど、僕のデッキから欲しいカードなんて何があるというのだろう。グレイドルは元々のプレイヤーのフィールドで破壊されないと効果を発動できないから、奪い取るメリットなんてどこにもない。壊獣を奪ったところで、壊獣カウンターの存在しない現状サンダー・ザ・キングと正面から戦えるのは辛うじて相打ちに持っていけるジズキエルぐらいのものだ。

一体何を宣言するつもりなのかと訝しんでいると、わからないのかと言わんばかりに

稲石さんが薄く冷笑する。
「君のデッキのカードの中で、自分が今間違いなく入っているだろうと言い切れるカードはそう多くない。だけど、１枚だけ君なら絶対にデッキから抜きはしない、それが確実にわかるものがあるのさ」
「何を……まさかっ！」
　稲石さんが知る、確実に僕のデッキに入っているであろうカード。そんな条件を満たすある１枚のカードの存在に思い当たり、慌ててデッキを手で抑えてしまう。その様子を見てほらやっぱり、と笑みを深くし、そのカードの名をあの人は口にした。
「やっぱりね。君なら絶対、大事にすると思っていたよ……戻ってくるんだ、ゴーストリック・フロスト！」
「ああ……」
　ゴーストリック・フロスト。以前稲石さんから僕のデッキには防御が欠けているから、と分けてもらい、その後ずっと愛用してきた防寒具を着た雪だるまのモンスター。あのカードが無ければ負けていた、そんなデュエルも数多い緊急時の守りの要。そのカードが稲石さんのポルターガイストに操られ、勝手にデッキから抜き出される。思わず伸ばした手もすでに届かずに、僕のゴーストリック・フロストは稲石さんの手の中に収まった。

まるで、自分の一部をえぐられたような悲しみ。でもそれに浸る余裕も時間も、僕は持ち合わせていない。眼前の稲石さんもまた、それを許しはしなかった。

「手札に加える、でいいのかな？もっとも今回はどちらにせよ、フィールドに出すことになるけど。ゴーストリック・ランタンを反転召喚して、このフロストを通常召喚」

???→ゴーストリック・ランタン　攻８００

ゴーストリック・フロスト　攻８００

「フロストを……？」

ゴーストリック・フロストは相手の直接攻撃に反応して効果を発動できる手札誘発モンスター。間違っても、通常召喚して使うようなカードではない。

何を企んでいるのか、稲石さんが次に取り出したのは最後に残った手札……ではなく、自身の服のポケットに入っていた見知らぬ１枚のカード。それを大事そうに指で撫で、話すでもなく語りかけてくる。

「これ、なんだかわかるかい？ああいや、答えを聞いているわけじゃないから安心していいよ。この話は、もう君にはしたんだっけ？確かまだだったよね。ちょうど今年度の始まってすぐごろだったかな、偶然この寮のある部屋で見つけたんだ」

クルクルと手の中でそのカードを回しながら、ペースを落とさずに話し続ける稲石さん。ただでさえ廃寮は暗いうえに光の加減もあってか、すぐ近くにあるそのカードの表

面、その正体がうまく見えてこない。ただ単に時間を引き延ばしにかかっているだけの中身のない話だと断じることは簡単だったが、なぜかそれをするのははばかられた。この話は、僕が聞いておかなければいけない。理由も根拠もまるでないが、そんな予感がした。

「ずっと、これがなんなのかわからなかった。ただの古いノーマルカード、昔のここの住人の忘れ物だろう。何度も自分にそう言い聞かせたけれど、なぜか気になってしょうがなかった」

ようやく回転を止めたカードが、稲石さんの人差し指と中指に挟まれた状態で静止する。ようやく僕にも見えたその名は、ドラゴン族・封印の壺。本人の言葉通り何の変哲もない、デュエルモンスターズ黎明期から存在するノーマルカードだ。

僕もそのカードを確認したのを確かめてか、再び封印の壺のカードが稲石さんの手の上でクルクルと回される。それと同時に、また稲石さんの口が開いた。

「だけど今朝になって、ようやく少しだけわかってきたんだ。このカードは本来、ドラゴン族・封印の壺じゃない。あるドラゴンの魂が文字通りに封印されて、今こうやって目に見えるこのカードに姿を変えさせられた。そしてその封印を解くために必要な力を、ダークネスが自分に与えてくれた。ほら、こんなふうに……！」

言うなり、稲石さんの腕に静かな力がこもる。細い腕に筋肉の筋が浮かび上がり、そ

の上を舐めるようにして闇の力が広がっていく。その闇の行きつく先は、封印の壺のカード。その全てを取り込み、次第にカードそのものが暗い光を放ちだす。

「稲石さん、何を……!」

「わからないかい?これこそが、ダークネスが協力と引き換えに自分にくれた力。通常魔法、融合を発動!自分の場の闇属性モンスター2体を素材に、融合召喚!奇怪と怪奇に誘われ、飢えた牙持つ邪龍よ嗤え!さあ出てくるんだ、スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン!」

ランタン、そして僕のフロストが、融合素材となって消えていく。すると廊下に突然、紫色の触手……いや、何本もの植物の蔓が伸びた。太さも長さもまちまちではあるが、いずれも共通点としてその先端にはぷっくりと膨れた花のつぼみがある。そしてそのうちの1つが、僕らの見る前でゆっくりと開いた。

だがそれは、間違っても真っ当な花なんかではなかった。いや、それは花ですらないのかもしれない。動物の口のように中央から2つに割れたその内側には控えめながらもびっしりと牙が生え、花弁らしきものは見当たらない。そうこうしているうちに他の蔦から生えるつぼみもまた、同じように開き始める……だが駄目だ。どれも最初のひとつと同じく、植物とは思えない獲物への貪欲さをむき出しにする動物的な代物でしかない。べちゃり、と湿った音がしてそちらに視線を動かすと、天井を這っていた「蔦」か

ら生える「花」が「咲いた」拍子に、貪欲気に真下の床まで「蜜」……いや、「涎」を垂らしていたところだった。

何かがおかしいとしか言いようのないそんな光景につい顔をしかめていると、頭の中で声がした。

『本体はあそこか。ずいぶん遠くにいるな』

そう言われてチャクチャルさんが注意を向けた、最初に蔦が伸びてきたその根元となる方向、稲石さんのいるずっと後ろの廊下に目を向ける。始めは暗闇になっていて何も見えなかったが、１瞬赤い光、ぞっとするほど冷たい知性を感じさせる爬虫類の瞳が瞬くのが見えた。あの暗闇にまぎれてこの捕食者、いまだ全貌の掴めない謎のドラゴンが蔦を伸ばし、静かに獲物を待っているのだろう。

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン　攻２８００

『マスター、聞いてくれ。あれだけのモンスターを封印していたとなると、それを破るために必要な力も相当なものだったはずだ。おそらくあのスターヴ・ヴェノムには、洗脳のため分け与えられたダークネスの力のほとんどがつぎ込まれているだろう。となるとどう転ぶにせよ、あのモンスターが鍵になりそうだ。奪おうなどと考えずに、さっさと破壊してしまえよ?』

「さあ、スターヴ・ヴェノムの効果発動!このカードの融合召喚に成功した場合、相手

フィールド上に特殊召喚されたモンスター1体を選んでその攻撃力をターン終了時まで加算する！当然選べるのは、サンダー・ザ・キングさ」

蔦のうち1本がおもむろに張り付いていた壁を離れ、白き三つ首のドラゴンの体を締め付けた。食い込んだ蔦は貪欲にその体に根を張り、根から吸い取られた雷撃の力が蔦を通して闇の奥の本体へと運ばれていく。だけど僕もチャクチャルさんも、当の本人であるサンダー・ザ・キングでさえそれには慌てなかった。

スターヴ・ヴェノム、確かに恐ろしい効果ではある。だけど、その対抗策となるカードは既にこの手の中にある。

『なかなか攻撃的な効果だが、欠点がないわけではない。今だ、マスター！』

「もちろん。速攻魔法発動、月の書！スターヴ……いや、サンダー・ザ・キングを選択して、裏守備に変更する！これで特殊召喚されたモンスターは僕のフィールドからいなくなった、よってスターヴ・ヴェノムの効果は不発！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング　攻３３００→???

「躱されたか……だとしても、いや、そうか。これ、自分で思いついたのかい？だとしたら、なかなかやるね」

「まあね。稲石さんのカードの効果、ちょこっと使わせてもらったよ」

そう。本来ならばこの緊急回避、素直にスターヴの方に発動する方がツーヘッドも攻

撃されることなくて済む。にもかかわらず、僕はサンダー・ザ・キングを裏にすることで効果を不発にさせることを選んだ。なぜか。

その答えは稲石さん自身の発動したこのフィールド魔法、ゴーストリック・ハウスにある。これまでも再三見てきたようにこのフィールドには、互いの裏守備モンスターに対する攻撃を禁止する効果がある。本来ならば守備表示だとスターヴ・ヴェノムの攻撃に耐えきれないサンダー・ザ・キングも、ハウスに守られることで攻撃されず返しの僕のターンに安全に反転召喚できる。おまけにハウスのもう1つの特殊能力、ダメージ半減が適用されるためツーヘッドとスターヴ・ヴェノムが戦闘しても僕のライフはまだギリギリ残るという寸法だ。次のターンで稲石さんにより多くのダメージを与えるためには、スターヴ・ヴェノムにはまだ攻撃表示のままでいてもらわなければいけない。となると、僕の受けるダメージなんて些細なものだ。

もちろん、普段ならばこれだってなかなかの、それもハイリスクローリターンなギャンブルだ。だが今の稲石さんは融合召喚で今度こそ手札を使い果たしてしまい、墓地にも発動できそうなカードは存在しない。次に稲石さんがカードを引くまで、この盤面に不確定要素は存在しない。

「狙い通りなんだろうけど、ここで引くわけにはいかないか。スターヴ・ヴェノムでツーヘッド・シャークに攻撃」

暗闇の奥でまたも赤い瞳が瞬くと、天井に伸びていた蔦の１本が突然外れて鞭のようにツーヘッドの体をその死角から打ち据える。例え蔦の１本といえど、その威力はさすがにドラゴンの一部、というべきか。

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン　攻２８００↓ツーヘッド・シャーク　攻１２００（破壊）

清明　ＬＰ１３００→５００

「ゴーストリック・ハウスで、ダメージは半分になる……さらに補給部隊で、また１枚をドローさせてもらうよ」

「やってくれるね、本当に。でもいいよ、自分はこれでターンエンドさ」

ここまでは計算通り。でもその言葉を聞いた瞬間、せっかく感じていた勝利への高揚感も引いていった。手札をすべて使って出したエースモンスターが大した成果も挙げぬまま今まさに破壊されようとしているのに、なんで稲石さんにはこんなに余裕があるのだろう。まるで、まだ何か隠し玉があると言わんばかりのこの様子はなんだ。

いっそリリースしてやろうか、そんな考えも頭をかすめた。僕の墓地にある妨げられた壊獣の眠りは、自身を除外することでデッキから壊獣１体を手札に加える効果も持つ。これを使って適当な壊獣をサーチすれば、あのスターヴ・ヴェノムを戦わずして墓地に送ることもできる。

だけどそれで、ダークネスの力を掃うことができるのか。仮にそれをして勝てたとしても、ダークネスの力が残ったままならば稲石さんはもう1度僕の前に立ちふさがるだろう。その場合、最悪稲石さんはスターヴ・ヴェノムをもう2度と出してこない可能性まである。となるとやはり今、あのドラゴンを打ち破る必要がある。

清明　ＬＰ５００　手札：4
モンスター：???（サンダー・ザ・キング）
魔法・罠：補給部隊
　　グレイドル・インパクト
稲石　ＬＰ１８５０　手札：0
モンスター：スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン（攻）
魔法・罠：魔力倹約術
場：ゴーストリック・ハウス

「ドロー。これは……」

あの余裕の真意はなんだろう。スターヴ・ヴェノムにはなんらかの耐性があって、それを使ってこの攻撃を耐えようとしている?それとも融合時の他に、まだ攻撃力を上げる手段を持っていて返り討ちにしようとしている?仮にその正体を破壊耐性だと仮定すれば、一応この手札ならもう1撃を与えることもできる。さっきの様子だと、チャク

チャルさんもあのカードに対する知識は薄いようだからそちらからのアドバイスもあまり期待できない。グレイドルカードさえあればもう1度インパクトをぶちかまして様子を見ることもできるのに、あいにく手元にそれを用意する手段はない。

などとぐだぐだ考えては見たが、要するに道は2つに1つ。このまま前のめりに攻めるか、手持ちを温存してサンダー・ザ・キングだけで様子を見るか、だ。だけどこのターン、稲石さんに打てる手は限られているわけだし。あの人の手札がないなんて、こんな絶好の機会そうはない。

『悩ましい所ではあるが、ここまでくるとマスターの好みの問題だな。突き放すような言い方になるがどちらの考えにも一定の理がある以上、選択を左右するのは自分しかいない』

「なら……僕はこのまま、前に出る！手札からシャーク・サッカーを召喚して、そのままリリース！場の水属性モンスター1体をリリースすることで、手札のシャークラーケンは特殊召喚できる！」

シャークラーケン　攻２４００

「特殊召喚可能な上級モンスターか。なるほどね、だけど攻撃力２４００程度じゃあ、自分のライフを削りきることはできないみたいだけど？」

「そんなの僕だってわかってる。でもそのこのカードがあれば、話は別さ。魔法カード、

アクア・ジェットを発動！魚族モンスターのシャークラーケンは、その攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

「まだそんな手が……」

シャークラーケン　攻２４００→３４００

これで、こちらの場の累計攻撃力は６７００。しかも今の稲石さんの物言いだと、スターヴ・ヴェノムはどうやら破壊耐性を持つモンスターではないようだ。何を企んでいるにせよ、この２体なら真正面から押し切れる。

「バトル！シャークラーケンでスターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンに攻撃！」

「ゴーストリック・ハウスの効果！」

シャークラーケン　攻３４００→スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン　攻２８００（破壊）

稲石　ＬＰ１８５０→１５５０

シャークラーケンが口から青い光線を放って廊下の向こう、暗闇の奥のドラゴンの本体に猛攻を加える。相変わらず雌その姿は見えず悲鳴１つあげなかったものの、その闇の中からはっきりと苦痛の感情が伝わってきた。廊下銃を走る紫色の蔦がみるみる枯れていき、１本また１本と力なく床に落下する。

「よし！……稲石さん！」

これで、ダークネスの影響を受けたカードは突破できた。となると、光の結社事件の時と同じならばこれで稲石さんの洗脳も解けるはずだ。稲石さんを包む闇の力が消滅前の最後の抵抗とばかりに暴れ回り、その場で飛ばされないように立っているのがやっとなほどの暴風が吹き荒れる。

そしてその終わりは、始まった時と同じように唐突に訪れた。力を使い果たした闇が霧散していき、稲石さんの体がそこから解放される。立ち尽くす稲石さんに近寄ろうとした時、静かだが真剣な声が頭に響いた。

『……待て、マスター。何かがおかしい、どうも様子が気にかかる』

チャクチャルさんが何に気を取られたのか僕にはわからないが、この邪神はそういうたちの悪い冗談を言うタイプではない。言われたとおりに立ち止ると、ようやく意識のはっきりしてきたらしい稲石さんの声がした。

そしてその内容に、またしても背筋が寒くなる。

「スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンが破壊されたことで、最後の強制効果を発動。フィールド上の特殊召喚されたモンスターは、すべて破壊される」

主の死と共に枯れ果てたはずのスターヴ・ヴェノムの蔦に、花に、最後の生命が宿る。でたらめにあちこちから枝分かれしてはその先端に無数の花を咲かせ、廊下全てが紫の蔦と黄色い花で埋め尽くされたところでその牙の奥から一斉に花粉らしき粉を吐き出

しては再び枯れていく。辺りに充満した花粉はほんの数秒と経たないうちに濃密な煙幕となって僕の視界を奪い、その煙の向こうから僕のモンスターの断末魔の悲鳴が聞こえた。

「そんな……！」

眠りの効果でデッキから呼ばれたサンダー・ザ・キングに、自身の効果で出てきたシャークラーケン。僕のフィールドにいたのは、２体とも特殊召喚されたモンスターだ。だけどそれより信じられないのは、いくら強制効果とはいえまだデュエルを続ける意思が稲石さんにあるということだ。闇の力を吸ったカードは倒したはずなのに、どうして。

「稲石、さん？」

僕の呼びかけに、今初めて気が付いたという風に目を瞬かせながらこちらを見る稲石さん。その目の中にあったのは、もはやダークネスの影響など受けてはいないことは明白な冷静な自我だった。

「どうして……」

「どうして？随分と変な質問だね、それは。ところで、ターンエンドしないのかい？」

『考えることは後でもできるから、今はとにかくありったけの準備をしておくんだ、マスター。どうもこのデュエル、ここからはこれまで以上に嫌な予感がする』

「くっ……補給部隊で1枚ドローして魔法カード、一時休戦を発動！互いにカードを1枚ドローして、次の相手ターン終了時までに発生する全ダメージは0になる。さらに、墓地の妨げられた壊獣の眠りの効果も発動。このカードを除外して、粘糸壊獣クモグスをサーチする」

何もかも予想外のことだらけだけど、少なくとも最後の一言に関しては僕もチャクチャルさんと同意見だ。それは理屈ではなく、もっと原初的なデュエリストとしての本能でわかる。今の稲石さんは、ダークネスの洗脳時よりも明らかに危険な存在だ。とっておきの防御札をここで切り、次のターンでの安全を確保。さらに壊獣のサーチを見せつけることで、大型モンスターの展開もある程度牽制しておく。

その準備を満足げに見やり、稲石さんもカードを引いた。

「それにしても、解放できたのがやっとスターヴ・ヴェノム止まりとはね。ダークネスの力といっても、こんなものか」

言いながらポケットからさっきのドラゴン族・封印の壺のカードを取り出し、スッとひと撫でする。何か硬質なものが壊れるような音とともに、まばゆいばかりの光がカードから溢れて稲石さんの顔を照らした。

「これでよし、と。確か今、壊獣をサーチしていたよね？それは困るなあ、手札抹殺を発動。互いのプレイヤーは全ての手札を墓地に送り、その数だけ新たにドローする」

「……」

稲石さんは今一時休戦で引いたカードを、僕は僕で手札の全てのカードを捨てる。牽制しつつデッキ圧縮もかねてのサーチだったけれど、それが裏目に出てしまった。でもこのドローで別の壊獣が引ければ……駄目か。

「スターヴ・ヴェノムは確かに十分強いカードだけど、まだその力を全て解放できているわけじゃない。魔法カード、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動。墓地のスターヴ・ヴェノムと捕食植物（プレデター・プランツ）サンデウ・キンジーを除外して、融合召喚！変異と異変に誘（いざな）われ、邪龍の牙よ全てを貪れ！……グリーディ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン！」

暗闇の奥に本体を隠すことをやめた毒龍が、ついにその姿を白日の下にさらけ出した。先ほどまで見えていた蔦と花から仮にスターヴ・ヴェノムを花の姿と仮定するならば、このグリーディ・ヴェノムはさしずめその花がさらに時を経て結んだ果実の龍というべきだろうか。体中のあちこちにあるたわわに実った果実のような丸いエネルギー体が、余計にそんな印象を抱かせる。黄色い瞳がギラリと僕を見下ろし、その口がパキパキと音を立てて開く。

グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン　攻３３００

一時休戦を使っていなければ、僕のライフはここで尽きていた。稲石さんがなぜまだ戦いを続けるのかはわからないけれど、ここまで本気で来るというのなら僕も本気で迎

え撃つしかない。僕のこの両肩には今、世界全体が乗っかっているといっても過言ではない。稲石さんに僕の邪魔をしなければいけない理由があるというのなら、僕にもそれをどうしても許せない理由がある。

「ターンエンド」

そして、稲石さんのターンが終わる。僕も迷わない、もう覚悟は決めた。グリーディー・ヴェノム、どんな効果を持っているかはわからないけれど、その真価を発揮させる前に潰してやる。

清明　ＬＰ５００　手札：４

モンスター：なし

魔法・罠：補給部隊

グレイドル・インパクト

稲石　ＬＰ１５５０　手札：０

モンスター：グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン（攻）

魔法・罠：魔力倹約術

場：ゴーストリック・ハウス

「ドロー！相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、カイザー・シースネークは攻守０、レベルを４にして特殊召喚できる。そしてこの効果で特殊召喚した時、さらに

手札か墓地からレベル８の海竜族を特殊召喚できる。墓地のカイザー・シースネークよ、今ここに甦れ！」

「そうか、手札抹殺で……！」

カイザー・シースネーク　☆８→４　攻２５００→０　守１０００→０

カイザー・シースネーク　☆８→４　攻２５００→０　守１０００→０

現れる２匹の大海蛇。しかしそれも、これから始まる出来事の序章に過ぎない。２体の姿が純白の霧に包まれ、その霧の彼方から僕の切り札がついにその姿を見せた。

「これで２体のモンスターが揃った。この２体をリリースして、霧の王（キングミスト）をアドバンス召喚！その攻撃力は、リリースしたモンスターの合計になる」

霧の王　攻０→５０００

「……確かにそれで攻撃すれば、大ダメージが発生する。だけど、その先がないね。ゴーストリック・ハウスの効果でダメージは半減し、わずかにだけどまだライフは残る。そのわずかなライフがあれば、それで十分さ。ひとつ教えておくけれど、グリーディー・ヴェノムはスターヴ・ヴェノムよりもさらに強力な破壊効果を持つ。たとえアドバンス召喚された霧の王だからといって免れることは叶わない、破壊時のモンスター全破壊効果をね」

「なら、破壊する前にライフを削りきるさ。フィールド魔法は既にあるんだ！魔法カー

ド、死者蘇生を発動！さあ行くよチャクチャルさん、七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ！地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）っ！」
『よしきた。これでゲームセットか』
地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００
「地縛神、これだと……」
「そう。これで終わりさ、稲石さん。Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａで攻撃、ミッドナイト・フラッド！地縛神は相手フィールドにモンスターが存在しても、ダイレクトアタックができる！もっとも、それもゴーストリック・ハウスに半減されるけどね」
地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→稲石（直接攻撃）
稲石　ＬＰ１５５０→１００
「くっ……」
「たとえグリーディー・ヴェノムの効果だろうと、稲石さんのライフが尽きれば意味はない。バトル、霧の王で最後の攻撃、ミスト・ストラングル！」
霧の王が飛び、毒龍が迎え撃つ。先手を打って放たれた紫色の破壊光線を剣の腹で受け止めその向きを逸らし、そのまま振り切られたその一撃が龍の首を狩った。
霧の王　攻５０００→グリーディー・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン　攻３３００（破壊）

稲石　ＬＰ１００→０

「稲石さん！」
　吹っ飛ばされて壁に激突し、糸の切れた操り人形のようにその場に崩れ落ちた稲石さんに、ソリッドビジョンが消えるのも待たずに駆け寄ろうとした。敵だろうがなんだろうが関係ない、稲石さんは僕の大事な友人だ。
　だが途中で、その足が止まってしまう。目の前で今、何かが起きようとしている。稲石さんの体からそしてその服からも、漆黒のオーラが溢れ出ている。あれは洗脳に使われたダークネスの力、ではない。確かにダークネスの力ではあるが、あの黒い霧のようなオーラには見覚えがある。ミスターＴが不意に現れたり消えたりする時、決まって漏れ出ている闇の一部だ。
「まさか、稲石さんに化けて……」
「いや、違うよ。自分は自分、それは間違いない」
　思い当たった可能性も、弱々しいがはっきりした声で本人が否定する。でもそれはそうか、霧の王にチャクチャルさんと、僕の２大エースを両方持ち出してやっと勝つことができるほどの相手。ミスターＴにそれは、いくらなんでも役不足だ。じゃあ、こうし

ている今も全身から溢れ出ては消えていくその闇はどう説明するのか。もう1度立ち上がる力も残っていないのか、その答えを壁にもたれて座り込んだままでぽつぽつと話し始める。

「にわかには信じられないだろうけどね。自分は元々、ここの生徒なんかじゃなかったのさ。その稲石ってのも、当然偽名だよ。本名は……いや、そんなもの存在しない、って言った方が正しいかな。自分はとある人間の魂をベースにしてダークネスが造った存在しない人間、つくりものの人格。手駒……の、できそこないさ。自分には、本来なら残るはずのなかった前世の記憶がかすかに残っている。だからこうして体も与えられず、幽霊として捨てられてたんだけどね。ちょっとした理由があってこの場所に来ていた前世の自分は、最後の最後に力の一部をそのエースカードだったグリーディー・ヴェノムと共に封印して、この場所に隠した。たとえその記憶の大部分を失っていても、どこかにそのかけらが残っていた。だから自分は、ずっとこの廃寮に留まっていたんだ。今ようやく、はっきりと思い出せたよ」

『嘘……ではないな。この土壇場で自らの狂気に飲み込まれ、現実とその狂気の狭間が曖昧になったというのなら話は別だが、そういうわけでもなさそうだ』

「だから、その体も今……」

いまだ闇に分解されつつある稲石さんの体に目を向けると、稲石さん本人も自らの消

えゆく体に目を落とす。声を上げて笑うものの、すぐに咳込んでしまう。
「ああ、そうさ。闇のデュエルの敗者は闇に喰われるけれど、作り物の魂だけの存在な自分の場合は跡形もなく消えてもともとの闇に帰る。もっとも、ここに来てからもう１７？いや、１８年だったかな？もういい加減にガタが来てたからね、そろそろ成仏する頃合いだったのかもね」
　自分という存在が、今まさに消えようとしている。たとえ作り物の命だろうと、それが怖くないわけがない。それでもいつも通りに飄々とした態度で強がってみせる稲石さんに、なんと声を掛けようとしたのかは自分でもわからない。でも僕が口を開いた瞬間、それを止めたのは稲石さん本人だった。
「いいから。自分にこれ以上構っているだけの時間は、今の君にはないはずだよ？それに稲石なんて存在はもともと存在しない、始めからこうなるのが自然の摂理さ。本当はもっと、自分の前世についても色々な話をしたい。君にとっても、これは無関係な話じゃないからね。だけどもう、それだけの時間はない……ただね、１つだけ君を心配する友人として、最後にアドバイスしてあげるよ」
「え……？」
　次第に体の消滅が加速していき、もはやしゃべるのも辛そうだ。それでも稲石さんは僕の目を真っ直ぐに見て、最期の言葉を絞り出す。

「自分は今朝まで放置されていたレベルのできそこないだけど、より手駒として質の高い完成品が君の近くにいる。恐らくは、つい昨日までの自分と同じようにその記憶を消された無自覚の状態でね。昔、ある人が死んだ。自分はその人の魂の半分を元にして作られた人格、だけど彼女はその人の残りの魂にダークネスが手を加えて捉えた本物の生命。おそらくそれが、君たちの言うダークネスのこちら側からの協力者だ。いや、仮にダークネスが関係なくても、君は彼女と戦わなくちゃいけない。辛い戦いになるだろうけど、どうしても回避することはできない。君は君自身が考えるよりずっと前からダークネス、それから自分の前世たちには目をつけられていた存在なんだよ」

「い、一体何を……」

「わからないかい？河風夢想。1度しか彼女には会っていないけれど、前世の記憶を取り戻した今思い返せばはっきりとわかる。彼女は自分と同じ、自分のオリジナルだ。でも覚えておいてほしい、君が死ぬことは、自分も彼女も願ってはいない。気を……付けて……」

河風夢想。彼女の名を口にしてすぐ、稲石さんの体は、そして魂は2度と手の届かないところに消えてしまった。たくさんの謎と、大きな悲しみと引きかえに。

早く動かなくちゃいけない。三沢に頼まれた賢者の石を、早く調達しなくては。頭ではわかっているのに、いつまでも体が動かなかった。さっきまで人がいたとはとても思

えない何の変哲もない壁をじっと見つめたまま、いつまでもその場に固まっていた。いつまでも、いつまでも。

ターン１２３　真紅の暴君と紅蓮の災厄

どれくらい、じっとしてただろう。ほんの数分だったようにも思えるし、もう何週間か、それどころか1か月近くここでこうしていたような気もする。

いずれにせよ、僕はどうにか立ち上がった。本音を言えば、まだしばらくはここに居たい。だけど稲石さんは、もうここにはいない。生命ですらない存在に対してこう称することが正しいかはともかく、殺したからだ。他の誰でもない、この僕が。

「あの時と、同じか……」

誰に向けたものでもない言葉が、先ほどまでのデュエルの衝撃で割れてしまったらしい窓から飛び込んできた風に乗って流れていく。覇王の異世界で出会った、暗黒界の鬼神　ケルト。あの時と同じだ。どうしようもなく周りの状況に流されるまま戦って、その結果として勝ったあげく目の前で消えていくところを見せつけられる。常勝不敗、無双の女王。夢想も自分が望まぬ勝利を重ねるたびに、こんな気持ちを味わってきたのだろうか？

そこまで考えたところで、稲石さんの最後の告白が再び蘇る。河風夢想は、ダークネスの手駒である、と。気が付けば、歯が折れるんじゃないかと感じるほどに強く歯を食

いしばっていた。……何が何だか、やっぱり僕にはわからない。ただ1つわかっていることは、稲石さんはあんな内容の嘘をつくような人じゃないということだ。

夢想に会いたい。でも、今は夢想に会いたくない。矛盾する2つの思いを抱え込み、僕はまたしてもいつもの手段、目の前の問題から目を逸らすことにした。その場を離れて当初の目的、賢者の石の回収に向かったのだ。そうやって目を背け続けた結果稲石さんにこの手でとどめを刺すことになったというのに、結局僕は何も変わっていない。賢者の石の方も一刻を争う問題だから、それにＰＤＦを稲石さんに壊された現状夢想に連絡を取る手段はない……それはすべて、もっともらしく聞こえる言い訳でしかない。そんなの、自分が一番よくわかっているはずなのに。

外の光も差し込まない、暗い階段を降りる。確か2年前に来たときは、この先にアムナエルの研究室があったはずだ。案の定たどり着いたその一室は、2年分のほこりが積もっていることを除けばまさに僕の記憶のままの部屋だった。その上に、真新しい猫の足跡が点々と続いている。

「……大徳寺先生！ファラオ！」

『やあ、ようやく来たのかニャ。さあファラオ、いい子だからそれを渡しておくれ』

あれだけのデュエルの間一向に戻ってこないと思ったら、どうやら大徳寺先生が先に準備を済ませておいてくれたらしい。どっしりと歩くファラオが中身のぎっしりと詰

まった小袋をくわえて僕の足元までやってきて、おもむろにそれを床に落とす。慌てて拾い上げると、見た目よりもずっと重い手ごたえが返ってきた。
「じゃあ、これが……」
『昔私が作った、試作品の賢者の石だニャ。私とファラオのことはいいから、早く三沢君のところに戻ってあげなさい。幸運を、祈るニャ』
「はい……ありがとうございます」
しっかりと小袋を抱え、すぐに背を向けて走り出そうとしたところでふと気になって、1度だけ振り返った。
「大徳寺先生、1つだけいいですか?もし……もしも迷った時は、僕は何を信じればいいんでしょうか」
言ってからなんだそれ、と、自分の言葉の稚拙さに笑いそうになる。夢想がダークネスの駒だなんて話、いくら稲石さんの言葉でもそうおいそれと言いふらすわけにはいかない。あの人から直接聞いた僕だって、いまだ彼女を信じたい気持ちと稲石さんの言葉の間で揺れ動いている状態なのだ。出来る限りぼかしたつもりが、今度は抽象的になりすぎてしまった。もう少し言葉を継ぎ足そうとしたが、それより早く大徳寺先生の返事が返ってきた。
『清明君。君が何の脈絡もなくそんな質問をするとは思えないから、何か人には言えな

いわけがあるんだろうニャ。ならその理由は聞かないけれど元寮長として、そして元先生として生徒の悩みに答えると、君は少し自分の中で全てを抱え込もうとしすぎていると思うのニャ』

生前と同じように穏やかな声で、大徳寺先生が喋る。その言葉を、僕はただじっと聞いていた。

『君には確かに、他の人にはない特別な力がある。だけど、それは君という存在のほんの一部の特徴でしかないのニャ。例えその力がなかったとしても、君という存在にはただそこにいるだけで周りを巻き込む不思議な魅力がある。だから、我慢や必要以上の気遣いなんてする必要はどこにもないのニャ。君は、君のやりたいことをやりたいようにやる。それが一番うまくいくし、もし君の目が曇って間違った道を選ぶようなことがあれば、その時は君に惹かれて集まってきた仲間たちがきっとその目を覚まさせてくれるのニャ』

同じだ、とぼんやり思った。ヘルカイザーも、覇王の異世界で別れるときに僕のことをそうやって称していた。常に自由でいるのが一番お前の性に合っている、とも。どうしてあの言葉を、今まで忘れていたんだろう。

『最初から最後まで常に完璧な答えを出すことなんて、神様だってできっこないのニャ。難しく考えすぎないで、いざとなったら助けてもらう。そのぐらいの気持ちで、自分の

直感を信じればいい。少なくとも、私はそう思うよ……少しは気が楽になったかニャ？』

「……ええ。ありがとうございました、大徳寺先生」

『その分だと少しは気が楽になってくれたみたいで、私としても教師冥利に尽きるのニャ』

実際、大徳寺先生に相談してよかった、そう思った。さっきまであれだけ先の見えなかった未来が、押しつぶしてきそうな不安が、だいぶマシなものになった気がする。自分の直感を信じればいい、か。

「ま、チャクチャルさんも何かあったら頼むよ。いいでしょ？」

『当然だ。私はマスターのことをマスターとして認めはしているが、盲信するとまで言った覚えはない。見限る予定もさらさらないが、あまりマスターが馬鹿なまま放置しておくと私までそんな目で見られかねないからな』

平然とそう言い放ったのち、愉快そうに含み笑いする気配が伝わってきた。まったく、呼び方がいくら変わろうと、どこまでいっても口の減らない邪神だ。つられて僕も口元がほころぶ。

『それで？今のマスターにとって、優先順位1番に来るものは何だと感じたんだ？』

その言葉に、足を止め目を閉じて考える。難しく考えなければ、結局のところ2択。

夢想を探すか、三沢のところに行くかだ。ダークネスとの戦いをいったん頭の隅にやり、純粋に自分がどちらに行きたいのかを探る。
「……行こっか、チャクチャルさん。三沢のところに」
『ほう』
「意外？確かに夢想も気になるけど……でも、決めたんだ。僕はもう少し、僕の知ってる方の夢想を信じてみるよ」
　稲石さんの最期のメッセージでは、夢想は自分と同じようにダークネスの手駒としての記憶が消されているという話もあった。裏を返せばそれは、記憶を取り戻すまでは彼女は僕の知る「河風夢想」であるということだ。それが偽りの記憶、偽の人格であろうとも、僕の知る彼女はあの夢想だ。男女がどうこうではなく１人のデュエリストとして、僕は僕が知るあの彼女ならきっとなんとかなると信じよう。
『それならそれで構わないとも。なら行くか、マスター』
「おー」
　後悔なんて、しない。それに夢想のことだ、こっちが気を揉んでたのが馬鹿馬鹿しくなるぐらい、あっさりした顔して葵ちゃんたちと一緒にコロッセオにいてもおかしくない。また駆け出して廃寮を飛び出し、敷地を出たところで最後にもう１度だけ振り返る。もはやそこに住まう主を完全に失った建物は、ひどくちっぽけなしろものに見え

た。また湧き上がってきた感傷に意志の力だけで蓋をして、後ろ髪引かれる思いを断ち切り前に向き直る。

『次から次へと……!』

チャクチャルさんが、僕の思いまで代弁するかのように呻いた。錆びついた門を抜けたすぐ目の前で空間が歪み、別の世界へと繋がっているであろう裂け目が生まれている。とっとこ逃げ出すことも咄嗟に考えたけれど、周りを見てすぐに諦めた。いくら長いことほったらかしの廃寮とはいえ、身を隠しながら逃げるほど草木が生えているわけではない。今来た道を引き返すのもいいが、それだといつまでたっても前に進めない。ならばどうせミスターTだろうし、ここで1発返り討ちと洒落込んでやるのも一興か。

……返り討ちにできれば、の話だけど。少なくとも、鼻歌歌いながら勝てるような相手ではない。覚悟を決めてデュエルディスクを構え、裂け目の向こうから来るであろう人影に臨戦態勢を整える。

『……いや、違うな』

「え?」

ゆっくりと、空間の裂け目の向こうから人影がやってくる。その姿を見てポツリと、チャクチャルさんが漏らした。

『あれは違う、ミスターTではない!』

「やあ。君の方と会うのは……確か２回目だったかなー？」
　声とともにその主が裂け目を潜り抜け、こちら側へと世界に足を踏み入れる。役目を果たしたことで閉じていく裂け目には目もくれず、気安いとも取れる調子で話しかけてきたこの男には確かに見覚えがある。
「遊（あそぶ）……！」
「へー、覚えてたんだ。その通り、遊さんだよー」
　遊。僕はこの男について、ほとんど何も知らない。突然何の前触れもなくやってきて、少なくともユーノのことを知っていて、凄腕のデュエリスト。なぜ僕のところにやってきたのか、フルネームはなんなのか、そんなこと何ひとつわからない。だけどたった１つ、厳然たる事実がある。理由も目的もわからないが、僕のデュエリストとしてか、元人間としてか、それとも争いを求めるダークシグナーとしてのものか……いずれにせよ僕には、理屈ではなく本能でわかる。
　この男は、敵だ。
「おおー、怖い顔。調子はどう？この世界のダークネス、どんな感じかなー？」
　おちゃらけた様子でおどける遊の、どう考えてもダークネスの襲来を知っているとしか思えない言葉に目を丸くした。ついさっき稲石さんにＰＤＦが壊される前、三沢との通信で聞いた話を思い出す。その２つが頭の中で繋ぎ合わされ、１つの推論が突然閃

く。
「まさか、ダークネスの協力者ってのは夢想じゃなくて」
「なーんだ、もうそこまで気づいてたんだ。ご明察、ダークネスもダークネスで正史より抵抗が大きいせいで攻めあぐねてたみたいだからねー、ちょっとだけ焚きつけておいてあげたのさ。もっとも、今言った彼女も無関係じゃないんだけどねー」
「夢想……」
「おっと、喋りすぎちゃったかなー？口封じ、口封じっと。今回は生かしてあげる理由もないし、パパッと終わらせちゃおっかな」
　それだけ言って、獲物に飛びかかる獣もかくやとばかりの身のこなしでさっとデュエルディスクを構える遊。それまで意図的に抑えていたのだろう殺気が周りに浸透し、ただ向かい合っているだけで息苦しさすら覚えるほどに空気が重くなる。
　正直、今のわざと漏らしたのだろう一言だけでも、聞きたいことは無数にできた。正史？稲石さんの言葉通り、夢想も無関係ではない？断片的にピースは集まってきているものの、確信に迫るための一番重要な部分がすっぽりと抜け落ちてしまっているせいで僕にはいまだに話が掴めない、そんな印象だ。だけどそんな疑問は後回しにして、今はとにかくやるしかないらしい。以前１度だけ、この男と戦った時のことを思い出す。まだ壊獣もグレイドルも手に入れていない頃の話ではあるけれど、明らかにあちらも本気

を出していない状態で軽く手玉に取られてしまった苦い記憶だ。
「じゃ、始めよっかー？」
その言葉を合図に、デッキから初期手札となるカードを……。
「いいや、その勝負俺が受けるぜ！」
「……チッ」
突如頭上から響くその声に、露骨に遊が舌打ちする。過去1度だけ聞いた覚えのあるその声からワンテンポ遅れて、遊がやってきたときと同じような空間の裂け目が頭上に生じた。そこを潜り抜け、第3の人影が着地する。
「確か……」
「まーた君かい？目障りだねー……！」
僕に背を向け、つまり遊と向かい合う形で突如現れたこの男もまた、僕は知っている。なんの予兆も前触れもなくやってきて、何もかも知っているような顔をして勝手に話を進めていく。何もかも前回、光の結社との戦いに入る少し前と同じだ。
「富野！」
「おう。今は……そうか、お前だけだったな。ユーノの野郎、勝ち逃げしやがって」
こちらを見ずに話しかけてくる口調こそ荒っぽいが、少なくとも彼は……富野は、ユーノの死を悼んでいる。それが伝わってきただけで、彼と文字通りの一心同体だった

僕もなぜだか少し救われた気がした。同時に、遊とは別ベクトルで得体の知れないこの男のことを、少なくとも今は信用しようという気が湧いてくる。

「……なあ、そこの地縛神。実際のところ、奴はどこまで教えたんだ？」

真剣なトーンで謎めいたことを口にする富野。その表情をこちらから見ることはできないが、問われたチャクチャルさんには何のことだか心当たりがあるらしい。いつでも余裕綽々なうちの神様にしては珍しい程にシリアスな調子で、すぐさま返答する。

『いや、まだだ。だが、そろそろ知るべき時だと私は思う』

「だろうな。最近のこの世界は、前はさほどでもなかったはずの正史とのズレが少しずつ大きくなってきてやがる。誤魔化し続けるのも限界なら、いっそ思い切ってこっち側のルールを知るほうがいいかもな……不本意だがな」

謎めいた短い会話の後、チャクチャルさんが身じろぎするような気配がした。まるで何か重要な話をする際、人がその姿勢を正す時のように。

『デュエリストである限り、誰もがその本能的に強さを求める。いつかはこうなる。それが遅いか早いかの違いだけだ』

「それは同感だ。ったく、面倒事押しつけやがってよぉ……」

ぼりぼりと頭を掻き、初めて富野が僕の方を向く。その仏頂面の奥に、なにか重大なことを成し遂げようとする人間に特有の緊張、迷いの色が透けて見えた。

「おい。お前は今から、俺たちのデュエルを見ているんだ。いいな、絶対に目ぇ逸らすんじゃねえぞ」
「な、何を……」
『急いでいるのは百も承知だが、ここは彼の言うとおりにしてくれ、マスター。私が手取り足取り教えるよりも、実戦を目の当たりにした方が理解も早くなる。このデュエルは、今後のマスターにとっても無関係な話ではない』
　依然として訳が分からないが、２人の調子からそれが偽りのない本心であることは理解できた。このデュエルには、これからの僕にとって重大な意味を持つ何かが潜んでいる。黙って頷くと、それを合図にしたかのように２人のデュエリストが同時にカードを引き抜いた。
「あ、相談タイムは終わったかい？ならー……」
「「デュエル！」」
　何が起きるというのか。何を起こそうというのか。喉元まで出かかった疑問を、ぐっと飲み込む。黙って見ていること。それが、今の僕に選べる中で最良の選択肢だったからだ。
「先攻か、悪くないねー。風来王　ワイルド・ワインドを攻撃表示で召喚、カードを２枚伏せてターンエンド」

緑のマントを身に着け、２足歩行する獣人。下級モンスターを出してカードを伏せるだけという、誰にだってできるごく当たり前のターン。

風来王　ワイルド・ワインド　攻１７００

「行くぜ、俺のターン！魔法カード、調和の宝札を発動。手札から攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー、ギャラクシーサーペントを捨てて２枚ドローする。さらにこの手札からレベル４以下のモンスター１体を捨てて、パワー・ジャイアントを特殊召喚！そしてこいつのレベルは、たった今捨てたモンスターのレベルの数値だけダウンするぜ」

パワー・ジャイアント　攻２２００　☆６→４

宝石を身に着けたきらびやかな巨人が、レベル４となって特殊召喚される。ということは、捨てたのはレベル２モンスターか。この時点でワイルド・ワインドの攻撃力を上回るモンスターを出すことに成功したため、このまま戦闘を行えば小さいとはいえダメージを与えることができる。

だが、彼はそうしなかった。

「まだ俺には通常召喚が残っている。チューナーモンスター、インフルーエンス・ドラゴンを召喚するぜ。このカードは１ターンに１度、俺のモンスター１体をドラゴン族に変更できる」

インフルーエンス・ドラゴン　攻３００
パワー・ジャイアント　岩石族→ドラゴン族

「へぇー……」

意外半分、愉快半分といった調子で、僕の方を1瞬チラリと見た遊が声を漏らす。僕？だがそんなことには目もくれず、２体のモンスターを並べた富野が声を張り上げた。

「いいか、しっかり目ぇ見開いてろよ！これで俺の場には、素材となるチューナーモンスターとそれ以外のモンスター1体以上が揃った！レベル４のチューナー以外のモンスター、パワー・ジャイアントにレベル３のチューナーモンスター、インフルーエンス・ドラゴンを……チューニング！」

チューニング、なる謎の言葉を宣言すると同時に、それは起きた。世界が動いた、といってもいい。インフルーエンス・ドラゴンがそのレベルと同じ３つの光弾に分裂したかと思うと、そのひとつひとつが光の輪に変化する。完成した３つの輪が一列に連なると、その中央をパワー・ジャイアントがまっすぐにくぐり抜けていき、それと同時にその姿から急速に色が抜けて輪郭だけとなる。よく見ると、内部にはそのレベルと等しい４つの光弾が真っ直ぐに並んでいたが、それも1瞬見えただけだった。すぐに光の柱に塗りつぶされ、全てが消えていく。

「大地揺るがす勝利の鉄槌、威光と共に振り抜き砕け！シンクロ召喚、エクスプロード・

ウィング・ドラゴン！」

☆４＋☆３＝☆７

エクスプロード・ウィング・ドラゴン　攻２４００

まるで爆発寸前の爆弾のように、膨れた丸い瘤を背負った２足歩行のドラゴン。２体のモンスターの姿が消えた後に新たに現れたその姿を見た時、真っ先に受けた印象はそれだった。ごつごつした筋肉質の胴体や尾とは対照的に細い腕と脚、だがその先端の手足はその体躯に相応しい堂々たる竜。

「エクスプロード・ウィング・ドラゴン……」

「そうだ。これがシンクロ召喚……基本的に１体以上のモンスターと１体のチューナーモンスターを素材とし、そのレベル合計と等しいレベルのモンスターをエクストラデッキから呼び出す、誇り高き白枠のカードだ」

そう言ってモンスターゾーンに置いたばかりのカードを１度持ち上げ、こちらに見せてくる。エクスプロード・ウィング・ドラゴン……当然１度も見たことのないそのカードは、富野の言葉通り通常、効果、儀式、融合モンスターのどれとも違う白い枠で囲まれていた。

「シンクロ、召喚……」

震える声でそう呟いた、直後。腕輪の姿に戻しておいたはずのデュエルディスク内部

で、何かがほんのわずかにその言葉に共鳴したのがわかった。永年の眠りから、満を持して目覚めたかのように。

無意識のうちに、腕輪をそっと撫でていた。そうか。君たちは、ずっと一緒にいてくれたんだ。

「バトルだ！エクスプロード・ウィング・ドラゴンでワイルド・ワインドに攻撃、キング・ストーム！」

あのドラゴンの攻撃力は２４００で、素材となった2体のモンスターの攻撃力合計は２５００。普通に考えればむしろダメージを減らす悪手にしかなっていないように見えるが、そこは富野に、そして新たな力、シンクロモンスターに抜かりはなかった。

「この瞬間、こいつの効果を発動するぜ。このモンスターが自身より攻撃力の低いモンスターとバトルを行う時、その相手モンスターを破壊して攻撃力分のバーンダメージを相手に与える。１７００ダメージは貰ってくぜ」

鋭く吐き出された火炎が、ウルを捉えて包み込む。火球の中に封じ込めた直後、それが内側から派手に爆発した。

エクスプロード・ウィング・ドラゴン　攻２４００→風来王　ワイルド・ワインド　攻１７００

「どうだ……ん？」

敵を倒した炎が、揺らめき消えていく。だが、それだけだ。その炎の向こう側で、無傷の遊がヘラヘラした笑みを浮かべていた。
「危ない危ない、４０００ライフ制でバーンは危険だってー。僕はその効果にチェーンしてトラップカード、アルケミー・サイクルを発動していたのさ。このトラップによりワイルド・ワインドの攻撃力は０になって、バーンダメージをフィールドでの攻撃力に依存するエクスプロード・ウィングの効果で受けるダメージは実質無効になったのさ」
「チッ、さすがに避けられたか。これ１枚だけカードを伏せてターンエンドだ」
アルケミー・サイクル。本来ならば自分モンスターの攻撃力を０にする代わりにその効果を受けたモンスターが戦闘破壊され墓地に送られるごとに１枚のドローを行えるカードだが、今回はドロー効果を度外視して純粋に攻撃力を０にできる、という点に着目して使われた形になる。遊も言及していた通り、この手のバーンカードにしては珍しくフィールド依存のダメージを与える点も向い風だったといえるだろう。
いずれにせよ、ダメージは通らなかったのだ。
遊　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
富野　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：エクスプロード・ウィング・ドラゴン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
「僕のターンー、まあ、これでいいかな？トラップ発動、シンクロ・マテリアル」
「そのカードは……！」
「そこの君はシンクロ初心者だからねー、ちゃんと解説してあげるよ。シンクロ・マテリアルは相手モンスター１体を選んで発動して、このターン僕が行うシンクロ召喚の素材としてその相手モンスターを使うことができるのさ。ただし、バトルフェイズは行えなくなるけどね。でもよかったよ、うまいこと闇属性ドラゴン族のエクスプロード・ウィングを出してくれてさー。同じレベル７でもこれでデーモン・カオス・キングでも出してたらどうしてやろうかと思ったけど、杞憂になったよー」
悔しそうに歯噛みする富野に対し、余裕の態度を崩さない遊。確かに２体のモンスターを消費して出したモンスターをこうもあっさり展開のついでで除去されるなんて、たまったものじゃないだろう。汚いやり口だ。
『は？』
「え？」
……たっぷり数秒考えて、さっきの考えは取り消すことにした。ま、勝負は非情だしね。たまにはそんなこともある、むしろシンクロモンスターの召喚に合わせてタイミン

グよくあんなカードを持ち出した遊の手腕を褒めるべきだろう、うん。
「チューナーモンスター、ドレッド・ドラゴンを召喚。そのままレベル７のエクスプロード・ウイング・ドラゴンに、レベル２のドレッド・ドラゴンをチューニングー。塗り潰された黒き世界を、憤怒の黒が重ね塗る。シンクロ召喚、琰魔竜　レッド・デーモン・アビス！」
　先ほどと同じように、召喚されたドレッド・ドラゴンが２つの光の輪になってその中心をエクスプロード・ウイングが通り抜ける。光の柱が走り、その中からさらなるドラゴンが咆哮とともに着地した。だがそれはドラゴン、とひとくくりに呼称するよりも龍人、と呼ぶ方が感覚的には近いかもしれない。格闘戦に特化したようなマッシブな赤黒の体には筋肉が浮かび上がり、その両腕には大斧を思わせる巨大な刃が生えている。悪魔のような巨大な翼がゆっくりと開くと、地獄の底から漂ってくるような威圧感がその巨体から満遍なく放たれる。
　琰魔竜　レッド・デーモン・アビス　攻３２００
　いくら相手のおぜん立てがあったとはいえ、わずか２枚の消費からおもむろに解き放たれた３２００打点の恐るべきドラゴン。しかもエクストラデッキのカードということは、変な場面でドローしてしまい手札事故を引き起こす危険性もない。逆に肝心な時に引くことができず出せなかった、なんてこともない。素材さえ用意できれば、ハンデ

スの影響すら受けない力。
　これが、これがシンクロ召喚。ユーノが、そしてチャクチャルさんがこの力を僕に隠していたのも頷ける。この力は、これまでのデュエルの常識をいっぺんに塗り替えてしまう可能性すら秘めている。もし何の備えも準備も無しにいきなりこんな力を受け取っていたら、どうなっていただろうか。向かうところ敵なしとまでは言わないが、並大抵の相手に対しては一方的に蹂躙できるはずだ。その結果は増長、そして慢心だろう。大切なカードとして、仲間として共に戦うどころか、完全にこの力に溺れてしまっていただろう。そして、カードパワーだけに頼ったデュエルは脆い。身分不相応な力を手にした驕りはプレイングや勝負勘を曇らせ、結果的に今の僕よりはるかに弱い雑魚デュエリストができあがっていたはずだ。
「バトルできないんじゃねー。ターンエンド」
「エクスプロード・ウィング……まだだ！まだ終わっちゃいねえ、俺のターン！」
　巨大な赤黒の龍と対峙して、怯むことなくカードを引く富野。ほんの1瞬の思考の後、流れるような動きでカードを選び出した。
「レッド・スプリンターを召喚し、効果発動。俺の場に自身以外のモンスターがいない状況で召喚、特殊召喚に成功した時、手札か墓地のレベル3以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚することができる。俺はこの効果で……」

「露骨な誘導だけど……いいよー、乗ってあげようかなー。レッド・デーモン・アビスの効果発動。1ターンに1度、相手の場のカード効果1枚を無効にできる！」

レッド・スプリンター　攻１７００

炎をまとった馬のようなモンスターがいななき、その全身がかすかな光を放ち出す。だがその瞬間を狙い澄ましたかのように、地獄の底から響くような吠え声とともに悪魔の龍がその腕を一振りする。剛腕による無造作にも見えるその動作はただそれだけで巨大な旋風を巻き起こし、フィールドの向こう側にいるはずのレッド・スプリンターを吹き飛ばした。辛うじて倒れる寸前に体勢を立て直すも、その効果は完全に中断されてしまっている。

だがそれは当然、そのカードを前から知っていたらしい富野にとっては織り込み済みの動作だった。

「問題ねえなあ！トラップ発動、リバイバル・ギフト！俺の墓地のチューナー1体を効果を無効にして蘇生し、代わりに相手フィールドにギフト・デモン・トークン2体を特殊召喚するぜ。戻って来い、ギャラクシーサーペント！」

ギャラクシーサーペント　攻１０００

ギフト・デモン・トークン　守１５００

ギフト・デモン・トークン　守１５００

先ほど調和の宝札によって墓地に送られていたレベル２のチューナーモンスターが蘇生され、通常召喚されたレッド・スプリンターと合わせてまたしてもチューナーとそれ以外の組み合わせが成立する。それと同時に遊のフィールドに２体ものトークンが生み出されるが、そんなもの意に介した様子もない。

すぐさま光の輪が生まれ、２体のモンスターが新たな力を生み出すべく新たな命へと生まれ変わっていく。

「レベル４のレッド・スプリンターに、レベル２のギャラクシーサーペントをチューニング！赤き闘志が燃え上がる時、熱き雄叫び強者を挫く。シンクロ召喚、レッド・ワイバーン！」

体から炎を噴き上げる、レッド・デーモン・アビスに比べあまりにもちっぽけな小型龍。にもかかわらずそのドラゴンは、１歩も引かない挑戦的な目で深淵の龍と向かい合った。

☆４＋☆２＝☆６

レッド・ワイバーン　攻２４００

「先に言っておくが、まだまだ序の口だぜ！魔法カード、死者蘇生を発動！俺の墓地からチューナーモンスター、レッド・リゾネーターを蘇生する。そしてレッド・リゾネーターの特殊召喚に成功したことで俺はお前のフィールドからアビスを選択し、その攻撃力分

だけライフを回復するぜ」
レッド・リゾネーター　攻６００
富野　ＬＰ４０００↓７２００
見慣れない、ということは先ほどパワー・ジャイアントの特殊召喚のために墓地に送られたのであろう、レベル２のチューナーモンスター。そしてレッド・ワイバーンはシンクロモンスターだけど、何も言っていないところを見るとチューナーモンスターではないらしい。
と、なると。息をするのも忘れて、目の前の炎の乱舞に見入っていた。
「まずはこの効果からだな。レッド・ワイバーンは１度だけ、相手フィールドに自身より攻撃力の高いモンスターがいる場合に効果を発動できる。ライフは回復したしもう用済みだ、失せな！フィールド上で最も攻撃力の高いモンスター、つまりアビスを破壊する！」
小柄なワイバーンが限界までその身を反らせて吐き出した火球は見る間に巨大化し、自身よりもはるかに大きなアビスの体を包み込むほどの大きさとなる。今度はアルケミー・サイクルの罠もなく、無効効果も使い終えたアビスがなすすべもなくその炎の中にどうと倒れた。
「よくも……」

「許さない、ってか？だがな、次のターンなんてくれてやるつもりはないぜ。レベル６のレッド・ワイバーンにレベル２のチューナーモンスター、レッド・リゾネーターをチューニング！赤き王者が立ち上がる時、熱き鼓動が天地に響く。防御に回る臆病者に、生きる価値など欠片もない！シンクロ召喚！叩き潰せ、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

真紅のワイバーンと悪魔がシンクロし、さらなる高みのモンスターへと昇華する。そのドラゴンはついさっきまで場を制圧していたアビスと実際似通ってはいたが、それでいて何もかもが違っていた。筋肉質なアビスとは対照的に細くしなやかな、それでいて力強さを感じる手足……そしてあの赤黒の炎よりも、ずっと明るく紅い鮮烈な炎。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００

「このカードで終わらせてやるよ。速攻魔法、竜の闘志！」

「それは……！」

このデュエルが始まってから、いや、もっと前から常に遊の顔に張り付いていた余裕の仮面が、初めて揺らぐ。

竜の闘志。あのカードはこのターン自分が特殊召喚したドラゴン族１体の攻撃回数を、同一ターンで相手フィールドに特殊召喚されたモンスターの数だけ増やすカードだ。そして遊のフィールドには、たった今呼び出されたギフト・デモン・トークンが２体。つまり今レッド・デーモンズ・ドラゴンは、合計３回の攻撃が可能となったことに

なる。

……あれ？確かにレッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃力は高いけれど、ギフト・デモン・トークンは両方守備表示だ。それはこれから2回攻撃で蹴散らすとしても、ダイレクトアタック1回ではライフを削りきれないはず。なんて、心配するのもおこがましいのだろうけれど。

「バトルだ、レッド・デーモンズ！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→ギフト・デモン・トークン　守１５００（破壊）

火炎放射が宙を裂き、１瞬でトークンを焼き尽くす。だがその攻撃は２段構え、敵を滅ぼしてなお勢い衰えぬままに拡散した炎がフィールドを舐めつくした。巻き込まれるようにして、もう1体のトークンも焼き尽くされる。

「こ、これは……？」

「これこそがレッド・デーモンズ・ドラゴンの効果、デモン・メテオ！守備表示に対し攻撃を行った後で、相手の場に存在するすべての守備表示モンスターを破壊するぜ。だが竜の闘志は継続中だ、あと２回の連続攻撃で沈めてやるよ！灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」

再び火炎放射が放たれ、爆発が巻き起こる。僕の位置にいてなお感じる、凄まじいま

での熱気と爆風。
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→遊（直接攻撃）
遊　ＬＰ４０００→１０００
「これでラストだ。灼熱のクリムゾン・ヘルフレア！」
三度火炎放射が放たれ、爆発が巻き起こる。僕の位置にいてなお感じる、凄まじいまでの熱気と爆風。
だがその中で、遊は平然と立っていた。
遊　ＬＰ１０００
「……性悪野郎、そんなもん持ってたのか」
「まあねー。ねえ、勝ったと思った？勝てたと思ったー？」
先ほどの驚愕もただの演技だったのか、元通りの余裕の表情を浮かべて笑う遊。舌打ちの音が、富野の背中越しに小さく聞こえた。あの状態から伏せカードも無しにノーダメージどころかライフ回復に持ち込むなんて、僕に心当たりは1枚しかない。
「まさか……！」
「ああ、ノーダメージで凌ぐなんて、それができる手札誘発は限られる。回復が入ってないところを見るとジュラゲドじゃあないだろうが……」
富野も同意見だったようで、補足するように吐き捨てる。それに応じて、やる気のな

いパチ、パチ、パチという拍手の音が聞こえてきた。
「ご名算ー、偉い偉い。いやー惜しかったねー。ちなみに今使ったのはこれ、ジェントル―パーさ。君の羅の予想通り、攻撃宣言時手札から特殊召喚できるカードだよー」
「こんの……！ターンエンドだ！」
計算づくの煽りと、理屈抜きの腕前。どちらか1つだけでも厄介なのに、それらが組み合わさることで対戦相手のペースを乱す。焦りや怒りは甘いプレイングを生み、実力がそこで生まれた隙をこじ開ける。なまじ強いのは間違いないだけに、本当にたちの悪いデュエリストだ。
今はまだ、富野も冷静さを完全には失っていない。ギリギリとはいえ、なんとか踏みとどまっている。なんとか、このまま進めばいいんだけど。
遊　ＬＰ１０００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：なし
富野　ＬＰ７２００　手札：０
モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻）
魔法・罠：なし
「さーてと、僕のターン。墓地に存在するワイルド・ワインドは、自身を除外することで

デッキから攻撃力１５００以下の悪魔族チューナーをサーチすることができるよー。ぴったり攻撃力１５００の幻影王　ハイド・ライドをサーチして、そのまま召喚。さらに自分フィールドにチューナーがいることで奇術王　ムーン・スターを手札から特殊召喚して、その効果で墓地のジュラゲドを選択。選んだレベルをコピーするよー」

幻影王　ハイド・ライド　攻１５００

奇術王　ムーン・スター　攻８００　☆３↓４

目まぐるしく2体のモンスターが召喚され、またしてもシンクロ召喚の準備が整う。戦う主力モンスターを全てエクストラデッキに放りこむことで、メインデッキを素材調達用として割り切った構築にできる、ということだろうか。そういう意味では融合デッキも似たようなものだが、十代やエドだってここまで割り切った構築はしていない。

「さて。レベル4のムーン・スターに、レベル3のハイド・ライドをチューニングー。天頂佇む白色が、穢れた地上に裁きを下す。シンクロ召喚、天刑王　ブラック・ハイランダー！」

☆４＋☆３＝☆７

天刑王　ブラック・ハイランダー　攻２８００

巨大な鎌を手にした、白を基調とする死神のような悪魔。レベル7で攻撃力２８００というのは破格の数値ではあるけれど、レッド・デーモンズ・ドラゴンには敵わない。と

すると、狙いはその効果だろうか。
「装備魔法、ビックバン・シュートをレッド・デーモンズ・ドラゴンに装備。そしてブラック・ハイランダーの効果を発動！装備魔法を装備した相手モンスター1体に装備されたそれをすべて破壊して、1枚につき４００のダメージを与える！」
レッド・デーモンズ・ドラゴン　攻３０００→３４００→３０００
富野　ＬＰ７２００→６８００
微弱な効果ダメージ……いや、狙いはそこじゃない。確かビッグバン・シュートには、重大なデメリット効果がある。レッド・デーモンズ・ドラゴンの巨体が、強力な重力に吸われていくかのような動きでねじれ、消えてしまう。
「この瞬間、破壊されたビッグバン・シュートの効果発動。このカードが場を離れたことで、装備モンスターのレッド・デーモンズ・ドラゴンには除外ゾーンに退場してもらうよー」
「レッド・デーモンズが……！」
「さてさてー、露払いは終わり。バトル、ブラック・ハイランダーでダイレクトアタック、死兆星斬（デス・ボーラ・スレイ）！」
死神が飛び、空中から鎌を振り下ろす。肩から腰にかけてを斜めに深々と切り裂かれた富野がそのまま倒れかかり……何とか踏みとどまり、荒い息で体勢を整える。

天刑王　ブラック・ハイランダー　攻２８００→富野（直接攻撃）
富野　ＬＰ６８００→４０００
「これでようやく初期ライフかー、回復が生きてよかったねー」
「ああよかったぜ、これで次の反撃も安心してできるからな！俺のターン！」
すでに遊は全ての手札と場のカード、さらには墓地リソースまで使い終えている。必然的にターンが移り変わり、富野がカードを引く……だが、彼もまた手札は今引いた１枚のみ。威勢だけは確かにいいのだが、あれでは誰が聞いても空元気にしか聞こえないだろう。
「来たぜ！魔法カード、命削りの宝札！このターンの特殊召喚が封じられる代わりに、手札が３枚になるようカードをドローできる！」
いや、そうじゃない。この男もまた、デッキを信じるデュエリストの１人。ならば、必ずデッキはその思いに応えてくれる。３枚ものカードを一気に追加でドローし、その内容に目を走らせる。
「モンスターをセットし、残り２枚のカードも伏せる。このターン終了時に俺は全ての手札を失うことになるが、あいにくとこの通りだ。捨てる手札なんて、１枚も持ってねえな」
遊　ＬＰ１０００　手札：０

モンスター：天刑王　ブラック・ハイランダー（攻）
魔法・罠：なし
富野　ＬＰ４０００　手札：０
モンスター：???（セット）
魔法・罠：２（伏せ）
「悪あがきにしか見えないんだけどねー、ドロー。おや、まったく皮肉なものだね。こっちも魔法カード、命削りの宝札を発動―。同じく手札が３枚になるようにドローしてからブラック・ハイランダーでセットモンスターに攻撃、死兆星斬（デス・ポーラ・スレイ）」
なんとここに来て、両者がほぼ同じタイミングで引いた同一のドローソース。これまた同じくその効果が最大限に生かせる３枚ドローを決め、またしても大鎌が空を裂く。
だがその一撃は、硬質な金属音と共に伏せモンスターを切り裂く寸前で止められた。それを成し遂げたのは、小さな悪魔がその手に持つ１本の巨大な音叉だった。
天刑王　ブラック・ハイランダー　攻２８００→???　守３００
「さすがにお前も息切れしてきたみたいだな、ああ？ダーク・リゾネーターは１ターンに１度、戦闘破壊されないぜ」
「息切れ、ねー。まあいいよ、カード３枚を伏せてターンエンド。でもまさか忘れてるとは思わないけど、ブラック・ハイランダーがいる限り互いのプレイヤーはシンクロ召喚

が行えない。シンクロ召喚を封じられた君のデッキに、あと何枚ブラック・ハイランダーを突破できるカードがあるのかなー？」

シンクロモンスターをメタるシンクロモンスター？ああ、ややこしい。どうやら僕が思うよりもはるかに、シンクロモンスターは奥が深い世界らしい。しれっと3枚の手札をすべて伏せることでデメリットを回避し、悠々とターンを譲り渡した。

「3伏せごときでビビってられるかよ！それにその答えはもう、俺の場に伏せられてるぜ！俺のターンにリバースカードオープン、デモンズ・チェーン！この効果によりブラック・ハイランダーは効果が無効となり、さらに攻撃も封じられる。これでシンクロは復活だ！」

「フン。まー、当然そのカードは入ってるよねー……君のデッキなら」

「さらにメイン1の開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺だ。俺の墓地から異なる種族を持つ3体のモンスター、岩石族のパワー・ジャイアントとドラゴン族のレッド・ワイバーン、悪魔族のレッド・リゾネーターをデッキに戻してカードを2枚ドロー。ただしこのターン、俺はバトルフェイズを行えないが……これなら十分だ。2枚目の永続トラップ、強化蘇生を発動！俺の墓地からインフルーエンス・ドラゴンを蘇生してそのレベルを1、攻守を１００ポイント上昇させるぜ」

インフルーエンス・ドラゴン　攻３００→４００　守９００→１０００　☆３→４

「2体のチューナー……？」

遊の言葉から察するに、先ほどブラック・ハイランダーの攻撃を受け止めたあのダーク・リゾネーターもチューナーなのだろう。しかも富野の言いっぷりによれば、これからバトルフェイズの行えないデメリットを帳消しにできるほどのモンスターを呼び出すつもりらしい。

僕の想像の2歩も3歩も先を行くシンクロモンスター使い同士の戦いに、かけられる言葉なんてあるはずもなかった。一体どんな効果を持つモンスターを出せば、あそこまで大きなことが言えるというのだろう。

「さあ、めんどくさい下準備はこれで最後だ。マジック・ホール・ゴーレムを通常召喚する」

マジック・ホール・ゴーレム　攻0

「遊！いつぞやのお望み通り、見せてやるよ。それとお前もいいか、こいつはちょっとばかり特別なシンクロだからな。真似しようなんて思うんじゃねえぞ！」

「う、うん」

不意打ち気味にこちらを振り返り釘を刺してくる富野。わけのわからないままとっさに頷いた僕に頷き返し、また前を向いて高らかに声を張る。

「これが俺の手に入れた、レッド・デーモンの新たな進化だ！レベル3のマジック・ホー

ル・ゴーレムに、レベル3、ダーク・リゾネーターと、レベル4となったインフルーエンス・ドラゴンをダブルチューニング！」

ダブルチューニング。その言葉通りに、これまでのパターンとは異なり2体ものチューナーが同時に光の環……いや違う、燃える炎の輪へと変化する。その合計7つもの輪が偶然にも同じ輪の形をしたゴーレムとともに、またしても未知なるモンスターへと生まれ変わっていった。

「紅き王者が悪魔喰らう時、天地創造の叫びが上がる。行く手遮る有象無象に、惑う価値などどこにもない！シンクロ召喚、レベル10！レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント！」

これが。これが富野の切り札、エースモンスターか。目が覚めるように紅い鮮烈な炎が噴き上がり、その火柱の中央で1体のドラゴン、更なるレッド・デーモンが咆哮した。

強大な翼に4本もの巨大な角、先が3つに分かれた尾などは本人の言葉通り悪魔と呼ぶにふさわしい意匠で、さらには体の細い部分を的確に補強するかのように鎧めいてあちこちを守る皮膚が、その全身を先ほどのレッド・デーモンズ・ドラゴンより一回りも二回りも巨大に見せている。だが何よりも目を引くのは、全身に何本も走る傷跡のようなオレンジ色の筋模様だった。あまりに膨大なエネルギーを抱えているからかその模様はかすかにそれ自体がオレンジ色に発光し、溢れる熱量が体の周りに陽炎のような揺

らめきさえも発生させている。
☆３＋☆３＋☆４＝☆１０
レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント　攻３５００
「なるほどー。それが君の持つもうひとつのレッド・デーモン……スカーライトの正当進化なわけねー」
「ああ、そして今からこいつの力を見せてやる！タイラントの効果の前には、敵も味方もありゃしねえ。１ターンに１度自身以外の全てのカードをまとめて破壊する、アブソリュート・パワー・インフェルノ！」
おもむろに暴君の名を持つそのレッド・デーモンが右腕を振りかぶり、それを地面に振り下ろす。ただそれだけで、僕の視界が真っ赤に染まった。１瞬遅れて僕の位置にまで叩きつけられた呼吸が苦しくなるほどの熱波の中で辛うじて、効果を封じる悪魔の鎖に繋がれたブラック・ハイランダーがほんのわずかにだけもがき、しかしすぐに動かなくなって燃え尽きていくさまが見えた気がした。
「乱暴な真似してくれるねー……今破壊されたカードのうち、１枚は発動タイミングの無かったトラップ、破壊神の系譜。だけど残りの２枚、これ実は同じカードだったんだー。それがこのカード、運命の発掘。このカードが相手に破壊された時、僕は墓地の同名カードの数だけカードを引くことができる。運のいいことに全体破壊でまとめて

墓地に送ってくれたから、それぞれ２枚が２枚分で４枚ドローさせてもらうよー」
「４枚だと!?クソが……!」
遊の残りライフは、２０００。攻撃力３５００を誇るタイラントの攻撃を当てる事さえできれば、１瞬で吹き飛ぶほどの数値でしかない。だが、それができない。これ以上はないほどの格好のチャンスで、バトルフェイズは封じられている。もっともあの貪欲で無欲な壺を使わなければ、そもそもこのチャンス自体が生まれなかったのだが。
「気張ってくれよ、タイラント……!俺はこれで、ターンエンドだ……!」
遊　ＬＰ１０００　手札：４
モンスター：なし
魔法・罠：なし
富野　ＬＰ４０００　手札：１
モンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント（攻）
魔法・罠：なし
「僕のターン。魔法カード、星屑のきらめきを発動ー。僕の墓地からドラゴン族シンクロモンスターのアビスを選択して、そのレベル合計と等しいレベルになるように墓地からモンスターを除外。レベル７のブラック・ハイランダーとレベル２のドレッド・ドラゴンを墓地コストに、選んだレベル９のアビスを蘇生するよー。まだ何かしてくるかも

しれないし、一応無効効果をタイラントに対して使っておこうかな」
　つい先ほど、タイラントが地面に穿った大穴。そこでいまだチロチロと燃えるオレンジの炎が、地の底から湧き上がってきた赤黒の炎に全て呑みこまれた。一気に地獄の底のような風景が広がる中、大穴の奥底から倒れたはずのアビスが再びその足で大地を踏みしめた。
　琰魔竜　レッド・デーモン・アビス　攻３２００
「そしてチューナーモンスター、フォース・リゾネーターを召喚。さらに場にシンクロモンスターがいることで、これもチューナーのシンクローン・リゾネーターは手札から特殊召喚できるよー」
　フォース・リゾネーター　攻５００
　シンクローン・リゾネーター　攻１００
「まさか……」
　これ見よがしに呼び出された、チューナー以外のモンスターに２体のチューナー。そして２人の使う、それぞれタイプの異なる【レッド・デーモン】デッキ。となると、ここまで来て次の展開が察せないほど鈍感になった覚えはない。
「それがアビス、ベリアルの次、か。何が来るかは知らねえが、全力で足掻かせてもらうぜ！相手がモンスターの特殊召喚に成功した時、手札のエクストラ・ヴェーラーは特殊

召喚できる！」

エクストラ・ヴェーラー　守２００

富野に残された最後の手札から、闘牛士のような見た目のモンスターが特殊召喚される。それを見た瞬間、ほんの１瞬だけ遊が露骨に不愉快そうな顔をしたが、すぐにその表情も消えていった。

「……まあ、いいよー。レベル９のレッド・デーモン・アビスにレベル２のフォースとレベル１のシンクローン、２体のリゾネーターをダブルチューニング……そして全てが塗り潰されて、闇へと消えた世界の末路。シンクロ召喚、終焉の絶対破壊神……琰魔竜王レッド・デーモン・カラミティ」

レッド・デーモンズ・ドラゴンとしての基本の形を保ったまま進化を遂げたのが富野のタイラントならば、それと向かい合うこのドラゴンはなんだろう。王者としての面影を残しつつも、悪魔の力がより色濃く出た進化の形だとでも呼べばいいのだろうか。

アビスからの真価にあたり異常な変異を繰り返した体からはさらに２本もの新しい腕が生え、盛り上がる筋肉のせいで大木のように太くなったその手足からはなお有り余るエネルギーが鋭く巨大な何本もの棘となって突き出ている。タイラントと比べてもさらに重量感のある巨躯を宙に舞わせるための翼はそれ自体がさらに分厚く強大なものとなり、広げられたそれのせいでただでさえ巨大なその姿を倍ほどの大きさに見える

ようにも錯覚してしまう。タイラントのそれよりもより低く重々しい、しかし威圧感という点では甲乙つけがたいそのカラミティの咆哮が、目の前の似て非なるものへの怒りを露わにするかのように空気を震わせた。

☆９＋☆２＋☆１＝☆１２

琰魔竜王　レッド・デーモン・カラミティ　攻４０００

「カラミティがシンクロ召喚に成功した時、まず最初の効果を発動。このターン相手はフィールドで発動するカードの効果が使えなくて、さらにこの効果に対して何かをチェーンすることもできない。もっともその様子だと、発動できそうなカードはないみたいだけどねー」

「フィールド完全封殺で攻撃力４０００だと?なんて効果してやがる」

「さらに墓地に送られたシンクローン・リゾネーターの効果で、墓地からフォース・リゾネーターを回収。本当は封殺効果なんて序の口なんだけど、今回はそれが裏目に出たかな。仕方がないから魔法カード、『守備』封じを発動。守備表示のエクストラ・ヴェーラーには攻撃表示になってもらうよー」

エクストラ・ヴェーラー　守２００→攻６００

「クソッ、エクストラ・ヴェーラーは失敗だったか……?」

「……まったく、それ本気で言ってるんなら大したものだよー?全くの偶然だけで1

ターン命を繋ぐなんて、さ！カラミティでエクストラ・ヴェーラーに攻撃、真紅の絶対破壊（クリムゾン・アブソリュート・ブレイク）！」

意味深な発言と共に号令を飛ばし、カラミティが狙いを定めたのはレッド・デーモンどうしの対決ではなくその横の小さな闘牛士だった。元から生えていた方の両腕を組み合わせて大きく振りかぶり、一拍空いたのちに大地も砕けよとばかりの馬鹿力で振り落とす。言葉にすればこれだけのシンプルな攻撃だが、その衝撃は空気を伝わり辺り一帯にまで破壊の風を吹かせるほどのものだった。大地にはタイラントが作ったそれと重なるように新たなクレーターが生まれ、吹こうにも衝撃を受けた何本もの木が耐え切れず攻撃地点を中心とした同心円状にへし折れていく。そしてその勢いは、至近距離でその攻撃を見ていた僕と富野にも襲い掛かった。

　　琰魔竜王　レッド・デーモン・カラミティ　攻４０００→エクストラ・ヴェーラー攻６００（破壊）

　　富野　ＬＰ４０００→６００

「ぐ……わあっ！」

だが、それで終わりではなかった。クレーターの中心で地に伏せたままピクリとも動かないエクストラ・ヴェーラーに、新たに生えたもう２本の腕を構えるカラミティ。その両腕の間に禍々しい地獄の業火という言葉を具現化したような火球が出現し、それが

加速度的なスピードで巨大化していく。あっという間にその両腕に抱えきれないほどのサイズに成長した火球を眼下に向けて振り下ろすのかと思いきや、意外にもその逆でおもむろに宙へと放り投げた。

だがそれは、決してカラミティが攻撃の手を緩めたというわけではない。解き放たれた火球は上空で制止したのち弾け、無数の隕石となって地表へと降り注いだのだ。

「カラミティがモンスターを戦闘破壊した時に発生する効果、地獄の災厄琰弾（ヘルカラミティ・メテオ）。今回ばっかりは残念なことに、カラミティは戦闘破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与えるんだよねー」

「そうか、それでタイラントじゃなくて、エクストラ・ヴェーラーを……」

隕石の雨の中、ようやく得心した風に頷く富野。エクストラ・ヴェーラーは緩い特殊召喚条件に加え、おまけのようなバーンメタ能力を持つ。自身の効果による特殊召喚が成功したターン、プレイヤーの受けるすべての効果ダメージは相手プレイヤーが代わりに受けるようになる。これは発動する効果ではないためカラミティでも無効にできず、手札誘発なためアビスでも止められない。特殊召喚の効果を通さざるをえなかった時点で、ライフがすでに２０００まで減っている遊は攻撃力３５００を誇るタイラントを戦闘破壊できなかった、という訳か。でもエクストラ・ヴェーラーならばその攻撃力が低いから、高い戦闘ダメージを与えたうえで自身に降りかかるダメージも最小限で済ま

すことができる。
具体的には今の奴のライフでも、問題なく受け切れるほどには。
遊　ＬＰ１０００→４００
「カードを1枚セットして、ターンエンド」
正真正銘、奴の最後の手札がフィールドに伏せられる。タイラントの効果を承知のうえで伏せたということは、速攻魔法かトラップか。いずれにせよ、次が勝負の分かれ目になるだろう。もう2人とも、これ以上の展開に割けるだけのリソースを準備する余裕はないはずだ。
「俺の……ターン！」
このターンで決着がつくか、それともまたしても耐えきられるか。いずれにせよ、富野にとってこのデュエル最後の1枚となるであろうカードが引き抜かれた。
「このターンもタイラントの効果発動、アブソリュート・パワー・インフェルノ！吹き飛べ、カラミティ！」
再び全身に炎の鎧をまとい、タイラントが吠える。宙へと舞い上がった暴君の拳が地表で見上げるカラミティへと襲い掛かると、カラミティもまた地獄の炎を全開にしつつその右腕で迎え撃つ。互いに似通っていて、それでいて全く異なる暴君（タイラント）と災厄（カラミティ）の拳が、文字通り天地をひっくり返すような衝撃を引き起こした。

「速攻魔法、禁じられた聖衣を発動！カラミティの攻撃力を６００下げることでこのターンカード効果の対象にならず、さらにカード効果で破壊されない効果を付与する！」

　　　

始めていた。明るい炎が地獄の業火を侵食し、呑み込み、じわじわとだがカラミティの体にまで広がっていく。

「確かに攻撃力では上回っただろうけど、その差は１００！まだ僕の手にはフォース・リゾネーターがある、カードさえ引けるならいくらでも戦える！」

「いいや、今度こそこれで終わりだ！速攻魔法、超再生能力を発動！」

超再生能力？この場に全く関係のない遅効性のあるドローカードに、僕だけでなく遊もその真意を測りかねて眉をひそめる。だが次の瞬間、タイラントの纏う炎の勢いが一層激しく鮮烈になった。

「そしてこの瞬間、タイラントのもう１つの効果を発動するぜ。バトルフェイズ中に魔法か罠が発動した時、その発動を無効にして攻撃力を５００アップさせる！これでとどめだ、獄炎のクリムゾンヘルタイド！」

「この、力は……！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント　攻３５００→４０００
↓琰魔竜王　レッド・デーモン・カラミティ　攻３４００（破壊）
遊　ＬＰ４００→０

「はー……」
　ライフが尽き、ごろんと大の字に寝転がる遊。さすがに体力と精神力が限界に来たのか、その場で膝をつく富野。どちらに行くべきか迷っていると、ふらふらになりながらも富野がどうにか立ち上がった。幾度も転びそうになりながら遅々とした足取りで寝ころんだままの対戦相手の元へ向かおうとする彼に、慌てて肩を貸す。
「……悪い」
「いやいや」
　気を失っているかと思ったが、意外と遊の意識はしっかりしているようだった。眼を開いて寝転がったまま、ダークネスの力なのか暗い雲の立ち込める空を見上げている。
「よう、気分はどうだ？」
「最悪だねー。よりにもよってレッド・デーモンとの同門対決で負けるなんてさ、プライドズタズタだよ」
「……そうか」
　富野の返事は短い。でも案外、今の遊の気持ちを最も理解しているのは、同じレッド・デーモン使いとして勝利した彼なのかもしれない。そんな感傷を振り払い、今度は僕が尋ねる。
「もう観念して、洗いざらい吐いてもらうよ。どうしてダークネスに手を貸したりなん

て」
「いやいや。君が聞きたいのは、そっちじゃないはず。本当に君が知りたいのは、彼女……河風夢想のはずさ。違うかなー？」
　図星だった。この男は、夢想についてまだ何か僕の知らない情報を持っている。例え聞いたことを後悔することになったとしても、それでも無関係ではいられない話を。押し黙った僕を見てゆるゆると息を吐き、やや苦しそうにくすくすと笑う。
「正直なのはいいことだよー。さて、彼女だけど。彼女は元々、僕たちの仲間だったんだよね。僕も、それからそこの冨野クンもいる、ある組織のね」
「……初耳だな。それにしても、随分べらべら喋るじゃねえか」
「アビスやベリアルならまだしも、カラミティまで引っ張り出して負けたんだ。もうこれ以上の奥の手はないしー、闇のゲームを仕掛けた以上どうせこの先長くはないしー。だったら、最後くらい大人しく観念するさ」
　先ほどの激しい衝突の結果生まれたクレーターや、薙ぎ倒された木々を見る。あの時は自然すぎて何も思わなかったけれど、現実に影響が出ているということは確かに闇のゲームだったのだろう。
「ここから先は富野クン、君も知らない話さ。『彼女』は元々古株でね、つい最近討ち死にしちゃったけど、青眼使いのおっさんがいただろう？あの人の同期だったのさー。だ

からあの人もちょくちょくこの世界まで来てたみたいだけど、まあそれは関係ないね」

彼女、というのは夢想……いや、稲石さんの話と併せて考えるなら、その大元になったオリジナルの人格のことだろう。先が長くないというのは本当のようで、こうして話している間にみるみる衰弱していくのが手に取るようにわかる。だから、何も口を挟めなかった。

「18年ぐらい前だったかな?ある時、彼女はこの世界に来た。新しい転せ……獲物が来る兆候が見つかったからね。だけど、彼女はそこで1つヘマをした。どうやらこの世界のバランスが、何かの拍子で崩れちゃったんだろう。偶然彼女の存在に気づいたダークネスは、その外敵を排除するため?それとも、単に世界の混乱を起こすため?今となってはわからないけれど、とにかく彼女にちょっかいをかけた。間の悪いことに、そのせいで大事故が起きたのさ。18年前の童実野町、自動車同士の正面衝突事故。両者の車にはそれぞれ母子2人と家族3人が乗っていて、片方は赤ん坊の男の子を置いて母親が。もう片方はこれまた赤ん坊の女の子を残してその両親が。全く突然に3人もの犠牲者が生まれたものの、奇跡的に赤ん坊2人だけが助かった事故……」

みるみるうちに顔が青ざめていくのが、鏡で見なくてもわかった。その事故は、僕も知っている。いや、知っているなんてものじゃない。相手が目の前で急速に弱っているということも忘れ、思わず震え声が出る。

「まさか、その事故って」
「その通り。その不幸な事故を起こした両者の名字は、新聞には載らなかったとはいえ少し調べればすぐにわかる。男の子の方が遊野。女の子の方は河風。君達のことだよ」
「夢想が……あの時の生き残り……？」
物心つく前に僕が母親を失ったあの事故については、これまで努めて考え無いようにしてきた。当時の新聞記事は何度も読んでいたからもう1人相手方にも生き残った人がいるとは知っていたけれど、それが誰なのかはこれまでも意図的に探さないようにしてきた。
なぜか。探し出して、その人に会ったとして、それでどうしたいのかがわからなかったからだ。その相手を目の前にした時、自分が何をするのかが予想できなかった。激情に駆られて殴りかかるかもしれないし、ひどいことを言うかもしれない。僕には親父がまだいたけれど、その子は両親がいなくなった。それが頭ではわかっていても、実際にその人を相手にするとその時どうするのか、僕自身でさえわからない。それが怖かったのだろう。
そういえば、といまさらながらに、修学旅行の時夢想と行った隣町の墓地を思い出す。あの時夢想は両親の墓を前にして、なんと言っていた？交通事故、物心ついてすぐ。あんな昔から、ヒントは目の前に転がっていたんだ。それに僕は気づかなかったのか、そ

れとも無意識に目を逸らしていたのか。今となってはもう、僕にだってわからない。

「彼女は責任感が強かったからね。あの時女の子の一家と君の母親は全員即死だったけれど、実は男の子、遊野清明だけは時間の問題とはいえまだ息があった。それを見て彼女は、この事故は私のせいで起きたんだと自分を責めに責めたあげく、その命を投げ打って唯一まだ命が残っていた君に自分の生命のすべてを譲り渡したのさ」

あまりの話に頭が真っ白になり、何も言うことができなかった。僕も本来は、あの事故で死んでいた?それを夢想の前身である『彼女』が命を投げ打って助けてくれた……あまりにも信じられない話だが、不思議と疑う気にはなれなかった。それどころか僕の中のどこかで、ずっと足りなかったパズルのピースがかちりとはまった時のような納得さえ感じる。

『待て。その女の子が即死したのなら、マスターの知る彼女はなんなのだ?ダークシグナーではないはずだ、それに第一他の地縛神はまだナスカで眠りについている』

チャクチャルさんが今の話の矛盾点に気づき、鋭く問いただす。確かにそうだ。夢想が即死したというのなら、僕らの知る夢想は?だがその答えも、遊は既に掴んでいた。

「簡単だよ。彼女は確かにその命こそ消えたけれど、まだその場に強い後悔や悲しみ、自分自身への怒りや贖罪の思いといった負の感情の残滓が残っていた。それをダークネスが拾い集めて死んだはずのその女の子に注入して、いつでも手駒として使えるように

蘇らせたのさ。記憶を消され、自分が何であるかもわからずにただ死に際の負の念だけを利用され。今君が見ている彼女は、誰も望んでいなかったはずの哀れな存在だよ。その挙げ句、今まさに彼女はダークネスの完全な手駒に成り果てた」

「そ、そんなの」

「横暴だと思うかい？ひどすぎると思うかい？でも、ある意味ではこの話はとても残酷に筋が通っている。君は彼女の口調について、本人から説明を受けたことはあったかい？」

　事故のショックで口がきけなくなった彼女に、ある時謎の声が聞こえた。声の主が彼女の言葉を代弁して会話を可能とする代わりに、いつか彼女は声の主に何かをしなければならない。あの時からきな臭い話だとは思っていたけど、よく考えればうちの神様だって第一声が『力が欲しいか？』だったからどこもそんなものだろうと思って記憶の片隅に放りこんでいた記憶だ。

『契約か』

　その張本人が今更、厳かな口調で問いかける。遊がコクリ、と頷いた。

「そう。純粋な交換条件、忌々しいことに単体では非の打ちどころのないダークネスとの完全な契約さ。さっきも言った通り、彼女は責任感が強かったからね。もはや元の人格すらなくなった今でもその名残が影響しているのか、馬鹿正直にそれを遵守している

のさ。だがこの話、おかしいとは思わないかい？元々彼女を蘇らせたのはダークネス自身、それが自分のつくりだした欠点を埋め合わせるために契約を迫る？馬鹿馬鹿しい、これはただのマッチポンプさ。つくられて日の浅い、まだ幼い彼女の精神にダークネスに対する借りを背負わせるためにわざわざ仕組まれた、ね」

話を聞くうちに握りしめた拳が、白くなるほどに力を込めていた。ダークネス。僕、夢想、稲石さん、その両親、僕の母親、そして夢想や稲石さんのオリジナルといえる『彼女』……一体、どこまで僕らの人生を引っ掻き回せば気が済むんだ。そのうえ、この世界までよこせだと？ふざけるな、お前には砂粒ひとつくれてやるもんか。

「燃えてるねー。まあ頑張ってよ、もう僕には関係ない話……だし、ね……」

そこでついに、遊が力尽きた。空を見上げるその目から、みるみる光が消えていく。その体が風と共に、塵となって流れていく。

ターン１２４　鉄砲水と、覚悟

遊の死に際に残した話を、僕のルーツとも言うべきその話を、じっくりと噛みしめる。ちらりと盗み見た富野の表情は彼が言葉を失っていることを如実に表しており、どうやらこの話は彼にとっても初耳だったらしい。ダークネス、夢想、稲石さん、そして僕。複雑にもほどがある人間関係が、よりにもよってこのとんでもなく忙しいタイミングで一斉に襲い掛かってきやがったわけだ。

『マスター』

「……わかってる」

せっつくようなチャクチャルさんの言葉に、そんな気はなかったがつい吐き捨てるように答えてしまう。すでに稲石さん戦、そして今の遊戦のせいで生まれたタイムロスはかなり大きい。この賢者の石を三沢に届ける、元々そのために僕はここに来たのだ。結果的にはそれが、ダークネスに対する何よりの復讐にも繋がる。色々と、割り切れないものはある。頭の中はぐちゃぐちゃだ。それでも、僕がここでやらなくちゃいけないんだ。やりたいようにやればいい。カイザーや大徳寺先生の言葉が蘇る。なら、これが今の僕がやりたいことだ。

「……じゃあ、僕はこれで」
「ああ」
短く富野に別れを告げ、よろよろと立ち上がる。しっかりと地面を踏み締めているはずの自分の両足が、なんだかひどく頼りないものに感じた。
最後に一礼し、くるりと背を向ける。もう、彼に会うことはないだろう。ふらつく足に活を込めて走り出そうとした僕の背中に、最後に富野の声が被さってきた。
「……なあ、遊野清明」
立ち止まり、しかし振り返らずに耳を澄ます。やや歯切れ悪く、しかしはっきりとした声だった。
「……お前は、俺みたいになるなよ。仲間を、友達を、ライバルを……全部失うようなヘマ、絶対にすんじゃねえぞ。もう後輩はいらねえ。お前みたいに扱いにくそうな奴、なおさらだからな」
何があったのか、なんて絶っ対に聞く気はない。なんか重い話っぽいし、間違いなく暗い話だし。なんでこの忙しい時にそんなめんどくさい上に長くなりそうな話を聞いてやらなきゃいかんのだ。
ただ、まあ。その言葉の実感のこもった重みは、そこに込められた彼の本音は、確かに受け取った。背を向けたまま片手をあげ、大丈夫だとアピールする。1度も振り返ら

ないまま、たっと地面を蹴って駆けだした。
　普通に走るだけじゃ、もう間に合わないかもしれない。走りながら顔の前に片手を持ってきて拳を握り、ぐっとひと撫でするように横に動かす。ただそれだけで、全身に蛇が絡みつくように紫の痣が走る。視界がクリアになり、これまで目に入らなかった世界の隅々までもが目に飛び込んでくる。そしていつもの赤い制服を包むように、灰色の地に紫の筋模様が入ったフード付きローブが全身を包んでいた。少し手をやって視界にかかっていたフードの位置を調整すると、これまでとは比べ物にならないほどの速度で周りの景色が後ろにすっとんでいった。このスピードなら、恐らくラーイエロー寮までは2、3分で着けるはずだ。
『……なあ、マスター』
「何？」
　チャクチャルさんの声も、ダークシグナーの力を解放して一時的にその結びつきを強めたからかいつもより明瞭に聞こえる。だからこそ、その声に含まれたわずかな躊躇いにも気づくことができた。スピードは落とさないまま問いかけると、思い切ったように語りかけてくる。
『どうも今のマスターは、見ていて不安なんだ。ひとつ、私と約束してくれないか？』
「約束？」

たまたま木の上にいた、野生の猿と目が合った。こんなに校舎の近くまで来ていたところを見るとかなり人に慣れている、もしかすると野生に帰ったＳＡＬだったのかもしれない。もっともこちらにその確信が持てなかったように、あちらが僕のことを認識できたかは怪しいものだ。ほんの１瞬自分の目の前を駆け抜けていった、灰色と紫の風にしか見えなかったことだろう。

「約束、って？」

何かよほど切り出すのを躊躇うようなことなのか、少しの間沈黙が流れた。あまりの気まずさにもう１度聞き直そうかとさえ思ったところで、ようやく返事が返ってくる。

『先ほどの話がすべて真実だとして、というよりも、あの話は恐らく真実だろう』

「だろうね」

あっさり肯定した僕がよっぽど意外だったのか面食らった様子のチャクチャルさんに、思わず笑ってしまう。少し説明が足りなかったので、もう少し詳しく話すために自分の胸をポンと叩いて見せた。

「僕にはわかるよ。根拠もないし覚えてないけど、僕の中の何かが教えてくれる。あの話は本当だ、って」

『そうか』

また沈黙。いきなりネズミが１匹足元を横切ったため、スピードを落とさないまま踏

みつぶさないように軽くジャンプしてそれを避ける。すぐ着地してまた走り出したのを合図に、かつてないレベルで歯切れの悪いチャクチャルさんが再び口を開く。
『約束してもらいたいのは、マスターの想い人についてのことだ』
「……うん」
　ああ、やっぱりその話か。もうこれ以上避けては通れない、どこかで必ずしなくてはならなかった話だ。それでもやっぱり、触れて欲しくない話題だと思うのはわがままだろうか。
『こんな所で会話を誘導する意味も無し。私とマスターの仲だ、率直に言わせてもらうぞ。あの女、マスターに殺せるのか？』
「殺……！」
　稲石さんを看取った時から、すでにその覚悟はできていたはずなのに。情けないことに投げかけられた言葉の重みを受け止めることもできず、走る足がもつれる。地面が突然の勢いで迫ってきたかと思うと、受け身を取る暇もなくそこに顎から叩きつけられた。
「ぐっ……！」
　悲鳴を押し殺してすぐさま立ち上がり、ローブに付いた埃を払う。チャクチャルさんの声は冷たかったが、今の僕にはその冷たさの中に潜む作りもののような嘘くささも聞

き取れた。この神様は口こそ悪いけれど、どこか僕には甘い所もある。だからこそこんな、わざと突き放した言い回しをチョイスしたんだろう。

なんて頭ではわかっていても、やっぱり面と向かってド直球に聞かれるとガツンと来るものがある。

『冗談や笑い話では済みそうにないから、今のうちに確認させてもらう。実力が足りているかはともかく、マスター自身の覚悟の問題としてだ。あの女は恐らくダークネスにとっても最後の守り、切り札中の切り札。今後あの女と対峙してとどめを刺せる状況に陥った時、マスターにそれができるのか？』

「僕は……」

『地縛神たるこの私に命の尊厳などともっともらしく、そして反吐が出る言葉を口にする資格はない。あの女のような存在を果たして「生きている」と呼称することができるのか、などという話は哲学人にでも任せておけばいい。だが、これだけは私と約束してほしい。あの女に与えられた偽りの命を、マスターの手で終わらせると』

今度は、僕が無言になる番だった。その沈黙の隙間を、自嘲気味なチャクチャルさんの声が埋めていく。

『私を卑怯だと蔑むか？冷血と嘲るか？だが私も所詮、その程度の力しか持ち得ない』

卑怯？冷血？そんなこと、口が裂けても言えるわけがない。僕にはわかる。チャク

チャルさんがどんな気持ちで、この通告をしているのか。要するにチャクチャルさんは、やっぱり僕に対してどこまでも甘い。優しいんだ。

今チャクチャルさんは僕を追い詰めていると見せかけて、実際はその逆……僕に、逃げ道を作ろうとしている。もしここでこの約束に僕が頷けば、ほんのすぐ後に来たるべき彼女との勝負に僕が勝ったとして、その時彼女にとどめを刺すことになる最後の決断を『約束だから』というのを言い訳にして行えるだろう。さらにその後でいくらその決断を後悔したとしても、怒りの矛先は最初にこの約束を持ち出したチャクチャルさんに向けることができる。決着をつけなくてはいけない僕ではなく、たまたまそこにいただけのチャクチャルさんが。本来ならば僕が1人で背負うべきその重みを、全て肩代わりして背負おうというのだ。

目頭が熱くなり、にじみはじめた視界から溢れそうになるものを精神力だけで強引に押さえつける。チャクチャルさんの献身に対する感謝の念もあるが、それ以上に自分の情けなさが身に染みたからこそ溢れた涙だった。僕が背負うべき業を他人が背負うと申し出て、それを恥じるどころか歓迎までしている自分がいたからだ。

『マスター？』

突然泣きそうになっていた僕を案じてか、心配げに声をかけてくる。それがまた情けなくて、そしてありがたかった。深く、荒く呼吸しつつフードを目深にかぶり、固く閉

じた両目に力を込めてどうにか涙を振り切る。この優しさに身をゆだねる、それは許されないことだ。

……僕と、夢想。共にあの交通事故の生き残りで、ダークネスに人生を何もかも捻じ曲げられた者同士。にもかかわらず僕は『彼女』から再び人間としての生を与えられ、彼女はダークネスに『彼女』の無念を含めその全てを利用される手駒としての偽りの生を与えられて。

結局のところ僕ら2人の運命を分けたのは、たまたま僕だけが即死せず虫の息で生きていたというだけの単純な理由でしかない。彼女と僕の立ち位置は、そっくりそのまま真逆でも何もおかしくはなかった。

でも、だからこそ、だ。誰よりも河風夢想に近くて、誰よりも河風夢想から遠いところにいる。この話に幕を引けるのは、僕しかいない。僕の手で、全て終わらせる必要がある。それが僕のダークネスにできる精一杯の抵抗であり、『彼女』に向けられる最大限の手向けだ。そして、その責任は当然僕が負う。それが筋だ。

……なんて即答できたら、それはどれだけ立派なことだろう。未来を向いて前に進む、高潔で誇り高い覚悟だ。だけど僕は、どこまでいっても僕でしかなかった。そうするのが正しいはずなのに、自分のエゴのせいでこの期に及んでまだ迷う。そのくせくだらない意地ばかり張って、手を差し伸べてくれたチャクチャルさんの優しさに素直に甘

える事すらできないでいる。
「僕は……」
「あ、あそこだクロノス先生！」
「わかってるノーネ！シニョール清明、そこをどきなさい！」
　言いかけた言葉はしかし、突如聞こえてきたけたたましい排気音と聞き覚えのある２つの声のせいで中断された。なぜか見覚えのある、しかしどこで見たのか思い出せないおんぼろの軽トラがガタガタと危なっかしく揺れながらこちらに近づいてくる。明らかに止まりきれないであろうその勢いにさっと森の中に逃げ込むと、案の定その直前まで僕のいた場所を踏みつぶすようにしてどうにか、といった様子で停車した。開きっ放しの窓から、だいぶ久々に見た気がする親友の顔が飛び出した。
「無事だったか、清明！」
「十代！」
「と、止まったノーネ……」
「それにクロノス先生も……なんでここに？」
　運転席に突っ伏した、いかにも疲労困憊なクロノス先生をちらりと見る。ぐったりとしたままの先生に変わり、十代が笑いながら返す。
「どうもこうもないぜ。色々あって童実野町から戻ってきたら、お前と連絡が取れなく

なったって三沢が焦っててな。ちょうどクロノス先生がこの車でまだ避難できてない生徒がいないか見回りをしてたから、廃寮まで様子を見に行くところだったのさ」
「車はトメさんが食材運搬に使ってるのを借りたノーネ……ペペロンチーノ、まさかこんな危ない物に乗っていたとは夢にも思わなかったノーネ……」
　言われてよく見れば確かにこの軽トラは、トメさんがいつも使っていたものだ。よくエンストしては立ち往生して、道中押して動かすのを手伝った覚えがある。しょっちゅうエンストするだけあってかなり古い型みたいだし、そりゃあこんな森の中だと乗り心地は最悪だろう。
「あ、そうだ！ちょっと待ってろ、今三沢に連絡するからな」
　そう言って自分のＰＤＦを取り出し、少し画面をいじってからこちらに手渡してくる。コール音１回の後、液晶に親友の顔が浮かんだ。
『どうした、十代……いや、清明か!?』
「ハローハロー。悪かったね、後で話すけどこっちも色々あったのよこれが。でもほら、確かに賢者の石は採って来たよ」
　ポケットにねじ込んでおいた小包を引っ張り出し、画面の向こうからも見えるように顔の近くで軽く振ってみせる。画面越しでもわかるほどに安どの色がその表情をかすめたのを見計らって、また小包をポケットに戻す。

「で？これから僕は、どうすれば？」
『今から説明する。その前にまず確認だが、十代とクロノス先生も今そこにいるんだよな？』
「おう、俺たちもいるぜ」
『ならよし。まず、清明の持っている賢者の石を持って１度俺のところまで来てくれ。それが終わったら十代、お前はそのままアカデミアの正面入り口に攻撃を頼む。特に大きな空間の歪みが２カ所確認された、恐らく藤原優介はそちらに出てくるはずだ』
「藤原、優介……」
　その名を口にした瞬間、十代のデッキがかすかに光を放つ様子が見えた。彼が１枚引きぬいたそのデッキトップにあったカードは当然というかなんというか、Ｅ・ＨＥＲＯ　オネスティ・ネオス。傷つき力尽きたオネストの魂を託され新たな力を得た、もうひとつのネオスの姿だ。オネストはもともと藤原のカード、やはり主の名に反応したのだろう。
『そちらにはヨハンと……それから、さっきコロッセオから連絡があったんだが。どこで聞きつけたかは知らないが、どうも吹雪さんも単独でそちらに向かったらしい。あの付近ではミスターＴも存在が確認されている、下手をするともうすでに交戦している可能性もあるから、なるべく急いでくれ』

「吹雪さんが……わかったぜ」
『それから清明。お前にはこれから、もう1か所の大きな歪みが観測された場所に向かって欲しい。お前にはさっきも話したと思うが、ダークネスの出現位置は2つまで特定ができた。だが、どうしてもそこから先を1か所に絞り込む決め手が見つからなくてな。藤原優介が陽動だった場合、ダークネスがもう片方の座標からこの次元に現れる可能性も否定できない』
「了解。まさかとは思うけど、ダークネスが分身して2カ所からいっぺんに出てくる……なんてことはないよね？」
冗談めかして言いはしたが、あいにく誰も笑わなかった。当然だ。なにせ、相手は闇そのものなのだから。尖兵のミスターTだってコピペやクローンのレベルで増えるのだから、その親玉であるダークネスがそれぐらいのことやってのけないなんて保証はどこにもない。たちの悪い冗談どころか、普通に有り得る未来の仮定でしかない。
だいたい僕のせいで重く立ちこめてしまった沈黙を最初に振り払ったのは、三沢だった。
『……それで、清明。お前に行ってほしい地点なんだが、ずいぶんと半端な位置でな。本校からレッド寮に向かう道の、ちょうど中間地点あたり……と言えば、お前ならわかるな？』

ああ、と頷く。なにせ3年間ずっと通ってきた道だ、鮮明に頭に浮かぶ。それと同時に、三沢がそれを訝しむ気持ちもよくわかった。あの辺りは確か、本当に何の変哲もないただの道でしかなかったはず。なんでまた、ピンポイントでそんな場所を？

『その近くを抜けてコロッセオにたどり着いた生徒の証言を聞く限りでは、その近くにはミスターTも見当たらなかったらしい。先ほどはああ言いはしたが、正直なところ戦略上の重要度は正面入り口の方が上だと思う。だから悪いが、そっちにはお前1人で行ってもらいたい』

「わかったよ、こればっかりはしゃーないね」

『すまない。そしてクロノス先生ですが、すみませんが十代と入れ替わるかたちで俺をその車に乗せて発電施設まで連れて行ってください。賢者の石の力を借りて電気エネルギー、そして先ほどから何カ所かで行われているらしいデュエルによって発生して今もこの島を飛び交っているデュエルエナジーを増幅し、時間移動システムの仕上げにかかります』

「むむむ、責任重大なノーネ」

その口調は硬かった。でも、それも無理はない。なにせ今伝えられた三沢の作戦は何から何まで全部、この車がちゃんと動くことを前提として立てられている。成り行き上とはいえその運転手を務めることになったクロノス先生は、ある意味ではこのダークネ

ス撃退作戦の要だ。
　自分が何か下手をすれば、作戦全てが瓦解しかねない。そのプレッシャーがいかほどのものかは想像もつかないが、それでもそれを隠して極力普通に振る舞おうとするあたりはこのメンバー唯一の教師として、そして大人としての風格を感じさせる。
「じゃあこっちは任せてくれ、清明。必ず、後でまた会おうぜ」
「もちろん。賢者の石、確かに預けたからね」
　十代の差し出した右拳に、こちらも拳を軽く合わせる。すぐにその手を放し、軽トラの助手席へと再び乗り込んでいく。向こうは引き返せばいいとして、僕はどっちに行けばいい？ここからレッド寮と本校の間だと……この場所なら、来た道をまた引き返すことにはならずに済むだろう。方角を確かめてから僕も僕の戦いに向かおうとしたところで、背後から鋭い声が飛ぶ。
「シニョール清明！」
　声の主、クロノス先生がこちらを見ていた。再びエンジンが動き始めた軽トラの窓から顔を出し、真っ直ぐに語りかけてくる。
「私からあなたにかけられる言葉は、もはや1つだけでスーノ。私には今あなたが何に苦しんでいるのか、それはわかりません」
「先生……」

苦しんでいる、とは、よく言ったものだ。表に出したつもりはなかったけど、きっぱりとお見通しだったか。

「なのでこれは無責任な言葉かもしれませんが、それでも言わせてもらいます。必ず成すべきことを成し遂げて、皆で悔いなく卒業式を迎えるノーネ！」

「……はい！」

その言葉を最後に、狭い道でどうにかUターンを決めた軽トラがガタガタと揺れながら去っていく。大きく手を振ってそれを見送り、その姿が完全に見えなくなる前に自分から背を向けた。成すべきことを悔いなく、か。その言葉を何度か頭の中で反芻し、それから先ほどのチャクチャルさんの問いにまだ返事をしていなかったことを思い出した。僕の成すべきこと。悔いを残さないこと。皆で、卒業式を迎えること。皆で。

ふと、あるアイデアが頭の中に閃いた。いや、それはアイデアなんて呼ぶのもおこがましい。あまりにも現実とかけ離れた、綺麗事の理想だけを固めたかのように稚気じみた夢。だけどそれを、口にせずにはいられなかった。

「ねえ、チャクチャルさん。さっきの話だけど」

『ふむ』

こちらの声の調子から、早くも何かを察したらしい。何を言い出すのかというかすかな警戒と、それでも抑えきれないらしい好奇心を、その短い言葉の端々から感じる。そ

れには気づかないふりをして、なるべく何気ない調子で問いかけてみる。
「そもそも、本当にどうにもならないのかな。全部丸く収まるハッピーエンドは、もうありえないのかな」
『と、いうと？』
　これだけで多分、チャクチャルさんには僕の言いたいことが伝わっているはずだ。だけどあえて問い返してきたのは、それを僕自身の言葉として語ってみろというのだろう。だから僕も、思い切って言葉を続けた。本来固めるべき覚悟に比べるとあまりにも浅ましく身勝手で、だけど切実な小さな叫びだった。
「夢想のことは、とっくの昔にどうにかできるレベルを超えたのかもしれない。だけどそんな物騒な話より先に、本当に夢想をこっち側の世界に引き戻す方法はないのかな、って」
『助けたい、と？傲慢だな。少しでも自分の気に入らないことには必ず他に満足できる選択肢があって、その全てが自分の思い通りになると？そもそも当人の意思も考えずに自分のエゴだけで手を差し伸べることが救いになると？なあマスター、それは本気で思っているのか？』
　即座に投げ返された言葉は冷徹で、残酷で、だけど正しかった。夢想を倒すのではなく、助ける。単純な言葉だが、まさに言うは易しだ。２０年近く前の死人、ダークネス

の傀儡でしかない魂を今更、人間の世界に戻す？Ｂ区はそれを望んでいる、それは間違いない。だけど彼女は、本当にそれを望んでいるのだろうか。違うかもしれない。皆の言うとおり、彼女をこの運命から解放するために戦うことが最善の行動なのかもしれない。

……でも。自分を強いて口を歪め、顔だけでもぐっと笑ってみせる。無理を通しさえすれば、道理は向こうから引っ込むのだ。

「僕を誰だと思ってるのさ。砂粒１つから水１滴まで、世界は全部このダークシグナー様の所有物なんだよ？僕を中心に宇宙は動いてるんだ、僕のやることは無条件で正しいに決まってるよ」

大それた言葉だと思う。だけど、これでいい。

要するにこれは、逆転の発想だ。世界を何もかも思い通りに動かしたいのなら、それができる存在になるしかない。逆に言えば僕こそがその存在だと言い張って周りがそれを信じれば、そんな僕の思い通りに世界の方が動く。世界を思い通りにできるから神なのではなく、神だからこそ世界はその意思に従う。そして僕はダークシグナー、いわば地縛神の神官だ。彼女の、夢想のためならば、どんな道理でもひっくり返して見せよう。僕にはそれだけの力があり、それだけの仲間がいる。多分。

そんな宣言にさすがのチャクチャルさんも二の句が継げず、少しの間黙りこむ。若干

不安になってきたタイミングで、低く重々しい、抑えきれなくなったかのような笑い声が聞こえてきた。

『ククク……ハッハッハー！いいだろうマスター、その意気は気にいったぞ。そしてよくぞ言った、その根拠なき自信と果てなき欲望こそが人間で、それこそがダークシグナーだ。愚かで、傲慢で、救いようもなくて、そしてだからこそ素晴らしい。それこそが生というものだ』

言葉の端々から、チャクチャルさんの若干の驚きが含まれた歓喜の鼓動が伝わってくる。その一方で僕自身も、今の言葉を口にしたことで何かが吹っ切れたような気分を味わっていた。これまで自分自身を縛り付けていた何かが、すっと消えさったような。今ならば何でもできそうな、初めてダークシグナーになったあの時よりも遥かに上の高揚感が無限に溢れ出て、それが体の隅々にまで瞬時に行き渡る。だからだろうか、こんな突拍子もない、たとえ思いついたとしても検討することすら諦めるような案が閃いたのは。

「例えば、だけどさ。僕が夢想に勝てば、ダークネスにとって夢想はもう用済みになるわけだよね」

『その可能性は高いな。そもそもあの女を手駒に置いたのも、マスターの……引いてはマスターの中に遺されたその魂の名残を警戒してのことだろう。たとえ能力が劣ろう

と、イレギュラー要素の無いミスターＴだけで基本的な用は足りるからな。それでは不十分だと判断したからこそのあの女……となると、その仕事すら果たせない駒をわざわざ手元に置き続ける意味はないはずだ』

「そうすると、どうなるの？消えちゃうとか？」

『最終的にはそうなるだろうな。だが仮に私が急にマスターとの繋がりを断ちきったとしても、マスターの体が即座に灰になるわけではない。今のマスターの身体には私が供給し続けるものとは別に少しづつ備蓄されてきた私のエネルギーが溜まっていて、それを使うことで時間的余裕が生まれるからだ。ダークネス式の蘇生は私の行えるものとは厳密には異なるだろうが、おおむねそこは同じはずだ』

「……っていうことは、さ」

考えをまとめながら、ゆっくりと口にする。無論、目の前の差し迫った危機を忘れたわけではない。だけどこの点についてだけは、どうしても今のうちに考えをまとめておきたかった。

「勝負が付いたらどっちにせよダークネスは夢想を切り捨てて、そこからエネルギーを使い果たして消えちゃうまでの間、夢想は完全に自由になれるってこと？ねえチャクチャルさん、そこを狙い澄まして無理にでも新しくエネルギーを流し込むって……できる？」

『マスターが言いたいのは、要するに接ぎ木だな？根、つまりダークネスからの供給が止まって枯れるまでの間に私に命を繋ぎ直して、そのまま眷属にしろと？』

「お願い、チャクチャルさん」

頷いた。しょせん素人の浅知恵ではあるが、今までの話を聞く限りではどうにかなりそうな気もする。夢想が解き放たれたその瞬間に僕の命を維持し続けるこの地縛神の力を代わりのエネルギー源とすれば、夢想が消えることもなくなる……はずだ。推測に推測を重ねたか細い光でしかないが、それでも唯一の光明だ。

『……可能性が無いわけではないが、それでもだいぶ厳しいだろう。前例も無論、皆無だ。そもそも、ダークネスがあの女に取った蘇生が本当に私のそれと同じものか、その部分から既に推測でしかない』

ここで一度言葉を切る。再び発せられた言葉には、心底愉快そうな響きがこもっていた。

『だが、マスターがそう願うのなら、きっとできるのだろう』

「それじゃあ！」

『賭けてみるのも、そう悪くないだろう……次元を越えた異邦人に、そして地縛神たる私に。過去に2度も死の因果を超え、本来あるべき現世の理から逃れて現世に留まり続けたマスターの可能性にな。それに私自身、そんなマスターの果てなき欲望の行きつく先

を見てみたくもなったからな』
「ありが……」
『ただし。そもそもマスターに勝ってもらわなければ、この話は全部白紙に戻るからな。それも、マスター自身がそのとどめを刺すんだ。マスター自身の手で勝敗を付けることによりマスターとあの女の間に簡易的な繋がりを作り、それを頼りに私が……まあ要するに極端な話、デッキレスなどで決着をつけられると私には手が出せないからな』
　感謝の言葉を遮り、間髪入れずに釘を刺すチャクチャルさん。とはいえ夢想の【ワイト】も、僕の壊獣やグレイドルといった面々も、そんな搦め手とは縁がない。盤面を支配して、殴る。それが1点集中突破スタイルか、相手フィールドまでも巻き込んでのコントロール型かの違いだけだ。一応覚えてはおくけれど。
「わかった。夢想にはずっと負けっぱなしだったけど、3年分の借りはまとめて返すさ……次は、次だけは、僕が勝つ。勝ってみせる。そういうことでしょ、チャクチャルさん？」
『ならばよし。その意気だ、マスター』
　とんだ道草になってしまったが、そのおかげで得られたものは大きい。諦めさえしなければ、必ず打開策は見えてくる。今はまだか細い糸のような不確かなものでしかないが、その先端には僕が望む未来がくくりつけられていると信じよう。

足を上げ、大地を踏みしめて1歩を踏み出した。さあ、待ってろダークネス。長い準備はようやく終わり、ここからはついにこっちのターン。反撃開始と洒落込もうじゃないか。

ターン１２５　鉄砲水と小さな挽歌

『む？……出遅れたなマスター、来客だ』
「ああうん、わかってるよもう！この忙しい時に……！」
　いざ反撃だ、と気合を入れ直して１歩踏み出すか踏み出さないかのうちに、突然それはやってきた。周囲の木陰に、覆い隠された闇の向こう側に、第三者の気配がある。こんな芸当ができるのは、僕の知る範囲では奴しかいない。
「とっとと出て来い、ミスターＴ！」
「「「よかろう」」」
「あ、あら……？」
　先手を打って声を張ったところまではよかったが、まさかその返事が真正面だけでなく四方八方から聞こえてくるとは思わなかった。ざっざっざっと足音を立て、僕の周りをぐるりと取り囲むようにコピペ集団がわらわらと湧き上がる。もっともミスターＴは１人いたら３０人はその辺に潜んでいてもおかしくない相手、１人目を見つけた段階でこうなることぐらい覚悟しておくべきだったのだ。
「まずかった……かな？」

『かもしれんな』

冷や汗がひとすじ、頬を伝う。頭ではわかっていたつもりだったが、チャクチャルさんとの会話に少しばかり時間をかけ過ぎた。時間は、時間はどれだけ残っている？あまりないだろう。だからといって助けを呼ぼうにもＰＤＦはスクラップ、投降するふりをして隙をみて逃げ出す……ことも難しいだろう。精霊を実体化させての召喚、それも大型モンスターを呼んで物理的に蹴散らす手もないではないが、当然それはミスターＴ側も真っ先に警戒する部分のはずだ。僕としても、どこまで精神力が削られるかわかったものじゃないその方法は本当にギリギリまで使いたくはない。なにせこの世界は、精霊が元々実体を持つ覇王の異世界や砂漠の異世界とはわけが違うのだ。もっと訓練すれば消費を抑えての使役も可能だろうけど、少なくとも今の僕には夢のまた夢だ。そしてこうしている間にも１人、また１人と包囲網を作るミスターＴは増えていく。

「こうなったら……！」

やぶれかぶれだろうがなんだろうが、結局これしかない。腕輪から水妖式デュエルディスクを展開、即座に構えて周りをじろりと睨みつける。闇のゲームもそれはそれで体力の消耗が激しいけれど、いつまで続けなければならないかもわからない精霊召喚よりはまだマシだ。とはいえいつかはそれも視野に入れなければならないだろうけど、とりあえずこれを何体か間引きしてからでないと。

『マスター、まさか……』
「しっかりついてきてよ、チャクチャルさん？さあ、消えたい奴からかかってこい！」
『ああ、やはり力技か。仕方ない、付き合おう』
威勢よく啖呵を切り、構えたまま周囲を威嚇する。無謀な挑戦をあざ笑うかのようにミスターＴたちの冷酷な笑みが濃くなり、一周即発の雰囲気が辺りに充満する。
だがそれが爆発する寸前、突然事態が動いた。
「うおおおおお！邪魔だああ、どけどけどけえっ！」
僕よりも数段ヤケクソな声が森に響き渡り、それに遅れて何人、いや何十人単位の足音がこちらへ近づいてくる。こちらを見ていたミスターＴの視線が一斉にそちらを向き、僕も背を伸ばして覗き込む。アメフトやラグビーばりのタックルで包囲陣をこじ開け、見覚えのある男たちがミスターＴから僕を守るかのように人の壁を作る。
「なんとか間に合ったぜ……遠からん者は音に聞け、近くば寄って目にも見よってんだ！デュエルアカデミアは北の果て、無敵のノース校番格、鎧田翼！本校だけで何おっぱじめてやがる、俺らも当然混ぜてもらうからな！」
「鎧田？！」
あまりといえばあまりに唐突な乱入に呆気にとられてその名を呼ぶと、それに応えるかのように人壁の一角から身の丈２メートル近い巨漢が低い声で宣言した。

「……サンダー四天王が十、次鋒の天田、いざ参る。先攻は貰った、儀式の下準備を発動。この効果によりデッキから儀式モンスターのハングリーバーガー。さらにその名が記された儀式魔法、ハンバーガーのレシピを手札に加える」

「それに天田……サンダー四天王まで……」

ノース校のサンダー四天王。元々はまだ僕らが1年の際、本校を飛び出した万丈目が流れ着いたノース校でお山の大将となって勝負を挑んできたときのメンバーだ。毎年毎年、特に僕とこの鎧田との間にはなにかと腐れ縁が続いていたが、それもつい先日僕の勝ち越しという結果で幕を閉じた。

……あれ以来この男はまたノース校に戻り、卒業後のプロ入りもすでに決まっていたはずだ。それがなぜこの本校に、それも仲間のノース校生まで引き連れて当たり前のような顔をして来ている?まさかこれもミスターTの変装か、とも疑りかけたところで、こちらの心を読んだかのようにタイミングよくミスターTと睨みあっていた鎧田が振り返る。

「なにぼさっとしてやがる。せっかくノース校から俺たちがはるばる来てやったんだぞ?事情はだいたいわかってるから、感謝しながら早く行け!……テメエの相手は俺たちだぜ、グラサンのおっさんよお。フィールド魔法、アンデットワールドを発動!」

「でも、どうしてここに?」

もちろんこんなことを聞く暇がないのは百も承知だ。だけど芽生えた不信感と相まって、どうしても聞かずにはいられなかった。

「なんだ、そんなことか。元々卒業前にもう1回、俺たちのサンダーにサプライズで会いに行こうって話は前からあったんだけどな。なんでも、最初に本校とデュエル大会した時にお前たちの側にいた……三沢とか言ったか?そいつの知り合いだとかいう筋肉ムキムキでバインバインのねーちゃんが何時間か前にノース校まで来たんだよ。だいぶ焦ってるみたいだから話を聞いてやったら、あのサンダーがいるこの本校で今、世界規模のとんでもないことが起きてるっていうじゃねえか。ちょうど船の準備もできてたわけだし、サンダーのためならってんで血の気の多い奴らを引き連れて大慌てで海を渡ってきたのさ。ねーちゃんにも一緒に行こうぜって言ったんだけど、また別の所にも顔を出さなきゃいけないっていうからな」

筋肉でバインバインで三沢の知り合い……間違いない、アマゾネスのタニヤだ。覇王の異世界からまたこっちに来ていたのは三沢だけなんだとなんとなく思っていたけど、どうやら彼女は彼女でこちらの世界で動いていたらしい。そしてその救援要請の成果が、このドンピシャのタイミングで現れたという訳か。

もちろん、この話が全部ミスターTのひねり出した真っ赤な嘘という可能性も否定はできない。だが、無駄に用心深い奴のことだ。もし作り話で油断を誘うならばこんなあ

りえるかありえないかのギリギリの線を攻めてくるよりも、もっとそれらしい嘘を考え付くだろう。

迷ったのは、ほんの1瞬だった。

「……この場は任せたからね、ノース校！」

「おう、とっとと行って来い！いいなお前ら、本校の奴らなんかに後れを取るんじゃねえぞ！」

最後に一声だけ残して身を翻し、鎧田の威勢のいい声とそれに応える鬨の声に背中を押されるようにして走る。すぐさまそれに気づいたミスターT軍団が手を伸ばして捕まえようとしてきたが、そのたびにそれをノース校生が身を挺して作り上げた人の壁が押し返しては片っ端からデュエルでその場に釘付けにしていった。

でもミスターTはいけ好かないが、気に食わないことに手ごわい相手だ。最初こそ不意を突かれていただろうが、その動揺も長くは持ちはしない。歯を食いしばって足を動かしどうにか包囲網を抜けようとするも、どうやら十代の側に藤原優介がいる分ミスターTはこちらに分身を裂いていたらしい。まるで途切れることなく同じ顔が湧き出してくる状態から抜けられずに苦戦するうち、次第に僕を守ってくれていたノース校の人員も1人また1人と数が減っていく。

「こん……のっ！」

このままではジリ貧なのは目に見えている。誰も口には出さないが、徐々に焦りの空気が色濃くなってくる。

だが、その時だった。その場にいたミスターTを何体か吹き飛ばして突然、何の前触れもなく空間に闇の穴が開いた。そしてその奥底の闇の中から響き渡るのは、ゆっくりとした愉悦の笑い声。初めのうち遠く小さく聞こえていたその声も、謎の穴を通って急速にこちらに近づいてきているらしく次第に大きくなってきた。

そして僕は、この声の主を知っている。

「この声って、まさか……！」

「そう、まさかだ。まさか、君にまた会えるとはね。それも太古よりうろうろと目障りだった憎き闇、そのおまけまで引き連れてきてくれるとは僥倖だ。トゥルーマンよ、この私の名をよもや忘れたとは言うまいな？だが悪魔は礼節を重んじる、一応の礼儀として名乗らせてもらおう。我が名はグラファ、またの名を暗黒界の龍神。次元を越えられる力は、君の専売特許ではないのだよ」

「グラファ！」

覇王の異世界における最大勢力、暗黒界の中でも最高の力を持ちながらもユベル事件の一環でその力を失い、雌伏の時を過ごしていた龍神。

あの時僕がこの悪魔に出会った時間はほんのわずかでしかなかったけれど、それだけ

でもわかるいかにも悪魔らしい狡猾で抜け目ない性格の持ち主だ。個人的には決して嫌いな性格ではないけれど、間違っても敵に回したくはなく、かといって味方にしてもいいように利用されることが目に見えている、どちらに転んでもこちらにほとんど利が無いという大変やりづらい相手だ。

そのグラファが、あの時変身していたのと同じボロボロの老人姿で結界通路の上部から頭をひょいと出す。真下にいた僕を見つけると悪魔というより小悪魔的な笑みを浮かべ、そのままこちらを見下ろして気安く声をかけてきた。

「よもやまた会うことに、それも君の世界で再会できるとはね。君の頭に浮かんでいるであろう当然の疑問には、聞かれる前に返答しておこう。覇王が消えてその残党も散った後、再びあの世界は私を首領として暗黒界がその大部分を統治することになったのだが、覇王城の再建も終わらぬうちにあるアマゾネスが謁見を申し出てきてね。ここまで言えば、察しはつくだろう?それに暗黒の闇を住処とする我々にとっても、ダークネスの手下はいろいろと目障りな存在なのだよ。つまりあの時と同じく、互いの利害が一致したわけだ。ここでトゥルーマンの存在を消せるのであれば、それに越したことはない」

三沢にタニヤと僕が再会したのはグラファと出会う前だから、本来ならば僕とグラファの会話を知るはずもない彼女がグラファに援軍を頼んだという点には時系列的に

違和感が生じる。だけど、なにせこの悪魔のことだ。僕を見出した自分の眼力を証明し喧伝するため、あの戦いの話を広めていてもおかしくない。

そうこうしているうちにその全身を結界通路から現して着地したグラファがその腕を空中で一振りすると、ただそれだけで巻きおこった闇の風がひしめいているミスターTのうち何人かをまとめて吹き飛ばし、その体が闇を纏う無数のカードになっては崩れていく。

「さあ、行きたまえ。これは君に対しての貸し1つとしておこう」

「ありが……」

『待て、ストップだマスター。そこは私が言うとおりに返しておくといい。いいか？まずこう言うんだ――――――』

「え、ええと？『とんでもないね、グラファ。僕からそっちへの貸しは2つ、これでようやくトントンさ。なんたって僕は覇王を倒しただけじゃない、あんたに水だって1杯恵んでやったんだよ？』……えっと、これでいい？」

『悪く思うな、龍神よ。悪魔の甘言……まあ仕事熱心なのは結構だが、私のマスターに対して勝手に悪魔が貸しを作られては困るのでな』

「そうかい？残念だよ、ずいぶんと優秀な参謀が付いているじゃないか」

目の前ではばったばったとミスターTが薙ぎ倒されていくのと同時進行で、うちの

地縛神(ブレイン)とどんな時でも狡猾な悪魔が僕を挟んで高度な舌戦を繰り広げる。
だがそんな一方的な光景を目の当たりにしても残るミスターTは表情1つ変えず、残った者どうしで互いの顔すら見合わせない不気味な意見交換をする……いや、こいつらがすべて同じミスターTという存在であることを考えると、むしろ独り言と言った方が正確なんだろうか。そのサングラスの奥の視線は例外なく、数人単位で自らを消し飛ばしていくグラファではなく僕の元へ注がれていた。
「これもまたイレギュラー、存在してはならない異物か」
「やはりあの男、あまりにも危険」
「真実が、さらに強く歪みつつある」
「なれば排除するしかあるまい」
相も変わらず何の話をしているのかはわからない、でも僕にとって悪い話なことだけはよく分かる。そして思わぬところで利害が一致して加勢に来てくれたグラファという存在にも、ミスターTは急速に適応しつつある。
まだ、足りない。この状況を覆す、なにか強烈で鮮烈なもうひと押しが。となると、やはり精霊召喚しかないのだろうか。今度こそ、僕も覚悟を決めるべきなのだろうか。さっき鎧田の登場により腕輪に戻しておいたデュエルディスクに目を落としたまさにその瞬間、地面が大きく揺れた。地震ではない。なにかもっと単純で、単発的な振動だ。

まるで、恐ろしく巨大でかつそれにふさわしい質量を供えたものが、大地を揺るがして動き出したかのような。
「手札の白夜のグラディウスを自身の効果で……どわっととと!?なんだ、噴火か!?」
「……俺のハングリーバーガーによって戦闘ダメージを受けたな?ならばこの瞬間、儀式素材となった儀式魔人プレコグスターの効果が発動する。さあ、手札を1枚捨ててもらおうか。それと落ち着け鎧田、それとも違うようだ」
　天田がデュエルの腕を止め、島の中央に位置する火山を仰ぐ。雲に覆われた暗い夜空の中で、僕らにとっては見慣れた火山は沈黙を保っていた。そうこうしている間に、またしても大地がどうん、と揺れる。だが、今度はそれだけではすまなかった。グラファが明後日の方向を見つめ、むう、と唸る。
「これはまた、大物だな」
　その言葉の真意を問い返す暇は、誰にもなかった。間髪入れず次に訪れたのは振動だけではなく、視界を埋め尽くすような巨大な拳……そう、拳だ。魔法カードの方の地砕きさながらに叩き込まれた巨大で青い筋肉質な右腕が、大量のミスターTだけを正確に巻き込んで衝撃波とクレーターを生み出した。
「魔技、天界蹂躙拳。影なるものよ、闇に沈み魔に呑まれるがよい」
　この見覚えのある巨大な拳。そして上空から重々しく聞こえてくる、相も変らぬ中二

病が炸裂したようなもったいぶった言い回し。忘れられるわけがない、僕はこの持ち主を知っている。世界を揺るがす三幻魔の一角にして、その最強との呼び声高き悪魔の皇。

「……ラビエル！」

「久しいな。だが、もはや我々に言葉は不要。道中の障害は排除しておこう、成すべきことを成し遂げに行くがよい」

三幻魔は砂漠の異世界でユベルが封印を解いて叩き起こしたのを追い返したのち、再びユベルが回収して……その後ずっと、行方不明のままになっていたはずだ。再封印されたわけではないことはこっちの世界に帰ってきてから1度見に行ったから確認済みだが、なぜこのタイミングでこの場所に？

『残念だが、私も何も知らないぞ。とはいえ、今は奴の言葉に理があることも認めねばなるまい』

聞きたいことは山ほどあるが、確かにそれは後でもできる。今やるべきは別にある、か。ラビエルは恐ろしい悪魔で、人類の脅威、三幻魔……でも、僕はそんなラビエルと2度もデュエルをしてきた。まるで少し前の十代みたいな物言いになってしまうが、デュエルを通じて向かい合うことで、敵味方を超越して分かり合えた部分が僕らの間には確かにある。だから、僕にはわかる。彼は少なくとも今この瞬間だけは間違いなく、

僕の味方だ。共に戦ってくれる、心強い仲間だ。
　再び目の前を巨大な拳、天界蹂躙拳が振り下ろされる。その着弾の衝撃を心地よく体全体で感じながら、ズタズタになった包囲網の中でも特に薄い場所に目をやる。おそらく、これが最大にして最後のチャンスだろう。いまだ戦っている富野、グラファ、そしてラビエルの顔を順番に見渡して、別れの挨拶代わりにすっと片腕を上げる。それを最後に、僕は戦場から脱出した。
「やっぱりここにいたんですね、先輩」
「やっほー清明ちゃん、来ちゃった。てへっ！」
　それを見計らっていたかのように頭上から聞きなれた女性の声がして、ばっと上を見上げる。真上の木の枝に乗ってバランスの悪さなどまるで気にしていないかのようにこちらを見下ろす、くの一姉妹がひらひらと手を振っているのと目が合った。
「葵ちゃん、明菜さんも」
「先輩のいるところには、いつだって人が集まりますからね。騒ぎを探せば一発ですよ」
「うん、それも清明ちゃんの魅力だとお姉さん思うけどね！……さて、葵ちゃん」
「わかってます、姉上。今回私がコロッセオを抜けて先輩を探していたのには、少し訳がありまして」
「お姉ちゃんは付添いだよー。また遊びに来たらなにかおかしな空気だったからね、大

事な大事な葵ちゃんは、いざとなったら私が守るんだから」
「姉上ちょっと黙っててください、話が進みません。実は先ほど電話を頂きまして、先輩に向けて伝言を頼まれたんですよ。連絡しようと思ったけれど、ＰＤＦが音信不通になっているから、と」
そう言ってひょいっとそれまで乗っていた木の枝から飛び降り、数メートル近い落下の勢いを膝だけで完璧に殺し無音で着地する葵ちゃん。明菜さんもそれに続き飛び降りたがこちらは着地の際、明らかに葵ちゃんより無造作な動きで飛び降りたにも関わらず無音どころか周りの空気すらもピクリとも動かなかった。といってもこれは葵ちゃんの技量が未熟なのではなく、この人が規格外なだけだ。
「伝言？誰から？」
「河風先輩からです。『場所はわかるよね、清明？３年前、私が初めて清明に話しかけたところ。待ってるからね？ってさ』だ、そうですが」
「夢想が……」
僕を待っている。つまりはまあ、そういうことなんだろう。もう今度こそ先送りは通用しない、正真正銘の決着をつけるべき時だ。ただその事実を突きつけられても、落ち着きこそすれ驚きはしなかった。正直、心のどこかでそんな気はしていたからだろう。
ダークネスの侵略とこちらの抵抗が始まってから、不自然なまでに誰の前にも姿を現

さなかった夢想。そして記憶を取り戻した稲石さん……夢想の片割れ。極めつけは二手に分かれて来いと言わんばかりの、2カ所あったダークネス出現ポイント候補。ここまであからさまにヒントは出ていたのだから、いくら僕でもさすがに察するというものだ。

黙りこくった僕を見かねてか、明菜さんが僕の後ろに回り背中をポン、と叩く。

「夢想ちゃんってこの前会った子だよね？なになに清明ちゃん、告白？告白やっちゃうの？」

「皆が皆、姉上みたいに年柄年中頭の中お花畑だと思わないでくださいね？あえて深くは聞きませんし、事情はやはり分からないままですが、先ほども言った通り私は先輩の判断を信じます」

フリーダムな明菜さんの言動についに頭痛でも起こしたのか、心底渋い顔でこめかみを指で押さえながらもそれをたしなめる葵ちゃん。心から力づけようとしてくれている彼女の言葉と明菜さんの底抜けの明るさに、これから先起こるであろう避けられない戦いに対してもほんの少し救われた気分になる。

「ありがと。じゃ、ちょっと行ってくるよ」

「ええ。コロッセオでは今、万丈目先輩と天上院先輩が中心となって皆さんを纏め上げています。なので私と……この呼んでもいないのにやってきた姉上しか自由に動けま

せんでしたが、それでも皆さん先輩については口を揃えて言っていましたよ。必ず、戻って来いと」
「……わかってる。夢想も連れてそっちに帰るよ。必ずね」
「追手は私たちにお任せください。これより先輩の元へは、1歩たりとも進ませません」
「私も手伝うねーっ！」
そう真剣な目で告げてデュエルディスクを構える姉妹の視線の先には、今まさに闇の中からその姿を現そうとするミスターTの姿があった。鎧田たちが何十人単位で食い止めてくれているのにまだ分身する余力があるとは、つくづくとんでもない奴だ。それとも、それだけ向こうも必死なのか。
この2人の実力は折り紙つきだが、それでもたった2人でミスターTを相手するなんて危険過ぎると言わざるを得ない。でも、この目になった葵ちゃんがてこでも自分の意見を曲げたりしないことも僕はよく知っている。議論するだけ時間の無駄だし、これ以上夢想を待たせるわけにもいかないだろう。そのまま2人に背を向けたところで、葵ちゃんがポツリと呟いた。
「……それと、これも先ほど言いましたが。先輩、ご武運を」
「そっちもね」
それで、今度こそ最後だった。後ろから聞こえはじめた戦闘音がやがて遠ざかるにつ

れ、次第に聞こえなくなっていく。一時の静寂に包まれながら、あの時と同じだと振り返る。入学式の夜、僕が夢想と初めて出会った日。あの時も彼女は、こうやって夜道を歩いていた僕に向こうから声をかけてきたんだ。あの時は、まだこの学園生活がどんな波乱に満ちたものになるのかなんてことを知る由もなくって。

　でも、おかげでこの３年間はまるで退屈しなかった。たくさんの仲間がいて、数多くのライバルがいて、果てしない敵がいて……。

「でもそれよりも何よりもここには君が、夢想がずっといたんだよ。月が綺麗ですね……なんて、そんな天気でもないけどさ」

　月明かりは分厚い雲のはるか上に押しのけられ、地表には街灯１つ点いていない暗いでこぼこ道。それでもそんな暗闇の中で、彼女の横顔は何よりも輝いて見えた。

　何を見るでもなくぼんやりと視線を宙に彷徨わせていた彼女が、僕が声をかけたことでようやく気が付いたようにこちらを向く。形のいい眉に、すっきりとした鼻。ふっくらとした瑞々しい唇に、彼女のトレードマークともいえる肩まで伸びた明るい青髪。綺麗だ、と思う。月並みで陳腐な言葉ではあるけれど、この３年間で彼女と顔を合わせる度に、ずっと感じてきたことだ。この思いが揺らいだことは、１度もない。

「死んでもいいわ……なんて返せたらいいのだけれど。あいにく私の生は、もうとっくに終わっていたの」

ふっと皮肉気に、だけどそれ以上に寂しげな笑みを浮かべて返す夢想。その様子にほんのかすかな違和感を抱き、すぐその正体に思い当たる。彼女の特徴でもあり、その身を縛り付けていたダークネスの呪いでもある伝聞調の語尾。それが、きれいさっぱり消えていたのだ。探るような視線の意味に気づいたのか、彼女が今度は屈託のない笑みを浮かべる。

「ああ、これ？稲石さん……つまり、あれもある意味では私だけど。あの人だって記憶さえ取り戻せば、ダークネスの力を取り込んでスターヴ・ヴェノムをグリーディー・ヴェノムという真の姿に変化させることができた。なら、私がいつまでもダークネスの支配に甘んじる道理なんてないでしょう？」

なんで彼女があの廃寮での戦いを知っているのか、なんて聞くのは野暮だろう。彼女とあの人はどこまでも同一人物に近い存在、それぐらいの情報は共有していてもおかしくない。

そしてそれよりも、今の話には重要な情報が含まれている。

「じゃあ今、夢想は自由なの？ダークネスの支配から抜け出して……」

もしかしたら、戦わなくてもいいかもしれない。だがそんな淡い期待を打ち砕くようにびしっと1本突き出した指を自らの唇に当て、静かにとジェスチャーで示す夢想。その様子に気圧されて僕の言葉は尻すぼみに消えていき、入れ替わるように彼女が口ずさ

む。

「……私が取り戻したのは清明のために命を投げ打った『彼女』の記憶、そして自分の言葉と名前、それだけ。ダークネスの力が私の偽りの命の全てだし、私はそれに抗えない、それは今も変わりない。私は直接ダークネスに刃向えないから、代わりにラビエルを探し出してそっちに行ってもらったの」

「ラビエルが……」

あの幻魔は僕に、なんと言っていたっけ。成すべきことを成し遂げに、か。もしかしたら奴は、こうなることがわかっていたのかもしれない。

だけどそのことについては口に出さず、代わりにもう1つの気になった点を問い返した。

「名前？」

「そう、名前。河風夢想、なんて名前は、その字の示す通り夢でしかない。ようやく取り戻した、私の本当の名前は――――河風現（うつつ）。できることなら、清明にだけは私の本当の名前で。現って、そう呼んでもらいたいかな」

河風現。それが彼女の名前。稲石さんの笑顔が、ちらりと胸をよぎった。あの人も最後の最後まで、僕に本名を明かさなかった。これは、あの人の名前でもあったのだろうか。

「河風……現」
そう呟くと、彼女の笑顔が満足げで、だけどどこか儚いものに変わる。
「ありがとう、そう呼んでくれて。私のことを、私だけの名前で呼んでくれて。ねえ、清明。最後にたった1つだけ、聞かせてもらってもいいかな」
「……」
最後。それはつまり夢想との……いや、現との戦いの時が着実に迫ってきていることを示していた。僕が無言で頷くと、彼女は一度息を吸った。そしておもむろに意を決したように、真剣な目でまた口を開く。
「清明。あなたも、私と同じ側に来てくれない？世界も何もかも全部捨てて、ずっとずっと私と一緒にいてくれないかな……なんて頼んだら、あなたはどうする？」
「僕は」
この時、はっきりと感じたことが1つある。たとえ僕がこの場を生き延びて１００年生きたとしても、僕はこのまま一生この瞬間のことを後悔するし、この時の自分を許すことはない。おそらく、きっと、だろう、だなんて曖昧な言葉ではなく、絶対にそうだ。じゃあこの問いにはなんて答えればいいのか、そもそも答えなんてものがある問いなのか。
そんなことはどうだっていい。この時、現が全てを賭けて僕と真剣に向き合っていた

この瞬間。彼女の問いかけに、僕は即答することができなかった。彼女とそれ以外の全てを天秤に載せ、どちらかを選ぶことが咄嗟にできなかった。そんな選択はしない、どちらも手に入れてみせる……そう啖呵を切ることすら、この時僕には思いつけなかった。

彼女にとってみれば、ここで言葉に詰まられるぐらいならばまだ断られた方が良かっただろう。僕が断りさえすれば、まだ割り切って戦うことができるはずだ。それで彼女の心が少しでも楽になることに気づいていたならば、僕は喜んでその選択肢を選べただろう。逆に、彼女の誘いに乗った場合。それはそれで、この先一生後悔を抱えたまま生きていくことにはなるだろう。それでも彼女だけはそこにいて、何もかもを捨てた僕の罪を2人で分かち合ってくれたはずだ。

「僕は……」

だけど、僕はこの時。どちらも選ぶことができず、第3の選択肢を示すこともできず、ただ言葉に詰まってしまった。無限にも思えるほんの数秒が過ぎ、ふっと現が笑う。その笑顔はこれまで見てきた彼女の笑顔の中では一番に寂しそうで、その諦念が含まれて……違う。僕が見たかった彼女の顔は、そんなものじゃない。僕は、そんな顔を彼女にさせたくなんて断じてない。

だけど、時間は決して巻き戻らない。ただ後悔だけをあとに残し、彼女の優しさがそ

の隙間を埋める。
「……ううん、ごめんね、清明。変なこと聞いちゃって」
違う。謝るのは僕の方だ。誰よりも答えを欲しがっていた彼女に唯一答えを示せた僕が、その程度のことすら果たせなかった。全部僕のせいだ。そんな優しさをくれるぐらいなら、怒ってくれた方がよほどマシだ。
だからもう、そんな顔しないでよ。
「じゃあ、始めようか。私とあなたの、最後のデュエルを」

ターン１２６　遊野清明と河風現

「先攻は……ああ、私じゃないか。なら、お先にどうぞ」

可愛らしく小首を傾げ、デュエルディスクが自動的に決定した順番を確認する夢想……いや、現（うつつ）。１撃が重い上に止めづらい彼女を相手にする際先攻は遠慮願いたいが、なってしまったものは仕方がない。もっとも夢想から現へと名を変えた、というよりも真の名を名乗るようになったことで、デッキまで変えてきていてもおかしくはないか。

それに……初期手札５枚を見て、初動を考える。それに、これならそう悪い手札でもない。とはいえ、いくらそうやって自分を奮い立たせてみても、緊張のあまり喉が渇いているのはどうしようもない。それでも努めてタフに笑い、いつものセリフを吐いた。

「じゃあ、デュエルと洒落込もうか」

人間というのは本当に単純なものだ。僕がまだ人間の範疇にいるのかどうかはさておき、決まったタイミングで決まった動きをする、あるいはお決まりの言葉を口にする。それをルーチンワークの一環として組み込む、ただそれだけで、どれだけひどい精神状態だろうとも少しはマシな気分になれる。スイッチが入る、と言い換えてもいいだろう。

「「デュエル！」」
「僕のターン。マーメイド・シャークを守備表示で召喚！」
マーメイド・シャーク　守３００
僕が最初に呼び出したのは、魚の身体から人型の上半身らしきパーツ……疑似餌？が突き出し、さながら上半身が貧弱な人魚のような格好のモンスター。ステータスもレベルもほぼ最低値だが、この子にはこの子にしかできない仕事がある。
「このカードの召喚に成功した時、僕はデッキからレベル３から５の魚族モンスター１体をサーチできる。レベル３のチューナーモンスター、フィッシュボーグ―アーチャーを手札に！」
「チューナー……」
これでいい。シンクロモンスターを呼び出すには、とにかくチューナーが必要。ぶっつけ本番、付け焼き刃にもほどがある新しい力ではあるけれど、それぐらいしないと到底歯が立つ相手ではない。ユーノの遺した最後の力、ありがたく使わせてもらおう。
「さらにカードをセットして魔法カード、成金ゴブリンを発動。相手ライフ１０００と引き換えに、カードを１枚ドローする。こっち先に引きたかったんだけどなー、フィールド魔法発動、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント。これでターンエンド」
正直、守りとしてはかなり薄い布陣だ。しかもウォーターフロントの壊獣カウンター

を手札を減らさず乗せられるからと入れておいた成金ゴブリンでそのウォーターフロントを引くという微妙に締まらない立ち上がり。だけど、そんなこと言ってたって始まらない。さあ現、どう返してくる？

現　ＬＰ４０００→５０００

「チューナー……なるほどね。なら魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札のモンスター、ワイトプリンセスを墓地に送ってデッキからレベル１モンスター、ワイトプリンスを特殊召喚」

ワイトプリンス　攻０

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（１）

どうやら真の名前を思い出した今も、彼女のデッキは変わらないままらしい。そのことに、心のどこかで安堵していた自分を感じて少し嫌になる。もっともそんな感傷は、次に彼女が持ち出したカードの前に跡形もなく吹っ飛んだ。

「チューナーモンスター、ユニゾンビを召喚。そして効果発動、１ターンに１度デッキのアンデット族モンスター１体を墓地に送ることで場のモンスター、ユニゾンビのレベルを１つ上げる。この時墓地に送った２枚目のワイトプリンスの効果で、デッキからさらにワイト１体とワイト夫人１体を墓地に。そしてユニゾンビ第２の効果で、私の手札１枚をコストにもう１回ユニゾンビのレベルを上昇させるね」

ユニゾンビ　攻１３００　☆３↓４↓５

「なっ……！」

フィールドを経由して魔法カードが墓地に送られたことで、そびえ立つ灯台から闇を切り裂きどこまでも走る光の筋が放たれる。だがそんなことよりも、あのカードだ。ユニゾンビ、レベル３のチューナーモンスター！

衝撃のあまり声も出ない僕の反応を見て彼女はクスリ、と笑い、物わかりの悪い子供に対して丁寧に常識を諭すかのような調子で語りかける。

「そんなに驚いた？でも、私が誰かは知ってるでしょう？」

だから、要するに。やっぱり僕は、この期に及んでもまだ目の前の彼女のことを心のどこかで河風夢想だと、僕のよく知る彼女だと思っていたんだろう。

彼女はもう僕が知っていた夢想ではない、河風現という同一人物にして別人なんだと頭では理解していても、心ではよくわかっていなかった。だからこうやって彼女が現なんだと、シンクロ召喚だって使いこなす別世界のデュエリストなんだという確固たる証拠を見せつけられただけで脳を直接殴られたかのような衝撃を感じる羽目になる。未練たらたらで女々しいにもほどがある、馬鹿馬鹿しいほど滑稽な話だ。頭を振って気を持ち直し、揺らぎかけた戦意をかき集めて火をつけ直す。しっかりしろ、僕。

慣れた手つきで……実際慣れたものなのだろう、テンポよくチューナーとそれ以外の

モンスターが並んだことになる。彼女の場に存在するモンスターの合計レベルは、６。
「の、前に。フィールド魔法、チキンレースを発動。ターンプレイヤーはそれぞれ１００００ライフを払って、３つの効果から１つを発動できる。私が選ぶのは当然、１枚ドローする効果」
現　ＬＰ５０００→４０００
「じゃあ改めて。レベル１のワイトプリンスに、レベル５になったユニゾンビをチューニング。冥府の大河に流るる調べは、運命を叩く鎚の歌。シンクロ召喚、獣神ヴァルカン」
☆１＋☆５＝☆６
獣神ヴァルカン　攻２０００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）→（３）
２体のモンスターを素材として呼び出されたのは、２足歩行の獣人にして鍛冶屋。場のカードがさらに２枚墓地に送られたことでその輝きを増した灯台の光に照らされたその太い腕に、力強く握りしめられた巨大な鎚がおもむろに地面に振り下ろされた。
「まず、シンクロ召喚に成功したヴァルカンの効果を発動。互いの場で表側のカードを１枚ずつ選んで、それを手札に戻す。ただし私が選んだカードと同名カードは、このターンもう発動できない。ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントは壊獣カウンターを身

代りに破壊耐性を得るけれど、それもバウンスには無力」
「しまった！」
　現の言う通り、これはこのカードの宿命ともいえる弱点だ。場のカードが墓地に行くだけでカウンターが乗るという性質上破壊にはめっぽう強いウォーターフロントも、バウンスや除外には無力。というよりも、そんな除去は最初から想定されていない。せっかく乗った壊獣カウンターごと、灯台が薄れて消えていく。
『しかもチキンレースを回収されたか。ドローはお預けだな』
「墓地に送られたワイトプリンスの効果で、もう1組のワイトとワイト夫人を墓地に。さらに、私の墓地から闇属性モンスターであるワイトと光属性モンスターのワイトプリンセスをゲームから除外して、手札のカオス・ソーサラーを特殊召喚する」
　カオス・ソーサラー　攻２３００
　ヴァルカンの隣に、これは僕も知っているカオスモンスターが並ぶ。最初のワン・フォー・ワンの時点で、すでにここまで計算済みだったわけか。守備姿勢を取るマーメイド・シャークを見て、そのまま伏せカードに視線を移す。まだ、大丈夫だ。このターンは、まだ凌げる。
「カオス・ソーサラーの効果を発動！1ターンに1度自身の攻撃権と引き換えに、場のモンスターを除外する。私が選ぶのは当然、マーメイド・シャーク」

漆黒の魔法使いが右手から光、左手から闇の軌跡を残しつつその両腕をゆっくりと円を描くように回転させる。そしておもむろに組み合わされた光と闇の衝突点から白黒の波動が解き放たれ、マーメイド・シャークを吹き飛ばす。これを防ぐ手立てはなく、また僕のデッキに除外は専門外なため再利用手段はない。お疲れ様、と心の中でねぎらい、次元の狭間へ消えていくその姿を見送った。

これで、僕の場はがら空き。現も言った通りこのターンカオス・ソーサラーはもう攻撃できないから、当然次に彼女はヴァルカンでダイレクトアタックをしてくるはず。だが彼女は、ここでわずかに思案した。

「ねえ、清明。いいもの見せてあげようか」

「……？」

ちょっとお茶しようか、とでも言うかのようなそのフランクさは、この場にはもっともそぐわないものだった。面食らい警戒する僕を尻目に、モンスターゾーンの２枚のカードをつまみ上げる。

「これは、清明もまだ知らないでしょ。私のフィールドには、これでレベル６のモンスターが２体。私は、この２体のモンスターでオーバーレイ！冥府の大地に彷徨う者よ、巡礼の果てに死の安息を。エクシーズ召喚、巡死神リーパー（ピルグリム）！」

カオス・ソーサラーが黒、ヴァルカンが赤の奔流となって、現の足元に開いた宇宙の

ような穴に吸い込まれる。その直後音もなく爆発が起こり、開いた穴の内側から新たなモンスターが生まれ出た。ひどく腰の曲がった老人のような姿に、その背から生えたボロボロの翼。姿勢のせいでよく判別がつかないが、それでもその身長よりも高いと思われる巨大な大鎌を杖のようにして寄りかかる不気味な死神……だが何よりも目を引くのは、その体の周囲を衛星のように絶えず飛び回る２つの球体だ。このいかにもな死神らしいモンスターの雰囲気には全く似つかわしくないそれからは、しかし確かに強い力を感じる。

☆６＋☆６＝★６

巡死神リーパー　攻?→１０００　守?→１０００

「エクシーズ召喚?シンクロとも違う……?さらに別の召喚方法があるってこと?」

『あれは……』

「そう。同じレベルのモンスターを組み合わせることでエクストラデッキから召喚できる、清明からすれば異世界……それとも遠い、もしかしたら近い未来かな?そこで手に入る、新しい力。そしてリーパーの攻守は、互いの墓地に存在する闇属性モンスター１体につき２００になる」

チャクチャルさんの返事を奪うかのように、現の説明が入る。それにしても今の反応、やっぱチャクチャルさんはエクシーズ召喚のことも知ってたな。どうせなら教えて

くれても……とも思ったが、よく考えれば富野からシンクロを教わって以降、休む暇もなく大慌てで走ってばかりだった。そんな暇、とてもじゃないがどこにもないか。

そして盤面に意識を戻せば、あれだけ大掛かりに出てきた割にリーパーの攻撃力はわずか１０００。ん、１０００？確かここまでに彼女が使った闇属性モンスターはシンクロ召喚で墓地に送られたユニゾンビとワイトプリンスで2、さらにワイトプリンス2回分の効果で4体のモンスターが送られたから合計6、だけどカオス・ソーサラーの召喚コストでそのうち1体が除外され、そのカオス・ソーサラーが今のエクシーズ召喚で使われたから……あれ、計算が合わない？

『それは違うぞ、マスター。これがエクシーズモンスターの唯一無二の特性なのだが、エクシーズ召喚に使われ素材となったモンスターは召喚後もオーバーレイ・ユニット……さっきマスターも気にしていたあれだ、あの光の球体となってフィールドでも墓地でもない場所に留まり、そのモンスターのサポートを行う。サポートと言ってもまあ、9割方は効果発動のコストだがな』

「ここで私は、巡死神リーパーの効果を発動。オーバーレイ・ユニットを1つ消費することで、互いのデッキから5枚のカードを墓地に送る。この時闇属性モンスターのカオス・ソーサラーを使うことで、さらに墓地の闇属性が1体増えることになる」

光球の1つが軌道を変えてリーパーの鎌に吸収され、赤い目を光らせて死神がその鎌

を振るう。刃から放たれた闇の衝撃波が、僕のデッキと現のデッキに襲いかかった。墓地に行くカードに目を通すと、案の定ワイト系統が２枚。さすが現の引き、というべきか。一方こちらもダブルフィン・シャーク、グレイドル・イーグル、地獄の暴走召喚、サイレント・アングラー、貪欲な壺と魔法カードの２枚を除けばそう悪くないのはまだ救いだ。

巡死神リーパー（２）→（１）　攻１０００→１８００　守１０００→１８００

「骨犬マロン、ワイトメア、タスケルトン、シャッフル・リボーン、ワイトキング……闇属性モンスターは、これで合計９体。うん、まあまあかな。バトル、リーパーでダイレクトアタック！」

「させるか！永続トラップ、バブル・ブリンガーを発動！これでレベル４以上のモンスターは直接攻撃を」

『駄目だ！』

チャクチャルさんの警告も、一手遅かった。大量の泡の壁がリーパーの鎌から僕の身を守るため噴き上がるも、そんなものまるで意に介さずに壁を切り裂いて飛び出した刃が僕の体をそのまま袈裟斬りに振り下ろされた。まるで想定外の攻撃にろくな防御も取れず、傷口から噴き出た血が見えてから少し遅れて激痛が走る。

巡死神リーパー　攻１８００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４０００→２２００
「え？」
『遅かったか。とりあえず気を確かに持て、その傷も痛みもマスターにしか見えないまやかしだ』
「わかっ……てる！」
止まらない出血に、現実そのものな痛み。それなりに闇のゲームも経験してきた僕だが、これほどまでにリアルなものにはお目にかかったことが無い。それだけダークネス、あるいは現が本気でかかってきているのだろう。だがどれだけレベルが高かろうと、これはチャクチャルさんの言う通り単なるまやかし、こけおどしにしか過ぎない。出血？そうだ、こんなに僕の血が液体のまま残るはずがない。斎王戦の時もそうだったが、ダークシグナーとなって以降の僕の体はそれ以前とはわけが違う。あの時僕の吐いた血は、地面に落ちるかどうかのうちに灰となって風に消えていった。
だからこれは、偽物だ。弱い自分を精神力で押し潰してさっきまで傷のあった箇所を改めて見下ろすと、そこには何の変哲もない学生服だけがあった。嘘のように痛みも消え、何事もなかったかのようにリーパーも元の位置に戻る。その様子を見て、先ほどの光景を思い返した。
「まだまだあっ！で、チャクチャルさん？バブル・ブリンガーは確かに発動したのに、な

んで攻撃が？」
『すまない、これを言うのを忘れていたな。エクシーズモンスターはその特殊な召喚の性質上、そのどれもがレベルという概念を持たない。そのかわり、基本的に素材となるモンスターのレベルと同じ数値のランクを持つ。バブル・ブリンガーはモンスターのレベルを参照して攻撃を抑制するカード、従ってエクシーズを縛ることは不可能なんだ』
「レベルに、ランク？」
　フィールドにも墓地にもないオーバーレイ・ユニットに、レベルではないランク。シンクロ以上に馴染むのが大変そうな概念だが、チューナーを用意せずとも使える分出しやすさは上というわけか。ふと気になって、もう１度チャクチャルさんに問いかける。
「そういえば、このデッキはどうなの？あのエクシーズってのも使えるんだよね？」
『ああ。それは私が保証しよう』
「……オーケーオーケー、ならしっかり使いこなしてみるさ」
『その意気だ』
　しかし考えようによっては、このタイミングでエクシーズ召喚のことを知ることができたのはむしろよかったのかもしれない。さっき感じたショックも何もかもをさらに上から吹き飛ばすほどに抑えきれない未知なるカードへの高揚感、そしてそれにどう対処し適応できるかが今は心の中を占めている。

ああ、そうだ。いつだってそのずば抜けたセンスと引きの強さで、僕のことを驚かせてくれる。たとえ名前が変わろうと、河風現は河風夢想とその本質は何ら変わりない。そして僕だってどんなに外面を取り繕ったとしても、その本性は立派な戦闘狂（バトルジャンキー）だ。

そう考えると、この不利な盤面を前にしていてもつい口元がほころんだ。この心境の変化はさすがの彼女にも予想外だったのかやや困惑した顔になるも、すぐに彼女も気を取り直す。

「ごめんね、とは言わないから。だから清明も、下手なことは考えないで本気できてね。それに、本気じゃない限り私には絶対に勝てないよ。もっとも本気で来れば勝てるかなんて、またそれは別の話だけど」

傲慢だ、とは思わなかった。現自身も、その言葉に自分の実力に対する過信は一切存在していなかった。それが天地がひっくり返っても否定しようもない、純然たる事実だったからだ。彼女も僕も、彼女が最強であることをよく知っている。それでも僕は、彼女をダークネスから奪い返して手に入れるために勝たなくちゃ……いや、勝つ。

清明　ＬＰ２２００　手札：３
モンスター：なし
魔法・罠：バブル・ブリンガー
現　ＬＰ４０００　手札：０

モンスター：巡死神リーパー（攻・1）
魔法・罠：なし
「僕のターン。シンクロ……それにエクシーズ……」
カードを引く。ついさっき知ったシンクロ召喚、そしてたった今知ったエクシーズ召喚。さっきはああ言ったけれど、わずか半日もしないうちにこれだけたくさんの情報をいっぺんに詰め込まれて、さらに実戦での応用なんてできるだろうか。
でもできなかろうがなんだろうが、今すぐにでも実戦レベルにまで仕上げるしかないのもまた事実。この2つの力は、使うことができてやっとスタートライン。ただでさえ強敵の現に対してそのカードプールにまでアドバンテージを与えていては、もう勝利など絶望的だ。実際に彼女が夢想だった時も、カードプールは全く同じだったにもかかわらず全戦全敗だったのだから。今必要なのはチューナーとチューナー以外のモンスター、そして同じレベルのモンスター。できないはずがない、なにせこのデッキは僕とともに、どんな戦いも乗り切ってきた最高のデッキなのだから。
……よし、見えた。
「手札の水属性モンスター、アーチャーを墓地に。これで、白棘（ホワイト・スティングレイ）☒は特殊召喚できる」
「へえ、チューナーを捨てるんだ」

白棘☒　攻１４００

コストを払って僕の場に特殊召喚されたのは、純白のエイ。これで、まずは1体。

「そして魔法カード、サルベージを発動。さっきのリーパーの効果には、僕からも礼を言わせてもらうよ。おかげで墓地に落ちてくれた攻撃力１５００以下の水属性、ダブルフィン・シャークとサイレント・アングラーを回収、そのまま召喚！そしてダブルフィンは召喚成功時、僕の墓地からレベル3または4の魚族モンスターを特殊召喚することができる。甦れ、フィッシュボーグ―アーチャー！」

『それでいい。この釣り上げ効果で、モンスターが3体になったな』

ダブルフィン・シャーク　攻１０００

フィッシュボーグ―アーチャー　守３００

「次！僕の場に水属性モンスターがいるとき、手札のサイレント・アングラーは特殊召喚できる！」

トリを務めるのは、チョウチンアンコウのような姿をした普段からアドバンス召喚のための潤滑油のような役割を果たしてくれているモンスター。これで、4体！ダブルフィン・シャークのデメリットによりこのターン僕は水属性しか特殊召喚できない……でも、僕にはわかる。そんな程度の制約で、これから起こることは止められない。今か今かと出番を待つ、エクストラデッキでずっと眠っていた新しい仲間の鼓動を感じる。

「仕上げに、さっきバウンスされたウォーターフロントをもう1回発動してと。じゃあ、まずはこっちから行こうか。レベル４のサイレント・アングラーと、ダブルフィン・シャークでオーバーレイ！」

どうすればこの声に、この鼓動に応えることができるのか。自然と体の内側から湧いてくる衝動に突き動かされてカードを手に取ると、ソリッドビジョン上では選んだ２体のモンスターが先ほど現がやったのと同じように青い２つの光となって僕の足元に開いた穴へと吸い込まれていく。デュエルディスクのエクストラデッキに当たる場所が光を放ち、そこから1枚のカードが飛び出した。

「三千世界を張り巡れ、海原に紡がれし一筋の希望！エクシーズ召喚、Ｎｏ．（ナンバーズ）３７！希望識竜スパイダー・シャーク！」

「へえ……」

その姿を見て、現が感心したような声を漏らす。これが、僕のはじめてのエクシーズモンスター。一見すると純白の体を持つ蜘蛛に海竜の尾が伸びたかのような、でもよく見ればその蜘蛛の脚に見えたのは一番前の両腕にあたる２本を除けば全て海中を自在に駆け回るための鰭だ。そのすらりと伸びた流線型の両腕からは鋭い爪が伸び、さらに右腕にはくっきりと３７、の文字が刻まれている。

希望を識る竜、いい名前だ。この力を文字通りこのデュエルの希望にできるかどうか

は、僕の腕次第だ。

☆４＋☆４＝★４

Ｎｏ．３７　希望識竜スパイダー・シャーク　攻２６００

「エクシーズ召喚の素材、オーバーレイ・ユニットは墓地に行かないから、ウォーターフロントのカウンターにはならないんだっけ？でも、だったらシンクロ召喚だ！レベル４の白棘⊠に、レベル３のフィッシュボーグ―アーチャーをチューニング！」

またもや、何をすればいいのかわかる。初めてそのチューナーとしての真の力を解放したアーチャーがレベルと等しい３つの輪になり、１列となったそれがスティングレイの体を包む。合計レベルは、７。

「快刀乱麻に凍てつかせ、七つの海裂く神の槍！シンクロ召喚、氷結界の龍！グングニール！」

そしてこれが、僕のはじめてのシンクロモンスター。氷結の文字通り氷のように白い体に、頭部をはじめ全身に見られるどこか雪の結晶のような意匠。だがその内側からは自身がただの雪像ではないことを語るかのように、赤く燃えるエネルギーが光となってかすかな輝きを放っていた。

☆４＋☆３＝☆７

氷結界の龍　グングニール　攻２５００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）↓（２）

『だが、グングニールの効果は手札が無いと使えない。墓地の様子から見ても、このターンで仕留めきるのはどうやっても無理だな』

「わかってる……でも、今は攻めるしかないからね。バトル、グングニールで巡死神リーパーに攻撃、グレイシャーファランクス！」

グングニールの瞳が、ひときわ赤く光った。翼を広げ超低空飛行でリーパーとの距離を詰め、鎌による防御すら許さないほどの超速で鉤爪が振り下ろされる。だがその攻撃は、リーパーの細い体をバラバラに裂く寸前で止められた。１匹の子豚の骸骨が、その間に割り込んでいたのだ。

「墓地からタスケルトンの効果発動。デュエル中１度だけ、モンスターが行う戦闘を自身を除外して無効にできる」

「承知の上さ。だけどタスケルトンはこれで打ち止め、次の攻撃はもう止められない。スパイダー・シャークで連撃、スパイダー・トルネード！さらにこの攻撃宣言時にスパイダー・シャークのオーバーレイ・ユニット１つを消費して効果発動、オーバー・レイン！」

初陣を邪魔されて渋々といった様子で帰ってきたグングニールに代わり、すぐさまスパイダー・シャークが海中の鮫めいた俊敏な動きで追撃を仕掛ける。その口元に軌道を

変えた光球が吸い込まれると背中の赤い球体から一斉に純白の蜘蛛糸が噴出し、縦横無尽にフィールドを走る粘性の糸は正確にその獲物であるリーパーの体を縛りつけた。

『スパイダー・シャークはモンスターの攻撃宣言時、オーバーレイ・ユニット1つを使い相手モンスター全ての攻撃力を１０００ダウンさせる。さらに先ほど除外したタスケルトンもまた闇属性、従ってリーパーの攻撃力は実質１２００下がることになるな』

Ｎｏ．３７　希望識竜スパイダー・シャーク（２）→（１）　攻２６００

↓巡死神リーパー　攻１８００→１６００→６００（破壊）

現　ＬＰ４０００→２０００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）→（３）

「よし！さらにこのメイン2で、壊獣カウンターの3つ以上乗ったウォーターフロントの効果を発動。デッキから、壊獣1体をサーチできる！来い、海亀壊獣ガメシエル！」

もっと何か防御カードがあればよかったのだが、あいにく手札はこのガダーラ1枚のみ。それは現もお互い様だけど、彼女の手札にあるのはさっきバウンスしたチキンレース。このターンのうちにライフを１０００以下まで削れなかった以上、さらなるドローを行われるとみて間違いないだろう。その時このグングニールとスパイダー・シャーク。それにただでさえ彼女のデッキには効き目が薄いのに、ここに来てダメ押しのようにエクシーズモンスターを拘束できないことが分かったバブル・ブリンガーだけでどこ

まで耐えきれるか。
「なーんて、心配してもしょうがないか。ターンエンド」
「私のターン。まずチキンレースを発動して、このターンも１０００ライフを払って１枚ドロー」
現　ＬＰ２０００→１０００
「魔法カード、龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）を発動。私の墓地から融合素材モンスターであるワイトキングと巡死神リーパーを除外して、ドラゴン族の融合モンスターを融合召喚できる」
「来たね……！」
融合素材は、アンデット族２体……来た。来てしまった。むしろ遅かった、と言うべきか。ワイトキングと双璧を成す、彼女のエースモンスター。相手の肉体に滅びさえも許さず、ただ魂のみを冥府へと引きずり落とす暴虐の龍。
「冥府の扉を破りし者よ、其には死すらも生温い。融合召喚……冥界龍　ドラゴネクロ！」
冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）↓（４）
ドラゴネクロは戦闘したモンスターを戦闘破壊させないかわりにその攻撃力を０とし、さらにそれと等しいレベル、攻撃力を持つダークソウル・トークンをプレイヤーの

フィールドに特殊召喚する能力を持つ。そう、これもレベルだ。となるとレベルを持たないスパイダー・シャークは、たとえ攻撃されても参照する数値が存在しない以上ドラゴネクロもトークンを生み出せないはずだ。

……となると、現の狙いはグングニール。スパイダー・シャークは相手の攻撃宣言に対してもその強力な効果を発動できるが、攻撃そのものを止められるわけじゃない。しかも悪いことに、今は彼女の方が僕よりもライフが少ない。つまりチキンレースのもう１つの効果により、このライフが逆転するまで彼女はダメージを受けないのだ。

「バトル。ドラゴネクロでグングニールに攻撃、ソウル・クランチ！」

長い首が伸び、氷結の龍の誇り高き魂を噛み砕かんと幽鬼のような顔が迫る。ここでスパイダー・シャークの効果を使えば、グングニールの攻撃力が弱体化したドラゴネクロより上となり返り討ちにできる……でも、駄目だ。仮にそんなことをしたとしても、ドラゴネクロの呪いは止められない。次にグングニールのダークソウル・トークンがグングニールの抜け殻を攻撃した際に打つ手がなくなってしまい、僕のライフが尽きてしまう。

結局、首元にその牙を深々と埋め込まれた氷結界の龍の体から力が、魂が少しずつ抜き取られ、しだいに抵抗が弱々しくなりやがて完全にその目から光が消えうせるのを、僕はただ指をくわえてみていることしかできなかった。

冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００→氷結界の龍　グングニール　攻２５００
清明　ＬＰ２２００→１７００
「今更言うまでもないだろうけど。ドラゴネクロがレベルを持つ相手モンスターとバトルしたことで、その魂は抜き取られる」
やっと、ドラゴネクロがグングニールの抜け殻を放り出した。だがその口元にはいまだ半透明のグングニールの魂ががっちりと押さえられており、冥界の龍の牙を通じてその内部に少しずつ穢れが入り込んでいく。
氷結界の龍（ひょうけつかいのりゅう）　グングニール（グングニール）　攻２５００→０
ダークソウル・トークン　攻２５００　☆７
「続けて、ダークソウル・トークンでグングニールにもう１度攻撃。ダークグレイシャーファランクス！」
「もう１度スパイダー・シャークの効果発動、オーバー・レイン！最後のオーバーレイ・ユニットを使って、相手フィールドの全モンスターの攻撃力をこのターンの間だけ１００ポイントダウンさせる！」
再び噴出した糸が雨のごとく降り注ぎ、冥府の龍と闇に捕らわれた氷結龍の魂の動きを奪う。だがその動きを完全に封殺するには至らず、物言わぬ抜け殻と化したグングニールの体をそのかつての魂が一爪の元に打ち砕いた。

Ｎｏ．３７　希望識竜スパイダー・シャーク（１）→（０）
冥界龍　ドラゴネクロ　攻３０００→２０００
ダークソウル・トークン（氷結界の龍　グングニール）　攻２５００→１５００→氷結界の龍　グングニール　攻０（破壊）
清明　ＬＰ１７００→２００
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）→（５）
「ぐううっ……！まだ、まだ戦える……！」
『首の皮１枚で繋がった、といったところか。さすがに危なかったな』
「まだ、戦うの？なんて、聞くまでもないんだよね。ならいいよ、私も相手してあげる。カードを１枚伏せて、ターンエンド」
ひどく悲しげな表情で、そっとカードを伏せる現。違うんだ、現。僕は、君にそんな顔をさせないようにするためにここに立ってるんだ。
……それなのに。彼女と目を合わせていられなくなり、つい一度目を伏せそうになる。だけど、それこそ許されないことだ。彼女が助けを、最後に救いを求めて伸ばした手を、僕は掴むどころか全力で踏みにじった。その上彼女から目を逸らすだなんて、そんなこと許されるはずがない。
そんなことを言っておきながら、その一方でこうやって僕は彼女に手を伸ばすために

戦っている。その矛盾からはあえて目を逸らし、皮肉な思いと全部まとめて闘志の炉にくべておいた。

冥界龍（氷結界の龍グングニール）ドラゴネクロ　攻２０００→３０００
ダークソウル・トークン　攻１５００→２５００
清明　ＬＰ２００　手札：１
モンスター：Ｎｏ．３７　希望識竜スパイダー・シャーク（攻・０）
魔法・罠：バブル・ブリンガー
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）
現　ＬＰ１０００　手札：０
モンスター：冥界龍（氷結界の龍グングニール）ドラゴネクロ（攻）
ダークソウル・トークン（攻）
魔法・罠：１（伏せ）
場：チキンレース

『……何かがおかしい』

「え？」

自嘲気味な様子を察して話題を切り替えてくれようとしたのか、チャクチャルさんの声が頭に響く。

『確かあちらの墓地には通常魔法、シャッフル・リボーンが落ちていたはずだ。もはやこれ以上効果を使えるほどライフの余裕はない、ならばなぜあれをわざわざ残しておいた？』

「そういえば……うん」

シャッフル・リボーンは若干制約の厳しい蘇生カードとしても使えるが、むしろその真価は墓地にあってこそ発揮される。墓地の自身を除外することで自分の場で表側のカード1枚をデッキに戻し、カードを1枚ドローできる効果……確かにチキンレースの恩恵を受けられない、どころかダメージ０の効果を受けているのが僕である以上、あれをわざわざ残す意味は全くないはず。

「こっちがダメージ０を利用してグレイドルで突っ込んできたところにカウンターでサイクロン、とか？」

『いずれにせよ、１枚のドローよりも優先する理由があの伏せカードには含まれているのだろう。今の段階ではまだ安易に結論を出すのは危険だが、用心しておくことだ』

用心と言われても、あの伏せカードを破壊できる手札なんてない。多少のリスクはあるけれど、ここは今引いたこれに頼ってみるか。

「魔法カード、トレード・インを発動。手札からレベル８のガメシエルを捨てて、カードを２枚ドロー。さらにこのターンもウォーターフロントに壊獣カウンターが３つ以上

乗っているから……」

乗っているから、何をサーチするべきだ？万能カウンターのガメシエルの２枚目をこちらに出せば伏せカードなんて怖くはないが、いかんせん攻撃力が低すぎてドラゴネクロはおろかダークソウル・トークンにも勝てやしない。同じ理由で攻撃力２４００のクモグスも却下。ジズキエルなら対象を取る効果にはめっぽう強いうえ攻撃力も申し分ないけれど、逆に言えばあの伏せカードが対象を取るものでなければ無力になってしまう。ガダーラの無差別攻守半減も悪くはないが今使うとスパイダー・シャークの攻撃力まで下がってしまうし、ラディアンは向こうに出すからそれも却下。となると生けるサンダー・ボルトとしてトークンもろとも薙ぎ払った後スパイダー・シャークで攻撃ができるドゴランか、効果を使うまでが隙だらけとはいえひとたび発動さえできれば帯電能力であらゆるカードの発動を許さないサンダー・ザ・キングか……。

「……来い、怒炎壊獣ドゴラン。そしてダークソウル・トークンをリリースして現、そっちのフィールドに多次元壊獣ラディアンを特殊召喚！相手フィールドの壊獣反応に誘われて、手札のドゴランを特殊召喚！」

今回選んだのは、たとえこのターンで決着をつけられなくともウォーターフロントとのコンボで壊獣カウンターを即座に貯められるドゴラン。どちらが良かったのか、この選択が本当に正しいのかは、わからない。

だけど、わからないならわからないなりに前に進むしかない。ドゴランが大きく息を吸うと、その全身が押さえきれない怒りの炎によりメルトダウン寸前の高熱を放ち赤く光る。

多次元壊獣ラディアン　攻２８００

怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００

「ドゴランの特殊効果、覆滅を発動！場の壊獣カウンター３つをコストに、相手フィールドの全てのモンスターを消し飛ばす！」

解き放たれた火炎がＫＹＯＵＴＯＵの街並みを焼き、さらには冥界の龍をも呑み込み焼き尽くしていく。炎の影響で５つあったライトのうち３つから光が消えた灯台に、再び２つの光が追加で灯いた。その光といまだくすぶる炎に照らされて闇に浮かび上がる現も、そんな彼女の目の前の伏せカードも、いまだ動きはない。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）↓（２）↓（４）

「これでドゴランはこのターン攻撃できない……もっとも、どうせバブル・ブリンガーが残っているからレベル８のドゴランにダイレクトはできないけど。だけどエクシーズモンスターにレベルは存在しない、従ってこっちはこのまま攻撃ができる！行くよ、スパイダー・シャーク！スパイダー・トルネード！」

スパイダー・シャークが俊敏に宙を舞い、致命となるべき一撃を叩き込みに音もなく

迫る。その距離が３メートルにまで縮まっても、現は動かなかった。２メートル。それでもまだ、動かない。１メートル。やはり動かず、その端正な顔立ちと相まって彼女は彫像か何かだったかのような錯覚まで起きそうになる。３０センチ、２０センチ、そしてついに彼女の細い首をスパイダー・シャークの爪が捉えるまで、あとわずか１０センチ。そこでついに、彼女が口を開いた。

「惜しかったね、清明……トラップ発動」

Ｎｏ．３７　希望識竜スパイダー・シャーク　攻２６００↓現（直接攻撃）

小さな声だったが、僕の耳にははっきりと届いた。だがそれが聞こえた直後、スパイダー・シャークの攻撃が命中する。土煙がのせいで一時的に視界が奪われる中、何が起きたのか探るため必死に目を凝らす。確かに攻撃は届いたが、デュエルはまだ続いている。一体何のカードで現はこの危機を脱したのか、それがわからない。

それに先に気が付いたのは、チャクチャルさんだった。ほとんど呻くように、してやられたと漏らす。

『マスター。そっちじゃない、手元だ。自分の手元をよく見てみるんだ』

「手元……え？」

清明　ＬＰ２００↓８０００

「ラ、ライフが８０００も……!?」

「そう。私が発動したカードは、ヒロイック・ギフト。相手ライフが２０００以下の時、それを８０００に引き上げることでカードを2枚ドローする。そしてチキンレースの効果により、ライフが相手より下のプレイヤーはあらゆるダメージを受け付けない」

「それでチキンレースを、ってことね……」

土煙もようやく晴れてきて、次第に現の姿が見えてくる。やられた。最高の好機だったのに、まんまとやられた。自然と生じた莫大な、この明らかに2枚程度のドローでは割に合わないライフ差だって当然のように攻撃力5桁のワイトキングを繰り出してくる彼女にとってはあって無いようなもので、限りなく低いリスクで敗北を防ぎカードを2枚引いたという結果だけがある。

「ならせめて、僕にも使わせてもらうよ。せっかくライフはあるんだ、メイン2にチキンレースの効果発動。１０００ライフを払って1枚ドロー、そして補給部隊をそのまま発動。まさか、こんな緊急防御まで用意してたなんてね」

清明　ＬＰ８０００→７０００

同じ１０００ライフを払うにしても、ここでチキンレースを自壊させておけば返しにシャッフル・リボーンの効果を使われることも防げる。確かにそれは間違いないけれど、こっちも手札は既にカツカツでそこまでやっている余裕がない。やっと引けた貴重なドローソースを発動しながら呻くと、意外にも現は首を横に振った。

「ううん、違うよ。私はただ、清明なら必ず1ターンでドラゴネクロを倒す、そう思っただけ。そうしたら、やっぱり思った通りに越えてきた。だからこのカードを使わざるを得なかった、それだけ」
「……そりゃどうも、だ。カードを1枚セットして、ターンエンド」
夢想の時からそうだったけど、彼女は僕の実力を過大評価しすぎだと思う。もっとナメられるぐらいの方が色々とやり易いのに、なんて憎まれ口を叩いたところで、彼女からの高評価を素直に喜ぶ僕がいるのもまた事実。
とはいえ、やりにくいのも冗談ではなく本当の話だ。次のターンのドローも合わせて、中盤以降の墓地が肥えてきた彼女にあれだけの手札を持たせるのは非常に危険だ。
「私のターン。墓地のシャッフル・リボーンを除外して、チキンレースをデッキに戻して1枚ドロー」
今度こそ役目を終えたらしいチキンレースが撤去され、彼女の手札が4枚になる。まあ想定内といえば想定内、問題はここからだ。
「私が召喚するのはこのカード。チューナーモンスター、劫火の舟守　ゴースト・カロン！」
劫火の舟守　ゴースト・カロン　攻500
「チューナー、か」

となると当然、次はシンクロ召喚か。オールを片手に人魂を浮かばせ、木製の小さな船に乗るボロボロの骸骨船頭。そいつがそのオールを地面に勢いよく突き刺すと、裂け目から大量の霊魂が凄まじい勢いで噴出する。やがてその波に乗り、巨大な影が地の底からゆっくりと浮かび上がってきた。あのモンスターは、たった今倒したはずなのに。

「ドラゴネクロ？」

「そう、ゴースト・カロンの効果発動。私のフィールドにこのカードしかモンスターが存在しない時、自身と私の墓地の融合モンスター1体を除外することでそのレベル合計と等しいドラゴン族シンクロモンスターを疑似的に呼び出すことができる。見せてあげる、清明。これが、ドラゴネクロの真の姿。冥府の大河の流れを紡ぐ、永久の嘆きが此岸に響く。ステュクスシンクロ……冥界濁龍　ドラゴキュートス！」

ゴースト・カロンに導かれ、冥府の底から浮かび上がったドラゴネクロ。そっと伸ばした骨の腕がその頭頂部に触れた時、両者は不気味なほどに白い光に包まれた。その光は1つとなり、新たなモンスターへと生まれ変わっていく。ドラゴネクロのレベルは8、そしてゴースト・カロンのレベルは2。

「レベル１０のシンクロモンスター……」

☆８＋☆２＝☆１０

冥界濁龍　ドラゴキュートス　攻４０００

再び開いた冥界の門を叩き破り、さらなる力を手に入れたドラゴネクロ……いや、ドラゴキュートスがその白き威容を見せつける。亡者たちの嘆きを、その魂を無差別に取り込み飽くることなく喰らいつくした自己強化の果てのいびつな龍。

「ゴースト・カロンの効果を使うターン、私はドラゴン族以外の特殊召喚が封じられる。だけど逆に言えば、例え何者であろうともその通常召喚が縛られることはない。魔法カード、二重召喚（デュアルサモン）を発動。このカードによって手に入れた2度目の召喚権で、私はこのカードを通常召喚する。その攻撃力は、墓地のワイト及びワイトキング1体につき１００００……お出でなさい、ワイトキング」

地面が爆ぜ、1本の骨の腕が地中から突き出る。ゆっくりと動くその腕が地面を押さえて力を込めると、全身に毛の1本、肉のひとかけらも残っていない藍色の服を着せられた骸骨が地中からその全身をあらわにした。ああ、ついに今回も来てしまったか。正攻法では絶対に勝てない、彼女のエースである骨の王。墓地のワイト及びワイトキング扱いのカードは、合計8枚。

ワイトキング　攻８０００

『これは……その、壮観だな。たった1ターンで攻撃力４０００と８０００を揃えてきたか』

「驚きはしないよ。現は、彼女は僕の知ってる夢想と同じなんだから。これぐらいのこ

とはやってくる、彼女はいつだってそうだった」
　実際、このまたもやひっくり返された状況を前に、僕は自分でも驚くほどに落ち着いていた。チャクチャルさんにも言った通り、どこかでこうなることがわかっていたのかもしれない。彼女なら、絶対にこの程度の逆境は1ターンで跳ね除けると。
「バトル。まずはワイトキングで怒炎壊獣ドゴランに攻撃、螺旋怪談！」
　ワイトキングがまさに王者の風格すら感じさせるような尊大な足取りで、自分よりも遥かに巨大なドゴランに迫る。そこから放たれる必殺の拳は、いかに壊獣の王とはいえど耐えきれる道理はない。
　ワイトキング　攻８０００→怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００（破壊）
　清明　ＬＰ７０００→２０００
　ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（４）→（５）
「ごふっ！ほ、補給部隊の効果！僕のフィールドでモンスターが破壊されたから、カードを1枚ドロー……！」
『大丈夫か、マスター？』
　初期ライフ全てを持っていってなお余りあるほどの特大ダメージが戦闘を通じてこちらにフィードバックし、呼吸が止まり細胞1つ1つが揺さぶられるほどの衝撃が内臓に直で響く。あの火力馬鹿のラビエル戦ですら、これほどのダメージを1度に受けたこ

とはない。変な話ではあるが、ヒロイック・ギフトによるドローのせいで生まれたこの状況、ヒロイック・ギフトが無ければ死んでいた。

『よし、そんなこと言ってられるうちはまだ余裕あるな。いいか、心が折れたらその時点で負けだからな。勝負はもちろんのこと、闇のゲームそのものにもだ。さあ、次が来るぞ！』

「あき……ううん、なんでもない。続けてドラゴキュートスでスパイダー・シャークに攻撃、冥界の幽鬼奔流（ゴースト・ストリーム）！」

「く……！」

冥界の濁流に飲み込まれ、スパイダー・シャークがついに倒れる。当然ダメージがこちらにも通る……でも、さっきの一撃に比べればまだダメージも常識的な範囲だ。もしかすると、後から強烈な一撃を与えてこちらの意識が飛ぶのを抑えるため、わざとこの順番で攻撃してくれたのかもしれない……なんて、さすがに考えすぎか。

冥界濁龍　ドラゴキュートス　攻４０００→Ｎｏ．３７　希望識竜スパイダー・シャーク　攻２６００（破壊）

清明　ＬＰ２０００→６００

「補給部隊は１ターンに１回しか使えないけど、スパイダー・シャークには最後の力が残っている。効果発動、ラスト・リザレクション！このカードが破壊された時、僕の墓

地から自身以外のモンスター1体を蘇生できる！蘇れ、グングニール！」

氷結界の龍　グングニール　守１７００

跡形もなく押し流されたスパイダー・シャークのいた場所に、かすかな希望のかけらが光る。先ほどゴースト・カロンとドラゴネクロが放っていた病的な光とはわけが違う、瑞々しい生命力に満ち溢れたその光から、再びその魂を取り戻した氷結の龍が咆哮と共に恐るべき2体のモンスターの前へとたった1体で立ちはだかった。

「これで、次のターンで……」

「グングニールの効果は、手札を捨てることでその枚数だけ場のカードを破壊する……確かに私がこのままターンを回すことしかできなかったら、わからなかった。でも詰めが甘いよ、清明。私は、そんなに甘くない。そんなもの、私が残すわけがない。この瞬間、戦闘で相手モンスターを破壊しなおかつ墓地に送ったドラゴキュートスの効果を発動。このカードはこのターン、もう1度だけモンスターに攻撃できる！」

「グングニール……っ！」

かすかに紡がれた希望の一筋が、再び解き放たれた冥界の濁流に飲み込まれて消えていく。思わず伸ばした手が虚しく空を切るその目の前で、神槍の名を持つ誇り高き竜は最後まで雄々しく翼を広げていた。まるで押し寄せる奔流の余波から、後ろに立つ僕を守ろうとするかのように。

冥界濁龍　ドラゴキュートス　攻４０００↓氷結界の龍　グングニール　守１７００（破壊）

「カードを伏せて、ターンエンド。このターン終了時にシャッフル・リボーンのデメリットで手札が1枚除外されるけど、今の私に手札はないからそれは実質無効になる」

抜け目なくデメリットを回避したところで、またターンが僕に回ってくる。どうにか、今回も生きて凌げはしたわけだ。だけど、もうこれ以上は持ちこたえられそうにない。おそらく、僕が攻めるチャンスは多くてあと1回。次のターンまでならまだ捨て身で攻めに行けるけれど、返しに自分の身を守れない。だから、それ以上は無理だ。７００００あったはずのライフをたかだか1ターンで６００まで減らしてくるような相手に、下手な引き伸ばしは通用しない。ワイトが墓地に貯まっていない序盤ならまだしもすでにワイトキングがあれだけの攻撃力を手に入れた現状、これ以上このデュエルをだらだらと続けたところで現のドロー1枚1枚が僕にとっての死刑宣告になるだけだ。そしてこの予想は、決して絶望でも悲観でもない。

でも逆に言えば、まだあと1ターンは自由に動ける。このエクストラデッキからは、今も僕に呼ばれることを待っている新たなカードの鼓動を感じることができる。とにかく次のターン、次のターンで終わらせる。それができなければ、もうおしまいだ。僕がだろうか、世界がだろうか。それとも彼女が、かもしれない。

清明　ＬＰ６００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：バブル・ブリンガー
１（伏せ）
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（５）
現　ＬＰ１０００　手札：０
モンスター：ワイトキング（攻）
冥界濁龍　ドラゴキュートス（攻）
魔法・罠：１（伏せ）

「僕のターン。頼むよ、僕のデッキ……！」

でも、この際なんだっていい。もう１度だけ僕に戦う力を、ここから現を救うだけの力を……！力を込めてデッキトップに指をかけ、目を閉じて呼吸を整えてからまた前を向く。せっかく紡いだ希望をも無に帰すほどの圧倒的な彼女の力に対抗できる最後の奇跡を、これで終わりとなるほどの切り札を。

「……ドロー！」

引いた。力強く。極限に達した集中が脳内にアドレナリンを爆発させ、鈍化した時間の中で自分の腕がスローモーに振り切られるのが見えた。そしてその先に握られた、１

枚のカード。永遠にも続きそうなその時間の中でそっとそれをひっくり返し、刻まれた正体を確かめる。

「これ……！」

『ほう。ここで引いた、か。まだわからないぞ、これは』

僕の引いたカード。そこには……何も描かれていなかった。イラストやテキストどころか色すらついていない、全くの白紙のカード。かつてペガサスさんに貰った、未知なるカードの片割れ。稲石さんと共に消えてしまったゴーストリック・フロストの穴を埋めるためにこっそり入れておいた、不思議な1枚。

いまだにこの真の姿も、僕にこれを使うことができるのかもわからない。そもそもう片方の白紙のカードが壊獣の力を解放するための扉の役割を果たすものだったことを考えると、これが本当に単なるカードなのかも怪しいものだ。だけど僕のデッキは、このカードをこの土壇場で僕に託してくれた。このカードは、この極限の状況で僕の手元にやってきてくれた。なら、迷う理由はどこにもない。

「現。僕はこのターン、このカードを使う！」

「それって……白紙の、カード？」

白紙のカードを見せつけるように突き出し、その奥底で眠る力に心の中で呼び掛ける。君が誰かはわからない。だけど、この1回だけでも構わない。お願いだ、僕に力を

貸してくれ。僕のことなんてどうだっていい、目の前の彼女を、現のことを。僕の一番大切な人を、この呪われた運命から解き放つために。

　するとその瞬間、カードを持つ指先がかっと熱くなった。思わず腕を引き戻すと、白紙のカードがその内側から光を放ち始めている。今まさに、このカードは目覚めようとしていた。

『よくやった、マスター。さあ、何が来る？』

「……ありがとう」

　小さく呟くと、さらにその輝きが増していく。そして次の瞬間には、白紙だった面に色が、イラストが、そしてテキストが浮かび上がった。それと同時にその使い方、そしてその奥で僕の声を待つ精霊の思いすらもいっぺんに届く。なるほど。この力なら、確かに。

「まだ僕のターンは始まったばっかりだったね、現。宣言通り、このカードを使わせてもらうよ……このスタンバイフェイズ、通常のドローによって手札に加わったこのカード。ＲＵＭ（ランクアップマジック）―七皇の剣（ザ・セブンス・ワン）を改めて公開する！」

「そのカードは！」

　本来この世界には存在しないはずのエクシーズモンスター、さらにその中でもごく一部にのみ対応する専用サポート。様々な因果や道理を超越し、巡り巡って僕の手元に来

たカード。このデュエルの、僕にとって逆転の切り札となるべき1枚。
「そしてこのメインフェイズ。このカードを公開し続けたことで、その発動条件は整った。七皇の剣、発動！」
精一杯に腕を伸ばし、七皇の剣を天高く掲げる。今こそ僕の元に、そしてその力を貸してくれ。
「このカードの発動時に僕はエクストラデッキか墓地からオーバーハンドレッド・ナンバーズ1体を特殊召喚し、さらにその先の境地、カオスの力を解き放つ！Ｎｏ．１０１！Ｓ．Ｈ．Ａｒｋ Ｋｎｉｇｈｔ……そして！」
上空の分厚い雲が割れ、空の彼方からゆっくりと白い箱舟が降りてくる。その中央部から射出されるように漆黒の人型をした何かが飛び出し、上空で静止した箱舟をあとに1人得物らしき真紅の槍を手にこの地上へと降り立った。
だがその姿は、僕がこれまで見てきた2種類のエクシーズモンスターとは異なっていた。オーバーレイ・ユニットが光の球として本体の衛星のように周りを飛び回るのではなく、もっと硬質なクリスタルとなってその足元に配置されていたのだ。
「霖雨蒼生の時は来た、想い託されし不沈の守護者！ＣＮｏ．１０１！Ｓ．Ｈ．Ｄａｒｋ Ｋｎｉｇｈｔ！」
ＣＮｏ．１０１ Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ Ｋｎｉｇｈｔ 攻２８００

「Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ……」

「そうさ。だけど、まだこれだけじゃ終わらないね。僕にはまだ、このデュエルで見せていない心強い仲間たちがいる！トラップ発動、グレイドル・スプリット！これを１つ目の効果で攻撃力５００アップの装備カードとしてダークナイトに装備して、そのままもう１つの効果に。このカードを墓地に送って装備モンスターを破壊、さらにデッキから２種類までグレイドルをリクルート！さあ行くよ、スライム！イーグル！」

漆黒の槍術師がその足元から粒子となって消えていき、入れ替わるようにそれぞれグレイ型宇宙人の上半身と黄色い鳥を模した２種類のグレイドルが特殊召喚される。そしてグレイドル・スライムは、チューナーモンスターだ。

グレイドル・スライム　守２０００

グレイドル・イーグル　守５００

「補給部隊で１枚ドロー。そして同じくこの瞬間、カオスオーバーレイ・ユニットを持った状態で破壊され墓地に送られ、なおかつ墓地に進化前のアークナイトが存在するダークナイトの効果を発動！このカードを蘇生し、さらにその元々の攻撃力分ライフを回復する！リターン・フロム・リンボ！」

清明　ＬＰ６００→３４００

不沈の守護者は、破壊程度では蘇る。そしてここからが、その特殊能力の真骨頂だ。

「ダークナイトの更なる効果発動、ダーク・ソウル・ローバー！1ターンに1度特殊召喚された相手モンスター1体を選択し、自身のカオスオーバーレイ・ユニットとして吸収する！消え去れ、ドラゴキュートス！」

ダークナイトがその槍でドラゴキュートスを指し示すと、2体の全身を包むかのように赤いオーラが立ち上る。するとドラゴキュートスの巨体がダークナイト側に引きずられるように吸い寄せられていき、両者の距離が縮まると同時に赤い光もしだいに力強さと深みを増していく。やがてそれが臨界点まで達した瞬間、あれほど大きく恐ろしかったドラゴキュートスの体が光の中で急激に圧縮された。いや違う、ダークナイトの召喚時にもあった足元のクリスタル、カオスオーバーレイ・ユニットに変換されたのだ。

「ドラゴキュートスが……」

「だけどこの効果だけじゃ、通常召喚されたワイトキングには敵わない。だからこそ、もう1度シンクロ召喚！レベル3のグレイドル・イーグルにレベル5チューナー、グレイドル・スライムをチューニング！」

次に何をすればいいのか、カードが語りかけてくるもうすっかりおなじみになった感覚。スライムといいＪｒといいずっとチューナーって書いてあったからこの唐突なチューナー要素はなんなのかと思っていたけれど、まさかグレイドル自体がシンクロテーマだったとは。もっともこの子たちも元はといえばある日突然宇宙から墜落して

きたカード、未知の召喚法をものにしていても不思議ではない……のかもしれない。
「変幻自在な不定の恐怖は、星海旅する魔性の生命！シンクロ召喚、グレイドル・ドラゴン！」
☆３＋☆５＝☆８
グレイドル・ドラゴン　攻３０００
イーグル、コブラ、アリゲーター、そしてスライムにそのＪｒ。これまで僕と共に戦ってきたグレイドルたちがその力を結集させた、変幻自在の真骨頂たるシンクロ体。まさかこんな隠し玉をこれまで抱えていたなんて、まったくあのスライムも人が悪い。
だけどこうしてグレイドルは、このどうしても負けられないデュエルを受けてその隠されたとっておきの力を僕に明かしてくれた。その思い、決して無駄にはしない。
「シンクロ召喚したドラゴンの効果発動、グレイドル・トルピード！シンクロ素材となった水属性モンスターの数まで、場のカードを破壊できる！当然選ぶのはその伏せカード、そしてワイトキングだ！」
ドラゴンの流体金属を思わせる独特な質感のボディが波打ち、無数の突起が生じたかと思うとそれらが一斉に本体を離れ有機体ミサイルとなって雨あられのごとく降り注ぐ。着弾、そして爆風に巻き込まれ、ワイトキングがただの骨へと還っていく。だがもう1枚の狙いだった伏せカードは、爆発に巻き込まれる寸前表を向いた。

「……速攻魔法、大欲な壺！除外されているドラゴネクロ、タスケルトン、巡死神リーパーの３体をデッキに戻すことでカードを１枚ドロー！」

『ブラフだったか……？』

チャクチャルさんが訝しむ。それならそれでいい、このまま押し通すまでだ。確かに僕の場のバブル・ブリンガーの効果によりレベル８のグレイドル・ドラゴンは現在ダイレクトアタックが封じられ、レベルを持たないダークナイトも蘇生効果を使ったターンには攻撃できない制約がある。

だけど僕にはそれ以前から、ずっとずっと切り札として一線を張ってきたこの１枚がある。

「バブル・ブリンガーのさらなる効果を発動！このカードを墓地に送り、レベル３以下の同名水属性モンスター２体を効果を無効にして特殊召喚する！」

グレイドル・イーグル　攻１５００

グレイドル・イーグル　攻１５００

「ランク３……ううん、違うか」

「さすがにわかってんじゃん、現。これで、バブル・ブリンガーによる制約は消えた。この２体のモンスターをリリースし、アドバンス召喚！その攻撃力は、リリースしたモンスターのそれの合計値。これこそが僕の切り札……霧の王（キングミスト）！」

２体のイーグルがどこからともなく立ちこめた霧に包まれ、そのまま消えていく。そして霧の彼方から、どれほどカードが増えようとも決して変わらない僕の切り札が姿を見せた。

霧の王　攻０→３０００

シンクロモンスター、エクシーズモンスター、そして効果モンスター。つい昨日までは、とてもじゃないが想像もしなかったような絵面だ。そしてその努力も、あと１回の攻撃で報われる。河風現に、無双の女王の二つ名に、ついに土をつける時が来た。

「霧の王、これが最後の攻撃だ！ダイレクトアタック、ミスト・ストラングル！」

ダークナイトとドラゴンがこじ開けてくれた結果、もはや現の場にカードは存在しない。この攻撃を、なんとしても届かせる。だがその剣閃は、天から無数に降り注ぎ大地に突き刺さった光の大剣によって阻まれた。

「光の護封霊剣！」

「なっ……」

動きを封じられたのは、霧の王だけではない。グレイドル・ドラゴンも、元より動きのとれないダークナイトも、僕のモンスター全てが光の剣に囲まれ身動きを取れなくなる。これだけ全てを賭けた攻撃だったというのに、またしても届かないというのか。自分の目を、耳を疑い呆然とする僕に、淡々とした中にも隠しきれないほんのかすかな焦

りを含んだ現の声がぼんやりと聞こえる。
「……このカードを墓地から除外することで、ターン内の相手の直接攻撃は全て封じられる。危なかった、本当に危なかった。これは、私にとっても最後の1枚だった」
「で、でも、そんなカード……」
答えは聞くまでもないが、それでも口に出さずにはいられなかった。いつの間に、だなんて、現にあのカードを墓地に送る暇があったのは1回しかない。後攻1ターン目、このデュエルが始まってすぐに召喚されて効果を使ったユニゾンビ。ワイトプリンスを墓地に送った方にばかり目が行っていたけれど、あの時あのカードはデッキのアンデット族だけでなく、さらに手札を1枚捨ててもう1度効果を使っていた。手札を、1枚。
あんな最初の最初から、いざという時の奥の手となるような最後の守りを仕込んでいたわけだ。この手札にも、そして僕のモンスターにも、攻撃を封じられた今これ以上彼女のライフを削る手段はない。
『マスター……』
「……わかってる。でもまだ、まだ負けたわけじゃないんだ。最後の最後まで、絶対に諦めてたまるもんか……！ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントの効果により、デッキから海亀壊獣ガメシエルをサーチする……！クソッ！」

血を吐くような後悔の声。手札のある1枚、たった今サーチしたガメシエルが見えたからだ。

……海亀壊獣ガメシエル。攻撃力こそレベル８にして２２００と特筆すべき数値ではないものの、その効果は場の壊獣カウンター３つをコストに相手のカードの発動を無効にして除外するという協力無比な代物。七皇の剣からのダークナイト、さらにスプリットからのグレイドル・ドラゴンで現の場を焼け野原にする、ここまではいい。もしもその後、バブル・ブリンガーで蘇生した２体のイーグルをリリースして呼び出したのが、あらかじめメイン１でサーチしておいたこのカードだったら。本来光の護封霊剣はフリーチェーンでいつでも使えるが、彼女はその性格からいっても今回のようにバトルフェイズに入るギリギリまで使わなかっただろう。スタンバイフェイズのこちらにとって絶対に止められない、どうしようもないタイミングでいきなり発動するようなことはせず、メインフェイズに一通りの展開を終えたのを見極めてから発動するために取っておいたはずだ。

あのカードは、彼女にとって文字通り正真正銘最後の守り。裏を返せば、それさえ押さえることができれば必ず攻撃は通っていた。つまりこのターンは僕にとって最後の攻撃が許されたターンであると同時に、彼女に勝つことができた最初で最後のチャンスでもあったのだ。無論、霧の王が悪いわけではない。ましてや、チャクチャルさんにも

一切の責任はない。全てあと1歩だったというのに、最悪のタイミングで読みを間違えた僕の責任だ。

ああ全く、どこまで皮肉な話なんだろう。ついさっき彼女がせめてもの救いを求めて伸ばした手を踏みにじった僕が、今度は彼女を救うため自分から伸ばしかけた手をも自身の手で払いのけたなんて。僕はただ彼女を助けたい一心で、本当にそれだけの理由から限界以上に自分の力を引き出して、未知のカードからも力を借りて戦って。そのくせ、肝心なところで彼女を無駄に苦しめる事ばかりしている。

『こんな言葉が慰めにならないことはわかっているが、たとえそれに気が付いていたとしても結果は変わりなかっただろう。サーチ効果がチェーンブロックを組む以上、ガメシエルを手札に加えた時点でその目論見も先読みされた可能性も高い……もっとも、サーチのタイミングによってはデッキ圧縮の一環とみなされスルーされた可能性も否定はできないが』

僕の手札には、このターン補給部隊で引いた幽鬼うさぎと今サーチしたガメシエル。辛うじて、心はまだ折れていない。まだデュエルを続けて、最後まで足掻くことができる。だけどそれは決して前向きなものではなく、ここまで彼女を苦しめたあげく手前勝手に勝負を降りるような行為は僕のデッキを、そして何より彼女のことを侮辱する行為だとわかっていたからだ。ターンエンド、と告げる自分の声は、悔しさのあまり我なが

ら情けないほどにか細く震えていた。
「私のターン。そう、このカード……なら、私も。まずは、3体目のワイトキングを召喚」
ワイトキング　攻９０００
現が召喚したのは、先のターンに大欲な壺でドローした方のカード。ああ、やっぱりだめだったか。発動を介さず永続効果で攻撃力を変えるワイトキング相手には、さすがの幽鬼うさぎも使うタイミングが無い。先ほどダークナイトで挟んだ回復も、あの火力を前にすれば誤差の範囲程度のものだ。確定した敗北を前に、むしろ心が落ち着いてくるのを感じていた。先ほどの失敗のせいでいまだに酷い気分なことは変わりないが、それでも穏やかな気持ちがじんわりと心中に広がってくる。
「地縛神、壊獣、それに……ううん、カードの精霊だけじゃないか。人間だって、それ以外だってそう。清明にはそうやっていつだって誰かを惹きつけて、一緒にいたくなる魅力があるね」
バトルフェイズに入る、その前に。死闘には似つかわしくないほど不思議と穏やかで優しい声とともに、現がそっと微笑んだ。
「……そりゃどうも。なんか最近、同じことをよく言われるよ」
何か企んでいる、だなんてことは思いもしなかった。彼女は気高い、真のデュエリストだ。だからこちらも空元気を振り絞り、素直な気持ちで答えることができた。口角を

上げてちょっと笑いそう返すと、現もおかしそうにクスクス、と笑う。そしてまた、小さく続けた。
「そしてそれは、私も同じ」
　言葉に詰まる。こんな時に気の利いたセリフの1つでも返せれば、どんなによかっただろう。その沈黙をよく聞こえなかったと解釈したらしく、またしてもからかうように小さく笑う。
「もう1回言うのは、さすがにちょっと恥ずかしいかな。ねえ、清明。清明がこの勝負に込めた覚悟。そしてその、デュエリストとして自分の限界を超えるほどの想い。デュエルを通じて私には、全部伝わって来たよ」
　ぶんぶんと強く、首を横に振る。伝わったからといって、それがなんの役に立つ。僕が求めていたことは、たとえそれが伝わらなかったとしてもいいから、とにかく結果を出すことだ。そんなこともできなかった僕に、優しい言葉をもらう資格はない。
「こんなこと言うと、清明は嫌がるかもしれないけど。ありがとう、清明。こんなに本気で、私と戦ってくれて。こんなにワクワクするデュエルを、最後に私としてくれて。最高のプレゼントだったよ」
　何を言わんとしているのか、その真意は掴めない。だけど、なぜだか嫌な予感が頭の片隅をよぎった。もう攻撃さえすればそれでこのデュエルは終わり、新たにカードを使

う理由はない。それなのに彼女の手が最後の手札1枚、このドローで引いたそれへと伸びていく。

「何を……？」

「私には、清明の気持ちには応えられない。だから、清明はもっと生きて。そうすればそのうちきっと、私なんかよりずっといい子だって見つけられるはずだから。でもやっぱり、ちょっとだけ妬けちゃうけどね」

『まさか……』

「駄目だ！」

嫌な予感が、ますます大きく強くなる。現が何をしようとしているのか、それを止めるためにデュエル中だということも忘れて駆け寄ろうとする。

でもその時にはもう、何もかもが手遅れだった。

「魔法カード、未来への思いを発動。私の墓地から異なるレベルを持つモンスター3体を攻撃力0、効果を無効にして特殊召喚する」

獣神ヴァルカン　攻２０００→０

ワイトプリンス　攻０

ユニゾンビ　攻１３００→０

そして呼び出される、3体のモンスター。だけど問題はそこじゃない、確か未来への

思い、あのカードのデメリットは！
「ターンエンド。そしてこのエンドフェイズまでにエクシーズ召喚をしなかったことで、私のライフは４０００失われる」
「現っ……！」
現　ＬＰ１０００→０
デュエルは終わった。あれだけの大型モンスターが飛び交い激しく激突した勝負の最後とは思えないほどにあっさりと、全てが消えていった。

「現！」
目を閉じて糸が切れた人形のように力なく、後ろに倒れこむ現。どうにか間に合って、地面にぶつかる寸前に抱え上げた。そのまま名前を叫んで揺さぶるけれど、反応はなくその体もぐったりしたままだ。
「現……そ、そうだ、チャクチャルさん！僕が勝ったんだよね、なら早く！」
『……無理だ。最初に釘を刺しておいたはずだ、デッキレスなどで逃げられるとそもそもマスターと彼女の間に繋がりが生まれず、私の力も届かないと。最後の最後に自分の手でライフを尽きさせた場合も同じこと、こういった手を使われると私にできる事など

何もない』
「ぐ……！」
　確かにこの決戦前、この作戦を決めた時からチャクチャルさんはそんなことを言っていた。どこにも持っていきようのない怒りと焦りが、体中を駆け巡る。
「だ、だったら、僕はこんな勝ち方認めない！こんなやり方で、あの現に勝ったなんて言えるもんか！こんなの無効だ、ありえない、もう1回勝負だ、現！だからお願い、目を覚ましてよ……」
『……やめておけ、マスター。それよりも、ほら』
「え……？」
　チャクチャルさんの押し殺したような声に、再び腕の中の現に目を落とす。ほんのかすかで弱々しくではあるが、その首が多少持ち上がりその目は再び開いていた。口が開き、大儀そうに言葉を絞り出す。
「……あはは。終わったね、清明」
「現！」
　その体を抱き寄せたところで、背筋が寒くなるような事実に気が付いた。ついさっき抱き止めた時、彼女の体はこんな不気味なほど軽くはなかった。でも今の彼女は片手どころか、指1本でも軽々と支えきれるだろう。いたって普通の感触、人間らしい重みす

ら、彼女の身体からは急速に失われつつある。それは、終わりが近いことを何よりも物語っていた。
「ほらほら、そんな顔しないで、清明。私のことよりも、そうね、清明は大丈夫なの？ちゃんと卒業できる？」
「そんなこと……」
『マスターもとうに気づいているだろうが、もう長くはない。悔いを残さないよう、今のうちに話をしておくことだ』
「うん……」
　チャクチャルさんに諭され、息を吸って気持ちを静めようとする。多分現は、最後の最後に僕の泣き顔なんて見たくはないだろう。だから辛いだろうに、苦しいだろうにこんな話題まで振ってくれて。稲石さんもそうだった。
　これだけ甘えさせてもらっておいて、まだこっちばかりが苦しい顔なんてできるわけがない。
「ああ、おかげさまで大丈夫だよ、現。３年間ずっと負け越してたけど、最後の最後に遊野清明は河風現に大勝利してぴったり１００点、それでめでたく卒業決定。そう決めて、ずっと探してたんだから」
「ふふっ、そうだったんだ。ごめんね、もっと早く、会いに行ければよかったんだけど」

「今だって、まだ遅くはなかったさ」
「ねえ、清明。もっとよく、顔を見せてくれる？」
　腕の中の現の存在が、また更に希薄になる。いよいよ終わりが近いことを本人も察したらしく、最後の力を振り絞って上半身を起こした。だから僕も、その目を覗き込むようにして顔を近づける。じっと目を合わせ……不意に、朗らかに笑いだした。
「ふふふっ、真剣な顔しちゃって。ねえ清明、キスしてもらえるかもって思った？」
「んなっ……！」
「隠してもだーめ。清明って、変なところですっごく真面目なんだもん。もしそんなことしたら、この先ずっと私に悪いからー、とか言って他の子を好きになるのに引け目を感じちゃうでしょ」
「そ、そんなこと」
「ないの？」
「……あるかも」
　ほらね、と得意げな顔になる現。僕はといえば、謎の気まり悪さに必死で耐えていた。こんな最後の最後まで、まるで弱みを表に出さない。強い女の子だ、本当に。とてもじゃないけど、やっぱり彼女には敵わない。
「ちゃんと約束できる？これからもっといい子のことを、私よりずっと大事にしてあげ

られるって」
「あー、それは」
「ちゃんと目を見て」
「……ハイ」
しぶしぶ頷くと、よろしい、と頷き返された。
「じゃあこれ、ご褒美ね」
その言葉の意味を理解するよりも早く首の後ろに手を回され、完全に不意を突いてぐっと下に押し付けられる。彼女の顔がさらに近づくと同時に唇にほんの1瞬触れた、柔らかな感触。
「……!」
「てへ。ごめんね、やっぱり私も我慢できなくて。でも約束、ちゃんと守ってね」
顔が熱い。頭の中が混乱して、口を開くも言葉が何も出てこない。その時、突然東の空からさっと朝日が差し込んで現の顔を照らした。これ幸いと上空に目を向けると、たった今まで空を覆っていた雲がみるみるうちに消えて朝焼けの空が一面に広がっていく。
「これ……」
「ダークネスが倒れた、そういうこと。今頃はそっちの計画も成功して、はるか未来に飛

ばされたのかな」
「じゃ、じゃあ！」
「おめでとう、清明。じゃあ、そろそろ私も時間かな」
もはやその感触すら希薄になってきた彼女の体を、無言で強く抱きしめる。彼女もそっと僕の背中に手を回し、それに応えてくれた。
さようなら、とは言いたくなかった。ならこんな時には何を言えばいいのか僕の足りない頭ではわからず、ただただ力を込めて抱きしめることしかできなかった。そうしている間にも現の体は薄く、軽く、最初から存在しなかったかのように消えていく。それでも彼女には、僕の想いは確かに伝わったらしい。
「うん。幸せに、ね」
その言葉を最後に、現が消えた。朝日の照らす中で自分の腕に目を落とすが、もはやその手は何も掴んではいなかった。視界がにじみ、ぼやけてほとんど何も見えなくなる。何度も何度も頬を涙が伝い、地面に落ちる。
しばらくの間、ずっとそうしていた。それを咎める者はどこにもおらず、僕はいつまでも、いつまでもただ泣いていた。

ｙｏｕ　ｋｎｏｗ～あなたのことを知っている～

ターン１２７　鉄砲水と遊戯の王

「本日は、我々卒業生のために盛大な卒業式を行っていただいたこと、心よりお礼申し上げます。時が経つのは早いもので……」

凛とした明日香の声が、講堂に響き渡る。さっきまでおいおいと男泣きに泣いていたクロノス先生と剣山が頭を冷やすためにつまみ出された今、全校生徒が静かにその声に耳を澄ませていた。

……いや、違うか。ただ１人、ただ１人だけ、この場にいない人がいる。僕が誰よりも助けたかった、誰よりも勝ちたかった、彼女はもういない。今年の卒業生は、３年前の入学生より１人少ない。たとえ僕だけでもそのことは決して忘れない、忘れられるわけがない。

「……このデュエルアカデミアで、多くの友人達、先生達と出会い、デュエルを通して、数多くのことを学んできました。時には戦い、励まし合い……」

明日香の卒業生代表答辞はまだ続く。実際こういった役どころに関しては、彼女はまさに適任だろう。それにしても、あの入学式がもう３年前か。

「たとえこれから別々の道を歩いていこうと、遠い場所で暮らしていこうと、私達は仲間です」

答辞もいよいよ佳境に入る。周りに耳を傾ければかすかに鼻をすする音や、涙をぬぐっているのであろう布音が聞こえてきた。まったく皆単純というか、涙もろいというか。

『随分スレたことを言うようになったものだな。無理に幼くなる必要はないが、もう少し年相応な態度になってもいいんだぞ？』

チャクチャルさんの入れてくる茶々にも、いつものようなそれを面白がっている響きが無い。あの日、あの現との死闘以来、僕の何かが決定的に変わってしまったことに、誰よりも敏感に気付いているのだろう。卒業、か。もちろん、それに対しての感慨が無いわけじゃない。だけど、少なくともまだしばらくの間は、僕の涙は枯れたままだろう。

「ありがとう、みんな……ありがとう……デュエルアカデミア。そして……さようなら」

明日香の演説が終わる。結局、涙は一滴もこぼれなかった。周りと共に拍手しながら、そんな自分を苦々しくも思う。現を失ってから数日、あの時流し続けた涙が止まったその瞬間から、ずっとこうだ。

まるで自分の心の一部が、死んでしまったかのように。感情の動きが明らかに鈍くなり、少し気を抜くと無意識のうちにため息ばかりがこぼれ出る。先日何気なく鏡を覗い

てみたら、随分ひどい顔をしていた。表情にも覇気がないのはもちろん、特に目だ。あれは冷めた目、というよりも台所で見慣れた死んだ魚の目に近い。その変化を自覚しつつもだからどうしようという気が湧いてこないあたり、かなり重症なんだろう。

「それでは、これで卒業式を終わります。卒業生の皆さんは今夜行われる卒業パーティーまでは完全に自由時間となりますので、ぜひ悔いを残さないよう皆さんが巣立つこのデュエルアカデミアに、そして後輩たちに別れを告げてきてください」

鮫島校長のその言葉を最後に、この島で過ごす最後の自由時間が訪れる。自由といっても、どこで時間を潰そうかな。レッド寮の自室も、もう荷物はまとめて本土行きの船に乗せてしまったため、今更戻ったところで本当に何もない。となると、まあ、あの場所しかないか。正直なところ、今はあそこにもあまり近寄りたくはないけれど。

「はぁー……」

また、だ。我ながらやる気のないため息をこぼし、重い足を半ば引きずるように、それでもいつもの場所を目指し歩き出す。

……後ろから万丈目たちがこちらを見て、心配そうな視線を向けていることにも気づいていた。ただ僕の方がそれに背を向け、気づいていないふりをしただけだ。悪いね、こんな日にまで心配かけて。でもちょっと、僕はもう駄目みたいだ。

誰もいない階段を上り、がらんとした廊下を渡り、明かりのついたある部屋に。目を

つぶっていても来ることができる、僕にとってはレッド寮と同じほどに馴染んだ場所だ。
「終わったよー」
「お疲れ様でした、先輩……と呼ぶのも、もう厳密には違うのでしょうが」
「そのへんはご自由にどーぞ」
　扉を開けると、光がパッと目に飛び込んできた。食べ物が少しでもおいしく見えるようにと、かつての僕が本気でパンフレットとにらめっこして決めた色と明るさだ。だけどあの熱気も、今の僕にはもうないだろう。一番入口に近い椅子に無造作に腰を下ろすと、店番をしていた葵ちゃんが何も言わずに湯気の出る紅茶のカップを２つ持ってきた。それを机にそっと置き、僕の対面に当然のような顔で腰かける。
「……自慢じゃないけど、財布は空だよ?」
「最後までさもしい先輩ですね。私からの卒業祝いです、おごりますから大人しく飲んでください」
「ありがと」
　僕はストレート派だけど、葵ちゃんは紅茶を飲むときにその余裕があれば必ず輪切りのレモンを乗せる。今回もその例に漏れず、彼女のカップには薄いレモンが浮かんでいた。それをストローで突っつきながら、ポツリと彼女が呟く。

「……先輩」
「なーに？」
　ストローなんて使うのは勿体ないので、封を切らず脇にのけてカップに直接口をつけて一口。ふむ、悪くない。茶葉の量、湯の温度、どれも及第点だろう。洋菓子はともかく紅茶に関してはほぼノータッチだったから、僕がいつも淹れるのをひたすら見て覚えたのか。そういえば彼女がここに入って来た当初、とりあえずお祝い代わりに1杯淹れてあげた時は目を丸くして飲んでたっけ。
　そんな昔の記憶を思い出しながら顔を上げると、さすがにこの数日でめっきり薄くなった僕の感情も動かされた。こちらをまっすぐ見つめていたのは、これまでに見たこともない彼女の顔……いまにも怒りだしそうな、それでいて今にも泣きだしそうな不安に包まれた表情の葵ちゃんが、そこにはいた。身を乗り出してこちらを覗き込む彼女の目は、この至近距離でとはいえこちらから見てもわかる程度に潤みかかっている。
「どうして、私達には何も言ってくれないんです？ダークネスとの戦いが終わったあの日、先輩にいったい何があったんですか!?私達は勝ったんですよ！なのに先輩だけずっとそんな顔ばかりして、今にもこの場で倒れて死んじゃいそうな……！いったい何を見て、何があったらそんな風になっちゃうんですか!?」
　最初のうちこそまだ抑えた口調だったもののすぐにヒートアップしていく、ずっと堪

えていたのであろう、およそ普段の葵ちゃんからは想像もつかないほどに突然な感情の爆発。その迫力に気圧されて黙り込んでいると、ますますその目を潤ませてこちらの肩に片手を置き、消え入りそうな声で畳み掛ける。

「先輩の様子を見ていたら、苦しまないでくださいなんて言えません……だからせめて、誰かに教えてください。どうしてあんなに頑張った先輩が、たった１人で苦しむ必要があるんですか。せめて、私たちにもそれを背負わせてくださいよ……」

こんな葵ちゃんは、僕も初めて見る。多分彼女は、本気で僕のことを心配してくれているんだろう。だけど今の僕には、こんな彼女の言動１つ１つが何よりも突き刺さる。もう、河風夢想は……あるいは河風現は、どこにもいないんだと嫌でも思い知ることになるからだ。

理屈も理由もわかりはしないが、あの戦いが終わった時にはすでに、現、という人間の存在は世界中から消えていた。この僕、それに僕と一緒にいたチャクチャルさんたち精霊を除き誰も、彼女のことは覚えていない。まるで、そんな人間など最初からどこにもいなかったかのように。それに気づいた瞬間から半狂乱になってアカデミア中を駆けずりまわり、調べられる限りのあらゆる資料をあたった結果、例の事故の記事が見つかった時にはまるで足元の地面が崩れ落ちたかのような絶望感がしたものだ。曰く、その交通事故の結果として僕の母親と河風一家は全滅。唯一の生き残りが遊野家の車に

乗っていた赤ん坊の男の子……つまり、僕だ。初めから、現はあの事故で死んでいたことになっていた。世界の歴史が、明らかに僕の知るものから変わっていた。

なら、こんなこと言えるわけがない。初めからいなかったことになっている人間を救えなかったから、なんて話に、一体何の意味がある？確かに僕たちはダークネスに勝った。奴を未来の果てに飛ばすことで、今の危機は去った。その喜びにいないはずの人間、誰も知らない記憶の話で水を差す必要はない。この苦しみは、結局彼女を救えなかった僕に対しての罰だ。だからゆっくりと首を振り、苦笑する。多分、恐ろしく空虚な笑みしか浮かばなかったろう。

「……なんでもないよ、なんでも」

そんな僕の態度は、当然のことながら彼女の感情を逆なでするだけに終わったらしい。肩にかけたままの手がぎゅっと拳を握り、その腕に力がこもり……辛うじてその腕を振り抜くことをやめ、代わりに涙と共にきっとこちらを睨みつける。

「先輩の……馬鹿っ！」

感情のままに吐き捨てたような捨て台詞と共に店を飛び出し、これでもかとばかりに力を込めて閉められた扉が目の前で派手な音を立てる。馬鹿、か。ごもっともだ。

『ごもっともついでに、私からも苦言を呈しておこう。マスターのアホ』

「わーお、ストレートな」

『ああ、これはすまなかった。あまりオブラートに包むと、その頭では理解できないのではないかと思ってな』

　チャクチャルさんの言葉にも、いつにもまして棘がある。そうさせたのも、僕のせいだ。頭ではわかるけれど、だからどうしようという気はまるで湧いてこない。

『あまりこういった話は、私も好きではないのだが。マスターがいつまでもそうやって腑抜けていて、それを彼女は喜ぶと思うのか？』

「もう現は喜べないし、悲しむこともできないよ。んでもって、そうさせたのは全部僕さ」

『……だろうな。ならもう勝手にしてくれ、私が本気でやると説得ではなく洗脳になりかねないから自重するぞ。どうせ時間は無限にある、マスターが自力で乗り越えるまで気長に見させてもらうとするさ』

　ため息交じりに、頭の中に響く声が退いていく。だが今回はいつもの呼んだらすぐ来るであろう距離感とは違い、もはや声すら届かないほど遠くに行ってしまうかのような感覚がした。怒らせちゃったかな。

　そして、そんなつかの間の孤独も長くは続かなかった。先ほど葵ちゃんが勢いよく飛び出て行った扉が再びゆっくりと開き、確かに見覚えのある……しかしまさかまた直接見ることになるとは夢にも思わなかった顔が見えたのだ。

「お久しぶりです、清明ボーイ。卒業おめでとうございマース」
「ペガサスさん……？」
片目を常に長髪で隠す、どれだけ時事に疎い人間でもその顔と名前を知らない人はいないであろう世界で最も知名度の高い男の1人。Ｉ２（インダストリアル・イリュージョン）社の総帥、ペガサス・Ｊ・クロフォード。
「Ｏｈ、どうしたんですか？確かにデュエルアカデミアのスポンサーは海馬コーポレーションですが、私はデュエルモンスターズの生みの親。その学校で卒業式が行われるとあれば、当然顔を出す権利はあるはずデース。それに実を言いますと、清明ボーイ。あなたに渡した白紙のカード、あなたに託した身としてはあの行く末が気になっていましてね。丁度今夜の卒業パーティーにサプライズゲストとして呼ばれていたので、ついでに顔を出させていただきました」
白紙のカード。1枚は壊獣に、もう1枚は次元を越えてやってきた魔法カード……ＲＵＭ（ランクアップマジック）―七皇の剣（ザ・セブンス・ワン）に。あの力を手に入れた時は、必ず勝てると思った。だけど、その結果がこれだ。もう2度と戻らない彼女と、無様に生き残った負け犬。カードは応えてくれたのに、肝心な僕のプレイングがそのすべてを台無しにした。
複雑な思いが胸をよぎり、若干の間が開く。ペガサスさんの表情が訝しげなものになってきたところで、ようやく我に返った。

「この子たちは、確かに応えてくれましたよ。そして多分……ペガサスさんには、これを見る資格があると思います」

シンクロモンスターやエクシーズモンスターをユーノもチャクチャルさんも頑なに僕に隠していたのには、きっとそれなりの理由があるはずだ。壊獣はともかくこの七皇の剣をペガサスさんに見せるという行為は、もしかしたらその思いを裏切ることになるのかもしれない。だけど元はといえばペガサスさんから貰ったカードを独断で当人に見せないというのもおかしな話だし、それに何よりも今の僕の精神状態では、もうそんなことはどうでもいいとしか感じなかった。いくら強力な力を秘めたカードでもこんなゴミみたいなプレイングしかできないようなヘボの手に残しておくぐらいなら、いっそ元の持ち主に返す方がずっと有意義だろう。デュエルにかける情熱もあの日以来燃え尽きてしまったし、返せと言うならもうそれでいいや。

もうやる気はないが、それでも捨てたりしまい込んだりする踏ん切りもつかず一応身に着けておいたデッキから壊獣一式と七皇の剣を引っ張り出し、それを手渡す。何かを察したような顔でそれを受け取ったペガサスさんが、これまで見たことが無いほど真剣な目でそのテキストに目を通していく。

「なるほど……どうやら、私の見立ては正しかったようデース。この未知なるカードは、おそらく私が持っていていいものではありません。とはいえ感謝します、私にまだ見ぬ

デュエルモンスターズの一端を見せてくれて。デュエルモンスターズの創始者として、心からお礼を言わせてください」

「……どうも」

本来なら嬉しいはずの賞賛の言葉も、まるで心に響かない。行儀が悪いとは思いつつも、返されたカードをぼんやりとうつむいて見つめる僕を見かねたのか、さっきまで葵ちゃんの座っていた椅子に腰かけたペガサスさんが、昔を思い出すかのように明後日の方向に視線を向けつつ語りだす。

「清明ボーイ、今のあなたのような目をした人間を、私は1人知っていマース。それは他ならぬ、かつての私自身……かつて誰よりも愛した恋人を病で失い、ただ真っ白な心のカンバスを見つめる事しかできなかった私デース」

「え……」

恋人を失った。僕の記憶が正しければ、この人にそんな過去があったなんて話は聞いたことが無い。わずかに顔を上げると、ペガサスさんの片目と視線が合った。

「あなたに何があったのかは、あなたも聞かれたくはないでしょう。ですが私には、今のあなたの思いは痛いほどわかりマース。しかし理解できるがゆえに厳しいことを言わせてもらいますが、あなたはそれを乗り越えなければなりません。思い出を忘れるのではなく、自らの一部として受け入れるのデス。私はそれを引きずり続ける苦しみを、よ

く知っていますから……」

　ここで言葉を切り、髪に隠れた左目のあるであろう部分にそっと手を当て、残った右目も閉じて物思いにふけるペガサスさん。その間に僕はといえば、今の話をずっと考えていた。忘れるのではなく、受け入れる……でも、そんなことができるわけがない。僕にとってあのデュエルは、間違いなく全てだった。その上で、僕はその勝負に負けたのだ。それは、何度後悔してもしきれない。

　再び目を開いたペガサスさんが立ち上がり、失礼しマース、と断りを入れて懐から携帯電話を取り出す。おもむろに番号を打ち込み、どこかに電話をかけだした。

「ハーイ、私デース。申し訳ありませんが、少しこちらに来ていただけますか？場所は……ええ、その通りデース。では、よろしくお願いしますネ」

　それだけ言って通話を切り、携帯をしまい直したペガサスさんが再びこちらに向き直る。

「とはいえ、いくら口で説明したところでとてもすぐに立ち直れるものではないでしょう。むしろ他人の言葉など、あなたの今抱えている空虚の前には何の役にも立ちはしない……そこで勝手ながら清明ボーイ、あなたにはこれからここに呼んだ人とデュエルをしていただきマース」

「え？えっと……え？」

「これからここに来る彼もまた、ある意味では私たちと同じ苦しみを知る者……しかし私とは違い、彼は自らの手でその関係に終止符を打ちました。その決意を抱くまでに一体どれほどの覚悟が必要だったのか、私には想像もつきません。ですがそんな彼と対することで、きっと見つかる何かがあるはずデース。ああ、噂をすれば彼がやってきましたね」

それは僕にも聞こえていた。こちらに近づいてくる控えめな足音が、ちょうど店の前で止まったからだ。そして、ノックの音が小さく響く。

「どうぞお入りください……遊戯ボーイ」

「こんにちは。君が遊野清明君、だね？話は聞いているよ」

「えっと……は、はじめまして……」

扉を開いて現れたのは、僕らにとっては生ける伝説にして童実野町の誇り。デュエルキングの称号をほしいままにする、最強無欠のデュエリスト。武藤遊戯が、そこにいた。

「そんなに緊張しなくてもいいよ。同じデュエリスト、もっと気楽にやろう。それに、コピーカードとはいえあのラーの翼神竜を倒したデュエリストには、僕も1度会ってみたいと思っていたんだ……だけど、今は本調子じゃないみたいだね」

立ち上がることも忘れ座ったまま半ば呆然と挨拶した僕に屈託のない笑顔で笑いかける遊戯さんに、ペガサスさんがすまなさそうに声をかける。

「申し訳ありません、遊戯ボーイ。予定には無かった話ですが、見ての通り1度火の消えてしまった彼のマインドを再び取り戻す、その手伝いをあなたにはしていただきたいのデース」
「なるほどね、ペガサス。なぜ僕を呼んだのか、何となくわかった気がするよ。それにいくらサプライズゲストだからって、夜までヘリの中にいるのも退屈だったしね。じゃあ、清明君。僕とのデュエル、受けてくれるかい？」
「僕は……」
　デュエルキングと直接戦える機会なんて、人生で何度あるかわかったものじゃない。それはわかっているけれど、どうしても踏ん切りがつかなかった。デュエルの力をもってしても何もなしえなかった僕に、今更カードを通じて何かを学ぶことができるのだろうか。この人と、戦う資格などあるのだろうか。デッキに目をやり、またその場でうつむく。
「もしユーにどうしてもその気が起きないというのなら、私もそこまで無理強いをする気はありません。ですがそれでも断る前に、もう1度だけ考えていただきたいのデース。本当に、それでよろしいのですか？」
　諭すような言葉に、また顔を上げる。理屈ではなく直感で、これが僕に与えられた最後のチャンスなのだと察した。ここでもう1度立ち上がるか、勝負に背を向けて心の折

れた負け犬のままでいるか。この差しのべられた手を払いのけることは簡単だけど、その代償は計り知れないほどに大きいだろう。

だけど、それでも。全身を覆って離さない、気怠い疲労が上回る。このまま、敗者のままでいたい。もう2度と目を覚まさず、ぬるま湯な世界の中で自分の傷をみじめったらしく舐めまわしながら無為に時間が経つのをただ眺めていたい。

だが、その欲求に身を任せることもまた、僕には許されなかった。まるで誰かに支えられるかのように、誰かが肩を貸してくれているかのように、体が勝手にぎこちなく、そしてゆっくりと立ち上がる。今のは、一体？

『わかっているだろうが、私たちではないぞ』

真っ先に思い当たった原因に先手を打った形で否定され、ぼんやりと周りを見回す。当然のことながら、遊戯さんとペガサスさんの他には誰もいない……いや、今ほんの1瞬だけ、視界の隅で青い長髪が揺れたように見えたのは気のせいだったのだろうか。その箇所を注視しても、やはりそこには誰もいない。気配すらない。

だけど、それでも僕はこう思うことにした。とっくに成仏した彼女が、わざわざ腑抜けた僕の尻をけ飛ばしに来てくれたんだと。ああまったく、僕がすべてにやる気をなくしたきっかけとなった当の本人まで、そうやって背中を押してくるとはね。結局、どこにも逃げ場はないってことか。ならこの勝負、僕のために受ける気力はなくっても、彼

女のために受けてみせよう。
「……遊戯さん。よろしく、お願いします」
「うん、よろしく。じゃあ、カットを頼むよ」
　そう言って差し出されたデュエルキングのデッキを受け取り、僕も自分のデッキを渡す。デッキをシャッフルしながらも、こうして触っているだけでも感じる圧倒的なパワーに威圧されそうになる。やがて返ってきたデッキをデュエルディスクに戻すと、僕も手にしていたそれを本来の持ち主の手に渡す。1歩下がってデュエルを見守るペガサスさんの射抜くような鋭い視線を感じながら、5枚の手札を引く。ああ、この感触もあの時以来だ。それを楽しむ気分にはなれないけれど、それでも彼女がそう望むなら、今だけでも前を向いていよう。
「「デュエル！」」
「僕の先攻！モンスターをセットして、さらにカードを2枚セット。さあ、かかっておいで！」
　遊戯さんの立ち上がりは、モンスターと伏せカード……これだけでは、何とも言いようがない。伏せカードも気になるけれど、わざわざセット状態で場に出したところを見るとあのモンスターはリバースモンスターだろうか。それとも遊戯さんを代表する壁モンスターの1体、マシュマロンという線もあるか。なら、わざわざ正面から攻撃して

効果を使わせることはないか。
「僕のターン。そのセットモンスターをリリースして遊戯さん、そちらのフィールドに粘糸壊獣クモグスを攻撃表示で特殊召喚します。そして相手フィールドの壊獣に反応して、手札から怪粉壊獣ガダーラを特殊召喚」
粘糸壊獣クモグス　攻２４００
怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００
早速揃った２体の壊獣で、いきなり布陣を突き崩す。だけどこれだけじゃ終われない、まだ僕には召喚権が残っている。
「さらに、ツーヘッド・シャークを召喚。先に言っておきますが、このカードは２回攻撃の能力を持っています」
「僕のモンスターを除去したうえで自分も大型モンスターをコスト無しで特殊召喚……なるほど、なかなかやるね」
「お褒めいただきまして。このままバトルフェイズに……」
「いいや、このターンは通さないよ。トラップ発動、重力解除！表側表示のモンスター全ての表示形式は入れ替えられる！」
「躱された……」
怪粉壊獣ガダーラ　攻２７００→守１６００

ツーヘッド・シャーク　攻１２００↓守１６００
粘糸壊獣クモグス　攻２４００↓守２５００
攻撃表示だった３体のモンスターが一斉に守備体勢を強要され、せっかくのバトルフェイズも攻撃可能なモンスターが存在しないまま流れてしまう。全ての攻撃が通ればいきなり遊戯さんのライフを半分以上削ることもできたけれど、さすがにそれは調子が良すぎたか。そしてまずいことに、ガダーラの守備力はクモグスの攻撃力どころか並みの下級アタッカーすら下回り、ツーヘッド・シャークと同じ数値の１６００。とはいえ、僕の手に防御札はない。
「なら、ターンエンドです」
「エンドフェイズにトラップ発動、リミット・リバース！この効果により僕の墓地から、攻撃力１０００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚できる。甦れ、マシュマカロン！」
伏せてあったもう１枚のカードが発動され、ショッキングピンクの巨大なマカロン型モンスターがクモグスの隣に並ぶ。このターンの攻防はまだほんの挨拶みたいなもの、ここからが本番だろう。
マシュマカロン　攻２００
清明　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：怪粉壊獣ガダーラ（守）
ツーヘッド・シャーク（守）
魔法・罠：なし
遊戯　ＬＰ４０００　手札：２
モンスター：粘糸壊獣クモグス（守）
マシュマカロン（攻・リミット）
魔法・罠：リミット・リバース（マシュマカロン）
「僕のターン、ドロー！」
ここで引いたカードを見た遊戯さんが、なぜか後ろのペガサスさんの方をちらりと見る。ペガサスさんも何が言いたいのか察したらしく、すぐに重々しく頷いて見せた。意思疎通が成り立つ中で１人話に取り残される僕に、遊戯さんが向き直る。
「ごめんごめん。ただ、本当にこのカードを使っていいのか少し確認したくてね」
「確認？」
これは遊戯さんと僕のデュエルなのに、ペガサスさんの意見がなぜ必要になるのだろう。余計に訳が分からなくなる中で、遊戯さんが動いた。
「僕はこのマシュマカロンを守備表示に変更し、この瞬間リミット・リバースのさらなる効果を発動。蘇生モンスターが守備表示になった時、このカードと蘇生モンスターをま

とめて破壊する！」
マシュマカロン　攻２００→守２００
せっかく呼び出されたマシュマカロンが、守備表示になった瞬間に自壊する。だがその別れた欠片がもぞもぞと動き出し、まったく同じ2体のマシュマカロンに増殖した。
マシュマカロン　守２００
マシュマカロン　守２００
「そしてマシュマカロンは1ターンに1度、破壊された時に分裂復活する。これで僕の場には、3体のモンスターが揃った！」
「3体……？」
武藤遊戯、いまだ残る召喚権、そして場には3体のモンスター。とくれば、それらの符号が示す意味は1つしかない。でも、そんなはずはない。あのカードは消失した、そう聞いている。
「天空に雷鳴轟く混沌の時、連なる鎖の中に古の魔導書を束ね、その力無限の限りを誇らん――――オシリスの天空竜、召喚！」
ここは室内だというのに、激しい雷鳴が轟いた。3体ものモンスターがすべてリリースされ、そのかわりに現れた鮮烈な雷光に照らし出されるあの赤い姿は、まさに究極のモンスター。いや、モンスターなどと呼ぶのもおこがましいか。数あるデュエルモンス

ターズの中でも頂点に位置し規格外とされる存在、三幻神のうち1体……オシリスの天空竜。そしてその攻守は、プレイヤーの手札1枚につき１０００ポイント……つまり遊戯さんの手札は2枚だから、そのどちらも２０００となる。

　オシリスの天空竜　攻?→２０００　守?→２０００

「ど、どうして神のカードが……！」

「それは私からお答えしましょう。ユーがフランツ、いえ、邪神アバターによる恐るべき事件を解決してくれてから、私は考えたのデス。実際のカードとして完成させていないはずのアバターがああして自我を持ってしまった以上、同じくかつての私が着想だけ残しておいた残る2枚の邪神カード……オシリスの天空竜に対応する邪神イレイザー、そしてオベリスクの巨神兵に対応する邪神ドレッド・ルート。その2体もいつか第2、第3のアバターとしてあのような事件を引き起こすかもしれない。元はといえばそのような存在を作り出した私の責任ですが、私はその可能性を恐怖しました」

「嘘でしょ、あんなのがまだ2枚も……?」

　アバターの持つ、あの悪夢のような強さを思い出す。どんな相手よりも常に攻撃力が１００高くなる、不定形にして無敵の邪神。正直もう1度奴と戦ったとして、また勝てるビジョンがさっと思い浮かばない、あれはそれほどの強敵だった。それと同格の存在があと2体、いつ目覚めてもおかしくない状況にあったというのか。乾いた僕の声に自

責の念からか目を伏せ、それとこのオシリスがどう関係しているのかの説明が続く。
「はい。ですが3幻神の研究を続けるうち、ある変化が起きていたことに気が付いたのデース。あれは、神のソリッドビジョンを調べている最中のことでした。ある研究員がほんの不注意から、ソリッドビジョン投影のためデュエルディスクに置かれていたその神のレプリカを素手で触ってしまったのです。私も彼もその後に起こるであろう悲劇を恐れましたが、バット、彼に神の裁きが下ることはついにありませんでした。しかしこれは、コピーカードの使用者は神の怒りに触れるという従来の常識に反していマース。そこで私は慎重に実験を繰り返した結果、少なくとも遊戯ボーイが今召喚しているコピーカードからは使用者に裁きをもたらす能力が消えていることに気が付きまシタ」
「で、でも、どうしてなんですか?」
　食いつく僕に、ゆっくりと首を振るペガサスさん。
「それはわかりません……しかし、私はある1つの仮説にたどり着きました。恐らく神のカードは、たとえコピーであっても自らの存在を脅かす邪神の存在に気が付いたのでしょう。そこでまたフランツのような犠牲者が生まれるよりはと、裁きの力を緩め邪神の誘惑に屈することなく自らを使いこなせる真のデュエリストを求めたのだ、と。そこで私は今の話をすべて明らかにしたうえで、遊戯ボーイに白羽の矢を立てました」
「だから僕は、こうしてこの神のカードを再びデッキに入れているのさ。もっともさす

がにレプリカだから、本物よりは効果も控えめになっているみたいだけど」
「その通りデース。例えばそのオシリスの場合、上級呪文にあたる魔法、罠の効果こそ1ターンのみ受け付けるものの他のカード効果は完全に受け付けない、いわゆる神の耐性は削除。またその代表能力である召雷弾も、真の姿とは異なり守備表示で召喚されたモンスターには発動できないように調整を施してありマース」
その言葉に、アバター戦で出てきたラーを思い出す。そういえばあのラーも、バトルシティのビデオで見たときにはあったけどコピーカードになった時に消えた耐性を神縛りの塚で補ったり、アドバンス召喚時にリリースしたモンスターの攻守を束ねる能力が消えていたっけか。
だけどあのラーも、そしてこのオシリスも。とてもじゃないがこの迫力、これが人の手で弱体化させられた神だとは思えない。まだ召喚されただけで攻撃すらしていないというのに、全身の毛が逆立ち肌が焼けつくようなひりひりした感覚がする。
「じゃあ、デュエルを続けようか。オシリスで怪粉壊獣ガダーラに攻撃、超電導波サンダー・フォース！」
２つの口が上下に重なるオシリス独特の頭部のうち下側の口がおもむろに開き、その奥から溢れんばかりの力が迸る。そしてそこから放たれた雷撃が、視界を白く染めガダーラを消し飛ばした。

オシリスの天空竜　攻２０００→怪粉壊獣ガダーラ　守１６００（破壊）
「ガダーラ！」
「これで僕は、ターンエンド」
オシリスの召喚、さらにガダーラが倒されたことで戦局は一気に遊戯さんの側に傾いた。いくらツーヘッドでも、さすがに手札を２枚保持した状態のオシリスを相手するのは荷が重いだろう。さて、あのオシリスとどう戦うべきか……ここまで考えたところで、いつの間にかすっかりこの勝負に集中している自分に気が付いた。確かに余計なことを考えていてどうにかなる相手でないのはその通りなのだが……こういう時に役に立つかどうかはともかく一緒に戦略を練ってくれるあの神様がいてくれないのは、やっぱり少し心細い。
『マスターがデレたと聞いて。どうだ、少しはマシな気分になれたか？』
「チャクチャルさん！」
ひょこっと思考に割り込んできた地縛神に、思わず驚きの声が出る。釘を刺しに来たのは例外としても、さっきの去り際の言葉からいってもう当分会えなくてもおかしくないと思っていただけに、これは本当に不意打ちだった。
『そりゃあ、マスターがやる気になったのなら私も協力を惜しむつもりはないさ。大体、マスターは根が単純だからな、それなり以上の強敵をぶつけておけば、あとはこう……

闘争本能的な？勝手に燃え上がって勝手に元気が出るなんてわかりきっていたからな。それを自分でやろうとしないから、いつまでたってもあの調子だったというだけで。ましてや相手はデュエルキング、この世界で用意できる相手としては最高峰だろう。でかしたぞ、マスター』

「……ありがと」

なんか言葉の端々から微妙に馬鹿にされているような気もするけど、まあ今回ばかりはあれだけ心配させたのだから何を言われても言い返す資格はない。チャクチャルさんの言った通り、ほんの１０分前と比べてもだいぶマシな気分になれたのは確かだ。もちろんまだ絶好調とまでは言えないし、ペガサスさんの言っていたこのデュエルを通じて見つけられる何かというものもわからない。だがこの感覚は、まるでオシリスの一撃が僕の心の奥底にうじうじと淀んでいたものを幾分祓ってくれたかのようだ。それとも、これがラーをアバターの手から取り戻したことに関する三幻神なりの借りの返し方だったのかもしれない。

「さーて……ドローー！」

とにもかくにも、今欲しいのは壊獣だ。神だろうが仏だろうが、リリースの魔の手から逃れることは不可能。結果論とはいえせっかく初手に来た２枚を早々に使ってしまったことが、つくづく悔やまれる。

『む、珍しいな。まだ少し腕が鈍っているか？』

「いや、これだって悪くないさ。カードを１枚伏せてターンエンド」

どうやら、このターンは大人しくしていろということらしい。そんなデッキのメッセージに従い、素直にセットのみでターンを終える。もちろん、何も考えていないわけではない。次のターンは生き残れるという、それなりの算段あってのことだ。オシリスの天空竜は攻撃力が手札に依存するがゆえに、召雷弾で牽制しながらモンスターを並べて一気に勝負をつけようにもあまり手札を派手に使うことができないジレンマを抱えている。なにせ手札１枚ならその攻守はたったの１０００、ツーヘッドすら突破できないほどの数値になるのだから。

清明　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：ツーヘッド・シャーク（守）

魔法・罠：１（伏せ）

遊戯　ＬＰ４０００　手札：２

モンスター：オシリスの天空竜（攻）

魔法・罠：なし

「僕のターン。ベリー・マジシャン・ガールを召喚！」

ベリー・マジシャン・ガール　攻４００

ドロー、そして召喚されたのは十代のカードエクスルーダーよりもなお幼い、幼女どころかまだおしゃぶりをくわえた赤ん坊のようなちっこい魔法少女。オシリスのステータスもそれに合わせて1瞬だけ３０００になり、またすぐ２０００に戻る。
「そして召喚に成功したベリー・マジシャン・ガールは、デッキからマジシャン・ガール1体をサーチできる。来い、ブラック・マジシャン・ガール！」
なるほど、サーチ効果持ちか。確かにそれなら手札を減らすことなく、なおかつ戦線を広げることができる。これによりオシリスの攻守がまた３０００に上がる……だが、遊戯さんの側にそれで終わらせる気はないようだった。
「そして、僕のフィールドに存在する魔法使い族モンスター1体をリリースする。これにより手札から、沈黙の魔術師―サイレント・マジシャンを特殊召喚！」
魔法幼女の姿が消え、うってかわって青と銀を基調とした体のラインがくっきり浮き出る服装の理知的な美女といった趣の魔法使いが特殊召喚される。その攻撃力は、ベリーよりは高いもののそれでも１０００止まり……いや、さらにその数値が上がっていく。
「沈黙の魔術師の攻撃力は、僕の手札1枚につき５００アップする。よって今の攻撃力は、２０００！」
沈黙の魔術師―サイレント・マジシャン　攻１０００→２０００

「攻撃力２０００が２体……」

『それだけではないな。沈黙の魔術師は１ターンに１度、相手の魔法を無効にして破壊できる。そしてオシリスの前では、守備表示で召喚しない限り攻撃力２０００以下のモンスターの起動効果は使えないも同然……気をつけろ、マスター。あれは、ただ漠然と合計攻撃力が高くなるようにモンスターを並べているのではない。着実に、こちらの打つ手を１つ１つ潰しに来ている』

強い。ただオシリスのカードパワーに任せてがむしゃらに突っ込んでくるのではなく、かといって複雑なコンボだけに頼り切るわけでもない。要所要所でとてつもなく重いはずの神のカードを難なくアドバンス召喚したかと思えば、こうして最低限の手札消費で別のモンスターも並べてみせる。テーマデッキでもなんでもない、言ってしまえば特定の動きが存在しないデッキにもかかわらず、まるでこうなることが最初から予定調和であったかのように無駄のない展開。それを可能にするカード知識と分析力、そして咄嗟の判断力と運。どうしてこの人がデュエルキングと呼ばれているのか、その底知れなさを改めて思い知った。

「バトル、まずはオシリスでツーヘッド・シャークに攻撃！」

オシリスの天空竜　攻２０００→ツーヘッド・シャーク　守１６００（破壊）

再びオシリスの口が開き、放たれる雷撃がガダーラの時のようにツーヘッド・シャー

クに襲い掛かる。この攻撃はこちらが守備表示だからダメージは受けない、だけどこれで僕の場にモンスターはいなくなった。
「沈黙の魔術師で攻撃、サイレント・バーニング！」
女魔術師の全身がまばゆい白い光を放ち、その光の中で振り抜かれた彼女の杖から白い衝撃波が飛ぶ。だけど、それをただ受けてやるほど僕だって甘くはない。
『不幸中の幸いなのは、ロックされた箇所が1ターンに1度の魔法に1部のモンスター効果と、トラップに対して無力であることだ。となれば、まだ勝機はある』
「わかってるって。永続トラップ、グレイドル・パラサイト！このカードの効果により、相手の直接攻撃宣言時に僕はデッキからグレイドルを攻撃表示で特殊召喚する！出番だよ、グレイドル・イーグル！」
その攻撃が届くより先に、丁度その間に割り込むような位置で銀色の水たまりが床から湧く。もぞもぞと震えながら盛り上がるそれは、すぐに黄色い鳥を模したグレイドルへと変化した。
グレイドル・イーグル　攻１５００
「壁モンスターかい？だけど相手フィールドにモンスターが特殊召喚されたことで、オシリス第２の口が開く。グレイドル・イーグルに特殊攻撃、召雷弾！」
オシリスの上側の口が開き、先ほどのような雷撃とは違う雷の光弾が発射される。空

気を歪ませるほどの質量で迫るそれが、現れたグレイドル・イーグルの姿を瞬く間に呑み込んだ。

グレイドル・イーグル　攻１５００→０（破壊）

『今だ！』

「この瞬間、モンスター効果で破壊されたイーグルの特殊効果発動！相手モンスター１体に寄生し、そのコントロールを得る！そしてこの効果は墓地でモンスター効果として発動し、装備魔法として適応される。つまり、例え沈黙の魔術師でも止めることは不可能。僕がこの効果で選ぶのは、沈黙の魔術師だ！」

できればこちらとしても、ここはオシリスを奪いたかった。だけど僕の手札は２枚で、このターンにパッと使える手札増強のカードもない。そして沈黙の魔術師は確か、破壊時に手札かデッキから新たなサイレント・マジシャン１体を特殊召喚する能力を持っている。

つまりここでオシリスを奪っても相打ちの起点に持っていかれるばかりか、十中八九がら空きになった僕に後続として呼び出される攻撃力３５００、サイレント・マジシャン　ＬＶ８のダイレクトアタックが襲い掛かるという最悪の結果が起きるだけになっていた。だからこれが、今の僕にできる最善手だ。最善手の、はずだった。だけど遊戯さんの、デュエルキングの戦略は、そんな浅い考えを軽く上回る。優しい表情のはずな

のに見ている側の背筋が寒くなる、そんな微笑を浮かべつつ1枚のカードを手札から発動する。

「速攻魔法、ディメンション・マジック！」

「そのカードは……！」

「そう。僕のフィールドに魔法使い族が存在するとき、モンスター1体をリリースすることで手札から別の魔法使い族を特殊召喚できる。効果の対象となった沈黙の魔術師をリリースし、ブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚！」

『これは……驚いたな。ロックどころか、もしグレイドル・パラサイトでの妨害がなければこのターンで一気にけりをつけるつもりで来ていたのか』

さすがのチャクチャルさんも、この容赦のない攻めっぷりには閉口したように呟く。一方フィールドではグレイドルによる寄生を回避した沈黙の魔術師が、今度は明るい金髪の魔法少女へと入れ替わっていた。今はまだ墓地にその師であるブラック・マジシャンが存在しないためその効果が生きることはないが、それでもその攻撃力は２０００ある。ああ全く、どうせなら翔にも見せてやりたい光景だ。

ブラック・マジシャン・ガール　攻２０００

オシリスの天空竜　攻２０００→０　守２０００→０

「ブラック・マジシャン・ガールで攻撃、黒・魔（ブラック・バー）・導（ニング）・爆・裂・波！」

「ぐっ……！」

ブラック・マジシャン・ガール　攻２０００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ４０００→２０００

「……まさか、そんなカードをずっと隠し持っていたなんて。完全に一本取られました」

「いや、あの短期間でオシリスの召雷弾を逆に利用するコンボを思いついて、しかもそれを使ってみせた君も凄いよ。３年前に僕がオシリスの効果を跳ね返した時は、事前に対策を練る時間もあったわけだし」

遊戯さんの言葉に、驕りや欺瞞の色はない。おそらく、本当に本気で賞賛の言葉をかけてくれているのだろう。この謙虚さも、さすがは王者の風格というべきか。

「僕は、これでターンエンド。さあ、君の番だよ」

「わかってます……じゃあ、ここからは逆転劇と洒落込ませてもらいますよ！僕のターン、ドロー！」

状況は圧倒的に不利……でも、諦めようとは思わなかった。感じることを拒んで久しかったデッキとの、カード１枚１枚との一体感。考えてみれば、神ならすでにランクが１段上のラーだって僕たちは倒したんだ。なら、今更恐れるものは何もない。

「……って、これ」

『うわ、まーたそういうややこしくなることをするんだからなこのマスターは……』

あ、やっちまった。真っ先に浮かんだのは、そんな感想だった。この大事な局面で引いたドローカードは、よりにもよって七皇の剣。確かに超強力なカードではあるけれど、いくらなんでもデッキの方がこれは変な方向に張り切りすぎているのではないだろうか。でも確かに、ついさっきペガサスさんに見せた後でデッキ内にいっしょくたにして入れたのはほかでもない僕自身だ。あの時はどうせもうデュエルなんてやらないだろうと思ってたから構わず突っ込んでしまったのが、完全におかしな方向に転がったか。

……この世界では誰も知らない、知るわけのないエクシーズモンスターのサポートカード。しかもドローしたターンのスタンバイフェイズに公開することでのみ効果が使えるという関係上、とりあえず保留していざとなったら使うことも辞さない、というような使い方もできない。このターンで使うか、諦めて手札で腐らせるか、だ。でもここでドロー1枚を完全に無駄にするような贅沢をしてもどうにかなるような相手……なわけがない。

完全にフリーズした僕に助け舟を出したのは、他でもないペガサスさんだった。

「清明ボーイ。ユーが何のカードを引いたのか、私には心当たりがありマース。ユーがそれを躊躇うのにも、何か理由があるのでしょうが……ですが私に、デュエルモンスターズの生みの親に、このゲームの持ち得る新たな可能性の力を、ぜひ見せていただき

たいのデース。それでよろしいですね、遊戯ボーイ？」
「よくわからないけど、清明君。遠慮はいらないから、君の全力でかかっておいで。僕も全力で、１人のデュエリストとしてそれに応えるから。大丈夫、君がそうしてほしいなら、僕たちはここで起こることを誰にも言わない。それにデュエルモンスターズがらみの不思議なことには、もう慣れっこだからさ」
２人の言葉を頭の中で繰り返し、ついで手の中の七皇の剣を見る。
……ま、いいか。それに、僕だって知りたい。この新たな力を得た僕が、最強のデュエルキング相手にどこまでやれるのか。掛け値なしに本気の全力で、この戦いを終えたい。
「……ええい、もうどうにでもなれ！僕が引いたカードは、ＲＵＭ―七皇の剣！このカードはドローしたスタンバイフェイズからメインフェイズ開始時まで相手に公開することでのみ、その効果を発動できる！」
「ドローした時に見せることで効果を発動できる魔法カード？」
「その通り。遊戯ボーイ、私達は今、デュエルモンスターズの新たな時代の幕開けを目にしているのデース」
さも知ったような言い方だが、ペガサスさんだってこのカードを見たのはついさっきが初めてのはずだ。まったく調子がいいというかなんというか、ずるい大人だ。それは

ともかく七皇の剣が発動に成功したことで、空に七つの星が赤い光を放つ。白い箱舟が地底から浮上し、その中央からあの時と同じように黒い人型のものが射出される。

「このカードの効果によりエクストラデッキから直接オーバーハンドレッド・カオスナンバーズを特殊召喚し、さらにそのモンスターをカオス化させることができる。霖雨蒼生の時は来た、想い託されし不沈の守護者！ＣＮｏ．１０１、Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ Ｋｎｉｇｈｔ！」

数日ぶりに会う漆黒の騎士の背中は、やはりただただ頼もしかった。オシリスの口が開き再び放たれる召雷弾を、感電しながらもその槍でがっしりと受け止める。

ＣＮｏ．１０１ Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ Ｋｎｉｇｈｔ 攻２８００→８００

「手札１枚で召雷弾を耐えきれる攻撃力のモンスターを特殊召喚するとはね。それに、ナンバーズ、だっけ？確かに、聞いたことのないカードだ。これが、君の手にした新たな時代の幕開けになるカードかい？」

「ええ。ですがダークナイトの力は、まだこんなものじゃないですよ！効果発動、ダーク・ソウル・ローバー！１ターンに１度相手フィールドに特殊召喚されたモンスター１体を、自身のカオスオーバーレイ・ユニットとして吸収する！」

ダークナイトが今回その槍を向けたのは、ブラック・マジシャン・ガールだった。というかそもそも、アドバンス召喚された神には通じないし。ドラゴキュートスの時と同

じく全身紅いオーラに包まれた魔法少女がクリスタルへと変換され、ダークナイトの足元に配置される。

ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ（１）↓（２）

「吸収能力、か」

あまり驚いた様子もないのは、そもそもここにいるペガサスさんのエースからしてサウザンド・アイズ・サクリファイス……モンスター吸収の元祖ともいうべきカードの使い手だからだろう。そして遊戯さんは、そのペガサスさんを正面から破ったことのある経験の持ち主だ。おそらく今だってその脳内ではこの光景に衝撃を受けるでもなく、どうやって僕のダークナイトを倒すかだけを考えているはずだ。

「だとしても、このターンにやることは変わらないね。ダークナイト、その手で神を叩き伏せろ！オシリスの天空竜に攻撃、ニライカナイ・ファンタズム！」

反撃に放たれたサンダー・フォースを紙一重で回避し、漆黒の槍術師が振るう剛槍が神の開いたままの口内からその脳天まで深々と突き刺さる。１瞬の沈黙の後に神の瞳から次第に光が消え、その巨体もまた空に浮くだけの力を失いその場に崩れ落ちた。

ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ　攻８００→オシリスの天空竜攻０（破壊）

遊戯　ＬＰ４０００→３２００

「よし！よくやった、ダークナイト！」

いまだ効力を発揮する召雷弾のせいで、神の攻撃力は０であったにもかかわらずダメージは微々たるものだ。でも重要なのはそこではない、オシリスをこの手で打ち倒したというその事実だ。

またもう１度、デュエルを通じてこんな気分になれるなんて。昨日どころかつい３０分前の僕に言ったとしても、到底信じられない話だろう。

清明　ＬＰ２０００　手札：２

モンスター：ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ（攻・２）

魔法・罠：グレイドル・パラサイト

遊戯　ＬＰ３２００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：なし

「オシリスを……なるほど、でも僕だって負けないよ。ドロー、エルフの聖剣士を召喚！」

エルフの聖剣士　攻２１００

オシリスが倒れ、手札も０枚の遊戯さんがここでドローしたのは、レベル４にして攻撃力２１００を誇る二刀流の剣士。しかもあのモンスター、確か効果が……。

「バトル、エルフの聖剣士でダークナイトに攻撃！」
　いくら軽装とはいえ鎧を身に着けた剣士とは思えないほどに優美な動きで聖剣士が迫り、その剣を振りかざす。対するダークナイトも自身の槍で迎え撃とうとするも、その動きはあからさまに精彩を欠いている。いまだ神の裁き、召雷弾のダメージが深刻に残っているのだ。
　エルフの聖剣士　攻２１００→ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ　攻８００（破壊）
　清明　ＬＰ２０００→７００
「この瞬間、相手に戦闘ダメージを与えたエルフの聖剣士の効果を発動。デッキから、場のエルフの剣士の数だけカードをドローする」
「ぐ……でもこっちも、破壊されたダークナイトの効果発動！カオスオーバーレイ・ユニットを持ったこのカードが破壊され、なおかつ墓地に進化前のＮｏ．１０１Ｓ・Ｈ・Ａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ（サイレント・オナーズ・アークナイト）が存在するとき、墓地から蘇り僕のライフを回復する！僕たちはまだまだ倒れない、リターン・フロム・リンボ！」
　ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ　攻２８００
　清明　ＬＰ７００→３５００
　地面にぽっかりと暗い魔方陣が開き、辺獄の底より不死身の槍術師が蘇る。これで

ダークナイトの攻撃力はリセットされ、エルフの聖剣士のそれを大きく上回った。次のターンで一気に攻め込んで……だがその思考を、天から降り注ぐ光の剣が中断させる。

「魔法カード、光の護封剣！3ターン後に自壊するまでの間、相手プレイヤーの攻撃を禁止する」

「また……！」

ダークナイト、そしてそれを封じる無数の光の剣。あの嫌な記憶を思い出してちょっと顔がこわばるが、それでも強いて自分を奮い立たせる。しっかりしろ、僕。あのデュエルとこのデュエルは別物、ちょっと似たシチュエーションになったからといちいちトラウマになってなってたらきりがない。

「僕のターン！む……」

『あらら』

手札は3枚もあるというのに、護封剣を破壊できるカードがない。サイレント・アングラー、水精鱗（マーメイル）―ネレイアビス、そして今引いた雷撃壊獣サンダー・ザ・キング。1枚1枚はいいカードだけど、今手札にあってこれをどうしろと？いやまあ、やることが無いわけではないけれど。

「ちょっと勿体ないけど、しかたないか。エルフの聖剣士をリリースして、雷撃壊獣サンダー・ザ・キングを遊戯さんの場に特殊召喚！そして相手フィールドに特殊召喚された

サンダー・ザ・キングを対象に、このターンもダーク・ソウル・ローバー！」

ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ（０）→（１）

攻撃できるわけでもないのに、自分で出して自分で吸収して……コンボといえば聞こえはいいが、ただのアド損気味な自作自演だ。それでもこのダークナイトは今の僕にとって生命線、まだ力尽きさせるわけにはいかない。

「ターンエンドです」

宣言と同時に光の剣の一部が消えていき、ほんの少しだけフィールドがスッキリする。とはいえいまだ３分の２は残り続けており、僕とダークナイトの行動を阻害しつづけている状態だ。

清明　ＬＰ３５００　手札：２

モンスター：ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ（攻・１）

魔法・罠：グレイドル・パラサイト

遊戯　ＬＰ３２００　手札：０

モンスター：なし

魔法・罠：光の護封剣

「僕のターン。レッド・ガジェットを守備表示で召喚し、効果発動。デッキからイエロー・ガジェット１体をサーチして、ターンエンド」

レッド・ガジェット　守１５００
守りに徹する遊戯さんが呼び出したのは、場に出た時に仲間のサーチを行う３色ガジェットのうち１体。デッキ圧縮と手札増強を兼ねる、厄介な効果だ。それも、こちらの攻撃が封じられているこの状況では毎ターンコンスタントにアドバンテージを積み重ねられる。
「僕のターン！永続魔法、強欲なカケラを発動。ターンエンドです」
これは護封剣の除去なんて考えずに、どっしり構えていろというお告げだろうか。確かにこの状況で、効果発動までに２ターンかかる強欲なカケラはマッチしていると言えなくもないが。でもどうせ遅行性のカードなら、グレイドル・インパクトの方が引きたかったのだが。
ともあれこのエンドと共に残る剣のうちさらに半分が消え、フィールドの包囲もだいぶスカスカになってきた。このままだと本当に、何かするより先に時間切れで自壊する方が早そうだ。
清明　ＬＰ３５００　手札：２
モンスター：ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ（攻・１）
魔法・罠：グレイドル・パラサイト
強欲なカケラ

遊戯　ＬＰ３２００　手札：１
モンスター：レッド・ガジェット（守）
魔法・罠：光の護封剣

「僕のターン。イエロー・ガジェットを守備表示で召喚し、また効果を発動。これで、デッキからグリーン・ガジェットを手札に。さらにこのイエロー・ガジェットを対象に魔法カード、同胞の絆を発動！」

『ほう……！』

感心するチャクチャルさんの声に反応したかのように黄色い歯車モンスターが腕を振り上げ号令をかけると、それに応えた２色の歯車がさらにデッキから呼び出される。ただしそれもノーコストとはいかず、同時に遊戯さんのライフもみるみるうちに減っていく。

遊戯　ＬＰ３２００→１２００
レッド・ガジェット　守１５００
グリーン・ガジェット　守６００

「僕のライフ２０００とこのターンの展開、及びバトルフェイズをコストに、選んだ下級モンスター1体と同じ属性、種族、レベルを持つモンスター2体を特殊召喚する。さらにこの特殊召喚したガジェットたちの効果で、デッキからそれぞれイエロー、レッドの

ガジェットを手札に。これでターンエンドだよ」
「いいんですか？いくら護封剣があるからって、２体も特殊召喚して」
思わずそう聞いた僕に、遊戯さんがふっと笑って返す。
「その君のモンスター、ダークナイトの特性はわかったからね。カオスオーバーレイ・ユニットが１つでもあるかぎり蘇生効果を使うことができるなら、最初に１体を吸収された時点でその意味では対策をする意味は薄い。なら、ここは準備に徹させてもらうよ。それにいくら不死身といってもどうやら１ターンに２回の破壊、あるいは破壊以外の除去には対応しきれないようだしね」
「……」
無言ではあったが内心、その発想に舌を巻く。たったあれだけのターン見ていただけで、もうダークナイトの特性と弱点をここまで把握したというのかこの人は。実際、遊戯さんの言葉はすべて正しい。正しいだけに、その大人しそうな顔に隠れた洞察力と行動力が恐ろしい。
「さあ、君のターンだよ」
「は、はい！」
『気圧されるな、マスター。ダークナイトの効果の穴は、元より見ていれば自然と気が付く程度のもの。それが早いか遅いかの違いだけだ』

「そ、そりゃわかってるんだけどさあ……このターン通常のドローをしたことで、強欲なカケラに強欲カウンターが１つ乗ります。さらにこのターンのダーク・ソウル・ローバーで、グリーン・ガジェットを吸収！」

確かに返す言葉もないけれど、でもやっぱり怖いものは怖い。とはいえこちらにどうすることもできないのもまた事実、まずはできる事を１つ１つやっていくまでだ。

……このデュエルは、これまで多かった即座に決着がつくタイプとは全く異なる異質な勝負だ。長く複雑で険しい戦況を、正解かどうかもわからず１歩１歩踏み締めながら進めていく。どの行動が正解なのか、それとも失敗だったのか、それは最後までわからない。派手なワンキルの恐怖とは無縁だけれど、どこで道を踏み外して押し切られるかわからない緊張感が常に付きまとう。

強欲なカケラ（０）→（１）

ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ（１）→（２）

そしてドローカードは、幽鬼うさぎ。できればガジェット展開前に来てほしかったけれど、だったとしてもサーチが止められない時点で大して変わらないか。このまま手札で温存して、このうさぎちゃんにはまたしかるべき時に働いてもらおう。カード内のイラストに彼女の精霊がだぶって見え、前回のデュエルに参加できなかったこともあってかふんすとやる気たっぷりに無い胸を張る様子が見えた。

「ターンエンドです」

そして、ついに３ターンが経過したことで全ての護封剣が消える。まさか本当に自壊するまで待つことになるとは思わなかったが、この稼がれた時間が後々まずいことにならなければいいが。遊戯さんの手札はひたすらガジェットのみと完全に割れているものの、だからといって安心はできない。

清明　ＬＰ３５００　手札：３

モンスター：ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ（攻・２）

魔法・罠：グレイドル・パラサイト

強欲なカケラ（１）

遊戯　ＬＰ１２００　手札：３

モンスター：レッド・ガジェット（守）

イエロー・ガジェット（守）

レッド・ガジェット（守）

魔法・罠：なし

「僕のターン。手札抹殺を発動！」

やられた。互いの手札をすべて捨ててその枚数だけドローする、ある意味では究極の手札交換カードに一気に背筋が寒くなる。まさか遊戯さん、あの護封剣を発動した時か

らこれを狙って、ずっと手札補充にターンを費やしていた？いや、そんなはずはない……と思いたい。

とにかく遊戯さんの手札から3枚のガジェットが一斉に墓地に送られ、僕の手札からは幽鬼うさぎにネレイアビスと貴重な手札誘発2枚が捨てられる。これで遊戯さんの手札は未知の3枚、そして場には3体のガジェット。嫌でも蘇る、先ほどのオシリスの威圧感。オシリスは既に倒れたから、残る神はオベリスクの巨神兵とラーの翼神竜。だけど、神のカードはとにかく重い。使い手の遊戯さんだって、それはよくわかっているはずだ。2種類目の神が、あのデッキに入っているという証拠はない。ただ逆に、入っていないという保証もない。結局のところ、何もわからないのだ。

「さらに、2体のレッド・ガジェットをリリースして……」

2体。ということは、神ではないということだ。その事実に少なからずほっとするが、すぐそんな感情を抱いたことを後悔した。さっき遊戯さんがダークナイトの効果の穴に付いてわざわざ確認していた、その意味をもっとよく考えるべきだったのだ。

「来い、破壊竜ガンドラ！」

『ガンドラ……！まずい物を引かれたな、これは』

破壊竜ガンドラ　攻0

ガンドラ。漆黒の巨体を持つ、禍々しき破壊の竜。そしてその効果は、ダークナイト

の不死身をもってしてなお上回る。
「ガンドラは僕のライフを半分払うことで、自身以外のフィールドのカード全てを破壊しゲームから取り除き、その枚数に応じて自身の攻撃力を上昇させる。そしてダークナイトの蘇生効果は、除外からでは発動できない」
「くっ……！」
「効果発動、そして攻撃！デストロイ・ギガ・レイズ！」
　その体中からまばゆく紅い破壊の光を放射し、フィールドの全てを焼き払いにかかるガンドラ。ダークナイトが、強欲なカケラが、グレイドル・パラサイトが、そして巻き添えを食う形で遊戯さん自身のイエロー・ガジェットが、その光の中に断末魔の声すら上げる暇なく消えていく。さらにその光の余波は、相手プレイヤーである僕にも襲い掛かった。
　遊戯　ＬＰ１２００→６００
　破壊竜ガンドラ　攻０→１２００→清明（直接攻撃）
　清明　ＬＰ３５００→２３００
「なるほど、カオスオーバーレイ・ユニットはフィールドのカードとしては扱わないのか。カードを２枚伏せて、ターンエンド。そしてこのエンドフェイズ時、召喚されたガンドラは墓地へ送られる」

どうやら、あの手札に追撃要因はいなかったらしい。フィールドを荒らし放題に荒らしていったガンドラもまた墓地で眠りにつき、これで遊戯さんの場はがら空き……だけど、とても素直には喜べない。あの２枚の伏せカード、あれは一体なんだ？ともあれ、まずはこのカードを使ってから考えるか。

「フィールド魔法、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロントを発動。さらに魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動。コストとしてデッキトップ１０枚を裏側で除外し、カードを……」

「そこでトラップ発動、精霊の鏡！プレイヤー１人を対象にした魔法効果を、僕の元に移し替える。コストは君に払ってもらうけど、２枚ドローの効果は僕が貰うよ」

「嘘!?」

そんなピンポイントなカードを、よりにもよってこのタイミングで引いていたとは。僕のデッキが虚しく削られていき、その横で遊戯さんの手札が０から２枚に潤う。

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（２）

『なんとまあ、つくづくえげつない真似を。だが、見方を変えればこれで伏せカードは半分になったわけだ。つまり危険も半分、行くぞ、マスター！』

「……フィールドから墓地に２枚のカードが送られたことで、ウォーターフロントに壊獣カウンターが２つ乗ります。魔法カード、埋葬されし生け贄！このカードの効果により互いの墓地からモンスターを１体ずつ除外し、それをリリース要因として最上級モン

スターをアドバンス召喚します！」

互いのデュエルディスクからそれぞれ、幽鬼うさぎとオシリスの天空竜がはじき出される。これでよし、と。いくら神とはいえ、除外ゾーンまで追いやってしまえばさすがに何もできないだろう。

「さあ、一気に終わらせるよ！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ！召喚、地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルア）！」

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００

ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（２）↓（３）

そして満を持して現れる、僕の神。フィールド魔法にリリース軽減カード、そして最上級モンスター。これだけのカードを一気に引き込めたことを考えれば、あの手札抹殺もこちらにとって悪い事ばかりではなかったかもしれない。

「……」

『私の召喚は通った、か。さて、どうする、マスター？』

だが、あと１歩。あと１歩のところまで追いつめたからこそ、最も警戒しなくてはならない。チャクチャルさんの言葉も、つまりはそういう意味だろう。あの伏せカード１枚に、手札２枚。チャクチャルさんはダイレクトアタッカーとしても使えるが、攻撃を放棄することでバーンを与えることもできる。そしてそのどちらを選んだ場合でも、そ

れが通りさえすれば遊戯さんのライフは尽きる。目の前にいるのが並の相手であれば、まあ適当にその時の気分からどちらでとどめを刺すかを選んでいただろう。だが、あの人はなんといってもデュエルキングだ。戦闘、効果、どちらに対する対抗策を引いていてもおかしくない。

「壊獣カウンターが３つ溜まったウォーターフロントの効果で、１ターンに１回デッキから壊獣をサーチします」

時間稼ぎを兼ねてわざとゆっくりとガメシエルのカードをデッキから取り出し、それを見せたうえで手札に加える。考えろ、考えるんだ。どちらの選択の方が、リスクが少ないと言える？神のカードが入っている時点で、この学校に置いてある遊戯さんのレプリカデッキのレシピの知識は既に役に立たない。現にマシュマカロンや沈黙の魔術師などは、あのデッキには入っていなかったはずだ。となると、何が飛び出してきてもおかしくはない。

例えば効果でダメージを与えにいく場合、有力な対抗策としては地獄の扉越し銃のような反射系やホーリーライフバリアーのような無効系、マテリアルドラゴンのような吸収系が考えられる。あるいはエフェクト・ヴェーラーやブレイクスルー・スキルのような効果そのものを無効にしてくることも十分考えられるだろう。逆に戦闘を選んだ場合は、ダメージを０にするクリボーならまだいい方でモンスター破壊のミラーフォー

ス、最悪攻撃を跳ね返す魔法（マジック・シリンダー）の筒の存在がちらつく。

『バーンを狙う場合「ダメージ」か「私の効果」のどちらかを無効にする、あるいは搦め手として「私の守備力」を0にすればいいから無効手段が多い分耐えきられるリスクはやや増すものの、やられた場合のこちらのリスクも低い。対して戦闘をするのならば無効化のリスクそのものはやや小さいが、その分してやられた際の被害が大きくなる、といったところだな。もちろん、ライフ回復で正面から耐えきられる可能性もある。どちらのリスクを重視するか……これば かりは判断の分かれるところだろう、下手に横から口を出すよりもマスターに任せよう。その結果がどうなろうと、誰もマスターを恨みはしないとも』

長々ともっともらしく語られたけど、要するにこっちに丸投げして逃げやがったなこの邪神。とはいえ、元より僕もそのつもりだ。この判断は誰かに任せるのではなく、この場で戦い指示を出すデュエリストである僕自身が下すのが筋だろう。

ややあって、ついに覚悟が決まった。

「僕はこのターン、チャクチャルアの効果を発動！1ターンに1度自身の攻撃を放棄することで、その守備力の半分の数値だけ相手にダメージを与える！ダーク・ダイブ・アタック！」

迷った末に僕が選んだのは、バーン効果の方だった。チャクチャルさんの守備力は2

４００、つまり１２００のダメージが通る。頼むから、このまま何もしてくれるな……だがそんな思いも、あっさり打ち砕かれる。

「手札から、クリアクリボーの効果を発動。ダメージを与える相手モンスターの効果を、このカードを捨てることで無効にする！」

『……駄目か』

マトリョーシカのように入れ子構造のクリボーが、その体内にチャクチャルさんの放つ闇の衝撃波を吸収する。手札誘発……ということは、あの精霊の鏡でコピーした僕の強欲で貪欲な壺が引かせたカードということか。このターンは僕のやることなすこと全てが裏目に出た、というべきか、要所要所でマストカウンターばかりを決めてきた遊戯さんのデュエルセンスと豪運を恐れるべきか。

今の展開に３枚のカードをいっぺんに消費したため、今の手札はサーチしたガメシエルしかない。この際ブラフでもなんでもいいからせめて伏せられるカードが欲しかったが、そんな贅沢は言ってられない。

「ターンエンドです」

清明　ＬＰ２３００　手札：１

モンスター：地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ（攻）

魔法・罠：なし

場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（３）
遊戯　ＬＰ６００　手札：１
モンスター：なし
魔法・罠：１（伏せ）
「僕のターン……ふふっ」
カードを引いた遊戯さんが、突然楽しそうに微笑む。突然の変化に虚を突かれた僕に、笑いながら語りかけてきた。
「ごめんごめん、でもなんだか楽しくって。たくさんの見たこともないカードを使いこなす君とこうして戦うのが、今とても楽しいんだ」
「遊戯さん……ええ、そうですね。僕も……僕も。このデュエルが、こうしてあなたと戦っていることが……楽しい、ええ、そうです。とっても、とっても楽しいです！」
デュエルが、楽しい。その言葉を言おうとした時、喉の奥に詰まるような感覚がした。大切な人を救えなかった僕が、デュエルを楽しいなんて言っていいのだろうか。そんなこと、口が裂けても言えないのではないだろうか。それでも、自分に嘘はつけなかった。やや苦労したもののとにかく１度口に出してしまうと、なんだかすうっと体が軽くなった気がした。それと同時に、理解する。
デュエルは、楽しい。そうだ、世界がどれだけ変わろうと、この世で何が起きようと。

この原理だけは変わらないし、決して変えてはいけない。それは、デュエリストとしての自分自身を否定することになってしまう。もちろん、それは現のことを忘れるということにはならない。彼女との記憶も僕の初恋も、忘れられるはずがない。だけどその記憶とトラウマに縛られてデュエルを楽しむことすら忘れてしまうのはデュエリストたる自分自身、そして誰よりも何よりも彼女に対する冒涜に他ならない。こんなことにすら気づかなかった……いや、はじめからわかっていたのかもしれない。それでも僕はこの数日、こんなわかりやすいことからも逃げ続けてきた。

「ありがとうございます、遊戯さん。おかげで、大切なことを思い出しました」

「そうかい？それなら良かったよ。でも、手加減はしないからね！」

「もちろん、望むところです！」

威勢よく啖呵を切ると、また遊戯さんが微笑む。そしてさっと真剣な顔に切り替わり、ドローカードを流れるような動きでデュエルディスクに置いた。

「カードをセットして、ターンエンドするよ」

『また伏せカード、か』

「僕のターン！まずはこのターンもウォーターフロントの効果で、怒炎壊獣ドゴランをサーチします」

これで、僕の手札には2体の壊獣。でも先のターンで遊戯さんがモンスターを出さな

かったせいで、いくら貯めこんだところでこの子たちの展開ができない。ガメシエルさえこちらのフィールドに出せていれば、あとはもう万能カウンターで守りながらチャクチャルさんで確実に攻め落とせたのだが。ならせめてトレード・インでも来て手札交換できないかと思いながら引いたドローカードは、目当ての代わりにそろそろ来るころだろうとは思っていたいつもの1枚。まったくもう……だけど、おかげでこのターンにやるべきことはよく分かった。僕は僕らしく、いつも通り行けということか。いいだろう、そこまで言うなら乗ってやろうとも。

「まずはもう1度、チャクチャルアの効果を発動。ダーク・ダイブ・アタック！」

「手札から、ハネワタの効果を発動！このカードを捨てることで、このターン僕が受ける効果ダメージは0になる！」

『ええい、またか！』

2度にわたり自慢の効果を防がれ、たまったものじゃないと言わんばかりのチャクチャルさん。とはいえ、ここまでは一応計算通り。これで決着が付けばもちろんそれに越したことはなかったけれど、正直なところどうせこうなるんじゃないかとは思っていた。

「構いませんよ。僕はこのチャクチャルアをさらにリリースして、アドバンス召喚！これが、僕の切り札だ！そろそろ幕引きだ、霧の王（キングミスト）！」

『久しぶりにフィニッシャーがやりたかったところだが、仕方ないな。その役は譲るから、きっちり決めて来い』

地縛神が消えていき、ＫＹＯＵＴＯＵが霧に包まれる。灯台の街に降り立ったのは、僕にとっても永遠のフェイバリットカード。

「霧の王は最上級モンスターですがそのリリースを任意で減らすことができ、そしてその攻撃力はリリースしたモンスターの合計値。この場合、チャクチャルアのものをそのまま受け継ぎます。そしてモンスターが入れ替わったことで、チャクチャルアのバトル不可になる制約もなくなりましたよ」

霧の王　攻０→２９００

遊戯さんは何も語らないが、少なくともその目の闘志はまだ消えていない。だけど僕も、ここで怯むわけにはいかない。覚悟は、既に定まった。このまま攻撃して何が起きるというのか、この目で見させてもらおう。

「バトル！霧の王でダイレクトアタック、ミスト・ストラングル！」

霧の魔法剣士が距離を詰め、その宝剣を大上段に掲げた。そして全身全霊を込め、生ける伝説を越えるための刃が振り下ろされる。

「墓地からクリアクリボーの効果を発動！相手の直接攻撃宣言時にこのカードを除外して、デッキから1枚ドローする。そしてそのカードがモンスターカードならば特殊召喚

することができ、さらに相手はそのモンスターに攻撃しなければならない！」
　先ほどのマトリョーシカ型クリボーが再び墓地から現れ、次々に何重もの中身が開いていく。その一番奥、ひときわ小さいクリボーの中に配置されていた1枚のカードを、さっと遊戯さんが手に取った。
「……僕の引いたカードはモンスターカード、クリボー！」
「でしょうね……！」
　デュエルキングたるものが、この極限の状況で魔法や罠を引いてお茶を濁すわけがない。ここでモンスターを引いてみせる、だからこその王者なのだ。しかし、クリボーか。このまま守備表示で壁にしてもいいし、ウォーターフロントの壊獣カウンターを増やすことを嫌うのなら特殊召喚せずに手札誘発として戦闘ダメージを0にしてもいい。防御札としては理想的な1枚だが、オベリスクあたりを引かれて特殊召喚、そのまま返り討ちにされなかったことに関しては良かったと喜ぶべきか。
「僕はこのクリボーを、攻撃表示で特殊召喚する。そしてクリアクリボーの効果により、君の霧の王の攻撃は強制的にこのクリボーへと誘導される！」
「攻撃表示!?」
　クリボー　攻３００
　ちょこんと鎮座するクリボーに、霧の王の剣が強制的に向けられる。本来ならば遊戯

さんのモンスターが増えたことで起こるはずの攻撃の巻き戻しも、先ほど説明にあったように発生せずそのままバトルへと移行する。振り下ろされた剣が深々とクリボーに食い込んだ瞬間に遊戯さんの場にあった最後の伏せカードが表を向き、同時にクリボーの全身がかっと光りだす。あれは……機雷化？いや、違う。

「永続トラップ、ディメンション・スフィンクス！」

半透明なスフィンクスの幻影が、クリボーを包むように浮かび上がる。その目が不気味な光を放つと、なんと霧の王の剣が少しずつ押し戻され始めた。両腕に力を込めて押し込もうとするも、それを上回る反発の力が少しずつ、少しずつ、突き刺さったはずの剣が不可視の力に押し返される。

「ディメンション・スフィンクスは、僕のフィールドに存在する表側攻撃表示のモンスターを対象にしてのみ発動ができる。そして対象となったモンスターが相手モンスターとバトルを行う際のバトルステップに１度だけ、２体の攻撃力の差の数値だけ相手にダメージを与える」

霧の王の攻撃力は、２９００。そして、クリボーの攻撃力は３００。僕のライフは……２３００。この攻撃が通れば遊戯さんのライフは０になるが、それより先に僕のライフが０になってしまえばデュエルはダメージ計算前に強制終了する。ライフ回復、クリボーの攻撃力を引き上げる、あるいは霧の王の攻撃力を下げる……いずれのカード

も、手札にはない。ここまで、か。
『これは……どうしようもない、完敗だな』
「ありがとうございました、遊戯さん。お疲れ様、霧の王、それにみんな」
「うん。楽しいデュエルだったよ、僕の方こそありがとう」
清明　ＬＰ２３００→０

「……はぁーっ、負けたーっ！」
ソリッドビジョンが消えてゆく。負けはしたけれど、それでも始まる前に比べたらはるかに気分は爽快だった。そんな僕の耳に、パチパチパチと力強い拍手の音が響く。
「ブラボー遊戯ボーイ、そして清明ボーイ。お２人とも大変素晴らしいデュエルを見せていただき、ありがとうございました。私もこのゲームの創造主として、とても鼻が高いデース」
「はは、お礼を言うのはこっちの方ですよ」
「そうだね。今日はありがとうペガサス、このデュエリストに合わせてくれて」
「ノンノン、私はただ若者に可能性を示しただけ、それを掴みとったのは紛れもなくあなたたち自身デース。清明ボーイ、どうやら一皮むけたようですね。では遊戯ボーイ、私

たちはそろそろお暇しましょうか」
「そうだね。じゃあね、清明君。きっと君なら、もう何があっても大丈夫だよ」
そう別れを告げる2人の声、そしてその目はとても温かかった。溢れる感謝の思いに胸が詰まり言葉が出てこず、ただただ深く頭を下げる。ドアが開き、そして閉じる音に顔を上げると、もう伝説のデュエリストたちの姿は消えていた。
夢見心地のままさっきまで座っていた席に戻り、すっかり冷めた紅茶をすする。熱くほてった体と心が多少冷めてきたところで、またドアが開く。多少怒りを呑み込んだのか、それでもまだ仏頂面の葵ちゃんが入ってきた。
「失礼します！」
「お帰り、葵ちゃん。さっきは悪かったね」
「……あれ？」
まさかさっきまで死んだ魚の目で座ってた張本人があの短時間でここまで復帰したとは思っていなかったのだろう、完全に鳩が豆鉄砲を喰らったような顔でこちらをまじまじと見つめてくる葵ちゃん。その様子がなんだか無性におかしくて、笑いをこらえながらも姿勢を正し、遊戯さんたちにしたように頭を下げる。
「ありがとね、葵ちゃん。これまで全部、ずっとずっと」
「えっと、先輩、何があったんですか？ああいえ、言っていただかなくても結構です。私

の先輩が戻ってきたのなら、それで構いません……それと、私からも。どういたしまして、先輩。卒業、おめでとうございます」

差し出された彼女の手を固く握り返したところで、なんだか店の外が騒がしいことに気が付いた。ちらりと視線を向けると、何人もの見知った顔と目が合う。説明を求め葵ちゃんに視線を戻すと、ああ、と悪びれる様子もなくさらりと口を開く。

「先輩があの調子でしたので、とりあえず賑やかにすればつられて少しは良くなるかと呼んでみたんですよ。もっとも、いらぬお節介だったようですが」

「そりゃどうも。まあせっかく来たんだし、入っておいでよ」

声をかけるとそれを待っていたかのように、わっと人がなだれ込む。三沢、万丈目、翔、剣山、明日香、吹雪さん、天下井ちゃん……大なり小なり僕のかけがえのない仲間、そして友達だ。そしてその奥には、トメさんやクロノス先生の姿まで見える。葵ちゃん、どんな呼び込みやったらこんな大勢引っ張ってこれたんだろう。

「そりゃあもう、葵ちゃんったら一生懸命だったからね。お姉ちゃんもまさかあの葵ちゃんがここまでやる娘だとは思わなかったよ」

「……なんで姉上が当然のような顔して混ざってるんですかね。私呼んでないんですけど」

「あーん、葵ちゃんったら辛辣なんだからー。でもそんな照れ隠し葵ちゃんも可愛いよ

！清明ちゃん、また今度さっき隠し撮りした写真見せてあげるからね！」
「今すぐデータ全部寄越して下さい！」
「やだよー、これ私の観賞用と葵ちゃん布教用と保存用だもーん！」
「真ん中から特に嫌な予感しかしません！」
わーわー言いながら逃げる明菜さんと、それを追いかける葵ちゃん。その後ろ姿を目で追っていると、今度は三沢と万丈目が近寄ってきた。
「何があったかはわからないが、終わりよければすべてよし、だな」
「全くだ、無駄に心配させよって。ほら清明、お前にもこれを書いてもらうぞ」
そう言って懐から取り出したのは、1枚の紙。開いてみるとそこにはたくさんの似顔絵と、それぞれの一言メッセージが添えられていた。
「これは？」
「十代の奴に、な。どうせあいつのことだから、卒業パーティーなんて待たずにこの島から飛び出して行ってしまうだろう。だからせめて俺たちからのサプライズとして、あいつの荷物にでもこれを仕込んでやろうと思ってな。だからお前も何か書くんだ」
そういえば、これだけたくさんの人がいるというのに十代の姿はどこにもない。あの野郎、つれない奴だ。一緒に渡されたペンを手に取り、少し迷った末にこう書いた。万丈目がそれを覗き込み、よせばいいのにわざわざ音読する。

「なになに？『童実野町本店「ＹＯＵ　ＫＮＯＷ」絶賛営業中』？なんだこれ、宣伝じゃないか」
「いや違うんだって、場所はここだからいつでも会いに来い的な……ね？」
「まったく、お前らしいといえばお前らしいな」
「……三沢、それ褒めてんだよね？」
一応聞いてみるも肩をすくめて笑うのみの三沢と、それを見て笑う他の皆。結局明菜さんには逃げ切られたらしい葵ちゃんが息を荒げながら帰ってきて、みんなして笑っている絵面に眉をひそめる。
うん、悪くない。確かにこのアカデミアに入学してからは色々あったけれど、なんだかんだいっても最後にはこうやって笑って卒業することができるなら……それは、悪くない。ちょっと唇をほころばせて、なんとなく窓の外に視線を向ける。どこまでも広がる彼女の髪のように青い空の奥で、現も少し微笑んだ気がした。

番外編その１　鉄砲水と絆の英雄

「ハーイ皆！卒業生代表、遊野清明でーす！えー、本日はお忙しい中このデュエルアカデミア同窓会にお集まりいただいて……いいやもう、以下略！かんぱーい！」

「「乾杯！」」

最初ぐらいはちゃんと挨拶らしいことでも言おうかと思ったが、途中で我慢できなくなって手にしたグラスを高々と掲げる。でも、どうやらその場にいた皆も同じ気分だったらしい。我ながら雑な開会の言葉にも一切の文句はつかず、そこかしこで一斉にグラスが打ち鳴らされた。おおむね良好な雰囲気の中始まったことを壇上からざっと確認し、飲みほしたグラスを置き両手を自由にしてから僕自身もそそくさと親友たちのところへ向かう。

しかしその道中、横から首に手を回された。ヘッドロック状態のままぐりぐりとこちらを締め付けてくる張本人、直接会うのは5年ぶりな万丈目が絡んでくる。とはいえこの男に関してはプロデュエリストという関係上メディア露出も多いし、正直こちらとしては久々に会った新鮮味というものがない。それはそれとしてこのやろ、さてはもう酔ってんな？

「お前なあ……司会と料理は僕がやるからお金出して！とか言われたからわざわざ万丈目グループとして招待状から会場まで全部手配してやったんだぞ？その結果があの挨拶か？」
「……てへ」
「てへじゃない！大体この忙しいプロデュエリストの予定まで同窓会で開けさせておいてだな……」
「明日香も呼ぶよって言ったら即ＯＫ出したくせに……わーったわーった、僕が悪かったってば。そういやさ、話変わるけどそっちはどうなの？３兄弟とか元気にしてる？」
『オイラ達なら毎日元気よん、お久しぶりね清明のダンナ～』
『『イエーイ！』』
「こら、まだ俺の話は……」
　勝手に出てきた３兄弟の精霊によってわずかに拘束が緩んだ隙にヘッドロックから脱出し、これ以上絡まれる前にひらひらと手を振ってその場を後にする。そこへタイミングよく横から手渡された次のグラスを受け取り、また中身をくっと飲む。
「センキュー三沢、ちょうどまた喉乾いてたんだ」
「あれだけ大声で騒いでいたんだ、そうだろうと思ってな。それにしても、お前に会うのも久しぶりだな」

これまた5年ぶりに会う三沢は、学生のころよりもさらに大人びていた。それでもその瞳に宿る芯の強さは、あのころからまるで変わっていない。

「三沢こそよくここに来れたね？向こうでタニヤといたらさすがに打つ手なかったから半分諦めてたんだけど」

「別に、年中向こうの世界にいるわけじゃないさ。科学技術だって俺たちが学生だったころとはわけが違う、だいぶ行き来も安定するようになってきたしな。それにここだけの話、最近は次元転移の技術に海場コーポレーションが内密に援助してくれるようになったんだ。いずれは冥界に行く技術を確立させる、とかなんとか言ってな」

「冥界、ねえ……」

そういえばあそこの社長がこの前テレビで、わが海場コーポレーションが次に目指す目標として次世代型デュエルディスクに搭載予定の新機能は、質量を持つソリッドビジョン……その名をパワービジョンと呼ぶ！世界中のデュエリストたちよ、その時を震えて待つがよい！ワーハッハハハ！とかなんとか演説してたっけか、と思い出す。精霊の世界でならカードは実体化する、つまりはそういうことだろうか？

……ま、いずれにせよ僕みたいな一市民にはあんまし関係のない話だ。そういう難しい話は、思う存分専門家に頭を捻ってもらうとしよう。

と、ここで三沢の表情がふっと真面目なものになった。誰かが聞き耳を立てていない

かと周りを見回してから、声を潜めて語り掛ける。
「それでな、清明。お前に会ったらずっと聞いてみたかったことがあるんだが」
「……どったの、そんなシリアスしちゃって」
体勢
そんな軽口とは裏腹に、僕も真面目に聞こうと体勢を整える。三沢が真面目になるということは、それなり以上に重要な話だからだ。
「3年前、だったか。ちょうど俺は向こうの世界にいたからあまり詳しくは知らないが、確かペガサス氏主催でデュエルモンスターズのイベントが行われたことがあったな？それ自体は別にいつものことだが、あの時俺はちょうど次元を超えてエネルギーを観測する実験をしていてな。何気なくこの世界に的を絞ってみたら、明らかにおかしな反応が見つかったんだ」
「……と、いうと？」
一度話を切った三沢に先を促すと、もう1度誰かがこの話を聞いていないか確かめて、再び口を開く。
「あのエネルギーは明らかに異常だ。5年前のダークネスとの戦いで俺が打ち立てた時間移動と性質やエネルギーの動き方はよく似ていたが、次元移動特有の空間のひずみまでこの世界には発生していた。しかもそのエネルギーは、その量もすさまじく膨大だっ

た。自然発生ではありえない、俺たちの今の常識を上回る何らかの人為的な力が必要となるほどにな」
「それを僕に話して、どうしようってのさ」
「ただ聞きたいだけだ。お前はその時のことを何か知らないかとな。言い忘れたがこの話の何よりも奇妙な点は、そのエネルギーの流れが唐突に消えたんだ。まるで最初から何もなかったかのように世界は元に戻り、ツバインシュタイン博士に連絡を取ってみても向こうでは何も観測されていないという。実際その日、何かおかしなことが起きたという話も聞かないしな」
「……機械の故障とかじゃないの？」
「それは俺も真っ先に考えた。だが、何度点検してもおかしなところは見つからなかったんだ」
「うーん……」
首をひねるふりをしながらも、頭の中では足りない脳みそをフル回転させる。三沢の言う、３年前のあの日。この世界に何が起きたのか、僕は知っている。正確に言えばこの僕、遊野清明と遊城十代……そしてデュエルキング武藤遊戯と、未来からの訪問者不動遊星。この４人だけが、あの日起きたことを知っている。
ただその内容をはたして目の前の男にはなんと言おうかと考えながら、同時に頭の片

隅ではあの日のことを思い出していた。

あの日起きたことに最初に気づいたのは、僕ではなくチャクチャルさんだった。僕にとってそれはいつもと変わらない朝、いつもと変わらない1日の始まりに過ぎなかった。

「おう、新聞持ってくんのにいつまでかかってんだ穀潰し!」

「るっさい親父!」

罵声に背中を押されるように家を出て、今日の新聞を手に取る。何気なく目に入ったその一面記事には、でかでかと廃墟、それもまだ火事の火すら消え切っていないものが映っていた。

『また人間が派手にやったのか。いつの時代もご苦労なこと……いや待て。マスター、今すぐそれを開け!』

「へ?こ、こう?」

背中越しにそれを覗き込まれるような感覚。チャクチャルさんが時事問題に関心を持つのは割といつものことだが、この日は少しばかりわけが違っていた。慌てて言われたとおりに折りたたまれた新聞を広げると、その写真の下半分があらわになった。それ

を目にしたチャクチャルさんは満足して引っ込むどころか、ますます気配を強め新聞をひったくらんばかりの剣幕で睨みつける。

『まさか……いや、これは……』

完全に自分の世界に入り込んでしまったチャクチャルさんからは何を聞いても答えなんて得られそうにないので、仕方なく僕もその記事に目を通す。えーっと、この写真は昨日発生した犯人不明、凶器不明の大規模破壊活動？幸い死者は皆無、しかし歴史的建造物が砕かれ怪我人多数……ふんふん。

だがそこまで読んだところで、チャクチャルさんがじっと見ていたのはその部分ではないことに気づいた。その横に添えられた小さな、解像度も荒い雑な写真だ。なにに、事件の様子を偶然とらえたらしい写真、ねえ。何やら３つ、白く巨大なものが映っているのがわかる。そのうち１つは機械的な光沢を放ち、１つは細長い体のラインに沿うように７色の光を放ち、もう１つは……なんだこれ。ほかの２つにかぶってるせいで、ただでさえ何の写真かさっぱりなのに、余計にわかりづらくなっている。それでもチャクチャルさんには、その部分だけで十分だったらしい。絞り出すような声を、僕は確かに聞いた。

『スターダスト・ドラゴン……なぜ貴様が「此処」にいる……！』

それから先はまさにとんとん拍子、というのは少し、言葉の使い方がおかしいだろう

か。親父に新聞を叩きつけて自分の部屋に入ると、チャクチャルさんの言われるがままに荷作りをする。いくらせっついても説明ひとつしてくれないので訳も分からないままにパスポートと数日分の着替えといくらかの食料を用意し、なけなしの現金を財布に詰め、大切な腕輪……水妖式デュエルディスクを装着する。親父に今日は店を手伝えない旨を伝え、百の嫌味と千の小言が飛んでくる前に靴を履いてさっさと朝の街に飛び出した。ここから空港に行くためには、まず電車に乗らねばならない。自家用ジェットのある海場コーポレーションやヘリ持ちの万丈目グループとは違い、遊野家はあくまでただの庶民だ。

「飛行機かー……高いんだよねあれ」

『なんなら私が乗せていくか？実体化しても構わないぞ』

「いや、遠慮しとくよ」

恐ろしいことに、チャクチャルさんはいつもの軽口をたたいているのではない。ド派手に実体化してあちこちから見られるリスクを考えたうえで、なおそれでも構わないからと大真面目に提案しているのだ。いったい、あの写真から僕の知らない何を読み取ったんだか。いずれにせよ、この暗躍好きな神様にここまで言わせる何かが、この写真にはあるのだろう。なら、僕がそれを疑う理由は何一つない。

『……マスター、いいか？』

　ここから空港へ行くには、まず電車に乗らねばならない。駅に向かう途中で、チャクチャルさんの声が聞こえる。ようやく口を開く気になったらしい神様が、ぽつぽつと語りだした。
『私があの写真にこだわる理由だが。マスターのことだ、私の口から出たスターダスト・ドラゴンの名は聞き逃してはいないだろう……無言は肯定と受け取るぞ？そのドラゴンだが、あれはシンクロモンスターだ。それも太古に我らが故郷、ナスカの地において赤き龍の、そしてシグナーの手足となり我ら地縛神、ひいてはあの先代も含めたダークシグナー達と死闘を繰り広げた侮りがたき６体の竜のうち１体だ』
「シンっ……!!」
　思わず叫びかけたところで、周りから一斉に向けられた奇異の視線に気が付いた。愛想笑いを浮かべながらどうにか平静を装い、ゆっくりと大きく息を吐く。
「なるほどね。それで、こんなに急いでたんだ」
『ああ。私も目を疑ったが、奴らの姿を見間違えはしない。なぜシンクロモンスターがこの時代に顕現しているのか。確かにそこも解せないが、もっとわからないことがある。私の知る彼の竜は仲間のため、守りのためにその力を振るうことはあれど、こんな無差別な破壊のために戦うことは決して良しとはしなかったはずだ』
「あのほら、遊や富野みたいに別の世界から精霊の入ってないカードを持ってきたん

じゃないの？」
　シンクロモンスターといえば真っ先に思い出す、僕にその使い方を教えてくれた異世界からの来訪者たち。あれ以来彼らやそのお仲間に会ってはいないが、その記憶は今もはっきりと残っている。
『それならそれで筋は通るし、その意味では話が楽になるのだがな。だが困ったことにその場合、別の問題が提起される。いくら異世界からの客人といえど、この世界であまり好き放題されて黙っているわけにもいくまい』
「ああそうか……じゃ、一発シメに行きますかってこと？」
『正義の味方の真似事も、たまには悪くないだろう。第一私としても、かつての仇敵がいいように使われているというのはあまり気分のいいものではないからな』
「ここでアクション起こしておけば、うまくいけば次のシグナーに対して恩も売っておけるしね」
『そういうことだ。よくわかってるじゃないか』
　そういうことなら納得だ。どうせ忙しくなるだろうし、ともかく今は体を休めて次に備えようと駅のベンチに深く腰掛けなおす。
　その瞬間、不意に地面が大きく揺れた。幸いにもその揺れはほんの1瞬で治まったが、反射的に周りの様子を見渡す。あんな変な揺れ方が、ただの地震なわけがない。案

の定この揺れの原因、なんて小難しいことは考えるまでもなくはっきりと見えた。ついさっきまでこの街の象徴であった海馬コーポレーションのビルがあるはずの場所が、揺らいでいた。比喩でもなんでもなく、まるで存在そのものが消えかかっているかのように不安定に揺らぎ、消えかかっている。どんな種類の攻撃を受けているのかはわからないが、１つだけはっきりしていることがある。狙われたのは、今飛び出そうとしていたこの童実野町だった。

「ねえ、チャクチャルさん」

『わからん』

あれは一体、何が起きているのか。そんな疑問も質問どころか呼びかけの時点でばっさりと言い切られる。なんだそりゃ、と閉口しかかったタイミングを見計らったかのようにだが、と言葉が続く。

『あの揺らぎ、そして存在の希薄化。なあ、マスター。あの時と似ている、そうは思わないか？』

精一杯にぼかした言い方は、この神様なりのせめてもの気遣いだろうか。目の前で起きている異変にもう１度だけ視線を向けるといまだに癒えない傷、思い出したくもない何よりも大切な記憶を呼び起こす。

確かに似ている、といえば似ている。彼女が、河風現が僕の腕の中で消えていったあ

の時と。
「……でも、それとこれと何の関係が」
『あくまで私の仮説だが、仮にあの時と同じように海馬コーポレーションそのものが消えようとしているのなら？あの女は消滅後、我々以外の歴史から完全にその姿を消した。それと同じ歴史改変が、どこかの時代で起きているのなら？』
「歴史が……！？」
その単語の意味するものに、言葉を失う。三沢の編み出したなんたら理論によれば、時間移動は決して夢物語ではない。それはあの、ダークネスとの戦いでも証明されたことだ。だけどそれを成し遂げるには、想像もできないほどのエネルギーとそれを扱う膨大な知識が必要となる。それはこの邪神、チャクチャルさんですら成し遂げられないほどのことだ。それをいとも簡単に、それも海馬コーポレーションという歴史上とんでもなく重要な役割を果たす代物に対してやってのけようとしているとは。今回の敵はヤバい、と、だいぶ遅ればせながら脳内で警鐘が鳴り響いたところで、ようやくなじみのある景色が見え始める。過去で何かが起きつつある地、童実野町に到着したのだ。
「でも、そんなの僕にどうしろってのさ？いくら駆け付けたくても、できることなんてないじゃない」
大前提として、僕は時間軸を自由に移動できない。いくらダークシグナーに人知を超

えた力があるからといっても、それは完全無欠の全知全能とは決してイコールで繋がらない。それは、その力の源たるチャクチャルさん本人が一番よくわかっているはずだ。だが意外にも邪神の口から飛び出た言葉は、その同意でも諦観でもなかった。

『そうとは限らないぞ。あれを見ろ、マスター』

　そんなアバウトな指示のもと示されたものは、確かにあれ、としか形容しようのないものだった。空間にぽっかりと浮かんだ歪み……いや、穴だろうか。前にも何度か、あれとよく似たものを見たことがある。例えばアカデミアの研究施設で、ユベルの手により砂漠の異世界に飛ばされた時。例えば僕のモンスター、多次元壊獣ラディアンを特殊召喚した時。ダークネスとの死闘の際に次元の壁を越えて覇王の異世界からグラファが救援に来てくれた時も、あれとよく似たものが発生していた。だけど、わかる。この穴を作ったエネルギーは、それらとは比べ物にならないほど大きい。

『……おそらくこれは、余波のようなものだろうな。過去、あるいは未来で、歴史を揺るがすほどの何かが起きている。そのエネルギーがでたらめに暴れたのか、予想を超えて溢れ出したのか。結果、この簡易的なタイムホールとしてこの時代に発生したのだろう』

「えーっと、つまり？え、なに、ここに入れってこと？」

『少なくとも、こんな大それたことをして暴れている馬鹿のところにはたどり着けるだ

ろうな』
「そんな他人事みたいな……帰ってこれなかったらどうするのさ」
『マスター』
　時間の移動は、チャクチャルさんでさえ専門外。ということはつまり、何かとんでもないことにならない保証なんて一切ないというわけだ。さすがに当然の反応として尻込みする僕に、チャクチャルさんが頭を下げる気配がした。
『頼む』
　たった3文字の、シンプルな言葉。だけどそこに込められた万感の思いは、痛いほどに伝わってきた。まったく、もう。そんな真剣に頼まれたら、断り切れるわけないじゃないの。タイムホールの向こう側で何が起きても反応できるよう、デュエルディスクを腕輪から展開する。
『……すまん』
「ったくもう、いいよいいよ。それにしても、こーいうのっていつもと逆だよね」
『？』
「いやほら、いつもは僕が無茶言ってフォロー頼んでたじゃん？いつもお世話になってる分、こうやってチャクチャルさん側から無理言ってくるのって新鮮だなってさ。よし、行くよ！」

軽く息を吸い、開いたままの空間の穴に意を決して飛び込む。ほんの１瞬の浮遊感ののち、再び地に足が付き体が重力に引っ張られる地球人としておなじみの感覚。あ、意外と到着早いのね。

「えっと……」

あたりを見回す。ここはどこだろう、なんて悩むことはなかった。見覚えのある噴水に、その中央から延びる時計。なんのことはない、生まれた時から見慣れてきた童実野町の一角だ。ただ気になることに、まだ日も高いというのにたった３人しか人影が見当たらない。僕がちょうど真後ろに到着したため、彼らはまだ僕の存在に気づいていないようだ。

まず１人目、あれはもう見ただけで分かる。あの特徴的な髪型は、デュエルキング武藤遊戯しかありえない。そしてその横の２人目だけど、あの茶髪もさることながらオシリスレッドの学生服をわざわざこんなアカデミアから遠く離れた地で着ているということは、その手のコスプレでなければ十代だろう。そして３人目は……。

『お前か！』

遊戯さんに負けず劣らず個性的な髪型で、赤いバイクのようなマシンを手で押している３人目。その横顔を、そしてその瞳を見た瞬間、理屈ではなくダークシグナーの本能が叫びだした。『あれ』だ。『あれ』がチャクチャルさんはじめとする地縛神にとって、そ

して自動的に僕にとっても不倶戴天の敵となる存在、シグナーだ。
突然の叫びに驚いた3人が一斉にこちらを向き、驚愕と困惑の視線が痛いほどに突き刺さる。そんなもの気にする余裕もなくシグナーに詰め寄ろうとしたが、それよりも先に反応したのは十代だった。明るく片手をあげてこちらに駆け寄ろうとして、途中で思いとどまり思案顔になる。
「久しぶりだな、清明……あ、でも今の時代だと俺のこともまだ知らないのか。な、なんて説明するかなー……」
「いや、わかるよ十代。卒業式以来だね?」
今のセリフから推測するに、どうやらこの時代は過去。それも少なく見積もっても僕がまだ、アカデミアに入学するより以前の時期のようだ。それはともかく、そう返されるのはさすがの十代も予想外だったらしい。
「清明?お前、いったい……」
「悪いね。色々話したいことはあるけども、今はちょっと取り込み中なのよ」
「おい、お前は……」
遊戯さんも何か言いかけていたが、超ど級の無礼を承知で言わせてもらえば今はそれどころではない。まっすぐにその3人目の名前も知らないシグナーへと距離を詰め、同時に全身に紫の痣を走らせ空中から灰色のフード付きローブを自動生成する。白目と

黒目はとうに反転し、これまた紫の光を放っていることだろう。直立不動の鋭いまなざしでそれを見つめているシグナーも、僕が何であるかは分かったらしい。それが宿命とはいえ逃げ出しもせず、それどころか表情すら変えていないのは誉めてやろう。クール&クレバー、そんな単語が脳裏をよぎった。
「遊星も、もしかして知り合いなのか？でも、遊星は未来から来たんだろ？」
「ええ。なので、知り合いというわけではないですが……すみません十代さん、それに遊戯さん。これは、俺たちの問題です」
「話が早くて助かるよ。えっと、遊星っていうんだって？僕としちゃ特に直接恨みがあるわけじゃないんだけど、ね。お互い難儀なことだよねえ」
　肩をすくめ、ウィンクしつつなるべく空気を重くしないように話しかける。そう、いくら不倶戴天の敵とはいえ、僕自身が彼に恨みがあるわけではない。ただこの命を地縛神に拾われた身としては、シグナーと出会ってしまった以上ここで見て見ぬふりというわけにもいかない。これが最低限のけじめだからだ。
「どうする、場所変える？」
「いや、ここでいいだろう。赤き龍よ、もう少し俺に時間をくれ！なぜダークシグナーがこの時代にいるかはわからないが、それが俺の使命ならばここで決着をつけよう」
　上を仰ぐように叫んだ遊星の声に応えるかのように、けたたましい咆哮とともに上空

に長い影が差す。あの龍に、実体はあるのだろうか。その名のごとく赤い光で構築された全身に白い光の筋が走る、さながら肉体というよりもむしろエネルギー体と形容する方がしっくりくるような姿を見ながらそんなことを思う。
『ふん。久しいな、赤き龍よ。色々と諸事情によりこちらは私とこのマスター1人だが、そちらもシグナーが1人しか用意できていないのなら差しさわりあるまい』
一体どんな思いでチャクチャルさんがそう口にしたのか、その歴史と重みは僕には計り知れない。でも恨みや憎しみといった感情を超越した、万感の思いがこもっていることだけは伝わってきた。
「おい清明、それに遊星も」
まだ何か言いかけた十代の肩を、事の成り行きを静観していた遊戯さんがポンと叩いて止める。
「十代。俺達には理解できないが、彼と遊星の間には何か、戦わなくてはならない理由があるのだろう。ならば、デュエリストに言葉は必要ないはずだ」
「遊戯さん……わかった、だけど後で俺にも説明しろよ！」
声援だか何だかわからない言葉を背中で受け止めて、改めて遊星と相対する。油断なくこちらを見つめるその目は確かに強者のそれだ……でも、まだ青い。おそらくこの男は、まだ自分の中の真の力を解放しきれていない。そして、それに自分では気づいてい

ない。惜しい、と思う。もっとも、相手する立場としてはその方がやりやすいのは確かだ。

「一応自己紹介しておこうか？僕はダークシグナー、遊野清明。それじゃあ、デュエルと洒落込もうか！」

「俺は、不動遊星。全力で行かせてもらう！」

望むところだ。さて、僕は後攻か。どう出てくるか、じっくり見させてもらうとしよう。

「俺のターン、トライクラーを守備表示で召喚！ターンエンドだ」

トライクラー　守３００

遊星が最初に召喚したのは、レベル３のわりにはステータスの低い３輪を持つ機械族モンスター。ふむ、下級１体出してエンドか。てっきり富野や遊みたいに初手からガンガン回してシンクロモンスター、それもあのスターダスト・ドラゴンを出してくるかと思っていたが、まあシンクロ使いにも色々いるのだろう。単にあの２人がおかしかっただけかもしれない。

「僕のターン。ツーヘッド・シャークを召喚」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００

そっちが様子見で来るなら、こっちはいつも通り前のめりに攻め込むまでだ。攻撃を

誘っているのなら別にそれでも構わない、なにが出てくるかその策に乗ってやろう。
「行けっ、ツーヘッド!そのままトライクラーに攻撃!」
２つの口を持つ鮫が、その鋭い牙と頑丈な顎で敵を噛み砕きにかかる。伏せカードの正体を見極められるかとも思ったが、まだ発動の時ではないらしい。
ツーヘッド・シャーク　攻１２００→トライクラー　守３００（破壊）
「俺はこの瞬間、戦闘で破壊されたトライクラーの効果を発動。手札またはデッキからヴィークラー1体を特殊召喚する!」
ヴィークラー　守２００
噛み砕かれてスクラップと化したトライクラーの代わりとして、すぐさま2輪に人型の上半身をくっつけたような黄色と青を基調とするモンスターが特殊召喚される。ふむ、リクルーターか。それもレベル3のトライクラーから出てくるレベル2……となると、もう1回攻撃しても後続が出てくる可能性の方が高いか。普段の相手ならわざわざデッキ圧縮に付き合ってやることもないけれど、何せ相手はシンクロ使いであることがほぼ確定しているシグナーだ。あれを残しておけば、後々よりレベルの高いシンクロモンスターに繋がれかねない。
「ツーヘッド・シャークは、1ターンに2度の攻撃ができる。そのヴィークラーにそのまま追撃させてもらうよ」

ツーヘッド・シャーク　攻１２００↓ヴィークラー　守２００（破壊）
「ならばヴィークラーの効果により、デッキからアンサイクラー１体を特殊召喚する」
「やっぱりか……」
アンサイクラー　守１００
ヴィークラーの跡を継ぐように特殊召喚される、一輪車に人型の上半身をつけたようなモンスター。ま、想定内といえば想定内だ。レベル２をレベル１にしたことが後々どう響くか、肝心なのはそこだけだ。
「カードを１枚セットして永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。このターンのエンドフェイズにその第２の効果、ドール・コール！デッキからグレイドルカード１枚、グレイドル・イーグルをサーチするよ」
遊星の表情からは、特に何も読み取れない。実際彼も、これだけでは僕のデッキがどんなものかはわからないだろう。ここまではお互いほんの挨拶代わり、次からが本番だ。かかっておいでと手招きのひとつでもしてやりたくなったけれど、あまり挑発することもないだろう。
遊星　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：トライクラー（守）
魔法・罠：なし

清明　ＬＰ４０００　手札：４
モンスター：ツーヘッド・シャーク（攻）
魔法・罠：グレイドル・インパクト
１（伏せ）

「……俺のターン！」
遊星の冷静そうな瞳に闘志の光が宿ったのを、僕は見逃さなかった。来るか。
「俺の手札からモンスターを１枚墓地に送ることで、クイック・シンクロンは手札から特殊召喚できる。さらにジャンク・シンクロンを召喚！このカードは召喚時、俺の墓地に存在するレベル２以下のモンスター１体を効果を無効にして特殊召喚できる。甦れ、クリア・エフェクター！」
「あんなモンスター……ああいや、たった今捨てたやつか」
ちょっと顔をしかめている間にも、遊星の場にはポンポンとモンスターが並ぶ。この展開力は、さすがのシンクロ使いだ。
クイック・シンクロン　攻７００
ジャンク・シンクロン　攻１３００
クリア・エフェクター　守９００
「行くぞ！レベル２のクリア・エフェクターとレベル１のアンサイクラーに、レベル５の

クイック・シンクロンをチューニング！そしてクイック・シンクロンはシンクロ素材とするとき、別のシンクロンモンスターの代わりとして扱うことができる。俺が選択するのは、ロード・シンクロン」

「出たな、シンクロ召喚！」

チューナー以外のモンスター２体が一列に並び、クイック・シンクロンが自身のレベルと同じ５つの光の輪となってそれを囲む。それを見て楽しそうに叫んだのは、後ろで観戦中の十代だった。見なくてもわかる、きっとこの時代には存在しない召喚法を前にして年甲斐もなく少年のように目をキラキラさせていることだろう。

「集いし希望が新たな地平へいざなう。光さす道となれ！シンクロ召喚！駆け抜けろ、ロード・ウォリアー！」

☆２＋☆１＋☆５＝☆８

ロード・ウォリアー　攻３０００

「くっ……」

光の柱から現れたのは、ベージュがかった黄金の鎧と背中から延びる何本もの排気口、そして硬質のマントに身を包む王者の風格すら漂わす戦士。いきなり攻撃力３０００とは、なかなかやってくれるじゃないの。

「クリア・エフェクターがシンクロ素材となった時、俺はカードを１枚ドローできる。さ

らに、ロード・ウォリアーの効果を発動。１ターンに１度、デッキからレベル２以下の機械族または戦士族モンスター１体を特殊召喚できる。出でよ、チューニング・サポーター！さらに魔法カード、機械複製術によりデッキから攻撃力５００以下の機械族であるチューニング・サポーターをもう２体特殊召喚する！」

ロード・ウォリアーのマントから光の道が天高く伸び、その光に導かれるようにして鍋を被った小人のようなモンスターが遊星の場に特殊召喚される。そしてそれが、さらにもう２体。まだ遊星の場には、召喚してクリア・エフェクターを釣り上げたきり何もしていないジャンク・シンクロンが１体。ということは、この符号が意味するものはまさか。

チューニング・サポーター　守３００
チューニング・サポーター　守３００
チューニング・サポーター　守３００

「レベル１のチューニング・サポーター３体にレベル３、ジャンク・シンクロンをチューニング！そしてチューニング・サポーターはシンクロ召喚に使用する際、自身のレベルを２として扱うことができる。俺はこの効果を２体分使用することで、レベル８のシンクロモンスターを呼び出す！」

３体のチューニング・サポーターと、３つの光の輪になったジャンク・シンクロン。通

常ならレベル６となるべき組み合わせが、シンクロ召喚に特化されたチューニング・サポーターの力によりさらに高みへと上り詰めていく。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光さす道となれ！シンクロ召喚！粉砕せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

☆２＋☆２＋☆１＋☆３＝☆８

ジャンク・デストロイヤー　攻２６００

次いで現れた２体目のレベル８シンクロモンスターは、まるで翼のように広がる十字の剣と本来の両腕の下に生えた一対の副腕が特徴的な黒い鎧の闘士。その攻撃力はロード・ウォリアーよりも劣っているが、この状況でわざわざ呼び出された以上はそれ相応の効果を持っているはずだ。

「この瞬間、シンクロ素材として墓地に送られたチューニング・サポーターとシンクロ召喚されたジャンク・デストロイヤーの効果がそれぞれ発動！チューニング・サポーター１体につき１枚のカードをドローし、さらに素材としたチューナー以外のモンスター１体につき１枚のカードを破壊する、タイダル・エナジー！」

遊星が３枚のカードを引くと同時に、ジャンク・デストロイヤーの４つの拳が握りしめられその目がギラリと光る。チューナー以外の素材は３体、そして僕の場のカードも３枚。この効果で場をこじ開けてダイレクト２回で終わり……なるほど、やっぱとんで

もなく強いなこいつ。

「だけど、まだ終わりじゃない！相手がモンスターを特殊召喚した時、手札を1枚捨てることで手札、または墓地のドラゴン・アイスは特殊召喚できる。この効果で手札のドラゴン・アイス自身を捨てて、そのまま墓地から特殊召喚！」

溢れるエネルギーの波に3枚のカード……ツーヘッド、グレイドル・インパクト、そして防御用だったポセイドン・ウェーブが破壊され、更地になった僕のフィールドに金属の仮面で素顔を隠す氷の竜人が片膝をついた防御姿勢で呼び出される。危ない、危ない。

ドラゴン・アイス　守２２００

「モンスターを呼び出したか。ならば、バトルだ！ジャンク・デストロイヤーでドラゴン・アイスに攻撃、デストロイ・ナックル！」

「この攻撃を通せば次はロード・ウォリアーから３０００ダメージ……いやだめだ、それはさすがに通せないか。手札から水精鱗（マーメイル）―ネレイアビスの効果発動！手札のこのカードを捨てて同じく手札の水属性モンスター、グレイドル・イーグルを破壊。そしてそのステータスを、このターンの間ドラゴン・アイスのそれに加算する！」

グレイドル・イーグルは攻撃力１５００だが、守備力はわずか５００しかない。それでも、ぎりぎりではあるがジャンク・デストロイヤーの攻撃を受けきることはできる。

４本の拳から放たれる乱舞を、氷の腕ががっしりと受け止めた。
ジャンク・デストロイヤー　攻２６００↓ドラゴン・アイス　守２２００↓２７００
遊星　ＬＰ４０００↓３９００
「ぐっ！」
「遊星が初ダメージだ！」
「だが、彼が今の攻撃を止めるために支払った代償は決して軽くはない。それに対し遊星はチューニング・サポーターの効果により手札は豊潤、さらにフィールドの状況でも圧倒的優位は変わりない。このターンをしのいだ彼がどう反撃するかが見ものだな」
はしゃぐ十代とは対照的に、冷静な分析をする遊戯さんの声が聞こえる。実際、ドラゴン・アイスはともかくネレイアビスまでこのターンで切ることになるとは思わなかった。だけどここで手札２枚を切るリスクよりも、３０００のダメージをこんな序盤で受ける方が痛い。切り替えていこう、切り替えて。
「ロード・ウォリアーでもう1度攻撃、ライトニング・クロー！」
これは耐えきれず、なすすべなく王者の爪に氷の体が引き裂かれ仮面が地に落ちる。それでも、ドラゴン・アイスはよくやってくれた。また手札が余ったら、その時はよろしく頼むとしよう。
ロード・ウォリアー　攻３０００↓ドラゴン・アイス　守２７００（破壊）

「そしてカードを２枚伏せる。俺はこれでターンエンドだ」
『それだけではない。クリア・エフェクターは、自身を素材としたシンクロモンスターに効果破壊への耐性を付与するもう１つの効果がある。覚えておくといい、マスター』
　伏せカードが２枚、そしてフィールドには２体のウォリアー。さらに手札まで３枚も抱え、遊戯さんの解説通りデュエルはまだ序盤のくせに一気に追い込まれてしまった。だけど不思議と、まだまだ負ける気はしなかった。
「僕のターン、ドロー……よしよしよし。まずは魔法カード、サルベージを発動。この効果で僕の墓地から攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体、ツーヘッド・シャークとネレイアビスを回収する。１つ教えてあげるよ、遊星。シンクロ召喚は、なにもシグナーだけの技じゃないのさ！チューナーモンスター、グレイドル・スライムＪｒ．を召喚、そしてこのカードは召喚時に墓地のグレイドルモンスター１体を蘇生して、それと等しいレベルの水族モンスターを手札から展開できる。墓地と手札からそれぞれレベル３のグレイドル・イーグル、そしてネレイアビスを特殊召喚！」
　グレイドル・スライムＪｒ．　攻０
　グレイドル・イーグル　攻１５００
　水精鱗―ネレイアビス　守２０００
「通常のチューナー……ダークシンクロではない、本来のシンクロモンスターか」

「ダークシンクロ？え、なに、まだ何か種類あんの？まあ、当面僕には関係ない話だからいいけどさ。レベル３のイーグルとネレイアビスに、レベル２のスライムＪｒ．をチューニング！」
「清明もシンクロ召喚だと!?」
うーん、十代はやっぱ食いついてきたか。そりゃそうだよなあ。後でペガサスさんの新カードテスター証明書でも見せとけば誤魔化せるかな。確か卒業証書とかといっしょに部屋の中に保管してあったはずだ。
ともかく３体のモンスターが飛びあがり、シンクロの輪の中で１つになる。このシンクロ召喚もあの時以来使うことがなかったから２年ぶりだけど、こっちの腕がなまっていなければいいのだが。
「変幻自在な不定の恐怖は、星海旅する魔性の生命！シンクロ召喚、グレイドル・ドラゴン！」
☆３＋☆３＋☆２＝☆８
グレイドル・ドラゴン　攻３０００
水銀めいた光沢を放つ体に、鳥のような黄色い翼。ワニのような鋭い牙が生えた巨大な口と、ピンク色のコブラが生えているかのような尾。様々なグレイドルの記憶を受け継いだ戦闘用の合体形態が、２体のウォリアー相手に頭と尾にそれぞれついた計４つの

目で睨みつける。
「グレイドル・ドラゴンはシンクロ召喚成功時、その素材となった水属性モンスターの数まで場のカードを破壊できる。僕が選ぶのは遊星、お前さんの伏せカード２枚とジャンク・デストロイヤー、お前だ！グレイドル・トルピード！」
「ジャンク・デストロイヤーを？」
　破壊耐性のことを知らないギャラリー２人から一斉に注がれたいぶかしむような視線も意に介さず、ドラゴンの体表にさざ波が走る。不定形のボディが変態して文字通りその身を削ることで放たれた無数の小型有機体ミサイルが雨のごとく降り注ぎ、僕が指定したロード・ウォリアー以外の３枚のカードを焼き尽くす。
「どれどれ？破壊したのはくず鉄のかかしに……スキル・サクセサー？」
『フリーチェーンで発動し、ロード・ウォリアーの攻撃力を４００アップさせることもできたはずだ。だがそれをせず、あえて破壊されるがままにしていたわけか。となると、考えられる理由は２つ』
「（グレイドル・ドラゴンの効果を最初から知っていたか、それとも僕の狙いを読み切ったか……いいねいいね、どっちにしても楽しいよ）」
　遊星に聞こえないようテレパシーで行われたチャクチャルさんとの短い意見交換を終える。最後の一言は、嘘偽りない僕の本音だ。目の前の文字通りに時代が違う、アカ

デミア卒業以来随分と出会っていなかった久方ぶりの強敵を前にどうしようもなく心が高揚し、自然と口元が好戦的に緩む。それを見た遊星のポーカーフェイスが若干困惑した風に揺らぐのを見て、より一層楽しくなった。

「おっと、忘れないうちにフィールドから墓地に送られたネレイアビスの効果を発動。デッキからカードを１枚引き、その後手札を１枚捨てる。永続魔法、補給部隊を発動！」

サルベージしたきりだったツーヘッド・シャークを墓地に送り、代わりのドローカードを即座に発動する。そろそろ手札が枯渇してきたこのタイミングでこのカードを引けたのは、実際ありがたい。

「さあ、バトル！悪いねグレイドル・ドラゴン。早速だけどロード・ウォリアーに攻撃、グレイドル・スパーク！」

「迎え撃て、ロード・ウォリアー！ライトニング・クロー！」

ドラゴンが翼を広げ宙に飛び、全身からエネルギーを放出することで発光しながら急降下突撃を敢行する。カウンターを合わせるようにして放たれた王の戦士の右拳がそれと激突し、行き場を失ったエネルギーが派手な爆発を起こすことで２体のモンスターがともにその爆風の中へと飲み込まれる。

グレイドル・ドラゴン　攻３０００（破壊）→ロード・ウォリアー　攻３０００（破壊）

「僕のフィールドでモンスターが破壊されたことで、補給部隊の効果によりカードを1枚ドロー。さらにグレイドル・ドラゴンが破壊された時、僕の墓地から水属性モンスター1体を効果を無効にして特殊召喚できる。甦れグレイドル・イーグル、そしてダイレクトアタックだ！」

爆発によりバラバラに飛び散ったドラゴンの体を構成する流体金属めいたグレイドルの欠片が空中に集合し、互いに再びくっつきあって黄色い鷹を模した姿となる。そして遊星のフィールドに、もはやその突撃を防ぐモンスターはいない。

グレイドル・イーグル　攻１５００→遊星（直接攻撃）

遊星　ＬＰ３９００→２４００

「くっ……」

「清明のダイレクトアタックが決まったぜ、遊戯さん！」

「ああ。先ほどのターンは遊星も見事な攻撃だったが、君の友達も1歩も引かない反撃だったな」

「そりゃそうですよ、なんたって俺の親友ですから」

親友、か。目の前でああまではっきり言い切られるとさすがに少し照れ臭いけど、その評価はありがたく受け取っておこう。でも親友なら卒業してからもせめて1回ぐらいはうちまで何か買いに来い、挨拶もなしに世界中ほっつきまわってからに。

「いいもん引けた、２枚目の補給部隊を発動。僕はこれで、ターンエンド」

遊星　ＬＰ２４００　手札：３

モンスター：なし

魔法・罠：なし

清明　ＬＰ４０００　手札：０

モンスター：グレイドル・ドラゴン（攻）

魔法・罠：補給部隊

補給部隊

「俺のターン、調律を発動。デッキからシンクロンチューナー１体をサーチし、その後デッキトップのカードを墓地に送る。俺が選ぶカードは、ニトロ・シンクロンだ。さらに魔法発動、ワン・フォー・ワン！手札のモンスター１体をコストに、手札またはデッキからレベル１のモンスターを特殊召喚する。出でよ、ターボ・シンクロン！」

ターボ・シンクロン　攻１００

専用サーチ効果を持つ魔法カード、調律を使いサーチされたニトロ・シンクロンが、すぐさま手札コストとして墓地に送られる。なるほど、モンスターをコストにする必要があるワン・フォー・ワンを使うためにやむなく貴重なサーチを使ったってことか。

そしてそこまでして遊星が次に呼び出したのは、緑色のデフォルメされた車のような

モンスター。シンクロン……確か、あのカードもチューナーモンスターだったはず。となると、もう次のシンクロの準備が整っているというわけか。

でも来るなら来い、多少のダメージは受けてやろうとも。ただし戦闘破壊してみろ、このイーグルの効果で即座にそのシンクロモンスターをパクってくれよう。今の特殊召喚に反応して墓地のドラゴン・アイスを蘇生させることもできるけれど……手札は1枚、さっき引いた貪欲な壺。わざわざデッキをこれ以上分厚くすることもない、次のドローが終わってからでいいだろうと思って放置してあったけど、やっぱりさっきのターンのうちに使っておくべきだったかな？いずれにせよ、せっかく発動条件も満たしているこれを使わずに捨てるのはさすがにもったいない。

「そして、スター・ブライト・ドラゴンを召喚。このカードが召喚に成功した時、自身以外のモンスター1体のレベルを2つまで上げることができる。ターボ・シンクロンのレベルを1つ上げる」

「レベル6、か」

スター・ブライト・ドラゴン　攻1900

ターボ・シンクロン　☆1→2

「レベル4のスター・ブライト・ドラゴンに、レベル2となったターボ・シンクロンをチューニング！集いし絆が更なる力を紡ぎだす。光さす道となれ！シンクロ召喚！轟

け、ターボ・ウォリアー！」
『これは……』
☆４＋☆２＝☆６
ターボ・ウォリアー　攻２５００
遊星３体目のシンクロモンスターは、先の２体に比べるとやや小柄なものの上級クラスとしては及第点以上の攻撃力を備えた赤い塗装のウォリアーだった。腰に装着されたタイヤが激しく回転し、体内のエンジンに命が宿る。
その姿を見たチャクチャルさんが何か言いかけたが、そのセリフの続きはこの機を逃さず畳みかけようと判断したらしい遊星の次なる宣言にかき消された。
「さらにここで、墓地からスキル・サクセサーの効果発動。このカードを除外し、ターボ・ウォリアーの攻撃力を８００ポイントアップさせる。バトルだ、ターボ・ウォリアー！アクセル・スラッシュ！」
「来たね！」
ターボ・ウォリアー　攻２５００→３３００→グレイドル・イーグル　攻１５００（破壊）
清明　ＬＰ４０００→２２００
「今度は遊星がいった！でも、清明のカードには効果があるぜ」

「その通り。だけどまずは、補給部隊2枚の効果でそれぞれ1枚ずつドロー。戦闘で破壊されたグレイドル・イーグルは相手モンスター1体に寄生して装備カードになり、装備モンスターのコントロールは僕のもとに移る。なかなか面白かったけど、次のターンで終わりだ遊星！」

両断されたイーグルが銀色の液体に溶け崩れ、ターボ・ウォリアーの精密部品の内部へと音もなく侵入にかかる。この作業が終了した時、ターボ・ウォリアーの機構は完全に僕のものとなる。

だが、そう言い切った際の遊星の表情の変化を僕の目は見逃さなかった。遊星はその時、確かに笑っていたのだ。

「やはりな……だが、それはどうかな？」

「なんだって？」

『ああ、このターンに関してはマスターの完敗だな』

「え？」

チャクチャルさんの不吉な発言に呼応するかのように、フィールドでも何かが起きていた。されるがままに寄生されていたかに見えたターボ・ウォリアーが突然エンジンを全開に噴かすと、その衝撃に液状のグレイドルがその内部から振り落とされて消えはじめたのだ。

「残念だが、ターボ・ウォリアーはレベル６以下のモンスターの効果の対象にならない。確かにそのモンスターの効果は恐るべきものだが、それもターボ・ウォリアーには無効だ！」
「嘘!?」
　さらにスピードを増して回転するエンジンが新たな力を生み出し、ついにグレイドルの力が完全に弾き飛ばされた。何事もなかったかのように遊星の側に立つターボ・ウォリアーを前に、思わず歯噛みする。
「やってくれるね、遊星。グレイドル・イーグルの効果を知ってたのかい？」
「いや、違う。ただグレイドル・ドラゴンが破壊されたあの時、攻撃力が２００程度しか差がないのなら場を離れた時の手札交換効果を持つネレイアビスを蘇生させてもよかったはずだ。そしてお前は十代さんが認めるほどのデュエリスト、わずかなダメージのためだけにネレイアビスを捨ててまでグレイドル・イーグルを蘇生させたとは考えにくかった。つまりグレイドル・イーグルには手札交換よりも優先するだけの効果がある、そう思ったのさ。もっともその効果にターボ・ウォリアーの耐性が通用するかどうかは賭けだったがな。だが、どうやら俺はこの賭けに勝ったようだ」
　答えてくれないかとも思ったけど、思いのほか饒舌に話してくれた。無口なようでいて、案外話しやすいタイプなのかもしれない。そしてあの１瞬でそれだけのことを見抜

く洞察力、そこから耐性持ちのターボ・ウォリアーを呼び出す応用力。
うん。やっぱりこの男、強いデュエリストだ。カードパワーとか引きの良さじゃない、純粋にデュエリストとして強い。つくづく今のうちに戦えてよかったけれど、もっと成熟してからの彼と戦えないことが惜しい。残りの手札１枚を伏せてターンを終える遊星の姿を見ながら、改めてそう思った。
ターボ・ウォリアー　攻３３００→２５００
「僕のターン。魔法カード、貪欲な壺！墓地のグレイドル・スライムＪｒ．、グレイドル・イーグル、グレイドル・ドラゴン、ツーヘッド・シャーク、そしてネレイアビスの５体をデッキに戻して２枚ドロー。トレード・インを発動、手札からレベル８のカイザー・シースネークを捨ててさらに２枚ドローする」
目まぐるしく引き込まれたドローソースと手札交換カードにより、手札の中身がくるくると入れ替わる。だけど、おかげですっかり準備は整った。さあ、さっきの借りを利子付けて叩き返してやる時だ。
「手札からカイザー・シースネークの効果を発動。相手フィールドにのみモンスターが存在するときレベル４、攻撃力０としてこのカードを特殊召喚し、さらに手札か墓地からレベル８の水属性かつ海竜族モンスターを攻守０として特殊召喚できる。たった今捨てたもう１体のカイザー・シースネークを蘇生！そしてこの２体目もまた、特殊召喚

されたことでレベルが４になる。チューナーモンスター、グレイドル・スライムＪｒ．を召喚！本来は召喚時に蘇生効果が使えるけど、あいにくついさっき墓地のグレイドルは全部デッキに戻しちゃったからね」

カイザー・シースネーク　攻２５００→０　☆８→４

カイザー・シースネーク　攻２５００→０　守１０００→０　☆８→４

グレイドル・スライムＪｒ．　攻０

「今度こそ覚悟しときなよ、遊星。レベル４になったカイザー・シースネークに、レベル２のＪｒ．をチューニング。鉄網珊瑚（てつもうさんご）の時の果て、目覚めよ海に抱かれし秘宝！シンクロ召喚、珊瑚之龍（コーラル・ドラゴン）！」

☆４＋☆２＝☆６

珊瑚之龍　攻２４００

海中で長き時を過ごすうちにその体はやがて珊瑚をまとい、それと一体化した文字通り赤珊瑚色の龍。あいにくとレベル６モンスターであり攻撃力でも劣るこのカードにターボ・ウォリアーを倒すことは不可能……だけど、この場においては十分だ。

「珊之龍は１ターンに１度、手札を捨てて場のカード１枚を破壊できる。ターボ・ウォリアーが対象に取れないなら、そのセットカードを狙うまで！効果発動、コーラル・グローアップ！」

瑚之龍が一吠えすると、遊星の伏せカードの真下から樹木のような珊瑚が急速に成長してそれを突き破り破壊した。だがカードを1枚除去されたというのに、遊星に焦りの色はない。
「まだだ!このカードが墓地に送られたことで、墓地のリミッター・ブレイクの効果発動!デッキからスピード・ウォリアー1体を特殊召喚する!」
「墓地発動……!」
スピード・ウォリアー　守４００
どうやら良かれと思ってなけなしの手札をつぎ込んだ破壊効果は、完全に裏目だったらしい。フルフェイスシュノーケルのような部品で顔を包む機械の戦士が、ターボ・ウォリアーの隣に片膝をついて現れる。モンスターを残させるのはあまりいい傾向ではないけれど、今更なかったことにはできないことだ。
「まあいいさ。だとしても僕は、今できることをやるだけだしね。いいこと教えたげるよ遊星、瑚之龍は確かにシンクロモンスターだけど、同時にチューナーモンスターでもある!レベル４のカイザー・シースネークにレベル６のシンクロチューナー、瑚之龍をチューニング!」
「シンクロモンスターのチューナーだと!?そんなカードが存在するというのか!?」
「お、これには食いついてくれた?嬉しいねえ、そう来てくれないとこっちも張り合いが

ないよ。完全無欠の海の主、神気宿りし眠れる臥竜！シンクロ召喚、白闘気双頭神龍（ホワイト・オーラ・バイファムート）！」

☆４＋☆６＝☆１０

白闘気双頭神龍　攻３３００

グレイドル・ドラゴンよりなお一回り大きい、僕の持つ最大サイズのモンスターであるチャクチャルさんやジズキエルとも張り合えるほどのサイズを誇る超大型シンクロモンスター、白闘気双頭神龍。偉そうなことを言ってはいるが、僕だってこのカードを使うのはこれが初めてだ。というか、カードイラストでしか見たことなかったけどお前こんなデカかったのか。

「シンクロモンスターでチューナー……それってどれぐらい凄いんですか、遊戯さん？」

「いや、俺に聞かれても」

実は僕もよくわからない。でも本家シンクロ使いの遊星があそこまで驚愕しているところを見ると、なんかよくわかんないけどとにかく凄いんだろう。凄いぞ瑚之龍、強いぞバイファムート。

……そんな凄いカードなのに、こんな頭の悪い感想しか出てこないところが申し訳ない。

「ととと、忘れるところだった。この瞬間自分ターンでのシンクロ召喚に成功した白闘

気双頭神龍と、シンクロ召喚された状態から墓地に送られた瑚之龍の効果を発動。神龍トークン1体を守備表示で特殊召喚し、カードを1枚ドローする」

双頭を持つ最強の魚の周りに神気が立ち込め、その姿が二重にぶれて見える。これこそがこのバイファムートを守る盾であり、またその力を増すための矛でもある特殊能力だ。

神龍トークン　守３０００

「まだ驚いてるところ悪いけど、このままバトルさせてもらうよ。白闘気双頭神龍でターボ・ウォリアーを攻撃、白の晴朗軌跡（ホワイト・メロウ・クロニクル）！」

バイファムートの双頭のうち片方が鎌首をもたげ、開いた口から純白の波動を放つ。赤い戦士がその中に飲み込まれ、跡一つ残さずに消え去った。

白闘気双頭神龍　攻３３００→ターボ・ウォリアー　攻２５００（破壊）

遊星　ＬＰ２４００→１６００

「うおおおおっ！」

遊星の悲鳴を聞きながらも、気分は今一つ晴れなかった。このターンで彼にとどめは刺せない。予想外のリミッター・ブレイクにより、モンスターは残してしまった。今は手札こそないが、それでも次のドローがある。

僕の遊星というデュエリストに対する見立てが正しければ、また彼はこの状況を巻き

返してくるだろう。頼むよ、バイファムート。僕が次のターンを無事に切り抜けられるかは、君がどれだけ持ちこたえてくれるのかにかかってるんだから。
「カードを１枚伏せて、ターンエンド」
遊星　ＬＰ１６００　手札：０
モンスター：スピード・ウォリアー（守）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ２２００　手札：１
モンスター：白闘気双頭神龍（攻）
神龍トークン（守）
魔法・罠：補給部隊
補給部隊
１（伏せ）
「俺の……ターン！」
さあ遊星、なにを引いた？あの様子だと、案の定何か仕掛けてくる気らしい。
「俺は、シンクロン・エクスプローラーを召喚！このカードは召喚時、墓地のシンクロン１体を効果を無効にして特殊召喚できる。甦れ、ニトロ・シンクロン！」
「ニトロ・シンクロンを……？」

シンクロン・エクスプローラー　攻０
ニトロ・シンクロン　守１００
釣り上げ効果により甦る、ニトロ・シンクロン。これで遊星の場の合計レベルは、６。確かに遊星の墓地に、ほかにレベル２のチューナーは存在しない。まさか、あの調律は手札コスト用のモンスターを引っ張ってくるためだけでなく、最初からこの盤面を想定したうえであのカードをサーチ先に選んでいたとでもいうのだろうか。シンクロン・エクスプローラーを引いたとき、レベル６のシンクロ召喚を可能とする盤面を用意するために。

考えすぎかもしれないが、もしもそこまで考えてのすべて計算づくな行動だとしたら……まったく、赤き龍はとんでもない人材を発掘してくれたものだ。

「レベル２のスピード・ウォリアーとシンクロン・エクスプローラーに、レベル２のニトロ・シンクロンをチューニング！星雨を束ねし聖翼よ、魂を風に乗せ世界を巡れ！シンクロ召喚、スターダスト・チャージ・ウォリアー！」

☆２＋☆２＋☆２＝☆６
スターダスト・チャージ・ウォリアー　守１３００
遊星が４体目に召喚したのは、星屑のように煌めく機械の翼をひるがえす新たなるウォリアー。そのステータスはこれまでのウォリアーたちの中でも断トツに低く実際

遊星も守備表示でシンクロ召喚しているが、無論それだけではないだろう。なら、ここでドラゴン・アイスを蘇生させるべきだろうか……いや、相手の効果が分からない以上、下手に手を出すのはやめておこう。

「スターダスト・チャージ・ウォリアーがシンクロ召喚に成功した時、俺はデッキからカードを１枚ドローできる……ドロー！」

なんとまあ、この土壇場でドロー効果に繋がるとは。さあ、次は何を引いたんだ？

「死者蘇生を発動！俺の墓地からミスティック・パイパーを特殊召喚し、その効果を発動。このカード自身をリリースすることでカードを１枚ドローし、それがレベル１モンスターならばさらにもう１枚ドローができる。俺がドローしたのはレベル１のガード・オブ・フレムベル、よってもう１枚だ」

ミスティック・パイパー　攻０

死者蘇生により見慣れない笛を持つ道化師のようなモンスター……おそらくあの調律の後半の効果で墓地に送られたのだろう、ミスティック・パイパーが現れたかと思ったら瞬時に消え、代わりに遊星の手札が２枚増える。

「魔法カード、調和の宝札を発動！手札から攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー、ガード・オブ・フレムベルを捨てることでさらにカードを２枚ドローする！」

『またか』

口には出さないが、僕も同感だった。たった1枚のドローから繋げてスターダスト・チャージ・ウォリアー、ミスティック・バイパー、調和の宝札とこのターンだけで計5枚ものドローに成功しているのだから、相手する側としてはそう言いたくもなるというものだ。

だが、そのドローのラッシュもようやくひと段落着いたらしい。

「……カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

「やるな遊星、まさかあんなにドローするなんてな」

「ああ。ただ引きがいいだけじゃない、彼のデッキとの深い絆がそれを可能にしたのだろう」

もはや実況に解説と化した後ろの2人も感嘆の声を漏らす中、再び僕にターンが巡る。あそこまでぐるぐる回して得た2枚のカードだ、当然ブラフではないだろう。どのタイミングでこちらにあの2枚が牙をむいてくるか、見極めを間違えたら倒れるのはこちらだ。

「僕のターン。魔法カード、アクア・ジェットを発動！このマジックコンボで魚族モンスター、白闘気双頭神龍の攻撃力はさらに１０００アップ！そして神龍トークンを攻撃表示にして、バトルフェイズ。スターダスト・チャージ・ウォリアーに攻撃！」

バイファムートの先ほどとは違う側の首がぐわりと動き、星屑の戦士へと純白の波動

を放つ。仕掛けてくるとしたらここだろうか……だが意外にも、まだ遊星はピクリとも動かなかった。

白闘気双頭神龍　攻３３００→４３００

神龍トークン　守３０００→攻３３００→スターダスト・チャージ・ウォリアー　守１３００（破壊）

「何もなし、か。なら続けて白闘気双頭神龍で遊星にダイレクトアタック、白の晴朗軌跡（ホワイト・メロウ・クロニクル）！」

攻撃を終えた側と入れ替わるようにバイファムートの最初に動いた方の首が目覚め、追撃のダイレクトアタックを仕掛けに行く。さあ、これを止めないとライフが尽きるぞ。

「トラップ発動、トゥルース・リインフォース！このカードは発動ターンの俺のバトルを封じる代わりに、デッキからレベル２以下の戦士族モンスターを特殊召喚できる。来い、マッシブ・ウォリアー！」

「構わない、攻撃続行！さらに速攻魔法、終焉の地！相手がモンスターを特殊召喚した時、デッキからフィールド魔法１枚を直接発動できる。これが僕のフィールドだ、ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント！」

「フィールド魔法か……」

巨大な石の歯車を盾のように掲げる戦士……確かあのカードは、1ターンに1度破壊されない壁モンスター。なるほど、確かにあれならば緊急回避にはもってこいだろう。そんなことを考えている間にも、バイファムートの攻撃はその頑丈な盾に受け止められていた。

だが、それは確かにこの一撃こそ止められたかもしれないが、決して安くない代償を支払うことにもなる。ほんの少しだけ、遊星の表情が変化した。そう、彼は僕が当然使うであろうフィールド魔法に依存するモンスター、地縛神を知っているのだ。ふふふ、すでに自分のライフが即死圏内にある状況でフィールド魔法を張られるというのはたまったものじゃないだろう。しかも僕のチャクチャルさんは、確実に場に出る隙を今か今かと伺っている。

そう、こんな風に。

白闘気双頭神龍　攻４３００↓マッシブ・ウォリアー　守１３００

「確かに攻撃を耐えきれるマッシブ・ウォリアーなら、僕が今のドローで召喚できるモンスターを追加で出していたとしてもライフを守り切れるってわけか。でも、そりゃちょっとばかし虫が良すぎるってもんさ。そろそろお楽しみの時間だよ、遊星！トラップ発動、リビングデッドの呼び声！」

「リビングデッドだと？まさか！」

遊星は、さっき死者蘇生を発動した時に自動的に僕の墓地も見ていた。つまり、僕の墓地にあのカードが落とされていることも知っている。そんなに出してほしいなら、お望み通りに満を持して呼んでやろう。

「力を維持するために必要なフィールド魔法は遊星、お前さんのおかげで発動できた。瑚之龍の効果を使った時にはもう、とっくに仕込みは終わってたのさ！七つの海の力を纏い、穢れた大地を突き抜けろ！地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルルア）！」

「地縛神……！」

童実野町の中心で、闇が増幅した。ぽっかりと地面に空いた深淵の穴から、黒を基調とした全身に紫の模様が描かれる巨大なシャチが浮上する。やっぱりシグナーとダークシグナーの戦いなら、うちの神様にもしかるべきタイミングで出てきてもらわないと。

地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００

『待ちくたびれたぞ、マスター』

「真打は遅れてやってくるもんさ。でもほら、そのおかげで最高のシチュエーションなんだから堪忍してよ。いくらマッシブ・ウォリアーの防御性能が優れていても、モンスターを無視して直接相手プレイヤーに攻撃ができる地縛神の前では無力。さあチャクチャルさんとっとと締めちゃって、ミッドナイト・フラッド！」

「これは決まったか!?」
マッシブ・ウォリアーの横をすり抜け、闇のパルスが空を裂く。十代が叫ぶ。遊星の場に残された、最後の1枚が表を向いた。
「トラップ発動、星墜つる地(スターダスト・リ・スパーク)に立つ閃珱!直接攻撃を宣言した相手モンスターの攻撃力が俺のライフを上回るとき、その攻撃を無効にしてデッキからカードを1枚ドロー。さらに俺のエクストラデッキから、スターダスト1体を特殊召喚できる!」
『しまった……!』
「これも止められたっ!?」
あと1歩で勝負が決まると思われたその時、天より振り下ろされたまばゆい星々の煌めきである光の柱がチャクチャルさんの攻撃を受け止め霧散させる。
「お前がダークシグナーである限り、必ず最後には地縛神を呼び出すであろうことは読めていた。ならば俺もこの戦い、シグナーとして迎え撃とう!集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ!飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン!」
星の色をした光の柱が砕け、その中心から星屑の名を持つ天翔けるシグナーの竜がついにその姿を見せた。できればあれを出される前に決着をつけたかったところではあるけれど、それこそ虫が良すぎるってもんか。
スターダスト・ドラゴン　攻２５００

「遊星もエースモンスターを出したぜ、遊戯さん！」
「見事な逆転だな。だがスターダスト・ドラゴンの特殊能力はこの状況にそぐわないし、攻撃力でも彼の場のモンスターを下回っている。エースモンスターを呼び出しただけで勝てるわけではないことは、彼自身が一番よくわかっているはずだ」
ダークシグナーの地縛神と、シグナーのドラゴン。対峙すべくして出会ってしまった２体のモンスターが、フィールドを挟み向かい合う。そうか。あれが、スターダスト・ドラゴンか。知らず知らずのうちに流れていた冷や汗を隠すように、努めて余裕を込めて虚勢を張る。
「真打登場はそっちもかい？だけどフィールドから墓地に星墜つる地に立つ閃珱のカードが送られたことで、ウォーターフロントには壊獣カウンターが１つ乗せられる」
ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（０）→（１）
スターダスト・ドラゴン。その特殊能力は不明だが、現状何も打つ手はない。終焉の地なんてまだるっこしいカードではなくテラ・フォーミングあたりから直接ウォーターフロントをこのターンの初めに握ることさえできていれば今頃壊獣カウンターは３つ溜まっていたはずだし、そこから壊獣をサーチしてとっととリリースでご退場願うこともできていたはずだ。でもまあ、あまり文句ばかり言ってもつまらないしもっと前向きにいこう。

遊星　ＬＰ１６００　手札：１
モンスター：スターダスト・ドラゴン（攻）
　　マッシブ・ウォリアー（守）
魔法・罠：なし
清明　ＬＰ２２００　手札：１
モンスター：地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ（攻・リビデ）
　　白闘気双頭神龍（攻）
　　神龍トークン（守）
魔法・罠：補給部隊
　　補給部隊
　　リビングデッドの呼び声（地縛神）
場：ＫＹＯＵＴＯＵウォーターフロント（１）
「俺のターン。そろそろ、この戦いに決着をつける時だ」
「それについちゃ僕も同感だね。それで？」
「これが俺の、最後の賭けだ！カードを２枚伏せてターンエンド、さあ、来い！」
　これまでの印象とはうってかわっての熱い叫びとともに、残り２枚の手札を勢いよくセットする遊星。スターダスト・ドラゴンは攻撃表示のまま、これがいったい何を意味

しているのか。いずれにせよ、遊星の目には本人の言葉通り最後の賭けに挑む者に特有の強い覚悟が燃えている。あれはブラフでも何でもない、本気で遊星はあの２枚、それとスターダスト・ドラゴン、あるいはマッシブ・ウォリアーか。ともかくこの最大でも４枚のカードから、これだけ不利な状況をひっくり返しての勝利を狙っている。

「……なら、こっちも出し惜しみなしだ！僕のターン、ドロー！」

『結局、マスターはこのカードなんだな』

ドローカードを覗き込み、半分呆れたように笑うチャクチャルさん。まったくだ。だけど、これは僕の誇りでもある。いつでも一緒に戦ってきた、最高最大のフェイバリットカード。

「神龍トークン１体をリリースして、アドバンス召喚！このカードはレベル７だけど、召喚の際にリリースを任意の数まで減らすことができる」

「あれは……」

「出たぜ、清明のエース！」

バイファムートを取り巻く神気が上空に揺らめき、優しい白色の霧となって滞空する。その霧の世界の向こうから、全身鎧の人影がやってきた。その攻撃力は、リリースしたモンスターの合計。

「さあ、クライマックスと洒落込もう！行くよ、霧の王（キングミスト）！」

霧の王　攻０→３３００

ちなみに、ここで神龍トークンをリリース先に選んだことにもちゃんと理由がある。バイファムートは相手ターンに1度、自分フィールドにトークンが存在しないときに神龍トークンを生み出すことができるのだ。つまり、実質消費なしでこの攻撃力の霧の王を出せることになる。

ま、残念ながらもうこのデュエルでそれを使う機会は訪れないだろうけど。

「何を企んでるかは知らないけど、まずはシンクロ対決だ！白闘気双頭神龍でスターダスト・ドラゴンに攻撃、白の晴朗軌跡（ホワイト・メロウ・クロニクル）！」

攻撃宣言を行ったことで、一時的に神気を失ったバイファムートの口元にエネルギーが集まりだす。だがそれこそが、遊星のずっと待ち望んでいたタイミングだった。

「トラップ発動、炸裂装甲（リアクティブ・アーマー）！このカードの効果により、攻撃宣言を行った相手モンスター1体を破壊する！」

「今更1体止めたところで……」

「さらに！カードを破壊する効果が発動したことでスターダスト・ドラゴンの効果発動、ヴィクティム・サンクチュアリ！このカードをリリースすることで、その発動を無効にして破壊する！」

スターダストの全身が、その名の示す如く星屑のような無数の光の粒に包まれる。

「そして！スターダストがリリースされ炸裂装甲と共に墓地に送られたことで、俺の墓地に存在するカードは３０枚となった！これにより発動条件を満たしたトラップ、残骸爆破を発動！この効果により、相手プレイヤーに３０００ポイントのダメージを与える！」

遊星に残された最後のカードにして逆転の切り札、残骸爆破。なるほど、確かにこの方法ならば僕のライフを１瞬で０にできる。スターダスト・ドラゴンの効果を最大限に生かしたコンボで墓地の枚数を調整するそのタクティクスも、実際大したものだ。

……だからこそ。こう思うのはもう３度目だけど、やっぱり改めて思う。まだ実力の開花しきっていないうちに彼と戦えたことは本当に僥倖であり、またとびきりの不幸でもある。だってこうして、今はまだ僕の方が上にいるのだから。

「霧の王！」

何をしろとも明確に伝えていない、ただその名を一言叫ぶだけの短い命令。それでも僕の相棒にして切り札は、僕の命令を読み取ってくれた。その剣の切っ先を星色の光に包まれ今まさにその中へ消えようとしていたスターダスト・ドラゴンへと静かに向けると、光の粒子の勢いが急速に衰えていく。やがて光は完全に消え失せ、何事もなかったかのようにすべてが元に戻った。

「馬鹿な、スターダストの効果が……！」

「惜しかったね、遊星。霧の王がフィールドに存在する限り、互いのプレイヤーはいかなる場合のリリースも行うことが許されない」
「……くっ」
炸裂装甲が発動に成功し、墓地に送られた。だけど、遊星の墓地のカードは２９枚。あと１枚、足りない。そしてそれを用意する前に、このデュエルは終わる。悔しそうにうつむいた遊星が、再び顔を上げて僕の目をまっすぐに見る。その覚悟に心の中で敬意を表し、そっと最後の指令を下した。
「チャクチャルさん。遊星にダイレクトアタック……ミッドナイト・フラッド」
地縛神　Ｃｈａｃｕ　Ｃｈａｌｌｈｕａ　攻２９００→遊星（直接攻撃）
遊星　ＬＰ１６００→０

「……ふぅ」
そっと息をつく。気を張り詰めっぱなしで脳もずっとフル回転、疲れる戦いだった。でも、最高に楽しい時間だった。デュエルが終わったことを見届けて、十代と遊戯さんが再び僕らのところに近寄ってくる。だけど僕にはそれとは反対側、最後の一撃のショックかその場に座り込んで自分の手を見つめて呆然とつぶやく遊星の姿が気に

なった。
「俺は……まだ生きている、のか？」
「あったりまえでしょ、そんな物騒な。ほれ、立てる？」
「あ、ああ」
　近寄って手を伸ばしてやると、素直にそれを掴んで立ち上がる遊星。その時のキョトンとした表情とさっきまでの真剣な顔のギャップに、思わず小さく笑ってしまう。
「ごめんごめん、つい、ね。まあ真面目な話としてお前さんと僕じゃシグナーとダークシグナーでも生きてる時代がそもそも違うし、そもそも僕は現世に恨み残してこうなったクチじゃないからね。礼儀、というかひとつのけじめとして喧嘩は売らせてもらったけど、それが終わればそんなのはもう関係ないさ」
「なんだかよくわからないけど、お前たち仲直りできたのか？」
　なんだか不思議なものを見るような顔で僕と、それから十代をかわるがわる見る遊星。ややあって、立ち上がる時に掴ませたままの僕の手をぐっと握り返した。
「このデュエルを通じて、ダークシグナーにもあなたのような人がいることを学べました。清明さん、俺と手合わせしてくださり、ありがとうございました」
「いやいや、こっちこそ楽しいデュエルだったよ」
　固く握手する僕らを見て満足そうに大きく頷く十代と、そっと微笑む遊戯さん。赤き

龍がどうかは知らないが、少なくともチャクチャルさんの方はシグナー相手に勝利したからか、それとも久々のフィニッシャーになれたからか満足そうだしめでたしめでたし、ということでいいだろう。

……いや、まだ1つ、聞きたいことがあったんだ。

「ところでさ、少し聞きたいんだけど」

「ええ、なんですか？」

「皆、いったい何があってこの時代に集まってたの？」

それを聞いてなぜか3人が顔を見合わせ、何とも言い難い複雑な表情を一斉に浮かべる。首をひねる僕の肩を、十代がポンと叩いた。

「それなんだけどな、もう大変だったんだぜ？遊星よりもさらに先の未来から、パラドックスってデュエリストが……」

「……ら。おい、清明！」

三沢に肩を揺さぶられながら自分の名前を大声で呼ばれ、ようやく我に返る。いつの間にか、がっつりあの日のことに思いをはせていた。そうだ、三沢にあの話をどう話そ

うか。あの時に十代から聞いた時空を超えるデュエリスト、パラドックスのこと、そしてあの後、元の世界に帰っていった遊星のこと。あの事件によって様々な時代で起きた一時的な歴史の改変は全部赤き龍がその帰り際になかったことにしてくれていたと思っていたけれど、まさか覇王の異世界から偶然その時の様子を見られていたとは。

うんうんと唸っていると、先にため息をついたのは三沢だった。

「まあいいさ。観測に成功した以上、何かが起きたことは間違いないからな。いつの日か必ず、３年前に何が起きたのかを俺自身の力で突き止めて見せるからな。あまり全部ネタバラシしてもらっては、研究の面白みもなくなってしまう」

そういって景気づけのつもりなのか、手にしたままのグラスの中身をぐいっと一気に開ける。空になったグラスをテーブルに置き、じゃあ後でな、と手を振って人並みの中に消えていく。ほかにも懐かしい顔はたくさんいるから、そちらの挨拶に向かったのだろう。

今度こそ壁の花となったところで、遊星とのデュエルに思いをはせる。結局この２年間、あれほどに僕の全てを燃やし尽くすほどのデュエルは経験していない。心当たりは何人かいるのだが、十代はあれ以降もまた世界中ほっつき歩いていて今日だって会えるかどうかわかったものではないし、カイザーはサイバー流道場を翔に譲って以降決して自分では戦わない生活を送っているという。

ただ僕が求めているのは、そういう意味での強者ではない。あの2人は確かに馬鹿みたいに強いけれど、だからといってシンクロモンスターを、あるいはエクシーズモンスターを、遠慮せずに出せる相手ではない。僕だけが持つカードというのならばまだしも、僕だけが所有する概念というのはフェアではない、だけどまたエクストラデッキの彼らと一緒に戦いたいという抗いがたい誘惑。

だから僕は今、悩んでいる。全力を気兼ねなく出し切れる相手との戦いに対しての渇望を癒すために、時折頭をよぎっては離れないある突拍子もない考えに。

「どうしようかね……」

自分でも気づかなかったけれど、もしかしたら今日ここで同窓会を企画したのはどんな形にせよ、この自分の中の迷いにけりをつけようと思ったからかもしれない。ふとそんなことも考えて、口からこぼれた小さな言葉は室内の喧騒にまぎれ、ちぎれてどこかへ消えていった。

番外編その２　鉄砲水とＧＸ

夜は続く。それはつまり、まだまだ宴が続くということでもある。
「こんなに成長したあなたたちに出会うことができて、私は今自分の教師生活の中でも一番に感動しているノーネエエエエエ！」
「お、俺も先輩方にまた出会えて、心の底から嬉しいザウルスウゥゥ！」
「ほらほら、２人ともわかったから！レイちゃん、悪いけれど手伝ってくれるかしら」
「任せて明日香さん！ほら２人とも、ボクが今お水持ってくるから、ちょっと落ち着いてね！」
だいぶ酔いも回ってきたのだろうか。いきなり会場のど真ん中で感極まって大声コンテストでもやってんのかと言いたくなるようなレベルで泣き崩れるクロノス先生とそれを見て一緒にもらい泣きする剣山、そして見ていられないとばかりにその世話を焼く明日香とレイちゃん。先生はともかく本来ならあの２人に関しては僕らの後輩なんだからこの同窓会に来ていることはおかしいのだが、あんまり一緒につるんでたことが多かったので呼ぶリストの中にこっそり放り込んでおいたのだ。ちなみに、同じ理由でカイザーもこの会場にいる。もっとも彼の場合、翔が半ば強引に連れてきたという側面

の方が大きい気もするが。

レイちゃんが持ってきた水をまだ涙目のまま素直にごくごくと飲む2人を見ていると、ふらりと近づいてきた彼女が話しかけてきた。

「なーに壁の花してるんですか。主催なんだから余興のひとつでもやってみてくださいよ」

そちらを振り返ると、久しぶりに見る後輩の姿。さすがにあの時から5年も経てば元から高かった背もさらに伸び、顔立ちも大人びてだいぶ全体の雰囲気も変わっている。

だけど、一目見ればわかる。彼女の本質は、僕と一緒に毎日厨房に立っていたころから変わっていない。だから僕も微笑んで、あの時と同じように言葉を返す。その隣の人は……うん。ダークシグナーになって以降成長や老化といった単語から一切無縁になって不老の体を手に入れた僕が言うのもなんだけど、ほんとこの人は何回会っても初対面の時から見た目変わんないな。

「おひさ、葵ちゃん……と、やっぱ来たんですね明菜さん。1か月ぶりですね」

「うん、ひっさしぶり清明ちゃん！なんてったってこの成人式すら出席しなかった葵ちゃんが清明ちゃんからのお誘いは断らないで同窓会に行くっていうんだからね、これはもうお姉ちゃんとして可愛い可愛い妹の晴れ姿をじっくり押さえておかなくちゃ！」

「なんで余計なことばかり言うんですか姉上は！すみません、どうしても途中で撒けな

くて……いやちょっと待ってください先輩。１か月ぶり？姉上が？」
　謝罪の途中でふと、僕の発言をいぶかしむ葵ちゃん。明菜さん、なんとなくそんな気はしてたけどやっぱ黙ってたのか。別に言ったところで減るものでもないし、別にどうだっていいだろうに。
「葵ちゃん知らなかったの？明菜さんうちの常連さんだよ」
「うんうん。お姉ちゃんよく紅茶飲んでケーキ食べておしゃべりしに行くんだ、ねー」
「ねー」
　これは本当のことだ。よく、といっても月に１度か２度程度だが、ちょっと店が暇になるような時間をピンポイントで突くようにやって来ては１時間ほど僕を駄弁り相手に指名して居座っていく。正直暇な時間とはいえやることがないわけではないので困らないと言えば嘘になるけれど、結構金払いがいいうえ会話のセンスも妹と同じく僕と波長が合い、なにより美人さんは目の保養にもなるので断じて嫌ではない。
「……本当になにやってるんですか」
「やっぱ明菜さん頭いいから喋ってて楽しいのよ」
「お姉ちゃんの見過ごしてた葵ちゃんのお話とかも聞けてとっても楽しいよ、ねー」
「ねー」
「……変わりませんよね、２人とも」

何か言いかけたけれども結局言葉を切り、特大のため息とともに呆れ顔で言い放つ葵ちゃん。失礼な。しかし言い返す前に、そんな彼女の表情がほんの少し優しくなる。
「でもなんだか、ちょっとだけですが安心しましたよ。先ほどお見かけした時は何か様子が変でしたが、先輩はそうやって変に大人ぶるよりもそれぐらいの方がしっくりきます」
「ちょっとちょっとマイシスター、あなたの愛しのラブリーお姉ちゃんは?」
「まずそのごちゃごちゃした形容詞全部取っ払ってください。姉上はいつになったら大人になっていただけるんですか?」
「んもー、ここは人が多いから素直になれないって?この恥ずかし屋さんめ。うりうりー」
「うわ、ちょ、どんな変換してるんですか引っ付かないでください姉上!」
相変わらず仲のよさそうな姉妹に小さく笑いながら、グラス片手に衝突事故を避けるべくちょっと距離をとる。あの姉妹のことだからそんなへまはしないだろうけど、姉妹愛を邪魔するのも悪いだろう。だが抱き着く明菜さんを引き離そうと苦心しながらも、葵ちゃんが最後にポツリと呟いた一言がひどく胸に突き刺さった。
「やっぱり迷うなんて、先輩らしくありませんよ。いつも通り、お好きなようにやってみてください。それで当たって砕けた時のフォローのためなら、私たちはいつだって駆け

付けるんですから」
　見抜かれてた、か。なんとなくそれ以上葵ちゃんと顔を合わしていることが気まずくなり、気持ち足早に距離を置こうとする。しかし、これが裏目に出た。後ろに足を踏み出したところで、誰かの背中にぶつかってしまったのだ。
「おっと失礼……あれ、十代じゃん。来てたんだ」
「ん？よお、清明。到着したのはついさっきだけどな」
　そこにいたのは、遊城十代。もう卒業してから５年、前回の騒動から数えても２年も経つというのに、なぜかその恰好はあの時と同じ赤い制服姿のまま。僕だって見た目は変わっていないかもしれないが、さすがに卒業したにもかかわらず外で制服を着るような真似はしない。僕や明菜さんの前に、こいつが一番変わってないんじゃないだろうか。
　そんな視線を向けられていると知ってか知らずか、２年前の時と同じように屈託なく喋りかけてくる。ああ、こんなところもまったく昔のままだ。
「ときどき思うんだ。なんだか、夢みたいだと思わないか？」
「なに、遊星の話？あっちの世界で元気にやってんのかね」
　あの時空を巻き込んだ大事件のことは、今でも夢みたいな時間だったと思う。でもそれは、僕が事件解決後に乱入者としていきなり首を突っ込んだからよくわかってないだ

けだと思っていた。当事者としてずっと戦ってきた十代がそんなことを口にするのは、なんだか意外だ。

でも予想に反し、違う、と彼は首を横に振った。

「それだけじゃなくてさ。卒業してから5年ってことは、俺たちがデュエルアカデミアに入学してからだと8年だろ?たったそれだけの間に、いろんなことがあったよなって」

「変なものでも食べた?卒業パーティーすらほっぽり出してどっか行っちゃったくせに、過去語りなんてらしくないじゃないの」

憎まれ口をたたきながらも、その言葉につられて僕も入学からのことをざっくりと思い出す。ユーノと出会い、入学試験の相手にクロノス先生が出てきて、それでもなんとか入学生の端っこに紛れ込めたかと思えば真っ当な学園生活からかけ離れた集団、セブンスターズとの戦いが始まった。思えば、あれがひとつのきっかけだったのだろう。それからというもの、普通の高校生ならば絶対に一生関わりあわないであろう闘争の日々が僕らにとっての「日常」となったからだ。

光の結社、ユベル、2つの異世界、ダークネス、不動遊星……そして何よりも、現。たくさんの仲間がいて、数多くのライバルがいて、果てしない敵がいて。どの戦いでもほぼ常に最前線にいた僕にとっては辛いことも多かったけど、楽しいことも多かった。僕

にとってあのやたら濃い日々は、思い出したくもないことも全部ひっくるめて大切な思い出だ。

　同じく過去のことを思い返しているのか、どこか遠い目の十代。学生時代はなんだかんだありつつも基本的にはいつだって前を見ていた彼がこんな表情をするのは実際珍しいが、まあ野郎のレアな表情なんぞに価値はない。先に現実に戻ってきたのは、僕の方だった。

「それで？しんみりするのはまだちょっと早いんじゃない、まだ始まったばっかなんだからさ」

「いや。１つ気になってな。なあ、清明。お前、何か様子が変じゃないか？」

「お前もか……ああいや、こっちの話。ちなみに、なんでそう思ったの？」

「さっき万丈目から聞いたけど、そもそもこの同窓会自体がお前が言い出したんだってな。俺が言えたことじゃないかもしれないけど、お前だって自分からそういうことを言い出すタイプじゃないだろ？」

「あー、そういうことね」

　言葉に詰まる。僕自身にも自覚はなかったけれど、確かにそれはあるかもしれない。視線を逸らすことも許さないとばかりにまっすぐこちらの目を見つめながら、畳みかけるように言葉を続ける。

「俺にはお前が何を悩んでるのかはわからないけど、俺たちはいつだって相談に乗るぜ。いや、それともこっちの方が向いてるか？」

そう言ってにやりと笑い、これ見よがしに左腕のデュエルディスクを軽く持ち上げる。一見ふざけているようにも見える態度だが、彼の目はいたって本気だ。

「俺たちはデュエルアカデミアで、大事なことは全部デュエルで決めてきたじゃないか。嫌とは言わせないぜ、それに俺だってワクワクしてるんだ。２年前の時は結局、お前とは戦えなかったんだからな」

「それそっちが本音じゃないの？」

思わず突っ込みを入れつつも、気づけば十代の提案にすっかり乗り気になっている僕がいた。わかったよ、と降参の印に両手を挙げ、ざっと周りを見回す。皆思い思いに旧交を温めるのに忙しく、こちらに注意を配っているような視線はない。とはいえ僕の感知能力は明菜さんの隠密技能以下だからあの人が本気で隠れていればどうしようもないが、まあその時はその時だ。

「外行こっか、十代。ここはちょっと手狭すぎるしさ」

景気づけにグラスに残った中身を一息に飲み干し、近くの机にこっそりと置く。手ぶらになったところで部屋を後にすると、どちらが示し合わせるともなく２人して屋上の方向へと向かう。鍵の開いていたドアを開くと、雲一つない夜空に抱かれたほどほどの

スペースが目に飛び込んできた。さすがに空気の澄んだデュエルアカデミアに比べると満天の星空とまではいかないが、その代わり眼下には色とりどりの照明が光って見える。

　もっとも、今回はここに風景を見に来たのではない。あたりを見回すのもそこそこに距離をとって向かい合い、互いのデュエルディスクを展開する。

「いいか清明、本気で来いよ。お前がシンクロモンスターを使いたがらないのはこの２年間ニュースにもなってないから予想はつくけどよ、俺が構わないって言ってるんだ。そんな半端なデュエルやったら承知しないぜ。本気で戦うからこそ、デュエルもそれに応えてくれるんだからな」

「十代……わかったよ、そこまで言うなら全力全開と洒落込ませてもらうさ」

　静かな高揚が全身を満たし、２年ぶりに味わうその心地いい感覚にしばし身をゆだねる。シンクロモンスターの存在を知る相手と戦えるのはあの時以来。それはつまり、２年ぶりに僕も本気のデュエルができるということだ。心にずっとたまり続けていたあのもやもやした感覚が、嘘のように引いていく。

「さあ……」

「「デュエル！」」

「まずは俺のターンからだな。行くぜ相棒、ハネクリボーを守備表示で召喚！」

ハネクリボー　守２００

先手を取った十代が真っ先に召喚したのは、精霊としてはともかくデュエルでその姿を見ることは随分久しぶりな十代の相棒、ハネクリボー。なんだか懐かしい1枚を見てほっこりしているうちに、十代はさらに次の行動へ移っていた。

「さらにカードを2枚伏せて永続魔法、補充部隊を発動。さらに魔法カード、命削りの宝札を発動！発動ターンの相手へのダメージと特殊召喚を封じる代わりに、手札が3枚になるようにカードをドローするぜ」

初手から下級モンスター1体の他は全部魔法と罠、そして最後の1枚が命削りの宝札とは。まるで衰えることを知らない相変わらずのとんでもない引きの良さに内心閉口しつつも、まるで子供のように純粋に目を輝かせて3枚ものカードを引く十代をじっと見守る。さあ、次は何を見せてくれる？

「カードを2枚セット。そしてこのエンドフェイズ、命削りの宝札3つ目のデメリットで俺の手札を全部捨てる。さあ、ターンエンドだ」

3枚中2枚をさらに伏せ、最後に余った1枚を墓地に送り込む十代。これで伏せカードは4枚……まあ、十代のことだ。まず間違いなくあの4枚のどれかにモンスターの戦闘破壊をトリガーにヒーローを呼び出すカード、ヒーロー・シグナルはあるだろう。あるいは大穴で伏せカードに仕込んだドローソースと進化する翼から無理矢理ハネクリ

ボーをＬＶ１０（レベル）に進化させる大技をしてくるかもしれない。
「さーて、どうすっかね……僕のターン、ドロー！」
ざっと手札を見る。とりあえずヒーロー・シグナルがある前提で考えると、あのハネクリボーにはうかつに攻撃できない。そして進化する翼も一応警戒すると、攻撃表示モンスターをあまり並べることも得策ではない。でも悠長に構えていても融合ヒーローの爆発力に押し切られることは必須、とするとここはあのカードで行くか。
「来い、白　棘（ホワイト・スティングレイ）⊠！さらに僕のフィールドに水属性モンスターが存在することで、手札のサイレント・アングラーは特殊召喚できる。さあ覚悟しな十代、水属性レベル４モンスターの白棘⊠とサイレント・アングラーでオーバーレイ！」
「オーバーレイ？シンクロ召喚じゃないのか？」
白棘⊠　攻１４００
サイレント・アングラー　守１４００
１瞬にして僕のフィールドに現れる、純白のエイと茶色のアンコウ。何が起きるのかと見守る十代とハネクリボーの視線を感じながらも２体のモンスターが水色の光となって天に昇り、次いで螺旋を描きつつ僕の足元に開いた宇宙のような空間の穴へと飛び込む。次の瞬間には空間の内部で光が弾け、新たなモンスターが生み出されその姿を見せた。

「一天四海に響く轟き、呼びて覚ますは同胞の牙！エクシーズ召喚、バハムート・シャーク！」

☆４＋☆４＝★４

バハムート・シャーク　守２１００

２足歩行をする異形のドラゴン、あるいは鮫ともつかない古の怪魚の名を冠する偉大なる海竜が、背中に生えた４枚もの羽根のようなヒレを広げ仁王立ちする。そしてその周囲には、まるでその衛星であるかのように一定の軌道で回る２つの光球。

「うおお!?……って、あれ？守備表示なのか？」

るせい。こっちだってそんなガン伏せしてなきゃ余計なこと考えずに攻撃表示で出してたわい。

「いいんだよ、これで。今回頼りにしてるのはバハムート・シャークの攻撃力じゃない、その効果なんだから。バハムート・シャークの効果発動！オーバーレイ・ユニットを１つ使うことで、エクストラデッキからランク３以下の水属性エクシーズモンスターを１体特殊召喚できる。ゴッド・ソウル！」

バハムート・シャークが自身に纏う光球の１つに食らいつくと、瞬間的にそのエネルギーを大幅に増幅させることで偉大な海竜に宿る真の力が解放される。胸にずしんと響くようなその咆哮に応えるようにして現れた新たなるモンスターは蛇のように細長

い体に鎌のような両腕、暗夜を覆うように不気味に開いた翼と既存の生物の特徴を詰め込んだ悪夢の住民のような姿だった。
「如法暗夜を引き裂くは、沈黙にして悪夢の刃。出でよ、Ｎｏ．４７（ナンバーズ）……ナイトメア・シャーク！」
　ババムート・シャーク（２）→（１）
　Ｎｏ．４７　ナイトメア・シャーク　攻２０００
「オーバーレイ・ユニット？ランク？いやそれより、エクストラデッキからモンスターを特殊召喚するモンスターだと？」
　十代が驚くのも無理はない。僕だってこんな特殊な効果を持つモンスター、この子以外には見たことがない。だけどまだ、やるべき手順は残っている。エクシーズモンスターの本気は、まだまだこんなものじゃない。
「そしてこの瞬間、特殊召喚に成功したナイトメア・シャークの効果を発動。手札か場に存在するレベル３の水属性モンスター１体を選んで、自身のオーバーレイ・ユニットとして吸収できる。僕が選ぶのは、手札のグレイドル・コブラだよ」
「グレイドルカードを吸収させる、だと？」
　手札のグレイドル・コブラをナイトメア・シャークの下に重ねると、ナイトメア・シャークの周りにも光球が１つ現れた。しかしそれはババムート・シャークを囲むそれ

のように衛星軌道を描くことはなく、即座にその腕の刃へと吸収された。

Ｎｏ．４７　ナイトメア・シャーク（０）→（１）→（０）

「さらにナイトメア・シャークのもう１つの効果を発動、ダイレクト・エフェクト！このカードのオーバーレイ・ユニットを１つ使い、僕の場の水属性モンスター１体を選択。そして選択したモンスター以外の攻撃を封じる代わりに、そのモンスターは相手にダイレクトアタックができる。当然僕が選ぶのは、ナイトメア・シャーク自身。さあ、バトル！ナイトメア・シャークで攻撃！」

ナイトメア・シャークの体が、夢か幻のように闇に揺らぎ溶け込んでいく。次の瞬間にぱっと現れた不可視の斬撃は、なんと十代の背後から振り下ろされた。どうやら姿を消すと同時に彼の背後まで超スピードで回り込んだらしいけれど、音を立てないどころか気配すらまるで感じさせずあのスピードであれだけの巨体を移動させるとは。こうして近くで見ているだけの僕ですら驚いたのだから、全くの不意打ちを受けた十代はもっと驚いただろう。

Ｎｏ．４７　ナイトメア・シャーク　攻２０００→十代（直接攻撃）

十代　ＬＰ４０００→２０００

「ぐわっ……くっ、まだまだあっ！やるな清明、だけど今のダメージをもとに俺の永続魔法、補充部隊の効果が発動するぜ。受けたダメージ１０００ポイントにつき１枚、だか

ら２枚のカードをドローだ」
　これで十代の手札は２枚。本当はこのドローもたいがいリスクが高いからやりたくはなかったが、そんなこと言ってあれもできないこれもできないでは勝機を掴むことなんて永久にできやしない。ライフを半分にできた、それだけで今は良しとしよう。
「さらにカードをセット。これでターンエンドだよ」
　今この瞬間だけを切り取ってみれば、大型モンスター２体を並べた僕の方が盤面としては有利。だけど十代にはこれまでのドローで得た、莫大なアドバンテージがある。
　そう、問題は次のターンだ。さっきは命削りの宝札のデメリットを前提に動いていたためにドロー枚数を除けば割と大人しかったけれど、その制約も消えた次のターンからは……まあ、何をしてくるかわかったものじゃない。心してかからねば。
　十代　ＬＰ２０００　手札：２
　モンスター：ハネクリボー（守）
　魔法・罠：補充部隊
　　４（伏せ）
　清明　ＬＰ４０００　手札：２
　モンスター：バハムート・シャーク（守・１）
　　Ｎｏ．４７　ナイトメア・シャーク（攻・０）

魔法・罠：１（伏せ）
「俺のターン。リバースカードオープン、テラ・フォーミング！このカードの効果でデッキのフィールド魔法、フュージョン・ゲートをサーチしてそのまま発動。そしてトラップ発動、チェーン・マテリアル！」
「嘘でしょ……！」
素材を除外するという特有の癖こそあるものの、フィールド魔法という性質上プレイヤーの素材が尽きない限り何度でも融合召喚を行えるフュージョン・ゲート。そして攻撃不可や自壊という様々なデメリットを受ける代わりに、１ターンだけ融合素材をデッキや墓地からも調達できるようになるチェーン・マテリアル。この２枚が揃った時にどれだけ様々なコンボが生まれるのかは、昼寝混じりに聞いていた授業中に教えられた覚えがある。
「まず俺のデッキに眠るワイルドマンとネクロダークマン、さらにスパークマンとエッジマンを除外して融合召喚！来い、ネクロイド・シャーマン！プラズマヴァイスマン！」
Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ネクロイド・シャーマン　攻１９００
Ｅ・ＨＥＲＯ　プラズマヴァイスマン　攻２６００
まず先陣切って飛び出したのは、錫杖を手にし複雑な模様の入れ墨を全身に刻んだ上半身裸のヒーローと、それとは対照的に強化スーツを身に着けたスパークマンとでもい

うべき黄金の鎧で手足の先端と胸を覆った電を纏うヒーロー。ネクロイド・シャーマンが印を結んで怪しげな呪文を唱えると、バハムート・シャークの全身に突然不気味な言語による文言が浮かび上がる。

「ネクロイド・シャーマンの効果だ。このカードは特殊召喚に成功した時に相手モンスター1体を破壊して、その代わり相手モンスター1体を蘇生させる。攻撃表示で甦れ、サイレント・アングラー」

サイレント・アングラー　攻８００

苦しむ暇もなく唐突に破壊されたバハムート・シャークの代わりに、その素材だったはずのアングラーが攻撃表示で無理やり引きずり出される。だけど、それを嘆く暇はない。何せ十代の場には、まだ2か所も空きスペースがあるのだから。

「デッキのネオス、そしてレベル４以下の効果モンスターであるプリズマーを除外するぜ。融合召喚、ブレイヴ・ネオス！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ブレイヴ・ネオス　攻２５００

そして、さらにもう1体。ネオスを除外した時点でてっきりネオス・ナイトの姿を見ることになるのかと思ったけれど、予想に反して十代が呼び出したのは全く違う未知のネオスだった。前者を鎧で守り剣で戦う文字通りの騎士とするならば、こちらはさながら格闘戦士としてのネオスというべきだろうか。銀色を基調とした大まかなフォルム

はそのままに全身の赤と青の模様はより色濃くなり、全身の筋肉はさらに太く発達し両肩に肩パッドのようなパーツが追加されている。

それにしてもわからないのは、なぜここまでデッキの主力モンスターをきっぱりと除外できるのかだ。十代のデッキは除外をそんな頻繁に扱うわけでもなく、攻撃できないこの状況で蘇生不可能な融合ヒーローをがむしゃらに呼びまくって何がしたいのだろう。

と、そこまで考えてふと、あるカードの存在を思い出した。これまでに除外された融合素材はワイルドマン、ネクロダークマン、スパークマン、エッジマン、ネオス、プリズマー……ああやっぱり、綺麗にあの４体は温存してあったのか。となると間違いない、奴が来る。

「どうやら気づいたみたいだな。その通り、次に俺が選ぶのは地水炎風を司る４体のヒーロー……クレイマン、バブルマン、バーストレディ、フェザーマンだ。出でよ、究極のヒーロー！Ｅ・ＨＥＲＯ　エリクシーラー！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エリクシーラー　攻２９００→３５００

ヒーローどころか全融合モンスターの中でも上位の重さを誇る、４体もの融合によってはじめてその姿を見せる究極のヒーロー。さすがの十代にもやはり扱いが難しいのか、その姿を見たのは随分久しぶりだ。確か、前に見たのは第一次ノース校親善試合の

時だったろうか。それはともかく、闇を滅し他の光を色褪せさせる黄金の輝きをもって降臨したそのヒーローの、能力は……！

「エリクシーラーはもともとの光属性の他に地水炎風の４属性としても扱い、その攻撃力は相手フィールドにいる自身と同じ属性のモンスター１体につき３００ポイントアップする。だけどそれだけじゃないぜ、この融合召喚に成功した時、互いの除外されたカードはすべて持ち主のデッキに戻る。さあ帰って来い、俺のヒーローたち！」

４連続融合の代償として除外された１０体ものヒーローが、エリクシーラーの輝きを浴びて十代のデッキへと再び戻っていく。これで実質十代は、チェーン・マテリアルたった１枚の消費から４体もの融合ヒーローを呼び出したことになるわけだ。

「さらに魔法カード、アドバンスドローを発動。俺のフィールドからレベル８のプラズマヴァイスマンをリリースし、カードを２枚ドローする。そしてこれでまた、俺のモンスターゾーンに空きができた。デッキに戻した……そうだな、フェザーマンとスパークマンを再び除外融合、グランドマン！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　グランドマン　攻０↓２１００

「グランドマン……？」

当然のような顔をして呼び出されたのは、ブレイヴ・ネオス同様これまで全く見たことのない新たなヒーロー。だがその姿はまるでフェザーマン、バーストレディ、スパー

クマン、クレイマンといった十代愛用のヒーローが合体したかのようにも見えた。となるとあの両手の甲に取り付けられた銃は、バブルマン由来の品物だろうか。

「そうさ。そしてこいつの攻撃力は、素材としたヒーローのレベル１つにつき３００ポイントアップする。もっともこのままターンエンドすると、ヒーローたちが全員破壊されちまうからな。速攻魔法、星遺物を巡る戦い！俺の場のエリクシーラーをエンドフェイズまで除外し、その攻守の数値だけ相手モンスター１体を弱体化させるぜ」

弱体化、というよりもこの一時的な除外によってチェーン・マテリアルとの関係をリセットすることが目的なのだろう。どちらにせよナイトメア・シャークの攻守はともに２０００、エリクシーラーのそれには遠く及ばない。

Ｎｏ．４７　ナイトメア・シャーク　攻２０００→０　守２０００→０

「カードを１枚伏せて、ターンエンド。そしてこのターン終了時、除外されたエリクシーラーが帰還して他のヒーローたちは破壊される。ごめんな、みんな」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エリクシーラー　攻２９００→３５００

怒涛のターンが終わり、十代のフィールドにはハネクリボーとエリクシーラーだけが残った。一方こちらの場には、オーバーレイ・ユニットは使い切り攻守も０になったナイトメア・シャークとバハムート・シャークの代わりとして強制的に引き出されたサイレント・アングラー。確かに手痛い被害ではあるけれど、当初覚悟していたものよりは

ずっと軽傷で済んだ。墓地に融合体を溜め込んで何を企んでいるのかは知らないけれど、そっちが準備に時間をかけるならばこっちはその隙に攻め込むまでだ。

「僕のターン、融合ラッシュには度肝を抜かれたけどね、十代。まだ詰めが甘いよ。どうせそれだけ融合するなら1回、伏せカードを破壊できるワイルド・ウィングマンでも呼んでおくべきだったのさ。トラップ発動、グレイドル・スプリット！このカードを攻撃力５００ポイントアップの装備カードとして、ナイトメア・シャークに装備する」

まあ、単にワイルド・ウィングマンが今回の十代のエクストラに入っていなかった可能性もあるけれど。しかし、仮にそうだとしてもそれは僕の責任ではない。

「さらにスプリット第2の効果で、装備状態のこのカードを墓地に送り装備モンスターを破壊。その後デッキから、グレイドルモンスターを2種類まで特殊召喚できる。行くよスライム、出てこいコブラ！」

ナイトメア・シャークが再び闇に消え、2体のグレイドルがそれと入れ替わるように特殊召喚される。グレイ型宇宙人を模したチューナーモンスターのスライムに、大蛇を模したピンク色のコブラだ。これでグレイドル・コブラは2体目、バブル・ブリンガーが引ければそれを使っての蘇生コンボも見えてきた。

グレイドル・スライム　守２０００

グレイドル・コブラ　守１０００

「来るか、シンクロ召喚！」
「お望み通り、見せてあげるとも。レベル３のコブラに、レベル５のスライムをチューニング！」
　スライムが５つの光の輪となり、その中央をコブラが潜り抜ける。合計レベルは、８。だけど今呼ぶのは、いつものグレイドル・ドラゴンじゃない。今更あちらをシンクロ召喚して伏せカードを叩き割ったところで、その方法を問わずとにかく自身が破壊されたターンにプレイヤーへの戦闘ダメージを１ターンの間だけ０にできるハネクリボーが存在する以上このターンにとどめを刺すことは不可能だからだ。
　この問題を解決し、なおかつ進化する翼による不意打ち進化コンボにも対抗できるカード。そんな都合のいいモンスターが、果たして存在するのだろうか？答えはイエス、だ。
「光機燦然日輪の下、語り継がれし波濤の勇魚！シンクロ召喚、白闘気白鯨！」
　白闘気白鯨　攻２８００
　雄大に宙を泳ぐ、白いクジラとしか言いようのない巨大なモンスター。そう、クジラだ。そのレベルとモチーフにふさわしい巨体がおもむろに大きな口を開き低い雄たけびを上げると、空気すらもビリビリと震えるような感覚がした。５年越しでようやく得た自らの出番に、歓喜の叫びをあげているのだろう。

「ク、クジラ？」
「そう、クジラさ。だけどただのクジラじゃない。白闘気白鯨はシンクロ召喚に成功した時、相手フィールドの攻撃表示モンスターをすべて破壊する！」
　何たる驚くべき肺活量か、白鯨の叫びはまだ続いている。その音波に共鳴したエリクシーラーがやがて耐え切れず膝をつき、ついには地に堕ちていく。一方でハネクリボーは守備表示であったためその大音波にも耐えきっていたが、だからこそここに勝機が生まれる。
「さあ、バトルだ。白闘気白鯨でハネクリボーに攻撃！そして白闘気白鯨は守備表示モンスターに対し、貫通能力を持つ。ハネクリボーは破壊されたターンのダメージを０にできるけど、自身の戦闘で受けるダメージに対しては無力。これで終わりだ、十代！」
　見た目に反して驚くほど軽やかに動く白鯨が、その圧倒的巨体と質量をもってハネクリボーを押しつぶしにかかる。ただあんな風に言いはしたけれど、これでそのまま終われるほど十代のデュエルは甘くない。それでも一応望みをかけてはみたけれど、正直本当でこのターンに終われるなんて期待はほとんどしていなかった。
　そして案の定白鯨の巨体が地面に届くよりも前に、十代の場にある３枚の伏せカードのうち２枚がほぼ同時に表を向く。
「トラップ発動、ゴブリンのやりくり上手！このカードは墓地の同名カードに１を足し

た数だけカードを引き、その後俺の手札1枚をデッキの1番下に戻す。さらにチェーンして速攻魔法、非常食を発動！俺のフィールドから魔法、罠カードを任意の枚数墓地に送り、その数1枚につき１０００ライフポイントを回復するぜ。俺が選ぶのはこの、たった今発動したゴブリンのやりくり上手だ」

「やーっぱりか……しぶといね、十代」

１枚のカードが墓地に送られ、十代のライフが白鯨の貫通ダメージを受けてなお余りある数値まで回復する。これでこちらとしてはこのターン中に十代を仕留め損ねたわけだけれど、それだけじゃない。ゴブリンのやりくり上手は今、発動後の効果が適用されるよりも前に非常食のコストとして墓地に送られた。つまりその効果解決時には、「墓地にある同名カード」の1枚として計算される。もっと平たく言えば、彼のドロー枚数は今のコンボにより1枚余計に増えたのだ。そして十代が引いたカードは、3枚。となると最初に発動していた命削りの宝札のデメリット、あそこですでに1枚は墓地に送っていたのだろう。

白闘気白鯨　攻２８００→ハネクリボー　守２００（破壊）

十代　ＬＰ２０００→３０００→４００

「へへへ、ピンチの後にはチャンスありってな。補充部隊、ハネクリボー、さらにヒーロー・シグナルを3枚同時に発動！今受けた２６００のダメージをもとにカードを2枚

ドローし、ハネクリボーの悲鳴をシグナルとして俺のデッキから更なるヒーローを呼び出すぜ。来い、バーストレディ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００

やっぱりあったのか、ヒーロー・シグナル。どうせこのターンダメージは通らないけれど、だからと言ってはいそうですかとターンを渡すほど僕だって甘くない。

「白闘気白鯨は自身の効果により、１ターンに２回までモンスターに攻撃ができる。せめて破壊させてもらうさ、そのままバーストレディに攻撃！」

「２回攻撃……ハネクリボーの効果がなかったら本気で危なかったな。助かったぜ、相棒」

白闘気白鯨　攻２８００→Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　攻１２００（破壊）

「メイン２に入って、サイレント・アングラーを守備表示に変更。さらに永続魔法、グレイドル・インパクトを発動するよ」

サイレント・アングラー　攻８００→守１４００

派手な落下音とともに、上空から半壊したＵＦＯが僕の足元に落ちてくる。十代が次に何をしてくるかは、全く予想がつかない。白鯨の生命力ならば大抵の相手には余裕をもって立ち向かえるけれど、困ったことに十代はその「大抵」の枠に入らないタイプのデュエリストだ。何が飛び出してきてもいいように、最大限の備えをしておこう。

「エンドフェイズにインパクトの効果、ドール・コールを発動。デッキからグレイドルカード1枚、グレイドル・スライムＪｒ．をサーチする……さあ、来い！」

十代　ＬＰ４００　手札：５

モンスター：なし

魔法・罠：補充部隊

場：フュージョン・ゲート

清明　ＬＰ４０００　手札：３

モンスター：白闘気白鯨（攻）

サイレント・アングラー（守）

魔法・罠：グレイドル・インパクト

「俺のターン。さあ、ヒーローの反撃開始だぜ！俺のフィールドにモンスターが存在しないことで魔法カード、コンバート・コンタクトを発動。手札とデッキからそれぞれＮ（ネオスペーシアン）のエア・ハミングバードとグラン・モールを墓地に送り、カードを２枚ドローする」

「……」

前々から引きが強いとは思っていたけれど、ちょっと今日の十代は、いくらなんでもカード引きすぎではないだろうか。デッキなくなるぞコラ。こっちがようやく１ター

ンに１枚のサーチができるグレイドル・インパクトを引けて喜んでいるというのに、そんなことお構いなしにやれ命削りの宝札だそれ補充部隊だやりくり上手だと即効性のあるドローソースばかりきて、挙句の果てには手札交換と墓地肥やしを兼ねるコンバート・コンタクトとは。

　世の中の言葉に言い表せない理不尽のようなものを深く感じながらも、ともあれ十代がカードを引く。すぐに次の行動が決まったらしく、意気揚々と別のカードを発動した。

「魔法カード、戦士の生還を発動。このカードの効果で俺は、墓地の戦士族１体を手札に戻すことができる。帰って来い、バーストレディ！」

「バーストレディ……」

　せっかく倒したバーストレディが、再び手札へ戻っていく。ここで戦士の生還を使わせただけマシ、とみるべきか。そんなことより、気に掛けるべきは次の行動だ。貫通能力を持つ白鯨の前に、守備力わずか８００のバーストレディでは壁にすらならない。となると、やはり融合か。

「だったら！ここで手札の増殖するＧを捨てて、効果発動！このターン相手がモンスターを特殊召喚するたび、僕はカードを１枚ドローする。さあ、どうする十代？融合する、それともしない？」

「やってくれるな。でも、ヒーローはそんな脅しには屈しないぜ！フュージョン・ゲートの効果で、手札のバーストレディとクレイマンの２体を除外融合だ。来い、ランパートガンナー！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー　守２５００

粘土でできた体を持つクレイマンの頑健さと、バーストレディの持つ炎の力を合わせたヒーロー。巨大な盾と粘土の巨体で身を守りつつ右腕の銃をぶちかます過激派の女戦士……なるほど、確かにあのモンスターならばこちらがどんな布陣を引いていようともお構いなしで攻撃ができ、さらに返しのターンでグレイドルによる自爆特攻を防ぐことができる。

僕が十代を警戒してカードを選んでいるように、十代も僕のデッキを警戒したうえでモンスターを選んでいるのだろう。こればかりは仕方ない、どれほど新たな力を手に入れようとも変わることのないデッキの根幹は、互いに知り尽くしているのだから。カードを１枚引きながら、改めてそのことを再認識する。

「ここからが本番だぜ？魔法カード、ネオス・フュージョンを発動！」

「ネオス・フュージョン……？」

今度はこちらが、十代のセリフをオウム返しにする番だった。聞きなれないカード名のそれが発動された瞬間、周りの風景が黒一色の夜空から緑色を中心とした優しい色合

いの宇宙空間のような場所に代わる。これは間違いない、ネオスペースだ。
「ネオス・フュージョンは発動ターンにこれ以上の特殊召喚を封じる代わりに、ネオスを含む素材２体で融合召喚できる融合モンスター１体を手札、場、そして俺のデッキから素材を墓地に送ることで特殊召喚ができるネオスペースの切り札さ。行け、ネオス！そしてフレア・スカラベ！」
「デッキからコンタクト融合を!?ええい、ドロー！」
ネオス特有の融合、コンタクト融合を行う魔法カード。なるほど、それで急に場所が切り替わったのか。あの１枚のカードの中には、ネオスペースの力が凝縮されているのだろう。十代が選んだのはフレア・スカラベ……となると、その融合体はあのカードか。
「出でよ、フレア・ネオス！そしてフレア・ネオスの攻撃力は、フィールド全てに存在する魔法、罠カード１枚につき４００ポイントアップするぜ。ここで俺がカードを１枚伏せることで、その枚数は４枚だ」
Ｅ・ＨＥＲＯ　フレア・ネオス　攻２５００→４１００
甲虫めいた硬質の羽根と鋭く伸びた２本の角が特徴的なネオスの進化の１つ、炎を操るフレア・ネオス。僕らの場にあるカードの存在そのものをその力として取り込んだことで、その攻撃力が白鯨を上回ってしまう。ただ僕にとって不幸中の幸いだったのは、この状況で選ばれていたらそれぞれの能力から即死級のダメージを叩き出していたエ

アー・ネオスのエア・ハミングバードが直前のコンバート・コンタクトで墓地に送られ、グラン・ネオスのグラン・モールがなぜか選ばれなかったことだろう。フレア・ネオスの火力は決して馬鹿にはできないが、まだあの２体に比べれば勝算は残っている。

「行くぜ、フレア・ネオス。白闘気白鯨に攻撃しろ、バーン・ツー・アッシュ！」

「ぐっ！」

全身を炎に包み業火の弾丸と化したフレア・ネオスが、自分よりもずっと巨大な白鯨に突撃する。たちまちその巨体の全身に燃え広がった炎が、ネオスペースを赤く照らす。

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレア・ネオス　攻４１００→白闘気白鯨　攻２８００（破壊）

清明　ＬＰ４０００→２７００

「熱ちち……でも、白闘気白鯨は生と死の輪廻を巡る海の化身。破壊によって死を巡ろうと、その命は再び母なる海に蘇る。白闘気白鯨の最後の効果、発動！このカードが破壊されたときに墓地から別の水属性を除外することで、自身をチューナー扱いとして蘇生することができる」

「何!?」

白闘気白鯨　攻２８００

ナイトメア・シャークを墓地から取り除く。すると炎を打ち消すかのような派手な水

しぶきと共に、傷ひとつない体で白鯨が現世に帰還した。これはさすがの十代も予想外だったらしく、その顔にほんの少しだけ焦りの色が浮かぶ……だがすぐに、その表情も心からデュエルを楽しむ満面の笑みに打ち消された。

「やるな、清明！シンクロも、エクシーズも、凄いモンスターだぜ！」

「気に入ってくれて嬉しいよ。それで？もう終わりかい？」

「とんでもない、勝つのは俺だ！ランパートガンナーは守備表示の時、攻撃力を半分として相手プレイヤーにダイレクトアタックができる。やれ、ランパート・ショット！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー　攻２０００→１０００→清明（直接攻撃）

清明　ＬＰ２７００→１７００

着実にダメージを稼ぐことで、グレイドルの自爆特攻戦法が確実にやりづらくなっていく。今の僕のライフの数値だと、このデュエル中には可能だとしてもせいぜい１度がいいところだろう。

それはいいのだが、１つ気になることがある。コンタクト融合体であるフレア・ネオスは、このエンドフェイズに十代のエクストラデッキに戻ることがほぼ確定している。そのデメリットを踏み倒せるネオスペースやインスタント・ネオスペースのカードが手札にあるのならば、フレア・ネオスの攻撃力をさらに上げるためメイン１の時点でささっと発動していただろう。そうなると次のターンで十代の場に残るのはランパートガ

ンナーのみになるが、その守備力では白鯨の攻撃に耐えきれない。そして僕の場には白鯨の他に、いまだサイレント・アングラーが残っている。素直に考えれば僕の勝利はほぼ確定だが、先ほどのセリフから考えると十代はこの勝負を捨てておらず、まだ何か仕掛けがあることは間違いないだろう。さあ、今度は何を見せてくれるのだろう。

「このエンドフェイズ、ネオスペース外にいるフレア・ネオスはデッキに戻る。だがその効果発動時、墓地に眠るネオス・フュージョンのもう1つの効果を使うぜ。このカードを除外することで1ターンだけネオスペースの力をネオスに与え、デッキに戻る効果の身代わりとなる!」

フレア・ネオスがフィールドに留まりターンが移り替わると、それと同時にネオスペースの風景が薄れていき、元の地球の夜空が頭上に戻る。なるほど、デッキに戻る効果の身代わりね。シンプルだけど、それゆえに説明の必要がないほどに強力だ。

「だったら……ドロー!」

白鯨のパワーがあれば、ランパートガンナーは恐れるに足らない。あの伏せカードはちょっと気にかかるけれど、それはそれだ。増殖するGと今のドローで、欲しかったパーツはこちらにも揃った。

「ヒーローも結構だけど、そろそろ壊獣大決戦と洒落込もうじゃないの。フレア・ネオスをリリースして十代、そっちのフィールドに怪紛壊獣ガダーラを特殊召喚。そして相手

フィールドの壊獣反応に呼応して、手札の怒炎壊獣ドゴランは特殊召喚できる！」
　せっかくバウンスを免れたフレア・ネオスがリリースという形で墓地に送られ、代わりに十代のフィールドには極彩色の羽根を持つ巨大な蛾の壊獣が呼び出された。その撒き散らされる大量の鱗粉に誘われたかのように、怒りの炎ですべてを焼き払う壊獣の中の壊獣、壊獣王がどこからともなく現れ吠える。相手モンスターをお構いなしに押しのけ、好き勝手な盤面をこちらの都合で作る……これこそ、僕が十八番とする戦術だ。
　怪紛壊獣ガダーラ　攻２７００
　怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００
「出たな、壊獣モンスター！」
「ああそうさ、出してやったとも。でも僕はこのターン、まだ通常召喚が残っているからね。グレイドル・スライムＪｒ．を召喚し、この時僕は墓地からグレイドルモンスター１体を蘇生できる。甦れ、コブラ！」
　ジズキエルと白鯨がそびえ立つ横で、銀色の水たまりがぶくぶくと２か所床に湧き上がる。それぞれその中央がぐっと盛り上がったかと思うと、おしゃぶりを咥えたグレイ型宇宙人の赤ん坊とピンク色に怪しく光を反射する大蛇に擬態したようなモンスターが召喚される。
　グレイドル・スライムＪｒ．　守２０００

グレイドル・コブラ　守１０００
「おっと、ここで墓地に存在するグレイドル・スライムの効果発動。場のグレイドルカード２枚を破壊して、自分自身を蘇生召喚。そしてこの効果での特殊召喚に成功したことで、たった今破壊したコブラをまた蘇生させる」
グレイドル・スライム　守２０００
グレイドル・コブラ　守１０００
赤ん坊の方のグレイドルが突然どろりと溶けて銀色の水たまりに１度戻り、再び中央から盛り上がって今度は成長した姿のグレイ型宇宙人となる。これで合計レベルは、８または９となった。
「レベル３のグレイドル・コブラに、レベル５のグレイドル・スライムをチューニング。変幻自在な不定の恐怖は、星海旅する魔性の生命！シンクロ召喚、グレイドル・ドラゴン！」
☆３＋☆５＝☆８
グレイドル・ドラゴン　攻３０００
この５年間でわずか４戦とはいえ、エクストラ勢にお呼びがかかるたびにほぼ毎回のペースで出ずっぱりのグレイドルの名を持つ竜……とは名ばかりのキメラめいた合体生物。でも仕方がない、状況を選ばない破壊効果の優秀さもさることながら、動いてい

るとちょいちょい引っかかる水属性縛りに対してこのカードは便利すぎるのだ。
「グレイドル・ドラゴンのシンクロ召喚に成功した時、素材とした水属性モンスターの数までカードを破壊できる。そのセットカードとフュージョン・ゲートをぶち抜け、グレイドル・トルピード！」
「悪いな、それも読んでいたぜ！リバースカード、オープン！トラップ発動、リビングデッドの呼び声！この効果で、俺の墓地のモンスター１体を攻撃表示で蘇生するぜ」
「リビデ？今更発動したってもう遅……あっ！」
もう遅い、なんてとんでもない。まさか十代、僕が除去することまで読み切ったうえであのカードを伏せていた？チェーン処理によって十代の墓地から再び、小柄のもこもこした体に天使の翼が生えたモンスターが１瞬だけ蘇る。
「もう１度頼むぜ相棒、ハネクリボー！」
ハネクリボー　攻３００
そしてグレイドル・ドラゴンがその身を変態させることで文字通り身を削り放った有機体ミサイルが２枚のカードに着弾、爆破する。するとリビデことリビングデッドの呼び声が破壊されたことでハネクリボーもまた連動して破壊される……だけど、十代にとってはそれこそが狙いだった。
完全に掌の上で踊らされ、グレイドル・ドラゴンという貴重な除去を無駄打ちしたこ

とに思わずうめき声が漏れる。でも、どうしようもない。
「ハネクリボーが破壊されたことで、その効果発動。このターンもまた、俺が受ける戦闘ダメージは０だ」
「くっ……」
これだけこちらが押していたはずなのに、またしてもそのピンチを潜り抜けてしまった十代。粘るなあ、もう。
「……ダメージが通らなくても、バトルまでできなくなったわけじゃない。ドゴランでガダーラに、白闘気白鯨でランパートガンナーにそれぞれ攻撃」
壊獣王が大怪虫に組み付いて空のかなたにぶん投げ、その横では白鯨が粘土のヒーローを押しつぶす。無事に僕の手元に帰ってきたガダーラをそっと墓地に送り込んだところで、これ以上できることもなくバトルフェイズを終えた。
怒炎壊獣ドゴラン　攻３０００→怪紛壊獣ガダーラ　攻２７００（破壊）
白闘気白鯨　攻２８００→Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー　守２５００（破壊）
「エンドフェイズにまた、グレイドル・インパクトの効果を発動。今回サーチするのは、２枚目のグレイドル・インパクトにしておくよ」
十代　ＬＰ４００　手札：２
モンスター：なし

魔法・罠：補充部隊
清明　ＬＰ１７００　手札：３
モンスター：白闘気白鯨（攻）
グレイドル・ドラゴン（攻）
怒炎壊獣ドゴラン（攻）
サイレント・アングラー（守）
魔法・罠：グレイドル・インパクト

「俺のターン。なんだかワクワクしてきたぜ……ドロー！」

全くこの男は、いつだってこの調子だ。ハネクリボーでピンチを凌いだとはいえ、何か状況が良くなったわけではない。だというのに、ドローできれば何とかなると言わんばかりのこの態度。そして実際どうとでもしてしまうのだから、つくづく相手にしていて恐ろしい。

「魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！俺の墓地からフレア・ネオス、ランパートガンナー、グラン・モール、ネクロイド・シャーマン、エリクシーラーの５体を除外することで素材とし、融合召喚！」

「はぁ!?」

思わず声が出た。この土壇場でミラクル・フュージョンを手にしたことに、ではない。

それはもうターンを渡した時点でこちらとしても半ば諦めている。問題なのは、その融合素材だ。５体も要求する上にそのうち４体が融合モンスター、しかもなぜかＮのグラン・モールまでその中にしれっと混ざり込んでいる。なんだ一体、こんなでたらめな素材から何が出てくるというのだ。

「融合素材はネオス、Ｎ、ＨＥＲＯの名前を含むモンスターそれぞれ最低１種類ずつの合計５体！見せてやるぜ、ゴッド・ネオス！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ゴッド・ネオス　攻２５００

暗夜を断ち切るかのように、金色の閃光が走る。その光の中央から姿を見せたのは全身に黄金の意匠を身に着けた、これまでの人間サイズだったネオスたちとは異なり巨大化したそのサイズも合わさってまさにその名の示すがごとく神々しさすらも感じるネオスの姿がそこにあった。

「ゴッド・ネオス……」

「そうさ。だけどまずは魔法カード、ＨＥＲＯの遺産を発動。俺の墓地からヒーローを融合素材とする融合モンスター２体をデッキに戻すことで、デッキからカードを３枚引く。プラズマヴァイスマンとグランドマンには、エクストラデッキに戻ってもらうぜ。これで準備は整った、ゴッド・ネオスの効果発動！１ターンに１度俺の墓地から指定されたモンスター１体を除外し、攻撃力を５００ポイントアップしたうえでその効果を得

る。このターンに俺が選ぶのはブレイヴ・ネオス、お前だ！」
　ゴッド・ネオスの背後に１瞬、筋肉質な格闘戦士ネオスの姿がダブって見える。そうか、そういうことだったのか。あの馬鹿みたいに重い素材条件をクリアし、なおかつそのあとも毎ターン安定して墓地のヒーローが持つ強力な効果を使う。３ターン目のチェーン・マテリアルによる融合召喚の乱発……あれはすべてこのターンに、ゴッド・ネオスに繋げるための布石だったのか。仮にゴッド・ネオスの召喚に失敗したとしてもＨＥＲＯの遺産があればリカバリーも容易にできる、隙のない戦術。
　だが、それに気づいたときにはもう遅い。５００ポイントといわず、ゴッド・ネオスの攻撃力がさらに上昇していく。
　Ｅ・ＨＥＲＯ　ゴッド・ネオス　攻２５００→３３００
「ブレイヴ・ネオスの効果によりその攻撃力は、俺の墓地に存在するＮ及びＨＥＲＯ１体につき１００ポイント上昇する。そしてまだ俺の墓地に残っている仲間はネオス、フレア・スカラベ、エア・ハミングバードの計３体だ。さらに装備魔法、アサルト・アーマーとライトイレイザーの２枚をゴッド・ネオスに装備し、そのままアサルト・アーマーの効果を発動。装備状態のこのカードを墓地に送ることで、装備モンスターはこのターンのみ２回攻撃が可能となる」
　ゴッド・ネオスがその手にナックル型の近未来的な武装を握りしめると、先端から光

の刃が伸びる。その全身がアサルト・アーマーの効力を受けて黄金のオーラを放ち、すべての準備が整ったところでその目が鋭く光った。
「バトルだ。ゴッド・ネオスで白闘気白鯨に攻撃!」
ゴッド・ネオスが胸の前で手を向かい合わせると、その間に聖なる白い光の塊が浮かび上がる。十分な大きさに育ったそれをライトイレイザーの刃に乗せるように解き放つと、その圧倒的な威力は白鯨の丈夫な皮膚を貫通しその中央に大穴を穿った。
Ｅ・ＨＥＲＯ　ゴッド・ネオス　攻３３００→白闘気白鯨　攻２８００（破壊）
清明　ＬＰ１７００→１２００
「でもたとえ破壊されようと、白闘気白鯨は蘇る!」
「いいや、ここでライトイレイザーの効果発動!」
「え?……しまったっ!」
僕が記憶の底からあの装備魔法の効果を引っ張り出したのに呼応するかのように、ライトイレイザーがひときわ強く輝きを放つ。そうか、だからこんなにも強気に攻撃を仕掛けてきたのか。
「装備モンスターが戦闘を行った時、その相手モンスターはゲームから除外される。これでお前のモンスターの輪廻は断ち切ったぜ!さらにゴッド・ネオスが戦闘で相手モンスターを破壊したことで、ブレイヴ・ネオスからコピーしたもう１つの効果を発動!

デッキからＥ・ＨＥＲＯ　ネオスの名が記された魔法、罠カード１枚を手札に加えることができる。俺がサーチするのはこのカード、ＮＥＸＴ（ネオスペースエクステンション）だ！」

偶然とはいえこちらに見せる時の指で隠れていたせいでテキストまでは見えなかったが、どうやらあのＮＥＸＴとやらはトラップカードらしい。そしてあれもまた、ネオス・フュージョンやゴッド・ネオスと同じく僕にとっては未知なるカードだ。

とはいえトラップならば、どんな効果を持っていようともまず伏せなければ使い物にならないはず。一応僕の手札と場にはそれぞれ１枚ずつグレイドル・インパクトがあり、この２枚を使えばとりあえず１枚は十代のカードを破壊できる。ゴッド・ネオスも危険だけど、まずこのターンに伏せられるであろうＮＥＸＴとやらを狙うべきだろうか。いや、さっきのリビデのように、この思考すらも十代の策の中なのか？

『ＮＥＸＴ……私も知らないカードだな』

「チャクチャルさん！どこ行ってたのさずっと」

突然思考に割り込んできたのは、この同窓会が始まって以降なぜかずっと大人しくしていたうちの地縛神だった。いくら呼び掛けても反応がなかったので多少は心配していたのだが、何事もなかったかのようにしれっと戻ってくるその様子につい非難がましくなる。

『少しばかり野暮用でな。今はそんなことよりも、こちらに集中した方がいいのでは？』

「あー、まあね」

露骨に話を逸らされた気もするが、残念ながら一理ある。改めてゴッド・ネオスを見上げ、その偉容に身震いする。怖いのではない。どうやって奴を倒そうかという武者震いだ。だがまずは、とにかく次の攻撃を凌がねば。

「ゴッド・ネオスでもう1度、今度はグレイドル・ドラゴンに攻撃するぜ。レジェンダリー・ストライク！」

そして再び光球が弾け、水銀状となって逃げようとするグレイドルの集合体を細胞ひとつ残さず焼き滅ぼす。グレイドル・ドラゴンは本来、破壊され墓地に送られた時に僕の墓地から自身以外の水属性モンスターを効果無効状態で蘇生する能力を持っている。だけどそれはあくまで、墓地に送られて初めて発揮される力。破壊された後に墓地に行くことを許さず除外するライトイレイザーが相手では、その能力も何の意味もない。

E・HERO　ゴッド・ネオス　攻３３００→グレイドル・ドラゴン　攻３０００（破壊）

清明　ＬＰ１２００→９００

「やられた……ほんっと、やってくれるよ十代……！」

蘇生持ちのグレイドル・ドラゴンに、輪廻蘇生の白闘気白鯨。ドゴランの打点も合わせ結構固い守りの布陣を引いていたつもりだったのに、まさか1ターンすら持たないと

は。

「戦闘破壊に成功したことで、再びブレイヴ・ネオスの効果を発動。今度はフィールド魔法、ネオスペースをサーチするぜ。そしてこのメイン２に通常魔法、打ち出の小槌を発動。手札を任意の枚数選んでデッキに戻し、その枚数分だけドローする。この効果で２枚戻して、２枚ドロー。カードを１枚伏せてターンエンドだ」

メイン２に入った時点で、十代の手札は４枚だった。つまり手元には１枚だけ残して、残りはすべて手札交換に回したということになる。ネオスペースを発動しなかったということは、よほどのことがない限り少なくともそちらは手札交換の枚数を増やすだけのためサーチされたということになる。

まあ、それはいい。問題なのはあの未知なるカード、ＮＥＸＴがどうなのかということだ。あの伏せカードのうち少なくとも片方はＮＥＸＴなのか、それともすでに十代の手元には存在しないのか。

「僕のターン、ドロー。このメイン１の開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動。種族の違うモンスター３体をデッキに戻して、カードを２枚ドローする。僕が選ぶのは海竜族のバハムート・シャーク、昆虫族の怪紛壊獣ガダーラ、そして水族のグレイドル・スライム」

『ただしこの発動ターン、マスターはバトルを行えない……やむを得ないとはいえ、かな

り痛い出費だな』

チャクチャルさんの冷静な分析は、ぐうの音も出ないほどにその通りだ。あと少しでゴッド・ネオスを攻略できるというのに、そのパーツが手札にない。仕方のないこととはいえ、ここでこの制約は痛すぎる。

「改めてメイン1に永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。そしてそのまま効果発動、グレイ・レクイエム！場のグレイドルカード1枚と相手フィールドのカード1枚を選択し、それを同時に破壊する。僕が選ぶのはまずもう1枚のグレイドル・インパクト、そして……ここはゴッド・ネオスじゃない、その伏せカードを破壊する！」

ゴッド・ネオスの効果は、もう把握した。そして仮にＮＥＸＴが耐性付与や対象をとる効果への身代わり効果でないならば、その対策も多大なる犠牲を支払い手に入れたドローによりすでに僕の手の中にある。となると残る不確定要素はあの未知のカード、（多分）ＮＥＸＴそのものだけだ。ＵＦＯの下部からにゅっとアームが伸び、その先端に取り付けられた光線銃から名状しがたい色のビームが伏せカード目掛け放たれる。

だが。

「残念だったな清明、これじゃないぜ？チェーンして速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動！俺の場の補充部隊とお前のグレイドル・インパクトを対象に、その2枚を同時に破壊する」

「ＮＥＸＴじゃない……!?」

『ほう』

なんとチェーン発動され表を向いたのは、ネオス関連どころかトラップですらない全く別のカードだった。そして十代が選んだのは効果を発動した側のグレイドル・インパクトで、これにより僕のグレイドル・インパクトは２枚とも破壊されてしまう。それにしてもダブル・サイクロン、ねえ。僕がＮＥＸＴについてあれこれ考え警戒していたのは全くの杞憂で、あのカードはとっくの昔に手札交換の弾としてデッキで眠っているとでもいうのだろうか。

『いずれにせよ一杯食わされたな、マスター』

「みたいね……次行くよ、次！」

よし、ちょっと落ち着いてきた。いつまでもフリーズしていたって使い終わったグレイドル・インパクトが返ってくるわけでもなし、ここは切り替えて次に行こう。

「魔法カード、サルベージを発動。これで墓地から攻撃力１５００以下の水属性モンスター、白棘☒とグレイドル・コブラを回収。そのまま白棘☒の効果に繋げて、手札の水属性モンスター１体を捨てることで特殊召喚する。これで揃った、レベル４のモンスター２体でオーバーレイ！」

白棘☒　攻１４００

回収したグレイドル・コブラをそのまま墓地に送ることで、場に展開された純白のエイ。そして僕の場にはもう1体、早々に引っ張り出されたはいいけれど様々な要因から互いに放置しっぱなしでデュエルの流れを見つめてきていたサイレント・アングラーがいる。2体の魚がまたしても光の軌跡を描き、空間の穴へと吸い込まれる。

……この2体の素材ならば僕のはじめてのエクシーズモンスター、スパイダー・シャークを呼ぶこともできる。だけど、ここでそれを選ぶのは愚策。ここは確実に、まず目の前のゴッド・ネオスを片付けるのみ。

「哀鴻遍野（あいこうへんや）の嘆きを背負い、錨を上げよ救済の方舟！Ｎｏ．１０１！Ｓ（サイレント）・Ｈ（オナーズ）・Ａｒｋ（アーク）　Ｋｎｉｇｈｔ（ナイト）！」

僕らのいるビルの下からゆっくりと浮上する、白い方舟。これまでは専用サポート、七皇（ザ・セブンス・ワン）の剣の効果で一足飛びに進化形態というか本体のダークナイトを呼び出していたため、こうしてアークナイト単体での起用は何気に初めてだ。

Ｎｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ　攻２１００

「でけえ……」

「アークナイトの効果を発動！自身のオーバーレイ・ユニット2つをコストに相手フィールドに表側攻撃表示で存在するモンスターを吸収、自身の新たなオーバーレイ・ユニットにする！消え去れゴッド・ネオス、エターナル・ソウル・アサイラム！」

「吸収能力だと!?」

アークナイトから無数のアンカーが打ち出され、その鎖がゴッド・ネオスの全身を縛り上げる。恐るべき力を誇る巻き上げ機構が、その巨体を船内へ有無を言わさぬ勢いで格納にかかる。神の名を持つネオスといえど、その救済の一撃に抗うことはできない。

Ｎｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ（２）→（０）→（１）

「これでよし……なんて、言えればいいんだけどね」

『うん?どうかしたのか、マスター?』

確かにゴッド・ネオスは倒した。バトルができず戦闘を介さない効果を持つチャクチャルさんのカードがいまだ引けていない以上、あとはこのターンでの決着を諦め今できる限りの迎撃準備をするだけだ。となると、後はこの手札を伏せればいい。それがベターな解だ。

「そのはずなんだけど、なんかこう……嫌な予感、っていうのかな。小細工よりも、今使えるカードの力を限界まで出し切ったほうがいいような、そんな予感がするんだよね」

『ふむ』

黙って僕の話を聞くチャクチャルさん。理屈で考えれば、このカードを今使う理由は何一つない。むしろ返しの十代のターンで柔軟性がなくなり、そちらの方が致命的な結果を生む可能性の方が高いといえる。

それはよく頭ではわかっているのだけれど、それでも直感が僕にささやくのだ。それでは不十分だ、と。

『まあ、その予感とやらは私にはさっぱりわからないが』

ほんのわずかな間を置き、チャクチャルさんの確信に満ちた声が頭の中に響く。

『筋の通った理屈とマスターの予感、どちらを信じるかと問われれば私は喜んで後者に従おう』

……本当に、この邪神は言うことがズルい。そんな風に言われたら、何も言い返せない。理性と直感の間で迷ってた僕が、なんだか馬鹿みたいじゃないか。

ああいいとも、そこまで言うならお望みどおりにしてやるさ。僕は5年前に現を救えなかった時からずっと、僕自身のことはまったく許す気はないし、信じてもいない。だけどチャクチャルさんがそう言うのなら、チャクチャルさんが信じた僕を今この瞬間だけでも信じてみよう。その結果がどうなろうと、もう悔いはない。

「速攻魔法、ＲＵＭ（ランクアップマジック）―クイック・カオスを発動！僕の場のナンバーズを選択し、そのモンスターをカオス化させランクアップする！」

方舟の中央がおもむろに開き、漆黒の人型が飛び出した。同じく方舟から飛んできた得物である深紅の槍を空中で掴み、ドゴランの横に音もなく着地する。

「霖雨蒼生（りんうそうせい）の時は来た、想い託されし不沈の守護者！ＣＮｏ．１０１、Ｓ（サイレント）．Ｈ（オナーズ）．

Ｄａｒｋ（ダーク）　Ｋｎｉｇｈｔ（ナイト）！」

ＣＮｏ．１０１　Ｓ・Ｈ・Ｄａｒｋ　Ｋｎｉｇｈｔ　攻２８００

「ランクアップ……？だけど何をしようとも、このターン攻撃できないことに変わりはないぜ」

「もちろん、それは忘れてないさ。だけどせっかくここまで来たんだ、僕がやりたいことはわかるんじゃない？」

「おっ、なるほどな。ついに来るのか、お前のエースモンスターが！」

「そうさ。どれだけカードが増えようと、どれだけデッキが変わろうと、絶対不変の僕の切り札。その攻撃力は、アドバンス召喚の際にリリースしたモンスターの合計値……クライマックスだ、霧の王（キングミスト）！」

怒りの炎を操るドゴランと、光届かぬ深淵より浮上した騎士。真逆の色を持つ２つの力が組み合わさり、突如立ち込めた霧の彼方から全身鎧の魔法剣士がゆっくりと歩を進める。

霧の王　攻５８００

「残りの手札は１枚……僕はこれを伏せて、ターンエンドする。これが僕の全て、今の僕の集大成。さあ十代、これを超えられるものなら超えてみろ！」

「面白れえ、見てろよ清明！俺の引きは奇跡を呼ぶぜ……ドロー！」

十代の手札は3枚。何をしてくるかはわからないけれど、ここまで来たらダメ押しにこれも使ってしまおう。
「トラップ発動、グレイドル・スプリット！このカードを霧の王に装備し、攻撃力をさらに５００ポイントアップさせる！」
霧の王　攻５８００→６３００
霧の王の片方の瞳がグレイドルの力を受け入れることで突如銀色に染まり、青と銀のオッドアイと化す。正真正銘、これで僕にできることは何ひとつなくなった。あとは十代がどう出るか、それを見ているだけだ。
そして十代が、こちらを見て目を輝かせ笑う。
「魔法カード、アームズ・ホールを発動！俺のデッキから一番上のカードを墓地に送り、デッキか墓地から装備魔法1枚を手札に加える。俺が選ぶのは墓地のカード、アサルト・アーマーだ。そして今、俺のフィールドにはカードが存在しない。これにより手札のＮＥＸＴは、場に伏せることなく発動できる！」
「手札から……それで伏せなかったってわけ？」
「ああ。正直お前なら、間違いなくゴッド・ネオスも超えてくるって信じてたからな。ちょうど補充部隊を破壊できるダブル・サイクロンも引けたわけだし、それなら手札に持っていた方が安全だと思ったのさ。ＮＥＸＴは俺の手札、そして墓地からネオス、及

びＮの仲間を任意の数だけ選んで守備表示で特殊召喚できる！甦れ、ネオスペースの戦士たち！」

圧巻の光景だった。これまでフィールドに出ることなく融合素材として、そして墓地の１枚としてデュエルに干渉し続けていたモンスターが、一斉にフィールドに集結する。グロー・モスに関してはこのデュエルではまだ見た覚えはないが、あれは今のアームズ・ホールのコストで墓地に潜り込んだのだろう。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス　守２０００
Ｎ・フレア・スカラベ　守５００
Ｎ・エア・ハミングバード　守６００
Ｎ・グロー・モス　守９００

「そして俺は今特殊召喚したこの４体すべてをデッキに戻し、融合召喚。これがネオスペースの集大成、クアドラプルコンタクト融合だ！さあ行くぜ、コスモ・ネオス！」

４体融合。召喚のために融合魔法が必要となったゴッド・ネオスのような亜種とは違い、ネオスペーシアン本来の融合魔法を必要としないコンタクト融合……その中でも３体素材によるトリプルコンタクト融合を通り越した、まさに最高峰のコンタクト融合。そして現れた最後のネオスもまた、まさにコンタクト融合という概念の集大成に相応しいものだった。以前十代から見せてもらった３体のトリプルコンタクト融合……マグ

マ、カオス、ストームの３種類を思わせる意匠を全身に抱きつつ、それでいてそのどれとも厳密には異なる２組４枚の翼をもつヒーロー。

Ｅ・ＨＥＲＯ　コスモ・ネオス　攻３５００

「コスモ・ネオス……」

「もうお前もカードは使い果たしたみたいだから意味はないけど、コスモ・ネオスの効果を使っておくぜ。このカードの特殊召喚時から相手は１ターンの間フィールドで発動するあらゆる効果が発動できなくなり、さらにこの効果に対して相手はカードをチェーンできない。そして装備魔法、アサルト・アーマーを装備。２回攻撃の効果を使わない場合、このカードは装備モンスターの攻撃力を３００ポイントアップさせる」

『封殺か。大したものだが、それからどうする気だ？アサルト・アーマーを装備したということは、攻撃する気はあるようだが』

「さあね。それならそれで、どっしり構えて迎え撃つまでさ」

Ｅ・ＨＥＲＯ　コスモ・ネオス　攻３５００→３８００

「さあ、バトルだ！コスモ・ネオス、霧の王に攻撃しろ！」

「返り討ちだ、霧の王！ミスト・ストラングル！」

コスモ・ネオスと霧の王がフィールドの中央でぶつかり合い、剣と鉤爪が激突の衝撃で無数の火花を散らす。それでも攻撃力の差で少しずつ霧の王が押し始めたところで、

十代が残る手札１枚を発動した。
「この瞬間手札からこのカード、オネスティ・ネオスの効果を発動！手札のこのカードを捨てることでフィールドのヒーロー１体を対象に、その攻撃力を２５００アップさせる！」
「３８００に２５００……ってことは！」
『相打ち、か』
　コスモ・ネオスの背に、さらに一対の天使の翼が生える。光の力を得たことで２体の実力は完全に均衡し、どちらも１歩も引かぬままに剣戟の音と火花だけが激しさを増していく。そして……。
　Ｅ・ＨＥＲＯ　コスモ・ネオス　攻３８００→６３００（破壊）→霧の王　攻６３００（破壊）
「くっ……うわっ！」
「うおおっ！」
　幾たびもの激突に限界まで達したエネルギーが、爆発を起こした。霧の王が、コスモ・ネオスが、僕が、十代が、一度にその爆風にのみ込まれて耐え切れずに後ろに飛ばされる。どうにか着地して前を見ると、ちょうど起き上がったところの十代と目が合った。何とはなしに笑いあい、また向かい合う。

これで互いに手札も尽き、フィールドもすっからかん。すべてが振出しに戻り、あとはもう先にモンスターを出せた方が勝ち……だけど、不思議ともう戦う気は失せていた。今の爆発が闘志も悩みも全部一緒に吹き飛ばしてくれたように、不思議と晴れやかで穏やかな気持ちだけが残っている。またこちらを見ていた十代と目が合い、向こうも向こうで同じことを考えていることを悟った。

そして十代も、僕が悟ったことに気づいたのだろう。2人して同時にデュエルディスクに手をやり、同じタイミングで電源を切った。十代のデュエルディスクは元の収納形態に、僕の水妖式デュエルディスクは腕輪に。心地いい疲労感からその場に座り込むと、十代も同じようにその場に腰かける。先に口を開いたのは、僕の方だった。

「この決着は、いつか必ずつけさせてもらうよ。だけど今は、これでお預けにしよう」

「ああ。いつでも受けて立つぜ。だけど今は……ガッチャ！」

そう言い切ってポーズを決めた十代と一緒に、訳もなくおかしくなってその場で笑い出す。勝負はつかず、か。決着の先延ばしだなんてある意味、僕らしい結末といえるかもしれない。ただ今の戦いを通して、いつの間にか僕の気持ちははっきりしていた。笑いの発作が収まったところで、改めて口を開く。

「ねえ――――」

「なんだお前ら、こんなところにいたのか！見たか皆、この名探偵サンダーの推理力を

！」
「推理力って、１階から順番に探し回っただけじゃないっスか」
「むしろ屋上に来たのは一番最後だドン……」
「なんだお前ら、卒業してから５年も経つというのにまだ捜査の基本が足だということもわからんのか？まあいい、おい清明、十代はともかく企画者のお前が勝手に抜け出してどうする。まったく心配させよって、随分探したぞ」
　ちょうど口を開いたタイミングで屋上のドアが開き、がやがやと好き勝手喋りながら大勢の人がなだれ込んでくる。こっそり抜け出したことはもうちょっと気づかれないかと思ったけど、思ったより早くバレてたのね。
　立ち上がって見渡すと、僕のアカデミアでの友達はほぼ全員ここにきているようだ。ならまあ、これはこれでいいタイミングだろう。
「ごめんごめん、悪かったね。でもちょっと、皆に聞いて欲しいことができたんだ」
「なんだと？まだ俺の話は……」
「お聞きしましょう、先輩」
　まだ何か言いたげな万丈目の言葉を途中で断ち切って、葵ちゃんが「我々の代表」のような顔をして１歩前に出て僕と向かい合う。５年ぶりの再会とはいえさすがにあれだけ付き合いが長いと、こうやって僕が珍しくシリアスな顔をしているときにはそれな

りに対応を切り替えてくれるからありがたい。
ちなみに万丈目はどちらかというと、こちらがシリアスしているのを悟ったうえで自分の態度を変えようとしないというはた迷惑なのか大物なのかよくわからない奴だ。それはそれで肩肘張らずに済むからありがたい時も……まあ、ごく稀にはある。三沢なんかは臨機応変に空気読むんだけどなあ。
「実は僕、卒業した時からずっと、ずっと頭の片隅で思ってたことがあるんだ。このままここにいるべきなのか、ここにいていいのかな、って。僕がこのままこの場所にいて、せっかく手に入れた力も使わずに宝の持ち腐れで腐らせていてもいいのかな、なんてさ。だけど最初のうちはそれでもいいや、とも思ってたんだ。2年前にちょっとした事件があって、そこに巻き込まれるまでは。まあ、それはもう終わった話なんだけどね」
2年前、というワードに、三沢の眉がピクリと動く。まあ僕や十代が答えを言わずとも、三沢ならきっといつか自力でたどり着くだろう。しかし全員しんと静まり返って、思うがままの言葉を推敲もせずにただ並べるだけの要領を得ない僕の話に耳を傾けてくれている。それだけのことに、しみじみ心が温かくなる。
「詳しくは今は言えないけどその事件で、卒業以来だから……3年ぶりか。随分久しぶりに僕も本気を出してさ。使える力を出し惜しみせずに、全部引っ張り出して戦って。楽しかった。本当にその瞬間が、楽しかったんだ」

ここで一度話すのをやめ、一呼吸置く。遊星とのデュエルで感じたあの感覚を、もう１度思い出す。

「それから今日までの２年間は、もうそれでもいいや、なんて思えなくなった。もっともっと遠くの世界に行って、僕自身がどこまでやれるのかを確かめたい。どうしようもなく弱い僕が、このデッキとどこまで強くなれるのかを僕自身が知りたい。もちろん、皆が弱いなんてことは思ってないよ。それどころか多分ここにいる皆なら、僕の新しい力にも平気な顔して渡り合えると思う。でも僕が手に入れた新しい力は、壊獣やグレイドルとは種類が違う。もっと根本的な、デュエルモンスターズそのものの常識を揺るがすような力。それを一方的に僕だけが使おうなんて、少なくとも僕はそれで勝っても嬉しくもないし、負けたとしてもこれまでみたいに熱くなれない。だからやっぱり、これはここの皆を相手には使えないんだ」

シンクロモンスターに、エクシーズモンスター。一般流通していない特殊なモンスターという点ではある意味十代のコンタクト融合やバトルシティで使われた本家神のカードと似ているが、前者はあくまで融合モンスターの一部であり、後者もあえて神をも恐れない言い方をするならば圧倒的な能力の数々や３体リリースという召喚の特殊性に目をつぶればメインデッキに入るモンスターという枠内の産物だ。やはり僕が持つ２種類のカードは、その特殊性が違いすぎる。

気兼ねなくこの力を使いたい、だけどここにいてはそれはまず不可能だろう。だろうというか、僕が一方的に不必要な負い目を感じているだけなのだろうけど。次元の壁を超え、全く別の世界……例えばユーノや富野のいたという、シンクロやエクシーズが当たり前に存在する世界。どれほどかかるかもわからないけれど、そんな場所を見つけ出すしかない。

「だけどこの場所には、この世界には、僕の大切な思い出がたくさん詰まっている。だからどうしても踏ん切りがつかなくて……それで今日は、同窓会を頼んで集まってもらったんだ。こうやって皆の顔を見ればここに残るか、それとも外に出ていくか、どっちにしても最後の一押しを決める勇気が貰えるかなって」

「それで、どうだったんですか？先輩」

改めて、ここにいる全員の顔を見渡す。葵ちゃんの促しに、首を縦に振って答える。

「今日皆と会って、話をして、改めて確信できたよ。この世界の思い出はどれだけ離れても、どれだけ時間が過ぎたとしても、絶対に忘れない。なら、迷いはもう消えた。どんなところに行くことになるのかもわからないけど、僕はここを出ていくよ。それが、僕の選んだ道だから……今までずっと、ありがとう」

嘘偽りのない感謝の気持ちから、深々と頭を下げる。言い切った瞬間、ふっと肩の荷が下りた気がした。長々と語ってしまったが要するにこれは、僕個人のただのわがまま

でしかない。それでもずっと胸につかえていたものを全部吐き出してしまったことで、だいぶ気が楽になっているのが自分でもよくわかった。

　それでも、こんな訳の分からない話をいきなり聞かされた皆の方はたまったものじゃないだろう。ちょっと心配になって顔を上げると、じっとこちらを見つめていたいくつもの顔と目が合った。

「……ほら、何をボーっとしている。こうなったからにはさっさと戻るぞ、お前たち」

　最初に動き出したのは、万丈目だった。くるりと身を翻してもと来たドアの方へ歩いていくと、それに続き１人、また１人とビルの中へ戻ろうとしはじめる。賛成にしろ反対にしろ少なくとも何かしらは言われるとばかり思っていたけれど、まさか全くのノーリアクションとは。完全に予想外の反応にたじろいでいると、すでに戻り始めていた三沢が急に振り返って僕を手招きしだした。

「なんだ清明、いつまでもそんなところで立ち止まって。お前には早く来てもらわないと困るんだぞ。何せ今日の同窓会は今から、お前が主役になったんだからな」

「僕が？なんで？」

「なーに言ってるんですか先輩。ご自身でおっしゃられたこと、もう忘れたんですか？」

「ええ？」

　ますますわからず余計こんがらがる僕に、葵ちゃんがため息をついて片手を差し出

す。反射的にその手を掴んだところで、彼女は小さく笑ってこう言った。
「当然です。本日現時刻をもってこの同窓会は、先輩のお別れパーティーになったんですから。出席拒否なんて、絶対に許しませんよ?」

それから。お別れという名目で再開したパーティーは、ずっと続くかのようにも思われた。最後の1瞬までそんな皆との記憶を胸に刻み込もうとする僕に仲間たちがかわるがわる訪れては激励の言葉をかけてくれ、たびたび視界が潤んだのは否定しない。だけどそんな時間も、いつかは終わる。朝日と共にお開きを迎え、改めて全員に別れを告げた時には、気合を入れて泣くのを堪えていた。最後に見せたのが泣き顔だなんて、何の自慢にもなりはしないからだ。
まだ早朝すぎて誰もいない童実野町をしばし歩くと、見慣れた自宅にたどり着く。次にここへ来るのは、いつになるのだろうか。いつか必ず戻ってきて、十代との決着もつけなくてはならない。それまでは、野垂れ死になんて絶対できないな。
「ただいまー……」
この時間だと多分親父は、もう今日の仕込みのために起きているだろう。案の定すでに電気がついていた家の中にそっと入ると、厨房から親父の顔が出てきた。

「……」
「……」
　朝帰りに対する説教でも飛んでくるかと身構えるも、なぜか何も言わずにじっとこちらを見つめる親父。ついその様子につられてしまい、こっちも固まったまま目を合わせていること数秒。
「ちゃんと、母さんにも挨拶してけよ」
　そう一言だけ残し、また厨房に引っ込む親父。言葉を失う僕に、厨房の奥から追加の言葉が届いた。
「２０年間近く顔つき合わせてきた馬鹿息子が、急に少しはマシな顔になって帰ってきたんだから何かあったぐらいの察しもするさ。俺を誰だと思ってるんだ、これでもお前の親だぞ？」
「親父……わかった、行ってきます。またいつか、必ず様子見程度には帰ってくるよ」
　向こうから見えないことは承知だったが、それでも厨房に向けて深く頭を下げる。そのまま仏間に行き、直接顔を合わせた記憶もない色褪せた写真の中の母さんに手を合わせる。見守っていてくれなんて言いません、せめてこれからもこの家で、親父と一緒にいてやってください。
　次いで僕の部屋に入り、荷物を軽く整理する。どんな旅になるのかさっぱりわからな

いし、本当に必要なものだけを最小限にあまりかさばるものは持って行かない方がいい。それはわかっているのだが、どうしても諦めきれない大物があった。デュエルアカデミアの卒業アルバム、僕にとっての思い出の結晶だ。

『いいじゃないか、持っていけば』

そんなチャクチャルさんの声に背中を押されるように、どう見てもかさばるそれをどうにか背嚢に放り込む。案の定ちょっと不格好に形が出てしまったが、それぐらいはよしとしよう。

「そういえば、チャクチャルさんはこれからどうするの？ナスカに帰る？」

『何を寝ぼけたことを。むしろ逆にこちらが聞かせてもらいたいものだがなマスター、私抜きで次元を超えて、そこからいったいどうやって生きるつもりだ？』

「え？……あっ」

『待て、本気で別れるつもりだったのか!?この8年間マスターがこうして現世に留まっていられるのは誰の力だと思っているんだ！私からの供給を絶ってみろ、3日もせずに血も肉も骨も全部灰になるぞ!?』

「いやー、あはは……ごめん。じゃあ、一緒に来てくれるの？」

『どうもまーだ、我々は意思疎通ができていないようだな。なあマスター、なんのために昨夜はわざわざ私があちこち駆けずり回ったと思っているんだ？運がいいぞマスター、

ちょうどこの近くに次元の揺らぎが起きている箇所が見つかったんだ』

目を丸くする僕に、チャクチャルさんが若干いたずらっぽい調子で付け加える。

『それと聞かれる前に答えておくが、仮にも８年越しのパートナーが延々抱えていた悩みにも気づけないほど衰えた覚えはないぞ。この私、権謀術数の地縛神相手にマスターの浅い人生経験が隠し事などできてたまるか』

「チャクチャルさん……」

『ほら、早くしないとどんどん日が昇るぞ。朝日に追い立てられる出発というのも乙なものだ』

そんな泥棒の逃走みたいなスタイルのどこをどうひっくり返せば乙なんて感想が出てくるのかはさっぱりわからないけれど、きっと５０００年以上生きて地球のことは知り尽くしたチャクチャルさんなりに次元を越えた未知の世界に対し興奮しているのだろう。単に美的センスが根本的に異なるという可能性も捨てきれない。

「じゃあチャクチャルさん、それに皆も。改めてこれからも頼むよ。これからも、まだまだデュエルと洒落込もうか！」

おまけ　鉄砲水の軌跡

原作キャラについて

ここからは表題通り、原作キャラについての反省。

……なんというか、バランス悪いというか格差大きいですね。三沢と万丈目の２人が大優遇、十代とカイザー、それにエドが優遇、吹雪とオブライエンがまあ普通からちょっと不遇気味……で、あとは全員不遇に両足突っ込んでる程度の描写だったと個人的には反省してます。斎王やコブラといった敵キャラならまだいいんですが、問題なのはそれを味方キャラでやっちゃってるんですよね。

公式から強化貰ったにもかかわらずそれを披露する場に恵まれなかった剣山と翔も大概ですし、ＯＣＧ化の機会に致命的に恵まれなかったせいでデュエルが語られることすらなかったジムやレイもあんまりな扱いでした。ですが特にひどいというか申し訳ないと思っているのは、なんといっても明日香です。まさか個人成績の勝ち星０のままストーリー全部終わってしまうとは。サイバー・エンジェルはサイバー・エンジェルで出番が１戦しかなく美朱濡どころか茶吉尼すら出ていないままという恐ろしく中途半端な有様ですし……何度か繰り返した覚えがありますが、別に明日香や機械天使が嫌い

なわけではないんです。なぜか出番を作れなかっただけで。

1期前半（入学～ノース校特別試合戦）

ストーリー総括

みんな大好き入学編。当初ＧＸ自体セブンスターズまでで最終回にする気だったんですってね。となるとこのあたりですでに全体の半分ぐらい消化していた？

それはともかく読み返してみての感想としては……まあ、よくこれ見てついてきてくれる人がいたもんだなあと。５年以上経てば私自身の感性も変化するのでしょうが、それを差し引いてみてもまだまだ稚拙。文章というより字の塊。というかこれだけ前の自分で書いたもの見直せって何の拷問？しかもこれ書くためだけにそれを自分からやるとかＭっ気でもあるのか私は。あとこの頃はまだ、私自身執筆を始めて間もない時のあれですので物書きのセオリーがよく分かってない感が強いですね。三点リーダー（……←これ）の使い方とか人数分だけ律義に積み重ねてた「」とか。そういったものの相乗効果で余計にやってらんない気分になる負の無限ループ。

とまあいつまでもけちょんけちょんのボロッカスにしていてもきりがないですので、もう少しストーリー的な部分を語りましょう……と思ったけどこの辺はよく考えると原作なぞってるだけだからノース校が一大勢力になったことぐらいしか話すことがなくそれすらもできない絶望。よーし次行くぞ次。

初出オリキャラ（登場順）

1、遊野清明（ゆうのあきら）

ダークシグナーとして手に入れた不老の体と人間枠を超えた身体能力、そしてカードの精霊召喚術を持つ一応主人公。まずメタ視点での話ですが、彼を書く上で個人的に意識していたことは「隙あらば負ける主役」でした。いろんな敵に突っ込んでいってはいや負けるのかよ、というところで負ける。とは言いつつも実際読み返してみると負けてもストーリーに影響ないところで勝っている場合もなんだかんだいってそれなりにあるので、もうちょっと黒星付けとけばよかったかなーなんて思ったり。でもその点を別にすればあの微妙にずれた彼ならではの感性はなんのかんの私も変に気負うことなく自然体で書くことができ、個人的には動かしやすい、いいキャラでした。一人称が僕なのは主役を書く上でのただのこだわり。散々書けたので割と満足。

それと彼を語る上で外せないのが、時代と共にデッキ内容が変化しまくっていった点。ベースがこの作者の愛用デッキということもあり時代の変化と共にその軸は【シーラカンス】→【魚軸グレイドル】→【壊獣】→【水属性軸壊獣グレイドル】と私自身思いもしなかった形でガンガン変わっていきました。そして増えていく嫌がらせ要素。やっぱこれ敵の使うデッキだよ。なんのかんのライフ調整はしやすかったのでそういう意味でだけは向いていたのかもしれませんが、はいお前のモンスターリリース！寄生

！とかやっぱ味方の使うムーブじゃねえ。楽しかったけど。

で、ここからはキャラクターとしての裏話。結局本編では匂わせる程度しかできませんでしたが、彼の幼少期から中学生ぐらいまでの時期はなかなかに荒れてました。まあ子供は基本残酷だし、生まれてすぐに起きた大事故で奇跡の生還者になったなんて経歴と生まれで目をつけられてない方がびっくりするわ。まして原作時点ではやたら治安の悪いことに定評がある童実野町育ちだし。

そして生き抜くためにあくまで徹底抗戦の構えをとった彼はその後、常に1対多での喧嘩に適応した結果の戦闘スタイルが素手の暴力のみならず口先、凶器、不意打ち上等卑怯万歳の姿勢を身に着け、メインウェポンはその辺の工事現場からかっぱらってきた鉄パイプ。その日々が本編でのやたら折れない闘争本能と時折見え隠れする危険思想、あと壊獣グレイドルなんて理不尽極まりない嫌がらせデッキを生き生きとぶん回す姿の原点になっている、というお話。でも実際それぐらいの気骨がないとあの世界でモブとしてならともかく我を張って生きていくとか無理そう。

その後、まあKC城下町だし機会には事欠かないであろうデュエルモンスターズに出会いその世界に魅入られ、闘争心の行き場がリアルファイトからカードに移ったことで本編開始時の穏やか成分強めの人格を維持することに成功。無頓着な父親に代わり家事技能もメキメキと伸ばし、デュエルアカデミアへの進学を志し勉強期間の少なさゆえ

に怪しいものだった筆記試験も辛うじて通過。そして1話へと繋がることに……なお入学後も校内で堂々と商売を始める、どうせ誰も来ないからと寮の壁をぶち抜き大部屋を作る、備品漁りのため立ち入り禁止の廃寮に平気な顔して出向くなど本性は今一つ変わっていない模様。

修学旅行時は童実野町に戻ることを嫌がっていたそぶりも見せたものの、そこから卒業までには精神的にも成長して吹っ切れたのか卒業後は実家のケーキ屋『ＹＯＵ　ＫＮＯＷ』にて仕事を続ける日々を5年間送っていた。

……が、最終的には闘争本能と冒険心を抑えきれずにデッキ片手にどこかに旅立つことに。きっと元気にやってるよ、たぶん。

エースモンスター：霧の王（キングミスト）

2、ユーノ

メタ視点担当。元々こちら側の世界の人間で、清明の初期デッキ【シーラカンス】要素は本来こちらが主体。

で、彼ですが。正直、実はあまり語りたくないキャラだったり。どうせ終わった今だからぶっちゃけられますが、完全に持て余している様子が読み返しているだけでも手に取るように伝わってくる人。もっと正直な話をすると未来の知識持ちだけど歴史がどう変わろうがあまり介入したがらない、そもそも私自身彼が何をしたいのかもよく分か

らない（考えてない）とコンセプトの時点で割と失敗したキャラで、後述のチャクチャルさんにはサポーターとしての彼に失敗した際に蓄積したノウハウが詰め込んであったり。そういう意味では決して無駄ではなかったキャラクターですが、まあそんなもん本編で連載と並行してやるなって話ですね。

最後は闇落ちした清明を救うために退場。ただその前の空白期間が長く、そこで彼がいなくても本編が問題なく回ることがよく分かったうえでの決定でした。ある意味私の力量不足に振り回された作中1番の被害者。すまん。

エースモンスター：霧の王

3、河風夢想（かわかぜむそう）

メインヒロイン兼ラスボス。名前の夢想は後に明らかになるもう1つの名前、現（うつつ）との対比であると同時に無双の言い換えでもあり、要するに主人公がコンセプト上不可能な何があろうと必ず勝つ、を体現させたお方。もっと言うと公式チートの俺ＴＵＥＥ系。

最序盤こそ独走していたヒロインレースに後述の葵ちゃん、及びなぜかチャクチャルさんまで顔を出したり出さなかったりし、しかも良かれと思って付けた語尾のキャラ付けがやっぱり若干使いづらい（ちゃんと意味があるものだから消すこともできない）、葵ちゃんの補完役としての異様なまでの使い勝手の良さ、そもそも最強キャラ自体がストーリーに絡ませづらいという怒涛の三重苦によって中盤からはやや影が薄くなりつ

つも要所要所できっちりヒロインムーブをぶちこんできたやればできる子。

デュエル面に関しては、どれだけ好き勝手に追い込んでも墓地肥やしの隙と召喚権さえ渡せば余裕の逆転可能という点からあまり悩む必要がなく、最強キャラとしてとても書きやすいデッキでした。あとドラゴネクロの口上は個人的に一番のお気に入り。

エースモンスター：ワイトキング、冥界濁龍　ドラゴキュートス

4、ノース校四天王

一応それなりに出番もあったので記述。もとはと言えば万丈目が選び抜いたノース校の精鋭4人衆。先鋒から順に飯田（いいだ）（初代）、和田（わだ）（2代目）、天田（てんだ）、酒田（さけだ）、鎧田（よろいだ）。

ぶっちゃけ名前の由来からしてサンダー四天王だし全員○○田にしようとか、○○の部分も一番だから飯田、サンダー四天王の十だから英語にしてテン、なら天田……とかそういうレベルで、ほぼモブキャラに毛が生えた程度にしか思っていなかったことが非常にわかりやすく見えてくる人たち。名字だけで下の名前すら未設定だし。唯一大将の鎧田のみは例外で、彼だけ名前の由来が使用デッキBFの代表シンクロ（当時基準）であるアーマード・ウイングであったため翼というちゃんとした個人名をつけた覚えがあります。でも名乗る機会は最後まで訪れなかった。

彼らもまた実際書き分けもできないくせに登場人物ばかり増やしたがる私の悪い癖の産物で、世代交代含めると計5人もいたくせにきちんと私の中で個性あるキャラク

ターとして成立したのが大将の鎧田と参謀の天田しかいなかった印象。反面この２人に関しては要所要所で出番もセリフも少ないなりに用意できただけに色々惜しい。

５、

……ここに三沢大地って書こうかとよっぽど思ったけどさすがに悪ノリが過ぎるので自粛。空気ネタはＴＰＯを弁え、用法用量を守って使いましょう。

１期後半（セブンスターズ）

ストーリー総括

原作に沿いつつもちょっとずつオリジナル色が濃くなってきた時期。その反動でセブンスターズと銘打ちながらきちんと１話使って描写したメンバーが半分ぐらいしかいないという。

それと思い出深いのが当時は失楽園もＯＣＧ化されておらず、４０００しかないライフのもとで揃えるまともなサポートもうまみもない（時期の関係上アーミタイルが出せない）三幻魔が揃うまで悠長に待ち構えるなんて絶対に無理だときっぱり判断した結果苦肉の策として影丸会長は原作通り十代に画面外で倒しておいてもらい、第二ラウンドとして三幻魔それぞれに自身特化デッキを作ってもらい分割して戦うというなんだかよく分からないことにした点。今となっては昔のことなので正直私もよく覚えていませんが、ちょうど直前にチャクチャルさんの存在が受け入れられたことで私自身が精霊

の擬人化という概念に対して何らかの手ごたえを感じていた時期だったのかもしれません。

それとは別に印象深い回はターン３５のバレンタイン回。生まれて初めて１話丸々ラブコメに挑戦してみた回なので印象も強いですが、それだけに読み返していて一番精神的にきつかったです。内容が云々以前に自分で書いたラブコメを、それも５年近く前のものを読み返すことそれ自体がもはや拷問の域。

初出オリキャラ

６、チャクチャルさん

終身名誉サブヒロインその１。でも男女の区別はないタイプの神様で、どうせならこっちこそ女神にしておけばよかった感は否めない……さすがにあざとすぎるから今のままでいいや。本名は地縛神　Ｃｈａｃｕ（チャク）　Ｃｈａｌｌｈｕａ（チャルルア）。

動かしてみて初めて分かったユーノの欠点を解消したサポートキャラ……というとなんだかぽっと出みたいですが、この神様については精霊の代表ポジションとして最初からここで出そうという構想自体はありました。霧の王もこの立ち位置の有力候補ではありましたが、デュエル面での切り札にしてフェイバリットカードであるあちらにそれ以上の役割を負わせるのは何か違うだろうと迷った末こちらを選択。結果的にはデュエル内での出番自体が少なめなため空いた時間で清明のフォローに回ったり補足

をしたりと大事な戦いではほぼ必ず切り札として呼び出されていたあちらとは別方向に個性を出すことができ、最低でも５０００年という年の効と知識量から清明だけではどうにもならないような場面も解決に導くブレイン担当としてよきコンビに。

とはいえこの神様についてもキャラクターとしては正直なところまだまだ手探りでしたが、ターン４９で清明を自分の正式な使い手と受け入れ呼び方をマスターに変えてからは書きながらこっちが驚くほどすらすら言葉が出てくるようになり落ち着くところに落ち着くとはこういうことを言うんだなあとしみじみ感じた記憶。

７、富野

転生者狩りの狩りがやりたかった、という一発ネタだったはずの人。サンダー四天王もそうですが、基本的に私の出す登場人物は名字だけだと出番少な目、どころか下手すると１話限り、下の名前まで決まっていたらそれなりにレギュラー化させるつもりで考えてます。ただ彼を軸とした転生者狩りの面々はもう少し設定を練れば現の正体やエクストラ勢の開放といった話を進めるための設定として使えるんじゃないか、と思い直し最終的にはそれなりに出番が生まれることに。

使用デッキが【レッド・デーモン】なのは……なんでしょう。もはや覚えてません。ですが初出時には思いもよらなかったことにその後漫画版（フィール）からのアビスベリアルカラミティ３兄弟、ＡＶからのスカータイラントとたくさんの派生に恵まれたことを考える

とぴったりのチョイスでしたね。ある意味書けば強化が来るジンクス第一号とも。

エースモンスター：レッド・デーモンズ・ドラゴン

8、稲石(いないし)

……この人なんで準レギュラーなの？

いや、というのも上記の富野やサンダー四天王はなんだかんだ言いつつもう1回ぐらいは出番作るかな？と思いながら出したキャラでしたが、この幽霊に関しては本気でふと書きたくなった単発ホラー回のオチ要因でしかなかったはずでした。そんな一発キャラ中の一発キャラであるにも関わらず何も考えずに舞台を例の廃寮にしたせいで、あ、これアムナエル戦でもう1回行くんだから顔出ししとこ→隼人の卒業回にも強化イベントが後付けでいいから欲しいな、この人に任せとこう→あ、ここで出番作れば話がスムーズに（以下略）の流れでいつの間にか存在感があるどころかストーリー的にもかなりの重要キャラに。なんで？

ちなみに完全な後付けとはいえ現の魂の片割れにして夢想の出来損ないという重要な設定が付いてしまったのでここに書き捨てておきますが、この人実は性別不詳なんですよね。頑なに性別を断定できる外見描写は避け、会話にも地の文にも彼や彼女といった単語は一切使って……ないはずです。あったとしたらそれはミスです。で、この人の大元である2人はどちらも女性。まあつまり、そういうことです。以前とある方からの

感想で「彼」と呼称されているのを見たときはＰＣ前でガッツポーズしてた覚えがあります。ただひとつ問題があるとすれば、それが本編に何一つ影響を与えない死に設定であったことぐらいでしょうか。ならここに書く必要もないですが、せっかく動いてくれたキャラクターなので書き手としてのせめてものけじめ、あるいは供養とでも思っておいてください。この後語り自体がそういうノリで思いつくままに書き連ねてます。

エースモンスター：ゴーストリック・マミー（多分）

９、男

結局名前一文字も出てねえんでやんの。さすがにこれだけじゃ誰のことだかさっぱりなので補足しておくと、現関係のイベントを進める際よく顔を出していた青眼使いの転生者狩りです。その界隈ではかなりの古株であり生前の現とも親交が深かったらしく、彼女のエースたるドラゴネクロをまだ夢想であった彼女に渡したのも彼。彼は彼なりに色々とドラマがあったのでしょうが、そのへんは特に描写されることもなく最期は現相手に人生最後の大勝負を挑んだ末に静かに消えていきました。ただ肝心の現がその時期は砂漠の異世界に飛んで行った清明にいっぱいいっぱいな時期だったせいで今一つそれどころじゃなかったという。一時の夢のように後に禍根を残さず退場できた、という点ではいかにも彼女関係のキャラクターらしいといえるかもしれませんが。

ちなみにこの人も書けば強化されるの体現者の一人。黙ってても強化される青眼を

こう称するのはなんか間違ってる気がしなくもないですが、この人初登場時にはまだカオスＭＡＸすらいなかったのよ。

エースモンスター：青眼（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）の白龍

１０、三幻魔

一応擬人化したので。三幻魔と銘打ちつつもほとんどラビエルの話になります。前述のように融合できない都合上３体を一度に使う戦術上の理由が全くありませんでしたので３分割し……たことは果たして良かったのか悪かったのか。ハイペースで更新できるならともかく私のペースだとリアルタイムで読む人はダレてなかったかな。ただここだけの話、書く側にとってはすごい楽なんですよねこの形式。少なくとも連戦が続く間はストーリー構築に全く脳味噌使わなくても半自動で話が進んでくれるし。

そしてラビエルですが、ホントにコイツ何であんなキャラになったんでしょう。稲石さんはいつの間にか準レギュラーに居座ってましたが、こっちはこっちで当初はその予定もなかったのになぜかライバルポジションに鎮座することに。ウリエル、ハモンとアカデミアサイドが２連勝した以上ここらで意外性が欲しかったのと、うちの主人公特有の負け癖が変な形で噛み合った結果相打ちにしただけで因縁を３期まで残そうなんてつもりは全くなかったんですがねえ。それでも４期ラストでの再登場が割と好評だったことを考えると、それもまた決して無駄ではなかったのでしょう。

エースモンスター：三幻魔

２期（光の結社）

ストーリー総括

とりあえず破滅の光に絡めておけば割と何やってもいいんじゃないかと調子乗り始めたあたり。起きたイベントを見返してみるとなぜかタイタンが出てきたりなぜか恒例行事となったノース校との親善試合が挟まったりなぜか三沢推しがピークに達したりとオリジナル色がだいぶ強まってきてますが、新キャラを絡めてストーリーを作るのではなく前に出たキャラの再登場を重点しているあたりがまだまだ過渡期。清明のデッキに強化イベントが入りグレイドルの力を手に入れたのもこの時期ですが、それよりも何よりも葵ちゃんの加入が一番この話のその後に影響を与えたイベントでした。

印象深いデュエルはフランツ（アバター）戦ですかね。ラーを倒すと本命のアバターが出てくる構図は前から決めていましたが、その少し前にＯＣＧでもスフィアモードが解放されたことはいいアクセントになったと思います。不死鳥まで解放済みだとさすがに完成されすぎていて逆にアバターの存在感が霞みそうなので、何かとちょうどいいタイミングでした。

初出オリキャラ

１１、葵（あおい）・クラディー

終身名誉サブヒロインその2。たまに頂いた感想等を見る限りではオリキャラの中でも一番人気が高かった気がします。しっかり者の後輩キャラ（女）が書きたい！毒舌だけど根はいい娘が書きたい！ニンジャ！という欲望のハイブリッドから生まれた色々と業の深いお方。反面私の書きたい要素が詰め合わさった娘ですので、裏を返せば何をさせるにしてもすっっごい書きやすかったです。

ただそんな彼女も、初期のころは設定に悩んでいました。その名残がエースモンスターとしてチョイスした銀河眼の光子龍です。彼女、当初は転生者狩りからのスパイにしてもいいように意識していたんですよね。なのでレッド・デーモンズや青眼と同じくライバルの使う３０００打点ドラゴンである銀河眼をエースとし、もし清明がシンクロやエクシーズを躊躇なく使い始めるようなら正体を明かしその隠された効果であるエクシーズメタ能力によって戦いを挑む、なんてのもちょっと考えてました。まあ没になったのでこの設定墓場に放り込んでおきます。

あと彼女を描写するにあたり意識していたことは、「（清明には）信用も信頼もしているが恋心はない」「安易にデレさせない」この2点です。いや、これ常に意識しておかないと本気でヒロイン食っちゃいそうだったので。その結果たまに見せる彼女なりのデレ描写は毒舌な性格も合わさり非常にわかりにくいものになりましたが、とある感想によるとそれもまた彼女の魅力として捉えていただいたりもしたので人生どう転ぶかわ

からないものです。

名前通りのハーフですが、それが何かの役に立ったり生かされることはついに最後までなかった。ちなみに母方が日本人の血です。

エースモンスター：銀河眼の光子龍（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン）

12、後輩

本来単発キャラをここに乗せる気はなかったですが、こいつに限り今でもちょっと悔やんでいることがあるので例外措置。誰かというとターン37、葵ちゃん初登場回のワンショットキル食らって退場したかませです。入学当初の葵ちゃんに勝ったと思しき描写があり、腕前はそれなり……と言いたいところですが、多分相手するのがめんどくさくなった彼女がわざと手を抜いたんだと思う。

で、なんでこんなのにわざわざ専用スペースを割いたのかというと。彼が葵からアンティで奪おうとしていたカードはカオス・ソルジャー――宵闇の使者―でした。しかし当の本人はそれ以降、最初から最後まで宵闇を出したどころかドローした描写すらないです。これ何がやりたくてそんなチョイスをしたのかというと、本来彼は光の結社の先兵としてもう1度清明ないし葵にリベンジを挑む予定でした。その際考えていたデッキが【カオス・ソルジャー】……今思えば馬鹿馬鹿しい一発ネタですが、遊戯王界隈では割と知名度の高い例の世界に1枚しかないステンレス製の通常モンスター版カオス・ソ

ルジャーをバニラサポートガン積みで専用デッキ組んで、なんてのを考えてました。なぜお蔵入りになったのかというと彼が一時退場した直後に公式がカオス・ソルジャーの強化を打ち立て、突如超戦士をはじめとするニューフェイスにより儀式軸が文字通り別物の強さを得て生まれ変わりこれが俺の激レアカード、カオス・ソルジャー（ステンレス製）だぁ！とかやらせるのがなんか馬鹿らしくなったからです。でもやっぱりやってみればよかったかな。

……あれ、そうするとこんなのも書けば強くなるの系譜？いや書いてなかったけど。

13、天下谷（あまがい）

ストラク3箱の代行天使使い。修学旅行の行き先を賭けて夢想と戦った1発キャラ……かと思いきやその後もデュエル描写こそなかったものの日常パートでたまに出番のあったお嬢様。卒業アルバム作成委員会所属なあたり、割と面倒見はいいのかもしれない。

彼女に関しては、原作回のプリンセス・ローズを見ていてふと思ったコテコテのお嬢様キャラが書きたい欲の化身です。本当にそれだけでストーリーに絡ませるつもりは全くありませんでしたし事実全く絡んでませんが、それだけに気楽かつ自由に書けた気がします。ですわ口調楽しかった。やっぱ突き抜けたキャラはそれだけで一定の刺激になりますね。

エースモンスター：マスター・ヒュペリオン

１４、遊（あそぶ）

転生者狩りその３。名字なのか名前なのかは不明な漫画版（フィール）【レッド・デーモン】使い。富野だけではどうも進まない話を無理矢理動かすために急遽導入されたテコ入れ要因でもあり、レッド・デーモン対決がふとやりたくなって出てきた要因。彼を描写し続けてつくづく痛感したことは、私の人物描写の幅の狭さです。もっと危険人物らしさ、やべーやつっぽさを出したかったのですが、どうしてもただ痛いだけの奴との壁を越えられなかった印象。そこを突き抜けることができるかどうかで物書きとして一皮むけるのかもしれませんが、まだ私が動く時ではなかったようで。猛省。

エースモンスター：琰魔竜　レッド・デーモン

３期（異世界）

ストーリー総括

砂漠の異世界から覇王の世界まで。この辺の清明は基本的に本編よりちょっと外れた場所を動いてますね。本編の裏側、みたいな話を書きたかったのもありますが、それ以上に十代が覇王堕ちするまでの鬱展開を描写したくなかったという方が大きいです。砂漠の異世界では中途半端に引き分けという形で終わってしまったラビエルとの因縁にケリをつけさせ……た代償にその後アーミタイルが１ミリも出てこなくなるという

とんでもない欠陥を抱え、覇王の世界では海の向こうからずっと待ちわびていた壊獣が来日。情報公開当初は同じ水属性ということもあり同時来日するバージェストマを組み込むつもりでしたが、やはりあの豪快さに惚れ込み急遽予定変更。本編で十代が手に入れたＥ―ＨＥＲＯと同じく清明が闇落ちして手に入れたデッキにもかかわらず当然のような顔をしてしれっと浄化後も居座り、そのまま清明側のメイン火力として定着するというお話的にはよく分からない立ち位置に。

印象深いデュエルとしては、長い因縁を消化したラビエル戦も捨てがたいですがやはりラストのユベル戦。十代の今後を考えると清明がいくら気合い入れようが勝ってはいけないデュエル、どこまでなら粘っていいのかの線引きに悩んだ覚えがあります。結局は一応主役であることを踏まえ最大限の譲歩として第３形態まで引っ張りだしましたが、まあ妥当なところでしょう。でもレインボー・ダークはリリースで始末する。

そのほか思うところがあるのは、覇王関連ですかね。Ｅ―ＨＥＲＯは敵役としてのスペックがなかなか高いので、演出や選出にもうちょっとこだわればもっといいデュエルが作れた気がする。

初出オリキャラ

１５、明菜（あきな）・クラディー

シスコンの姉にしてフィジカル面では作中最強。ドテンプレな超ハイスペックで妹

ＬＯＶＥのお姉ちゃんキャラが書きたかった。
この人も私の中ではなかなかの曲者で、最初は登場回のあとがきにもある通り黄昏の忍者シリーズにもっとやる気があれば出番が比例して増えていくというだけの葵ちゃん強化イベント専用キャラでした。でもそこに本物のくノ一としての身体能力を付与した結果便利屋として、特有のハイテンションを付与した結果状況を明るくするムードメイカーとしての立場としても定着することに。一発キャラだからこそ濃くしようと思ったら濃いからこそ定着したというよくわからない逆転現象の結果存在感を放つことになった人でした。
スレンダー体系で毒舌家、母方の血が色濃い黒髪の妹と出るところは出て引っ込むところは引っ込んだニコニコ明るく父方の血が強い金髪の姉といろいろ対照的な２人ですが、まあこれは深く語るまでもないテンプレといえばテンプレ、よくいえば王道ですね。
エースモンスター：黄昏の忍者将軍―ゲツガ
１６、Ｔｈｅ（ザ・）ｄｅｓｐａｉｒ（ディスペア・）ＵＲＡＮＵＳ（ウラヌス）
砂漠の異世界の主。一応断っておきますがあそこが精霊世界における天王星だなんて話は原作ではどこにも出てきません。ユベルへの復讐心を胸に清明に同行し、力及ばず敗れたもののその能力のヒントを与えることには成功した……と言えば聞こえはい

いけれど、要するに相性いいかな?と思って入れてみたけど最終的にはやっぱり使いづらくて抜けていったカード。唐突に出てきたけれど単発でしか出番のなかったカードには大体そんな理由がありますが、ストーリー的な意味を持たせられただけ一番優遇されているので代表として特筆。

エースモンスター：Ｔｈｅ　ｄｅｓｐａｉａ　ＵＲＡＮＵＳ

１７、憑依するブラッド・ソウル→魔人ダーク・バルター

ユベルの影響で砂漠の異世界に現れたカードの精霊で、使用デッキは自身の効果を最大限に生かすための【捕食カウンター】→純【捕食植物】。単発かと思いきや覇王の世界でも再登場したリサイクル系キャラ。辺境の大賢者やバックアップ・ウォリアーはそれぞれ１話しか出てないのになーんでそのあたりの味方キャラ差し置いてこっちが優遇されてんですかね。

まあ真面目に話をするとまず本人が悪魔族ということもあり悪役として使え、その後融合体の設定を絡めることでもう１回進化した悪役として出番が作れる、という割と貴重な立ち位置のカードではあるんですよね。ハ・デス軍周りはバックストーリーがわりとパック単位でしっかりしているのでなおさら組み込みやすく、中でも大賢者を憑依先に選ぶあたり知性派っぽかったこいつに白羽の矢が立つことに。

話は変わるけどそろそろあの三つ巴の戦争の行方を誰か教えてくれませんかね。切

り込み隊長もハ・デスも最近はすっかり身内にかかりっきりで、タイラント・ドラゴンなんて開戦以降どこで何やってんのかすらさっぱりだし。いい加減に竜魂の城から出てこいや。

エースモンスター：憑依するブラッド・ソウル→捕食植物キメラフレシア（プレデター・プランツ）

１８、暗黒界の鬼神　ケルト

公式設定の邪悪なりに誇り高き大物感溢れる暗黒界とＧＸで覇王の部下でしかなかった今一つ大物感のない暗黒界をすり合わせた結果生まれたユベルの影響論。この辺の設定に困ったらとりあえずユベルのせいにしとけ感は２期の光の結社の系譜であり、４期のダークネスにそのまま受け継がれます。そしてさらに時を経るとドン・サウザンドのせいへ。

そしてこのケルトですが、暗黒界のトップであるグラファは古狸系の胡散臭さ重点にすることは割と早くから決まっていて、じゃあ誇り高さの要素をどこに持ってくるかということで荒っぽいながらも色々考えてるあのようなキャラ付けになりました。ケルト、ラチナ、グラファの３体はＧＸ放送後に新規登場した暗黒界ということで本編には影も形も出てきていない都合上なおさら出しやすく、じゃあ攻めのケルトと守りのラチナのどちらを味方側に置くか、と考えた結果見た目が騎士っぽいという理由だけでこちらを選択。１歩違っていればラチナとケルトの立ち位置は真逆だったかもしれません。

エースモンスター：幻影騎士団（ファントムナイツ）　シャドーベイル

19、暗黒界の龍神　グラファ

清濁呑み込む器を持つ暗黒界の元君主。魔神レイン以上の暗黒界のトップが存在し、なおかつそれが本編未登場というこの状況は話を作る上で大変やりやすかったです。【暗黒界】使いの人には申し訳ないですが、執筆中に新ストラクチャーデッキ、デビルズ・ゲートR発売決定！とか出なくてよかった、あと今更カラレス収録決定とか言われても正直反応に困る時期でしたからそれもなくてよかった、とこのあたりの執筆中は1日ごとに安心していた思い出。普通なら杞憂で済むような話ですが、コズミック・ブレイザー・ドラゴンやデス・キマイラ・ドラゴンすらめでたく収録される最近の事情を考えると正直いつ出てきてもおかしくない時期でしたからね。

本人のキャラクターとしては、正直暗黒界最強の肩書きを頼りにちょっと便利屋にしすぎたかなあと。この辺のさじ加減は難しいものです。

4期（ダークネス）

ストーリー総括

ここにたどり着いたときには、私としても色々と感慨深いものがありました。いや、エタらずにちゃんとここまでこれたんだなあって。別に実際そんなことはないんでしょうが（というより単に母数が多いだけ）失踪に定評のあるGX二次、なんて前評判

を聞いて書き始める前は正直ちょっと怖かったんですよね。実際書き始めるとこれはこれで楽しいものなので、迷ってる人はぜひ投稿を始めてみましょう。この４期というくくりの中でなんといっても印象深い回は現戦……と、万丈目対エドですね。

まず後者の話からすると、当初は無難にダスクユートピアガイと白黒アームドを出す程度で終わらせるつもりでした。ほかにやりたいことも特になかったし。が、その少し前に公式からのデュエリストへの挑戦（と私は受け取りました）こと悪魔合体の申し子、アームド・ドラゴン・カタパルトキャノンが爆誕。「やあぁーってやろうじゃないかオラァァ！」と本気になった結果として前後で２話に分けるほどなっがい回になってしまいました。楽しかったのは間違いないけれど後書きにも書いた通りまだ出したりないモンスターはいっぱいいたので、あれでもまだちょっと消化不良ですが。

で、現戦の話です。あの終わり方そのものは、かなり初期から決めていました。ですがそれってどうなんだろう？と自分でもここにたどり着くまでに散々迷い、それでも最終的に初志貫徹する形で決まった彼らの恋の、そしてデュエルの結末でしたが、私がこの作品に込めてきた思いを全て出し切ることができた回だと私自身は自負しています。試合に勝って勝負に負けて、最後の決まり手は未来への思い。後悔はありません。

初出オリキャラ

２０、『彼女』

本編開始前にダークネスの罠により死傷者４人の自動車事故を引き起こす原因となり、自責の念から唯一の生き残りであった当時の清明に自らの生命力をすべて受け渡し、死してなお残った後悔や悲しみの残留思念をダークネスに分捕られた転生者狩り。すべての始まりとなったこの人が最後のオリキャラ紹介枠になるこの流れ好き。現の名前は本来、彼女の本名でした。

……ならば本編ラスト、自らを現と名乗り愛する者との戦いを経て自らの意志で散っていった彼女の人格は夢想と現、厳密にはどちらのものだったのか？どちらのものでもあり、どちらのものでもないんでしょう、多分。身もふたもないけれど、こういう話はあまりはっきりさせない方がいい気がします。これに関しては、聞かれても答えませんよ私は。

ラスト（最終決戦）

最後の番外編、清明対十代。最終的には勝負持ち越しとなりましたが、あの後の展開もほんの少しだけ考えてあります。まず返しのターンで清明がデッキトップの一時休戦をドローし即座に発動、十代はそのドローで並行世界融合を手に。除外されたフェザーマンとバーストレディから満を持してフレイム・ウィングマンを呼び出し……さらにその後？さあ、どうなるでしょう。きっと、私にすら思いもよらない手をあの２人ならば見せてくれることでしょう。

よし、こんなところですかね。改めまして、最後に一言ご挨拶を。

これまで長らく遊野清明の物語に付き合っていただき、ありがとうございました。私1人だけでは、これだけ長い期間1つの話を書き続けることなどできなかったでしょう。幾度となく頂いた感想、指摘、応援、あるいはお気に入り登録。そういったものの1つ1つが、執筆者としての私をつくる血であり肉でした。

この物語はここで幕を引きますが、またよろしければ次の作品でお会いしましょう。